艦魂年代史 ～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～

黒鉄大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～

【Ｎコード】
Ｎ５４３９Ｃ

【作者名】
黒鉄大和

【あらすじ】
１９４１年１２月、日本は太平洋戦争に突入した。新たな歴史の幕開けとなった真珠湾攻撃からしばらくした頃、完成間もない超弩級戦艦『大和』に一人の少年士官が乗艦した。雪降る呉の海に浮かぶ『大和』の甲板で、少年――長谷川翔輝は運命的な出会いをする。艦魂――艦に宿る魂の化身である精霊のような少女――大和と出会った。必然の出会いをした二人はお互いを大切な人と思うようになった。二人のまわりには多くの艦魂が集まり、平和な時を過ごす。だが、戦争が激化するにつれて次々に命を落とす艦魂達。三年八ヶ

月にも及ぶ日本という国の地獄の中、二人の少年少女が激動の時代を翔けながら互いの守るべきものを守る為、そして生きる為に戦い出す。

序章　艦魂（前書き）

以前投稿していた『艦魂年代史　恋する乙女は大艦巨砲主義』のあまりの誤字脱字の多さ、長ったらしくて読みづらいというご指摘を受け、読者の皆様に読みやすい作品をと思い、修正させていただきました。

２００８年バージョン、どうかよろしくお願いします。

序章　艦魂

艦魂（かんこん）――それは文字通り艦の魂の事である。

今から約六〇年前。日本は壮絶な大戦争――太平洋戦争に突入していた。その主役を担っていた大日本帝国海軍が世界に誇る最強艦隊――それが連合艦隊だった。

明治維新以来日清戦争、日露戦争とを勝利に導き、日本を一躍世界三大海軍国にまでのし上げた欧米が恐れる東洋の虎。それが日本海軍。

艦隊決戦なら無敵とも謳われた日本海軍はイギリス、アメリカと並び世界海軍の頂点に君臨していた。

――その大小艦艇全てに艦魂は宿っていた。それは戦艦はもちろん、空母、巡洋艦、軍艦ではない駆逐艦や潜水艦、輸送艦に水雷艇など各小型艇にも存在している。

そして、そのどれにもいくつかのある共通点があった。

一つ、どんな艦艇でも艦魂は必ず宿る。

一つ、その姿は霊感の強い者、または艦魂の精神波長に似ている波長を持つ者だけにしか見えない。

そして、それは全て若い女の姿をしている。

一般船なら航海安全の守り神として、軍用艦なら敵国軍艦を打ち砕く勝利の女神として、船乗り達の伝説として今も語り継がれている。

これは、そんな艦魂達と一人の少年が繰り広げる、三年八ヵ月にも及んだ壮絶な太平洋戦争を生き抜いた、愛と勇気の物語である・・・

第一章　第一節　大艦巨砲主義の王者

一九四一年六月、日本の中国侵攻に反対するアメリカ、イギリス、オランダは日本への石油輸出禁止等の経済制裁を加えた。日本はその状況を打開すべく、ハワイの米太平洋艦隊司令部のある真珠湾に奇襲攻撃をする事を決定した。

そして、同年十二月八日、日本連合艦隊の第一航空艦隊――日本機動部隊、旗艦・正式空母『赤城』、正式空母『加賀』『蒼龍』『飛龍』『翔鶴』『瑞鶴』の計六隻の正式空母を主軸とした部隊が真珠湾に奇襲攻撃を敢行した。

結果、日本海軍はアメリカ海軍に大損害を与え、日本は一躍世界最強の海軍国になった。

同日、日本の開戦の引き金となったと言える超弩級戦艦――戦艦『大和』の最後の公試運転が行われた。

そして、開戦から一週間後の十二月十六日に――戦艦『大和』は就役した。

全長二六三ｍ、全幅三八・九ｍ、機関出力十五万三五五三馬力、基準排水量六万五〇〇〇トン、最高速力二七・四六ノットという空前絶後の世界最大最強の超弩級戦艦だった。

主要兵装は主砲として世界最大最強の三連装四五口径四六ｃｍ砲三基九門、副砲には三連装六〇口径十五・五ｃｍ砲四基十二門（以後対空改装で二基六門に減少）、四〇口径十二・七ｃｍ連装高角砲六基十二門（対空改装で十二基二四門に増強）、二五ｍｍ三連装機銃八基二四門（対空改装で五二基一五六門に増強、さらに二五ｍｍ単装機銃六基六門を新装備）十三ｍｍ連装機銃二基四門を装備し、まさに『浮かべる城』だった。

大艦巨砲主義の申し子にして日本海軍の象徴――それが戦艦『大和』だった。

そんな『大和』を見て、当時の日本海軍軍人の全てが『この『大

和』がいる限り、我が大日本帝国は負けん』と誰もが信じて疑わなかった。

――大艦巨砲主義の王者は、こうして爆誕した。

第一章　第二節　艦魂の少女

進歩のない者は決して勝たない
負けて目覚める事が最上の道だ
日本は進歩という事を軽んじ過ぎた
私的な潔癖や徳義にこだわって、本当の進歩を
忘れてきた
敗れて目覚める、それ以外にどうして日本が救
われるか

今目覚めずしていつ救われるか
俺達はその先導になるのだ
日本の新生に先駆けて散る
まさに本望じゃないか

～～《戦艦大和ノ最期》より抜粋～～

開戦以来日本は連戦連勝し、破竹の勢いで中部太平洋や南方資源地帯を次々に占領していった。

その頃、戦艦『大和』は呉の軍港に停泊していた。各地から次々に優秀な人材が集まり、『大和』に乗艦する。そんな中、一人の若い少年兵が実習生として『大和』に乗艦した。

「これが戦艦『大和』かぁ」

そう言って嬉しそうに甲板から艦橋を見上げて優しげな笑みを浮かべる、まだ幼さを少し残した少し小柄な少年。

彼の名は長谷川翔輝訓練航海少尉。歳はまだ十七歳。この呉で育ったが、目の前で『大和』が建造されていた事はついこの前知ったばかりだ。

当時、大和型戦艦の建造は軍機というトップシークレットだった。超弩級艦を建造する為に海軍上層部は一九二九年三月、『大和』建造に当時の金額で一億三七八〇万二〇〇〇円を予定としていた。これは当時の国家予算の約三パーセントにもなった。しかし、予算請求額からだいたいの艦の規模はわかってしまうから、同年六月に大蔵省に予算請求した時は一億四四〇万五〇〇〇円となっていた。大幅に減ったが、海軍は実際には建造しない架空の駆逐艦三隻と潜水艦一隻を建造する事にして、後にこの中から『大和』の予算を捻出した。

『敵を欺くには、まず味方から』、まさにそれだった。なにせ『大和』の世界最大最強の主砲――四六ｃｍ砲でさえ九四式四〇ｃｍ砲と呼称されていたほどだ。だから建造もまわりの民間人にバレないようにこっそり行い、進水式も周囲に煙を上げて視界不良にした中で息を殺して行われた。世界最大最強戦艦にしてはあまりにも寂しい進水式だったようだ。

余談だが、今『大和』を作るとすると、現在の物価にして二六三二億二二二六万七一〇〇円になる。これは現在の国家予算の約〇・三パーセントに当たる。ちなみに、今現在海上自衛隊が装備している中で最も戦闘力の高い艦船のイージス艦二隻分に相当したりする。

ともかく、そんな極秘で誕生した『大和』も今では日本海軍軍人の誇りと言える艦になった。

そんな『大和』に乗った翔輝は実習生ながらすでに少尉だった。彼は海軍学校の航海科を上位で卒業した期待の大きい軍人なのだ。見た目はそうは見えないが。

「――という訳で、『大和』の中は非常に入り組んでいる。まさに迷路だ。ついこの前行われた艦内特定部屋捜索大会では実に十五人の者が迷子になりって捜索をしたが、その捜索隊の者の中からも五人の迷子が出たという驚異的というか、かなり残念な結果を残している」

数人の士官候補生の中にいた翔輝は先程から『大和』艦内を案内してくれている上官の話を聞いていた。計二〇人の迷子が出るとは、やはり『大和』は艦もでかけりゃそういう事でもでかいと改めて感心した。

「まぁ、俺からは以上だ。これから自由時間にするが・・・迷うなよ？」

上官はニヤニヤしながら言う。周りも微笑しながら敬礼し、翔輝も敬礼した。

これでやっと『大和』の中を自由に動き回れるようになった。同僚達は一人一人別方向に行き、翔輝も歩き出した。

「これが世界一の艦か、すごいなー」

翔輝は溢れる好奇心を抑えきれず、走り出した。

自分が世界一の艦に乗る。まさに夢のようだった。

ふと、上官が『迷うなよ』と言っていた事を思い出した。しかし、迷う訳ないと思った。

・・・十数分後、それは最悪な形となって訪れた。

「迷った・・・」
どこだかわからない鉄の廊下でうずくまる。階段を使ってないから、ここが中甲板だという事はわかる。しかし、右へ左へと行っているうちに完全に迷ってしまった。
「えっと、うーん」
こんな時はやはりマニュアルだ。頭の中に入ってるマニュアルを開いて、その中から目的の部分を検索する。
――検索結果、自艦内で迷うのは言語道断。帝国海軍軍人としての恥だ。
「・・・そっか、そんな事学校で教わったな」
思い出に浸るが、それは最悪の形だった。仕方なく、翔輝は自分で決断する事にした。
「まぁ、まずは上って甲板に出よう」
それが最善の策だった。それに、甲板に上がるだけなら階段を上るだけでいい。一番簡単で、一番効果的な策だった。
そう決めて歩き出すと、すぐに階段を見つけた。それを上って上甲板に移る。ここでようやく十数分ぶりに人に会った。ちょっと涙が・・・
「ちょっと」
翔輝は目の前の兵に尋ねる。
「甲板に出るにはどうすればいい？」
「はっ、甲板ならここを真っ直ぐ行って兵員室を右に曲がった所にある階段を上ってください」
「ありがとう」
翔輝が敬礼すると兵も答礼した。相手は自分より年上だが、翔輝の方が階級は上である。答礼して翔輝は兵の言うとおりに歩く。一直線なので兵員室は簡単に見つかった。その奥を右に曲がり、階段を発見。それを上り、扉を開ける。
次の瞬間、そこは冷たすぎる風が吹き猛っていた。おまけに雪ま

で降っている。大降りというわけでもないが、とにかく瀬戸内には珍しい雪まで降っていたのである。『大和』に乗った時、曇っていたが雪は降っていなかった。最悪である。

甲板は真っ白に染め上げられ、見たところ兵は誰一人いない。寒いからだろうか？

呉は日本の中では南に位置するとはいえ、十二月の冬の季節が、寒くないはずがなかった。地元出身だからよくわかる。

「さ、寒い・・・」

身体を小刻みに震わせ、口から白い息を漏らす。

「さ、さっさと中に戻ろう・・・」

よく考えてみれば、別に今でなくとも良かったのだ。自由時間の終わりにでもくれば良かったじゃないか。

翔輝は自己嫌悪に陥った。

扉を開けようとした瞬間、翔輝は三番副砲の右側で海の向こうを見続けるる一人の少女を見た。

「だ、誰？」

それは見たことのない少女だった。というか、そもそも戦艦に女性がいること自体おかしい。

（げ、幻覚・・・かな？）

軍艦に、それも戦争が始まって忙しい今日の軍艦に、民間人の、それも少女が乗っている訳がない。

だが、翔輝は少女の異様さに気がついた。

少女は見た目十三、四歳くらいだろうか。端整な顔立ちをしたその少女は黒く長い髪を海風に靡（なび）かせ、その黒い瞳で海の向こうを見詰めている。

――何だ、この子は・・・？――

幻覚にしてはやけに鮮明に、翔輝の目には写っていた。

翔輝はその少女が、なにか無視してはならない存在のような感覚

を受けた。
「君、そこで何をしてるんだ？」
咄嗟（とっさ）に思い付いた言葉を繋ぐ。
少女はそれに気付き、振り返った。そして、何かに驚いたような表情で翔輝をしげしげと見つめていた。改めて見ても、少女は美少女だった。
「どうしたの？」
「・・・」
翔輝が首を傾げながら問うが、少女は黙っている。だが、やがてその桜色の唇を動かし、口を開いた。
「長谷川翔輝航海少尉・・・ですか？」
少女は太刀を腰から抜き取ると、タンッと床につき、両手を添えた。
少女の姿を見て翔輝派驚く。
少女は日本海軍の士官服という出で立ちをしていた。階級章は付いているが、日本海軍のものとは少し違い、階級は不明だった。そもそもこんな少女が軍服を着ている事が不思議だった。
「・・・どうして、僕の名を？」
少し間を置いて、少女は答えた。
「――ずっと、見ていましたから」
「え？」
翔輝は全くわからない。見ていた？　どこで？
翔輝が必死に記憶と格闘していると、少女は今さらながら何かに驚いたのか、目を大きく見開いて翔輝を見る。
「長谷川少尉には、私が見えるんですか？」
心底不思議そうに聞かれた。
だが、翔輝には問いの意味が全くわからなかった。
「・・・どういう事？」
「少尉」
少女は翔輝の疑問に答えず、凛とした声で自分の階級を呼んだ。

「ん？」
「私、さっきからここにいるんですが」
「うん」
「雪、積もってます？」
少々間が必要だったが、翔輝は自分の肩や頭に雪が積もっているかどうか聞いたのだろうと解釈した。
「君には、積もってないね」
「でも少尉には積もってますね」
あぁ、そうだよ。さっきから寒くてたまらないんです。
だったらとっとと中に入ればよいものだが、寒さよりもこの少女の事の方が気になったのだ。
「君は、幽霊か何かなの？」
戦争が激しくなってきている戦乱の時代。さすがにまだ本土は攻撃の対象になっていない。というか、軍服を着た少女なんて普通はいない。
「霊・・・とは、ちょっと違うと思います」
うーん、と少し考えこんで、少女はそう結論した。
その時、翔輝は小さなくしゃみを連発した。
「大丈夫ですか？」
少女は笑ってそう優しく言った。
「ごめん、ちょっと雪風に当たり過ぎたみたい、僕は艦内に戻るよ。君はどうする？」
「私はまだここにいます。お気づかいありがとうございます」
「お礼を言われるような事は言ってないよ。じゃあね」
翔輝は来た時の扉を開けると、室内に入ってすぐ扉を閉めた。
少女はその光景に微笑をたたえると、また向き直って海の向こうを見つめた。
「うー寒い、寒い・・・寒いよぉ・・・」
バカな事をやっていたなぁと自分でも思う。あんな所に少女がい

る訳がないじゃないか。だいたい、自分は幻覚を見ていたか何かに決まっているのだ。

とりあえずこれからどうするか決めようとして兵員室に入った時、数人の兵が翔輝を見て慌てて駆け寄って来た。

「どうされたんですか!?」

真っ先に口を開いたのはその班の班長らしき男だった。口ぶりからして、かなり驚いているようだ。

まぁ、士官が軍帽と肩に雪を積もらせて兵員室に入ってきたら誰でも驚く。

「えっと、ちょっと甲板に登ってまして」

「マジっすか！　この寒空の下を」

兵のひとりが驚きながら訊く。

「うん、ちょっと外が見たくなりまして。そしたら雪が降ってまして、すごく寒かったんですよ。でも艦上からの雪は格別でした」

さすがに、甲板で見知らぬ少女と話していたなどとは言えない。

「あぁー、そうかもしれませんね。・・・しかし、呉でも雪が拝めるとは思ってもみませんでした」

水兵の青年が苦笑しながら言った。その言葉に皆が確かにと言いたげにうなずいた。なんとかごまかせそうだ。翔輝はほっと胸をなで下ろした。

「それじゃ、さっきの続きといきますか」

班長はそう言い、立ち去ろうとする。今度は翔輝が聞き返す番だった。

「何の続きですか?」

翔輝の疑問に副班長が答えた。

「少尉は、艦船に人格が宿る、という伝説を聞いた事がありますか?」

翔輝は、走っていた。

甲板を辞退してから彼はただ一途に、先程抜けてきたばかりの極

寒地獄、最上甲板へ。
バタンッ！
力強く開け放たれた扉の向こう側に先ほどと寸分かわらぬ少女が、立っていた。
彼女は不思議そうな顔で翔輝の方に振り返った。
「君は・・・」

「君は、艦魂だったんだね・・・」

時の古今、洋の東西を問わず、船乗り達の間で語り継がれる一つの伝説があった。
船はそれぞれに人格を持ち、その船の航海の安全を司っている、という昔からの噂話。
そして、軍艦のそれは《艦魂》と呼ばれ、容姿は若い女性であるとされてきた。
『軍艦は男性』とされる日本海軍であってもそれは同じで、軍艦の艦魂は女性である、とも。
兵達は『大和』の艦魂はどういう女性か、というバカ話（当人達にはそれが実在するとは知る由もないが）をしていたのだ。
少女はうなずいて肯定の意を示した後、
「一つ、聞いていいですか？」
「何？」
「・・・寒くないですか？」
「寒い」
翔輝は素直に答えた。そんな間でも翔輝の軍帽や肩には雪が積もる。黒い第一種軍装は冷たい雪で白く染まっていく。
「寒いなら中に入ったらどうです？」
少女はもっともな事を言う。しかし、その入れない原因は君だ。・・・と、心で思う。
「そういう君も入ったら？」

「私は寒くないので」
そういう少女に翔輝は近寄った。少女は不思議そうな顔で翔輝を見詰める。
「うーん、こっからじゃ雪しか見えないな」
「そうですね」
「君は何を見てたの？」
そう問うと、少女は小さく首を振る。
「いえ、この向こうで空母のみなさんが戦ってるんだなって」
「それって、機動部隊の艦魂の事？」
少女はコクリとうなずいた。
この時、日本機動部隊は別部隊が攻略に失敗したウェーク島に救援として機動部隊の中から空母『蒼龍』『飛龍』を援軍として送り、残りの四空母は内地への帰途についていた。
「へえ、機動部隊の子と仲が良いの？」
翔輝が聞くと、少女は首を弱く横に振る。
「いえ、だってまだ会った事はないですし」
「あ、そっか」
少女の言葉に翔輝は何かに気づいたかのようにうなずいた。『大和』が完成したのは真珠湾攻撃後なので会えないのが道理だ。
「でも、会ってはみたいんだろ？」
翔輝が言うと、少女はコクリとうなずいた。
風が吹き、雪が空を舞う。詩人ならここですばらしい俳句の一つや二つが書けるかもしれないが、翔輝は、
「へくしょぉぉぉんっ！」
思いっきり大きなくしゃみをした。
「・・・中に、入りませんか？」
こちらを見て優しく微笑む少女の言葉に、翔輝は「うん」と少女の意見を素直に聞いた。
少女が翔輝の来た扉の前に立つと、扉が一人でに開いた。少女は振り返ると翔輝に優しく微笑む。

「さぁ、中に入りましょう」
「ちょっと待って」
中に入ろうとした少女を翔輝が止めた。少女が不思議そうに振り返ると、そこに微笑む翔輝の姿があった。
「君、何て呼べばいいかな？」
「え？」
少女は正直に驚いていた。翔輝は構わず続ける。
「君が『大和』の艦魂だという事はわかった。これは何かの縁かもしれない。だから名前を聞きたい。もっと君を知る為に」
翔輝の言葉に、少女の瞳に動揺が起きる。それを隠す為か、少女はうつむいた。今までこんな風に会話をした事がないのだろうか。少女は少し戸惑い、うつむきながら小さな声で言った。
「・・・大和、と呼んで下さい。それが、私の名です」
風が吹き、翔輝は軍帽を押さえる。そして、軍帽を押さえた格好で翔輝は微笑んだ。
「大和、か・・・。さすが、『大和』の艦魂だね。同じ名だ」
翔輝は少女――大和に近づき、軍帽を取り上げる。軍帽の中からキラキラと輝く長い黒髪が靡く。翔輝はそんな大和の髪を、わしゃわしゃと掻き乱す。
「な、何をするんですか！？」
大和は顔を真っ赤にして怒る。翔輝は微笑んだ。
「よろしくな。大和」
翔輝が言うと、大和は顔が真っ赤なのは変わらないが、それは別の意味で赤くなった。
大和は軍帽を被り直し、顔を真っ赤にしたまま微笑んだ。
「はい、長谷川少尉」
『大和』の甲板が純白の雪で染め上げられ、雪は降り続ける。まだまだ冷たい風が『大和』を流れ、軍艦旗が静かに靡く。
これが、翔輝と大和の、最初の出会いだった。

第一章　第三節　優しき連合艦隊旗艦（前書き）

《長谷川翔輝（はせがわ　しょうき）》

役職　帝国海軍軍人・戦艦『大和』航海士

出身　広島県呉市

身長　１６５ｃｍ

年齢（１９４１年１２月現在）１７歳

誕生日　１２月８日

家族構成　父（戦死）　母（病死）　妹・翔香（病死）

好きなもの　翔香・艦魂達・軍艦（特に戦艦）・海・絵を描く事・心から打ち解ける友達・困っている人を助ける・平和な日々・甘いもの

嫌いなもの　翔香を侮辱される事・無力で弱い自分・誰かが死ぬ事・自己犠牲する人・筋の通らない話・死というのを軽々しく言う奴・特攻作戦・戦争・苦いもの

今作の主人公で戦艦『大和』の航海士をしている艦魂が見える珍しい人間。海軍学校を優秀な成績で卒業した『大和』の最年少士官で期待の新人。その航海技術は航海長ですら納得させるほどの実力。しかし優秀な成績にも関わらずそれを威張ったり自慢したりはせず、常に謙虚な態度でいる為に皆からも慕われている。誰にでも優しくできる少年で艦魂達からの信頼は厚い。少々天然ボケなところがあり、仕事以外ではかなりの優柔不断。しかも乙女心がまるでわからない鈍感少年という典型的なハーレムアニメキャラ。そんな彼の優しさに触れて好意を寄せる艦魂は数多い。両親はどちらもすでに他界し、唯一の家族であった妹は大戦直前に病死しまっていて、彼はそれをトラウマにしている為、死というものにすごく敏感。彼女を助けられなかった事を今でも後悔していて、戦争で艦魂が死ぬと誰よりも心を痛めている。いまだに翔香の死から完全に脱却できない自分を情けなく思っている。命を自ら捨てるのを嫌い、後の特攻作

戦は全面的に反対の立場となる。しかし自分が犠牲になる事はあまり気にしておらず、自分よりも他人を優先させる節があり、何をするかわからないという怖さもある。大和や多くの艦魂達に触れ、彼自身も少しずつ成長している。艦魂以外の友人関係は意外と狭く、あまり友達はいない。しかし小さい頃からの幼なじみの女の子がいて、姉のように慕っている女性もいる。

《大和（やまと）》

大和型戦艦一番艦――戦艦『大和』

出身　呉海軍工廠（広島県）

身長　１５４ｃｍ

髪型　長髪

実年齢（１９４１年１２月現在）０歳

外見年齢　１３、４歳

誕生日　１２月１６日

家族構成　妹・武蔵（予定）

好きなもの　翔輝・翔輝と一緒にいる事・翔輝に好かれる事・仲間・楽しい日々・大艦巨砲主義・艦隊決戦思想・平和

嫌いなもの　翔輝を他の子に取られる事・翔輝に嫌われる事・誰かが死ぬ事・連合国軍（特にアメリカ）・敵空母・敵機・潜水艦・戦争

今作のメインヒロイン。日本海軍が世界に誇る大艦巨砲主義の頂点に君臨する超弩級不沈艦・戦艦『大和』の艦魂。日本海軍の希望の星として生誕した。自ら自分を世界最大最強の戦艦と自負し、その誇りを大切にしている。後に連合艦隊旗艦、つまりは日本海軍艦魂の頂点に立つが、仲間想いで犠牲を嫌うので消耗戦である戦争の指揮官には向いていない。初めて自分に接してくれたのが翔輝で、優しく接してくれる彼の事が好きになる。一番身近な存在なので常に一緒に行動する事が多い。翔輝が他の艦魂と話していたりすると不機嫌になるかなりのやきもち焼き。自分が亡くなった翔輝の妹の翔

香にそっくりである事がちょっと嫌。優しく穏やかな性格の為友達も多く、部下からの人望はかなり厚い。戦艦の艦魂なので戦争をするなら自分の実力を十二分発揮できる艦隊決戦にしたいとは思っているが、戦況の変化から航空機を優先させている。その為大艦巨砲主義や艦隊決戦主義など前時代的な考え方を持つ古参組からはあまりよく思われていない。空母や駆逐艦ばかり活躍していて自分は安全な所で動かない事に不満があるが、そのおかげで翔輝と毎日楽しくやっているので複雑な心境をしている。戦争が早く、そして無事に終わる為に戦い続けている。

第一章　第三節　優しき連合艦隊旗艦

開戦から数週間後、日本軍の『大東亜共栄圏（だいとうあきょうえいけん）』をスローガンにした進撃は止まる事を知らなかった。

日本海軍は連日のように海を駆け回り、各所で勝ち続けている。

そんな状態だが、戦艦『大和』は依然呉の軍港に停泊したままだった。

この二週間、世界は色々な事があったが、翔輝にも大きな動きがあった――翔輝は訓練期間を終え、正式に『大和』に配属された。

役職は航海士だ。

・・・艦で迷子になるような奴が航海士によくなれたものだと、自分でも驚いている。

そして、大和ともかなり親しい関係になった。

そんなある日、翔輝は甲板で呉に停泊している艦艇を眺めていた。

その時の彼の表情はとても嬉しそうだった。

「あぁ、やっぱ『大和』もいいけど、他の戦艦もかっこいいな」

うっとりと連合艦隊の戦艦達を眺めていると、

「少尉」

なんとなく不機嫌な声に階級を呼ばれて翔輝は振り返る。そこには、声と同様に不機嫌そうな顔をした大和が立っていた。

「なんだ大和か。一体どうしたんだ？　そんな怖い顔して」

楽観的に言う翔輝に、大和はピクリと眉を動かす。

「どうしたじゃありませんよ。何ですか、仕事もしないで戦艦見物三昧。それでも帝国海軍の軍人ですか？」

大和はやはり不機嫌そうに言う。その声には少し怒りが感じられた。

困惑するのは翔輝の方だった。こんな不機嫌そうな大和は初めてだったからだ。

「いや、でも一応まだ仕事らしい仕事をもらってないし」

「自分で見つけてください」
大和は凛とした声で言う。
翔輝は確信した。大和は明らかに何か怒っていた。
「なぁ、お前何か怒ってない？」
翔輝が心配そうに聞くと、
「別に怒ってません。それより、仕事がないなら私の主砲でも磨(みが)いたらどうですか？」
「んな無茶な」
「無茶ではありません」
凛とした声で言われると反論ができなくなる。
情けない。自分よりも頭一つ分くらい小さい女の子に何も言い返せないなんて・・・まぁ、相手は世界最大最強の戦艦だが。
「さぁ、さっさと来てください」
大和は翔輝の腕を掴み、グイグイと引っ張る。
「お、おい。ちょっと待てって・・・ッ！」
翔輝の言葉に対し、大和は凛とした声で、
「嫌です」
即答した。
もうお手上げだ。もう僕なんて自由にこき使って。翔輝が自暴自棄になった。その時、
「いい加減許してあげたら？」
どこからか声が聞こえた。女性の声だ。しかもかなり若い。
その声に大和はピタリと止まった。不機嫌そうな顔で振り向き、一隻の戦艦を見詰める。
「長門(ながと)さんには関係ないですよ」
そう言った。
え？　長門？　長門って戦艦『長門』の事か？　連合艦隊旗艦の？
戦艦『長門』とは長門型戦艦の一番艦の事である。日本国民に最も愛された戦艦が長門型戦艦であり、自慢の四一ｃｍ砲を四基八門を搭載した二一五・八ｍの巨艦は、大和型戦艦ができるまでは名実

共に世界最強の戦艦であった。
そんな『長門』の艦魂とは一体どんな人物なのだろうか。
困惑していると、二人の目の前に光が集まり、それはやがて人の形を形成する。次の瞬間、目の前には大和と同じ士官用の海軍服を着た女性が立っていた。いや、大人びた顔をしているが少女だった。
「日本連合艦隊の象徴が聞いて呆れるわよ？」
温和な表情で少女は言った。その雰囲気はすごく優しかった。
「な、長門さん」
「えええぇぇぇッ！」
大和は少女を長門と呼んだ。という事は、彼女は連合艦隊で一番偉い艦魂という事だ。
「うん？　どうしたの？」
長門は「んー？」と翔輝の顔を覗き込む。翔輝は驚いて一歩下がった。
「そんなに驚かなくてもいいじゃない」
軍帽を脱ぐと、スラリと伸びた長髪が風に靡いてそよそよと揺れた。
長門はにっこりと翔輝に微笑むと、そのまま大和を見詰める。大和はそんな長門を見てうつむいてしまった。
「まったくあなたって子は」
うりうりと大和の髪を掻き回す。自分がやると本気で怒られるのに、翔輝はちょっとうらやましく思った。
「その性格、少しは治しなさい」
長門は優しく微笑んだ。そんな彼女に対し、大和はうつむいたままだった。
翔輝は長門に向かって敬礼した。
「お初にお目にかかります。長谷川翔輝少尉です」
一応連合艦隊旗艦という事もあり、翔輝は上官に対しての態度で接する事にした。そんな翔輝に長門はくすりと笑った。
「そんなにかしこまらなくてもいいでしょ？」

なんか、イメージとだいぶ違うような気が、連合艦隊旗艦というからにはすごく威厳があり、規則に厳しく、最強の軍人かと思ったが、実際はかなりのお姉さんキャラである。「んー？」という感じで見詰めるその仕草はどこか幼さを残すが、大人の女性という雰囲気が印象的だった。見た目は自分より少し年上位の少女だったが。

「予想が裏切られちゃいました？」

「うわッ！？」

考え込んでいた翔輝の目の前に大和の顔が現れた。翔輝はビビって一歩下がった。その反応に不機嫌になる大和。

「何ですか。そんなに驚かれなくてもいいじゃないですか・・・」

その声はやはり不機嫌だった。しかしどこか寂しそうでもあった。

「ご、ごめん」

翔輝が素直に謝ると、

「べ、別に謝らなくてもいいじゃないですか」

と、翔輝から顔を逸らした。そんな様子を長門はニヤニヤと見ていた。

「んー？　何か妙に仲がいいのね」

「・・・ッ！？」

「そうですか？」

柔和な笑みを浮かべる翔輝の横で、大和はうつむいたまま微動だしなかった。その時の彼女の頬は、薄い桜色に染まっていた。

そんな大和を見て、長門はむふふと口元に手を当てて微笑んだ。

「うーん、大和はこの人が大のお気に入りなのよね？」

そう言い、長門は翔輝を見た。首を傾げる翔輝に、長門はそっと微笑む。

「この子ね、この前の艦魂会議でね、あ、でも会議って言っても自分の艦の艦長を自慢したりとかっていう雑談よ」

艦魂達はいつの間にそんな事をしていたのだろうか、

「その時この子、『私は艦長もいいですけど、今すっごくお気に入りの士官がいるんです』って嬉しそうに言ってたのよ」

「そうなんですか、で、それは一体どなたで？」
「何言ってんのよ。あなたの事よ」
「ぼ、僕ですか！？」
長門の言葉に翔輝は素直に驚く
「そうよ、あなた以外に考えられないでしょ？　ね、大和？」
二人が大和を見ると、大和はこれでもかと言わんばかりに顔を真っ赤にしていた。
「あの、大和？」
翔輝が声をかけると、大和は一目散に走り去ってしまった。神業である。
「あーあ、行っちゃった。もっと自分に正直になればいいのに」
長門は苦笑いをする。
「あの、何が何だか・・・」
翔輝は困惑するだけだった。
長門は軍帽を被り直してくるっと反転し、優しい瞳で翔輝を見詰める。
「あなたなら、大和を任せられるかも」
そう言った。
「え？　何がですか？」
翔輝はさら困惑する。そんな翔輝を見て、長門はその横についた。
風が吹き、長門の長い髪が翔輝の鼻をかする。
「あの子はね、すごい寂しがり屋なのよ」
「寂しがり屋・・・、ですか？」
長門の言葉に翔輝は彼女を見る。長門は『大和』の艦橋を見詰めている。その表情はどこか悲しげだった。
「あの子は我が日本連合艦隊の希望として生まれた。でも・・・、彼女が守るべき我が国の国民は、彼女の事を知らない」
当時、戦艦『大和』は完成して就役した後も、その名と存在は軍の中には知れ渡ったが、国民はその存在を知らず、知る者はごく一部だけだった。戦艦『大和』の名が世に知れ渡ったのは戦後の事で

あった（当時は戦艦といえば長門型戦艦であった）。
「私はみんなに歓迎されて生まれた。人間で言う誕生日だった就役式では多くの国民に祝福されたわ。でもあの子は、その就役式もすごく寂しいものだったの。あの子は希望をたくさん持って生まれたけど、愛情は全く受けなかったのよ」
長門は寂しそうに言う。
潮風が流れ、甲板の兵達が黙々と機銃や高角砲の整備を行っている。
しばらく二人は黙っていたが、兵の一人が階段から転倒したと同時に長門の口が開いた。
「あの子はまだ、自分の守るものを知らないのよ」
長門はそっと翔輝を見た。透き通った漆黒の瞳が翔輝を見詰める。
「だから、それをあなたが教えてあげて」
長門は優しく微笑みかけた。
「ぼ、僕がですか！？」
「そうよ。お願いね」
そう言い、長門は去ろうとする。
「ちょッ！　ちょっと待ってください！」
去ろうとする長門を翔輝が止める。長門は「んー？」と振り返る。
「何で僕なんですか！？」
「えー、だって君って大和と仲がいいじゃない」
「だからって・・・ッ！」
「んー？　長谷川君は大和の事が嫌い？」
「いえ、そういう訳では・・・っ！」
「じゃあいいじゃない」
長門は罪のない微笑みを向ける。その笑顔には邪心が無い。まさに純真無垢だった。
「言ったでしょ？　あなたはあの子のお気に入りだって」
長門は微笑んだまま光に包まれ、消えてしまった。
消える直前、長門は「あの子はすっごいやきもち焼きだから、あ

んまり他の艦をジロジロ見ちゃだめよ」と言って消えた。
甲板に取り残された翔輝はしばらく海を眺めていたが、静かに艦内に入って行った。
そしてふと気づく。
長門が、大和以外と初めて話した艦魂だという事に・・・
まだまだ寒い呉軍港。甲板に流れる風はまだ冷たい。しかし、その風はほんの少し春の匂いがする。
もうすぐ日本には春が来る。
だが、日本という国の春はしばらく訪れない。
甲板では転倒した兵が友人の肩を借りて医務室に向かって行った。

長門と別れ、翔輝は艦内のある自室に入った。
「やっぱり・・・」
翔輝は自分のベッドを見る。そこには、明らかに布団が盛り上がったベッドがあった。かくれんぼなら幼稚園児でも見つけられるレベルの低さだ。
「勝手に入らないでよね」
「いいじゃないですか。ここは私の艦ですよ」
大和は布団に潜ったまま言う。確かにそうだが、
「だからってさ・・・」
「静かにしてください。少尉のバカ」
いつになく元気のない声で大和は言う。
翔輝はもう何も言わず、部屋の隅の椅子に座り、隣の机の上に置いてある写真立てを見詰める。そこには、優しく微笑んでいる少女の姿があった。今ベッドで泣いている誰かに似ている少女は、今年の春に病気で死んだ四歳年下の妹――翔香。その横の写真立てには若い頃の父と母の写真がある。母は三年前に亡くなり、陸軍軍人だった父は満州事変の時に戦死している。つまり、翔輝にはもう、家族はいないのだ。
両親が亡くなってから、翔輝は翔香と二人で生きてきた。しかし、

今年の春に体を壊し、病院に入院したが、原因不明の病気で亡くなったのだ。
そんな妹の翔香の事を思い出していると、
「妹さん、でしたよね？」
その声にベッドを見ると、大和が布団の合間からこちらを見ていた。
「あぁ、そうだよ」
翔輝は素直に答える。
「私にそっくりですよね」
「そうなんだよね。だからほっとけなかったのかな？」
「・・・私が妹さんに似ているから、優しくしてくれたんですか？」
翔輝は椅子から落ちた。
「だから、そうじゃないって何度も言ってるだろ」
初めて彼女をここに呼んだ時も彼女に翔香の話をしたらそう聞かれたのだ。それからすねるたびにこのベッドに侵入して、翔輝が励ますたびに何度も訊かれる。もういい加減にしてほしいものだ。
「だって、それ以外に少尉が私に優しく接してくれる理由がないじゃないですか」
「人を心配するのに理由がいる？　普通」
「・・・ない、ですけど」
「そういう事。何度も同じ事を言わせないでよね」
翔輝はそう言って微笑んだ。
翔輝の笑顔を見て、大和は顔を赤くしてまた布団の中に潜ってしまった。
「さてと、お前がここにいるってわかったし、もう一回甲板に戻るか」
ピクッと大和が反応する。
翔輝は立ち上がり、ドアを開けて出て行った。
数分後、大和がその後を追った。

甲板に向かおうと歩いていた時、
「長谷川少尉」
突如『大和』艦長――高柳儀八大佐と出会った。
「艦長」
翔輝は敬礼した。高柳もそれに応えて静かに答礼する。
「長谷川少尉。今用事はないか？」
「はっ、何もありません」
「そうか、良かった」　高柳はそう呟き、懐から一つの封筒を取り出した。
「これを『陸奥』の艦長、小暮軍治大佐に渡してきてくれないか？」
「『陸奥』ですか？」
「あぁ、副長に任せようとしたんだが、彼がいなくなってしまってな」
「はぁ」
「もう内火艇の用意はしてあるから、よろしく頼むよ」
「はい」
そう言って、高柳は去った。　残された翔輝は高柳から預かった手紙を懐に入れた。
「うーん。じゃあ行くか」
翔輝は甲板に行くのをやめ、後部の内火艇乗り場に向かった。

「どうされたのですか？」
内火艇乗り場に着いた翔輝に兵が声をかけた。
「いや、艦長から『陸奥』の小暮艦長への手紙を預かって」
「おや？　それは副長の役目では？」
「なんかいなくなっちゃったみたいです」
「そうなんですか、ではお乗りください。すぐに船を出します」
「ありがとう」
翔輝は内火艇に乗り、兵は準備に入った。
数分後、内火艇はクレーンに吊られて海面へと運ばれ、ゆっくり

海面に着水。クレーンをはずし、内火艇はエンジンをかけて動き出した。
翔輝を乗せた内火艇は五〇〇メートルほど離れた戦艦『陸奥』に向かった。

「あれ？　どこ行っちゃったんでしょうか」
甲板に出た大和は翔輝の姿を探していた。
いつの間にか空は晴れ、輝く太陽が『大和』が纏(まと)う純白のドレスをキラキラと輝かせる。
甲板では兵達が愚痴を言いながら雪かきをしていた。
「少尉。一体どこに行ったんですか？」
大和は寂しそうにつぶやいた。その時、
「あ、あれは・・・ッ」
大和は『大和』から離れて行く一隻の内火艇に気づいた。そして、それに乗っているのは・・・
「しょ、少尉・・・ッ！？」
大和は走り、内火艇を追いかける。
「少尉ーッ！　どこに行くんですかあああぁぁぁッ！」
大和は艦尾まで走ったが、内火艇は離れて行く。
「少尉ッ！　少尉いいいぃぃぃッ！　ほぺッ！」
大和は段差につまずき、見事にすっ転んだ。
「うぅ・・・」
打ち付けた鼻をこすりながら立ち上がると、もう内火艇は遠くまで行っていた。その先には、戦艦『陸奥』が、
「どうして『陸奥』に・・・少尉、どうして・・・」
どんどん離れて行く内火艇を見詰め、大和は何もできなかった。

第一章　第四節　陸奥の優しき想い（前書き）

《長門（ながと）》

長門型戦艦一番艦――戦艦『長門』

出身　呉海軍工廠（広島県）

身長　１７０ｃｍ

髪型　長髪

実年齢（１９４１年１２月現在）２１歳

外見年齢　１７、８歳

誕生日　１１月１５日

家族構成　妹・陸奥

好きなもの　大和・陸奥・仲間・かわいい子・楽しい日々・人をからかう事・恋話・観艦式・日本・平和

嫌いなもの　頑固者・前時代的な考え方・筋の通っていない話・プライドを捨てきれない人・無益な争い

現連合艦隊旗艦・戦艦『長門』の艦魂。本当にリーダーなのか不思議に思うほどの楽観主義者でお姉さんキャラだが、有事の際には全艦魂を纏めるすさまじい統率力を発揮。実は艦魂達の中でもかなり有能な指揮官。いつも笑顔で優しく、ちょっとしつこいところもあるがその優しさから多くの部下に好かれている。仲間思いで無茶な作戦にはいつも先頭に立って反対し、大和と同じく航空機を優先させるので、古参派の艦魂達と対立する事もよくある。連合艦隊旗艦として戦前活躍し、大和に旗艦を譲ってからは参謀として大和を支える。みんなで楽しく過ごすのが好きで、艦魂達がよく宴会を開くのは長年彼女が旗艦を務めていた時によく宴会をしていた名残である。戦艦の艦魂ながら争い事が嫌いで、この戦争に対しては戦前から猛烈に反対しており、日独伊三国軍事同盟締結にも大反対し、この二つの事柄に対し反対派の艦魂を従えて賛成派の艦魂と武力衝突した事もあった（三国軍事同盟反対の時は一九四〇年の十・一六（といちろく）事

件。対米英戦反対はハルノート提示後の一九四一年の十一（とい）・二八（にはち）事件）。結局はどちらも止められず、長門は一時期中立立場にいた陸奥に旗艦を譲る事となった。このように筋の通らない話に対しては武力も辞さないという強い志を持っている。最も艦魂達に慕われているが、このような事件で敵対した艦魂からはあまりいい目では見られておらず、長門政権の時は一枚岩ではなかったが、いざ対米英戦が始まるとそれどころではなく、一貫して長門の指示を仰ぐようになる。大和や妹の陸奥、それに多くの艦魂達の恋を応援している。

第一章　第四節　陸奥の優しき想い

「うわぁ・・・」

近づいて来る『陸奥』を見詰め、翔輝は視線を上げる。

そこには、『大和』よりも国民の信頼を集めている戦艦の一隻があった。

長門型戦艦二番艦。戦艦『陸奥』だ。連装四五口径四一ｃｍ砲四基八門という日本海軍が所有する大和型戦艦の三連装四五口径四六ｃｍ砲に続く巨大な大砲を持つ戦艦。その大きさも大和型戦艦の次に大きく、大和型戦艦ができるまでは名実共に日本連合艦隊一の戦艦の一隻だった。しかし『大和』が完成した今でも、『長門』、そして『陸奥』は日本連合艦隊の主力戦艦に変わりはない。

その『陸奥』に向かって翔輝を乗せた内火艇は近づく。その大きさは『大和』ほどではないが、その勇姿は『大和』にも引けを取っていない。

「もうすぐ接舷します」

兵が舵を取って『陸奥』のラッタル（階段）に速度を落としながら近づき、ゆっくり接舷した。

「少尉。お気をつけて」

「ありがとう」

兵は敬礼し、翔輝は答礼してラッタルを上る。カンカンと金属の音を響き渡る。そして、ラッタルを上り終えて甲板に上がる。

「ここが『陸奥』の甲板かー。やっぱり大きいな」

『陸奥』は造られたばかりの『大和』と違って色々な物が甲板に置かれていた。

「どうされたのですか？」

近くを歩いていた下士官が声を掛けて来た。襟の階級章を見ると水兵長だった。

「『大和』艦長高柳大佐から『陸奥』艦長小暮大佐宛ての手紙を預

かったので、それを届けに」
「そうですか、ご苦労様です。入り口はあちらですので」
水兵長は敬礼し、翔輝も答礼した。
水兵長が去ってから、翔輝は艦橋に向かって歩き出した。
扉を開けて艦内に入る。金属の天井に床、壁と、中は『大和』と同じ感じがした。ただ違うのは、ここが『大和』ではないという事だ。
「艦橋へ行くには、どっちだろ」
翔輝はT字路で立ち止まり、左右を見回す。辺りは静かで人が来る気配はない。
「うーんと、たぶん左だ。・・・たぶん」
自身なさげに左へ曲がる。
こんな感じで、翔輝は『陸奥』の中を歩き出した。

――十数分後。
「ま、迷っちゃった・・・」
いつかみたいに床に座り込んでしまう。
翔輝はまた迷子になってしまった。懲りないなーと自分でも思う。
こんな方向音痴が航海士をやっているのだ。世も末である。
「どうしよう・・・」
翔輝はもはや打つ手がなかった。
前回と違い、ここは中を詳しく知らないし、階段を使ってしまったのでここがどの甲板かすらも全くわからなくなってしまっている。
「ここで人が来るのを待つか・・・」
翔輝の力ではもう手に負えなかった。
こういう時、すぐに人が通り掛かり、「どうされたのですか?」と声を掛けてくれればいいが、そんなご都合主義が起きる訳――
コツン・・・
「うん?」
突然遠くの方から足音が聞こえてきた。誰かが来たのだ。

「やった！　これで艦橋に行ける！」
翔輝は走り出した。そんなに遠くはない。
次第に近づく両者。目の前にT字路が見えてきた。足音はその右側から聞こえた。翔輝はそのT字路を右に曲がって立ち止まった。
そして、足音の正体に声をかけた。
「すみません！　ちょっと道を聞きたくて・・・って・・・え？」
翔輝は前方の人物を確認する。黒い第一種軍装を着ているが、中身は翔輝とさほど変わらない少女だった。その少女の軍帽からは長いきれいな髪が流れている。その姿は普通の軍人ではなかったが、翔輝はすぐにその正体がわかった。
「えっと、『陸奥』の艦魂？」
翔輝が声を掛けると、目の前の少女は目を丸くした。
「私が、見えるんですか？」
なんかどっかで聞いたようなセリフだった。
「うん、まぁ」
翔輝は回答した。その返事に少女――陸奥は驚いたような顔をする。
「私が見える人なんて、数人しか会った事がないんですが」
「そういる人種でもないよ」
翔輝は笑う。それにつられて陸奥も笑った。
「私の配属ではありませんね。どの艦からいらしたのですか？」
陸奥の問いに、翔輝は優しく微笑んだ。
「僕は長谷川翔輝少尉。戦艦『大和』で航海士をやってるんだ」
「『大和』で？　じゃあ彼女にもお会いしたんですか？」
この彼女は大和の事だろう。翔輝はうなずく。
「うん。大和とは一応仲良くしてる」
「じゃあ、あなたがこの前大和ちゃんが言ってたお気に入りの士官ですか」
大和ちゃん？　なんか調子が狂う呼び方だ。そして、その話はさっき長門さんから聞いた。

「そういえば、長門さんがそんな事を言ってたような」
「お姉様とも知り合いなんですか？」
「お、お姉様！？」
えっと、『陸奥』は長門型戦艦の二番艦である。つまり彼女はあの長門の妹である。でもだからってお姉様って・・・
「えぇ、『長門』の艦魂は私の姉で、私はお姉様と呼んでるんです」
なんか、危険な匂いがするようなしないような・・・
「へぇ、確かに《お姉様》ってオーラは出てたな」
「ですよね、私憧れちゃいます」
「いや、陸奥さん。それはやめといた方がいいかと」
「どうしてですか？　あと陸奥でいいですよ」
「あ、そう。あー、陸奥。やっぱり軍艦というか軍人なんだから、あんまり軽くはならない方が・・・」
「お姉様の悪口を言わないで！」
突如陸奥が烈火の如く激怒した。そのあまりの豹変ぶりに、翔輝は一歩引いた。
「お姉様は立派な軍人です！　確かにちょっと軽いかもしれないけど、でもお姉様は今まで旗艦として立派に生きてこられたんです！　私はそんなお姉様が大好きです！　だから、お姉さまの悪口を言わないでください！」
いつの間にか陸奥は翔輝を壁に追い詰めていた。身長は翔輝と同じくらいなので、壁に押し付けられた翔輝の顔の数センチ先に陸奥のきれいな顔がある。まぁ、今はかなり怖いが、
「ご、ごめんなさい！　もう言いません！　金輪際長門さんの悪口は言いません！　だからお許しをー！」
あまりの迫力に、素直に翔輝は謝った。この勢いでは土下座は時間の問題だったが・・・
「わかってくれればいいんです」
素直に謝れば案外すぐに陸奥の機嫌は直った。
やっと陸奥の顔から怒りが消え、笑顔になった。同時に、翔輝の

足から力が抜けて、翔輝はその場にへなへなと腰を落とした。
「あの、大丈夫ですか？」
陸奥が心配そうに尋ねる。原因は君なんだが・・・
「うん、大丈夫」
翔輝はなんとか足に力を入れて立ち上がった。
立ち上がると、自然に陸奥と視線が合う。今は怒ってないので、陸奥の端整な顔立ちはかなりの美少女に見える（実際は『陸奥』の艦齢は二〇歳と、もう少女ではないが、見た目は翔輝と同じくらいの年齢である）。翔輝は顔を赤くし、自然に視線を逸らした。
「顔が赤いですけど、本当に大丈夫ですか？」
心配そうに陸奥は翔輝の顔を覗き込む。焦るのはもちろん翔輝だ。
「だ、大丈夫！」
翔輝は必死で言う。ここは否定しておかなければマズイので。
そんな翔輝を見て陸奥はくすくすと笑う。それにつられ、翔輝も笑った。
「それより、一体『陸奥』に何のご用件で来られたんですか？」
陸奥はふとそう訊いた。ここでようやく翔輝は自分の仕事を思い出した。
「あぁ、そうだった。これを小暮艦長に渡すんだった」
そう言って翔輝は懐から手紙を取り出した。それを見て陸奥は不思議そうに首を傾げた。
「艦長に？　だったら艦橋に向かうんですよね？」
「あぁ、まぁ」
「だったら何で下甲板にいるんですか？」
「え？　ここって下甲板だったの？」
下甲板は軍艦艦内のかなり下の方の階だ。どうやら上に行こうとして思いっ切り下に向かっていたらしい。
「知らなかったんですか？」
「うん。それで迷子になっちゃって」
その答えに陸奥は大きなため息を吐いた。呆れられているのだろ

うが、全くもって言い返す言葉がない。
「艦の針路を迷わずに誘導する航海士という役職にいながら、艦内で迷子になり、あまつさえ上に向かうのに下に行き着くとは、ものすごい方向音痴ぶりですね」
「全くもって面目ない」
翔輝も言い返す言葉がなかった。すると陸奥は柔和な笑みを浮かべた。
「では、私が艦橋まで案内します」
そう言って自ら案内役を買って出てくれた。その言葉に翔輝は驚くとすぐに嬉しそうに微笑んだ。
「本当？　ありがとう！」
翔輝は嬉しくなって笑った。その満面の純粋な笑みを見て、陸奥はドキッと心臓を跳ね上げると顔を一瞬で真っ赤に染めた。
（長谷川少尉の笑顔って、結構かわいいです・・・）
「どうしたの？」
「ひやっ！」
翔輝の事を考えていた時に、その本人がいきなり自分の顔を覗き込んできた。そりゃ誰だって驚くだろう。
「な、何でもありません！」
顔を真っ赤にしたまま、陸奥はプイッと翔輝に背を向けた。
「さぁ、行きましょう。まずは上に行かなくちゃなりませんから」
「あ、うん・・・」
陸奥は歩き出し、翔輝はその後を静かについて行く。時折陸奥がチラチラとこっちを見てくるので、そのたびに翔輝は優しく微笑んだ。すると陸奥は顔を赤くしてすぐに前に向き直る。
一体何なんだろう？
翔輝は首を傾げながらも、陸奥の後をついて行った。

陸奥の案内で、翔輝はやっと艦橋に辿り着いた。
「ここが艦橋です」

「本当にありがとう」
艦橋の入口で翔輝は陸奥に礼を言った。陸奥は「いいんですよ」と言ってにっこりと微笑んだ。
「気にしないでください。それより早く用事を済ませた方がいいですよ」
陸奥は笑顔でそう言った。その言葉に翔輝はうなずく。
「あぁ、そうするよ」
翔輝は笑って陸奥と別れて艦橋の扉を開けた。戦艦の頭脳とも言うべき艦橋の中には数人の人がいた。それらは突如入ってきた翔輝を不思議そうに見詰めていた。
「うん？　君は誰だ？」
近くにいた航海長が声をかけてきた。翔輝はそんな彼にそっと敬礼する。
「戦艦『大和』航海士、長谷川翔輝少尉です。『大和』艦長高柳大佐から小暮艦長宛の手紙をお届けに参りました」
「私に、高柳君から？」
艦橋の奥にいた男がこちらに振り向いた。彼が小暮艦長なのだろう。
「はい」
翔輝は懐から手紙を取り出し、小暮に向ける。
「しかし、手紙を届けさせるくらいなら兵にでも任せばいいものを、相変わらず士官使いが荒い男だ」
小暮は苦笑しながら近づいて来た。翔輝はどうぞと言ってその手紙を小暮に渡す。
「ご苦労。君、長谷川翔輝と言ったね？」
「は、はい。そうですけど・・・」
翔輝がそう答えると、小暮は嬉しそうにうなずいた。
「君は艦魂が見えるんだね？」
唐突に出た『艦魂』という言葉に翔輝は驚愕した。
「艦長、どうしてそれを・・・？」

「いやー、『大和』の長谷川翔輝という新米航海士は艦魂を見る事ができるという噂を聞いてな」
一体どこのどいつがそんな噂を・・・
不思議そうに首を傾げる翔輝に、小暮は優しく微笑んだ。
「で、どうなんだ？　実際に見えるのか？」
小暮は楽しそうに聞く。まるで少年のように屈託のない笑顔だ。
「えっと、まぁ見えます。というか、さっき『陸奥』の艦魂にも会いましたけど」
「ほう、『陸奥』のも見たのか。で、どんな奴だった？」
「えっと、僕と同じくらいの女の子でした」
「君とって、おいおい、『陸奥』は今年で二〇（はたち）歳だぞ」
「さぁ、艦魂の年齢って結構適当みたいですよ。『大和』だってついこの前できたのに、艦魂は十三、四歳ぐらいの女の子でしたもの」
「それはすごい適当だな」
小暮は笑い、艦橋にいた全員がつられて笑った。
和やかな雰囲気が艦橋を包む。
「そうかそうか、『陸奥』の艦魂はまだ少女なのか、こりゃいい事を聞いた。高柳君にもよろしく言っといてくれ」
「はい」
翔輝は敬礼して扉の外に出た。
「終わりましたか？」
「あれ？　君まだいたの？」
目の前には自分をここまで案内してくれたこの艦の艦魂、陸奥がいた。
翔輝の言葉に陸奥は少し不機嫌そうな顔をする。
「だって、また迷子になられたら困りますから」
陸奥は苦笑いしながら言う。反論ができない所が情けない。
「そうか、ありがとう」
翔輝もそんな彼女の優しさに微笑んだ。
「いえ、それよりお手紙は艦長に渡されたんですか？」

「あぁ、あと艦長に君の事を教えといたよ」
その言葉に陸奥は目を大きく見開いて驚く。
「わ、私の事ですか？　な、何て言ったんですか？」
翔輝は一言、
「シスコン艦魂」
「シ、シスコン！？」
陸奥は顔を真っ赤にして驚く。だがすぐに怒り出す。
「な、なんて事を言ったんですか！　私は純粋にお姉様の事を・・・って、笑わないでください！」
そのあまりの焦りぶりに、翔輝は腹を抱えて大笑いした。
「うそうそ、うそだよ。君の外見を教えただけだよ」
そう訂正すると、陸奥はさらに顔を真っ赤に染める。
「だ、騙すなんてひどいですよ！」
「ごめんごめん」
笑いながら謝っても全く説得力が無い。
陸奥は顔を真っ赤に膨らませて怒った。
「もう知りません！　勝手に迷子でも何でもなってください！」
そう言って、陸奥は背を向けて走り出してしまった。廊下の向こうに消えてしまった少女の背中に、今頃になって、ちょっとやり過ぎたな、と後悔する翔輝。
「はぁ、ちょっとからかい過ぎたな」
頭を掻いてさすがに反省する。
「仕方ない。自力で帰るか」
そう言って、翔輝は歩き出した。彼が進む道はどこまでも金属のトンネルであった。

「まったく、あの人は・・・っ！」
ブツブツと文句を言いながら早歩きで進む陸奥。しかし、どうしても憎み切れなかった。
「・・・」

陸奥は立ち止まった。そして、自分が来た道を振り返る。
てっきり追って来てくれるかと思っていたが、その様子はなく、陸奥は残念そうに肩をがっくりと落とす。
「・・・また迷子になられたら私が困ります」
そう言って、陸奥は元来た道に歩き出した。
なんだかんだいっても、陸奥はとても優しい女の子なのだ。

その頃、一人で出口を目指していた翔輝はというと――案の定、迷っていた。
「えっと、どっちから来たっけ？」
T字路の左右を何度も見る。しばし見続け、そして決断。
「よし、右に行こう」
「一体あなたはどこに行くつもりなんですか？」
「え？」
その声に振り返ると、そこには呆れ顔の陸奥がいた。そんな彼女の姿を見て翔輝は嬉しそうに微笑む。
「陸奥。来てくれたんだ」
翔輝が笑うと、陸奥はプイッと横を向く。
「べ、別にあなたの為に来たんじゃないんです。ただ、偉大な戦艦『陸奥』の艦内で迷子で死人がでたら困るので」
「おーい、人を勝手に殺すなー」
ツッコミを入れるが、陸奥は軽くスルーした。なんか悲しい。
「そっちは機関室です。余計甲板からは遠くなりますよ」
「あ、そうなの？」
はぁと陸奥は深いため息をついた。
「本当に帰る気があるんですか？」
「あれ？　お前僕に帰ってほしいの？」
ニヤニヤしながら翔輝は聞く。
「そ、そういう訳では・・・ッ！」
おろおろとし始める陸奥を見て、翔輝はイタズラっぽい笑みを浮

かべる。
「ふーん、じゃあいてほしいの？」
「いや、そうでもなくて・・・」
陸奥は赤面しながらあたふたとする。
「どっちなんだよ」
少し呆れながら翔輝は言う。
「と、とにかく！　まずは甲板に向かいます！　ついてきて下さいッ！」
陸奥は左の通路を歩いて行った。
「逃げたな、ありゃ」
丸分かりな反応に翔輝は苦笑いしながらも後を追った。

数分後、翔輝は無事に甲板に着いた。
「はぁ、やっと海を見れた」
ふうと翔輝は息を吐いた。
もう空はオレンジ色に染まり、水平線上には太陽が沈みかけていた。夕日のオレンジ色が『陸奥』の甲板を染め上げる。まるで、『陸奥』燃えているかのようになんとも言えない輝きが艦体を包む。
「そろそろ帰らないと大和ちゃんが心配しますよ」
「そうだな」
翔輝は振り返った。夕日を背にした翔輝は微笑んでいた。
「今日は色々ありがとう」
「いえ、長谷川少尉ももう迷子にならないでくださいね」
「・・・努力する」
翔輝の返答に、陸奥はくすくすと笑う。それにつられて翔輝も笑った。
「長谷川少尉ー！」
「え？」
その声に振り向くと、内火艇の兵がいた。
「あ、あれ？　君待っててくれたの！？」

「すぐに出しますから！」
兵はラッタルを下りて行った。
翔輝は陸奥を見直す。
「お別れだね」
「そうですね」
翔輝は微笑み、右手を陸奥に向けた。陸奥もそれを理解して右手を出す。二人の手ががっちりと握り合い、二人は強く握手した。
「じゃあな。がんばれよ」
「少尉こそ」
握手を解き、翔輝はラッタルに足をかけた。その時、
「長谷川少尉！」
陸奥が翔輝を呼んだ。翔輝はそれに振り向く。陸奥は振り向いた彼に満面の笑顔を向けた。
「また、いつでもいらしてください！」
その言葉に、翔輝は笑った。
「あぁ、また来るよ！」
「きっとですよ！　約束です！」
「あぁ、約束だ！」
翔輝は手を振ってラッタルを下りて行った。

夕焼けでオレンジ色に染まった海を、翔輝を乗せた内火艇はゆっくりと『大和』に向かって進んだ。その様子を、陸奥は甲板からいつまでも見詰めていた。
真っ赤に燃える夕日のように、一人（一魂?）の少女の胸にも、何か暖かいものが生まれたのだった・・・

で、所変わって帰還した『大和』艦橋。
「任務、完了しました」
翔輝は高柳に任務完了の報告をしに艦橋に来ていた。戻って来た翔輝を見て高柳は優しく微笑んだ。

「そうか、小暮君は元気だったか」
「はい」
翔輝の返答を聞いて高柳は「それは良かった」とうなずいた。そんな彼を見て翔輝はぺこりと頭を垂れる。
「では、僕はこれで」
退室しようとする翔輝に高柳は「ありがとな」と礼を言った。
「いえ、また何かありましたら言ってください」
翔輝は敬礼して艦橋を出た。と、そこには、
「あ、大和」
そこにいたのはものすごく、死ぬほど不機嫌そうな顔をした大和だった。そして、大和は翔輝をキッと鋭い眼光で睨みつけていた。
「え？　何？」
戸惑う翔輝に、大和は吐き捨てるように言葉を出す。
「楽しかったですか？」
「は？」
「陸奥さんとの甘い時間は」
「はい？」
突然の意味不明発言に翔輝は困惑する。一方、そんな彼の前では刀のような鋭い瞳をしていた大和が、徐々にその鋭さを失っていく。
「少尉は年上好みだったんですか？」
そんな小さな言葉をやっとの思いで出した頃には、大和は今にも泣きそうな顔をしていた。
翔輝はうるうるとした瞳を向ける大和に苦笑いする。
「あの、なんか誤解してない？」
「誤解・・・ですか？」
その言葉に大和は少し反応した。それを見て、翔輝はうなずく。
「『陸奥』の小暮艦長に手紙を届けに行ったんだよ」
そう言うと、大和はきょとんとする。
「え？　じゃあ任務で？」
「そう、一応『陸奥』の艦魂にも会ったけどね」

そこで再び大和の目が鋭くなる。
「そこで何かありませんでした？」
大和は睨みつけるように言い放つ。
「だから何もないってば。一体何があるっていうんだよ」
「え、それは、その・・・」
大和は急に顔を真っ赤にして焦る。そんな彼女の反応に不思議そうに翔輝は首を傾げる。
「だから何があるって言うんだよ」
「そ、それは・・・、な、何でもないですぅッ！」
大和は顔を真っ赤にしたまま走り去って行った。
「一体何なんだ、あいつ」
一人残された翔輝はただただ大和の消えた方を見ているだけだった。

第一章　第五節　平和な内地（前書き）

《陸奥（むつ）》
長門型戦艦二番艦――戦艦『陸奥』
出身　横須賀海軍工廠（神奈川県）
身長　１５８ｃｍ
髪型　長髪
実年齢（１９４１年１２月現在）２０歳
外見年齢　１６、７歳
誕生日　１０月２４日
家族構成　姉・長門
好きなもの　翔輝・長門・翔輝と一緒にいる事・翔輝に好かれる事・長門の補佐をする事・平和な日々
嫌いなもの　長門をバカにされる事・翔輝を取られる事・口だけで実際には行動しない人・戦争
現連合艦隊の次席指揮官兼参謀長を務めている戦艦『陸奥』の艦魂で長門の妹。有事に際しか指揮ってくれない姉と違い、その妹である陸奥は士官クラスの艦魂の中ではかなりのまじめで、司令部の雑務は基本的に彼女がこなしている。長門の起こした二度の内乱の際は本当は長門に協力したかったが、長門が失敗した際の勢力維持の保険として中立立場を命令されたので中立勢力におり、十・一六事件の後はしばし連合艦隊旗艦を代行した。そんな彼女も翔輝に好意を寄せる一人で、翔輝が出会った艦魂の中では大和・長門に続く三番目の古参。大和と翔輝の強い絆に対抗できる数少ない有力者。仕事の実力はかなりのものだが、恋には素人同然なので、どう翔輝を自分に向けたらいいかわからず、右往左往する事もしばしば。さらに大和に負けず劣らずのやきもち焼きなので大和と対立する事もしばしば。しかし誰よりも純粋に翔輝を愛している。親友の伊勢や姉の長門に相談するも、あまり効果はない。それでも翔輝に対する想

いは誰にも負けず、いつか恋人になる事を夢見ている。

第一章　第五節　平和な内地

十二月二一日、『大和』は呉の軍港を離れ、連合艦隊の駐屯基地である柱島（はしらじま）にその拠点を移した。

その翌日、『大和』の会議室で艦魂達の集会が開かれた。

「王手！」

「うぐっ！」

ふふんと胸を反らすセミロングの少女の強烈な一手に、小さなツインテールをした少女が小さな悲鳴を上げる。

「ね、姉さん・・・ま」

「待ったなし」

「そ、そんな・・・っ」

敗北した少女は泣きそうになった。

この二人の名は勝利した少女が北上（きたかみ）。敗北した少女が大井（おおい）。どちらも球磨（くま）型軽巡洋艦の三番艦『北上』、四番艦『大井』の艦魂である。

球磨型軽巡洋艦は大正時代に竣工した旧式の軽巡である。だが、全五隻（他は一番艦『球磨』、二番艦『多摩（たま）』、五番艦『木曾（きそ）』）の球磨型軽巡のうち、この二隻は雷撃戦を重視して四連装魚雷発射管を十基四〇門をつい数ヶ月前にしたばかり。艦隊決戦の主力として位置づけられている。

そんな重雷装巡洋艦の二隻の艦魂はというと、今日もまたおなじみの光景を繰り返していた。

「こ、これで将棋、囲碁、学問、対術、兵法で五連敗・・・ッ！」

「素直に全敗と言ったらどう？」

北上は呆れながら言った。

「あらあら、北上ったら手加減なしね。大井ちゃんが泣いちゃうわよ？」

長門が横から優しげな笑顔をしながら入ってきた。すると、そん

な彼女にバッと大井に
「長門ぉッ！　どうすれば姉さんに勝てるようになるのッ！？」
大井はすがるように長門に哀願する。ちなみにこの二人は長門より少し年上である。
長門は「そうね・・・」と考え込み、
「ま、努力する事ね」
そんな情けない言葉を苦笑いしながら助言するのであった。
「そんな・・・」
大井は肩を落とした。そんな妹を見て、北上は呆れたようにため息する。
「これが私の妹かと思うと、先が思いやられるわよ」
「コラコラ」
長門はそんな北上の言葉に苦笑いした。
今や会議室は雑談場と化していた。
艦魂同士で楽しそうに会話をし、囲碁や将棋を楽しみ、先輩艦魂が後輩艦魂に色々と指導をしたり、平和そのものだった。まるで今が戦時中だとはとても思えない。
そして、そんな場所に一人の人間がお邪魔していた。
「なぁ大和。長門さんが来いって言ったから来たけど、本当に来て良かったのかな？」
翔輝は隣に座っている大和に声をかけた。翔輝の問いに大和は気にした様子もなくお茶をすする。
「いいんじゃないんですか？　艦魂を見る事ができる人間はめったにいないらしいですし」
「うーん、でもな・・・」
翔輝は改めて目の前の艦魂達を見る。みんなすっごく楽しそうだ。しかし、その中には一人だけ知っている顔がなかった。どうやら遅れて来るらしい。
「遅いなぁ・・・」
翔輝は懐中時計を見る。その時、

「遅れてすみません！」
ドアを開けて一人の少女が入って来た。その少女を見て翔輝の顔がぱあっと華やいだ。
長門は遅刻してきた妹を見てにっこりと微笑んだ。
「あぁ、陸奥。やっと来たのね。まぁくつろいでよ」
長門は楽しそうに言う。陸奥はその言葉に微笑み、ふと翔輝と目が合った。すると陸奥は翔輝の前までやって来ると、柔和な笑みを浮かべながら敬礼した。
「お久しぶりです。長谷川少尉」
「久しぶり。陸奥」
翔輝も立ち上がって陸奥に微笑む。。その様子を不機嫌そうに大和は唇を尖らせながら見詰める。
「少尉。どうです？　一勝負」
陸奥は近くにあった将棋盤を指差して笑う。
「お、いいね。やるか」
翔輝と陸奥は将棋盤の両側に向かい合うようにして座った。
将棋盤の上には規則正しく駒が置いてあった。これからこれを自分が指揮するんだと思うと、気合が入る。ちょっとした指揮官の気分だ。
「では、始めましょう。先手は少尉で」
「了解」
翔輝は歩兵一体を前衛に出す。
「私はこれで」
陸奥も歩兵を一体出陣させる。
「ほい」
翔輝は別の歩兵を出して連携をとる。
「では、私はこうです」
陸奥も別の歩兵を出す。
そんな調子で駒は盤の上を縦横無尽に動き回り。戦いを繰り返す。
そして十数分後、

「うーん・・・」
翔輝はかなりの劣勢だった。考え込む翔輝に、陸奥は容赦なく楽しげにとどめの一手を打ち込む。
「王手！」
「うぐっ！」
右に逃げれば金将が、左に逃げれば銀将が、前に逃げれば飛車が、後ろに逃げれば角行が王将を狙っている。つまり、逃げ場なし。
「くっ・・・参った」
翔輝は負けを認めた。
「やったーッ！」
陸奥は嬉しそうに駒を片付ける。その目の前では、
「ま、負けた・・・」
一人の少年が泣きそうな顔で将棋盤を見詰めていた。実は翔輝は同僚の中では将棋は強い方であった。その彼がまともに反撃できずに一方的にボコ殴りにされた形で戦いは終わった。
「あ、あの少尉・・・」
一方、小動物を思わせるように弱々しい姿をする翔輝にどう声かければいいかわからず陸奥はおろおろとするばかり。
すると、落ち込む翔輝の前にそっと羊羹が差し出された。
顔を上げると、そこには優しげな笑みを浮かべた大和が。
「少尉は十分善戦されました。元々陸奥さんと少尉ではやり込みの量が違いますから、無理ありません。これでも食べて元気出してください」
そう言って、大和は羊羹を差し出した。
「ありがとう」
翔輝は嬉しそうに大和に微笑んだ。が、すぐに不思議そうに首を傾げる。
「え？　羊羹？　どっから持って来たの？」
「主計科から拝借して来たんです」
大和は胸を反らして自慢げに言う。その言葉に翔輝は驚く。

「げ、それはヤバイだろ」
「そうですか？」
きょとんとする大和に翔輝は頭を抱える。
「そりゃそうだよッ！　ヤバイって！　まずいってぇッ！」
「・・・でも私の中ですし、問題はないかと」
「・・・そう言われると、そうだけど」
翔輝は何か丸め込まれた気がするが、一応納得する事にした。これ以上言い争っても無意味だと悟ったからだ。
翔輝は小さくため息をすると羊羹を手に取る。
口に入れると甘い味が口の中に広がり、疲れが全て吹っ飛んだよう。まるで夢心地。
「うん。おいしい」
「良かったです」
大和は嬉しそうに笑い、翔輝もつられて笑う。そんな二人を見て今度は陸奥がつまらなさそうな顔をする。その時、陸奥が何かを思い出したように笑った。
「少尉。半熟ゆで卵を食べませんか？」
「半熟ゆで卵？」
翔輝が不思議そうに聞くと、陸奥は笑顔で答えた。
「はい。ボイラーの熱で作った。とってもおいしいゆで卵なんです。今やそのおいしさから兵の間では大人気で、卵の出費がものすごく激しくなったんですよ」
「そういえば、兵達がそんな事を話してたような」
翔輝は記憶を掘り返してみる。
その間にも、陸奥はいつの間にか持って来た風呂敷の中から数個のゆで卵を取り出した。その中から、一番大きいのを翔輝に向ける。
「これなんかおいしそうですよ」
陸奥は笑顔でゆで卵を渡す。
「ありがとう」
翔輝も笑顔で受け取った。が、その時、不機嫌そうな大和の顔が

視界に入った。
「あ、陸奥。悪いけどもう一個くれる？」
その言葉に陸奥は首を傾げる。
「いいですけど、あまり食べるとお腹を壊しますよ」
「僕が食べるんじゃないよ」
そう言って翔輝は陸奥からゆで卵を受け取ると、優しげな笑みを浮かべながら大和に振り返った。
「ほら、お前も食べるだろ？」
「え？」
翔輝はゆで卵を大和に向けた。
大和は差し出されたゆで卵を見て呆然とする。
「あの、私に・・・ですか？」
「うん。食べないの？」
「あ、食べます！」
大和は急いで翔輝の手からゆで卵を受け取った。
ぽかぽかと温かみがあるゆで卵の殻をそっとむく。翔輝も同じ事をする。
陸奥から渡された塩をふって二人は口に運ぶ。
「うん。おいしい」
「はい。見事な半熟ですね」
二人は笑い合いながらゆで卵にかぶりつく。
「あ、ずるいよ陸奥ー。私にもちょうだーい」
「あ、私も！」
「私もお願いします！」
巡洋艦や駆逐艦の艦魂が次々にゆで卵を奪う。
「あ、私の分も残してよね！　って、人の話を聞けえええぇぇぇッ！」
顔を真っ赤にして怒る陸奥をよそに、ゆで卵は次々に消えていく。
「ねえねえ、お姉ちゃん。私達も食べようか？」
「うちは遠慮しとく。あんたはうちに気にせず、好きなだけぎょー

さん食べといで」
「うんッ！」
関西弁をした腰まで長い髪を揺らす少女の言葉に、ボブカットの髪から虫の触覚のようなツインテールをした少女が嬉しそうに喧騒の中に消えた。それを見て残った少女は嬉しそうに微笑む。
彼女の名は伊勢（いせ）。伊勢型戦艦一番艦『伊勢』の艦魂である。伊勢型戦艦は長門型戦艦の前級戦艦であり、建造当時は最大であった三五・六ｃｍ砲を六基十二門という重装備をした戦艦である。先ほど飛び出して行った少女は彼女の妹で伊勢型戦艦二番艦である戦艦『日向（ひゅうが）』の艦魂だ。どちらも二四歳と二三歳という年齢的には成人している二人だが、外見は伊勢は翔輝と同じくらい。日向に関してはなぜか大和くらいに見える。いくら艦魂の実年齢と外見年齢があやふやだといってもめちゃくちゃである。
「ほんま、のどかな午後やねぇ」
伊勢はそう言って緑茶を飲む。
「どうしたの？　伊勢はゆで卵食べないの？」
そう言って現れたのは二〇代前半くらいの女性。黒く長い髪をポニーテールにした女性は伊勢に向かって優しく微笑む。
「お姉ちゃんって、すごく信頼されてるな。伊勢」
「扶桑（ふそう）はん」
むに。
「ふふぉうふぁん（扶桑はん）！？」
「だから、お姉さんって呼びなさいって言ってるでしょ？」
そう言って伊勢のほっぺを引っ張りながら苦笑いするのは扶桑型戦艦一番艦――戦艦『扶桑』の艦魂である。
扶桑型戦艦は伊勢型戦艦の前級艦であり、伊勢型と同じく三五・六ｃｍ砲を六基十二門を搭載した戦艦であると同時に、日本連合艦隊でも古参組に入る老兵でもある。
そんな扶桑にほっぺを引っ張られる伊勢は半泣きになる。
扶桑の艦魂が伊勢のほっぺを引っ張る。

「ふふひへーは（許してぇな）！　ふぉふぇえふぁん（お姉さん）ッ！」
「よろしい」
そう言って、扶桑は伊勢のほっぺを離した。伊勢はちょっと赤くなった頬をそっと撫でる。
「せやけどお姉さんって、艦種別表では扶桑型戦艦と私達伊勢型戦艦は別の戦艦になっとるんよぉ？」
引っ張られたほっぺをさすりながら伊勢は言う。しかし、扶桑は笑った。
「私や山城の砲力や防御面の問題を改良されてできたのがあなた達伊勢型戦艦。でも、本当はあなたは扶桑型の三番艦として造られたのよ。ただ、あなた達の方が優秀だから同じにするのは無理だって、後から伊勢型戦艦って名になっただけ、つまり、あなたは私の妹なのよ」
「わかったような、わからないような」
伊勢は唇に人差し指を当てて考え込む。
「んもう。お姉さんをいじめる悪い子は、こうしちゃうぞ！」
「うひゃっ！？」
扶桑は突然伊勢を捕獲。その身体の隅々までくすぐった。
「おりゃ、おりゃ、おりゃっ！」
「にゃはははははっ！　や、やめれえええぇぇぇっ！」
目の縁に涙を溜め、顔を真っ赤にしながら笑い死に寸前で笑う伊勢。
「お姉ちゃん！　ゆで卵ゲットしたよ！　・・・って、あれ？」
激戦を勝ち抜いた日向が戻って来ると、伊勢が悶死しかかっていた。
口はだらしなくポカーンと開き、そこから大量のよだれが流れ出ている。体は細かく痙攣していた。扶桑もよだれを流しながら、楽しそうで、しかし危ない目をギラつかせながら伊勢をくすぐっている。

「あはは、も、もう。らめぇ。ひゅうが。助けふぇ・・・っ」
ここでようやく伊勢は妹の日向に助けを求める。が、
「ごめーんお姉ちゃん。駆逐艦の子達に呼ばれてるんだ」
「なっ！？」
日向はペロっと舌をかわいく出して反転。人ごみの中に去って行った。
「いひひひ、そ、そんな殺生な・・・、ひゅうーがー。はうっ！」
もはや狂い死にしそうな伊勢に、扶桑はとどめを刺す事にした。
「もう助けは来ないわね。じゃあ、本気で行くわよっ！」
「ひいっ！」
「超超秘伝最終奥義！　扶桑流精神破壊神手！」
その瞬間、扶桑の腕は音速を超えた。
「ぎゃはははっ！　い、息が、できなはははっ！　ゆ、許してぇなはははっ！」

扶桑の腕は約二分間動き続け、その後、去って行った。残ったのは、一人の艦魂の、無残な笑死体だけだった。

「あの、大丈夫？」
伊勢は誰かに揺り起こされた。
目の前には心配そうに自分を見詰めている軍人がいた。
「う・・・ん・・・あんたは・・・、大和の・・・」
「長谷川翔輝少尉。よろしくね」
伊勢は翔輝の力を借りて起き上がった。
「助かった。おおきにぃ」
「ううん、たいした事じゃないよ。いきなり白目を向けて、よだれを流しながら痙攣して気絶している人を見たら誰だって助けるって」
翔輝は悪意なく言ったのだが、その発言は伊勢のプライドに強烈なとどめを刺した。
「しゅ、醜態（しゅうたい）をさらしてしもた・・・」

「しゅ、醜態って・・・」
伊勢は翔輝の手も借りずに立ち上がった。そしてそのまま翔輝の方を向く。
「この事はどうか他言無用でお願いしますぅ」
「た、他言無用って言われても」
「？」
「もうみんなにバレてるし」
「えええぇぇぇっ！？」
伊勢は急いでまわりを見る。別段変わった様子はないように見えるが、よく見ると、駆逐艦の艦魂がこっちを指差してくすくすと笑っていた。
「そ、そんな・・・ッ」
「ちなみに、君をいじめてた扶桑さんはあっち」
翔輝達から少し離れた所に、ニヤニヤ笑っている扶桑がいた。
伊勢はその場に崩れ落ちると、ぐったりとうな垂れた。
「うぅ、お姉さんはひどい方やで」
「ははは・・・」
「笑い事じゃおまへん！」
「まぁまぁ」
怒る伊勢をなだめ、ひょいひょいと日向を呼ぶ。
「日向ちゃん。お姉さんをよろしくね」
「了解！」
やんちゃに敬礼する日向に、翔輝も答礼した。
「ちょい」
後ろから伊勢が声をかけてきた。
「何？」
振り返ると、伊勢は頭を下げてきた。
「その、おおきに」
もじもじと伊勢は言った。関西弁という翔輝が今まで聞いた事もない方言に新鮮味を感じながら、優しく微笑んだ。

「気にしなくていいよ」
そう言って、翔輝は大和の元に寄る。
「悪い大和。僕もう帰るよ」
その言葉に大和は驚く。
「え？　でもまだ・・・」
「一応仕事があるし」
「そうですか・・・お気をつけて」
「うん」
大和にそう伝えて、翔輝は去ろうとしたが、
「はーい、みんな注目！」
突然長門が椅子の上に立って大声を上げた。翔輝も自然にそっちを見る。長門は自分を見ている艦魂達を見詰め、ニッと笑みを浮かべて口を開く。
「明日は真珠湾を攻撃した機動部隊が帰って来るよ！　みんな疲れてるだろうけど、各員機動部隊の艦魂達が帰って来たら、盛大に歓迎してあげよう！」
長門は最後ににぱっと笑った。
『おおおぉぉぉッ！』
長門の意見にみんな賛成し、急遽歓迎会が開かれる事になったが、翔輝は人間なので、こそこそと部屋を退室した。

第一章　第六節　ハワイ作戦祝勝会（前書き）

《扶桑（ふそう）》
扶桑型戦艦一番艦――戦艦『扶桑』
出身　呉海軍工廠（広島県）
身長　１６４ｃｍ
髪型　ポニーテール
実年齢（１９４５年１２月現在）２５歳
外見年齢　２２、３歳
誕生日　１１月８日
家族構成　妹・山城　義妹・伊勢・日向
好きなもの　伊勢姉妹（特に伊勢）・山城・蒼い空
嫌いなもの　特になし
扶桑型戦艦一番艦・戦艦『扶桑』の艦魂。日本艦魂社会でも古参に入る老朽戦艦。２０年以上も前の戦艦なので性能は低く、問題も多く、二番艦『山城』と共に《欠陥戦艦》という不名誉な称号を持つ。人間側からそんな事を言われているが、本人は気にした様子もなくみんなの姉として信頼も高い。そんな彼女は義妹の伊勢が大のお気に入り。いつも伊勢にちょっかいを出している。その攻め方はかなり荒々しく、実は結構危険なキャラだったりするが、それを抜けばとても優しいキャラ。二度の内乱には中立に立った。

《伊勢（いせ）》
伊勢型戦艦一番艦――戦艦『伊勢』
出身　川崎重工業神戸造船所（兵庫県）
身長　１６０ｃｍ
髪型　長髪
実年齢（１９４１年１２月現在）２４歳
外見年齢１７、８歳

誕生日　１２月１日
家族構成　義姉・扶桑・山城　妹日向
好きなもの　翔輝・緑茶・和菓子・のどかな日常
嫌いなもの　突発的な緊急事態・怪談話
扶桑型の強化発展型である伊勢型戦艦一番艦・戦艦『伊勢』の艦魂。長い長髪をしたおっとりした性格で、大和撫子という言葉がぴったり。神戸（こうべ）出身だからか、関西弁を使う。翔輝に好意を寄せる一人。翔輝を我が物にしようと強硬策を取るキャラが多い中、彼女はそうした事はなく、平和的に想いを寄せている。翔輝の相談相手になる事もあり、陸奥と並ぶ有力候補。扶桑に絡まれるのが悩みだが、それもひとつの愛の形だと諦めている。大和と陸奥の対立に頭を悩ませている翔輝が相談するのも伊勢が多い。戦前から三国同盟や対米英戦には反対しており、長門と共に内乱を起こした一人。長門と同じく日本を破滅に導く策は何が何でも撤回させようとした。結局は失敗に終わり、しばし伊勢は長門達反対派と共に非国民などと呼ばれていたが、戦争が始まると仲間意識がより高くなり、今では皆一丸となってこの戦争に挑んでいる事に、皮肉を感じている。主力艦の長門型や大和型、汎用性が高い金剛型と違って攻撃力・防御力・速力・燃費など使い勝手が悪い扶桑型と伊勢型は常に浮いた形となっていたが。伊勢型は後に航空戦艦として生まれ変わる事となって、すばらしい活躍が期待されたが、残念な事に航空機や石油不足でその機会はなかった。終戦時に残った数少ない日本戦艦。

《日向（ひゅうが）》
伊勢型戦艦二番艦――戦艦『日向』
出身　三菱重工業長崎造船所（長崎県）
身長１５６ｃｍ
髪型　ボブカット・ツインテール
実年齢（１９４１年１２月現在）２３歳
外見年齢　１４、５歳

誕生日　４月３０日
家族構成　姉・伊勢　義姉・扶桑・山城
好きなもの　伊勢・水兵艦魂・楽しい事・日本
嫌いなもの　階級差別・わからない事・予想外な事
伊勢の妹で戦艦『日向』の艦魂。実年齢は２０歳を超えているのに、見た目は完全に子供という全キャラの中で最もギャップがあるキャラ。艦魂社会は艦種によって階級があり、通常士官艦魂と下士官・水兵艦魂との繋がりはほとんどない中、日向はそんな事気にせず駆逐艦や潜水艦の艦魂などと仲がいい。水兵達に最も信頼されている士官艦魂で、誰にでも笑顔で接せられる彼女だからこそである。大和達の翔輝の恋愛戦争を見て、みんなを応援している。でもやっぱり姉である伊勢を陰ながら応援している良き妹でもある。二度の内乱に対しては多くの水兵を味方に付けて三国同盟には反対したが対米英戦には賛成に回った。理由は先の翔鶴とほぼ同意見で、戦って死ぬか、座して死ぬかという選択で彼女は前者を取った。その為一時期は敵対勢力に回った伊勢と絶交状態に陥ったが、これも皮肉な事に戦争が始まったらなくなってしまった。日本が大好きで、日本を守りたいという気持ちは誰にも負けない。

第一章　第六節　ハワイ作戦祝勝会

翌二三日、『大和』の艦首甲板に柱島に駐留の全艦艇の艦魂達が集結し、機動部隊の帰りを待っていた。その中には、長門に呼ばれた翔輝もいた。

そして、ついに蒼く輝く水平線の向こうに多数のシミが見えてきた。そのシミは次第に大きくなり、艦の形に変形する。

『前方より機動部隊接近！　機動部隊接近！』

『大和』のスピーカーから見張り兵の声が響く。その放送の後、各艦の甲板や岸周辺に無数の兵達が群がった。みんな機動部隊の帰りをずっと待っていたのだ。

海面を進む艦隊の中心に、四隻の空母が見えた。

機動部隊の主役。空母『赤城』『加賀』『翔鶴』『瑞鶴』だった。

合奏隊が軍艦行進曲を演奏し、もうすでに目の前まで来ている機動部隊を歓迎する。

たった一度の攻撃で世界最強の艦隊になった機動部隊は、今や日本海軍の中核となっている。そんな機動部隊を、皆輝いた目で見詰める。中には睨む者もいた。きっと彼らは航空機反対主義者や戦艦優勢主義の前時代的な考えの者達なのだろう。

そして、ついに機動部隊の各艦が柱島軍港に接舷した。

機動部隊の兵達を、柱島駐留艦隊の兵達が歓迎する。

そして、『大和』の上の艦魂達の目の前がまばゆく光り、次の瞬間、多くの女性達が現れた。皆、大和達と同じく黒い軍服を着ている。それは士官服や下士官服、水兵服など様々だ。

「敬礼ッ！」

真ん中にいた少し右側にずれた所で纏めたポニーテールをした少女が敬礼し、それに合わせて機動部隊の艦魂達が敬礼する。

長門を中心とした駐留艦隊の艦魂達も答礼した。

「直れッ！」

長門達が答礼をやめると、向こうも敬礼をやめた。
ポニーテールをした少女は長門の前に出ると、カッと踵(かかと)を揃え、再び敬礼する。
「第一航空艦隊旗艦赤城以下、真珠湾攻撃の任務を遂行し、只今帰還しました！」
少女――機動部隊旗艦・空母『赤城』の艦魂が長門に報告をする。
緊張感たっぷりの赤城に対し、長門は柔和な笑みを浮かべる。
「ご苦労様ー。ゆっくりと休んでねー」
長門も笑いかけながら言う。そしてふと大和を来い来いと呼ぶ。
大和は不思議そうに首を傾げると翔輝を見る。だが翔輝も首を傾げた。その間にも長門は大和を呼ぶので、大和は慌てて長門に駆け寄る。
大和が来ると長門は機動部隊艦魂達に満面の笑みを向けた。
「紹介するわね。我が日本連合艦隊の希望の星。戦艦『大和』の艦魂よ。みんな仲良くしてあげてね」
長門は大和をぐいと前に出す。
前に押し出された大和は緊張しながらも自己紹介をする。
「は、始めまして！　戦艦『大和』の艦魂です！　まだまだ経験知らずの新米艦魂ですが、皆さんの期待に応えられるよう前向きに努力します！　右も左も分からないふつつかものですが、よろしくお願いします！」
ちょっと早口で大和は自己紹介を終える。
すると、どこからともなく多数のくすくす笑いが聞こえてきた。
「え、え？　えぇっ！？」
大和は辺りを見回す、笑われている事に焦っているのだ。
翔輝はやれやれという具合に大和の頭に手を載せる。
「あのな大和。嫁に来たんじゃないんだからさ・・・」
翔輝の見事なツッコミは、艦魂達を大爆笑の渦に巻き込んだ。大和は恥ずかしさのあまり、顔を真っ赤にする。
「あ・・・う、少尉の、少尉のバカ！」

「あぐッ！」
大和は翔輝の脇腹に肘を打ち込んだ。あまりの痛さに翔輝は身体を折ってしまう。
「こ、このッ！」
翔輝は大和を捕まえようと手を伸ばすが、大和はするりと回避して距離を取る。
「痛いなぁ・・・ッ、お前、不意打ちは卑怯だぞ・・・ッ」
「不意打ちではありません。奇襲攻撃です」
大和はきっぱりと答える。その返答に翔輝は呆れたようにため息を吐く。
「あのな、言い方を良くしても同じだろ」
「違います。不意打ちとは相手の思いもよらない攻撃をし、先手を取る事です。奇襲攻撃とは緻密に練られた奇策で敵を襲撃する事です」
「僕には同じに聞こえるけど」
うんうんと他の艦魂達もうなずく。その反応に大和は「むぐ・・・」と言葉を詰まらせる。どうやら追い詰められたのは、大和の方らしい。
「そ、そんな事はないです！　不意打ちと奇襲攻撃は全く別のものです！」
「それは間違っているよ」
突然機動部隊の艦魂群から声がし、二人は振り返る。そこには辞書を持った、大和と同じくらいの年の長い髪を流した少女が笑みを浮かべていた。
「奇襲とは、敵の隙を狙って、不意に襲撃する事。類語。不意打ち。って書いてあるよ」
少女は辞書を閉じて微笑みかける。
「えっと・・・」
翔輝は頭を掻く。大和も呆然としている。すると、二人の反応に気がついた長門が説明してくれた。

「あ、紹介するねー。この子の名は瑞鶴。第一航空艦隊・第五航空戦隊所属の、正式空母『瑞鶴』の艦魂なんだよー。ちなみに、歳はあなたと同じ今年生まれの子よ。よろしくねー」
「よろしく」
瑞鶴は二人に笑いかける。普通ならここで何らかの友情の華が咲くだろうが、そうならないのがこの人。
「ち、違うよ！　不意打ちと奇襲攻撃は全く別のものだよ！」
大和はもはや勝ち目のない無謀な戦いを翔輝に挑む。そんな大和の諦めの悪さに翔輝はため息する。
「あのなー、今瑞鶴が説明しただろ。奇襲の類語に不意打ちって言ってたじゃん」
「うぅ・・・」
大和はまだ納得してなかった。不満げに翔輝を見上げて唸っている。そんな大和に翔輝は再びため息する。
「大和ちゃんはまだ納得してないみたいですね」
横から陸奥が苦笑いしながら出てきた。
「こいつの納得の悪さは天下一品だよ」
「大和ちゃんはプライドが高いからですから」
「小さすぎるプライドだけどね」
苦笑いする翔輝に陸奥は笑いかける。その仲良さそうな様子を見て、大和は不機嫌が増し、さらに抵抗する。
「ち、違うったら違うの！　全く別なんだよ！　それにッ！」
「うわッ！」
大和はいきなり翔輝を捕まえ、陸奥から引き離すと、自分の背後に隠し、キッと先輩である陸奥を睨み付ける。
「陸奥さん！　変に少尉に近づかないで！」
「わ、私はそんなつもりじゃ・・・ッ」
顔を赤くしてあたふたとする陸奥に、大和は叫ぶ。
「ウソ言わないでください！　少尉をたぶらかしたんでしょ！？」
「そ、そんな事する訳ないでしょッ！」

顔を真っ赤にして怒る陸奥。いくら温厚な陸奥とはいえ、ここまでひどい言われ方をすれば怒る。だが大和だって大事な大事な翔輝を取られたくない一心である。怒りを露にして陸奥を睨み付ける。

そして・・・

「あの、話が脱線してる気が・・・」

大和に抱き付かれ、顔を赤くしている翔輝が困る。その苦笑いが、今のこの場にはあまりにも不謹慎であった。

大和は最後の自らの想いを咆哮する。

「私は間違ってないんだあああああぁぁぁぁぁぁッ！」

ドガアアアアアアアンッ！

『えええぇぇぇッ！？』

大和の身体は宙を舞い、滞空時間が五秒ほどした頃に落下。大和は自分の甲板を滑走し、第二主砲にすさまじい勢いで激突した。

沈黙が艦魂達を包む。それを破ったのは、

「ね、姉さんッ！　あーあ、やっちゃった・・・」

うろたえる瑞鶴が見詰める人物を全員が見て、全員が納得した。

軍帽から流れるようなサラサラとした長髪が特徴の少女だった。士官用の第一種軍装をを着こなし、すごくかっこいい。だが顔は端整でとても美しい。年の頃は大和より少し年上そうに見える。勇ましげな瞳が鋭く光り、少し怒っているようだ。

「あの、何がなんだか」

硬直している翔輝がつぶやくと、陸奥が苦笑いしながら説明してくれた。

「あの子の名は翔鶴。瑞鶴の姉で、翔鶴型空母一番艦・空母『翔鶴』の艦魂です――そして、連合艦隊艦魂最強の剣士なんです」

「さ、最強って？」

「柔道・空手・剣道の達人で、問題の全てを《技》で解決する子なんです」

その言葉に翔輝は冷や汗を流す。

「そ、それってヤバイんじゃ」

「ま、まあ」とつぶやいて、陸奥は苦笑いする。
「でも、基本的にはすごく優しい子なんですよ。ただ、ちょっと変わってるだけで」
「ちょ、ちょっとって・・・」
機銃台の横で気絶している大和を見詰め、やっぱりヤバイんじゃ、と思う翔輝。
「まぁ、大和はんはまだ翔鶴はんに会った事がなかったから、かなっての奇襲になったんではおまへん？」
翔輝の横から伊勢が出てきた。気がつくと、日向が数人の駆逐艦の艦魂を連れて大和を運んでいた。
「はーい、ちゃんと大和ちゃんを運ぶんだよー」
のん気な声が響く。と、その時、
「伊勢ちゃあああぁぁぁんッ！」
「うわッ！」
突如すさまじい勢いで扶桑が伊勢に飛びついてきた。あまりの威力に伊勢はその勢いに耐え切れずに転倒してしまった。
「伊勢ちゃん」
「姉さんやめてぇなッ！　少尉助けて！　陸奥助けて！　誰かああぁぁぁぁッ！」
伊勢が命の危機（？）に泣きながら絶叫する。その瞬間、
ドガアアアアァァァァンッ！
爆音と共に扶桑が宙を舞う。空中で三回転ほど回り、甲板に顔面から激突し、撃沈した。
呆然とする一同と顔面真っ青瑞鶴の見詰める先には、翔鶴が唇の端を吊り上げて不敵に笑っていた。
「これで問題はなくなったようだな」
翔鶴は何度もうなずいて嬉しそうに言う。
翔輝はそんな翔鶴を見詰めて「ははは・・・」と苦笑いする。そんな心が冷めていく翔輝に陸奥が慌ててフォローを入れる。
「あれでも問題を解決してるんですよ、彼女なりに」

「初期の問題はともかく、新たな問題が起きる気がする」
翔輝は苦笑いし、陸奥も苦笑した。
風が翔け抜け、各艦の甲板で風が踊る。
蒼い海に浮かぶ浮かべる城――それが戦艦。敵艦を打ち砕く為だけに造られ、そして存在するまさに戦う艦。
空母だって、巡洋艦だって、駆逐艦だって、みんな戦う事が使命の戦う艦だ。
「やっぱり軍艦はいいな」
翔輝は海面に浮かぶ軍艦群を見詰める。その時の彼の表情はとても優しげなものだった。
ふと、そんな彼を横目で見ていた陸奥が口を開く。
「軍艦と艦魂、どちらの方がいいですか？」
突然陸奥がそんな事を聞いてきた。いきなりどんな質問かと思ったが、基本根が単純な翔輝は考え込む。
「うーん、そうだねぇ・・・」
翔輝は悩む。軍艦は好きだが艦魂が嫌いという訳でもない。つまりどちらも好きなのだ。それに順位をつけろと言う方が無理な話だ。
「うーん。どっちも好きだな」
「ですから、どちらかと言うと」
「決められないよ。そんな事」
「じゃあ、一番好きな艦魂は誰ですか？」
「へ？」
陸奥は真剣に聞いてきた。自分を見詰めるその大きめな瞳はしっかりとこちらを見据えているが、翔輝は不思議そうに首を傾げる。
「それって、答えなきゃいけないほど重要な事なの？」
「え、それはその・・・」
陸奥は急に顔を赤くし、あたふた。翔輝はそんな陸奥をじーっと見詰める。するとその視線に気づいたのか、陸奥は慌てて視線を逸らす。
「べ、別に答えなくても構いません。ただ、なんとなく気になった

だけで」
「そう」
翔輝はそう言い、空を見詰める。空はどこまでも澄んでいて、どこまでも蒼かった。
風が吹き、各艦のマストに掲げられた朝日を象徴とした軍艦旗が靡く。戦艦も空母も、巡洋艦、駆逐艦もその威風を堂々と輝かせている。
これが――日本連合艦隊なのだ。
翔輝はそんな連合艦隊の艦艇達を見詰めて静かに微笑んだ。
「ひ、ひどい目に遭いました・・・」
「うわッ!?」
そこに頭に包帯を巻いた大和が現れた。その表情はげっそりとしていれかなり疲れているようだ。これがゲームならきっと体力は赤ゲージだろう。
「お、お前大丈夫なのか?」
「はい、なんとか・・・」
がんばって笑って見せるが、かなり疲れきっているらしくその笑みもどこかぎこちない。そんな大和を翔輝は心配する。
「お前、少し休んだ方がいいんじゃないか?」
「はい、そうさせてもらいます」
大和は素直に従った。相当ダメージを受けているらしい。大和はフラフラと艦内に入って行った。すると、大和と入れ替わるようにして水兵がこちらに向かって走ってきた。年の頃は翔輝と同じくらいだろうか。
「長谷川航海士!　航海長がお呼びです!」
「わかった!　ありがとう!」
水兵は翔輝に報告を終えると去って行った。どうやらそれだけの為に来てくれたらしい。ちょっと申し訳なかった。
「仕事ですか?」
陸奥が少し残念そうな顔をして訊いてきた。

「あぁ、悪いけど長門さんによろしく言っといてくれ」
「わかりました。がんばってください」
翔輝は陸奥に手を振りながら艦内に入って行った。

その夜、艦魂達は旗艦・戦艦『長門』の一室で歓迎パーティを開いていた。
「正式空母六隻もいれば、負けるはずなもんねぇ」
「そうそう。結局私達駆逐艦は何もしなかったもんね」
「実感はないけど、私達は勝ったのよ！」
「でも、往復にかなり時間がかかるのね、ハワイは」
「それだけ私達が深く敵地に突入したって事よ」
「大日本帝国万歳！」
機動部隊の駆逐艦達が嬉しそうにお酒を飲んでいる。外見は大和と同じ十三、四歳くらいなので、かなり違和感がある。駆逐艦の艦魂達は軍艦（戦艦・空母・巡洋艦。駆逐艦は艦艇に入る）と違って、士官服ではなく水兵の服を着ている。艦魂社会にも階級制度のようなものがあるのだろう。ちなみに、メンバーは谷風、浦風、浜風、磯風、陽炎、不知火、秋雲、霞、霰の計九人。機動部隊の全駆逐艦の艦魂達だ。そこへさらに「おめでとう！」「一緒に飲もう！」「今夜は飲み明かすぞ！」と柱島駐留艦隊の駆逐艦達も合流する。
駆逐艦達が楽しそうに飲んでいる所から少し離れた所には軍艦の艦魂達が集まっていた。駆逐艦の艦魂達は上官である軍艦の艦魂達の輪に入りづらく、端っこの方に仲間内だけで固まっているのだ。
『・・・』
しかし、駆逐艦の艦魂達と違い、なぜか軍艦の艦魂達は全員黙っている。
きっかけは長門が真珠湾攻撃の事を訊いたのに始まる。
理由はただ一つ。
よく考えればわかる事だ。真珠湾を実際に攻撃したのは空母ではなく、その艦載機だからだ。艦隊は安全圏にいたので、そのすさま

じい戦いを実際にした訳ではない艦魂達がその全貌を教える事など不可能だからだ。

「あいやー、ちょっとマズかったなー」

長門が笑いながら焦っている。なんとかこの気まずい雰囲気を変えたいのだ。原因は彼女だが・・・

そんな雰囲気の中、瑞鶴が大和に近づいた。

「ねぇ、大和って呼んでいい？」

「え？」

いきなり話し掛けられた大和は硬直する。そんな彼女に笑いかける瑞鶴。その優しい笑顔が大和の緊張を解した。

「は、はい」

「敬語はやめてよ。私の方が早く生まれたからって、三ヶ月しか違わないんだよ」

「は、はい――じゃなかった・・・うん」

「そうそう」

この二人の空気のおかげで、軍艦の艦魂達は別の話題で盛り上がった。

「ねえねえ大和。昼間いたあの若い士官は来ないの？」

彼女の言う士官とは翔輝の事だろう。

「え、少尉？　少尉は『大和』の航海士だから、そんな簡単に艦を降りられないんだ。だから、今は『大和』にいるよ」

「ふーん。彼って私達艦魂が見えるんだよね？」

「そうだよ」

「へー、私そういう人初めて会った」

「そっか、まだ生後三ヶ月だもんね」

「ちょっと、それじゃ赤ちゃんみたいだからやめて」

「あ、そういえばそうだね」

二人はくすくすと笑う。

そんな二人から少し離れた所に、日本連合艦隊の主力艦魂達が集まっていた。リーダーの長門、その妹の陸奥、扶桑、伊勢、日向の

柱島駐留艦隊の戦艦艦魂。機動部隊指揮官の赤城、加賀、蒼龍、飛龍、翔鶴の空母艦魂。さらに、機動部隊護衛戦艦、金剛型戦艦の二番艦『比叡』と、四番艦『霧島』の艦魂の計十二人だ。ちなみに、巡洋艦達も別の所で集まっている。

「しかし司令。敵空母部隊は撃ち漏らしてしまいました。申し訳ありません」

「そんなの気にしないでよ。長官（連合艦隊司令長官山本五十六大将）がまた機会を見つけてくれるよ」

赤城はものすごく真面目で、米太平洋艦隊の空母部隊を撃ち漏らした事をとても気にしていた。そんな赤城を長門が励ます。

この真珠湾で撃ち漏らした米空母部隊が、後に日本連合艦隊の決定的な致命傷となったのだが、今はそれは置いておく。

「元気を出せ加賀」

「ありがとう」

落ち込んでいる加賀を翔鶴が励ます。

加賀はショートヘアをした少女で、いつも柔和な笑みをしている心優しき艦魂なのだが、今はその笑顔が消えている。実は、真珠湾攻撃で戻って来なかった艦載機の内、約半数は『加賀』の艦載機だったのだ。その事を彼女は気にしていて落ち込んでいた。そんな彼女を翔鶴が励ます。

その二人から少し離れた所には二人の戦艦がいた。

「霧島。この玉子焼きおいしいよ」

きれいな長髪の女性――比叡が玉子焼きののった皿を妹に向ける。

「・・・ありがとう」

恥ずかしそうに顔を伏せていたショートヘアの女の子――霧島は姉の皿を受け取る。

二人は長女金剛、次女比叡、三女榛名、四女霧島の金剛四姉妹の内の二人で、金剛姉妹は日本戦艦中最も多い姉妹だ。長女金剛、三女榛名は同じ戦隊に所属していて現在はシンガポールからマレー沖に進出している。

実は長女金剛は元はイギリス人である。元々巡洋戦艦として日本がイギリスに注文して『金剛』は造られた。その後日本にやって来て二度の大改装の結果、高速戦艦として生まれ変わったのだ。『金剛』が初めて日本にやって来て、日本がそれを真似て造ったのが、姉妹艦『比叡』『榛名』『霧島』である。その為、他三人は日本人である。しかし、金剛は髪の色は金髪で瞳も蒼く外見もイギリス人だが、心は日本人であり、生まれ故郷のイギリスと戦う事は気にしていない。さらに、日本海軍の中で最も軍人らしい艦魂で、規律に厳しく、いつも『海軍精神注入刀』という竹刀を持っていて、他の艦魂達から『鬼の金剛』と呼ばれ、恐れられている。

そんなスーパー艦魂の妹達はものすごい個性的だ。

次女の比叡はとても妹想いな子で、お姉さんキャラでもある。末っ子で同じ戦隊の霧島の世話をよくやっていて、霧島をとても大切にしている。

三女の榛名は男勝りな性格でボーイッシュな艦魂。面倒見が良く、駆逐艦やその他小型艇の艦魂達に慕われている。

そして末っ子の四女霧島。彼女が一番変わっている。とても内気で人見知りが激しく、恥ずかしがり屋。いつもおどおどしているというなんとも戦艦の艦魂としては情けない奴だ。その内気振りは連合艦隊艦魂一である。自分に優しくしてくれる姉の比叡にいつもくっ付いて行動している。ちなみに、三番艦『榛名』と四番艦『霧島』は別の工廠で造られていたが、竣工したのは同じ日、つまり双子なのだ。そのせいか二人はかなりそっくりな顔立ちをしている。髪型と性格、瞳の鋭さ以外はそっくりだ。

なんとも愉快な金剛四姉妹である。

「伊勢ちゃん！」

「ひやぁっ！」

いきなり伊勢は後ろから扶桑に抱き付かれた。

「お姉さん。もうやめてぇな」

伊勢はもう疲れきっていた。そりゃあそうだろう。これだけ付き

纏われれば誰だってくたくたに疲れるだろう。だが、扶桑は疲れた様子もなく義妹である伊勢に抱き付く。

「いやーん。かわいい、かわいい伊勢ちゃん！」

扶桑は嬉しそうに伊勢の頬に自分の頬をこすり付ける。

「お、お姉さん・・・ッ」

もう抵抗する力もないのか、されるがままになっている伊勢を見て、日向がにこにこと笑顔をしていた。

「あー、またお姉ちゃんと扶桑お姉ちゃんがじゃれ合ってる」

「いや日向、じゃれてへんや。むしろ助けてぇな」

完全に高みの見物状態の日向を睨みながら怒る伊勢。そんな姉の瞳に真剣さを感じ取ったのか、日向はうなずいた。

「はいはい。扶桑お姉ちゃん。そろそろやめてあげないと、お姉ちゃんに嫌われちゃうよ」

「えッ！？　それは嫌ッ！」

日向の言葉に音速で手を放す扶桑。これが彼女の力。日向は機転の利く事をいつも言ってくれて、伊勢の対扶桑用の最終兵器である。そんな彼女はしゃべり上手でもあり、駆逐艦等の艦魂達とすごく仲がいい。

そんな日向の姉が全艦魂キャラの中で、上位に入るまともなキャラが伊勢だ。関西弁というスキルを抜けば一番まともである。その為まわりに振り回される事が多く、損な役回りが多い。義姉の扶桑にすごく気に入られ、いつも付きまとわれる。

その迷惑女が扶桑。義妹の伊勢が大好きで、強烈なスキンシップをする。実はSの属性があり、かわいい伊勢をいじめるのが大好きという、全艦魂キャラの中で最も困ったキャラである。

そして、そんな扶桑の実の妹はというと、

「・・・」

部屋の隅の方で一人飲んでいるセミロングの少女が扶桑の妹――山城（やましろ）である。

極度の無口で、常に無表情。感情を表に出さず、単独行動が多い。

その為扶桑は「つまらない」と言って山城に構わず、おもしろい伊勢にちょっかいを出す。

彼女の笑顔を見たと言う艦魂は五本の指にも入らず、扶桑もたった一回しか見た事がないというほどの無表情で、全艦魂の中で最も無口、無表情キャラだ。しかし、実は怒らすと最も恐ろしいという噂もある。謎の多いキャラだ。

以上。連合艦隊主力艦魂達でした。

「ねぇ大和。その少尉ってどういう人？」

お酒を飲んで上機嫌の瑞鶴が訊く。それに対し大和は顔を真っ赤にしながら（大和はお酒を飲んでいないのでたぶん別の理由）答える。

「どうって、すごく優しい人です」

「ほうほう、それで恋仲は進展しているか？」

「な、長門さん！？」

いつの間にか長門を始め主力艦魂達が集まっていた。その誰もがにこやかな笑みを浮かべている。

「確かに、優しい人でした」と伊勢。

「浮気はダメよ！」と扶桑。

「そうですね、私も少尉の事は好きです」と陸奥。

「お、これはドロドロの三角関係の始まりか？　お姉さんはどっちを応援しましょうかしら？」と長門。

「お姉様ッ！　わ、私はそういう好きでは・・・っ！」と陸奥が焦る。

「それも青春だよぉッ！」と日向。

「・・・バカ」と山城。

「うわッ！　山城がしゃべった！　明日は厄日だ！」と比叡。

「そんなおおげさな」と霧島。

「中島（なかじま）中尉、平崎（ひらさき）少尉・・・」と加賀。

「わかったわかった」と翔鶴。
「あなた達いい加減にしなさい」と赤城。
いつの間にか集まった主力艦魂達を見て焦る大和。この状況を打開すべく、大和は今言った事を否定する事にした。どうせ本人はいないし。
「あう、でも、優しいけどバカだし、おっちょこちょいだし、方向音痴だし、戦艦フェチだし、結構最低男ですよ」
「お前、僕の事今までそんな風に思ってたの？」
「ひやあああぁぁぁッ！　少尉、どうしてここに・・・ッ！」
突如最悪のタイミングで現れた翔輝に焦りまくる大和。それに対しものすごく寂しそうな翔輝。
「旗艦で航海会議をやってたんだよ。知らなかったのか？」
昼間翔輝が呼び出されたのはそういう理由だったのだ。
「あ、そういえばそんなのがあったような・・・」
もう大和の頭は崩壊寸前である。もちろん翔輝も別の意味で崩壊寸前だったが、
「・・・って、ちょっと待て」
翔輝は突然頭を抱える。
「ん？」
長門はモグモグとカレーライスを食べている。
「ちょっと、質問いいですか？」
「モグモグ・・・うん、いいよ」
「あの、一体どこから持ってきたんですか？」
当然の疑問だった。
まさか主計長に頼んだわけでもあるまい。かといって艦魂の誰かが料理した、とも考えにくい。というか、よく見ると艦魂達はみんな何か飲んだり食べたりしている。
頭を抱えたままの翔輝に、長門は一度カレーライスを飲み込む。
「空間からだよぉ」
食べながら長門は平然と言ってのけた。

いつも思う事だが、この人の言う事はいちいち意味が分からない。
そのたびに翔輝は固まらなければならなかった。実は長門はお姉さんキャラ＋電波なのではと疑い始める今日この頃。
「空間から、って・・・あなたは魔術師ですか！？」
「そんなわけないじゃない・・・私は司令官だよぉ」
「空間からカレーを取り出す司令官はいないと思いますけど」
「うーん。というか、この艦は艦魂の心の中みたいなもんだからねぇ、思った事なら大体叶うんだよぉ。例えば・・・」
そう言って長門はニヤリと不気味に笑った。すると、
ガゴォォォンッ！
「痛ってぇ！」
なんだか間の抜けた効果音と一緒に翔輝が呻き声をあげた。同時に艦魂達が爆笑する。何が起きたかと言うと、翔輝の脳天にどこからか落ちてきた金ダライが直撃した、といったところだ。
「と、こんな事もできるんだよぉ」
「ちょ、ちょっと長門さん・・・？」
ガゴンッ！　ガゴンガゴォンッ！
十個も落ちた・・・結構痛い。
「まぁ、今回はタライだったけど、矢の雨を降らす事もできるだよ・・・試してみる？」
「死んでしまいますよッ！」
翔輝が自分を埋め尽くしているタライを押しのけて怒鳴った。そんな翔輝を見て長門はケラケラと笑う。
「死なないってばぉ。ちゃんと手加減するからさぁ」
「それでも嫌です！」
「まぁそんな怒らないでぇ、ほら、長谷川君も食べる？　カレー」
また長門はどこからかカレーを取り出して翔輝に手渡した。
「・・・食べても大丈夫なんですよね？」
スプーンでカレーをつつきながら、疑惑の目で長門を見る。
「んー、害はないハズだよぉ。お腹は膨らまないけど、ちゃんとカ

レーの味はするんだよぉ」
「夢の中でご飯を食べてるようなものですか？」
「そうそう。だから、矢の嵐に降られても夢の中で矢に追いたてられているようなものなんだよぉ」
「・・・嫌すぎます」
「でも、スリルがあっていいかもねぇ」
「冗談キツイですよ」
「あはははははッ！」
そんなやりとりに長門が笑い出す。同時に他の艦魂達も笑い出した。その誰もが心の底から楽しそうに笑っている。おそらくたった今の世界中で一番のどかで平和な場所はここだろう。
「ま、いいや。みんな楽しそうだってわかったし、じゃ、僕は戻ります」
「えーッ！？　帰っちゃうの？」
長門は明らかに不満そうだ。見ると大和達も同じ反応をしている。
「はい。すみませんが」
「仕事？」
「いえ、何もないですけど」
その回答に長門はぱあっと顔を華やげる。
「じゃあ宴会に混ざってぇ！」
その言葉に焦るのは翔輝の方だ。
「いや、僕以外全員艦魂ですよ」
「差別はいけませーん」
「いや、そうじゃなくてですね」
長門を説得しようとするが、今の長門は酒を飲んでいて通常の三倍わがままだった。
長門は椅子から立ち上がるとビシッと翔輝に指を突き立てる。
「えーい、第十七駆逐隊！　長谷川君を捕獲しろー！」
『了解ですッ！』
第十七駆逐隊・駆逐艦の艦魂――谷風、浦風、浜風、磯風の四人

が翔輝に跳び付く。
「うわぁッ！　ちょっと待ってッ！」
四人の少女に捕獲され、翔輝は無理やり参加させられた。

「ほんまぁ？　長谷川はんは航海士をしとるんどすか」
伊勢が翔輝にくっ付く。酒のせいで歯止めが外れているのだ。強制歯止め役の扶桑は爆睡中。誰も今の彼女は止められない。
「あ、あの伊勢さん」
「伊勢でええよー」
「あ、じゃあ伊勢。ちょっと離れてくれない？」
「嫌やぁ」
「そ、そんな・・・じゃあ実力行使」
伊勢をかるーく持ち上げて離す。
「悪い日向。これ頼む」
「了解しましたー」
酒が飲めない日向は健在で、泥酔しきっている伊勢を託す。日向に抱きとめられた伊勢は最初こそは不満そうな顔をしていたが、すぐに今度は妹に甘え始めた。
「はー、やっと脱出できたー」
翔輝はやれやれと汗を拭う。が、
「少尉ーッ！」
「うわッ！？」
突然前方から陸奥が抱きついて来た。その勢いで翔輝は立ち上がろうとしていたのにまたも無理やり座らせられてしまう。
「ちょ、今度は陸奥かよ」
「えへへー、今度は私でした」
無邪気な笑みを出す。こいつも完全に酔っ払っている。上気した顔が何よりの証拠だ。
「陸奥。頼むから離れてよ」
「じゃあ、大和ちゃんじゃなくて私に来てよぉ」

「いや、それはちょっと」
「んじゃ、離れない」
陸奥は余計顔を埋める。常時の敬語はどこへやら。今の陸奥は完全に翔輝に甘え切っている。
「えへへー」
「勘弁してよー」
翔輝がもう諦めようとした時だった。
「・・・すぅ」
「え？」
その変な息の音に翔輝は再び下を見る。すると、陸奥は小さな寝息を立てて静かに眠っていた。
「あ、あはは。疲れちゃったんだ」
翔輝は仕方なく陸奥を運び、隅っこの方に寝かせた。陸奥は小さな寝息を立てて気持ち良さそうに寝ていた。
「おやすみ」
翔輝は陸奥から離れた、すると、
「お姉ちゃん。起きてよー」
一人の女の子がもう一人の寝ている女の子を起こしていた。起こしている方の女の子が泣きそうな顔をしていたので、放っとけなかった。
「どうしたの？」
翔輝は自然に声かけた。が、
「ひやッ！？」
女の子は死ぬ程ほど驚き、顔を隠してしまった。見た目は陸奥と同じくらいに見えたが、全体的に幼さをかなり残している少女だった。
「えっと・・・」
目の前で起きた事が理解できなかった。自分は何かひどい事をしてしまったのか？
その時、翔輝は長門に紹介された主力艦魂達の中にこの少女がい

た事を思い出した。
「えっと、霧島さん？」
名前を言うと、少女――霧島はうなずいた。
「ど、どうしたんですか？」
一応艦齢は自分より上なので敬語で接する。
「・・・」
一方、霧島は黙ったままだった。顔を真っ赤にして必死で寝ている少女の後ろに隠れている。
「えっと・・・」
そこで翔輝はもうひとつ思い出した。
そういえば、長門が霧島は史上最強の内気兼人見知りが激しい兼恥ずかしがり屋という三大他人恐怖症を持っていると言っていた。
仕方ないので、翔輝は自分の頭脳に頼る事にした。
「えっと、頼れる比叡さんが寝てしまって一人ぼっちなってしまって困っていると」
翔輝は自己解釈したが、あながち合ってはいない訳ではなかったらしい。霧島はゆっくりとうなずいた。
そこで比叡を見ると、完全に泥酔していた。このような上官を何人も見ているので翔輝には即断できた。
「これは無理だな。完全に夢の中に堕ちてる」
「そ、そんな・・・」
聞き取れたのが不思議なほど小さな小さな声で言う霧島。
「んー、誰か代役は」
翔輝はまわりを見回すが、艦魂達は寝ているか理性が吹っ飛んでいる奴ばかりだった。大和も瑞鶴と寄り添って寝ている。
もう一度見回した時、一人だけ見つけた。
「あ、一人いた」
それは隅で一人飲んでいる無表情少女だった。
「あのー」
少女に声をかける。

「・・・」
なぜか睨まれた。そこで名前を思い出す。彼女の名は、
「山城さん。その、霧島さんが比叡さんが寝ちゃって困ってるんです。助けてやってくれませんか？」
「・・・そんな義理はない」
「いや、同じ艦魂じゃないですか」
「・・・」
山城は怯えている霧島を睨み付ける。
「ひッ！」
霧島は再び隠れてしまう。仲間を睨むなって。
「その」
「・・・失せろ」
そう一蹴された。
「はい」
そのあまりの気迫に押され、素直に引き下がった。
再び霧島の元に戻るが、霧島の対応も変化なしだった。
「うーん、どうしようか」
困る翔輝はフラフラとテーブルに向かい、まだ温かさが残っている料理をいくつか持って霧島の元に戻り、それを向ける。
「え？」
「まぁ、これでも食べて待つしかないですね。誰かまともに可動できる人が起きるまでは僕が相手しますよ」
「え？」
驚く霧島に、翔輝は寂しげに笑う。
「・・・僕、じゃ、やっぱりダメですか？」
「・・・いえ」
霧島は顔を真っ赤にしながら持って来た羊羹を口に入れる。
翔輝は小さなため息をついて霧島の横（少し離れているが）に座った。だが、話題が出ず、二人は沈黙したままだった。
うーん、大和や陸奥と違ってかなり攻略が難しいキャラだな。

翔輝は頭を掻く。その時、
「・・・すみません」
「え？」
霧島はうつむいたまま言った。
「・・・その、迷惑を掛けてしまって」
「いや、別に気にしてないですから」
「・・・本当ですか？」
「もちろん」
翔輝は笑顔で言った。その言葉に、霧島は少しだけ安心した。
「・・・大和さんが認めたのも、なんとなくわかるような気がします」
「え？」
「い、いえっ。別に・・・ッ！」
顔をさらに真っ赤にさせてうつむく。
「何か、いつの間にか僕は大和のお気に入りって事になってしまってるようですね」
「・・・嫌、なんですか？」
「うーん、どうでしょう。別に嫌って訳じゃありませんけど、複雑な心境ですね」
「そうなんですか。大和さんみたいなかわいい女の子に気に入られてるのに、素直になれないんですね」
「かわいい、か」
「かわいくないんですか？」
「いえ、まぁかわいいと思います。結構好きですし」
「好きって、恋人に対するようなものですか？」
霧島の質問に、翔輝は顔を赤く染めて否定する。
「そ、そういうのとは違いますよ。何て言うか、家族。妹に対するような好きですね。英語で言えば《ラブ》ではなくて《ライク》です」
翔輝の答えに、霧島くすくすと笑う。そんな彼女の小さな笑顔に

翔輝もつられて笑った。
霧島は笑っていたが、ふと思った事を口にした――そこで霧島は地雷を踏んでしまった。
「少尉の家族はどういう方々なんですか？」
そこで霧島は気づいた。一瞬にして翔輝の顔から笑顔が消えた事に・・・
「あの・・・、私、なんかまずい事言いましたか？」
そのあまりの豹変ぶりに霧島は怯える。すると、翔輝は優しく微笑んでくれた。だが、その笑みは少し寂しそうだ。
「いや、別に。僕にはもう家族はいないんですよ」
「え？」
驚く霧島に、翔輝は小さくため息した。
「父は満州事変で、母は病気で、唯一の肉親だった妹は今年の春に病気で亡くなっているんです」
その言葉に霧島の顔が真っ青になる。
「あ、ご、ごめんなさいっ！　私、何も知らなくて・・・ッ！」
「いや、いいんです。もうケジメはつけていますから」
笑って見せるが、その笑顔は弱々しかった。
霧島はなんとかこの雰囲気を打開しようと考える。
「あ、あの」
「はい？」
霧島は再び顔を真っ赤にして、今度はしっかりと翔輝の目を見る。
「あの、その、・・・呼び捨てにしてくれませんか？」
「え？」
突然の謎の頼みに翔輝は不思議そうに首を傾げる。すると、霧島は少し照れたように小さく笑みを浮かべる。
「・・・いくら私が二六歳で人間で言う大人でも、その・・・艦魂って成長が遅くて、特に私は著しく成長が乏しくて、年下の長門さんや陸奥さんに負けますし、その、こういう性格ですから、敬語で接せられるのって不自然で嫌なんです」

「・・・なんか、説明長いですね」
「・・・そういう問題では」
あうあうと今にも泣き出しそうな霧島に、翔輝は優しく微笑む。
「別に、霧島さんがいいならそれでもいいですけど」
「お、お願いします」
「了解。霧島」
初めて敬語抜きで自分の名前を呼ばれて、霧島はこれまでにないほどの笑みを浮かべた。
「はい。少尉」
「そっちは変わらないのね」
「当然です」
そんな霧島を見て、ついつい笑ってしまう翔輝。それにつられて笑う霧島。
ふと思う。
「お前、ずいぶんと話すようになったな」
「え？」
自分でも自覚していなかったのだろう。その言葉に霧島は一気に顔を赤くし始めた。それはもう熟れたトマトのように。
「ちょ、霧島。大丈夫！？」
「ふひゃぁぁぁ・・・」
変な声を上げたと思った瞬間、霧島はカクッと力が抜け、その場に倒れてしまった。
「うわぁッ！　霧島！」
起こそうとするが反応なし、しかし、見た感じただ寝ているだけだった。気絶してそのまま寝てしまったのだろう。
翔輝は霧島を比叡の横に寝かせ、再びあたりを見回す。泥酔して熟睡している人が半数。まだ飲んでいるが、完全に歯止めがはずれているのが十数名。さっきから飲んでいるが全く変化がない人が一人。
「こりゃ、そろそろ帰るか」

もうここは別世界となっていて、ノーマルな翔輝はお手上げだった。
翔輝は寝ている大和を一瞥し、ドアを開ける。その時振り返り、全員を見詰める。
「おやすみ」
翔輝は笑顔で言った。
そして、翔輝は部屋を出て、無事に『大和』に着いた。

翌日。柱島駐留艦隊と、昨日帰って来た機動部隊の艦艇の内、戦艦『大和』『日向』『山城』、その他数隻の艦艇以外の全艦艇の調子が狂った。原因は不明。テロ説などが言われたが、テロなら沈めなければ意味がないと否定。
結局、整備兵達は一日中整備に回される事になった。
しかし、本当に原因は何なのか、それは艦魂と、翔輝しかわからなかった。
その日、大和は朝に帰って来てとても疲れていた。酒に異常に強かった山城、飲まなかった大和、日向以下数人の艦魂以外が二日酔いにかかり、その看護をしていたそうだ。
ここでようやく翔輝は原因がわかった。
艦体は艦魂にとって身体のようなもの。つまり、艦魂が二日酔いになったせいで艦に異常が出たのだ。
お酒は程々に、と、翔輝は学習した。

その次の日、二日酔いも治り、整備兵達が不眠不休で調べていた原因不明のトラブルも直り、この騒動は幕を閉じた。
この騒動で、整備兵五人が過労によって倒れ、病院に運ばれたのは隠れた被害だったという。

第一章　第七節　寂しき少女の想い（前書き）

《赤城（あかぎ）》

赤城型航空母艦一番艦（天城型巡洋戦艦二番艦）――空母『赤城』

出身　呉海軍工廠（広島県）

身長　１５７ｃｍ

髪型　ポニーテール

実年齢（１９４１年１２月現在）１４歳

外見年齢　１７、８歳

誕生日　３月２５日

家族構成　姉・天城（建造途中に廃棄）

好きなもの　長門・航空機・努力・思い通りに戦局が動く事

嫌いなもの　悪天候・予想外な敵の動き

日本海軍を一躍世界最強にした真珠湾攻撃の陣頭指揮をした第一航空艦隊旗艦・空母『赤城』の艦魂。元々は天城型巡洋戦艦二番艦として起工されたが、ワシントン海軍軍縮条約の締結に伴って空母に変更されて竣工した。そんな『赤城』の艦魂はとてもまじめで機動部隊司令部の仕事を一手に行っている優秀な指揮官。副司令官を務めている加賀にいつも振り回されるかわいそうな一面もある。長門を敬愛し、極度の長門ファン。何事も策を十分に練ってから行動するので失敗する事はほとんどない。しかし逆に突発的なアクシデントには極端に弱いが、それ以外は頼れる指揮官。長門の起こした二度の内乱には反対派として賛成派と衝突した一人。今では日本海軍の最前線の指揮官として日々激務をこなしている。実は今現在彼女には春が訪れているとかいないとか。

《加賀（かが）》

加賀型航空母艦一番艦（加賀型戦艦一番艦）――空母『加賀』

出身　川崎重工業神戸造船所（兵庫県）

身長　１５８ｃｍ
髪型　ショートヘア
実年齢（１９４１年１２月現在）１３歳
外見年齢　１７、８歳
誕生日　３月３１日
家族構成　妹・土佐（建造途中で廃棄）
好きなもの　赤城・赤城をおちょくる事・航空機・平和な日々
嫌いなもの　出撃するたびに減ってしまう搭乗員・表面だけの勝利・戦争

赤城の副官として機動部隊副司令官を務めている。『赤城』と同じくワシントン海軍軍縮条約の影響で加賀型戦艦一番艦の『加賀』が空母に改造される事になった。本当は赤城型巡洋戦艦一番艦『天城』が改造される事になっていたが、『天城』は関東大震災で致命傷を受けた為『加賀』が代艦となった。そんな加賀はいつも笑顔でバカっぽく、赤城にちょっかいを出して彼女を怒らせるが、赤城が司令部の中で一番信頼している艦魂。時折気まずい雰囲気になる機動部隊艦魂司令部に和やかな雰囲気を出してくれるキャラ。長門の内乱に対しては赤城と共に反対派に回った。いつも笑顔で明るい彼女だが、航空機搭乗員の命を誰よりも大切に想っていて、夜中に戦死名簿を見て涙する優しき一面もある。

《翔鶴（しょうかく）》
翔鶴型航空母艦一番艦――空母『翔鶴』
出身　横須賀海軍工廠（神奈川県）
身長　１６３ｃｍ
髪型　長髪
実年齢（１９４１年１２月現在）０歳
外見年齢　１５、６歳
誕生日　８月８日
家族構成　妹・瑞鶴

好きなもの　武士道・正々堂々・一騎打ち・強い奴
嫌いなもの　卑怯な行い・人海戦術・弱い奴

日本海軍が世界に誇る日本の空母技術の粋を結集させて完成したばかりの新鋭攻撃型空母の艦魂。その性能は同時期の外国空母よりも高性能。そんな『翔鶴』の艦魂は剣道・柔道・空手の達人。その戦闘能力は日本艦魂の中で最強。物事を《技》で解決してしまうので争い事を治める最終兵器でもある。性格はいたってクールで上官に対しても敬語を使わないなどかなり肝が据わった人物。武士道を心に持つ武道家。後に日本機動部隊の主力となる。十一・二八事件の際は先輩空母艦魂や長門達を敵に回して賛成派に立った。理由はハルノートを受け入れる事は事実上不可能な上にもし条件を呑んでも日本には利益がなく、それどころかハルノートには条件を呑んだら石油輸出禁止を解くとは書かれておらず、石油不足で訓練もできずに弱った所を難癖つけてアメリカに攻め込まれたらそれこそ日本という国の滅亡になるとの意見だった。それは後の太平洋戦争開戦の議論でも扱われている戦争正解派の考えそのものであった。そんな翔鶴だが、妹の瑞鶴には多少甘いところもある。瑞鶴を大切にしており、幾多の戦いで自分が傷ついて瑞鶴が無傷という事に関しては、妹を守れて良かったという想いを抱いている。翔輝とは結構話が合うのか、彼に相談する事もしばしば。翔輝を巡る恋愛戦争に参戦するかはいまだ未定。ちなみに身長に対してかなり胸が小さい（貧乳）を少なからず気にしていて、それについて言われると大激怒する。

《瑞鶴（ずいかく）》

翔鶴型航空母艦二番艦――空母『瑞鶴』
出身　川崎重工業神戸造船所（兵庫県）
身長　１５５ｃｍ
髪型　長髪
実年齢（１９４１年１２月現在）０歳
外見年齢　１３、４歳

誕生日　９月２５日
家族構成　姉・翔鶴
好きなもの　翔鶴・大和・剣道・優しい人・甘いもの
嫌いなもの　いじめる人・まじめに話を聞いてくれない人・辛いもの
空母『瑞鶴』の艦魂。日本海軍最強の姉に対し、瑞鶴はいたって普通の女の子。姉に習っているので剣道はそれなりの腕を持つ。大和の親友として彼女の相談にのったりする。内地や根拠地で停泊し続ける大和達主力部隊の代わりに太平洋の海を縦横無尽に翔け回る。今作は主力部隊と機動部隊で物語が分かれるので、機動部隊主人公として彼女がこの後に活躍していくので、もう一人の主人公とも言える。ミッドウェー海戦の後は姉である新司令官となった翔鶴の補佐に全力を注ぐ。あまり自分の意見をハッキリと言うタイプではないが、筋の通っていない話には全力で反撃する強い一面も持つ。自分が生まれた時はすでに開戦は避けられない緊迫した雰囲気だったので、自分が生まれたから日本は戦争を始めてしまったのだと後悔している部分もある。十一・二八事件では翔鶴の命令で中立勢力にいた。この戦争を何とか日本が滅びぬ形で終了させる事に全力を注いでいる。

《比叡（ひえい）》
金剛型戦艦（巡洋戦艦）二番艦――戦艦『比叡』
出身　横須賀海軍工廠（神奈川県）
身長　１６２ｃｍ
髪型　長髪
実年齢（１９４１年１２月現在）２７歳
外見年齢　２４、５歳
誕生日　８月４日
好きなもの　姉妹・後輩達・蒼い海・平和
嫌いなもの　特になし

家族構成　姉・金剛　妹・榛名・霧島
日本海軍最古参の艦魂姉妹・金剛姉妹の次女である比叡。日本海軍唯一３０ノット出る金剛型高速戦艦は高速性を求められる機動部隊の護衛にはもってこいであり、そんな彼女は空母を守る重要な役目を任され妹の霧島と共に真珠湾攻撃に参加。戦前は海軍軍縮条約などで練習艦に格下げされた事もある超旧式戦艦でもある。そんな『比叡』の艦魂はとても優しいお姉さん的な存在。扶桑や長門と並びその優しさからみんなに好かれている。そして何より比叡は日本海軍一の巨乳でもある。いつもにこにこしているその笑顔で皆をいつも元気付ける。妹の恋を応援している。二度の内乱に対しては中立立場にいた。

《霧島（きりしま）》
金剛型戦艦（巡洋戦艦）四番艦――戦艦『霧島』
出身　三菱重工業長崎造船所（長崎県）
身長　１５７ｃｍ
髪型　ショートヘア
実年齢（１９４１年１２月現在）２６歳
外見年齢　１７、８歳
誕生日　４月１９日
家族構成　姉・金剛・比叡・霧島
好きなもの　比叡・翔輝・金剛・榛名・仲間・静かな日々・平和
嫌いなもの　怖い人・怖い話・怖い所・争い事・注目される事・知らない人・一人になる事・・・ｅｔｃ
金剛型戦艦四番艦・戦艦『霧島』の艦魂で三女榛名とは双子。ただし似ても似つかないような性格の違いだが。そんな霧島は日本海軍でも古参に入る重鎮。しかしものすごい内気な性格で初めての人とは基本的に話せないし、比叡がいないと知らない所には行けないし、怖いものがすさまじく苦手という小動物系のキャラ。自分に優しく接してくれた翔輝に好意を寄せ、強力なキャラばかりの恋愛戦争に

なんとかついて行こうとがんばっている。強烈なキャラばかりなので疲れたりする翔輝の心休まる所としても彼に頼られているのが数少ない大和達に勝る点。大和達の必死さに泣きながらも必死にがんばっている。一応古参なので皆に頼られるように日々努力している。二度の内乱には比叡と共に中立立場。

《山城（やましろ）》

扶桑型戦艦二番艦――戦艦『山城』

出身　横須賀海軍工廠（神奈川県）

身長　１６３ｃｍ

髪型　セミロング

実年齢（１９４１年１２月現在）２４歳

外見年齢　１７、８歳

誕生日　３月３１日

好きなもの　単独行動・酒

嫌いなもの　特になし

家族構成　姉・扶桑　義妹・伊勢・日向

扶桑型戦艦二番艦・戦艦『山城』の艦魂。『扶桑』と同じく《欠陥戦艦》という不名誉な称号を持っている。そんな艦魂である山城は表情豊かで友好的な姉とは違い、めったに表情を変えずに口数も極端に少なく、常に孤立して単独行動をしている個性的なキャラ。あまり他人と接触しようとはせず、実の姉である扶桑に対してもあまり接触しようとはしない。日本海軍でも有数の大酒飲みだが、いくら飲んでも全く乱れないという猛者でもある。古参組に入るが、大艦巨砲主義や艦隊決戦主義など前時代的な考えを持つ古参派には属さず、航空機やレーダーといった新兵器への主力転換を主張する長門達改革派に属し、二度の内乱にも長門共に反対派としてその力量を振るった。翔輝の良き相談相手でもある。

第一章　第七節　寂しき少女の想い

あれから数日。翔輝もずいぶんと艦魂達と仲良くなった。
今は甲板で風に当たって休んでいる。
「長谷川少尉。何を見ているんですか？」
つい先日翔輝の直属の部下になった水上祐二（みなかみゆうじ）上等水兵（十六歳）が声をかけて来た。パッチリとした目が特徴のまだまだ幼さを残した年若い少年である。
「うん？　何でもないよ」
翔輝は笑ってごまかす。
「少尉はよくぼーっと何かを見てますね」
「そ、そうか？」
「艦魂が見えているんですか？」
「うん。あそこで修行してる」
「そうなんですか。さすが艦魂ですね。僕も見てみたいですよ」
「ははは、まぁ、僕も見たくて見てる訳じゃないしね」
「僕は見てみたいです。『大和』の艦魂って、かっこいいんでしょうね」
「あ、まぁ、ね」
ものすごいわがままなガキとは言えないしね。
「『長門』の艦魂はとてもリーダーらしい方なんでしょうね」
めちゃめちゃ楽観主義のお姉さんキャラと知ったらどうなるか。
「金剛四姉妹は堅物なんでしょうね」
金剛と榛名には会った事はないけど、比叡はともかく霧島は一番言えないかもしれない。
「あー、やっぱり少尉がうらやましいです」
水上が純粋な笑顔で言う。こんな純真無垢な少年に艦魂達の現実と今目の前で広がっている光景を正直に言うのは夢を壊してしまう。
今目の前では確かに修行をしている艦魂がいる。戦闘だ。

「左舷弾幕薄いぞ！　何やってんの！？」
「了解！」
「撃て撃てッ！」
「反撃の隙を与えるな！」
大和と瑞鶴の新米チームと、陸奥と伊勢の先輩チームが輪ゴム銃を撃ち合って激戦を繰り広げている。
「・・・」
いいのか？　連合艦隊の期待されている主力がこんな風に遊んでいて。女の子なんだから遊んでもいいのだが、せめて輪ゴム銃の白兵戦はどうかと・・・
「どうしました？」
水上の心配そうな顔が目の前にあった。
「いや、何でもないよ」
その時、大和がこちらに気づいたようだ。
「少尉！　楽しいですよ。一緒にやりませんか？」
翔輝は笑顔で応える。
「行こうか？」
「え、あ、はい」
翔輝の後を子犬のように幼いキャラの水上が後を追う。
「あ、しょ、少尉？」
二人の去った甲板で、呆然としている大和に輪ゴムが命中した。

「もう！　返事ぐらいしてくれてもいいじゃないですか！」
一人自室でくつろいでいた翔輝に対し、入って来た早々いきなり怒る大和。
「なんだよ」
くつろいでいた所を邪魔されてちょっと不機嫌な翔輝。
「どうして無視したんですか！？」
「隣に水上がいたからね」
「それだけですか？」

「艦魂が見えるってだけでかなり変人って言われてるからな、あまり後輩に変な所見せたくないしね」
「わ、私が見えるのが嫌なんですか！？」
「そうは言ってないだろ」
「言ってます！」
なぜか今回の大和はしつこい。たぶんさっきの戦い（？）で負けて気が立っているんだろう。こいつは負けず嫌いだから。
「あのさ、悪いけど僕にやつ当たりしないでよ」
「そ、そんな事してないですよ！」
「いやしてるって」
「・・・ッ！」
顔を真っ赤にして、今にも怒りのマグマが噴火しそうな大和にさすがの翔輝も怖くなり、素直に謝った。
「さすがにさっきは悪かった。ごめん」
「あ、いや、そ、そんな、謝らないでください。考えてみると私の方が悪いんですし・・・ッ！」
素直に謝ると、急におとなしくなる。彼女も自分が悪いとわかっていたようだが、きっかけがなかったらしい。
「んで、用は何なの？　まさか怒りに来ただけじゃないだろ？」
「あ、はい」
すると、大和は不機嫌そうに唇を尖らせる。
「陸奥さんと霧島さん、伊勢さんが呼んでいました」
「え？　陸奥達が？」
翔輝は不思議そうに聞き返す。
「はい。もう甲板にいらしてます」
というか、陸奥と伊勢はさっきからいただろ。
「わかった」
脱いでいた上着を着て用意する。
「い、行かれるんですか？」
「え？　そりゃ行くけど」

「・・・そうですか」
寂しそうな顔で言う大和。そんな大和を翔輝は不思議そうに見る。
「どうしたの？」
「・・・いえ」
そう言い、大和は笑顔を向けた。
「少尉。行ってらっしゃい」
「あ、あぁ・・・」
翔輝は大和のその悲しげな笑顔が気になったが、結局部屋を出て行った。

一人残された大和。
ドアから視線を外し、ふと翔輝の机に目が止まる。
机の上には純粋な笑顔をこちらに向けている少女がいた。彼の大事な妹の翔香。自分にそっくりな顔で、自分にはできない純粋過ぎる笑み。それが私と彼女の差なのでしょうか？
少尉は私を置いて行ってしまった。陸奥さんや伊勢さん、霧島さんの所に行ってしまった。
大和は、いつの間にか自分が一人になってしまっている。そう思えてしかたがなかった。いつか少尉が、自分から離れて、別の艦に乗ってしまうのではないか。そう思えてしかたなかった。
少尉は優しい。
大和は素直にそう思う。だが、それは自分に対してだけの優しさではない。困っている人がいたら、そっと手を差し伸べる。そんな優しさ。
決して、大和という存在に手を差し伸べるのではなく、困った人という意味で差し伸べる。そんな手はいらなかった。
そんな手だったら振り払い、自分で立ち上がる。
しかし、彼に最初に会った時は、できなかった。
彼の笑顔を見ていると、そんなのどうでも良くなってしまう。
全てが純粋で、全てが優しい。それが、長谷川翔輝少尉なのだ。

でも、誰かに手を差し伸べている間は、他の誰かが手を差し伸べてはもらえない。それが今の私・・・

少尉が陸奥さんと仲がいいのは知っている。

少尉が伊勢さんと楽しそうに話しているのも知っている。

少尉が超内気の霧島さん会話ができるのも知っている。

だから、辛いのだ。

少尉が遠くに行ってしまう。

少尉が自分から離れて行ってしまう。

私は、そんな気がしてならない。

窓から見える海はどこまでも蒼い。それなのに、だんだんとその景色が歪んでいく。

海の青も、空の蒼も、何もかもが・・・

もう、何も見えない。

少女はその場に座り込み、瞳を隠す。その瞳は濡れていて、それは少女の苦しみとなって湧き出てくる。だんだんと瞳を濡らしていたそれは、ついに瞳から零れ落ち、少女の頬を伝った。

「少尉・・・、寂しいです・・・ッ！」

大和は、大好きな少年の階級を、静かにつぶやいた。

「で？　何なの？」

甲板に出て来た翔輝は、待っていた三人の少女を見詰める。

「少尉は明日、機動部隊が出撃する事はもう知っていますね？」

陸奥が翔輝に確認を取るように聞く。

「あぁ、明日出撃するんだろ？」

機動部隊は南方資源地帯攻略の為に、明日出撃する事が決定していた。

「はい、そこで今日の夜に出撃祝いをしようと決定したんですが、少尉も参加されますよね？」

「うーん、どうだろ。そろそろ別艦にちょくちょく移動できなくなってきたし、今回は無理かな？」

「そないなら、『大和』で開くのはどうやろか？」
そう言ったのは伊勢。すばらしい提案である。翔輝もこの提案にはうなずいた。
「それなら大丈夫だよ」
「本当ですか！？」
「あぁ」
翔輝の返事に陸奥達は大喜びした。
「ほな、さっそく大和はんと相談しましょうか」
伊勢が嬉しそうに言う。すると翔輝は笑みを浮かべた。
「あ、いいよ。僕から大和には伝えとくから」
「え？　本当どすか？　助かりますわぁ」
伊勢は頭を下げる。
「じゃ、じゃあ、打ち合わせしましょう」
小さな声で霧島が言う。
その後三人は色々と打ち合わせをし、数分後、翔輝は三人と別れて艦内に戻って行った。

「あっれー？」
翔輝は自室に戻ったが、そこには大和の姿はなかった。
「どこ行ったんだろ」
翔輝は仕方なく艦内を捜す事にした。しかし、出会ってから数週間。彼女が行きそうな場所は熟知していた。
「仕方ない・・・」
翔輝は自室を後にする。もう艦内の構造はだいたい理解しているが、いまだにたまに迷う事がある。しかし、その場所なら迷わず行けた。
ドアを開けると、そこには蒼い空があった。そよそよと風が吹き、澄んだ蒼が天空を彩る。
そこは防空指揮所だ。
敵機の来襲を警戒する最前線の場所。

いくつもの望遠鏡が設置され、そのひとつひとつが天空を睨む。
今は休憩時間なので、軍港湾内という事もあって見張り兵はいなかった。いるのは翔輝と、もう一人・・・
「大和、またここにいたの？」
入口から少し離れた場所に、捜し人はいた。
「・・・」
大和は空を眺めていて、翔輝の事なんか無視していた。
「おーい、やーまと」
翔輝も声を少し大きくするが、完全に無視。仕方なく、翔輝は大和の横について空を眺める。
まだ十二月という真冬の風が地上三〇メートルの防空指揮所に吹く。それはもう寒いの何の。
「うぅ、寒い。大和、中入んない？」
「・・・」
「ねぇ、大和」
大和は答えず、しばらく沈黙が続く。翔輝が再び声をかけようとした時、
「・・・少尉」
そこで初めて大和の口が開いた。
「何？」
しかしそれは、いつもの優しい彼女の声ではなかった。重く、そしてどこか寂しそうな声だった。
「少尉は、私の事嫌いなんですか？」
「はぁ？」
翔輝は訳がわからなかった。なぜここでそんな話をするのだろうか？
「答えてください」
大和は振り向き、翔輝の瞳を見詰める。その声は今まで翔輝が聞いた事ないほど凛としていた。
ここで翔輝は大和がいつもと違うという事に気がついた。

「大和、お前一体どうし・・・」
「質問に答えてください」
大和は翔輝を睨む。答えないとは許さないという気迫に、翔輝は驚く。だがどうやら答えないと話は進みそうになかった。
「そんなの、嫌いな訳ないだろ」
翔輝は素直に答える。が、大和は依然翔輝を睨むように見ている。
「それは、本当ですか？」
「ほ、本当だよ。僕が大和の事を嫌いな訳ないだろ」
「・・・」
大和はまだ翔輝を見ている。ふと、その瞳の色が変わった。
「では、質問を変えます」
大和は顔だけでなく身体もこちらに向け、軍刀の先端をトンと床に付ける。
「陸奥さん、伊勢さん、霧島さん、そして私。今言った中で一番好感を持てるのは誰ですか？」
再び意味のわからない質問をしてくる。
「そ、そんなの決められないよ」
そう言ってうつむいてしまう。これは彼の正直な気持ちだ。確かに陸奥や伊勢、霧島、そして目の前の大和とは他の艦魂達よりも仲がいい。だが、それに順位を付けろと言うのは無理だ。四人とも同じくらい好きだからだ。
翔輝は困り、うつむいていた顔を上げ、大和を見る。
そこで事件は起きた。
「うぅ・・・ひっく・・・ッ」
なんと大和が泣いていたのだ。恥じる事なく大粒の涙をぼろぼろと流し、顔をぐしゃぐしゃにして泣いていた。
「や、大和・・・？」
いきなり一八〇度変わった状況に、翔輝はただただ呆然とする。
「答えてください・・・ッ」
泣きじゃくりながらも、大和は質問を続ける。

「そ、そんな事言われても・・・決められないよ」
情けないが、それが翔輝の答えだった。
大和は依然泣いたままだった。瞳から零れ落ちる雫が、ポタポタと黒鉄の床に無数のシミをつくる。
「少尉は・・・どうして私を一人にするんですか・・・ッ？」
大和は突然翔輝の上着の裾を掴んだ。
「少尉はいつも陸奥さんや伊勢さん、霧島さんと楽しそうにお話しています。楽しそうに笑って。私の時とは大違いじゃないですか。私の時は、あんなに・・・、あんなに楽しそうじゃない。私が話そうとして逃げるし、捕まえても嫌そうな顔するし、笑ってくれる事なんてないじゃないですか・・・ッ」
「そ、それは違うよ・・・ッ」
「何が違うんですか・・・っ？」
「それは、その・・・陸奥達とは世間話ができておもしろいんだよ。でも、生まれたばかりのお前とはそうもいかないだろ？　だから・・・ッ」
「そんなの言い訳です！　少尉は私の事が嫌いなんです！」
「ち、違うよ！　そんな訳・・・ッ」
翔輝が必死で大和に説明しようとした時、
トン・・・
突然大和が自分の胸に抱き付いてきた。
「や、大和・・・ッ！？」
翔輝は顔を真っ赤にする。なぜ真っ赤になるかというと、まぁ、なんだ。大和の外見はちょっと幼いがかなりの美少女だからだ。
一人焦る翔輝の胸の中で、大和は静かに言う。
「私はずっと一人ぼっちだったんです。気がついたときからずっとドッグの中でした。暗くて、閉ざされた世界だった。私はそこで何年もいました。人はいっぱいいるのに、私の声、私の姿が見える人は誰一人いませんでした。ずっと寂しかった。初めて海を見た時もそうでした。霧ばかりで、街も、人も、自然も何もなかった。あっ

たのは深い霧だけ、後でそれが外の世界だと知りました。とっても寂しい世界でした。連合艦隊第一戦隊に編入されても、誰一人私と話せる人はいませんでした。そんな私の前に現れたのが・・・」

大和は顔を上げ、嬉しそうに翔輝を見詰める。

「――少尉、あなたでした」

翔輝は黙って聞いている。

「ずっと一人ぼっちだった私に、初めて話しかけてくれたのが少尉でした。少尉と出会えたから、私は一人ぼっちじゃなくなったんです」

そう言った直後、大和は急に悲しい顔になった。

「なのに、少尉は艦魂が見えるって知ったら、陸奥さんと仲良くなっちゃうし、伊勢さんや霧島さんとも楽しそうに話すようになってしまいました。暇を見つけては陸奥さん達の所に行って、いつも私を一人ぼっちにします。何でですか？　私はこんなにも少尉の傍にいたいのに、どうして少尉は私から離れて行くんですか？　少尉は私と一緒にいるのが嫌なんですか？」

大和は泣きながら必死に訴える。

「ち、違うよ。嫌な訳ないだろ」

必死に訴えてくる彼女の姿に、翔輝はそれしか言えなかった。

大和は再びうつむく。

「少尉は私の心の中の大半を占領してるんです。少尉は私の全てなんです」

「大和・・・」

「私、怖いんです。いつか少尉が私を捨てて、別の艦に乗ってしまうんじゃないかって。怖くて、怖くて仕方ないんです」

大和はぎゅっと抱き付く力を強める。

そんな彼女を、翔輝はそっと抱きし締めた。

ビックリするのは大和だ。

「しょ、少尉・・・？」

顔を上げると、そこには悲しげに微笑む翔輝の顔が。

「大和、ごめんな。僕のせいで、そんなに苦しんでたなんて」
翔輝はやっと、大和の気持ちを理解した。
彼女はずっと寂しかったんだ。それに気づかず、自分は彼女を放って他の艦魂とばかり楽しんでいた。大和がこんなに傷ついているなんて知らなくて。
「ごめん、本当にごめん」
翔輝はそれしか言えなかった。
ぽとり・・・
大和の頬を涙が流れた。
「少尉・・ッ！」
大和はようやく翔輝の心に触れられて安堵し、涙を塞き止めていたダムが決壊し、涙の大洪水を引き起こした。
そんな大和を、翔輝は強く抱き締めた。
「大丈夫だよ。僕は絶対に君から離れない。他の艦には乗らないよ」
「本当、ですか・・・？」
「うん、本当だよ」
その言葉を聞き、大和は嬉しそうに喜んだ。こんなに嬉しそうな大和は久しぶりだった。
大和の笑顔は、とてもまぶしかった。
「大和」
「え？」
翔輝はそっと手を差し出す。
大和もその意味を覚り、手を伸ばす。
二人の手が絡み、その手の指は一つ一つで絡み合い、強く結ばれる。やがて十本の指全部が重なり合い、二人は強く手を握った。
「ここは寒いから、中に入ろう」
「・・・はい」
二人は手を繋いだまま、ゆっくりと防空指揮所を後にする。
誰もいなくなった防空指揮所に一陣の風が吹き、太陽が燦々と輝く。

まるで、二人の新しい物語を、祝うかのように・・・

第一章　第八節　空の戦姫達の新たなる戦場（前書き）

《水上祐二（みなかみ　ゆうじ）》
帝国海軍軍人・戦艦『大和』普通兵
出身　栃木県宇都宮市
身長　１５８ｃｍ
年齢（１９４２年１２月現在）１６歳
誕生日　５月５日
家族構成　父　母　兄
好きなもの　翔輝・頼れる人・カステラ
嫌いなもの　直属の鬼上官・鉄拳制裁
翔輝の従兵を務める翔輝よりひとつ年下の少年。誰にでも優しく接する翔輝を尊敬し、同時に彼が艦魂が見える事をうらやましがっている。常時は翔輝の従兵と同時に本来の仕事もしている。戦闘の際は対空機銃の弾薬補充兵をしている。まじめだが少しドジな所があるので失敗する事も多い。兄がいて同じ海軍軍人。

第一章　第八節　空の戦姫達の新たなる戦場

「で、『大和』でパーティを開く事になったんだけど」
「・・・少尉、さっきの話忘れたんですか？」
ここは翔輝の部屋。
今は今晩の機動部隊出撃祝いの話だ。
「それはそれ、これはこれだよ」
翔輝はさっきの出来事を一旦置いておいて大和を説得する。
そんな翔輝を見て呆れる大和。だが、ふっと静かに笑う。
「でも、その方が少尉らしいですよね」
大和は空間から紅茶の入った二つのティーカップを出現させる。
「どうぞ」
「ありがとう」
艦魂が空間から出すものは全て幻みたいなもの。だからステーキを出されても味はするが満腹にはならない。しかし紅茶で腹を膨らませる訳ではないので、今回はその効果は意味を成さない。
翔輝はカップを受け取り、湯気が立つ紅茶を、そっと口に含む。
「うん、おいしいや」
「本当ですか？　良かった」
安心した大和も紅茶を飲む。
「それで、どこでやろうか？」
「そうですね。第三会議室はどうでしょう」
「あぁ、あそこか。確かに普通使わない部屋だしな」
第三会議室とは臨時会議室みたいなものだ。基本的に使用されるのが艦橋に近い第一、第二会議室。この二つで事が足りる上、第三会議室は艦内後部に位置するので普段は使用されていない。
「では、そこで決定ですね」
大和は紅茶をくいっと飲む。
翔輝も紅茶を飲むと、悲しげな笑顔を向ける。

「・・・機動部隊の艦魂達とも、しばらくのお別れだね」
翔輝が寂しそうに言う。
「そうですね。でも、またいつか会えますよ」
大和が笑顔で言う。その笑顔に、翔輝もつられて笑う。
「そうだな。また、会えるよな」
「はい、いつか私達主力部隊と機動部隊が合同で大規模な作戦を実行する時がくるといいですね」
「あぁ、そうだね」
翔輝は笑いながら窓を見る。
もう日は傾き、青空は夕空になっていた。
出撃祝いまであと数時間。これからが忙しくなる。

夜中の十二時を回った頃、艦内は静まり返っていた。
しかし、第三会議室では普通の人間には聞こえない声が飛び交っていた。
「日本連合艦隊機動部隊の出撃を祝って、乾杯ッ！」
『乾杯ッ！』
艦魂達がぐいっとラムネを飲む。先日の二日酔いが明日起きては困るという長門の計らいだった。
「がんばってね」
「はい！　機動部隊旗艦赤城。殊死奮戦の覚悟で戦って参ります！」
長門の激励を受け、赤城はすごく嬉しそうに敬礼した。
「姉さん。御国の為にがんばろうね！」
「あぁ、天皇陛下の為にも」
翔鶴と瑞鶴がラムネを天に向けて叫ぶ。
「「日本機動部隊の力、今こそ発揮する時！」」
『おおおぉぉぉッ！』
二人の声に、艦魂達も咆哮する。
「今度こそ、仇を討ってやる！」
真珠湾攻撃に失った搭乗員達の仇を討とうと意気込む加賀は本日

三本目のラムネを飲む。
二人して掛け声を上げた翔鶴と瑞鶴はラムネを飲んで喉を濡らす。
「姉さん。明日はいよいよ出撃ですね」
「あぁ」
表情豊かな瑞鶴と違い、翔鶴は無表情でラムネを飲んでいる。そんな二人の横で、大和と翔輝もラムネを飲んでいた。
「ふわぁ・・・」
翔輝は目の縁に涙を溜めながらあくびした。
「眠いんですか？」
二本目のラムネを空にした大和が心配そうに顔を覗き込んでくる。
そんな大和に翔輝は優しく微笑む。
「あぁ、もう夜中だしね」
「本当にすみません。明日は早いというのに」
「気にすんなって」
翔輝は笑顔で言う。そんな翔輝を見て、一応笑う大和。その時、
「しかし、機動部隊は戦争の最前線に出れていいな」
近くにいた柱島駐留艦隊の陽炎型駆逐艦の艦魂がぼやく。
「そうそう、私達主力艦隊はまだ何もできてないもんね」
「いいなー」
陽炎型駆逐艦は比較的最近生まれた次世代型駆逐艦なので、まだ実戦では戦った事がないのだ。最近誕生したので、全員大和と同じくらいの女の子ばかりだった。
「そう言うなよ。いつか僕らにも大事な役目ができるはずさ」
翔輝がそう言うと、駆逐艦の艦魂達は互いに見合い、そして笑った。
「そうですね」
「少尉の言うとおりです」
「まだ戦争は始まったばっかだもんな」
「そうそう」
そう言って嬉しそうに笑う。ちなみに、今は様々な方面に散って

いるので少ないが、陽炎型駆逐艦は十九隻存在する。つまり陽炎十九姉妹という事だ。その内機動部隊護衛駆逐艦隊にも回され、『霞』と『霰』以外の駆逐艦は全て陽炎型駆逐艦が空母を護衛している。

「少尉は本当に優しいですね」

大和が静かに言う。

「そうかな？　そんな事はないと思うけど」

真正面から言われると、さすがの翔輝も照れてしまうのか、頬を赤くして笑う。

翔輝が照れていると、

「少尉！」

陸奥が手を振りながら寄って来た。そんな彼女を見て翔輝は笑顔を向ける。

「おぉ、陸奥。どうした？」

「一緒に飲もうと思って、向こうに行きませんか？」

陸奥は楽しそうに言う。しかし、翔輝は少し困った顔をして隣の大和を一瞥する。大和はこちは見ずに三本目のラムネを飲み始める。

「悪い、僕はここにいるよ」

その答えが意外だったのだろう。陸奥は目を大きく見開いて驚く。

「そ、そんな。な、何でですか？」

「いや、ちょっとね。今日は大和といるよ」

「え？」と大和が驚く。

翔輝が「ごめんね」と付け加えると、陸奥は「わかりました・・・」とちょっと悲しそうに退散して行った。

残された二人は再びラムネを飲む。

「・・・いいんですよ。無理しなくても」

大和が静かに言う。そんな大和に翔輝は首を横に振る。

「いや、いいんだ。少し疲れてるし」

ラムネを飲みながら返す。

「少尉」

「ん？」

大和は真剣な瞳を翔輝に向ける。その真剣な眼差しに、翔輝もただ事ではないと真剣になり、翔輝は大和の次の言葉を待つ。
そして、大和の口が開く。
「私の弱点って、何でしょうか？」
「・・・はい？」
どれだけ真剣な話かと思えば、かなり突拍子もない事を訊いてきた。
「うーん、それって君の事？　それとも『大和』の事？」
「両方です」
あまりにも意味不明な質問だが、大和は真剣に訊いてきている。その真剣な眼差しに対して翔輝も手を組んで真剣に考える。
「うーん、そうだな。『大和』の弱点といえば、それは航空機だけど。それは戦艦共通の弱点だしね」
翔輝は真剣に考える。これでも戦艦には詳しい方である。そういう事は結構熟知している。
「うーん、強いて言うなら。副砲だな」
「副砲ですか？」
大和は意外な返事にビックリする。自分にとって副砲も大事な主力火器だから、まさかそれが弱点だったなんて想像もできなかったらしい。
「どうして副砲なんですか？」
大和の当然の問いに、翔輝は一度うなずく。
「うん。『大和』の副砲は元々最上型軽巡洋艦を重巡洋艦に改装した時に余った余剰品だろ？　元々軽巡用に造った砲塔だから断片防御程度の装甲しか施されていないから、『大和』の強力な防御力の中では著しく脆いんだ。特に第一、第四副砲の真下には『大和』の重要設備もあるし、主砲に近いだけあって砲弾薬庫や火薬庫もある。もしも戦闘で一発でも副砲に砲弾を撃ち込まれて装甲を貫通されたら、爆発、誘爆、そして大爆発。それはかなりヤバイ事になると思うよ」

「なるほど」
大和は翔輝の適切な説明に理解してうなずいた。自分の弱点を知り、どうやらまた一つ彼女は成長したらしい。
「で、私の方の弱点は何でしょうか？」
大和的にはこちらの方が気になった。なにせ自分の事なのだ。それを理解して受け止める事で自分はまた一つ成長できる。そう思っているのだろう。
爛々（らんらん）と輝く瞳が翔輝を捉えて離さない。そんな大和の眼差しに対し、翔輝は即答した。
「無駄にプライドが高くて、自分の意見をなかなか曲げようとしない所」
「うぐッ」
翔輝の発言は大和にクリーンヒットした。
心の中で悶絶する大和。まさに自分の恐れていた一番言われたくない所をストライクでぶち入れられたのだ。
「あ、あのー、大和？」
いきなり倒れた大和を心配する。しかし、
「やっぱり、そこですか。ははは・・・」
大和は泣きそうになるのをなんとか押さえて空笑いする。もうそれしか自分を保てないのか、大和は少し笑うが、再びうつむいてしまう。
そんな大和を見て、翔輝が苦笑いする。
「・・・なんか、急所をぶち抜いちゃった？」
翔輝がどうしようか考えを模索し始めた、その時、
「はーい、皆さん。祝いの席も盛り上がってきたので、ここはパアッと気合入れて、軍艦行進曲でも歌っちゃう！？」
『おおおぉぉぉッ！』
長門の掛け声に、艦魂達の咆哮も臨界点を突破する。
長門は嬉しそうに喜び、大和に頼んで空間から必要な演奏道具を出現させ、近くにいた駆逐艦達の中から演奏員に抜擢した。

長門自身も指揮棒を持って指揮を始め、それに合わせて演奏が始まり、艦魂達も歌い出す。

『守るも攻むるも黒鉄(くろがね)の
浮かべる城ぞ頼みなる
浮かべるその城日の本の
皇国(みくに)の四方(よも)を守るべし
真鉄(まがね)のその艦(ふね)日の本に
仇(あだ)なす国を攻めよかし
石炭(いわき)の煙は大洋(わだつみ)の
竜(たつ)かとばかり靡(なび)くなり
弾撃つ響きは雷(いかづち)の
声かとばかりどよむなり
万里の波濤(はとう)を乗り越えて
皇国(みくに)の光輝かせ』

海軍では定番の演奏がされ、艦魂達嬉しそうに歌い上げた。大和もノリノリで歌っていた。だが、翔輝は小さめな声で歌っていた。艦魂達の声は普通の人間に聞こえなくても、人間である自分の声は聞こえるのだ。夜中に誰もいない部屋で一人で軍艦行進曲を歌っている所を目撃されてみろ。次の日には病院送りにされてしまう。本当は歌いたいのだが、ここは我慢して明日、ではなくて今日の昼に歌う事にする。

軍艦行進曲を流した事で場は大いに盛り上がった。

「少尉。そろそろお休みになられてはどうですか？」

大和が心配そうに見詰める。気になって懐中時計を見ると、もう一時も回っていた。

「うーん、そうだね。仕方ない。今日はもう寝るよ」

翔輝は立ち上がり、ドアへと向かう。

「あっれー？　長谷川君帰っちゃうのー？」
長門が横から訊いてくる。その顔には不満の表情が浮かんでいる。
そんな長門に翔輝は申し訳なさそうに頭を下げる。
「はい、明日はこちらの方でも機動部隊出撃式をしなければならないので」
こちらとは人間の方である。そう言うと、長門も納得してくれたようだ。
「そっかー、うん。じゃあもう寝るんだ。お休みー」
長門が笑顔で手を振ってくれる。
「はい、お休みなさい」
『長谷川少尉、お休みなさい』
部屋にいた艦魂達全員が翔輝を見送る。これだけの大人数に言われるとさすがに照れる。
「あ、はい。お休みなさい」
翔輝は笑顔で部屋を後にする。
真っ直ぐ自室に戻り、まずどこかの誰かさんの為の布団を敷き、その後即行でベッドイン。即寝る。
さすがの翔輝も眠いのを我慢していたのだ。
翔輝は解放されたベッドの中で、ぐっすりと寝てしまった。

一方、艦魂達はまだバカ騒ぎを続けていた。
「大和、一人で寂しいの？」
ぼんやりとしている大和に瑞鶴が声をかける。
「そ、そんな事ないよ」
顔を真っ赤にして全力反論する大和。
「眠れないのなら、私が寝かせてやろうか？」
翔鶴がそう言い、指をボキボキと鳴らす。それを見て青ざめる大和。
「いえッ！　結構です！　というか安眠じゃなくて永眠してしまいます！」

先日の翔鶴の一撃を受けた大和は彼女の異常なまでの戦闘能力を身をもって知っている。彼女の腕なら自分の命など簡単に危険に晒されてしまう。

「そうか、それは残念だ」

翔鶴は本当に残念そうな顔をする。それを見て大和はぞっとする。

そんな三人がのん気にラムネを飲む。

それからしばらくしても艦魂達の勢いは高まるばかり、一向に終わろうとはしない。このまま皆徹夜で宴会を開こうとしたその時、

「・・・帰る」

山城が突然立ち上がり、光に包まれて消えてしまった。

最高潮まで達していたテンションは、山城の退散により海より深く落ちてしまった。

ハッと我に返った艦魂達は慌てて現実に戻る。

「そういえば、今何時？」

「げっ、もう二時近いよ！」

「うわッ！　明日起きられなくなっちゃうよ！」

駆逐艦の艦魂達が騒ぎ始める。さすがの長門も、懐中時計で時間を確認すると困ったような笑みを浮かべる。

「うーん・・・もうヤバイわね。みんなッ！　今日はこれでお開き！　早く自艦に戻って休んで！　明日は早いわよ！」

長門の掛け声のすぐ後、艦魂達は次々に光に包まれ、消えていった。

「じゃあ大和。お休み」

「はい。お休みなさい」

最後に長門が大和に挨拶をして消えた。

一人残された大和は全て物を空間に戻して会議室を後にした。

大和はそのまま翔輝の部屋に入った。

翔輝はベッドで爆睡していた。その横には大和用の布団が敷いてあった。最近は寝る所は翔輝の部屋と決めていた為、翔輝が毎晩布団をしいてくれるのだ。今日も疲れているのに自分の為にやってく

れて、大和は嬉しくなる。
「少尉、ありがとうございます」
大和は軍帽と上着を脱いで布団に潜り込む。
こうして、連合艦隊は眠りについた。

翌日の昼。柱島軍港には大勢海軍軍人が集まっていた。
軽快な軍歌が演奏され、海軍幹部達が第一航空艦隊司令長官を務める南雲忠一中将に敬礼する。南雲司令長官もそれに応え敬礼する。その横には同参謀長草鹿龍之介少将。その後方には機動部隊の主役を担う四隻の正式空母の艦長達がいる。
南雲は幹部達に敬礼すると、草鹿と『赤城』艦長青木泰二郎大佐と共に、機動部隊旗艦・正式空母『赤城』に乗り込んだ。その後、各艦長も自艦に戻る。出撃が近いのだ。
機動部隊を見送る兵の中に翔輝はいた。その隣には翔輝直属の部下の水上がいる。
そこからかなり離れた場所で、柱島駐留艦隊艦魂達が機動部隊艦魂達を見送っている。
「赤城、加賀、翔鶴、瑞鶴、がんばってきなさい。比叡、霧島、利根、筑摩、阿武隈、谷風、浦風、浜風、磯風、陽炎、不知火、秋雲、霞、霰、空母達をよろしく」
普段とは全く違う真剣な表情で言う長門。そんな長門に激励され、機動部隊艦魂達は嬉しそうに敬礼する。
瑞鶴はそっと大和に近づくと、優しく微笑んだ。
「大和。しばらくのお別れだね。元気でね」
「瑞鶴こそ」
大和も笑みを浮かべる。親友二人があいさつし、硬く握手した。
その時、空母部隊が汽笛を鳴らした。出港の合図だ。
「司令。行って参ります」
赤城が敬礼する。それに対し長門が答礼し、他の艦魂達も敬礼する。

機動部隊艦魂達が光りに包まれ、徐々に消えていき、最後には誰もいなくなった。

ボオオオォォォ・・・

汽笛を鳴らしながら、機動部隊は出港した。

大和達主力艦隊もいつかこうやって出撃できる事を夢見た。

次第に小さくなっていく機動部隊を、艦魂達はずっと見詰めていた。

そして最後、微かに汽笛が聞こえた後、機動部隊は見えなくなった。

蒼い海は今日も平和な波の音色を流し続けていた・・・

もうすぐ年も明け、戦争は本格的になるだろう。

艦魂達はいつ来るかわからない出撃の時を夢見て、今日も柱島で楽しい日々を過ごす事になった。

第二章　第一節　何気ない日常（前書き）

今回はオリジナル作品にはなかったお話です。オリジナルとはかなり違ったキャラになっている伊勢が活躍します。

第二章　第一節　何気ない日常

「どうしたの？」
資料に書き込んでいる翔輝の背中に、突如大和が抱きついて来た。
翔輝の問いに対し大和は「何でもありません」と言って抱きついたまま離れない。
「何でもないって言われてもなぁ」
翔輝はそう言うが、別に仕事に差し支えはなさそうだったので、気にせず作業に戻る。すると、
「や、大和ちゃんッ！？」
その声に振り返ると、艦橋の入り口で立ち尽くしている陸奥がいた。その床には手に持っていたのを落としたのか数枚の資料が落ちている。
震える手で大和を指差すと、次に翔輝を見る。
「あ、長谷川少尉。こんにちは」
「あ、うん」
礼儀正しくあいさつすると、今度は大和を睨みつける。
「あなたはさっきから一体何してるの？」
「少尉に甘えているだけです」
陸奥の問いに大和はきっぱりと言い返す。その返答に陸奥の眉がピクリと動く。
「何で甘えるのよ？」
「別に私の勝手じゃないですか」
「長谷川少尉は仕事中ですよ」
「少尉は甘えるのを許してくれました」
「いや、別に許した訳じゃないんだけど」
そう言うと、陸奥は大和を見る。
「だそうです。大和ちゃん。あなたの行為は迷惑ですって」
「いや、そこまでは言ってないけど」

陸奥の言葉に、大和はむぅとむくれる。
「な、何なんですかさっきから。私と少尉の勝手じゃないですか。何で陸奥さんがそんなに構うんですか？」
「私は少尉のお仕事を邪魔させたくないだけよ。あなたが邪魔をして少尉が怒られる事があったらどうするの」
「むぐぐ・・・」
陸奥の的確な言葉に、大和は何も言い返せなくなってしまった。ただひたすら悔しそうに陸奥を睨み、翔輝の服の裾をギュッと掴んでいる。
静かなる睨み合いに、翔輝は小さくため息した。その時、
「陸奥はんも大和はんもそんな怖い顔してどうしたん？」
おっとりした声に三人が振り返ると、そこにはこっちを見て首をかしげている伊勢がいた。
「「伊勢」」
「伊勢さん」
「ケンカ？　ケンカはあかんよ」
そう言って二人に近づくと、そのおでこにそっと人差し指をつんと突付く。
「「ご、ごめんなさい・・・」」
二人が素直に謝ると、伊勢はうんうんとうなずいて満足げに微笑む。すると今度は翔輝を見て微笑む。
「長谷川はん、こんにちは」
「お、おう」
「お仕事中どすか、えらい大変やろうけど、がんばっておくんなはれ」
「まあ、そのつもりだけど、こいつらがな」
そう言って二人を見ると、二人ともそっと視線を逸らす。そんな明らかにバレバレな仕草に翔輝は苦笑いする。
「ったく、お前らは」
「三人とも仲がええーんやねぇ」

伊勢は嬉しそうに微笑むと、翔輝の手をそっと握る。突然手を握られた翔輝はビクッと震える。

「い、伊勢？」

自分を見詰める透き通った瞳に、翔輝は言葉を失う。彼女の手の温かさに包まれた手がほんのりと熱くなる。

「うち、長谷川はんともっとお話がしたいんや。今度一緒にお茶でもいかがやろか？」

「え？　あ、うん。いいけど・・・」

「ほんまどすか？　嬉しぃわぁ」

ほんのりと頬を赤らめながら嬉しそうに笑顔を浮かべる伊勢に、翔輝は一瞬ドキリとしてしまう。

手をギュッと握り、「約束やよ」と言って、伊勢はふわふわとした物腰で去った。

残された翔輝はほんのりと温かい手をじっと見詰めて止まる。そんな翔輝を見て大和と陸奥は顔を見合わせて驚く。

「ど、どういう事ですかこれッ！？」

「わ、私にもわからないわよッ」

二人はかなり動揺している。特に大和はもうパニックに陥っている。

「いつの間に伊勢さんまで少尉にッ！？」

「だから知らないってばッ！　私だってビックリなのよッ」

「あなた伊勢さんの親友なんでしょッ！？」

「だからビックリしてるのよッ！」

わーわーと言い合う二人を見て、翔輝はため息すると、うるさいのを我慢しながら仕事を再開した。

その日の正午、翔輝は士官達が食事を取る食堂にいた。まわりには知り合いと一緒に食事を取る者が大勢いる。そんな中、翔輝は一人でテーブルの隅に座っていた。どうして一人でいるかというと、士官クラスになるとまわりはみんな青年や中年などばかりで、翔輝

ぐらいの年齢の士官なんてほとんどいないのだ。
もし兵と合同だったら水上と一緒に食事を取れるのだが、残念ながら水上は兵用の食堂にいる。
まあ、こんな生活を一ヶ月以上暮らしているのでもう慣れてしまった。
「ふう、疲れたぁ」
午前中の仕事を終えたばかりの翔輝はそうつぶやくと目の前の料理に小さく微笑む。
今日のメニューは彼の好物のハンバーグ定食だった。
「うまそうだな。じゃあさっさと食べるか」
翔輝は午後の仕事の事も考え、さっさと食べ始める。
「おお、おいしいな」
パクパクと料理を笑顔で食べる翔輝。すると、
「少尉。ここにいたんですか」
「え？」
その声に顔を顔を上げると、こちらににっこりと笑顔を向ける大和がいた。
「今日はハンバーグですか。いい香りですね」
「大和？　どうしたの？」
「いえ、もうお昼の時間でしたので少尉ならきっとここにいると思って。隣、いいですか？」
「あ、いいけど」
「ありがとうございます」
「でもどうしたの？　わざわざこんな所まで来て。僕に何か用？」
「あ、いいえ。ただちょっと少尉に会いたかっただけです」
そう言って大和は屈託のない笑みを浮かべる。その純粋な笑みに翔輝もつい微笑んでしまう。
「今日はハンバーグですか。おいしそうですね」
そう言って笑顔で大和はハンバーグを見詰める。
「あ、食べる？」

切り分けたハンバーグをフォークに刺し、翔輝は大和にフォークを向ける。すると大和は「へ？」とフォークを見詰めると、突如ボンッと顔を真っ赤にした。

「い、いいえッ。結構ですぅッ」

手をブンブンと振って断るが、翔輝は「遠慮すんなって」と笑顔でそう言ってフォークを近づける。

「ほら、口開け」

「い、いいですってばッ！　少尉が食べてくださいッ！」

大和は顔を真っ赤にして必死になって拒否する。そんな大和の反応に翔輝は不思議そうに首を傾げる。

「おいしいのに。何でそんなに嫌がるの？　もしかしてハンバーグ嫌い？」

「そ、そうじゃないですけど・・・」

そう恥ずかしそうに言って、大和は頬を赤らめたまま翔輝の持っているフォークを見詰める。

（少尉の使ったフォークで食べたら、間接キッスになっちゃいますぅ）

そんな乙女心を翔輝が気づく事などなく、大和はどうしようか考えを模索する。

（そうだ。艦魂の力でフォークを召喚すれば）

一人で考え込んでいたものだから、

「ほら、食べてみろって」

と、翔輝が差し出したフォークに条件反射で口を開けてしまった。

まるで恋人みたいに。

「ね、おいしいでしょ？」

「・・・」

もぐ、もぐもぐ。

何も言えなくなって、じっくりと噛んで、大和は飲み込む。

そして、今しがた自分がしてしまった事を思い出す。

（しょ、少尉と間接キッス・・・ッ！？）

顔をこれまで以上に真っ赤に染め、大和はガクガクと震え出す。
「ど、どうしたの？　顔色変だけど」
翔輝が心配して大和の顔を覗き込んだ刹那、
「ふひゃあああああぁぁぁぁぁぁ・・・」
変な声を上げて、大和が倒れた。
「や、大和ッ！？」
まわりの視線が一気に自分に集まったのを感じたが、翔輝はそれを無視して慌てて大和に駆け寄る。
「や、大和？　大丈夫？」
抱き起こすと、大和は顔を真っ赤にして目をグルグルと回して気絶していた。
「ど、どうしたんだろ？」
自分のせいで倒れたとは思いもしない翔輝はとりあえず大和を部屋で寝かせようと思って食堂を後にした。

大和達艦魂と違って瞬間移動ができない翔輝は地道に部屋に向かって歩いていた。すると、前から陸奥と伊勢がやって来た。
「おお、二人とも」
「少尉、どうされたんですか？」
「あらまぁ、大和はんどうされたんどすの？」
二人は翔輝に背負われている大和を見て驚く。翔輝はそんな二人の視線に苦笑いする。
「なんか知らないけど気絶しちゃったみたい。だから部屋まで送ろうって思って」
そう言うと、伊勢がにっこりと微笑んだ。
「そんならうちが運びますわぁ」
「え？　でも・・・」
「気にせんといてください。うちら艦魂は瞬間移動ができますから」
「そ、そう？　だったらお願いできる？」
「任しといてぇな」

そう言って伊勢は翔輝の手をギュッと掴む。
「え？　な、何？」
戸惑う翔輝に伊勢は優しく微笑む。
「安心してぇな。うちと手ぇ繋いでたら一緒に移動できんのどすわ」
「人間の僕でも？」
「はいな」
そう笑顔で答えると、伊勢の身体は光り出した。次の瞬間、そこは見慣れた自分の部屋に変わっていた。
「す、すごい。これが瞬間移動か」
「そないに驚く事やないわぁ」
ひらひらと手を振って笑顔をする伊勢。その横には一緒に移動したのか陸奥もいる。
「艦魂はいつもこの能力を使って移動しています」
「へえ、便利だね」
翔輝は素直にうらやましいと思った。時間にうるさい軍という組織の中では実にうらやましい能力だ。
「ほら、早よう大和はんをお布団で寝かしてあげてぇな」
「そうだね」
翔輝は大和をベッドにそっと寝かせると、ベッドに座ってひと息つく。
「ふぅ、二人ともありがとう」
「気にしぃひんで」
「私は何もしてませんけどね」
そう言って二人は微笑む。そんな二人を見て翔輝は頬を掻くと、二人を見上げる。
「ちょっと二人にお願いがあるんだけど」
「何でしょう？」
「僕これから仕事だからさ、できれば大和を看ててほしいんだけど」
「あー、私はちょっと無理ですね。司令部の仕事がまだ残ってますから。すみません」

そう言って陸奥は申し訳なさそうに頭を下げる。
「そ、そっか・・・どうしよっかな？」
「ほんならうちが面倒みといたろか？」
そう言って笑顔を向けたのは伊勢だった。その言葉に翔輝の顔が明るくなる。
「本当？」
「任しておくれやす。うちが責任もってちゃんとみとるから」
「じゃあ、お願いね」
翔輝はそう言って急いで部屋を出て行った。どうやら結構遅刻ギリギリらしい。
その後陸奥も仕事の為に消え、残された伊勢は大和の寝顔を見て優しく微笑む。
「かわえぇなぁ、大和はんは」
大和の頬をそっと撫で、伊勢は優しく微笑んだ。

その後、翔輝は少し早く仕事を終え、夕方には部屋に戻った。すると、そこにはついさっき目覚めたばかりの大和と伊勢がいた。
「大和、やっと起きたんだ」
翔輝が笑顔で声をかけるが、大和はつーんと翔輝を無視する。
「え？　あれ？」
予想外の反応に戸惑う翔輝。
「大和？　さっきはいきなり気絶なんかしたりしてどうしたの？」
「・・・」
翔輝が声かけても、大和は何も答えない。
「や、大和？　もしかして何か僕に怒ってる？」
そんな問いにさえ大和は沈黙を続ける。どうやら本当に何か怒らせてしまったらしい。
「えぇ？　僕何を怒らしたんだろ」
完全にそれっぽい出来事が記憶にないので、翔輝は必死に考えるが答えは出てこない。

「なあ伊勢。お前なら理由わかる？」
「さあ、うちは何も知らんどす」
伊勢も首を傾げている。
そんな二人して困っているのをそっと横目で見て、大和は不機嫌そうに唇を尖らせる。
（何でいつの間にか伊勢さんとあんなに仲良くなってるんですか？）
ちょっと自分が気絶していたたった数時間で二人の距離が明らかに急速に近づいていた。
（一体何がどうなってるのよぉ）
それも彼女の不機嫌さの原因の一つであった。
結局、その後も大和はずっと不機嫌のままで、翔輝と伊勢は居心地の悪さにただただ苦笑いするしかなかった。

翌日、翔輝は昨日のお礼もかねて伊勢をお茶に誘った。と言っても水上に頼んで主計科から分けてもらった緑茶とちょっとした和菓子だけだったが。
招待された伊勢は礼を言って席に着くと、緑茶をゆっくりと飲む。
「やっぱりお茶は日本人の心ですわぁ。心が和みますぅ」
「そう？　良かった」
翔輝も嬉しそうに微笑んでお茶を飲む。
伊勢はにこにこと翔輝を見ながらお茶を飲む。
「何？　僕の顔に何かついてる？」
「違いますぅ。ただ、長谷川はんって結構かっこえぇなぁって思って」
「え？　そ、そっかな？」
いきなりそんな事を言われ、翔輝は照れる。そんな彼を見て伊勢はしっかりとうなずく。
「そうやで。長谷川はんはかっこえぇ」
「あ、ありがとう」
翔輝は照れながらも礼を言う。

二人して互いを見合って微笑む。
そんな二人を物陰から監視する二名。
「むむむ・・・いつの間にあんな仲の良い関係に・・・」
「い、伊勢・・・ずるいわよぉ」
大和と陸奥は、楽しげに翔輝をお茶をしている伊勢を見て悔しそう指をくわえているしかなかった。が、
「そこの二人も、一緒にお茶しまへんか？」
突如伊勢がこちらを見て笑顔でそう言ったので、二人は慌てて逃げ出そうとしたが、いつの間にか翔輝が道を塞いでいた。
「何してるの？　お前達」
「い、いえ」
「別に何でもありせんよ。ねえ大和ちゃん？」
「う、うん」
互いの顔見て意味深な笑みを浮かべる二人に翔輝は首を傾げる。
と、
「「え？」」
そんな二人の手を、伊勢がしっかりと掴んだ。
「お茶は大勢の方がにぎやかで楽しいどす。さあ、お二人もこっちへ」
伊勢はそう言って微笑みながら二人を引っ張って行った。そんな三人を見て、翔輝は優しげな笑みを浮かべると、三人について行った。

第二章　第一節　何気ない日常（後書き）

《大本営発表》
ＯＰ♪　軍艦行進曲
先程アクセス数を確認したところ、なんとユニークアクセス数がついに１万アクセスを突破しましたッ！
これも皆様の応援のおかげです。本当にありがとうございます。
ちなみにＰＶアクセス数は７万３０００という恐ろしき数字を出しています。
これからも艦魂年代史シリーズをどうかよろしくお願いします。
ＥＤ♪　軍艦行進曲

第二章　第二節　日本機動部隊無敵神話

年が明けた一九四二年。機動部隊は日本海軍の重要拠点であるトラック島に入り、少しそこで休憩を取ると、一月十七日にトラック島を後にした。

今回の機動部隊の目的は南太平洋の最重要攻略拠点であるラバウル島に対しての先制爆撃である。

先日、機動部隊『蒼龍』『飛龍』のおかげでウェーク島攻略ができた第四艦隊司令長官井上成美（いのうえしげよし）中将は、ビスマルク方面を攻略する事を決定。その主要目的のラバウル攻略を、機動部隊が請け負ったのだ。

機動部隊の正式空母『赤城』『加賀』『翔鶴』『瑞鶴』の四空母は艦載機の出撃用意をしている。

空母『瑞鶴』でも甲板に次々と艦載機が並べられ、第一次攻撃隊の発艦準備が進められていた。

甲板の上にエレベーターで次々に飛行機が格納庫から出され、悠然と甲板に並んでいく。空母が一番輝くのは、艦載機で甲板を一杯にしたこの緊迫と興奮の瞬間だ。

そんな甲板を一人の少女が見詰めていた。黒い士官用の第一種軍装に身を包んだ少女の流れるような髪が風でそよそよと揺れる。その中にある顔は緊張に包まれている。

彼女の名は瑞鶴。この正式空母『瑞鶴』の艦魂だ。

今彼女は防空指揮所にいる。上から悠然と並んでいる零式艦上戦闘機や九九式艦上爆撃機、九七式艦上攻撃機数十機が甲板を埋め尽くすのは壮観な眺めだ。

瑞鶴が艦載機を眺めていると、艦内から飛行兵達が続々と出て来て、艦橋前に整列。飛行長が兵達に作戦概要を説明する。そのひとつひとつの細かな動きが彼らが訓練された戦士だと表している。その後兵達は自分の愛機に向かって走り出す。

飛行兵達は整備兵に愛機の確認をし、それが万全と聞くと嬉しそうに整備兵に感謝する。

同じ小隊に所属する飛行兵同士が打ち合わせして互いに自分の命を仲間に預けている光景は、とても美しく見える。

『搭乗員搭乗開始！　搭乗員搭乗開始！』

スピーカーから命令が下り、飛行兵達は次々に愛機に乗り込む。

全機のエンジンが起動し、プロペラが高速回転を始める。辺りは勇ましいエンジン音とプロペラが風を切る音だけが響き渡る。

『攻撃隊発艦開始ッ！』

スピーカーの声と同時に、マストに出撃旗が上がる。その直後、前方の零戦隊が甲板を滑走し、その機体を天空に舞い上げた。それに続いて次の隊も発艦を開始する。

整備兵や空母兵が甲板を滑走する飛行機に乗る搭乗員達に自分達の想いを込めて軍帽を振って見送る。

次々に舞い上がる攻撃隊を見詰め、瑞鶴は敬礼する。

そして、数十機の攻撃隊全機が天空へと舞い上がった。

瑞鶴も軍帽を振って攻撃隊を見送る――真珠湾の時と同じように。

四隻の空母から発進した攻撃隊は上空で旋回して隊列を整えると、母艦群に別れを告げて艦隊から離れていく。目指すはラバウル。

やがて攻撃隊は大空に吸い寄せられるように、雲の向こうに消えて行った。

甲板から兵達が去る中、瑞鶴は軍帽を被り直し、天空を見上げる。

青い大空が広がり、頬を撫でる風が気持ち良かった。

「荒鷲が、天舞い踊る、太平洋」

つい思いついた川柳をつぶやき、少し照れたように笑みを浮かべる。

波の音が全てを包み込み、安らかなひと時をかもし出す。

蒼い空はどこまでも澄んでいて、海と重なって美しい《蒼》の世界をつくり上げる。そんな蒼穹の空をそっと見上げる瑞鶴。

「今日は、星がきれいに見えるだろうな・・・」

瑞鶴は流れる髪を押さえて、蒼穹の空に優しく微笑んだ。
さざ波が揺れるどこまでも続く大海原で、一隻の空母が静かにその勇姿を輝かせていた。

南雲機動部隊の第一航空戦隊『赤城』『加賀』と第五航空戦隊『翔鶴』『瑞鶴』の空母計四隻から一〇九機の攻撃隊を発進した。
攻撃隊はラバウル島に対し猛烈な空襲を行った。米軍の反撃はほとんどなく、ラバウル島に対する初空襲は大成功に終わった。

その日の夜。ラバウル攻撃は大成功し、各艦では成功祝いをしていた。
兵達が楽しそうにバカ騒ぎし、主計科にコソ泥が大発生し、主計長が激怒の声を上げた。
そんな中、瑞鶴は一人甲板にいた。
「きれい・・・」
瑞鶴は天空の宝石を見上げてそうつぶやいた。
光り輝く星が、何万年もかけてこの地上に光をもたらす。その長い年月に比べれば、今自分達がやっている戦争は、宇宙から見れば微生物よりも小さく、視界に一瞬写っても気がつくか気がつかない分からないほど小さいものだ。それでも、今自分は戦争をしているのだ。大日本帝国というすばらしい国で、その主力として戦っているのだ。
その時、星空に一筋の光が走った。瑞鶴は急いでその流れ星にお願いをする。
(どうか、神国大日本帝国が邪道アメリカに勝てますように)
そう願った直後、再び流れ星が走った。
(そして、飛行兵が一人でも多く生き残れますように)
それは、空母『瑞鶴』の願いだった。
空母にとっては艦載機も、それに搭乗する飛行兵も大事な子供なのだ。

瑞鶴は自分の本体の子供達を、大切に想っている。
再び瑞鶴は星空を見上げる。
その時、誰かが甲板に現れた。瑞鶴がその方向を向くと、そこにはラムネを持った自分の姉である翔鶴がいた。
「お姉ちゃん？」
「よう」
翔鶴は軽く挨拶し、瑞鶴の横に腰掛ける。
「ほら、飲むか？」
そう言って差し出したのは彼女が手に持っていたラムネだ。
「え？　いいの？」
「構わん。どうせ主計科から拝借してきたものだ」
「だ、ダメだよぉ。そんな事しちゃ・・・」
瑞鶴は怒り狂っていた主計長の顔を思い出した。そんな彼女の心境に気づいたのか、翔鶴は鼻で笑う。
「今は戦勝の無礼講だ。これくらい兵達は皆している。一本や二本消えた所でどうって事ない」
「そ、そりゃそうかもしれないけど・・・」
いまだに渋る瑞鶴に、翔鶴は向けていたラムネを引っ込める。
「まあ、無理にとは言わん。いらないのなら私が飲む」
その言葉に瑞鶴はハッとして慌ててラムネを受け取ろうとする。
「の、飲む飲むッ！」
必死になって自分の手からラムネを取る妹を見て、翔鶴は小さく笑みを浮かべた。
二人は栓を抜くと、グイッとラムネを飲む。シュワシュワとした炭酸がのどを潤す。
「ぷはッ。甘くておいしいなぁ」
「私は本当は酒がいいのだが、お前が飲めないからな」
「あははは、ごめん」
ペロリと舌を出して謝る瑞鶴に、翔鶴はふんと鼻を鳴らしてラムネを飲む。

流れ星が流れ、二人はそれを見詰める。
「なぁ、瑞鶴。お前には怖いものはあるか？」
翔鶴の唐突の質問に驚き少し悩むが、瑞鶴は普通に答える。
「飛行兵がたくさん死ぬ事、かな」
「そうか」
「お姉ちゃんは？」
「私か？　私は特にないが、あるとすれば敵の機動部隊だな」
「機動部隊？　どうして？」
不思議そうに首を傾げる瑞鶴に、翔鶴は少し考えて口を開く。
「いや、真珠湾で敵の空母を撃ち漏らしただろ？　山本長官は米太平洋艦隊の中でも空母を最も恐れている。私も同じさ。真珠湾攻撃で空母の優位性はお前もわかったと思うが、その優位性は敵も同じ。いつかその米機動部隊に私達日本機動部隊が恐ろしい目に遭いそうな、そんな気がするんだ」
いつも自信に満ちあふれている翔鶴にしては珍しく弱きな発言だ。それだけ見えない敵が恐ろしいのだろう。
瑞鶴はそんな姉の言葉に小さくうなずく。
「そっか、そう言われると怖いかもね」
姉妹はお互いに肩を寄せ合った。
星空の下、仲のいい姉妹はお互いに微笑み合いながら、まだ戦った事のない敵に対して、恐怖を感じていた。

機動部隊はその後も柱島で待機している主力部隊の代わりに世界の海を翔け抜けた。
ラバウル攻撃が成功した翌日は第一航空戦隊空母『赤城』『加賀』の五二機がカビエンを攻撃。第五航空戦隊空母『翔鶴』『瑞鶴』の七五機が東部ニューギニアのマダン、ラエ、サラモアを空襲、敵基地の飛行機を殲滅。続いて二二日にも『赤城』『加賀』の四六機が第二次ラバウル攻撃を行って重要施設を徹底的に破壊した。
その後この二度のラバウル空襲のおかげで日本軍はラバウルを被

害極小で占領し、終戦まで南太平洋方面の日本軍重要拠点となった。

ある日、第一航空艦隊こと日本機動部隊旗艦・空母『赤城』で艦魂会議が開かれた。

「我々第一航空艦隊の連日の連勝の報を聞き、山本連合艦隊司令長官もお喜びだそうだ。もちろん長門司令も」

機動部隊旗艦こと赤城は艦魂達の前で熱弁をふるっていた。その瞳は光り輝き、生き生きとしている。

「だからこそ今後も気を引き締めて――って人の話を聞けえええええぇぇぇぇぇッ！」

無駄に元気な赤城一人を置いて、他の機動部隊艦魂は長テーブルにぐったりと突っ伏している。皆相当に疲れ切っていているのだ。

「赤城ちゃん、まぶしすぎるよ。南国の太陽よりもまぶしいよ」

柔らかい笑顔で手をひらひらとさせる比叡に赤城がビシッと指差す。

「比叡さん！　冗談はやめてください！　それとちゃん付けするなぁッ！」

比叡の場を和ませようとしたのんびりした口調も、頭にクソが付くほどの真面目な赤城の前では無力だった。

「・・・やかましいな」翔鶴が眉をひそめる。

「お姉ちゃん、過激発言はやめようよ」瑞鶴が疲れた顔で言う。

「でもマジで疲れましたー」谷風がぐったりする。

「谷風にも一理あるよねー」浦風が何度もうなずく。

「お姉ちゃん、私もうへとへとー」浜風が眠そうに目を擦る。

「ｚｚｚ・・・」約一名爆睡。

「ゴラアアァァァッ！　加賀！　寝るなあああああぁぁぁぁぁぁぁッ！」

赤城の放った鉛筆が宙を翔け抜ける。そして・・・

ゴンッ！

「いったぁぁぁいッ！」

鉛筆の直撃した額を押さえて加賀が飛び起きた。
「加賀ッ！　今は会議中だ！　寝るなんて言語道断よッ！」
「だ、だって・・・ッ！」
「だっても伊達少佐もあるかあああぁぁぁッ！」
しーん・・・
「え、何？」
急激に変わった雰囲気に赤城は戸惑う。今完全に部屋の空気が変わった。なぜか甘い桃色の空気に。
「あー、いや赤城ちゃん。ちょっといいかな？」
「はい？」
比叡は深呼吸し、赤城を見詰める。そして一言、
「伊達少佐って、誰？」
しーん・・・
「え、いや、それはその・・・ッ！」
比叡の問いに顔を真っ赤にして赤城は焦り出す。先程まで機動部隊を見事率いていたリーダーとしての威厳は完全に失っていた。
『ほおぅ・・・』
陽炎姉妹がニヤニヤした笑顔で赤城を見る。
「な、何よ・・・ッ！？」
明らかに怪しい笑みをする駆逐艦達に頬を赤く染めた赤城はキッと睨みつける。それでも駆逐艦達は笑みをやめない。
すっかり部下にからかわれている幼なじみに、加賀はニヤニヤしながらさらに追い打ちを掛ける。
「そういえば赤城。あんたこの前自分が見える士官がいたって嬉しそうに話してたよね」
『えええぇぇぇッ！？』
「加賀！　あんたッ！　それは二人だけの秘密――」
「それって、赤城の恋人？」
罪のない優しい笑みで比叡が爆弾発言をした。
「ひ、比叡さん！」

これが、全ての引き金となった。
加賀の決定的な証言と艦隊最年長者である比叡の爆弾発言に一気に部屋の中の甘い空気は最高潮に達した。
「そっかぁ、やっぱり赤城長官も女なんですね」
「いやぁ、赤城さんかわいいですよ」
「ひゅー、ひゅー」
「あーん、超真面目の赤城さんももう恋人持ちかー。私の立場って何？」
「まだまだこれからよ」
駆逐艦達が頬を赤く染めて嬉しそうに声を上げる。そんな彼女達の発言に、ついに赤城がキレた。
「ゴラアアァァッ！　貴様らあああぁぁぁッ！」
赤城は鬼のように激怒する。が、顔をすさまじく真っ赤させているので、全く説得力がない。
そこに、加賀が悪気無く、
「結婚式には呼んでね」
ウインクして決定的な爆弾発言をぶちかました。その言葉に、赤城が完全にキレた。
「死ねえええぇぇぇッ！」
赤城の激しい怒号が、ゴングとなった。
完全にぶちギレた赤城がテーブルに乗り上げてまずは加賀に襲い掛かる。
明るい悲鳴が飛び交い、一対機動部隊全艦魂のすさまじい戦いは永遠に続くかと思われたが、
「やかましいわッ！」
「あぶッ！」
今まで騒音に耐えていた翔鶴が赤城の暴走についにキレ、上官であるはずの赤城に容赦なく回し蹴りを炸裂させた。この間わずか五秒。
「ちょ、ちょっと姉さんッ！？」

容赦なく上官を蹴り飛ばしてしまった姉に瑞鶴は顔を真っ青にさせて慌てて追撃しようとするのを止める。
「さっきから耳障りだッ！」
「だからって司令官を蹴っちゃだめだよッ！」
必死に姉を止める瑞鶴をよそに、加賀は床で気絶している赤城に近寄ると、
ぎゅっ・・・
「な、何してるんですか加賀？」
比叡が問うと、加賀は気絶している赤城の頬擦りする。
「こんな時ぐらいしかこんな事できないから」
「なるほど」
比叡は納得すると、気絶している事をいい事に加賀は赤城に抱擁を開始する。起きていたら絶対にできない事だ。
一方、翔鶴の一撃を目の当たりにした霧島は部屋の隅小さくなって怯えている。そんな妹を見て、比叡は小さくため息する。
「霧島。そんなに怖がらなくて大丈夫よ」
ガタガタと震えている霧島にそう声かけると、霧島は泣きながら比叡に抱きついて来た。
「ね、姉さんッ！」
「もう、怖がりなんだから」
えんえんと泣く霧島を抱き締め、よしよしとその頭を撫でてやる比叡。
駆逐艦達は司令官が倒れてしまった為、いつの間にか飲食物をテーブルに並べて宴会を始め、その後翔鶴達も加わってしまい、会議はお開きとなってしまった。

日本という資源のない小国がアメリカのような大国相手に長期戦をする為には資源の確保が絶対必須。その占領をする陸軍の支援をする為、海軍は真珠湾攻撃を見事成功させた機動部隊で足場を築いた。

真珠湾以来の連戦で連勝し続ける機動部隊は開戦後二ヵ月にも及んだ南方作戦の第一段階を終え、ようやく内地に帰還した。

第二章　第三節　日本海軍最凶　鬼の金剛

機動部隊全艦が集まってから数日後、連合艦隊旗艦・戦艦『長門』で祝勝会が開かれた。
『かんぱぁぃッ！』
艦魂達が楽しそうに笑い合う。
機動部隊との久しぶりの再会にみんな盛り上がっていた。その中で、大和、陸奥、瑞鶴、翔鶴、伊勢、霧島、比叡の六人は部屋の隅に陣取って楽しそうに話をしていた。
「それでね、赤城さんに熱愛疑惑が出てるの」
そう嬉しそうに言ったのは瑞鶴。空になったラムネのビンを横に置き、新しいのを手に取る。
「うっそーッ！？　あの超真面目な赤城さんが？」
瑞鶴の言葉にラムネを飲んでいた大和は驚きのあまりちょっとこぼしてしまった。
「それ本当なの？」
陸奥もかなり驚いている。食べていた羊羹を一度皿に置いて真剣に話に聞き入る。
「本当だ。私も驚いているのだが」
翔鶴がお茶をグイッと飲みそう答える。その言葉に確信を持った大和達は盛り上がる。
「信じられへんけど、まさかあの赤城はんがねぇ」
伊勢はそう言葉で驚くが、その後すぐにお茶をすすって、あまり驚いた様には見えなかった。
「で、でもまだ相手が誰だがわかりませんし」
そう小さな小さな声言ったのは比叡の手をギュッと握って彼女にくっ付いている霧島。
「本人も否定されてますし、あまり掘り下げない方が・・・」
「何言ってるのよ霧島。ああいうまじめな子の場合、本当だとして

も恥ずかしくて首を縦に振る訳がないじゃない」
そう言って比叡は笑うと、まだまだ子供な妹の頭を優しく撫でる。
「あのまじめな赤城まで恋人持ちなんて、世の中変わったわね」
六人は部屋の中央で長門に絡まれている赤城を見る。
「ねぇねぇ、恋人がいるってほんと？」
長門は赤城にしな垂れかかって茶化すように真相を本人に問う。
すると、赤城は顔をボンッと真っ赤に染め、慌てた様子で手をブンブン振って否定する。
「ち、違います！　彼はそんな人じゃありません！」
「ほう、《彼》ね。ずいぶん仲良さそうな呼び方だね。んー？」
「・・・ッ！」
顔を真っ赤にして右往左往する赤城をさらにニヤニヤした長門がからかう。
そんな光景を見て陸奥は嬉しそうに「あの赤城がほれた人、会ってみたいな」と言い、大和達はうんうんとうなずいた。その時、
「あ・・・」
今まで静かにオレンジジュースをちびちびと飲んでいた霧島が初めて大きな声を出した。
「どうした霧島？」
横にいる比叡が不思議そうに訊くと、霧島はそっとある方向を指差す。
「あれ・・・金剛姉さん」
その言葉に大和達は霧島の指差す先を見詰める。そこにはまわりとは異なる雰囲気を纏った女性がいた。
闇夜を神々しく照らす満月の光のような金色の長い髪を優雅に空に流し、蒼穹の空のような美しい蒼の瞳を輝かす、日本人離れした女性。その碧眼の瞳は力強く光を放ち、彼女の美しき光をより輝かせる。
――彼女の名は金剛。日本海軍の現役主力艦最古参の戦艦『金剛』の艦魂であり、比叡、榛名、霧島の姉である金剛四姉妹の長女だ。

金色の髪に蒼き瞳は明らかに日本人のそれとは異なるが、彼女は生粋の日本人。

なぜ彼女日本人離れした姿をしているかというと、それは彼女の生い立ちにある。

日露戦争で世界三大海軍国になった日本海軍だが、英国海軍新鋭戦艦『ドレッドノート』の竣工によってそれまでの全戦艦が一挙に旧式化してしまった。俗に言う《ドレッドノートショック》である。特に日本海軍は初の国産新鋭戦艦『薩摩（さつま）』がドレッドノートショックの影響で竣工前に旧式艦の烙印を押されてしまった屈辱的な記憶でもある。日本海軍は『ドレッドノート』を超える戦艦を次々に竣工させるが、日本の技術力では限界があり、造船先進国であるイギリスに新鋭戦艦を注文した。それが戦艦『金剛』であった。当時は巡洋戦艦（戦艦並みの巨砲を搭載し装甲を減らして高速力を持った戦艦）として建造されたが、その後時代の移り変わりで日本で二度の大改装を受け、機関・防御力の強化を行い高速戦艦となった。

日本戦艦として生きてきたが生まれはイギリスなので、『金剛』の艦魂はイギリス人なのだ。

そんな『金剛』をモデルにして日本で建造されたのが姉妹艦『比叡』『榛名』『霧島』。その為、他の三人は日本生まれなので日本人なのだ。

黒髪黒眼の世界の中で、金髪碧眼の彼女が放つオーラはすさまじく目立つものだった。

そんな彼女は開戦時は同型艦『榛名』と共にインドシナ方面を担当する南遣（なんけん）艦隊に配置されていたが、その後機動部隊に合流して艦隊護衛を行い、そのまま機動部隊と共に久しぶりに本土に戻って来たのだ。

「さっきも思ったけど、やっぱり目立つね。あの髪」

大和は黒い軍服から金色の髪を流す金剛を見てそうつぶやく。

「だよね。あの髪、気にならないのかな？」

瑞鶴が大和の言葉にうなずき、不思議そうに言う。すると、

「大丈夫よ。姉さんは外見がイギリス人だって事、全然気にしてないから」
「え？　そうなんですか？」
比叡の言葉に大和は驚く。この黒髪黒瞳世界において金髪碧眼はかなり目立つのだ。それを気にしていないというのはどういう事なのか。
比叡はにっこりと微笑むと、金剛を見る。
「姉さんは、心の底から日本を愛している――生粋の帝国海軍軍人だから」
「貴様ら、何だそのだらしない格好は」
突如響いた静かな、凛とした声が、大騒ぎしていた部屋を一瞬にして沈黙させた。
「あ、その・・・」
声を震わせている巻き毛が特徴的な少女――陽炎姉妹長女の陽炎が妹達をかばうように説明しようとする。
そんな陽炎を鋭い眼光で睨みつけるのは、金髪が目立つ女性――金剛だった。
「貴様ら、陽炎。そいつらは貴様の妹か？」
金剛のすさまじい威圧的な声に、陽炎は一度ビクリと震えると、静かにうなずく。
「はい・・・」
陽炎の返答に、金剛は納得したように一度うなずく。
「そうか、新米か」
そうつぶやくと、再びギロリと陽炎達を睨みつける。その眼光はもはや辻斬りとかのレベルである。
「だが、その格好は何だ？　軍服はちゃんと着こなすよう言ってないのか？」
「す、すみません」
「さっさと直せ」
「はいッ」

急いで陽炎達は軍服を正す。
全員が軍服をきれいに着直すと、金剛は満足したように一度うむとうなずく。
「よし。その格好を忘れるな。いくら新米といっても規律を乱す者は万死に値するぞ。今度やってみろ――」
バシィッと肩にのせてあった竹刀を床に叩き落した。そして、刀のように鋭い眼光でギロリと睨みつける。
「処罰を与えるぞ」
『はいッ！』
陽炎達は美しい敬礼で答えた。だが、その表情は全て恐怖に染まっている。
金剛はうなずくと、やっと彼女達に背を向けた。
そんな一連の光景を見て、大和顔を真っ青にしてガタガタと震える。
「な、何ですか。あの鬼下士官みたいな方は」
震える大和に対し、他の者はみんな苦笑いしていた。そんな中、比叡は震える大和の頭をそっと撫でる。
「あれが戦艦『金剛』の艦魂――私達の姉さんだよ」
「・・・金剛姉さんは、帝国海軍の艦魂の中で一番軍人らしい艦魂なんです。その勇ましさは獅子を思わせ、皆からは通称《鬼の金剛》と呼ばれ恐れられています」
霧島がそう説明していた時、金剛がクルリとこちらを向く。大和は「ひっ」と声を上げて縮まる。
大和の恐怖は見事に――命中した。
「おぉ、比叡、霧島。ここにいたか」
金剛は大和達に近づいてきた。すると、その後ろには扶桑よりも長いポニーテールをした、気の強そうな少女がいた。金剛姉妹三女――榛名だ。
「金剛さん、榛名さん、お久しぶりです」
陸奥が立ち上がって最上級敬礼をする。そんな陸奥の敬礼に金剛

は静かに答礼する。
「うむ、陸奥か。久しぶりだな」
金剛は金色の髪を揺らしながら無表情で言う。蒼い瞳は先程のような刀のような鋭さはなかった。だがそれでも目つきは十分鋭い。
そんな金剛の後ろにいた榛名は、陸奥の敬礼に鋭い瞳を柔らかく曲げて笑みを浮かべる。
「よぉ陸奥。元気にしてたか？」
「はい、お姉様もすごく元気にしております」
そう答えると、金剛は赤城に絡んでいる長門を見て苦笑する。
「長門か、あいつのキャラはどうにかならんもんか？」
「さぁ」
長門の悪口を言われると怒る陸奥も、金剛の前では牙を立てられない。いや、きっとこんなやり取りを何十年もやってきたのだろう。互いの瞳は柔らかい光に満ち溢れている。
「金剛。今までどうしていたのだ？」
大和は目を疑った。翔鶴は金剛に敬語を使っていない上に呼び捨てをしたのだ。
ガタガタと震える大和に、瑞鶴がそっと説明してくれた。
「大丈夫。姉さんは金剛さんに一騎撃ちで激戦の末に勝利したの。そのせいか金剛さんは姉さんの無礼な態度をある程度は認めてくれてるの」
きっと、金剛は翔鶴の溢れるような戦士の気を感じ取り、彼女を認めたのだろう。というか重鎮である金剛を認めさせるなんてさすが翔鶴といった所か。
「うん？　あぁ、山本長官達の会議を傍聴していてな。それで遅くなったのだ」
そう言って金剛と榛名は空いている場所に腰を下ろす。
「そっか」
翔鶴は新しいお茶を湯のみに入れると、「飲むか？」と金剛に向ける。

「いや、私は遠慮する。比叡」
「はいはい」
比叡は笑顔で答えると、どこからかアタッシュケースを取り出した。
「ど、どこにそんな物を？」
不思議そうにつぶやく大和。
比叡は内ポケットからカギを取り出しすぐさまアタッシュケースを開く。中にはありとあらゆる拳銃やら機関銃、手榴弾や軍刀のオンパレード。
サーっと、大和は自分の血が引く音を聞いた。
比叡はアタッシュケースから何かを取り出す。と、手に持っているのは機関銃やバズーカではなく、
「ティ、ティーセット？」
比叡が持っているのは西洋風の美しいティーポットとティーカップ。
「はい、姉さん」
いつの間にか霧島がどこからかお湯の入ったヤカンを持って来ていた。
「ありがとう」
比叡はそれを受け取ると、再びアタッシュケースの中から何本も小さな銀色の缶を取り出す。
「姉さん、今日の気分は？」
「うん？　ダージリンもいいが、今日は祁門（キーマン）気分だな」
「ふーん、じゃあプリンス・オブ・ウェールズでいい？」
「頼む」
「はいはい」
大和にはちんぷんかんぷんな会話をし、比叡はてきぱきと缶から茶葉を取り出しお湯を入れたりを終え、ポットでカップに何かを注ぐ。
「うわぁ・・・いい香り」

大和は漂ってくる香りに思わず気が緩んでしまう。見ると、匂いの発信源はティーカップからだった。
「はい姉さん」
「うむ。ありがとう」
金剛は比叡からカップを受け取ると、それを優雅に飲む。
「ふむ。やはり貴様が淹れたものが一番私には合うな」
「何年姉さんの紅茶を淹れてきたと思ってるのよ」
「ふっ、それもそうか」
金剛はそう軽く笑うと、再び紅茶を飲み始める。
「姉さん、俺にもくれや」
「はいはい」
比叡は榛名にも紅茶を注ぐ。
「あんがとさん」
「陸奥達も飲む？」
比叡はこちらを見て問う。
「あ、いいえ。私は結構です」
「うちも結構。うちは緑茶の方が好きやから」
陸奥と伊勢は断った。比叡は「そう」と答えると今度は大和達に「どう？」と訊くが、翔鶴も瑞鶴も断り、大和も雰囲気的に断った。
「さて」
金剛は半分ほど残ったカップを置くと、大和を見る。
「先程から気になっていたのだが、貴様は誰だ？」
金剛が今まで話の外にいた大和を見て不思議そうに訊いてきた。
大和の心臓は限界まで縮まる。
「あ、紹介しますね。私の親友。帝国海軍の期待の新生。戦艦『大和』の艦魂です」
瑞鶴が無邪気に自分の事を大げさ（？）に紹介してしまい、大和は硬直する。瑞鶴を見ると「空気を温めといたからね」と無邪気な笑顔をしていた。それは確実に爆沈的おせっかいであると知らずに。
「こいつが・・・」

金剛が大和を見る。睨まれている訳じゃないのに、すごい威圧感を感じる。
「あ、あの。戦艦『大和』の艦魂です。よ、よろしくお願いします」
挨拶＋金剛の視線を避ける為に、ペコリと頭を下げる。
「ふむ、貴様が・・・」
目線を外しているのに、視線を強烈に食らう。
「おいおい、そんなに硬くすんなって。ほら、頭を上げて」
榛名が笑顔で大和の顔を上げる。
あぁ、せっかくの視線外しが・・・
大和は仕方なく頭を上げる。目の前にはもちろんこちらを見ている金剛が。
「・・・軍服の乱れはなしか」
「へ？」
金剛の言葉に、大和は自然に金剛を見る。こちらを見ている金剛は小さいながらも笑みを浮かべていた。
「新米だが、なかなか礼儀がなっている。戦艦『金剛』の艦魂だ。よろしく」
「あ、はい。こちらこそ」
出された金剛の手に対し、大和も腕を伸ばして握手する。
「俺の名前は榛名。戦艦『榛名』の艦魂だ。よろしくな」
「こちらこそ」
榛名とも挨拶をし、大和の緊張はひと段落した。と、
「伊勢ちゃあああぁぁぁんッ！」
猫なで声で伊勢の天敵の声がし、伊勢の後ろから飛びつく。
「ふ、扶桑姉さん！？」
「あぁーん、伊勢ちゃぁぁぁん」
扶桑は嬉しそうに伊勢の頬と自分の頬を擦り合わせる。そんな扶桑を見て金剛は苦笑する。
「相変わらずだな、扶桑」
「あら、金剛さん。相変わらずって、私と伊勢が仲いいって事？」

「いや、伊勢も苦労してるだろうと」
「いやーん、金剛さんったら」
「く、苦しいわぁ・・・姉さん」
「あら、ごめーん」
扶桑はやっと伊勢を離す。伊勢はたった数秒でぐったりと床に倒れる。
「ん？　山城は？」
「むぅ、山城はあっち」
扶桑は部屋の隅を指差す。そこには相変わらず一人で酒（山城は酒に強いので）を飲んでる山城がいた。
金剛が無言で手を振ると、山城もそれに気づき、小さく手を振った。
『！？』
「どうした？」
榛名は急に固まった大和、翔鶴、瑞鶴を見る。
「いえ、山城さんが手を振ったから。驚いて」
大和が三人を代表して言う。
「あぁ、山城は姉貴に対してだけは少し心を開いてるんだ」
榛名がいつの間にか紅茶を飲み終えてラムねを飲みながら言う。
しかしすぐに山城は視線を外した。そんな山城を見て金剛は小さくうなずく。
「ふむ、元気そうで何よりだ」
軽く笑う金剛を見て、大和がふと言う。
「金剛さんって、怖い人かと思ってましたけど。意外と優しいんですね」
「まぁね。姉さんはアメとムチを使うのがうまいからね」
「比叡。貴様私は厳しいだけで、優しくはないぞ」
金剛が比叡を睨むと、比叡は苦笑いする。
「何だその微妙の笑いは」
「まぁまぁ、姉貴達ケンカしないで」

榛名が止め、お互い苦笑いする。
「あ、お姉ちゃん！」
日向が駆逐艦群の中から伊勢に手を振る。そんな日向を見て金剛は小さくため息をした。
「相変わらず兵（駆逐艦や潜水艦）と仲の良い奴だな」
「すんまへん」
「お前が謝るな。別に兵と仲良くしても構わんが、ケジメだけは付けてもらわないと困るぞ」
「ほんますんまへん。後で注意しときますぅ」
伊勢はその場に縮まってしまう。
「あーん、金剛さん。そんなに伊勢ちゃんをイジメちゃダメですよー」
頬ずりを再開する扶桑。それを見て金剛は再びため息する。
「貴様も少し場をわきまえろ」
「はーい、すみませーん」
大和は呆れ半分、感心半分で扶桑を見る。
（扶桑さん。金剛さんに対しても態度を全く変えないなんて、すごいのか、それともバカなのか）
「まったく」
（あんたも叱れよ！）
「ん？　どうした大和」
「い、いえッ！　何でもありませんッ！」
怖い人にツッコミを入れた刹那に、その本人に声をかけられれば、誰でもビビる。
「何々？　楽しそうじゃない」
「ちょ、司令・・・ッ！」
突然長門が赤城を引っ張ってやって来た。
「おう、長門に赤城か」
長門が赤城を無理やり座らせ、その横に長門も座る。
「金剛。相変わらず無粋な顔してるわね」

「無粋で悪かったな」
長門の言葉も金剛はスルーする。というか長門も金剛に対しては敬語なしだ。妹の陸奥は律儀に敬語を使っているのに。
その様子を見て、大和は瑞鶴に静かに言う。
「私達大日本帝国海軍の艦魂って、金剛さんみたいな怖い人よりも長門さんや扶桑さんみたいなお姉さんキャラの人の方が強いんですね」
「さぁ、陸奥さんの方が詳しいと思うよ」
瑞鶴も苦笑いする。
「あ、赤城ちゃん。熱愛疑惑ってほんとー？」
扶桑が地雷原に竹槍で突っ込むような特攻発言をした。
「もうッ！　いいかげんその話題から離れてくださいッ！」
顔を極限まで真っ赤にして赤城は激昂する。
「どうでも良いが、あまり大声を出すと注目されるぞ」
翔鶴は遠巻きに見ている駆逐艦群を見て言う。
「・・・翔鶴の言うとおりですね」
赤城がようやく落ち着きを取り戻し、その場に腰を下ろす。
機動部隊の主力が集まったので、話は自然と南方作戦の話に流れる。
「しかし、今作戦は大遠征で疲れました」
「あ、赤城が復活したー」
「・・・司令。いいかげんにしてください」
「・・・こりゃ失敬」
長門が黙ったところで、話は戻る。
「だが、いまいち力不足な敵だったな。私的には互角な戦いをして、敵を殺ったらこっちも殺られるぐらいの方が燃えるんだが」
「萌える？」
「瑞鶴。口は災いの元という古い格言を知らんか？」
「ごめんなさい・・・ッ！　ちょ、ちょっと待ってッ！　その関節はそっちに曲がらな・・・ッ！」

瑞鶴の右腕を不自然な方向に曲げている翔鶴は無表情だ。それが余計怖い。

金剛は翔鶴の言葉に「なるほど」とつぶやき目をつむる。

「ふむ。その気持ちはわからんでもないが、味方に被害が少ないのは良い事だ。戦争とは全て国力で決まる。我が日本海軍はアメリカ海軍と違って艦艇の数が少ない。虎の子の我が艦隊を雑魚相手に失う訳にはいかんのだ」

「姉貴の言うとおりだな」

榛名が腕を組んで何度もうなずく。

「でも、これほどの大活躍をしている私達海軍も、艦隊決戦はまだよね」

お茶のおかわりを入れながら言った比叡の言葉に、金剛は深く考える。

「ふむ。艦隊決戦か。アメリカの新鋭艦と手合わせはしてみたいが、私はもう時代遅れだからな。どこまでやれるか、疑問だな」

金剛は苦笑すると比叡が淹れたばかりの紅茶を飲む。

「確かに、俺達帝国海軍には今現在十一隻の戦艦がいっけど、アメリカ海軍には数に劣ってる上に、速度が三〇ノットを超えるのは俺達金剛型だけだし、主砲も長門型戦艦と『大和』以外は全艦三五・六ｃｍ砲だしな。射程の問題もあるからなぁ」

榛名の説明に、扶桑が頬を膨らませる。

「でも、金剛さん達は連装砲塔四基で八門でしょ？　私と山城、伊勢、日向は六基あって十二門もある異例の重武装戦艦だからバンバン戦えるよ」

「榛名さんが言いたいのは砲門の数ではありません。それはあくまでこちらが敵を射程に入れた時の事。主砲の口径が射程範囲になりますからね。敵の主砲の方が口径が大きければ射程範囲も大きい。近づくまでに一方的に砲撃を受けるだけです」

「つまり、口径が小さい私達は、敵にたどり着く前に大損害を被るって事？」

陸奥の説明に、扶桑は難しい顔をする。
「はい。金剛、扶桑、伊勢型戦艦の三五・六ｃｍ砲最大射程距離は三二キロ。長門型の四一ｃｍ砲は三八キロ。大和型にいたっては四二キロまで砲撃できますから。主砲の口径が艦隊決戦の戦局を左右するのは間違いありません」
陸奥は淡々と説明する。
全員が『おぉ』と小さな声を上げるほど感心する。さすが連合艦隊旗艦長門の補佐官だ。
連合艦隊旗艦である長門を連合艦隊司令長官とすれば、陸奥は連合艦隊参謀長と言ったところだ。
しかし大和は、腕を組んで考える。
「その話は少尉から聞いた事があります。その為に日本海軍は敵の射程外からの一方的砲撃。アウトレンジ戦法を考えた為、私のような超弩級戦艦を造ったそうです。しかし、空母の最大攻撃範囲は一〇〇〇キロ。爆撃機の爆弾の重量は数百キロで命中率五〇パーセントに対し、戦艦の射程距離は三〇キロ～四〇キロ。砲弾の重量は約一トン。命中率に至っては十パーセント前後で、どう考えても空母の方が強いという結論になるそうです」
「少尉が？」霧島が訊く。
「そう言えば、長谷川少尉は戦艦マニアだったね」陸奥も思い出したように言う。
「ん？　誰だ？　その長谷川少尉というのは」
金剛が無表情で霧島に聞く。
「いえ、その・・・」
「あぁ、長谷川君ってのは大和、陸奥、伊勢、霧島が大好きな士官の事だよ」
長門爆弾発言！
『違いますッ！』
四人が全力で否定する。
「え、そうなの？　へぇ、嫌いないんだぁ。だったら私がもらっち

ゃおっかなぁ？」
長門爆弾発言2！
『それはダメですッ！』
四人は全力で拒否する。
「あれー？　嫌いなんじゃないの？」
「そ、それは・・・」
大和が口ごもる。それを見て金剛は呆れる。
「おい長門。部下をからかうのはやめろ」
「えー。楽しいのにー」
本当に面白そうな顔でにやける長門に呆れる金剛。
金剛は腕を組むと、大和をじっと見詰める。
「しかし、その長谷川とかいう士官。航空機の事を過信しておる。山本長官みたいな奴だな。空母兵か？」
「ううん。戦艦『大和』の航海士だよ」
長門の返答に、金剛は顔をしかめる。
「航海士ってのはわかるが、戦艦兵なのに航空機主義とは、一体何者だ？」
「少尉は大艦巨砲主義者だけど、戦艦は航空機には勝てないという事を理解しているようですね」
大和がそう言った瞬間、戦艦の艦魂達に戦慄が走り空気が凍りついた。
「戦艦が航空機に勝てないだと！？」
まず先陣切ったのは榛名だった。そのすさまじい激昂に、大和はビクッと震える。
「お前、大艦巨砲主義の頂点に君臨するのに、その大艦巨砲主義を愚弄するのかッ！」
「い、いえ、私でなくて少尉が・・・」
あたふたとする大和に榛名が詰め寄る。と、
「貴様。日本海軍の象徴がそれでは困るぞ」
金剛が静かに言う。その声にはすさまじい怒りが込められていた。

たった一言で、宴会だった部屋が、一触即発の激戦区になった。
その時、金剛が静かに立ち上がり、腰の竹刀を抜いた。
波を打ったように静かになる。
睨み付けるような眼差しで、金剛は大和を睨む。
「大艦巨砲主義こそ海軍の全てだ。それを愚弄するとは、ましてや、その大艦巨砲主義の象徴が・・・立てッ！」
「はいッ！」
大和はもうなすがまま今にも泣きそう顔で立ち上がった。
「足を開け、腕を上げろッ、腰を出せ！　歯を食いしばれえええぇぇぇッ！」
すさまじい怒声が響き、竹刀が天空に上る。
その時、大和のある記憶がフラッシュバックした。
それは以前艦内で水兵の一人がミスをし、鬼下士官が処罰の為に鉄パイプで水兵の腰を思いっ切り叩いたシーンだった。
あぁ、叩かれるんだ・・・
あの帝国海軍伝統の処罰が・・・
大和が半泣きを始め、竹刀が天空を舞う。その時、
「・・・やめろ」
どこからともなく静かなる声が響き、竹刀が大和の腰の数センチ手前で止まる。
まさに、危機一髪。
金剛や大和、その他全員が見た人物は、驚愕させるには十分過ぎた。
「山城・・・」
そこには、帝国海軍一の無口の艦魂が立っていた。
山城は嗚咽を漏らす大和を一瞥すると、金剛を見詰める。
「金剛さん。大和の言ってる事は間違ってない」
「何？」
金剛と山城が睨み合う。
恐ろしい金剛の眼光に、山城は一歩も引かずに対峙する。

「戦艦の時代は終った。これからは航空機の時代」
「飛行機など戦艦にとっては蚊も同然」
「その蚊に、米太平洋艦隊の戦艦は叩き潰されたじゃないか」
「それはアメリカの戦艦が脆かっただけだ」
「違う。もう大艦巨砲主義の時代は終った。これからは航空機時代だ」
「山城ッ！　お前戦艦のくせに大艦巨砲主義を捨てるのか！？」
「待て」
横から榛名が激怒したのを、金剛が止める。
「姉貴・・・ッ！？」
驚く榛名を制止、金剛は山城を見据える。
「貴様がそれほど言うのだ。そうかもしれん。私自身、内心大艦巨砲主義時代は終ったかもしれない、本心ではそう思っている」
「姉貴！」
「だが、これはプライドの問題だ」
金剛は強く言う。
「今まで戦艦は海戦の主力として戦ってきた。たった一度の大成功でおいそれと主力の座を譲る訳にはいかんのだ」
「それはわがままなだけだ」
「そうかもな。だが、その頑固な精神と大艦巨砲主義が日本海海戦で勝利できた大きな理由だ」
「四〇年近く前の海戦と今の戦いが違う。時代は変わるものだ」
互いを睨み合う金剛と山城。どちらも一歩も引かなかった。が、
「はいはい、もうおしまいねぇ」
長門が笑顔で飛び込んできた。
「いつまでももめないのぉ。せっかくの宴会なんだからさぁ」
「・・・」
「うむ。そうだな。すまん」
長門の優しげな笑みに、金剛は軍帽を被り直し、山城も軍帽を深く被る。

こうして、一触即発の大艦巨砲主義対航空機主義の激論は、旗艦長門の仲介で終結した。
「はう・・・」
緊張が解けたのか、大和はその場にへなへなと座ってしまった。
その時、こちらを睨み付けている山城と目が合った。
「・・・」
「あ、あの・・・」
大和が声をかけようとすると、山城は身を翻して去ってしまった。
「あ・・・」
（お礼を言いたかったのに・・・）
しょんぼりしている大和を、扶桑がそっと後ろから抱き締めた。
「扶桑さん・・・」
「お姉様って呼んで良いのよ」
（いや、それはちょっと・・・）
「元気出して。私が後であなたがお礼を言ってたって事言っとくわ」
（私の言いたい事がバレてる。侮れないなお姉さんキャラ）
そこで扶桑は大和を離し、優しい笑みをする。
「山城は仏頂面だけど、本当は優しいのよ。だから、困ってるあなたを助けてくれた。でもこれはかなり珍しい事なのよ。あの子が口を開く以上に」
「はい」
「結構、あなた気に入られてるのかもね」
「え・・・？」
優しく微笑む扶桑は、突然むぅと膨れる。
「でもいいなー。山城に気に入られるなんて。ずるいー」
「うにゃ！」
再び扶桑が抱きつく。
（うーむ、このしつこさ恐ろしい。伊勢さんも大変なんですね）
「・・・すまんな」
突如金剛が話しかけてきたので、大和は扶桑の腕を振り解いて急

いで姿勢を正す。
　すると、金剛は恥ずかしそうに、
「すまん。どうも私は大艦巨砲主義を侮辱されると我を忘れてしまう。この通りだ」
　金剛は頭を下げる。
　焦るのは大和の方だ。
「いえ！　そんな・・・ッ！　頭を上げてください！」
　おろおろとする大和に止めを刺したのは、榛名だった。
「悪かった。俺も少し熱くなりすぎた」
　不機嫌そうに嫌々謝ってるオーラ全開の榛名に、金剛の竹刀が炸裂する。
「あうあう・・・」
　もはや色んな意味で死にそうな大和に助け舟を出したのは、長門だった。
「ほらほら。金剛もやめてやめて」
「うむ。しかし貴様。私の方が年上だという事忘れてないか？」
「忘れた♪」
　てへ。
「てへじゃない」
　呆れる金剛を長門は気にしない。その時、
「あ、お姉ちゃん！」
　日向が駆逐艦数人と二人の下士官の少女をを引き連れてやって来た。
「赤城さん？」
　セミロングをした長身の少女が不機嫌そうな赤城を見て首を傾げる。
「あ、ごめーん。あなた達の指揮官、ちょっといじめ過ぎちゃった。」
　悪びれた様子もなく長門が謝る。
「そうですか」

「どうしたのお姉ちゃん？」
ため息をした少女にピョコピョコと揺れるツインテールをした少女が心配そうに顔を覗き込む。
「いや、何でもない」
少女が笑うと、ツインテールの少女も嬉しそうに笑う。
この二人が真珠湾攻撃に『赤城』『加賀』『翔鶴』『瑞鶴』と共に活躍した空母の艦魂である。
セミロングの髪をしたのが蒼龍型航空母艦一番艦・空母『蒼龍』の艦魂。ツインテールの髪をしたのが飛龍型航空母艦一番艦・空母『飛龍』の艦魂だ。
飛龍型は改蒼龍型とも言うので、二隻は準同型艦となる。つまり、義姉妹なのだ。だが、蒼龍の身長が高いのに飛龍が普通なので、二人の身長差は実に二〇センチもある。
日向は伊勢に自分の友達である駆逐艦の子を紹介していた。
「ま、いいでしょ。それより宴会を続けようぅッ！」
長門の楽観的な言葉で、宴会は続行された。

その日の夜。翔輝は航海科の会議で遅くなり、深夜に部屋に戻った。
「あれ？」
部屋に入ると、宴会に出ていた大和が戻っていた。
「大和。戻ってたんだ」
翔輝があくびしながら言うと、大和は翔輝を睨みつける。だが、その瞳には力強さはまるでなかった。
「・・・少尉のせいで、死ぬかと思いました」
大和の元気のない声で言った。
「どういう事？」
いきなりそんな事を言われても、何も知らない翔輝は全くわからない。
大和は大きなため息を吐く。

「少尉が戦艦は航空機に勝てないなんて言うから、冗談抜きで死ぬかと思いましたよ」
そう言うと、翔輝の顔が真剣な表情に変わる。
「・・・おい、それ戦艦の艦魂達の前で言ったか？」
「そうですが」
「お前はバカか！？」
突如怒鳴られ、大和は「な、何がですか？」と震えながら聞き返す。
翔輝は大和を見て、呆れたようにため息を吐くと、大和に理由を説明する。
「日本の戦艦はみんな大艦巨砲主義を信じてるんだぞ？　そんな奴らの前で航空機主義を推進するような事を言うのは、イスラム教徒の協会のステージで堂々と『私はキリスト教信者です！』って言うような自殺行為だろ」
「・・・よくわかりませんが」
「艦魂じゃなきゃ、今頃死んでるぞお前」
ようやく理解できたのか、大和の顔から血の気が失せる。
翔輝は椅子に座り、呆然としている大和に言う。
「まぁ、僕も大艦巨砲主義者だけどね」
「そうですよ。少尉も大艦巨砲主義者なのに、どうして航空機の有利性を認めてるんですか！？」
復活した大和に、翔輝は笑いかける。だが、その笑みには悲しみが含まれていた。
「僕も大艦巨砲主義を信じたい。好きだからね、戦艦が。でもね、好きな事と得意な事が違うって事もあるだろ？　それと同じさ。大艦巨砲主義は好きだけど、航空機の方が強いというのも理解している。結構大変なんだよ。こういう微妙な気持ちって」
力のない笑みをする翔輝を見て、大和は何も言えなくなってしまう。
「ま、そういう事さ」

翔輝は立ち上がり、大和の頭を撫でる。前にやった時はかなり怒られたが、今回は抵抗されなかった。
「それに、お前が心配する事じゃないよ」
その言葉に、大和は不機嫌になる。
「子供扱いしないでください」
「えー、僕子供の方が好きなんだけどな」
「・・・やっぱり、子供でも良いです・・・」
大和は急に顔を赤らめた。
「ん？　お前顔赤いけど、熱でもあるの？」
翔輝は大和の頭の上にのせていた手をおでこに当てる。
大和はさらに顔を真っ赤にさせる。
「んー、やっぱ熱あるよ」
「だ、大丈夫です！」
大和は翔輝の手を振り解いて離れる。
まだ、彼女の心臓はドキドキしている。
「？」
首を傾げる翔輝をよそに、大和は「何でもないです！」と顔を赤らめたまま自分で布団を敷いて寝てしまった。

第二章　第四節　新連合艦隊旗艦　戦艦『大和』（前書き）

《金剛（こんごう）》

金剛型戦艦（巡洋戦艦）一番艦――戦艦『金剛』

出身　ヴィッカース社（イギリス）

身長　１７５ｃｍ

髪型　長髪（金髪）

実年齢（１９４２年1月現在）２８歳

外見年齢　２５、６歳

誕生日　８月１６日

家族構成　妹・比叡・榛名・霧島

好きなもの　戦艦・大艦巨砲主義・艦隊決戦・大日本帝国海軍・大日本帝国・紅茶・己が志を貫く者

嫌いなもの　航空機・欧米列強・大日本帝国陸軍・コーヒー・軟弱な者

金剛姉妹長女にして日本海軍最古参の戦艦『金剛』の艦魂。生まれはイギリスなのでイギリス人だが、イギリスと戦う事に迷いはない。日本海軍艦魂一軍人らしい艦魂で、曲がった事は絶対に許さず、規則や規律を破る者は容赦なく常に持っている《海軍精神注入刀（かいぐんせいしんちゅうにゅうとう）》と彫られた竹刀で海軍精神を叩き込む。その恐ろしさは日本海軍最凶で《鬼の金剛》と呼ばれて恐れられている。戦闘能力は翔鶴に続く強力なもの。前時代的な大艦巨砲主義者で戦艦最強伝説を信じ、航空機を認めようとせず、真珠湾攻撃を卑怯な戦法として嫌っている。当時の陸海軍不仲の影響か徹底した陸軍嫌いでもある。日独伊三国軍事同盟、対米英戦の賛成派の筆頭。長門の起こした二度の内乱を武力によって抑圧した人物。日本海軍最古参なので味方は多く、物量戦で長門達反対派を壊滅させた。しかし長門とは気心の触れ合った仲であり、戦争が始まった今では過去の事は水に流して長門と連携を組んでいる。艦隊決戦に持ち込む作戦を重視するので、大和や

長門の航空機主力作戦に反対する事が多い。最後まで日本の勝利を信じ続けた生粋の日本人。愛国家で日本を本当に誇りに思っており、日本文化を好み、欧米文化を嫌う。ただし、元がイギリス人だからか、紅茶は好物である。

《榛名（はるな）》

金剛型戦艦三番艦――戦艦『榛名』

出身　川崎重工業神戸造船所（兵庫県）

身長　１５８ｃｍ

髪型　ポニーテール

実年齢（１９４２年1月現在）２６歳

外見年齢　１７、８歳

誕生日　４月１９日

家族構成　姉・金剛・比叡　妹・霧島

好きなもの　姉妹・殴り合い・一騎打ち・強い奴・日本

嫌いなもの　欧米列強・軟弱な者・弱い奴・なよなよした奴

金剛姉妹の三女で霧島の双子の姉、戦艦『榛名』の艦魂。『榛名』は初の民間造船所建造の戦艦であり、『霧島』もこれに続いて別の民間造船所で造船され、両社は壮絶な造船戦争を行った。そのすさまじさは故障の為に『榛名』の完成が遅れ、工作部長が責任を感じて自殺したほどである。それだけ軍艦の建造が当時は重要だったかがわかる。事故の遅れで『榛名』は『霧島』と同時に竣工した。そんな二隻の艦魂は双子なので顔は似ているのだが、性格が正反対。物静かで争いを嫌う霧島に対して榛名は男勝りな性格で大雑把で初対面の人も気に入らなければケンカを売るというすさまじいもの。そんな榛名は金剛の腹心として常に彼女と行動を共にしており、開戦時も『金剛』と『榛名』は同行していた。金剛を本当に尊敬していて、彼女のような立派な軍人になる事を夢見ている。金剛と共に長門達反乱軍と敵対した一人。姉と同じく艦隊決戦主義者だが、空母の有用性も理解しており、まず敵空母を壊滅させて、敵主力艦隊

と雌雄を決する作戦を好む。楽観主義者である翔輝を嫌っているが、本当のところはどうなのか。いわゆるツンデレキャラである。それに加えてホラーやオカルト系が苦手という典型的な弱点もある。そんな力強いキャラの為、水兵や下士官の艦魂から《姉貴》や《姉御》と呼ばれて慕われている。後に日本海軍一の武勲艦と称される。

第二章　第四節　新連合艦隊旗艦　戦艦『大和』

一九四二年二月十二日、連合艦隊の旗艦交代が行われた。
長年連合艦隊旗艦を務めていた戦艦『長門』のマストから山本五十六連合艦隊司令長官の大将旗が下ろされる。
山本長官、同参謀長を務める宇垣纏（うがきまとめ）中将以下や司令部要員が敬礼し、『長門』を後にする。
そして、軍楽隊の演奏響き渡る中、新連合艦隊旗艦――戦艦『大和』のマストに大将旗が上がった。
この瞬間、連合艦隊旗艦は、『長門』から『大和』に移った。
山本長官や宇垣参謀長他幹部が『大和』に乗り込む。
そんな『大和』の前甲板で、もうひとつの連合艦隊旗艦交代式が行われていた。
前連合艦隊旗艦である長門は数々の艦魂達から多くの花束を受け取っていた。そりゃあもう手に収まらないほど。
「長門さん。今までお世話になりました」
駆逐艦の艦魂が泣きながら花束を渡す。そんな彼女達を見て長門は優しく微笑む。
「やだもう。別に引退する訳じゃないのよぉ？」
こんな時でも長門はお姉さんキャラだ。さすが長年旗艦を務めた女だ。
次に、連戦連勝が続く第一航空艦隊こと機動部隊旗艦の赤城が前の駆逐艦より大泣きで、一際豪華な花束を長門に渡す。
「私はどこまでも、長門司令について行きます！」
「赤城ー。これからは大和についてってよぉ。私は一般戦艦になるんだからさぁ」
「司令は一般戦艦ではありません！　日本連合艦隊をここまで率いてくれました！　私はそんな司令にどこまでもついて行きます！
真珠湾攻撃の時に司令から送られた『ニイタカヤマノボレ』は今で

忘れません！」
　涙を必死に堪えてそう言う赤城に長門は優しく微笑む。
「赤城ー。私には陸奥がいるんだよ？　あなたは機動部隊の空母達を指揮して。立派な機動部隊旗艦になってよ」
　長門の言葉に、赤城は歓喜して敬礼した。
「はいッ！　機動部隊旗艦赤城。粉骨砕身の覚悟で努力します！」
　赤城との会話を終えると、長門は新連合艦隊旗艦となった大和を見る。大和も敬礼して長門を見詰める。
「これからは、大和。あなたがこの連合艦隊を率いていくのです。頼みましたよ新旗艦」
　そう言って、長門は自分の腰の軍刀を大和に渡す。
「私からの餞別よ。受け取って」
「はい」
　大和は軍刀を受け取り、自分の腰に差す。
「新旗艦に敬礼！」
　長門の命令の後、全艦魂達が一糸乱れぬ動きで敬礼した。
　大和も、ゆっくりとそれに答礼する。
　戦艦『大和』のマストに掲げられている大将旗が春の朗らかで優しい風でゆっくりと揺れる。
　新たな連合艦隊旗艦・戦艦『大和』は、その巨大な勇姿を威風堂々と輝かせていた。

「少尉！」
　大和は人間側の旗艦任命式に出て帰って来た翔輝に飛びついた。
「少尉！　旗艦ですよ。旗艦！　責任重大だけど、私、一生懸命がんばります！」
　大和は嬉しそうに言うが、翔輝の表情は複雑だった。その意外な反応に大和は心配そうに訊く。
「少尉？　嬉しくないんですか？」
　翔輝は黙っていたが、ふと大和を見る。

「旗艦か。という事は人間で言う連合艦隊司令長官だろ？」
「そうですね」
「階級は大将」
「おそらくは」
再び気難しそうな顔をする。
「うーん。それじゃ今までみたいな友達関係はもう無理だな」
「へ？」
大和は面を喰らったような顔をする。そんな大和に翔鶴は肩をすくませて言う。
「これからは上下関係でいきますか」
「ちょッ！　ちょっと待ってくださいッ！」
大和が驚愕の顔をしてより強く抱きつく。
「そ、そんなの絶対に嫌ですッ！」
「いやー、だって」
渋る翔輝に大和は泣きそうな顔で叫ぶ。
「旗艦になっても私達の関係は変わりません！」
必死で大和は哀願する。
「んー、でもなぁ」
翔輝は困った顔をしているが、実は大和をイジメてるのだ。
「お願いします！　ダメでしたら今すぐ長門さんに旗艦の辞表を叩き付けてきます！」
さすがにそれはヤバイと思い、翔輝は笑いながら言う。
「冗談だよ。冗談」
突然空間から拳銃が落ちて来た。
「・・・ッ！」
見事拳銃は当たったら記憶が吹っ飛びそうな頭の大事な所に命中し、頭を押さえながらその場に座り込み、悶絶する。
「怒りますよ？　さすがに私でも怒りますよ」
静かな怒りの声が聞こえた。
すさまじい痛みに耐えながらも翔輝はその声の方向を見る。そこ

にはこめかみに青筋をたてて、今にも崩壊しそうな笑顔を保っている大和がいた。ものすごく怖かった。
「わ、悪かった・・・ごめん」
「少尉なんか知らないですッ！」
大和は完全に機嫌を悪くし、謝る翔輝を無視して部屋を出て行ってしまった。残された翔輝は困ったように頬を掻くと、小さくため息した。

その夜、新連合艦隊旗艦となった大和の就任祝いが新連合艦隊旗艦・戦艦『大和』の一室で開かれた。
主賓（しゅひん）である大和は部屋の中央で士官の艦魂達に祝ってもらっていた。だが、
「まったく、少尉って人は！」
そう言って大和はラムネをグイグイと飲む。
「ちょ、ちょっと飲みすぎじゃない？」
「いいの。私はもっと飲みたいの」
大和は瑞鶴の心配する声にも耳を貸さず本日八本目のラムネを飲む。そんな大和を見て、翔鶴は腕を組む。
「大和。あの航海士と何かあったのか？」
「そうなんですよッ！　少尉ったらひどいんですよッ！？」
大和は待ってましたと先程の翔輝の態度や愚痴をまるでマシンガンのように吐き出す。その話を翔鶴は何も答えずに聞くが、瑞鶴は途中から飽きてしまったのか飛龍と話をし始めてしまった。
ようやく大和が言いたい事を全部言い終えたのは、三〇分後の事だった。そして、翔鶴の答えは、
「ふむ。貴様達はかなり仲がいいようだな」
「そ、そうですか？」
「ああ、互いをそこまで言い合えるのは、それだけ互いを想っている証拠だ」
「そ、そうなんですか・・・」

大和は翔鶴の言葉に満更でもないといった具合に微笑んだ。どうやら鬱憤を全部吐いたおかげで機嫌も治った上に翔鶴に嬉しい事を言われてさらに上機嫌に。

「えへへ、そうですよ。私と少尉は一心同体なんです」

さっきとは打って変わっても笑顔全開でラムネを飲む大和を見て、瑞鶴は苦笑いする。

「もう、さっきまで散々悪口を言っていたのに」

「過去は振り返らない主義なの」

ルンルン気分でラムネを飲む大和。

一方、大和をここまで上機嫌にさせた翔鶴は無言でラムネを飲む。そんな翔鶴の頬を伊勢がつんつんと突付いた。

「何だ？」

「ほんま、翔鶴はんはええ子やなぁ」

伊勢の笑顔に翔鶴は「誤解するな。私はあんな状態で宴の席にいられるのが不快なだけだっただけだ」と憮然と言うが、伊勢は優しく微笑む。

「ほんま、翔鶴はんは素直じゃないわぁ」

そんな翔鶴と伊勢の横で、大和は嬉しそうに長門から受け取った軍刀を見詰める。

「えへへ、でも私が連合艦隊の旗艦なんかになっちゃっていいのかな？」

「いいに決まってるでしょ」

比叡が優しく笑いかけると、大和も嬉しそうにうなずく。

「長門さんからの贈り物、大事にしないとなぁ」

笑顔で言う大和に、長門が優しく微笑む。

「そうよ。大切にしてね。それは私達連合艦隊旗艦である証拠として、代々受け継がれてきた物なんだから」

うんうんとまわりの者はうなずく。が、

「え？　連合艦隊の旗艦って、長門さんだけじゃなかったんですか？」

『・・・』

大和の言った言葉に、部屋は一瞬にして呆れムードが漂った。そんな中、いまだ状況がわからない大和は「え？　えぇッ！？」と右往左往する。

「あ、あの、私何か変な事言いましたか？」

「お前、仮にも連合艦隊の旗艦でしょ？　もう少し勉強しようよ」

そう呆れながら言ったのは、ドアの前にいつの間にか立っていた翔輝だった。

「しょ、少尉ッ！？　何でここにッ！？」

「あ、私が招待したのよぉ」

そう言って長門が無邪気な笑みを浮かべる。本当に二〇歳を超えているか不思議なくらいの幼げな笑みだ。

一方、翔輝はそんな大和に近づくと、軽くその額をトンと指先で突付く。

「な、何ですか？」

「大日本帝国海軍は日清戦争のずっと前から編成されてたんだぞ。それなのに大正生まれの『長門』一隻がずっと旗艦なんておかしいだろ」

「うぅ・・・」

大和は言葉に詰まる。そんな大和を見て翔輝は呆れる。

「連合艦隊の旗艦はその時代によって変わるんだよ」

「じゃ、じゃあ少尉は全部の連合艦隊旗艦を知ってるんですか？」

「バカにするな。僕は海軍軍人だぞ。そんなの海軍学校で覚える初歩の初歩だ。初代は防護巡洋艦『松島』。それ以降は戦艦『三笠』を始め『敷島』『朝日』『金剛』『山城』『長門』『陸奥』。そして今回からは『大和』、お前だ」

そう言うと、大和はキラキラした目で翔輝を見詰める。その瞳には尊敬の想いが込められていた。

「す、すごいじゃないですかッ！　そんな事を覚えてるなんてッ！」

「驚かないでよッ！　それくらい海軍軍人なら当然よッ！？」

陸奥が呆れきった声で叫ぶ。すると大和は、
「あ、陸奥さんも旗艦だったんですね」
「ま、まあお姉様と交代しながらだけど」
「姉妹揃ってリーダーには見えませんね」
「「おい」」
長門姉妹二人に突っ込まれ、大和は罪のない笑みを浮かべる。すると、今度は今日も比叡の淹れた紅茶を飲んでいる金剛を見る。
「金剛さんも旗艦だったんですね。金剛さんにピッタリの役職ですね」
「うん？　まあ、あの頃は私も若かったな」
そう言って金剛は苦笑する。見ると、比叡、榛名、霧島の三人が苦笑いしていた。
「ど、どうしたんですか？」
「ああ、確かにあの頃は地獄だったな」
「そうね。姉さんが権力を握ってからは恐怖政治が続いたものね」
「私、今でも雪降る真冬の空の下で上半身さらし一枚で甲板掃除をした思い出が忘れられないんだけど」
「ああ、あれか。でも俺は参加可能の全艦魂で竹刀一本の壮絶バトルロワイヤルが一番辛かったなぁ」
「本当に、山城さんが旗艦を変わってくれて助かったよぉ」
霧島の言葉に、比叡と榛名、古参の巡洋艦と駆逐艦がうなずいた。中には涙を流す者までいる。
一方、大和と瑞鶴は互いを抱き合ってガクガクと震えていた。
「そ、そんな恐ろしい事が？」
「ああ、お前も真冬の海水を注いだドラム缶に準備運動なしで素っ裸で飛び込んでみな。人間なら心臓マヒで即死だ」
「一体何がどうなればそんな毎日が死闘になるんですかッ！？」
「姉貴が権力を握るとだ」
「ひえええぇぇぇ・・・」
怯える大和と瑞鶴の横では長門や陸奥、伊勢と扶桑が苦笑いして

いた。
「確かに、そんな事もあったわねぇ」
扶桑が遠い昔を思い出すようにつぶやいた。
「扶桑さんも経験者なんですか？」
「そいつは常にのらりくらりと逃げ回っていたからな。何もしてないぞ」
陸奥の問いに金剛が苦笑しながら返答した。その言葉に陸奥の顔からさーっと血の気が引いた。
「こ、金剛さんから逃げられるんですかッ！？」
驚く一同に、扶桑は屈託のない笑みを浮かべる。
「簡単よぉ。いつも伊勢ちゃんにしてるあの技を炸裂させれば、金剛だって牙をもがれた虎も同然よ」
納得する一同の中、金剛は不機嫌そうに紅茶を飲む。心なしかその頬はほんのりと赤く染まっていた。
「私の神の手は体中のツボを的確に、強烈に刺激するからねぇ。ちょっとくすぐったくて体中に言いようのない快感が電撃のように走る。終わった後しばらくは行動不能になるけど、しばらくすれば疲労やコリなんかは全部解決するの。欠点があるとすれば私は実感できないって事ね。でも気持ちいでしょ？　金剛、伊勢ちゃん」
「「・・・」」
二人は頬を赤くしたまま沈黙している。そんな二人を見て陸奥が「気持ちいんですね。うｔらやましいです」とつぶやいた。が、それが引き金となった。
「そう？　じゃあ陸奥にも味あわせてあげるわ」
「え？　いや結構で――はひいいいぃぃぃッ！」
慌てて逃げようとした陸奥を扶桑は見事に捕獲。すぐさま攻撃――ではなくマッサージを開始する。いつもは伊勢なので陸奥がやられていると新鮮味がある。
「ねえ？　気持ちいでしょ？」
「あはははははッ！　ちょ、ちょっと待ってくだははははははッ！

はふぅんッ！」

涙とよだれを流しながら大笑いして快感に悶絶している陸奥を見て、皆苦笑いしていた。

そして、ようやく解放された陸奥は、ぐったりと床に突っ伏したままピクピクと痙攣（けいれん）している。何かを言おうと口を少し動かすたびに、だらしなくよだれが流れ出る。

「む、陸奥さん、大丈夫ですか？」

霧島が心配して近寄る。と、

「あ、霧島もしてあげるぅ」

「へ？　いや、私は遠慮して――はふぅんッ！」

ミイラ取りがミイラになった。

数分間霧島の笑い声とあえぎ声が響いた後、陸奥の横に同じような状態の霧島がぐったりと倒れていた。

二人連続で極楽へいざなった扶桑はふぅと一度息を整えると、今度は大和を見る。

「あ、大和もする？」

「け、結構ですッ！」

慌てて拒否の言葉を出すが、扶桑は「まあまあそう言わずに」と、少し血走った目で大和を見る。明らかにもう大和の為とかじゃなくて自分が楽しみたいだけである。

「け、結構ですッ！　わ、私は少尉にしてもらいますからッ！」

『へ？』

とっさに言った発言に皆は不思議そうに大和を翔輝を見る。皆驚いているは、一番驚いているのは翔輝だ。

「え？　ぼ、僕は何も――」

大和は変な事を言わないうちに翔輝の口を塞ぎ、そっと耳打ちする。

「話を合わせてくださいッ！　でないと私まであそこにいる浜に打ち上げられたようなクラゲのようになっちゃいますからッ！」

「わ、わかった」

あまりにも必死な大和に、翔輝は迫力に押されてうなずく。
「へえ、長谷川君ってマッサージできるんだ」
長門が笑顔で感心する。この人は人を疑う事を知らないのだろうか。
「ふぅん、じゃあお手並み拝見といきましょうか」
そう言ったのは扶桑。どうやらライバルの出現に対抗心を燃やしているらしい。
「え？　でも僕は――」
「わかりましたッ！」
大和が慌てて許可した。驚く翔輝に「お願いしますッ！　私の貞操の危機がなんですッ！」と泣きつく大和。
「て、貞操って・・・」
「は、早くお願いしますッ！」
大和は上着を脱ぐと空間から敷布団を出し、その上に寝転んで背中を向ける。珍しいワイシャツ姿の大和に翔輝は少し困る。
「え？　でも・・・」
「少尉ッ！」
「さあ、あなたの実力を見せて」
まわりのみんなも注目している。もはや逃げ道なんてなかった。
「わ、わかったよ」
翔輝は諦めたように大和の上にまたがる。体重をかけないようにして大和の小さな背中に指をのせる。
「じゃあ、いくよ」
「はい、お願いします・・・」
今さらながら自分のされようとしている行為に恥ずかしさを感じる大和。
（あ、でも、少尉なら身体を触られても・・・構いません）
ひとり乙女心全開の大和はうっとりと翔輝の体温を感じ、ほんのりと上気する。
――次の瞬間、大和は天国を見た。

翔輝の指は見事大和のツボを神業的に押し始めた。
「はひッ!?　ちょ、少尉ッ!?　どうしてそんなにお上手で――はっふぅんッ!」
扶桑のマッサージとはまた違ったうまさだった。むしろくすぐったさがないので快感が直に伝わる。
「ひょ、ひょうい（しょ、少尉）。ひょうひいひぇひゅ（もういいです）。ひゃへへふははい（やめてください）」
「え?　何か言った?　っと、結構お前こってるなぁ。そんなに仕事があるのか?」
「ひ、ひひょひょははしを――はひぃんッ!」
もう大和は生きながら天国へ行ってしまった。
涙とよだれが止まらず、変な声が意思と関係なく口から発せられ、舌はだらしなくまったく機能していない。
数分後、見事陸奥と霧島の横にもう一体の快楽死をした死体が並んだ。
皆は呆然と翔輝を、特に翔輝の手を見詰める。
「は、長谷川君?　何でそんな殺人的なマッサージができるの?」
長門の問いに、少し疲れた様子の翔輝は苦笑いする。
「知り合いの超わがままな子の修行の結果ですね」
「長谷川君」
扶桑はじっと翔輝を見詰めると、スッと手を差し伸べた。
「君と私は、いいライバルになれそうね。これからは、己が技を磨き、より多くの者達を極楽の世界を味あわせてあげましょう」
「は、はあ」
何か危険な事を言っている気がするが、とりあえず握手する。ガッチリと握られた手は、どちらも神の手であった。
「なんか、危険な同盟が結ばれちゃったわね」
苦笑いする長門はひとり紅茶を飲む金剛に近寄る。
「・・・ふと思ったのだが」
「何よ」

扶桑と手を結ぶ翔輝を見てひと言。
「あいつは誰だ？」
「ああ、そっか、知らないわね。彼が前に言っていた戦艦『大和』に乗ってる航空機主義の航海士の士官よ」
「あいつが」
ギロリと睨むようにして見詰める金剛。その視線に気づいた翔輝が振り向くと、そこには見た事のない金髪碧眼の女性がこちらを辻斬りのような目で睨んでいる。
「あ、あの、扶桑さん？　あの方は？」
「うん？　ああ、あの人は金剛。日本海軍最古参の戦艦である戦艦『金剛』の艦魂よ」
「あ、だから外人なんですね」
納得する翔輝。『金剛』がイギリス産というのも勉強済みだ。
翔輝は自分を睨む金剛にぺこりと頭を下げる。
「は、長谷川翔輝航海少尉です。大和の保護者みたいなものですけど、よろしくお願いします」
翔輝の礼儀正しいあいさつに、金剛は、
「ああ」
と仏頂面に答えた。そんな金剛に「もう素直じゃないんだからぁ」と長門が絡むが、すぐさま竹刀が炸裂し、顔面を押さえて長門は悶絶する。
「で、こっちの子が金剛の妹で榛名よ」
今度は榛名を見て扶桑が紹介してくれた。
「よろしく」
翔輝は笑顔であいさつする。が、
「テメェとなんか仲良くなる気はさらさらねぇ」
榛名は冷たくあしらった。
「え？　ぼ、僕って嫌われてる？」
ひとり戸惑う翔輝を置いて、扶桑は榛名に抱きつく。
「な、何しやがるッ！？」

「もう、榛名は素直じゃないんだから。これはおしおきが必要ね」
「はあッ！？」
「比叡手伝って」
「はいはい」
「ちょっと待て扶桑ッ！　姉さんもッ！？　ま、マジでやめてッ！　ゴラッそこのクソ人間ッ！　テメェも見てないで助け――いひッ！？」
比叡に押さえつけられ、扶桑のマッサージを抵抗できずに受ける榛名。だんだんとそのやかましい声は小さくなり、ついに聞こえなくなった。
天に向かって真っ直ぐと伸びた榛名の足は、扶桑が身体を動かすたびにピクピクと震えていたが、ついにぐったりと床に落ち、止まってしまった。
結局、実に四人もの尊い命を犠牲にした宴会は、主賓脱落という結果でお開きとなった。

第二章　第五節　英東洋艦隊壊滅す（前書き）

《蒼龍（そうりゅう）》
蒼龍型航空母艦一番艦――空母『蒼龍』
出身　呉海軍工廠（広島県）
身長　１７６ｃｍ
髪型　セミロング
実年齢（１９４２年２月現在）４歳
外見年齢　１７、８歳
誕生日　１２月２９日
好きなもの　飛龍・静かな日常・頼れる人
嫌いなもの　騒音・理不尽な事・暗闇
家族構成　義妹・飛龍
日本機動部隊の一翼を担う空母『蒼龍』の艦魂。日本海軍正式空母最高の高速力を持つ『蒼龍』は抜群の性能を持ち、後の日本空母の原型となった。そんな『蒼龍』の艦魂はいつも冷静な少女。指揮官である赤城の参謀のような存在で、その抜群の状況判断能力には赤城も一目置いている。あまり表情豊かではないが、嬉しいときにはちゃんと小さいながらも笑みを浮かべる。義妹艦『飛龍』の艦魂を本当の妹のように大切にしている良き姉でもある。いつも冷静で頼れる存在であるが、本当はまわりが思っているほどしっかりしている訳ではない。人並みなのに陰で努力しているのでできるだけ。本当は頼れる誰かがほしいのだが、今はひたすらがんばっている。赤城の指揮下で内乱に参加した一人。

《飛龍（ひりゅう）》
飛龍型航空母艦一番艦――空母『飛龍』
出身　横須賀海軍工廠（神奈川県）
身長　１５６ｃｍ

髪型　ツインテール
実年齢（１９４２年２月現在）２歳
外見年齢　１５、６歳
誕生日　７月５日
好きなもの　蒼龍・楽しい日々・友達たくさん
嫌いなもの　頑固な人・筋の通ってない事・全力を出しても結果が出ない事
家族構成　義姉・蒼龍

空母『蒼龍』共に第二航空戦隊に所属する空母『飛龍』の艦魂。赤城と同じ左側に艦橋がある試験型の空母で、後の空母は二隻の結果から皆それ以前の右舷型になった。『飛龍』は後の大海戦で《英雄空母》と呼ばれる。そんな『飛龍』の艦魂は平和的な性格をしていて、仲間とわいわいと楽しむのが大好きな女の子。とても優しい性格をしていて天真爛漫な少女だが、曲がった事が大嫌い。筋の通らない事には徹底的に反撃する。さらにいざ戦闘になると猛虎となって敵に襲い掛かる勇ましさも兼ね備えており、その勇猛さは日本海軍でも一目置かれている。姉や赤城達と共に反対派として金剛達と決戦を行ったが、結局は失敗し、自分の失態で起きたこの戦争をどうにかして終わらせようと日々戦っている。

第二章　第五節　英東洋艦隊壊滅す

数日後、第一航空艦隊は再び内地から出撃した。今度は戦艦『比叡』『霧島』だけでなく『金剛』『榛名』も加わっての金剛型戦艦全艦揃っての出撃だった。

南方作戦の第二段階としてインド方面の敵戦力の撃滅が今度の作戦の目的だ。

機動部隊はまずトラック島に続く日本海軍の重要艦隊基地であるパラオに進出した。が、その際『加賀』が座礁してしまった。修理の為、『加賀』は艦隊から落伍した。

別れ際、加賀は「本当にごめんね」と謝ると同時に、搭乗員達の仇を討てない悔しさと、新たな犠牲者を生まなくて済んだ安堵と、自分だけ参加できない後ろめたさとで複雑な顔をしていた。そんな加賀に赤城は「安心して。私達日本機動部隊は世界最強よ。あなたの分まで暴れまわって来てあげるわ」と励ました。

その言葉に、加賀は涙ながらに「ありがとう」とつぶやき、痛む足を引きずって『赤城』の会議室を去った。

損傷した『加賀』は一度内地へ戻ったが、残りの『赤城』『蒼龍』『飛龍』『翔鶴』『瑞鶴』の五空母はインド方面を目指して途中の敵基地や艦隊を撃滅しながら進撃した。

それから二ヶ月の月日が流れた。

機動部隊の攻撃に援護された陸軍は驚異的な速度で進撃を続け、南アジアは日本の勢力下に入りつつあった。だが、開戦直後に起きたマレー沖開戦（一九四一年十二月十日にマレー沖にて日本陸軍の上陸作戦を阻止しようと出撃した英新鋭戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』、巡洋戦艦『レパルス』を基幹とした六隻の英東洋艦隊を日本海軍の陸上攻撃機隊が撃滅した海戦。上記二隻を撃沈し、大艦巨砲主義を根底から覆した）で太平洋方面の戦力を失ったイギリ

スは新たに本国艦隊から抽出した艦艇を送り、この頃には東洋艦隊の戦力はほぼ立て直っていた。

日本軍は中国戦線を重視する陸軍と太平洋戦線を重視する海軍とで意見が分かれていた。

海を渡れない陸軍は陸伝いに攻め込もうとするのに対し、海軍は米太平洋艦隊を叩き潰すのが目的であったので、互いの主張は強く、次の作戦が決まらずにいた。

そんな時、東洋艦隊の復活を知った海軍は第一段作戦で確保した南方資源地帯にイギリスが舞い戻ってくる事を警戒し、インド洋作戦と呼ばれる英東洋艦隊撃滅作戦を立案・実行した。

虎の子の機動部隊を基幹に南方地帯の主要艦艇を集結させて編成された艦隊は第一航空艦隊、南遣艦隊とを合わせて空母六隻（大型空母三隻、中型空母二隻、軽空母一隻）、戦艦四隻、重巡洋艦七隻、軽巡洋艦三隻、駆逐艦十九隻、潜水艦五隻の大艦隊だった。

一方、日本のインド洋作戦の情報を入手したアメリカはイギリスに警告。東洋艦隊はインド洋に展開していた艦隊を一度アッヅ島へ集結させ、主要艦艇の避難と迎撃の為に待ち受けていた。

しかし、日本軍の攻撃が予想されていた四月一日になっても、日本艦隊は現れなかった。

東洋艦隊司令官ジェームズ・F・サマヴィル中将は情報が誤報、または日本軍の攻撃が延期されたと判断して迎撃の為に展開していた艦隊をアッヅ島へ再集結させ、損傷重巡洋艦『ドーセットシャー』と護衛の為に重巡洋艦『コーンウォール』が分派。さらに軽空母『ハーミーズ』は別作戦準備の為に分派した。

東洋艦隊は日本軍襲来の緊張の糸が解けた。

――だが、その直後の四日、ついに日本艦隊がインド洋に殴り込みをかけてきた。

今回の機動部隊の任務は英東洋艦隊の根拠地であるセイロン島に対する空爆であった。

艦隊は英哨戒機に発見されたものの、構わず進撃。翌五日にセイロン島に空爆を行った。その際敵基地から迎撃機が舞い上がって来たが、零戦の敵ではなく壊滅した。しかし攻撃隊側も敵の対空砲火の影響で十分な爆撃を与えられず、第一次攻撃隊は第二次攻撃隊を要請した。

南洋のまぶしい日差しをキラキラとはね返す海に浮かぶ五隻の空母。それは真珠湾以来無敵神話を作り続けている第一航空艦隊であった。

戦いのたびに艦載機を舞い上げる飛行甲板には魚雷を装備した九七艦攻を主力とした対艦隊用の第二次攻撃隊が並んでいた。

「何？　第二次攻撃隊を雷装から爆装へ変更だと？」

そのうちの一隻、旗艦『赤城』の作戦室では艦魂達が突如与えられた命令に戸惑っていた。

「ええ。セイロン島に対する爆撃が不十分だったので、南雲長官は待機している対艦隊魚雷装備の第二次攻撃隊を爆装に変更してセイロンへ向けるそうです」

赤城の説明に、翔鶴が眉をひそめる。

「だが、今から装備の変更をするとなると時間がかかるぞ？　それにもし敵の艦隊が現れても、艦載機は空になってしまうぞ？」

「そうですよ。航空機の戦いは時間が命なんですよ？」

翔鶴と瑞鶴の言葉に赤城は「そうね」とうなずく。だが、

「でも、これは命令なの。実際さっき兵装転換の命令が出たから、今頃はもう転換を始めてるわよ？」

「本当だ。艦載機が格納庫に戻されてる」

窓から自艦を見ていた飛龍の言葉に翔鶴は不機嫌そうに腕を組む。

「さっき瑞鶴が言ったとおり、空の戦いは時間が命。先手必勝こそ勝利の法則。なのにその時間を無駄にするのか？」

「確かに、情報によると英東洋艦隊は空母を何隻か保有しているらしいし」

「それはまずいのではないですか？」
蒼龍の言葉に皆うなずく。すると赤城は首を横に降る。
「でも、イギリスの空母は艦体こそ大型だけど、その搭載機数は軽空母並み。多くても飛龍型や蒼龍型らしいわ」
「はあ？　大型空母が少数しか艦載機を持っていないのですか？」
「そう。英海軍の空母は防御力を重視してるの。その為沈めるのは難しいけど、その分攻撃力はほとんどない。私達の航空兵力は全部合わせて三〇〇機以上。恐れる事はないわ」
「だが、そのほとんどをセイロンに向けてしまっている今、こちらの方が不利なのではないか？」
翔鶴の言葉に蒼龍は「大丈夫でしょう」と笑みを浮かべた。
「今のところ索敵機から敵空母どころか敵艦隊の発見すら報告がない。この付近に敵の艦隊はいないと判断しても、大丈夫よ」
「で、でも・・・」
食い下がる瑞鶴に、比叡が「大丈夫よ」と手をひらひらと返して微笑んだ。
「敵機が来たら私達金剛姉妹が自慢の三五・六ｃｍ砲で撃ち落してあげるわよ。あなた達には指一本触れさせないわ。ねえ霧島」
「え？　あ、うん。私もがんばる。金剛姉さんと榛名姉さんもそう思ってる」
そう小さな声で霧島は言う。
今ここに金剛と榛名はいない。航空機を嫌う金剛は機動部隊の作戦会議にはいつも不参加しているのだ。その為腹心である榛名もいない。
比叡と霧島の言葉に、ようやく翔鶴は首を縦に振った。
「よかろう。なーに、敵の艦隊に遭遇しても私だって高角砲で砲撃してやるさ」
「もう、姉さんったら」
翔鶴の言葉にみなに笑みが浮かんだ。
赤城は「静かに」と言って場を静めると、凛とした声で命令する。

「ただちに第二次攻撃隊の雷装を爆装に変更。変更を終えた空母から逐次攻撃隊を発進させるように」
『了解！』
空母五人は急いで自艦に戻ると、今か今かと攻撃隊の兵装転換を待ち続けた。

五隻の空母のうち中央に第二航空戦隊が陣を張っている。所属の『蒼龍』『飛龍』の二隻は慌しく甲板に爆装変更した攻撃機を並べていた。
『蒼龍』の甲板にも次々に攻撃隊が並べられていた。
そんな甲板の上で艦載機を見守る蒼龍。すると、
「蒼龍！」
人ごみの中から少年が走ってきた。その少年の声に蒼龍が視線を送ると、少年は嬉しそうに微笑んだ。
「僕の零戦もやっと準備を終えたんだ。これでいつでも発進できるよ」
「そう。良かったわ」
蒼龍はそう言って静かに微笑む。
「やっぱり蒼龍は笑ってた方がかわいいね」
少年の言葉に蒼龍はぽっと顔を赤らめると、ぷいっと背を向けてしまう。
「バカ言ってないで、あなたも兵装転換の手伝いをしてきなさい。今は猫の手を借りたいくらい忙しいんだから」
そう強く言うと、少年は「わかったよぉ」と少し寂しげに答えて格納庫の方に向かった。
しばらくして、蒼龍も無言で格納庫に行くと、中では攻撃機の兵装転換が慌しく行われていた。その中に先程の少年の姿を見つける。
少年は整備兵と協力して攻撃機の下部に爆弾を取り付けていた。
汗みどろになって働く少年を見詰め、蒼龍は小さく笑みを浮かべた。

「がんばって、刹那」
蒼龍の見詰める先で、少年――神風刹那上等飛行兵曹は次の機体の魚雷を取り外していた。

一方、僚艦『飛龍』も慌しく兵装転換を行っていた。
そんな中、ようやく自分の愛機である零戦を甲板に並べ終えた少年が最後の点検を行っていた。
「これで良し。後は命令を待つだけか」
少年はそうつぶやくと機体に描かれた日の丸をポンポンと叩いた。
その時、
「剣ッ！」
「うわッ！？」
突如少年の背中に少女が飛び込んできた。バランスを崩しそうになった少年は慌てて踏ん張る。
「ひ、飛龍か。びっくりしたぁ」
「ふふん。驚いた？」
「驚くよ。心臓飛び出るかと思ったぁ」
胸を押さえてびっくりする少年に、飛龍は嬉しそうに微笑む。
「こんな所で何やってるのよ」
「何って、愛機の手入れだけど」
「もう終わってるじゃない。だったら格納庫の方を手伝ってよ。今格納庫は大忙しなんだよ？」
「まあな。床に爆弾や魚雷が乱雑に置かれてたもんな。もし今敵の攻撃を受けたら間違いなく爆沈するな」
「もう、怖い事言わないでよ」
「ははは、悪い悪い」
少年の言葉に、飛龍はぷぅと頬を膨らませるが、すぐに笑顔に戻る。
「あと三〇分もすれば発艦準備が終わるから、そしたら――頼むよ？」

飛龍の言葉に少年は「任しとけって。攻撃隊は僕がちゃんと守ってみせるさ」と力強く言った。
それを見て、飛龍は安堵して嬉しそうに微笑む。
少年――大空（おおぞら）剣上等飛行兵曹も嬉しそうに微笑んだ。
今か今かと出撃を待つ二人。
だが、事態は一変した。
『敵艦隊発見ッ！　敵艦隊発見ッ！』
「えええぇぇぇッ！？」
「うわぁ、最悪のタイミングなんだけど」
驚く飛龍の横で剣も呆れながらも顔には緊張が走っている。
「長官、兵装の再転換なんてしないでしょうね？」
「さあ、わかんないよ」
飛龍は右往左往している。その横で剣は愛機の零戦を見詰めて苦笑いした。

敵艦隊発見。
それは今の機動部隊には悪い知らせでしかなかった。しかも《敵艦隊発見》というあやふやな情報だけなので、敵艦隊には空母がいるのかいないのかわからない。
もし随伴していたら、それは機動部隊にとって脅威でしかない。
――だが、

「また兵装の転換だと？」
『赤城』の会議室で再び緊急招集がかけられ、艦魂達が集まった中、赤城から発せられた命令に翔鶴は明らかに不機嫌そうに眉をひそめる。
「そうよ。急いで爆装を雷装に戻して」
赤城の命令に、蒼龍と飛龍は顔を見合わせる。
「ちょっと待ってください。また兵装の転換ですか？」
蒼龍の言葉に、赤城はうなずく。

「そ、そんなぁッ！　せっかく兵装転換がもうすぐ終わるのにぃッ！」

飛龍が不満げに声を上げると、瑞鶴も賛同した。

「そうですよッ。さっきも言いましたが、航空戦の場合時間が絶対重要なんです。なのにまた兵装の転換をしてしまえばその重要な時間を失う事になりますッ」

瑞鶴はどうしても納得がいなかった。それは皆同じであった。

「兵装の転換をしてたら敵に先手を打たれてしまいます！」

「瑞鶴の言うとおりです。敵は空母を伴っている可能性があります。もし空母がいたとしたら一刻の猶予もありません。ならば、敵空母の甲板を破壊できる艦爆隊だけで十分です。魚雷がなければ撃沈は難しいとしても飛行甲板さえ無能力化してしまえば艦載機が舞い上がってくるという脅威はありません」

蒼龍が言ったのは、艦攻隊抜きの攻撃隊を向けるというものだ。もちろん対艦用の魚雷を装備した雷撃機がないというのは敵艦を沈めにくいという弱点を持つが、早急に敵艦の戦闘能力を無力化するという点ではベストな選択である。

「そうだ。蒼龍の言うとおり艦爆隊を向ければいいじゃないか」

翔鶴も蒼龍の意見に賛同するが、赤城は首を横に降る。

「これはもう南雲長官が決定したの。だから、今すぐに兵装の再転換をして」

「いや、しかし・・・」

「これは命令よ」

赤城の強い言い方に、翔鶴は不機嫌そうに眉をしかめる。すると、そんな翔鶴の肩に飛龍がポンと手を置いた。

「命令なら仕方ないよ。急いで転換しよ」

「・・・」

だが、結局翔鶴は無言のまま、会議が終わると足早に去ってしまった。その背中を追い掛ける瑞鶴と、見詰める飛龍。

そして、窓の外の艦隊を見詰める赤城を、蒼龍は不安げに見詰め

ていた。

「マジッ！？」

「ええ、本当よ」

格納庫で汗や油まみれになって兵装転換を行っていた刹那は、蒼龍の言葉に思わずスパナを落としてしまいそうになった。

蒼龍はさっき赤木から受けた命令を刹那に言ったのだ。

驚く刹那は一度スパナを置く。

「え？　って事はまた魚雷に戻すの？」

「そうよ」

「だ、だって今変えたばかりじゃないかッ！」

そう言って手を大きく広げる。その向こうには爆装を終えた九七艦攻が並んでいた。これをまた雷装に直すとなるとかなりの手間がかかってしまう。

「そうだけど、南雲長官の命令よ」

蒼龍がそう言うと、刹那は大きくため息を吐いた。

「うっそぉッ！　ここまでやってそれかよぉッ！」

刹那は今しがた爆装を終えた九七艦攻を見詰めて肩を落とした。

そんな背中を見て、蒼龍は軍帽を脱ぐ。

「私も手伝うわ。だから、協力して」

上着を脱ごうとする蒼龍に、刹那は慌てて止める。

「い、いいよッ！　僕がやるからッ！　君までやる必要はないよッ！」

「しかし時間がない」

暗い顔でつぶやく蒼龍に、刹那は「大丈夫だよぉ」と笑う。

「みんな必死になってやってるからさ」

そう言って見回すと、今度は再び雷装に戻す作業が始まっていた。

「みんな・・・」

「だから、蒼龍は僕らを信じて待っててよ」

笑顔で言う刹那の言葉に、蒼龍はうなずく。

「はい、皆さんの奮闘を期待しています」
「任しとけって」
蒼龍は小さいながらも笑みを浮かべると、再び作業に戻った刹那を見詰め、再び軍帽を被ると、甲板に戻った。
彼が仕事を終えて甲板に戻って来るのを待って――

「どうしたの？」
床にぐったりと座っている剣に飛龍が声をかけると、剣は「どうしたもこうしたもないよぉ」と泣き言のように力のない声で言う。
「さっきやっとの思いで爆装にした艦攻を今度はまた雷装に戻すなんて、身体が持たないよぉ」
そう言う剣は汗と油にまみれて、まるで整備兵のような状態になっている。そんな剣に汗まみれの顔を、飛龍はそっとタオルで拭き取る。
「飛龍？」
「もう、剣の本業は空を飛ぶ事でしょ？　なのにその前にこんな見るも無残な姿になっちゃって」
「仕方ないだろ？　こんな重労働整備兵だって倒れちゃうよ」
「まあ、そうかもしれないけど。でもこのままじゃ間に合わないよ・・・」
慌しく人が動き回る格納庫を見て飛龍は不安げに顔を曇らせる。
「まったく、長官もまさか本当に兵装の再転換を行うなんて」
「長官は航空戦は苦手ですからね。元々水雷畑出身の方だから」
「何でまた魚雷を撃ちまくって勝とうとする水雷戦の指揮官が、見えない敵を相手にする航空艦隊の指揮官になるのかな？」
「日本は先任を優先する風習がありますからね」
「そんな理由で指揮官を決めてほしくないよなぁ」
呆れる剣の額に、飛龍はデコピンする。
「な、何すんだよ」
「もう、長官の不満なんか言っちゃダメだよ。長官は私達空母を輝

かせてくれた恩人なんだから」
　確かに、南雲は空母を一躍海戦の主力に変えてくれた恩人である。それに航空戦は苦手かもしれないが、水雷畑で培った艦隊操作の腕前はすばらしいものだ。その影響がハワイまで艦隊を無事に運べた大きな理由でもある。
「そりゃ感謝はしてるさ。でも、これはいくらなんでもなぁ」
　そう言って剣は格納庫内を見る。そんな剣の肩を、飛龍はポンと叩く。
「さあ、早く兵装を転換しよ。私も手伝うからさ」
「バカ、ガキに任せられっかよ」
　そう言って剣は立ち上がると、飛龍の頭をポンと叩く。
「まあ、お前は安心して待ってな」
「わかった」
　飛龍は近くの木箱の上に腰掛けると、再び兵装の転換を始める剣を見守った。

　兵装の大転換を慌しく行っている機動部隊に、さらなる状況悪化が重なった。
　セイロン島を爆撃した第一次攻撃隊が戻って来たのだ。これで甲板はさらに大忙しとなった。
　まず第一次攻撃隊を収容し、今度は第二次攻撃隊を甲板に並べなければいけないからだ。
　第一次攻撃隊を収容し、格納庫はさらに大混乱となった。

　機動部隊はまず先発として艦爆隊（九九式艦上爆撃機五三機）を発進させた。
　艦爆隊は偵察機からの位置情報で敵艦隊を発見。それは東洋艦隊から分派していた重巡洋艦『ドーセットシャー』『コーンウォール』であった。
　艦爆隊は付近に敵の空母がいないと確認すると、この二隻に殺到。

わずか二〇分で両艦を撃沈。その時の命中率は通常の急降下爆撃が二五パーセントに対し八八パーセント。当時の日本機動部隊が最強と謳われていたのが当然と思える結果に終わった。

機動部隊の艦魂達は祝勝会を旗艦『赤城』で開いた。

嬉しそうに今日の勝利、特に敵重巡洋艦二隻轟沈という圧勝にかなり宴会は盛り上がっていた。

「アメリカと違って、イギリスは雑魚よね」

赤城は気分良く日本酒を飲む。その頬はほんのりと上気し、気分は高揚している。アルコールがほど良く気分を良くしているらしい。

「確かに、攻撃隊の話によると敵の戦闘機はこちらの零戦より数が多かったのに、その半数を零戦に撃墜されたそうですから」

蒼龍の言葉に「はあ、早く米空母と戦いたい」と赤城はうっとりと微笑む。どうやらちょっとアルコールが異常に回っているらしい。

一方、そんな赤城と蒼龍の横では飛龍と瑞鶴が翔鶴と共に今日の南雲長官の判断に批判的な意見を言い合っていた。

「まったく、これだから畑違いの者が指揮官だと困る」

「そうだよね。何で航空機に詳しい指揮官を素直に立てないんだろ？」

「それが日本の先任を立てるっていう悪しき風習なのよ」

飛龍の言葉に、翔鶴はため息する。

「先任を立てるのが悪いという訳ではないが、だからといって畑違いから引っこ抜く必要はないだろう？」

「ははは、良くも悪くも日本の伝統なのよ」

「飛龍さん、笑い事じゃないですよぉ。私達の命がかかってるんですから」

瑞鶴の不安げな声に「大丈夫大丈夫。何かあっても零戦隊が何とかしてくれるわよ」とあまり気にした様子もなくラムネを飲む。

そんな飛龍に翔鶴は「笑い事じゃないぞ」と言い、日本酒をクイッと飲む。

「指揮官は私達の命を預ける大切な存在。そんな事では困る」
翔鶴はどうやら南雲長官のやり方が気に入らないらしい。元来《見敵必勝》という考えを持つ翔鶴は南雲の慎重過ぎる指揮の仕方が性に合わない。彼女なら護衛戦闘機なしでも攻撃隊を出そうと言いそうだ。
そんな三人の批判的な声に比叡が苦笑いした。
「もう、いくらなんでも批判し過ぎよ」
「・・・ちょ、ちょっと南雲さんがかわいそう」
比叡と霧島の言葉に「これくらい言っても足りんな。あの指揮官は」と南雲批判をやめない。そんな翔鶴に金剛が釘をさす。
「確かに、慎重過ぎる指揮官は困るが、何せ元々水雷屋の南雲にこんな訳のわからん航空戦を指揮しろと言う方が無理な話だ。そんな南雲を責めるのはどうかと思うが」
「だから、畑違いの指揮官にする必要はないと言っているのだ」
「貴様、上官を侮辱するのは万死に値するぞ」
「犬死はごめんだ。私は死ぬなら悔いなく奮戦して死にたい。その運命を託すには南雲では器が小さすぎると言いたいんだ」
睨み合う翔鶴と金剛に、榛名はため息する。
「ったくよ、南雲は航空艦隊の司令長官じゃなくて俺達の戦艦部隊の司令長官になってほしいぜ。あいつは根っからの水雷屋だからな。俺達戦艦とあいつが指揮する水雷戦隊が共同すればどんな敵にだって負けねぇよ」
榛名の言葉に「そうだな」と金剛もうなずく。
苦笑いする比叡の横で、部屋の中の妙な雰囲気にビクビクとする霧島。
「まあ、人それぞれ合った場所がありますが、世の中思い通りにはいかないんですよ。南雲長官もその一人という訳です」
赤城の仲裁に金剛と翔鶴はあまり納得していなかったが、比叡が「ほら、ケンカはもうやめてよ」と言って仕方なく納得した。
比叡は自分の背中に抱きついて今にも泣き出しそうな霧島を気遣

ったのだ。
再び宴会が再開され、赤城達はおおいに飲んで歌って騒いだ。

翌日、翌々日になっても両軍は動かなかった。
八日、東洋艦隊は日本艦隊を迎え撃とうと再展開させていた艦隊を再びアッヅ島に撤退させた。何も動かない日本艦隊に、敵艦隊は去ったと誤解したのだ。
九日、機動部隊は再びセイロン島を空爆。湾内の敵艦船と基地施設を破壊した。
そして、この攻撃隊攻撃中に、機動部隊に偵察機からある情報が飛び込んできた。

――空母一、駆逐艦一、南下中――

「もう突っ込まないぞ」
呆れきった翔鶴のツンドラ気候よりも冷たい言葉に、赤城ももう何も言い返せない。
「気持ちはわかる。痛いほどわかるけど、でもお願い・・・艦攻隊の爆装を雷装に変更して」
敵空母発見の報に、用意していた第二次攻撃隊の艦攻隊を爆装を雷装を転換する事になったのだ。まさに五日と全く同じ状況である。
呆れているのは翔鶴だけではない。蒼龍、飛龍、瑞鶴の空母三人。さらに比叡と霧島まで呆れた顔をしている。
そんな呆れた視線を一身に受ける赤城は、頭を抱えていた。
「長官・・・私は長官を信じればいいんですか？」
同じような状況に同じような命令をする南雲に、翔鶴達はもちろん赤城ですら疑心暗鬼に陥っていた。
もう赤城ですら指揮不能の状態に陥った状況に、翔鶴はため息する。
「仕方ない。兵装の転換をするぞ」

翔鶴の疲れ切った言葉に、瑞鶴達も疲れ切ったようにうなずいて各艦に散った。

一人残された赤城は、今は内地で療養をしている幼なじみの少女を思い出し、あの能天気ぶりをうらやましく思うのだった。

自艦に戻った蒼龍は甲板に上がると蒼い空を見上げる。その先には艦隊直援の零戦が数機が飛び回っていた。その中の一機を見詰め、蒼龍は小さく笑みを浮かべる。

「刹那・・・」

艦隊直援の零戦の一機には刹那が乗っていた。

刹那の零戦は『蒼龍』の上空を中心に飛び回っている。そのまるで自分を守っているかのような光景に、蒼龍の心はほんのりと嬉しさが溢れていた。

じっと刹那の零戦を見詰める蒼龍。だがその時、突如刹那の零戦が機体下部に付いた燃料増槽を落として急上昇した。不思議そうに見ていると、雲の切れ間から突如敵機が急降下して来た。

「――敵機ッ！？」

驚く蒼龍の目線の先で、刹那の零戦が敵機の中に突っ込んで行った。

目の前に現れた双発の敵爆撃機に向かって、刹那は真正面から突っ込む。

敵はどうやら陸上基地から発進してきた敵機らしく、九機の空軍機だった。

「僕達第一航空艦隊にたった九機で挑むなんて、命知らずだな」

刹那は照準を合わせて引き金を引く。七・七ｍｍと二〇ｍｍ機銃がすさまじい勢いで敵機に掃射され、一機は黒い煙を上げて撃墜された。

残った八機は刹那の零戦を一瞬で通り抜けて機動部隊に襲い掛かる。刹那は急いで反転して急降下すると、一番近い敵機に機銃を浴

びせる。が、敵機も必死になってそれを避け、機銃弾は何もない空を突き抜けた。

敵機に向かって猛烈な対空砲火を浴びせ、また一機を撃墜。敵機は急いで爆弾を投下するが、どれも見当違いな所に着弾し、敵機は慌てて逃げるが、刹那達零戦隊はそれに容赦なく襲い掛かって一機また一機と撃墜する。

低空で逃げる敵機に照準を合わせ、引き金を引く。

当時戦闘機の機銃としては最大の二〇ｍｍ機関銃が敵機に次々に穴を開け、撃墜する。

再び艦隊上空に戻ると、すでにそこに敵機の姿はなかった。

敵機来襲のすぐ後、今度はもまた先発隊として九九艦爆八五機と直援の零戦六機が敵空母に向かって出撃した。

攻撃隊の護衛として剣も選ばれ、甲板を翔けて空へ舞い上がる。後ろを見ると、防空指揮所の上から飛龍がこっちに向かって敬礼をしていた。剣は微笑むと、すぐに真剣な顔で味方機を追い掛ける。出撃した攻撃隊を見詰め、飛龍はいつまでも敬礼していた。

攻撃隊は敵空母『ハーミーズ』に殺到。

猛烈な命中率八二パーセントの攻撃の前では小型空母などひとたまりもなく、わずか十五分で撃沈された。まさに瞬殺である。

攻撃隊は引き続いて随伴の駆逐艦他四隻を撃沈。

大戦果を上げ、攻撃隊は意気揚々と母艦に戻った。

歴史的大勝利に旗艦『赤城』の会議室では大宴会が開かれた。

大喜びする赤城に、同じく喜ぶ飛龍と瑞鶴、比叡と霧島。少し嬉しそうに微笑む蒼龍。そして、いつもと変わらず酒を飲む翔鶴。

皆、今日の勝利に沸き立っていた。

「私達日本機動部隊は世界最強よッ！」

赤城は嬉しそうに高らかに叫ぶ。

「はい。まさに向かう所敵なしです」
「そうよねッ！　ああ、加賀にも味あわせてあげたかったわ」
赤城は本当に嬉しそうに喜ぶ。こんなに子供っぽい仕草をする赤城は珍しい。それほどまでに今回の大勝利が嬉しいのだろう。
そんな赤城に相槌を打つ蒼龍。その顔にも小さな笑みが浮かんでいる。
「私達こそ最強艦隊ね。もう何も怖くないわ」
飛龍の言葉に瑞鶴も嬉しそうにうなずく。
「これならアメリカにだって必ず勝てますよ」
嬉しそうに言う飛龍と瑞鶴を見て、翔鶴は複雑そうな顔をしていた。
「米機動部隊か・・・装簡単に倒せる敵ではあるまい。ここにいる奴らが何人死ぬか・・・」
そんなささやきなど、勝利に酔いしれている赤城達には届かない。
一方、盛り上がる艦魂達から少し離れた所に陣取っているのは、航空機否定主義者の金剛と榛名だ。せっかくの大勝利も、航空機の活躍のおかげという事であまり喜べていないのが現状であった。
金剛は不機嫌そうに一升瓶をグイッと飲む。
「まったく、航空機などという下賤な物を使っておいて何が勝利だ。勝利というのは己が大砲で敵艦を撃沈する事。こんな見えない戦果に喜びおって」
「そうだぜ。勝利ってのは艦隊と艦隊の一騎打ち。どっちが負けるか徹底的に撃ち合って得るもので、こんな飛行機なんて物を使うもんじゃねぇ」
「まったく、日本海海戦がうらやましい」
「まったくだぜ」
前時代的な二人は、巣のに日本の勝利を喜べずにいた。
そんな姉と妹を見て、比叡は小さく笑みを浮かべ、霧島は気づかず皆と微笑み合っていた。
艦魂達は歴史的勝利に、いつまでも笑い合っていた。

セイロン沖で展開された海戦はこうして幕を閉じた。
戦果は軽空母『ハーミーズ』、重巡洋艦『ドーセットシャー』『コーンウォール』他駆逐艦二隻撃沈。その他輸送船や小型船、敵基地施設などに大損害を与え、撃墜敵機約五〇機。
それに対し日本海軍は未帰還機十六機という小規模な損害であった。
東洋艦隊は残った艦艇を安全なマダガスカル島まで後退させた。
この日本海軍の圧勝で終わったセイロン沖海戦南方資源地帯の完全攻略と英東洋艦隊の壊滅を確実なものとした。
この圧勝に沸き立つ日本海軍は慢心を生み、後の大敗北の致命的な原因にもなるが、まだ彼らはそんな事など知らない。わかるのは、今日の勝利だけだった。

機動部隊は一度内地に向かって再び来た道を戻って行った。
その途中、第五航空戦隊・空母『翔鶴』『瑞鶴』は別任務の為に艦隊から分派し、新たなる戦場に向かった。

四月十八日。日本近海に突如現れた米空母『ホーネット』『エンタープライズ』から十六機の米陸軍爆撃機Ｂ‐２５が発艦。帝都東京を空爆した。
海軍の持つ空母から陸軍の爆撃機を飛ばす。当時陸海軍不仲の日本とは対照的なアメリカ。これもまた勝敗の一つでもあった。
もう一つ、日本海軍はさらに内部でも勢力が分かれ、一枚岩ではなかった。
作戦を立案・許可する軍令部（ぐんれいぶ）と、実際に作戦を指揮をする山本長官率いる連合艦隊司令部では、まったく作戦内容が違っていた。
連合艦隊司令部は山本長官の《短期決戦早期和平》を主軸に敵機動部隊殲滅・太平洋方面に対する全力攻撃を方針に考えているのに対し、軍令部は依然長期戦の構えとして後方の安全を確保する為に

南方へ攻める事を望んでいた。
だが幸か不幸か、この空襲により軍令部は太平洋の重要性を認め、以後太平洋方面作戦を立案していく事になった。

柱島にいた主力部隊も東京が空襲された事が伝わっていた。
翔輝は甲板に置かれた椅子に座りながら新聞を読んでいた。新聞の見出しはこう書かれていた。
『帝都空襲！』
『東京市、川崎市、横須賀市、名古屋市、四日市市空爆』
『死者五〇名。家屋二六二戸が被害』
『鬼畜の敵、小学校の校庭に機銃掃射。帰宅途中の小学生一名死亡』
どうやらどの新聞も同じ見出しが躍っているようだ。
「帝都が空襲ですか」
水上が横から新聞を覗きながらつぶやく。
「『鬼畜の敵、小学校の校庭に機銃掃射。帰宅途中の小学生一名死亡』ですか。子供に機銃掃射するなんて、アメリカ人は血も涙もありませんね」
「・・・戦争だからね」
十三歳といえば、翔香ぐらいの年の子だろう。年の子だろう。
翔輝はふと死んだ妹を思い出した。
今月、四月一日は翔香の命日だった。その日は航海長にお願いして呉に戻ったのだ。
あれからもう一年。月日が経つのは早いものだ。
「そういえば、今度機動部隊がＭＯ作戦を開始するみたいですね」
水上が思い出したように言う。
「あぁ、米豪遮断作戦の事か」
ＭＯ作戦とは、アメリカに加担するオーストリアを孤立させる為にニューギニア島のポートモレスビーを攻略する作戦の事だ。
「うまくいくといいですね」
「大丈夫だろ。日本機動部隊は無敵だからな」

「そうですね」
翔輝の言葉に水上は安心したようにうなづくと、陸の上を見詰める。
翔輝も新聞を畳むと、水上と同じとおり陸の方を見る。そこは一面満開の桜が輝いていた。
甲板にも桜の花びら風にのって舞っている。
輝く満開の桜を見て、翔輝は笑みを浮かべた。

第二章　第五節　英東洋艦隊壊滅す（後書き）

前回のオリジナルでは手抜きされていたセイロン沖海戦を今回は書いてみました。
これを書くのに手間取ってちょっと更新が遅れていたんです・・・すみません。
今回から新キャラを投入し、これでより『艦魂年代史　恋する乙女は大艦巨砲主義』はさらに進化します。
これからもがんばりますので、どうか皆さん応援よろしくお願いします。

第三章　第一節　壮烈　史上初の機動部隊決戦（前書き）

《神風刹那（かみかぜ　せつな）》
帝国海軍軍人・空母『蒼龍』航空隊所属戦闘機乗り
出身　神奈川県綾瀬市
身長　１６７ｃｍ
年齢（１９４２年５月現在）１８歳
誕生日　３月３日
好きなもの　飛行機・蒼い空・心地良い風
嫌いなもの　水（泳げないから）・雨・納得がいかない事
家族構成　父　母　妹

今改定版から登場する新たなキャラクター。空母『蒼龍』の戦闘機乗りで艦魂が見える。蒼龍が頼れる数少ない少年で、本当は普通の女の子である蒼龍の苦悩を身近で知り、彼女を支えている。蒼龍と共に幾多の戦いに出続けた。性格は温厚でとても優しいが、曲がった事が嫌いで、そういう事には果敢に反対する。本当は民間のパイロットになりたかったが、戦争が近くなるとそういったパイロットも全て軍隊に徴兵され、彼は戦闘機のパイロットとして真珠湾攻撃で初陣を飾った。皮肉にも、戦闘機乗りとしての腕はかなりのものだった。この戦争にはあまり乗り気ではないが、次々に死んでいく同胞を見て、彼らの分まで戦って日本を救おうと考えるようになる。泳げないという弱点があるので着水は大嫌い。本当は母艦搭乗員ではなく溺れる危険性がほとんどない基地航空隊に入りたかったが、これも皮肉な事に着艦技術がすばらしかった為、母艦搭乗員となった。自分の思う事とできる事にギャップのあるかわいそうなキャラでもある。

《大空剣（おおぞらつるぎ）》
帝国海軍軍人・空母『飛龍』航空隊所属戦闘機乗り

身長　広島県呉市
身長　１６４ｃｍ
年齢（１９４２年５月現在）１８歳
誕生日　２月６日
好きなもの　飛行機・快晴の空・蒼い海・心地良い風・甘いもの
嫌いなもの　無意味な争い・何も考えてない人・野菜
家族構成　父（戦死）　母　姉　妹

刹那と同じく今改定版から登場する新キャラクター。『飛龍』航空隊の戦闘機乗りとして真珠湾攻撃で初陣を飾る。同戦闘機隊中では敵機撃墜数が一、二を争うほどの撃墜王。零戦を自分の身体のように操る事ができる。母艦搭乗員には自ら立候補した。飛龍とは気心の知れた仲で、開戦後五ヶ月の間、彼女の心を支え続けた少年。本当は戦争なんかしたくないが、日本が好きで、祖国を守りたくて必死に戦っている。飛龍からはかなりの信頼を得ており、『飛龍』に迫る敵機のほとんどは彼が撃墜している。飛龍と剣はお互いの背中を預けられる心から結ばれている仲で、双方共に相手の事が気になっている。戦争が激化する中、多くの仲間が死んでいくが、それでも彼はその自慢の技量で次々に敵機を撃ち落とし続けた。

第三章　第一節　壮烈　史上初の機動部隊決戦

ＭＯ作戦――米豪遮断作戦とは、アメリカの属国であるオーストラリアをアメリカから遮断し、同国と休戦させる為の作戦である。南太平洋に進出したい日本海軍としては後方の安全を確保すると同時に、米海軍の反撃作戦が行われるであろうこの周辺海域を確保するのが目的であり、日本海軍としてはなんとしても成功させたい重要な作戦であった。

だがこれは軍令部の作戦であり、米海軍の反抗作戦に先手を打つものであったが、連合艦隊司令長官である山本はこの作戦をあまり重要視していなかった。

山本が恐れるのは真珠湾以来連戦連勝している機動部隊と互角に戦える米機動部隊の存在であった。実際、米空母二隻による本土初空襲は衝撃を走らせた。国民の軍部に対する不信を警戒する山本としては、早期に敵機動部隊を殲滅してその不安を拭いたかった。

山本は後の大作戦であるＭＩ作戦の為に機動部隊を無傷で残しておきたかった。何度も全力攻撃できるほど、日本には余裕はなかったのである。

しかし、ＭＯ作戦も十分重要な作戦である。これを無視する事もできず、結局敵機動部隊殲滅＞ＭＯ作戦という構図で作戦には必要最低限の部隊しか派遣されなかった。それがインド洋作戦を終えた機動部隊から分派された第五航空戦隊――空母『翔鶴』『瑞鶴』の二隻であった。

第五航空戦隊の援護を受ける事になったＭＯ作戦は機動部隊と攻略部隊、援護部隊を編成して発動された。

第五航空戦隊を基幹としたＭＯ機動部隊はトラック島に入港してＭＯ作戦の準備を進めていた。

ＭＯ機動部隊旗艦・重巡洋艦『妙高』の会議室では艦魂達による

作戦会議が行われていた。部屋に置かれた長テーブルの中央に座る翔鶴と瑞鶴にとっては、初めての赤城の指揮下以外での作戦だった。

二人はまわりの艦魂達を見回すが、知っている顔は一人もいない。少し不安げに辺りを見回す瑞鶴に翔鶴は「大丈夫だ。私がいるであろう？」と励ます。

「ね、姉さん・・・」

嬉しそうにキラキラした目で見詰める瑞鶴に翔鶴は少し恥ずかしそうに視線を逸らす。

「以上がＭＯ作戦――米豪遮断作戦の全容です」

短いポニーテールをした女性――ＭＯ機動部隊旗艦・重巡洋艦『妙高（みょうこう）』の艦魂が作戦の具体的な説明を終える。

「作戦発動の為に五月一日に我々ＭＯ機動部隊。四日にはＭＯ攻略部隊がラバウルを出港してポートモレスビーに向かいます」

妙高が説明を終えると、隣にいたセミショートの女性が立ち上がる。彼女は妙高の妹である妙高型重巡洋艦四番艦・重巡洋艦『羽黒（はぐろ）』の艦魂である。

「今作戦には、翔鶴と瑞鶴が重要な鍵を握っています。どうか、よろしくお願いします」

年上の人に頭を下げられ、瑞鶴は慌てて手を横に振る。

「羽黒さん。頭を上げてください。私達は全力で任に当たるだけです。そんな先輩に頭を下げられる訳には――」

瑞鶴の邪心のない純粋な感情に、羽黒は小さく微笑むと「そうね」と小さくつぶやくと、頭を上げてまわりにいる艦魂達を見詰める。

「今作戦が成功すれば、南太平洋も私達日本海軍が席巻できる。そうすれば、もはや太平洋は私達大日本帝国のもの。皆一丸となってが一緒に勝利を掴みましょう」

羽黒の言葉に、全員がうなずいた。皆、日本の為に戦う事を誇りにしている戦姫達なのだ。言わずとも皆同じ想いで戦っている。それは翔鶴と瑞鶴も同じだった。

「今回の作戦には後の作戦の事を考えて第一航空艦隊から私達第五

航空戦隊だけの参加となってしまった。新参者二人では信用できないだろうが、安心してくれ。こっちには真珠湾以来連戦連勝をしている熟練の搭乗員と整備された最新鋭の艦載機がある。赤城司令達の分まで、私と瑞鶴が存分に暴れてみせよう」

翔鶴の勇ましい言葉に、瑞鶴もうなずく。すると、まわりの先輩艦魂達も嬉しそうに微笑んだ。

「そうね、期待してるわ。あなた達は私達に日本海軍の期待の星なんだから」

妙高の言葉に皆真剣にうなずく。

そう、当時の日本機動部隊は連合国軍にとっては恐怖の破壊神。友軍にとってはこれ以上頼もしい味方はいない。その空母が作戦に参加しているという事もあり、参加将兵の士気はおおいに上がっていた。

妙高の言葉に、翔鶴は「まあ、戦争とは何が起こるかわからない。こちらも全力を出すが、貴官らも全力を出してほしい」と頼む。返答はもちろん、

「当然よ。戦は気合。尻込みした方が負けなんだから」

「任しといて。金剛長官ほどではないにしても、あなた達は私達が必死に守り抜いてみせるから」

妙高と羽黒の言葉に、翔鶴は小さく笑みを浮かべ、瑞鶴は嬉しそうに微笑んだ。

「じゃあ皆さん、連合軍を討伐しに行きましょうッ！」

『おおおぉぉぉッ！』

瑞鶴の掛け声に機動部隊全艦魂達が力強い叫びをした。その女性特有の高い声が、会議室にいる艦魂達の士気の高さを物語っていた。

嬉しそうに拳を天に上げて微笑む妹を見て、翔鶴は小さく笑みを浮かべると、軍帽を深く被り直して顔を隠した。

士気が最高潮まで上がった機動部隊の艦魂達は、出撃に備えて自艦に戻っていった。

一九四二年五月一日、空母『翔鶴』『瑞鶴』を中心としたＭＯ機動部隊はトラック島を出撃した。

ラバウルからも改装軽空母『祥鳳』を護衛に付けたＭＯ攻略部隊が出撃。さらに援護部隊、ＭＯ攻略部隊も出撃し、三艦隊の合同で作戦は実行された。

一方、米軍も日本海軍の暗号を解読し、日本海軍の攻撃に対し空母『ヨークタウン』『レキシントン』を中心とした部隊を出撃させた。この時、空母『ホーネット』『エンタープライズ』は日本本土空襲を終え帰途の途中で間に合わず、空母『サラトガ』は一月に日本海軍の潜水艦伊号第六潜水艦こと『伊一六』の雷撃を受けて損傷し修理中の為、今作戦には参加できなかった。

迫る日本海軍に、米海軍も迎撃態勢を整えていた。

今まさに、史上初の空母決戦が行われようとしていた。

ほぼ互角の戦力で互いに近づく両軍機動部隊。

ＭＯ機動部隊は目的地に向けて白波を立てて海面を翔けていた。

旗艦・重巡洋艦『妙高』の司令部にツラギ島偵察機より敵機動部隊発見の報が入り、それは機動部隊にも伝えられた。

「敵機動部隊を発見したのか？」

ここは第五航空戦隊旗艦・空母『翔鶴』の艦橋。第五航空戦隊司令官の原忠一（はらちゅういち）少将は伝令兵からの報告を予想していたのか、全く驚かなかった。

「はい。しかし、敵はまだ我々の攻撃範囲外です。井上中将はこれを泳がせておくそうです」

「そうか、わかった。一応『瑞鶴』にも報告しておけ」

「了解」

伝令兵は敬礼し、艦橋を出て行った。

海を見詰める原の横、彼には見えない少女が天空を見詰めていた。

「・・・戦いは、近いな」

鋭い視線で海を見詰め、翔鶴は軍刀を抜く。

日の光を反射し、軍刀は眩く輝いていた。

その日の夜、瑞鶴は防空指揮所にいた。

昼間に敵機動部隊の位置が報告されたが、遠方だった為攻撃はしなかった。その時、瑞鶴は未だ経験した事のない空母対決に恐怖を感じた。

「敵機動部隊、戦いたくないなぁ」

弱気な発言だが、それは正直な気持ちだった。

もちろん自分が傷つく恐怖もあったが、それ以上に大事な飛行兵を失いたくなかった。

「あぁ、寂しいよ」

機動部隊には空母は姉と自分しかいない。いつも一緒にいた赤城も加賀も蒼龍、飛龍もいない。いつもここから見えていた大海原に浮かぶ主力空母五隻も、今は右斜め前にいる姉しかいない。

「そういえば、攻略部隊の方には祥鳳さんっていう改装軽空母がいるって聞いたけど、会ってみたいなぁ」

ＭＯ攻略部隊には今年一月に空母に改装されたばかりの新鋭空母である祥鳳型航空母艦一番艦――軽空母『祥鳳』が護衛の為に配置されていた。『瑞鶴』のような大型の正式空母を違い、軽空母は小型の空母で全長は二〇〇ｍ前後。搭載機数は大型正式空母が八〇機から九〇機に対し、軽空母は二〇機から三〇機ほどで非力である。だが、今の航空機優勢時代では、そんな軽空母も大事な主力戦力なのである。

瑞鶴は小さなあくびをする。今は真夜中。兵達も寝静まっているので辺りには波の音だけが心地良く響いている。

静かな甲板で、瑞鶴は眠そうに目を擦る。

「もう寝ちゃおう」

瑞鶴は自室に瞬間移動した。自室といっても今のところまだ使われていない兵員室だが、瑞鶴はその隅に布団を敷き、それに潜った。

「おやすみなさい」

そうつぶやくと、瑞鶴は静かに目を閉じた。
とても眠かったので、瑞鶴はすぐに眠りについた。

翌朝、ＭＯ攻略部隊所属の重巡洋艦『衣笠（きぬがさ）』『古鷹（ふるたか）』、空母『翔鶴』から偵察機が発進し米機動部隊を発見。六時に攻撃隊が発艦したが、偵察機の誤報と判明。敵艦隊の正体は駆逐艦一隻と油槽艦だった。

攻撃隊は仕方なくこれを殲滅し、帰還した。

一方、米軍も偵察機を発艦し、ポートモレスビーに近づくＭＯ攻略部隊を発見。これを攻撃する為に攻撃隊を発艦させた。

輸送船十二隻と駆逐艦を中心とし、護衛に重巡洋艦四隻、改装軽空母『祥鳳』一隻のＭＯ攻略部隊は蒼い海を進んでいた。

ＭＯ攻略部隊所属にして唯一の空母『祥鳳』は、本来なら空母は部隊から離れた所にいるのが普通だが、輸送船団直衛の為に近くに配置されていた。

そんな『祥鳳』の防空指揮所に、『祥鳳』の艦魂はいた。

モデルのようなスラッとした長身に、長い髪、スタイル抜群という少女だった。しかしそのスタイルなら超明るい性格の方が似合うが、祥鳳はメガネに手帳装備という学園ものの委員長キャラだった。実際皆から『委員長』と呼ばれているが、本人はあまり好きではないらしい。

そんな彼女の周りには数人の見張り兵が双眼鏡で上空警戒にその神経を集中させていた。

祥鳳は自らが護衛している輸送船団を見詰めた。その時、横にいた見張り兵が双眼鏡から一旦目を離し前方を睨み、もう一度急いで双眼鏡で確認する。そして、見張り兵は蒼白な顔で伝声管に叫んだ。

「敵機ッ！　左三〇度方向より襲来ッ！」

「何ですって！？」

祥鳳は予備で置いてあった双眼鏡を急いで取って確認する。双眼

鏡に映されたのは、無数の敵機の姿だった。
「十・・・二〇・・・いや三〇ッ！？」
祥鳳は唇を噛む。
上空に旋回していた護衛の零戦隊五機が燃料増槽を落とし、その身を翻して敵機に向かう。
とてもじゃないが防ぎきれない。
「急いで第二零戦隊を発艦させなくちゃ」
甲板を見る。零戦隊は配置されているが、飛行兵はまだだった。
その間も敵機が近づいて来る。
零戦隊五機が敵機に突っ込んで行く。が、所詮は五機。簡単に突破された。
その時、防空指揮所の扉が開き、黒い第一種軍装に身を包み防空ヘルメットを被った『祥鳳』艦長伊沢石之介（いさわいしのすけ）大佐がやって来た。
「祥鳳！　敵は！？」
祥鳳が見た方向を伊沢は睨む。
伊沢は艦魂が見える人物だった。
「面舵いっぱぁぁいッ！　両舷全進全速！」
『祥鳳』の反対方向に艦首を変え、全速力で逃げる。
敵機は小編隊に別れて散開。多数方向から攻めてきた。
「第二零戦隊、発艦急げ！」
飛行兵達は次々に零戦に乗り込む。
『一番機発艦します！』
艦橋の飛行長が叫ぶ。
轟音と共にプロペラを高速回転させて零戦隊隊長機が甲板を滑走する。その時、
「敵機直上！　急降下！」
見張り兵が叫び、伊沢と祥鳳は上空を睨むと、三機の急降下爆撃機が降下してきた。
「取舵いっぱぁぁいッ！」
『祥鳳』は緊急回避する。

隊長機はいきなりの急速転進にバランスを崩し、海面に激突した。
「一番機着水！」
見張り兵が叫ばなくてもわかった。さらに、
「左三〇度敵雷撃機五機！」
低空水平飛行で接近してくる五機が次の瞬間、魚雷を投下し、雷跡五本が『祥鳳』に突進して来る。
「取舵いっぱぁぁいッ！」
伊沢はさすまじい大声で叫ぶ。
何とか魚雷を回避するが、敵機は容赦なく爆弾、魚雷を次々に投下してくる。無数の水柱が上がり、大雨の如く海水が甲板に叩き付けるよう降り注ぐ。
「左舷魚雷接近！」
「右四〇度雷跡二本！」
「敵機直上！　急降下！」
見張り兵達の絶叫が響く。
「取舵いっぱぁぁいッ！」
伊沢が絶叫する。
空から爆弾が降って来たが、回避して艦よりも高い水柱が上がり、降って来る海水が大雨のように艦を叩き付け、防空指揮所の者全員がずぶ濡れになった。が、右からの魚雷二本は何とか回避したが、左の魚雷一本は間に合わなかった。
「総員衝撃に備えろおおおぉぉぉッ！」
蒼白な顔で伊沢は叫ぶ。
「・・・ッ！」
祥鳳は覚悟したように魚雷を睨む。
次の瞬間、『祥鳳』左舷中部に大爆発が起きた。
「ぐはッ！」
祥鳳の左脇腹が砕け、赤い鮮血が弾けた。祥鳳はその場に膝をつくと、数度せきをして大量の吐血を吐き出した。
「祥鳳！」

「・・・気にしないでください・・・ッ！」
振り向く伊沢を一喝する。
その隙に敵機は爆弾を投下してきた。とても、回避できなかった。
爆弾二発が甲板に命中し、待機していた零戦隊が吹き飛んだ。
祥鳳の背中からすさまじい鮮血が飛び出て、祥鳳は悲鳴を上げる。
「くっそぉぉぉッ！」
伊沢は叫ぶ。
祥鳳は吐血を吐き、倒れそうになる体をなんとか保つ。
零戦隊と機銃が必死で迎撃するが、敵機は果敢に攻めて来る。
次々に爆弾、魚雷が投下され、高い水柱が上がる。
なんとか『祥鳳』は左右に回避して行く。
だが、敵機はすさまじい猛攻撃をし、傷付いた『祥鳳』に止めを刺そうと全力を挙げて攻撃して来る。
『祥鳳』はさらに魚雷二本が命中し、大火災を起こした。

初弾を受けてから十分後、『祥鳳』は爆弾五発、魚雷四本を受けて大黒煙を上げ、大きく傾斜していた。
敵機の数も減っていたが、攻撃はまだ続いていた。
零戦隊と対空砲火が敵機を次々に撃ち落とす中、『祥鳳』の防空指揮所には常人には見えない大量の血が飛び散っていた。
鮮血の海の中、祥鳳は倒れていた。
何度も吐血を吐き、血まみれの体をどうにか立たせようとするが、もう力が入らなかった。
敵機が撤退して、ようやく伊沢は死にかけた祥鳳の身体を抱き起こす。
「祥鳳！　しっかりしろッ！」
伊沢に抱き起こされた祥鳳は虚ろな目をしていた。
「艦・・・長・・・」
「しっかりしろッ！　しっかりしろよッ！」
「艦・・・長・・・総員・・・退去を・・・」

吐血をしながら、祥鳳は必死で懇願する。身体はもう力を残していないというのに、その瞳には強い想いが込められていた。
「艦長・・・ッ！　早く・・・もう、私は・・・ッ！」
艦魂である彼女には、艦の命が尽きかけているのがわかるのだ。
伊沢はうなずき、生き残っている見張り兵に命令する。
「総員最上甲板！　総員退去！」
「了解！」
彼には祥鳳は見えない。
しかし、彼は伊沢が艦魂が見える事を知っている。彼だけではない。この『祥鳳』に乗る全ての者が知っている。だから、彼が泣きそうな顔で見えない者を呼び掛け、本当に辛そうな顔で退去命令を出した理由など、すぐにわかった。
見張り兵は去って行った。
防空指揮所に残された二人は、静かに泣いた。
「すまない。やっと、やっと空母になれたのに」
『祥鳳』は今年の一月の終わりに空母に改装が終ったばかりだ。
あまりにも、あまりにも短い命であった。
「仕方、ありません・・・これが――戦争なんですから」
「祥鳳・・・ッ」
伊沢は祥鳳を強く抱き締めた。離すもんかと、必死で抱き締めた。
しばらくそれが続いたが、『祥鳳』が一際大きく爆発し、祥鳳が血の塊を吐いた。
「祥鳳！」
「早く・・・艦長も・・・ッ」
祥鳳は必死に言う。
伊沢はわかっていた。自分にも艦を降りろと言いたいのだ。だが、伊沢は首を横に振った。
「俺は残る」
伊沢の言葉に祥鳳は血の気の失せた顔をさらに蒼白にさせて叫ぶ。
「ダメですッ！　艦長は降りて・・・ッ、降りてくださいッ！」

「俺は『祥鳳』の艦長だ。死に掛けた艦を捨てて逃げるなど俺にはできない」

「ダメです・・・ッ！　逃げてくださいッ！」

血まみれの顔から涙が流れる。

甲板で爆発が起き、鋭い痛みが走り、吐血する。

「艦・・・長・・・ッ！」

べっとり血で汚れた手で、祥鳳は伊沢を掴む。

その手を、伊沢はそっと握り締め、そして弱り切った祥鳳の体を強く抱き締めた。

「もういいんだ。俺はここでお前と一緒に散る。俺は大日本帝国海軍・軽空母『祥鳳』の艦長だ。お前と一緒に――逝きたいんだ」

「艦長・・・」

祥鳳はもう何も言わなかった。ただ伊沢の胸の中で泣いた。恥じらいもなく大泣きした。

甲板で数度の爆発が起こる。

二人は一度離れる。

そして、二人は笑った。

見詰め合い、再び強く抱き締める。

今度は祥鳳から抱き付いた。体中で伊沢を感じる為に・・・

――今度会う時は、戦争のない、平和な時代で会いましょう――

――あぁ、そうだな――

その直後、『祥鳳』は数度の大爆発を起こして、その艦体を真っ二つに折り、海底にその姿を消した・・・

――空母『祥鳳』、潜水母艦『剣埼（つるぎざき）』として竣工され、その後空母に改装されて《祥鳳》と名を変えて今年の一月に竣工したばかりの最新鋭空母であった。だが、その初陣で爆弾十三発、魚雷七本を受け無念の沈没。日本海軍最初の損失空母となってしまった――

MO攻略部隊からの『祥鳳』沈没の報は、すぐにMO機動部隊にも伝えられた。
「祥鳳が・・・、死んだ・・・ッ!?」
緊急で旗艦『妙高』で艦魂会議が開かれ、祥鳳の死は機動部隊全員に伝えられた。
全員が驚きと悲しみを隠し切れなかった。そんな中、一番ショックを受けていたのは、瑞鶴だった。
「そ、そんな・・・」
彼女はいつか祥鳳と共に大海原を翔けたいと思っていたのだ。何と言っても同じ部隊ではないが、同じ作戦に参加した初めての軽空母だったからだ。
そんな彼女が死んだ。
瑞鶴は泣きそうになった。
こんなにも近くに《死》というものを感じるなんて。
ぐったりとうな垂れる瑞鶴を見て、翔鶴は真剣な顔で妙高を見る。
「それで、輸送船団は?」
翔鶴は悔しそうに唇を噛みながら訊く。
「全員無事だそうよ。今は古鷹さん達が護衛して後方に退避してるらしいわ」
羽黒の説明に、翔鶴は多少安堵したのか、ふぅと息を吐く。
「そうか。ならば、我々が祥鳳の仇を討ってやろう」
翔鶴の言葉に、全員がうなずいた。瑞鶴も、姉の力強い言葉にうなずくと、泣きそうな気持ちを必死に堪えて真剣な眼差しで海の外を見上げた。

暁の夕焼けにオレンジ色に照らされる二隻の空母を基幹とした日本機動部隊。
攻略部隊が攻撃されて『祥鳳』が沈没した事を受け、機動部隊は夜間攻撃になる事を覚悟で攻撃隊を発進させる事を決定した。

『搭乗員は直ちに搭乗を開始せよ！　繰り返す！　搭乗員は直ちに搭乗を開始せよ！』

出撃命令が下り、搭乗員が飛行長から作戦概要を聞いて自らの愛機に向かって散った。

攻撃隊の飛行機は次々にプロペラを回し、辺りにはエンジンの轟音とプロペラの回る高速音が響き渡り、淡い夕日に照らされて緑色の艦載機が煌く。

ただひたすら攻撃隊は発進の命を待つ、そして、

「攻撃隊発進！」

信号兵の紅白の手旗信号が翻り、飛行機は次々に甲板を翔けた。

『帽を振れッ！』

攻撃隊が次々に発艦して行く。隣を走っている『翔鶴』の甲板からも攻撃隊が発艦しているのが見えた。

天空に上って行く攻撃隊に向かって、瑞鶴は静かに敬礼した。

次々に舞い上がる艦載機は、真珠湾からの歴戦の荒鷲達。連合軍が何よりも恐れる日本機動部隊の攻撃力であった。

上空に並ぶ攻撃隊は編隊を組むと目的地に向かって行き、ついに見えなくなった。だが、瑞鶴はいつまでも敬礼をやめない。その瞳には強い想いが込められていた。

「必ず、敵空母を沈めてください」

瑞鶴は胸の前で腕を組むと、天に向かって攻撃隊の武運を祈った。

出撃した攻撃隊は視界不良の為に敵空母を発見できず、レーダーで攻撃隊の接近を察知した米機動部隊は多くの戦闘機を舞い上げた。

その結果、攻撃隊は一方的に反撃を受け、大損害が出た。

『攻撃隊が戻って来ました！』

見張り兵の叫びに、瑞鶴は甲板から暗闇の天空を見詰める。まわりには攻撃隊を迎えようと多くの兵達が出て来た。

そして、攻撃隊が見えた。

次々に着艦する攻撃隊の飛行機はボロボロだった。数機の飛行機のコックピットの窓が敵機の機銃を浴びて穴が無数に開いていた。そのせいで数人の飛行兵が負傷し、二人乗りの九九艦爆や三人乗りの九七艦攻では数人の発射手が敵機の機銃を頭に受け、絶命していた。

甲板は血の海と化していた。

「救助作業急げ！」

空母兵と整備兵が必死で担架を使って重傷した航空兵を医務室に運び込み、軽傷の兵は甲板で手当て、応急処置を受けた。

そんな様子を見て、瑞鶴は真っ青になる。

あまりにも悲惨すぎた。

彼女の経験上これ程酷い損害は初めてだった。

赤十字の肩章を付けた衛生兵が手当てに走り回る。整備兵や無傷、比較的軽傷な飛行兵も手当てに回る。甲板はもう地獄絵図状態だった。

三〇分ほど経ち、ようやく甲板に平和が戻った。しかし、甲板には不特定無数の血が飛び散り、辺りには血の生臭さが潮の香りと混ざった臭いが漂っている。

瑞鶴はその光景に吐き気を感じて目を背ける。

もう見たくないと自室に逃げた。

急いで布団に潜り、瑞鶴はその中で静かに泣いた。

翌日、敵機動部隊を発見。攻撃隊を向けた。

しかし、この時敵機動部隊からも攻撃隊が発艦し、瑞鶴達日本機動部隊に向かっていた。

『敵機ッ！　右四〇度高角六〇度突っ込んでくるッ！』

見張り兵の絶叫が伝声管を伝わり、空母『瑞鶴』の艦橋に緊張が走った。急いで参謀達が確認の為に右舷の窓に集まり、双眼鏡で空を見た。蒼空にキラキラと輝く無数の点が、艦隊に向かって急接近

していた。
「敵機・・・ッ！」
瑞鶴の顔が凍りつく。
「対空戦闘急げッ！」
『瑞鶴』艦長横川市平大佐が伝声管に向かって叫んだ。
敵機は轟音を立てて高速で突撃して来る。
『敵機『翔鶴』に向かいます！　あッ！『翔鶴』が攻撃開始を開始しました！』
瑞鶴は対空砲火を撃ちまくる姉を見た。
「姉さんッ！」
『敵機襲来ッ！』
彼女も人の心配をしている暇はなかった。
「高角砲隊砲撃始めッ！」
ドオンドオンッ！　ドオォォンッ！　と高角砲が唸り、敵機に向かって砲弾が向かう。
いくつもの小さな爆発が起き、敵機数機が落ちた。
「機銃隊撃ち方始めッ！」
ダダダダダダダダッ！　と機銃が鋭い発砲音立てて空中を飛び交かって無数の弾幕を張る。
この攻撃で敵機は十機近く撃ち落とされたが、それでも敵機は編隊を解いて突っ込んでくる。
「副長！　艦橋を任せた！」
「了解！」
横川は艦橋を飛び出した。瑞鶴もそれに続く。
二人は防空指揮所に駆け上がった。
扉を乱暴に開けると、横山はすぐに防空ヘルメットを被って操艦を始める。
「取舵いっぱぁぁぁいッ！」
横川は伝声管に叫ぶ。
瑞鶴は近づいて来る敵機を睨む。もうかなり近づいていた。

『瑞鶴』は左に曲がり、迫る敵機から全速力で逃げる。
「右七〇度雷撃機！」
敵雷撃機が低空で接近し、細長く鈍い銀色に輝く魚雷が投下した。
水中に潜った魚雷はすさまじいスピードで海中を走る。
「取舵三〇度ぉぉぉッ！」
『瑞鶴』は全力で左に曲がり、魚雷を見事に回避した。
「今だっ！　両舷前進全速！」
先程の倍の白波を立てて『瑞鶴』は前進する。
「敵機後方より接近！」
振り向くと、数機の敵機が追い掛けて来た。
「きゃあッ！」
瑞鶴は悲鳴を上げる。刹那、後方機銃が唸りを上げて弾幕を張り、敵機を撃ち落した。
「あ、あうあう・・・」
へなへなと崩れる。
「あ、危なかった・・・」
瑞鶴は泣き目になる。
「敵機急降下！」
グオオオオォォォォォンッ！　という急降下音が響き、上空を見上げると、数機の敵機が急降下して来た。
「もう嫌あああああぁぁぁぁぁッ！」
瑞鶴は泣きながら悲鳴を上げた。

一方『翔鶴』は先に敵機に遭遇したので集中攻撃を受けていた。
「取舵いっぱぁぁぁいッ！」
『翔鶴』艦長城島高次大佐は叫びを上げる。
『翔鶴』は白波を立てながら艦を右に傾けながら急速に左に回頭する。そんな『翔鶴』に敵機は急降下して襲い掛かる。
敵機一部隊が『瑞鶴』に向かって行こうとするが、それはすぐさま機銃が敵機を襲う。

「ここは一歩も通さんぞッ！」
翔鶴は仁王立ちする。その手には磨き上げられた軍刀がキラキラと輝いていた。
鋭い眼光で敵機を睨む。
直後、『翔鶴』が『瑞鶴』を守る盾のようにその巨大な艦体で針路を塞ぐ。それはまるで優しき姉の妹を想う健気な姿でもあった。
敵機は針路を塞いだ『翔鶴』に攻撃を加えた。
防空指揮所にいる翔鶴が敵機を睨み付ける。
「瑞鶴には指一本触れさせんッ！」
翔鶴の咆哮が轟いた。
迫る敵機にすさまじい対空砲火を浴びせる。その無数の弾丸の前では敵機など鎧袖一触。次々に鉄の弾丸がその青い機体を撃ち抜き、火と黒煙を噴いて海に落ちていく。その時、
「敵機直上ッ！　急降下ッ！」
その声に顔を上げた刹那、翔鶴はまばゆい光に包まれた。

ドカアアアアァァァァンッ！
突如響いた大爆音に瑞鶴はビクリと震える。
「な、何？」
「『翔鶴』被弾ッ！」
見張り兵の絶叫に、瑞鶴は顔を真っ青にして振り返る。
「ね、姉さんッ！」
黒煙を上げる『翔鶴』を見て、瑞鶴は悲鳴を上げる。
「姉さん！　姉さんッ！」
必死に叫ぶが、聞こえてくるのは爆音だけだった。その間にも『翔鶴』の甲板からは黒煙が上がっていく。
「敵機直上ッ！」
見張り兵が叫び、瑞鶴は悲鳴を上げる。
「取舵いっぱぁぁぁいッ！」
爆弾を避け、巨大な水柱が上がる。

「艦長ッ！　このままでは・・・ッ！」
参謀が絶望的な表情で横川を見る。
『瑞鶴』はまだ被弾していないが、この猛烈な敵機の空襲の前ではいずれ命中弾が出てしまう。それは時間の問題だった。
「わかっている！」
横川は唇を噛んだ。彼だってこのままではまずいとわかっているのだ。その時、
「十時の方向にスコール発見！」
見張り兵の叫びに、横川は左舷を見る。そこには青空の中、その方向だけ濃い雲があり、その下では雨が降っていた。
「スコール・・・」
横川はしばしスコールを見詰め、そして決断、命令した。
「取舵三〇度！　スコールに向かえッ！」
「艦長、何を？」
「スコールの中に入って敵機をやり過ごす！」
「りょ、了解っ！　取舵三〇度！」
『瑞鶴』はスコールに向かって全速で向かう。その行動に瑞鶴は顔を真っ青にする。
今ここで『瑞鶴』が離れれば、敵機の攻撃は必ず『翔鶴』に集中する。手負いの姉にそんな見殺しのようなことなんて瑞鶴にはできなかった。
「ちょ、ちょっと待ってっ！　姉さんが、姉さんがあああぁぁぁッ！」
泣きながら悲鳴を上げる瑞鶴を無視して、『瑞鶴』はスコールに向かった。
『瑞鶴』がスコールに入った頃、集中攻撃を受けている『翔鶴』も敵機の数が徐々に減っていた。
「ぐう・・・ッ」
先程被弾した爆弾で『翔鶴』の甲板は吹き飛んでいた。同時に翔

鶴の背中も砕け、かなりの量を出血し、背中は赤い鮮血で真っ赤に染まっていた。しかし、さすがは武人。翔鶴は倒れてもおかしくはない激痛に耐えて倒れたりせず、仁王立ちしたままだった。

「『瑞鶴』、スコールの中に逃げ込みました！」

見張り兵の声に、城島と翔鶴は同時に苦笑した。

「『瑞鶴』さえ逃がせばこっちのものだ」

城島はニヤリと笑う。

翔鶴もそれにうなずき、迫る敵機を睨む。

「さぁ来いッ！　アメリカのゴミクズ共ッ！」

軍服を翻し、軍刀を抜刀する。その煌きは自らの血で赤く染まり、さらに鋭利に輝いていた。

「我が名翔鶴ッ！　大日本帝国海軍精鋭空母『翔鶴』の艦魂だッ！　こんな所で、貴様らなどに負ける訳にはいかないんだあああああぁぁぁぁぁッ！」

翔鶴の勇ましい咆哮は、天高く響き渡った。

『戦闘警戒態勢解除！　戦闘警戒態勢解除！』

スコールに入った『瑞鶴』は敵機の攻撃を回避し、ようやく戦闘を終えた。

瑞鶴は生まれて初めての本格的な対空戦闘を無事に終え、へなへなとその場に崩れ落ちた。

「お、終った・・・」

体中から力が抜け、その場にぐったりと崩れた。

本当に怖かった。

無数の敵機が爆弾や魚雷を落とし、紙一重で避けていた恐怖が今頃になって現れて体を震わす。

これが戦闘なんだ。

これが戦争なんだ。

初めて味わったそのすさまじさは、とても言葉では表せない。

戦いが楽しいなんて人がいるのだろうか？

正直、瑞鶴はただ、怖いだけだった。
ガタガタと身体を小刻みに震わす瑞鶴の横で、横川はふぅとため息をした。そして内ポケットから煙草を取り出して一服する。
「終わったか・・・」
煙草を吸い終えると、海に捨てて艦橋に戻った。
「艦長。操艦ご苦労様です」
副長が敬礼し、横川はそれに応える。
横川が窓に着くと同時に参謀長が現れる。
「艦長、戦闘警戒態勢を解除しました」
「よし、取舵回せ。スコールを脱出する」
「了解」
横川の自然の力を借りた奇跡の指揮のおかげで、『瑞鶴』は一発も敵機の攻撃を受けず、全くの無傷だった。
瑞鶴は疲れ切った顔で窓を眺めていた。だから横川達のバカ会話も横川の最後の叫びだけ聞こえた。
「お前たち！　無事に内地に帰れたら俺のお気に入りの店で飲もうッ！　もちろん俺のおごりだ！」
『了解です！』
艦橋の中の士気が一気に上がった。
その様子を見て、瑞鶴はわずかに微笑んだ。
『まもなくスコールを抜けます！』
見張り兵の声で艦橋の全員が前方に集中した。が、スコールを抜け、目の前の光景を見た瞬間、全員の顔が凍りついて言葉を失った。
――最初に視界に入ったのは、洋上に黒煙を上げ、大火災を甲板で起こし、数度爆発を起こして停止している姉空母『翔鶴』の姿だった――
「姉さんッ！」
瑞鶴の顔は真っ青になった。

味方駆逐艦群が『翔鶴』を守るように周囲を囲んでいる。
『瑞鶴』も急いで『翔鶴』に近づく。
「姉さん・・・」
瑞鶴はこの世の終わりのような顔で『翔鶴』を見詰める。
そして、『瑞鶴』は『翔鶴』の横に停止した。
「姉さんッ！」
瑞鶴は両艦が自分の瞬間移動可能範囲に入った瞬間、一瞬にして『翔鶴』の甲板に移動した。
瑞鶴は走って艦内に入り、艦橋に向かう。
「姉さんッ！」
ドアをぶち破って中に入ると、全員の視線が彼女、ではなく扉を見た。彼らには瑞鶴の姿は見えない。彼らは突然開いたドアを見て「何だ？」「風か？」「いや違うだろ」と混乱する。
そんなのを無視して瑞鶴は一人の少女に近づく。
「姉さんッ！　大丈夫!?」
頭に包帯を巻いた翔鶴は、自分を心配してくれている妹をつまらなそうに見詰める。
「何だ。自艦を離れて何やってる？」
「・・・はい？」
心配して来たのに何を言うんだこいつは？　と瑞鶴は内心怒った。
「何って、姉さんを心配して・・・ッ！」
「心配？　ふっ。私を誰だと思っている。大日本帝国海軍精鋭空母『翔鶴』の艦魂だぞ。お前に心配されるほど衰えてはおらん。自惚れるな」
せっかく心配してやったのに、何だその態度は!?　瑞鶴のこめかみに青筋を立てる。
「姉さん。そんな事よりケガ大丈夫？」
瑞鶴は心配そうに痛々しい包帯を見詰める。
「ん？　問題ない」
「問題ないって、中破でしょ？」

「それは『翔鶴』だ。私ではない」
いや、それはあなたの事だよ。
「まぁ、無事ならいいけど・・・」
何やかんやで元気な姉の姿を見て、安堵した。
「それよりお前は大丈夫なのか？」
「え？」
翔鶴は自分がケガした事より妹が無事かどうかの方が心配だった。
そんな姉の優しさに瑞鶴は笑顔でうなずく。
「あ、うん。姉さんのおかげで助かったよ」
「そうか」
翔鶴はそれだけ言って窓の外を見詰める。
瑞鶴は笑った。
これは翔鶴が照れている時の態度だった。瑞鶴は翔鶴の妹なので、姉の気持ちは理解していた。
瑞鶴は静かに笑いながら艦橋の外に出た。
その途中、一度だけ振り向いて正直じゃない姉に笑いかける。
「本当にありがとう。お姉ちゃん」
その言葉に翔鶴は顔を赤くし、深く軍帽を被り直した。それもまた彼女の照れ隠しの仕草であった。

一方出撃して行った攻撃隊は敵空母『レキシントン』を大破。『ヨークタウン』を中破させるという大戦果を上げた。しかもその後、『レキシントン』は気化したガソリンに引火。爆発、炎上、沈没した。

甲板が破壊された『翔鶴』は戦線離脱した。
見事敵空母壊滅させた攻撃隊は無事だった『瑞鶴』に全機着艦した。だが、壮絶な戦いだったのだろう、未帰還機多数という大被害だった。
その後、あまりにも犠牲が大きすぎると判断した井上中将は作戦

中止を決定。ポートモレスビー攻略は無期限延長となり、以後二度と発動される事はなかった。

第五航空戦隊はボロボロになりながらも内地の柱島に戻った。ただし、『翔鶴』は修理の為にドックに入ってしまった。

第三章　第二節　悲しみの傷跡

史上初の空母決戦となった先の海戦――珊瑚海海戦での戦果を、瑞鶴は連合艦隊旗艦である大和に報告した。

「戦果は空母、駆逐艦、油槽船それぞれ一隻撃沈。空母一隻中破させました。しかし我が方も軽空母『祥鳳』沈没。正式空母『翔鶴』が中破しました。被害が大きかったので、井上中将はＭＯ作戦を中止しました」

瑞鶴は淡々と言った。その報告を、大和は相槌（あいづち）しながら聞いた。

「そうですか。祥鳳さんは残念でした。翔鶴さんにも早く傷を癒すよう言っといてください」

「はい、わかりました」

「ちょっとぉ、二人共真剣すぎるよぉ」

大和の補佐をしている前旗艦の長門が笑いながら言う。その長門の屈託のない笑みが二人の緊張を解き、二人はソファに腰かけた。

「あなたが無事で良かった。翔鶴さんも満身創痍（まんしんそうい）だけど無事で何より。ただ、祥鳳さんの死はは辛いね」

「私も、いつか一緒に戦えると思ったのに・・・」

二人は悲しそうに窓の外の空を見詰める。

瑞鶴は振り返ると、じっと長門を見詰める。

「あの、祥鳳さんというのは、一体どういう方だったんですか？」

長門は「んー」と唇に鉤（かぎ）型に曲げた指を当てて考える。こんなひとつひとつの仕草をやってもこの人がやると色っぽい。

「そうねぇ、あの子も私達の中では新米だったからなぁ。ロンドン海軍軍縮条約で艦艇の保有が制限されてた時代、あの子は後に空母に改装される事を目的に潜水母艦として生まれて、その後空母になったからなぁ。いつもドックにいてあまり会った事がないんだ」

「そうですか」

残念そうにうつむく二人に、長門は続ける。

「ただあの子はすごく真面目だったわよ。陸奥みたいに真面目だけどどこか抜けてるっていうんじゃなくて、しっかり者だった。外見はモデルのようなスラッとした長身に、スタイル抜群の少女だったわね」

私には負けるけどというセリフを二人は無視する。

「あとメガネを付けてたわね。何て言うのかしら、学園もので言う委員長キャラだったわね」

この時代にそんな物があるかッ！　と二人は心の中でツッコミを入れる。ただ、祥鳳という艦魂は大体想像できた。

「それより・・・」

瑞鶴は横にいる親友の姿をじっと見詰める。

「な、何？」

突如見詰められ、大和は少し恥ずかしそうに顔を逸らす。すると、

「大和。全然旗艦らしくなってないよね」

「うぐッ」

予想外の言葉に、大和の心は見事言葉という名の槍に貫かれた。

「あらあら、まぁまぁ。瑞鶴。それは言っちゃダメ。この子も気にしてるんだから」

長門が苦笑いしながらフォローに入る。だが、大和はそんな長門に笑みを浮かべる。

「そ、そんな事ないですよぉ」

「なんか笑顔が崩れかけてる」

大和は一度大きくため息を吐き、顔を伏せて悲しそうに言う。

「わかってますよ、そんな事。旗艦なんてまだ私には早いのに、新鋭艦だからって勝手になっちゃったんですもの。私はもっと色々知ってからなりたかったのに。それでもなっちゃったんなら一生懸命やろうって努力してるのに。右も左もわからない。がんばってもいつもから周り。だから、全然旗艦ぽくなんないんだもん」

大和の弱気な言葉に、瑞鶴は気まずそうに視線を逸らして黙ってしまう。

部屋の中には気まずい雰囲気が流れる。
「大和ぉ。そんなに努力しなくてもいいんだよぉ」
長門が屈託のない笑顔で言う。大和はそっと顔を上げると、不安げな瞳で長門を見詰める。
「私も最初はそうだったんだもの」
「長門さんも？」
大和は驚く。
長門なら何でもその場のノリで乗り切ってしまうように思ってたのに。長門も普通の艦魂だという事実に大和は少し安堵する。
「そう。毎日努力して、がんばって、一生懸命にやったわ」
長門は遠い昔のように思い出す。
「でもね、ある日ふと、旗艦になる為のすごい事思いついたんだよ」
「そ、それは一体！？」
答えを待つ大和を見詰め、長門は真剣に・・・
「開き直りよッ！」
「「はぁッ！？」」
長門の自信満々な答えに、二人（特に大和）が呆れる。
「だーかーらー。もう真剣にやるなんてバカな事考えないで、その場の流れに身を任すのよぉ」
満面の笑顔で高らかに言う長門の前で、がくーっと大和は崩れた。
これが、長年大日本帝国海軍連合艦隊旗艦を務めていた艦魂だと思うと、真剣にやってた自分がバカに思えてきた。
（あ、これが長門さんの言う開き直り？）
「あ、陸奥との約束の時間だ。ごめーん。私帰るねぇ」
一人の少女を変な方向にひとつ成長させて、日本海軍艦魂一のん気な女は帰って行った。
残された二人は互いに見合い、苦笑いし合った。
「長門さんらしいと言えば、長門さんらしいね」
「うん・・・だけど、私ね」
「うん？」

「旗艦、テキトーにやっちゃおうかな？」
「金剛さんに殺されるわよ？」
「あの人は、苦手」
「得意な人なんてそういないわよ」
「長門さんなら・・・」
「あの人なら何でもありだよね」
大和と瑞鶴はそう言って小さく微笑むと、部屋を出て行った。

一方、翔輝は霧島と一緒に甲板にいた。
蒼い空と蒼い海がどこまでも続く景色を見詰める翔輝と霧島は、どちらも暗い表情であった。
「・・・祥鳳さんが亡くなられたそうですね」
「そうだね」
霧島はあまり会った事のない戦死した仲間の名を言う。その顔は悲しみに染まっていた。
「・・・私、まだ二、三回しか会った事がなかったんですが、とてもしっかりした方でした」
「そうなんだ」
翔輝はどこまでも蒼い海を見詰める。そんな翔輝に霧島は話しかける。
「翔鶴さんも重傷。あまり勝ったって感じがしません」
「まあね。敵も一隻空母が沈んだそうだけど、祥鳳が死んだのに変わりはないからね」
悲しそうに蒼い海を見詰める翔輝を見て、霧島も寂しそうに海を見詰める。
戦争というのは必ず死者が出る。それが今こうして目の前に現れたのだ。
これから先、何度も何度もこんなような想いを抱くのだろう。
――それが、戦争なのだ。
二人はしばし黙って海を見詰める。すると、甲板の向こうから霧

島の姉達が来た。
「霧島。何をやっている？」
長い金髪に蒼く力強い瞳をした若い女性――金剛が二人を見る。
「金剛姉さん」
金剛の横にはその妹である比叡と榛名もいた。
二人は急いで体もそっちに向け、翔輝は踵をそろえて見事な敬礼であいさつする。
「長谷川。久しいの」
「はい」
翔輝は汗を流す。
翔輝は金剛が苦手だった。金髪碧眼という敵性国民のような出で立ちをしているが、誰よりも日本を愛している愛国者にして最強の軍人。そんな彼女からは常にものすごい威圧を体中から放っているのだ。頭なんて絶対に上がらない。
「霧島。そんなにくっ付いて何やってんだ？」
「え？」
榛名の言葉に、霧島は顔を真っ赤にして翔輝から離れる。そんな霧島の行動に榛名は不思議そうに首を傾げる。だがそんな彼女の隣にいる比叡は霧島を見てそっと微笑む。
「仲がいいのね」
比叡が罪のない柔らかな笑顔を向ける。それだけで霧島の顔はボンッと真っ赤に染まる。
「あ、あの・・・その・・・」
口ごもる霧島の頭を比叡がよしよしと優しく撫でる。
「ほんと、霧島はかわいいわね」
「・・・もう、姉さん・・・」
霧島は少し怒ったように頬を赤らめて弱々しく睨む。そんな妹を見て比叡は優しく微笑む。
そんな姉妹で微笑ましい光景を繰り広げる金剛姉妹を見詰め、翔輝はそっと背を向ける。

「あー、では僕はこれで・・・」
姉妹の邪魔をしてはいけないと判断した翔輝は、こそこそと立ち去ろうとする。が、
「貴様。どこに行くのだ？」
金剛は凛とした声で翔輝を止める。
「あ、いや、そのー・・・」
汗だらだらで苦笑いする翔輝。こんな危機的な状況にいつまでも耐えられるほど翔輝は強くない。
（だ、誰か助けてぇッ！）
心の中で悲鳴を上げる翔輝。するとそんな彼に助け舟がやって来た。
「あ、少尉」
「大和ぉッ！」
金剛達の反対側から大和、瑞鶴、伊勢、日向が現れた。翔輝はまるで神が舞い降りたかのように喜ぶ。そんな翔輝の仕草に大和は戸惑いと嬉しさを感じる。
「ど、どうしたんですか少尉？　そんなに私に会えて嬉しかったんですか？」
「うんッ！　とってもッ！」
その言葉に大和は顔を真っ赤に染めた。身体をくねらせて体中で嬉しさを表す。
「そ、そんな・・・わ、私も少尉にそんなに喜ばれて・・・う、嬉しーー」
「じゃあ、後はよろしくッ！」
「へ？」
翔輝は大和の背後に隠れると、ズイッと彼女の背中を押す。
「ちょっ、な、何ですか急にーーッ！？」
背中を触れられてさらに顔を真っ赤にした大和が前を向き直った途端、さーっと顔色が真っ青になった。
「こ、金剛さん・・・」

「大和。久しいの」
金剛は無表情であいさつする。
「あ、金剛さん。どうもこんにちは」
硬直する大和。どうやら大和も彼女が苦手らしい。体が小刻みに震えている。それを直接感じる翔輝は「え？　もしかしてとんでもない事しちゃった？」と戸惑う。
一方、他の者は結構普通にあいさつした。
「金剛さん。こんにちは」瑞鶴はそうあいさつをして敬礼する。
「どうもぉ」伊勢がゆっくりとした動きでぺこりと頭を下げる。
「金剛せんぱーい。こんにちはぁ」日向が純粋無垢な笑みをする。
「うむ」
これでこの場を去れると思ったが、
「金剛ぉ。どうしたのぉ？」
危機感のない声で長門が手を振りながら笑顔で現れた。そのまわりには陸奥、赤城、加賀、蒼龍、飛龍もいた。
「金剛さん。どうしたんですか？」赤城が（なぜか）笑顔で言う。
「うん？　どうした赤城。何か楽しそうだが」
「え？　そ、そうですか？」
「赤城ねぇ。最近彼氏とうまくいってるらしくってねぇ。すごく機嫌がいいんだよぉ」
長門が無邪気な笑みで無駄な説明をする。すると、赤城は「ち、違いますよッ！　私達はそんな関係じゃありませんッ！」と顔を真っ赤にして反撃する。
「そうやって赤城は大人の階段を上っていくのでした」
「加賀！　貴様！」
赤城はすさまじい激昂で加賀を追い掛ける。追い掛けられている加賀は笑いながら逃げる。傍から見ればかなりハイレベルな鬼ごっこに見えるが、実際には死闘とも言える戦いを繰り広げている。
「何やってるの？　あの二人」
「さ、さぁ」

呆れる翔輝の横に陸奥が現れる。しかも気がつかないうちに腕に抱き付いている。
「い、いつの間に・・・」
「あ、少尉。散歩しませんか？　天気もいいですし」
陸奥は翔輝の腕に力を入れて引っ張る。その際小さいながらも柔らかいものが当たり、翔輝は頬を赤くする。
「あ、うん」
「ちょ、ちょっと待ってくださいッ！」
大和が慌てた様子で反対の腕を取って引っ張ると、キッと陸奥を睨み付ける。すると陸奥も大和を睨み返す。
「勝手に少尉を連れてかないでください！」
「少尉はあなたのものじゃないでしょ？」
「少尉は私のものですッ！」
「私のものよッ！」
「僕に拒否権というか、人権はないの？」
双方に引っ張られる翔輝は呆れていた。
そういえば昔占い師に百万年に一度現れるかわからない破壊的な女難の相が出てると言われた事があったが、なるほど。こういう事だったのか。
心の中で翔輝がひとり納得して諦め始めた時、
「じゃあ、私達と散歩しようよ」
『え？』
三人は言葉を発した人物を見る。
第一種軍装に身を包んだ身長差二〇センチの少女二人。そのうちの小さい方のツインテールの少女だった。
「飛龍？」
それはあまり会話した事のない飛龍だった。その横にいる身長の高い少女が義姉の蒼龍だ。
「飛龍さん？」
大和も突然の事に何も言えなくなってしまう。

すると、飛龍の隣にいる蒼龍が不思議そうに首を傾げる。
「飛龍。こういう問題はあまり関わらない方がいいわよ？　火の粉が飛んでくるから」
「大丈夫大丈夫」
飛龍が笑いながら言う。その屈託のない笑みに蒼龍も何も言わなくなった。
「・・・じゃ、じゃあ、一緒に行きますか」
陸奥が提案して、大和も何度もうなずく。
「じゃあ行こうか」飛龍が嬉しそうに言う。
「仕方ないな」蒼龍も苦笑いする。
「・・・で、僕にはやっぱり拒否権はないのね」
一人、翔輝だけが納得していなかった。

残された金剛と長門は海の向こうを見ながら話していた。その表情はどちらも真剣で、いつも笑顔の長門も今はその笑みを消している。
「・・・長門。ミッドウェー作戦は実行するのか？」
「えぇ、決定事項だから」
長門の返事に、金剛は「そうか」と答える。
「しかし、『翔鶴』が中破。『瑞鶴』も艦載機を消耗し切っていて戦闘不能。当初の予定では空母六隻で攻略するはずであったであろう。空母四隻で大丈夫か？」
金剛の問いに、長門はようやく小さな笑みを浮かべた。
「艦載機一六〇機を失うのは厳しいけど、彼女達なら大丈夫よ」
そう言って、二人はまだケンカしている赤城と加賀を見る。
「ふっ、そうだな。それに、もし戦力が足りないというなら、この私が直々に敵空母を砲撃してやろう」
金剛の不敵な笑みに長門はやれやれといった感じでため息する。
だが、その顔には笑みがあった。
「比叡、榛名、霧島。行くぞ」

『はい』
金剛は妹達を引き連れて去った。

「で？」
右手に大和、左手に陸奥をくっ付けた翔輝が言う。
「二人とも、離れてくれないか？」
「「嫌です」」
「何で変なところだけは意見が一致するの？」
そんな三人の前を、蒼龍と飛龍が歩く。
「二人とも、この子達何とかしてよ」
翔輝は二人に助けを求める。
「ふー、二人とも、そろそろやめなさい」
蒼龍が言うと、二人は素直に離れた。大和は相手が先輩なのでわかるが、陸奥は蒼龍より年上のはずだけど・・・素直だなぁ。
「少尉は色んな艦魂に好かれてるね」
飛龍はくるりと一回転して軍服を翻す。そんなひとつひとつの仕草がかわいらしい。
「好きでなってる訳じゃないけどね」
苦笑いする翔輝を見て、大和は膨れる。
「嫌だって言うんですか？」
「いや、そうじゃなくて」
「あ！　今はっきり《いや》って言った！」
「違うよッ！」
すっかりからかわれていた。
「仲がいいね」
飛龍は嬉しそうに静かに微笑んだ。
翔輝はまだギャーギャー言う大和から離れ、飛龍の傍に付く。
「さっきはありがとう。助けてくれたんだよね」
翔輝は笑顔で礼を言う。そんな翔輝に飛龍は「いいのいいの」と笑みを浮かべる。

「金剛さんが苦手なのは、みんなそうだしね」
「そう。あなたが特別苦手という訳じゃない」
蒼龍も小さく笑いながら言う。似た者同士というものか。
「もうすっかり春だね」
飛龍が立ち止まり、深呼吸する。
春の風は暖かく、優しい。
「季節は春だけど、日本の春は遠いな」翔輝が微笑しながら言う。
「だよね」飛龍も笑う。
「私は早く日本の春が見たい」
蒼龍の言葉に、三人はうなずく。
そんな楽しそうな三人の後ろ、取り残された艦魂が二名。
「何か、すっかり忘れられてますね」
「少尉ぃ」
陸奥と大和が物寂しげに翔輝を見詰める。
青空には雲一つなく、燦々と太陽が輝いていた。
「長谷川少尉！」
突然名前を呼ばれて振り向くと、そこには水上がいた。
「水上。どうした？」
「航海科の会議があるそうです。至急航海室に行ってください」
「え、あ、そう。ありがとう」
翔輝は水上に駆け寄る。去る前に翔輝は振り向き、
「みんな、またね」
そう言って、翔輝は笑顔で去った。

航海科の会議が終ったのは夜中だった。
翔輝はまぶたを半分閉じて自分の部屋に戻った。
部屋の中央には布団が敷かれ、布団には大和が気持ち良さそうに寝ていた。
「もう寝てたのか」
そりゃそうだ。もう夜中の二時を回っているのだ。良い子はもう

寝ている時間だ。
少しめくれている布団を掛け直す。そっと大和のかわいげな寝顔を見ると、翔輝は疲れなんて消えてしまい笑顔になった。
「んじゃ、僕も寝るか」
大和の布団の横にあるベッドに向かう。その途中、ふと机の上に置いてある翔香の写真が目に入った。
太陽のような明るい笑顔を向けている、今はもういない妹を見て、翔輝の顔から笑顔が消えた。
今も思い出せる。翔香の『お兄ちゃん』という声が、
「翔香・・・」
翔輝はそっと翔香の写真を取り、妹の変わる事のない笑顔――いや、もう変える事ができない笑顔を見詰め、翔輝は悲しげに顔を伏せる。
その笑顔を見て、翔輝は翔香との楽しかった日々を思い出した。いつも不安げに自分に頼り、自分の事を誰よりも心配していて、そのせいでケンカをした事も何度もあった。その全てが今では思い出となり、もう二度と帰って来ない。
自分にとっては最愛の肉親であった。父も母も亡くなった後、二人は二人三脚で生きてきた。幼かった翔香を、翔輝が育てた。
あの天真爛漫な笑みは、もう二度と目の前で起きない。
――お兄ちゃん――
忘れる事なんてできない。
癒える事なんて決してない。
大切な妹を失った兄の苦しみは、誰よりも辛く、誰よりも悲しい。
――会いたい。
でも会えない。
こんなに苦しい事はない。
静かな深夜、誰も見ていない、聞いていない。それを翔輝は理解した。だから・・・
「うぅ・・・ッ」

翔輝は静かに泣いた。
大和が起きてしまわないように、その泣き声は弱々しく、小さいものだった。
もう戻る事のない大切な妹。
もう話す事も、一緒に笑い合う事もできない――それが、辛かった。
涙が後から後から溢れて止まらない。
死んでしまった人は、二度と生き返らない。
そんなの当然の事だ。
神が決めた、人間がどう抗おうと決して変えられない事実。
翔輝はそれを改めて理解してしまい、泣き続けた・・・

翔輝が泣いている姿を、一人の少女が見ていた。
――大和だ。
彼女は翔輝が部屋に入った時に起きたのだが、寝たふりをしたのだ。途中顔をじっと覗かれてすごくドキドキしたのだが、すぐにそう感じた自分を後悔した。
いつも明るく自分に微笑み、勇気付けてくれていた翔輝が泣いていたのだ。
彼は自分の大切な妹に泣いている。自分には何もできない。情けなくて、それがどうしようもなく辛く、悲しかった。
自分は彼を元気づける事なんてできない。自分はいつも彼に元気をもらっているのに、自分は何もできない。
なんて非力なんだろう。
大和は悔しくて唇を噛んだ。
何が世界最大最強の超弩級不沈戦艦の艦魂だ。
大切な人も守れない、励ませない世間知らずの少女が、世界最強なんておこがましい。
敵を打ち砕く為の巨砲は、大切な人が悲しんでいるのに何もできない。

何が日本海軍の象徴だ。
何が大艦巨砲主義の申し子だ。
何が――艦魂だ。
自分にできる事なんて小さくて少ない。何もできないと言ってもおかしくない。そんな自分が彼を元気づける？　できる訳がない。それをする方法すらも知らない。敵と戦う方法ならいくらでも頭に入っているのに、そんなのがこんな状況には何の役にも立たない。
――なんて自分は、小さな存在なんだろう。
自分の無力さを改めて理解し、自分がとても小さく思えた。
涙が止まらない。
本当に自分は役立たずだ。
大和はすぐ隣で声を殺して泣く翔輝に背を向け、布団深くに潜る。
そして、目をつむり、静かにさめざめと涙した。

第四章　第一節　総力決戦に向けて

連合艦隊司令長官山本五十六大将は米機動部隊が無事な事を最も恐れていた。神出鬼没で各前線を突然襲い掛かる米機動部隊ほど、連合艦隊にとって恐ろしいものはない。だからこそ、その敵機動部隊をなんとしてでも殲滅しなければならなかった。その為に、米軍基地のあるミッドウェー島を攻撃して、それを助けに来るであろう敵機動部隊を殲滅し、敵の戦意を失わせ、講和への道を確保する為にミッドウェー作戦を自分の首を懸けて推進。それは承認された。

そして、日本連合艦隊は宿敵米海軍に総力をもって決戦を挑む事になった。

「それがミッドウェー作戦の全てです」

連合艦隊旗艦・戦艦『大和』の会議室で、大和は作戦の為に編成された主力部隊、機動部隊、その他の部隊の重要艦魂達に次の大作戦であるミッドウェー作戦を説明した。

「参加艦艇三五〇隻。航空機一〇〇〇機。参加将兵十万人。とてつもない大作戦だな」

金剛が嬉しそうに言う。その笑みはまるで新しいおもちゃを買ってもらった小さな子供を思わせた。

「姉貴嬉しそうだな」

「そうね。姉さんは戦う事が好きだからね」

「姉さん、すごく嬉しそう」

そう言う榛名と比叡と霧島も嬉しそうに微笑んでいる。

「何か質問はありますか？」

大和は全員を見回す。すると一人の少女が手を上げた。

「ねぇ、私は参加できないの？　私もみんなと一緒に行きたいよぉ」

それは珊瑚海海戦での損害の大きさの為に今ミッドウェー作戦から除外された瑞鶴だった。その瞳は濡れているのかキラキラと光っ

ている。
長門が残念そうに懇願する瑞鶴を諭すように説明する。
「あのね瑞鶴。あなたのお姉さん、翔鶴は珊瑚海海戦の傷を癒す為に病院（ドック）で入院してるし、あなたもその際に艦載機の大半を失ってるでしょ？　だから今回は参加できないのよ。わかって」
「・・・でも」
納得できない瑞鶴に、赤城が小さく笑みを浮かべる。
「大丈夫よ。私達があなた達の分まで活躍するから。あなたはゆっくり休みなさい。休むのも任務の内よ」
赤城の自信溢れた声に、瑞鶴はしばしうつむくと静かにうなずいて着席した。
他の艦魂達も作戦書をじっと睨んでいる。それほどこの作戦が重要だという事だ。
「大和ちゃん。私達こんなに後方で大丈夫なの？」
陸奥が作戦過程を見て不思議そうに訊く。
大和達主力部隊は後方支援及びミッドウェー島の攻略なので、機動部隊のかなり後方に配置されているのだ。
「今作戦は機動部隊が主役で、私達はその第二段階の為に後方に陣を張ってるんです。だから私達は前には出ないんです」
「でも、せっかく三五〇隻も参加させるのに、機動部隊は二〇隻ほどしかいないのはちょっと・・・せめてもっと巡洋艦に駆逐艦、金剛さんや比叡さんも加えた方がいいと思うけど・・・」
陸奥は機動部隊の防空能力を心配していた。その戦力は真珠湾の時よりも少ないのだ。なのに次の作戦は総力決戦である。少しばかり戦力不足といえば戦力不足である。
そんな陸奥の不安に、赤城は気にした様子もなく余裕を見せる。
「問題ありません。我が機動部隊の防空能力は世界最強です。それに近づく前に滑走路や甲板を破壊すれば脅威でも何でもありません」
「お、今日はやけに強気ね？」
自信に満ち溢れている赤城には加賀の茶化す声も聞こえてない。

その時、
「まぁ、赤城殿がそこまで言うのだ。心配はないでござろう」
主力部隊護衛の為に今作戦に参加している空母『鳳翔（ほうしょう）』の艦魂が片目を開けて言う。彼女は昔嵐に襲われた際に左目を失ったらしく、今では黒い眼帯を付けている。
連合艦隊最古参の空母が言うのだ。心配ないと全員が安心した。
赤城はそんな自分へ助け舟を出してくれた鳳翔に礼を言うと、少し残念そうな顔で彼女を見詰める。
「鳳翔さんと一緒に戦えないのが残念です」
「赤城殿。私は共に戦えぬが、そなたには加賀殿達もついてるだろう？　安心するが良い」
「はい」
年長者はこういう時は最強に威厳がある。
「では、今作戦について、他に意見はありませんか？」
大和が再び全員を見回す。
「お姉ちゃん。何かないの？」
日向がおもしろそうに伊勢を見る。伊勢はそんな妹を見てため息を吐く。
「私達は姉さん達と一緒に第一艦隊に配属されてるんよ？　これ以上に何を求めるん？」
「いやー、お姉ちゃんなら何かおもしろい事言ってくれるかなぁって」
「あんたは一体私をどう思ってるん？」
「てへ♪」
「てへ、でごまかさないの――それより、あんたこそそんな病み上がりな体で大丈夫なん？」
心配そうに伊勢は日向を見る。その頭には今でも痛々しい包帯が巻かれているのだが、彼女はそれを隠そうと後ろでリボン結びをしているのでかわいく見えてしまう。
伊勢の問いに、日向は笑顔で答える。

「うん。平気だよ」
この少し前、戦艦『日向』は主砲射撃訓練中に第五砲塔で装薬が砲塔内部で爆発、多数の死傷者を出す大惨事が起こっていた。今現在は同砲塔は撤去されて、大穴の開いた跡に仮設の蓋を張り、その上に二五ｍｍ三連装機銃四基を設置するという応急処置を施していたのだ。
「そう。ならいいんやけど」
伊勢と日向の会話が終わると、今まで黙っていた連合艦隊でもトップクラスのやかましい人が口を開いた。
「伊勢ちゃん。本当にいいの？」
「扶桑姉さん。今言ったとおり私はこれで満足どす」
「えー、つまんなーい」
「そういう問題じゃないんよ」
扶桑は本当につまらなさそうな顔をする。そんな彼女に伊勢は小さくため息する。その時、扶桑は普段あまり構わない実の妹――山城を見る。
「ねぇねぇ、山城は何か意見ないの？」
山城は湯のみを持ってお茶を飲んでいた。
「ねぇ山城ってば」
扶桑がしつこく山城の肩を揺らして訊く。そんな扶桑にも山城は無表情で抵抗せずに揺られる。
山城は揺れで零れそうな湯のみを机に置き、作戦書をじっと見ると、こちらを向いている大和を見詰める。
大和はいきなり山城に見詰められ、緊張が走る。
「大和」
「は、はいッ！」
大和は緊張した顔で山城を見る。山城から話しかけられるなんて初めての経験に大和は姿勢を正す。
そんな大和を見詰め、山城はほんの少し、ほんの少しだけ唇を柔らかく曲げた。

「旗艦初任務。がんばりなさい」
「は、はいッ！」
大和は本当に喜んで敬礼する。
山城の珍しい激励は、大和だけでなく全員を奮起させた。
「ま、こんなんでいいでしょ？　それに意見があっても私達には何もできないし」
長門の言葉に、全員がそう言えばそうだとうなずく。
自分達は艦魂。司令長官ではないのだ。艦隊はもちろん一個艦も、対空機銃ですら動かせない非力な存在。それが艦魂なのだ。
「では、ミッドウェー作戦についての会議はこれで終了とします」
大和の言葉に全員がうなずき、長々と続いた会議は終わった。

会議を終えた大和は帰る途中、航海室で海図の整理をしていた翔輝を見つけた。
「少尉？　何をやってるんですか？」
不思議そうに首を傾げる大和の声に、翔輝は気づいて微笑んだ。
「あ、大和」
翔輝は大きな紙袋を床に置く。その中には筒状になった大きな紙が何枚も入っていた。
「ミッドウェー島までの海図を探してたんだよ」
「海図ですか？」
「そう。次の作戦までに用意しとかなくちゃと思ってさ」
「そうですか。ご苦労様です」
大和はそう言うと立っていた廊下からそっと部屋の中に入る。
「手伝いましょうか？」
大和のそんな優しい言葉に翔輝は「ありがとう」と礼を言う。
「でもいいよ。もう終ったし」
「そうですか」
いくつもの丸められた海図を入れた紙袋を持って、翔輝は部屋を出る。その後に大和も続く。

「本当に大丈夫ですか？　手伝いますよ」
「いいって、それに常人には海図が浮いているように見えちゃうだろ？」
艦魂は普通の人には見えない。だが艦魂が何かを持って歩いていれば、艦魂が見えない人には物が浮いているように見えるのだ。
「そ、そうですね」
大和は残念そうにうなずくと翔輝の後ろを歩く。その時、
「あ、山城さん」
前から万年無表情艦魂である山城がやって来た。
「こんにちは」
翔輝が笑顔であいさつすると、
「・・・」
睨まれた。
（僕って、もしかして嫌われてる？）
大和はそんな翔輝の横をすり抜けて山城の元に駆け寄る。
「先程はありがとうございました」
ぺこりと頭を下げる。が、山城は黙っていた。そんな彼女にこれ以上関わっちゃ迷惑だなと思った大和は急いで背を向ける。
「では、先を急ぎますので」
「待て」
大和が翔輝の元に戻ろうとすると、山城が制止した。
大和は不思議そうに山城を見るが、山城は大和ではなくその奥にいる翔輝をじっと見詰めていた。
「その子供は・・・」
山城の中では自分は子供なんだ。翔輝は心の中で泣いた。というか、完全に忘れられている。翔輝が苦笑いすると、
「艦魂が見える士官だったか。以前真珠湾勝利の祝いで声を掛けて来た」
あ、覚えててくれた。
「はい。長谷川翔輝少尉です。航海士をやってるんですよ」

大和が紹介したので、翔輝も頭を下げる。
「航海士？」
「はい」
翔輝の返事に山城は腕を組んで何か考え始めた。
「私の所の航海士はみんな凡人だが、お前は優秀か？」
「はい。とても優秀な方で、上層部からも期待されてるんですよ」
大和がまるで自分の事のように嬉しそうに説明する。すると、
「そうか――ではもらって良いか？」
「「はい？」」
二人は疑問符を空中に浮かべる。
そんな二人に対し山城は至って平然と、
「先も言ったとおり、私の航海士はみんな使えなくてな、優秀な人材がほしかった所だ」
大和はしばらく突然の事に驚いて黙っていたが、慌てて声を荒げた。
「だ、ダメですよ！　少尉は私の配属ですよ！？」
「だから、くれと言っている」
「ぜぇぇったいにイヤですッ！」
顔を真っ赤にして反撃する大和を見ても、山城は一貫して無表情を貫いている。恐ろしき無表情魂。
「そうか、残念だ。航海士」
「はい」
山城は翔輝を見た。大和から顔が見えない角度に位置を置き、そして・・・
「気が向いたら来てくれ」
薄い笑みを浮かべたのだ。これには翔輝は驚き、紙袋を落とした。
山城は身を翻して去っていったが、翔輝は完全にフリーズしていた。
何で笑ったのか？　翔輝は不思議で、意味不明で、完全に思考が停止していた。だから・・・

「・・・い・・・しょ・・・・い、少尉・・・ッ、少尉ッ！」
「え？」
大和に呼ばれているのも気づかなかった。
「どうしたんですか？　固まっちゃって」
心配そうに顔を覗き込んで来る大和に、翔輝は小さく笑みを浮かべる。
「あ、いや、何でもない」
翔輝は床に落ちた紙袋を持ち直して再び歩き始める。
大和も翔輝を心配しながらも後に続く。
細い通路を抜けて、ようやく幅の広い通路に出た。すると大和が翔輝の横に並ぶ。
「・・・ダメですよ」
「え？」
大和の小さな声に、翔輝は立ち止まって大和を見る。すると、大和は不安げな瞳の上目遣いで翔輝を見る。
「山城さんの所に行かないでくださいね。約束したでしょ？　私から離れないって。他の艦には乗らないって」
「そのつもりだけど」
「本当ですか？」
寂しそうな顔をする大和は、なんだかお腹を空かせた捨てられた子犬のように弱々しかった。そんな大和に翔輝は微笑む。
「ここでウソついてなんか僕に得があるか？」
しばらく大和は翔輝を見ていたが、その言葉を信じたのかぱぁっと明るくなる。
「わかってればいいんです」
嬉しそうにステップして大和は先を歩進む。
「何だかなー」
「ほら、早く早く」
嬉しそうに自分を呼ぶ大和に、翔輝は苦笑いしながら大和を追い掛けた。

途中で大和と別れた翔輝は海図を持って艦橋に向かった。
「航海長。海図を持って来ました」
「おう、ありがとう」
翔輝より二〇センチ以上もある身長の高い航海長がコーヒーを飲みながら言った。
航海長は飲んでいたコーヒーカップを翔輝に向ける。
「お前も飲むか？」
「いえ、結構です」
航海長はコーヒーカップを置き、翔輝が持って来た海図の一つを机の上にに広げた。
「これがミッドウェー島か」
太平洋の中央に浮かぶその島は、連合艦隊の総力決戦の舞台にしてはあまりにも小さすぎる島だった。
「こんな所を攻めても、敵空母は出て来ないんじゃないですか？」
一介の航海士に過ぎない翔輝の意見に、航海長は首を降る。
「いや、確かに小さな島だが、ミッドウェー島はハワイ諸島にも近い。今作戦が成功すればハワイにも戦力を拡大できる。だから敵も全力でこれを守ろうとするはずだ」
「しかし、今作戦も真珠湾の時と同じように奇襲でしたよね？」
「あぁ、まだ防衛戦力も少ない今が絶好のチャンスなんだ。これを占領して敵空母を誘き出し、それを殲滅する。それが今ミッドウェー作戦だ」
航海長は煙草とマッチを取り出した。火を着け、煙草を吸う。その時、
「航海長。俺にも一本くれ」
「「艦長」」
高柳が右手を伸ばしてきた。
航海長は煙草を一本取り出し、高柳に渡す。高柳が煙草を唇に運ぶと同時に航海長がマッチで火を着けた。

高柳は煙を口から吐き、眠そうに目を擦る。
「艦長。寝不足ですか？」
「え？　あ、すまんすまん」
翔輝の質問に高柳は苦笑いする。
「ミッドウェー作戦で会議が多くてな。寝る暇もないんだ」
「そうですか。ご苦労様です」
翔輝はふと机にある航海長が飲んでいたコーヒーカップを見る。
「艦長。コーヒーでも飲みますか？」
「おぉ、貰うよ」
高柳の返事した瞬間、航海長が新しいコーヒーカップにコーヒーを入れて渡した。
「どうぞ」
「すまん」
高柳は煙草を灰皿に置いてコーヒーを飲む。
艦橋に煙草の煙とコーヒーの香りが充満し、ひと時の平和が流れる。今は休憩時間の為に参謀達もどこかに行っているのだが、しばらくすると参謀達が戻って来た。どうやらもう休憩は終わってしまったらしい。
「では、自分はもう戻ります」
翔輝はぺこりと頭を下げる。
「うん？　戻るのか？」
翔輝が身を翻すと、航海長が今日十二本目の煙草を吸い出した。
「はい。自分も色々用がありますので」
「用って艦魂の事か？」
高柳は優しげな笑みを浮かべるが、翔輝は「違いますよ」と微笑んだ。
「違うのか？」
航海長は口からドーナッツ型の煙を吐く。
翔輝は苦笑いしながら否定する。
「いつもいつも艦魂と一緒って訳じゃありませんよ」

「ははは、それもそうか」
「はい。ではこれで」
翔輝は艦橋の扉を開けて通路に出た。すると、そこにはデッキブラシを持った少年がせっせと床を磨いていた。
「長谷川少尉？　どうしたんですか？」
「水上。どうしたの？」
それは作業服を着た水上だった。水上は翔輝に気づくと手を止める。
「仕事ですよ。僕は少尉のお世話以外はこうした雑務をする一介の兵ですから」
「そっか。お疲れ様」
翔輝の激励に、水上は照れたのか、まるでそれを隠すように笑みを浮かべる。
「僕なんかはまだまだですよ。それだったら長谷川少尉の方が毎日毎日大変でお疲れ様ですよ」
「あ、いや、そんな事――って、そんなに頭下げなくていいってっ！」
全力で頭を下げる水上を翔輝は慌てて止める。
水上の仕事はもう終わりかけていたので翔輝はそれを待つ事にした。すると水上は慌てて残りの作業を全速力で終わらせた。
（なんか、迷惑だったかな？）
仕事を終えた水上と共に翔輝はそのまま二人で甲板に出た。
燦々と輝く太陽が甲板に照り付けているが、それはとても暖かく、昼寝がしたくなる気持ち良さそうだった。
甲板の上に敷かれた日差し避けの下の椅子の腰掛けると、水上がふと訊いてきた。
「長谷川少尉は、今度の作戦をどう思いですか？」
今度の作戦とは、もちろんミッドウェー作戦の事だ。
連戦連勝で天狗になっている日本軍は次の作戦がとてつもなく重要なのにその情報は国内にだだ漏れ。先輩の話では芸者が知ってい

たほどらしい。真珠湾の時とは大違いだ。
「うん？　別に？　全力でやるだけだけど」
気にした様子もなく翔輝が普通に答えると、水上はぱあっと顔を輝かせる。
「さすが長谷川少尉ですッ！　それでこそ自分が最も尊敬する方です！」
本当に嬉しそうに喜ぶ水上を見て、翔輝は微笑した。
さざ波が『大和』の巨艦に当たり、弾ける。その無限に繰り返される永遠のループは、時間という名のページに静かな時をゆっくりと刻んでいる。
蒼空の下、大日本帝国海軍連合艦隊はその全戦力を結集しつつあった。
目的はただ一つ。
この大作戦で必ず勝利する事。
圧倒的な勝利でアメリカの戦意を奪い、講和への道を作る事。
それしか、日本が求める《勝利》というものはない。
この作戦に成功するこそ、日本に残された最初にして最後の講和へのチャンス。
時は一九四二年五月の終わり。
どこまでも蒼く広い太平洋の海は、どこまでもその名のとおり静かなものだった。
この平和な海で、日本海軍史上最大の作戦が実行されようとしていた。
連合艦隊の総力決戦が、今、始まる。

第四章　第二節　始動　史上最大の作戦

一九四二年五月二七日、第一航空艦隊こと第一機動部隊が柱島から出港しようとしていた。

『第十戦隊出港しまーす！』

『第八戦隊出港しまーす！』

『第四駆逐隊出港しまーす！』

『第三戦隊出港！　戦艦『榛名』発進を確認！』

第二航空戦隊旗艦――空母『飛龍』の艦橋に続々と各戦隊出港の報が入り、今まさに『飛龍』も出撃しようとしていた。

『『加賀』！　前進微速！』

前方に止まっていた『加賀』が後部から白波を立てて前進を始めた。

『南雲司令長官より入電！『第二航空戦隊出港セヨ』！』

ついに『飛龍』にも出港命令が下った。艦橋から外を見ていた飛龍にも緊張が走る。この戦いがこの戦争を左右するのは、誰もがわかっていた。当然飛龍も理解している。だからこそ、全力で戦わなければならない。

「ついに、決戦ね」

軍帽を深く被って天空を見詰める。

「よしッ！　錨上げッ！」

空母『飛龍』艦長加来止男（かくとめお）大佐が伝声管に向かって叫んだ。

第二航空戦隊司令官山口多聞（やまぐちたもん）少将は司令席に座ったまま窓の外の艦隊を眺めていた。

『錨収納完了！　出港用意完了！』

加来はうなずき、後ろに座ってる山口を見る。山口も加来を見てゆっくりとうなずいた。

加来は機関室直結の伝声管に向かって叫ぶ。

「『飛龍』発進！　両舷前進微速！」

『両舷前進全速！』
『飛龍』は煙突から黒煙を上げながら白波を立ててゆっくりと前進を始めた。
飛龍は左に流れる景色を一瞥し、横を一緒に翔ける義姉艦『蒼龍』を見る。『蒼龍』は煙突から黒煙を上げて勇ましく海を翔けていた。その甲板の上にいた少女を見て、飛龍の顔に自然と笑みが零れる。
「姉さん。がんばろ」
飛龍の声は勇ましい汽笛の中に消えた。
二十数隻の大艦隊を見詰め、飛龍は静かに微笑みかけた。

空母部隊の先頭を翔ける第一航空艦隊旗艦・空母『赤城』の艦橋には機動部隊司令長官南雲忠一中将、同参謀長草鹿龍之介少将以下の機動部隊司令部が陣を取っていた。その中にはこの艦の艦魂である赤城もいた。
「長官、いよいよですね」
草鹿の言葉に、南雲は静かにうなずく。
「あぁ、参謀長。いよいよ敵空母を殲滅する時が来たよ」
「この戦いで、全てを終わらせましょう」
「そうだな・・・」
「長官？」
どこか遠い目をする南雲に草鹿が不思議そうに首を傾げる。
「この戦争が終わったら、私はもう一度、巡洋艦に戻りたいな」
「長官・・・」
「草鹿君。君にはいつも頼ってばかりですまんな。私のような航空機の素人がこんな見えない敵を相手に戦うなんて夢にも思っていなかった。今までこうして勝ち続けられたのも、優秀な搭乗員達と、優秀な参謀達。そして、君のおかげだ」
「そんな。長官のすばらしい艦隊指揮が我々をここまで導いてくださったのです」
草鹿の言葉に、南雲は「ありがとう」と礼を言う。

蒼い海を翔ける自分が指揮する艦隊を見詰め、南雲は小さく微笑んだ。

「皆すばらしい部下達だ。私は誇りに思う。あんなに若々しく勇ましい部下達と共にいられるなら、機動部隊の司令長官も満更でもない」

そう言って、南雲はまわりを走る艦艇一隻一隻を見詰める。その瞳には子を想う親のような温かなものが含まれていた。

「この作戦が終わったら・・・私は山本長官に謝らなければいかん」

「山本長官にですか？」

「ああ、私は以前ロンドン海軍軍縮条約の際に、艦隊派（条約反対派）に属していてな、条約派（条約賛成派）にいた山本長官や井上中将と毎日のように揉めていたんだ。言うなれば、私は山本の敵。なのに彼は、こんな私を第一航空艦隊司令長官という大役を任せてくれた。もちろん先任だったという理由もあるが、私は彼に感謝している。だがな、ひとつ不満を言うとすれば、私は水雷戦隊や巡洋艦部隊を指揮したかったな。私は見える敵しか攻撃できない、不器用な指揮官だ」

悲しそうに微笑む南雲に、草鹿以下参謀達は黙ってしまう。もちろん、傍から聞いていた赤城も南雲の突然の言葉も黙っていた。

「長官は、この作戦が終わったら、我が艦隊の司令長官をお辞めになるんですか？」

参謀の言葉に、南雲は首を傾げる。

「さあな。できればそうしたい気持ちもある。ここは私の居場所ではないからな」

「長官・・・」

「だがな、君達のような信頼できる部下がいる艦隊を、むざむざ誰かに任せたくはないな。もう一年の付き合いだ。愛着がわくのは当然だろう？」

南雲の子供のような笑みに、草鹿達も嬉しそうに微笑んだ。

「そうだ。もし私が巡洋艦部隊を任されたら、機動部隊の護衛に参

加してやろう。私の水雷屋としての力量を、お前達に見せてやる。
驚くぞ？　私の命令で放たれた魚雷は百発七〇中だ」
「ずいぶんリアルな命中率ですね」
草鹿の言葉に、南雲や参謀達は大笑いした。
これが日本の未来を左右する大作戦の出撃の風景にはとても見えない。
笑う部下達に、南雲は「ほら、いつまでも笑っとらんで仕事に戻りなさい」と言う。
自分の仕事に戻った部下達を一瞥し、南雲はふと後ろに遠ざかる日本を見る。
「・・・もしも、どこかの艦隊を任される事になったら・・・その時は、戦艦『大和』を指揮してみたいな」
南雲はそうつぶやくと、離れていく日本に向かって見事な敬礼をしてみせた。そんな自分達の司令長官の背中を見詰め、草鹿達も敬礼した。
赤城も遠く離れていく祖国に向かって敬礼する。
「見ていてください長門司令！　必ず敵空母を沈めてみせます！」
天高く響いた赤城の声は、汽笛の音の中に溶けていった。

横を走る『飛龍』を見て、蒼龍は静かに微笑んだ。
「いよいよ、敵機動部隊との決戦ね」
海風が蒼龍の肩ほどまでの髪をさらさらと揺らす。その時、海を見詰める蒼龍に近づく人影があった。
「蒼龍」
声をかけたのは刹那だった。いつものように茶色い飛行兵の服を着ている。
刹那の声に振り返りもせず、蒼龍は背を向けたまま口を開く。
「なあ刹那」
「何だ？」
「・・・必ず、勝利しよう」

「当然だろう？　みんなその気満々だもの」
　刹那の言葉に、蒼龍は「そうね」と小さくつぶやく。そんな蒼龍に刹那は不思議そうに首を傾げる。
「蒼龍、もしかして怖いのか？」
　刹那の問いしばし蒼龍は沈黙したが、ゆっくりと首を縦に振った。
「ええ、怖いわ。何せ敵は私達と同じ機動部隊。今までの相手とは勝手が違うのよ・・・翔鶴達もこんな恐怖を感じていたのかしら」
　蒼龍のいつになく弱気な言葉に、刹那は困ったように頬を掻く。
「うーん、僕はただ敵機を撃ち落とすだけだからな。敵が機動部隊だろうと基地航空隊だろうとやる事は変わらないからな、あんまりピンとこないな」
「・・・そう」
「――でも」
　刹那は蒼龍の肩を持ってこちらに向かせる。驚く蒼龍に、刹那は優しく微笑む。
「そんなに敵の艦載機が怖いなら、僕が全部撃ち落としてやる。お前に降りかかる火の粉のような敵機を、僕は全部撃ち落としてやる。だから、安心しろ」
　刹那の言葉に、蒼龍は戸惑ったような顔をするが、すぐに苦笑する。
「あなたがいくらがんばっても、あなた一機じゃ落とせる敵機の数なんて知れてるでしょ？」
「関係ないよ。一機だろうが十機だろうが、二〇ｍｍ機銃で落としてやる」
　自信満々に言う刹那の言葉に、蒼龍は呆れた顔をする。
「あなたは本当にバカな人ね」
「な、何だよ。人が心配してやってるってのに！」
　刹那は頬を赤くして怒る。せっかくかっこいいセリフで励ましたのに、それをバカにされたからだ。
　隣で怒る刹那に蒼龍はそっと背を向けると、静かにうつむく。

「ありがとう・・・」
頬をほんのりと赤らめた蒼龍の小さな声は、波音の中に溶けていった。

機動部隊護衛部隊には戦艦『榛名』『霧島』も参加していた。
戦艦『霧島』の艦橋に霧島はいた。
横を翔ける空母部隊を見て、霧島は少し怖いのを隠して気合を入れる。
「この作戦が成功すれば、戦争は終わる。がんばらなくちゃ！」
霧島の望みはただ一つ。
――戦争を終わらせ、日本を平和にする事――
ただ、それだけだった。
「だから、なんとしてでも空母は守らないと」
自分は連合艦隊でも古参組に入る重鎮である。だからこそ、自分がしっかりしないといけない。そんな想いが心の中で大きくなる。
「私ががんばらないと」
「まあ、がんばるのもいいけどよ。あんまり無理すんじゃねぇぞ」
その声に振り返ると、そこには「よっ」と片手を上げて笑う榛名がいた。
「姉さん」
榛名は霧島に近寄ると、その背中をボンッと力強く叩く。そのあまりの勢いに霧島は耐えられずにすっ転んでしまった。
「あ、悪ぃ」
榛名は悪びれた様子もなく無邪気な笑みを浮かべる。
一方、榛名に突き飛ばされて顔面から床に激突してしまった霧島は「も、もう姉さんッ！」と打ち付けた鼻を押さえて怒る。
「いきなり何するのよッ！」
「あはは、ごめんごめん。またおまえがまじめそうな顔をしてたからさ」
「これから大作戦に向かうのにまじめな顔をしてない方がおかしい

と思うけど」
そう言って霧島は榛名をじーっと見詰める。すると榛名は豪快に笑った。
「あっはははははッ！　俺はこれでも緊張してるんだぜ？」
「どこが？」
「もう緊張しすぎて嬉しくて、もう笑うしかないだろ？」
「もう、姉さんったら」
霧島は呆れるが、同時に小さく笑みを浮かべた。
自分だって史上最大の作戦に緊張していたのだ。それがいつもと変わらない姉の姿を見て解けた。
榛名は肩が軽くなった妹を見て静かに笑みを浮かべる。
「あんまり無理すんじゃねぇぞ。何かあったら俺がなんとかしてやるさ」
榛名の言葉に、霧島は少し照れたようにうなずく。そんなかわいい仕草をする妹を見て榛名も照れ隠しなのか頬を掻く。
「ま、まあ俺は比叡姉さんと違って不器用だからさ。お前に迷惑をかけちまうかもしんねぇけど、でも、俺はお前の力になりてぇんだ。それだけは、わかってくれ」
「・・・わかってるよ。姉さんの気持ち」
霧島は嬉しそうに微笑むと、そっと榛名に抱き付く。驚くのは榛名だ。
「お、おい霧島」
「姉さん、これからも・・・姉さんの事、頼ってもいい？」
霧島の不安そうな瞳に、榛名はニッと笑みを浮かべる。
「もちろん。どんどん頼ってくれ」
「ありがとう、姉さん」
頼れる姉の腕の中で、霧島は嬉しそうに微笑んだ。そんなかわいい妹の身体を榛名は抱き締め、小さく笑みを浮かべていた。
真珠湾以降幾多の戦いを生き抜き、勝利を導いてきた機動部隊は

今回も連合艦隊の希望として出撃した。
誰もが勝利を疑わず、作戦の成功を信じていた。
第一航空艦隊は、空母『赤城』『加賀』『蒼龍』『飛龍』の四隻の空母中心として部隊を編成し、勇ましく柱島を出撃した。

――だが、勇ましく出撃した四空母は、これが最後の姿となってしまった――

五月二九日、機動部隊に続いて主力部隊が出港の用意を始めた。
連合艦隊第一戦隊には連合艦隊旗艦・戦艦『大和』他『長門』『陸奥』。第一艦隊第二戦隊に戦艦『伊勢』『日向』『扶桑』『山城』。第二艦隊第三戦隊第一小隊に戦艦『金剛』『比叡』が配置された。
そんな主力部隊が出港の用意をしている中、艦魂達は旗艦『大和』の甲板に集まっていた。
「これが私達の初陣ねぇ」
長門が嬉しそうに言う。彼女の言うとおり、『長門』はこれが初めての実戦出撃であった。なんやかんやで日本は平和だったので、長門他の主力部隊は戦闘が初めてだったのだ。
「やってやるぞぉッ！」
「日本の駆逐艦の性能は世界一よ！」
「日本海軍最強兵器酸素魚雷の威力を見せてやる！」
駆逐艦達が嬉しそうに歓喜している。やはり兵器の魂である艦魂は戦いを好むらしい。
「で？」
そんな駆逐艦達から少し離れた所にいる戦艦艦魂達。そこには翔輝の姿もあった。仕事中の所を無理やり大和達に引っ張られて来たのだ。
「で、とは？」
かなり迷惑そうな顔をしている翔輝に大和が不思議そうに訊く。
彼女はどうやら翔輝の不安なんて全然わかってはいないらしい。

「あのさ、僕出港するから艦橋に行かなくちゃいけないんだけど」
翔輝が少し怒ったような顔で大和を見るが、大和は気にした様子もない笑みで翔輝を見詰め返す。
「まぁまぁ、それは一旦置いといて」
「置いとけないよ！　航海長に怒られるんだよ！」
仕事中だったの無理やり連れて来られたので仕事を放棄した事になる。そんな事になったら航海長に怒られるのは必然である。
慌てる翔輝を金剛が不機嫌そうに睨みつける。
「ここにいろ。今から出撃式をやるのだからな」
「し、しかし・・・ッ」
「私は艦魂だが戦艦の艦魂だ。戦艦は人間の階級にすると佐官だぞ」
「何その無理やりの設定！？」
金剛曰く戦艦・正式空母が士官。巡洋艦・水上機母艦・潜水母艦・改装空母・軽空母が下士官。駆逐艦・潜水艦・その他小型艇（水雷艇・輸送艦等）が水兵らしい。
金剛の説明を聞き、翔輝は苦笑いしながら大和を見る。
「それじゃ、連合艦隊旗艦のお前は大将じゃん」
その階級差は九もある。常識だと話せるような階級差じゃない。ましてや敬語抜きだと切腹ものである。
翔輝の言葉に大和は恥ずかしそうに顔を赤くする。
「そ、そんな・・・大将だなんて・・・ただ艦魂の艦種を階級に直しただけですよ」
「直しただけって、じゃあ事実って事じゃん」
「あ、いや、そのぉ・・・」
翔輝から視線を外す。どうやら自分から地雷を踏んでしまったらしい。
「まぁまぁ気にしない気にしない。みんな仲良くね？」
長門が罪のない笑みを向ける。そんな長門を見て陸奥が少し怒ったような顔をする。
「お姉様。緊張感なさ過ぎです。これから世紀の大作戦に赴（おもむ）くとい

うのに」
「陸奥。リラックスリラックス」
「敵性国の言葉は慎むように」
「えー、つまんなーい」
相変わらず長門はのん気だ。そんなひたすらボケキャラの長門を抑えるツッコミキャラの陸奥はとても大変そうだ。きっとすごく苦労しているのだろう。
「・・・もうやめてぇな」
「あーん、伊勢ちゃーん」
ここにも一人ものすごく苦労している人物がいた。本当に伊勢はいつもかわいそうである。
「山城お姉ちゃん♪　がんばろうね？」
「・・・」
博愛主義者（決して変な意味ではない）である日向は山城に対しても愛情表現が直球勝負。抱き付いて離れようとしない。そんな日向に抱き付かれている山城は嫌そうな顔をしているが、顔がほのかに赤い。実はそんなに嫌じゃなかったりする（扶桑のは本当に嫌らしいが）。
「おい大和。出撃の演説をしたらどうだ？」
「え、あ、はいッ！」
大和は急いで全甲板の演説台に向かう。そこに上がると仲間内で話していた艦魂達の目が一瞬で自分に向いた。その不特定多数の視線に大和は緊張のあまり硬直する。
「あ、その・・・ッ」
元々あまり前に出て何か言うようなキャラじゃないのだ。一応連合艦隊旗艦なので人の前に立つのが当然なのだが、大和はその辺は完全に抜けている。
無数の視線を感じ、大和は何も言えなくなる。
それはもう緊張ではなく恐怖である。
喉が渇き、汗が吹き出て、呂律が回らなくなる。

（そ、そんなに見ないでよぉ）

もう泣きたくなってきた。その時、自分を見詰める群集の中に翔輝を見つけた。翔輝は大和と視線が合うとにっこりと微笑み、親指を立てる。

がんばれ、そう言ってくれてるようで、たったそれだけの事なのに大和の胸にはとても温かいものが込み上げ、それは勇気となった。

（私、がんばりますッ！）

大和はキッと正面を向く。真剣にこちらを見詰めている全員をゆっくり見回し、そして全員に聞こえるような大声を上げた。

「先日、第三七回海軍記念日に機動部隊が出撃しましたッ！　そして今我々も、次の大作戦に向けて出撃しようとしていますッ！　本作戦の目的はミッドウェー島を奇襲攻略！　我が軍の太平洋戦線に対する前線基地を確保するものですッ！　機動部隊は予定攻撃地点に到達後、同島を空襲！　所在の敵航空兵力、及び基地施設を殲滅！　その後、我々主力部隊が同島を攻撃！　残存兵力を完全撃滅！　随伴している攻略部隊で同島を占領！　なお、これにより、必ずや出撃したる敵艦隊！　空母を中心とするアメリカ主力艦隊を迎え撃ち、これを完全殲滅するのが最大の目的ですッ！　今作戦は、日本海軍の全戦力を結集して実施されます。すなわち、山本連合艦隊司令長官直卒の、戦艦『大和』を始めとして、参加艦艇三五〇隻！　航空機一〇〇〇機！　参加将兵約十万人！　まさに、世界海軍史に例のない、大艦隊の出撃ですッ！　皇国の荒廃は、まさにこの一戦にありッ！　気を引き締めて望んでくださいッ！　終わり」

連合艦隊旗艦である大和の勇ましき演説の後、、誰が言ったでもなく全員が見事な敬礼をした。大和もそれに応えて見事な敬礼を返す。

翔輝は微笑しながらその場を離れた。

なぜだか、自分はこの場にいてはいけないような気がしたのだ。

やはり、艦魂と人間は違うのだと、改めて理解した。

そして、なぜだか大和がとても遠くに思えた。

立派になった大和と、何も変わらない自分。その差が翔輝の心を少なからず痛めていた。
「大和。がんばれよ」
翔輝はそう言って微笑むと、静かにその場を去った。
余談だが、この後翔輝は急いで艦橋に向かったが、結局航海長にこっぴどく怒られた。

出撃式が終わると、大和は艦橋に移った。
艦橋には山本五十六連合艦隊司令長官、宇垣纏同参謀長がいた。
そして、そんな艦橋の隅に翔輝はいた。
「もう少尉ッ！　勝手にいなくならないでくださいよ――って、あれ？」
大和は怒りながら翔輝の隣に駆け寄った。すると、翔輝は少し肩が落ちて目が赤くなっていた。
「どうしたんですか？　何か目が赤いですよ？」
「お前のせいで航海長に怒られた」
その返事に大和は申し訳なさそうに頭を下げる。
「それはすみません。って、泣いてたんですか？」
「泣きたくもなるよ。航海長は怒るとものすごく怖いんだから」
「・・・本当にすみません」
さすがの大和も翔輝のあまりのやつれっぷりに何も返せなくなってしまった。
大和がどう謝ればいいか考え始めた刹那――事件が起きた。
「何を一人でぶつぶつ言っとるんだ？」
いきなり会話を断たれた二人は、話し掛けて来た人物を見て悲鳴を上げた。
それは――山本五十六連合艦隊司令長官その人だった。
「ちょッ！　長官ッ！？」翔輝は悲鳴に似た――いや、悲鳴そのものを上げた。
「にゃあああぁぁぁッ！」大和が常人には聞こえないからと意味不

明な叫び声を上げる。
　そんな二人（山本にとっては翔輝一人）の意外な反応に山本は怪訝そうな顔をする。
「何を驚いておる？」
「すみませんッ！」
　ともかく謝ろう。ともかく謝れば何とかなる！
　翔輝は全力で謝罪する事に決めた。まずは土下座からだろうか。
　山本は混乱しているようだったが、今の翔輝にはそれを知る由もない。
　しかし、救いの手はちゃんと差し伸べられた。
「長官。彼は艦魂を見る事ができるのです。おそらく今、『大和』の艦魂と話しておられたのでしょう」高柳艦長が笑顔で言った。
「艦魂を？　それはおもしろい。私の知り合いにも何人かそういう奴がおったな」
　山本は高柳の言葉を信じ、嬉しそうに微笑むと改めて翔輝を見る。
「君。名は何と言う？」
　山本の問いに翔輝は敬礼して答える。
「はッ！　長谷川翔輝航海少尉であります！」
「長谷川君。今大和と話していたのかい？」
「はい！　そうであります！」
「何の話をしていた？」
「はい！　自分が航海長に怒られた事を話しておりました！」
「おいいいぃぃぃっ！」航海長がかなり焦った声を上げた。
　そんな情けない話を真剣に言う翔輝を見て、山本は豪快に笑った。
「ははは、そうかそうか。じゃあこれからは怒られないように努力せよ」
「はいッ！」
　山本は身を翻そうとしたが、ふと翔輝に視線を戻す。すると山本は少し照れくさそうな顔をしながら翔輝に言う。
「長谷川君。今大和はどこにいるんだ？」

その言葉に、大和の口からある平仮名が出た。
「はい。今も横にいますけど」
「そうか」
山本は翔輝の横、彼には何も見えないが、大和がいる所を見る。
優しい顔で、とても優しい顔で大和を見詰める。
「大和」山本は優しい笑みを大和に向ける。そして、
「一緒にがんばろう」
「はいッ！」
山本は聞こえないはずだが、微笑して去った。
司令官席の前に立った山本は、先程のような優しい笑顔ではなく、連合艦隊司令長官の顔になっていた。
「高柳君」
山本は高柳の目を見る。高柳はうなずき、機関室直通の伝声管に叫ぶ。
「『大和』発進！　両舷前進微速！」
『大和』の巨大な艦体が白波を立てて動き出した。
『大和』の後を『長門』『陸奥』、さらには数百の艦艇が続く。
甲板には軍楽隊が陣を取って『軍艦行進曲』を演奏している。
日本海軍史上最大の出撃に、その曲はすばらしく合っていた。
勇ましく軍艦行進曲が鳴り響く太平洋の海を進む数百の艦艇。それは日本海軍のほぼ全戦力であった。その中央に、史上最大最強と謳われる超弩級不沈戦艦――戦艦『大和』がその雄姿を堂々と輝かせていた。
世話しなく人が動き回る艦橋の中で、大和はそっと翔輝の手を握った。翔輝もそっと握り返す。
二人は互いを見合うと、静かに微笑んだ。
参加艦艇三五〇隻、航空機一〇〇〇機、参加将兵十万人という空前絶後の大艦隊が参加する作戦が発動した。
日本海軍史上――いや、世界海軍史上最大規模の大作戦であった。

太平洋の海を埋め尽くす赤い日の丸の旗。
当時世界最強と謳われた大日本帝国海軍の全戦力がアメリカという強大な敵に対し襲い掛かろうとしていた。
日本海軍にとって、絶対に負けられない戦いが幕を上げたのであった。

――しかし、それが最悪の結末になる事を、まだ誰も知らなかった――

第四章　第三節　リメンバーパールハーバー

その頃、アメリカ軍は日本軍の暗号を解読してミッドウェー攻略作戦は筒抜けであった。この時点ですでにミッドウェー作戦は奇襲作戦から強襲作戦に変わってしまっていた。

アメリカ軍は万全の防御体制を徐々に整えていた。小さなミッドウェー島の飛行場には各島々に散っていた航空機を集結させ、その戦力は強大なものになりつつあった。さらに防衛艦隊としてアメリカ機動部隊もミッドウェー島防衛の為に北方海域に待機していた。だが、この作戦は明らかにアメリカ軍が圧倒的に不利であった。

急遽用意した艦隊の総数は空母３隻、重巡洋艦７隻、軽巡洋艦１隻、駆逐艦１５隻、潜水艦１９隻という５０隻にも満たないものだった。普通に見ればかなりの戦力だが総戦力３５０隻で迫る日本海軍の前では蹴散らされるのが目に見えていた。

しかし、この圧倒的に不利なアメリカ軍は、機動部隊と基地航空隊の見事な連携で、この危機を乗り越えるのであった。

そのカギを握るのが、日本海軍が最も恐れていた――アメリカ機動部隊であった。

ミッドウェー島北方海域に、アメリカ機動部隊はその戦力を展開させていた。その攻撃力である空母は全３隻。基地航空隊と合わせれば日本機動部隊と真正面からやり合っても、一応まともな戦いができる程度のものだった。

開戦以来日本機動部隊の強力な航空戦力に圧倒され、真正面からの反撃を回避し続け、ひたすら敵基地に対する遊撃しかしてこなかったアメリカ機動部隊。それが先の珊瑚海海戦で激突した。だがその結果は戦術的には自軍の敗北となってしまった。日本機の搭乗員の圧倒的な技量の前に、アメリカ軍は蹴散らされていた。

すさまじい命中率を誇る日本機動部隊の急降下爆撃と魚雷攻撃の

前では、必死の回避行動もただの悪あがきでしかなく、反撃の為に舞い上げた戦闘機はジーク（零戦）に次々に撃墜された。

もはや、日本機動部隊を止められる有用な艦隊など、世界中どこを捜しても存在しなかった。せめて悪あがきできる程度が、アメリカ機動部隊だった。

その中のアメリカ合衆国海軍機動部隊旗艦兼第１７任務部隊旗艦・空母『ヨークタウン』の艦橋にはこの機動部隊を率いる司令官であるフランク・Ｊ・フレッチャー少将がいた。

彼は疲れ切った顔で甲板を眺めていた。

『ヨークタウン』は先の珊瑚海海戦で中破し、３ヶ月の修理が必要とされていた。しかし、修理工達の不眠不休７２時間という奮闘によってなんとか応急処置を終え、今作戦には参加できた。工業大国アメリカだからできる離れ業であった。しかし、あくまで応急処置なので今も修理工を乗せて修理は続いている。この作戦が終われば本格的な修理を受けなければならない。

フレッチャーは小さくため息をすると、近くにあった椅子にぐったりと腰掛けた。その顔は疲労によるげんなりとしていた。

「司令。どうぞ」

そんなフレッチャーに１５、６歳くらいの長い金髪に碧眼の少女が笑顔で湯気が立ち上るコーヒーを渡した。

「あぁ、ありがとう」

微かに笑みしながら受けとるフレッチャー。

コーヒーを受け取ったフレッチャーを見て小さく微笑む少女の名はヨークタウン。この空母『ヨークタウン』の艦魂だ。そんな彼女は頭や腕、足には包帯をいくつも巻いていた。これは珊瑚海海戦で受けた傷で、応急処置しかしていないのでまだ治っていないのだ。そんな姿がとても痛々しい。しかし、ヨークタウンはそんな事を気にしないで笑みを送る。

「お疲れですか？　少し休まれてはいかがですか？」

「それはできん」

フランクは小さく首を降ると、悔しそうに唇を噛み、口に出すのも辛そうに言う。

「私はコーラル海（珊瑚海）でレックスを沈めてしまったんだ。彼女の為にも私はがんばらなければいけない」

「少将・・・」

レックスとは《レディ・レックス》の事で、珊瑚海海戦で沈没した空母『レキシントン』の愛称である。

コーヒーをすするフレッチャーの横で、ヨークタウンは顔を曇らせる。

「レキシントンさんですか、確かに、彼女を失ったのは辛いです。祖国をとても大切にし、皆からもとても慕われていましたのに、残念です。でも、彼女も司令が元気を失うのは嫌なはずです」

ヨークタウンは顔を伏せているフレッチャーを元気付けようとする。その瞳は真剣そのもの。心の底から彼を想っている証拠だった。そんな彼女の優しさにフレッチャーは顔を上げる。

「・・・そうだな。それに、俺にはまだお前がいる。だからまだ戦える」

フレッチャーはヨークタウンに優しい笑みを向ける。その笑顔を見て、ヨークタウンも嬉しそうに微笑む。すると、

「しょ、少将・・・」

フレッチャーはヨークタウンの頬にキスした。それは彼なりの感謝の気持ちだったのだが、ヨークタウンは別の意味で捉えて顔を真っ赤にした。

フレッチャーは優しく笑っていたが、突然難しい顔になって何かを考え始める。

「でも、日本海軍は総力をもって攻撃して来るらしい。ヤマモトも本気なのだろう。それに、日本には謎の新鋭戦艦『ヤマト』もいるらしい。どれほどの脅威になるかわからん。今回の作戦、成功できるかどうか・・・」

それはアメリカ人誰もが思っている恐怖であった。

開戦以来破竹の進撃を続ける日本軍の前には、アメリカ軍の攻撃など跳ね返し、逆に殲滅されてしまう。

パールハーバーから始まり、フィリピン、マレー、インドネシア、インド、中国と次々に進撃していく日本はアメリカにとっては化け物であった。

黄色人種など白人の前では雑魚と思われていたこの時代、同じ黄色人種である日本は世界一恐ろしい国になった。

当初アメリカは日本よりドイツの方が危険と思っていた。だが、すさまじい勢いで太平洋やアジアを席巻していく日本を目の当たりにし、日本こそ真の敵であると認識するようになっていた。

だが、その強力すぎる機動部隊と航空兵力、さらには空前絶後のメガトン級の戦艦を保有しているという圧倒的な《力》の前に、アメリカ軍は《リメンバーパールハーバー》で高めていた士気を急降下させていた。

兵達の中では「そのうちアメリカの朝食はパンとミルクではなく、ライスとミソスープに替わってしまうのではないか」という不安が蔓延していた。

それほど、日本という圧倒的な力を持つ国を恐れていた。

フレッチャーも、珊瑚海での戦いを経験し、日本の恐ろしさが身に染みていた。

顔を曇らせるフレッチャーに、ヨークタウンを不安げに見詰める。

(司令は、レキシントンさんを死なせてしまった事を悔やんでるんだ・・・)

確かに、レキシントンとフレッチャーは仲が良かった。旗艦である自分の艦橋でいつも楽しげに会話していた。そんな2人を見てうらやましく思った事は何度もある。それだけ2人が仲が良かったのだ。

落ち込むフレッチャー。だが、いつまでも落ち込んでいては何も始まらない。

ヨークタウンはフレッチャーの手を掴むと、両手で包み込んだ。

そんな彼女をフレッチャーが驚いた目で見る。
「少将。弱気になってはいけません。日本軍が全力で来ても、こっちも全力で迎え撃つだけです」
ヨークタウンは真剣に言った。その瞳には闘志が燃え盛っていた。そして自然に窓の外を見る。その視線の先には第１６任務部隊に属する２隻の空母を見ていた。
「それに、この作戦には私の妹達全員が参加してるんです。アメリカ海軍最強のヨークタウン３姉妹がいる限り、絶対に負けませんよ」
「強気だよねぇ」
ヨークタウンの意気込んだ瞬間、２つの光が出現し、その中から２人の金髪碧眼の少女が現れた。
「エンタープライズ、ホーネット・・・」
それはヨークタウンの妹達だった。
ヨークタウンと同じ長い金髪をしているがかなり強気な瞳をしたのがヨークタウン級航空母艦２番艦・空母『エンタープライズ』の艦魂。
その隣にいる金色の髪をツインテールにしたかわいげな少女が３番艦・空母『ホーネット』の艦魂。
２人の妹の登場にヨークタウンは不思議そうに首を傾げる。
「２人ともどうしたの？　今は作戦中よ？」
「別にいいだろ。姉貴を心配しにきたんだよ」
「そうだよ。お姉ちゃんは傷が治ってないんだからさ、無理しないで私達に任しておいてよ」
ヒョコヒョコと揺れるツインテールをしたホーネットが心配そうに言う。そんな彼女の隣でエンタープライズが不敵に笑った。
「そうだぜ姉貴。あたしが全力を出せばジャップの奴らなんて簡単に殲滅できるぜッ！　それにあたしはジャップの新鋭戦艦より、新鋭空母の方と戦いたいぜ。コーラル海で姉貴を傷つけた上に、レキシントンを殺した日本空母『ショウカク』と『ズイカク』をなッ！」
最初の方は強気だったが、後半は辛そうに唇を噛みながらエンタ

ープライズは言う。それほど仲間の死が苦しいのだ。
この3人、それぞれバラバラな性格をしているがとても仲のいい姉妹なのだ。さらに姉妹であると同時に、大親友でもある。そんな仲のいい3人を見てフレッチャーも自然と笑顔になる。
「フランク。あんまり落ち込むなよ。レキシントンは戦ってるお前が好きだったんだ。そんな弱々しい姿なんか晒すんじゃねぇぞ。レキシントンをがっかりさせるのは絶対に許さないからな」
「そうだよ。今回は私達も司令の配下で戦うだもん。今度こそ絶対に負けない。私、司令の事を信じてるから。必ず勝ってくれるて信じてるから」
エンタープライズのかなり暴力的だが励ましの言葉と、ホーネットに純粋な気持ちにフレッチャーも静かにうなずき、まだ湯気の立っているコーヒーを一気に飲み干した。
力強い眼光で蒼い海を睨みつける。そんな彼を3人の少女達もじっと見詰める。
「来るなら来い日本艦隊。我々アメリカ合衆国海軍が返り討ちにしてやる」
フレッチャーの言葉に3人はうなずくと、強大な敵が迫っているであろう方向をじっと見詰めた。
蒼い空の下、アメリカ合衆国軍はパールハーバーの仇を討つ為、息を殺して日本軍を待ち構えていた。

第四章　第四節　一抹の不安（前書き）

《ヨークタウン》
ヨークタウン級航空母艦１番艦――空母『ヨークタウン』
愛称　ヨーク
出身　ニューポート・ニューズ造船所（アメリカ）
身長　１６５ｃｍ
髪型　長髪（金髪）
実年齢（１９４２年６月現在）４歳
外見年齢　１５、６歳
誕生日　９月３０日
好きなもの　姉妹・フレッチャー・祖国を守る事
嫌いなもの　戦争・敵攻撃隊・血を流す事
家族構成　妹・エンタープライズ・ホーネット
ヨークタウン３姉妹の長女。珊瑚海海戦で日本機動部隊と激戦の末に大怪我を負いながら、応急処置でミッドウェー海戦に参加。次女のエンタープライズと違って温厚で優しい性格。本当は戦争なんてしたくないのだが、祖国を守る為に必死になって戦っている。指揮官としてかなりの実力を持ち、珊瑚海海戦ではアメリカ機動部隊の旗艦として奮闘した。自分達第１７任務部隊司令官であるフレッチャー少将に絶対の信頼を置いており、彼の支えとなる事に喜びを感じている。

《エンタープライズ》
ヨークタウン級航空母艦２番艦――空母『エンタープライズ』
愛称　エンター
出身　ニューポート・ニューズ造船所（アメリカ）
身長　１６２ｃｍ
髪型　長髪（金髪）

実年齢（１９４２年６月現在）４歳
外見年齢　１５、６歳
誕生日　５月１２日
好きなもの　姉妹・アメリカ・航空機・日本人を殺す事・日本を焼け野原にする事・日本人の皆殺し
嫌いなもの　日本・日本人・黄色人種・特攻機・尻込みする奴・チャンスを他人に取られる事・甘いもの
家族構成　姉・ヨークタウン　妹・ホーネット
本作品のアメリカ側主人公にして艦魂年代史史上最強の嫌日家。自分のいない間に卑怯な手を使ってパールハーバーを攻撃し、仲間達を殺してきた日本を心の底から憎み嫌っている。日本人を殺す事を生きがいとし、日本人を皆殺しにする事を夢見ている。後年アメリカ艦魂の中からも批判が出た無差別爆撃も、彼女は日本に対してだけは賛成している。日本を破壊し、徹底的に焼け野原にする事に全力を注ぐ。性格は粗暴で暴力的。見敵必勝で見つけた敵は例え輸送船一隻でも日本の船なら徹底的に潰す。だが、反面とても仲間想いでその闘志溢れる姿に仲間からの信頼は厚い。彼女の口癖は「Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！」という過激なもの。尊敬する司令官はハルゼー提督という、本当に徹底した日本人嫌いなキャラである。

《ホーネット》
ヨークタウン級航空母艦３番艦――空母『ホーネット』
愛称　特になし
出身　ニューポート・ニューズ造船所（アメリカ）
身長　１５７ｃｍ
髪型　ツインテール（金髪）
実年齢（１９４２年６月現在）０歳
外見年齢　１３、４歳
誕生日　１０月２０日

好きなもの　姉妹・仲間・甘いもの
嫌いなもの　戦争・社会主義・誰かが傷つく事・辛いもの
家族構成　姉・ヨークタウン・エンタープライズ
ヨークタウン姉妹3番艦・空母『ホーネット』の艦魂。上2人の姉と年が少し離れていて、姉妹艦二隻の問題点などを修正したアメリカ海軍の最新鋭空母であった。誰とでも仲良くできる無邪気な性格をしている。温厚で優しく、誰にでも気軽に接せられるので、友達はとても多い。日本を嫌うエンタープライズと違い、彼女は日本と戦う事に疑問を持っている。むしろ自分達の真の敵はソ連だと考えている。ヨークタウン亡き後暴走するエンタープライズを必死に支える。

第四章　第四節　一抹の不安

一方、日本機動部隊はミッドウェー島を目指して深い濃霧の中を進んでいた。

汽笛が鳴り響く機動部隊。その中の旗艦『赤城』の会議室には各部隊の主力艦魂が集まっていた。

さあこれから会議を始めようとした刹那、

「赤城司令ッ！　これは一体どういう事ですかッ！」

飛龍がバンッと机を叩いて立ち上がった。まわりの艦魂達は飛龍のいきなりの激昂に戸惑っている。

そんな飛龍が睨み付けているのは涼しい顔でコーヒーを飲んでいる機動部隊旗艦である赤城だった。

「無線封鎖を解除するとはどういう事ですか！？」

先程、無線封鎖中なのに旗艦から無線で指示が入って来たのだ。無線を使えば敵に傍受され、こちらの動きが丸わかりになってしまい、今作戦の絶対必須の奇襲攻撃が強襲攻撃になってしまうからだ。

怒る飛龍に対し、赤城は涼しい顔をしながら彼女の問いに答える。

「それは私がした事ではない。南雲長官がやった事だ」

赤城はコーヒーを飲みながら静かに言う。その余裕な姿も今の飛龍をいら立たせる。

「だからと言って無線封鎖を解除するのは艦隊の存亡に関わる重大な事ですよッ！？」

「飛龍。少し落ち着きなさい」

蒼龍は怒りをむき出しにしている妹を止めるが、

「姉さんは黙っててッ！」

飛龍は一歩も引かない。そんな飛龍の剣幕に蒼龍はそれ以上口を挟めなくなった。

あまりにも理不尽な司令部の行動に飛龍の中で連戦連勝で浮かれている司令部に対する不満が爆発した。

「司令部は今作戦の重大性を全く理解してませんッ！」
飛龍は怒りで頭がどうにかなりそうだった。
そういった軽率な行動をする事によって艦隊将兵を危険な目に晒す事になってしまう。そんな事もわからない司令部――強いて言えば南雲に対する怒りは壮絶なものだった。
今にも腰の刀を引き抜いて襲い掛かってきそうな飛龍に対し、赤城はカップを置いてじっと飛龍を見据える。
「飛龍。これには理由がある。この濃霧の中艦隊は陣形を保たないといけない。今は汽笛の音で個艦の位置を知らせているが、艦隊を先程変針させた時だけはどうしても無線を使わなければ衝突が起こると思ったのだ。アメリカ軍には《れーだー》という艦艇の位置を感知できる物があるらしいが、我が軍にはそれがない。無線を使うしか手がなかったんだ」
「で、でも・・・ッ！」
赤城の理解できる理由を聞いても、飛龍は食い下がらなかった。
「でも・・・飛龍さん・・・・あの・・・」
その時、いつもはあまりこうした議論の中に入ってくるような、そもそも他人とあまり話さない霧島が口を開いた。
「この無線を聞いて・・・敵機動部隊がやって来れば・・・今作戦の第一段階が完了します。あの・・・その・・・一石二鳥だと・・・思いますけど」
霧島の声とても小さな声だったが、飛龍の激昂で静まり返った部屋ではその声もよく響いた。
「それもそうですね」
赤城も霧島の意見に賛同する。
今回の目的は二つある。軍令部と連合艦隊司令部の意向が合わず、二つの目的を果たさなければいけないのだ。
一つは軍令部が言ってきたミッドウェー島の攻略。
一つは連合艦隊司令部、つまりは山本長官が豪語する敵機動部隊の殲滅であった。

ミッドウェー島の攻略はおそらく問題はないだろうが、機動部隊は来てもらわなければどうしようもない。ならば霧島の言うとおり無線を傍受させてこちらに敵機動部隊を惹きつけられれば万々歳である。

霧島の説明に飛龍はまだ納得してなかったが、一応怒りを抑える事にして席に着いた。これ以上不毛な争いをしていては、実戦の際に問題が生じてしまうと思ったからだ。

静まり返った部屋では加賀がずっと作戦資料を見ていた。いつもはバカキャラだが、作戦実行中は軍人の顔になっている。

その後会議はスムーズに進んだ。皆今回の作戦に対しての意気込みはすさまじいもの。その為皆全員真剣に聞いているから早く済んだのだ。

赤城は話す事を全て言い終えると、自分を見詰めている艦魂達を見て静かにうなずく。

「攻撃地点には六月五日に到達する。到達後、すぐにミッドウェー島を空襲する。気を引き締めてやってほしい」

赤城の言葉に、全員はうなずいた。

これから始まるのは今までの戦いとは違う。

《決戦》なのだ。

負けは絶対に許されない。

だからこそ、皆全力で戦う事に意気込んでいる。

今、日本海軍の士気は史上最大にまで高まっていた。

解散となり散っていく艦魂達の中、飛龍は一人不安を感じていた。

だが、そんな飛龍に蒼龍がそっと笑みを送った。

「大丈夫よ。今までだってそうだったじゃない。だから、今度もきっと大丈夫。搭乗員達を信じてあげなさい」

蒼龍の優しい言葉に、飛龍も笑顔でうなずいた。

自艦に戻った飛龍は甲板に座っていた。

まわりは濃霧の為に何も見えない。確かにこんな状態で汽笛だけ

で艦隊の針路を変えれば衝突事故が起きてもおかしくはない。無線を使うのも仕方がないだろう。

だが、飛龍は心配していた。

開戦以来の連戦連勝で艦隊将兵の士気は大いに高まっている。だが、同時に油断というものも大きくなっている。

つまり、天狗になっているのだ。

こんな状態で敵が全力で反撃してくる戦いに赴いて、果たして勝利する事はできるのだろうか。

戦いとは何が起きるかわからない。

圧倒的な兵力を有していたとしても、それが少数に撃破される事がある。それが戦争なのだ。事実、少数精鋭で大軍に勝った例など世界には数多く存在する。

飛龍は最悪の予想をした。

機動部隊全滅・・・

慌てて首を横に激しく振る。

そんな事は絶対にない。絶対に起きたりなんかしない。

だが、そう心の底から信じる事は、できなかった。

油断だらけの機動部隊。

真珠湾と同等かそれ以上に重要な作戦なのに、『翔鶴』と『瑞鶴』の不参加による攻撃力の不足。

そして、いまだ未知数の敵機動部隊の攻撃力。

何もかもがわからない。

飛龍にとって、これから始まる戦いはまるでこの濃霧のように先が見えないものだった。

世の中に、答えがわかっている事なんて存在しないのだ。

「この戦い・・・勝てるよね・・・？」

不安げに飛龍はつぶやく。だが、返って来るのはもちろん波の音と風の音、そして汽笛の音だけだ。

甲板に座ってじっと濃霧を見詰める。こうしていれば何かヒントでも見つかるような気がしたのだ。だが、所詮は気。そんなものな

ど見つかるはずもなかった。
飛龍は小さくため息を吐く。すると、
「飛龍？　どうしたの？」
その声に振り返ると、そこには不思議そうな顔でこちらを見ている剣がいた。
「剣・・・」
飛龍の顔を見て、自然と剣の顔も真剣なものになる。
「どうしたの？」
剣はそっと飛龍の隣に腰を下ろす。
自分を見詰める剣に、飛龍は一瞬自分の心の中に押さえている不安を言ってしまいそうになった。だが、彼に余計な心配をかけたくなかった。
「な、何でもないよぉ」
飛龍は努めて笑顔を彼に送る。だが、剣はそんな飛龍の額にデコピンをする。
「い、痛ぃ・・・ッ！」
「まったく、お前は何でいつもそうやって一人で考え込むかな？」
涙目で自分を見る飛龍に、剣は少し怒ったような顔をする。
「僕とお前の仲だろ？　今さら隠し事はなしだ」
「剣・・・」
「ったくよ、何でお前は本当に大切な事だけはいつも隠そうとするんだ？　バレバレだってのにさ。お前が僕を不安にさせない為にそうしてるのかは知らないけどさ、僕にとってはむしろそっちの方が不安になるよ」
剣はそう言ってごろんと濃霧で灰色に染まった空を見上げる。そんな剣を、飛龍はじっと見詰める。
「まあ、僕が頼りないってなら言わなくてもいいけど」
「そ、そんな事ないよッ！　私、剣の事を本当に信頼してるんだよッ！」
「なら、何で言えないのさ」

「そ、それは・・・」
口ごもる飛龍。そんな飛龍の頭を、剣がそっと撫でる。
「剣・・・？」
驚いた目で自分を見る飛龍に、剣は優しく微笑んだ。
「まあ、言いたくないなら別に構わないさ。僕は一介の戦闘機乗りでしかないから、できる事には限界がある。僕の手の平小さいな」
「剣・・・」
「――でも、これだけは言わせて」
剣は自分をじっと見詰める飛龍に、とても優しい笑みを向ける。
たったそれだけでも、飛龍の心の中にある何かが、溶けていく。
そして・・・
「僕は、ずっと飛龍の味方だから」
たったそれだけの言葉。それだけで、胸がいっぱいになった。
「ひ、飛龍・・・？」
気づいたら・・・
彼に抱き付いていた。
自分は小さな存在でしかない。
たった一人でがんばろうとしれば、必ずできない事も生まれる。
だったら、誰かに協力してもらえばいい。
ただそれだけの事なのに、たったそれだけの事なのに、自分は今まで気づかず、必死にがんばってきた。
こうして、誰かの腕に支えられるのが、どれほど心を支えてくれるのか、考えた事もなかった。
だから・・・
「うっ・・・ひぐっ・・・」
いつの間にか、瞳からは涙が溢れ、頬を濡らしていた。
こんなにも自分の中に苦しみがあったなんて、全然気がつかなかった。
でも、もういんだ。
自分には、支えてくれる仲間がいる。彼がいる。

もう、泣いてもいいんだ・・・
小さく泣き続ける飛龍を、剣は何か言葉をかけたりもせず、励ましもせず、ただひたすら彼女の小さな身体を、抱き締め続けた。

同じ頃、蒼龍も刹那と共に防空指揮所に甲板にいた。
天気が良ければきれいな満月が見えるであろう夜も、今は濃霧で何も見えない。
「これは・・・思ったよりも見えないわね」
蒼龍は、刹那の腕を掴んでいた。何も見えない状況にあって、はっきりと感じられるのは、蒼龍の手の感触だけだ。その手はわずかに震えている。
蒼龍は暗闇が苦手なのだ。なのに、無理をして艦隊がどうなっているのかその目で見る為に外に出た。刹那はその際偶然にも出会って付き合っているのだ。
(泣きそうな顔を必死に隠しながら来てほしいなんて言われれば、ついて行くしかないよな)
震える蒼龍の手にそっと自分の手を重ね、震えを抑え込んだ。
少し驚いたのか、蒼龍は刹那を見た。
「実は、話があるんだけど」
努めて軽い調子で、刹那は言った。
「・・・何?」
「戦争が終わったら、僕は軍をやめるつもり」
「なッ!?」
驚く蒼龍。その表情は驚きのあまり青ざめている。だが、すぐに平静を取り戻すと、刹那に向かって詰め寄るように怒る。
「ど、どういう事よッ!?」
「どうって、言葉どおりの意味だよ」
「何で軍をやめるのよッ! あなたは優秀な戦闘機乗りじゃないッ!」
「それは違う。僕は普通だよ。ただ、今までは運が良かっただけさ」

「運も実力のうちよッ！　何でやめるのよッ！？」
蒼龍の殴り倒そうかというすさまじい迫力にも、刹那は引かない。
じっと蒼龍の瞳を見詰める。
「な、何よ・・・」
「僕は、本当は軍隊なんかに入りたくはなかったんだ」
「え・・・？」
「それでも軍隊に入ったのは、飛行機があったからなんだ。軍隊に入れば、飛行機の技術が学べるから、だから入った」
自分の腕を掴む蒼龍の手が再び震え出す。それは別の理由で震えているのだ。
「――僕は、民間機のパイロットになりたいんだ」
蒼龍の顔を絶望という感情に染まった。
そんな蒼龍の顔などに気づいていない刹那は、遠い目で灰色の空を見上げた。
「僕は、憎しみや悲しみを空に飛ばしたくない。僕は、笑顔を飛ばしたい。空を飛んで、蒼い空と白い雲を見て、嬉しそうに笑う人々が見たいんだ。だから――」
（聞きたくないッ！）
蒼龍は心の中で悲鳴を上げる。
だが、耳を塞ぐような事はしなかった。いや、できなかったのだ。
彼の本当の気持ちを、聞きたいという想いもあったからだ。
そして・・・
「僕は軍隊をやめる。そして、旅客機のパイロットになるんだ」
「・・・させない」
隣から聞こえてきた小さな声に、刹那は「え？」と振り向く。
そこには、キッと自分を睨み付ける蒼龍が。その瞳は濡れていた。
「絶対にそんな事させない・・・ッ！　私は、あんたを降ろす気は絶対にないからッ！」

「そ、蒼龍・・・？」
彼女なら賛成してくれると思っていた刹那は、予想外の彼女の言葉に驚く。
蒼龍はいきなり刹那の胸倉を掴むと、睨み殺しそうな鋭い眼光で刹那を睨む。
「戦いに背を向けるなんて、刹那は非国民よ」
「ち、違うよッ！　言っただろッ？　戦争が終わったらの話だ！」
「例えアメリカとの戦争が終わっても、まだ中国やロシアが残ってるッ！　世界から戦争が消える事なんて絶対にないッ！　この大東亜戦争が終わっても、あなたにはまだ戦ってもらうわよッ！」
「い、嫌だよッ！　僕は民間の――」
「絶対にダメッ！」
蒼龍の高圧的な言葉に、刹那もいら立つ。
「何でダメなんだよ。僕以外にも優秀な戦闘機乗りはたくさんいるだろッ！　何で僕じゃなきゃダメなんだよッ！」
「そ、それは・・・ッ！」
蒼龍は口ごもる。
言える訳がない。
そんな事、言える訳がないじゃないか。
黙ってしまった蒼龍に、刹那は自分の胸倉を掴んでいる彼女の手を剥がす。
「とにかく、僕はやめる。何があろうと、旅客機のパイロットになるのが、僕の夢なんだから」
刹那の言葉に、蒼龍の中で何かが崩れた。
もう何もかもどうでもいい。
もう好きにしてほしい。
そんな気持ちが、心の中から湧き出した。
「・・・勝手にすれば」
「蒼龍・・・」
蒼龍は刹那に背を向けると、苦手な暗闇の中に消えていった。

その背中は、刹那が今まで見た事もないほど、小さく、簡単に折れてしまいそうなものだった。
「蒼龍・・・」
残された刹那はその場に立ち尽くすしかなかった。

一方、旗艦『赤城』の防空指揮所では赤城がぼーっと立っていた。
思うのは、飛龍の言っていた言葉。
確かに、兵達の油断はかなりある。敵を過小評価している所もある。
だが、自分は南雲長官を信じていた。
あんなに兵達の事を想ってくれる指揮官を、信じたかった。
でも、彼女が言ったように、彼は仲間を危険に晒すような事をした。
一体何を信じればいいのか、わからなかった。
「まあ、深く考えない方がいいわよ」
そう言ったのは隣にいる加賀だった。
赤城の様子がおかしい事に気づいた加賀は、こうして赤城を尋ねてきたのだ。赤城はそんな幼なじみに自分の葛藤を話したのだ。
そして、返ってきたのはそんな無責任な言葉だった。
「やっぱりあんたに話したのが間違いだったわ」
呆れる赤城。
いつも楽観的な加賀にこんな難しい話をしてもダメだって早くに気づけば良かった。
一方、加賀は呆れる赤城を怒ったように見詰める。
「あんた、何か勘違いしてない？」
「何がよ」
あんまり関心がなさそうな赤城に、加賀はため息する。
「な、何よ、そのため息は」
「あんた、私が適当な事言ったなんて勘違いしてない？」
「勘違いじゃないでしょ？」

「まったくあんたは」
加賀は赤城の肩を掴むと、いつになく真剣な顔で見詰める。そんな幼なじみの顔に赤城は驚く。
「人は何か必ず迷うものなの」
「私は人じゃないわ」
「そういう揚げ足は取らないの。私が言いたいのは誰でも必ず迷うって事。それは決して避けられないもので、いつか必ず選択の時が来る。でも、あんたの悩みはまだ決断の時じゃないわ。今私達が考えるのは、この戦いの勝つ事、違う？」
赤城はハッとする。
そうだ。自分には責務がある。
必ず、この作戦に勝利する事。
今の自分はただそれだけなのだ。
迷っている暇はないのだ。
「加賀・・・」
自分に大切な事を気づかせてくれた親友は、優しげな笑みを向けていた。
「やっといつもの赤城に戻ったわね」
「加賀・・・私・・・」
「あーもう、礼とか謝りはなし。私とあんたの仲でしょ？」
「加賀・・・」
嬉しそうに微笑む赤城に、加賀も優しく微笑んだ。その時、
「おーい、赤城ー！」
下の方から声が聞こえた。その声に赤城と加賀は互いに顔をほころばせる。
「ほら、彼氏が呼んでるわよ」
「べ、別に彼氏って訳じゃないわよ・・・でも、ちょっと行ってくる」
そう言う赤城は頬を赤らめていつもは見せない《女の子》の顔になっていた。

防空指揮所から降りていく親友を見詰め、加賀は微笑む。
「いってらっしゃい」

機動部隊は確実にミッドウェー島に向けて進んでいた。

その頃、機動部隊より後方数百キロ地点を進む主力部隊に、ある情報が入って来た。
「報告します！　敵信傍受班がミッドウェー島北方海域に敵空母から発進されたらしき無線を傍受しました！」
通信兵の報告に、山本は目をつむった。
「やはり、出て来おったか」
「長官。この情報を機動部隊に知らせますか？」
宇垣の質問に、山本は答えなかったが、参謀の一人がそれを否定した。
「参謀長。今は無線封鎖中です。むやみに無線を使っては味方を殺すようなもの。報告はしないでいいと思います。それに、一航戦（第一航空戦隊）は連合艦隊から優秀な敵信傍受班を派遣してあります。当然『赤城』もこの情報を捉えているでしょうから、特に知らせる必要ないと思います」
「・・・そうだな」
参謀の言葉に、山本も了解した。
しかし、実際には機動部隊はこの情報を知らず、ギリギリまで敵機動部隊の存在を知らなかった。
山本達が話している所から少し離れた所に、翔輝と大和はいた。
翔輝は不安そうに顔を曇らせる。
「大丈夫かな？　赤城達ちゃんとわかってるといいけど」
「たぶん、大丈夫だと思います。あの参謀の言った通り『赤城』『加賀』には一流の敵信傍受班が配置されてます。とっくに傍受してるでしょう」
「・・・そうだといいけど」

大和の言葉にも不安を拭いきれない翔輝に、大和が心配そうに問う。

「不安なんですか？」

「うーん、どうだろ？　でも。何か嫌な予感がするんだ」

「変な事言わないでください」

弱気の翔輝を、大和は一喝する。

こんな弱気な翔輝は初めてだった。

翔輝はしばし考え込むが、すぐにいつものような笑みに戻る。

「そうだな。考え過ぎだよね」

「そうです。今は赤城さん達を信じて待つんです」

「あぁ、わかった」

翔輝と大和は互いを見合って優しく微笑み合った。

――しかし、この翔輝の予感は、最悪の形となって現れた。

第四章　第五節　バトル・オブ・ミッドウェー

一九四二年六月五日、ミッドウェーの長い一日が始まった。

『山本連合艦隊司令長官より無電！『皇国ノ荒廃此ノ一戦ニ在リ。各員一層奮励努力セヨ』！』

連合艦隊司令長官直伝の激励に、艦隊の士気は最高潮に高まる。

さらに、Z旗（意味は山本長官の激励文と同意味）も各艦艇のマストに掲げられ、この戦いの重要性に相応しい旗だった。

空母『飛龍』の甲板には大勢の搭乗員が整列していた。その全員が飛行長から作戦の概要一つを聞いている。

「搭乗員搭乗開始！　諸君らの健闘を祈る！」

「敬礼ッ！」

飛行長からの説明を終えた搭乗員達は敬礼して彼にあいさつすると、それぞれ自分の愛機に向かって走り出した。

空には薄っすら明かりがあるだけで、まだ夜明け前だという事を表していた。そんな明かりに照らされる四隻の空母の甲板には零式艦上戦闘機、九九式艦上爆撃機、九七式艦上攻撃機が勇ましく並んでいた。

「剣ッ！」

自分の愛機である零戦に乗ろうとした剣に、飛龍が駆け寄って来た。今は多くの兵達が甲板にいるので、それを高速ですり抜けてくる飛龍に剣は驚く。さすがは艦魂だ。

「飛龍？」

いったん翼の上から降りると、そこへ飛龍が駆け寄ってきた。

「どうしたの？」

自分を見詰めて肩を激しく動かしている飛龍に剣は不思議そうに問う。すると、飛龍は軍服のポケットから何かを取り出し、そっと剣の手に握らせる。

「これ、受け取って」
そっと手を開けると、そこにはいたって普通の御守りがあった。
「これは？」
そう聞くと、飛龍はなぜか恥ずかしそうに頬を赤らめて顔を伏せる。
「えっと・・・弾除けの御守り・・・だけど」
「・・・あぁ、御守りには《恋愛成就》って縫ってあるけど」
「そ、それは気にしないで。それはちょっと訳ありで・・・」
飛龍はなぜか視線を逸らす。きっと何か人には言えない事情があるのだろう。
剣はそんな飛龍の頭を撫でて笑顔を向ける。
「あ、ありがとう」
剣はそっと御守りを首にかける。すると、飛龍が抱き付いてきた。
「ひ、飛龍？」
「生きて帰って来て」
「え？」
顔を上げると、飛龍は真剣な眼差しで自分を見詰めた。
「必ず、生きて帰って来てね。私、それだけで十分だから」
そう言う飛龍の身体は小さく震えていた。そんな震える身体を剣は優しく抱き締める。
「ありがとう。必ず帰って来るから、安心して」
そう言うと、飛龍は嬉しそうに笑みを浮かべる。
「約束だよ」
「ああ、約束だ」
剣と飛龍は互いの瞳を見つめ合うと、静かに微笑み合った。
剣は飛龍の身体をそっと離すと、愛機である零戦に乗り込む。
プロペラが轟音を立てて回り出し、今まさに荒鷲達は出撃の時を待っていた。
今や『飛龍』だけでなく、『赤城』『加賀』『蒼龍』の全空母が同じ状態。

防空指揮所に移った飛龍は甲板を見詰めている。空母が輝くのはこの瞬間。甲板を艦載機で埋め尽くした時だ。

「攻撃隊発進！」

そして、第一次攻撃隊が飛行甲板を滑走して次々に発艦して行く。空母兵や第二次攻撃隊の搭乗員が帽を振って見送る。

空には埋め尽くすような艦載機の群れがきれいな編隊を組んで飛んでいく。

そして、ついに剣の零戦も滑走を始めた。

「剣ッ！　必ず帰って来てよッ！」

飛龍は軍帽を大きく振って剣の零戦を見送る。

零戦は甲板から車輪を離すと、大空に向かって飛び立った。

飛龍はそれでも大きく軍帽を振り続ける。

まだ夜も明け切らぬ空に、赤い日の丸を付けた数百の攻撃隊が舞い上がり、そして消えて行った。

飛龍は防空指揮所からその光景をずっと見詰め、攻撃隊が空に溶けていくいまでずっと帽を振っていた。

そして、攻撃隊は見えなくなり、飛龍は軍帽を被り直し、天空を見上げる。

「ついに、始まった・・・」

――バトル・オブ・ミッドウェーが――

第一次攻撃隊はミッドウェー島目指して進み続け、ついにその姿を雲下に確認した。

「あれがミッドウェー島か・・・」

剣は眼下の小さな島々を見てそうつぶやいた。

小さい。本当に小さい。

真珠湾に比べたらそればまるで豆粒のような島々であった。

本当にこんな島を攻撃して敵機動部隊が現れるのだろうか。

剣はじっとミッドウェー諸島を見詰める。その時、前方を飛ぶ隊

長機が増槽を捨てて機首を上げて上昇して行った。その行動に目を向けると自分達の上空に無数の敵戦闘機が編隊を組んでいた。

「迎撃機!?　そんな、奇襲攻撃のはずじゃ・・・ッ!」

今回のミッドウェー作戦は奇襲攻撃から始まるはずだ。だが、迎撃機が舞い上がっているという事は、強襲攻撃となる。

奇襲と強襲。どれだけ危険な戦いになるか、想像するだけでぞっとする。

上空に待機していた敵戦闘機隊は次々に機体を返して流星のようにダイブして来る。空中戦の基本である上空を取られた。状況は極めてまずい。

「くそッ!」

剣は急いで燃料増槽を落として操縦桿を思いっ切り引いた。

剣の零戦は一瞬で機首を上に向けると、敵戦闘機の大群の中に突っ込んでいった。

攻撃隊はミッドウェー島を奇襲――ではなく強襲した。

米軍の防空能力は予定よりも数倍以上高く、攻撃隊は敵対空砲火、敵戦闘機のすさまじい猛反撃に遭い、予定より敵陸上施設を破壊できず、爆撃の効果不十分と見た第一次攻撃隊隊長の友永丈市大尉（ともながじょういち）は、『第二次攻撃隊ノ要在リト認ム』と打電した。

第一攻撃隊隊長の打電を受け、機動部隊司令部は、旗艦『赤城』で話し合いをしていた。

「第二次攻撃隊をミッドウェーへ?」

航空参謀が驚いたように作戦参謀に聞く。

「そうだ」

作戦参謀ははっきり答えた。

「それは違うな作戦参謀。我が機動部隊としては、敵の機動部隊を捕捉撃滅する事が、一番に重要な事だ」

航空参謀の言葉に、戦術参謀が腕を組みながら言う。

「しかし、索敵機が出撃してもう数時間経つ。とっくに索敵範囲の前端に行き着いているのに、何の報告もない。航空参謀。これは当然、攻撃範囲に敵艦隊はおらんと判断すべきだ」
「いやしかし、今日は一段索敵だからな。出たのは夜明け前で、索敵範囲の前端でようやく視界が開ける。参謀長。とっくに敵艦隊の上空を通り越してる事もあります」
航空参謀の意見に、草鹿は黙ったままだった。
「しかし、敵信班も真珠湾前面に配備した潜水艦からも、敵艦隊が動き出しているような傾向はまだ報告して来ない」
通信参謀がはっきりとした口調で言う。その言葉に、作戦参謀は呆れたように言う。
「とにかくだな、何度も言ってる通り、明日には陸戦隊と陸軍部隊がミッドウェー島に上陸を開始する。しかし、空襲効果の不十分なこの状態では上がれないじゃないか」
「問題は、敵の機動部隊がどこにいるかだが」
草鹿の言葉に、一瞬沈黙したが、参謀副長が口を開く。
「通信参謀。敵機動部隊出現の兆候はまだないな？」
「はい。何の判断資料も掴めてはおりません」
通信参謀の言葉に、南雲は決意した。
「よし、ミッドウェーを叩こう」
「了解。しかし、山本長官は、第二次攻撃隊を対敵機動部隊攻撃部隊とするから、攻撃機の装備は魚雷のまま変更するなと言っておりましたが」
「構わない。ただちに第二次攻撃隊の雷装を爆装に切り替えろ」
「了解」
草鹿は参謀達に向き直り、命令した。
「第二次攻撃隊はミッドウェー島を攻撃するッ！　攻撃機の装備は魚雷から爆弾に切り替えろ！」
『了解！』
参謀達が動き回り、伝声管に次々命令を出した。

『第二次攻撃隊の攻撃目標を、ミッドウェー島に変更するッ！　攻撃機の装備は魚雷を爆弾に切り替えろ！』

その様子を、赤城は表情を変えずに見守っていたが、自分としては、第二次攻撃隊の雷装を爆装に変更するは反対だった。

「どうした赤城？」参謀の一人が赤城を心配そうに見る。

「別に。問題ない」

「そうか」

彼の名は伊達俊介（だてしゅんすけ）少佐。例の赤城の恋人（？）である。

伊達は赤城をそっと抱き寄せる。

赤城はほんのり頬を赤く染め、普段艦魂達には見せない《女の子》の顔になっていた。

『旗艦より発光信号！『第二次攻撃隊ヲ以ッテミッドウェー空襲ヲ行ウ。攻撃機ノ魚雷ハ陸用爆弾ニ変更セヨ』！』

その報告に、飛龍は愕然とする。

「な、何を考えてるんだ司令部は・・・ッ！」

無線封鎖を解除しただけでなく、山本長官の命令も無視するとは。

「ったく！　何考えてるんだ司令部は！？」

飛龍と同意見な言葉を吐いたのは山口だった。

山口はキッと旗艦『赤城』を睨み付ける。そんな山口に、諦めたような顔で近づく加来。

「命令とあれば、仕方ありません。ただちに第二次攻撃隊の雷装を爆装に変更します」

加来はただちに命令した。

飛龍はせっかく甲板に並んでいた第二次攻撃隊が格納庫に収容されていくのを見て悔しそうに唇を噛んだ。

「瑞鶴が言ってた。航空戦は時間が命なのに・・・ッ！」

飛龍は強く拳を握った。

もし、こんな事をしていて敵に攻撃されれば、セイロン沖海戦と全く同じ失敗を犯す事になる。しかも今度は弱敵英東洋艦隊ではな

く、強力な米機動部隊である。その攻撃力と被害は未知数だ。
「南雲長官・・・ッ！」
飛龍は前方を走る旗艦『赤城』を睨む。だが、所詮自分には睨む事しかできなかった。
こうして、第二次攻撃隊は雷装を爆装に変更した。

『敵機来襲ッ！』
その声に蒼龍はハッと空を見上げる。
空はいつものように晴れ渡っていた。が、雲の向こうから数十機の敵機が現れた。
『対空戦闘用意ッ！』
蒼龍はいつものように防空指揮所にいた。慌てて空いている双眼鏡を覗くと、敵機の機種が確認できた。
「四発爆撃機・・・陸軍機か」
それは米陸軍の主力重爆撃機であるＢ－１７（フライングフォートレス）であった。
蒼龍は安堵した。もしあれが敵機動部隊から発進した艦載機なら兵装転換は無駄で、敵空母を攻撃するのに新たに時間が掛かってしまうからだ。
蒼龍は迫る敵機を見詰める。あの程度の敵なら、艦隊の対空砲火でも十分撃破できる。
その時、意気込む蒼龍の上を一機の零戦が通り抜けた。
「刹那・・・」
それは上空直援に上がっていた刹那の零戦であった。
刹那の零戦は艦隊を襲おうとしている敵機に突っ込み、瞬く間に二機撃墜した。今度は反転し、自分に向かってきている敵機を撃ち落とす。
再び敵機に向かう零戦を見詰める蒼龍はあまり嬉しそうではなかった。
今、自分は彼に守られたというのに、それが全然嬉しくもない。

むしろ、民間機のパイロットになりたいという軟弱な夢を持つ奴に助けられた事に怒りを感じていた。
「刹那・・・」
敵機群の中で暴れまわる一機の零戦を見詰め、蒼龍は悲しげにため息した。

「左三〇度より魚雷二本接近ッ！」
『赤城』の艦橋に響いたのは見張り兵からの悲鳴であった。
青木は急いで回避行動を取ろうとした。その時、
「艦長、操艦もらうぞ」
「ちょ、長官ッ！？」
伝声管に命令を叫ぼうとした青木の肩を押し、南雲が伝声管の前に立った。そして、
「取舵いっぱぁぁぃッ！」
南雲の声に合わせて『赤城』は左に回避。見事魚雷を回避した。
続いて魚雷一本が右舷から迫った。
「面舵いっぱぁぁぃッ！　よぉそろうッ！」
これまた見事回避。
南雲はその後も操艦を続け、なんと魚雷八本を見事回避してみせた。
敵機が去り、南雲はようやく青木に操艦を返した。
驚く艦橋の者達に、南雲は自慢げに笑った。
「私の本業は水上戦だ。これくらいの魚雷が回避できんでは艦隊を殺す事になるからな。まあ、私の腕ならこれくらいは当然だ」
その言葉に、艦橋からは拍手が上がった。その中には赤城もいた。
やっぱり自分達をここまで導いてくれた南雲に、改めて感謝した。

襲って来たのはミッドウェー島を発進した攻撃隊であった。
攻撃隊は戦闘機の護衛がなかったので、零戦の敵ではなく対空砲火とで全機撃墜した。

そして、第二次攻撃隊はなんとか雷装を爆装に変更した。その直後だった。

「偵察機より無電！『敵ラシキモノ十隻見ユ、ミッドウェーヨリノ方位十度二四〇浬地点』！」

その報告に、機動部隊司令部に戦慄が走ったが、この情報だけでは敵艦隊がどういう部隊になのかわからないと『艦種知ラセ』と打電すると、しばらくして『敵兵力ハ巡洋艦五隻、駆逐艦五隻ナリ』と返答があり、安堵した。

『飛龍』艦橋でも胸を撫で下ろしていた。

「やっとの事で魚雷を陸用爆弾に取り替えて、これからミッドウェーに出かけるところでしょ？　今空母に出てこられたら、それこそ一大事ですよ」

加来の言葉に、参謀長はうなずく。

「二四〇浬じゃ、あっという間に艦載機が殴りこんで来るしな」

安堵する参謀達に対し、山口は報告書を見詰めたまま考え込んでいた。

「司令？」

加来が心配そうに聞くと、山口は静かに言った。

「しかしおかしいな。空母を伴わずに敵艦隊が出て来るなんて・・・空母を・・・伴わず・・・」

山口の言葉に、飛龍も同意見だ。

今ミッドウェー島が航空機で襲われているという事は、自分達日本機動部隊が現れたという事だ。その実力は開戦以来半年の南方作戦でアメリカは痛いほどわかっているはず。なのにそんな強力な部隊に対し向けてきたのは小規模な巡洋艦部隊。そんなの無敵の日本機動部隊の前では蹴散らされる事など一目瞭然なのに、米軍はわざわざそれを向けてきたというのだろうか。

「おかしい。何かがおかしい。一体何を考えているの、アメリカ軍は」

飛龍は何か嫌な予感がしてならなかった。

とても嫌な、最悪の事態が起きるかもしれないという不安に胸が押し潰されそうになる。
最悪が迫っている。
飛龍はそう直感した。
「一体、何が起きるの？」
飛龍は不安げに震える小さな声で空に問うた。
そして、飛龍不安と山口の疑問は、最悪の形で現れたのだった。

「偵察機より無電！　偵察機より無電！」
艦橋に転びそうな勢いで通信兵が駆け込んできた。その顔は絶望という感情に真っ青に染まっていた。
「どうした？」
山口の問いに、兵は震える声で報告書を読み上げる。
「『先ニ発見セル敵ハ、後方ニ空母三隻ノ機動部隊ヲ伴ウ』！」
通信兵の言葉に、『飛龍』艦橋はこの世のものとは思えない戦慄が走った。
「空母、三隻！？」
参謀の一人が悲鳴のような声で叫んだ。
「くそッ！」
山口も悔しそうに唇を噛むと、壁を思いっ切りぶっ叩いた。
「そ、そんな・・・」
飛龍は頭が真っ白になり、力なくその場に崩れ落ちた。まさかこんな最悪の事態になるとは思ってもみなかった。
山口は唇を噛みながら、慌てふためく参謀達に命令を出す。
「至急、待機している艦爆隊を出撃させよッ！　続いて陸用爆弾装備の艦攻隊を敵空母に向けるッ！」
山口の命令はすさまじいものだった。それは航空戦の常識を覆す命令だったからだ。
「艦爆隊に続いて、陸用爆弾のままの攻撃機をですか！？」
「そうだ」

航空参謀は驚愕した。
「しかし司令。陸用爆弾のままの攻撃では、ほとんど効果が挙げられないと思いますが」
参謀長の言葉に、山口はうなずく。
「だが相手は空母だ。飛行甲板さえ粉砕すれば艦載機は発艦できん。それで十分だ」
「では戦闘機の掩護はどうします？　大部分は今機動部隊の上空直衛に上がってますが。それを全機収容していては時間が掛かります」
そう。攻撃隊に付けた戦闘機、上空に上がっている戦闘機で機動部隊の戦闘機は全部である。今手元には第二攻撃隊に付けられる戦闘機がない。手はずでは上空直掩の戦闘機を収容して付ける予定だったからだ。
だが、そんな参謀長の言葉に、山口は恐るべき発言をした。
「航空参謀。裸で行こう」
それは戦闘機の護衛なしの攻撃隊を向けようという壮絶にして無茶苦茶な命令だった。
「しかし護衛戦闘機のない攻撃隊の運命は、さっきのアメリカ軍の攻撃隊がいい例です。攻撃隊にもそんな運命を与えよというのですか？」
参謀長は反対だった。しかし、
「わかっている。だが、現在の行動は、敵空母を一刻も早く全滅する事だ。三機でも五機でもいい。付けられるだけの戦闘機を付けて向けよう」
山口の固い決心に、参謀達はうなずいた。
参謀達は次々に命令を発し始める。そんな部下達を一瞥し、山口は空を見詰めた。
一方、絶望的な状況に落ち込んでいた飛龍だが、山口の溢れるような闘志に勇気付けられ立ち上がる。その瞳には闘志が宿っていた。
「司令。私は司令が指揮官で本当に嬉しいですッ！」
飛龍は見えぬ敵機動部隊を睨みつけた。

この海の向こうに、自分達を狙っている敵機動部隊がいるのだ。
このまま時間だけが過ぎれば、敵に先手を打たれてしまう。そうなれば、いくら強力な防空態勢を整えているこの艦隊でも、必ず被害が出てしまう。
敵が狙うのは同じ空母。
姉か、赤城か、それとも加賀か。いや、もしかしたら自分かもしれない。
誰が、どこで、いつ殺られるかがわからない。それが戦争である。
「このまま、ただ殺られるのを待つほど、私達は甘くない」
飛龍はそう言うと、真珠湾以来勇ましい指揮で自分達を導いてくれた闘将山口司令官の背中を頼もしげに一瞥し、再び海の向こうを見詰めた。

第四章　第六節　運命の五分間

その頃、最も大混乱していたのは旗艦『赤城』の司令部だった。
「参謀長、第二次攻撃隊を、このまま敵空母に向けましょう！」
参謀副長が焦りながら草鹿に意見を出した。だが草鹿は首を横に降る。
「陸用爆弾で艦船攻撃をやっても効果はない！」
「甲板に穴を開ける事くらいはできます！」
「それじゃあ空母を叩き潰す事にはならん！　第一このまま出しても戦闘機が付けられん！　戦闘機のない攻撃隊は死にに行くようなものだ！　例としては、早朝より二派三派と来襲してきた六、七〇機の敵攻撃機も、護衛戦闘機を伴わない為に、そのほとんどが味方機に撃墜されている。それと同じ戦法を取る事はできん！」
草鹿も焦っていた。
すでに敵の刃は自分達ののど下に向けられている。一刻の猶予もない。
参謀副長は動揺している参謀達を見て、再び草鹿に訴える。
「しかしこのままやられるよりはマシでしょう！」
参謀副長が悲痛な声で叫んだ。その時、
『『飛龍』より発光信号！『飛龍』より発光信号！』
見張り兵の声が伝声管を伝わって艦橋に響いた。
『発、山口司令官！　宛、南雲司令長官！『直チニ発進ノ要有リト認ム。直チニ発進ノ要有リト認ム』！』
それは山口からの怒涛の攻撃要請であった。その力強くも無謀な攻撃要請に、参謀達は驚愕する。だが、参謀副長は、
「私も同感です」
真剣な瞳で草鹿を見詰める。草鹿はそんな参謀副長の決意に、沈黙する。
参謀副長は考えを渋る草鹿から沈黙を続ける南雲に向き直る。

「長官、ご決断を」
参謀副長は南雲のの言葉を待った。しかし、南雲は蒼い空を見詰めるだけだった。
「長官！」
「長官」
迫る参謀副長を押さえ、草鹿も南雲に決断を迫った。しかし、草鹿は参謀副長とは正反対の意見だった。
「長官、空母は魚雷で、魚雷で叩くべきです」
草鹿は力強く言った。
それは航空機を長きに渡って学んできた草鹿が絶対に譲れない常識であった。
大型艦艇は魚雷で攻撃してこそ撃沈できる。それは航空機の――いや、水上戦闘での最も有効な攻撃手段、それが魚雷なのだ。
「長官」
草鹿や参謀達の声にも、南雲は空を見上げるばかり。
不気味な沈黙の中、南雲は静かにうなずき皆に振り返った。
「私の出身は水雷畑だ。魚雷の恐ろしさを、徹底的に学んできた。だからこそ、敵空母を叩くのは魚雷だと思っている。だが、今は一刻を争う。ならば、例え陸用爆弾でも一時的に敵の戦闘能力を奪う事はできる」
「では、長官」
参謀副長が南雲を見詰める。だが、南雲は首を横に降る。
「しかし、戦闘機のない、裸の攻撃隊など出す訳にはいかん。陛下よりお預かりしている将兵を・・・私の大切な部下達を、むざむざ無駄死にさせる事などできん。ましてや、兵士のバランスも取れん攻撃機隊を出すなど、その攻撃戦果も挙がらん」
「長官・・・」
草鹿以下参謀達が南雲を見詰める。
南雲は静かにうなずくと、参謀達に命令した。
「ただちに攻撃機の爆装を雷装に変更せよ。だが戦闘機の収容を最

優先。戦闘機の用意ができ次第逐次攻撃隊を発進させよッ！」

『了解！』

南雲の命令に草鹿達は敬礼すると、ただちに命令を各空母へと送る。

「至急各班に命令ッ！　第二次攻撃隊は、敵機動部隊に向かうッ！　爆弾をやめ、魚雷とせよッ！　さらに上空直衛機を急速収容ッ！　全力を挙げて敵機動部隊に向かうッ！」

参謀達が走り回り、伝声管に命令を出し始めた。

赤城は南雲の決断には司令官としては反対。しかし、軍人としては賛成という複雑な心境だった。

確かに、戦闘機のない攻撃隊など出したくはない。だが、このままでは機動部隊壊滅という非常事態にもなってしまう。

苦渋の決断である。

「赤城・・・」

今の赤城には伊達の姿は見えていない。今、彼女はすさまじい葛藤をしていた。

ギュッと拳を強く握り、甲板から格納庫に消えて行く第二次攻撃隊を見詰める。

「早く、早く兵装転換が終わって！」

赤城は祈るように甲板を見詰め続けた。

「『上空直衛機ヲ急速収容。全力ヲ挙ゲテ敵機動部隊向カウ。艦隊針路ハ五〇度ニ変更。待機中ノ第二次攻撃隊ハ至急艦戦攻撃兵装ニ変更』」

その命令文を聞き、参謀達はただちに指示を出し始めた。だがそんな中、飛龍と山口は同じ、辛そうな目をしていた。

「時間がないというのに・・・司令部は一体何を考えているのだ・・・ッ！」

山口は悔しそうに甲板を睨み付ける。そこでは命令に従って並び始めたばかりの攻撃隊を再び格納庫に戻している最中だった。

艦橋の窓から格納庫に消えて行く艦載機を見詰め、飛龍はギュッと拳を握った。

「こんな事してたら、間に合わなくなる！」

飛龍は必死だった。

命令どおり兵装の転換をしていては敵空母に先手を打たれてしまう。何より先程ミッドウェー島から攻撃隊が襲って来た。という事は敵機動部隊にもこちらの位置情報が入っていてもおかしくはない。事は一刻を争っている。

ふと遠くを翔ける『蒼龍』を見た。『蒼龍』の甲板でも並べられていた艦載機が格納庫に収容されていた。

「姉さん。私、どうすればいいの？」

飛龍は泣きそうな顔で姉の姿を見詰めた。

自分には何もできない。

艦魂は艦の魂なのに、この艦体（からだ）は、自分の意思では動かないのだ。

自分はいつも第三者でしかなく、傍観者でしかない。

自分はいつも見ているしかできない。

何かしたくても、自分では何もできない。これほど苦しいものはない。

飛龍は悲しげに瞳を揺らすと、まだ蒼い空を見上げた。

この時、蒼龍も同じ事を考えていた。

『蒼龍』艦橋では、蒼龍が軍刀を床に着いて葛藤していた。

「南雲長官。それでいいのですか？　本当にそれでいいのか？」

南雲の判断は甲乙付けがたいものだ。だが、蒼龍としては南雲の決断には反対だった。時間との戦いである航空戦でその時間を犠牲にするというのは本末転倒である。

セイロン沖海戦の教訓を、司令部は生かしていないのだ。

蒼龍は悔しそうに机の上に置かれた兵装転換の命令書を見詰める。

ふと窓の外を見ると、刹那の零戦が敵雷撃機を警戒して低空飛行をしているのが見えた。

蒼龍はそれを一瞥すると、今度は遠くにいる『飛龍』を見て、すぐ傍にいる敵空母の存在を恐怖に感じる。
「せめて、妹だけはお守りください」
蒼龍は胸の前で手を組んで必死に祈った。
もはや、彼女には神頼みしかできなかった。

再び攻撃機の爆装を雷装に転換する事になった機動部隊。
整備兵達は搭乗員や空母兵などと協力して急いで兵装の転換を行った。
だが、機動部隊の不運はまだ続いた。
ミッドウェー島を攻撃した第一次攻撃隊が戻って来たのだ。これにより状況はさらに悪化した。
まず第一次攻撃隊を収容し、続いて第二次攻撃隊の兵装の転換を行い、そして甲板に並べるという恐ろしく時間の掛かる作業となった。
四空母はどこもかしこも大混乱となっていた。
「飛龍ッ！」
「剣！？」
戻って来た第一次攻撃隊には剣の姿もあった。だが、彼は大慌てになっている艦内を見て漠然とした。
「い、一体どうなってるんだ？」
「敵空母を発見したそうです」
「何だってッ！？　だったらすぐにも攻撃隊を出さないと！」
「それが――」
飛龍は彼がいない間に起きた出来事を離した。それを聞いた剣は驚愕する。
「そ、そんなッ！　このクソ忙しい時に兵装の転換だなんてッ！　何で爆装のままの攻撃隊で行かないんだッ！」
「わかんないですよッ！　私にだって何がなんだか！」
慌てふためく剣に、飛龍も頭を抱えて叫ぶ。状況が全然わからな

いのはむしろ飛龍自身である。
「一体、何がどうなって・・・」
発狂しそうな飛龍を見て、剣は我に返る。
（ここで僕が慌ててたら飛龍も慌てる・・・ッ！）
「飛龍。とにかく僕は兵装の転換を手伝ってくるッ！　お前も力を貸してくれッ！」
「わ、わかりました」
飛龍は剣に手を引かれて格納庫に向かった。だがそこは甲板の混乱をはるかに上回るもう一つの戦場だった。
「急げ！　急いで爆装を雷装に切り替えるんだ！」
格納庫はすさまじい事になっていた。整備兵はもちろん搭乗員や空母の一般の兵達までが動き回って兵装の転換を行っている。
今や『飛龍』だけでなく、『赤城』『加賀』『蒼龍』の全空母が同じ状態だった。
「急げッ！」
「班長！　取り外した爆弾はどうすれば！？」
「ほっとけ！　今は急いで魚雷を装着するんだ！」
「はいッ！」
兵達が全速力で格納庫内を動き回っている。
格納庫の中には雷装前の飛行機や、雷装が完了した飛行機、爆弾、魚雷等が大量に放置されていた。
「とても間に合いません！」
「バカ者！　弱音を吐くな！」
整備兵は死に者狂いで作業を続けていた。
「・・・こりゃひどいなぁ」
剣は目の前の現実に唇を噛んだ。
もはや統制なんか執れてはない。ただひたすら兵装の転換を行う為だけに集中し、皆ただそれだけを行っている。
あちらこちらで「爆弾はまだかッ！」「人手が足りないッ！」「おい早くしろッ！」「邪魔だッ！」など悲鳴に近い怒号が飛び交っ

ている。
　呆然とする二人だが、飛龍は慌てて我に返る。
「と、とにかく急いで手伝いましょうッ！」
「あ、ああッ！」
　二人は慌てて荒れ狂う格納庫の中に飛び込んだ。

　この魚雷から爆弾へ、そしてまた爆弾から魚雷へ変更した時間のロスと、さらに弾薬庫にしまう暇がなく、大量に放置された爆弾と魚雷、飛行機、これが機動部隊の決定的な致命傷となった。

「飛行長！　発艦にはあとどれくらいかかる！？」
『あと五分！　あと五分で何とか・・・ッ！』
「よしッ！　あと五分で発艦できます！」
　その言葉に、山口は耐え切れずに艦橋の外の吹きさらしの通路に出た。そこからは甲板に並び始めた攻撃隊が見れた。
　飛龍もそこから攻撃隊を見詰める。そして、待ちに待ったその時が来た。
「よしッ！　第二次攻撃隊発艦開始！」
　山口は命令し、飛行機のプロペラを回転し始めた。

　――まさにその時だった。

『敵機！　雲の切れ間から直上！　急降下！』
　見張り兵の声と同時に、グオオオオォォォォォォンッ！　という降下音がし、甲板の兵が上空を見上げると、雲の切れ間から敵機が急降下して来た。
「取舵いっぱぁぁぁいッ！」
　加来が伝声管に向かって叫ぶ。
　艦が大きく左に曲がって敵機を回避する。
　水柱が高く上がり、『飛龍』はその中を逃げ回る。

艦橋から敵機を睨み付ける飛龍は唇を噛んだ。
「やっぱり来たか・・・ッ！」
飛龍は軍刀の先端をダンッ！　と床に叩き付ける。
無数の水柱群の中を『飛龍』は翔ける。
『敵機急降下！』
上空から敵機が流星のように次々に急降下して来る。
「面舵いっぱぁぁいッ！」
『飛龍』は大きく蛇行して敵機を回避する。
機銃や高角砲が火を噴き、必死に弾幕を張って敵機を撃ち落とす。
飛龍は軍刀の先端を床に付けたまま天空を睨む。
「こんな所で殺られてたまるかあああぁぁぁッ！」
次の瞬間、すさまじい大爆音が響いた。

『敵機直上！　急降下！』
見張り兵が伝声管に叫んだ。
見張り兵の断末魔の叫びが艦橋に響いた。
「取舵いっぱぁぁいッ！」
青木が大声で叫んだ。
「取舵いっぱぁぁいッ！」
信号官が伝声管に叫ぶ。
『赤城』は左に敵機を回避したが、すぐにまた敵機が向かって来た。
赤城は窓から急降下して来る敵機を睨む。
「面舵いっぱぁぁいッ！」
『面舵いっぱぁぁいッ！』
『赤城』は左右に蛇行し、必死で回避行動をする。
『敵機直上！　急降下！』
敵機数機が一気に急降下して来た。
赤城の顔が真っ青になる。
「ち、近すぎるッ！　回避が間に合わない！」

急速に接近してくる敵機は一気に大きくなる。
「赤城ッ！」
伊達が赤城の肩に手を掛けたその瞬間――
ドガアアアアァァァァンッ！
「があッ！」
『赤城』の甲板が数度爆発した瞬間、赤城は吐血を吐き、背中の数ヵ所からすさまじい鮮血が飛び出た。
「赤城ッ！」
伊達が崩れる赤城の体を寸前で受け止める。
「赤城！　しっかりしろ！」
「うぐッ・・・伊達少佐・・・がはッ！」
赤城は血の塊を吐いた。
『甲板中部！　第二エレベーター付近に爆弾命中！　大破！』
被害状況が伝わってきたが、それはほんの序章にしかすぎなかった。
突然、ドガンッ！　ドガンッ！　ドガアアァァァンッ！　という連続した爆発が、しかも内部から起きた。
「がああああぁぁぁッ！」
その瞬間、赤城はこれまで以上に吐血を吐き、背中の肉が砕けた。
「おいッ！　しっかりしろッ！」
「ゲホッ！　はぁ・・・はぁ・・・ゲホッゴホゴホッ！」
すさまじく咳き込み、吐血を繰り返す。
体中からおびただしい量の鮮血が飛び出て、赤城の華奢な体が真っ赤に染まっていく。
「報告！　格納庫内の爆弾、魚雷、飛行機に誘爆した模様！」
「何だとッ！？」
草鹿は蒼白な顔で驚愕する。
その間も誘爆が続き、『赤城』の甲板が吹き飛び、赤城の体から鮮血が飛び出る。
『第二格納庫炎上中！』

『第一格納庫に誘爆！　火災拡大中！』
『第二火薬庫炎上中！』
『第三格納庫に火災拡大！　誘爆！』
次々に被害報告が入って来る。
青木が必死で操艦をしているが、さらに一発爆弾が後部甲板に命中した。
「あああぁぁぁッ！」
赤城の右足から鮮血が飛び出て、赤く染まりってだらんとする。
「あぐぁッ！　うぐッ、い、痛い・・・ッ！」
赤城は苦悶の表情を浮かべ、目の縁にはたっぷりの涙を浮かべていた。
「赤城！　しっかりしろ！」
焦点を失った瞳で、赤城は伊達を見る。
「・・・伊達・・・少佐・・・ッ！　みん・・・なは？」
この『みんな』とは、他の艦艇の事だろう。
赤城の部下を想う気持ちがひしひしと伝わって来た。
だが、伊達は残酷な事を言わなければならなかった。
唇を噛み、言葉にするのも辛そうに、伊達は言う。
「『加賀』『蒼龍』が被弾。爆発炎上。『飛龍』のみ無事だ」
「そん・・・な・・・ッ！」
赤城が驚愕する。必死に立とうとするが、もう体に力が入らなかった。
空母『赤城』は一瞬にして火に包まれて、戦闘不能となった。

一方、空母『加賀』も四発の爆弾を被弾していた。しかも艦橋近くにあった燃料車に爆弾が命中。爆発して艦橋を吹き飛ばし、艦長以下指揮陣は総員戦死していた。
加賀は炎上する甲板の上に倒れていた。
身体中真っ赤に染まり、ぐったりとその場に横たわっている。
体にはもう力が入らず、意識ももうろうといていたが、艦内から

の誘爆の痛みで何とか意識を保っていた。
「私は・・・死ぬの？　ここで、死んじゃうの・・・？」
吐血をしながら、加賀は泣いていた。
仇を討ちたい。
死んで逝った搭乗員達の為にも、自分は仇を討ちたい。
でも、もう体に力が入らない。もう戦えない。
自分には死が近い。自分の体は自分が一番よくわかる。
「赤城も蒼龍も、もう戦えない。あとは、飛龍だけ」
加賀は首だけ動かし、雲の向こうにいる『飛龍』を見詰める。
「飛龍。あとは、任せたよ・・・ッ！」
加賀は血と涙を流しながら飛龍に思いを託した。

『飛龍』の義姉艦『蒼龍』も三発の爆弾を受けて甲板が炎上して戦闘不能になっていた。
蒼龍も防空指揮所の手すりに寄り掛かりながら何とか立っているというような状態だった。
「ここで、倒れる・・・訳には・・・ッ！」
ドガンッ！　ドガンッ！　ドガアアァァンッ！　と内部からすさまじい爆発が起こり、蒼龍はすさまじい量の吐血を吐いてその場に倒れた。
仰向けになって天空を見上げると、空は憎たらしいほど青く、嬉しくなるほどきれいな快晴だった。その空に、今しがた自分を攻撃した爆撃機を次々に撃墜する零戦が見えた。
「刹那・・・」
彼に会いたい。
なぜかそんな想いが胸を満たしていた。
彼の笑顔を見たい。彼の声を聞きたい。
蒼龍は泣きながら次々に敵機を撃ち落とす零戦を見詰める。
身体中に激痛が走る蒼龍は手すりと手すりの隙間から遠く微かに見える義妹を見る。

「飛龍。せめて、せめてあなただけは・・・あなただけは、助かって・・・ッ！」

泣きながら、蒼龍は姉として妹の無事を祈った。

『『赤城』『加賀』、続いて『蒼龍』被弾！　爆発炎上中！』

見張り兵の報告に、艦橋の者は無我夢中で三隻の空母を見詰める。

三隻の空母は自らの艦体の長さよりも高い火柱を上げていた。

「姉さんッ！　赤城さんッ！　加賀さんッ！」

飛龍は狂ったように三人を呼びまくる。

「くそッ！　だから爆装のままで発進させろと言ったのに！」

山口は作戦机をぶっ叩いた。コーヒーや灰皿が宙を舞い、床に飛散した。唇を噛み、濡れた瞳をギラギラと怒り輝かせていた。

「司令！　機動部隊は壊滅したも同然です！　撤退しますか！？」

加来は真剣に聞いて来た。彼はもう戦意を喪失しているのだ。

しかし、、山口は加来の弱気な態度に激怒した。

「バカ者！　仲間が殺られたのに撤退なんかできるかッ！」

「しかしッ！」

「貴様！　仲間が殺られたのに、悔しくないのか！？」

「そりゃあ悔しいですよッ！」

加来は悔しそうに叫んだ。拳を白くなるほど強く握り、唇をキッと噛んだ。

「悔しいですよ・・・ッ！」

震える加来の肩をそっと山口は叩き、顔を上げた加来に静かに微笑んだ。

「なら、仇を討とう！　日本機動部隊の意地を見せてやろう！」

「・・・はいッ！」

加来はうなずいた。山口もうなずいて伝声管に向かって叫んだ。

「全兵に告ぐ！　全兵に告ぐ！　機動部隊の空母は、我が『飛龍』を除いて全滅した！　だが、我々にはまだ『飛龍』があるッ！　味方空母の仇を討とう！　私は独断で攻撃隊を編成するッ！　最後の

最後まで戦い、日本機動部隊の意地を見せ付けてやろうッ！」
その瞬間、おおおおぉぉぉぉぉッ！　という兵達の咆哮が艦を揺らした。
「そうだ、最後まで戦うんだ」
山口は窓から空を見上げ、命懸けの決意をした。
そんな山口の横では、彼の決意に飛龍が涙していた。
山口のおかげで三人の仇を討てる。今の飛龍にとってこれほど嬉しい事はなかった。
「山口司令・・・ッ！　ありがとうございます・・・ッ！」
飛龍は山口に何度も感謝し、遠くの洋上で炎上している三隻の空母を見詰める。
「必ず、姉さん達の仇を討つ・・・ッ！」
飛龍は三隻に向かって敬礼した。
山口は炎上する三隻を一瞥し、通信参謀を向く。
「南雲司令長官に無電！『我、今ヨリ航空戦ノ指揮ヲ執ル』！」
「了解！」
通信参謀は急いで通信室に命令した。

機動部隊壊滅の報は主力部隊にも伝えられた。
「機動部隊より無電！『我ガ部隊、空母『赤城』『加賀』『蒼龍』被弾。既ニ戦闘力無シ』！」
『何だと！？』
旗艦『大和』の艦橋に戦慄が走った。
「機動部隊が壊滅だと！？」
宇垣は伝令兵に迫ると、伝令兵も蒼白な顔で何度もうなずく。
「・・・で？　『飛龍』はどうなっている・・・？」
山本は無理して冷静を保っているようだった。
「はい。『飛龍』はいまだ健在だそうです」
伝令兵の言葉に、山本は「最悪の事態は避けられたな」と言った。
伝令兵は敬礼して艦橋を去った。

艦橋に重い空気漂っている中、大和は狂ったように翔輝に迫っていた。
「少尉！　赤城さんが、加賀さんが、蒼龍さんが！」
「お、落ち着けッ！　連合艦隊旗艦がうろたえるなよ！」
「だって、だって・・・ッ！」
大和はもう混乱していて、指揮官としての能力を失っていた。
涙を流し、必死に翔輝の胸倉を掴んで揺する。
「赤城さんが・・・ッ！　加賀さんが！」
「落ち着けってば！」
大和は完全に正気を失っている。
翔輝が必死で大和をなだめていると、山本がやって来た。
「長谷川君。どうした？」
さっきから必死に何か言ってる翔輝を見て、何か異変に気づいたのだ。
「ちょ、長官！　大和が錯乱してしまって・・ッ！」
「錯乱？」
「空母三隻が壊滅したと聞いて、その三空母は大和の知り合いなんです！」
「そうか・・・」
山本は翔輝が必死になって押さえている見えない少女を見る。
「大和」
山本の声で大和は暴れるのをやめた。
「長・・・官・・・ッ！」
「大和。機動部隊を助けに行くぞ」
山本はそうはっきりと言った。
その言葉に、大和はしずかにうなずいた。
「・・・はい」
山本はうなずき、高柳や参謀達に命令した。
「全艦！　機動部隊に向けて前進全速！」
『了解！』

参謀達が命令を出すと、大和もようやく正気を取り戻した。涙を拭き、キッと顔を引き締める。
「少尉。みなさんを、助けに行きますよ」
「あぁ、その意気だ」
大和は翔輝の腕を離れて窓の外を見詰める。
「待っててください。今すぐ救援に向かいます」
主力部隊は全艦最大速度で海を蹴った。

第四章　第七節　飛龍　怒りの猛反撃

生き残った唯一の空母『飛龍』は急遽攻撃隊を編成した。
甲板には寄せ集めの攻撃隊が用意され、搭乗員達が艦橋の前に整列する。
山口と飛龍はその前に立った。
「今より、『飛龍』の全機をもって敵空母を攻撃する。しっかりやってくれ。頼むぞ！」
山口はそう言い、搭乗員一人一人と握手した。「しっかりやってくれ」「頼むぞ」「がんばってくれ」と言いながら。
全員と握手をすると、山口は激励を言った。
「みんなッ！　ひとつ体当たりするつもりでやってくれ！　大丈夫！　俺も後から逝くぞ！」
山口の言葉に、搭乗員だけでなく空母の兵達の士気も大いに上がった。
『了解！』
搭乗員達は敬礼し、飛行機に乗り込んでいった。
出撃命令が下り、攻撃隊は次々に発艦していく。
空母兵達は軍帽や作業帽をこれでもかと振って見送った。
「頼むぞぉぉぉッ！」「頼むぞ！『赤城』『加賀』『蒼龍』の仇を討ってくれぇぇぇッ！」「必ず敵空母をッ！」という声を聞きながら、攻撃隊は紺碧の空へ舞う。それは妖精のように可憐で、龍のように勇ましかった。
零戦六機、九九艦爆十八機というあまりにも小規模な第一次攻撃隊は、怒り狂った竜のように天へと舞い上がり、一路仲間の仇の敵機動部隊目指して突撃した。
攻撃隊が見えなくなり、山口と飛龍は艦橋に戻った。艦橋では参謀達が炎上している三空母を見詰めて唇を噛んでいた。その時、

『山本連合艦隊司令長官より無電！　山本連合艦隊司令長官より無電！』

伝声管を伝わって通信兵が報告したのは山本長官からの激励無電だった。

『『飛龍』ノ健闘ヲ祈ル。『飛龍』ノ健闘ヲ祈ル』！』

その激励文に、艦橋の中の士気は一気に上昇した。

山口は遠い迂遠方の主力部隊に向かって静かに敬礼する。

「山本連合艦隊司令長官へ無電！」

山口は通信参謀に叫んだ。

「『『飛龍』ハ健在ナリ。『飛龍』ハ健在ナリ。全機ヲ以ッテ敵艦隊撃滅ニ向カウ。全将兵意気盛ン』！」

「敵機来襲！」

アメリカ機動部隊は突如日本軍の攻撃隊に襲われた。

今までとは数が圧倒的に少ないが、流星のように舞い降りて来る日の丸を見て、ヨークタウンは恐怖を感じた。

たった二十数機の攻撃隊なのに、その迫力は数百機の攻撃隊にも引けを取らない。

獅子の咆哮に似た急降下音が響き、敵機が突っ込んで来る。

「回避しろおおおぉぉぉッ！」

フレッチャーは叫び、『ヨークタウン』は緊急回避する。

すさまじい対空砲火と敵戦闘機の嵐の中、敵機は必死に迫って来る。仲間の仇を討とうと、その命を懸けて・・・

「ふざけるないでッ！　仲間の仇なら、あなた達もレキシントンさんを殺したじゃないッ！」

ヨークタウンはそう叫ぶと、拳が白くなるほど強く握った。

すさまじい爆音が轟き、艦のまわりに無数の水柱が上がる。さながらそれは水の壁のように艦を飲み込もうと舞い上がる。

『ヨークタウン』は荒れ狂う海を翔ける。しかし、敵機も果敢に攻めて来る。爆弾が雨のように降り注ぎ爆発していく。

ヨークタウンは悲鳴を上げる。
「もっと速度を上げろッ！」
「ダメですっ！　今の本艦ではこれがやっとですッ！」
フレッチャーは唇を噛む。
『敵機急降下！』
敵爆撃機が垂直に急降下して来た。
「取舵いっぱぁぁぁいッ！」
「アイアイ、サーッ！　取舵いっぱぁぁぁいっ！」
『ヨークタウン』艦長が急いで伝声管に叫ぶ。だが、敵機はすでに爆弾を投下した後だった。
「総員衝撃に備ええええええぇぇぇぇぇッ！」
艦長の絶叫が響いた。
「ヨークッ！」
「司令ッ！」
フレッチャーはヨークタウンの身体を抱き寄せた。その瞬間、ドガアアアアアアアンッ！
「うわあああああぁぁぁぁぁッ！」
甲板に爆弾が命中して瓦礫と化した破片が吹き飛ぶと同時に、ヨークタウンの背中からも真っ赤な血が噴き出す。
「ひっ・・・ひぐぅ・・・ッ」
「ヨーク、しっかりしろッ！」
自分の腕の中で血まみれでぐったりとするヨークタウンを抱き上げ、フレッチャーは何度も彼女の名前を叫ぶ。
「し・・・司令・・・あああぁぁぁッ！」
さらに爆弾が二発命中し、『ヨークタウン』は大爆発を起こした。
火炎に包まれた甲板の不気味な明かりに照らされるヨークタウンは自らの血で真っ赤に染まり、もはやその身体には力は残されていなかった。
「ヨークッ！」
フレッチャーの声でなんとか意識を保つ。

彼の腕の温かさに、ヨークタウンは恐怖の中に一筋の光を見た気がした。
「司令・・・」
「大丈夫だ！　傷は浅いッ！」
「ほ、本当ですか・・・？」
「ああッ！　だからしっかりしろッ！」
「大丈夫です・・・私はまだ・・・負ける訳にはいかないんです・・・だから・・・」
「ああ、わかった。わかったから、もうしゃべるな」
ヨークタウンは悔しそうに唇を噛むフレッチャーを見て静かに微笑み、瞳を閉じた。

しばらくし、敵機は去った。
わずか二十数機で空母一隻を戦闘不能にした敵機を、皆悔しげに睨みつけた。
「姉貴ッ！」
「姉さんッ！」
敵機が去るとエンタープライズとホーネットが急いで現れた。そして、フレッチャーの腕の中でぐったりしている姉を見て、その顔を真っ青にさせる。
「姉貴ッ！」
「静かに、今は眠ってるだけだ」
フレッチャーの言葉に、エンタープライズは口を閉じる。
「姉さん・・・」
ホーネットは血まみれになった姉の顔をハンカチでそっと拭く。
「司令・・・姉さんは？」
「大丈夫だ。被害は甚大だが航行に問題はない。火災も鎮火できる規模のものだから、沈没の危険性はない。だから、きっとヨークも大丈夫さ」
「良かった・・・」

泣きながら安堵するホーネットの頭を、フレッチャーはそっと撫でる。
「姉さん・・・きっと助かるよね・・・？」
「助かる。いや、助けてみせる」
「司令・・・」
フレッチャーはホーネットに血をきれいに拭き取ってもらったヨークタウンの金色の髪を、そっと整える。
「クソッ！　ジャップどもッ！」
バンッ！　と壁をぶっ叩き、悔しげに顔を恐ろしくゆがめるエンタープライズ。その瞳は怒りに染まり口からは唇を噛み過ぎて血が流れる。
「許さねぇ・・・ッ！　絶対に許さねぇッ！　クソジャップどもぉッ！」
悔しそうに何度も何度も壁を蹴りつけるエンタープライズをフレッチャーは無言で見詰める。
「エンター、ホーネット。後は、頼むぞ」
「おうッ！　絶対に姉貴の仇を取ってやるッ！」
「うんッ！」
フレッチャーの言葉に、エンタープライズとホーネットはうなずく。そんな二人の反応に安堵したフレッチャーは、被っていた帽子をそっとヨークタウンに被らせた。

帰って来た攻撃隊を見て、飛龍は愕然とした。
――出撃した半分も帰って来なかったのだ。
「飛龍・・・」
肩を震わせる飛龍を、剣はそっと抱き締めた。そんな彼の腕の中で、飛龍は震える。
「そ、そんな・・・こんなに・・・」
「機数が少なければ。狙われる確率は上がる。仕方ない事なんだよ」
「でもッ！」

「――これが、戦争なんだ」
その言葉に飛龍はドキリとする。
そう、これは戦争。犠牲が出るのは仕方のない事。
「でも、だからって――ッ！？」
そこで飛龍はある事を思い出し愕然とする。
「剣・・・あなた・・・」
剣は、次の第二次攻撃隊で出撃する予定だった。
飛龍は、頭が真っ白になった。
そして気がついたら、
「だ、ダメッ！　行っちゃダメッ！」
飛龍は剣に抱きついていた・・・
「ダメッ！　行ったら・・・行ったら剣が死んじゃうッ！」
泣きながら必死になって自分に抱きつく飛龍に、剣は驚く。
「な、何言ってるんだ。そんな事できないよ」
「ダメッ！　私、剣に死んでほしくないッ！」
抱きついて離れずに泣き叫ぶ飛龍に、剣は一喝する。
「飛龍ッ！」
その大声に飛龍はビクリと身体を震わす。
怯えた目で見詰める飛龍に、剣は優しく微笑む。
「大丈夫。僕は死なないよ」
「剣・・・」
剣はそっと胸に掛けてある御守りを飛龍に見せる。それを見て、飛龍に顔からわずかに不安が消えた。
「大丈夫。僕は死なないよ。それに、この御守りが僕を守ってくれるよ」
「剣・・・」
「だから、安心して」
剣の言葉に、飛龍は静かにうなずくと、小さな笑みを浮かべた。
「そうだよね、剣が死ぬ訳ないもんね」
「ああ、だから、安心して」

「うんッ！」
飛龍は嬉しそうな笑みを浮かべ、今度は喜びの意味を込めて剣に抱き付いた。

蒼い海に浮かぶただ一隻の空母『飛龍』。その甲板には新たな攻撃隊――第二次攻撃隊が用意されていた。
甲板に並べられた艦載機に搭乗員達は次々に乗り込む。
その中には、剣の姿もあった。
「剣ッ！」
零戦に駆け寄る剣を、飛龍が止めた。
剣が振り返ると、飛龍は真剣な眼差しで自分を見ていた。
「飛龍・・・」
「必ず、姉さん達の仇を討って」
飛龍の強い言葉に、剣はうなずく。すると、今度は先程とは打って変わって悲しげな瞳で剣を見詰める。
「でも、無理はしないで・・・生きて、帰って来て」
泣きそうな飛龍の言葉に、剣は「わかった」とうなずく。その首には飛龍からもらった御守りが掛けられていた。
「さあ、危ないから」
剣の言葉に、飛龍はうなずくと、甲板から離れた。
彼女の背中が消えると同時に、剣は零戦に乗り込む。その時、
「おいッ！　隊長機の燃料タンクの修理は終わってるのか！？」
「まだできていません！」
「何だとッ！？」
怒鳴り声の方を向くと、九七艦攻の前で搭乗員が整備兵を睨みつけていた。それは隊長機であった。すると、
「構わん。敵は近い。片タンクだけで十分だ」
そう言って現れたのは攻撃隊の隊長である友永だった。
友永は涙目になっている二人に優しげな笑みを浮かべ、傷ついた愛機に乗り込んだ。

剣はそんな隊長を見て、静かに唇を噛むと、エンジンを起動させる。

高速でプロペラが回り、辺りに轟音が響く。

仲間の仇を討つ為、飛龍航空隊はその全戦力を敵空母に向けようとしていた。

マストに出撃旗が揚がり、艦載機は次々に轟音を立てて甲板を滑走して天空に飛び立つ。

荒鷲達は蒼穹の空にその翼を羽ばたかせていく。

飛龍は軍帽を振って攻撃隊を見送る。この攻撃隊に想いを乗せて。

「姉さん達の仇を討ってぇぇぇッ！」

そして、徐々に消えて行く攻撃隊の中にいる少年に向かって叫ぶ。

「必ず、生きて帰って来てぇッ！」

攻撃隊は空の蒼に溶けていき、やがて見えなくなった・・・

零戦六機、九七艦攻十機の第二次攻撃隊は無事敵機動部隊に到着した。

襲って来る敵機を剣達零戦隊が次々に撃墜していく。その下を、すさまじい対空砲火の壁を抜けて艦攻隊が突撃していくのが見えた。

「頼むぞッ！」

剣は艦攻隊に敬礼すると、再び襲ってくる敵機を撃ち落とした。

『左三〇度雷撃機ッ』

その報告にフレッチャーは唇を噛んだ。

「司令・・・」

腕の中で先程目を覚ましたばかりのヨークタウンが小さな声を発する。

「取舵いっぱぁぁぁいッ！」

迫る魚雷を、『ヨークタウン』はなんとか回避する。だが、敵機の壮絶な攻撃の前で、傷ついた『ヨークタウン』はいい獲物になっていた。

次々に敵機が魚雷を投下していく。
「面舵いっぱぁぁぃッ！」
『ヨークタウン』はなんとか敵の攻撃を開始する。
「これなら、なんとか・・・」
フレッチャーは安堵の息を漏らす。その時、
『敵機！　スプルーアンス部隊に向かうっ！』
見張り兵の言葉に、ヨークタウンは真っ青になる。
「いけないっ！　妹達が・・・ッ！　司令ッ！」
傷ついたヨークタウンの枯れた声での必死な叫びを聞いて、フレッチャーは絶句する。
「し、しかし・・・ッ！」
「お願い・・・しますッ！　妹達を・・・ッ！」
フレッチャーは苦しげに唇を噛むと、決断した。
「取舵いっぱぁぁぃッ！　スプルーアンス部隊と敵機の間に向かえッ！　本艦を盾にして二隻の空母を守るんだッ！」
「司令！？　本気ですか！？」
艦長が驚愕する。
「本気だ。傷ついた本艦を囮にするんだッ！」
「あ、アイアイ、サーッ！　取舵いっぱぁぁぃッ！　両舷前進全速！」
『ヨークタウン』は最大速度で海面を蹴る。
すぐに間に回り込み、必死で弾幕を張る。すると敵機は攻撃目標を変えて『ヨークタウン』に襲いかかって来た。
『左舷より魚雷接近ッ！』
迫る魚雷を『ヨークタウン』は右へ左へと回避する。
一本、また一本と回避する『ヨークタウン』だが、ついに限界が来た。
うまく回避した魚雷と魚雷の間にもう一本の魚雷が突っ込んできた。
ドガアアァァンッ！

「がああぁぁぁッ！」
艦体が激しく揺れ、艦橋よりも高い水柱が上がり、もうもうと煙が舞い上がる。
「ヨークッ！」
ヨークタウンは口から大量の血を吐いた。
フレッチャーの白い軍服は、彼女の真っ赤な血に染まった。
「ヨークッ！　しっかりしろッ！」
「し・・・司令・・・」
小さなか細い声で返事するヨークタウンは、もう限界に達そうとしていたその時、
『敵雷撃機左舷より接近ッ！』
その報告に、フレッチャーは絶望した。
左舷から迫る敵機に来るな来るなと心から祈る。だが、現実とは残酷なものだった。
『敵機魚雷投下ッ！』
フレッチャーは覚悟を決めてヨークタウンの小さな身体を抱き締めた。次の瞬間、
ドガアアアァァァァンッ！　ドゴオオォォォンッ！
「ぎゃあああぁぁぁぁぁッ！」
「ヨークッ！」
ヨークタウンの身体が仰け反り、真っ赤に染まる。
敵機は魚雷を放った後甲板に激突してきた。甲板は敵機の突撃で炎上し、魚雷の影響で艦は左に傾く。
ヨークタウンの包帯が解け、赤い鮮血が飛び出た。
一瞬にしてヨークタウンはその場に崩れ、フランクの腕の中で倒れた。
もはや息も絶え絶えのヨークタウンの真っ赤に染まった身体を、フレッチャーはそっと抱き締める。
「お前、本当にこれで良かったのか・・・ッ？」
フレッチャーは悲痛な声を上げる。そんな彼に、ヨークタウンは

静かに微笑む。
「はい。妹達が無事なら・・・これでいいんです・・・」
フレッチャーはヨークタウンの小さな身体を抱き締めた。
ヨークタウンは焦点を失った瞳でフレッチャーを見詰める。
「少将。妹達に反撃を、頼んでください・・・ッ！」
「あぁ、わかった！　お前の仇を討たせてやる！」
フレッチャーの言葉にヨークタウンは小さく微笑む。
「Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ・・・」
そう言って、ヨークタウンはフレッチャーの頬にキスをし、瞳を閉じた。

「剣ッ！」
戻って来た第二次攻撃隊の中に剣の姿を見つけ、飛龍は涙を流しながら喜んだ。
「剣ッ！」
「うわッ！」
突然抱きつかれた剣はびっくりする。だが、そんな事今の飛龍には関係なかった。
「良かった・・・ッ！　良かったッ！」
飛龍は本当に嬉しそうに喜ぶ。そんな飛龍を、剣もそっと抱き締める。
「ははは、なんとか助かったよ」
「もうッ！　笑い事じゃないよぉッ！」
顔を膨らませて怒る飛龍に「ごめんごめん」と謝る。
再会を喜ぶ飛龍だったが、帰って来た攻撃隊を見て顔を曇らせる。
「でも、攻撃隊・・・ずいぶん減っちゃったね・・・」
そう言って見た先には、機数の半分以下にまで減らした攻撃隊。
「ああ、隊長も、敵空母に体当たりしちゃったしね」
その言葉に飛龍は絶句する。
「た、隊長って・・・ッ！？　まさか友永大尉がッ！？」

「うん・・・魚雷を放った後、そのまま敵の甲板へ」
「そ、そんな・・・ッ！」
飛龍は顔を真っ青にする。
いつも攻撃隊の先頭に立って飛んでいた隊長が・・・もういない。
愕然とする飛龍の頭を剣はそっと撫でる。
「隊長の決死の攻撃のおかげで、敵空母一隻は沈没確実だ。ただし、もう二隻は無傷だけどね」
「・・・だったら、もう一度攻撃します」
飛龍は力強い言葉でそう言った。そんな飛龍に、剣は優しく微笑む。
「その時は、僕も協力するよ」
「ありがとう」
飛龍は剣に微笑むと、遠くの海で燃えている三隻の空母を見詰め、一瞬だけ悲しい目をしたが、すぐに力強い目になり、そっと敬礼した。

孤軍奮闘で戦い続けた飛龍に、つかの間の幸せが訪れた。
「えへへ・・・」
ついつい顔が嬉しさのあまりにやけてしまう。
そんな飛龍の膝の上では、気持ち良さそうに眠る剣がいた。
連戦の影響で残存機数がほんのわずかとなってしまい、とてもじゃないが強襲攻撃ができなくなってしまい、薄暮攻撃に戦法を転換した。その為、時間に余裕ができたので今搭乗員達はこうして兵員室で仮眠をとっていた。
そして今、飛龍の膝の上に頭をのせ、剣は眠っていた。正確には普通に並べた椅子の上で寝ていた剣をそっと頭を起こして座り、膝の上にのせたという違法なのだが。
自分の膝の上で気持ち良さそうに眠っている剣を見て、飛龍は嬉しそうに微笑む。
「はあ・・・幸せ・・・」

ほんのりと顔を赤らめて喜ぶ飛龍。
こんな平和な時間がずっと続けばいいなと思っていると、それはあっけなく終わった。
「ふわ・・・？　って、うおッ！？」
目を覚ました剣は最初こそは寝ぼけていて状況を理解していなかったが、すぐに目が覚めて自分の置かれている状況に慌てて飛び起きた。
「あん・・・」
「な、何してんのッ！？」
起きてしまった剣を悲しげに見詰める飛龍に対し、何がなんだかわからない剣は慌てる。
「な、何で？　僕は普通に寝てたのに・・・何で飛龍に膝枕されたの？」
「そ、それは・・・」
視線を逸らす飛龍に、剣はようやく理解してため息した。
「お前・・・寝起きビックリをするな」
「べ、別にビックリさせるつもりじゃなかったの。ただ、何もないで寝たら首が痛いかなぁって思ったから膝枕しただけじゃない」
少し起こったようにして言う飛龍に、剣は不思議そうに首を傾げる。
「あのな、怒るのは僕であってお前じゃないぞ」
飛龍は「知らない」と言ってそっぽを向く。
剣は訳がわからないと言った具合に首を傾げると、起き上がる。
「え？　もう起きるの？」
「うん。もう十分寝たし」
「で、でもまだ一時間ぐらいしか・・・」
「それで十分。本格的に寝ちゃうと起きた時に逆に疲れちゃうから」
「そ、そうですか」
剣は飛龍がなぜか少し残念そうな顔をするのがわからなかった。
ふと、まわりを見ると、共に戦ってきた仲間達が皆仮眠をとって

いた。その数も、この戦いでかなり減っていた。
剣自身、仲の良かった仲間が数人ミッドウェーの空に散ってしまった。
真珠湾以来連戦連勝を誇ってきた日本機動部隊も、今ではその見る影もない。
「なあ、飛龍。他の空母の様子はどうだ？」
悲しげに問う剣の言葉に、飛龍はしばしの沈黙の後、自身も泣きそうなのを必死に堪え、辛い想いをしながら口を開く。
「距離が離れすぎているので・・・会いに行けないので実際に見た訳じゃありませんが、報告によると、三隻の空母全てが爆弾命中による火災で格納庫にあった爆弾や魚雷、航空機などに誘爆して、艦内は火の海。とても鎮火できるようなものではないそうです」
「・・・そう」
「『加賀』は、初弾で艦橋が吹き飛び指揮系統が壊滅。戦死した艦長に代わって飛行長が消火作業を指揮していたそうですが・・・すでに、総員退去が発令され・・・今は、沈没を待つのみだそうです」
苦しそうに言う飛龍の震える肩を、剣はそっと抱く。
「『赤城』『蒼龍』はいまだ炎上中・・・復旧の見込みは・・・まだ立っていないそうです」
「飛龍・・・」
「私だけ・・・生き残って・・・ッ！」
飛龍は悔しそうに服の裾を握る。その拳は強く握られたせいで真っ白に染まり、瞳からはボロボロと涙が零れ落ちる。
剣はそんな少女の震える肩を、そっと抱き寄せた。
こんな小さな身体に、彼女はたくさんの責務を背負っている。
少女でありながら兵器の魂であるがゆえに戦う事から避ける事ができない。なのに、いざ戦いになれば彼女はただの傍観者でしかない。
決して、主人公に離れない。
敵が迫ろうと、彼女には自分の身体である艦体を動かす事はでき

ない。機銃一門でも、動かす事はできない。
姉や仲間の仇を討ちたくても、自分では何もできない。
その苦しみは計り知れない。
どうして彼女がそんな重すぎる宿命を背負わなければならないのか。
だって、彼女は普通の女の子だ。
笑ったり、怒ったり、悲しんだり、泣いたり、迷ったりする。普通の女の子と何も変わらない。
なのに、ただ人間じゃない。艦魂という兵器の魂だからという理由で、こんなにも心が真っ直ぐな女の子に、こんな苦しみを与えるなんて。
自分には、彼女を助ける事はできない。
彼女の傍にいて、彼女と同じ時を過ごして、同じ話をして、笑った。
なのに、自分は何もできない。
自分にできるのは、彼女救う事ではなく、彼女の折れてしまいそうな身体を支えてやり、そっと押してやる事だけだった。
決して、彼女は救えない。
でも、救えなくても、応援する事はできる。
それだけで、彼女の励みになるかはわからない。でも、何もしないよりは絶対にマシだ。
「飛龍」
剣は泣きじゃくる少女を、そっと抱き締めた。
温かい。
こんなに温かなぬくもりを彼女は持っている。
――それで、十分じゃないか。
「僕は・・・僕は君の――」
飛龍はそっと、顔を上げた。
真っ直ぐな瞳で、少年の顔を見上げる。
「――味方だから」

胸の奥に、何か温かいものが流れ込んだ。
それはとても心地良く、優しく、温かい。
「例え、世界中の全てが君の敵だとしても、僕は君の味方だから。安心して、前に進んで」
そうだ。
自分にはまだ――
「僕は、いつも一緒にいるから」
――まだ、彼がいる。
彼がいれば、どんな敵でも怖くはない。
自分は無敵になれる。
飛龍は袖で涙を拭き取ると、今自分が出せる精一杯の笑顔を向け、彼に抱きついた。
「剣ッ！　私、剣と一緒なら、どこまでもがんばるッ！　剣と一緒なら、戦えるッ！」
「そっか・・・良かった」
彼の温かい笑みに、彼の優しい腕の中で、飛龍は満面の笑みを浮かべた。
窓から差し込む光は、いつの間にか夕焼けに変わっていた。
温かく、柔らかなその光は、二人の少年少女を、静かに照らし続けた。

飛龍航空隊はすさまじい執念とも言える二度の果敢な攻撃を行い、半数以上艦載機を犠牲にしながら空母『ヨークタウン』に致命傷を与えた。
その後、『ヨークタウン』は日本軍潜水艦『伊‐一六八』の雷撃で、沈没した・・・
そして、敵空母に止めを刺そうと残存艦載機全機（十四機）で第三次攻撃隊を編成している時、悲劇は起きた。
「敵機！　太陽を背にして急降下！」
見張り兵の言葉に、『飛龍』全乗組員が悲鳴を上げた。

「取舵いっぱぁぁぁいッ！」
加来の絶叫が防空指揮所に弾ける。
機銃や高角砲が火を噴き、荒くれる嵐のように弾幕を張る。
無数の爆弾が海面に炸裂し、巨大な水柱を上げる。至近弾が炸裂し、飛龍の体にかすり傷ができる。
「つぅ・・・ッ！」
「飛龍ッ！」
防空指揮所の上にいた飛龍は痛みに小さな悲鳴を上げる。その横には、第三次攻撃隊として出撃を待っていた剣がいた。
剣は飛龍の身体を抱き寄せると、迫る敵機を悔しそうに睨みつけた。
「面舵いっぱぁぁぁいッ！」
魚雷群を避ける為に『飛龍』は急速回頭する。
無数の爆弾や魚雷を次々に回避する『飛龍』。敵の荒鷲は味方空母『ヨークタウン』の仇と突っ込んでくる。艦隊の対空砲火で炎上する敵機。だが、敵機はしぶとく機銃を『飛龍』に撃ち込んで来る。機銃兵達が悲鳴を上げ、必死に機銃を乱射して敵機を完全に撃ち落した。
「取舵いっぱぁぁぁいッ！」
加来がずぶ濡れになった格好で枯れかけた声を上げる。
敵機の爆弾が海面に炸裂し、海水を巻き上げ、それは無数の水滴となって艦体を撃ち付ける。その一瞬の隙に一機の敵爆撃機が突っ込んで来た。敵爆撃機は翼を翻して垂直一直線に急降下して来た。すさまじい急降下音が響き、見張り兵が悲鳴を上げる。
「面舵いっぱぁぁぁいッ！」
『飛龍』は急いで回避するが間に合わない。
「飛龍ッ！」
敵機から爆弾が投下された瞬間、剣は飛龍の身体を抱き寄せた。
――次の瞬間。
ドガアアアァァァァンッ！

敵機の放った爆弾が『飛龍』後部甲板に命中、大爆発を起こした。
同時に飛龍の腰が裂け、血飛沫が上がる。
「あああああぁぁぁぁぁぁッ！」
「飛龍ッ！」
腕の中で真っ赤に染まり、ぐったりとする飛龍を、剣は抱きとめる。
「おいッ！　飛龍ッ！　しっかりしろッ！」
「剣・・・ッ！」
必死に自分の名前を呼ぶ剣に、飛龍は小さく笑みを浮かべる。
「大丈夫・・・私は・・・剣と一緒なら・・・大丈夫だから・・・」
唇を噛み、必死に痛みを堪える。身体からは真っ赤な血が流れ出る。
その間にも敵機の猛攻撃が続いている。これらを全て回避しなければならない。
迫る敵機に『飛龍』はさらに回避を続ける。だが、『飛龍』の幸運もついに尽きた。
「敵機五機直上！　急降下！」
轟音を立てて流星のように突っ込んで来る敵機に、剣が悲鳴を上げる。
「あと、あと一歩なのに・・・ッ！」
剣の腕の中で、飛龍は急降下して来る敵機を睨み、泣き声を上げた。
――剣が、自分を強く抱き締めるのを感じた。
次の瞬間、全てが真っ白になり、真っ赤に染まった。
「がああああぁぁぁぁぁッ！」
「飛龍ッ！」
飛龍はすさまじい悲鳴を上げ、自らの血で真っ赤に染まった。
爆風で剣は吹き飛ばされて壁に叩きつけられる。そんな彼の腕から離れた飛龍の力なき身体は冷たい鉄の床に投げ出された。
三発の爆弾を受けて『飛龍』は炎上し、飛龍も自らの血で真っ赤

に染まった床の上で吐血を吐いた。
「飛龍・・・ッ！」
剣は痛み身体をなんとか立たせ、鉄の床にぐったりと倒れている飛龍に近寄る。
膝を着き、もはや動けない身体になった飛龍の身体を、そっと抱き寄せる。
べっとりとした彼女の血が、自らも赤く染めた。
「剣・・・」
その小さくか細い声に、剣は涙を流し、絶叫した。

第四章　第八節　空の戦姫達の最期

一番最初に力尽きたのは、最も被害が深刻だった――『加賀』だった。

紅蓮の炎が燃え盛る破壊され尽くされた甲板の上に、血まみれでぐったりと倒れていた加賀の意識は、だんだんと遠のいていた。

薄れゆく意識の中、加賀は悔しそうに唇を噛んだ。

「・・・こんな・・・所で・・・私は・・・負ける訳には・・・いかないのに・・・ッ！　死んでいった・・・みんなの仇は・・・まだ討ててないのに・・・ッ！」

加賀は戦死した搭乗員達を思い出し、悔しくて甲板を殴った。だが、その一撃も、もはやとても弱々しいものだった。

みんな日本の為に全力で戦い、そして死んで逝ったすばらしき戦士達。自分はそんな彼らが好きだし、誇りに思っている。彼らの死を無駄にしたくないし、彼らの仇を討ちたい。今までも、これからも・・・

だが、大きく傾斜し、荒れ狂う猛火に包まれる自分の艦体は、もうそれすらも自分にはできない事を示していた。

今も内部では爆発が起き、火は消えるどころか艦全体を飲み込もうまでに燃え盛っている。

すでに総員退去は出されたが、火と瓦礫で逃げ出せない者、自ら艦と運命を共にしようとする者、様々な命が艦内に取り残されていた。

そして、もはや痛みも感じられぬほど弱り切った加賀は、仲間達の事を思い出していた。

かわいい、自分にとって最高の幼なじみ赤城。

少しまじめ過ぎるのがたまに傷だが、とても優しい蒼龍。

まだまだ子供っぽいが、いざとなったら頼れる戦士飛龍。

プライドが高く、少しかわいげがないが、戦闘になったら最も頼

れる翔鶴。
最年少者だが、がんばりたいという気持ちは一番強い瑞鶴。
自分を入れた全六空母は、真珠湾以来怒涛の連戦連勝を続けてきた。だがそれももう終わり。この最高の仲間達とも、これでお別れだ。
寂しくて、嫌で、涙が止まらない。
「・・・みんな・・・ごめんね・・・ッ」
泣きながら、加賀はみんなに謝った。
もうみんなと笑う事も、話す事も、助け合う事もできない。
悔しくて、寂しくて、涙が止まらない。
だが、いつまでも泣いている訳にはいかない。
せめて、最期だけは、みんなと笑顔で別れたい。
その時、『加賀』は今まで以上の爆発を起こし、天高く爆炎を上げた。
炎上する甲板の上で、加賀は静かに目をつむった。
「・・・みんな、元気でね・・・私・・・みんなと出会えて・・・とっても・・・幸せだったよ・・・」
加賀は自分の中に残る最後の力をふり絞って――笑った。それは、彼女の生涯で一番優しい笑顔だった・・・
その瞬間、二度の大爆発と共に、空母『加賀』は蒼い海深くに沈んだ。
だった。

――空母『加賀』、戦艦として建造されるが、条約制限の為に航空母艦に変更されて完成した日本海軍最大の排水量を誇る重武装空母であった。皮肉にも、空母に建造された事によって内地で錨を下ろし続ける戦艦に代わって最も活躍した一隻となった。最初は三段甲板を持つが撤去され、大艦巨砲主義の影響で空母には不要の大砲をも備え付けた『加賀』は、常に日本海軍の先頭に立って戦い続けた。そして、『加賀』はその激動の生涯を追え、ミッドウェー沖の

海の底に、轟音と共に爆沈した――

『加賀』が沈没して三〇分後、ついに『蒼龍』にも総員退去の令が下った。総員退去が発令されたという事は、その艦はもう助からないという事を意味していた。

空を暁色に染める夕日の光は、海までを暁色に染める。だが、『蒼龍』は真っ赤に染まっていた。

敵急降下爆撃機の爆撃で受けた爆弾の爆発で起きた火災は、他の空母と同じく格納庫にあったありとあらゆる爆発物に引火、誘爆して大火災を引き起こした。

爆弾と内部から起きた爆発によって、艦載機を舞い上げていた美しい甲板は粉々に壊れ、荒れ狂う炎が艦のいたる所から噴き出し、『蒼龍』は炎に包まれていた。

そして、そんな燃える甲板の上にぽつりとある艦橋の上にある防空指揮所で、血だらけで蒼龍がぐったりと倒れていた。

自分から降りる兵達を見詰め、蒼龍は悲しげに瞳を揺らした。

「・・・みんな・・・元気でね・・・」

見知った人達の背中に心の中で敬礼をし、蒼龍は再び暁の空を見上げる。

もうすぐ『蒼龍』は沈む。自分の艦体の事は自分がよくわかる。

もちろん、まだ死にたくはない。でも、もう自分の命は短い。

心残りはたくさんあるが、強いて言えば妹の安否だ。

蒼龍は暁の空へ必死に祈った。

「どうか・・・妹だけは・・・お助けください・・・お願いします」

涙を流しながら、必死になって妹の安全を祈る。だが、この時すでに『飛龍』も敵急降下爆撃機の攻撃を受けて炎上していたのだが、指揮系統が沈黙した『蒼龍』にはそんな情報は入っていなかった。

「お願いします・・・私は、どうなっても構いませんから・・・ッ！　妹だけは・・・ッ！」

涙を流しながら必死に祈る蒼龍。

妹の命だけは、どうしても助けてほしい。
蒼龍の願いはそれだけだった。
――そして、もうひとつの心残りは・・・
「刹那・・・」
それは今はどこにいるかわからない刹那の安否だった。
三空母が被弾してしばらくした頃、上空直掩の零戦は帰るべき母艦を失い、仕方なく水面に不時着した。その後近くの艦艇に救助されただろうが、今はどこにいるか全然わからない。
「・・・大丈夫・・・彼なら・・・きっとどこかで無事にいるはず・・・」
真珠湾以前からずっと傍にいてくれた彼なら、そう簡単に死ぬはずがない。そう信じていた。
だが、蒼龍はそんな彼の顔を思い出し、涙が溢れた。
すでに沈没した『加賀』と自分が死ぬ事によって、機動部隊は壊滅するだろう。そうなれば、日本の平和への道筋はほとんど閉ざされてしまう。
日本の平和がなくなるというのは、彼の民間機のパイロットになるという夢も、途絶えてしまう。
自分の死によって、彼の大切な夢を奪ってしまう。それだけは嫌だった。
正直言って、彼の夢には賛同できない。だがそれは、彼が自分から離れてしまうのが嫌だったからだ。でも、今となってはもうそれは関係ない。自分はもうすぐ死んでしまうから。もう一緒にいられないなら、彼の夢を応援してあげたい。
なんて身勝手なのだろう。自分でも呆れてしまう。
自分のわがままで、彼にひどい事を言い、自ら彼とケンカ別れをしてしまった。
そして、いざ自分が死に直面すると、今度は彼を応援する。本当にわがままな女だ。
彼に会いたい。でも、もう彼に会う事はできない。

・・・でも、それでいいのかもしれない。
自分のせいで、彼の夢は途絶えてしまったのだから。彼と会っても、何を言ったらいいかわからないし、彼を傷つけてしまう。それなら、もう会わないで、このまま・・・静かに死を迎えるのも、いいかもしれない。
「刹那・・・ごめんなさい・・・」
もう会えない彼に、そっと謝った。
ゆっくりと、蒼龍の瞳が閉じ――
「蒼龍ッ！」
その声に閉じかけた瞳は再び開く。
今ここにいるはずがない彼の声に動揺しながらも、ゆっくりと声のした方向を見ると、そこには頭に包帯を巻いた刹那が肩を上下に激しく動かしていた。火の中を走り回ったのか、服はすす焦げ、無惨な姿になっている。
「刹那・・・ッ！？　どうして・・・ッ！？」
「蒼龍ッ！」
刹那はフラフラと蒼龍に駆け寄るとひざまずき、彼女を抱き上げる。
「蒼龍ッ！　しっかりしろッ！」
「ど、どうして・・・刹那がここにいるの・・・？」
「悪いな。俺が連れて来たんだ」
その声に顔を向けると、そこには壁にもたれ掛かって腕を組んでいる榛名がいた。
「榛名さんが・・・？」
「ああ。俺の近くに零戦が着水してな。搭乗員を救助したらこいつだったって訳だ。俺はこいつと面識はないが、いきなり現れて炎上している『蒼龍』に転送してくれって懇願した訳だ。あんな危険な所に無闇に人を連れて行くもんじゃないし、めんどくさかった。だが、こいつは必死に俺に頼み込んでな。だったら俺に勝ってからにしろって言ったんだが・・・」

そう言うと、榛名は軍帽を深く被った。一瞬見えた彼女の唇の端からは、血がたらりと流れていた。

「ボロクソにやられても起き上がって殴りかかって来て、一発とはいえこの俺に当てた褒美に連れて来たって訳だ」

榛名の言葉に蒼龍は心の中で大喜びしたが、すぐにキッと刹那を睨み付ける。

「あ、あなた・・・榛名さんに・・・なんて無礼をしたのよ・・・ッ！」

「だ、だって、お前の所に行きたくて必死だったから・・・すまん」

「私じゃなくて榛名さんに――」

「俺は構わねぇ。俺はテメェみたいな根性のある奴は好きだからな」

そう言って榛名は小さく笑うと、二人を邪魔しちゃいけないとそっと艦橋の中に消えた。

残された二人だが、蒼龍はしばし彼を呆然と見詰めると、少し怒ったような顔で睨みつける。

「何で・・・戻って来たのよ・・・私はもうすぐ沈む・・・あなたがここに来る理由は・・・どこにもないじゃない・・・」

そう言うと、刹那はフッと小さく笑みを浮かべた。

「――そりゃもちろん、お前と一緒にいようと思ってな」

「どういう事？」

刹那は蒼龍の身体をギュッと抱き締めると、彼女の耳元でそっとささやいた。

「・・・もちろん、艦と運命を共にする為にさ」

「・・・なッ！？」

驚く蒼龍に、刹那は優しく微笑む。

「お前一人であの世には行かせない。僕も一緒に行くよ」

「ば、バカッ！　何・・・言ってるのよ・・・ッ！　あなたには・・・これからも日本海軍の・・・最前線で戦い続ける・・・責務がある・・・ッ！　それに・・・夢だって・・・あるじゃない・・・ッ！」

そう叫ぶと、刹那は小さく首を振った。
「もう、僕は戦いたくないし・・・夢は、お前に反対されたから、やめたよ」
「バカ言わないで・・・ッ！　何で私に反対されたぐらいで・・・夢を諦めるのよ・・・ッ！」
「意味わかんないぞ。お前は一体僕の夢を応援してるの？　反対してるの？」
その問いに、蒼龍は口ごもる。
もう、一緒にいられないなら、彼の夢には賛成だ。人は夢を持つからこそ強く生きられる。だからこそ、これからは夢を掴んでほしい。
「・・・さ、賛成よ」
その小さな返事に、刹那は首を傾げる。
「あれ？　お前は反対してたんじゃ・・・」
「それは・・・私が・・・これからも・・・生きている事を・・・前提にして・・・言っただけ・・・これからも・・・一緒に海を翔けたかったから・・・でも・・・私はもうダメだから・・・だったら・・・あなたには・・・夢を叶えてほしい・・・」
「蒼龍・・・」
蒼龍は刹那の襟をグイッと掴むと、必死な瞳で彼に迫る。その瞳はうるみ、揺らめく炎に照らされてオレンジ色に輝いていた。
「だからお願い・・・生きて刹那・・・ッ！　夢を叶える為に・・・ッ！　私の祖国を・・・守って・・・ッ！」
「蒼龍・・・でも・・・僕は・・・」
渋る刹那に、蒼龍は必死に叫ぶ。
「お願いッ！　私の大切な妹を守ってッ！」
その言葉に、刹那は顔を曇らせる。
激戦の末に『飛龍』が炎上した事は、すでに彼の耳にも届いていた。だが、燃ゆる彼女は知らないのだ。
「お願い・・・ッ！」

涙を流しながら必死に叫ぶ蒼龍に、刹那は動揺する。すると、そんな肩を誰かが叩いた。振り返ると、榛名が真剣な瞳で自分を見詰めていた。

「それくらいにしておいてやれ。泣きながら必死に頼む女の願いを、テメェは踏みにじるってのか？」

「そ、それは・・・」

「せめて、蒼龍に安心してあの世に逝けるだけの事をしてやらねぇのか」

榛名の不機嫌そうな言葉に、刹那は沈黙した。そんな彼の頬を、蒼龍はそっと撫でる。

「私はもう・・・長く・・・ない・・・だか・・・ら・・・早・・・く・・・」

「蒼龍・・・」

もう言葉を言うのも辛くなり始めた蒼龍を見て刹那は悲しげにうつむくと、静かにうなずいた。

「わかった。必ず、みんな守ってやる。だから、安心しろ」

その言葉に、蒼龍は最後の力を振り絞って、最高の笑みを浮かべた。

「・・・ありが・・・とう・・・刹那・・・」

そして、笑みを浮かべたまま、蒼龍の瞳はゆっくりと閉じられ、二度と開く事はなかった。

「蒼龍・・・ッ！」

涙する刹那。その時、まるで艦の魂である蒼龍の死を待っていたかのように、『蒼龍』はゆっくりと沈没し始めた。

傾きが一層激しくなる『蒼龍』の上で、涙する刹那の肩を、榛名がそっと叩いた。

「おい、さっさと行くぞ。蒼龍の願いを、無駄にするんじゃねぇ」

「・・・わかってるさ」

光ながら消えていく蒼龍の身体をそっと床に戻すと、刹那は榛名に連れられて光の中に消えた。

その直後、空母『蒼龍』はゆっくりと深い海の底に沈んでいった・・・

――空母『蒼龍』、日本空母の原型とも言うべき様々な能力をバランス良く備えたその空母は、中型空母のひとつの完成形であった。日本空母一の速度を誇り、安定した性能と運用の良さから常にその身を前線に置き続けた若き戦姫は、壮絶な戦死を遂げ、深い海の底へと消えていった――

『蒼龍』が沈没してから四時間後、真珠湾以来幾多の戦いで機動部隊を率いていた第一航空艦隊旗艦・空母『赤城』も、その命尽きようとしていた。

既に総員退去が出され、兵達は海へ逃げ込んで周囲の駆逐艦や巡洋艦などに救助されていた。

一方、南雲以下司令部はそれ以前にすでに旗艦を軽巡洋艦『長良』に変更し、そちらに移乗していた。

燃える『赤城』の艦橋で、南雲は自らの失態で機動部隊を壊滅させてしまった事に責任を感じ、艦と運命を共にしようとしていた。だが、草鹿や多くの部下達に仇を討ってほしいという必死の説得に、『赤城』を去った。その時の彼の表情は今でも忘れられない。

青木も部下達の必死の説得で退艦した。そして、艦橋に残った者はロープを使って自分の身体を羅針盤（らしんばん）などに縛りつけていた。艦と運命を共にする為に・・・

そして、満身創痍の赤城は、伊達に抱かれて防空指揮所にいた。燃える甲板の火に照らされ、辺りは夜だというのに明るかった。

「ほら、星がキレイだぞ」

空にはキラキラと輝く星空が煌いていた。

「はい・・・」

赤城の返事は、とても小さいものであった。

赤城はその・・・何だ。いわゆるお姫様抱っこをされていた。そ

のせいか蒼白な顔ながら頬だけはほんのりと赤らめている。
先程から軍歌の中の鎮魂歌《海行かば》が遠くの駆逐艦から流れていた。
被弾した三隻の空母の中で、『赤城』は一番被害が軽く、機関に問題がなくしばらくは自力で走行が可能だったが、格納庫の爆発物に引火した無数の爆発によって、ついに機関が破壊され、航行不能となった。
すでに『加賀』『蒼龍』は沈没したが、『赤城』だけは沈む気配はなかった。このまま海に浮かぶ廃墟のような状態が続く訳にはいかなかった。
鎮火不可能。自力走行不能。曳航(えいこう)不可能。沈没する気配もなし。
そんな死に掛けた艦に残された選択は――自沈か処分だけだった。
もし『赤城』を残したまま退去すれば、敵は海に浮かぶ『赤城』に調査に入るだろう。しかも『赤城』は米海軍が最も恐れていた日本機動部隊の旗艦。その中にある資料はのどから手が出るほどほしいものであった。
敵に重要な情報を渡す訳にはいかない。
山本長官直々の命令で、機動部隊旗艦・空母『赤城』は、味方駆逐艦の雷撃処分を受けて沈む事が決定された。
赤城はその決定に驚きもせず、静かにうなずいた。
「仕方がない。自分の失態で仲間を殺してしまった上、敵に情報を与えるなんて、そんな事進でも嫌」
そう言って、赤城は死を覚悟した。
そんな彼女の決意に、伊達も共に艦に残る事を選んだ。もちろん赤城は大反対したが、伊達は絶対に退艦しようとはしなかった。
赤城の三〇分にも及んだ必死の説得も無駄に終わり、そして時間来てしまった。もう退艦している暇はない。
伊達は胸の中で死に掛けている赤城をそっと抱き締めた。ぐったりとした彼女の弱々しい身体に一瞬顔がゆがむが、すぐに優しい笑みを彼女に向ける。

「なぁ、赤城。あの世に行ったら、結婚してくれないか？」
「・・・え？」
それは突然のプロポーズだった。
彼の顔を見上げると、彼は真剣な眼差しで自分を見詰めていた。
赤城はうつむくと、しばし沈黙した。どう返答すればいいか模索しているのだろう。
そして、答えが決まったのか、赤城はそっと顔を上げて、静かに笑みを浮かべた。
「喜んで・・・」
赤城の返事に伊達は嬉しそうに微笑んだ。
ここに、一つのカップルが誕生した。流れ星が流れ、それは二人の幸せを祝っているかのようだった。
二人はお互いに唇を近づけ、そっと口づけした。
その瞬間、演奏していた駆逐艦から魚雷が発射された。その時、微かに少女の悲鳴が聞こえた。それは味方駆逐艦の悲鳴だった・・・
迫る魚雷を見詰め、赤城はそっと彼に問うた。
「・・・伊達少佐」
「うん？」
「・・・私なんかで・・・本当に良かったの・・・ですか・・・？」
「何だよ突然」
「いえ・・・でも・・・私みたいな女の子らしい・・・家庭的な一面もない・・・私なんかで・・・本当に良かったのだろうかと・・・」
「その辺は大丈夫。僕は家事得意だから」
「そ、そういう事ではなくて・・・」
「言っとくけど、そんなの気にしないよ。好きになっちゃったんだから仕方ないでしょ？」
「・・・伊達少佐」
嬉しそうに微笑む赤城に、伊達は再びそっと口づけをする。
そんな悲運のカップルを、星達はキラキラと照らし続けた。

そして、味方駆逐艦が放った魚雷が命中し、『赤城』は巨大な水柱を上げて、沈没した。

――あぁ、結婚式には他の艦魂も呼ぶか？――

――それはやめてくださいッ！――

――ははは、冗談だ――

――結婚式は静かな森でするんです・・・――

――わかったわかった。約束だ――

――約束です・・・――

――空母『赤城』、巡洋戦艦として建造された本艦は、軍縮条約の影響を受けて空母に急遽変更される事になった。三段空母として竣工するも航空機の目覚しい進歩に時代遅れとなり全通甲板に変更。さらには大艦巨砲主義時代の空母という事もあり空母には不要な重巡洋艦規模の大砲も装備していた。そんな紆余曲折の末に完成した本艦は山本五十六連合艦隊司令長官が大佐時代に艦長を務めた事もあった。第一航空艦隊こと日本機動部隊旗艦として太平洋戦争の火蓋を切り、以後も連戦連勝。日本機動部隊無敵神話を築き続けたが、運に見放された本海戦で壮烈な最期を遂げ、味方駆逐艦の雷撃処分を受け、静かに艦尾から海底に没した――

「空母三隻、沈没・・・」

伝令兵の報告に、山本は疲れたように椅子に座った。

「『飛龍』も、炎上中だそうです」

「せめて、『飛龍』は残ってもらいたいですね」

宇垣は静かに言った。その表情は悲痛にゆがんでいた。

艦橋には不気味な沈黙が漂っていた。そんな艦橋に翔輝と大和はいなかった。二人は今は翔輝の自室にいた。大和が赤城達の死で立てなくなるほど脱力してしまったからだ。

「うぅ・・・ッ」

小さな声を出しながら大粒の涙を流して泣き崩れている大和を、翔輝は何も言わずただ抱き締めているだけだった。

翔輝の胸の中で、大和はすすり泣くだけだった。

そんな大和を見詰め、翔輝は辛い現実を言葉にする。

「大和・・・わかってほしい。これが戦争なんだ」

「わかってます！　わかってますけど・・・ッ！　大切な人が死ぬのは嫌なんです・・・ッ！」

大和は翔輝の軍服を掴んで泣くしかできなかった。

今まで彼女はずっと戦争ながらいつも平和な内地にしかいなかった。しかも今まで奇跡的に彼女の親しかった友人の中に死者はいなかった。だが、今こうして目の前に仲間の死が現実なものとなって現れると、それを受け入れきれないのだ。

わかっている。彼女の気持ちは痛いほどわかる。だが、このままでは大和がダメになってしまう。

戦争という死と隣り合わせな時代の中、こうした事はこれから何度も起きるだろう。そのたびに耐えられなければ、この時代は生きられない。だから・・・

「大和。いい加減にしろ」

「え？」

大和はまぬけな顔で翔輝を見る。いきなり意味のわからない事を言われて呆然としているのだ。

翔輝はそんな大和を離して立ち上がる。

「いつまでも泣いてるんじゃない」

「・・・いいじゃないですか・・・いいじゃないですかッ！」

翔輝の冷たい態度に、大和は激怒した。

泣きながらひどい事を言った翔輝に詰め寄る。

「仲間が死んだんですよ！　悲しくないんですかッ！？　泣くくらい許してくださいよッ！　私は一応は女の子なんですよッ！」

「そうやって甘えるな！　お前は全日本海軍艦魂達のリーダーなんだぞ！」

「だから何だって言うんですか！？　泣いて何が悪いんですかッ！？」
「お前が崩れれば艦隊全体が崩れるんだ！　しっかりしろ！」
翔輝の強い物言いに、大和は顔を真っ赤にして激昂する。
「・・・少尉は人間だから艦魂が死んでも関係ないって言うんですかッ！？」
「そうは言ってないよッ！」
「言ってますよ！　最低ですッ！　少尉も仲が良かったじゃないですかッ！　なのに何も感じないんですか！？　死んだって言うのに、大切な人な人が死んだ悲しみがわからないんですかッ！？」
その瞬間、空気が凍りついた。
大和はすぐに自分が決しては踏んではいけない最強の地雷を踏んでしまった事に気づき、翔香の写真を一瞥する。
翔輝はうつむくと、ゆっくりと口を開く。
「知ってるよ？　嫌ってほど知ってるし、わかる」
翔輝は顔を上げる。その表情は悲しそうだったが、ふっと笑った。
「でもね、今ここで悲しんでも彼女達は喜ばない、だろ？」
「少尉・・・」
翔輝は経験者なのだ。だから、こんなにも説得力がある。
翔輝は苦笑いする。
「でもね、僕も悲しかったよ？　だから、別に泣くのは構わない。でも、今ここでは堪えて。今は作戦実行中なんだから」
「・・・はい」大和は素直にうなずく。
「じゃあ、艦橋に戻ろう。長官も心配してる」
二人は艦橋に戻った。
主力部隊は全速力で機動部隊救援に翔ける。

翌六日午前二時、孤軍奮闘で戦った空母『飛龍』にも、雷撃処分が命令された。
昨日のうちに総員退去が命じられ、艦橋には参謀長達の必死の説

得にも応じず山口司令官、加来艦長が残り、『飛龍』と運命を共にしようとしていた。

参謀長達が涙を流しながら艦橋を去る時、山口は共に残る事になった加来に「一緒に月でも眺めるか」と言って二人して艦橋に戻った。それが二人の最後の姿であった。

そんな艦橋の上にある防空指揮所にはぐったりと剣に腕の中で倒れる飛龍がいた。真っ赤に染まった軍服はそのすさまじい出血量を物語っていた。

飛龍は憔悴し切っていた。もう痛みは感じず、疲労だけしか感じられなかった。

そんな彼女を抱き止める剣は何も言わず、ただ抱き締めるだけだった。

剣の腕の中で最期の時を迎えようとしている飛龍。

結局、敵空母一隻しか道連れにできなかったが、彼女は満足だった。

昨日、赤城も加賀も姉も死に、生き残っているのは自分だけとなってしまった。その自分ももうすぐ味方駆逐艦の雷撃処分で死ぬ。

遠くで味方駆逐艦が《海行かば》を演奏している。それはとても心地よい子守唄のようだった。

意識が飛びそうなのを必死に耐え、自分を抱き締める剣を見詰める。

「剣・・・」

「何？」

「・・・約束の時間・・・さあ・・・退艦して・・・」

剣は飛龍とある約束をしていた。

それは、沈没の直前に他の艦へ移乗する事。彼は必死にそれを断ったが、飛龍は断固としてそれを譲らなかった。

「・・・あなたに・・・翔鶴や・・・瑞鶴を守ってほしいの・・・」

その途切れ途切れの必死な言葉に、剣はようやく納得してくれた。

だが・・・

「悪いけど、やっぱりそれはできない。お前を一人じゃ逝かせない」
剣は約束を破り、彼女と死ぬ事を選んだ。そんな彼の言葉に、飛龍は怒る事はなかった。むしろ、その答えは予想していたのか小さな笑みを浮かべる。
「やっぱり・・・剣は・・・退艦する気はないのね・・・」
「わかってたの？」
「・・・当たり前でしょ・・・？　何年の付き合いだと・・・思ってるの・・・？」
その言葉に、剣は苦笑した。
「バレてたなら話は早い。僕は絶対に降りないからな」
剣はそう言って飛龍を強く抱き締める。そんな彼の腕の中、飛龍は嬉しそうに微笑むが、すぐに悲しげな笑みになる。
「あなたの気持ちは・・・痛いほどわかる・・・でも・・・やっぱりダメ・・・あなたを一緒に死なせられない・・・」
その言葉の後、剣の身体がまばゆく輝きだした。
その輝きに気づいた剣は続いて彼女の想いにも気がついた。
「まさかお前・・・ッ！　僕を他の艦に転送するつもりかッ！？やめろッ！」
必死に自分を抱き締める剣の耳元で、飛龍は小さく「ごめんね」とつぶやく。
――次の瞬間、剣は光に包まれて消えた。
彼のいなくなった寂しい防空指揮所の上で、飛龍はぐったりと横たわる。
「疲れた・・・眠い・・・」
飛龍はもう焦点の合ってない瞳で空を見る。
空はきれいな星空だった。
天空に広大な星の海が広がり、夜なのにとても明るかった。満月のせいもあるが、星の輝きが一番明るい。いや、一番明るいのは、自らの艦体を燃やして赤く輝いている炎だ。明るく、暖かく、そして心地良い。艦体が燃えているのに、痛みは感じず心地良い。死の

直前はこんなものなのだろうか？

「もう、眠い・・・普通・・・なら・・・もう寝てる・・・時間だし・・・」

本当に眠かった。出血多量で意識が飛び掛けていると言ってはイメージぶち壊しだが、それが理由だとしても眠かった。

下ではまだ山口達が起きている声が聞こえる。まぁ、もうすぐ死ぬっていうのにのん気に寝れる訳ないが。

そして、ついにその時がが来た・・・

駆逐艦から魚雷が発射された。

白い軌跡を残して接近して来る魚雷はなぜか遅い。まるで時間がゆっくり流れているかのように・・・

走馬灯のように記憶が駆け巡る。

楽しかった事、悲しかった事、怖かった事、姉や仲間達の事。そして、剣の事。

「姉さん・・・もうすぐそっちに逝くからね・・・」

飛龍は西の空を見詰める。その先には主力部隊が、大和達がいる。

「大和・・・長門さん・・・長谷川少尉・・・」

飛龍はそっと微笑み・・・

「後は、任せたよ・・・」

その瞬間、全てが真っ白になった。その先には赤城、加賀、そして姉の姿があった。

飛龍は姉達の元へ駆け出した。

――空母『飛龍』、義姉艦『蒼龍』と共に日本空母の原型となった最高の中型空母。本艦を応用して後に日本海軍は中型空母の大量増産に力を入れる事になった。真珠湾以来幾多の戦場を戦い抜き、常に戦いの最前線で激戦を繰り広げた。そして最後の戦いも孤軍奮闘で戦い、この海戦の英雄艦として、日本機動部隊無敵神話に終止符を打ち終え、己が責務を果たし、海の底に静かに消えて逝った――

「報告します・・・空母『飛龍』、山口司令官、加来艦長と共に、沈没しました・・・」
伝令兵の報告に、山本は静かにうなずいた。
「そうか・・・『飛龍』も沈んだか・・・」
宇垣も沈黙している。
目をつむり、唇を噛む翔輝の隣にいる大和は必死に涙を堪えていた。
「飛龍さん・・・さようなら・・・」
「大和・・・」
翔輝はそっと大和を抱き締めた。
翔輝の腕の中で必死に涙を堪える大和。そんな彼女に、翔輝は何も声をかけられなかった。
一方、目をつむっていた山本はゆっくりと目を見開くと、隣にいた宇垣を見る。
「宇垣君。各班に通報。敵機動部隊を夜戦で撃破する」
その言葉に、宇垣は小さく首を降る。
「長官。それは難しいです。主力部隊の速度より、敵空母の方が速いですから。まずこの大和の速力は三〇ノットに満たないので無理です。『金剛』『比叡』を中心に巡洋艦、駆逐艦で高速部隊を編成するのも手ですが、混乱している今の状況ではその編成に時間が掛かりすぎてしまいます。ですので、夜戦は不可能に近いかと」
「しかし・・・ッ！」
食い下がる山本を、宇垣はじっと見詰める。その瞳は別の目的に輝いていた。
「長官。ここは機動部隊の生存者を救出する方が先です。失った空母は戻りませんが、優秀な搭乗員達さえいれば、基地航空隊に配属するも、残った五航戦（第五航空戦隊）の搭乗員にする事もできます」
宇垣の言葉に、山本は沈黙する。
航空機主義の山本に対し、その参謀長である宇垣は大艦巨砲主義

者である。その彼が航空機の有用性を認め、その搭乗員達を救おうと言っているのだ。

「お願いします。長官のお考えであった短期決戦早期和平は、これ以降不可能になるでしょう。これからは意地と気合の長期戦です。航空機の必要性はより増すでしょう。その時、機動部隊の搭乗員がいれば、アメリカとも正面から戦えます。飛行機ならある程度は生産できるでしょうが、搭乗員の育成はそれに間に合いません。例えまともに戦える時間が少なくても、それだけで十分敵の侵攻を遅らせる事はできます。沈んでいった四隻の空母達の為にも、せめて搭乗員だけは一人でも多く確保しましょう。海に投げ出されている彼らを、どうかお救いください」

宇垣は山本をじっと見詰め、軍帽を取り、自ら頭を下げた。そんな彼を、山本や参謀達、そして翔鶴と大和も見詰めた。

「もし、承諾いただけないというなら、夜戦をしても構いません。ですが、その際は旗艦を『長門』に変更し、『大和』は自分にお貸しください。私が直々に『大和』を指揮し、アメリカ本土にでも何でも殴り込みをかけます」

必死に訴える宇垣。

山本はしばらく沈黙していたが、宇垣の強い決意にやがて静かにうなずいた。

大和はそれに驚いたが、それが最善の策だった。

涙する大和を、翔鶴はそっと抱き締めた。

主力部隊は足の速い駆逐艦を全速力で空母のいない機動部隊に向け、海に投げ出された生存者を救出。救出作業を終えると、駆逐艦は主力部隊に合流した。

駆逐艦が戻って来たところで、主力部隊は撤退を決定した。

「全艦、反転一八〇度・・・全艦戦闘区域を離脱。内地に帰還する」

山本の命令で、艦隊は反転を始めた。その時、

「聞けッ！　日本海軍全艦魂達よッ！」

すさまじい大声が艦隊に響いた。しかし、山本も宇垣も反応がない。という事は・・・

「これは、長門さんの声？」

「防空指揮所に行こう！」

二人は急いで防空指揮所に上がった。

見張り兵が敬礼したが、翔輝は無視した。

壁を掴み、急いで後方を走っている『長門』を見る。すると、『長門』の防空指揮所に身長の高い女性が立っていた。さらに、他の三〇〇隻の艦の防空指揮所にも次々に女性や少女が出て来た。それは全て艦魂だ。

長門は防空指揮所の天辺に立つ。その姿は勇ましいの一言だった。

「皆も知ってる通り、機動部隊の空母赤城、加賀、蒼龍、飛龍は戦死した！　作戦は失敗し、仲間を四人も失い。我が海軍は開戦以来、いや、日本海軍史上最悪の大敗北をした！　敵の被害は空母一隻大破だ！　今、伊-一六八（潜水艦）がとどめを刺しに行っている！

しかし、この戦果は全て最後まで諦めなかった飛龍の最大の手柄だ！　飛龍はよくやった！　もちろん、赤城、加賀、蒼龍もがんばった！　だから、みんな忘れるな！　我が海軍を栄光まで導き、そして散っていった四人を、わかったなッ！」

『おおおぉぉぉッ！』

泣きが混じった女性特有の高い声が響き、艦隊は全艦反転を終えた。

長門はすごい。さすがは長年連合艦隊旗艦をやっていた事はある。いつもは笑顔で軍人には向いていないような人なのに、いざとなればこんなにも勇ましく、多くの艦魂達をまとめられる。それに比べて自分は、情けない・・・

大和はそう思い、恥じらいもなく大声で泣いた。

もう、作戦は終わったのだから・・・もう、泣いてもいいのだ。

翔輝の腕の中、大和は始めて味わった敗北と仲間の死に、いつまでも泣き続けた。そんな彼女を抱き締め、翔輝は悔しそうに唇を噛

んだ。
艦隊は、一路内地柱島を目指した。
途中、艦隊は敵潜水艦の雷撃を受けるが、命中はせず、『大和』は副砲で応戦したが、効果は確認できなかった。

ミッドウェー海戦はこうして終わった。
正式空母を四隻と全艦載機と多くの搭乗員を失い、作戦は大失敗だった。
世界最強と謳われた日本機動部隊はここに壊滅し、その後、日本は二度と同等の力を持つ機動部隊を編成する事はできなかった。
日米の兵力バランスは完全に狂い、山本の考えていた《短期決戦・早期和平》というこの戦争の絶対必須事項を失った。これ以降、日本は敗北の一途を辿り始め、長く苦しい戦いの中、多くの将兵や飛行機と艦艇、そして艦魂達が、太平洋の海に散っていく事になった・・・

第五章　第一節　大和敵わぬ最大の恋敵

日本海軍最大の敗北であったミッドウェー海戦から数週間後、その日は柱島に駐留している『大和』の特定兵員第三班上陸日だった。
特定兵員とは主計科、通信科、砲術科などの通常兵員とは違い、港に停泊していても使用する機関（簡単に言うとエンジンの事）を操作する機関科。そして次の航海の作戦等を立てる航海科等の特殊な科の兵員の事だ。この兵員達は艦に絶対に必要な人材であり、他の科と違って複数の少数班に分けて上陸させる為、他の科と上陸日が微妙に変わるのだ。
そして、今日は翔輝の所属する航海科首脳部が上陸する日でもあった。

初夏の日差しが射し込む翔輝の部屋では、翔輝が上陸の為に荷物を用意していた。
「少尉！　本当に行っちゃうんですか！？」
アタッシュケースに作業着を畳んで入れている翔輝に大和が叫ぶ。
そんな大和に翔輝は嬉しそうに微笑む。
「うん。たまには外の空気吸いたいし」
「それなら甲板で十分じゃないですか！」
「いや、そういう事じゃなくて」
翔輝は困ったように頬を掻く。
さっきからこんな調子で大和は翔輝が上陸する事に反対しているのだ。理由はわからないでもない。ミッドウェー海戦で仲間を失ったばかりで辛いのに、ここで翔輝がいなくなるのはとても辛いのだ。
「お願いです！　行かないでください！」
「そう言われても」
困る翔輝の腕に大和は必死になってしがみ付く。
「今一人になるのはすごく寂しいんです！」

「お前は一人じゃないだろ？　長門さんや陸奥、瑞鶴もいるだろ？」
「少尉じゃなきゃ嫌なんです！　お願いです！　行かないでください！」
必死に懇願する大和を見て、だんだん翔輝は上陸する事になぜか罪悪感を感じ始めた。もちろん彼は何も悪くはないが。
翔輝は大和のあまりの必死っぷりに、ついに根負けした。
「あ、うん。そ、そこまで言うなら、上陸はまた今度にするよ」
「本当ですか！？」
「大和ぉ。あまり長谷川君を困らせたらダメよぉ」
突然の声に振り返ると、いつの間にかドアの前に呆れた笑みを浮かべれる長門腕を組んで壁に寄り掛かっていた。しかもその横には陸奥、伊勢までいた。
「あれ？　みんなどうしたの？」
「少尉を見送りに着たんですよ」
陸奥が笑顔で答えた。
「見送りって、別に転属になる訳じゃないよ？」
「それもそうですね」
陸奥は翔輝のツッコミにくすくすと笑みを浮かべ、そんな彼女の笑みに翔輝もおもしろそうに笑う。
翔輝と陸奥が楽しそうに話していると、いつの間にか一人になっていた大和が怒鳴る。
「陸奥さん！　少尉から離れてください！」
大和は翔輝と陸奥の間に入ると、二人は女の子にはあるまじきかなり怖い目で睨み合う。そんな二人を横目に、長門が二人を見て戸惑う翔輝に話しかける。
「長谷川君。大和の事は私達に任せて上陸しておいで」
「え？　でも・・・」
渋る翔輝の唇に長門は人差し指をそっと当てると優しげな笑みを浮かべる。そんな仕草に一瞬ドキリとしていまう。
「いいのよ。たまにはゆっくり羽を伸ばしてらっしゃい」

「そ、そうですか？　じゃあお言葉に甘えて――」
「絶対にダメですううううぅぅぅぅッ！」
そこで陸奥と激戦していた大和がこっちに食い付いた。
「少尉は上陸しないって言ってくれたんです！　だから上陸しないんです！」
「大和」長門はわがままな大和にため息混じりに言う。「長谷川君は上陸したがってるのよ？　たまにはゆっくりさせてあげましょうよ」
「嫌です！　少尉はどこにも行っちゃダメなんです！」
大和は顔を真っ赤にして激怒する。そんな大和の様子に少し離れた陸奥と伊勢が呆れる。
「大和はんってあないに束縛癖があったんねぇ」
「というか、わがまま過ぎると思うけど」
「過ぎるなんて当の昔に通り越してわがまんまの極致に達してるんちゃう？」
「ほとんど神の領域ね」
「そんな神はいれへんなぁ」
「だよね。大和ちゃんも少し大人になってほしいよね」
陸奥と伊勢は呆れたようにため息を吐く。
そんな二人をよそに大和が先輩である長門に牙を向け続ける。
「少尉は行っちゃダメです！　一人になるのは嫌なんです！」
「だから、あなたは一人じゃないってばぁ。私や陸奥がいるじゃない」
「少尉じゃなきゃ嫌なんです！」
話は横線のないアミダくじのように完全に平行線をたどり、お互いに一歩も引かない。当事者である翔輝は諦めたようにため息する。
「いいよ。上陸はやめにするから、ね？」
その言葉に、大和は満面の笑みになる。
「ほら！　少尉もいいって言ってるじゃないですか！　これで万事丸く収まり――」

「いい加減にしなさいッ！」
突如爆弾が炸裂したかのような怒号が響いた。その声は、いつも温和な長門の声だった。
長門の顔はいつものような柔和な笑みではなく、怒り狂った龍のような激怒顔だった。そのあまりの迫力に四人はただただ圧倒されていた。
長門の怒りの矛先はしっかりと大和に向いていた。
「大和。いい加減にしなさい。長谷川君は疲れてるのよ？　たまには陸の上で休ませてあげなさい！」
「長門さん。そんなに怒らなくてもいいじゃないですか。もういいですよ」
「いい訳ないでしょッ？　あなたが甘やかすから大和もつけ上がるのよッ？」
「あ、いや・・・すみません」
自分がとても小さく感じた。何も言い返せないのが情けない。
沈黙した翔輝を一瞥し、長門は落ち込む大和を睨みつける。
「長谷川君はただでさせ航海科っていう他の科より激務な科に所属してるのに、あなたの面倒までやってるのよ？　休暇くらい解放してあげなさい！」
長門のあまりの迫力に、大和は何も言い返せなくなる。そりゃあもう虎に威嚇されたクマネズミの如く。
「だから」
長門は翔輝を見詰め、そして、優しく微笑んだ。
「ゆっくりしてきなさい」
「あ・・・はい」
翔輝は嬉しくなって笑顔で答えた。だが、この結果に猛反対するであろう人物の存在を二人は忘れていた。
「で、でもッ！」
大和は意外としぶとい＋怖いもの知らずで反撃を敢行する。
「少尉には家族がいないんですよ！？　泊まる所があるんですか！

？」

大和は同意見を求める為に翔輝に質問する。その質問に翔輝は苦笑いする。

「家はあるけど、そこには帰らないよ？　近くの宿に泊まるつもり。それに・・・」

翔輝はポケットから一枚の手紙を取り出した。

「休暇中に一度遊びに来いって」

全員が翔輝の持っている手紙を覗き込む。

『宛先

帝国海軍広島県呉鎮守府軍港駐留艦隊所属・長谷川翔輝海軍航海少尉

内容

今度ノ休暇ニ是非イラシテ下サイ。御待チシテオリマス。

広島県呉市中央三丁目

〒XXX-XXXX　霞　瑠璃』

「霞瑠璃（かすみるり）？　誰ですか？」

大和が頭にハテナマークを浮かべる。それは大和だけでなく長門達も同じような反応だ。

「そういえば、瑠璃の事は話してなかったな」

翔輝は机の上の翔香の写真を取る。

「瑠璃はね、僕のいとこで四つ年下の幼なじみなんだ。それに、翔香の親友でもあったんだ」

全員が翔輝の手元の翔香の写真を見る。永遠に変わる事のない純粋な笑みを浮かべる少女を・・・

「あとね、彼女は呉の貴族家である霞家の一人娘でもあるんだ」

「霞家って、日本有数の高級貴族でしょ？」長門が言う。

「はい」

翔輝の返事に、長門は不思議そうに首を傾げる。

「でも何で貴族の家の子と知り合いなの？」
長門の質問を予想してたのか、翔輝は慌てた様子もなくその問いに答える。
「霞家の先代は貴族なのに冒険家でして、各地を飛び回っていたそうです。その時に呉に戻った際にちょっとヤンキーに絡まれたそうでして、その時に助けたのが私の祖父なんです。その関係で昔から貴族である霞家と一般だあるはずの長谷川家は仲が良く、それに瑠璃の母は僕の叔母でして、十数年前に長谷川家から霞家に嫁いだんです。その関係でよく瑠璃を預かったり、遊びに行ったりしてたんです」
「なんか、ものすごい複雑な事情ね」
「僕もそう思います。毎回こうやって説明するのが大変なんですよ」
そう言って翔輝は苦笑いする。
だが、翔輝の言った人物の名を聞いて、尋常じゃない不安を覚えている人物が一人いた。
「少尉、あの、その瑠璃さんというのは、女の子ですか？」
大和はまったくもって見当違いな質問をする。だが、大和にとっては今一番最も心配な最優先事項だった。
だが、大和の心配は最悪の形となって現実に現れた。
「うん。そうだけど」
大和は頭上に雷でも落ちたような気がした。大和は口をパクパクさせながらよろめき、後退っていく。
大和は決して聞きたくない、だが聞かなければならない最後の質問をする。
「その子、かわいいですか？」
うーん、と翔輝は考え、なぜか頬をほんのり赤めながら言った。
「うん。まだ幼いけど、結構美人。と言うか美少女だよ？」
ががががあああああぁぁぁぁぁんッ！
大和は意識の奥で激しく打ち鳴らされる大鐘の音を聞いた。
そして、ゆらゆらと揺らめく炎を見た。

それは自分の手だった。
心の底からふつふつと湧き上がってくる、感情のほとばしりだった。
「しょ・・・ッ！」
大和はじわりと涙を目の縁に溜め、怒り狂った龍のような顔をする。
そして・・・
「少尉のバカアアアアァァァァッ！」
一〇〇発の砲弾を同時に炸裂させたかのような地響きと爆音が響いた。直後、大泣きしながら「少尉のバカッ！　屠(ほふ)るッ！　皮を剥いで肉を切り裂いて骨付きカルビって名目で焼肉店に売り出してやるッ！」とグロテスク＋商品詐称犯罪的な言葉を残して部屋から去って行った。
残された四人はまだ耳鳴りがする耳を押さえて、お互いに苦笑いするしかなかった。

甲板に兵達が集まっていた。
そこには翔輝もいた。結局上陸する事になったのだ。
遠くでは顔見知りの艦魂達が日章旗を振って万歳していた。別に赤紙を貰って戦地に行く訳じゃないのに（これは戦争中期～終戦の事なので、一応戦争初期である今はまだない）。中には涙ぐむ者まで。確実にこれでは出兵じゃないか。
翔輝がそんな事を考えていると、ふと大和がいない事に気づく。急いで辺りを見回すと、目の前の第二砲塔の上で仁王立ちしてこっちを睨んでいた。そりゃあもう睨みだけでエチゼンクラゲ一個大隊を粉砕できるような（実際してくれたら漁師の人達が喜ぶが）恐ろしさである。今の彼女を鳥取砂丘に埋めれば砂漠が三倍に増えるのではないかというような、すさまじい怒りの炎を上げていた。なぜ彼女を怒らせてしまったのか、翔輝はわからなかった。だが、あの表情を見るに相当怒ってる。まるで阪神と阪急が合併して、阪神タ

イガースの名前が変わってしまうのではないか烈火の如く激怒した阪神ファンのように。しかし、自分はそんな確実にスズメバチの巣をつつくどころか、竹槍で特攻するような事はしていない。では一体何が彼女を激怒させたのか。

そんな事ばかり考えていたので、気がついたら内火艇に乗る順番が来ていた。後ろから「少尉。元気でねー」「風邪引かないでね」「食中毒には気をつけてね」とか言ってる艦魂達の声が聞こえる。

そして、大和の視線も。

「少尉のバカアアアアァァァァッ！」

その怒号にビクリと震えて振り返ると、大和がこちらを睨みつけていた。翔輝の視線の気づいたのかふんとそっぽを向くが殺気に近い気は依然こちらに向いている。

翔輝は苦笑いしながら内火艇に乗り込んだ。乗るとすぐに内火艇は出た。近くにいた駆逐艦は小さくなっていくのに、大和だけは他の艦を圧倒する大きさのまま全然小さくならない。改めて自分の乗っている艦の大きさを認識する。

だが、その後すぐに内火艇は岸に着き、翔輝は降りた。

船着場には多くの人がいた。その多くが女性だった。母親、妻、娘と息子、姉、妹、恋人関係の人が多く集まっているようだった。

そして、そこには満面の笑みを浮かべる軍人達もいた。我が子や妻、妹、恋人を抱き締め、母親や姉に抱き締められる者がたくさんいた。

だが、翔輝にはそんな事をしてくれる人はいない。家族はいないし、恋人もいない。こりゃあ、大和の言う通り艦でおとなしくしてれば良かったな、と翔輝が早くもこの休暇の取り方を根本的に考え直した時だった。

「翔輝様」

ふいに自分の名前を呼ばれた。

その聞き覚えのある声に振り向くと、そこには大きな外国産らしい高級車が止まっていた。そして、その窓には・・・

「今回は来られたのですね？」
黒く艶(つや)やかな長い髪を美しく流し、前髪をきれいに切りそろえた髪形をした美少女が優しく微笑んでいた。黄色を基本とし、所々に桜の花が描かれたきれいで高そうな着物を悠然と着こなしている。
その少女は・・・
「瑠璃？　どうしたのこんな所で」
翔輝はそう言うと嬉しそうに微笑んだ。
そう。彼女こそ翔輝の幼なじみにして翔香の親友。そして、霞家のお嬢様である――霞瑠璃その人だった。
瑠璃は純粋な笑みを向ける。
「それは、翔輝様を待っていたからですわ」
「僕を？」
不思議そうに首を傾げる翔輝に、瑠璃は満面の笑みを向ける。
「はい。翔輝様をお迎えに来たのですわ」
「む、迎えに？」
混乱する翔輝をよそに、瑠璃は勝手に話を進める。
「ささ。早くお乗りください。神鳴(かみなり)さん」
「はい、お嬢様」
運転席のドアを開けて老紳士のような男が出て来た。翔輝も知り合いの瑠璃専属の執事である神鳴勉(つとむ)であった。
「神鳴さん。お久しぶりです」
翔輝は懐かしそうに喜ぶと頭を下げた。
「こちらこそ。翔輝様もずいぶん立派なお姿になられて。浩平(こうへい)様（翔輝の父親の名前）もさぞお喜びでしょう」
神鳴は本当に嬉しそうに喜ぶ。この二人、翔輝が小さい頃よく遊んでもらい、祖父と孫のような関係でもあった。
そんな笑みを浮かべ合う二人を、瑠璃が「むむむ・・・」と不機嫌そうに見詰める。
「もう。神鳴さんも翔輝様も、お話なら家に戻ってからゆっくりすればよろしくて？」

瑠璃がしびれを切らして言う。この子、お嬢様生活が長いのか、常人よりちょっと我慢が苦手なのだ。

「ほほほ。そうですな。ささささ翔輝様。お早くお乗りください」

「え、あ、はい」

翔輝は場の流れに流され、結局車に乗ってしまった。

これが、翔輝の一泊二日の休暇の始まりだった。

第五章　第二節　史上最強の幼なじみ（前書き）

《霞瑠璃（かすみるり）》

日本有数の貴族兼資産家である霞家のお嬢様・翔輝の幼なじみ・翔香の親友

出身　広島県呉市

身長　１５６ｃｍ

髪型　長髪の姫カット

年齢（１９４２年６月現在）１３歳

誕生日　１２月２４日

好きなもの　翔輝・翔輝の為にする事・翔輝と一緒にいる事・翔輝と一緒に寝る事・翔輝にほめられる事

嫌いなもの　翔輝に嫌われる事・翔輝に害をなす存在・翔輝に近づく女性・自分の思うとおりにならない事

家族構成　父　母

日本有数の貴族である霞家の一人娘のお嬢様にして次期当主。大昔から続く由緒正しき貴族で超超超大金持ちの一人娘、それが瑠璃である。その為一般人とは金銭感覚がかなりずれていて一度に使う金額が桁違い。翔輝の為なら現在の価値で億単位をもポンと出せる超超超大金持ちのお嬢様。そんな瑠璃は翔輝の子供の頃からの幼なじみで小さい頃から彼に想いを寄せており、今でも翔輝の事を心の底から慕っている。翔輝の事ならいくらでもお金を投じる事ができる。さらに独自の諜報機関を持っていて、その情報収集能力は世界でもトップレベルに入る実力で、本気を出せば軍機だろうが国家機密だろうが厳重なファイアーウォールを突破してほしい情報を手に入れる。しかしその大部分は常に翔輝の為に動いているのが現実である。お嬢様生活が長いので人より忍耐力がなくかなりわがまま。自分の思い通りにいかない事は大嫌いというかなりのもの。しかし根が純粋なので誠意を持って接すれば理解してくれる。すごい毒舌家でか

なりバイオレンスな事を言い放つが少し天然なところがある本人は自覚がなくそれで相手を傷つけている事に気づいていない。意識がないので怒りようがない。ちなみに霞家は呉海軍工廠最大のスポンサーでもある。

第五章　第二節　史上最強の幼なじみ

車は賑わう呉の街中を抜けて小高い丘の上に位置する霞家の屋敷（大きな学校の校舎三つ分並みの大きさ。庭に関しては東京ドーム三〇個分ほどはある。しかもこれの半分規模くらいの別荘が日本各地にある。・・・そんな場所あるか？）に着いた。

翔輝はそのまま屋敷内に案内され、茶の間に案内された（学校の体育館並みの広さ）。もちろん内装もすばらしいのひと言である。

瑠璃は上座に座り、翔輝も下座に座った。

「どうぞ」

神鳴がお茶と和菓子を二人に差し出す。

「どうも」

「ありがとう」

お互いに礼を言い、それを受け取る。そして、二人はそのお茶をすすった。

相変わらずおいしいお茶を用意している。それだけ高いという事で最初の頃は拒否していたが、無理やり飲まされる内にためらわなくなっていた。

「うん。おいしい」

翔輝が笑顔で言うと、瑠璃は心の底から嬉しそうに満面の笑みを浮かべて喜ぶ。

「それは良かったですわ。静岡の最高級の茶葉を直輸入したかいがありましたわ」

それを聞き、翔輝はもう慣れているのか驚いた様子もなく、ただただ呆れる。

「そんな大変な事をわざわざ僕の為に？」

「もちろんですわ。翔輝様の為なら私はお金をバンバン使いますわ」

（いや、それはちょっと・・・）

自慢げに宣言する瑠璃はいつになく自信に満ち溢れている。

「このお茶菓子も老舗に特注したのですよ？」
「そこまでしなくていいって」
「いいえ。翔輝様には全て一流品を差し上げなくてはいけませんわ」
どうもこの娘はかなり世俗ずれしている。お嬢様だから仕方ないが、それにしてもこれはやりすぎだと思う。
翔輝が苦虫を噛み潰した上呑み込まずに口の中に残しているような顔をすると、瑠璃は驚いたように目を見開く。
「翔輝様!?　どうされたのですか!?　血色不良のゾンビみたいなお顔をされて！」
この娘、時々バイオレンスな言葉を言い放つのだ。ひどい事この上ない。
「大丈夫だよ」
翔輝が精一杯の笑みを浮かべると、瑠璃は一応安堵した。
「ビックリしましたわ。体調でも優れないのですか？　風邪なら首にネギを巻きますか？　もちろん最高級の下仁田（しもにた）ネギを用意しますわ」
「いや、別にいいし。それにそれ間違った民間療法だし」
苦笑いしながらお茶をすする。瑠璃は純粋な笑みを浮かべていた。おそらく何もわかっていない。やっかいな事この上ない。
「あ、そうですわ」
そう言うと、瑠璃は今までの優しい笑みを消して急に不機嫌そうな顔をする。
「どうして軍艦の名前を教えてくれなかったんですの？　おかげで鎮守府（ちんじゅふ）に送らなくてはならなかったじゃないですか」
「あぁ、ごめんごめん。軍の秘密なんだ」
これはウソではない。当時『大和』は極秘だったので、一般人に口外する事はできなかったのだ。『大和』の乗組員も自分は『大和』に乗っている事を、例え親にさえ言えなかったのだ。
翔輝は「ごめんごめん」と謝り、お茶をすする。その刹那、瑠璃が急にイタズラっぽい笑みを浮かべた。そして、恐ろしい事を口に

した。
「連合艦隊旗艦・大和型戦艦一番艦・新鋭超弩級不沈戦艦『大和』ですね？」
ゴハッ！　すさまじい奇襲攻撃に翔輝はマンガでおなじみの《お茶吹き》をやってしまった。汚れた所を神鳴が拭き取ってくれた。さすが執事。
だが、今はそれどころではなかった。翔輝は目の前で幼い顔立ち相応のかわいく笑っている少女を見る。なぜ彼女が『大和』の事を知っているのか。これは極秘中の極秘。軍機である。極秘扱いでは最高の国家機密の一つ下である。そんな事を、貴族といえど民間人である彼女が知るはずがなかった。
なのに、どうして・・・？
「げほげほッ！　あー、その、な、何で瑠璃が『大和』の事を知ってるの！？」
たまらず聞くと、瑠璃はあんまりない胸を張って自信満々に答えた。
「ふふん。霞家の情報収集力をなめてもらっては困りますわ。これくらい造作もない事ですわ。全力を出せば『大和』の今晩の夕食の献立までわかりますわ」
な、何と恐ろしい。
「・・・献立は何？」
「白米にハムステーキ、キャベツの味噌汁、たくあん、それに羊羹が二切れ付くそうですわ」
「・・・結構豪華だな」
「そうでしょうか？　なんならハムステーキと言わず最高級の松坂牛のステーキでも食べますか？」
あ、それはいいかも。ラッキー。
「じゃなくて！」
翔輝は瑠璃の言葉と自分の欲望にツッコミを入れる。
「何でそんな事を知る必要があるの！？」

「私は翔輝様の全てを知る必要がありますわ」
「いや、ちょっとやり過ぎじゃ・・・」
「知る事は必要です。情報公開制度というものを知らないのですの？」
「いや、まだそんな制度は存在しないし。ってか君の情報網は時間も越えるのか？　というかどうやってそんな情報を得てるの？」
「あら、乙女は秘密があればあるほど美しくなりますのよ？」
よくそんな設定は聞いた事はあるが、そんな秘密はいらない気がする。
「そうなの？」
「はい。もちろんですわ」
「でも、瑠璃は十分きれいだし、かわいいと思うけど」
「え？」
翔輝の言葉に瑠璃は顔を真っ赤にして、驚いてように大きな瞳をいっぱいに広げる。
「そ、そんな事ありませんわ・・・ッ！　私などまだまだ・・・でも、翔輝様がそうおっしゃられるなら、とても・・・嬉しいです・・・」
ほとんど語尾の方は翔輝には聞こえなかった。だが、瑠璃の突然の変化に翔輝は心配そうにする。
「瑠璃？　大丈夫？　顔が赤いみたいだけど」
この少年、草食恐竜並みに鈍感だった。
「へ、平気ですわ」
顔を真っ赤にしたまま瑠璃は笑った。
翔輝は「そう」と答えて羊羹を口に運ぶ。さすが老舗。甘すぎずちょうどいい甘味が口の中いっぱいに広がっていく。
「どうですの？」
瑠璃は心配そうに翔輝を見詰める。翔輝は嬉しそうに、
「うん。おいしいよ」
「本当ですの？　良かったですわ」

本当に嬉しそうな顔で喜ぶ。そして爆弾発言。
「さすが二〇円二七銭したかいがありましたわ」
「に、二〇円！？」
翔輝は驚愕する。もちろん安すぎて驚いたのではない。むしろその逆だ。この金額を現在価値に直すと、約三万七〇〇〇円である。
高い・・・
「あら？　どうしたのですの？　そんなバカみたいにリンゴを丸齧りしてアゴが外れたようなお顔をされて」
「いや、すごく高いからビックリして」
「そうですの？　そんなに高いですか？」
「いや、高いって！　二〇円（約三万七〇〇〇円）でしょ！？」
「あら、そうですの？　私のこの着物でもたった三五〇〇円（約六五〇万円）ほどですのよ？」
「さ・・・ッ！？」
翔輝はもう開いた口が閉まらなかった。
ちなみに、翔輝（つまり海軍少尉）は年俸一〇二〇円（約一九〇万）（現代に比べると随分安いが衣食住全部国持ちだった上、当時は物価が安かった。だが、この時は有事時期だったので結構厳しかったらしい）である。単純計算で瑠璃の着物は翔輝の給料三年半分にもなる（昇級すれば変化するが）。
「その着物、僕の給料の三・五倍ぐらいあるんだけど」
その言葉に、瑠璃は心底驚いたようだった。
「え、うそ？　冗談でしょ？　え？　三・五倍って、年俸一〇〇〇円？　たったそれだけ？　子供のお駄賃ぐらいですよ？」
「それは言いすぎだって、しかも物価の変動をちゃんと換算してね？　現代金額の一〇〇〇円じゃないよ？」
「冗談ですわ。でも軍人って死ぬほど安年給ですのね」
そんなすさまじい事を瑠璃は笑顔で言った。
悪気がなく、悪口を言っている事も自覚にない奴を怒るのは、相当難しい。というか無理だ。

「ま、まぁ。瑠璃は少なく思うかもしれないけど、これでも結構裕福な方なんだよ？」
「・・・なるほど、平民はそれでも十分なんですのね。また一つ成長しましたわ。これを日進月歩と言うのですわね」
瑠璃の最近の趣味は平民（一般階級民）の文化を知る事らしい。その度に辛口な発言をされるのは辛いが。
「まぁ、喜んでくれてるならいいか」
元気なく苦笑する翔輝。
「でも、翔輝様が望むなら資金の提供もしますよ？　ほんの一万円（約一八〇〇万円）ほどですが」
そんなすさまじい事を言い出した瑠璃を翔輝は慌てて止める。
「いや、そんなお金いらないから！」
「あら、そうですの？　足りませんでしたか？　では五万（約九二〇〇万円）ではどうでしょうか？」
「いらないってばッ！　そんな大金！　ほとんど零戦一機分の額でしょ！？」
「あら、いらないんですの？　遠慮深い方ですね」
瑠璃はくすくすと笑った。苦笑ではなく、純粋に笑っている所を見ると、何も全くわかってないらしい。
翔輝はため息して羊羹（三万七〇〇〇円）を口に入れた。瑠璃も嬉しそうにパクパクと羊羹（三万七〇〇〇円）を食べる。
それぞれの話と高級日本茶と高級羊羹（三万七〇〇〇円）は次々に進み、二人の時間はすぐに過ぎた。

夕方になり、翔輝は夕焼けに照らされる海を見詰めた。ここに来た時は二時頃だったが、時間というのは結構進むのが早い。
「そろそろ宿を取らないとな」
「翔輝様？」
翔輝はアタッシュケースを持って立ち上がる。
「どうされたのですか？」

瑠璃は紅茶（やっぱり高級品）を飲みながら驚いた。
「うん？　そろそろ帰ろうと思って」
「え？　帰るって長谷川家の家にですの？」
「いや、宿を取るんだけど」
そう答えると、瑠璃は名案を思いついたように小さな胸の前で手を合わせて笑った。
「それでしたら問題ありませんわ。ここに泊まっていけばいいのですわ」
その言葉に、翔輝は驚いた。
「ちょ、ちょっと待って！　さすがにそれは・・・ッ！」
「どうしたんですの？」
「どうしたのって、孝之（瑠璃の父、翔輝の叔父）さん達いないんでしょ？」
「えぇ、貴族会の旅行で、一週間は帰って来ませんが」
「だから、親の許可なしに泊まるのはちょっと・・・」
「あら、今更何をおっしゃるんですの？　私と翔輝様の仲じゃないですか、心配いりませんわよ」
「でも・・・」
「翔輝様。どうぞお泊りください」
そこへ瑠璃の三杯目の紅茶（高級品）を注ぎに来た神鳴が言う。
二対一。これは明らかにこちらに分が悪い。この圧倒的不利な状況を打開すべく策を考えるが、敵はそれを待ってはくれない。
「神鳴さん。『桜の間』を用意しておいて」
「はい、お嬢様」
本人の意思に関係なく、話はどんどんと進んで行く。というか、当事者である翔輝には決定権はないのだろうか？
「だから、待ってって！」
さすがにそろそろ自分の存在が危うくなった所で翔輝は止める。
「翔輝様。どうされたのですの？　ペットショップに一匹取り残された子猫みたいな顔をして、そんなにかわいくはないですけど」

相変わらず例えが無茶苦茶で、尚かつ痛恨の一撃の威力を持つ言葉を言い放つ瑠璃。
「だーかーらー。僕は宿を取ってそこに泊まるから、部屋の用意はいいって」
「・・・なぜですの？　ここなら無料かつ最高級のお持て成しができるのですよ？」
「いいってば、僕はゆっくりしたいの」
そう言うと、瑠璃は呆れたような顔をする。
「わからない人ですわね。ここなら最高級にゆっくりできますのに」
「別に最高級じゃなくていいから。僕は平民なんだから、瑠璃のような貴族と違って平民だから、ゆっくりも平民並みで良いの」
特に『平民』と『貴族』に力を入れて嫌味っぽく言ってみた。さっきから色々（特に安年給）ひどい事を言われていたので、ちょっとしたお返ししてやろう・・・そう思ったのだが・・・
ほろり・・・
「え？」
「お嬢様!?」
瑠璃が突如ほろほろと涙を流して泣き出してしまったのだ。これには翔輝と神鳴（特に神鳴）は驚いた。
翔輝はアタッシュケースを捨てて、急いで瑠璃の傍についた。
「瑠璃!?　ど、どうしたの!?　も、もしかして嫌味がダメだった!?　なら謝るよ!　ごめん!」
顔を赤く染めて大粒の涙を流しながら泣く瑠璃は、とてもかわいく思えたが、今は非常時でそんな煩悩は消え失せた。
瑠璃はしばらく嗚咽をしながら静かに泣いていたが、突然ダムが倒壊したかのようなすさまじい鉄砲水の如く涙を流し、大声で泣き出した。
「うえええええぇぇぇぇぇんッ！　翔輝様と一緒に寝るんだもん！　寝るんだもん！　翔輝様はここに泊まるんだもん！　絶対絶対ぜぇぇぇったい泊まるんだもん！」

恥じる事なく、高い着物（約六五〇万円）が乱れてもお構いなし。まるで小さな子供が駄々を捏ねるように手足をこれでもかとバタつかせて泣き出した瑠璃。そんな瑠璃を見て、心配から呆れに変わる二人。

この少女、いつもは『～ですわ』とか『～ですのよ』とかお嬢様言葉で優雅だが、一度このように駄々を捏ねると『～だもん』に語尾が変わり、しかも幼い子供のように絶対自分の意見を譲らない、つまりは暴走するのだ。そして、一度こうなってしまった瑠璃は、二人の経験上その願いを叶えてやらないとかなり根に持つ（無視モード・最高一ヵ月。ネチネチ言う・最高一生）のだ。だから・・・

「はぁ、わかったよ。泊まるよ。泊まればいいんでしょ？」

呆れながらも、瑠璃が昔とちっとも変わっていない事に心配と安心で複雑な苦笑をした。

この言葉に、瑠璃は喜んだの何の、大喜び。

「やったあああぁぁぁぁッ！　じゃあじゃあいつものように一緒に寝ましょうね！？　翔輝様のお話聞かせてくださいね！？」

「はいはい。どうせ「嫌だ」って言っても聞かないだろ？」

「あら、わかってるじゃないですの」

「バーカ。何年の付き合いだと思ってんだよ？」

お互いに苦笑する。そんな二人を邪魔しちゃ悪いとそっと消えた心優しい神鳴に、二人は気づかなかった。

夕食（本当に松坂牛のステーキだった。とってもおいしかった）を終え、翔輝は霞家最高の客間『桜の間』に敷かれた布団（最高級）の中にいた。

「ふぅ、なんかすごく柔らかくて軽いな。さすが霞家使用の布団だ。絶対に天文学的値段に違いない」

翔輝は呆れながら言う。ちなみにこれは二〇〇〇円（約三七〇万円）もするという事は知らなかった。

「しかし、布団に入ってからずいぶん経つけど、瑠璃の奴遅いな」

そう。かれこれ三〇分以上ほったらかし状態が続いていたのだ。
翔輝は仕方なく捜しに行こうと布団から立ち上がった時、
「翔輝様。お待たせしましたわ」
襖（ふすま）の向こうから瑠璃の声がし、翔輝は再び布団に入る。すると、襖が開いて白い寝巻き（もちろん最高級）姿になった瑠璃が現れた。
「翔輝様。夜伽（よとぎ）に参りましたわ」
ちなみに、彼女が言っている夜伽とは変な意味ではなく、あくまで辞書的な意味で使っている。ややこしいのだが。
「あー、はいはい。もう勝手にして」
「もう、翔輝様ったら、そんなつれない事言わないでくださいよ」
瑠璃はそう言って布団に潜り、翔輝に抱きつく。
「だーかーら。抱きつくなって」
「嫌ですわ」
「こいつ・・・」
瑠璃は満足そうな笑みで翔輝の体に頬を摺り寄せる。もう十年以上の付き合いなので、もうすっかり慣れてしまっているが、やっぱり一つの布団に男女が寝るのはいかがなものかと、
「あのな瑠璃・・・」
言いかけて翔輝はやめた。
瑠璃は気持ち良さそうに眠っていたのだ。
「・・・ったく、僕の話が聞きたいって言ったのはどこのどいつだよ？」
翔輝は笑いながら瑠璃の頭を撫でる。
「おやすみ」
電気を消して、翔輝は布団に潜る。
静かな時の中で、ふと翔輝は大和を思い出した。
「うーん、大和。何であんなに怒ったんだろ？　僕何かやっちゃったかな？」
あそこまで激昂するという事は相当の事をやったのだろうが、どう考えてもその原因が思いつかない。これじゃ謝りたくても謝れな

い。そもそも明日には帰るのにこれじゃあ帰った途端に襲撃されるかもしれない。

「うーん、考えるのは明日でいいか。眠いし」

翔輝は思考停止の為に眠りについた。

第五章　第三節　翔輝のいない一日

一方、翔輝のいなくなった『大和』の第三会議室では落ち込む大和の為に『大和を励ます会（自由参加）』が開かれていた。集まったのは金剛、榛名、以外の戦艦全員に翔鶴、瑞鶴といった大和の関係者と十数人の駆逐艦達だ。

最初こそ大和を励まそうとみんな必死になって大和を気遣ったこの宴会だが、始まって一時間ほど経ち酔いが心地良くまわった頃、事件は起きた。

「バカアアアアアアアアアッ！　少尉のバカアアアアアアアアアッ！」

ダンッと中身が半分になった一升瓶をテーブルに叩き付けたのは顔を真っ赤にして横隔膜痙攣（おうかくまくけいれん）――しゃっくりを起こしている今回の主役――大和。

大和は顔を真っ赤にしてしゃっくりする。これは典型的な酔っ払いの現象だった。

大和は翔輝のいない怒り＋寂しさで慣れない酒を浴びるように飲み、完全に酔っ払っていた。しかも、

「ういッ、少尉のバカ・・・もう一生顔も見たくねえええええぇぇぇぇぇッ！」

完全に怒り上戸になっていた。常の彼女とは思えないような荒々しい態度でこうして先程から暴れまわっているのだ。

さすがの長門も大和がここまで荒れるとは思っていなかった。ただただ暴走する大和を見て苦笑いするしかなかった。

「や、大和ちゃん？　そろそろやめない？　そんなに飲んだら身体に悪いよぉ」

陸奥がすでにこの前に一升瓶一本を空けている大和を止めるが、大和はそんな彼女をキッと睨みつける。

「別にいいじゃないですかッ！　もう私なんてどうなっても構わな

いんですッ！　少尉に見捨てられた私なんて、もうどうでもいいじゃないですかッ！　もう何もかも四六ｃｍ砲で吹っ飛ばしてやるぅッ！」

と、とても常の大和の口からは出ないような恐ろしい言葉が噴き出し、怒り狂った龍のごとく陸奥を睨み付ける。そのあまりの迫力に、陸奥も言い返せなくなる。

「大和？　ちょっともうお酒はやめようよ」

そう言ったのは瑞鶴。親友が荒れるのを見ていられなかったのだ。だが、

「何？　瑞鶴も私に文句があんの？　ひっく」

「いや、そうじゃなくて・・・」

「うるさいなぁッ！　弱虫のくせにでしゃばるな！」

そう罵声を上げると、心配する瑞鶴を突き飛ばした。

吹き飛ばされた瑞鶴は「きゃあッ！」と悲鳴を上げて近くのテーブルを派手に巻き込んで倒れた。

小さな悲鳴を上げて痛む身体を押さえる瑞鶴を一瞥し、翔鶴は大和を睨みつける。

「貴様ッ！　私の妹に何をするッ！」

椅子を蹴り飛ばして立ち上がった激怒した翔鶴に、大和は満面の笑みを浮かべる。

「へぇ、翔鶴さんもシスコンなんだぁ、そろそろ妹から卒業したらどうなんですか？」

「貴様・・・ッ！」

その瞬間翔鶴は地面を蹴って駆け出した。一気に加速して大和との間合いを詰める。そして、渾身の蹴りを大和の脇腹に・・・

パシッ！

「なぁッ！？」

「やめないか、翔鶴」

翔鶴の一撃必殺の蹴りは、少女の片手で押さえつけられていた。

その少女は・・・

「山城ッ！　邪魔をするのかッ！」
怒り狂う翔鶴は足を戻そうとするが、山城はそれをその細い腕一本で押さえつける。
「うぐッ・・・」
「落ち着け翔鶴。頭に血が上っていては冷静な判断などできんぞ」
「私の妹に暴力を振るった奴に冷静な判断なんていらんッ！　蹴り飛ばせばいいッ！」
睨みつける翔鶴に山城は一喝する。
「貴様は赤城達のいなくなった機動部隊の中核であろう？　その貴様が冷静な判断ひとつできんでどうする？　貴様は味方を殺すきか？」
その山城の言葉に、翔鶴は「むぐ・・・」と言葉を詰め、黙ってしまった。
山城は持っていた彼女の足を離す。翔鶴は解放された足を床に戻して山城を睨みつけると回れ右して瑞鶴に向かった。
たいした事のない瑞鶴はいきなり暴走した姉を説教するが、翔鶴は聴く耳も持たぬといった感じでそっぽを向き、瑞鶴がキレた。
一方、山城はまた酒を飲み出した大和に歩み寄る。
「大和」
「あぁ、山城さん。さっきは助かりましたよぉ。どうですか？　一緒にお酒を飲みませんか？」
えへへと完全に酔った笑みを浮かべる大和を山城は無表情でじっと見詰めると、
「ウギャッ！？」
渾身の回し蹴りを炸裂させた。
吹き飛ばされた大和は派手にテーブルを巻き込んで倒れる。
「な、何するんですかッ！？」
立ち上がって抗議の声を上げると、今度は椅子が飛来した。
「うわぁッ！　危ないッ！　本当に危ないですからッ！」
数個飛来した椅子をなんとか避けると、山城はいつの間にかまた

部屋の隅に陣取って酒を飲んでいた。
「もうッ！　何なんですかッ！」
大和は機嫌を損ねたらしく半分残っていた一気に飲み干して一升瓶を空にする。
「ういッ、酒がないですッ！　もっと持って来いですッ！」
大和は空になった一升瓶を投げ捨てる。
もう誰にも止められない大和の暴走に全員が諦めかけた時、
「大和司令。そろそろやめた方がいいと思いますよ？」
突如水兵服を着た短い髪を小さなポニーテールでまとめた少女が大和を止めた。
「うん？　何だ雪風じゃない。何？　一緒に飲む？」
「遠慮しておきます。私は司令の健康を心配してるんです」
彼女の名は雪風。陽炎型駆逐艦八番艦・駆逐艦『雪風』の艦魂である。戦艦や正式空母と違って駆逐艦、潜水艦、各種小型艇は人間で言う水兵なので、彼女は水兵服（もちろん海軍用なのでスカートじゃなくてズボン）を着ている。そして、彼女は先日大和の従兵に任命されたのだ。
大和はそんな自分直属の部下の忠告に不機嫌そうに唇を尖らせる。
「うるさいな。いいでしょ？　私の身体なんだし」
「ダメですよ。連合艦隊旗艦が倒れられたら困ります」
雪風はピシリと言う。
「むーッ！　あなたに大切な人がいなくなる気持ちがわかる！？」
大和は酔った勢いで雪風に食い付く。すると、雪風は微笑して答えた。
「わかりますよ？　めったに会えない姉さんや妹達もいますし。それに・・・」
雪風は寂しそうにつぶやく。
「私はもう、姉を失ってますし・・・」
雪風の言葉に、部屋は沈黙した・・・
陽炎型駆逐艦三番艦・駆逐艦『夏潮』、雪風の姉はジャワ沖海戦

（一九四二年二月四日に起きた日本海軍航空隊と連合軍艦隊との海戦。日本海軍の圧勝）の後方支援で参加。その海戦後に敵潜魚雷を受けて沈没した。

夏潮は、陽炎姉妹で最初に戦死した艦魂だった。

雪風の言葉に、大和は沈黙した。雪風の気持ちは痛いほどわかっていた。自分も姉妹ではないが大事な仲間を失っている。

先程までの騒音は一瞬に消えて、今は気まずい沈黙が流れる。

「大和司令。もうその辺にしといてください」

そう言ったのは長い黒髪を優雅に流した夕雲型駆逐艦一番艦・駆逐艦『夕雲』の艦魂だった。夕雲型駆逐艦は『伊勢』『日向』のように陽炎型駆逐艦の問題を改良した、言うなれば改陽炎型駆逐艦のようなもの。義姉妹であるのだ。余談だが夕雲型駆逐艦も全部で十九隻いる。

夕雲は悲しい笑みで大和を見詰めた。

「みんな同じ気持ちなんです。どうか、それだけはわかってください」

夕雲を中心に駆逐艦達が大和を見詰める。その瞳にはそれぞれ色々な悲しみが込められていた。

大和はうつむいたまま沈黙している。そんな大和の肩を、雪風は優しく微笑みながらそっと叩いた。

「大和司令。お気持ちはわかります。旗艦であろうと、私達はまだまだ経験不足です。だから辛さから立ち直れないのもわかりますし、当然といえば当然です。私と違い、司令には姉妹がいません。だからこそ長谷川少尉に頼っていたのですね？」

大和は答えない。そんな大和に、雪風はそっと微笑んだ。

「ですが、私はあなたの従兵に任命されました。私も力になります。もちろん、他の皆さんもです。それじゃ、ダメですか？」

雪風の言葉に、全員がうなずく。

優しい雰囲気が流れ、自然とみんなに笑みが浮かぶ。

「そうよ大和。私も力になるわ」

長門も満面の笑みを向ける。
大和は沈黙したまま肩を震わす。泣いているのだろう。みんなの優しさに触れられて・・・
「・・・がう・・・」
「え？」
大和の小さな声に雪風は耳を傾ける。
「ち・・・う、違う・・・ッ！」
次の瞬間、大和が叫んだ。
「違うんだってばあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
「え？」
大和は雪風の両肩を掴んで、涙と鼻水の大洪水を起こしながら叫んだ。
「違うんですよ！　少尉が上陸して寂しいよりも、少尉が顔を赤くして美少女って言った幼なじみの所に行ったって事が嫌なんです！」
「え・・・」
雪風の微笑みが崩れかける。
長門がポンと手を叩き、感情のない笑みを向ける。
「あー、そっちか、そっちなんだ」
長門の声が、全ての終わりだった。
「何だよ・・・」
「心配して損しました」
「そっちなんだ。そっちなんだ」
「・・・お酒飲み直すか」
駆逐艦達が呆れたように大和から離れる。そんな彼女達を無視して、大和は逃げ遅れた雪風の肩をガシッと掴んだ。
「聞いてよ雪風！　少尉は私なんかどうでもいいんですよ！」
「あ、いや・・・って！　ちょッ、司令!?　や、やめて・・・ッ！」
大和は雪風を押し倒して抱きつき、大泣きした。雪風は嫌がって大和を必死に引き剥がそうとするが、大和はすさまじく強く抱きつ

いていてなかなか剥がれない。
「司令やめて！　あ、ダメ・・・ッ！　そんな所・・・いや・・・ッ」
「君だけだよ私の事をわかってくれるのは！」
「ダメです・・・ッ！　あうッ、だ・・・め・・・ッ！」
「うーん、どうする？」
夕雲は陽炎姉妹十一女の浦風（うらかぜ）に聞くが、浦風は「ほっとけば？結構嬉しそうだし」と答え、雪風はほったらかしが決定された。
「浦風、初風（はつかぜ）姉さん・・・ッ！　助けて・・・ッ！　あっ・・・！」
泣き目になっている雪風を、姉妹は楽しそうに見守っていた。
「かわいいなぁ雪風は」
「司令・・・ッ！　ダメです・・・ッ！　胸はダメ・・・ッ！」
雪風を押し倒して嬉しそうに笑う大和と、押し倒されて甘い声を上げる雪風を見て長門達は苦笑いした。
「完全にエロキャラになってるわね、大和」
「はい。色々と辛い事が重なって壊れたのでしょう」
長門と陸奥も、早く翔輝が帰って来る事を願った。
大和の行動に触発されたのか、その後伊勢も扶桑に襲われ、その夜『大和』はとても賑やかだった。

翌日の夕方、ようやく翔輝は帰って来た。手には瑠璃が「いつもお世話になっている人達に配ってください」と持たせた最高級の酒、タバコ、和菓子など総額二〇〇円五〇銭（約三七万円）のお土産が大量に詰まった紙袋を持っていたが、
翔輝はそれを艦長や航海長、水上はその他関係者に配った。
そして、ようやく自室に戻ると、そこには大和と雪風がいた。
「あ、二人ともただいま」
「・・・」
「お帰りなさい・・・」
翔輝を睨みつけている大和と、なぜかすごくやつれている雪風に、

翔輝は笑顔であいさつしたが、返事はいまひとつだった。
「雪風？　どうしたのそんなに疲れた顔して？」
「な・・・何でもないですぅ・・・」
心配する翔輝の声に雪風は力ない声で答えた。
「では、私はこれで・・・」
ふらふらと雪風は出て行き、部屋には翔輝と大和の二人だけが残された。
「・・・」
「・・・」
二人の間には気まずい雰囲気が流れる。そんな中、先陣を切ったのは翔輝の方だった。
「・・・大丈夫だった？　色々と」
「・・・普通です」
「これからしばらくは休暇はないし、またしばらく一緒にいられるね？」
「・・・へぇ、そうなんですか」
「・・・」
「・・・」
間が持たなかった・・・
翔輝はため息を漏らして諦め、アタッシュケースから荷物を取り出す。その時、
こと・・・
何か光る物がケースから落ち、大和の足元に転がった。
「あ、それ・・・」
翔輝が言う間もなく大和がそれを取った。
「・・・首飾り？」
それは銀色に輝くチェーンに海のように蒼い宝石を付けたシンプルなペンダントだった。
「・・・それは」
「・・・少尉？　何ですかこれ？」

大和が荒涼としたツンドラ地帯の如く冷たい瞳で翔輝を見詰める。
そんな瞳に見詰められても翔輝は気にした様子もなく微笑む。
「あ、それ？　翔香の首飾りだよ」
「翔香さんって、妹さんの？」
「うん。実はそれを取りに今回は上陸したんだ」
翔輝は今日の朝に瑠璃が大切に持っていたこのペンダントを受け取ったのだ。「これはやっぱり翔輝様が持っていた方がいいと思います」と、瑠璃は寂しそうに言って。
これは翔香が死んで悲しんでた瑠璃に翔輝が預けたものだった。
だが、もう瑠璃は悲しみから解放され、翔輝にこれを返したのだ。
「翔香さんの・・・」
大和はペンダントを見詰める。
キレイで、そしてとてもうらやましかった。
死んでも尚翔輝の心を独占している翔香の事が、うらやましく、憎かった。でも、目の前のペンダントはすごくキレイだった。
しばらく大和が見詰めていると、翔輝はふと、
「なぁに？　欲しいならあげるよ？」
と言った。
「い、いらないですよ」
突然の事に顔を真っ赤にして大和はペンダントを翔輝に返す。
「え？　でも何か欲しそうだったから」
「いらないです！」
大和は顔を真っ赤にしたまま叫ぶ。
「・・・別にいいけど」
翔輝は上着の前を開け、ペンダントを首に掛けた。
「おかえり、翔香」
そうかれがささやいたのを、大和は聞き逃さなかった。
唇を噛み、辛そうな顔を見せない為に背中を向ける。
「大和・・・まだ怒ってるの？」
翔輝が恐る恐る聞くと、

「怒ってません」
大和は低い声で言った。
そんな大和に翔輝は頬を掻きながら近づく。
「あのさ、僕、君を何で怒らせたのかわからないんだけど、でも僕が何か気に障る事を言ったならごめん。謝るよ」
翔輝は頭を下げて謝った。そんな翔輝を一瞥して、大和は言った。
「許してほしいなら、条件があります」
「条件？」
翔輝は大和を見詰める。
大和は振り向き、寂しそうな顔で言った。
「あまり、艦から降りないでください。私には少尉しかいないんですから」
その言葉を言った後、大和は翔輝に抱きついた。
「もう、離れたくないんです・・・」
嗚咽混じりのその声に、翔輝はただ黙って頭を撫でてやった。
そんな彼の腕の中で、大和はとても幸せそうな笑みを浮かべていた。
夕焼けの優しげな光に照らされ、二人はいつまでも抱き合っていた。

第六章　第一節　大和の妹　新鋭戦艦武蔵誕生（前書き）

《雪風（ゆきかぜ）》
陽炎型駆逐艦八番艦――駆逐艦『雪風』
出身　佐世保海軍工廠（長崎県）
身長　１５２ｃｍ
髪型　小さめなポニーテール
実年齢（１９４２年６月現在）２歳
外見年齢　１３、４歳
誕生日　１月２０日
好きなもの　姉妹・大和・翔輝・平和・無血勝利・クッキー
嫌いなもの　戦争・無意味な戦い・対空戦闘・自分だけ助かる事・肉料理
家族構成　姉・三人　妹・十五人（多すぎるので名前はカット）
日本海軍の駆逐艦技術の粋を結集させた陽炎型駆逐艦の一隻。その水上戦闘能力は当時世界最強とも呼ばれたほど強力なもので、世界最強と謳われた日本海軍必殺の兵器である酸素魚雷を使っての水上戦では他の駆逐艦を圧倒するものだった。そんな『雪風』の艦魂である雪風は大和の従兵として彼女直属の補佐をしている。性格は穏やかで優しく、優秀な補佐官でいつも大和の後方支援をしている。いつも自分に優しく接してくれる翔輝に想いを寄せる。そんな彼女は幾多の戦いに出撃し、仲間が次々に死んでいく中、彼女だけはすさまじい幸運でほぼ無傷で生き抜き、《幸運艦》と呼ばれ、終戦まで生き残った。

第六章　第一節　大和の妹　新鋭戦艦武蔵誕生

歴史的大敗を喫したミッドウェー海戦で大和達日本艦魂は大切な仲間五人（重巡洋艦『三隈（みくま）』が姉妹艦である重巡洋艦『最上（もがみ）』と衝突。『最上』は大破して『三隈』と駆逐艦『荒潮（あらしお）』に護衛されて戦線を離脱後、空襲を受けて『三隈』沈没。『荒潮』中破という事があった）を失った。しかし、日本海軍は主力空母四隻を失っても意地と根性で勝ち続けた。

だが、いくら勝とうと艦魂達の悲しみは少しも癒えなかった。生まれるものはあっても、それが失われたものの代わりには決してならない。そんな当たり前な事も、彼女達には辛い現実でしかなかった。

大和も五人の仲間を失った悲しみで立ち直れず、さらにミッドウェー作戦失敗の責任を追及され、彼女の旗艦としての権威も日増しに落ちていった。

艦魂達の士気も下がり、とても戦争ができるような気分にはならなかった。

しかし、同年八月五日、ミッドウェー海戦から二ヵ月後のその日、その大和を元気づけるには十分すぎるほどの出来事があった。

日本海軍最後の戦艦である大和型戦艦二番艦・超弩級新鋭不沈戦艦『武蔵（むさし）』――つまり、大和の妹が誕生したのだ。

柱島に現れた『大和』そっくりの新鋭戦艦『武蔵』。真新しく、金属特有の鈍い光で艦体はキラキラと輝いている。

『大和』と同じく世界最大最強の四六ｃｍ砲を三基九門搭載されているその浮かべる城は、世界最強の称号に相応しい勇ましさを輝かせていた。

そんな『武蔵』は姉艦『大和』の隣に横付けされた。

両艦は素人では見分けがつかないほどにそっくりだったが、『大

和』には連合艦隊旗艦の証、連合艦隊司令長官山本五十六大将の大将旗がマストに掲げられている。それに対し『武蔵』は軍艦旗のみしかはためいていなかった。

しかし、『武蔵』は『大和』より旗艦としての司令設備が充実しているので、旗艦変更は時間の問題と言われていた。

だが、全長二六三ｍもある世界最大最強の戦艦が二隻並んでいると、その勇ましさは桁が違う。すさまじい威圧を放ち、その光は神々しい。

まさに、二隻は大艦巨砲主義の申し子であった。

そして、戦艦『武蔵』は『大和』と同じ代々最強の戦艦が配置される第一戦隊に配属される事になった。

『大和』の甲板には大勢の女性――艦魂が集まっていた。

先頭は大和。隣には大和に無理やり呼ばれた翔輝。その後ろに長門以下戦艦艦魂。そしてその後ろに二人に減ってしまった主力空母艦魂、翔鶴と瑞鶴。さらには軽空母の艦魂がいて、さらに後方にはその他大勢の艦魂がいる。

そして、大和の数メートル前に光が発生して中から大和に似た、大和よりさらに若い、というか幼い十二歳くらいの真っ白（今は夏なので全員白色の夏服）な第一種軍装に身を包んだ少女が現れた。長髪の大和に対し少女は肩にさらりと髪がかかる程度のセミロングだ。

大和ぐらいならまだ笑いですむが、目の前の少女の軍服姿は笑いを通り過ぎて滑稽（こっけい）にすら見える。だが、その身体から放たれるオーラはどの艦魂よりも力強い。

喜怒哀楽が豊富な大和に対し、少女は山城と同じく無表情だった。

少女はゆっくりと大和達に近づき、大和の前で静かに敬礼した。

「・・・大日本帝国海軍大和型戦艦二番艦・戦艦『武蔵』の艦魂」

無表情少女――武蔵はそう名乗ると目の前にいる緊張した顔をした大和を見詰める。

大和は緊張しながら初めて会う自分の妹に向かって敬礼した。
「大日本帝国海軍大和型戦艦一番艦・連合艦隊旗艦・戦艦『大和』艦魂――あなたの姉です」
今ここに、姉妹が初対面した。
大和は嬉しそうに微笑んで手を伸ばす。握手の合図だ。武蔵はそれに気づき、無表情のまま手を差し出す。
二人の手はがっちりと結ばれた。
その瞬間、爆発音のような歓喜の叫びがと拍手が天高く響いた。
意気消沈していた艦魂達にとって、武蔵の誕生は士気を上げるには十分すぎた。なにせ日本海軍は航空時代を自ら幕開けさせたというのにいまだに大艦巨砲主義を信じている。そんな彼女達に大艦巨砲主義の王者とも言うべき武蔵は神のような存在であった。大和と武蔵が並んだ今、艦魂達の士気や戦意は急上昇した。
大和は笑顔で自分の妹を見る。
「武蔵。私の事は『お姉ちゃん』って呼んで」
大和の恥ずかしそうな顔での注文に、武蔵は初めて表情を変えた。だが、すぐに先程のような無表情に戻る。
「・・・嫌だ」
その予想していた反応に、大和はがっくりと落胆する。
「こぉら、いきなり自分のお姉さんを一刀両断しないように」
そう苦笑いながらに言ったのは長門。そんな彼女の後ろには並み居る戦艦の艦魂達が続く。
長門は武蔵に柔和な笑みを向ける。
「始めまして。私戦艦『長門』の艦魂よ。これでも長年連合艦隊旗艦をやってたのよ？」
「・・・初めまして」
それぞれ自己紹介をし終えると、武蔵は隅っこでこの光景を見守っていた翔輝を見た。
「・・・その人間は誰？」
武蔵の質問に待ってましたかのように大和が満面の笑みで紹介す

る。
「この人は長谷川翔輝少尉。私で航海士をやってるの。わかってると思うけど、少尉は艦魂が見えるんだよ」
大和の紹介に、翔輝は照れながら微笑んだ。
「長谷川翔輝少尉。航海士をやってるんだ。よろしく」
翔輝は笑顔で自己紹介する。
「・・・戦艦『武蔵』の艦魂。よろしく」
武蔵は握手を求めてきた。翔輝もそれに応えて腕を伸ばす。二人はしっかりと握手した。
武蔵の手は細く、折れてしまいそうなほどだった。
どう見ても小学校高学年の女の子にしか見えない子が、連合艦隊期待の新鋭戦艦の艦魂とは、翔輝は複雑な心境だった。
武蔵の歓迎会を開こうと、大和は嬉しそうに言った。その結果夜中、いつもの会議室で歓迎会が開かれる事になった。
歓迎会が開くのは夜中だが、今はまだ昼。大和は武蔵、翔輝（やっぱり無理やり）を連れて甲板を散歩する事にした。
前を大和、武蔵の二人が歩き、その後ろを翔輝が続く。
大和はとても嬉しそうにもうとろけそうな笑みをしながら武蔵に話しかける。
「いやぁ、いっつも伊勢さんや陽炎達を見て、『妹っていいなぁ』って思ってたけど、やっと夢が叶ったよ」
「・・・」
「残念だけどミッドウェー海戦で赤城さんや加賀さん、蒼龍さん、飛龍さんが死んじゃったのは知ってるよね？　会わせてあげたかったなぁ」
「・・・」
「あと、その海戦の影響で一一〇号艦（大和型戦艦三番艦。後に空母『信濃（しなの）』になる）と一一一号艦（大和型戦艦四番艦）のうち、一一一号艦が建造中止。一一〇号艦も空母へ変更するらしいね。これで妹が一人減った上にもう一人は空母になっちゃうのかなぁ？」

「・・・」
「おーい大和。何かお前一人でしゃべってるみたいで滑稽に見えるよ」
翔輝のツッコミに大和は不機嫌になる。
「いいじゃないですか別に。私の妹ですよ？」
「いや、そうだろうけど」
「ねぇ、武蔵。何かしゃべろうよ？」
しかし、武蔵は沈黙を続けた。そんな武蔵の反応に大和の顔から笑みが消える。
初日早々もう自分の妹に自信をなくす大和。
二人は立ち止まり、大和は翔輝に泣きついてきた。
「少尉ー！　つまんないですぅ！　なんとかしてくださいッ！」
「そんな事言われても・・・」
翔輝は困ったように頭を掻くが、大和はそんな翔輝にすがりつくように涙を浮かべた瞳で見詰める。
「まさかこんなに無口な妹だとは思ってなかったんですよぉ！」
「・・・」
「大和。武蔵がこっち見てるけど」
「もういいです！　少尉が友好的な雰囲気つくってください！」
「ちょっと待て！　サジ投げるな！　自分の妹だろ！？」
「少尉と違って私は妹経験がないんです！　このままじゃ彼女の心にたどり着く前に沈没しちゃうです！」
大和の必死な訴えに、翔輝はやれやれと武蔵に近づく。
武蔵は依然無表情を貫いている。
「ねぇ？　君は何でそんなに無口なの？」
翔輝はまず彼女の事を知ろうと思った。その問いに武蔵は振り向かず、
「・・・性格」
あっさりと返された。そのあまりに手応えのない返しに翔輝は困ったように頭を掻く。

「お姉ちゃんの事は好き？」
そう訊くと、武蔵は大和を一瞥し、
「・・・普通」
好きと言われなくて、大和は明らかに落胆した。ちょっとかわいそう。
「長門さん達はどう？」
その問いには少しだけ考えてさらりと返す。
「・・・普通。でも、山城は好き」
（うーん、類は友を呼ぶという事か）
「・・・で？」
「え？」
唐突に声を掛けられたので、翔輝は驚く。そんな翔輝を感情の読めない透き通った瞳で見詰める武蔵。
「・・・あなたは一体何がしたいの？」
「何って？」
「・・・さっきから話し掛けてくるけど、一体私と何がしたいの？あなたのしようとしている目的がまったくわからない」
武蔵は振り向いて翔輝を見る。肩まで掛かる黒い髪が翻（ひるがえ）ってキラキラと輝き、黒い純粋な瞳を向ける。
そんな武蔵の問いに、翔輝は困ったように頭を掻く。
「いや、別に何がしたいっていう訳じゃないけど・・・」
「・・・けど？」
「まぁ、強いて言えば、君と友達になりたい、かな？」
少し照れながら言う翔輝をじっと見詰める武蔵はそっと口を動かし、
「・・・友達なんていらない」
「え？」
驚く翔輝を、武蔵は何の感情もこもっていない瞳で見詰める。その無の瞳に小さな恐怖を感じる。
「・・・日本は戦争をしている。国の存亡が懸かっているこの非常

時に、友達だの仲間だの友情だのといった個人の感情や妄想を持ち込まないでほしい。戦争に必要なのは己の実力と冷静な判断ができる上官。それ以外などの事は不要。それは仲間というものも例外じゃない」

そう言うと、武蔵は再び背を向けた。そんな彼女の背中を見詰め、翔輝は彼女の冷たさに恐怖を感じた。

彼女は今までの艦魂とは違う。そんな感じがした。

黙ってしまった翔輝を気にした様子もなく武蔵は海を見詰める。

その時、

「ちょっと武蔵ッ！」

その怒鳴り声に振り向くと、そこにはいつになく激昂した大和が立っていた。身体を震わせ、顔を真っ赤に染め、目は血走っている。

「や、大和？」

「少尉を侮辱するような事は言わないでッ！」

そう怒鳴って大和は武蔵に駆け寄ると、いきなり武蔵の胸倉を掴んだ。身長差がそれなりにあるので軽く武蔵の身体が浮く。

「私の事をバカにするならまだいいのよ。でも少尉をバカにするような事だけは絶対にしないでッ！」

激昂する大和に対し、武蔵は不気味なほど静かで無表情だった。

「・・・彼をどう判断しようと私の勝手。あなたには関係ない」

「関係あるわよッ！　少尉を侮辱するのは絶対私が許さないからッ！」

睨みつける大和を冷たい瞳でじっと見詰める武蔵。すると心底不思議そうに首を傾げると小さく口を開く。

「・・・何？　あなた、彼の事が好きなの？」

「なぁッ！？　か、関係ないでしょッ！？」

武蔵の予想外の反撃に大和は顔を真っ赤にしておろおろと慌てる。だが、武蔵は気にした様子もなくそんな姉を冷たい瞳で見詰める。

「・・・個人的な感情で動くなんて軍人失格。軍人たるもの、感情は捨て、生きる機械として命令を忠実に行動する。あなたは連合艦

隊の旗艦なのにそんな事もわからないの？」
「違うッ！　私達は機械じゃないッ！　心を持った、生きた存在！　それが艦魂よッ！」
大和の言葉に対し、武蔵はまったく表情を変えずに淡々と言葉を繰り出す。
「・・・どんなに抗おうと、絶対の存在の前ではどんな存在も手の平で踊らされてる哀れな道化師も同じ。それは私もあなたも、そこの人間も同じ」
「訳のわからない事言わないでッ！　それに少尉をそんな失礼な呼び方しないでッ！」
「・・・名前なんてどうでもいい」
「む、武蔵・・・ッ！」
「ちょッ、大和落ち着いてッ！」
今にも腰の軍刀に手を掛けて抜刀しそうな勢いの大和を翔輝は慌てて止める。腕の中で大和が暴れるので翔輝は必死になって彼女の暴走を止める。そんな二人を武蔵は無表情のまま冷たい瞳で睨みつける。
「・・・バカじゃないの？」
そう吐き捨てるように言うと、武蔵は背を向けて歩き出す。
「待ちなさいッ！」
「大和ぉッ！」
暴れる大和を落ち着かせた時には、武蔵の背中はどこにもなかった。
残った二人のうち翔輝は疲れたようにため息し、大和は妹の失礼極まりない態度に激怒していた。
「な、何なのあの子はッ！？　少尉にあんな失礼な態度をしてッ！」
「いや、別に僕は構わないけど」
「そんなのダメですッ！　それにあの態度ッ！　ものすごくムカつくぅッ！」
大和はそう怒鳴ると、地団駄を踏んで武蔵の消えた方向を睨みつ

けた。
そんな大和を見詰め、翔輝は小さくため息を吐いた。
これが、大和と武蔵の初めての出会いであった。

第六章　第二節　武蔵の小さな笑顔（前書き）

《武蔵（むさし）》

大和型戦艦二番艦――戦艦『武蔵』

出身　三菱重工業長崎造船所（長崎県）

身長　１４５ｃｍ

髪型　セミロング

実年齢（１９４２年８月現在）０歳

外見年齢　１１、１２歳

誕生日　８月５日

好きなもの　翔輝・論戦で相手を従属させる事・目に見える成果・毎日の積み重ね・平和

嫌いなもの　机上の空論・古く使えない伝統・意味のない神話・前時代主義者・一度限りの博打・戦争

家族構成　姉・大和

大和の妹にして大和型戦艦二番艦である戦艦『武蔵』の艦魂。次期連合艦隊旗艦。冷静沈着で常に無口無表情で単独行動が多く、あまり人と接触しない。例外としては自分に優しく接してくれる翔輝にだけ心を開いている。大和にも多少開いているが、翔輝ほどではない。そんな翔輝の事が好きで、彼の為なら何でもする。常に大和達よりも先に翔輝に対して先手を打っている。すさまじい理論武装をしていてほとんど論戦だけで相手を撃沈できるが、武力行使を用いる事もある。しかもその腕前は翔鶴や榛名、金剛とも互角に渡り合えるほどという恐ろしさ。さらには瑠璃にも負けない諜報機関を持っていて情報収集能力は連合艦隊一。情報の重要性を誰よりも理解している。多々ある過激な発言の為によく皆と対立し、大和達大勢に対し武蔵一人という事態はよく起きるが、孤軍奮闘で互角以上の勝負ができる。戦争に対しては消極的で、あまり乗り気ではない。しかし日本を守る事に誇りを持ち、その為に毎日仕事をこなしてい

る。表情が乏しく、喜怒哀楽の多い姉である大和をうらやましく思っている。常に軍服の中には銃と短剣が仕込んである。名実共に全キャラクター最強のキャラである。

第六章　第二節　武蔵の小さな笑顔

その夜、予定通り武蔵の歓迎会は開かれた。
場所はいつものとおり『大和』の第三会議室。部屋の中央の長テーブルには白いシーツが敷かれ、その上には多くの料理や酒が並んでいた。もちろん全て大和が出したものだ。
そして、部屋の中には大勢の艦魂が集まっていた。皆期待の新生である武蔵の誕生を祝福しに来た・・・のだが、
「えっと・・・」
困ったような笑みを浮かべる長門が見詰める先には、いきなり初日で絶交関係に陥った世界最強の戦艦姉妹がいた。
完全に敵視して睨みつける姉・大和に対するのは、そんな恐ろしい視線を受けているのに眉ひとつ動かさずに無視して無表情を貫く妹・武蔵。
せっかくの祝いの席なのにそんな主賓と主賓の姉による気まずい雰囲気に、誰も口を開けずに助けを求めるような視線で頼れる元連合艦隊旗艦である長門を見詰める。が、そんな長門も何がなんだかわからず困る。
「い、一体何がどうなってるのかしら・・・？」
「わ、わかんないよぉ」
陸奥もこの意味不明な状況におろおろとする。そんな彼女の隣でも伊勢が「ほんま、どうしたんやろ大和はんと武蔵はんは」と心底心配そうに絶交状態にある大和と武蔵を見詰める。
「ほんと、どうしたのかしら？」
「でもこのままじゃまずいよねぇ、金剛がいるからあまりこの状態は放置できないよ？」
日向の言葉に、皆うなずく。もちろん長門もこのままにしておくつもりはない。せっかくの楽しい武蔵の歓迎会を氷のように冷たく鉛のように重たい雰囲気と金剛の暴走による赤い景色にする訳には

いかない。
　長門は懇願するような目で見詰める艦魂達に満面の笑みで微笑んだ。
「大丈夫。もう手は打ったから」
　その言葉に皆が「おぉ・・・」と感心の声を上げた。その時、
「連れてきましたッ！」
　その声に全員が見ると、そこには荒い息で部屋に入って来た雪風が立っていた。そんな彼女を見て長門が勝利を確信したような笑みを浮かべる。
「一体どうしたの・・・？」
　雪風の後ろから目を擦りながら現れたのは、上着を脱いでワイシャツとズボンだけというラフな格好をした翔輝だった。
「長谷川君ッ！　待ってたのよッ――って、あれ？」
　嬉しそうに翔輝に駆け寄った長門。だが、すぐに彼の状態に気づいた。
「も、もしかして寝てた？」
　長門の問いに、翔輝は目を擦ると苦笑い。
「ええ、まあ。疲れてぐっすりと寝てた所を飛び込んで来た雪風に叩き起こされたという具合でして・・・」
「べ、別に叩き起こした訳じゃないですか。わ、私は普通に起こしただけですよ」
　雪風は頬を赤らめて怒る。そんな雪風に翔輝は苦笑いする。
「『少尉ッ！　長谷川少尉ッ！　大変なんですッ！　起きてください！　起きてくださいってばッ！』と耳元で騒がれた上に布団を剥がれ、ベッドから引きずり落としたのに叩き起こした訳じゃないんだ」
　その痛恨の言葉に雪風は言葉に詰まる。
「わ、私は別に叩いたりという暴力は――」
「ベッドから引きずり落とすのは普通暴力って言わないか？」
「あうぅ・・・」

翔輝のクリティカルな一撃に雪風はついに沈黙した。
そんな二人のやり取りを見て長門は苦笑いするが、すぐに今の状況を思い出して慌てる。
「ちょっと長谷川君ッ！　あなたに緊急のお願いが――」
「わかってます。大和と武蔵がケンカをしているんでしょ？　ここに来るまでに雪風が説明してくれました」
「なら話は早いわ。あの二人をなんとかして。このままじゃ金剛が何するかわからないから」
長門の言葉に翔輝は目を擦りながら微笑んだ。
「わかりました」
翔輝は長門から離れると、大和と武蔵に近づく。
「二人とも」
その声に振り向いた大和は驚く。
「しょ、少尉？　どうしたんですか？」
武蔵も視線を翔輝に向ける。
二人に見詰められ、翔輝は、本当の本当に優しい笑みを浮かべる。
「とりあえず、二人とも殴らせて♪」
「「・・・え？」」
ゴチンッ！　ガゴンッ！
「いったあああああぁぁぁぁぁぁいッ！」
「・・・ッ！」
翔輝は一瞬で二人の頭に拳を入れた。そのあまりの一撃に大和と武蔵はそれぞれの悲鳴を上げて身体を丸めてしまう。
突然の事に長門達は一歩も動く事もできず呆然と立ち尽くす。
痛みがある程度引いた所で大和がバッと顔をもたげる。その瞳は理不尽な暴力に対する怒りと痛みで出た涙で濡れていた。
「いきなり何するんですかッ！」
怒鳴る大和だが翔輝の顔を見て絶句した。翔輝は今にも崩れそうな笑みを浮かべて自分を睨んでいた。
「なあ、大和。お前なら僕の最近の予定を知ってたよな？」

「え・・・？」
「僕、ここ最近仕事が忙しくてあんまり寝てないんだけど」
「あ・・・」
大和はその言葉に顔を真っ青にさせる。そんな大和の肩を翔輝は掴む。その力はいつになく強い。
「今日は久しぶりに早く終わったからぐっすり寝てたんだ。それを何？　お前達姉妹のケンカ仲裁の為に雪風に叩き起こされてここに来たんだ」
雪風が今にも泣きそうな真っ青にした顔で姉の胸に逃げ込んだ。翔輝はもうほとんど崩れた笑みを浮かべる。その表情の奥には怒りの炎が燃えていた。
「正直言って、今ものすごくイライラしてるんだ」
「ご、ごめんなさいぃッ！」
大和は珍しく激昂寸前の翔輝に恐怖して泣きながら土下座した。
「ごめんなさいッ！　本当にごめんなさいッ！　ほら武蔵もッ！」
ゴンッ！
「・・・ッ！」
「あ、ごめん」
大和は慌てたせいで武蔵の頭を勢い良く力強く下げさせた為に、武蔵は思いっ切り顔面を地面に激突させた。
あまりの激しい激突に、謝っていた大和も怒っていた翔輝も慌てる。
「だ、大丈夫？」
武蔵は地面に着けていた顔を上げる。その鼻からは赤い鼻血が流れていた。
「・・・平気」
鼻血を垂らしながら言われても説得力のかけらもない。
「まったく、大和も手加減しろよな」
ため息をついて翔輝はポケットからハンカチを取り出すとおもむろに武蔵の鼻に当てる。

「・・・へぶ」
「まったく、世話焼けんだから」
苦笑いしながら翔輝は武蔵の鼻血を拭き取る。そんな彼に鼻を拭いてもらっている武蔵はじっと彼を見詰めていた。
「はい。後は自分でもできるよね？」
そう言って翔輝はハンカチを彼女に渡す。
武蔵は翔輝からハンカチを受け取ると、それをそっと鼻に当てる。
「・・・ありがとう」
武蔵は頬をほんのりと赤らめて小さくそう言った。その小さなお礼の言葉に翔輝は「どういたしまして」と優しく微笑む。
「・・・これ、洗って返すから」
「別にいいよ。血って洗っても落ちないから、終わったら捨てて」
「・・・ごめんなさい」
「気にするなって」
翔輝はそう微笑むと、こっちを見詰める大和の視線に気づいた。
「大和？」
「ご、ごめんなさい・・・」
何度も頭を下げて謝る大和に、翔輝もため息すると優しく微笑む。
「もういいよ。僕こそ殴ったりしてごめんね」
「あ、はい・・・」
翔輝は大和の頭を優しく撫でる。その光景を武蔵はじっと見詰める。
大和から離れた翔輝はこっちを見詰めている長門に近づくと苦笑い。
「まあ、なんか仲裁とまではいかなかったけど、気まずい空気は壊せましたよね？」
「ええ、まあ。ありがとうね」
長門が微笑むと、翔輝も優しく微笑んだ。が、すぐに「ふわぁ・・・」とあくびをすると目を擦る。
「とりあえず、僕の役目は終わったみたいですので、僕は戻ります」

「ごめんね。ゆっくりと休んでね」
長門の言葉に微笑み、翔輝は部屋を後にしようとする。が、突如そんな彼の服の裾を誰かがちょこんと掴んだ。不思議そうに振り返ると、裾を握っていたのは――武蔵だった。
「武蔵？　どうしたの？」
翔輝が問うと、武蔵はじっと翔輝を見詰める。
「・・・ダメ」
「え？」
「・・・あなたは、ここにいて」
その言葉に、翔輝は驚く。まさか彼女の方からそんな事を言われるとは思ってもみなかったのだ。
一方、そんな武蔵のわがままに姉である大和がキレた。
「ちょっと武蔵！　少尉はお疲れなのよ!?　これ以上私達の事情を押し付けないでよッ！」
大和の怒号に皆うなずく。特に陸奥と伊勢がそれを許さなかった。
「大和ちゃんの言うとおりよ。少尉は連日の激務で疲れてるんだから、わがまま言わないで」
「そうやで。あんたのわがままで長谷川はんに無理させちゃあかんよ」
二人の援護に大和の攻撃も苛烈になる。
「武蔵ッ！　その手を離しなさいッ！」
四面楚歌となった武蔵だが、そんな姉達の集中砲火にもビクともせず、翔輝をじっと見詰め続ける。
自分をじっと見詰める武蔵の瞳には、先程にはなかった意思が感じられた。
「・・・お願い。ここにいて」
武蔵の純粋な瞳に、翔輝は困ったように頭を掻く。すると、そんな翔輝を助けようと大和達が総攻撃をかけてくる。
「武蔵ちゃんッ！　いい加減にしなさいッ！」
「武蔵はん。わがままはあかんよ」

「武蔵ッ！　これは連合艦隊旗艦である私からの命令よッ！　いますぐに少尉から離れなさいッ！」
姉妹の間に権力を持ち出すとは、さすがの翔輝も呆れてしまう。
一方、最終手段を投じられた武蔵は、翔輝をじっと見詰めるとうつむき、そっと手を離した。それほど強力な権力なのだろう、連合艦隊旗艦の命令は。
肩を落として悲しそうに回れ右する武蔵の背中を見詰め、翔輝はため息する。
「わかった。ここにいるよ」
その返事に、皆驚いた。もちろん武蔵も振り返って驚いたような顔をする。先程までの無表情とは違って、そこにはちゃんとした感情が込められていた。
「・・・ほ、本当？」
「うん。せっかくのお誘いだし」
「・・・あ、ありがとう」
ほんのりと顔を赤らめながら礼を言う武蔵に、翔輝は優しく微笑む。
「ちょ、ちょっと待ってくださいッ！」
そんな二人の間で勝手に進む話に、大和が慌てて止めに入る。
「い、いいんですか少尉ッ！？」
「うん？　まあ、起きちゃったからね。そんなに眠くもないし。それに、武蔵のお願いを断る訳にもいかないよ」
そう言って微笑む翔輝に、大和はため息する。
「まったく、少尉は優し過ぎるんですよ」
「そっかな？　僕はそんなに優しくないと思うけど」
「そんな事ありませんよ。少尉はとてもお優しい方です」
そう言ってまるで自分の事のように喜ぶ大和に翔輝は「ありがとう」と笑顔を送る。そんな二人を見詰める武蔵。
「でも本当によろしいんですか？　お疲れなんでしょう？」
陸奥の問いに、翔輝は「大丈夫大丈夫」とひらひらと手を返す。

「みんなといると楽しいし。それに、今日からは武蔵もいるしね」
そう言って武蔵に微笑むと、武蔵はそっと視線を外した。そんな武蔵を見て長門は「あらあら」と言って微笑んだ。
「そんなら長谷川はんも座ってくだはれ」
伊勢の言葉に翔輝はうなずくといつものように部屋の隅の方に向かう。
「そないな所におらんでこっちにおいでぇな」
「あ、いいよ。僕はここでいいから」
伊勢の言葉に笑顔を送り、翔輝は静かにそこへ腰掛けた。すると、その隣に大和が座り、反対側には武蔵が座った。
「ちょっと二人とも。何でこんな所に来るのさ」
「別にいいじゃないですか」
「・・・あなたがここにいるから」
それぞれの返答に翔輝は困ったように頬を掻く。
「だって武蔵はこの歓迎会の主賓でしょ？　大和はその姉なんだから二人とも前に行かないと」
「私はここがいいんです。どうせこの会の主賓は武蔵なんですから。だからこそ武蔵は前に行くべきです」
大和の棘のある言い方にも武蔵は無表情を貫く。
「・・・やってと言った訳じゃない。それに、私はここがいいの」
そう言って武蔵はその場を動かない。どうやら完全にここに腰を据えるつもりらしい。
「ちょっと長谷川君」
「はい？」
長門は翔輝の前で両手を当ててお願いのポーズをする。
「悪いけど、大和と武蔵の事任してもいいかしら？」
「僕がですか？」
「ええ、なんたってあなたは大和の保護者だもの」
「いつから僕は大和の保護者になったんですか？」
「まあ、細かい事は気にしないで。そこでそんな長谷川君には新た

に武蔵の保護者というのも加えてほしいのよ」
「む、武蔵のですか？」
自信なさげな顔をする翔輝に、長門は「大丈夫よ」と背中を押す。
「なんかあなた、彼女に気に入られてるみたいだし」
「え？」
そっと横目で武蔵を見るが、彼女は楽しそうに会話をしている艦魂達をぼーっと見詰めている。その表情からは何の感情もうかがえない。
「そ、そうですか？」
「そうよ。ほら」
長門の指差す先を見ると、武蔵の小さな白い手がしっかりと自分の服の裾を握っていた。
「こんな事されてるんだから信頼されている証よ」
「う、うーん・・・」
「そう深く考えないの。じゃあ、よろしくね」
長門は満面の笑みを浮かべてみんなの所に戻って行った。そんな彼女の背中を見詰め、翔輝は小さくため息した。
「どうしたんですか？」
大和が心配そうな表情で翔輝を見詰める。そんな大和に翔輝は優しく微笑んだ。
「何でもないよ」
「そ、そうですか？　でも今一体長門さんと何を話していたんですか？」
「たいした事じゃないよ。気にしないで」
「は、はぁ・・・」
いまいち納得のいかないような顔をする大和だが、長門の掛け声にその顔も吹き飛んだ。
「ほんじゃ、一応みんな揃ったって事で、改めて武蔵の歓迎会を始めるわよッ！」
『おおおぉぉぉッ！』

「・・・結局、みんなただ騒ぎたいだけじゃないのか？」
「ま、まあ、そうかもしれませんね」
翔輝の言葉に、大和は苦笑いした。
こうして、武蔵の歓迎会は開いたのだった。
しかし、歓迎会とはきっと名目だったのだろう。武蔵が主賓だというのに宴会は勝手に進行していた。その理由の中には武蔵に話しかけづらいという悲しい現実もあるのだが。
一方、そんな武蔵はというと翔輝の横にちょこんと座ってラムネを飲んだり料理を食べたりしていた。先程から彼女は一言も発していない。
そんな武蔵の横では大和が翔輝に盛んに話しかけていた。二人とも楽しそうに会話している。この中に陸奥達が入って来ないのは長門の手回しがあるからだろう。
大和は思う存分翔輝と話せるので心底嬉しそうである。そんな彼女に話しかけられる翔輝も楽しそうに彼女と会話していたが、ふと武蔵の存在に気づく。
「あ、武蔵。ちょっといい？」
「・・・え？」
翔輝はそっと手を伸ばす。その手は武蔵の口元に向かい、そっと何かをつまんだ。それは一粒のごはん粒であった。それを見て翔輝は優しく微笑む。
「まったく、少しは気をつけて食べなよね」
そう言うと、翔輝はそれをためらう事もせずに自分の口に入れた。
その衝撃的な光景に武蔵はもちろん事の成り行きを見ていた大和、遠くから盗み見ていた長門や陸奥達も驚いた。
「・・・あ、ありがとう」
武蔵はそう言うと頬を赤らめて顔を伏せてしまった。そんな武蔵を見て翔輝は不思議そうに首を傾げる。
「しょ、少尉ッ！」
その震えた声に振り返ると、

「はいッ！？」
そこには口元に大量のごはん粒を完全武装した大和が真っ赤にした顔で自分を見詰めていた。
「や、大和？　何なのその無法地帯は？」
切羽詰った顔で自分を見詰める大和に翔輝はちょっと引く。
「わ、私もお願いしますッ！」
「な、何が？」
「私にも武蔵にした事をしてほしいんです！」
「え？　僕何かした？」
その返答に、大和と二人の会話を聞いていた長門達は一斉にズッこけた。
「じ、自覚がないのね。さすが長谷川君ね」
感心半分呆れ半分の苦笑いする長門の言葉に、陸奥達もうなずいた。みんな知っているのだ。翔輝がどうしようもなく鈍感で少し天然な所がある事を。
一方、完全に先を見失った大和はすさまじくがっかりして口のまわりを拭き取る。自分から説明するほど大和はまだその領域には達していないのだ。
そんな皆の反応に本当に心の底から不思議そうな顔をする翔輝。
「一体みんなどうしたんだろ？」
「・・・ねえ」
その声に振り向くと、武蔵がこっちをじっと見詰めていた。
「武蔵？　どうしたの？」
「・・・ラムネ、いる？」
そう言って武蔵はラムネを差し出して来た。
「あ、ありがとう」
翔輝は笑顔でそれを受け取る。そんな彼の笑顔を見て、武蔵は口元でほんの小さな笑みを浮かべた。
「あ、今笑った？」
「・・・私だって、笑う事もある」

「そうだよね」
「・・・私が笑うと、変？」
「ううん。そんな事ないよ。武蔵の笑顔はすっごくかわいいよ」
笑顔で言う翔輝の言葉に、武蔵は頬を真っ赤に染めてうつむく。
「・・・ねえ」
「何？」
顔を上げた武蔵は、真剣な顔で翔輝を見詰めた。その瞳の奥にある強い意思に翔輝は驚く。
「・・・あなたの事、翔輝って呼んでいい？」
「え？」
一体何を言われるのだろうと構えていた翔輝は意外な問いに拍子抜けする。だが、武蔵はそんな翔輝をじっと見詰めている。心なしか、その瞳はキラキラと煌いていた。
「・・・ダメ？」
不安げに訊いてくる武蔵に、翔輝は優しく微笑んだ。
「別にいいよ」
「・・・本当？」
「うん」
翔輝の嬉しい返事に、武蔵はほんの小さな笑みを浮かべた。それは彼女の出せる精一杯の笑顔だった。
「・・・ありがとう――翔輝」
「そんな礼を言われるような事じゃないよ」
「・・・ううん。翔輝のおかげで、私は笑えた。だから、お礼を言うの」
「そ、そう？　なんかよくわかんないけど、嬉しいな」
「・・・翔輝」
武蔵は小さな笑みを浮かべると、そっと翔輝に抱きついた。
「お、おい武蔵」
「・・・翔輝」
武蔵はすっかり翔輝の胸の中に納まってしまっている。その中で

嬉しそうに笑みを浮かべる。そんな彼女は自分の巣で落ち着いている子猫のようだった。
「・・・翔輝、好き」
「あ、ありがとう」
二人とも互いの顔を見合って照れたように笑みを浮かべた。
そんな幸せな雰囲気が流れる二人。まるで昔からの仲のいい兄妹のような。
だが、そんな幸せムードを許すほどここにいる連中は優しくはなかった。
「ちょ、ちょっと武蔵ッ！」
慌てた様子で二人の間に入って来たのは大和。その後ろにはいつの間にか陸奥と伊勢、さらには霧島と雪風がいた。
大和は翔輝の腕の中で心地良さそうに目を細めている武蔵を恐ろしい形相で睨みつける。
「武蔵ッ！　あなた一体何してるのよッ！？」
「そ、そうよッ！　あなただけそんなうらやましい事をするなんてずるいわよッ！」
「陸奥。どさくさに紛れて何言っとるん？」
「ひ、卑怯ですぅ・・・武蔵さん、いつから長谷川少尉の事を・・・？」
「と、とりあえずこの関が原のように緊迫した雰囲気を打開する為に離れてくださいッ！」
それぞれの必死な言葉の集中砲火を浴びても、武蔵の鉄の心はビクともしない。無表情で自分を睨みつける姉達を見詰める。
「・・・何？」
「何じゃないわよッ！　とにかく離れなさいよッ！」
大和の必死な怒鳴り声にも武蔵は気にした様子もなく翔輝に抱きつく。
「だから抱きつかないでよッ！」
「・・・私の勝手」

「そんなの許されないんだからッ！」
「・・・これは私と翔輝の事。翔輝が嫌って言えばやめる」
「少尉ッ！」
突如自分に話が振られた事に翔輝は思いっ切り驚く。
「ぼ、僕？」
「少尉から言ってくださいッ！　こんな事されるのは迷惑だってッ！」
大和の必死な言葉に翔輝はちょっと怖くなる。
「い、いや、別に僕はこれでも構わないけど」
「少尉ッ！」
「・・・ほら」
武蔵は小さく笑みを浮かべた。だがそれは先程翔輝に見せた優しいものではなく、大和達にとっては憎たらしい勝ち誇った笑みだった。
「キーッ！　悔しいッ！」
地団駄を踏む大和を無視し、武蔵は翔輝にさらに抱きつく。
「・・・翔輝、ありがとう」
「っていうか武蔵ッ！　あんた少尉の事を呼び捨てにして失礼でしょッ！」
「・・・これは翔輝が許可してくれた。誰にも文句は言わせない」
「少尉ぃッ！」
「だから何で僕なのさッ！？」
「少尉がしっかりしないからこうなるんですッ！」
「意味わかんないよぉッ！」
言い合う二人に入り込む余地のない陸奥達。そしてそんな翔輝に抱きついて離れない武蔵。なんとも奇妙な光景である。
だが、いつまでも姉妹ゲンカで許されるものではない。何しろその中心にいるのは翔輝である。その火花は辺り一面に撒き散らしてしまう。
「いくら少尉が許したからって、私を差し置いてそんな事ッ！　先

任制度っていう日本の伝統を知らないのッ！？」
「そうやで。あんたはまだ野球部で言う所の球拾い。先輩を無視してそういう事はちょっとあかんと思うえ？」
陸奥と伊勢が果敢に攻めてくる。すると、
「あのさ、陸奥と大和はなんとなくわかるけど、どうしてまた伊勢と霧島、さらには雪風までいるの？」
翔輝の問いに、一瞬の沈黙が流れる。だが、その沈黙はすぐに独特の関西弁によって打ち砕かれた。
「うちな、長谷川はんの事がすごく気になるねん」
「はい？」
戸惑う翔輝に対し、伊勢はうっとりとした顔でそんな彼を見詰める。
「うち、男の人に優しくしてもらうの初めてやったんや。せやからうち、初めて優しく接してくれた長谷川はんに身も心も捧げよう思うて」
伊勢の超絶爆弾発言に、部屋の空気が一瞬で凍りついた。長門などは飲んでいたラムネを見事に逆噴射させた。
「さ、捧げるって・・・」
「一体何を・・・？」
「それは愚問よ。身も心もって事は・・・」
「・・・よねえ」
駆逐艦達がなぜか顔を真っ赤にさせてこそこそと話している。その中には鼻血大流血の者も何人かいた。
一方、長門はこぼしたラムネを拭き取ると慌てた様子で伊勢に飛びつく。
「ちょ、ちょっと伊勢！　この壊滅的な状況をどうするつもりよッ！？」
「せやから」
伊勢は満面の笑みを翔輝に向けると、一瞬の隙を突いて翔輝に飛びついた。しかも驚く武蔵をどかしてからの行動だったので、一瞬

で伊勢は翔輝を独占した。
「ちょッ！　伊勢ッ！？」
いきなり同い年くらいの女の子に抱きつかれた翔輝は慌てるが、そんな彼の腕の中では伊勢がとても心地良さそうに微笑んでいた。
「ああ、長谷川はんの胸はたくましゅうな」
「ちょっと伊勢ッ！　へ、変な所触んないでよぉッ！　く、くすぐったい！」
必死に伊勢を離そうとするが、伊勢は翔輝にぴったりと抱きついて離れようとしない。それどころか頬擦りまでしてものすごく嬉しそうな笑みを浮かべている。
だが、こんな伊勢の横暴をいつまでも許しているほど、ここに集まっている少女達は甘くはなかった。
「ちょ、ちょっと伊勢ッ！？　何してるのよッ！？」
まず最初に怒鳴ったのは伊勢の親友である陸奥だった。顔を真っ赤にして怒鳴っているが、その赤みはきっと怒りのせいではないだろう。
怒鳴る親友に向かって、伊勢は翔輝の胸から顔を上げ、真剣な顔で対峙する。
「陸奥」
「な、何よ」
「うち、本気やから」
その言葉に、陸奥はドキリとする。
「ほ、本気って、何が？」
伊勢は、自分を見詰める陸奥、そして大和達に、宣戦布告した。
「うち、本気で長谷川はんが好きやから」
その瞬間、不気味な沈黙が舞い降りた。
誰もが口を開く事をためらい、誰も言葉を発しない。
さっきまで明るい会話や怒声が飛び交っていた部屋は、その一瞬で音という概念が消滅したかのように、何の音もない。
このまま誰も口を開かないのだろうかという不安が誰の胸にも過

ぎった頃、この沈黙に一番槍したのは、
「わ、私だって本気よ」
顔を赤らめながら小さな声で言うのは陸奥。真剣な瞳で自ら宣戦布告した伊勢を見詰める。
「私だって本気で少尉の事が・・・好きなの」
その言葉に、再び部屋に沈黙が舞い降りた。
見詰め合う二人の少女の瞳には、どちらも決意の炎――恋の炎が燃え上がっていた。
そして、互いの瞳を見つめ合い、互いの想いを感じ合ったのか、ほぼ同時に口元を吊り上げて笑った。その笑みはいつもの優しい笑みではなく、好敵手（ライバル）を見つけた事への喜びの笑み。
「ちょ、ちょっと待ってくださいッ！」
そこへ慌てて飛び込んだのは大和だった。なんか自分を置いて勝手に話が危険な領域に達しようとしていたからだ。
振り返った二人に、大和は顔を真っ赤にさせて自分も宣言する。
「わ、私だって本当の本当に少尉の事が大好きなんですッ！　誰にも少尉は渡しませんッ！」
自分の中にある本当の気持ちを素直に口にした。
見詰め合う三人。
すると、伊勢が優しい笑みを浮かべた。
「ほんなら、誰が最初に長谷川はんと一緒になれるか、勝負やねぇ」
「そうね。でも、勝つのはこの私よ」
「わ、私だって負けませんからッ！」
お互いを見詰めて笑い合う三人。話の内容が複雑な関係でなければ、とても仲のいい友達にしか見えない。
翔輝を懸けて宣戦布告し合った三人は、互いを最高の好敵手（ライバル）と認めたのか、ガッチリと握手をし合った。その勇ましいまでの恋心に、まわりからは絶え間ない拍手喝采が起きた。
こうして、翔輝を懸けて戦う恋の三銃士は・・・
「ま、待ってくださいッ！」

その突然の声に振り返った皆は、その意外な人物に驚いた。
「き、霧島さん・・・？」
そこにいたのは、いつも静かであまり目立たない存在である日本艦魂の古参に入る少女――霧島だった。
霧島は顔を真っ赤にして三人を見詰める。その顔からはいつになく彼女の必死さが伝わってきた。
「き、霧島・・・？」
驚く比叡の横で、霧島は身体中に力を入れて必死な瞳で三人を見詰める。
「わ、私も・・・がんばりますぅッ！」
その言葉に、三人は驚くが、すぐにフッと口元に笑みを浮かべた。
「霧島さん。お互いがんばりましょう」
陸奥の伸ばした手に霧島は驚いたが、すぐにうなずき、その手を握る。その上に、伊勢、そして大和が手を合わせ、四人の恋姫達は互いをライバルと認めた。その瞬間、まわりからは勇ましき四人の勇姿に感動して拍手喝采が起きた。
いつになく勇ましい四人の少女達を見詰め、長門は苦笑いした。
「まったく、何やってるのよ」
「ほんと、若いっていいわね」
そう言ったのは扶桑。その表情はとても嬉しそうだ。
「扶桑も大変ね。伊勢があんな事になっちゃって」
そう言うと、扶桑少し寂しそうに笑った。
「伊勢ちゃんも女の子なのよね。いつかこういう時が来るって思ってたけど、やっぱり寂しいわね」
「扶桑・・・」
しかしすぐに、扶桑は嬉しそうに微笑んだ。
「でも、こういう時こそ、喜ぶものよね」
「そうよ。私だって陸奥を応援したいもの」
そう言って、二人の姉は嬉しそうに微笑み合った。
一方、すっかり話の中心にいるはずなのに、そんな自覚のない翔

輝は、見詰め合う四人を見詰めて困ったように頬を掻いた。
「あー、なんかよくわかんないけど・・・つまりみんな僕の事が好きだって事？」
その瞬間、辺りに衝撃が走った。
さすがの翔輝もこれだけの言葉を並べられれば四人の気持ちもわかってしまう。ついに始まる泥沼の関係に皆は戦慄を覚えた。が、
「そんなのわかってるのに、僕だってみんな大好きだよ」
そう言って、翔輝は屈託のない笑みを浮かべた。
そして、皆は一斉にズッこけた。
「あはは、ほんと、長谷川君らしいわ」
そう言って長門は苦笑いした。
「もうッ！　少尉はどうしてそんなに乙女心がわかんないんですかッ！？」
呆れ怒る大和の肩を、陸奥がそっと叩いた。
「少尉があそこまで鈍感だからこそ、私達がこうして微笑み合えるのよ。だって、少尉にみんなの気持ちがわかっちゃったら、それこそ泥沼よ」
「ほんまやなぁ。まぁ、難しやろけど、結果オーライってね」
「そ、そうですね・・・」
そう言って、四人は再び笑い合った。
一方、完全に話の外に出されてしまった武蔵は、微笑み合う四人の隙を突いて再び翔輝の胸に潜り込んだ。
「ちょっと武蔵？」
翔輝の戸惑った声にいち早く気づいた大和は慌てて武蔵の肩を掴む。
「ちょっと武蔵何やってるのよッ！」
「・・・翔輝に抱きついてる」
「そんなの見ればわかるわよッ！　っていうか、何でそんな事するのよッ！」
「・・・決まってる。私は翔輝が好きだから。ただ、それだけ」

「なぁッ！？」

驚く大和。もちろん驚くのは大和だけじゃない。陸奥や伊勢、霧島なども驚く。同時に長門は苦笑いした。

「あはは、嬉しいな。僕も武蔵が大好きだよ」

そう屈託のない笑みを浮かべて、翔輝は武蔵に微笑んだ。その笑顔に、武蔵はぽっと顔を赤らめてうつむく。同時に、大和達からはため息が漏れた。

「ある意味、長谷川少尉にはこのままでいてほしいですね」

雪風の言葉に、全員がうんうんとうなずいた。だが、すぐに翔輝の腕の中で子猫のように甘えている武蔵の存在を思い出す。

「だから武蔵は離れなさいッ！」

大和の怒った声にも武蔵は動じない。そんな冷静過ぎるムカつく妹に大和のイライラは募るばかり。そんな大和の代わりのように陸奥が武蔵に言い放つ。

「私達四人は互いを恋敵（ライバル）と認めたわ。武蔵ちゃんも少尉を狙っているなら、それ相応の事をしてもらおうじゃない」

陸奥は彼女の口から彼女の想いを聞き出したいと思ったのだ。このままではただの疑心暗鬼。ここはズバッと言ってもらった方が後の為だ。

陸奥の言葉に皆もうなずく。大和も「そうよッ！　あなただけ何もなしだなんてズルイわよッ！」とまるで子供のように（子供だが）加勢する。

そんな大和達に迫られた武蔵はうつむいた。

「お、おい。あんまり武蔵をいじめるなよ」

翔輝は場の雰囲気を正そうと口を挟むが、かなり怖い目で睨まれる。そのせいで言葉が詰まる。だが、翔輝だって一応男である。いつまでも女の勢いに押されているものではない。

「お前らいい加減に――」

「・・・わかった」

『え？』

「・・・証明してあげる」

そう言って、武蔵はおもむろに両手で翔輝の顔を掴んだ。

びっくりして、翔輝は一瞬動きが止まった。だが、事はその一瞬で決まってしまった。

目の前に、武蔵の顔があった。いつもの無表情ではなく、ほんのりと頬を赤らめ、口元には小さな笑みを浮かべた、普通の女の子の顔。

唇が近づく。

そっと、触れた。

『あああああああああああああああああぁぁぁ

第六章　第二節　武蔵の小さな笑顔（後書き）

更新遅れてすみません。
言い訳になりますが、今回のはオリジナルでは武蔵があまりにも急に翔輝の事を好きになってしまったので、改定版ではそれを少し変更したかったので、今回のこの話は書き下ろし。なかなかどう書けばいいのかわからなく、模索を続けていたので、書き上げるのに時間が掛かってしまいました。
申し訳ありません。
あとは、新発売したモンスターハンターポータブル２Ｇにハマっていてそっちに神経がいってしまったのもあります（たぶんこっちが致命傷）。
これから先も更新が遅れる事が多々あり、皆様にご迷惑をかけてしまうかもしれませんが、それらを含めましてこれからもよろしくお願いします。

あと、何かご意見や要望があればなるべくお答えします。
誤字脱字の指摘・設定に対する疑問・物語への意見・使用している史実への意見・登場させてほしい艦艇やもっと登場してほしいキャラへの要望など、皆様のご意見や要望はなるべく入れたいと思っていますので、どんどん感想やメールをください。お願いします。

第六章　第三節　人間と艦魂

「なんか、僕のせいでとんでもない事になっちゃったみたいで、すみません」
頭を下げて謝る翔輝に、長門は優しく微笑んだ。
「長谷川君が悪い訳じゃないわよ」
「でも、だからって・・・」
「そう落ち込まないの。長谷川君は笑ってた方がずっといいんだから」
「長門さん・・・」
ちょっと涙が出そうなきらきらした瞳で翔輝は長門を見詰める。
そんな彼に、長門は優しく微笑む。が、すぐに目の前の現実を見てため息する。
「でも、このままって訳にもいかないわよねぇ・・・」
「そうですよね・・・」
二人が見詰める先では、大和と陸奥、そして武蔵がつーんとしていた。もちろん一方的に敵意むき出しなのは前者の方だが、双方の間にはベルリンの壁よりもすさまじい壁が立ち塞がっていた。
あれから双方の戦争状態はまだ続いていた。伊勢と霧島はこう表立って敵意をむき出しにはしていないが、水面下からバックアップをしている。
長門と翔輝、そして扶桑や比叡などは不安に陥っている艦魂達の不安を解消するのに全力を注ぎ、先程一応鎮静したばかりだった。
そこで初めて翔輝は艦魂四大新聞というものを知った。どうやら普通の四大新聞のようなものらしく、艦魂達の中では絶大に信用されている情報手段らしい。それがあんな報道をしたから不安も過熱したのだろう。
翔輝はため息すると天を仰いだ。
「昨日のあれは、何だったんでしょうか?」

「あれって？」
「その・・・武蔵の・・・えっと・・・」
途中まで言って、翔輝は口ごもってしまう。その頬はいつになく赤く染まっている。そんな翔輝を一瞬かわいいなと思ってしまったが、すぐに彼の不安を和らげようとする。
「えっと、昨日武蔵があなたにしたキスの事？」
長門のストレートな問いに、翔輝は小さくうなずいた。
「そうね・・・まあ、あれは武蔵が長谷川君の事が好きって事なのよ」
「そりゃそうでしょうね。そもそも好きでもない相手にあんな事しませんよ」
「およ？　長谷川君、彼女の気持ちがわかってたの？」
驚く長門だが、すぐにそれは自分の誤解だったと思い知った。
「気持ち？　えっと、それは一体・・・」
「え？　だから、武蔵があなた事を好きっていう・・・」
「僕も武蔵は大好きですよ？　もちろん大和や陸奥、伊勢や霧島も」
その言葉に長門はため息した。どうやらこの少年、あれだけインパクトのある一撃を受けてもまだ何も気づかないらしい。ここまで鈍感だとある意味そういうのの天才なのかもしれない。
「とりあえず、まずはあのキューバ危機寸前の状態をなんとかしないとね」
「・・・あの、長門さん。一応歴史語ってるので、そういった時代考証を無視した発言はやめてほしいんですが」
「まあいいんじゃない？　結構適当にやってるんだし」
「いいんですか？」
「いいのよ。それより今はあの子達をなんとかしないとね」
そう言って長門は武力衝突寸前の大和達をを見てため息した。
翔輝も小さくため息すると、そっと立ち上がった。
「長谷川君？」
「元はといえば原因は僕にあるんですし。なんとかがんばってみま

す」

そう言って翔輝は開戦寸前の三人に近づくと、腰の軍刀の柄を握っている大和の頭を引っぱたいた。

「しょ、少尉ッ！？　いらしてたんですかッ！？」

突然の翔輝の介入に驚く大和。それは陸奥や武蔵も同じらしかった。どうやらお互い相手の事しか見えていなかったらしい。

そんな三人に翔輝はまたため息する。

「お前らな。いい加減仲直りしろよな」

「嫌ですッ！　武蔵が土下座をしても許さないですッ！」

「大和ちゃんと同意見です。私も絶対に許しません！」

そう言って、大和と陸奥は断固として武蔵と仲直りするつもりはないらしい。そんな頑固な二人に翔輝はため息する。どうやらこの二人は徹底抗戦の構えらしい。

翔輝は二人の説得を諦めて比較的穏健派の伊勢に近づく。

「あ、あのさ、伊勢。お願いがあるんだけど」

「何どすか？」

伊勢は柔和な笑みで翔輝を迎えてくれた。向こうに比べたらずいぶんと話がわかりそうだ。

「あのさ、君はどうなの？　大和達みたいに武蔵と敵対してるの？」

「うち？　うちはあの子達みたいに正面からは敵対しないでぇ」

「そっか・・・え？　正面からって？」

翔輝の問いに、伊勢は満面の笑みで、

「うちな、今闇討ちを勉強しとるんよ」

そう言って笑顔で見せてくれたのは、『元禄赤穂事件大全集』という雑誌だった。さーっと血の気が引いた。

伊勢の笑顔が急に恐ろしくなり、翔輝はそそくさとその場を離れた。すると、目についたのは金剛姉妹であった。

「あ、霧島」

「少尉？」

比叡と仲良く話していた霧島は翔輝に声を掛けられ嬉しそうに微

笑んだ。
翔輝はそんな霧島と話そうと近づくが、その針路を榛名に塞がれた。
「は、榛名？」
「おい朴念仁。俺の妹に何の用だ？」
榛名は不機嫌そうな顔で翔輝を睨みつける。明らかに敵対心むき出しである。
「いや、ちょっと霧島に話があって・・・って、朴念仁って、何？」
「うるさい。テメェみたいな奴に俺の妹には手を出させねぇからな」
そう言って榛名はギロリと翔輝を睨む。その眼光はもはや辻斬りのレベルである。そのあまりの迫力に翔輝はたじたじになる。
「あ、いや、その、ね・・・」
「あぁんッ！？　何だゴラぁッ！」
「ひぃッ！」
「こらこら榛名。あんまり長谷川君をいじめないの」
そう言って怒る榛名の肩を掴んだのは、金剛姉妹で最も友好的な比叡だった。その登場は翔輝にとっては嬉しい以外何にでもない。
「ひ、比叡さん」
涙目になりつつある翔輝に、比叡は優しく微笑む。その笑顔は天使のよう。
「ほら霧島。ご指名よ」
そう言って比叡は自分の後ろに隠れていた霧島を前に出す。隠れていた霧島は頬をほんのりと赤らめて翔輝を見詰めている。
「こ、こんにちは」
「え？　あ、うん。こんにちは」
見詰め合う二人。そんな二人の横では今にも腰の刀を抜刀しそうな榛名を比叡が笑顔で止めていて、一人金剛だけは涼しい顔で紅茶を飲んでいた。
翔輝は自分の質問を待っている霧島にそっと問う。
「あ、あのさ。武蔵の事なんだけど・・・お前も怒ってるの？」

ちょっと自信なさげに問う翔輝に、霧島はブンブンと首を振る。
「わ、私はそれほどには・・・あの、ちょっとびっくりしただけで」
「そ、そう？　良かったぁ」
翔輝は安堵の息を漏らす。これで味方になってくれそうな艦魂が一人増えたという事だ。すると、安心した翔輝に霧島が不安そうに問う。
「で、でも、少尉は良かったんですか？」
「え？　何が？」
「その・・・武蔵さんと・・・えっと・・・」
その瞬間二人一斉に顔を真っ赤にした。
うつむいてもごもごとしゃべる霧島と、赤い頬を困ったように掻く翔輝。そんな翔輝に拳銃を向けていた榛名を比叡が必死に止めていた。
翔輝は照れながらも自分の本当の気持ちを言葉にする。
「ま、まあ、僕はそんなに気にしてないから。それよりも一人になっちゃった武蔵の方が心配だし」
「私は少尉がいいというなら、構いません」
そう言って、霧島は笑顔で微笑んだ。その笑みは天使のようで、翔輝はそれだけで彼女の優しさに感動した。
「霧島。君っていい子だね」
「そ、そんな事ないですよぉ」
顔を赤らめながら嬉しそうに微笑む霧島に、一瞬ドキリとしてしまう。そんな翔輝に機関銃を向けていた榛名は比叡のバックドロップで轟沈した。
「あ、そうだ霧島。これって何に使うの？」
そう言って比叡は彼女が座っていた座布団の下から雑誌を取り出した。
「あッ！　姉さんそれは――」
「何それ？」
比叡の手から慌てて取り返そうとした霧島だが、なぜか何もない

所で転倒した。そのせいで、雑誌の表紙が見えてしまった。
「えっと・・・『明るい拷問大全集初級編』・・・？」
翔輝は崩れかけた笑みでその雑誌を手に取ると、なぜか付箋のついた所を開いた。そこには明るい文字で『激辛唐辛子汁満載のじょうろを憎き恋敵の口に突っ込ませよう！　目標1リットル！』と書かれていた。
翔輝の中で、何かが音を立てて崩れた。
霧島は慌てて翔輝の手から雑誌を奪うと、それを座布団の下に再び戻し、硬直した翔輝に弁明する。
「ち、違うんですッ！　これは金剛姉さんの書斎を整理していた時にたまたま見つけて、整理していただけなんですぅッ！」
「そ、そうだよね。霧島がこんな物を読むなんてね」
「そ、そうですよ」
あははははと、ぎこちない笑いを上げる二人。だが、ここに来て最悪の追い討ちが炸裂した。
「うん？　何を言っている。それは貴様が「拷問に関する知識を教えてッ！」って血走った目で言ったから貸したんじゃないか。そういえばあの時殺気のようなものを纏っていたが、一体何の為に借りたんだ？」
と、今まで沈黙していた金剛は今世紀最大の暴露をかました。
霧島の顔からさーっと血の気が失せた。慌てて弁明しようと振り返った時には、翔輝の姿はどこにもなかった。
霧島から逃げ出した翔輝は心に《人は第一印象で決めつけない》と深く刻み込んだ。
結局、全滅だった上に、一番怖いのは大和と陸奥ではなくあの二人の方だったという認めたくない現実を見るはめになった。
翔輝はふらふらとした足取りで向かったのは、大和達に敵対し、翔輝の唇を奪った――武蔵だった。
「あ、あのさ武蔵」
翔輝が声掛けると、武蔵は無表情で振り返った。

「・・・翔輝？　どうしたの？」
「あ、いや・・・なんか、ごめんね。僕のせいで」
翔輝の言葉に、武蔵は小さく首を横に振った。
「・・・翔輝のせいじゃない。悪いのは愚姉達」
そう感情なく言った武蔵の額を、翔輝は軽くデコピンした。その突然の攻撃に驚く武蔵に、翔輝は少し怒ったように注意する。
「自分の姉をそんな言い方しちゃダメだよ」
「・・・ごめんなさい」
「わかってくれればいいんだよ」
翔輝は素直に謝った武蔵に優しく微笑む。
「・・・翔輝。お願いがある」
「うん？　何？」
翔輝が不思議そうに見詰めると、武蔵は一度顔を伏せ、再び上げて真剣な瞳で彼を見詰める。
「・・・私にも、して」
「え？　何を？」
「・・・だから、私も、頭なでなでして」
真剣に言う武蔵に、翔輝はくすりと笑ってしまう。
「・・・何で笑うの？」
「いや、武蔵があんまりにもかわいいからさ」
「・・・」
翔輝の何気ない言葉に、武蔵は顔を赤らめてうつむいてしまった。
そんな武蔵に翔輝は優しく微笑むと、そっと彼女の頭を撫でた。
翔輝に頭を撫でられ、武蔵は小さく微笑んだ。それは彼女が出せる最高の笑顔なのだろう。
そんな嬉しそうな二人だが、そんなおいしい事を許さないのが、
「ちょっと武蔵ッ！　何やってるのよッ！」
早速大和が食いついてきた。すぐ二人に近づくと慌てた様子で武蔵の肩を掴む。
「・・・何？」

「少尉からいますぐ離れなさい！」
「・・・嫌」
「離れなさいッ！」
必死になって大和は翔輝から武蔵を引き剥がそうとするが、武蔵も必死になって翔輝に抱きついているので離れない。それでも大和は必死になって引き剥がそうとする。
「おい大和ッ！　乱暴はやめろよなッ！」
そう叫んで翔輝は必死で止めるが、女の子（いくら艦魂と言えど）に暴力を振るうのは気が引け、暴れる大和を離して武蔵を助けた。が、それが新たな戦いの火種になってしまった。
「少尉・・・？　どうして武蔵をかばうの？」
武蔵の方を助けた翔輝に大和は心底驚いている。そんな大和の問いに翔輝は当然でしょと言いたげな顔をする。
「どうしてって、そんなのお前が武蔵に乱暴するからだろ！？」
「ちょ、ちょっと待ってください！　私が悪いって言うんですかッ！？」
「どう見てもそうでしょッ！？」
大和の顔がみるみる青ざめていく。それはもうまるで、大切なものをなくした子供のように。
「少尉？　少尉はいつも私の味方でした。今回も、今回もそうですよね？」
「いや、今回は武蔵に味方する」
ガガガガアアアアアァァァァンッ！
音にすればこんな感じの衝撃が大和に走った。あわあわあわと口を震わせ、信じられないという顔で翔輝を見詰める。
「しょ・・・ッ！」
次の声は、いつもの大和の声より一トーン高い声だった。
「少尉のバカアアアァァァッ！　裏切り物おおおぉぉぉッ！　絶対に徹甲弾を撃ち込んでやるううぅぅぅッ！」
大和は大泣きしながら翔輝を突き飛ばすと、無表情で自分を見詰

める武蔵を睨みつけ、大泣きしながら部屋を出て行ってしまった。
残された二人は呆然とする。
「・・・」
武蔵はいつの間にか脱げた軍帽を被り直し、服の乱れを直す。
「ヤバイなぁ・・・」
後でうるさいだろうなぁ。と先の事を考えてため息する翔輝。
翔輝は立ち上がると近くの椅子に腰かけ、軽く頭を抱える。すると、
「・・・ありがとう」
「え？」
武蔵が突然礼を言ってきた。顔を上げると、武蔵が微かに微笑んでいた。すごく純粋で、とてもかわいかった。
「・・・私に味方してくれて」
「いや、別に。今のは大和が悪かったしな」
翔輝は軍帽を脱ぐと暑そうに顔を扇ぐ。もう八月なので夏真っ盛り。かなり暑いのだ。
武蔵は翔輝の横の椅子に腰掛ける。同じく暑いはずなのに彼女は汗ひとつかかずに無表情を貫いている。さすがといおうかなんとおうか。
そんな武蔵に、翔輝は少し怒ったように言う。
「確かに大和は悪いけどさ、お前ももう少し自分の姉を大切にしろよな」
そう言うと、武蔵は無表情で翔輝を見詰める。
「・・・私はまだあの人を姉と認めた訳じゃない。そんな急に認められるような関係じゃない」
「そ、そりゃそうだろうけど」
武蔵はそれだけ言うと再び無表情で沈黙した。そんな彼女の横で翔輝は困ったようにため息する。
「さてと、どうすっかな」
どうやったらあの二人を仲良くする事ができるか？　翔輝は頭を

掻きながら必死に考える。その時、
「少尉？」
その声に顔を上げると、そこには霧島がいた。
「霧島」
霧島は頭を抱えている翔輝に気づいて声を掛けてきたのだ。そっと翔輝の隣の椅子に腰掛ける。その位置は武蔵の反対側だ。
霧島は心配そうに翔輝の顔を覗き込む。
「どうしたんですか？　頭を抱えて」
「いや、ちょっとね」
その時、ふと霧島を見る。少し頬の赤い霧島に翔輝はふと浮かんだ疑問を訊く。
「ねぇ、霧島は金剛さん達を《お姉さん》って思えたのは、出会ってからどれくらいだった？」
霧島はいきなりの謎の質問に戸惑っていた。翔輝が大和と武蔵がケンカした事（大和が泣いた事は控えた）を言うと、ようやく霧島も理解したようで、考え始めた。
「そうですねぇ。私の場合は三人もいましたからね。三人とも《お姉さん》って思えるようになったのは一ヶ月くらいかかりましたね」
「最初に《お姉さん》って思えたのは誰？」
「やっぱり、比叡姉さんですね。比叡姉さんは一週間で懐きました」
「あぁ、比叡さんか。確かにあの人以外は一癖も二癖もあるような人達だもんね」
「だぁれが一癖も二癖もある人達だ。ああぁん？」
「は、榛名！？」
「姉さん！？」
そこには金剛、榛名、比叡の三人がいた。金剛四姉妹、今ここに全員集合。
「貴様。霧島と何をやっている？」
「あら、長谷川少尉。こんにちは。いつも霧島がお世話になってます」

「つーか、お前今私達の事何て言ったんだゴラ」
三者三様の言葉を放ち、三人は二人を見る。特にかなり凶悪な二人に睨まれているので、翔輝は苦笑いする。
「いや、その、霧島に相談を」
「霧島って、呼び捨てとは良い度胸してんじゃねえか、ああぁん？」
「榛名姉さん。私が呼び捨てにしてって言ったの」
霧島の言葉に、榛名は少し驚いたような顔をする。
「お前が？　ふーん」
榛名は翔輝を天然記念物を見るような好奇なまなざしで見る。
金剛は榛名に見詰められて苦笑いする翔輝をじっと見詰める。
「貴様。霧島に相談とは何事だ？」
金剛は威厳のある声で聞く。その声にビビリながら翔輝はその問いにギクシャクながら答える。
「あ、いや、その、大和と武蔵がケンカしちゃって」
「うむ？　まだ会って間もないというのにもうケンカとは。ケンカとは双方の事を知り、そこで生まれた溝が原因でなるもの。まだ互いをよく知らぬのにケンカとは、一体何が原因なのだろうか？」
「あ、その・・・」
翔輝が返答に困っていると、霧島がフォローを入れてきた。
「姉さん達は姉妹って思えるのにどれくらいかかった？」
霧島の質問に、三人は不思議そうな顔をするが、妹の質問という事もあってか考え始めた。助かった。霧島ナイスフォロー。
「俺はそんなにかからなかったな。姉貴も霧島も一週間くらいだ」
榛名は細かい事を気にしない豪快な性格らしい。予想通りといえば予想通りだが。
「私は一ヵ月くらいだな。ちゃんと知らなければ互いに不幸だと思ってな」
金剛は奥が深い。さすが武人。
「私は三日もかからなかったなぁ。えへへ」
比叡は長門や扶桑と同じお姉さんキャラなのでかなり友好的らし

い。というかそれはさすがに時間かからなさすぎ。
「そうですか、最低三日。最長一ヵ月ですか。いや、いい参考になりました。ありがとうございます」
本当に参考になったかは微妙だが、翔輝は礼を言って立ち上がる。
「これから大和と武蔵を仲直りさせる為の策を考えます」
「ふーん。がんばれよ。あまり期待はしていないけど」
「大変ね。私できる事があったら何でも相談して」
「はい。ありがとうございます」
榛名と比叡の激励（？）に感謝する。すると霧島もそっと立ち上がって翔輝を見詰める。
「手伝いましょうか？」
「いや、いいよ。その気持ちだけ受け取っとく」
霧島は「そうですか」と言って小さく笑みを浮かべた。
最後に金剛を見ると、金剛は窓の外を見ていた。そっと翔輝を見ると、口元に小さな笑みを浮かべた。
「貴様。私は助けてやらんが、あいつなら武蔵の気持ちがわかるかも知れんぞ。何て言っても同類だからな」
金剛の言葉に、彼女の視線を見る。そこは甲板であった。兵達が世話しなく動いている中にいる人物を見詰め、そして納得。
「わかりました。ありがとうございました」
翔輝は金剛達と別れて部屋を飛び出すと、甲板に向かって駆け出す。後ろからは武蔵の声が聞こえたが、翔輝はそれを無視して走った。
甲板に出ると、そこは風がそよそよと吹いて心地良かった。
翔輝は甲板にたたずんでいるその人物に駆け寄る。
「あのッ！」
翔輝は海の無効を見詰めている武蔵と同類の人物――山城に声掛けた。
山城はその声に振り返るといつものように無表情で翔輝を見る。
やっぱりちょっと怖い。

「山城さん。実はお願いが・・・」
「私に配属されたいのか？」
「いえ、違います」
というか、まだその話続いてたんだ。
「では何だ？」
山城は近くにあった椅子に腰掛ける。
翔輝はどう切り出すか少し迷ったが、直球勝負をする事にした。
「あの、山城さんは扶桑さんを《お姉さん》と思えるのにどれくらいかかりました？」
その質問に、山城は迷った様子もなく。あっさり、
「今も姉とは思ってない」
うわぁ・・・姉妹関係が根本から成り立ってないよ。これが武蔵というキャラの最終進化形態だとしたら、関係修復は不可能だろう。
翔輝が戸惑ってると、山城は「それがどうした？」と言いたげな目をする。そんな山城に翔輝は慌てて理由を説明する。
「あ、いや、大和と武蔵がケンカしちゃって。どうやったら仲直りできるか考えていて、それでまずだいたいどれくらいで姉妹という意識が生まれるかと思って・・・」
「なぜお前がそんな事する」
「え？」
驚いて山城の顔を凝視する。山城は相変わらず無表情で、感情は読めなかった。
「お前とあの二人の関係はそれほどのものでもないだろ？　友人でも、あまり関わると、それはおせっかいになるぞ？」
山城は無表情で淡々と言葉を繋ぐ。
そして、山城の次の言葉は翔輝の心を凍らせるには十分すぎる言葉だった。
「それにお前は・・・」
異様に冷たい風が吹き、翔輝の軍帽が空に舞った。
「艦魂ではなく、人間だろ？」

その瞬間、翔輝は自分の全てが凍ったような感じがした。
山城は続ける。
「人間のお前が艦魂の世界にあまり関わるのはよくないと思う。艦魂に感情を抱いてしまえば、戦争で駆逐艦一隻――いや、水雷艇一隻を失うのにもためらいが生まれる。戦争とは必ず犠牲が出る。その犠牲を気にしていては軍人として戦えなくなる」
その後の言葉は何も聞こえなかった。
翔輝が聞きたくないといわんばかりに山城から逃げ出したからだ。
後ろの方で山城が何か言ってるようだったが、もうどうでもよかった。
艦魂と人間。本当は交わってはいけない存在同士じゃないか？
そう思えてしかたなかった。
山城の言うとおり、今は戦時中だ。水雷艇一隻失うのに戸惑っていては戦争はできない。戦争とは、勝つも負けるも犠牲が必要なのだ。その犠牲が多いか少ないかで勝敗は決まる。それが戦争なのに、その犠牲をためらっていては戦う事ができない。
――戦争はできないのだ。
翔輝は全力で走って艦内に消えて行った。
甲板で主を失った軍帽が風に揺れた。山城はその軍帽をそっと掴み、翔輝の消えた扉をいつまでも見詰めていた。

第六章　第四節　恋姫達の絆

夜中、『大和』の第三会議室には多くの艦魂が集まっていた。しかし、ある重大な問題が起きていた。それは、
「ちょっとぉ！　肝心の主役がいないじゃない！」
長門が怒る。主役とはもちろん武蔵の事だ。その武蔵がまだ来てないのだ。
「大和ちゃんもまだ来てません」
陸奥が心配そうに言う。そう、大和もまだ来てないのだ。
「何やってるのだあの姉妹は」
翔鶴が呆れたようにため息混じりに言う。
「そういえば、長谷川はんも来ておらんよ？」
伊勢が不思議そうにまわりを見ながら言う。
「うそ！　少尉来てないの！？」陸奥が驚く。
「あら？　あなたの主役は長谷川君なのかしら？」長門が笑いながら言う。
「ち、違うよッ！　そんなんじゃないよッ！」陸奥は顔を真っ赤にして怒る。
しかし、盛り上がりは一瞬の事。主役も旗艦も翔輝もいないのでは話にすらならない。
不気味な沈黙が舞い降りた部屋の中、独立した雰囲気を持つ金剛はその沈黙を破った。
「実は、何か大和と武蔵がケンカしたようでな」
『はぁッ！？』
金剛の言葉に、全員が開いた口が閉じなかった。
「それで長谷川が仲介役をやってたんだが、まさかまだやってるのか？」
「つーか無理だったんだよ。きっと」
金剛の言葉に、榛名が否定的な意見を吐く。

しかし、会って間もない二人がいきなり姉妹ゲンカをしたというのは、おもしろい話だった。みんなくすくすと笑っている。だが、この話題もすぐに終わる。しかも、一人の言葉がそれを早めてしまった。

「山城お姉ちゃん。それ長谷川少尉の軍帽だよね？」

日向の言葉で部屋にどよめきが走った。全員が山城に注目するが、山城は無口で翔輝の軍帽を布で磨いていた。

「どうしてお姉ちゃんがそれ持ってるの？」

日向の言葉に、山城は軍帽に付いた階級章を磨きながらそっと言う。

「航海士が落としていった」

「そういえば貴様に長谷川が尋ねたはずだが」

金剛の言葉に山城は小さくうなずいた。

「大和と武蔵を仲直りさせるにはどうしたらいいかと悩んでいましたが」

「で？　その後長谷川はどうした？」

「私の言葉に放心して、軍帽も拾わずに去って行きました」

「・・・何て言ったのだ？」

その言葉に、山城は普通に答えた。だがそれが、艦魂達に戦慄が走らせた。

「あまり艦魂に関わらない方が良いと忠告しただけです。人間と艦魂は違うのだから、と」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

陸奥が悲鳴に近い声を上げた。それが激論の引き金となった。

「そ、そんな事言ったんですか！？」

「そらひどいどすよぉッ！」

「山城さん！」

陸奥、伊勢、霧島の翔輝派とも呼べるの三人が声を荒げた。三人が三人無表情を貫く山城に詰め寄る。霧島はいいが、陸奥と伊勢は先輩であるのに、すでに感情むき出し状態となっている。しかし、

山城は平然と、
「我々は戦争をやってるんだ。それなのに軍人が艦艇個々に感情を抱いてしまえば戦えなくなる。だからあまり関わらないほうが良いと言っただけだ」
山城の意見は正論だった。だが正論でも、それは認めがたい事だった。
「そうかもしれませんが、それは例えれば、友達が東大に行くから、勉強を邪魔しちゃいけない。だから友達とはもう会わないというような事ですよ!?　でも、友達ならその友達を応援します！　それが普通なんですよ!?」
「陸奥！　長谷川はんを探しに行くでッ！」
「わ、わかった！」
「あ、私も行くぅッ！」
三人は急いで部屋から出て行った。
嵐のような三人が出て行くと、部屋は深い沈黙に包まれた。その気まずい雰囲気の中を先陣切ったのは長門だった。
「じゃ、長谷川君はあの三人に任せましょう。瑞鶴と翔鶴、駆逐艦達は大和を探して。私と日向、は武蔵を迎えに行きましょう他の者はその場にて待機」
長門は淡々と命令（もう旗艦ではないが、いまだ大和より実権を握っている）し、消えた。
友好会は一旦中止になり、残った艦魂達は翔輝の軍帽を磨いている山城を見詰めていた。

「あなたは何やってるのよ?」
呆れた声を上げる長門は目の前にいる少女を見てため息した。
『武蔵』の艦橋に武蔵はいた。その武蔵を長門と日向が迎えに来たのだ。
「ねぇ、武蔵ちゃん。あなたの歓迎会なのに、肝心のあなたが来ないと始まらないよ」

「・・・」
日向の言葉を無視して、武蔵は月の映る海面を見詰めている。
「ねぇ、武蔵。あなた大和の事嫌いなの？」
「・・・違う」
「じゃあ何で来ないのよ？」
長門の質問に、武蔵は少しためらったが、正直に答えた。
「・・・ケンカしたから、会いづらいだけ」
二人はその理由にお互い見合い、笑った。
「そんな事？　だったら問題ないよ。大和はそんなにくよくよした性格じゃないよ？」
「・・・でも」
「はいはい。じゃ、行きましょうか」
長門は武蔵の手を掴んで引っ張る。その時、ふと気づく。
「そう言えばさ、何でケンカになったのよ？」
武蔵は無表情でその問いに答える。
「・・・翔輝と私が話していたのが気に入らなかったんだと思う」
長門は、また新たな問題が起きたなぁと、心の中でため息をした。

その頃、艦内を泣きながら逃げ回っていた大和を翔鶴が一方的に背負い投げを決めて捕まえていた。
「うぅ・・・」
大和は泣き崩れていた。これが日本海軍の全艦魂を指揮する連合艦隊旗艦と思うと、先が思いやられると翔鶴はため息した。
「何で泣いてるの？」
瑞鶴が訊くと、大和は言いたい事を洗いざらいぶちまけた。大和の説明＋愚痴＋泣き声は十五分にも及び、全て言い終えたとき、二人は結論を言った。
「「それは確実に大和が悪い」」
「何でよ！？」
大和は牙を向ける。

翔鶴はやれやれと肩をすくめる。
「お前なぁ、それは嫉妬って言うんだぞ。せめてもう少し平和的に言えばよかったものを、そんな攻撃的に言うからあの少尉も武蔵に付いたんだ。一〇〇人に聞いても一〇〇人がお前が悪いって言うぞ？」
それからさらに十五分間翔鶴の説教＋技は続き、大和はようやく自分が悪いと思ったようで、武蔵に謝る為に会議室に向かった。

一方、陸奥、伊勢、霧島の三人は翔輝を探していたが、自室にも航海室にもいず。艦内を走り回っていた。
だが、最初に翔輝を見つけたのは伊勢だった。
そこは防空指揮所だった。
月夜に照らされる少年に、伊勢は小さな声で聞く。
「長谷川はん？」
伊勢の声に、少年はこちらを向く。それはまぎれもなく翔輝だった。
「伊勢・・・」
「長谷川はん。友好会が開いとるどす。そろそろお行きになってはいかがやろか」
翔輝は伊勢の言葉を聞いていなかった。翔輝はずっと星空を見上げ、山城に言われた言葉を考えていた。
「長谷川はん・・・」
「ねぇ」
翔輝は伊勢を向く。
こんな質問、簡単には答えられない。わからない。それがわかってても訊かなければならなかった。
「君は艦魂と人間。交わっちゃいけない存在だと思う？」
いきなりそんな難しい質問を投げかけられて、伊勢は戸惑った。
「そ、そうやねぇ・・・」
伊勢は真剣に考えた。しかし、そんなすぐに答えが見つかるもの

でもない。数十秒間考えたが、答えは見つからなかった。
「わからんなぁ。そないな事考えた事もあらへんし・・・」
「そっか、ごめんね」
「いえ、こっちの方こそお力になれへんでほんま申し訳おまへん」
再び沈黙が流れる。波の音だけが暗闇に響き、星空に流れ星が流れる。
だが、伊勢には翔輝を友好会に連れて行くという任務がある。あまりここに長居はできなかった。
「あの、長谷川はん。会議室でみんな待ってるんや。早う向こうてぇな」
「あぁ、そうだったね」
翔輝は微笑して伊勢を見詰める。すると、「ごめん」と言って頭を下げた。
「悪いけど、僕は出ないって言っといてくれる？」
翔輝の突然の欠席宣言に、伊勢は瞳を大きく開ける。
「で、出れないって、どういう事どすか？　何か理由がなくてはできへんで？」
「理由・・・ね。今は彼女達に会いたくない、かな？」
「会いたくないって、どうしてやろか？　やっぱ、山城はんに言われた事を気にして・・・」
「あ、何だ。みんな知ってるんだ」
翔輝は伊勢の言葉に驚いたような顔をするが、すぐに優しく微笑む。
「それなら話が早い。そうだよ。僕がこれ以上艦魂と関わる事で、双方に悪影響が出ないかなって思ってさ。もし関わらない方がいいなら、早い方がいいと思ってる。だから・・・」
「それって、逃げてるっちゅー事にならへんか？」
「え？」
翔輝は驚いて伊勢を見る。伊勢は大きな瞳を真剣に翔輝に向けていた。

「逃げてるって、どういう事？」
翔輝は伊勢の言った言葉の意味がわからなかった。伊勢は凛とした声で翔輝に問う。
「長谷川はんはどうなんどす？　もう大和はんや長門はん達と関係を断って、それでもええんどすか？　悲しくないんどすか？　寂しくないんどすか？」
「それは・・・、悲しいし、辛いよ？　でも、それが最善の策なら――」
「それが逃げてるんどす」
伊勢は凛とした声で続ける。
「それが一番ええと誰が決めたんどすか？　それが一番ええとどうして決められるんどすか？」
「そ、それは・・・」
「その方法は確かに正論どす。せやけどそれはあくまで空論。実行できっこない理想論どす。ほんなら訊くけど、長谷川はんを信頼し切ってる大和はんを突き放して、彼女を悲しみのどん底に突き落としてまで関係を断ちたいんどすか？」
翔輝は答えなかった。いや、答えられなかった。
「それに、うちが知る限り艦魂が見える人は最後まで艦魂と関係を持っとるどす。赤城みたいに特別な関係になる人もたくさんいたんや。あんただけどすよ？　そんなふうに否定的な考えを持ってるちゅーのは」
「・・・最後まで関係を持ってるの？　それって、辛い事じゃ」
「楽しかったらしいどすよ。一生艦魂達と仲良く暮らした人もぎょーさんおるどす。まぁ、今は戦時中で次々に艦魂は死んでいくんやけど、それはあんた方人間もそうどすよ？　せやのになんで艦魂だけを特別扱いするんどすか？　戦争で犠牲になるのは、むしろ艦魂より人間の方どすよ？」
伊勢の言葉に、翔輝はずっと沈黙したままだった。
「それに・・・」

伊勢は月夜で照らされる顔を笑顔にする。
「長谷川はんがやってくれへんと、大和はんと武蔵はんはずぅっとケンカしたままどすよ？」
その言葉を聞き、翔輝は思い出したように笑った。
「あの二人まだケンカしてたのか。正反対な性格してるのに、負けず嫌いな所だけはそっくりだな」
「そうやねぇ。厄介な所だけはそっくりな姉妹やで」
二人は笑い合った。その時、下の方から翔輝を呼んでいる陸奥の声がした。
「長谷川はん。あんたが来てくれへんと友好会が開けんよ？」
伊勢はイタズラっぽく笑った。
「でもなぁ」
翔輝はまだ迷っていた。そんな翔輝を見て伊勢はため息をついた。
「長谷川はん。長門はんをこれ以上待たせとると金ダライ二六〇二連発どすよ？」
「・・・すさまじい数だけど、何でそんな微妙な数なの？」
「二六〇二は今年の皇紀どす」
「・・・皇紀で金ダライの連射が決まったら、頭がもたないよ」
「せやったら行く。選択肢はないどすよ？」
伊勢は抵抗しない翔輝を半ば無理やり連れて行った。というか連行した。
途中、陸奥、霧島と合流。三人がかりで抵抗不可連行された。

一方、友好会が開かれている第三会議室は気まずい雰囲気に包まれていた。
「・・・・」
「・・・・」
「あー、大和？　武蔵？　お互い言いたい事はないの？」
テーブルを境に分かれて、問題姉妹はお互いに沈黙している。そんな二人に長門は極力平和的に話し掛けるが、完璧に一触即発の雰

囲気だった。
「あー、どうしようぉ？　ねぇ金剛」
「知らん」
大和と武蔵は沈黙したままで、長門が冷や汗を流した時、強力な援軍が到着した。
「お姉様！　少尉を連れて来ました！」
陸奥の叫びがこだまし、部屋のドアが勢いよく開いた。そこには翔輝連行部隊の陸奥、伊勢、霧島の三人と、連行されて来た翔輝がいた。
翔輝の姿を見てぱあっと長門の顔が明るくなった。
「あッ！　やっと来た！　長谷川君何とかしてよぉッ！　大和の保護者のあなたじゃなきゃ無理だよぉ！」
（・・・僕はいつから大和の保護者になったんだ？）
ため息をつく翔輝を長門が呼ぶ。その時、一番に動いたのは大和――ではなく、
「・・・翔輝。今までどこに行ってた？」
いつの間にか武蔵が翔輝の前に立って彼を見上げていた。その顔は無表情だが、瞳の中には心配という感情がしっかりと込められていた。
「あ、ちょっとね、あはは」
空笑いしてごまかす。その時、視界いっぱいに黒い影が現れた。
「うわッ！　って、軍帽？　しかも僕の？」
一瞬驚いたが、その軍帽を掴んでいる細腕の先には、今一番会いたくない人物がいた。
「あ、山城・・・」
「・・・」
山城は翔輝の頭に軍帽をのせて身を翻す。
「あ、ちょっと・・・ッ！」
「長谷川君！　何とかしてよぉッ！」
長門の悲鳴が一時中断する。

「・・・翔輝？」
武蔵が心配そうに翔輝を見る。
「あ、大丈夫」
その時、ずっと沈黙を続けてる人物に気づいた。
「大和・・・」
「・・・」
大和は沈黙したまま翔輝を見詰める。その表情は全く読めない、無表情だった。
「大和。その・・・」
さっきの事をまだ気にしてるのだろうか？　いや、きっとそうに違いない。だって、何か微妙に瞳が冷たい気がするし。
翔輝はこの状況を打開すべく、何とか平和的な雰囲気をつくろうとする。
「大和？　その、徹甲弾は撃ち込まないでね？」
翔輝は笑いながら言ったが、大和は笑わなかった。
翔輝は思った。確実にすべった、と。
笑顔は苦笑いに変わり、冷や汗が流れる。
「あー、ちょっとこれはヤバイかもぉ」
長門も引きつった苦笑いする。
しばらく沈黙が続いたが、それは突然終わりを迎えた。
「そんな事、しませんよ」
大和が微かに笑ったのだ。
「大和？」
突然の変化に戸惑う翔輝に、大和は抱きついた。
「や、大和・・・ッ！？」
「ごめんなさい。悪いのは私でした」
大和は素直に謝った。それは自分の過ちに気づいたのか、それとも翔鶴の脅迫（？）のおかげか、それは分からない。ただ、これだけは言える。この二人は、切っても切れない関係なのだ。
だが、せっかく大和が謝罪の意を示しているのに、当の本人は完

全に混乱していた。
「や、大和？　ちょっと待って・・・ッ！」
顔を真っ赤にして焦る翔輝とどこか大人っぽい大和。そんな二人をなぜか桃色の瞳で見詰めている他数十名。
「ラブラブねぇ」
長門は全く動じていない。というかむしろ喜んでる。が、約一名《怒りのパワーメーター》が臨界点を突破しようとしている人物がいた。しかし、そんな事全く気づいてない大和は続ける。
「さっきは、その・・・錯乱してて、本当にごめんなさい」
今錯乱してるのは翔輝の方だという事に、大和は全く気づいていない。
「大和・・・ッ、は、離れてよ！」
そろそろ色んな意味で翔輝が限界になりかけた時、事態を解決するどころかさらに悪化してしまった。
「大和ちゃん！　いいかげん少尉から離れなさいッ！」
今まで顔を真っ赤にして怒りを堪えていた陸奥の堪忍袋の緒が、完全にブチギレた。
陸奥は突進のような勢いで二人に近づくと、大和を翔輝から引き離す。
一瞬、翔輝は助かったと思ったが、それは完全な誤解と考え直さなければならなかった。
「な、何するんですか！？」
いきなり二人の仲（？）を引き離された大和は陸奥に牙を向ける。が、陸奥も負けじと反撃する。
「いつまでもくっ付いてないの！　ここは公共の往来よ！？　第三者どころか、第数十者の存在を忘れるなぁッ！」
最後の言葉は大和に対してすさまじい破壊力だった。そりゃあもう『ドレッドノート』の存在を知った日本海軍幹部のごとく。
大和は急に顔を真っ赤にして辺りを見回す。おそらく他の艦魂の存在をすっかり忘れていたのだろう。それを今思い出して、今焦り

出したのだ。
　すっかり行動不能になった大和と陸奥がもめている中、一応解放された翔輝はようやく落ち着きを取り戻していた。
「はぁ、疲れた」
　翔輝が乱れた服装を直していると、いきなり目の前に湯飲みが現れた。
「や、山城？」
　湯飲みを差し出しているのは、表情の変化がほとんどない山城だった。しかし、今の山城はどことなく（特に唇の辺りが）笑ってる・・・訳ないか。
　翔輝は湯飲みを受け取ってすする。
「その様子だと、少しはふっ切れたようだな」
「うん、まぁ」
　というか、原因はあなたにあるんだけど、とは口が裂けても言えないのが悲しい。
「貴様も合格か。最近の者はタフだな」
「え？　もしかしてそれ不特定多数の人に言ってるの？」
　翔輝は驚いた顔で彼女に問うと、山城は小さくうなずいた。
「まぁな。艦魂が見える者は誰しもが通る問題だ。それを聞いて、この問題を越えられなければ金輪際艦魂と関係を断ってもらおうと思ってたんだ」
「ず、ずいぶんハードルが高いなぁ」
「そうか？」
　そりゃあもう富士山を超える勢いで高いだよ？　むしろ魚類に陸に上がれて言う位難しい。あ、でも大昔一応成功してるんだ。
「まぁいい。貴様は合格だ。がんばれよ」
「え、あ、ちょっと・・・ッ！」
　立ち去る山城を止めようとすると、
「ちょっと長谷川君！」
「うわッ！」

いきなり後ろから抱き付かれた。二本の腕が首をがっちり拘束し、あともう少し力を入れれば確実に窒息死する。そのギリギリの状況の中、さらに翔輝を混乱させたのは、さっきから背中にくっ付いてる弾力のある双丘だった。

「え、あ、え？　扶桑さん！？」

その正体はあまり正面から会話した事のない――扶桑だった。

扶桑はつまらなさそうな顔をすると、翔輝の額に軽くデコピンした。

「何で山城とそんなに仲いいのよぉ。私を差し置いてぇ」

「そ、そんな事言われても・・・ッ！」

今の翔輝はそれどころではなかった。背中に当たってる柔らかい双丘が翔輝の小学生並みの情緒をすさまじく刺激して混乱させていた。

そんな翔輝を見ていて大和が黙っているはずがなかった。

「扶桑さん！　少尉から離れてください！」

わいわい騒いでいる二人を置いて、翔輝は武蔵に近寄る。

「まったくあいつは、君と仲直りするのを忘れて」

「・・・」

武蔵は相変わらず無表情で変化がない。

「武蔵。君は大和と仲直りしたいの？」

「・・・向こうにその気があるなら」

「頑固だね」

呆れる翔輝。

「変な所だけよく似てますね」

その声に振り返ると、翔輝の横から雪風が笑いながらわいわいと騒いでいる大和を見詰めていた。

「雪風？　どうしたの？　お姉さん達は？」

「姉さん達ならあそこで泥酔してます」

そう言って指差した先には、だらしない格好で寝ているのやら呂律の回っていない顔の赤い女性達が集合していた。その中には何度

か見た事のある陽炎などもいた。
「へえ、あそこに君の姉妹が・・・全員？」
「いえ。半数以上は横須賀や佐世保など他の軍港や、シンガポールやトラックなどの外地にいます。駆逐艦はどんな戦況にも絶対必須な艦艇ですから。水上決戦や船団護衛はもちろん、輸送艦の代わりに危険地域の輸送任務などにも使えますからね」
「あははは、駆逐艦は何でも屋だね」
「まったくもってその通りです。でも少尉。私達駆逐艦の本業は酸素魚雷を使った水上戦ですよ？　いくら使い道が豊富だからって酷使するのはいかがなものかと」
少し怒ったように言う雪風。そんな彼女に翔輝は少し驚く。きっと彼女にも水上戦でこそ輝く駆逐艦としての誇りがあるのだろう。
「ま、まあそうだろうね。それにせっかく水上戦に長けた日本駆逐艦も、今の時代は航空機だからその自慢の酸素魚雷もなかなか結果を出せないし」
翔輝の言葉に、雪風は「まったくもってその通りです」とため息混じりに言った。
「時の流れって怖いですね」
「ま、まあ、怖いわな」
雪風はそう言って翔輝に微笑んだ。なんとなくだが、彼女は大和に似ている。この心の底から優しそうな笑みがそっくりなのだろう。
だが、雪風の優しい笑みはすぐに消え、一転して悲しい顔になった。
「もちろん、もう会えない姉妹もいますけど・・・」
駆逐艦という職業柄、多くの任務を受け持たねばならないので危険な上、戦艦や空母に比べて防御力はほとんどなく、一撃喰らえばおしまい。それが駆逐艦なのだ。その為、もっとも損失が激しい艦艇なのだ。
「雪風・・・」
雪風は死んだ妹の事を考えていたが、すぐに悲しそうな瞳で自分

を見詰める翔輝に気がついて慌てた様子で笑みを浮かべた。
「そ、そういえば舞風がいないけど、どうしたのかしら」
舞風とは雪風の少し離れた妹の事だ。
「ふわぁ？　舞風にゃらもう帰っちゃったよぉ？」
そう言ったのはピンと跳ねたクセッ毛に無理やり軍帽を被った雪風のひとつ上の姉である初風だった。
初風の言葉に雪風は不思議そうに首を傾げる。
「帰っちゃったの？　どうしてまた」
「ふわぁ？　きっとまたアニメでも観てるんでひょ？」
初風の言葉に雪風はため息した。
「またアニメ？　ほんとあの子ったら」
「え？　君の妹がアニメにはまってるの？」
「はい。舞風っていう私の妹なんですが、すっかりアニメとかにはまってて」
「へえ、例えば？」
「えっと・・・エ○ァンゲリオンとか機動戦艦ナ○シコ、涼宮ハ○ヒの憂鬱にＴ○Ｈｅａｒｔ2。あ、最近じゃ灼○のシャナとゼ○の使い魔の第二期シリーズにはまってるらしいですね」
「そ、そりゃまた豪華だな・・・」
苦笑いする翔輝だが、雪風はそんな翔輝に少し驚いたような顔をする。
「少尉もアニメがわかるんですか？」
「ま、まあ人並みにはわかるけど」
「好きなアニメは？」
「え？　Ｆ○ｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔとかが好きだけど」
「・・・それって作者が好きなアニメでは？」
「ま、まあその辺は気にしないで」
翔輝はそう言って苦笑いする。
「・・・そもそも時代考証を完全に無視してる」
「うおッ！？　武蔵！？」

いつの間にか翔輝の服の裾を掴んでいた武蔵に翔輝は驚く。すると、そんな翔輝の反応に武蔵は少し寂しそうな瞳をする。
「・・・私、邪魔だった？」
「あ、いや、そんな事ないけど・・・」
「・・・けど？」
武蔵は純粋な瞳を向けてくる。そんな武蔵に翔輝は苦笑いする。
なんとか話題を変えようと翔輝はまわりを見回して何か話のネタになりそうなものを探す。と、
「あ、あれは？」
翔輝は部屋の隅に集まっている十数人の水兵服を着た少女達を見た。彼女達は決して日の目を見ずに、陰ながら戦っている少女達だ。
「・・・潜水艦の艦魂」
そう、彼女達は潜水艦の艦魂。静かな海の中から敵艦を魚雷で攻撃する海の暗殺者。そしていつも仲間内でしか会話しないのだ。そのせいで他の艦魂達から多少嫌われている。その原因は彼女達の暗い性格、そして原因の一つには彼女達の名前も関わっている。潜水艦の艦名は番号で付けられている。『伊-（番号）』『呂-（番号）』なので、名前が言いづらいのだ。
しかし、そんな彼女達もこの戦争においては大活躍している。
例えば『伊-一六八』はミッドウェー海戦の後、損傷して真珠湾に帰港中の空母『ヨークタウン』とその護衛をしていた駆逐艦『ハンマン』を撃沈。『伊-十七』はこの年の二月二四日にアメリカ本土のカリフォルニア州サンタバーバラを艦載砲で砲撃をし、その帰途中にタンカー一隻、輸送船一隻を撃沈するという戦果を挙げている。このように彼女達もちゃんと活躍しているのだ。だから・・・
「ねぇねぇ、一緒に飲まない？」
翔輝は潜水艦達の声を掛けた。少女達はビックリしたようにお互いに肩を寄せ合った。ビクビクと震えて明らかに翔輝を警戒していた。
今までにない反応に、翔輝は対応に困った。

第一印象としては、みんな外見は普通の女の子だが、全員が全員前髪が長く瞳が見えない。しかも数人はメガネをかけている。基本的に内気オーラが体中から出ている。
「あのさ、その、一緒に・・・」
『・・・』
おどおどしている少女達に困っていると、雪風がため息する。
「少尉。やめた方がいいと思いますよ。彼女達は他の者とは関係を持ちません。誘うだけ無駄です」
「でも・・・」
「まぁ、例外はありますけど」
「え？」
「イロハ（伊-一六八）！　イクト（伊-一九〇）！　ミオ（呂-三〇）！　サヨ（呂-三四）！　一緒に飲も！」
日向が楽しそうに潜水艦の輪の中に突入した。彼女の誰とでも仲良くできるところはすごい才能だと思う。というか、番号をかわいく呼んでるのもすごい。
「あ、少尉！　一緒に飲む？」
日向が嬉しそうに天使のような笑顔を向けてくる。
「あ、うん。よろし・・・」
「少尉！」
言い掛けたところで大和が翔輝の腕を掴んで引っ張った。
「え、何？」
大和は頬を赤く染めて何か言いたそうに口を何度もパクパクさせる。
「あ、あの・・・武蔵と・・・その・・・」
そう言ってちらりと横にいる武蔵を一瞥する。
あ、なるほど・・・そういう事ね。
翔輝は日向の方に向く。
「ごめん。ちょっと姉妹ゲンカの仲介をしてくる」
その言葉に日向も理解したようで、かわいらしく敬礼した。『健

闘を祈る』という意味なのだろう。
翔輝はふと思い出したように近くに置いてあった紙袋（お土産大量）を開けて中から羊羹とカステラ（どちらも最高級）を取り出した。
「これ、食べてよ」
そう言って翔輝は潜水艦二人に渡した。すると、
『ありがとうございます・・・』
潜水艦達が蚊の羽音のような小さな声で礼を言った。心なしか微笑んでいるように見えた。
翔輝は笑顔で「どういたしまして」と答えて立ち去った。

余談だが、この後潜水艦の艦魂の中で翔輝の株が急上昇。密かにファンができた。

再び翔輝は大和と武蔵を向かい合わせる。この状況に全員が注目していた。
しばらく両者全く動かず、お互いに沈黙していたが、沈黙が始まってから五分ほど過ぎてようやく、
「武蔵。その・・・昼間はごめんなさい」
大和が先手を決める。頭を下げて頭ひとつ分小さい妹に素直に謝る。
武蔵は沈黙していたが、やがて・・・
「・・・ごめんなさい」
武蔵も謝罪の意を示し、両者は握手してケンカは終結した。その瞬間、まわりからは大歓声が上がった。
「んじゃ、大和と武蔵も仲直りしたし、ここはパァッと飲みましょうか！」
今まで事の成り行きを見守っていた長門が叫び、艦魂達が咆哮する。
『かんぱあああぁぁぃッ！』

艦魂達はラムネ（やっぱり二日酔いが怖い）をグイグイと飲む。
一部酒を飲んでいるが、それは酒に強い者や軽く飲んでいる者ばかりで、ほとんどはラムネを飲んでいる。ちなみに、酒に強いのはもちろん山城だ。
部屋の中央に翔輝、大和、武蔵、長門、陸奥、伊勢、霧島、翔鶴、瑞鶴というおなじみのメンバーの他、大和の従兵の雪風、今や翔鶴瑞鶴以外正式空母が消滅してしまった新日本機動部隊こと、新生第三艦隊の主力になっている祥鳳型航空母艦二番艦・軽空母『瑞鳳』の艦魂、新生商船改装空母――飛鷹型航空母艦一番艦『飛鷹』、二番艦『隼鷹』の艦魂もいた。
「・・・翔輝。これおいしい。食べてみて」
「え？　あ、うん・・・おいしいね」
すっかり意気投合した翔輝と武蔵は互いを観て微笑み合う。その横でいまいち不満そうな大和はラムネを一気飲みする。
「大和。ちょっと押されぎみねぇ」
「妹ができたのは嬉しいんだろうけど、どうも素直に喜べないのね」
長門と陸奥が心配そうに大和を見詰める。
一方、空母は空母同士話が弾んでいた。
「今度の作戦は一緒に戦おうね？」
「うん！　がんばろうね！」
瑞鶴の言葉にセミロングの髪をした瞳の大きな少女が嬉しそうに微笑んだ。彼女の名は瑞鳳。軽空母『瑞鳳』の艦魂だ。
同じ《瑞》の名を持つ瑞鶴と瑞鳳は親友のような仲だった。瑞鳳は姉である祥鳳（珊瑚海海戦で沈没）と同じくメガネを装備している。しかし目が悪かった祥鳳と違い、彼女は姉に合わせてメガネを付けている為、伊達メガネである。
姉が死んだ後、ミッドウェー海戦では戦艦部隊護衛の為に後方にいたので、機動部隊を助ける事ができなかった。だが今は翔鶴と瑞鶴（特に瑞鶴）を助けていきたいと思い、日々訓練に励んでいる。
「私も微弱ながらお力になります」

「私もするぅッ！」

そう言ったのはセミショートの女の子と元気いっぱいのツインテールをした女の子。姉妹でも大人っぽい（飛鷹）のと子供っぽい（隼鷹）のと極端な姉妹だ（最も極端なのは金剛四姉妹だが）。

『飛鷹』『隼鷹』はそれぞれ『出雲丸（いずもまる）』『橿原丸（かしはらまる）』という豪華客船を改装し、今年に完成した商船改装空母だ。ただし、色々な事情が重なった為に一番艦『飛鷹』はミッドウェー海戦後に完成したが、二番艦『隼鷹』は同海戦の前に竣工し、その際は陽動作戦であるダッチハーバー作戦に参加していた。つまり、書類上は姉が『飛鷹』で妹が『隼鷹』だが、艦魂では隼鷹が姉で飛鷹が妹になるのだ。

そんな商戦改造空母は本来は後方支援に徹するのだが、ミッドウェー海戦で正式空母四隻を一挙に失った影響は深刻で、補助空母だった二隻は一躍主力空母の仲間入りを果たしたのだ。

まずこの二隻。商船改装空母ながら蒼龍並（約五〇機）の搭載機数を誇るので、連合艦隊司令部からもそれなりに評価が高い（余談一、『瑞鳳』は約三〇機程なので、その差は歴然。翔鶴型は約八〇機）。しかし、最大速度が二五・五ノットと低速で、高速性を求められる機動部隊では少し問題がある（余談二、『瑞鳳』は二八ノット、翔鶴型は三四ノット出る）。だが、今や日本にとっては虎の子の空母なので、背に腹は代えられないのだ。さらにこの二艦は後に出てくる超強力空母の実験艦で、従来の空母が側面に煙突を配置していたのに対し両艦は艦橋と一体化して甲板にあるので、外見は米空母に似ている。その煙突は飛行機の発着艦を邪魔しないように外側に斜めに倒れている傾斜煙突で、かなり特徴的な空母だ。

「翔鶴お姉ちゃん！　大好き！」

隼鷹が翔鶴に飛びつく。外見は十二歳くらいなので不自然ではないから自然に見える。

「むぅ・・・」

ほんのり頬を赤らめた翔鶴が困ったように隼鷹見詰める。

「コラ姉さん！　翔鶴さんに失礼でしょ！？」

飛鷹が姉である隼鷹を怒る。隼鷹の行動に問題があるが、それよりも階級に問題があった。

艦魂には軍人で言う階級のようなものがある。以前説明したが、確認すると駆逐艦、潜水艦、その他小型艇（水雷艇、砲艦等）等の軍艦でない艦艇は水兵。（軽・重）巡洋艦、水上機母艦、潜水母艦、正式空母以外の小型空母（軽空母、商船改装空母）等の準主力軍艦は下士官。そして戦艦、正式空母は士官といった具合だ。問題は艦種によって決まっているので昇級ができない（例外はある。金剛型は元々巡洋戦艦だったので金剛姉妹は以前は下士官）ところだが、艦魂達はあまり反発はないらしい。

大和のように連合艦隊旗艦といかなくても、部隊の旗艦は少し偉う。

ここで話は戻るが、準主力軍艦に位置する隼鷹（下士官）が、正式空母である翔鶴（士官）に甘えるのはダメだと思ったのだ。だが、

「飛鷹。好きにさせてやれ。私は構わん」

大人な翔鶴は少し恥ずかしいのを隠して飛鷹に言う。

「しかし・・・ッ！」

「たまにはいいだろ、な？」

「翔鶴さん・・・」

飛鷹は心の広い翔鶴をキラキラした瞳で見詰める。それが恥ずかしいのか、翔鶴は視線を逸らす。

「ねぇ、翔鶴お姉ちゃん。頭なでなでして」

「うん？　ま、まぁいいが・・・」

あまりやった事がないのだろう（実際やってないが）、翔鶴はぎこちない手つきで隼鷹の頭を撫でる。当の隼鷹は仔猫のように幸せな表情を浮かべている。なぜかこの隼鷹、この誰もが恐れる連合艦隊最強の翔鶴をかなり気に入っていて、本当の姉のようになついているのだ。

そして、その最強少女の妹は、

「うーん、これおいしいよ？　瑞鳳も食べて。ほら、あーん」

「あーん・・・おいしいね」
すっかり仲のいい瑞鶴と瑞鳳はお互いに《あーん》し合っている。
話は戻って大和達はと言うと、
「長谷川はん。これほんまにおいしいどすよ」
「しょ、少尉・・・これ食べてみてください・・・」
「少尉。私のもどうぞ」
伊勢、霧島、陸奥が翔輝に総攻撃（？）を仕掛けていた。
「あ、ありがとう」
押され気味の翔輝は出されたものを次々に食べる。だが長期戦になったら結構ヤバイかもしれない。胃が。
大和は不機嫌そうにラムネを飲むと、じっと武蔵を見る。
「・・・で？　あなたは一体何をやってるのよ？」
「・・・おんぶ」
「そんなの見れば分かるわよ」
「・・・じゃあなぜ訊く」
「そういう意味じゃないわよッ！」
大和は「うーッ！」と武蔵に威嚇する。一方武蔵はさりげなく翔輝の背中にピッタリと抱き付いている。いわゆるおんぶの体勢だ。
「大和。そんなに怒らなくても」
翔輝（背中に武蔵付き）が微笑みながら言う。そんな危機感のない翔輝に大和が吼える。
「少尉も無防備すぎるんです！」
「無防備って、別に警戒する必要はないだろ？」
「うぐ・・・ッ」
反論に詰まったのか、大和はプイッとそっぽを向く。そんな大和を見て翔輝はため息する。
「はぁ」
「・・・重い？」
後ろにくっ付いている武蔵が心配そうに（無表情）聞いてくる。
そんな小さな事まで心配してくれる武蔵に翔輝は微笑む。

「ううん。そんな事ないよ」
「・・・本当？」
「うん。平気平気。気にしないで」
「・・・そう。ならばこのままがいい」
そう言って、武蔵はぎゅっと強く抱き付く。柔らかな感触が背中を包み込む。翔輝はふと昔を思い出して、自然と笑顔になった。それは今までとは違う優しく、温かい笑みだった。
「少尉？　何ニヤニヤしてるんですか？」
大和が微妙に軽蔑のまなざしで翔輝を見る。
「え？　あ、うん。何かこの感じが懐かしくて」
「懐かしい？　何人もの女の子を侍らせてハーレムをしている事が昔あったのですか？」
ドゴッ！
「変な事言うな」
「・・・冗談なのに・・・（涙）」
翔輝は大和を黙らせた腕を下ろし、そっとうつむく。
「懐かしいんだ。この背中の温もりが・・・」
その翔輝の表情に、大和がいち早く気づいた。
それは、翔輝にとって忘れられない、大切な、そして悲しく辛い思い出。
「・・・翔香さん、ですか？」
「・・・うん」
翔輝は静かに答えた。
翔輝は顔を上げ、見えない遠い空を見上げる。
「昔な、翔香をおぶって河原を歩いた事が何度もあってね。その時はいつも友達にいじめられただの犬に追い掛けられただので泣いててさ、泣き止むまでずっとおんぶしてたんだ」
もう会えない妹を思い出し、翔輝は幸せそうな笑みと悲しみを堪えた笑みが混ざった笑みを浮かべていた。そんな翔輝を見て、大和はもちろん周りのみんなも沈黙し、他で騒いでいる艦魂達の声だけ

が響いた。
沈黙したまわりを見詰め、翔輝は慌てて笑みを浮かべる。
「あ、ごめんね。辛気臭くなっちゃって」
翔輝は無理して笑った。それは誰もがわかっている。
「長谷川君・・・」
しきりに翔輝は目をこする。涙を堪えているのだ。
「ごめんね。あ、そうだ。今日は夜中に航海科の会議があったんだ。忘れてたよ。ははは」
翔輝はそう言って背中の武蔵を下ろして、みんなに別れを告げて立ち去って行った。
「・・・こんな夜中に会議なんてあるの?」
「違うわよ。ただ、一人になりたいだけの・・・」
大和が寂しそうに言う。
完全に気まずくなった雰囲気は、すぐに長門が回復させたが、全員の心の中には靄が残ったままだった。

翔輝は一人自室に戻った。
机の上にある翔香の写真と首に掛けているペンダントを見て、自虐的に笑った。
「まったく、僕はダメだな。まだ立ち直れないなんてさ」
翔輝は泣いていた。後から後から溢れる悲しみの雫が頬を伝い、顎に流れ、そして落ちる。その先には翔香の形見のペンダントがあった。宝石に雫が落ち、弾けて消える。そんな無限ループの繰り返し。
翔香の親友だった瑠璃はもう立ち直れたというのに、自分は何をやってるんだ。翔輝はそう思えて仕方がなかった。
「くそッ、何やってんだよ僕は」
翔輝はベッドに潜った。
寝てしまって、何も考えたくなかった。
そして、それは叶えられた。

意識が薄れていき、やがて真っ暗になった。

翔輝がいなくなった事で自然にお開きになったので、大和は翔輝が消えてから三〇分後に翔輝の部屋に戻った。

ベッドで寝ている翔輝を一瞥し、大和は机の上の翔香の写真を見る。

太陽のような笑みを浮かべる翔香を見て、大和は泣きたくなった。

自分では彼の心の傷は癒せない。触れる事すらできない。

大和は翔香を恨んだ。

死んでもなお翔輝の心を支配している翔香の事を、

いつか本で読んだ事がある。

『人が使える最強にして最悪の呪いは死。死ぬ事によって心を奪ったまま永久にいられる。生きていれば変化するが、死んでしまえば過去の姿のまま残る。永久に・・・』

その言葉どおりだった。

翔香は翔輝の心を独占したまま死んでしまった。

もう、自分では変えられない・・・

「私じゃ、少尉の心には触れられないんですか・・・？」

大和は翔輝を見てそう言った。

この瞬間、星空にもう一つのキラリと輝く星が生まれた・・・

第七章　第一節　南太平洋防衛戦（前書き）

《瑞鳳（ずいほう）》
祥鳳型航空母艦二番艦――軽空母『瑞鳳』
出身　横須賀海軍工廠（神奈川県）
身長　１５４ｃｍ
髪型　セミロング
実年齢（１９４２年８月現在）１歳
外見年齢　１３、４歳
誕生日　１２月２７日
好きなもの　祥鳳・瑞鶴・みんなと一緒にいる事
嫌いなもの　一人になる事・暗い所・オカルト系
家族構成　姉・祥鳳　義妹・龍鳳
旧名《高崎（たかさき）》。珊瑚海海戦で戦死した祥鳳の妹で瑞鶴の親友。当初高速給油艦として建造されるが、その途中に潜水母艦に変更され、さらに空母に再度変更されて完成した最新鋭軽空母。姉と同じくメガネをしているが祥鳳と違って彼女は姉に習って伊達メガネ。瑞鶴の親友で彼女と共に戦う事を嬉しく思っている。赤城達の消えた機動部隊の新たな主力として瑞鶴達と共に敵機動部隊と死闘を繰り広げる。状況判断能力に優れており、新生日本機動部隊では赤城の後任として旗艦となった翔鶴の参謀として活躍する。前回は瑞鶴の親友としてあまり出番のないキャラだったが、今回からの改定版ではかなり活躍させる予定。

《飛鷹（ひよう）》
飛鷹型航空母艦一番艦――商船改装空母『飛鷹』
出身　川崎重工業神戸造船所（兵庫県）
身長　１５４ｃｍ
髪型　セミショート

実年齢（１９４２年８月現在）０歳
外見年齢　１４、５歳
誕生日　７月３１日
好きなもの　隼鷹・姉の幸せ・無血勝利・日本を守る事
嫌いなもの　何もできない事・自分の無力さ・悲しい雰囲気
家族構成　姉・隼鷹
旧名《出雲丸（いずもまる）》。日本郵船が建造していた豪華客船『出雲丸』を海軍が接収。建造途中で空母に変更して建造を継続。後に名前を《飛鷹》に変更されて完成した。建造速度が遅く、妹艦『隼鷹』よりも後に竣工した。その為飛鷹は隼鷹の妹になる。竣工遅延の影響でミッドウェー海戦には間に合わなかった。さらに後の南太平洋海戦でも機関故障の為に参加できず、何かと運の悪い空母であった。ミッドウェー海戦で失った空母の穴を埋める為に主力空母に格上げさた。その理由には商船改装空母としては驚異的な搭載力が認められたのが大きい。そんな『飛鷹』の艦魂は基本的なキャラで特に設定はない。主に何かと暴走する姉の隼鷹を止めるの役目を持っている。オリジナルでは『飛鷹』と『隼鷹』の姉妹設定が通常通りだったが、後に読者から情報提供をもらってこのように訂正された。

《隼鷹（じゅんよう）》
飛鷹型航空母艦二番艦――商船改装空母『隼鷹』
出身　三菱重工業長崎造船所（長崎県）
身長　１４３ｃｍ
髪型　ツインテール
実年齢（１９４２年８月現在）０歳
外見年齢　１０、１１歳
誕生日　５月３日
好きなもの　飛鷹・翔鶴・翔輝・↑三人と一緒にいる事・みんなの笑顔
嫌いなもの　戦う事・人が傷つく事・大切な人を失う事・戦争・

特攻

家族構成　妹・飛鷹

旧名《橿原丸（かしはらまる）》。『飛鷹』と同じく日本郵船が建造途中だった『橿原丸』を海軍が接収して改造した商船改装空母。一番艦『飛鷹』よりも三ヶ月近く早くに竣工。『飛鷹』の代わりにミッドウェー作戦では陽動作戦としてダッチハーバー作戦に参加した。そんな『隼鷹』の艦魂は艦魂年代史シリーズの中でも正統派の妹キャラ。後に翔輝に好意を寄せる一人となり、彼の事を《お兄ちゃん》と呼び、絶対の信頼を置くようになる。子供っぽいキャラなので翔輝も彼女には少し甘く接する。そんな隼鷹は艦魂年代史シリーズではかなり重要なキャラに位置づけられている。史実では１９４４年の終わりに敵潜魚雷を受けて修理ドックに入り、そのまま終戦を迎え、修理途中の為にその後復員船として活躍せずに解体されるが、艦魂年代史シリーズではそれらが全てなしとされて戦後は復員船として活躍。艦魂年代史外伝シリーズにも幾度として登場し、戦後の話の中核となっていく。

第七章　第一節　南太平洋防衛戦

一九四二年八月七日、米軍はソロモン諸島の島々に次々と上陸を開始した。そのうちの一つ、太平洋戦争最大の激戦地となるソロモン諸島最大の面積を持つガダルカナル島にも上陸。目的は日本海軍がミッドウェー海戦後衰退した南太平洋の制空力を復活させる為に建設している飛行場の席巻。完成間近だったので島には正規部隊は配置されておらず、建設員とわずかな守備隊しかおらず、米軍の圧倒的な兵力に全滅。米軍はほとんど完成していた基地（後に《ヘンダーソン基地》と命名）を手に入れた。

日本海軍はこれを奪還しようと第八艦隊（重巡洋艦五隻、軽巡洋艦二隻、駆逐艦一隻）を向けるが、八日の夜中に米英豪連合国艦隊（重巡洋艦六隻、軽巡洋艦二隻、駆逐艦八隻）と遭遇。夜戦の得意な日本艦隊は直ちに一方的な砲雷撃を開始。連合国艦隊は突然の攻撃に混乱し、まともに反撃できずに壊滅し、第八艦隊は大勝利を挙げた。

連合軍は重巡洋艦四隻沈没、一隻大破。駆逐艦二隻が中破。それに対して第八艦隊は旗艦・重巡洋艦『鳥海』が小破しただけだった。だが後に米潜水艦の雷撃で重巡洋艦『加古』が沈没した。

戦闘で勝利した日本軍だが、主目的だった敵輸送船団への攻撃は行われず、米軍は重装備部隊の上陸に成功。この部隊がその後の日本陸軍を苦しめた。

戦術には勝ち、戦略で敗北。これが第一次ソロモン海戦であった。

日本軍はガダルカナル島奪還の為に大艦隊の編成を急いだ。

ミッドウェー海戦後再編成された新機動部隊こと第三艦隊の空母『翔鶴』『瑞鶴』、そして軽空母『龍驤（りゅうじょう）』、さらにその護衛に戦艦『比叡』『霧島』が参加。第三艦隊機動部隊兼第三艦隊司令長官には南雲中将。参謀長にも草鹿少将が就任した。

機動部隊は十六日に柱島を出撃。一路トラック島を目指した。
機動部隊に引き続いて第二艦隊、第三艦隊本隊、陸軍支隊がソロモン海に集結していた。さらに第二艦隊には戦艦『陸奥』までもが参加した。

翌日、ガダルカナル島奪還作戦の為に、主力部隊も一路トラック島を目指して柱島を出撃した。
『大和』や『長門』は二ヵ月ぶり、『武蔵』は初めての太平洋の海に翔け出した。

一方米軍も基地防衛の為にフランク・J・フレッチャー中将（昇級）率いる空母『エンタープライズ』『サラトガ』『ワスプ』を中心とする第６１任務部隊が出撃。基地航空隊と合同で日本艦隊を待ち受けていた。
後日二三日、『ワスプ』は燃料補給の為に南下した。

八月二〇日、日本軍偵察機が敵機動部隊を発見。急遽機動部隊はトラック島経由をやめ、全速力で南下した。
翌日、ガダルカナル島に上陸した陸軍支隊がヘンダーソン基地に突撃を行ったが、米軍の圧倒的な火力で壊滅した。

二四日、両軍機動部隊が動いた。

「フランク！　敵の空母を見つけたのか！？」
第６１任務部隊旗艦・レキシントン級航空母艦二番艦・空母『サラトガ』の艦橋に興奮したエンタープライズが現れた。
「エンター。落ち着いて、ね？」
そう言ったのは海のように蒼い髪を腰まで伸ばしたエンタープライズより少し年上の少女。《シスターサラ》の愛称を持つ空母『サラトガ』の艦魂。エンタープライズの親友だ。

そんな落ち着いた物腰をしたサラトガにエンタープライズは激怒した。

「サラッ！　何のん気な事言ってんのよ！　私の姉貴は奴らに殺されたんのよ!?　あんただって姉さん殺されてるでしょッ!?」

サラトガの姉、それは珊瑚海海戦で沈んだ《レディレックス》の愛称を持っていた空母『レキシントン』の艦魂の事だ。

その言葉に、サラトガは沈黙する。

二人の会話を見詰め、機動部隊司令官であるフレッチャーはため息する。

「エンター、落ち着け。気持ちはわかるが、それ以上言うな。サラが悲しむ」

フランクの言葉にようやく我を取り戻したエンタープライズは悲しそうな瞳をしたサラトガに謝る。

「サラ。ごめん。頭に血が上ってて、その、ごめん」

「いいの。気にしないで。お姉さんの仇を討ちたいのは同じでしょ？　でも、感情に流されていては戦争はできない。今だからこそ冷静に、ね？」

サラトガの言葉に、エンタープライズは「わかった」とつぶやいてうなずくと、サラトガに優しく微笑む。

そんな二人を見て、フレッチャーはコーヒーを飲む。

「二人には悪いが、敵の空母は一隻、しかも小型空母だそうだ」

フレッチャーの言葉に明らかに落胆するエンタープライズ。そんな彼女にサラトガは優しく微笑む。

「サラ。あんたの仇じゃないみたいね」

エンタープライズの言葉に、サラトガは気にした様子もなく優しく微笑む。

「ふふふ、そうね。でもあなたの仇でもないわね」

「まあね」

「直情型のあなたの事だもの、きっと『ショウカク』『ズイカク』と戦いたいんでしょ？」

サラトガの問いに、エンタープライズは「当ったり前だろ？」と不敵な笑みを浮かべる。そんな親友を見詰め、サラトガは優しく微笑んだ。

「もしその時が来たら、譲ってあげてもいいわよ？」

「え、でも・・・」

驚き戸惑うエンタープライズに、サラトガは優しく微笑み続ける。

「いいの。気にしないで」

サラトガは青髪の長い髪を靡かせて笑った。外見はまだ十六、七歳ぐらいだが、とても大人びた雰囲気が彼女の特徴だ。

サラトガの言葉に、エンタープライズは嬉しそうに拳を突き出す。

「おう！　サラの分までがんばるからな！」

エンタープライズは気合を入れて屈託のない笑みを浮かべた。そんな親友の姿を見詰め、サラトガは人懐っこい笑みを浮かべた。

そんな二人を眺めて、フレッチャーはそっと苦笑した。

「その時には、もう私はお前達の司令官でなくなってるかもな」

フレッチャーのつぶやきは、はしゃいでいる二人には聞こえなかった。そんな二人をフレッチャーは寂しそうに二人を見詰める。

「これが私の最後の実戦になるかもしれんな・・・」

実は、フレッチャーは三ヵ月後に北西海域指揮官に転属される予定になっていた。しかし、その事は二人、特にエンタープライズには黙っていた。時が来れば教えよう。そう思っていたからだ。

そして時は来た。

甲板に並んだ艦載機群を見詰め、フレッチャーは深く軍帽を被り直した。

「よしッ！　攻撃隊発進！」

フランクは参謀長に叫んだ。

空母『サラトガ』から攻撃隊が発進した。

――目標、空母『龍驤』――

「敵艦隊発見！　敵艦隊にはどうやら空母が二隻いるようです！」
第三艦隊旗艦・空母『翔鶴』の艦橋に報告が入った。
通信兵の報告に、南雲は一瞬顔をしかめた。頭の中ではミッドウェーの悪夢が蘇る。だが、そんなトラウマを首を振って忘れる。
「長官？」
心配そうに見詰める草鹿。そんな草鹿に南雲は「何でもない」と小さく笑った。だが、すぐにその顔は真剣なものになる。
「参謀長。もう我々に敗北は許されない。ミッドウェー海戦での責任を不問とし、仇討ちの機械として山本長官は再び機動部隊の指揮官にしてくれたのだ。山本長官の温情を裏切る訳にはいかん」
「長官・・・」
「我々には、もう敗北は許されないのだ」
『はいッ！』
南雲の言葉に、艦橋にいる者全員が敬礼した。そんな彼らを見詰め、南雲はしっかりとうなずくと、命令した。
「先手必勝ッ！　直ちに第一次攻撃隊発進せよッ！」
『了解！』
参謀達は南雲の命令に忠実に動き、次々に命令を下す。そんな司令部要員達を見詰め、翔鶴は静かに目を閉じる。
騒がしい艦橋の雑音から五感を完全に遮断し、翔鶴は神経を集中させる。
そして、再び瞳を開いた時、その瞳には闘志が燃えていた。
「・・・赤城達の仇、必ず討ってやる」
翔鶴はそう言って立ち上がると身を翻し、艦橋から静かに消えた。

海を翔ける『翔鶴』から天空に消えていく攻撃隊を見詰めて、瑞鶴は敬礼していた。
『瑞鶴』の攻撃隊は第二次攻撃隊として別部隊攻撃用の為に今回の出撃はなかった。
防空指揮所で瑞鶴は姉とお揃いの軍刀を握る。

真珠湾攻撃の際、未帰還機ゼロという初陣を飾った瑞鶴に、翔鶴が祝いとしてプレゼントしたもの。彼女の宝物だ。

天空を翔ける翔鶴攻撃隊を、瑞鶴は真剣な瞳で見詰める。その瞳には、勝利への想いが力いっぱい込められていた。

「必ず、必ず敵空母を沈めて。ミッドウェーで散って逝った赤城司令、加賀さん、蒼龍さん、飛龍さんの為にも、絶対に・・・ッ！」

瑞鶴はギリッと歯を強く噛み、軍刀を天空に向ける。

日光を反射してギラギラと輝く。日本刀独特の刃紋が流れるように煌めき、自らの瞳を映し出す。

蒼い空の下、『瑞鶴』は蒼い海を蹴った。

マストに掲げられた軍艦旗が、これまで以上に勇ましく風に靡いた。

第二艦隊旗艦の任を受けた陸奥は初めての姉抜きの実戦に緊張しているかと思いきや、結構普通だった。翔鶴達とも別部隊だが、しかしさすがは陸奥。長年連合艦隊次席や連合艦隊旗艦を務めていた事はある。作戦参加全艦艇は顔見知りで、怖いという気持ちは一切なかった。

「海がきれいね」

海風に靡く長い髪をいじり、陸奥は笑顔で海を見詰めていた。

南国の海は暖かく、日本近海では見られない緑色に輝く美しい珊瑚が、陸奥の心を作戦中だという事を忘れさせて楽しませた。

「陸奥司令」

陸奥の後ろにいた黒い髪を真っ白なリボンでポニーテールに結いだ少女が立っていた。彼女は高雄型重巡洋艦二番艦『愛宕』の艦魂。今回陸奥の補佐をする事になった第二艦隊艦魂司令部参謀である。

そんな彼女の後ろには長い髪を流した少女とツインテールをした少女が立っていた。それは愛宕の姉妹である一番艦『高雄』の艦魂、三番艦『摩耶』の艦魂だった。ちなみに摩耶の双子の妹にして高雄姉妹四女の『鳥海』は前作戦で負傷して、今は本土のドックに入っ

て損傷を修理している。
高雄はどこまでも澄んだ南国の海を見詰め、長い髪を風に靡かせる。
「陸奥司令、姉さん、摩耶。そろそろ作戦海域に入ります」
高雄が三人に声を掛ける。
「わかった」
愛宕はそんな妹にそっと微笑んだ。
実は高雄型重巡洋艦の一番艦『高雄』は平均的な速度で竣工したが、二番艦『愛宕』は諸事情によって大幅に工程が高速化され、『高雄』より二ヶ月先に竣工した。
書類上一番艦は『高雄』、二番艦は『愛宕』だが、艦魂にしてみればやはり先に生まれた方が姉。飛鷹と隼鷹の関係と同じなのだ。
高雄の忠告に、陸奥は小さくうなずくと蒼い空を一瞥し、自分の部下達に司令官として命令を下す。
「全艦に通報！　これより戦闘警戒海域に入る！　気を引き締めるように！」
『了解！』
三人は陸奥の命令に見事な敬礼をした。すると、その中の一人の摩耶は・・・
「これで衰退していた連合艦隊が復活できるようになるかなですぅ。今の今まで停滞していたから。『いい加減目覚めなさい』って感じなのですぅ」
「お前は女王〇教室の阿〇津先生か・・・？」高雄がため息してアホな妹に呆れる。
「名前が同じだから？　でも向こうは『真矢』であなた『摩耶』。漢字が違うわよ？」まじめな愛宕は見当違いな注意をする。
「ノリですぅ。終わり良ければ全て良しなんですぅ」そう言ってニヤハと笑う摩耶。
「いや、終わりもよくわからないんだけど」基本的にこういう情報にはうとい陸奥は話について行けずに混乱する。

第二艦隊の艦魂達はここが敵地だという事も忘れてちょっと平和だった。

ガダルカナル島攻撃の為に独立艦隊になっている第三艦隊支隊は、空母『龍驤』を旗艦とし、水上機六機搭載可能な通称航空巡洋艦と呼ばれている利根型重巡洋艦『利根』、駆逐艦二隻の小部隊だった。司令官にはかつてまだ『翔鶴』と『瑞鶴』が第五航空戦隊という戦隊に所属していた頃の司令官、原忠一少将だった。

空母『龍驤』はワシントン海軍軍縮条約の裏をかいて制限のない排水量一万トン以下の小型空母を目指して建造されたが、後のロンドン海軍軍縮条約の際に一万トン以下も制限が加わり、小型の意味を失い、急遽大型化した軽空母である。

一段格納庫を二段格納庫にして搭載機数を増やした為に艦高が以上に高く、海に浮かぶ箱を思わせるものとなった。小型の為に甲板に艦橋があると邪魔なので、艦橋は『瑞鳳』などと同じ艦内型になっていのがその姿をさらに拍車をかけた。

そんな空母『龍驤』の飛行甲板では赤い紐でリボン結びをしたポニーテールの少女が海を見詰めて立っていた。彼女の名は龍驤。この空母『龍驤』の艦魂だ。

彼女は他の艦魂と少し違い腰に軍刀ではなく矢筒、背中には弓を持っていた。そして白い夏服用の軍服の上から弓道のように胸には黒い胸当てをしているので、さながら弓道着に見える。

龍驤は連合艦隊一の弓使いで日本古来の競技である弓道の達人。その腕前は人間ならば弓道七段クラスにもなる。

そんな龍驤は先程から蒼く美しい空を見上げていた。

この空の向こうに敵の空母が進出してきたという情報はすでに彼女の耳にも届いていた。

「敵が近いらしいけど、大丈夫かな？」

そうつぶやくと、龍驤は見えぬ敵機動部隊への恐怖に空笑いした。

龍驤はミッドウェー作戦の陽動作戦であるダッチハーバー作戦に

参加した。その際は敵を攻撃する事しかなかった。その為敵に攻撃される事はなく、だからこんな敵の近い戦いは初めてで恐怖した。

ソロモンの海は蒼く輝き、吸い込まれそうに澄んでいた。

空の蒼と海の蒼。二つの蒼は互いに色を輝かせ、美しい《蒼》の世界を創り上げていた。それはとても幻想的で、心の底から美しいと思える絶好の景色だった。

ここが戦場でなければ、その美しさに小さな笑みを浮かべる。

だが、そんな《蒼》の世界にキラリと何かが光った。それは・・・

「左三〇度方向より敵機襲来！」

横にいた見張り兵が断末魔の叫びを上げ、幻想的な《蒼》の世界は崩れた。

戦闘開始のラッパが鳴り、兵達が次々に機銃、高角砲に陣取る。

その瞳には侍の心が宿っていた。誰もが戦う戦士なのだ。

上空を旋回していた直掩の零戦隊数機が増槽を落として敵機に向かって突っ込んで行った。一騎当千の勢いで突っ込む零戦隊はとても勇ましかった。

迫って来る敵機を見詰め、龍驤は恐怖に唇を噛む。

「やっぱり、見逃してはくれないよね」

龍驤は天空から襲い掛かって来る敵機を見詰めながら空笑いした。

零戦隊は見事に敵機を次々に撃墜していくが、如何せん敵は零戦隊の数倍の数である。いくら落としても次々に敵機はその防空線を突破して来る。

その時、敵機周辺で無数の爆発が起こった。その爆発に巻き込まれて敵機数機が火を噴いて落ちる。

「護衛部隊対空戦闘開始しました！」

見張り兵が叫ぶ。

二隻の駆逐艦と『利根』が艦体中から火を噴き、敵機に鉛の弾を嵐のように撃ち込む。直掩の零戦隊も反転して来て敵機に機銃の雨を降らす。その結果、敵機は煙を吐いて次々に海に落ちて水柱を上げる。だが、敵機は数に物を言わせて直進して来る。

「対空戦闘開始！」
双眼鏡で敵機を睨みながら『龍驤』艦長の加藤唯雄大佐は叫んだ。
刹那、『龍驤』の艦体中の機銃が甲高い発砲音を立てて射撃を開始し、同時に軽い地響きがと重低音が響く、高角砲が攻撃を開始したのだ。
『龍驤』は必死に弾幕を張るが、敵機は雨のように爆弾を落とし、高速で海中を走る魚雷が迫る。
「右に二本、左上に三発・・・ッ！　大丈夫これくらい」
龍驤はギリと歯を軋ませながらも敵機に向かって弓を構え、引き絞った矢を放つ。それは機銃の弾丸となって敵機を撃ち抜いた。
艦体は左に回避して事を終える。しかし、敵機は次々に爆弾、魚雷を投下していく。
敵機の攻撃は空母である『龍驤』に集中している。敵機は煙を吐きながら急降下して爆弾を落とそうとする。間一髪龍驤は撃ち落とした。
さらに敵機は連続して急降下して来る。
龍驤は矢筒の中の矢を一斉に三本弦にかけて放つ。矢は弾丸となって敵機三機を貫く。さらに迫る敵機に龍驤は目に見えぬ速度で再び三本の矢を弦にかけて撃ち出す。その矢は見事敵機を貫く。
龍驤の放つ矢の命中率は高確率。その一撃一撃は確実に、的確に敵機の醜い青色に機体を粉々に撃ち抜く。
迫る敵機は龍驤の腕の前に次々に撃墜される。だが、工業大国アメリカは数に物を言わせて攻撃して来る。撃ち落としても撃ち落としても次々にその倍の数で迫って来る。
「もうッ！　一体何機いるのよッ！」
矢筒の中から矢を取り出して構え、それを天空に撃ち抜く。その繰り返しを続けても、敵機の数は一向に減らない。
連射を続ける龍驤にも疲れが出始めた。その為にほんのわずかだが矢を装填する手に一瞬の遅れが出た。が、その一瞬が命取りだった。

「敵機直上！　急降下！」
気がつくと敵急降下爆撃機数機が急降下して迫っていた。
「何ッ！？　と、取舵いっぱぁぁいっ！」
見張り兵の言葉に加藤は蒼白になり、加藤は急いで舵を回すが、既に時遅し。敵機は次々に爆弾を投下して来た。
避けられぬ死の悪魔に『龍驤』の全将兵が悲鳴を上げた。
龍驤は迫り来る爆弾を見て、肩を落とし、小さくため息した。
「ここまでか・・・」
龍驤は死の覚悟をし、静かにその光る黒き瞳を閉じた。
その刹那、空母『龍驤』は大爆発を起こし、炎に包まれた。

――空母『龍驤』、ワシントン、ロンドン海軍軍縮条約の影響を受けて高を高くした為に海に浮かぶ箱のようなその外見をしていた。その姿は他の空母とまったく違い、異彩を放っていた。彼女は海軍上層部の思惑に振り回されて上に生まれた悲運の空母であった。そんな彼女はは、敵機の猛攻撃を受けて爆弾四発、魚雷一発命中。大破。その四時間後、浸水の為にソロモンの海深くに沈んだ――

『龍驤』が攻撃を受けてから一時間後、『翔鶴』を発進した第一次攻撃隊がアメリカ空母部隊を発見。これを攻撃。空母『エンタープライズ』が爆弾三発を受けて中破した。
「クソッ！　黄色い猿どもが調子に乗りやがって・・・ッ！」
黒煙を上げる『エンタープライズ』の防空指揮所で真っ白な米海軍の背広型夏用軍服を真っ赤に染めた少女が痛みを堪えながら、悔しそうに敵機の消えた空を睨みつける。
――そして、その場に崩れた。
「エンターッ！」
エンタープライズが倒れたと同時にサラトガが現れた。
サラトガは真っ赤な血の海に沈むエンタープライズを抱き上げ、必死にその名を呼ぶ。

「・・・うるさい・・・傷に響く・・・ッ」
エンタープライスは頭から血を流しながらサラトガを睨む。
すでに軍帽は脱げていて、長い金色の髪が風に靡く。しかし、そのきれいな金髪は今や真っ赤に染まり、場所によってはどす黒く変色していう所もあった。
「エンター。大丈夫？」
サラトガがハンカチでエンタープライズ顔の血を拭いながら聞く。
そんな親友の問いにエンタープライズは不機嫌そうに答える。
「あぁ、気分は最悪だけどな」
エンタープライズは小さく舌打ちして吐き捨てるように言う。
サラトガは持って来た応急処置用の傷薬を使い、包帯を器用にエンタープライズの傷に巻く。その間、エンタープライズは抵抗も何もせず、されるがままだった。
一連の作業が終わり、サラトガはエンタープライズに満面の笑みで微笑んだ。
「はい。終わり。これで少しは楽になるはずよ」
「サンキュー。サラ」
エンタープライズはサラトガの肩を借りて立ち上がる。
「悪いな。手当てしてもらった上に肩まで借りちまって」
「いいのよ。で？　どこ行くの？」
「とりあえず応接室に連れてってくれ。そこのソファで一休みする」
「わかったわ」
あの直情感情型のエンタープライズが『休みたい』と言ったのだ。相当痛いし疲れているのだろうとサラトガは感じ取り、あえて何も言わなかった。
『エンタープライズ』が中破したアメリカ艦隊は、一旦北東方面に撤退した。
一方、日本軍も作戦を中止してトラック島に撤退した。
帰り道、翔鶴と瑞鶴はまた仲間を失ってしまった事で傷心し、す

っかり元気をなくしていた。
「姉さん。また、仲間が・・・死んじゃった」
「あぁ、そうだな」
『翔鶴』の防空指揮所に二人はいた。二人とも龍驤の死にショックを受け、一睡もしていなかった。
やつれた瑞鶴を、同じくやつれた翔鶴がそっと抱き締める。自分が辛くても、妹を最優先にする所は、翔鶴も姉なのだ。
「これで、赤城司令、加賀さん、蒼龍さん、飛龍さん、祥鳳さん、龍驤さん。この三ヵ月で六人も空母仲間が死んじゃった・・・」
「そうだな。クソッ・・・外道鬼畜米英め・・・ッ！」
翔鶴も悔しそうに唇を噛む。
腕の中でほろほろと泣いている妹を抱き締めながら、翔鶴は行き場のない怒りを堪えていた。その時、
「翔鶴、瑞鶴」
突然の声に振り向くと、そこには陸奥、比叡、霧島がいた。
見詰め合うだけで、お互いに何もしゃべらない。
気まずい無言の沈黙はしばらく続いた。
この中では最年長組である霧島が、何とか落ち込んだ雰囲気を変えようとがんばろうとする。
「あの、その、元気だして・・・ね？」
「すまん。心配を掛けさせてしまって」
翔鶴の言葉に、霧島は顔を真っ赤にして手をブンブンと顔の前で振る。
「いえッ！　その、すみませんッ！」
「なぜ謝る？」
翔鶴は心底不思議そうに首を傾げる。そんな翔鶴と慌てふためく霧島を見て比叡は優しく微笑む。
「はいはい。そこまでにしてあげてくれる？　霧島の心臓が破裂しちゃうよ？」
比叡がこの場をなんとかしようと前に出る。さすがは最年長組で

ある。
　比叡はそっと柔和な笑みを浮かべながら、瑞鶴の頭を優しく撫でる。
「辛いだろうけど、それをバネにしてがんばらないと、ね？」
「比叡さん・・・ッ！」
　瑞鶴は比叡の胸に飛び込み、今まで以上に大きな声で泣いた。
　そんな妹の様子を翔鶴は眉をひそめ不機嫌そうに見詰める。
「なぜ比叡の方に行くんだ？」
　そんな翔鶴の不機嫌そうな質問に、瑞鶴を抱き締める比叡は柔和な表情で返す。
「そりゃあ、胸の中で泣くなら、母性を感じる大きな胸の方がいいでしょ？」
「・・・」
　翔鶴は比叡の大きな胸を一瞥し、自分のぺったんこな胸を見る。
　避けられない現実を見て、翔鶴は顔を真っ赤にして大激怒する。
「貴様・・・ケンカを売ってるのか・・・ッ！」
　顔を真っ赤にさせた翔鶴は野獣のような恐ろしい目で比叡を睨む。
　そんなブチギレる翔鶴に対し比叡は気にした様子もなく「よしよし」と瑞鶴の頭を撫でる。
「無視するなあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
　翔鶴は激怒し、軍刀を振り回して比叡を追い掛ける。それに対し比叡は柔和な笑顔のまま翔鶴の荒くれるの剣跡から逃げる。
　そんな二人を見て、三人は微かに笑った。
　傍から見れば一一〇番で通報されそうな事をしている二人は防空指揮所から飛び降りて甲板でさらに過激になる。
　陸奥はふと無邪気に笑う比叡を見る。
　彼女はきっと、皆の重苦しい雰囲気を変えてくれたのだ。先程の空気のままでは心が重い。だからこそ彼女はそんな空気を変えてくれたのだ。
　陸奥は頼りなさげな雰囲気をしながらも、本当は誰よりも仲間の

事を想ってくれている比叡に対し、そっと敬礼した。
作戦を中止した日本艦隊は一路、トラック島を目指して北上した。

この海戦で日本海軍が軽空母『龍驤』を失ったのに対し、米海軍は空母『エンタープライズ』が中破しただけだった。さらにガダルカナル島への輸送作戦も失敗し、ガダルカナル島は米軍の手に落ちてしまった。
この海戦は戦術・戦略どちらでも日本の敗北に終わった。
これが、第二次ソロモン海戦である。

第七章　第二節　外洋の恐怖（前書き）

《サラトガ》
レキシントン級航空母艦２番艦――空母『サラトガ』
愛称　サラ
出身　ニューヨーク造船所（アメリカ）
身長　１６０ｃｍ
髪型　長髪（蒼髪）
実年齢（１９４２年８月現在）１４歳
外見年齢　１７、８歳
誕生日　１１月１６日
好きなもの　エンター・アメリカ・平和・お菓子・お菓子作り・ココア
嫌いなもの　仲間が傷つく事・人種差別・戦争・辛いもの・苦いもの・濃いブラックコーヒー
珊瑚海海戦で第五航空戦隊（『翔鶴』『瑞鶴』）に撃沈された空母『レキシントン』の妹艦で壊滅しつつあるアメリカ機動部隊の主力空母の一隻。何かと不運の多い空母で、二度日本海軍の潜水艦の攻撃を受けて大損害を受けたり、エセックス級空母が竣工し始めてからは後方支援に回る事が多く、再び前線に戻れば特攻攻撃を受けて大損害を被るというものだった。そんな『サラトガ』の艦魂はエンタープライズの親友で、彼女に航空戦や空母の運用、空母としての心得などを教えた師匠でもある。エンタープライズも暴走を止める事のできる数少ないキャラで、平和的な性格をしている。他のアメリカキャラが一貫して白人主義で黄色人種である日本を見下し、毛嫌いする嫌日家ばかりの中、彼女は中立的立場にいる。元々人種差別を嫌っているので、エンタープライズの過激な日本嫌いにはいつも頭を悩ませている。アメリカキャラの中でも結構な苦労人。

《高雄四姉妹》

高雄型重巡洋艦

長女（二番艦）《愛宕（あたご）》

出身　呉海軍工廠（広島県）

身長　１６３ｃｍ

髪型　ポニーテール

実年齢（１９４２年８月現在）１０歳

外見年齢　１６、７歳

誕生日　３月３０日

次女（一番艦）《高雄（たかお）》

出身　横須賀海軍工廠（神奈川県）

身長　１６０ｃｍ

髪型　長髪

実年齢（１９４２年８月現在）１０歳

外見年齢　１５、６歳

誕生日　５月３１日

三女（三番艦）《摩耶（まや）》

出身　川崎重工業神戸造船所（兵庫県）

身長　１５６ｃｍ

髪型　ツインテール

実年齢（１９４２年８月現在）１０歳

外見年齢　１４、５歳

誕生日　６月３０日

四女（四番艦）《鳥海（ちょうかい）》

登場したら書きます

高雄型重巡洋艦こと高雄四姉妹の艦魂。雪風が駆逐艦の代表なら彼女達は重巡洋艦の代表。後に代表の座を他のキャラに移すものの、艦橋の大きさから軍艦好きの中では結構有名な艦なのでサブキャラとして活躍。後のレイテ沖海戦でそのほとんどが撃沈される。一番艦『高雄』よりも二番艦『愛宕』の方が先に竣工してしまったので、

艦魂では愛宕の方が姉となっている。さらに三番艦『摩耶』と四番艦『鳥海』は同日に竣工したので一応双子キャラの予定。長女（二番艦）愛宕はまじめなキャラでまじめ過ぎるのがたまにキズ。次女（一番艦）高雄はめんどくさがり屋。三女（三番艦）摩耶は子供っぽいキャラで、語尾に「～ですぅ」と付く。摩耶の双子の妹である四女（四番艦）鳥海はまだ未定。全艦魂キャラの中でも数少ない巡洋艦キャラ。

第七章　第二節　外洋の恐怖

一方、主力部隊（『陸奥』抜き）は二八日に前線進出の為に日本海軍重要艦隊根拠地トラック島を目前にまで来ていた。

艦隊はまわりを駆逐艦や巡洋艦に囲まれている輪型陣形を形成し、前衛には『大和』、その右後ろには『武蔵』、左後ろには『長門』が続き、その後方には『金剛』『榛名』『伊勢』『日向』『扶桑』『山城』等他の戦艦部隊も続く。その勇ましさはまさに連合艦隊の輝かしい姿だった。

「まもなくトラック島に到着します」

航海長が司令席に腰掛けている山本長官に向かって言う。山本はその報告に静かにうなずいた。

そこから少し離れた窓の近くには、目を爛々と輝かせて小さく見え始めてきた小島を見詰める大和がいた。

「小さな島ですね」

大和はうきうきと隣に話し掛ける。が、

「少尉？」

返答がないので振り返ると、そこに翔輝の姿はなかった。さっきまでいたのだが。どこへ行ったのか辺りを見回すと、海図を広げた机で何か作業をしている翔輝を見つけた。

「少尉。黙っていなくならないでくださいよ」

大和は少し怒ったように翔輝の横腹を軽く肘でつつく。

「うん？　あ、ごめん」

翔輝は走らせていた鉛筆を止めて大和に謝る。そんな翔輝を見て大和はあわあわと慌てて頭を下げた。

「あ、仕事中でしたか、すみません」

「いいよ別に。作戦中じゃないから」

「でも、仕事は仕事ですよね？」

「まぁ、そうだけど」

翔輝は鉛筆を置き、そっと隣に置いてあった煙草を持つ。その翔輝の行動に大和は大慌てで焦る。
「しょッ、少尉ぃッ!?　煙草を吸われるようになったんですか!?」
「え?」
突然の大和の絶叫に近い大声に翔輝はビビる。そんな翔輝の反応を無視して大和は顔を真っ赤にして彼に激怒する。
「煙草なんてダメです!　肺を汚すだけです!　病気の根源です!　百害あって一利なしですよ!」
大和は睨みつけるように翔輝を見る。すると、翔輝は呆然と、
「あの大和?　君は何か誤解してない?」
「何が誤解ですかッ!　タバコを吸うなんて言語道断ですぅッ!」
「・・・これ、僕のじゃないよ?」
「・・・へ?」
翔輝の言葉に大和はまぬけな顔をする。そりゃあもう口をポッカーンと開けて。
そんな大和に翔輝はそっと苦笑いする。
「これ、航海長のだよ?」
「・・・」
「大和?　なんか別の意味で顔が赤くなってるよ?」
大和は顔を伏せて回れ右し、その場からそっと立ち去る。
「やーまーとー?」
大和はあまりにも恥ずかしすぎて顔を上げる事ができなかった。
「自爆です・・・自爆・・・」
大和は恥ずかしさのあまり頭を抱える。そんな大和を見詰め、苦笑いする翔輝。
こんな和やかな雰囲気の中、艦隊は無事にトラック島に到着――
『左三〇度!　雷跡四本向かってくる!』
その伝声管を伝わって響いた絶叫が、全てを吹き飛ばした。
全員が慌てて左に集中して海を見詰める。その先には護衛の駆逐

艦と駆逐艦の間を白波を立てて海中から接近して来る魚雷が見えた。
「取舵いっぱぁぁぁいッ！」
高柳が伝声管に向かって絶叫のような声で叫ぶ。
『大和』は左に急速回頭する。魚雷と艦を一直線にして相対面積を小さくし、回避率を上げる。対魚雷の基本的な回避行動である。
四本の魚雷と『大和』はすさまじい速度で近づく。
「少尉！」
大和は翔輝の胸に飛び込む。実戦経験のない大和はいきなりの奇襲攻撃に顔を真っ青にして恐怖に身体を小刻みに震える。翔輝はそんな大和をしっかりと抱き締める。
「大丈夫。艦長ならきっと避けられる。安心して」
「少尉・・・ッ！」
腕の中で震える大和を、翔輝は強く抱き締める。
『魚雷接近！』
伝声管から響く見張り兵の声に、全員が息を呑んだ。そして・・・

『大和』はギリギリで魚雷全本を回避。駆逐艦数隻が敵潜水艦撃沈の為に魚雷が来た方向に向かって行ったが、駆逐艦は敵潜水艦を発見する事はできなかった・・・

「バカ者おおおおぉぉぉぉぉッ！」
すさまじい怒号が響き、三人の水兵服を着た少女が吹き飛び、冷たい鉄の床に激しく叩きつけられた。
三人は怯えた目で自分達を吹き飛ばした金髪碧眼の女性を見詰める。その瞳にはすさまじい怒気が込められていた。
「貴様らは一体何をしていたのだッ！」
竹刀を床に激しく叩きつける。バシィンッ！　というすさまじい音に、三人の少女は涙目になって必死に土下座をする。
『も、申し訳ありませんッ！』
「ならんッ！　敵潜水艦を発見できんのは貴様らの精神が弛(たる)んでい

るからだッ！　猛省せいッ！」
「金剛さん！　もうやめてください！　もういいですから！」
大和が悲痛の叫びを上げて止めるが、金剛はそんな大和にも激怒する。
「何をバカな事を言っている！　貴様はこいつらのせいで死ぬ所だったんだぞ！？」
金剛は《海軍精神注入刀》と名づけている竹刀を床に倒れている三人の少女達に向ける。少女達は「ひぃッ」と小さな恐怖の悲鳴を上げる。
この三人は先程艦隊の左側を担当していた駆逐艦達だ。金剛はこの三人が敵潜水艦を警戒していながらもそれに気づかず、むざむざ魚雷を放たれた上に追跡も失敗した事に激怒し、三人に処罰を加えていた。
金剛は血走った目で三人を睨む。
「さぁ立てッ！　海軍精神叩き込んでやるッ！」
『はいッ！』
三人は今にも泣きそうな顔で一瞬で立ち上がる。
「歯を喰いしばれッ！」
『はいッ！』
「金剛さん！　私は無事なんですからもうやめてください！」
大和は金剛の袖を掴むが、簡単に解けた。
金剛は優しすぎる感情中心の現連合艦隊旗艦の大和を見て、さらに堪えられない怒りを解放して激昂する。
「貴様がちゃんとせんから水兵は弛むんだッ！」
金剛は大和の襟を乱暴に掴み、ぐいっと大和の足が背伸びするぐらいまで持ち上げる。息ができなくて、大和は苦しむ。
「金剛さん・・・ッ！　苦しい・・・ッ！」
「こ、金剛さん！　やめてくださいッ！」
ここで今まで黙っていた翔輝が動いた。軍人として、処罰自体は止める事はできない。それが帝国海軍の伝統だからだ。しかし、今

目の前で行われている行為は明らかに軍規違反だ。
翔輝は金剛の腕を掴んで大和を引き離す。そんな翔輝の行動に金剛はさらに激怒する。
「貴様！　邪魔するのか！？」
金剛は翔輝に牙を向けるが、翔輝だって帝国海軍軍人。負けずに食らい付く。
「これは明らかに軍規違反ですよ！？」
「やかましいッ！　貴様には関係ない！　すっこんでろッ！」
「できませんッ！　これは帝国海軍規則第三条第四項に――ッ！？」
翔輝の言葉はそれ以上続かなかった。瞬速で現れた金剛の竹刀が翔輝の腹に強烈な一撃を加えたからだ。
「がは・・・ッ！」
肺の中の空気を全て吐き出し、翔輝はすさまじい勢いで後方に吹き飛ばされて鉄の壁に背中から激突した。
「少尉ッ！」
「長谷川はんッ！」
「しょ、少尉ッ！」
大和、伊勢、霧島が慌てて駆け寄る。そんな三人に起こされる翔輝を睨み、金剛は吐き捨てるように言う。
「人間が決めた規則など我ら艦魂には関係ない」
「金剛！　何やってんのよ！？」
今まで黙っていた長門もさすがに激怒し、金剛の襟首を持ってを睨み付ける。しかし金剛はそんな怒る長門の手を簡単に外すと、見下して嘲笑う。
「ふん。貴様もずいぶん丸くなったな――いや、情けなくなったな」
「金剛・・・ッ！」
長門が強く拳を構えて金剛に殴りかかる。
金剛も手に持っていた竹刀を構えて長門を迎え撃つ。
二人の距離は一気に縮まり、そして・・・

ガアアアアァァァァンッ！

突然の銃声に全てが沈黙した。

長門の拳は金剛の顔面の、金剛の竹刀は長門の頭上に激突する寸前で止まった。

全員は突如発砲した人物を見て驚愕した。

大和より一回り小さく、幼い顔立ちをしているが、その表情はめったに変化しない少女――武蔵だった。

「武蔵・・・」

大和は泣きながら翔輝を抱き締める体勢で武蔵を見る。翔輝は壁に激突した時に頭を強打し、気絶していた。

武蔵はいまだ煙を吹いている拳銃の銃口をフッと吹いて煙を消してホルスターに収める。

武蔵は無表情だったが、その瞳は激しく怒っているように見えた。

「・・・翔輝に乱暴する事は、絶対に許さない」

武蔵の突然の乱入に金剛一瞬驚いたが、すぐにいつもの不敵な笑みを浮かべる。

「ふん。こんな優男（やさおとこ）のなにがいいんだ？　まったくわからん」

「・・・あなたには関係ない。さっさと消えて」

そう吐き捨てるように言い、武蔵は頭二つ以上大きい金剛を睨む。

金剛は突然の武蔵の言葉に一瞬眉をひそめたが、すっかり戦意を失っていた。

「・・・ふん。それはこっちの方だ」

金剛はそう吐き捨てると、踵（きびす）を返した。その後ろに翔輝を心配そうに一瞥して付いて行く榛名。

金剛と榛名がいなくなった事で、場の空気は翔輝にの方に向いた。

「大和。長谷川君は？」

「はい。気絶しているだけです」

大和は気絶している翔輝を抱き締める。彼女の腕の中で、翔輝は瞳を閉じていた。

「とりあえず長谷川君の部屋に連れて行きましょ」
長門の提案にうなずき、大和以下長門、伊勢、霧島が翔輝を連れて消え、比叡、日向、扶桑、山城はそれぞれの艦に戻った。
「あの・・・」
残された武蔵に先程の三人の中でも一番年上の少女が声を掛ける。
「ありがとうございました」
「・・・」
武蔵はそれを無視して立ち去る。
「あのッ！　待ってください！　まだちゃんとしたお礼が・・・ッ！」
そんな駆逐艦三人に向かって武蔵は、
「・・・感謝されるような事はしていない」
そう言い残して、消えた。
武蔵の消えた方向に向かって、三人は見事な敬礼をした。

武蔵は翔輝の部屋に来ていた。先に到着した大和達は翔輝をベッドに寝かし終えていた。
心配そうに翔輝を見る大和、そんな大和を慰める長門、自分の姉が起こした事に落ち込む霧島、そんな霧島を慰める伊勢。部屋はそんな感じだった。
武蔵は机の椅子に座った。その時、机の上に置かれた笑っている少女が写った写真立てを見つけた。
「・・・お姉ちゃん？」
それは大和そっくりだった。しかし大和とはどこか違う。
「それはね、少尉の妹さんの翔香さんって言うの」
いつの間にか武蔵の横に来た大和がそう説明した
「・・・妹？」
「でも、去年の春に病死してるの」
「・・・」
武蔵はじっと翔香を見詰める。

まったく埃（ほこり）が掛かっていない。毎日毎日手入れしている証拠だ。
それほど翔輝はこの写真を――翔香を大切にしているのだろう。
「素敵な笑顔をする人でしょ？　私とそっくりなのに雰囲気が根本的に違う。少尉は翔香さんを今でも大切に想ってる。私じゃ勝てないよ」
寂しそうな笑顔をする自分の姉を見て、武蔵は再び翔香の写真を見る。
決して自分にはできない笑み。喜怒哀楽が充実している姉でも届かない完璧な邪心のない笑み。それは完全勝利というものだった。
「・・・故人は最強だと思う。新たに何かをする事はないけど、逆に揺るぎようのない地位を確約できる。それは汚される事を許さず、そしられる事を許さない。今や長谷川翔香は長谷川翔輝を縛る絶対の鎖。何があっても解けることはない最強の鎖」
武蔵はすさまじい事を言う。
「いや、そこまですごくはないと思うけど」
そう言うが、大和も納得できるものだった。
翔香は翔輝を縛り、決して離そうとしない。翔香が翔輝にとって大切な存在である事が変わらない限り。しかし、それは変わる事はない。なぜなら、翔香は翔輝にとって、妹だから。二人の間には消しようのない血の繋がりがあって、翔輝は彼女を忘れる事なんてできない。
「確かに、最強の鎖ね。でも・・・」
「・・・でも？」
「翔香さんの死があって今の少尉がいる。私は今目の前にいる少尉が好き。だから、鎖を持っていても、それが私の好きな少尉なの。悔しいけど」
「・・・同感」
二人はベッドの上で寝ている翔輝を見る。
決して解けない。しかし、その鎖があるから今の翔輝がいる。認めたくない、けど認めなくてはならない現実を見て、二人は愕然と

するしかなかった。

長門、伊勢、霧島は各艦に戻り、今は大和と武蔵、翔輝しかいなかった。

外はもう暗闇に包まれ、全てが静かだった。

「武蔵」

大和は隣に座っている武蔵を向く。

「・・・何？」

その声に武蔵も大和を向く。

武蔵の目を見て、大和は小さく首を横に振る。

「ううん。何でもない」

「・・・？」

大和は再び翔輝を見る。

訊けなかった。訊ける訳がない。

――あなたは、少尉の事をどう想ってるの？――

訊ける訳がない。

もし、好きだと返ってきたら、自分はどうしたらいいのか。

自分の妹の恋は、何がなんでも応援してあげたい。だけど・・・

(私も、少尉の事を・・・)

「うっ・・・」

そこで思考は途絶えた。突然翔輝が声を発したからだ。

「少尉？」

「・・・翔輝」

二人は翔輝を不安げに見詰める。すると、翔輝の目がゆっくりと開いた。

「少尉ぃッ！」

「・・・翔輝！」

二人の存在に気づいた翔輝は不思議そうな顔をする。

「大和。武蔵。どうしたの？　って言うかここは？　僕の部屋？」
翔輝は状況の変化に戸惑っていた。どうやら記憶が混乱しているらしい。大和はそんな翔輝にそっと状況を説明する。
「はい。少尉は金剛さんの一撃で気絶してしまったので、ここまで運んで来たんです」
その説明に翔輝は思い出したのか、強打した頭を押さえると、二人に苦笑いする。
「そっか・・・ごめん。重かったろ？」
翔輝は申し訳なさそうに謝る。
「いえ、瞬間移動でしたし、長門さんや伊勢さん、霧島さんも協力してくれましたから問題なかったです」
「そう。三人は？」
「もうお帰りになりました」
「そうか、後でお礼を言っておかないと。それと」
翔輝はそっと大和の横にいる武蔵を見る。翔輝に見詰められ、武蔵は一瞬表情を和らげた。
「武蔵もありがとう」
「・・・私は、別に」
武蔵は無表情で答えると、すっくと立ち上がる。驚く二人に、武蔵は淡々と口を開く。
「・・・翔輝が無事で良かった。じゃ」
「「あ・・・」」
武蔵はそう言い残して消えた。いつもながら彼女は意味不明な突然行動が多い。
二人残された大和と翔輝は何も言わずにお互いに見合い、どちらからとなく笑った。
「武蔵ってよくわかりません」
「まったくだ」
大和はくすっと笑って立ち上がった。
「では、今日はもうお休みください。私は旗艦の仕事がまだ残って

ますので」
「いや、僕も仕事が残ってるから。さっさとやらないと航海長に怒られる」
「え、でも・・・」
心配する大和に笑顔を向け、翔輝は起き上がって椅子に掛けてあった上着を着る。
「もう大丈夫だよ」
「本当ですか？　無理してませんか？」
大和は平然としている翔輝が無理をしているんではないかと不安になって、必死な瞳で彼を見詰める。そんな彼女に、翔輝は優しげに微笑む。
「うん。もう元気」
「なら、いいですけど。無理だけはしないでくださいね？」
「あぁ」
翔輝と大和は部屋を出て途中まで一緒に歩き、別れた。
艦橋に向かう途中、窓から外の景色を見た。
小さな島だと思った。南国特有の暑苦しい風が吹き込んできて、冷房完備の『大和』艦内を改めて感謝する。
翔輝はそのまま艦橋に向かった。

九月十五日、ソロモン海の海中を日本海軍潜水艦伊号第十九潜水艦――『伊－十九』が息を殺して進んでいた。
潜望鏡から見えるのは敵艦隊。空母一隻を中心とした小艦隊だった。
『伊－十九』の艦魂は潜望鏡から見える敵艦隊を睨み、その内の一隻、空母に照準を合わせる。そして・・・
「撃てッ！」
『伊－十九』の前部魚雷発射管六つが開き、白い泡を吐いて六本の魚雷が発射された。
海中を翔けるようにして進む六本の魚雷。日本海軍独自にして世

界最強の魚雷――酸素魚雷は通常魚雷を凌駕する速度で敵艦隊に向かう。そして・・・

「命中！　魚雷六本中三本敵空母に命中！　敵空母大破！」

その報告に狭い潜水艦内に歓喜の声が響いた。

大喜びする兵達を見詰め、長く美しい髪をした水兵服の少女は嬉しそうにうなずいた。彼女はぉの『伊‐十九』の艦魂だ。

「敵空母一隻大破。大和司令にいい報告ができそうです」

伊一十九は嬉しそうに微笑むと、近くにあったコーヒーカップを手に取り、一気にあおる。が、脊髄反射的に噴いた。

「ぶ、ブラック・・・？」

伊一十九は涙目でそっとテーブルを見る。そこにはさっきまで自分が飲んでいたココアが置いてあった。どうやら誰かのブラックコーヒーろ間違えたらしい。

苦いものが大嫌いな伊一十九はせっかくの戦勝気分も吹き飛び、そっと間違えたカップを戻し、元の自分のカップを手に取り、中にあったココアを飲む。

甘い味が下を心地良く刺激し、伊一十九の頬を赤く染め、頬を緩ませる。

「やっぱり・・・勝利の後のココアは格別だよねぇ」

そう言って微笑むと、再びココアを飲む。すると、その時一瞬先程飲んだブラックコーヒーを誰かが掴んだ。その人物を見て、少女は嬉しそうに微笑んでいた。

『伊‐十九』は敵空母は航行不能、沈没と判断して撤退した。

この時大破した空母は第二次ソロモン海戦の際に一時的に参加していた空母『ワスプ』だった。

『ワスプ』は三本の魚雷を受けて大破。その後味方駆逐艦の雷撃処分で沈んだ。その他、残った三本の魚雷が十キロ離れた敵前衛部隊の戦艦一隻、駆逐艦一隻にそれぞれ一本が命中した。その後、駆逐艦は沈没した。

第七章　第三節　空前絶後の艦砲射撃作戦

日本海軍は何が何でもガダルカナル島に設営し、完成直前で奪われた飛行場を奪還、最悪使用不能にさせたかった。その為には陸軍部隊を安全に同島に送らなければならない。しかしすでに制海権・制空権は米軍に奪われつつある上にソロモン周辺の航空隊は連戦続きによって激しく損耗していた。その為飛行場からはいつでも敵機が出撃できる状態であり、このままでは増援しても撃沈されるのが目に見えていた。

味方航空隊は頼りにならない。だが輸送を成功させるには何としても飛行場を一時的にも無力化さえなければならない。しかしその為には味方航空隊の援護が必要。だが航空隊は使えない。この無限のループを打破すべく、山本長官は最後の切り札を使う事にした。

当時、世界海軍の常識であった航空機の次に攻撃範囲の広い兵器。それは前時代の主力兵器――戦艦であった。

山本はヘンダーソン飛行場に対し、戦艦による艦砲射撃作戦を立案した。しかし投入されたのは世界最強の四六ｃｍ砲を搭載した戦艦『大和』『武蔵』ではなく、高速戦艦『金剛』『榛名』であった。後に大和型戦艦二隻でやればもっと被害を大きくできたという意見があるが、それは愚問でしかない。

この作戦は電撃作戦でなければならないのだ。なぜならば攻撃に成功しても、敵艦隊や敵空母、はたまた撃ち漏らした敵機なんかがすぐさま迎撃に向かってくるからだ。

攻撃力は確かに世界最強だが、速度は日本戦艦としては一応速い方に位置するが、それでもやはり低速。逃げ切る事は難しい。そんな状態で迎撃されればいくら世界最強の防御力を持っている『大和』『武蔵』といえど損害は避けられず、最悪沈没という事もありえた。

日本海軍の象徴であるこの二隻を失う事は、軍全体の士気にも関わる。

その為に白羽の矢が立ったのが金剛型であった。
速度は日本海軍戦艦唯一の三〇ノット超えの高速力を持つので、一撃離脱にはもってこいであった。
さらに金剛型が四隻あるといのもひとつの理由でもある。
もし投入した金剛型が最悪沈められても、代わりがいるからである。大和型も長門型も代わりはないし、扶桑型と伊勢型は低速の為に問題外。
これらの理由も踏まえ、山本は金剛型戦艦二隻による艦砲射撃作戦を提示した。
この大事な作戦を指揮する事になったのは今でも批判が多い栗田健男中将であった。
栗田は当初危険が高すぎると作戦に反対していたが、山本は「お前がやらんなら、私が『大和』を指揮して突っ込む」とまで言い、渋々引き受けた。
かくして、日本海軍は初の航空機に戦艦で挑むという世界海軍史上空前絶後の作戦を発動したのだった。

一九四一年十月十一日、トラック島からヘンダーソン基地艦砲射撃部隊――第二次挺身隊が出撃した。
編成は作戦の要である金剛型戦艦から『金剛』『榛名』が抽出され、その護衛に軽巡洋艦一隻、駆逐艦九隻という規模の艦隊であった。
島から離れていく艦隊の中央に位置する戦艦『金剛』の甲板の上にあるテーブルに腰掛けて金髪碧眼の美女がティーカップを口に傾けていた。
優雅に紅茶を飲むその姿はとても美しく、彼女が日本海軍最凶と呼ばれている恐ろしい人には到底見えない。
小さくなるトラック島を一瞥し、テーブルの上に置いてある小さな風呂敷を開く。中にはおいしそうなクッキーが入っていた。
金髪の美女――金剛は妹の比叡が作ってくれたクッキーを一枚か

じる。欧米文化を嫌っている彼女でも生まれはイギリスなのでこうしたイギリス式のティータイムは大切にしている。
優雅にティータイムをする金剛に対面するように座っているのポニーテールの少女――榛名はクッキーをムシャムシャと食べる。
「おぉ、やっぱり姉さんの料理はうまいな」
「当然だ。あいつは私の自慢の妹だからな」
「えー、じゃあ俺は？」
「もっと修行しろ」
「んだよ。姉貴のいじわる」
榛名は少し不機嫌そうにクッキーを頬張る。そんな彼女を見て、金剛は紅茶を飲みながら静かに微笑んだ。それは口元だけの小さな笑みだが、かわいい妹を見詰める姉の姿そのものだった。
「金剛司令。紅茶のおかわりいりますか？」
そう言ったのは三つ編みにメガネというおとなしそうな女の子だった。その手には西洋風のティーポットが握られている。
「うむ。もらおう」
金剛が伸ばしたティーカップに、少女は紅茶を注ぐ。
「うむ」
金剛は再び淹れられた紅茶を口にする。ほのかな甘みが舌をくすぐる。
「ふむ。比叡ほどではないが、五十鈴（いすず）の淹れた紅茶もなかなかうまいな」
「そうですか？　光栄です」
そう言って少女――五十鈴は嬉しそうに三つ編みを揺らした。
彼女の名は五十鈴。長良型軽巡洋艦二番艦・軽巡洋艦『五十鈴』の艦魂だ。今回出撃した護衛部隊の旗艦を務めている。
今回は比叡がいないので紅茶に困っていた金剛だったが、五十鈴は紅茶を淹れるがなかなかうまいと知って一時的に従兵にしたのだ。
「おぉ五十鈴。このクッキー食わねぇか？　姉さんが作ったんだ」
「比叡さんが？　それはおいしそうですね」

「だろ？　ほら、食えって」
「ありがとうございます。では一枚だけ」
そう言って五十鈴は一枚クッキーを取ってかじる。すると見る見るうちに幸せそうな笑みに表情が変わる。
「おいしいです」
「だろぉ？　やっぱり姉さんの料理は最高だよ」
榛名の笑顔に五十鈴も嬉しそうに微笑む。
「姉様のお姉さんはいいお姉さんですね。私の姉なんてもう・・・」
そう言って首を小さく振る五十鈴に対し、榛名は小さくため息する。
「姉様？」
「なあ、その呼び方なんとかなんねぇのか？」
「へ？」
きょとんとする五十鈴に、榛名は指差す。
「みんなで俺の事を《姉貴》とか《姉御》とか呼んでさ、そしてお前の《姉様》。俺そんな呼ばれ方したくねぇんだけど」
そう言って少し不機嫌そうに言う榛名だが、五十鈴はそっと微笑む。
「だって、姉様は姉様ですもの。みんな大好き姉様です」
『そうですよッ！』
その突然の声に振り返ると、そこには数人の少女達が立っていた。皆が皆榛名をキラキラとした瞳で見詰める。
「姉貴！」「姉御！」「姉様！」「お姉様！」「お姉ちゃんッ！」など多くの呼び方で呼ばれる榛名は「だぁからッ！　そういう呼び方するなってばッ！」と怒る。そんな妹を見詰め、金剛はカップを傾ける。
榛名はその男勝りの性格から多くの水兵や下士官（主に駆逐艦と巡洋艦）に慕われており、前述のような呼ばれ方をされているのだ。それだけ皆彼女を慕っているという事なのだが、当の本人はそんな呼ばれ方はあまり好きではないらしい。

叫ぶ榛名をうっとりとした目で見詰める五十鈴や駆逐艦達。
そんなやかましい者達の声を無視し、金剛は紅茶を飲む。
「まったく、こんな任務を私がやらなければならないとはな」
そう言うと、金剛は不満そうな顔をしてカチャンとカップを置く。
いつもなら絶対に音を立てたりなんかしないのだが、金剛は憮然とした態度をする。そんな姉を見詰め、榛名も「まったくだぜ」と不満げにぼやく。
「ったく、なんで俺達戦艦が陸の基地を攻撃しなきゃなんねぇんだよ。山本はバカなんじゃねぇの？　陸上砲と艦載砲じゃ陸上砲の方が圧倒的に有利っていう常識を知らないのか」
この当時、陸上砲と艦載砲では陸上砲の方が有利というのは常識であった。
艦載砲は艦に載せるのでどうしても制限が出てしまう。実弾なので撃てば衝撃が生まれるので、その衝撃で艦を傷つけてしまうからだ。
逆に陸上砲はそんな制限がないので、やろうと思えば超巨砲を作る事もできる。その分移動できないという欠点はあるが、防衛としておかれているならそれは関係ない。
制限なく巨大な大砲が作れる陸上砲と制限がある艦載砲。巨大であればそれだけ攻撃力も射程距離も大きい。
その為、陸上砲＞艦載砲というのが世界軍事力の基本であった。
さらに飛行場という事は敵は航空機。もはやこの時代は戦艦＜航空機というのが基本。
今回の作戦はこの二つの常識を打ち破るものだった。
榛名は「ふざけんなよぉッ！」と叫んで不機嫌そうに椅子の上で胡坐(あぐら)をかく。
「俺達戦艦は同じ戦艦と殴り合うのが存在理由だろうが。何でそんな俺達が飛行場を潰さなきゃならねぇんだよッ！」
榛名は不満を爆発させる。それは仕方ないのだろう。彼女達は今まで機動部隊の護衛として敵機とばかり戦ってきた。今回の主役は

自分達だが、それでも自分達の本来の戦うべき敵ではない。プライド高い榛名には堪えられない屈辱なのだろう。
「な、姉貴もそう思うだろ？」
榛名はこうした事に一番固い姉に意見を仰ぐ。すると、金剛は意外にも、
「うん？　私はそれほど不満ではないが」
「マジッ！？」
驚く榛名に、金剛は不機嫌そうに空を見上げる。
「空母の護衛なんかに比べたら、今回は私達戦艦が主役だ」
「け、けどよぉ。艦砲射撃だぜ？　ちょっと俺は・・・」
「戦艦の任務はなにも敵戦艦を撃ち砕くだけではない。日露戦争では戦艦だって敵軍港を攻撃していた。臨機応変に対応するこそ、真の軍人だ」
金剛の勇ましい言葉に、駆逐艦達は「おぉ・・・」と感動し、拍手する。その中には五十鈴もいる。
しかし納得のいかない榛名は紅茶を飲む姉に不思議そうに問う。
「なら、何で不満そうな顔してんだ？」
榛名の問いに、金剛はそっとティーカップを置く。
「いや、今回の私達艦隊名は何だ？」
「あ？　挺身部隊だろ？」
「そうだ。《挺身》とは捨て身という意味。つまり今回の作戦はそれだけ危険という事だ。山本長官は最悪の場合全滅も覚悟しているそうだ」
「はあッ！？　ふざけんなよッ！」
金剛の言葉に榛名は激昂する。
「俺はこんな任務じゃ絶対に死なねぇからなッ！」
「姉様落ち着いてください！」
怒る榛名を五十鈴が止める。そんな怒る妹を見詰め、金剛も「当然だ」と力強く言う。
「私も死ぬ気はない――だが、国の為に死ねるなら、私はそれでも

構わん。ここは戦場だ。何が起こるかわからない。死と隣り合わせで戦う。それが戦場だ。それこそ、いつ死ぬか、誰が死ぬか、どこで死ぬか。それはわからない。戦争で死ぬのは私の本望だ。だが――」

金剛はそっと立ち上がると、甲板の柵にそっと手を掛ける。

蒼い空を見上げ、金色の髪を風に靡かせる金剛はとても美しく勇ましい。

空や海と同じ蒼の瞳は、少し悲しげに揺れていた。

「――私は戦艦として生まれた。艦隊決戦で戦って死ぬこそ、戦艦の死に場所だ。こんな意味のわからん戦いで死ぬのは正直ごめんだ。だが、もし死ぬなら、せめて一度でいいから死ぬ前に敵戦艦部隊と艦隊決戦をしたかった」

そうつぶやく金剛を、榛名はじっと見詰める。

いつも見てきた尊敬する姉の背中は、いつになく悲しげに見えた。

第二次挺身部隊こと敵飛行場砲撃部隊は、一路ガダルカナル島へンダーソン基地に向かって白波を立てて突き進んだ。

ヘンダーソン基地砲撃の主力は先の戦艦『金剛』と『榛名』だが、何もこの二隻に全てを任せている訳ではない。戦艦よりも攻撃力は低いものの、それなりの打撃を与えようと重巡洋艦三隻と駆逐艦二隻の第一次挺身部隊が第二次挺身部隊より先に派遣された。

第一次挺身部隊こと巡洋艦部隊はガダルカナル島への兵や武器、弾薬や食糧を送る輸送船団を護衛する事になった水上機母艦二隻、駆逐艦六隻の輸送部隊の護衛を行い、その後飛行場への砲撃が予定されていた。

そして、第一次挺身部隊は途中輸送部隊と分かれてもう一つの任務である飛行場攻撃の為に順調にヘンダーソン基地に迫っていた。

無事に護衛任務を終えた第一次挺身部隊はヘンダーソン基地に向かって闇夜の中を進み続けた。

艦隊中央に位置する第一次挺身部隊旗艦――青葉(あおば)型重巡洋艦一番艦・重巡洋艦『青葉』の第二主砲の上に一人の少女が静かにたたずんでいた。

長い髪を先端の方で紐で纏めた独特の髪型をした少女はじっと明るい月を見上げる。

彼女の名は青葉。この重巡洋艦『青葉』の艦魂だ。

見上げる月は今日は満月。艦隊はその柔らかい月明かりにそっと照らされている。

「きれいな月夜ね」

そっとつぶやいた青葉は、ふとまわりを走る艦隊を見詰める。

今回参加している重巡洋艦は『青葉』とその妹艦『衣笠(きぬがさ)』、そして現役重巡洋艦最古参の古鷹(ふるたか)型重巡洋艦一番艦の『古鷹』である。

三隻とも重巡洋艦の中では古参に入る艦ばかりだった。

青葉はそんな旧友達と共に作戦に参加できる事がとても嬉しく、そっと微笑んだ。その笑顔はとても優しく、彼女が軍人とはとても思えない。

青葉はそっとガダルカナル島のある方向を見詰める。

「輸送部隊は無事に行けたかしら」

先程まで守っていた輸送部隊の安否が気になるが、現在の作戦は敵飛行場を砲撃する事だ。今はそれに集中しようと首を振って邪念を忘れる。

「今の任務は敵飛行場を砲撃し、金剛さん達の負担を軽くする事。がんばらないと」

そう言って青葉は気合を入れ直した。

艦隊は進み続け、そろそろガダルカナル島も近くなって来た頃、艦隊は暗闇の向こうに友軍艦隊を見つけた。

「もしかして、金剛さん達かな？」

青葉はそれを見てあわあわと焦る。なぜなら自分達の任務は第二次挺身部隊の先遣隊として先に攻撃しなければならないからだ。

青葉はその場にがっくりと崩れた。

「・・・あぁ、金剛さんに怒られるぅ・・・」
青葉は目に涙を溜めて悲しむ。それほど金剛という存在は怖いのだ。
その時、照射灯が照射され、点滅した。発光信号である。
――ワレアオバ、ワレアオバ――
同士討ちを避ける為に『青葉』は発光信号を続ける。だが、向こうの艦隊からは何の返答も返って来ない。
「金剛さん・・・？」
青葉が疑問を持ち始めた刹那、
友軍艦隊が一斉に発光した。直後、すさまじい砲撃音が響いた。
「・・・え？」
次の瞬間、青葉が見たのは真っ白な光だった。

第一次挺身隊は友軍の同士討ち――ではなく、それは敵艦隊の砲撃であった。
日本軍の出撃を知った米軍は迎撃の為に重巡二、軽巡二、駆逐艦五隻の巡洋艦部隊を派遣した。この艦隊には夜戦最強の日本艦隊に対抗する為にレーダーを搭載していた。
米艦隊はレーダーで日本艦隊こと第一次挺身部隊を捕捉。無知な日本艦隊からの発光信号に対して発光信号ではなく砲弾を送った。
この攻撃により旗艦『青葉』が被弾し、司令官の五藤存知（ごとうありとも）少将戦死。指揮系統は壊滅した。
ここに来て艦隊はようやく友軍艦隊と思い込んでいた艦隊が敵艦隊だと気づき、慌てて応戦するが、すでに奇襲によって混乱が起き、さらに司令官の戦死によりさらに混乱。まとも反撃ができなくなっていた。
そんな中、殿を担当していた『衣笠』は駆逐艦『吹雪（ふぶき）』（吹雪型駆逐艦一番艦）を率いて敵艦隊に突入。敵艦隊に大打撃を与えた。
共に行動した『吹雪』も奮戦するが、敵艦隊との近接戦闘で撃沈された。

『衣笠』の奮闘によって、残存艦艇は逃げる事ができ、戦闘は終わった。しかし第一次挺身部隊の受難は続く。

帰還中、敵機の攻撃を受けて駆逐艦二隻が犠牲（うち一隻は輸送作業を終えた駆逐艦）となった。

結局、この海戦で第一次挺身部隊は重巡洋艦『古鷹』、駆逐艦三隻沈没。『青葉』大破。『衣笠』小破という壊滅的な被害を受けたのに対し、米巡洋艦部隊は駆逐艦一隻沈没、軽巡洋艦一隻、駆逐艦一隻大破。重巡洋艦一隻小破に留まった。

五藤司令官は最期まで敵艦隊を友軍艦隊と思い続け、「バカ者！バカ者ッ！」と悔しそうに叫びながら絶命した。

第一次挺身隊は壊滅し、撤退した。

日本海軍は絶対の自信があった夜戦において、米艦隊に完膚なきまでに叩き潰されたのだった。

これが、サボ島沖海戦と呼ばれる海戦である。

十三日の朝、第二次挺身部隊に悪い知らせが届いた。それは先のサボ島沖海戦により先遣隊である第一次挺身部隊が壊滅したというものだった。

「ふ、古鷹が死んだッ！？」

第一次挺身部隊が壊滅したという報告に榛名は驚愕して叫んだ。

「ああ、他にも吹雪、夏雲（なつぐも）、叢雲（むらくも）も戦死。青葉が重傷に衣笠が軽傷。原因は五藤存知司令官の敵艦隊を味方艦隊と誤認した事だそうだ」

金剛は報告書の重要部分だけを読んだが、それは頭の痛くなる状況だった。

「ふ、古鷹が・・・」

榛名は愕然と椅子に座り込んだ。

古鷹は重巡洋艦の最古参という事もあって榛名達とも付き合いが長い艦魂だった。

仲間の死に愕然とする榛名に対し、金剛は報告書を最後まで読む

とため息した。
「まさか先遣隊が壊滅するとは・・・これは予想外だな」
金剛はそう言うと、目をつむって沈黙した。
会議室には不気味な沈黙が舞い降りた。
誰もが口を開ける事をためらい、沈黙に拍車を掛ける。
このすさまじい気まずい雰囲気を打破できるのは相当な自信を持っている者か、単なるアホかしかいない。
「飛鷹、お腹空いたぁ・・・」
そう言ったのテーブルに突っ伏しているツインテールの少女――隼鷹だった。
空母『飛鷹』と『隼鷹』は護衛の為に参加していた。
「ね、姉さん・・・ッ！」
慌てて飛鷹が隼鷹の口を塞ぐが、すでに時遅し。
先程まであった緊迫した雰囲気は吹き飛び、所々から笑いが起きる。そんな中、飛鷹と榛名は頭を抱え、当の隼鷹は「お腹空いたぁ・・・」と繰り返す。
一方、金剛はそんな部屋の雰囲気に対しいつものように不機嫌そうな顔をする。
「とにかく、我々の目的はヘンダーソン飛行場を砲撃する事。その一点に絞られる。各員は先の通り行動するように。以上」
金剛がそう締め括ると、会議は終わった。
五十鈴や駆逐艦が帰る中、金剛はそっと立ち上がると隼鷹に近づく。
「す、すみませんッ！　姉さんには私がちゃんと言いますからッ！」
妹より頭ひとつ大きい飛鷹は必死になって金剛に謝るが、金剛は歩みを止めず、隼鷹の前に立つ。
「おい」
「ほや？」
金剛に声かけられたのに、隼鷹は起立も敬礼もせず顔だけ向けただけだった。その行為はあまりにも失礼であった。

「ね、姉さんッ！」
飛鷹があわあわと慌て、榛名は苦笑いした。
金剛はそんな隼鷹をじっと見詰める。そして、
「これでも食べろ」
そう言って差し出したのは、出撃前に比叡が持たせたクッキーだった。
「うわぁ・・・ッ！」
目をキラキラさせる隼鷹に対し、榛名は驚き、飛鷹はパニくる。
「そ、そんなッ！　金剛さんからこのような物をもらう訳には・・・ッ！」
「構わん」
金剛は無表情で言った。そんな彼女に飛鷹は「すみません、本当にすみませんッ！」と何度も何度も頭を下げた。
一方の隼鷹は「いっただきまぁすッ！」と嬉しそうにクッキーを頬張る。どっちが姉か妹かわからなくなる。
「おいしいッ！　このクッキーすごくおいしいよぉッ！」
隼鷹はそう言うと、ムシャムシャと食べる。その勢いに榛名は軽く引く。
口の周りにクッキーの食べかすを付けながら隼鷹はクッキーを頬張る。
「おい」
「ふえ――ぶッ」
顔を上げた隼鷹にハンカチが押し付けられた。それを握っているのは――金剛だ。
「女子（おなご）は清楚でいろ。そんな子供ではいかんぞ」
一番清楚とは無縁そうな金剛の言葉に、榛名と飛鷹は苦笑いした。
金剛は隼鷹の口を拭き終えると、ハンカチをそっとポケットに戻す。そんな金剛を見詰める隼鷹。
「うん？　何だ？」
視線に気づいた金剛は不思議そうに首を傾げる。そんな金剛をキ

ラキラとした目で見詰める隼鷹は、嬉しそうに満面の笑顔をした。
「えへへ、ありがとう。金剛お姉ちゃん」
隼鷹の天真爛漫な笑みを見詰め、金剛は口元に小さな笑みを浮かべた。
「あ、姉貴？」
驚く榛名を無視し、金剛は身を翻して部屋を出る。その後を榛名も慌てて追いかける。
部屋に二人だけで残された飛鷹は満面の笑みでクッキーを頬張る姉を見詰め、小さくため息した。

その日の夕方、上空直援の零戦を常に舞い上げ続けていた『飛鷹』『隼鷹』は第一次挺身部隊と別れた。ここから先は危険海域。足の遅いこの二隻では足手まといになるからだ。
空母の援護を得られなくなった艦隊は、全速力でガダルカナル島に向かった。

それから数時間後の夜。艦隊は目標海域に到達した。
戦艦『金剛』『榛名』はそれぞれ一列に並び、自慢の三五・六ｃｍ砲計八基十六門をガダルカナル島に向けた。
月明かり照らす甲板の上で闇夜に薄っすらと浮かぶガダルカナル島を睨む金剛。金色の髪が月の光を浴びてより輝く。
金剛は風に靡く髪を押さえもせずに静かに目標の島を睨みつける。
その時、島の数箇所から光が起きた。
光を見詰め、金剛は不敵な笑みを浮かべた。
――それは、計測用に陸軍兵が上げた篝火（かがりび）だった。
「合図だ」
金剛はじっと自分の主砲を見詰める。主砲はわずかに方向・仰角を変え、さらにもっと撃ちやすい場所に移動する。
そして、不気味な沈黙の中、再び光が起きた。
篝火のような弱々しい光ではなく、まばゆく、まるで小さな太陽

のように光り輝くものだった。
――それは、先に発進した水上偵察機が投下した照明弾だった。
そしてそれは――砲撃開始の合図だった。
刹那、金剛の金色の髪が激しく揺れた。
蒼き瞳は己が敵をしっかりと睨みつけ、逃がさない。
腰に下げていた軍刀を力強く抜いて構え、金剛は咆哮した。
「我が一撃を受けてみよッ！　砲撃開始ッ！」
金剛の軍刀が空を切った刹那、『金剛』『榛名』の三五・六ｃｍ砲が咆哮した。

ドガアアアァァァァンッ！

十三日から翌十四日にかけての深夜二時間、戦艦『金剛』『榛名』は一方的な砲撃を加えた。
次々と撃ち出される砲弾によりヘンダーソン飛行場は瞬く間に火の海と化した。
弾薬庫に引火し次々と立ち上る火柱、その頭上から降り注ぐ砲弾の雨。まさに一方的な攻撃だった。
敵基地に大損害を与えたが、すでに敵は第二滑走路の建造を終え、そっちに飛行機の半分を移動させていたので被害は全航空機の半分に留まった。
第二滑走路の存在を知らない日本海軍司令部はこの戦果に敵基地は壊滅したと判断した。
この作戦で『金剛』『榛名』は搭載砲弾のほとんどを敵飛行場に撃ち込んだ。その数は『金剛』が三式弾（対空弾）一〇四発、一式弾（徹甲弾）三三一発、副砲二七発の計四六二発。『榛名』は零式弾（対空弾）一八九発、徹甲弾二九四発、副砲二一発の計五〇四発。両艦合わせて計九六六発にも及んだ。
攻撃を終えた艦隊は早々に撤退した。

途中安全海域に待機していた『飛鷹』『隼鷹』と合流し、再び上空直援を受けながら艦隊はトラック島に帰還した。

だが、事は全てうまくいった訳ではなかった。

輸送部隊は無事にガダルカナル島に到着。物資の揚陸を開始した。しかしヘンダーソン基地の残存敵機がこれを空爆。輸送部隊に打撃を与え、揚陸物資はそのほとんどが焼失した。

結局、最も重要な兵力・物資補給は、失敗に終わった。

第七章　第三節　空前絶後の艦砲射撃作戦（後書き）

どうも、いつも読んでくださりありがとうございます。
えっと、今まで春休みだったので一日一話とか二話投稿できましたが、明日からは学校があるので遅れると思います。
すみませんが、そこのところはご了承ください。
これからもがんばって修正するので、最後までどうか見捨てないでください。

第七章　第四節　南太平洋の嵐と新たな絆（前書き）

《五十鈴（いすず）》

長良型軽巡洋艦二番艦――軽巡洋艦『五十鈴』

出身　浦賀造船所（神奈川県）

身長　１５７ｃｍ

髪型　三つ編み

実年齢（１９４２年１０月現在）９歳

外見年齢　１５、６歳

誕生日　８月１５日

好きなもの　本・夕焼け・平和

嫌いなもの　朝起きる事・コンタクトレンズ・戦争

家族構成　姉・長良　妹・名取・由良・鬼怒・阿武隈

山本五十六や山口多聞といった有名な指揮官が艦長を務めた軽巡洋艦『五十鈴』の艦魂。完成当初こそは高速巡洋艦として水雷戦隊旗艦として采配を振るっていたが、太平洋戦争時にはもうすでに旧式化していた。しかし後に主砲などを外して高角砲を装備した《防空巡洋艦》となるが、速力重視の軽巡洋艦なので艦体が細く、期待したような性能は出なかった。対潜能力が比較的高く、第三一戦隊（対潜水艦部隊）旗艦となるが、対潜掃討という任務を実行に移す前に敵潜水艦の攻撃で撃沈される。そんな『五十鈴』の艦魂は三つ編みにメガネという外見をしていて、おとなしい女の子。外見通り本が好きという文学系の少女。オリジナル作品では登場しなかったが、外伝の《初月絶対防衛戦》でほんの少し登場したキャラ。艦魂年代史シリーズでは戦艦や空母のキャラはたくさんいるが、駆逐艦は基本は雪風などしかなく、後は外伝キャラだけだが、巡洋艦のキャラはそれすらいなかったので追加した。今のところ重巡洋艦代表は高雄姉妹が担当し、今回は軽巡洋艦の代表として出しました。これから先もちょくちょく出てくる予定。

第七章　第四節　南太平洋の嵐と新たな絆

日本軍は敵基地艦砲射撃作戦が成功と判断。ガダルカナル島奪還の為に同島に待機していた陸軍が総攻撃を掛ける事になり、その支援の為に日本海軍は第二、第三艦隊を派遣した。

第二艦隊は戦艦『金剛』『榛名』、改装空母『隼鷹』他、重巡洋艦『愛宕』『高雄』『摩耶』他一隻、軽巡洋艦『五十鈴』、駆逐艦九隻が参加。前衛部隊を任された。

第三艦隊は空母『翔鶴』『瑞鶴』、軽空母『瑞鳳』、戦艦『比叡』『霧島』他、重巡洋艦四隻、軽巡洋艦一隻、駆逐艦には『雪風』他十四隻が参加。今作戦の主力を務める事になった機動部隊である。

そんな日本艦隊の中、第三艦隊旗艦・空母『翔鶴』の会議室では艦魂達による会議が開かれていた。

「今作戦は機動部隊による航空攻撃でガダルカナル島の敵航空基地を空爆。これに止めを刺して陸軍第十七軍の総攻撃を掩護するものだ」

金剛が淡々と説明し終えて席に座る。金剛は乾いた喉を潤す為に比叡が淹れてくれた紅茶を上品に飲む。常の彼女と真逆である。

一方、作戦の要である空母艦魂の翔鶴、瑞鶴、瑞鳳、隼鷹は作戦書を見て空爆に関して話し合っている。

「じゃあ、ガダルカナル島空爆に関してはこれで。でも、敵の空母が出て来た場合は全ての作戦を放棄してこちらを最優先するからね」

機動部隊参謀長兼副司令を務める瑞鶴はそう言って作戦書を閉じる。

「いいと思うよ。今回はあくまで陸軍の総攻撃を支援する事だし。敵の空母が出て来た時は陸軍には悪いけどそっちが優先されるしね」

新たに機動部隊の主力になった瑞鳳は瑞鶴の意見に笑顔で賛同する。

そんな仲良き二人の横では、
「翔鶴お姉ちゃんがんばろうね！」
「う、うん。それは良いが離れてくれないか？」
嬉しそうな隼鷹と、そんな隼鷹に抱きつかれて苦笑いする翔鶴。なんとも微笑ましい光景である。
一方、金剛達も話し合いをしていた。
「今作戦、必ず敵空母も出て来る。今度こそミッドウェーの仇を討ってやらんとな」
金剛は紅茶を優雅に飲みながら言う。たが、その瞳には強い闘志が宿っていた。
「そうそう。いい加減うざったい飛行機を運ぶ敵空母を殺さないとこっちが動きづらいしな。敵機がいると俺戦艦が活躍できないし」
そう言うのは榛名。舌打ちまでしてイライラしながら言う。本当にうざいのだろう。
「でも、敵も必死でしょうね。ミッドウェー、珊瑚海で二隻。伊-十九の活躍で一隻。合計三隻失ってる上に残存敵空母も結構ダメージを受けてるしね」
比叡は金剛の三杯目の紅茶を淹れながら困ったように言う。
「で、でも、こっちも空母六人を失ってるし、双方辛いのは同じだと思う」
霧島は寂しそうに言う。きっと心の中では赤城達の事を想っているのだろう。そんな妹の頭をそっと撫で、金剛は凛とした顔で皆を見る。
「そうだな。だからこそ今回の戦いで敵空母を殲滅し、ガダルカナル島の航空基地も奪還。しくは破壊して再び戦争の流れをこちらに戻さないといかん。絶対に」
「おうよ」
「そうね」
「そ、そうだよね」
金剛四姉妹全員は顔を見合ってそっとうなずいた。

窓の外は蒼い海が広がり、南国の眩しい光が会議室にも注ぎ込んでいた。そんな中、瑞鶴は頼れる仲間達を見渡し、そっと微笑んだ。

一方、アメリカ軍は日本軍のガダルカナル島に対する輸送作戦や艦砲射撃から近く大規模な反抗作戦が実施されると予想。防衛の為、金剛の確信していたように空母部隊を向けていた。しかし、その数は『エンタープライズ』『ホーネット』のたった2隻だけだった。比叡の言うとおり、アメリカ軍も空母の損害がひどく、『サラトガ』は8月の終わりに『伊－２６』の雷撃を受けて修理中、『ワスプ』は『伊-１９』が撃沈し、稼動空母はこの2隻しかいなかったのだ。しかし、それでもアメリカ軍は日本軍の出陣にかき集められるだけの空母を出撃させた。

日本軍攻撃に反撃する為、艦隊は南太平洋を翔けていた。

空母『エンタープライズ』の艦橋では2隻の艦魂が話していた。

「クソッ！　黄色い猿共めッ！　ワスプまで殺しやがって・・・ッ！」

「姉さん・・・」

怒りでどうにかなりそうな姉の姿を見て、ホーネットは胸を痛める。

体をぶるぶると震わせ、体全体から怒りを露にしているエンタープライズは何度も何度もテーブルに拳を叩きつける。

「姉貴、レキシントン、ワスプを殺して・・・ッ！　サラまで病院送りにしやがってッ！　殺してやるッ！　日本人は一人残らず殺し尽くしてやるッ！」

体中から殺気を放出し、エンタープライズは蒼い海を睨みつける。

そんな姉にホーネットは恐怖する。

「ね、姉さん・・・ッ！」

「それに空母『ショウカク』『ズイカク』・・・ッ！　貴様らも必ず殺してやるからなッ！」

エンタープライズは鉄の壁を思いっきり蹴った。

金髪の髪の毛を逆立て、蒼い瞳を怒りに染め、エンタープライズは激怒していた。

そんなエンタープライズを心配そうに見詰めるホーネット。

「姉さん・・・こんな時こそフレッチャー中将がいれば・・・」

ホーネットは寂しそうに言う。

フランクは北西艦隊指揮官に転属し、今はもうここにはいない。いるのは・・・

「ジャップめ、今度こそパールハーバーの恨みを受けてもらうぞ！日本人は殺し尽くせ！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！」

と、どことなくエンタープライズと性格が似ている新南太平洋地域作戦司令官、猛将ウィリアム・Ｆ・ハルゼー中将だった。彼はその乱暴な言葉使いからわかるように、ものすごい前線指揮的（悪く言うと粗暴）な性格で、敵味方から恐れられる人物だ。

何でこんな明らかにヤバイ人が艦隊司令長官をやっているのか不思議だが、これには浅い理由がある。

元々ハルゼーは学業成績が悪く、士官学校を落第寸前で卒業した強者（？）で、駆逐艦艦長時代、訓練中味方戦艦を雷撃で中破させた実力（？）もあり、部下には暴力を振るう最低最悪司令官だが、アメリカ海軍も士官が不足していて、こんな人物でも司令官にしていなければならないほどだった。ちなみに、彼の妻はもっと最強らしい（部下達の目の前で彼を殴り飛ばした事がある）。

しかしその熱血キャラから部下や国民からは絶対の信頼を受け、彼の下で戦える事を兵達は喜んだが、彼の下や上で働く司令官達はそんな彼に毎回振り回された。兵には人気があるが司令官達からは厄介者。それがハルゼー提督であった。

こんな司令官の傍にいて、さらに悪い方向に流されないといいけど、と姉を心配するホーネット。不幸中の幸いは彼には艦魂が見えない事だった。

だが、ホーネットに心配をよそにエンタープライズはキラキラし

た目でハルゼーを見詰める。それはもう最高尊敬の眼差しであった。
「その通りだハルゼー長官！　黄色い猿どもは殺しまくるんだ！　日本人は殺し尽くせッ！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！」
早速日本人に暴言を吐くエンタープライズ。
「あぁ、早くも悪影響が・・・」
間違った方向に全速力している姉を見詰め、ホーネットは頭を抱えた。
そんなこんなで新たにハルゼー中将を司令長官にした第１６、第１７、第６４連合任務部隊は日本艦隊を待ち構える為に完全な防御態勢を整えていた。

進撃を続ける機動部隊であったが、補給路を断たれた陸軍はジャングルに針路を阻まれて攻撃用意を整えるのに相当な時間を要し、総攻撃を何度も延長。機動部隊は航空支援の機会をうかがう為に南下・北上を繰り返してその時を待っていた。
そんな機動部隊の主力空母の一隻、空母『瑞鶴』の甲板では瑞鶴が気持ちいい風を浴びて髪を揺らしていた。
「今日もいい天気だなぁ」
燦々と照りつける太陽に、そんな場違いな事を言う。ここは熱帯地方なので暑苦しく、兵達は皆甲板にはほとんどいない。脱水症状を起こすからだろう。
しかし、艦魂だって暑さを感じない訳じゃない。
「あ、暑い・・・」
ジリジリと照りつける太陽に、瑞鶴の額には汗が噴き出していた。
「あぁ・・・冷たい物が飲みたいなぁ・・・」
瑞鶴はそう言って早速ラムネを出そうとした。その時、
ピタ・・・
「ひゃあッ！？」
突如頬に冷たい物が当たり、瑞鶴は飛び上がった。慌てて振り返

ると、そこにはラムネを持った作業服を着た少年が立っていた。
「あはは、ごめん。驚かせちゃった？」
少年はそう言って優しく微笑んだ。が、
「・・・どちら様？」
瑞鶴は目の前の少年に見覚えがなかった。しかも、
「・・・わ、私が見えるの？」
「うん。見えるよ」
少年は笑顔でそう答えた。
瑞鶴はさらに驚く。今まで自分が見える人間は自艦には乗っていなかった。他艦でも翔輝以外は面識がない。
驚く瑞鶴に、少年は優しく微笑む。
「驚かせちゃってごめんね。僕の名前は神風刹那飛行少尉。今回から瑞鶴航空隊に加わったんだ。よろしくね」
「神風刹那？」
瑞鶴は不思議そうに見詰める。確かに今回から配置されたんなら自分が知らないのは当然だ。そんな瑞鶴に刹那はそっとラムネを渡す。
「飲むだろ？」
「え？　あ、はい。ありがとうございます」
瑞鶴は刹那からラムネを受け取ると、早速飲む。心地良い炭酸がのどや下をほど良く刺激し、甘みが口の中に広がる。
刹那も瑞鶴の横に腰を下ろしてラムネを飲む。
そんな刹那を見詰め、瑞鶴は初めて自艦で会った自分が見える刹那に興味津々。早速色々と話しかける。
「神風少尉って、前はどこの隊に所属していたんですか？」
「うん？　ラバウル航空隊だよ」
刹那の言葉に、瑞鶴は目を丸くして驚く。
「ら、ラバウル航空隊って精鋭部隊じゃないですかッ！」
「いやいや、そんな事ないって」
刹那は謙遜するが、当時ラバウル航空隊とはミッドウェー海戦で

衰退した航空兵力を空母だけでなく基地航空兵力にも重点を置いた際、南太平洋の主力航空隊として配置された精鋭部隊。ガダルカナル島攻防戦はもちろん、南太平洋全体の戦闘に大きく関わる存在であった。その激しい戦闘の連続によって機体や兵の損耗が激しい激戦地でもある。

そんな所から来た彼は間違いなくエースパイロットである。

「担当は何ですか？　艦爆ですか？　それとも艦攻？」

「ううん。戦闘機だよ」

「零戦ですか。それはすごいですね」

瑞鶴は歓喜する。ラバウル航空隊の戦闘機乗りともなれば本当のエースパイロット、撃墜王である。

「今回は一大作戦って事もあって、ラバウルから何人も機動部隊に回されてるんだ」

「そうなんですか。あ、でも基地航空隊と空母航空隊とでは勝手が違いますよ？　大丈夫ですか？」

確かに、空母航空隊は基地航空隊よりもある技量が必要とされる。動かぬ長い滑走路を離着陸基地航空隊に比べ、空母航空隊の搭乗員は短く波に揺れる飛行甲板を離着艦する技量が必要不可欠なのだ。

瑞鶴の問いに刹那は優しく笑う。

「それなら大丈夫。僕はラバウルの前は空母航空隊の搭乗員だったから」

「え？　そうなんですか？　所属は？」

刹那は笑顔で答えた。

「『蒼龍』さ」

「・・・え」

その懐かしい名前に、瑞鶴から笑みが消えた。

それは珊瑚海海戦の影響で参加できなかったミッドウェー海戦で沈んだ懐かしい先輩の名前であった。

「そ、蒼龍さんとのご面識は・・・？」

恐る恐る問う瑞鶴に、刹那は優しく答える。

「あったよ。というか結構仲は良かった」
「そ、そうですか・・・」
うつむく瑞鶴に、刹那は優しく微笑む。
「みんなの事は、いつも蒼龍から聞いてたよ。赤城はすごくまじめな子で、加賀はとても優しい子、飛龍は子供っぽいけどやる時はやる子で、翔鶴は頼れる武人。そして瑞鶴は、まだまだ経験不足だけど、誰よりも努力するとってもいい子って」
「蒼龍さんが・・・そんな事を・・・」
今は亡き優しく先輩の想いに、瑞鶴は涙する。そんな瑞鶴を見詰め、刹那は遠い空を見上げた。その瞳には悲しみが含まれている。
「本当は、あいつと一緒に死ぬつもりだったんだけど、蒼龍が必死に僕に生きてくれって頼んだから、生きる事にした。まあ、その結果がこうしてまた空母航空隊の搭乗員になったって事だな」
「そうですか・・・」
顔をうつむかせたままの瑞鶴の頭を、刹那はそっと撫でる。
「まあ、これからよろしく頼むよ――瑞鶴」
刹那の言葉に、瑞鶴はそっと顔を上げると、しっかりとうなずいた。
「はい。よろしくお願いします」
そう言って、二人は笑い合った。その時、
「瑞鶴。ここにいたのか――って、誰だ貴様」
「あぁ？　どうしたんだ翔鶴――って、テメェは・・・ッ！」
現れた翔鶴と榛名に、刹那は優しく微笑んだ。
「よろしくね」

一方、二隻の大型正式空母に比べて軽空母である『瑞鳳』はひと回りもふた回りも小さな空母だった。搭載機数も翔鶴型に比べて三分の一程度しかない。
そんな『瑞鳳』の甲板では瑞鳳が一人で暗記帳と奮闘していた。
「えっと・・・これは陽炎型駆逐艦」

瑞鳳の見詰める先には艦艇のシルエットが描かれた手帳があった。ページをめくると答えが載っていて、そこには、

「やったッ！　大当たりッ！」

そこには《陽炎型駆逐艦》と書かれていた。

「よぉしッ！　次行くぞぉッ！」

瑞鳳は気合を入れて次の艦のシルエットを見る。それは先程の駆逐艦ではなく長い艦体で甲板にはほとんど建造物がない艦種――空母であった。

「えっと、これは・・・うーん・・・」

その空母は小さな艦橋が真ん中にあった。瑞鳳が今まで見てきた空母はほとんどが艦橋が真ん中より前方に位置しているか、自分のように艦橋が艦内にあるタイプである。

「た、確かこの空母は・・・」

悩む瑞鳳は必死に頭の中から知っている空母のシルエットを探す。

「えっと・・・うーんっと・・・」

「それは『飛龍』だよ」

その突然の声に驚いて振り返ると、そこには暗記帳を覗き込む少年がいた。

「え？　ひ、『飛龍』？」

「うん。間違いないと思う」

瑞鳳がページをめくると、そこには《空母『飛龍』》としっかりと書かれていた。

「ほ、ほんとだ」

「でしょ？」

自慢げに微笑む少年を見詰め、瑞鳳はふと、

「・・・あなた、誰？」

見覚えのない少年に瑞鳳は不思議そうに問う。すると少年は優しく微笑み、

「初めまして。今回の作戦からラバウル航空隊から瑞鳳航空隊に転属になった大空剣飛行少尉。よろしくね」

「飛行兵？」
「うん。戦闘機乗りだよ」
剣は屈託のない笑顔で瑞鳳に微笑むと、そっと彼女の横に腰を下ろした。
蒼い海を見詰める剣に、瑞鳳は嬉しそうに微笑む。
「え、えっとね、私の名前は瑞鳳って言うんだ」
「知ってるよ」
「ど、どうして？」
驚く瑞鳳に、剣は苦笑いする。
「だって君に乗ってるんだもん」
「あ、そっか」
そう言って二人は笑い合った。どっちもまだ幼い顔をしてるので、微笑ましい光景である。
「でもすごいよ。よく『飛龍』だってわかったね」
瑞鳳が感心したように言うと、剣は少し寂しげに微笑んだ。
「・・・そりゃあ、『飛龍』は昔の母艦だもの。忘れる訳がないさ」
「・・・え？」
驚く瑞鳳に、剣はそっと微笑む。
「真珠湾からミッドウェーまで、ずっと僕は『飛龍』に乗ってたんだよ。もちろん、飛龍とも仲は良かったさ」
「そ、そうなんだ」
瑞鳳は複雑そうな顔をする。
自分は軽空母であり、階級は下士官。そんな彼女は士官である正式空母とはほとんど面識がなかった。
今でこそ翔鶴や瑞鶴と話しているが、それは空母不足という状況だからだ。それ以前の頃の赤城や加賀、蒼龍、そして飛龍なんかとはほとんど話した事はなかった。
「飛龍さんって、どういう人だったの？」
気がつくと、そう質問していた。
瑞鳳の問いに、剣は空を見上げる。

「そうだね・・・とても優しい子だったよ。優しくて、笑顔がとてもかわいくて、明るい子だった。でも、心の中には誰よりも強い帝国軍人の魂があった。戦闘になれば勇猛果敢に戦って、戦姫って感じだった」
「・・・そっか。なんか、瑞鶴みたい」
「そうなの？」
「うん。瑞鶴もね、とっても優しくて、明るくて、笑顔がとってもかわいくて、でも戦いになれば一生懸命戦うんだ」
「へえ、会ってみたいな」
「そう？　なら今度会わせてあげようか？」
「いいの？」
「もっちろん」
自信満々に言う瑞鳳に、剣は嬉しそうに微笑んだ。
「じゃあお願いね」
「うん。翔鶴さんや比叡さん達にも会わせてあげる」
「ありがとう」
剣はそう礼を言うと、どこまでも蒼い空を見上げた。
空はどこまで澄んでいて、どこまでも蒼い。
「飛龍・・・僕はまた、空母に乗ってるよ。見てくれてるかい？」
剣はそうつぶやくと、そっと青空に微笑んだ。
そんな彼を見詰め、瑞鳳は小さく微笑んだ。
南国の太陽に照らされる蒼い空の下、歴戦の日本機動部隊は敵が待ち受けるガダルカナル島に向かってどこまでも蒼い海を白波を立てて進撃した。

第七章　第四節　南太平洋の嵐と新たな絆（後書き）

今回はミッドウェー海戦以来音信不通だった刹那と剣の登場です。
これからこの二人は弱体化していく機動部隊の中で戦い続けます。
一体どうなるのか。
正直僕にもわかりません。
まあ、とにかく完成できるまで必死に全速力で前に進むだけです。

第七章　第五節　戦姫瑞鳳の強き決意

十月二五日、アメリカ軍偵察飛行艇が日本機動部隊を発見。その情報はすぐさまソロモン海洋上に展開していた機動部隊にも伝えられた。

猛将ハルゼーはすぐさま艦隊を全速力で敵機動部隊に向かって突撃させた。

空母対空母の戦いは通常距離を開けて攻撃するものだが、彼はその常識を打ち破って敵機動部隊との距離を詰めた。

これは元パイロットでもあるハルゼーが長距離飛行は搭乗員に負担をかけるという事を身をもって知っていた事が原因でもあった。部下達に無駄な負担をかけたくないのと、それにより集中力を高めたいというのが狙いだった。

しかし、敵空母に近づくというのは母艦を危険に晒すという事に直結する。

だが、目の前の敵をぶっ飛ばすという考えのハルゼーにとってはそんな事は関係なく、副司令や参謀長が止める中、断固として突撃を続けた。

そんな彼の背中をエンタープライズは感動した目で見詰め、そんな姉の姿を見て、ホーネットはまたもため息した。

アメリカ機動部隊は全速力で日本機動部隊に空前絶後の全力突撃を続けた。

一方、日本機動部隊は日付が変わった頃に敵索敵機を発見。所在攪乱（かくらん）の為に針路を変更するも、数時間後に別の偵察機に発見された。

二六日早朝、日本機動部隊は二〇機の偵察機を発進させた。

ほぼ同時刻、米軍機動部隊も十九機のＳＢＤドーントレス急降下爆撃機を発進させた。

偵察機発進二時間後、偵察機の一機が敵機動部隊を発見。
日本機動部隊はすぐさま攻撃隊を編成した。
空母『瑞鶴』の甲板では艦載機が次々に格納庫から運び出されていた。それは第一次攻撃隊であった。それらの艦載機を見詰め、瑞鶴は決戦に気合を入れる。その時、
「神風少尉！」
瑞鶴は攻撃隊の中に刹那の姿を見つけ慌てて駆け寄ると、刹那は整備兵との会話を打ち切って瑞鶴の方に向く。
「瑞鶴か。どうしたの？」
「神風少尉、第一次攻撃隊だったんですか？」
「うん。攻撃隊の護衛をね」
「そうですか。がんばってください」
瑞鶴の激励に刹那は「任しとけ」と笑みを送ると、手を差し伸べた。その手の意味に気づいた瑞鶴もそっと手を伸ばす。
二人はしっかりと握手を交わした。
刹那は一度うなずくと、瑞鶴と別れて愛機の零戦に乗り込んだ。
エンジンを点火し、プロペラが高速回転を始める。
今までとまったく同じ事なのに、心が躍る。やっぱり空母から発進するのは適度な緊張があって自分の性分に合っている。刹那はそう思った。
ふと横を見ると、瑞鶴がこっちに手を振っていた。そんな彼女にそっと手を振る。
「そういえば・・・蒼龍も軍帽を振って見送ってくれたっけ」
今は亡き大切な少女の事を想い、刹那は小さく笑みを浮かべた。
そして、第一次攻撃隊の全機が高速でプロペラを回し始めたまさにその時、ついに出撃の合図がなされた。
戦闘の零戦隊が自らを縛っていた力を解いて飛行甲板を駆け抜け、大空高くへ舞い上がる。
刹那の零戦もスロットルを全開にして一気に甲板を滑走、発艦した。

重力から解放され、零戦は天高くに舞い上がる。
小さくなる母艦を一瞥し、刹那は操縦桿をしっかりと握り、隊長機に続いた。
上空を旋回して後続機の編成を待つ零戦隊を見詰め、瑞鶴は嬉しそうに微笑んだ。

一方『瑞鳳』の甲板でも瑞鳳と剣がお互いを見詰めていた。
「剣、気をつけてね」
瑞鳳の言葉に、剣はしっかりとうなずく。
「大丈夫。僕には御守りがあるからね」
そう笑顔で言うと、首から掛けている御守りを見せた。それはどこにでもある普通の御守りだった。
「御守りか・・・あれ？　でもこれ恋愛成就って書いてあるけど」
「あぁ、これは気にしないで。込められた想いは変わらないからさ」
「へえ、誰にもらったの？」
瑞鳳の問いに、剣は優しく微笑む。
「飛龍にね、もらったんだ」
「そっか、飛龍さんに・・・」
微笑ましげに見詰める瑞鳳。そんな瑞鳳を一瞥し、剣はそっと御守りを見詰めて微笑む。
「これが僕をラバウルの激戦から命を救ってくれたんだ。これがある限り、僕は負けないよ」
「そっか。じゃあ、期待してるからね」
「うん。任しとけ」
瑞鳳に優しく微笑むと、剣は零戦の翼に上る。と、そんな剣の服の裾を、瑞鳳がそっと掴んだ。
「瑞鳳？」
不思議そうに振り返ると、そこには不安げに自分を見詰めている瑞鳳がいた。
メガネの奥のうるむ瞳がそっと剣を見詰めて離さない。

「生きて帰って来てね」
必死な瞳で見詰めながら言う瑞鳳。そんな彼女の姿が、どことなく飛龍と重なった。
剣は不安げに自分を見詰める瑞鳳に心配かけさせないように優しく微笑む。
「大丈夫だって。飛龍の御守りもあるし」
「ほんと？」
「本当さ。必ず帰って来る。約束だ」
「約束？」
「あぁ、約束」
瑞鳳はその言葉に嬉しそうに微笑むと、そっと小指を差し出した。
その意味に剣は優しく微笑むと自分も手袋を外して小指を差し出す。
二人の小指がそっと絡まり、しっかりと結ばれた。
「うそついたら、竹槍千本で貫くからね」
「そこは普通針千本じゃないの？」
「まあ、どっちも死んじゃうけどね」
「・・・死んだ上にさらに殺されるって事？」
苦笑いする剣に対し、瑞鳳は嬉しそうに微笑む。そんな無邪気に喜ぶ瑞鳳に、剣は心が和む。だが、もう時間だ。
「さあ瑞鳳。ここは危ないから向こうへ」
「うん。がんばってね」
「あぁ」
笑顔でそう言うと、瑞鳳は背を向けて走り出した。
小さくなっていく背中を見詰め、剣はゴーグルをしっかりと付けてコックピットに乗り込む。その時、『翔鶴』『瑞鶴』から第一次攻撃隊が舞い上がっているのが見えた。
すぐに『瑞鳳』にも発艦命令が下った。
プロペラを高速回転させて先頭の零戦が舞い上げる。続いて二番機、三番機と続けて発艦し、剣の番になる。
スロットルを最大まで上げると、機体は勢い良く走り出して甲板

を滑走する。そして、地に足を着いている感覚がなくなると、機体は空中に浮いていた。
徐々に小さくなっていく母艦を一瞥し、剣は先に飛び立った翔鶴隊や瑞鶴隊を追ってスロットルの出力を上げた。
徐々に消えて行く攻撃隊を見詰め、瑞鳳はいつまでも手を振り続けた。
攻撃隊の武運と、剣の無事を祈って、いつまでもいつまでも、蒼い空に手を振り続けた。

第一次攻撃隊発艦後、各空母は甲板に第二次攻撃隊を用意していた。
軽空母『瑞鳳』も空母『翔鶴』『瑞鶴』の後方で第二次攻撃隊を用意していた。
瑞鳳は甲板に立ち、並べられている第二次攻撃隊を見詰める。どの機体もきれいに整備され、整備兵達の努力がうかがえる。
ピカピカの愛機を見て、搭乗員達は嬉しそうに整備兵に感謝する。なんとも微笑ましい光景だ。
笑いが飛び交う甲板の上で、瑞鳳はふと前方を走ってる『瑞鶴』を見た。『瑞鶴』の甲板にも第二次攻撃隊が並べられている。
「瑞鶴。やっと一緒に戦えるね」
嬉しそうに瑞鳳は前方を走る『瑞鶴』を見る。
姉と共に戦う事はできなかったが、今はこうして瑞鶴やその姉である翔鶴と共に戦える。どんなに恐ろしい敵と対峙しても、心強い仲間がいれば、怖くない。
「もう剣達、攻撃してる頃かな・・・」
蒼い空を見詰め、瑞鳳は遠い洋上にいるであろう敵機動部隊に向かっている第一次攻撃隊――剣達の安否を気にかける。
だが、すぐに首をふるふると横に振る。
「剣達なら大丈夫。無事に任務を終えて帰って来る」
瑞鳳はそう自分に言い聞かすと、再び甲板に並べられている艦載

機を見詰める。
深緑色の機体に輝く赤い日の丸。何度見ても美しい。
零戦、九九艦爆、九七艦攻。すべてが勇ましく輝いている。
爆撃機と攻撃機の性能は平均的だが、零戦の戦闘能力は世界一である。零戦の前では他国の航空機は鎧袖一触（がいしゅういっしょく）。まさに無敵なのだ。
そんな日本海軍が世界に誇るすばらしい艦載機達を見詰め、瑞鳳は第二次攻撃隊の発進を待った。
その時、突如警報が鳴り響いた。
「な、何ッ！？」
瑞鳳は突然の警報に慌てる。
――それは敵機襲来の警報だった。
警報に続いてスピーカーから『瑞鳳』艦長、大林末雄大佐（おおばやしすえお）の声が響く。
『敵機襲来！　総員戦闘配置！　対空戦闘用意ッ！』
「敵機ッ！？」
瑞鳳は慌てて双眼鏡を出現させ、敵機が襲来して来る方向を見ると、蒼い空をぶち壊す憎き十数機の濃紺色の敵機が接近して来ていた。
瑞鳳は慌てた様子で艦橋に瞬間移動する。すでに艦橋は一足速く戦場となっていた。慌しい艦橋では大林が駆け回る参謀達に指示を出していた。
「両舷前進全速！　敵機を本艦に集中させるんだ！　決して『翔鶴』『瑞鶴』に爆弾を落とさせるな！　あの二隻は我が帝国海軍最後の希望ッ！　絶対に殺させるなッ！」
『了解ッ！』
大林の怒涛の命令にも、参謀達は驚いたりせず忠実に従う。すばらしい連携力である。
そんな大林の指示に、瑞鳳は歓喜した。大林が自分と同じ考えを持っていてくれて嬉しかったのだ。
瑞鳳は窓の外から迫る敵機を睨み付ける。

「瑞鶴達には絶対に手は出させないッ！　二人は日本海軍最後の希望の星なんだからッ！　それに――」

瑞鳳は腰から軍刀を引き抜くと柄をしっかりと握り、光り輝く日本刀を構える。その瞳は心優しき少女のものから――戦姫になっていた。

「友達を守るのは、当然の事よッ！」

『瑞鳳』は『翔鶴』『瑞鶴』の前に出る為全速力で一騎当千のごとく海を翔けた。

『『瑞鳳』！　後方より全速力で敵機に向かう！』

その報告に、艦橋から敵機を睨みつけていた瑞鶴に戦慄が走った。

瑞鶴が慌てて反対側の窓にしがみ付いて見ると、『瑞鳳』が航行速度を遥かに上回る全速力で『瑞鶴』と『翔鶴』の間を白波を立てながら翔け抜けていった。

「瑞鳳ッ！？　何考えてるのッ！？」

瑞鶴は颯爽と翔けて行く『瑞鳳』の艦尾を見詰め、ようやくその意図に気がついた。

――彼女は、自分の身を囮にする気なのだ。

「瑞鳳！　やめてッ！　やめてよッ！」

瑞鶴は必死になって叫ぶ。

もう、誰かが傷つく姿は見たくない。

瑞鶴の頭には赤城達や祥鳳、龍驤の悲劇が思い出された。

もう、仲間が死ぬのは嫌だった。

瑞鶴の必死な叫びも聞かずに、『瑞鳳』は敵機に翔け続ける。その時、真っ直ぐ突貫していた敵機が一斉に翼を翻した。

『敵機！『瑞鳳』に向かって急降下ぁッ！』

敵急降下爆撃機が『瑞鳳』に向かって流星のごとく一斉に急降下した。

「ダメえええええぇぇぇぇぇッ！」

瑞鶴は涙を流しながら悲鳴を上げた。

『敵機急降下！』
「取舵いっぱぁぁぁいッ！」
大林は艦を左に向けるが、既に時は遅し。
敵機は垂直に急降下し、機体下部のぶら下げていた爆弾を一斉に切り離す。支えを失った爆弾は重力に従って『瑞鳳』に向かって流星のように降り注ぐ。
「総員衝撃に備えろおおおおおぉぉぉぉぉッ！」
大林は艦内放送マイクに悲鳴のような声で叫んだ。
瑞鳳は覚悟を決め、歯を食い縛って目をつむる。
（これで、瑞鶴を守れるなら、本望だよ・・・）
そう思った刹那、ふと頭に剣の顔が浮かんだ。
自分に向かって笑顔をする彼に、瑞鳳は涙する。
「ごめんね・・・私・・・剣の約束、見られないかも・・・」
瑞鳳の頬を涙が一筋流れた。
刹那、『瑞鳳』の甲板が大爆発した。

――軽空母『瑞鳳』は敵急降下爆撃機（索敵機）の爆弾を二発受け中破。しかし幸いにも直撃箇所が最後部であった為、艦載機の誘爆によるミッドウェーの悪夢の再現は避けられた――

「「瑞鳳！」」
翔鶴と瑞鶴は逸早く『瑞鳳』の艦橋に駆け込んだ。
そこには・・・
「「瑞鳳！」」
血だらけの姿で仰向けにぐったりと倒れている瑞鳳がいた。
二人は急いで倒れている瑞鳳に駆け寄る。彼女のまわりには赤い血がべっとりと付いていた。
「瑞鳳しっかりしてッ！」
瑞鶴はぐったりとしている瑞鳳の身体を抱き上げる。

瑞鳳は砕けたメガネの奥の虚ろな瞳で自分を抱き上げている瑞鶴を見る。

「あは、瑞鶴だ・・・」

か細い声でそう言い、瑞鳳は血の気の失せた顔で喜ぶ。そんな彼女を瑞鶴はしっかりと抱き締める。ぐったりした瑞鳳の体は妙に冷たかった。

「貴様、無茶をするから・・・ッ！」

翔鶴は急いで上着を脱ぎ、胸に巻いている晒(さらし)を解いてそれを瑞鳳の傷口に巻いて止血する。

「瑞鳳！　しっかりしてよ！　死なないで！」

泣き叫ぶ瑞鶴の頬を、瑞鳳はそっと撫でると、小さな笑みを浮かべた。

「瑞鶴・・・私は死なないよ・・・？　だって・・・まだ戦争は続いてて・・・あなたが生きているもの・・・私はあなたを最後まで守り切る・・・だから・・・こんな所じゃ死なないよ・・・」

「瑞鳳・・・ッ！」

瑞鶴は涙を流しながら瑞鳳の身体を抱き締める。そんな親友を、瑞鳳もそっと抱き締める。

「瑞鶴、泣かないでよ・・・」

「だって・・・ッ！」

ぽろぽろと涙を流す瑞鶴に、瑞鳳は微笑む。

「・・・大丈夫・・・私には・・・約束が・・・ある・・・か・・・ら・・・」

それを最後に、瑞鳳の瞳はそっと閉じた。

「瑞鳳ぉッ！」

「気を失っただけだ。心配するな」

半裸になった翔鶴は放っていた上着に袖を通すと、前を留めずにすすり泣く瑞鶴の頭をそっと撫でる。

「瑞鶴。早く瑞鳳を休ませてやれ」

「うん・・・」

翔鶴はぐったりとした瑞鳳を抱き上げ、そのまま空いている兵員室に連れて行く事にした。その後を瑞鶴もついて行った。

気絶した瑞鳳を部屋に運んだ翔鶴と瑞鶴は瑞鳳を一度下着姿にし、身体中に付いた血を拭き取った。そして本格的に手当てをし、身体中に包帯を巻き終えるとそっとベッドに寝かせた。

安定した寝息を立てる瑞鳳に、瑞鶴は「良かったぁ・・・」と涙目で安堵する。

「報告によると、『瑞鳳』の被害はたいした事はないらしい。損傷自体は中破。飛行甲板が破壊されて艦載機の着艦は不可能だそうだ。おそらく『瑞鳳』は戦線離脱するだろう」

翔鶴の言葉に、瑞鶴はさらに安堵する。

「そっか・・・じゃあ、瑞鳳は助かるんだね？」

「あぁ、離脱中に攻撃されなければ大丈夫だ」

「怖い事言わないでよぉ」

「ありえる状況を言っただけだ。事実、ミッドウェー海戦では衝突で損傷した重巡『三隈』が退避中に敵機の攻撃を受けて沈没している。そんな可能性もあるというだけだ」

淡々という翔鶴に、瑞鶴は「いじわるぅ」と頬を膨らませると、再び横になっている瑞鳳を見詰める。

「瑞鳳の分も、がんばらないとね」

「当然だ。瑞鳳の想いを無駄にする訳にはいかん」

「うん。わかってる」

「まずは第一次攻撃隊に参加した『瑞鳳』の艦載機を二人で分担着艦させんとな」

「そうだね。とりあえず今後の事は向こうで話そう」

「そうだな」

翔鶴と瑞鶴は瑞鳳をゆっくりと休ませる為に部屋を出た。

そして、この戦いに勝つ為に話し合いをするのだった。

蒼い空の下、二隻の空母は仲間の仇を討つ為に再び攻撃準備を整

えつつあった。

『瑞鳳』は飛行甲板破壊により攻撃隊を着艦する事が不可能となった。

南雲長官は被弾した『瑞鳳』に戦線離脱を下令し、『瑞鳳』は残存空母『翔鶴』『瑞鶴』など多くの機動部隊艦艇に見送られ、戦線を離脱した。

第七章　第六節　二つの決断

一方、第一次攻撃隊は順調に敵機動部隊を目指して空を翔けていた。
剣の零戦は攻撃隊の前方を、刹那は後方を守っていた。
第一次攻撃隊は雲の中に突入した。白い雲が搭乗員達の視界を奪う。
そして、雲を抜けた時、予想外の部隊と遭遇した。
『右上方敵の攻撃隊ッ！』
無線から流れた声に攻撃隊の搭乗員達は皆同じ方向を見詰めた。
そこには、雲で見にくいが、確かに敵機が編隊を組んで反対方向に向かっていた。
敵攻撃隊はＦ４Ｆワイルドキャット艦上戦闘機、ＳＢＤドーントレス艦上爆撃機、ＴＢＦアベンジャー艦上攻撃機で編成されており、攻撃隊には間違いなかった。
問題は、一体どこへ向かうかだ。
そんなの決まっている。
自分達の母艦に向かっているのだ。
通り過ぎていく敵攻撃隊を見詰め、自軍攻撃隊を守る戦闘機の搭乗員である剣と刹那の胸中は違うものが流れていた。
徐々に小さくなっていく敵攻撃隊を見詰め、剣は悔しそうに唇を噛む。
「瑞鳳・・・死ぬなよ」
そうつぶやくと剣は前を見詰め、攻撃隊の護衛を続けた。
一方刹那は消えて行く敵攻撃隊を見詰め、しばしの沈黙の後、操縦桿を思いっ切り倒した。
「このまま瑞鶴達を見捨てられるかッ！」
刹那は敵攻撃隊撃滅の為に機体を反転させた。
反転した零戦は刹那だけでなく、彼を含めて二一機中九機に上っ

た。
もう見えなくなった敵機を睨み、刹那はスロットルを全開にまで上げた。
反転して去って行く味方戦闘機を見詰め、剣はため息した。
任務を放棄して帰るべき母艦を守るか、任務を忠実に守って攻撃隊を守るか。どちらも正解であり、どりらも間違い。正解なんて人の数だけあるのだ。
去って行く零戦隊に、剣はそっと敬礼した。
こうして、二人の零戦はそれぞれの道に向かって飛翔した。

『敵機襲来！』
アメリカ艦隊に警報が鳴り響く。アメリカ将兵全てが西の空を見ると、黒い無数の点が天空を舞いながら接近して来ていた。
「ジャップだ！　迎え撃て！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！」
ハルゼーは狂ったように叫ぶ。
艦隊は弾幕を張り、直掩の戦闘機隊は敵機を撃墜していく。だが敵機も果敢に攻めて来る。翼に輝く赤い日の丸を輝かせて突撃して来る。
空母『ホーネット』も敵機に対し機銃や高角砲を乱射して敵機を迎撃する。
『敵機直上！　急降下！』
見張り兵の絶叫が艦橋に響く。
「面舵いっぱぁぁぁいッ！」
「アイアイ、サー！　面舵いっぱぁぁぁいッ！」
艦長が叫び、それを航海長が復唱する。
『ホーネット』は全速力で右に曲がる。水柱が立ちまくる海上を『ホーネット』は逃げ回る。
「きゃッ！」
艦体の右舷に突然水柱が上がり、それに驚いたホーネットは尻餅

を着いてしまった。爆弾が近くに炸裂したのだ。
「敵機が私に集中してる？　それは良かった。これで姉さんを危ない目に遭わせなくてすむ」
ホーネットはまだ数機の敵機にしか襲われていない『エンタープライズ』を見て安堵する。だが、それは敵機の大半が自分に向いている事。辛く、苦しいのは明らかだった。
水柱が無数に上がる中、『ホーネット』はその間をすり抜けて逃げる。敵機が急降下して来ても器用に回避、撃墜する。だが敵機は諦めずに、執念深く爆弾や魚雷を次々に投下して来る。
空から降ってくる爆弾の雨。海中を翔ける魚雷の大群。そんなのから逃げ続ける事など、できるはずがなかった・・・
『敵機急降下！』
見張り兵の絶叫が響き、敵機の急降下音が天空に響く。
「取舵いっぱぁぁぃッ！」
艦長は叫ぶが、既に敵は爆弾投下体勢に入っていた。さらに、
『左舷より魚雷二本接近！』
魚雷二本が接近して来ていた。
回避など、できるはずもなかった・・・
「総員衝撃に備えろおおおおぉぉぉぉッ！」
艦長の絶叫が艦内全てに響いた。
ホーネットは迫る敵急降下爆撃機と魚雷を見詰め、その時を覚悟した。

レーダーで日本攻撃隊を発見して米機動部隊は戦闘機を発艦させていた。その数は三八機。零戦隊の三倍の数である。攻撃を開始した攻撃隊は次々に撃ち落とされた。
剣達の零戦も必死で迎撃するが、半分以下になった護衛の零戦では十分な護衛をまかない切れない上に敵は三倍の数。撃墜される味方機を悔しそうに見詰め、剣は唇を噛んだ。
「くそッ！　くそッ！」

剣は怒りを弾丸に込めて必死で迎撃するが、味方は次々に撃ち落される。

目の前の敵機に照準を合わせたその瞬間、後方から、ダダダダダダダダッ！　と敵機の機銃が掃射され、驚いた剣は操縦桿を倒して回避しようとしたが、キュンッ！　という軽音を立てて、敵機の弾丸がコックピットの窓を貫通し、剣の右肩を撃ち抜いた。

「あぐッ！」

剣は顔をしかめ、辺りに赤い鮮血が飛び散った。

すぐに反転上昇して敵機から逃げようと考えたが、今ここで自分が逃げれば味方の攻撃機が危なくなる。剣は右肩の痛みを堪え、敵機に向かって行った。

数機の敵機を撃ち落とし、味方も数機撃ち落された時、一機の九九艦爆が急降下、爆弾を敵空母に命中させた。敵空母は炎上した。

「や、やった・・・ッ！」

剣は炎上する敵空母を見詰め、歓喜した。が、その九九艦爆は敵機に撃ち落とされた。

「このおおおぉぉぉッ！」

剣は機体を急降下させ、敵機に機銃を撃ち込んだ。敵機は黒煙を引いて落下した。そして、上昇した時、隊長機が反転した。撤退だった。

「くそッ！」

剣も仕方なく反転した。が、逃げる味方を敵機が狙う。剣達零戦隊は再び反転し、敵機に突っ込んだ。

激しい激戦をし、味方攻撃隊が見えなくなるまで踏ん張り、剣達も撤退した。

全速力で攻撃隊に追いついた剣達は我が目を疑った。

前方を飛んでいる攻撃隊の数は、艦爆・艦攻それぞれたった四機。それぞれ約二〇機もいた攻撃隊は、ほんのわずかしか残っていなかった。

振り返ると、零戦も自分を含めて三機にまで減っていた。その中

には、ラバウルから一緒に来た仲間も、仲良くなったばかりの艦載機搭乗員もいなかった。
剣は肩の痛みの他に、もう一つの、もっと強い痛みを感じながら、悔しそうに唇を噛み、操縦桿を握り続けた。

「ホーネット！」
『ホーネット』の艦橋に飛んで来たエンタープライズが見たのは、頭から血を流してぐったりと床に倒れている妹の姿だった。
「ホーネット！　しっかりしろッ！」
エンタープライズはぐったりとしているホーネットの弱り切った身体を抱き上げる。
ホーネットは意識はしっかりしているようで、エンタープライズの声を聞いてそっと表情を和らげた。
「姉さん・・・ケガはない？」
「バカッ！　人の心配よりも自分の心配をしろ！」
「・・・泣いてるの？」
「バカヤロ・・・ッ！　泣いてなんかねぇよ・・・ッ！」
そう言うものの、エンタープライズは蒼い瞳からぽろぽろと涙を流していた。猛将と呼ばれ、多くの艦魂達に慕われている姉が、自分の為に泣いてくれた。いつも足を引っ張ってばかりのダメな妹なのに、泣いてくれた。
不謹慎だが、そんな想いが胸に広がり――嬉しかった。
「姉さん・・・泣かないで・・・まだ敵は・・・生きてるんだから・・・まだ戦わないといけないんだから・・・ここで止まっちゃ・・・ダメだよぉ・・・」
血を流しながらも敵を撃滅する事を最優先にしている勇ましき妹を見て、エンタープライズはぽろぽろこぼれる涙をゴシゴシと袖で拭いて決意した。
「わかった！　必ず、あんたの仇を討ってやる！」
「お願い・・・姉さん・・・」

ホーネットの身体をそっと床に置くと、エンタープライズは憎しみ一色に染まった蒼き瞳で敵機が去った方向を睨みつける。
「絶対に許さんぞジャップどもッ！　必ず貴様らにも地獄を見せてやるッ！」
エンタープライズはホーネットの応急処置をすると自艦に戻った。
必ずホーネットの仇を討つ。そう胸に誓って。

一方、日本軍にも悲劇が起きた。
『左三〇度方向より敵機襲来！』
見張り兵の報告が入った『瑞鶴』艦内に戦慄が走った。
瑞鶴は急いで確認すると、蒼い空に無数の黒いシミが見えた。それを確認し、瑞鶴は顔を真っ青にした。
「姉さんが危ない・・・ッ！」
ちょうどこの時、敵機、『翔鶴』部隊、『瑞鶴』部隊の順で一直線になっており、敵機は一番手前にいた『翔鶴』に向かって群がった。
いてもたってもいられなくなった瑞鶴は防空指揮所に上がって姉を見詰めた。
敵機の群れの中、『翔鶴』は一騎当千のごとく敵機を蹴散らしながら水柱だらけの海を翔けて行く。その姿はまさしく鶴の様に可憐で、勇ましかった。
「姉さん！　姉さんッ！」
瑞鶴は必死に戦う姉をずっと呼び続けた。

『翔鶴』は敵機が襲って来る中をひたすら突撃して敵機を粉砕していった。
「貴様らの相手はこの私だ！　私は逃げん！　ここで貴様らを海の藻屑（もくず）にしてくれる！」
防空指揮所で仁王立ちしている翔鶴は勇ましいを通り越して恐怖すら感じる迫力だった。長い髪を揺らして、翔鶴はひたすら敵機を

睨み付け、近づく敵機に軍刀で切り付ける。切り付けられた敵機は単座機銃によって撃墜された。

艦魂と艦は一心同体。艦魂が思った方に攻撃すれば、高確率で機銃やら高角砲がそこへ攻撃してくれる。それが艦魂の戦い方だ。

翔鶴はひたすら軍刀を振り回すが、それは全て敵機を切り、機銃や高角砲がそれを撃墜する。すさまじい攻撃の嵐だ。近づくものは全て翔鶴の刀の鍔に輝かされ、次の瞬間には炎に包まれる。猛将と呼ばれる翔鶴はやはり只者ではないのだ。

だが、そんな無敵の翔鶴であっても、一つだけ弱点がある。それは・・・

「敵機！『瑞鶴』に向かう！」

「何だと！？」

横にいた見張り兵の叫びに、翔鶴は躊躇なく妹を見た。が、それが命取りだった。

「敵機直上！　急降下！」

気が付いた時には敵機数機が頭上から猛スピードで急降下して来た所だった。

翔鶴はダンッ！　と軍刀を鉄の床に叩き付ける。

襲い来る敵機を睨み付け、彼女は一歩も引かなかった。それが、猛将と謳われる空母『翔鶴』の艦魂だった。

「貴様らごときに殺られる私ではないわッ！　鬼畜米英めッ！」

その叫びの刹那、空母『翔鶴』の甲板が吹き飛んだ。

「『翔鶴』被弾ッ！」

「姉さんッ！」

瑞鶴の瞳に映っているのは、天高く黒煙を上げる姉の壮絶な姿だった。

「姉さん！　姉さんッ！」

黒煙を上げて甲板に火災が起きた『翔鶴』だが、敵機に向かって壮絶な対空砲火を続けている。その姿に、瑞鶴はほんの少しだけ胸

を撫で下ろした。
「大丈夫だよね・・・姉さんは、絶対に大丈夫だもん」
そう自分に言い聞かせ、瑞鶴を平常心に戻る。が、
「敵機来襲ッ！」
その絶叫に顔をもたげると、敵機が自分に向かって殺到していた。
「い、いやあああぁぁぁッ！」
瑞鶴は目の前の恐怖に目を背けた。その時、
ダダダダダダダダダッ！　と機銃音が響き、敵機数機が撃墜された。驚いていると、敵機の後方から数機の零戦が突っ込んできた。
次々に機銃を放って敵機を撃墜する。
「あ、あれは・・・？」
瑞鶴はあまりにも突然の事に驚く。
あっという間に敵機を撃墜し、零戦隊は『瑞鶴』の上空を低空飛行しながら旋回する。その時、そのうちの一機のパイロットに瑞鶴は驚く。
「せ、刹那ッ！？　何でここにいるのッ！？　攻撃隊はッ！？」
もう何がなんだかわからない。混乱した瑞鶴はその場にぽかんと立ち尽くすしかなかった。
そんな彼女の上空では、再び敵機が『瑞鶴』に向かって突っ込んで来ていた。

「全機突撃！」
迫る敵機に向かって刹那は全速力で飛んだ。
そんな彼を追いかけるように他の零戦も全機が最高速度で突っ込んだ。
照準を合わせ、機銃を撃ち込む。
零戦に搭載されている二〇ｍｍ機銃が敵機を次々に撃ち砕く。蜂（はち）の巣になった敵機は次々に黒煙を拭いて海に落ちていく。
撃ち落された味方の仇と、敵戦闘機が突っ込んで来た。刹那はベテランの力で、まるで自分の体のように機体を捻って回避、反転し

て敵機に照準を合わせる。
「これでもくらえッ！」
機銃を掃射し、向かって来た敵機を撃ち落とした。
零戦隊は散開、他方向から機銃を掃射したが、敵機に挟み込まれ次々に撃墜された。
この頃、すでに零戦無敵神話は崩壊し始めていたのだ。
激戦とミッドウェー海戦の大敗北の影響で熟練の、特に真珠湾攻撃からの歴戦の搭乗員はほとんど戦死し、さらに米軍は対零戦戦法を生み出し、そのせいで通常搭乗員や新米搭乗員が次々と戦死。今や零戦の栄光は終わっていると言っても過言ではなくなっているのだ。
そんな零戦に乗る刹那は仲間の死に唇を噛むと、迫る敵機に突貫した。
仲間数機をやられながらも敵機を次々に撃墜し、刹那達はなんとか『瑞鶴』を守りきれた。

「姉さん！」
敵機が去ってようやく瑞鶴は翔鶴に対面する事ができた。だが、
「・・・だから、勝手に自艦を離れるなと言うに」
防空指揮所でぐったりしている翔鶴を見て、瑞鶴は狂ったように姉を呼んだ。
「姉さんッ！　大丈夫なのッ！？」
「うるさい。少し黙れ。傷が痛む」
しかし、翔鶴は相変わらずクールだった。すでに自分で止血、応急処置を終えていた。だが、頭や腕に巻かれた包帯はとても痛々しい。
瑞鶴は泣きながら翔鶴を見る。
「もう。心配かけさせないでよね」
「お前に心配されるとは、私も堕ちたものだな」
翔鶴がいつものように憎まれ口を言った刹那、右頬に鋭い痛みが

走った。
驚く翔鶴を睨み付ける瑞鶴。それは、今まで翔鶴が見た事のないほどの怒りを秘めた瞳だった。
――その瞳は濡れ、甲板で燃える炎に照らされて赤く燃えていた。
「そんな言い方やめてよ」
瑞鶴は搾り出すように言う。
翔鶴に抱き付き、震える体を翔鶴にくっ付けて泣き出した。
「心配するのは当たり前だよ。だって、私達――姉妹でしょ？」
その言葉に、翔鶴は何も言えなかった。
しばらく瑞鶴は翔鶴の胸の中で泣いていたが、突然翔鶴が瑞鶴を抱き締め返した。驚く瑞鶴に翔鶴は、今まで見せた事のないような優しい笑みで瑞鶴を見詰めていた。
「ごめんな、瑞鶴。お前の気持ち、すごく嬉しいよ」
「姉さん・・・ッ！」
再び泣き出した妹を、翔鶴はいつまでも抱き締めていた。

『翔鶴』は敵急降下爆撃機の爆弾を受けて中破した。
だが、すでに第二次攻撃隊が発艦した後だったので、反撃の布石を打つ事はできていた。
その後『翔鶴』は南雲司令部を乗せたまま戦線を離脱。その後航空戦の指揮は第二航空戦隊（改装空母『隼鷹』を中心とした第二機動部隊。ちなみに、この海戦の少し前に『翔鶴』『瑞鶴』『瑞鳳』は『赤城』『加賀』の後を継いで第一航空戦隊に昇級した）司令官、角田覚治（かくだかくじ）少将に任せた。

刹那は敵機が来ないと確認すると『瑞鶴』に着艦した。
甲板に下りた刹那に駆け寄った瑞鶴はまずお礼を言った。
「助けていただき、ありがとうございます」
そう言ってぺこりと頭を下げると、今度は突如刹那の襟首を掴み彼を睨みつけた。

「戻って来たという事は、任務を放棄したんですね？　護衛戦闘機の数が減った攻撃隊はどうなると思ってるんですかッ！？」
　今にも泣きそうな顔で激怒する瑞鶴に、刹那はただ「ごめん・・・」としか返せなかった。
「でも、いくら攻撃が成功しても、母艦がなくなちまってたら意味がないでしょ？」
「攻撃してこそ勝てるんですッ！　犠牲を恐れては戦争なんてできませんッ！」
「日本海軍にとって、お前と翔鶴は虎の子の空母なんだぞッ！？向こうは沈没してもすぐに造れるけど、こっちはそうもいかないッ！　それほど圧倒的な敵と戦ってるんだぞ、僕達はッ！」
「で、でも・・・ッ！」
　それでもまだ食らい付く瑞鶴に、刹那は小さく首を振った。
「それに、お前を見捨てられるかよ・・・」
　その言葉に、瑞鶴は何も言い返せなかった。
　ただ、蒼い空を見詰めるその瞳はとても悲しげに揺れていた。
「護衛戦闘機の数が不足した攻撃隊・・・無事ならいいんですが・・・」
　瑞鶴はそうつぶやくと、心の底から必死に攻撃隊の無事を祈った。

　この後、米軍第三次攻撃隊は日本機動部隊を発見できず、前衛艦隊を攻撃。重巡洋艦『筑摩（ちくま）』を大破させた。

『ホーネット』の火災がまだ鎮火できていないアメリカ艦隊にさらなる悲劇が起きた。
『敵襲ッ！』
　その報告にアメリカ艦隊に衝撃が走った。
　エンタープライズは防空指揮所にいて少し離れた所にいる『ホーネット』を一瞥し、迫る敵機を睨みつけて対空戦闘に入る。
　一方、ＣＩＣ（Ｃｏｍｂａｔ　Ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎ　Ｃｅｎ

ｔｅｒの略　戦闘指揮所の事）にいるハルゼーは「Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！」と狂ったように叫んでいた。

「貴様らにはもう決してホーネットは傷付けさせん！」

エンタープライズは激昂しながらそう怒号を飛ばす。

『エンタープライス』は『ホーネット』を後方に下げて全速力で敵機に突っ込んだ。

敵機は自ら接近して来る空母に次々と群がった。その時、ホーネットが悲鳴を上げたのを彼女は知らない。

猛将翔鶴と同じように、猛将エンタープライズも敵機に恐れる事なく一騎当千の勢いで敵機に突っ込む。だが、エンタープライズが振り回しているのは刀ではなく拳銃だった。百発百中の腕を振り回し、敵機を次々に撃墜していく。

火の塊となった敵機は次々に海面に落下して行く。だが、いくら敵機を落としても爆弾や魚雷の嵐は止まらない。敵機が多すぎるのだ。

「面舵いっぱぁぁぃッ！」

艦長が防空指揮所で彗星のように落下して来る敵機を睨みながら叫ぶ。

『左舷魚雷二本接近！』

『左一二〇度方向より魚雷三本接近！』

『右三〇度方向より魚雷接近！』

『敵機直上！　急降下！』

次々にＣＩＣに入ってくる報告に司令部は驚愕した。

「魚雷など構うものか！　突っ込め！　ＧＯ！　ＧＯ！」

「長官。それはちょっと・・・」

参謀長は暴走するハルゼーを止めようとするが、前しか見えていないハルゼーはそんな参謀長の声は聞こえない。

「ジャップごときに負けはせん！『サウスダコタ』と『ワシントン』（どちらも戦艦）は対空砲弾を撃ちまくれ！」

「長官・・・」
参謀長は呆れて何も言えなくなる。そして、前司令官だったフレッチャー中将と比べて前途多難と思って肩を落とす。
その間も艦長の見事な操艦で『エンタープライズ』は敵機の攻撃を避け続ける。その時、
ドカアアアァァァァンッ！
「爆発だと！？　被弾したのか！？」
「いえ、本艦ではないようです！」
ハルゼーが荒い息で参謀長の胸倉を掴む。
だが、今の爆発音は何だったのだろうか。それはすぐにはっきりした。
『戦艦『サウスダコタ』に爆弾一発被弾しました！　あ、『サウスダコタ』より発光信号！『我、被害軽微ナリ　航行及ビ戦闘ニ問題無シ』！』
その報告に、ハルゼーはさらに興奮する。
「問題ないなら突っ込め！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！」
そんなハルゼーを見て参謀長は呆れた。
「参謀長」
参謀の一人が不安そうに参謀長を見ると、参謀長はため息した。
「言うな。長官が直情型なのはもう慣れた」
そんなＣＩＣは置いといて、防空指揮所では依然艦長が見事な操艦を続けていた。その横では、遠くで黒煙を上げながらも勇猛果敢に主砲を連射している『サウスダコタ』を見詰めるエンタープライズがいた。
「ちっ、サウスダコタ・・・がんばってくれ」
唇を噛んで襲い来る敵機を睨み付ける。
その時、敵機は一気に総攻撃を仕掛けてきた。
急降下爆撃機は一斉にダイブし、雷撃機は横一列になって低空飛行で接近して来る。

「左二〇度魚雷三本接近！」
「右七〇度魚雷二本接近！」
「左一五〇度方向より魚雷五本接近！」
「左九〇度より魚雷接近！」
「右一二〇度より魚雷二本接近！」
「敵機五機直上！　急降下！」
「敵機さらに十二機急降下！」
それは壮絶苛烈な攻撃だった。エンタープライズでさえ恐怖で表情を硬くした。だが、猛将エンタープライズは迫る敵機を睨み付ける。
「く、来るなら来い！　私は一歩も引かんぞ！」
エンタープライズは大きく叫び、仁王立ちする。憎い赤い日の丸が迫り、次の瞬間、体中に激痛が走り、目に見えたのは赤い自分の鮮血だった・・・

――空母『エンタープライズ』は爆弾三発を受けて中破した――

一方、主力機動部隊唯一の空母となった『瑞鶴』に第一次攻撃隊が戻って来た。
飛行甲板に着艦した残存攻撃隊を見詰め、瑞鶴は言葉を失った。刹那はボロボロの攻撃隊を見詰め、沈黙していた。その時、一機の零戦に駆け寄った衛生兵が「担架持って来てくれッ！」と叫んだ。だが、
「だ、大丈夫です・・・」
そう小さく行ってコックピットから降りたのは、飛行服の右肩付近が黒く変色し、今でも赤い血が傷口からドクドクと出ている少年だった。その顔色は真っ青だった。
「じっとしてろ！」
「だ、大丈夫ですって・・・」
そう言って衛生兵の助けを断り、少年はフラフラと歩くと、瑞鶴

と目が合った。
「え？」
驚く瑞鶴に、少年はフラフラと駆け寄る。
「・・・君、『瑞鶴』の艦魂だよね・・・？」
「え？　あ、はい。そうですけど・・・」
突然の事態に困惑する瑞鶴に、フラフラの少年は静かに名乗った。
「瑞鳳航空隊所属・・・大空剣少尉・・・」
「瑞鳳の・・・？」
瑞鶴の問いに剣はうなずく。そして、不安げに今度は瑞鶴に問う。
「それで・・・『瑞鳳』は・・・？」
不安で押し潰されそうな表情をする剣は、最悪の想像をした。が、そんな彼に瑞鶴は小さく微笑んだ。
「瑞鳳と姉さんは、敵機の攻撃を受けて中破。それぞれ戦線を離脱しました。もう瑞鳳ならもう安全圏を出ているでしょう」
瑞鶴の言葉に、剣は「そう・・・良かった・・・」と小さく安堵した。そんな彼を見詰め、瑞鶴は小さく微笑む。
「瑞鳳とお知り合いなんですか？」
「うん。今回から配属されてね。それまではラバウルにいたんだけど」
「え？　ラバウルですか？　じゃあ神風少尉ともご面識が？」
そう言って刹那に振り返った時だった。
「神風！」
その横から攻撃隊の隊長が出て来て刹那を呼んだ。その顔は真剣だった。
隊長は刹那と目を合わせると、
「バカヤローッ！」
と、爆弾でも炸裂したと思わせる怒声を出し、刹那の顔面を思いっきりぶん殴った。刹那はそのまま後ろに倒れた。
「神風少尉！？」
瑞鶴は駆け寄ろうとしたが、その前に隊長は倒れた刹那の上にの

しかかり、そこでもう一発顔面に拳を入れた。
刹那は隊長の拳を受けても、何も返せなかった。
隊長は悔しそうに唇を噛むと、刹那に怒鳴った。
「貴様が反転した為に、味方は散々だ！」
隊長の怒りは納まらず、刹那の襟を乱暴に掴んだ。
「帰って来たのはわずかに十二機！　全五四機のうちたったの十二機だぞ！　三枝（さえぐさ）も大村（おおむら）も火だるまになって戦死した！　大空達がいなかったら全滅していた可能性もあったんだぞッ！」
「隊長！　やめてください！」
そこでボロボロの剣が止めに入った。
自分達を守って負傷した剣を見て、隊長はもう一度刹那を睨んで立ち上がった。
「貴様の命令違反を、俺は絶対に許さん！」
隊長はそのまま立ち去った。
「刹那、大丈夫？」
剣が手を差し出すと、刹那はそれを断って立ち上がった。そして、負傷した剣を見て、
「すまなかった・・・」
「気にしないでよ。君の行動も間違いじゃなかったんだから」
そう言って剣は優しく微笑む。そんな剣に、刹那は何度も「ごめん・・・」と謝る。
そんな二人を見詰め、瑞鶴は嬉しそうに微笑む。
「お二人はお知り合いなんですか？」
「あぁ、僕ら二人はラバウルで会ったんだけど、その前に実はミッドウェーまで第二航空戦隊で一緒だって知ってな、それ以来仲はいい」
刹那の説明に、瑞鶴はハッとする。
「・・・という事は、大空少尉も『蒼龍』に？」
「いや、僕は『飛龍』に乗ってたんだ」
「飛龍さんにですか？」

「うん。刹那は蒼龍に説得されて戦艦『榛名』の艦魂と艦を降りたらしいけど、僕は絶対に降りる気なんてなかったんだ。でも・・・」
剣はそこまで言い、悲しげに笑った。
「最後の最後で、あいつは僕を近くの駆逐艦に飛ばしやがった。慌てて『飛龍』を見た時には、『飛龍』は艦尾からゆっくりと沈んでいく所だった。まったく、ひどい奴だろ?」
剣は力なく笑う。その笑みの後ろにある辛い想いに、瑞鶴は何も言えなかった。
沈黙してしまった瑞鶴に、剣は今度は心の底から優しい笑みを浮かべた。
「でも、今こうして生きてるんだ。それもこれも、全部あいつのおかげさ」
「大空少尉・・・」
「剣、ひとつ言っていいか?」
「うん? 何、刹那?」
「とりあえず手当てを受けて来い。じゃないと出血多量で飛龍の後を追う事になるぞ」
刹那の言葉に、剣はやっと自分がけが人だと思い出したらしい。
「い、いってえええぇぇッ!」
ご丁寧に今頃痛みを感じ始めたらしい。
剣はその後、そのまま医務室に向かった。

第七章　第七節　隼鷹涙の逆襲　ホーネットの最期

その頃、第二艦隊所属第二航空戦隊・商船改装空母『隼鷹』がついに動き出した。

「攻撃隊を発進させてください！　もう我慢できません！」

大声で言うのは第二航空戦隊司令官角田覚治少将であった。彼は現連合艦隊最強と呼ばれる勇猛果敢な闘将である。

元々彼は航空機主義を一切否定し、『腰抜けの空論、たとえ航空機が無くても戦うのが海軍軍人魂』と主張していた。だが、真珠湾攻撃で飛行機の優位性を理解すると、柔軟にそれを認めて航空戦隊の司令官に就任した男だ。

角田は恨みがましそうに敵機動部隊が展開しているであろう方角を睨む。

「山口の仇、必ず討ってみせるッ！」

角田の言う山口とは、ミッドウェー海戦で最後まで『飛龍』と共に戦い抜いた猛将山口多聞中将（死後昇級）である。山口と角田は同じ海軍学校出身の後輩先輩という関係だった。お互いに『見敵必戦』という考え方だったので仲も良く、後輩である山口が先に大佐・少将に昇級してもそれを自分の事のように喜び、『彼が指揮官なら、何時でも喜んで指揮下に入る』と言っていた。だが、山口はミッドウェー海戦で戦死し、角田は山口が戦死した事を深く悼んだ。その際角田は『山口を機動部隊司令長官にしてあげたかった。彼の下でなら、喜んで一部将として戦ったのに』と言った。

そんな山口の遺志を継ぐ角田は山口と同じく上層部の命令を無視して攻撃隊発進を命じた。似た者同士なのだ。

余談だが、角田は闘将でありながら部下に対しては非常に温厚かつ丁寧な態度を見せ、水兵や下士官に対しても決して上官風をふかさず「おはようございます」「お疲れ様」と挨拶を交わし、部下将兵にも慕われていた。だが挨拶された側は、上官である角田にどう

挨拶を返したらいいか困ったらしい。
そんな角田の横では、隼鷹が顔を真っ赤にさせて激昂していた。
「翔鶴お姉ちゃんの仇、絶対に討ってやる！」
大好きな翔鶴をケガさせられた隼鷹は幼い顔をその年齢ではありえない怒りの色に染めて激怒していた。その瞳からは涙が溢れる。
「飛行長！　攻撃隊を出してください！」
角田の言葉に対し、飛行長は複雑そうな顔をした。
「しかし司令。敵は攻撃範囲外です。今出しても攻撃隊が帰って来れません」
そんな至極当然な飛行長の言葉に、角田はニヤリと不敵に笑った。
「だったら、この『隼鷹』を敵艦隊に全速力で向けましょう。空母は海上を動く航空基地。でしょ？」
角田の言葉に、飛行長は唖然としていた。敵艦隊に近づけば、それだけ敵機の攻撃範囲に入ってしまって危険なのだ。だが、
「大丈夫です。それに空母二隻を中破させられて、黙ってる訳にはいきませんよ」
角田の少年のようなキラキラした瞳に、飛行長はため息混じりにうなずいた。
「まったく、司令のお考えはいつも私達の度肝を抜きますなぁ」
「それはほめているのか？」
「どっちもですよ」
飛行長の笑みに角田も笑顔でうなずくと、すぐさま司令官の顔になって部下達を見詰め、命令を発する。
「攻撃隊発艦せよ！」
角田の命令で、甲板に用意されていた十数機の攻撃隊が次々に発艦した。
正式空母である『翔鶴』や『瑞鶴』に比べたら小さな空母だが、その身体からはすさまじい闘志が溢れている。
多くの整備兵や空母兵に見送られ、攻撃隊は次々に発艦する。
緑色の機体に赤い日の丸を付けた零戦、九九艦爆、九七艦攻は、

それぞれ上空で編隊を組み終えると、一路敵機動部隊に向かって飛び立った。
天空に消えて行く攻撃隊に涙を流しながら笑顔で手を振る隼鷹。だが、蒼穹の向こうに攻撃隊が見えなくなると真剣な顔で、
「必ず敵空母を・・・」
静かに、隼鷹は敬礼した。
どんなに幼くても、どんなにかわいくても、彼女は大日本帝国海軍に所属する艦魂――帝国海軍軍人なのだった・・・

「敵襲！　敵機左三〇度方向より接近！」
満身創痍といえる状況のアメリカ艦隊に、止めと言える敵機（『隼鷹』を発進した第三次攻撃隊）が襲来した。
敵機は、もうボロボロの『ホーネット』に群がった。
「はぁ・・・はぁ・・・まだ・・・負けない・・・負けられないの・・・ッ！」
すでに『隼鷹』の第一次、第二次攻撃隊の攻撃で『ホーネット』は死に掛けていた。甲板一面が火で包まれ、すさまじい黒煙を上げていた。ホーネット自身も真っ白な夏用背広型アメリカ海軍軍服を自らの血で真っ赤に染め、もう立ち上がる力も残されておらず、防空指揮所の壁に背中を付けて倒れていた。
「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」
もはや呼吸もままならず、肩で息していた。
もう『ホーネット』には敵機を回避する力など、残っていなかった・・・
「敵機直上！　急降下！」
見張り兵の叫びに、ホーネットはため息した。
辺りからは爆音は響くも対空砲火の音はほとんどない。もう敵機にまともに反撃できるだけの防空能力は残っていなかった。
力なく空を見上げると、敵機数機が爆弾投下体勢に入っているのが見えた。

数はほんのわずかだ。きっと残っている稼動全機を必死に掻き集めて編成した寄せ集めの部隊なのだろう。

ホーネット自身わかっている。

航空戦とは消耗戦なのだ。

出撃すれば犠牲が出る。

何度も何度も攻撃隊を編成して送り込めば、逐次撃破で次々に撃ち落とされる。

何度も攻撃をすれば、見るも無惨な攻撃隊しか編成できなくなる。

手当たり次第に飛行機を集めて攻撃する。それが航空戦なのだ。

まだ経験浅い航空戦は、今も右も左もわからない。

陸上戦が考えられたのは人類が生まれてすぐだ。

海上戦が行われるようになったのは、人間が船というものを手に入れてからだ。

だが、航空戦というのは生まれてわずか数十年。しかも当初はあまりにも無惨な航空戦であったが、今では航空戦にも戦術や戦略が用いられるまでになった。

そんな航空戦は、航空機の進歩と共にいつも劇的に変化する。

この戦争は、まさにその連続だ。

一体何が正しく、何が間違いなのか。誰にもそれはわからない。

ただ、今わかる事は――

――敵機の攻撃がすぐ目の前まで来ているという現実だった――

ホーネットは爆弾投下態勢に入り急降下して来る敵機を一瞥すると、ゆっくりと目をつむり、その何度も受けた時を待った。そして・・・

次の瞬間、空母『ホーネット』の甲板が粉々に吹き飛んだ。

帰って来た攻撃隊を見て、隼鷹はうつむいた。

無事に帰って来た残存機数は見るも無惨なほど消耗していた。

敵に一番近づく一番危険な急降下爆撃機である九九艦爆は最も消耗が激しく、十七機出撃したうち十一機撃墜された攻撃隊もあった。

ボロボロの攻撃隊に、角田も暗い顔をしていたが、頭から血を流した第三次攻撃隊隊長は涙を流しながら角田に敬礼した。

「敵空母一隻、沈没確実！」

その報告に、角田は「そうですか・・・良くやってくれました」と感謝し、生き残った搭乗員ひとりひとりと握手した。

そんな甲板を離れ、隼鷹は防空指揮所に移った。

空はもうオレンジ色に染まり、夕焼けがとても美しい。まるで空が燃えているかのようだ。

隼鷹は、その幼い心の中に、勝利の喜びと、犠牲の悲しさという複雑な感情を混ぜ、そっと、頬を涙で濡らした。

空母『隼鷹』は、数席の駆逐艦に守られながら、残存機数わずかで一路トラック島を目指して全艦取舵を回した。

空母『隼鷹』の壮絶な反復攻撃の後、アメリカ軍は航行不能に陥った『ホーネット』を処分する事を決定。味方駆逐艦二隻から合計九発の魚雷と四〇〇発の主砲弾を食らうが、燃ゆる『ホーネット』は沈まなかった。

この処分攻撃の際、処分命令を受けた駆逐艦の艦魂をエンタープライズは殴り飛ばして処分をやめるよう言ったが、艦の魂であっても、実際に艦を動かす事のできない艦魂には、何もできなかった。

涙を流しながら、泣き叫びながら、二人は魚雷と主砲を撃ち込んだ。せめて痛みは少ないだけにしてあげたい。だが、そんな二人の願いに反して、『ホーネット』は沈まなかった。

一向に沈む気配のない『ホーネット』を見て、二人は安堵と罪悪感で胸を痛めた。

激戦の末、アメリカ海軍は敗北を喫した。

これ以上ここにいても、犠牲が増えるだけ。

アメリカ軍は撤退を決定した・・・

「姉さん・・・お別れだね」
「ホーネット・・・ッ！」
燃える『ホーネット』の防空指揮所で、エンタープライズは血まみれでぐったりとしている大切な妹を抱き抱えながら泣いていた。涙を堪え、唇を噛み、できるだけ妹に情けない姿を見せたくはなかった。それは彼女のプライドであり、妹に心配をかけたくないという優しき姉の想いでもあった。そんな必死に色々な感情に耐えている表情は、誰よりも姉の事を心配するホーネットを悲しませるには十分だった。
「ダメだよ・・・姉さん・・・猛将と謳われた姉さんが・・・そんな顔をしちゃ・・・」
「そんなの・・・誰かが勝手に言い出した事だ・・・私はそんなに強くない・・・口では強がっているが・・・仲間やお前がいないと何もできないダメな艦魂だ・・・ッ！」
「姉さん・・・」
エンタープライズは泣きながら言う。それは今までホーネットが見た事がなく、そして、一番見たかった――姉の本当の姿だった。
くす・・・
ホーネットは微かに笑った。これが本当に体中血まみれで今にも死にそうな女の子の姿なのだろうか。
ホーネットの微笑に、エンタープライズが顔を赤くする。
「な、何よ。何がおかしいのよ」
「ううん・・・おかしくないよ・・・？　ただ・・・」
ホーネットはそっとエンタープライズを見詰める。
蒼い。海の優しい、空の温かい、キレイな蒼色の瞳同士がお互いを見詰め合う。
「ただ・・・最後に姉さんの知らなかった・・・ううん・・・知っていたけど・・・ずっと・・・見れなかった・・・姉さんの本当の姿を見れて・・・嬉しいかっただけ・・・」

「ホーネット・・・」
その時、遠くから汽笛が聞こえた。艦隊が撤退を開始したのだ。
ホーネットは最後の力を振り絞って、今自分にできる最高の笑顔を、エンタープライズに向けた。
風が吹き、二つの金色の髪が揺れる。
「姉さん」
ホーネットは上半身を起こし、エンタープライズの頬にキスした。
ホーネットはそのままエンタープライズに抱き付いた。
懐かしい香りが嬉しくて、嬉しくて・・・泣きながら・・・
「私の分も・・・ヨークタウン姉さんや・・・レキシントンさん・・・ワスプの分まで・・・生きて・・・そして・・・必ず・・・アメリカを・・・愛する祖国を・・・救って・・・」
それは、妹の最後の言葉だった。
エンタープライズはその言葉に涙を堪えて小さくうなずく。
「わかった。私、必ずアメリカを勝利に導いてみせる。だから、あなたはゆっくり休んで」
まるで彼女の返事を待っていたかのように、エンタープライズの言葉の後、ホーネットの瞳はゆっくりと閉じられた。
意識を失ったホーネットに自身の上着を布団代わりに掛け、エンタープライズは立ち上がり、静かに敬礼した。
そして・・・
一際大きい波の音が響いた時には、エンタープライズは姿を消していた。
ホーネットの金色の髪と、エンタープライズが掛けて行った白い軍服が、風に揺られて小さくはためいていた。

アメリカ艦隊から見捨てられて、大傾斜しながらも浮き続ける空母『ホーネット』に、思わぬ来訪者が現れた。
今目の前には見慣れぬ水兵の服を着た、黒髪黒眼の少女二人がいて、そのどちらもが自分に向かって敬礼していた。一方はセミショ

ートのまじめそうな女の子、もう一人は後ろの方で纏めたツインテールをしたクリッとしたかわいい女の子だ。
「あなた達は・・・？」
ほとんど自分でも聞き取れないほど小さな声でホーネットは訊いた。
「大日本帝国海軍陽炎型駆逐艦十九番艦・駆逐艦『秋雲（あきぐも）』」
セミショートの少女――秋雲は静かにそう名乗った。
「同じく大日本帝国海軍夕雲型駆逐艦二番艦・駆逐艦『巻雲（まきぐも）』」
ツインテールの少女――巻雲は名を名乗ると再び敬礼する。
少女達は凛とした声で自分達の名を名乗ってくれた。
名乗られたからにはこちらも名乗る。それが海軍軍人の礼儀である。
「私は・・・アメリカ合衆国海軍・・・ヨークタウン型航空母艦三番艦・・・空母『ホーネット』・・・」
かすれた声でホーネットは名乗った。
ホーネットの言葉に二人は静かにうなずく。
「空母ホーネット。あなたの殊死奮戦の活躍は、我が帝国軍でも賞賛されています」
そう秋雲が言うと、ホーネットは「そう・・・」と小さく言った。
「それは、ありがたい・・・私の名前が後世まで残る・・・」
苦笑するホーネットに、巻雲はなんと傷の手当てをした。
「ど、どうして・・・？」
驚くホーネットに巻雲は優しい笑顔で、
「戦いは終わりました。もう我々が戦う理由はありません。ならば、目の前で傷付いた人を見たら手当てをするのは当たり前です。と言っても、艦魂の対するものですから、せめて痛み止めにしかなりませんが」
巻雲の言葉に、ホーネットの胸に何か温かいものが流れた。
「・・・私は、勘違いしていたの・・・？」
日本人は世界正義を脅かす狂った種族で、殲滅するのは当たり前

だと教わってきた。だが、今目の前にいる二人を見ると、それが間違いではないかと思ってしまう。

「私は、日本人は倒さなければならない敵だと思っていた。でも・・・」

「私達もそうです。鬼畜米英と習い、あなた方アメリカ人は帝国の栄光を遮るものだと教わってきました。でも、あなたを見る限りそうは思いません」

秋雲の言葉に、ホーネットは何も返せなかった。

「私は別にアメリカが嫌いという訳ではありません。上官の命令で戦っているだけです。まぁ、唯一嫌いなのはあのルーズベルト大統領だけです」

巻雲の言葉に、ホーネットはくすりと笑ってしまった。

「ルーズベルトか・・・私もあいつは嫌い・・・国民には・・・好かれているらしいけどね」

「日本ではあの人の事を《ペテン師》と呼んでます」

「ペテン師？　あははは・・・そのとおりね・・・うん・・・なかなか・・・気の利いた名を・・・付けるわね」

ホーネットの笑いにつられ、二人も笑ってしまった。

しばらく三人は敵国軍同士という事を忘れて談話した。もちろんそれは普通の話だ。ホーネットは自ら愛する祖国が不利になるような事は言わないし、秋雲と巻雲もそのような事は一切訊かなかった。そんな二人の気遣いにも、ホーネットは静かに感謝した。

人種や国を越えた繋がり。が、それも十数分の事だった。

突然二人は立ち上がり、悲しい顔でホーネットを見詰める。

「今命令が下りました――あなたを雷撃処分します」

秋雲の言葉に、ホーネットは静かに笑った。

「そう・・・」

「我々はあなたを日本へ連れて行きたかったんですが、損傷が激しく、どうしようもないという事がわかりました」

巻雲の悲しい声に、ホーネットは笑顔で言う。

「それは良かった・・・一応・・・私も合衆国海軍の空母だもの・・・味方と戦うくらいなら・・・自ら死を選ぶわ・・・」

ホーネットの勇ましく儚い言葉に二人は最高の敬礼をした。

「「貴官のご冥福をお祈りします」」

そう言って、秋雲と巻雲は光に包まれて消えた。

直後、ホーネットの聞いた事のない演奏が聞こえた。それは、日本海軍の軍歌の一つ、鎮魂歌『海行かば』だった。たとえ敵艦であっても、最後は情けを掛ける。それが日本海軍――日本という国であった。

「なんていい曲なの・・・」

ホーネットは涙を流しながらその曲に耳を傾けた。

風に乗って来るメロディに、ホーネットは心から日本海軍に感謝した。

そんな彼らを、最高のライバル国だと思った。

「あなた達に負けて・・・私は悔いはない・・・」

ホーネットは心からそう思った。

曲が終わり、月夜に照らされる敵駆逐艦二隻――『秋雲』『巻雲』の甲板には多くの兵が敬礼していた。それが、ホーネットにはすごく嬉しかった。

そして・・・

遠くで何かが着水した音が聞こえ、次の瞬間、月に照らされる海に数本の白い軌跡が見えた。

それはなぜかとても遅く、スローモーションのようだった。

『死の直前は、時間がゆっくり流れる』

そんな言葉をどこかで聞いた事がある。

その瞬間、今までの記憶が走馬灯のように甦った。

いつも笑っていて優しかったヨークタウン姉さん・・・

軍人らしく、いつも厳しいが本当は優しいエンタープライズ姉さん・・・

そんな二人の妹でいられて、本当に嬉しかった。

少し先にはエンタープライズ姉さんがいて、遠い海の底にはヨークタウン姉さんがいる。自分ももうすぐヨークタウン姉さんと同じく海に沈む。

思えば短い命だった。生まれてからたった一年でもう死を迎えなければならないのだから。

もし、日本と戦う事がなければもっと長生きできただろう。でも、兵器は戦っている時にこそ輝く物。平和な時代に生まれ、何もせずにただ訓練の毎日になるのと比べれば、艦魂にとっては嬉しい限りだった。

そして、日本という国は、本当はすばらしい国だともわかった。今はまったく日本の事を恨んだり憎んだりできなかった。

戦えた事に、今は誇りを持てる。そう思った。

「でも・・・」

ホーネットは静かに日本に謝った。

「まだ・・・戦争は終わらない・・・そして・・・まだ姉さんが残ってる・・・まだ戦争は終わらないのよ・・・」

寂しいそうに言う。

変えられない現実。

戦争という悲惨な歴史。

この戦いはまだ続く。そんな気がしてならない。

きっとこれからも日米双方で多くの人間や艦魂達がこの海に沈むだろう。

でも、それが戦争なのだ。

刹那、ホーネットは一面に星が煌く夜空に小さく笑い掛けた。

「でしょ？　姉さん・・・」

その瞬間、艦が大きく揺れ、ホーネットの意識は永久に途絶えた。

――空母『ホーネット』、他の姉妹艦とは年の離れたこの新鋭空母は、今までの空母の欠点をできる限り改良した、まさに合衆国海軍の空母技術の粋を結集させた空母であった。日本本土を空襲し、

ミッドウェー海戦では無敵の日本機動部隊を壊滅させ、常にその身を前線に置き続けた。そんな『ホーネット』は激動の時代の中、僅か一年の短い生涯を終え、ソロモンの海深くに沈んで逝った――

この海戦で日本軍は重巡洋艦一隻大破。空母『翔鶴』『瑞鳳』を中破。駆逐艦二隻が小破した。

米軍は空母『ホーネット』、駆逐艦一隻沈没。駆逐艦一隻大破。空母『エンタープライズ』中破。戦艦『サウスダコタ』、軽巡洋艦一隻が小破した。

奇しくも、この日はアメリカ海軍の海軍記念日であった。

この海戦を発表したアメリカのラジオは、史上最悪の海軍記念日と報じたという。

この海戦で米軍は『ホーネット』沈没。『エンタープライズ』中破で稼動空母が〇隻になった。これ以降、米軍は空母なしでしばらく戦うという辛い時期を迎える事になった。

一見すれば日本軍の勝利に思えるが、実際は同時に行われた輸送作戦は失敗。陸軍への航空支援も失敗した。

そしてなにより、陸軍の作戦の延長と米機動部隊を優先した海軍との間の溝により共同作戦は実質不可能となり、この海戦の二日前の二四日、ガダルカナル島に生き残っていた陸軍部隊は補給・援護なしの総攻撃を敢行。強大な敵兵力の前に壊滅した。

日本海軍は海戦にこそ勝利したものの、本来の任務が失敗し、結果は日本軍の戦術的勝利・米軍の戦略的勝利という、限りなく引き分けに近い形となった。

この後、南雲長官は機動部隊司令官から転属し、真珠湾以来常にその身を前線に置いていた日本機動部隊、通称《南雲機動部隊》は、永遠にその名称を封印する事になった。

そして、この日本機動部隊の最後の勝利となった海戦を、南太平洋海戦と呼ぶ。

第七章　第八節　悲しげな瞳

トラック島に戻った艦隊は連合艦隊旗艦である大和に海戦の戦果を報告していた。
「以上。敵空母はしばらく行動不能だろう」
金剛の報告に、大和は笑顔で応える。
「ご苦労様。もう休んでください。翔鶴さんと瑞鳳の具合は？」
「大丈夫。姉さんも瑞鳳もそう簡単には死ぬような人じゃないよ」
瑞鶴の少し外れた返事でも、大和は二人がそれほど深刻でないとわかった。
「機動部隊の皆さんは本当にご苦労様でした」
「ううん。本当にがんばったのは敵空母に止めを刺した隼鷹だよ」
そう言って瑞鶴は勇ましく勇姿を浮かべる『隼鷹』を見詰める。
『隼鷹』の艦載機が一桁になるまで行った壮絶な攻撃によって、敵空母一隻撃沈という大戦果を挙げたのだ。
隼鷹は今、翔鶴の看病（無理やり）やっている為ここにはいない。
そんな今海戦の英雄とも言うべき隼鷹に、大和もうなずく。
「そうね。あの子もよくがんばった」
大和の言葉に、皆は否定せずにうなずく。が、そんな中金剛だけは首を横に振った。
「いや、大和。本当に敵空母に止めを刺したのは彼女達だ」
金剛はそう言って水兵の服を着た二人の少女を前に出す。二人を見て、大和も嬉しそうに微笑む。
「秋雲、巻雲。よくやってくれました。あなた方は帝国海軍の誇りです」
大和は最高の笑顔で激励を送る。が、
「「どうも・・・」」
連合艦隊旗艦という日本海軍艦魂の最高総司令官である大和の激励にも、二人は浮かない顔をしていた。そんな二人の反応に皆は顔

を見合わす。
「どうしたの？　どこか具合でも悪いの？」
大和が心配そうに声を掛けると、二人は互いの顔を一度見つめ合うとうなずき、決意したように大和に見る。その瞳には真剣な決意の炎が燃えていた。
「あの、アメリカ人は本当に敵なのでしょうか？」
秋雲の言った壮絶な言葉に、今まで勝利の余韻（よいん）に浸っていた部屋が一瞬にして崩れた。
「秋雲。それはどういう事だ？」
金剛はいつもと変わらない口調で訊く。だが、その声の裏には怒りがあった。瞳の奥にはすさまじい怒りの炎が荒れ狂う。
だが、鬼の金剛と呼ばれる最凶の金剛に睨まれても、二人は負けなかった。
「空母『ホーネット』を沈める前に、私達は『ホーネット』の艦魂に会いました」
巻雲の言葉に、部屋はさらに衝撃が走った。敵の艦魂と勝手な理由で会う事は、決して許されない軍規違反だった。
巻雲はいつになく冷たい皆の視線を受けても一歩も引かずに問う。
「その時、ホーネット提督は血まみれで倒れていましたけど、私達に笑ってくれたんです！　私達は今まで鬼畜米英とアメリカ人は悪と習ってきました。でも、彼女を見ていて、本当に彼女達が敵なのか、わからなくなってしまって・・・」
「彼女も、日本が嫌いって訳じゃなかった。命令で仕方なく戦ってたんです！　本当は誰よりも平和を望んでいたのに・・・ッ！」
巻雲と秋雲の言葉に部屋は不気味に沈黙したが、突然鋭い音と共に二人は吹っ飛んだ。鉄の壁に思いっきり背中から叩き付けられ、二人は肺の中の空気を全て吐き出し咳き込む。
「この非国民が！　鬼畜米英に味方しおって！」
そう激昂して怒鳴ったのは金色の髪を不気味に揺らし怒り狂う鬼の金剛。

いつもは海や空と同じ美しい蒼い瞳も、怒りに染まって身体を小刻みに震わせる。

震える二人に殺気を全開させる今回の金剛の行動は、誰も止めなかった。皆、金剛と同じように非国民な二人に怒っている。

震える二人の前でそれぞれの長女である陽炎、夕雲が急いで土下座した。

「申し訳ございません！」

「この二人には私達が後できつく言っておきますから、何卒穏便に・・・ッ！」

二人は必死で妹達をかばおうと土下座をして金剛に謝罪する。が、

「ならんッ！　こんな反抗分子は放っとく訳にはいかんッ！　貴様らにはきっちり海軍精神をもう一度一から叩き直してくれるッ！」

竹刀を振り回す金剛は許す雰囲気ではなかった。それはそうだろう。敵を敵として見られないのでは、軍人失格だし、当時の日本は欧米諸国を敵としているのだ。許されるはずがない重罪である。が、

「金剛さんッ！　もうやめてくださいッ！」

怒り狂う金剛を連合艦隊旗艦である大和が止めた。

暴れる金剛から竹刀を奪うと、大和は真剣な瞳で二人を見詰める。

「秋雲、巻雲、あなた達の言動は許されない重罪です。しかし、今回の戦での功績を差し引いて、あなた方にはしばらく司令部の雑用を命じます。さらに、陽炎さん、夕雲さん、そして私の補佐官の雪風にきっちり説教してもらいます。いいですね？」

それは、大和の温情が混じった処罰だった。陽炎達は泣きながら土下座して喜んだが、

「貴様！　そんな事で良いのか！？　ふざけるなッ！」

金剛は納得いかず、大和に詰め寄る。が、大和はそんな金剛を睨みつける。

「金剛さん。これは連合艦隊旗艦であるこの私が決めた事。逆らう事は許しません」

大和は真剣な瞳で金剛を見据える。

金剛はしばらく苦虫を噛み潰したような顔をしていたが、「ふんッ！」と鼻を鳴らして踵を返し、おろおろする比叡、霧島。舌打ちする榛名を従えて去ってしまった。

だが、金剛達が消えても部屋の気まずい雰囲気は戻らなかった。

「最低ね」

「鬼畜米英に味方するなんて」

「非国民」

「帝国海軍の恥だわ」

周囲から巡洋艦や仲間であるはずの駆逐艦、さらには姉妹からも睨まれうつむく二人。そんな二人を見詰め、大和は皆に命令する。

「今回はこれで解散とします。秋雲、巻雲来なさい」

大和は二人と雪風を連れて部屋を出た。

部屋を出てしばらくしても、大和は口を開かずに沈黙したまま歩き続ける。そんな不気味な沈黙の中最初に口を開いたのは雪風だった。

「何考えてるのよあなた達は・・・」

雪風が呆れたようにため息混じりに言う。

二人にとって姉であり義姉である雪風の冷たい言葉に、二人は必死になる。

「でもッ！　姉さん、本当に彼女は・・・ッ！」

「そういう考えをする事自体信じられない」

秋雲の言葉をバッサリと切り捨てる。いつもはやさしい雪風も、帝国海軍軍人なのだ。

「お義姉さん・・・」

「巻雲。あなたも一体何を考えて――」

「雪風。やめて」

大和の言葉に、雪風は顔をしかめる。

「ですが司令。あなたの温情ある処分には二人の姉として感謝しますが、こんな考えを持っているのは危険すぎます」

「それぞれ色々な考えを持っている。仕方ない事です」

「司令・・・ッ！」
食い下がる雪風を止め、大和は二人に向く。その顔はいつになく疲れている。
「秋雲、巻雲。長門さんに雑用を聞いてそれを行って。私は疲れた」
「「はい・・・」」
そう言い残し、大和は一人通路の先に消えて行った。

「どうしたの？　疲れたような顔してるけど」
航海室で海図の山に埋もれていた翔輝に会いに来たのはもちろん大和だ。
「いえ、ちょっと・・・」
近くにあった椅子に腰掛ける大和に対し、翔輝は立ち上がろうとして何かに躓いて海図の山の中にこけた。
「あーッ！　もう海図がすご過ぎるんだよぉッ！」
「何でそんなに海図を散らかしてるんですか？」
「・・・整理してるんだけど」
「どう見ても散らかしてる様にしか見えないんですけど」
「・・・」
沈黙する翔輝を見て、大和は小さく笑った。
それから少し経ち、翔輝はようやく南太平洋諸島周辺の海図を片付け、休憩という事で大和の隣の椅子に座った。
もう冷めてしまったコーヒーを飲み、翔輝はようやく落ち着いた。
そこで再び落ち込んでいる大和を心配そうに見詰める。
「大和。本当にどうかしたの？」
「うん・・・」
そこで大和はようやく口を開いた。
「あの・・・秋雲と巻雲が軍規違反を起こした挙句・・・戦意を失ってしまったんです」
「はぁ？」
大和は説明した。秋雲と巻雲が軍規違反を起こして敵空母の艦魂

に会った上に、その空母と親しくなってしまい、戦う事に疑問を持ってしまった事を。
しばらく翔輝は黙ってそれを聞いていたが、
「駆逐艦がね。まぁ、艦魂それぞれの考えもあるだろう」
それが翔輝の答えだった。そんな翔輝の返答に大和は驚く。
「いいんですか？　明らかに非国民なんですよ？」
「そう言われてもね。実際戦いたくないのに戦争だからって無理やり戦っている奴もいる。中には捕虜にした敵兵に情を入れてしまって戦えなくなった、彼女達みたいな連中もいる。アメリカ人やイギリス人に友人を持つ軍人もいる。まぁ、日本国民全てが戦争万歳って訳じゃないのさ」
翔輝のすさまじい爆弾発言に、大和は瞳を大きく見開いて驚く。
「そうなんですか？　国民のみんなが戦争を望んでるんじゃないんですか？」
「そりゃそうだ。全てが同じ考えを持つなんて、人間には不可能さ」
翔輝の言葉に、大和は意気消沈する。そして、ふと思う。
「少尉はどうなんですか？」
「僕？」
突然の事に翔輝は不思議そうに首を傾げる。そんな翔輝を大和は真剣な瞳で見詰める。
「少尉は戦争万歳ですか？　それとも反対ですか？」
「僕は中立だけど」
「いや、そこんとこもうちょっとはっきり」
「うーん、どちらかって言えば反対かな？」
その答えに大和は驚き、悲しげな瞳を揺らす。
「ど、どうしてですか？」
「そんなの、戦わなければ一番いいだろ？　それに元々僕は戦いたくて海軍に入った訳じゃないし」
その翔輝の驚愕的な爆弾発言に大和はすさまじく驚く。
「え？　そ、そうなんですか？　じゃ、じゃあ、どうして・・・？」

震える声で問う大和に、翔輝は小さく悲しげな笑みを浮かべる。
「うん？　海軍に入ったのは生活を楽にする為だよ。海軍は給料がいいからね。まだ翔香も生きてて、生活費は必要だったから。まぁ、翔香の為に入った海軍だけど、もう翔香はいないからな・・・」
「少尉・・・」
悲しそうな目をする大和に、翔輝は寂しそうに笑い掛ける。その瞳は闇よりも暗い。
「呆れただろ？　戦う為じゃなくて海軍に入ったんだよ僕は・・・」
「・・・」
大和は無言で立ち上がり、翔輝に背を向けて部屋から出て行ってしまった。
消えてしまった大和に翔輝は小さくため息する。
「呆れられて当然か・・・情けないな、僕は・・・」
近くにあった一枚の海図を広げ、翔輝は苦笑した。

航海室から立ち去った大和は、翔輝のベッドの中に潜っていた。
「少尉・・・」
海軍軍人は戦う為にいる、そう思ってた。
だけど、翔輝は違った。大切な妹と一緒に、平和に暮らす為に海軍に入ったのだ。
「じゃあ、翔香さんがいなくなった今では、ここにいる意味がないじゃないですか」
大和はいつの間にか涙を流し、泣きながら言う。
翔輝が海軍にいるのは翔香の為。でも、その翔香はもういない。ならここにいる理由はない。だけど、今は戦時中。海軍から抜け出す事は不可能。戦いたくないのに、翔輝は海軍に囚われている。
でも、それが、大和には嬉しかった。
翔輝はもうどこにも行けない。もう自分から決して離れない。それが嬉しくて、でも、そんな事を思ってしまう自分が許せなかった。
翔輝は翔香の為に海軍に入り、でもその翔香はもういない。そし

て自分は、そんな翔輝の傍にいたかった。
複雑な心境だった。
翔輝を縛る海軍。だけどそれでもいてほしい。
大和は二つの、決して交わる事のない感情の間で苦しんだ。

一方、大和が去ってからようやく海図の整理が終わった翔輝は甲板にいた。
今日も兵達は機銃や高角砲の整備、甲板の雑巾掛けを行っている。
「うおりゃッ！」
と思えば甲板中部では午前修行の一環として柔道、剣道を行っている兵もいる。
そんな作業服や柔道着、剣道着の世界の中に一人だけ第一種軍装の白い夏用士官服は目立ち、作業や修行を行っている兵はその手を止めて敬礼して来る。邪魔してしまったようだ。
「・・・ここにいては兵達の邪魔になる」
突然の声に振り向くと、そこには無表情でこちらを見詰める武蔵がいた。
いつも思うのだが、なぜ艦魂達はみんな自艦でじっとしていないのだろうか。
ともかく翔輝は声を掛けてきた武蔵に小さく笑みを向ける。
「武蔵。どうしたの？」
「・・・さっきの話」
「へ？」
武蔵はじっと翔輝を見詰める。その瞳にはしっかりとした想いが込められている。
「・・・さっきの話、まだ終わってない」
「さっきの話って？」
「・・・翔輝が海軍に入った理由」
武蔵の小さな声に、翔輝は小さくため息する。。
「・・・聞いてたんだ。盗み聞きなんていい趣味じゃないよ？」

「・・・勝手に聞こえた」
無表情でそんな事を返してくる武蔵に、翔輝は思わず笑ってしまった。
「・・・なぜ笑う」
顔をほんの少し赤く染めた武蔵が不機嫌そうに言う。
「いや、ごめんごめん。何か君らしくなく幼い反応をするからさ」
「・・・ッ！」
顔を真っ赤にさせてうつむく武蔵を見て、翔輝は小さく笑った。
「・・・それ以上笑うと、四六ｃｍ砲を撃ち込む」
武蔵は年齢相応に怒っていて、それがおかしくて翔輝は笑い、武蔵に殴られた。
二人は風が心地良く吹く防空指揮所に移動した。南国特有の暑い風が流れ、海のさざ波が空間に響く。
武蔵の大和の長髪とは正反対のセミロングの髪が風にそよそよと揺れ、武蔵は海を無表情で見詰めながら言う。
「・・・翔輝が海軍に入ったのは翔香の為だったと言った」
「うん。そうだよ」
「・・・なら、今ここにいるのに理由はない」
武蔵の言葉に、翔輝は複雑そうな顔をする。
「うーん。そういえばそうだけど、今は戦時中だから海軍を抜ける事はできないし、それに、抜ける気もないよ？　いい仲間達がいるし」
「・・・それは、水上海兵曹長達の事？」
「うん。もちろん大和や長門さん、君の事もだよ？」
「・・・そう」
武蔵は深くうなずき、何かわかったように、満足した表情を浮かべた。
「・・・それならいい」
武蔵はそう言い残し、急に消えてしまった。
武蔵の消えた後一人残された翔輝は苦笑いした。

「まったく、わからない奴だな」
風が吹き、翔輝は軍帽を深く被り直すと艦内に消えた。

その日の夜、翔輝は航海科の会議を終えて部屋に向かっていた。
「では、自分はこれで」
「うん。お疲れ」
付き添ってくれていた水上は敬礼して別の道に去った。
翔輝はそんな水上を見送るとそのまま自分の部屋に行き、ドアを開けた。すると・・・
「・・・ッ！」
翔輝は我が目を疑った。
そこには、着物を着た少女が立っていた。それはとても懐かしい、とても会いたかった大切な人・・・
「しょ、翔香!?」
「きゃぁッ！」
翔輝は狂ったように翔香の肩を強く掴んだ。
驚く翔香を翔輝は泣きそうな顔で強く抱き締めた。が、
「・・・って、あれ?」
何かに気づき、翔輝は翔香（?）を離す。確かに翔香である。だが、少し恥らうように頬を赤らめ視線を右往左往させる翔香に、翔輝は冷静になった頭である現実に気づいた。
「お、お前大和か?」
「あ、はい・・・」
それは翔香そっくりな格好をしていた大和だった。大和は呆然とする翔輝に「あの・・・その・・・」小さく繰り返す。
翔輝は深いため息を吐いてベッドに腰掛けた。
「何だよ・・・驚かすなよ・・・」
「ごめんなさい・・・」
大和は翔輝の横にそっと腰掛けた。
大和はうつむきながらどこか怒ったような翔輝に謝る。

「ごめんなさい。でもすぐわかりましたね。同じ格好をしたのに」
「当たり前だろ？　妹と他人くらいすぐわかるよ」
他人・・・
翔輝の何気ない一言に、大和は顔をうつむかせる。
「匂いが違ったからね。すぐわかった。いくらそっくりになっても匂いだけは変えようがないからね」
「・・・そうですか」
大和はため息をつく。
（やっぱり、同じにはなれないんだ・・・）
落ち込む大和。だが、翔輝はそんな大和を見詰め少し怒ったような顔をする。
「でも、翔香の格好をするなんて、たちの悪い嫌がらせか？」
「ち、違うです！」
大和は大きな声でそう言いうが、翔輝の顔を見ると再びうつむき、
「違うんです・・・」と小さな声で続ける。
大和はうつむいたまま、そっと寂しそうにつぶやく。
「こんな格好をすれば少尉が喜んでくれるかと思って・・・」
「僕が？」
不思議そうに首を傾げる翔輝に、大和は真剣な瞳で見詰める。
「はい。だって、私知ってますもん。少尉は夜中に時々翔香さんの写真を見て泣いてるのを」
その言葉に、翔輝は驚愕し、みるみる顔を真っ赤にする。
「って、えぇっ！？　し、知ってたの・・・ッ！？」
「はい」
翔輝は「あちゃー」と声を上げ、顔を赤くする。
そんな翔輝の横で、大和は翔輝の袖の裾をそっと掴む。
「だから、少尉に元気になってほしくて、こんな格好を・・・」
「大和・・・」
大和はいつの間にかぽろぽろと涙を流していた。悲しそうに顔をしかめ、嗚咽交じりの声で小さくつぶやく。

「私じゃ――《大和》じゃダメなんです・・・ッ！　少尉の心に届くのは翔香さんじゃなきゃダメなんです・・・ッ！　私じゃ、私じゃダメなんです・・・ッ！」

感情を押し殺したその声は、辛く、苦しい声だった。それは大和が本当に落ち込んだ時にしか出ない、悲しそうな声だった。

「大和・・・」

どう声を掛けていいかわからず困る翔輝に、大和は突如抱き付いた。

「や、大和・・・ッ!?」

「だから、今は大和じゃなくて、翔香さんと思っていてください」

大和は泣きながら抱き付く。そんな彼女の姿に、翔輝は何も言わなかった。が、

翔輝は大和を離した。驚く大和に、翔輝はそっと笑みを送る。

「いいよ、そんな事しなくても。君は君で十分だから。無理しないで」

「で、でも・・・」

翔輝は涙する大和の震えるその頭を優しく撫でた。

「もう翔香はいないんだ。もう・・・」

そう言う翔輝の顔は、いつになく悲しく、辛くゆがんでいる。そんな翔輝を見上げ、大和はどう声を掛ければいいか右往左往する。

「少尉・・・」

「でもね」

「え？」

翔輝は大和をそっと抱き締めた。

温かいものに包まれ、大和は何もできなくなる。

そんな大和に、翔輝は温かく、優しい声で言った。

「今は、君が一番大事だから」

その言葉に、大和はぽろぽろと涙を流した。恥じらいもなく、ただただ泣いた。

胸の中で小さく泣いている大和に、翔輝は何も言わなかった。

翔輝はそっと大和の頭を撫で、ふと窓の外を見た。窓の外には金色に輝く満月があった。そんな月の下、翔輝は大和を優しく抱き続けた。

第七章　第九節　霧島の健気な恋心（前書き）

《巻雲（まきぐも）》
夕雲型駆逐艦駆逐艦二番艦――駆逐艦『巻雲』
出身　藤永田造船所（大阪府）
身長　１５６ｃｍ
髪型　ツインテール
実年齢（１９４２年１０月現在）０歳
外見年齢　１３、４歳
誕生日　３月１４日
好きなもの　姉妹・仲間・午後のティータイム
嫌いなもの　戦争・人種差別・頭の固い上層部
家族構成　姉・夕雲　妹・十七人
世界海軍史上唯一空母二隻を魚雷で葬った駆逐艦。空母『ホーネット』の艦魂と出会って対米英戦に疑問を持つが、鬼畜米英を方針にしている帝国海軍の中ではそういう考え方は危険分子。一時期は村八分にされるがすぐに仲直りする。だが、それでもこの大東亜戦争に疑問を持ち続ける。この作品でちょくちょく登場する駆逐艦キャラの一人。

第七章　第九節　霧島の健気な恋心

南太平洋海戦から二週間後、いまだ航空戦力の衰えないヘンダーソン基地に対して、日本海軍は苦戦を強いられていた。

ラバウルを中心に多くの航空隊が攻撃を掛けるが、犠牲は増える一方で、そのほとんどの隊が航空戦力を失いつつあった。

南太平洋の航空戦力はこの戦争の最後の砦。この戦力が失われるような事があれば、敵を中部太平洋、西太平洋へと進出させる足場を渡すようなもの。そうなれば日本本土が危険に晒されてしまう。

南太平洋の死守は、この戦争での絶対的な防衛線なのだ。

だからこそ、ソロモン諸島の中央部に位置するガダルカナル島を米軍に渡す事はできなかった。あそこは南太平洋の東側やオーストラリアへの航空戦力展開の重要な中継地点。そこを奪われればこれ以上東に進出はできなくなり、さらにはアメリカ本土との補給路となってしまう。そうなれば、資源の少ない日本に勝ち目はない。

なんとしても、ガダルカナル島は死守しなければならなかった。

しかし航空兵力は頼りにならない。

そんな苦境の日本海軍は、一ヶ月前に成功した艦砲射撃作戦を再び考えていた。

だが、今度作戦に参加するのは戦艦『金剛』『榛名』ではなく、その姉妹艦『比叡』『霧島』だった。

トラック島に停泊している連合艦隊旗艦・戦艦『大和』の会議室では戦艦艦魂が会議を行っていた。

「わ、私なんですか！？」

普段は目立たず、小さな声でしか話さない霧島が部屋中に響くような悲鳴に近い声を上げた。そんな霧島に全員（十二人二四瞳）が集中し、霧島は顔を真っ赤にして萎（しぼ）んだ。

大和はそんな霧島を一瞥するが、構わず話を続ける。

「今作戦は十月十三日～十四日にかけて行われた敵航空基地艦砲射撃作戦と同様に戦艦二隻他による艦砲射撃で敵航空基地を破壊するものです。その為、今作戦には戦艦『比叡』『霧島』を中心に前衛、後衛を合計して軽巡洋艦三隻、重巡洋艦六隻、駆逐艦三二隻の部隊で行われます」

大和は指揮棒で海図に描かれた要所を示しながら淡々と説明する。

さすがに何ヶ月も経っているので旗艦にも慣れているのだ。

「ちょっといいか？」

「はい」

大和が説明している最中に金剛が挙手した。不思議そうに首を傾げながら大和が発言権を与えると、金剛は大和、武蔵を睨みつける。

「今作戦も前作戦も、艦砲射撃で敵航空基地を粉砕するものだが、それなら旧式艦である我々ではなく、貴様ら自身が行った方がいいのではないか？」

「そうだぜ。悔しいけど私達の三五・六ｃｍ砲より、テメェらの四六ｃｍ砲の方が強力だろ？　砲門数もこっちは八門、そっちは九門。どう考えたってテメェらの方が適任だろ？」

金剛と榛名（発言権なし）が言うのは当然の事だ。その方が絶対威力があり、作戦も成功しやすい。何より何もせずにのうのうとしているよりはマシだ。

「砲門数なら私達が一番よぉ！」

「はい姉さんは黙ってぇな」

扶桑が空気を読まずに吐いた言葉に冷静にツッコミを入れる伊勢。

確かに扶桑型と伊勢型は連合艦隊一の砲門数（六基十二門）。そんな扶桑を置いて、大和は金剛と榛名の質問に答える。

「私と武蔵、それと長門さんも陸奥もトラック島で待機だそうです」

その言葉に、金剛は不機嫌そうに顔をしかめる。

「貴様らは我が帝国海軍を勝利に導く為に生まれたのだろう？　なのに開戦よりもう一年が経とうとしているのに、全く動く気がない。

貴様らは一体何の為に生まれてきたのだ?」

「そんな事言われましても・・・」

対応に困る大和はどう答えればいいか考える。そんな大和を次席指揮官である武蔵が珍しく助ける。

「・・・実際に参加艦艇を決めるのは連合艦隊司令部。私達には何もできない」

「それは言い訳に過ぎん！　貴様らは戦う気が本当にあるのか！?」

「そうだ！　お前達がまともに出て来たのはミッドウェー海戦だけ！　しかもその時も後方にいて海戦にまったく参加しなかったじゃないか！」

自分もその時は主力部隊に所属していた事を棚に上げて榛名は怒鳴る。

「そうは言われましても、我々が作戦等を決定してる訳じゃないんです」

大和の言葉に皆もうなずく。

所詮艦魂は艦の魂であって傍観者でしかない。戦争に直接介入する事はできないのだ。だが、頭に血が上った金剛にはそんな事関係ない。ただ、怒りに任せて咆哮するだけ。

「知らん！　貴様らは南国のこの島で冷房完備の艦内で堕落するつもりか！?」

「そんな事絶対にしません！」

金剛の失礼な言動に、さすがの大和も激怒してテーブルをバンッと叩く。彼女だって世界最大最強戦艦としての誇りがある。それを汚す事は誰であろうと許さない。

睨み合う両者に他の者も小さくため息する。

年長者と若者は度々衝突する事があるものだが、この二人はいくらなんでも衝突し過ぎだろうと思ってしまう。

二人がこうして言い合うのは結構多い。それは航空機を優先する大和と艦隊決戦を望む金剛との間にある堅固な壁が原因だろう。

金剛は榛名に持たせてある竹刀を、大和は腰の軍刀に手を掛ける。

一触即発の空気に誰もが神に助けを求めた。その時、
「やめてぇッ！」
今まで事の成り行きをおろおろと見詰めていた霧島が泣きながら叫んだ。その意外な人物の大声に部屋はしんと静まり返る。
瞳からぽろぽろと涙を流しながら霧島は二人を見つめる。
「金剛姉さんやめて！　大和もッ！　私と比叡姉さんががんばればいいんでしょ！？　だからケンカはやめてよぉッ！」
「霧島・・・」
「霧島さん・・・」
そんな霧島の言葉に二人はそっと武器から手を離すと、互いを一度睨み合ってそっぽを向く。
「あうあう・・・」
「大丈夫よ。いつもの事だから」
二人の険悪な雰囲気に再び泣きそうになった霧島の頭を、比叡は優しく撫でた。
比叡は優しげな笑顔で二人を見ると、突然拳を突き出し親指を立てて《任しとけ》と言いたげなポーズをとる。
「大丈夫よ。これくらいの任務ちょちょいのちょいって終わらせて来てあげるから」
比叡の優しげな雰囲気に、険悪な雰囲気全開であった大和と金剛も次第に殺気を噴出するのをやめる。
やっとの思いで議論（ケンカ）が終わった所で、長門が立ち上がった。
「そうよね。なんやかんやでもこの二人だってすごいんだから」
「当然だ。私の妹達だからな」
長門の言葉に、金剛は少し照れながら言う。
部屋の雰囲気が戻った所で、大和は言う。
「では、会議終了。各員解散」

「へぇ、霧島と比叡さんが」
甲板の日差し避けの布の下で翔輝は椅子に腰掛けながら嬉しそう

に言う。その前には大和、武蔵。そして今回の主役の一人である霧島がいた。
「うらやましいな。そんなに活躍できるなんて」
「そ、そんな事ないですよ・・・」
翔輝の言葉に、霧島は手を大きく振って謙遜する。
そうは言っても真珠湾攻撃、南方作戦、ミッドウェー海戦（これは『大和』も参加していたが、後方配置。それに対して『霧島』は機動部隊護衛）、第二次ソロモン海戦、南太平洋海戦、そして今度は第二次敵航空基地艦砲射撃作戦という主力作戦にはいつも参加していた。
そんな大活躍の霧島を見て翔輝はがっかりとため息を吐く。
「はぁ、『霧島』に比べて『大和』は全然動かないし、どうせなら戦艦としてたくさん活躍できる『霧島』に乗っちゃおっかなぁ」
翔輝の軽い冗談に、大和は「えええぇぇぇッ！？」とすさまじく驚愕し、霧島は「ほ、本当ですかッ！？」と大喜びした。
「絶対にダメですぅッ！」
泣きながら翔輝に抱きついて抗議する大和。そんな彼女を見て、翔輝は大笑いした。
「冗談。冗談だよ」
翔輝があはははと笑うと、顔を真っ赤にした大和は「少尉のバカぁッ！」と怒鳴ると必殺の鉄拳を打ち込んだ。
見事みぞおちに入った一撃に翔輝は声も出せずに悶絶する。そんな翔輝を大和は「もうッ！」とそっぽを向き、霧島は「少尉ぃ！お気を確かにぃッ！」と泣き出し、武蔵は無言でどこから出したのか機関銃を大和に向ける。
「む、武蔵・・・ッ！　それ・・・は・・・ダメ・・・ッ！」
翔輝は痛む身体を引きずって武蔵の足を掴んで止める。
「・・・でも」
「い、いいから・・・ッ！　むしろ・・・起きるの手伝って・・・ッ！」

「・・・わかった」
翔輝は優しい武蔵の肩を借りて立ち上がる。が、そんな姿を見て大和が怒る。
「な、何で武蔵と抱き合ってるんですかッ！」
「お前のせいだし抱き合ってもないからッ！」
「・・・翔輝、好き」
「ほらぁッ！」
「武蔵ッ！　お前もややこしくするなッ！」
「あ、あの・・・私の存在、忘れてません・・・？」
「「あ・・・」」
大和と翔輝は顔を見合わせると、引きつった笑顔を浮かべてごまかす。
「そ、そんな事ないよぉ」
「そうですよねぇ」
「そ、そうですか・・・？」
「・・・完全に忘――」
「だからお前は余計な事言うなッ！」
翔輝は何か言いそうだった武蔵の口を慌てて塞ぐ。すると・・・
「・・・な、何で顔を赤らめるの？」
「・・・（ペロ）」
「な、舐めるなッ！」
「・・・やっぱり、忘れてますよね？」
そんな感じで四人が楽しく（？）団欒（だんらん）していると、艦内のハッチが開いて誰かがやって来た。
「大和！　武蔵！」
そうかわいい声で言う天真爛漫な笑みを浮かべる軍服が似合わないほどかわいい外見をした少女――日向だった。
「どうしたんですか日向さん？」
大和が訊くと、日向は「そうそう」と言って胸の前で手を合わせた。どうやら軽く忘れていたらしい。彼女らしいと言うかなんと言

うか、
「あのさ、長門が呼んでるんだ」
「長門さんが？」
「うん。何か司令部の仕事をやってほしいって」
その言葉に大和はため息し、「あれか・・・」と小さくつぶやいた。
「大和。もしかして司令部の仕事・・・さぼったの？」
翔輝の言葉に、大和は「あははは」と笑ってごまかす。そんな大和を見て翔輝は「やっぱり・・・」とため息する。
呆れる翔輝に慌てて大和は必死になって弁解する。
「だ、だって三〇センチ以上の高さに積み上げられた訳のわからない書類にひたすら目を通してサインをし続けるなんて耐えられないです！」
「それが連合艦隊旗艦である君の仕事だろ？」
「だ、だからって、あんなの拷問ですよ！」
まぁ、普通に考えれば十三、四歳の少女が各地域の戦闘結果や進行状況、敵軍の動き、決して助けられない友軍のからの援軍要請等の書類を処理するのは難しいというより拷問である。特に援軍要請書が辛いだろう。でも、それが連合艦隊旗艦である彼女の役目なのだ。
「・・・嫌なら旗艦を私に譲って」
武蔵は駄々を捏ねる大和に旗艦委任の意を告げる。そう言えば大和も自分が旗艦である事を自覚するだろうと（武蔵が思ったかどうか知らないが）翔輝は思ったが、大和は一枚も二枚も上手だった。
「それはいいかも」
「おい」
翔輝の冷たい視線に気づき、大和は「冗談です。冗談」と笑ってごまかすが、全員は冷たい視線を大和に容赦なく浴びせる。それに耐えられなくなったのか、大和は踵を返してそのまま走り出した。
逃げたな。

「じゃあ、また後で！」
走りながら言う大和にようやく気づき、日向は嫌がる武蔵を「あなたも参謀長でしょッ！？」と連行してその後を追って走って行った。
残されたのは翔輝と霧島の二人だけ。
「えっと、その・・・」
困っている霧島を見て、翔輝は頭を掻くと霧島に笑顔を向ける。
「散歩でもしよっか？」
翔輝のお誘い（？）に、霧島が返す反応はもちろん。
「はい！」
満面の笑顔での了承だった。

翔輝と霧島は艦首にいた。艦首は艦の最先端。前を見れば蒼く輝く海が広がり、後ろを振り向けば『大和』の勇姿を望む事ができる。
海には多くの艦艇が泊まっている。少し離れた所には同型艦『武蔵』が泊まり、その奥には『長門』『陸奥』がいる。そして、一際目立つのは、忙しく動き回る内火艇が弾薬等を補給している今作戦の主力を務める戦艦『比叡』『霧島』だ。
内火艇が艦に接舷すると、兵達がラッタルを上って弾薬や食料等に物品を甲板まで運び、その荷物を今度は艦の兵達が艦内や各機銃、高角砲や弾薬庫まで運ぶ。そんな単調でものすごくしんどい作業を遠くで見ながら、翔輝はつぶやく。
「やっぱりいいよな。出撃できて」
どこか残念そうな翔輝の言葉に、霧島は慌ててフォローを入れる。
「『大和』もいつか任務を受けて出撃する時が来ますよ」
霧島の元気付けようとした言葉に、翔輝は「どうかな」とつぶやくと首を傾げる。
「連合艦隊司令部は『大和』や『武蔵』、『長門』『陸奥』は温存しておきたいそうだから、夢のまた夢でしかない艦隊決戦以外での出撃はないかもな」

「でも、刻一刻戦況は悪化しています。いくら温存したくてもそれを使わなければ本末転倒。必ず出撃はあります」
霧島の自信たっぷりな言葉に、翔輝は小さく笑みを浮かべるとうなずく。
「だな。確かにお前の言うとおりだ。連合艦隊司令部もそこまでバカじゃないよね」
「しょ、少尉ッ！　そういう海軍に対する暴言はやめてくださいッ！　誰かに聞かれたら大変ですぅッ！」
この時代、軍隊に対する不満や暴言は禁句である。もしそれが上層部に伝わってしまえば軍法会議という恐ろしい結末が待っているのだ。だからこそ霧島はそれを心配しているのだ。だが、当の翔輝は・・・
「そういえばそうだね」
「自覚ないんですかッ！？」
「うーん、たぶん大丈夫だと思う」
「危機感ってものがまるでないんですね・・・」
さすがの霧島も翔輝の楽観的な考え方にため息する。
そんな霧島も気も知らずに翔輝は何も考えていなさそうな笑顔をする。
「ま、みんないい人ばっかりだから大丈夫さ」
「少尉は本当に人を疑わないんですね」
霧島は翔輝のすさまじいお人好しに呆れ半分感心半分といった感じにため息するが、すぐに笑顔になる。そんな優しい翔輝が、大好きだからだ。
おもしろそうに笑う翔輝。そんな彼の笑顔を見詰め、霧島はうつむいた。
「霧島？」
うつむく霧島を翔輝は不思議そうに見詰める。
そんな翔輝の見詰める霧島は、しばしの沈黙の後、何かを決意したように顔を上げた。その表情は真剣で、瞳には強い想いが込めら

れていた。
「あの、長谷川少尉！」
「うん？　何？」
翔輝は霧島のいつにない迫力に驚きながらも顔を向ける。その瞬間、霧島の鼓動は一際速くなった。心臓が爆発しそうなほどドキドキして、焦る気持ちを落ち着かせる。
「霧島？　大丈夫？　顔赤いけど、熱でもあるの？」
翔輝が心配そうに訊くが、艦魂が熱を出されても彼にはまったくその対処方法がわからない。それでも心配する事はできる。
「だ、大丈夫です！」
霧島は顔を真っ赤にさせたまま断言する。
「で、でも・・・」
「大丈夫ったら大丈夫ですぅッ！」
霧島は身体全体を使い必死になってそう断言する。こうまでハッキリ言われてしまうと顔が依然赤くてもそれを言う事はできない。翔輝にできる事と言えば、「そう、ならいいんだけど・・・」というなんとも弱気な言葉だけだった。
翔輝はふと空を見上げる。
太陽が、ギラギラとまぶしかった。
青い空に白い雲。耳に響いて来るのは水兵や下士官がしきりに叫んでいる声と、波が打ち寄せるざざーという音。それは何度も見たり聞いたりしたものなのに、それがなぜか昨日とはまた違い、今に流れ、明日にはまた違ったものになる。それは毎日感じていても飽きない。翔輝はそれがまるで世界が動いているように思えたから。世界はいつも動いている。それが良い形でも悪い形でも現れ、そして消えていく。その単調な無限のループが古今東西、未来永劫一度も変わらずに《今》を作り出し、《過去》や《未来》に繋がっている。それは、この戦争がどういう結果になろうと、世界はただ傍観しているだけにすぎないという空しさにも繋がる。
毎日が違い、それが楽しく悲しい時もある。それが世界なのだ。

翔輝が一人で自己世界に入ってしまったのも知らずに、霧島はずっと顔を下げてぶつぶつとおまじないのように「大丈夫。大丈夫・・・きっと大丈夫・・・」とつぶやく。

しばらく自己暗示するかのようにつぶやいていたが、ついに霧島は何かを決意したような表情で頭をバッともたげる。

気持ちを落ち着かせる為に大きく深呼吸して気持ちを整えると、霧島は真っ赤な顔で翔輝を見詰める。

「あ、あの・・・ッ！」

気合のせいか、予想以上に声が出てしまい言った本人も聞こえた少年も少なからず驚いた。

「えっと、な、何？」

霧島の必死な声に振り向いた翔輝は不思議そうな表情を浮かべている。

翔輝の瞳と霧島の瞳が一直線に繋がる。

霧島は頭の中で八三回シミュレーションした言葉を出そうとするが、いざ本番となると出るのは「あ、あの・・・」とか「その・・・」、さらには「えっと・・・」とかまで出てしまう。これではせっかく八三回もしたシミュレーションも無駄になってしまう。でも、もうここまできたらあとは勇気の問題。あと少し勇気があれば言えるのだ。

霧島は再び大きな深呼吸と一度目を閉じ心を整える。そして、次に見開いた瞳には、もう迷いはなかった。

「長谷川少尉」

「何？」

勇気を出して、霧島は渾身の勇気を絞って心の中にある彼に伝えたい想いを言葉にした。

「今回の作戦が終わったら、一度でいいですから、デートをしてください！」

「・・・」

「・・・」

「・・・え？」

たっぷり数秒の間の後、翔輝の口から出たのはあまりにも典型的過ぎるひらがな一文字だった。

霧島は自分の言ってしまった事に対し、顔を限界まで真っ赤に染める。だが、その瞳の奥には強い想いが込められている。

「えっと、デートって・・・デートだよね？」

突然の事に混乱している翔輝に、霧島はキッパリと、

「言葉どおりの意味です」

そう返した。もちろん意味は日付ではない方の意味だろう。

翔輝は必死になって自分を見詰める霧島を一瞥して顔を伏せるとしばらく考え込む。そんな彼を見て霧島は恐怖で心が押し潰されそうになった。その目には薄っすらと涙が浮かぶ。

だが、そんな泣きそうな霧島に、翔輝はそっと優しく微笑んだ。

「別にいいよ」

そう軽くオッケーした。

この翔輝の意外なほど軽い返答に、霧島の顔は見る見るうちに歓喜の色に染まる。

「本当ですか！？　後悔しませんか！？　本気なのかな平気なのかなぁッ！？」

霧島は嬉しすぎて一人驚愕と自己解釈を笑顔で続けている。そんな霧島に翔輝は笑顔で続ける。

「うん。別に暇だしね」

「暇・・・」

その言葉に、霧島はがっくりと落胆する。

どうやらこの少年、まったく彼女の言っている意味をわかっていない。何も考えていなさそうな笑顔がそれを物語っている。

「いや、でもいいのかな？　どうなんだろ？　妥協かな、チョロいのかな、どうなんだろ？」

たっぷり数秒考えた霧島は、とりあえず納得したのか一度小さくうなずくと、頬をほんのり染め、

「じゃ、じゃあ・・・お願い、します。デート、約束しましたよ？」
「うん。約束だ」
二人はお互いに小指を絡ませ、約束の契りを結ぶ。その時、一際大きく波が立った。ざざーんッ！　という大きな音がした後、二人は笑い合った。
時は一九四二年十一月八日、明日はいよいよ比叡と霧島の出撃であった。
そして、それが無事終われば、翔輝と霧島はデート（？）をする。霧島はそれだけを考え、明日の出撃に備えた。
――だが、この約束は、永遠に叶う事はなかった・・・――

第七章　第十節　生きて帰れぬ夢跡

一九四二年十一月九日、全軍の期待を一身に受けた戦艦『比叡』『霧島』を中心とした挺身部隊（戦艦『比叡』『霧島』、軽巡洋艦一隻、『雪風』を含む駆逐艦十一隻）は、トラック島を出撃。一路ガダルカナル島に向かった。

一方、アメリカ軍はこの日本艦隊を十二日に付近を警戒していた偵察機で発見した。

ハルゼー中将はガダルカナル島守備隊を守るべく圧倒的劣勢な艦隊（重巡洋艦二隻、軽巡洋艦三隻、駆逐艦八隻）を派遣。さらにはまだ南太平洋海戦の傷が治っていない空母『エンタープライズ』を無理やり引き出し、掩護攻撃させた。まだ修理中の空母を無理やり引き出すというのは彼の性格を感じる。

そんな限界の近いアメリカ軍は日本軍の攻撃を身を挺して守るべく防御を強化するのだった。

出撃した挺身部隊はガダルカナル島沖まで向かったが、スコールの影響で砲撃ができず、一旦北方に撤退した。しかし三〇分後にスコールが止んだと同島守備隊からの報告を受けて、艦隊は再び艦首を南方に向けた。

一方、のアメリカ艦隊は日本艦隊が接近して来るのをレーダーで捕捉。アメリカ艦隊は日本艦隊に向かって全艦突撃した。

艦隊は無線封鎖をしながらガダルカナル島に向かっていた。

輪型陣形をしている艦隊の中心には今作戦の要である戦艦『比叡』『霧島』がその勇姿を輝かしていた。例え老朽戦艦でも、戦艦というだけでその勇姿はすさまじいものだ。

「霧島。行ったり来たりで疲れた？」
『霧島』の艦橋でちょっと疲れた表情で椅子に座っている霧島に比叡が笑顔で声を掛ける。霧島はそんな姉の言葉にため息ひとつ吐き、ゆっくり立ち上がる。
「疲れたなんて言ってられないよ。早くこの任務を終わさないと」
「それって、早く少尉とデートしたいから？」
比叡の突然の奇襲攻撃に、霧島は顔をかあっと真っ赤にして焦る。
「ち、違うよ！　私はただ早く任務を終わしたいだけで・・・ッ！」
「はいはい」
比叡は何か意味深な笑顔のまま何度も首肯する。そんな姉を見て絶対にわかっていないと霧島は確信する。
「だから違うってば！」
普段はおとなしい霧島が顔を真っ赤にさせて大声を出して反論するのを、比叡はとても楽しそうに見詰める。
今は夜中だが、空には一点の雲のなく、絶好の砲撃日和だった。艦隊は順調に南進を続け、艦隊を包む静けさが、ここが戦場だという現実を忘れさせそうになる。が、それは突如入った無線で崩れた。
「駆逐艦『夕立』より無電！」
通信兵が突如艦橋に飛び込んで来た。その通信兵は持って来た報告書を通信参謀に渡した。『夕立』とは霧島達本隊の十キロ前方で前方警戒に当たっている駆逐艦だ。
「何を考えてるんだ。今は無線封鎖中だぞ」
通信参謀は呆れた態度でそれに目を通すと、突然表情を変えてそれを声に出して読み上げた。
「駆逐艦『夕立』より無電！『敵艦隊見ユ。本隊前方四五キロ地点。敵兵力ハ重巡洋艦二、軽巡洋艦三、駆逐艦八』！」
その声に、『霧島』艦長の岩渕三次大佐が叫んだ。
「全艦に通報！　全艦全速力で敵艦隊に向かう！」
艦長命令で参謀達や信号兵が伝声管に向かって「両舷前進全速！」

「総員水上戦闘配置に付け！」等の声が飛び交う。
そんな中、霧島と比叡の話は戦闘に移っていた。
「霧島。がんばってね」
比叡が笑顔で優しく言うと、霧島は「任せておいて」と自信満々に言う。普段はそうは見えなくても彼女も帝国海軍軍人なのだ。
「これでも機動部隊護衛戦艦として数々の海を翔け回ってたんだから、戦闘は結構得意だよ？　嫌いだけど・・・」
「でも、それが私達の使命よね？」
比叡の問いに、霧島は悲しげな笑顔を浮かべて静かにうなずく。
「わかってる。これも日本を、愛する祖国を守る為だもの」
「そうね。がんばろ」
「うん」
その直後、比叡は妹である霧島に向かって見事な敬礼をすると、自艦に戻った。
艦橋には彼女を見る事ができる人間は一人もいない。そんな中、霧島は決意した瞳で黒い海を睨む。
「早く終わらして、早く戻る。絶対に」
霧島の睨んだ海は、どこまでも闇に包まれた漆黒色だった。

まず戦いの先陣を切ったのは、味方に敵艦隊の位置を報告した駆逐艦『夕立』だった。
本隊の負担を少しでも軽くしようと、『夕立』は単身で敵艦隊に向かって突撃した。
白波を立てて最高速力である三四ノットで『夕立』は敵艦隊に向かって突貫する。
『夕立』の艦橋では長いポニーテールをした勇ましい雰囲気を放つこの艦の艦魂である夕立が軍刀を構えていた。頭に巻いている日の丸に《突撃上等》と書かれた鉢巻の余った部分が風もないのにハタハタと揺れる。
そしてついに、敵艦隊が闇夜の中に薄っすらと見えてきた。

「よしッ！　照明弾発射ッ！」
夕立の声と呼応して、『夕立』の十二・七ｃｍ砲が火を噴き、敵艦隊上空で炸裂。まばゆい光が辺りを包んでいた闇を消し飛ばし、敵艦隊が丸見えになった。その刹那、『夕立』は攻撃を開始した。
「大日本帝国海軍白露型駆逐艦四番艦・駆逐艦『夕立』！　参るッ！」
夕立はそう叫ぶと同時に軍刀を振った。
駆逐艦『夕立』は敵艦隊の懐に入り込み、手当たり次第に敵艦に砲雷撃を開始した。

――駆逐艦『夕立』、敵艦隊に単身突撃。単艦で敵艦隊の深部に突入し魚雷を発射、見事に命中。その後も手当たり次第に砲雷撃を行い目覚しい働きを見せ、敵艦数隻に大ダメージを負わし、敵艦隊を大混乱に陥れた。そしてその後も孤軍奮闘で戦うが、敵艦隊の集中攻撃を受け、沈没した――

『夕立』の突撃および撃沈の報の後、本隊はすぐに現地に着いた。
前方にはいくつもの火柱が上がっているのが見えた。
――それは最後まで武人として戦い抜いた、夕立が残した繋がりであった。
霧島は一人の英雄に向かって静かに敬礼すると、燃える敵艦隊をいつもの優しい表情ではなく、一人の軍人として睨みつける。
挺身部隊は一気にその間合いを詰める。そして、
「照明弾発射！」
戦艦『比叡』『霧島』の主砲が火を噴き、照明弾が天空を突き抜け、敵艦隊上空で炸裂。敵艦隊が闇の中からはっきりと現れた。
「よしッ！　左三〇方向の重巡らしきものに主砲三式弾発射！」
岩渕が叫んだ刹那、『比叡』『霧島』の三五・六ｃｍ砲十六門が火を噴き、両艦それぞれが狙った敵艦に砲弾が命中。敵艦は一瞬にして炎上した。

霧島は反撃してくる敵艦を睨み、そこに照準を合わせると、霧島の意思を感じたかのように第一、第二主砲が旋回し、火を噴く。敵艦は爆発、炎上した。

「夜戦は私達日本海軍の得意中の得意。絶対に負けない」

霧島は握り拳をさらに強める。

そして再び、『霧島』の主砲は何度目かの砲撃をした。

一方、『霧島』の前方を走る『比叡』も主砲副砲を乱射し、敵艦を次々に破壊していった。

比叡は闇夜に照明弾で照らされる敵艦を軍人の顔で睨みつける。

「敵には戦艦も空母もいない。どうやら巡洋艦部隊ね」

比叡は安堵した。戦艦や空母がいればこちらが不利になってしまうが、巡洋艦部隊なら話は違う。逆にこちらが有利になれる。

ふと海面を見ると、味方駆逐艦から射出された酸素魚雷が高速で闇の中に呑み込まれていった。刹那、敵艦数隻に水柱と火柱が上がった。

戦闘は両軍の指揮系統が十分に機能していないのか敵味方入り乱れる大混戦となっていた。だが戦局は戦艦が二隻配置されている日本側に有利に進んでいた。すでに敵艦数隻が沈没または時期沈没という状況になっている。だからこそ、比叡に小さな油断があった。

突如敵艦隊から数隻の駆逐艦が突っ込んで来た。

『敵駆逐艦！　右舷方向から本艦に向かって突撃して来ています！』

「主砲発射！　右舷副砲は各砲の判断でこれを砲撃せよ！」

戦艦『比叡』艦長の西田正雄（にしだまさお）大佐が命令する。

『比叡』の全主砲と右舷側の単装副砲八基が唸り、敵駆逐艦を砲撃する。敵駆逐艦はそれを受け爆発、炎上し、うち一隻は一瞬にして轟沈した。しかし、敵残存駆逐艦数隻が諦めず、依然突撃をやめない。

『敵駆逐艦接近！』

見張り兵の声が艦橋に木霊（こだま）する。

「ち、近すぎる・・・ッ！」
比叡は敵駆逐艦が行うであろう次の行動を予測し、絶句する。
敵駆逐艦は近距離から魚雷を放ち、こちらが避ける暇もなく命中させるつもりだ。もしそんな事をされれば、この距離なら敵全艦のほとんどの魚雷が命中してしまう。いくら戦艦でも、それだけの魚雷を受ければ沈没する可能性が高い。
「両舷前進全速！　主砲副砲は敵駆逐艦を殲滅せよ！」
西田は悲鳴に近い声を上げる。
『比叡』は日本海軍戦艦の中でもトップクラスの最高速度――三〇ノットで闇の中の海を疾駆する。それに呼応して主砲副砲も勇ましく砲撃を行う。
敵駆逐艦が次々に爆発、炎上、轟沈を繰り返す。だが、大破して炎上する駆逐艦と駆逐艦の間から、突如炎上している駆逐艦が横向きに姿を現した。
「・・・ッ！」
比叡が声にならない悲鳴を上げる。そして、
『敵駆逐艦魚雷発射！　その数八本！』
見張り兵の悲鳴が艦橋に不気味に響く。
「面舵いっぱぁぁいッ！」
西田はすぐさま舵を回す。艦が大きく右に傾斜する。最高速度で全速回頭すれば当然の事だ。
比叡は大きく右に傾斜する床に対し、右足に力を入れてその姿勢を保つ。
『比叡』と魚雷は次第に近づく・・・そして、
白波を立てて、先頭集団の四本の魚雷を回避した。しかし、そのすぐ後ろから残り四本の魚雷が迫る。
比叡はしっかりとその魚雷群を見詰め、息を呑む。
一本が艦の後方数十メートル先の空間を空しく通り過ぎる。
一本がすぐ横にいた味方駆逐艦に命中し、大きな水柱を上げる。
一本は不発弾だったらしく、途中で深い海の底に沈んでいった。

そして、最後の一本は・・・
視覚からその姿を消した刹那、鈍い爆発音と共に、同じく鈍い振動が『比叡』の巨大な艦体を震わせた。
「ぐぅ・・・ッ！」
その刹那、比叡の右足から鮮血が飛び出て、重心を失った身体はそのまま支えを失って床に倒れた。
痛みに耐え、比叡は傷口を確認する。
大したケガではなかった。が、当たり所が悪かった。
艦魂が足をケガしたということは、スクリューか舵に命中したという事だ。そのどちらも、壊れればたちまち正常な航行が不能になる。比叡はそれでない事を祈ったが、運命はあまりにも無情だった。
『主舵に魚雷一本命中！　大破！　使用不能！』
見張り兵の言葉は比叡の心を凍り付かせた。
――最悪だった――
舵が壊れたという事は、もう曲がる事ができず、ひたすら直進しかできないという事だった。一応副舵が残っているからそのような最悪な事態は起きないが、極端に運動性能が下がる。それは回避行動の遅れとなり、致命傷へと繋がってしまう。
比叡は愕然としながらも、冷静に包帯を出現させ、赤く染まった足に巻き付けた。
続いて杖を発現させるとそれを使ってゆっくりと立ち上がる。足に力を込めた瞬間、鋭い痛みが走り顔をゆがませるが、すぐに重心を変えて痛みに耐えながらしっかりと立つと、いまだ続く戦闘を見詰め、比叡は唇を噛んだ。

敵味方入り乱れる大混戦は三〇分ほど続き、挺身部隊は見事敵艦隊を撃滅した。
重巡洋艦二隻と駆逐艦三隻大破。軽巡洋艦一隻、駆逐艦四隻沈没。無傷は駆逐艦一隻のみという、ほぼ全滅という壊滅的な損害を受けた。

一方、日本軍も駆逐艦『夕立』『暁（あかつき）』が沈没。『比叡』も小破した。

挺身部隊は一旦バラバラになった艦隊を再び集結する事にした。

戦闘は終わり、霧島は急いで比叡の元に駆け付けた。

「姉さん・・・」

「あぁ、霧島。大丈夫だった？」

比叡は近くにある椅子に座っていた。その足には白い包帯が巻かれていたが、今では鮮やかな朱色に染まっていた。

そんな比叡に対し霧島はケガはなく無事であった。

「大丈夫だよ。それより、姉さんは大丈夫なの？」

「・・・足――舵をやられてね。でも副舵が残ってるから、まだ大丈夫よ」

「そう。ならいいけど。無理しないでね」

「そうね。そうするわ」

比叡はそう笑顔で答えた。すると、そんな比叡に霧島は無言でいきなり抱き付いた。

「き、霧島・・・？」

比叡は一瞬驚くが、すぐに優しい笑みを浮かべて肩を小刻みに震わせて自分に抱きついているかわいい妹をそっと抱き締めた。

「姉さん・・・ッ」

「まったく、あなたの泣き虫にも困ったものよね」

「だって、だってぇ・・・ッ！」

「でも――そんな霧島が、私は大好きよ」

比叡の言葉に、霧島は一度顔を上げる。その顔は涙でグシャグシャになっていたが、比叡の笑みを見てまた涙をポロポロと流して姉の胸に顔をうずめる。

そんな泣き虫の妹を、比叡はいつまでも優しく抱き締め続けた。

まだ夜は明けず、暗い海は沈黙が降り立っていた。そんな中、二人の姉妹はずっとその肩を寄せ合っていた。

艦隊はようやく再編成を終え、再び一路目的地であるガダルカナル島に向かって進撃を再開した。

先に向かった巡洋艦部隊が壊滅したという報告が入り、空母『エンタープライズ』に攻撃隊発進命令が出た。

まだ真っ暗な空の下、アメリカ軍独特のネイビーブルーの機体をした艦載機が次々に天空に舞って行く。甲板ではそんな彼らを見送る兵達が頻(しき)りに帽を振っている。

そして、防空指揮所ではまだ頭や腕等に包帯を巻いているエンタープライズが帽を振りながら攻撃隊を見送っていた。

だが、その顔は憔悴し切っており、いつもの元気な彼女ではなかった。

ホーネットの死以来、エンタープライズは他の艦魂達がいくら励ましても立ち直れずにいた。

大切な妹を失った姉の悲しみは、とてつもなく大きい。

帽を振るのにも疲れたのか、エンタープライズは艦内に戻ってしまった。

攻撃隊は闇の中に消えて行った。

翌朝、挺身部隊はガダルカナル島付近にまで来ていた。

艦隊は『霧島』を中心に駆逐艦達が護衛するという輪型陣形だった。その『霧島』から少し離れた後方には損傷で速度が落ちている『比叡』が続いている。

夜通し突き進んだ艦隊は、ついに淡い朝日に映し出されるソロモン諸島を目視した。

朝日に照らされるソロモン諸島は輝いて見える。ここが自分たちが目指していた敵地だと思うと、そんな朝日の輝きにも緊張が走る。

そんなソロモン諸島を霧島は真剣な瞳で見詰める。

「いよいよ。金剛姉さんや榛名姉さんのやった艦砲射撃をする時が来た・・・絶対に成功させてみせる！」

霧島はソロモン諸島を見詰め小さく拳を握って意気込んだ。が、その時だった。

『敵機！　左七〇度！　突っ込んでくる！』

見張り兵の青天の霹靂のような絶叫が伝声管を伝わって艦橋に響いた。その報告に霧島はさあーっと青ざめる。

「ど、どうして敵機が・・・ッ！？」

霧島は目の前の状況に混乱する。ソロモン諸島に入ったとはいえ、まだガダルカナル島は遠い。敵機が来るには距離が離れ過ぎているからだった。

「見張り兵！　本当に敵機か！？　ラバウルの味方航空隊ではないのか！？」

岩渕がもっともな事言う。ラバウルなら近いので、味方の航空機が来るのもわかる。きっとラバウル航空隊が我が艦隊の為に護衛戦闘機を出してくれたのだろう。そう甘く考えていた。が、

『違います！　あの吐き気のする濃紺色は絶対に米軍機です！』

その声に、艦橋は大混乱に陥った。敵機が来るなんて、まだ想像もしていなかったのだ。

この敵機は、まだ修理中と判断されていた空母『エンタープライズ』から発進して来たものとは彼らが知る由もなかった。

「対空戦闘ッ！」

岩渕はともかく敵機を迎撃する事にした。

兵達は急いでそれぞれの配置に向かって走る。しかし、甲板へ出るはずの兵はまだ艦内に待機していた。なぜなら――

「主砲三式弾装填！」

そう。戦艦の最大攻撃力である主砲が発射されるからだ。主砲の爆風は甲板に出た兵達にも被害が出るので、甲板兵達は主砲発射が終わるまで艦内で待機していなければならないのだ。

そして、主砲の旋回と砲弾の装填が終わり、砲身は確実に敵機を睨み付けていた。

岩渕はそれを確認し、戦艦の艦長として最も勇ましい命令を発し

た。

「主砲発射！」

刹那、『霧島』の三五・六ｃｍ砲四基八門全部が火を噴き、爆発音と爆風が蒼き海に響き渡った。さらに後方から『比叡』も砲撃を始め、両艦は黒い煙に包まれた。

そして、『比叡』『霧島』の二隻から放たれた十六発の砲弾は敵機の上空で炸裂。巨大な大輪花を咲かせ、敵機は次々に墜落する。

時限信管で目標空域で炸裂。焼夷粒子と砲弾の破片をバラ撒いて敵機を撃ち落す日本海軍独自の対空砲弾――三式弾だ。

『敵機！　三式弾を物ともせずに突っ込んでくる！』

「次弾装填急げッ！」

霧島は依然突撃してくる敵機を睨みつける。上方に急降下爆撃機、水平線に水平攻撃機、その前方には戦闘機という基本編成の攻撃隊だった。

霧島は空母護衛で何度も見てきた光景に悔しそうに唇を噛む。

「艦隊直衛の戦闘機さえいれば、なんとかできるのに」

機動部隊護衛の時には必ず零戦が上空を守ってくれていた。だが、今回の作戦には空母はなく、護衛戦闘機もない。

護衛戦闘機のない裸の艦隊は敵機の攻撃にとても弱い。それはマレー沖海戦以降の世界海軍の常識となっており、改めて戦闘機の重要性を再認識する。

『次弾装填完了！』

伝声管から砲術長の声が響き、岩渕はしっかりとうなずいた。

「主砲発射！」

岩渕の命令が伝声管を震わせた刹那、再び爆音が響き渡り、『霧島』、続いて『比叡』の主砲が唸る。さらに直掩の軽巡洋艦からも三式弾が発射され、敵機に焼夷粒子の嵐が吹き荒れた。だが、敵機はその数の三割を失っても突撃をやめず、さらには散開を始めた。

これで三式弾はもう使えない。三式弾は敵機が密集しているからこそその威力を何倍にも増幅できるのだ。散開されてしまったらそれ

もできなくなる。
「機銃兵配置に付けッ！」
岩渕の声が艦内中に響き、甲板のドアが次々に開かれて機銃・高角砲の兵達が各々の配置に向かって走っていくのが見えた。
『第二七駆逐隊対空戦闘開始しました！』
艦隊の左端にいる第二七駆逐隊が主砲や機銃を乱射し始めた。それに呼応して他の駆逐隊も攻撃を開始する。
敵機はすさまじい弾幕の中を犠牲を出しながらも突進して来る。それは何度も見て来たが、何度経験しても慣れる事のない恐怖だ。
そして、敵機は激しい対空砲火の防空網を突破し、ついに第十一戦隊――『比叡』『霧島』の上空にまで達した。その瞬間、敵急降下爆撃機が一斉に機体を捻らせて急降下して来た。
『敵機直上！　急降下！』
見張り兵がこれまでにない程の絶叫を艦橋に響かせる。
「取舵いっぱぁぁいッ！」
岩渕は迫る敵機を睨み回避命令を叫んだ。その命令に『霧島』は急いで左に曲がる。
艦のまわりに白い水柱が何本も高く上がり、吹き飛ばされた海水が雨のように『霧島』に降り注ぐ。
主砲の代わりに機銃や高角砲が唸り、迫る敵機を次々に撃墜していく。さらに副砲も対空砲弾を使って敵機に応戦する。今や『霧島』の艦中から火が噴き、全方位にすさまじい弾幕を張る。だが、それが仇となった。敵機はすさまじく全力で応戦しながら逃げ回る『霧島』を諦め、速度が遅く対空砲火も少ない『比叡』に群がった。
「し、しまった！　姉さんが！」
霧島は自分から離れて行く敵機を見詰め青ざめる。その敵機が向かった先には後方で無数の敵機襲われている『比叡』。そして、霧島は見てしまった。
ドガアアアァァァァンッ！
爆弾を受けて、巨大な火柱を上げて大爆発する姉の姿を・・・

「姉さあああああぁぁぁぁぁんッ！」
霧島の悲鳴は、『比叡』の爆発音の中に消えていった。

敵機は去り、艦隊は再び陣形を戻した。艦隊自体の被害は少なかったが、集中攻撃を受けた『比叡』だけが大損害を受け、大破した。
『比叡』は爆弾二発、魚雷一本を受けた。爆弾の一発は左舷副砲群に命中。もう一発は第二主砲に命中して堅固な主砲塔を破壊してしまった。そして、魚雷はあろう事か再び艦尾に命中。今度は副舵もろともスクリューまで粉砕。『比叡』は完全の航行不能となった。
霧島は急いで『比叡』の艦橋に向かった。
「姉さん・・・ッ！」
真っ青な顔の霧島が見たのは、真っ赤な血の海にぐったりと横たわる、大切な姉の姿だった。
「姉さんッ！」
霧島は血まみれになった姉を泣きながら抱き締めた。身体にベチャっとした不気味な感触がしたが、今はそれどころではない。
比叡の身体から少しずつ冷たくなっていく。
「姉さんッ！　姉さんしっかりしてッ！」
「霧島・・・泣かないでよ・・・」
泣き崩れる霧島を比叡もそっと抱き締めた。
もう霧島は何も言わず、ただひたすら泣き続けた。そんな妹を、比叡はいつまでも抱き締め続けた。
姉妹はお互いを抱き合い、お互いを感じ合った。そんな光景は永遠に続くかと思われたが、運命とはあまりにも無情だった。

「嫌ですッ！　絶対にさせませんッ！」
黒煙を上げる『比叡』の艦橋に集まった他の艦魂達の前で、霧島は絶叫に近い声で叫んだ。
「し、しかし・・・これは命令なんです・・・ッ！」
「そんな命令は絶対に嫌ぁッ！」

駆逐艦の艦魂がいくら説明しても、霧島は断固としてうなずかない。それは当然の反応だろう。その命令とは、航行不能となった姉――『比叡』の雷撃処分なのだ。

霧島はなんとしても比叡を殺したくはなかった。最も信頼していて、これまでもずっと一緒に太平洋を翔け回った大切な姉なのだ。霧島は例え引っ張ってでも『比叡』を本土まで連れて行きたかった。だが、

「もう・・・いいの・・・霧島・・・これ以上・・・みんなに迷惑を・・・掛けないで・・・・」

血まみれで倒れている姉の力ない言葉に、霧島は泣き叫びながら比叡に抱き付く。

「嫌だよッ！　姉さん死なないで！　死んじゃダメッ！　姉さんが死んだら、死んだら私はどうすればいいの！？」

霧島は恥じる事なく泣いた。鼻水を流しながら、「姉さん」と何度も何度も呼びながら泣いた。そんな霧島を見て、泣かずにいられる者など一人もいなかった。みんな泣いた。みんな、もう仲間を失うのは嫌だった。

比叡は血まみれの身体でゆっくりと立ち上がる。もうそんな力など残っているはずもないのに、比叡は立った。

立ち上がった比叡は、みんなを見回す。みんな、少女も女性も恥じる事なく泣いていた。そんなみんなに、比叡はそっと微笑んだ

「みんな・・・泣かないで？　私がいなくなっても・・・まだ霧島や金剛姉さん・・・榛名がいるし・・・扶桑、山城、伊勢、日向、長門に陸奥・・・そして大和と武蔵もいる・・・だから・・・きっと大丈夫よ」

「大丈夫じゃない！　姉さんは・・・私の大切な比叡姉さんはあなた一人しかいないの！　なのに、死ぬなんて、絶対にダメ・・・・」

語尾の方はもうかすれて聞こえなかった。そして霧島それを最後にはその場に泣き崩れた。もう姉と会えないなんて、そんなの嫌だった。

比叡は、そんな霧島をそっと抱き締めた。優しく包み込まれた霧島は思い出す。この感触、この匂い、全て大好きな姉のものだった。

「霧島・・・戦争はこれからもっと激化する・・・なのに・・・私がいなくなるくらいで・・・泣かないの・・・あなたはこれでも・・・連合艦隊戦艦の最古参の一人なのよ・・・？」

霧島は首を横に振る。もう聞きたくない。そんな意思の表れだった。だが、比叡はやめない。ここで言わなくちゃ、もう永遠に言えなくなる。だから・・・

「霧島！　前を向いて生きなさい！　私はあなたをずっと見守ってるから！　だから・・・だから、泣かないでよ・・・ッ！」

そう叫ぶ比叡の頬を、温かい雫が流れる。

我慢していた。死ぬのが怖いのずっと我慢していた。そうでもしなければ、自分は霧島の姉ではなくなる。そんな不安と戦いながら、比叡は耐えていた。

「姉さんだって、泣いてるじゃない・・・」

「これは違うわよ・・・目にゴミが入っただけなんだから・・・」

「素直じゃないね・・・」

「・・・そうね」

今度は霧島から比叡を抱き締めた。比叡もそれに応えて霧島を抱き締める。お互いの温もりを直接、体中で感じ合い、今目の前に姉が、妹がいる。今は、それだけで十分だった。

ずっと、このままでいたい。そんな二人の気持ちに、駆逐艦達は涙した。

だが、時間というのは、あまりにも残酷で、無機質なものだった。

ついに、『比叡』の雷撃処分の時間が来た。

艦橋には西田艦長や参謀長、他の参謀達が自分の身体を伝声管などに縄で括り付けていた。艦と運命を共にする為に・・・

比叡は防空指揮所に移動していた。「空が見たい」と比叡が言った為、霧島や他の駆逐艦数人が手伝って連れて来てくれた。そして、

もう彼女達ももうここにはいない。みんな自艦に戻って比叡の最期を見届けていた。

比叡にはもう指一本動かす力も残されていなかった。残っていた力も先程使い切ってしまった。

自分には艦魂が見える青年士官が乗っていた。開戦直前に出会い、真珠湾の時からずっと一緒だったその彼は、自分と一緒に死ぬ覚悟をしていたが、比叡はそれを許さなかった。

嫌がる彼を無理やり転送した。彼には生きていてほしい。そんな願いを込めて使った最後の力。もう自分には何も残っていない。あるのは、変えられない死の運命だけ。

もう比叡に迷いはなかった――と言えばうそになる。だが、自分は今日この時まで戦艦として戦えた事に誇りを持っていた。敵戦艦と戦えなかったのが心残りだが、それでも自分は十分戦った――今ならそう思える。

「それに・・・」

自分には頼れる大切な姉や妹、最高の仲間達がまだ残っている。それが、今の彼女を一番支えていた。

そして・・・

味方駆逐艦から魚雷数本が発射された。海の中を翔ける魚雷を一瞥し、比叡はどこまでも蒼い空を見上げた。蒼く澄み切った空は美しく輝いていて、絶好の死に日和だった・・・のかな？

比叡はそう思うと、なぜかおかしくて笑ってしまった。心の底から笑った。その時、蒼い景色がじわりと歪んだのは笑いすぎて出たのかものか、それともやっぱり死にたくないという気持ちの表われだったのかはわからない。ただ、今だけは――涙が止まらない。

笑い終えたときには目は真っ赤になり、頬には一筋の雫が煌いていた。

海中を翔ける魚雷はもう肉眼でもはっきりと見える距離にまで迫っていた。

比叡はそっと遥か彼方に浮かんでいる『霧島』に向かって、そっ

と、優しく微笑んだ。
「姉さん・・・榛名・・・霧島・・・」
比叡は、本当に、心の底から嬉しそうな、優しい、満面の笑顔をした。
「あなた達と一緒にいられて、本当に良かった・・・」
雫が、頬をそっと流れた・・・
「――ありがとう」
その言葉を最後に、比叡は静かに目を閉じた。
刹那、『比叡』の艦体に数本の水柱が上がり、歴戦の重鎮戦艦、戦艦『比叡』はゆっくりと艦尾から海の底に沈んで逝った・・・

――戦艦『比叡』、旧式艦だが最も活躍した戦艦の一隻。イギリスの造船技術の粋を結集させて完成した『金剛』をモデルに日本で完成した国産金剛型戦艦最初の巡洋戦艦。完成後すぐに第一次世界大戦アジア戦線に参加。その初陣を姉艦『金剛』と共に飾り、その後十年以上日本海軍の中核として活躍。だが時代の変化で旧式化し始めていた金剛型戦艦四隻を近代化改装していた際に締結されたロンドン海軍軍縮条約の影響で、日本は戦艦一隻を失う事となり、他の戦艦よりも工事の遅れていた『比叡』が選ばれ、彼女は第一線から身を引いた。兵装や装甲を一部撤去し、練習戦艦となった『比叡』はさらに天皇陛下の御召艦となり、天皇陛下を乗せて海を翔けるという名誉も受け、昭和の最も愛された戦艦として『長門』『陸奥』と同じくらい国民から愛された。しかし、その後再び大改装して高速戦艦化して第一線に復帰し、その初陣を真珠湾で飾った。その後も幾多の戦いに赴き、常にその身を前線に置き続けた歴戦の英雄艦は、戦いに疲れ切ったその艦体（からだ）を深い海の底に沈め、日本海軍最初の損失戦艦として永遠の眠りについた――

第七章　第十一節　霧島の決意と艦隊決戦

挺身部隊は作戦の要の一隻である戦艦『比叡』が沈むと、作戦を中止して全艦艦首を北に向けて撤退して行った。

その後、戦艦『比叡』『霧島』による敵航空基地砲撃が失敗した為、日本海軍は十一日深夜から十二日にかけて、外南洋部隊の第八艦隊（重巡洋艦二隻、軽巡洋艦一隻、駆逐艦四隻）によるヘンダーソン航空基地砲撃を行った。だが、重巡二隻の二〇ｃｍ砲は合わせて九八九発砲撃したにもかかわらず戦艦の三五・六ｃｍ砲に比べてたいした効果はなく、その日のうちに復旧されたばかりか、砲撃終了後、帰投中に空母『エンタープライズ』の艦載機による攻撃を受け、重巡洋艦『衣笠』が沈没した。

一方、撤退していた『霧島』を中心とした艦隊は十四日、再び針路を南に変針していた。

新たな任務が命令されたのだ。

味方陸軍に補給する物資を積んだ輸送船団を無事にガダルカナル島に送り届ける為、再度敵航空基地砲撃が必要となったのだ。その為、艦隊は損傷した艦をトラックに戻し、各地域に展開していた別艦隊から選抜した艦を集め、艦隊を再編成した。その戦力は戦艦『霧島』、重巡洋艦『高雄』『愛宕』、軽巡洋艦二隻、駆逐艦九隻だった。

艦隊は再び、ガダルカナル島に向かって進撃を開始した。

その頃、アメリカ軍は日本軍の暗号を解読し、日本軍が再び突入して来るのを察知していた。

ハルゼーはこの報告に自らの隷下の機動部隊護衛任務に就いていた新鋭戦艦『ワシントン』『サウスダコタ』他駆逐艦四隻の艦隊を急遽編成。日本軍の侵攻を止めようと日本軍に向かって突進した。

霧島は姉の仇と、姉と共に成し遂げられなかった敵航空基地艦砲射撃作戦を絶対に成功させようと意気込んでいた。が、その想いは実現される事はなかった。

十四日の深夜、艦隊は周囲を哨戒していた水上偵察機から敵艦隊発見の報が入った。その報告では敵艦隊は巡洋艦四、駆逐艦四だったが、それは誤報で本当は前述のような新鋭戦艦二隻を基軸とした艦隊であった。

偵察機からの報告を信用した近藤中将は敵艦隊に戦艦はいないと誤解してしまった。

そして、艦隊はその後も進撃を続けた。

それから一時間半後、本隊の前方を走っていた前方警戒第一部隊の駆逐艦二隻の部隊が敵艦隊を発見。急遽第一部隊の軽巡洋艦『川内』が掩護に向かってしまい、僚艦、駆逐艦『綾波』は単身で暗い海を突き進んだ。

駆け付けた『川内』も合流し、三隻は六隻の敵艦隊としばし砲雷撃を繰り返して交戦を続けたが、戦艦二隻の恩恵を受ける敵艦隊はあまりにも協力で、川内隊はその圧倒的な火力の前に被害が増え、一時退避を余儀なくされて撤退し、敵戦艦部隊はそのまま進み続けた。だが、それが『綾波』の運命を大きく変えた。

全く敵艦隊の情報が入って来なかった『綾波』は単艦で戦艦二隻を含む敵艦隊と偶然にも遭遇してしまった。

駆逐艦『綾波』の全員が覚悟を決め、敵艦隊に向かって突撃を決めた。

白波を立てて敵艦隊に向かって突貫する『綾波』の艦橋で、二刀流の軍刀を構えた十八歳くらいの少女が長いポニーテールをゆらゆらと揺らしながら覚悟を決めた顔で闇夜に見える敵艦隊を睨んでいた。

彼女はこの駆逐艦『綾波』の艦魂。連合艦隊でも数少ない二刀流

の使い手で、その優雅にして高速の攻撃で相手を打ち倒す様はまるで《妖精》のようと謳われ、その戦闘能力は翔鶴や榛名とも互角に戦え、まさに駆逐艦の鏡のような艦魂だった。

最大速度で『綾波』は突貫する。敵との距離が五〇〇〇ｍほどに縮まった時、敵艦隊から無数の光が放たれた。その直後、『綾波』のまわりに大量の水柱が上がった。敵艦隊に発見されたのだ。

無数の砲弾の雨の中、『綾波』も照明弾を発射。その直後敵艦隊がまばゆい光の中に現れた。が、同時に『綾波』も闇というベールを脱がされて姿を現した。そんな『綾波』に向かって敵艦隊は集中砲火をする。

無数の水柱が立ち上る中、綾波は敵艦隊を睨みつけ刀を構える。

「構うものかッ！　我が魂の一撃受けてみよッ！」

綾波の怒号と同時に第一主砲である十二・七ｃｍ連装砲が轟音を立てて砲撃した。次の瞬間、敵駆逐艦一隻が爆発し炎上した。なんと初弾を命中させたのだ。

その直後『綾波』は一気に敵艦隊に向かって突進した。主砲と魚雷を乱射。次々に敵艦を攻撃していく。そのすさまじい攻撃で次々に敵駆逐艦は炎上する。

敵艦隊もたった一隻の駆逐艦に集中攻撃を行ったが、『綾波』はその艦魂の異名の《妖精》のごとく敵の砲雷撃を避け、踊るように砲雷撃を繰り出した。

「私は、負けられないのよッ！」

綾波は二本の軍刀を高速に振り回す。フォン・・・という風を切る音が美しい音となって艦橋に響く。

敵艦は次々に炎上し、『綾波』の死の舞は止まらないかと思われたが、それはついに終わりを迎えてしまった。

敵戦艦『ワシントン』『サウスダコタ』が後方から一斉に砲撃を開始し、『綾波』を集中攻撃したのだ。

敵戦艦の砲弾は『綾波』に次々に命中。『綾波』は爆発、炎上した。

「あぁぁッ！」

第一煙突が砕け、火災が発生した。火災の影響で発射直前の装填を終えたばかりの一番魚雷発射管が右方向を向いたまま故障して旋回不能・発射不能。さらには左舷に積んでいた内火艇のガソリンから発生した火災によって魚雷が炙(あぶ)られるという最悪の状態に陥ってしまった。

燃える自分の艦体を見詰め、綾波は咳と共に赤い血の塊を吐いた。

「ゲホゴホッ・・・この程度でやられる私じゃない。皆から≪妖精≫という異名をもらい、最強の駆逐艦と呼ばれる私が、貴様ら鬼畜米英に負けるものかッ！」

綾波は唇の端から垂れる血筋を袖で拭き取ると、自らの血にまみれた双剣を握り直して構えた。同時に、残った二基の六一ｃｍ三連装魚雷発射管が右旋回して敵艦隊を捉えた。

「これでも食らえッ！」

綾波の咆哮と同時に、二基の魚雷発射管から六本の魚雷が発射され海の中を翔け、敵駆逐艦を一隻轟沈させた。さらに二隻の駆逐艦にも損害を与えた。

だが、敵艦も黙ってはいない。砲雷撃をひたすら加え続けた。『綾波』は煙突を破壊。二番砲塔が粉砕。機関部に二発の砲弾を受け、『綾波』はついに沈黙した。

その直後、退避していた軽巡『川内』以下駆逐艦二隻の艦隊が到着。さらに後方の本隊にいた駆逐艦も数隻駆けつけ、『綾波』が屠(ほふ)りまくった敵艦隊に壮烈無比の砲雷撃を開始した。

しばしの砲雷撃の末、日本艦隊は敵駆逐艦一隻撃沈。一隻中破させた。

両艦隊は散々お互いを撃ち合った後、それぞれ離れて行った。

艦隊は『綾波』の生存者を救出する事に全力を挙げ、乗組員の半分以上を救出した。

一方、敵艦四隻を撃破したという想像絶する戦果を挙げた綾波はもはや意識はなく、艦橋の床に死んだように倒れていた。だが、そ

の表情はこの上ないほど柔和なものだった。まるで、最高の満足を得たように・・・

――駆逐艦『綾波』、敵艦二隻撃沈。一隻大破。二隻に損害を与え、日本海軍駆逐艦史上類を見ない大戦果を挙げるが、損害が酷く、生存者救出終了直後、まるでそれを見届けたかのように二度の大爆発を起こして、ソロモンの海に沈んで逝った――

その頃、近藤中将は依然敵艦隊に戦艦はなしと誤解し続け、巡洋艦部隊なら水雷戦隊で片が付くと判断。挺身部隊本隊は任務を完遂させる為に艦首をガダルカナル島に向けたまま前進を続けた。

闇夜の中を進む艦隊は、旗艦・戦艦『霧島』以下軽巡一、駆逐艦三という規模の少ないものになっていた。水雷戦隊の大半を敵巡洋艦部隊撃滅に向けてしまったのが原因だ。

だが、そんな小さくなってしまった艦隊の中、戦艦『霧島』だけはその勇姿を輝かせていた。

天高くそびえ立つ艦橋は、まさに浮かべる城。艦齢はもう二七年という老朽戦艦だが、その勇姿はいつも最前線にあり、艦隊の将兵達はそんな『霧島』と共に戦える事に誇りを持っていた。

そして、そんな『霧島』の防空指揮所では、霧島が夜食を取っていた。夜はまだ長い。休息も大切な事だ。

うつむく霧島は無言で握り飯を頬張る。

「・・・うぅ・・・ぐすっ・・・」

霧島は肩を小さく震わせ、嗚咽を漏らす。その白い頬を、涙が一筋流れる。

「・・・おいしいよ・・・姉さん・・・」

泣きながら、霧島は出撃前に姉が持たせてくれた握り飯を頬張る。ただの塩むすびなのに、その塩加減は最高だ。何より、姉の味。今は亡き、もう食べられない姉の味だ。

「・・・姉さん・・・ぐすっ・・・」
霧島は軍服の袖で頬を流れる涙を拭き取る。すでに何度もそうやって拭いたので、袖は涙でぐちゃぐちゃになっている。
いつもはきれいに食べる霧島だが、今日だけは違う。ただひたすらに姉の味だけを味わおうと、口いっぱいに塩むすびを頬張る。その口や手には米粒が付くが、それすら気にせず霧島は塩むすびを呑み込むと、最後の塩むすびに手を伸ばす。が、その手は何も取らずに戻った。
霧島は無言で最後の塩むすびを見詰める。
「・・・姉さん・・・私・・・がんばるから・・・見ててね・・・」
そう言って、塩むすびを笹の葉で包むと、そっと腰のポーチに入れる。
「・・・この最後のおにぎりは、任務を完遂させた後に食べる」
そう言って、しっかりとポーチを閉じると、光り輝く星空を見上げる。
どこまでも澄んだ星空を見上げ、霧島はそっと拳を握る。
「・・・姉さんの為にも、日本の為にも、そして――」
霧島は遠く日本の方向を見詰め、ほんのりと顔を赤らめる。
「少尉とのデートを成功させる為にも」
そう言って、霧島はいつの間にか手に持っていた結婚式場案内のパンフを見詰める。これは比叡と共に翔輝との未来を綿密に計画したものだった。正確にはゴールはしっかりしているけどその過程が真っ白という致命的な弱点を持っているのだが。
霧島はパンフをギュッと両腕で握ると、星空を見上げる。
光り輝く星空と、淡い月の光がその身を包み込む。その姿はまるで月の女神のよう。きらきらと輝く黒髪を、風が柔らかに揺らす。
「姉さん・・・見ててね。私、絶対幸せになるからね」
そう笑顔で宣言すると、美しく輝く星空に向かって見事な敬礼をした。月に照らされるその姿は、まさに月の女神。どこか間違った方向に全力疾走しているが、それでも月の女神のように美しい。

霧島はどこまでも澄んだ星空を見詰め続けた。

戦艦『霧島』を基幹とした艦隊はガダルカナル島に向かって進み続けた。

白波を立てて進む『霧島』の防空指揮所で、海風に髪を靡かせる霧島はじっと闇夜を見詰めていた。

この暗闇の向こうに、自分達の目的地――ガダルカナル島があるのだ。姉達が見事に成功させた作戦を、今はこうして自分が亡きもう一人の姉の想いを背負って遂行している。これは責務なのだ。

「・・・もうすぐ、ガダルカナル」

霧島はそっと軍帽を脱ぐと、手に持っていたもうひとつの軍帽を被った。

それは、死ぬ間際に自分に託してくれた――比叡の軍帽であった。姉の軍帽を被り、霧島は気合を入れ直す。その時、

「・・・え？　あれは・・・」

霧島が見たのは、右前方に薄っすらを見えた影であった。

「・・・あれは、艦隊・・・？」

薄っすらと見えるそれは、確かに水上に浮かぶ艦艇の陰であった。

「もしかして、水雷戦隊が帰って来たのかな・・・？」

霧島は不安げにその艦隊を見詰める。その時、すさまじい光が霧島の目をくらませた。

「うわぁッ！？　な、何ッ！？」

驚く霧島だが、奪われた視界をすぐに戻った。どうやら探照灯が照射されたらしい。その先には闇に隠れていた艦隊が光で映し出された。

「・・・え？」

霧島の顔から血の気が引いた。

目は驚きのあまり動かせずその壮絶な現実を見せつけ、耳は恐怖のあまりまわりの怒号や雑音を全て取り払って無の空間を作り上げる。

霧島の見詰める先で探照灯に映し出されたのは、距離にして約六キロという超接近していた――敵戦艦であった。

「・・・うそ・・・だって、戦艦はここにはいないって・・・ッ！」

霧島はハッとした。ここにきてようやく霧島は偵察機の情報が誤報だという事に気がついた。

自分達は《巡洋艦》という隠れ蓑（みの）を着た戦艦をむざむざと見逃していたのだ。

悔しそうに、霧島はその桃色の唇を噛む。すると、今の今まで気がつかなかったが、艦長の声が辺りに響いていた。それは攻撃用意の命令だった。

「そうだ。今は敵を倒す事だけを考えよう」

霧島はそう自分に言い聞かすと、先程までのうろたえていた少女の顔から、一人の帝国海軍軍人の顔になる。

考え方を変えればいい。

目の前には、日本海軍が待ちに待っていた敵戦艦がいる。

日本海軍が死に物狂いで求めていた戦艦対戦艦の艦隊決戦の現実がそこにある。

なら、軍人として、戦艦として、やるべき事はただひとつ。

「敵戦艦を撃破するッ！」

霧島はそう叫ぶと、腰に挿してある軍刀をスラリと鞘から抜いた。戦う事が嫌いであっても、日本を守りたいという気持ちには勝てない。

隣を走っていた軽巡洋艦が照明弾を撃ち上げた。すさまじい光によって敵戦艦『サウスダコタ』、そして日本艦隊が映し出された。

霧島は目の前の敵戦艦に向かってその剣先を向けると、いつもは柔らかな曲線を描いている瞳を細め、武人の顔になる。その姿まるで、金剛のようだ。

「私は負けられない。必ず勝つッ！」

ゴゴゴゴゴ・・・・と、『霧島』の前甲板にある三五・六ｃｍ連装砲二基四門が動き出し、敵戦艦にその砲身を向ける。

それを一瞥した霧島はキッと敵戦艦を睨みつけ、心の底からの、戦艦としての誇りを胸に咆哮した。

「撃てええええぇぇぇぇぇッ！」

ドガアアアアァァァァンッ！

『霧島』の主砲が唸り、敵戦艦に砲撃を加える。その一撃は敵戦艦の近くにいた敵駆逐艦らしきものに命中し、一瞬にして轟沈させた。だが、敵艦隊もすさまじい砲撃を行ってくる。

撃ち出された無数の砲弾が雨のように降り注ぎ、『霧島』のまわりに無数の水柱を上げる。対空戦闘と違って敵機の動きで艦の針路を変えるのではなく、とにかくジグザクに動いて敵砲弾を回避しながら攻撃する。それが、海軍の誇りとも言うべき艦隊決戦というものだ。

無数の水柱に包まれる『霧島』の防空指揮所では、舞い上がった海水が雨のように降り注いでいる。すでに霧島はずぶぬれだが、その瞳はしっかりと敵戦艦を見つめている。

「これが艦隊決戦・・・この心を震わす衝動・・・これが艦隊決戦なのね！　金剛姉さん！」

霧島は初めて知った。

この心を震わせる最高の戦い。これこそが戦艦の本来の有り方である艦隊決戦なのだ。対空戦闘や敵駆逐艦と交戦するのとは訳が違う。己の実力を本気でぶつけられる小細工なしの戦いができる最高の好敵手。それが戦艦なのだ。

「今ならわかるよ・・・金剛姉さんがあれほど艦隊決戦に執着していたのが・・・こういう事だったのねッ！」

霧島は最高の好敵手である敵戦艦に向かって刀を振り下ろす。と、同時に主砲も轟音を立てて巨大な砲弾を撃ち出す。そして敵戦艦のまわりにいくつもの巨大な水柱を立たせる。命中弾はなし。霧島は悔しそうに唇を噛む。が、すぐさま敵戦艦からお返しの砲弾が返って来る。『霧島』はそれを右へ回避する。すると、左側の海に無数の水柱が上がった。

もしあのまま突き進んでいたら、自分はきっと今頃無数の敵砲弾を受けて無数の穴を開け、大火災を引き起こしていただろう。そう思うとぞっとする。が、すぐさま敵戦艦を睨みつけ、咆哮する。

「撃てえええぇぇぇッ！」

怒りの三五・六ｃｍ砲が敵戦艦を襲う。

無数に撃ち出された砲弾が敵戦艦に雨のように降り注ぐ。と、一瞬、敵戦艦が光った。次の瞬間、敵戦艦は炎を上げた。

「め、命中した・・・ッ！？」

霧島は目を見開いて驚く。だが、見詰める先に浮かぶ敵戦艦は燃えている。

「や、やったぁッ！」

今自分は、長年日本海軍の悲願であった敵戦艦に一矢を報う事ができたのだ。しかも、自分は本当ならもう引退しているであろう老朽戦艦。そんな自分が、敵戦艦に一撃を入れられたという喜びに、霧島は歓喜する。

「姉さん！　私、私やったよッ！」

霧島はそう嬉しそうに叫ぶ。

それは、戦艦として生まれた自分が、二七年という艦生で得た最高の戦果であった。

戦艦の艦魂である霧島が、その勝利に何度も歓喜の声を上げる。

「・・・え？」

もう一度燃える敵戦艦を確認した時、その戦艦の奥で数度の小さな光がほとばしった刹那、ドガンドガンッ！　ドォンッ！　という爆音と共に無数の水柱が『霧島』を包み込んだ。

「な、何ッ！？」

突然の事に霧島は驚く。と、

ドガアアアアァァァァンッ！

「あがぁッ！」

突如すさまじい光に包まれた刹那、身体にすさまじい痛みが走った。

埃ひとつついていなかった士官用の軍服からは真っ赤な血がにじみ出る。

すさまじい激痛の中、霧島は闇の向こうを見詰めた。と、

「あ、あれは・・・ッ！」

痛みを堪えて見詰める先には、燃える敵戦艦の向こうから同等、もしくはそれ以上の大きさの敵艦が姿を現した。それは間違いなく、戦艦であった。

現れたのは、戦艦『サウスダコタ』の後方にいた戦艦『ワシントン』であった。

現れた新たな敵戦艦に、霧島は愕然とする。まさか敵が二隻も戦艦を用意していたなんて予想外だったからだ。

だが・・・

霧島は首を小さく横に振る。

「約束したんだ・・・少尉とデートするって・・・だから――」

霧島は比叡の形見の軍帽を深く被ると、口の端から垂れる血を袖で拭き取り、自らの血で赤く染まった軍刀を構え、敵戦艦を睨む。

「負けられない・・・負けられないのよッ！」

負けられない、負けてはならないのだ。姉の為にも、夕立や綾波の為にも、この戦いに、今作戦の全てが掛かっている。絶対に、負けれない。

「・・・たとえ、敵がどんなに強くても、気合と根性で戦い抜く――それが大日本帝国海軍。そうよね？　みんな」

霧島は刀を構え、『霧島』は敵艦に向かって突進を開始した。

敵戦艦から次々に打ち出される砲弾を受け、『霧島』の甲板設備が次々に粉々に吹き飛び、霧島自身も血まみれになっていく。だが、霧島はあきらめない。死んで逝った者達の為にも、自分を信じて待っていてくれている者達の為にも、そして・・・

「長谷川少尉とデートする為にも・・・私は負けない・・・ッ！負けられないのッ！」

霧島は最後の力を振り絞り、四基八門の主砲を雷鳴のごとき咆哮

を天空に響かせ、敵戦艦を砲撃した。

敵艦隊は去った。

敵戦艦二隻を相手に奮戦した『霧島』は、敵艦隊にかなりの被害を出し、その激務を終えた。

洋上に浮かぶ大傾斜した『霧島』の艦体は巨大な黒煙を上げ、荒れ狂う炎が大火災を引き起こしていた。そのまわりを味方駆逐艦や巡洋艦達が生存者を救出する。

そんな様子を、霧島は祈るようにして見ていた。

「・・・早く・・・私はもうダメ・・・一人でも多く・・・生存者を救出して・・・ッ！」

心優しい霧島は、自分の事よりも他人の心配をしていた。

そして、一通り生存者を救出すると、駆逐艦や巡洋艦は沈没時の渦に巻き込まれない為に離れていく。

すでに体中が鉛のように重く、氷のように冷たくなっていた。真っ赤に染まった白い軍服は、もはやその輝きを失っている。

焦点の合ってない目で、霧島は虚空を見詰める。その瞳は薄っすらと濡れている。

「結局・・・少尉との約束・・・守れなかった・・・ごめんなさい・・・」

霧島は目を閉じ、比叡と同等、もしくはそれ以上に大切な少年を思い出す。

初めて心の底から信頼できた大切な人――それが少尉だった。

少尉は底抜けて優しく、いつも下を向いていた私の視線を前に向けてくれた。世界はこんなにも美しく、自分のまわりにはこんなにすばらしい仲間がいるという事に気づかせてくれた。

そして、初めて会った時から――ずっと好きだった。

好きで、いつも少尉の事ばかり考え、それが恋だという事に気づいたときには、もう少尉のまわりにはたくさんの少尉を慕っている艦魂達がいた。

自分は遠巻きでもいいから、そんなおこぼれを貰っていればいい。そう思ってた。でも、それじゃいけない。それじゃ何も進まない。姉さんに言われて、私は勇気を出して少尉をデートに誘った。少尉は、なんか微妙な態度だったが了承してくれた――嬉しかった。

――でも、それはもう叶える事はできない。もう自分は――死ぬのだから。

「ごめんなさい少尉・・・あなたに・・・見せてあげたい・・・景色があったから・・・だから・・・」

霧島はそう言いながら、涙を流した。

ぽろぽろと涙を流すが、その表情はとても柔らかな笑みであった。きっと彼なら約束を破っても許してくれる。そう、思えたから。

「・・・ありがとう」

私の人生に、少しだけの間だったけど、たくさんの思い出をくれて、本当にありがとう。

デートに誘ったら言おうと思っていた事だけど、今、そっと言おう。

霧島は静かに目を閉じ、笑顔を浮かべた。

それは、彼女が出せる、精一杯の最高の笑顔だった。

――少尉。私は、あなたを世界で一番、愛しています・・・――

――戦艦『霧島』、大正時代、第一次世界大戦中に誕生し、海軍休日を経験し、太平洋戦争では僚艦『比叡』と共に真珠湾攻撃から常に機動部隊の護衛として常にその身を最前線に置いていた。日本海軍の戦艦の中では古参に入るが、他の同型艦と同じく高速戦艦だったので内地やトラックで待機している大和型や長門型戦艦の代わりに前線で戦い続けた。そんな歴戦の戦艦の艦魂である霧島は、戦艦の艦魂には不似合いな平和主義者で争い事が嫌いだった。だが、愛する祖国を守る為に、必死の想いで戦い続けた本当の戦士だった。普通の女の子として生きる事を許されず、普通の恋をする事も許さ

れない、戦うだけの存在の乙女。そんな彼女も、普通の女の子ように恋をした。優しい彼といつまでもずっと一緒にいたい。そんな普通のささやかな願いも、彼女達には許されなかった。そして、そんな少女は戦艦としての責務である敵戦艦とのすさまじい艦隊決戦の末、ソロモンの海に、静かに沈んで逝った。彼女は、戦艦として立派に戦い、立派にその責務を終えたのだ――

この海戦で、日本海軍は戦艦『比叡』『霧島』、駆逐艦『夕立』『綾波』他一隻を失い、重巡洋艦『愛宕』『高雄』、駆逐艦二隻が小破とい悲惨な結果になった。しかし米軍も軽巡洋艦二隻、駆逐艦六隻が沈没し、重巡洋艦二隻、駆逐艦二隻大破。戦艦一隻、駆逐艦二隻中破。軽巡洋艦、駆逐艦それぞれ一隻が小破という満身創痍という状態だった。

結果、日本軍は戦術では辛くも苦い勝利をしたが、敵基地はほとんど無傷の上、せっかくガダルカナル島まで辿り着いた輸送船団は敵基地航空隊の猛攻撃で全滅。揚陸した弾薬や食料などの補給物資のほとんどが焼き払われ、陸軍支援作戦は失敗に終わった。

米軍は海戦では負けたが、日本軍の絶対必須の作戦を失敗させ、戦略では大勝利を収めた。

この悲惨な海戦を、第三次ソロモン海戦と言う・・・

この後、陸軍兵はガダルカナル島の通称《ガ島》の文字をもじった《餓島（がとう）》と言われた同島で食糧不足や伝染病に掛かり、次々にその命を失っていった。

日本軍はもはやガダルカナル島奪還を諦め、その後は高速駆逐艦によるピストン撤退を行い、ガダルカナル島を撤退する事となった。

ミッドウェー海戦で失った航空兵力増強の為に行われたソロモン諸島攻略作戦は、ガダルカナル島での壮絶な戦いでそのミッドウェー海戦の三倍もの航空機を失い、死者の数は約二万人にも上った、日本陸海軍でも類を見ない大敗北だった。

第七章　第十一節　霧島の決意と艦隊決戦（後書き）

今話では駆逐艦『綾波』の戦闘シーンが改良されました。
知っている人はわかると思いますが、外伝短編の《艦魂年代史外伝　ソロモンの英雄　綾波　ＡＹＡＮＡＭＩ》をベースに書き直しました。ですので、そっちと被る部分もありましたが、その辺はご勘弁ください。

第七章　第十二節　悲しみの連鎖（前書き）

《綾波（あやなみ）》

綾波型駆逐艦（特二型駆逐艦）一番艦――駆逐艦『綾波』

出身　藤永田造船所（大阪府）

身長　１６５ｃｍ

髪型　ポニーテール

実年齢（１９４２年１１月現在）１２歳

外見年齢　１７、８歳

誕生日　４月３０日

好きなもの　姉妹・友情・努力・正義・日本

嫌いなもの　無知・無能・無策・欧米列強

家族構成　妹九人

《艦魂年代史外伝　ソロモンの英雄　綾波　ＡＹＡＮＡＭＩ》の主人公の艦魂。太平洋戦争ではかなり有名な駆逐艦な上に、某人気アニメキャラの苗字の由来にもなっている。重武装駆逐艦である特型駆逐艦の一隻で、その艦級は常に日本海軍の最前線に身を置いていた。特にソロモン諸島の戦いでは駆逐艦の主力になっていた。そして『綾波』はそんなソロモンの戦いのひとつである第三次ソロモン海戦で単艦で敵駆逐艦四隻を撃破沈させるという大戦果を挙げている。そんな『綾波』の艦魂は翔鶴や金剛、榛名にも引けを取らない戦闘能力を持ち、日本海軍では数少ない二刀流使い。その華麗な攻撃から《妖精》という異名を持つ。彼女が残した功績は今もなお世界駆逐艦の伝説のひとつになっている。

第七章　第十二節　悲しみの連鎖

比叡、霧島の死の報告を受けた連合艦隊艦魂達は、悲しみの緊急会議を開いた。

旗艦『大和』の会議室には多くの艦魂が集まっていたが、部屋を支配する音はすすり泣きや嗚咽ばかりだった。

「戦艦『比叡』『霧島』、駆逐艦『暁』『夕立』『綾波』、計五隻沈没・・・」

連合艦隊旗艦である大和は、そのあまりにも壮絶な内容の報告書を見て愕然としていた。

二人の死を聞いて飛んで来た翔輝も大和の横に座っていたが、ずっと沈黙したままだ。

翔輝は自分の前方の席に座って涙をボロボロと流しながら唇を噛み、必死に悲しみを堪えている、見るのも辛い榛名を見て、うつむいてしまう。

その他の艦魂も悲しみに包まれ、あの山城も眉間にしわを寄せて苦しそうな表情を浮かべていた。

誰もが仲間を失った悲しみに支配されていた。が、

「二人は、御国（おくに）の為に最後まで戦い抜き、死んで逝ったのだ。悔いはなかろう。まさに、連合艦隊戦艦の鏡だ」

一人、常時と全く変化がない金剛は、自分の妹達の死を賞賛していた。

「何、言ってるの・・・ッ!?」

瞳を真っ赤にするほど泣いていた日向が冷淡な態度をしている金剛に激昂した。

「金剛お姉ちゃんおかしいよ！　比叡お姉ちゃんや霧島お姉ちゃんは、金剛お姉ちゃんの大切な妹でしょ!?　どうしてそんな態度が取れるの!?」

日向の言葉に全員が息を呑んで金剛の回答に注目する。が、金剛

が返したのはあまりにも感情を捨てたものだった。
「奴らは私の妹である以前に軍人だ。帝国海軍軍人であり、戦艦なのだ。戦って、散って逝った。奴らは御国の為にその命を最後まで奉げたのだ。立派な奴らだよ」
その言葉に、全員が完全にキレた。
確かに軍人である身、戦って死ぬ事は立派だ。しかし、いくらなんでも金剛の態度はあるまじきものだったのだ。自分の妹が二人も死んだというのに、平然としていられるその神経に吐き気がした。
「金剛さん！　そんな言い方しないでくださいッ！」
「そうですッ！　大切な妹さんでしょ！？」
「金剛長官には失望しました！」
死んだ暁や夕立、綾波の姉妹達が牙を向く。
部屋中から罵声が飛び交い、部屋は金剛という最低な女を排除しようという空気に包まれた。が、
「みんなやめてくれよぉッ！」
突如嗚咽交じりで響いたその声に、全てが一瞬にして沈黙した。
「榛名・・・」
長門が見た先には、いつも明るくて男勝りで、艦魂達の中にも密かにファンが大勢いる元気印の少女――榛名の辛そうな表情があった。
「やめてくれよ・・・ッ！　あいつらだって、テメェらがこんなに悲しむのは嫌なはずだろ？　だから・・・ッ！」
榛名の涙に、誰も何も言えなくなった――いや、言えなかった。
「姉貴が無粋なのはみんな知ってんだろ？　姉貴はあんまり怒りの感情以外は面に出さない。でも、これでも姉貴なりに悲しんだんだ・・・勘弁してやってくれよ」
榛名の言葉に、金剛は「ふん」と鼻を鳴らして部屋を出て行った。
一瞬、今の金剛の態度に全員眉をひそめたが、榛名が「悪い・・・」と謝ると、全員は何も言わなかった。
「では・・・今日はこれで解散とします。各自、自艦に戻ってくだ

さい・・・」

大和の力ない小さな声も、沈黙した部屋には良く響いた。

艦橋に戻った翔輝の横には、大和はいなかった。今は翔輝のベッドで思いっきり泣いているだろうから、翔輝は大和を一人にさせてあげたかった。

落ち込んでる翔輝に、高柳はそっとコーヒーを差し出してくれた。それは翔輝にとって、涙が出るほど嬉しかった。

高柳は知っていた。翔輝が『比叡』や『霧島』の艦魂と仲が良い事を。だから、落ち込んでいる翔輝をほっとけなかった。

艦橋にコーヒーの匂いと翔輝の嗚咽が混じった時だった。

「長谷川君。ちょっと・・・」

航海長が申し訳なさそうに声を掛けて来た。

「実は、『金剛』の航海長に書類を渡さなければならないんだが、頼んでいた奴が風邪で倒れてしまったんだ。だから、その・・・」

言いよどむ航海長。そんな彼を見て翔輝はうなずいた。

「いいですよ。『金剛』ですね？」

翔輝は努めて笑みをした。そんな翔輝の健気な姿に、航海長は「すまん」と小さく謝った。

「しかし、兵ではダメなのか？」

高柳は不機嫌そうに問う。彼としては今の翔輝にそんな仕事を任せたくないのだ。

「はい。重要書類なので、ちょっと兵には」

航海長が遠慮がちに答える。彼だって仕事なのだ。

そんな二人に、翔輝は優しく微笑む。

「いいですよ。気分転換にもなりますし」

「すまん。ではこれを」

翔輝は航海長から重要書類の入った大きな封筒を受け取った。

翔輝は艦橋を離れると、内火艇乗り場へ行った。そしてそこから内火艇に乗って、洋上に浮かぶ戦艦『金剛』に向かった。

戦艦『金剛』は老朽艦（艦魂は二〇歳前半ぐらいだが）と言われているが、翔輝の目の前に広がる甲板はピカピカで、南国の暑苦しい太陽光を反射してまばゆく光っている。その他機銃や高角砲も新品のように輝いていて、その清掃能力は優秀な将兵が乗っている新鋭艦『大和』と同等、またはそれ以上だ。

翔輝は鏡のようにキラキラ輝いている甲板を見てふと思い出した。

金剛の異名は確か《鬼の金剛》だが、今考えるとその名は本体である『金剛』の異名だ。『金剛』は日本海軍艦艇の中で最も訓練が過酷で、処罰もかなり厳しい事から《鬼の金剛》』と言われている。まぁ、どうでもいいが。

翔輝は途中で考えるのを止め、その足で艦橋を目指す。今回は無事に迷わず艦橋に着いた。珍しい事もある。

艦橋には『金剛』の航海長が待っていてくれて、すぐに書類を渡し終えた。

翔輝は難なく航海長から受けた任務を終えると、艦橋を出て今さっき自分が来た道を記憶を頼りに下った。が、

「あれ？」

翔輝の背中に嫌ぁな汗が流れる。

これはやっぱり・・・

嫌だ嫌だ。認めたくない。でも認めなくては、認めなくては・・・ッ！

「ま、迷った・・・？」

引きつった笑みをしながら、翔輝の顔から血の気が失せていく。

それはもうサーっという効果音がこれ以上なく的確なほどに。

錯乱。錯乱したい。いい？　してもいい？　いいんだよね？　するぞ。本当にしちゃうぞ！

「って、何一人で空しい事考えてんだよ・・・」

翔輝はため息して、結局歩く事にした。歩かなくては先に進まないという、あまりにも基本的で、無謀な選択だった。山での遭難な

ら確実に命を落とす選択だ。
翔輝はキョロキョロと辺りを見回すが、周りは全て鉄、鉄ッ、鉄！　鉄ッ！　そこには鉄の壁と鉄の床、鉄の天井しかなく。戦果はなかった。ただひたすら鉄の世界が広がっているという空しい現実だけだった。
迷い始めてから十五分後（自覚してから）、ようやく上へ上がれる階段を見つけた。ただの鉄の階段が、今の翔輝には天空へ導いてくれる光の階段に見えた。
「ふう、これでようやく出れる。さっさと『大和』に戻って大和達と一緒にコーヒーでも飲むとしますか」
翔輝はさっさと出てしまおうと階段の一段目に足を掛けた、その時、

くそおおおおぉぉぉぉぉッ！

「ひッ！？」
突然響いたすさまじい叫び声に、翔輝は硬直してへなへなと腰を落としてしまった。
そのすさまじい叫び声は再び響いた。その方向は、翔輝の来た方向とは別の通路の奥の方から聞こえた。
翔輝はただ事ではないと思い、全力でその方向に向かって走り出した。
次第に叫び声の発信源に近づき、ある事に気づいた。
声は男性のような低い音ではなく、どこか高い声だった。それは、女性特有の・・・
「艦魂？　って事は、金剛さん？」
叫び声の発信源である部屋の前に来た時、翔輝は気づいた。
「ううッ！　う、うわあああぁぁぁぁッ！」
叫び声は・・・嗚咽混じりの、泣き叫び声だという事に。
「くそッ！　くそおおおぉぉぉッ！」

翔輝は見てはいけないと直感したが、でも気になり、そっとドアを開けてその隙間から部屋の中を覗いた。すると、

「鬼畜米英め・・・ッ！　ううっ・・・私が・・・私が出撃していれば・・・こんな・・・こんな事には・・・ッ！」

中で泣き叫んでいたのは金髪の長い髪をした白い士官用の第一種軍装に身を包んだ女性――金剛だった。

金剛はベッドに突っ伏し、恥じる事なくボロボロと涙を流していた。悔しそうに唇を噛み、ベッドを何度も何度も拳で叩いて、金剛は悲愴な叫びを上げる。

「比叡・・・ッ！　霧島・・・ッ！　私が、私が死ねば・・・ッ！　私が死ねば良かったのに・・・ッ！　そうすれば・・・そうすれば・・・ッ！　くそ・・・ッ！　くそおおおおおぉぉぉぉぉッ！」

金剛の悲痛な声は、彼女の心の底からの叫びだった・・・

「・・・」

翔輝は無言でドアを閉めた。そしてそのままその場を立ち去った。見ていられなかった。見ているこっちまで辛くなるような表情が、翔輝の瞳に焼き付いている。

金剛が――連合艦隊の艦魂で最も勇ましいと言われる金剛が泣いていた。当たり前だ。自分の妹が死んで悲しまない姉がいるはずがない。

人目を避けて本来の姿を出していたのは、彼女が連合艦隊戦艦艦魂の最古参だからだと思う。最も勇ましく、最も軍人らしい。そんな彼女だからこそ他の者に自分の弱い部分を見せたくはなかったのだろう。自分が弱気でいては他の艦魂達の士気が下がる。だからこそ、彼女はあえて非情な一面を演技してでも、常に強いという印象を残したかったのだ。

だからこそ、一度剥がれた仮面の下は折れてしまいそうなほど弱いのだ。

金剛を見て、翔輝の目から涙が溢れた。

金剛の真の姿。比叡霧島の死。これだけでも翔輝はもう耐えられなくて泣きそうだったのに、身近な者の死と、金剛の姿を見て、翔輝は過去を思い出してしまった。

――さっきの金剛の姿が、昔の自分に似ていたから――

泣いて、泣いて、声が嗄れるまで泣き叫んだ、あの頃の自分に。

翔香の死を悲しみ、苦しんだ、あの頃の自分に。

大事な妹を失った痛みというのは計り知れない。もう会えない。もう触れられない。もう笑えない。永遠に閉ざされた想いは、もう叶う事はない。絶対に・・・

そんなの、翔輝自身が一番良く分かっている――痛いくらいに。

心の中がズタズタに引き裂かれ、気が狂うような辛さを知っている。

壊れた物は決して戻らないように、死んだ者は決して戻らない。残るのはただ儚く散る一輪の花のような思い出だけ。その思い出が残された人を勇気付ける事もあるが、逆にその人を苦しめ続ける事もある。永遠に・・・

「金剛さんには、辛いだろうけど立ち直って欲しい。絶対に」

翔輝はそうつぶやき、そっと、泣きながら金剛のいる部屋に向かって敬礼した。

その夜、戦艦『大和』の前甲板で比叡霧島他三人の追悼式が開かれ、連合艦隊艦魂全員（トラック島にいる艦魂全員）が南東の星空に向かって、静かに敬礼した。

その後、甲板（人数が数百人なので）でみんなヤケ酒を飲みまくった。もう二日酔いなんて言ってられなかった。

「みんなッ！　飲んで飲んで飲みまくっちゃいな！」

長門が無理した笑みで大きく叫ぶ。そんな長門の姿を見て、艦魂達は『おおおぉぉぉッ！』と叫びを上げる。

みんな泣きながら、無理した笑いしながら酒を飲みまくる。
そんな中、榛名は第二主砲の上で静かに一人酒をしていた。そんな榛名を心配そうに見詰めている一部（一部といっても数十人）の駆逐艦達。
「姉御・・・」
「姉貴、大丈夫かな？」
「あぁ、榛名様、あんなにやつれてしまって」
駆逐艦や巡洋艦の艦魂達が心配そうにそんな榛名を見詰める。
常日頃皆に慕われている榛名は多くの艦魂達に心配されていた。
そんな心配の目線を受ける榛名だが、それらの視線など気づかずに榛名は海の向こうを見詰め続ける。すると、
「榛名・・・さん」
そんな榛名に声を掛けたのは――翔輝だった。
翔輝の声が聞こえないのか、榛名は虚ろな目でずっと同じ方向を見ている。その方角は南東。二人の死んだソロモン海の方向だ。
「榛名さん・・・」
「・・・」
いくら翔輝が声を掛けても、榛名は返事をして来ない。心ここにあらず。確実に自分の世界に入り込んでいる。
「少尉・・・」
大和が心配そうに――自分も辛いはずなのに、翔輝を心配してくれた。
「・・・いや、大丈夫」
翔輝は榛名を一瞥して、いつもの――だが、もう霧島のいない輪の中に戻った。
『・・・』
みんなあまり酒は飲んでいなかった。大和と武蔵は沈黙したまま。伊勢は泣きじゃくる日向を抱き締め、瑞鶴と飛鷹は泣いている隼鷹の頭を撫でていた。
陸奥は少し離れた長門の横で鎮座し、一切口を開いていなかった。

他の所も同じなのか、甲板はその時間相応の静けさをかもし出し、常人には見えない大和の出したの明かりだけがゆらゆらと揺れていた。

金剛はもうとっくに帰り、いつもはやかましい扶桑もこの時だけは沈黙していた。

怖いくらい静かな空間の中は数分、数十分――本当は十数秒くらいだが、それくらい長く感じられた。だが、その先陣を切ったのは、

「みなさん。比叡さんや霧島さんが死んで悲しいのはわかります。ですが、忘れもらっては困ります――私の妹だって死んだんですよ！？」

そう叫んだのは単身で敵艦隊に突っ込んで死んだ一人、夕立の姉――白露だった。

白露はヤケ酒を飲みまくって、理性のたがが外れていた。怒りをむき出しにして、呆然としている艦魂達を睨み付ける。それに呼応して夕立の実姉妹である白露姉妹全員も睨み付け、さらに白露型の準同型艦である初春（はつはる）姉妹も怒りを露にする（初春型の改良型が白露型）。十二人二四（すでに三人が戦死）の瞳が怒りの色に染まる。

「そうだ！　白露の言うとおり、私の姉も死んだんだぞ！」

そう怒りを露にするのは、単身で敵艦四隻撃破沈した今回海戦の英雄艦である綾波の妹――敷波（しきなみ）だ。それを合図に綾波姉妹、準同型艦の吹雪（ふぶき）姉妹、暁姉妹（暁姉妹長女暁もこの海戦で死亡）の十三人二六（すでに二人死亡）の瞳が激昂する。

総勢二五人が体中から怒りのオーラを放出し、すさまじい怒気となっていた。さらに、死んだ三人が連合艦隊の中で十年近く生きていたのが災いした。仲が良かった他の駆逐艦や巡洋艦達も次々に怒りを爆発させる。

「ちょ、ちょっとちょっと！　やめなさい！」

長門が止めに入るが、そんな事で姉や妹、仲間を失った艦魂達が止まるはずがなかった。ついに怒りが爆発し、数十人が一斉に暴動に出た。あちこちから「やったなッ！」「うるさい黙れ！」「何よ

！　妹が死んだのはあんた達だけじゃないのよ！」と次々に誘爆。殴り合いが始まった。
「やめなさい！　やめないさいってば！　誰かあの子達を止めて！」
長門が黙っている艦魂達に叫ぶが、誰も立ち上がろうとはしなかった。
「ちょっとみんなッ！」
「無理よ。長門」
そう言って彼女を止めたのは力なく首を横に振る扶桑。
「どうしてよ！？」
長門が悲鳴に近い声を上げる。そんな長門を、扶桑は悲しい目で長門を見詰める。
「姉や妹、仲間を失ったあの子達が、そう簡単に引き下がるはずがないでしょ？　いくら私でも、これだけは手が出せないわよ」
「扶桑・・・」
長門も扶桑の言葉に口を閉じ、暴れる艦魂達を見詰めるしかなかった。
その間も暴動は激化し、もはや沈静化は不可能だった。
「み、みなさん！　もうやめてください！」
連合艦隊旗艦である大和が必死で止めるが、まったく意味がない。殴り合いが殺し合いに変化するのは時間の問題だった。もう止める事は不可能になり、長門はため息ついた。が、

バシイイィィィッ！

突如響いた鋭い音が、爆音のように空間を占拠していた罵声や物音を一瞬にして静めた。そのすさまじい音に、全員が音の発信源を見て、絶句した。そこにいたのは・・・
「貴様らいい加減にしろ。静かにせんか。うるさくて眠れん」
今まで微かに雲に隠れていた月が顔を出し、その人物を照らす。月と同じ金色に輝く長い髪を星空に流し、スラッとした長身にほど

良いスタイル。月に照らされる整いすぎた顔。しかしその顔に不釣合いな怒りの色に染めた瞳。彼女の名は――金剛。

金剛は竹刀を甲板叩き付けた格好で艦魂達を睨み付けていた。

「姉貴・・・」

今までずっと沈黙していた榛名が月夜に照らされる姉の姿を見る。

金剛はいつもどおり不機嫌そうな顔をしていた。

「貴様ら、上官である長門や大和の命令に背いていたな？　それでも帝国海軍の艦魂か？　情けない」

金剛は吐き捨てるように言う。その瞬間、すさまじい殺気を大和は感じた。それはまわりから感じる。急いで振り返ると、水兵服を着た駆逐艦達がこの世のものとは思えないすさまじい激昂をした顔をしていた。

「金剛さん！　あんたはいつもクールだ。でも、自分の妹が死んだってのに、そんな態度はねぇだろ！？」

敷波が上官である金剛を睨み付ける。その視線だけで人を切り殺せそうなすさまじい激怒の瞳だった。だが、金剛はそれを「ふん」と鼻で笑った。

「我々は戦争をやっているのだ。お遊び気分の貴様らと一緒にするな。それに、さっきも言ったが、私の妹は立派に御国の為にご奉仕して戦死したのだ。私は妹達の立派な最後に誇りを持っている」

ブチッ！

その瞬間、何かが切れた。敷波の心の中で真っ赤な炎が燃え上がっていた。それは怒りだった。真っ赤で、全てを焼き尽くす紅蓮の炎。敷波はその炎に身を任せた。瞬間、全てが爆発した。

「金剛！　もうお前には耐えられん！　この手でぶっ潰す！」

敷波の声が全ての怒りの引き金となった。次々に怒りの爆発が誘爆し、一瞬にして甲板は怒りの嵐が吹き荒れた。刹那、誰が言ったでもなく駆逐艦や巡洋艦の艦魂達が拳や軍刀、拳銃を構えて駆け出

した。その狙いは――金剛。
「ふん。おもしろい。《鬼の金剛》はいまだ健在だぞ！」
金剛は上着を脱ぎ捨てた。刹那、金剛は夜叉になった。
金色の髪がいつもよりも禍々しく、夜叉のごとく流れている。胸には晒が巻かれ、ダンッ！　と甲板を叩く軍靴、肩に担がれた竹刀はすさまじい迫力を全方位に噴出しまくっている。『近づくものは全て殺す！』という威圧感が彼女に纏う。
戦闘態勢に入った金剛を見詰め、長門は苦笑いする。
「あっちゃー、しばらく封印していた《鬼の金剛》が目覚めちゃった。これは駆逐艦の子達死んだわ」
「冷静に言ってる場合じゃないでしょ！？」
冷や汗を流しながら苦笑いするの長門を叱責する陸奥の足もガクガクに震えていた。
金剛は竹刀を構え、近づいてくる駆逐艦達に冷笑する。その態度に駆逐艦達はさらに激怒して、速度を上げる。
「みんなやめてくださいッ！」
大和の悲痛な声は駆逐艦達の咆哮の中に消えていった。
そして、鬼の金剛が竹刀を振り上げた――

「やめろよ」

その小さな声は、不思議と全てに流れた。
駆逐艦達は立ち止まり、金剛も竹刀を下ろす。そして、一人の人物にその焦点を合わす。
「しょ、少尉？」
大和が見上げるのは、いつもは優しい笑みをしている翔輝ではなかった。感情を殺した、冷徹な、冷たい瞳だった。
翔輝は駆逐艦達を睨み付ける。刹那、駆逐艦達がビクリと震え、一歩引く。そこに流れるものとは違う意味の恐怖だった。
例えるなら金剛は殺気をみなぎらした恐怖。駆逐艦達は怒りの炎

を燃え上がらせた恐怖。そして、翔輝は冷たい、絶対零度の寒さを秘めた恐怖だった。

全員が豹変した翔輝を見て硬直している。

翔輝は全方位を睨み付けると、踵を返して歩き出した。

「しょ、少尉・・・」

大和が不安そうな瞳で翔輝の裾をそっと掴んだが、すぐに振り払われた。翔輝は艦魂達を一瞥し、冷たい瞳でこう言った。

「金剛さんの事、何も知らないで責めるんじゃない」

そう言い残すと、翔輝は艦内に消えて行った。

残された艦魂達は翔輝の冷たさに頭が冷えたのかようやく落ち着き、駆逐艦や巡洋艦達もその場に座り込む。

金剛は軍服を元に戻すと、何事もなかったように消えた。

呆然としている大和の肩を、武蔵はそっと触れた。

武蔵は翔輝の消えたドアを、いつまでも見詰めていた。

第七章　第十三節　戦姫達の涙は頬を流れて

「待てよ！」
礼儀も何にもない直球勝負な声に翔輝が振り向くと、ポニーテールの髪を揺らした少女が立っていた。
「榛名さん？」
「さんはいらねえ。それよりテメェに聞きたい事があんだけど」
「何？」
榛名は目を細くした。その瞳には刀のような鋭さを秘められていた。
「テメェ、姉貴の何を見た？」
「・・・」
「答えろよな。答えなきゃ力ずくで聞き出す」
榛名は拳を構える。そんな彼女に、翔輝は小さなため息を零す。
「別に言わない訳じゃないよ。ちゃんと言うよ？」
「けっ、ならさっさと言いやがれ」
榛名の礼儀もクソもない言い方に、翔輝はため息する。
「君は失礼だな」
「けっ、悪いけどテメェよりは長く生きてんでな。失礼もクソもねぇ」
「そりゃそうか」
確かに榛名は外見はともかく実年齢は年上である。
翔輝の軽い態度に榛名はイライラする。
「ほらッ！　へらへら笑ってねえでさっさと言いやがれ！」
「わかった！　わかったからヘッドロックはやめて！」
翔輝は洗いざらい暴露した（させられた？）。金剛の真の姿の事、自分の過去と現在、全てを榛名に話した。その間榛名は「ふーん」とか「あっそ」と適当な相槌をしているが、その瞳はずっと翔輝に向けられていた。

「それだけの事だよ」
ようやく説明を終えると、榛名は「あーッ！」と叫び、めんどくさそうに頭をバリバリと掻きむしる。
「ったくッ！　姉貴も少しは俺を信用しろっつーの！」
そう叫ぶと、榛名は寂しそうな表情を浮かべてうつむく。
「もう、たった二人になっちまった姉妹じゃねえか」
「榛名・・・」
そこにはいつも元気で前向きな榛名の姿はなかった。あるのは、二人の姉妹を失い、悲しみにくれる少女の姿だった。
「ったく、姉さんのバカ・・・姉さんがいなきゃ・・・誰が姉貴の紅茶を淹れるんだよ・・・バカヤロー・・・」
榛名はそうつぶやき、その場に崩れた。悔しそうに涙を流し、嗚咽交じりのその声は、もはや語尾の方が聞き取れないほど小さかった。
翔輝は、そんな榛名の肩にそっと触れた。
「榛名」
その声に、榛名は苦笑する。
「何だよ・・・励ます気か？」
「そんな事はしないよ。僕だって、妹を失っている身なんだから。家族を失う気持ちは、人一倍わかっているつもり」
榛名は、静かに微笑む翔輝を見詰める。翔輝の言葉を待っているのだ。どんな言葉が出てくるのか、榛名はそれに意識を集中させている。
翔輝は、静かに言った。
「悲しい時は悲しんだ方がいい。でも、それは時と場合を考えてしなきゃダメだ。自分の悲しいという感情は本物なんだから、それを押し殺すようなマネはしちゃダメ。悲しい時は誰かに頼って、その人の胸の中で泣いた方がきっといい。僕には、泣ける胸はなかったけど、君にはある――金剛さんがね」
翔輝の言葉に、榛名はほろほろと泣き出した。

榛名は、そんな言葉を待っていたのだ。自分は一人じゃない。まだまだ仲間がたくさんいる。まだ姉が残っている。そんな人に頼ったほうがいい。そんな言葉を、待っていたのだ。

涙を流す榛名だが、すぐにその涙を拭き取ると、いつものような強気を見せる。

「ちっ、本当はそのセリフ、姉貴に言ってほしかったぜ」

いつもと同じ、素直じゃない言葉。

「ははは、僕じゃやっぱり説得力がないか？」

「いや、確かに歳は俺の方が上だが、家族の死はテメェの方が先輩って訳か。むかつくけど、それは事実だからな」

榛名は立ち上がり、翔輝を見た。それは、翔輝が今まで見た事がなかった榛名の――笑顔だった。心の底からの笑みは、榛名を優しく見せた。しばらく翔輝はその笑顔を見詰めていたが、それは突然不機嫌そうな顔になった。

「か、勘違いすんなよ！　俺はテメェの一部分だけ認めただけだ。テメェの全てを認めた訳じゃねぇからな！」

そう言って顔を赤くしている榛名を見て、翔輝は笑ってしまった。榛名はさらに顔を紅潮させる。

「てっ、テメェ！　何笑ってやがる！　わ、笑うなッ！」

翔輝はその後ずっと笑い続け、榛名の拳が顔面に入るまで笑い続けた。

「姉貴。いるか？」

翔輝と別れた榛名は、『金剛』の予備兵員室の前に立っていた。ここは今は誰も使っておらず、金剛の寝床になっている。

「榛名か。入れ」

中から響いた金剛の言葉に従い、榛名は中に入った。部屋は簡易ベッドが六つほどというシンプルなものだった。そのうちのベッドの一つに、軍帽を脱いだ金剛が腰掛けていた。

「姉貴」

「どうした？　貴様から訪ねて来るとは珍しいな」
榛名は無言で金剛の隣に腰を下ろした。そんないつもと違う榛名に、姉である金剛はいち早く気づいた。
「榛名。貴様一体――」
「なぁ、姉貴」
榛名は金剛の声も聞かずに声を出し、金剛の顔を見詰める。「何だ？」と金剛も榛名を見詰める。外見のまったく違う二人は、お互いを姉・妹として見詰め合う。蒼い瞳と黒い瞳がお互いをじっと見詰める。そして、
「は、榛名？」
金剛は榛名の行動に驚いた。
榛名は――金剛の胸の中に抱き付いたのだ。
「あぁ、姉貴のぬくもり。懐かしいな」
「榛名。貴様一体何を――」
「なぁ、姉貴」
今回も榛名は金剛の質問を無視した。金剛の胸の中で、榛名は小さな声でつぶやいた。
「比叡姉さんと霧島が死んだ事、本当は辛いんだろ？」
「・・・」
金剛は答えなかった。決して表情は変えずに、不機嫌そうな顔のままだ。
「なぁ、姉貴」
「そんな事を聞いて、何になる」
金剛は悠然とした態度を変えなかった。断固自分のキャラを保とうとしている。
「悲しいとか寂しいは一時の気の迷い。時間が経てば全て何にもなくなる。私は連合艦隊戦艦の最古参だ。そんな私がそのような感情に流されていては全日本海軍艦艇や天皇陛下に申し訳が――」
「バカヤローッ！」
刹那、金剛の頬に鋭い痛みが走った。驚いて目の前を見ると、涙

を瞳にいっぱいに溜めた榛名の顔があった。徐々痛みから熱さに変わってくる頬を手で押さえ、ようやく理解した。

――自分は榛名に頬を平手打ちされたのだと――

「何で、何でなんだよ・・・？」

小さく弱々しい声は、いつも元気な妹の声だった。

金剛は突然の妹の変化に戸惑っていたが、榛名は、そっと金剛の胸の中で丸くなった。

「なぁ、姉貴。俺って頼りねぇのか？」

その言葉は、金剛の心によく響いた。

「俺さ、姉貴と一番一緒にいたんだよ？　なのに、何で俺を頼ってくねぇのかな？　俺って、姉貴にとっちゃすんげぇお荷物なのか？」

「榛名・・・」

金剛は自分の胸の中で泣きじゃくる妹を、抱き締める事はなかった。ただ、じっと見詰めているだけ。

「姉貴。泣いたんだってな？　一人で部屋の中で」

「なぁッ！」

突然の暴露宣言に、金剛は顔を真っ赤に染める。だが、そんあ姉の反応に榛名は確信を得た。

「・・・やっぱり、泣いたんだ」

「・・・ッ！」

「隠さなくてもいいんだ。長谷川が見掛けたって言うんだし」

「長谷川？　あの士官か」

金剛は心の中で翔輝を血祭りに上げようと決意した。

「あれは違うんだ。その、何だ。ちょっと足の小指をタンスの角にぶつけてしまって」

それもそれで《金剛》というキャラを破壊してしまうような発言だが、榛名は必死に否定する姉の姿を見て、くすくすと笑い出した。

「なッ！　笑うな！」

「悪い悪い。何かすっげえおもしれぇからさ」
「お、お前な・・・ッ！」
顔を赤くして怒る金剛を見て、榛名はさらに大きな声で笑い、金剛の竹刀をもろに受けて治やめた。
金剛の胸の中で、榛名はそっとつぶやいた。
「たまには、俺を頼ってくれよ。姉貴・・・」
「・・・あぁ」
金剛の胸の中で、榛名は落ち着いていた。
連合艦隊現役戦艦最古参という立場から素の表情を出せない姉の苦しみに、頼りないけど、必死に姉を想う榛名は、いつまでもそんな姉に抱きついていた。
それは、何年ぶりかの、姉妹の心から繋がった絆でもあった。

自室に戻った翔輝は椅子に腰掛けて翔香のペンダントを見詰めていた。
「霧島・・・」
結局、霧島との約束は永遠に叶える事ができなくなってしまった。あの時に見た霧島の笑顔。とても幸せそうな表情で、彼女はデートを楽しみにしていた。でも、それはもう叶う事はない。
死んでしまったら、もう何もできないのだから。
「・・・」
翔輝は虚空を見上げる。
初めて霧島と会ったのは、真珠湾攻撃成功の宴の時だった。
あんなに自分の事を怖がっていたのに、ついこの間までは笑顔の絶えない女の子だった。まぁ、もう女の子っていう歳じゃなかったけど、外見はまさにそれだった。
あんなに純粋で優しい女の子がどうして、どうして死なないけなかったんだろうか。死ななければ、もっとずっと一緒にいられたのに。どうして・・・
そう思っているうちに、翔輝の瞳から涙が零れていた。流れる雫

は床に溶けて見えなくなる。あまりにも儚かった。
「霧島・・・ッ！」
ここでようやく思い出した。
戦争が始まってもうすぐ一年。ミッドウェー海戦などで多くの艦魂が死んでいった。中には顔見知りの奴もいたが、霧島は、翔輝の身近にいた艦魂で、そんな艦魂の中で初めて死んでしまった艦魂だった。
これが戦争。
どんなに優しい奴でも、明日には死んでしまうかもしれない。それが戦争なのだ。
自分達はいつも死と隣り合わせで生きている。今日の夕日が見れても、明日の夕日は見れないかもしれない。それが戦争。
「忘れてたよ。今日本は戦争をしてるって事を・・・」
翔輝は翔香の写真を手に取る。
日本は戦争をしている。それも強敵アメリカと。壮絶な戦いになるのは予想していたが、開戦より一年。戦争は激化の一途を辿り、刻一刻と敗戦の色が濃くなっていく。それに連れて多くの将兵や艦魂達も死んでいく。
わかっている。そんな事。でも・・・
「だからって、あんな子が死ななくても・・・いいじゃないか」
ベッドに仰向けに倒れる。
翔輝は人一倍死というものに対して脆い。それはもちろん翔香の死が主な原因だが、彼はもう母と、幼い頃に父を亡くしている。これだけ人の死を身近で感じていれば脆くもなるが、彼は人一倍優しい。優しいからこそ死というものに強い反発をする。だから、認めたくないのだ。
死ぬという事を。
死んだら何もできない。だからこそ今を必死に生きる。そう思っている。それなのに、時代は戦争を迎え、毎日のように戦場で人の命が消え、艦魂の命も消える。

平和に暮らす事を、時代は許してくれない。

日露戦争から約四〇年。日本は完全に軍事国家になってしまった。戦う事が正義。中国を侵略するのも正義。鬼畜米英を皆殺しにするのも正義。日本という国を未来永劫繁栄させる為ならどんな事でも正義になる。それが今の日本という国。

一体、僕らはどこで舵を取り間違えたのか。

平和であれば、誰も戦いで傷つかず、死にもしない。それは、何にも勝る幸せではないのか？　大切な人と一緒にいられる。その為にするのを正義と言うのではないのか？

翔輝だって、もし父が満州事変で戦死しなければ、母は生きていたかもしれないし、翔香だって今も隣にいたかもしれない。そして、自分は軍人にならなかったかもしれない。でも、そうしたら彼女達との関係も全てなかった事になってしまう。

無限のループ。

考えれば考えるほど可能性は出て来る。だが、それは所詮地に足を着いていない空論。叶えられるはずがない理想論なのだ。現実は、日本は戦争していて、家族はみんな死に、自分は帝国海軍軍人になっている。そして、艦魂達と平和に暮らしている。

だが、いつかこれも壊れてしまう――いや、もう壊れ始めている。霧島という友達の死。

パズルはピース一つでもなくなれば完成しない。翔輝というパズルから霧島というピースがなくなった。他にもあまり会話しなかった赤城や加賀。蒼龍、飛龍、比叡など多くのピースを失っている。それが翔輝というパズルの形と言ってしまえばそれで全てが終わってしまう。だが、いくらピースがなくても完成させたい。そうは思わないだろうか？　それがどんなに苦しくても、完成させたいと思う。決して、完成したのが良いものとは限らない。だが、それでも放っとけない。諦めたくない。

人は生きている事でピースを失い、また新たなピースを手に入れられる。そして、十分生きた最後に、自分の人生のパズルが完成す

る。
そう、生きる事は冒険なのだ。
楽しい事も、悲しい事も、全てそれはピースとなる。そのピースを使って生きる。それが、人間。それは艦魂にも言える事。
霧島は自分のピースを完全には手に入れられなかった。虚空のパズルでしか完成しなかったのだ。
まだまだ生きていられたのに、まだまだ冒険できたのに、霧島はもう、何もできなくなってしまった――翔香と同じように。
もう何もできない。それって、そんなのって――
「あんまりだよ・・・」
「・・・何が？」
「え？」
驚いて飛び上がると、部屋の入り口に無表情少女――武蔵が立っていた。
翔輝は急いで涙を拭い、苦笑いで武蔵を見る。
「・・・あのさ、部屋に入る時はノックぐらいしてよね」
「・・・」
武蔵は自分で開けたドアを見詰め、右手をグーにした。
コンコン――
「・・・入るよ？」
「・・・もう入ってから訊くなよ」
相変わらず大人っぽかったり、こんなふうに子供っぽかったりしてわからない奴だ。
武蔵は無言で部屋に入り（もう入っていたが）、そのまま翔輝の横にちょこんと座った。
「どうしたの？」
「・・・別に」
「あぁ、そう・・・」
相変わらずこの子との会話は続かない。以前もこんは風にあいさつして、そのままお互い無言で一時間過ごした事があった。あの時

の気まずい雰囲気はもう言葉では言い表せないくらいに辛かった。
ほとんど拷問である。
翔輝はなんとか会話を成立させようと頭を回転させた時だった。
「・・・ねぇ」
突然、武蔵の方から声を掛けてきたのだ。
「何だい？」
翔輝は努めて笑顔で訊く。
「・・・翔輝さっき」
「うん？」
「・・・泣いてたでしょ？」
突然、翔輝の笑顔が崩れた。体全体を使って驚愕のオーラを全方位に最大出力で放出している。武蔵はそんな翔輝を見詰め「・・・やっぱり」と小さくため息ついた。
「いや、泣いてない。泣いてないから」
「・・・目が赤く、頬に涙跡あり。これを泣いてなかったと判断する事は不可能」
「うぐっ・・・相変わらず根拠を元に一手を決めるな」
「・・・策も考えずに行動するなど、戦略的にも戦術的にも利益はない。そんな無謀な事をするのは愚か者だけ」
「って事は、僕は愚か者って事？」
「・・・違う」
「え？」
この絶対な事しか答えない武蔵が否定してくれたのだ。それは心の柱になるような事を――
「・・・翔輝は何も考えずに敵重火砲陣地に竹槍で突っ込むような行為するタイプ」
「・・・それって、遠回しにバカにしてるよね？」
「・・・」
「無視すんなッ！」
「・・・突撃ー」

「しないよッ！」
　怒っても武蔵は無視する。普通の奴ならものすごくむかつくが、なぜか武蔵だとあまり怒れない。まぁ。やっぱり小さな女の子を本気では怒れないというのもあるが。
　武蔵は相変わらず無表情で微動だもしない。傍から見れば人形にも見える。
「つーか、何しに――うっ」
　振り返ると、そこには視界いっぱいの武蔵の顔があった。キラキラと輝いている邪心のない瞳が翔輝を釘付けにする。
「な、何・・・？」
「・・・元気、出た？」
「え？」
　驚いて何も言えなくなる。一体彼女は何を言っているのだろうか。
「・・・翔輝。霧島が死んでから元気なかったから」
　武蔵は静かに言った。その声は本当に心配しているような声だった。
「・・・姉さんが言ってた。翔輝はツッコミを活発にさせればそれと連動して元気になるって」
　あんのアホ大和。無垢な武蔵に何を吹き込んでるんだ。・・・まぁ、ツッコミの属性があるのは否定できないが。
「・・・だからこうすれば翔輝が元気になるって思って。でも、やっぱりダメ。私は姉さんみたいにボケの才能がないから」
　いやいや、君も十分天然ボケキャラだよ？　というか今何気なく大和をバカにしなかったか？
　苦笑いする翔輝の横で、武蔵はうつむく。
「・・・私、知識はたくさんあるけど、それを実行に移すのが苦手。私じゃやっぱり翔輝の力にはなれない。姉さんじゃないと」
　そこで、武蔵の表情に変化が起きた。いつもは全く感情を面に出さない武蔵が、寂しそうな顔をしたのだ。その変化に、翔輝は呆然としていた。

「・・・姉さんじゃないと」
武蔵はそうつぶやくと、立ち上がった。
「武蔵？」
「・・・姉さんを連れて来る」
「お、おい」
翔輝は武蔵の肩に手を掛ける。その肩は、震えていた。
「武蔵？」
「・・・ずるい」
「え？」
「・・・姉さんはずるい。どうして翔輝といつも一緒にいるの？私だって翔輝の傍にいたいのに。なのに、どうして・・・ッ」
それは、翔輝が始めて見た武蔵の涙だった。ポロポロと年齢相応の姿で涙を流す武蔵。嗚咽交じりのその声は、いつも以上に小さかった。
彼女はただ翔輝を元気付けたかっただけだった。でも、自分と姉のギャップの差は大きく、自分じゃ何もできないと思った。しかし、それでも・・・
「・・・それでも、私は翔輝に元気でいてほしい。だから――」
それ以上言葉は続かなかった。翔輝が武蔵の頭を撫でたのだ。
「・・・翔輝？」
「何言ってんの？　嬉しいよ。君が僕の事を心配してくれるなんてさ」
それは翔輝の正直な気持ちだった。武蔵と出会ってから三ヶ月。基本的にいつも単独行動が多く、他の艦魂と交わろうとしない武蔵は、姉である大和にさえなかなか懐かなかった。それでもなぜか翔輝にはそれなりに懐いていたのかよく翔輝の前に現れる。しかし、一緒にいてもいつも表情を崩さない武蔵に対し、翔輝はいつも自分は本当は嫌われているんじゃないかと心配していた。だが、それは完全な誤解だと気づいた。
「・・・私は、いつも翔輝を見てた。だから」

武蔵は自分の肩に掛けられている翔輝の手を見詰め、少し焦った声で言う。そんな行為に、翔輝は微笑んだ。
「・・・良かったよ。もしかしたら君に嫌われているんじゃなかって思っててさ」
「・・・そ、そんな事ない！」
翔輝は驚いた。いきなりいつも小声の武蔵が大声を出したから。それに対し、武蔵も思わず出た自分の大きな声に驚いていた。
「・・・わ、私は、翔輝第一だから、その・・・」
「ははは、わかったわかった」
翔輝は笑って武蔵の身体をそっと抱き締めた。武蔵はこれでもかと言わんばかりに顔を真っ赤にし、そんな珍しい武蔵の表情に翔輝は優しく笑った。
「・・・は、離して」
「えぇ？　いいの？　離しても」
そっと翔輝は武蔵を離す。すると、
「・・・あ、やっぱりやめて」
そう慌てて訂正した。が、翔輝はついついいじめたくなった。
「うんわかった。やめる」
「・・・ち、違う。離すのをやめてって」
「うん？　それじゃどうしてほしいの？」
「・・・そ、それは」
「うん？　口で言わなきゃわかんないよ」
「・・・ッ！」
顔を真っ赤にさせる武蔵を見て、翔輝はニヤニヤしている。そして、
「・・・だ、だから、その」
「うん？　何？」
「・・・だ、抱き締めて」
「・・・わかった」
翔輝は再び武蔵を抱き締めた。大和と違って体が小さく、力を入

れると折れてしまいそうなくらい細かった。こんな子が、世界最大最強戦艦の艦魂の一人だと思うと、やりきれなくなる。

しばらく武蔵は翔輝の腕の中に身を任せていたが、突然翔輝が離れた。

「・・・」

「睨むなよ。もういいでしょ？」

「・・・まだ」

「そうは言っても、もうじき大和もやって来るし」

「・・・」

「な？　ごめんね。あいつ何でか僕が他の艦魂と仲良くしてると怒るんだ。後々がめんどくさいからね。本当にごめん」

「・・・愚姉。いつか屠る」

「バイオレンスな事は言わないように」

武蔵は名残惜しそうに翔輝の胸を見詰めている。

「また今度、ね？」

「・・・」

武蔵は静かにうなずいた。

「よしよし。えらいえらい」

翔輝は武蔵の頭を撫でる。その行動に、武蔵はムッとする。

「・・・私、子ども扱い嫌い」

「そうなんだ。でも僕はどちらかと言うと子供の方が好きだな」

翔輝の言葉に、武蔵は複雑そうな顔をすると、

「・・・子供でいい」

「ははは」

まったく、性格は正反対でも根源は一緒、か。

翔輝は大和と武蔵を重ね合わせた。どちらも子供と認めてしまった。笑えるほどそっくりな二人だ。

翔輝が武蔵の頭から手を離した。その時、

コンコン。

「はい？」

突然ドアがノックされ、翔輝が返事するとドアが開き、書類を持った大和が現れた。
「あ、少尉。武蔵」
大和はドアを閉めて翔輝の机の上に書類を置いた。
「それは？」
「司令部の重要書類です。・・・また、ガダルカナル島の陸軍からの悲鳴電報です。二個大隊が敵航空基地に突撃し、全滅したそうです」
「そうか・・・」
大和は疲れ切った顔をしていた。そう言えば、ここ最近あいつはまともに寝てもいなかった。
「・・・私はこれで」
翔輝が何かを言う前に、武蔵は光に包まれて消えた。
残された二人は何を言うでもなくその場から動かなかった。
「少尉」
「うん？」
大和は翔輝の横に腰を下ろした。
「さっきはどうして怒ったんですか？」
大和は唐突に訊いた。
「あぁ、あれ？　別に。金剛さんの気持ちも理解しないでとやかく言うのが気に入らなかっただけ」
「金剛さんの気持ち・・・？」
首を傾げる大和に翔輝は続ける。
「いくら最凶と言われる人でも、家族を失って苦しくない訳がないだろ？」
「そ、それは・・・」
「だろ？　自分の妹が死んで悲しくない奴なんて・・・いるもんか」
翔輝の言葉には重みがあった。それは翔輝自身の声でもあった。
大切な妹を失って悲しまない兄や姉はいない。それは、翔輝の人生最大の教訓でもあったのだ。

大和にも妹がいる。武蔵が死んだら、自分にもわかるのだろうか。でも、自分だって多くの仲間を失っている。それとはほとんど変わらない辛さを彼女もちゃんとわかっているのだ。だから・・・

「もし、私が死んだら、少尉は悲しんでくれますか？」

気がついたら口に出していた。その言葉に、翔輝は驚いたような顔をして、呆れる。

「あのな、お前は不沈艦だろうが。死ぬなんて考えるな――そもそも、軽々しく《死ぬ》なんて口にしないでよね」

「ご、ごめんなさい」

翔輝が誰よりも《死》や《命》に過敏な事を思い出し、慌てて謝る。そんな大和に、翔輝は優しく微笑む。

「まぁ、お前が死んだら――そりゃ、悲しいよ」

翔輝の言葉に、大和は心の底で安堵した。自分も、彼の中ではそれなりの地位が確約されているという事が嬉しかったのだ。

だが・・・

「霧島さんと比叡さんはもう、帰って来ないんですね・・・」

「あぁ」

比叡の死も悲しいが、二人にとって一番に辛いのは霧島という最大の仲間の死だった。

霧島は二人の良き理解者であり、親友でもあった。

霧島は、あまりにも身近な存在だった。

「私、霧島さんが死んだって、まだ信じられません。今もドアを開けていつものように小さな声で『少尉？』って言ってくれる気がして」

「仕方ないよ。信じられないのは僕も同じさ・・・」

翔輝は辛そうに唇を噛んだ。

しばらく気まずい沈黙が続いたが、翔輝は突然大和の髪をワシャワシャと掻き乱した。

「な！？　何するんですか！？」

「いや、ちょうどいい所に掻き乱しやすい頭があったからさ」

「・・・どういう意味ですか、それ」
ため息する大和に、翔輝はふっと笑った。
「まぁ、元気出して。ここで悲しんでても意味ないし。霧島も悲しむ」
「・・・はい」
大和がうなずいた所で、翔輝は大和用の布団を敷いた。
「今日はもう遅い。寝よ」
「あ、私はまだ司令部の仕事がありますので」
「まだ仕事？　大丈夫なの？」
「はい。こんな時に休んでなんかいられないですから」
「そう。がんばってね」
大和は資料にペンを走らせてその資料を持って部屋を出て行った。
一人残された翔輝はベッドに背中から倒れ込んだ。
「霧島・・・」
翔輝は何の変哲もない鉄の天井を見上げる。
今も目をつむれば思い出せる――霧島の小さな笑顔。
そして、もう一人。
「比叡さん・・・」
あまり会話をした事はなかったが、彼女は母性的な人だった。悲しみにくれる艦魂達を、その柔和な笑みで優しく包む。それが彼女だった。
二人とも、失うにはあまりにも大きな存在だった。
「・・・これが、戦争なのか・・・」
翔輝は苦しそうに目をつむった。その時、部屋のドアがノックされた。
「はい」
翔輝が起き上がって返事すると、
「長谷川少尉？　まだ起きてますか？」
「水上？」
それは翔輝の従兵である水上の声だった。

ドアが開き、部屋に入って来た水上は少し疲れている翔輝を見た。
「少尉。眠れないのですか？」
「うん？　あぁ、まぁね」
「やはり、今日報告があった敵航空基地艦砲射撃艦隊で沈んだ艦の艦魂のせいですか？」
「・・・」
翔輝は答えなかったが、それは肯定の意味になった。
「少尉・・・」
水上は持っていたラムネを翔輝に渡した。
「これは？」
「山本長官からです」
「長官が？」
その意外な人物の名に翔輝は驚く。
「今日の報告を受けてから艦橋に顔を出さなかった少尉を心配して」
「・・・そうか。あとでお礼を言っとかないと」
翔輝はビンを開けてラムネを飲んだ。喉が渇いていたのでちょうどいい。
「艦長や航海長、航海科の方々が心配していらっしゃいます」
「・・・そうか。僕は大丈夫だって伝えといてくれないか？」
「・・・とてもそうには見えないんですが」
「そんなにダメな顔してるか？」
「とてもお疲れに見えますし、瞳が赤いですよ？」
「・・・ははは、泣いてたからな」
空笑いするが、水上はごまかせなかった。だてに半年以上翔輝の従兵をやってはいない。
「少尉。今日はもうお休みください」
「そうだな。そうするよ」
「では、おやすみなさい」
水上は敬礼して出て行った。
翔輝は布団に潜り込むが、寝れる訳がなかった。

結局、翔輝はその日、一睡もできなかった。

一方、司令部に戻った大和は霧島の死を忘れるように仕事をしていた。

「司令。もうお休みになられてはどうですか？」

「大丈夫。それより雪風こそ休んだ方がいいよ」

「私は結構です」

雪風はそっと大和の横にコーヒーを置く。

大和はすでに書類一〇〇枚以上にサインしていた。

「大和。無理はダメだよ」

「大和ちゃん。あとは私がやるから」

そう言ったのは同じ司令部にいる長門と陸奥だった。二人とも、極端にがんばる大和を心配しているのだ。

そんな二人に、大和は笑みを浮かべる。

「長門さん。陸奥さん。お気持ちは嬉しいんですが、これは連合艦隊旗艦である私の任務ですから。――それに、仕事をしていれば他の事を考えなくてすむんです」

「大和・・・」

大和が再び書類に目を戻した。

それから二枚の書類に目を通した所で、ふと窓の外を見た。窓の外は雲ひとつない晴天の星空だった。

この海の向こうには、多くの艦魂達がその生涯を終えて海の底にいると思うと、寂しくなってくる。その時、一筋の流れ星が光った。大和は急いでお願いをする。

――今はもう海の底で眠る彼女達に、永遠の眠りを与えてください――

大和の願いが叶ったのかは、誰にもわからなかった。わかったのは、多くの仲間を失っても、まだ戦争は続いているという・・・悲しい現実だけだった。

第八章　第一節　武蔵の星空大作戦

十一月下旬、ソロモン海の制海空権を失った日本軍はガダルカナル島の陸軍に補給をする事ができなくなっていた。海軍は陸軍を助けようと闇夜にまぎれて高速駆逐艦で補給物資を送る事を決定した。海軍としては虎の子の艦艇を、それが例え駆逐艦でも失うのは惜しいので最初は反対していたが、山本長官の強い意向から実行に移された。

田中頼三（たなからいぞう）少将率いる第二水雷戦隊こと第一次ガ島増援部隊は駆逐艦八隻の艦隊で出撃した。第二水雷戦隊は各艦の予備魚雷を下ろし、その代わりに補給物資を入れたドラム缶を大量に積んでいた。輸送船のように陸に揚陸できない駆逐艦ではガダルカナル島の浅瀬で艦底が着底しないギリギリの所からドラム缶を海に投棄して、それを波にのせて同島の浜に送るという方法しかなかったのだ。だがそれでは無事に浜に届く物資は半分以下になってしまうが、背に腹は替えられなかった。

第二水雷戦隊は予定通りガダルカナル島浅瀬海域に到着し、物資投下の用意をしていたが、突如付近の警戒を当たっていた駆逐艦『高波（たかなみ）』が『敵艦見ユ』の報告を旗艦『長波（ながなみ）』に送った。

田中少将は補給物資投下という任務を中止し、全艦に突撃命令を出した。

敵艦発見の報を送った『高波』は敵艦隊のレーダーに発見され、集中砲撃を受けて大破。後に沈没した。

第二水雷戦隊は海上で炎上する『高波』を一瞥して敵艦隊の突撃。復仇の想いを胸にすさまじい砲雷撃を繰り出し、敵艦隊に大損害を与えた。

この海戦で日本海軍の犠牲が駆逐艦『高波』沈没に対し、米軍は圧倒的に有利な艦隊（重巡洋艦四隻、軽巡洋艦一隻、駆逐艦六隻）で戦闘を行ったのに、第二水雷戦隊の猛攻撃を受けて重巡洋艦一隻

沈没。三隻大破という大損害を受けた。
しかし本来の任務であった輸送作戦は失敗に終わり、作戦は失敗だった。
この日本海軍の劇的な勝利で終わった海戦を、ルンガ沖夜戦という。
その後田中少将は魚雷を消耗し切った艦隊を直ちに戦線離脱させ、その四日後の夜に再度ガダルカナル島に突入して輸送物資を海上へ投下させ、輸送任務を完遂させた。
後に田中少将は任務を放棄した事から第二水雷戦隊司令を解任。左遷された。
しかし一方で米軍からは《タフネス田中》と彼の奮闘振りを絶賛され、日本軍人では数少ない米軍が高評価した軍人の一人であった。
世界の中で、田中少将ほど敵味方で評価の違いが雲泥の差になった軍人はそうそう存在しないだろう。

ルンガ沖夜戦から数日が過ぎた。
ある日、まだ兵達が寝ている早朝に、突如『大和』艦内で緊急起床のラッパが鳴り響いた。兵達は急いで飛び起き、だらしない格好から一転、通常服である作業服を着込んで兵員室から飛び出した。
戦艦『大和』に乗る二五〇〇人の将兵達はすばらしい動きで自分達の向かうべき配置に向かって艦内や甲板を駆け抜ける。
そう、日本海軍伝統の月月火水木金金の、猛訓練である。

「四番機銃配置良し！」
「三番高角砲配置良し！」
「十二番機銃配置良し！」
「五番機銃群配置良し！」
艦橋に駆け込んで来る兵達が次々に報告する。伝声管からの声を大声で復唱し、電話に答え、機銃や高角砲の状況を報告する。艦橋は若く勇ましい声に溢れていた。

翔輝はその兵達を見詰めていた。一応彼は士官なので動く側ではなく命令する側である。

翔輝はふと窓から甲板を見ると、無数の兵達が走り回っていた。自分の機銃に急ぐ者、機銃台に弾薬を運ぶ者、機銃を旋回して指定方向に銃口を向ける者、露天高角砲や機銃では砲弾をや弾丸を装填している者もいた。そして、動き回っていた兵達は自らの高角砲や機銃に配置を完了した。

「高角砲、機銃配置良し！」

最後に兵の声が響き、『大和』は静かになった。

副長がストップウオッチを止め、訓練時間の計測を終えた。

「総員配置終わりました！　時間、三分四二秒！」

その報告に高柳はうなずき、長官席に座っている山本を見る。山本はその視線に気づいてうなずいた。

高柳は艦内マイクに向かって命令を下した。

「対空戦闘訓練終了！　各自通常業務に戻れ」

訓練が終わり、兵達は敬礼して艦橋を出て行った。

「前回より五秒早かったですね」

翔輝の横で事の成り行きを眺めていた大和が言った。

「そうだね。これも月月火水木金金の訓練の賜物（たまもの）だよ」

「そうですね」

大和は視線を再び戻すが、神経は全て翔輝に向けていた。

大和はある心配があった。それは・・・

翔輝を見ると、どこか遠い目をしていた。

大和の心配はこれだった。翔輝は霧島の死の後からずっと元気がなかった。自分もまだ立ち直れてはいない。だが、日常的に暮らすのには何の問題もないほどには回復した。しかし、翔輝は違った。仕事に影響はないようだが、いつもどこか上の空なのだ。そんな翔輝を、大和はずっと心配していた。

「少尉。もう仕事が終わったようですが、これから何をするつもりですか？」

「・・・別に、のんびり戦艦見物でもするよ」
そう言って翔輝は艦橋から出て行ってしまった。
声を掛ける暇もなく出て行った翔輝を、大和は追う事もできず、自分の小ささにため息をした。

その日の夕方、翔輝は自室に戻ってある物を手にして、甲板に出た。
年がら年中蒸し暑いトラック島では艦内から一度出るとうだるように暑い。例えそれが夕方であっても容赦ない。そんな中翔輝は日差しよけの下に入って一つの椅子を手に入れてその周囲に陣地を張った。
翔輝は部屋から持って来たケースを開いた。その中には絵の具とスケッチブックが入っていた。
翔輝の最近の趣味は軍艦の絵を描く事だった。
「さてと、今日で仕上げるか」
翔輝はスケッチブックの使っている一番後ろのページを開いた。そこには大きな戦艦が描かれていた。その戦艦の象徴である巨大な三基の主砲を装備したそれは戦艦『大和』――ではなく『武蔵』だった。
翔輝は『武蔵』の背景である夕日を塗り出した。『武蔵』の方はもう完成し、あとはこの輝く夕日を描くだけだった。
オレンジに輝く空の宝石を鮮明に描く。少し雲に掛かっていて空はキレイなオレンジ色に輝いていた。
途中色鉛筆を取り出して『武蔵』の灰色に上に薄く塗った。夕日に対して絵よりも本物の方がもう少しオレンジに輝いていたからだ。
「よし。これでいいかな」
「・・・これ、私？」
「ぬおッ！？」
突然後ろから声を掛けられて翔輝はビクリと震えて急いで後ろを向くと、そこには今自分が描いていた戦艦のモデルがいた。

「武蔵か。驚かすなよ」
「・・・ごめんなさい」
武蔵はそう小さく謝ると、しげしげと翔輝の描いた絵を見詰める。
「何か変かな？」
翔輝としては結構自信があった。でもモデルが違うと思えばそれは完全に違うのだ。翔輝は武蔵の言葉を待った。すると・・・
「・・・正確に描かれている。見事だ」
武蔵が翔輝の絵をほめたのだ。翔輝はぱあっと笑顔になって喜ぶ。
「ほ、本当!?」
「・・・うん。正確だし、背景の夕日とも良く合ってる」
「そっか・・・」
武蔵に絶賛された翔輝は嬉しそうに微笑むと、広げていた絵の具を片付けた。その間武蔵はずっと絵を見詰めていた。すると他のページも見出した。他のページには『長門』や『陸奥』、『伊勢』などたくさんの戦艦が描かれていた。しかし中には駆逐艦や巡洋艦。空母も描かれていた。
「・・・どれもすごい」
武蔵はそう小さく言った。その声に、翔輝は照れ笑いする。
「そうかな？　素人の絵だよ？」
「・・・私、芸術とか良くわからないけど、私は翔輝の絵が好き」
「そう・・・」
最後にスケッチブックをしまおうと武蔵に声を掛けようとした時だった。
「・・・翔輝。この絵がほしい」
「え？」
突然そんな事を言い出した。翔輝が確認すると、それは今日描き終えたばかりの『武蔵』の絵だった。
「それ？」
「・・・うん。ダメ？」
いつになく不安げに訊いてくる武蔵。そんな彼女に翔輝は笑顔で、

「別にいいよ」
「・・・本当？」
武蔵は少し嬉しそうに翔輝を上目遣いで見る。そんな武蔵に、一瞬かわいいと思ってしまう。
「うん。でもいいの？　僕なんかので」
「・・・うん。私は翔輝のがほしいし、この絵が好きだから」
「そっか」
翔輝はその絵をスケッチブックから切り離して武蔵にあげた。スケッチブックをケースの中に戻し、翔輝はそっと立ち上がる。
「んじゃ、またな」
「・・・うん。絵、ありがと。大切にする」
武蔵は自分にできる精一杯の笑顔をした――まぁ、それでも唇の辺りがちょっと笑っているくらいだが。
翔輝はそんな武蔵の笑顔に笑顔で応えると、艦内に消えていった。その背中を見詰め、武蔵は表情を無表情に戻して空を見上げた。もう夕方はずいぶんと過ぎ、空には一番星が輝いていた。そんな星を見詰めて、武蔵は微かに笑った。
「・・・ついに実行する時が来た」
武蔵はぎゅっと翔輝からもらった絵を抱き締めた。
「・・・翔輝。必ず本当の笑顔を取り戻してあげるから」
武蔵はそう言い残し、翔輝が描いてくれた自分の絵を大切そうに抱き締めながら、『大和』から消えた。

一九四二年十二月八日。日本軍全てがドンちゃん騒ぎになった。何を隠そう（別に隠さなくていいが）今日はちょうど一年前に真珠湾攻撃が行われた日なのだ。つまり大東亜戦争（太平洋戦争）が始まった日なのだ。これを祝わなくていつ祝うと言わんばかりにみんな喜んだ。それは人間だけではない。
夜中、連合艦隊旗艦・戦艦『大和』の会議室では宴会が開かれて

いた。みんな浮かれ騒いで今日という記念日を大いに楽しむ。だが、その中には翔輝の姿はなかった。

「ねぇ大和ちゃん。少尉はどうしたの？」陸奥がつまらなそうに聞く。

「そ、それが、どこにもいないんですよ。私も捜したんですが・・・」大和も心配そうに答える。

「霧島はんがお亡くなりになってから、ずっと元気がなかったやしねぇ」伊勢も心配そうに言う。

大和達は翔輝がどうしたのか心配そうにため息する。

「そういえば武蔵もいないよ？」日向が思い出したように言う。

「そうですね。武蔵副司令もいないんですか？」雪風が新しいラムネを持って来た。

「そんなに心配なら捜してくればいいじゃない」長門がもっともな事を言う。

「・・・そうですね。もう一度だけ捜してみましょう」

大和の声に全員がうなずいた。

かくして翔輝捜索隊（大和、陸奥、長門、伊勢、日向、雪風）は宴会場を後にして部屋を飛び出した。

翔輝は甲板にいた。

きれいに輝く星空を見ながら一人ラムネを飲んでいた。

北半球にある日本と南半球にあることではまったく星空が違う。

昼間の蒸し暑さも夜になれば少しは落ち着き、海の潮の匂いが心地良くさせてくれる。

翔輝は眠そうにあくびをした。

もうずっとここにいたのだ。そろそろ寝ようと立ち上がった時、

「・・・翔輝」

突然の声に振り向くと、そこには月夜に照らされる武蔵がいた。

「武蔵？　どうしたの？　宴会は？」

翔輝は質問をするが、武蔵は答えてくれなかった。

「・・・翔輝」
武蔵はなぜか少しもじもじとしていた。そんな武蔵に翔輝は不思議そうに、
「トイレでもがまんしてるの？」
武蔵はコケた。
「・・・違う・・・ッ！」
武蔵は結構マジで怒っていた。そのあまりの怒気に翔輝は一歩引く。
「ごめんごめん。で、何なの？」
翔輝はとにかく彼女の目的を訊く事にした。正確には何か話してこの状況から逃げたいという気持ちもあったが。
「・・・あの」
武蔵は一度深呼吸して、瞳を閉じた。
少女の心の中に、何度も練習した言葉が流れる。完璧超人と言われる武蔵でも、緊張する事はある。しかもそれが翔輝の事ならなおさらだ。
武蔵は心を落ち着かせると、そっと瞳を開いた。
開かれた瞳にはもう迷いわなかった。唇がそっと動き、そして・・・
「・・・翔輝」
一筋の流れ星が、静かに流れた。

「・・・誕生日、おめでとう」

「え・・・」
翔輝は驚きのあまり瞳をこれでもかと見開いていた。
そう、十二月八日は真珠湾攻撃日であると同時に、長谷川翔輝十八歳の誕生日だったのだ。しかし、
「え？　な、何で君がそれを・・・」
翔輝は自分の誕生日を誰かに言った記憶はない。なのに武蔵が知

っているのはどういう事か。
驚く翔輝に武蔵は微笑した。
「・・・連合艦隊次席指揮官の情報収集能力を甘く見てもらっては困る」
どこかの誰かと同じようなセリフを言う武蔵に、翔輝はつい笑ってしまう。
「・・・な、何がおかしいの」
「いや、ちょっとね」
「・・・変」
「こりゃ失敬」
武蔵は翔輝に一歩近づき、そっと何かを差し出した。
――それは腕時計だった。
「これ、軍の最新式の腕時計じゃないか。どうしたの?」
さらに驚く翔輝に、武蔵は平然と、
「・・・注文表に一個多く書き加えた」
それは犯罪だよ、と言いたかったが黙った。せっかく武蔵が自分の為に用意してくれたのだから。そういうツッコミはなしだ。
「武蔵。ありがとう」
翔輝は腕時計を受け取って、今自分がしている腕時計を外して新しい時計を付けた。
「どう? 似合ってる?」
「・・・うん」
武蔵は嬉しそうに微笑すると、ふと翔輝の手の先の物に視線を止めた。
「・・・それ」
「え?」
それとは、翔輝の外した今まで使っていた時計だった。
「これがどうかした?」
「・・・それ、いらないならくれる?」
「え?」

不思議そうに首を傾げる翔輝に、武蔵は少し気恥ずかしそうにお願いする。

「・・・誕生日にプレゼントしておいて何かをもらうなんて変だけど、私、それがほしい」

武蔵はじっと翔輝を見詰める。その瞳にはいつになく強い感情が感じられた。

そんな武蔵のお願いを断れるはずのない翔輝は微笑した。

「いいよ。これがあればもう使わないし」

そう言って翔輝は腕時計を武蔵に渡した。武蔵は「・・・ありがとう」とお礼を言ってそれを付けた。少し大きかったが、武蔵は嬉しそうにそれを見詰める。

「・・・翔輝のぬくもり」

武蔵は温かそうに、そして愛しそうに翔輝からもらった時計を見詰める。しかし、すぐに自分を優しげに見詰めていた翔輝を真っ直ぐに見詰める。

「・・・翔輝。改めて言う。十八歳の誕生日、おめでとう」

「ありがとう」

「・・・なぁッ！？」

突然武蔵は翔輝に抱き締められた。身体中が翔輝に包まれ、何も考えなくなる。さらに吐息の掛かる距離で翔輝の顔があり、武蔵は顔を真っ赤にして完全に思考は停止する。

「ありがとう」

翔輝の言葉に武蔵は心の底から嬉しくなる。

その言葉が聞きたくて、こんな小さいが想い満載の作戦を立案して実行したのだ。

武蔵の心優しい気持ちに翔輝は心の底から嬉しかった。

霧島の死で凍てついていた翔輝の心が、少しずつだが、溶け始めた。

翔輝の腕の中で沈黙を続ける武蔵だったが、そっと顔を上げる。

「・・・翔輝。最後のお願い、いい？」

「何？」
翔輝はお返しに何かしてあげようと笑顔で武蔵に向く。そんな翔輝の笑顔に武蔵は頬を赤く染め、そっと心に想っていた願いを口にする。
「・・・その、あの、き、キスをして」
「・・・はい？」
翔輝はアホな顔をしていた。それはそうだろう。彼が予想していた注文のはるか上空を音速で通過するような内容だったからだ。
そんな翔輝の反応に武蔵はさらに顔を真っ赤にして顔をうつむかせる。
うつむく武蔵を見詰め、翔輝は困ったように頬を掻きながら、ある出来事を思い出す。
それは初めて彼女に出会ってからすぐの事。なんかお互いを認め合っている大和達に何かを証明するとかなんとかで、いきなり一方的に彼女からキスをされた事。
「あ、いや、き、キスって言われても・・・その・・・」
あたふたとする翔輝の反応に、武蔵も彼の思っている事に気づいたのか、さらに顔を赤くする。
「・・・あ、あれはその・・・私の一方的なものだったから・・・翔輝には悪い事をした。で、でも今度は、翔輝からしてほしい」
「いや、でも・・・」
渋る翔輝。そりゃそうだろう。いくら外見は子供でも美少女である武蔵。そんな彼女にキスを迫られれば普通は喜ぶものだが、翔輝はそういった事にとても疎い上に情緒が小学生並みなのだ。できる訳がない。
困る翔輝に、武蔵は仕方な妥協案を提示する。
「・・・なら、おでこにして」
武蔵のギリギリの提案でも、翔輝は「うーん・・・」と唸る。が、
「んー、まぁ・・・おでこなら・・・いいかな・・・」
「・・・本当？」

「あぁ、ほら」
「・・・え？」
その瞬間、武蔵の額に、翔輝の唇がそっと触れた。武蔵の思考は完全に停止し、まるで人形のように固まっていた。
やがてそれはそっと離れた。
「こ、これでいいか？」
翔輝も恥ずかしいので少し顔が赤い。
武蔵は依然硬直したままだった。
その時、流れ星が流れた。
それは、一人の少女が他の少女達よりもさらに一歩少年に近づいた祝福だった。
顔を真っ赤にして沈黙を続ける武蔵に対し、翔輝は「はぁ・・・」とため息する。
「まさか、ファーストキスを奪われた武蔵に、僕の方からおでことはいえキスする事になるとはね・・・」
翔輝の言葉に、武蔵は目を見開いて驚く。
「・・・え？　翔輝・・・あれ、初めてだったの・・・？」
驚く武蔵の問いに、翔輝は少し怒ったような顔をして背中を向ける。
「そ、そうだよ。悪かったね。もてなくてさ」
「・・・う、うそ。翔輝は素敵な人。絶対に恋人もいたはず」
「いないよ。正直、軍人になってから瑠璃や翔香以外の女の子とこんなに話すようになったよ」
翔輝の驚くべき発言に武蔵はさらに困惑する。
「・・・翔輝はかっこいい。だからもてる」
「それは違うさ。お前は陸の上を知らないからそう言えるの。僕よりかっこいい奴なんて五万といるさ。それに、この『大和』にだって乗ってるよ」
「・・・翔輝以外の男なんて、興味ない」
「もっと世界を広げて。僕なんかが一位じゃ悲しすぎるよ」

そう言う翔輝だが、彼だってそれなりにかっこいい顔立ちはしている。むしろもてた事のない方が驚きだ。

驚く武蔵だが、さすがは武蔵。すぐに冷静になって翔輝に質問する。

「・・・翔輝、彼女の経験は？」

「ないよ」

「・・・キスの経験は？」

「お前に初めてを奪われた」

「・・・夜の関係は？」

「何を訊いてるんだお前はッ！？」

怒る翔輝の声を無視し、武蔵はうつむく。そして、

「・・・嬉しい」

「え？」

驚く翔輝を、武蔵はじっと見詰める。その瞳はとても嬉しそうに煌いている。

「・・・私、翔輝の初めてなんだ」

「う、うん・・・まあ・・・」

「・・・私じゃ、初めては嫌？」

一転して不安げに瞳を揺らす武蔵に、翔輝は慌てて首を振る。

「い、いや、そんな事ないよ」

「・・・ほんと？」

「うん。断言できる」

「・・・そう」

武蔵は一度そうつぶやいてうつむくと、そっと翔輝に抱きついた。

「む、武蔵？」

驚く翔輝に、武蔵は顔を上げると――心の底から嬉しそうな笑みを浮かべた。

「・・・翔輝、好き」

そう言って武蔵はさらに翔輝に強く抱きつく。

「・・・私、決めた」

「何を？」
「・・・翔輝の初めては、全部私がもらう」
「え？　あ、いや・・・」
「・・・翔輝、大好き」
武蔵は翔輝に強く抱きついて離れない。
ずっとこうしていたい。
ずっとこうやって翔輝のぬくもりを感じていたい。
ずっと、このまま・・・
「あああああぁぁぁぁぁぁッ！」
突然の大声に振り向くと、そこには大和の他に長門、陸奥、伊勢、日向、雪風が立っていた。その中央にいる大和は極限まで顔を真っ赤にして、鬼のような顔をしている。
「少尉！　一体武蔵と何をしていたんですか！？　今すぐ離れてください！」
翔輝は言われたままに急いで武蔵から離れた。その際武蔵がすごく寂しそうな顔をしたが、どうしようもない。
大和はズカズカと翔輝と武蔵に近づく。さらにその後ろから他五名が続いた。
「少尉ッ！」
「大和。これはその、何だ。誤解と言うか東シナ海と言うか」
翔輝は大和が一歩進むと一歩下がるという事をくり返したが、すぐに追い詰められた。追い詰めた大和は翔輝を睨み続ける。
「あの・・・ね？　大和ちゃん？」
「私達が必死になって捜している間に、一体二人で何をしていたんですかッ！」
「いや、だから誤解――ッ！？」
その瞬間、翔輝は大和に押し倒された。
「少尉のバカバカバカバカバカバカバカバカ、バカーッ！」
と、大和は翔輝をポコポコと殴る。それに対して翔輝「誤解！　誤解なんだ！」と必死に叫んでいる。そんな二人を見て、長門はため

息。
「まったく、心配して損したわ」
「まぁまぁ、お姉様。何もなかったから良かったじゃないですか」
「陸奥。あんた笑顔が引きつってるわよ？」
「気のせい、気のせいですよ・・・（ニコ・・・ッ！）」
「やっぱり引きつってる」
そんな長門姉妹が見詰める先で、一通り殴り終えたのか、大和はようやく翔輝を解放した。
翔輝はフラフラと立ち上がる。
「痛ッ、手加減なしかよ」
「そんなもの無用です」
大和は翔輝に背を向ける。そんな大和の背中を見て翔輝はため息ついた。
「・・・大丈夫？」
武蔵が心配そうに翔輝の顔を覗き込む。
「あぁ、大丈夫大丈夫」
翔輝は努めて笑顔を送る。が、その態度がマズかった。
「少尉！　反省してるんですか！？」
大和が再び牙を向けて来た。
「反省って、何を・・・？」
「決まってるです！　私のかわいい妹をたぶらかした事です！」
「んな事するか！」
翔輝がマジで怒り始めると、突然武蔵が翔輝の手を握った。
「武蔵！？　何を・・・ッ！」
「・・・姉さん。これは、私の意志だから」
「なッ！？」
「あらぁ、先手を打たれてたのね」長門がポンと手を叩く。
「・・・ッ！」
「陸奥ちゃーん？」
陸奥は顔を真っ赤にさせて怒りの炎を燃え上がらせているが、そ

れは置いといて、大和はこれまで以上に激昂していた。
「それよりも二人はこんな所で何をやってたんですか!?」
大和の怒鳴り声に、長門がすばやく反応した。その顔は何をバカな事をと言いたげな顔だった。
「大和。それは聞かない方がいいわよ?」
「どうしてですか!?」
「いやぁね、人気のない所で若い男女がする事っていったら一つしかないでしょ?」
沈黙が降りた。
ここに至って初めて、大和の瞳に理解の色が浮かんだ。みるみるうちに顔を色が真っ赤に染まってゆく。弱い月明かりの下でもはっきり見えるほどだった。
「少尉・・・ッ!」
「誤解だ! そんな事するか! 長門さんも火に油を注ぐような事を!」
「あら、私は火に重油をぶち込んだだけよ?」
「なおひどいわ!」
「少尉!」
大和は臨戦態勢に入っていた。ギラリと輝くそれは、旗艦になった時に長門からもらった軍刀だった。
斬られる! 翔輝の本能がそう告げていた。
「待てッ! お前キレやすいぞ! 牛乳飲んでカルシウムをちゃんと取れ!」
「どちらかって言うと、武蔵は牛乳じゃない何かを飲んでたのよね? 白い何かを」
「少尉ッ!」
「長門さん!」
もはや修羅場は泥沼化していた。大和はジリジリと翔輝に近づき、翔輝はダラダラと汗を流しながら後退して行く。そしてついに、翔輝の背中は冷たい金属の壁に触れた。その瞬間、全てが動いた。

「ひッ！？」
恐怖の声は――大和の口から出た。
大和の後頭部には冷たい金属が触れていた。純粋に人を殺す道具。拳銃だった。その拳銃のグリップを握っているのは、武蔵の白い手。
「・・・誰もそんな事してない・・・ッ！」
震える拳銃を握っている武蔵の声は、本気の本気で激怒していた。顔を真っ赤に染めて唇をギュッと噛んでいる。
翔輝と自分をそんなふしだらな関係に思われた事に、マジでキレていた。
「む、武蔵・・・？」
さっきまで真っ赤に染まっていた大和の顔は、今はもう真っ青だった。
「武蔵。えっと、冷静に、ね？」
さっきまで冷静どころか理性のたがが外れていた奴がよく言うわ、と内心呆れている翔輝。
「私と翔輝は、そんなふしだらな事してない・・・ッ！　私はただ、翔輝に誕生日プレゼントを渡してただけ・・・ッ！」
再び沈黙が降りた。
大和以下五名はポッカーンと口をアホみたいに開けて硬直していた。
「え？　少尉の、誕生日・・？」
先陣を切った大和は「何を言ってるの？」と言いたげな瞳を向ける。そんな姉を不機嫌そうに見詰め、武蔵は言い放った。
「・・・そう、今日は翔輝の十八歳の誕生日。私はただ、翔輝にその祝いのプレゼントと渡してただけ、それ以上でもそれ以下でもない」
思いっ切りおでこにチューしてもらっておいてそれはないだろう。
「ちょっと、いいかな？」
長門が引きつった笑みで翔輝を見る。
「長谷川君。それは本当かな？」

「あ、はい」
翔輝の返事に長門の笑みが崩れ始めた。次に長門は無表情の少女――武蔵に訊く。
「それをどうして武蔵が知ってるの？」
長門の問いに、武蔵は何をバカな事をと言いたげな顔をする。
「・・・情報を制す者が全てを制す。さっきも言ったけど、連合艦隊次席指揮官の情報収集能力を見くびってもらっては困る」
「元連合艦隊旗艦である私や、現連合艦隊旗艦である大和ですらそんな事知らなかったわよ？」
「・・・情報に対する認識の甘さが敗因。戦局を左右するのは全て情報。そんな事すらわかってないあなた達は、私に完全敗北した」
武蔵の自信満々な勝利宣言に、大和達が激怒する。
「教えてくれてもいいじゃない！」
「そうよ！　武蔵ちゃん最低！」
本気の本気でキレた大和と陸奥は鋭利な牙をギラギラと輝かせながら武蔵を睨む。
「自分ひとりだけやなんてずるいわぁ！　情報提供してほしかったわぁ！」
「そうだそうだ！」
理不尽な武蔵の行動に伊勢と日向も激怒していた。
「あ、あの武蔵副司令？　さすがにそれはマズイですよ？」
雪風は極力平和的に解決しようとするが、それは無駄な努力だった。
武蔵は表情の薄い顔を、勝利で勝ち誇った顔をしていた。
「・・・教える？　情報提供？　こういう戦いに助け合いは必要ない。必要なのは己自身の実力。お気楽に仲間ごっこしている姉さん達は、絶対に私には勝てない。最新鋭の世界最大最強超弩級不沈戦艦の実力をなめてもらっては困る」
武蔵の勝利宣言に四人（長門と雪風以外）は今にも襲い掛かりそうな雰囲気だったが、大和がそれを止める。

いつになく、大和は冷静だった。これも連合艦隊旗艦という大役を受けて長いからだろう。幾多の難局を切り抜いてきた司令官の瞳がそこにある。

「悔しいけど、今回は先手を打たれた。でも今からでもまだ間に合う。私達もプレゼントを渡せば！」

その言葉に四人の瞳の色が変わった。大和達は急いで渡すものを考える。もちろん長門と雪風も考える。が、そんな大和達を見て、武蔵はあざ笑った。

「・・・言ったでしょ？　あなた達は私に、完全敗北したって」

「それが何よ・・・ッ！」

大和の必死な顔を見て、武蔵は苦笑し、おもむろに翔輝からもらった腕時計を見る。

「あ、それは少尉の――」

「・・・いいの？　あと十秒で明日になっちゃうけど？」

『え・・・？』

その言葉に全員は急いで腕時計や懐中時計を確認する。すると、現在時間十二月八日十一時五九分五二秒。

『ぎゃあああああぁぁぁぁぁッ！』

六人（特に長門と雪風以外の四人）は悲鳴を上げて、あたふたと焦りまくる。そんな六人を見て、武蔵は軍帽を被り直した。

「・・・五・・・四・・・三・・・二・・・一」

そして、秒針は無情にも、十二と重なった。

現在時間十二月九日〇時〇分〇〇秒。

「・・・完全勝利」

『いやあああああぁぁぁぁぁッ！』

こうして、翔輝の十八歳の誕生日は終わり、戦いは終わった。結果は武蔵の単独圧倒的完全勝利。大和達にとっては、ミッドウェー海戦以来の大敗北だった。

「大和？　大丈夫？」

力なく甲板に倒れている大和を翔輝は急いで抱き起こすが、被害

は甚大だった。
「負けた。妹に、完全敗北・・・完敗よ・・・」
「何の勝負だよ!?」
ガクガクと翔輝は大和の肩を揺らすが、すでに大和の心は遠い所に行ってしまった。そんな大和を必死に呼び戻している翔輝の横で、同じような状態に陥っている陸奥を看病する長門。
「お姉様。私はもう・・・」
「がんばれ！　傷は浅いわ！」
どこか演技も入ってそうだが、ともかく陸奥も爆沈であった。
そして、伊勢も轟沈し、日向が必死に姉に叫んでいる。
「お姉ちゃん！　今から渡せばいいじゃない！」
「甘いんよ日向ぁ。誕生日プレゼントちゅーのはそん日に渡すんが絶対必須事項なんや。それがないんじゃ、カレー粉を入れていないカレーと同じやわ」
「私はカレー粉が入ってなくても、塩コショウをかけて食べるよ！」
「食い意地が張っとるあんたと一緒にせぇへんで・・・ッ！　第一、一日遅れた誕生日プレゼントを、どう言って渡すって言うんよ・・・ッ!?」
「え?　普通に、『昨日はごめんね。一日遅れのハッピーバースデーだよ。てへっ♪』って具合に」
「・・・あぁ、日向。今のあんたはうちにはまぶし過ぎる」
「お姉ちゃん！　カムバーックッ！」
そんな六人を見ながら、雪風はあたふたとしている。どうすればいいかわからないのだろう。
「・・・翔輝。今日はもう遅い。また明日、じゃねくて、朝ね」
「あぁ、うん」
武蔵は翔輝にあいさつを済ませると、足早に消えてしまった。大和達にとっては、見事な勝ち逃げにしか見えなかった。
こうして、翔輝の十八歳の誕生日は終わり、武蔵はまたひとつ翔輝との絆を結んだのであった。

第八章　第二節　翔輝の古き悪友

翌朝、翔輝は多くの艦魂達から色々な誕生日プレゼント（一日遅れだが）をもらった。大和からも万年筆をもらった。

自室に戻り、翔輝は大量のプレゼントを机に置いた。

「ずいぶんもらいましたね」

大和は大量のプレゼントを見詰めて驚く。そんな大和の言葉に翔輝は笑顔でうなずく。

「うん、もらって嬉しいのもあるんだけど、意味のわからん物もあるな」

そう言って、翔輝はおもむろに――魚雷を取り出した。

「九五式酸素魚雷型万年筆。潜水艦の子からもらったんだけど、こんな物どうやって手に入れたんだ？　ここにあるのは全部本物だろ？」

本物とは、艦魂達から空間から取り出した幻のような物ではなく、常人が触れられる普通の物の事だ。

「さぁ、でもいいじゃないですか。なかなかいいデザインですよ？」

「でもさ、駆逐艦の子数人からも魚雷型万年筆をもらったんだよ？　なんか少し形は違うけどさ」

そう言って翔輝は別の魚雷型万年筆と持つ。すると、

「それ、艦艇の使用する九三式酸素魚雷型万年筆ですね。九五式は潜水艦用の魚雷ですから」

大和は翔輝が手に取った別の魚雷型万年筆を見て自信満々に言った。

大和の説明に翔輝は感心すると同時に苦笑いする。

「素人の僕によくわからないな」

「少尉の専門分野は戦艦ですからね」

大和の言葉に、翔輝は「そうだな」と返すと今度は一際目立つ一升瓶を取り出す。

「山城からは一升瓶をもらったよ」
「すごいですけど、少尉はお酒はお飲みになるんですか？」
「うーん、残念だけど僕はあんまり飲まないね」
「・・・これ、どうするんですか？」
「うーん・・・」
翔輝は目の前の一升瓶を見詰め、小さく首を振る。
「山城には悪いけど、これは誰かにあげよう」
「それがいいですね」
大和も翔輝の提案にうなずくと、一升瓶をそっと隅に置く。
プレゼントを見詰める大和はふと隅にある意外な人物からのプレゼントを見詰める。
「でも、金剛さんからプレゼントが来たのは意外でしたよね？」
「あぁ、物は竹刀だったけどな」
そう言って翔輝は苦笑いしながら金剛からもらった竹刀を持つ。
柄の部分には力強い文字で《切磋琢磨海軍精神》と彫られていた。
あの人らしいといえばそうだ。
次に大和はいまだに袋の中にひとつだけ入っているある人からのプレゼントの話に触れる。
「扶桑さんの過激でしたよね。釘の刺さったわら人形でしたものね」
そう言って、袋を見詰める。その中には誕生日プレゼントには絶対に渡さないはずの呪術道具が入っている。
翔輝も袋を見詰めて苦笑いする。
「同封されてた手紙には『山城からプレゼントなんて、私は一回ももらった事がないのに！　呪ってやるー！』って書いてあったし」
「嫉妬とは時に恐るべき力になりますから、少尉も気をつけてくださいね」
「うん。すぐ近くにそれに近い人もいるし」
「え？」
「ううん。気にしないで」
翔輝はプレゼントの山を見詰めてそっと微笑む。中にはあれな物

もあるが、みんなからプレゼントをもらえて嬉しいのだろう。
「伊勢さんは伊勢エビ十匹でしたよね？　あれはどうしたんですか？」
「主計長にあげたら「こりゃすごい！　こんなもんどうしたんだい！？　まぁいいや、これを使って今日は伊勢エビの味噌汁を作ってやらぁ」って嬉しそうに言ってたよ」
「それは良かったですね」
「問題は日向のだ。これはさすがに・・・」
そう言って翔輝はため息しながらベッドの上に置かれた大きなクマのぬいぐるみを見詰める。
「かわいいじゃないですか」
大和は頬を赤くして嬉しそうな笑みを浮かべるが、翔輝は複雑そうな顔をする。
「軍艦にクマのぬいぐるみはおかしいだろ？」
「ま、まあそれはそうかもしれませんが・・・」
「どうしよっかな・・・瑠璃にでもあげっかな」
翔輝がクマのぬいぐるみをどうするか困っているとドアがノックされた。
「はい？」
「あ、あの、水上です」
「あぁ、入っていいよ」
翔輝の返事の後「失礼します」と言って水上が入って来た。
部屋に入って来た水上はいつもと同じ水兵服を着ていた。きれいに着込まれた服は彼の几帳面さが染み出しているのか埃ひとつ付いていない。
「少尉。内地から少尉宛ての郵便が届きました」
「僕宛て？」
翔輝は水上から手紙を受け取る。と、そこで水上は部屋の中にある異常な物を見詰めて不思議そうに首を傾げる。
「あ、あの少尉。これは何ですか？　なんか魚雷が何本もあったり、

クマのぬいぐるみもあるし。えっと、こっちの袋には・・・これは、呪いのわら人形!?」
「あぁ、それは艦魂からもらったんだよ」
「艦魂からですか？　なぜまた」
「昨日は僕の誕生日だったんだよ」
「そうだったんですか!?　これはすみません！　お誕生日おめでとうございます！」
水上は慌てて頭をぺこりと下げて祝い言葉を言う。こういった礼儀正しいところが彼の素直なところだ。
「ありがとう」
翔輝は笑顔でお礼を言うと、ふと手元の手紙を見詰める。そんな翔輝を見詰めていて水上は何かを思い出したように付け加えた。
「あ、それとですね少尉。今日は内地から軍楽隊が派遣されるようですよ？」
軍楽隊とは軍隊に所属する音楽専門の軍人が海軍の行事や前線の将兵の士気高揚に活躍する音楽隊の事。れっきとした軍人であり階級も存在する、まさに軍の為の音楽隊だ。
「軍楽隊？　ほぉ、そりゃいいな」
翔輝は水上の嬉しい情報に嬉しそうに笑みを浮かべる。そんな彼の笑顔に水上も嬉しそうに笑顔になる。
「ですよね？　僕すごく楽しみなんです！」
「そっか、僕も楽しみになってきたよ」
「えへへ、じゃあ僕まだ仕事があるのでこれで失礼させていただきます」
「うん、ありがとう。仕事がんばってね」
「はいッ！」
水上は翔輝の激励に満面の笑みを浮かべ敬礼をすると、部屋から出て行った。その後姿を見詰め、翔輝もそっと微笑む。
「水上さんって、本当にお優しい方ですね」
隣に立っていた大和もいつの間にか笑みを浮かべていた。

「そうだね。とってもいい子だ」
嬉しそうに微笑む翔輝を見詰め、大和は少し寂しそうな笑顔を浮かべる。
「水上さんが艦魂が見えないのが、ちょっぴり悲しいです」
「そうだな・・・」
翔輝は小さく笑顔を浮かべると、ふと手に持っていた手紙を開封して中身を確認する。すると、翔輝の笑みが小さなものから満面の笑みに変わった。
「瑠璃からだ」
その名前に、大和の眉がピクリと動く。
「瑠璃さんですか？」
大和は少し警戒したような顔で翔輝を見詰める。そんな大和の身に纏っている雰囲気が鋭くなった事にも翔輝は気がつかずに笑顔を浮かべ続ける。
「うん。誕生日祝いの手紙だ。プレゼントが大量にあるから、今度上陸した時に渡すってさ。あいつの事だからまた無意味に高級品だろ。まったくあのバカ」
瑠璃の悪口を言う翔輝だが、その顔にはいつなにく優しい笑顔があった。それだけ幼なじみからの手紙が嬉しかったのだろう。
笑みを浮かべる翔輝を見詰め、大和は少し不機嫌そうに唇を尖らせる。
「それよりこのプレゼントどうするつもりですか？」
大和の言葉に翔輝は「あ・・・」と思い出す。
「そ、そっか。どうしよう・・・」
「知りません」
「・・・ねぇ、大和。何かお前冷たくない？」
「そんな事ありません」
「そ、そう？」
「そうです。それより早く何とかしたらどうですか？」
大和の言葉に、翔輝は困ったように頬を掻き、手紙を机の引き出

しにしまうと再び艦魂達からもらった大量のプレゼントをどうするかを悩み始める。

一人困る翔輝を一瞥し、大和はそっと瑠璃の手紙が納められた引き出しを悲しそうな瞳でいつまでも見詰めていた。

その日の夕方、戦艦『大和』の兵達は甲板に集まっていた。その兵達の顔はみんな何か楽しそうでうきうきしていた。そんな彼らの視線の先には楽器を持った多くの兵達がいた。

帝国海軍軍楽科の兵――軍楽隊だった。

翔輝もそんな兵達のいる甲板で軍楽隊を見詰める。彼は一応士官なので兵達よりも前にいる。そんな彼の横にはわくわくしたような顔をした大和がいた。

「私、軍楽隊の演奏が大好きなんです。ミッドウェー作戦出撃の時の《軍艦行進曲》は感動しました」

「そっか、それ以降軍楽隊は来なかったもんね」

「・・・たまにはこういうのもいい」

そう言って翔輝の腕に抱きついているのは武蔵。先程「二人で聴きに行きましょう！」と言った大和に「・・・抜け駆け禁止」と言って武蔵もついて来たのだ。これには大和はかなり不満そうだったが、翔輝が「まあいいじゃない。三人で行こうよ」と笑顔で言ったので、一応妥協した。

翔輝の右側にうきうきした大和が、左側には翔輝に抱きついて離れない武蔵がいる。そして、さらにその横では、

「うちも軍楽隊の演奏はほんまに好きなんよ」

伊勢が嬉しそうにおっとりとした笑みを浮かべる。彼女も途中で会ったので一緒に来たのだ。残念ながら陸奥は仕事があるので来れなかったが、今はこうして四人で軍楽隊の演奏を聴きに来ている。

「へー、伊勢はどんな歌が好きなの？」

「うち？　うちは京都の手まり歌が好きや」

「手まり歌？」

「えぇ。《丸竹夷二押御池、姉三六角蛸錦、四綾仏高松万五条、雪駄ちゃらちゃら魚の棚、六条三哲とおりすぎ、七条こえれば八九条、十条東寺でとどめさす》と歌いはります」

伊勢は美しい声で京都の手まり歌を歌った。その声に翔輝はもちろん大和も感心する。

「それ、どんな歌なんですか？」

「うちは本物の京都人ちゃいますからよく知りまへんが、なんや京都市内の道は東西南北に碁盤目状になっとって、その通り名を覚えるための歌がこの歌らしいんどすが、うちは艦魂ですけぇ、あんま関係ないどすなぁ」

伊勢はそう言って笑みを浮かべた。心なしか、その笑顔は少し寂しそうだった。

「伊勢？」

「うちな、もし人間だったら京都に住んでみたかったんや。そして、舞妓はんになって、きれいな着物着て、皆はんの前で踊りたい――それが、うちの叶うはずもない夢なんや」

伊勢はそう言うと悲しげに微笑む。その笑顔の奥には、決して叶う事のない儚い夢への呆らめからくる悲しみがあるのだろう。そしてその苦しみは、誰にもわからない。

「・・・だから、関西弁を？」

「鋭いなぁ。これも夢の一環なんや。つーても関西から来た将兵の真似なんや。だから京都限定やのうて大阪や兵庫、奈良なんかも混ざっとるから、ほんまもんの京都弁は遠いんや。せやから関西弁っていう方がええかもしれへんな」

そう言って笑う伊勢を、翔輝は悲しげに見詰める。そんなに辛い想いをしながら笑える彼女の強さと辛さに、翔輝は自分の中の似たものに痛みを感じた。

自分をそんな目で見詰める翔輝の視線に気づいた伊勢は、優しく微笑むと甲板の一角を見詰める。そこには軍楽隊の演奏を聞こうと駆逐艦の艦魂が数人がわくわくしたような顔で軍楽隊を見詰めてい

た。
「せやけど、今はみんながいるし・・・」
伊勢はそっと翔輝を見詰め、優しく微笑む。
「長谷川はんがおる。うちは今幸せや」
「伊勢・・・」
二人はいつの間にか見詰め合っていた。
伊勢の整った美しい顔が自分を見詰める。自分と同じくらいの年齢の美少女のうるんだ瞳に、翔輝は一瞬ドキリとする。すると、そんな翔輝に伊勢はそっと微笑んだ。
「せやけど長谷川はん。あんまりうちばっかり見いひん方がええで」
「え？　どうして？」
首を傾げる翔輝に、伊勢はそっと視線を別の方向へと向ける。翔輝もその視線を追って振り返る。と、
「・・・私達・・・すっかり忘れられてるね・・・」
「・・・翔輝のバカ」
そこには姉妹そろって落ち込んで甲板の上に微かに積もった塵（ちり）で《の》の字書いている大和と武蔵の背中が。
「あ・・・」
「ほら、二人の機嫌を直してあげてぇな」
伊勢に背中を押され、翔輝は慌てて二人に笑顔を振りまいた。しかしすっかり心の根から折れてしまった二人の機嫌を直すのはかなりの重労働で、翔輝は必死になって謝ったりした。そんな翔輝を見詰め、伊勢はそっと優しく微笑んだ。

翔輝の必死の謝罪に大和と武蔵も一応機嫌を直し、四人は再び演奏準備をする軍楽隊を見詰める。
翔輝はふと演奏用意をしている一人の軍楽隊員を見る。すると、突然翔輝の顔に驚愕の色が染まった。
「あ、あれは・・・ッ！」
「少尉？」

大和は怪訝そうに翔輝を見上げる。見詰める先にある翔輝の顔はいつになく驚いていた。
翔輝は目を何度も擦って何かを確認する。そして、
「あれって、滝川(たきかわ)か・・・ッ!?」
「滝川さん?」
大和は翔輝の口から出た知らない名前に戸惑いながら翔輝の視線を追った。その先にはトランペットを構えている青年軍楽士官がいた。
「あの前列の右から五番目の人ですか?」
「あぁ・・・やっぱり滝川だ」
「・・・誰?」
武蔵も翔輝の表情から尋常じゃない何かを悟ったのだろう。不安げに彼を見上げる。
翔輝は懐かしそうに青年を見詰める。
「滝川健太(けんた)海軍軍楽少尉。僕の友達さ」
「長谷川はんのお知り合いどすか?」
伊勢の問いに、翔輝はしっかりとうなずくと、友人――滝川を見詰める。
「あぁ、海軍学校で横須賀の海兵団に見学に行った時に、そこであいつと出会ってね。それが縁で横須賀に行った時はよく一緒に行動したりしてたんだ」
翔輝の嬉しそうな顔に、大和も自然と笑みが浮かぶ。
「へぇ、つまりは親友って事ですか?」
「そんな大したもんじゃないよ。どっちかって言うと悪友って感じかな」
翔輝はそう言って苦笑いした。そんないつになく嬉しそうな翔輝を見て、大和は嬉しそうに笑みを浮かべた。もちろんそれは伊勢も武蔵も同じだった。
そうこう言っているうちに軍楽隊の演奏が始まった。
日本の歌はもちろん外国の歌も演奏された。しかし今はアメリカ

やイギリスと戦っているのでその国の曲は演奏禁止となっていたが、代わりに同盟国のドイツとイタリアの曲などが演奏された。
曲は優しいものや激しいものなど様々が演奏された。兵達はその一曲一曲を静かに聞き入っていた。
毎日過激な訓練に明け暮れる兵達にとっては食事やささやかな娯楽のよりも、こうやって軍楽隊の演奏を聴くのが数少ない楽しみだった。
演奏は一時間近く続き、全ての演奏が終わると爆音のような拍手喝采が起きた。軍楽隊員達は敬礼してそれに応えた。
こうして、軍楽隊の演奏は終わった。

翔輝はすぐに軍楽隊が使用している部屋に飛び込んだ。
ドアを開けると、いきなり士官が飛び込んできたので下士官や兵の軍楽隊員達は敬礼した。翔輝はそんな部屋の中から目的の人物を見つけた。
「滝川！」
滝川と呼ばれた男は「え？」という声を発して振り向き、翔輝の顔を見ると驚いたような顔をした。
「長谷川！？」
「久しぶりだね滝川！」
翔輝は旧友の胸に嬉しそうに飛び込んだ。
翔輝の親友（悪友？）の滝川は身長が一八〇センチはあるかという背の高い青年だった。年は幾分か翔輝より年上らしい。身長が二〇センチ近く違うので、まるで二人は兄弟のように見える。
「久しぶりだな！　まさかお前が『大和』に乗ってたなんて」
滝川も驚いたような顔をしているが、その表情はとても柔らかく優しいものだった。そんな彼に翔輝は笑顔を向ける。
「驚いた？　僕はここで航海士をやってるんだよ。滝川の方はどう？」
「あぁ、この間トランペット班の班長になった」

「そりゃすごい。おめでとう！」
「ありがとう。おぉ、そうだ。みんなに紹介しないと」
滝川は嬉しそうに翔輝の肩を掴むと仲間達の方を向く。
「おいみんな。彼は長谷川翔輝。この『大和』で航海士をしてるらしい。横須賀海兵団にいた時ちょいと縁があってな、こうやって仲良くなったんだ。みんなよろしくな」「長谷川少尉です。以後よろしくお願いします」
隊員達は敬礼した。そんな心優しい兵達に翔輝の心も自然と温かくなる。
「それよりお前、まだ少尉なのか？」
滝川はニヤニヤしながら翔輝に問う。
「え？　あ、うん。そうだけど」
「そっかそっか――とりあえずパン買って来い」
「はい？」
翔輝は突然の意味不明な彼の発言に戸惑う。そんな翔輝に滝川は依然ニヤニヤと笑みを浮かべ続ける。
「ほら、さっさと買って来い」
「ちょ、ちょっと待ってよッ！　何だよいきなり！」
さすがの翔輝もいきなりの横暴に怒る。だが滝川はそんな彼の声など気にした様子もなくニヤニヤと笑う。
「何だよって、上官命令でパシリしてもらおうと思ってな」
「じょ、上官ッ！？」
滝川の突然の爆弾発言に、翔輝は今まで以上に驚く。そんな彼の反応に滝川は豪快に笑うと、襟に付いている階級章を見せ付ける。
「そう。俺はもう中尉になってんだ。そんでお前がまだ少尉。つまり俺はお前の上官って事になんだよ」
ガハハハッと豪快に笑う滝川に、翔輝は呆然とする。
「な、なんだろ、君の昇級を素直に喜べないんだけど・・・」
呆然とする翔輝に、滝川はそっと肩を叩く。
「まあ気にすんな。俺達の仲じゃねぇか。頭の固い連中の前以外で

はこうやって今までのように仲良くしようや」
　滝川の嬉しすぎる言葉に、翔輝は目に涙を溜めて喜ぶ。
「あ、ありがとう！　滝川はやっぱり僕の親友だ！」
「おうよ。困った時は任しときな！」
「うんッ！」
「まあ、まずはとりあえず酒買って来い。もちろんお前の金で――」
「死ねやゴラぁッ！」
　鬼神のごとく咆哮した翔輝の強烈な鉄拳が滝川の腹に見事に炸裂した。刹那、滝川の身体は激しく痙攣した後その場に身体を折って悶絶する。
「て、テメェ・・・ッ！　上官になんて事を・・・ッ！」
　痛みの為か涙目で翔輝を睨み滝川に、翔輝も睨み返す。
「やかましい！　お前は相変わらず人を怒らせる冗談が得意みたいだな！」
「うるせぇッ！　テメェの方こそ純粋無垢そうな瞳をして邪悪な武器仕込んでんじゃねぇよッ！」
「はあ？　何の事だい？」
「とぼけんじゃねぇッ！　テメェが手に持ってるもんは何だッ！」
「・・・マイク？」
「バカかテメェッ！？　そんな電流バチバチいってる護身用武器がマイクな訳ねぇだろッ！　バカだろ！　お前はやっぱりバカだろッ！？」
「うるさいッ！　このブラックイーグルスタンガンで眠れッ！」
「自分から正体明かしてんじゃねぇかッ！　つーかブラックイーグルって世界最強のスタンガンじゃねぇかッ！」
「天誅（てんちゅう）ッ！」
「やらせるかッ！」
　スタンガンを構えた翔輝と立ち上がった滝川はそのまま取っ組み合いの大ゲンカをした。わいわい騒ぐ二人にまわりの兵達も「滝川さんに二銭！」「長谷川少尉に三銭！」とノリノリ。二人のケンカ

はいつまでも続くかと思われたが、
「少尉やめてください！」
ブラックイーグルスタンガンを最大出力の一一〇万ボルトにして滝川に最後の一撃を入れようとした翔輝の背中に今にも泣きそうな顔の大和がしがみ付いた。
「や、大和？」
「少尉やめてください！　私の知っている少尉はそんな悪い人じゃないですぅッ！」
必死になって翔輝を止めようとする大和に、翔輝もすっかり戦意を失う。
「わ、わかった。わかったから泣くなよ」
今にも泣きそうな大和に翔輝も慌ててスタンガンを懐にしまう。
「ほら、もう泣くなって」
「少尉は優しい人です・・・だから・・・」
「わかったわかった。わかったから泣くなって」
すっかり翔輝の腕の中で嗚咽を漏らす大和に、翔輝はため息する。
兵達はいきなりケンカをやめて独り言を言い出した翔輝を不思議そうに見詰めている。が、そんな中、滝川だけはニヤニヤと笑みを浮かべていた。
「おい長谷川。いつの間に彼女なんてつくったんだよ」
「ち、違うよ。そんなんじゃないって」
「ち、違うんですか・・・？」
「ちょ、ちょっと泣くなよ！」
「まあ、どうでもいいけどそれはロリに入るぞ？」
「だから違うって言ってるで・・・」
翔輝はそこまで叫ぶと、突然動きを止めた。
「お？　どうした？」
ニヤニヤと笑みを浮かべ続ける滝川にそっと視線を向けると、翔輝は苦笑いしながらそっと問う。
「あ、あのさ滝川」

「うん？　何だ？」
「――なんで、大和が見えるの？」
大和の翔輝の言葉に驚いたような顔をすると滝川を見詰める。そんな二人に、滝川はイタズラっぽい笑みを浮かべる。
「そりゃ見えるさ。なにしろ俺は艦魂が見えるんだからな」
「「えええぇぇぇッ！？」」
すさまじく驚く二人に滝川は豪快に笑う。
「これまでに俺は数々の軍艦に乗って多くの艦魂達を見てきたぞ」
滝川は胸を逸らして自慢げに言う。そんな彼を見詰め、翔輝は驚愕していた。『大和』に乗って一年経つが、艦魂が見える他の人を初めて見た。しかもそれが友人だったとは世界は結構狭いものだ。
「んで？　その初潮も来てないようなお嬢ちゃんは誰だ？」
「少尉以外に子供扱いされたくないです」
滝川の失礼極まりない言動に大和は少し不機嫌そうに唇を尖らせる。だが、そんな大和の言葉も気にした様子もなく滝川は愉快そうに笑う。
「子ども扱いして当然だろ？　子供なんだからよ」
「少尉だったら構いませんが、それ以外の人に子供と言われたくないです！」
大和は滝川の失礼極まりない態度と言動にいつになく怒る。しかし滝川は軽く鼻で笑うと、
「おら」
「ひゃあッ！？」
「なぁッ！？」
滝川は突如大和の後ろに立つと両手で彼女の両胸を鷲掴みにした。その突然のセクハラ行為に大和は顔を真っ赤にする。
「な、何するんですか！　放してください！」
「あれ？　お前それなりに胸あんだな。ぺったんこだと思ってたんだが。着やせするタイプか？」
そう言って滝川は大和の（実はそれなりにあるらしい）胸を揉む。

そのもはや犯罪的行為に大和は顔を限界まで真っ赤にして暴れる。
「いやあああぁぁぁッ！　エッチぃッ！」
顔を真っ赤にして叫ぶ大和は回し蹴りを放つが、滝川は「おっと」と簡単に避けてしまう。
「おー、危ないな」
滝川は悪びれた様子もなくニヤニヤと笑う。
一方、翔輝にだって触らせた事のない胸を激しく揉まれた大和は乱れた胸元を両手で隠しながら顔を真っ赤に染めたまま、涙いっぱいの瞳で滝川を睨みつける。
「な、何するんですか変態！」
「あ？　何って豊胸マッサージだけど？」
「何もっとな事を言ってごまかそうとしてるんですかッ！　あなたがやった事は犯罪ですよ！」
大和の激昂に対し、滝川はやれやれといった感じで肩をすくめる。
「いくら胸がある事がわかっても、そんなあるのかないのかわからない程度で一人前に恥ずかしがってんじゃねぇよ」
滝川の恐ろしき暴言に、純粋な心の大和はついに泣き出してしまった。
「ひ、ひどいですぅッ！　一番気にしている所をそんなひどい言い方するなんて！」
「お、自覚はあったんだ。ぺったんこの」
「うえええええぇぇぇぇぇんッ！」
大和はその場にぺたりとお尻をついて泣き始めてしまった。
「お、おい、何も泣く事ないで――」
「何やってんだお前はッ！」
「ぎゃあああああぁぁぁぁぁッ！」
大和を泣かせた事に激昂した翔輝はブラックイーグルスタンガンを最大出力で滝川の身体に拳と共に押し付けた。一一〇万ボルトの電流の直撃を受けた滝川は身体を激しく痙攣させるとその場に崩れ落ちた。

「ふぅ・・・」
女の敵を倒した翔輝は、肩を小刻みに震わせて泣いている大和の肩をそっと叩いた。だが、大和は泣き続ける。そんな大和にどう声をかけていいかわからなかったが、とりあえず励ましてみる。
「まあ、あのバカの言う事は気にしなくていいから。元気出せって」
翔輝の声にも、大和は泣きやまない。
「む、胸がどうとかなんてどうでもいいじゃん」
「どうでも良くなんかないですッ！　女の子にとっては大切な事なんですッ！」
大和は泣きながら翔輝に叫ぶ。確かに女の子にとってはかなり大切な問題だ。
「それに私、あんな見ず知らずの人に・・・む、胸を・・・」
そう言って乱れた胸元を泣きながら必死に隠す。
女の子にとって、好きでもない男に胸を揉まれるのはとても耐え難いものなのだろう。それは男である翔輝だってなんとなくはわかる。
大和は泣きながらがっくりとうな垂れる。
「・・・私、傷物になっちゃった・・・」
「いや、そんな事はないと思うけど・・・」
「・・・もうお嫁に行けない」
ここで「元々嫁には行けないだろ」というツッコミを入れたら負けなのだろう。
翔輝は完全に元気を失った大和の悲しげな姿を見詰め、困ったように頬を掻く。こんな時にどう声をかけたらいいか困っているのだ。
翔輝はとりあえず彼女の心配を解いてやろうと言葉を考える。そして、
「まあ、とりあえず誰かにもらわれるまでは僕が面倒見てあげるから、そう肩を落とさないで」
「・・・え？」
翔輝の言葉に、大和は顔を上げた。その顔は驚愕の表情。

「な、何？　僕なんか今変な事言った？」
翔輝は予想外な反応をした大和に不安げに問う。すると、そんな彼を見詰め、大和はおろおろとし始める。
「え、で、でも・・・私・・・胸ないです」
「いや、そんな事別に気にしないけど。っていうか関係ないし」
「・・・少尉」
いつの間にか、大和の瞳から流れる涙は違う涙になっていた。
ぽろぽろと流れるその煌く雫は、きっと悲しみのものではなく、嬉しさからくるものだ。
大和は心が温かくなるのを感じた。
考えてみれば、彼は外見で人を判断するような人じゃないのだ。
彼の優しさに、大和は嬉しくなり、自然と笑みが浮かぶ。
「やっぱり、少尉は優しいです」
「へ？　な、何が？」
「何でもないです♪」
翔輝の何気ない言葉に、大和はすっかり復活した。それどころか嬉しそうに笑顔が絶えない。そんな大和に翔輝は不思議そうに首を傾げる。
「どうしたんだろ？　急に」
「まったく、お前は乙女心ってのが全くわかってないんだな」
「え？　何言って――って、お前ッ！　いつの間に復活してたんだ!?」
驚く翔輝の横には、いつの間にか復活していた滝川が意味ありげな笑みを浮かべていた。
「胸が小さくても、女の子なんだな」
「意味不明だし、つーかお前、一一〇万ボルト喰らってもすぐ復活するんだな・・・お前、本当に人間か？」
呆れる翔輝に対し、滝川は自慢げに胸を逸らす。
「俺はお前と違って幾多の修羅場を潜り抜けてきたんだ。これくらい余裕さ」

「それって、ほとんど女関係だろ？」
「当たり前だろ？　何をバカな事を」
「一応友人として忠告しておくけど、全然威張れる事じゃないからな」
呆れ切った翔輝のため息混じりの言葉にも、滝川は気にした様子もなく愉快そうに笑う。本当にマイペースな奴だ。
「少尉！　私、もっともっとがんばるですッ！」
大和は大和で何かをがんばるらしい。とりあえず翔輝は笑みを送る。
「ま、まあ、何だかよくわからないけど、がんばって」
「はいッ！」
大和は嬉しそうに元気良く返事した。
「ま、《貧乳はステータスだ。希少価値だ》っていう名言もあるし、がんばれよ」
滝川の言葉に、大和は「は、はいです・・・」と少し声が小さいながらも返事した。やっぱりまださっきの事を怒っているのか警戒心全開である。
翔輝はこの先の事を考えて大きくため息した。
そんな翔輝の気苦労など知らず、滝川はふと大和を見る。
「そういえばさっきは答えてもらえなかったけど、この嬢ちゃん誰だ？」
「今さらそれ？」
翔輝はもう呆れすぎてツッコミを入れる気力も残っていなかった。だが、残った力を絞って笑顔をつくると、翔輝は大和を呼び、横に添えた。
「こいつの名は大和。この戦艦『大和』の艦魂だ」
翔輝の紹介に滝川は「ふーん」と見定めるように大和を上から下まで見詰める。その視線にどこかいやらしいものを感じたのか、大和は「み、見ないでください」と言って胸を両腕で隠した。
「ほぉ、こいつが世界最強戦艦の艦魂か。思ってたより強そうじゃ

ないな」
「私は弱くなんかありません」
大和は不機嫌そうに滝川を睨む。そんな全然怖くない大和の視線に、滝川は愉快そうに笑う。
「おぉ、悪い悪い。つい口から本音が」
「・・・少尉。ちょっと二、三発ぶん殴っていいですか？」
「やめなさい。女の子でしょうが」
「何だ。ずいぶん仲良さそうだな？　お前のこれか？」
笑いながら滝川は拳から小指を立たせた。それを見た翔輝は再びため息する。
「そんなんじゃないよ」
「え？　何ですか？」
一人困惑する大和。そんな大和の反応に驚いたように滝川は大和を見詰める。
「お嬢ちゃん。これ知らねぇのか？」
そう言って小指を立たす。それを見詰め、大和は小さく首を横に振った。
「これはな、恋人って意味だ」
「恋人ですか。じゃあさっきのは――即答否定したんですか！？」
大和はようやく理解するとキッと翔輝を睨みつけ、彼の腹に強烈な一撃を決めた。
「いてッ！　このヤロッ！」
攻撃を受けた翔輝は大和を捕まえようと手を伸ばすが、大和はその手を簡単に回避した。相変わらずすばしっこい奴だ。
「ははは、仲がいいな」
そんな二人を見て、滝川は再び大笑いした。こっちも相変わらず根っから明るい奴だ。
滝川は笑いながらいまだ睨み合う二人の肩を掴んだ。
「ところで、ここは旗艦だろ？　前に艦魂の女の子から聞いたんだけど、ここじゃ艦魂の会議なんかも行われてんだろ？」

「え、えぇまあ。今日も深夜に行われる予定ですが」
大和の返事に滝川は嬉しそうに笑顔を浮かべた。
「ならさ、そこに俺を連れてってくれないか？」
「え？　別にいいですが・・・」
「本当か！？　ありがとう！」
嬉しそうに笑う滝川に、翔輝は不思議そうに首を傾げる。
「滝川。誰か会いたい艦魂がいるのか？」
翔輝の質問に滝川は心の底から嬉しそうな顔をしていた。
「あぁ、俺の最高の相棒さ」

第八章　第二節　翔輝の古き悪友（後書き）

今回からようやく滝川の登場です。
前回よりもより変態さに磨きをかけて登場。これから彼がまたどんな変態さを炸裂させるのか、作者である僕もわからず、楽しみです。

第八章　第三節　金滝の協奏曲（前書き）

《滝川健太（たきかわ けんた）》

帝国海軍軍人・軍楽隊トランペット奏者

出身　神奈川県横浜市

身長　１８２ｃｍ

年齢（１９４２年１２月現在）２３歳

誕生日　５月２７日

好きなもの　アニメ・二次元・かわいい女の子・メガネっ子・常識破りのコスプレ

嫌いなもの　アニメの価値がわからない奴・コンタクトレンズ・常識に囚われた価値観・メイド喫茶

家族構成　父（病死）　母（離婚して行方不明）（姉や妹がいたら大変だ）

艦魂年代史シリーズ最強の変態キャラ。アニメ好きで女性のコスプレが大好き。その趣味はかなりの域に達しており、スクール水着なら旧スク限定などのこだわりを持っている。そして何よりメガネっ子が大好き。メガネっ子が世界を救うを信じて疑わない。金剛とは戦前からの付き合いで、あの日本海軍最凶と恐れられる金剛と正面からぶつかる事のできる数少ないキャラ。オリジナルでは一等兵曹だったが、改定版からは中尉にランクアップした。権力と変態力、さらには何度叩き潰されても蘇る非常識な回復力を持つある意味最強のキャラの一人。金剛との名コンビ（迷コンビ？）は艦魂年代史シリーズでも伝説となっている。

第八章　第三節　金滝の協奏曲

深夜の『大和』第三会議室、数多くの艦魂達が今後の戦局を話し合う為に集まるこの部屋に、いつもより人間が一人多く来た。
すでに幹部要員はほとんどそろっており、後は最高幹部と呼ばれる者達――連合艦隊旗艦である大和などが来るのを待つばかりであった。
そして、開始時間五分前に部屋がノックされ――勢い良く開いた。
「うっす！　帝国海軍滝川健太軍楽中尉だ！　みんなよろしく！」
そう大声で言いながら入って来たのは滝川。いつものようにお気楽そうな笑みを浮かべている。が、そんな彼を出迎えたのは、
『・・・』
とてつもなく、耳が痛くなりそうなほどの沈黙だった。その予想外の反応に、滝川は困惑する。
「あれ？　何だこの微妙な空気は」
「当たり前だろ？　いくらなんでもいきなり過ぎるよ」
そう呆れた声を上げたのは彼の後ろでため息する翔輝。その横には大和もいる。
「そうか？」
「・・・そうだって」
呆れる翔輝の横で滝川はどうしたもんかと苦笑いする。その時、
「も、もしかして滝川少尉ですか？」
その声に振り向くと、そこにはセミショートの髪をした水兵の女の子がいた。その顔には小さな笑みが輝いていた。
そんな少女を見て、滝川は二ッと歯を見せて笑う。
「よぉ秋雲。久しぶり」
滝川は少女――秋雲に懐かしそうに声を掛けた。その声に、秋雲は満面の笑みを浮かべる。
「やっぱり滝川少尉ですね！　お久しぶりです！」

秋雲は嬉しそう滝川を見詰める。どうやら二人は面識があるらしい。

「滝川少尉！」

「うおッ！」

秋雲は勢い良く滝川の胸に飛び込んだ。その勢いに一瞬滝川の身体を崩れそうになったが、すぐに足に力を入れて事なきを得る。

「お久しぶりです！　半年ぶりですね！」

「おう。もうそんなに経つのか」

秋雲の言葉に、滝川は笑顔を浮かべる。それは先程までの軽い笑顔ではなく、心の底からの優しげな笑顔だった。

しばらくぶりの再会に二人は仲良さそうに話す。さらに、

「あ！　滝川少尉！」

「滝川！　久しぶり！」

「軍楽隊の坊主じゃねえか！」

「滝くーん！」

色々な呼び方をしながら次々に多くの艦魂達が滝川に駆け寄って来た。そんな彼女達を見詰め、滝川は驚く。

「響（ひびき）！　若葉（わかば）！　妙高（みょうこう）！　那珂（なか）！　久しぶり！」

あっという間に滝川は多くの艦魂達の中心になってしまった。その数約二十数名。

「あの方、あんなに艦魂と仲がいいなんて・・・」

「あぁ、僕も意外だったよ・・・」

翔輝と大和は多くの艦魂達に囲まれて楽しそうに会話する滝川に呆気を取られていた。

「長谷川少尉。あの方は誰なんですか？」

その声に振り返ると、陸奥と伊勢が滝川を不思議そうに見詰めていた。

「えっと、僕の友人」

「長谷川はんのご友人どすか、なかなか楽しそうな方どすな」

伊勢もどこか楽しげにわいわいと騒ぐ滝川を笑顔で見詰める。

「そうね。とても愉快な人みたい」
「ほんまに」
「いや、愉快っていうか・・・ウザイ？」
「え？　何どすか？」
「ううん。何でもない」
首を傾げる伊勢に、翔輝は小さく微笑むと、久しぶりの再会を楽しむ滝川をそっと見詰める。
滝川は嬉しそうに集まってきた艦魂達と会話している。だが、時折キョロキョロとまわりを見回す――まるで誰かを探しているかのように。
一通り艦魂達との会話を楽しんだ滝川は、一度艦魂達から離れて翔輝達の方に歩み寄って来た。
「なぁ長谷川。あいつはいねぇのか？」
滝川は少し残念そうに部屋を見回しながら翔輝に問う。
「あいつ？」
そう言われても、誰だかわからない翔輝は首を傾げるしかない。
そんな翔輝に、滝川はどこか嬉しそうに微笑む。
「あぁ、あいつだよあいつ。もうやったらめったらに竹刀振り回す恐怖の鬼暴君」
その時だった。定例会議の遅刻組数人が部屋の中に入って来た。意外にもその中にはいつもなら一番最初に来て皆を待っている側の人物がいた。
黒髪黒眼の日本海軍艦魂社会の中で、唯一敵性国のみ持つ金色の長髪を風に流し、海や空のように澄み切った蒼の瞳をした、日本海軍最強の艦魂――金剛だ。
「すまん遅れた。山本長官達の作戦会議を傍聴するのに夢中になってな。ついつい会議を忘れてしまっていた。この通りだ」
金剛は礼儀正しく頭を下げる。いうもは指導する側にいても、自分が何か失態をすると潔く頭を下げる。こんな真剣な彼女だからこそ、皆は彼女に従っているのだろう。

金剛の謝罪に、連合艦隊旗艦である大和は大慌て。
「いいんですよ金剛さん！　頭を上げてください！　まだ何も始まっていないような状況ですし！」
「本当に何も始まってねぇな、こりゃ」
そう言って部屋を見回し苦笑いする榛名。その粗暴な言動にはもう比叡や霧島を失った悲しみは含まれていない。わずかな時間の中で、彼女は日本海軍艦魂の古参としてそういった悲しみを必死に乗り越えたのだろう。
彼女も、これまで日本海軍を支えてきた大切な古参の一人なのだ。
「榛名。いつもお疲れ」
翔輝はそんな榛名に笑顔で声を掛ける。すると、榛名は不機嫌そうにそっぽを向く。
「何でテメェがいるんだよ。ここは艦魂達の場所だぞ」
「え？　あ、うん。ごめん・・・迷惑だった？」
「べ、別にんな事はねぇけどよ・・・」
そう言う榛名の頬は少し赤みがかっていた。
「榛名？　頬が赤いけど、熱でもあるの？」
「う、うるせぇ！　テメェには関係ねぇだろ！」
榛名はそう怒鳴ると、ますます不機嫌そうに翔輝に背を向ける。そんな榛名に、翔輝は不思議そうに首を傾げる。その時、
「よう！　久しぶりじゃねえか」
満面の笑顔で滝川が、無謀にも日本海軍最凶の人物に気安く声を掛けた。
部屋は一瞬にして沈黙した。
金色の髪を揺らしながら金剛は不機嫌そうにその方向を向く。と、一瞬にして表情が変わった。その表情は驚愕の色一色に染まった。
「き、貴様・・・ッ！　なぜここにいるのだ・・・ッ！」
驚きのあまり声を震わせながら叫ぶ金剛。彼女らしからぬ慌てぶりだ。
「おうおう。相変わらず無粋な性格してるじゃねえか金髪ヤロー」

滝川は他の者では恐ろしくて口が裂けても絶対に言えないような失礼極まりない言葉を放つ。
「何だテメェ。気安く姉貴に声掛けやがって」
姉に対して失礼極まりない言動を発する滝川に榛名が不機嫌そうに睨み付ける。その百獣の王も逃げ出すような鋭い眼光にも、滝川はビクともしない。
「ほぉ、お前が榛名か。噂通り色気が皆無だなおい」
「なッ！　テメェッ！」
榛名が顔を真っ赤にして激昂する。ムカつく笑みを浮かべる滝川を一発殴り飛ばそうと前に出たが、それは金剛の手で止められた。
驚く榛名をよそに、金剛は不機嫌そうに滝川を睨み付ける。
「貴様。今度は『大和』に来たのか。相変わらず自由人だな」
「それ罵ってるみたいだけど、俺達軍楽隊は派遣部隊だからね。自由なのは当たり前さ。お前も相変わらず無粋な顔をしてくれてさ。もっと愛想良くしたらどうなんだ。えぇ？　金髪ヤロー」
滝川の挑発するような言動にも、浮かべる城の金剛は微動だもせずいつものように鼻を鳴らす。
「ふん。愛想などしてたまるか。私は日本海軍最古参の戦艦だ。それがどうして愛想などというものが必要になるか」
「おうおう。つまりはもうお婆ちゃんって事か？」
滝川のからかうような言葉に、金剛は余裕の表情を崩した。
「ち、違う！　私はまだ婆さんでは・・・ッ！」
「うるせーよ！　俺より年食ってる軍艦のくせにお婆ちゃんじゃないだぁ？　ふざけるな！　メガネしろメガネ！　メガネをすればお前もお婆ちゃんという不名誉な称号を破棄できるぞ？」
滝川の意味不明発言に、金剛は拳をギュッと握る。
「貴様・・・ッ！　相変わらずメガネにしか興味ないのかッ！」
「はっはっは！　何をバカな事を。メガネは正義だ！　メガネこそ人類が生み出した輝かしい文明の形！　メガネを付けない者みんな愚か者だ！」

「貴様はメガネをしてないだろうが！」
「バカな事をぬかすな！　俺は心のメガネをかけてるんだ！　今の俺には世界の全てが清らかな一輪の花のように輝いて見えるぞ」
「バカにつける薬はないのか・・・」
あまりのアホさに金剛は額に手を当ててため息する。だが、そんな彼女の仕草にも眼もくれず、滝川は続ける。
「前にも言っただろ？　この世の女は全てメガネをかけるんだ！　メガネっ子世界を救う！　それなのにお前はそれを愚弄しおって！」
「やかましい！　貴様の変態趣味に付き合ってなんかいられるか！」
「バカヤローッ！《金髪碧眼》《クーデレ》。そしてここに《メガネ》が加われば萌え三種の神器がそろうだろうが！　お前は自らその輝きを泥に沈める気か！？」
「知るか！　しかも私がいつ！　どこで！　デレたッ！？」
「アニメにはこういうジャンルが必要なんだよ！　勉強しとけバカッ！」
「やかましいッ！　秋葉原行け！　秋葉原ッ！」
「うるせぇッ！　俺は二次元にしか興味ねぇんだ！　何がメイドカフェだ！　あんな物の何がいいんだ！　アニメキャラの方が萌えるだろうが！」
「なおさら秋葉原に行け！　あそこは二次元に最も近い場所だろうが！」
ギャーギャーもめる異色の二人を、他の者はただ呆然と見ているしかできなかった。
最凶と言われる金剛にあれほど罵詈雑言できる滝川。
完全に《金剛》というキャラを捨てながら髪を振り乱して反撃する金剛。
翔輝達はそのあまりにも非常識な光景を呆然と見詰める事しかできなかった。
一体あの二人はどのような関係なのか、それを教えられたのは二人の暴言の吐き合いがひと段落した、一時間後の事だった。

「何？　俺とこの金髪の関係？」
「うん」
ようやく騒乱も終わった所で、翔輝は皆の疑問を代表して滝川に質問した。
滝川は腕を組んで真剣な顔で考える。
「そうだな、強いて言えば人生の相棒？」
「勝手に何言ってんだ。このド変態」
「うるっせーよ！　ドS！」
「誰がドSだ！」
「お前だよ竹刀フェチ！」
「き、貴様ッ！」
取っ組み合いの大ゲンカになりそうな二人を慌てて止めて、翔輝は先に進める。
「二人はどうやって出会ったの？」
翔輝の邪心のない清らかな質問に、滝川はわざとらしく大きなため息を吐く。ちょっぴりイラっときた。
「あのな長谷川。俺とこいつの出会いはな」
「うん」
「布団の中だ！」
「そんな訳あるかッ！　大概にしないと虐殺するぞッ！」
竹刀を振り回しながら襲い掛かる理性のたがが外れかけている鬼神金剛に怯える事なく滝川は平然と反撃する。
「うるせぇッ！　抱いてもらったくせに生意気言うな！　この前はあんなにかわいい声を出してたのに・・・あぁ、やっぱり布団の中じゃねえと素直になんねぇのか？」
滝川のすさまじい爆弾発言に皆に戦慄が走った。中には何を想像したのか鼻血を大噴出させて気絶した艦魂が数名。
金剛は顔を限界まで真っ赤に染めると、竹刀を振り回して激昂する。

「何勝手に私で妄想プレイしてるんだ！　この妄想変態が！」
「うるせぇッ！　竹刀を振り回すな竹刀を！」
暴れる二人を艦魂十数人でようやく黙らせるが、この二人、すさまじく仲が悪い・・・のか？
「なぁ滝川。お前、今の話は」
翔輝が不思議そうに問うと、滝川は呆れる。
「あん？　ウソに決まってんだろ？　俺とあいつの出会いは一昨年の夏に『金剛』に派遣された時に出会ったんだ。それからもちょくちょく派遣されてたしな」
「へぇ。で、いきなりちょっかい出したのか？」
「ま、確かにあいつは美人だけどよ。いくら俺でもあんな乱暴者は相手にできねぇよ。お前じゃあるまいし」
「え？　今のはどういう・・・」
滝川の言葉に大和は困惑する。そんな純粋無垢な大和に、滝川は大人の悪い事を堂々と吹き込む。
「あれ？　知らねぇのか？　こいつ横須賀にいた時三日間で五人の女と夜を共にしたんだぜ？」
「はあッ！？　滝川何言って――」
「え？　夜を共にって」
「わかんねぇか？　男と女が布団の中でする事だよ」
沈黙が降りた。
ここに至って初めて、大和の瞳に理解の色が浮かんだ。みるみるうちに顔を色が真っ赤に染まってゆく。明るい照明の下でははっきり見える。
「少尉・・・ッ！」
殺気を感じ、翔輝は本能的に身構える。
そこには野獣がいた。牙をギラギラとギラつかせながら、鼻息は荒く、今にも飛び掛って来そうな超非常警戒態勢の必要がある猛獣だった。
「ち、違うッ！　誤解だよ！」

「今の話のどこをどう聞いたら誤解になるんですか！」
「その話自体が真っ赤なうそなんだよ！」
「見苦しいですよ！」
「本当なんだよ！」
「問答無用です！」
今にも飛び掛りそうな大和を慌てて押さえる翔輝。大和は押さえる翔輝の腕の中でジタバタと大暴れする。そんな二人を見て大笑いする滝川。
「悪い悪い！　冗談だ冗談。いやー、まさかこうもあっさり信じるなんてさ。あはは――」
「死ぬです！」
大和の身体全体を全力回転させた渾身の回し蹴りを食らい、滝川は轟沈した。
赤い頬に肩を激しく上下させて荒い息をする大和。しかし、すぐにどこか寂しげな背中を自分に向けている翔輝の方を向き、申し訳なさそうに頭を下げる。
「ご、ごめんなさい！　罵詈雑言を言ってしまって」
「大和。今僕は海よりも深く落ち込んでる」
そう言う翔輝はいつになく肩が下がっている。
「うっ、ご、ごめんなさい・・・」
「いや、いいんだよ。どうせ僕は君に信用されてないんだから」
「ううっ・・・」
完全に落ち込んでいる翔輝を何とか励まそうとする大和。しかし、一度撃沈した翔輝はもはや浮上不能だった。が、
「・・・翔輝」
「武蔵？」
突如現れた武蔵は口元に小さな笑みを浮かべ、優しい瞳を向け、今の翔輝にとって最も嬉しい言葉を言った。
「・・・大丈夫。私は、翔輝の事を信じてるから」
「武蔵・・・ッ！」

「ち、ちょっと！　何でそこで抱き合うんですか！？」
翔輝を心を支え、見事彼との抱擁を成功させた武蔵はそっと姉を見詰め、小さく勝ち誇った笑みを浮かべた。その笑顔に慌てて大和は二人を離そうとする。そんな三人の横で、不死身の男は再び立ち上がった。
「いってぇ。見た目に反してかなり過激だな・・・あん？　そこのお嬢ちゃんよりもさらにチビのガキは誰だ？」
大和に無理やり翔輝から引き離されて、欲求不満全開の武蔵を見て滝川は首を傾げる。
「あの子は連合艦隊艦魂司令部次席指揮官兼参謀長を務める戦艦『武蔵』の艦魂です」
秋雲の説明に「あいつがねぇ・・・」と頭を掻く滝川。
「おいそこのチビ」
滝川は武蔵に声を掛けた。すると、武蔵は心底嫌そうな顔で滝川を睨む。
「おいおい、そんな嫌そうな顔すんなよ」
「・・・誰？」
一同見事にズッコケた。あれだけ過激な登場して来たのに、名前はともかくその存在すら眼中にないとは、恐るべし翔輝以外の男子興味なし主義。
「・・・誰だか知らないけど、私に声掛けていい男は翔輝だけ。それ以外の外道男は声掛けないで。むしろ、近づかないで」
「これはまた手厳しいな」
「・・・あと、そのウザイ声を二度と出さないで」
武蔵は滝川を道端の生ごみを見ているかのような目で睨み付けている。正直、翔輝はここまで武蔵が過激な反撃をするとは思っていなかった。自分に対する時とは大違い。裏表全開である。
だが、さすがは百戦錬磨（女関係専門）の滝川。武蔵の猛攻撃を受けても苦笑いだけだ。
「まぁまぁ、そう攻撃的にならない。かわいい顔が台無しだよ？」

「・・・別に貴様に何を言われても痛くない。それに、私は十分かわいいから問題ない」
「それは自信過剰というんじゃねぇか？」
「・・・事実を言っただけ。統計学的に見ても私は世間一般の女子よりは顔立ちは断然いい。つまり、私は十分かわいいの。喜怒哀楽が少なくても、元がかわいいからそれで十分」
「へっ、ものは言いようだな」
わざとらしく言う滝川を睨みつけ、武蔵は彼を鎧袖一触（がいしゅういっしょく）で吹き飛ばす。
「・・・貴様みたいな奴に言われたくない。地味男（じみお）がでしゃばらないで」
「地味男・・・ッ！？」
ここに来て今までそれなりに余裕の態度を取っていた滝川の表情に変化が起きた。情けない顔で呆然としている。まるで心の底から衝撃を受けているような表情だった。
「じ、地味男はないだろ！？　そりゃいくら何でもひど過ぎる！」
「・・・うるさい。《バカ》《ウザイ》《地味》。地味男三種の神器がそろっている貴様は、究極の地味男だ」
「そんな三種の神器はいらん！　それにさっきから貴様貴様って、俺の方が断然年上なんだぞ！」
「・・・貴様だって私をチビなんてふざけた呼び方をしていたでしょ？　自分の事を棚に上げるのは、大人としてどうかと思うけど？」
「ほんっとにムカつく奴だな、このチビッ！　名乗ればいいんだろ！？　俺は海軍軍楽科滝川健太軍楽中尉だ！　覚えとけ！」
「・・・あ、そう。尉官の分際で将官クラスの私に声を掛けるなんて命知らず。むしろバカ。軍楽兵のくせに生意気言わないで。音楽しか能のないくせに」
「うるせぇ！　軍楽隊も立派な軍人だ！　バカにするな！」
「・・・」
「無視すんじゃねぇッ！　そもそも長谷川は俺より階級は下だろう

がッ！」
「・・・貴様は本当にバカだな。貴様みたいな生きていても何の価値もない――いや、存在自体が害である貴様と何事にも一生懸命で、皆に信頼され、誰にも優しい、最高の人材である翔輝とを比べるなんて滑稽だと思わない？」
「このクソガキッ！」
「まぁまぁ！　二人とも落ち着いて、ね？」
今にも殴り合い（滝川が一方的）になりそうな二人に慌てて翔輝は仲裁に入った。そのおかげで「まぁ、仕方ねぇ」「・・・翔輝が言うなら」と二人は一応休戦条約を結んだ。
いつもと同じ無表情をする武蔵を見詰め、翔輝はため息する。
「まったく、お前は、少しは友好的な雰囲気になれないのか？」
「・・・翔輝以外の事は、どうでもいい」
「おいおい」
呆れる翔輝の腕にそっと抱き付く武蔵。翔輝はため息をしながらも苦笑いした。そんな微妙に春の甘い匂いを感じさせる二人にふつふつと怒りを感じている大和だった。
「どうでもいいけどよ。お前って奴は、お嬢ちゃんを忘れてチビを相手にしなくてもよ」
「・・・チビ言うな」
「チビはチビだろ？　お前、そんなにかわいげがないと長谷川に嫌われるぞ？」
「・・・え？」
ここに来て余裕たっぷりであった武蔵の顔は凍りついた。それを見て、滝川はニヤリと勝ち誇った笑顔を浮かべる。
「おや？　お前、長谷川の好きな女の子のタイプの三種の神器を知らないのいか？」
『好きな女の子・・・ッ！』
「ちょっと滝川――」
顔を真っ赤にして怒る翔輝を制し、大和、武蔵、陸奥、伊勢の瞳

が輝いた。他にも大勢の艦魂達が聞き耳を立てる。
「それって何なんですか!?」
「うん？　お嬢ちゃん。気になるのかい？」
「もちろんです！」
「大和！　何言って――」
滝川はニヤニヤと笑いながら四人を見回す。そして、静かな声で言った。
「長谷川はな、《年下》《天真爛漫》《貧乳》という妹系萌え三種の神器を持ってる女の子が好きなんだ。まぁ、ぶっちゃけロリコンって事だ」
『・・・』
沈黙する四人の横で、翔輝は滝川を《翔輝》というキャラを無視してバイオレンスな攻撃を開始していた。
一方、突如判明した翔輝の好きな女の子のタイプに皆は硬直していた。
「わ、私と伊勢は年上だから・・・」
「せやけど、ウチはともかく陸奥は見た目同い年くらいやから・・・ダメやね」
陸奥と伊勢は《年下》という第一条件でアウト。
「と、いう事は」
「お嬢ちゃんとそこのチビが一応ストライクゾーンに入る訳だ。まあ、チビの方は《天真爛漫》かは怪しいがな」
いつの間にか復活した滝川がニヤニヤしながら言う。
「・・・」
「うん？　どうしたんだ？」
「・・・翔輝の好きな女の子のタイプになれたのは嬉しいけど、女としては敗北」
「そ、そうよね・・・」
大和と武蔵は複雑な顔をして自分達の胸を見詰めた。悲しい事に足下はしっかりと見える。そんな二人を見て大笑いしている滝川に、

翔輝の渾身のバックドロップが決まったのは言うまでもない。

「貴様。いつまでこっちにいるのだ？」

会議が終わって解散した後、滝川は金剛に呼び止められてそう訊かれた。

「明日の夕方にはまた内地に戻るよ」

滝川は足を止め、金剛に小さく笑みを向ける。

「明日だと？　ずいぶん急な話だな」

「まぁ、軍楽隊もそれなりに忙しいんだ。少ない兵で各地に散っている艦隊に行かなきゃいけないんだからさ」

「そうか。なら明日の午前は空いてるのか？」

金剛の突然の問いに、滝川は不思議そうに首を傾げる。

「特に何もないけど、どうしてだ？」

すると、金剛は先程までのようなクールな一面が崩れた。頬は少し赤く、どこか不機嫌そうに滝川とは違う方向を見詰める。

「べ、別に深い意味はない。ただ、久しぶりの再会なんだ。ちょっとくらい茶でもと――」

「あぁ、デートのお誘いか？」

ゴンッ！

「いってえええぇぇぇッ！　だから竹刀を振り回すなと言うに！」

「やかましい！　せっかく人が茶に誘ってやろうと思ったのに！　いい加減貴様は下品な方向に考えるのをやめんか！　もういい！」

完全に怒って踵を返す金剛を慌てて滝川が止める。

「ごめんごめん！　冗談だよ。わかったからさ」

金剛の前で素直に頭を下げる滝川に、金剛は不機嫌そうに見詰める。

「・・・まぁ、いいだろう」

歩き出した金剛の横に滝川もついて歩く。しばし歩いた時、ふと何かに気づいた。

「でもさ、茶を淹れてた比叡はもういないんだろ？　誰が茶を淹れ

るんだ」
「・・・」
沈黙する金剛を見て、滝川は慌てて話題を変えようとする。
「あ、あのさ！　どう見ても榛名は無理だろ！？　だったら長谷川にでも任せたらどうだ！？」
「あの航海士に？」
怪訝な顔をする金剛に、滝川は何度もうなずく。
「あぁ、あいつなぜかお茶の淹れ方がうまいんだ」
「そうなのか？」
「あぁ、あれはプロ級だぞ」
「ふむ。なら貴様から頼んでおいてくれ」
「わかった」
こうして、勝手にお茶会の翔輝参加がなかば決まった（丸め込むのがうまい滝川と最凶の艦魂金剛の前では翔輝に勝ち目はないから）。
金剛と滝川は互いの顔を見合うと、小さく笑みを浮かべ、そっと二人して『大和』の甲板を歩いて行った。

第八章　第四節　夕日に照らされる優しき笑顔

翌日、嫌がる翔輝を拉致して無理やりお茶会に参加させた。
「なんで僕が・・・」
「いいだろ？　どうせ非番なんだからさ」
「それはそうだけど・・・」
「少尉。もう諦めるしかないですよ」
「・・・観念の要在りと認む」
「ま、諦めろって」
「ううっ」
無理やり連れて来られた翔輝。金剛の参謀である榛名。自艦で行われているので一応見張りみたいな感じでいる大和。翔輝がいるからという理由でいる武蔵の計六人は静かに会議室でお茶会を開いていた。
せっかくの非番だったのに強制参加させられて肩を落とす翔輝に、金剛が申し訳なさそうに頭を下げた。
「悪いな。比叡が死んで以来紅茶を淹れてくれる奴がいなくてな。それ以来紅茶を飲んでいないのだ」
珍しく自分に向かって頭を下げるという驚異的行為をした金剛に、翔輝もこれ以上何かを言う気にはなれなかった。
「まぁ、別にいいですけどね」
比叡の事を思い出しながら辛そうに言う金剛を見ていると、断れる訳がない。なんやかんやいっても翔輝は底抜けて優しいのだ。
翔輝は笑いながら紅茶を淹れた。
金剛は湯気の立つティーカップを手に取った。キレイな琥珀色をした紅茶を見て、金剛は硬直する。
「この色、この香り、比叡のとそっくりだ・・・」
その言葉に、翔輝は驚く。
「え？　そうなんですか？　比叡さんってお茶淹れるプロなんです

ね。この淹れ方はプロの正式な淹れ方なんですよ？」
「なぜ貴様がそれを・・・？」
金剛の当然とも言える質問に、翔輝は苦笑いする。
「いやー、僕の親族といか、幼なじみというか。そいつが「お茶の淹れ方で人間の価値観が決まるのですわ。だから、翔輝様もお茶の淹れ方をマスターしていただかないと困りますわ。いつか私がそのお茶を独占でき為にも」って、最後の方はよくわかんないけど、そう言って練習させられたからです」
あははと笑う翔輝の横で、約二名がその幼なじみの最後のセリフに殺意を抱いているのには誰も気づかない。
「うん。さすが長谷川。相変わらずうまいな」
ゴンッ！
「いってぇッ！　何すんだよ金髪！」
「貴様！　何一人勝手に飲んでるんだ！」
「いいだろ別に」
「マナーというのを前にも教えただろうが！」
「マナーを守ってたらできる事ができなくなるだろうが！」
「マナーとルールは必ず守れ！」
「バカヤローッ！　ルールは破る為にあるんだろうが！」
「威張るなボケッ！」
金剛と滝川が殴る蹴るのケンカになり掛けていた所をなんとか止め、お茶会を再会する。
紅茶を優雅に飲む金剛に榛名（意外だが、長い間金剛の隣にいたのは伊達じゃなかったらしい）。そしてなぜか武蔵（本人曰く。一般常識だそうだ）。金剛に飲み方を教えられてぎこちない手つきで紅茶を飲む大和。マナーもへったくれもなくガブガブ浴びるように飲む滝川。そして、ただひたすらに紅茶を淹れ続ける翔輝。珍しい組み合わせだ。
「うん。うまいじゃん！　比叡姉さんそっくりだぜ！」
「そう。それは良かった」

「うむ。何か懐かしいな・・・二人が死んで、まだ一ヶ月しか経っていないというのにな・・・」
おいしそうに、そして懐かしそうに紅茶を飲む金剛と榛名。今は亡き比叡の優しい味が、二人にはとても嬉しかった。
そんな二人の横で滝川は本日十五杯目の紅茶を飲み干した。
「それにしてもさ、長谷川って本当に何でもできるよな」
突然話題を振られた翔輝は驚くが、すぐにそんな滝川のセリフを否定する。
「そんな事ないよ」
「いやいや、お前は絶対終戦後軍艦から降りても生きていけるよ」
何気なく言った滝川の言葉に、大和はむっとする。
「少尉は戦争が終わっても私から降りたりなんかしません」
不機嫌そうに言う大和に、滝川はため息する。
「無理無理。日本はアメリカに負けて軍を解体される。そうすれば軍艦はおさらばだ。ま、その時までこの『大和』が残ってればの話だけど」
「滝川。日本は負けん。兵達を活気付ける軍楽兵が諦めていたら前線で戦っている兵達に申し訳がたたんだろ」
金剛が睨み付けながら言う。そのひとつひとつには力強い想いが込められている。だが、そんな彼女の言葉にも、滝川は首を振る。
「だってよ。機動部隊は壊滅して、山本長官の『短期決戦、早期和平』というこの戦争の絶対必要事項を失ってしまってんだ。もう日本みたいな小さな島国があんなバカでかい世界最強軍事経済大国に勝てる訳がねえだろ」
それは対英米戦反対派の主張であり、山本長官がこの戦争を始めるならこの条件を呑まないと戦わないとまで言わせた絶対条件だった。
金剛は何度も聞いてきたその腰抜け主義に呆れる。
「またその話か。安心しろ。初期段階に機動部隊が南方地帯を攻略してくれたおかげで石油も確保してある。長期戦の構えはできてい

るのだぞ？」
「いくら石油を確保しても、それで動かす軍艦がなけりゃ意味がないだろ？」
滝川の言葉に、金剛はギロリと睨みつける。
「どういう意味だ？」
金剛の鋭い視線にも滝川は動じずに続ける。
「敵さんは軍艦が殺られてもその数倍の数を造るけど、こっちは殺られてら最後、その半分の数すら造れない。このまま正攻法で戦争を続けていれば、工業力で圧倒的に負けている日本は確実に滅ぶ」
「まぁ、そうだが・・・」
それは否定できない事だ。どう足掻こうと、日米には雲泥の差ともいえる工業力の差があり、それは絶対に覆る事のない事実だ。
「実際、もう空母は小型大型合わせて六隻失ってるし、戦艦だって――」
そこで滝川の口が止まった。金剛と榛名の表情が変化したからだ。
金剛と榛名はお互いに沈黙していた。ただ、一瞬だけ、辛そうに唇を噛んで・・・
「あ、その・・・」
「気にするな。一ヶ月以上も経っている。もうケジメはついてる」
金剛は不機嫌そうに言う。その言葉に榛名も苦笑いする。そんな二人を見て、滝川は申し訳なさそうに頭を下げる。
「悪い。嫌な事を思い出させちまって」
「嫌じゃねぇよ」
榛名の言葉に、全員の視線が集まる。
「確かに、比叡姉さんや霧島の死を思い出すのは辛い。でもよ。それ以上に楽しい思い出があるんだぜ？　プラスマイナス楽しい思い出の勝ち。だから、辛くねぇよ」
「榛名・・・」
「へっ、まぁ、姉貴と俺がいれば帝国海軍もまだ安泰（あんたい）だ。大船に乗ったつもりでいろ」

ドンと胸を叩いて自信満々に言う榛名に、翔輝はそっと微笑んだ。
が、
「・・・大船って、汽船？　危なすぎる。私の方が安全。不沈艦だから」
そんな榛名の気分を害す空気を読まない武蔵の言葉に、榛名のこめかみで何かが断裂した。
「例えだよ！　本気でんな骨董品に乗るか！」
「・・・うるさい。耳元で大声出さないで」
「んだとゴラッ！　俺の方が断然年上だぞ！」
「・・・精神年齢の問題」
「せいしんねんれい？」
「・・・ガキっぽいって事」
「このクソチビ！　さっきから黙ってればいけしゃあしゃあと！」
「・・・十分うるさい。静かにしてよ。おばさん」
「お、おばさんだと・・・ッ！」
戦艦『榛名』の艦齢は二七歳。艦魂の見た目は十代後半ぐらいだ。年齢的にも外見的にもおばさんにはまだ早い。
「このヤローッ！　俺はまだおばはんじゃねぇッ！」
「そうだよ武蔵！　榛名はどう見たって僕より少し年上にしか見えないだろ？　艦齢だってまだ二〇代だし。それに、連合艦隊最古参の戦艦の艦魂がこんなに若々しいんだぞ！　榛名をおばさんにしたら金剛さんはミイラだよミイラ！」
「貴様。ほめるかけなすか、どっちかにしろ」
「あ、いや、すみません」
謝る翔輝を無視して金剛は紅茶を優雅に飲む。それを見て、他の者も紅茶を飲み始めた。そんな時、再び唐突に滝川が口を開いた。
「そいえば長谷川って何ができるの？」
「な、何だよ唐突に」
「いやさ、お前っていろんな事ができるだろ？　一体何ができるんだと思ってさ」

「そんな急に言われても・・・」
「何でもいいからさ」
「うーん・・・」
翔輝は腕を組んで悩み始めた。
「そうだね・・・上流階級の作法とか？」
「何ですかそれ？」
「うん？　瑠璃がいつか一緒に外で食事する時に恥ずかしくないようにって、フォークを使う順番とかを無理やり教えられたんだ」
「また瑠璃さんですか・・・」
大和は絶対零度の視線を向けるが、翔輝は鈍感なので、まったく気づいていない。その時、
「・・・翔輝は絵も得意」
武蔵が紅茶を飲みながらそう小さく言った。
「そうなのか？」
滝川も初耳だったのか、興味ありげに問う。
「あ、いや、得意というかなんというか」
「・・・得意と判断する。あれほどの完成度なんだから」
「え？　武蔵は見た事があるの？」
「・・・って言うか、もらった」
「も、もらった・・・ッ！？」
大和は驚愕した。「そんな話聞いた事ないですよ？」という顔で翔輝を見詰める。微妙に睨んでいるが。
「あ、まぁ、武蔵がほしいって言うから」
「私にはくれないで、武蔵にだけってひどくないですか？」
「ごめん。別にあげられるような物じゃなかったから」
「・・・最低です」
「そ、そんな・・・」
大和の放つ絶対零度の視線にようやく気づき、苦笑いで取り繕うが、そんなのもはや無駄な抵抗だった。
「他には何ができるんだ？」

「うーんと、兵棋演習が得意かな」
「兵棋演習とは、海軍学校でやるエリート司令官候補生用の図上演習の事だろう？　それをなぜ航海士のお前ができるのだ？」
金剛が当然とも言える質問をすると、翔輝は小さく笑みを浮かべて頭を掻く。
「いやー、友達が司令官候補生でよく部屋でお遊びやってたから。そいつに教えてもらってたらいつの間にか勝ち進んで《不沈司令官》とっていう変なあだ名を付けられちゃったんです。上官も「お前、司令官候補生になったらどうだ？」って言われたんですけど、「僕はそんな大役できません。のんびり海を見詰めてられる航海士になりたいんです」と断りましたけど」
翔輝の言葉に、金剛は「ほう・・・」と少し興味がわいたような顔をした。
「なるほど、いつか手合わせしてみたいな」
「喜んで」
笑顔で了解する翔輝を、榛名がとてもかわいそうな生き物を見るような目で見た。
「まぁがんばれや。生きていればきっといい事があるからよ」
意味不明な言葉に頭に疑問符を浮かべていると、榛名がそっと肩を叩いた。
「姉貴は最強の図上演習プレイヤーだ。勝利の為なら何でもする。以前は敵軍港を壊滅させる為に駆逐艦五隻を湾口に自沈させて軍港の機能を破壊するという大胆な奇策をしたような人だ。その前は敵前一斉回頭というかなり無謀な事をしてT字戦法を無理やり完成させて艦体決戦を実行して敵艦隊を全滅させたような人だぜ。そのあまり博打ぶりながらも成功させる姉貴に、図上演習で勝ったものは一人もいないんだ」
榛名の説明に、翔輝は苦笑いする。
「その二つの戦い方って、確か日露戦争の時に実際に実行されたやり方だよね？　旅順港閉塞作戦に、日本海海戦の東郷ターンでしょ

？　あれから四〇年近く経ってるのに、やっぱり金剛さんは《あの時代》の艦魂なんですね」
「それは、ほめてんのか？」
「いや、ちょっと皮肉を」
「殺されるぞ？　以前長門が戦艦二、空母二、巡洋艦八、駆逐艦二五、潜水艦六の大艦隊で姉貴が防衛している軍港に攻め込んだけど、姉貴の攻撃に壊滅的被害を受けて、圧倒的有利だった長門艦隊を敗北させたんだから」
「いやいやいや、それはもはやすごいとかすごくないとかの問題じゃないでしょ？」
「軍港には一応少ないながらも基地航空隊があったけど、姉貴は「航空機など邪道な物は使いたくない。反吐が出る」って言って三度にわたる夜間攻撃で挺身水雷戦隊と挺身潜水戦隊を投入して逆転勝利したんだ。長門艦隊は四五隻のうち戦艦、空母、潜水艦全滅。巡洋艦四隻沈没、二隻大破、一隻中破。駆逐艦十二隻沈没、六隻大破、二隻中破、二隻小破という被害を受けて、姉貴が圧勝したんだぜ？」
「いやいやいや、無傷がたった四隻って何？　挺身？　捨て身の部隊で？」
「あぁ、ちなみに姉貴の被害は攻撃を行った軽巡洋艦五隻、駆逐艦三〇隻、潜水艦十二隻のうち軽巡一、駆逐艦八、潜水艦五隻沈没。他十六隻が損傷を受けただけだぜ？」
「被害少なっ！　敵が二六隻も沈没したのに、こっちはたった十四隻！？」
　驚く翔輝に、榛名は苦笑いする。
「姉貴は水上戦闘のプロだからな。水雷戦隊と潜水戦隊のすさまじい酸素魚雷による雷撃でほとんど沈めたんだ。ちなみに、その後長門は一週間姉貴の下僕になったけどな」
「・・・手合わせをやめていいですか？」
「ダメだ」
「こりゃ、長谷川は終わったな」

金剛に一刀両断で断られたのを見て、滝川はニヤニヤと笑っている。その笑みはいつもと同じ、訳のわからない事を考えている時の笑みだった。

「終わったなお前。きっとムチでしばかれたりロウソクを垂らされたり、さらには靴の裏を舐めさせられたりするぜ。（金剛）「どうだ!?　嬉しいか!?　嬉しいのか!?　犬のくせにご主人様の足で○○○を踏まれて気持ちいいのか!?」（翔輝）「はい！　嬉しいです！　もっと私めをいじめてください！　このだらしない犬めの○○○を踏み倒して下さい！」とか言ったりしてさ。あと縛って――中略（入力自粛）――とかあんじゃない？　良かったな長谷川。これはある意味おいしいぞ？」

「「死ねえええぇぇぇッ！」」

金剛の竹刀と翔輝の飛び蹴り炸裂したのは同時だった。滝川の顔面に翔輝の必殺ドロップキックが爆裂し、金剛の竹刀がその頭を砕く。滝川はその見事な連携攻撃に轟沈した。いくら無敵の生命力を持つ滝川でもさすがに再起不能の一撃だろう。

「貴様という奴は・・・ッ！」

「滝川・・・ッ！　お前なぁ・・・ッ！」

肩で息をする二人。その顔は真っ赤だ。ふと、二人はお互いを見合った。そして気恥ずかしいのかほぼ同時に反対方向を向いた。翔輝の視線はそこであるものに行き着いた。顔を真っ赤にさせて硬直している大和。同じく顔を真っ赤にさせて無表情の仮面が崩れ掛けて唇の端が引きつっている武蔵。一人テーブルの上で頭を抱えている榛名。特にヤバそうなのは、おそらく武蔵の方だ。大和はたぶん大丈夫（今までの経験上）だが、純粋無垢な武蔵はまずかった。ついに無表情の仮面が砕け、目をグルグル回して倒れてしまった。お子様にはまだ早すぎる世界だったのだ。

「武蔵！」

慌てて駆け寄ると、武蔵は真っ赤な顔をしていた。武蔵はいやいやというふうに顔を手で隠しながら首を横に振る。一瞬、翔輝の股

間を一瞥し、さらに過激に首を振る。こんなかわいい仕草をする武蔵をもう少し見ていたい翔輝だったが、このまま放置しておけば、確実に武蔵は再起不能になるだろう。

「おい、武蔵大丈夫か？」

「・・・人間は結局、己の欲望に操られた愚かな傀儡（くぐつ）・・・」

無表情の崩れた武蔵は、身体を小刻みに震わせてつぶやいた。

「・・・金がほしい、有名になりたい、偉くなりたい、そういう下劣極まりない願望は、全て欲望――いや、性欲から生まれる。戦争、犯罪、不景気。全ては性欲が人間を支配して歪ませた腐った世界の排泄物。それが、それさえなければ、人間はもっとすばらしい文明を築きあげられるのに・・・下劣極まりない欲望は清らかな思考を捻じ曲げ、汚し、腐らせ、腐敗させる。欲望なんて、欲望なんて・・・性欲なんて・・・ッ！　朽ち果てろおおおおおぉぉぉぉぉッ！」

武蔵が壊れたあああああぁぁぁぁぁッ！

「・・・そんなもの、葬ってくれる！　私の四六ｃｍ砲で粉々に粉砕してくれるッ！」

「武蔵落ち着け！　僕は君の意見に賛同する！　だが、ここで叫んでても仕方ない！　今は落ち着くんだ！」

「・・・翔輝！　決して、決してあなたはそんな下劣極まりないものに囚われてはダメ！」

武蔵は必死になって翔輝に訴える。その瞳は涙でいっぱい。きっと心の底からの願いなのだろう。

必死な武蔵の言葉に、翔輝は何度もうなずく。

「わかった！　わかったから元の静かな武蔵に戻って！」

「まぁ、男は狼だからな。本能の赴くまま生きるぜ？　きっとお前もいつか長谷川に食べられるぜ？」

国士無双並みの生命力を発揮していつの間にか復活した滝川がとどめを刺す。

「・・・そ、そんな事ない！　翔輝はそんな事しない！」

武蔵は必死になって反撃する。だが、滝川はそんな武蔵を鼻で笑

う。
「無理無理。男は女を目の前にすると己の主砲を射撃したいという衝動に駆られるんだ」
「・・・お前は性病朽ち果てろ！」
武蔵は体中から怒りのオーラを最大出力で全方位に放出している。その怒りは常日頃大和達などへ向けているものとは桁違いであった。
本気の本気で、武蔵は激怒していた。
このままでは大惨事は避けられないと判断した翔輝は慌てて事態の収拾をする。
「と、ともかく武蔵を僕の部屋に！　榛名！　大和を連れて来て！」
「お、おう・・・」
まだダメージの残っている榛名は、気力がないのか、いつもの大声ではなかった。榛名は硬直している大和を担いで翔輝の後に続く。
そんな翔輝達を見て滝川はさらに興奮する。
「おうおう長谷川！　いきなり４Ｐか！？　ひゃっほう！　男だね！　青春だね！　鬼畜だねぇッ！」
「・・・金剛さん。そこの下半身変態色魔をよろしくお願いします」
「言われるまでもない」
翔輝は金剛と見つめ合うと静かにうなずき、四人は部屋を後にした。
残されたのは金剛と滝川。
金剛は早速竹刀を構えると、鋭い眼光で滝川を睨む。その迫力に、さすがの滝川を身体を震わせる。
「え？　何？　金剛？　ちょっと目が怖い・・・」
「貴様とはじっくり話をせんとな」
金剛はしっかりと竹刀の矛先を滝川に向けたまま動かさない。そんな金剛に滝川は二ぐぁ来する。
「ご、ごめ～ん。今日の夕方には内地に帰るから、そろそろ準備が・・・」
「まだ八時だ。出発時刻の四時までまだ八時間もある。たっぷり懲

らしめてやるからな」
「申し訳ありませんが、私めはそのような趣味はありませんので」
「死ねえええええぇぇぇぇぇッ！」
刹那、男のすさまじい悲鳴とバイオレンスな打撃音と破壊音が南国の小島に木霊した。

夕方、キレイなオレンジ色に染まった空を翔輝達と滝川（頭には包帯が巻かれている）は左舷甲板で見ていた。軍楽隊員達が次々に荷物を輸送艦に輸送している。そんな彼らを一瞥し、ため息する滝川。
「死ぬかと思ったぜ。『金剛流三大七拷問術』は、マジで天国が見える」
「自業自得だよ。っていうか、《三大七》っていくつだよ」
「三×七＝二一だろ？　小学校低学年レベルの計算だぞ？」
「言い方がわかりづらいんだよ」
「文句ならあの金髪に言ってくれ」
滝川は疲れた顔で少し離れた所で仁王立ちしている金剛を見る。
金剛はこっちを睨んでいたが、滝川の視線に気づくとプイッとそっぽを向く。いや、無茶苦茶丸分かりなんですけど。
滝川は大きくため息すると、どこか寂しげな瞳で夕日を見詰める。
「でもよ、最後にお前のフルートの音色・・・聞きたかったな」
「ちょっと滝川――」
「フルート？」
すでに時遅し。滝川の言葉はしっかりと大和の耳に届いていた。
興味津々の大和の視線を感じ、翔輝はため息する。
「滝川。その話はしないって約束だろ？」
「あれ？　そだっけ？」
滝川は首を傾げ、翔輝はため息する。
「そだっけ、じゃないよ」
頭を抱える翔輝の上着の裾をくいくいと大和が引く。

「少尉。少尉ってフルートが吹けたんですか？」
「あぁ、まぁね」
「そうなんですか。すごいです。私も聴いて――」
「悪いけど、フルートはもうやめたんだ。ごめん」
「少尉・・・？」
大和はなぜか悲しげな表情をする翔輝に戸惑う。
「そっか、あの時は無理言って頼んだんだもんな」
滝川の言葉に、翔輝はうなずいた。その表情には陰りがあった。
大和はその表情を嫌というほど知っている。
「翔香さんが関係してるんですか？」
大和の問いに、翔輝は静かにうなずいた。
「元々フルートは母さんがやってたんだ。僕も翔香もその音色が大好きだったんだ。でも母さんは病気で死んじゃって、もう二度と聴けなくなってしまったんだ。母さんの死で塞ぎ込んじゃった翔香を、僕はどうしても元気づけたかった。だから、僕はこっそり音楽教室に通ってフルートを習ったんだ。言わなかったのは驚かせたくてさ。先生は僕には才能があるって言ってくれた。きっと母さんのおかげだったんだ。僕は練習に練習を重ねて、一ヵ月後に翔香に聴かせてやった。翔香は満面の笑みをしてくれた。それ以来、翔香を楽しませたくてフルートを練習してたけど、その翔香も死んじまって、僕は一人になっちまった。翔香との思い出は胸に秘め、フルートは永遠に封印したんだ。だから、僕はもう、フルートを吹くつもりはない」
翔輝の悲しそうな顔を見て、大和は胸を痛めた。また翔輝が悲しんでる。また翔輝が苦しんでる。助けたい。力になりたい。でも、自分には何もできない。見ている事しかできない。それが辛くて、辛くて、惨めで。無力な自分に憤りを感じる。
「で、でもよ。せっかくの才能を――」
「悪いけど、あの時はフルート役が風邪で休んじゃったからやっただけで仕方なく参加したんだ。だから、もう二度と吹くつもりはな

い」
翔輝の辛そうな顔を見て、滝川は「そうか」としか答えられなかった。
気まずい沈黙が流れた時、ついに時間が動いた。
「お、もう出港か。残念だけど、俺はもう行くよ」
滝川はトランペットの入ったケースと私物の入ったアタッシュケースを持った。向こうの方で他の軍楽隊員達が上官である翔輝に向かって敬礼しているのが見えた。
滝川は振り返ると、ニッと笑みを浮かべた。
「今度また『大和』に来る事があったら、よろしくな」
「あぁ、元気でな」
「これからも御国の為に一層奮励努力するように」
「つーか、早く帰れボケ」
「同感です」
「・・・右に同じ」
後半三人の態度に滝川は口を尖らせる。
「何だよ。最後ぐらい笑って見送れないのか？」
「それをできないくらい人をからかったのはどこのどいつだよ」
「・・・せめて味方軍港の湾口に沈むような、人の足を引っ張るような事だけはしないように」
「それ、すごい迷惑。もう迷惑なんてレベルじゃないよ」
「はいはい。それじゃ、沈まないうちに駆逐艦は撤退しますよ」
滝川は皮肉を言うが、そんなのこの三人にはまったく無駄。むしろ、
「お前が駆逐艦ってのは駆逐艦達に失礼だろ？」
「・・・同感。水雷艇がいいところ」
「練習艦でいいよ」
余計ひどく返された。
ため息する滝川の肩を、翔輝は苦笑いしながら叩いた。そんな翔輝に滝川も苦笑いして踵を返した。

「じゃあな！　元気でな」
激しく手を振り、満面の笑顔で別れの挨拶をする滝川に、翔輝も笑顔で手を振った。
夕日に照らされる二人の笑顔は、とても柔らかいものだった。
そして、滝川の姿は、輸送艦の中に消えていった。

夕焼けに染まった海の上を走って湾外に出て行く輸送艦。そのまわりを味方駆逐艦が護衛する。金剛はそんな部隊に向かって小さく微笑むと、静かに敬礼した。それは彼女なりの、小さな激励だった・・・

暁色に照らされたその微笑は、とても優しげなものだった。

第八章　第五節　月光煌く君の笑顔

さて、真珠湾攻撃が終わったら一週間後には何があるでしょうか？答えは簡単。十二月十六日は、戦艦『大和』の就役日――つまり、大和の誕生日である。

戦艦『大和』の会議室では艦魂達が大和一歳の誕生日を祝っていた。

「これ私からのプレゼントです！　大和司令！　受け取ってください！」

「ありがとう」

キャーキャー言いながらプレゼントを渡す駆逐艦達ひとりひとりに、大和は笑顔を向ける。それを受け、駆逐艦達は心底嬉しそう。前連合艦隊旗艦である長門の忠誠心と違って、大和は共に戦う仲間という意識が強いのか、友達のような関係できた駆逐艦達にとっては、もうドンちゃん騒ぎ。食って歌って踊って騒いでフィーバーッ！　という感じだ。

駆逐艦や巡洋艦達からプレゼントを一通りもらうと、大和は戦艦と空母の輪に入った。そこには今日の朝に内地から整備を終えてトラック島にやって来た瑞鶴の姿もあった。

「改めて、久しぶりだね瑞鶴」

「うん。ごめんね。整備ついでに機銃の増強も行ったから時間がかかってね。前線であるトラック島に大和や隼鷹達を置いて来ちゃったから、ちょっと心配だったけど、大丈夫だったみたい」

お互いを心配して笑い合う二人の姿は、春の日差しのように暖かく、輝いていた。そんな二人の内の一人、瑞鶴の上着の裾を不安げな瞳をした少女がちょこんと握った。

「ねぇ、瑞鶴。翔鶴お姉ちゃんは？」

「姉さん！　瑞鶴さんを呼び捨てにして！」

「いいの飛鷹。私さんづけの方が好きじゃないから」
「そ、そういう問題では・・・」
一人納得のいかない飛鷹を置いて、瑞鶴は隼鷹の頭をそっと撫でた。
「ごめんね。姉さんと瑞鳳の傷って結構重傷だから修理に時間がかかるの」
「あとどれくらい？」
「そうね。二人とも来年の春までにはきっと復活してるわよ」
「えー、来年ー？」
隼鷹は心底残念そうな顔をする。
「こればっかりは仕方ないのごめんね」
翔鶴に会いたくて仕方ない隼鷹は、早く翔鶴が戻って来てくれるのを祈るしかなかった。その時、瑞鶴が腕を組んで何かを考え始めた。
「瑞鶴？　どうしたの？」
大和が不思議そうに問うと、瑞鶴は複雑そうな顔をする。
「いや、内地に行った時に聞いたんだけど、どうやら次の機動部隊司令長官は南雲中将じゃなくて小沢中将が就任するみたいなんだ」
「小沢中将が？」
《小沢》という名前に、空母達は鋭く反応した。
「小沢中将って、機動部隊の生みの親でしょ？」
長門の言葉に、空母達はうなずいた。空母達にとっては、自分達に日の目を当ててくれた小沢中将は山本長官よりも重要な人物なのだ。さながら武田信玄を敬愛している山梨県民のようだ。
「・・・小沢治三郎中将。開戦直前まで第一航空戦隊司令官を務め、当時あくまで艦隊の補助艦艇でしかなく一艦隊に一隻配置されていた空母を一つの艦隊に集結させ、後の海戦の主力となる機動部隊を生み出した。海戦初期は南遣艦隊司令長官を務め、マレー沖海戦で大英帝国海軍東洋艦隊を九六式陸上攻撃機と一式陸上攻撃機を以って攻撃。敵艦隊の新鋭戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』、巡洋

戦艦『レパルス』を撃沈するという大戦果を収める。日本海軍の伝統で先任である南雲中将が機動部隊司令長官になったが、小沢中将の方が適任であったという意見が多く、今回の小沢中将就任に、機動部隊の新たな歴史が始まると言われている」

長々と説明した武蔵を、他のみんなは唖然として見ている。空母ですら知らないような事まで言い、数秒後には拍手喝采が起きた。

「武蔵。よく知っているな」

金剛が感心すると、武蔵は静かに頭を下げた。

「・・・戦局を左右するのは情報。つまり、情報戦に勝利したものが戦闘を有利に実行できる。連合艦隊次席指揮官の情報網を使えば、造作もない」

「ふむ。貴様は良い指揮官になるだろう。もし貴様が旗艦になったら、喜んで貴様の下で戦おう」

「・・・ありがたき幸せ」

武蔵の言葉に金剛は満足そうだ。だが、そんな金剛を見て、榛名は硬直していた。扶桑が「榛名？」と声を掛けてると、榛名はそっと口を開く。。

「あの姉貴が誰かの下で喜んで戦う？　ウソだろ。俺は今衝撃的に驚いているぞ。きっと、帰って来てみれば我が軍の攻撃で炎上している真珠湾を目撃した米機動部隊の者達も同じ気持ちだったんじゃねぇか？」

相当衝撃的という事だけは伝わって来た。確かに、あの独立している金剛をあそこまで納得させるのは神業である。さすが、次期連合艦隊旗艦だ。

一方、そんな優秀な妹を見てため息する大和。「私だってがんばってるのに・・・どうせもうすぐ旗艦は私じゃなくなるよ」と落ち込んだ。そんな大和を瑞鶴や日向が励ます。なんとも微笑ましい光景だ。しかし、この光景にはある人物が一人足りない。それは・・・

「なぁ大和はん。長谷川はんは来てへんの？」

伊勢が唐突に訊いて来た。すると、大和は力なく首を横に振る。

「最近少尉は忙しいんです。海軍司令部はガダルカナル島の陸軍を撤退させる為の作戦を考えているみたいなんですが、その安全な航路を確立する為に各艦の航海科の人達が集結して、少尉も航海長他数名と共に参加してるんです。だから、最近夜も遅くて、まとも寝てないみたいなんです・・・体を壊さないといいんですが」

「そうどすか、そういえばウチの航海科も何人か派遣されとったね」

「私からも派遣されたわ」

伊勢と陸奥も思い出したように言う。

「仕方ないね。航海科は兵科の中で五本の指に入るほど忙しい科だから。最近は戦局も苦しくなってさらに厳しいみたい」

日向も困ったような顔をする。その時、

「ついにガダルカナル島から撤退か。上陸陸軍兵員三分の二以上の約二万人が戦死したというのに。我が海軍も多くの艦艇や兵員を失ったというのに、撤退しか道がないのか」

辛そうにつぶやく金剛を見て、雪風は申し訳なそう言う。

「申し訳ありません。私達駆逐艦が輸送船団の護衛任務や補給任務を完遂できていればこんな事にはならなかったんですが。全駆逐艦を代表して謝罪します」

「雪風。貴様一人の責任ではあるまい。確かに作戦は失敗して今の現状は最悪だ。だが、貴様らも粉骨砕身の努力をしたのであろう？　そんな貴様らを、私は責めんぞ。私だって艦砲射撃作戦を行ったが、当初の予定戦果の半分しか殲滅できなかったんだぞ？　私だって失敗しているんだ。気にするな。これからがんばればいいじゃないか。まだ戦争は続くんだからな」

「も、もったいないお言葉を」

感激して頭を下げる雪風。そんな二人を少し離れた所にから見ている陽炎と夕雲は笑った。

「金剛さんもずいぶんと丸くなられたな」

「妹を二人も失って、辛いんだろうよ」

「あの鬼の金剛がね」

「鬼の目にも涙ってやつか？」
「夕雲うまい！」
「・・・聞こえてるぞ」
おちゃらけていた二人に響いたその凛々しい声は、二人を硬直させるには十分過ぎた。二人が震えながら見ると、金剛が睨んでいた。
二人は次に自分達がすべき行動を一秒で決めた。
「「すみませんでした！」」
日本人の最終奥義――土下座だった。
二人が土下座モードに入ったと同時に、金剛は酒瓶を雪風に渡し、二人は何事かを話すと、雪風は二人の所に戻った。
「姉さん。夕雲姉さん。金剛さんから差し入れです。あと、金剛さんから伝言。「つまらん戯言は寝て言え」だそうです」
「「ははー」」
二人は水戸黄門の印籠を見せられた悪代官のような、あまりにも見事な土下座だった。それは後世まで語り継がれるであろう神業的な土下座だった。
陽炎達駆逐艦は再びドンちゃん騒ぎを再開した。
一方、戦艦空母連合も騒いでいた。
「伊勢ちゃーん！」
「や、やめてぇな・・・ッ！」
扶桑に体中をまさぐられていて赤面して抵抗している伊勢。そんな伊勢を危ない顔で襲っている扶桑。
いつの間にか駆逐艦や潜水艦、巡洋艦達の所に行ってしまった日向。
金剛は榛名と共にお酒を飲んでいる。
その他の者は一緒にお酒やラムネを飲んでいる。しかし、そんな中、大和の顔は浮かなかった。やはり、翔輝の事が気になっているのだ。
「大和司令。元気出してください」
「飛鷹。ありがとう。大丈夫だよ」

大和は笑顔で返すが、それは表だけだった。それは誰もがわかっていた。

長門達は大和に元気になってもらいたくてさらに過激にアタックを開始しようとした。その時、

「・・・翔輝？」

武蔵の声に、大和は驚き急いで振り向いた。そこには、疲れ切った顔をした翔輝がいた。

「少尉！　大丈夫ですか！？」

「あ、あぁ」

肩で息する翔輝に、武蔵はそっと水を渡す。

「・・・翔輝、大丈夫？」

「うん。なんとか」

武蔵の渡した水を翔輝は一気に飲み干した。少しやつれた顔を見て、陸奥や伊勢は驚愕する。

「少尉。今日はもうお休みになられた方が」

「それ所じゃない。大和。高柳艦長が」

翔輝の口から意外な名前を聞いて、大和は怪訝な顔をする。

「艦長？　艦長がどうなされたんですか？」

翔輝はうつむいてしまった。その異常な態度に、大和も真剣な話だと理解した。

翔輝はしばらくの沈黙の後、ゆっくりと口を開いた。

「艦長は、高柳大佐は、本日付を持って、『大和』艦長を解任してしまったんだ」

「え・・・」

大和にも衝撃が走った。今まで一緒にいた高柳が艦長の任を終えた。それを理解するのには少し時間がかかった。

「高柳艦長が？　ウソでしょ？　そんな・・・ッ！」

「本当なんだ」

翔輝の顔で、それがウソではないとわかると、大和は女の子の顔から、連合艦隊旗艦の顔になった。

「詳しく、教えてください」

少し前の艦橋。艦橋には高柳以下参謀長、航海長。その他参謀や航海士がいた。もちろんその中には翔輝も含まれる。

翔輝は航海科の会議を終えて部屋に帰ろうとしていた所を航海長に捕まって艦橋まで連れて来られたのだ。

「航海長？　一体何ですか。自分はもう寝たいんですが」

眠い目を擦る翔輝だが、航海長は沈黙したままだ。その時、ずっと沈黙したまま闇夜を見詰めていた高柳が振り返った。

「君達。今日まで私の補助に努力をしていてくれた事に、感謝する」

突然の意味不明な言葉に、参謀達や翔輝も混乱する。「艦長？　何言ってるんですか」「艦長？」と参謀達が次々に困惑の声を上げる。そんな彼らを見詰め、高柳はゆっくりと口を開いた。

「本日一九四二年十二月十六日をもって、私は『大和』艦長を解任する事になったんだ」

『なッ！？』

高柳大佐が艦長をやめる。それはあまりにも衝撃的で、過酷な現実だった。認めたくない。それはみんなの気持ちそのものだった。誰も彼もが世話になった高柳と一緒に戦いたい。そう願った。だが、衝撃の走る参謀達とは裏腹に、高柳は微笑んだ。

「明日からは松田千秋大佐が後任に当たり、私は第一艦隊参謀長に就任するんだ」

「そうですか。という事は、少将に昇級されるのですね。おめでとうございます」

航海長の言葉に、高柳は「ありがとう」と返した。

「だが、艦長の私が参謀長になるとは、思ってもみなかったよ」

一人笑う高柳を、参謀達は見詰める。その視線に気づいたのか、高柳は笑顔をやめ、真剣な顔で参謀達を見詰める。

「だから、今日で私の任務は終わった。君達は今までどおり『大和』の任務を続けてくれ。俺は『長門』でがんばる」

「艦長。栄転、おめでとうございます！」
参謀の一人が激励を叫ぶと、それを引き金に次々に他の参謀達も高柳の栄転に喜ぶ。中には高柳が去る事に泣いている者もいる。握手を求む者もいる中、翔輝は呆然としていた。そんな翔輝に気づいたのか、高柳は翔輝に近づいて来た。
「どうした？　俺の栄転を喜んでくれないのか？」
「え？　いや、その・・・」
うつむく翔輝の肩を高柳はポンと叩いた。
「何暗い顔してるんだ。別に死地に行く訳じゃないんだぞ？　俺は第一艦隊に行くだけだ」
「はい。おめでとうございます」
「何だよ？　笑えって」
高柳の笑顔に、翔輝は固いながらも笑みを浮かべた。
翔輝にとっては初めての軍艦勤務。その艦は最新鋭戦艦である『大和』だった。まだ右も左もわからなかった翔輝を、高柳は優しく迎えてくれた。そんな彼の下で翔輝は戦いたいと思っていた。だが、それはもうできない。でも・・・
「艦長。これからも、がんばってください」
翔輝の笑顔に、「おう」と高柳は答えた。高柳はそんな翔輝の軍帽を取り、頭を撫でた。
「お前もがんばって昇級するよう努力しな」
「はい！　がんばって航海長を目指します！」
高柳は豪快に笑った。その時、後ろの方から「おいッ！」という誰かの声が聞こえたが、無視した。
「そうかそうか。こりゃ君も危ないかもな」
高柳は驚愕している航海長を見る。航海長はそんな言葉に苦笑いを浮かべる。
「ははは、大丈夫ですよ。お、俺がこんな坊主に負けられる訳がないですよ」
「おーい。笑顔が引きつってるぞ？」

「ま、まぁ、確かに天才的な能力を持っていますが、まだまだ子供。経験が不足していて――」
「君。それは負け惜しみというのだぞ？」
「うぐっ」
艦橋を笑いが包んだ。大爆笑の中、航海長だけは「笑うなッ！」と大激怒していた。笑いがひと段落すると、高柳は全員を見た。
「明日、俺は『大和』を離れる。見送りよろしくな」
『了解ッ！』
全員は敬礼して答えた。
翔輝は敬礼を終えると、急いで艦橋を飛び出した。そんな彼を、高柳は見送った。

「そうですか、『長門』へ・・・」
大和は寂しそうにつぶやいた。
「そういえば、私に新しい参謀長が来るって言ってたけど、それがあなたの艦長だったのね」
長門は何度もうなずいた。同時に悲しそうな顔をしている大和を見詰める。
「高柳はんが第一艦隊参謀長になるんどすか。嬉しい事やね」
「お姉ちゃん？」
一人喜ぶ伊勢を見て、日向が不思議そうに首を傾げる。すると、その視線に気づいたのか、伊勢は少し顔を赤くする。
「高柳はんは、私の前の艦長やからね。出世して嬉しいんや」
その言葉に日向は手をポンと叩いた。
「そっか、高柳大佐ってどっかで聞いた事があったけど、お姉ちゃんの前の艦長の人だったんだ」
「そうだったの？」
大和が意外そうな顔をする。そりゃそうだろう。そんな話全然聞いた事なかったのだから。
「そうやで。結構ええ奴やったしね」

もう遠い昔を思い出すかのように、伊勢は思いにふける。その時、日向が小学生の授業のように威勢良く手を挙げて「はいはーい！」と叫んだ。

「確か『大和』の新艦長って、松田千秋大佐だっけ？」

「うん。そうだよ」

翔輝の返事に、日向は意味ありげな笑みを浮かべる。そして、

「松田大佐って、私の艦長だよ？」

爆弾発言をした。

「そうなの！？」

驚く大和を見て日向は「うむ」と自慢げにうなずいた。

「そういえばそうやった。まぁ、松田はんには何度か会った事はあったけど、結構優しそうな人やったし、良かったな」

伊勢がそう言うが、大和は聞いていなかった。寂しそうに、ただ呆然と立っているだけ。そんな大和の肩を軽く叩く伊勢。

「どないしたん？　高柳はんが出世したんよ？　嬉しくないの？」

「う、嬉しいよ。でも、やっぱり寂しい・・・」

そんな大和に、日向はまじめな顔で言う。

「大和。私は同じ気持ちで松田大佐を見送ったんだ。私だってできたんだ。大和にもできる。大和。あなたの艦長をちゃんと見送ってあげよう」

「日向・・・」

日向はにゃは、と笑った。そんな彼女らしい仕草に、大和にも笑みがこぼれる。

「うん。わかった。ちゃんと笑顔で見送る」

「そうそう！　そうこなくっちゃ！」

二人の小さな少女は笑い合った。日向の方が二〇歳以上も艦齢は上だが、艦魂は身長も小さくかなり子供っぽいので大和といると、仲のいい友達同士に見える。なんとも微笑ましい光景だ。そんな光景を、遠くから見詰める翔輝。やっぱり友情というのはいいものだなぁ。と思っていると、

「うおッ！」
突如目の前にラムネのビンが現れた。それを掴んでいる細い腕を目で追うと、そこには武蔵を上回る無表情少女がいた。
「山城？」
「餞別（せんべつ）だ。飲め」
「あ、ありがとう」
翔輝はそれを受け取り、近くの椅子に腰を落とした。その横に山城も付く。
山城の片手には一升瓶があった。しかももう半分消えてる。相変わらず大酒飲みだ。だが、そんなに飲んでるのに全く乱れていない。他の艦魂はこんなに飲める奴は少ないし、飲めても何かオプションが付いてくる。だが、隣の無表情少女はそれがまったくない。きっと彼女の肝臓は難攻不落の要塞のような臓器なのだろうと思うと、なぜか笑えて来た。
「どうした？　なぜ笑う」
翔輝のおかしな態度に山城は引く。反られた背中の角度は約一二〇度。相当引かれている。そんな山城を見て、翔輝は慌てて弁解する。
「い、いや・・・相変わらずいい飲みっぷりだと思って」
「そ、そうか？」
山城の表情に変化が起きた。少し恥ずかしそうに顔を赤らめたのだ。しかし、翔輝は今自分自身の事しか頭になく、気づかなかった。
「これでも今日はまだ少なめなんだが」
「マジッ！？　半分も飲んで！？」
「これは三本目だ」
「死ぬ！　急性アルコール中毒で死ぬ！　バカだろ！　お前バカだろ！」
「・・・」
「無視すんなッ！」
山城は薄い笑みを浮かべる。そんな事を知らずに硬直している翔

輝。そんな翔輝の首が突然絞められ、背中に柔らかな双丘が押し付けられた。こ、これは・・・ッ！

「長谷川少尉？　何でまた山城と会話エンジョイしてるのかな？」

「ふ、扶桑さん！？」

ぎゅーっと扶桑は翔輝の首に巻き付いている腕に力を入れる。力が入ればさらにくっ付くので、背中の双丘もさらに密着。翔輝は息苦しさと別の苦しさに挟まれた。

「く、苦しい！　ギブギブ！　いろんな意味ギブッ！」

「さぁ言いなさい！　山城と何をトークしてたの？　回答によっては容赦しな――うごッ！」

突然縛めが解かれ、翔輝は何とか肺に空気を入れる。もう少し遅かったら天国が見えていたかもしれない。

翔輝はが振り返ると、そこには頭を押さえて悶絶する扶桑の姿あった。そして、そんな彼女の横で、空になった酒瓶を逆さに構えて、武器にしている山城。状況から考えて扶桑の頭に山城の酒瓶が直撃したというところだろう。

「ちょっと山城！　何すんのよ！？　バイオレンス！？　ドメスティックバイオレンス！？」

「うるさい。黙れ」

「黙れって何よ！　私はあなたの姉のなのよ！？」

「私はそう思ってないから」

「キーッ！　かわいくない奴――っと、頭痛い！　割れる割れる！　よりにもよって酒瓶なんて凶器を使って・・・ッ！　もう少し打ち所が悪かったら今頃私は天国でハープを奏でていたわよ！」

「おしい」

「おしいじゃないでしょ！」

ギャーギャー言う扶桑を完全無視して、山城は四本目の酒瓶に手を伸ばす。なんとなく、その光景が大和と武蔵に見えたのがおかしく、笑ってしまった。その時、ふと前方を見ると、榛名がいた。

「あ、榛名！」

駆け寄りながら声を掛けると、榛名はビクリと震えて超速で振り返った。そして、振り返ったその手は空手の構えになっていた。榛名は真剣な顔で翔輝を睨み、
「俺の後ろを取るとは・・・やるな」
「どこのゴ○ゴだよ」
わかる人にはわかるツッコミを入れ、翔輝は榛名の横に付く。
「な、何だよ」
榛名は不振そうに翔輝を見詰める。
「いや、別に。ただ見つけたから」
「それだけの理由で？」
「いや、別にいいだろ？」
「別にいいけど。俺は姉貴が待ってるから急いでんだけど」
「あ、そうなの？　ごめん」
「・・・来るか？」
榛名はニヤニヤと笑う。一体何を考えているのだろうか？　翔輝はあまりの恐怖に身震いし、半歩引く。
「じゃ、じゃあッ！」
翔輝は迷わず反転、全力疾走。後ろの方でなんか舌打ちのような音が聞こえたのは気のせいだろうか。いや、絶対違う。翔輝はなぜか確信が持てた。これが人間に残されている野性のカンというものなのだろうか。
翔輝は部屋の隅にまで逃げ込んだ。いくら榛名でも追い掛けるまではしつこくないはず。あれで結構さっぱりした奴なのだ。だが、ここにはすでに先客がいた。
「あ、長谷川少尉」
その声に下を見ると、そこには小さな女の子がいた。見た目は武蔵と同じくらい。いつも喜怒哀楽の多く、ツインテールが元気に揺れる少女。しかし、今は萎れた花のように寂しそうな顔をし、ツインテールも力なく揺れている。翔輝は少女の名をそっと呼ぶ。
「隼鷹？　どうしたの、こんな所で」

「うん。ちょっとね・・・」
元気のない声で答える隼鷹。そう言えば、瑞鶴達といた時もこんな感じだった。理由はたぶん・・・
「翔鶴がいないから、寂しいの？」
翔輝の問いに、隼鷹は静かにうなずいた。
やっぱり・・・
翔輝はため息した。
隼鷹は翔鶴を実の姉のようにに慕っている。だが、今翔鶴は内地で南太平洋海戦の傷を癒している。隼鷹にとっては辛い日々なのだろう。
「まぁさ、翔鶴がいないのは辛いとは思うけど、飛鷹や瑞鶴もいるんだし、元気出せよ。大和や長門さん達もさ」
隼鷹は沈黙したままだ。この気まずい雰囲気はどことなく武蔵と似ているが、翔輝にとっては武蔵で慣れている上、武蔵よりは攻略可能だった。
「隼鷹」
「え？――ひゃッ！」
翔輝は山城からもらったラムネを隼鷹の頬に当てる。隼鷹は驚いた顔でそれを一瞥して翔輝の顔を見詰める。
「飲む？」
隼鷹は少し躊躇したが、ゆっくりとうなずいた。
翔輝はラムネを隼鷹に渡し、その横に座り込んだ。
「瑞鶴達の所に行かないの？」
「いいの。心配かけちゃうから」
「そっか。優しいんだね」
「ううん。優しいのはみんなだよ。私の事を気遣ってくれる。でも、それが辛いんだ。なんか余計な心配をかけてるみたいで」
「そんな事ないのになぁ。みんな君が大切だから心配してるんだし」
「うん・・・」
隼鷹はラムネを開けようとするが、なかなか開かない。翔輝は「

貸して」と言って受け取り、ラムネを開ける。ラムネを渡すと、隼鷹は薄く笑って「ありがとう」とお礼を言って飲み始める。そんな隼鷹の横で翔輝は眠そうにあくびする。

そういえば、ここ最近まともに寝てなかったなぁ。

「ふわぁ」

「眠いの？」

隼鷹が心配そうに見詰めている。翔輝は苦笑いする。

「ちょっとね。最近あんまり寝てなかったから」

「航海科は最近大忙しだからね」

「いつも忙しい方だけど、最近はどうも・・・」

「撤退作戦があるからね。ガダルカナルの」

「まぁね」

「多くの仲間を失ったのに、撤退か・・・」

寂しそうに言う隼鷹。

「仕方ないよ。もうソロモン海の制海空権を失って、海軍はまともに動けないし、陸軍は壊滅だし、これが最後のソロモン作戦になると思う」

沈黙する隼鷹。彼女の言うとおり、多くの艦艇将兵を失ってまで戦ったこの海を去るのは、身を切られるような思いだ。霧島の沈んだ海を、みすみす敵に渡すのは辛い。でも、これ以上続ければ、確実に日本軍は壊滅する。ここは、撤退しかない。そう、納得するしかなかった。

隼鷹はラムネを半分ほど飲み終えると、翔輝を見詰めた。

「ねぇ、長谷川少尉。次はどこが戦場になると思う？」

「・・・それは、わからない。わかっていれば対策が立てられるけど、今はこのソロモン海域以外で目立った攻防はない。航空部隊だけでならラバウル辺りが危ないけど、それを言うとトラック諸島も危ないし、一概に言える事じゃないよ」

「そっか、でも、敵が戦力を立て直す前に総攻撃を仕掛けたいな。翔鶴お姉ちゃんや瑞鳳が血を流して敵残存空母を戦闘不能にできた

んだから。私と飛鷹、瑞鶴で叩ければなぁ」
「こっちも搭乗員を消耗し切っているからね。それは無理だよ。残念だけど、ソロモン海の戦いは、ラバウルの海軍航空隊に任せるしかないね」
「・・・」
落ち込む隼鷹。無理もない、大事な翔鶴を傷つけられ、仲間も殺されたのに、自分には何もできない。その悔しさは計り知れないだろう。例え見かけが小さな女の子でも、彼女は大和魂が流れている――艦魂なんだから。
「よしッ！」
翔輝は立ち上がり、突然隼鷹の手を取った。
「え？　何！？」
「いいからいいから」
「ちょ・・・ッ！」
隼鷹は翔輝に引きずられるようにして部屋を縦断する。
「飛鷹！　ちょっとお姉ちゃん借りてくよ！」
途中すれ違った飛鷹に言うと、「どうぞ。こんなのでよろしければ」とまるで物みたいに言った。まぁ、自分も『借りてく』って言ってる時点で同レベルではあるが。
中央にいた大和達に一瞬翔輝はひるんだが、幸いにも大和は長門の膝の上に頭を乗せて眠っていた。見た目仲の良い姉妹に見える。武蔵がこちらを見て来たので、翔輝は手旗信号（旗なし）で『我、戦線離脱』と送ると、『了解。貴官ノ健闘ヲ祈ル』という謎の返答が帰って来た。
ともかく、翔輝は隼鷹の手を引いて部屋から出て行った。

黒い暗黒の空間が続く。もう消灯時間を過ぎているので、通路には人の気配も音もなく、広がるのは漆黒の闇だけ。明かりをつけるという手段はあるが、そうすれば確実に巡回に見つかって怒られる。副長なら怒鳴られるし、兵だったら上官に怒られたくないからと必

死で哀願される。どちらも捕まればアウトだ。そんな中、翔輝が一つだけ感じられるのは、隼鷹の手のぬくもりだけだ。おそらく彼女も同じだろう。

入り組んだ通路を手探りで進む。さっきから隼鷹は沈黙している。たぶん暗闇が怖いとかだろうと思ったが――そのものズバリだった。

「ね、ねぇ、どこ行くの？」

不安そうな声が初めて響き、翔輝は歩きながら答える。

「もう少しだよ」

「だからどこに・・・」

「行ってみればわかるよ」

翔輝に引っ張られ、隼鷹はそのまま身を任せ続ける。

会議室を出てから数分後、ようやく翔輝の足が止まり、隼鷹も止まった。

「ここを開ければ」

「え？　でも、この先って――」

言い終える前にドアが開かれた。そこは軍艦の目――防空指揮所だった。

月に照らされる防空指揮所には人はおらず、波の音だけが響き渡っていた。

翔輝は隼鷹の手を引いたまま指揮所に入った。

隼鷹は翔輝の手を離れて、未知の世界に食い入る。

「た、高あああぁぁぁぁいッ！」

隼鷹は叫んでいた。彼女には初めての視界だったのだろう。

空母と戦艦じゃ艦橋の高さは天と地ほどの差がある。ましてやここは世界最大最強戦艦のトップだ。その高さは計り知れないだろう。

「『大和』の高さは、艦底からそこの十五ｍ測距儀まで五一ｍもあるんだ」

「大きすぎてわかんないよ」

「まぁ、中型水雷艇くらいの大きさはあるよ」

「そ、そんなにあるの！？　ひえええぇぇぇッ！」

隼鷹は震え出す。日本では冬でも、ここトラック島は南半球に位置する。ここでは今は夏だ。しかも日本の夏よりも死ぬほど暑い。唯一の救いは今が雨季が終わったおかげで蒸し暑いという事はない事だ。ついこの前までは雨季で死ぬほど蒸し暑く、艦内から出るのは地獄だった。

「ねぇねぇッ！　あれが『大和』の主砲!?」

隼鷹が指した物は、この『大和』の象徴である四六ｃｍ砲だった。

「そうだよ。あれ一つで駆逐艦一隻分の重さがあるんだ」

「すごいすごい！」

大喜びする隼鷹。先程までとは大違い。翔輝はやっぱり連れて来て良かったなぁと思った。

「あ！　あれ私だ！　おーいッ！」

隼鷹が手を振る先には彼女の本体――空母『隼鷹』が月に照らされていた。

「へぇ、私ってあんな形だったんだ」

「知らなかったの？」

隼鷹の言葉に、翔輝は不思議そうに首を傾げる。

「うん。だってあっちの艦橋じゃよくわかんないし、こんなふうに他艦の防空指揮所から見た事もなかったんだもん」

「ふーん」

「えっと、あれが私なら・・・あ！　あれが飛鷹で、少し先のが『瑞鶴』だ。横から見る事はあっても、上から見るとまた違うんだぁ」

「そりゃあね。ほら、あれが戦艦『長門』と『陸奥』。向こうのが『金剛』。その横のが『榛名』。反対側のが『扶桑』『山城』。第二停泊所にいるあれが『伊勢』と『日向』」

「こんな高い所から見ても大きいんだね、戦艦は」

「そうだよ。あっちを見てごらん」

「え？　うわッ！」

隼鷹が驚いた先には、この『大和』の姉妹艦・戦艦『武蔵』が威風堂々とその巨体を浮かべていた。

「戦艦『武蔵』。日本海軍の象徴の一隻だよ」
「おっきい！　山みたい！」
笑いながら喜ぶ隼鷹の横、翔輝は静かに星空を見詰めていた。
何度見てもあきないこの空。翔輝はこうやって星空を見上げるのが好きだった。昔から言うある言葉。『死んだ人は星になって、大切な人を見守っている』。翔輝はそれを信じている――いや、信じていたいのだ。
こうやって星空を見ていれば、いつか翔香の星を見つける事ができるような気がして。いつもこうやって星空を見詰めている。その際特に見上げる場所はここ――防空指揮所だ。他よりも高い場所であるここなら、星空に手が届くかもしれないと思って。そんな事物理的に不可能だが、翔輝はそうしていたかった。そうすれば、自分は一人じゃないと思えるから。いつも翔香と共にいる。そう思えたから。
「長谷川少尉？」
そんな事を考えていたので、隼鷹の存在をすっかり忘れていた。自分を見詰める彼女の不安げな瞳に、翔輝は慌てて笑顔をつくる。
「あ、ごめんごめん」
「やっぱり疲れてるんじゃ・・・」
「大丈夫だよ・・・それより、見てごらん」
「うわぁ・・・」
翔輝と同じく隼鷹も上を見上げ、感動した。
光り輝く散りばめられた宝石。それがそこにあった。
星の光が全てを包み込むように輝き、幻想的な空間を創り上げる。
こんなふうに真剣に星空を見上げた事はあったかな？　隼鷹はそう思った。たぶん答えは『いいえ』だ。今まではすぐそばに光り輝く太陽があったから、暗闇の中の星なんて真剣に見上げた事はなかった。でも、今はその太陽はない。だからこそ、今見上げている星空がこんなにも輝いて見えるのだ。
「きれいだろ？　星空って」

「うん！　すっごくきれい！」
星の輝きと同じくらい瞳を輝かせている隼鷹を見て、翔輝に自然と笑みがこぼれた。
「さっきまでとは別人みたいだな」
「え？」
微笑んでいる翔輝を見て、隼鷹は沈黙する。
優しい笑みだと思った。自分が見た笑顔の中でも五本の指に入るくらいだ。
翔輝と隼鷹じゃ身長差がかなりあるが、翔輝は視線を低くして隼鷹を見詰める。
「な、何？」
突然の急接近に隼鷹は脈拍を最高出力まで上昇させる。
吐息の掛かる距離。見詰め合う瞳。隼鷹は何もできずに硬直する。目が離せない柔らかそうな唇。刹那、その唇が微かに動き、隼鷹はさらに硬直する。
そんな隼鷹の気も知らず、翔輝は笑顔のまま隼鷹の頭を撫でた。ビクリと震える隼鷹に、翔輝はそっとつぶやいた。
「良かった。元気になって」
「え？」
驚く隼鷹から離れ、翔輝は満月が映る海面を見詰める。
「翔鶴がいなくなってからずっと元気なかったろ？　ずっと心配してたけど、もう大丈夫みたいだからさ」
「長谷川少尉？　ずっと心配しててくれたの？」
「当然だろ？　仲間を心配するのはさ」
「長谷川少尉・・・」
時が止まったように感じた。隼鷹の瞳には今星空や月は見えてはいない。見えているのは翔輝だけ。士官にしてはあまりにも若く、だがとても優秀な航海士。そして、誰よりも優しい笑顔。
隼鷹の中にもう一つの太陽が生まれた。光り輝くそれは翔鶴とは違う。翔鶴を夏の勇ましい太陽に例えると、その太陽は春の暖かな

日差しを届ける優しい太陽。
「そろそろ戻ろっか」
翔輝の言葉に隼鷹はうなずいた。
翔輝は再び隼鷹の手を握った。先程とは違い、隼鷹は幸せな気分になれた。
翔輝に先導されて、隼鷹は再び艦内に潜った。

翌朝、『大和』の全将兵が甲板に集まり、高柳を見送った。高柳は兵達に「俺がいなくなっても元気でな」と言い残し、山本長官や宇垣参謀長に敬礼して、『大和』を去った。その背中を翔輝はずっと見詰めていた。
新艦長には元『日向』艦長の松田千秋大佐が就任し、ここに新たな戦艦『大和』が発足した。

その日の夜。会議室に今後の事を話し合う為に連合艦隊主力艦魂（戦艦・空母）が集まっていた。
「では、今日はもう遅いのでこれで終了します」
大和が最後を締め、会議は終わった。その瞬間、
「どうも」
「少尉？」
偶然立ち寄った翔輝がタイミング良く現れた。翔輝は大和を見詰め笑顔になる。
「会議終わった？　じゃあ一緒に戻ろっか」
「そうですね。では一緒に――」
「お兄ちゃん！」
大和が言い終わる前に飛び出したのは――隼鷹だった。
「隼鷹！？　うわッ！」
いきなり飛びつかれた翔輝はバランスを崩しかけるが、何とかその場に踏み止まる。そして、ついさっき自分にアタックして来て、今は自分の胸の中にいる少女を改めて確認する。

「隼鷹？　どうしたの？」
「お兄ちゃん！　今日は一緒に寝よ！」
翔輝の質問を無視して、隼鷹は究極の爆弾発言を発した。
硬直する一同。呆然とする大和、武蔵、陸奥、伊勢。何やらまた新たな新キャラ降臨に苦笑いする長門。
隼鷹は天使の笑みで翔輝を見上げる。
完全に凍り付いた空気の中、先陣を切ったのは大和だった。
「ちょ、ちょっと、隼鷹？　お、お兄ちゃんって？　少尉の事？」
「え？　そうだよ。翔鶴お姉ちゃんに翔輝お兄ちゃん。私のお気に入り」
「ちょッ！　翔輝ってまた!?」
また自分が恥ずかしくて言えない名称を言われ、硬直する大和。
だが、大和が停止してもまだ強力なキャラが残っていた。
「それは別にいいけど。何で隼鷹ちゃんと少尉が一緒に寝るのよ!?　それが一番の問題よ！」
陸奥が叫ぶ。その言葉に他三名もうなずいた。だが、隼鷹は頭に《？》を浮かべている。
「どうして？　一緒に寝たいからだけど」
言ってのけたよこの子は！　と心の中で同じような事を考える四人。いまだにその一線は越えた事がない（武蔵は他三人より少し先にいるが）四人にとって、新参者にいきなりそんな超Ｓランク行為を許すはずがなかった。相手が見た目まだ幼い事などお構いなし。
超非常警戒態勢のオーラ全開の四人を隼鷹はきょとんと見つめていたが、彼女は結構天然だった。
「お兄ちゃん。私眠いよぉ。早く早く」
「え？　ちょっと待って――うわッ！」
「あ！　少尉!?」
「コラ！　少尉を返せ！」
「勝手に奪わんといてぇな！」
「・・・宣戦布告と受け取っていいの？」

四者四様の言葉を放って逃亡する隼鷹＋翔輝を追い掛ける四人。
そんな計六人を見詰め、この戦いの行く末を考えて笑ってしまう長門。
また新たな恋敵（ライバル）が現れ、焦りまくる大和だった。

第八章　第六節　激動の新生活

時代はついに一九四三年に突入した。
戦艦『大和』も二代目艦長、松田千秋大佐を迎えてから一ヶ月近くが経っていた。
松田は高柳に負けず劣らずの艦長で、すぐに参謀達と打ち解けていた。
一方、ガダルカナル島撤退作戦の航路がようやく決まり、航海科の者は久しぶりに数日の非番をもらって各自それぞれ自由気ままに過ごした。
そんな中、翔輝はと言うと・・・
「少尉。そろそろ起きてください。いくら非番だからって寝すぎですよ」
いまだに布団の温もりから脱出できない翔輝を大和が起こそうとするが、翔輝の目覚めの悪さは天下一品だった。
「あと五分・・・」
溶けた砂糖のようにベタベタな事を言う翔輝。自分でも情けないと思うけど、やっぱり眠いのは変えられようのない事実なのだ。そんな呆れる事を思っている翔輝に、大和はイライラする。
「そのお約束なセリフを毎回言うからこうやって五分前に起こしてるんじゃないですか！」
大和の完璧な海軍精神である五分前行動の精神も、翔輝の寝起きの悪さには到底足元にも及ばなかった。
「いいだろ・・・ついこの前まで徹夜続きだったんだからさ」
それは事実である。だからこそ仕事が終わったので非番をもらったのだ。だが・・・
「もう昨日と一昨日一日中布団の中で爆睡してたじゃないですか！まだ寝足りないんですか！？」
そう。翔輝は昨日と一昨日の計三五時間眠っていた。もう十分寝

たはずなのに翔輝は起きない。余談だが、その二日間せっかくの非番なんだから一緒に何かしようと思っていた大和だったが、翔輝が疲れているからと二日待ったのだ。だが、今日と言う今日は大和の我慢も限界だった。つまり、ものすごく構ってほしいのだ。欲求不満（変な意味ではなく）という奴だ。

「寝る子は育つんだよ・・・」

「もう十分成長してます！　身長がちょっと足りないけど問題ありません！」

「チビの気持ちはチビにしかわからないよ」

「お言葉ですが、貧乳の気持ちは貧乳にしかわかりません！」

そう言って大和はあまりない胸を見詰める。悲しい事か、足下はしっかりと見えていた。そして、キレた。

「いい加減にしてください！　こうなったら実力行使でいくまで！」

大和は布団の端を掴んだ。夏用なので薄いが、『大和』は冷房完備。これがないと少し寒く感じるほどガンガンに効いている。だから・・・

「起きるですううううぅぅぅぅッ！」

大和は布団を剥いだ。

そして、絶句した。

ただただ呆然と、翔輝の――背中を見詰める。

「ひどいなぁ、布団を剥ぐなんて」

「朝の空気はさわやかだよ？」

「そうか、んじゃ起きるか――うん！？」

翔輝は背中に違和感を感じた。

何か、柔らかくて温かいものがへばり付いてる！？　と言うか、僕今自分の背中と会話した！？

急いで飛び起きると、その正体が判明した。

かわいいクマの絵が描かれた西洋風の寝巻（パジャマ）を着た小さな女の子が、自分の隣にいた。それは・・・

「やん。お兄ちゃんのいじわる」

「「隼鷹!?」」

二人の声がシンクロした。そこにいたのは日本機動部隊の一翼を担う空母の一人、空母『隼鷹』の艦魂だった。

しばし時が止まる。そして、先陣を切ったのは、

「少尉・・・ッ!?　これはどういう事ですか・・・ッ!?」

今にも笑顔が崩れそうな顔をしている大和だった。唇の端が引きつり、こめかみの辺りには血管が浮き出ている。相当激怒している。一触即発の爆弾がそこにあった。

「や、大和?」

「少尉?　まだ幼い隼鷹を夜の世界に入れるのは、人間的にも道徳的にもどうかと思いますが・・・ッ?」

その瞬間、翔輝は全てを理解した。そして、それに対する見解を、心の底から湧き上がるその衝動を、己の雄叫びに込めた。

「誤解だあああああぁぁぁぁぁッ!」

「何が誤解なんですか!　何が!?　どこをどういうふうに見たら否定できると言うんですか!?」

仲のいい兄弟みたいな二人が仲良く寝ていた。という一般的解釈すら、今の大和にはできなかった。さらに、

「お兄ちゃん。昨日はすごかったね。私、興奮して全然眠れなかったよ」

「「!?」」

大和から完全に冷静な部分が吹き飛んだ。

「な、な・・・ッ!」

「そんなに恥ずかしがらないでよ。誰でも最初は恥ずかしいものなんだから。おかげで私、昨日は全然寝かせてもらえなくてね――でも、すごくかわいかったよ。えへへ」

頬に手を当てて、にこやかに笑う隼鷹。

「ま、まさか隼鷹・・・ッ!　もうすでに既成事実を・・・ッ!?」

部屋の空気が変わった。荒涼としたツンドラ気候の如く絶対零度の吹雪が吹き荒れる。

「ぬ、抜け駆けされた・・・ッ！」
翔輝はそれだけで子供を泣かせそうなすごい視線を浴びせられる。
四六ｃｍ砲が自分に向いてたとしても、この恐怖の方が断然恐ろしいと断言できる。
「しょ、少尉も少尉です！　こんな事って・・・ッ！」
「え？　えぇッ！？」
責められる。責められまくる。そのうち漢字が《責める》から《攻める》に変わるのは時間の問題だった。
いや、別に翔輝はまだ大和と、その、そういう関係じゃないんだからそこまで責められるいわれはないんだが、なぜかそう反論したら切り殺されそうな雰囲気がそこにある。
「少尉！」
「う、ううっ・・・」
（な、何で僕がこんな目に・・・）
追い詰められた翔輝は災いの元凶である隼鷹に向かって叫んだ。
「じゅ、隼鷹！」
「なぁに？」
「それさ、本当なの！？　僕が隼鷹と、その、そういう激しい事を・・・」
隼鷹はあんな事を言っているが、昨晩そんな事があったとは到底思えない。思えないったら、思えない。だって翔輝は隼鷹がベッドに入ってきた事がわからないくらい熟睡していたんだし。
すると、隼鷹は天使の笑みでこう言ってのけたのだった。
「うん。本当だよ。お兄ちゃんの寝言と寝相、とっても激しかったんだから」
「・・・はい？」
今、何と言いましたか？
「それが気になって、私、眠れなかったんだよ？　お兄ちゃんの寝顔はとってもかわいかったんだったんだけど」
「・・・」

「・・・」
「うん？　どうしたの二人とも、そんな疲れた顔をして、どうかしたの？」
　そんな中、一人何もわかっていない笑みを浮かべる隼鷹。こ、この子って・・・
「頼むから、わざわざ誤解を招くような言い方はしないでくれ」
「誤解？」
　さっぱり何にもわかっていない顔だった。それどころかこの娘、さらにこんなとんでもないセリフを口にした。
「でも、私はお兄ちゃん求めるならいつでも大丈夫だよ？」
「はい？」
「なんなら今からでも・・・」
　肌着一枚のしどけない姿のまま近づく隼鷹。
「ストーップ！」
　大和の腕が制止し、何とか事態は沈静化する。
　翔輝はようやくベッドから降りて上着を着込む。そんな翔輝を一瞥して、大和は自分よりも拳ふたつ分くらい小さい幼き隼鷹を睨む。
「それよりも、何であなたが少尉のベッドで寝てるの？」
「え？　だって一人じゃ寂しかったんだもん」
　つまらなそうに言う隼鷹に、一瞬殺意を感じた。そんな髪の毛を逆立てている大和を慌てて制止し、三人は部屋を後にした。
　通路をなんて事のない会話をしながら歩いていると、突然通路に設置してあるスピーカーが起動し、松田の声が響いた。
『乗務員の呼び出しをする。長谷川翔輝航海士。至急艦橋に来れたし』
「ぼ、僕？」
　首を傾げる。今日は非番だから通常業務はないはずだ。なのに呼び出しとはどういう了見だろうか。
「緊急の事態が発生したんじゃないですか？」
　大和の心配そうな言葉にうなずき、翔輝は急いで艦橋に上がった。

階段を駆け上がって、一気に艦橋まで上がる。
艦橋の扉をぶち破って、翔輝は艦橋の中に転がり込んだ。
「艦長！　どうされたんですか！？」
「長谷川君？　大丈夫か？」
「長官！？」
いつもは長官室にいる山本＋宇垣の姿を見て、翔輝は絶句する。
その他基本的に今日は非番であるはずの航海長や他の航海士も大勢いた。
「みんな？　どうしたの？」
「長谷川翔輝航海士」
「はいッ！」
真剣な声に急いで姿勢を正す。その声の主は、松田だった。松田は手に持っている紙を開く。
「艦長？」
松田は翔輝の声を無視し、手元の紙を読み始めた。
「『戦艦『大和』航海士。長谷川翔輝帝国海軍航海少尉。本日ヲ以ッテ帝国海軍航海中尉ニ昇級ヲ命ズ』」
松田の言葉を理解するのに多少の時間を要した。数秒の沈黙の後、翔輝は顔を真っ赤にして喜んだ。
「あ、ありがとうございます！」
「これは『大和』前艦長の高柳大佐からの頼みでな。それを実行したまでだ」
松田は翔輝に昇級書と中尉章を渡した。そして、それと同時に艦橋の中の者全員が敬礼した。山本や宇垣、松田もが敬礼していた。
松田は翔輝を見詰め、静かに言った。
「これからもよろしく頼む。長谷川中尉」
「は、はいッ！」
艦橋に拍手喝采が起きた。それに対し翔輝は見事な敬礼で返した。
空には一点の曇りもなく、まさに快晴だった。
飛び跳ねて喜んでいる隼鷹の横で、大和は静かに微笑んでいた。

翔輝は戦争が始まってから一年、ようやく昇級できた。
今ここに、長谷川翔輝帝国海軍航海中尉が誕生したのだった。

「では、長谷川君の中尉昇級を祝って、乾杯！」
『乾杯！』
艦魂達は長門の呼び声に答え、一気にラムネ（一部酒やお茶）を飲み干す。
今日の主役は翔輝だった。翔輝と仲のいい艦魂達はそれぞれ翔輝の昇級を祝う。
「長谷川少尉――じゃなくて、中尉！　おめでとうございます！」
陸奥がまるで自分の事のように喜ぶ。その横でも「めでたいなぁ」「おめでとーっ！」「おめでとうございます！」「おめでとうお兄ちゃん！」と、伊勢、日向、瑞鶴、隼鷹が叫びを上げる。
一方、大和も「おめでとうございます！」と三七回目の祝福の言葉を放つ。そんな大和の妹の武蔵は、先程から翔輝の背中にへばり付いている。一度だけ「・・・おめでとう」と言ったっきりずっとこの調子だ。
「みんな、ありがとう」
翔輝は嬉しそうに喜ぶ。軍人にとって昇級ほど嬉しい事はない。
「長谷川少尉。おかわりどうぞ」
雪風が新しいラムネを翔輝に渡す。翔輝はそれを笑顔で受け取る。
立ち去ろうとした雪風に、日向が訂正を入れる。
「雪風。もう少尉じゃなくて中尉なんだよ？」
「あ、そ、そうでした！　すみません！」
慌てて謝る雪風に翔輝は「いいよ別に」と微笑む。
「そうだよ。少しずつ慣れればいいんだから。ねぇ少尉」
「瑞鶴も間違えてる」
「あ――あはは・・・」
瑞鶴は苦笑いしてごまかす。そんな仕草に陸奥は笑ってしまう。
「瑞鶴の言うとおり。少しずつ慣れればいいんだから。少尉はそん

な細かい事で怒るような人じゃないからね」
「陸奥。あんたも間違えてる」
長門の言葉に陸奥は恥ずかしそうに沈黙する。
「すみません・・・」
「まぁ、いいからさ」
翔輝ももう苦笑いするしかなかった。
相次ぐ部下達の不祥事に、連合艦隊旗艦である大和はため息する。
「陸奥さんもダメですね。もっと少尉の事を祝福する気持ちが必要なんですよ。私は間違えたりなんかしまないもの。ねぇ少尉？」
「大和。思いっきり間違えてる」
「あ・・・」
「しかも二回。今までで最多記録だよ。や・ま・と・ちゃん？」
陸奥の呆れた言い方も、今の大和に多大なダメージを与えた。あまりのショックにがっくりとうな垂れる。そんな大和の背中を「気にしてないから」と言いながら、ちょっと寂しそうな翔輝がそっと叩く。
そんな大和達の中でも、一部の者はあまり変わらなく翔輝に接している。翔輝の事を《長谷川はん》と呼んでいる伊勢。《航海士》と呼んでいる山城。《お兄ちゃん》と呼んでいる隼鷹。あともう一人、
「・・・翔輝。のどかわいた」
「あ、うん」
背中にへばり付いた武蔵だ。
そんな武蔵を大和は少しうらやましそうに見詰める。
「いいなぁ、武蔵は。名前で呼んでるから階級の変化で呼び方変えなくてもいいから」
「・・・なら、お姉ちゃんも名前で呼べばいいのに」
「それができれば苦労はしないよ」
大和の返事に、まわりは爆笑した。一人、主役であるはずの翔輝だけは意味がわからず笑い損ねていた。

「おっしッ！　今日はとことん飲むわよ！　もうお酒解禁よ！」
「お、お姉様！？　そ、それはいくらなんでも・・・ッ！」
「いいのよ！　ここで飲まずしていつ飲む！　今日は無礼講よ！」
『おおおおぉぉぉぉぉッ！』
「あぁ、もう知らない。私は忠告したからね？」
「陸奥。もう諦めや。今の長門はんはもう止まらないで」
「伊勢・・・」
「ウチらは静かに少尉――やのうて中尉の事をパアッと祝うで」
「うんッ！」
「そうは問屋が卸さないわよ！」
その謎の声の刹那、突然伊勢は何かに押し倒された。そして、伊勢自身はもう理解していた。こんな唐突に自分を襲う者は一人しかいないと。
「伊勢ちゃん！　今日は寝かさないわよ！　たーっぷりお酒を飲まして、べろんべろんに酔わせて、それから、うふふ・・・」
「何やッ！？　その恐ろしい何かを考えとるダークな笑みは！？
一体ウチに何をしようっていうんやッ！？」
「大丈夫。最初は痛いけど、慣れれば気持良くなるから。でもね、本当はそんなのどうでもいいの私が楽しければ全て良し！」
「ええ訳ないやろがッ！　一体何をするつもりなんやッ！？」
「何言ってんの伊勢。そんなの決まってるじゃない。《棒》とか《穴》の話しかないでしょ？」
長門のエロティカルな発言に、伊勢は顔を真っ赤にして、そして力いっぱい抵抗を始めた。
「嫌やッ！　ウチは絶対に嫌やぁッ！」
「ちょっと伊勢ちゃん！　暴れないで！　この日の為に通販で買っといたのよ！」
「何を買ったんやあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
「あら？　知りたい？　うふふ、すぐに教えてあげるわよ。あなたのカ・ラ・ダ・に・ね♪」

「嫌やあああぁぁぁぁぁッ！　ウチの初めては少尉（↑間違い）に捧げるって決めとるんやあああぁぁぁぁぁぁッ！」
「何の話をしてるんだあああぁぁぁぁぁぁッ！」
全く関係ないと思って油断していた翔輝に突然の攻撃。翔輝は顔を真っ赤にして叫んだ。
伊勢はもう今にも泣きそうな顔だった。貞操に危機に必死で暴れる。
「い、嫌ぁッ！　堪忍してぇなッ！　ちょッ！？　そないな所触らんといて――あぁッ！」
早速得意のマッサージ＋くすぐり攻撃に伊勢は大笑いしながら力を抜かれていく。
このまま伊勢の貞操も失われるのかと思われた、その時、
「あ、あのさ扶桑さん。もうそこら辺にしといてくれないかな？」
そう言ってよだれを垂らしながら痙攣する伊勢をかばったのは翔輝。その翔輝の言葉に扶桑はすごく不満そうに唇をゆがめる。
「ダメよ。これからが楽しくなるのに」
「だけど、伊勢は嫌がってますよ？」
「嫌よ嫌よも好きのうち。伊勢はこれでも楽しんでるのよ」
「楽しんでなんかあらへんッ！」
伊勢が渾身の力を振りぼって叫ぶ。その声を味方にして翔輝は続ける。
「ほら、嫌がってますよ？」
「む、むぐぅ・・・」
言い返せなくなった扶桑に、翔輝はそっと諭すように言う。
「あんまり伊勢が嫌がるような事をしていると、そのうち本気で嫌われますよ？」
ががががああああぁぁぁぁぁんッ！
扶桑に雷が落ちたような見えたのは、気のせいだろうか。
ふらふらと扶桑はたじろぐ。
「そ、そんな・・・わ、私は・・・ッ！」

「扶桑さん。もう少しまわりを見ましょうよ」
翔輝の追撃の言葉に、扶桑はついにガックリとその場に崩れた。
少しかわいそうに思えてきたが、ぐったりと横たわっている伊勢を見詰め、これで良かったのだ自分に言い聞かす。
「大丈夫？」
翔輝が声を掛けると、伊勢は「大丈夫やで・・・」と力なく答えた。どうやら相当疲れているらしい。
翔輝がそっと手を伸ばすと、伊勢はそれを掴んで立ち上がる。
「むぐぅっ」
口元についたよだれをそっとハンカチで拭き取ると、「おおきに」と少し恥ずかしそうに礼を言った。
「ウチ、また醜態をさらしてもうたな・・・」
「そんな事ないよ。あれは不可抗力だったんだからさ」
「せやけど、ウチ、あんな姿長谷川はんに見られとうない」
「僕は別に気にしないけど」
「ウチは気になるんや！　ほんま、何であんたはそないに鈍感なんや？」
「・・・？」
まったくわかっていないのか、翔輝は不思議そうに首を傾げる。
そんな翔輝に伊勢はため息するしかなかった。
「お兄ちゃん！」
「うわッ！？」
勢い良く抱きついてきた隼鷹に一瞬転びそうになるが、なんとか堪える。
「隼鷹。いきなり抱きつかないでよ」
「えへへ、お兄ちゃん大好きぃ」
「まったくもう・・・」
幸せそうな笑みを浮かべる隼鷹を見ていると、怒る気力もなくなってしまう。
翔輝がため息すると、伊勢もそっと翔輝の右腕に抱き付いた。

「い、伊勢ッ！？」
「隼鷹はんだけなんてズルいわぁ。ウチもギュッとするんや」
そう言ってスリスリと身体を摺り寄せる伊勢。隼鷹ならともかく同年齢（外見は）の伊勢にそんな事をされればさすがの翔輝も顔を真っ赤にして慌てる。
「ちょっと伊勢！　離れてってばッ！」
「嫌やわ。ウチはこうしてたいんや」
「伊勢ぇッ！」
「あぁッ！　何してるんですか！」
大和が血相を変えて飛び込んでくると、慌てて隼鷹と伊勢を翔輝から離す。
助かったと思う翔輝とすさまじく不満そうな隼鷹と伊勢。そして、ものすごく怒っている大和。
「抜け駆けは禁止です！」
「そないな事関係あらへん。ウチはウチの好きなようにさせてもらうどす」
「私だってお兄ちゃんともっとギュッとするの！」
「ダメなものはダメですッ！」
睨み合う三人に、翔輝は力なくため息する。
「不毛な争いですね」
「まったくだよ・・・って、陸奥？」
「はい？」
「何で僕の手を繋ぐ必要があるの？」
翔輝の視線はいつの間にか握られていた右手に注がれる。その手を握るのは白く細い手。視線を上げると、そこには頬を赤らめる陸奥の顔が。
「こ、これはこれです」
「意味わかんないよ」
翔輝が再びため息すると、
「あぁッ！　陸奥ズルいぃッ！」

「陸奥さん！　何してるんですかッ！」
「陸奥！　抜け駆けは許さへんよッ！」
大和、伊勢、隼鷹が総攻撃を掛けてきた。すさまじい集中砲火にさすがの陸奥も・・・
「いつもいつも三人ともズルいのよッ！　私はあんまりできないのッ！」
見事に逆ギレした。
「少尉（↑間違い）にはいつも大和ちゃんがいて、伊勢もよくいるし、さらに最近は隼鷹まで！　これじゃ私の入る余地なんてこれっぽっちもないじゃない！」
「そんなの知らへんよ。ウチには関係あらへん」
「伊勢！　あんた私の親友じゃなかったの！？」
「今は恋のライバルや」
「う、裏切り者ぉッ！」
ブチギレた陸奥は伊勢に飛び掛った。いつもはおとなしい方の二人の取っ組み合いのケンカに、さすがの大和も手が出せずに呆然とする。隼鷹にいたっては右往左往している。
長門や扶桑が慌てて止めに入るが、二人のすさまじいケンカに入る余地なんてなく機会をうかがい続ける。
「お、おいッ！　やめろよ二人とも！」
「・・・放っとけばいい」
そう言って突然横に現れたのは武蔵。相変わらず神出鬼没な奴だ。しかも当然のように手を繋いでるし。
「そんな事できないよッ！」
「・・・止められるの？　あの二人を」
そう言って見詰める先では、いつの間にか軍刀を抜き放ってすさまじい剣劇を繰り広げる陸奥と伊勢。忘れていたが、あの二人も海軍軍人。刀の扱い方は熟知しているらしい。
風を切る音や刀と刀が弾ける音が響く。というか速すぎて剣先が見えません。

「む、無理・・・だね」
「・・・なら、わざわざ翔輝が危険を冒す必要はない。勝手に共倒れすればいい」
「そんな事言わないで！　何とかしてよ！」
「・・・無理」
「頼むからさ！」
翔輝が必死に頼むと、一瞬武蔵はうなずきかけたが、慌てて首を固定する。
「・・・敵は少ない方がいい。共倒れしてくれれば万々歳」
「陸奥と伊勢は敵じゃないでしょ！」
「・・・恋においては敵なの」
「はあ？」
「・・・翔輝。女は、己の志の為に剣を持って戦わなければならない時がある。あの二人は今がそうなの」
「かっこいい事言ってるけど結局は放置するって事だよねッ！？」
「・・・（コクリ）」
「うなずくなぁッ！」
頑なに仲裁する気のない武蔵。
翔輝は他に止められそうな人を捜すが、金剛は榛名と共にいつの間にか消えてるし、連合艦隊最強の翔鶴はここにはいない。他にあの二人を止められそうな者は・・・武蔵しかいなさそうだ。
「なあ、頼むよ」
「いくら翔輝の頼みでも、これだけは聞けない。私にも曲げられぬ想いがある」
「・・・どうしても、ダメ？」
「・・・ごめんなさい。でも、これだけは」
「止めて。これが最後通牒だからね」
「・・・翔輝？」
いつになく冷たい翔輝に、武蔵は怪訝そうな顔で彼を見詰める。
翔輝は、無表情だった。

「いい？　ここまで言ってもまだ仲裁しないって言うなら――」
「・・・だから、私は嫌だって何度も」
「――僕は明日から武蔵の事を《二号艦》って呼ぶ事にする」
「・・・」

「・・・エクスカ〇バーッ！」
ドゴオオオオオオオォォォォォォォォォンッ！！！！！
まばゆい金色の閃光が二人もろとも部屋中を吹き飛ばした。
立ち込める煙が晴れた後には、見るも無惨に破壊された部屋と転がる艦魂達。その中には陸奥と伊勢、さらには大和達も気絶していた。
一瞬で部屋を崩壊させた無表情少女は最強の剣士が持つ宝具である黄金の剣を振り下ろすと、剣は消えた。
「・・・風王結界（イン〇ジブル・エア）発動」
そう小さくささやくと、隣で呆然としている翔輝を見上げる。
「・・・問題解決」
「してないよねッ！？　余計悲惨な状況になってるよッ！」
「・・・崇高なる目的の為なら、多少の犠牲はやむを得ない」
「犠牲は出しちゃダメだよッ！　つーか何で君が伝説の剣を持ってるんだよッ！」
「・・・《約束された勝利の剣》――エクスカ〇バーくらい、連合艦隊次席指揮官なら当然準備できる」
「無理だよ！　普通は絶対に無理だからね！」
「・・・《何なら全て遠き理想郷》――ア〇ァロンでも出す？」
「もう突っ込まないからねッ！　それよりこの状況どうするんだよッ！」
「・・・」
「無視すんなあああああぁぁぁぁぁぁッ！」

結局、その後意識を取り戻した大和達と一緒に壊れた部屋の修理

た掃除などの後片付けをする事になり、全てが終わったのは太陽が昇り始めた頃だった。

第八章　第七節　ガダルカナル島撤退作戦

一九四三年二月、ガダルカナル島撤退作戦――ケ号作戦が発動された。このガダルカナル島撤退作戦の《ケ号》とは、《捲土重来（けんどじゅうらい）》の故事成語から来ている。意味は一度戦いに敗れた者が再び勢いを盛り返して攻め寄せてくると言う意味だ。平たく言えば縁起をかついだ作戦名だった。

この一ヶ月前、南東方面艦隊司令長官の草鹿任一（くさかじんいち）中将が陸攻隊による大規模な夜間雷撃作戦を行い、敵重巡洋艦一隻撃沈。駆逐艦一隻大破という少ないながらも勝利を得た。この大規模な空襲に米軍は『日本軍がガダルカナル島で大規模な反攻作戦を考えている』という誤解を与え、敵艦隊は戦力を立て直す為に後方に後退した。これにより、ガダルカナル島の撤退作戦は思わぬ幸運を受ける事となった。

ちなみにこの草鹿中将は南雲中将が機動部隊を指揮していた頃彼の参謀長として活躍した草鹿龍之介少将のいとこにあたる。

一日、駆逐艦二〇隻という大高速艦隊がガダルカナル島沖に向かって出撃した。目的はガダルカナル島にいる味方陸軍の救出である。陸軍司令部の反対を押し切って、山本長官が決断して実行された。しかし海軍司令部でもソロモン海の数々の戦いで駆逐艦失っていたので、撤退作戦などに使って失う事を恐れて低姿勢だったが、山本が一喝してさらに予定以上の多くの駆逐艦を派遣した艦隊である。味方を見捨てるなど、彼にはできなかったのだ。

大救出艦隊は一路ガダルカナル島に向かって三〇ノット以上の高速で海を翔けて進んでいた。その中に、駆逐艦『巻雲』の姿があった。『巻雲』の艦魂は以前敵空母『ホーネット』と接触し、日米戦争に疑問を持った一人だ。あれからもずっと日米戦争に疑問を抱いていたが、それ以降戦闘作戦がなく、ひたすらガダルカナル島の輸送作戦に参加していた。そして、今回の救出作戦にも参加していた。

巻雲は艦橋ではなく防空指揮所にいた。先程敵機の空襲を受け、妹艦『巻波（まきなみ）』が大破。航行不能になって落伍してしまったのだ。

「巻波、大丈夫かなぁ？」

巻雲は頭の包帯を押さえながらつぶやく。巻雲自身も命中弾はないが至近弾を受けてしまった。航行や戦闘に問題ないが、艦魂には痛みが残った。

「いったー」

苦笑いしながら頭を押さえる。しかし、痛みに耐えながら、快晴の青空を見詰める。

「この作戦が成功すれば、多くの友軍を助ける事ができる。でも、失敗すれば・・・」

この作戦に参加している多くの艦魂や将兵が、その尊い命を落としてしまう・・・それだけは、何としても阻止しなくてはならない。この艦隊には自分の姉や妹も大勢参加している。もう誰一人、傷つけたくなかった。

「この作戦、誰一人死なずに成功させる。必ず」

巻雲は水兵用の軍帽を深く被り、まばゆく輝く南国の太陽の日差しを見詰めた。

その夜、艦隊はなんとか無事にガダルカナル島沖に到達。内火艇や小型艇を使って島の兵を次々に救出した。その数は約五〇〇〇名。大成功と言えるものだった。だが、まだ作戦は終わっていない。無事に帰るまでがこの作戦なのだ。

『巻雲』も大勢の兵を救出した。甲板では痩せこけた陸軍兵達が支給された握り飯を一心不乱に食べていた。そんな彼らを見詰め、助けられて良かったという気持ちと、こんなになるまで何もできなかった自分への憤りを感じていた。

艦隊は急いで戦闘海域を退避する為、全速力で撤退を開始した。

「ふぅ・・・」

軍帽を脱ぎ、さらさらと流れる髪を重力に任せて流す。空には満

月が輝き、優しい光が柔らかな髪を煌かせる。すると、巻雲は空を寂しそうに見上げた。

「こんなきれいな星空だったなぁ」

巻雲は寂しそうに思い出した。この手で二人の空母を殺した事を。一人はミッドウェー海戦で奮闘し、その後雷撃処分の命を受けた『飛龍』。巻雲はその『飛龍』の雷撃処分を行った艦だった。そして、もう一人は敵空母『ホーネット』だ。彼女と過ごした時間。巻雲は決して忘れなかった。

飛龍とはあまり会話はした事はなかったが、とても仲間思いの良き軍人だった。ホーネットは祖国の為に戦い抜いた真の戦士だった。どちらも、亡くすにはあまりにもおしい者だった。

巻雲は自分の通って来たあまりにも残酷な人生にため息をついた。一体、いつになったら、この悲しい戦争は終わるのだろうか。いつになったら、アメリカという騎士道溢れる国と再び友好国になれるのか。もしかしたら、もうそんな事できないかもしれない。でも、自分は信じたい。いつか平和になった世界で、多くの国々が力を合わせて生きる時代を。その為に、早くこの戦争を終わらせたい。それだけが、彼女の唯一の願いだった。

「飛龍さん。ホーネットさん。私は、この戦争を終結させる為に、この身を捧げます。お国や、天皇陛下の為でなく、平和の為に・・・」

巻雲は輝く月に向かって敬礼した。輝く月は、いつまでも彼女を照らし続けた。

しばらくし、巻雲は防空指揮所を下りようと踵を返した。その時、何か海面が光ったのに気づいた。驚き、急いで確認すると、その正体に気づき、絶句した。

それは海に浮かぶ爆弾――機雷だった。しかも、その機雷に全く気づかずに向かっている駆逐艦が見えた。それは義姉艦――『雪風』だった。

「雪風姉さん！　危ないよ！」

叫ぶがそんな声に気づく訳もなく、『雪風』は進み続ける。巻雲は悔しそうに唇を噛んだ。その時、

「艦長！『雪風』前方に機雷発見！『雪風』は全く気づいていません！」

隣にいた見張り兵が気づき、艦橋に伝えた。巻雲は急いで艦橋に戻ると、艦長が苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「『雪風』に発行信号！『貴艦前方ニ機雷在リ。至急停止又ハ回避セヨ』！」

『巻雲』は急いで発行信号を送った。すると、『雪風』は急激に速度を落とし始めた。だが、艦隊はあまりにも高速で進んでいた上、通常以上の乗員が乗っている為、重みでなかなか速度は緩まない。しかもちょうど海峡を通っていた為、艦隊は密集していて、横に回避する事すら不可能だった。そんな事をすれば、玉突き事故が起きる。

艦隊は『雪風』の減速に対応できず、パニックが起きていた。このまま『雪風』が進み、機雷が爆発すれば、周りの艦数隻にも被害が出る。さらに後方の部隊が衝突する恐れもあった。このままでは、艦隊は一挙に壊滅する。

巻雲は絶句していた。みんな一緒に帰ろうと、出撃した時に約束したのに、こんな所でその約束が破られるなんて、絶対に嫌だった。

艦長はずっと沈黙していたが、最後の決断を下した。

「『雪風』には我が艦以上の陸軍兵を救出され、爆発すれば最悪の被害になるだろう。だが、我が艦は陸軍兵は少なく、『雪風』にも近い」

「艦長？　何を・・・？」

参謀はもうわかっていた。だが、ちゃんと艦長の口から聞きたかった。艦長は真剣な顔で言った。

「前進全速！『雪風』の前方に出るんだ！　我が艦を、『巻雲』に機雷をぶつけて被害を最小限にするんだ！」

艦長の命令に艦橋は沈黙した。が、

「了解！　艦長！　やりましょう！」
副長の声に他の者も覚悟した。そして、巻雲も・・・
「雪風姉さんは、大和司令の従兵。そして、大和司令は私や秋雲姉さんの恩人。そんな人の大切な人を、みすみす殺すわ訳にはいかない。それに・・・もう、誰かが傷つく所は、見たくない」
その思いが、全てだった。
『巻雲』は全速力で海を翔けた。すぐに『雪風』を通り過ぎた。その時、『雪風』の防空指揮所にいた少女と目が合った。彼女は『巻雲』の行動に驚愕していた。口元を見ると何か言っているようだ。よく見ると「やめて」と言っているようだった。巻雲は微笑した。そして、前方の機雷を見詰める。徐々に近づく機雷を見詰め、覚悟を決めた。そして・・・

「巻雲！　やめて！」
雪風は悲鳴を上げる。このまま行けば『巻雲』が機雷に接触して、
『巻雲』は・・・
嫌だ！　そんな事考えたくない！
「やめて！」
雪風は絶叫する。その間も、『巻雲』は前進を続け、そして・・・
ドガアアアアァァァァンッ！
「ひっ！」
『巻雲』の側面に水柱が上がり、雪風は悲鳴を上げた。

『巻雲』はうまく側面で爆発させた為、被害人数は少なかった。だが、『巻雲』の被害は甚大だった。側面に大きな穴が開き、そこから海水が浸水。少しずつ沈み始めていた。
「巻雲！　どうして・・・ッ！」
雪風はぐったりしている巻雲を抱き抱えながら叫ぶ。そのまわりには全駆逐艦の艦魂が集まっていた。みんな血まみれの巻雲の姿を見て言葉を失っていた。多くの者が涙を流していた。

「バカッ！　どうしてこんな」
「だって・・・もう誰かが傷つくのを・・・見たく・・・なかったんだもん・・・」
「だからって・・・ッ！」
「そうよ！　機雷なんて、私達駆逐艦が触れれば沈むのは確実！それに自分から飛び込むなんて！」
巻雲の妹の風雲（かざくも）が叫ぶ。そんな彼女に、巻雲は静かに微笑んだ。
「それに、私はもう、戦いたくないの」
『なっ！』
巻雲の言葉に、全員は言葉をなくす。兵器として生まれてきた駆逐艦の艦魂が、戦う為に生まれてきた彼女が、戦いたくない。それは本末転倒の事だった。だが、
「私は駆逐艦の艦魂・・・敵を駆逐する為に生まれてきた・・・戦闘艦の艦魂・・・でも・・・私は戦いたくなかった・・・最初からそう思ってたけど・・・ホーネットさんと会ってから・・・本当にそう思った・・・だから・・・私は日米の友好を取り戻す為に・・・ここまで来た・・・でも・・・もう無理みたい・・・」
「バカッ！　なら、自分の決めた事は最後まで貫きなさい！」
雪風は涙を流しながら叫ぶ。巻雲は力なく首を振る。
「私はもうダメ・・・でも・・・日米戦争に反対していた人は・・・大勢いる・・・そして・・・この戦争を終結させようと・・・努力している人もたくさんいる・・・それだけで十分・・・」
「巻雲・・・」
その時、艦の傾斜が速度を増し、艦が沈み始めた。本格的に沈没が始まったのだ。
巻雲は駆逐艦達を見回し、そっとつぶやいた。
「さぁ・・・もう行って・・・もう沈む・・・雪風姉さん・・・大和司令に伝えて・・・「今まで本当にありがとうございました」って・・・」
「・・・わかった」

雪風は巻雲の身体を床に下ろした。
駆逐艦達は静かに敬礼し、次の瞬間、光に包まれた。
巻雲は静かに目を閉じた。
「やっと・・・これでもう・・・戦わなくていい・・・良かった・・・」
感じる。体が次々に水に沈んでいくのを。冷たい海に溶けていく。
その時、思い浮かんだのは、優しく微笑んでくれた尊敬する上官。
「大和司令・・・ここで落伍する巻雲を・・・お許しください・・・これから・・・戦争は激化するでしょう・・・でも・・・がんばってください・・・雪風姉さんやみんなと共に・・・」
――駆逐艦『巻雲』、世界海軍で唯一二隻の空母を処分した駆逐艦。その艦魂である巻雲は多くの出会いを通じ、この戦争の終結に必死となって駆け回った。彼女が思い描いた世界は一体どんなのか、それはもう、わからない。けれど、彼女の想いは、多くの者の中に受け継がれていき、役目を終えた『巻雲』は他の駆逐艦達に見送られ、静かに、そしてゆっくりと、深い海の底に沈んで逝った――
第一次撤退作戦は『巻雲』が沈没したが、作戦は成功し、約五〇〇〇名の陸軍兵を収容。安全海域まで後退した。
第二次撤退作戦は四日に行われ、駆逐艦二〇隻が参加した。駆逐艦一隻が空襲で航行不能となって別の駆逐艦に曳航されて戦線離脱したが、これも無事に終わり、約五〇〇〇名を救出した。
最後の第三次撤退作戦は七日に行われ、駆逐艦十八隻が出撃。今度は空襲を受ける事なく、しんがりの約二五〇〇名を救助し、帰還した。
このケ号作戦はミッドウェー海戦以降戦術・戦略の完全勝利が全くなかった日本軍にとって、海戦以降初めての完全勝利と言えるものだったが、結局は撤退作戦。ガダルカナル島を失い、日本軍は南太平洋の勢力のほとんどを失い、これ以降南太平洋とガダルカナル

島は、ラバウルの海軍航空隊に委ねられた。

大和は作戦の成功を喜んだが、巻雲の死を聞いて悲しんだ。彼女の死は決して無駄にしない。大和は心の中で誓った。

第八章　第八節　新連合艦隊旗艦　戦艦『武蔵』

一年にも満たず、とうとうこの日が来た。
時に一九四三年二月十一日、連合艦隊旗艦が、戦艦『大和』から、妹艦『武蔵』に移された。
大和には多くの花束が贈られた。短い間だったが、大和も一生懸命に旗艦を務めてきていた。それはみんなわかっていた。
武蔵にも花束が贈られる。そして、大和と武蔵は強く握手した。
その瞬間、『大和』から降ろされていた山本長官の大将旗が、『武蔵』のマストに掲げられた。
この瞬間、連合艦隊旗艦は、『大和』から『武蔵』に移動された。
山本や宇垣以下司令部要員も全て『武蔵』に移り、新たな司令部が発足された。

夜。
艦魂達は武蔵の旗艦就任を祝っていた。
「おめでとう武蔵！」
「・・・どうも」
長門の強烈な攻撃も、ひらりとかわす。さすがである。
みんなにちやほやされる武蔵。そんな彼女から遠く離れた部屋の隅で、一人の艦魂が暗い雰囲気を放出していた。
「あぁ、これで私は普通の戦艦に、大将も中将に格下げ。もう連合艦隊旗艦なんて大層な身分も言えないや」
大和は自分よりも優秀で、自分よりもずっと連合艦隊旗艦に向いているであろう妹を見詰め、再び大きなため息を吐いた。
「おい大和。せっかくお前の妹の武蔵が旗艦になったんだぞ？　もう少し喜べよ」
ラムネを二本持った翔輝が大和の横に腰を降ろす。大和は翔輝を一瞥するが、再び視線を下に戻す。そんな大和を見て、翔輝もため

息してしまう。
「大和。元気出せって。ほら、これやるから」
翔輝はラムネを一本渡す。大和はそれを力なく受け取った。
「中尉はいいですね。昇級したんですから。私は降格ですよ？　降格」
「まぁ、仕方ないよ。司令部の設備は向こうの方が上なんだから。わかってた事だろう？」
「そうですけど、やっぱり・・・」
「妹の昇級が喜べないのか？」
「喜ばしいし、嬉しいですよ？　でも、これからは連合艦隊旗艦なんて名乗れないし、武蔵のの下で働くんですよ？　姉としては複雑です」
「まぁな。でも、これからは前の武蔵みたいに連合艦隊参謀長とか、次席指揮官とでも名乗れば？」
「・・・そうします」
大和はラムネを開けて飲み始めた。その時、
「・・・翔輝」
武蔵はいつの間にか翔輝の隣に座っていた。もうすっかり慣れてしまった翔輝や大和は全く動じない。
「どうしたの？」
翔輝は笑顔で訊く。すると、武蔵は大和を見詰め、とんでも発言をした。
「・・・姉さん。もう翔輝に近づかないで」
「「・・・はい？」」
翔輝と大和は同じ声を出した。「何言ってんだこの子は」と言いたげな目を向ける。が、武蔵は動じない。そして、おもむろに懐から一枚の書類を取り出し、大和に突き付けた。
「・・・翔輝に近づく艦魂は私だけ。それ以外の艦魂は近づく事を禁ず。例え姉さんだとしても。これはたった今連合艦隊旗艦発令の正式な命令になった」

「「何ですと!?」」
大和は武蔵から書類をふんだくり、すさまじい速度で読む。そして、
「ふざけるなあああぁぁぁッ!」
ビリビリと書類を真っ二つに裂き、武蔵に突っ返す。そのまま武蔵を睨み、「こんなの聞ける訳ないでしょッ!」と叫ぶ。
武蔵は予想していたのか、全く驚く様子もなく、無残に引き裂かれた書類を拾う。
「・・・命令違反は軍規違反。軍法会議もの」
「こんなの命令じゃないわよ!」
「・・・連合艦隊旗艦のこの私が決定した事は絶対。そして、あなたは今連合艦隊旗艦のこの私の命令に背いた。次席指揮官から通常艦魂に格下げ」
「何よそれ! あんた知ってる!? そういうのを職権濫用って言うの!」
「おぉ、大和にしては明確な事を」
「『しては』は余計です」
「こりゃ失敬」
二人の会話に入る二人を見て、武蔵はめったに変えない表情を不機嫌そうにしかめる。
「・・・追加。あなたには一週間司令部の雑用係――奴隷になってもらう」
「何よそれ!」
「・・・さらに追加。金剛に海軍精神を叩き込んでもらう」
その言葉に大和は真っ青になった。金剛の海軍精神注入とは、いわゆる下士官流の体罰である。一瞬、下士官に鉄パイプで腰を殴られる水兵を見た時の事が頭にフラッシュバックした。真っ青から蒼白に変わる。
そんな完全に行動不能になった大和を一瞥し、武蔵は翔輝の手を取った。

「・・・翔輝。あなたもついでに『武蔵』に来て」
「それは絶対にダメッ！」
早々復活した大和は絶対防衛線とも言えるそれを全力で阻止する。
対する武蔵は涼しい顔で、
「・・・追加。扶桑に一日中体を舐め回させる」
「そ、そんなの、何ともないわよ」
翔輝は大和の膝が震えてるのに気づいた。
「・・・追加。金剛、榛名、翔鶴に一日中吊るし上げさせる」
「・・・」
ついに沈黙する。悔しそうに武蔵を睨む大和。だが、どこか恐怖を感じているようだ。自分の妹が権力というものを手に入れ、本当の姿を現した事に。
「あ、あの武蔵？」
「・・・心配しないで。翔輝には指一本触れさせない」
「あ、あのね」
「・・・何？」
純粋な瞳が向けられる。邪心のない瞳は全てを見透かしたような透明さで、翔輝を見詰める。そんな瞳に見詰められ、何もできない翔輝。両者しばらく見詰め合っていたが、それは突然破られた。
「討ち入りです！」
突然の声に振り向くと、そこには多くの艦魂がいた。
大和の他に長門、陸奥、伊勢、隼鷹、雪風を中心とした翔輝防衛連合軍だ。長門や金剛は呆れた視線を送っている。その他、翔輝に日頃からお世話になっている駆逐艦の艦魂の十数名参加。潜水艦達もダークなオーラを放っている。
武蔵ＶＳ翔輝防衛連合軍（大勢）。完全に武蔵の方に分が悪い。
が、
「・・・雑魚がいくら集まった所で、所詮は雑魚。バカ＋バカ＝天才にはならない。むしろ余計バカになる」
涼しい顔で反撃する武蔵。まだ何か策があるのだろうか。

武蔵を見て、大和も極力涼しい顔で返す。
「あのね武蔵。ことわざにあるでしょ？《枯れ木も山の賑わい》って言葉もあるのよ？」
「いや、大和ちゃん。それはおかしいから。《枯れ木も山の賑わい》はつまらない物でもないよりはマシっていう意味で、確実にバカを認めてるよ？」
「あ・・・」
陸奥のツッコミに、大和は威勢を失う。
「それを言うなら《塵も積もれば山となる》や」
「伊勢ナイス」
伊勢と陸奥はお互いにニヤリと笑う。
「むーっ！　お兄ちゃんを返せ！」
隼鷹が武蔵に激怒するが、
「・・・」
「あぁッ！　無視した！　無視した！」
武蔵はお得意の『無視攻撃』でものともしない。そんな態度を続けていた為、武蔵のまわりは敵だらけになってしまった。
「な、なぁ武蔵。さすがにこれはヤバイって。あっちは数に物を言わせて来るつもりだよ」
「・・・人海戦術。無駄な事を。鎧袖一触で蹴散らしてくれる」
そう言って、武蔵は腰の拳銃を抜いた。しかも二丁。
「・・・拳銃の腕には自信がある」
「コラッ！　拳銃なんて物騒な！　それにたった二丁じゃ無駄だよ！」
「・・・問題ない。私の軍服には拳銃が全部で七丁隠してあるし、短剣は十本以上ある。翔鶴が武術の天才なら、私は頭脳と武器の天才」
自分で自分を天才と言っている事にツッコミを入れるべきか、そんな歩く武器庫のような事にツッコミを入れるべきかで迷う翔輝。
その間もじりじりと包囲網は狭まって来る。ヤバイ。ヤバイよ。

「・・・安心して。翔輝は私が守る」
「あ、あのさ。僕はみんなと仲良くしたいから、面会謝絶ってのは嫌なんだけど」
「・・・そうなの？」
「そうなの」
武蔵はしばらく沈黙したが、やがて拳銃をしまった。
「・・・翔輝に無理強いをさせるつもりはない。翔輝のしたい事を私は推進する」
「武蔵・・・」
こうして、第一次武蔵ＶＳ翔輝防衛連合軍との戦いは終わった。
まだ始まっていないと言えばそうだが、でも無血終戦って事でひとつ。
翔輝の仲介を経て何とか事態を沈静化したが、依然ピリピリとした雰囲気は変わらず、武蔵は完全に孤立していた。だが、そんな武蔵に加勢している人物が問題だった。
「まぁ、みんな落ち着いてさ」
「どうして中尉は武蔵をかばうんですか？」
大和が不機嫌そうに見詰める。それは全員の気持ちだった。全員の冷たい瞳に翔輝は苦笑いする。
「あのさ武蔵。旗艦の権限をそんな事に使わないんでほしいんだけど」
長門の注意を、武蔵は無視した。
そんな雰囲気の中、ため息ついて大和は翔輝の横に腰を降ろした。
「まったく、武蔵は何をやらかすか読めなくて困ります」
「まぁ、でもそこがあいつらしいと言っちゃあね」
「だからどうしてそんなに武蔵の肩を持つんですか？」
「べ、別にそういうつもりじゃ――」
「私より武蔵の方がいいんですか？」
「それは比べるもんじゃないでしょ？」
「ふんです」

不機嫌そうにそっぽを向く大和に苦笑い。が、そこに、
「・・・翔輝」
突然武蔵が翔輝の背中に抱きついた。その行動を見て、大和、陸奥、伊勢の表情が凍り付いた。
「む、武蔵？」
「・・・ぽかぽか」
「あ、そうなの・・・？」
「・・・うん。私、ここ好き。ぽかぽかで優しい」
「そうなんだ・・・」
武蔵を背中にくっ付けたまま翔輝は大和達の方を向くと、大和達が絶対零度の視線を送っていた。
「な、何？」
「中尉って、本当に武蔵に甘いですよね」
うなずく一同。そんな大和達を見て首を傾げる。
「そ、そうかな？　そんな事ないと思うけど」
「甘すぎです。ガムと同時にチョコを食べるくらい甘いです」
「いや、それガムが溶けるから」
翔輝のツッコミに一瞬大和は「むぐ・・・」と詰まるが、すぐに反撃する。
「ともかく。中尉はもっとビシッとするべきです」
「うーん、大和がそこまで言うなら――あの、武蔵？」
翔輝は降ろそうと武蔵に声を掛けると、
「・・・翔輝。大好き」
微かに表情をほころばせる武蔵を見て、翔輝は嬉しそうに笑った。
そんな翔輝の後頭部に大和のチョップが炸裂した。
「な、何だよ・・・」
「本当に甘いです」
呆れる大和はもう何も言わなかった。その横では陸奥と伊勢が同じような顔をしていた。翔輝はそんな三人を一瞥するが、すぐに武蔵を話し始めた。

大和はふと気づいた。
最近、翔輝が自分とより武蔵と接している事が多かった。
翔輝の背中を独占している自分をはるかに凌ぐ優秀な妹を見て、大和は再び大きなため息をした。

わいわいと騒いだ祝賀会は無事に終わり、翔輝と大和は翔輝の自室に戻った。そこまでは良かったのだが。
「もう一回言ってくれる？」
大和はこめかみに青筋を浮かべて目の前の少女に問う。
「・・・だから、今日から私もここで寝るって言ったの」
武蔵が先回りして翔輝の自室にいたのだ。それはまだ良い。だが、今の爆弾発言で大和との間にすさまじい睨み合いが始まったのだ。
大和は必死に怒気を堪えて平静を装う。しかし、傍から見れば噴火寸前の危険な火山を思い浮かばせる。一方、武蔵の方はどこまでも深く冷たい海のようだった。そんな天地ほどの差がある二人の間に立って、翔輝は何とか事態を収拾しようとするが、大和がそれを遮る。
「どうしてあなたがここで寝るの？　ここは『大和』。『武蔵』じゃない。それにあなたにはあなたの寝室が向こうにあるでしょ？」
「・・・関係ない。私は翔輝と寝たいの」
「絶対にダメ」
「・・・お姉ちゃんにそんな権限はない。あるのは翔輝か、連合艦隊旗艦のこの私」
「ここで旗艦は関係ないでしょ？」
「・・・関係大あり。私はこれからも艦魂の会議はここ『大和』の第三会議室で行うつもり」
「へぇ、何で？」
「・・・人間である翔輝は『武蔵』には来れない。だから」
なるほど。そういう理由なら反対する必要はない。大和はそう思った。だが、

「それはわかった。でもそれがどうやったらここで、中尉と寝る事に繋がるのか、しっかりと説明して」
「や、大和・・・」
あくまでも徹底排除の姿勢を崩さない大和を見て、武蔵はわざとらしく大きなため息を吐いた。
「・・・旗艦自体は『武蔵』に移行したが、司令部の機能は『大和』に残る。司令部に近い方が有事の際便利だから」
「なるほど。指揮官として当然の判断ね。なら私も協力を惜しまないよ。あなたの為に特別に寝室をあてがってあげる」
「・・・結構」
「やっぱり中尉と寝たいだけじゃない！」
大和の叫びも無視し、武蔵は翔輝を見詰める。その視線は「ダメ？」と聞いているようだった。翔輝は静かに微笑んだ。
「別に僕は構わないよ。武蔵の好きにして」
「中尉!?」
「・・・協力に感謝する」
大和はかなりの不満があり、その後すぐに翔輝に詰め寄ったが、
「そこまで妹を邪険にしなくてもいいだろ？」と言われ、口をつぐんだ。
三人が寝る支度を始めると、さらにもう一人の来訪者が現れた。
「お兄ちゃーん！　一緒に寝よ！」
翔輝派の中で最も純粋な心を持った少女――隼鷹だった。
「隼鷹か。今日は武蔵もいるぞ」
その言葉に、隼鷹は心底嫌そうな顔をした。武蔵と視線が合うと、武蔵は会釈したが、隼鷹は顔で《ノー》というの送った。が、武蔵は無視した。隼鷹は仕方なく諦めた。
今日も隼鷹はかわいいクマが描かれた西洋風のかわいい寝巻（パジャマ）を着ている。大和も白い寝巻きに着替えた。だが、一人だけ外れている奴がいる。
「武蔵？　それでいいの？」

「・・・何か、変？」
「いや、別に、変じゃないけど」
武蔵は別に着替える事はせず、ただ上着を脱いだだけだった。上着の下に着るワイシャツとズボンという格好。翔輝の経験上この格好は仮眠する時の基本的な服装だ。普通に寝るなら寝巻に着替えるのが普通なのだが。
「いつもそんな感じで寝てたの？」
「・・・そう。すぐに動けるし、あまりベッドで寝てなかったから便利」
「ベッドで寝てなかったって、ソファで寝てたの？　何で？」
「・・・有事の際すぐに飛び起きて司令部に駆け込む為。戦場では何が起こるかわからないから」
「立派。立派だよ君は。ついこの前まで同じ旗艦をやっていたある人物は毎日布団の中で爆睡してたのに」
翔輝が冷たい視線を向けると、その誰かさんはもう布団の中に潜っていた。相変わらず感のいい奴。
「ねぇねぇお兄ちゃん。私もう眠いよ。早く寝よ」
「え？　ちょっと待って――武蔵」
翔輝の声に上着を椅子に掛け終えた武蔵が振り向いた。
「なぁ、どこに布団敷く？　大和の横でいいか？」
基本的な事を訊いたはずなのに、武蔵は「何をバカな事を」と言いたげな瞳を向けて来た。
「・・・私は翔輝と一緒に寝る」
「だから、それをどこに敷くのかって――」
武蔵は少し恥ずかしそうに顔を赤らめて、言った。
「・・・翔輝と同じ布団で寝る」
「え・・・」
翔輝の顔から笑顔が消えた。予想外の回答に思考が完全に停止しているようだった。だが武蔵は困惑していた。
「・・・さっきから言ってる」

沈黙が降りた。翔輝はしばらく考え込むと、「あっ！」と声を上げてようやく気づいた。そして、なぜ大和があそこまで反対したのも、

「い、いや、それはちょっと・・・」

「・・・何で？」

「だ、だって・・・ねぇ？」

「・・・私の好きにしてって言った」

「そ、それは・・・」

「だから私は反対したのに」

大和がいい気味だと言いたげな冷たい視線を向ける。そんな視線に苦笑いしかできない翔輝。

結局、武蔵は断固として譲らず、翔輝は諦めた。だが、一人だけ大和以上に猛反対している人物がいた。

「お兄ちゃんと一緒に寝るのは私だけだよ！」

隼鷹は今にも腰のホルスターから拳銃を抜きそうな勢いだ。まだまだ子供なので歯止めが利かないのだろうが、あまりにも危険だ。

「じゅ、隼鷹！？　やめろって！」

「お兄ちゃんは渡さないから！」

顔を真っ赤にして怒る隼鷹に、「はぁ」と殺意を持たせるような呆れたため息をする武蔵。その行動に隼鷹はキレた。

「私だって、怒るんだもん！」

「隼鷹！　落ち着けって！」

隼鷹は顔を真っ赤にして叫ぶ。そんな隼鷹の声を聞いて飛び起きる大和。あまりの怒気に驚く翔輝。そして武蔵は、

「・・・消すよ？」

全く持って全然余裕だった。

涼しい顔を崩さない武蔵を見て、隼鷹はついに実力行使に出た。

「バカにするな！」

隼鷹の手が拳銃のグリップを握った。刹那、武蔵の姿が一瞬で消え、次の瞬間には隼鷹のすぐ目の前に立っていた。しかも、その手

には二丁の拳銃が。
「・・・武器を抜いたという事は、殺られるのも覚悟の上と判断する」
武蔵は冷たい瞳を向けたまま言い放つ。いつもと同じ口調なのに、なぜか凍て付くような恐怖を感じる。無表情と感情のない声、そして微動だしない拳銃を見るとかなり怖い。そんな武蔵に睨まれた隼鷹は目の縁にいっぱいの涙を溜めて、これまたすさまじい速度で翔輝の後ろに隠れた。そんな隼鷹を追尾した拳銃の射線は自然と、
「む、武蔵！　拳銃を下ろせ！　危ないって！」
拳銃の矛先は翔輝に向いていた。それに気づき、慌てて拳銃を下ろす。
「・・・翔輝に銃を向けるなんて、一生の不覚」
怖がる隼鷹を慰め、翔輝は結局武蔵と隼鷹との三人で寝る事になった。が、翔輝が折れるともう一人も反撃に出た。
「二人ともなんてずるいです。それなら私も――」
「悪いけど、これ以上は入らないよ」
「そ、そんな・・・」
しょんぼりと落ち込む大和に翔輝は「ごめんね」とつぶやく。
「この三人の中では一番年上なんだ。我慢してね」
「・・・はい」
大和は寂しそうに自分の布団の中に潜った。そんな大和の背中を見詰め、翔輝は二人を連れて自分の布団に潜った。だがここでも翔輝の気が休まる事はなかった。
「こ、怖いよ・・・お兄ちゃん」
武蔵に完全に怯えて、翔輝に抱き付きながら震える隼鷹を寝付かせるのはかなりの精神的重労働だった。一方、武蔵は翔輝の背中にくっ付いてすやすやと眠っていた。翔輝には後ろなので見えないが、武蔵はわずかに微笑んでいた。
窓から照らされる明るい月を見詰め、翔輝はこれから先激化し、長く続くであろう姉妹ゲンカ＋一人の事を考え、ため息をついた。

第八章　第九節　武蔵の海軍大改造計画（前書き）

今回は武蔵の大活躍の話です。
原作にはなかった完全書き下ろし作品で、武蔵が政権を握ったらどれだけすごいかがわかる武蔵中心のお話となっています。
武蔵の海軍大改造計画とは！？
武蔵の立ち上げた海軍新組織とは！？
武蔵と大和の姉妹の関係は！？
そして、翔輝との仲は！？
原作で人気投票第一位を獲得した武蔵の華麗なる激動のお話をたっぷりお楽しみください。

第八章　第九節　武蔵の海軍大改造計画

翌日、新連合艦隊旗艦である武蔵が陣頭指揮をする第一回連合艦隊艦魂会議が開かれた。場所はもちろん『大和』の第三会議室だ。

部屋にはすでに多くの艦魂が集まっている。

士官艦魂はもちろん、いつもはあまりいない下士官や水兵の艦魂も何人か集まっていた。武蔵がそう命令したのだ。

そして、なぜかここに翔輝がいた。彼も武蔵に頼まれてここに来たのだ。

「まったく、なぜ部外者がこんなにもいるのだ」

艦魂達の聖域とも言っていい会議に翔輝はもちろん下士官や水兵がいるのが気にくわない金剛は不機嫌そうに吐き捨てる。

「まあまあ、あの子の事だから何か考えがあるのよ」

長門がそう言うと、金剛は「ふん」と鼻を鳴らして黙った。

「一体、何をするつもりなんでしょうか？」

前連合艦隊旗艦であり現在は連合艦隊艦魂司令部参謀長に就任した大和は不思議そうに翔輝を見る。

「さあね。でも、波乱のひとつやふたつはあるんじゃない？」

翔輝の言葉に、大和は「争い事はごめんです」とため息した。その時、ドアがゆっくりと開き、新連合艦隊旗艦――武蔵司令長官が入って来た。

敬礼しようと立ち上がる皆に「・・・そのままでいい」と言って敬礼を省略した。金剛はその行為に眉をひそめるが、それ以上何もしなかった。

武蔵は集まった一同を見回すと、早速最初の言葉を言う。

「・・・連合艦隊艦魂司令部は、今日をもって廃止する」

部屋が一瞬で凍りついた。

武蔵の言った言葉に、皆が愕然としたからだ。

「ちょ、ちょっと待って！　そんないきなり無理よ！」

そう叫んだのは元連合艦隊旗艦にして現在は先任参謀となっている長門だ。
「そうよッ！　軍隊の頭をなくすなんて、そんなの無茶苦茶よ！」
参謀の一人である陸奥が悲鳴のような声で叫ぶ。
その他多くの者から反対意見が続出した。しかも、
「そんな横暴を認める訳にはいかんッ！」
竹刀を構えた金剛にさらに部屋は大混乱する。
だが、そんな皆を見回し、武蔵はわざとらしくため息する。
「・・・何も首脳部をなくす訳じゃない。ちゃんと代行組織を編成する」
その言葉に、一瞬で部屋は静かになった。
「ま、まあそれなら」「いいんじゃない？」「うん」「そうね」と皆がうなずく中、金剛は不機嫌そうに武蔵を睨む。長年の伝統を崩されたので怒っているのだろう。だが、武蔵の優秀さは彼女自身わかっているので、頭ごなしに否定はできなかった。
「・・・とりあえず、名前を考えた」
「どんなのさ」
翔輝の問いに、武蔵は無表情で、
「・・・ただの人間には興味ありません」
「む、武蔵、そのセリフ、まさか・・・」
「・・・《世界を己（オー）がままにする戦艦（エス）武蔵の団（エス）》、略して――」
「略しちゃダメぇッ！」
慌てて翔輝が武蔵の口を塞いだので、最悪の事態は避けられた。
皆不思議そうにこっちを見ている。きっと翔輝が血相を変えた意味がわからないのだろうが、それでいい。君達はこっちの世界に入ってはダメだ。
「武蔵！　各方面から総攻撃を受けるような名前はやめてよッ！」
「・・・いいと思ったのに」
少し不満そうな武蔵だが、翔輝の剣幕に押されて渋々その候補名を破棄した。

武蔵は「・・・第二候補があるから、これでどう?」と言って立ち上がると、後ろにあった黒板にその候補名を書く。

書き終えると、まわりから「おぉ・・・」という感嘆の声が上がる中、翔輝は頭を押さえていた。

「・・・《連合艦隊極大権限保有最上級幹部会》、略して極上幹部会」

「だぁからッ! 何でそう危ない名前にするんだよッ!」

翔輝が珍しく激怒する。が、

「えー、かっこいいじゃん」「そうだよ」「なんかおもしろそう」

「私これがいい」と次々に賛成意見が続出する。

「待って! これはマジでヤバイ! ちょっと《連合艦隊》とか《幹部会》って変わってるだけで残りはほとんどパクリだからね!」

翔輝の必死な反撃も空しく、連合艦隊艦魂統制最高機関の名前は《連合艦隊極大権限保有最上級幹部会》、通称《極上幹部会》と決定した。

肩を落とす翔輝を大和が励ます中、武蔵は新組織の全容を説明し始めた。

「・・・新連合艦隊艦魂司令部全艦魂統制組織、連合艦隊極大権限保有最上級幹部会は、今までの司令設備とは違い、それぞれほぼ独立した部を七つ設置し、それぞれの部の意見などを結集し、最終的に私が判断するという機構となる」

武蔵の説明に、皆は驚く。今までの組織形態とまるで違うからだ。今までは全ての権限を連合艦隊艦魂司令部が保有し、その中で旗艦は絶対的な権限を持っていた。

だが、今回の組織は分割組織。国会のような組織形態だ。

「ちょっと待って。何でわざわざ分割する必要があるの?」

長門の問いに、武蔵は淡々と説明する。

「・・・組織というものは権力が偏っていては成り立たない。分割して多くの意見を用いて最終的な判断をする。それが本来の組織というもの」

「なるほどね。金剛はどう思う？」
長門は今まで基本的に黙っている金剛に意見を求める。
「悪くはない。だが、そういった民主主義的な考え方はひとつの整理に時間が掛かる」
「・・・問題はない。各部で話し合った内容を最終的に私の直属下で議論し、私が判断する。私が無意味と判断すれば、私が却下する」
「それでは組織を分割した意味がないと思うが」
「・・・ひとつの部が専門の仕事をする事で、全体に掛かる負荷は軽減され、より話し合いに集中できる」
「なるほど。ならば問題はない」
連合艦隊最古参の金剛の言葉に、皆も異論なしとうなずく。その反応に武蔵はうなずくと、手に持っていた資料を皆に配布する。
「・・・これが、組織の全体。各部の部長副部長は私が決めた。問題はない？」
翔輝達は配られた書類に目を通す。

《連合艦隊極大権限保有最上級幹部会配下の各組織部》
『執行部』（極上幹部会最高審議会。各部の部長副部長などで編成。最終審議を行う）
会長　武蔵（戦艦）
副会長　長谷川翔輝中尉
奴隷　大和（戦艦）
『遊撃部』（執行部直属の実行部隊。最終審議を行う執行部の後方支援や実行を行う）
部長　長門（戦艦）
副部長　陸奥（戦艦）
『審理部』（執行部の判断を審議する部。主に伝統や艦隊決戦を重視する者で編成）
部長　金剛（戦艦）
副部長　榛名（戦艦）

『戦略部』（様々な情報や実情を元に戦略を立てる。戦争を総合的に判断する部）
部長　山城（戦艦）
副部長　翔鶴（航空母艦）
『航空部』（機動部隊・基地航空隊の航空作戦を審議・実行する部。主に空母で編成）
部長　瑞鶴（航空母艦）
副部長　飛鷹（航空母艦）
『前線部』（前線で戦う艦魂達で編成。戦争に対して戦術的に判断し、現場の考えを報告する）
部長　川内（軽巡洋艦）
副部長　響（ひびき）（駆逐艦）
『水雷部』（水雷戦隊の艦魂で編成された水雷作戦の審議・実行をする部）
部長　神通（じんつう）（軽巡洋艦）
副部長　雪風（駆逐艦）
『隠密部』（潜水艦の艦魂で編成。攻撃・偵察・隠密輸送などの審議・実行を行う潜水艦専門部）
部長　香取（かとり）（練習巡洋艦）
副部長　伊一二五（潜水艦）
『補給部』（補給・輸送作戦を審議する部。主に護衛を行う巡洋艦や駆逐艦で編成）
部長　日進（にっしん）（水上機母艦）
副部長　五十鈴（軽巡洋艦）
『陸軍部』（中国・南方方面・各島守備隊の陸軍の情勢を報告する部）
部長　愛宕（重巡洋艦）
副部長　鬼怒（きぬ）（軽巡洋艦）
帝国陸軍代理人　あきつ丸（特殊揚陸艦）
『情報部』（内部情報、敵軍情報を収集し、各部などへ報告する

情報専門を行う機関）
部長　青葉（重巡洋艦）
副部長　夕張（軽巡洋艦）
『総務部』（日本海軍艦魂全体の事務を行う。人事、主計、書類整理など裏方役）
部長　伊勢（戦艦）
副部長　利根（重巡洋艦）

「・・・異論はない？」
「ちょっと待ってッ！　何で僕が入ってるのッ！？」
悲鳴のように翔輝が声を上げると、武蔵は無表情で答える。
「・・・翔輝は優秀だから。必要なの」
「ただ単に僕と一緒にいたいだけでしょッ！？」
「・・・（コクリ）」
「やっぱりぃッ！」
「武蔵！　何よ私の役職は！　奴隷ってどういう事ッ！？」
そう激怒したのは大和。確かに大和の役職は執行部奴隷となっている。それは怒るのは当然だろう。
大和の激昂に対し、武蔵は涼しい顔で返す。
「・・・無能の使い道としては十分だと思うけど？」
「このクソ妹ッ！　私は前連合艦隊旗艦なのよッ！？」
「・・・世の中は能力制。成り行きでなった役職なんて飾りにもならない」
「何ですってッ！」
「・・・本当は姉さんを極上幹部会に入れる気はなかったけど、翔輝が反対すると思ったから仕方なく。それでもありがたいと思いなさい」
「いや、余計ひどいと思う」
翔輝のツッコミに皆はうんうんとうなずいた。
すると武蔵は翔輝に早速反対されて困ったように頬を掻く。

「・・・これもダメ？　じゃあこの無能な愚姉をどうしろっていうの？」
「表出なさい！　あんたとは一度きっちりと決着をつけてやるわッ！」
軍刀を抜いた大和はいつになく激怒している。それはそうだろう。ここまで言われたら誰だってブチギレるのは当然だ。
武蔵は身体中から怒りの炎を舞い上げる姉に、わざとらしく大きなため息をする。
「・・・好きになさい」
「マジぶっ殺すッ！」
ゴンッ！
「いったあああぁぁぁいッ！」
「女の子が《ぶっ殺す》なんて野蛮な言葉を使うな！」
「だからって殴らなくても・・・ッ！」
涙目で殴られた頭を押さえる大和。
翔輝は武蔵を見る。いつもは優しい翔輝の怒気に、武蔵は身体を震わせる。
「・・・しょ、翔輝？」
「武蔵。冗談もいい加減にしてよね。僕の事よりも、大和に意地悪するのは許さないから」
「・・・あ、いや、その・・・」
珍しくうろたえる武蔵。それほどまでに翔輝の怒りを怖がっているのだ。
「今すぐに、大和を副会長にするんだ」
「・・・そ、そんな！　それじゃ、翔輝と二人っきりになれない！　絶対に嫌！」
「関係そのものを絶とうか？」
「・・・え？」
「どうする？　二号艦」
刹那、武蔵の表情が一変した。

「・・・い」
無表情は崩れ、ぼろぼろと涙を流し、悲しみ一色に染まった顔で、
「・・・いやあああああぁぁぁぁぁッ！」
武蔵はそう絶叫すると椅子から転げ落ち、床で大泣きを始めた。
「・・・翔輝！　それだけはやめてッ！　お願いだから！」
武蔵は這って翔輝に近づくと、その足に抱きついて必死に懇願する。その表情は年相応の悲しむ少女のもので、突然の武蔵の大泣きに長門達も呆然としている。
必死に哀願する武蔵に、翔輝は冷たく言い放つ。
「どうしたの二号艦？　服が汚れちゃうよ二号艦」
「・・・」
返事はなかった。
武蔵はショックのあまり気絶していた。
翔輝は意識を失った武蔵を抱きかかえると、「ちょっとやり過ぎましたね。ちょっとこの子を寝かしてきますね」と苦笑いし、部屋を出て行った。
残された大和達はどうすればいいか顔を見合わせて首を傾げた。あの金剛でさえ状況がわからず困惑していた。
元連合艦隊旗艦である長門は混乱する皆を静かにさせると、極上幹部会の資料を手に説明を代行した。

翔輝は自分の部屋に着くと武蔵をそっとベッドに横たわらせた。
「何も気絶する事もないのに」
翔輝はそっと毛布を掛けると、立ち去ろうと踵を返す。と、
「・・・行かないで」
小さく弱々しい声と同時に服の裾がキュッと握られた。振り返ると、そこには泣きながらこっちを見詰める武蔵がいた。
「武蔵？　起きたの？」
「・・・行かないで・・・お願い・・・一人にしないで・・・！」
翔輝の問いにも答えず、武蔵は泣きながら言葉を続ける。

（そんなに《二号艦》って呼ばれるのが嫌なのかな？）
史上最強に鈍感な翔輝に武蔵の儚い乙女心なんて毛筋ほどもわかるはずがない。
翔輝は必死になって自分にしがみ付く武蔵に、謝る。
「悪かったよ。二号艦なんて言ってさ」
だが、翔輝の言葉も聞こえないのか、武蔵は「・・・行かないで・・・お願い・・・」と繰り返すばかり。
「行かないってば」
ここに来て、ようやく武蔵の瞳にしっかりとした光が見えた。
「・・・本当？　どこにも・・・行かない・・・？」
「うん、行かないから。もう泣かないでよ」
翔輝が優しく言葉を掛け、そっとその頭を撫でてやると武蔵は表情をわずかながら綻ばせた。
「・・・翔輝・・・」
武蔵はゆっくりと翔輝に抱き付いた。ゆっくりだが、抱き締めたその腕の力は強く、しっかりと離さない。
「・・・翔輝、もう私、わがまま言わない。姉さんもちゃんと扱う。だから、ずっと傍にいて」
結局、大和を格下に扱ったままだが、翔輝はため息してそれは不問とした。
「・・・翔輝」
小さな小さな笑顔をして身体を摺り寄せてくる武蔵。その笑みが彼女の最高の笑顔という事を翔輝は知っている。こんな嬉しそうな彼女を怒れるほど、翔輝は非情にはなれなかった。
しばし抱きつく武蔵の頭を翔輝は撫で続けていたが、ここでふと思い出す。
「つーか、そろそろ戻らないとみんな心配するよね？」
「・・・放っとけばいい」
「そうはいかないよ。みんな君の事を心配してるんだから」
「・・・そんな事ない」

「どうして君はそうやって切り捨てちゃうかな。もう、とにかく戻るよ」
「・・・やっぱり、翔輝は優しい」
「ほら、おだてたってダメだからね」
そう言って翔輝は武蔵の手を引っ張って部屋を出た。手を握られている武蔵は、白い頬を桜色に染め、小さな笑みを浮かべていた。

部屋に戻った二人を見て、皆は安堵の息を漏らした。
「良かった。武蔵大丈夫だったのね」
長門が嬉しそうに言う。そんな彼女を見てきっと大和達も同じ気持ちなんだろうなと思って見ると、
「・・・」
大和はどこか不機嫌そうな顔でこっちを睨みつけていた。
「や、大和・・・？」
「ふんです」
大和は翔輝と視線が合うとぷいっと視線を外した。そんな彼女の行為に翔輝は困惑する。
「えっと、何で大和怒ってるのかな？」
「そうね長谷川君。とりあえず――武蔵を降ろしたら？」
そう言って長門は――翔輝の背中で小さな笑みを浮かべる武蔵を見る。
「っていうか、そもそも何でおんぶしてるのよ」
「え？　あ、武蔵がしてほしいって言うから」
「お兄ちゃんの背中は私だけのだもんッ！」
そう言って怒る隼鷹に武蔵は鋭い眼光で睨みつけ、
「・・・死にたいの？」
「・・・なんでもない」
後ろを見れない翔輝はなぜ隼鷹が真っ青な顔をしておとなしく座ったのかわからなかった。
「まあ、とりあえず武蔵も降りて」

「・・・いや」
「わがまま言わないの。みんなお前を待ってたんだからさ」
「・・・わかった」
武蔵は渋々といった感じで背中から降りた。その際武蔵はすごく寂しそうな表情をしたが、翔輝は視線を逸らした。
「・・・会議を再開する」
武蔵は何事もなかったかのように会議を再開した。相変わらず切り替えが早い。
「・・・極上幹部会役員の変更を行う。姉さんを副会長に格上げし、翔輝には会長補佐官になってもらう」
「いいの？」
長門の問いに翔輝はため息して首を横に振る。
「これ以上文句を言うと武蔵が本格的にいじけるでしょうし、これが最善の妥協案でしょう」
「大変ね」長門は同情するように言う。
「もう慣れました」
「そっかぁ」
長門はなぜか嬉しそうに微笑んだ。その笑みが一体どういう意味なのか、翔輝にはわからなかった。
「・・・それ以外に変更はなし。何か意見はある？」
「ちょいと質問があるんやけど。ええどすか？」
独特な関西弁でそう言ったのは伊勢だ。
「・・・何？」
「うちが総務部の部長ってのも気になるんやけど、とりあえず今はそれは置いとって。この水雷部と補給部とかって、何で前線部に組み込まんといて別々にしたん？　一緒でもええと思うんやけど」
確かに伊勢の言うとおり、水雷戦や補給、さらに潜水艦も前線部に一括にしても問題はなさそうなのに、武蔵はわざわざ分けた。それには一体どんな意味があるのか、皆の視線は武蔵に注がれる。
武蔵は皆の疑問にいつもの無表情で答える。

「・・・前線部はあくまで前線の考えを統括する現場の艦魂達の組織。水雷部は水雷戦隊全体を統括し、夜戦や水上決戦に対する意見を出す。補給部はねずみ輸送や船団輸送を行う輸送作戦全体を管轄する。さらに潜水艦は敵艦隊偵察、敵艦攻撃を行い、隠密輸送の場合は補給部と連動する。それぞれ役目を分担する事で、より物事ひとつに対する時間や労力を集中できる。それが理由」

武蔵の説明に伊勢は納得したようにうなずくと、静かに座った。

さすがは歴代連合艦隊旗艦の中で一、二を争う優秀さを誇る、日本海軍艦魂達の最後の希望と謳われている武蔵だ。そこまで深く考えた上に行動ならば、誰も反対意見は出さない。

「・・・他には？」

武蔵が再度皆を見回すと、手が上がった。挙手したのは審理部の部長に就任した金剛だ。

「いくつか訊きたい事があるのだが、いいか？」

「・・・何？」

武蔵は無表情で金剛を見据え、金剛はそんな武蔵を睨むように見詰めると、手元の資料を見る。

「私が管轄するこの審理部だが、『執行部の判断を審議する部。主に伝統や艦隊決戦を重視する者で編成』と書かれているが、これは航空戦を重視する現在の帝国海軍では不要な存在の集団のように見えるが？　厄介者を集めたのか？」

金剛の小さな怒りを秘めた視線に、皆は自分が睨まれた訳じゃないのに恐怖する。だが、そんな視線で睨まれる武蔵は相変わらず無表情を貫く。

「・・・私は大艦巨砲主義の王者の一人だけど、残念ながら戦艦の時代は終わったと考える。だからこそ、私は航空戦力を主力とした日本海軍を率いて対米英戦に全力を注ぐ覚悟。でも今でも戦艦最強主義者や艦隊決戦を望む艦魂が多いのは事実。ならば、それらの考えを集約して航空主義と戦艦主義を正面から論戦させる事が、解決への一番の道と私は考えている。だからこそ、審理部は航空機主義

の反対勢力を置いた方が、より執行部に反撃できる。良き好敵手となる」

武蔵は決して厄介者として前時代的主義者を反対勢力に結集させたのではなく、正反対な考え方の勢力を敵に置く事でより良い日本海軍という組織をつくりたいのだ。

武蔵の強い志のある言葉に、金剛は静かにうなずいた。

「なるほど、そのような堅固な良き考えがあるのならば、私が反対する理由はない」

金剛はそう言うと少し嬉しそうに微笑んだ。

それは、自分達を認めてくれた新しきリーダーに対する敬愛の笑みであった。

だが、金剛はすぐにいつもの少し不機嫌そうな顔をすると、質問を続行する。

「次の質問だが、審理部は執行部の反対勢力となるが、つまり我々は国会でいうところの野党になるのだな?」

「・・・細部に違いはあるけど、まあそういう事」

「うむ。それは良いのだが、私が野党というのはどうも・・・」

今まで日本海軍艦魂の事実上の天辺に君臨していた金剛にとって、野党という地位はあまり好ましいものではないのだろう。

皆も金剛が野党というのに多少不満があるのか、武蔵を見詰める。

だが、武蔵は皆の視線にも微動出せずに答える。

「・・・与党側は私が管轄するのは、連合艦隊旗艦として当然の事。だけど、私と真っ向から論戦できる相手はあなたを除いて他にはいない。だからこそ、あなたには反対勢力のトップにした。ダメ?」

武蔵の言葉に、金剛は不敵な笑みを浮かべると、

「問題はない。貴様にそこまでの大役を任されるのなら、本望だ」

「・・・よろしく」

「こちらこそ」

金剛は少し嬉しそうに笑うが、武蔵は相変わらず無表情だ。

「では、最後にひとつ聴く。この陸軍部というのは必要ないのでは

ないか？」

金剛が名指しで言ったのは、海軍中心の極上幹部会において唯一外部組織となる陸軍部であった。

金剛は心底不機嫌そうに、まるで吐き捨てるように言い放つ。

「陸軍の事など放っておけ。奴らは泥にまみれて地べたを這いずり回っているのがお似合いだ」

心の底からそう言う金剛。それは日本陸海軍の不仲を象徴するかのようなものだった。

根っからの海軍軍人である金剛は、その海軍精神の塊を言っても過言ではない。当時の日本陸海軍の不仲は世界最悪と言っても過言ではない状態であった。そんな彼女も根っからの陸軍嫌いで、陸軍を名指しで批判する事は決して少なくない。しかもそれは金剛だけでなく、他にも少なからずの艦魂達も陸軍を嫌っている。当時の状況が艦魂達にも影響しているのだ。

武蔵はそんな金剛の蒼い瞳をじっと見詰める。

「・・・ガダルカナル島を守っていたのは、どこの部隊？」

唐突に出された質問に金剛は一瞬戸惑ったが、すぐに冷静になると誇らしげに言う。

「もちろん、我が帝国海軍だ」

「・・・私は『島を守っていたのは、どこの部隊』と訊いた。海軍は島の周辺海域であって、島自体を守っていた訳じゃない。じゃあ、どこ？」

武蔵の問いに、金剛は不機嫌そうに吐き捨てる。

「下等集団の集まりの陸軍だ」

金剛の暴言にも武蔵は顔色ひとつ変えずに無表情を続ける。

「・・・その通り。陸軍が島を守ってくれるからこそ、私達海軍は陸戦を気にせずに攻防戦を展開できる。陸軍がいるからこそ、私達海軍は背中を安心して構えられる」

「だが、陸軍どもは我々海軍の意見をまるで聞こうともしない愚か者の集団だ！　そんな奴らにそのような気遣いは無用！」

「・・・確かに、陸軍と海軍では作戦方針が違う。でもそれは陸軍が中国戦線に重点を置き、私達海軍が太平洋戦線に重点を置いているという根本的な違いからのもの。中国を占領したい陸軍と米太平洋艦隊を撃滅したい海軍。元々作戦方針が違うから、食い違いが生じる。太平洋においても、陸軍と海軍では根本的に作戦が違う。それは開戦時に南方作戦でも起きた事」

武蔵が言うのは開戦前に長期戦の構えとして南方資源地帯を確保する為の作戦を決定する際、陸軍と海軍で全く違う作戦方針が取られた際の事。陸軍はマレー半島を攻略してからオランダ領インドシナへ侵攻するのに対し、海軍はまずフィリピンを攻略し、それからオランダ領インドシナへ向かうというもの。基本的に陸伝いで進みたい陸軍とフィリピンの敵航空戦力を壊滅させたいという海軍の方針の違いから起きたものだ。

結局、開戦の際は海軍はフィリピンを空襲し、陸軍はマレー半島に上陸するというお互いの意見の中間点で決行された。

「・・・陸軍と海軍は元々陸と海という全く違う場所を戦場にする軍隊。必ずしも作戦方針が重なるなんて事はない。日本陸海軍の仲ではさらにありえない」

武蔵の言葉に、金剛は口を閉じた。彼女が言っているのは全て正論。反論できる余地はどこにもなかった。

「し、しかし！　元々戦争がしたいと言ったのは陸軍だ！　海軍は最初から反対していた！　だが、中国戦線の悪化や欧米諸国の圧力で世論が開戦論に傾いたから、仕方なく真珠湾を攻撃したのだ！　我々海軍は陸軍の無能な考え方に振り回されてこの戦争に巻き込まれた！　ならば、責任を持って陸軍は太平洋戦域においては海軍のいう事を聞いていればいいのだ！」

金剛の言う意見もまた正論であった。

対米英戦を最も望んだのは陸軍だ。

陸軍はまともな太平洋方面への展開戦力や作戦を持っていないくせにアメリカやイギリスと戦いたがっていた。「歩いてアメリカ大

陸まで行くつもりか」と、当時の海軍関係者は皮肉ったそうだ。
金剛の意見は山本長官以下の開戦反対者の考えそのものだった。
大和は困惑した。
いつもはとにかく戦う事しか言わない金剛が、今は戦争を仕方がなく始めたというまったく正反対な意見を言っているからだ。
金剛はさらに続ける。
「私とて、好き好んでこの戦争を始めた訳ではない！　元々この戦争には反対だったのだ！　それを無能な陸軍のせいで仕方なく始めたに過ぎんッ！」
金剛の発言に大和は驚く。
あれほど欧米列強を目の敵にしていた金剛の、戦争はしたくなかったという衝撃発言に大和だけでなく、他にも多くの艦魂が驚愕した。
言葉を失う大和に、長門は悲しげな表情を向ける。
「金剛だって、好き好んで愛する祖国を危険に晒すような事はしないわ。戦わなければならなかったからこそ、彼女は心を鬼にして戦ってきただけ。できる事なら、愛する祖国を、日本を平和にしておきたかったのよ」
長門の言葉に、大和はじっと金剛を見詰める。その蒼き瞳の奥に一体どんな想いが渦巻いているのか、それはわからない。だが、今わかる事は、彼女は自分達艦魂の中で一番祖国を、日本を愛しているという事だった。
「そんな日本を危険に晒す狂ったクソどもの為に、我々海軍はこんな無茶な戦争をしているのだ！　陸軍に譲歩する理由はない！　断固として陸軍部はいらんッ！」
金剛はバンッ！　とテーブルを叩いた。いつの間にか、金剛だけでなく他にも多くの艦魂が陸軍部の創設に反対していた。
金剛の言った事は全て真実であり、陸軍を同等扱いする言われもなかった。
だが、武蔵はそんな金剛をじっと見詰める。その瞳は金剛の熱い

ものに対し、吹雪のように冷たいものだった。
「・・・じゃあ、好きにすればいい」
そう武蔵は突け離した。
驚く大和に対し金剛は勝ち誇った笑みを浮かべる。だが、
「・・・その代わり、具体案を出して」
「具体案だと？」
「・・・陸軍部は陸軍との連携を行う重要な機関。これをいらないと言うなら、各島の守備隊は陸軍から海軍に移行する。大勢の陸戦隊が必要になるけど、それだけの兵員のあてがあるからこその発言よね？　一体どんな対案を持ってるの？」
武蔵の鋭い一撃に、一瞬にして金剛は悔しそうに唇を噛んで沈黙した。
武蔵の言うとおり、もし海軍だけで太平洋戦争を実施するというなら、各島の守備隊を全て海軍で担当する事になる。例えるなら、ガダルカナル島だけでも二万人の兵員を動員した。それを無数の島で行うとすれば、何十万人という兵員が必要となるが、もちろん海軍にはそれだけの兵員はいない。
陸軍の協力がなければ、海軍は太平洋戦域に展開できないのだ。
金剛は悔しそうに唇を噛む。そんな金剛に、武蔵はそっと言葉を繋ぐ。
「・・・私達の敵は連合国？　それとも陸軍？　今は仲間内でもめている暇はない。日本国民一丸となって挑まなければ、この戦争は確実に負ける」
「ならば、貴様には日本が勝利する策があるというのか？」
金剛の言葉に、武蔵は小さく首を振る。
「・・・ない」
「ならばそのような無責任な事を――」
「・・・でも」
武蔵は真剣な瞳で金剛を見詰める。その瞳には強い意志の炎が燃えていた。

「・・・今なら、勝利はできなくとも引き分けに持ち込む事はできるかもしれない。まだ、日本は完全に負けた訳じゃない。まだ策はある。だからこそ、陸軍の協力は絶対条件。貴様だって、それはわかっているはず」

その言葉に金剛は悔しそうに唇を噛む。そんな金剛の肩を、そっと扶桑が叩いた。振り向くと、扶桑の瞳は「もういいでしょ？」と言っているかのようだった。

金剛は静かにうなずくと、そっと席に着いた。

武蔵は金剛が納得したのを見守ると、再び皆を見回す。

「・・・他に意見はない？」

「あ、あのさ」

そう言っておずおずと手を上げたのは翔輝。皆の視線が自分に注がれるのを感じ、一瞬手を下ろしかける。

「・・・何？」

「ちょっと訊きたい事があるんだけど、いいかな？」

「・・・（コクリ）」

「この陸軍部の要員の中に帝国陸軍代理人あきつ丸って書いてあるけど、この人って誰？」

翔輝がそう言った刹那、部屋に沈黙が舞い降りた。

「え？　えぇ？」

「あのさ長谷川、もう少し勉強しとけよ」

榛名が頬杖を付きながら呆れた声を上げる。

「ご、ごめん・・・」

翔輝が謝ると、「別に謝る事じゃねぇだろ」と榛名は少し困ったような顔で返す。

「『あきつ丸』ってのは、陸軍の空母さ」

「え？　陸軍って空母を持ってるの？」

「って言っても、海軍のとは全然違うけどな。詳しい事は武蔵が知ってるんじゃねぇか？」

榛名の言葉に翔輝が武蔵を見ると、武蔵は無表情で口を開く。

「・・・正確には陸軍が建造運用している航空機搭載型特殊揚陸艦、それが『あきつ丸』。わずかな戦闘機を載せ、上陸用舟艇を数多く搭載して上陸作戦の主力から支援まで行う事を目的に造られている。陸軍は当初から海軍が上陸作戦に貴重な空母を動員する事はあてにしておらず、自軍でまかなおうとした。しかし海軍のように純粋な空母を造るのは陸軍の方針上できず、結果的に揚陸艦に航空機を搭載した形になっている。しかも艦体が短く低速なので発艦するのも難しく、着艦はできない。その為着水した艦載機をクレーンで引き上げるか投棄するしかない。海軍の水上機母艦と同じ原理。空母としての能力はないと言っても過言ではないが、揚陸艦としては高性能で、陸軍が開発した揚陸艦では最も次世代型となっている」

武蔵の説明に所々わからない所はあったが、とりあえず何となくはわかった翔輝。だが、

「何で君がそんなに詳しく知ってるの？」

翔輝の質問に、武蔵は「・・・秘密」と言った。その時わずかに頬を赤らめたが、翔輝は首を傾げていて見逃した。

「まあ、とりあえず『あきつ丸』がどんな船かはわかった。でも、そんな陸軍の重要な艦艇の艦魂を入れて大丈夫なの？」

「・・・問題はない。すでに向こうも了承している」

「そうなんだ――って、もう会ってるのッ！？」

「・・・今でもトラック島に停泊はしている。彼女が島へやって来た時にあいさつに行った。それで昨日の夜に話はつけてきた」

「ちょっと待てッ！　ふざけんなッ！　陸軍の艦魂なんかこっちから願い下げだッ！」

そう怒鳴るのは榛名。しかも榛名だけではない。多くの艦魂が同じように非難の声を上げる。だが、無論武蔵はそんな声を気にも留めない。

「・・・今日はすでにここに呼んでいる」

『えええええぇぇぇぇぇッ！？』

「・・・どうぞ」

「ちょッ！　ちょっと待てぇッ！」
榛名が止める間もなく、会議室のドアがゆっくりと開いた。
皆の視線が集まる中、一人の少女が部屋の中に入って来た。黒色の日本海軍の軍服ではなく、カーキ色の日本陸軍の士官軍服を着たうら若き乙女。長い黒くつややかな髪を風に流すその少女は部屋に入るなり見事な陸軍式敬礼をした。
「大日本帝国陸軍特殊揚陸艦艦魂、あきつ丸参上」
少女――あきつ丸はすばらしい登場をした。が、すぐに部屋の中の自分を歓迎しない空気に顔を引きつらせる。
「あ、あの・・・」
「・・・彼女があきつ丸。陸軍代理人を担当してもらう」
武蔵が助け舟を出してやると、あきつ丸はぺこりを頭を垂れて「よ、よろしくお願いします！」とぎこちないあいさつをする。
あきつ丸の突然の登場に驚く一同だが、すぐに反撃が出る。
「り、陸軍なんかに用はねぇッ！　さっさと出て行けぇッ！」
榛名が敵意むき出しで叫ぶと、まわりからも「出てけ！」「海軍の象徴に陸助が乗るなッ！」「帰れドブネズミッ！」と罵声が飛び交う。
翔輝が慌てて止めに入ろうとした時だった。
「ご、ごめんさぁいッ！」
『へ？』
あきつ丸はその場にしゃがみ込むと――見事な土下座をした。
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいッ！」
あきつ丸は額を床につけて必死に土下座を続ける。そんな彼女の突然の行動に皆は責める勢いを失う。一方、武蔵は小さくため息を吐く。
「・・・あんまりいじめないで。彼女はとっても気が小さいんだから。ここに来てもらうにも苦労したんだから」
そう言う武蔵に、あきつ丸が泣きついてきた。
「武蔵殿！　私はもう帰っていいでありますかッ！？」

「・・・もう少しがんばって」
「わ、わかったでありますぅ・・・」
あきつ丸はえぐえぐと嗚咽を漏らしながら泣き出してしまった。
そんな彼女に、榛名達はすっかり牙をもがれたのか、ため息すると席に着いた。
皆が落ち着いたところで武蔵は見回す。
「・・・彼女が陸軍の情報をこちらに提供してくれる。異論はない？」
武蔵の問いに対し、もう皆《好きにして》っという感じのオーラが流れていた。どうやらあきつ丸のあまりの弱さに皆攻撃する勢いを失ってしまったらしい。
「・・・反対意見がないみたいだから、彼女を帝国陸軍代理人にする。あきつ丸、ありがとう。もう帰っていい」
「は、はいぃッ！」
あきつ丸はぺこりを頭を垂れると急いで部屋を出て行ってしまった。よっぽどみんなが怖かったのだろう。
武蔵はすっかり戦意を失った反対派を見回し、小さくうなずく。
「・・・他に質問もないみたいだし、これで極上幹部会の説明を終える。解散」

会議が終わった翔輝は航海室で今日の仕事をこなしていた。
書類に没頭する翔輝に、そっとコーヒーが差し入れされた。
「あんまりがんばり過ぎるとお体を壊しますよ、中尉」
そう言って優しく微笑んだのは水上だ。
「あ、うん。ありがとう」
翔輝は水上が淹れてくれたコーヒーをそっと飲む。
「に、苦い・・・」
「そ、そりゃブラックですから」
「砂糖ない？」
「え？　砂糖ですか？　すみません。持ち合わせていません。と、

取ってきましょうか？」
「いや、いい。別に飲めない訳じゃないから」
「そ、そうですか。すみません」
「お前が謝る事はないだろ？」
翔輝は小さく笑うと再び書類を読み始める。と、頭に浮かんだ疑問を訊いてみた。
「なあ、水上」
「はい？」
「どうして日本は陸軍と海軍が仲が悪いんだろ？」
翔輝の突然の問いに水上は一瞬困ったような表情を浮かべるが、すぐに回答する。
「世界各国陸海軍は基本的に不仲です。お互いの戦力拡大の為に決められた軍事費を奪い合っている訳ですから。しかし、日本の場合は極端すぎます。ここまで仲が悪いという国もそうありません」
「だよねぇ。アメリカとは大違いだよ。向こうは海軍の空母から陸軍の爆撃機を飛ばして東京を空爆したってのに」
「ドーリットル空襲ですか？　確かに、日本では絶対にできない戦法ですね」
「ま、そもそも陸軍機より海軍機の方が航続距離が長いからね。まずそれをするくらいなら空母に陸攻を載せるだろうし」
翔輝はそう言ってコーヒーをすする。そんな彼に、水上はそっとため息した。
「どうした？」
「いえ、本当に、こんな仲間内でもめていては、日本の未来は暗いなぁって思いまして」
「そうかもしれないが、あんまりそういう事を言うもんじゃない。誰かに聞かれたら軍法会議だぞ」
「そ、そうですね。気をつけます」
水上は慌ててまわりを見回すが、幸いにも誰もいなかった。
翔輝はそんな水上を一瞥し、そっと窓の外を見詰めた。

「この戦争に、勝利なんてものは、もうないだろうなぁ・・・」
翔輝は蒼い海を見詰め、寂しそうにそっとつぶやいた。

一九四三年三月、ニューギニア方面で連合軍の大規模な反攻作戦が行われており、日本軍は次の攻撃目標と思われるラエに対して陸軍の第五一師団を送る為に輸送船団を出撃させた。

しかし米陸軍航空隊とオーストラリア空軍は《跳躍爆撃》と呼ばれる新戦法でこれを迎え撃った。跳躍爆撃とは魚雷の要領で特殊な爆弾を低高度から投下。高速の爆弾が水面を跳躍して敵艦を襲うという恐ろしいものだった。

例えるなら、川で水面に向かって石を水平に投げると水面を跳ぶ。あのように爆弾が敵艦を襲うというものだ。

魚雷をはるかに越える速度で迫る爆弾と対空能力の低い駆逐艦の護衛する輸送船団ではこれを回避する術はなかった。

結果、日本艦隊は輸送船七隻全て撃沈。さらに護衛の駆逐艦も七隻中四隻撃沈という大敗北となった。

これは作戦を優先させて安全を無視した第八艦隊司令部と連合軍の新戦法とが重なり合った最悪の結末であった。

このビスマルク海海戦――またの名をダンビールの悲劇は、すぐに極上幹部会にも伝わり、その数日後、作戦に参加したが辛くも生き残った雪風からの当時の状況を説明した報告に愕然とした。

雪風の報告では敵機が輸送船を通過した直後に輸送船が爆発して沈没したという驚異的な報告であった。これにより、敵爆弾の速度は推定二〇〇キロ～三〇〇キロ。そんな高速の爆弾を輸送船や駆逐艦が避けられるはずはなかった。

意気消沈する皆の中、武蔵はすぐにその新戦法の欠点を見出した。

跳躍するので爆弾が艦艇を飛び越えてしまう欠点と、魚雷に比べたら圧倒的に威力が落ちる上に低高度で侵入しなければならない。

その為、輸送船や駆逐艦のような防御が貧弱な艦艇には脅威でも戦艦や空母ならその攻撃に耐えられるだろうという見解であった。

皆はその言葉に安心したが、一人武蔵だけは、これからの輸送作戦の大きな障害となると思い、悔しそうにそっと唇を噛んだ。

第八章　第九節　武蔵の海軍大改造計画（後書き）

さて、今回は武蔵大活躍でした。
ちょっと新組織の名称には危険な感じがしますが、これから極上幹部会が一体どんな活躍をするのか、気になります。
それと皆様に発表があります。
ついにこの《艦魂年代史　恋する乙女は大艦巨砲主義》が原作の際との累計ＰＶが１０万アクセスを突破しました！
これも皆様のおかげです。
本当にありがとうございます。
これからも改めてよろしくお願いします。

第八章　第十節　蒼き天空に散りし英霊

ガダルカナル島を失った日本軍は防衛線を下げて新たな防衛作戦を展開していた。

ソロモン海の制海空権は完全にアメリカに奪われ、日本軍は艦隊を送る事ができなくなっていた。そんな中、南太平洋防衛の要であり、その奮戦振りから後世に名を残した帝国海軍基地航空隊の伝説となった世界最強の航空隊――ラバウル航空隊は連日のように出撃していた。だが、所詮は基地航空隊。敵の基地航空隊と艦載機の大航空部隊の前に飛行機を次々に損出していった。

連合艦隊司令部はシンガポール方面で搭乗員養成訓練を行っていた空母『翔鶴』『瑞鶴』『瑞鳳』を基幹とする第三艦隊機動部隊こと日本機動部隊の艦載機をラバウル基地航空隊に投入する事にした。これに対し、新たに日本機動部隊司令長官に就任した小沢治三郎中将は猛反対した。せっかく再建したばかりの機動部隊の攻撃力をこんな場当たり的な反攻作戦に投入にして失う訳にはいかないと一蹴した。小沢の意見はもっともだった。空母航空隊と基地航空隊の搭乗員では根底から違うのだ。動かない陸の上に着陸するより、波で揺れ、走行している空母に着艦する方が断然難しいし、それの訓練は時間もかかる。だからこそ、空母に着艦できるというスキルを持った搭乗員を、最前線であるラバウルになど送れなかったのだ。

だが、戦局は悪化して日増しに日本側が劣勢になっていった。このままではラバウル航空隊が全滅し、南太平洋が完全に陥落してしまう。

連合艦隊司令部は小沢の説得を繰り返した。さすがの小沢も基地航空隊が壊滅するのを目をつむっている訳にもいかず、背に腹はかえられない思いで艦載機をラバウルに投入する事を了承した。

一九四三年四月、日本海軍は連合軍に対する大反撃作戦の発動を

決定した。その名は『い号作戦』。ラバウル航空隊と投入された艦載機隊の合同で敵艦隊に損害を与え、状況を打破する為の作戦で、参加航空機は三八〇機という大航空部隊で行い、連合艦隊司令長官である山本五十六大将が直々に陣頭指揮を執るという大規模な作戦だった。

作戦は四月七日にガダルカナル島にX攻撃（零戦一五七機、九九艦爆六六機）、十一日にニューギニアのブナ近郊にY2攻撃（零戦七一機、九九艦爆二一機）、十二日にポートモレスビーにY攻撃（零戦一三一機、一式陸攻四四機）十四日にラビへY1攻撃（零戦五二機、一式陸攻三七機）とミラン湾へのY2攻撃（零戦七五機、九九艦爆二三機）が行われた。

十六日、日本海軍は敵艦船二一隻撃沈、九隻撃破、航空機一〇〇機以上撃墜という十分な戦果をあげたと判断し、作戦を終了した。しかし、実際には連合軍は沈没五隻、二五機の航空機を損失しだけでたいした被害はなかった。それに対し日本海軍は零戦十八機、九九艦爆十六機、一式陸攻九機の計四三機を失い、むしろ日本側の方が損害は大きく、この後しばらく基地航空隊と機動部隊双方に障害が生じたという致命的な敗北でもあった。

結局、日本海軍の戦局打開の為の大規模な反攻作戦であるい号作戦は多数の航空機を失い、作戦は実質的には失敗だった。

作戦終了が正式に発令された十六日の午後、南国の日差しの下、それは起きた。

「長官！　どうかお止めください！」

空を見上げる山本に宇垣が必死で叫んだ。だが、山本はそんな宇垣の言葉にも耳を貸さずに空を見詰め続ける。

宇垣が必死になって止めたのは、明後日に行われる前線視察の事だった。

「長官、この件については私も反対です」

宇垣の横で同じく反対意見を出すのは第三艦隊司令長官の小沢治

三郎中将だ。
山本は二人の反対の声を気にせずに歩き出した。
「一番安全なコースを日帰りで行くだけだ。心配はいらん」
「しかしッ！　制空権のない前線視察は危険すぎます！」
「長官、どうしてもと言うなら、私の指揮下にある戦闘機隊全機を護衛に付けさせてください」
そう言ったのは南東方面艦隊司令長官でガダルカナル撤退作戦を陰ながら支えた草鹿任一中将。彼はこのラバウル航空隊を指揮する最高司令官でもある。
宇垣は草鹿の意見に大きくなずく。
「そうです！　護衛機がたった六機では万が一の時に対処しきれません！」
山本は三人の部下の意見に首を横に振った。
「それはできん」
「なぜですかッ！？」
宇垣は山本が血迷ったようにしか見えなかった。危険な前線を貧弱な護衛だけで向かうなんて、それこそ死にいくようなものだ。
山本はしばし黙ったまま歩き続けたが、ふと宿舎を見詰めた。その中には連日の出撃で疲労困憊となっている搭乗員達が倒れているのが見えた。
山本は天を見上げ、ゆっくりと口を開いた。
「搭乗員の諸君は連日の出撃で疲れきっているんだ。私の護衛くらいで余計な負担をかけたくない」
「しかしッ！」
宇垣はまだ納得できなかった。
山本は宇垣、小沢、草鹿を一瞥すると、再び南国の空を見上げる。
「これまでに、護衛を付けない艦隊や輸送船団を突っ込ませる事が無数にあった。その度に、多くの将兵を亡くしてしまった。私の為だけに、大げさ事をするのは申し訳ない」
『長官・・・』

三人は静かに自分達が命を預ける上官を見た。
山本の瞳には紅蓮に燃え盛る決意の炎があった。
「宇垣君」
「はい」
「小沢君」
「はっ」
「草鹿君」
「はい」
山本は三人を見詰め、静かに言った。
「戦争を始めるのも難しいが、終わらせるのはもっと難しい。これを、誰がやるかが問題だ。私の時代は終わったのだよ」
去って行く山本を、もう三人は止める事はできなかった。
宇垣と小沢、草鹿は、ただ呆然と山本の背中を見詰めるだけだった。
その時、三人は、その言葉が山本の遺言に聞こえた。
そして、それは本当の遺言となってしまった。

四月十八日、山本は宇垣以下司令部要員と共に前線視察と前線の士気高揚の為に二機の一式陸上攻撃機に乗り込み、護衛の零戦六機を従えてラバウルを出撃、一路ブイン基地を目指した。
深緑の機体に赤い日の丸を付けた日本機の出撃は、ここでは毎日のような日常的な光景であった。
しかし、今回は一国海軍の最高司令官が座乗している。なのに、その護衛はわずかに六機。しかも無敵神話が崩壊している旧式の零戦である。
次第に見えなくなっていく部隊を見詰め、小沢はその無事を祈った。
「なぜそういうバカな事をしたんだ！」
小沢は報告に来た兵を怒鳴りつけた。

兵達が勝手に山本の前線視察の事を無電で他基地に報告したという情報が入ったのだ。

兵は小沢のすさまじい激怒ぶりに驚いたが、自己主張を言った。

「し、しかしッ！　極秘の暗号を使いましたので・・・ッ！」

「軽々しく無電を打って何が極秘だ！」

小沢は兵を突き飛ばして去ってしまった。

残された兵は、初めて見た小沢の本気の激怒に腰を抜かし、立てなくなった。

小沢は燦々と輝く太陽を見上げ、苦しそうにその唇を噛んだ。

「長官・・・どうかご無事で・・・」

この無電が、最悪を招いてしまった。

この頃、山本の行動予定はこの暗号電文を解読されて、全て米軍に筒抜けだった。

念入りに練られた待ち伏せ計画で、敵機は思わぬ方向から攻めて来た。

低高度から接近して来た米軍新鋭機Ｐ‐３８戦闘機十六機が部隊の下方向から攻撃を開始した。

すでに時代遅れとなった零戦六機対最新鋭の米機十六機ではまともに戦えなかった。

長官機は敵機の集中的猛烈苛烈な攻撃を受け、撃墜された。同時に二号機も撃墜され、座乗していた宇垣は負傷した。

しかし、海に落ちた二号機と違ってジャングルに落ちた一号機に乗っていた山本はそのまま帰らぬ人となってしまった。

これを海軍甲事件という。

この戦争において、米軍が情報収集に全力を挙げたのに対し、日本は情報に対する認識の甘さから、いくつもの悲劇を繰り返した。

山本五十六長官の死もまた、その悲劇の一つであった。

トラックに戻った宇垣の手には山本の形見の短剣が握られていた。宇垣自身も重傷だったが、それなりに元気だった。ただ、山本の死で彼は塞ぎ込んでいた。

宇垣は『武蔵』の一室で休んでいた。すると、その部屋の前では一人の少女がウロウロとしていた。その少女は無表情で、しかし少し困ったような顔をしていた。

それは、この戦艦の艦魂である武蔵だった。彼女は連合艦隊参謀長である宇垣を心配してやって来たのだが、様子を見る為に中に入るべきか否かで困っていたのだ。

「・・・」

武蔵はしばらくウロウロしていたが、意を決して中に入った。そっとドアを開けると、部屋の奥のベッドに宇垣が眠っていた。武蔵はそっとドアを閉めようとドアノブに触れた。が、部屋の窓が開いていたので風でドアが勝手に動き、勢い良くバタンッ！　と大きな音を立てて閉まってしまった。その音に武蔵は驚愕し、言葉を失った。

「誰だ？」

「・・・ッ！」

その音に気づいたのか、宇垣がゆっくりと体を起こした。頭の包帯が痛々しいが、目はドアを睨んでいた。その視線の先には武蔵がいたが、彼女は硬直していた。

宇垣は不思議そうに首を傾げた。「誰もいないのか？」と声を上げる。もちろん答えは返って来ない。すると宇垣は疑うような目線で部屋を見回す。

「もしかして、艦魂か？」

「・・・ッ！」

再び声にならない叫びを上げる武蔵。あの武蔵でも冷や汗ダラダラである。ともかく冷静になろうと武蔵は考える。やはり連合艦隊旗艦である彼女は一味違う。

参謀長は艦魂が見えていない。でもどうして「艦魂か？」なんて

口にしたのだろうか？
そこで彼女はある事を思い出した。
現在連合艦隊旗艦は自分だが、依然は姉が旗艦だった。そして翔輝はその『大和』の艦橋にいる航海士。何らかの接点があり、そこから艦魂の話を聞いた可能性は高い。
武蔵の考えは見事に命中していた。
「おい。いるなら何でもいいから答えろ」
宇垣はだんだんと馬鹿らしくなってきたのか、言葉が投げやりになっていた。武蔵は一応尊敬する宇垣の命令を忠実に実行した。
彼女は知っていた。
彼が自分達大和型戦艦建造を誰よりも支持してくれた――いわば父のような人物である事を。
机の上にあった通信書の余りの紙と近くにあった万年筆を使って字を書き出した。そんな光景を見て宇垣は絶句していた。当然だろう。常人である彼には万年筆が勝手に動いて字を書いているのだから。
武蔵は書き終えると、紙を持ち、宇垣の方に向けた。その紙にはきれいな達筆でこう書かれていた。
『我武蔵。戦艦『武蔵』ノ艦魂。貴官ノ容態ヲ気ニ掛ケ見舞ニ来タリ。容態ハ如何カ』
「あ、あぁ、問題はない」
宇垣はぎこちない返事を返した。おそらく自分でもまだ混乱しているのだろう。武蔵は無視して下に新たに文字を書いて宇垣に見せる。
『連合艦隊司令長官山本五十六大将ノ死ハ、我ガ帝国海軍全艦魂モ無念ナリ』
「あぁ、そうだな・・・すまん」
『何故貴官ガ我に謝罪ヲ行ウ』
「俺は一応前線視察はやめてほしいと進言したのだ。しかし長官は聞く耳を持たなかった。あの時、無理にでもお止めしておけば、こ

んな事には・・・」
宇垣はそう言うと、顔を伏せてしまった。
自分の不甲斐なさが、山本を殺してしまったのだと、彼は責任を感じていた。
武蔵はそんな宇垣を見詰め、文字を書く。
『貴官ノ責任デハ無イ』
「確かに、だが、俺があそこで止めておけばこんな事態にならなかったのは事実だ。それか、無理にでも戦闘機をもっと付けさせとけばな」
「・・・参謀長」
窓の外を見詰める宇垣を、武蔵は心配そうに見詰める。すると、宇垣は武蔵の――正確には浮かんでいる通信書を見詰めた。その表情はとても優しそうな笑みだった。
「あのさ、その無機質な通信文みたいな文章はやめてくれないか？」
武蔵は少し考え、万年筆を走らせた。
『了解』
「変わってないように見えるんだが」
『元々こういう話し方だから、筆記にしてもこんな感じ』
「カタカナがひらがなに変わっただけのように見えるが、まぁこの方がいいからな」
宇垣はさっきとは別の窓を見詰める。その先には山本長官との思い出がたくさん詰まった前連合艦隊旗艦である戦艦『大和』が浮かんでいた。
「おい武蔵。長谷川という航海士を知っているか？」
突然翔輝の名が出て武蔵は驚いたが、万年筆を動かす。
『姉と共に日々楽しく過ごしている』
「そっか、仲がいいのだな、あの二人は」
『憎たらしいくらい仲がいい』
「おいおい、自分の姉にそんな事を言っちゃダメだろうが」
宇垣は呆れたように笑うが、武蔵は心の底からそう思っていたの

で、
『問題なし。事実だから』
「コラコラ」
宇垣は静かに微笑んだ。その笑顔は翔輝にも勝ると劣らないほど、優しいものだった。
宇垣はそっと天を仰いだ。
「武蔵よ。あの長谷川という航海士の事、どう思う？」
『どう思うとは？』
「いや、あいつは他の者と何かが違うんだ。一人でいると瞳が曇っているように見える。それに、いつも用がない時は空を見上げて、時々悲しそうな目をするのだ」
武蔵は正直に答えるべきか躊躇したが、回答した。
『翔輝は戦前に大事な妹を病気で亡くし、父も母ももうこの世にはいない。たった一人で生きている。妹の翔香が生きていた時はお互いに助け合って生きて来たが、翔香の死以来《死》というものに過敏に反応するようになってしまった。そして、いまだに大事な妹を忘れられいない』
「そうか・・・彼の瞳が悲しそうだったのは、そういう事か。ずいぶん情けない奴だな」
その言葉に、武蔵は不機嫌になる。
『翔輝は情けなくなんかない。立派に姉の航海士を務め、その実力を遺憾なく発揮している。それに、翔輝はすごく優しい。他人の痛みを理解し、そこを優しく包んでくれる。そんな彼は艦魂達にも好かれている。そんな翔輝が、情けない訳がない』
武蔵の荒々しい書体に、武蔵が激怒しているのを感じ取ったのか、宇垣は慌てて訂正を加えた。
「す、すまん。少し言い過ぎた」
その後しばらく気まずい沈黙が流れた。武蔵は自分から話し掛けるようなタイプじゃないので、宇垣の言葉を待っていた。一分ほど過ぎた時、宇垣が唐突に訊いて来た。

「なぁ、お前ってどんな子なんだ？　俺は艦魂が見えないからお前が見えないんだ。大和は以前長谷川中尉から聞いた事があるが、活発な明るい子と聞く。妹のお前はどうなんだ？」

武蔵はさらりと、

『姉とは正反対。冷静沈着で非喜怒哀楽。感情をあまり面に出さず、常に無表情。指揮官としての能力は姉よりは上だが、社交的な姉と違い、私は常に部隊から孤立状態にある』

「・・・なんか、苦労しそうな性格だな」

苦笑いする宇垣に、武蔵はそっと心のうちにある想いを書く。

『喜怒哀楽の多い姉を・・・少しうらやましいと思う』

「まぁ、それはそれで君の良さだと思うよ」

宇垣の言葉に、武蔵は小さく笑みを浮かべると、再び万年筆を走らせる。

『外見は姉をはるかに凌ぐ完璧型。スラリとした長身に長い髪。出る所は出て、引っ込む所は引っ込む。抜群のスタイルで、顔はきれい過ぎるほど整っていて、まさに、無類の超絶美少女』

自信満々に大ウソを書き殴り、宇垣に見せる。宇垣はそれを一通り読むと、大笑いした。

「あははッ！　無理すんなよ！　自分から超絶美少女なんて名乗る事自体がおかしいだろ!?　本当はその真逆なんだろ？」

武蔵は宇垣の反応に顔を真っ赤にする。

確かに彼の言うとおりだが、「あそこまで笑わなくてもいいじゃないか！」と心の中で怒鳴ると、乱暴に万年筆を走らせる。

『消すぞ』

「消えてるのはお前の方だ！　ははははは！」

お腹を抱えて大笑いする宇垣の上空に、突如無数の金ダライが現れた。そして、次の瞬間、

ガゴン！　ガゴン！　ガゴゴンッ！

宇垣は金ダライの急降下爆撃を受けて沈黙した。しばらくすると、金ダライの山がモソモソと動き出し、盛大な音を立てて崩れ、中か

ら困惑した宇垣が現れた。
「な、何だ？　何か見えない金属で脳天叩かれたぞ。なんというか、金ダライ・・・そうっ！　金ダライが空から無数に降って来たみたいな」
艦魂が見ない彼には、艦魂が空間から出した物も見えない。そんな困り切った顔をする宇垣を見詰め、武蔵は静かに金ダライを消した。
「お？　消えた・・・？」
驚く宇垣をよそに、武蔵は再び万年筆を走らす。
『次、変な事を言ったら刃物を落とす』
「じょ、冗談キツイぜ・・・」
『大丈夫。ケガはしないから』
「本当か？」
『ただし、ケガはしないけど、刃物に刺された痛みだけはする』
「あまり意味がないじゃん」
苦笑いする宇垣を見て、武蔵は混乱していた。
宇垣纏という男は常に冷静沈着。的確な指示を出し、山本長官の右腕をとして力量を振るっていた。日頃山本以外の者と会話する事はなく、実力のわりに部隊から浮いていた。それは彼がいまだに大艦巨砲主義者であるのも理由の一つだ。そんな孤立・独立な宇垣を、何か自分と似たものがあると思って武蔵は近づいたのだ。だが、こうして見ると結構おもしろい人物だった。地はこちらなのだろうか？
武蔵が深く考えている間、宇垣はずっと窓の外を眺めていた。その表情は『黄金仮面』と呼ばれ、参謀達から嫌われていた男の顔とは到底思えない朗らかなものだった。
この『黄金仮面』とは、自信家でプライドの高かった宇垣は上官に対してもあまり敬礼をせず、海軍学校の時の成績が自分より低い同期は無視するといった態度をし、さらに自分より下の者からの敬礼や挨拶は無視し、答えたとしても、「おう」とだけ言って頭を後ろに反らすな態度を繰り返していて、海軍内であまり好かれる人物

でなかった。そんな彼が常に不機嫌そうな表情で歩いていたので、『黄金仮面』と呼ばれ、まわりから毛嫌いされていたのだ。

補足だが、開戦当初宇垣と山本は仲が悪かった。大艦巨砲主義者で『大和』『武蔵』の建造を強く支持していた宇垣と『『大和』一隻の資材、資金で航空機が一〇〇〇機作れる』と建造に強く反対していた山本は元から考え方が根本的に違ったのだ。そんな二人の接点は対米英戦反対・日独伊三国軍事同盟反対側の人間だったというだけだが、それに関して宇垣は山本を尊敬していた。一方、宇垣は高まる同盟論に押されて、『ドイツやイタリアが開戦しても日本は開戦しない』という条件と付けて賛成側に回った。結局は米英と戦う事になったが。そんな宇垣の態度に山本は嫌悪感を抱き、二人は仲が悪かった。しかし、ミッドウェー海戦の時に大混乱した司令部を迅速に立て直した彼の行動を見て、山本は彼を信頼するようになった。

――補足終了――

そんな宇垣の今まで見た事のない表情に、武蔵は混乱したままだった。

「なぁ、武蔵。この戦いの行く末をどう思う?」

そんな急な質問に、武蔵は驚いたが、そこは旗艦。すぐに返答した。

『私は山本長官の『半年から一年は戦えるが、それ以降は無理』という意見に賛成。このままいけば、日本は《日本》という国家を失うまでアメリカに叩き潰される』

「・・・同意見か、さすがは連合艦隊旗艦。わかる者にしかこの戦いの先は見えんという訳か・・・いや、この戦いの行く末など、誰にもわからないか」

宇垣の言葉は、いまだに勝利をまさぐっている司令部の者達に対する嫌悪感の表れだった。武蔵は万年筆を動かす。

『どの時代にも、どの国にも、頭の固いの者はいる。敵の実力もわからずにただ無能に立ち向かう愚か者が。それは人間だけではない』

「と言うと？」
『私のまわりにもたくさんいる。艦魂達の重鎮である金剛は昔の考えに囚われ、その腹心である榛名はただ闇雲に敵を叩き潰す事しか考えず、陸奥は日本が勝つ事を信じ続け、姉は戦いを恐れている』
「大和が？　なぜだ？」
『姉は優し過ぎる。軍艦の艦魂や軍人には向かない。他人を想う反面、他人が傷つくのを見たくない。そんな優しい者は最も危険で、最も死亡率が高い。例としては、開戦反対で平和主義者だった霧島がいい例』
「霧島は、そんな奴だったのか？　姉達は結構わからず屋のようだが」
武蔵は静かに霧島の顔を思い浮かべた。
『霧島は優し過ぎた。アメリカと手を取って世界を守りたい。そう考える奴だった。巻雲もそんな一人』
「巻雲？」
首を傾げる宇垣。それはそうだろう。戦艦や空母なら名前を覚えておいて当然だが、駆逐艦一隻一隻の名前を覚えているなんて事はほとんどない。
武蔵はそっと万年筆を走らせる。
『ケ号作戦の時に仲間をかばって自らの命を犠牲にした駆逐艦』
「あぁ、あの時のか」
宇垣はやっと思い出した。ケ号作戦の時の犠牲表に一隻だけ載っていた駆逐艦。それが巻雲だった。
『彼女は敵空母『ホーネット』と接触し、対米英戦反対側に回った人物』
「そうか、良き者は次々に死んでいったのか」
宇垣は残念そうにつぶやく。そんな彼に、武蔵は続ける。
『それは人間も同じ事。あの猛将と謳われた山口多聞中将も、そして山本長官も、有能な人間は死んでしまった』
「そうだな。だが、まだ残っている者もいる。まだ日本海軍は死ん

だ訳ではない。一刻も早く立て直して、長官の仇を討つ」
宇垣の言葉に、武蔵は静かにうなずいた。
彼の言うとおり、日本海軍はまだ死んだ訳ではない。連合艦隊はまだ健在であり、空母も初期よりはだいぶ減ってしまったがまだ残っている。敵の戦意を奪い、一刻も早くかなり譲歩した形でも、日本という国を残す為の――敗戦の道を探さなくては。
武蔵は気合を入れ直した――と言っても、無表情の彼女ではあまり顔の変化はなかった。
「ところで」
宇垣は突然武蔵の方を向いて声を掛けて来た。何事かと武蔵も宇垣を見詰める。宇垣は十分な時間を置いて、質問して来た。
「お前、あの長谷川という航海士の事が――好きか？」
「・・・ッ！」
宇垣の突然の発言に、武蔵は彼女とは思えないほど動揺した。顔を真っ赤に染めてうつむき、両手を胸の前でモゾモゾと動かす。口はパクパクと閉じたり開いたりし、硬直していた。
そんな武蔵の反応などわからない宇垣は不思議そうに続ける。
「いやさ、彼の事を説明した時やけに力の入った文字だったからさ」
「・・・わ、私は、翔輝の事を・・・」
思い浮かぶのは翔輝の笑顔。
いつも優しく自分に微笑んでくれる彼の笑顔。
彼は自分にとって特別で、大和には悪いが、実の姉よりも信頼している。彼の優しい笑みに、いつも助けられ、励まされる。
「・・・私は、翔輝の事が・・・好き」
心からそう思った。
彼がいるからこそ、自分はこうして立っていられる。
彼の助けになりたい。
彼に助けてもらいたい。
翔輝の存在が、自分の中で大きなものになっている。
「・・・私は、翔輝が好き。この気持ちに偽りはない」

武蔵は頬を赤らめながら小さく笑みを浮かべてそう言った。
しばらくしても武蔵からの返事がない。宇垣はそれを肯定と受け取った。
「まぁ、わからなくもないがな。彼は確かに人一倍優しい。誰でも好感を抱けるだろう。だが、話を聞くに恋敵も多いだろう？　お前の姉――大和もその一人だろう」
そう、姉である大和は、最も翔輝の近くにいて、そして、翔輝の事が好きなのだろう。そんな事、言われなくてもわかっている。
「自分の姉を敵に回しての恋か、これは激戦になりそうだ。この戦争の行く末よりも予想が付かなそうだな」
ケラケラと笑う宇垣に、武蔵は真っ赤な顔のまま金ダライ爆撃を敢行した。
宇垣が再び顔を出す頃には、武蔵はいつもの冷静さを取り戻していた。
その後、武蔵と宇垣は雑談をしたが、宇垣自身の体力も考え、三〇分後には部屋を後にした。その時の武蔵の顔は、どこか釈然としないものだった。

一方、『大和』の航海室では翔輝が仕事をしていた。
「長谷川中尉。これでいいですか？」
「え？　うん。問題ないよ」
部下（部下と言っても翔輝の方が年下だが）の航海兵が置いた紙袋の位置を確認してうなずく翔輝。確認を終えるとすぐに自分の使っている机に目を戻す。机の上には海図の他に鉛筆や定規、分度器、下書き用の紙等が散らばっているが、汚い訳ではない。乱雑に物が置いてあるだけだ。
「それにしても、結構広い部屋なのに相変わらず狭いですね」
「航海科は物が多いからね。仕方ないよ」
そう言って乱雑に海図や筆記用具が散らかった部屋を見回す。紙袋の中で重ねられてたり丸められて保存されている海図の山がそこ

にあった。部屋の約半分が物で埋まっているこの部屋は『大和』航海科の全能力が詰まっていると言っても過言ではない。
「さぁ、早く終わらせて休もう」
「はい」
翔輝が散らばっている鉛筆を一ヵ所に集め始めた時、
「中尉」
聞き慣れた声が響いた。翔輝の隣にいる兵はまったく気づいていない。という事は・・・
振り向くと通路に大和が立っていた。
「大和？」
「え？　何ですか？」
翔輝の声に兵は不思議そうに見詰める。
「あ、いや、その大和が・・・」
その言葉に兵はすぐに理解した。翔輝が艦魂を見る事ができるのは『大和』ではかなり有名な事なのだ。
「中尉。私がやっておきますので。話をしてあげてください」
「え、でも・・・」
「でも早く戻って来てさい。さすがにこの量を私一人では」
「ありがとう。すぐに戻るよ」
そう言って、翔輝は兵に任せて通路にいる大和に近寄った。
「どうしたんだ？」
「いえ、ちょっと顔が見たくなって」
翔輝は豪快にコケた。
「ど、どうしたんですか！？」
「バカッ！　そんな事で僕を呼ぶなよ！　仕事中だったんだぞ！」
「ご、ごめんなさい！」
慌てて謝る大和に、翔輝は仁王立ちして言い放った。
「罰として、航海室の整理を手伝え」
「え？　そ、それは・・・」
目を横に逸らす大和。あからさまに嫌そうな顔だ。

「おいコラ。何嫌そうな顔してんだよ」
「だ、だって・・・」
大和は部屋を見詰める。中はかなりの肉体労働になりそうな光景が広がっている。艦魂とはいえ女の子がそんな力仕事を進んでやりたがる訳がない。
渋る大和に翔輝は大きくため息する。
「はいはいわかったよ。もう頼みません」
「あ、待ってください！　手伝いますからぁッ！」
不機嫌そうに部屋に戻った翔輝を見て、大和は慌てて手伝う事にした。

「いやー、助かります。まさか『大和』の艦魂に手伝ってもらえるなんて」
浮かんでいる紙袋に向かって兵は感激する。常人が見えない艦魂と接するのは極めて珍しく、翔輝と共に仕事をしている彼でさえ大和と接したの今回で三回目である。
「ほらほら。さっさと終わらせようよ」
「了解！」
明らかに先程よりも表情が明るい兵を見て、翔輝は苦笑いする。やっぱり、みんな艦魂が見える自分の事がうらやましいのだろう。確かに、大和達というのは楽しく、幸せだ――まあ、一概には言えない時もあるが。
「中尉。この紙袋はどこに置くんですか？」
紙袋を抱き締めながら大和が聞いて来た。
「あぁ、それはそっちにお願い」
「はい」
普通に大和と会話する翔輝を見て、兵はうらやましそうに見詰める。
「いいですね中尉は、艦魂と話ができて」
「別にいいって事はないと思うけど」

「だってこんな男だらけの世界で女と接せられるんですよ？　うらやましい限りです」
　なるほど、確かに軍隊は男の世界だ。女を求めたくなる気持ちはわかる・・・たまに歯止めが外れて同性愛者が誕生してしまうのも仕方がないのだ。
「ははは、そうは言ってもそんな女らしい女は駆逐艦や巡洋艦ばかりで、戦艦や空母はそんな奴ほとんどいないよ？」
　翔輝の言葉に、兵は驚く。
「そうなんですか？　噂では大和の艦魂は美人だと聞きますが」
「そ、そんな、美人だなんて」
　嬉しそうに照れる大和を見て、翔輝は大笑いした。
「誰だよそんなデマ流した奴。大和は全然美人じゃないよ。まだまだ子供だよ。それに――」
　刹那、翔輝の頭上に金ダライが現れ、その脳天に炸裂した。
「痛い！　何すんだよ！」
　頭を押さえながら怒る翔輝を、大和は睨み付ける。
「子供はともかく、美人じゃないってあそこまで否定しなくてもいいじゃないですか！」
「事実でしょッ！？　大人の女性はそんなに貧相な胸はしてないよッ！」
「胸の事は言わないでくださいってば！」
　ギャーギャーもめる二人を見て、改めてうらやましそうな目で見詰める兵。その時、
「あ、武蔵」
　大和の声に翔輝が振り向くと、通路を武蔵がとことこと歩いていた。
「武蔵！」
　翔輝が声を掛けると、武蔵は怪訝そうな顔で振り向いた。
「あのさ、ちょっと手伝ってほしいんだけど」
　すると武蔵は手に持っていた通信用の紙に万年筆で何かを書き、

それを見せて来た。
『了解』
「はい？」
武蔵は静かに部屋に入って来たが、翔輝の不思議そうな視線に首を傾げた。そんな武蔵に、翔輝は質問する。
「あのさ、何で筆記で回答したの？」
その言葉に、武蔵は「・・・あ」と声を漏らした。そして、少し恥ずかしそうに答えた。
「・・・さっき、宇垣参謀長と話してたから」
「う、宇垣参謀長と！？」
「え？　どうしたんですか？」
翔輝の突然の声に兵は驚いた声を上げた。
「あ、いや、その武蔵が・・・」
「え？　今度は『武蔵』の艦魂もいるんですか？　すごいです！」
感激する兵を一瞥し、翔輝は急いで武蔵を見詰める。
「宇垣参謀長の容態は？」
「・・・良好」
「そっか、良かった・・・」
胸を撫で下ろす翔輝。が、すぐに不思議そうな顔で武蔵を見詰める。
「でも、どうやって参謀長と会話したのさ」
「・・・会話というか、向こうは声で、こっちは筆記で答えただけ」
ポンと手を打つ。
「なるほど、やっぱり頭いいなお前」
「・・・それほどでも」
こういう事を否定しないのが彼女らしい。翔輝は静かに微笑んだ。
「長谷川中尉。手伝いましょうか？」
その突然の声に振り向くと、そこには水上がいた。
「水上？」
水上は室内を見回すと優しく微笑んだ。

「これだけの量。二人では厳しいでしょう」
作業帽の階級章がキラリと光った。
水上は先月めでたく水兵長の昇級した。同時に階級から見てもう従兵は卒業だったので、翔輝の従兵を解雇されたが、水上は「中尉の従兵をやめさせられるなら、昇級を放棄します！」と強く反対し、結局水兵長という班長になってもおかしくない地位にいるのに、いまだに翔輝の従兵をやっている。
「二人じゃないんだけど、お願いできる？」
翔輝の言葉に一瞬水上は不思議そうな顔をしたが、すぐにうなずく。
「あ、大和さんがいるんですね」
「おいおい、さんづけなんてよせやい。あいつのがらじゃないって。それに今は武蔵も一緒だ」
「へぇ、そうですか。では、計五人でがんばりましょう」
そう笑顔で言って、水上も手伝う事になった。
水上も合流し、片付けは当初の予定よりも早く終わった。

「本当にありがとう武蔵」
「・・・気にしないで」
楽しそうに話している翔輝と武蔵。その二人の後ろで不機嫌そうに見詰めている大和。
「私だって手伝ったのにぃ・・・」
そのつぶやきが聞こえたのか、翔輝は「ごめんごめん。ありがとう」と言い、すぐに武蔵と会話を再開させた。そんな翔輝の態度に大和は軽くイラッとして、二人を睨み付けると踵を返して去ってしまった。
大和のがいないと翔輝が気づいたのは、それからすぐの事だった・・・

第八章　第十一節　雛鳥飛翔　儚きの栄光の後継

い号作戦からしばらくした頃、内地近海では修理の終わった『翔鶴』と訓練の為にトラックから戻って来た『瑞鶴』『瑞鳳』『飛鷹』『隼鷹』の五隻の空母が搭乗員の飛行訓練を行っていた。

かつて蒼い天空を舞っていた荒鷲は今では雛鳥になってしまったが、雛鳥も時が来ればその力みなぎる翼を羽ばたかせて天空へと舞い上がり、また新たな荒鷲になる。そんな事を信じながら瑞鶴は飛び立っていく艦載機を見詰めていた。が、飛行甲板を走っていた零戦一機が発艦できずにそのまま海に着水してしまった。それを見詰め、瑞鶴はため息を付く。

最近はこんな事ばかりだった。まだろくに空母から発艦できないような搭乗員ばかりで、着艦はできる者がし、できない者は海面に着水して駆逐艦に救助してもらう。そんな光景ばかり最近見る。

真珠湾や珊瑚海の時は期待をその舞い上がる攻撃隊に込めて見送ったが、今ではそんな事はできない。むしろ無事に帰って来れるのかが心配だった。

そしてまた、一機の九九艦爆が発艦に失敗して海に落ち、瑞鶴は大きなため息をついたのだった。

その日の夜、瑞鶴は機動部隊旗艦である姉の会議室にいた。そこには機動部隊旗艦である翔鶴はもちろん瑞鳳や飛鷹、隼鷹他十数人の駆逐艦や巡洋艦達が集まっていた。

「それにしても、ひどいですね。我々駆逐艦が敵機を撃ち落とすのではなく、味方艦載機を拾いに行くはめになるとは」

一人の駆逐艦が言った言葉は、ここにいる者全員の気持ちだった。

ため息する瑞鶴。不機嫌そうに沈黙している翔鶴。搭乗員名簿を見て頭を抱える瑞鳳。今日の訓練を思い出してため息している飛鷹。

そして、

「はぁ・・・」
どことなく元気のない隼鷹。翔鶴に会った時はあんなに嬉しそうだったのに、最近はいつもため息を吐いている。それに夜になると彼女は星を見上げている事が多い。あの翔鶴でさえ彼女の異変に心配している。
「ねぇ隼鷹。どうしたのよ」
どっちが姉かわからない彼女の妹である飛鷹が心配そうに声を掛けた。その問いに、隼鷹は「ううん。何でもないよ」と力なく答える。
「何でもないって、そんなふうには見えないわよ。搭乗員のせい？」
「ううん。違うよ」
「じゃあ何で？」
飛鷹の問いに、隼鷹は力なく笑った。
「翔鶴お姉ちゃんに会えたのは嬉しいけど、でも・・・」
「でも？」
「翔輝お兄ちゃんに会いたくなって・・・」
その言葉に、飛鷹はため息する。
「あのね隼鷹。向こうにいれば翔鶴さん会いたくて、やっと会えたと思ったら今度は長谷川中尉。どっちか二者択一してくれないと」
「だって、会いたいんだもん」
「隼鷹」
寂しそうな瞳で落ち込む隼鷹に、瑞鶴は優しく笑みを送った。
「その気持ちわかるよ。私も早く大和と会いたいもん」
瑞鶴の優しい笑みに、隼鷹は小さくうなずいた。そんな優しい瑞鶴の姿を、瑞鳳と飛鷹は朗らかな笑みで見詰めた。
一方、皆が小さな笑みを浮かべる中、翔鶴は依然沈黙したままだった。腕を組み、何か真剣に考えているようだが、その表情はどこか不機嫌に見える。
「姉さん、どうしたの？　さっきから浮かない顔して」
瑞鶴が心配して翔鶴に声を掛けるが、翔鶴は沈黙したままだった。

「ねぇ、姉さんってば」
瑞鶴は翔鶴の袖をくいくいと掴んだ。が、翔鶴はそれを振り払った。
翔鶴は何度も頭を掻き乱す。
「うるさいな。少しほっといてくれ」
翔鶴はそう冷たく言い放つと、会議の資料を乱暴に掴んで部屋を出て行ってしまった。
呆然としている艦魂達。そんな中、瑞鶴は心配そうに翔鶴の去ったドアを見詰めるしかできなかった。
「姉さん。どうしたんだろ・・・？」
「翔鶴さん。最近疲れてるみたいですね」
「確かに、飛鷹の言うとおり、最近翔鶴お姉ちゃん忙しそうだもんね」
飛鷹と隼鷹の言葉はその通りだった。
最近翔鶴は機動部隊旗艦として仕事が山積みになっているのだ。元々翔鶴は旗艦というリーダー役はあまり向いていない。彼女は《将軍》ではなく《英雄》なのだ。
それが今では赤城の後を継いで機動部隊の旗艦となっている。南太平洋海戦までは熟練の搭乗員がまだ残っていて、戦局はまだ互角に戦えていた。そのおかげで旗艦としての仕事も少なく、翔鶴も難なく旗艦を務める事ができた。しかし、最近は搭乗員の質が落ち、今では戦闘訓練をする毎日。その結果、連合艦隊艦魂司令部からの書類やらなんやらが大量に送られて来るようになり、さらにまともな搭乗員の不足でさらに仕事が増え、最近はかなり忙しいのだ。
「大丈夫かな？　翔鶴さん最近かなり忙しそうだから」
瑞鳳も心配そうに声を上げる。そんな三人に背中を向けて、瑞鶴は暗い瞳でいつまでも沈黙していた。
夜中、多くの将兵や艦魂が寝静まったこの時間帯に、大忙しで働いている少女が一人いた。

空母『翔鶴』の会議室には大量の書類が山積みになっていた。その一つ一つを処理しているのは、決して頭脳系じゃない少女――翔鶴だった。

翔鶴は眠い目を擦って書類に目を走らせていた。

今彼女が呼んでいるのはラバウル基地に再び艦載機を転用させるという意見打診書だった。それは前回のい号作戦の時と同じで、小沢中将は反対している。もちろん翔鶴自身も反対だ。

「連合艦隊司令部は何を考えているんだ」

大きなため息を吐いて壁に掛けてある時計を見た。現在時間は午前二時三二分。草木も眠る丑三つ時とはこの事だ。最も恐ろしい時間帯である。

「もうこんな時間か。どうりで眠い訳だ」

何度も目を擦って眠気を吹き飛ばすが、それ以上の眠気が彼女を襲う。このまま無限のループが繰り返されるかと思われた、その時、

「姉さん？」

突然の声に振り向くと、そこには寝巻を着た妹――瑞鶴がいた。

「瑞鶴？　どうしたんだ。こんな時間に」

「姉さんこそ・・・」

「私か？　見てわからないのか？　仕事中だ」

「仕事って、こんな遅くまで？」

「当たり前だろ？　最近は戦局の悪化から司令部からの書類が大量に回って来る上に、なんか勝手に極上幹部会という新組織の戦略部副部長になってしまったからな。徹夜しないと終わんないんだよ」

「・・・大変なんだね」

「人事だと思って・・・」

「そ、そんな事・・・ッ！」

「いいから、さっさと寝ろ。明日はまた早いぞ」

翔鶴は瑞鶴との会話を一方的に終了させ、再び書類に目を走らせ始めた。そんな姉を見詰め、瑞鶴はそっと部屋を出て行った。

しばらくして、翔鶴が次の書類に目を走らせ始めた時、突然コー

ヒーの匂いがした。その瞬間、書類の横にカップに入ったブラックコーヒーが現れた。驚いて振り向くと、そこには瑞鶴が優しく微笑んでいた。

「瑞鶴・・・寝たんじゃなかったのか？」

怪訝そうに訊く翔鶴に瑞鶴は小さくうなずく。

「うん。もう寝る。でもその前に姉さんにコーヒーを淹れたくて」

「私に？」

「うん。これ飲んでもうひとがんばりしてよ」

瑞鶴は純粋な笑みを送る。そんな邪心のない妹を見て、翔鶴は苦笑した。

「まったく、貴様らしいな。まぁ、もらっとくよ」

翔鶴は瑞鶴の淹れたコーヒーを口元に持って来た。漂って来るコーヒーの匂いが脳の働きを活性化する。そして、静かにそれを口に含んだ。感想は、

「苦ッ！　苦過ぎる！」

翔鶴は顔全体をしかめて苦さを強調する。予想外の姉の反応に、瑞鶴は慌てる。

「そ、そんなに苦かった？」

「苦い！　これはもうブラックコーヒーじゃない。ダークコーヒーだ！」

「ご、ごめん。眠気を飛ばそうと思ってちょっと多めにコーヒー豆入れてみたんだけど・・・す、すぐに淹れ直して来るよ！」

「いや、もういいよ」

「ね、姉さん・・・」

しょんぼりと落ち込む瑞鶴を一瞥して数秒、翔鶴はどこか不機嫌そうに言った。

「貴様のすさまじいコーヒーで眠気なんか吹っ飛んだ。だからもういらん」

少し気恥ずかしそうな翔鶴を見て、素直じゃないなぁと思う瑞鶴。笑顔の瑞鶴に見詰められてほんのりと頬を赤く染め、翔鶴は不機嫌

そうに書類に目を戻す。
「い、いいから、さっさと寝ろ。貴様だって航空部の部長だろうが」
「う、うん。でも難しい事は飛鷹がやってくれてるし」
その答えに、翔鶴は呆れたような顔をする。
「まったく、飛鷹は部下な上に年下だぞ？　少しは上官として、先輩として立派なところを見せろ」
「うぅ・・・」
反論できずに落ち込む瑞鶴に、翔鶴は呆れながらも、どこか楽しそうな笑みを浮かべた。
「ほら、さっさと寝ろ。邪魔だ」
「う、うん。おやすみ・・・お姉ちゃん」
「・・・あぁ、おやすみ」
再び仕事を再開した姉を邪魔しちゃいけないと、瑞鶴はそっと部屋を出て行った。

瑞鶴はそのまま自室に戻る事はなく、甲板に出た。
空は雲ひとつない晴天で星がキラキラと輝いていた。
「きれい・・・」
瑞鶴はそんな星空を見上げ、嬉しそうに微笑んだ。
戦争がどんなに苦しくなっても、星の輝きだけは変わる事はない。
瑞鶴はしばし波音を聞きながら星空を見上げ続ける。が、その時月明かりに薄っすらと照らされる甲板に人影を見つけた。
「え？　誰・・・？」
不安げにそっと近づくと、その背中に見覚えがあった。
「え？　神風中尉？」
「うん？　瑞鶴？　どうしたのこんな時間に」
それは先日中尉に昇級したばかりの刹那だった。月明かりに薄っすらと照らされる彼の顔には優しげな笑顔が浮かんでいた。
瑞鶴は驚いたような顔で彼に近づく。
「それはこっちのセリフですよ」

「僕？　僕はちょっと眠れなくてね」
「眠れないんですか？」
「ちょっとね。だから風に当たろうと思ってさ」
そう言って再び空を見上げる刹那の横に瑞鶴はそっと腰を下ろした。
「でも、見回りに見付かったら大変ですよ？」
「うん？　まあ、その時はその時さ」
刹那の楽観的な考え方に、瑞鶴は少し呆れたように、だがとても楽しそうに笑みを浮かべた。
彼は非常に優秀な戦闘機乗りなのに、こうしたところが結構楽観的だ。
しばし二人は無言で星空を見詰め続けたが、そっと瑞鶴が口を開く。
「そういえば、ラバウルに戻った感想はどうでしたか？」
刹那はい号作戦でラバウルに派遣された一人だった。
その問いに刹那は小さく首を振る。
「悲惨だったよ。僕が前にいた時と全然違う、激しい戦闘だった。ラバウルに置かれている航空機はどれも埃だらけで風穴も開いてるのばかりだった。どれだけあそこが激戦を繰り広げているかがわかったよ」
「・・・そうですか」
瑞鶴はその言葉に落ち込む。
自分達機動部隊が情けないから、ラバウルの基地航空隊にそこまで重い負担を掛けてしまった。そのせいで、ラバウル航空隊は行ったら死ぬとまで言われるほどの激戦地になってしまっている。
なのに、今の自分達は真珠湾の頃の優秀な搭乗員はほとんどおらず、今では発艦さえ失敗する事が目立つようになったひ弱な搭乗員で構成された頼りない艦載機だけ。これでは、ラバウルを助ける事も、日本を守る事もできない。
ミッドウェーの大敗と、ソロモン戦の影響が日本という国に深い

傷跡を残したのだ。
「・・・私達のせいですね」
「そんな事ないさ。アメリカと戦うって決まった時、こんな事くらい予想できたよ」
「・・・返す言葉がありません」
「ま、そう落ち込むな。戦争なんだから仕方ないさ」
「そ、それはそうですけど・・・でも・・・」
「気にするな。僕達現場の者はただ動くだけ。そういう難しい事は上層部のお偉いさんに任せておけばいいのさ」
「それ、無責任じゃないですか？」
瑞鶴の少しトゲのある言い方に、刹那は力なく首を振る。
「僕達がどう考えようと、この戦争が変わる事なんてないだろ？」
「それはそうですけど・・・」
落ち込む瑞鶴の頭を、刹那はそっと撫でた。驚く瑞鶴に刹那は優しく微笑む。
「落ち込んだお前なんてらしくないぞ」
「中尉・・・」
「お前は笑ってればいいんだ。お前が笑っているだけで、みんな幸せになれるからさ」
刹那の言葉に、瑞鶴はしばし彼をじっと見詰めていたが、ふいに嬉しそうな笑みを浮かべる。
「中尉、ありがとうございます」
「うん？　何がだ？」
「私を心配してくれていたんですね？」
「バカ、そんなんじゃないよ」
少し照れたように言う刹那に、瑞鶴は優しく微笑むと、そっとその肩に寄り添う。
淡い月の光が、そっとそんな二人を照らし、見守り続けた。
翌日、瑞鳳は訓練を終えて着艦した一機の零戦に駆け寄った。そ

の手には白いタオルが握られている。
「剣！」
零戦から降りて来た剣に笑顔でタオルを渡すと、剣は嬉しそうな笑みを浮かべた。
「ありがとう」
「調子はどう？」
「うーん、まずまずだね」
瑞鳳から受け取ったタオルで汗を拭きながら剣は答える。
「一応編隊は組めるけど、やっぱり旋回なんかすると乱れちゃうね」
「そっか・・・昔はそんな事なかったんだけど・・・」
「仕方ないって。い号作戦でまた搭乗員が減っちゃったんだし」
「それはそうだけど、だからって・・・」
落ち込む瑞鳳。
彼女の想いはとても辛い。
彼女は空母の艦魂だ。己が飛行甲板から艦載機を舞い上げ、敵艦隊を撃滅する。それが空母としての責務であり、彼女の誇りだった。
だが、今の搭乗員ではそれは難しい。
レーダーで事前に大量の迎撃戦闘機を発進させたり、最新鋭の防空兵器を使った命中率の高い対空砲火の前では、最悪攻撃隊全滅という可能性もある。
それが、今の日本機動部隊の現状だった。
かつては無敵を誇っていた日本機動部隊も、今ではその見る影もない。
大型空母四隻、中型空母二隻、艦載機数約五〇〇機という空前絶後の戦力を持ち、無敵神話を作り続けたあの頃の機動部隊も、今では幻想でしかない。
現在の戦力は大型空母二隻、軽空母一隻の第一機動部隊と、改装中型空母二隻の第二機動部隊だけで、艦載機数約三〇〇機。しかもそのほとんどが素人同然の実戦経験もほとんどない新入りばかりだ。
とてもじゃないが、かつての栄光と比べるまでもなく、ひ弱な戦力

だ。
　しかも相手は栄光時代の時は敵大型空母はエンタープライズ型とレキシントン型の計五隻。他には大西洋方面から『ワスプ』が投入されたりもしたが、それでも六隻程度だった。しかし今では敵機動部隊には新鋭空母のエセックス型が次々に投入され始めているらしい。性能はわからないが情報に寄れば翔鶴型並みの搭載機数を持っているらしい。現在までに三隻が完成して艦隊に編成されているらしい。
　さらに日本の軽空母や商船改装空母に当たる護衛空母はもう無数に投入されているらしい。
　自軍は以前より戦力が減っているのに、相手はむしろより強固になっている。それが今の戦況である。頭が痛くなっていも仕方がない。
　先の見えぬ戦いに頭を抱える瑞鳳を、剣は不安げに見詰める。
「あんまり悪い方向に考えるな。もう少し練習すればもっとまともな攻撃隊が編成できるさ」
「そうだといいんですけど・・・あッ！」
　瑞鳳が海を見詰めた時、一機の九九艦爆が水面に着水した。どうやら着艦できなかったらしい。それを見て、瑞鳳はため息した。
「ほんとに、昔はそんな事なかったのに・・・」
「それを言うなら僕の方が驚いてるさ。僕は真珠湾攻撃に参加したんだよ？　鹿児島での猛訓練や実戦をこの目で見てきたんだ。その時はこんな未来なんて予想できなかったよ」
　真珠湾攻撃からミッドウェー海戦までは無敵を誇っていた機動部隊艦載機。その後も南太平洋海戦まではなんとか踏ん張っていたが、今ではそんな面影すらも残っていない。
　日本はあの機動部隊があったからこそこの戦争に踏み切ったのだ。
　なのに、今ではその頼みの綱である機動部隊は存在せず、あるのは長い戦いの中で戦力をすり減らし続け、もはやまともな搭乗員も持たないひ弱な機動部隊のみ。

戦争はこれからより一層激しさを増し、日本が不利になっていくというのに、敵は戦力を無限に拡大し続け、自分達はわずかな戦力でさえ次々に失っていく。

もはや、この戦争に勝利なんてものはなくなっていた。あるのは、無意味な戦いの日々と、徐々に日本という国の首に迫る敵の牙のみ。

勝てぬ戦をして、一体何の意味があるのか。

一体自分達は何の為に戦っているのか？

戦争に勝つ為？

日本を守る為？

それらは目標であって結果ではない。

結果は、日本を守る為のこの戦いは、日本を苦しめ、破滅への道を歩み出しただけだった。

この戦争は正しかったのか、この戦争で日本はどうなるのか、そんなの全然わからない。

今はただひたすら鍛錬に励み、後の大反攻作戦に備えるだけ――いや、それしかできない。

自分はなんて無力なんだろう。改めて自分の弱さを自覚する。

「ほんと、私はダメな空母ね・・・」

落ち込む瑞鳳から、剣はそっとメガネを取る。驚く瑞鳳は顔を上げ、自分を優しく見詰める剣と目が合う。度が入っていないとはいえ、レンズ越しの彼の顔はまた違った感じがした。

「そんな事ないさ。瑞鳳はダメなんかじゃない。僕は知ってる。君が誰よりもがんばっている事を」

剣の言葉に一瞬嬉しくなったが、すぐに首を振る。

「がんばったって、結果が出せなきゃ意味がないよ」

「確かにそうかもしれない。でも、やった事に意味がある。それもまた事実さ。落ち込んでも仕方ない。今は目の前の事をがんばろう」

「・・・剣」

瑞鳳は剣の言葉に明るいものを見た。

この戦争がどうなるかなんて、結局は誰にもわからない。わから

ないからこそ、みんなは必死に手探りで探しているのだ。
だったら、自分は今目の前にいる彼と一緒に戦えばいい。それだけでも、きっと何かが変わる。そんな気がした。
瑞鳳の優しげな笑みに剣も笑顔でうなずく。
そして、次々に戻ってくる艦載機を――この雛鳥達が大空を勇ましく羽ばたく荒鷲になる事を夢見て、いつまでも見詰め続けた。

一九四三年四月二一日、山本五十六大将の後任として、新連合艦隊司令長官は古賀峯一（こがみねいち）大将が着任した。古賀は内閣総理大臣の米内（よない）光政（みつまさ）、開戦初期第四艦隊司令長官として奮戦し、今は海軍兵学校長に就任している井上成美中将、そして山本とは親しい関係であり、全員対米英戦反対派だった。
就任したすぐに旗艦『武蔵』で開かれた連合艦隊司令部首脳部会議では「もはや寸分の勝ち目もない」と断言した。
こうして、もはや海軍実働部隊の頭がこの戦いの勝利を諦めている新連合艦隊が発足し、新たな日本海軍の歴史が始まった。

第八章　第十二節　懐かしき日本の風

一九四三年五月八日、戦艦部隊は護衛の駆逐艦に守られながら整備の為に内地へ向かってトラック島を抜錨(ばつびょう)した。

乗組員にとっては久しぶりの内地で、皆家族や大切な者の顔を思い浮かばせながら嬉しそうな笑顔をほころばしていた。

それはもちろん翔輝もだった。

白波を立てて進んでいる艦隊を翔輝は嬉しそうに見詰めていた。

そんな翔輝を見詰めるのはどこか不機嫌そうな大和。

「長谷川。やけに嬉しそうだな」

航海長の言葉に、翔輝は素直にうなずいた。

「はい。なんせもう半年以上内地に戻ってないんですから」

「そうだな。普通の科なら時々内地に戻れたが、俺達航海科は艦から降りれないからな」

「はい。おかげで妹の命日にも戻れなかったですし・・・」

残念そうな顔をする翔輝に、航海長は「すまんな」と謝る。そんな航海長の態度に翔輝は慌てる。

「そ、そんな謝らないでくださいよ！　大丈夫ですって！　知り合いがうまくやってくれましたし。問題ありませんよ」

この知り合いとはもちろん翔香の親友である瑠璃だ。

い号作戦の少し前に翔香から手紙があり、翔香の命日はこっちの方でやるから心配はないとの事だった。そんな瑠璃に会うのも約一年ぶり。時が流れるのは早いものだ。

「でもまぁ、久しぶりにあいつにも会えるし、それは嬉しいけど」

「あいつ？　あいつってこれか？」

航海長がニヤニヤと笑って小指を立てる。

「ち、違いますよ！　そんなんじゃないですよ！　ただの幼なじみって言ってるじゃないですか！」

顔を真っ赤にして怒る翔輝を見て、航海長は豪快に笑った。そん

な二人を見詰めて松田も静かに笑っている。
一方、顔を赤く染めている翔輝を見て、どこか不機嫌そうな大和。
「どうしたの？」
翔輝が不思議そうに訊くと、「知らないです」と顔を逸らされてしまった。まったくわからない翔輝を睨み、大和は唇を尖らせたままだった。

艦隊は順調に進み、ついに明日には柱島に到着する海域まで来ていた。
その日の昼間、珍しく旗艦『武蔵』の会議室で艦魂会議が開かれていた。
「明日には柱島に到着。そこで一度寄港して呉の軍港に入り、各艦の整備を行います。これから戦争は今まで以上に激戦になります。この辺でちゃんと整備を行い、万全の体制で望まなければなりません」
極上幹部会副会長を務めている大和が説明をする。
連合艦隊旗艦――極上幹部会会長である武蔵は無口なので説明は全て大和がする事が暗黙の了解になっている。
大和の説明の後、武蔵は無表情で書類を眺めていた。
「確かに、もうこれが本格的な整備の最後かもしれないな」
金剛は麦茶を飲みながら言う。紅茶じゃなくて麦茶を飲んでいるのは会議が『武蔵』で行われている為、翔輝が来れないので紅茶を淹れてくれる人がいないからだ。
長門は陸奥と一緒に書類を読んでいたが、大和の元気のない顔を見て声を掛けた。
「ねぇ大和。どうしたのよ。最近、トラック島を出てからちょっと変よ？」
「そ、そうですか？」
「そうよ。本当にどうしたのよ？」
心配の目線が大和に集中する。みんな大和の異変には気づいてい

た。
　大和は「何でもないです」と答えるが、長門はちゃんと説明するように要求する。そんな長門に押され、大和はしばらくして口を開いた。
「内地から離れて、ずっと中尉と一緒でした。でもそれももうすぐ終わり。中尉は呉に戻ったら上陸する気です。陸に上がれば、私との縁は切れます。そして、中尉には瑠璃さんという幼なじみがいます。これまで会えなかった分、二人は楽しそうに会話したりするでしょう。それが、なんか悔しくて・・・中尉は艦から降りたら私との関係は断たれます。しかし、人間である瑠璃さんは艦の上でも、艦を降りても関係はずっと・・・それが・・・悔しくて・・・寂しくて・・・」
　大和は心配していたのだ。翔輝が自分から離れて、他の女の子と仲良くして、心まで離れてしまうのを。
　長門はそんな乙女らしい悩みで悩んでいる大和に微笑み掛けた。
「大丈夫よ。長谷川君はそんな人じゃないでしょ？　あなたがそれを一番わかってるじゃない」
「わかってます。わかってますけど・・・」
「わかってるけど、何？」
「・・・少し、心配で・・・」
　うつむく大和の肩を、長門はそっと叩く。
「何言ってんのよ。長谷川君はそんな人じゃないでしょ？　信じられないの？」
「そ、それは・・・」
　うつむいたままの大和に、長門はため息した。その時、
「・・・信じられないのなら信じなくてもいい。それが姉さんの翔輝に対する評価なんだから。私は信じる。翔輝の事を」
　武蔵は静かに言った。書類から視線を外し、大和を見詰める。その視線は何か挑発的なものが含まれていた。だから、
「な、何よ。私だって信じてるわよ！」

大和も反撃に移る。が、武蔵はわざとらしく大きなため息をつく。
「むかつく！　そのため息！」
「・・・信じてるなら何を心配する？　何が不安？　信じてるなら、そんな負の気持ちは発生しない」
「そ、それは・・・その・・・」
言葉に詰まる大和を見詰め、武蔵は無表情の中にも少し寂しそうな顔で口を開く。
「・・・認めたくないけど、姉さんは今現在最も翔輝に近い艦魂。その姉さんが翔輝を疑うなんて、本末転倒」
「武蔵・・・」
「そうだよ。私は中尉を信じてるよ」
「うちも。長谷川はんを疑うなんてありえまへん」
「陸奥さん、伊勢さん・・・」
陸奥と伊勢、翔輝派の主力二人が自信満々にそう言った。二人は自信満々の笑みを浮かべている。二人の笑顔を見て、大和の顔にも笑顔が華やぐ。
「つーか、あの低姿勢全開の平和主義者にんな度胸ある訳ねぇだろ」
榛名がめんどくさそうに言った。正論だが、どことなく腑に落ちない意見である。
「まぁ、私もあいつの事はこの一年半見てきたが、積極的に女に攻撃をするような奴ではないな」
金剛は三杯目の麦茶を飲みながら言う。そんな金剛の意見に大和の気持ちも吹っ切れた。しかし、金剛は続けた。
「だが、自分からは積極的ではないが、逆に積極的な女に流される傾向はあるみたいだがな」
『・・・確かに』
まったく否定できない。その通りだった。
「積極的な女の子って誰？　実は山城だったりして」
扶桑はニヤニヤと実の妹の山城を見詰める。見詰められた山城は無表情のまま鉛筆を扶桑に投げ付ける。

「おっと、そんな簡単な攻撃――ほべっ！」
鉛筆は囮だった。後から飛んで来た軍帽が扶桑の顔面に命中した。
軍帽は結構硬い。しかも扶桑の顔面にはその中でも最も硬い部分、鍔がクリーンヒットし、ちょっと痛そうだ。
「ちょっと山城！　囮使うなんて卑怯よ！」
「・・・」
「ああッ！　また無視する！」
相変わらずこの二人は姉妹という基本的関係が成り立っていないらしい。
扶桑は山城に軍帽を投げ返すと、キラキラした瞳で伊勢を見詰める。見詰められた伊勢からは血の気が失せていた。
「伊勢ちゃーん！　私の氷のように凍て付いた心を温めてぇッ！」
すさまじい踏み込みで一瞬で伊勢の目の前に出現。回避などできる暇はなく、伊勢は扶桑に捕獲された。
「あはーん。伊勢ちゅわーん！」
「ね、姉はん・・・ッ！」
悶え苦しむ伊勢を眺め、唖然としている陸奥。
相変わらず変わらないみんなを見て、いつの間にか大和は笑っていた。
戦艦の艦魂である自分には、戦艦だけでもこんなに多くの仲間がいる。他の艦種も含めるとたくさんの仲間がいるのだ。ただ、戦艦だけでももう二人いなくなり、空母もたくさん死んでしまった。
日本は戦争をしている。この辺で少し休憩してもバチは当たらないだろう。
「なぁに充実した顔してんだ。充実するのは野菜だけにしとけ」
「まぁ、こんなふうにしてられるのも、もうないかもしれないんだしね」
いつの間にか榛名と陸奥が隣にいた。
三人は扶桑と伊勢の攻防戦をしばらく見ていたが、突然榛名が大和の耳元でぶっちゃけ本音を吐いた。

「でもよ、姉貴の言うとおりあいつその場の流れに身を任すタイプだからな。俺達の監視の目が外れてその瑠璃とかいう奴に捕まったら、そのまま既成事実まで行っちまうかもしれねぇぞ？　場の空気だけで」

「そ、それはさすがにないと思いますけど・・・」

大和は否定するが、榛名は首を横に振る。

「でもよ、さすがにそこまで行かなくてもキスの一つや二つはやっちまうんじゃねぇ？」

「そ、それもさすがに・・・」

「そうか？　それにそいつはあいつの幼なじみなんだろ？　っていうか、もうそこまでの関係だったりして」

「ま、まさか。ははは・・・」

「おーい、大和。笑顔が引きつってるぞ？」

榛名はそうツッコミを入れた後、真剣な顔をした。

「俺は奴に借りがある。姉貴の心に触れられた大事な借りがな。だから、その借りを返す為にも、あいつに変な事は絶対にさせねぇッ！」

ゴオオォォォと燃え上がる榛名のやる気の炎に、二人はちょっと引いていた。

なぜここまで真剣になるのか。大和や陸奥と違い、榛名は別に翔輝に特別な感情を抱いている訳でもないのに。やはり、義理深い大和民族に血を受け継いでいる彼女だからこそ、そこまで借りに執念を燃やすのか。

「ねぇ榛名。あなたひょっとして長谷川君が好きなんじゃないの？」

『なッ！　何ですとおおおおぉぉぉぉぉッ！？』

突然現れた長門の爆弾発言に三人は驚愕の絶叫をする。特に一番驚いたのは榛名だった。顔を真っ赤にして激怒する。

「ば、バカヤローッ！　な、何で俺があんなヘラヘラした奴を好きになるんだよ！　誰があんな平和主義者――」

「あら？　男勝りなキャラって優しい男の子に恋するのが王道なの

よ？」
「勝手に俺の設定を決めるなあああぁぁぁッ！」
「ハーレムアニメの定番なのに。あなたは《男勝り系》ね」
「だから勝手に決めるな！」
「だって、ポニーテールだし、めちゃくちゃ強気なのに実はホラー話が苦手って、榛名そのものじゃない」
「うわーッ！　言うな！　恥ずかしい事言うなぁッ！」
顔をさらに真っ赤にして春名は慌てて長門の口を塞ぐが、時すでに遅し。
「あ、あの陸奥さん。榛名さんって怖い話だめなんですか？」
「う、うん。昔からね」
「へぇ、じゃあ今年の夏に肝試しやりましょうか？」
「あ、それいいね」
「コラそこの外野！　コソコソうるさい！」
榛名は叫び疲れたのか肩を激しく上下させて呼吸している。そんな彼女に攻撃の手をまったく休めない長門。
「それにほら、『強がりを言っているが本当は主人公に対する好きな気持ちを素直に出せないでいる』。まさにこれじゃない」
「誰が主人公だ！　誰が誰を好きなんだ！」
「あら、主人公はもちろん長谷川君で、榛名が長谷川君の事を好きなのよ」
「長門！　テメェ覚悟の上でやってんだろうなぁッ！」
「覚悟の上は覚六覚七覚八覚九・・・ｅｔｃ」
「うるせえッ！　上るんじゃねぇッ！」
一人激昂している榛名を無視し、長門は一枚の紙を取り出した。
「ちなみに陸奥と大和、他の艦魂ほとんどがこの《清純派》っていう分類に入るわね」
「そ、そんな、清純だなんて」
「ちなみにこれは各系統に分かれるから必ずしも純粋な女の子という意味じゃないからね大和」

「そ、そうなんですか」
少し残念そうな大和だった。
「この《男勝り系》はもう榛名しかいないわね。たぶんこのまま進行するとさらにこの《ツンデレ系》の要素も加わるわね」
「いいなぁ、一人でこんなに要素があるなんて」
「あと他にはこの《委員長系》は祥鳳が該当するわね」
「じゃあ、この《お嬢様系》は瑠璃さんですね。憶測ですが」
「そうね。あとは雰囲気的には伊勢も該当するわね」
「ほんま？　うちがお嬢様やなんて嬉しいわぁ」
「そしてこの《お姉様系》は私や扶桑が該当するわね」
「比叡さんも該当しましたよね」
「まぁね。この《天然ボケ系》は・・・日向かな？」
「でも、日向はこっちの《ロリ系》と組み合わせですよね」
「そうね。この《耳年増系》は・・・いないわね。これといった者は特に」
「お姉様は色恋ざたの《耳年増系》だと思うけど」
「そう？　この《ロリ系》はさっきの日向もそうだけど、純粋に言ったら隼鷹よね？」
「確かに、あれは《ロリ系》の中の分野の一つ、《妹系》ですよね」
「最後にこの《ミステリアス系》。この分野の中でも《内気系》だったら霧島。《無口系》は山城や武蔵が該当するわね」
「どちらかって言うと、武蔵は《ミステリアス系》全ての要素を持ってるんじゃないですか？」
「そうだよね。あの子は不思議かつ電波キャラだよ。きっと」
考え込む三人に、すっかり忘れられてしまった人物が怒りの炎を燃やして咆哮する。
「ゴラアアァァァッ！　無視すんじゃねえええぇぇぇッ！」
「あら、忘れてたわ」
長門は罪のない笑みを向けると、ガルルルと唸る榛名の肩をポンポンと叩き、長門はそんな不器用な恋する乙女に激励をする。

「がんばってね榛名。恋敵は多いけど、私はあなたも応援するわよ」
キレた。確実にキレた。
榛名のポニーテールが怒りの炎のようにゆらゆらとダークに華やぐ。
「あ、あらあら」
さすがの長門も張るなの激怒ぶりに笑顔も引きつっていた。そんな彼女に向かって榛名は怒号を発した。
「ブッ殺すッ！」
艦魂の標準装備である軍刀を抜刀し、長門に切りかかるが、彼女は紙一重でこれを何とか回避する。回避した長門を榛名は体勢を整えて追撃すると、長門も慌てて駆け出す。
「待でやゴラアアァァッ！」
「もう、素直じゃないんだから榛名は♪」
「マジでブッ殺すッ！」
二人は喧騒と共に部屋を出て行った。
ちょっと危険な鬼ごっこがここに始まった。

翌日、艦隊は無事に懐かしの地――柱島に到着した。そこで機関科や航海科といった艦には絶対に必要な兵員以外の約半分が上陸した。戦艦部隊は本格的な整備を受ける為に各海軍工廠に入渠するので、必要最低限以外の兵はみんな艦から降ろされるのだ。
艦橋から上陸していく将兵を見詰めている翔輝に、大和は不安げに声を掛けた。
「明日、中尉も上陸されるんですよね？」
「うん。ダメ・・・かな？」
翔輝はうかがうように大和を見詰める。前回はそれで絶交寸前まで関係が破綻したのだ。翔輝もそれを心配しているが、上陸したい気持ちもある。
そんな板挟みの彼の気持ちを、大和はちゃんとわかっていた。
「別にいいですよ。もう中尉を束縛したいなんて思ってませんし。

ゆっくり休暇を楽しんできてください」
大和が笑顔で言うと、翔輝は驚いたような顔をする。
「お前、大人になったな・・・」
「私だって成長はしてます。外見はあまり変化はありませんが」
「そっかなぁ？　少し身長が伸びたような気がするけど」
「そうですか？　今度測ってみます」
そう笑顔で言っているが、大和の本音は翔輝を降ろしたくはない。でも、そんな事を言って自分のわがままで翔輝を苦しめる事もしたくない。二つの正反対な気持ちに挟まれ、大和は苦笑いするしかなかった。
「瑠璃さん、元気にしているのでしょうか？」
「うん。結構元気にしてるみたい」
翔輝が嬉しそうに言うと、大和は寂しそうな笑みを浮かべる。その笑顔に、翔輝もようやく気づいた。
「大和・・・やっぱり、降りない方がいいよね？」
「え？　あ、いえ。そんな事ありませんよ。久しぶりの再会です。ゆっくりお楽しみください」
大和は無理して笑顔になるが、そんな彼女の表面だけの笑顔など、もう一年以上の付き合いなので、本心はわかってしまう。
「大和、無理してるでしょ？」
「無理なんかしてませんよ。どうしてそう疑われるんですか？」
「だって、すごく悲しそうだから」
「・・・そうですか」
大和はそこでもう笑顔を作るのをやめた。どうせ無理しても笑っても、彼にはすぐ見破られてしまうのだから。やるだけ無駄だ。
「確かに辛いですし、本心では中尉には離れてほしくありません」
「だったら――」
「――でも、中尉を縛り付けたくないというのも、本当の気持ちなんです。どっちも私の気持ちで、相反する想い。だから、私もどうすればいいのか・・・わからないんです」

「大和・・・」
大和は寂しそうな表情のままうつむいてしまう。
この一年、二人はいつも一緒にいた。それは変わらない事実で、良き思い出だ。だが、これからは違う。翔輝は大和の手の届かない所へ行ってしまう。そして、そこでまだ自分が見た事のない幼なじみの女性と会う。それが苦しくて仕方ない。
「・・・でも」
大和はしっかりと顔を上げた。その瞳は真剣な想いが込められていた。
「私は、自分のわがままで中尉を縛り付けたくない。だから、上陸してください」
「大和・・・」
大和の瞳に、翔輝はそれ以上何も言わなかった。
彼女が決心して決めた事。それをとやかく言う権利は自分にはないと思ったからだ。
だが、できる事があるとすれば・・・
「ちゅ、中尉!?」
翔輝はしっかりと大和を抱き締めた。
腕の中で、大和が顔を真っ赤にして混乱する。
「中尉!?　な、何ですか突然!?　は、離してください!」
「嫌だ」
「ちゅ、中尉・・・?」
「これから少しの間だけど会えなくなるんだ。これくらい、いいだろ?」
翔輝の言葉に、大和はもう抵抗はせず、静かにうなずいて彼に身を任せた。
翔輝の腕の中で、大和は幸せそうに笑みを浮かべた。
「中尉・・・私やっぱり、中尉の事が・・・」
「・・・大好き」
「「えぇッ!?」」

突然の声に振り返ると、そこにはいつの間にか翔輝の手を握っている武蔵が立っていた。
「む、武蔵？」
「・・・翔輝、私もギュッてして」
「え？　あ、ちょっと・・・！」
武蔵はそう言うと手早く大和をどかして翔輝の胸の中に飛び込んだ。その早業に翔輝も大和も一瞬反応が遅れてその進入を許してしまったが、すぐに反撃する。
「な、何するのよ武蔵！」
「・・・邪魔しないで」
「あぶッ！？」
武蔵は自分の肩に手を掛けて邪魔しようとした大和に冷静にローキックを炸裂させた。そのあまりの痛みに大和は悲鳴も上げられずにその場に倒れて悶絶する。
「や、大和ッ！？」
「・・・翔輝はこのままでいい」
「ちょっと武蔵！　離してよ！　大和が、大和がぁッ！」
「・・・平気。姉さんなら勝手に復活する」
「そういう問題じゃないでしょッ！？」
「・・・翔輝、好き」
「武蔵ぃッ！」
いつの間にか痛みのせいで気絶してしまった大和の横で、幸せそうな笑みを浮かべて翔輝に抱きつく武蔵と、そんな彼女に抱きつかれて身動きできない翔輝。
いつもと同じ、何気ない日常がそこにあった。
夕方、戦艦部隊は護衛部隊と別れて一路呉に向けて発進した。

第八章　第十三節　燃え盛る瑠璃の灼熱逆鱗

五月二一日、戦艦部隊は各艦それぞれ無事に呉海軍工廠に入渠した。

戦艦『大和』も生まれ故郷である第四船渠に入渠。整備作業の為に残った兵達も次々に退艦していった。ただし、艦の長である艦長は艦に残らなければならない。その他参謀長や航海長、通信長、砲術長等のそれぞれの科の長も残る。その為に艦橋には艦を降りていく兵達を見送っている松田達が残っている。

一方、甲板ではアタッシュケースを持った翔輝を見送る為に多くの艦魂が集まっていた。

「今回は何日くらい休暇なの？」

「二泊三日って所ですね」

長門の質問に翔輝は正直に答えた。翔輝の返答に長門は少し驚いた。

「三日だけ？　私の所の航海士達は一週間くらい休みを取ってるのに」

「あまり陸の上に長居するきはありませんし、大和に心配かけたくありませんからね」

翔輝は大和を見ながら笑顔で言った。翔輝の言葉に長門が大和を見詰めると、大和はうつむいているが頬がほんのり赤くなっていた。

「あらあら、優しいのね長谷川君。でもたまには自分のわがままを通してもいいと思うけどな」

「別にいいですよ。陸に上がったら何にもできない男ですからね」

「そんな事ないと思うけど」

長門は小さく微笑んだ。

長門との会話を終わらせ、翔輝は他の戦艦達の方にも声を掛けた。

「それじゃ、ちょっと行ってくるよ」

「ふん、行くなら勝手に行け。羽目を外し過ぎんなよ」

「・・・な、何？　その無責任な見送り」
「お前がどうなろうと知ったこっちゃねぇって事だ」
榛名は不機嫌そうに翔輝に罵声を飛ばす。翔輝はそんな榛名に態度に苦笑いするが、長門はニヤニヤと笑う。
「あらあら、素直じゃないんだから」
「な、何だよ？」
榛名はニヤニヤと笑みを浮かべる長門を睨む。
「本当は離れたくないんでしょ？　素直に言っちゃいなさいよ」
「うっるせえええええぇぇぇぇぇッ！」
顔を真っ赤にして軍刀を振り回して追い掛ける榛名を笑いながら紙一重で回避しながら逃げる長門。相変わらず頼りなさそうだがものすごい力を秘めている人だ。
そんな二人を苦笑いしながら見ている一同。
「ほんま、えらい過激な鬼ごっこやね」
「お姉様。最近榛名さんをからかうのが楽しいらしいの」
「はた迷惑な楽しみ方やね」
呆れる陸奥と伊勢。そこから少し離れた所には「まったく、何をやっているんだ」とため息混じりで自分の妹の痴態を見て呆れている金剛がいる。
その反対側には日向に絡まれて少し不機嫌そうな顔をしている山城がいる。どことなくその顔は嬉しそうにも見える。そんな二人の横では伊勢に襲い掛かるチャンスを見定めている扶桑がいる。
多くの女の子に見送られるとはうらやましい限りだが、彼はそういう事は鈍感なので残念（？）である。
「・・・翔輝」
「武蔵？」
いつの間にか翔輝の横には無表情が第一印象の少女――武蔵がぽつんと立っていた。しかも、
「何で手繋いでるの？」
これまたいつの間にか翔輝の手が武蔵の手に掴まれていた。彼女

の手は女の子らしい柔らかくて温かい手だった。
翔輝に理由を聞かれると、武蔵は少しうつむいて、
「・・・別に」
二文字で返された。相変わらず口数が極端に少ない子だ。
「まぁ、別にいいんだけど」
翔輝自身も女の子に手を握られるのは悪い気はしない。だが、
「あッ！　武蔵！　何勝手に中尉と手を繋いでるの！」
大和に発見され、それに呼応して陸奥と伊勢も加わっていきなり
三人は翔輝に抱き付いた。
「お、お前ら！」
「中尉は渡さないです！」
「それはこっちのセリフよ！」
「うちやって渡さへんから！」
「・・・同感」
四人の女の子に構われるという男の夢とも言うべき状況の中、翔
輝はバランスを保つのが精一杯だった。もったいないと言うか何と
言うか。
いつものように翔輝の取り合いが始まった。その時、
「こ、困ります！」
突然響いた声に五人の動きは止まり、艦魂達も会話を中断した。
「な、何だ？」
翔輝が周りを見ると、兵達や整備員達が下を見ていた。翔輝も同
じく下を見る。それに合わせて艦魂達ももめている方向を見る。そ
こには・・・
「瑠璃様！　ここは一般人は立ち入り禁止です！」
整備長と思われる中年の男が高そうな着物を着こなす少女に注意
していた。だが、なぜかすごく低姿勢なのが気になる。
少女は不機嫌そうな顔で整備長を睨み付ける。
「私の父はこの海軍工廠に資金提供をしているスポンサーですわ。
その娘を一般人扱いするなんて、所長に言いつけますわよ」

「そ、それはご勘弁を。でもですね」
「私に逆らうつもりですの？」
その返答許さぬ声に、整備長は沈黙する。
少女は不機嫌そうに整備長を一瞥すると、巨大な艦体を威風堂々と輝かせている戦艦『大和』を一変して優しげな瞳で見詰める。その優しげな表情はずいぶん大人らしくなったが、いまだに幼い少女の面影を残している。
「瑠璃？」
翔輝は驚いた顔で少女を見詰める。
「あれが瑠璃さんですか？」
大和が親の仇のような目で少女を見詰める。他の艦魂も翔輝の幼なじみとわかると凝視する。
少女の名は――霞瑠璃。広島県を本拠地に日本でも有数の大金持ちの貴族の娘である。そして、今は亡き翔香の親友であり、翔輝の幼なじみでもある。
「瑠璃！」
翔輝が大声で声を掛けると、瑠璃はビクリと震え、恐る恐る上を見上げる――そこで、二人は約一年ぶり二人は再会した。
瞳と瞳が重なり、お互いを見詰め合う。
しばらくお互い何も言わずに見詰め合っていたが、瑠璃の顔に満面の笑みが華やいだ。
「翔輝様！」
瑠璃はいきなり走り出してラッタルを上り出した。慣れないラッタルを動きづらい着物で駆け上がるとはこの少女も只者ではない。
「瑠璃！」
急いで翔輝もラッタルに向かって走り出した。そんな彼を追う者は誰もいなかった。大和も、ただ見詰める事しかできなかった。
翔輝がラッタル付近に到着した時にはもう、瑠璃はラッタルを上り切っていた。素人とは思えない速さである。
日本海軍には軍艦に女を乗せてはならないという規則があるのだ

が、誰も注意しなかった。誰が好き好んで自分の首が飛ぶようなマネをするものか。

距離にして五メートル。今までは三〇〇〇キロ以上離れていた二人の距離が、今はわずか五メートルにまで縮まっていた。手を伸ばせば触れられる。そんな短い距離にまで・・・

「瑠璃・・・」

「翔輝様・・・」

お互いの小さな声までが聴こえる。そんな短い距離。

日本列島の長さに匹敵する距離――これは今までの物理的距離。

一年という長い時間――これは会えなくなった時間という距離。

それが今、五メートルというわずかな距離。触れるまで数秒もかからない時間の距離。そこまで近くなったのだ。

きれいな着物を着こなす瑠璃は沈黙したままだった。が、そのつぶらな瞳からはぽろぽろと涙が溢れ出ていた。

「瑠璃・・・」

翔輝も呆然と立ち尽くしていた。

二人は一歩も動かない。ただ、見詰め合うだけ。だが、それも終わった。

「翔輝様！」

瑠璃は駆け出し、一瞬で翔輝の胸に飛び込んだ。懐かしい感触、匂い、声、全てが今目の前にある。

胸の中で泣いている幼なじみを、翔輝は強く抱き締めた。

「瑠璃。久しぶり。元気だったか？」

返事はなかった。返って来たのは泣き声だけだった。嗚咽交じりのその声は、記憶よりも少し大人っぽかった。

「翔輝様！　私、私・・・ずっと会いたかったですわ！」

「僕もだよ。それなのに・・・ごめんね。ずっと会えなくて」

「翔輝様・・・ッ！」

二人の抱き合う様子を、兵達も微笑んで見詰めていた。

艦魂達も嬉しそうにしている者、感動して泣いている者、呆然と

立ち尽くしている者、そして、不機嫌そうに見詰めている者。皆それぞれだった。

大和は最後の不機嫌そうに見詰めているである。大和だけではない。陸奥や伊勢、武蔵、（なぜか）榛名達もである。金剛は別の意味で不機嫌（軍規違反をしているから）だった。

しばらく泣いていた瑠璃もようやく落ち着きを取り戻した。

「翔輝様・・・ひゃッ！」

正気を取り戻すと、自分が今している行動に驚き、赤面する。急いで翔輝から離れ、息を整える。そして、冷静さを取り戻すと、着物を優雅に揺らして翔輝の前で会釈する。

「お帰りなさいませ。翔輝様」

静かに響いたその声に、翔輝も優しい声で返す。

「あぁ、ただいま。瑠璃」

翔輝はそっと瑠璃の頭を撫でてやった。瑠璃も大好きな頭撫で。瑠璃はとても嬉しそうな笑みで翔輝を見上げる。

なんとも微笑ましい光景。こんな二人を祝福するのは至極当然・・・

「いつまでやってるんでしょうか？」

大和は感情のない氷のように冷たい視線を向けている。それは大和だけではない。陸奥や伊勢、武蔵に榛名といったメンバーもだ。

「あらあら・・・」

長門も苦笑いしかできない。この状況、さすがの長門でも対処不能である。

少し離れた所にいる山城もどこか不機嫌そうである。そんな山城に扶桑が「何よ何よ。焼いちゃってるの？」とひやかすと、必殺のパイルドライバーが炸裂した。

その間、翔輝と瑠璃は春の風のように朗らかな空気が漂っていた。どちらかというと甘い香りか、桃色の空気に近い気がする。

瑠璃は嬉しそうに翔輝を見詰めていたが、しばらくすると『大和』を見るようになっていた。世界最大最強の不沈戦艦をこの目で見よ

うという気持ちなのだろう。天高くそびえ立つ艦橋、どんな敵艦をも粉砕する巨大な主砲、そして・・・

「・・・ッ！」

そこで瑠璃の表情に変化が起きた。だがそれは、とても変化なんていうレベルではない。《豹変》という言葉が当てはまった。そして、急速に瑠璃の顔から笑顔が消え、冷たい無表情の仮面に変わる。

突然の瑠璃の変化に驚く翔輝。一体何が起きたのかと瑠璃の視線を追うと、そこには、

「なッ！」

そこには、大和が立っていた。大和は翔輝の視線に気づくと、ぷいっとそっぽを向く。が、突如襲ったすさまじい視線に振り返った瞬間、二つの視線がぶつかった。

瑠璃の放つ絶対零度の視線が、大和の心まで凍らすような勢いで照射されていた。

身震いする大和。

瑠璃はそのまま他の艦魂達をも見詰める――もはや睨み付けるの方が該当される。

艦魂達は瑠璃のすさまじく冷たい瞳で見られ、真っ青になって半歩引く。

そして、真っ青になっているのは艦魂達だけではなかった。

「ま、まさか・・・ッ！」

血の気の引いた顔で震え声を上げる翔輝。彼は今恐るべき最悪な予想を感じていた。

まさか、そんな事が・・・ッ！　ありえない、ありえないッ！

もし本当なら、そんな、そんな・・・ッ！

翔輝は心の中で悲鳴を上げる。

「翔輝様」

「ひぃッ！」

恐ろしく低く、ダークなオーラを放つ声が瑠璃の口から出た。そこにはいつも笑顔の絶えない少女はいなかった。いたのは、絶対零

度の視線を放ち、体中から黒いオーラを放っている妖女だった。
翔輝のすさまじい怯えぶりに大和達にも戦慄が走る。
瑠璃は恐ろしく低く、小さな、しかし聞き取るには十分過ぎるほどの凛とした声で、正気に問う。
「あの女の方々は、どういった方々ですの？」
予感は・・・最悪の形で命中した。

瑠璃は、艦魂が見えたのだ・・・

場面は変わって、ここは戦艦『大和』第三会議室。艦魂達が会議や祝いを行う主な場所である。いつもは緊張した空気か楽しい空気に包まれるここで、今日は別の意味での緊張と北極や南極よりも寒い空気が漂っていた。
ちなみに、なぜここが使えたかというと、瑠璃が艦長にお願い・・・と言うか脅迫をして借りたのだ。脅迫と言っても脅すような事を言ったのではなく、この絶対零度の視線を向けただけである。大の大人が根負けするほどの視線。逆らいたくないと誰もが思い、満場一致で貸してくれたのだ。
部屋の中央に置かれている長方形のテーブル。その短い方の辺に翔輝が一人で座り、長い方の辺に瑠璃が、もう一方の辺に艦魂達が座っていた。
艦魂達は大和、武蔵、長門、陸奥、伊勢、日向、山城、榛名の計八名だった。金剛は「くだらん」と言って去り、扶桑は「私がいると余計こんがらがるでしょ？　だから戦略的撤退をするわね。決して逃げる訳じゃないのよ」と言い訳して逃げ、結果がこの八名という訳だ。
瑠璃はたった一人で八人の艦魂に牽制及び威嚇の絶対零度の視線を放つ灯台になっていた。照らされる大和達は震えるばかり。さすがの長門も今は笑っていない。
一方、そんな壮絶な攻撃範囲から外れている翔輝も、その余波を

食らって震えていた。
この関ヶ原みたいなものすごく緊迫した雰囲気が漂う空間。いつ開戦してもおかしくない状況である。
「・・・」
「・・・」
『・・・』
十人全員が沈黙している。この黙秘戦は永久に続くのかと思われたが、それは突然破られた。
「――それで」
腕を組んで沈黙していた瑠璃がゆっくりと口を開いた。
「もう一度聞きますが、あなた方は一体何者なのですか？　私のように海軍の重要な関係者のようではありませんし、それにどうして軍艦に平然と乗ってられるんですの？」
「そ、それは・・・」
翔輝が恐る恐る挙手し、おどおどと説明を始めた。
彼女達は人間ではなく艦魂という者なのだと。普通の人には見えない事、そして、大事な仲間だという事。
翔輝の説明＋弁解は約三〇分にも及んだ。
翔輝の話に驚いたり意見する事なく瑠璃は聞いていた。そんな事通常の彼女では絶対にありえない事である。
説明を終えても、瑠璃は沈黙したままだった。数分後、ようやく瑠璃は固く閉ざされていた口を開いた。
「なるほど、つまりは艦の魂。精霊のようなものですわね。本当なら信じませんが、翔輝様が言う事にうそはありえません。信じましょう」
「瑠璃・・・」
翔輝の顔に笑顔が戻る。
「しかし」
瑠璃の表情には変化が起きず、翔輝も再び笑顔が消える。
「もう一つの質問に答えてもらってません。あなた方は、翔輝様の

何なんですの？」
「や、だからそれは・・・」
さっきした説明をもう一度しようとして、
「この方々が艦魂であり、翔輝様の大事なご友人というのはわかりました。しかしそれだけではないと思いますが」
ぴしゃりと遮られた。
「そんなごまかしは必要ありませんわ。私が訊いているのは、この方々が翔輝様と具体的にどのようなご関係なのかという事。その一点に尽きますわ」
「そ、そんな事言われても・・・」
翔輝自身は大事な仲間だとしか認識していない。それを具体的に説明しろと言われても無理な話だ。しかも、下手な事を言えば瑠璃の逆鱗に触れ、あの鉄をも凍らせて砕く視線で粉砕されるのがオチだ。
「さぁ、お答えください。この方々は何者なのですの？」
うさんくさいものでも見るかのようにぐるりと大和達を見回す。
で、それに対する彼女達の返答は、
「わ、私は中尉を大切に想っている者です。それ以上でもそれ以下でもありません（本当はもっと上を目指したいんですが）」
「・・・私は翔輝の親友と言うべきもの（今現在友達以上恋人未満というレベルだが、いつか正式なものになる）」
「私は長谷川君の保護者かな？（と言うより傍観者？）」
「私は中尉の傍で常日頃お世話になっている者です（本当は恋人志望なんですけど）」
「うちも陸奥と同じどす（恋人ってええたいけど、そこまでは発展しておらんし）」
「私は中尉のお友達だよ！」
「私と航海士はあまり関係はない。ただの知り合いだ」
「腐れ縁だよ。別にこいつとどうとかはねぇよ」
との返答だった。

「なるほど。前半の方々の心の声が気になりますが、今のところはまだそのような関係なんですのね」
少しトゲのあるような言い方に大和達はムッとする。
「ただのご友人という訳ですね。それなら問題ありませんわ。先程のご無礼は謝罪しますわ」
ここでようやく緊張が解けた。瑠璃の顔にほんのりと笑みが浮かんだのだ。それに呼応して翔輝や大和達にも自然と微かな笑みが浮かぶ。が、
「でも、一つだけ言っておく事があります。何人か危険な思考を持っている人がいるみたいですからね」
瑠璃から再び笑顔が消える。真剣な瞳で大和達を睨む。大和達も瑠璃を見詰める。そして、瑠璃は大和達に向かって言い放った。
「翔輝様の恋人は私一人で十分ですわ。それを踏まえて翔輝様に勝手に手を出す事だけはやめていただきますわ」
『なッ!?』
すさまじい戦慄が走った。瑠璃の言葉は電撃となって大和達の心を見事に貫いたのだ。
恐ろしいくらい深い沈黙が舞い降りた。誰もが息をするのもやめたくなるほどの緊張、そして衝撃。その先陣を切るのは並大抵の力ではできない。または、よほどの無策無謀な奴だけ・・・
「ど、どういう事ですか!」
いた! ここに無策無謀な人物が!
大和はついにその鋭利な牙を瑠璃に向けた。そのあまりの後先考えない行動に唖然とする者もいたが、ほとんどがそれに呼応して反撃を開始した。
「そ、そうですよ! いきなり藪から棒にそんな事言って!」
「いくら長谷川はんの幼なじみやからって許さへんから!」
「そうだそうだ!」
「こんなクズはどうでもいいけど、テメェのその態度が気に食わねぇっ!」

八人中五人が反撃を開始する。いきなり五人も敵に回したというのに瑠璃は至って平然としている。予想の範囲内なのだろうか。

「私は翔輝様の身の安全と生活環境の改善の為に言ってるんです。このままでは翔輝様はダメになってしまいます。あなた方といても、翔輝様にいい事は一つもありません。百害あって一利なしですわ」

「な、何でそんな事が言えるんですか！」

大和が食い付くのを待っていたかのように、瑠璃はハッキリと答えた。

「あなた達のような人外の存在は、翔輝様と交わるのはハッキリ言って迷惑だと言っているのです」

その言葉で、大和達は沈黙した。

――人外の存在。

それはつまり、大和達が人間でないという事だ。確かに彼女達は艦魂であって人間ではない。それは事実である。しかし・・・

「あなた方は人ではありません。人外の存在である艦魂。所詮は私や翔輝様とは根本的に住む世界が違う異端者達ですわ。そんなあなた達は――」

「瑠璃！」

すさまじい怒気を秘めた怒号が響いた。その声の主は――翔輝だった。

さすがに黙って聞いていられなかった。

瑠璃自身も悪気はないだろうが・・・それでもその言葉は見過ごせない。

翔輝の大声に、瑠璃は信じられないものを見るかのように翔輝を見た。

「しょ、翔輝様――？」

「そういう事、言うなよ。人じゃないとか、異端とか・・・」

例え人間じゃなくても大和達は大和達だ。その事で彼女達の事を違う目で見る事だけは、翔輝はしたくない。瑠璃ににもしてほしくないと思っている。

「それに、大和達と一緒にいていい事がないっていうのは、絶対違う」

それだけはハッキリと言える。

みんなと――大和達や瑞鶴達、今はもういない赤城達や霧島と一緒にいたこの一年半。一緒に笑って、一緒に過ごし、一緒に戦った――それは翔輝にとってかけがえのない時間だったし、これからもそうだと思う。

「確かに大和達は人間じゃない。それは事実だ。でも、だからと言ってもそういうふうに言うのはやめてくれないか。彼女達みんな、僕の大切な仲間なんだから」

「「中尉・・・」」

「長谷川はん・・・」

「・・・翔輝・・・」

大和達は翔輝の言葉に心から感謝した。

場の流れが変わった。明らかに翔輝が大和達に加勢したのだ。それを理解すると、瑠璃の表情に変化が起きた。

「翔輝様。わ、私は別に・・・」

明らかに瑠璃は動揺していた。先程までの威圧感は完全に消え、年齢相応の少女の表情に戻っていた。その表情は――混乱。

「しょ、翔輝様。その方々に加勢するのですか？　そ、そんな事って・・・」

「何だよ？　長谷川がこっちに付いて動揺してんのか？」

「・・・ッ！」

榛名の言葉に瑠璃の表情に戦慄が走る。悔しそうに唇を噛む。そんな瑠璃の表情を見て、榛名は勝ち誇った笑みを浮かべる。

「図星か。何だよ。長谷川のヤローがいねぇと何もできねぇのか？　情けねぇなお前」

「榛名。さすがの僕も怒るぞ」

翔輝の驚くほど低い声に、榛名は気まずそうに沈黙した。

完全に劣勢になってしまった瑠璃。だが、瑠璃も負けじと反撃を

する。
「しょ、翔輝様は私の幼なじみです！　なのにその私を見捨ててそちらに付かれるというのですの！？」
「い、いや、それは・・・」
「「中尉！」」
「長谷川はん！」
「・・・翔輝！」
再び翔輝は中立に戻った。それを確認すると、瑠璃は最終兵器の投入を決定した。それは・・・
「私は、翔輝様の許嫁ですのよ！」
「え？」
『何ですってえええええぇぇぇぇぇッ！』
驚愕する大和達。呆然としている翔輝。勝ち誇った笑みを浮かべる瑠璃。完全に三つに分かれた一同の中、瑠璃は再び大和達を劣勢に追い込み始めた。
「そ、それは本当ですか！？」
大和が翔輝に悲鳴に近い声で聞くと、全員が翔輝に注目した。戦場が急展開を迎えたのだ。
大和達の泣きそうな顔や怒り心頭の表情、呆然や特に変化なしの表情が翔輝に向けられる。そんな大和達に見詰められる翔輝の返答は、
「いや、それは違うでしょ？」
との事だった。
大和達は安堵の息を漏らす。が、今度は瑠璃が再び動揺し始めた。
「翔輝様！　ち、違うというのはおかしいですわ！　だって――」
「だって、そういう関係になる前に母さんが死んじゃったんだもん。その話もなくなったでしょ？」
翔輝の返答に、今度は大和達が再び動揺する。
「ど、どういう事ですか！？　それじゃあまるで中尉のお母さんが亡くならなかったら許嫁になっていたみたいじゃないですか！」

「そうだけど」
大和は雷が落ちたかのような衝撃を受ける。それは他の艦魂も同じ状態だった。
大和達の異様な沈黙を無視し、翔輝は説明する。
「叔母さんが霞家に嫁いだのは前に言ったでしょ？　その関係で僕と瑠璃を許嫁の関係にしようという動きがあったんだけど、母さんが病気で死んじゃって、その話はなくなったんだ。だから僕と瑠璃は別に――」
「その後お母様が亡き伯母様の無念を晴らす為に許嫁を成立させたのをご存じないんですか？」
「何ですとおおおおぉぉぉぉッ！？」
翔輝は驚愕する。そんな大層大事な話は聞いた事がない。というか、当事者である翔輝が知らないのはおかしい。というか無念って何？
「あら、存じ上げてなかったんですね。お母様自分から言うとか言ってたのに、まったく忘れん坊なんですから」
くすくす笑う瑠璃。
「笑ってる場合か！」
ここで榛名が激怒し、その場で跳躍。一瞬にして翔輝の目の前に現れ、翔輝の胸倉をグイッと持ち上げる。
「テメェッ！　んな大事な事何で教えなかった！」
混乱しているのか、榛名は翔輝がその事を知らなかったという事を完全に忘れているようだ。
「ちょ、ちょっと待って！　僕は知らなかったって言ってるでしょ！」
「うるせぇッ！　そんな大事な事知らねぇはずがねぇだろうがッ！」
それはもっともな意見だ。だが翔輝は本当の本当に何も知らなかったのだ。こればかりはどうしようもない。さらに、
「中尉の浮気者！」
「ヘッ！？」

大和がすさまじい目で睨んでいた。その瞳にはたっぷりの涙が、
「中尉は軍艦という新しい世界に来て、許嫁の目が届かない所で私にちょっかい出そうとしてたんですね！　だから私に近づいたんです！　そうか、そうだったんですね！　バレちゃって残念でしたね。もう私の事なんかなかった事にしたいですよね！　そうすればいいじゃないですか！　勝手にしてください！　最低・・・最低です！　もう二度と私に話し掛けないでください！　この先一生放っておいてください！　・・・危うくだまされるところでした！」
自分の言葉で自分を傷つけ、大和は苦しげな表情で翔輝を睨む。
だが、それは完全なる誤解だった。
「ちょ、ちょっと待って！　僕は別にそんなふうに思って――」
「近寄らないでください！」
大和の悲鳴に似た叫びに、翔輝は大和の方に伸ばした手を引っ込める。
部屋に今まで以上の気まずい雰囲気が流れた。そんな中、
「私としては、どうでもいい事だがな」
ここまでずっと沈黙していた山城が口を開いた。その言葉は沈黙した部屋に十分と響いていた。
「ど、どうでもいいとはどういう事ですか！？」
陸奥が山城を睨むが、山城は平然としている。
「どうという事ではない。航海士が今までそんなふうに邪な（よこしま）考えを持ってお前達に接していたと、本当に思えるのか？」
山城の言葉に大和は沈黙したままだ。それを確認し、山城は続ける。
「お前と武蔵のケンカの仲裁や、仲間を失った時に支えてくれたのも、全てうそだったと、本当に言い切れるのか？」
大和達は何も返さない。みんな本当はわかっているのだ、そんな事。翔輝がそんな人間ではないという事は。でも、
「でも、そんなのって・・・ッ！」
翔輝には許嫁がいたのは変えられようのない事実だ。だが、

「許嫁がいようといなかろうと、お前達の気持ちは変わらないだろう？　それをぶつければいいじゃないか。状況が変わっても、お前達の気持ちが変わらない限りどんな壁を越えられるだろう」
「そ、それは・・・」
「大和。お前がそれでどうする。武蔵を見ろ。先程の会話に一切関わっていない。それは航海士を信じているからではないのか？」
山城の言葉に、全員の視線が武蔵に集まる。
武蔵は平然としていた。いつもと全く変わらない無表情で沈黙している。しばらくし、武蔵は翔輝を見詰めて言葉を発す。
「・・・私は翔輝の全てが好き。だから、別にまわりがどう変化しようと、長谷川翔輝という人間自体が変わらない限り、私は翔輝を信じる」
武蔵の言葉に、大和にもかすかに笑みがこぼれる。
「へッ、言ってくれるじゃねぇか」
榛名も不敵に笑う。
「そうよね。武蔵の言うとおり。長谷川君に許嫁がいようと、奪ってしまえば問題ないわよね。こういうのを、略奪婚って言うのよね」
長門の言葉にちょっと引っ掛かりがあるが、その意見自体にはみんな賛成だった。
誤解も解け、部屋にほがらかな雰囲気が流れる。
「ちょっと待ってですわ！」
その空気をぶち破って瑠璃が悲鳴を上げる。今のこの状況、瑠璃にとって見れば大ピンチである。
「あなた方がどうしようと、私と翔輝様に許嫁という関係がある以上、勝手な事はさせませんわ！」
「そんなの関係ありません！　私だって中尉に対する想いは真剣ですッ！」
「私だってそうよッ！」
「うちも同じや！」
真正面から激突するお互いの言い分。東西冷戦の如く睨み合う両

陣営。一進一退の攻防の末が再び牽制し合う形になるとは、発展しないものである。
「と、ともかく！　あなた方に勝手な事はさせませんわ！　翔輝様！」
「え？　あ、何？」
瑠璃は突如正攻法を諦め、強行作戦に切り替えた。完全に聞き手になっていた翔輝の手を引っ張り、外へ連れて行こうとする。
「な、何をするつもりですか！？」
大和達も瑠璃の突然の行動に動揺する。
瑠璃は顔を真っ赤にして翔輝に抱き付く。刹那、衝撃と殺意の混じった空気が流れる。
「る、瑠璃？　ど、どうしたの？」
「翔輝様には私のお屋敷に来てもらいます！　そして、もう二度と軍艦に乗れないように海軍関係に霞家の財力的圧力を掛けますわ！」
『な、何ですとおおおおぉぉぉぉぉッ！？』
翔輝と大和達の悲鳴が同調した。異口同音。
「ちょ、ちょっと待って！　僕は『大和』を降りたく――」
「安心してください。呉の鎮守府（海軍の根拠地として艦隊の後方を統轄した機関）に転勤してもらうだけですわ。そうすればいつでもお会いできますわ！」
「い、いや、だからといっていきなりそんな・・・」
「そうですよ！　そんな勝手な事は絶対にさせません！　断固阻止です！」
「テメェッ！　いい加減にしやがれ！　長谷川は絶対に渡さねぇからな！」
大和と榛名を基幹とした翔輝防衛連合が瑠璃の横暴な行動に反旗を翻す。
「勝手とは何ですの！　私は翔輝様の許嫁ですわ！　それに、翔輝様の身の安全を守るのも私の役目。危険な前線にもう翔輝様を送りたくありません！　それより、あなた方の近くに私の大切な翔輝様

を安心して置いとく訳にはいきませんわ！」
瑠璃も負けじと反撃する。
真正面から激突する両軍。いつ開戦してもおかしくない状態である。このままでは確実に実力行使である武力行使――武力による衝突はまぬがれない。そんな状況を打破したのは、
「ちょ、ちょっと落ち着いてよみんな！」
今まで流されるだけ流されていた翔輝が両軍の仲介に当たった。
瑠璃から離れ、両軍の間に入って戦いを止める。
「争いはダメだよ！　仲良くしてよ！」
どこのどいつのせいでここまで関係がこじれたと思ってるんだ！
と翔輝以外の全員が思った。以心伝心。
「ともかく、どちらにしても僕は一旦休みで陸に上がるんだ。そこで瑠璃とゆっくり話し合うよ」
「で、ですが・・・ッ！」
大和は諦め切れない。ただでさえ場の流れに流されやすい翔輝である。もし瑠璃の言葉に言いくるめられて失敗すれば、もう二度と翔輝と会えなくなる。そんなのは絶対に嫌である。
大和の心配に気づいたのか、翔輝は優しい笑みを送る。
「大丈夫。なんやかんやでこいつとは十数年来の仲だ。そう簡単には負けないよ。安心して」
「中尉・・・」
翔輝はまだ興奮の冷めない瑠璃を刺激しないように迅速に行動した。
結局、ろくに見送りもできずに、翔輝と大和達はしばしの別れになってしまった。

第八章　第十四節　それぞれの想い

再び場面転換。ここは日本でも有数の大財閥兼貴族の霞家のお屋敷――瑠璃の実家だ。

その中の茶の間に翔輝と瑠璃はいた。しかし今日はいつものように上座と下座に分かれる事なく、下座にいる翔輝の横に瑠璃はいた。しかも今日は瑠璃の専属執事である神鳴はいない。今現在彼は瑠璃の父と母のいる部屋にいる。

久しぶりに会った翔輝を瑠璃の父と母は喜んで歓迎したが、瑠璃のあまりの迫力に押され、今は神鳴と共に退避している。

そんなサブイベントがあったが、今はそれどころではない。

いつもなら笑顔の絶えず、たまに強烈な毒舌が飛び出るこの空間は、今は荒涼としたツンドラ気候の如く荒れ果てていた。

「・・・」

「・・・」

お互い『大和』を降りてから全く会話がない。ただお互いにちらりと見ては視線を戻し、またちらりと見ては視線を戻すという同じ動作を繰り返している。さっきからずっとこの調子、さすがに間が持たなくなってきた。

瑠璃はちらちらとこちらを上目遣いで見るたびに何か言いたげな顔をしている。

（・・・やっぱり、かなり怒ってる？）

そんななんとなく気まずい時間が十五分ほど続き――

やがて、

「――お久しぶりですわ。翔輝様」

瑠璃がそう話し掛けてきた。

「あ、うん。久しぶり」

「約一年半ぶりですけれども、元気にしていらっしゃいましたか？」

「僕は大丈夫。元気だけが取り柄みたいなもんだし」

翔輝が答えると、瑠璃は少しだけ表情を緩めた。
「ふふっ、それもそうですわね」
「そっちも元気にしてた？」
「はい。本当にこの国が戦争をしているのかわからないくらい平和でしたからね」
「そっか、こっちも結構平和だったからね。戦争を感じるのは日々消えていく艦魂達が何人もいるって事ぐらいだったし」
「そうですか。前線と言っても、最前線ではないから結構安全なのですわね」
「まぁね。ソロモン海周辺は激戦区だったけど、トラック島は平和そのものだったからね」
「大本営の発表と私が独断で掴んだ戦局がかなり違うようですが」
瑠璃は少し心配そうに言う。当時の日本は国民の戦意喪失を招くのを恐れて、大本営と呼ばれる日本陸海軍最高統帥機関が膨張や捏造の戦果を国民に教えていたのである。いわゆる大本営発表というものだ。
「翔輝様が以前に来られたのが去年の初夏でしたが、それ以前にミッドウェー海戦がありましたわよね。あの後知ったんですけれども、大本営の発表と私の掴んだ情報とでは全く違うんですの。大本営の発表では敵空母二隻撃沈。大型巡洋艦一隻大破。駆逐艦一隻撃沈。飛行機撃墜一九三機。同撃破七三機で、日本軍の被害は空母一隻沈没。同一隻中破。巡洋艦一隻中破。損失飛行機四二機で被害は極めて軽微とされていましたけれども、実際は敵空母及び駆逐艦それぞれ一隻撃沈だけの大した戦果もなかった上、日本軍の被害は空母四隻沈没。重巡洋艦一隻沈没。一隻大破。駆逐艦一隻沈没という大敗北でしたわ。これ、本当ですの？」
翔輝は答えるかどうか迷ったが、ここまでバレていてはもう無意味と思い、正直に答えた。
「その通り。ミッドウェー海戦は日本軍の戦術的、戦力的大敗北に終わったよ。おかげで機動部隊は壊滅。それ以降の戦いが敗北一途

になっていった原因だよ」
　ミッドウェー海戦。あの戦いがあんな結果にならなければこんなに壮絶な状況にはならず、今でも赤城や加賀、蒼龍、飛龍が生き残っていて、翔鶴と瑞鶴と合わせた空母六隻の世界最強の機動部隊が健在だったかもしれない。そうすれば、霧島や比叡さんも死なずに済んだかもしれないのだ。だが、所詮はもう後の祭り。後悔しても意味はない。
　翔輝の言葉に、瑠璃は悲しそうにため息した。
「そうですの。では、今日本中が帝国陸海軍の連戦連勝で沸き立っているのは、全てうそなのですのね」
「うん。そういう事」
　日本国民のほとんどが戦争の真実を知らず、大本営の発表するありもしない戦果に振り回されているのだ。
　翔輝の曇った表情を見て、瑠璃は明るく振舞う。
「でも、翔輝様が無事で何よりですわ。私はそれが一番嬉しいですわ」
「瑠璃・・・ありがとう」
「お、お礼なんていりませんわ。当然の事ですもの」
　あたふたと焦る瑠璃を見て、翔輝にも笑みがこぼれる。
「しょ、翔輝様！　笑わないでください！　は、恥ずかしいではないですか」
「ごめんごめん。やっぱり変わってないなぁって思ってさ」
「そ、そんな事ありませんわ！　私も成長して変わりましたわ！」
「ふーん、どこが？」
　ニヤニヤと聞く翔輝に、瑠璃は真剣に答える。
「以前よりもずっと女らしくなりましたわ！」
　静寂。そして、
「あはははははッ！」
　大爆笑。
「な、何がおかしいんですの！」

顔を真っ赤にして怒る瑠璃を見て、翔輝はさらに大笑いする。
ようやくいつもの二人に戻った。笑ったり怒ったりの喜怒哀楽あふれるのがこの二人。それがないと花のない花瓶のように輝かないものだ。
「まぁ、それはそれでいいのですが。翔輝様」
しかし、根本的な解決はされていなかった。瑠璃は再び表情を固くする。翔輝の笑みも消える。
瑠璃は翔輝を睨み付けるように見詰める。
「翔輝様。あの方々とは一体どのような関係なのですか？」
「だからそれはさっき大和達が説明したように――」
「それはあの方達の考えですわ。私が聞きたいのは、翔輝様の気持ちですわ」
「そ、それは・・・」
瑠璃は黙って翔輝の言葉を待っている。
深い沈黙の後、翔輝は答えた。
「大事な仲間――ううん。家族・・・かな。みんないなくなってしまった僕にとって、一緒にいて楽しいって思える、そんな奴ら」
翔輝は嬉しそうに言う。故郷を離れて軍艦に乗り込み、知り合いもいない世界の中、いつも傍にいて励ましてくれた。そんな彼女達を、家族のように思っていた。
家族を全て失い、不幸な人生だと呪った事もあった。でも、彼女達と出会い、一緒に過ごした時間は、かけがえのない幸せなものだった。
「あいつらは、僕を救ってくれたんだ」
静かに言う翔輝の言葉を、瑠璃は何も言い返す事なく聞いていた。だが、そんな彼女の反応を見て翔輝は慌てる。
「も、もちろん瑠璃だって大事な家族だよ。あ、もしかして大和達が言った事を気にしてるの？　確かに色々な奴らがいるけど、榛名みたいに乱暴な奴だけじゃないよ。大和みたいに優しい奴もいる。みんな根は素直なんだ。みんないい奴らなんだよ。それは僕が保障

する。だからそんなに目の仇にしないでよ・・・」
翔輝が必死に大和達を弁護すると、
「翔輝様は、少し勘違いをしていますわ」
瑠璃は少し寂しげにそう言った。
「え？」
「別に私は、あの方々が何でも構わないのです。私はそこに固執するつもりはまったくありませんわ。例えあの方々が翔輝様とどのようなご関係でも、良い方々でも悪い方々でも、人でなくても、それ自体は別に構いませんわ。そう、それが――」
そこで、翔輝の目を真っ直ぐに見詰める。
「それが、翔輝様とその生活に悪影響を及ぼさない限り」
「瑠璃・・・」
瑠璃はうつむき加減で言葉を続ける。
「翔輝様が毎日を元気に過ごしているかどうか・・・お節介かもしれませんが、ただその事だけが私には気がかりなのです」
ちょっと言い過ぎたかなと思った。
やり方は不器用だけど、瑠璃は翔輝の事を気遣っていてくれただけなのだ。昔から瑠璃はそういう子だって翔輝にはわかっていたはずなのに、大和達の事を言われた為、つい強く言い返してしまった。
「ごめん・・・」
謝ると、瑠璃は首をふるふると横に振った。
「いえ、私もあの方々に少しきつく当たり過ぎましたから・・・こちらこそ、出過ぎた事を申し上げてすみませんでしたわ」
瑠璃は深々と頭を下げる。
「出過ぎたなんて、そんな・・・」
幼なじみなのに、そんな他人行儀な事は言ってほしくない。
「もういいからさ、いつまでも頭下げてないでよ・・・」
「はい・・・」
言われたとおりに瑠璃が顔を上げる。
しばしの沈黙が流れる。

このままだとまたそこはかとなく気まずい雰囲気になりそうだったので、翔輝は話題を変えた。
「あ、あのさ瑠璃。どうして第四船渠なんかにいたの？」
考えてみればなぜあのタイミングで瑠璃がいたのか。それが不思議だった。
「それは・・・」
「何か用事でもあったの？」
「・・・」
瑠璃は少しの間、翔輝を見詰めて黙っていたが、
「その、待ち切れなくて」
やがて翔輝の軍服の袖をちょこんと掴んでそう言った。
「え、何が？」
「・・・『大和』が戻って来たと知って、早く翔輝様に会いたくて」
わずかに顔を逸らして頬を紅潮させている。そんな瑠璃の反応に翔輝も自然と笑顔になる。
「そっか、嬉しいな」
翔輝はそっと瑠璃の頭を撫でる。それに対し瑠璃は頬をほんのりと赤く染めて嬉しそうにそれを受け入れる。
しばらく続けていたが、翔輝がやめると名残惜しそうに見詰めていた。そんな瑠璃を見て、もう一回だけ頭を撫でてやる。
「翔輝様の手、とても温かいですわ」
翔輝の手を取り、自らの頬に当てながら言う。
寄り添う二人は、お互いを感じながらしばらくそうしていた。
十分の時間が過ぎた頃を見計らって、翔輝は訊こうと思っていたことを恐る恐る聞く。
「あのさ、お前が僕の許嫁っていうのは、本当？」
「もちろん――うそですわ」
さらりと返された。
翔輝は「やっぱりね」つぶやく。その言葉を聞き、瑠璃は表情を暗くする。

「すみません。翔輝様を取られるような気がして、ついうそを」
瑠璃は悪気があった訳ではなかったのだ。無謀にして無策の暴挙に等しい突撃を行っても勝ち目はない。そんな彼女が対等、それ以上の地位を確立する為にはあのようなハッタリを言うしかなかったのだ。
「ごめんなさい・・・」
うつむいたまま言う瑠璃の言葉に、翔輝は首を振る。
「別に謝らないでよ。母さんが死ななければそういう関係になってたんだし、それに、瑠璃が許嫁って言って、ちょっと嬉しかったから」
照れながら言う翔輝に、瑠璃は上目遣いで「本当ですの？」と聞いてくる。
「あぁ、うそじゃないよ」
「翔輝様・・・」
瑠璃は嬉しそうに翔輝に抱き付く。翔輝は驚いたが、あまり抵抗せずに受け入れた。
嬉しさのあまり、瑠璃は本音をぶっちゃけた。
「ずっとずっと一緒にいましょうね。翔輝様」
「え？」
そ、それって・・・『大和』を降りろって事・・・？
翔輝の顔から笑顔が消えるが、瑠璃は構わず続ける。
「呉の鎮守府に来てください！　そうすれば、ずっとずっと一緒にいられますわ！　それに、本土の方が安全ですわ！　だから――」
必死に訴える瑠璃に、翔輝は「ごめん。それはちょっと・・・」と答えるしかなかった。
瑠璃の気持ちは痛いほどわかる。でも・・・
思い浮かぶのは、大和達の顔。
彼女達は自分のように逃げる事のできない、戦いを避けられない悲しき乙女達。そんな彼女達と過ごした日々を失いたくない。
何より、大和達の傍にいたい。そんな想いが胸に広がる。

だから、
「ごめん瑠璃。それは、できないよ」
翔輝は心からそう思った言葉を言った。それが、彼の気持ちだった。
だがその瞬間、瑠璃の顔から笑顔が再び消える。
「それは、あの方々がいるからですの？　私よりあの方々を選ばれるんですの！？」
「そ、それは・・・」
うそと言えばうそになる。
確かに彼女達の傍にいてやりたい。その気持ちは本当だ。だが、だからといって瑠璃を見捨てた訳じゃない。正直、まだ少し迷っている。そんな彼に、この（戦闘以外では）優柔不断な少年に今すぐ決めろと言われても、決められる訳がない。
しかし、その沈黙が、瑠璃に誤解を招いた。
「・・・選ばれるのですね。私より――十年以上の付き合いのある私より、ついこの前会ったようなあの方々を選ばれるのですね。翔輝様は」
「それはその・・・」
瑠璃は微動だせずに翔輝を見詰める。が、翔輝が答えずに無言のままでいると、それをさらに誤解する。
「そうですの・・・翔輝様はもう、もう私の事など嫌いになったのですね」
「え？　ち、違うよ！」
急いで否定するが、一度走り出した瑠璃の悲しき想いは止まらない。
「私はずっと翔輝様をお慕いしておりましたのに・・・なのに翔輝様は・・・私を捨てて・・・あの方々の方がいいと言うのですわね・・・」
「ち、違う！　瑠璃聞いてよ！」
「聞きたくありませんわ！」

瑠璃は悲鳴を上げる。そんな追い詰められた瑠璃を見て、翔輝は何も言えなくなる。

しばらく瑠璃は翔輝を睨み付けていたが、だんだんと表情を暗くし、瞳からぽろぽろと涙を流す。

「・・・私の願いは、翔輝様の幸せです。それが翔輝様の決めた事ならば、私は止めません。どうぞあの方々の所に行ってください。そして、翔輝様のお決めになった道をお行きください。私は翔輝様の幸せを願っています」

そこで瑠璃は立ち上がった。ふらふらと脱力し切った身体を引きずり、翔輝から少し距離を取ると、泣きながら言う。

「もう・・・私はお払い箱ですわね・・・翔輝様の迷惑にならないよう・・・もう近づかないようにしますわ・・・だから・・・翔輝様も・・・もうここには来ないでください・・・これが二人の幸せなら――絶交しましょう」

もう、我慢できなかった。

翔輝は走り出し、瑠璃の小さな身体を強く抱き締めた。

「しょ、翔輝様・・・？」

呆然とする瑠璃を翔輝は嗚咽交じりの声で言う。

「お前を嫌いになる訳・・・ないだろ。お前は僕の大事な家族なんだぞ・・・それを嫌いになるなんて、そんなの、そんなの絶対にないから・・・信じてよ」

「翔輝様・・・」

「でも、わかってくれ。お前と同じくらい、僕は彼女達も大切な家族だと思ってる。彼女達は激戦の中、多くの姉や妹、仲間を失って戦い続けている。そんな彼女達の力になりたくて、僕は彼女達の傍にいたいんだ。だから、今はまだ、あいつらから離れられないんだ。わかってくれ・・・ッ！」

翔輝の必死な叫びが届いたのか、瑠璃は沈黙したまま翔輝の手から離れ、そっと部屋を出て行ってしまった。部屋を出る寸前、瑠璃は翔輝の方を一度だけ見て、小さな笑顔を浮かべ、

「やっぱり、翔輝様はお優しいのですわね。だから、ずっとお慕いし申し上げていたんです」

そう言い残して、瑠璃は去って行った。

一人残された翔輝は、仰向けに倒れ、しばらく天井を見詰めていたが、そのまま眠ってしまった。疲れが出たのだ。

しばらくし、瑠璃が戻って来た頃にはもう夢の中。瑠璃はそんな翔輝に寄り添うようにして横になり、そのまま彼女も寝てしまった。

気持ち良さそうに眠っている二人に、神鳴はそっと毛布を掛けてやった。

一方、終始落ち着かない様子で部屋をうろうろしているのは大和だ。翔輝が心配なのだ。しかしそれは大和だけではない。陸奥はもじもじとしているし、伊勢はずっとそわそわしている。長門も少し不安そうな顔をしている中、山城は依然無表情を貫いて、武蔵は無表情のまま資料を見ていた。

「中尉。戻って来てくれるでしょうか・・・」

いつになく弱気な大和を、陸奥が一喝する。

「大和ちゃん！　あなたがそんな弱気でどうするのよ！」

「で、でも・・・」

「でもじゃない！」

「ちょいと陸奥。いら立ってるからやってそないに大和はんに当たらんでも・・・」

「そんな事ないわよ！」

伊勢の言葉を跳ね除けて陸奥は叫ぶ。そんな陸奥を姉である長門がなだめる。そんな光景を金剛はくだらなそうに見詰めている。

「でも、本当に戻って来るのかな？」

日向の言葉に、再び場は沈黙する。

「あの瑠璃って子かなり強引そうだからね。あの中尉で抗えるかな」

日向の意見はもっともだった。日頃の彼を見ればそのような心配をするのは至極当然だ。

「大丈夫です！　中尉はやる時はやる方ですから！」
どこからそんな根拠のない自信が湧いて来るのか不思議な陸奥。
「そうそう。長谷川君ならきっと大丈夫よ」
陸奥の意見に賛同し、それを援護する長門。そんな二人の意見に希望を抱く他数名。
「まぁ、今の俺らにできるのは待つ事だけだ。あいつが戻って来るのを」
意外と落ち着いている榛名。そんな榛名をまたあの女がからかう。
「あら、恋する乙女は愛する人を信じて待ち続けるのね。愛があればこそできるのよね。うらやましいわぁ」
「だからッ！　俺は別にあいつをそんなふうには――」
「あらあら、顔真っ赤よ」
「うっるせえええええぇぇぇぇッ！」
再び恐怖の鬼ごっこが開始され、一同しばしそれを観戦する事にした。
その時、榛名がへばったところでドアがノックされ、「失礼します」というか細い声がし、部屋の中に一人の水兵の少女が入って来た。前髪が少し長く、瞳を隠したような出で立ちは彼女達独特の特徴だ。彼女の名は伊号第二五潜水艦。潜水艦『伊‐二五』の艦魂であり、極上幹部会隠密部の副部長をしている。そんな彼女は潜水艦艦魂の中では特異な存在で、潜水艦の中でも五本の指に入る英雄である。
彼女は大和や翔鶴、瑞鶴とほぼ同時期に生まれ、当時の日本潜水艦技術の結晶であった。そんな彼女が英雄扱いされるのには理由がある。
――彼女はアメリカ本土を唯一空襲した潜水艦なのだ。
日本の潜水艦は他国の潜水艦と違って水上機を搭載し、策的範囲を飛躍的に向上させ、敵艦を発見するとすぐに攻撃に転ずる戦法を使用していた。
この『伊‐二五』はその偵察機である水上機に爆弾を装備し、そ

れを使用してアメリカ本土に空爆をしたのだ。
『伊‐二五』はその戦法で二度アメリカ本土を空襲し、アメリカ国民を畏怖させた。彼女こそまさに日本潜水艦の英雄なのだ。
しかし、彼女はそれを「私達潜水艦の定義は敵艦を酸素魚雷で撃沈する事にあります。ですので、自分の定義を大きく逸脱したその作戦で英雄と言われても嬉しくありません。潜水艦なら潜水艦らしく、敵艦の撃沈数で英雄になりたいです」と言いっている。潜水艦の子にしては意思の強い女の子だ。
「あ、空水(そらみず)ちゃん」
日向が嬉しそうに手を振る。ちなみにこの《空水》の名の由縁とは『敵国本土を《空》爆した唯一の潜《水》艦』の略である。さすが日向、無理にでもかわいい名前を潜水艦達に付けたがる。
「あの・・・日向さん。その呼び方はやめてくださいと何度も言っているのですが・・・」
「えー、だってかわいいじゃん」
「そ、そういう問題では・・・」
見た感じ他の潜水艦の子とほとんど変わりはなく、ひ弱そうな感じがする。そんな伊‐二五は日向に絡まれて困ったような顔をしていた。
「こら日向。あんまり空水ちゃんをからかっちゃあかんよ」
「えー、つまんなーい」
「あ、あのだから私は空水では――」
必死に自分の名前の訂正を主張するが、そのか細い声は伊勢と日向の言い合いの声の中に消えてしまう。このままでは話が進みそうにないが、そこに助け舟が渡された。
「・・・で、どうしたの？」
武蔵が資料を見ながらいうと、伊‐二五は持っていた書類を渡した。
「これ、その、あの・・・アッツ島の守備隊の報告書・・・です」
小さな声で説明するが、武蔵の表情のない顔に怯えて声が震えて

いる。
「そ、それで、こ、このままでは全滅の恐れも、その・・・」
「・・・もっとわかりやすく言って」
「は、はい・・・ッ！」
「・・・守備隊の被害は？」
「え、えっとですね、その、えっと・・・」
「・・・もういい。自分で確認する」
「す、すみません・・・ッ！」
ぺこぺこと何度も頭を下げる。そんな彼女を武蔵は別段気にした様子もなく書類を読み始めた。
武蔵を邪魔しちゃいけないと、伊－二五はそっと離れた。その時、いつになく元気のない大和に気が付いた。
「あ、あの、大和長官どうしたんですか？」
伊－二五はこの中でも最も接しやすそうな長門に声を掛けた。すると長門苦笑いしながら答える。
「ちょっとね。長谷川翔輝航海中尉って知ってる？」
「あ、はい。私達の中でも人気の方ですから」
「そういえばそうね。その彼が今陸に上がってるんだけど、もしかしたらもう戻って来ないかもしれないのよ」
「そうなんですか。それは困りましたね。あの人は私達潜水艦の中でも人気のある方ですから」
伊－二五が残念そうに言うと、陸奥が取っ付きかかる。
「中尉は必ず戻って来ます！」
「は、はい・・・ッ！」
陸奥の迫力に負け、伊－二五は怯えながら何度もうなずいた。その時、
「陸奥さん。あんまり怖がらせちゃダメですよ」
今まで沈黙していた大和が陸奥を注意する。それに対し、落ち着いた陸奥は申し訳なさそうに謝った。
「あ、あの、私はこれで失礼します」

「あ、うん。ありがとう」
「じゃあね空水ちゃん！」
「・・・はぁ」
伊-二五は静かに部屋を出て行った。
一方、伊-二五にため息をされて不思議そうな顔をしている日向。
「ねぇお姉ちゃん。どうして空水ちゃんはため息したの？」
「あんたの胸に手を当てて聞いてみんさい」
日向は伊勢に言われたとおり胸に手を当てる。そして、
「き～み～が～世～は～♪」
「あんたはサッカー日本代表か！」
「えへ、ちょっとやってみたかったんだ」
「今ここでやるか？　普通」
「変かな？」
「おかしいやろ。タイミングがガタガタ」
「えー、でも先手必勝って言葉があるし」
「おかしいから。その言葉のこの状況は明らかに違うから」
「そっかな？」
「そうや」
伊勢と日向の漫才を、大和はため息交じりで見詰めていた。そんな元気のない大和を、遠くから武蔵は見ていた。そして、自分の付けている腕時計を愛しそうに見詰める。それは翔輝の誕生日に翔輝と交換という形でもらった腕時計だ。
「・・・翔輝」
武蔵は静かにつぶやいた。その声は隣にいた山城に聞こえた。だが、山城は軍帽を深く被るだけだった。
「お姉様。少し頭を冷やして来ます」
長門の返事も聞かす、陸奥は消えた。次の瞬間、彼女は『陸奥』の艦橋にいた。
艦橋に人気はない。どうやら艦長達は別の所に行っているらしい。
窓から見えるのは一面壁の世界。甲板では多くの整備員達が走り

回って作業をしていた。
陸奥は司令席に座る。どの椅子よりも柔らかく、高級な椅子である事がわかる。そんな椅子に座り、陸奥はため息をつく。
（もし、もし本当に中尉が戻って来なかったら・・・どうしよう・・・）
陸奥は翔輝が帰って来る事を信じている――いや、信じたいのだ。好きだから。本当に好きだから、傍にいてほしい。だから、戻って来てほしい。大和や武蔵のように、もっと自然に翔輝に触れたい。だから、その時間を得る為にも、必ず戻って来てほしい。
陸奥はただ信じる事しかできなかった。だから、信じる。ただ、それだけだった・・・

夜。夕食を瑠璃の両親と一緒に取り、翔輝は今《桜の間》にいた。ラフな軽装でリラックスしていると、胸に下げている翔香のペンダントに目が行った。
「翔香・・・」
翔輝はペンダントを強く握った。その時、寝巻に着替えた瑠璃が「失礼します」と言って部屋の中に入って来た。
「翔輝様。夜伽に参りました」
しつこいようだが、彼女が言っている夜伽とは変な意味ではなく、あくまで辞書的な意味で使っている。
翔輝は瑠璃を見るとため息をする。
「またか、もうそろそろ別々の部屋に寝ないか？　もう添い寝なんていう年でもないでしょ？」
「そういう訳にはいきませんわ。私の数少ない楽しみの一つですのよ？　それをむざむざ放棄なんてできませんわ」
「頼むから放棄してくれよ。恥ずかしいんだよ」
「え？　何か言いましたか？」
「・・・いや、何でもない」
恥ずかしいのは事実だが、武蔵と隼鷹とは寝ている。それは別に

するところが彼の抜けているところである。
瑠璃は翔輝の入っている布団に潜り、いつものように布団の中で翔輝に抱き付く。
「あのさ、せめて抱き付くのだけはやめない？」
「嫌ですわ。こうすれば翔輝様をもっと近くで感じられるんですもの」
「うわッ！」
瑠璃はさらに強く抱き付いて来た。前回一緒に寝た時より確かに女らしくなっている。その、何だ、胸が少し・・・
「どうされたのですか翔輝様。お顔が赤いようですが」
「な、何でもない！」
翔輝は瑠璃とは反対方向を向く。その異様な態度に瑠璃は首を傾げたが、少し考え、すぐに察した。すると、瑠璃の優しげな笑みはいやらしい笑みに変わる。
「何ですか翔輝様？　私が大人の女の魅力を持っているから照れてるのですか？」
「ば、バカ！　違うよ！」
「照れなくても結構ですわ。発情しちゃいますの？」
「するかッ！」
顔を真っ赤にして怒る翔輝を無視し、瑠璃は続ける。
「私はいつでも歓迎ですわ。いつでも襲ってください。盛りの付いたオス猫のように飛び付いていいのですわよ」
ほんのりと頬を赤らめながら言う瑠璃に、翔輝は悲鳴に近い声を上げる。
「するかボケッ！」
少年の声は天高く響いた。
結局、その夜は変に意識してしまい、翔輝は一睡もできなかった。

一方、夜中の呉では皆寝静まっていた。大和達も翔輝が心配でなかなか寝付けなかったが、しばらくするとみんな夢の中にいた。し

かし、一人だけ日付が変わっても眠らずに起きている者がいた。
戦艦『武蔵』の防空指揮所でに一人で星空を見上げている小さな少女がいた――武蔵だ。
『武蔵』の入っているこの船渠は天窓があって星空が見える。久しぶりに見た日本の星空は南国とはまた違った輝きを放っている。日本の天の川は他と違って輝きの質が違う。暗闇の空を彩り、煌いている。しかし、そんな事は彼女には全くの無縁だった。彼女が思っているのは翔輝の事、ただ、それだけだった。
「・・・翔輝」
武蔵は静かにつぶやいた。その表情はいつもの無表情ではなく、どこか寂しげなものだった。
「・・・翔輝。早く、帰って来て」
昼間はああ言ったが、実は大和と同じくらい――それ以上に翔輝を心配していた。信じているが、どこか心配があるのは変えられない。瑠璃の強引さを見れば流されやすい翔輝が抗えるかどうか・・・
武蔵は首を横にふるふると振る。
「・・・大丈夫。必ず翔輝は帰って来る・・・必ず」
武蔵は月を見る。金色に輝くそれを、彼も見ていてくれているのか、
「・・・こんなに月のきれいな夜なのに」
武蔵はそのまま月を見続けた。
結局、武蔵は寝ようとはせず、一睡もできなかった。

第八章　第十五節　霞家三大輝石（前書き）

今回は刹那、剣に続く新キャラが登場します。
改定版から新たに登場するもう一人の翔輝の幼なじみと、翔輝が姉のように慕う女性。
翔輝のまた新しいページが開かれます。

第八章　第十五節　霞家三大輝石

翌朝、元気いっぱいの瑠璃に対し睡眠不足の翔輝はかなり眠そうだった。

「翔輝様！　早く早く！」

「うん・・・」

今二人は呉の商店街にいた。ここは呉市民の生活の中心で、色々な物を売っているお店が軒並みになっている。そんな商店街を二人は歩いていた。

「これは瑠璃様。こんにちは」

八百屋の若い女性が瑠璃に声を掛けて来た。それに呼応して周りの者も瑠璃の周りに集まって来た。

地域密着している霞家は呉市に資金を提供し、呉市の財政を潤している。おかげで商店街も発展しているので、霞家の令嬢である瑠璃は呉市民の人気者。呉の中ではお姫様のようなものだ。

「瑠璃さん！」

「瑠璃お姉さん！」

あっという間に瑠璃は大勢の人達に囲まれ、商店街は大騒ぎになった。

一方、翔輝はそんな輪から完全に離れてしまっていた。

「相変わらず人気があるんだな、あいつは」

翔輝は皆に囲まれる瑠璃を見詰め苦笑いした。

「ちょ、ちょっと皆様！　い、今は離れてください！　しょ、翔輝様！？」

人々の波の中、瑠璃は翔輝に助けを求めるが、翔輝は無視した。

「がんばれー」

日の丸の旗を振ってやると、瑠璃は驚愕し、一気に人々の波の中に溺れた。そんな瑠璃を笑いながら見ていると、

「あ、翔輝お兄ちゃん！」

足に小さな女の子が抱き付いて来た。三つ編みが特徴のかわいい女の子だ。
「お、何だ加奈子(かなこ)か」
そこにいたのはこの近くの時計屋の娘の加奈子だった。人懐っこくてとてもかわいい女の子で、よく遊んでくれていた翔輝にすっかり懐いているのだ。
「翔輝お兄ちゃんいつ戻ってたの!?」
「うん？　昨日だよ」
「そうなんだ。お帰り！」
「ただいま」
笑顔で言うと、加奈子も嬉しそうにさらに強く抱き付く。すると、何かを思い付いたのか、バッと顔をもたげた。
「ねぇッ！　一緒に遊ぼッ！」
「え？　でも・・・」
人の波に溺れている瑠璃を見詰め、翔輝は困ったように頬を掻く。
「ねえってば！　みんなも一緒だよ！」
「え？」
その言葉に振り返ると、そこには数名の子供がいた。海軍に入る前まではよく一緒に遊んだこの近くの子供達だ。
「翔輝お兄ちゃん！　一緒に遊ぼ！」
「お兄ちゃん！　遊ぼ！」
「遊ぼうよ！　翔輝お兄ちゃん！」
あっという間に翔輝も子供達に囲まれてしまった。体中にくっ付いて来る子供に翔輝は慌てる。
「ちょ、ちょっとみんなッ！　抱き付かないでよ！」
ふらふらと転びそうになるが、すぐに立て直す。
「ねぇ翔輝お兄ちゃん！　早く一緒に遊ぼッ！」
加奈子はぐいぐいと翔輝を引っ張る。
「ちょッ！　ちょっと待って！」
「お待ちください！」

そこへようやく人々の波から解放された瑠璃が戻って来た。瑠璃の服はちょっと乱れているが、彼女は気にしていないらしい。
「翔輝様は私と一緒にいたんですのよ！　勝手に連れて行かないでほしいですわ！」
結構本気で怒っているようだ。自分の年より半分くらいしかなさそうな子供に本気で怒るのはどうかと思うが。
「さぁッ！　翔輝様を返してください！」
「なら瑠璃お姉ちゃんも遊ぼッ！」
「え？」
加奈子の言葉に他の子供達も「そうだよ！」「一緒に遊ぼうよ！」と賛同。驚くのは瑠璃の方だ。
「え？　私は、その・・・」
「ほらッ！　早く行こうよ！」
子供達に手を引かれて、瑠璃は「お、お待ちくださいませ！　まだ心の準備が――」と言いながら連れて行かれた。そんな瑠璃を見て、翔輝は苦笑いしていた。
「ほら、翔輝お兄ちゃんも！」
「はいはい」
加奈子に手を引かれ、翔輝は瑠璃の後を追った。

「つ、疲れましたわぁ・・・」
「ははは、お疲れ」
お昼には皆も昼食を取る為に家に帰っていまい、ようやく二人は解放されて霞家に戻る事ができた。
軍人なので体力には自信のある翔輝とは違い、インドア派の瑠璃の体力はすぐになくなってしまい、後半はほとんど傍観者になっていた。
そして今もくたくたになった身体を畳の上に投げ出して横になっている。本当は貴族として床にそのまま横になるというのはあまりいい事ではないのだが、どうやら今回はそれすらもできないほど疲

れているらしい。
「も、もう一歩も動けませんわ・・・」
「少しは運動したらどうだ？」
翔輝が笑いながら言うと、瑠璃は首を横に振った。
「貴族である私は運動なんてしなくても良いのです。私が何もしなくてもまわりが全てやってくれますし。それに――」
瑠璃は少しふてくされた顔で翔輝を見詰める。
「動いたら負けかなって思ってますし」
「うわぁ、ニートの発言だ」
「ち、違いますわッ！　あんな社会のゴミクズ達と一緒にしないでほしいですわッ！」
「おいッ！　日本中から集中砲火をされそうな発言はやめろッ！」
「事実ですわ。あんな方々がいるから日本は先進国なのに欧米に負けるんですわ。天下りとか消えた年金とかドラックラグとか」
「それは完全に役人の問題だよねッ！？　ニートとか関係ないし！」
「そんなの主観の相違ですわ。ニートのせいで日本はおかしくなるのですわ」
「だぁからッ！　ツッコミづらい発言はやめろってッ！」
「『僕らが不幸なのは社会のせいだ』なんて妄言を言う人間なんて、生きている価値なんてありませんわ」
「だぁからッ！　やめろってばッ！　あの人達だって、仕事がしたくても仕事がないって人達だっているんだ！」
「確かに、そういった方々もいますわ。ですが、自ら働く事を諦めた人間のクズみたいな方々もいるのも事実。ほんと、日本も落ちる所まで落ちてしまったんですわね」
わざとらしく大きなため息をする瑠璃。翔輝もため息して頭を抱える。
「つーか、完全にこの時代から脱線してるよね。頼むから、脱線はやめよう」
「そうですわね。この時代を必死に生きるのもバカバカしくなりま

すわね」
瑠璃の激しい毒舌に、翔輝は身も心もボロボロになっていた。この子はあまりにも危険すぎる。
「さて、これから何をしましょうか？」
毒舌を見事炸裂させて元気を取り戻したのか、瑠璃は笑顔でそう問うた。
「・・・別に何でも」
一方、逆に翔輝はくたくたになっている。先程とは立場が完全に逆転してしまっている。
「そんなつれない態度をしないでほしいですわ」
「誰がこうしたと思ってるんだよぉ」
翔輝はため息するとゆっくりと立ち上がる。
「どちらへ？」
「うん？　暇だからちょっと散歩でもしようかと」
「お散歩ですの？　でしたら私もご一緒に」
「え？　でもお前疲れたんだろ？」
「翔輝様の為ならこれくらい何でもありませんわ！」
そう言って瑠璃はピョンピョンとその場で飛び跳ねる。一応着物は運動性能が恐ろしく低いのだが、彼女はそれを無視して行動する。
そんな瑠璃を見詰め、翔輝は小さく笑みを浮かべる。
昔から変わらない彼女の仕草に、微笑ましくなってしまう。
「じゃあ、行こうか」
「はいですわ！」

霞家の敷地内は恐ろしく広い。東京ドーム三〇個分の敷地の中には山はあるは川はあるわ森はあるわ。散歩というよりハイキングに近い。これだけ広ければ毎年使用人の一人か二人くらい行方不明になるのもうなずける。
翔輝と瑠璃は遭難したくないので屋敷の中庭で済ます事にした。
中庭もずいぶんと広く、池もある。もちろんその池の中には何百

万もする鯉が優雅に泳いでいる。中には何千万もするのもいるらしいが、この家ならありえるところが恐ろしい。

きれいに整えられた庭の敷石の上を翔輝と瑠璃は歩いていた。

「へぇ、相変わらずきれいだね」

「そうですわね。こんな風になってたんですね」

「え？　もしかしてここに来る事ってあんまないの？」

「はい。いつもは屋敷の中で暮らしていますから」

ここでヒッキーと突っ込んだらきっと負けなのだろうと思いながら、翔輝は苦笑いした。

「いやぁ、それにしてものどかだね」

「そうですわね」

蒼い空を見上げ、二人は互いに微笑んだ。

「ほんと、戦争なんてしてるなんて信じられないよ」

「そうですわね」

その時、蒼い空に数機の軍用機が飛んでいった。双発だったのでおそらく陸海軍のどちらかの爆撃機なのだろう。

雲の向こうに消えた爆撃機に、翔輝はため息した。

「やっぱり、日本は戦争してるんだな」

「そうですわね。悲しいですけど」

蒼く澄み切った空を見上げながら、翔輝と瑠璃は悲しげに笑った。

戦争をしているのだ。日本は。

どれだけ空の蒼がきれいでも、きっとどこかの空では命の奪い合いが起きているのだろう。そう思うと、悲しくなってくる。

蒼い空を翔輝は悲しげに見詰める。

「もしかしたら、僕もこれと同じ蒼い海に・・・」

「え？　何ですの？」

瑠璃が不思議そうにキラキラとした瞳を向けてくる。

「い、いや、何でもないよ」

翔輝はそう笑いながら言ってごまかすと、再び空を見上げる。

（大和も、こうして空を見上げてるかな）

そう思ったが、すぐに『大和』は船渠の中だという事を思い出し、一人で笑ってしまった。それを見て瑠璃は「な、何で笑うんですの？」と怪訝そうな顔をする。

そんな彼女を見て、やっぱり平和だなと改めて思った。

そして、どこまでも澄み切った空を再び見上げ――

「バカ翔輝いいいいいいいいッ！」

突如響いた罵声と空気に、翔輝はとっさに身体を半回転させてその場を離脱する。意識してやったのではない。十何年も受け続けてきた攻撃に身体が勝手に動いたのだ。

刹那、一瞬前まで彼がいた所に何かが突っ込んで来た。

芝生の上を滑走したそれはそのすぐ先で急停止した。

そのすさまじい威力に辺りには土煙が舞い上がる。全くまわりが見えない。

一体どうしたのか。何が起きたのか。二人はまったく――

「また、かよ・・・」

「また、ですわね・・・」

二人はなぜか呆れたような顔をして、今の攻撃の犯人がいるであろう先程の落下方面を見詰める。と、

「ふん・・・よく今のを避けられたわ。相変わらず勘が鋭いのね。だけど・・・」

徐々に晴れていく土煙の中から姿を現したのは、瑠璃と同じように着物を来たツインテールの少女。その瞳には自信の炎が燃え上がっている。

少女は腰に手を当てておなじみの決めポーズを取る。

「バカでボケなところは相変わらずみたいね――翔輝！」

少女は見事な登場をしたと思った。そしてすぐに返って来るであろう反応に胸を躍らせる。が、

「あ、あれ？」

少女の思い描いた反応は返って来なかった。

翔輝と瑠璃は混乱する少女を見詰め、ため息した。

「何しに来たんだよ――珊瑚（さんご）」
珊瑚と呼ばれた少女は自分の思い通りの反応をしない翔輝を睨みつける。
「何でそんなテンション低いリアクションなのよ」
珊瑚は翔輝に詰め寄ると睨みつける。が、
「あんなど派手な登場するのはお前しかいないだろッ！？」
翔輝の見事なツッコミに、珊瑚は「うぐ・・・」と言葉に詰まる。
が、
「う、うるさいわね！　あんたの為を思って毎回同じ登場をしてあげてるんじゃない！」
「はぁッ！？　いつもいつも飛び蹴り登場しておいて僕の為って、一体どんな自己中なんだよッ！」
「う、うるさいうるさいうるさい！　黙れ黙れ黙れ！」
睨み合う翔輝と珊瑚。そんなやけに親しい二人を見詰め、瑠璃はため息した。
「瑪瑙（めのう）姉様。なんとかしてくださいな」
「無理ね。それに、いつもの事」
そう言って現れたのはこれまた着物を着た長髪の女性。白い肌に黒い髪、整った顔に落ち着いた物腰。何もかもが美しく、まるでそれは大和撫子を具現化したような美しさの女性だった。唯一違う場所といえば――腰に挿された二本の刀であろうか。
「そうですわね」
瑠璃は瑪瑙と呼んだ女性の言葉にため息する。その間も翔輝と珊瑚の言い合いは続く。
「だいたいあんたはいつもへらへらして！」
「べ、別にしてなんかいないだろ！」
「してるじゃない！　小学校の遠足の時、私が仕方なくあんたのお弁当を作ってあげたってのに、あんたはクラスの女子から分けてもらってたじゃない！　私があの時どれだけ悔しかったかあんたにはわかんないのッ！？」

「わかんないよ！　しかもいつの時のだよッ！　あれはお前が作るって言ってたくせにいつまでも渡さなかったのが悪いんだろッ！？」
「私悪くないもん！　それにあんた中学の時も修学旅行で女子と一緒に回ってたじゃない！」
「あ、あれは班分けで仕方なくそうなっただけだろ！　それに他にちゃんと男子もいたよ！」
「確かにそんなのいたけど、あんたはずっと女子と一緒だったじゃない！」
「し、仕方ないだろ！？　その班じゃ気軽に話せるのが女子しかいなかったんだから！」
「それにあんた！　私におみあげを買わなかったじゃない！」
「何で一緒に行った奴におみあげを買わなきゃいけないんだよ！」
「それが礼儀ってもんでしょ！？　バカじゃないのッ！？」
「バカって言うなッ！」
「バカをバカって言って何が悪いのよッ！」
ギャーギャー言い合う二人を見詰め、瑠璃は再びため息を吐いた。
そんな瑠璃の肩を、瑪瑙がそっと叩いた。
「ごめんね。騒々しくて」
「ううん。確かに少しやかましいですけど、これもまた平和のひとつの形ですわ」
「・・・そうね」
瑠璃と瑪瑙はをまた過去をさかのぼってケンカする二人を見詰め、小さく微笑んだ。

瑪瑙と珊瑚は姉妹で、瑠璃のいとこである。
霞家は強大な貴族の家系だが、その長い歴史の中でいくつもの派に分かれてきた。
純潔を守り続けているのが霞家本家。瑠璃の家系である。
そして、本家に最も近い血筋の霞家分家。それが瑪瑙と珊瑚の家である。

この本家と瑪瑙達の分家は将軍と親藩のようなもので、もし本家に何かがあればすぐに代行を行うほどの信頼関係が結ばれている。
その為、この二家で本家に一人、分家に二人の娘が生まれた際、七宝の名前を付けようという話になった。
その結果、瑠璃、瑪瑙、珊瑚という名前が三人には与えられたのだ。
そして、この三人は仲良く一緒に育ったのだ。
ちなみに長谷川家もめでたく霞家の分家のひとつになったのだが、その影響で翔輝と翔香もこの三人とは親しく育ってきた。
同い年の瑠璃と翔香は親友に、翔輝と珊瑚は小中ずっと同じクラスで、翔輝が海軍学校に入るまではいつも一緒だった——幼なじみだ。
翔輝が海軍学校に入ってからはなかなか会えなかった上に、開戦直前に瑪瑙と珊瑚の家は京都へと引っ越してしまったので余計会えなくなった。引越しの理由は海軍の重要基地のある広島よりも重要文化財や国宝が並ぶ京都の方が安全だからという理由だ。
そんな二人はいつも優柔不断な翔輝と違い、自称しっかり者の珊瑚は同い年なのに翔輝を弟のように思い、自称姉として過ごしてきたのだ。
これが、翔輝のもう一人の幼なじみだ。

とりあえず立ち話もなんだったので、翔輝達は瑠璃の家に戻った。
いつの間茶の間で四人はお茶を飲む。
「ふむ、相変わらず瑠璃の家の茶はおいしいな」
「そうですか？　姉様にお気に入りしていただき光栄ですわ」
瑠璃と瑪瑙は楽しげに会話している。この二人、本当の姉妹のように仲がいい。
そして、そんな瑪瑙の本当の妹と瑠璃の幼なじみはというと・・・
「ちょっと！　そんなにお菓子食べないでよ！　僕の分がなくなるじゃないか！」

「うるさい。これは私と姉さんが買って来たのよ。私がどれだけ食べようと構わないじゃない」
「だからってそんなパクパクと・・・」
「うるさい！　翔輝のくせに生意気よ！」
まったくもってこの調子。典型的な幼なじみなのだ。
ギャーギャー言い合う二人を無視して、瑠璃は瑪瑙との会話を進める。
「でもまさか、姉様達が来るなんて思ってもみなかったですわ」
「久しぶりに翔輝が戻って来るって聞いたんでね」
「へぇ、誰からお知りになられたんですか？」
「あなたが珊瑚に送った手紙よ。あれを見て珊瑚ったら大慌てでね。あなたの家に行くって大暴れしてね。父様が仕方なく車を出してくれたのよ」
「そうですか、珊瑚様が・・・」
「ち、違うわよッ！　わ、私は姉さんがどうしても行きたいって言うから仕方なくついて来たんじゃない！」
珊瑚は突如翔輝との痴話ゲンカを放棄してこっちの話題に食いついてきた。
顔を真っ赤にして姉を睨む珊瑚に、瑪瑙は小さく首を振った。
「相変わらずね、あなたは――そうよ。私が翔輝に会いたかったから来ただけで。珊瑚は私が無理やり連れて来たのです」
「と、いう事よ翔輝！　変な誤解はしないでよね！」
「えっと・・・まだ何も言ってないけど・・・」
「う、うるさいわね！　翔輝のくせに生意気よ！」
顔を真っ赤にして怒る珊瑚に、さすがの翔輝も返す言葉もない。
「珊瑚様。あまり私の翔輝様をいじめないでくださる？」
ここでようやく瑠璃が反撃を開始した。今までただ見ていただけだったが、ついに珊瑚の横暴に我慢の限界を迎えたのだ。
「わ・た・く・し・のぉ？」
珊瑚は翔輝を突き飛ばすと爆弾発言をした瑠璃と対峙する。

「そうですわ。翔輝様はこの私のですわ」
「違うわ。翔輝は私の下僕よ」
「いいえ違いますわ。翔輝様は私の未来の旦那」
「違うわよ。翔輝は未来永劫私の下僕よ」
すさまじい怒気を噴出させての睨み合い。その迫力は何万の軍隊でもしっぽを巻いて逃げ出すかのようなすさまじさだ。
さすがの翔輝もこれはまずいと止めに入る。
「あ、あのさ二人とも。とりあえずケンカは――」
二人はキッと翔輝を睨み付け、
「翔輝様は黙っていてください！」
「翔輝は黙ってて！」
見事に一蹴された。
再び睨み合う瑠璃と珊瑚に、翔輝はもう何もできなかった。
だが、まだ望みが全て絶たれた訳じゃない。
まだ彼には、奥の手がある。それは・・・
「め、瑪瑙姉さん！　な、何とかしてッ！」
それは本当の姉のように慕っている瑪瑙への救援だった。
瑪瑙はいつの間にか本を読んでいたが、泣きついてきた翔輝を見て小さくため息する。
「まったく、身体は大きくなっても相変わらず女の子には弱いな、翔輝は」
まさか艦魂という存在の女の子達にも言いように振り回されているとは思わないだろうが、翔輝が昔からまわりに流されやすい少年だった事は事実のようだ。
「ね、姉さんッ！」
必死に泣きつく翔輝を見て、瑪瑙は小さくため息すると本を閉じた。
「やれやれ、かわいい弟の頼みだ。断る訳にはいくまい」
そう言って立ち上がると、いつの間にか取っ組み合いのケンカにまで発展している二人に近寄る。

「瑠璃、珊瑚。やめないか」
実にかっこいい態度だ。
瑪瑙は外見こそは絶世の美人だが、性格はさっぱりしていて実にボーイッシュだ。しかもため息を吐く事は多いが、基本的にあまり表情を変えない。そんな彼女を見て、なんとなく翔鶴に似てるなぁと思う翔輝。
瑪瑙の登場に二人は一瞬抗争を止めるが、すぐにまた再開する。
「私の翔輝様ですのよッ！」
「違うわッ！　私の翔輝よッ！」
いつの間にか珊瑚のセリフまで変わってしまっている。
瑪瑙はやれやれと肩をすくめると、腰に挿した刀を一本抜いた。
「私はあなた達がいくらケンカしてようと関係ない。だが――」
瑪瑙はさらにもう一本の刀を抜いた。
二本の刀をそれぞれ右手と左手に構え、瑪瑙は細めた目で二人を射抜く。
「私の弟を泣かせる事だけは、許さない」
二本の刀を交差させた瞬間、
「「ごめんなさい！」」
二人は土下座して謝った。それを見て、翔輝はほっとすると同時に嬉しくなった。
瑠璃と珊瑚がケンカして、自分が泣いて、瑪瑙姉さんが止める。
昔から変わらない、関係。
翔輝は安心して、その場に腰を下ろした。
そう、変わらない。何もかも・・・
――いや、変わったか・・・
本当はこの輪の中にもう一人、瑠璃と珊瑚のケンカの中に、もう一人入っていた。
今は亡き、大切な妹――翔香。
本当の関係は、彼女がいてこそ成り立つのだ。
でも、もう彼女はいない。それは帰られない、悲しき現実。

「変えたくなくても・・・変わっていくんだな・・・時間って」
翔輝はうつむいた。
悲しくないなんてうそだ。本当は今でも悲しくて、苦しくて、辛い。
笑ってしまった。
まだこうしてちょっとしたショックで、耐えられなくなるなんて・・・笑ってしまう。
「はは・・・は・・・」
――笑える訳ないじゃないか。
頬を伝う涙は、偽りの笑顔を否定する。
どうして、自分はこんなにも弱いのだろう。
こんな弱い自分なんて、いなくなってしまえばいいのに・・・
「翔輝」
閉ざされつつある世界に、光が降り注いだ。
ゆっくりと顔を上げると、目の前に瑪瑙が座っていた。
いつものように、何を考えているかわからないクールな表情。それはいつも見慣れた彼女の顔。だが、
「姉さん・・・」
瑪瑙は――優しく微笑んだ。
「辛い時は、誰かを頼るものよ。一人で塞ぎ込む事はない。翔輝には、助けてくれる手がたくさんある。だから、その手を取っても、誰も怒らない。むしろ、それがみんなの幸せにもなる」
瑪瑙の言葉に、翔輝の心で何かが弾けた。
ずっと堪えていた何かが、解き放たれる。
「ね、姉さんッ！」
翔輝は、瑪瑙の胸に飛び込んだ。
柔らかく、とてもいい香りのする、懐かしくて、落ち着く。何もかもが皆翔輝を包み込んでくれた。
そうだ。
昔から、何か辛い事が起きた時は、いつも瑪瑙が優しく包んでく

れた。
この感触、この想い、全てが自分を支えてくれる。
瑪瑙の腕の中で、翔輝は泣いた。そりゃあ声を上げて泣いた。
瑠璃と珊瑚も、悲しげに泣く翔輝を見て、そっと涙を流した。
瑪瑙は、そんな本当は誰よりも繊細で、誰よりも折れやすく、誰よりも壊れやすい弟を、そっと抱き締めた。
変わってほしくないのに、変わってしまった。
もう戻れない、思い出の中だけの笑顔が、寂しかった・・・

第八章　第十五節　霞家三大輝石（後書き）

どうでしたでしょうか。
瑠璃のいとこの珊瑚と瑪瑙。
珊瑚は典型的な幼なじみキャラで、瑪瑙はまじめだがとても優しい女性。
孤独というのがテーマだった翔輝という存在が、少しずつ変わってきてはいますが、よりおもしろくなっていると僕は思っています。
えっと、ここで皆様に二つほど報告させていただきます。
まず一つ、先日《艦魂年代史　恋する乙女は大艦巨砲主義》をパソコン限定ですが《ネット小説ランキング》という所に登録しましたので、もしこの作品が気に入っていただけたら、そちらへの投票もよろしくお願いします。
もう一つは、僕は一応学生――しかも受験生です。実はもうすぐ中間テストが迫っていますので、一応ストックはあるんですが、更新は少し遅れると思います。ですが、まだまだ続きがあるので、これからもよろしくお願いします。
それと、評価や感想もお待ちしています。皆様の忌憚のない意見を、どうかこの未熟な僕に教えてください。

第八章　第十六節　それぞれの輝く月夜（前書き）

《霞（かすみ）　瑪瑙（めのう）》

瑠璃の従姉妹・珊瑚の姉・翔輝が最も信頼する姉代わり

出身　広島県呉市

身長　１７２ｃｍ

髪型　長髪

年齢（１９４３年５月現在）２３歳

誕生日　８月１５日

好きなもの　翔輝・翔香・珊瑚・瑠璃・翔輝の淹れてくれた紅茶・みんなの笑顔・何気なくも平和な日常

嫌いなもの　上記の四人に危害を加える奴・コーヒー・お酒・タバコ・争い事

家族構成　父　母　妹・珊瑚

瑠璃の従姉妹で最も本家に近い血筋の霞家分家の令嬢。妹の珊瑚と共に幼い頃から翔輝や瑠璃、翔香と一緒に遊んだ仲で、翔輝からは《姉さん》と呼ばれて慕われている。その容貌は誰もが認める美しさで、大和撫子という言葉がぴったりな美人。だがその反面昔からあまり感情を顔に出さない上に剣道の達人なのでまわりから怖い人と思われているが、本当は誰よりも優しい。剣道の実力は段位を持っていてその実力は折り紙つきである。弟のように慕ってくる翔輝を本当にかわいがっており、実の妹の珊瑚よりもかわいがっている節が多い。かわいい弟の為なら何でもし、時折度が越えて問題となってしまうほどのブラコン。しかし、翔輝からの信頼は絶対で、今現在翔輝が最も信頼している一人。悩み事などの相談は昔から常に彼女にしている。海軍に入るという相談もまず最初に彼女にしている。翔輝を守る事に誇りを持っている。剣道を始めたのも子供の頃からその優しすぎる性格からよくいじめられていた翔輝を守る為だった。翔輝が海軍でがんばっているのを、そっと応援している良き

姉。

《霞（かすみ）　珊瑚（さんご）》

瑠璃の従姉妹・瑪瑙の妹・翔輝のもう一人の幼なじみ

出身　広島県呉市

身長　１５８ｃｍ

長髪　ツインテール

年齢（１９４３年５月現在）１８歳

誕生日　３月３日

好きなもの　甘いもの・お菓子・人形やぬいぐるみ・翔輝に認められる事

嫌いなもの　辛いもの・苦いもの・オカルトやホラー系・雷・翔輝が他の女とデレデレしている事

家族構成　父　母　姉・瑪瑙

霞家分家の次女で瑪瑙の妹。今二人は戦火に巻き込まれないように京都へ引っ越したが、昔は瑠璃の家のすぐ近くに住んでいた。翔輝とは幼い頃からの幼なじみで、同い年という事もあって交流は多い。小中学校と翔輝が海軍学校に入るまでは同じ学校のしかも九年間同じクラスという生粋の幼なじみだった。どこか抜けている翔輝と違って珊瑚はしっかりしていて、折り畳み傘など常に二つ携帯していて翔輝のドジに対処していた。ちなみに風呂なども一緒に入った仲（もちろん瑠璃や瑪瑙、翔香もだが）。よくまわりから《夫婦》とか呼ばれたが、そのたびに怒っていた。自称翔輝の姉として翔輝にいつも世話を焼いているのですごく優しい子なのだが、性格がキツく素直になれなく、いつも翔輝に強く言ってしまってケンカになってしまう。本人は否定しているが翔輝に好意を持っている。いわゆるツンデレ。翔輝が海軍に入る時は反対の立場で、今でも嫌がっている。さらに海軍に入って以来女の子に囲まれるという異例の事態により一層自分がしっかりしないとと意気込むと同時に、その強烈なやきもちで大和達と敵対する事が多く、よく瑠璃と連携を組む事

が多い。翔輝も彼女の事は大切な人と思っており、二人の仲はそれなりに良好。

第八章　第十六節　それぞれの輝く月夜

翔輝のいない最後の日の夜、大和達は何もする事がなくてつまらなそうにしていた。
結局、長門の計らいで『長門』の会議室に主要な艦魂が集まる事になった。
「はぁ・・・」
本日二七回目のため息をつく大和。
「コラコラ。そんなにため息してると幸せが逃げちゃうわよ」
長門が心配そうに言うが、大和は溶けたソフトクリームのようにぐてーっとしていた。
「別にいいですよ。これ以上幸せがなくなる事ありませんから」
「そ、そんな事ないと思うけど・・・」
長門はすっかり元気をなくした大和を見て、小さくため息した。
今ここには大和と長門、陸奥、伊勢だけである。そのうち大和、陸奥の二人は同じような状態。長門がそれを看病（？）しているといった具合だ。ちなみに武蔵は集合を拒否し、日向は「今日は昨日のお詫びに空水ちゃんとハグして来る！」と言って断った。伊－二五こと空水の安否が気がかりだ。
「明日ですよね？　中尉が帰って来るのって」
「そうだけど」
その言葉を聞いて、大和は再びぐてーっとなる。一応女の子なんだからもう少し女の子らしくしてほしい。
「あー、一日が長く感じるー」
陸奥も脱力している。頬杖をついて通信書に落書きを書いている。常の彼女とは思えないダメっぷりだ。
一方、伊勢は結構しっかりしている。先程からずっと陸軍の戦果報告書を読んでいる。
会話がほとんどなく、長門が解散しようとした時、

「失礼します」
ドアが開かれ、部屋の中に下士官の服を着た長髪に大きな白リボンをした少女が入って来た。
彼女の名は最上。重巡洋艦『最上』の艦魂だ。彼女はミッドウェー海戦の時に妹艦の『三隈』と衝突した艦だ。『三隈』はその後撤退中に敵機の空爆を受けて沈没した。『最上』も艦首を失い、その後ずっと佐世保の海軍工廠で修理と大改造が行われていた。その大改造とは、前代未聞の航空巡洋艦への転換だ。後部主砲を全部撤去し、艦体後部に水上機射出機を装備する事によって、水上機母艦の半分にも及ぶ十一機の水上機を搭載できるようになり、これにより『最上』は単艦ですさまじい策的範囲を得た。
そんな最上は今現在忙しくなってしまった利根の後継として総務部の副部長をやっている。
「あの・・・あれ？　武蔵長官はどこに？」
「武蔵ならここにはいないわよ」
長門の返答に最上は「そうですか」とつぶやくと、少し困ったような表情を浮かべる。が、そこに見知った顔を見つけて表情を明るくする。
「部長じゃないですか」
そう言って近寄ったのは伊勢。彼女は最上と同じ総務部の、しかも部長である。
「最上はんやないの。こないな所にどうしたんどすか？」
「武蔵司令に例の書類を渡そうと思って来たのですが」
「そっかぁ、あの書類をねぇ。うん、わかった。うちが直接武蔵に渡しとくで」
「え？　しかし・・・」
「ええから。困った時はお互い様やろ？」
そう言って伊勢は優しく微笑んだ。
この優しくておっとりとした雰囲気が、彼女の人徳高い理由なのだろう。

「では、お言葉に甘えて、武蔵長官に渡しておいてください」
「うん、ええよ」
最上はほっとした様子で伊勢に資料を渡す。伊勢はそれを見て「はい。ほな確かに受け取ったよ」と優しく答える。
「では、私はこれで・・・」
最上は敬礼して部屋を出て行こうとした。が、
「あ・・・ッ！」
最上のポケットから何かが落ちた。最上は急いで拾うが、それはどうやら写真ケースのようだった。
「ねぇ、それは何ですか？」
大和が質問すると最上は大和の顔とケースを見比べ少し躊躇したが、踵を返して大和を向いてそれを見せてくれた。
それはやはり写真ケースだった。その写真ケースには四人の女の子が笑顔で写っている写真が大切そうに納められていた。そのうちの一人は最上だ。
「これは？」
「私の家族――私とその妹達です」
長門達もその写真を見詰める。
満面の笑みを浮かべた最上が三人の妹を抱きかかえるような形で写っている。姉妹の仲が良い事が見て取れる。
「これは戦前のものです。まだ戦争が起きていない、平和な時に撮った」
最上はすごく懐かしそうに言う。平和だった戦前を思い出しているのだろう。
見れば、長門達も同じような顔をしていた。戦前を、平和な時代を知らない大和は少しうらやましかった。
「戦前は、平和だったんですね」
「はい。とてものどかでした」
最上の幸せそうな表情を見る限り、本当に平和で幸せだったのだろう。

「そっかぁ、私も武蔵と一緒に姉妹記念の写真を撮ろっかな」
「いや、それは無理やって」
伊勢のツッコミに「それもそうですね」と小さく笑う。
「あの武蔵長官と一緒に写真を撮るのはかなり困難ですよ」
笑いながら言う最上。その笑みはとても優しいものだった。だが、
「ねぇ、あなた少し疲れてない？」
長門の言葉で気づいたが、最上は少しやつれていた。それに対し最上は苦笑いをする。
「私はずっとドックの中にいましたからね。ずっと休みだったので、復帰した今はがんばらないといけません――三隈の為にも」
その言葉と同時に、最上は悔しそうに唇を噛んだ。その辛そうな最上の表情を見て、大和は沈黙する。
彼女は三隈の死を自分のせいにしている。それは当然かもしれない。もし彼女と三隈が衝突しなければ、退避する事もなく、敵機の空襲を受けずに済み、彼女の妹の三隈も死ななかったかもしれないのだ。そんな風に思ってしまうのは仕方がない。でも、
「あの、最上さん。あまり自分を責めないでくださいね」
大和は最上を励まそうと思ってそう言った。が、
「そのお気持ちはありがたいですが、私の責任に変わりはありません。三隈は私が殺したも同然。それは変えられない事実ですから」
大和の励ましは、最上の前でぴしゃりと一蹴された。
「で、でも・・・」
「大和長官。失礼ですが、この件に関しては誰の意見も聞き入れません。三隈の死は私の責任。これはもう私の中で決定事項ですので」
最上はそう言い放つと会釈して踵を返す。
最上のその自虐的な言葉を無視できるほど、大和は薄情ではない。
「そんな事ないです！　三隈さんだって最上さんが自分の事で苦しむのは望んでいません！　だから――」
「いい加減な事言わないでッ！」
最上の悲鳴が響き、大和はビクリと震える。

最上は涙を浮かべ、顔を真っ赤にして激昂していた。先程までの静かな雰囲気と違い、そのあまりの豹変ぶりに大和や他の者も言葉を失う。

最上は上官である大和をすさまじい目線で睨み付ける。その瞳には殺気に近いものまでもが含まれていた。

「三隈が死んだのは私のせいなの！　それ以上でもそれ以下でもない！　何も知らないくせに、適当な事言わないで！」

ほとんど泣きながら激昂する最上に、大和は自分が出過ぎた事言ったと理解し、「ご、ごめんさない」と謝った。

最上は大和をキッと睨み付けると、そのままドアを勢い良く開けて走って出て行ってしまった。

残された大和は落ち込んでいた。

「ま、まぁ、そのうち何とかなるわよ。うん。きっと！」

長門がなんとか明るい声を出して励ますそうとするが、大和は呆然としていて、彼女の耳には何も聞こえていなかった。陸奥と伊勢も呆然としていて言葉を失っている。

翔輝のいない悲しみを何とかしようと長門が集めたが、結果は散々なものになってしまった・・・

結局、あのままお開きとなってしまい、大和は自室こと翔輝の部屋に戻った。

ドアを開けても電気は点いておらず、いつもは笑顔で迎えてくれる彼もいない。

大和は小さくため息をすると、そっと電気を点けた。

「・・・まぶしい」

「ひゃぁッ！？」

突然そんな声が響いたのに驚いてその声のした方を見てみると、そこには、

「・・・人がせっかく寝てるのに、邪魔しないで」

「む、武蔵？」

そこにいたのは紛れもなく自分の、かわいげのない妹の武蔵だった。

大和は突然の事にしばし混乱していたが、すぐに気を取り直す。

「な、何であなたがここにいるのよ」

大和は少し不機嫌気味に言った。なぜなら、武蔵は翔輝のベッドで横になっていたからだ。

そんな不機嫌な姉の問いに対し、万年無表情の武蔵は、

「・・・翔輝がいなくて寂しいから」

そう簡単に返した。だが、その言葉に、大和の心の中に何か熱いものが流れた。

驚愕と歓喜の表情を浮かべて大和は武蔵を見る。

「も、もしかして、寂しくてお姉ちゃんに会いに来たんじゃ――」

「・・・違う」

大和の想いは見事に一蹴され、儚く散った。

がっくりとその場にうな垂れる姉を無視して、ベッドの毛布の中に潜り込む。

「・・・翔輝の匂いがする」

「え？」

武蔵の突然の言葉に、大和は顔を上げた。

「・・・翔輝の匂いがする」

二回目でようやく彼女が言っている意味がわかった。大和はふらふらと立ち上がると、そんな感じで翔輝のベッドに近づき、そっと匂いを嗅ぐ。

「・・・ほんとだぁ、中尉の匂いだぁ」

いつもあるのその匂いに、大和はいつに間にか満面の笑みを浮かべていた。

彼がいない事は変わらないけど、彼の匂いはここにある。そう思うだけで、自然と心が軽くなった。

「・・・翔輝の心は、いつも一緒」

「そうね、そうよね」

その瞬間、大和と武蔵の瞳が重なった。
この瞬間ほど、自分達が姉妹だと思った事はなかった。
しばし見詰め合う二人だったが、どちらからともなく笑みがこぼれた。
「中尉は明日帰って来るのよね」
「・・・そう。だから、明日は今日までの分を取り返すくらいに甘える」
「そ、それは私だって」
むぅと睨み合うが、すぐさま笑みがこぼれてしまう。
なぜか、今は武蔵とこうしているだけで幸せな気分になってしまう。それは武蔵も同じ事だった。
「ねぇ、今日は中尉のベッドで二人で寝ようか」
大和の突然の提案に武蔵は瞳を見開いて驚いたが、姉の純粋な笑みを見詰め、静かに首を縦に振った。
「・・・わかった。一緒に、寝る」
「そうこなくっちゃ！」
大和はそう嬉しそうに言うと、いきなり武蔵に抱き付いてそのままベッドに倒れた。
「・・・ね、姉さん？」
困惑する武蔵に、大和はすごく嬉しそうな笑みを浮かべる。
「そういえば、こうして姉妹二人だけで寝るのって初めてよね」
「・・・そうだけど」
「えへへ、何か楽しくなっちゃうね」
「・・・別に」
「あぁッ！　そんな事言って！　見てなさい！　すっごく楽しくしてあげるんだから！　えいッ！」
そう叫ぶと、大和は再び武蔵に抱き付いた。
突然の姉の全力抱擁に武蔵はあたふたとする。いつも冷静な彼女らしからぬうろたえぶりだ。
「・・・ね、姉さん。離してッ」

「嫌よ。今日は姉妹水入らずなんだから」
「・・・だからって、これはやり過ぎ」
「いいの。これくらいしないと今までの分が取り返せないじゃない・・・あぁ、なんていい香り。これが武蔵の匂いなのねぇ」
「・・・だ、ダメ・・・そんな所触らないで・・・」
「えへへ、恥ずかしがる武蔵もかわいいなぁ。もっとその顔を見せてよ」
「・・・ま、待って！　ダメだったら・・・ッ！　だから抱き付かないでぇ・・・ッ！」
いつになくしつこい大和に武蔵は必死になってベッドから脱出を試みる。だが、毛布から上半身をやっと出した所で、再び毛布を上から被らされてやり直し。
身体中をぺたぺたと触って来る姉から何とか逃げ出そうとするが、今日の大和は一味違う。武蔵の的確な反撃をこれまた的確に防御と回避して再び攻撃してくる。
「・・・姉さん！」
「あぁん、私のかわいい武蔵ぃ♪」
ついに音符記号まで出てしまった。武蔵はその瞬間顔を真っ青にした。
「・・・姉さん！　離してぇ！」
その時、ふと大和の顔が近づいた瞬間、何か異様な匂いに気がついた。これは・・・
「・・・お酒？」
それは紛れもなくアルコールの匂いだった。
「・・・姉さん。お酒、飲んだ？」
「え？　別に飲んでないけど」
「・・・じゃあ、何か飲んだ？」
「うーんとね・・・そんな事どうでもいいじゃない」
「・・・ダメ」
「むぅ、わかったわよ。えーっとね、確か長門さんにきれいな色を

したジュースをもらったから、それを何杯か飲んだよ」
この瞬間、武蔵は心の中で「・・・あの万年小春日和がぁッ！」と怒りに叫んだ。
大和のこの異常なまでの武蔵に対する想いは、全部アルコールの回り過ぎによる酔っ払い行為だったのだ。それを知って、武蔵はほっと胸を撫で下ろした。心の中ではもしや姉が壊れて同性愛者になってしまったのかと疑っていた。だってそれだけ危険な目で襲い掛かるのだから。
でもどうやらそれも全部お酒のせいらしい。安心した。
「えへへ、素直に答えたからお姉ちゃんといい事しようか」
その瞬間、再び武蔵の顔に戦慄が走った。
そうだ。まだ原因が解明されただけで現状は変わっていない。
大和は再び武蔵に抱きつく。
「あぁん、武蔵大好き――ごぶッ！」
「・・・悪く思わないで。私の初めては、翔輝のもの」
武蔵はそう言うと、見事に姉の首に炸裂した手刀を引き抜いた。
大和はまるで糸の切れた人形のようにピクリとも動かずベッドに横になった。
「・・・ふぅ」
武蔵は小さくため息すると、時計を見る。もう寝る時間だった。
そっと隣で気絶している姉を見詰め、小さくため息。
「・・・仕方がない」
そうつぶやくと、電気を消してそっと姉の横に横になると、姉と一緒に毛布を被った。
武蔵は隣で眠る姉に小さく「・・・おやすみ」とつぶやくように言うと、姉の隣で横になった。
初めて姉と寝る感触は、どこか翔輝と寝る時と似ていた。
武蔵はそっと大和の腕を取ると、その腕に抱き付いた。
そして、静かに瞳を閉じた・・・

その頃、翔輝も布団の中にいた。
隣には瑠璃が気持ち良さそうに眠っている。
珊瑚と瑪瑙は隣の部屋で眠っている。
寝る間際まで瑠璃と珊瑚は瑠璃が翔輝の隣で眠る事で大ゲンカしていたが、結局瑪瑙の仲裁で事なきを得た。
すやすやと眠る瑠璃を見詰め、翔輝は小さく笑みを浮かべると、そっと立ち上がった。
何の為に立ち上がったかと言うと、夕食に瑠璃がお酌（未成年なので当然ジュース）をしまくるので断りきれずに結構飲んでしまった・・・ここまで言えば目的はただひとつ。
「トイレはっと・・・」
翔輝は無駄に広い屋敷の中ですぐに目的地を見つけた。何やかんやで長い付き合いなのだ。
翔輝はさっさと用事を済ませると長い縁側を歩いて部屋に戻る。
と、その途中中庭に人影を見つけた。
「あ、あれは・・・」
翔輝は近くにあった下駄を履いてその人影に駆け寄る。
「瑪瑙姉さん？」
「うん？　何だ、翔輝か。どうしたのよこんな時間に」
そこにいたのは瑪瑙だった。昼間のような着物ではなく白い寝巻き姿だが、その腰にはしっかりと刀が挿されている。
「トイレだよ。姉さんは？」
翔輝の問いに、瑪瑙は静かに満月を見上げる。
「いや、月がきれいだったから、こうして見上げていたんだ」
「――確かに、きれいだね」
翔輝もそっと顔を上げて月を見上げる。
キラキラと輝く星空や月の光に照らされながら、二人は星空を見上げる。
しばし無言で見上げていたが、
「なぁ、翔輝」

瑪瑙は翔輝を向かずにそうそっと声を掛けた。
「何？」
「どうだ？　海軍は」
瑪瑙はそこで翔輝を見詰めた。その瞳には少し不安の色が煌いていた。
彼女は、翔輝が海軍に入る事を反対した一人だ。だからこそ、翔輝が今どんな生活をしているのか気になるのだ。
翔輝は瑪瑙に不安を掛けたくなかった。
「大丈夫だよ。戦艦の乗組員のおかげであんまり戦地には行ってないから」
「実戦は？」
「まだないよ」
「・・・そうか」
それを聞いて、瑪瑙は肩を撫で下ろした。翔輝の言葉に安心したのだろう。
「なら、まだ怖い思いはしていないのだな」
「うーん、一度二度ほど敵潜水艦に襲われて、そのうちの一回は被弾したけど・・・」
「だ、大丈夫だったのか？」
「うん。僕の乗っている戦艦は不沈艦だから」
翔輝は『大和』の名を明かさなかった。一応軍機なので家族にだって明かせないのだ。まあ、瑠璃の時は彼女の恐るべき諜報力に軍機もクソもなかったが。
翔輝の嬉しそうな言い方に、瑪瑙は静かに微笑んだ。
「『長門』に乗っているのか？」
当時は戦艦と言えば長門型戦艦の『長門』と『陸奥』だ。『大和』や『武蔵』は軍機なので国民には知られていない。
「え？　あ、うん、まぁ・・・」
翔輝はうそが苦手だ。だが、翔輝は軍人。軍機を話す訳にはいかないので無理してうそをついた。が、

「今、翔輝はうそをついたな」
「うぐっ・・・」
こちらも長年の付き合いなので、すぐにうそはバレてしまった。
「あ、いや、そのぉ・・・」
うろたえる翔輝を見詰め、瑪瑙は静かに微笑んだ。
「軍の機密なんでしょ？　なら、何も言わなくていい」
瑪瑙はちゃんとわかっていた。翔輝が言えない理由を。
翔輝は瑪瑙の優しさにそっと感謝した。
彼女はいつも無表情だが、その心は誰よりも優しい。
自分の事を誰よりも思ってくれているのに、そんな彼女に応えてあげる事ができない。
何か、申し訳なくてたまらなかった。
「姉さん、ごめんね」
「何で翔輝が謝るの？　翔輝は何も悪くない。だから、謝らなくていい」
「ありがとう、姉さん」
「お礼を言われるような事じゃないわ」
瑪瑙はそう言うと再び月を見上げた。そんな彼女の横顔を見詰め、翔輝はそっと笑みを浮かべた。
昔から頼れる姉は、いつも自分を救ってくれた。
翔香の死の時も、彼女が優しく自分を支えてくれた。
昔から見てきた姉の顔は、やっぱり年を重ねてより美しくなっていた。
翔輝はそんな姉を見た後、再び空を見上げた。と、その時、
「・・・翔輝・・・様ぁ・・・？」
その小さな声に振り返ると、縁側に寝巻き姿で目を擦って立っている瑠璃がいた。
「瑠璃？　どうしたの？」
「・・・翔輝様が・・・いなかったから・・・捜しに・・・」
どうやらふと起きたら翔輝がいなかったので捜しに来たようだ。

翔輝が「ごめんごめん」と苦笑いすると、瑠璃は少し怒ったような顔をする。
「笑い事じゃないですわ・・・さあ、早く寝ましょう」
「う、うん」
翔輝が「姉さんは?」と問うと、瑪瑙は「もう少しここにいる。あなたは早く瑠璃の所に行ってあげなさい」と返した。
「うん。じゃあ、姉さんおやすみ」
「あぁ、おやすみ」
翔輝は瑪瑙とのあいさつを済ませると、瑠璃の下へ駆け寄った。
二人の背中が屋敷の奥へ消えるまで見守っていた瑪瑙は、再び静かに月を見上げると、小さく笑みを浮かべた。
その笑顔はどこまでも澄み切っていて、とても美しく優しいものだった・・・

第八章　第十七節　つかの間の休息の終わり（前書き）

《最上（もがみ）》

最上型重巡洋艦一番艦――重巡洋艦『最上』

出身　呉海軍工廠（広島県）

身長　１６０ｃｍ

髪型　長髪に大きな白リボン

実年齢（１９４３年５月現在）７歳

外見年齢　１６、７歳

誕生日　７月２８日

好きなもの　姉妹・翔輝・仲間・妹達の髪を結んであげる事・きれいなリボン・平和な日々

嫌いなもの　妹を殺してしまった自分・敵機・戦争

家族構成　妹・三隈（戦死）・鈴谷・熊野

重巡洋艦『最上』の艦魂。最上型重巡洋艦は条約の制限を受けて艦体は重巡、装備は軽巡と条約失効後に改装できるような設計で軽巡洋艦として竣工し、条約失効後に主砲などを換装して重巡洋艦となった。重巡洋艦なのに軽巡洋艦の名前の付け方である川の名前が付いているのはこの為だ。新鋭重巡洋艦として艦隊決戦の準主力となるはずだったが、時代は航空機時代となってしまった。主に陸軍の上陸作戦を支援し、バタビア沖海戦では妹艦『三隈』と共に敵重巡洋艦、軽巡洋艦それぞれを酸素魚雷で撃沈するという大戦果を挙げるが、その際に放った魚雷で味方輸送船一隻を沈没させてしまうという失態を犯している。さらにミッドウェー海戦に参加するも、妹艦『三隈』と衝突して大破。損傷軽微だった『三隈』と駆逐艦二隻に護衛されて退避するも、敵機の攻撃を受けてさらに被弾。その際護衛をしていた『三隈』が沈没した。その後大破した『最上』は後部第四、第五主砲を撤去し、後部甲板を水上機運用甲板に改装し、十一機の水上偵察機を搭載した航空巡洋艦となった。そんな最上の

艦魂は仕事熱心で誰にでも優しく人望も厚い指揮官。だが、妹の三隈を自分と衝突してしまった為に殺してしまったと悔やんでおり、三隈の死は自分のせいだと思い込んでいる。三隈の死を引きずっていて、どこか翔輝と似ている。自分の暗い想いを同じ苦境を経験していながら支えてくれた翔輝を心から尊敬している。艦魂年代史シリーズ数少ない巡洋艦キャラ。

第八章　第十七節　つかの間の休息の終わり

翔輝の休み最終日。朝は瑠璃や珊瑚、瑪瑙達と一緒に会話に華を咲かしていたが、時間は経つのはとても早く、ついに翔輝の出発の時間になった。

「では、行きましょうか」

瑠璃は少し寂しそうに言い、神鳴を呼ぶ。神鳴が現れて翔輝の荷物を車に載せる。

翔輝がそっと振り返ると、珊瑚と瑪瑙が見送ってくれていた。彼女達はこれから実家に戻らなければならないのでここまでだ。

瑪瑙はゆっくりと翔輝に近づくと、そっと彼の頭を撫でた。

「がんばって来い」

「うん。わかった」

瑪瑙は静かに微笑んだ。その笑みに、翔輝も笑顔になる。

これからまたみんなとはしばしの別れになる。もしかしたら永遠の別れにもなってしまうかもしれないと一瞬頭をそんな考えが過ぎったが、翔輝は否定した。

必ず生きて帰って来る。そんな想いが彼の心にあった。

「珊瑚も、元気でな」

翔輝は瑪瑙の横で先ほどからずっと黙っている珊瑚に声を掛けたが、珊瑚は「ふん」と鼻を鳴らして背中を向けてしまった。

「さ、珊瑚？」

「――言っとくけど、ちゃんと無事に戻って来なさいよね。これ命令」

背中を向けたまま珊瑚は言った。その震える背中に、翔輝は一瞬どう言葉を掛けていいかわからなかったが、「約束だ」とそう返した。

「死んだりなんかしたら・・・許さないんだから・・・ッ！」

震える声で言う珊瑚に、翔輝は「わかった。約束だ」と返す。

本当は心配や不安でいっぱいなのに、まったくもって素直じゃない。

「じゃあ、行って来るね」

「がんばって来なさい」

「さっさと行きなさいよバカ」

それぞれの見送りを受けて、翔輝は二人と別れた。

小さな笑顔で手を振る瑪瑙と、つーんとした態度を崩さない珊瑚。いつも見慣れた別れの光景である。

翔輝は二人に手を振ると、車に向かう。

車の前では瑠璃が待っていてくれたが、翔輝が来ると無言で車に乗り込んでしまった。翔輝もそれに続いて乗る。その後に用意を整えた神鳴も運転席に乗り込む。

翔輝と瑠璃も乗り込み、荷物を積みいれた神鳴も運転席に乗り込む。

「では、呉の軍港に向かいますね」

「はい。お願いしますわ――本当は嫌なんですけど」

「瑠璃・・・」

寂しそうに言う瑠璃だが、心配する翔輝を見ると必死に笑顔を作り、

「なーんてね！　私は大丈夫ですわ！　だから心配しないでください！」

無理して笑っている瑠璃に、翔輝は何も言えなくなっていた。

「では、行きます」

車が動き出し、呉の軍港を目指して進む。

移動中、瑠璃は一切話そうとせず、翔輝も気まずい雰囲気の中沈黙を続ける。そんな空気に見かねた神鳴が話題を振るが、長続きしなかった。

気まずい雰囲気のまま車は数十分走り続け、ついに到着した。

潮の香りが漂う呉軍港。またここに戻って来たという嬉しさと、やっぱり戻って来てしまったという瑠璃に対する罪悪感を感じながら

ら進む。
神鳴が出してくれたアタッシュケースを受け取り、瑠璃を見詰める。瑠璃はうつむいていて翔輝と目を合わせようとしない。
「じゃあ、行くね」
翔輝が笑顔で声掛けても、瑠璃は顔をうつむかせたままだ。
「翔輝様。お気をつけて」
滝川はお辞儀をする。
「はい」
翔輝はうつむいたままの瑠璃を一瞥するが、瑠璃は依然視線を合わせようとしない。そんな瑠璃にため息し、翔輝は歩き出す。その時、瑠璃は顔を上げた。
だんだんと遠くなる愛しの人の背中を見詰める。これでまたしばらく会えなくなる。
そんなの・・・そんなの・・・
「嫌ですわ・・・ッ！」
「お嬢様！？」
気がついたら走り出していた。神鳴の制止を振り切り、着物が乱れるのも気にせず、ひたすら走った。
急激に近くなっていく大切な人の背中、次の瞬間、
「翔輝様！」
瑠璃は翔輝の背中に抱き付いた。
「る、瑠璃！？」
驚いて振り返ると、力いっぱい自分の事を抱き締めている瑠璃がいた。その小さな身体は、小刻みに震えていた。
「翔輝様・・・やっぱり・・・行かないでください・・・ッ！」
瑠璃は必死に懇願する。
大切な人を、死地に送りたくない。誰しもが思う事を、必死に訴える。そんな瑠璃の頭を、翔輝は静かに撫でる。
「ごめんね。やっぱりそれはできない」
寂しそうな笑みをする翔輝を見て、瑠璃は沈黙する。

わかっているのだ。翔輝は人一倍優しい人だと。困っている人を見つけると、手を差し伸べずにはいられない、そんな人だと。例え、その相手が人でなくても・・・翔輝は手を差し伸べる。だからこそ、瑠璃はそんな彼が好きなのだ。

沈黙する瑠璃を、翔輝はそっと抱き締める。温かい腕に包まれ、瑠璃は静かに目を閉じる。

「あいつらと一緒にいたいんだ。だから・・・」

「・・・わかっていますわ。だから・・・もういいです」

瑠璃は翔輝の腕から離れ、彼の前で姿勢を正す。その顔は笑顔だった。

「翔輝様はお優しいお方。だからこそ、困っている人を助けたいんですね。それが人でなくても・・・そんなお優しいところが、私は大好きですわ」

笑顔でそう言う。面と向かって言われると照れるのか、翔輝は少し顔を赤くする。

「それに、今回『大和』は整備の為に戻って来たそうですね。だとしたら、しばらくはこの呉にいるはず、私の権限をフルに使って、毎日通いますわ」

瑠璃が純粋な笑顔でそう言うのに対し、翔輝は苦笑いしている。

そんな事になったら、大和達との対立も激戦に・・・

先の事を考え、果てしない徒労にため息する。が、それもいいのかもしれないと思う。例え両者が対立しても、自分ががんばればいいのだ。それだけで瑠璃と一緒にいられるのなら、それもまた良い方法なのかもしれない。

「明日から通いますわね。今日はあの方々に差し上げますわ。少しはハンデがないと、楽々私が勝ってしまいますものね」

瑠璃の言葉に、翔輝は微笑んだ。なんやかんや言っても相手の事も考えている瑠璃は優しいのだ。

「そこで折り入ってお願いがあるのですが」

瑠璃は急にかしこまって翔輝を見詰める。翔輝も何事かと瑠璃を

見詰めていると、瑠璃は懐から一通の手紙を取り出し、それを渡した。その手紙を裏に返すと、宛先は大和、武蔵、陸奥、伊勢、榛名の五名だった。

「それを代表として大和様にお渡しください。大事なお手紙なので」

「わかったけど、これは何？」

「秘密ですわ」

笑顔で言う瑠璃に、少し恐怖を感じた。

「さぁ、早く行ってください」

「あぁ、じゃあね」

翔輝は手を振りながら歩く。瑠璃も手を精一杯振って見送る。お互いずっと手を振り続ける。そして、お互いが見えなくなると、そこで腕を下ろした。

翔輝は前を向き、曲がっていた軍帽を被り直して、呉の軍港の中を駆け出した。

「中尉！」

自室で荷物の整理をしていると、早速大和達がやって来た。

「ただいま」

「中尉！」

「うわッ！？」

大和はすさまじい勢いで翔輝に跳び付いた。が、ほとんどタックルに近いような勢いだったので、翔輝はバランスを崩してその場に倒れてしまった。

「いってぇ・・・」

「あッ！　ご、ごめんなさい！」

大和は慌てて翔輝の上から退く。

思いっ切り腰を床に叩き付けてしまったせいで骨盤にあってはならない痛みを感じつつ、翔輝はゆっくりと起き上がった。

「痛いなぁ。いきなり過ぎるよ・・・」

「ご、ごめんなさい・・・」

申し訳なさそうに謝る大和の頭を翔輝は小さな笑顔を浮かべながら撫でる。その翔輝の行動に大和は驚く事なく受け入れる。
「なんか・・・こうやって頭を撫でてもらうの、久しぶりです」
「そうだったっけ？」
「はい」
「そっか。じゃあちゃんとやらないとな」
その言葉に、大和は嬉しそうにうなずく。二人は幸せな空気に包まれた。
「どうでもいいけど、私達の事忘れてない？」
入口で微笑んでいる長門がうかがうような声で聞いてきた。そのまわりには出遅れたせいで今にも噴火しそうな火山の如き陸奥と、少し不機嫌そうに沈黙している伊勢、相変わらず無表情の武蔵、純粋な笑顔をしている日向がいた。
大和が気恥ずかしそうにしているのを一瞥し、陸奥はつまらなそうに翔輝を見詰める。
「中尉。たまには私にもしてください」
「そうどすよ。いつも大和はんばっかり、ずるいどすわ」
陸奥と伊勢が不満げに翔輝を見詰めると、翔輝は少し困ったような顔をする。
「いや、でもさ、大和なら年齢（外見）的にもギリギリセーフだけど、お前達はちょっと・・・」
陸奥と伊勢、互いに四歳ほどの違いがあるが、艦魂は成長が遅いので二人とも外見は翔輝と同じぐらいの年齢に見える。実際はどちらも二〇歳前半だが。
「むぅ」
翔輝の至極的を射た理由に陸奥は言葉に詰まる。が、
「いいじゃん別に。気にしない気にしない」
日向は無邪気な笑顔を向けてくる。彼女は伊勢の妹だから陸奥よりは年上なのに、どう見ても陸奥より年下に見える。これが艦魂の不思議なところの一つだ。

「世の中あんたのみたいな人ばっかりやないの」
「そっかな？」
「そうなの」
「でも、《きせーじじつ》を作っちゃえば問題ないんじゃない？」
「なッ！？」
日向のとんでも爆弾発言に伊勢は顔を真っ赤にして驚愕する。
ものすごいボケキャラだが、その方向には全くの無縁だった日向がいきなりすさまじい発言をしたのだ。これは誰でも驚く。
「日向あんた！　そないな卑猥な言葉どこで覚えたんや！？」
姉のすさまじい激昂ぶりに笑顔を振り撒いていた日向は驚く。
「え？　私何かおかしな事言った？」
「はぁッ！？　あんた何言ってんの！？　今さっき《既成事実》って言ったやろ！？」
「え？　変・・・なのかな？」
「当たり前やろッ！」
伊勢の激しい攻撃に、日向はだんだんと涙目になる。
「だ、だって長門がその言葉はカップルになる過程に使う言葉だって――」
「えッ！？」
日向の言葉に伊勢は急いで振り返って長門を見ると、長門はいつものように意味ありげな笑顔を向けている。その笑みを見て伊勢はため息する。
「長門はん・・・お願いやから日向に余計な知識を入れんといてくだはい」
「えー、楽しいのにー」
「のにー」
「「ねー」」
長門と日向が楽しそうに笑顔を送り合う。いつの間にか日向は長門に染まっていた。そんな実の妹を見て、伊勢はため息するしかできなかった。

「これ以上日向がやっかいになったら、もううちは止められんよ」
「まあまあ、乱暴者になるよりはマシでしょ」
「まぁ、それはそうやけど・・・誰の例えどすかそれ？」
「わからない？　いつもうるさくて口の悪い奴」
「あぁ、榛名はんどすか」
翔輝の言葉に「確かに、あないな妹ならもううちは姉をボイコットしてはりますね」と伊勢も納得。翔輝も笑顔で続ける。
「だろ？　僕だってあんなのが妹だったら人生やめてるよ」
「あのなぁ・・・ッ！　さっきから聞いてれば好き勝手言いやがって・・・ッ！　死ぬ覚悟はできてんだろうな・・・ッ！」
「げッ！　榛名・・・ッ！」
そこにはすさまじく激昂していて今にも飛び掛って来そうな勢いの鬼神、榛名がいた。
突然の榛名の登場に翔輝はかなり焦りまくる。
「あ・・・、や、やぁ、今さっき戻って来ました」
必死に平和的な雰囲気を作るが、榛名の今にも抜刀しそうな勢いは消えていない。むしろ全速力で悪化している。
「その平和的に解決しようと考えていそうな笑顔がムカつく」
「そ、そんな・・・」
「は、榛名はん。ここは穏便に」
「殺すぞ伊勢」
「こ、こわ・・・」
もはや伊勢にも怒りの炎が吹き荒れそうな雰囲気を何とかしようと翔輝は慌てる。
「え、えっと、その――って、あれ？」
翔輝は懐の中から一通の便箋を取り出した。それはさっき瑠璃が大和達に渡してほしいと頼まれた手紙だった。今は、この手紙に全てを賭けるしかない。お願いします瑠璃エンジェル！
「あ、あのこれ、大和達にって、瑠璃が・・・」
「え？　手紙・・・ですか？」

翔輝に手紙を渡された大和は不思議そうに首を傾げるとその裏を見る。
「えっと、私の他に武蔵、陸奥さん、伊勢さん、榛名さんに宛てたものですね」
「・・・私？」
「私と伊勢も？」
「何やろ？」
「おいコラ。何で俺にもあんだよ」
「ともかく開けてみたら？」
「あ、はい」
長門の意見にうなずき、大和は便箋を開き、三つ折にしてある手紙を取り出し、がさがさと手紙を開く。
「どれどれ？」
大和達はその手紙を覗き込む。そして、
しばしの沈黙が流れた。
いきなりの展開に誰もが我が目を疑う。その真っ白な純白の用紙に美しく整った達筆の文字が輝いていたのだが、その意味がよくわからない。
「あらあらー」
長門のマヌケな声が響いた。
そして、その場にいる者全てがが注目しているその手紙には、

――宣戦布告――

とだけ、筆で書かれていた（達筆）。

「・・・・」
「・・・・」
「・・・・」
「・・・・」
「・・・・」

その美しく整った文字から、彼女の本気が見て取れた。そういえば、瑠璃は書道三段の腕前を持っていたなぁ、と今さらながら思い出す翔輝。

深い沈黙の中、最初に先陣を切ったのは、

「・・・相手にとって不足はない」

武蔵だった。

武蔵はいつもと変わらない無表情だったが、その瞳にはなぜか燃え盛る炎があった。

「そ、そうだよ。例え瑠璃さんが相手でも、負けませんから！」

「私だって負けません！」

「うちも負けんよ！」

「て、ていうか、何で俺まで・・・」

それぞれ色々な反応をする大和達。その傍らでは、

「うーん、これはさらに複雑になってきたわね」

「ねー。個人的にはお姉ちゃんを応援してるんだけど、瑠璃ちゃんの参戦でまったく先が読めなくなったから」

長門と日向がこの戦いの行く末を考えて苦笑いし合っていた。

「何だかなぁ・・・」

翔輝は当事者のはずなのにすっかり皆に置いて行かれていた。

何事か意気込む大和達を見詰め、翔輝は小さく笑みを浮かべた。

なんか、本当に戻って来たんだなぁ、と思った。

いつも暮らしてきたこの光景、何もかもが全て懐かしい。たった三日ほど離れていただけなのに、こんなにも懐かしくなるなんて、翔輝は自分の中の感情に困惑しながらも笑顔になった。

「ははは、相変わらずだな」

「・・・まったく進歩がない」

「うおッ！？　お前も相変わらず神出鬼没だな」

いつの間にか横にいた武蔵はそっと翔輝の服の裾を掴んだ。

「・・・翔輝、戻って来たんだ」

「何を今さら。戻って来たからここにいるんだろ？」

何を当然の事を言うのだろうかと翔輝は首を傾げるが、武蔵は小さく首を横に振った。
「・・・もしかしたら、翔輝がもう戻って来ないんじゃないかって、心配した」
それは瑠璃の強硬手段に翔輝が負けるのではないかと不安になっていた事だ。
「あはは、そっか。ごめんね心配させちゃって」
翔輝はそんな武蔵に笑みを送るが、武蔵は相変わらず無表情を貫いている。だが、
「・・・でも、本当に良かった。翔輝が戻って来てくれて、私は嬉しい」
武蔵は純粋な瞳を翔輝に向けた。何も邪念がないその瞳はどこまでも澄んでいてきれいに輝いている。そんな瞳に見詰められ、翔輝は小さく笑顔になる。
「そっか、かわいい事言ってくれるじゃん」
「・・・私はかわいい」
「ははは、うん。かわいいかわいい」
「・・・バカにした？」
「ううん。そんな事ないよ」
翔輝の屈託のない笑みに、武蔵は「・・・そう」とだけ返すと、そっと翔輝にもたれ掛かった。
「武蔵？」
「・・・翔輝、好き」
武蔵はそう言って翔輝に抱き付いた。が、
「あぁッ！　武蔵何やってるのよ！」
早速大和に発見された。彼女の索敵網には穴がまったくない。
「ずるいわよ武蔵ちゃん！　自分だけいい思いしてッ！」
「そうやでッ！　それにさっき「かわいいかわいい」って翔輝はんが言ってたでッ！」
「ほ、本当ですかッ！？　中尉ッ！　どういう事ですか！？」

「テメェッ！　死ぬ覚悟はできてんだろうなッ！？」
一瞬にして大和、陸奥、伊勢、榛名に取り囲まれた二人。翔輝は苦笑いするだけだが、武蔵はしっかりと拳銃にグリップを握っている。
「撃ったらダメだからね」
一応翔輝は釘を刺す。と、
「・・・他に手がない」
「それでもダメ」
「・・・わかった。翔輝がそこまで言うなら、最後の切り札を使う」
「え？」
「コラァッ！　何二人で仲良さげに話しているんですかッ！？」
大和が憤慨すると、武蔵は突然翔輝の手をしっかりと掴んだ。
「え？　何？」
「・・・離脱」
「え？　ちょ、ちょっとッ！」
翔輝はいきなり走り出した武蔵にほとんど引きずられる形で部屋を出て行ってしまった。
「こ、コラ武蔵ッ！　逃げるなッ！」
「中尉を返しなさい！」
「長谷川はんを返してぇなッ！」
「待てやゴラアアァァッ！」
四人は逃走した二人を追いかけてこれまた勢い良く部屋を出て行ってしまった。
残されたのは長門と日向。
お互い顔を見合すと、どちらからともなく笑みが零れた。
「まったく、あの子達はおもしろいわね」
「ほんとにねぇ」
長門と日向はいつまでも笑みを浮かべ続けた。

第八章　第十八節　同じ悲しみを抱く者

その夜、翔輝は休みの間に溜まっていた仕事を終わらせて自室に戻って来た。ドアを開けると部屋には大和がいた。
「お疲れ様でした。中尉」
大和は笑顔で疲れた翔輝を迎え入れてくれた。そんな大和に翔輝も笑みを送る。
「待っててくれたんだ。そっちこそ、会議があったんでしょ？」
「えぇ、まぁ。でもあまり長くありませんでした。機動部隊も護衛部隊もいないですから、極上幹部会の主要メンバーも戦艦以外はごくわずかしかいませんし。それに・・・」
そこまで言って、大和は顔を曇らせた。その表情の変化に翔輝はいち早く気づく。
「どうしたの？」
心配する翔輝の言葉に大和は小さく苦笑いすると、ため息をつく。
「最上と顔を合わせづらくなってしまって・・・」
「最上？」
あまり聞きなれない名前に翔輝は一瞬困惑するが、すぐに重巡洋艦『最上』の艦魂の事だと気づく。だが、正体がわかってもあまり面識がないのでどんな子かまではわからなかった。
翔輝は落ち込む大和に不思議そうに問う。
「何でまた？」
「そ、それが、その・・・」
大和は言いにくそうに顔を伏せると、昨日の出来事をそっと話した。その話を静かに翔輝は聞いていたが、話が終わると、
「そっか、それは大和が悪いよねぇ」
開口一番にダメ出しをした。
「そんなのわかってますよ」
翔輝の言葉に大和はさらに元気をなくしたのか、大和はベッドに

腰掛けた。
　落ち込む大和に、翔輝は諭すように言う。
「三隈の死を自分のせいにするのは、たぶん、彼女の原動力になってるのかもね」
「どういう意味ですか？」
　大和は翔輝の言葉の意味がわからず首を傾げる。そんな大和に、翔輝は少し悲しそうな瞳を向けながら口を開く。
「三隈の仇か、彼女の分までがんばるという気持ちが、今の彼女を動かしているって事。いるでしょ？　復讐する為に生き続けている奴とかさ。それと同じようなものだよ」
「そう・・・なんですか？」
　復讐とかいう感情とは無縁の大和にとっては理解しがたいものだった。
「きっと、彼女は三隈の死を背負って生きていくつもりなんだろう・・・でもね、そういう生き方って悲しいよ」
「そ、そうですね」
「まぁ、人の事言えないんだけどね」
　悲しげな笑みを浮かべる翔輝の言葉に、大和は驚いて伏せていた顔を上げる。
「え？　それってどういう・・・」
「僕も、翔香の死を自分のせいにしてた時期があったからね」
「そッ！？」
　大和はすごく驚いた。翔輝がそんなふうに思っていたなんて微塵も思っていなかったのだ。だって・・・
「翔香さんは病気で亡くなられたんですよね？」
　そう。三隈と違って翔香は病死である。翔輝が責任を感じる要因なんてどこにもない。しかし・・・
「そうだけど、もう少し早く病院に連れてってやればって思っちゃってさ」
「でも、突然倒れられたんですよね？　前兆もなかったんですよね

？　なら中尉に落ち度なんて――」
「確かに、前兆もなく倒れて、その夜に死んじまった。原因もわからない病気だった。でも、その時の僕はそんな事も考えられないほど落ち込んでたからね。でも、そんな僕を助けてくれたのが――」
　大和はすぐにわかった。
「瑠璃さん・・・ですね？」
「あぁ。あいつのおかげで立ち直れたからね。こういう時に幼なじみっていると嬉しいよ。ままぁ、もちろん瑠璃以外の人達にもたくさん助けてもらったんだけどね」
　幼なじみというオプションの効果はかなり強力だ。それに比べて何のオプションもない大和は自分の無力さにため息する。
　大和が落ち込んでいるのを見て、翔輝は最上との仲を取り戻さないとなぁと勘違いして気合を入れる。
　仲直りは早い方がいい。先手必勝である。
「大和。行くぞ！」
「え？　行くぞってどこへ？　って――」
　翔輝はまだ混乱している大和の腕を引っ張って急いで部屋を飛び出した。
　翔輝にさらわれる。それもまたいいかも、と変な方向に考えている大和だった。その間も翔輝は走った。向かう先はもちろん・・・

　たどり着いたのは予備事務室だった。『大和』の事務仕事の中枢である事務室が何らかの理由で使えなくなった時の緊急用の部屋である。それゆえに普段使われる事がなく、今では連合艦隊艦魂司令部こと極上幹部会の司令室になっている。
　なぜ旗艦である『武蔵』でなく次席艦である『大和』に本部があるのかは以前話したとおり武蔵が翔輝に会いたいが為である。
　そんな司令室のドアを開けて中に入ると、そこはすさまじいものだった。かなり広めな部屋なのだが、まわり全ての壁が本棚で、そこには大量の書物や書類が整然と並べられていた。その他にも大量

の書類が床や机に積み上げられている。部屋の手前には印刷機や通信機などの機械が置いてあり、現在進行形で活動中だった。奥には一人用の大きな机があり、そこには武蔵が座りながら書類に目を通していた。部屋には三列の長い机が並べられており、そこには十数人の艦魂が仕事をしていた。本来ならもっと艦魂がいるのだが、それらは皆トラック島に置いてきてしまった為、残った艦魂は大忙しのようだ。

「武蔵」

翔輝の声に武蔵は書類から目を外して翔輝を見詰めると、驚いたように瞳を見開く。

「・・・翔輝？」

武蔵は立ち上がるとパタパタと駆け寄ってきた。こうしたひとつひとつの何気ない動作が彼女の他人にはあまり見せない愛らしさを輝かせる。

駆け寄ってきた武蔵は翔輝をじっと見詰める。一応言っておくが翔輝の隣には大和もいるのだが、武蔵の瞳には翔輝しか映っていないらしい。

「・・・翔輝？　どうしたの？」

「なんか大変そうだね、人手不足みたいで。手伝おうか？　一応お前の補佐官だし」

「・・・確かに人数不足だけど、翔輝が出るまでもない。私が本気を出せば部下の十人や二〇人いなくても問題はない」

「マジでそう思えるのが怖い」

翔輝は武蔵のすさまじいまでの天才ぶりに苦笑いするしかなかった。そんな翔輝を武蔵はじっと見詰める。

「・・・だから、翔輝は気にしなくていい」

「だったら何で僕を補佐官なんかにしたんだよ。いらないじゃん」

「・・・翔輝が隣にいてくれるだけで、私の実力は二・八倍になる」

「ずいぶん跳ね上がるな」

翔輝が小さく微笑むと、武蔵は何か思いついたのか手をポンと叩

いて笑う翔輝を見詰める。
「・・・なら、翔輝に頼みがある」
「何？」
「・・・肩がこったから、肩を揉んで」
「え？　別に構わないけど」
「・・・（ぽっ）」
「なぜ頬を赤くする」
「はいはい！　無駄話はそこまでにしてください！」
ここにきてようやく今まで黙っていた大和が制止に入って来た。
そんな大和の突然の乱入に武蔵は「・・・姉さん、いつからいたの？」と完全に姉が眼中になかった宣言をし、大和は「最初からいたわよ」と不機嫌そうに言う。
「とにかく、中尉も何でいきなり関係のない話をするんですか」
大和はいきなり自分達の問題を放棄して関係のない話に華を咲かせた翔輝を責める。が、
「つーか、お前も副会長なんだから少しは仕事手伝ってやれよ」
「うぐ・・・」
逆に反撃を喰らって言葉を詰まらせた。
「と、とにかく！　今は私達の目的を遂行すべきです！」
大和は状況打破の為に慌てて話題を変える。
「・・・目的って何？」
何も知らない武蔵は不思議そうに首を傾げる。
「ちょっと最上に用があってね」
「・・・最上？　総務部副部長の？」
「あ、うん、たぶん。いいんだよね？」
翔輝の問いに、大和は「あ、はい・・・」と小さく答えた。そんな二人を武蔵はじっと見詰めると、
「・・・ここにはいない。待ってて」
そう言って踵を返すと武蔵は部屋を出て行こうとする。たぶん呼んで来てくれるのつもりなのだろう。その時、

「長官？　どこへ行くのですか？」
　一番近くの机にいたメガネをした水兵の女性が声を掛けて来た。
「・・・最上を呼んで来る」
「あ、それなら私が行きます。長官はここで待っていてください」
　水兵の言葉に武蔵は無表情で「・・・そう。ありがとう」と小さく礼を言う。そんな武蔵の言葉に水兵は「いえ、構いませんから」と微笑み翔輝達に会釈すると急いで部屋を出て行った。
「あの、こちらにお掛けになってお待ちください」
　今度は別の水兵の女の子が近くにあったソファに案内する。さっきまでわからなかったのは今急いで片付けている書類の山で見えなかったのだろう。
　三人がソファに腰を下ろすと、水兵は急いで部屋の奥へ行くと何かをして戻って来た。その手にはお盆があり、そこには三つのお茶が湯のみから白い湯気を立てていた。
「どうぞ」
「あ、ありがとう」
　翔輝はすぐに受け取る。二人もお茶を受け取ると、水兵はお茶菓子を置いて傍らに立った。いつでも命令があれば動きますというオーラに満ち溢れている。そんなまじめそうな少女を一瞥し、翔輝は困ったような顔をする。
「な、なぁ武蔵。もしかして邪魔だったかな？」
　翔輝が申し訳なさそうにすると、武蔵はふるふると首を横に振る。
「・・・そんな事ない」
「で、でもみんながこんなに忙しそうなのに伝令を頼んだりお茶くみをさせたりで、仕事が進まないでしょ？」
「・・・翔輝は優しい。でも気にしないで。ここの者は日頃ハードな仕事をこなしているからこれくらい問題ない」
「でも・・・」
　それでも渋る翔輝を見て、武蔵は小さな笑みを浮かべた。
「・・・翔輝は本当に優しい。そんなに言うなら――ちょっと」

武蔵は傍らに立っていた水兵に声を掛ける。水兵すぐさまは「何かご用ですか?」と営業スマイル全開で聞いてくる。
「・・・もうここはいいから、本来の仕事に戻って」
「え、しかし・・・」
「・・・命令だ」
「了解しました」
水兵は敬礼をして自分の机に帰っていくと再び書類整理を再開した。
「ごめんね。無理言っちゃって」
「・・・翔輝が気にする事じゃない」
武蔵は無表情で翔輝の言葉を打ち返す。何が何でも翔輝にそのような感情を持たせたくないのだろう。
翔輝はそんな武蔵を見詰めて笑顔を浮かべると、お茶をすする。
その時、
「長官。最上司令をお連れしました」
先程伝令に向かった水兵が戻って来た。そんな彼女の隣には分厚い書類を持った最上がたっていた。
「・・・ご苦労。仕事に戻って」
「はい」
水兵は敬礼して自分の机に戻った。残された最上は武蔵の元に来た。一瞬大和と目を合わせるがすぐに逸らす。
「極上幹部会総務部副部長、重巡洋艦最上参りました。それで長官。一体なぜ私を呼んだのですか? 何かご用ですか?」
「・・・呼んだのは私ではない。翔輝だ」
武蔵の言葉に最上を翔輝を見る。翔輝は立ち上がってあいさつする。
「戦艦『大和』航海士長谷川翔輝航海中尉です」
「極上幹部会総務部副部長を務める、最上型重巡洋艦一番艦・重巡洋艦『最上』です」
お互いに名乗ると、翔輝は早速話を始める。

「大和が君を怒らせるような事を言ったんだって？　ごめんね」
翔輝が大和の代わりに謝る。横にいる大和は申し訳なさそうに自分の為に頭を下げる翔輝を見詰める。一方、翔輝に謝られた最上は少し慌てる。
「あ、その、私も少し感情的になりすぎました。申し訳ありません・・・」
「まぁ、僕に謝っても意味がないんだけど・・・」
苦笑いする翔輝に最上は慌てる。そして、
「・・・」
「・・・」
大和と最上の視線が空中で重なった。しかしすぐにお互いに視線を外し、沈黙する。そんな二人を見て翔輝は再び苦笑いして大和を見る。
「ほら、お前も謝れ」
翔輝の言葉にうなずき、大和は立ち上がって真っ直ぐ最上を見詰める。最上も大和の瞳をしっかりと見詰めていた。大和はゆっくりと口を開く。
「あ、その、昨日はいい加減な事を言ってしまってごめんなさい」
大和は軍帽を脱いで頭を下げた。極上幹部会副会長という全日本海軍艦魂のナンバー2である大和が下士官である重巡洋艦に頭を下げたのだ。鉛筆を走らせていた司令部の水兵達も今は鉛筆を止めて二人を凝視している。翔輝はもちろん武蔵も自分の姉である大和を見詰めている。
一方、自分より圧倒的に上官である大和が頭を下げた事に最上は驚く。
「ちょ、長官！　頭を上げてください！」
最上は慌てて大和に頭を上げるように言う。大和もそれに従って頭を上げる。ここで再び二人の視線が合わさる。今度はどちらも視線を外さない。
しばらくしてから、最上は申し訳なさそうに頭を下げた。

「昨日の件ですが、本当に申し訳ありませんでした。上官である長官にあのような罵声を言い放ってしまって。冷静さを取り戻してから血の気が失せてしまいました。自分のしてしまった事を理解し、昨夜は一睡もできませんでした」

「そうですか。こちらこそ申し訳ありませんでした。完全な部外者である私が出すぎた事を言ってしまって」

「そ、そんな！　出過ぎただなんてとんでもないです！　長官はあくまで一般論をおっしゃってくれたんですから、それに噛み付いた私がいけないんです」

二人はお互いに謝罪の言葉を連射する。このままでは永遠に謝罪戦が繰り広げられそうだったので翔輝が間に入って話題を変える。

「最上は三隈の死を自分のせいにしてるんでしょ？　それは今でも変わらない？」

翔輝の問いに最上は一瞬顔を伏せて沈黙するが、ゆっくりと答える。

「はい。それは今でも変わりません」

「そう・・・先に言っとくけど、僕は君の考えは否定しないよ」

「え？」

最上は意外そうな顔で翔輝を見詰める。彼がそんな考えを持つ人間には見えなかったのだろう。

「貴官がそのようなお考えをお持ちとは意外です」

「そう？」

「はい。どちらかと言うとそういう考えを必死にお止めになる方だと思いましたが。違うのですね」

「まぁ、そういう事の方が多いけど。これに関しては特別」

翔輝の何か意味ありげな言い方に、最上は興味を持った。

「どういう意味ですか？」

最上の問いに、翔輝は悲しげに微笑む。

「・・・僕も、妹を病気で亡くしているから」

「・・・え？」

最上は驚いて口を開ける。翔輝はそんな最上を見ながら少し寂しそうな表情になる。
「もっと早く気づいて病院に連れて行けてたらなぁって思っちゃうんだよね。だから自分にも責任があるような気がして」
「そうなんですか」
「でも――」
翔輝は最上を見詰める。その表情はとても柔和で優しいものだった。
「いつまでもそんなふうに自分を責めていたら何もできない。何も進まない。でしょ？　違う？」
「そ、それは・・・」
翔輝の言葉に、最上は言葉に詰まる。どれも自分の心の中にある理性が感じている事と同じ言葉だった。
翔輝は続ける。
「君も気がついてんだろ？　でも、認めたくない。違う？」
最上は答えない。ただ呆然と床を見詰めている。そんな最上が昔の自分に重なる。翔香の死を苦しんでいた、あの頃の自分に、
「まぁ、ゆっくり考えなよ。最上型は確か全部で四隻。まだ二人の妹がいるでしょ？　その子達は姉である君を頼ってるんだからさ。それに仲間もいっぱい、ね」
翔輝の心の底から優しさに満ちた笑顔を、最上はしばし見詰める。そんな最上に翔輝は一度大きくうなずくと、隣にいる大和に声掛ける。
「大和。そろそろ帰るよ」
「あ、はい」
帰る用意をする大和を一瞥し、今回迷惑を掛けてしまった一人の武蔵に声を掛ける。
「武蔵。まだ仕事残ってる？」
翔輝の問いに、武蔵は一度表情を崩すと、珍しく苦笑をした。
「・・・いっぱい。だからここにいる。翔輝と姉さんは先に休んで

て」
「そう・・・わかった。行こ」
翔輝は大和を連れて部屋を出た。水兵達も自分達の仕事に専念し始め、部屋は再び忙しそうな雰囲気に包まれた。そんな中、最上は少しすっきりしたような顔をしていた。自分と同じ境遇を感じた翔輝の言葉だからこそ、彼女の心に良く響いたのだ。だから・・・
「ご助言、ありがとうございました」
静かに、最上はドアに向かって敬礼した。そんな最上を見て、武蔵は本当にごくわずかな微笑をしていた。

「さぁ、寝るよ」
部屋に戻った二人は明日に備えて寝ようとしていた。翔輝はいつものように大和の布団を出してやる。が、
「あ、あの！」
大和がそれを制止する。不思議そうに翔輝が「何？」と訊くと、大和は恥ずかしそうにもじもじとしながらゆっくりと口を開く。
「あ、あの。今日はその・・・武蔵や隼鷹みたいに・・・」
「え？」
首を傾げる翔輝に遠回しな言い方はやめ、大和は意を決して単刀直入に言う。
「今日は、い、一緒に寝たいんです！」
しばしの沈黙。時が止まったようなその空間の中、翔輝の脳にその言葉意味が染みとおるまで少しの時間がかかった。そして、
「だ、ダメだッ！」
数十秒後にその返事が返ってきたが、それは大和の期待していた返事の正反対のものだった。
「ど、どうしてですか！　武蔵や隼鷹とは一緒に寝てるのに！」
大和はおかしいですと翔輝に叫ぶが、翔輝にも翔輝の理由があるのだ。それは、
「武蔵や隼鷹は妹みたいでいいけど、お前はそういうふうには思っ

てないんだよ」
「ならどういうふうに思ってるんですか？」
大和は少し期待した眼差しで見詰める。が、翔輝の返答は、
「と、友達だよ！　決まってるだろ！」
との事だった。大和はがっくりとうなだれる。期待していた自分がバカらしく思えた。が、ここで諦めるほど大和は甘くない。
「そんなの関係ないです！　私は中尉の隣で眠りたいんです！」
「無茶言うな！」
話は平行線をたどる。大和はそんな頑なに拒む翔輝に嫌気を感じ始める。
（そんなに強く拒否しなくてもいいじゃないですか・・・）
「何でですか！　どうせ瑠璃さんとも寝てるんでしょ！？」
言ってから大和はハッとする。口が滑ってしまったのだ。彼に変な誤解を与えてはいけないと急いで訂正しようとする。が、
「中尉？」
彼女が見詰めた先にいたのは、引きつった笑みをしている翔輝だった。その笑みから受け取れる答えはただ一つ。
「寝てるんですね？」
大和にしては恐ろしく低い声だった。そんな大和らしからぬ声色に翔輝は恐怖を感じた――どちらかというと殺意に近い。ここまできたら正直に答えるしかない。無駄に言い訳すればその背後で揺れている青い炎で焼き殺されかねん。
「ま、まぁ、瑠璃の家に行った時は、その、一緒に寝たりするけど・・・そ、それは昔からの習慣というか、その・・・」
「なるほど」
簡単に納得するところがまた怖い。そのあまりの恐怖に翔輝は硬直する。
一方、大和は怒りを無理やりに冷ます。本当は激昂したいが、これは千載一遇のチャンスだった。なぜならこれを使えば翔輝は言い訳できずに納得するしかないのだから。

「それならば、外見上瑠璃さんと同い年である私を拒否する理由はないと思いますが」
「うっ・・・で、でも瑠璃とは長い付き合いで――」
「私達もそれなりに長い関係だと思いますが？」
「い、いやー、まだそんなには・・・」
翔輝の言葉に、大和は少なからずショックを受けた。この一年半、大和は翔輝の傍にずっといた。確かに瑠璃と翔輝の十数年にははるかに及ばない。それでも、翔輝との時間はどの艦魂達よりも多い。《今》の翔輝に最も近い位置にいる。それなのに、それが翔輝にはわずかな時にしか感じられていないなんて、そんなの、あまりに理不尽だ。
「大和？」
ずっと沈黙している大和の異変に気づき、翔輝は慌てて声を掛ける。心配そうに大和の顔を覗き込むが、大和は別の方向を向いてそれを拒む。
「大和・・・」
「・・・もう、いいですから」
大和はそうつぶやいて途中まで敷かれた布団の中に潜ってしまった。そんな大和の行動に翔輝は驚く。
「な、なぁ。僕なんか悪い事言ったか？　それなら謝るからさ」
翔輝は必死に布団の中の大和に声を掛けるが、大和は、
「別に、中尉の言うとおりですから・・・」
と寂しげに答えただけだった。
その後も翔輝は何度も声を掛けるが、それ以降大和は沈黙したままだった。翔輝は大和が寝たと判断して、渋々ベッドに入ったが、その夜大和は一睡もできなかった。

第八章　第十九節　瑠璃色の季節

朝。人々は一日の始まりをそう呼ぶ。
全てはここから始まる。小鳥がさえずり、風が気持ち良くさわやかに流れる。そんな朝を過ぎると一日が始まり、その先にはそれぞれの道が存在する。平和的な道もあれば明日の命も知れぬ危険な道もある。そんなそれぞれの道を進む者はいつも昨日より楽しい一日でありますように、昨日より幸せな一日になりますよにと願う。そしてまた、昨日とは違う刺激がほしいと願う者も・・・

「だからってこれはいくらなんでも刺激的すぎるわよ」
長門がため息しながら言う。
そう、今この状況は極めてよろしくない。超非常警戒態勢である。いつ戦闘が開始されてもおかしくないこの一触即発な雰囲気。息をするのも苦しいこの圧迫された空間。
さて、今ここで何が起きているのかというと・・・
「さぁ翔輝様。インド産の最高級アッサム茶葉を使ったミルクティーですわ。どうぞお飲みください」
「あ、ありがとう」
翔輝は少女から受け取ったミルクティーを口に運ぶ。
おいしい。くせがなく、とても濃厚な味がする。確かにおいしい――おいしいのだが、今の翔輝の味覚は少し空回りしていた。
「どうですの？」
「う、うん。おいしい」
「そうですか？　お口に合って良かったですわ。おかわりはどうですか？」
少し困っている翔輝に一方的にからんでいる少女。その表情はとても幸せそうだ。その時、
「おいコラ。いい加減目の前で堂々とイチャ付くのはやめろ。バカ

ップルが」
　榛名が不機嫌そうに翔輝と少女を睨む。だが少女はそれを待ってましたかのように、
「あらごめんなさい。こーんな仲のいい所を見せ付けられて恥ずかしいのですわね。ならいいですわ。翔輝様。翔輝様のお部屋に行きましょう」
「そういう問題じゃねぇッ！」
　榛名のイライラも限界に達し、テーブルをバンッ！　と叩いて立ち上がって少女を睨む。そして、叫びたい事の中から、一番、根本的問題の疑問を咆哮する。
「何でテメェがここにいるんだ！　瑠璃！」
　瑠璃は「何でって・・・」と、まるで1＋1＝2の理由を聞かれたかのように困惑する。
「そんなの決まってるじゃないですか。翔輝様にお会いしたいからですわ」
「んな事聞いてんじゃねぇッ！」
「あら、では一体何を？」
「何で一般人であるお前がどうして軍艦である『大和』にいるのかって聞いてんだ！」
　その意見はもっともだ。だがそれは同時に愚問と呼ばざるを得ない。瑠璃はそれに対して至極当然のように、
「我が霞家は広島の地方財政を自在に操作でき、この呉海軍工廠にも資金提供をさせていただいてますわ。つまり、この呉の海軍工廠は霞家には逆らえない。その家の者である私が『大和』乗りたいと言えば断れないのは道理。所長は快く了承してくれましたわ」
「いや、それは脅迫って言うんじゃ・・・」
　翔輝のツッコミに、瑠璃は頬を膨らませる。
「失礼ですわ翔輝様。政治的・財力的な圧力をかけただけですわ」
「いや、それも威張って言えるような事じゃないんだけど・・・」
「世の中はミンチ機のようなもの。強力な力で踏みにじられ、砕か

れ、潰される。強きものはそれを弾く事も可能でしょう。でも大抵はその力の前に潰され、グチャグチャのグチョグチョにすり潰され、後に残るのはそれは見事なミンチ肉だけですわ」

相変わらず意味不明かつえげつない言葉を放つ瑠璃。

一方、そんな理由で引き下がるほど翔輝連合軍は甘くない。今度は陸奥が反撃を開始する。

「そんな事までして、そんなに中尉と一緒にいたいんですか！？」

瑠璃はハッキリと、

「もちろんですわ」

瑠璃の満面の笑みに、陸奥も悔しそうに沈黙する。その気持ちはわからなくもない。自分達もそう思うだろうから。でも、だからと言って――

「そんなに中尉とくっ付かないでください！」

二人の距離はゼロ距離。すでに接触ではなく密着になっている。もちろんこれは瑠璃が一方的にやっているので翔輝は悪くない。だがそんな困ったような顔をしているならハッキリ断れ。と言いたげな眼差しで睨む榛名。そんな榛名の視線に翔輝は苦笑いする。

「――くうッ！　悔しい！　ちょっと大和ちゃん！　あなたも何か言い返してよ！」

ここで陸奥は大和に援軍を要請する。が、

「大和ちゃん？」

「・・・」

大和は沈黙していた。寂しそうにうつむき、翔輝達の会話にまったく参加しようという意思が感じられない。

今日の朝に気がついた時にはもうこのような状態になっていた。すぐに翔輝に訊いたが、彼から返ってきたのは「昨日ちょっとすれ違いがあって」とのものだった。すぐにそれが原因だと感づいたが、肝心の《すれ違い》の原因がわからず、現在に至っている。

「おい陸奥！　今の大和は戦力にならねぇッ！　いいからお前も攻撃しろッ！」

攻撃って何だよとツッコミを入れる翔輝を無視し、榛名は陸奥と伊勢と作戦会議を開く。そんな三人を勝ち誇った笑みで一瞥すると、瑠璃はまた翔輝に甘え始める。その時、

「ねぇ瑠璃ちゃん」

先程から瑠璃のカステラをモソモソと食べていた日向が突然会話に参加して来た。

「何ですか？」

敵対反応がない者には純粋な笑みを送る。そんな瑠璃にボロボロとカステラをこぼしながら日向は質問する。

「瑠璃ちゃんって学校とか行ってないの？」

「いきなり何訊いとるん？」

呆れる伊勢の声を気にした様子もなく、日向は不思議そうにしている。

「だって、瑠璃ちゃんの年齢じゃ今頃は学校でお勉強してるんだよ？　なのにどうして瑠璃ちゃんは学校に行かないでここにいるの？」

日向の疑問に誰もがうなずいた。確かにそうだ。瑠璃くらいの年齢なら今は学校にいるはずだ。それがどうしてここにいるのか。会いたいなら放課後でいいのに。

「なるほどね」

榛名は不気味な笑みを浮かべる。その表情を見て誰もが悟った。

――今榛名は、とんでもなく恐ろしい事を考えていると。

「何だよ瑠璃。お前学校に行ってないのか？　行きたくないのか？　不登校なのか？　えぇ？　おい」

榛名は絶好の攻撃地点を確保したらしく、再び総攻撃を開始する。が、それに対して瑠璃は涼しい顔をしていたが、榛名の言葉に呆れたような顔を露にした。

「な、何だよその顔！　何か言いたいならハッキリ言えよ！」

榛名は思うような反応のない瑠璃にイラついていた。そんな榛名を見て、翔輝はため息ひとつを零して説明しようとする。

「あのな、瑠璃は――」

「・・・今現在彼女は学校には通っていない。その理由は、彼女はすでに難関文系大学卒業レベルの学力を保持しているから」

翔輝が説明しようとした事を、瑠璃とは反対側に座って翔輝の服の裾を掴んでいた武蔵が代わりに説明する。武蔵の説明を聞いて、瑠璃は納得したような顔をする。

「そういえばあなた、情報収集能力が他の艦魂をはるかに凌駕するのですわね？　翔輝様から聞きましたわ」

瑠璃の言葉に、武蔵は無表情で彼女を見詰める。その瞳にはいつになく強い意志が秘められていた。まるで、瑠璃を挑発しているかのようだ。

「・・・そういうあなたも個人所有の諜報機関がすごい」

「いえ、あなたのそれには負けますわ」

瑠璃の言葉に、常に無表情の武蔵が微笑した。そんな武蔵を見て瑠璃も笑顔を向ける。だがその笑みはどこか憎たらしげなものだった。お互いに楽しい笑顔とはほど遠い笑みを向け合う光景を見て、他の者は恐怖を感じる。

「お、おい大和。お前の妹おかしいぞ」

榛名が大和を小突くと、大和も苦笑いする。だが、その表情は相変わらず寂しそうで、榛名もため息する。

「大和！」

「ふえッ！？」

いきなり日向が大和に抱き付いた。完璧に密着すると、日向は大和の頬にすりすりと頬ずりを始める。

「ひゅ、日向！？」

驚く大和の頬を日向はペロリと舐める。その行動に大和はビクリと震え、日向はにぱっと笑顔を向ける。

「ほらほら元気出して。何があったか知らないけど、大和は笑ってた方がかわいいんだから。ほら笑って笑って！」

「え？　あ、うぅ・・・」

困り果てている大和にさらに強く日向は抱き付く。そんな二人を

見て他の者は優しい笑みで見詰める。だが、それに触発された人物もまたいた。それは・・・

「伊勢ちゃーん！　私達も頬ずりしましょ！」

「ふ、扶桑姉はん！？　か、堪忍や――うひゃッ！」

伊勢は暴走した扶桑に押し倒され、床の上で抵抗を開始した。よだれを垂らしながら血走った目で伊勢の服の中に手を入れ始めた扶桑を見て、これ以上は見てはいけないと思って翔輝は視線を逸らした。後ろの方から伊勢の喘ぎ声交じりの抵抗する声が聞こえたが、翔輝は心の中で「ごめん」と謝るしかできなかった。

所々でそれなりに仲の良さそうな雰囲気になっているのを見ていると、突然目の前に輝く水滴を身に纏ったコップが現れた。その中には冷えた麦茶が入っている。

「飲むか？」

コップから伸びている白い腕の先には、武蔵以上に表情の変化がない少女がいた――山城だ。

「あ、うん。ありがとう」

山城から受け取った麦茶を口の中に含むと、ちょうど乾いていた喉が冷たく潤う。

「・・・うまいか？」

「うん。とっても」

「そうか」

そうつぶやき、山城はひょいとポケットから――何のためらいもなく一升瓶を取り出した。一体どうやって入れていたのか。

「あ、あのさ。それどこに入れてたの？　艦魂は自艦でなくちゃ空間能力は使えないんでしょ？」

「そうだが」

山城は何を今さらといった感じの顔で翔輝を見詰める。そんな山城に、翔輝は苦笑いする。

「ならどうやって一升瓶をポケットに入れてたの？」

「普通に」

「いやいや、ポケットに入れておく酒は普通ウイスキーでしょ？まずそれが一升瓶ってのがおかしいのに、それをどうやって入れてたんだよ」

翔輝の問いに、山城は一度目を閉じると、再び開いて天を見上げた。

「航海士。女には多くの秘密があるものだ」

「そ、そういうものなのか？」

考える翔輝を見て、山城は唇だけで笑った。が、そんなすごい事がすぐ横で起きているのも翔輝は気が付かない。が、約一名だけは見逃さなかった。

「ちょっと！」

突然瑠璃が翔輝と山城の中に割り込み、山城を睨み付けながら手を広げて翔輝を守るようにして立ち塞がる。

「な、何だよ」

翔輝は突然の瑠璃の行動に驚くが、瑠璃は翔輝の質問には答えない。ただ、山城を睨み続ける。それに対し山城は涼しい顔で瑠璃を見ている。

数秒睨むと、瑠璃は重そうに口を開く。

「まさか、まだ翔輝様を付け狙う輩（やから）がいたとは、伏兵ですわ」

「な、何言ってんの？」

戸惑う翔輝に対し、瑠璃は真剣だった。

一方、瑠璃の爆弾発言に他の艦魂達も驚愕する。

「う、うそ。まさか山城さんも中尉を狙ってたなんて」

「しょ、衝撃的過ぎ」

大和と陸奥が信じられないという顔をしている。榛名もあんぐりと口を開いたまま硬直している。伊勢も同じような状態だ。武蔵に関しては無表情が崩れかけている。

一方、長門と扶桑はお互いに顔を見合わせ、何か意味ありげな笑みをし合っている。

さて、そんな嵐の中心にいる山城はというと――相変わらず無表

情を貫いていた。さすがというかなんというか。
「あなたは一体誰ですの？」
瑠璃と山城一度会っているが、その時は大和達の援護をしていたので直接二人が会話するのはこれが初めてだった。
山城は軍刀の先端を床に付け、会釈する。
「申し遅れた。大日本帝国海軍所属・戦艦『山城』の艦魂。以後よろしく」
「こ、これはどうもご丁寧に」
瑠璃も山城の礼儀正しい行動に礼儀正しく頭を下げる。が、すぐに顔を上げて山城を睨みつける。
「それで、翔輝様とは一体どのようなご関係で？」
「私と航海士は別に特別な関係などはない。強いて言うなら友人だ。あなたが思っているような関係ではない事だけは安心せよ」
それは翔輝と山城は別にどうという関係ではないという事だった。その言葉に瑠璃は安堵する。同時に他の者も安堵する。が、まだ翔輝を取り巻く状況には一点の変化もなかった。
「どうでもいいけどよ。そろそろ長谷川から離れろよ」
イライラしながら言う榛名の言葉に瑠璃はニヤリと不敵な笑みをし、さらにぎゅっと翔輝に抱き付く。
「だぁがら抱き付くなっての！」
「そうです！」
「離れてください！」
大和達の声を無視し、瑠璃は飼い猫のようにニャゴニャゴ鳴きながら翔輝に抱き付く。そんな瑠璃に抱き付かれている翔輝は気恥ずかしさと困ったような顔が混ざったような複雑な表情を浮かべていた。
『がるるる・・・ッ！』
大和達の怒りが頂点に達するのを感じると、瑠璃は翔輝の手を取って翔輝を引っ張る。
「翔輝様。お散歩に行きましょう。私達の未来結婚生活に向かって」

「え？　何言って――うわッ！」
「あッ！　中尉がさらわれた！」
「大和ちゃん！　追いかけるよ！」
「あんのクソガキがッ！」
大和達も急いで二人の後を追う。一方、
「ま、待ってぇなぁ・・・うちも一緒に・・・」
「あーん。伊勢ちゃんかわいーい！　もう最高！」
「あ、あかん・・・そこはあかんよぉ・・・」
扶桑は伊勢にさらなる攻撃を開始していた。暴走する扶桑の攻撃を受けている伊勢は、もうすさまじい事になっていた。口からはよだれが溢れ、ひくひくと痙攣している。これはさすがにヤバイのでは？
「てへ。幸せそうだね。お姉ちゃん」
日向は伊勢の気持ちも知らずに仲良く（？）している二人を見て楽しそうな顔をしている。
残っているのは長門と武蔵。
「いいの？　追い掛けなくて。長谷川君取られちゃうわよ？」
長門の少しいじわるっぽい声に対し、武蔵はいつものように無表情だ。
「・・・別に。翔輝はそんな簡単な人じゃない。私はただ信じて待つだけ」
「ふーん。あなた、長谷川君を信用してるのね」
「・・・当然の事。翔輝を信じないなんてありえない」
武蔵はお茶をすすった。そんな武蔵を見て、長門の顔に笑みが浮かぶ。
二人は静かになった部屋の中で、静かにお茶をすすった。

それから数十分後、武蔵を司令官にした翔輝解放軍は瑠璃を捕縛して翔輝の救出に成功した。翔輝が瑠璃の解放を頼むと、大和達はものすごく不満そうだったが解放してくれた。

瑠璃は翔輝に説得されて渋々帰って行った。
防空指揮所の上でぼんやりとしていると、不意に後ろに気配を感じた。振り返ると、
「こんな所で何してるんですか？」
笑顔で近づいてきたのは大和。
「いや、ちょっとね」
「ドッグの中ですから空は見えませんよ？」
「わかってるよ。何となくさ」
そう答えると「そうですか・・・」と小さくささやき、大和は翔輝の隣に立った。彼と同じようにぼんやりとドッグの中を、自分の生まれた場所を見詰める。
「変わってませんね」
「え？　何が？」
突然の言葉に翔輝が首を傾げると、大和はにっこりと微笑んだ。
「いえ、ここで生まれた時とほとんど何も変わってません。このドッグ」
「そっか・・・」
大和はどこか遠くを見るような目でドッグを見回す。その瞳には懐かしい友人に会ったような、優しげなものが含まれていた。
「私はここで生まれたんですよ？　皆の期待を一身に背負って、世界最大最強の戦艦としての誇りを持って、生まれたんです」
そう言う大和はどこか楽しげだ。その姿は久しぶりの実家に戻った子供を思わせる。
「そっか、ここが大和が生まれた場所か」
「はい」
ここが大和の生まれ故郷。そう思うとただのドッグが特別なものに見える。
下を見ると、多くの整備員達が整備を行っている。こんな光景を彼女は竣工するまでの間毎日見ていたのだろう。
ふと横を見ると、大和は整備員達を嬉しそうに見詰めている。

「懐かしい光景です」
きっと生まれたばかりの頃の話だろう。
翔輝は人間なので生まれたばかりの頃の記憶はない。それに対し艦魂である大和はこんな姿で現世に生まれたので記憶は鮮明なのだろう。少しうらやましい。
しかし、こうして整備される『大和』を見てふと思う。
戦艦や空母はもちろん、軍艦というのは戦う為に生まれる兵器だ。だが金剛型、扶桑型、伊勢型、長門型のどの戦艦も平和な時代に生まれた。金剛型は第一次世界大戦に巻き込まれているが、日本は主だった戦闘はしていないので平和そのものだった。
しかし、大和型は違う。
『大和』はこの戦争の引き金となって竣工し、『武蔵』も戦時中に竣工した。どちらも他の戦艦と違って戦う運命が避けられない戦艦だった。
きっと、日増しに開戦論が高まる中、大和は毎日を過ごしていたのだろう。
平和な時代を知らない。それはあまりにも悲しすぎる運命だ。
下を見下ろす大和を横目に、翔輝はため息した。
戦う事が宿命の軍艦の艦魂。それは決して避けられない運命。
なんて悲しい存在なのだろう。
今まで、こうして笑い合ったりしてばっかりだったから忘れ掛けていた。
彼女達は艦魂。軍艦の魂なのだ。戦う事こそが本来の姿。平和な時代には決して不要な存在。
大きな宿命を背負っているのに笑える彼女達は、本当に心が強いのだろう。
「なあ、大和。聞きたい事があるんだけど」
翔輝の言葉に、大和は「何でしょうか？」と不思議そうに首を傾げる。
翔輝はふと思った疑問を問う。

「お前さ、生まれるのが怖くなかったの？　高まる開戦論、そして開戦。生まれれば戦わなくちゃいけないってわかってただろ？　それは、怖くなかったの？」

翔輝の問いに、大和は少し驚いたような顔をすると、力なく首を横に振った。

「そりゃ、怖かったですよ。元々私は軍艦の艦魂には向いてませんでしたし、戦いは嫌いです。できる事なら、客船として生まれて、みんなに笑顔を与えたかったです」

それはそうだろう。余程の者でもない限り、戦う事を好む者はいない。

「でも・・・」

大和は言葉を繋ぐ。

「戦艦として生まれたからこそ、中尉と出会えた。長門さん達や武蔵とも出会えたんです。戦う事は嫌ですけど、この出会いは幸せ以外何ものでもありません。だから、私は後悔はしてません。戦艦として生まれた私は、戦う事が定め。でもそれは責務だけど、私自身の願いです。私は金剛さんみたいに日本という国をあまり知りません。愛国心なんて、ないかもしれません。でも・・・私は、中尉が愛する故郷の日本を、皆が愛した日本を守りたいです。これは自分の為だけではなくみんなの為。世界最大最強の戦艦として、私は日本を守る為に戦います。それが、一億の民が願う事ですから」

そう真剣に言う大和。

やっぱり彼女は強いなぁと、改めて感動してしまう。

「そっか・・・」

翔輝だそれだけ言うと、再びドッグを見る。世話しなく動く整備員達に、翔輝はそっと「がんだれ」とつぶやくと、防空指揮所を後にする。その後ろを慌てて大和が追って来る。

「中尉。待ってください」

追い掛けて来た大和に振り返ると、大和は笑顔で翔輝の横に並んだ。そんな愛らしい彼女に、翔輝は笑顔になる。

「僕の部屋でお茶でもしない？」
「あ、いいですね。ぜひ」
「わかった。じゃあ僕の部屋に行こう」
「はい」
翔輝の伸ばした手を、大和は嬉しそうに掴んだ。
手を繋ぎながら、翔輝と大和は通路の奥へと進んで行った。

第八章　第二〇節　激突　翔輝を想う気持ち

翌日、さらなる事件が起きた。
「ご紹介しますわ。私のいとこに当たります――」
「瑪瑙と言う」
「・・・珊瑚」
笑顔で瑪瑙と珊瑚を紹介する瑠璃。口をあんぐり開けて驚愕する大和達。そして、
「もう嫌だ・・・いっそ殺して・・・」
床でぐったりと倒れている翔輝。
一体どういう事かというと、話は簡単だ。
――瑠璃が、二人に全部話してしまったというのだ。包み隠さず、全てを暴露したと。
きっかけは簡単だった。
昨日『大和』から瑠璃が家に戻ると、二人が怒涛のごとく怒っていたそうだ。聞いてみると、なんと二人は瑠璃の後をこっそりとついて来たというのだ。そして、霞家の血筋なのか二人は艦魂が見えた。その能力をフルに使って翔輝が大勢の女の子に囲まれているという驚異的現場を目撃。マジギレした珊瑚が乱入しようとしたのを瑪瑙が押さえ込んで何もせずに戻った。そして、その輪の中にいた瑠璃を問いただし、瑠璃は全てを話し、そして今日、二人はこの『大和』に乗り込んで来たという訳だ。
強力な味方をつけた瑠璃は勝ち誇った笑みを浮かべ、珊瑚はもちろんだが瑪瑙までもがどこか不機嫌そうな顔をし、大和達は驚きのあまりフリーズし、翔輝は「もう世界なんか大嫌いだぁ・・・」と悲しげにつぶやく。
不気味な沈黙の中、誰もが口を開く事はない。開くのは、「もうお嫁に行けない・・・」と、ちょっと壊れ始めた翔輝のつぶやきだけ。

ものすごく重い空気の中、大和達はこういった状況を進行させる事のできる唯一無二の存在とも言うべき長門を見詰める。
皆の視線を感じたのか、長門は小さくため息すると瑠璃達にそっと話しかける。さすがは頼れるお姉様だ。
「あ、あの瑠璃。この人達は一体どのような方？」
「今も申したように、私のいとこですわ。正確には私の霞家本家に忠誠を誓った最も親しい霞家分家の令嬢ですわ」
「分家・・・？　あぁ、お家制度って奴ね」
納得する長門だが、彼女が聞きたかったのはそれではない。
「まぁそれもなんだけど、私が知りたいのはこの二人と長谷川君の関係なんだけど」
長門の質問に、瑠璃は待ってましたと言いたげに胸を反らす。
「お二人は翔輝様の大切な方ですわ」
「大切な人？」
長門はもちろん、大和達も瑠璃の言葉に目を丸くする。皆の意識がこちらに向いたのを確認すると、瑠璃はニヤリと笑う。
「瑪瑙姉様と珊瑚様は見ての通り姉妹ですわ。そして、珊瑚様は翔輝様とは小中学校を同じクラスで過ごした生粋の幼なじみ。瑪瑙姉様は翔輝様の姉代わりのような存在ですわ」
瑠璃の言葉に、大和達に衝撃が走る。そんな人がいるなんて今の今まで全く知らなかった。
「ちゅ、中尉！　どういう事ですかッ！」
いち早く硬直状態から脱した大和が翔輝に叫ぶ。と、翔輝はやっと立ち上がった。だが、その表情は少し泣きそうであった。
「まさか、こんなに世界が狭いなんて」
翔輝の絶望的な言葉に、長門は心の中でうなずいた。まさか翔輝の重要な関係の女の子が全て艦魂が見えるなんて。世の中狭いというかご都合主義というか・・・
大和は翔輝からの返答を待ち続けた。その瞳はしっかりと翔輝を捉えて離さない。そんな大和に翔輝は力なく微笑み、

「ごめんね、迷惑かけちゃって」
「え？　あ、いえ、そんな事は・・・」
いつになく疲れ切ったような表情をする翔輝に、大和はそれ以上の追及はできなかった。
視線を下げた大和を一瞥し、今度は瑠璃達に同じような笑みを向ける。
「とりあえず、今度会った時にゆっくり話すからさ、今日の所は帰ってくれな――」
「このアホ翔輝ぃッ！」
翔輝が言い終わる前に、珊瑚が鉄の床を蹴って跳躍。身体を空中で捻らせて右足を思いっきり突き出す。そのすさまじいまでの勢いを殺さずに、全威力を翔輝の腹部に打ち込んだ。翔輝は吹っ飛び、代わりに一瞬前まで翔輝がいた所に珊瑚はきれいに着地。一方翔輝は壁に激しく叩きつけられてその場で悶絶。
あまりにも華麗な飛び蹴りに誰もが反応が鈍った。が、
「あぁッ！　翔輝様！」
瑠璃がいち早く脱し、お腹を押さえて悶絶する翔輝に駆け寄る。
「珊瑚様！　翔輝様に何て事をするのですの！？」
「うるさいわよ！　そこのバカ翔輝がムカついたから蹴りを入れただけ！　文句ある！？」
すさまじいまでの理不尽な暴力に、皆呆然とする。
「な、なんか・・・榛名さんに似てるね」
「ほ、ほんまになぁ」
陸奥と伊勢は本人には聞こえないような小さな声でそう言うと互いにうなずいた。
一方、瑠璃の肩を借りて立ち上がった翔輝は、いきなり暴力を振るった幼なじみに激怒する。
「いきなり何すんだよ！」
翔輝の激怒に、珊瑚もギロリと彼を睨みつけると激昂する。
「あんたが悪いんでしょ！」

「何でだよ！　僕は何も悪くないでしょッ！」
確かに、翔輝は何も悪い事はしていない。だが、そんな事ぐらいで引き下がるような女の子では珊瑚はなかった。
「う、うるさい！　何よ！　軍人になりたかったのはこんなハーレムを作りたいからだったの！？　最低ッ！」
珊瑚は大和達を指差して顔を真っ赤にして怒鳴る。
「そ、そんな訳ないだろ！　こいつらと出会ったのは『大和』に乗ってからだよ！」
翔輝も珊瑚の無茶苦茶な言葉に激怒する。
だが、珊瑚だってここで引き下がる訳にはいかなかった。
幼なじみが間違った方向に行かないように導かなければならない。
それが子供の頃から変わらない二人の絆だから。
「小学の頃はそんなんじゃなかったじゃない！」
「知らないよ！　いきなり何意味不明な事言ってんだよッ！」
「いつからこんなのになっちゃったのよッ！　小学三年生の時、雨の日に傘を忘れた私に傘を押し付けて雨の中を走って帰ってったじゃない！　あの優しさはもないの！？」
「だぁかぁらッ！　何でそんなガキの頃の話を出すんだよ！　そんなのもう覚えてないよ！」
「私は覚えてるもん！　次の日、あんたは風邪を引いて学校を休んだ！　だから私はその日の放課後にお見舞いに行った！　謝る私にあんたは「気にしないで。例え珊瑚だとしても、女の子を雨の中には置いて行けないよ」って、ちょっと腑に落ちない所もあったけど、あんなに優しかった翔輝はもういないのッ！？」
「やめろぉッ！　ものすごく恥ずかしいからもうやめてくれぇッ！」
ギャーギャー言い合う翔輝と珊瑚。そんな二人を瑠璃と瑪瑙は微笑ましく見詰めているが、いつになく怒鳴る翔輝に呆然とするのは大和達。
「中尉って、あんなに怒りっぽかったっけ・・・？」
「・・・あれが、翔輝の本来の姿」

武蔵は無表情で翔輝を見詰める。だが、その瞳には悲しい光が灯っていた。

一方、大和も翔輝を見詰めるが、こちらは少しうっとりとしている。

「中尉って、子供の頃から優しかったんだぁ」

珊瑚の口から連射されるのはどれも翔輝の子供の頃の優しい行為の数々だった。翔輝は珊瑚の言葉に反撃をするが、それは照れ隠しなのだろう。大和も翔輝の武勇伝（？）を聞いてうっとりとする。が、事件は突然起きた。

珊瑚は「あ・・・」と小さく声を上げると、急にジト目で翔輝を見詰める。

「な、何だよ」

「そういえばあんた、中二年の時の水泳の授業で女子更衣室に乱入したわよね」

珊瑚の突然の翔輝というキャラが崩壊しかねない事実に、大和達は声にならない悲鳴を上げた。慌てて翔輝を見詰める。それらの目には《あなたはそんな人間じゃないありませんよね？》という必死な想いが込められていた。

大和達の視線を背に受けながら、翔輝はうつむいたまま肩を小刻みに震わせる。そして、我慢に我慢を重ねた感情を解放する。

「やめでええええぇぇぇぇッ！　あれは間宮（まみや）と新井（あらい）が悪いんだぁッ！　あいつらが無理やり女子更衣室に僕を突っ込んだんだぁッ！　なのに、なのにぃッ！」

いつの間にか、翔輝は泣きながら床に突っ伏していた。余程辛い思い出なのだろう。だが、普通男の子なら女子の着替えを見れたならラッキーなはずだが、

「その後女子全員に半殺しにされたのよね。もし日頃の態度が良かったあんたじゃない別の男子だったら、たぶん死んでたわよ」

珊瑚は平然と言う。どうやら翔輝の心を深く傷つけたのはその後の暴行事件の方らしい。

床に伏して涙する翔輝。珊瑚の言葉に完全に戦意を失っていた。
すると、そんな彼の肩をポンと誰かが叩いた。顔を上げると、そこには無表情で立つ武蔵が。
「武蔵・・・？」
武蔵はポケットからハンカチを取り出すと、そっと翔輝の顔に当てて涙を拭い取った。驚く翔輝に武蔵は口元にわずかな笑みを浮かべた。見つめる瞳はとても柔らかに光っている。
「・・・翔輝。私は信じてる。翔輝はそんな人間じゃないって」
武蔵の言葉は、今の翔輝にはものすごく嬉しい言葉だった。翔輝は「ありがとう・・・」と涙ながらに礼を言って武蔵を抱き締めた。
翔輝の腕の中、武蔵は小さな笑みを浮かべた。
相変わらず弱り切った翔輝の心の隙に入り込むのがうまい武蔵は、翔輝を独り占めにした。だが、そんな横暴を許す者はいなかった。
「ちょっと武蔵！　中尉から離れ――」
「このバカ翔輝ぃッ！」
大和が武蔵に噛み付く寸前、珊瑚のすさまじい飛び蹴りが武蔵ごと翔輝を吹き飛ばした。
唖然とする一同の中、珊瑚はきれいに着地すると床に転がっている翔輝の胸元を掴んで持ち上げ、怒りに染まった瞳で睨みつける。
「この変態！　あんな小さな女の子に抱きつくなんて不潔よッ！」
「べ、別にやましい想いなんてないよッ！」
「女子更衣室に乱入した奴なんか信用できないわよッ！」
「だ、だから好きで入った訳じゃないってばぁッ！」
「うるさい！　それ以上言うともう一発飛び蹴りをかますわよ！」
「理不尽だぁッ！」
「言ってるそばからこのアホ翔輝ッ！」
珊瑚は勢い良く手を上げる。
パシッ！
天高く上げられた珊瑚の手は、突如別の手に掴まれた。視線を落とすと、感情の込もっていないような瞳で見詰める少女。それは、

先程まで翔輝と抱き合っていた少女だった。
「な、何よ。邪魔しないでよね」
冷たく言い放つが、少女は掴んだ手を離そうとはしない。無表情でじっと見詰めるだけ。その無言の威圧に、珊瑚はイラつく。
「何よ！　何か言いたい事があるならハッキリ言いなさいよ！」
武蔵の手を叩き落として珊瑚は怒鳴る。武蔵はじっと怒る珊瑚を見詰める。そして、突如その瞳の色が変わった。平穏な海から、激流の川へと変貌した。
「・・・翔輝は私が守る。誰にも傷つけさせない」
それはあまりにも彼女らしい言葉だった。だが、それを知っているのは彼女との付き合いのある者だけ。今日初めて会ったばかりの珊瑚はその言葉に激怒した。
「な、何よあんた！　さっきから翔輝に色々絡んだりして！」
珊瑚は今にも武蔵に飛び掛りそうな勢いだったが、その肩を突如誰かが叩いた。振り返ると、
「姉さん？」
そこには長い黒髪を流した瑪瑙が静かに立っていた。
「あまり騒がないで」
そう言うと、瑪瑙は床に座ったままこちらを見詰めている翔輝を向き、しゃがんで視線を落とすと、そっとその頬を撫でた。
「ね、姉さん・・・」
見詰める先で、瑪瑙は静かに笑みを浮かべた。
「安心して。翔輝は私がついてるから。私が、必ず守ってあげるから」
「ね、姉さぁんッ！」
今度は瑪瑙の優しさに感動し、翔輝は瑪瑙に抱き付いた。その行動に皆が驚愕する。大和達なんかはあまりの事に愕然としている。翔輝が抱きつくのは子供っぽい女の子に限るのだが、今彼が抱きついているのは大人の女性である瑪瑙だ。少々胸は足りないかもしれないが、その身体は大人の女性そのものだ。そんな彼女に自ら抱き

ついている翔輝に、大和達は言葉をなくす。
・・・武蔵も、ショックのあまり愕然としている。
皆に見詰められる翔輝と瑪瑙。
瑪瑙は自分の腕の中にいる翔輝の頭をそっと撫でた。それは彼が常日頃大和達にしている優しい好意だった。
瑪瑙に頭を撫でられる翔輝はとても心地良さそうな笑みを浮かべる。それは常日頃大和達が見ている笑みとは違った。
――心の底から、安心している子猫のような笑みだった。
「翔輝・・・私の大切な翔輝・・・」
瑪瑙はそう言ってうっとりとする。すると、
「僕も姉さんが大切だよ？　姉さん、大好き」
刹那、衝撃が走った。
翔輝の口から放たれた衝撃の言葉。それは常日頃彼が恥ずかしがってあまり言いたがらない愛の言葉だった。
安心できる存在である瑪瑙だからこそ心の底から言えるその言葉に、大和達の中で何かが音を立てて崩れた。
瑪瑙は、そんな弟のようにかわいがっている翔輝の言葉に「ありがとう」と小さく礼を言って優しく抱き締める。
その時、
「・・・翔輝から離れろ女狐ッ！」
突如部屋の中にすさまじい怒声が響いた。そのすさまじい怒号に、皆は驚いて声の主を見てまた驚愕した。
そこにいたのは、身体中から殺気を噴出させて憤怒している武蔵。その顔はいつもの無表情は完全になくなり、顔を真っ赤にして怒りで顔を染めている。瞳には灼熱の炎が燃え盛っている。
そのあまりにも恐ろしき武蔵の姿に、大和達もたじたじだ。
「む、武蔵・・・？　ちょっと――うわッ！？」
武蔵は瑪瑙から翔輝を奪うとその前に立ち塞がる。
そして、怒りの眼光で瑪瑙を貫く。
「・・・私の翔輝に勝手に近づかないで！」

悲鳴に近い声でそう怒鳴ると、今度は翔輝に向き直る。その視線は依然怒りに染まったままだ。
「む、武蔵・・・？」
「・・・翔輝も翔輝！　私以外の女にデレデレしちゃダメぇッ！」
「え？　あ、うん・・・」
武蔵のあまりの迫力に、翔輝は訳もわからず反射的にうなずいてしまった。
再びキッと瑪瑙を睨む武蔵。だが、瑪瑙は涼しい瞳で武蔵を見据える。いつもと完全に逆パターンになっている武蔵。
瑪瑙はしばし武蔵を見詰めた後、そっとその隣であわあわしている翔輝を見る。
「翔輝。この子は誰？」
そういえばなんかメチャクチャ過ぎて紹介するのを忘れていた事を思い出す。
「えっと、姉さん達は艦魂は知ってるんだよね？」
「まあ、瑠璃から一応は」
「なら話は早いや。えっと、まずこの子が大和。この戦艦『大和』の艦魂だよ」
翔輝に紹介された大和は軽く会釈する。
続いて陸奥、長門、伊勢と次々に紹介していくが、皆かなり警戒しているようだ。どうやら翔輝とあまりにも仲がいい二人に敵意を持つ者までいるらしい。
「そして、この子が武蔵。戦艦『武蔵』の艦魂で、大和の妹」
最後に武蔵を紹介したが、武蔵は依然瑪瑙を睨みつけたまま。どうやらこの子がこの中で一番敵対心むき出しらしい。
瑪瑙と珊瑚は大和達をもう一度見回す。しかし何度見直してもそこにいるのはうら若き乙女達ばかり。
「ねぇバカ翔輝。あんたは何？　ハーレムを築きたいの？」
そう言って珊瑚は恐ろしく冷たい目で翔輝を見詰める。その中には軽蔑も込められていた。

「ち、違うよッ！　そんなんじゃないってば！」
翔輝がいくら否定しても、珊瑚は冷たい視線を崩さない。
一方、瑪瑙は先程から自分を睨み付けている武蔵を見詰め、そっと問う。
「あなたは翔輝の何？」
瑪瑙の問いに、武蔵は素直に答える。
「・・・友達」
「そう、お友達。翔輝といつも仲良くしてくれてありがとう。これからもよろしくね」
そう言って、瑪瑙は会釈した。一瞬、瑪瑙のその礼儀正しい態度に武蔵も驚いたが、すぐに態勢を立て直す。
「・・・貴様は何者？」
「私？　私は翔輝の姉のような者よ」
「・・・なるほど、所詮は姉か。ならば、私の翔輝に勝手に近づかないで」
そう言って武蔵は翔輝に抱きつく。後ろでは大和達や珊瑚、瑠璃が何か文句の声を上げたが。瑪瑙もピクリと眉を動かす。
「いきなり何を言うかと思えば、そんなの無理に決まってるじゃない」
「・・・言う事を聞かないなら、武力行使もやむをえない」
そう言うと、武蔵は腰の軍刀を引き抜いた。その突然の行動に皆が驚愕する。
「ちょ、ちょっと武蔵！」
翔輝が間に入ろうとしたが、武蔵はそんな彼を睨み「・・・翔輝は下がってて」と言うと再び瑪瑙を睨む。視線の先の瑪瑙は戸惑っていた。
「剣を抜くって事がどういう意味かわかってるの？」
「・・・それ相応の覚悟はできている」
「なるほど、言っても聞かないって訳ね」
「・・・翔輝は私が守る。貴様の力は不要」

「それは心外ね。私は翔輝が小さい頃からずっと守ってきた。そしてそれはこれからも。あなたこそ必要ない」
「・・・黙れ女狐。貴様はここで倒れろ」
「・・・仕方ないわね――潰してあげる」
そう言って瑪瑙は瞳を細くし、腰の二本の刀を引き抜いた。それを見て驚愕するのは翔輝に珊瑚、瑠璃のメンバー。
「まずいッ！　武蔵！　すぐに刀を捨てるんだッ！」
そう叫んだのは翔輝。その声にはいつになく焦りがあった。同じような反応の珊瑚と瑠璃に大和達は不思議そうに首を傾げる。
「中尉。武蔵の実力はあなただってわかってるじゃないですか。あの金剛さんや榛名さんを手玉に取るくらいですよ」
「気に入らねぇが、純粋な実力だけならあいつは本気の翔鶴にある程度は食い下がれる。人間の女なんかに負ける訳がねぇ」
大和と榛名の言葉に皆うなずいた。ただでさえ艦魂は人間よりも身体能力が上なのに武蔵はさらにそこへ戦闘能力が加わっている。その実力は他を圧倒し、人間なんかが勝てるようなレベルではないが、
「とにかくやめるんだ！」
翔輝の声に、武蔵はイラっとした。
彼は、あんな女の方が自分よりも強いと言っているのだ。気に入らない。軽くあしらう程度のつもりだったが、変更。徹底的に叩き潰す。
刀を構えた武蔵に、翔輝は叫ぶ。
「やめろぉッ！　瑪瑙姉さんは強すぎるんだよッ！　翔鶴だって姉さんには――」
そこまでしか聞こえなかった。
意識を集中して、一気に踏み込んだ。先手必勝！
ドス・・・ッ！
「・・・かはッ！」
突然の衝撃とその声は、自分から出ているものだった。

先手を取ったと思ったのに、自分の刀は虚空で止まり、いつの間にか目の前まで踏み込んだ瑪瑙の刀の峰が自分の腹に食い込んでいた――峰打ちだ。

その強烈な一撃に、武蔵の意識が消えて行く。

途絶える直前、瑪瑙の口か動いた。もう何も聞こえないが、その口ははっきりとこう言っていた。

――あなたじゃ、翔輝は守れない――

「・・・違う・・・私は・・・翔輝を・・・守・・・る・・・」

そこで意識は途絶えた。

武蔵はその場にぐったりと倒れた。

瑪瑙は何事もなかったかのように刀をしまうと、翔輝を見た。

「む、武蔵！」

翔輝は慌てて武蔵に駆け寄ると、彼女の身体を抱き起こした。そして、ただ気絶しているだけとわかると安堵の息を漏らした。しかしすぐに視線は瑪瑙へと向けられる。

「何も気絶させる事もないのに」

「冷静さを失った者は頭が冷えるまで黙らせておいた方がいい」

「・・・まさか、武蔵が冷静を失うなんて」

翔輝は腕の中で気絶している武蔵を見て驚く。

一方、大和達も驚愕していた。

確かに先手を取ったのは武蔵だった。だが、彼女達はその後に恐るべきものを見た。

踏み込んできた武蔵にただ立ったままだった瑪瑙がいきなり踏み込んだ。しかも一瞬で消え、慌てて確認した時には、すでに瑪瑙は武蔵に峰打ちを打ち込んだ後だった。

あの武蔵が負けた。

大和達は恐ろしさのあまり震えた。あの瑪瑙という女性は桁が違う。

翔輝は気絶した武蔵を抱きかかえると、部屋を出て行った。とりあえず彼女を自分の部屋で寝かせる事にしたからだ。
呆然としている大和達に、そっと珊瑚が近寄ってきた。
「悪かったわね。姉さんがあなたの妹さんを」
「い、いえ。気にしないでください。えっと、珊瑚さん？」
そう問うと、珊瑚は笑顔でうなずいた。
「そうよ。あなたは大和だっけ。初めまして。いつもバカがお世話になってるわね」
「そ、そんな。中尉はバカじゃありませんよ」
「バカよバカ。アホでもいいけどね。私はそんなあいつを十何年も見てきたんだから。間違いないわよ」
そう言ってくすくすと笑う珊瑚。そんな珊瑚に大和はそっと問う。
「珊瑚さんは、中尉とは幼なじみなんですよね？」
「まあね。腐れ縁ってやつよ。あいつとは子供の頃からいつも一緒だったわね」
「へぇ、中尉ってどんな子供だったんですか？」
大和は興味がわいて訊いてみた。すると珊瑚は小さく笑みを浮かべた。
「昔からあいつは変わってないわよ。いつもバカで抜けてて、私がいないと何もできない奴だったんだから。まったく困ったものよ」
そう言うが、その口調はとても楽しそうだ。
「今じゃ忌まわしき思い出だけど、昔は一緒にお風呂に入ったり一緒に寝たりしたのよね」
珊瑚の爆弾発言に大和達は驚く。
「い、いいいいい一緒にお風呂ぉッ！？」
「今じゃ嫌な思い出だけどね」
そう言う珊瑚に対し、大和達はものすごくうらやましかった。自分達じゃ背伸びしたって届かない高さの領域である。
愕然とする大和に、珊瑚はくすくすと笑いながら続ける。
「ほんと、私がいないとダメでね、一人じゃ頭が洗えなかったし、

もちろん夜中に一人でトイレに行く事なんてできないし、ほんとにダメダメ翔輝なのよ」

その言葉には大和達も素直に微笑んだ。とてもかわいらしいではないか。

「もっと色々教えてください！」

大和はそう頼んだ。続いて陸奥や伊勢も頼み込むと、珊瑚は喜んで話し始めた。

まずは幼稚園の頃から話し始めた珊瑚とそれを真剣に聞く大和達。そんな彼女達を一瞥し、長門は一人窓の外を見詰める瑪瑙を見た。身体中から武士のオーラを放っているが、その端々からは弟を想う姉の優しさが溢れていた。

長門は小さく微笑むと、自らも窓の外を見詰めた。

空は重い鉛のような雲に覆われていた。

「もうすぐ、雨が降るわね」

長門は厚い雲に覆われる空を見詰め、そっとつぶやいた。

翔輝の部屋のベッドで横にされていた武蔵は一度寝返りを打つと、そっと瞳を開いた。

ぼーっとした瞳で部屋を見回す。どうやらここが翔輝の部屋で自分は横になっている事はわかったが、どうしてそうなったのかはまだあやふやだ。

起き上がろうとしたら腹部に鈍い痛みが走った。反射的に痛みに顔をゆがめ上がり掛けていた上半身が落ちた。

そこでやっと武蔵は思い出した。

なぜ自分がこんな所で横になっているか。それは、

「・・・負けたんだ」

武蔵はそうつぶやくと悔しそうに唇を噛んだ。

自分から挑んでおいて、一瞬の、それもたった一撃で気を失うなんて、情けなさ過ぎる。

武術には絶対の自信があった。もちろん翔鶴に勝てるなんて自惚

れた事は思っていなかった。でも、人間に負ける可能性なんてまったく考えていなかった。そして、負けた。
自分でも何が起きたかわからなかった。
わかった時には、勝負はついていた。
自分の弱さが、恨めしかった。
そして、翔輝の前で、守ると決めた人の前で無様に負けた自分が、嫌いだった。
その時、彼女がいっていた言葉が頭に浮かぶ。
――あなたじゃ、翔輝は守れない――
彼女の言うとおりだ。こんな弱い自分に翔輝は守れない。
自分には彼を守る力も、権利もない。ただのわがままでしてきた。
だが、そんな生半可な決意では本当の力の前では簡単に砕け散る。
それが、さっきの戦いで嫌になるほど痛感した。
彼はいつも自分を守ってくれた。だから、今度からは自分が彼を守る。そんな淡い乙女心は、圧倒的な力の前に脆くも崩れ去ってしまった。
ほろり・・・
いつの間にか涙が溢れていた。後から後から溢れ出て来て止まらない。
「・・・ひぐっ・・・うぐっ」
嗚咽を漏らしながら、武蔵は泣く。
ほろほろと涙を流していると、部屋の扉がゆっくりと開いた。武蔵は反射的に布団を被って顔を隠す。
暗闇の中、聞こえてきたのは今一番会いたくない人の声だった。
「武蔵？　まだ起きてないの？」
そっと隙間から垣間見ると、こちらを不安げに見詰めている翔輝と目が合った。慌てて隙間を塞ぐが、布団がゴソゴソと動いてしまったので、自分が起きている事がバレてしまった。
「起きたんだ。良かったぁ。痛い所はない？」
翔輝は優しく訊いてくる。だが、今の武蔵にはその優しさが辛か

った。何も答える事ができず、沈黙する。
翔輝は武蔵が落ち込んでいるんだと悟った。己の力に自信を持っている彼女だからこそ、一瞬で敗北した事に自信を失っている。
「あ、あのさ武蔵。あんまり落ち込むなよ。瑪瑙姉さんは強すぎるんだよ。翔鶴だって勝てるかどうかわからないほど強いんだ。だから負けて当然なんだよ。武蔵が弱い訳じゃない。だからさ、そう落ち込むなって」
翔輝は武蔵を元気付けようとそうフォローを入れるが、それは今の武蔵にとっては辛いだけだった。さらに翔輝の言葉は瑪瑙の強さを認めている。それが悔しくて、唇を噛んだ。
翔輝は布団から出てこない武蔵にため息すると、手に持っていた包みを差し出した。
「ほら、一緒にまんじゅうでも食べよ」
翔輝からの誘いに、武蔵の心がときめいた。
少しだけなら、と布団から出ようとする。
「瑪瑙姉さんの手作りなんだ。味は保障するよ」
続けられた言葉に、武蔵は歯軋りすると再び横になる。
「え？　た、食べないの・・・？」
翔輝が驚いたような声を上げる。
「・・・いらない」
武蔵はようやく口を開いた。だが、出て来た言葉は翔輝にため息させるものだった。
翔輝は仕方なく自分ひとりでまんじゅうを食べる。絶妙な甘さ加減は昔から変わらずおいしい。
「うん、さすが瑪瑙姉さん。おいしいな。本当に何でもできるなぁ。尊敬しちゃうよ。えへへ、僕の自慢の姉さんだ」
「・・・あの女の事は言わないでッ！」
突然の悲鳴のような声に驚いて見ると、ベッドの上で布団をはいで起き上がっている武蔵と目が合った。その瞳には並々ならぬ怒りに満ちていた。

「む、武蔵・・・？」
突然の事に呆然とする翔輝に武蔵は立ち上がって近づいてくる。
そして、翔輝の目の前に立つと彼を睨みつける。その恐ろしい瞳に翔輝は何も言葉が出ない。が、次の瞬間、
「・・・こんなものッ！」
そう叫ぶと、武蔵は突然包みを鷲掴みにすると、ゴミ箱の中にぶち込んだ。
「なッ！？　何すんだよッ！」
翔輝は慌ててゴミ箱から包みを取り出すが、開けたままだったので中のまんじゅうはゴミ箱の中に散っていて、他のゴミと混ざってしまっていた。これではもう食べられない。
翔輝は怒りに身体を震わせ、武蔵を睨みつけると激昂した。
「な、なんて事するんだよッ！」
翔輝のすさまじい怒りに対し、武蔵も激怒する。
「・・・あんな女の作った物なんか食べたら身体を壊す！」
「そんな訳ないだろッ！　お前、自分が負けたからって姉さんを責めなくたっていいだろ！　あれは当然の結果だったんだから！」
その言葉に、武蔵は歯軋りする。
当然の結果。それは翔輝が自分は絶対に彼女には勝てないと確信していたという意味だ。
握られた拳がそのあまりの強さに白く染まる。
「・・・翔輝まで、私を愚弄するのッ！？」
「愚弄なんかしてないだろ！」
「・・・私があの女に勝てないって言った！　それは私に対する冒涜以外何ものでもない！」
怒りが溢れ出て来て止まらない。
翔輝に認められたくて、翔輝に優しくしてもらいたくて、武蔵はがんばってきた。だが、翔輝は自分を負かした相手をかばう。それはあまりにも悲しく、あまりにも辛い事だった。
身体が怒りに震える。

キッと睨みつけ、武蔵は再び噛み付く。
「・・・翔輝は私よりあの女の方がいいって言うのッ!?」
「意味わかんないよ！　比べるものでもないし、比べられる訳ないだろッ！」
「・・・そんな言い訳聞きたくない！　翔輝は私が嫌いなんだッ！」
「違うって言ってるだろ！　被害妄想もいい加減にしろよッ！」
翔輝は武蔵との会話がまったく噛み合っていない事にいら立つ。
彼女は今やいつもの冷静さを失って感情的になっている。しかしそれは翔輝も同じ事。せっかく瑪瑙が作ってくれたまんじゅうを台無しにされ、翔輝自身も感情的になっている。
感情と感情のぶつかり合いに、平和的解決なんて存在しない。あるのはただひたすらの感情の激突だけだ。
武蔵はギュッと唇を噛むと、怒りに任して咆哮する。
「・・・翔輝は私の事なんてどうでもいいのよッ！」
「そんな事言ってないだろッ！」
「・・・うそよッ！　翔輝は私が嫌いなのッ！　あんな女の方がいいんでしょッ！」
「だからッ！　そんな事言ってないだろ！」
武蔵は翔輝の胸倉を掴んでガクガクと揺らしながら怒りに任して怒鳴る。そんな武蔵の態度に翔輝もイライラとする。
武蔵はいつの間にか溢れる涙を拭く事もなく堪えられぬ怒りを翔輝にぶつける。そしてそれは、ついに越えてはいけない領域を越えてしまった。
「・・・翔輝なんか大嫌いッ！」
それは、今まで彼女が一度も口にした事はなく、本心ではない言葉だった。感情に任せていった言葉は、翔輝に対しては禁句とも言うべき言葉だった。
武蔵は慌てて口を塞いだが、翔輝は先程までの怒りがうそのように静かになっていた。
うつむき、黙りこくる翔輝に掛けるべき言葉はただひとつ。《ご

めんなさい》だ。だが、まだ翔輝を許した訳じゃない武蔵は、その心とは相反して罵声を続けてしまう。

「・・・翔輝なんて知らないッ！　翔輝なんていらないッ！　翔輝なんて最低ッ！　翔輝なんか大嫌いッ！」

言葉を並べるたびに、武蔵は心の中で悲鳴を上げる。そんな事、心では思っていない。だが、口が勝手に先走って止まらない。

武蔵の暴走した感情は何も言い返してこない翔輝にイライラする。そして、ついに禁断の言葉を言ってしまう。

「・・・翔輝のバカ！　あんな女がいいなんて知らないッ！　あんな女がいるから翔輝がおかしくなる！　あんな女、死ねばいいのにッ！」

悲鳴に近い声でそう言い放った刹那、頬に鋭い痛みが走った。

じーんと熱くなる頬を押さえて、武蔵は目を丸くする。そして、ようやく今の状況が理解できた。

自分は、翔輝に平手打ちされたのだ。

驚く武蔵が見詰める先には、目に涙を浮かべ、怒りの瞳を向ける翔輝がいた。

翔輝は、呆然として自分を見詰める武蔵を突き飛ばすと、そのまま踵を返す。

「・・・翔輝！」

武蔵は慌てて呼び止めるが、翔輝は止まらずにドアを開ける。そしてそこで、一度だけ振り返った。

それは自分が今まで見てきた翔輝の中で、一番彼が怒っている顔であった。

翔輝は震える唇を開け、武蔵に言い放つ。

「僕の事ならどれだけ言ってもいいさ。だけど、瑪瑙姉さんの悪口、ましてや《死ねばいいのに》なんて、そんな最低な事を言うのは絶対に許さないッ！　僕はお前を許さないから！　そんなに僕の言葉が信用できないなら勝手にしろッ！　絶交だッ！」

そう叫ぶと、翔輝はドアを勢い良く閉めて出て行ってしまった。

残された武蔵は棍棒で頭を殴られたようなショックを受けた。
――絶交。それは関係を断ち切る事。つまり、もう昔にようには戻れないという事。
ほろり・・・
怒りが冷め、冷静になった今、武蔵は自分の失態と愚かさに涙した。
自分の身勝手な言動で彼を傷つけ、そして、絆は断たれた。
もう、自分と翔輝を繋ぐものはなにもない。全部、自ら断ってしまったのだ。
さめざめと涙を流す武蔵。どうせなら、さっきみたいに怒りで頭がどうにかなっていてほしいが、今の彼女はあまりにも冷静すぎた。
そして、冷静になった頭は、ようやくそれを理解した。
――もう、彼の笑顔は、自分に向けられる事はない――
「・・・い、いやあああああぁぁぁぁぁッ！」
少女の悲鳴が、暁色に染まった空に不気味に響き渡った。

五月二九日、米軍が上陸してから二週間以上続いたアッツ島における両軍の地上激戦は終わった。結果は、兵力及び装備の不利、補給なしという圧倒的劣勢だった日本軍の全滅で終了した。二七〇〇名の守備隊は九九パーセントが戦死し、生存者は三〇名にも満たなかった。
この全滅の報告に昭和天皇は「最後まで良くやった。この事を伝えよ」と陸軍参謀総長（海軍で言う所の軍令部総長）に命令した。総長はすかさず、「全滅して打電しても受け手がいません」と言った。だが昭和天皇は「それでも良いから電波を出してやれ」と命令した。
これ以降日本軍の占領島が次々に米軍に上陸・攻撃され、全滅していった。同時に、これ以降味方全滅の事を《玉砕》と呼ぶようになった。

第八章　第二〇節　激突　翔輝を想う気持ち（後書き）

えっと、まず皆様に謝らなければいけません。
一応僕は受験生で、この作品を書くのも手一杯です。しかし連載が途中で止まっている作品が二つほどありました。今日、勝手ながらこれを削除させていただきました。
前からあまり人気がなかったうえに続きが全然思い浮かばなかったので、いずれ削除しようと思っていましたが、今日させていただきました。
本当に身勝手ですみません。これからはこれに全力を注ぎます。

えっと、今度は皆様に嬉しい（？）お知らせです。
まず気がついた方もいるでしょうが、今作のタイトルが少し変更されました。
新タイトルは《艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～》というのに変更しました。これによってさらに固いイメージがなくなったと思います。内容は全然軽いので、こっちの方がいいと思います。ちなみにこのフレーズは某中国三国時代をモデルにしたエロゲーですが、もちろん僕はやってません（本当です。信じてください）。今年の夏にアニメ化されるそうで、すごく楽しみです。
それともうひとつ、先日今作のユニークアクセス数が2万を突破しました。ありがとうございます。これも皆様のおかげです。
これからもがんばっていきますので、どうか応援よろしくお願いします。

第八章　第二一節　弱き武蔵の心

翌日、恒例の極上幹部会の会議に武蔵は現れなかった。
「会長の武蔵がいないのでは話にならん」
そう言うのは極上幹部会の野党ともいうべき審理部部長の金剛。
柳のようにスッと伸びた眉は今日は不機嫌そうにゆがんでいる。
「確かに、これじゃ会議にならないわよ」
遊撃部部長の長門が困ったように言う。彼女の言うとおり、武蔵がいなくては話は進まないのだ。
困ったように皆がため息すると、ガタリと音を立てて大和が立ち上がった。
「私、ちょっと見て来ます」
「え？　じゃあ、お願いできるかしら」
「はい」
長門に笑顔でそう答えると、大和はすぐさま瞬間移動した。場所は一転して第三会議室から戦艦『武蔵』にある武蔵の部屋の前に出る。いきなり部屋に入らないのは一応プライバシーを考えているからだ。
大和はドアをノックする。だが、返事はなかった。
「武蔵？　いるんでしょ？　もう会議が始まってるわよ」
そう言いながら何度もノックするが、応答はない。
「あれぇ、おっかしいな。いないの？　入るわよ」
大和はドアノブを回して驚く。部屋にはカギが掛かっていた。つまり中に武蔵がいるという事だ。
大和は少し怒ったように語尾を強くする。
「ちょっと武蔵。いるならいるって答えなさいよ。それと、もう会議始まってるから、早く来なさい」
だが、それでも返事は返ってこなかった。
大和は大きくため息するとその場から消えた。次に出たのは武蔵

の部屋の中だ。もうこの際プライバシーなんて言ってる暇はない。
「武蔵・・・？」
部屋に入った大和はその異変に気がついた。
一見すると部屋には人影はない。だが、よく見るとベッドの布団が膨らんでいるのが見える。
大和は近づくと、その膨らみに言葉を投げ掛ける。
「武蔵。いつまで寝てるのよ。速く準備しなさい」
だが、武蔵からの返答はない。
「いい加減起きなさい！」
しびれを切らした大和はその布団を勢い良く剥ぐ。が、
「む、武蔵・・・？」
そこにいたのは確かに武蔵だった。だが、それはいつも人を見下したような言葉を遣ってまわりに戦乱を起こすちょっぴりムカつく妹ではなく、弱々しい少女だった。
武蔵はベッドの上でその小さな身体をより小さく丸め、小刻みに震えていた。その身体から放たれるのは怯え。どんな些細なものにも敏感に反応して恐怖する怯えだった。
「ど、どうしたの！？」
大和はいつもと明らかに様子の違う武蔵に慌ててその肩を掴んだ。ビクッと震えるその肩はいつもより小さく見える。
「・・・ね、姉さん？」
今まで伏していた武蔵は大和の温かな手にそっと振り返る。刹那、大和は息を呑む。
いつも無表情のその整った顔は悲しみにゆがみ、目は一日中泣いていたのか赤くなり、白い雪のような頬にはとめどめなく涙が溢れ、グチャグチャになってしまっている。
そんな妹の異例中の異例の様子に、大和は驚愕する。
「い、一体何があったのよ！？」
大和は姉として、妹を心配する。
震えるその身体を抱き締め、少しでもその震えを押さえる。

姉の温もりに、武蔵は再び泣き出してしまう。そんな弱々しい妹を、大和は抱き止める。

「何があったの？　話してよ」

大和は優しく声を掛けるが、武蔵は沈黙したまま何も答えない。そんな彼女は心の中で首を振っていた。

・・・言える訳がない。

自分の不用意な一言で翔輝を傷つけ、二人の関係は破綻して、その事に悲しんでいるなんて、言える訳がない。聞いたら優しい大和の事だ。何が何でも二人を仲直りさせようと努力してしまうに決まってる。そんな大和のしつこさに翔輝が怒ったりでもしたら・・・大和まで翔輝との関係が破綻してしまう可能性がある。

いつも自分に優しくしてくれる姉に、そんな事はさせられない。

武蔵は得意の先読みで先を読む。結果は沈黙が良策だと判断されたが、何も知らない大和は心配でひたすら声を掛けてくる。

「武蔵、話してってば。お姉ちゃんが相談にのってあげるから」

必死になって説得するその瞳には妹を心配する姉の光しかなかった。純粋に泣いている自分を心配している。そう思うと、胸が痛くなる。

武蔵は大和の手から離れると、姉に背を向けてベッドの上に横たわる。

「・・・何でもない」

「何でもなくなんかないでしょッ！？　どうしたかちゃんと言ってよ！　私は、頼りないかもしれないけど、あなたのお姉ちゃんなのよ！」

大和の言葉に武蔵はジーンとする。だが、言う訳にはいかない。だから、

「・・・姉さんには関係ない」

「わからないじゃない！　言ってくれなきゃわかんないよッ！」

「・・・ほっといて」

「ほっとける訳ないでしょ！」

「・・・一人にして・・・お願いだから・・・」
武蔵は泣きながら懇願する。
今は一人になりたい。それは心から願う事だった。一人になって、一人で考えればいい。誰の助けなんかいらない。自分の失態は自分で何とかする。
大和は必死になって一人になりたいと願う妹に、一瞬退陣しようかと考えたが、そんな考えは無理やり首を振って頭から追い出す。
妹が苦しんでいる時に、見捨てる姉にはなりたくない。
それは、翔輝を見ていて思った事だ。
彼はおそらく何よりも妹の翔香を優先させてきたのだろう。それはつまり、心の底から妹を思っていうからこそだ。
自分もそんな姉になりたい。そう思っているからこそ武蔵に対しても見捨てるなんて事はできない。見捨てたりしたら、姉失格である。
だから・・・
「一人になんかしない・・・あなたには私がいるじゃない！」
大和は武蔵の言葉を無視してそう叫んだ。
それは、心の底からの想いだった。
武蔵は大和の言葉に大きく瞳を見開くと、ぽろぽろと涙を流す。
「・・・ありがとう」
武蔵はそう言うと、静かに姉に抱き付いた。
小さな小さな妹を、大和は優しく、そっと抱き締める。
腕の中ですすり泣く妹の本当の姿に、大和は場違いとは思いながらも小さく笑みを浮かべた。
しばし大和の腕の中にいた武蔵だが、そっと彼女から離れると、力なく首を振った。
「・・・でも、これは私の起こした事。だから、姉さんの助けは・・・いらない」
「まだそんな事言ってるのッ！？　もっと私を信用し――」
「・・・お願いだから一人にしてぇッ！」

武蔵は突然叫ぶと、大和を突き飛ばした。大和は突然の事に受身も取れずに床に転げ落ちた。

「む、武蔵・・・？」

「・・・もうほっといてッ！　何もしないでッ！　これ以上翔輝に嫌われたくないッ！」

そう叫ぶと、武蔵は毛布を勢い良く被ると再び閉じこもってしまった。先程よりも激しく身体をガタガタと震わせる。

「・・・嫌・・・翔輝に嫌われたら・・・私・・・生きてる・・・意味ない・・・嫌・・・お願いだから・・・私を嫌いにならないで・・・翔輝・・・翔輝ぃッ！」

泣き叫ぶ武蔵に、大和は確信した。

「中尉と、ケンカでもしたの？」

「・・・私が悪いの・・・私が悪いのぉッ！」

大和は立ち上がると、泣き崩れる武蔵の頭をそっと撫で、静かに部屋を出た。残された武蔵はいつまでも泣き続けた。

大和は会議室に戻ると武蔵が体調不良で欠席すると伝え、すぐに自分も用があると言って抜け出した。金剛は執行部二人の怠慢に激怒していたが、何とか長門が押さえ込んでくれた。

大和はこの時間に彼がいるであろう航海室に向かった。そして思ったとおり彼はいた。

机に向かって海図に資料を書き込んでいるのだろう。だが、その手はピクリとも動かず、どこか遠い目でいる。そして小さくため息を吐く。明らかに様子がおかしい。

「中尉」

大和は意を決して部屋の中に入った。すると、翔輝は慌てていつものように明るい笑みを向けてくる。

「よ、よぉ大和。どうしたんだ？」

少しぎこちない笑みだが、それでも十分優しげな笑顔だ。だが、この笑顔の奥には何かがある。大和は確信した。

大和は真剣な瞳で翔輝を見詰める。
「単刀直入に訊きます」
「な、何？」
「武蔵と何かあったんですか？」
大和の問いに、翔輝は明らかに動揺し、視線を逸らした。本当にうそをつけない人だなぁと大和は小さく笑みを浮かべた。
「あったんですね？」
大和の確認するかのような問いに、翔輝はしばし視線をさまよわせていたが、突如キッと大和を睨みつける
「お前には関係ないだろ」
その冷たい言葉に、大和は驚愕した。まさか翔輝がそんなに冷たい事を言うとは思っていなかったからだ。
「か、関係なくなんかないです！　武蔵は私の妹ですよ！？」
「妹のケンカに姉が口出すなよ。これだからお節介は困るんだよ」
翔輝の突き放すような言葉に、大和の中で何かが弾けた。みるみるうちに表情が険しくなる。
「どうして・・・そんな冷たく言えるんですかッ！？」
大和はそう怒鳴ると、翔輝の襟首を掴んで怒る。
「中尉のせいで武蔵が泣いてるんですよッ！　謝る言葉のひとつも言えないんですかッ！？」
「何で僕のせいなんだよッ！　悪いのはあいつの方だろッ！」
翔輝は掴み掛かってくる大和を無理やり引き離すと、彼女が見た事もないような怒りの表情で睨みつける。
「悪いのはあいつの方だ！　なのに何で僕が責められなきゃいけないんだよッ！」
「ケンカというのは双方に問題があるから起きるんです！　どちらが悪いとかないです！」
「そんな偽善はいらないよッ！　お前だってよくケンカしてるじゃないか！」
「それはそれです！　でも今は関係ないです！」

「無茶言うなよッ！」
翔輝はそう叫ぶと大和を突き飛ばして部屋を出て行く。大和は慌ててそんな彼の背中を追う。
「待ってください！　まだ話は終わってません！」
「うるさいな！　ほっといてくれよッ！」
「ほっとけませんよ！　武蔵が泣いてるのにほっとけません！」
「何だよ！　結局僕の事なんてどうでもいいんだろッ！」
「そうは言ってないじゃないですか！」
「もういいからほっといてくれよッ！」
翔輝は大和を思いっ切り突き飛ばした。軽い大和の身体は簡単に吹き飛び、その場に尻餅を着いてしまう。
翔輝はそんな大和を一瞥したが、手を伸ばす事なく立ち去ってしまった。
小さくなる翔輝の背中に、大和はこれまでにない怒りを覚えた。常の彼なら、例え怒っていてもこういう時には優しく手を伸ばしてくれた。だが、今回はそれはなかった。それが悔しくて仕方がない。
「ちゅ、中尉のバカぁッ！　もう知らないですッ！」
その声に翔輝は一度だけ振り向いたが、何も言わずに再び歩き出して見えなくなった。
大和は翔輝のそんな態度に憤慨し、立ち上がると鉄の壁を思いっ切り蹴り――痛さのあまり悶絶した。

翔輝と武蔵がケンカして二日が過ぎた。
極上幹部会の会長席には武蔵が座っていた。ようやくある程度まで回復したのだ。しかし髪はボサボサでお風呂に入っていないのでベタベタ。目の下には隈があり、目はずっと泣いていなので赤く、白い頬にはまだ涙の跡が残っている。ボロボロであった。
一方、大和はどこか不機嫌そうににしている。あれから彼女は翔輝と一切口を利いていない。

もちろん会長補佐である翔輝は欠席である。
そんな壊滅的な執行部要員に、遊撃部部長の長門は困ったような顔をする。
「どうしたのかしら、大和達」
長門の言葉に陸奥や伊勢も同じような目で見詰める。
一方金剛はそんな執行部の面々を見て呆れ、すでに退室してしまっている。榛名は一応心配して（本人は否定しているが）ここに留まっている。
「・・・じゃあ、今日の会議はここまで」
武蔵は必要最低限の議題だけ片付けるとさっさと会議を終え、ふらふらとおぼつかない足取りで部屋を出た。その後を大和も追いかける。
長門達はそんな二人を不思議そうに見送るしかできなかった。

「・・・ごめんなさい」
会議室を出た武蔵は自分を追いかけて来た大和と並ぶと開口一番にそう言った。
「え？　何の事？」
武蔵はとぼける姉に悲しげな瞳で見詰める。
「・・・私のせいで、翔輝とケンカした」
「・・・あぁ、うん。そうだけど・・・武蔵が気にする事ないよ。悪いのは中尉なんだから」
武蔵は大和のその言葉に小さく首を振る。
「・・・違う。悪いのは、私なの」
「そんな事ないって。私幻滅しちゃったもん。中尉って意外に薄情な人なんだなって」
「・・・お願い、翔輝を悪く言わないで」
「武蔵・・・」
武蔵は悲しげな瞳で大和を見上げる。その瞳は悲しみに満ちていた。

「・・・私が悪いの。だから、翔輝は悪くない」
「どうして、そんなに中尉をかばうのよ」
大和は呆れたような声を上げる。そこまでして彼を必死にかばう彼女が信じられないのだ。
「中尉はあなたにひどい事をして泣かせたのよ？　そこまでされたのに、何でそんなにかばうのよ」
武蔵は沈黙したが、しばらくしてゆっくりと口を開いた。
「・・・私が、翔輝の姉代わりの女性に負けたのは知ってる？」
「うん。確か瑪瑙さんだったっけ。きれいな人だったよね。中尉デレデレだったし」
思い出したのか、うらやましさ半分嫉妬半分というような顔をする。確かに誰もが認める美女だったし、翔輝も彼女に自ら抱きつくという暴挙をしている。うらやまし過ぎる要素満載である。
大和の言葉に十分といった感じにうなずくと、言葉を続ける。
「・・・あの後、私は翔輝の前で無様に負けた事に泣いてた。そんな時、翔輝がやって来て私を励ましてくれた。『あんまり落ち込むなよ。瑪瑙姉さんは強すぎるんだよ。翔鶴だって勝てるかどうかわからないほど強いんだ。だから負けて当然なんだよ。武蔵が弱い訳じゃない。だからさ、そう落ち込むなって』、そう言ってくれた。でもそれは、私があの女よりも弱いって、翔輝が認めたって事。だから、すごく悔しくて、悲しくて。その後、翔輝がその女の作ったまんじゅうを進めてきたけど、私は翔輝があの女の作った物を食べるのが耐えられなくて、そのまんじゅうを奪い取ってゴミ箱に捨てたの。そしたら翔輝が怒った」
「そ、そりゃあ、あんたが圧倒的に悪いでしょ・・・」
「・・・わかってる。でも私はいつでも翔輝の一番になりたかった。でも、私は負けた。だから、そんな私を負かしたあの女の全てが憎くて、あんな事を・・・」
武蔵の言葉に、大和はため息した。
「だから、中尉が怒ったのね」

「・・・それもだけど、もうひとつある」
「まだあるの!?」
「・・・その後、私は感情に任せて翔輝と大ゲンカした。その時私はカッとなって、『あんな女死ねばいいのに』って、言っちゃったの。そしたら翔輝にいきなり頬を叩かれた。その後翔輝は本気で怒って、私と絶交するって言ったの」
「そ、それはちょっとひどすぎるでしょ・・・」
「・・・わかってる。あの時、私はどうかしてた。そのせいで、翔輝と・・・ケンカして・・・絶交って・・・絶交・・・ぜ・・・ぜっこ・・・う・・・ッ!」
「お、落ち着きなさい武蔵! ここは七階よッ! 早まっちゃダメぇッ!」
窓から飛び降りようとする武蔵を何とか引き止め、大和はため息する。
「何よぉ・・・完全にあんたが悪いじゃない。中尉とケンカまでしてあんたを援護したのに、裏切られたわよぉ」
「・・・ごめん」
「もういいわよ・・・」
大和は疲れたようにため息すると、困ったように頬を掻くと、再び大きなため息を吐く。
「仕方ないわね」
そう言うと、大和はうな垂れている武蔵の手をしっかりと掴んだ。突然手を掴まれた武蔵は驚いて顔を上げる。
「・・・え? な、何?」
「ほら、行くわよ」
「・・・え? 行くって、どこへ?」
「中尉の所に決まってるでしょ」
「・・・え? で、でもまだ心の準備が・・・」
「ほらぐずぐずしないの! 膳は急げでしょ!」
「・・・え? えぇッ!?」

心の準備がまだ整っていない武蔵は、主導権を完全に握った大和に無理やり引きずられて翔輝の所へ向かった。

「「・・・ごめんなさい」」

「え？　な、何？」

艦橋で休憩していた翔輝の所に現れた二人はいきなり土下座すると開口一番にそう言った。突然の展開に翔輝は完全に混乱に陥っていた。

深々と土下座する二人はその姿勢を崩す事なく美しい土下座を続ける。こうなるとパニックするのは翔輝の方だ。

「と、とりあえず上行こう」

翔輝はそう言って二人を連れて防空指揮所に上がった。

「で？　どうしたのさ」

翔輝はわかってはいるが、一応確認の為に訊く。二人を見詰める瞳にはいつもあるような優しさはない。

大和は「ほら」と言って武蔵を前に出す。前に出された武蔵は驚いて姉の顔を一瞥した後、翔輝の顔を見る。と、

ほろり・・・

「「え・・・？」」

翔輝の顔を見て耐えられなくなったのか、武蔵は泣き出してしまった。これには二人も慌てる。特に慌てるのは翔輝だ。

「お、おい武蔵――ッ！？」

声を掛けた翔輝に、武蔵はいきなり抱き付いた。そりゃあもう押し倒しそうな勢いの体当たりに近いアタックである。翔輝がもう少し反応が遅れていたら二人して転ぶ所だった。

なんとか踏み止まった翔輝は武蔵を見る。

「む、武蔵。危ないだ――ぬおッ！？」

自分に必死に抱きついている武蔵は先程まですすり泣いていたが、今は瞳からボロボロと涙を流してうるむ瞳を翔輝に向ける。そのあまりの感情的な武蔵に、翔輝は混乱する。

「え？　あ、武蔵・・・？」
「・・・ごめんなさい」
「え？」
「・・・ごめんなさいッ！」
武蔵はそう泣きながら謝ると、即座に土下座に転向した。
「・・・ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいッ！」
何度も何度も頭を下げ、その額は今にも鉄の床に直撃しそうな勢いだ。
「・・・ごめんなさい翔輝！　私が悪かった！　謝るから許して！　お願いだからぁッ！」
泣き叫ぶ武蔵に翔輝も大和もたじたじである。それほど切羽詰ったという雰囲気が彼女から吹き荒れているのだ。
武蔵は再度顔を上げて翔輝を見据えると、腰に挿した軍刀を引き抜いた。
「・・・翔輝が許してくれないなら、私は今ここで自決するッ！」
そう叫ぶと、武蔵は上着を脱ぎ捨てて上半身下着姿になった。武蔵の下着は現代なら普通だが、当時としては革命的なものだった。
「えっと・・・時代考証って知ってる？」
大和が混乱したように問うた。
武蔵は白い清楚なキャミソールを付けていた。しかも上着を脱ぐ時に乱暴に脱いだせいか、ズボンの隙間からは白いパンティも見える。
つまり、武蔵は昭和という時代を無視して思いっ切り現代風の下着を付けていた。
武蔵は先程までの勢いはどこへやら、驚く大和に不思議そうに首を傾げる。
「・・・これくらい普通」
「普通って・・・私、サラシにドロワーズなんだけど・・・」
武蔵は刀を手に持ったまま先程までの表情とは一転して無表情で

姉を見詰める。
「・・・女は下着が命。下着は女の武器。殿方の心を貫く何ものをも寄せ付けぬ槍なの。下着をおろそかにする女に、恋愛をする権利なんてない」
ががががあああぁぁぁぁぁんッ！
音にしたらそんな感じの衝撃が大和に走った。　自分は、戦う前からすでに敗北していたのだ。
勝てない。勝てる訳がない。自分は身体や心、そして知識まで子供ではないか。これではこの激しい戦いに勝てるはずがない。いつも自分がまわりよりも出遅れるのは、こうした情報を軽視した為だったのだ（それだけではないが）。
大和はギュッと拳を握ると武蔵に――土下座した。
「一生のお願い！　私にそのかわいい下着を教えて！　あとは自力で発現させるから！　詳しい細部まで！」
大和の必死に頼みに、武蔵は小さくうなずく。
「・・・わかった。今回は姉さんに世話になったから、今回はそのお礼。私の部屋に来ればいっぱいあるから、それを見て勉強すればいい。残念だけど、私と姉さんはサイズは合わないから」
「うん！　わかった！　ありがとう武蔵！」
「・・・こっちこそありがとう」
ひしと抱き合う大和と武蔵。その姿はなんとも微笑ましい。
しかし、一方の翔輝はというと、日本一女性に無害な少年という称号（？）を陰ながら持つ彼には武蔵の下着は大胆すぎた。今なら普通かもしれないが、当時は今みたいに肌を見せるような服や下着は日本文化には存在していない。つまりある意味初体験。
本来なら鼻血が出てるかもしれないが、今の彼の心を支えているのは二人に対する弱々しくなっている怒りである。結局、どたばたし過ぎて脱線しているが、まだ翔輝は二人を許した訳ではない。
翔輝は姉妹の絆を結ぶ二人を置いて踵を返そうとする。が、
「中尉！　どこ行くんですか！」

「・・・翔輝！　行かないで！」
見付かってしまった。どうやらこの二人、身体にレーダーがあってあり一匹の動向すら見逃さないらしい。
翔輝は仕方なく振り返ると、そこには怒っている大和と今にも大粒の涙を流して泣き出しそうな武蔵（上半身下着姿バージョン）が見詰めていた。
翔輝はため息する。
「あのさ、君達は結局僕に何しに来たの？」
「・・・翔輝に謝る為」
「なら僕を無視するなよな。あと、上着は着ろ」
武蔵はコクリとうなずくと、上着を着た。どうやら本日の山場（翔輝視点）は突破したらしい。
翔輝は腰に手を当てて少し威圧するような態度で二人を見詰める。
「で？　結局何？」
武蔵は今度は立ったまま頭を九〇度に下げた。
「・・・ごめんなさい。この前翔輝にした無礼と暴言は、私が完全無欠に悪かった。ごめんなさい。仲直りして。お願い・・・」
武蔵はそう言うと、微動だせずに頭を下げ続ける。その後ろでは大和も頭を下げていた。翔輝はそんな二人を見詰め、ため息すると頭を掻いた。願っていた返事がいつまでも返って来ない。武蔵は不安でじわりと涙を浮かべる。
翔輝はしばし頭を下げ続ける二人を見詰めると、静かに、優しく微笑んだ。
「ったく、女の子二人に頭下げられちゃ許さないなんて言えるなくなるじゃないか」
二人はその言葉に驚き、顔を上げた。武蔵は、自分に向けられている、もう二度と見られないのではないかと覚悟していた笑みを見た。
「仕方ない。今回は許してやるよ」
翔輝はわざとらしく肩をすくめた。

武蔵は、我が耳を疑った。
今、翔輝は何て言ったのか、混乱のあまり脳が理解するのが遅い。
「やったぁッ！　良かったわね武蔵！　中尉、許してくれるって！」
大和が後ろから大喜びしながら抱きついてきて、ようやく理解した。
――翔輝は、許してくれたのだ。
「・・・しょ、翔輝ぃッ！」
武蔵は己が限界を超えた。
顔を満面の喜びの笑みを浮かべ、瞳からは滝のような涙が流れ出す。感情全開の武蔵はそのまま翔輝に思いっ切り抱き付いた。
「ちょっと武蔵!?　危ないってば！」
「・・・翔輝翔輝翔輝翔輝翔輝翔輝翔輝翔輝翔輝翔輝ぃッ！」
「そんなに名前を呼ばなくてもいるよ！」
「・・・好き好き好き好き好き好き好き好き好き！　大好きぃッ！」
「わかった！　わかったから離れろってばぁッ！」
泣きながら抱きつく武蔵と、そんな武蔵のすさまじい攻撃に必死に耐えている翔輝。そんないつも通りな二人を見て、大和は嬉しそうに微笑んだ。
やっぱり、こうした毎日がいいのだ。
こうして笑って過ごせれば、他に何もいらない。
平穏という幸せがあれば、他に何も求めない。
平穏こそ、最高の幸せだ。
大和は抱き合う二人を微笑ましく見詰める。が、ふと思い出す。
そういえば、自分も翔輝とケンカしていた・・・
サーっと血の気が失せるのを感じた。
「ちゅ、中尉！　武蔵を許したんですよね!?」
大和は切羽詰ったような顔と声で翔輝に問う。
「う、うん。そうだけど」
「わ、私も許してもらってますよねッ!?」

泣きそうな顔で必死に確認する大和に、翔輝はようやく理解した。
そして、イタズラっぽい笑みを浮かべる。
「何言ってるのさ。僕が許したのは武蔵であって、まだお前は許してないよ」
ががががあああぁぁぁぁぁんッ！
大和は翔輝の言葉にぶわっと涙を大量に流して彼にすがりついた。
「ごめんなさい！　ごめんなさいですから許してくださいぃッ！」
「えー、どうしよっかなぁー？」
イジワル度全開の翔輝は泣きついてくる大和を心の中でくすくすと笑っていた。
「お願いしましゅぅッ！」
「・・・翔輝」
その時、武蔵が口を開いた。いつの間にか彼女はいつもの無表情に戻り、冷静な瞳で彼を見詰める。そんな彼女に、大和は歓喜した。きっと、自分を援護してくれるんだ。
大和は優しき妹に期待の視線を向ける。が、
ニヤッ・・・
「え・・・？」
武蔵は翔輝には見えない角度で、大和に、己が姉に向かって、かなりダークな笑みを浮かべた。その恐ろしさに、大和はゾクリとする。
「む、武蔵・・・ちゃん・・・？」
「・・・翔輝。あんな女ほっとけばいい。許さなくていい。未来永劫無視し続ければいい。それが翔輝の為」
援護どころか追い討ちを開始した史上最悪の妹！
「武蔵！　何よそれッ！　あんたの時には私が頭下げたでしょッ！？　何で私の時は助けないのよッ！　恩を仇で返すつもりッ！？」
大和は史上最悪の己が妹に向かって激昂する。が、武蔵は慣れない猫なで声で翔輝に言葉を続ける。
「・・・翔輝。私と二人で楽しい事しよ。こんな女ほっといてぇ」

「こんのカマトトッ！　いい加減にしなさいよッ！」
「・・・翔輝、あんな女を許すのぉ？」
「どうしよっかなぁ？」
二人の会話に大和はもう大泣きしながら必死に謝る。常の彼女ならすぐわかるだろうが、翔輝と武蔵は互いの目を見て小さく笑みを浮かべた。
・・・二人して、大和をおちょくっているのだ。
結局、大和が飛び降り自殺する寸前でネタばらしして許したが、今度は大和が激昂し、その後丸一日、会話どころか目すら合わせなくなってしまった。
立場が逆転して、今度は翔輝が大和に土下座するのであった。

余談だが、その後武蔵は極上幹部会である法律を審理部の反対を押し切って強行採決した。その法案とは、
《連合艦隊極大権限保有最上級幹部会法第六章第五八条。日本海軍全艦魂ノ下着ハ個人ノ自由ニ委ネルベシ》
それまで下着はサラシにドロワーズというのが一般的だった日本海軍艦魂社会は、この法案によって消滅した。
一体どんな下着を着ればいいか右往左往している皆に、武蔵は己が下着のキャミソールを伝授。それは怒涛の勢いで浸透した。
金剛や榛名など反対派の勢力もあったが、艦魂とはいえ女の子である皆はそのほとんどが賛成派に回ってしまったので、金剛も苦虫を噛み潰したような顔で了承した。
こうして、日本海軍艦魂社会は下着の制限がなくなり、長門や扶桑は大胆露出全開のブラジャーまで投入。それもすぐに伝わった。
日本海軍の艦魂達は、どの日本女性よりも先に下着ファッションに目覚めたのだった。
ちなみに、反対派には翔輝もいたりした。女の子が露出した下着を着る事に抵抗があったのだ。さすがは純情少年。しかし、翔輝の奮闘も空しく、これぱっかりは大和や武蔵、陸奥や伊勢も敵対勢力

につき、あえなく敗北したのだった。
　これが後の艦魂達の歴史の教科書にも出て来た《昭和下着内乱》の全容である。

第八章　第二二節　滝川のある計画（前書き）

オリジナルにはなかった書下ろし作品です。
今回と次回に渡って繰り広げられる滝川の恐るべき計画。それは日本海軍艦魂の歴史を大きく変えるものだった。
滝川大活躍の変態度全開作品。どうかお楽しみください。

第八章　第二二節　滝川のある計画

光り輝く太陽の光が燦々と降り注ぐその日、翔輝は珍しく陸の上にいた。

呉市内にあるクラシック喫茶で、翔輝は久しぶりに会った悪友とお茶をしていた。

「それで、みんな元気にしてるのかよ」

滝川がコーヒーを飲みながら問うてきた。

珍しく休暇をもらった滝川が呉に停泊している『大和』に乗っていた翔輝をこうして誘い出したのだ。久しぶりの再会なので、翔輝も快く誘いに乗った。そして今はこうしてクラシック喫茶でお茶をしていた。

「うん。みんな元気だよ」

翔輝の言葉に、滝川は「そっかそっか」と嬉しそうにうなずくと、コーヒーを飲む。

「あ、もちろん金剛さんも元気だよ」

「何でそこで金髪が出てくんだよ」

「え？　何でって・・・あれ？」

翔輝は不思議そうに首を傾げる。そんな翔輝に滝川はため息した。

「お前は相変わらず変わんねぇよな」

「そんな事ないよ。ほら、僕も中尉になったんだよ。これでお前と同じだ」

自慢げに階級章を見せる翔輝に大使、滝川はつまらなさそうに唇を尖らせる。

「ちぇっ、せっかくお前を追い抜いたってのに、これでまた同じかよ」

「もしかしたらまた僕の方が階級上になったりして」

イタズラっぽく笑う翔輝に、滝川は「調子にのんなバカ」と言ってデコピンする。

それから二人は互いの事を話した。翔輝はもちろん大和達との思い出や瑠璃が『大和』に乗り込んだ時の事などを話した。

一方、滝川は軍楽隊の苦しい現状を言った。

軍隊だけの演奏では食っていけないので、最近は民間の仕事もやっているらしい。しかも戦争による人員不足で軍楽隊員達も戦地に飛ばされているらしい。

「俺もいつ軍艦勤務になるかわかんねぇな」

苦笑いする滝川に翔輝は満面の笑みを送る。

「そしたら、その時こそ『金剛』に乗んなよ」

「嫌だよ。あそこは海軍一訓練が厳しいんだから。《鬼の金剛》は伊達じゃねぇんだぞ」

「でもさ、そしたら金剛さんといつも一緒だよ」

「冗談！　何であんな凶暴な女と四六時中顔を合わせてなきゃいけねぇんだよ！　どんな処刑だ！」

滝川は「絶対に嫌だね！」と叫ぶと、コーヒーのおかわりを頼んだ。そんな彼に小さく微笑むと、翔輝もカフェオレを飲む。

「にしても、こんな所にも戦争の影響が出てるなんてな」

「え？」

「ほら、さっきから流れてる曲だよ」

滝川の言葉に、翔輝は不思議そうに耳を澄ます。聞こえてくるのはクラシック音楽だ。しかしそれを聞いても素人の翔輝にはわからない。

「何かおかしいの？」

翔輝の問いに、滝川はため息する。

「まあ、お前に音楽をわかれって言っても無意味だよな。素人だし」

「むぅ、だから何なんだよ」

少し怒ったように言うと、滝川は悲しげに口を開く。

「全部ドイツやイタリアの曲なんだよ。敵性国家の曲を流したら特高（特別高等警察）に捕まるからな。どこもみんなアメリカやイギリスの曲をやめて、同盟国のドイツやイタリアの曲ばかり。ったく、

音楽に戦争もクソもねぇってのによ」
「まったく、その通りですよ」
滝川のグチにうなずいたのは初老の男。この店のマスターだった。
「この方の言うとおり、音楽に戦争なんて関係ないんですけどね。悲しい事です」
マスターはそう言うと滝川にコーヒーを渡す。
「しかし今は国民が一丸となって戦争をしている時代。わがままは言ってられませんよね」
「だからって、いくら敵の国の音楽だからって禁止にしなくたってよぉ・・・」
滝川の言葉に、マスターは何度もうなずく。
「あなたの気持ちはわかります。しかし今は英語全般が禁止の世の中ですからね。近所の子供達の野球だって、ストライクが《良し》、ボールが《ダメ》、アウトが《それまで》と言い換えられてますからね。徹底してますよ」
「そ、そうなの？」
驚く翔輝に、滝川もうなずく。
「あぁ。お前は軍艦勤務が長いから知らないだろうが、今じゃ小学校の運動会にも軍歌が使われてるらしいぜ」
「そ、そんなぁ・・・」
翔輝が少し見ないうちに、日本という国はずいぶん変わってしまったらしい。
「まぁ、そんなに落ち込むな。アメリカと戦争するって決まった時にはわかってた事だろ。今さら驚く事じゃないだろ」
「そ、そりゃそうだけど・・・」
「そもそもアメリカと戦争しようなんて言う方がおかしいんだよ」
「ちょッ！　バカぁッ！」
翔輝は顔を真っ青にして慌てて滝川の口を塞ぐ。もごもごと何か言っている滝川を無理やり伏せ、翔輝は呆然としているマスターに「カフェオレおかわり！」と叫ぶ。

「い、いきなり何すんだよ！」
マスターが奥に消えた所で滝川が翔輝の手を振り払ってキレた。
だが、翔輝もこの時かなり怒っていた。
「バカかお前は！　こんな公共の場所で何口走ってんだよッ！」
翔輝が怒るのは無理もない。当時日本では治安維持法という法律によって特別高等警察という組織が国民を監視していた。戦争批判や軍部批判などの国にとっての危険因子を捕まえ、拷問をするという恐ろしい時代。そんな場所で思いっきり戦争批判をした滝川は度胸があるとかではなく単なるバカだ。
「今度またふざけた事を言ったら、今度こそぶっ飛ばすからな！」
「わかったわかった！」
翔輝のあまりの剣幕に押され、滝川も渋々了承した。誰でも命は惜しいものだ。
「そういえば、あなたは軍人ですか？」
カフェオレをテーブルに置いたマスターは翔輝に問う。
「は、はい。どうですけど」
翔輝は何をバカな事を言いたげな目をする。今の翔輝はいつもと同じ黒い第一種軍装を着ている。どこからどう見たって帝国海軍軍人にしか――
「まぁ、長谷川が着ると学生服にしか見えないもんな」
「何だよそれ！　僕はれっきとした海軍軍人だ！　しかも士官だよ士官！」
「わかってるって。でもお前を知らない奴はマスターみたいに学生に見えんだよ。年齢もピッタシだしな」
滝川の言葉に、翔輝は泣きそうになる。
「す、すみませんね」
マスターが慌てて謝る。
「別にいいですよ。どう見たって僕は学生なんですから」
完全に落ち込む翔輝に、滝川はゲラゲラと笑う。
一方、マスターはしみじみと翔輝を見詰めた。

「私にも息子がいたんですがね。こうして海軍の軍服を着ていましたよ」
「へぇ、息子さん、海軍軍人なんですか」
翔輝は嬉しそうに微笑んだ。しかしマスターは悲しげに微笑む。
「正確には、海軍軍人だった、ですね」
「だった？」
「せがれは、もう半年も前に戦死しましたよ」
マスターの言葉に、二人は口を閉じる。
「まぁ、あの子もお国の為に戦って死んだんです。私は誇りに思いますよ」
その言葉に、翔輝は一瞬金剛の顔を思い浮かべた。
マスターは踵を返すと、店の奥に消える。その途中、「せがれの好きだったイギリスの音楽を流せるのは、いつになるんでしょうね」と、悲しげにつぶやいた。
翔輝と滝川はしばし黙っていたが、気を利かせた滝川が口を開いたのですぐに会話は戻った。
その後、二人は喫茶店を出ると別れた。
明日、『大和』に所用があって来るらしいので、翔輝は「待ってるからね」と笑顔で彼を見送った。
そして、滝川の背中が見えなくなると、翔輝もオレンジ色に染まった空を見上げながら呉軍港に戻っていった。

翌日、滝川は『大和』に乗り込んで来た。
甲板に上がった彼を迎えたのは、大和以下の大勢の艦魂だった。
「よぉ、久しぶり」
笑顔であいさつした滝川に、大和も会釈する。
「お久しぶりです、滝川中尉」
「おう。元気そうで何よりだ」
「滝川さんもお元気そうで」
「ははは、俺は元気だけが取り得だからな。ピンピンしてるぜ」

滝川は大和の言葉に笑顔で答えると、取り巻く艦魂達の中から目的に人物を捜す。
「おう！　金髪！」
滝川は艦魂達の群れから離れた所で一人で立っている金髪碧眼の女性に近づく。
「金髪。なぁに突っ立ってんだよ」
「フン、私の勝手だ。貴様には関係ない」
「相変わらずキツイねぇ」
ヘラヘラとしている滝川に呆れたようにため息するのは、滝川に懐かれて心底困っている苦労人――金剛であった。
「貴様、相変わらず楽観的な生き方をしているようだな」
「ははは、軍楽隊はさながら軍の中に生きる旅人。自由が一番なのさ」
「はぁ、貴様という奴はまったく」
「お前も相変わらずきれいな金髪してるよな。シャンプー何使ってんだ？」
「さ、触るな無礼者！　髪が汚れるではないか！」
美しい金色の髪を守るように金剛は滝川から遠ざかる。それに対し滝川は不満げに、
「いいじゃねぇか、別に減るもんでもないし」
「そ、そういう問題ではない！」
「つーか、髪を気にするなんて、金髪らしからぬ乙女さだな」
ニヤニヤとしながら言う滝川に、金剛の白い頬はみるみるうちに真っ赤に染まる。
「き、貴様という奴は・・・ッ！」
「うーん、怒った顔もチャーミング！」
ビシッ！　と親指を立てて滝川はエールを送る。と、それが引き金となったのか、金剛からブチンッ！　と何かが断裂する音が聞こえた刹那、金剛は竹刀を抜いて跳躍した。
「死ねえええええぇぇぇぇッ！」

すさまじい速度で飛来する竹刀を、滝川は「ぬおッ！」と声を漏らすと同時に身体を半回転させてギリギリで回避した。が、着地した金剛はすぐさま反転してよろける滝川に追撃を行う。

「避けるな！」

「無理に決まってんだろ！」

すさまじい金剛の剣撃の嵐を、滝川は全て紙一重で回避する。二人の動きは見事にシンクロしていた。

まわりからはその光景に拍手喝采が起きた。

「だ、黙れ！」

金剛は竹刀を止めて歓声に激怒する。一方滝川は「待ってろ！もう少ししたら金髪のパンツ見せてやるからな！」と爆弾宣言をし、金剛は「死ねッ！」と攻撃再開し、一部からは「キャー！　金剛姉様の下着見たいですぅッ！」と、金剛のファン（意外にも結構いるらしい）の子達が滝川を応援する。

甲板の上、特に《大和坂》と呼ばれる第一主砲と第二主砲の間の坂のようになっている場所で、金剛と滝川は夫婦ゲンカを繰り広げるのだった。

一方、そんな光景にどうしたらいいか右往左往する大和に、長門が声を掛ける。

「ねぇ大和。長谷川君と武蔵の姿が見えないんだけど」

「へ？　あ、中尉ならまだ仕事をしてます。武蔵は戦略部と会議中です」

「へぇ、そういえば山城の姿も見えないわね」

戦略部部長を務めている山城と、極上幹部会会長兼執行部部長の武蔵の話し合い。一体どんな事が話し合われているのか。

「まあ、後で会いに行きましょう――それより今はこっちですぅッ！」

大和は自分の甲板の上で暴れ回っている二人を見詰めて大きくため息を吐いた。

一方、『大和』の第三会議室では極上幹部会会長兼執行部部長を務める武蔵と、戦略部部長を務める山城との首脳作戦会議が行われていた。
「・・・・」
「・・・・」
一枚の海図を見詰め、沈黙し合う無表情少女二名。この沈黙はもう五分が続いている。
「・・・はぁ」
不気味な沈黙をようやく解いたのは、武蔵の力ないため息だった。
「・・・また負けた」
「どうしても、勝ってしまうな」
山城も海図を見てため息した。
今二人の目の前には大きな海図が長テーブルの上に敷かれている。そこにはわずかな青い駒と、日本を太平洋側で包囲する無数の赤い駒が置いてある。さらに、中国、満州国、朝鮮北部、台湾、沖縄、小笠原諸島は赤い旗が翻っている。
武蔵はまたため息をした。
二人は日本（武蔵）とアメリカ（山城）に別れて兵棋演習で対戦をしたのだ。結果は見ての通り日本軍の大敗北である。
「・・・全然ダメ。搭乗員の練度を甘く見積もっても、物量、資源、工業力など全ての面に置いて完敗。これじゃ勝てる訳がない」
「情報によると敵は新鋭空母、エセックス級航空母艦を次々に投入しているらしい。能力は不明だが、ヨークタウン級航空母艦の発展改良型と考えて差し付けないだろう」
「・・・甘く見積もって搭載機数は九〇機ないし一〇〇機。きっとアメリカの事だから、最低でも十隻くらい建造する。そしたら搭載機は一〇〇〇機」
「軽空母とほぼ同程度の能力の護衛空母なら、搭載機数約三〇機で艦数は二〇隻くらい、アメリカなら簡単に造れるだろう」
「・・・最悪の場合、アメリカが本気で空母戦力の充実を図ったら、

エセックス級空母は約二〇隻。護衛空母は一〇〇隻くらい用意してもおかしくない」

「総搭載機は五〇〇〇機といったところか。沖縄諸島、小笠原諸島、マリアナ諸島、フィリピンの陥落を考えて、日本の脅威となる敵基地航空隊の規模は一万ないし二万機ってところか」

山城は苦笑いしながら言った。その言葉に武蔵は机に突っ伏した。

「・・・勝てないにしても、もう少しまともな作戦は立てられないの？」

「なら、本土上陸して来た敵上陸部隊を国民総出で攻撃するか？上陸部隊を一〇〇万ないし二〇〇万としても、こっちの総戦力は一億。勝ち目くらいあるのではないか？」

「・・・非戦闘員である国民を巻き込む戦法は断じて認めない」

「なら、残存全航空機を敵艦に体当たりさせる手もあるにはある。空母戦じゃ敵艦に突っ込んだ飛行機がかなりの戦果を挙げてるみたいだしな」

「・・・私達が戦うのは生き残る為の《決死》。必ず死ぬ《必死》じゃない。そんな外道な作戦、絶対に認めない」

強い語調で言う武蔵に、山城はうなずく。

「私だってそんな事はしない。だけど、追い詰められた日本軍首脳部が考えそうな最後の作戦が体当たり戦法になる可能性も、捨てきれないのは事実」

「・・・わかってる」

武蔵と山城は再び沈黙した。

どうやっても、この戦争の結末は日本の敗北しかない。

ならば、どこで負けるべきか。

どのようにして負けるのかを見極めるのが、日本に残された最後の手段である。

ここで舵を取り間違えば、日本の分割統治も考えられる。そんな事になったら、日本は国としての機能を完全に失うばかりか、新たな戦争の火種となるかもしれない。

そう、社会主義対資本主義――ソ連とアメリカの戦いに。
そんな事になったら、日本という国は完全に滅びるだろう。
北と南に別れて、日本人同士が殺しあうというシナリオも考えられる。
想像したくなくても、それが結末になる可能性はある。
自分達の手に、日本人一億人の命と未来が掛かっている。そう思うと、手が震える。
「・・・山城」
「何？」
「・・・勝てないとわかっている戦ほど、辛く、悲しいものはない」
「・・・そうだな」
そう返すと、山城はコーヒーを飲む。会議直前に淹れたそれは、すっかり冷えていた。コーヒーの苦味が、口の中に広がる。
武蔵は日本の未来予想図を見て、力なくため息した。その時、
コンコン・・・
部屋のドアがノックされた。
「・・・誰？」
「あ、私だよ。入っていい？」
その声は大和のものだった。沈みきった心に、姉の無邪気な声が優しく広がる。
「・・・許可する」
武蔵の返事が聞こえたのか、大和はドアを開けて入って来た。
「・・・何の用？」
武蔵が首を傾げながら問うと、大和は困ったように頬を掻く。
「あ、あのさ。滝川さんが今来てるんだけど、みんなを集めて何かするらしいんだ。それで、武蔵にも来てほしいんだけど――」
「・・・断る」
言い終わらないうちにバッサリと断られた。ある程度は予想していた大和もこれには苦笑いするしかない。
「ちょ、ちょっとくらいなら――」

「・・・断る」
再度断固とした態度で拒否する武蔵。恐ろしく冷たい瞳で姉を見詰める。
「・・・あんな地味男に関わっていたら、変な病気がうつる」
「残念ながら、俺はここ五年間風邪すらひいた事はねぇ生粋の健康人間だ」
そう言って現れたのは、今現在もめている原因――滝川であった。
「た、滝川さん！　勝手に入って来られたら困ります！」
大和があたふたとするが、滝川は気にせずズカズカと入って来る。そんな彼の無礼極まりない態度に、武蔵はその柳のように凛とした眉をゆがめる。
「・・・神聖な極上幹部会の会議室に入って来るな」
「へぇ、新組織を立ち上げたってたのは本当だったんだ」
「・・・人の話は最後まで聞け」
武蔵は睨むように滝川を見詰める。滝川を嫌っている武蔵としては当然の態度だ。
「お？　何だこれ。日本ボコボコじゃねぇか」
滝川はテーブルの上に海図を見て軽く言った。その言葉に武蔵は不機嫌そうに眉をゆがめる。
「え？　な、何ですかこれ？」
大和も不思議そうに覗き込むが、武蔵はさっさとそれを片付けてしまう。
「あ、ちょっと――」
「・・・これは、姉さんには受け入れがたい事。まだ見るのは早い」
「何よそれ」
大和は不満そうに海図片付ける武蔵を見詰める。武蔵は無言で海図を丸めて脇に置く。そんな彼女を滝川はニヤニヤと、
「へぇ、優しいところあんじゃん」
「・・・うるさい」
武蔵はそう言って彼を睨むと、スッと立ち上がる。

「・・・じゃあ、また後で」
武蔵は山城に静かに会釈すると部屋を出ようとする。
「おい、ちょっと待てよ」
人を無視して消えようとする武蔵を滝川が呼び止めると、武蔵は足を止めて振り返る。その瞳は道端のゴミを見るかのような目だった。
「・・・貴様と話す時間が惜しいし、貸す耳もない」
「手厳しいな」
「・・・黙れ。貴様の声を聞くだけで吐き気がする」
武蔵は徹底的に滝川と関係を持ちたくないらしい。散々吐き散らすとさっさと出て行こうとする。すると、
「仕方ないな。これを聞いたら絶対お前は食いつくと思ったんだが、まあいいや」
滝川の意味ありげな言葉に、武蔵の足が止まった。その瞬間、滝川はニヤリと笑った。
「・・・それ、どういう事？」
武蔵は振り返ってそう尋ねた。
「あん？　お前にはもう関係ないだろ」
「・・・話だけは聞く」
武蔵の言葉に、滝川は再びニヤリと笑う。
「なぁに、ちょっくら長谷川を喜ばしてやろうと思ってな」
「・・・詳しく教えて」
武蔵は一瞬にして滝川の目の前に接近すると、キラキラした瞳で彼を見上げる。そりゃあもう空腹のところを助けてもらった子猫のように。
滝川は「まあ待てって。話はみんなを集めた後だ」と言うと、皆を会議室に集め、その計画を提出、実行に移す事となった。

第八章　第二三節　蒼海の理想郷の女神達（前書き）

滝川の計画がついに発動。原作では予定はあったが書く暇がなかった滝川の変態力と大和達の美貌が重なる最強物語。完結編です。

第八章　第二三節　蒼海の理想郷の女神達

ようやく仕事を終えた翔輝は甲板に向かって階段を駆け下りていた。

「すっかり遅くなっちゃったよ。滝川の奴怒ってるだろうなぁ」

とにかく急いで向かおうと階段を二段飛ばしで駆け下りる。着地した瞬間足にかなりの負担が掛かるが、衝撃で折れた膝を伸ばす勢いを利用して再び階段に飛び込む。そんな事を繰り返してようやく上甲板に到着し、今度は走って甲板を目指す。そしてようやく重厚なドアを開けて甲板に出た。

荒い息のまま甲板に出ると、辺りを見回す。しかしながら滝川の姿はどこにもない。

「あ、あれ？　どこ行っちゃったのかな」

翔輝はようやく息が整ったところで困ったように辺りを見回す。しかし何度見回しても滝川の姿も大和達の姿も見えない。

翔輝は困ったように頭を掻く。

「どうしよっかな」

「・・・翔輝」

突然の声に振り返ると、そこにはいつも神出鬼没な無表情少女―武蔵が立っていた。

「あ、武蔵。滝川を見なかった？　今どこにいるかわかる？」

「・・・来て」

武蔵は翔輝の右手を両手で包み込むようにして握った。その突然の言葉に翔輝は驚く。

「え？　行くってどこへ？」

「・・・来て」

その瞬間、武蔵の身体が光りだした。

「瞬間移動！？」

武蔵の行動に驚いた刹那、自分の身体も光りだした。そして、次

の瞬間、
「あ、暑い・・・」
そこは炎天下であった。
すさまじい太陽の熱で蒼い海の水平線はゆらゆらと揺れている。
翔輝はまぶしい太陽を一度見上げると、黒い影に視線を向けた。
そこには巨大な前檣楼（ぜんしょうろう）が天に向かって聳（そび）え立っていた。そして、その前には巨大な二本の砲身を向けて堂々と並ぶ二基の連装砲塔。
「え？　ここどこ？」
右往左往する翔輝だったが、聳え立つ艦橋の形を見て気づく。
「え？　この異様に高い艦橋は扶桑型？　え？　でもくびれてないって事は『山城』？　え？　でも何で・・・なぁ武蔵――ってあれ？」
振り返ると、そこに武蔵の姿はなかった。何度見回しても、彼女の姿はない。
翔輝はどうしようかと思っていたが、すぐに初めて乗る『山城』に興味津々となった。
「へぇ、これが『山城』か。うおッ！　三五・六ｃｍ連装砲が六基もある！　大艦巨砲主義がここにある！」
嬉しそうにキラキラした目で『山城』を見回す翔輝。さすがは戦艦大好きッ子である。
しばし『山城』のその威風堂々とした姿に惚れ惚れとしていたが、
「おう。早速戦艦見物かい？」
そう言ってニヤニヤと笑いながらやって来たのは滝川。
「滝川！　お前一体どこに行ってたんだよ！」
「いやぁ、悪い悪い」
そう言ってケラケラと笑う。絶対に悪いと思っていない。翔輝はため息した。すると、滝川は燦々と輝く太陽を見上げた。
「今日は暑いな」
「え？　あ、うん、そうだね。八月なみの暑さだよこれは」
「現在気温は三二度ってところか」

「何で気温がわかるのかって、ツッコミを入れるか？」
「いや、いい。それよりこの暑さと組み合わせた俺のとっておきのプレゼントを用意してある」
「プレゼント？」
翔輝は怪訝そうに首を傾げる。今日は自分の誕生日ではないし、何か特別な日でもない。プレゼントをもらう理由はないはずだ。
「え？　でも僕今日は何でもない日だよ」
「いやいや、日頃お世話になっているから、恩返しがしたいんだよ」
明らかに怪しい滝川の態度だが、根が単純で優しい翔輝は、
「えへへ、ありがとう」
素直に喜んだ。天然記念物である。
「で？　プレゼントって何？」
その問いを待ってましたと言わんばかりに、滝川は叫んだ。
「夏の海の風物詩！　それは水着ギャルだあああああぁぁぁぁぁッ！！！！！！」
「はあ？」
「長谷川くぅん♪」
驚く翔輝に誰かが背後から抱きついてきた。その声には聞き覚えがある。
「長門さん？　いきなり後ろから抱きつくなんて卑怯で――ニャアッ！？」
翔輝は顔を真っ赤にして長門を突き飛ばすと、一気に全力後退した。
「あん、もう。長谷川君ったらつれないわねぇ」
そう言いながら嬉しそうに微笑む長門。それはいつもと変わらない事。だが、今日は明らかに何かが違う。例えるなら、重武装突撃隊が突然切り込んで来たかのよう――いや、違う。
明らかに軽装備すぎる！
「な、なななななッ！」
言葉にならない翔輝が見詰める先には、いつも着ている軍服では

なく黒いビキニを付けた白い素肌全開の長門が。
「長門さん！　一体何のまねですかッ！？」
翔輝は顔を真っ赤にして叫んだ。
「何って・・・水着だろ？」
「そうそう。水着よみ・ず・ぎ♪」
二人の言葉に、翔輝は口をパクパクとさせる。純情少年にはかなり衝撃的だったらしい。
で、翔輝はといえば相変わらずの第一種軍装。袖すらまくっていない翔輝を、長門は不思議そうに指差した。
「それ・・・暑くない？」
「暑くなんかありません！　ともかく長門さん！　そのあるまじき恥さらしな姿を即刻やめてください！」
炎天下の下、玉のような汗をかきながら翔輝は怒鳴る。
翔輝の言葉に、二人は顔を見合わせ驚く。
「まさかここまでとはな。ここまで童貞だとキモイぞ」
「まあまあ、そこが長谷川君のかわいいところじゃない」
「無視するなぁッ！」
翔輝は絶対自分の事を言っているであろう二人に怒鳴る。
「と、とにかく早く服を着てください！」
「もう、長谷川君はかわいいわねぇ」
うふふと色っぽく微笑むと、長門は消えた。驚いた刹那、突如背後から抱きつかれた。
「うわッ！？」
「うふふ、つ・か・ま・え・た♪」
ふにっと柔らかい双丘がかなりリアルに背中に押し付けられる。白い腕が、翔輝の首に優しく絡まる。そして、クラクラとしそうな香りに、翔輝は顔を真っ赤にして絶叫する。
「は、離してください！　そして服を着てください！」
「うふふ、大人の関係、体験してみる？」
「た、助けてえええぇぇぇぇぇッ！」

翔輝が長門に押し倒されかけたその時、
「な、何してるのお姉様ッ！？」
その声は陸奥だ！　救いの女神が現れた！
「あら陸奥。そんなに怒らないでよ」
「と、とにかく離れて！」
「んもう、仕方ないわね」
背中に押し付けられていた柔らかな感触と甘い匂いが離れ、翔輝は安堵の息を漏らす。
「だ、大丈夫ですか？」
不安げな声に、翔輝は笑顔で顔を上げる。
「うん、ありがとう。助か――」
陸奥を見た瞬間、翔輝の優しげな笑顔が凍りついた。
「中尉？　どうしたんですか？」
「な、なななななッ！」
翔輝は再び顔を真っ赤にさせる。その視線の先には――白いビキニと水着用のミニスカートを組み合わせた水着を着ている陸奥が。
「うわあああああぁぁぁぁぁッ！」
翔輝は腰を床につけたまま全速力で後ずさる。その顔は長門の時と同じように真っ赤に染まっている。
「ちゅ、中尉？　どうしたんですか？」
陸奥が不思議そうに首を傾げる。
先に言っておくが、長門は大胆かもしれないが、陸奥はかなり控えめな水着だ。そこまで目を惹くものではない。しかし、純情少年にはこれでさえ衝撃的だったらしい。
「お、お前も服を着ろよッ！」
「え？　あ、これですか？　こんなに素肌を出す服は恥ずかしいですけど、に、似合いますか？」
頬を赤らめながら嬉しそうに言う陸奥に対し、翔輝は首がもげるかの勢いでうなずく。
「うんうんうんッ！　に、似合うから！　早く上着を着てぇッ！」

「え？　似合ってますか？　嬉しいです！」
「だから服を着ろぉッ！」
翔輝は頑なに目を閉ざし続ける。これを開けたら戻れなくなる！
「あ、長谷川はん。ここにいたんどすか？　捜したんやでぇ？」
そんな中聞こえてきたのは伊勢のおっとりとした声だった。彼女なら大丈夫。清楚で可憐な伊勢はきっとこんな公然わいせつ的な物を着たりしない。きっと、薄めの着物くらいだ！　そうに違いない！
「い、伊勢！　た、助け――だあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
翔輝は再び絶叫を上げた。
近づく伊勢は不思議そうに首を傾げる。
「長谷川はん？　どうされたんどすか？」
「だぁかぁらぁッ！　服着ろっつってんだろうがあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
キレた。
翔輝は完全にキレた。
伊勢はポカーンとする。
「は、長谷川はん？」
「服着ろよ！」
翔輝は伊勢の卑猥な姿に怒鳴る。そんな伊勢は淡い桜色のビキニにゆったりとしたパレオ。清楚で可憐な伊勢にしてはかなり大胆だが、普通に考えればかなりシンプルな水着だ。
翔輝の言葉に、伊勢は自分の水着姿を見詰め、ぽっと頬を赤らめる。
「うち、こんな肌出すの着るの初めてやったけど、似合う？　うち、かわいい？」
伊勢はその場でくるりと回る。ふわりとパレオが翻る。たったそれだけで、翔輝はさらに真っ赤になる。
「とにかく服を着ろぉッ！」
「え？　うち、これ似合わんの？」
悲しげな顔になる伊勢に、翔輝は慌てて叫ぶ。

「似合う！　似合うから！」
その言葉に、伊勢はぱあっと笑顔を浮かべる。
「ほんま！？　じゃあうちこのままでおる！」
「だから服着ろぉッ！」
すでに長門、陸奥、伊勢の水着姿で翔輝はパニックになっている。
一方、美少女三人の水着姿にニヤニヤ度マックスの滝川。どうやら翔輝の為とか言いながら本当は艦魂達の水着姿をおがむのが目的だったらしい。
翔輝を心配そうに彼の顔を覗き込む陸奥と伊勢。しかし翔輝は必死になって彼女達から視線を逸らしている。その光景に、長門はくすくすと笑う。
「ほんとに、かわいいわね」
長門はさてどうしたものかと頭を掻いた。その時、
「は、離せ扶桑！　こんな恥ずかしい格好で外に出れるか！」
「まあまあ、そう言わないで。長谷川君に見てもらいましょうよ」
「なぁッ！？　長谷川がいるのか！？」
「もちろん。その為の《ドキッ☆女だらけの水着大会》じゃない」
「なぁッ！？　絶対に嫌だ！　長谷川にこんな格好を見せられるかッ！」
「まあまあ、きっと長谷川君もかわいいって言ってくれるわよ」
「え・・・？　じゃねぇッ！」
「あらぁ？　今何想像してたのかしら？」
「う、うるせぇッ！　とにかく離せえええええぇぇぇぇぇぇッ！」
ドタバタと物音と悲鳴を上げながら現れたのは、
「あら、扶桑に榛名。遅かったじゃない」
「ごめんごめん長門ぉ。もう、この子が抵抗して遅くなったのよ」
「扶桑テメェッ！　俺の方が年上だろうがッ！」
おっとりと笑う扶桑に怒鳴る榛名。だが、やっぱりいつもとは違う容貌をしている。
扶桑は赤い、長門と同じような大胆な水着を着ている。お姉さん

キャラはこういう水着が好きなのか。
　一方、榛名は青いスポーツタイプのセパレート。ビーチバレー選手みたいな彼女らしいかっこいい水着だ。
「あら、榛名かわいいじゃない」
「う、うるせぇッ！　俺は帰る！」
「まあまあそう言わないで。ほら、長谷川君ならあそこよ」
「何であいつの場所を俺に教えるんだよ！」
「あら、そんなにかわいいのに彼に見せたくないの？」
「誰が見せるか！　恥ずかしすぎて死ぬわ！」
　榛名はそう怒鳴ると反転して帰ろうとする。すると、
「あらぁ残念ねぇ。仕方ない、扶桑。私達の大人の水着、長谷川君に見せに行きましょう」
「あら、いいわね」
　ニコニコと微笑みながら長門と扶桑は去って行く。
　一方、なぜかピタリと止まったまま固まっている榛名。しばしの沈黙の末に再反転。コソコソと翔輝の所に向かうのだった。
　そして、翔輝は必死になって目をつむっている。
「あらぁ、ちゃんと見てあげなきゃダメよ。女の子に失礼じゃない」
「なぁッ！？　その声は扶桑さん！？　って、ダメです！　目をこじ開けないでください！」
　扶桑は強硬手段で翔輝の目を開けさせようとするが、翔輝も必死に抵抗してなかなか開かない。
「仕方ないわね」
　そう言うと、扶桑は翔輝の背後に回って親指を構える。そして、
「プスッと」
「！？」
　その瞬間、翔輝の身体の自由が奪われた。
「な、なななッ！？」
　唯一無事な口だけが軽快に動く。すると、目に誰かの指が押し付けられ、簡単に開いた。まぶたを閉じる力も入らない。燦々と輝く

太陽の光が一瞬視界を奪うが、すぐに見える。
そして、見えた。
長門と扶桑の大胆な水着。陸奥と伊勢のかわいらしい水着。なぜかいる榛名のかっこいいながらもかわいい水着。
翔輝は――
「がああああぁぁぁぁぁぁッ！」
絶叫した。
「中尉！？　大丈夫ですか！？」
「長谷川はん！？　お気を確かにぃッ！」
「あらあらぁ」
「長谷川君？　大丈夫？」
「お、おい長谷川。どうした？」
心配そうに顔を覗き込んで来る五人の水着美女。わずか一枚の布切れにしか守られていないそれぞれ大なり小なりの胸。白や小麦色の肌。黒い髪と瞳・・・
「だぁりゃあああああぁぁぁぁぁッ！」
翔輝は自らの身体を戒める力を破り、全力疾走した。後ろでは驚く五人の声。特に扶桑は「うそッ！？　扶桑流全身マヒ術が破られたッ！？」とかなり驚いている。
翔輝はとにかくこの状況を脱しようと走る。が、無理な体勢で走っていたので見事に転んだ。勢いがあったので身体が一回転してしまう。
甲板の上を滑った翔輝に、優しく声が掛けられた。
「あ、あの中尉？　大丈夫ですか？」
その優しげながらもおどおどした声は――大和だ。
「あ、うん、平気」
翔輝は顔を上げようとした。が、すぐにやめた。おそらく彼女も公然わいせつな格好――いや、児童ポルノ法に引っ掛かる格好をしているに違いない！
「や、大和。ひとつ訊いてもいいか？」

「え？　何ですか？」
「――今、お前は何を着てるの？」
「え？　あ、その・・・」
少しおどおどした声に、翔輝の予想は確信へと変わった。
「お前、水着着てるだろ？」
「え？　あ・・・はい」
蚊の羽音のように小さな声で大和は答えた。この瞬間、翔輝はこのままほふく前進して逃げようと決意した。
「もう、何やってるのよ」
長門の声がした刹那、誰かが背中を掴んで上半身が浮かんだ。
「え？　な、長門さんッ！？」
「もうッ！　せっかく榛名が水着を着てくれてるのに、見てあげないとかわいそうでしょ！」
「はあッ！？　長門テメェッ！」
顔を真っ赤にして怒る榛名の水着姿に、翔輝はドキリとしてしまう。榛名にドキドキしてしまっていてはおしまいだろうなぁとは思うが、いつもは隠れている彼女の意外にもある胸や健康的な薄い小麦色の肌に、翔輝の心臓は敏感に反応してしまう。
「ほらぁ、長谷川君も満更じゃないみたいよぉ？」
長門がニヤニヤしながら言うと、そこで榛名と目が合った。その瞬間、榛名は顔をさらに真っ赤にして激怒した。
「み、見てんじゃねぇッ！　変態！」
「ご、ごめんッ！」
慌てて翔輝は視線を逸らすが、その先には、
「ややわぁ、そんなに見詰められたらうち照れてまうわぁ」
伊勢が紅色の頬に手を当てて恥ずかしそうにする。が、結構自慢の胸を見て見てといわんばかりに突き出す。
「ごめん！」
再び視線を変えると、今度は陸奥の白いビキニ。
「中尉に似合うって言ってもらえて、私とても嬉しいですぅ」

邪心のない純粋な笑みで翔輝と向かい合う。すると、陸奥は伊勢の胸を一瞥した後、自分の胸を見詰めた。小ぶりだが形の整った美乳だ。

「わ、私！　伊勢みたいに大きくはないけど、でも！　若さなら負けない！」

後ろで伊勢が「ぐはッ！」と何かを吹いて倒れた音が聞こえたが、この際無視しよう。

陸奥は胸の前に手を当てて、頬を赤らめながらとびきりの笑顔で、

「わ、私の胸・・・や、柔らかいですよ？　触ってみます・・・か？」

爆弾発言をした。

「い、いいッ！　触らない！」

翔輝は首をブンブン振って拒否する。と、

「そ、そんなぁッ！　私の胸は触るに値しないって言うんですかッ！？」

涙目になって言う陸奥。どうやら彼女の乙女心を傷つけてしまったらしい。翔輝は慌てる。

「い、いや、そういう意味じゃなくてぇッ！」

「長谷川君。私の妹を泣かせないでくれる？」

長門はものすごく優しい笑顔をしている。が、その背後からはなにやらダークなオーラが吹き荒れている。

「確かに陸奥の胸は大きくわないわ。でもね、陸奥は東証一部上場間違いなしの急成長株価なんだから」

「意味わかりません！　しかも時代考証を無視しないでくださいッ！」

翔輝はとにかくこの場を脱出しようとする。が、まわりには海の妖精達が包囲していて出れない。唯一突破できそうな可能性が残っている場所は・・・大和の方向！

翔輝はたぶん一番ダメージを受けなさそうな大和に視線を移す。

が、その浅はかな考えは見事に打ち砕かれた。

「あ・・・」
確かに長門達に比べれば幼すぎて色気なんかはない。だが、その分彼女達には負けない幼いからこそのかわいさが溢れていた。
大和は皆と同じように水着を着ていた。しかし、長門達とはまったく違う水着。桜の花が所々に散りばめられた薄桃色のワンピース型の水着だ。かなりシンプルで少し子供っぽいので色気なんてないに等しい。が、純情無垢な大和が着るとそのかわいさが何倍にも増幅される。しかもいつもは縛られる事なく流れていた長い髪は、左右に纏めてツインテールになっている。いつもは隠れている白いうなじや膨らみ始めたばかりの胸がその存在を主張している。
確かに、長門達の時のように視界に入れるのすら恥ずかしくなってしまうのに比べたらずいぶんマシだが、逆に視線が外せない。形は自然に大和を見詰める事になってしまう。
「あ、あの、そんなに見詰めないでください・・・」
大和は自らの身体を抱き締めるようにして隠す。そんな大和に翔輝は慌てて視線を外す。
「ご、ごめん！」
「い、いえ・・・その・・・似合って・・・ますか・・・？」
大和は不安げな瞳で翔輝を見詰める。その白い頬は上気して桜色に染まっている。
翔輝はそんな大和の問いに、何度も首を縦に振る。
「うん、似合ってる。すごくかわいい」
その言葉に、大和の顔がぱあっと華やぐ。
「ほ、本当ですか！？　やったですぅッ！」
ピョンピョン跳ねながら笑顔を振り撒いて嬉しさを全方位に撒き散らす大和。そんな大和の姿に、翔輝は自然と微笑んでしまう。
「うぅッ！　わ、私もワンピース型に変えて来るぅッ！」
「あかんよ陸奥！　うちらと大和はんじゃ同じ水着でも同じにはなれへんのや！　水着は人それぞれのもんがあるんよ！」
「で、でもぉッ！　私だってあんなに嬉しそうに中尉にほめられた

いよぉッ！」
「うちやって同じやぁッ！　せやけどここは耐えるんやッ！　臥薪嘗胆なんやぁッ！」
　後ろの方で陸奥と伊勢がさめざめと泣いているような気がしたが、とりあえず今は無視しよう。
　くるくると回ってかわいさを振り撒く大和。こんな姿も見られるのなら、こういうイベントもいいのかもしれない。と、ようやくこの状況を受け入れ始めた。
「あら、長谷川君も満更じゃないみたいね」
　長門がニヤニヤとしながら寄り添ってきた。翔輝は苦笑いしてそれを避ける。
「べ、別に僕は・・・」
「長谷川君。越えちゃいけない一線だけは越えないでね」
「長門さんは僕をどう思ってるんですか？」
　翔輝は呆れたように声を上げる。
　その後、大和達は海に入って海水浴を始めた。どうやら艦魂は艦からある程度の距離までなら海にも入れるらしい。
　大和は扶桑に泳ぎ方を教わりながら泳いでるし、陸奥と伊勢はお互いに水を掛け合って笑い合っている。榛名は見事なクロールで海を突貫している。
　ようやく慣れた翔輝はそんな彼女達を見詰め、少しうらやましかった。
「長谷川君も泳ぎたいの？」
　海には入らず日光浴を楽しむ長門の問いに、翔輝は「えぇ、まぁ」と答える。季節外れの強い日差しがジリジリと照りつける。大粒の汗がダラダラと流れる。正直言ってかなり辛い。
　一方、滝川はと言うと、
「き、きききき貴様と言う奴はぁッ！」
「ふざけんなテメェッ！　何で用意した水着を着ねぇんだよッ！」
「誰があんな痴態をさらせるか！」

「バカヤロォッ！　夏のビーチに謝れ！　土下座して謝れぇッ！」
「貴様は祖国に土下座せんか！」
「うっせぇッ！　海の極楽を守れない奴に国なんか守れるかッ！」
「貴様という奴はぁッ！」
いつの間にか現れた金剛と激論を交わしている。どうやらこの騒ぎに彼女も誘ったらしいが、失敗に終わったらしい。当然といえば当然だが。
ちなみに、今金剛は滝川に渡された水着を持っているのだが、どうやらこれが本命だったらしい。長門や扶桑よりもかなり大胆な水着だ。
生地が少し少なめの白い紐ビキニに、同じく少し生地のすくなさそうな紐パンティ。所々の結び目がまたなんとも美しい。
かなり大胆だが、金色の髪と白い肌を持つ金剛に対してはかなりベストな選択だ。生地が薄いのは滝川の趣味かもしれないが、彼の桁違いの変態能力はデザイナーとしても桁違いらしい（エロ方面）。
金剛は顔を真っ赤にして竹刀を振り回し、滝川はそれを見事に回避しながらもしぶとく水着の着用を要求する。もはやあの争いには誰も介入できそうもない。
翔輝と長門も彼らを放っておく事にした。
翔輝は滝川と金剛の夫婦ゲンカ（？）を一瞥すると、再び大和達を見る。今が戦時中だという事を忘れさせるような彼女達の笑顔に、翔輝は多少なりとも滝川に感謝した。
「ねぇん、長谷川くぅん。お願いがあるのぉ」
「オイルは自分で塗ってください。僕は絶対にしません」
「むぅ、海で美女にオイルを塗ってと頼まれてるのに断るなんて、男の子失格よ」
「いいんです。僕は失格でも何でも構いません。己が道を突き進めって父の教えですから」
翔輝はそう言って一切長門の方を見ない。先程から彼女は日焼け止めオイルを背中に塗ってとしつこく頼んでくるのだ。翔輝の方も

徹底して拒否しているので話は平行線のままだ。
「ねぇん、お願いよぉ。このままじゃ私お肌が小麦色になっちゃうぅ」
「いいじゃないですか。健康的で」
「むぅ、長谷川君のいじわるぅ」
「はいはい。僕はいじわるですよぉ」
翔輝がもう何度目かわからない長門の頼みを拒否した時だった。
ブゥッ！
「・・・翔輝」
背中から聞きなれた声が掛けられた。それはここまで自分を連れて来た少女の声だった。しかし、今の噴射音は一体？
「あぁ、武蔵。お前も水着に着替――え・・・」
振り返った翔輝の言葉はそれ以上続かなかった。目の前の状況を理解できなかったからだ。
「・・・翔輝、似合う？」
武蔵はいつになく頬を赤らめて恥ずかしそうに訊いてくる。
似合っている。確かに似合っているのだが・・・
武蔵が着ているのはおとなしめな紺色のシンプルなワンピース型の水着。腰の部分は微妙にスカート上になっているが、これが服ならその隠すべき場所が見えている不思議な形。そして何より発育途上の小さな胸には白い長方形の布が張ってあり、そこには大きく『むさし』とひらがなで書かれている――世に言うスクール水着（旧スク）である。
それだけでもある意味犯罪的だが、彼女はそこにさらに浮き輪を装備している。ここまでなら実刑はやむをえないが、さらに彼女はなぜか白いニーソックスを履いている。なんとかここまでならまだ懲役は二年程度で済むかもしれない。しかし、それを死刑にするだけの装備を彼女はしていた。
なぜ――水着にネコ耳が必要あるのか。
武蔵の黒く美しい髪から生えているのは同じく黒いネコ耳。そし

て腰からは赤いリボンが結ばれた黒いしっぽがピョコピョコと揺れている。
——そこには、黒いネコ耳ネコしっぽにスクール水着、白いニーソックスを履いた武蔵が立っていた。
「な、なななッ！」
「む、武蔵！？　あんた何してるの！？」
顔面を派手に濡らした長門が慌てて駆け寄ってきた。どうやらさっきの噴射音は彼女がジュースを噴いた音らしい。
翔輝は顔を真っ赤にしてうろたえる。それは先程までの長門達とは比ではない。そんな翔輝に、完全武装した武蔵は不安そうに問う。
「・・・わ、私・・・変？」
変どころか変態である。だが、そんな事言える訳もなく、翔輝はこの純粋無垢な少女に悪魔のささやきをした男を怒鳴る。
「滝川テメェッ！　武蔵に何を吹き込みやがったッ！」
「おぉッ！　さすがチビッ子！　わかってるなぁッ！」
滝川は武蔵を発見するとキラキラした目で駆け寄ってきた。やはりこいつか。
「なぁッ！？　む、武蔵！　何て格好をしておるのだ！」
金剛が顔を真っ赤にして怒鳴る。彼女にもかなり衝撃的だったらしい。
一方、武蔵はいまだに返事が返って来ない事に不安を感じていた。
「・・・似合って・・・ない・・・の・・・？」
泣きそうになる武蔵の耳元で、滝川がそっと何かをささやく。と、武蔵はそれまで以上に顔を赤くすると、コクリとうなずいた。
「・・・翔輝、見て」
「え？」
その瞬間、武蔵は自らの身体を光で包んだ。そのまばゆい光は一瞬だったが、光が消えると、そこには——スク水の上からさらにセーラー服の上を着ている武蔵が。
「な、ななななッ！」

もはや開いた口が塞がらない。
そして、武蔵は翔輝を悩殺する一撃必殺の技を放った。
武蔵は顔を真っ赤にして目をつむり、中腰になって、あまりない胸を無理やり両腕で寄せて、右手を開いて腰につけ、左手は顔の前でネコの手を作り、
「・・・きょ、今日からあなたがご主人様にゃんッ！」
空気が凍りついた。
そして、翔輝は・・・
ブバババババッ！　ドタァッ！
「長谷川君ッ！」
奇怪な噴射音と共に真っ赤な鼻血を大放出して、翔輝は床に倒れた。長門が慌てて抱き起こすが、すでに意識はない。気絶したのだ。
しかし、その鼻からは尋常じゃない量の鼻血がドボドボと流れ出ている。
「長谷川君！　しっかりしてぇッ！」
「おいおいッ！　こんぐらいで気絶すっかフツーッ！？」
「貴様は一体どれだけ人に迷惑を掛ければ気が済むのだ！」
「な、何ですか今の音ッ！？　って、武蔵何よその格好！？　って、中尉ッ！？」
「中尉！？　お姉様！　どうしたんですかッ！？」
「長谷川はん！？　一体どうされたんどすかッ！？」
「滝川テメェッ！　長谷川に何しやがったぁッ！」
「武蔵も大胆な事するわねぇ。長門、後で詳しく教えてね」
下にいたはずの大和達も合流し、血の海に沈む翔輝のまわりにはいつの間にか多くの者が集まっていた。
そして、あまりにも突然な事に皆テンパっていて気がつかなかったが――翔輝はこの上なく幸せそうな顔をして気絶していた。
「うぅ・・・？」
目を開けると一瞬白い光が視界を奪ったが、すぐになくなり、視

界いっぱいに蒼い空が広がっていた。
身体を起こすと、自分が何個も並べられた椅子の上に横たわっていたのがわかる。
「え？　これは一体・・・」
「もう起きて大丈夫なのか？」
突然の声に振り返ると、そこには一升瓶を片手にした山城がいた。
「山城？　何でこんな所に・・・って、何昼間から酒を飲んでるの？」
そう訊くと、山城は少し不機嫌そうな顔をする。
「ここは私の上だ。いて当然だろう？」
「あ、そういえば・・・」
「それとこれは酒ではない。中身はただの水だ。私だって昼間から酒を飲む事はない」
そう言って山城は背を向けてしまう。どうやら怒らせてしまったらしい。翔輝は慌てて弁解しようとする。が、
「それに、それが介抱してやった者へ言うセリフか？」
山城から放たれた言葉に、翔輝の言葉は止まった。
「え？　山城が？」
「そうだよ。私では不満か？」
「いや、そんな事はないけど・・・」
山城は翔輝の横まで来ると屈み、下に落ちていた何度か折られたタオルを手に取って立ち上がる。
「軽い熱中症だそうだ。しばらくは安静にしてろ」
そう言うと山城は翔輝を横に促すと、酒瓶をタオルに傾けて水で濡らし、それを一度絞って翔輝の額に当てる。
一方、翔輝は記憶が混乱していた。彼の記憶では武蔵の過激な格好を見て気絶したのだ。熱中症とは関係なさそうだが・・・
「でもごめんね。僕なんかのせいで・・・」
山城は皆と違って水着ではなく、自分や金剛と同じ軍服を着ている。きっと自分の介抱のせいで遊べなかったのだろう。翔輝はその

事に謝ったのだが、
「構わない。私はどうせ泳ぐ気なんかない」
「え？　そうなの？」
翔輝は驚く。だがよく考えてみれば水遊びをする山城なんて想像できない。
「そういえば、みんなは？」
「大和達なら早速泳いでいる」
そう言って山城が指差した先では、大和達が嬉しそうに水遊びをしていた。どうやら自分の介抱と海で遊ぶので後者を取ったらしい。ちょっと寂しい。しかも絶対に前者を選んでくれるだろうと思っていた武蔵も榛名と水泳競争をしている。が、かなり速い榛名でも追いつけない速度で泳いでいる武蔵。さながら魚雷である。ちなみに武蔵は今はもうスク水だけになっている。ある意味セーフだ。
一通り見回すが、やはり何人かいない者もいる。
「金剛さんと滝川は？」
「滝川なら金剛に竹刀でボコボコに殴られた後に首根っこを掴まれて消えた。今頃虐殺されているかもな」
「あははは、そりゃあいい。せいぜい真っ当な人間になるまで教育してもらいたいよ」
「あの人間にそう簡単に変わるか？」
「あははは、ないね」
翔輝がおかしそうに笑うと、山城は口元に小さな笑みを浮かべた。
二人はしばし楽しそうに水遊びしている大和達を見詰めていた。
「山城は泳がないの？」
ふと思った事を訊くと、山城は首を横に振る。
「私はあんな痴態をさらす気はない」
「まあ、最初は僕も驚いたけど、こうして慣れてくるとみんなかわいいよね」
「そうか？」
「うん。今だったらちょっとだけ滝川に感謝するよ」

「そうか」
山城は再び大和達を見る。
「山城の水着姿、きっと似合うと思うよ」
水を飲んだ瞬間そんな事を言われ、山城は噴くまではなかったがむせてしまう。
「ゲホゴホッ！　な、何を突然!?」
山城は顔を真っ赤にして翔輝に怒鳴る。常の彼女とは思えない動揺ぶりだ。
「わ、私なんかが似合う訳ないでしょ」
「そんな事ないって。山城はきれいなんだから、絶対似合うって」
翔輝は笑顔で言う。そんな翔輝の言葉に、山城はさらに顔を真っ赤にして視線を逸らす。
「そういう事は私ではなく大和達に言って」
山城はそう言うと翔輝から少し離れた椅子に腰掛け、楽しそうに水を掛け合っている大和達を見詰める。
翔輝はゆっくりと立ち上がると海の方へ近づく。途中山城が「無理しないで。今度倒れたら介抱はしないから」と忠告したので、笑顔で返した。
柵に手を掛けて下を見下ろすと、大和達が楽しそうに遊んでいる。すると、魚雷のごとく突き進んでいた武蔵と目が合った。
「・・・翔輝。もう平気なの?」
「うわッ!?」
突然横に現れた武蔵が不安そうに訊いてきた。相変わらず神出鬼没だ。
「う、うん。もう平気だよ」
「・・・そう、良かった」
武蔵は胸を撫で下ろした。本当に心配してくれていたのだろう。
そう思うと、自然と笑みが浮かんでしまう。
「心配してくれてたんだ」
「・・・当然。翔輝が心配で心配で、実力の半分も出せなかった」

「あ、あれで半分ッ！？」
魚雷のごとき速度で驀進（ばくしん）していた武蔵の姿を思い出す。あれで半分なら本気を出したら一体どうなってしまうのだろうか。
呆れ半分感心半分で微妙な笑顔を浮かべていると、
「中尉！　もう起きてもいいんですかッ！？」
いつの間にか大和、そして陸奥と伊勢がいた。三人とも心配そうに翔輝を見詰めるが、翔輝は笑顔で「うん。もう平気だよ」と答えた。
「ほんまぁ？　良かったわぁ。うち、あのまま中尉が鼻血大流血で死なはるんやないかと心配したやで？」
伊勢の言葉でようやく翔輝は思い出した。どうやら自分は熱中症ではなく一時的に血を大量に失った事で気絶したらしい。なんとも情けない話だ。
「ごめん。みんなに迷惑掛けちゃって」
「気にしないでください。元はと言えばこのバカ妹のせいなんですから」
「・・・反論できない」
珍しく優位に立っている大和が呆れたような顔で武蔵を見る。一方の武蔵も一時の気の迷いとはいえ滝川にいいように弄ばれていた事にかなり反省しているようだ。そんな二人に翔輝優しく微笑む。
「まあ、何事もなかっただけ良かったさ」
「いえ、ちょっとした問題が・・・」
陸奥がおずおずと手を上げた。
「え？　何かあったの？」
「先程、金剛さんが滝川中尉を監禁している部屋に大量の石畳を運んでいたんですが、あんな量の石畳をどうするんでしょうか？」
心底不思議そうに考える陸奥。大和と伊勢も不思議そうに首を傾げる。そんな中、滝川の境遇と石畳の使い道とを結びつけた翔輝と武蔵は苦笑いするしかなかった。
「とりあえず、滝川の無事を祈ろう」

「・・・しかし、足の一本や二本折れても仕方ない」
「そうだな・・・」
二人は互いを見合うと笑い合った。その二人の笑みに気づいた大和がふてくされたような顔をして近づく。
「もうッ！　二人で内緒話しないでください！」
大和は髪の毛を逆立ててムーッっと唸る。陸奥も伊勢も少し怒っているように見える。
「ごめんごめん」
翔輝は笑ってごまかすと大和の頭をそっと撫でる。たったそれだけで大和はしゅんとおそなしくなる。陸奥と伊勢がうらやましそうに見詰めるが、もちろん翔輝がこうしてやるのは年下の子に対してだけだ。残念ながら二人は艦齢も外見年齢もこれには該当しない。
翔輝は大和を優しく撫でる。撫でられている大和はとても幸せそうな顔をしていた。だが、大和を撫でる翔輝の反対の手を武蔵が掴んだ。
「・・・翔輝も遊ぶ」
「え？　遊ぶって――」
「名案やわぁ。長谷川はんもうちらと一緒に遊びましょ」
「そうですよ中尉！　一緒にビーチバレーでもしましょう！」
「武蔵にしては気の利いた事を言うじゃない」
満場一致で翔輝の参加が（強制的に）決定された。そんな中、当事者である翔輝は戸惑うばかり。
「え？　どういう事？」
混乱する翔輝の右腕を大和と武蔵が、左手を陸奥と伊勢が掴んで引っ張る。
「さあ中尉」
「・・・翔輝」
「長谷川中尉」
「長谷川はん」
「え？　えぇッ！？」

四人全員が思い思いの方向へ引っ張る。正直かなり痛い。
「待ってよッ！　僕の身体は一つしかないの！」
「中尉は私と遊ぶですッ！」
「・・・翔輝は私と泳ぐ」
「長谷川中尉は私とスイカ割りをするのよッ！」
「長谷川はんはうちと密着するんやぁ」
最後の一人は意味不明だが、とりあえず今翔輝はかなりの危機に瀕していた。
四人はとにかく海の方へグイグイと引っ張る。これはマズイ。
「ちょっと待って！　そっちは海だよ！　落ちるからぁッ！」
翔輝は必死に抵抗するが、女の子は言え艦魂。しかも四人がかりではどうしようもない。ズルズルと身体が勝手に引きずられる。
そして・・・
「中尉！」
「・・・翔輝！」
「長谷川中尉！」
「長谷川はん！」
四人が力強く引っ張った瞬間、翔輝の身体は中に浮いた。続いて四人の悲鳴が聞こえた後、翔輝は床がなく蒼い海が真下に見えた瞬間――落下した。
「うわあああああぁぁぁぁぁぁぁッ！」
急速に近づく海には、榛名が一人で泳いでいた。翔輝の声に不思議そうに顔を上げた榛名はその光景に驚愕する。
「は、長谷川ッ！？　ば、バカッ！　来るんじゃねぇッ！　うわあああぁぁぁぁッ！」

ドボォンッ！

一方その頃、山城は日頃自分が使っている部屋にいた。
山城は部屋に設置してある鏡の前に立つと、その場でクルリと回

ってみる。そんな彼女が着ているのは透き通った海と同じ美しい青色のビキニ。滝川が艦魂達に配布したもので、当然山城にも配られた。

本当はこんな物を着るつもりはなかったが、翔輝が言った《山城の水着姿、きっと似合うと思うよ》という言葉が頭の中に響き、いつの間にか着ていた。

長い髪をポニーテールで纏めたその水着姿は翔輝の言ったとおり似合っている。似合っているどころではなくとてもかわいい。

山城は無表情ながらも頬を赤くしながら自分の水着姿をしみじみと見詰める。思っていたよりも変ではない。

「これで、いいのかな？」

再確認の為もう一度クルリと回った刹那、外から翔輝の悲鳴が響き、続いて何かが水に落ちた大きな音が聞こえた。

山城はその音にすぐさま部屋を飛び出した。

大和達に駆け寄った時には、もうすでに翔輝と榛名が甲板に寝かされていた。水着の榛名はともかく翔輝の軍服はズブ濡れである。しかし榛名はなぜか水着の上がなく、スポーツには適した胸が丸見えだったが、山城がすぐにタオルを掛けて応急処置をした。

大和、武蔵、陸奥、伊勢の四人は長門にこっぴどく怒られていた。どうやら四人が無茶をしたせいで翔輝は海に落下して、榛名はそれに巻き込まれたらしい。

たいした事ではなく一人安堵していると、戸籍上は姉に当たる扶桑がニヤニヤとした笑みを浮かべながら近づいてきた。

「あらあらぁ？　山城が水着を着るなんて意外ねぇ。しかもすっごくかわいい。一体どうしたのかしらぁ？　一体誰に見せようとしたのかしらぁ？　ねぇ山城ちゅわぁん？」

「良かった。水着は血がついても平気な生地だ」

「いきなり返り血の心配ッ！？　私が出血するのは決定事項なのッ！？」

慌てて逃げ出す扶桑を捕まえ、とりあえず人目のつかない所に引

きずる。途中の廊下で金剛の怒号と滝川の悲鳴が聞こえたが、この際無視した。どうせ自分もすぐ同じような状況になるのだから。

山城は誰も使っていない無人の部屋に必死に抵抗する扶桑を連れ込むと、ドアを閉めた。

・・・その後、部屋からは扶桑の悲鳴が響き渡った。

こうして、滝川の計画した《ドキッ☆女だらけの水着大会》は終わった。四人の尊い犠牲があったものの、一応無事に終了し、皆は安堵した。

滝川と扶桑はしばらくは絶対安静という重傷を負ったが、二人とも驚異的な回復力で三日後には復活した。

一方、翔輝は大激怒した榛名にぶっ飛ばされた。原因は翔輝が海に落下した際に榛名の水着の上を脱がしてしまったからだった。もちろん翔輝はその際に榛名の胸は見ていないのだが、乙女（一応は）の心を傷つけたという事で、ボコボコにされたのだった。

――以上後日談――

第八章　第二三節　蒼海の理想郷の女神達（後書き）

えっと、長々と宣伝しておいて、結局は水着ものの作品でした。なんかすみません。

先に言っておきますが、もちろんこの時代にこんな水着なんてありません。完全に僕の妄想です。

長門や扶桑の大胆な水着、陸奥と伊勢の少し大人っぽい水着、榛名のかっこいくもかわいい水着、大和のかわいさ全開の水着・・・武蔵の一部の人間には破壊的な威力を発揮する水着。これらを考えるのには正直苦労しました。ですが、かなり完成度（変態度？）の高い作品となりました。

皆様にもお喜びいただけた事と思います。

唯一残念な事は、金剛の水着姿が封印されている事です。設定上、彼女が水着姿になるのはちょっと彼女のイメージが崩れるので（元々滝川が登場し始めた辺りから壊れつつあるが）今回は控えさせていただきました。

さて、合計二三節にも及んだ長期編の第八章も今回で終わりです。

次は原作にもあった間章です。

アメリカ側の視点での太平洋戦争で、主人公はアメリカ側主人公のエンタープライズ。そんな彼女とエセックス級空母や戦艦達の物語。

ぜひぜひ読んでください。

第八・五章　復活　アメリカ海軍最強少女（前書き）

今度の話は日本側ではなくてアメリカ側の視点、エンタープライズを主人公にした作品です。
１９４３年頃は日米機動部隊の決戦はありませんのでエンタープライズの出番はありません。ですのでこうして間章を書きました。
エンタープライズの物語、どうか楽しめる事と思っています。

第八・五章　復活　アメリカ海軍最強少女

ガダルカナル島から少し東にいった場所にサンタクルーズ諸島というアメリカ海軍の南太平洋海域の前線基地がある。ここからソロモン海域に部隊を派遣するのだが、日本軍の撤退に伴って前線基地をさらに前進させる作業が行われていた。

そんな中、機動部隊旗艦である空母『エンタープライズ』の第２会議室にはアメリカ海軍の精鋭空母達が雑務をこなしていた。

「しかし、こういう仕事は水兵の役目じゃないの？」

書類の山を片付けながら愚痴るポニーテールに纏めた銀髪をした碧眼の少女。彼女はアメリカ海軍の最新鋭空母であるエセックス級航空母艦１番艦、空母『エセックス』の艦魂だ。勝気な性格に釣り目のが特徴の女の子だ。

「仕方ないじゃない。駆逐艦達のほとんどはガダルカナル島海域警戒に向かってるんだから。人手が足りないのよ」

そんな不平不満を連呼するエセックスを同じく銀髪のロングヘアをした碧眼の少女がなだめる。エセックスの妹にしてエセックス級空母２番艦・空母『ヨークタウン』の艦魂だ。

ヨークタウンの言葉に、エセックスは納得いかずに文句を言う。

「だからと言って、何も私達がやらなくても・・・」

やっぱり気に入らないエセックス。書類を片付けながらやっぱり文句を言う。

さてここで疑問に思った方もいるだろう。なぜミッドウェー海戦に沈んだはずの空母『ヨークタウン』が――しかもエセックスの妹としているのか。これには深い理由がある。

エセックス級空母２番艦はミッドウェー海戦で奮闘したヨークタウン級空母１番艦である『ヨークタウン』の名を受け継いだのだ。多くなる空母に名前のストックが切れるとは、うらやましい限りだ。

「ほらほらエセックス。愚痴を言わずに手を動かすの」

「は、はいッ！」
上官に笑顔で注意され、エセックスは慌てて作業に戻る。
そんな2人の上官とは、レキシントン級空母2番艦・空母『サラトガ』の艦魂だ。蒼く輝く髪を流した少女は、優しい笑みで新米空母を見詰めている。だが、それもすぐに横にいる少女を見て表情を曇らせる。
「エンター。あなたも手伝ってよ」
視線の先にはアメリカ空母一の猛将と謳われた空母『エンタープライズ』の艦魂がいた。だが、それは猛将と呼ばれていた頃と比べると、あまりにもひ弱になっていた。牙をもがれた虎のように、かつての勇ましさは微塵も感じられない。
エンタープライズは机に突っ伏してやる気のなさそうにぼんやりと窓の外を眺めていた。
「サラトガさん。雑務は私達でやるので、エンタープライズさんと一緒にくつろいでいてください」
「え？　でも・・・」
「やるわよーッ！」
ババババッ！　と書類を片付けるエセックスをサラトガは期待と不安が入り混じった微妙な表情で見詰める。
「サラトガさん。カフェオレをどうぞ」
ヨークタウンが持って来たカップをサラトガは笑顔で礼を言って受け取る。次にエンタープライズにブラックコーヒーを渡そうとするが、それは断られた。
「エンター。どうしてそんなにヨークに冷たいのよ」
サラトガは不満そうにエンタープライズを見詰める。
エンタープライズはどうもヨークタウンを好きになれない。姉の名を受け継いでいるせいか、ヨークタウンにはひどく冷たい態度をとる。
「いいんですよ。私、全然気にしていませんから」
ヨークタウンはそう笑顔で言うが、その笑みは寂しさがある。そ

んなヨークタウンを顔を上げてエンタープライズは見詰めるが、すぐにまた突っ伏す。
「もう」
サラトガは腰に手を当てて不機嫌そうにエンタープライズを見詰める。すると、居心地が悪くなったのか、エンタープライズは唐突に立ち上がってドアに向かった。
「ちょっとエンター。どこに行くの？」
サラトガの質問に、エンタープライズは面倒くさそうに、
「お前には、関係ないだろ？」
そんな冷たい言葉を言い放ち、エンタープライズは部屋を出て行ってしまった。
閉められたドアを、寂しげに見詰めるサラトガ。そんな彼女を心配そうに見詰めるヨークタウン。そして、
「おいヨーク！　この書類どこに置くんだよ！？」
1人完全に雰囲気から浮いているエセックスの妹を呼ぶ声が静かな部屋に響いた。

海戦の主力である空母部隊の旗艦である空母『エンタープライズ』の第二会議室で行われた艦魂会議。そこには多くのアメリカ海軍の艦魂が集まっていた。
「まったく！　エンターはいつになったらあの頃の猛将に戻るのかしら！」
そう不機嫌そうに言ったのは茶髪のセミショートの少女。機動部隊護衛部隊所属・サウスダコタ級戦艦2番艦・戦艦『インディアナ』の艦魂だ。彼女の言葉に皆もうなずく。
「あの頃のエンターは輝いていたのに。ちょっとハルゼー提督の影響を受けて危なかったけど、軍人としては私達合衆国海軍の誇りだった。でも今ははただのなまけ者よ！」
インディアナは先輩であるエンタープライズを尊敬し、彼女のような軍人になりたいと思っていた。しかし、だからこそ今のエンタ

ープライズが許せない。今のエンタープライズは彼女の尊敬を踏みにじっているのだ。

「インディ。気持ちはわかるけど、そういう事は心の中だけにして。口にはしないの」

「いいやサラ、今は言わせてもらう！　あなたはエンターに甘すぎる！　エンターが壊れてしまったのは仕方がない事よ。でも、それをさらに悪い方向に壊したのは、あなたじゃないのサラ？」

インディアナの言葉に、サラトガは思わず立ち上がって反撃する。

「そ、そんな事ないわ！」

「どうだろうね？　甘やかしてもその子にとっては為にならないのよ」

インディアナのトゲのある言い方に、サラトガの表情が暗くなる。

「わ、私はただ、エンターの親友として・・・・」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

悔しそうに唇を噛むサラトガを援護しようとエセックスが意見するが、

「うるさい！　新参者は黙ってろ！」

と一蹴された。

ちなみに『インディアナ』も昨年生まれたばかりのアメリカ海軍の中では新参者だが、年上には変わりない。

まだ諦めないエセックスは再反撃しようとするが、サラトガがそれを制す。

「ともかくサラ。何とかしてエンターを復活させて。あのままじゃ生ける屍も同然」

「・・・わかってるわよ」

深い沈黙が降りた。他の艦魂達も黙って、部屋には不気味な雰囲気が流れる。とその時、

「私はエンターの武勇は聞いた事しかない。でも、猛将として謳われていたのは事実。でもそれが今では牙を失った虎のように弱々しくなっている。だからインディの言い分もわかる。わかるけど、そ

れはさすがに言いすぎだと思うわ」
　深い沈黙を破った凛とした声の主は、美しい桃色の長い髪をポニーテールで纏め、同じく桃色の瞳を持つ少女。アメリカ海軍最新鋭戦艦、アイオワ級戦艦1番艦・戦艦『アイオワ』の艦魂だ。
　堂々とした態度に、皆は一瞬圧倒されたが、すぐにインディアナは不機嫌そうにアイオワを睨む。
「アイオワ。新米が生意気な事言うんじゃないの。新米は新米らしく先輩や上官の命令を聞いていればいいの。そして今あなたがすべき事はただ1つ。黙っていなさい」
　インディアナのトゲのある言い方に、アイオワはしっかりと首を横に振る。
「いいや。誇りある正義の国であるアメリカの猛将を――例えそれが今は違うとしても、侮辱する事は許されない」
　あまりにも堂々としたその物言いに、インディアナは激怒する。
「何よ！　新米のクセに偉そうに！」
「インディッ！　いい加減にしなさい！」
　立ち上がって怒鳴るインディアナを止めたのは、美しい金色の長髪を風に靡かせた女性。鋭い蒼き眼光は自分にはむかう全てを威圧した。アメリカ海軍戦艦でも古参に入るペンシルバニア級戦艦1番艦・戦艦『ペンシルベニア』の艦魂だ。年齢的には扶桑や山城に相当する老朽艦であるが、そこは古参としてその発言力は強力だ。
　ペンシルベニアはインディアナを見詰める。その鋭い三白眼にさすがのインディアナも縮こまる。
「インディ。アイオワの意見はもっともよ。あなたは少し激しすぎる。もう少しエンターの気持ちもわかってあげなさい。彼女は、もう2人の家族を失ってるんだから」
　その言葉に、インディアナは何も言い返せない。
　ペンシルベニアの言葉には重みがある。それは彼女のたった1人の妹の戦艦『アリゾナ』もあの日本軍によるパールハーバー奇襲攻撃で戦死したからだ。彼女自身もその際に被弾して戦艦生命を絶た

れるような大怪我を負った。しかし脅威の大改装を経て今こうして新造戦艦としてアメリカ海軍の戦艦達の重鎮として活躍している。妹の分まで。

再び深い沈黙が降り、その沈黙はしばらく続いた。

「ともかく、今日はこれで解散しましょ？　もう議題もないみたいだし」

そう言ったのは水色の長い髪に黄色い瞳を持った少女。ノースカロライナ級戦艦2番艦・戦艦『ワシントン』の艦魂だ。

ちなみに、この艦齢的にも年齢的にも大和と同じくらいの少女が、第三次ソロモン海戦で霧島を葬った戦艦の1人である。

「そうだな。今日はこれで終わりにしよう」

ワシントンの言葉に首肯したのは燃え盛る炎のような赤髪と赤い隻眼の女性。赤い右目のすさまじい威圧に対し、左目には黒い眼帯を付けている。彼女の名はネバダ。ネバダ級戦艦1番艦・戦艦『ネバダ』の艦魂。彼女も日本軍のパールハーバー奇襲攻撃で戦艦生命を絶たれるような大怪我を負ったが、大改装されて戦線に復帰した。しかし彼女はその代償として左目を失ってしまった。

ネバダは現在この場所にいる艦魂の最古参にして戦艦部隊総司令官だ。そんな彼女の言葉に反論できる者などおらず、会議は終了した。

会議が終わり、艦魂達は各自バラバラに部屋を出て行った。だが、サラトガだけはずっと椅子に腰掛けたままうつむき続けていた。その背中は、あまりにも弱々しかった・・・

自艦に戻ったヨークタウンはする事がなくベッドに寝そべっていた。長い銀色の髪が白いシーツの上に乱雑に乱れている。

「はぁ・・・」

ついついため息を吐いてしまう。

彼女の頭の中に浮かぶのは自分に冷たいエンタープライズの不機嫌そうな顔。

どうも自分はエンタープライズと仲良くできない。自分の名前が彼女の姉と同じだからというのが原因なら、自分にはどうする事もできない。好きでこの名前になった訳ではないからだ。もちろん自分の名前は好きだが。

「はぁ・・・」

再びため息をつく。

しばらく対策を考えたが、自分にできる事なんてまったく浮かんでこない。

ともかく、彼女に喜んでもらいたい。そしてそこから仲良くなりたい。そんな想いが心の中に響く。

しばしその方向に考えていると、ようやく1つ名案が浮かんだ。

「よしッ！」

ヨークタウンはガバッと起き上がり、椅子に掛けていた上着と机の上に置いてある帽子を付けると、部屋を出た。右に左に細い通路が枝上に分かれる通路を時々迷いながらも目的の場所に到達した。

そこは烹炊室だった。烹炊室とは軍艦の炊事を行う――いわゆる台所である。この部屋で乗組員３４００人分の食事を朝昼晩の３食を用意している。その忙しさはもうひとつの戦場と言っても過言ではない。

「フェイト！」

ヨークタウンが烹炊室の中に雪崩れ込んで大声を上げると、奥の方で椅子に腰掛けながらコーヒーを飲んでいた男が反応した。

「ヨーク？　どうしたんだ？」

まだ若くスラッとした印象を持つ男が不思議そうに声を掛ける。彼の名はフェイト・Ｊ・フォックス少尉。空母『ヨークタウン』主計科烹炊班副班長。いわゆる烹炊副長の任を受けている青年士官だ。

ヨークタウンは目的の人物を見つけると早足で駆け寄る。

「フェイト！　お願いがあるの！」

「お願い？　何だ。俺にできる事なら何でもするけど」

フェイトは立ち上がるとコーヒーを置いてヨークタウンの話に集

中する。そんな彼にヨークタウンは意を決して口を開く。
「クッキーの作り方を教えて！」
「クッキー？」
フェイトはヨークタウンの意外なお願いに不思議そうに首を傾げる。
「何でまた」
フェイトの質問に、ヨークタウンは懐かしそうに口を開く。
「あなた言ってたでしょ？　クッキーは人の心を和ませ、優しい気持ちにさせるって。だから、手作りクッキーをエンタープライズさんに食べてもらってお話をすれば、きっと仲良くなれると思うの」
「エンタープライズって、お前を毛嫌いにしている奴だろ？」
「だからこそ、早く仲良くなりたいの」
ヨークタウンの真剣な言葉に、フェイトは何度かうなずくと優しげな笑みを浮かべた。
「そういう事なら喜んで」
フェイトは快く引き受けた。
「本当！？」
喜ぶヨークタウンを見詰め、フェイトも優しげな笑みを浮かべる。
「でも、教えるからには本気やるからな。覚悟しろよ？」
そう言うとフェイトは意地悪そうに笑う。そんな彼にヨークタウンもニヤリと笑い、
「望むところよ」
こうして、ヨークタウンとフェイトのクッキー作りが開始された。

「できた！」
ヨークタウンの歓喜の叫びが天高く響いた。彼女の手には色々なかわいい形のクッキーが入ったかごが握られている。
「なんか、結構簡単にできたな」
フェイトはつまらなそうな顔をしている。そんな彼の態度にヨークタウンは不思議そうな顔をする。

「ど、どうしてよ？」
「だってさ、料理を教えるってなったからにはすさまじい下手ぶりを期待してたんだぞ？　それをこうも簡単に。こういう時は砂糖と塩をまちがえるとか、たかがクッキーを作るのに部屋でマグロの解体をしているような血の海を現出させるとかしろよ」
「・・・あなた、私をどんなふうに思ってるの？」
「いや、ここは場の空気を読んで。最低限爆発オチくらいは――」
「・・・もういい」
ヨークタウンは呆れたようにため息すると彼を無視し、キレイにラッピングする。それを見てヨークタウンは満面の笑みを浮かべる。すると、フェイトは不思議そうに、
「でもよ、これをどうやって渡すんだ？」
ピシリッ！
ヨークタウンの笑みにひびが入った。その変化にフェイトはため息をつく。
「お前は相変わらず行き当たりばったりだな。もう少し考えて行動しろよ」
「うぅっ・・・言い返せないよぉ・・・」
「返さなくていいから。どうするか考えろよ」
フェイトの言葉にうなずき、ヨークタウンは腕を組んで考える。
「手紙で呼び出して・・・突撃？」
「あのなぁ、黄金のワンパターン告白じゃないんだから、もう少し発展させろよ」
「うぅっ・・・と、ともかく渡せばいいの！」
もうヤケクソになっているヨークタウンに「はいはい」と軽く返事し、フェイトはハンカチを取り出してひらひらと振る。
「がんばって来ーい」
「・・・なぜ永遠の別れのような言い方を」
多少不可解な点はあるが、それは無視してヨークタウンは出口へ向かう。その途中何度か振り返って恋しそうにフェイトを見ながら

去って行った。
　ヨークタウンのいなくなったドアを見ながら、フェイトは苦笑い。
「あいつ、絶対ついて来てほしかったんだろうなぁ。でも、俺じゃ何もできないしな。まぁがんばれ」
　苦笑いするフェイトは、再び椅子に腰掛けるとコーヒーを飲み始めた。そのコーヒーはすっかり冷えていたが、心なしかいつもよりもおいしかった。

　その頃、エンタープライズは自室（使われていない部屋）のベッドに仰向けに寝転んでいた。そんな彼女の部屋はものすごく荒れていそうだが、意外にもすごくキレイに整えられていた。先に言うが、これはもちろん彼女がやった訳ではない。彼女の親友で掃除好きな少女のおかげだ。
「もうッ！　下着はちゃんと片付けてって言ってるでしょ！」
　ベッドの横に散らばっているブラジャーやパンティを拾いながら怒るサラトガ。そんな彼女の声に「あぁ、悪い」と小さな声で返すエンタープライズ。
　ぐうたらしているエンタープライズを見て、サラトガはため息する。
「ねぇ、たまには外に出ようよ。最近出てなかったでしょ？」
「いい」
「でもさ、たまには外の空気を吸おうよ。海がすごくきれいで――」
「――外に広がってるのは、姉さんやホーネットが死んだ海だけだ」
　そう言ったエンタープライスの顔は、サラトガが一番見たくない表情だった。ホーネットの死後よくするようになった――悲しみ一色に染まった辛そうな顔。サラトガはそれを見るたびに胸を締め付けられるような痛みを感じる。
「エンター・・・そんな顔・・・しないでよ・・・」
「無理言わないでよ。私は自分の感情を操作できるほど器用な艦魂じゃない」

力なく言うエンタープライズに、サラトガは沈黙する。その沈黙はしばらく続き、だんだんと間が持たなくなってきた時、突然ドアがノックされた。そのすぐ後に「ヨークタウンです」と聞き覚えのある声が響く。

「ヨークが来たみたい。入れてもいい？」

「好きにしろ」

エンターの許可（？）を確認し、サラトガはヨークタウンを部屋に入れる。

「どうしたのヨーク？　何か用事でもあるの？」

サラトガが優しい声で話し掛けるが、ヨークタウンはうつむいたまま沈黙している。その時、彼女の持っているバスケットから香ばしい匂いが漂っているのに気づいた。

「ねぇ、それって・・・」

サラトガが言い終える前に、ヨークタウンは緊張しながら口を開く。

「え、えっと、クッキーを焼いてきたんです。もちろん手作りで。それで、エンタープライズさんに食べてもらいたくて・・・その・・・」

ええぇいッ！　じれったいッ！

ヨークタウンは直球勝負に出た。

「このクッキーを食べてください！」

クッキー満載のバスケットをエンタープライズに向ける。このまま受け取ってもらえば第一段階が終了する。そうすれば第二段階に進み、そして――

「あれ？」

ヨークタウンはある異変に気づいた。まったく手から重みが消えない。つまりバスケットはまだ自分の手の中にあるという訳だ。どうして受け取ってくれないのか、気になって閉じていた瞳（目視するのが怖かった）を開けると、ベッドに寝ているエンタープライズがとても冷たい目で自分を見ているのが見えた。

「え？　えぇ？」
混乱するヨークタウンを、かわいそうな目でサラトガは見詰める。
「あのね、ヨーク。落ち着いて聞いてねあの――」
「おい。先に言っとくけど」
サラトガの言葉を遮り、エンタープライズは心底困った顔をしながら、ハッキリと言い切る。
「私は甘いものが嫌いなんだ」
「・・・」
理解できなかった――いや、脳が理解するのを拒んだのだ。だって、一生懸命考えた作戦が根底から頓挫する可能性大なのだから。
しばらくの沈黙の後、ヨークタウンはへなへなとその場にへたり込んだ。
「そ、そんな・・・」
使用時間数十秒、ようやく頭に状況が染み込み、体中から力が抜けたのだ。
ヨークタウンの計画は、完全に転覆した。
あまりにもかわいそうなヨークタウンを慰めようとサラトガは声を掛けようとした。その時、
ほろり・・・
「え？」
サラトガは言葉をなくした。
ヨークタウンのつぶらな瞳から大粒の涙が流れたのだ。
ヨークタウンはぽろぽろと涙を流しながら、嗚咽交じりに声を出す。
「ううっ、せ、せっかく作ったのに・・・ひっく・・・」
嗚咽で必死に我慢しているが、悲しみはついに限界を超えてしまった。
「うえええええぇぇぇぇぇぇんッ！」
完璧に泣き出してしまった。
「ヨーク！　大丈夫よ！　私やエセックスと一緒に食べましょう！」

必死にサラトガがなだめるが、今の彼女には何も聞こえない。
そんな二人を見ながら、エンタープライズはため息する。
（これじゃあ私が悪者みてぇじゃねぇか）
勝手に走って、勝手にコケて、勝手に泣き出したのを、どこをどういうふうにすれば自分が悪くなるのか。こっちが聞きたい。だが、
「うえぇえぇぇぇんッ！」
「・・・」
エンタープライズは薄情な少女ではなかった。基本が優しいのだが、彼女はそれを認めようとしない。恥ずかしいからだ。だから、
「・・・はぁ」
エンタープライズはため息すると立ち上がった。泣いているヨークタウンの持っているバスケットからクッキーを一枚引き抜き、そして、
「え・・・」
「あ・・・」
エンタープライズはヨークタウンの手作りクッキーを口に入れたのだ。
もぐもぐもぐ・・・ごくん。
エンタープライズは表情を崩さずに食すと、不機嫌そうに、
「食ってやったんだ。もう泣くな」
その言葉に、ヨークタウンはぱあっと華やぐ。
「やったぁ！　エンタープライスさんに私のクッキーを食べてもらっちゃった！」
「良かったわね」
ヨークタウンは本当に嬉しそうにはしゃぐ。その天真爛漫な姿に、エンタープライズも小さく笑みを浮かべた。
「ありがとうございます！」
ヨークタウンは満面の笑みでエンタープライズを見詰める。エンタープライズはこんな笑顔に弱かった。
エンタープライズは頬を赤らめてぷいっとそっぽを向く。

「う、うるさい。黙ってろヨーク」
その言葉に、再びヨークタウンの顔は満開に華やぐ。
「は、初めて名前で呼んでもらった！」
「わ、私は用があるから」
とろけそうな顔しているヨークタウンから逃げるようにして、エンタープライズは部屋を出て行ってしまった。
彼女の去ったドアを見詰め、微笑むサラトガ。その時、
「サラトガさん！　私決めました！」
突然ヨークタウンが謎の宣言をした。不思議そうに「何を？」と訊くと、ヨークタウンは意味ありげな笑みを浮かべ、高らかに宣言した。
「私、エンタープライズさんのファンクラブを作ります！」
「ふぁんくらぶー？」
サラトガはほとんど呆れるている。そんな彼女を無視し、ヨークタウンはキラキラした瞳を天に向けながら語る。
「エンタープライズさんてすっごくかっこいいんです！　あんなにかっこいい所を見せてもらっては、もう尽くすしかありません！　だからファンクラブを作るんです！」
まさかここまでエンタープライズフィーバーになるとは、ある程度予想していたサラトガの予想も見事に吹き飛んだ。
ヨークタウンはガッツポーズをし、気合十分な声を発する。
「ようし！　ファンクラブがんばるぞ！」
大騒ぎするヨークタウンを止める事はできず、サラトガは終止苦笑いを浮かべていた。
その後、『エンタープライズ様ファンクラブ』は多くの艦魂がメンバーになり、アメリカ海軍艦魂社会でも有数の組織になった。ちなみに、サラトガは伝説と呼ばれる一桁メンバーになっていた。
それなりにかっこ良く部屋を出て行ったエンタープライズだったが、

「うえっ・・・やっぱり甘いものはダメだ・・・」
そうつぶやき、急いで水をがぶ飲みするのであった。
彼女も彼女で、優しく、そして負けず嫌いなのだった。

あれ以降、エンタープライズは日増しに元気を取り戻し、力強さを取り戻していった。
そして、１９４３年１１月２９日に新たな仲間を入れ、アメリカ機動部隊はさらに強力になった。
そんなある日の昼、エンタープライズは拳銃の訓練をしていた。
バンッ！　バンバンッ！
拳銃を全弾的の中央に命中させる。相変わらず射撃の腕は天下一品である。
「お見事です。エンタープライズさん」
銀色の髪をツインテールでかわいく纏めた幼い女の子が嬉しそうに拍手する。そんな彼女に、エンタープライズはピースを送る。
「ありがと、ホーネット」
エンタープライズは笑いながらそう言った。
少女の名はホーネット。だが、もちろんエンタープライズの妹のホーネットではない。彼女はもうソロモンの海の底にいる。
彼女の正式名称はエセックス級空母４番艦・空母『ホーネット』。この命名がされた理由は『ヨークタウン』と同じだ。
そして、そんな二代目ホーネットは現在エンタープライズの願いで彼女の従兵をやっている。
「一休みしよっか？」
エンタープライズはホルスターに拳銃を収め、ホーネットを連れてソファに腰掛ける。
「もらい物のクッキーがあるんだが、食うか？」
「え？　いいんですか！　嬉しいです！」
ホーネットはエンタープライズが差し出したクッキーをおいしそうに頬張る。そんなホーネットを見詰め、エンタープライズは微笑

む。
「うまいか？」
「はい！　すごくおいしいです！」
「そうか。全部食ってもいいぞ」
「本当ですか！？」
「あぁ、私は甘い物は食えないからな」
「ありがとうございます！」
ホーネットは明るい笑顔でエンタープライズを見詰めた後、再びクッキーを頬張る。そんなホーネットを見て笑っているが、別の事を考えていた。
（同じホーネットでも、あいつとはずいぶん違うな・・・）
あいつとはもちろん、彼女の妹の方のホーネットである。彼女は今のホーネットと違って子供っぽくなかった。言動は少し幼いのがあったが、いつも冷静に良く考えているような少女だった。
「エンタープライズさん。これって・・・」
思考の途中に話し掛けられて、エンタープライズは慌てて現実に戻る。
「うん？　何だ？」
「これ、エンタープライズさんの姉妹ですか？」
ホーネットが指差した先にあったのは、写真立てだった。その写真立てには三人の少女が写っている。
清楚な雰囲気をかもし出している大人びた少女――姉・ヨークタウン。
緊張したような笑顔を向けている少女――妹・ホーネット。
そんな二人を両腕で抱き締めて明るく笑っている少女――自分。
戦前に三人で撮った写真だった。今はもう自分一人しか残っていないが、
「あぁ、そうだよ。姉さんのヨークタウン。妹のホーネット。もうどっちも海の底だけどな」
苦笑いするエンタープライズに、ホーネットは慌てて謝る。

「ご、ごめんなさい！」
「うん？　何で謝るんだ？」
「だ、だってその、辛い事を思い出させてしまったから・・・」
「気にすんな。少し前までは落ち込んでたけど、今はもう全然大丈夫だ。それに――」
エンタープライズはホーネットの頭をそっと撫でてやった。その突然の行為にホーネットは呆然とエンタープライズを見詰めると、彼女は笑っていた。
「今はサラやヨーク、お前もいるしな」
「はい・・・」
顔を赤くさせるホーネットはとてもかわいく見えた。すると突然、
「あ、あのエンタープライズさん！」
「うん？　何だ？」
ホーネットは顔を真っ赤にしながら真剣な顔でエンタープライズを見詰める。そして、
「あ、あのッ！　前からずっと言おうと思っていたんですけど、その・・・エンタープライズさんをお姉ちゃんと呼んでいいですか！？」
ホーネットの突然の言葉に沈黙が流れた。しばらくの沈黙の後、
「・・・え？」
エンタープライズは口をぽかーんと開けてホーネットを見詰める。
「ダメ・・・ですか？」
ホーネットは不安げな視線をエンタープライズに送る。そういうか弱い視線に、彼女は弱かった。
エンタープライズは少し恥ずかしそうに頬を掻く。
「ま、まぁ、いいけど・・・」
「本当ですか！？」
ホーネットはその言葉に嬉しそうに笑顔を浮かべると、勢い良くエンタープライズに抱き付く。
「お、おい・・・ッ！」

「えへへ、お姉ちゃん」
その言葉はエンタープライズの心に響いた。
ホーネットの死以来、自分の事を《姉》と呼んでくれる者はいなかった。しかし、新たなホーネットがそう呼んだのは、偶然だろうか、いや、偶然であっても関係ない。少女にまた新たな守るべきものが生まれたのは事実なのだから・・・
「おう、よろしくな。ホーネット」
「はいッ！」
エンタープライズは自分の守るべきものを守る為に、そして、死んだ姉妹や仲間達の仇を討つ為に、再び戦う事を決心した。
こうして、アメリカ海軍最強の少女は、再び立ち上がった。

第九章　第一節　陸奥の想いは永遠に輝き（前書き）

《エセックス》
エセックス級航空母艦１番艦――空母『エセックス』
愛称　なし
出身　ニューポート・ニューズ造船所（アメリカ）
身長　１６０ｃｍ
髪型　ポニーテール（銀髪）
実年齢（１９４３年１０月頃）０歳
外見年齢　１３、４歳
誕生日　１２月３１日
好きなもの　姉妹・エンタープライズ・サラトガ・暴れる事
嫌いなもの　辛いもの・細かい事・地道な事・敵軍
家族構成　妹・ヨークタウン・ホーネット・他８人
アメリカ海軍が増産した第２次世界大戦最高性能を持つ最新鋭空母のエセックス級空母の１番艦にして長女。エセックス級空母はヨークタウン級空母の後継艦でその性能は飛躍的に上がっており、増産性にも優れているので姉妹艦は空母としては驚異的な１０隻を持つ。そんな『エセックス』の艦魂は細かくて地道な事が嫌いな少女。エンタープライズを心から尊敬して彼女のように大暴れするような事が好きで姉妹一の日本嫌い。そんな少々男っぽいところはあるが、妹達を大切に思っていて彼女達からの信頼は絶対である。エンタープライズの頼れる腹心の一人。

《ヨークタウン》
エセックス級航空母艦２番艦――空母『ヨークタウン』
愛称　ヨーク
出身　ニューポート・ニューズ造船所（アメリカ）
身長　１５８ｃｍ

髪型　長髪（銀髪）
実年齢（１９４３年１０月頃）０歳
外見年齢　１２、３歳
誕生日　４月１５日
好きなもの　姉妹・エンタープライズ・フェイト・甘いもの・料理（特にお菓子作り）
嫌いなもの　辛いもの・チョウチョ以外の虫全般（特にゴキブリは見ると失神）・争い事・戦争
家族構成　姉・エセックス　妹・ホーネット・他８人
エセックス級空母２番艦でエンタープライズの姉の名を受け継ぐ新鋭空母の１隻。自分を避けるエンタープライズと仲良くなりたくて色々と考えては撃沈していた健気な女の子。エンタープライズとの間のわだかまりがなくなったら彼女の魅力に惹かれ、彼女のファンクラブを作ってしまうほどのエンタープライズが好き。ただしあまりにも破壊的な彼女の行為に多少は引いている様子。自分に乗る烹炊班副班長を務めるフェイトとは極めて仲がいい。まわりからよく二人の仲をからかわれたりするが、彼女はそれを全て否定している。しかしその真相は・・・

《ホーネット》
エセックス級航空母艦４番艦――空母『ホーネット』
愛称　特になし
出身　ニューポート・ニューズ造船所（アメリカ）
身長　１４８ｃｍ
髪型　ツインテール（銀髪）
実年齢（１９４２年１０月頃）０歳
外見年齢　１１、１２歳
誕生日　１１月２９日
好きなもの　姉妹・エンタープライズ・甘いもの・お菓子・日向ぼっこ

嫌いなもの　暗い所・怖い話・辛いもの・雨・雷
家族構成　姉・エセックス・ヨークタウン・他一人　妹7人
エンタープライズの妹の名を受け継ぎ彼女の従兵をしている艦魂。エンタープライズに良く懐いていて本当の姉のように慕って《お姉ちゃん》と呼んでいる。性格は優しく子供っぽい。かなりの怖がりで夜中にトイレに行く際もエンタープライズの付き添いなしにはできない。エンタープライズの為なら何でもする健気でかわいい子。アメリカキャラ唯一の清純な少女キャラ。

さて、ついに２００８年も6月に入りました。月日が経つのは早いですね。
そして、現在この作品もようやく１９４３年6月に入りました。という事で、今回は昨日に引き続いてもう1話を投稿させていただきました。
今回は原作を知っている方はあれ?と思うと思いますが、今作は原作とちょっと違った設定となった話ですので、十分楽しめると思います。どうか最後まで読んでください。

第九章　第一節　陸奥の想いは永遠に輝き

六月五日、各地に展開している日本海軍全艦魂がそれぞれの場所で黙祷を捧げた。

この日、日比谷公園で前連合艦隊司令長官山本五十六元帥の国葬が厳かに執り行われた。そして、ちょうどこの日、艦魂達にとっても忘れられない日だった。

忘れもしない、去年起きたあの悪夢。

一九四二年の今日、日本海軍の全兵力を結集させて、そして無惨にも大敗北したあの戦い。

尊い四人の少女と共に多くの兵員が命を落としたあの戦い。

――ミッドウェー海戦。

あれからもう一年が経ったのだ。あの戦い以降戦局は悪化し、幾多の戦いで多くの艦艇や人が死んでいった。

そんな遠い昔のような悲惨な敗北日と山本の国葬が重なった今日は、艦魂達も暗い気持ちも隠せなかった。

山本元帥の国葬から三日後の六月八日、初夏の日差しが呉の海をキラキラと照らし上げるそる日、波が揺れる海の上に浮かぶ一隻の戦艦――『陸奥』。

一足速く整備を終えた『陸奥』はドックから出てこうして日の目を見る事となった。

甲板の上で、久しぶりの海に陸奥は嬉しそうに身体を伸ばす。

「やっぱり海はいいですね」

「そうだな」

そう答えたのは夏用の白い第一種軍装を着た翔輝だ。彼は『陸奥』で行われた各艦の航海士達との会議に参加する為に『陸奥』にいる。会議は無事に終わり、余った時間をこうして陸奥と一緒に過ごす事となった。

「そういえば、中尉が私に乗るのは久しぶりですね」
懐かしそうに言う陸奥に、翔輝はうなずく。
「あぁ、お前と初めて会った後に『陸奥』に乗ったのは五回ほどだったし、前回乗ったのは去年の暮れだったしな」
「あれからもう半年ですか。月日が経つのは早いですね」
そう言う陸奥の瞳は暗い。その半年という期間の間には、日本が敗北への道を確実に踏み出した軌跡がある。思い出すのも辛いのだろう。
「まあ、いい事も悪い事もたくさんあったよね」
辛い思いは否定しない。翔輝自身も辛い思いは何度もしてきた。だが同時に、良かった事もたくさんあった。全てが全てダメだった訳じゃない。
翔輝の励ますような言葉に「そうですね、そうですよね」と陸奥は小さく笑みを浮かべた。
陸奥の笑みに満足すると、翔輝はふと軍港の方を見詰める。そこにはドッグがあり、今も『大和』が整備を受けている。
「第一艦隊が役立たずって言われるのも、仕方ないかもしれませんね」
突然の言葉に翔輝は陸奥を見る。陸奥は悲しそうに微笑むと、居並ぶ戦艦群を見詰める。
「戦艦の時代は終わり、今や航空機の時代。金剛さん達はその高速力を生かして最古参ながら機動部隊護衛や敵基地砲撃などを行ったのに対し、それ以外の戦艦は低速で使い道がなくて、こうして待機の日々ばかり。いつも内地にいて、外海に出ても比較的安全なトラック島からは出ようとはせず、毎日訓練ばかり。これじゃ、駆逐艦や巡洋艦から「能無し」「役立たず」「ただ飯ぐらい」と言われても仕方ないです」
悲しげに言う陸奥。何かあったのだろうか。
「何かあったの？」
翔輝が問うと、陸奥は自虐的な笑みを浮かべる。

「いえ、ただ昨日、前線部、水雷部、隠密部、補給部の合同会議が行われた際、偶然通り掛った時に聞いてしまったもので――「戦艦達は役に立たない。資材不足の今、戦艦なんて解体して全部駆逐艦や飛行機に変えるべきだ」って」

「そりゃひどいなぁ」

とんでもない事を言う艦魂もいたものだ。戦艦は今だって海戦の主力である。今はまだ適地がないだけであって、いざ出撃すればそれは日本海軍の栄光に繋がる。そんな戦艦を解体しろだなんて――それは、大和達に死ねと言っているのと同じ事になる。

翔輝はいつになく腹立たしかった。無責任かつ仲間に向かってそんな残虐な事が言える艦魂がいるだなんて、驚きと同時に怒りを覚える。

不機嫌そうな顔をしている翔輝に、陸奥は悲しそうに微笑む。

「そう怒らないでください。彼女達の意見はもっともです。戦艦は戦う艦と書いて《戦艦》と言います。なのに戦う場所がない、戦う機会ではないと言って逃げ続け、安穏と暮らしている私達は戦艦失格です。日露戦争では戦艦は十二分活躍しましたし、今の戦争だってアメリカは空母の護衛に戦艦を使ったり、戦艦の艦砲射撃で島々を攻略したりしています。比べるまでもありませんよ」

「陸奥・・・」

陸奥は真面目でしっかりした子だ。何事にも全力で、努力に努力を重ねて目的を達しようとする健気な子だ。それだけに、仲間達が命懸けで戦っているのに自分だけが何もせずに安穏と暮らしている事に責任を感じているのだろう。

握られた拳は真っ白で、小刻みに震えている。

「陸奥・・・」

「私も、艦魂になるんだったら空母の艦魂になりたかったです。そうすれば、みんなの力になれる・・・変ですよね？　戦前は自分が戦艦である事に誇りを持っていたのに、今じゃ戦艦である自分が嫌いだなんて」

自虐的に笑う陸奥に、翔輝は掛ける言葉を模索する。
「まあ、いつかお前にも大切な役目が来るはずだよ。きっと」
散々考えたが、出て来たのはそんなあまりにも情けない言葉だった。翔輝自身、このまま戦艦部隊は待機したまま戦争は終わってしまうのではないかという不安が過ぎった。『大和』も、世界最大最強の四六ｃｍ砲を敵に撃つ事なく戦争の終わりを迎えるのではないか、そんな予感がした。
それはそれでいいかもしれないが、彼女達はそれを許さないだろう。
大和も陸奥も戦争は嫌で戦いたくはないはず。それでも、仲間が傷つき、必死に戦っているのに自分達は何もしないなんて、そんな事はあってはならない。それが、艦魂なのだ。
「そうですね・・・そうである事を、今は願うばかりです」
陸奥は翔輝の言葉に静かにうなずくと、天を仰いだ。蒼い空を見上げる彼女の横顔を盗み見ると、その瞳はどこか悲しそうだ。
「陸奥」
翔輝はポンと陸奥の肩を叩いた。驚いたように陸奥が振り向く。
「え？　何ですか？」
「あんまり深く考えるなよ。悪い方へ考えてもキリがないよ。君のせいじゃない。そう自分を責めるなって」
翔輝の言葉に、陸奥は「そうですね」とささやき、小さく微笑んだ。その笑顔は小さいながらもとても優しく、煌いている。翔輝もそんな陸奥に小さく微笑むと、そっと海を見詰める。
しばし二人して黙ったまま潮風に当たっていたが、翔輝は頭の中である事を考えていた。
今現在大和達は会議室で今後の戦局に対する議論をしている。会議には各部の部長と志願で副部長も加わったメンバーで構成されているが、かなり切羽詰まっているようだ。
アッツ島守備隊玉砕の報は艦魂達にも焦りを呼んでいる。このままでは各地に待機している守備隊が米軍の猛攻撃で全滅する恐れが

あるのが現状だ。
　さっき翔輝は会議室を覗いたが、議論は今まで以上に地に足を着けていない意見をぶつけ合っていた。金剛なんかは残存戦艦部隊を結集させて敵艦隊に突っ込ませるという無茶無策無謀の三連撃を放っていた。そんな中、武蔵は最終防衛線絶対死守論を唱えていた。千島、マリアナ、フィリピンを中心に絶対死守拠点を位置付け、そこを守る為に日本海軍残存全戦力を投入するという意見だ。これは後に日本軍が提唱した『絶対国防圏』と全く同じものだった。さすが連合艦隊旗艦。的確な意見を出す。が、その意見に対し山城が意見した。その理由は簡単だった。絶対防衛線を完成させる為にはその勢力圏の外地にいる守備隊を撤退、新基地の建設やすでにある基地の改良・戦力の増強などやる事が多くある為難しいという事だ。武蔵もこれには答えられず、再び激論がされる事になった。
　大和も頭を悩ませていた。日々確実に侵攻して来る敵に対し、満足に防衛戦もできない状況。これを見て頭を抱えない方がおかしい。
　そんな大和達の邪魔をしちゃいけないと、翔輝は黙って離れたのだ。
　今頃もきっと皆で議論を交わしているのだろう。だが、大和達が苦しんでいても、一介の航海士でしかない自分は何も応援する事ができない。自分の無力さを改めて理解する。
「中尉」
　考えに耽(ふけ)っていた翔輝は陸奥の声と裾を掴まれる感触に現実に戻る。
「え？　あ、陸奥？」
「もう、また中尉はぼーっとしてして」
　そこには腰に両手を当てて少し怒ったような顔をしている陸奥が立っていた。
「まったく、人に悪い方へ考えるなって言う中尉自身が悪い方へ考えるなんて本末転倒です。もう少し自分の言った事には責任を持ってください」

陸奥は人差し指を立てて翔輝の鼻先に向ける。そんなちょっと強気な陸奥に翔輝は驚く。
「陸奥？　どうしたの突然？」
驚く翔輝に、陸奥は強気な態度から一転して優しげな笑顔を浮かべた。
「えへへ、どうですか？　こういう強気なキャラは？」
笑顔で言う陸奥。どうやら今のは演技らしい。そんな陸奥に翔輝はため息する。
「びっくりさせないでよね。それに、強気な女の子は榛名だけで十分だよ」
「それもそうですね」
陸奥はてへっと舌を出しておどけたように笑う。そんないつにない仕草に翔輝はドキリとする。
「陸奥？」
「元気になりましたか？」
「は？」
陸奥は真剣な瞳で翔輝を見詰める。潤んだ瞳はしっかりと彼を捉えて離そうとはしない。
驚いた顔で自分を見詰める翔輝に陸奥は静かに微笑む。
「私、中尉にはいつでも笑っていてほしいんです。だから、悲しい顔は、しないでください」
陸奥は翔輝の手を取ってそう言った。その笑顔に、その優しさに、翔輝は自然と微笑んでしまう。
「あぁ、ありがとう。陸奥」
「はい」
互いを見詰め合い、互いに微笑み合う。こんなに幸せな事はない。
翔輝は知っている。
こうした優しく温かく、平和な日々こそ、かけがえのない幸せだという事を。
翔輝はふと『陸奥』を見上げた。

国民が知っている戦艦の中では最新鋭艦であり、姉艦『長門』を上回り最も国民に愛されている戦艦。それがこの『陸奥』だ。天高く聳える前檣楼はまさに浮かべる城の象徴である。重厚な装甲で守られた四一ｃｍ連装砲は大和型を除けば世界最大最強の主砲だ。

戦艦『陸奥』。それは世界最大最強の戦艦という名前を姉と共に長らく持ち続けた英雄戦艦だ。

翔輝はそんな『陸奥』を見上げる。大和型のようにすでに完成されたのではなく、時代の流れの中で何度も改造されたその痕跡は色々な所で見られ、彼女が必死に日本を守る為に生きてきた証のような感じがした。

「古い・・・ですか？」

「え？」

振り返ると、不安げに瞳を揺らす陸奥が自分を見詰めていた。

「私、古いですか？」

「え？　そんな事ないよ」

「ほ、本当ですか？」

「う、うん」

戦艦『陸奥』は竣工してから二〇年以上経っている。確かに諸外国の戦艦に比べたら年季が入っているが、それでも『陸奥』は日本の中では太平洋戦争までは一番新しい戦艦だった。それを古いと言っては金剛型は旧式戦艦という名称では押さえきれなくなってしまうだろう。

だから、決して『陸奥』は古くはない。しかしそんな『陸奥』の心である彼女は恥ずかしそうに己が身を抱き締める。

「わ、私は今年でもう二二歳になります。軍縮条約が適用される前の時代では引退していても仕方がない古い戦艦です。だから、私は大和ちゃんや武蔵ちゃんのような生まれたてのピチピチの戦艦じゃないです。だから、その・・・あまり見ないでください」

恥ずかしそうに言う陸奥に、翔輝は色々とツッコミをしたかった。

『陸奥』が古い戦艦なら金剛型は記念艦クラスに古い戦艦だろうが

とか、生まれたてのピチピチの戦艦って何だとかだが、とりあえず今は無視しよう。

自信なさげにうつむく陸奥の肩を、翔輝はそっと叩く。その行動に陸奥は驚いたように顔を上げる。そんな彼女に、翔輝は優しく微笑む。

「まあまあ、大和は大和。お前はお前だろ。比べるものじゃないよ」

「で、でも、私は・・・」

「年なんか関係ないさ。陸奥は陸奥だろ？　それ以外の何者でもないさ」

翔輝は笑顔でそう言った。それは彼の心の底からの想いだった。陸奥は陸奥。何があろうと変わる事のない事実。それだけで、何もいらない。ただそれだけ。

翔輝の言葉に、陸奥はぱあっと笑みを浮かべた。たったそれだけの事なのに、陸奥にとっては嬉しくてたまらない。

「中尉ッ！」

「うわッ！？」

陸奥は笑顔満開で翔輝に抱き付いた。慌てる翔輝を無視して、彼の胸に頬擦りする。

彼の言葉が、彼の存在が、私の心を突き動かしてくれる。自信を失ったり、悲しくなったりしても、彼がいれば乗り越えられる。それが、嬉しくてたまりない。

「中尉！　大好きですッ！」

「わ、わかった！　わかったから離れて！」

「好き好き好き、大好き！」

「離れてってばぁッ！」

陸奥は翔輝に散々抱き付いた後、「す、すみません！」と顔を真っ赤にして離れた。その後は気まずくてお互い何も話せなくなった。だが、いつまでも沈黙を続ける訳にはいかない。翔輝は思い切って口を開く。

「そ、そういえばさ、陸奥って来週にもトラックに行くんだろ？」

逸早く整備を終えた『陸奥』は来週にも再びトラック島へ向かう事になっていた。そうなれば、しばしの別れとなってしまう。
翔輝の言葉に、陸奥は顔を伏せた。
「はい、来週には出撃命令が下ります。そうなれば、私は単艦でトラック島に向かう事になるでしょう」
「そっか・・・」
「もしかして中尉、寂しいんですか？」
陸奥はイタズラっぽい笑みを浮かべてからかうように言う。が、
「うん。寂しいよ」
「え・・・」
思っていたのと違う回答が返ってきた事に陸奥は驚く。そしてすぐに顔を真っ赤に染めて急いで彼から視線を逸らす。
「な、何言ってるんですか。中尉には大和ちゃんや武蔵ちゃんとかがいるでしょ？　私がいなくなるくらいで寂しいだなんて――」
「そりゃ寂しいさ。確かに大和や武蔵達と一緒だから極端な事はないけど、でも――」
翔輝はそっと陸奥の頬を撫でた。初めてされた行為に陸奥の心拍数はギネス記録を更新する勢いで加速する。そんな陸奥に、翔輝は優しく微笑む。
「君は、《陸奥》は君一人しかいないだろ？」
その言葉を聞いて、本当に嬉しかった。
自分はちゃんと彼の大切な一人として存在していたんだ。離れられると悲しくなってくれる、そんな存在に、
「中尉」
「うん？」
「セリフが黄金のワンパターンですよ」
「うっ・・・」
言葉に詰まる翔輝に、陸奥はおかしそうにくすくすと笑う。
「まさか中尉がそんな事を言うなんて、意外です」
「そ、そっかな？　変かな？」

「いいえ。それもまた中尉の良き一面だと思います。中尉の優しさだと思います」
「陸奥・・・ありがとう」
「礼を言われる事は何もしていません。むしろこちらが礼を言わねばなりません。私なんかの為に寂しがっていただけるんですから」
「そんな言い方するなよ。《私なんか》なんて悲しい事、言っちゃダメだよ」
「ふふふ、そうですね。失礼しました」
おかしそうに笑う陸奥を見て、翔輝は自然と笑顔になる。
そういえば・・・
「なぁ陸奥。君とこういうふうに二人っきりで話すなんて、ずいぶん久しぶりだよね？」
「そういえばそうですね。いつもはうるさくて束縛グセのある大和ちゃんやいつもくっ付いている武蔵ちゃんがいましたからね。こんなふうに二人でお話しするのは久しぶりです」
「そっか・・・なぁ、陸奥。覚えてるか？　君と初めて話した時の事を」
「えぇ、覚えてますよ。あの時は私の中で迷子になってましたよね？」
「うっ、嫌な事を思い出させないでよ」
「ふふふ、ごめんなさい」
おかしそうに笑う陸奥を一瞥し、そっと海の向こうを見詰める。
「そう、あれは――」
戦争が勃発して少し経ったある日、当時『大和』艦長だった高柳儀八大佐に伝令を頼まれて、初めて『大和』以外の戦艦に乗り込んだ。それが『陸奥』だった。
そんな『陸奥』の中で方向オンチである翔輝が当然のように迷子になった時、そっと手を差し伸べてくれたのが、彼女だった。
自分と同じくらいの女の子に助けられたのはちょっと恥ずかしかったが、彼女はとても落ち着いた雰囲気をかもし出していたので、

一目見ただけでは同い年とはわからなかった。
そんな彼女とは、大和の次に長く付き合ってきた。
「そういえば、陸奥は僕が会った艦魂では三番目だったね」
「そうですね。大和にお姉様、そして私。最近はなんか強烈なキャラが多くて忘れていましたけど、私は中尉の知り合いでは古参組に入るんですね」
「あれから、もう一年半になるんだね。長かったような短かったような」
「あれから、色々ありましたね。出会いと別れの繰り返しが」
陸奥は懐かしそうにつぶやく。そう、出会いもあったが別れもあった。そんな激動の一年半だったのだ。
「あぁ、そうだな」
翔輝も思い出す。たくさんの艦魂と出会い、たくさんの艦魂と別れた。悲しい事もあったけど、だがそれ以上に楽しい事が多かった、そんな一年。
その時、陸奥は何か言おうとしたが、すぐにうつむく。そしてまた口を開くが閉じる。それを繰り返す事五回、ついに陸奥は意を決したように顔を上げた。
「中尉。中尉にある少女のお話をしてあげましょう」
「え、何？」
翔輝が不思議そうに問うと、陸奥は顔を上げ、遠い空を見詰めた。その瞳は、どこか遠くを見ているようだった。
「これはまだ生まれてまもなく、多くの国民に祝福されて生まれたある軍艦の艦魂の話。その時すでに少女には信頼できる優秀な姉がいました。その姉は能天気な事ばかり言ってまわりをからかっていたけど、本当は誰よりも仲間想いな艦魂でした」
「それって・・・」
「少女は多くの仲間と一緒に平和な時代を生きました。そして、生まれてから数年経ったある日、少女の前に一人の青年士官が現れました。その青年は何人もの艦魂と親しくしてきた艦魂を相手にする

のがとてもうまい方でした。少女に対してもとても優しく接し、二人はすぐに仲良くなりました。それからは毎日が幸せ。彼と会うのが楽しくて、嬉しくて、幸せだった。少女がそれを恋だと感じたのはそのすぐ後、少女は一生懸命勇気を出して告白しました。そしたら、彼も同じ気持ちを抱いていました。その後二人は恋人になり、少女は初めての口付けを彼に捧げました」

陸奥は淡々と話すが、その言葉の端々には強い想いがこもっていた。やっぱり、この話の少女とは――

「幸せでした。本当に幸せでした。そんな幸せが永遠に続けばいいと思っていました。でも、それは突然終わりを迎えました」

陸奥はそこで一度言葉を切り、辛そうに唇を噛む。

「ある日、その軍艦はシンガポールのイギリス海軍と合同訓練の為に出撃しました。その時、突如その軍艦の右舷で爆発が起きました。どうやら第一次世界大戦中に敷設された機雷に触れたらしく、運悪くそれはその軍艦の装甲を破壊してしまいました。破口から大量の海水が艦内になだれ込み、浸水によって艦は右に傾き始めました。少女は吐血を吐いて、生まれて初めて血の味を知りました。鉄の味でした。痛く苦しく、辛かった。すぐにでも左舷タンクに注水さえすれば問題はなかったのですが、タンクの注水弁の付近にある電気室が火災を起こして異常加熱を起こし、浸水した海水がすさまじい熱湯となって付近一帯を覆いました。そのせいで、誰も近づく事ができなかったんです。少女は死を考えましたが、青年は諦めませんでした。青年は「待っててくれ、すぐに注水して来る！」と言って飛び出して行きました。少女は泣き叫びながら青年の背中に手を伸ばしましたが、それは虚空を横切っただけでした。そして十数分後、軍艦は左舷タンクに注水がされ、艦の傾斜は元に戻り、沈没は免れました。応急処置を終えた少女は嬉しくなって、自分を救ってくれた青年を思いっ切り抱き締めてやろうと思いました。しかし、青年は二度と帰ってきませんでした。後日、青年が熱湯の中で絶命しているが発見されました。その手はしっかりと注水開閉弁のハンドル

を握っていたそうです。少女は泣きました。自分を犠牲にして少女を救った青年に対し、泣きました。それで少女が喜ぶ訳がありませんでした。怒りを覚えました。何もできなかった自分に対して、自分を置いて先に逝ってしまった彼に対して、様々な感情が渦巻き、少女は一時引きこもりになりました。ですが、少女の姉や仲間が少女を救いました。長い年月をかけて、少女は少しずつ元気を取り戻し、以前と変わらぬ笑顔を見せるようになりました。そして、時代は流れ、少女は今大東亜戦争の中で戦い、そして、今ここに立っています」

そこで陸奥は辛そうな顔をしながら顔を上げて翔輝を見詰めた。その瞳はとても悲しげに揺れている。

「そう、もうわかっていると思いますけど、この少女は私です。私の初恋の相手は、私を救って死んでしまったのです」

陸奥の瞳は濡れていた。キラキラ光る瞳なのに、それはとても寂しげに見える。

「そして、中尉。あなたは私の初恋の相手に良く似ています」

「僕が・・・？」

「はい。優しく、おもしろく、一緒にいて楽しいと思える、そんな所が同じです。だから、私は中尉に近づいたんです」

「陸奥・・・」

「最初、私はあなたに死んだ彼を求めていました。しかし、やはり別人。彼とは違いました。しかし、気がついた時には中尉はそれでも私にとってかけがえのない存在となっていました。こんな気持ちになったのは、彼との出会い以来初めての事でした。だから、私は今でも中尉の傍にいるんです――これが、私の全てです」

陸奥はそう言うと、翔輝の胸に飛び込んだ。翔輝は一瞬躊躇したが、陸奥の幸せそうな表情を見て、何も言わなかった。

「彼の事は、今でも忘れられません。でも、今の私には中尉が必要なんです。それだけはどうか、わかってください」

陸奥の言葉に、翔輝は静かにうなずく。

「あぁ、わかったよ。君とはちょっと違うけど、僕だって死んだ翔香の事を今でも忘れられないからね」
「・・・お互い、似た者同士って事ですね」
「そうだな・・・」
お互いに大切な人を失っている。そんな気持ちを共有できた事は少し嬉しかった。
その時、翔輝は沈黙したままの陸奥の頭をそっと撫でた。突然の行為に陸奥は驚いて翔輝を見詰める。そんな陸奥に、翔輝は優しく微笑む。
「陸奥。君には辛い思い出があるのがわかった。だから、辛くなったら、いつでもおいで」
その言葉に、陸奥は瞳を大きく見開く。
「僕じゃ役不足かもしれないけど、君を大切に思っているのは誰にも負けない自信がある。いつでもこの胸を貸してやる。これは大和達だけのものじゃないしな。お前も――」
そこで翔輝は言葉を止めた――いや、止めるしかなかった。陸奥が――陸奥が泣いていたから・・・
陸奥は嗚咽を交えながら後から後から溢れてくる涙を軍服の袖口で拭い取る。その顔は涙でぐちゃぐちゃだった。
「陸奥・・・」
「ありがとうございます・・・ッ！　そのお言葉、私の胸にしかと響きました。そのご好意に、甘えさせていただきます」
「え――ちょ、ちょっと・・・ッ！」
陸奥はいきなり翔輝に抱き付いた。慌てる翔輝の胸の中、陸奥は嬉しそうに泣いていた。そんな顔を見ては、翔輝が抵抗できる訳もなく――
「中尉の胸、すごく温かいです」
「そ、そうかな？」
「はい。とても心が落ち着きます」
翔輝は陸奥を抱き締めていた。いつも大和や武蔵、隼鷹にやるよ

うに。だが、いつもは自分より頭一つ分以上小さい体を抱き締めていたが、陸奥は翔輝より少し身長が低いだけなので、いつもと少し違う感覚だった。

陸奥は落ち着いたのか、そっと翔輝を見上げ、満面の笑みを浮かべる。

「ずっと、一緒にいましょうね」

「あぁ、ずっと一緒だ」

陸奥は嬉しそうにうなずいき、再び翔輝の胸に顔を埋める。

こうして見ると、陸奥はすごくかわいい女の子だった。今まであまり二人っきりという時間がなかったので気づかなかったが、陸奥は美少女だ。

今頃それに気づいて、翔輝は顔を真っ赤にしたままあわあわと慌てる。急いで陸奥を離そうとするが、陸奥は離れようとしない。

「ちょっと陸奥！」

「もう少し、このままでいたいです」

「あ、いや、ちょっと暑いからさ、艦内に入らない？」

汗を垂らしながら苦笑いする翔輝に、陸奥は「すみません！」と慌てた様子で飛び退いた。現在気温は二八度。日差しは全開で二人を照らし上げている。かなり暑い。

陸奥は慌てた様子でポケットからハンカチを取り出して翔輝の額を拭った。

「そ、そうですね。冷房の効いた中に入りましょうか」

「うん。そうしよう」

翔輝は笑顔でそう答えると、手を差し伸べた。その手を、陸奥は嬉しそうに笑みを浮かべて掴む。二つの手はしっかいと結ばれ、二人を繋ぐ。

「じゃあ、行こうか」

「はい」

翔輝は歩き出し、陸奥も一歩足を踏み出した。

ドクン・・・ッ！

「ッ！？」

「む、陸奥ッ！？」

突然襲ってきた衝動に、胸が締め付けられるような痛みを感じ、陸奥はそのあまりの激痛にその場に倒れた。

「陸奥！　しっかりして！」

翔輝が慌てて彼女の身体を抱き起こす。すると、陸奥は額に脂汗を垂らして、苦しそうに顔をゆがめている。

「陸奥！」

陸奥は自分を襲う謎の痛みに困惑した。

この痛みは、何かの警告のような気がしてならない。

悪い予感が、最悪が迫っている。そんな気がした。

心臓を鷲掴みにするような痛みだったが、それは意外にも早く終わりを告げた。

「はぁ・・・」

息を吐き出し、痛みが完全になくなった事を確認する。

陸奥は翔輝の手を借りずになんとか自力で立ち上がる。

「だ、大丈夫なの？」

「はい、ちょっとめまいがしただけです」

「え？　でも、苦しそうだったけど・・・」

「平気です。それよりも早く中に入りましょう」

「え？　あ、うん」

翔輝は陸奥に手を引かれるように艦内に入って行く。そんな彼を引っ張る陸奥は倒れたのを感じさせないくらい元気だった。

「あ、あまり無理はするなよ」

「わかってますって」

翔輝の言葉に、陸奥は笑顔で答える。だが、その心内では先程感じた不安が渦巻いている。

一体先程の胸を締め付けられるような痛みと悪い予感は一体なん

だったのだろうか。何度考えてもわからない。
陸奥は首を振ってその考えを振り払う。
今はそれより彼と共にいる時間を少しでも長くしたい。
「さあ、早く早くぅッ！」
「わ、わかったから引っ張るなって！」
翔輝と陸奥はは鉄の廊下を進む。『大和』や他の軍艦と同じ鉄に囲まれた通路。それは無機質ながらも、人々の活気が溢れている。
陸奥はしばらく翔輝をどこかへ引っ張って行く。すると、
「えへへ、ここが私の部屋です」
そう言って迎え入れたのは誰も使っていない部屋であった。そこはどうやら陸奥の自室になっているらしい。
中はやっぱり鉄の空間である。ベッドとテーブル、タンスしかないシンプルな部屋だが、よく見るとベッドには何個かぬいぐるみが置いてある。
「へぇ、ここが陸奥の部屋か」
「すみません。とても女の子の部屋には見えませんよね？」
不安げに言って来る陸奥。確かにこれは女の子の部屋には見えないが、そんな事を言っても彼女を悲しませるだけだ。だから、
「そんな事ないって。ほら、あのぬいぐるみは女の子っぽいし」
そう言って翔輝はベッドに近づくと、ぬいぐるみを掴む。犬のかわいいぬいぐるみだ。
「えへへ、それはお気に入りなんですよ」
いつの間にか、陸奥は紅茶を用意してくれていた。
「さあ、こちらへどうぞ」
「ありがとう」
翔輝はぬいぐるみを元に戻すとテーブルの椅子に腰掛ける。するとその前に淹れたての紅茶の入ったティーカップが置かれる。
「どうぞ」
「ありがとう」
翔輝は紅茶を飲む。ほのかな甘みがまたおいしい。

陸奥も翔輝の対面に腰掛けると、そっと紅茶を飲む。
翔輝はティーカップを置くとふと辺りを見回す。すると、
「あれは？」
タンスの上に置かれた一枚の写真に目がいった。翔輝の視線を追った陸奥は、「あぁ」と小さくつぶやくと、悲しげに微笑む。
「先程話した私の初恋の相手です」
「へぇ、見てもいい？」
「はい」
翔輝は立ち上がるとタンスに近寄って写真を手に取る。そこには大和くらいの年の頃の陸奥が立っていた。まだ今のように大人に近い体つきはしておらず、幼さに溢れている。そんな彼女の横に立つのは自分より少し年上に見える青年士官。優しげな笑顔が特徴的だ。
「この人が、陸奥の初恋の人？」
「はい。とてもお優しい方でした」
本当に好きだったのだろう。写真に写る彼女はとても幸せそうに見える。
「これが、僕が知らない陸奥の過去か」
「・・・はい。中尉の知らない、中尉に出会うずっと以前の私です」
人にはそれぞれ知らない過去がある。それは艦魂も同じ。楽しい事や嬉しい事もあるが、辛く悲しい記憶であったりもする。それが過去。それが記憶。陸奥もそんなものを持つ一人なのだ。
「僕の知らない陸奥かぁ。なんか寂しいな」
「寂しい？」
「うん。なんかさ、僕はずっと陸奥と一緒にいたからさ、君の事は結構わかっているつもりだったけど、こうして僕の知らないものを見せられると、なんか寂しくなるんだ」
悲しげに言う翔輝に、陸奥は小さく微笑んだ。
自分だって、彼と出会う以前の彼は知らない。だけど、それでいいのだ。例え彼に自分の知らない過去があったとしても、それを含めた全てを、自分は好きなのだから。

「中尉」
陸奥はそっと彼の腕に抱き付いた。驚く翔輝に、陸奥は満面の笑みを浮かべる。
「大丈夫ですよ。私は私です。過去なんか気にしないでください。中尉には、《過去》の私より《今》の私を見てほしいんです。人にはそれぞれ過去がありますが、それは《過去》でしかなく、《今》とは違います。《今》は《未来》に繋がります。だから、《今》の私を見てください。私は、《ここ》にいるんですから」
陸奥はそう笑顔で言うと、ギュッと翔輝に抱きつく。身体全体で彼を感じる。それが嬉しくてたまらない。翔輝もそんな陸奥を拒む事はせず、少し恥ずかしそうに彼女の行為を受け入れる。
「ずっと、一緒にいましょうね」
「あぁ、ずっと一緒だ」
ずっと一緒。
なんて平凡で、なんて幸せな響きなのだろう。
そう、こんな日々が続いてくれればいい。
戦争なんてなく、平和な日々が続いてほしい。
こうして、愛する人と一緒にいる日々が続いてほしい。
こんな幸せが、ずっと続いてほしい。
ずっと、このまま・・・

ドクン・・・ッ！

「む、陸奥ッ！？」
急にまた胸が締め付けられるような痛みが走った。
胸を押さえ、陸奥はその場に倒れた。
胸が痛くて、息が苦しい。
「陸奥！　どうしたんだよッ！？」
翔輝が慌てて陸奥の身体を抱き起こす。
陸奥は困惑していた。先程感じた痛みに似ているが、今度のは先

程よりも何倍も痛くて苦しい。
胸が痛い。
痛くて痛くて、気絶してしまいたいくらい痛い。
近くで翔輝が叫んでいるのに、まるでどこか遠くで叫んでいるかのように声が遠い。
「ちゅう・・・い・・・ッ！」
陸奥は翔輝が遠くに行ってしまわないように、痛みに耐えながら手を伸ばす。
もう少しで、もう少しで彼の手に触れられる。陸奥はさらに手を伸ばす。その時、
「ゲホゴホッ！」
陸奥は激しく咳き込んだ。伸ばしていた手も口を押さえる為に引っ込めてしまった。
激しく咳き込み、手で必死に押さえる。その時、喉の奥から、熱い《何か》がこみ上げ、そしてそれは口からわずかばかりの勢いを伴って出てきた。
「陸奥！？」
その感触に、陸奥は驚く。そして慌てて隠そうとするが、そんな陸奥の手を、翔輝は強引に掴んで指を開かせた。
――陸奥の白い手、真っ赤に染まっていた。
「血ッ！？」
驚く翔輝は陸奥の顔を見詰める。陸奥はいつの間にか顔色は真っ青になっていた。そして、口からは真っ赤な血が溢れている。
「陸奥！　ど、どうしたんだよッ！？」
「ちゅう・・・い・・・ッ！」
身体中に痛みを感じながら、陸奥の中には《悪い予感》が渦巻いていた。
何か、恐ろしい事が、自分の艦体（からだ）の中で起きている。
陸奥は、必死に自分に声を掛ける翔輝を一瞥して、一体何が起きているのかを確認しようと窓の外を見詰め――絶句した。

部屋に備え付けられている艦尾が見える窓の向こうで、白い煙が上がっていた。その位置は第三砲塔付近――そこは、火薬庫の付近でもあった。

陸奥の顔からさーっと血の気が失せた。

まさか・・・ッ！

「中尉ッ！　逃げてくださいッ！」

陸奥はそう悲鳴を上げると、翔輝を力いっぱい突き飛ばした。

――刹那、大爆発が戦艦『陸奥』を包み込んだ。

すさまじい爆発は第三砲塔で起きた。火柱は天高くまで昇り、『陸奥』の堅牢な装甲を、艦体を貫いた。

大爆発のすさまじい威力に、『陸奥』の艦体はその身を貫いた炎の槍によって真ん中から真っ二つに折れた。艦体を折り、角度の浅い《く》の字型となる。

艦内は爆発の威力で壁や天井が崩れて瓦礫の山となった。

二人がいた部屋も爆発の衝撃で天井が崩れて瓦礫の山となった。

濛々（もうもう）と立ち込める塵（ちり）で薄暗い部屋の中、瓦礫の隙間には真っ赤な血の海ができていた。

血の海に倒れているのは陸奥。口からは咳と共に吐血を繰り返し、腹部からはおびただしい量の血が流れ出ていた。

もはや痛みすら感じない。

朦朧（もうろう）とする意識の中、陸奥は残った力を振り絞って首を回して必死に想い人を捜す。

「ちゅう・・・い・・・ッ！　どこ・・・です・・・か・・・ッ？」

必死に彼の姿を捜す。すると、あるものを見て陸奥は絶句した。

瓦礫の山から見えている、白い何か。それは人の手だった。

この部屋にいたのは自分と翔輝だけ。という事は――

「ちゅう・・・い・・・ッ！」

陸奥は仰向けだった身体を反転させて伏せると、力の入らない身

体を引きずって彼の元へ向かう。
本当はもうとっくに動けるような身体ではなかったが、彼女の心が、彼女の想いが、その身体を突き動かす。
必死に瓦礫を掻き分けながら近づくと、案の定それは人の手だった。
「中尉・・・ッ！」
陸奥は必死になって瓦礫を崩す。力の入らぬ手に必死に力を入れて、吐血を繰り返しながらも、泣きながらでも、必死になって瓦礫を崩す。そして、
「中尉ッ！」
瓦礫の下から出て来たのは紛れもなく翔輝だった。彼は頭から血を流しているが、それ以外は特にケガをしている様子はない。陸奥は安堵した。すると、
「む、陸奥・・・？　陸奥ッ！？」
翔輝は瞳を開けて陸奥の姿を目にすると、顔を真っ青にして飛び起きた。目の前の血まみれとなった陸奥の姿に驚きを隠せない。
「む、陸奥ッ！　どうしたんだよッ！　一体何が――うわッ！？」
陸奥のぐったりとした身体を抱き締めた途端、艦体が大きく震え、すさまじい勢いで傾きだした。同時に、陸奥は一際激しく咳き込んで吐血した。翔輝の身体が常人には見えない、艦魂の、陸奥の血で真っ赤になる。
「陸奥ッ！　しっかりしろッ！　おいッ！」
「ちゅう・・・い・・・」
もう意識が遠くなってきた。どうやらもう限界のようだ。
必死に自分に泣き叫ぶ彼の姿を見て、陸奥は最後の《力》を振り絞った。
自分はここで終わってしまうだろう。だが、彼を終わらせる訳にはいかない。
彼に生きてほしい。
別れとなってしまうけど、それでも、彼には生きていてほしい。

生きて、ほしい。
「なッ！？　何だッ！？」
翔輝は突然自分の身体が光り出した事に驚く。だが、すぐにそれが陸奥の《艦魂の力》だと気づく。そして、彼女の考えも・・・
「陸奥ッ！　お前ッ！　僕だけ助けるつもりかッ！？」
翔輝は顔を真っ青にして陸奥の身体を抱き締める。
「やめろッ！　そんな事をしたら、力を使っちまったらッ！　もう、お前は・・・ッ！」
「・・・これで・・・いいんです」
陸奥の口から漏れた声は、あまりに小さく、か細いものだった。
「中尉には・・・生きていて・・・ほしい・・・ずっと・・・一緒って約束・・・いきなり・・・破っちゃったですけど・・・許してください・・・」
「陸奥ぅッ！」
泣き叫ぶ翔輝の頬を、陸奥はそっと手で触れる――白い手に、彼の涙が流れる。
「・・・中尉・・・生きてください・・・ッ！　そして・・・姉さんや・・・大和ちゃん達を・・・頼みます・・・ッ！」
「陸奥ッ！　陸奥ぅッ！」
泣き叫ぶ彼の顔。見たくない、彼の辛い顔。彼には、ずっと笑っていてほしいのに・・・
「・・・最期に・・・これだけは・・・伝えたい・・・」
陸奥はゆっくりと身体を起こし、涙でぐちゃぐちゃになった彼の顔に、同じく涙でぐちゃぐちゃになった顔を近づけ――

そっと、口付けを交わした。

艦が大きく傾斜を続ける。
斜めに倒れていく景色の中、陸奥はいつまでも彼の唇に自分の唇を当て続ける。

そして、ゆっくりと離れた陸奥の顔は、満面の笑みが浮かんでいた。

それは、彼女が見せた――精一杯の、最高の笑顔だった。

そして陸奥は、心の中にある彼への想いを、悔いのないように口にした。

「長谷川中尉。あなたを、心の底から――愛しています」

瓦礫が崩れる音がした。

艦が悲鳴を上げる音がした。

戦艦『陸奥』の断末魔の悲鳴のような音が響き渡る。

そして、

「陸奥ううううぅぅぅぅッ――」

一人の少年の、大切な者を呼ぶ声が響き、途切れた。

次の瞬間には、彼の姿はどこにもなく、陸奥は一人真っ赤な海の上に力なく横たわっていた。

戦艦『陸奥』は急激に傾き、最後の瞬間を迎えようとしている己が艦体を見詰め、力なくため息した。

本当はもっと、彼と一緒にいたかった。

でも、もうそれも叶わない夢となる。

だけど、それでも、彼との大切な思い出があれば、きっと大丈夫。

これからは、ずっと彼を見守ってあげよう。

彼がこの戦争を無事に生き残れるように、幸せになれるように、祈ろう。

陸奥は静かに笑みを浮かべると、そっと、その瞳を閉じた――その瞳は、もう二度と開かれる事はなかった・・・

突如爆発を起こして轟沈した『陸奥』から一キロほど離れた位置にいた戦艦『扶桑』は、直後に『陸奥爆沈ス。一二一五』と発信した。

そして、その甲板には多くの艦魂が集まり、その光景に愕然とした。

戦艦『陸奥』が・・・陸奥が・・・死んだ。
突然の事に皆戸惑いが隠せない。そんな中、逸早く現実に戻ったのは・・・
「陸奥ッ！　陸奥ッ！　陸奥ぅッ！」
そう泣き叫びながら海に飛び込もうとしたのは陸奥のたった一人の姉――長門。そんな長門を駆逐艦の艦魂などが必死になって止める。
「放してッ！　陸奥が、陸奥がぁッ！」
「長門司令！　もう遅いんです！」
「やめてくださいッ！　陸奥司令はもうッ！」
「放して！　放してぇッ！」
暴れる長門に金剛が駆け寄って落ち着かせようとするが、長門は気が狂ったかのように妹の名前を叫びながら暴れる。
そして、陸奥の親友だった伊勢は・・・
「うそや・・・陸奥が死にはるなんて・・・絶対にうそや・・・うそやぁッ！」
辛い現実に泣き出し、何度も首を横に振ってその場に崩れた。そしてそのまま大声を上げて泣き出した。そんな姉を、妹を、日向と扶桑をそっと抱き締めた。二人の目にも涙が浮かんでいるというのに・・・
榛名は目の前の状況に愕然とする。「何で、何でだよ」と小さく連呼する。
武蔵は最初こそは愕然としていたが、すぐに踵を揃えて見事な敬礼を彼女に向けた。その瞳からは涙が一筋流れていた。
そして、大和は・・・
「陸奥さんッ！」
大和は泣きながら長門と同じように海に飛び込もうとする。そんな大和を慌てた様子で止めるのは敬礼していた武蔵。
「・・・姉さんッ！」
武蔵は大和を後ろから羽交い絞めにして押さえ込む。だが、大和

はそんな武蔵を振り払おうと暴れる。
「放してぇッ！　陸奥さんがッ！　陸奥さんがぁッ！」
「・・・姉さん！　落ち着いてぇッ！」
武蔵は必死になって暴走する姉を止める。向こうでは長門が駆逐艦達に押さえ込まれていたが、いかんせんこちらは武蔵一人だけ。しかも体格的には武蔵は大和より小柄なのでなかなか押さえ込めない。
「放して！　放してぇッ！」
暴れる大和を押さえ切れなくなり始めた時、
「大和司令！　お気を確かにぃッ！」
そう叫んで武蔵の横から大和にしがみ付いたのは大和の従兵の雪風。彼女のおかげで脱出し掛けた大和はなんとか押さえ込まれた。
甲板の上に倒された大和は二人に押さえ込まれているというのに大暴れして脱出を図ろうとする。
「放してッ！　陸奥さんを助けないとッ！」
「司令！　もう遅いんです！　陸奥司令は、陸奥司令はもう・・・ッ！」
「うそよッ！　早く陸奥さんを助けないとッ！」
泣き叫ぶ大和を押さえ込む雪風も、涙を流す。辛そうに顔をゆがめ、涙をぼろぼろと流し続ける。そんな部下の姿に、大和は暴れるのをやめた。
「もう・・・遅いんです・・・ッ！」
大和の白い頬に、雪風の涙がぼたぼたと垂れる。そんな彼女の姿に、大和はもう何も言えなくなった。
「雪風・・・」
「もう・・・遅いんです・・・」
雪風の言葉に、大和はようやく辛い現実を受け入れた。
――陸奥は、もういないのだと・・・――

「そ、そんな・・・ッ！」
大和は再び泣き出した。
いつも翔輝を巡ってケンカする事が多かった好敵手はであった陸奥は、もういないのだ。
辛い現実が受け入れ切れず、でも受け入れなくてはならない。そんな現実に、涙が止まらない。
「陸奥さん・・・ッ！」
苦しそうに涙を流す大和を、そっと抱き締める雪風。彼女も陸奥とは少なからず接点があった人物。彼女の死を目の前にして、自分も辛いだろうに、必死になって忠誠を誓う上官を励ますその姿に、まわりからは涙が溢れる。
そんな姉を悲しげに見詰め、武蔵は海から立ち上る黒煙を見詰めた。
「・・・翔輝に、伝えないと」
武蔵はそうつぶやくと身を翻す。その時、
「ちゅう・・・い・・・？」
今まで泣いていた大和が急に泣き止んだ。そしてすぐに顔を真っ青にして小刻みに震えだす。
「中尉・・・中尉・・・ッ！」
「司令！？」
大和は突如雪風を突き飛ばして再び柵を越えようとする。慌てて雪風がその足にしがみ付いて引きずり落とす。
「司令！　一体どうされたんですか！」
雪風は先程以上に大暴れする大和に叫ぶ。すると、大和は真っ青の顔から涙をぼろぼろと流して悲鳴のような声で叫んだ。
「中尉が、中尉が『陸奥』に乗ってるんですぅッ！」
『なぁッ！？』
大和の言葉に全員が驚愕する。
「・・・ど、どういう事？」
武蔵が震える声で問う。その顔は先程の陸奥の死の時よりもずっ

と驚愕に満ちていて、顔色は真っ青。
大和は皆の視線を受け、努めて静かに答える。
「中尉は、『陸奥』で開かれた航海科の会議に出席してたんです・・・まだ、帰って来てない・・・だから・・・中尉は・・・『陸奥』と一緒に・・・ッ！」
大和は泣き出しながらそう言った。その言葉に、皆は身体中から力が抜けるような感覚がした。
陸奥の死、そして翔輝の安否不明。皆もはや絶望的な顔をしていた。
「・・・翔輝ぃッ！」
そんな中柵を越えて海へ飛び込もうとした武蔵を、榛名が間一髪で止めた。
「武蔵テメェッ！　何すんだよッ！」
「・・・放してぇッ！　翔輝がッ！　翔輝がぁッ！」
「テメェッ！　さっき大和の時は止める側だっただろうがッ！」
「・・・関係ない！　翔輝！　翔輝ぃッ！」
武蔵は榛名の腕の中で大暴れして必死になって翔輝の所へ行こうとする。だが、その先は・・・
「武蔵！　あれを見ろッ！　あん中に長谷川はいるんだぞ！？　もう遅いんだよッ！」
榛名も自分で言いながら唇を噛む。彼女だって辛いはずだ。
「・・・遅くないッ！　翔輝は、翔輝は絶対に生きてる！」
武蔵はそう叫ぶと榛名の手から脱出した。驚く榛名や一同には目もくれず、柵を飛び越えようとした時、
「おいッ！　衛生兵を呼んでくれッ！」
突如甲板が騒がしくなって兵達が集まっていた。どうやらケガ人が出たらしい。
「おいッ！　しっかりしろぉッ！」
士官らしき男が手を振って駆け寄って来る衛生兵を呼ぶ。その瞬間、人垣が割れた。そして見えた。

それは頭から血を流して気絶している――翔輝だった。

「・・・翔輝ッ！」

武蔵は慌てて彼の元へ走る。その後ろから大和達も慌てた様子で走る。だが、その中に長門の姿はなかった。

長門は金剛におぶられて、そっと皆の輪から外れた。その背中は、見ていられないほど弱々しいものだった。

担架で運ばれる翔輝を、大和達は遠巻きに見詰めていた。近寄れば救助作業の邪魔になると思ったからだ。

「中尉・・・」

大和は胸の前で手を組んで翔輝の無事を祈った。武蔵も、伊勢も、雪風も、みんな祈った。

そんな彼女達の横では、蒼い海から舞い上がる黒煙が、いつまでも消える事なく天高く上り続けていた。

――戦艦『陸奥』、大正時代に英米海軍と正面から戦えるだけの戦力を保持する為を目的とした八八艦隊思想の中で計画建造された『陸奥』は、無限に広がっていく軍備拡張の中、ワシントン海軍軍縮条約で未完成艦と名指しされて廃艦の危機となったが、苦肉の妥協策の中でなんとか生き残る事ができた。竣工から太平洋戦争まで、国民の心を釘付けにしたまさに浮かべる城。日本海軍に『長門』と『陸奥』ありと国民を歓喜させた。絶大な人気を誇り、その人気は日本海軍全艦艇一番という人気艦となった『陸奥』は、観艦式などで国民の心を支え続けた。そして、そんな彼女は太平洋戦争でも大和型に続く主力戦艦として決戦の時まで戦争がどんなに厳しくてもその時を待ち続けた。だが結局、その時は訪れず、『陸奥』は最期の時を迎えてしまった。いまだに原因不明の爆発事故。突如第三砲塔から噴出した白煙と、そのすぐ後の大爆発によって艦体は真っ二つに折れ、すぐさま前部轟沈。後部も天高く持ち上がった後、ゆっくりと海底に没した。そして、沈み行くその戦艦は、ある少年に恋をしていた。決して実らぬ恋であったが、それでも彼女は恋に生き

続けた。きっと彼女は幸せだったのだろう。《陸奥》の死は、新たな物語の始まりとなった――

第九章　第一節　陸奥の想いは永遠に輝き（後書き）

どうでしたでしょうか？
ついに陸奥が死んでしまいましたが、原作とはずいぶん違う内容になっています。
原作では『陸奥』はトラック島に向かう途中に敵潜水艦の魚雷攻撃を受けて撃沈されていました。これはメインキャラである陸奥を殉職という形で失うのは嫌だったという僕の個人的な理由だったんですが、どうもこの部分は批判が多く、今回は史実どおり事故沈没という形になりました。
他のキャラに比べて陸奥の最期のシーンが短いのは、『陸奥』が一瞬で轟沈した為です。
これなら皆さんにも満足していただけると思います。
さて、これから先は陸奥の消えたメンバーで構成されますが、陸奥はメインキャラだったのでその穴を埋めるのは苦労しますが、なんとかがんばってみます。

第九章　第二節　堪えきれない悲しみの果てに

目が覚めると、そこは医務室だった。
なぜここにいるのか思い出せなかった。
起き上がった自分に、軍医が近寄って来て「帰られて結構です」と言った。
翔輝は頭に包帯を巻いたまま医務室を出た。まわりを見てもそこは見慣れぬ光景だった。どうやらここは『大和』じゃない別の軍艦の中らしい。
翔輝は戸惑いながらとりあえず甲板に出た。すると、
「中尉！」
その声に振り返ると、泣きながら大和が駆け寄って来た。そしてそのままの勢いで翔輝に思いっ切り抱き付いた。
「うわぁッ！？」
翔輝は突然の事に対処できずに転倒してしまった。なんとか頭部は守ったが、思いっ切り腰を甲板に強打してしまった。
「つぅッ！　お、お前――」
文句を言おうとした――だが、できなかった。
「ひぐ・・・えぐッ・・・」
――大和が、泣いていたから。
「や、大和・・・」
「良かった・・・ッ！　中尉だけでもご無事で・・・ッ！」
大和は翔輝にしがみ付いて涙をぼろぼろと流す。一体何が・・・
困惑する翔輝に、大和は泣きじゃくる。
「でも・・・ッ！　陸奥さんが・・・ッ！　陸奥さんがぁッ！」
その名前を聞いた瞬間、全てを思い出した。
瞳に映るのは、陸奥の最期の姿、最期の笑顔、最期の声・・・
「む、陸奥ッ！」
翔輝は慌てて『陸奥』が停泊していた場所を見詰める。だが、そ

こには蒼い海だけがあり、全長二一五・八mの巨艦はどこにも浮かんでいなかった。

「大和・・・陸奥は・・・？」

翔輝の震える声に、大和は小さく首を振った。

「陸奥さんは・・・殉職なされました・・・ッ！」

「そ、そんなぁ・・・ッ！」

愕然とする翔輝は頭の包帯に気づいた。それは『陸奥』が沈む原因となった大爆発の時にケガをしたものだった。そして・・・

「中尉には・・・生きていて・・・ほしい・・・ずっと・・・一緒って約束・・・いきなり・・・破っちゃったですけど・・・許してください・・・」

「・・・中尉・・・生きてください・・・ッ！　そして・・・姉さんや・・・大和ちゃん達を・・・頼みます・・・ッ！」

「長谷川中尉。あなたを、心の底から――愛しています」

浮かぶ彼女の最期の言葉に、翔輝は涙した。

あの声も、あの笑顔も、あの日々も、もう戻っては来ない。

陸奥は死んでしまった。

突然、何の兆候もなしに――翔香と同じように・・・ッ！

自分の腕の中で泣く大和も、今の翔輝には見えていない。

見えるのは、彼女との思い出。もう二度と帰って来ない大切な思い出。そして、もう思い出となってしまった彼女の笑顔。

翔輝は絶望した。

こんなにも唐突に、お別れが来るなんて、誰が思っていただろうか。いや、誰も思っていなかった。

「大和・・・戻ろう・・・『大和』へ・・・」

翔輝の力ない言葉に、大和は静かにうなずいた。そして、静かに

二人はその場から消えた。

『大和』に戻った翔輝と大和。「一緒にいたいです」と願う大和に対し、翔輝は「一人にしてくれ」と力なく答えた。

翔輝のあまりにも弱々しい背中に、大和はそれ以上もう何も言えなかった。

大和と別れた翔輝はとぼとぼと通路を歩いていた。

心の中には陸奥の死が受け入れられない自分がいる。それは当然だろう。あんな別れ方、誰が望むというんだ。

もう、何もかもが嫌だった。

霧島に続いて陸奥。あんなにも親しかった彼女達の突然の死。そしてそれらに重なるのは、同じく突然死んでしまった妹の翔香。多くの死が重なり、翔輝の心を壊す。

こんなのってない。

どうして自分のまわりの大切な人は、こうして忽然(こつぜん)と死んでしまうのだろうか。

どうして、いつも自分は一人ぼっちになってしまうのか。

翔輝は当てのない自問自答を繰り替えす。その時、

「・・・翔輝」

「・・・武蔵」

きっと翔輝は悲しんでいるだろうと心配してやって来た武蔵は、タイミング良く翔輝と対面した。が、事態は彼女の予想よりもはるかに深刻だった。

翔輝の瞳からは涙が溢れ、止まる事なくその頬を濡らしていた。悲しみを通り越して茫然自失している翔輝の姿は、武蔵の心を苦しめた。

「・・・翔輝。大丈夫?」

「これが、大丈夫に見えるか?」

翔輝は感情のこもっていない声で答える。そんな彼の言葉に、武蔵はまたも心を痛める。こんな彼は見ていたくない。

武蔵はだらんと垂れている翔輝の腕を取る。
「・・・少し、休んだ方がいい」
「・・・わかってる・・・そのつもり」
「・・・なら早く行こう。私も少し休みたい」
武蔵はそう言って彼の腕を引っ張った。だが、翔輝は動かなかった。
「・・・翔輝？」
「・・・あのさ・・・ちょっと・・・一人にして・・・お願い」
翔輝の言葉に、武蔵は背筋が冷たくなるのを感じた。
今の翔輝は陸奥の死のせいで正気じゃなくなっている。今放置しておけば何をするかわかったもんじゃない。あまりにも危険すぎる。
だから――
「・・・ダメ。今の翔輝を一人にしておくのは危険。だから、できない」
武蔵は首を振って彼の頼みを拒否した。だが、翔輝はその返答にピクリと眉を動かす。
「・・・お前には、関係ないだろ」
関係ない。その言葉に武蔵は傷ついた。だが、武蔵は諦めない。
「・・・関係ある。翔輝は私にとって――」
「うるさいッ！　もうほっといてくれよぉッ！」
翔輝は怒鳴るようにそう叫び、武蔵を突き飛ばして走り去ってしまった。
「・・・翔輝」
床に叩き付けられた武蔵は、走り去って行く翔輝をただただ見詰める事しかできなかった。
何もできない自分の無力さが、悔しかった。

自室に戻った翔輝は布団の中に潜っていた。
瞳に焼き付いているのは――陸奥の笑顔だった。
「陸奥が・・・死ぬなんて・・・信じられねぇよ・・・」

布団の中で涙する翔輝の心についた傷は、海よりも深かった。
あの時、彼女は死にそうになっていたのに、自分を助ける為に残っていた力を全て使った。どれだけ苦しく、辛かったのかは計り知れない。でも、それでも彼女は自分を助けてくれた。だが、自分は彼女を助ける事はできなかった。
無力な自分が、悔しくてたまらない。
どうして、霧島に続いて陸奥まで死ななければならないのか。
どうして、自分のまわりにいる大切な人は、次々に死んでいくのか。
どうして・・・ッ！
「陸奥・・・ッ！」
陸奥は大和、長門に続いて三番目に出会った艦魂だった。翔輝の艦魂の知り合いでは古参に入る奴だった。いつも明るく、よく大和と衝突していたけれど、大和と陸奥。どちらもよく一緒にいた艦魂だった。
傍にいつもいて、いつも大和とケンカして、いつも笑い合って、いつまでも傍にいると思っていた。なのに、もうその温もりは永遠に触れられない。閉ざされたその笑顔にはもう触れられず、思い出になってしまう。
そんなの、絶対に嫌なのに・・・でも、もうそれしか道は残っていない。
永遠に触れらなくなってしまったその笑顔はいつも明るく、自分を優しく包んでくれた。自ら自分の悲しく苦しい過去を話してくれるほど、彼女は自分を信頼し、傍にいてくれた。でも、もうそれは永遠にない。永遠に・・・
「クソッ！　クソオオオオォォォォォッ！」
翔輝は思いっ切り布団を殴りつけた。
もしも神というものがいるのなら、この手で殴り殺してやりたい。
――どうして陸奥が死ななければならなかったのか――
――どうして霧島が死ななければならなかったのか――

――どうして赤城や飛龍、巻風など多くの艦魂達が死ななければならなかったのか――

――どうして・・・翔香が死ななければならなかったのか――

翔輝は悔しそうに布団を何度も何度も叩く。

今も目を閉じれば思い出せる多くの笑顔。とても優しく、明るく、温かい笑顔だった。なのに、どうして彼女達は死んでしまったのか。どうして自分が、生きているのだろうか。

それが、悔しくて、苦しい。

大事な仲間が死ぬほど、翔輝の心にある鎖は強く巻き付く。永遠に消える事のないその鎖は、永遠に翔輝の心を締め続ける。

その鎖の名は――翔香。

陸奥や霧島の死が、翔香の死に重なり、翔輝の悲しみを増幅させる。

悔やんでも悔やみきれないあの出来事が、嫌でも思い出させる。それが《死》というもの。決して避けては通れず、苦しい道だ。

陸奥の死は、そんな道をさらに険しくする。

翔輝の瞳から涙が止まらずに溢れ出している。

その苦しさに耐えられず、翔輝は叫んだ。何度も、喉が裂けるほどの痛みを無視し、叫ぶ。二度と触れる事のできない者達の名を――

「翔香！　陸奥！　霧島！　みんな、どうして死んじまったんだよ！　どうして僕を一人にするんだよ！　どうして・・・ッ！」

胸が熱く、苦しい。耐え難い熱さと痛みが駆け巡り、翔輝を焦がす。永遠に消える事のない痛みは、翔輝に多大なダメージを負わせる。翔輝はそれを、耐え続けなければならない。永遠に――

「ううッ・・・陸奥・・・頼むから・・・戻って来てくれよ・・・ッ！」

翔輝は枕に顔を埋めた。そうすれば、何も見えない。何も聞こえない。そんな空間がほしかった。そうすれば、もう自分は苦しまなくていい。もう悲しまなくていい。永遠の苦しみから、例え少しでも、例え偽りでも、解放される。その時、

「お兄ちゃん・・・？」
ドアが開き、部屋の中にかわいげなツインテールをした幼い少女――隼鷹が入って来た。彼女は先日翔鶴達と共に呉に入港したばかりだった。隼鷹は心配そうに翔輝のいる布団を見詰める。翔輝を心配して来たのだが、思ったとおり、翔輝は落ち込んでいた。
隼鷹は翔輝の傍に近寄り、健気にも必死に励ます。
「お兄ちゃん。元気出してよ。陸奥が死んだのが辛いのはわかるけど、お兄ちゃんが苦しむのは陸奥だって望んでないよ？　ほら、笑ってよ。またあの優しい笑顔を見せてよ」
隼鷹は翔輝を励まそうと必死だった。とても健気で、微笑ましい。普通の時なら、こんな彼女を見ればどんな事も乗り越えられるだろう。だが、そんな隼鷹の言葉は、今の翔輝にとっては、耐え難い怒りに変わってしまう。
「お兄ちゃん」
「・・・何が、笑ってだよ・・・」
「え？」
驚く隼鷹に、翔輝は勢い良く起き上がるとすさまじい怒りを彼女にぶつける。
「何でこの状況で笑えるんだよ！　何で笑わなくちゃいけないんだよッ！」
翔輝は怒りに任せて拳を振るった。その拳は呆然としている隼鷹の腹に勢い良く喰い込んだ。
「かはッ！」
すさまじい一撃に、隼鷹は肺の中の空気を全て吐き出し、そのまま吹き飛ばされて壁に叩き付けられた。
何が起きたかわからない隼鷹は背中と腹にすさまじい痛みを感じ、何度も咳き込む。
「けほッ！　げほッ！　お・・・お兄・・・ちゃん？」
顔を上げると、そこにはいつも優しく、笑顔が素敵な愛しの兄ではなく、彼女が今まで見た事もないような怒りを放つ、翔輝がいた。

「何が元気出せだ！　何が辛いのがわかるだ！　お前なんかに僕の気持ちがわかってたまるかッ！」
翔輝は怯えている隼鷹に枕を投げ付け、部屋を走り出て行った。
残された隼鷹はあまりの恐怖に隅で丸くなるしかなかった。

「大和。元気を出せ」
翔鶴は大和をおんぶしながら言った。
「うん・・・ありがとうございます」
大和は力ない声でそう答えた。
先程翔輝と別れた大和は途中翔鶴達と出会い、ふらふらだった彼女を翔鶴が気を利かせておんぶしてくれ、今はこうして翔輝の部屋に向かっている途中だ。
「大和。今はゆっくり休んで。ね？」
自分も辛いはずなのに、瑞鶴はそんな仕草は見せずに笑顔を親友の大和に送り続けている。そんな親友の姿に、大和も小さく笑みを浮かべる。
「ありがとう、瑞鶴」
「ううん、気にしないで。私達親友でしょ？」
瑞鶴の言葉に、大和は心温まる。
そうして歩いていると、ようやく翔輝の部屋の前に着いた。
「あ、着いたみたい」
瑞鳳がそう笑顔で言いながら部屋のドアを開けて中に先導する。
すると、
「姉さん！？」
突如として飛鷹が驚愕の叫びを上げ、何かに駆け寄った。その先には、小さな隼鷹がさらに小さく丸くなっていた。
「姉さん！　どうしたの！？」
慌てて駆け寄った飛鷹は部屋の隅で丸くなっている隼鷹に触れて絶句した。
隼鷹は震えていた。何か恐ろしいものを恐れる小動物のような姿

は、彼女をとても弱々しく見せる。
「隼鷹！　どうしたの!?　ねえッ！」
瑞鶴と瑞鳳も駆け寄る。翔鶴は大和をベッドに寝かせてから遅れて駆け寄った。
「隼鷹。どうした?」
翔鶴は丸くなっていた隼鷹を抱き寄せ、その背中をさする。だが、大好きな翔鶴の腕の中でも、隼鷹は震え続けていた。
「お、お姉ちゃん・・・ううっ」
突然隼鷹は声を上げて泣き出した。その突然の事に皆も驚く。
「ど、どうしたと言うのだ?」
隼鷹の異変に尋常ではないと感じた翔鶴の言葉にも焦りが混じる。
散々泣いた後、隼鷹は口をそっと開き、震えながら小さな声を出す。
「お、お兄ちゃんに・・・お腹ぶたれた・・・」
『なッ!?』
瑞鶴達は絶句する。隼鷹の言う《お兄ちゃん》とは翔輝しかいない。その翔輝が人に手を上げる――ましてや隼鷹のような小さな女の子にするなど、とても信じられなかったからだ。
「あの平和ボケした長谷川が、お前を殴っただと・・・ッ!?」
翔鶴は信じられないといった顔をする。
「本当・・・なの・・・?」
瑞鶴が震える声で隼鷹に訊くと、隼鷹は力なく小さくうなずいた。
「そんな・・・ッ！」
瑞鶴は愕然とする。翔輝はそんな事をする人間ではないと信じて疑わなかったからだ。
「長谷川中尉・・・ッ！　よくも姉さんを・・・ッ！」
拳を強く握る飛鷹。その顔はすさまじい怒りに満ちていた。
「許せない。文句を言って来る！」
「待って・・・ッ！」
今にも殴り込みに行きそうな妹の飛鷹を姉の隼鷹が必死になって

止める。そんな姉に、飛鷹は激怒する。
「何でよ!?　何で止めるのよ!」
頭に血が上っている飛鷹に、隼鷹は泣きながら訴える。
「お兄ちゃんを怒らせちゃったのは・・・私なの。私が怒らすような事を言ったから」
「何を言ったのよ?」
「辛いのはわかるけど、元気を出して。笑ってって」
「普通じゃない!　どうしてそれが殴られなくちゃいけないのよ!?」
「・・・お兄ちゃんは、たくさんの人を失ってる。多くの辛さを知っているのに、私が軽はずみな事言ったのが許せなかったんだと思う・・・お兄ちゃん、泣きながら言ってた。『何が元気出せだ。何が辛いのがわかるだ。お前なんかに僕の気持ちがわかってたまるか』って。私、お兄ちゃんの一番触れちゃいけない場所に触れちゃった。怒られて、当然だよ・・・ッ!」
泣きながら言う隼鷹に、飛鷹は沈黙していた。翔鶴も、瑞鶴や瑞鳳も黙っている。隼鷹の自分を責める言葉は、とても辛く聞こえたから・・・
嗚咽をしながら泣く隼鷹を、翔鶴はそっと抱き締めた。
「翔鶴お姉ちゃん・・・ッ!」
隼鷹は翔鶴の胸の中で泣いた。年相応のその泣き方は、本物の少女と何一つ変わらないものだった。
無言で隼鷹の頭を、慣れない手つきで撫でる翔鶴。そんな姉の姿を見詰め、瑞鶴は自然と笑みが零れた。ふと、瑞鶴は大和のいるベッドを見て絶句した。そこにはさっきまでいた大和の姿はどこにもなかったのだ。
「や、大和がいないッ!」
瑞鶴の悲鳴のような叫びに翔鶴も驚いてベッドを見るが、誰が見てもそこには大和の姿はなかった。
「くそッ!　逃げられたッ!」

翔鶴は隼鷹を飛鷹に任せて部屋を飛び出した。
「ちょッ！　ちょっと待ってよ！　姉さん！」
「瑞鶴！？　私も行く！」
後から瑞鶴と瑞鳳が続き、三人の足音が通路の奥に消えて行った。
残された飛鷹はいまだに泣き止まない姉をそっと立たせる。
「姉さん、行こう」
飛鷹の言葉に、隼鷹はちいさくうなずいた。
隼鷹と飛鷹はゆっくりと翔鶴達の後を追いかけた。

その頃、『大和』の前甲板ではある争いが起きていた。
「離せよ！　武蔵！」
「・・・嫌ぁッ！」
逃げようとする翔輝に抱き付いて離そうとしない武蔵。
傍から見ても何か見えないものに引っ張られているのがわかるくらいの接近戦だった。
翔輝は自分を決して離そうとしない武蔵を力ずくで引き剥がそうとする。
「・・・そっちは、艦首！　何をするつもり！？」
「お前には関係ないだろ！？」
「・・・関係あるッ！」
ずるずると前に進む翔輝を、武蔵はその小さな体で必死に止める。
武蔵にはわかっていた。翔輝がこれからしようとしている事が――

――翔輝は、死ぬつもりなのだ――

翔輝は今まで多くの死と直面してきた。それが陸奥の死でついに限界に達したのだ。考えてみれば、翔輝だってまだまだ幼い若干十八歳。まだ成人してもいない少年なのだ。そんな彼が、家族全員の死や親しかった仲間の死などにいつまでも耐えられるものではない。いつかは必ず壊れてしまう。その時が――まさに今だった。

このままでは翔輝まで死んでしまう。武蔵は自分の命をかけて翔輝を死守しようと決めていた。

「・・・行かないで！　翔輝！　死んじゃダメッ！」

「うるさいうるさいうるさいッ！　お前なんかに邪魔をされてたまるか！　もう僕は嫌なんだ！　まわりの奴らが死んで行くのを見るのは！　もう死なせてくれよ！　翔香の所に行くんだッ！」

「・・・絶対に、ダメ！」

武蔵は身体全体で翔輝を押さえ、足に力を込めて必死に踏ん張る。いくら艦魂が人間よりは力があるといっても、武蔵の力じゃ本気になった翔輝を押さえ込めるのにも限界がある。

「・・・行っちゃ、ダメぇッ！」

武蔵は歯を食い縛って必死に彼の歩みを止める。

揉み合う二人は一進一退の攻防を続ける。そんな進もうとしても進めない状況に、翔輝はついにキレた。

「離しやがれクソガキッ！」

「・・・がぁッ！」

翔輝は武蔵の顔面を思いっきり殴った。突然の事に武蔵は避ける事もできずに拳は顔面に命中し、そのまま崩れ落ちた。

床の上でうずくまっている武蔵を一瞥し、翔輝は走り出す。が、

「お前・・・ッ！」

武蔵は諦めなかった。翔輝の足を必死に掴んでいる。《絶対に離さない》という想いが伝わるほど、武蔵は強く握った。上げられた顔は鼻血と涙でぐちゃぐちゃだった。だが、その瞳の中に宿る闘志はまだ消えていない。むしろ強く燃え上がる。

「・・・離さない！　絶対にッ！」

「このッ！　離せッ！　離せよッ！」

翔輝は容赦なく武蔵の小さな体に蹴りを連打した。蹴りが一回一回入るたびに武蔵は小さな悲鳴を上げるが、決して放そうとしない。ここで放したら、もう二度と触れられなくなる。絶対に放す訳にはいかない。だが、十数回目の蹴りが武蔵の腹に命中し、ついに翔輝

の足の戒めは解かれた。
翔輝は自由になった足を確認すると同時に武蔵を見た。
武蔵は蹴られた腹を押さえるように小さく丸まっていた。その肩は小さく震え、嗚咽と咳き聞こえる。見詰めていると、武蔵はゆっくりと顔を上げた。先程よりも涙や鼻血は量がすごく、何かを必死に訴える瞳も強くなっていた。
「・・・翔輝・・・ッ！　ダメ・・・ッ！」
「武蔵・・・」
その弱々し過ぎる武蔵の姿に、翔輝は一瞬手を差し出そうとしたが、すぐにそれをやめ、武蔵を見詰める。
「武蔵・・・ごめん・・・」
そうつぶやくと、翔輝は歩き出した。後ろで武蔵の必死の声が聞こえたが、無視した。
艦首のマストには日章旗が翻っていた。翔輝はそのマストの前に静かに立つ。そこからは船渠のゲートが見え、下を見れば水の抜かれた船渠の中に悠然とその巨体を置いているその高さを確認できる。高さは三〇メートルはある。ここから落ちれば、まず間違いなく死ねるだろう。
翔輝はさらに一歩前に出ようと重心をずらした。その時、
「中尉」
小さなその声はなぜか良く響いた。その声に驚いて振り返ると、おぼつかない足取りでこちらに向かって歩いて来る大和が見えた。
「大和・・・ッ！」
翔輝はそこを動けなかった――大和が、泣いていたから・・・
「中尉。何してるんですか？」
大和の瞳からは涙が溢れ続けている。
「そこは、艦首ですよ？　落下する危険がありますから、早くこっちに来てください。危ないですよ？」
大和はふらふらと近づいて来る。その顔は真っ青だった。
大和の登場に翔輝の決心が揺れるが、翔輝は首を振って邪念を振

り払う。
「く、来るなッ！」
翔輝は叫んだ。ここで何かしないと、自分は再び動けなくなってしまうと思ったからだ。
「これ以上近づくと、許さないぞ！」
その声が聞こえたのか、大和は止まった。が、何かを感じ取ったのか、その顔からはさらに血の気が失せ、真っ白になる。
「中尉まさか・・・ッ！　死ぬつもりですか・・・ッ！？」
翔輝は――何も答えなかった。しかしそれは、肯定の意の表れだった。
「そんな・・・ッ！　中尉――」
「来るなッ！」
大和が踏み出す前に翔輝は叫んだ。これ以上近づかれたくなかった。じゃないと、未練が残る。もう踏み出せなくなってしまう。それが怖い。
大和は切羽詰ったような顔をして死の直前に瀕（ひん）している翔輝に、泣きながら叫ぶ。
「中尉！　やめてください！　死ぬなんて、そんなの――」
「うるさいッ！　もう僕にはこれしか残ってないんだよぉッ！」
「違います！　まだたくさん残っています！　私や、長門さんや伊勢さん、武蔵だって」
床に突っ伏している武蔵からは何の返事もないが、おそらく大和と同じ気持ちだろう。
必死に自分を説得しようとする大和に、翔輝は耳を塞いで叫ぶ。
「うるさいうるさいッ！　あの・・・陸奥まで・・・死んじまったんだぞ？　僕の傍にいた・・・陸奥が・・・死んだんだぞ！　もう嫌だ！　人が死ぬのは、もう嫌なんだ・・・」
「中尉・・・」
大和は何も言ってこなくなった。その気持ちは、大和自身も同じなのだ。でも、だからと言って翔輝を死なすつもりは微塵もない。

「だから――死ぬんですか・・・？」
「あぁ、もう僕は十分生きた。翔香の死から二年。もう、疲れたよ・・・」
「そんな・・・ッ！　中尉が死んだら私はどうなるんです！？　私には中尉が必要なんです！」
「悪いけど、他を当たってくれ」
「嫌です！　中尉は――長谷川翔輝航海中尉はあなた一人しかいないんですよ！？」
「大和・・・」
「お願いです！　死なないでください！　中尉まで死んだら、私、どうすればいいんですか？」
大和は泣き崩れた。大声で泣き叫んだ。翔輝は何も答えない。いや――答えられなかった。大和のそんな姿、見たくなかったのに・・・
「大和。ごめんね。でも、僕はもう・・・」
翔輝もこれだけは譲れなかった。
もう、決めたのだ。
お互いに何も話し掛けない時間がしばらく続いた。そして、翔輝はもう話す事はないと首を横に小さく振って再び艦首の方を向く。
その時、
「・・・わかりました。中尉が決めた事なら、もう止めはしません」
「え？」
「・・・お姉ちゃんッ！？」
大和の言葉に翔輝も武蔵も驚いた。大和の口からそんな言葉が出てくるとは思ってもみなかったのだ。だが、
「でも、中尉が死ぬなら――私も死にます！」
「はあッ！？」
翔輝の表情は驚愕一色になった。大和の言っている意味が理解できなかったからだ。
「ば、バカ言うな！　何でお前まで死ななきゃいけないんだよ！

そもそも艦魂であるお前が自分の意思で死ねるわけないだろ！」
翔輝はそう叫んで絶句した。
大和が――不気味な笑みを浮かべたのだ。
唇の端を吊り上げた不気味な笑みを浮かべたまま、大和は言葉を繋ぐ。
「簡単な事です。私自らこの巨大戦艦『大和』の火薬庫、弾薬庫、機械室、発電機室を爆破すればいい事」
「なぁッ！？　ば、バカヤローッ！　大日本帝国海軍の象徴を吹き飛ばすつもりか！？」
翔輝は青ざめる。大和がこんな超破壊的発言を言うとは思わなかったのだ。思える訳ない。普段の大和を見ていればそんな事は考えられないからだ。
「仕方ありません。元々、艦魂である私が死ぬには本体である艦を破壊しなければ意味がありませんから」
「そ、それはそうだけど、まだ『大和』には通常時ほどじゃないけど整備員や多くの将兵が乗ってるんだぞ！　巻き込むつもりか！？」
「それは、仕方ありませんね。多少の犠牲はやむをえません」
「た、多少って・・・ッ！」
「多少です。もしこれが作戦航海中なら乗組員二五〇〇名を危険にさらします。ですが、今なら数百名の犠牲で済みますが？」
大和の言うとおりだった。もしこれが作戦発動中なら被害は甚大だ。でも修理中で兵達は休暇でいない今なら犠牲は最小限で抑えられる。が、
「バカヤローッ！　そう簡単に死を選ぶんじゃねえッ！」
翔輝の言葉に、大和は無表情で一蹴する。
「今の言葉。そっくりそのままお返しします」
「うぐッ！　ぼ、僕は・・・もういいんだよ！」
「何がいいというんですか！」
大和の悲鳴に、翔輝はビクリと震える。大和の瞳は本気だった。
本気の本気で、その瞳は鋭い刃を思わせる。

「中尉は人が死のうとするのは止めますが、自分の死はどうでもいいというんですか！？」
「――あ、あぁいいさ！　こんな命。もうどうでもいいよ！」
「・・・本気ですか？」
大和の瞳が大きく見開き、再び縁に涙がたまる。
「本気だよ。そもそも、みんな死んでいくのに、何で僕だけ生き残ってるんだよ？　霧島や陸奥の代わりに、僕が死ねば良かったんだ。むしろ、翔香の代わりに、僕が・・・僕が死ねば・・・良かったんだ・・・ッ！」
いつのまにか、翔輝の瞳からは涙が流れていた。
一人の時には涙を流す事はあっても、誰かの前では泣いた事のなかった翔輝が――泣いたのだ。恥じる事なく・・・
「中尉・・・」
大和はただただ見ている事しかできなかった。
わかっていた。翔輝はとても弱い人間だと。
いくら優しく、いつも笑顔で笑っている彼でも、十八歳の少年。
それなのに多くの死を見て育ってきた。そんな彼が内面がとても弱いのはわかっていた。わかっていたのだ。なのに――何もできなかった。
自分の無力さが本当に悔しい。自分にもっと力があれば、翔輝をこんなに苦しめずに、自暴自棄にさせなかったのに・・・
「・・・それは、違う」
その時、今まで苦痛に耐えていた武蔵が起き上がった。まだ鼻血は止まっていないが、武蔵は袖でその血を拭い取る。
「・・・もし、翔香の代わりに翔輝が死んでいたら、私達は出会う事はなかった。そんなの、考えたくもない」
武蔵は力強く、言った。それが、彼女の本心だから、
武蔵は動けずにいる翔輝に近づき――そっと、抱き締めた。
「・・・翔輝。もう一人で苦しまないで。これからは、私や姉さん、みんなを頼って。今まで、私達は翔輝に助けられてきた。今度は、

私達が翔輝を助ける番だから」
その瞬間、翔輝は今まで以上に涙を流した。
「武蔵・・・ッ！」
翔輝はそのまま武蔵を抱き締め、そして・・・
「うっ、ううっ、うわぁ、うわあああぁぁぁッ！」
大声で泣き出した。
それは、翔輝が初めて彼女達に見せた。彼の弱い一面だった。
ずっと、この言葉を待っていた。
翔輝だって、限界があった。でも、限界になっても発散できる所はななかった。でも、ようやく・・・ようやくできたのだ。
それが、自分の胸でないのが少々不満だが、今回は水に流す事にしよう。そう大和は思った。結局、自分が言いたかった事は全部武蔵に言われてしまった。おいしい所を取られてしまった。だが、悔しくはなかった。
今は、翔輝が死ななくて済んだ事が、一番嬉しかった。
「中尉。私も微弱ながらご協力させていただきます」
大和は武蔵のあんまりない胸の中で泣きじゃくる翔輝にそっとつぶやいた。その声を聞き、翔輝は何度もうなずいた。
なぜだろうか、翔輝より年下である自分が、翔輝のお姉さんになったように感じた。やっぱり、弱い一面を包んであげたいというこの気持ちは、年上も年下も関係ないようだ。
泣きじゃくる翔輝を抱き締めている武蔵の顔はボロボロだった。いまだに止まらない鼻血を何度も袖で拭いているので、彼女の黒い軍服の袖は異様に黒く染まっていた。そんなボロボロの姿だが、武蔵は微笑んでいた。嗚咽をしながら声を出して泣く翔輝を、武蔵はめったに表情を変える事のないその顔で――微笑んでいた。本当に嬉しそうだった。そんな笑顔を見て、大和の表情もほころぶ。
「今回は、私の負け――ね」
大和は誰に聞こえるでもない小さな声でそうつぶやいた。
その後しばらく翔輝は泣き続けたが、落ち着きを取り戻すと顔を

真っ赤にして武蔵から逃げるようにして離れた。そんな翔輝のかわいい行動に、二人は笑ってしまった。そんな二人を翔輝は恥ずかしそうに見詰めていた。その時、

「いたぞッ！」

「あぁッ！　長谷川中尉もいるッ！」

「斬るッ！」

「だ、ダメぇ・・・ッ！」

「大和！　危険よ！　離れて！　って、武蔵！？　鼻血出てるわよ！？」

やかましい声が複数響いたと思って振り返ると、そこには機動部隊のメンバーがそろっていた。その刹那、

「長谷川ッ！」

「中尉ッ！」

すさまじい怒声が響き、翔鶴と飛鷹がいきなり突貫して来た。あまりにも突然の事で、翔輝は回避も受身も取れずに二人の一本背負いと跳び蹴りをモロに受けてぶっ飛んだ。飛ばされた翔輝は危うく艦首から落ちそうになったが何とか踏ん張った。

「げほッ！　けほッ！　い、いきなり何するんだよ！？」

翔輝は当然の反応のように文句を言った。が、

「おい貴様。まさか反論できる身分だと勘違いしていないか？」

ぞくりと背筋が凍り付いた。翔鶴の冷徹過ぎるその声に硬直した。さらに、

「長谷川中尉。姉さんがお世話になったみたいで。ちゃんとお礼をしなければいけませんね？」

いつも冷静で優しい雰囲気がある飛鷹がこめかみに血管を浮かべて笑みを浮かべていた。正直言おう。めちゃくちゃ怖い。

だが、飛鷹の言葉でようやく状況が飲み込めた。恐る恐る瑞鳳の後ろに隠れている隼鷹を見ると、ビクリと震えて引っ込んでしまった。恐る恐るこちらを見ている彼女の顔は恐怖に満ちていた。

翔輝の悪い予感は、見事に当たっていた。

「覚悟はできているな？　長谷川」
翔鶴がボキボキと指を鳴らす。
「い、いや・・・その、これには深い訳が――」
「武蔵！　大丈夫！？」
さらに武蔵を心配した瑞鶴の声が響いた。翔鶴と飛鷹もそっちを見ると、武蔵はいまだに鼻血を出していた。
「・・・平気」
「いやいやッ！　とてもそうには見えないよ！？　っていうか、何で鼻血なんか出てんのよ！？　しかもなんかボロボロだし！」
「・・・べ、別に」
武蔵の微妙な反応に、勘が鋭い瑞鶴はピンと感づく。
「長谷川中尉にやられたの？」
「・・・」
武蔵は答えなかった。だが、それは肯定の意味だった。
「なるほど。これはさらにキツイお灸が必要だな」
こちらを向き直した翔鶴の顔はさらに険しくなっていた。さっきよりも怒りが増したのは一目瞭然。しかもさらに指がボキボキ鳴っている。
あぁ、僕死ぬんだ。今この瞬間に。
翔輝はかなり本気で死を覚悟した。だってこのままじゃ確実に殺されそうなんだもん。
「小さい女の子をいたぶって楽しいんですか？　あまり感心できる趣味だとは思いませんが」
飛鷹は完全に翔輝の事を誤解し始めていた。彼は決してそういう趣味はないのは当然だが、今の飛鷹に言っても無駄だろう。
「長谷川・・・ッ！」
「ご覚悟ッ！」
「ご、ごめんなさいッ！」
あまりの恐怖に泣き始めた翔輝の前に、武蔵が立ち塞がった。その後姿はとても凛々しくかっこいいと思った。が、正面にいる翔鶴

と飛鷹は一瞬口元が笑った。原因は瑞鶴に鼻に突っ込まれたティッシュが笑えるのだ。

「・・・翔輝を、いじめるな」

「いじめてなどいない。これは教育だ」

翔鶴は武蔵の目を見詰めて言い放つ。視線を無闇に外さないのは、きっとそれ以上下を見るとまた笑ってしまいそうになるからだろう。

「・・・こんなの教育じゃない。ただのいじめ」

「お前がそう思うのは勝手だがな。お前も長谷川にやられたんだろ？　仕返ししたくはないのか？」

「・・・そんな負の気持ちはない。それにこれは不可抗力だ」

「不可抗力って、お前なぁ・・・」

呆れる翔鶴。そんな彼女の横で飛鷹が諦めずに攻める。

「武蔵長官は良くても、姉さんの問題が残っています！」

飛鷹は怖い目で翔輝を睨み、翔輝は怯える。だがその視線を遮断するように武蔵が動く。しかし何も言わない。飛鷹の言っている事が事実なのか誤解なのかわかりかねているからだ。

「・・・翔輝。本当？」

武蔵は背中を向けたまま尋ねる。

「う、うん・・・」

翔輝の小さな返事に武蔵は「・・・そうか」と小さく答えた。それに対し飛鷹は「やっぱり・・・ッ！」と唇を噛む。そんな飛鷹を一瞥し、武蔵は隼鷹を見詰める。

「・・・隼鷹」

「な、何・・・？」

「・・・翔輝のした事は許しがたい行為。謝罪が必要だと思う」

武蔵の言葉に、翔輝は落ち込む。が、武蔵は構わずさらに攻撃する。

「・・・それで、隼鷹は翔輝を嫌いになったか？」

武蔵は冷たい視線を隼鷹に当てる。隼鷹は一瞬硬直するが、顔を真っ赤にして反論する。

「そ、そんな事ないもんッ！　私がお兄ちゃんを嫌いになる訳ないよぉッ！」
「・・・それは、本当か？」
「本当だよッ！　私、お兄ちゃんの事大好きだもんッ！」
「隼鷹・・・ッ！」
隼鷹の言葉は、翔輝の心に良く響いた。
隼鷹は自分の言った事があまりにも恥ずかしい事だと気づいて顔を真っ赤にして再び瑞鳳の後ろに隠れてしまった。そんな彼女を微笑んで見詰める瑞鳳。困ったような顔で見ている大和と瑞鶴。相変わらず無表情を貫く武蔵。いぶかしげに見ている翔鶴。そして、
「な、姉さん・・・ッ！」
隼鷹の為と思って行動していた飛鷹は頬を桜色に染めている姉の姿を見て愕然としている。
一方、翔輝は隼鷹を嬉しそうに見ていたが、突然顔をしかめ、そのまま急に立ち上がって走っていってしまった。大和達が止める暇もなかった。
「中尉！　待ってくださいッ！」
大和が慌てて追い掛ける。さらにその後ろから隼鷹が慌てて駆け出し、武蔵が歩いて行ってしまった。
残された四人は四者四様だった。
微笑ましく見詰める瑞鳳。困ったような表情を浮かべている瑞鶴。口元だけで笑っている翔鶴。そして、
「こ、これじゃあ私は何だったって言うのよぉッ！？」
飛鷹の悲痛な叫びが悲しくこだました。

全速力で翔輝は艦内に駆け込んだ。途中何人も水兵とすれ違って敬礼されたが、全て無視し、自室に駆け込んだ。そしてそのまま鍵をかける。肩で息していると複数の足音が聞こえてきた。
「中尉！　どうしたんですか！？」
「お兄ちゃん！　どうしたの！？」

「・・・翔輝？」

ドアの向こうで大和達が叫んでいる。だが、翔輝は耳を塞いでその場にしゃがみ込んでしまった。

さっきまではその場の空気で忘れていたが、自分は隼鷹と武蔵にひどい事をしてしまった。特に武蔵には顔向けなんかできない。

「・・・翔輝。どうしたの？」

武蔵の心配した声が聞こえた。それに対し、翔輝は震える声で返す。

「ぼ・・・僕・・・隼鷹や・・・武蔵に・・・ひどい事しちゃった・・・ごめん・・・ッ！」

「お兄ちゃん。私は気にしてないよ？」

「・・・翔輝。そんな事気にしないで」

二人は気にしてないと言ってくれたが、翔輝は優しい性格なので、とてもじゃないが彼女達に手を上げてしまった事には耐えられなかった。しかも、彼には昔翔香の事で瑠璃と大ゲンカしてしまった時も、激昂した勢いで彼女を殴り飛ばしてしまった経験があった。その時は仲直りはでき、瑠璃は気にしていないと言ったが、それから一週間はまともに会話ができなかった。だからこそ、隼鷹と武蔵から逃げてしまった。身体は震え、汗が止まらない。翔輝は硬直したままだ。しかも、今回は前回よりも症状がひどい。心臓が爆発しそうなくらい心拍数が跳ね上がっている。原因は簡単だった。

陸奥の死だ。

元々翔香の死以来精神は常人よりもモロく、霧島の死でさらに悪化。本人は自覚がなかったが、彼の精神はギリギリの状態だったのだ。そして、今度は陸奥という親友に近い友の死。これによって自殺の衝動に駆られたが、これはなんとか回避できた。しかし武蔵と隼鷹に対する突発的な暴力で翔輝の精神は積み重なっていたものと一緒に限界を超えてしまった。

翔輝は真っ青な顔を上げると、小さな声で「ちょっと、一人にしてくれ」と頼んだ。そしてそのままベッドの中に潜ってしまった。

大和と隼鷹は諦めずに呼び続けるが、武蔵がそれを制した。「・・・一人にしてやろう」。そう言った武蔵に二人は従うしかなかった。離れていく足音を無視し、翔輝はベッドの中で震えるしかなかった。

第九章　第二節　堪えきれない悲しみの果てに（後書き）

いつもご愛読ありがとうございます。今作もいつのまにか７０部という巨大なものになりましたが、これも皆様読者の方々のおかげです。

ここで皆様にもうひとつお礼です。

先日ついにこの《艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義》が全小説ランキングにランクインしました。サイト内の全約３万作品の中のベスト７５に、艦魂という旗を掲げる事に成功しました。もうこれは一位を狙うしかない！？（調子乗りすぎ）

まあ、そんなこんなでこれからもよろしくお願いします。まだあと戦争は二年以上続きますので（まだ半分も経ってない・・・）。

第九章　第三節　長門を繋ぐ大切な絆

陸奥の死からしばらくしたある日、金剛は『長門』に来ていた。慣れた様子で迷う事なく進み、目的の場所に到着する。そこは使われていない士官室だった。金剛はドアをノックすると、返事も待たずに「入るぞ」と言って入った。

部屋の中はびっしりと本が詰まった本棚が二つとベッド、机とそれとセットの椅子だけというシンプルなものだった。だが、そんな部屋の床は脱ぎ捨てられた軍服と下着、本、その他もろもろが散らばっていた。いつもならきれいに片付けられているが、陸奥の死以来長門は全く掃除をしなくなってしまったのでこんな状態になっている。

金剛は気にする事なく進み、ベッドの端に腰掛けた。

ベッドの掛け布団は膨らんでおり、ここに誰かいるのを表していた。

「長門。気分はどうだ？」

金剛はいつものぶっきらぼうの声を出すが、そこにはどことなく心配している気持ちがこもっているような気がする。

声を掛けられた長門は沈黙したままだ。起きているだろうが、今は何もしたくないのだろう。

「今日の会議には先任参謀の貴様はもちろん、参謀長の大和。さらに伊勢までが出席しなかったせいで会議にならなかったぞ」

金剛は愚痴（本人は愚痴だとは思っていない）を言う。そんな金剛にも、長門は反応しようとしない。

金剛はため息つくと立ち上がった。もうこの場に踏みとどまる必要はないと判断したのだ。

「まぁ、貴様が話をしたくないならそれでも構わん。今はゆっくり休め」

そう言う金剛の表情は、少し優しげに見えた。返事のない長門を

一瞥して部屋を出て行く。その時、
「金剛」
名前を呼ばれて振り向くと、長門が上半身を起こしてこちらを見ていた。少し見ない間にずいぶんとやつれていた。サラサラと流れ美しく輝いていた髪は風呂に入っていないのかベトつき、いろんな方向に跳ねていた。そして、瞳は真っ赤に充血し、目の下には隈ができている。ひどい有様だった。
「・・・寝て、いないのか？」
「えぇ、ずっと泣いてて眠れなくてね」
「そうか――隣、いいか？」
「えぇ」
金剛は再びベッドに腰を下ろす。うつむいている長門の乱れた髪を、金剛はそっと撫でる。
「ふん。貴様がこんなにひ弱に見えたのは、一体何年ぶりだろうな」
「さぁ、どうかしらね・・・？」
小さく笑う長門に、金剛は優しく笑う。
「やっと、笑えるようになったか」
「・・・えぇ」
そう答えると、長門は再びうつむく。そんな長門から視線を外して、金剛は窓の外の赤く輝く空を見詰める。
「どうだ？　少しは落ち着いたか？」
「えぇ、心配してくれてありがとう」
「ふん。何を今さら。これでも私と貴様は長い付き合いだ。心配しない方がどうかしている」
そんな明らかに照れ隠しの発言に、長門は微笑んだ。金剛は頬を赤くして不機嫌そうに腕を組む。
「な、何がおかしい」
「別に♪」
「別にって――ならその音符マークは何だ！？」
「さぁ、何でしょう♪」

「き、貴様・・・ッ！」

顔を真っ赤にして怒る金剛に、長門は今日一番の笑いをした。そんな嬉しそうに笑う彼女を見て、金剛は「ふん」と視線を逸らしただけだった。

夕日が徐々に傾き始めた頃、長門はふと聞いた。

「最近、みんなどう？」

「どうって――何が？」

「陸奥の死で、何か変わった？」

心配そうに訊いてくる長門。自分の事を棚に上げて他人を心配する態度に、金剛は心の中で笑った。だが、表情は依然不機嫌そうなままだ。

「そうだな。大和と伊勢は情報によると部屋に閉じこもっているらしい。ただし大和は武蔵の部屋にいるそうだ」

「え？　どうして」

「長谷川が部屋を占領してしまったからだそうだ。奴も今は休暇をとってずっと引きこもっているらしい」

「長谷川君が・・・」

長門は最後に見た彼の姿を思い出す。彼は『陸奥』に乗っていたはずなのに、『扶桑』の甲板で倒れていた。あれはきっと陸奥が最期の力を振り絞って彼を転送したのだろう。陸奥は彼に生きていてほしかった。そして、翔輝は陸奥の最期を見たただ一人。

人の死にもろい彼が、目の前で絶命し掛けている陸奥を目にして、無事でいられるはずはなかった。

「長谷川君、立ち直れるかしら・・・」

「ふん。あいつはアホでバカではあるが、そう簡単には折れない心を持っている。きっと大丈夫だろう」

金剛は珍しく翔輝をほめた。そんな彼女に長門も驚く。

「あら、金剛は長谷川君にそんなに優しい人だったかしら？」

「アホか。落ち込んでいる人間にとどめを刺すほど、私は冷酷ではない」

「ふふふ、そうね」
くすくすと笑う長門に、どこか釈然としない金剛。
「まぁ、貴様はもちろん、親友だった伊勢と好敵手だった大和。そしてその原因だった長谷川。陸奥の重要関係者は全滅といった所だ」
「そう・・・」
長門はため息した。予想通りか、それとも予定外なのか、それは彼女にしかわからない事だ。そんな長門を見ていた金剛だが、ふと時計を見ると眉をひそめた。
「もうこんな時間か。そろそろ行かなくては」
「・・・仕事？」
「あぁ、お前や大和の不在と陸奥の欠員で執行部とその補佐をする遊撃部の統制が取れてなくてな、極上幹部会の仕事が進まないらしい。そこで武蔵から野党である審理部部長の私に直々に救援要請が来ていてな。本当は友軍の劣勢しか書かれていない書類を処理するなど気は進まんが。旗艦直々の命令とあれば仕方がない」
そうつまらなさそうに言う金剛だが、その表情はどこか嬉しそうだ。そんな金剛に、長門は小さく微笑む。
「・・・変わったわね。金剛」
「そうか？」
「えぇ、今までなら上官であろうと自分より年下の命令を受け付けなかったあなたが、武蔵の命令を聞くなんて。よっぽどあの子がお気に入りみたいね。榛名がやきもち焼くわよ？」
長門のからかうような物言いに、金剛は鼻を鳴らす。
「ふん。武蔵は極めて優秀な人材だ。お前以来の優秀な艦魂だからな。その能力は私や貴様をも凌駕する。いずれ我が帝国海軍を導いてくれるだろう。その時に奴の下で機敏に動けるように今のうちに慣れとかんとな」
「それって、ただ単に恩を売っていつか彼女が重役になった時いい役をもらう為に媚(こび)を売ってるだけじゃない？」
「なぁッ！　貴様・・・ッ！」

「あら？　大当たり？」
長門が嬉しそうに言うと、金剛は殺意たっぷりの瞳で彼女を睨み、腰に挿した竹刀の柄をグッと握る。
「おい貴様。頼むから一発だけ殺らせろ。安心しろ。痛みは一瞬だから」
「そ、それはちょっと・・・」
冷や汗を流す長門を見て、金剛は苦笑した。
「思ったよりも元気になっているようだ。安心した」
金剛はそう言うと、立ち上がってドアに向かった。夕焼けに照らされてキラキラと輝く金色の髪は、天の川のように美しい。そんな彼女の背中に、長門をそっと声掛ける。
「金剛」
呼び止められ、金剛は振り返って不思議そうな顔をする。そんな彼女に、長門は満面の笑みを送る。
「私がいない間、みんなをよろしくね」
長門の言葉に、金剛も静かに笑みを浮かべた。
「あぁ、わかった。なぁに、お前や大和がいなくても、武蔵と私が何とかしておくからな」
「・・・えぇ、よろしく。相変わらず頼もしいわ」
「ふん。当然だ。私は大和の民だからな」
そう言い残すと、金剛は部屋を出て行った。
金剛が出て行った後、長門は再び布団に潜った。
なぜだろう。今度は今までなかった眠気を感じた。
金剛の顔を見て、安心したのだろうか。だが、今はもうどうでもいい。今はただ、眠りたい。それだけだった。
長門は数日振りに眠りについた。

その夜、涼しい風が流れ、月の光に照らされる戦艦『武蔵』の一室には二人の少女がいた。ベッドで横になっている元気のない大和と書類を見詰める武蔵の二人だ。

書類を見詰めている武蔵は書類から目を離し、ベッドを一瞥する。見詰めた先のベッドは微動だしない。
「・・・姉さん。大丈夫？」
武蔵はベッドの上で暗い雰囲気をかもし出している自分の姉の背中を見詰める。ここ数日ずっとこんな背中しか見ていない。
「うん。大丈夫・・・」
そう答えるが、あまり大丈夫そうには見えない。武蔵はため息して立ち上がった。そのまま鏡の前に立つと、身だしなみを整えて部屋を出ようとする。そんな妹に大和は不思議そうに声を掛ける。
「どこ行くの？」
「・・・翔輝の所」
「え？　わ、私も行くぅッ！」
さっきまでとはうって変わって大和は布団を吹き飛ばして起き上がった。ドアに手を掛けた武蔵はそんな姉を半目で見詰める。
「・・・翔輝の所と言っても、翔輝が入れてくれなきゃ入れない」
「大丈夫ッ！　瞬間移動を使えば簡単に入れる！」
「・・・」
呆れた目で見詰める武蔵。だが、大和はそんなの気にしない。そんな姉に武蔵は諭すように言う。
「・・・あくまで翔輝の様子を見るだけ。翔輝を困らせる事は厳禁」
「しないよッ！　ただ、最近中尉に会っていないから・・・中尉は私以上に陸奥さんと仲良かったから・・・」
大和の悲しげな言葉に、武蔵もうなずく。
「・・・私も最近会ってない。会いに行ってもいつも面会謝絶」
「そう・・・会って、くれるかな？」
「・・・わからない。でも、やれる事はやる。ただ、それだけ」
「うん」
武蔵の後に続いて、大和は部屋を出た。刹那、瞬間移動で一瞬にして翔輝の部屋の前に着く。二人はお互いの顔を見合ってうなずき、武蔵はドアを叩く。

「・・・翔輝。私」
「中尉。私です」
返事はなかった。会いたくないという意味だろうか。
「・・・入る」
「え？　でも・・・」
「・・・日本人なら、玉砕覚悟の突撃あるのみ」
「・・・それ、間違ってない？」
武蔵は無言でドアを開ける。意外にも鍵は掛かっておらず、すんなり入る事ができた。中に入ると、久しぶりの翔輝の部屋だった。だが、そこには目的の人物はいなかった。
「・・・翔輝？　いない？」
武蔵は無表情を少し崩した。変わった表情には焦りがあった。
「・・・翔輝がいない。どこ行ったの？」
「・・・あそこかな？」
大和は思い当たる場所があった。
「・・・どこ？」
武蔵はそんな姉を切羽詰ったような顔で見上げる。いつになく焦る妹に、大和は言う。
「防空指揮所。中尉はそこから星空を見るのが好きだから。幸いこの船渠には天窓があるから、たぶん・・・」
「・・・突撃あるのみ」
武蔵はそう言い残すと、光に包まれて消えた。おそらく防空指揮所の行ったのだろう。大和も慌てて後に続いて消えた。

その頃、翔輝はやはり防空指揮所にいた。
天窓から見える星空は、光り輝いていた。そんな星の輝きに照らされる翔輝の顔は、とても寂しげなものだった。
「・・・陸奥」
翔輝は静かにつぶやいた。その声は、とても小さく、弱々しかった。

金色に輝く月を、生気のない瞳で見詰める。この状態はもう一時間以上続いている。だが、彼はそんなに時間が経っている事もわからない。ただ、星を見ているだけだから。

「お前がいないと、寂しいよ」

翔輝はうつむく。今でもはっきりと思い出せる陸奥の顔。翔輝はそんな陸奥の笑顔を瞳に映していた。

瞳が濡れているのを感じる。

（また、泣いてるんだ。本当に情けないな、僕って）

一人沈黙している翔輝は、扉が開く音に気づき、扉の方を見る。

そこには、

「大和、武蔵・・・」

そこには大和と武蔵がいた。

「・・・翔輝」

「中尉・・・」

二人とも翔輝を見詰めている。そんな二人に、翔輝は力ない笑みを送る。

「どうしたの？　こんな所に来るなんてさ」

「・・・翔輝が部屋にいなかったから、捜しに来た」

「そっか、ごめんね。心配させちゃって」

「・・・気にしないで。私達が勝手にやった事だから」

武蔵は無表情でそう答える。そんな武蔵を、翔輝は悲しい目で見詰めた後、気まずそうに視線を逸らす。

「あのさ、この前はその・・・ごめん。あの時の僕、どうかしてた」

「・・・気にしないで。私は別に翔輝を責めたりしない。翔輝は悪くない」

「で、でも、僕は君にひどい事を――」

「・・・問題ない。その時受けた傷も、今では問題なく回復している。その程度の事で翔輝が考え込む事はない」

武蔵はどこまで翔輝の事を想っているのだろうか。小さな笑みを浮かべてそう言う武蔵は、天使に見える。

「本当？」
不安げに訊く翔輝に、武蔵はコクリとうなずく。
「・・・当然。翔輝にうそを言う理由は何もない」
武蔵の言葉に、翔輝は自然を笑顔になる――その笑みは、心なしかいつもの雰囲気を纏っていた。
「そっか、良かった――でも、本当にごめんね」
「・・・だから、気にしなくていい」
「一応謝らなきゃ」
そう言うと、翔輝は今度大和を見詰める。翔輝に見詰められ、大和は緊張して硬直する。そんな大和に、翔輝は心配そうに声を掛ける。
「大丈夫か？　あれから、どうだ？　立ち直ったか？」
翔輝の言う《あれ》とは、陸奥の死の事だろう。それに対し、大和は力なく首を振る。
「まだダメです。夜はほとんど眠れませんし、辛いです。でも、武蔵のおかげで少しずつ元気を取り戻しています」
「・・・私は何もしていない」
大和にほめられ、武蔵は珍しく頬を赤くして恥ずかしそうに姉に背を向ける。そんな妹に、大和は笑みを送る。
「ううん。武蔵のおかげだよ。武蔵がいつも傍にいてくれたから、私は錯乱せずにここにいられる。一人じゃないから、辛いのも和らぐ。本当に、あなたには感謝してる――ありがとう」
大和の笑顔に、武蔵は頬をさらに赤らめて「・・・うん」と小さく答えた。そんなかわいい反応をする武蔵に、大和は優しく微笑む。そんな二人を見て、翔輝も自然と笑顔になる。だがすぐにそれは引っ込み、再び悲しい表情で天空を見上げる。
「中尉？」
「――僕は、まだそこまでは立ち直ってないな。夜は全く眠れないし、陸奥の死が苦しい。それに、陸奥を思い出すと、霧島や翔香の事も思い出しちまう――本当に苦しいよ」

「中尉・・・」
翔輝は本当に辛そうな顔をしている。どれだけの辛さ、苦しさなのだろうか。彼の背負っているものはあまりにも重過ぎる。その辛さや苦しさはとてもじゃないが計り知れない。
「僕ね。こうやってよく星を見てるけど、まだ翔香の星は見つけてない」
「翔香さんの・・・星？」
「そう。人は死ぬと星になって大切な人を見守っていてくれる。それを僕は信じてる。だから、僕は僕を見守っていてくれる翔香の星を探してる。なのに今じゃ霧島や陸奥のも見つけなくちゃいけない。大変だよ」
翔輝は弱々しく笑った。翔輝につられ、二人も星空を見上げる。煌く星が三人を照らす。きれいだ。素直に思った。
（あの中に、翔香さんの星や、陸奥さん霧島さんの星があるんだ）
大和は翔輝の言葉を自然と信じられた。そう思うと、少し悲しみが軽くなった気がした。
そんな夜の世界に心を落ち着かせている二人に対し、武蔵は表情を変えずに無表情を貫いていた。
「・・・翔輝」
武蔵は翔輝の服の裾を掴んだ。振り向く彼を、武蔵は邪念のない純粋な瞳で見詰める。
「・・・夜の星空に心を寄せるのは悪くない。でも、輝く太陽の下で生きた方がいい。翔輝には、星の下じゃなくて紺碧の空の下で生きてほしい」
武蔵はそう力強く訴える。翔輝がもう一度太陽の下で生きてくれるように、
そんな武蔵を、翔輝は笑顔で見詰める。
「わかってるよ」
そう答えると、突如翔輝はお腹を抱えて笑い出した。
「・・・な、何？」

武蔵が混乱したような顔で見詰める。そんな彼女を、翔輝は目の縁に涙を溜めて笑いながら見詰める。
「なんかさ、お前らを見てたら嬉しくなっちゃってさ。まだ僕にはお前達が残ってるんだなって思ってさ」
「・・・翔輝」
翔輝はそう言うと、立ち上がった。おもむろに武蔵の頭を撫で、そのまま抱き締めた。急激な状況変化に武蔵は顔を真っ赤に染めて慌てる。
「・・・しょ、翔輝？　な、何するの？」
「なんか、急に抱き締めたくなったから」
「・・・そ、そう」
武蔵はしばらくすると、そのまま翔輝の腕の中に落ち着いた。その表情は翔輝から見えないが、大和から見れば一目瞭然。彼女らしくなく口元が緩んで瞳は幸せそうに細まり、大好きな主人の膝でくつろぐ子猫のような顔をしている。
「むぅ・・・」
大和は頬を膨らませて翔輝と武蔵を睨む。最近武蔵ばかりおいしい思いをしている。すごく不満だ。その時、大和と武蔵の視線がぶつかった。その瞬間――ニヤッ・・・
「なぁッ！？」
武蔵は勝ち誇った笑みを向けたのだ。大和は唇を噛んで悔しそうに武蔵を睨み付ける。その怒りは自然と翔輝の方に向く。
「中尉。私の妹を勝手に抱き締めないでください」
「え？　あ、ごめん」
翔輝は武蔵を離すが、武蔵は翔輝の服の裾を掴んで離れようとしない。そんな身勝手な妹の態度に、大和はキレた。
「いい加減にしなさい武蔵ッ！」
大和は武蔵の手を掴んで無理に引き剥がす。そして、
「中尉に抱いてもらうのは私なんだから」
「って、大和！？」

大和は翔輝に抱き付く。焦る翔輝をよそに大和は幸せそうな表情をする。そんな大和を無表情の武蔵が見詰める。だが、その口元は悔しそうに歪み、両手は腰のホルスターに伸びる。

「ちょっと待って武蔵ッ！」

翔輝は手でバツ印を作って武蔵を止める。こんな所で発砲すればとんでもない事になる。艦魂は単身では死なない為死ぬ心配はないが、世界最大最強の戦艦同士が争えば、その被害は甚大だ――まぁ、艦魂同士で戦えば確実に武蔵が勝つと思うが。

武蔵は不機嫌そうな顔を向ける。

「・・・姉さんは、ずるい」

「ずるいのはあなたでしょ？　いっつも中尉に優しくしてもらって」

「・・・それは姉さんに魅力がないだけ」

「なぁッ！？　この妹が・・・ッ！」

「・・・何？　姉」

大和は武蔵と取っ組み合いのケンカを開始した。と言っても攻撃をしているのは一方的に大和の方であって、武蔵は一方的にやられている。が、さすが武蔵。大和の攻撃を全て防御している。だがさすがにこのままにしておく訳にはいかず、翔輝は攻撃する大和を武蔵から引き離す。

「ちゅ、中尉！？」

「ほら、妹に殴り掛かるなんて姉として失格だぞ？」

翔輝が後ろから抱き締めるようにして大和を武蔵から離すと、難なく大和はおとなしくなった。その頬は赤く染まり、なぜか嬉しそうな表情を浮かべる。

「・・・何で笑ってるの？」

「えへへ、別に♪」

「？」

首を傾げる翔輝の腕の中で、大和は幸せそうな表情を浮かべる。すると、そんな大和を見詰めていた武蔵の視線に気づき、大和は再び勝ち誇った笑みを向ける。

武蔵は無表情で迎え撃つ。が、ゆっくりと腰のホルスターから二丁の拳銃を抜いて実の姉である大和に向ける。
「だから拳銃を抜くなってばッ！」
結局、翔輝が必死に止めたおかげで発砲未遂で終わった。だが、その後も大和は翔輝の右手、武蔵は左手にくっ付いて睨み合いを続け、翔輝は苦笑いを浮かべていた。

翔輝と大和、武蔵の三人は翔輝の自室に戻る為に通路を歩いていた。
「あ、あのさ。二人ともちょっと離れてくれない？」
「嫌です」
「・・・断る」
翔輝の願いも空しく、二人は翔輝にピッタリくっ付いたままだった。口では嫌そうにしているが、翔輝の表情はほころんでいた。陸奥の死以来艦魂達と距離を置いていた翔輝にとって、こうして触れられるのはずいぶんと久しぶりの事だったからだ。
そんな三人が歩いていると、対向方向から三人の少女が歩いて来た。
「おぉ、長谷川か」
歩いて来たのは翔鶴と瑞鶴。そして翔鶴の後ろに隠れている隼鷹の三人だった。
「翔鶴さん。瑞鶴に隼鷹も。どうしたんですか？」
大和が問うと、翔鶴は自分の後ろに隠れていた隼鷹を前に出す。
「うん？　あぁ、隼鷹が長谷川に会いたいというので連れて来たんだが、部屋にいなかったんでな。どこに行ってたんだ？」
「・・・デート」
「でッ！？」
「違うから。隼鷹驚き過ぎ」
翔輝のいつも通りなツッコミに、隼鷹はぱあっと満面の笑顔になる。

「良かった・・・お兄ちゃん元気になったんだ」
「え？　あ、うん・・・」
隼鷹の明るい笑顔を見て、翔輝の顔から笑顔が消える。そんな翔輝の態度に隼鷹が不思議そうに首を傾げる。
「お兄ちゃん？　どうしたの？」
「あ、うん・・・その・・・この前は、ごめん・・・」
申し訳なさそうにしている翔輝に対し、隼鷹は満面の笑みを向ける。
「お兄ちゃん。私全然気にしてないよ。だから、笑ってよ」
隼鷹は天使の笑みで翔輝に抱き付いた。そんな心優しい隼鷹を翔輝もそっと抱き締める。そんな二人を大和は不満そうに、武蔵は無表情で、瑞鶴は嬉しそうに見詰めていた。
「どうでもいいが、隼鷹だから許してくれたが、今度やったら私がお前を屠るからな」
不機嫌そうに言う翔鶴だが、その口元は嬉しそうに笑っていた。
「あぁ、わかってる」
翔輝は隼鷹の頭を撫でながらそう答える。翔輝に頭を撫でられ、ご機嫌な隼鷹。そんな光景を見かねた大和は翔輝の腕を取って走り出す。
「や、大和！？」
「もうッ！　早く行きますよ！」
「ちょ、ちょっと待って・・・ッ！」
翔輝を連行して行く大和に一同呆然としていたが、ハッと現状に気づき、隼鷹は慌てて「待てーッ！」と叫びながら追い掛け、武蔵はお辞儀をしてから用途不明の拳銃を抜いて走り去った。
残された翔鶴と瑞鶴は四人の消えた通路の先を見詰める。
「まったく、騒がしい奴らだ」
「まぁ、彼女達らしいじゃない」
二人はそのまま『翔鶴』の甲板に移動した。
輝く月に照らされる二人。

瑞鶴は楽しそうに甲板を走り回る。そんな彼女を翔鶴は苦笑しながら見詰める。

「ねぇ、姉さん。この戦いをどう見る？」

突然そんな事を訊いてきた妹に一瞬驚いたが、翔鶴は冷静に答える。

「勝ち目はほとんどない。だが全力で戦うまでだ。これ以上敵の侵攻を許す訳にはいかない。それに――」

「違う違う。戦いって、長谷川中尉を狙った恋の戦いの事よ」

「こ、恋だとぉ？」

少し頬を赤く染めた翔鶴が呆れて聞き返すと、瑞鶴は大きくうなずいた。

「くだらん。恋だの愛だの。今は戦時中だ。不謹慎にもほどがある」

翔鶴はそう見事に両断した。そんな姉の返事に瑞鶴は頬を膨らませる。

「それは言い過ぎだよ。愛や恋にはそんなの無力だと思うなぁ。それに大和や隼鷹が参加してるんだよ？　ちゃんと応援しなきゃ」

「私は恋なんてした事はないからわからん。それはお前も同じだろ？」

「さて、それはどうでしょう？」

「はぁ？」

意味ありげな笑顔を翔鶴に向ける瑞鶴。

「もしかしたら、私は姉さんよりも先に大人の女になってるかも」

瑞鶴の爆弾発言に、翔鶴は驚愕する。

「ま、まさか、お前、誰か好きな奴がいるのか!?」

驚愕する翔鶴をよそに、瑞鶴は「むふふ♪」と笑顔を向け続ける。

そんな妹の態度に、翔鶴は慌てふためく。

「い、いかんぞ！　姉である私が認めた男以外は絶対に認めん！　誰だ!?　一体誰なんだ!?　なッ!?　まさか長谷川ではないだろうな!?　お前まであんな平和主義者に好意を抱くというのか！　私は断じて認めんぞ！」

叫びまくる姉を見詰め、瑞鶴をお腹を抱えて大笑いする。
「な、何がおかしい！」
「あはははははッ！　ね、姉さん！　冗談だよ冗談。私はまだ誰にも心は奪われてないよ」
そう答えた瑞鶴の言葉に、翔鶴は安堵の息を漏らす。そんな姉を見詰め、瑞鶴はニヤニヤと笑う。
「でも、よーくわかっちゃった。姉さんが妹大好きの――シスコンだという事がね！」
「なぁッ！？　誰がシスコンだッ！　私は純粋にお前を心配――ってコラ待てッ！　まだ話は終わっておらん！」
笑いながら逃げる瑞鶴を追って、顔を真っ赤に染めた翔鶴は通路を翔け出した。

その頃、翔輝の部屋では翔輝と一緒に寝るのは誰かというのを決める為の話し合いが行われていたが、いつの間にか取っ組み合いの大ゲンカになっていた。そのケンカは翔輝が止めるまで続いた。
結局、翔輝は妥協案として全員に不可侵条約を締結させ、各自それぞれの布団を敷いてそこに渋々寝付いた。
翔輝も安堵の息を漏らし、床に就いた。

深夜、『瑞鶴』の甲板ではいつも同じ光景が広がっていた。
「そっか、みんな元気になって何よりだよ」
そう言って嬉しそうに微笑むのは刹那。そんな彼の横には瑞鶴が笑みを浮かべている。
「大和も元気になって良かったです」
瑞鶴が嬉しそうに話すのは、陸奥の死から立ち直った大和達の事だ。
一方的に嬉しそうに話す瑞鶴に対し、刹那は相槌を打つ。これが二人のいつもの会話だ。
たくさんたくさん話した瑞鶴は、一息入れるようにラムネを飲む。

「ぷっはぁ、おいしい」
「ははは、いい飲みっぷりだ。もう一本いくか？」
「もらいます！」
二本目のラムネを開けてゴクゴクと飲む瑞鶴を見詰め、刹那は静かに微笑んだ。瑞鶴はラムネに夢中だったが、刹那の視線に気がついて頬を赤くする。
「な、何ですか？　人の顔をジロジロと見て」
「うん？　いや、別に」
ニコニコとしたままはぐらかす刹那に、瑞鶴は頬を膨らませる。
「い、言いたい事があるならはっきり言ってください」
むぅと睨む瑞鶴に、刹那は優しく微笑む。
「いや、相変わらず瑞鶴はかわいいなぁって」
「かわ・・・ッ！」
予期せぬ返答に、瑞鶴は顔をボンと真っ赤に染める。
「な、何ですか突然！」
瑞鶴は恥ずかしさのあまり彼を正視できず、背を向けてしまう。そんな背中に掛かる長く黒い美しい髪を、刹那はそっと撫でる。
「ひゃぁッ！？　何するんですかぁッ！？」
「あ、ごめん。つい・・・」
「ついじゃないですよぉッ！」
髪を抱きながら瑞鶴は彼から距離を置く。非常警戒態勢だ。
うーと唸る瑞鶴に小さく微笑み、刹那はラムネを飲む。そんな彼に、警戒しながらも再び瑞鶴は近づく。
「なあ瑞鶴」
いきなり声を掛けられ、瑞鶴はビクリと震える。
「な、何ですか？」
警戒しながら訊く瑞鶴に、刹那は真剣な瞳を向ける。
「俺達はまた搭乗員育成の為に出撃するだろ？」
「え、えぇ。来週の終わりには出撃の予定ですけど」
何を今さらと言いたげな顔でそう言うと、刹那は「そうか」と小

さくつぶやく。
「何でそんな事を訊いたんですか？」
「うん？　いや、こうして訓練する日々を続けている間にも、敵は迫ってるんだろ？　いつかは決戦兵力として俺達機動部隊にも出撃命令が下るだろうけど、こんな兵達を引き連れて行かなきゃいけないと思うと、何だかなぁって思っちまって」
彼が言っているのは雛鳥となってしまった母艦機搭乗員達の事だ。い号作戦からずいぶんと経つが、まだまだ搭乗員は訓練不足だ。まともに編隊を組む事すら難しい。
瑞鶴だって本心では同意見だ。彼女は真珠湾からずっと日本海軍の最前線で戦い続けて来た歴戦の空母である。その時代の移り変わりを直接見てきた。
真珠湾の頃の荒鷲は、いつの間にか無事に巣も飛び立てないような雛鳥に変わってしまった。それは彼女自身が一番よくわかっている。
だけど・・・
「それでも、戦わなくてはならないんです。私達機動部隊は、日本海軍の最後の希望なんですから。いつかは、決戦が来ます。私達にできる事は、それまでにできるだけ力を上げてその時に備える事だけです」
瑞鶴はしっかりとした口調でそう言った。それは、彼女の想いでもあったから。
今ここで話していても、何にもならない。ならば、その時が来るまでがんばるしかない。それしか、自分達にはできないから。
瑞鶴の言葉に、刹那は「そうだな・・・」とつぶやき、月を見上げた。
金色の月は、いつまでも二人を明るく照らしていた。
照らす光は、そっと、繋がれた二人の手をも美しく輝かせた。
その頃、瑞鳳は自室にはいなかった。

寝巻きのまま枕を持ってそろそろと侵入したのは、剣の部屋だ。
ベッドの上では剣が気持ち良さそうに寝息を立てている。そんな彼に、瑞鳳は足音も立てずに一歩一歩近づく。
「そぉっと、そぉっと・・・」
「何してるの？」
そっと彼のベッドに忍び込もうとした瞬間、その彼の瞳が開いて声を掛けてきたので、瑞鳳はあまりにもびっくりしてベッドから転げ落ちた。
「お、おい大丈夫か？」
剣が起き上がって見詰める先では、頭を強打したのか抱えている瑞鳳の姿が。
しばし痛みが引くまで黙っていた瑞鳳だが、痛みが治まると不機嫌そうに頬を膨らませる。
「もう。何で起きてるのよぉ」
「さっきトイレに行ったからだよ」
「うぅッ！　剣のくせにトイレに行くなんて生意気よぉッ！」
「無茶言うなよ」
剣は呆れたような声を上げて起き上がる。そんな彼を瑞鳳は頬を膨らませて睨む。
「で？　一体何しに来たんだよ？」
「決まってるじゃない。あなたが寂しくないように添い寝してあげようと思っただけよ」
ツンとしながら言う瑞鳳に、剣は苦笑いする。
「はいはい。さっき飛行長がしてた怪談話を聞いて眠れなくなったからここへ来たのね」
「ち、違うッ！　私は怖くないもん！　怖くてブルブル震えていたのは剣の方でしょッ！　だから添い寝してあげる！」
今にも泣きそうな顔でそんな事言われてもまったく迫力はない。
瑞鳳は返答しない剣に、うろたえたように目線を泳がす。寝る前だからかメガネを掛けていないので、瞳の動きはしっかりと見える。

そんな瑞鳳を見て剣は、
「あ、おばけ」
「嫌ぁッ！」
瑞鳳は泣きながら剣に抱きついて来た。剣の腕の中で、瑞鳳は「おばけ嫌ぁッ！　あっち行ってぇッ！」と泣き叫ぶと、ガクガク震える。
「あ、ごめん。今のうそ」
剣が正直に言うと、
「剣のバカぁッ！」
瑞鳳は涙をぼろぼろと流しながらぽかぽかと彼の胸を叩く。だが、まったく痛くない。
散々殴った後、瑞鳳はふてくされたように頬を膨らませる。しかし、それでも剣から離れようとしない。そんな彼女の姿に、剣は自然と笑みが浮かぶ。
「もう、瑞鳳は怖がりなんだから」
「こ、怖くなんかないもん！」
「じゃあ離れてよ」
「これは剣が怖がらないように気を利かせて仕方なくしてるだけ！」
ぷんぷん怒る瑞鳳に、剣は苦笑いする。
どうも最近瑞鳳は意地っ張りになってしまったというか、素直じゃなくなったというか。とにかく扱いづらい。でも慣れてしまえばどうという事もない。
「そんじゃ、僕はもう寝る」
そう言って剣は布団の中に潜ってしまう。いきなり離れてしまった彼に、瑞鳳はむぅと頬を膨らませる。
「ほら、寝るんならさっさとしろ。明日はまた早いんだから」
剣の言葉に、瑞鳳は「バカバカバカぁッ！」とまたもぽかぽかと剣を殴った後、しばし躊躇し、頬を赤らめながら腕を組む。
「し、仕方ないわね。そんなに一緒に寝たいなら特別に寝てあげる。感謝してよね」

「はいはい。さっさと寝てください」
瑞鳳はようやく素直に剣の布団に潜る。すると、またも不機嫌そうに頬を膨らませる。
「むぅ、剣。何でそっち向いてるのよ」
どうやら背を向けているのが気にくわないらしい。また何か言われそうだったので、剣は仕方なく向きを変える。今度は目の前に頬を赤らめた瑞鳳の顔が来る。
「そ、そうよ。《れでぃ》に背を向けるなんて失礼よ」
「慣れてないなら英語は使うな」
「むぅッ！　剣のくせに生意気！」
再びぽかぽかと殴る瑞鳳に、剣はため息すると、
「さっさと寝ろ」
そう言って、剣は瑞鳳を抱き締めた。突然の事に瑞鳳は顔を真っ赤にするが、抵抗はしなかった。
剣はそのまま瞳を閉じて眠りについた。
瑞鳳はそんな彼の腕の中で、幸せそうに笑みを浮かべると、今度は自分からも彼に抱きつき、幸せそうな寝顔で眠りについた。

第九章　第四節　戻りつつあるいつもの日常

翌朝、翔輝、大和、武蔵、隼鷹の四人は朝の空気を吸う為に外に出ていた。
「今日は快晴。雲一つない青空がどこまでも続いている。そんな清々しい朝に――」
翔輝ははぁと疲れたようにため息する
「何で一言も口を利かないの？」
そう。今日起きた時から三人は冷戦状態になっていた。
原因は隼鷹が不可侵条約を無視して夜中に翔輝のベッドに潜り込んだ事だ。これには大和と武蔵も合同で戦うかと思ったが、武蔵は「・・・足手まとい」と大和の同盟提案を一蹴。大和はそんな武蔵の態度にキレて武蔵にも宣戦布告。結局同盟は結べず、三国時代に突入してしまったというのが原因である。
「・・・」
「・・・」
「・・・」
それぞれ大和が翔輝の右手に、武蔵が左手に、隼鷹がおんぶの状態という典型的な位置を確保し、現在は休戦条約が結ばれている。
「あはは・・・」
空笑いする翔輝。その時、
「翔輝様！」
「バカ翔輝！」
突然の声に振り向くと、そこには肩で息をしている瑠璃と珊瑚の姿があった。その奥には瑪瑙もいる。
「瑠璃！？　珊瑚！？　瑪瑙姉さんまで！　何でここに！？」
翔輝は驚愕する。なぜなら三人は瑠璃の両親に連れられて揃って貴族会の旅行で伊豆半島に行っていたのだ。帰って来るのは明々後

日で、今ここにこの三人がいるのはあまりにも不可思議だ。そんな瑠璃は翔輝に駆け寄り、彼に群がる三人を虫を払い落とすかの如く追っ払い、心配そうな瞳で翔輝を見詰める。

「戦艦『陸奥』が沈んだとの情報が入ったので、急いで戻って来たんですわ。翔輝様と陸奥様は良きお知り合いだと存じていたので、翔輝様が心配になって途中退場したのですわ」

「あ、そうなんだ・・・ありがとう」

三人が翔輝の顔を見詰めると、翔輝の顔は寂しそうな笑顔を浮かべていた。そんな翔輝の表情を見て、瑠璃は慌てる。

「ご、ごめんなさい。お、思い出させてしまって・・・」

「いや、別にいいよ」

そう言い、瑠璃の頬を撫でる。驚く瑠璃に、翔輝は優しい笑みをする。

「久しぶり。せっかく呉に帰って来たのに、あの後しばらくしたら貴族会の旅行でいなくなっちゃったし、ちょっと、寂しかったかな？」

「申し訳ないございませんですわ。どうしても断り切れなくて」

「ま、仕方ないさ。当主様のお誘いじゃ断れねぇし」

珊瑚はため息しながら言う。彼女の言う《当主様》とは瑠璃の父の事だ。分家の令嬢である珊瑚と瑪瑙は本家当主には逆らえないのだ。本人はかなり優しい人だが。

「そっか、ごめんね。迷惑掛けちゃって」

そう素直に謝ると、珊瑚はそっぽを向いてしまう。

「別にあんたの為じゃないわよ。瑪瑙姉さんがどうしてもって言うから仕方なくよ」

そうツンと言う珊瑚の横では、瑪瑙が「まったく仕方のない子だ」と小さく笑っていた。

「瑪瑙姉さんまでごめんね。心配掛けちゃって」

「気にしないで。それより、翔輝の方は大丈夫？」

「うん。大和達のおかげでなんとかね」

「そう、ありがとう」
瑪瑙は翔輝の後ろに隠れていた三人に笑みを送った。超絶美人である瑪瑙が笑みを浮かべると、それはもう美しいの何の。同じ女性なのに大和達からもため息が漏れてしまう。
一方、瑠璃はどこか疲れた様子の翔輝を心配そうに見詰める。
「でも、本当に大丈夫なんですの？　元気がないように見えますが」
「うん。最初はショックも大きかったけど、今はもう大丈夫」
「本当ですの？」
「うん」
翔輝の言葉に瑠璃は安堵すると、にこやかな笑顔になる。
「そうですか。本当に申し訳ございませんでしたわ。翔輝様が一番辛い時にいられなくて」
「別にいいよ。それよりお前と会えて良かったよ」
翔輝が笑顔で言うと、瑠璃は頬を赤らめて笑顔で「私もですわ」と答える。そんな春風のような二人を、鉛筆があったら折りたい衝動に駆られている大和。頬をぷっくり膨らませて不機嫌そうな顔をしている隼鷹。無表情を貫く武蔵が見詰める。
「ま、どうせ何かあっても平気な顔してるからね。このバカ翔輝は」
そう言ってズイッと人差し指で翔輝を挿す珊瑚。口調こそは不機嫌そうだが、その顔には笑みが灯っている。
「ま、元気そうで何よりだよ。あんたに何かあったら、瑪瑙姉さんや瑠璃が悲しむからね。特に姉さんを泣かせたら、承知しないんだから」
どこか嬉しそうに笑いながら言う珊瑚に、翔輝も自然と笑みを浮かべる。
「ははは、瑪瑙姉さんって泣くのかなぁ？」
「失礼な。私だって泣く事はあるさ」
瑪瑙が無表情で翔輝の頭を小突く。そんな彼女に翔輝は「ごめんなさい」と笑いながら謝ると、瑪瑙は「まったく」と腕を組む。だが、その口元には小さな笑みが浮かんでいた。

久しぶりの再会に、翔輝も嬉しそうに微笑む。すると、瑪瑙はそんな翔輝の軍帽を取って頭の上にポンと手を置き、かわいい弟の頭を撫でる。
「大きくなったな」
「も、もう。人前でこういう事はやめてよぉ。恥ずかしいのにぃ・・・」
翔輝はそう言って怒るが、自分の頭を撫でる瑪瑙の手を振り払おうとはしない。恥ずかしそうに頬を赤らめるばかりだが、それでも少し嬉しいのだ。
そんな誰かに甘える珍しい翔輝をとてもうらやましそうな目で見詰める大和達。
しばし翔輝の頭を撫でていた瑪瑙だが、ふと何か名案を思いついたような顔をして、笑顔で翔輝を見詰める。
「そうだ翔輝。これから一緒に食事でもどう？　まだ食べてないでしょ？」
「お、いいね。朝食まだだからお腹ぺこぺこだったんだぁ」
「それはもう行動ありですわ。すぐに行きましょう！」
そう言ってなぜか翔輝の手を取って走り出す瑠璃。そんな独占禁止法に違反（？）しそうな瑠璃の行為に二人が先陣を切る。
「ダメです！」
「お兄ちゃんを連れて行っちゃダメ！」
大和と隼鷹が阻止するが、瑠璃は毅然とした態度で、
「これはすでに決定事項ですわ」
「いや、それは違うと思うが」
瑪瑙がツッコミを入れるが、瑠璃は気にせずにグイグイと引っ張る。
「翔輝様も私達と一緒にお食事したいですわよね？」
瑠璃は必死な瞳で翔輝を見詰める。そんな瞳にえらく弱い翔輝。
さらに、
「ねぇバカ翔輝。あんたに選ばせてあげてるんだから、さっさとし

なさいよね。私は早くみんなで楽しく食事がしたいんだから」
きっと首を縦に振らないとえらい目に遭わされるであろう珊瑚の鋭い視線。こんなダブル攻撃に晒されては、翔輝に拒否権なんて絵に描いたモチよりも意味のないものだ。しかし、
「中尉！　行かないでください！」
「お兄ちゃん！　行っちゃ嫌だよぉッ！」
今にも泣きそうな大和と隼鷹に服の裾を引っ張られる。この状況も翔輝はものすごく弱い。
基本的に優柔不断が服を着て歩いているような翔輝にこんな究極的な選択をしろという方が無理な話だ。
翔輝は武蔵か瑪瑙に助けを呼ぼうとするが、なぜか二人は黙って自分を見ている。そして、その瞳を見て翔輝は悟った。
――二人は、信じている。自分が彼女達の方へ行くと。
しかし、残念な事に二人は相反する主張をしている。優柔不断な翔輝にそんなの決められるはずもなく・・・
「翔輝様！」
「バカ翔輝！」
「中尉！」
「お兄ちゃん！」
「・・・翔輝」
「翔輝」
六人の乙女の視線が翔輝の心を貫く。
「もうッ！　どうすりゃいいんだよぉッ！」
翔輝が悩みすぎて発狂し掛けた、その時、
「こんのクソガキイイイイィィィィッ！」
突然野獣の咆哮が轟き、翔輝達の目の前にポニーテールを揺らす格闘系少女が見事な跳び蹴りを放ちながら登場した。だが、少女の感度抜群の跳び蹴りを瑠璃紙一重で回避した。
「また、あなたですの？」
呆れる瑠璃の前にきれいに着地した少女は、連合艦隊戦艦でも古

参に入る艦魂だった。
「ちっ、避けられたか。もうちょっと助走が必要だったか。悔しいな。後もう少しでテメェの首をぶっ飛ばしてやったのによ」
とんでもない事を言っている少女の名は――榛名と言う。
「榛名。久しぶり」
翔輝が笑顔であいさつすると「お、おう」と驚いた顔で翔輝を呆然と見詰める。
「何か嫌な予感がしたから来てみりゃこのクソガキはいるわ、しばらく音信不通だった長谷川はいるわ、一体どうなってんだ？」
「音信不通って、蒸発した訳じゃないんだからさ」
「似たようなもんだろ？」
相変わらず礼儀もクソもない物言いの榛名。だが、そのいつもどおりの彼女が嬉しい。
榛名は瑠璃の隣にいた珊瑚と瑪瑙にあいさつする。どうやら彼女が目の仇にしているのは瑠璃だけらしい。まあ、瑠璃ほどの自己中心的な人もそうはいないだろう。
榛名は大和と隼鷹、武蔵にも一応あいさつを済ますと、再び翔輝を見詰める。その瞳には心なしか心配しているような感じがした。
「もういいのか？　陸奥が死んでからずっと部屋にこもってたんだろ？」
榛名はそう言って翔輝を下から上まで見回す。どうやら異常がないか確認しているらしい。そんな彼女に翔輝も笑顔で答える。
「うん。でももう大丈夫。それにそろそろ仕事をしないとまずいし」
「だな。いつまでもその調子じゃクビになるかもしれないしな」
「これでも一応エリートコースを生きてきたからね。ここで舵を取り間違えちゃ本気でまずい」
「けっ、自慢話かよ」
「事実だしな――それよりお前は平気なのか？」
「は？　俺か？」
突然自分に話を振られた榛名は驚く。そんな彼女に翔輝は言葉を

繋ぐ。
「あぁ。僕よりお前の方が陸奥と長い付き合いだろ？」
翔輝の質問に榛名は「あぁ」とうなずくと、小さく苦笑する。
「まあな。俺も結構ショックが大きかったけど、大和に長門が倒れたから極上幹部会の指揮系統が混乱してたからな。それの処理を姉貴とやっているうちに落ち着いたな」
「す、すみません」
榛名の言葉に大和が謝ると「何言ってんだよ」と榛名が笑い返す。
「お前らのおかげで俺は落ち込まなくて済んだんだ。礼を言うのはむしろこっちの方だぜ」
「榛名さん・・・」
嬉しそうに互いを見詰め合う榛名と大和。そんな二人を一瞥して瑠璃は何事もなかったように翔輝の手を引っ張る。が、そう簡単にはいかないのがこの両名である。
「瑠璃さん！　中尉を連れて行くのはなしです！」
「テメェッ！　いい加減にしろ！」
睨み付ける二人に、瑠璃は満面の笑みで、
「翔輝様は私の許嫁ですわ。どうしようと、私の勝手ですわ」
「その設定、まだ続いてたんだ・・・」
「抑止力には十分な効力を発揮しますわ」
「まぁ、そりゃそうだろうけどさ・・・」
どうもその設定が新たな火種になりそうで翔輝はため息する。そして見事にそれは命中した。
「許嫁が何だって言うんですか！」
「そうだそうだッ！」
「所詮テメェらの親同士が決めただけのしょぼいもんだろうが」
三人が瑠璃を睨み付ける。瑠璃も反撃するように三人を睨み返す。
そして、冷戦はついに開戦した。三対一のケンカは過激なものになった。
「何でこうなるのかな？」

「さあ、瑠璃が敵を大勢作るのは昔からじゃない」
「確かに。それでいつも翔輝が巻き込まれてたな」
「私も巻き込まれて大変だったんだから」
「あははは、そういえばそうだね」
翔輝、瑪瑙、珊瑚の三人はそんな光景を昔と重ね合わせてどこか懐かしそうに会話する。こういう時に共通の思い出があるのはうらやましい。こうしたところに積み重ねてきた年月の差というものが色濃く出てくるのだ。
昔話を楽しそうに話す翔輝を見詰め、どこか寂しそうに瞳を揺らした武蔵はそのまま翔輝の服の裾をちょこんとつまんだ。その時、
「まったく、いつも元気いっぱいね」
突如響いたその大人びた声に、大和達の喧騒は止んだ。全員がある一定の方向を見詰める。その先には、
「みんな、おはよう」
「長門!?」
『長門さん!?』
そこには死んだ陸奥の姉である長門がいた。その表情はいつもと変わらずほがらかなもので、とても優しげだ。その横には相変わらず不機嫌そうな顔をした金剛と無表情を貫く山城もいる。
「貴様ら、一体何をしとるんだ？　榛名。貴様もだ」
「あ、姉貴・・・悪い。ちょっと調子にのってた」
金剛に掛かれば強暴な榛名もヘビに睨まれたカエルのようにおとなしくなってしまう。だが、さすがの榛名も長門の登場には驚く。
「長門。もういいのか？　もう少し休んでた方が・・・」
「遊撃部の副部長である陸奥がいなくなった今、部長である私まで休んでちゃ混乱するでしょ？」
「けどよ・・・」
心配する榛名の頬を、長門は笑顔でそっと撫でる。
「大丈夫よ。金剛のおかげでずいぶん落ち着いたから。ね？」
「ふん」

金剛は不機嫌そうな顔を向ける。長門にはそれが照れ隠しだというのは丸わかりだった。

次に長門は大和と翔輝に近づいた。

「それよりあなた達は大丈夫なの？」

「あ、はい。もう大丈夫です」

大和はそう答えて微笑んだ。そんな大和の頬を撫でて、今度は翔輝を見詰める。

「長谷川君は？」

長門はこの日一番心配していた翔輝にそっと問う。翔輝はそんな長門に包み隠さずちゃんと今の自分の気持ちを言う。

「最初は辛くてしょうがなかったけれど、今じゃずいぶん落ち着きました。みんなのおかげです」

翔輝の返事に、長門は安堵したのか、静かに笑みを浮かべた。

「そう・・・長谷川君。陸奥の事、忘れないでよね？」

「当たり前です！　忘れたりなんかしません！」

本気で怒る翔輝を見て、長門は「やっぱり長谷川君は優しいのね。陸奥の目は確かだったようね」と小さく笑った。

次に長門は霞家の三人に微笑む。まず最初に一番接点の多い瑠璃にあいさつする。

「久しぶりね。瑠璃」

「・・・そんなふうに呼ぶような仲ではないと思いますわ」

「いいじゃない。仲良き事は良き事よ」

「全然良くないですわ」

呆れる瑠璃に対しても、長門はほがらかな笑みを崩さない。そんな長門を見て、瑠璃は小さく微笑んだ。

「妹さんの死は悲しい事でしたわ。でも、これからも御国の為にがんばっていただきたいですわ」

「もちろん。最善を尽くすつもりよ」

笑い合う二人は、強く手を握り合った。そんな光景を、まわりにいる艦魂達は微笑ましく見詰めている。

次に長門は珊瑚と瑪瑙にあいさつするが、長門とこの二人はあまり話した事がないので会話が成り立たず、お互いに沈黙してしまう。だが、
「妹さんのご冥福をお祈りします」
そう言ったのは瑪瑙。これに会話の糸口を見つけた長門は小さく微笑む。
「ありがとう。そういえばあなたは長谷川君と長い付き合いなのよね？」
長門の問いに、瑪瑙は誇らしげにうなずいた。何が誇らしいのかはわからないが。
「その通り。私は翔輝のオムツを替えた事もあるほどの長い付き合いだ」
「ね、姉さんッ！」
「ちなみにこれが翔輝のこれまでの写真を満載した《翔輝・愛のメモリーアルバム》よ」
「げぼおおおおぉぉぉぉぉッ！　ね、姉さん！　そんなもんどっから出したんだよ！　つーかそもそも何でんな物を持ってるんだよッ！」
「これが幼稚園の頃の写真」
『見せてぇッ！』
瑪瑙の広げたアルバムに大和達が群がる。翔輝はもう何からツッコミを入れればいいのかわからず立ち尽くす。
「これが小学校の入学式の写真」
「うわぁ、かわいいですぅ！」
「お兄ちゃんが弟みたい！」
「あら、かわいいじゃない」
「こ、これが長谷川？」
「・・・焼き増しして」
「何度見ても、翔輝様のかわいさは爆発ですわ」
「ほんと、この頃の翔輝はかわいかったわよね」

「おいッ！　何で人の成長記録を見てほんわかした雰囲気を作ってんだよ！　姉さんもそれはしまってよ！　恥ずかしいから！」

翔輝の悲鳴をも無視し、瑪瑙は次々に写真を見せていく。その度に大和達からはキャーとかいやーんとか黄色い悲鳴が聞こえる。そして、翔輝はどんどんブルーになっていく。

「これが翔輝が幼稚園に通っていた頃の写真。この時の翔輝もとてもかわいかった。ほっぺなんかぷにぷにとしていてね」

『かわいいーッ！』

「だーかーらーッ！　恥ずかしいからやめてくれえええぇぇぇッ！」

「この頃の翔輝は、近所のバカな子供達にいじめられていたんだ。それを見つけた私が、そいつらを追っ払ってやったのよ。そしたら翔輝、すっごく感謝してくれて・・・大人になったら結婚しようって約束してくれたの・・・あの時の翔輝の言葉、今でも忘れられない・・・」

「そんな事言ってないよッ！　僕がその時に言ったのは、いじめっ子達をもう許してやってくれって事だけだッ！　僕がいじめられているのを目撃して怒り狂った姉さんは、いじめっ子達を全員半殺しにしたんじゃねぇかッ！　あの時の修羅のような姉さんの顔は忘れられないよッ！」

翔輝は今さらながら重大な事を思い出した。

――瑪瑙は、極度のブラコンだったのだ。

本当の姉弟じゃなくても、ずっと似たような関係で育ってきた二人は、本当の姉弟のようだった。そして、そんな中瑪瑙は極度に翔輝に惚れ込んでしまい、翔輝の為なら何でもするというブラコンになってしまったのだ。今でも彼女の家には翔輝の写真しかない本格的なアルバムが七冊あり、金庫の中には翔輝が幼稚園の頃にプレゼントした肩たたきが大切に保存してあり、豪華な宝石が散りばめられた宝石箱の中には瑪瑙の十四歳の誕生日に当時まだ小学生だった翔輝がわずかなお小遣いを全部使って買ってあげた安物のネックレスが大切に保存してある。確かにそのネックレスはそんなに高価な

ものじゃない。だが、瑪瑙にとってそのネックレスは何十億円もする宝石なんかよりもずっと価値のあるもの。いつか翔輝との結婚式ではこのネックレスをしようと心に決めていたりする。

そんな誰もが引いてしまうほどのブラコン。それが霞瑪瑙であった。

散々翔輝の写真＋翔輝の思い出話を披露しまくって何かをやり遂げたような顔をする瑪瑙と、それを見たり聞いたりしてすごく幸せそうな表情を浮かべる大和達と、恥ずかしさのあまり精神崩壊寸前の翔輝と、それぞれな一同。

なんとか翔輝が立ち直った途端、今までその時を見定めていた瑠璃が突然翔輝の腕を取った。驚く大和達を無視し、瑠璃は笑顔で一言、

「では、翔輝様と朝食を食べて来ますので。失礼させていただきますわ」

「え？　ちょ――」

翔輝は断る事もできずに連行された。その後を苦笑いしながら珊瑚と瑪瑙が追いかけて行き、大和、榛名、隼鷹の三人が激昂しながら追跡した。少し遅れてから、どこから出したか不明な上に用途不明の九九式七・七ｍｍ軽機関銃を構えた武蔵が前進した。

急に静かになった通路に残された三人は二人苦笑いと一人無表情をしていた。

「まったく。うるさい連中だな」

金剛はもう呆れながら言う。そんな彼女に、長門はくすくすと微笑む。

「まぁ、仲がいいのはすばらしい事だと思うなぁ」

「ふっ、貴様らしい考え方だな」

「あら？　それってほめてるの？　それともけなしてるの？」

「ふん。両方だ」

金剛の素直じゃない答えに長門は嬉しそうに優しく微笑んだ。その時、

「・・・貴様。何をやってるんだ？」
「・・・」
山城はどこから出したか不明な上に用途がまったくわからない九二式七・七ｍｍ重機関銃を構えていた。弾倉を確認すると、無言で歩き出した。
「ちょっと。どこ行くのよ？」
長門が恐る恐る訊くと、山城は一言、「排除」と言って立ち去ってしまった。
残った二人のうち、金剛が呆然と立ち尽くし、長門は困ったように苦笑いを浮かべる。
「山城も、結構一途なのね」
「知らん」
金剛はつまらなさそうにそう吐き捨てると、歩き出した。その後を、長門は優しい笑顔をしながら続く。途中、外の景色が見える窓の前で、長門は立ち止まった。
まだ昇り始めたばかりの太陽を見詰め、長門は小さく微笑んだ。
「陸奥。お姉ちゃんがんばるから」
そのつぶやきに、金剛は軍帽を深く被り直した。その鍔（つば）の下の表情は優しく微笑んでいた。

結局、追撃戦は武蔵と山城の機関銃掃射の嵐で鎮まり、瑠璃は不満ながらも艦魂達と一緒に食事をする事になった。瑪瑙と珊瑚もこれを了承し、珍しい組み合わせで食事をする事となった。だが譲歩として翔輝の隣を独占した瑠璃は二人の仲の良さを猛烈にアピールし、食事中も乱闘が何度か起きた。その度に大和達は怒号を放ち、長門は小さく微笑み、瑪瑙は静かにシャッターを切り、珊瑚は呆れ、翔輝は泣いた。
いつもと同じ、変わらぬ平和な一日が始まった。

第九章　第五節　伊勢の辛き想い　航空戦艦への道

朝の激戦の後、瑠璃達は翔輝の仕事の邪魔をしては悪いと言って帰り、大和達も久しぶりの極上幹部会の会議を開く事になって今は第三会議室にいる。

そして、翔輝は――

「おはようございます」

翔輝は笑顔で艦橋に入った。久しぶりの翔輝の登場に松田や航海長達も驚く。

「長谷川中尉。もういいのか？」

松田が心配そうに訊いてきたので、翔輝は笑顔でうなずく。

「はい。完全復活とはいきませんが、仕事に支障は出ないほどには復活しましたので」

「そうか、それは良かった。でも無理はするなよ」

「はい」

翔輝が仕事に入ると、ドンと大量の書類の束が航海長から渡された。何かとてつもなく嫌な予感がしたが、それは見事に命中した。

「さっそくですまないが、これはお前がいない間に溜まったお前担当の書類だ。これを全て処理しとけ」

「これ全部ですか！？」

パッと見ただけでも積み重ねられた書類の高さは三〇センチ以上はある。

「そうだ」

「多くありません！？　異常な量ですよ！？」

「まぁ、がんばれ」

「ちょっとぉッ！？」

翔輝のすさまじい慌てぶりを見て、航海長は大笑いする。見ると他の航海士達も腹を抱えて笑っている。これはつまり、陰謀・・・

「僕に仕事を押し付けてません！？」
「まぁ、遠からずそんな感じかな？」
「コラッ！　職務放棄をしないでください！　お前達もだぁッ！」
「航海長。ふざけるのはよしなさい」
松田の言葉に、航海長は笑いながらうなずき、本来の書類量を翔輝に渡した。その高さは一センチもなく、明らかに激減である。一体どんだけやらせようとしたんだろうか？
「まぁ、しっかりやりなよ」
笑いながら言う航海長に、翔輝は苦笑いしながら「はい」と答える。
航海長は「がんばれ」と笑いながら言って肩を叩き、翔輝は「よし」と気合を入れて仕事を始めた。

その頃、極上幹部会の会議ではちょっとした問題が起きていた。
「・・・一名不在」
武蔵が出席簿を確認しながらそうつぶやいた。
「誰がいないの？」
大和は不思議そうに見回す。その時、いつもはいるはずのメンバーが一人いない事に気づいた。
「もしかして――」
「・・・伊勢が欠席」
武蔵の言葉に、全員が空いている席を見詰める。日向と扶桑に挟まれた空席は、間違いなく伊勢の席だった。
「伊勢はどうしたの？」
長門はわかっているが一応確認の為に問う。
「長門はずっと欠席してたから知らないかもしれないけど、伊勢ちゃんはあなたや大和と同じで今もずっと部屋に引きこもってるのよ」
扶桑の言葉に、長門は「そう・・・」と小さくつぶやいた。そんな彼女の横にいる金剛は深くため息を吐く。
「伊勢は陸奥の親友だったから、受けた衝撃もかなり大きかったの

だろう」
「でも姉貴。実の姉の長門が復活したんだぞ？　何で伊勢はまだなんだ？」
「常人である伊勢と得体の知れない長門を一緒にするな」
「ちょっとそこ。何好き勝手言ってんのかな？」
金剛と榛名の会話に終止符を入れ、長門は扶桑と日向を見る。
「で、伊勢の調子はどう？」
長門の問いに、日向は力なく首を横に振る。
「ダメぇ。お姉ちゃんずっと部屋にこもったままなんだ」
「たまに出て来ても元気ないわね」
日向と扶桑の返答に、長門は一度小さくため息を吐くと、「わかったわ」と小さくうなずく。
「それなら後で私が直々に行ってみるわ。それで何とかしてみるわ」
「無駄だと思うぜ」
長門の言葉に横槍を入れたのは榛名。彼女は頬杖をして唇を≪へ≫の字に曲げている。彼女自身も伊勢を元気付けようと何度か訪れたが、会う事すらできなかったのだ。
「でも榛名。何もしないよりはマシよ。やらないで後悔するよりやった後に後悔した方がいいじゃない」
「まぁ、そうかも知んねぇけどよ・・・」
榛名は納得いかないような顔で頭をボリボリと掻く。すると、何か名案を思いついたように「そうだ」とつぶやく。
「何？　どうかした？」
「長谷川を向けてみないか？　あいつなら何とかなるかもしれねぇ」
「長谷川君を？」
長門は首を傾げる。そんな長門に榛名はうむとうなずくと力説する。
「あぁ。伊勢は結構長谷川に信頼を置いてるからな。実際俺や長門よりは心を開いているじゃねぇか。それにあいつ今日復活してたし」
「長谷川の奴、立ち直ったのか？」

金剛が驚いたように問い返すと、榛名は小さくうなずく。
「あぁ。今日から仕事を再開するって言ってたし」
「ほう、それは良かった」
「何だよ姉貴。長谷川の事心配してたのか？」
ニヤニヤと訊く榛名に、金剛は不機嫌そうに鼻を鳴らす。
「ふん。あれでも艦魂達の士気の大きく関わっているいるからな。いないと困る」
「言い訳くせぇな」
「――殺るぞ」
「すみません。ほんとすみません」
「金剛、やめなさい。でも榛名の意見は賛成よ。私が後でお願いするわ」
「いいですよ。私の方から中尉に言いますから」
大和が志願するが、長門は小さく首を横に振る。
「いいの。私が直々に言いたいの――伊勢をお願いって」
長門の言葉に、艦魂達は沈黙する。悲しみの混ざったその空気の中、武蔵は手元の書類を見詰める。
「・・・これより、会議を開会する」
沈黙した空間に、その声は良く響いた。

その夜、航海長の計らいで少し早く仕事を終えた翔輝は自室に戻って来た。部屋に入ると、大和と武蔵、榛名、金剛、日向、扶桑、そして長門が待っていた。
「あれ？　金剛さんに長門さん。どうしたんですか？」
大人数でいる大和達に翔輝が驚くと、長門がそっと前へ出た。
「長谷川君に用があってね。待ってたの」
「僕にですか？」
「えぇ。ちょっと伊勢の事で」
重々しく開いた口から出た少女の名に、翔輝は心配そうに訊く。
「伊勢、ですか？　そういえば最近会ってませんね。どうしてるん

ですか？」
「この前までのあなたと同じよ。部屋に引きこもってるの」
長門の言葉に、翔輝は「そうですか、伊勢が」と心配そうにつぶやく。そんな翔輝を見て、長門は本題を切り出す。
「だからね、そんな伊勢をあなたに助けてほしいの」
「僕が、ですか？」
「そう。彼女はあなたにかなりの信頼を置いてるわ。おそらく陸奥がいなくなった今現在では一番よ」
「それはおかしいですよ。日向や義姉の扶桑さんや山城の方が上だと思いますが――」
「それはちょっとね。日向はちょっと頼りないし、扶桑は《あれ》だし、山城とはあまり会話はしないしで。ね？　壊滅でしょ？」
長門は苦笑いしながら言う。翔輝も彼女の言葉に苦笑いしてしまう。
「揃いも揃って異色を放つ姉妹ですね」
「あら、金剛四姉妹も負けず劣らずのものよ」
「そこでなぜ私達の話が出てくるのだ」
金剛が不機嫌そうに間に入ってくる。そんな金剛に長門は屈託のない笑みを浮かべる。
「いやぁ、いい比較対照になるかと思って」
「ならん」
そんな二人の会話に小さく微笑んでいると、いきなり翔輝は手を握られた。視線を向けると、握って来たのは大きな瞳で必死に何かを訴えようとしている日向だった。
「長谷川君お願い！　お姉ちゃんを助けてッ！　私、お姉ちゃんは元気でいてほしいのぉッ！　でもそれができるのは中尉だけ――だからお願いッ！　中尉、お姉ちゃんをどうか・・・どうかお願いしますぅッ！」
いつの間にか、日向は泣いていた。それほど姉の事を心配しているのだろう。そんな彼女の必死な姿を見て、翔輝は胸を打たれた。

姉の為に一生懸命になる日向に、何か自分に近いものを感じたから。
「僕に・・・できるかな・・・？」
「できる！　だから――」
日向の声はそれ以上続かなかった。日向の頭を翔輝がそっと撫でたからだ。驚く日向に、翔輝は優しく微笑む。
「――わかった。やってみる」
「ほ、本当・・・ッ！？」
「うん。僕もこのまま見捨てるつもりもないし、善処するよ」
「あ、ありがとう・・・ッ！」
日向は嬉しさのあまり翔輝に抱き付いた。慌てる翔輝を無視し、日向は何度も「ありがとうありがとうありがとうありがとうッ！」と言い続けた。そんな日向をうらやましそうな瞳で見詰める大和。
「まあ、これで目星はついたな。頼むぞ、長谷川」
榛名はニヤリと笑みを浮かべる。そんな頼もしい笑みに、翔輝も自然と笑顔になる。
「うん。がんばってみる」
「じゃあ、お願いね」
長門はそう笑顔で言うと、金剛と榛名、扶桑を連れて出て行った。その後に日向も出て行った。残されたのは翔輝と大和、武蔵の三人。
翔輝は苦笑いしながらため息ついた。
「――ってまぁ、引き受ける形になったけど・・・どうすればいいのかな？」
「何も考えてなかったんですか？」
大和は翔輝の言葉に呆れたような声を上げる。そんな大和に翔輝は苦笑いする。
「あぁ、なんか日向の根気に負けてさぁ」
「先を何も考えずに引き受けるなんて、楽観主義の中尉らしいですよ」

「・・・それ、ほめてるのか？」
「もちろんです」
「・・・本当か？」
疑いの視線を向けると、大和は口笛を吹きながら出て行ってしまった。
「逃げたな、あれは」
「・・・正解」
翔輝はくすくすと笑った。すると、今度は武蔵がじっと自分を見詰めているのに気づいた。
「・・・でも、どうするの？」
「まぁ、何とかなるさ」
「・・・やっぱり楽観主義」
「ん？　何か言ったか？」
「・・・別に」
翔輝は不思議そうに首を傾げるが、すぐに頭を抱えて悩み出した。そんないつもと変わらない翔輝を見て武蔵は安心したのか、小さな笑みを浮かべた。
「うん？　何で笑ってるんだ？」
「・・・な、何でもない」
なぜ彼女が頬を赤らめたのかわからない翔輝は再び首を傾げるしかなかった。

長門達に頼まれてから一時間後、翔輝は『伊勢』にいた。そんな彼の横には無表情をしている武蔵がいる。彼女のおかげで翔輝は『伊勢』に乗り込めた。
「ありがとう武蔵。ここに連れて来てくれて」
「・・・気にしないで。私にはこれくらいしかできないから」
武蔵はそう言うと、「・・・がんばって」と言って消えた。
武蔵が消えた後、日向に言われた伊勢の部屋に向かった。その部屋はやっぱり恒例の使われていない兵員室だった。

翔輝は軽く深呼吸すると、ドアをノックした。
「伊勢、いるか？　僕だ。長谷川だよ」
声を掛けるが、返事はなかった。もう一度ノックをするが、やはり返事はなかった。
「いない・・・のかな？」
となると、どこにいるかさっぱりわからない。ここは『伊勢』。どういう構造かわからない上、彼女のいそうな所もわからない。それに・・・正直迷う気がかなりする。
「捜す、しかないか・・・」
翔輝がため息して部屋を後にしようとした時、
「長谷川はん・・・」
「え？」
振り向くと、いつの間にかドアを少し開けて伊勢が顔を覗かせていた。
「伊勢・・・」
久しぶりに会った彼女は、自分の知っている彼女とはずいぶんと違っていた。髪は乱れ、やつれ、目は赤く充血し、目の下には隈があった。明らかに不眠だ。そんな彼女に、翔輝は優しく微笑む。
「久しぶり。大丈夫？」
「何しに・・・来はったんどすか・・・？」
「あぁ、どうしてるかと思って」
「別に、用はそれだけどすか？」
「え？　あ、その――」
「用がないんなら、もう帰ってぇな・・・」
「あ・・・」
そこでドアはパタンと閉められてしまった。
翔輝は呆然とその場に立ち尽くした。彼女のあまりの冷たさに何も言えなかったのだ。
彼女は、かなり変わってしまった。自分の知っている彼女とは全然違っていた。

「それほど、ショックだったんだ・・・」
悲しそうに、翔輝はつぶやいた。
自分も、そんな時があった・・・
経験上、こういう時はそっとしておいてほしいと願うものだ。
誰とも会いたくないのだ。でも・・・
「今なら、瑠璃の気持ちがわかるよ」
悲しんでる人を励ましてあげたい。今はその気持ちでいっぱいだった。
人間とは身勝手なものだ。立場によって考えを変えるなんて、身勝手すぎる。でも、それでも自分に何かできる事を、やりたい。それが、本当の人をというものだから・・・
「なぁ、伊勢」
翔輝は閉じられたドアに優しく声掛けた。
「今、すごく悲しいんだろ？　陸奥の死が」
答えはなかった。構わず続ける。
「僕も、今日までずっとそうだった。自殺しようとも思ったよ。でも、そんな僕を大和と武蔵が救ってくれたんだ――考えてみれば、翔香の死の時も瑠璃が僕を励ましてくれた。友達っていいものだって、思ったよ。まぁ、その時の僕は放っといてほしくて邪魔だと思った。でも、今僕は励ます側にいる。こうなってみて、やっと瑠璃や大和達の気持ちがわかったよ。だから今は、伊勢に元気になってほしいと思ってる」
伊勢から返事はない。
「だから、君には迷惑だと思うけど、聞いてほしい――悲しかったら、僕を頼ってよ。僕も、君の悲しみをわかってあげられるから」
翔輝は精一杯心を込めてそう言った。
沈黙が舞い降りる。痛いほどの沈黙は、翔輝から笑顔を奪う。
伊勢からの返事はない。
翔輝はため息した。
――自分の想いは、彼女には届かなかった――

「ごめん。勝手な事ばっかり言って。僕より君の方が陸奥とずっと一緒だったよね。新参者がでしゃばり過ぎた。ごめん・・・」

翔輝はそう言うと、身を翻してその場を立ち去る。その時、

「待ってぇな・・・」

突如現れた伊勢が、開いたドアから手を伸ばして翔輝の手を掴んだ。驚く翔輝を、伊勢は無理やりに部屋に連れ込んだ。あまりにも突然の事に翔輝は逆らう事もできなかった。

「い、伊勢・・・？」

「長谷川はん・・・」

伊勢は翔輝の手を握ったまま彼の瞳を見詰める。その瞳は一体何を訴えているのだろうか。翔輝はその答えを見つける為に彼女の瞳を見詰め返す。すると、伊勢は急に翔輝に抱き付いた。

「伊勢！？　どうしたの！？」

「ううっ、ひぐっ・・・」

「伊勢・・・」

伊勢は――泣いていた。

翔輝は急な事に驚いたが、そんな伊勢をそっと抱き締めた。

泣きたい気持ちは、痛いほどわかる。だから、何も言う事はない。言ったところで何かが解決するという訳でもない。こういう時は、ただ黙って彼女の気持ちを聞いてあげるのが一番だ。

「陸奥が・・・死んで・・・ッ！　うち、守れんかった・・・ッ！　守って、あげたかったのに・・・大切なもんを守りたいから・・・がんばって来たのに・・・何も・・・何も守れんかった・・・ッ！」

伊勢は泣き続けた。

辛いのだ。親友の死が辛くない者などいる訳がない。その苦しみは行き所を失い、彼女の中に冷たく渦巻いていた。翔輝はただそれを、そっと彼女自身から引き出しているにすぎない。

「うち・・・うち・・・ッ！」

泣き続ける彼女に、翔輝は何も言わなかった。

――何も言わず、ただ、抱き締めながら、彼女の頭を撫で続けた。

伊勢はそのままの状態で泣き続けた。
零れ落ちる涙が、風に揺れるカーテンから覗く月明かりに照らされて静かに煌く。白い頬を流れ、あごに至り、そして落ちる。
しばらくして、伊勢は落ち着きを取り戻すと、自分のしている行為に顔を真っ赤にして急いで翔輝から離れた。
「ご、ごめんな！　う、うちったら・・・ッ！」
「え？　あ、別にいいよ」
ここに来て、ようやく翔輝の知っている伊勢が戻って来てくれた。
「あ、長谷川はん――おおきにな。あんたのおかげで少し落ち着けたで」
「そう、良かった」
微笑む翔輝の胸に、伊勢は再びゆっくりと抱き付いた。再び驚く翔輝をよそに、伊勢は嬉しそうに微笑む。
「陸奥には悪いけど、こうやって長谷川はんに触れられて、うちほんまに嬉しいどす」
「そっかな？　そんなに僕君に対して冷たかったかな？」
「いえ、そうやあらへん。ただ、大和はんや武蔵はん、陸奥に比べてうちはいっつも長谷川はんから遠い位置にいたから、嬉しいんや」
「そっか。ごめん。これからはもっと君の傍にいられるようにがんばるよ」
「そんなッ！　もったいない言葉おおきにぃな・・・ッ！」
「あはは」
笑う翔輝の腕の中で、伊勢は嬉しそうな顔から悲しみに満ちた表情に変わった。その瞳は再び先程のように詰めたい色に染まる。
「陸奥が、死んでもうた」
「あぁ、そうだね・・・」
「もう、帰って来ないんよね？」
「うん。もう、帰って来れないんだ」
翔輝の悲しい言葉に伊勢は一瞬泣きそうになったが、必死にそれを耐える――もう、泣くという逃げる行為はしたくなかった。

「嫌やなぁ。もう、陸奥と会えないなんて・・・ッ」
「伊勢・・・」
「わかっとるよ。もう陸奥に会えんのは。せやけど、やっぱりうちは信じたくないんどす。陸奥が・・・死んだやなんて」
「でも、受け入れないといけない。それが現実なんだ」
悲しげに言う翔輝に、伊勢はそっと問う。
「長谷川はんは、翔香はんが亡くなった時はどうやったんや？」
「うん？　まぁ、正直今のお前の何百倍もひどい有様だったな。一ヶ月くらい寝込んでたから、こんなに早く回復は始まらなかったよ」
「そ、そうどすか・・・」
それを最後に、二人は沈黙した。
深い静けさは二人の会話に終止符を打つかと思われた。しかし――
「ちょっと、ついて来て」
そう翔輝が言い、伊勢の手を繋ぐまでは――

船渠内にいる『大和』と違って、広島湾に浮いている『伊勢』からは星空が一望できた。
翔輝が伊勢を連れて来たのは防空指揮所。彼が一番好きな場所だ――ただし、今回は『大和』ではなく『伊勢』だが。
「きれいやねぇ」
最初に星空を見た伊勢はそうつぶやいた。
「そうだな――へぇ、双眼鏡の位置が『大和』とはやっぱり違うんだな」
「・・・そ、そないにジロジロ見んといてぇな。恥ずかしいでぇ」
「何で？」
キョトンとする翔輝に、伊勢は恥ずかしそうに視線を逸らしながら口を開く。
「そ、それは・・・一応この『伊勢』はうちの分身みたいなもんやから」
「そうだったね。すっかり忘れてた」

彼女は艦魂。艦に宿る魂の化身。人間とは違う、また別の存在。
「・・・かなり重要な事なんですけど」
「悪い悪い。それにしても、『大和』以外の艦に乗るのはこれが六艦目か」
「そうなん？」
「うん。まぁ、今までに乗ったのは『長門』『陸奥』『金剛』『山城』。それに陸奥が死ぬ直前に送った『扶桑』。そして今回は『伊勢』。これで六艦目だ」
「そうなんどすか。嬉しい事やで」
そこで、翔輝は再び星空を見上げた。それに続いて伊勢も星空を見詰める。
「きれいやねぇ」
「あぁ」
「長谷川はんはよく星空を見とるんか？」
「うん。ほとんど毎晩」
「毎晩も？　何でや？」
「翔香の星を、探してるからさ」
「翔香はんの星、どすか？」
「うん」翔輝は力なく答えた。
「こうして星空を見ていれば、いつか翔香の星を見つけられるんじゃないかって思って。死んだ人は星になるって言うだろ？　だからさ」
翔輝の言葉に、伊勢は終始黙っていたが、突然、
「そうどすか。ほんなら、うちも陸奥の星を探してみるで」
「伊勢・・・」
「絶対に見つけるんや！　それに、いつまでもくよくよしとったら陸奥に面目ないんや！」
「そうだね」
「せやでッ！」
伊勢は満面の笑顔で答えた。元気を取り戻した彼女には、翔輝の

優しい瞳にも気づかず、嬉しそうにはしゃいだ。だから、
「良かった・・・元気になって」
翔輝の小さな声も、彼女には聞こえなかった。

その後、翔輝は伊勢の転送で無事に『大和』に戻った。そこで二人は別れ、翔輝は自室に入り、そのまま眠った。

翌朝、定例の艦魂会議が開かれた。そこには、
「伊勢。もう大丈夫なの？」
「大丈夫どす。長門はんやみなはんにも心配かけて堪忍なぁ。せやけど、もう大丈夫やで」
長門に話しかけられ、笑顔で伊勢は答えた。その笑顔にはもう暗いものはなかった。
みんな伊勢の登場で嬉しそうな笑顔を向けていた。
「にしてもよぉ伊勢。何でまた急に元気になったんだ？」
「へ？」
榛名はニヤニヤと笑いながら伊勢に詰め寄る。詰め寄られた伊勢は驚きの表情を浮かべている。
「昨日、長谷川がお前の所に行ったはずだが、それが関係あるのか？」
「なあッ！？」
榛名の意味ありげな笑顔に、伊勢は顔を真っ赤にする。その反応を見て、榛名は笑う。
「なぁんだ。やっぱりそうか」
「な、何どすか？」
「いや、長谷川に何かされたから元気になったんだなぁって」
「う、うちは別に！」
「いいっていいって。もうバレバレだから」
「はうぅッ！」
耳まで真っ赤に染めた伊勢が右往左往していると、やっぱり、

「伊勢ちゃん！　どういう事！？　お姉さんに全てを話しなさい！」
やっぱり扶桑が伊勢に飛びかかる。
「扶桑姉はん！？」
「さぁ話なさい！　何があったの！？」
「べ、別に何も――ひあッ！？」
「話なさい！　話さないと・・・」
「い、嫌やぁッ！　だ、誰か助けて――ああぁッ！」
扶桑に襲われて変な声を出している伊勢を見て、みんな微笑んだ。
いつもどおりのみんなだなぁ、と。満面の笑みで。
「・・・これより、会議を始める」
武蔵の小さな声は、誰の耳にも届かなかった。

ある日、衝撃的な情報が入った。
扶桑型及び伊勢型戦艦が、空母に改造される計画が進行中との情報だった。
「せや。元々大和型以外の全戦艦が対象になったんやけど、長門型は大和型に次ぐ主力艦やし、金剛型はその速力を生かした空母直衛の為に除外されたんや。そこで最も戦力的に活用されてへんうちら伊勢型、それと扶桑型が空母へ改造されるんが決定されたんや。まずは扶桑型からの予定やったんやけど、『日向』が去年の五月に爆発事故を起こして第五砲塔を撤去して砲撃力が不足しとるから、『日向』とその同型艦である『伊勢』から先に改造される事になったんや」
伊勢は驚く一同にそう説明すると、小さなため息をした。
「どうしたんですか？」
大和が訊くと、伊勢は複雑そうな顔で今の自分の心境を語った。
「正直、うちは空母になるんは嫌なんや」
「どうしてですか？」
「うちらは戦艦として今まで生きてきたんや。それを急に空母になってぇって言われても受け入れへんし、正直不安なんや」

「戦艦として生まれたなら、戦艦として戦場を翔けたかったのになぁ」

伊勢と日向は二人してため息する。いきなり自分が戦艦から空母になると言われたら、困惑するのは当たり前だ。

二人の言葉に、長門は何度もうなずく。

「そうよねぇ。ねぇ金剛。あなたはどう思う？　あなたは元々巡洋戦艦から高速戦艦に改造されたんでしょ？」

「それはそうだが、私達は装甲巡洋艦の発展型の巡洋戦艦から戦艦になったのだ。当初はこれほどの栄誉はないと思った。しかし今回は状況がかなり違う。同じ大砲を主力とする系統で昇格した私達とは違い、今回は全く別の分野である空母への改装だ。いくら戦況が空母中心に変わったとしても、戦艦と空母は大きく違う。一概に良いとは思えん。それに私は航空主義が嫌いだ」

「最後はともかく、金剛の意見はもっともよね。戦艦と空母は根本的に戦い方とその存在意義が違うもの」

長門も伊勢達の空母への転換には結構消極的だ。そんな中、

「俺はいいと思うぞ」

榛名が賛成意見を出した。これには全員が驚く。大艦巨砲主義の第一人者の金剛の腹心である彼女が空母への改装に賛成するとは誰も思わなかったからだ。

「伊勢の言うとおり、この四隻はあんまり活躍の場がない。このまま何もしないでいるよりは空母になって翔鶴達と一緒に敵艦隊を撃滅してもらう方がいいだろ？」

「まぁ、その通りだが。しかし戦艦と空母では――」

「姉貴。認めたくないのはわかるけど、もう時代は航空機の時代だぜ。日本海軍の象徴の大和型。その大和型に次ぐ主力艦の長門型。空母直衛に向く唯一の戦艦の俺達金剛型。この三種はそれなりに存在価値が確立されているけど、扶桑型と伊勢型は今は何もないだろ？　四隻が空母になれば、『翔鶴』『瑞鶴』、それに計画中の空母と合わせて再び最強の日本機動部隊が編成されるんだ。今はこれが

最もいい方法だと俺は思う」
　榛名の言葉はもっともな意見だった。今や戦艦だ空母だとこだわっている時ではない。今は戦時中。しかも日本の圧倒的不利な状況だ。これを打破する具体的な案。それが扶桑型と伊勢型四隻の空母への転換だ。
　榛名の意見に、長門と金剛は沈黙する。
「扶桑さんと山城さんどうなんですか？」
　大和の言葉に、扶桑は満面の笑みで、
「私は構わないわ。元々戦艦にこだわるつもりもないし、これが日本の為なら喜んで空母になるわ」
　いつもふざけている扶桑のマジメな返答に、彼女の意気込みを感じる。大和はそんな彼女の隣にいる山城に向く。彼女は金剛に以前「戦艦の時代は終わった」と言った人物である。空母への転換に賛成意見を言うかと思ったが、
「私は反対だ」
　意外にも反対側だった。大和は驚いて聞き返す。
「どうしてですか？　山城さんは戦艦の時代は終わったと前に言ったじゃないですか」
「それはそれだ。時代は航空機が主力になったが、私は戦艦として生まれ、戦艦として生きてきた。なのにそれをいきなり空母に変更するなど、私を愚弄しているとしか思えん。性能が悪いのは私のせいではない。その設計者が悪いのだ。それを造った後に欠陥だらけが判明。欠陥戦艦と不名誉な称号も得て、そして今度は空母に変更？　いくら常に冷静な私でぶちギレるぞ」
　こめかみに血管を浮かべながら言う山城に、全員が恐怖する。山城がそこまで感情的になるとは誰も思っていなかったからだ。
「山城姉はんにうちは賛成どす。戦艦を空母にするなんて、いくらなんでもおかしいで」
「・・・『加賀』は戦艦として建造中に空母になった」
「あれは建造途中で変更になったんやで？　うちは二六年以上も戦

艦として生きてきたんよ？　状況が違うんや。それに――」
「・・・それに？」
伊勢は悲しそうな表情で、小さくつぶやく。
「空母になってしもたら、うちは長谷川はんの好きな戦艦やなくなってまうんやぁ」
伊勢の言葉に、翔輝連合の者はうなずいた。いくら彼が航空機の有用性を理解しているとはいえ、元々は大艦巨砲主義者。それに戦艦が好きな人物だ。空母になる事で今までとは違う関係になるのは、正直不安だった。だが、
「確かに、中尉は空母よりは戦艦の方が好きです。でも、だからと言って今までの関係が崩れるなんて事はありませんよ？」
大和ははっきりと断言した。翔輝はそんな細かい事で人を判断しないと知っているからだ。きっと空母になっても、彼なら明るく笑顔で迎えてくれるだろう。
しかし、伊勢はまだ不安なのか考えを渋る。
「でも・・・」
「それに、中尉は別に陸軍大嫌いの金剛さんと違って、別に空母が嫌いではありません。嫌いなら隼鷹とあんなに仲が良くなるはずがありません」
「私お兄ちゃん大好き！」
「姉さんは黙っててよぉッ！」
飛鷹と隼鷹の声を聞き、伊勢にも笑みが出る。
「そうやね。長谷川はんが空母になったからって、うちを嫌いになるなんてありえまへん」
「それはどうだろ？」
「え？」
榛名の言葉に、伊勢の顔から笑顔が消える。
「長谷川は結構こだわるところはこだわる奴だからな。戦艦から空母になったお前に愛想を尽かし、関係が破綻。こうして伊勢は脱落。チャンチャン」

「そ、そんなぁッ！」
「さらば伊勢。君の死は忘れない」
「い、嫌やあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
「アホかあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
突然の怒号に振り向いた榛名に跳び蹴りを食らわせ、翔輝はきれいに着地した。一方榛名はそのまま無様に壁に叩き付けられた。
「な、何すんだ長谷川！」
「何すんだじゃねぇッ！　伊勢を不安にさせるような事を言うなボケぇッ！」
翔輝はそう怒鳴ると小さくため息し、伊勢に向く。伊勢は不安げな瞳で彼を見詰める。そんな彼女を、翔輝はそっと見詰める。
「長谷川はん・・・」
「空母になるんだって？」
「そ、そうなんや・・・」
「良かったじゃん。今の時代ならこれは昇格だよ」
翔輝は屈託のない笑みを浮かべて伊勢の昇級（？）を喜ぶ。そんな翔輝の態度に伊勢はぽかーんとする。
「え？　嫌がらないんか？」
「何で？」
「え、だって、長谷川はんは戦艦が好きなんじゃ――」
「戦艦は好きだけど、空母が嫌いとは一回も言ってないけど」
「そ、それはそうどすが」
「あのなぁ、僕が戦艦だ空母だとこだわる訳ないだろ？　陸軍嫌いの金剛さんじゃあるまいし」
「おい。何でさっきから私の名が出てくるのだ」
「いい比較対照なんでしょ？」
「比較するな！」
金剛が長門に怒鳴っている声いつもの雑音を無視し、翔輝は続ける。
「でも残念だなぁ」

「え？」
伊勢は青ざめる。やはり空母になるのは嫌なのだろうか？　震える伊勢に、翔輝は寂しそうに微笑む。
「改造している間は、伊勢には会えないんだ」
「え？　あ、まぁ、そうやけど・・・」
「それが残念だなぁって。伊勢の笑顔が見れないなんてさ」
微笑む翔輝に、伊勢はぱあっと嬉しそうに笑う。
「そ、そんなぁ、うちなんかの為に」
「自分を《なんか》なんて言うなよ」
「わかったでぇッ！」
嬉しそうな話す二人を見て、微笑む者、悔しそうに見詰める者など大勢いる中、約一名。
「空母になるのも、悪くはない、か」
山城が小さくつぶやいたのは誰も気づかなかった。

扶桑型、伊勢型の空母変更計画の実行が決定されてからしばらくし、状況が一転した。
「・・・新情報。当初は全通飛行甲板を持つ通常型航空母艦に改造する予定だったが、作業工数の短縮と資材節約の為に艦橋から後ろ、三番から六番砲塔までを撤去して格納庫や飛行甲板を設置するという半分戦艦半分空母の航空戦艦に変更された」
「こーくーせんかんー？」
忘れがちだが重鎮である榛名が新しい用語に首を傾げる。
「それはつまり、戦艦なのか？　空母なのか？」
「・・・不明。でも艦体の四分の三が飛行甲板になる訳だから、たぶん空母」
「何だそれは。また新しい枠組みができるのか？」
新しい事に弱い金剛も不思議そうに首を傾げる。そんな中、伊勢は少し嬉しそうだった。
「完全な空母やのうて半分でも戦艦なら、うちは嬉しいなぁ」

「『赤城』や『加賀』に二〇ｃｍ砲六門が搭載されていたのと同じようなものか？」

空母『赤城』は後部に二〇ｃｍ砲を六門、『加賀』は十門を搭載していた。理由は両艦建造当初はまだ完全な大艦巨砲主義の時代だったので、一応艦隊決戦もできるようにという構想の為である。ちなみに以後の空母には搭載されていない。

「似たようなものだけど、こっちの方が重装備よね」

長門も複雑そうな顔だ。やるなら完璧にしてほしいのに、何だかよくわからない艦種になるのは、あまり嬉しい事じゃない。だが、当の本人は、

「うちは嬉しいわぁ。まだうちは戦艦って名乗れるんやもん」

伊勢は胸の前で手を重ねて満面の笑みで嬉しそうに喜ぶ。

「私もまだ大砲が撃てるのが嬉しいよ」

日向も嬉しそうに笑顔で言う。いくら子供っぽくても、彼女も立派な日本海軍の戦艦の一人なのだ。

「・・・私個人の意見は、純粋な空母の方が強いと思う」

「私もそう思うな。二兎を追うものは一兎も得ずだ」

武蔵と金剛は航空戦艦という微妙な改造より純粋空母の方がいいという意見で一致した。どうやらこの案には本人以外は結構は否定的らしい。

そんな中、翔輝は珍しく最上と話をしていた。

「中尉？　どうしたんですか？」

最上と話をしている翔輝に大和が不思議そうに尋ねる。

「うん？　いや、航空戦艦じゃないけど。同じ構想で改造された最上』の意見も聞きたいと思ってさ」

重巡洋艦『最上』は以前説明したが、ミッドウェー海戦での損傷を修理すると同時に後部主砲等を撤去して、水上機作業甲板と射出機を装備した『航空巡洋艦』となった。新伊勢型は『最上』をモデルに改造されいる。

そんな伊勢達の新たな先輩になる最上は腕を組んで真剣に考える。

「まぁ、確かに砲撃力は弱まりましたが、おかげで空母や水上機母艦にも引けを取らない偵察能力を持ち、連合艦隊でも重宝される存在になりました。私としては改造されて大正解でした」

と、新伊勢型の先輩になるであろう最上の言葉に、全員も一応納得する。確かに、『最上』は戦略上かなり重要な艦である。

「長谷川はん！　うちは今ほんまに嬉しいわぁ！」

満面の笑みで喜ぶ伊勢を見詰め、翔輝は優しく微笑む。

「良かったな。何か半分戦艦半分空母って、見てみたいな」

「そ、そんな、うち恥ずかしいわぁ！」

そんな笑い合う二人を見て、微笑む者、悔しそうに見詰める者など大勢いる中、約一名。

「半分戦艦半分空母の航空戦艦か。おもしろそうだな・・・」

山城がそうつぶやき、小さな笑みを浮かべた事には誰も気づかなかった。

状況というのは一転二転は当たり前だが、今回は三転した。変更された計画で進行中だった伊勢型にさらなる状況変化が起きた。

「・・・新情報その二。当初は全通飛行甲板を持つ通常型航空母艦に改造する予定だったが、作業工数の短縮と資材節約の為に艦橋から後ろ、三番から六番砲塔までを撤去して格納庫や飛行甲板を設置することになった。しかし、緊急性からさらに短縮が求められ、最終計画では後部甲板の五番と六番主砲塔を撤去し、その上に格納庫と航空機作業甲板を設置する方式に変更。それにともない対空兵装の強化、副砲の全廃に変更。さらに時間、資材的に扶桑型の空母変更はなし」

「扶桑型は戦艦のままか。良かったじゃねぇか」

「えぇ、何だかんだ言っても戦艦の方がいいわ」

榛名と扶桑が話す横で、大和は不思議そうに武蔵に問う。

「つまり、艦体後部の三分の一が空母って事？」

「・・・（コクリ）」

「それって戦艦になるの？　それとも空母？」
「・・・情報によると、戦艦らしい」
「やったわぁーッ！」
手を上げて跳ね喜ぶ伊勢をよそに、翔鶴は不思議そうな顔をする。
「しかし、そんなに短いのでは軽空母の甲板よりも短いではないか。それでは発艦――ましてや着艦などできないんじゃないか？」
「・・・心配ない。伊勢型は射出機を装備し、これで飛行機を飛ばす事ができるようになっている」
「なるほど。だが、着艦はどうする」
「・・・航空戦で飛行機が消耗されるのは当たり前。伊勢型を飛び立った飛行機は機数の減った空母に着艦または陸上基地に着陸する」
「なるほど・・・なんか微妙だな」
「・・・同感」
そんな二人をよそに、伊勢は翔輝にキラキラした瞳を向ける。
「うち、戦艦のままやぁッ！　これからも戦艦のままやぁッ！」
「良かったな。でも三分の一が飛行甲板だなんて、ますます見てみたいな」
「は、恥ずかしいわぁッ！」
伊勢は照れまくって思いっきり翔輝の背中を叩いた。忘れているかもしれないが、艦魂は人より力が強い。翔輝は簡単に吹き飛ばされて壁に激突して沈黙した。
「あぁッ！　やってもうたッ！　長谷川はん！　しっかりしてぇなッ！」
伊勢は慌てて翔輝に駆け寄る。そんな二人を見て、微笑む者、悔しそうに見詰める者など大勢いる中、約一名。
「戦艦のままか。安心したような、がっかりしたような・・・」
そう山城が小さくつぶやいたのは誰も気づかなかった。

第十章　第一節　懐かしきトラック前線

陸奥の死から二ヶ月が経った。辛い事であったが、みんな少しずつ元気を取り戻し、今では前とあまり変わらないくらいまで回復していた。そんなある日――

蒼い海の上を大艦巨砲主義の頂点に君臨する巨大戦艦が翔けていた。浮かべる城と呼ばれる山のような巨体を威風堂々とさせている二隻の超弩級不沈戦艦の名は――戦艦『大和』、戦艦『武蔵』。大日本帝国海軍の象徴である。

二隻とその護衛をしている駆逐艦はトラック島に向かっていた。ようやく両艦の整備が終わったからだ。先に整備が終わった他の戦艦は主に二隻ずつ数回に分かれてトッラクに向かった。ただし、『伊勢』と『日向』は航空戦艦への改装の為に呉に残っているが。

今回は最後の部隊で、日本海軍の象徴である大和型戦艦の二隻がトラック島に向かっている。

艦橋の中では久しぶりの海を楽しんでいる大和がいた。その隣には航海室から持って来た資料を航海長に渡している翔輝の姿もあった。

「これが頼まれた物です」

「おう、ありがとう」

航海長は受け取った資料を艦長である松田に渡し、何かを相談する。

急ぎの仕事を終え、翔輝が安堵の息を漏らす。

「長谷川中尉も大変だな。すっかり航海長のお気に入りで」

隣にいた若い航海士の言葉に、翔輝は苦笑いする。その時、

「長谷川中尉はいますか？」

その声に振り向くと、そこには水上がいた。

「水上？　どうしたんだ？」

「港を出る時に預かった手紙を今配ってたんですけど、中尉宛てのがあったので届けに来たんです」
「そう、ありがとう。でも後ででも良かったのに」
「早く渡そうと思いましてね。またいつもの人からですよ」
「あぁ、瑠璃だろ？」
「はい。恋人さんからです」
「ははは、違うって」
そう言いながらも、翔輝は嬉しそうに水上から手紙を受け取る。
「今は仕事中だからね。手紙は後で読むよ」
「そうですか。では自分はこれで」
そう言って敬礼すると、水上は艦橋を出て行った。それを見計らってか、大和は翔輝に話し掛ける。
「また瑠璃さんからですか？」
「うん。そうだけど」
「よくもまぁ飽きもせずに送って来ますね」
「コラコラ。瑠璃の悪口は言うなよな」
「むぅ、中尉は瑠璃さんと私。一体どっちの味方なんですか？」
「別に。中立だけど」
「何で私の味方じゃないんですか？」
「何でって言われてもなぁ」
笑う翔輝を不機嫌そうに見詰める大和。いつもと変わらない、平和な会話。平和なひと時。何もかものどかな時間が流れる。その時、
『前方にトラック諸島を確認！』
艦橋に見張り兵の声が伝声管を伝わって響いた。全員が窓の外を見詰めると、水平線の上にポツポツと黒い点が見えた。
――懐かしの、トラック諸島だった――
「みなさん、お元気にしているでしょうか？」
大和はもう笑顔満開でトラックを見詰めながら言う。久しぶりに会える仲間などの顔を思い浮かべているのだろう。

「さあな。雪風とも久しぶりに会えるしな」
「はい。呉の護衛には参加できませんでしたからね。久しぶりに会えます」
「他にもいろんな駆逐艦や潜水艦の子とも会えるしね」
嬉しそうに言う翔輝に、どこか素直に喜べない大和だった。
その間も艦隊はトラック島に向かって進み続けた。

トラック島に入港し、『大和』と『武蔵』は錨を下ろして停泊した。すると、それを待っていたかのように『大和』の甲板に多くの艦魂達が現れた。翔輝と大和も急いで甲板に行くと、そこにはトラク島に待機していた艦の艦魂達が二人を出迎えていた。
「おっせーぞッ！」
先に来ていた榛名が嬉しそうに手を振る。その横には相変わらず不機嫌な顔をしている金剛の姿もあった。
「ごめんごめん」
翔輝が笑いながら現れると、一瞬にして多くの艦魂達に取り囲まれた。
「中尉。お久しぶりです！」
「うわぁ、身長伸びましたか？」
「中尉がいなくて寂しかったですよ」
「は、長谷川中尉。お、お久しぶりです」
駆逐艦や潜水艦の子達に囲まれ、翔輝も嬉しそうにみんなに話し掛ける。その様子を、大和はどこかおもしろくなさそうに見詰める。
その時、
「司令！　お久しぶりです！」
「雪風！？　久しぶり！」
大和に元気良く声を掛けたのは大和の従兵を務める雪風だ。雪風は嬉しそうに大和にあいさつし、大和も嬉しそうにそれに答える。
「三ヶ月ぶりですね」
「えぇ、もうそんなになるのね」

「はい。戦艦が一隻もいなくなると寂しいものでした」
「そう。ならもう安心ね。こうして戦艦が七隻もそろったんだから」
「はいッ！　世界最強帝国海軍がこうしてそろうと威風堂々としますね」
「そうね」
「おぉ、雪風。久しぶり」
ようやく多くの艦魂達から解放された翔輝がにこやかな笑みを浮かべて二人の所にやって来た。雪風はすぐに敬礼する。
「お久しぶりです。長谷川中尉」
「久しぶり。元気にしてたか？」
「はい。この通りです」
「そっか。良かったな」
久しぶりの再会を嬉しそうに三人は笑顔で色々な話をする。だが、そんな陽気な雰囲気と相反して、にぎやかな艦魂達の輪から少し離れた所では、金剛と武蔵が深刻そうな顔で何やら重々しい話をしていた。
「連合軍の侵攻状況は？」
「・・・ソロモン海のニュージョージア島のムンダ飛行場が陥落。我が軍の防御拠点は後方のコロンバンガラ島に集中。防御陣地の建設の為に輸送船団を派遣するも、敵艦隊と遭遇。護衛の駆逐艦が壊滅し、輸送作戦は失敗（ベラ湾夜戦）。さらにその後連合軍はこちらの予想を裏切り、コロンバンガラ島のさらに後方のベララベラ島に上陸。これによりコロンバンガラ島の友軍は孤立し、輸送路も断たれた。今現在はこんなところ」
武蔵の説明に、金剛は不機嫌そうに眉を吊り上げる。
「まったく、護衛の駆逐艦四隻中三隻が沈没とは、体たらくにもほどがある」
不機嫌そうに吐き捨てて竹刀をピシャリと甲板に叩きつける金剛。彼女は輸送作戦の失敗は駆逐艦の無能さが原因だと思っていた。しかし武蔵はそんな金剛に対して首を横に振る。

「・・・仕方がない。向こうはレーダーでこちらの艦隊を捕捉して攻撃したけど、こちらは敵艦隊の存在には気づかず、完全な奇襲になったんだから」

武蔵の言葉に、金剛はさらに不機嫌そうになる。口をへの字に曲げて何事かを考えると、小さくため息をした。

「しかし、日本海軍の十八番（おはこ）の夜戦までもがアメリカに敗北してしまうなど、そのれーだーとやらはすごい性能を持っているらしいな」

「・・・それに対し、我が軍は夜間で敵艦隊を発見するのは困難。見つけたとしても照明弾か照射灯で敵艦隊を照らし出し、その後は目視射撃。さらに照明弾や照射灯を使えばこちらの位置まで気づかれ、集中攻撃を受ける。これではいまだに目視射撃を行っている我が軍が圧倒的に不利」

「れーだーという物は好かんが、できる事なら我が軍の艦艇全てに設置したいものだ」

「・・・同感」

二人はため息をすると、トラックの平穏な海を見詰める。この一歩外洋に出ればもう戦地なのだ。それだけ敵の包囲網が迫っているという事だ。

金剛と武蔵が戦況の悪化に頭を悩ましているのも知らず、他の艦魂達は楽しそうに会話をしていた。

その夜、久しぶりの大和と武蔵の登場に、戦艦『大和』の第三会議室では宴会が開かれていた。

「そうなんですか、伊勢さんと日向さんが航空戦艦に」

「そうなんだ。半分戦艦半分空母みたいなものだって」

「重巡『最上』や利根型重巡みたなものですか？」

「まぁ、似たようなものだって」

大和から戦艦『伊勢』『日向』の航空戦艦改造の話を雪風は興味津々で聞いていた。そんな友好を深め合っている二人から少し離れた所で、翔輝は武蔵と二人きりで会話をしていた。

「相変わらず、トラックにいる連中は元気がいいな」
わいわいと騒ぐ艦魂達を見詰め、翔輝は嬉しそうに微笑む。だが、武蔵の顔は明るくない。翔輝と二人きりなのに、いつもと変わらぬ無表情。
「・・・一応、ここも前線だから。元気がなくちゃ、やってけない」
「前線と言っても、ラバウルみたいに敵機が襲ってこないけどな」
「・・・」
翔輝はラムネを口にする。炭酸のさわやかさとほのかな甘みが口の中を心地良く刺激し、のどにうるおいをもたらす。翔輝はもう一本を武蔵に渡す。武蔵はそれを無言で受け取ると、フタを空けて一口飲む。
「・・・でも、いつかはここも空襲される」
武蔵はそうぽつりと言った。そんな彼女の言葉に翔輝は小さくため息する。
「まぁ、このままアメリカが侵攻して来ればそうなるな」
「・・・このトラック島が陥落したら、次はパラオに司令部を移転させる」
「だけど、そこもいつかは落ちるだろうな」
「・・・（コクリ）」
「シンガポールの方はまだ安全だったよな？」
「・・・インド洋作戦以降、英東洋艦隊は隠れていて目だった戦いも起きていない。でも、対米戦にはあそこはあまり戦術的価値はない」
「だけど、あそこが落ちれば南方資源地帯の拠点を失う。戦略的価値はずいぶんと高い場所だよ」
「・・・でも、シンガポールまで攻めなくても、フィリピンを落とせば南方資源地帯との補給路を断たれる。もし敵が攻めて来ても、フィリピンは死守しなければならない」
「だけどさ、マリアナ諸島や台湾が落ちてもヤバイだろ？　どっちも日本本土に近い重要拠点だから」

「・・・そこも死守」
「・・・なんか、死守するものが多くてやんなっちまうな」
「・・・同感」
二人は先の見えない未来にため息する。
すっかり防衛戦になったこの戦いも、いよいよ日本の重要拠点までもが危うい局面まで来ているのだ。
後にマリアナ諸島もフィリピンも失う事を、彼らは知らない。だからこそ、今に全力を注ぐしか方法はないのだ。
――例えそれが、命を失う事になってもでも・・・――
「武蔵？」
急に黙りこくった武蔵に翔輝はそっと声を掛ける。武蔵は小さく首を振り「・・・何でもない」と小さく答えた。
「そ、そうか」
「・・・」
武蔵は手に持ったままのラムネを口にする。
自己犠牲を覚悟しているところは、そっくりな二人だ。決して自己犠牲がいいという訳ではない。だが、それが間違っているとも、否定できないのはまた事実。
何かを守る為には、何かを犠牲にしなければならない。
大きなものを助ける為に、小さなものを犠牲にする。それが世の中の摂理。例えその犠牲が自分だとしても、構わないと考えるのが翔輝と武蔵だ。
似ているからこそ、お互いを信用でき、理解できる。その証拠に、この二人の間には他人ではわからない絆がある。
武蔵の微妙な表情の変化を読み取れる翔輝。
翔輝の考えに同調し、常に彼をフォローする武蔵。
同じような者同士だから、わかり合える。それがこの二人。
そんな他とは違う絆を持っている二人を不機嫌そうに睨んでいるのは、この二人とは考え方がまったく逆な少女――大和。
彼女は自己犠牲を認めない。何かを助ける為に何かを犠牲にする

など、考えられない者。全てを助ける事を前提に行動する。
例え小さなものでも犠牲は犠牲。そんなものは絶対に必要としない。それが大和という少女である。
「中尉。何武蔵と話をしているんですか？」
雪風を連れた大和は二人に近寄ると不機嫌そうに翔輝に尋ねる。
「別に。たいした事じゃないよ」
「たいした事じゃないなら、言っても構わないのではないですか？」
「別にいちいちお前に言う事はないだろ？」
「そ、それはそうですが」
そう言われてしまうと言い返せない。どうすればいいか考えを模索する大和に、翔輝は少し不機嫌そうに口を尖らす。
「だいたい、お前は何かしら僕を束縛するような事をするけど、一体何なんだよ？」
「そ、束縛だなんてそんな・・・ッ！」
そんな事をしているつもりはない。翔輝は自分のものでもないし誰のものでもない。彼は彼自身のものだ。そんな彼を束縛しているなんて、大和は考えた事すらなかった。
「・・・事実」
「う、うるさいなッ！」
ふんっと大和はかわいくない妹の武蔵にそっぽを向ける。武蔵は別段気にした様子もなく無表情でラムネを飲む。
そんな余裕な態度をする武蔵にイライラする大和。その後ろから事の成り行きを見ていた雪風は不思議そうに自らの上官に問う。
「司令。何か少し会わないうちに武蔵長官と中尉がずいぶんと仲が良くなったようですが――」
「う、うるさいなッ！　もうッ！」
「す、すみませんッ！」
縮こまる雪風に少し言い過ぎたなと思う大和。だがすぐにその考えは消え、翔輝と武蔵に視線を戻す。
先程とは打って変わって楽しげに話す翔輝。

表情に変化があるかないかよくわからない武蔵。
雪風の言うとおり、最近翔輝と武蔵は仲が良い。前々から翔輝は何かしら武蔵に肩入れする事が多かったが、最近は特に多い。時期的には陸奥が死んだあたりからだ。今月にあった武蔵の誕生日には、なんとなく自分の時よりも祝っていた（完全な気のせいだが）気がする。
実の妹である武蔵が――非常に恨めしい。
だから、楽しそうに話す翔輝が憎らしく、そんなに優しく話し掛けられているのに、全く表情を変えずに聞いているのか聞いていないのかよくわからない反応をしている武蔵が――許せなかった。
「ちょっと武蔵。せっかく中尉がそんなに親しげに話し掛けてくれているのに、どうしてそんなに冷たくしてるの？」
「・・・え」
武蔵は目をパチクリとさせる。彼女にしては珍しく誰が見ても驚いた顔だ。
「大和。何言って――」
「表情の一つも変えないなんて、どこまで心が冷たいの？」
「・・・」
大和の言葉に、武蔵は無表情のまま大和を見詰める。その瞳に対し「何よ」と少し動揺する大和。そんな大和に、翔輝はため息する。
「大和」
「な、何ですか？」
「武蔵はちゃんと表情を変えてるよ？」
「はぁ？　何言ってるのですか？　武蔵は先程から一切表情に変化などさせていませんじゃないですか」
「お前、本当にわかってないのか？」
翔輝のその少し小ばかにしたような言い方に、大和はむっとする。そのせいで自然と口調が強くなってしまう。
「わかりませんよ。中尉が言っている言葉の意味が全くわかりません」

大和のやけクソの一撃に、翔輝は本当に呆れているようなため息をする。そんなため息にも大和はカチンとくる。
「な、なんですか」
「あのなぁ、お前こいつの姉だろ？　自分の妹の表情の変化ぐらいわからないのかよ」
「だから武蔵は表情なんか変化させてなんか――」
「してるってば」
「へ？」
大和はぽかーんとした顔をする。そりゃあもうアホ面全開である。
そんな大和に翔輝は再びため息して頭を掻く。
「慣れなくちゃわかんねぇけど。微妙に変わってるんだよ」
「う、ウソです。全然変わってないじゃないですか」
「だから変わってんだよ。本当に微妙だけどな――見てみろ。お前にひどい事を言われて、武蔵かなり傷ついているぞ」
翔輝の言葉に大和は驚いて武蔵を凝視する。しかし彼女はいつも通り無表情をしている。眉もピクリとも動かない。どう見ても、いくら見ても何もわからない。
「やっぱりいつもと一緒です」きっぱりとそう答える。
「お前なぁ」
「・・・」
「何の話？」
長門達が何やら四人の間に発生した険悪な雰囲気に気づいて来て見ると、そこでは大和と対峙している翔輝と、二人を見詰めている武蔵と雪風の四人がいた。
「ねぇ、一体どうしたのよ」
長門が不思議そうに問うと、翔輝は聞いてくださいよと言わんばかりに話す。
「それが、大和は武蔵の姉なのに、彼女の表情の変化がわからないと言うんです」
「武蔵の表情の変化？」

長門は不思議そうに首を傾げる。そんな長門の反応に今度は翔輝が驚く。
「え？　長門さんも、わからないんですか？」
そう問うと、長門は少し考えた後に首を横に振る。
「一応わかるわよ。たまにすごくわかりやすい感情を表情に出すから」
「それは本当にすごい時だけです。それ以外の彼女の微妙な表情の変化はどうですか？」
「え？　武蔵ってそんなに表情が変わってた？」
翔輝に雷が落ちたように見えたのは気のせいだろうか？
「ま、マジですか？」
目を大きく見開いて驚く翔輝。それに対し長門も真剣な顔で、
「うん。すっごくマジ」と答える。
「それはちょっとひど過ぎるんじゃ――」
「・・・翔輝。もういい」
二人を会話を遮ったのは少し怒ったような（翔輝にしかわからない）声で言う武蔵。表情も不機嫌そう（翔輝にしかわからない）で翔輝の服の裾クイクイっと引っ張る。
「で、でも・・・」
渋る翔輝に、武蔵は小さく首を横に振る。
「・・・私は、翔輝が理解してくれているだけで十分」
武蔵はそう言って翔輝の服の裾を掴んだまま立ち上がり、歩き出す。
「む、武蔵。ちょっと――」
「中尉！？　ちょっと武蔵！　中尉をどうするつもり！？」
「・・・姉さんには、関係ない。これは私と翔輝との問題」
「そうはいかないわッ！　中尉を返して！」
「ちょっと二人とも！　やめてよ！」
睨み合うようにケンカする困った姉妹。そんな二人をなんとかなだめようとがんばる翔輝。そんな彼の前にいきなりラムネが現れた。

「航海士。すこし落ち着け」
「山城」
ラムネを渡したのは、武蔵の最終進化形態（仮）である――山城だった。山城は彼がラムネを受け取ると、武蔵をじっと見詰める。
「先に言っておく。私は武蔵の表情の変化は読める」
「え、うそッ！」
「私は武蔵に似てるからだいたいはわかる。だが、長谷川ほどではない」
「さすが同族」
「ほめているのか？」
「一応」
「そうか」
なんとなく納得いかない山城は無言で翔輝を見詰める。そんな視線から逃げるようにして翔輝は大和姉妹のケンカの仲裁を始める。もうすでに殴り合いに発展しそうな勢いだった。
「ほら、女の子がそんな恐怖の目をするなって」
翔輝の言葉に、二人は睨み合った後お互いに反対方向を向く。
「お、お前らなぁ」
あまりの姉妹の仲の悪さにさすがの翔輝も呆れる。
「・・・行こ。翔輝」
「え？　のわッ！」
「あぁッ！　武蔵！　中尉を返しなさい！」
「司令！？　どこに行かれるんですか！？」
翔輝を捕獲して逃亡する武蔵。そんな武蔵を追跡して飛び出す大和。驚いて自分が使える主を追い掛ける雪風。
そんな相変わらずな翔輝達を見て、艦魂達は嬉しそうにほがらかな笑みを浮かべていた。

翔輝は何とか二人に停戦条約を結ばせ、自分の部屋に連れて来た。
「お前らなぁ。いい加減仲直りしろよ」

停戦条約を結んでも、いまだに冷戦状態が続く二人。そんな一触即発な臨戦態勢の二人を、翔輝は呆れながら見詰める。そんな三人を見て、雪風は嬉しそうに微笑む。

「相変わらず仲がよろしいのですね」

「そうかな？」

「はい――いえ、以前よりも、ずっと・・・」

優しく微笑む雪風に翔輝は見とれた。

――雪風って、こんな優しい笑顔ができたんだ・・・――

その笑みはとても幸せそうに見える。が、そんな瞳の奥に、秘められた悲しみがあるのが翔輝には見えた。

トラックに来る途中に艦魂達の状況を確認する為に見た資料の一つを思い出した。その資料の名は――陽炎型駆逐艦・各艦戦没記録。

「なぁ雪風」

「はい。何でしょうか？」

翔輝の声に、雪風は優しげな笑顔で対応する。そんな彼女い翔輝は確認するように訊く。

「僕らがトラックを離れて呉に戻っている間に、お姉さんや妹さんが何人か亡くなったんでしょ？」

「・・・はい」

悲しそうに返事する雪風。

この戦艦部隊――特に『大和』が内地に戻っていた三ヶ月の間に、陽炎型駆逐艦は五隻沈没した。

陽炎十九姉妹の内、すでに四人――つまり四隻が沈没している。さらにこの三ヶ月の間に五隻も沈没し、その中には陽炎姉妹の長女――陽炎も入っている。よく妹達の不祥事に自ら頭を下げて大事な妹達を守って来た陽炎も、『大和』がトラックを出たその日、輸送作戦中に機雷に触れて損傷し、航行不能になった所で敵機の来襲を受け、ソロモン海に沈んだ。

長女を失った陽炎姉妹は次女の不知火（しらぬい）と義理の姉妹である夕雲十九姉妹の長女――夕雲が統一している。

雪風は先程の笑みをやめ、悲しそうに顔を伏せる。その姿は、翔輝も知っている大切な人を失った悲しみに包まれている。

「陽炎姉さんも死んだ。黒潮姉さんも、親潮姉さんも、夏潮姉さんも、早潮姉さんも、時津風も、嵐も、萩風も、舞風も――みんな死にました。残っているのは、私を含めてあと十人。姉妹も、半分近くいなくなってしまいました」

「駆逐艦は最も活躍している艦艇だからね。損失率も高いんだ。仕方がないと言えばそれまでだけど、辛いよね」

「はい・・・」

「僕も仲の良かった艦魂を多く失ったよ」

「・・・二ヶ月前、陸奥参謀が亡くなられたんですよね」

「あぁ」

「とても仲が良かったですよね」

「うん。だから、すごく辛かった。自殺未遂までしたけど、大和や武蔵に止められちゃった」

「あ、当たり前ですよ！　何考えてるんですか！？」

途端に本気で怒る雪風。それは彼の事を本気で心配している証拠だ。そんな彼女の姿を見て、翔輝は自然と笑ってしまう。

「あはは、何にも考えてなかったなぁ」

「笑い事じゃありませんッ！」

「――でも、心配してくれるんだ」

「え？」

驚く雪風に、翔輝は優しく微笑む。

「ありがとう」

「あ、いや、その・・・ッ！」

急に慌て出す雪風に翔輝は不思議そうに彼女を見詰める。雪風は顔を真っ赤にしながら翔輝から視線を外す。その表情は少し嬉しそうに見える。

「中尉は、お変わりになりませんね」

「そう？　成長してないって事？」

「違います。その・・・相変わらずお優しいと」
「えー、僕はそんなに優しくないよぉ」
「そんな事ありません。私が見てきた人間や艦魂の中で、一番お優しいと思います」
「雪風。どんだけ優しい人に会わなかったの？」
「たくさん会いましたよ。でも、やっぱり一番は中尉です」
「・・・真正面から言われると照れるなぁ」
翔輝は嬉しそうに頬を桜色に染める。そんな翔輝の反応に、雪風は嬉しそうに笑う。そんな久しぶりに話す二人。傍から見てもとても中が良さそうに見える。そんな二人を見て約一名が妨害工作に出た。
「ちょっと雪風。何一人で中尉と楽しそうに話してるの？」
少し怒ったような顔をしている大和が雪風を睨む。そんな大和に雪風は小さくなって口ごもってしまう。
「いえ、その・・・」
「中尉も中尉です。私と武蔵が決別状態だという事を忘れていませんか？」
「いや、忘れてないけど」
「仲裁とかは考えていないんですか？」
「・・・っていうか、姉妹ゲンカに仲裁が必要なのはおかしいだろ。姉妹ゲンカなら姉妹の中で解決しろよ」
「無理です」
「何でそんなに自信たっぷりなんだよ・・・」
呆れる翔輝だが、このまま大和姉妹が決別状態になるのは翔輝自身あまり好ましくない。仕方ないなと言いながら大和と武蔵の仲裁を始めるのであった。そんな優しい翔輝を、雪風は優しく微笑みながら見詰めていた。

第十章　第一節　懐かしきトラック前線（後書き）

この作品には各話に初めて登場した後に、次の話でそのキャラのプロフィールが書かれていますが、先日それを修正しました。と言っても出身地と家族構成を加えただけですが。
人間は出身地。艦魂は出身の造船所の名前です。これで彼女達がどこで生まれたのか一目瞭然です――って、いらない気がする。
さて、この第十章は一気に１９４４年まで進む章で、マリアナ沖海戦の手前くらいまで進みます。
ついに比較的平和だった大和達にも、実戦が迫る。
激動の第十章。これからも読んでください。

第十章　第二節　悠久の絆砕ける亀裂

九月七日、松田千秋大佐に代わって大野竹二（おおのたけじ）大佐が大和三代目艦長に就任した。その後、松田は軍令部第一部第一課出仕兼大本営参謀という役職に就任した。彼はそこで伊勢型戦艦の航空戦艦改造を誰よりも支援していた。実は伊勢型戦艦を航空戦艦に改装するのを提案したのが、この松田だったのだ。

そんなこんなで松田の後任には大野竹二大佐が当たった。彼は『大和』の前は最上型重巡洋艦三番艦『鈴谷』の艦長をしていた。ちなみに、『大和』初代艦長の高柳儀八大佐も以前は『鈴谷』の艦長だったりする。

ともあれ、こうして戦艦『大和』新司令部が発足した。

就任初日、大野は司令部の人事異動を行った。その際、翔輝は大尉に昇級。及び通常航海士から先任航海士に昇級した。先任航海士とは、航海長の補佐を行う数人の優秀な航海士に与えられる役職である。

この翔輝の昇級に、大和達は大喜びし、その祝賀会を開いた。

「では、戦艦『大和』先任航海士に格上げ、及び大尉に昇級した長谷川翔輝航海大尉を祝って、乾杯ッ！」

『かんぱーいッ！』

長門の掛け声で、艦魂達は嬉しそうにお酒（特別許可）やラムネを飲み始めた。気分はもう祝賀会ではなく宴会である。

「おめでとう。長谷川君」

満面の笑顔で言う長門の激励に、恥ずかしそうに頬を赤く染める翔輝。その襟には銀色の桜章が三つ輝いている。

「ありがとうございます。でも、こんなに祝わなくてもいいんですよ？」

「何言ってんのよ。相変わらず低姿勢なのね」
「いや、低姿勢も何も、一兵士の一階級昇進くらいでこんなに祝うのもどうかと」
「長谷川君。こういう時は羽を伸ばしなさい。いつも大変なんだから」
そう言って長門は優しく微笑んだ。そんな長門の笑みに、翔輝も自然と笑顔になる。
「中尉――じゃなくて大尉。おめでとうございます。はぁ、また言い方が変わってしまいました」大和は疲れたようにため息を吐く。
「ははは、ありがとう。階級で呼ぶのが面倒なら、名前で呼べばいいだろ？」
「そ、そんな恥ずかしい事できないですよ！」
翔輝の言葉に、大和は顔を真っ赤にさせて顔の前で手をブンブン振って否定の意味を表す。鈍感な翔輝に複雑な乙女心を理解しろという方が無理な話だ。
「そうか？　別に恥ずかしい事なんてないと思うけど。それに武蔵は名前で呼んでるし」
「武蔵は武蔵。私は私です」
「まぁ、お前がそれでいいならいいけど・・・」
「・・・翔輝」
小さな声が響き、振り返ると、そこにいたのは数多くの艦魂の中で唯一彼の事を名前で呼ぶ親しい存在の艦魂――武蔵だった。武蔵は口元に小さな笑みを浮かべる。
「・・・翔輝。おめでとう」
「武蔵。ありがとう」
翔輝も嬉しそうに微笑む。そんな二人を見て、大和は赤い頬のまま唇を尖らせる。
「いいなぁ武蔵。中尉の事を名前で呼べて」
「・・・姉さん。翔輝の階級間違ってる」
「あ・・・」

「おいおい、また同じ間違いをするつもりか？」
「ちょ、ちょっとした間違いです！」
顔を真っ赤にして反論する大和を見て、翔輝はおかしそうに笑う。
笑われた大和はさらに顔を真っ赤にして怒る。
「中尉ッ！　何がおかしいんですか！」
「ほら、間違えてる」
「うっ」
言葉に詰まる大和に、翔輝はそっと優しく微笑んだ。その時、
「お兄ちゃん！　昇級おめでとう！」
勢い良く走って来た隼鷹が嬉しそうに翔輝に豪快に抱き付いた。
おもわず転びそうになるのをなんとか耐える。こうした日々の奮闘が、彼をたくましく成長させている理由のひとつでもあったりする。
そんな翔輝に抱き付いて満面の笑みを浮かべている隼鷹は昨日翔鶴達機動部隊と共にトラックに来たばかりだったが、まさか着いて次の日にこんな祝い事があるとは誰も思わなかっただろう。
「こんなに早く大尉に昇級できるとは、たいしたものだ」
「おめでとうございます。長谷川大尉」
頼もしい笑みを浮かべる翔鶴と天真爛漫な満面の笑みを浮かべる瑞鶴は嬉しそうに激励する。翔鶴は「まあ、これからもがんばれ」と念押しをする。さらに、
「・・・（無言でラムネを突き出す）」
「大尉。全駆逐艦を代表して言います。おめでとうございます」
山城らしい激励と、雪風の純粋無垢な笑顔の激励に、翔輝も嬉しそうに「ありがとう」とお礼を言う。
「ふん。貴様にしては上出来だ」
「大尉か。よくやくまともな階級になったじゃねぇか」
そう言って素直じゃない激励をするのは金色の髪を流して不敵な笑みを浮かべる金剛とポニーテールまでもが元気いっぱいに揺れる榛名。そんな二人にも祝ってもらい、翔輝は嬉しそうに笑う。
陸奥がいなくなって三ヶ月。自分にはまだこんなにも多くの仲間

がいる。そう思うと嬉しくてたまらない。
　こうして昇級を祝ってくれるみんながいるから、自分は今ここに立っていられるのだ。決して一人ではなく、みんなと一緒に。
　翔輝は満面の笑みで皆の激励に応えると、山城から受け取ったラムネを天高くに突き上げる。電気に照らされた透明なビンの中で、シュワシュワと炭酸が心地良い音を奏でる。
「よーしッ！　今夜は徹夜で飲みまくるよぉッ！」
『おおおおぉぉぉぉぉッ！』
　部屋にいる多くの艦魂達の嬉しそうな咆哮が、深夜の『大和』第三会議室を力強く震わせた。

　翔輝は先任航海士になり、今まで以上に忙しくなった頃、艦魂達を震撼させる出来事が起きた。
　それは航海科に新しい航海士達が配属された日に起きた。
　その日、大和は武蔵を共に『大和』艦内の通路を歩いていた。
「・・・そっか、いよいよ最終防衛線を考えないといけないわね」
「・・・最終防衛線は千島列島、小笠原諸島、マリアナ諸島、中西部カロリン諸島、西部ニューギニア、スンダ列島、ビルマに決定して防衛作戦を考えるべき。敵がこのいずれかを攻略した場合、日本の破滅へと繋がる。最悪敵がこの最終防衛線に侵入した場合は、本土防空用の全本土基地航空隊を向けてでても敵の侵攻を食い止めなくてはならない。その時は、私達連合艦隊も命を懸けて敵艦隊に殴り込みを掛ける事になる」
　武蔵の言葉に、大和はうなずく。
　日本本土近海の制海空権を失えば、日本は南方資源地帯との補給路を失う。そうなれば、資源のない日本はすぐに枯渇する。艦を修理する鉄も、艦を動かす石油も、何もかも失ってしまう。そうなれば、継戦能力を完全に失われる。その先に待つのは破滅だけ。
「何としても、守らないと」
　大和の言葉に、武蔵もうなずく。

日本を守るには、もう日本軍の全力を挙げて戦うしかない。総力戦だ。

大和と武蔵は具体的な防衛作戦を練りながら歩く。と、対向方向から一人の青年士官が現れた。青年は大和と武蔵を見ると、にっこりと微笑む。

「「・・・え？」」

驚く二人に、青年は優しく言った。

「こんにちは。俺は坂井昇航海少佐。本日付で『大和』勤務に任命された。で、大和はどっちなの？」

青年――坂井昇航海少佐は満面の笑みでそう言った。

――それが、新たな出会いであり、亀裂の始まりだった・・・――

「坂井昇少佐？　あぁ、今日配属された航海士の一人だけど。それがどうしたんだ？」

艦橋で海図に書き込みをしていた翔輝に、大和は興奮した表情で言う。

「坂井少佐って、艦魂が見えるんです」

「艦魂が？」

これには翔輝も驚いた。乗組員二五〇〇名のこの『大和』であっても艦魂が見えるのは今まで自分一人だったのだ。それが今回もう一人現れた。これは翔輝も嬉しい事だった。

「坂井少佐か、これは話が合いそうだな」

そう笑っていると、ドアが開き、ご本人――坂井昇航海少佐が現れた。

「あれ？　君は大和。どうしたの？」

坂井が不思議そうに首を傾げると、翔輝はそんな彼の前に立った。

「あの、僕の名前を覚えてますか？」

敬語を使うのは役職が上と言っても、階級も年齢も相手の方が上だからだ。

坂井はにっこりと微笑む。その笑みは翔輝に負けず劣らずの優しげなものだった。
「あぁ。戦艦『大和』先任航海士、長谷川翔輝航海大尉だろ？」
「よく覚えてましたね」
「もちろんだ。階級は私の方が上だが、役職上一応上官だしな。覚えなければならん。あぁ、でも、敬語は抜きでいいよな？」
「はい。もちろんです」
微笑む坂井という青年は、どこか幼さが残る翔輝と違ってしっかりとした大人の雰囲気を纏っている。そんな彼に、翔輝も優しく微笑んだ。
「あなたは艦魂が見えるんですか？」
「な、何でそれを・・・ッ！」
驚く坂井に、翔輝は嬉しそうに優しく微笑む。
「実は、僕も見えるんです――艦魂が」
「え？」
再び驚く坂井に、翔輝は隣に立つ大和を紹介する。
「もう知ってると思いますけど、彼女は戦艦『大和』の艦魂。僕の知り合いです」
翔輝が何気なく言った《知り合い》という単語に、大和は寂しさを覚えた。
（私は、大尉にとってはただの《知り合い》でしかないんですか）
悲しげな瞳を揺らす大和に気づかず、翔輝はにっこりと微笑む。
すると、坂井も嬉しそうに笑みを浮かべる。
「そうだったのか。これは嬉しい事だ。前に乗っていた艦には俺一人しかいなかったからな。これは楽しくなりそうだ」
「以前は何に乗られてたんですか？」
翔輝が何気なく訊くと、突然坂井は悲しそうに微笑んだ。その悲痛な笑みを、翔輝は知っている。
「あいつはもう、ソロモンの海の底だ」
「・・・沈んだ・・・のですか？」

「あぁ。俺は以前――戦艦『比叡』に乗っていたんだ」
「「『比叡』！？」」
二人は驚く。
忘れもしないその名前の戦艦。
金剛型戦艦二番艦として連合艦隊の中でも重鎮的存在だったその戦艦の艦魂は、凶暴な姉と乱暴と内気という正反対な性格の双子の妹との間でいつも優しく微笑んでいた。その笑みに、一体どれだけの艦魂が救われてきたか数知れない。そんな彼女は、一九四二年十一月に適否工場砲撃任務を受けて出撃し、待ち受けていた敵艦隊や敵機の猛反撃を受けて妹艦『霧島』と共に海に沈んだ。
目をつむれば思い出せるその優しげな笑みに、翔輝と大和も悲しそうな瞳をする。
「そうですか・・・以前は・・・『比叡』に・・・」
「あぁ。比叡とはかなり仲のいい関係だった。沈没する際、俺は強く艦に残る事を希望してあいつと運命を共にしようとしたんだが、あいつは無理やり俺を甲板に転送し、俺はそのまま海に投げ出された――俺は、比叡に助けてもらって、ここにいるんだ」
寂しそうに言う坂井の肩は震えていた。そんな震える彼の肩に、翔輝はそっと手をのせる。上げられた瞳をじっと見詰める。
「比叡さんとはあまり親しい関係ではありませんでしたが、同作戦で沈没した『霧島』の艦魂とは、仲のいい友達でした。だから、そのお気持ちはわかります。だからこそ、彼女達の為にもがんばりましょう」
翔輝の強い志が込められた笑みに、坂井はうなずいた。
「当たり前だ。あいつの為にも――それに、大和達の為にもな」
「え？　あ、はい」
いきなり話を振られた大和は油断していて慌てて答える。
「へぇ、ずいぶんと仲良くなったじゃん」
嬉しそうに笑顔で言う翔輝に、どことなく不満の残る大和だった。

その夜、翔輝はみんなに坂井を紹介する為に会議が終わった直後の会議室に向かった。

長い会議が終了した直後に翔輝はドアをノックして部屋の中に入る。思ったとおり椅子から立ち上がろうとしていた艦魂達が一斉に自分達に注目する。

「中尉？　どうされたんですか？　それに坂井少佐まで」

驚く大和に優しく微笑むと、後ろにいた坂井を前に出す。

「みんな、紹介します。彼は坂井昇航海航海少佐。本日付で『大和』に配属されました。ここに連れて来た訳は、彼は艦魂が見えるからです」

翔輝の紹介に、その場にいた艦魂達は全員坂井に注目した。好奇な目や、警戒する目が集まる中、坂井はにっこりと微笑む。その時、

「うん？　坂井昇？　貴様確か、『比叡』に乗っていなかったか？」

何かを思い出したように訊く金剛に、坂井はうなずく。

「あぁ、乗ってたよ」

「――そうか、比叡から聞いていた艦魂の見える航海士とは、貴様の事であったか」

「あいつが、比叡姉さんが言ってた」

特に坂井をジロジロと見る金剛と榛名。そんな二人の名前を翔輝が言うと、坂井は嬉しそうにうなずき、彼女達に近づく。

「君達が比叡の言っていたお姉さんと妹か。初めまして、坂井昇航海少佐だ。よろしく」

「――ついでに口が悪いと言っていたが、それは当たりのようだな」

無礼者を金剛は不機嫌そうな瞳で見詰める。だが、坂井はそんな事を気にした様子もなく二人に話し掛ける。そんな坂井のまわりには多くの艦魂が集まっている。彼の優しげな雰囲気が彼女達を引き付けたのだろう。

長門は艦魂達に囲まれて微笑んでいる彼を嬉しそうに見詰めている翔輝の傍に寄る。

「いいの？　あんなに明るい人なら、艦魂達がみんな坂井について、

あなたから離れていくかもしれないわよ？」
　長門はからかうように言うが、翔輝は気にした様子もなく微笑む。
「別に。それは僕よりも坂井さんの方がいいという判断でしょう。僕は、それでそいつが幸せになれるなら構いません。僕から離れたければ、離れればいいだけです」
　笑顔で言う翔輝。聞き様によっては悲しい言葉に、長門は黙ってしまう。
「わ、私は絶対に大尉から離れませんから！」
「・・・翔輝以外の男なんて、近寄りたくもない」
　そんな翔輝に必死な声で言う大和と武蔵。そんな二人の言葉に翔輝は嬉しそうに微笑む。
「ありがとう。大和。武蔵」
　笑顔で言う翔輝は本当に嬉しそうだった。そんな笑顔を見て、長門はきっと大丈夫と思った。今までの思い出が、彼らの絆の深さを思われる。
　長門はわいわいと騒ぐ大和達を見詰め、優しく微笑んだ。

　坂井との出会いから数週間後が経った頃、『大和』の会議室では緊急の艦魂会議が開かれていた。極上幹部会の幹部である各部の部長副部長がほぼ全員参加した。
　武蔵は会議の開口一番に驚くべき訃報を口にした。
「イタリアが、降伏しただと・・・ッ！」
　金剛が怒りの表情一色で武蔵を睨む。そんな彼女に睨まれる武蔵は無表情で手に持つ資料を見ながら淡々と説明する。
「・・・連合国の反撃を受けてイタリアは陥落。ドイツもスターリングラード攻防戦（一九四二年八月～翌年二月にかけての第二次世界大戦最大の陸上戦。ドイツ軍五〇万人は三倍以上の兵力を持つソ連軍に包囲されて大敗北した）で劣勢に追い込まれている。ドイツも陥落するのは時間の問題」
「ふんッ！　所詮は欧米のクズ国家か。降伏など、武士の誇りに反

する愚策をしおって・・・ッ！」

金剛はいつも以上に不機嫌そうだ。欧米に対しすさまじい嫌悪感を持つ金剛は、イタリアが陥落した事にすさまじく腹を立てていた。

「ちっ、所詮騎士道なんてそんなもんか。武士道の足元にも及ばねぇ。だがよ、俺は騎士道も嫌いじゃなかった。武士道と騎士道、どこか似通っているものがあると思ってた。だが、イタリアの連中は騎士精神も忘れた――ただの愚民でしかなかったかよッ！」

榛名もすさまじい嫌悪感を露にする。そんな二人の言葉に、皆は何も言えずに沈黙する。

「ヒトラーとやらも、所詮は欧米人。いつかは降伏するだろう。だが、我が不滅の大日本帝国は、決して欧米諸国には屈せんッ！　その民族の魂尽きるまで戦い、一億総玉砕の覚悟で欧米諸国に最後まで抗うッ！」

――金剛の瞳に刃が灯る。

「例え、日本人が全て滅ぶとしてもだ・・・ッ！」

金剛の言葉に、全員が息を呑む。彼女のすさまじい愛国心は、人並み外れている。だが、ここにいる大和の民は、全て同じ想いだ。

――その命尽きるまで戦う――

それは、誰もが敬愛すべき天皇陛下に誓った――絶対必須な責務なのだから。

「・・・おそらくイタリアは米英の傀儡（かいらい）国家となって、対日独戦に参加する。そうなれば、ドイツの命も風前の灯（ともしび）になる」

武蔵の言葉に、金剛は椅子を蹴って立ち上がる。その瞳には紅蓮に燃え上がる闘志があった。

「例えドイツが滅んでも、我が神国大日本帝国は永久に不滅ッ！　アメリカやイギリスには絶対に屈せんッ！　民族の魂尽きるまで戦う！　銃がなければ竹槍で串刺しにしろッ！　竹槍を失ったら殴り殺せッ！　両腕をもがれれば蹴り殺せッ！　脚を潰されれば噛み殺せッ！　首を断たれれば睨み殺せッ！　最後の一人まで欧米人に挑み掛かれ！　それが真の日本人であり、真の武士道だッ！」

金剛のすさまじく過激な言葉に皆呆然としたが、ほとんどの者がうなずいた。ここにいる皆も同じ志を持つ大和の民なのだ。

だが、長門や大和、武蔵といった数名の者は、うなずく事はしなかった。

「日本人全てが死ぬなんて、そんなの・・・絶対にダメなんだから・・・」

長門の小さな声は、頭に血が上っている金剛達には聞こえる事はなかった。

会議が終わり、大和は艦橋に向かった。艦橋のドアを開けると、そこでは翔輝が忙しそうに仕事をしていた。そんな彼の姿に嬉しそうに微笑むと、大和は彼に近づく。

「大尉。何か手伝える事はありますか？」

大和が笑顔で尋ねると、翔輝は仕事の手を止めぬまま「会議終わったんだ」と明るく声を掛けてくれる。

「はい。それで何かお手伝いは」

「いや、何もないよ。ありがとね」

翔輝は笑顔で答えると、すぐに海図に目を戻す。大和はそんな翔輝の横に付いて一緒に海図を見る。その表情は嬉しそうだ。

いつもと変わらぬ、平和で幸せなひと時。だが、

「おぉ、大和」

「坂井さん！」

艦橋に戻って来た坂井に、大和は満面の笑顔で翔輝から離れ、彼の下に寄った。そんな大和に坂井も嬉しそうに微笑む。

「相変わらずかわいい顔してるな」

「そ、そんな、かわいいだなんて。照れてしまいますぅ」

「ははは、そうやって恥らう仕草もかわいいな」

「んもう。坂井さんったら」

「ははは」

大和は照れたように頬を赤らめながらも嬉しそうに笑う。そんな

彼女に坂井も嬉しそうに微笑む。その会話はとても楽しそうだ。そんな楽しげに話す二人を、少し離れた場所にいる翔輝は少し寂しげな瞳で見詰める。

「・・・翔輝」

「え？　あ、武蔵」

いつの間にか、翔輝の横には武蔵が立っていた。相変わらず神出鬼没で、何の感情も窺えない無表情をしている。だが、その瞳はしっかりと翔輝に向けられている。

「・・・どうしたの？」

「うん？　いや、あの二人、仲がいいなぁって思ってさ――えへへ、ちょっと、悔しいな」

「・・・翔輝？」

翔輝らしくない言葉に武蔵は驚いて彼の顔を見上げる。小さく微笑んでいるが、その表情は悲しみを秘めた笑顔だった。そのまま、翔輝は口を開く。

「いやね、最近大和と坂井さんが仲がいいから。大和も坂井さんの所に行く事が多くなったし。なんか、ちょっとね」

小さく「悔しいなぁ」とつぶやく彼に、武蔵は楽しげに話し込む実の姉を睨む。

「・・・姉さん。最低」

「コラ。自分の姉の事を悪く言うなってば」

翔輝はそう言って苦笑いする。いつもと変わらない言葉だが、その表情はどこか暗い。そんな彼を、武蔵はしっかりと見詰める。その瞳にはしっかりとした意思が込められていた。

「・・・でも、安心して。私は翔輝から決して離れないから」

凛とした声で言う武蔵に翔輝は唖然とする。その気まずい沈黙の中、武蔵の頬がだんだん赤く染まる。自分の言った事が恥ずかしい事だと脳が理解し始めたのだろう。そんな武蔵がかわいくて、いじらしくて、翔輝は笑ってしまった。

「・・・な、何で笑う」

武蔵は顔を真っ赤にさせたまま不機嫌そうに唇を尖らせる。
「いや、なんかかわいかったからさ」
「・・・か、かわ・・・ッ！」
武蔵は先程以上に顔を真っ赤にさせる。
「・・・ほ、本当？」
不安げに問う武蔵に、翔輝はしっかりとうなずいて答える。
「もちろん。基本的に僕はウソつかないでしょ？」
翔輝の言葉に、武蔵はコクリとうなずく。
「・・・翔輝はウソをつかない。だから、今の事は本当な訳で――」
再び顔を赤く染めて黙ってしまう武蔵に、今度は翔輝まで頬を赤らめて慌てる。
「も、もうその話はやめよう！　なんかこっちまで恥ずかしくなってくる」
「・・・了解」
二人は頬の赤いまま互いを見詰め合い、笑った。
翔輝と武蔵は楽しそうに話を弾ませ、武蔵は翔輝の仕事を手伝う。
そんないつもと変わらなく見える日常。だが、その日常は確実に変化しつつあった。
時は一九四三年九月某日。
翔輝と大和の固い絆は坂井の乱入により乱れ、解けつつあった。
日に日に大和は翔輝から離れていく。他の艦魂も坂井の人の良さに引き込まれ、次々に坂井の側に行ってしまう。
そんな激変する翔輝を取り巻く状況を見て、長門は一人ため息をついた。彼女の信じていた翔輝と大和の絆が、解けていく。
だがそんな中、翔輝に絶対の信頼を寄せて彼から離れない艦魂が二人いた。
それは、翔輝と心から話せる仲である――武蔵と山城だけだった。
ある日、極上幹部会の定例艦魂会議は緊急事態となった。
「・・・何で貴様がここにいる」

敵意むき出しの武蔵が睨み付けている先にいるのは、ほがらかな笑みを浮かべている坂井だった。
「いやぁ、艦魂達は一体いつもどんな会議をしているのかなぁって思ってさ。見学させてよ」
にこやかに笑みを浮かべる坂井を、武蔵は怒りの込められた鋭い視線で睨み付ける。
「・・・断る。それにそこは翔輝の席だ。即刻去れ」
「いいじゃん。今日ここに長谷川はいないんだし」
榛名は気にした様子もなく資料を見詰める。それよりさっさと会議を始めろと言いたいのだろう。
「・・・反対者はいないの？」
武蔵は見回すが、誰も何も言わない。あの規則にうるさい金剛でさえも不機嫌そうだが何も言わない。たった数週間でここまで艦魂達と親しくなれるとは、坂井はたいした人間だ。だが、武蔵はそんな彼が気に入らなかった。
「・・・反対者はいないの？」
武蔵が周囲を睨み付けていると、一人挙手が上がった。その人物に皆は少なからず驚いた。それは常日頃あまり自分の意見を言わない山城だった。
山城は無表情ながらもしっかりとした意思のこもった瞳を向ける。
「私は反対。航海士ならともかく、そんなどこの馬の骨ともわからない奴など、ここにいる許可を与える必要はない」
山城の意見に武蔵は無表情だが、味方の登場に嬉しそうにうなずく。さらに、
「私も反対だなぁ」
そう言って手を上げたのは緊張感のカケラもない笑みを浮かべた長門。長門が反対派になった事に全員が驚いた。
「長門。なぜお前が反対するのだ」
金剛が不機嫌そうに問うと、長門は笑みを消して真剣な顔で腕を組んで対峙する。

「そんなの、私が認めている人間は長谷川君だけだからよ。それより金剛こそ何で彼がここにいるのを止めないのよ」
「坂井は長谷川よりも有能な意見を言う事が多いからな。効率的に彼を参加させた方がいいと判断しただけだ」
金剛の感情のこもっていない事務的な返答に、長門の眉がピクリと動く。
「それって、長谷川君が無能だって事？」
「そうは言っていない」
長門の異様な食い付きに金剛は戸惑う。すると長門は不機嫌そうに坂井と楽しそうに話をしている大和を見詰める。
「大和。あなたは何か言わないの？」
突然話し掛けられた大和は驚き振り返る。その顔は何もわかっていない。
「え？　どうしてですか？」
「金剛が長谷川君を無能って言ったのよ？」
「だから私は――」
「え？　そんなひどい事を言ったんですか？」
バンッ！
すさまじい打撃音が響き、全員が驚いて音の発信源を見詰める。音の正体はテーブルを勢い良くぶっ叩いた武蔵だった。彼女らしくなく顔を真っ赤にさせて肩をブルブルと震わせ、身体全体から怒気を全方位に放っている。
「・・・もういいッ！　今日は会議を中止するッ！」
そう怒号を叫び、先程の十倍の大きさの激しい音でドアを勢い良く閉め、武蔵は部屋を出て行ってしまった。
唖然とする一同。さらに山城も無言で出て行ってしまった。さらに呆然とする一同に長門はため息。
「これは・・・マズイわね」
長門のつぶやきが聞こえたのは、誰もいなかった。

その頃、艦橋で仕事を終わらせて休憩をしていた翔輝の下に、すさまじく怒っている武蔵が現れた。
「む、武蔵？　どうしたの？」
「・・・姉さんなんか最低！　もう知らないあんな因業女ッ！」
持っていた資料を思いっ切り床に叩きつけ、肩で息をする。そんな彼女の姿に翔輝は呆然としている。
しばらく武蔵は荒い息をしていたが、呆然としている翔輝の視線に気づき、慌てていつもの無表情に戻すが、時すでに遅し。
「何かあったの？」
「・・・べ、別に」
「別にって雰囲気じゃなかったし――それに、因業女って？」
翔輝は真剣な瞳で武蔵を見詰める。武蔵自身こういう目が苦手だったりするので、結局根負けして先程の会議の事を話した。すると翔輝は軽く言う。
「別にいいんじゃないの？」
翔輝の意外な返答に、武蔵は一瞬驚くがすぐに首を横に振る。
「・・・良くない。姉さんは今まで第一に翔輝の事を考えていた。それが今や坂井とかいう男に夢中。節操のない最低な女だ」
「それは大和のせいじゃないよ。僕がのほほんとしてるのが悪いんだから」
「・・・翔輝は悪くない！」
武蔵は声を荒げて怒鳴る。いくら翔輝でも、自分が大好きな彼の事を悪く言ってほしくないのだ。だが、翔輝はそれでも首を横に振る。
「ううん。僕が悪いんだ。何事にもハッキリしない性格だから」
「・・・翔輝」
翔輝の悲しい瞳に、武蔵は何も言えなくなってしまう。翔輝のこういう目が、武蔵は嫌いだった。彼にそんな目をしていてほしくない。でも、翔輝はときどき一人でいるとこういう目をする事がある。でも、人前ではあまりしない。そんな目を、翔輝は今している。そ

れが、武蔵を苦しめる。
「・・・翔輝」
「ごめん。励まそうとしてくれたのに、何か変な空気になっちゃったね」
力ない笑みをする翔輝に、武蔵は再び何も言えなくなってしまった。
笑みを終えると、翔輝は少し悲しい表情を見せた。彼のそんな顔を武蔵は見たくない。だから――
「む、武蔵？」
武蔵は――翔輝の胸の中に飛び込んだ。驚く翔輝を気にせず、武蔵は翔輝の胸の中で優しい声で言った。
「・・・翔輝。私は翔輝を裏切らない。絶対」
「武蔵・・・」
翔輝は心の底から嬉しそうな笑顔をする。そして、
「ありがとう」
翔輝はそっと、武蔵の小さ身体を抱き締めた。
愛しい彼の腕の中で、武蔵は幸せそうな笑みを浮かべながら、心に決意する。
――例え、世界中の全てが彼の敵になっても、自分だけは彼の味方でいよう――
小さな少女の胸に決意された想いは、いつまでも輝き続けた。

その夜、仕事を終えた翔輝が部屋に戻っても、大和の姿はなかった。それもそのはず。大和はさっき坂井の所に行ったからだ。「坂井さんの所に行ってきます！」と、楽しそうに言って。そんな彼女を、翔輝は「いってらっしゃい」と、寂しげに見送った。
だから、今大和は坂井と楽しい会話をしているだろう。そんな事を考えると、自然にため息が出てしまう。
翔輝はとぼとぼと歩き、机に向かう。そして、机の上に置いてある翔香の写真を持ち、寂しげにそれを見詰める。

こちらに優しい笑みを向ける二度と会えない妹の姿を見詰める。
最近またこの写真を見る事が増えてきた。今までは大和がいたから寂しくなかったが、今ではその大和は自分から離れて行ってしまった。そのせいで悲しみがまたぶり返してきたのだ。
「翔香・・・」
翔香の写真を、翔輝は抱き締めた。目をつむり、もはや記憶の奥にしかない翔香の顔、声、匂いなどを思い出す。
「やっぱり、僕には翔香がいないと・・・」
「・・・翔輝」
突然の声に驚いて振り返ると、そこには気まずそうな顔をして立ち尽くす武蔵がいた。
「む、武蔵・・・ッ!?」
「・・・あ、その、ドアが開いてたから・・・ごめんなさい」
武蔵は目を泳がせながらそう言うと、慌てて部屋を出ようとする。
「待って!」
翔輝は逃げる武蔵の腕を掴む。
「・・・は、離して」
「どうして、逃げるの?」
「・・・だって」
武蔵は翔輝が手に持っている物――翔香の写真を見詰める。武蔵の視線に気づき、翔輝はそれを慌てて隠すが、効果はない。
「その、これは・・・」
気まずそうに視線を逸らす翔輝。だが、それが武蔵には辛かった。
「・・・ごめんなさい。翔輝の邪魔をしてしまった」
「いや、そんな事ないから・・・逃げないでよ」
最後の《逃げないでよ》はとても小さく弱々しい声だった。そんな翔輝の言葉に、武蔵は「・・・ごめん」と謝る。
「お前が謝る必要はないよ」
そう言って、二人は黙ってしまう。その間には気まずいという雰囲気が流れている。お互い何を言っていいかわからず、口を閉じた

まま。そんな中、翔輝はなんとか話題を作る。
「でもどうしたの？　僕に何か用？」
そう訊くと、武蔵はうつむいてしまう。その頬はほんのりと桜色に染まっている。何度か口を空けたり閉じたりを繰り返し、意を決して心の中の気持ちを口に出す。
「・・・一緒に寝ようと思って」
翔輝は基本は一人で寝ている。添い寝を嫌がり、いつも一人で寝ているのだが、今日は翔輝が心配で武蔵は添い寝の申し込みをしに来た――というのは言い訳で、本当は翔輝と寝たい一筋であったりる。
「・・・ダメ？」
武蔵はいつものように断られるのを覚悟していた。が、
「いいよ」
翔輝の返事は意外にもオーケーだった。武蔵は瞳を見開いて驚く。
「・・・いいの？」
「うん――今は、あまり一人にはなりたくないから」
翔輝の言葉に武蔵は他人に向ける無表情を緩め、優しげな笑みを浮かべる。
「・・・じゃあ、寝よう」
「うん」
翔輝と武蔵は着替えを終わらせると、そのまま一緒のベッドに入った。
武蔵は緊張して何も言葉が出ない。元々基本的に無口な方である武蔵が何も言わなくても、あまり違和感はない。そんな武蔵を、翔輝は背中から抱き締める。そんな行為に武蔵はビクリを震える。明らかにいつもと違う。
「・・・翔輝？」
「昔ね、翔香と一緒に寝る時はいつもこうしてたんだ。こうしていると、身体全体で武蔵を感じられるから。武蔵もそうでしょ？」
確かにその通りだった。背中から、彼の温もりを感じる。死角で

ある背中は見えない恐怖ある。敵に背中を見せないのは後ろが怖いからだ。でも今は、そんな背中を愛しい彼に優しく抱いてもらっている。これほど嬉しい事はない。

自らの背中を任せられるのは、一人だけ。

「・・・うん」

武蔵はいつの間にか緊張が解け、幸せそうに翔輝の腕の中で眠りについた。

翔輝も武蔵が寝たのを確認すると、ゆっくりと眠りについた。薄れる意識の中、翔輝は一度大和の事を考えたが、すぐに消えて眠った。

――結局、大和は帰って来なかった――

第十章　第二節　悠久の絆砕ける亀裂（後書き）

坂井の登場で翔輝と大和の間に生まれた亀裂。離れていく互いの心。悲痛にゆがむ笑顔。その全てが二人の絆を崩壊させていく。

艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～の動乱編。通称《坂井の乱》、しばらくの間はこれが続きます。次回をお楽しみに。

第十章　第三節　崩れゆく絆と結ばれる絆（前書き）

《坂井昇（さかいのぼる）》

役職　帝国海軍軍人・戦艦『大和』航海士

出身　静岡県静岡市

身長　１７３ｃｍ

年齢（１９４３年９月現在）２３歳

誕生日　５月５日

家族構成　父・母・弟・妹

好きなもの　艦魂・海・平和・笑顔

嫌いなもの　高い所・争い事・戦争

『大和』に転属して来た艦魂の見える男。第三次ソロモン海戦までは『比叡』に乗っていて比叡とは親しい関係だったが、沈没の際に比叡に助けられて生き延びた。翔輝のような優しい青年で、笑顔が絶えない。そんな彼の優しさに大和の心は自然と惹かれた。いつの間にか大和を始め多くの艦魂と親しい仲になった。だが、そんな彼に味方して翔輝を裏切るようなその行為に、武蔵達は激怒して決別する。これが俗に言う《坂井の乱》である。彼自身はみんな仲良くというのが一番いいが、武蔵達が敵視しているので不可能となっている。翔輝より階級と歳は上だが、役職は下に当たる。翔輝とは同じ艦魂が見える仲間なので結構仲が良い。艦魂年代史動編、坂井の乱の原因人物。本当は海上生活ではなく父と同じ軍令部に行く事を夢見ている。

第十章　第三節　崩れゆく絆と結ばれる絆

十月に入ってしばらくしたある日、『大和』の第三会議室では艦魂会議が開かれていた。今回は各部の部長副部長だけでなく、その部の幹部要員も集まる大規模なものだった。

「・・・絶対国防圏が制定されて一週間。その最終防衛線は千島列島、小笠原諸島、マリアナ諸島、西部ニューギニア、スンダ列島、ビルマを含む地域で、これを破られるような事があれば、その時は日本の滅亡に繋がる。この区域を守る為に、日本陸海軍が合同で作戦を実行し、死守しなければならない。その為に、現在海軍は新たに軍令部直轄で再編された決戦兵力の基地航空隊――第一航空艦隊をマリアナ諸島に展開させる案が検討されている。第一航空艦隊は名実共に精鋭部隊。本来なら訓練が終了するまで温存させておくべきだが、状況の悪化にともない、マリアナへの進出は時間の問題となる。その航空兵力は一八〇〇機にも上り、名実共に決戦兵力。防衛の主力はこの第一航空艦隊に任せ、機動部隊はこれの補助兵力として、侵攻して来た敵艦隊を挟み撃ちにする。機動部隊の全兵力はおよそ四〇〇機。つまり、マリアナ諸島防衛戦には総合計二〇〇〇機を超える航空部隊を投入し、日本本土に接近する全敵艦隊を粉砕する。マリアナの防衛はこれで問題なく、残るフィリピンやパラオなどは沖縄、フィリピン、台湾の航空隊と、第一航空艦隊の抽出部隊で補う。さらに潜水艦部隊による敵艦隊撃滅作戦や水雷戦隊による夜間決死作戦、戦艦部隊による艦隊決戦作戦など様々な作戦が議論されている。私達連合艦隊は、とにかく全力をもって作戦に当たり、敵軍をこれ以上日本に近づけない事。その一点に集約される」

黒板に張られた太平洋の海図を指揮棒で叩きながら、武蔵は最終防衛作戦の構想を説明する。各重役艦魂に配られた資料には、その作戦がまさしく決戦作戦である事を示していた。日本陸海軍の全航空隊、海軍の全艦艇を用いた最後の決戦にふさわしい内容に、皆は

沈黙していた。
「・・・戦略部部長である山城も、今回の作戦こそが最後の決戦となると予想している」
武蔵の言葉に、山城は小さくうなずく。
「今回のこの作戦、順調にいけば間違いなく敵艦隊を粉砕できる。ただし、順調にいけばの話。他の地区に敵が来寇し、そこへ部隊を抽出すれば、各個撃滅で戦力は磨り減る。だから、この戦力は決戦まではなんとか温存しなければならない事が大前提」
「・・・その為、機動部隊には第一航空艦隊の代わりにフィリピンなどの地区の防衛に当たってもらう可能性がある。とりあえず、決戦まで私達戦艦部隊は待機という形となる」
武蔵の報告に、皆は期待の眼差しを向ける。この作戦なら、敵に一矢を報いるどころか、敵艦隊を殲滅する事ができる。期待するのは当然だった。だがそんな中、金剛は不機嫌そうに鋭い瞳を武蔵に向ける。
「絶対国防圏は本当に守勢の作戦だな。ここまで前線の後退とは一体どういう事だ。この防衛線は明らかに陸軍側の意見に近いではないか。これではソロモン諸島を完全に捨てる事になる。それに、一八〇〇機という第一航空艦隊だが、マリアナ一点に集中するのは危険だ。敵だってバカじゃない。わざわざ危険を冒してまで敵が準備万端で待ち受ける場所には行くまい。次の攻略地点はフィリピンの可能性もある。その時はどうする？　すぐさますでに配置された部隊を再編するというのか？　それは無茶がありすぎるぞ」
「・・・第一航空艦隊の指揮官には角田覚治中将が就任している。彼はダッチハーバー作戦の時に航空隊回収の為に危険を冒してまで母艦を前進させたり、南太平洋海戦の際は『隼鷹』を巧みに操り攻撃機の数が一桁になるまで執拗に敵を攻撃した猛将。決戦作戦の指揮官にこれほど勇猛果敢な指揮官は彼を置いて他にはいない。今回の作戦では第一航空艦隊司令長官角田覚治中将、機動部隊こと第三艦隊司令長官小沢治三郎中将という航空機専門の指揮官が指揮をす

る。今までこれほど航空機主力の作戦を立案した事は、連合艦隊の長い歴史の中でも初の試みである」

「おいッ！　武蔵！　人の話を聞け！　無視するとはどういう了見だぁッ！」

金剛がテーブルを叩いて怒鳴っても、武蔵は表情ひとつ変えずに無視して話を進める。

坂井が会議に乱入して以後、武蔵は一部の艦魂（長門と山城）以外の艦魂を無視するようになった。

「おいッ！　武蔵！」

「武蔵ッ！　無視すんじゃねぇよ！」

「武蔵！　いい加減にしなさい！」

金剛、榛名、大和の三人が激怒して怒号を上げると、ようやく武蔵は無視するのをやめた。だが、今度はまるで道端に落ちているゴミでも見ているような目で三人を睨む。

「・・・何？」

「何じゃねぇよ！　俺達の事を無視しやがって！　ふざけんなッ！」

「・・・ふざけてるのはどちらか、そんなの一目瞭然。会議を邪魔するなら消えろ」

「んだとテメェッ！」

「武蔵！　なぜ私達を無視するのだ！　私は貴様に期待して――」

「・・・そっちが勝手に期待しただけ。私はあなたの為に戦っている訳じゃない。日本の為に――いや、大好きな翔輝の故郷を守る為に、必死になって戦っている」

「貴様ッ！」

「武蔵！　金剛さんに何て口利いているの！？　早く謝りなさい！」

「・・・黙れ愚姉ッ！　貴様は今すぐ死ねッ！　貴様のような裏切り者の妹だと思うと虫唾（むしず）が走る！」

武蔵の激昂に大和はひるむ。それは大和だけではない。ここにいる艦魂達全員が同じ状態だ。あの冷静沈着な武蔵が顔を真っ赤にして怒鳴りつける光景などそうそう見られるものではない。そんな艦

魂達をも、武蔵はゴミのように見下した目で見詰める。
「・・・ここにいる者のほとんどは坂井の犬に成り果てた者ばかりか。情けない」
武蔵の言葉に、多くの艦魂達から反論が出た。
「坂井少佐をひどく言わないでください！」
「坂井少佐はとても言い方です！　武蔵司令はわからないんですか！？」
「いくら司令でも、少佐の悪口を言うのは許しません！」
あちこちから反撃が返って来る――だが、それは武蔵の怒りの炎にガソリンをぶち込むような行為だった。
「・・・黙れッ！」
突如武蔵が怒号を放ち、テーブルを蹴り倒した。誰かの悲鳴が響き、グチャグチャになった部屋の惨事に唖然としたが、武蔵を見てまた絶句した。
――武蔵は、泣いていた。
ほろほろと恥じる事なく涙を流し、唇はキュッと結ばれる。
「・・・何も知らないで・・・翔輝の苦しみも・・・悲しみも・・・何も知らないで・・・坂井なんかに味方して・・・許さない・・・ッ」
誰にも聞こえないような声でうつむきながらそう言うと、武蔵は全員をキッと睨み付けて罵声を放つ。
「・・・今の私の敵は、アメリカでも、イギリスでもない！　貴様達だ！　この外道どもッ！」
そう怒号を放つと、武蔵は部屋を出て行ってしまった。
呆然としている艦魂達の中、長門は苦笑いしながらパンパンと手を叩く。
「さぁ、テーブルを直しましょう」
長門の命令で艦魂達は倒れたテーブルを立て直す。だが、その間も所々から愚痴が聞こえる。そりゃあそうだろう。会議をめちゃくちゃにするわ、自分たちが慕っている人を愚弄するわ散々な事ばか

りだった。こんな日々が続き、現在武蔵司令長官の支持率は右肩下がりの一方であった。

掃除をする艦魂達の中で、金色の髪を流して怒りの色に染まった碧眼をする金剛は掃除の指示を飛ばしている長門に詰め寄る。

「長門！　武蔵の奴、少し甘やかし過ぎた。こうなったら制裁を加えるしかない！」

「ま、待ってください金剛さん！　私から武蔵には注意しますから。どうかそれだけは――」

「黙れ大和！　貴様では話にならん！」

金剛はあんな結果になっても妹をかばおうとする大和を突き飛ばし、長門に迫る。そんな怒り心頭な金剛に長門はわざとらしくため息する。

「何でも暴力で解決しようとするのはあなたの悪いクセよ。金剛」

「うるさいッ！　あの小娘に世の中の道理を教えなくてはならん！」

「私はどちらかって言うと、武蔵に味方するわね」

「なッ！？」

驚く金剛。他の艦魂達も手を止めて驚愕している。

「なぜだ！　なぜ貴様が武蔵の味方なのだ！」

「ハッキリ言って、坂井少佐が来てからあなた達浮かれ過ぎよ」

「なッ！？　浮かれてなどおらん！」

「いいえ。浮かれてるわ。そして、浮かれてないのが武蔵と私、そして山城だけよ」

その言葉に全員が隅っこで事の成り行きを見守っていた山城を見詰める。

「山城！　本当か！？」

金剛の問いに、山城はうなずいた。

「私も、坂井少佐の反対派」

「山城まで・・・ッ！　この非国民が！」

「どうとでも言いなさい。私はあなた達に心底呆れたわ」

ため息しながら言う長門の胸倉を掴んで金剛が激怒する。

「貴様ッ！　私に対する侮辱は許さんッ！」
「あなたに許される必要なんてないわ！」
怒鳴り返す長門に金剛は一瞬ひるむ。その瞳には燃え上がる紅蓮の炎が見える。そんな意思に強く、そして怒る長門など久々に見た。
「ふんッ！」
金剛は長門を突き飛ばし、すさまじく不機嫌そうに部屋を出て行った。その後を榛名が追い掛ける。残された艦魂達は全員長門を凝視する。そんな中、長門は呆然としている大和に近寄り、
パンッ！
強烈なビンタを浴びせた。
「・・・ッ！」
痛みと驚愕で声が出ない大和に、長門はキッと睨みつけて叫ぶ。
「金剛よりも、私は今のあなたが一番許せない！　最低よッ！」
長門はそう叫ぶと、部屋を出て行ってしまった。
罵声を浴びせられた大和は何がなんだかわからず、その場に崩れ落ち、呆然としていた。

この騒動が決定的となり、金剛を中心とした坂井連合と、武蔵、山城、長門を中心とした新生翔輝連合の二派に分かれ、これ以降絶交関係になった。数的には圧倒的に劣る翔輝連合だが、雪風や最上など翔輝を慕う艦魂はまだいた。巡洋艦や駆逐艦もほとんどが坂井派に加わったが、中には姉妹全員と敵対してでも翔輝派に加わる艦魂もいた。争いを好まない潜水艦の艦魂達ですら、姉妹で敵対してしまうという緊急事態に陥った。戦力比は十対一にも満たない圧倒的な差ではあったが、連合艦隊艦魂達は、二派に別れて一触即発の雰囲気に包まれた。
そんな騒動の中心で、ただ呆然としている大和は――
「坂井さん。私はどうしたらいいのでしょうか？」
坂井に応援を求めていた。翔輝ではなく、坂井に・・・
元気のない大和に、坂井は優しく声を掛け、頭をそっと撫でてや

る。

「元気出せ。俺はお前の味方だ。安心しろ。それにこの騒動も一時のものだろう。時が来れば終わるさ」

坂井の優しげな言葉に、大和は嬉しそうにうなずいた。

そんな二人から少し離れた所で愕然としている少年がいた。

「大和・・・」

翔輝だった。

偶然大和の姿を見つけて声を掛けようと近寄ったら、坂井と会う現場を目撃したのだ。

頭を撫でられる大和の、幸せそうな笑顔が、翔輝の心を貫く。

愕然とし、うつむく。

「そっか・・・僕は、もう・・・」

悲しみを堪えながら、翔輝は走り出した。

「・・・翔輝！」

目の前を走り去った翔輝に武蔵は驚く。そして、彼女の視力は二・〇だった。見えていた――翔輝が苦しそうに泣いていたのを・・・

「・・・翔輝――なッ！」

ここで武蔵は見てしまった。

――大和と坂井が、とても楽しげに話しているのを・・・――

状況は理解した。

大和と坂井の現場を見て、翔輝は衝撃を受けたのだと。

武蔵は悔しくて仕方がなかった。今すぐにでも愚姉をこの手で殴り飛ばしたかったが、今は翔輝の方が大事だった。

急いで武蔵は追い掛けたが、すでに翔輝の姿はどこにもなかった・・・

結局、翔輝は一日中見つからなかった。

十月二一日、日本は究極の兵員徴集を行った。

今まで免除されていた学生の兵員徴集――学徒出陣である。
これ以降、訓練期間を短縮された特別年少兵（通称《特年兵》）は続々と実戦に配備された。その面々は、皆幼さが残る十六歳、十七歳の少年達であった。

数日後、戦艦『大和』にも特年兵が配備された。
翔輝は歩きながら不思議な感覚を感じていた。
今まで自分と同じくらいの軍人はめったに見た事がなかった。だが特年兵が来てからは自分よりもさらに若い少年達が仕事をしているのをよく見る。その誰もが生き生きした瞳をしていた。みんな、日本の為に戦えるのを喜んでいるのだ。
それに対し、自分の瞳は曇っている。
つい先日、武蔵、山城、長門の三人が少数の仲間を連れて金剛以下大勢の艦魂達と決別したと聞いた。その原因は全て自分にある。
自分が情けないから、多くの人達に迷惑を掛けている。それが本当に情けなかった。
それに、もうずっと大和と話していない。
今頃、大和は坂井の所にいるだろう。そう思うと、泣きそうになってくる。
力なく翔輝がとぼとぼと歩いていると、前から数人の特年兵を連れた水上と出会った。
「長谷川大尉」
声を掛けられ、翔輝は顔を上げる。
「水上じゃないか、どうしたんだ？　その子達は？」
「はい。本日付で『大和』に着任した特年兵達に艦内を案内していた所です」
「そっか」
翔輝は少年達を見回す。みんな自分よりも年下の――幼さが残る子供のような少年達だった。
「君、出身は？」

翔輝はその中で一番小さい少年に笑顔で声を掛ける。すると、少年は同世代だが士官服を着ている翔輝に緊張した顔で答える。
「はッ！　鳥取県であります！」
「鳥取か。砂遊びはしたか？」
「え？　いや、その・・・」
返答に困っている少年兵。他の少年兵達もそんな二人のやり取りを見て楽しそうに笑う。
「ごめんごめん。気にしないでがんばってね」
「はいッ！」
翔輝はそう言うと、去って行った。
残された少年達は上官である水上に質問する。
「今のは誰ですか？」
「彼は長谷川翔輝航海大尉。この『大和』の先任航海士を務めてるんだ」
「お、お歳は？」
「僕より一つ上だ」
「と言うと、十九歳ですか！？」
「正確には十八歳だよ。再来月に十九になる」
「たった十八歳で世界一の戦艦の先任航海士を務めているなんて、すご過ぎです！」
「あぁ、本当にすごい人だよ」
水上はまるで自分の事のように嬉しそうに微笑んだ。
通路の向こうに消えていく尊敬するその背中。だが、その背中は心なしか悲しげに見える。
「長谷川大尉・・・」
水上は不安そうに、小さくなっていくその背中を見詰めた。

翔輝は一度自室に寄ってからとぼとぼと甲板に出た。南国の日差しがまぶしく、暑い。
日よけの下にある椅子に腰掛け、持ってきた物を開く。それはス

ケッチブック。他には鉛筆などもある。
翔輝はスケッチブックをめくって絵を描き始める。
絵を描いている間は、何も考えなくていい。
辛い事も、全部忘れられる。
ほんのひと時でしかないのはわかっている。だけど、自分にはそんなひと時がほしかった。
何も考えなくていい、無のひと時が。
描くのは、『大和』の隣に浮かぶ『武蔵』。連合艦隊旗艦にして日本海軍の誇る世界一の新鋭戦艦。
鉛筆を走らせ、ただひたすら絵を描く。
この時間が、自分はほしかった。だが、
「あ・・・」
突如ボキッという音を立てて、芯が折れた。粉々になった芯の破片が、白い紙を黒に染める。たったそれだけの事なのに、翔輝は手を止めた。別の鉛筆はあと数本あるが、取り出す気にはなれなかった。
「何で・・・だよ・・・」
不思議だった。
絵を描いていても、何も忘れられない。
大和の笑顔が、頭から離れない。
「未練がましいにも・・・ほどがあるよ・・・」
翔輝は自虐的な笑みを浮かべる。
いつも隣にいて当然だと思っていた存在が、急に自分から離れると、その存在の大きさに気づく。なんとも人の心とは不器用なものだ。
翔輝はスケッチブックを床に置き、懐からある物を取り出す。それは小麦色の便箋。切手が貼られ、宛先人は自分になっている。そして、差出人の名前は――霞瑪瑙。
昨日届いたその手紙の中には、翔輝の身を案じる言葉がたくさん並んでいた。昔から過保護ってくらい自分の事を心配してくれてい

た瑪瑙。自分の事を、ずっと見てくれていた大切な姉だ。血は繋がってなくても、本当の姉弟じゃなくても、絆はしっかりと結ばれている。

翔輝は瑪瑙の手紙を読み直す。何度読んでも、心温まる内容だ。言葉のひとつひとつに、自分を心配している彼女の想いが詰まっている。

彼女は元気にしているらしい。もちろん、瑠璃も珊瑚も元気のようだ。同封されていた珊瑚からの手紙には大きく大胆な文字で《バカ》と書かれている。本当に、何も変わっていない。

自然と笑みが零れた。

変わっていく世の中で、変わらないものもある。

自分と瑪瑙や珊瑚、瑠璃、そして翔香との絆は、変わる事なく、ずっと繋がっている。

でも、自分と大和をの絆は・・・

わかっている。

二人を結ぶ絆が、解け掛かっているのは――いや、もう解けてしまっているのかもしれない。

いつも煮えきれない態度で、優柔不断で、男として情けない自分だけど、大和との絆は大切にしていた。でも、それがいつの間にか、こんなにも細く、こんなにも弱いものになっている。

もう、元には戻れないのだろうか。

未練がましいとは自分でも思っている。彼女は彼女であり、自分には彼女の全てを決める権利なんてない。だから、これは自分のわがまま。

誰にも大和を取られたくない。

大和に離れてほしくない。

大和と、ずっと一緒にいたい。

何でもないようにあった日常が、こんなにも自分を包んでいたなんて、気づかなかった。

大和の笑顔が、心に痛い。

どうしてだろう。大和を自分から奪った坂井が憎い。
自分にこんな黒い感情があるなんて、知らなかったし、知りたくもなかったのに。その黒い感情は、ぐるぐると自分の中で渦巻く。
自分の事なのに、何もわからない。こんなにも苦しく、厄介な事はない。
自分と大和の絆は、解け掛かっている。
だけど、別の絆は、もっとしっかりと結ばれようとしている。
――・・・翔輝――
落ち込む自分を、いつも励ましてくれている、大和の妹――武蔵。
彼女は言った《自分から決して離れない》って。
こんなにも嬉しい言葉はない。
見える。自分と武蔵を繋ぐ絆が、強く、太く、固く結ばれているのを。
大和の代わり、そんな風には思いたくない。だけど、それでも、自分には武蔵が必要。そんな想いが胸にある。
「あ・・・」
なぜだろう。自然と手が動いていた。
いつの間にか新しい鉛筆とスケッチブックを持って、手が動いていた。
真っ白な何も書かれていない白紙に描かれたのは――武蔵の笑顔。
自分にしか見せない、彼女が心の底からの気持ちが込められた、本当の笑顔。
武蔵は大和みたいな満面の笑みじゃない。小さく、頬を少し上げ、頬を上気させた小さな小さな笑顔。だけど、それが彼女の本当の笑顔。
そんな笑顔を、なぜ自分は書いたのだろう。
「何でだろうな・・・」
「・・・翔輝」
突然の声に驚き振り返ると、そこにはいつもの無表情で立っている武蔵がいた。

「む、武蔵？」
「・・・絵、見せて」
「え？　あ、いやッ！　ちょっと――」
止める間もなく、武蔵はちょこんと絵を覗き込む。その先にあるのは――
「・・・え？」
武蔵の瞳が大きく見開かれる。
そこには、かわいげな笑みを浮かべた自分が描かれていた。
翔輝は顔に手を当ててがっくりと肩を落とす。見られてしまった・・・
「・・・これって」
「うん、武蔵だよ」
驚く武蔵に、翔輝は穴があったら入りたいような気持ちになった。恥ずかし過ぎる。
武蔵は驚きながらもじっと自分の絵を見詰める。
「あ、あんまり見ないでよ」
翔輝は慌ててスケッチブックを閉じる。が、
「・・・もっと、見せて」
武蔵はしまおうとする翔輝からスケッチブックを一瞬で取ってしまう。
「ちょ、ちょっと！」
翔輝は武蔵からスケッチブックを取り返そうとするが、武蔵はそれを華麗に避け、自分の絵を見詰める。
絵の中の自分は、とても幸せそうに見える。
自分にとっての満面の笑みが、こんなにも小さい事に驚きもするが、それ以上に絵の中の自分は無邪気に笑っている。
本当の自分よりも、ずっと笑顔がかわいい。そう思ってしまう。
翔輝が自分の絵を描いていた。そう思うだけでも嬉しくて失神しそうなのに、それがまたうまい事。もう死にそうだ。
武蔵は顔を真っ赤にし、恐る恐る翔輝に問う。

「・・・どうして、私の絵を？」
武蔵の問いに、翔輝はどう答えたらいいか模索する。
「いや、どうしてって言われても、無意識に書いてたから」
「・・・無意識」
意識して描いたのではないという落胆と、無意識なのに描いてくれたという嬉しさが武蔵の胸の中で交差する。
「・・・私、こんなに笑顔かわいくない」
「え？　そ、そんな事ないよ。これはお前の笑った時の顔を描いたんだから」
「・・・でも私、こんなに笑えない」
しゅんと落ち込む武蔵に、翔輝は笑みを送る。
「そんな事ないよ。武蔵の笑顔はかわいいさ。それこそ大和や陸奥とかにも引けを取らないさ」
「・・・本当？」
「ほんと」
翔輝の言葉に、武蔵はまたも顔を真っ赤に染める。そして、手に持つ自分の絵を一瞥し、翔輝を見る。
「・・・私、翔輝に描いてもらって、嬉しい」
「え？　あ、そう」
「・・・これ、私にちょうだい」
「え？　あ、いや、でも・・・」
今回ばかりはあげられそうにない。戦艦などの絵だったらいくらでもあげるが、今回のはあまりにも恥ずかし過ぎる。だが、
「・・・翔輝、お願い」
武蔵は翔輝を上目遣いに見詰める。そんな懇願する武蔵に、ダメとも言い切れない。だけどこれは・・・
「・・・翔輝、お願い。私にちょうだい」
うるうるとした瞳を向ける武蔵。こういう目にあまりにも弱い翔輝としてはかなり善戦した方だ。だが結局、
「わ、わかった。あげるよ」

根負けしてしまった。
武蔵はぱあっと顔を華やぐ。
「・・・ほ、本当！？」
「あぁ本当さ。まったく、武蔵のお願いには勝てないなぁ」
苦笑いする翔輝は絵を切り離して武蔵に渡す。すると、武蔵は笑みを浮かべる。その笑みは、絵に描かれた笑顔のよう――いや、それ以上にかわいげな笑顔だった。
「・・・ありがとう翔輝！　早速スキャナーを用意しないと！」
「あははは・・・って、スキャナー？　何でそんな物使うの？」
あまりにも突拍子もない言葉に、翔輝は「この時代にない物を言うな！」というツッコミを忘れる。
「・・・だって、その・・・」
問われた武蔵は恥ずかしそうに頬を染めてこう答えた。
「・・・そうしないと、翔輝の魅力を全世界にＷＥＢ（ウェブ）で発信できない」
「待てぇッ！　返せ！　やっぱりそれは返せ！」
そんな事をされたら人生終わりだ。まだ始まってたった十数年しか経ってないのに、スタッフロールが流れるのはごめんだ。
「・・・だ、ダメ！　これはもう私の！　私の宝物！」
武蔵は今にも泣きそうな顔で必死になってその絵を守る。そんな武蔵から物を奪えるほど、翔輝は非情な人間にはなれなかった。
「うぅ・・・わかったよぉ。ただし！　それは門外不出の物としてくれ！　決して人に見せるな！　見せたら絶交！　その瞬間からお前の事は二号艦って呼ぶからな！」
武蔵は《絶交》と《二号艦》って単語に青ざめ、何度も何度もうんうんとうなずく。どうやらこの子にはこういう単語が絶大な威力を与えるらしい。
「・・・わかった。翔輝のすばらしさは私だけが知っていればいい。翔輝を独り占め。翔輝と私の秘密」
武蔵は何事かをつぶやきながら顔を真っ赤にしている。大丈夫だ

ろうか。
「と、とにかく。絶対人には見せるなよ」
翔輝は念押ししてスケッチブックなどを片付けて立ち上がる。
「じゃあな」
翔輝は武蔵に背を向けて歩き出す。それを見て武蔵は慌てて彼を追い掛けると、空いている左腕にギュッと抱き付く。
「お、おいおい離れろよ」
そう言うが、武蔵は笑みを浮かべたまま離れようとはしない。それどころか、
「・・・翔輝、大好き」
と威力絶大な攻撃を放つ。
翔輝はため息し、許してやる事にする。彼自身、こうした温もりが嬉しかったりする。
翔輝に抱きついたままの武蔵は満面の笑みを浮かべる。そして、そんな武蔵に懐かれている翔輝は、武蔵に小さく笑みを送ると、二人して艦内に消えた。

第十章　第四節　空と海を制す航空戦艦

十一月一日、日々険悪になっていく翔輝派と坂井派との対立。このまま双方わかり合えず、永遠に決別するかという時、落ち込む翔輝を嬉しくさせる事が起きた。それは・・・

トラック島に入って来た艦隊を、翔輝は嬉しそうに見詰める。その隣には武蔵が無表情で艦隊を見詰めている。だが、その口元は少し微笑んでいた。

空母『翔鶴』を旗艦として空母『瑞鶴』、軽空母『瑞鳳』、改装空母『飛鷹』『隼鷹』で編成された第三艦隊機動部隊こと日本機動部隊。機動部隊は日本近海で訓練を行っていたが、またトラックに舞い戻ってきたのだ。しかも、この艦隊には期待の新鋭戦艦が配属されていた――いや、新生戦艦と言うべきだ。

機動部隊の両側を護衛している二隻の戦艦。その艦容は他の戦艦とは大きく違っていた。

艦体後部三分の一に飛行甲板を設置し、射出機を完備した空母としての能力も持つ戦艦。その名は――伊勢型戦艦こと航空戦艦『伊勢』『日向』。

瑞鶴達空母の艦魂と伊勢、日向を中心とした機動部隊艦魂達は艦隊が錨を降ろし終えるとすぐに『大和』の甲板に現れ、待っていた長門達にあいさつした。

「長門。久しぶりだな。元気にしてたか？」

そう言ったのは長い黒髪を流す少女――翔鶴。現在日本海軍の最後の切り札とも言うべき機動部隊を率いている艦魂だ。

「えぇ。翔鶴も元気そうね」

長門は元気そうな翔鶴達を見詰めて嬉しそうに微笑む。

「まぁな。健康状態は良好だ」

「そう。良かったわ」
「――ところで」
「なぁに？」
「何かあったのか？」
翔鶴は怪訝な顔でトラック島待機の艦魂達を見詰める。その問い、長門は苦笑いするしかない。
金剛以下多くの艦魂達と、武蔵、山城、長門の三人とごく少数の艦魂とで大きく二つに分かれて立っている。しかも金剛側の駆逐艦の艦魂達は武蔵達（特に武蔵）を睨み付けている。一触即発な雰囲気がそこにあった。
「なぜ味方同士で臨戦態勢なのだ？」
「いやぁ、あなた達がいない間に色々あって」
「・・・何がどうなればこうなるのだ？」
翔鶴は本当に呆れたような声を上げる。いくら大和達が日頃お騒がせでもここまで状況が険悪になる事はそうそうない。
翔鶴は苦笑いする長門を問い詰める。そんな姉の横を通り過ぎ、瑞鶴は大和に笑顔で駆け寄る。
「大和！　久しぶり！」
「瑞鶴。久しぶり」
大和も嬉しそうに瑞鶴と抱き合う。
久しぶりの親友の再会だ。お互い艦魂だから成長するというのが目に見えるほどは起きてはいないが、それでも「変わったねぇ」とか「変わってないよぉ」とか楽しそうに話す。なんとも微笑ましい光景だ。
瑞鶴は笑いながら訓練中に起きたおもしろかった事を話し、大和もそれを聞いておかしそうに笑う。すると、
「ねぇ、お兄ちゃんはどこ？」
いつの間にか二人の所に来ていた隼鷹が早く翔輝に会いたそうな顔をしている。が、それがこの辺一帯の雰囲気を鋭くさせた。
「あ、その・・・大尉は・・・」

「え？　長谷川中尉は大尉になったんだ！　良かったじゃない大和！」
「あう・・・」
キャッキャと嬉しそうに笑う瑞鶴に対し、困ったような顔をしている大和。ここにきて瑞鶴もようやく何か変だと気づく。
瑞鶴から笑みが消え、真剣な眼差しを向ける。
「一体どうしたのよ？　私達がいない間に、何があったのよ」
「・・・その女は翔輝を裏切った」
突然の声に瑞鶴が振り返ると、そこには大和を睨み付けている武蔵がいた。いつもの無表情とは違う、身体から激怒という雰囲気がビシビシと伝わってくる。
「裏切ったって、どういう事？」
「私は大尉を裏切ってなんか――」
「・・・その女は新しい男を見つけて翔輝を捨てた最低最悪な女。そして、ここにいるトッラク島待機の艦魂も、私と山城、長門他少数の勇士以外はみんな同じ」
「えぇッ！？」
瑞鶴は武蔵達と対立している艦魂達を見る。そこには翔輝と親しくしていた駆逐艦の艦魂達も多くいた。瑞鶴は信じられないという顔をする。
「大和。本当なの？」
「違う！　私は――」
「・・・何が違う。坂井とかいう男に目移りしたくせに」
「違うッ！」
本気で怒っている両者は殺意に近い眼光を血走らせてお互いを睨み合う。その眼光は刃のように鋭い。世界最大最強の戦艦姉妹が、まるで艦隊決戦寸前の両国大艦隊のような緊張感を放つ。
「大和はん。一体どういう事や？」
そう言ったのは今まで事の成り行きを見ていた伊勢だった。いつもは優しい伊勢の眼光も鋭い。それは伊勢らしからぬ冷徹な怒りの

表れだった。そんな一触即発な雰囲気。今にも爆発しそうな緊迫感だ漂う。その時、

「女の子がそんな怖い目をするなよな」

その優しげな声に、張り詰めていた緊迫感は一瞬にして崩壊した。皆が驚いて見詰める先には、のん気に笑いながら歩いて来る翔輝がいた。

「長谷川はん！」

「お兄ちゃん！」

伊勢と隼鷹がたちまち反応して翔輝の下に走った。

「お兄ちゃん！」

「うわッ！」

隼鷹は身体全体でスキンシップをとる。翔輝に抱き付き、その頬に自分の頬をすりすりとすり寄せる。その表情はとても嬉しそうだ。

「じゅ、隼鷹！　離れてってば！」

「やだよ～♪」

「お、お前なぁ」

そう言葉こそは怒っているが、翔輝の表情はとても嬉しそうだった。そんな彼の笑顔を見て、武蔵はそっと安堵した。久しぶりの、翔輝の嬉しそうな笑顔。

「長谷川はん」

その声に振り向くと、そこには黒くつややかな長い髪を流した大和撫子――伊勢がいた。

「伊勢」

「長谷川はん、お久しぶりどす」

とても優しい笑みで伊勢は翔輝を見詰める。その目には薄っすらと涙が浮かんでいる。それもそうだろう。実に三ヶ月ぶりの再会だ。

伊勢は優しげな笑みを浮かべる。

「お元気そうで何よりどす」

「お前こそ、元気そうだな」

「はい――その、どうやろか？」

伊勢はそう言うと恥ずかしそうにうつむく。
「どうって？」
「うち、かっこええか？」
そう言って、伊勢は遠くを見詰める。その先には伊勢の本体――戦艦『伊勢』が悠々とその勇姿を浮かべていた。
彼女の言う《うち》とは、戦艦『伊勢』の事だろう。そして、《かっこええ》とは、その明らかに変わった艦容だ。彼女は変わってしまった自分の艦容の事を訊いている。その瞳は少しおびえている。たぶん、似合ってないとか言われるのを恐れているのだろう。そんな伊勢に翔輝は正直な感想を言う。
「ずいぶん変わったな。後ろがスッキリしたよね」
「えぇ、まぁ。ほんで、その・・・」
「他と全然違うよな。なんか異彩を放ってるよね」
「うぅっ、それって似合ってへんって事どすか？」
伊勢はがっくりと肩を落とす。伊勢にとって、これは死ぬほど辛い事だった。だが、うなだれている伊勢に、翔輝は優しく微笑む。
「でも、かっこいいぞ。なんか他と違う所がさ。『大和』や『武蔵』にも引けを取らないし」
「ほ、ほんまか！？」
伊勢は嬉しそうに喜ぶ。変わってしまっても、彼にほめられた。それが嬉しくて嬉しくてたまらない。伊勢は満面の笑みを浮かべる。だが、そんな翔輝の言動に約一名が不機嫌そうな声を上げる。
「・・・翔輝。騙されてはダメ。所詮は旧式戦艦。しかももはや純粋戦艦ではない。それに比べたら大和型の方が性能は上。それにかっこいい」
武蔵が横から冷静んひツッコミを入れてきた。《旧式》という単語に、ピクリと伊勢が反応する。
「あんたには関係ないやろ？」
「・・・大あり。新鋭戦艦が旧式戦艦に評価負けするなんて言語道断」

「武蔵。別に僕は大和型がかっこ悪いとは言ってないだろ？」
「・・・なら訂正して。旧式戦艦が新鋭戦艦に引けを取らないって事を」
「旧式旧式ってやかましいわぁッ！」
「・・・旧式」
無表情の武蔵とむぐぐと怒る伊勢が睨み合う。かなり珍しい組み合わせだ。
「ちょっと二人とも！」
翔輝が仲裁に入り、ようやく二人は離れる。
「相変わらず大変そうだな」
苦笑しながら近づいてきた翔鶴。その顔はなんとも楽しそうだ。
「ははは、翔鶴ほどじゃないよ」
翔鶴の同情の眼差しに翔輝は苦笑いする。
「私はそんなに苦労はしてないぞ」
「でも機動部隊旗艦って役柄は疲れるでしょ？」
「うぅむ。それはまぁそうだが」
「お疲れ様」
「あ、あぁ」
翔輝の優し過ぎる言葉に闘将翔鶴は押される。そんないつもと違ったちょっとおもしろい翔鶴を飛鷹が笑いながら見詰める。
一方、瑞鶴は必死に大和を励ましているが、大和の表情は暗いままだ。
「大和。元気出してよ」
「うん・・・」
うつむいたままの力のない返事に瑞鶴はため息する。
「大和。元気ないね。どうしたの？」
伊勢と同じく航空戦艦として生まれ変わった日向が心配そうに大和の顔を覗き込む。
「何でもありません」
「でも・・・」

「ほっといてください！」
大和は日向から視線を逸らす。視線を逸らされた日向は瑞鶴と目を合わせてため息した。
白と黒。光と闇。陰と陽。正反対の雰囲気の艦魂達に、混乱する者も多くいた。
一体自分達がいない間に何が起きたのか。機動部隊の面々はこの異常な展開に不思議そうに首を傾げる。その時、
「みんなどうしたの？」
明るい声が響いた。それはこの対立の原因となった男ののん気な声だった。
「坂井さん」
「大和？　どうしたの？」
坂井は大和の表情を見て心配そうに彼女に近づく。その瞬間、武蔵の身体から殺意に近い危険なオーラが放出した。
「どうしたんだ？　大丈夫か？」
「はい。大丈夫です」
「そうか。なら、俺を機動部隊の艦魂達に紹介してくれよ」
笑いながら言う坂井に、大和は複雑そうな顔で翔鶴達を見詰める。その瞳は困っているようだ。
突然の坂井の登場に機動部隊の艦魂達は困惑する。そんな一人である翔鶴は横にいる長門に声掛ける。
「長門、あいつは何者だ？」
「さっき話題に出てた大和の新しい男――坂井昇航海少佐よ」
「・・・あいつが」
翔鶴は睨むようにして坂井を見詰める。その先にいる坂井はこの場の雰囲気にはあまりにも場違いなにこやかな笑みを浮かべている。
「君達が機動部隊の艦魂？　初めまして。この前『大和』に配属された坂井昇航海少佐だ。よろしく」
坂井は屈託のない笑みを浮かべる。だが、機動部隊の艦魂、特に空母達からの反応は厳しいものだった。

「私個人としては長谷川の方がいいと思うが」
「私もよ」
長門と翔鶴は坂井を睨む。その視線に気づいたのか、坂井は苦笑いする。
「あれ？　なんか歓迎されてない？」
坂井は翔鶴から視線を逸らす。すると、その視線の先には翔輝達がいた。
「長谷川。両手に花をして何やってんだ？」
突然坂井に声を掛けられた翔輝は焦る。
「あ、いや、その・・・」
「見た事がない子がいるな。誰だ？」
「あ、こっちが戦艦『伊勢』の艦魂で、こっちが空母『隼鷹』の艦魂です」
「ほぅ、機動部隊の艦魂か。俺は坂井昇航海少佐だ。よろしくな」
坂井は優しく笑い掛けるが、二人は警戒心バリバリで翔輝の影に隠れて坂井を見詰める。
「あ、あれ？」
「・・・残念。貴様に友好的なのはそこでアホ面している愚姉ぐらいだ」
めったに表情を変えない武蔵が唇を吊り上げて不気味な笑みをする。他の艦魂達はその恐怖的笑顔に一歩引く。だが、当の本人は気にした様子もない。
「うーん。ねぇ、君って俺の事嫌いなのか？」
「・・・愚問。当然貴様など負の感情しか抱かない」
「そりゃないよ。もっと仲良く――」
「・・・黙れ下等生物」
ひどい言いようだ。さすがの翔輝も武蔵のその失礼極まりない暴言に怒ろうとするが、
「手厳しいな。じゃあ君にちゃんと人間に見てもらう為に努力するよ」

全然気にした様子もなく優しい笑みで武蔵の暴言をスルーする。
「・・・あっ、うぅ」
坂井の予想外な反応に武蔵の冷笑が消え、一転焦りの様子がうかがえる。そんな武蔵の反応に坂井は満足した様子。次に坂井は伊勢と隼鷹に向かう。
「よろしくね」
「こ、こちらこそ」
「え、うん」
坂井という人間が警戒する必要がないと判断すると、差し出された彼の手に二人がぎこちないながらも握手する。そんな二人の様子を、正気に戻った武蔵が睨み付ける。
「・・・き、貴様ら・・・ッ！」
ドス黒い妖気のような殺意を身体から大量放出する武蔵に、伊勢と隼鷹は慌てたように弁解する。
「か、勘違いせぇへんで！　握手を求められたらそれに答える。それが礼儀でやろ？」
「・・・むぅ」
「私は伊勢に従っただけだもん！」
「・・・むむむ」
何か言い返したいが、《礼儀》と言われてしまうと根がマジメな武蔵は何も言い返せなくなってしまう。
ついに武蔵は視線を逸らした。珍しく武蔵の完敗である。そんな武蔵の様子に翔輝も小さく微笑む。
「あ、そうだ」
坂井が思い出したように翔輝に向く。
「十時から航海室で会議があるから。そろそろ行かないと」
「あ、わかりました」
翔輝は急いで坂井の後を追う。そんな背中を、大和は寂しそうに見詰めていた。

翌日の昼頃、第一航空戦隊の空母『翔鶴』『瑞鶴』『瑞鳳』の三空母の甲板では慌しく飛行機が並べられていた。

訓練中の機動部隊がわざわざ前線基地であるトラック島に進出した理由がこれであった。

この頃、ラバウル海軍航空隊は度重なる出撃でその戦力を消耗し切った。そこで連合艦隊司令長官古賀峯一大将は以前山本五十六元帥が発動した『い号作戦』とほぼ同内容の作戦――『ろ号作戦』を立案、実行に移した。その内容はい号作戦と同じで機動部隊艦載機をラバウルに送り、同基地航空隊と連携して敵基地・敵艦隊を攻撃するというものだ。

今こうして並べられている艦載機は、全てラバウル基地に向けて出撃するものであった。

プロペラが高速回転してエンジンの轟音が響き渡る『瑞鶴』の飛行甲板、その上に立っている瑞鶴の横では、刹那が出撃の準備をしていた。

「まさか、またラバウルに行く事になるとはね」

刹那は白いタオルをグルグルと首に巻き、飛行ゴーグルを頭に付ける。

「仕方ないですよ。これ以上敵の侵攻を見逃していては、いずれ取り返しがつかなくなります。その前に、一矢を報いるんです」

そう言う瑞鶴の表情は暗い。それもそうだ。これから戦地へ向かう艦載機の搭乗員はお世辞にも一人前とは言いがたい。まだまだ訓練が必要な若者ばかりで構成されている。そんな彼らを最前線であるラバウルに送ればどうなるかなんて、火を見るより明らかであった。

「一矢を報いる、ね。できたら敵さんの空母の一隻くらいは沈めたいけど、残念だが僕は戦闘機乗りだからなぁ。敵艦艇に直接攻撃は与えられない。僕の零戦だけ爆弾を積んでくれないかな」

「縁起でもない事言わないでください。戦闘機に爆弾を搭載するなんて言語道断です。そんなどっちつかずな飛行機を戦場へ向けるな

んて、私は断固反対です」
「お、怒るなよ。冗談に決まってるだろ」
「この状況で冗談を言える神風中尉に怒ってるんです」
瑞鶴はいつもと変わらない刹那の態度にむっとする。
これから彼は日本海軍が持つ基地の中で一番過酷で危険なラバウル基地へ向かうというのに、全然怖がったり嫌がったりしていない。いつものように、ただ笑っている。そんな彼の姿が、瑞鶴を不安にさせる。
「大丈夫ですよね？」
気がついたらそう口に出していた。
「え？　何が？」
「今回のろ号作戦です。作戦内容こそは同じかもしれませんが、今回は前回よりも戦況は悪化しています。基地航空隊だけでなく敵機動部隊もソロモン方面にはいます。それだけの大敵を相手にするというのに、今回の作戦参加機数は空母・基地両航空隊合わせて約三〇〇機しかありません。前回のい号作戦の時はさらに一〇〇機多かったはずです。戦況の悪化から考えても、最低でも五〇〇機は用意しないと今の敵には敵いません。しかも今の搭乗員はい号作戦の時よりも質が悪いです。これじゃみすみす死にに行くようなものです」
瑞鶴はこのろ号作戦には反対だ。もちろんい号作戦にも反対だった。それは空母の艦魂、いや、空母に携わる者達全ての意見だった。
艦載機の搭乗員というのは基地航空機の搭乗員よりも育成が難しく長い。そんな貴重な戦力を艦載機の本来の戦うべき場所ではない基地に送り込み、圧倒的に不利な戦力で敵に挑もうだなんて、無茶にも程がある。特にラバウルは行ったら死ぬとまで言われている激戦地。そんな所に、我が子のように育てて来た大切な若者達を送り込むだなんて、普通ならできるはずもする気もない。
戦況の悪化がどうであろうと、この作戦は断固反対だった。
空母が本気で敵に襲い掛かるのは、決戦の時だけ。今回の作戦は決戦ではなく絶対国防圏完成の為への時間稼ぎ。そんな作戦に、大

切な決戦兵力を投入するだなんて、連合艦隊司令部が狂っているようにしか思えない。
決戦の為の兵力を決戦準備に投入するなど、本末転倒だ。
もしここで艦載機部隊が壊滅すれば、もう日本機動部隊は再建不能となる。
瑞鶴はキュッと唇を噛む。
「こんな事で、艦載機を失う事があれば・・・その時は・・・」
ギュッと握られた拳は、ブルブルと震え、白くなる。そんな瑞鶴の肩を、刹那は優しく叩いた。
「大丈夫さ。なんとかなるって」
「そんな気休めはいりません。私が必要なのは有利に戦局を動かす――もがッ！？」
突如口に突っ込まれた物に瑞鶴は慌ててそれを口から出す。すると、ドロップだった。
「ど、ドロップ・・・？」
「まあ、そんな思いつめるなって」
そう笑顔で言う彼の手にはドロップ缶が握られている。瑞鶴は目をパチクリさせる。
「そ、そんな物支給品にありましたっけ？」
「ううん。これは田舎の妹が送ってくれたものさ」
「え？　神風中尉、妹さんがいらしたんですか？」
「あれ？　言ってなかったっけ？」
「聞いてませんよぉッ！」
怒る瑞鶴に刹那は「あはは、ごめんごめん」と悪びれた様子もない声で謝る。
刹那は一個ドロップを取り出し、口に入れる。
「年が離れてな、小学校に通ってるんだ。そいつがお小遣いをはたいて買って送ってくれたんだ」
嬉しそうにそのドロップ缶を見詰める刹那。そんな彼に、瑞鶴も微笑む。

「いい妹さんですね」
「あぁ、とっても兄想いのいい、自慢の妹さ」
そう言うと、刹那は「ほらよ」とドロップ缶を放った。
「なぁッ！？」
瑞鶴は慌ててそれをキャッチする。
「な、何するんですか！　妹さんからの大切な贈り物でしょッ！？」
結構本気で怒る瑞鶴に、刹那は屈託のない笑みを浮かべ。
「あげる」
そう言ったのだ。
「え？　あ、あげるって・・・そんなダメですよ！　これは神風中尉が持っているべきで――」
「そうかもしれないけどよ、自分が死ぬかもしれない戦地に、そんな大切な物を持っていけるかよ」
刹那の言葉に、瑞鶴は頭を殴られたような衝撃がした。
自分が死ぬかもしれない戦地。そう、ラバウルはそういう場所なのだ。
「神風中尉・・・」
「まあ、僕も死ぬつもりは全然ないけどさ。そういう所に妹の大切な想いを持って行きたくないのよ。オーケー？」
いつものように、明るい笑顔。それが、もう見れなくなるかもしれない。
瑞鶴はうつむく。そんな彼女の肩を、刹那はポンポンと叩く。
「それはお前が持っててくれ。中身は食べてもいいよ。本当は僕甘い物があまり好きじゃないんだ。今食べたのもハッカだし。昔から甘党な妹によく甘いものを食べさせられて苦労したよ。まあ、その気持ちは嬉しかったけどね」
そっと顔を上げる瑞鶴に、刹那はにっこりと優しげな笑みを向ける。
「だから、僕が帰って来たら、その缶を返してね。鉛筆立てにでもするから」

刹那の言葉に、瑞鶴はうなずく。
彼は必ず帰って来る。そう思った。
「約束」
瑞鶴は小指を突き出す。それを見て刹那は微笑み、同じく小指を突き出す。
「あぁ、約束だ」
二人の小指はしっかりと結ばれた。

一方、同じく飛行甲板にたくさんの飛行機を並べた『瑞鳳』のでも、エンジンの轟音が響き渡る中、剣と瑞鳳がいた。
出撃準備をする剣を、瑞鳳は寂しげな瞳で見詰める。
「剣・・・」
不安げにつぶやく声に、剣は振り返る。
「瑞鳳。そんなに心配するなって」
そう言うと、瑞鳳は顔を真っ赤にして怒る。
「べ、別にあなたの心配してる訳じゃないわよ！　私はただ搭乗員全体を心配してるの！」
相変わらず素直じゃない言葉に、剣は苦笑いする。
「はいはい、僕を心配してくれるの飛龍だけという事ね」
「ひ、飛龍さんは関係ないでしょ！　今はミッドウェーの時とは違うの！」
「関係はあるさ、彼女は僕の守り神だからね」
「わ、私は？」
メガネの奥にある何かを期待したような目で見詰める瑞鳳に、剣は優しげな笑顔で答える。
「瑞鳳も僕の大切な守り神さ」
「そ、そう。ま、まあ私は瑞鳳航空隊全員の守り神だから、あなただけひいきする訳にもいかないけど、ま、まあそう言うなら応援してあげる」
顔を真っ赤にしてまたも素直じゃない言葉。だが、伊達にずっと

一緒にいる訳ではない。瑞鳳がこういう態度を取った時には嬉しいのや恥ずかしいのを隠しているのだとちゃんとわかっている。
「ははは、ありがとう」
剣はそんな瑞鳳がいじらしくて、かわいくて笑みを浮かべる。そんな彼の笑顔に、瑞鳳はむっとする。
「な、何よ。笑う事ないじゃない」
「ごめんごめん。そう怒るなって」
「べ、別に怒ってないわよ」
背を向けてそう言う瑞鳳。本当に素直じゃない。こういうのを《ツンデレ》というのかなと剣は時代考証を無視した事を考える。
「ラバウルって、危険な場所なんでしょ？」
「え？　あ、うん。激戦地だよ」
「そんな所に行って大丈夫なの？」
「大丈夫ではないと思うけど。まあ、ラバウルならミッドウェー海戦後やい号作戦の時に行ってるし」
「その時とはまったく情勢が違うでしょ？」
「そ、それはそうだけど」
言葉に詰まる剣に背を向けたまま、瑞鳳はうつむく。その顔は苦しくゆがみ、メガネの奥には薄っすらと涙が浮かんでいる。
「あなたに死んでほしくないの」
ポツリとつぶやいた言葉に、剣は瞳を見開く。
震える肩を、そっと抱き締める。
「か、勘違いしないで・・・あなたに死なれたら、飛龍さんに会わせる顔がないだけなんだから・・・」
震える声で言う瑞鳳に「わかったから」と言って、震えるその肩を抱き続ける。
背中越しに聞こえる嗚咽に、剣は唇を噛む。
ラバウルは最前線だ。それこそ、もう生きて戻って来れないかもしれないほどの激戦地。そんな所に行けば、もしかしたら自分も死ぬかもしれない。そう思っていた。だけど、そうなったら今自分の

腕の中にいるこの少女はどうなる。戦闘機というのは攻撃隊を守り、艦隊を守り、日本を守る飛行機だ。名前や目的から攻撃の為の飛行機と思われがちだが、本当は違う。何かを守る為の飛行機なのだ。

自分は今まで一体何を守って来たのだろうか。

飛龍は死んだ。仲間も大勢死んだ。なのに、自分は今まで何を守ってこれただろう。

そう思い起こすと、何もない。

自分が今まで守って来たものなど、何もないのだ。

だけど、それなら作ればいい。

今まで何も守って来れなかったのなら、これから守ればいい。そう考えると、一体何を守るべきか――もちろん、瑞鳳だ。

この生まれてまだ三年も経っていないこんな少女を、守ってやりたい。そう思う。

だけど、これから自分はラバウルに行く。死ぬかもしれない、激戦地に。

もし自分が死んだら、一体誰が彼女を守るのか――いや、彼女を、瑞鳳を守れるのは自分だけだ。

もう、飛龍と同じように、瑞鳳を失いたくはない。

「大丈夫。僕は、死なないから」

自然と口から漏れた言葉に、瑞鳳がピクリと反応する。

「僕はお前を守るって決めた。だから、お前をずっと守る為にも、死ぬ訳にはいかない。必ず帰って来るから、だから、泣かないでよ」

「泣いてなんか・・・ないよ」

震える声で返す瑞鳳を、剣は愛しそうに抱き締める。

「ほんと、素直じゃないんだから・・・」

「う、うるさいなぁ・・・」

瑞鳳は口調こそ嫌そうだが、自分を包む彼の腕は決して放そうとしない。

まわりから響くエンジンの轟音も、二人には届かない。

剣の腕の中、瑞鳳は何も言わないし剣も黙っている。

徐々に迫る出撃時刻――別れの時間。
でも、決して永遠の別れではない。
必ず彼は、自分は帰って来る。そう信じているし、そう思っている。
瑞鳳はうつむきながら、背中から自分を抱き締める彼に言う。
「・・・死んだりなんかしたら、絶交だから」
「あぁ、必ず帰って来るよ」
その言葉に、瑞鳳は嬉しそうに微笑んだ。
「約束、だよ」
「約束だ。必ず帰って来る」
瑞鳳は「ありがとう・・・」と小さくつぶやいて剣の手を離れて向き直ると、今度は自分から彼に抱き付いた。
ギュッと、ずっと、いつまでも・・・

そして、ついに第一航空戦隊の三空母、『翔鶴』『瑞鶴』『瑞鳳』から計一七三機の戦闘機、爆撃機、攻撃機が一路ラバウルに向かって飛翔した。
刹那と剣はそれぞれの零戦に乗り込んで母艦群の上空を飛ぶ。
しばらく見れなくなる少女の姿を甲板に見つけ、微笑む刹那と剣。
刹那は空中で翼をクイクイッと動かす。別れの挨拶だ。
剣は「じゃあ、元気でね」と別れの言葉を言うと、操縦桿に結びつけた《恋愛成就》と刺繍された飛龍の形見である御守りを見詰める。
「飛龍、僕を必ず守ってくれよ。約束したんだ。生きて帰って来るって」
剣は操縦桿を強く握った。
緑色の機体に赤い日の丸を描いた艦載機群は、上空で編隊を組んで旋回し、母艦に別れを告げてラバウルに向かって消えていく。
多くの艦魂達が決死の出撃をしていく艦載機群に向かって敬礼をした。

そして、瑞鶴と瑞鳳は、それぞれの甲板で艦載機群を見送る。
艦載機群の中にいる大切な人の無事を祈って、天に祈った。

――どうか、あの人をお守りください――

第十章　第五節　敵機来襲　反撃空しくラバウル炎上

十一月一日、米軍はソロモン諸島ブーゲンビル島西岸タロキナに上陸した。このブーゲンビル島は山本元帥が戦死した島であると同時に、ガダルカナル島攻防戦で駆逐艦隊が幾度も出撃した前線基地であるショートランド泊地がある。ついに、米軍は日本軍の重要拠点の一つに上陸を開始したのだ。

日本軍は索敵中だった哨戒機がこの攻略部隊を発見。哨戒機約五〇機が敵輸送船団を攻撃したが、目立った戦果は与えられなかった。

連合艦隊司令部は直ちに敵上陸部隊撃滅の為に襲撃部隊（重巡洋艦二隻、軽巡洋艦二隻、駆逐艦十一隻）を急遽編成。さらに逆上陸の為の輸送船団も編成。その日の午後三時に両部隊はラバウル基地から出撃した。

だが、米軍は偵察機でこの艦隊を発見。直ちに迎撃部隊（軽巡洋艦四隻、駆逐艦八隻）を派遣。両艦隊は急激に接近した。

翌二日午前〇時頃、霧雨が降る視界不良の中両艦隊は遭遇。米艦隊は直ちにレーダー管制射撃で砲撃を開始。日本艦隊も照明弾を発射。照らされた敵艦に砲雷撃を開始した。

だが、すでに敵の発砲による閃光を頼りに目視で照準を付ける日本艦隊と、レーダーにより闇夜でも敵に照準を合わせる事が出来る米艦隊との差は歴然。さらに霧雨の影響でさらに日本艦隊は不利に傾き、激しい砲雷撃戦は三時間近く続き、結局、日本艦隊は軽巡洋艦一隻、駆逐艦一隻沈没。同二隻中破。それに対し米艦隊は軽巡洋艦一隻小破、駆逐艦一隻大破、一隻中破という沈没艦なしの極めて軽微な被害だった。

日本艦隊優勢な戦力を保持しながらも日本海軍十八番の夜戦で米軍に完敗した。さらに輸送船団も上陸に失敗し、日本軍は戦術と戦略の両方で惨敗した。

これがブーゲンビル島沖海戦である。

だが、そこで諦めるほど日本海軍は腰抜けではない。
三日、ろ号作戦支援艦隊として編成した艦隊を急遽敵艦隊撃滅の為にトラックから派遣した。
多くの艦魂や兵達に見送られ、栗田健男中将率いる巡洋艦部隊（重巡洋艦『高雄』『愛宕』『摩耶』『鳥海』『最上』『鈴谷』『筑摩』、軽巡洋艦一隻、駆逐艦四隻）は南国の日差し注ぐトラックを出撃した。

どこまでも澄んだ蒼い海を翔ける巡洋艦部隊。その中の一隻、旗艦・重巡『愛宕』の会議室には艦隊全十二人の艦魂が集まっていた。
「今作戦はブーゲンビル島沖の敵艦隊撃滅。及びろ号作戦支援です」
旗艦愛宕の説明に艦魂達はうなずく。その中の一人、この中で唯一極上幹部会の重役の一人である最上は浮かない顔をしていた。彼女の頭には同じく二つの作戦を実行しようとして大敗北したあの悪夢が蘇っていた。
「同時に二つの作戦を進行させるなんて、ミッドウェー作戦の時のようにならないといいけど・・・」
不安そうに作戦資料を読む最上。そんな最上の肩を笑顔で叩いたのは最上に良く似た顔立ちに桜色のリボンを頭の両側で結んでちょこんと触覚のような小さなツインテールをした少女。最上の妹――最上型重巡洋艦三番艦『鈴谷』だ。
「大丈夫よ姉さん。今回はラバウルにいる航空隊が主力だから、支援と言っても私達は敵艦隊の陽動が主任務だし」
「鈴谷の言うとおりだよ。まぁ、特に私と最上は偵察機の運用が重要視されるだろうけどね」
そう言ったのは長い髪をポニーテールで結んだ少女。利根型重巡洋艦二番艦・重巡『筑摩』の艦魂。
利根型は連合艦隊で一番新しい重巡洋艦の艦種であり、連装主砲塔四基八門全てが前部に集中している特異な艦容をした艦である。その代わり、後部には偵察機運用甲板があり、『最上』ほどではな

いが六機の水上機を搭載できる。利根型は『最上』の先輩に当たる航空巡洋艦なのだ。

最上を中心に他にも駆逐艦四人も彼女を励ます。そんな水雷戦隊の艦魂達から少し離れた所では第四戦隊こと愛宕四姉妹が久しぶりの姉妹全員揃っての出撃を喜んでいた。

「う～み～は～広い～な～大きいなぁ～♪」

そう笑顔で楽しげに歌うのは愛宕姉妹三女にして一番子供っぽい摩耶。そんな摩耶をうるさそうに見詰めるのは書類上は一番艦だが戸籍上は次女に当たる高雄。

「摩耶。今は作戦発動中よ。もう少し落ち着きなさい」

高雄のめんどくさそうな物言いに対し、摩耶は気にした様子もなくニコニコと微笑む。

「だって高姉ぇ。久しぶりの姉妹全員での出撃なんですぅ。もう心はウハウハですぅ」

「ウハウハって・・・」

呆れてものも言えないといった具合にため息する高雄はめんどくさそうに髪を掻き乱す。そんな二人の姉を見詰めおろおろとするのはボブカットにクリッとした瞳が特徴のかわいげな女の子――四女鳥海である。

「摩耶お姉ちゃん。落ち着いてよ」

おろおろとしながら言う鳥海に、摩耶は屈託のない笑みを浮かべる。

「鳥海。戦場で生き残る為にはある事が必要あるんですぅ」

「え？　何？」

根が真面目な鳥海は内ポケットから手帳を取り出して姉の名言を書き取る用意をする。そんな我が妹を見詰め、摩耶はにっこりと口を開く。

「それは――どんな逆境でも挫けずに、その場に適応し、何事も楽しむ事ですぅ。楽しいと実力以上の力が発揮しやがるですぅ」

「そ、そっか！　すごいよ摩耶お姉ちゃん！」

「違うから！　それは確実に違うからッ！　コォラ摩耶ッ！　純粋な鳥海に何いい加減な事を吹き込んでるのよ！」
キレる高雄に対し、摩耶は気にした様子もなくニャハハと屈託のない笑みを浮かべる。
「国民の戦意を下げない為には、例えないに等しい戦果も誇張して報告しなければならないんですぅ」
「なに大本営みたいな事言ってるのよ！」
キャハハハと大笑いする摩耶に高雄が激昂する声が会議室に響き、鳥海は今度こそ泣きそうな顔をする。そんな中、長女愛宕はそんな妹達のバカらしい声を聞きながら頭を抱えてため息する。
「自分の妹達ながら、頭が痛くなるわ」
「大変そうですね愛宕さん」
心配する最上の言葉に、愛宕はため息する。
「最上姉妹はみんなおとなしい子ばかりだから、うらやましいよ」
愛宕は疲れたように言う。それに対し、最上は悲しげに微笑む。
「私は愛宕さん達がうらやましい。姉妹全員で出撃できるんだから」
最上の悲しい顔に、愛宕は焦る。
「ご、ごめんなさい。不用意な事を言ってしまって」
「謝らないでください。愛宕さんが謝る事はないですよ」
「でも・・・」
「それに、私にはまだ鈴谷と熊野がいますから」
そう言って明るく微笑む最上。愛宕が一番最近知っているのは三隈の死に落ち込んでいた頃の彼女。それがいつの間にかこんなにも優しげな笑みを浮かべられるようになっていた。一体何があったのかはわからないが、嬉しい事だ。
「そうね。まだまだ、守るべきものはあるのよね」
「はい」
優しげに微笑む最上に、愛宕も自然と笑顔になる。
そんな春風のような二人から少し離れると、
「あんたいい加減にしなさい！　さっきかが訳のわからない事を言

わないでッ！」
「何なんですぅ！　高姉ぇ！　私のする事全部否定しやがってですぅ！　さすがの私だって怒るですぅ！　プンプンですぅ！」
「何がプンプンだぁッ！」
「高雄お姉ちゃん！　摩耶お姉ちゃん！　もうやめてよぉ！」
うるさく騒ぐ己が妹達。まわりでは駆逐艦がくすくすと笑っている。
愛宕は妹達の失態に再び頭を抱えるのであった。

一方、アメリカ軍は愛宕達巡洋艦部隊を察知していた。しかし、南太平洋方面艦隊指揮官であるハルゼー大将の手元にはこの重巡7隻を基幹とした強力な水上打撃部隊と対抗できる水上打撃部隊はなかった。その為、ハルゼーは日本艦隊の目的地であるラバウルに艦隊が入ったところで機動部隊でこれ及び敵航空基地を破壊する作戦を立てた。
機動部隊と言ってもエンタープライズやエセックス級空母は他の海域に出動している為、ハルゼーは手元にある第３８任務部隊を出撃させた。
正式空母『サラトガ』とインディペンデンス級航空母艦2番艦・軽空母『プリンストン』を基幹とした小規模な航空艦隊だ。
海を翔ける空母『サラトガ』の防空指揮所には二人の艦魂がいた。
一方はサラトガ。もう一人の薄ピンク色の髪をツインテールでまとめたかわいげな少女はプリンストンだ。
サラトガは燦々と輝く太陽を嬉しそうに見上げる。
「空は快晴。絶好の爆撃日和ね」
「ピクニック日和みたいな言い方しないでください。そもそも爆撃日和なんてものはありません」
サラトガの明るい言葉をピシャリと叩くプリンストンに、サラトガはつまらなそうに唇を尖らせる。
「もう、プリンは堅物ね」

「その名で呼ばないでと何度も――」
「いいじゃない。かわいいし」
「そのような判断をされては困ります」
「もっと肩の力を抜きなさいよ」
青く輝く髪を撫でながらサラトガが言う。それに対し、薄ピンク色の髪を風に流したプリンストンは疲れたようにため息する。
「新米の私が肩の力を抜く事はできません」
「もう、そんな事は言わないの」
サラトガは苦笑いし、天空に浮かぶ太陽を見詰める。燦々と輝くその光は一体誰の勝利を見詰めているのだろうか。
サラトガは自分の甲板に並ぶ星を掲げたアメリカ軍機を見詰める。今作戦には新型戦闘機Ｆ６Ｆ（ヘルキャット）、新型爆撃機ＳＢ２Ｃ（ヘルダイバー）が参加し、兵達の士気も上々である。
そんな熱気に包まれた甲板を見詰め、サラトガは小さく笑みを浮かべる。
「そろそろ攻撃隊が出撃するわね」
「はい。すでに攻撃隊は発艦準備を完了しています」
「そう――じゃあ、行くわよ」
「はいッ！」
サラトガの顔が軍人のものになると、プリンストンは見事な敬礼でそれに応えた。
直後、甲板に並んでいたラバウル空襲部隊が次々に天空へと舞い上がって行った。そんな攻撃隊を、アメリカ艦隊全艦魂が見詰める。
サラトガとプリンストンは帽を振って攻撃隊を見送る。
上空で編隊を組み終えた攻撃隊は一路ラバウルに向かって、空の蒼に溶けていった・・・

その頃、巡洋艦部隊はラバウルの湾内に入っていた。
今現在艦隊は錨を下ろして停泊している。艦魂達もそれぞれ自艦に待機している。

最上は防空指揮所にいた。
空には雲一つなく、蒼一色だった。だが、視線をふと陸に向けると、すさまじい数の航空機がその大地を機体の色の緑一色に染め上げている。きれいに並んだ機体に描かれている日の丸が輝かしい。
その大航空隊がろ号作戦の参加航空機だ。
数日後にはその大航空隊が天空を埋め尽くしながら舞い、敵を撃滅すると思うと興奮してくる。自分はたぶん偵察機の運用だけで終わるだろうけど、味方が勝つのは喜ばしい限りだ。
心地良い風が頬をくすぐる。最上は気持ち良くなってあくびをする。
「ふわぁ、眠い・・・出撃は数日後だから、お昼寝でもしよう」
前線と言っても、今まで呉で戦場のように書類整理をしていて休む暇がなかった最上にとって、今この時間は貴重なお休み時間なのだ。
最上は眠そうに目をこすり、艦内に入る。が、突然けたたましい警報が鳴った。その警報音でわかる。この警報は敵機来襲だ。
『敵機来襲！　敵機来襲！　東南方向より敵機約一〇〇機接近！』
悲鳴に近いスピーカーを通した男の悲鳴が島中に響く。
最上は急いで防空指揮所に舞い戻る。すると、さっきまで雲一つなかった空の向こうに無数の黒点が見えた。
「敵機！？」
「錨上げぇッ！　機関室！　緊急発進！　エンジン全開！」
指揮所に上がって来た防空ヘルメットを乱暴に被った艦長が伝声管に向かって怒鳴る。
『迎撃戦闘機隊急速発進！　繰り返す！　迎撃戦闘機隊急速発進！』
スピーカーが千切れんばかりの悲鳴が木霊する。同時に、錨を巻き終え、『最上』は白波を立てて走る。ふとまわりを見ると、他の艦も同じように動いている。だが、所詮は湾内。動くのに制限がある。全速力で走るには湾外に出なければならない。だが、敵機はそれを許さない。

「味方戦闘機隊我が艦の上空を通過！」
その声に上を見ると、十数機の零戦が敵機に突進するのが見えた。
だが、数が違いすぎる。敵機は零戦に構わず一斉にそれぞれの爆撃目標に向かって急降下を開始する。
「敵機急降下！」
敵急降下爆撃機数機が『最上』の上空に現れる。依然速度はまだ十ノットも出ていない。回避不能。
「面舵いっぱぁぁぃッ！　機銃隊は撃ち落せ！」
艦長は叫ぶが、こんな速度で回避などできる訳がなかった。
最上は次の瞬間を覚悟して目をつむる。そして、
ドガアアァァンッ！
「あぐッ！」
右肩が裂けた。艦体を確認すると、第三砲塔付近から黒煙が上がっていた。紅蓮の炎が甲板の上で暴れる。
痛い。最上は裂けた肩を押さえる。
だがおかしい、敵は複数いたはず。なのに爆発は一回。一体どういう事かと上を見上げると、二機の零戦が低空飛行で艦の上を滑空していった。一瞬見えた搭乗員の瞳は、なぜか自分を見ているような気がした。
最上は気づいた――彼らが敵機を撃ち落してくれたのだと。
最上は見えるはずもないが左手で大きく手を振った。二機の零戦は急上昇して敵機群に突入した。直後、いたる所で爆発音が響いた。味方艦や基地、滑走路や航空機に爆弾が次々に命中しているのだ。
『最上』は対空戦闘をしながら必死に敵機を回避し続けた。そして・・・
敵機は去った。米海軍攻撃隊の後に続いて陸軍攻撃隊まで襲い掛かってきたが『最上』の被害は最小限で済んだ。だが、基地や滑走路、航空機はもちろん、ラバウルに来たばかりの艦隊にかなりの被害が出た。

『鳥海』『鈴谷』『筑摩』以外の艦は命中弾や至近弾を受けた。特に『愛宕』は艦橋付近に命中し、艦長が戦死してしまった。

甚大な被害を受けた艦隊を見て栗田中将は撤退を決定した。

結局、艦隊は到着したその日にラバウルから撤退する事になってしまった。

このラバウル空襲こそ、日本がソロモン海での継戦能力を失ってしまった敵の攻撃のひとつであった。

これ以降、南太平洋で激戦を繰り広げ、米軍からも恐れられた世界最強の陸海軍合同航空隊であるラバウル航空隊はこれ以降大規模な反撃は不可能となり、事実上壊滅した。

劣勢挽回の為、大反攻作戦である《ろ号作戦》はついに発動された。総戦力三〇〇機の大規模な航空部隊による航空攻撃作戦だ。

ろ号作戦は四日行われた。十一月二日にセント・ジョージ岬の敵輸送船団、五日にラバウル南方海域に出現した敵機動部隊（本当は戦車揚陸艦と魚雷艇三隻の上陸部隊）、八日にタロキナ沖で敵輸送船団、十一日にラバウル空襲を行った敵機動部隊をそれぞれ攻撃しただが、結果はい号作戦よりも戦果はなく、被害は甚大だった。

戦果は魚雷艇一隻沈没、軽巡洋艦一隻大破、損失航空機三〇機と皆無に等しいのに対し、被害はすさまじいものだった。特に艦載機は消耗が七〇パーセントに達し、一七三機の艦載機は五二機まで激減した。

こうして、決戦兵力を割いて投入した艦載機部隊は壊滅し、ろ号作戦は惨敗という結果に終わった。

巡洋艦部隊はボロボロになってトラックに帰って来た。

その夜、すぐに緊急の艦魂会議が開かれた。そんな中、頭に包帯を巻きながら土下座して必死に妹や仲間をかばって金剛に自分の責任だと泣き叫ぶ愛宕に、金剛は何も言わなかった。愛宕の必死な姿と即日撤退で呆れている二つの理由からだった。

長門は泣き崩れる愛宕を必死に励ましている。そんな中、最上は翔輝の前にいた。ケガだけなら愛宕以上に重傷だ。
松葉杖を付き、頭や腕に包帯を巻いた最上は重苦しそうに沈黙している。そんな最上に、翔輝は努めて明るく声を掛ける。
「到着早々敵機に空襲されるなんて、散々だったね」
「申し訳ございません・・・」
「僕に謝る必要はないだろ？」
翔輝の言葉に、最上は泣きそうな顔で首を横に振る。
「いえ、謝らなければなりません。私は大尉に「がんばって来い」と言われ、それに対し私は「はい」と答えました。しかし、結果は何もせずに逃げ帰って来てしまいました。もう謝罪しかありません」
必死に頭を下げる最上。根が真面目な最上の強い責任感は、彼女を苦しませている。後頭部で結ばれたきれいな白いリボンも、空襲のせいか所々黒く焦げている。そんな彼女に翔輝は優しく微笑む。
「何言ってんの。みんな無事だったんだからいいじゃない。誰も死ななくて本当に良かったよ」
「大尉・・・」
最上は涙目で翔輝に頭を下げる。今の彼女にとって、彼の優しさはこの上なく嬉しいのだ。
すると、今まで翔輝の横で黙っていた武蔵が初めて口を開く。
「・・・今夜はゆっくり休め。今日を反省し、明日に活かせ」
「はい・・・」
武蔵の言葉に最上は敬礼し、離れた。
そんないつになく優しげな武蔵に、翔輝は優しく微笑む。
「優しいとこあるじゃん」
「・・・私にも落ち度があったし」
「え？」
翔輝は武蔵を見詰める。武蔵は無表情を貫いているが、その瞳は悔しそうだ。
「・・・最前線であるラバウルに艦隊を送ればどうなるかなんて簡

単に予想できた。でも、まさかここまでとは、私の計算が不甲斐ないから」
「そんな事ないよ。世の中全て計算で動くほど、甘いもんじゃないだろ？」
「・・・それはそうだけど」
「そうやって、何でも自分のせいと思うなよな」
「・・・その言葉、そっくりそのまま翔輝に返す」
「うっ・・・」
言葉に詰まる翔輝に、武蔵は小さく笑う。そんな武蔵を見て、翔輝も笑顔になる。
「ったく、からかうなよ」
「・・・翔輝が好きだから。これも愛情表現」
「斬新だな」
「・・・それってほめてるの？」
楽しげに笑い合う二人を、遠くから大和は見詰めることしかできなかった。その瞳はとても悲しく、不安げに揺れていた。

第十章　第六節　誤解の先　絆の崩壊（前書き）

《鳥海（ちょうかい）》

高雄型重巡洋艦四番艦――重巡洋艦『鳥海』

出身　三菱重工業長崎造船所（長崎県）

身長　１５４ｃｍ

髪型　ボブカット

実年齢（１９４３年１１月現在）１１歳

外見年齢　１４、５歳

誕生日　６月３０日

好きなもの　姉達・メモ・優しい心・知らない事を知る事・毎日の積み重ね

嫌いなもの　特になし

重巡洋艦『鳥海』の艦魂。予定では高雄姉妹で一番活躍させる予定。常にメモを持ち歩き、何かあれば忘れないようにそれをメモに書き込むメモっ子。人を疑う事を知らないのか、何でも順応に信じ込んでしまう。その為に姉の摩耶に変な知識を植え付けられ、高雄が摩耶を怒るという姉妹のパターンの原因にもなっている。人を信じ込む事に関しての心の純粋さは全艦魂一。予定では活躍させる予定ですが、現在まだほとんど未定。

第十章　第六節　誤解の先　絆の崩壊

ろ号作戦中止から数日後、翔輝は翔鶴と一緒に『大和』の甲板にいた。かなり珍しい組み合わせである。
「はぁ・・・」
「どうしたんだ？　ため息なんてして」
「ため息もしたくなる。私達空母の艦載機がたった数日で一気に一二一機も減ってしまったんだぞ？　頭が痛くなる」
「ろ号作戦の被害はすさまじいね」
「愛宕達も修理の為に内地に向かったし、機動部隊もしばらくはトラックで訓練だそうだ。本当に頭が痛い」
頭を抱えて疲れ切ったようにする翔鶴。彼女は機動部隊の旗艦を勤めている。そんな彼女にとってその攻撃力である艦載機を失うのはあまりにも過酷過ぎる。
「大変だね」
翔輝もろ号作戦の大敗北の話は聞いていたので、同情するように翔鶴を励ます。
翔鶴は小さくため息を吐くと、小さく苦笑した。
「まぁな。だが、大変なのはお前の方なのではないか？」
「どういう事？」
翔鶴の全てを見透かしたかのような目に、翔輝は視線を逸らす。そんな彼に、翔鶴は話を切り出す。
「大和と最近うまくいってないそうじゃないか」
「え？　あ、まぁ・・・」
やっぱりそれか。翔輝は予想通りの問いにため息する。
「大和はまだ幼い。お前のような奴が傍にいないと大変な事になるぞ」
「・・・僕がいなくても、大和には坂井さんがいますから」
翔輝の悲しい笑みに、翔鶴は驚く。その笑顔の奥にあるのは《諦

め》。全てを諦め、流れに逆らわず、流れに身を任した、悲しい瞳。
「長谷川・・・」
「まぁ、僕はしばらく武蔵に付く事にするよ。あいつは僕を必要としてくれてるし」
そう言い残して、翔輝は翔鶴と別れた。翔鶴は彼の背中が消えるまでそれを見詰め続けた。
沈黙が流れる中、翔鶴は呆れた声を出す。
「さっさと出てきたらどうだ。大和。瑞鶴」
翔鶴は不機嫌そうに三連装二五ｍｍ機銃を見詰める。すると、機銃に隠れるようにして息を潜めていた二人が気まずそうに出て来た。
「いつからバレてたの？」
瑞鶴が落胆したような顔で訊いてくる。結構自信があったのだろう。そんな彼女に翔鶴はバッサリと。
「最初からだ。もっと修行しろ」
「ううぅ」
翔鶴に怒られて小さくなる瑞鶴。だが、翔鶴はすぐに大和を向いた。
「さて、大和。そろそろ話してくれんか？」
「え？」
「とぼけるな。最近のお前ら変だぞ。一体何があったか全て言うんだ」
「そ、それは・・・」
言いよどむ大和に、翔鶴は鋭い眼光を当てる。
「言えないのか？」
「・・・翔鶴さんには関係ないじゃないですか」
大和の言葉に、翔鶴は顔を不機嫌そうにゆがめる。瞳の奥に揺らぐ炎が怒りの炎へと変貌する。
「大和。思い上がるな」
「え？」
驚く大和に、翔鶴は冷たく言い放つ。

「私はお前の心配もしているが、私が本当に心配しているのは長谷川だ。私はあんな長谷川の悲しそうな顔は初めて見た。どれだけあいつが苦しんでいるか、お前はわかっていない」
翔鶴の言葉に、大和は沈黙する。
「大和。私にも教えてよ。一体何があったの？」
瑞鶴も心配そうに大和を見詰める。
二人の視線に負け、大和はその重い口をゆっくりと開いた。
大和の言葉に、翔鶴と瑞鶴は黙って聞いていた。
しばらくし、ようやく経緯を言い終えた大和に、翔鶴は、
「それは、お前が悪いな」
そうハッキリと言った。
「ど、どうしてですか？」
「お前が最近坂井とばかりいるのが一番の原因だ。あいつにとってお前は心の支えだ。だが、それが今は離れている状況。確かに長谷川も少しいき過ぎだと思うが、ほとんどの原因はお前にある」
「や、やっぱり・・・」
大和は自覚はしていたようだ。だからこそ落胆も大きい。落ち込む大和に、翔鶴はさらに追撃する。
「それに、お前の話や長門から聞いた情報によると、支えを失った翔輝は、どうやら新たに武蔵を支えにしようとしているようだな」
「ううっ」
「それも自覚ありか」
「う、薄々気づいていましたけど、やっぱり」
「まぁな――だが、その方があいつにはいいかもしれん」
「そ、そんなッ！」
「お前と違い、武蔵は翔輝に絶対の信頼を置いている。言い方は悪いが、武蔵はお前と違って長谷川を決して裏切らない。裏切られたりいなくなられたりするのを一番嫌う長谷川にとって、武蔵はその理想像かもしれんからな」
翔鶴の言葉に、大和はうつむく。そんな大和を一瞥し、瑞鶴は怒

ったような口調で姉を責める。
「姉さん！　言い過ぎだよ！　大和がかわいそう！」
「かわいそうなのは、長谷川も同じだ」
「どうして姉さんは大尉にばっかり加担するの！？」
「長谷川は私の友だ。それを助けるのに理由などあるまい」
「なら、大和は私の友達だよ！」
「瑞鶴・・・」
「大和も言いなよ！」
自分の為に必死になってくれる親友の姿に大和は状況が状況なのに嬉しくなってしまう。
「わ、私は大尉をむざむざ武蔵に渡す気はありません！　もちろん、他の誰にも絶対に渡しません！」
大和は翔鶴に向かって宣言する。顔を真っ赤にしながら必死に言う大和を翔鶴は不機嫌そうな表情を変えずに見詰める。すると、
「その言葉が聞きたかった」
「え？」
突如優しい笑顔になった翔鶴は、そのまま大和の頬を撫でる。その様子はまるで姉と妹のようである。
「坂井とかいう者の出現で、お前が長谷川に興味がなくなったのかと思ったが、どうやら違ったようだ。安心した」
「翔鶴さん・・・」
「まぁ、がんばれ」
「はいッ！」
笑い合う姉妹のような二人。そんな二人を本物の妹である瑞鶴が微笑ましく見詰めている。
どこかうらやましいと、思ってしまう。
翔鶴のおかげですっかり元気を取り戻した大和は、翔鶴と瑞鶴にお礼を言って嬉しそうな笑顔を浮かべながら艦内に走り去った。きっと翔輝の所に行ったのだろう。
残された翔鶴と瑞鶴の二人は、大和が去った方を見詰める。ふと、

瑞鶴は翔鶴を見詰める。その表情は彼女にはめったに見られないほど優しいものだった。

それにしても、どうして翔鶴はそこまで翔輝にこだわったのだろうか。彼女の言うとおりただの友人というなら、大和も彼女にとっては十分な友人である。なのに、翔鶴は翔輝に付いた。

瑞鶴は不思議そうに翔鶴を見詰める。すると、その視線に気づいた翔鶴は不機嫌そうに自分を見詰めている瑞鶴を見詰める。

「何だ？　人の顔をジロジロを見て」

「――姉さんって、長谷川大尉の事が好きなの？」

「なあッ！？」

顔を真っ赤にして驚く翔鶴に、瑞鶴は「ふうん、そうなんだ・・・」と、なにやら怪しい笑みを浮かべる。

「な、何をバカな事を！　私はあんな平和主義者などにそのような感情は持っていない！」

いつもの翔鶴らしからぬ慌てぶりに、瑞鶴の予想は確信に変わる。

「そっか、姉さんも女の子だったんだね。大丈夫。私は応援するよ！」

「勝手に話を進めるな！」

「あぁッ！」

「ど、どうしたッ！？」

「どうしよう！　私姉さんと大和、どっちかしか応援できないよ！」

「死ねえええええぇぇぇぇぇッ！」

翔鶴は跳躍し、鋭利な刃物のような見事な跳び蹴りを瑞鶴に突貫させる。瑞鶴はほとんど反射的に動いてなんとかその一撃を紙一重で回避した。

「な、何するの！？」

「うるさいッ！　全部お前が悪いんだ！」

「何でよ！？」

「お前がくだらん事をぬかすからだ！」

翔鶴の鬼神のような気迫に、瑞鶴は生命の危機を感じた。これが

眠っていた野性の本能というものだろう。瑞鶴はその本能に素直に従う事にした。

「ごめんなさあああああぁぁぁぁぁぃッ！」

瑞鶴は泣きながら全力疾走で逃げ出した。

「待たんかゴラアアアアァァァァッ！」

心の底から鬼の咆哮と共に、翔鶴は瑞鶴の速度をはるかに上回る速度で追撃を開始した。

この後、瑞鶴が翔鶴に半殺しどころかほとんど殺されるような仕打ちを受けたのは言うまでもない。

だが結局、翔鶴の翔輝に対する気持ちは再び闇の中に消えてしまった・・・

その頃、瑞鶴達と別れた大和は翔輝の姿を探していた。

「大尉。どこにいるんだろ」

大和はキョロキョロとまわりを見るが、どこにも翔輝はいない。艦橋も航海室も翔輝の自室にもいなかった。残るは・・・

「防空指揮所」

大和はすぐに防空指揮所に向かった。すると、思ったとおり翔輝は防空指揮所にいた――武蔵と一緒に。

「な、何で武蔵と一緒に・・・」

驚く大和。しかし、予想はできる。さっき翔鶴が言っていたように大和という支えを失いかけている翔輝は、今は武蔵という支えを作ろうとしていると、だから、この二人が一緒にいても不思議はない。不思議はないのだが、なぜか心が締め付けられる。

そんな大和の視線の先にいる翔輝は、どこか寂しげな眼差しで空を見ていた。それはどこか翔香の事を思い出している時に似ている。

「なぁ、武蔵。僕、どうしたらいいのかな？」

翔輝は顔を向けずに武蔵に言う。対する武蔵は何も言わない。大和の位置的に彼女の表情は見えないが、たぶんいつもどおりの無表

情でいるだろう。
「大和さ、たぶん今も坂井さんの所にいるよね」
（ここにいますよ！）
そう叫びたかったが、その衝動を必死に抑える。今ここで出る訳にはいかないと感じたのだ。
「僕さ、ちょっと大和に黙ってた事があるんだ」
（え？）
驚く大和に気づかず、翔輝は武蔵にそれを話す。
「出会った時、僕はすごくびっくりしたんだ――彼女が、翔香にそっくりだったから。だから僕は、彼女に近づいたと思う」
大和は声にならない悲鳴を上げた。それは、今まで自分の心の隅にずっとあった不安。それを彼は否定してくれたが、本当は違っていたのだ。
「この子なら、翔香の代わりになると思った――つまり、彼女は翔香の代わりでしかなかったんだ」
その言葉の後は聞こえなかった。
大和が――泣きながら逃げ出したから。
「そんな、そんな・・・ッ！」
信じていたものが、偽りでしかなかったのだ。
翔輝の自分に対する声も、表情も、感情も、行動も、全て偽りのものでしかなかった。
「そんなの、嫌ぁッ！」
大和は足がもつれて転んだ。顔面から床に突っ込むかなり危険なコケ方だったが、今の彼女にはそんなのどうでも良かった。
床に突っ伏したまま、大和は生気のない瞳で冷たい鉄の床を見詰める。
全てが、偽りだった。
翔輝は自分の事を《大和》としてでなく、《翔香の代わり》としか思っていてくれなかった。それなのに自分は勝手に舞い上がって、本当に――

「バカみたい・・・」
大和はそう悔しそうにつぶやくと、静かにその姿を光に包ませ、次の瞬間には、どこかに消えてしまった・・・

「――でも」
翔輝の瞳はすこし嬉しそうなものに変わった。
「最初は、本当に最初の一ヶ月くらいはそうとしか思わなかったけど、一緒にいるうちに、代わりとしての彼女でなく、たった一人の彼女の傍にいたいと思うようになってきてたんだ。だから僕は、大和を大切な人と思えるようになった。でも――」
そこで再び翔輝の表情が曇る。
「今でも心の隅では、彼女を翔香の代わりとしか見ていない自分がいるんだ。だけど、それは本当に一部だけの僕の気持ちであって、そうじゃない。でも、そんな気持ちで大和に接するのは、嫌だった」
翔輝は空を見上げる。どこまでも澄み切った空は、一体何を伝えようとしているのか。
「だから、大和が僕から離れていくのは――いい事かもしれない。本当は嫌だけど、こんな微妙な気持ちで彼女の傍にいたくない。だから――」
「・・・だから、お姉ちゃんとはもう――」
「もう、終わりにしようと思ってる。今の彼女には坂井さんがいる。だから、もう僕は必要ない」
「・・・本当に？」
「あぁ、本当だ」
「・・・なら――何で泣いているの？」
武蔵に言われて初めて気が付いた。自分が情けなく顔をゆがめて、ポロポロを涙を流しているのが・・・
「ち、違う！」
翔輝は慌てて袖で拭くが、涙は後から後から湧き出てきて止まらない。

「な、何で・・・」
「・・・不思議な事じゃない。翔輝が言っていた事が本心ではないから、涙が出るだけの事」
「違う！　僕は本当に――」
「・・・本当に、翔輝はお姉ちゃんと終わりにしたいの？　何もかも全て」
武蔵の真剣な瞳を見て、翔輝の決意が揺らぐ。
「そ、それは――」
翔輝はうつむいた。だが、翔輝は肩を震わせながら、嗚咽交じりの声で静かに言った。
「確かに、本心じゃない――本心は、大和ともっと一緒にいたい」
「・・・ならッ！」
「でも、大和にこんな中途半端な気持ちで接したくないのも本当だよ。だから・・・」
翔輝は顔を上げ、泣きながら無理に笑い、
「大和が僕を必要としなくなったら、僕は――潔く引き下がるつもり」
翔輝の辛い決意に、武蔵はもう何も言わなかった。だけど――
武蔵は翔輝に背中を向けて、そのまま歩き出した。
ドアの前で武蔵は一度立ち止まり、翔輝の方を向いた。その瞳はとても冷たく、怒っているとも悲しんでいるともとれる瞳だった。
「・・・お姉ちゃんに中途半端な気持ちで接するのに罪悪感があるから、翔輝はお姉ちゃんから離れたいと言った――だったらどうして」
武蔵の瞳から、一筋の涙が流れた。
「・・・どうして、私にそんな中途半端な気持ちで接するの？」
武蔵の言葉に、翔輝はただただ呆然としていた。
そうだ。自分はどうして大和は嫌だったのに武蔵には接しているのだろう。おかしいじゃないか。これではまるで・・・《大和の代わり》ではないか。

「武蔵・・・それは――」
「・・・やっぱり、私とお姉ちゃんじゃ、違うんだ」
悔しそうに絞り出たその声は、とても小さく、ひ弱だった。
「武蔵・・・」
「・・・ごめん。言い過ぎた。今のは忘れて」
「あっ・・・」
翔輝の声を聞かず、武蔵は去ってしまった。
一人残された翔輝はただぼんやりと空を見詰めるしかなかった。

その頃、坂井は甲板で昼寝をしていた。南国の静かな風が心地良く、彼はよくそこで昼寝をしていた。常人なら暑くて昼寝どころではないが、彼はちょっと変わっている。そんな坂井の下に、誰かがやって来た。
「坂井さん・・・」
その小さな声は、眠っていた彼の脳に届き、彼を覚醒させた。
「うん？　誰だ？」
眠そうに目を擦りながら起き上がると、そこには涙で顔をグチャグチャにした――大和がいた。
「大和。どうしたんだ・・・？」
「坂井さん。私、どうしたらいいか、全然わかりません・・・ッ！」
そう言って、大和は坂井の胸に飛び込んだ。
「大和！？　一体どうし――」
坂井の言葉は続かなかった。
嗚咽をしながら小さく泣く大和に、掛ける言葉がなかったのだ。
だから、自分にできるのは泣いている大和を抱き締める事ぐらいだった。
何も言わない坂井に、大和は感謝しながら、泣き続けた。

あれから一週間後、武蔵は以前となんら変わらずに翔輝に接していた。嬉しい事だが、どこか不気味だった。それと、大和は翔輝を

避けるようになっていた。それに対し翔輝は「もう、ダメかも」と悲しそうにつぶやいただけだった。
日に日に離れていく二人の絆。だが、まだ修正できる可能性があった。

――今日、この瞬間までは・・・――

それは全て偶然が重なっただけの誤解だった。
原因は、大和と坂井が二人きりだった事。
「最近疲れてないか？」
「えぇ、ちょっと最近ちゃんと寝れなくて」
眠そうにに目を擦る大和。
原因は、大和が寝不足だった事。
「ふわッ！？」
立ちくらみした大和は自然と坂井に寄り掛かった。
「大丈夫か？」
「あ、はい」
原因は、大和が立ちくらみして坂井に寄りかかった事。
原因は、そんな何気ない行為を遠くで愕然として見ている者がいた事。
原因は、それが本当に偶然通りかかった翔輝と武蔵だった事。
原因は、二人の位置からだと、大和達が――キスしているように見えた事。
ただ、それだけだった・・・
「・・・翔輝・・・ッ！」
武蔵にはわかっていた。確かに姉は最低な女だが、そこまでひどい女でないと思っていたから。だから、すぐにあれは誤解だとわかった。
だが、翔輝は・・・
「あ、ああ、うあ・・・ぅ・・・」

よろよろと後退した。その表情はもはや表現できないほどの驚きと悲しみの二色だけだった。そして、

「う、うわあああああぁぁぁぁぁッ！」

「・・・翔輝！」

突然脱兎の如く走り出した翔輝を、武蔵は追った。その謎の声は、大和達にも届いていたが、二人は何の声かわからず、困惑するだけだった。

全力疾走する翔輝はあっという間に武蔵を引き離した。引き離された武蔵は手当たり次第翔輝を探すしかなかった。

走り続けた翔輝はいつの間にか甲板に出ていた。

「嫌だ！　嫌だあああああぁぁぁぁぁッ！」

暗い夜の中を、翔輝は叫びながら走った。

覚悟していたとはいえ、あれは限界だった。

もう、大和は自分には帰ってこない。そう思うと、涙が止まらない。

翔輝の心は、崩壊を始めていた。

「うわあああああぁぁぁぁぁッ！」

叫びながら走る翔輝の足に限界が来た。足がもつれ、そのまま転倒した。運悪く、そこはラッタルだった。翔輝はラッタルを転がった。体中に痛みが走る。だが、翔輝の身体は階段を転げ落ちる。その先は――海だった。

バシャンッ！

翔輝はそのまま海に投げ出された。

体中が海の心地良さに吸い込まれた。心が冷たくなっていくのを、翔輝は怖いともなんとも思わなかった。

大和はもう戻ってこない。

心の支えが大破した翔輝は、もう何も考えられなかった。

上を見ると、きれいな星空があった。翔輝はそれを見て、泣いた。

「翔香・・・」

そう自分の亡き妹の名を呼ぶと、翔輝の意識は途絶えた。

翔輝が海で浮かんでいるのを発見されたのは、それから六時間後の朝の事だった。

第十章　第七節　絆再び結ばれて（前書き）

誤解の連鎖で二人の絆は完全に崩壊した。支えを失った翔輝は倒れ、信頼を裏切られた大和は泣き崩れる。そして、失われた絆はもう二度と戻らないのか。

だが二人の絆は、離れる事を望んでいなかった。

《艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～》の動乱編、《坂井の乱（仮）》の完結編。どうぞ。

第十章　第七節　絆再び結ばれて

病状は芳(かんば)しくなかった。ラッタルを転げ落ちた事で全身打撲だらけの上、頭部をラッタルで打ったらしく、頭には痛々しく包帯が巻かれている。さらに南国と言っても一晩中水に浸かってれば風邪を引くのは当然。それが例え三八度台の悪性だとしても、全て当然の事だった。

だが、今の翔輝にはどうでも良かった。

多くの艦魂に心配されている翔輝は――もう、彼女達の知っている翔輝ではなくなってしまったのだから・・・

翔輝の意識はあった。だが、何度呼びかけても返事がない。まるで心がここにないような、目の前にいるのは翔輝の姿をした人形かと思わせるほど、翔輝は反応がなかった。

生気のない瞳。武蔵の無表情よりもさらに上の無表情。心ここにあらず状態。今の翔輝はそんな状態だった。

――翔輝の心は、完全に壊れていた――

「・・・翔輝。リンゴ食べる？」

武蔵は震える声で努めて優しくそう言った。だが、翔輝からは沈黙が返って来るだけだった。

「・・・じゃ、じゃあ、みかんは？」

「・・・」

「・・・トラック産のバナナがあるけど」

「・・・」

いくら話しかけても、翔輝からは何の返事も返って来なかった。

ここは翔輝の部屋。中には翔輝はもちろん大和達主力メンバーの他駆逐艦など多くの艦魂が翔輝を心配そうに見詰めている。

武蔵は無言で長門達の方を向き、力なく首を振る。効果なしという合図だ。それを見た長門はため息する。その表情は悲しみ一色だった。

「とうとう、恐れていた事態が起きたわね」

「どういう事だ？」

金剛の問いに、長門は心配そうな瞳で翔輝を見詰める。

「長谷川君はとても心が弱い。だからこそ長谷川君は誰かの支えが必要なのよ。だから、それを失えば崩れる。そして――壊れてしまったのよ」

長門の言葉に、全員は翔輝を見詰める。

ついこの間まで太陽のような優しい笑顔を向けていた彼の姿は、もうここにはいない。あるのは、壊れた彼でしかなかった。

「ふん。情けない奴だ」

金剛は吐き捨てるように言った。その言葉にまわりの艦魂から驚きの視線が集まる。そして、長門はそんな金剛の言葉に激怒する。

「金剛！　あなたッ！」

「ふん。事実だろうが。大和が自分から離れていくだけで心が折れるとは、精神がたるんでいる証拠だ」

「金剛ッ！」

長門は金剛の勢い良く胸倉を掴んだ。身長の高い金剛を、長門は下から睨み付ける。その瞳には怒りの炎が燃え上がっている。そんな長門に、金剛は口元を吊り上げる。

「ふん。事実を言われて腹が立ったか？」

「金剛ぉッ！」

長門が真っ白になるほど強く握った拳を上げる。もう金剛を許せなかった。そんなひどい事を言う彼女は許せない。だから、殴り飛ばそうと思った。だが――

「・・・死ねッ！」

突如武蔵の跳び蹴りが金剛の横腹に命中した。長門に掴まれていた金剛は身動き取れず、モロに命中。金剛は呆気なく倒れた。

「む、武蔵！？　貴様一体何を――」
金剛が言い終わる前に武蔵は彼女に強烈な踵落としを炸裂させる。腹部にその一撃を受けた金剛は一瞬苦悶に顔をゆがめる。
「や、やめろ――」
金剛が言い終わる前に再び武蔵は動き、腕を掴んで無理やり立たせるとそのまま彼女を背負い投げする。
連合艦隊最凶の金剛は、その実力を発揮する前に轟沈した。
見事に金剛に地獄の三連撃を放った武蔵は鬼神のような顔で金剛を睨んでいた。その背後からは冥界の入り口かと思わせるほどのドス黒く、濃密な妖気――殺気が吹き荒れていた。
「貴様！　一体何をする！」
起き上がった金剛も武蔵を睨む。が、今回は武蔵の方が断然怖いと満場一致だった。
武蔵はギリリと歯を軋むほど歯軋りすると、戦艦の砲撃音のごとき怒号をぶっ放す。
「・・・翔輝を愚弄する事は、絶対に許さないッ！」
そう怒りの怒声を上げると、武蔵はどこから出したのか機関銃を構えていた。さすがの金剛もこれには驚く。というか生命の危機。
「ちょ、ちょっと待て！　それは冗談にならん！」
「・・・原子のレベルから葬り去ってやる！」
「総員武蔵を確保してえええええぇぇぇぇぇッ！」
長門の命令で多くの艦魂達が慌てて武蔵に襲い掛かった。さすがの武蔵も人海戦術の前では抵抗する事もできず、あっけなく確保された。
「姉貴。さすがに言い過ぎだ。俺も今の姉貴の言動は許せねぇ」
そう言ってポニーテールを炎のように揺らぎながら榛名も金剛を睨み付ける。その後方から伊勢や日向、山城や扶桑。さらには瑞鶴以下空母の艦魂や駆逐艦達も睨み付ける。そんな数の劣勢の中、金剛は居心地が悪くなったのか「ふん」と鼻息を立てて部屋から出て行った。

残された一同は再び翔輝を見詰める。こんな騒がしい喧騒の中でも、翔輝は先程から一切変わらず虚空を見詰めている。

――本当に変わってしまったのだ。

「・・・翔輝」

ようやく解放された武蔵は、再び翔輝に近づく。だが、翔輝は相変わらず虚空を見詰め、彼の視界には武蔵の姿は映っていない。

「・・・翔輝」

泣きそうな顔をしている武蔵を一瞥し、長門は先程から泣きもせず無表情で隅にいた大和に向き直る。その瞳には絶対零度の、冷徹な怒りが込められていた。

「そろそろ話してくれないかしら。一体何があったの？」

「え？　わ、私は何も・・・」

「うそ言わないで。あなたが何かしなきゃ長谷川君はこんなふうにならないわよ」

「ほ、本当に何も知らないんですよ！」

大和は真剣な瞳で長門に訴える。本当に彼女は何も知らないのだ。だが、長門はそれを信じない。睨み合う両者は、榛名の行動に二人は停戦した。

「長谷川！　いつまでもボーッとしてんじゃねえよ！　頼むからよ！」

榛名の表情は辛そうに歪んでいた。必死になって翔輝の胸倉を掴んで彼を揺らす榛名を、伊勢が「やめてぇな」と小さな声で制し、引き離す。

「うぅっ、長谷川・・・ッ！」

榛名の目に涙が浮かぶ。その常の彼女らしくない行動に、艦魂達は改めて現状の重大性を認めた。

「お兄ちゃん！　お願いだから笑ってよ！」

隼鷹も泣きながら翔輝に抱き付く。だが、翔輝はそんな彼女達の想いも届かないほど、彼の心は破壊されていたのだ。

「航海士・・・」

「長谷川君・・・」
山城と日向も心配そうに彼を見詰めている。そんな誰もかもが悲しみに包まれている中、大和は一切変わらず無表情で事の成り行きを見ている。その瞳は彼女に合わないほど冷たいものだった。そんな大和に、武蔵は怒りの目を向ける。
「・・・何で、そんな冷たい目をしていられるの？」
武蔵は大和の目の前まで行き、冷たい視線を向けている姉を睨み付ける。
「私は別に・・・」
武蔵の怒り一色の瞳に、大和は視線を逸らす。そんな大和の行為に武蔵は許しがたい怒りを感じる。
「・・・姉さんは翔輝が心配じゃないの？」
「心配だよ。何言ってるのよ」
「・・・本当に？」
「本当だよ！　どうして疑うのよ！」
「・・・姉さんなんか信じられないから」
「何ですって！？」
イラ立つ両者は互いを睨み合っている。そんな二人を仲裁しようと長門達も止めようとするが、お互いの間には主砲を向け合っている大艦隊のような緊迫感があり、下手に動けそうにない。そんな二人の沈黙を破ったのは、武蔵の方だった。
冷徹な怒りを込めた瞳で、実の姉を射抜く。
「・・・翔輝が壊れたのは、姉さんのせい」
「ど、どうしてよ！」
武蔵の言葉に大和は激怒する。だが、そんな大和を武蔵は冷たい瞳で睨み付ける。
「・・・昨日、姉さんは坂井と一緒に第三七通路にいた」
「え？　第三七？　通路の名前はよくわからないけど、確かに夜通路に坂井さんと一緒にいたけど」
「・・・そこで、姉さんはふらついて坂井に寄り掛かった」

「確かにそうだけど、何であんたが知ってるのよ」
気味が悪いといった具合に顔をゆがめる大和。そんな大和に、武蔵は冷たく言い放つ。
「・・・あの時、あなたの後方約七m地点に私と翔輝はいた」
「え？」
「・・・そして、その方向からだと、二人はキスしているように見えた」
「き、キスッ！？」
大和は顔を真っ赤にして驚く。そんな大和を武蔵は冷たい目で見詰める。
「それは本当か！？」
「大和はん！」
榛名と伊勢が狂ったように大和に詰め寄るが、大和は全力で首を横に振る。
「そんな事してませんよ！　武蔵！　いい加減な事言わないでよ！」
「・・・事実。そこからは二人がキスしているように誤認してもおかしくな場所だった。でも、私はすぐに誤解だと気づいた。いくらお姉ちゃんが最低最悪な女だとしても――」
「何かどさくさに紛れてすごい悪口言ってない？」
「・・・そんなふしだらな行為を平然と行う人じゃないってわかってる」
「武蔵・・・」
「・・・でも、翔輝は違った」
「え？」
武蔵は思い出すのも辛いといった具合に首を小さく首を横に振ると、小さく口を開く。
「・・・姉さんに裏切られ、精神が限界に近かった翔輝はそれを誤解と判断するだけの余力は残っていなかった。目の前の状況を真に受け、ついに精神が崩壊した。それがこの結果」
大和は壊れてしまった翔輝を見詰める。彼がこんな状態になって

も、心が麻痺しているのか、なぜかあまり感情的にならない。
武蔵は虚空を見詰める翔輝を悲しげな瞳で見詰める。
「・・・翔輝はもう、元に戻れないかもしれない。全ては姉さんのせい」
全員の視線が大和に集中する。そのどれもが彼女を責めるような視線だ。だが、一方的に攻撃されている大和は抵抗する。
「私のせいじゃない！」
「・・・なら、誰のせい？」
武蔵は冷たい視線を浴びせる。まるで道端のゴミを見るような、何の感情のこもっていない瞳だ。
「・・・翔輝はあなたのせいでこうなった。それ以外の何ものでもない」
「私は悪くないッ！　悪いのは、むしろ大尉の方よ！」
「・・・何ッ！？」
拳を真っ白に染めて武蔵は血走った目で大和を睨み付ける。その眼光は鋭利な刃物のように鋭かった。その瞳の中には殺意に近いもの輝いている。だが、そんな武蔵の視線も今の大和も負けなかった。
「私、聞いたんだからッ！」
「・・・何を？」
「先週、あなたと翔輝が防空指揮所で話していた事！」
大和は言うのも辛そうな顔で武蔵を睨む。
武蔵の記憶力は他の者より並外れていた。すぐに大和の言っている場面を思い浮かべてハッとしたような顔になる。
「私、それを偶然聞いちゃったの・・・大尉が、私を翔香さんの代わりでしかないって言ったのを・・・ッ！」
『えぇッ！？』
全員が翔輝を一瞥し、今現在状況を唯一話せる武蔵を見詰める。
それに対し、武蔵はただじっと大和を見詰めている。
「信じてたのに・・・私は、大尉をずっと信じていたのに・・・なのに、大尉にとって私はただの代わりでしかなかったのよ・・・バ

カみたい」
いつの間にか、大和は泣いていた。
自分が今までそんなふうに彼に思われていたなんて、信じたくなかった。
嗚咽を繰り返して泣き崩れる大和を同情の視線が見詰める。同時に、翔輝に対し嫌悪感を抱く艦魂達もいた。だが、
「・・・それは違う。ただの誤解」
武蔵は冷静にそう言った。だが、《誤解》の一言で済ませられるほど状況は甘くなかった。
「何が誤解よ！　あれのどこが誤解になるのよ！」
大和は武蔵の胸倉を掴んで激怒する。
信じていた者に裏切られた。これほど悲しく辛い事はない。
泣きながら大和は武蔵を睨みつける。
憎い。
この妹が憎い。
彼女は《武蔵》として見られて、彼に慕われている。なのに自分は違う。悔しくて、悔しくて仕方ない。
キッと睨みつける大和。だが、武蔵は冷静にそんな彼女を見詰める。
「・・・姉さんは最後まで聞いていない」
「え？」
武蔵の言葉に、大和は目を見開く。そんな姉に、武蔵はあの時の事を思い出しながら淡々と話す。
「・・・翔輝はその後こう言った。『最初は、本当に最初の一ヶ月くらいはそうとしか思わなかったけど、一緒にいるうちに、代わりとしての彼女でなく、たった一人の彼女の傍にいたいと思うようになってきてたんだ。だから僕は、大和を大切な人と思えるようになった』って」
「うそ・・・」
「・・・うそじゃない。翔輝は姉さんを誰よりも大切に思っていた」

武蔵の言葉に、大和は力なくその場に崩れた。
信じていた者を裏切ったのは・・・自分・・・？
「じゃ、じゃあ、全部私の誤解だったって事なの・・・？」
「・・・全部がそうじゃない。翔輝はこうも言っていた。『今でも心の隅では、彼女を翔香の代わりとしか見ていない自分がいるんだ。だけど、それは本当に一部だけの僕の気持ちであって、そうじゃない。でも、そんな気持ちで大和に接するのは、嫌だった』って。その後、『だから、大和が僕から離れていくのは――いい事かもしれない。本当は嫌だけど、こんな微妙な気持ちで彼女の傍にいたくない。だから――もう、終わりにしようと思ってる。今の彼女には坂井さんがいる。だから、もう僕は必要ない』って、辛そうに言っていた。そして最後に、翔輝は泣きながら無理に笑って『大和が僕を必要としなくなったら、僕は――潔く引き下がるつもり』って言った。翔輝はそこまで、誰よりも姉さんの事を考えていた」
「そ、そんな・・・ッ！」
大和は愕然とする。翔輝がそこまで自分の事を考えていてくれたのに、自分はそんな彼の気持ちを踏みにじって、疑い、冷たく当たり、離れた。一体自分は何をしていたのか――泣きそうになる。
「大尉は、いつも私を心配していてくれたなんて・・・そんなの・・・」
「・・・翔輝はいつでも姉さんの事を気にしていた。それを、お姉ちゃんは踏みにじった。だから、翔輝はこんな事に」
そう言って武蔵は翔輝を見る。大和もそれにつられて翔輝を見る。
翔輝は風邪の症状で苦しいのか、今は目を閉じ、脂汗を流して咳き込んでいる。そんな翔輝の傍に大和はふらふらと近づく。翔輝の傍に行くと、大和は震える手で翔輝の頬を撫でた。
苦しそうに顔をゆがめ、風邪に苦しむ翔輝。そんな彼の頭には痛々しい包帯が巻かれている。
「大尉。私は、あなたの気持ちも知らずに・・・」
泣きながら言う大和に、武蔵は冷たく、言い放つ。

「・・・何もかも、みんなもう手遅れ」
「いやあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
少女の絶叫は、愛する人の心には届かなかった。

その夜、翔輝の看病の為に集まった武蔵、伊勢、山城、榛名、隼鷹、雪風――そして、大和の七人は翔輝を徹夜で看病した。その間、大和はずっと沈黙したままだった。

翔輝の精神が破壊してから数日後、翔輝の看病を担当している六人は誰もが睡眠不足で疲れていた。だが、大和と武蔵の二人だけは疲れているはずなのにそんな雰囲気を全然見せずに翔輝の看病を続けた。
「大尉。お食事ですよ」
水上が持って来てくれた食事を大和が食べさせる。意識はあるので食べてはくれるが、相変わらず無表情で無言は変わっていない。
「おいしいですか？」
「・・・」
翔輝からの返事がなくても、大和は気にしない。本当は辛いのだが、これも自分の責任だと思って必死にやっている。そんな大和の横では武蔵が部屋の掃除をしていた。掃除能力に関してでも武蔵は大和より上だ。武蔵曰く「・・・家事。特に掃除と料理は花嫁修業の絶対必須条件」だそうだ。
「・・・翔輝の具合は？」
「熱はもうないから、風邪は治ったみたい」
「・・・そう。良かった」
武蔵はそう言うと、掃除を再開する。そんな彼女を見詰め、本当に翔輝の事を想っているんだなぁと大和は感心する。もしかしたら自分よりも翔輝の事を大切に想っているのかもしれない。ちょっと敗北感。
「風邪は治ったみたいだから、もうそろそろ元の大尉に戻るかな？」

すがるように言う大和だが、武蔵の表情は暗い。
「・・・可能性はある。でも、極めてその確率は低い。風邪という障害物を排除したとしても、変化は軽微。壊れているのは、《身体》じゃなくて、《心》だから」
「そっか・・・」
武蔵の言葉に、大和は落胆はするが、絶望はしない。まだ、可能性は残っている。奇跡みたいなものだけど、それを信じる。
大和は黙々と掃除をする妹に、満面の笑みを浮かべる。
「じゃあ、がんばらないと」
「そうね。本当に今日中に長谷川君を復活させないと」
突然現れた長門が真剣な顔でそう言った。突然の登場とその謎の言葉に、二人は驚く。
「どういう事ですか？」
大和が訊くと、長門は力なく首を横に振った。
「さっき偶然知ったんだけど、病状が芳しくない長谷川君を明日内地の病院に送るって話が持ち上がってるのよ」
「えええッ！？」
驚く大和。武蔵も驚きのあまり目を見開いている。珍しい事にどうやら彼女も知らなかったみたいだ。
「・・・それは本当？」
「たぶんね。『大和』の航海長が言ってたし。でも、賢明な判断だと思うわ」
「・・・同感」
「そ、それはそうですけど」
通常軍艦の医務能力は主に戦闘で傷ついた兵に対する応急処置である。翔輝のように外傷以外は軍艦の医務科の専門外なのである。だからこそ、内地の病院に送るのは適切な処置である。だが、
「そんな事したら、もう大尉に会えなくなるかもしれません」
「その可能性は大きいわね。何より、あの瑠璃が壊れてしまった長谷川君をまた軍艦勤務にする可能性は少ないし、もしかしたら仇討

ちに来るかもしれないわ」
「瑠璃さんが仕返しに来るのは構いませんが、大尉が二度と帰って来ないのは困ります！　私は大尉にちゃんと謝りたいんです！」
大和の訴えに、長門もうなずく。
「あなたの気持ちはわかるわ。でも、このままだと明日には確実に長谷川君は内地の病院に送られるわ。そうしたらあの瑠璃の事ですもの。日本全国に張り巡らせた情報網を使ってすぐに捕捉。これを確保するわね」
「そんな事になったら、全てがおしまいです」
「・・・何とかしなきゃ」
大和と武蔵は他五名を呼んで対策を考えたが、いい案は浮かばなかった。結局、長門の意見で翔輝と最後の夜を過ごす事になった。

夜、翔輝はいつもどおり早くに就寝した。そんな彼の寝顔を、多くの艦魂達が寂しげな瞳で見詰めている。
明日の朝には、翔輝は内地に行ってしまう。今夜が、もう最後なのだ。
「大尉。ごめんなさい。私・・・ッ！」
泣きながら言う大和の肩を、長門が抱き締める。そんな二人のまわりで、武蔵、伊勢、山城、榛名、隼鷹、雪風も翔輝を見詰める。
そんな彼女達の中には涙を浮かべる者もいた。
これが翔輝といれる最後の時間になるかもしれないと思うと、涙が止まらなくなる。
全員が全員、徹夜して翔輝といようと決心した。
だが、ここにいるのはいずれも徹夜組である。長門も疲労困憊（ひろうこんぱい）だった。あの武蔵でさえ睡魔に敗北した。
結局、最後まで残ったのは大和一人だった。
大和は全員が眠ってしまったのに気づくと、翔輝と一緒に瞬間移動で防空指揮所に向かった。
防空指揮所からはきれいな星空が見えた。

「大尉。きれいですね」
大和は嬉しそうにそう言った。眠っている彼は星が見えないが、大和は気にしなかった。
そんな大和は、空を見ながら正直な気持ちを言った。
「私、大尉の事が大好きです。それなのに、そんな大尉をこんなに苦しめてしまって、本当にごめんなさい。謝っても許してもらえないでしょうが、本当にごめんなさい。私・・・怖かったんです」
大和は目をつむっている翔輝の顔を見詰める。
「坂井さんと会ってから、大尉は私から離れているように感じたんです。だから、怖くなって、優しくしてくれた坂井さんに近づきすぎたんです。今考えれば、それも大尉の考えだったんでしょう？私を強くする為の」
翔輝からの返事はない。それでも大和は続ける。
「私ってバカですよね。大尉の気持ちもわからずに疑って、離れて、本当に大バカです。でも――」
大和の瞳から、一筋の涙が流れる。
「こんなバカでも、大尉の傍にいたい。これは変わらない事実です――大尉。大好きです」
大和はそっと、翔輝の唇にキスした。それは、恋する乙女の決意の表れだった。
大和は翔輝から顔を離すと、再び空を見上げる。空に浮かぶ星達の輝きは一体何を伝えているのだろうか。それは誰にもわからない。でも、大和には、それが《初心を思い出すように》と聞こえた。
大和はうなずき、眠っている翔輝を再び見詰めるのであった。

翌朝――朝と言ってもまだ日が出てから三〇分も経っていない朝一番。一つの奇跡が起きた。
「ふわぁ・・・」
突然翔輝があくびをしながら起き上がった。目を何度も擦り、眠そうな瞳を開ける。その瞳は眠そうだが、その瞳の中には生気が戻

っていた。
「・・・何でこんな早い時間に起きたんだろ？」
ぼーっとまわりを見て驚く。
「え？　大和？　武蔵・・・」
そこにはベッドを中心に椅子に座りながら眠っている大和達がいた。全員が気持ち良さそうな寝息を立てている。
「長谷川ぁ、何ニヤニヤして顔してんだよぉ。ぶっ殺すぞぉ・・・」
一人床で寝ている例外がいたりするが。
そんな彼女達を見詰め、翔輝は首を傾げる。
「何してんだ？　こいつら」
精神が崩壊した後の記憶がまったくない翔輝は何が起きたのかまったく理解できていなかった。
訳がわからないのでとりあえず二度寝しようかと思ったが、
「何か寝づらい」
七人の女の子と一緒の部屋で寝れるほど翔輝は大人ではない。情けないが翔輝の情緒は小学生並みである。
「仕事に行こう」
翔輝はこの状況を解決するよりも逃げる事を選んだ。
上着を着て、軍帽を被ったところで気が付いた。
「何だ？　この包帯」
少し考えたが、記憶が混乱しているので思い出せず、結局気にせずに部屋を出て行った。

その一時間後、この中では一番早起きの武蔵が起きた。と言っても、連日の徹夜のせいで睡眠不足になっていたのでいつもより遅めの起床だが。
起き上がった武蔵は寝ぼけ眼で第一に翔輝を確認した。そして、その異常事態に気づいた。
「・・・翔輝！？」
驚いた武蔵は腰から銃を取り出し、上に向かって数発発砲した。

「な、何だ!?」
だらしない格好で寝ていた榛名が飛び起きた。それに続いて他の者も飛び起きる。
「何っつぅモーニングコールだよぉッ!」
榛名が血走った目で武蔵を睨み付ける。だが、めったに表情を変えない武蔵が今にも泣きそうな顔で慌てているを見て状況は変わった。
「ど、どうしたんだ!?」
「・・・翔輝がいない!」
『ええぇッ!?』
大和達は眠る前にはいたはずの翔輝がベッドにいない事に気づいた。全員からサーッと血の気が失せた。
「ま、まさかもう内地に行きはったの!?」
「そ、それはないと思いますが」
慌てる伊勢を雪風がなだめる。だが、伊勢の予感は絶対に外れていると言い切れない現状だ。
「お兄ちゃん! お兄ちゃん!」
「落ち着け隼鷹。とにかく捜そう」
山城の前向きな意見に全員は満場一致で賛成した。
「司令! 手分けして捜しましょう!」
「・・・いや、翔輝の行く所は限られている。一緒に探したほうがいい」
「武蔵の言うとおりです! 誰か一人が見つけても他の人達にどうやって連絡すればいいんですか?」
大和と武蔵の意見により、七人は一緒に探す事になった。
「んじゃあどこを探すんだよ?」
「・・・翔輝の主な行動場所は艦橋、航海室、防空指揮所の三つ」
「この時間なら航海長達もいますから、たぶん艦橋にいると思います!」
「そう。じゃあまずは艦橋に行きましょう!」

長門の言葉が合図となり、七人は艦橋に転移した。すると、
「あれ？　みんな」
目の前にきょとんとしている翔輝がいた。
「長谷川ッ！」
「長谷川君！」
「長谷川はん！」
「・・・翔輝！」
『大尉！』
七人がそれぞれ翔輝を呼ぶ時の名を叫ぶ。
「え？　何？」
何がなんだかわからないという感じで首を傾げる翔輝。と、
「大尉！」
「うわッ！」
一番に突撃したの大和だった。大和は泣きながら翔輝の胸の中に思いっ切り飛び込んだ。翔輝はそんな大和を必死に受け止める。
「や、大和？」
「大尉！　大尉！」
翔輝の腕の中で泣きながら何度も翔輝を呼ぶ大和。それに対し翔輝はびっくりしている。後ろではそんな翔輝を独占する大和に機関銃を構える武蔵を長門と雪風が取り押さえる。
「や、大和・・・ちょっと外に行こう」
今は坂井の姿はないが、航海長達がいる。みんな怪訝な顔でこちらを見ている。翔輝は艦魂達を連れて防空指揮所に出た。指揮所に来ても、大和は泣きながら翔輝の腕の中にいる。そんな大和を、翔輝は困ったような目で見る。
「ちょっと・・・」
翔輝は離そうとするが、大和は服を掴んで離れようとしない。そんな大和に翔輝は訊く。
「大和。どうしたの？」
「・・・翔輝。覚えてないの？」

「え？　何を？」
武蔵の質問に翔輝は首を傾げる。その反応に全員が驚く。
「長谷川はん。ほんまに何も覚えてないんどすか？」伊勢が不思議そうに聞く。
「だから何を」
「一週間前に海に落ちた事とか」
「あぁ、あれね。さっきまで忘れてたけど航海長達に言われて思い出した」
「・・・それで、その原因となったあの事も？」
「うん。まぁ・・・」
そう答えると、翔輝は気まずそうに大和を見る。翔輝の記憶は一週間前から今日に至るまでまったくない。つまり、翔輝のとってはあの衝撃的出来事は昨日の出来事になる。まだ鮮明にあの時の事を思い出せる。
「大和。その・・・」
「ごめんなさい」
「え？」
大和の口から意外な言葉が出たので、翔輝は驚く。大和は涙で濡れた瞳を上目遣いで見てくる。これは結構ヤバイ。
「私、大尉の気持ちを全然わかってませんでした。なのに、私は勝手に勘違いして、大尉に冷たく当たりました。本当にごめんなさい」
「え？　あ、その・・・」
困惑する翔輝に冷静さを取り戻した武蔵が説明する。
大和と坂井の行為は翔輝の誤解だという事。翔輝は一週間も精神崩壊状態でいた事。そして、大和が反省しているという事ｅｔｃ・・・
全てを理解した翔輝は「なぁんだぁ」と声を出してその場に座り込んだ。
「そっか、良かったぁ」
本当に心の底から嬉しそうな顔で言う。そんな翔輝に大和が気ま

ずそうに謝る。
「本当にごめんなさい」
「何でお前が謝るのさ。悪いのは僕なんだからさ」
「そんな事ありません！　悪いのは全ての元凶であるこの私です！　本当にごめんなさい！」
「僕が悪いんだ。ごめん」
「悪いのは私です！　ごめんなさい！」
すると翔輝はくすくすと笑い出す。そんな翔輝の反応に大和は首を傾げる。
「どうしたんですか？」
「いや、これじゃお互い謝ってばっかだなぁって思ってさ」
そう言うと、翔輝は大和の目を見て、優しい笑みを浮かべながら言う。
「心配してくれて、ありがとう」
「え？　あ、いや、その・・・」
翔輝の見事な切り返しに、今度は大和の方が困惑する番になった。
「えっと、ど、どういたしまして」
そんな大和の微妙な反応に翔輝はおかしそうに笑う。そんな大笑いする翔輝に大和は顔を真っ赤にして怒る。そんな二人を見ていた榛名が翔輝に近づいて――頭を下げた。
「悪かったのは大和だけじゃない。この俺もだ。すまん」
「うーん。大和はともかく、榛名が謝る理由がわからないんだけど」
「俺だってお前を裏切ったようなもんだ。いくら姉貴に押されたとはいえ、お前には悪い事をしたと思っている。すまん」
「・・・僕はお前が素直に謝っている光景の方が精神に悪いと思う」
翔輝の言葉に、頭を下げていた榛名のこめかみで何かが断裂した。
「テンメェッ！　人が下出に回りゃあ言いたい放題言いやがって！」
ブチ切れた榛名は翔輝の首を羽交い絞めにする。
「ちょっ！　待って！　僕一応ケガ人ッ！」
「うるさいうるさいうるさいッ！　黙れボケッ！」

このままだと本当に首をへし折りそうな勢いの榛名を長門と山城が引き離す。すると今度は武蔵が、
「・・・翔輝。良かった」
「武蔵？」
「・・・翔輝はやっぱり笑っている方がいい」
「武蔵・・・ありがとう」
翔輝は優しい笑みを向ける。それは今日一番の笑みだった。そんな翔輝を見て、早急に関係回復をしなければならないと思う大和だった。
「航海士。頭の傷は大丈夫なの？」
山城が無表情ながらもどこか心配そうな声で訊いてくる。
「うん。もう大丈夫みたい。心配してくれてありがとう」
「あ、うん」
少し頬を赤くしながらうつむく山城。
「お兄ちゃん！　良かったよ！　本当に良かったよ！」
隼鷹がわんわん泣きながら翔輝に抱き付く。そんな隼鷹の頭を、翔輝はそっと撫でる。
「ごめんね。心配掛けさせちゃって」
「私、お兄ちゃんがずっとあのままだったらどうしようって思って、私、本当に心配して――」
「ごめん。ごめんね」
「うわあああぁぁぁぁんッ！」
隼鷹はぼろぼろと涙を流す。そんな隼鷹の頭を翔輝は撫で続けた。
次に伊勢が柔らかな笑みを浮かべて声を掛けてきた。
「長谷川はん。ご無事で何よりやわぁ」
「伊勢。僕の事心配してくれた？」
「したでぇッ！　ほんまのほんまに心配して――」
「ごめん。だからそんなに怒らないでよ」
「怒ってあらへん！　嬉しいんどす！」
「そっか、ありがとう」

伊勢は袖で何度も涙を拭う。そんな彼女の仕草に、翔輝はいけないと思っていても自然と笑みになってしまう。

その時、そっと指揮所を出て行こうとした少女がいた。

「あ、待ってよ雪風！」

翔輝に呼ばれた雪風は慌てて振り向く。その顔は何か気まずそうだ。

「あ、その・・・」

「何で逃げるの？」

「え、あ、いえ――ごめんなさい！」

雪風はそう言うと慌てて指揮所から出て行った。

「あ、ちょっと――」

「いいのよ。長谷川君」

そう言って止めたのは長門。その顔には「追わないであげて」と言っているかのようだった。

「長門さん。でも・・・」

「ちょっと緊張してたのよ、あの子」

「緊張、ですか？」

「えぇ。ここにいるのは戦艦と小型空母。自分よりもずっと階級が上の私達と一緒にいるのが気まずかったんでしょ。後であなたからお礼を言っておいてね」

長門はそう言ってウインクする。その行為がとても色っぽかったので翔輝は一瞬ドキッとしてしまう。危ない危ない。

「じゃあ今夜は長谷川君の回復を祝って宴会を開きましょう！」

長門の言葉に大和達は「おおおぉぉぉッ！」と声を上げる。

「うーん。なんか僕らって宴会ばっかしていませんか？」

「そんな事ないわよ。ほら長谷川君も。おーッ！」

「お、おー・・・」

一人翔輝だけが苦笑いしているのであった。だが、その表情にもう悲しみはない。大和との絆は、再び結ばれたのだ。

その夜、本当に宴会が開かれた。みんな飲んで歌って騒いでのドンチャン騒ぎ。中には金剛や榛名、翔鶴の超強力な攻撃を受けて悲鳴をあげる者もいたが、それも余興のうちと長門があっさりと片付けてしまった。

その際、翔輝は雪風にお礼を言うと、雪風は首がもぎ取れそうなほど首を振って「そ、そんなお言葉は結構です！」と、顔を真っ赤にさせながら走って行ってしまった。そんな彼女を見て翔輝は不思議そうに首を傾げるのであった。

数日後、坂井は長年の夢だった軍令部に配属される事が決まった。その数日後、嵐のように現れた坂井は、嵐のように去って行った。見送りの際には多くの艦魂が見送ったが、武蔵と山城だけは決して見送る事はしなかった。

こうして、翔輝達は再び平和な生活を再開するのであった。

第十章　第七節　絆再び結ばれて（後書き）

紆余曲折はあったけど、二人の絆は再び、そして強く結ばれた。だが、この間に勢力を拡大した武蔵は、姉であり恋敵である大和にどう挑むのか。大和はどうこれを迎え撃つか。そして、翔輝は大和や武蔵、伊勢や隼鷹など多くの艦魂達とどうなっていくのか。それはまた次の機会に。

これから先は史実と合わせて進んでいきます。この十章はマリアナ沖海戦の手前まで進みます。そして、新キャラクター、空母『大鳳』の艦魂もこの先登場します。一体どんな話になるのか、皆さん待っててください。

ここで皆様に報告があります。

実は僕は一応学生ですので、期末テストが近づいています。今のところストックがありますので、問題なく更新はできると思いますが、もし止まってしまったらそういう事情があると察してください。

ではまた次のお話で。

第十章　第八節　海中に潜む悪魔　初めての戦傷

十二月八日、翔輝の十九歳の誕生日は盛大に祝われた。去年できなかった分を取り戻すかのような大盤振る舞いだった。

「でも、いくら何でもやりすぎだろ」

翔輝は目の前の光景に呆れてしまう。

第三会議室は通常は会議や宴会に使われているが、宴会でもここまではやらない。

部屋はきれいに飾りつけされていて、ライトアップまでされている。あれはＬＥＤ？　何であるのこの時代にというツッコミは野暮だろう。

だが、みんなで盛大に祝ってくれるのは恥ずかしいながらもすごく嬉しい。並ぶ豪華な料理や飾りつけはもちろんだが、特に嬉しかったのは雪風以下駆逐艦の有志で編成された艦魂軍楽隊の演奏だった。なぜ戦時中の日本で《ハッピーバスデートゥーユー》を演奏するのかツッコミを入れたかったが、あの金剛も黙殺しているのでそれもやめる。

そして、なぜか戦時中の日本なのにケーキが用意され、ご丁寧に十九本のろうそくが灯っていた。もう流れにを身を任せる事にした翔輝はろうそくの火を一回で吹き消す。と、次の瞬間には爆発のように皆の拍手や激励の言葉が飛び交った。

本日最大の山場を越えると、後は皆それぞれ料理を食べたり雑談をしたりしている。なんとなくいつもの光景に見えてきた。

「大尉！　おめでとうございます！」

「長谷川はんおめでとぉ！」

「まあ、めでてぇな」

「おめでとぉ」

などなど、多くの艦魂から次々にお祝いの言葉をもらう。ただし、プレゼントは今回はなしという事に翔輝から全員に通達しておいた。

理由は前回一部だけでもあの量だったので、今年はたぶん殺人級の量が押し寄せると予想して却下したのだ。一部からは不満の声が上がったが、そこは耐えてもらうしかない。

そんな誕生日会だが、皆はプレゼントの分まで大いに彼を祝った。みんなの笑顔に触れられた翔輝も、嬉しそうに微笑む。

途中やっぱり武蔵と大和達がケンカに発展したが、ケンカも祭りの華と長門はこれを放置。殴り合いのケンカになる寸前で翔輝が慌てて止めるという騒ぎも起きたが、誕生日会は大いに盛り上がった。

ともあれ、翔輝の誕生日はこうして無事に終わったのであった。

嵐のような翔輝の誕生日が過ぎてから一週間ほど経った十二日、『大和』と『武蔵』の両艦は整備、補給の為にトラックを出発した。行き先はいつもの呉ではなく横須賀だった。

ちなみに横須賀は武蔵の故郷である横須賀海軍工廠がある。海を進む時、武蔵の機嫌が多少なりとも良かったのは、故郷に帰れるからというものなのだろう。

航海は問題なく終わり、十七日に両艦は横須賀港に入港した。

対空機銃の増強が主な整備である為、両艦は船渠に入る事もなく海の上で整備作業が行われた。

兵達にも一泊二日の休みが与えられたが、翔輝は『大和』に残った。大和達と一緒にいたかったからだ。途中瑠璃が現れるかと思ったが、この時瑠璃は瑪瑙や珊瑚と共に貴族会の旅行で四国にいたので来られないのが道理。そんな事を知らない翔輝ががっかりすると、大和に脛(すね)を蹴られた。めちゃくちゃ痛かった。

整備作業は三日で終わり、二〇日には横須賀港を出港した。

二隻の超弩級戦艦は護衛の駆逐艦数隻に守られながら進み続けた。

何もかも順調な航海。このまま無事にトラックに入港する。誰もがそう思っていた。だが、そこで悲劇が起きた。

二五日、トラック島北東海域を戦艦『大和』『武蔵』を中心とした艦隊は南に向かって進んでいた。

その日は朝から鉛のように思い雲が空を覆い隠していた。
「お日様が現れませんね」
大和が残念そうに艦橋の窓から空を見上げる。空は晴れるどころか雨が降りそうなくらい怪しげな天気だ。
「あぁ、この調子だと今日丸一日はこのままだな」
「そうですか。残念です」
大和はどんよりとした空をつまらなそうに見詰めている。そんな彼女を見て、翔輝は小さく笑う。
「大尉。どうして笑うんですか？」
唇を尖らせて問う大和。そんな彼女に翔輝は「ごめんごめん」と謝る。
「いや、なんかかわいくてさ」
「か、かわ・・・ッ！」
翔輝の突然のそんな言葉に、大和は顔を真っ赤にさせてうつむく。そんな彼女を見詰め、翔輝は優しく微笑む。
いつもと同じ平和な日常だった。
――だが、二人は忘れていた。
ここがもう、敵に制海権を握られつつある危険な外洋――戦場であるという事を。
『四時方向より魚雷三本接近ッ！』
突然響いた見張り兵の絶叫が、悲劇の始まりだった。
参謀の一人が窓に立って確認すると、蒼い海の中に三本の白い線があった。それは、敵潜水艦が放った魚雷攻撃。そしてそれらは確実にこちらに向かって来ていた。
「面舵いっぱぁぁいッ！」
大野はすぐさま回避行動を取るが、ここで大きな問題があった。
普通なら右後方からの攻撃に対しては取舵を回すのだが、『大和』の左には『武蔵』がいた。この為、衝突しない為に大野は面舵を回した。だが、大和型戦艦は巨体ゆえに舵の反応が遅い、魚雷がずいぶん接近してからようやく艦は右に大きく回り始めた。だが、もう

遅い。
『魚雷接近！』
見張り兵の悲鳴が艦橋にこだまする。
「大尉！」
大和は翔輝の胸に跳び込んだ。その肩は突然の戦闘――死への恐怖に小刻みに震えている。翔輝はそんな大和を抱き締める。
「大和。大丈夫。大丈夫だよ！」
翔輝の行った言葉は自分へ向けたものでもあった。震える大和を、強く抱き締めた。そして・・・
ズドオオオオォォォォォォン・・・
鈍い音と振動が響き、魚雷一本が『大和』の第三砲塔付近に命中した。
「ひぐぅッ！」
「大和ッ！」
大和は膝を着くと、顔をしかめて足を押さえる。翔輝が慌てて確認すると、白い肌を切り裂いて赤い切り傷ができていた。そこからは真っ赤な血が流れ出している。
「大和！　しっかりしろ！」
『後部第三砲塔付近に魚雷一本命中！』
『機関室！　火薬庫に浸水！　防水ハッチ閉まります！』
『浸水区画封鎖！』
幸いにも被害は軽微なものだった。大和型戦艦の持つ装甲は普通の戦艦のそれとは比べものにならない。確かに浸水はあったが破口は小さく済み、浸水も少ない。だが、いくら軽微とはいえ、彼女に痛みがない訳ではない。大和は苦しそうに足を押さえる。
「大和。しっかりして！」
翔輝は自分のハンカチで大和の傷口を強く結んで塞ぐ。艦魂にやるだけなら痛みを和らぐ事くらいはできる。艦橋にいる全員がその光景を見詰める。翔輝が艦魂が見えるのはすでに皆知っている。彼らには空中に浮かぶ結ばれたハンカチしか見えないが、それでも翔

輝の慌てぶりを見て少なからず大和が苦しんでいるのは理解できた。
「長谷川。お前はもういい。早く大和を安静な所で休ませておけ」
航海長の言葉に翔輝はうなずき、苦しむ大和を抱え上げると、急いで艦橋を出て行った。向かった先は翔輝の部屋。翔輝は部屋に入ると自分のベッドに大和を寝かせた。大和は痛みを堪えるようにして苦しそうに顔をゆがめている。
「ううっ・・・くうッ・・・」
「大和・・・」
翔輝が大和の看病をしていると、状況を理解した武蔵が現れた。その顔は無表情ではあるが、瞳は暗い。
「・・・姉さんの具合は？」
「右足をケガしてる」
「・・・そう。敵潜水艦は駆逐艦二隻が追撃してる」
「わかった」
翔輝と武蔵は苦しんでいる大和を見て、何もできない自分達の無力さに唇を噛む事しかできなかった・・・

その後、敵潜水艦を追撃した駆逐艦は敵を見つけられずに戻って来た。
艦隊は逃げ込むようにしてトラック湾に入港した。

鬼の金剛の怒りはすさまじいものだった。
みすみす敵潜水艦に魚雷を放たれ、しかもそれが日本海軍の象徴である『大和』に命中してしまったのだ。その怒りは紅蓮の炎となって燃え上がる。
金剛は護衛をしていた駆逐艦をすさまじい怒号で怒鳴る付ける。
「貴様らは一体に何をやっていたんだぁッ！」
鬼の怒号が空間を振動させる。そのすさまじい迫力の前ではどんな者だろうと畏怖する。そんな彼女の目の前にいるのはいずれも彼女よりも年下かつ階級も下の者ばかり。そのどれもが金剛の憤激に

小さくなっている。中には涙を流す者もいる。
「敵潜水艦を発見できないどころか、みすみす魚雷を発射され、あまつさえその魚雷が『大和』に命中するなど、万死に値するぞッ！」
激昂する金剛を止められる者はそういない。だが、そんな金剛をその一人である長門が穏やかに止めに掛かる。
「まぁ、金剛。大和もたいしたケガじゃなかったんだし。彼女も許しているわよ。だから――」
「たわけえええええぇぇぇぇぇッ！」
怒号と共に豪風まで吹いた。蒼い瞳は怒りに染まり、危険な光をギラギラと放っている。それらの全てが彼女の怒りが尋常じゃないのを物語っている。
怒り狂う金剛は今度は楽観的な態度を取る長門に噛み付く。
「長門！　貴様みたいな楽観主義者は黙ってろッ！　それに大和も甘すぎる！　指揮官としての自覚が足りんッ！」
金剛は牙をむき出しにして震える駆逐艦達をギロリと睨み、怒鳴り付ける。
「しかも、追撃に失敗しただと？　そんな体たらくでどうするッ！　貴様らは軍人としての自覚が足りんッ！」
「す、しゅみましぇん・・・」
金剛の強烈な怒号についに泣き出す駆逐艦達。そんな彼女達があまりにかわいそうだったので、長門は怒り狂う金剛を説得する。
「金剛。いい加減にしなさい。彼女達のせいじゃないでしょ？　悪いのは彼女達に乗っていた見張り兵達でしょ？　それなのにどうして彼女達が怒られなきゃいけないのよ」
「艦魂の精神がたるんでいると、艦全体の士気が下がるのを知らんのか？」
「そんな曖昧なものを理由にして怒るなんてどうかしてるわ」
「もういいッ！　話にならんッ！」
「えぇ、そうね。話にならないわ」
金剛と長門お互いをキッと睨み付けると、ふんと互いにそっぽを

向く。そして金剛は手に持っていた竹刀をバシィッ！　と床を叩く。その音に駆逐艦達はビクリと震える。竹刀を腰に戻し、金剛は部屋を出て行ってしまった。

去って行く金剛の背中を見詰め、長門は疲れたようにため息する。

「まったく、頑固な人よね」

金剛とまともに口論できる数少ない人物である長門のおかげで、駆逐艦達の命は助かった。駆逐艦達は泣きながら長門に感謝する。それに対し長門は笑顔で一人一人の頭を撫でて泣き止ませる。本当にお姉さんみたいな人だ。

「ねぇ長門。大和は大丈夫なの？」

扶桑が心配そうに訊く。それはここにいる全員が知りたい情報だった。

「まぁね。今は長谷川君と武蔵、それに雪風が看病してるはずよ。司令部は大慌てよ。まさか『大和』の装甲に穴が開くなんて思ってなかったみたい。どうも継ぎ目の部分で爆発して変形しちゃったみたい。でもさすが『大和』よ。すぐに浸水区画を封鎖してそれ以上の被害は食い止めたわ。被害自体はたいした事ないみたい。すぐに治るわよ」

長門の言葉に、皆は安堵する。特に駆逐艦達は自分達の失態のせいで大和にケガをさせたと責任を感じていたのでほっと胸を撫で下ろす。

「でも、せっかく整備が終わったのにそのすぐ後に魚雷で傷つくなんて。これじゃあまた整備のし直しね」

「たぶんね」

長門扶桑は互いに珍しく深刻そうな顔を浮かべながらため息した。

ついにトラック島周辺にまで敵潜水艦が侵入するようになっていた。以前『大和』が敵潜水艦の攻撃を受けた際は、偵察程度の潜水艦だっただろうが、今回は違う。確実に迫る敵の包囲網の一端。それが今回の魚雷攻撃だ。

二人はまるでのど下に刃物を突きつけられているような日本軍の

戦況悪化に、もはや打つ手なしといった感じに首を横に振ると、静かにため息した。

一方、ケガした大和は翔輝と武蔵、それに彼女の従兵である雪風の三人に看病されていた。

「足。大丈夫か？」

心配する翔輝に、痛みがほとんどなくなった大和は笑顔で答える。

「はい。もうすっかり良くなりました。これも破口を応急処置してくれた兵の皆さんや大尉達のおかげです。ありがとうございました」

「礼を言われるような事じゃないよ」

照れたように言う翔輝に、大和は再度礼を言う。そんな二人の雰囲気にピクリと眉を動かすのは武蔵。

「・・・むしろ、姉さんは一回ケガした方が良かったと思う」

「武蔵。それは一体どういう意味なのかな？」

引きつった笑みを浮かべる大和に、武蔵は少し考えこう答える。

「・・・あれ。壊れたテレビは叩いて直せ」

「あんた。遠回しに私をバカにしてない？」

「いや、どう聞いたってストレートに言ってるぞ。バカだって」

「・・・バカにされているに気づかないのは、本当にバカな証拠。証拠と証明。作用反作用。サイン・コサイン・タンジェント」

「あぁもううるさいなぁッ！」

さっきまで看病されて（特に翔輝に）幸せ気分だった大和は武蔵のせいで機嫌を悪くする。そんな姉妹二人を見詰め、雪風はくすくすと笑う。

「相変わらず仲がよろしいんですね。司令と武蔵さんは」

雪風が嬉しそうにそう言いながら水の入ったコップを持ってくると、大和に差し出す。

「どこをどう見ればそうなるのよ」

大和は口を尖らせて雪風が持ってきた水を受け取って飲む。そんな大和がいじらしくて、雪風は嬉しそうに微笑む。

「いえ、嵐と舞風がいつもケンカばかりしてたんですが、やっぱり一番その組み合わせが仲が良かったんですよ」
嵐と舞風は雪風の妹で、今はもう二人とも海の底にいる。そんなもう二度と会えない妹達を嬉しそうに言う雪風は、心の強い子だ。
「ことわざでもあります。《ケンカするほど仲がいい》って」
「そうかな？」
「・・・正確にはそれはことわざじゃないし、私達の間にはないと判断する」
「八割がたケンカしてるよな。お前ら」
真剣に考える三人を見て、雪風はおかしそうに笑う。そんな彼女の反応に大和は頬を赤らめて不機嫌そうに唇を尖らせる。
「な、何で笑うのよ」
「すみません。なんか、ちょっとかわいくて」
くすくすと笑う雪風に、三人は自然と笑顔になる。そんな彼女達をオレンジ色の夕焼けが照らす。
日本ではもう雪降る真冬だが、南海のトラックは逆に夏だ。でも、冷房完備の『大和』艦内ではそれは関係のない事だ。
「甲板の兵達は大変そうだな」
翔輝は窓からふと甲板にいる兵達を見た。みんな汗水たらして仕事をしている。
「こう見てると、冷房の恩恵を受けて働いている僕がなんか楽してるみたいだな」
「そんな事ありませんよ。大尉は大変なお仕事をされているんですから」
「・・・姉さんのおもりとか」
「ケンカ売ってるの？」
睨み合う両者。そんな二人を無視し、翔輝はふとある事を思い出して不機嫌そうに口を開く。
「なんか他艦の兵からは『大和』を『大和ホテル』。『武蔵』を『武蔵御殿』とか言って皮肉ってる奴もいるらしいけど。何もそこま

で言わなくても――」
「長谷川大尉ッ！」
雪風の慌てた声に振り返ると、そこには重苦しい雰囲気を出してうな垂れる超弩級不沈戦艦姉妹がいた。
「大和？　武蔵？」
「そうなんですよ。大和ホテルって、あはは・・・」
「・・・これ以上の屈辱はない」
どうやらこの悪口はかなり二人の心を傷つけていたようだ。なんやかんやで二人は日本海軍の象徴である。一応プライドみたいなものがあるのだろう。それが見事に粉砕されるこの皮肉。うーむ。誰が考えたかは知らないが、すごいネーミングセンスだ。
落ち込む二人に、翔輝は慌てて励ます。
「まぁ二人とも、そう落ち込まないでよ。『大和』も『武蔵』もトラックっていう前線で敵に対し抑止力としてちゃんと役に立ってるんだからさ」
空前絶後の超弩級不沈戦艦が前線にいれば敵も畏怖してそう簡単にはトラックを攻め込めないというメリットがある。だからこそ両艦はトラックに配置されているのだ。今や航空機の時代とはいえ、航空機に次に恐ろしいのは海戦元主力である戦艦に変わりはない。
「そうですよね。私達の四六ｃｍ砲は敵を破壊するだけでなく、敵を畏怖させる効果もあるんです。だから役立たずじゃない。だから大和ホテルじゃない。大丈夫、大丈夫・・・」
大和はまるで自分に暗示を掛けているかのようにブツブツと言い続ける。そんな彼女の横では武蔵が銃の手入れをする。なぜこのタイミングでやるのかは不思議だが、怖くて訊くに訊けない。なぜなら彼女の目がかなりヤバイくらいに血走っているからだ。
「・・・誰が言い始めたのか。私の四六ｃｍ砲でこの世から消し飛ばしてくれる」
相当怒っているようであります。
「だ、大丈夫かな？　この二人」

「大丈夫ですよ・・・たぶん」
翔輝と雪風はそんな世界最強姉妹を見て苦笑いし合うしかできなかった。

第十章　第九節　瑞鶴の新たな絆

その頃、機動部隊はシンガポール方面で朝早くから訓練を行っていた。い号作戦、ろ号作戦の大量の航空機と人員の損失で、機動部隊は過去のような華々しさはもはや完全になくなっていた。

いつもと同じく防空指揮所で瑞鶴は甲板から飛び立つ艦載機を見詰めていた。すると、零戦の一機がふっと艦首から姿を消した。次の瞬間バシャンッ！　という着水音が上がった。その音に瑞鶴はため息する。

「また発艦に失敗ですか？　これで今日七機目ですよぉ・・・」

「ここまで来ると憤りよりも呆れの方が強いな」

瑞鶴の横に立っている男はため息交じりにそう言った。

彼の名は貝塚武男大佐。今月『瑞鶴』艦長になったばかりの男だ。

「まったく、せっかく『瑞鶴』の艦長になれたってのに、肝心の搭乗員でがこれではなぁ」

「すみません・・・」

「お前が謝る事じゃないだろ？」

――そして、彼は艦魂が見える人間だった。

貝塚はため息するともう大昔の事のように思えるあの頃を思い出す。

「真珠湾の時はあんなに輝いていたのにな」

「はい。もう懐かしいという記憶になってしまいましたが」

「小沢長官も頭が痛かろう。せっかく任された肝心の機動部隊がこれでは」

「長官に会わせる顔がないですよぉ」

「長官は艦魂は見えんぞ？」

「表現ですよ。本気にしないでください」

瑞鶴は怒ったように唇を尖らせる。そんな瑞鶴に貝塚はおかしそうに笑う。

「ごめんごめん」
「謝っているように聞こえないのはなぜでしょうか？」
たった一週間で二人はお互い信頼できるほど仲が良くなっていた。
瑞鶴自身、彼になら自分の命を任せられると思っている。
そんな二人が本日八機目の着水機を見てため息すると、
「何朝っぱらから暗い顔をしているのだ」
「姉さん」
「おぉ、翔鶴」
二人が振り返ると、そこには腰に手を当てていつものように無愛想な顔をしている翔鶴が立っていた。
翔鶴は朝っぱらからため息を連発していた二人を呆れたような目で見る。
「まったく、本当にお似合いの組み合わせだな」
「そ、そんな事ないよ！」
瑞鶴は顔を真っ赤にして手をブンブン振って全力否定する。そんな彼女の横では少し寂しそうな貝塚が。
「そこまで全力否定されると寂しい」
「知りませんよそんな事」
言い合う二人に今度は翔鶴がため息する。
「まったくお前らは、今がどれだけ重要なの時かわかっとらんだろう」
「わかってるよ！　機動部隊再建に全力を注ぐだけよ！」
「わかってるならため息を連発するなぁッ！」
翔鶴の跳び膝蹴りが瑞鶴のみぞおちにクリーンヒット。瑞鶴は吹っ飛び床に叩き付けられた後、あまりの痛さに床に突っ伏して声も出せずに肩を震わせる。
そんな瑞鶴を一瞥し、貝塚は呆れたように翔鶴を見る。
「本当に容赦ないんだな、お前」
「当然だ。お前もこうなりたくなかったらそのシャキっとしない顔をどうにかしろ」

翔鶴は不機嫌そうにそう言い放つと、ツカツカと靴を鳴らしながら消えた。

「ね、姉さん。ひどいよぉ・・・」

「大丈夫か？　顔が真っ青だぞ」

貝塚は涙を浮かべる瑞鶴の顔を覗き込むと、ひょいっと彼女の身体を抱き上げた。お姫様抱っこで、

「ちょっと艦長！？」

「その様子じゃ歩けんだろ？　俺が連れてってやる」

「けけけ結構ですぅッ！　艦長！　放してくださいッ！」

恥ずかし過ぎて顔を真っ赤にしてジタバタと暴れる瑞鶴。貝塚は腕の中で大暴れする瑞鶴を怒鳴る。

「あぁッ！　うるさい！　暴れるな！」

「放してッ！　放してよおおおぉぉぉッ！」

少女の恥ずかしそうな声は、横で訓練していた空母『瑞鳳』の防空指揮所にいた瑞鳳の耳にも届くほど大きなものだった。

「こういう事は申請してもらわんと困るのだが・・・」

「まぁそう固い事言うなって。楽しめばいいんだからさ」

「まったく・・・」

翔鶴は呆れたようにため息すると、クイッとラムネを飲む。そんな彼女の隣で豪快に笑うのは貝塚だ。

ここは『瑞鶴』の第二会議室。普段はあまり使われないこの部屋で、今日は貝塚の独断で艦魂達の宴会が開かれていた。貝塚や翔鶴、瑞鶴はもちろん、瑞鳳と隼鷹、飛鷹、さらに護衛の駆逐艦や巡洋艦までも巻き込んだ大掛かりなものだ。しかも貝塚の許可を得て来た刹那と瑞鳳に連れて来られた剣もいる。二人はつい一週間ほど前にラバウルから戻って来たばかりだった。

「剣。そのお菓子取って」

「それくらい自分で取ってよ」

「何よ。別に取ってくれるくらいいいじゃない」

相変わらずな瑞鳳と剣。今でこそこうしていつも通りの会話があるが、彼がラバウルから帰って来た時の瑞鳳の喜びようといったら。涙を流して彼に抱き付いたほどだ。

そんな微笑ましい再会を経た後は、こうしていつものような関係に戻っていた。

剣は「わかったよ」と渋々彼女の求める和菓子を取って渡す。瑞鳳は「ん」と受け取ると、お礼も何もなく和菓子を頬張る。そんな彼女に剣も呆れる。

「お前なぁ、礼くらい言えよな」

「感謝されたいの？」

「いや、別にそういう訳じゃないけど」

「ならいいじゃない」

「いや良くないってば。マナーとしてだな――」

「うるさいわね。これあげるから静かにして」

そう言って彼女が差し出したのは――メロンパン。

剣はツッコミ所が多過ぎてどうツッコミを入れればいいか困る。

そんな彼を無視し、瑞鳳はメロンパンをとてもおいしそうに食べる。

ツッコミ所満載だったが、彼女の幸せそうな顔を見てとりあえず黙ってメロンパンをかじる。確かに甘くておいしい。

「おいしいでしょ？」

「うん。おいしい」

「でしょぉ？　感謝してよね」

あまりない胸を逸らして自慢げに言う瑞鳳に苦笑いし、剣は黙ってメロンパンを食べる。

瑞鳳は何の返事もない剣に不満そうだが、メロンパンを食べると幸せそうな笑みを浮かべる。

そんな二人から少し離れた所に布陣しているのは翔鶴達だ。

「翔鶴お姉ちゃん」

隼鷹は相変わらず翔鶴に懐いていて離れない。そんな彼女に懐かれている翔鶴は気にした様子もなくラムネを飲む。隣では瑞鶴も同

じく飛鷹と一緒に和菓子を摘みながらラムネを飲んでいる。
「お前らは酒は飲まないのか？」
貝塚はコップを傾けながら瑞鶴に問うと、瑞鶴は苦笑いする。
「いえ、私は結構です。あまりお酒は好きではないので」
「ははは、まだまだ子供だな」
「はいはい。どうせ私はまだ子供ですよぉ」
瑞鶴はすねたように唇を尖らせると一気にラムネを飲む。そして炭酸の威力にのどが負けて咳き込む。
「アホだろお前」
呆れる貝塚の前で、瑞鶴は恥ずかしさのあまり赤面してうつむく。
「貝塚大佐。あまり瑞鶴をからかわいないでくださいよ」
そう言って瑞鶴をかばうように言ったのは刹那。
「別にからかってる訳じゃないぞ」
「からかってますよ」
「違うって。俺はただ本気で呆れてるだけだ」
「それはそれでダメです」
刹那の後ろではさらなる止めを受けた瑞鶴ががっくりとうな垂れている。そんな彼女に刹那も苦笑いしかできない。と、
「まったく、貴様という奴は」
呆れた声を上げるのは翔鶴。美しくつややかな黒い髪を掻きあげるその仕草は常の彼女にはない女らしさ。
「お前って、時々女っぽいよな」
貝塚が何気なく言った言葉に、ピクリと翔鶴の眉が動く。
「貴様の目は節穴か。私は女だ。女の私が女の仕草をして何が悪い」
「いや、別に悪くはないけど・・・お前女っぽくないし」
部屋の空気が、一瞬にして緊迫した。
誰もが口を閉じてしまうような空間の中、皆の視線は急に沈黙した翔鶴を見詰める。その瞳にあるのは恐怖。全てが壊れてなくなってしまうんじゃないかという不安。それら全てが含まれた瞳を一身に受ける翔鶴は沈黙を続ける。

「私が、女らしくない・・・だと・・・？」
恐ろしく低い声で放たれたその言葉に、皆の顔は恐怖する。隼鷹も今はもうその殺気に近い雰囲気に飛鷹の背後に隠れている。姉としての威厳とかそんなものは関係ない。
震える瑞鶴達。瑞鳳も今は剣の後ろに隠れ、剣自身腰が浮いていつでも逃げられるように構えている。
「私が女らしくないというは・・・どういう事だ・・・？」
そんな殺気の中、貝塚はほど良くお酒が回っているからか全く恐怖を感じていない。それどころか「えぇー」と言うと、少しためらった後、起爆剤をぶち込む。
「だってお前胸ないじゃん」
「・・・」
不気味な沈黙。そして、

ブチィッ！

破滅の恐音。
「総員退避ぃッ！」
瑞鶴が慌てて叫ぶが、時すでに遅し。
ゴゴゴゴゴ・・・・ッ！　と、音にすればそんな爆音を轟かしながら、邪神が覚醒した。
轟々と燃え上がる紅蓮の炎は、まるで怒り狂った龍のごとく荒れ狂う。その炎を纏い、翔鶴は立ち上がった。誰かの悲鳴と、コップの割れる音が響く。
「貝塚・・・ッ！」
「お、何だ？」
貝塚はアルコールが回り過ぎて獅子も逃げ出すような殺気を振り撒く翔鶴にいつもの通りのん気な顔をする。そのまわりでは瑞鶴達が声にならない叫びを上げている。
翔鶴は、腰の刀に手を添える。

「貴様とは、腹を割って一度話さんといかんようだな・・・ッ！」
「よしキタッ！　だったら酒を飲んでパァッっと盛大に話そうじゃないか！」
そう嬉しそうに叫ぶと、貝塚は酒を用意する。そんな彼のふざけた姿に翔鶴の怒りはついに臨界点を突破する。
「き、貴様という奴――ゴハァッ！？」
突如奇襲のように口に突っ込まれたコップ。その中に入っていた飲み物が防御する事もできずに直接のどを襲う。その熱さに、翔鶴は慌ててそれを吐き出す。
「ゲホゴホッ！　な、何を飲ませた！」
顔を真っ赤にして咳き込む翔鶴に、貝塚はきょとんと、
「何って、日本酒だけど」
「に、日本酒だとぉッ！」
「おうよ。やっぱり酒は日本酒に限るぜ」
「き、貴様という奴はぁッ！」
刀を抜き放って切り掛かる翔鶴。だが、その足取りはおぼつかない。貝塚はその一撃を簡単に避けると、一升瓶を持つ。
翔鶴が体勢を立て直そうとした時、勝敗は決した。
「ゴボォッ！？」
「おら飲め！　酒があれば腹を割って話せる！　友好を深めようじゃないか！」
「ゲボォゴボォッ！　は、放せぇッ！　ゴブゥワァッ！？」
押し倒した翔鶴に馬乗りになって大笑いしながら貝塚は彼女の口に一升瓶を突っ込む。その中身はもちろん日本酒。翔鶴は悲鳴を上げようにも口を塞がれてできず、暴れる事もできずに流れ込んで来る酒を必死になって吐き出すが、それでもどんどんのどの奥に流れていく。そして・・・
「あれ？　おーい、翔鶴？」
二本目に手を掛けた所で、貝塚は突如抵抗をやめた翔鶴を不思議そうに見詰める。

――翔鶴は、気絶していた。
顔を熟れたトマトのように真っ赤に染め、口からは酒とよだれが溢れ、身体を小刻みに震わせ、目をグルグルと回し、その縁には涙も浮かんでいる。とてもじゃないが《翔鶴》というキャラが崩壊しかねないヤバイ状態だ。
「気絶したのか？」
刹那、音速の一撃が彼の後頭部を強打した。
「いってぇッ！　何しやがる瑞鶴！」
振り返ると、そこには顔を真っ赤にして激怒する瑞鶴が立っていた。その手にはしっかりとハリセンが握られている。
「何しやがるじゃないですよ！　姉さんになんて事しちゃったんですかッ！」
「何って、ただ酒を飲ませただけだが」
「姉さんはお酒が大の苦手なんですよ！」
「マジぃッ！？」
それは本当である。翔鶴は舐めただけでも頬を赤らめるくらい酒に弱い。コップ一杯飲んだだけでもベロンベロンに酔っ払う彼女に、一升瓶を突っ込むなんて殺人的な行為だ。
「ど、どいてください！　翔鶴さんッ！」
飛鷹が慌てて翔鶴に駆け寄り、気絶した翔鶴を抱き抱えると、巡洋艦や駆逐艦の子数人を引き抜いて緊急の救護班を編成する。
「酸素マスクを持って来てぇッ！」
「心拍数低下ッ！」
「点滴を持って来てください！」
「それじゃない！　そっちのを持って来て！」
「ブドウ糖点滴はまだなのッ！？」
「心拍数さらに低下！」
「最悪電気マッサージ器を用意してください！」
「翔鶴司令が何か言っています！　え・・・だ、ダメですぅッ！
その川は渡っちゃダメですぅッ！　え？　赤城さん達が呼んでる？

なおさらダメですぅッ！　戻って来てくださぁいッ！」
聞こえてくるのは冷や汗全開な内容ばかりだ。
貝塚の顔からもサァッと血の気が失せる。
「どどどどうするんですかぁッ！？」
パニックする瑞鶴にガクガクと身体を揺すられる貝塚。
「いや、俺もまさかこんなになるとは・・・」
「艦長ぉッ！　どうするんですか！」
「お、落ち着けって！」
「神風中尉！　どうすればいいんですかこの状況ッ！」
瑞鶴はすがるように刹那に助けを求めるが、彼だってこの状況に困惑している。そんな彼の身体をガクガクと瑞鶴は揺らすと、彼女の服の裾がちょこんと掴まれた。
「お姉ちゃん・・・大丈夫だよね・・・？」
そこはに目の縁に涙をいっぱい溜めた隼鷹が立っていた。不安そうに瞳を揺らす彼女に、刹那は「大丈夫だよ・・・たぶん」と自身なさげながらも励ます。
「ほ、ほんと？」
「ほ、本当よ！　姉さんがお酒くらいでやられる訳・・・ないわよ」
「今の間はなにぃ・・・？」
泣きそうな顔で迫る隼鷹に対し、瑞鶴は苦笑いしかできない。そんな二人を見詰め、刹那も不安そうに翔鶴を見詰める。
一方、瑞鳳は剣を引っ張って翔鶴の救護作業に携わっている。
「剣！　それ取ってよぉッ！」
「それってどれだよッ！」
「それはそれよッ！　早くしてよぉッ！」
「だからどれだってば！」
「それだって言ってるじゃない！　役に立たないわねぇッ！」
「名前を言えってッ！《それ》じゃわかんないよッ！」
緊急時だというのに二人は相変わらずギャーギャー言い合っている。まったく仲がいいのか悪いのかわからない。

結局、瑞鶴はパニックになり、貝塚はヤケ酒を飲み、刹那はため息し、隼鷹は泣き、飛鷹は翔鶴の手当てを行い、瑞鳳と剣はずっと言い争いをするしと、別の意味で盛り上がった宴会であった。

「み、水をくれ・・・」
「う、うんッ！」
ぐったりとベッドに倒れる翔鶴に、瑞鶴は十四杯目の水を差し出す。受け取った翔鶴はそれを一気に飲み干す。
ここは『瑞鶴』の艦内にある瑞鶴の部屋。
気絶してから三時間後、生と死の狭間をさまよっていた翔鶴は飛鷹達の懸命の治療によってなんとか一命を取り留めた。
翔鶴は頭を押さえながら起き上がる。ひどい頭痛、そして吐き気だ。込み上げるものを瑞鶴から受け取った水で無理やり胃に戻す。
十五杯目を要求すると、翔鶴はぐったりと横になる。もはや身体には起き上がっているだけの力も残されていない。
「まったく・・・ひどい目にあったぞ・・・」
「災難だってね。艦長は私から厳しく叱っておくね」
「お前が言っても・・・奴は聞かんだろ」
「うぅ・・・」
反論できずに言葉に詰まる妹に、翔鶴は口元だけで小さな笑みを浮かべる。
「まったく、困った奴を艦長にしたものだな。お前も」
「し、したくてした訳じゃないもん」
「しかもあいつは戦前までは砲術畑を歩んできた生粋の砲術家だぞ。戦中はずっと陸の上にいて、半年前にやっと『鳳翔』の艦長になって、そしてお前の艦長になった・・・実力は未知数だ」
「そ、それはそうかもしれないけど・・・貝塚艦長なら大丈夫だよ」
「その自信は一体どこから来るんだ・・・」
呆れながらも、翔鶴は彼を否定はしない。
翔鶴自身も彼の未知数の力を感じていた。彼は何かが違う。そん

な気がした。だからこそ妹の命を預けられる。
　笑顔を振り撒き、誰にでも優しいその姿は、今はトラックにいる戦艦に乗るある少年の顔を思い浮かばせる。そういえば奴はどうしているだろうか。どうせいつものように艦魂達に振り回されて大変な日々を送っているのだろう。
「姉さん？　何で笑ってるの？」
　突如顔を覗き込んできた瑞鶴の言葉に声にならない悲鳴を上げる。
「な、何でもない！」
「そ、そう？」
　背を向けた姉の顔は真っ赤だ。やっぱりまだアルコールが抜けてないのだろう。その赤みが別のものも含まれているとは彼女は思わない。
　その時ドアがノックされた。
「あ、艦長ですか？」
　瑞鶴は慌ててドアに駆け寄るが、現れた人物は貝塚ではなかった。
「お姉ちゃん！」
「翔鶴の具合はどうだ？」
「隼鷹？　それに神風中尉まで」
　隼鷹はすぐにベッドに倒れている翔鶴に駆け寄ると抱き付いて涙を流す。そんな彼女に抱き付かれた翔鶴は「や、やめんか！　揺らすな！　うぷぅッ！」と悲鳴を上げて口を押さえる。軽い二日酔いが混ざっているらしい。
　そんな二人を見詰め、刹那は小さく笑みを浮かべた。
「どうやら大丈夫みたいだね」
「はい。まだ立ち上がる事はできませんけど、とりあえず会話はできるようになりました」
　瑞鶴は刹那の横に立って安堵したように微笑む。そんな彼女の笑顔に刹那は疲れたようにため息する。
「まさか翔鶴があそこまで酒に弱いとはねぇ」
「そうなんですよ。いつもは武人で勇ましい姉さんですけど、お酒

だけは大の苦手なんです。それなのに艦長ったら・・・」
「まあ、知らなかったから仕方ないでしょ。今も艦長は下士官艦魂に処罰されてるだろうし、今回は穏便にならないかな」
「さ、さぁ・・・姉さんが許してくれるかどうか・・・」
「だよなぁ」
二人は泣きつく隼鷹とアルコールと戦う翔鶴を見詰め、今回ばっかりは彼女に同情するのであった。その時、突如としてドアがけたたましく開いた。
「救援要請です！」
そう叫んで飛び込んで来たのは荒い息をする瑞鳳。急いでいたからかメガネもズレている。そんな彼女の横には剣もいる。
「おう刹那ッ！　ここにいたのか！　ちょっと来てくれぇッ！」
「ど、どうしたんだよそんなに慌てて」
剣は混乱する刹那の手を引っ張るが、そんな刹那の服の裾を瑞鶴が慌てて掴む。
「ど、どこへ行くんですか！？」
「ぼ、僕だってわかんないよ！　剣！　一体どうしたんだよ！」
「お前んとこの艦長が巡洋艦や駆逐艦にボコボコにされてんだよ！」
「「えぇッ！？」」
二人は顔を見合わせて驚く。そんな瑞鶴の手を瑞鳳が慌てて掴む。
「瑞鶴！　とにかく来て！　暴走したみんなを止められるのは上官であるあなただけなの！　早くしないと貝塚大佐が殺されちゃうわよ！？」
「どれだけひどい仕打ちを受けてるのよッ！？」
「とにかく早く来て！　ほら剣もぼさっとしてないで神風さんを連れて来てよッ！」
「わかってるよ！　そういう事だ！　お前も付き合え！」
「か、艦長ぉ・・・ッ！」
「ほんとに世話の焼ける艦長なんだから！　もう私嫌ぁッ！」
ドタバタと慌てて駆け出す四人は全速力で第二会議室を目指した。

そんな彼らを見送った翔鶴は己が戦い、懐く隼鷹とアルコールとの戦いを貫くのであった。

第十章　第十節　大和型戦艦大改造計画（前書き）

《貝塚武男（かいづかたけお）》

役職　帝国海軍軍人・空母『瑞鶴』艦長

出身　千葉県佐原市

身長　１７５ｃｍ

年齢（１９４３年１２月現在）４５歳

誕生日　１月３日

家族構成　妻（病死）

好きなもの　海・桜・大砲・軍艦・艦隊勤務

嫌いなもの　事務仕事・対空戦闘・慣れない空母戦（嫌いというよりは苦手）

艦魂年代史シリーズの人間メインキャラで数少ないの実在キャラ。上記のうち身長、家族構成、好きなもの、嫌いなもの以外は本当。キャラ設定は全てオリジナルなので、典型的な《これはフィクションであり実在の人物団体とは一切関係ありません》キャラ。今作での貝塚は機動部隊のメインキャラとしてこれからマリアナ沖海戦、レイテ沖海戦と参加。『瑞鶴』の艦長として瑞鶴や翔鶴など空母の艦魂を励まし共に戦場に向かう。妻は数年前に病死。海軍軍人一直線で生きてきた彼は本来は副砲長、砲術長、巡洋艦の副長を務めてきた根っからの砲術家。どうして航空機に転身したかは資料不足で不明だが、空母『鳳翔』、『瑞鶴』艦長を歴任する。『瑞鶴』艦長として戦争後期の連合艦隊が壊滅していく時代の中で瑞鶴を支え続け、瑞鶴も彼に絶対の信頼を寄せている。太平洋戦争開戦時～中期までは主に本土で鎮守府など事務を行っていた。開戦前までに歴任した主な艦は戦艦『山城』『伊勢』『日向』『長門』『陸奥』、重巡洋艦『愛宕』の砲術長、重巡洋艦『摩耶』副長。それらの艦魂とは今でも仲がいい。

第十章　第十節　大和型戦艦大改造計画

そして、時代はついに一九四四年に突入した。戦争が始まって四回目の年越しである。艦魂達もお正月を少しだけれど満喫した。だが、それもすぐに終わる。この瞬間にも米軍は確実に侵攻して来ているのだから――

一月十日、『大和』以下戦艦部隊は整備の為にトラック島を出航。一路呉を目指した。特に『大和』は去年の暮れに受けた敵潜魚雷の傷の修理。及び『武蔵』と共に対空装備の大幅な増築改造を受ける事になった。

蒼い海を白波を立てながら進む艦隊の中心にいる戦艦『大和』の会議室ではその大和型戦艦の大改造の話で盛り上がっていた。

「第二、第三副砲を撤去して高角砲と機銃の増強をするだと？」

改造計画の内容を聞かされた金剛は明らかに不機嫌そうな顔をして当事者である大和と武蔵を睨み付ける。大和は縮こまるが、武蔵は平然とその視線と対峙する。

「・・・そう。艦の防空能力を上げる為に対空装備を増強。その犠牲として副砲二基を撤去する」

「だが、そんな事をすれば砲撃力が不足するであろう？」

「・・・問題ない。これからは艦隊決戦よりも対空戦闘の方が多くなる。防空能力が低くては敵機に撃沈される恐れもある」

武蔵の言った《撃沈》という単語に、金剛は激怒した。

「大和型戦艦は不沈艦だ！　例え敵機が数万と襲い掛かって来ても沈む事はありえんッ！」

怒鳴る金剛を、武蔵は呆れたような目で見詰める。

「・・・神話論はいらない。大和型戦艦は注排水タンクが桁違いに大きいので《沈みにくい艦》という理論にはなる。だけど、絶対沈まない《不沈艦》なんていう神話論は存在しない」

「貴様！　なぜ自分の価値を下げるような事を平気で言うのだ！」

「・・・事実を言っているだけ。不沈艦でなくても沈みにくい艦で十分。それでも敵戦艦を撃滅する事に問題ない。だが、無数に来襲する敵機に大砲で挑むのは無謀に近い。だからこそ、戦艦に重要な砲撃力を犠牲にして対空能力を上げる。これのどこに問題が？」

「飛行機で戦艦を沈めるなど――」

「・・・真珠湾攻撃の時にいた米戦艦。マレー沖海戦での英新鋭戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』。他にも我が方なら戦艦『比叡』などが有名」

「米英の戦艦はもろいのだ！　それに『比叡』は連戦で傷ついた艦体に食らっただけだ。敵機のみにやられたのではない！」

「・・・例えそうであったとしても、戦艦が飛行機に負けた例はこんなにある。艦の防空能力を上げる必要がある判断材料が満載だと判断する」

「だが、艦隊決戦が――」

「・・・艦隊決戦を果たした戦艦は『霧島』のみ。もはや時代は航空機。貴様は今まで一体何を見て来た？」

鋭い眼光で睨み合う両者。先程から永遠とこんなやり取りを繰り返している。

過去の栄光や誇りを刀に攻める大艦巨砲主義の金剛。

完全理論武装を盾に返り討ちにする航空機主義の武蔵。

この異色の二人が結論を出すのは難しい。というかどちらかが妥協しない限り無理だが、どちらも妥協するような者ではない。つまり永遠に二人に結論が出るのは不可能なのだ。

睨み合う二人を一瞥して長門はため息して大和を見る。武蔵はこの改造に賛成しているが、大和はどちらかというと反対の立場だ。ちょうど今も翔輝に改造の話をしている。

「副砲の撤去なんて言語道断です。世界最強の砲撃力を持つ私が、なぜ対空装備程度の為に大事な砲撃力を犠牲にする必要があるんです？」

「ぼ、僕に聞かないでよ」

すっかり関係が回復した翔輝と大和。だが、今の大和はかなり不機嫌な為翔輝も対応に困っている。

大和は大艦巨砲主義の王者としての誇りを持っている。確かに航空機を優先させるなど航空主義はしているが、自分の対空装備増強の為に砲撃力を下げるのは彼女のプライドを傷つけている事になる。

唇を尖らせて不機嫌そうな態度を続ける大和に、翔輝はため息する。すると、そんな彼の横にいる雪風がおろおろと大和に近づく。

「司令。もっと冷静に」

「雪風は黙って」

「はい・・・」

従兵の雪風にも当たる始末。これはかなり危険な状況である。翔輝が万策尽きて助けを呼ぼうとすると、長門の方からやって来た。

「大和。まだごねてるの？」

「はい。断固として副砲撤去に反対しています」

「大和も金剛に負けず劣らず頑固者よね」

「そりゃあ自分の事ですから、慎重になるのは当然です」

「でも、姉妹でここまで意見が真っ二つになるなんて、すごいわ」

「元々正反対な二人ですから仕方ありませんよ」

翔輝は笑って言うが、大和が不機嫌そうなのは彼にとってもあまり気のいい状況ではない。なんとか雰囲気を正の方向に移行しようと翔輝は大和に声を掛ける。

「ほら大和。そんなに不機嫌そうにしてるとかわいくないぞ」

「そんなの関係ないです」

見事に一蹴された。向けた笑みは行き場を失って空しく散る。

「あらあら」

長門もこれには苦笑いしかできない。そんな状況でいると、金剛との激戦を終えた武蔵が戻って来た。

「あら武蔵。金剛は？」

「・・・悔しそうに顔をゆがませて不機嫌そうに出て行った」

「あらあら」

武蔵の勝利という誰もが予想したとおりの結果に終わったらしい。
少し疲れたのか、武蔵は肩をトントンと叩く。
「お疲れ様」
翔輝はそんな武蔵に優しく声を掛ける。すると、武蔵は別段気にした様子もなく。無表情を向ける。
「・・・問題ない。この程度の相手では疲れに入らない」
「金剛さんで《程度》なら、もう誰も君には勝てないよぉ」
翔輝の言葉に、武蔵は珍しく口を《へ》の字に曲げて細くした瞳を向けて不機嫌そうな顔になる。
「・・・いや、まだ難攻不落の要塞が残っている」
「え、誰？」
武蔵が勝てないような相手など、残ってはいないはずだ。そもそも彼女こそ最強の艦魂である。そんな彼女に勝てる艦魂などいる訳が――
「・・・今目の前にいる」
そこで二人の視線は一人の人物に当たった。当人は「んー？」と人差し指を唇に当てるという色っぽい仕草をしながら不思議そうにこちらを見ている――確かにある意味難攻不落だ。
「まぁ、それはそれとして・・・」
翔輝は再び不機嫌そうに唇を尖らせている大和に説明する。これからの時代は飛行機であり、艦隊決戦の機会はかなり少ない。それに比べて敵機の猛攻撃を受ける可能性の方が高い。ならば、使うかわからない砲撃力より、実用的な防空能力を上げた方がいいと説明する。大和自身も航空機の方が有利とはわかっている。だが、世界最大最強戦艦の誇りが彼女にはある。それを曲げる事になるのは嫌らしい。
金剛のように頭ごなしに否定している訳じゃないので、時間が経てばわかるだろうと、翔輝達は思った。ただ今は心の整理がついていないのだろう。
艦隊は順調に進み、十六日には呉に入港した。

各艦それぞれは船渠に入ったり沖に停泊したりと様々だったが、『大和』と『武蔵』は船渠に入った。半年ぶりに入った船渠で、『大和』は大改造を行われるのであった。

船渠に入り、兵達はそれぞれ休暇をもらった。これから『大和』は何ヶ月にも及ぶ大改造が行われる。兵達は久しぶりの内地の土を踏む為に我先にと艦を降りていった。

そんな仲、翔輝は休暇を取るか取らまいか迷っていたが、大和が「降りないでください」と泣きそうな目で言うもんだから、とりあえず休暇は先延ばしにする事にした。

「瑠璃には悪いけど、会うのはもう少し先だな」

と、翔輝は苦笑いした。

だが、お忘れだろうか。あの瑠璃という少女はこの呉海軍工廠の重要なスポンサーの一人娘。翔輝の為なら軍部だって動かすような彼女の強行突破を止める事など、ここにいる者は誰もできない。

だから――

「『大和』。相変わらず大きいですわ」

不敵な笑みを浮かべる少女が権力を使って『大和』に乗り込んで来ても、仕方がない事なのだ。

その頃、何も知らない翔輝は第三会議室にいた。艦魂達がこれからの事を話し合っているのを傍聴しようと思ったからだ。

「『大和』と『武蔵』はこれから長い間の休暇ね。私達も休暇だけど、あなた達ほど長くはないわ。だから最後まで一緒にいられないの。だから長谷川君。二人をよろしくね」

「ぼ、僕がですか？」

「そうよ。他に誰がこの二人の仲を取り持ってくれるのよ？」

「ま、まぁ、そうですが・・・」

翔輝は長門の説明に一応納得した。そんな翔輝を見詰め、長門は申し訳なさそうな笑みを浮かべる。

「ごめんね。あなた以外に二人を抑えられる人はいないのよ。お願い」
頭を下げて頼み込む長門に、翔輝も諦めたようにため息する。
「はい。まぁ、仕方ないですね。今回の休暇は少し少なめにするしか――」
「そんなの断じて認められませんわ！」
突如響いた声。これほど特徴のあるしゃべり方をするのは一人しかいない。
ある者はその懐かしい声に心躍らせ。
ある者は天敵の登場で不機嫌そうに顔をゆがめる。
またある者はこれ以上ややこしくなる展開に頭を痛める。
そんな色々な反応が飛び交う中、けたたましく部屋のドアを開けて入って来た人物は全員の予想通りの人だった。
「瑠璃！」
翔輝が嬉しそうに瑠璃に駆け寄る。瑠璃も翔輝を見つけると天真爛漫の笑みを浮かべる。その光景をおもしろくなさそうに見詰めている者数名。
翔輝は目の前にいる少女に少なからず驚いた。
たった半年しか離れていないのに、瑠璃はずいぶんと大人に成長していた。年齢はもう十五歳になっているはず。もう子供ではなく立派な大人の女である。出る所は出て引っ込む所は引っ込んでいる。かなりのスタイルである。
少し見ない間にずいぶん変わってしまった瑠璃に翔輝は困惑する。
「瑠璃・・・だよね？」
「そうですわ。何を言っているのですの？」
不思議そうに首を傾げる瑠璃。そんな仕草は変わっていない。翔輝はすっかり大人らしくなった瑠璃を見詰めて顔を赤くしながら、
「いや、その・・・ずいぶん大人らしくなったなぁ・・・って・・・」
「え・・・？」

お互いに次の言葉がなくなる。瑠璃は頬を赤くして翔輝を見詰めている。その視線は次の言葉を待っているかのようだ。そんな瑠璃に見られて翔輝は恥ずかしそうに視線を外す。

「その、翔輝様も十分かっこよくなられました」

沈黙に耐えかねて最初に開口したのは瑠璃。その瞳はしっかりと翔輝を見つめている。

「そ、そうかな？」

「はい。また背が高くなったと思います」

「うーん。自分じゃよくわからないなぁ」

翔輝が困ったように笑うと、瑠璃も嬉しそうに笑う。そんな二人の間に流れる甘い桃色の空気が気に入らない武蔵は突如翔輝の腕を掴む。

「・・・翔輝」

「む、武蔵？　どうしたの？　って、何か目が怖いよ？」

「あら、誰かと思ったら武蔵様じゃありませんか」

瑠璃は不敵な笑みを武蔵に向ける。それに対し武蔵は瑠璃を睨み付ける。常の彼女なら無視するが、瑠璃に対しては強い敵対心を抱いているようだ。

「今翔輝様とお話していますの。お邪魔虫は引っ込んでいてほしいですわ」

「・・・却下」

瑠璃の顔から事務的なものとはいえ笑顔が消え、武蔵を睨み付ける。両者の間にバチバチと火花が散りそうな睨み合いが起きている。

さすがの翔輝もこれは止めないといけないと思い止めに入る。

「ちょ、ちょっと二人とも。ケンカはやめてよ」

「翔輝様は黙っていてください」

「・・・翔輝。口出ししないで」

睨み合う両者はすでに互いしか見えていない。こうなってしまうと止めるのは難しい。翔輝がどうしようか悩んでいると、今度は大和が腕を引っ張った。振り返ると、大和は頬を赤らめながらどこか

嬉しそうな笑みを浮かべている。
「大尉。二人の事はもうほっといてどっか行きましょう」
「え？　でも・・・」
「あの二人のせいで大尉が困る必要はありません」
「いや、そうもいかないと思うんだけど」
「さぁさぁ行きましょう」
「え？　あ、ちょっと――」
「何しているんですの！？」
「・・・姉さん！」
睨み合っていた瑠璃と武蔵は、翔輝を連行しようとしていた大和に怒鳴ると、今度は大和を睨み付ける。大和の漁夫の利作戦は失敗に終わった。
「翔輝様を勝手に連れて行かないでほしいですわ！」
「・・・姉さん。最ッ低ッ！」
瑠璃と武蔵が大和という共通の敵に攻撃を開始する。だが、そんな劣勢な大和にも助っ人が現れる。
「何やねん！　あんた達やってずいぶんと横暴な行為をしているやないどすか！」
「ぐだぐだうるせぇんだよ！　黙ってろッ！　特に瑠璃！」
「航海士が困っている」
「そ、そうですよ！　大尉は誰のものでもないです！」
伊勢、榛名、山城、雪風の四名が参戦。これで大和が有利になるかと思われたが、
「・・・うるさい。おばさん」
「殺すぞッ！」
「航海士は誰のものでもない。私の執事になってもらう」
「山城姉はん！　どさくさに紛れてとんでもない事言わんといてぇな！」
「翔輝様は私の許嫁ですわ！」
「そ、そんな事関係ないと思います！」

「っていうか、何で雪風がいるのよ？」
たった数秒で全員が全員敵になり、状況はさらに悪化した。七人の女の子が睨み合う光景はそうそう見れるものではない上にかなりの迫力がある。正直かなり怖い。
そんな中、あわあわとする翔輝にいつもと同じように屈託のない笑みを浮かべている長門が他人事のように笑う。
「あらあら、これはまた大変な事になったわね」
「長門さん！　笑ってる場合じゃないでしょ！　何とかしてくださいよ！」
「原因はあなたにあるのよ？　止めるのはあなたの責任だわ」
「ぼ、僕ですか！？　僕は何もしてませんよ！」
基本的に鈍感な翔輝は自分の存在がこの戦いの火種になっているなど知る由もない。だが、わからないくても翔輝はこの戦いを止めたい。
「ちょ、ちょっとみんなッ！　落ち着いてよ！」
間に割って入り、翔輝は七人の危険な少女達を止める。だが、翔輝が止めに入っても、戦いは止まらない。だが、こういうおいしい瞬間を狙っている少女にとっては絶好のチャンスだった。
「翔輝様！　逃げましょう！」
瑠璃は突如翔輝の腕を掴んで引っ張る。
「えッ！？　何で！？」
「愛の逃避行ですわッ！」
「いや、愛って！？　逃避行って！？　ちょっと――うわっ！」
瑠璃は翔輝の腕を掴んだまま走り出した。その後を引きずられるようにして翔輝が続く。だが、戦いは終結するどころか冷戦から追撃戦に変化しただけだった。
「待てやゴラァッ！」
「大尉を返すです！」
「・・・ここは停戦条約を結ぶべき」
「長谷川はんを追いかけるんやぁッ！」

「はいッ！」
「機関銃の弾はフル」
逃げる瑠璃＋αを追撃する六人。すさまじい足音を響かせて戦いの舞台は新たなステージに移った。
長門はただ一人残されてくすくすと笑っている。
「楽しそうね。長門」
そこに現れたのは屈託のない笑みを浮かべて現れた、今までここにはいなかった扶桑だった。
「あら扶桑。ずいぶん遅れての登場ね。重役出勤？」
「休みの日くらいゆっくりしたいのよ」
「そうね。確かにあなたの言うとおりだわ」
長門はおもしろそうに笑う。そんな長門に扶桑が不思議そうに首を傾げる。
「そういえば、さっき瑠璃って言ったけ？　そんな女の子をが長谷川君を拉致ってそれを追い掛ける集団とすれ違ったけど、何？」
「今あなたが言ったとおりの連中よ」
「なるほど」
長門と扶桑は互いに笑い合った。どこか似ている二人はいつも仲が良い。二人はその後も笑みを浮かべ続け、他愛のない話で盛り上がった。

二五日、戦艦『大和』艦長が大野竹二大佐から森下信衛（もりしたのぶえ）大佐に変わった。
就任したその日、彼は『大和』の前は『榛名』の艦長だった事を教えてくれた。そしてもう一つ――
「聞いて驚くなよ。俺は艦魂が見えるんだ」
森下は――艦魂が見える人物だった。

「そうか。君が榛名の言っていた長谷川大尉か。俺は森下信衛。よろしくな」

「こ、こちらこそ」
柔和な笑みで話し掛ける森下に翔輝は小さくなる。相手は大佐。しかもこの戦艦『大和』の艦長で務めてる人である。軍人たるもの上官に無礼な態度はできない。小さくなってしまうのも仕方がない事だ。
「おいおい。そう緊張するな。俺は今まで艦魂が見える奴と話した事がなかったんだ。まぁ、友達感覚で付き合ってくれや」
「そんな事できません！」
翔輝の必死な反応に森下は嬉しそうに笑う。その笑顔からはとてもいい人に見える。だが、
「艦長。冗談はやめてください・・・」
すっかりからかわれている翔輝は泣きそうだった。

「榛名！」
翔輝はその日の艦魂会議に殴り込みをした。
「・・・しょ、翔輝？」
指揮棒を持って黒板の海図を使って説明していた武蔵が目を見開いてこちらを見ている。他の者も同じような反応だった。
「あん？　何か用か？」
目的の人物――榛名は奥の席でふんぞり返っていた。そんな彼女に翔輝は怒鳴る。
「何で森下艦長の事を言わなかったッ！」
「森下？　あぁ、今日『大和』艦長に栄転したんだっけ？」
「そうだ！　前はお前で艦長をしていた人だ！　何で教えてくれなかったんだよ！」
「何をだよ」
「艦長が艦魂が見えるって事だよ！」
「はぁ？　言う必要なんてなかっただろ？」
「あるよ！　おかげで今日僕は艦長に話し掛けられても何を言えばいいのかわからなくて硬直したんだぞ！」

「知るかボケッ！」
「ボケって言った方がボケなんだよ！」
「んだとゴラァッ！　表出ろッ！」
いつになくキレている翔輝と噛み付く榛名。そんな睨み合う二人にまわりの者はどうすればいいかわからなくておろおろとするばかり。その時、
「お、ここか」
突然声が響き、中年の男が部屋に入って来た。それは大佐の階級章を輝かせた渦中の人――戦艦『大和』艦長・森下信衛大佐、その人であった。
「何だ森下。何しに来た？」
金剛が顔だけ向けて問う。その顔は相変わらず無愛想だ。
「いや、せっかく会議をやってる『大和』に来たんだ。ちょっと見学してみようと思ってさ」
「ふん。好きにしろ」
「・・・相変わらず素直じゃないな」
金剛と普通に森下は話している。そうやら彼女も森下を知っているらしい。妹の艦長なら当然か。しかしあの金剛と対等に話せるとはなかなか侮れない。
森下は部屋の中の艦魂達を見回し、嬉しそうにうなずく。
「それにしてもずいぶんと艦魂がいるじゃないか。長谷川大尉。紹介してくれないか？」
突然森下に指名された翔輝はめちゃくちゃ驚く。
「ぼ、僕がですか！？」
「そうだ。この空間では男は私と君だけだからな」
「いや、榛名とか、親しそうに話していた金剛さんに頼んだ方がいいかと」
「この二人が俺の頼みを聞いてくれる訳がないだろ？」
確かに。この二人に頼み事は無理だ。むしろ頼みたくない。後が怖すぎる。

結局、翔輝は森下に押し切られるようにして艦魂達の紹介をした。機動部隊の不在の為にここにいるのは戦艦の艦魂だけだったのですぐに終わった。

「長門は見た事があったな」

「えぇ、一度だけ面会したことがあったわね」

「悪いが、他は知らない顔ばかりだ」

「んまぁ、俺に来る奴なんてほとんどいねぇしな」

「でも、もう顔と名前は覚えたぞ。これからはよろしくな」

森下は優しく笑う。本当に笑顔の似合う人だ。その瞳は年を感じさせないほど少年のように若々しい。

そんな中、大和はとても嬉しそうに森下を見ていた。

「大尉。なんか今度の森下艦長って優しそうな人ですね」

「あぁ、艦魂が見える人はただでさえ少ないのに、艦長みたいな上級階級の人はそういないと思うよ」

ちなみに『瑞鶴』艦長貝塚大佐の事は、まだ彼らは知らない。

翔輝と大和が仲良く話していると、森下が近づいて来た。

「君が『大和』の艦魂かい？」

「あ、はい」

「これからよろしく頼むよ」

「は、はいッ！」

大和は見事な敬礼をした。そんな立派になった彼女を見て、翔輝は嬉しいような寂しいような複雑な心境だった。

戦艦『大和』新司令部は、後に《操艦の神様》と謳われる森下艦長の下で発足した。

第十章　第十一節　瑠璃の笑顔と翔輝のため息（前書き）

《森下信衛（もりした　のぶえ）》

役職　帝国海軍軍人・戦艦『大和』艦長

出身　愛知県常滑（とこなめ）市

身長　１７６ｃｍ

年齢（１９４４年１月現在）

誕生日　２月２日

家族構成　妻・息子・娘

好きなもの　海・軍艦・砲撃・タバコ・艦魂

嫌いなもの　禁煙・防弾チョッキ・防弾ヘルメット・軽々しく命を捨てる者

貝塚と並ぶ艦魂年代史シリーズの人間メインキャラで数少ないの実在キャラ。上記の設定は貝塚と同じく本当と妄想が混ざっている。開戦時は重雷装巡洋艦として改造されたばかりの軽巡洋艦『大井（おおい）』艦長として迎え、その後軽巡洋艦『川内』、戦艦『榛名』の艦長を勤め上げ、『大和』の第四代艦長に就任する。森下は日本海軍屈指の操艦の名手で、他の艦より操艦しづらい『大和』をまるで自分の身体のように操艦し、後のレイテ沖海戦では満身創痍の末に沈没した『武蔵』に対し的確かつ素早い転舵を繰り返し、『大和』を守りぬき、《操艦の神様》と呼ばれるようになる。後に第二艦隊参謀長となり、『大和』と共に沖縄へ出撃する。艦魂が見える数少ない人間で、榛名や金剛、長門とはすでに面識があった。初めて自分以外の艦魂が見える人である翔輝とは意気投合し、年や階級が離れているのに仲がいい。翔輝が慕う上官の一人。部下想いで優しいので、部下達からはかなり慕われている。

第十章　第十一節　瑠璃の笑顔と翔輝のため息

２月、マーシャル諸島を占領したアメリカ軍は、ついに南太平洋の日本海軍の要――トラック島に攻撃を開始した。
トラック島北東海域に蒼い海を埋め尽くす大空母部隊がいた。アメリカ海軍第５８任務部隊。その攻撃力である所属空母は、空母『エンタープライズ』『エセックス』『ヨークタウン』他１隻、軽空母５。戦艦６隻を基幹とした大艦隊である。
空母部隊旗艦・空母『エンタープライズ』の防空指揮所には猛将エンタープライズ以下空母艦魂がその勇姿を威風堂々と輝かせていた。
「これより《ヘイルストーン作戦》を開始する！　いいかッ！　狂ったジャップの黄色いサルどもをこの南太平洋から一匹も残さずに殺し尽くすんだ！　攻撃は我が艦隊の全艦載機をもって行う！　トラック島を火の海にしてやれ！　ジャップは殺し尽くせッ！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！」
エンタープライズは興奮したように直立している空母達を怒鳴り散らす。相変わらず日本人皆殺し論を提唱する恐ろしい人物だ。
「トラックにいる日本人を皆殺しにするんですか？　それはちょっと――」
「ヨークッ！　奴らに同情などいらん！　奴らはパールハーバーを卑怯な策略で宣戦布告もなしに攻撃して来た奴らだ。手加減無用！」
「は、はぁ。エンタープライズさんがそこまで言うなら」
《エンタープライズ様ファンクラブ》会員ナンバー１兼会長を務めるヨークタウンはエンタープライズの命令には逆らえない。かなり乱暴な言い方だが、彼女の言う事は全て事実だ。
「ヨーク！　エンタープライズさんの言うとおりだ。ジャップの黄色いサルどもは皆殺しにする。いいな？」
エセックスはにっこりと笑みを浮かべる。言葉と笑みがまったく

合っていない。そんな姉を見詰め、ヨークタウンはため息する。
「もぅ、姉さんまで・・・」
「ヨーク姉さん。ここまで来たらする事は一つ。攻撃するのみだよ」
セミロングの銀髪を揺らす少女は、ヨークタウンの妹――エセックス級空母3番艦・空母『イントレピッド』の艦魂が諦めたような笑顔で言う。エセックスの妹達はこうしてエセックスの楽観主義に振り回されているのだ。
「もう知らないわよぉ・・・」
ヨークタウンはため息する。自分の姉や妹はなぜか場の流れに身を任す人が多くて困る。
「姉さんも大変だね」
そう言ったのは銀色の長い髪を蒼いリボンで9つに分けた。ツインテールの変形版、ナインテールと言うべき髪型をした少女――ヨークタウンの妹のエセックス級空母7番艦、空母『バンカー・ヒル』の艦魂。姉妹の中で数少ないヨークタウンの心をわかってくれる妹だ。
「ほんと、今回の作戦にヒリーがいてくれて助かったよ」
「姉さんは気苦労が多いからね。私で良かったらいつでも力になるからね」
「ありがとう」
ヨークタウンとバンカー・ヒルがそうして仲良く話していると、エンタープライズは迫る出撃時刻を確認して解散を命じた。
風が流れる防空指揮所で一人になると、エンタープライズは甲板に並ぶネイビーブルーを輝かせる艦載機を見詰め自信満々な笑みを浮かべる。
「ジャップども。本気で怒ったアメリカの恐ろしさ、見せてやる！」
エンタープライズの叫びが合図になったかのように、艦載機が次々発艦を始めた。エンタープライズはそれに帽子を振って見送る。
攻撃隊はすさまじい大部隊でトラック島に向かった。

トラック島空襲は始まった。その戦況は米軍の一方的な攻撃だった。

空爆で停泊中の日本艦艇を次々に撃沈。島の周囲を包囲していた潜水艦が軽巡洋艦『阿賀野』を撃沈。トラック島を出港していた輸送船一隻を守る軽巡一、駆逐艦二の艦隊は米軍の新鋭戦艦・アイオワ級戦艦一番艦『アイオワ』、二番艦『ニュージャージー』の艦砲射撃で駆逐艦一隻以外全て沈没という散々なものだった。

一方、日本軍の戦果は迎撃部隊の攻撃で空母『イントレピッド』に魚雷一本命中させただけだった。

結果は、十七、十八日のたった二日間で日本軍は軽巡洋艦二、練習巡洋艦一、駆逐艦四、特設巡洋艦四、特設潜水母艦二、商船（輸送船、給油艦、油槽船など）三一隻沈没。水上機母艦一、駆逐艦二、特務艦三、潜水艦四隻が損傷を受け、約二七〇機の航空機を失うという最悪なものだった。

この攻撃により、トラック島の基地能力は失われ、南太平洋の根拠地であり連合艦隊の駐屯基地として数多くの戦いに艦艇を出撃させ、戦艦部隊を待機させていたトラック島はもう使い物にならなくなってしまった。

日本海軍は新たな連合艦隊司令部をトラック島西方にあるパラオに移し、戦況の打開を模索するのであった。

「トッラク島が落ちただとッ！？」

トラック島の空襲はすぐに内地にいる戦艦艦魂達にも届いた。その訃報に緊急の艦魂会議が『大和』の第三会議室で開かれた。

トラック島空襲の話はすでに大和達にも伝わっており、その顔は皆暗い。誰しもがあの島に関わりを持っている。大和にとってはもうひとつの故郷のようなものだったトラック島。それがついに陥落したのだ。

「正確には陥落してはいないわ。ただ、敵地のど真ん中に位置するような形になったのよ」

「それではほとんど陥落と同じではないか！」
金剛は顔を真っ赤にして長門に怒鳴る。相変わらず感情的な金剛はストレートな意見を放つ。それに対し長門は憤怒する金剛をなだめるように言う。
「でも一応戦艦部隊はこうして内地にいるし、機動部隊も数日前に出港してる。それに連合艦隊司令部もパラオに移転したからなんとか大丈夫よ」
「その自信は一体どこから来るんだッ！」
金剛は牙をむき出す。そんな凶暴な金剛を長門が必死になだめる。その時、ふと長門は壁際で無表情で空を見詰めている大和を見た。
「大和。何か見えるの？」
「い、いえ。別に・・・」
大和は空を見詰めたまま答える。その瞳は寂しそうだ。
大和が落ち込んでいる理由は、翔輝が不在だからである。
今翔輝は『大和』にはいない。陸地に上がっているのだ。彼自身はそんなに陸に上がりたいという気持ちはなかったが、瑠璃が強硬手段を行って翔輝をなかば拉致ってしまったのだ。
艦から一歩も出られない艦魂は、陸地に上がられたらお手上げなのだ。
「大尉、今頃どうしているでしょうか？」
「そうね。たぶんその場の空気に流されてデートでもしてるかもね」
「ううっ」
大和は二人っきりでいるであろう翔輝と瑠璃のデートを想像し、声にならない悲鳴を上げる。そんな彼女の横にいる武蔵もどこか落ち着かない様子だった。伊勢もどこかそわそわしている。
長門はそんなかわいらしい大和達を見詰め、小さく笑顔になる。が、すぐに今頃何をしているかわからぬ翔輝を心配した。
長門の推理は見事に当たっていた。
翔輝と瑠璃は彼女行き付けの高級料理店で食事をしていた。

「また高そうな店を選んで・・・」
広い豪華な部屋を貸し切って食事をする二人。そんな中翔輝はもう呆れるしかない。一方の瑠璃は気にした様子もなく笑みを零している。
「そうですの？　ここはお安くておいしいので翔輝様ならお気に入りになられると思ったのですが」
ちなみに、金銭感覚がかなりズレている瑠璃は金銭の基準線が常人のはるかに上に引かれているので、この店が翔輝の考えている《普通》の十倍以上も上だという事にはまったく気づいていない。
「まぁ、予想の範疇だよ」
伊達に長年彼女の幼なじみをやってはないない。この程度では驚かない。呆れるのだけは今も続いてはいるが。
「本当に相変わらず瑠璃は瑠璃だなぁ」
「それはほめてるんですの？　けなしてるんですの？」
「どっちも」
「複雑な心境ですわ」
瑠璃は少し怒ったような目で翔輝を見詰めるが、翔輝は気にしないでメニューを見る。高そうな名前や知らない名前がずらりと並んでいる。
「何が何だかわからないや。瑠璃に任せる」
「え？　わ、私が決めていいんですの？」
驚く瑠璃に翔輝は首を傾げる。
「どんなのかよくわからないからさ。瑠璃のおすすめでお願い」
「そ、それは私を信頼しているからですの？」
「ま、まぁそうなるかな？」
何でそんな言い方になるのか不思議だったが、とりあえずうなずく。すると、瑠璃はぱぁっと明るい笑みを浮かべた。
「わかりましたわ！　では決めさせていただきますわ！」
なぜかすごく嬉しそうに瑠璃は高速でメニューを決めた。知らない店に入ったらその店の常連に訊くのが一番の解決策である。場の

流れに身を任してしまう翔輝にとっては最善の策だ。
注文を終えた瑠璃は嬉しそうに翔輝に話し掛ける。
「こうして落ち着いてお話するのは久しぶりですわ」
「確かに、なかなか内地に戻れなかったからね」
「ずっと、寂しかったですわ」
唇を尖らせる瑠璃に、翔輝は困ったように頬を掻く。
「そんな事言ったって、僕じゃ艦隊をどうこうする事なんてできないよ」
「だから鎮守府に来ればよろしいと言ったのですわ」
「それはできないってば」
「もう、翔輝様は強情なんですから」
怒ったように言うが、その表情はとても朗らかなものだった。
「ごめんごめん」
翔輝も笑って返す。二人が幸せそうに話していると、料理が運ばれて来た。それは翔輝の知識をはるかに超えるものばかりだった。
「このお店のフルコースを頼みましたの。とてもおいしいのですよ」
「だからってこれはやり過ぎだろ・・・」
並べられたか数々の料理はどれもとてもおいしそうだった。だが、翔輝の目から見ればとんでもない金額の数々が並んでいるように見える。
「僕の月給の何倍の金額になるんだろ・・・」
「さぁ、値段はわからないですから」
「はぁッ!?　値段不明ってどういう事!?」
翔輝が驚くと、瑠璃はさも当然に、
「日替わりですから、値段も日替わりですの」
「ははは・・・はぁ」
翔輝はため息する。いくら驚かなくても呆れるのは彼女といる限り消える事はない。十数年の付き合いだが、いまだにこれは対応できない。
「でも、これくらいのお金で経済破綻してしまうのでは、私とのデ

ートの際はどうやって私を楽しませてくれるのですの？」
「安心していい。そんな事は未来永劫絶対にないから」
瑠璃とのデートなんて考えた事もない。彼女は分類では幼なじみだが妹のように接して来た。『Ｔ○　Ｈｅａｒｔ２』の河○貴明と柚○このみの貴明視点の関係みたいなものに近い。
翔輝がそういうふうに考えていると、瑠璃は不満そうに口を尖らせる。
「なぜ《絶対》のところだけそんなに強く強調するのですの？」
「まぁ、一応ね」
「どんな一応ですの？」
呆れる瑠璃ははぁとため息する。
「しかし、デートなんて考えてみればよくしていましたし、現在進行形で行なっていますし」
「え？　何か言った？」
瑠璃のつぶやきが聞こえなかった翔輝が聞き返す。それに対し瑠璃は満面の笑みで答える。
「何でもありませんわ。気にせず食べてしまいましょう。早く食べないとせっかくのお料理が冷めてしまいますわ」
瑠璃の意見に賛成し、二人は食事に入る。
翔輝の予想通り、料理は超絶においしかった。だからこそ、翔輝は自分と瑠璃の金銭感覚の溝を改めて認識した。いつかはこの溝をなんとか塞ぎたい。まぁ、無理だろうが。
その後、二人は会話しながら食事を終わして霞家に戻った。

霞家には翔輝が帰って来ると瑠璃に呼び出されて京都からわざわざ瑪瑙と珊瑚が来ていた。
「久しぶり。また背が伸びたんじゃないか？」
「そ、そっかな？」
「うん。また男らしくなったよ」
「えへへ、そっかな」

「うん。でも、翔輝にはいつまでもかわいい翔輝でいてほしいけどね」
「僕はそれは嫌だなぁ。男だし」
「こんなかわいい顔をした男がいるか？」
「か、からかわないでよ！」
怒る翔輝を口に袖を当ててくすくすと笑う瑪瑙。そんな彼女もちょっと見ないうちにまた女らしくなっていた。色気や柔らかな物腰に磨きが掛かっている。
「姉さんもまたきれいになったよね」
「そ、そうかな？」
「うん。すっごくきれい」
「あ・・・う・・・むぅ・・・」
突然翔輝にそんな事を言われ、瑪瑙は珍しく頬を赤くして困ったように言葉に詰まる。そんな彼女の思いも気づかない翔輝は笑顔を向ける。その屈託のない笑みは男にしてはかわいすぎる。彼は女に生まれるべきだったのかもしれない。
「何姉さんを口説いてるのよ」
そう言って不機嫌そうに睨みつけるのは珊瑚。相変わらず強気な態度な上に素直じゃない。そんな彼女も少し見ないうちに大人の女らしくなっていた。顔からも少し幼さが抜けてきているが、その頬を赤らめながらの不機嫌そうな顔はまだまだ幼い。
「べ、別に口説いてる訳じゃないよ」
「どうだか。姉さんは美人だから」
「だ、だから！　僕は姉さんなんて口説かないってば！」
「そ、それは・・・私が翔輝に口説かれるだけの素質を持っていないダメ女という事か？」
「うわわわ！　ち、違うよ！　そんなんじゃないって！　だからそんなに落ち込まないで！　っていうか何で落ち込むの！？」
ショックのあまり倒れた瑪瑙を翔輝が必死になって弁解する。そんな彼に珊瑚は暴言を言い続け、ついにキレた瑠璃と取っ組み合い

のケンカとなった。
結局は誰もほとんど変わってはいなかったのだ。
翔輝はようやく復活した瑪瑙と共に激戦を繰り広げる瑠璃と珊瑚を見詰め、諦めたようにため息をはいた。

その夜、翔輝と瑠璃の間である言い争い勃発した。
「絶対にダメだッ！」
「絶対にゆずれませんわ！」
お互い《絶対》というところにかなりの力を入れ、両者は睨み合う。
この仲がいい二人がここまで言い合いなった原因は――
「もう一緒に寝るのは卒業だ！」
翔輝は顔を真っ赤にして叫んだ。
そう。原因はこれ。瑠璃はいつものとおり翔輝と一緒に寝るというとんでも発言をかましたのだ。。だが、自分はもう十九歳。彼女ももう十五歳。お互いにもう添い寝の限界を超えてしまっていると翔輝は思った。しかも少し見ないうちに少しとはいえと大人らしい体つきになった瑠璃と一緒に寝る勇気など、彼は持ち合わせていなかった。
そんな翔輝の考えなど露知らず、数少ない翔輝との接触、及び楽しみを失いたくない瑠璃は何が何でもこれだけは死守しなければならなかった。
「翔輝様！　私達は今まで一緒に寝てきましたわ！　これはこの先未来永劫続くのですわ！」
「未来永劫も続かないよ！　ともかく、一緒に寝るのはもうおしまいだ！」
「そんな、翔輝様！」
瑠璃は持っていた枕をギュッと抱き締め、翔輝を見詰める。その瞳からは今にも零れ落ちそうなほど涙が溜まっている。
だが、さすがの翔輝もこれだけはゆずれない。少しとはいえ大人

らしく成長した彼女と一緒に寝て『へっへっへ、これは役得だね。思う存分楽しませてもらおう』などと思うような人種では翔輝はない。むしろ全力で抵抗する情けない人間である。

「瑠璃。わかってくれよぉ。もう僕らはそういう年じゃないんだぞ？」

「ですが――」

「なぁ？　お願い。隣に布団を敷いてそこに寝てよ」

そう言うと、翔輝は一人布団の中に潜った。その間、瑠璃は何も言わなかった。ただ聞こえるのは、彼女の嗚咽だけ。

「ごめん」

そう翔輝はつぶやくと、瞳を閉じた。これでもう瑠璃は一緒に寝ようなどとは言わないはずだ。

「ひぐっ、ううっ」

これで・・・何もかも――

「うえええええぇぇぇぇんッ！」

「うそッ！？」

翔輝は驚いて飛び起きた。すると、そこには高価な寝巻きを乱しながら畳の上で子供のように手足をジタバタさせて鳴き叫ぶ瑠璃の姿があった。

「瑠璃？　お前・・・」

「寝るんだもん！　翔輝様と一緒に寝るんだもん！　絶対絶対ぜぇぇぇったい寝るんだもん！」

勃発、瑠璃駄々こねモードッ！

こうなってしまっては瑠璃は言う事を聞かないと泣き叫び続ける。だが、今回は翔輝もマジである。いくら泣き叫ぼうが知ったこっちゃ――

「うえええええぇぇぇぇんッ！　ひぐッ！　翔輝しゃまぁ、一緒に、寝るんだもん・・・うえええええぇぇぇんッ！　ゲホッゴホッ！　ケホッ！」

「・・・」

「翔輝しゃまぁッ！」
翔輝は布団の隙間から見ると、瑠璃は泣きながら枕を抱き締めてこちらを見詰めている。その様子を見ているとなぜか自分が悪いように思えてしまう。悪いのは明らかに瑠璃の方なのに・・・
「翔輝様は、私の事が嫌いなのですの？　嫌いになってしまったんですの？　お願いですから嫌いにならないでください！」
「あぁぁもうッ！」
翔輝は耐えられなくなって飛び起きた。翔輝の行動に瑠璃はビクリと震える。そんな瑠璃を翔輝は恨みがましい目で睨む。
「お前なぁ、僕が泣いている女の子が大の苦手だと知ってるからって、これはいくらなんでもずるいよぉ」
「・・・翔輝様？」
翔輝はため息をし、苦笑いする。
「もういいよ。寝たいなら好きにしろ」
「ほ、本当ですの！？」
根が優しい翔輝ならではの最後の判断である。それに対し瑠璃は花がぱあっと開くように華やいだ。
「もう好きにしてよぉッ！」
翔輝はなかばヤケクソ気味で叫んだ。だが、その声がどんなのでも瑠璃にとっては最高の言葉だった。
「では早く寝ましょう！」
瑠璃は翔輝の布団に潜り込み、ぴょこっと顔を出す。その表情はとても幸せそうだ。だが、
「翔輝様？　どうしてこちらを向いてくれませんの？」
瑠璃の言うとおり、翔輝は瑠璃とは反対方向を向いていた。
「いいでしょ、別に」
「嫌ですわ。こちらを向いてほしいですわ」
「い、嫌だよぉ」
翔輝は頬を赤く染めながら言う。そんな翔輝の表情も知らない瑠璃は、悲しそうに顔をゆがめ、

「やっぱり、私の事をお嫌いに――」
「だから違うってばッ！」
激しく訂正する翔輝は思わず振り返ってしまった。目の前には瑠璃の顔が――翔輝はさらに顔を真っ赤にして反対方向を向く。そんな翔輝の行動を見て、瑠璃はハッとし、次にはニヤリと怪しげに笑う。
「どうしたんですの？　翔輝様。何やらお顔が赤くなっていますわ」
「そんな事ないッ！」
「わかりますわ。隣に絶世の美少女がいればいくら翔輝様とはいえ男の本能が揺さぶられて当然ですわ。お辛いでしょう？　もうここは理性をかなぐり捨てて襲うしか――」
「どうして君はそういう方向に考えたくなるのかな！？」
「どうしてって・・・そういう年頃なんですもの」
いわゆる発情期というものだろうか？
「困った年頃だよぉ」
翔輝は布団の中でうな垂れえる。そんな翔輝の背中に瑠璃はぴっとリとくっ付く。これには翔輝はかなり動揺する。ついこの前まではあまり感じられなかった二つのふくらみが翔輝の背中に柔らかくくっ付いてその存在を主張する。
「る、瑠璃！　離れてよ！」
「嫌ですわ。いつもと同じ事をしているだけですのに」
「自分の年齢を考えてよぉッ！」
翔輝の悲鳴は瑠璃には無視され、瑠璃はそのまま寝息を立てて寝てしまった。残された翔輝は背中に瑠璃をくっ付けたまま力なくため息をするのだった。

そんな二人を障子の陰から覗く者が二人いた。
「変態じゃないのあいつ？　まだ瑠璃と寝てるなんてキモ」
吐き捨てるように言う珊瑚だが、その表情はおもしろくなさそうだ。そして瞳にはどこかうらやましさが含まれている。これは・・・

「瑠璃はいいなぁ。翔輝と一緒に寝れて・・・」
寂しそうな顔をして人差し指を力なく加えながら悲しく言うのは瑪瑙。その瞳はものすごくうらやましげで、そして何より悲しげだ。
「えぇ？　姉さんもそんな事考えてるの？　やめなってあんな奴」
「あんな奴とはなんだ。私は翔輝が大好きなのだ。あの愛らしい笑顔がなんとも・・・」
「はいはい。ブラコン姉さんには何を言っても無駄なのよね」
「も、もう我慢できない・・・ッ！　翔輝！　私とも寝てぇッ！」
「ちょっと姉さん！　やめなさいって！」
「放して珊瑚！　私は翔輝を抱き枕にして寝たいの！」
「私のまわりには何でこんな人ばっかりなのよぉッ！」
ドタバタと騒ぐ二人。その物音と声はしっかりと翔輝にも聞こえていた。翔輝はがっくりと肩を落としてため息する。
「珊瑚。そのセリフは僕のだよ」
離れていく喧騒。どうやら珊瑚が無理やり瑪瑙を引きずって部屋に戻っているらしい。遠くから聞こえる瑪瑙の泣き声に翔輝はため息する。
ほんとに、自分のまわりには厄介な女が多い。どうも自分には女難の相が出ているらしい。
自分の理不尽な宿命（滝川曰く世界中の男子の嫉妬の炎で焼き殺される楽園生活）にため息し、背中の少女の存在にもため息し、結局そのまま徹夜をしてしまうのだった。

三日後、翔輝は何とか無事に『大和』に戻った。
結局瑠璃に振り回されたり瑪瑙に襲われたり（主に抱き付き）珊瑚に襲われたり（こっちは言葉通り）加奈子達に捕まったりとあまり休む暇はなかったが、楽しかった事は事実である。
帰って来た翔輝に大和はほとんど泣きながら抱き付いた。どれほど心配していたのか計り知れない。
翔輝は「ごめんごめん」と言って大和の頭を撫でてやった。する

と、大和は幸せそうな表情を浮かべていた。
その後ろで武蔵が拳銃を大和に向けていたのを長門が身体を張って止めていたのは二人は知らない。

第十章　第十二節　日本海軍最後の希望　新鋭空母大鳳爆誕（前書き）

ついに時代は激動の一九四四年（昭和十九年）の準備期間に入りました。大和型戦艦の対空強化、日本海軍の大反撃作戦の用意、――そして、新鋭空母『大鳳』の登場。

激動の時代に生まれ、激動の時代に生き、激動の時代に散った短き命の最強空母は、日本海軍の最後の希望として生まれた。

そんな短き命の中で必死に生きた小さな少女の話が、いよいよ始まります。

原作の頃と大鳳は大幅にキャラ設定が変更されているので、前に読んだ方でも楽します（たぶん）。

自分的には武蔵に続くくらい好きなキャラである大鳳を、どうぞご覧ください！

第十章　第十二節　日本海軍最後の希望　新鋭空母大鳳爆誕

一方、海軍が連戦連敗しているほぼ同時期、陸軍も劣勢になっていた。

各日本陸軍・関東軍及び満州帝国満州軍は中国を舞台に中国軍（国民党軍）と成都（せいと）を基地とした米軍、さらには中国の周辺諸国を拠点とする英軍の主力三国による連合陸軍・空軍に追い詰められていた。

敵軍――特に米軍は西都から爆撃機を出撃させ、日本軍の拠点に爆撃を繰り返し、陸上戦では強力な機甲部隊（戦車部隊）で歩兵を主力とした日本陸軍を粉砕していった。

この状況を打破する為、日本陸軍は捨て身の大作戦『ウ号作戦』――後年日本陸軍批判の象徴とも言える『インパール作戦』を発動した。これは補給困難な中大きな川、二〇〇〇ｍ級の山々を越え、ジャングルを越えて大遠征をして英軍の主力基地があるインパールまで一気に攻め込もうという暴挙に等しい無謀な作戦だった。

三月八日にこれは発動され、作戦の立案者である牟田口廉也（むたぐちれんや）中将率いる日本陸軍（参加将兵九万二〇〇〇人）は各軍に分かれて同時進行した。だが、この無謀な作戦は途中で食糧不足や疫病などで苦しみ思うように進めず、さらには連合軍の猛反撃に遭って各軍は壊滅状態になった。

その後、被害甚大の為に本作戦は七月一日に中止された。

この作戦で陸軍は参加将兵九万二〇〇〇人のうち戦死者三万八〇〇〇人、戦病者四万人以上という大損害を受けて大敗北した。

日本軍はついに陸軍も海軍も壊滅的になってきていたのだ。

これが後に《陸軍悪玉海軍善玉論》において陸軍の評価を著しく下げる原因の一つであり、陸軍悪玉論の筆頭に、牟田口中将の名が挙がる事となった。

三月八日、日本海軍の切り札とも言える期待の新鋭空母が完成した。

その名は正式空母『大鳳（たいほう）』。『装甲空母』と言われる強力な空母だった。

日本軍は主に《戦闘空母（翔鶴型空母がこれの頂点）》と言える空母を主に生産してきた。航空機の搭載量を極限まで極めた、まさに《攻撃こそ最大の防御》という日本らしい空母だった。しかし、ミッドウェー海戦の際に急降下爆撃で四隻の空母を撃沈され、さすがの日本海軍も防御面を考慮した空母の生産を開始した。それがこの『大鳳』である。飛行甲板には五〇〇キロ爆弾に耐えられる強力な装甲を施し、側面装甲も従来の空母とは段違いの防御力を施された。まさに装甲空母と言う名にふさわしい防御力だった。ただし、防御力強化の為に搭載機を犠牲にしているので、搭載機は六一機と控えめになっている。《防御こそ最大の攻撃》という逆転の発想である。

煙突は『飛鷹』『隼鷹』と同じ傾斜煙突を採用した。それらの装備面から他の大型空母とかなり違う外見をしている為かなり目立つ。『大鳳』には同型艦はいない。だが、この技術は後に出てくる世界最大最強空母に応用されているが、その話はまだ先の事である。

そんな空母『大鳳』は日本海軍最強の空母として機動部隊に配置された。

日本近海で飛行訓練を行っていた機動部隊に新たに加わった空母『大鳳』。その飛行甲板には一人の少女が立っていた。

蒼い空をぼーっと見上げるその少女は日本人の中では異彩を放つ茶色の髪をボブカットに切り揃えている。風に揺れる髪から覗く顔は年の頃は十歳ぐらいに見える。幼いがかわいい顔立ちをした美少女だった――彼女が空母『大鳳』の艦魂である。

大鳳はまるで何か見えないものが空にあるかのように、ぼーっと空を見上げている。その先を飛行訓練中の艦載機が横切るが、その後を目では追わない。彼女が見ているのはそのもっと先だ。

ぼーっとしている彼女の顔には表情はない。瞳にも何の感情も込められていない。
その整った顔や表情は、まるで人形のようだ。
大鳳は海風に揺れる髪を押さえる事もなく、ぼーっと空を見上げ続ける。
なんとも不思議な女の子だ。
その時、ふと彼女の前を白いチョウチョが舞い踊った。
「・・・チョウチョさん」
大鳳の視線は今度はチョウチョを追いかける。表情はさっきまでとは違って小さな笑みを浮かべ、頬はほんのりと赤い。
「・・・待って。チョウチョさん」
大鳳はチョウチョを追い掛けて強力な装甲の施された飛行甲板の上をパタパタと走る。
「・・・チョウチョさん」
大鳳はチョウチョを追い掛けて甲板を走る。と、
ズデンッ！
転んだ。しかも何もない平らな所で。顔面から。
鼻を押さえながら起き上がった大鳳は一言。
「・・・痛い」
そしてすぐにチョウチョの姿を追うが、どこにもいない。残念そうにうつむくと、
「・・・雛鳥？」
少し離れた所に小さな雛鳥が落ちていた。まだ飛べない翼をパタパタと動かし、必死に起き上がろうとするが、そんな力はまだない。
ピヨピヨと鳴くその雛鳥に大鳳はそっと近づくと、それを手で包むようにして持ち上げる。温かな温もりを感じたのか、雛鳥は鳴くのを止めた。じっと、大鳳を見詰める。
「・・・親鳥」
大鳳はキョロキョロと辺りを見回す。と、何かを見つけた。それは傾斜煙突と一体化した特徴的な艦橋の上に立つ軍艦旗を掲揚して

いるマストの中ほどにある茶色い木屑などの塊――鳥の巣。
大鳳はじっと鳥の巣を見上げ、もう一度雛鳥を見詰める。そして、
「・・・お家、帰る」
その瞬間、大鳳の身体がまばゆく光った。その神々しいまでの白い光は大鳳の背中に集約され、一対の白い翼となった。
純白に光る翼からはキラキラとした輝きと白い羽毛が舞い踊る。
翼を羽ばたかせ、大鳳は空へと飛んだ。
一直線にマストへ向かい、鳥の巣に到達すると、そこには他にも数羽の雛鳥が口を開けていた。
大鳳はそっと小さく微笑むと、手に抱いていた雛鳥をそっと巣に戻す。と、親鳥らしき小鳥が戻って来て、大鳳のまわりを飛んだ。まるで感謝しているかのよう。
小さく微笑むと、純白の翼を羽ばたかせながらふと海を見詰める。その先には同じ第一航空戦隊を組む空母『翔鶴』『瑞鶴』が見える。その向こうにいる小さな空母は自分が入った為に第三航空戦隊に転属となった『瑞鳳』。さらにその向こうには自分を小型化したような外見を持つ『飛鷹』と『隼鷹』も見える。これが自分の仲間、第三艦隊だ。
大鳳は機動部隊の面々をぼーっと見詰める。
これが自分の仲間。
「・・・仲間」
大鳳はより強く純白の翼を羽ばたかせた。
木板ではなく装甲が張られた鈍い銀色に輝く飛行甲板に、一枚の白い羽が輝きながら落ちた。

第三艦隊旗艦兼機動部隊旗艦・空母『翔鶴』の甲板では機動部隊のメンバーが大鳳の登場を歓迎していた。
「私は空母『翔鶴』の艦魂。この艦隊の全艦魂の命を預かる旗艦だ」
「・・・初めまして。空母『大鳳』です」
新しい仲間の登場に嬉しいのを顔に出さないように気をつけなが

ら、翔鶴は目の前に現れた瑞鶴よりもずっと幼い、隼鷹と同じくらいの少女――大鳳に手を伸ばす。大鳳もそれに応えて手を伸ばし、握手した。

小さな手だった。

この小さな手、小さな身体に、日本海軍全ての希望が詰まっていると思うと、複雑な気持ちになる。

「これからよろしく頼むな」

「・・・はい」

手を放すと、大鳳はぼーっと自分の仲間達を見詰める。

色々な人がいる。自分と同じくらいの子から大人な女性まで、長髪やセミロング、ポニーテールなど様々な人がいる。これが、自分の仲間。

瑞鶴や翔鶴、瑞鳳など機動部隊の艦魂達は新たに仲間になった大鳳を見て、思った。

――武蔵に似てるなぁ・・・――

幼い外見に無表情なその姿は、連合艦隊のトップに君臨するある少女と重なる。

大鳳はぼーっとまわりを見回す。と、

「えへへ、大鳳よろしくね。私隼鷹って言うの。空母『隼鷹』の艦魂だよ」

そう満面の笑みを向けてあいさつした隼鷹に、大鳳はぺこりと頭を下げる。と、

「ね、姉さん！　上官になんて無礼な態度を！」

慌てて隼鷹の口を塞ぐと、飛鷹は「す、すみません！」と明らかに自分よりも年下な女の子に頭を下げる。

「ねぇ、大鳳の髪って変わってるね。茶色い髪なんて私初めて見たぁ」

「姉さん！」

飛鷹が慌てて隼鷹の口を塞ぐ。そんな飛鷹と隼鷹をじっと見詰める大鳳。そして、

『あ・・・』
唐突にその姿を消した。
大鳳のいなくなった甲板の上で、艦魂達は呆然とする。
「あ、あれが・・・私達の新しい指揮官になる方？」
「だ、大丈夫かな・・・？」
「きっと大丈夫よ。ほら、大鳳司令って武蔵長官にどことなく似てるし」
「それって・・・有能だけどちょっと壊れた人って事・・・？」
「・・・それはそれで困るなぁ」
駆逐艦達は次期第三艦隊旗艦、つまりはいずれは上官になるであろう大鳳に、一抹の不安を感じるのであった。
そして、瑞鶴達は・・・
「か、変わった子だね、姉さん」
「うむ・・・少し不安だな・・・」
「良かった。三航戦に転属になって」
「瑞鳳、それは左遷なんじゃないかな？」
「お姉ちゃん大好きぃッ！」
それぞれ（一人違うが）新たな仲間、及び新たな指揮官となるであろう大鳳に、不安を覚えるも、きっと大丈夫だろうと・・・自分に言い聞かせた。

数日後の夜、月明かりに照らされる『大鳳』の艦橋の上、軍艦旗靡くマストの横を白く光り輝く翼を生やした大鳳が羽ばたいていた。
巣の中ではピヨピヨと雛鳥達が口を大きく開けてエサを求めている。さっきも親鳥がエサを持って来ていたが、雛鳥の食欲の前では焼け石に水。再び陸に向かって飛んで行った。ここは洋上。親鳥も大変だろう。
大鳳はポケットから畳まれた白い和紙を取り出す。開くと、そこにはミンチ状になったわずかな魚の肉があった。本物だ。悪いとは思ったが、さっき烹炊所から失敬してきたのだ。

大鳳はミンチ状になった魚の肉を発現させたピンセットで小さく摘み、一羽一羽の口に運ぶ。雛鳥達はそれを喜んで食べる。

少ししかなかった魚はすぐになくなってしまう。恐るべき雛鳥の食欲。

ピヨピヨと雛鳥達はさらにエサを求める。しかし大鳳にはもう何もない。

「・・・ごめんなさい。もうないの」

そう言うと、雛鳥達はピタッと鳴くのをやめた。まるで彼女の言葉がわかったかのようだ。

大鳳は白く細い指で雛鳥の頭を撫でる。かわいい。その時、

「そんな所で何してるんだ?」

下から誰かに声を掛けられた。不思議そうに振り向くと、そこには見慣れない少年が立っていた。誰だろう。しかしその横に立つ人物なら知っている。瑞鶴だ。

「大鳳！　ちょっと降りて来てよぉ！」

瑞鶴の声に、大鳳は不思議に思いながらも雛鳥に手を振って降下する。

甲板の上にコツと足を着くと、大鳳は翼を消す。

彼女の前にいたのは瑞鶴。そして少年の二人だった。

「えっと、突然ごめんね。この人の事を紹介したくて」

この人とは隣に立つ少年の事だろう。大鳳はじっと彼を見詰める。

「彼は神風刹那飛行大尉。明日からあなたに配属される事になった戦闘機乗りだよ」

「神風刹那。よろしくね。へぇ、瑞鶴の言うとおり本当に茶色い髪なんだ」

大尉に昇級したばかりの刹那は笑顔で大鳳に手を差し出す。大鳳もそれに応えて手を差し出して握手する。

優しそうな人だった。だが、その手はとてもたくましい。この手で今まで数多くの敵機を撃ち落として来たのだろう。

「・・・よろしくお願いします」

か細い小さな声であいさつすると、手を放す。
「大尉は私に配属されてたんだよ。これでも彼は真珠湾からの生き残りなんだ。その実力は折り紙つきだよ」
真珠湾・・・自分の生まれるはるか前にこの戦争の発端となった戦い。
大鳳はそんな歴戦のパイロットにぺこりと頭を垂れると、くるっと踵を返し、瑞鶴が止める前に光に包まれて消えた。
「もう、まだ話は終わってないのにぃ」
不満そうに唇を尖らせる瑞鶴に、刹那は苦笑いする。
「お前の言うとおり変わった子だね」
「そうなんですよ。大変だと思いますけど、彼女の事をよろしくお願いしますね」
「いや、別に僕は彼女の保護者って訳じゃないんだけど・・・」
刹那は新鋭空母の鉄の甲板の上で、彼女の消えた場所を見詰め、これから先の事を考えた。
神風刹那の新たな物語が、始まった瞬間だった・・・

連合艦隊司令部はトラック空襲でパラオに移転したが、その一ヶ月半後の三月三〇日、パラオも空襲された。
古賀連合艦隊司令長官以下首脳部は翌日二機の二式大型飛行艇でフィリピンのダバオに向かったが、その途中で低気圧に巻き込まれて墜落。古賀長官は殉職した。
だが、生存者が残っており、なんとか陸地に流れ着いた。だが、そこで米軍に協力する現地人のゲリラに捕虜にされ、重要な機密文書を奪われてしまった。その機密文書はマリアナ防衛作戦の参加兵力、航空機や艦艇の数、補給能力、指揮官の名前等が書き込まれた超重要書類で、米軍はこれを元に作戦を立案し、日本軍のその後の作戦遂行に甚大な影響を与えた。
これを海軍乙事件と呼ぶ。

時代は少し戻り一九四四年二月、マリアナ諸島に内地で温存されていた基地航空隊を基幹とした第一航空艦隊所属の一八〇〇機もの超航空部隊が配置された。これは日本軍の名実共に精鋭部隊であった。そんな第一航空艦隊の司令長官にはあの角田覚治中将が務めていた。

角田中将は南太平洋海戦で南雲中将以下司令部が被弾した『翔鶴』と共に退陣した後に空母『隼鷹』で敵空母部隊を撃退した人物で、ミッドウェー海戦の英雄山口多聞中将の先輩に当たる闘将である。

そんな角田はマリアナ諸島に配置された航空隊を用いて敵艦隊撃滅出撃を繰り返した。敵艦隊発見の知らせがあればそれが例え小規模な艦隊だろうが大艦隊だろうが全力攻撃を行い、数々の戦果を上げ、角田は米軍からも恐れられた指揮官であった。

だが、数々の戦いを行えば飛行機の消耗も激しく、さらにはニューギニア方面防衛の為に戦力が分散され、四月頃には角田の手元には初期の四分の一以下の四〇〇機の可動機しか残されていなかった。

この第一航空艦隊の戦力不足が、後の大作戦の致命的な敗因となった。

その頃、内地にいる戦艦部隊は平和なものだった。

その日開かれた艦魂会議には珍しく翔輝、さらには森下までが見物に来ていて、いつも以上に（特に大和以下翔輝連合）張り切って会議をしていた。

「・・・現在、私が考えたとおり日本軍の太平洋戦線の防衛線はマリアナ諸島を中心に、千島、マリアナ、フィリピンを絶対防衛とした《絶対国防圏》を制定。これを死守すべく角田中将率いる第一航空艦隊がマリアナ諸島に布陣し、敵艦隊迎撃を行っている。今現在多方面に戦力を分散している一航艦（第一航空艦隊の略）の可動可能機は四〇〇機余り。決定的な戦力不足になっている。決戦までに何としてでも航空機の増強を行わなければならない。米軍の進撃がこちらの予想よりも早いので、早期にマリアナ諸島の防備を増強す

る必要がある」
武蔵はいつもと変わらずに無表情で説明をする。だが、時々チラチラと翔輝を見ている事は翔輝以外の全員に丸わかりだった。
「ここでうちから機動部隊代理として報告するどす」
立ち上がったのは航空戦艦となった伊勢だった。
「第三艦隊こと機動部隊には先日、日本海軍空母技術の粋を集めた最新鋭空母である正式空母『大鳳』が配置されたどす。『大鳳』の性能は手元の資料に詳細が書かれとるからので省くどす。これにより機動部隊の戦力は大幅に上昇。それと後に機動部隊旗艦は『翔鶴』から『大鳳』に移る可能性があるという事を報告しておくどす」
伊勢の報告に全員が『空母大鳳性能一覧』を見た。しばらくするとおおむね理解したのか、資料から目を離す。
続いて大和が大和型戦艦の改造状況の報告をする。
「今現在私達大和型戦艦は二番、三番副砲の撤去が完了し、高角砲、機銃の配置に取り掛かっている状況です。さらに十五m測距儀の上には『三式二号電波探信儀二型』が取り付けられました。これにより、我が『大和』には対空用電探『一号電波探信儀三型』、『二式二号電波探信儀一型』、そして今回装備された水上兼射撃の『三式二号電波探信儀二型』の計三つの電探を装備し、艦の性能は飛躍的に向上しました」
大和の説明が終わる。続いて武蔵が再び立ち上がって手元の資料を見ながら説明を始める。
「・・・次に第一機動艦隊の説明に入る。第一機動艦隊とは新設された航空艦隊。これは先日解体された第一艦隊の戦艦部隊を併合した第二艦隊と、機動部隊主力の第三艦隊との合同艦隊。第一機動艦隊の指揮権は第三艦隊司令部に置かれる。これにより海軍の主力が完全に航空部隊に移行される。つまり、私達戦艦は決戦の際は第二艦隊司令長官栗田健男中将の指揮下ではなく、第三艦隊司令長官小沢治三郎中将の指揮下に入り、機動部隊護衛の任務に就く事となる。以上」

今日の会議はすごい勢いで色々な事が解決していく。そんないつもと違う艦魂達に金剛は戸惑いを隠せない。
「おい長門。一体どういう事だ？　今日はなぜこいつらこんなにやる気がみなぎっているんだ？」
「それはもちろん長谷川君がいるからよ」
「・・・そういう事か」
金剛の大和達を見る目が好奇のものから呆れのものに変わる。その先にはすさまじい勢いで会議をこなす大和達が。
「ゲンキンな奴らだ」
「まぁいいじゃない。これで一気に片付けましょ」
前向きな長門の言葉に、金剛は呆れながらうなずく。
そんないつもとは違う会議を見て、日頃を何も知らない翔輝と森下は感心する。
「ほぉ、艦魂達はいつもこうやって議論してるのか？」
「はい。ですがこんなにマジメだと思ってませんでした。以前は会議と言っても実際に会議しているのは数人だけというものでしたから。成長したみたいです」
翔輝はしみじみと思う。立派に成長した彼女達を心から嬉しく思うが、どこか寂しい気持ちもあったりする。
完全に騙されている二人（特に翔輝）を観察しながら大和達は会議を進めていく。ここで好感度を一気に上げようという魂胆だ。
結局、戦果は会議が通常の十倍以上の議題を終えるという大勝利だった。それに対し金剛は複雑な表情で報告書を見詰めるのであった。

三月半ば、呉軍港に休養の為に機動部隊が入港した。
呉に待機している艦隊の艦魂達は機動部隊を待ち望んでいた――
新鋭空母『大鳳』の艦魂に会う為に――

旗艦代理艦・戦艦『大和』の甲板には多くの艦魂が集まっていた。

そこには翔輝の姿もあった。久しぶりに瑞鶴達に会うのが楽しみだったからだ。その時、翔輝達の目の前に光が輝き、機動部隊の艦魂達が現れた。

多くの艦魂の仲に、翔鶴、瑞鶴、飛鷹、隼鷹の四人がいた。第三航空戦隊に転属になった瑞鳳は同じ戦隊の空母と共に別の軍港にいるからここにはいない。

そして、そんな彼女達の中央には見た事がない少女が立っていた。年の頃は十歳くらい。武蔵や隼鷹のような年の子だ。

日本人離れした茶色い髪をきれいに切り揃えられたボブカットにをした幼い女の子。まだまだ子供だ。着ている真新しい黒い士官用の軍服も、滑稽に見えてしまう。

そして何よりぼーっとした瞳が特徴的だ。何を見ているか視線を追うが、何もない。

整えられたその顔には一切の感情がなく無表情。翔輝は思わず隣に立つ無表情少女を盗み見た。似ている。顔とかではなく、雰囲気が・・・

少女は右に翔鶴、左に瑞鶴を従えて武蔵に近寄ると、静かに敬礼した。

「・・・第三艦隊新旗艦兼第一機動艦隊旗艦・空母『大鳳』艦魂です」

「・・・連合艦隊旗艦・戦艦『武蔵』艦魂」

かなり変わった光景がそこにあった。無表情の組み合わせなら武蔵と山城で見慣れているはずなのに、今度はそれに幼さが加わったせいかかなり奇妙な光景だ。

お互いに無表情でお互いを見詰め、無言で握手を交わす。

そんな二人を苦笑いしながら見詰めていると、袖を引かれた。振り返ると、翔鶴が「久しいな」と手を振っていた。

「翔鶴、久しぶり。元気にしてた？」

「まあな。やっと旗艦という大役を降りられたんだ。肩の荷が下りて楽になったよ」

「そっか、お疲れ様。あのさ翔鶴。ちょっと聞きたい事が――」
言い終わる前に、翔鶴は首を振った。言わなくてもわかるという事だろうか。
「貴様の言いたい事はわかっている。だが、その前に紹介させてくれ。たぶん貴様は初面識のはずだからな」
そう言って彼女の後ろから現れたのは長い髪を三つ編みにした細メガネの少女。縁なしメガネのブリッジを人差し指でクイッと上げると、少女はじっと翔輝を見詰める。
「え？　だ、誰？」
少女はその声にピクリと反応し、踵を揃えて直立し、ビシッと見事な敬礼をする。その服装を見る限り下士官なので巡洋艦の艦魂だろうか。
「いつも妹がお世話になっています」
「妹？」
翔輝は知っている艦魂を頭の中に並べるが、組み合わせそうな艦魂がいない。さすがに資料不足である。
そんな翔輝の反応が予想通りだったのか、少女は敬礼をやめると再びブリッジを上げる。
「申し遅れました。私の名前は祥鳳型航空母艦同型艦、空母『龍鳳（りゅうほう）』の艦魂と言います」
少女、龍鳳はペコリと頭を垂れる。という事は妹というのは・・・
「瑞鳳のお姉さん？」
「はい」
あぁ、なるほど。姉妹揃ってメガネという事か。
「瑞鳳のは祥鳳さんをマネして伊達メガネだけど、君のもそう？」
「いいえ。私のは度が入っています。瑞鳳と違って前線に出る機会が少なく、いつも事務仕事をしていたのでいつの間にか視力が落ちてしまったんです」
「大変だね」
「長谷川大尉ほどではありません」

さらっと自分の名前を言った龍鳳に驚くが、きっと瑞鳳や翔鶴達から聞いていたのだろう。

「瑞鳳は第三航空戦隊に転属になりましたが、私は隼鷹と飛鷹と共に第二航空戦隊に転属になりました。これから先色々とお世話になると思いますので、こうしてごあいさつさせていただきました」

丁寧な言葉遣いで言う龍鳳。妹の瑞鳳と違ってかなりしっかりしている。翔輝はあまり知らないがどことなく祥鳳と似ている。

「これからも妹共々よろしくお願い申し上げます」

「こ、こちらこそ」

翔輝はそっと手を伸ばす。握手の合図だ。

だが、差し出された彼の手を見て、龍鳳の顔色が変わった。先程のクールな表情は消え、新たに現れたのは恐怖。

「え・・・」

驚く翔輝の前で、龍鳳はおろおろとする。そんな彼女の耳に翔鶴が何事かをささやいた。口の動きを見ると《奴なら大丈夫だ》と言っていた。一体何の事だろうか。

「よ、よろしくお願いします・・・」

先程までのクールさはどこへやら、龍鳳はなぜか少し怯えながらおずおずと手を差し出してきた。心なしかその手は小刻みに震えている。

一体何なのだろうか。

先程までの彼女の健康そうな肌が、今は真っ青になっていて、脂汗を流している。これはあまりにも危ないのではないか。

「だ、大丈夫？」

「ひゃ、ひゃい」

たぶん《はい》と言ったのだろうが、なぜか口まで回らなくなっている。

そして、そっと差し出された彼女の細い手が、翔輝の手に近づく。

その指先がそっと・・・触れた。

瞬間、龍鳳の顔が凍りついた。

身体は小刻みの震えからガクガクと激しく震え、青い顔色は真っ白になった。そして、
「い――」
戸惑う翔輝は一瞬、顔に手を当ててがっくりとしている翔鶴の姿を見た。そして、
「いやぁあああああぁぁぁぁぁッ！」
超音波的な叫び声を発し、激しく表情をゆがませながら、左手で翔輝の襟元を握る。
そして――
「いやあああぁぁぁぁッ！　私に触らないでえええええぇぇぇぇぇッ！」
「ごふぁッ!?」
容赦のないフルスイングの右拳が、翔輝の左頬にめり込んだ。
「いやぁッ！　もういやぁッ！　何でこんな生き物が存在するのよ！　ありえないありえないありえないッ！　意味わかんないよぉッ！」
「な、何がわからごぶぅッ!?」
「半径五メートル以内に近寄らないで！　無理無理無理無理無理ぃッ！　無理に決まってるじゃないッ！　Y染色体なんて滅んでしまえばいいのよッ！　っていうかあんたが死になさいよゴミ虫ぃッ！」
「意味わかぐはぁッ!?」
龍鳳はなぜか急にキレ出し、翔輝の存在意義激しく否定しながら問答無用の拳を顔面に打ち込んできた。それはあまりにも理不尽な言動と暴力だった。
「こわいこわいこわいこわいこわいッ！　こわいよおおおおおぉぉぉぉッ！」
最後には身体全体をしならせて放った強烈な拳が顔面を貫いた。
その少女とは思えないすさまじい一撃に翔輝は吹っ飛んだ。
甲板にぐったりと浜に打ち上げられたクラゲのように倒れた翔輝を見詰めて頭を抱える翔鶴の後ろに、身体をガクガクと震わせなが

ら龍鳳は隠れる。
　あまりにも強烈な拳の連打に顔面に激痛が走り、立ち上がれない。鼻血が出てないのが奇跡だった。
「い、いってぇ・・・ッ！」
「大尉！　大丈夫ですか！？」
「長谷川はん！？　どうしたんや！？」
「・・・翔輝！？」
「姉さん！？　また何をやらかしたの！？」
　いきなり龍鳳にリンチにされた翔輝に驚いて大和、伊勢、武蔵、瑞鶴が駆け寄って来た。武蔵なんかはすっかり大鳳を置き忘れている。忘れられた大鳳はぼーっとこちらを見ている。
　一番背が似ている伊勢の肩を借りながら立ち上がると、泣きそう顔をした龍鳳の頭よしよしと撫でる翔鶴がいた。
「やはり長谷川でもダメだったか。女顔の貴様ならなんとかなるかと思ったのだが」
　ため息する翔鶴。
「ど、どういう事・・・？」
「龍鳳はな、男性恐怖症なんだ」
「だ、男性恐怖症・・・？」
「あぁ、男が怖くて、男が傍にいるだけで体調を崩すのだ。さらにもし万が一にでも、髪の毛一本でも男に触れれば、過剰な自己防衛本能で相手の男を再起不能になりかねないほど暴行してしまうんだ」
　翔鶴はまるで台本に書かれているかのように淡々としゃべる。なるほど。男性恐怖症か。男だらけの軍艦の艦魂には致命的な気がするが、この際はツッコミはなしだ。むしろ入れるべきは、
「だったら何で僕が握手を求めた時に止めなかったんだよぉッ！」
　そうすればどちらも辛い思いをしなくて済んだのに。
「いやだから、貴様なら大丈夫だと思ったんだ。貴様は私の知っている男の中で一番女性に人畜無害な存在だから賭けてみたんだ。女顔だしな。しかし全ては失敗に終わった」

「うぅ・・・そんな根拠のない可能性に賭けたせいで・・・」
顔面が痛い。大和が心配そうに頬を撫でた。その瞬間鋭い痛みが走る。伊勢がそっと手鏡を見せてくれた。いつも見慣れた自分の顔は頬が赤く腫れていた。まあそうだろう。あれだけの攻撃を喰らえば。
「す、すみません・・・わ、悪気はないんです・・・」
そう今にも泣きそうな声で翔鶴に隠れながら言う龍鳳。きっと彼女も身体が勝手に動いてしまうのであって、本心から殴りたい訳ではないのだろう。そんな彼女に怒る事なんてできる訳もなく・・・
「う、うん、平気。気にしないで」
そう笑顔で返しながら、背後で重機関銃を構えていた武蔵にデコピンする。
龍鳳は翔鶴から差し出されたハンカチで目の縁に溜まった涙を拭う。一見して普通の女の子と何ら変わりない彼女はどうしてまた男性恐怖症になったのだろか。
翔輝が不思議に思っていると、その考えに気づいたのか、翔鶴が説明してくれた。
「別に龍鳳自身が男に暴行されたという事はない。だが、どうやら生まれた直後に兵と下士官の本気のケンカを見てしまって以来、男全般が怖くなってしまったらしい」
なるほど。確かにそれなら男性恐怖症になっても仕方がないかもしれない。
「まぁ、とりあえずこんな子だが、悪い子ではない。仲良くしてやってくれ」
「龍鳳がいいなら別に構わないけど」
「わ、私も長谷川大尉とは仲良くなりたいです。姉さんからいつもあなたの話は聞いていますし、とても優しい人です――ですが、最低でも半径五メートルは離れてください。でないと、私の右ストレートが大尉を貫きますよ」
彼女の気持ちは嬉しい。だが、後半の言葉はしっかりと覚えてお

こう。お互いの為にも。そして自分自身の命を守る為にも。
それにしても、
「い、痛い・・・」
艦魂は人間よりも強い。例えかわいい外見をした少女でも、その力は並の成人男性よりも強い。そんな強力な拳の連打を受けたのだ。痛くて当然だ。
翔輝が再び頬に手を当てようとした時だった。
ピト・・・
突如頬に冷たい何かが触れた。痛いけど、気持ちいい。視線を向けると、そこにはわずかながらも心配そうな表情をした大鳳が自分を見上げていた。その手にはハンカチが握られ、それが頬に当たっている。しっとりと冷たいのはハンカチが冷水に浸けたものだからだ。
「あ、ありがとう・・・」
驚きのあまり言葉を失った翔輝だが、なんとか声を出して礼を言う。だが、大鳳は無言のままハンカチを翔輝に渡すと、踵を返して、光と共に消えてしまった。
呆然としていると、目の前にいた翔鶴がため息した。
「まったく。大鳳は一体何を考えているのか全くわからない」
「そうだよねぇ。私も全然わかんないよ。まるで武蔵みたいに無表情で、しかも武蔵以上に何もしゃべらないんだもん」
瑞鶴はため息混じりに言う。きっと彼女もがんばって大鳳に挑んだが、ことごとく返り討ちになったのだろう。
「うーん、確かに似てるよね」
「長谷川もそう思うか？　だからあいつの事は貴様に任せようと思ったんだが」
「ちょっと待ってよ！　僕に押し付けるつもり!?」
「長谷川大尉が適任なんですよ」
「いくら僕でも二人もあんな子を相手にはできないからね」
「うーむ、確かに・・・あてが外れた」

「ど、どうしよう姉さん」
翔鶴と瑞鶴は珍しく本気で悩んでいる。それほどにまで厄介な子なのだろう。良かった。武蔵のおかげで助かった。
一方、新たな仲間の登場に喜ぶ一同の中、金剛は不機嫌そうに顔をゆがませていた。
確かにあまりにも幼すぎるという事はあった。しかし外見年齢的には武蔵とそう変わらない。しかも武蔵のような艦魂だ。武蔵ほどではないが、戦闘向きな翔鶴や補佐が得意な瑞鶴よりは機動部隊の旗艦には向いているだろう。そうも思った。
しかし気に食わない。
顔でも、性格でも、存在感でもない。気に食わないのは――あの茶色い髪だ。
日本人なら黒い髪をしているのが当然だ。それでこそ大和撫子。日本女児だ。だがあの髪の色はそれを全て否定している。それが気に食わない。
翔鶴の報告書によると、どうやら染めている訳ではなく地毛らしい。ならば仕方がない。自分では変えられない運命をとやかく言うほど、金剛は愚かではない。
だが――
不安だった。
髪の色が違う。たったそれだけの事なのに、不吉な気がして震える。
こんな気持ち、屈強な精神を持つ金剛が思うなんて滅多にない事だ。それほどの不安。
「・・・不吉だ。何か良からぬ事が起きぬといいんだが」
金剛の独り言に、隣にいた山城はうまく聞き取れなかったのか首を傾げる。だが、それ以上訊く事はなく、再び翔輝達のやり取りを見詰める。無表情ながらも、その瞳にはわずかだが楽しそうな光があった。
こんな幸せがずっと続けばいい、戦艦の魂だけど、彼女は平和を

願った。
大鳳のいなくなってしまった甲板では、目的を失った艦魂達が次々に自主退場していったが、翔輝達だけはいつまでもその場に留まっていた。交わされる会話は何気ない世間話。そんな何気ない時間が、幸せだった。
長い髪を靡かせながら長門はそんな彼女達を見詰め、小さく優しげに微笑んだ。

第十章　第十二節　日本海軍最後の希望　新鋭空母大鳳爆誕（後書き）

・・・えっと、とりあえずすみません。
武蔵のファンの皆様には特にすみません。以前の大鳳が好きだった方々にはもっとすみません。
えっと、無口無表情キャラは設定当初は武蔵と山城と決めていたんですが、どうも最近はよく武蔵はしゃべるし、山城は出番が少ない（これは僕の配置ミスですが）。この状況の中、もう一度真の無表情無口なキャラを再降臨させなくてはいけないという考えから、大鳳のキャラを変えました。他にはツンデレキャラを増やしたいという考えもあったので、最終選考までこの二つが残ったのですが、結果はご覧の通りです。
大鳳、かなりミステリアスな女の子の予感。これからどうなるのか、僕にもわかりません。
さらに新たなキャラに龍鳳も加わりました。こっちも原作とはずいぶん設定が変わっていますが、あまり使っていなかったキャラですので大丈夫だと思います。ですが、男性恐怖症の女の子なんて初めて書きましたので、一体どうなるか僕にもわかりません（わからない事だらけだ）。しかも触れられただけで暴行行為。翔輝の受難は続きます。
これから先、いよいよ連合艦隊が破滅していく物語です。悲劇と同時に奇跡もある、そんな時代。
これからも応援よろしくお願いします！

追伸、先日《第一章第二節　艦魂の少女》に新しくある有名な言葉を入れました。
戦艦大和の最期に詳しい方なら、有名な士官、臼淵磐（うすぶちいわお）少佐を知っている方も多いと思います。
臼淵少佐のあの有名な言葉を見て、もう一度『大和』の生きた記憶

を見詰めなおしてみましょう。
・・・うわぁ、ダサイ言い方。

第十章　第十三節　彼の袖を掴むと・・・（前書き）

《龍鳳（りゅうほう）》
龍鳳型航空母艦一番艦――軽空母『龍鳳』
出身　横須賀海軍工廠（神奈川県）
身長　１５７ｃｍ
髪型　三つ編み
実年齢（１９４４年3月現在）９歳
外見年齢　１５、６歳
誕生日　３月３１日
家族構成　妹・祥鳳（戦死）・瑞鳳
好きなもの　瑞鳳・緑茶・三つ編み
嫌いなもの　男性・男の存在自体（どっちも嫌いというか苦手）・Ｙ染色体（？）
旧名《大鯨（たいげい）》。潜水母艦として竣工する。その翌年第四艦隊事件で損傷したせいで修理・改良の為に大幅に遅れて一九三八年に第一潜水戦隊旗艦に就任。太平洋戦争勃発と共に航空機の有用性から空母への改造を開始。一九四二年十一月に再竣工。だがその後敵潜水魚雷を受けて修理の為に内地に戻り、その後は輸送作戦や訓練に従事し、まだ航空戦の実戦経験はない。そんな『龍鳳』の艦魂は年こそは祥鳳や瑞鳳より上だが、空母としては後輩に当たる。まじめで他二人の妹と同じく細メガネを掛けている。以前は翔鶴、現在は大鳳の指揮下で機動部隊先任参謀を務めている。事務仕事が得意。男性に対してものすごい恐怖心を持っている男性恐怖症の持ち主。男の人に髪の毛一本でも触れられたら過剰防衛の為に相手の男を再起不能寸前まで暴行してしまう。もちろん翔輝も例外ではない。彼女自身は別に男が嫌いなのではなく、本当に苦手なだけ。翔輝に対しては友達でありたいとは思っていても半径五メートル以内に近寄られたくはない。男性ばかり軍隊の中では非情に苦労しているらしい。

第十章　第十三節　彼の袖を掴むと・・・

その夜、『大和』の第三会議室では大鳳の歓迎会が開かれた。皆最新鋭空母の誕生を喜んでいた。中には真珠湾再来と喜ぶ者もいたが、残念ながら現在の機動部隊はあの頃とは比べも荷ならないほど戦力も搭乗員も枯渇している。

そんなわいわいと騒ぐ艦魂達の中、主役であるはずの大鳳はポツンと一人でいた。原因は彼女のあまりの無口さにみんな声を掛けるを諦めてしまったからだ。そりゃあ武蔵以上に無口な子に話し掛けてもつまらないだろう。気持ちはわかるが、あまりにもひどい。

仕事の関係上遅れて登場した翔輝はその現状に真っ先に大和達を怒った。だが、彼女達だって最初から大鳳を見放していた訳ではない。彼が来る前に色々と話し掛けて、全て撃沈したのだ。

翔輝は大和から彼女達の奮闘を聞き、ため息した。どうやら今回の相手はかなり手強いらしい。

翔輝は仕方なく援軍も期待できぬ中、たった一人で大鳳に向かう事となった。大和や武蔵がやめた方がいいと止めたが、このままにしておくのは嫌な翔輝は、これを振り切って歩み寄る。

日本人離れした茶色い髪が異彩を放っていて、彼女を幻想的に見せる。

大鳳はぼーっと和気藹々（わきあいあい）と話す艦魂達を見詰めている。その瞳には何の感情も感じられない。

「隣、いいかな？」

翔輝が声を掛けると、大鳳は身体ごと彼の方に向けてじっと見詰めると、小さくうなずく。

「ありがとう」

翔輝はそんな彼女の横に腰掛ける。大鳳はそんな翔輝を一瞥すると、再びぼーっとどこかを見詰める。そんな彼女に翔輝は早速話し掛ける。

「どう、もうみんなとは打ち解けた？」
「・・・」
「機動部隊旗艦って大変でしょ？　他の艦隊より仕事が多いって聞くし。大丈夫？　体調が悪くなったりしてない？」
「・・・」
「みんな君に最後の希望を抱いてるんだ。大変だと思うけど、一緒にがんばろうね。僕でよければ協力するから」
「・・・」
「君の髪の毛って変わってるよね。茶色い髪かぁ。とっても似合ってておかわいいよ」
「・・・」
「・・・」
今まで多くの艦魂達の心を開いてきた歴戦の英雄である翔輝でも、大鳳の心は開かない。それどころか完全無視だ。隣に座るのを許しておいて会話を全て無視するなんて残酷にもほどがある。
翔輝はすっかり戦意を削がれ、がっくりとうな垂れる。きっと大和達もこんな風になったのだろう。自分の情けなさに言葉も出ない。
翔輝はもう戻ろうと立ち上がった。今回は完敗だ。
「あ、そうだ」
戻る前に、翔輝はポケットからそれを取り出す。
「はいこれ。さっきはありがとう」
そう笑顔で大鳳に渡したのは昼間に借りた彼女のハンカチ。しっかりと洗濯してアイロンを掛けてあるところなんかは、彼の律儀さや優しさが溢れている。ちなみに洗濯はともかくアイロンは大和に発現してもらったものを使った。
そこで大鳳がやっと翔輝を見た。茶色い前髪の向こうの黒いクリッとした瞳がじっと自分を見詰めた後、手にあるハンカチを見詰める。片手で差し出したハンカチを、大鳳は彼の手ごとそっと両手で包んだ。驚く翔輝を、大鳳はじっと見詰める。刹那、大鳳の唇がわずかに柔らかな曲線を描いた。笑った・・・のだろうか？

「・・・ありがとうございます」
小さな、かわいらしい声でそう言った。それは初めて翔輝に向けられた、大鳳の言葉だった。
暖かな手に包まれて困惑する翔輝の前で、大鳳はそっと手を離してハンカチを受け取ると、まるでそれを宝物のように胸の前で両手で包み込む。その顔には小さな笑みが。
「・・・ありがとうございます」
「え？　あ、うん・・・」
見とれていた翔輝はヘタな相槌だけを打って彼女から離れる。と、誰かの「あ・・・」という声を聞いて振り返った時には、もう大鳳はどこにもいなかった。

歓迎会は肝心の主役が帰ってしまったというのにそのまま宴会へと移行され、艦魂達はわいわいと飲んで食べて歌って騒いでという宴会モード全開となっていた。
大和達もその中に入って、先程の大鳳のあまりにも翔輝に対する失礼な態度（大和達からの角度では翔輝に隠れて彼女の表情は見えず、無言で受け取って消えたように見えていた）に批判が飛び交っていた。翔鶴も困ったような表情を浮かべ、瑞鶴もどうしたもんかと頭を抱えていた。
そんな中、翔輝はその輪の中にはいなかった。
彼がいたのは部屋のすぐ外の廊下。仕事だとうそを言って抜け出したのだ。そしてそんな彼の前には・・・
「あ、あの・・・私に何かご用ですか・・・？」
頬を赤くして緊張したような顔で問う雪風が立っていた。彼女は大和達士官への給仕を担当していたところを翔輝に連れ出されたのだ。
雪風はしきりに辺りをキョロキョロと見回す。だが、ここにいるのは二人だけ。二人だけの世界。
目の前にいる翔輝に、雪風は恥ずかしくて顔をうつむかせてしま

う。手に持ったおぼんをギュッと掴む。
（な、何だろう突然・・・私、またなんかミスをしたんじゃ・・・）
雪風の頭の中に今までしてきた数々の失敗が次々に思い浮かぶ。
（・・・どうしてまた・・・はっ！？　ま、まさか・・・大尉は私の事を・・・ッ！？）
頭の中で何か考えが変な方向に傾き始めている雪風に、翔輝は不思議に思いながらも声を掛ける。
「あ、あのさ雪風――」
「だ、ダメです！　大尉には大和司令という方が・・・ッ！」
「はぁ？」
顔を真っ赤にさせて手を顔の前で必死に振る雪風に、翔輝は困ったように頬を掻く。
「あ、あのさ雪風。折り入ってお願いがあるんだけど」
「そ、そんな・・・ッ！　そこまで私の事を・・・ッ！？」
顔を真っ赤にして身体をクネクネさせる雪風。どうやら自分達の間にはすさまじい誤解が発生しているらしいが、この際は無視しよう。話が進まないし。
「僕を『大鳳』に連れてってくれないか？」
「あぁ、大和司令と恋敵になって――って、はい？」
どうやらようやく雪風が戻って来てくれたらしい。良かった。
「だから、僕を『大鳳』に連れてって話」
「『大鳳』にですか？　もしかして、大鳳さんに何かご用が？」
「うん、まぁ」
「ふーん・・・」
雪風はどこか冷めた瞳で見詰める。よくわからないが今急激に彼女の自分に対する好感度が下がったらしい。
「へぇ、大尉。大和司令や伊勢さんだけでは飽き足らず大鳳さんまで・・・」
「あぁ、雪風。君のその瞳がすごく怖い」
ここから彼女の誤解を正すのに十分近く掛かった。どうやら雪風

は自分がやましい気持ちで大鳳に近づこうとしていたと思っていたらしい。断じて否。彼は純粋に一人孤独な大鳳の心を開かせたいだけだった。

「そういう事でしたらご協力させていただきます」

そう優しげな笑みを雪風は浮かべる。どうやら好感度は回復したらしい。良かった。

「あ、あとこの事は大和達には内緒にしておいてくれないかな」

「別にいいですけど。なぜですか？」

「なんかあいつら僕が他の艦魂と話してると機嫌が悪くなるからさ、大鳳に不快な思いをさせたくないから」

今さらながら彼の鈍感さには脱帽するしかない。雪風はあまりにも彼らしくて、そしてそのあまりの鈍感さに嬉しくもあり悲しくもある複雑な心境だった。

「わかりました。大和司令達には機密にしておきます」

素直で優しい子な雪風に感謝し、翔輝は「じゃあ行こうか」と笑顔で言うと、雪風は「はい」と答えて満面の笑みを浮かべる。

翔輝は雪風の名前のような真っ白な手を掴む。雪風は「ふわぁッ!?」と奇声を上げて驚く。

「な、何で手を繋ぐんですか？」

「え？　移動する為に」

「べ、別に手を繋がなくてもちゃんと転送できますよ」

「うーん、そうかもしてないけど。なんかこっちの方が落ち着くし。あ、でも雪風が嫌だって言うならやめるけど」

「わ、私は別に構いませんが・・・」

雪風は頬を桜色に染めてもごもごと何事かを口の中で話す。翔輝が不思議そうに首を傾げると、「やっぱり大尉は大尉なんですね・・・」と小さくつぶやいた。

「何か言った？」

「い、いえ何でもないです。じゃあ、行きましょう」

「うん」

雪風はすっと目を閉じた。その瞬間彼女の身体はまばゆい光に包まれた。その光は翔輝も包み、そして爆発。光が消えた後には二人は消えていた・・・

足が地面を離れる感触の後すぐにまた足が着く感触。まばゆい光から目を守る為に反射的に閉じた瞳を開けると、そこは先程までの通路ではなくて甲板の上にいた。だがそこは『大和』のように機銃や高角砲などは一切なく、真っ平らな景色が広がっている。

「ここが『大鳳』です。では私はこれで」

「うん。ありがとう」

「いえ、ではがんばってください」

雪風は笑みを浮かべて敬礼すると、光に包まれて消えた。

雪風。

多くいる艦魂の中で数少ない常識人で優しい少女。翔輝はそんな彼女の笑みを思い出して微笑む。と、辺りを見回す。そこは飛行甲板であった。

ふと思い出すと、そういえば自分は空母に乗るのはこれが初めてだった。

いつもとは違う景色に翔輝は興味津々だ。

戦艦のような天高く聳える艦橋はなく、見る者全てを畏怖させる巨大な大砲もない。あるのは全てが平らな、航空機を滑走させるだけの飛行甲板。月明かりに照らされる飛行甲板には中心を真っ直ぐに貫く白線が見える。練度の低い搭乗員が離着艦しやすいようにという配慮らしい。

いつまでもこうして飛行甲板を見ていても仕方がない。翔輝はとりあえず大鳳を捜す事にした。今さらながら大鳳の部屋を教えてもらえば良かったと後悔する。まぁ、雪風に訊いても無駄だったであろうが。

翔輝はローラー作戦するしかないとため息し、星空を見上げながら歩き出す。

月光に輝く純白の天使を見た・・・

「え・・・」

空に浮かぶ月をバックに、月明かりに照らされて光り輝く純白の翼を羽ばたかせた天使がいた。いや違う。月明かりだけではなく、翼自体が純白に輝いて光の粒子を纏っている。

天使はそのまま空をゆっくりと飛翔し、艦橋の上のマストの中ほどで停止した。純白の翼をゆっくりと羽ばたかせ、天使はマストに手を伸ばしている。何かそこにあるのだろうか。

翔輝は自然とその場所へ歩みを進めていた。

翔鶴型よりも遥かに大きい煙突と一体化した艦橋の上に建つマストを見上げる。月明かりに照らされて軍艦旗が風に靡き、そのさらに上、マストのトップには小沢中将が乗艦している証である中将旗が翻っている。

そして天使は、そのマストの中ほどで手を伸ばしたり引っ込めたりを繰り返していた。一体何をやっているのだろうか。

その時、波の音に混ざって何か聞こえた。これは――鳥の鳴き声。

鳴き声は天使が手を伸ばした先から聞こえた。

美しい翼を持つその天使は、翔輝を釘付けにした。目が離せない。と、天使がこちらを向いた。どうやら気づかれたらしい。

「あ、その・・・」

何て声を掛ければいいかわからず、翔輝は「あの・・・」とか「その・・・」を繰り返してしまう。

天使はじっと自分を見詰めたまま、ゆっくりと彼の前に着地した。靴がコツと音を立てて地面に着く。

そこで翔輝は初めて彼女の正体がわかった。

純白に輝く翼を背中に生やし、黒い士官用の第一種軍装を身に纏い、黒い軍帽の下には日本人離れした茶色い髪が靡く。そして、さらにその下には、何の感情も込められていない瞳。

「大鳳・・・」

それは翔輝が捜そうとしていた――大鳳だった。
大鳳はじっと自分を見詰める。光り輝く翼は今までより一層強くなって光り輝くと、光の粒子となって消えた。残ったのはさっきも見た彼女のいつもの姿。
「た、大鳳・・・？」
大鳳は驚く翔輝をじっと見詰めると、ペコリを頭を垂れた。そして踵を返して歩き去ろうとする。翔輝はそんな彼女の背中を慌てて追う。
「あ、あのさ大鳳！　ちょっと話しない？」
翔輝の言葉に大鳳はピタリと足を止めた。ゆっくりと振り向き、黒く澄み切った瞳をじっと向ける。
「あ、あの・・・」
沈黙したままじっと見詰める大鳳。やっぱりダメかを一瞬諦めが頭を過ぎった刹那、大鳳はコクリと小さくうなずいた。
「え？　いいの？」
「・・・（コクリ）」
大鳳は再度うなずくと甲板の上をトコトコと歩き、甲板の端に腰掛ける。翔輝もその後を追って「隣、いい？」と訊き、大鳳の首肯を見て座る。そこからはすぐ下に『大和』にも装備されている二五mm三連装機銃が見え、その向こうには黒い海が見える。月明かりに波間が反射し、海は昼と違った幻想的な光景が広がる。
「きれいだね・・・」
「・・・（コクリ）」
大鳳は翔輝の言葉にうなずいた。先程の宴会ではどんなに声を掛けてもうなずきもしなかった大鳳は、今はなぜかこっちをじっと見詰めている。何の感情も込もっていない瞳が、今はなぜか子犬のように純粋な瞳に見える。
「な、何か付いてる？　僕の顔に」
「・・・（フルフル）」
「じゃあどうしてじっと見てるの？」

「・・・」
これは首を振るだけじゃ答えられないからか、無視された。ただひたすらじっと見詰めて来る。なんかこっちも見ていたら自然を見詰め合う形になってしまい、慌てて視線を海の方に向ける。頬に彼女の視線を感じる。が、それは突然消えた。
「・・・これ、ありがとうございました」
「え？」
そう礼を言って見せてくれたのは、両手に包まれた先程彼女に返したハンカチだった。
「あ、いや・・・別に大鳳の方から礼を言われる理由はないけど」
翔輝の言葉に、大鳳は小さく首を横に振る。
「・・・いいえ。こうして洗濯し、しっかりと伸ばしていただき。あなたの愛情を感じます」
そう言って自分の胸の前にハンカチを当てる。そんな言葉にそんな行為をされると、なんだかこっちが照れてしまう。
「い、いや、別にたいした事じゃないよ」
翔輝は優しく微笑んだ。彼がいつも皆に向けている、とても優しげな笑顔。
大鳳はそれを見てコクリとうなずくと、海を見詰める。どうやら会話はこれで終わりらしい。
翔輝もどうしたもんかと海を見詰めていると、またも彼女の方からを声を掛けられた。
「・・・お名前は？」
「え？　あ、まだ名乗ってなかったっけ。ごめん。僕は長谷川翔輝航海大尉。戦艦『大和』の先任航海士だ」
「・・・翔輝さん」
いきなり名前の方で呼ばれた事に少なからず驚いたが、この程度では日頃トラブルメーカー達と暮らしている翔輝はそれほど驚かない。
「名前で呼ぶんだ」

「・・・ダメ、ですか？」
「いや。別に構わないよ。みんな色々な呼び方で呼んでるし」
翔輝が笑顔で答えると、大鳳は一度うなずいて再び海を見詰める。
翔輝もつられて海を見詰め、会話は終わる。どうも会話が続かない。
翔輝は何か話題を振ろうとがんばる。

「大鳳って何か好きなものある？」
「・・・（フルフル）」
撃沈。

「第三艦隊だけじゃなくて第一機動艦隊の旗艦まで務めて大変でしょ？」
「・・・（フルフル）」
爆沈。

「大和達の事どう思う？　みんないい子達だと思うけど」
「・・・（コクリ）」
轟沈。

翔輝の振った話題は全て首の動きだけで打ち返されてしまった。
恐るべき首肯攻撃。
その後も色々と話を振ったが、ものの見事に全て撃沈された。鉄底海峡のごとく沈められた話題が空しく沈む。
翔輝は今度こそピンチだった。今の彼には大鳳と話せるきっかけが全くない。全て鉄底海峡に沈められてしまったからだ。きっとこの二人の間に揺らぐ海に潜れば、そこには無惨にも海底深くに引きずり込まれた悲しき話題達が無言で沈んでいるだろう。
翔輝がもはや戦闘不能になる直前、大鳳がじっと見詰めてきた。
「ど、どうしたの大鳳？」
「・・・その名前、嫌です」

「え？」
驚く翔輝に、大鳳はじっと見詰める。その瞳はうるみ月明かりに照らされてキラキラと光る。
「・・・私は女の子。その名前は女の子っぽくなくて嫌です」
そうかなぁと翔輝は思ってしまう。しかしよく考えれば女の子の名前に《大鳳》なんて変だ。日頃自分のまわりには《大和》《武蔵》《瑞鶴》など男らしい名前の女の子がい過ぎてすっかりその辺の感覚が鈍ってしまっている。まあ、《大鳳》という名前自体は軍艦としてはかっこいいが。
「え、《大鳳》って嫌なの？」
「・・・（コクリ）」
しかしそんな事言われても困ってしまう。今さら軍上層部に名前の変更を直訴する訳にもいかないし。そもそも一介の航海士に過ぎない翔輝がそんな事をしても無駄だし、最悪軍法会議で首が飛ぶかもしれない。
そんな事を考えていると、大鳳がこっちをじっと見詰めてきているのが見えた。その瞳には疑う心が微塵も感じられない。その純粋過ぎる瞳が、今の翔輝には辛い。
「じゃ、じゃあ僕が『大鳳』のじゃなくて、君の名前を考えてあげるよ」
視線に耐えかねて口から出た言葉に大鳳は目を少し開けて驚く。だが一番驚いているのは言った本人である翔輝自身だ。
「・・・本当、ですか？」
期待するような眼差し。そんな瞳の前で今さらノーとは言えない。翔輝はうなずく。
「うん。えっと、何がいいかな・・・」
翔輝は考える。残念ながら結婚して子供がいる訳でもペットを飼っている訳でもない。二〇年近く生きているが、今だかつて何かに名前を付けた事のない翔輝はどうすればいいか困ってしまう。それでも彼女にいい名前をプレゼントすべく、腕を組んで考え込む。

そのまま五分経過。
「・・・・・・・・・・かのん」
出て来た名前は当時の日本には浸透していないような名前だった。
「・・・かのん、ですか？」
「うん。ほら、君の名前は《大鳳》じゃない。だから文字を変えて《大砲》。そしてそれを英語に変えて《Ｃａｎｎｏｎ》。それをひらがなに直して《かのん》。どうだろ？」
「・・・」
大鳳からの返事はない。あまりにも単調な決め方に呆れているのだろうか。翔輝は慌てる。
「あ、いや。別に嫌ならいいんだ！　それなら他の名前を考え――」
言い終わる前に、大鳳が翔輝の服の裾を掴んだ。ギュッと軽く引っ張られる感覚に、翔輝は自然と彼女を見詰めていた。そして彼女も・・・
「・・・かのん・・・素敵な名前、ありがとうございます」
「あ、いや、喜んでもらえて嬉しいよ」
大鳳ことかのんは、小さく微笑んだ。それは翔輝が見た彼女の最高の笑顔であった。
「・・・この名前、大事にします」
「いや、そんなたいしたものでもないけど」
「・・・（フルフル）」
大鳳はそのまま黙ってしまう。残念だが再び会話が止まってしまったらしい。
二人は再び何も言わずに沈黙してしまう。会話が続かなさ過ぎる。翔輝はすでに話題は全て鉄底海峡に沈められてしまっている。つまり彼にはこの状況を打開する力は残されていない。
翔輝はこの耐え難い沈黙をどうしたら打ち破れるか頭を抱えて模索する。と、
クイ・・・
袖が引っ張られる感触に振り向くと、大鳳がじっとこちらを見詰

めていた。キラキラと輝く瞳は心配してくれているのか、微かに揺れている。

「・・・痛いんですか？」

急に頭を抱えた翔輝を頭痛か何かを心配する大鳳。そんな彼女の純粋すぎるほどの優しさに、翔輝は嬉しくなる。

「ううん、何でもないよ。平気」

翔輝の答えに大鳳は小さくうなずく。だが、その手はしっかりと袖を掴んでいて放そうとしない。どうやらそれが気に入ったらしい。

せっかく彼女の方から声を掛けてくれたのに、翔輝はそれをうまく使えずに黙ってしまう。自分の無能さが情けなくて仕方ない。

翔輝が再び頭を抱えそうになった刹那、大鳳は突如無言で立ち上がった。

「か、かのん・・・？」

「・・・来てください。素敵な名前のお礼がしたいです」

「いや、別にお礼なんて――」

言い終わる前に、大鳳は翔輝の服の袖を掴んで引っ張る。そんな彼女に翔輝は立ち上がって歩き出す彼女について行く。細く小さい、雪のように白い腕はしっかりと自分の服の袖を掴んで放さない。

スタスタと歩く彼女に引っ張られてついて行くと、そこは艦橋の前だった。それはさっき彼女が飛んでいた場所。

「・・・手、貸してください」

「え？　あ、うん」

翔輝はそっと手を差し出す。大鳳はその手をしっかりと握り、目を閉じる。

大鳳の身体がまばゆく光り出し、その光は背中に集約されて純白の翼となる。闇を切り裂く光の翼。その神々しさに、翔輝は言葉を失う。

美しい・・・

そんな言葉が頭を過ぎった。

「・・・浮きます」

「え？」
大鳳は大きく翼を羽ばたかせ、空へ飛んだ。手を握られている翔輝もだ。だが、不思議と吊るされているという感覚は全くない。まるで自分の背中にも翼が生えたかのように浮かぶ。これも艦魂の能力か。
「その翼も、艦魂の力？」
「・・・（コクリ）」
どうやら艦魂は自由に翼を生やせるらしい。知らなかった。これは新しい艦魂のもつ《力》の使い方だ。
「・・・これです」
大鳳は空中で停止し、何かを指差した。視線を追うと、その先に何かある。暗がりの先を目を細めて見詰めると、それは鳥の巣だった。中には雛鳥が数羽鳴いている。
「鳥の巣？」
「・・・私の、宝物です」
そう言って大鳳は人差し指を差し出し、一匹の雛の頭を撫でる。撫でられた雛鳥はピヨピヨと鳴いてまるでそれが母鳥かのように身体を摺り寄せる。かわいい。
「かわいいね」
「・・・（コクリ）」
ふと翔輝は大鳳を見た。その表情は心なしか笑っているように見える。背中に生えた純白の翼と交わり、本物の天使に見える。
その慈愛に満ちた姿に、翔輝は見とれてしまう。
大鳳は今までの艦魂と何かが違った。どう言えばいいかわからない。だけど、大和達が日の光の下で輝くのなら、大鳳はその逆。月の光の下で輝く。そんな感じ。自分と同じ、夜に生きる者。
「・・・二人だけの、秘密です」
大鳳はそう言って、翔輝を見詰める。その瞳は確認しているように見える。だから、
「わかった。秘密だ」

そう答えた。大鳳はそれに小さくうなずくと、翼を再び大きく羽ばたかせる。そしてゆっくりと降下し、着地。翼は霧散した。

大鳳は手を放すと、今度は再び袖を掴む。

「・・・送って行きます」

「え？　でも・・・」

「・・・あなた一人じゃ、帰れません」

確かにそうだ。雪風と待ち合わせをしている訳でもない。失敗した。もっと先の事まで考えておくべきだった。というかそもそも脱出手段なしで突っ込むなんて無謀過ぎる。

「そ、そうだね。じゃあお願い」

「・・・（コクリ）」

大鳳は再び瞳を閉じて光り出す。まばゆい光は今度は集束する事はなく、まるで爆発のように光を広げて二人の体を包み込む。

一瞬の浮遊感の後、再び足を着くと、そこは見慣れた『大和』の甲板だった。

「ありがとう、かのん」

翔輝が礼を言うと、大鳳はペコリと頭を垂れた。お別れのあいさつなのだろう。

「・・・おやすみなさい」

「おやすみ」

大鳳は踵を返すと光に包まれて消えた。

翔輝は一人になった甲板の上で立ち尽くす。頬を撫でる海風が心地いい。

踵を返した翔輝はそのまま艦内に入る。薄暗い廊下を、翔輝は一人で歩き、暗闇の奥に消えた。

部屋に戻ると、そこには怒ったような顔をした大和といつもよりも冷たい視線を向ける武蔵、今にも泣きそうな顔をしている隼鷹がいた。

「あ、いたんだ」

「いたんだじゃないですよ！　こんな遅い時間まで帰って来ないなんてッ！」

怒る大和。どうやら勝手に消えて遅くに帰って来た翔輝に怒っているらしい。言葉の端々にある心配してくれている気持ちがある分、翔輝は罪悪感を感じる。

「ごめん。ちょっと仕事があってさ」

「・・・大鳳とどんな仕事を？」

ぎょっとした目で武蔵を見る。彼女は相変わらずの無表情。だがその瞳には明らかに冷徹な怒りが込められている。かなり怖い。

「か・・・大鳳は関係ないでしょ」

危うく《かのん》と言ってしまいそうになった。それを言えば確実にバレる。

きっと彼女達は同時期に消えた翔輝と大鳳が会っていたのではないかと疑っているらしい。本当は会っていたのだが、もし正直に言えば殺されかねない緊迫感が部屋に漂っているので、翔輝は否定した。

「本当に僕は仕事で出ただけだよ。大鳳とは会ってない」

「・・・うそ」

武蔵は無表情で言う。なぜか今回はかなりしつこい。

「うそじゃないよ。何でそんなに疑うのさ」

「・・・これが全部吐いた」

そう言って武蔵がベッドの中に手を入れる。今気づいたが、ベッドは膨らみ、ゴソゴソと揺れている。そして、

ドサッ・・・

「なぁッ！？」

「・・・ッ！・・・ッ！」

ベッドから引きずり出されて現れたのは自分を『大鳳』まで送ってくれた雪風だった。縄でグルグル巻きにされ、ご丁寧に口には猿轡（さるぐつわ）までされている。完全なる捕縛状態であった。

そして雪風は、えぐえぐと泣いている。一体何があったのかと思

ったが、すぐにわかった。
雪風が出された事によってずれた掛け布団の隙間から、なぜか乗馬用のムチが見えた。きっと本来の使い道ではない何かに使うつもりだったのだろう。その可能性に翔輝は青ざめる。
もしもう少し遅く帰って来ていたら、きっと雪風はボロボロになっていただろう。
言葉をなくす翔輝に、武蔵は淡々と説明する。
「・・・隼鷹が翔輝と雪風の密会を目撃した。そして二人はどこかへ消えた。私達は戻って来た雪風を拉致して拷問を開始した。最初は必死になって耐えていたけど、スタンガンを出したら泣きながら全部吐いた。翔輝が大鳳に会いに行ったのも、雪風が口止めされていた事も」
大和は自分の従兵である雪風をかばうような事は何も言わない。きっと彼女も武蔵側にいたのだろう。大和は無言で雪風の口を開放する。
「す、すみません・・・」
消え入りそうな声で泣きじゃくりながら謝る雪風。いや、そこまでして黙秘を続けなくても良かったんだけど・・・
「と、とにかく雪風を解放して」
「その前に正直に言ってよ。お兄ちゃんは大鳳ちゃんに会ってたの？」
隼鷹はかわいげな瞳で見詰める。だがその瞳も今は細くすぼめられて怖い。翔輝は降伏した。
「うん。確かに会ってたよ」
翔輝が認めると、三人とも少なからずショックを受けたような顔をしたが、武蔵は約束どおり雪風を解放した。えぐえぐと泣きじゃくる雪風に謝って帰すと、今度は三人と対峙する。
「大鳳と、何をしていたんですか？」
大和がいつになく冷たい声で問う。きっと彼女の心の奥の怒りは絶対零度のように冷たい炎が燃え盛っているのだろう。

「大鳳と話がしたかっただけだよ。ほら、結局歓迎会じゃまともに話せなかったでしょ？」

それは真実である。本来の目的はこれだ。もちろんだが大鳳に名前というか愛称をつけた事は黙っていた。余計ややこしくなるに決まっている。

大和は翔輝の説明にむぅと不機嫌そうに唸るが、それ以上の追求はしなかった。不満は残るが納得できたらしい。

「だったらどうして雪風に頼んだのぉ？　私とかに言ってくれれば良かったのにぃ」

「いや、お前らの誰かに頼んだら強引について来たり後をつけたりしそうだったから。ちゃんと彼女の事を知る為に二人っきりになりたいのに、それじゃ意味ないだろ？」

翔輝の言葉に、隼鷹は不満そうに唇を尖らすが、それ以上何も言わない。きっと図星を言われて反撃できずにいるのだろう。

「・・・本当にそれだけ？　何も、なかったの？」

武蔵が探るような目で見詰める。翔輝は必死に平常心を装う。彼女の事だ。大鳳に名前を付けたなんて言ったらブチギレするに決まっている。

「何もないさ。というか一体何があるって言うの？」

二人は無言で向き合う。

耐え難い沈黙。だが先程の大鳳とのやり取りのおかげか幾分かは和らいで感じる。人間の慣れとは怖い。

深い沈黙の後、武蔵は「・・・そう」とだけつぶやき背を向けた。どうやら納得してくれたらしい。聞き分けのいい子で助かった。

「じゃあもう寝ようか」

翔輝が上着を脱ぎながら言うと、隼鷹は嬉しそうにピョンピョンと跳ね回る。大和も「はい」とうなずいている。一方武蔵は翔輝が脱いだ上着を受け取って壁に掛けると、ブラシで汚れを取る。最近これが日課になっているが、奥さんみたいだなぁと毎回思ってしまう。まぁ、難点はあるにしろ、武蔵はお嫁さんに向いている。人間

だったらさぞかしいいお嫁さんになるだろう。
　そんな翔輝の考えなど知らない武蔵は黙々とブラシで撫でる。実は、武蔵は翔輝の上着の汚れを取るのも目的だが、もう一つの目的は他の女の髪が付いていないかチェックする為。幸いにも大鳳の毛はなく武蔵は安堵する。次に自分の髪の毛を見つけると、名残惜しいがきれいにする為に泣く泣く除去。大和や隼鷹の髪の毛は容赦なくゴミ箱へゴー。いいお嫁さんどころか嫉妬深い恐妻に成長する兆しが全開な武蔵だった。
　そんな武蔵の隠れた秘密など知らない翔輝は一日の疲れを癒す為にベッドに入る。するといつの間にか寝巻きに着替えた隼鷹が布団の中に入って来る。次に同じく寝巻きになった武蔵が入って来る。昔は上着を脱いだだけの堅苦しい寝方だったが、最近はこうして寝巻きを着るようになった。ちなみにここに至るまでの過程に下着姿で寝るという暴挙をしてこっ酷く武蔵は翔輝に怒られている。ちなみに下着はフリルが付いた白いキャミソールに同じくフリルの付いた白いパンティ。かわいさ爆発だが、翔輝は別の意味で爆発した。
　そして最後に大和は隣に布団を敷いて潜る。
　いまだに翔輝は大和とは寝ていない。それは武蔵や隼鷹ならまだ妹としてセーフな部分があるが、大和は完全にアウトである。そのためいつも大和は寝る時に寂しげに背中を向けてくる。それを毎回見るのは辛い。そのたびに心の中で「ごめんね」と謝る。
　隼鷹と武蔵と一緒に寝て、大和は隣で寝る。いつもと同じ、いつもの夜・・・のはずだったのだが・・・
「長谷川はぁん、夜伽に参りましたぁ」
　そう爆弾発言をして現れたのは天然系関西弁キャラという概念が定着しつつある伊勢。白い寝巻きを着てほんわかな笑みを浮かべて突如部屋に現れた。
「い、伊勢ぇッ！？」
「もう、長谷川はんいつも武蔵はんや隼鷹ばっかりずるいどす。今日はうちが一緒に寝るって決めたんやぁ」

「いや困るから！　帰って！」
「そんなつれない事言わんといてぇな」
伊勢は柔らかな笑みを浮かべたまま翔輝のベッドに侵入して来た。
しかもわざと寝巻きを少しはだけさせて。
「うちが長谷川はんを身も心も温めてあげるんやぁ」
「むむぅッ！　わ、私だって負けないもんッ！　えいッ！」
「・・・おもしろい。その勝負受けて立つ」
「み、みんなずるいよぉッ！　わ、私もぉッ！」
「ば、バカぁッ！　何してるんだよ！　大和！　お前まで入って来るなぁッ！　っていうか抱き付くな！　わざと寝巻きをはだけさせるな！　隼鷹は意味もわからずにマネするな！　伊勢は冗談じゃ済まないって！　頼むから僕に安眠をくれぇッ！」
四人の美少女に抱き付かれるという全国の男達を敵に回しそうな状況にいる翔輝。だが彼はこの状況を楽しむような男ではなく、必死に脱出しようとして空しく少女達の中に沈む。
結局、長門が騒ぎを聞きつけて来るまで、翔輝はある意味死闘を繰り広げた。ちなみに途中で雪風まで混ざって来たが、一番顔が真っ赤だったのである意味一番対処に困ってしまった。
そんな、いつもと違っても結局いつもと同じ夜。
大鳳は防空指揮所にいた。
満月の明るい光に照らされながら、大鳳はぼーっと星空を見上げる。
「・・・翔輝さん・・・かのん・・・」
その二つの単語を先程から一分間隔くらいで繰り返している。
今日あった様々な出来事を思い出し、大鳳は無表情キャラに慣れている翔輝でもわかりづらいようなわずかな笑みを浮かべる。
そして、月光煌く夜に、少女は純白の翼を羽ばたかせ、天使になった。

第十章　第十三節　彼の袖を掴むと・・・（後書き）

新キャラ大鳳は翔輝と急接近。愛称までつけられてもう大和達は不安でいっぱい。
これからマリアナ沖海戦までこんな感じで突っ走ります。
えっと、大鳳のキャラ設定は次の時に書きます。今回の話でようやく大鳳のキャラが大まかに出ましたので。

さらにお気づきの方も多いと思いますが、先日この《艦魂年代史～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義》の背景を白に変更。さらに目次背景も『大和』の写真に切り替えました。これでより一層戦争作品のレベルが上がったと思います。
まぁ、実際は最近戦争小説というか恋愛小説になってきてますし、舞台はこの『大和』のはずなのに、最近はそれが感じられないなぁ・・・
それはさておき、次回作に乞うご期待！

第十章　第十四節　翔輝を取り巻く新たな波乱（前書き）

《大鳳（たいほう）》
大鳳型航空母艦一番艦――空母『大鳳』
愛称　かのん
出身　川崎重工業神戸造船所（兵庫県）
身長　１４５ｃｍ
髪型　ボブカット（茶髪）
実年齢（１９４４年３月現在）０歳
外見年齢　１０、１１歳
誕生日　３月７日
家族構成　なし
好きなもの　翔輝・翔輝の服の袖・平和・月・星空
嫌いなもの　特になし

日本海軍の空母技術の粋を結集させた最新鋭空母。ミッドウェー海戦以降の空母の急降下爆撃に対する弱さを飛行甲板に五〇〇キロ爆弾にも耐えうる強力な装甲を施して改善した装甲空母と呼ばれる艦種。飛鷹型と同じ巨大な艦橋と煙突が一体化した島型艦橋を持ち、現代空母のような飛行甲板と艦首が一体化したハリケーン・バウを持つ。そのすさまじい防御力から《不沈空母》と称される日本海軍最後の切り札。ただし防御力を上げた為に搭載機数が六一機と翔鶴型よりも二〇機以上少ないが、それでも日本海軍が決戦兵力として誕生させた日本海軍最強の空母であり、第三艦隊（小沢機動部隊）・第一機動艦隊（決戦艦隊）旗艦を務める。そんな『大鳳』の艦魂は年の頃は十歳くらいにしか見えない小さな女の子。あまり表情が顔に出ず口数も日本艦魂一、二を争うほどの少なさ。そして一番の特徴は日本人離れした茶色い髪。金剛曰く《不吉な兆し》。大鳳は同じ無表情無口キャラの武蔵と違い強引な行動や自己中心的な考え方はない無害な子。同じ第三艦隊に属する翔鶴や瑞鶴などにもあまり

接しようとせず、いつも一人で行動している。そんな大鳳は翔輝の優しさに触れて彼にだけは少し心を開いている。《大鳳》という女の子っぽくない自分の名前が嫌で、翔輝に名づけてもらった《かのん》という名前が気に入っている。今現在この名で呼ぶのは翔輝だけ。由来は《大鳳》→《大砲》→《ｃａｎｎｏｎ》→《かのん》である。翔輝の事を信頼していて、最近は翔輝のまわりにいる事が多い。彼の袖を掴むと安心するのかいつも掴んでいる。その感情の真の意味にはまだ気づいていない。天使のような光り輝く純白の翼を艦魂の力で生やして空を飛ぶ（ただし艦魂は一定の距離以上自艦からは離れられないからその範囲内）。マストにある鳥の巣の雛鳥を大切にしていて成長するのを楽しみにしているかわいい一面も持つ。艦魂としての自分ではなく、普通の女の子を夢見ている。自分に所属する刹那とは多少の会話をする仲。

第十章　第十四節　翔輝を取り巻く新たな波乱

翌日、翔輝は昼休みの時間を利用して艦魂達の会議が行われている第三会議室に向かった。その途中水上が後輩達を指導している所を会った。すっかり先輩が似合うようになった水上に激励を送り、翔輝は目的地を目指す。

そして、いつも見慣れた部屋をノックしてドアを開くと、そこにはいつもの光景が広がっていた。

指揮棒で海図を示しながら何かを説明していた武蔵は翔輝の登場に口を閉じた。まわりの皆の視線も翔輝に注がれる。

「あれ、邪魔しちゃった？」

「テメェッ！　また邪魔しに来たのかぁッ！」

榛名が椅子を蹴り倒して立ち上がった。ポニーテールを炎のように揺らして激怒する。どうやらかなりまずいタイミングに来てしまったらしい。無言でこっちを睨む金剛の視線には軽い殺意が込められている気がする。

「す、すみませんでしたぁ・・・」

「ちょっと待ってください！　別に邪魔じゃないですよッ！」

退出しようとした翔輝を慌てて大和が止める。閉め切る前にドアの淵を掴まれ、閉鎖を止められる。逃げる手段を失った。

「大尉！　いい所に来ました！　これからみんなでお昼を食べようと思ってたんですよ！」

「そうなの？」

「何をバカな事をぉッ！　さっさと会議を――もごぉッ！？」

「あらあら、金剛ったらもうお腹ペコペコなのねぇ。じゃあお昼にしましょうか」

長門が暴れる金剛の口を塞いでにこやかな笑みを浮かべる。場の空気からして大和の言葉は確実にうそだが、その笑顔には昼食を一緒に摂るという強制の意が込められている。あの笑みは逆らわない

方がいい。
「じゃあッ！　食堂から大尉の分の昼食を持って来ますね！」
大和は翔輝が止める間もなく消え、十秒後には戻って来た。その手にはしっかりと今日の昼食であるカレーライスが握られていた。
海軍の伝統である海軍カレー。本来はインド原産のカレーだが、イギリス海軍はこのカレーに目をつけてパンと組み合わせて食事をするようになった。そしてイギリス海軍式の組織である日本海軍もまたカレーを導入した。最初はパンに合うようにカレーが作られていたのでカレーとパンだったが、パンでは食べた気がしないと兵達から批判が噴出し、試行錯誤の末にとろみをつけさせて白米と合うように改良された。これが海軍カレーであり、後の日本家庭に並ぶ日本式カレーの原型となった。
香ばしいスパイスに匂いに、翔輝は空腹だった事を思い出す。そんな彼の反応に大和は嬉しそうにうなずく。
「では昼食ターイムッ！」
長門の号令で大和は力を発動する。艦魂の能力の一つ、具現化である。艦魂は自艦でしか能力が使えないので、当番は毎回大和になっている。
白いテーブルクロスの上には前菜だろうか、スープが置かれている。
翔輝は大和に「さぁここへ！」と引っ張られて抵抗できずに座る。刹那、音速の戦いが起きた。
素早い視線の撃ち合い。縮み切った筋力を一斉に解放し、大和達が飛んだ。
一番近場にいた大和が翔輝の右隣の席へ。次に反応の早かった武蔵が左隣へ。正面の椅子には一番近かった隼鷹が座り、伊勢はその隣に腰掛ける。この間わずか〇・七秒。
翔輝を取り囲むように座った翔輝派の艦魂達。もはや神業的な速さだ。
長門は苦笑いして適当な席に座る。他の艦魂達もだ。あれだけギ

ャーギャー言っていた金剛と榛名も時計が十二時を回っているのに気づくと意外と呆気なく席に着いた。軍人とは時間に厳しいもの。それは昼食も同じだ。

翔鶴と瑞鶴、飛鷹もそれぞれ座る。視線に気づいて向くと、二人の隣に座った龍鳳がこちらを不安そうに見詰めていた。男性恐怖症の彼女には自分の存在自体が怖いらしい。少なからずショック。

ふと気づいた。そんな空母達の面々の中に昨晩会った少女の姿がない。不思議に思って訊こうとしたら、部屋の中の異常な空気に口を閉じた。いつの間にかドアの前には雪風が立ってしきりに部屋の中と外を見比べる。何なのだろうか。

その時、みなの視線が一ヶ所に集中しているのに気づいた。視線を追うと、それは隣に座る武蔵に注がれていた。

武蔵は無言でスプーンを手に取り、上品に音を立てずに皿に注がれたスープにスプーンを沈め、スプーンに入ったスープを口に含んだ。刹那、雪風が素早く手を上げた。すると、どこからか柔らかな音色の演奏が聞こえて来た。続いて大和達もそれぞれ食事を開始する。一体今のは何だったのか。戸惑う翔鶴に、武蔵がそっと説明する。

「・・・司令部の将校達は司令長官が食事を開始するまで食事はできない。そして、司令長官が料理に口をした瞬間、すぐさま待機している軍楽隊がＢＧＭを流す。これが海軍のトップに君臨する連合艦隊司令長官の食事。もっとも、これは山本元帥までで終わってしまったけど。私達艦魂はそれを習ってこのように食事をしている」

武蔵はそう説明するとスープを飲む。

なるほど、いつもは礼儀なんて知らなそうな振る舞いをしているのに、こういう時は律儀に作法を守っているらしい。感心する。

翔輝も食事を開始する。と、

「あ、大尉は関係者じゃないので普通に食して結構です。金剛さんもそれくらいは目をつむってくれますよ」

大和は笑顔でそう言った。何が大丈夫なのかと訊くまでもなかっ

た。
　皆スープを飲んでいるのだが、誰一人音を立てていない。まるで貴族のような食事の仕方だ。大和はきっと翔輝が一般人だからそんな高等技法ができない事を考慮してくれたのだろう。だが、残念だがその心配はご無用だった。
　翔輝はカレーの中にスプーンを入れて持ち上げ、口に含む。その間音は全く発生していない。これにはまわりの皆も目を見開いて驚いている。かなり意外だったのだろう。
「長谷川はん、上品に食べるんやなぁ」
　伊勢が食事の手を止めて驚いたような声を上げる。そんな彼女に、翔輝は苦笑いする。
「あははは、たいした事じゃないよ。ほら、僕の幼なじみって貴族でしょ？　色々と仕込まされたんだよ。前にも話したでしょ？」
　そういえば、と大和達は思い出す。
　翔輝の幼なじみである瑠璃は翔輝を未来の夫とする為、どこへ出しても恥ずかしくないように貴族の作法などを徹底的に叩き込んだのだ。皮肉にも、嫌々やっていたあの訓練がまさかこんな所で役に立つとは、世の中わからないものだ。
　そんな上品に食事をする（食べている物は思いっ切り庶民的な物だが）翔輝を、うっとりとした目で見詰める大和達。彼女達の心の中では《これが私の未来の旦那かぁ》と、それぞれすでに結婚確定していた。なんとも迷惑な話だ。
　そんなこんなで食事を再開させる大和達だが、翔輝はすっかり忘れていた事を思い出して慌てて翔鶴に問う。
「あ、あのさ翔鶴。大鳳はいないの？」
「うん？　大鳳か。あいつなら今頃自艦で書類仕事でもしているだろう」
　翔鶴の意外な返答に翔輝は驚く。
「え、だってあいつは一艦隊の旗艦だろ？　ここに来なくていいの？」

「まぁ、あいつはこの極上幹部会に属している訳ではないしな。それにあいつはあまり人前に出たがらないからな。こういうみんなでいる事に抵抗があるのだろう」
翔鶴は気にした様子もなくパンを食べる。どうやら彼女がまだ旗艦だった頃もそんな感じだったのだろう。
「そっか・・・」とつぶやき、翔輝は視線を落とす。そんな彼をどこか不機嫌そうな顔で見詰める大和。
「そんなに大鳳が気になるんですか？」
「え？　いや、そんな事はないけど・・・」
大和はじーっと翔輝を見詰める。その瞳には疑惑の念が込められている。「本当ですかぁ？」という言葉がいつ口から出てもおかしくない。その前に先手を取る。
「本当だよ。ただ昨晩会っただけあって今日いないのが気になるだけだよ」
「うん？　長谷川お前、昨晩大鳳と会ったのか？」
「うん。昨日は結局歓迎会では何もしゃべれなかったけど、そこでは何とか」
そう言って微笑む翔輝に、翔鶴はどこか複雑そうな顔をして「そうか」とだけ小さくつぶやく。そんな姉の姿に瑞鶴は首を傾げる。
「どうしたの？」
「いや、やはり長谷川に任せて正解だったなぁと思ってな」
「そうだね。なんだかんだ言っても結局話ができたみたいだし、長谷川大尉の人の心の扉を開ける才能は右に出る者はいないね」
「まぁ、そうなのだが。こうも簡単にいくとなぁ・・・」
「なぁに？　長谷川大尉のまわりまた敵が増えて困ってるのかなぁ？」
ニヤニヤと笑う瑞鶴の首元に、翔鶴は無言でナイフを突きつける。たったそれだけで、瑞鶴の顔からサーッと血の気が引く。
翔鶴は恐ろしく低い声で言う。
「斬るぞ」

「ごめんなさい！　本当の本当にごめんなさい！」
泣きながら謝る瑞鶴と食事中に血を見たくない者代表の飛鷹の仲裁でなんとかその場は治まった。ケガ人が出なくて本当に良かった。
翔輝は大鳳のあの小さな笑顔を思い出す。確かにあまり人と接する子ではないが、みんな一緒の方が楽しいに決まっている。
「じゃあ、後で会いに行くか」
「その必要はないみたいよ」
突如長門が言った言葉に「え？」と驚くと、長門はそれそれと言いたげに指を挿す。その先を視線で追うと、
クイ・・・
袖を引かれる感触。そして振り返ると、そこにはぼーっとした顔でこっちを見詰める大鳳が至近距離にいた。いつの間に・・・
「た、大鳳？」
驚く翔輝に、大鳳はじっと見詰める。よく見ると、先程までぼーっとしていた瞳が、なぜか今は強い意志を感じる。
まわりでは大和達が驚きの声を上げ、武蔵が警戒心むき出しで睨みつける。そんな中、大鳳はじっと翔輝を見詰め、クイクイと袖を引く。
「・・・かのん」
静かに小さな声で言ったのは、翔輝が名づけた彼女の名前だった。きっとそれで呼べと言いたいのだろう。だが、今はまずい。というかそもそもあれは第三者のいる時には封印してほしいのだが。
「あ、あのさ大鳳。大和達がいる前では――」
「・・・かのん」
「いや、だから大和達の前では――」
「・・・かのん」
言い終わる前に大鳳は全てピシャリと封鎖して自分の言葉を向ける。どうやらその名前がかなり気に入っているらしい。そして、どうしてもその名前で呼んで欲しいらしい。
翔輝は苦渋の決断を迫られた。

彼女を傷つけて自分の保身に走るか。
彼女を幸せにして自分が死ぬか。
なんだ。答えは簡単じゃないか。
翔輝はスッキリとした頭で決断を下すと、満面の笑顔を大鳳に向ける。
「おう。昨日はちゃんと眠れたか――かのん」
ピシッと、早速部屋の空気に亀裂が走った。予想通りだ。そしてやっと《かのん》と呼ばれた大鳳は、
「・・・（コクリ）」
「そっか、良かった」
翔輝は優しく微笑む。そして大鳳もじっとそんな彼を見詰める。
そんな見詰め合う二人に呆然とするのは大和達。特に翔鶴達機動部隊の艦魂達は皆目の前の光景の驚愕的光景に目を疑う。
「ま、まさかあの大鳳が・・・」
「さ、さすが長谷川だ・・・奴は女に対しては国士無双だな」
瑞鶴と翔鶴は呆れ半分感心半分といった感じで優しげな笑みを浮かべる翔輝と決して自分達には心開かなかった大鳳を見詰める。
一方、大和達は別の意味で呆然としていた。
昨日は翔輝なんか眼中にないといった感じの態度をとっていた大鳳が、今目の前では翔輝をじっと見詰めて視線を放さない。翔輝もそんな彼女に優しく微笑んでいる。信じられない光景だ。
そして、一番のショックは・・・
「かのんもカレー食べる？」
翔輝は大鳳を呼ぶ時、《かのん》と呼んでいる。《大鳳》とではなく《かのん》と。それは今まで自分達には絶対になかった愛称。
それが今大鳳には使われている。
うらやましくて、悔しくて、色々な感情が胸の中で渦巻く。
「大尉。これは一体どういう事ですか？」
自分でも驚くくらい冷たい声。まるで一切の感情が含まれていないかのよう。胸の中で渦巻く感情は、言葉にはできないという事だ

ろうか。
　大和の絶対零度のような冷たい声に、翔輝はビクリと震える。背後から、殺気のようなものを感じる。振り返ると、そこには感情を殺した無表情の大和が立っていた。
「や、大和・・・？」
「詳しいご説明を聞きたいです。いえ――聞いてあげます」
　大和の背後からはいつも激怒する時に出る紅蓮の炎はなく、絶対零度のブリザードが吹き荒れている。
　いつもより、怖い気がします・・・
「・・・翔輝」
　そこへ救いの女神が現れた！
「武蔵！　ちょっと助け――ねぇ、何でバズーカ砲を構えてるの？」
「・・・違う。これは陸軍が採用した最新鋭噴進砲、四式二〇糎噴進砲」
「何でお前がそんなもの持ってるんだよッ！？　何でそんなものを構えてるんだよッ！？」
　頭を抱える翔輝を無視し、武蔵はその巨大な二〇〇ｍｍ（実際は二〇三ｍｍ）の銃口を――大鳳に向ける。
「ちょっと待てぇッ！」
　翔輝が慌ててその斜線上に入って大鳳の前に立つ。と、武蔵は慌ててその銃口を下げる。翔輝に武器を向けるなんて、彼女にはできないのだ。
「・・・翔輝。どいて」
「どける訳ないでしょッ！？　ほら、早くそんな危ない物はしまって！」
　翔輝に怒鳴られ、武蔵は渋々服の中にしまう。一体あの軍服の中はどんな状態なのだろうかと思いながら、消えていく噴進砲にため息する。
　袖を引っ張られる感触に振り返ると、背後にいた大鳳が翔輝にピッタリとくっ付いて袖を引いている。どうやら大和や武蔵に恐怖を

抱いているらしい。小さな身体が小刻みに震えている。
「大丈夫か？　ほら、お前らのいせい――ぬおッ！？」
再び前を向くと、そこには武装小隊が全火力を向けていた。
武蔵は右手に先程の噴進砲を左手には軍刀を構え、大和は九七式自動砲を、伊勢は一式軽機関銃、隼鷹は使い方がわかっているのだろうか、八九式重擲弾筒を構えている。誰かの号令があれば一斉掃射できる構えだ。翔輝の顔からさーっと血の気が引く。
「そんなものどっから出したんだよッ！？」
ここは『大和』だ。艦魂の力が使えるのは大和だけ。という事は大和が出したのだろうか？　いや、それはたぶんない。大和は陸軍の装備品なんて知るはずがない。翔輝だって陸軍の友人がいるからこそどんな武器かは何となくわかるだけなのに。
翔輝の謎は、意外にもあっさりと解決した。
「・・・雪風。あなたにはこの九九式長小銃がおすすめ」
「い、いえ！　私はそんな――」
「お前かぁッ！」
あっさりと犯人はわかったが、着剣したその全長は一六四・二ｃｍにもなる。武蔵の身長よりも二〇センチ近く高い。そんなものを一体どこから出したかのかは永遠の不思議だ。
「・・・撃ち方用意」
「待てええぇぇぇッ！」
一斉に引き金に指を掛けた大和達に怒鳴る。だが、翔輝が怒っても誰も狙いは正確に――大鳳を狙っている。
「やめろッ！」
翔輝が慌てて大鳳を背後に隠す。これで彼女を撃ち抜くには翔輝ごと貫通させなくてはならない。さすがの大和達も翔輝の身体をぶち抜く訳にはいかないので銃を下ろした。
「・・・隼鷹。擲弾筒撃ち方用意」
「え？　これを引くの？」
「待てぇッ！」

擲弾筒とはいわゆるグレネードランチャーの事。敵陣地攻撃用の兵器で、放物線を描いて飛ぶので翔輝は貫通せずに後方にいる大鳳だけを――

「やめろぉッ！　熟練の射手ならともかく撃ち方もわかってないような隼鷹にそんな物を任せるなぁッ！」

翔輝の激昂に、さすがの武蔵もこれ以上はまずいと撃ち方止めの命令を下す。

翔輝は疲れたようにため息する。大和達と関わるとなぜこんなに疲れるのだろうか。

スッと後ろから大鳳の手が伸びて、翔輝の額をハンカチで拭った。驚く翔輝を、大鳳は無表情で見詰めるが、額や頬を拭う彼女の手はとても優しい。

「あ、ありがとう」

「・・・（フルフル）」

礼はいらないという事だろうか。優しい大鳳に、翔輝は自然と微笑む。

「・・・撃ち方用意」

「やめろっつーのッ！」

翔輝はそう怒鳴ると踵を返し、

「行くよかのん！」

「・・・（コクリ）」

翔輝は大鳳を連れて出て行ってしまった。これには大和や武蔵は大慌て。

「た、大尉！　どこへ行かれるんですかぁッ！？」

「・・・翔輝！　ダメ！　帰って来てぇッ！」

後ろから大和達の悲鳴に近い声が聞こえたが、無視した。

翔輝は怒りながら足早に部屋から遠ざかる。そんな彼の袖を、大鳳はそっと掴んでいた。

大鳳の登場から数日、状況は翔輝連合の最悪の予想通りに進行し

ていた。
「かのん。これそっちに持ってって」
「・・・（コクリ）」
航海室で翔輝と大鳳は整理をしていた。海図や航海日誌、測定器など様々な物が置かれた部屋はそれなりの広さがあるはずなのに狭苦しい印象を受ける。
大鳳は脚立に上って海図が満載された箱を棚の上に載せる。ここが『大鳳』なら艦魂の力でなんとかなるが、いかんせんここは『大和』。彼女は力を使えないのでこうして自分の力でやるしかない。
「気をつけてね」
「・・・（コクリ）」
大鳳は小さな身体で大きな箱を棚の上に載せる。これで終わりだ。
が、
「・・・！？」
「かのん！」
突如大鳳はバランスを崩した。だが脚立から落ちる寸前、床の彼女の間に入り込んだ翔輝がクッションとなり、大鳳にケガはなかった。
「・・・！　翔輝さん！？」
身体にあまり痛みがなく、自分の下に何か温かいものがあると気づき、大鳳が下を見ると、そこにはうつぶせで倒れて下敷きにされている翔輝がいた。
「いたたた・・・ケガはない？」
翔輝が笑顔で言うと、大鳳はおろおろとする。
「・・・平気、ですか？」
「うん。なんとかね」
翔輝の無事を確認し、大鳳は胸をなで下ろす。薄い表情にはまだ不安が残っている。
「・・・良かった」
「あはは、心配してくれてありがとう」

「・・・（フルフル）」
頬をほんのりと赤らめながら首を横に振る大鳳に翔輝は優しく微笑む。
「かのんって本当にえらいよね」
「・・・（フルフル）」
翔輝にほめられ、大鳳は微妙に頬の赤みを増す。そんな彼女に翔輝は微笑む。
「本当にえらいよ。大和なんかあんまり手伝ってくれないし、強情だし、頑固だし。武蔵は僕の頼みは何でも聞いてくれるけど、暴走する事が多いし。本当に君みたいな子がいると助かるよ。かのん」
「・・・ありがとうございます」
大鳳はうつむいたまま小さな声で言った。
翔輝はそんなかわいい反応をする大鳳を見て微笑んだ。本当にいい子だ。
「悪かったですね。強情で頑固で」
「え？――って大和！？　それにみんな・・・」
振り返ると、そこには大和以下武蔵、長門、伊勢、山城、榛名、隼鷹、雪風の八人がいた。その時、隅の方にいた武蔵がなぜか悲しい目で見ているのに気づいた。
「む、武蔵？」
「・・・ごめん。暴走して」
どうやら先程の会話で少なからず傷ついているらしい。
「いや、さっきのはその・・・」
「おい長谷川。テメェ何大鳳とイチャイチャしてんだ」
榛名がこめかみに青筋を立てて言う。その構えはいつでも突貫可能だ。
「べ、別にイチャイチャしてなんかいないよ」
「けッ、信用できるか」
榛名は不機嫌そうに言い放つ。それに対し翔輝も彼女の理不尽な態度に不機嫌そうに彼女を睨み付ける。そんな二人を見て長門はた

め息する。
「まったく、ケンカするほど仲がいいって言うけど、あんた達仲良すぎよ」
「違いますよ！」
「誰がこんなガキなんかと！」
二人は一度見合うと、ぷいと互いに反対方向を向いた。そんな二人を見て長門は苦笑いする。
「はいはい。もうそれくらいにして。それより長谷川君。こんな所で何やってるの？　また航海室の整理？」
「あ、はい」
「あなたもう通常航海士じゃなくて先任航海士なのよ？　何でそんな雑用をやってるのよ？」
「いやぁ、航海長が新入りをいじるより僕をいじった方が楽しいとか言って雑用を任してくるんで」
翔輝の言葉に長門は呆れたように苦笑いする。
「大変そうね」
「まぁ、でも僕結構雑用とか好きなんで」
翔輝はそう言うと、再び書類の整理に戻る。すると、そんな彼の袖をちょこんと大鳳が掴む。手に持っている荷物をクイクイと動かす。これはどこに置くのか聞いているのだ。
「あ、これはあの棚の上に置いて」
「・・・（コクリ）」
大鳳も手伝いに戻る。二人はテキパキと作業を再開する。そんないつの間にかすごく仲が良くなった二人を見て大和達は、
「大鳳一人に得点を上げられては困ります！」
「・・・同感」
「うちもがんばるぅッ！」
「お兄ちゃん！　私もお手伝いするぅッ！」
「大尉。わ、私にも手伝わせてください」
大和、武蔵、伊勢、隼鷹、雪風の五人が加勢に入る。残ったのは

長門に山城。そして榛名の三人。
「ねぇ山城。私達も手伝っちゃおうよ」
「わかった」
長門と山城も加わり、賑やかに整理を始める一同を見詰める残された榛名。その顔は不機嫌そうにゆがんでいる。
「俺は手伝わねぇからな」
そう言ってスタスタと立ち去ってしまった。
結局、計九人での大仕事になってしまったが、翔輝は終始笑顔だった。そんな彼の横で、ずっと彼の袖を掴みながら整理をする大鳳は、わずかに表情を綻ばせていた。

その夜、会議室では久しぶりの宴会を開いていた。最近は敗戦の色が濃くなってのん気に騒ぐ事もできなかったので皆は盛り上がっていた。
艦魂達が飲んで歌えの大騒ぎをしている中、一部の艦魂達が殺気を体中からみなぎらせていた。その鋭さは刃のごとく。その原因は・・・
「さぁ翔輝様。もう一杯いかかですか？」
「え？　あ、うん。ありがとう」
瑠璃にお酌（酒ではなくてラムネだが）をされ、恥ずかしそうながらもそれに答える翔輝。その幸せな雰囲気は新婚生活のごとく。だが、それが気に入らない者は大勢いる。その筆頭が、
「おい瑠璃！　テメェまた『大和』に乗り込んできやがったのか！」
榛名は怒鳴り声を上げる。それに呼応して大和達も文句を言い放つが、瑠璃は気にした様子もなく翔輝に抱き付く。刹那、殺気がパワーアップ。
「翔輝様との幸せな雰囲気をあなた方ごときに破壊されたくありませんわ」
「うるさい！　テメェはすっこんでろ！」
「うるさいですわよ。そんな意味不明な事ばかりおっしゃる口は生

ゴミの日に捨てるべきですわ」
「んだとゴラッ！　やんのか！？」
「お下品ですわ」
瑠璃を殴り殺そうとする榛名を翔輝が慌てて止める。
「榛名！　落ち着いてよ！」
「どけ長谷川！　一発でいいからあいつを殴らせろ！」
「ダメだってば！　ごめん！　本人に代わって僕が謝るからさ！」
翔輝の必死な声に、榛名は苦虫を噛み潰したような顔だが一応納得し、武力衝突は避けられた。
翔輝はため息する。すると隣にいた瑪瑙が小さく笑った。
「相変わらずのようだな。翔輝も大変だ」
「まぁ、慣れたとはいえこう毎日だと疲れるよ」
瑪瑙は翔輝の言葉に優しげに微笑むと、そっと彼の頭を撫でる。
翔輝もそれを嬉しそうに受け入れる。なんとも幸せそうな雰囲気に大和達は敗北を認めるしかなかった。
「うぅ、瑪瑙さんはずるいですぅ」
「翔輝は、弟は誰にも渡さない。翔輝をこの私から奪いたければ私を倒してからよ」
真剣な表情で言う瑪瑙。そこには微塵の隙もない。横に置かれた刀をいつでも引き抜けるように配置している。侮れない相手だ。
「それより珊瑚が風邪を引いたって本当？」
翔輝は今日は病欠で来れない珊瑚を心配そうに訊く。
「まぁね。でもたいした事じゃない。もう熱もずいぶん下がってたし。でもまだ身体はよく動かないみたい」
「そっか・・・」
「あと珊瑚から伝言があるけど、聞く？」
「え？　う、うん」
「『風邪が治ったらドロップキックでぶっ飛ばすから！』だって」
「姉さん。悪いけど珊瑚に大量の下剤を呑ませておいて」
翔輝は迫り来る恐怖にため息した。相変わらず変わりない幼なじ

みに嬉しくもあるが悲しくもある。もう少し彼女にも大人になって欲しい。特に精神部分を。

そんな平凡な一日。何事もなく進む・・・なんて彼のまわりではそうない事。

クイッ・・と袖を引かれる感触に振り返ると、そこには無表情で自分をじっと見詰める大鳳が。

「あ、かのん。どうしたの？」

「・・・」

大鳳は返事はせずにそのまま袖を掴み続ける。その目には優しげな光が灯っている。

「・・・疲れてませんか？」

小さな声で大鳳は言った。それは隣にいた翔輝にしかわからないくらい小さな声。そんな純粋な瞳を持つ彼女に翔輝は努めて明るい笑みをする。

「ううん。心配しないで」

大鳳は無言で袖を引っ張る。彼女は心の底から心配してくれている。そんな彼女の純粋さに翔輝は嬉しくなってしまう。が、

「翔輝様？　その方はどなたですの？」

瑠璃の目が細くなり、大鳳を見詰める。その目は獲物を狙う虎のような凶悪な目である。そのあまりの迫力に大和達も何も言えない。目標の隣にいる翔輝ですら顔が引きつるほど恐ろしいのだ。睨まれている大鳳の恐怖は計り知れない。事実、大鳳は翔輝の後ろに隠れて身体を震わせていた。

「・・・怖いです。妖気を感じます」

殺気はわかるが妖気まで感じるとは、瑠璃は本当に人間なのだろうか？

「何やらまた新キャラが現れたと、私の第六感が告げているんですけど」

女の感というものは恐ろしいものだ。電波探知機（レーダー）なんかよりずっと高性能だ。

このままでは大鳳の命が危うい。翔輝は慌てて瑠璃を止めに入る。
「瑠璃。そんな怖い目をしないでよ。この子は日本機動部隊期待の新生・現機動部隊旗艦を務めている空母『大鳳』の艦魂だよ」
「『大鳳』というと、最新鋭の装甲空母のですの？」
「うん――知ってるんだ」
翔輝がもはや驚く事もなく力なく言うと、瑠璃は機嫌良く小さな胸を張る。
「当然ですわ。空母『大鳳』に関する情報はもうとっくに霞家の諜報機関が捕捉していましたわ」
相変わらず謎の情報網を駆使して多種多様な情報を集めているらしい。そういえば情報収集と言えば武蔵も一体どんな情報網を持っているか不思議である。
だが、場の空気はいい方向変わった。翔輝にほめられた瑠璃はとても上機嫌だった。これを利用して翔輝は話を進める。
「かのん。紹介するよ。彼女は霞瑠璃。僕の幼なじみで日本でも指折りの裕福な貴族である霞家の一人娘なんだ。そしてこっちがその分家のお嬢様の霞瑪瑙。」
翔輝の紹介に、大鳳はじっと瑠璃と瑪瑙を見詰めたが、ふと翔輝の袖を引っ張る。
「・・・翔輝さんも貴族の方ですか？」
「いや、ごく一般的な庶民の家だけど」
大鳳は小首を傾げる。そりゃ誰だって首は傾げるだろう。翔輝はため息してもう何度言ったかわからない事を簡略化して言う。
「長谷川家と霞家はちょっとした仲なんだ。もう結構何度も説明してるからもう一度言うのはだるいんで、そういう事だと思ってくれ」
「・・・手抜きですか」
「まぁ、そんなに重要な事じゃないさ」
「十分重要な事ですわ」
翔輝の発言に瑠璃は否定を入れが、翔輝は笑ってごまかす。瑠璃はまだ何か言いたさそうだったが仕方なくといった感じで浮いてい

た腰を下ろした。
　気を取り直して宴会を再開する。
　組み合わせは長門、扶桑の年長組と大和達翔輝連合、隼鷹を除く空母達、金剛と山城は一人で酒を飲んでいる。他には巡洋艦や駆逐艦などの連合が宴会を楽しんでいる。
　翔輝にぴったりとくっ付いている瑠璃は大和達から反感を買ったが、瑠璃は毛筋ほども感じていない。そんな臨戦態勢な状況の中、翔輝は必死に火消し作業に追われていた。そんな大変な翔輝を見詰め、大鳳は不安そうに彼の袖を引っ張る。
「・・・大丈夫ですか？」
「うん。慣れてるし」
　大鳳は無言でラムネを差し出す。これでも飲んで一休みしてと言いたいのだろう。翔輝は「ありがとう」と言ってそれを受け取って飲む。そんな彼を見詰め、大鳳は誰にもわからないくらい小さく微笑んで彼の袖を掴んだ。
　そんなどこか幸せそうな二人を見て瑠璃は明らかに不機嫌そうになる。
「翔輝様。今日は私がいるのですから、私を構ってほしいですわ」
「あ、うん」
　瑠璃はそう言うと翔輝に抱き付く。翔輝は慌てるが、瑠璃はとても幸せそうな表情を浮かべている。さらに瑪瑙まで後ろから彼を抱き締める。これには翔輝はもう大慌て。だが、そんな独占行為を他の者が許す訳もなく、
「瑠璃さん！　大尉から離れてください！」
「クソガキッ！　テメェは本当に死にたいらしいなッ！」
「むーッ！　お兄ちゃんから離れてよぉッ！」
　特にこの三人が激怒する。しかしなぜか瑪瑙には一切攻撃がなく瑠璃に集中する。きっと瑠璃の感情は危険因子だが、瑪瑙の感情は姉弟愛か何かを判断しているのだろう。実際はどうだかわからないが。だがそんな彼女達に瑠璃は余裕満々な表情で、

「何ですの？」と返す。
「『何ですの？』じゃねぇよッ！　テメェは今すぐに長谷川から離ろッ！」
「あら、思想相愛な二人を引き離すつもりですの？」
「テメェの妄言なんか聞きたくねぇッ！」
「あら、妄言だなんてぇ。事実を言っているだけですのよ？」
「テメェはそうでも長谷川にんな気持ちはねぇよッ！」
「そうですの？」
「え、あ、その・・・」
瑠璃はうるうるした目が翔輝の瞳を捉える。その上目遣いな行動は翔輝の行動を制限する。
「その、えっと・・・」
「テメェもしゃきっとしろッ！」
榛名がどこからか取り出したハリセンで翔輝の頭をぶった叩く。
「大尉！　瑠璃さんに言ってください！　そんな事をされても迷惑なんですと！」
「む、無理だよぉ・・・ッ！」
十数年間こうした関係だったのを、急に変えろと言うのは無理だ。ましてや瑠璃の瞳がそれを許さない。
「翔輝様・・・」
「そんな悲しげな瞳をしないでよッ！」
「翔輝・・・」
「何で瑪瑙姉さんまでそんな瞳をするのッ！？」
もうツッコミ全開の翔輝をむぅと膨らんだ顔で見詰める隼鷹。
「お兄ちゃんに抱き付いていいのは私だけだもん！」
隼鷹は後ろから翔輝に抱き付く。
「隼鷹！？　ちょっと――」
「邪魔ですわ」
「ふんだもん！　あなたにばっかりいい思いはさせないんだから！」
睨み合う両者。そんな二人に挟まれた翔輝は苦笑いするしかなか

った。
「って言うか隼鷹！　お前もそいつから離れろよ！」
「そ、そうよッ！」
「・・・斬る」
「翔輝は私のだから、誰にも渡さない」
「姉さん！　これ以上ややこしくしないでぇッ！」
こうして翔輝連合は睨み合いをする事になった。そんな大和達を見て翔輝はため息する。大鳳だけが、翔輝に同情の気持ちを抱いて彼の袖を引っ張るのだった。

第十章　第十五節　決して癒えぬ心の傷

大鳳の登場から数週間後、その日の翔輝は少しおかしかった。どこか上の空で話し掛けられても聞いていないような感じだった。
「大尉？　大丈夫ですか？」
大和は心配になってそっと声を掛けるが、翔輝は答えない。
「大尉」
「え？　あ、何？」
袖を引っ張るとさすがに翔輝も気づいた。驚いたように振り返る。
「大尉。お体の具合が悪いのですか？」
「いや、そんな事ないけど、何で？」
「いえ、どうも今日はどこか上の空ですので、どうしたのだろうと思って」
「あぁ、うん。何でもない。気にしないで」
そう小さく笑みを浮かべながら言うが、自分から離れた翔輝の目は再びどこか遠くを見ている。その表情は翔香の事を思い出した彼の辛そうな表情を思い出させる。
「大尉・・・」
結局、大和は翔輝に何もできなかった。
翔輝が悲しそうに瞳を揺らしていると言うのに、何もできなかったのだ。
そんな無力な自分が、大和は本当に嫌だった。

その夜、翔輝は忽然（こつぜん）と姿を消した。会議の最中に大和はみんなに訊いたが、彼の行方は不明だった。
「というか、今日の長谷川君変だったわよね」
長門が読んでいた作戦書から目を離して言うと、まわりの皆もうなずく。
「せやなぁ。長谷川はん今日はどっか上の空っちゅー感じやったな

ぁ」
「どうしちゃったんだろ？」
「さぁ？　何かあったんでしょうか？」
伊勢と日向、瑞鶴の三人は顔を見合って心配そうに話す。他の者も皆心配そうな表情だ。翔輝は崩壊しつつある日本艦魂社会において皆の心の支えとなっている。だからこそ皆本当に心配しているのだ。ただし、たった一人大事な会議をそんなどうでもいい話で逸らされた金剛は不機嫌そうに眉を吊り上げていた。
「また星空でもバカ面下げて見てんじゃねぇの？」
どうでもいいと言いたげな榛名の意見がもっともだった。大和は「そうですね」と言って後で防空指揮所に行こうと決意した時、今までずっと沈黙していた武蔵が書類から目を離した。珍しく今日は翔輝の話に食い付かずに書類を見ていたのだが、
「・・・今日は、翔輝をそっとしておいて」
武蔵の突然の言葉に全員が彼女を見る。その中で榛名が不思議そうに首を傾げる。
「あん？　何でだよ」
「・・・お願いだから、今日は翔輝をそっとしておいてあげて」
武蔵にしては珍しく榛名に強気で掛からない。そんな彼女の妙な態度に榛名が不思議そうに見詰める。
「武蔵、貴様まさか長谷川の様子が変な理由を知っているのか？」
翔鶴の問いに、武蔵はコクリとうなずく。
「・・・一応」
「ほ、本当か！？」
全員の視線が再び武蔵に集中するが、武蔵は気にした様子もなくその視線を真っ向から受ける。その瞳には強い意志が込められていた。
「・・・今日は、翔輝は一人にしてあげた方がいい」
「何でよッ！　大尉の様子が変なら助けてあげないとッ！」
大和が悲鳴のような声でそう叫んだ。それは皆の意見を代表した

ものだったが、武蔵は小さく首を横に振る。
「・・・姉さん、今の翔輝に必要なのは自分の力だけ。私達には、何もできない」
「武蔵長官は大尉を放っとけと言うんですかッ！？」
「・・・雪風。今度ばかりは、私達じゃ何もできない」
「お兄ちゃんをほっとくなんてできないよ！」
「・・・それをするの」
「長谷川はんを見捨てるなんてうちにはできへんッ！」
「そうだそうだッ！」
伊勢と日向がそう叫んで部屋を出て行こうとするのを武蔵が一瞬で回り込んで止める。
「どいてぇなッ！」
「・・・みんなわからないの？」
「何がッ！？」
大和が食い付く。その反応に武蔵はため息する。本当にわからないらしい。
武蔵は無表情の仮面を崩し、一転して悲しげな表情をする。武蔵の表情の変化に他の者にも緊張が走る。
「・・・今日は、何の日？」
武蔵の意味不明な質問に全員が頭に疑問符を浮かべる。
「何言ってるの？　今日は別に何もない四月――・・・ッ！」
突如大和の表情が凍り付いた。大和だけじゃない。長門に山城、さらには金剛までもが表情が凍っていた。
「な、何だよ！　今日が何だってんだ！」
榛名がわからない者達を代表して叫んだ。それに対し武蔵はうつむきながら小さな声で話す。自分の口から言うのも辛い、そんな感じで。
「・・・今日は四月一日・・・翔輝の妹――翔香の命日」
「な・・・ッ！」
――そう、今日は四月一日。翔香が死んで四年目の春だった。

「そ、そうか・・・だから長谷川の奴・・・」
「大尉・・・」
「長谷川はん・・・」
「お兄ちゃん・・・」
榛名以下大和と伊勢、隼鷹他皆が表情を曇らせる。
――翔香。それはいまだに翔輝の心の中の大半を占めて彼の心の中で生き続ける彼の妹――
そして、翔輝を想う者の最大の恋敵。
彼女の存在が彼の心から消える事はない。永遠の存在。それが翔香。
「そっか・・・今日は翔香ちゃんの命日だったわね」
長門もいつものお気楽な笑みを出さずに真剣な表情で腕を組む。
「確かに、それなら今日は彼一人にさせるのが一番ね」
「でも・・・ッ！」
食い下がる大和に長門は力なく首を振って説得する。
「大和。私達ができるのは彼を見守るだけなのよ」
「そんなの絶対嫌です！」
「私達にできる事は何もないのよ」
「嫌ですッ！　私は絶対大尉のお力になります！」
「大和ッ！」
長門の制止を振り切って、大和は部屋を出て行ってしまった。行き先は防空指揮所だろう。
大和を追いかけるようにして長門以下も慌てて部屋を出て行った。

その頃、翔輝はやっぱり防空指揮所にいた。
星空の下、手の中にある何かを見詰める彼の瞳は濡れていた。そんな彼の手には翔香のペンダントが握られている――二度と会う事のできない大事な妹の形見を・・・
「翔香・・・」
もう呼んでも帰ってこない妹の名をつぶやき、翔輝は空を見上げ

る。今日の星空も最高に輝いていた。雲一つなく、輝く星は何の障害物もなくその輝きを煌かせている。

「もう、四年になるんだな・・・お前が死んで」

この四年間、彼は幾度となく挫折し、そして這い上がって来た。多くのものを失い、多くのものを得た。だが、彼女の匹敵するだけのものは何も得られなかった――大和達との出会いも、彼の心にぽっかりと開いた《翔香》という大きな穴を埋めるには足りないのだ。

「もう四年。僕は十分生きたと思うなぁ。もうそろそろ潮時・・・なんちゃってさ」

小さく翔輝は笑う。と、

クイ・・・

袖を引っ張られる感触に驚いて振り返ると、大鳳がじっとこちらを見詰めていた。

「か、かのん・・・？」

大鳳は無言で翔輝にハンカチを渡す。

「・・・涙、拭いてください」

「・・・ありがとう」

翔輝はそのハンカチを受け取るとそっとそれで涙を拭う。

大鳳はじっと翔輝を見詰めている。その瞳は「・・・どうしたんですか？」と言いたげな瞳だった。

「ちょっとね、昔の事を思い出して」

「・・・昔の事？」

「あ、そっか。かのんにはまだ言ってなかったっけ――僕の心の傷を」

翔輝はこの際だからと大鳳に翔香の話をした。大切な妹で、たった一人しかいなかった家族だった彼女の存在を。そんな彼女の突然の死を。彼女を失ってから今日までの苦悩を。

大鳳はそれを相槌も打たずに無言で聞いていた。

全てを話し終えた翔輝は彼女との思い出を思い出したせいか溢れ

た涙を大鳳が渡したハンカチでそっと拭う。
「・・・ははは、情けないだろ」
翔輝は力ない笑みを浮かべる。本当に自分が情けない。大和達はこんな弱い人間を信頼しているのだ。それではまるで彼女達を裏切っているみたいだ。こんな話を聞いて大鳳に嫌われても仕方がない。そう思った。だが、
「・・・（フルフル）」
大鳳は小さく首を横に振った。
「かのん・・・」
「・・・翔輝さんの想いは、みんなと同じです。私には姉妹がいない。でも、長門さんにはいた。私が会った事のない、陸奥さんが」
「うん・・・いい奴だったよ」
翔輝は陸奥の笑顔を思い出す。まさか彼女の事まで思い出してしまうとは、連鎖的に霧島や比叡、赤城達の笑顔も思い出す。なんか、また泣きそうになった。
「・・・それはみんな同じ。あなただけが特別じゃないです」
「そうかもしれないけど、やっぱり辛いよ」
「・・・（コクリ）」
大鳳は小さくうなずくと、じっと翔輝を見詰める。その手はしっかりと翔輝の服の袖を掴んで放さない。
「・・・翔香さんって、どんな人でした？」
「うん？　優しい子だったよ」
翔輝はそう言って内ポケットから一枚の写真を取り出す。それはいつもは机の上に置いてある翔香の写真だった。もう見られない彼女の輝かしい笑みが、心に痛い。
「・・・大和さんに、似てます」
「うん。性格も結構似てる。優しくて、ちょっとバカで、でもすんごくまじめで、僕なんかの為にいつも一生懸命だった」
「・・・（コクリ）」
「もう四年になる。あいつがいなくなってから。その間に日本は戦

争に入り、僕が帝国海軍軍人として戦艦『大和』に乗って、君達と出会った」

「・・・嬉しかったですか？　私達に会えて」

「うん。良かったさ。君達のおかげで、僕はこうして笑えるんだからさ」

そう言って翔輝は笑みを浮かべる。そんな彼の笑みを見詰め、大鳳は小さくうなずくと、彼の手を握った。

「・・・来てください」

「え？」

翔輝がどこへと言い終わる前に、大鳳は光り輝いて瞬間移動した。防空指揮所にいた二つの影が消え、そこへ大和達が現れた。

「大尉！」

だがもちろんそこに彼の姿はなく、大和達は顔を見合わせた。

「・・・他に翔輝が行きそうな場所を検討する」

武蔵の指揮の下、駆逐艦の艦魂を大規模に動かし、発見次第突入という作戦を執った。

翔輝が見付かるのは時間の問題だった。

翔輝が大鳳に連れられて来たのは、『大鳳』の甲板だった。

「かのん？　何でここに連れて来たの？」

「・・・来てください」

大鳳は翔輝の問いに答えずに彼の服の袖を引っ張る。翔輝はとにかく彼女に連れられて歩く。と、大鳳は突如光り輝いて背中に純白の翼を生やすと、天空へ舞い上がった。もちろん翔輝も一緒に飛ぶ。そしてそのまま天に昇る。てっきりマストの鳥の巣でも見るのかと思っていたが、その高さはもうとっくに越え、眼下には『大鳳』の強固な飛行甲板が見える。視線を変えれば『大和』や『武蔵』、『翔鶴』や『隼鷹』の姿も見える。と言っても、夜間攻撃を警戒して灯火管制が布かれているのでどの艦も明かりはない。だけど、輝く月がそれを薄っすらと照らし上げている光景は幻想的だ。

「・・・きれいですね」
「うん。すごくきれいだ」
確かにきれいな光景だ。だが、彼女はこれを自分に見せて一体何をしようというのだろうか。翔輝が首を傾げると、
「・・・これが、あなたが守って来た仲間」
大鳳は小さくそう言った。
「いや、そんな大げさな。僕は艦どころか対空機銃一基ですら動かせないような人間だよ？　これは僕じゃなくてその艦の艦長が守ってきたんだ」
それはそうだ。艦長の的確な回避行動や攻撃で、この軍艦達はここまで生き残ってきたのだ。自分は何もしていない。
だが、大鳳は小さく首を振る。
「・・・艦魂は艦の魂です。もし艦魂が戦う事が嫌だと思えば、艦内の兵の士気は下がり、結果的に艦の動きは鈍くなるんです」
それは以前金剛に聞いた事があった。艦魂はまさしく艦の魂。艦の心なのだと。艦魂がたるんでいれば、それは艦全体のたるみとなり、生き残る事はできない、と。理屈はよくわからないが、納得はできた。
「・・・そして、ここにいるみんなは、翔輝さんに支えられ、励まされ、生きてきた。だから、この軍艦達は翔輝さんが守って来たも同然です」
「そんなバカな」と言い返す事は簡単だった。でも、翔輝はそれを言わなかった。
自分が守って来たという軍艦達を見詰め、翔輝が小さく笑顔を浮かべた。
こんなちっぽけな自分でも、こんな目に見える結果が残せていた。そう思うと、嬉しくなる。
「そっか・・・」
うなずく翔輝に大鳳は続ける。
「・・・翔香さんも同じ。失ってしまったけれど、その結果はずっ

と残っている。あなたがいたから、翔香さんという物語は存在します。そして、あなたが彼女の事を忘れず、ずっと心に留めておけば、翔香さんの物語は終わらない。ずっと、続くんです・・・あなたが生きている限り」

大鳳の言葉に、翔輝は涙を流した。

そんな事を言われたのは初めてだった。

自分の存在が、今の彼女を残している。そんな考えは今までなかった。

「そっか・・・」

翔輝はそれだけ返すと、天に輝く月を見上げる。

月明かりに照らされる艦隊も、心に残る翔香の存在も、自分が知らず知らずに守って来たものだったのだ。

心に、小さな光が灯った。

「ありがとう、かのん」

「・・・（フルフル）」

大鳳は首を横に振ると、翼を大きく羽ばたかせた後降下した。ゆっくりと『大鳳』の甲板が近づき、そしてそっと着艦する。

大鳳は翼を消すと、クイッと翔輝の服の袖を掴む。

「・・・大丈夫ですか？」

「うん。君のおかげだ。僕はずっと死の事ばかり考えて――」

「そんなのダメですぅッ！」

突然の声と何かとてつもない金属音が響き、扉を蹴破って大和が転がり込んできた。

「や、大和？　どうしたの？」

驚いて呆然としている翔輝に対し、大和はいきなり彼に抱き付く。

「大和！？」

「大尉ッ！　また死ぬなんて考えてたんですか！？」

「え？　えぇ？」

驚く翔輝の首を絞める勢いで大和は迫る。

「ぬおおぉぉぉッ！　死ぬッ！　これはたぶん死ぬッ！」

「あわわわッ！　ご、ごめんなさいッ！」
大和は慌てて翔輝の首から手を離す。大和から解放された翔輝は何度も咳き込む。危うく気道に空気が二度と入らない事態になるところだった。
「だ、大丈夫ですか？」
「ゲホッ！　ゴホッ！　お前は僕に死ぬなとか言って殺すつもりなの！？」
「ご、ごめんなさいぃ」
翔輝は不機嫌そうに彼女を見詰めるが、ふと優しい笑みを向ける。
「まったく、お前はいっつもやかましい奴だなぁ」
「うぅっ・・・」
申し訳なさそうにうつむく大和の頭を、翔輝はそっと撫でる。
「大尉？」
「まぁ、それがお前のいいところでもあるけどね」
「大尉・・・」
優しく微笑む翔輝を大和はじっと見詰める。翔輝が不思議そうに見詰めるが、大和はそんな彼に優しく抱き付く。
「どうしたの？」
「いえ、ただ、こうしていたいと思って」
「甘えん坊だな、お前は」
「はい」
翔輝の腕の中で心地良さそうに微笑んでいると、再びドアが慌しく開き、長門が現れた。
「長門さん！？」
「あら？　長谷川君」
そんな彼女の後ろから次々に艦魂達が顔を出す。そんな彼女達を見て翔輝は呆れる。
「お前ら・・・何やってんだ？」
「う、うるせえッ！　お前こそ何やってんだよッ！」
榛名が翔輝に食って掛かる。すると、突如榛名の横に現れた武蔵

が腰の軍刀を鞘に入れたまま抜き、それで榛名の頭をぶっ叩いた。
「ぐわあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
榛名はあまりの痛さに床に突っ伏して悶絶する。そんな榛名を冷たい視線を向けながら武蔵は翔輝に近づく。
「おい、今のはやり過ぎじゃない？」
「・・・問題ない。あの女はこれくらいじゃ死なない」
「いや、死んだら困るんだけど」
翔輝が心配そうに榛名を見詰めていると、榛名が目の縁に涙を溜めて起き上がった。その顔は憤怒一色。
「おいゴラッ！　武蔵テメェッ！　いきなり何しやがんだッ！」
「・・・うるさい。貴様は黙ってろ」
「んだとゴラッ！」
「ちょっと榛名。落ち着いてよぉ」
暴れる榛名を扶桑が止める。そんな二人を山城は無表情で見詰めているが、どこか呆れているように見える。
武蔵は翔輝から大和を引き離して翔輝を見詰める。その表情は常の無表情ではなく心の底から心配そうな表情だった。
「・・・翔輝、大丈夫？」
「うん？　何が？」
翔輝は笑顔で答えるが、それは彼女を心配させたくないという彼の思いやりだったが、すぐにそれに武蔵感づいた。
「・・・今日は、翔香の命日でしょ？」
「・・・知ってたんだ・・・今日が・・・翔香の命日だったって事」
先程までの優しい笑顔とは一転、翔輝は寂しそうな表情で武蔵を見詰める。
「・・・翔輝」
武蔵が心配そうに見詰めると、翔輝は優しい笑みを向ける。
「大丈夫だよ。安心して」
翔輝はそう言うが、その笑みはどこか寂しげなものだった。妹の、家族の死を《大丈夫》の一言で片付けられるなど、できるはずはな

い。
「・・・翔輝。星がきれい」
「あぁ、そうだね」
星空はどこまでも輝き、その神々しい光を大地に注いでいる。その光は一体何を物語るのか、それは誰にもわからない。
「お兄ちゃん・・・」
隼鷹が心配そうに声を掛けると、翔輝は苦しそうに顔をゆがめた。
「お、お兄ちゃん？」
「悪い隼鷹。今日は・・・今日だけは・・・僕の事を《お兄ちゃん》って呼ばないで」
「ど、どうして？」
「頼む・・・ッ！」
隼鷹は辛そうに顔をゆがめる翔輝に声を掛けようとして飛鷹に止められた。飛鷹は小さく首を横に振る。
「今日だけは、大尉の事を《お兄ちゃん》と呼んでいいのは、大尉の本当の妹さんである翔香さんだけ。わかって」
隼鷹は飛鷹の言葉に何か言い返そうとするが、彼女の真剣な瞳と翔輝の表情を見て力なくうなずいた。
翔輝は空を見上げていたが、ふとその瞳から涙が流れた。その突然の事に全員が驚くが、翔輝は苦しそうに笑う。
「・・・ダメだなぁ、僕は・・・翔香が死んでもう四年になるのに、まだ全然立ち直れないや・・・情けないよ・・・本当に・・・」
「大尉・・・」
翔輝は力なく笑うが、その瞳からは止めどもなく涙が流れ続ける。男が涙を流すのは情けない行為だが、そんな事を思う者は誰もいなかった。
家族の死を、妹の死を苦しんで涙を流さない者など存在しない。その苦しみは計り知れなく、心を締め付ける。翔輝はそれを四年間という長い間たった一人で耐え続けてきたのだ。誰にも言えない苦しみを抱えながら。

翔輝はしばらく星空を見上げていたが、そっとうつむく。すると、今まで大和達の眼中の外にいた大鳳は再びハンカチを差し出した。

「・・・時間は掛かります。でも、忘れないでください。あなたがさっき見た光景を。あれが、あなたが今まで守って来たもので――そして、これからも守っていかなければならないものだから」

大鳳はそう言うと、光に包まれて消えた。

大和達は今のやり取りを呆然と見詰めていたが、翔輝は消えた大鳳に「・・・ありがとう」と小さく礼を言って大和達を見る。

「ごめん、みんな。今は・・・一人にして――大丈夫だから」

翔輝の小さな声は全員に聞こえた。だから、

「行きましょう」

長門の言葉に反対する者は誰もいなかった。

艦魂達はそっと『大鳳』から去った。

自分一人しかいなくなった空間の中、翔輝は腕に顔を埋めた。この星空の中に翔香の星があるなら、自分の情けない顔を見せたくなかった。

翔香のいない四年目の春。だが、翔輝の春は永遠に来ない。翔香という太陽を失い、花が咲く事は永久に失われた。

永遠に溶ける事のない氷を持ち、翔輝の季節は永遠に冬でしかない。

うつむく翔輝のはるか上で、一つの星が光ったのは誰も見ていなかった。

その後、翔輝は大鳳に『大和』に戻された。

翌日、大和達はとても心配していたが、翔輝は復活していた。

毎年四月一日には落ち込むが、翌日になればすっかり回復するのだという。みんなが安心した中、武蔵だけはずっと翔輝を見ていた。

その後、瑠璃が乱入したり榛名が瑠璃に奇襲したり、大和が武蔵と取っ組み合いのケンカになったり隼鷹が隙を見て翔輝に飛びつい

てみんなから罵声を受けたり、大鳳が袖を引っ張ったりと、忙しい一日が始まった。

第十章　第十六節　滝川の笑顔　金剛の想い

四月十日、戦艦『大和』の改造が終了。二番、三番副砲を撤去し、新たに高角砲六基十二門を装備。他二五ｍｍ対空機銃を増強。『武蔵』は高角砲の数が集まらずに二五ｍｍ対空機銃を代わりに装備したが、両艦の防空能力は他の戦艦を凌駕するまでになった。

翌十一日、『大和』と『武蔵』は伊予灘（いよなだ）にいた。

『甲板員総員艦内退去！　繰り返す！　甲板員総員艦内退去！』

スピーカーからけたたましく警告とジリリリリッ！　という警報が甲板に鳴り響く。甲板にいた兵達は大急ぎで艦内に入る。一体何が始まるかと言うと・・・

「全砲左砲戦！　全砲九時方向砲旋回！」

森下が命令し、『大和』の一基で駆逐艦一隻分に相当する巨大な主砲砲塔がゆっくりと旋回する。その数三基。他に二基の副砲がそれに続く。

後ろを翔けている『武蔵』の主砲副砲も同方向を睨み付けている。まるであの海の向こうに憎き敵艦隊がいるかのように。

主砲副砲は旋回を終えると今度は各砲身が目標地点に向かって仰角を取る。全砲身が水平線を睨むと、不気味な沈黙が流れる。そして・・・

「撃ち方始めッ！　撃てぇッ！」

森下の号令一下、目をつむっても入って来る激光が迸り、鼓膜を粉砕しそうな大爆音と内臓がグチャグチャになりそうな衝撃が『大和』全体に響いた。

空気を突き抜けて滑空する九つの一・五ｔ砲弾とそれに続く六つ副砲弾。一瞬にしてそれははるかかなたに飛翔していった。

世界最大最強の主砲の威力は桁が違った。

すさまじい黒煙が艦を包む。その黒い視界の向こうでは『武蔵』が砲撃を開始していた。

艦橋の者全員が双眼鏡で砲弾の飛んで行った方向を見詰める。そして、数十秒後・・・

ドドドドドオオオオォォォォォンッ！

遠くの海面で十五個の巨大な水柱が上がった。そのうち九個は天高く海面を爆発させた。その爆発は双眼鏡なしでも視認でき、その後には兵達の咆哮が響いた。艦橋の空気もヒートアップする。

「さすが『大和』！　世界最強の戦艦の砲撃は桁が違います！」

参謀の一人が嬉しそうに大声を出す。その参謀だけでなく全員が嬉しそうに握手したり抱き合ったりした。そんな中、翔輝も目を輝かせていた。

「僕・・・初めて『大和』の砲撃を見たよ」

「あれ？　そうでしたっけ？」

隣にいる大和は驚いたような顔をする。

「そうだよ。前に主砲を撃ったのは完成前の公試運転の時だろ？その時はまだ僕大和には配属されてなかったもん」

「そういえばそうですね・・・で、どうでした？」

大和のイタズラっぽい笑みに翔輝は満面の笑顔で答える。

「最高だよ！　やっぱり『大和』に配属されて良かった！」

「大尉にそう言われると私も嬉しいです」

航空機の有用性を理解はしているが基本的には大艦巨砲主義者である翔輝は世界最大最強戦艦の砲撃で本当に嬉しそうな笑みを浮かべる。

「どうやら、問題なさそうですね」

副長が森下に言うと、森下はうむとうなずく。

「あぁ、電探のおかげで命中率も上がってるしな」

「これから定期的に対空機銃を増強していきます。これで我が艦の防空能力は日本最強です」

「これにアメリカのＶＴ信管とやらが加われば、もはや難攻不落の要塞になるのだがな」

「近接信管は我が日本では造れません。何せ空気入りの真空管が出

回る国ですからね」
「・・・それは真空管と言わんのじゃないか？」
森下のツッコミに艦橋は爆笑の渦に包まれた。翔輝と大和も楽しそうに笑っていた。
戦艦部隊は整備を終えていつでも出撃可能な状態にあったが、トラックに続いてパラオまで落ちている今、低速な戦艦部隊が急行できる拠点はどこにもなかった。

四月の半ば、その日翔輝は甲板で大和と雪風と話していたが、そこへ突然の訪問者が現れ、翔輝はもちろん大和や雪風まで驚いた。
「おうッ！　久しぶりだな長谷川！」
「た、滝川ッ！？」
「「滝川中尉！？」」
「おいおい、俺はもう中尉じゃねぇぜ」
そう言ってイタズラっぽい笑みを浮かべて青年は襟の階級章を輝かせた。
驚く三人の前に現れたのは、日本海軍軍楽隊隊員トランペット奏者にして日本海軍一の変人――滝川健太軍楽大尉その人だった。

その夜の艦魂会議は急遽滝川来艦パーティーになった。みんな久しぶりに戻って来た滝川に質問の連射を浴びせる。
「滝川さん。今まで何をしていたんですか？」
「あぁ、主にラバウルに送られてたなぁ」
「ら、ラバウルって・・・最前線じゃないですか！？」
「そうだよ。俺も敵機に何回も空襲された」
「だ、大丈夫だったんですか！？」
「おうよ。仲間が数人蜂の巣になったが、俺はピンピンしてるぜ」
なっははは、と笑う滝川は以前にも増して豪快になっていた。同時に以前よりもまたかっこいい青年に成長していた。ニッと歯を見せて笑うその笑みに、駆逐艦達からは歓喜の声が上がる。

「休暇はいつも何をされてるんですか？」
純情そうな駆逐艦の子がそう興味津々といった感じで質問すると、滝川は何をバカな事とい痛げな顔をする。
「何ってお前・・・女遊びに決まってるだろ？」
「お、女遊び！？」
艦魂達がその返答に顔を真っ赤にすると、滝川はニヤニヤと笑う。
「遊郭なんか最高だぜ？　美人が多くてな。どれを食べようかと――」
「貴様の口は開けばエロ発言しかせんのかッ！」
「のわッ！？」
笑っていた滝川の前にあった酒瓶が砕け、次の瞬間には《海軍精神注入刀》と金字で書かれた立派な竹刀がその存在を畏怖させていた。
「き、金髪ヤローッ！　お前何しやがんだッ！」
滝川は今確実に自分を一刀両断しようとした金色の髪を流した女性――金剛に怒鳴る。金剛はそんな滝川の言葉に鋭い眼光をさらに鋭くさせる。
「やかましいッ！　久しぶりに会ったと思ったらますます変態になってるではないか！」
「変態とは失礼な。青春を満喫しているだけだ」
「その満喫方法がおかしいと言うのだ！」
金剛はバンバンと激しく竹刀を床に叩き付ける。
またいつもの壊れかけの金剛になりつつある金剛。そんな彼女をじーっと見詰める滝川。
「な、何だ？」
金剛がその視線に不思議そうに訊くと、滝川は真剣な顔で、
「いやぁ、お前また一段と美人になったなぁって思ってさ」
「なッ！？」
滝川の驚きの爆弾発言に金剛は顔を真っ赤にしてフリーズする。十数秒の沈黙の後、金剛の竹刀が音速を超えて滝川に飛来。滝川は避

ける事もできずに顔面でそれを受けた。
「ごがあああああぁぁぁぁぁッ！」
滝川は身体をありえないくらい反らして悶絶する。そんな滝川に金剛は攻撃の手を全く緩めない。それどころかさらに追撃を加える。
「貴様と言う奴はッ！　死ねッ！　貴様なんか死んでしまえッ！」
「ちょっと待てぇッ！　死ぬッ！　本当に死ぬっつってんだろうがッ！」
「だから死ねと言うにッ！」
絶叫する滝川に金剛は学校教育なら問題どころか事件に発展するような攻撃を続ける。そんな金剛を見詰め、小さなツインテールをピョコピョコと揺らして日向が不思議そうな顔をする。
「ねぇ扶桑お姉ちゃん。何で金剛はあんなに怒ってるの？　美人って言われたのにぃ」
「それはね日向。金剛は照れてるのよ」
「照れてるの？」
「そう。あれは素直じゃない彼女の愛情の裏返しなの。つまり金剛は滝川さんの事が好きなのよ。そりゃあもう好きで好きで夜も眠れないくらいね。だから睡眠不足でイライラしているから怒りやすいの」
「へぇ、そうなんだぁ」
「扶桑ッ！　貴様何を日向に吹き込んでいるのだ!?」
金剛の怒りが今度は扶桑に向くが、扶桑は罪のない優しげな満面の笑みでこう返した。
「結婚式には呼んでね♪」
「貴様あああああぁぁぁぁぁッ！」
金剛の竹刀が炸裂するが、扶桑は見事な動きで全部回避する。どうやらこの日本海軍の艦魂社会ではあまり目立たないがお姉さんキャラは最強らしい。
「扶桑ッ！　お前ふざけんなッ！　誰が好き好んでこんな悪の権化（ごんげ）みたいな魔神と結婚なんかするかッ！　俺は金髪と結婚するくらい

ならお前とする。ちなみに夜は寝かせない」
「あらぁ」
「き、貴様あああああぁぁぁぁぁッ！」
扶桑は顔をぽっと赤らめ、金剛は再び竹刀で滝川を痛めつける。
だが、そんな滝川が虐殺されているのを見詰め、扶桑は申し訳なさそうに、
「ごめんなさい。私には心に決めた――伊勢ちゃんがいるからぁ」
その言葉で顔を真っ青にして震えながら逃げようとした伊勢を扶桑は見事に捕獲。あのいやらしい手つきで伊勢の体中を触りまくる。伊勢は顔を真っ赤にしながらよだれを垂らして痙攣する。そんな扶桑を見て長門は、
「やっぱり、扶桑は百合なのね」
「大尉。百合って何ですか？　花の名前ですよね？」
「大和。その先は深追いしないほうがいい。きっと十八禁に繋がるから」
不思議そうに訊く大和を翔輝が制止する。これはこんな純粋無垢な女の子に教えてはいけない事なのだ。ついでにこういう知識には疎いのか、百科事典で《百合》を調べようとしていた武蔵を慌てて止める。
そんな外野は置いといて、滝川を散々竹刀で殴り付けた金剛は肩で息をするのに対し、滝川はもう回復していた。
「何だ金髪。お前体力落ちてないか？」
「そ、そんな事・・・ッ！」
「やっぱりメガネがないからだぜ。メガネしろよ。黒ぶちメガネ限定だけど」
「だ、誰がするかッ！」
「えー、だってお前のメガネ姿めちゃくちゃかわいいのに」
「き、貴様！　それは言わない約束――」
「えええぇぇぇッ！？　金剛ってメガネをかけた事があるの！？」
時すでに遅し。金剛メガネ装着疑惑は一瞬で艦魂達に広まった。

金剛は顔を真っ青にすると、続いてすぐに真っ赤に染める。一方の滝川はあははと笑い、
「バレちゃった♪」
「バレちゃったじゃないだろうがッ！」
金剛は顔を熟れたトマト以上に真っ赤にすると、突然竹刀の鍔から先の部分を抜き取った。その中には光り輝く真剣が・・・
「ちょっと待てええええぇぇぇぇッ！　それはやばいってばッ！　と言うか何だよその竹刀ッ！？　完全に仕込み刀じゃねぇかッ！」
「これが《海軍精神注入刀》の真の姿だ！」
「もはや注入じゃねぇだろ！《海軍違反者惨激刀》って名前に変えろよッ！」
「やかましいッ！　何も言わずに死ねッ！」
「ぎゃあああああぁぁぁぁぁッ！」
本気の本気で逃げ回る滝川を本気の本気で金剛が竹刀（真剣）を振り回して追いかける。そんな姿を見て長門は微笑む。
「青春よねぇ」
お忘れかもしれないが、長門は金剛より年下である。落ち着いてるので大人らしく見えるハヤテ〇ごとく！登場の十七歳の某メイド現象である。
「っていうか、あの竹刀は仕込み刀だったんだ」。
「驚きですね」
「まあな、姉貴は基本的にいつも竹刀として使ってるからな。そう見れねぇと思うぜ」
翔輝と大和は驚くが、さすがは金剛の腹心。彼女の竹刀の真の姿は知っていたらしい。という事は以前にも抜いた事があるのだろうか？
「前にあの刀を抜いた事はあるのか？」
「あん？　確か十一・二八事件の時だったけか？」
「え？　何それ」

翔輝と大和は同じような顔をして首を傾げる。
「あぁ、そっか。テメェらは知らねぇのか。戦前に起きた大規模な艦魂内乱の事さ」
「な、内乱ッ！？」
いきなり飛び出した物騒な単語に二人は驚く。そんな二人の反応に榛名は「うそみたいだけど、本当に起きたんだぜ？　内乱が」と念を押す。
「ど、どうして？」
翔輝が問うと、榛名はめんどくさそうに頭を掻く。あまり人に説明するというのが得意ではないのだ。
「内乱自体は明治の頃から十年に一回くらい小規模で起きてるんだよ。言論じゃ言う事を聞かない堅物がいたからな。でもこの四〇年代に入ってからは今までとは桁が違う流血を伴う大規模な内乱が二度起きたんだよ」
「に、二度も？」
「あぁ。一九四〇年十月十六日に十・十六事件。翌年の十一月二八日に十一・二八事件。どっちも百数十単位の大規模な暴動でな。俺達保守派の艦魂と反乱派とが入り乱れて激闘したんだ。多くの艦の甲板で激しい銃撃戦や砲撃戦が起きてな。艦魂は死なねぇとはいえ負傷者が桁外れに出たんだよ」
榛名の話に戦中生まれの大和と戦中に軍艦勤務となった翔輝は驚きを隠せない。こんな女の子達が敵味方に分かれて戦争をしたなんて。
「言っとくけど、保守派の筆頭はもちろん姉貴だ」
「え？　じゃあ反乱を起こした首謀者は？」
「うん。それあたしだよ」
そう軽く言ったのは突然現れた長門だった。その顔にはいつものように優しげな笑みがある。
「な、長門さんが反乱を起こしたんですかッ！？」
「失礼ね。あれは反乱じゃなくて聖戦よ」

「俺達が勝ったんだからあれは反乱だ」
いつもの笑みを浮かべる長門に対し、榛名は不機嫌そうに彼女を睨みつける。え？　って事はこの二人は元敵同士って事？
「な、何で反乱なんて起こしたんですか？」
大和が少し怯えながら訊く。そりゃあそうだろう。彼女が実は武力行使に訴えるような過激派の艦魂だったのだから。
「反乱じゃないって言ってるでしょ？　十・十六事件は日独伊三国軍事同盟締結に反対した聖戦で、十一・二八事件は対米英開戦に反対した聖戦よ」
「まるで人間と同じような道筋ですね」
「まぁ、長谷川くんの言うとおりね。結局人間も艦魂も思想ってのがあって、それは時にぶつかる事もあるのよ」
そう言う長門はどこか遠くを見ているような気がした。
日本の為を思って反旗を翻した長門と、同じく日本の為を思って反乱派と武力衝突した金剛。こんな小さな社会である艦魂社会でも、人間と同じように衝突する事があるのだ。翔輝は複雑な心境になる。自分が生まれる前にそんな事があったなんてと、大和はうつむく。
「まぁ、私達が思ったとおり日本は戦争を始めてこんなになっちゃったけどねぇ」
長門はトゲのある言い方で榛名を見る。榛名はそんな彼女の言葉に「知るか」と不機嫌そうに視線を反らす。長門は笑みを浮かべる。
「でさ、本当に金剛はメガネをかけた事があったの？　私は金剛と付き合いは長いけど、見た事ないわよ？」
いきなり話題を戻した長門。ちょっと強引だが、この気まずい状況を打開するにはちょうど良かった。
「そうそう。俺だって見た事ねぇ」
榛名もその話にのって答える。そんな長門と榛名の発言に滝川は逃げながら回答する。
「そうなのか。あいつあの時しかかけた事がなかったんだ」
「あの時って？」

「俺とこいつが始めて会った時なんだけど、最後の別れの時にこいつ顔を真っ赤にしながら黒ぶちメガネをかけてくれたんだぜ」
「マジかよ！？」
「滝川！　貴様あああああぁぁぁぁぁぁッ！」
金剛の速度がさらに過激に、鋭利になる。だが同時に滝川の避け方も高速、華麗になる。
「いやぁ、あん時の金髪はマジでかわいかったぜ」
「や、やめろッ！　それ以上何も言うなッ！」
もはや金剛の威厳は内閣支持率のごとく急降下。みんな金剛に対する見方を変えた。恐怖の鬼暴君からやっぱり女の子なんだと。
「そういえば、今度会った時はネコミミ＋メガネ（黒ぶち）＋スクール水着＋セーラ服（上だけ）にルーズソックスを希望してたんだが、まだ着てもらってないな」
「誰がそんな物を着るかあああああぁぁぁぁぁッ！」
金剛はもはや神の領域を超えた動きで滝川を追撃するが、滝川も人間離れした動きでそれを回避する。もはや頂上決戦（？）である。
そんな金剛を見て龍鳳が、
「金剛長官、大丈夫でしょうか？」
「いや、もうダメだろ」
「ダメね」
「ダメだね」
「・・・あの、この部屋から出てってください」
「はい・・・」
翔鶴と瑞鶴の横でうなずいた翔輝は龍鳳の強烈かつ悲惨な言葉に泣きそうになりながら部屋を出て行こうとする。そんな翔輝を慌てて大和が止め、武蔵が龍鳳に機関銃を向け、翔鶴は慌ててそれを制し、隼鷹が龍鳳の背後から擲弾筒を構え、瑞鶴と飛鷹が慌ててそれを止め、大鳳が翔輝の袖を握り、雪風がうらやましそうに見詰め、長門が笑い・・・と、翔輝達らしいいつもの時間が流れた。

翌日、滝川以下軍楽隊隊員の演奏が行われた。滝川達軍楽隊の演奏によって『大和』乗組員の士気は上がった。

その日の午後、滝川は雪風に頼んで彼女の姉妹を集めてもらった。十九人いた陽炎姉妹も、壮絶な戦争の中で次々に命を落とし、今ではもう九人になってしまっていた。陽炎姉妹次女にして今現在一番上の姉である不知火に滝川は花束を渡した。驚く一同に滝川は寂しい笑顔を向け、

「今月の十一日に、秋雲が死んだって聞いたからさ」

秋雲は南太平洋海戦で敵空母『ホーネット』沈め、その後海を駆け回った駆逐艦の艦魂で、滝川にとってずいぶん親しかった人物だ。その『秋雲』は今月の十一日にインドネシア近海で敵潜魚雷を受けて沈没した。

「ありがとうございます。きっと、秋雲も喜ぶでしょう」

不知火の言葉に滝川はおだやかな笑みを浮かべる。常の彼とは人違いと思わせるほどの違いだ。

彼女達に見送られて滝川は艦内に戻った。すると、

「ふん。貴様も人並みの事ができるんだな」

壁にもたれ掛かって腕を組んでいた金剛が苦笑したような顔でそう言った。それに対し滝川も苦笑する。

「何だよ。盗み見なんていい趣味じゃねぇぞ」

「ふん。見られたくないならもっと場所に気をつけるべきだな」

「はいはい」

滝川は気にせず歩き出す。すると金剛もそれに続く。

「何だ？　何でついて来んだ？」

「うぬぼれるな。進行方向が同一方向なだけだ」

「そもそも何で『金剛』でおとなしくしてねぇんだよ」

「それはいつもの事だ。今さら言う事じゃない」

「・・・言いたい事があんならさっさと言いな」

滝川の真剣な言葉に一瞬金剛は驚くが、すぐに表情を変えて苦笑する。

「ふん。貴様には丸わかりという訳か」
「長い付き合いだろ？」
「ふん。そこまで長くはないわ」
金剛は腕を組んで威圧感たっぷりで立つ。そんな金剛に振り返る滝川の目はいつになく真剣だった。そんな彼に金剛は言葉を放つ。
「滝川。軍楽隊が解体されるらしいな」
「あぁ。そうだぜ」
金剛の言葉に滝川はさして驚きもせずに答える。だが、軍楽隊が解体されるという日露戦争以来の事件は同時に、軍楽隊の通常兵への転換を意味している。
「貴様もどこかの艦に派遣されるんだろ？」
「まあな。まずは駆逐艦で下積みするだろうがな」
「つまり、生き残ればもっと大型軍艦にも配置されるのか？」
「そういう事だ。お前に乗る可能性もある」
「ふん。それはすさまじく迷惑だな」
金剛は心底嫌そうな表情を浮かべる。だが、そんな彼女の瞳はどこか嬉しそうだ。滝川はそんな素直じゃない金剛に苦笑する。
「まあ、生き残れれば・・・の話だがな」
「どういう事だ？」
滝川の意味深な物言いに金剛は眉を吊り上げて不機嫌そうに訊く。
「お前も知ってんだろ？　陽炎姉妹はもう九人に減っちまってる。元々十九人いたのにな。そんな消耗率の激しい駆逐艦で敵機の雨の中や敵の潜水艦が潜んでいる海に行けば、撃沈される可能性は高い。死ぬ確率がな」
「滝川・・・」
「・・・もしかしたら、もう二度とお前の無愛想な顔を見る事はできないかもしれないな」
「ふん。無愛想は余計だ」
金剛は憎まれ口を叩くが、滝川からの返答はなかった。あるのは彼の元気のない表情だけだった。そんな彼の姿に、金剛は否定しな

がらも傷つく。
「言っておく。今のは本気発言だ」
「滝川・・・貴様・・・」
「明日にはここを出て兵学校で基礎訓練に入る。六月頃から実戦に配備されるだろう。だから、お前に言っておく事がある」
滝川は姿勢を正して、真剣な瞳で金剛を見る。そして、
「今まで、世話になったな。色々問題発言をして悪かった。だがな、これだけは言わせてくれ――生きろ。金剛」
滝川の真剣な言葉に――金剛はうつむいた。その表情は読めないが、でも苦しんでいるのはわかる。
「貴様が真剣な事言うなんて・・・似合っておらんぞ。それに――」
顔を上げた金剛の表情は、苦しそうにゆがみ、目は微かに濡れていた。
「――こんな時に限って・・・私の名を呼ぶな」
震える口から漏れた声は、常の彼女にはない弱さがあった。
「すまん」
「謝るな・・・貴様に謝罪は似合わん・・・」
沈黙する二人。
滝川の真剣な言動に金剛は頭をバットで殴られたような感覚を覚えた。彼が真剣に何かを言うなんて、想像もしていなかったからだ。でも、彼だって大日本帝国海軍の軍人だ。やる時はやる。それがどんなにふざけていてもだ。
「最後に、お前にお願いがある」
「何だ？　遺言か？」
滝川は真剣な瞳を向けて金剛に対峙する。そして・・・
「頼む。ネコミミ＋メガネ（黒ぶち）＋スクール水着＋セーラ服（上だけ）にルーズソックスを着用してくれんか？　最後にそれだけは見たいんだが」
金剛からの返答はなかった。あるのは、光り輝く刃をギラつかせた竹刀（真剣）を構える金剛の武力行使だった。

「貴様という奴は・・・最後までそんな事を・・・ッ！」
「俺に真剣な話は似合わないって言ったのはお前だ。だからやっぱりこういう路線で進む事にした。俺もその方がいいしな」
「死ねッ！　滝川あああああぁぁぁぁぁぁッ！」
跳躍する金剛の表情は生き生きしていた。やっぱり自分達はこういうノリの方が合っている。そう二人は以心伝心していた。
逃げる滝川は終始笑顔だった。
二人の追撃戦と回避戦は『大和』艦内全域で繰り広げられたのであった。

翌日、滝川は去った。
陸に去って行く内火艇に、金剛は静かに敬礼した。そんな彼女を長門と扶桑は嬉しそうに見詰め、榛名は不思議そうに見詰めるのであった。

四月二一日、戦艦部隊は呉を出港。フィリピン首都マニラ、インドネシア諸島のリンガ島泊地を経由してにフィリピンの小島タウイタウイに到着。錨を下ろした。
これからの戦いを行く末を見詰める為に・・・

一九四四年五月四日、一年以上も連合艦隊旗艦を務めた戦艦『武蔵』のマストから豊田大将の大将旗が下ろされた。連合艦隊旗艦の変更であった。
次期連合艦隊旗艦は――戦艦でなく軽巡洋艦『大淀（おおよど）』に移された。
この頃になると日本の石油不足は深刻化し、大型艦を頻繁に動かせなくなっていた。その為司令設備の充実した小型及び中型の旗艦が必要になった。そこで白羽の矢が立ったのが司令設備の充実したこの『大淀』だった。
元々軽巡洋艦『大淀』は潜水艦隊旗艦として建造された。登載されている水上機で敵艦隊を発見すると隷下の潜水艦に指示を出して

撃滅させるという構想の基に建造された軽巡洋艦だった。それは開戦前まで日本海軍が方針としてきた両軍主力艦隊による艦隊決戦の前に敵戦力をすり減らす作戦の要であった。だが時代は航空機の時代になり、潜水艦隊の出番は少なくなった。さらに偵察や追撃など、個々の潜水艦としての任務が多くなったのも原因だ。そんな中あくまで潜水艦隊旗艦として造られた『大淀』は高角砲や対空機銃も少なく、連合艦隊からは浮いた存在になっていた。空母に改造しようという意見まで出るほどであったが、そんな『大淀』に連合艦隊旗艦の任が来たのは命拾いに近かった。

こうして、連合艦隊旗艦は軽巡洋艦『大淀』に変更された。

その夜、大淀の旗艦就任パーティーが開かれた。主に巡洋艦達が舞い上がった。自分達の仲間から一国の艦隊を全指揮するリーダーが生まれたのだ。これを祝わずしていつ祝うの如くだ。

多くの下士官（巡洋艦）に囲まれてはにかむ癖のないストレートロングヘアに細メガネを掛けた知性的な少女――彼女が大淀だ。彼女が着ているのは巡洋艦ながらピカピカの士官服を着ている。一国の艦隊総司令官が下士官服では示しが付かないという理由からだ。

大淀はまじめで働き者として有名だった。自分が海軍でも浮いた存在だとは理解していたので呉艦魂司令部で下仕事に全力を挙げていたのだが、そんな自分がまさか連合艦隊旗艦になるとは夢にも思っていなかった。

彼女の特徴は潜水艦隊旗艦として生まれたので潜水艦の艦魂と仲がいい事と――連合艦隊艦魂の中でも数少ないメガネを装備した子だという事だ。滝川がいたら今頃彼女の体をなめ回していただろう（その後確実に金剛に殺されただろうが）。

そんな大淀に旗艦を譲与した前連合艦隊旗艦である武蔵は大和の時と同じように落ち込んでいるかと思ったが、意外と落ち着いていた。

「武蔵。旗艦をやめたの辛い？」

隣に座る翔輝が訊くと、ちゃっかり彼の腕にしがみ付いている武蔵は首を横に振る。
「・・・元々あまりやりたい役職じゃなかったし、それに――」
「それに？」
「・・・これからはもっと翔輝と一緒にいられる時間が増えるから、私は素直に嬉しい」
「そっか」
翔輝は物事を前向きに考える武蔵に素直に感心した。そもそもこんな小さな女の子が一国の海軍総司令官を務めていたのだ。さぞ大変だっただろうに――ってあれ？　確か大淀の方が年下だったような・・・まぁ、艦魂自体は年上そうだからいいのか・・・いいのかな？
武蔵は翔輝と一緒にラムネを飲む。そんな二人に集まるようにして大和達がまわりを囲む。いつの間にか二人のまわりは賑やかになっていた。
そんな和やかな雰囲気の中、今にも爆発しそうな活火山が一つあった。
戦艦こそ軍艦で最も有能かつ最強と信じて疑わない前時代的な考えを持ち、今の世で大艦巨砲主義を信じ続ける日本海軍戦艦最古参の艦魂――金剛であった。
「なぜ巡洋艦ごときが連合艦隊旗艦になるのだ。なぜ武蔵が旗艦をやめねばならんのだ・・・ッ！」
「あ、姉貴？　落ち着けよ。何か頭から湯気が出てるぜ？」
「そうよ。こんな時代だもの、仕方ない事じゃない」
「こんな屈辱を受けて湯気の一つや二つ立たん方がおかしいだろ！」
今にも暴動を起こしそうな金剛を榛名と長門が必死に抑える。そんな金剛から少し離れた所には伊勢に絡んでいる扶桑がいて、その二人を幸せそうな目と冷たい目で見詰める日向と山城もいる。
しばらくすると、新連合艦隊旗艦大淀があいさつを始める。
「今回連合艦隊旗艦に任命された軽巡洋艦『大淀』の艦魂です。私

は今まであまり表舞台には出て来ませんでした。しかし連合艦隊旗艦という重大な責務を受けた今、私は全力でがんばります。どうかよろしくお願いします」

大淀の言葉に拍手喝采が起きる。特に巡洋艦達や駆逐艦から。

大淀のあいさつが終わると、再び宴会に戻る。が、大淀は仲間数人を率いて戦艦や空母の艦魂が陣を取っている場にやって来た。

「これから、よろしくお願いします」

大淀は頭を下げて大和達にあいさつする。金剛は不機嫌そうに睨み付けていたが、長門が優しい笑みを向ける。

「こっちこそよろしくね――あ、そうだ。どうせなら一緒にお話しましょうよ。これから仲良くしていかなきゃいけないし」

「はい――ですが・・・」

大淀は怯えながら自分を殺気を含んだ視線で睨みつける金剛を見る。その意図を察した長門は笑顔を向ける。

「大丈夫よ。金剛は昔の人間だから頭が固いのよ。気にしないで」

「は、はぁ」

一応返事はするが、大淀の全神経は金剛の方向に向いている。そんな状況で大淀は一番安心できそうな長門の隣に腰を下ろす。そのまわりには元呉艦魂司令部司令を務めた最上と大淀の親友であるポニーテールの少女が腰を下ろした。

「武蔵司令。今までお疲れ様でした」

最上の言葉に武蔵は小さくうなずく。

「・・・もうケガは、治ったのか？」

「あ、はい。もう大丈夫です」

武蔵の言うケガとは昨年の暮れに起きたラバウル空襲の時のものである。修理が終わった今彼女はいつもと変わらない優しい笑みを浮かべる。

「その節は申し訳ございませんでした」

「・・・気にする事じゃない」

武蔵はそう言ってラムネを飲む。そんな彼女を嬉しそうに最上は

微笑む。
「長門参謀。こちらは矢矧（やはぎ）。私の親友です」
「矢矧です」
大淀に紹介された少女――矢矧は榛名とは違って柔らかい髪質のポニーテールを下げた優しげな女の子だった。
「矢矧です。阿賀野（あがの）型軽巡洋艦三番艦『矢矧』の艦魂です」
矢矧は優しげな笑顔を大和達に向ける。そんな彼女を見て武蔵が少し何かを考え始めた。
「・・・阿賀野型軽巡洋艦と言えば、確か一番艦『阿賀野』が今年のトラック島空襲で島を包囲した敵潜水艦の魚雷攻撃を受けて沈んだんじゃなかったか？」
「えぇまぁ、阿賀野姉さんはトラック島空襲で死にました」
「・・・それと二番艦『能代』は『最上』と同じラバウル空襲で損傷したらしいが、大丈夫なのか？」
「はい。今はリンガ泊地にいます」
「・・・そうか」
武蔵はそう言ってラムネを飲み始める。相変わらずすさまじい記憶力と情報力を持っているらしい。
そんな武蔵を大淀と矢矧がキラキラした目で見詰めると、武蔵は照れたのか視線を逸らして翔輝を見る。
「・・・翔輝。そのラムネちょうだい」
「え？　でもこれ僕の飲みかけだけど」
「・・・いいから」
「あ、ちょっと――」
翔輝が止める暇もなく武蔵は翔輝のラムネを飲む。そんな彼女を大和が不思議そうに見ていると、武蔵は不敵な笑みを浮かべる。まるで決定的な勝利を得たかのような笑みだった。
「・・・翔輝と間接キス成功」
「なッ！？」
大和は驚愕する。なぜあそこまで武蔵が翔輝のラムネに固執した

かがようやくわかった。そして、武蔵のした行為も・・・
「武蔵・・・あなた・・・ッ！」
武蔵は何も答えずにラムネを飲み干す。その表情はこの上なく幸せそうなものだった。
「・・・完全勝利」
「くやしいッ！　大尉！　このラムネに口を付けてください！」
「いや、意味わかんないから！　意味わかんないから！」
翔輝の口に無理やりラムネを押し込もうとする大和を見て、大淀は隣にいた日向に尋ねる。
「あの、あれが一時期でも連合艦隊旗艦を務めた方なのですか？」
「まあね。そもそも連合艦隊旗艦になる艦魂は一くせも二くせもあるような人が多いからね。大和はもちろん長門だってそうだし、武蔵も指揮官としては有能だけど人格が危ないからね。それに比べたら大淀はずいぶんおとなしいよねぇ」
「何か、自信をなくしました」
「早いって・・・」
その後大淀は歴代連合艦隊旗艦に旗艦とはどういうものかと教わったが、まともな回答が返って来たのは武蔵だけだった。

新たに連合艦隊旗艦となった軽巡洋艦『大淀』は内地に戻り、東京湾木更津沖に停泊した。豊田連合艦隊司令長官以下新連合艦隊参謀長となったあの草鹿龍之介中将他司令部要員は『大淀』から部隊を直接指揮。これからの戦いに全力を投入するのであった。

数日後、機動部隊はより前線に向かって出撃した。
連合艦隊司令部は米軍に大反撃作戦を決行する為に艦隊を大規模に動かしていた。
石油不足の中、フィリピンと日本のシーレーンも危うい状況でこれほどの大規模移動を行うとは、次の作戦は壮大な物になるのだろう。

こうして、各地に散っていた残存日本海軍のほぼ全軍が集結し始め、次の大作戦に向けて着々と準備を整えるのであった。

第十章　第十六節　滝川の笑顔　金剛の想い（後書き）

金剛と滝川の二人の迷コンビと新連合艦隊旗艦『大淀』など、様々な内容が詰まった今話でついに長々と続いてきた第十章も終了です。

次からはいよいよ第十一章――日本海軍が挑む最後の決戦であるマリアナ沖海戦に突入します。

まず三、四話くらい決戦前の話を書き、そこからいよいよ壮絶なマリアナ沖海戦を描きます。

史上最大の航空戦であるマリアナ沖海戦編、どうかお楽しみに。

第十一章　第一節　負けられない戦いへの道（前書き）

《大淀（おおよど）》
大淀型軽巡洋艦一番艦――軽巡洋艦『大淀』
出身　呉海軍工廠（広島県）
身長　１６０ｃｍ
髪型　長髪
実年齢（１９４４年5月現在）１歳
外見年齢　１３、４歳
誕生日　２月２８日
好きなもの　仲間・事務仕事・参謀役（得意なもの）
嫌いなもの　敵機・無茶な作戦・指揮官（苦手なもの）
家族構成　なし

軽巡洋艦『大淀』の艦魂。日米艦隊決戦の前哨戦としての潜水艦による漸減作戦の指揮をする為、潜水艦隊旗艦として建造・完成した。しかし真珠湾攻撃により海戦の主力は戦艦から航空機に移り、艦隊決戦思想は崩壊した。その為潜水艦隊の出番はなくなり、『大淀』はその存在価値を失い、連合艦隊でも浮いた存在となった。そんな『大淀』だが、その司令・通信能力を買われて連合艦隊旗艦に就任する。巡洋艦が連合艦隊旗艦になるのは連合艦隊創設当時の防護巡洋艦『松島（まつしま）』以来であった。マリアナ沖海戦では東京湾木更津沖からの指揮を行い、その後旗艦を解任された。その後のレイテ沖海戦には一般艦として参加し、その後も幾多の重要作戦に参加して勝利を飾ってきた。そんな大淀の艦魂は日本海軍の艦魂の中でも数少ないメガネを掛けた子。性格はいたって真面目で、連合艦隊旗艦になる前は自分が浮いた存在である事を気にしながらも事務仕事に徹していた。連合艦隊旗艦になってからはその役目を必死にこなす。確かにそれなりには優秀な子だが、武蔵や長門などの歴代の旗艦に比べれば凡な子。足りない分は努力でまかなっている。親友の矢矧

とは行動を共にしている事が多い。本当は妹に二番艦として『仁淀（によど）』が存在したが、開戦と共に建造が中止されてしまった。

《矢矧（やはぎ）》

阿賀野型軽巡洋艦三番艦――軽巡洋艦『矢矧』

出身　佐世保海軍工廠（長崎県）

身長　１５８ｃｍ

髪型　ポニーテール

実年齢（１９４４年５月現在）０歳

外見年齢　１３、４歳

誕生日　１２月２９日

好きなもの　姉妹・仲間・甘いもの・水雷戦隊・水雷戦

嫌いなもの　辛いもの・航空機・空母・無用な戦い

家族構成　姉・阿賀野・能代　妹・酒匂（さかわ）

軽巡洋艦『矢矧』の艦魂。最上型、利根型が条約破棄後に重巡洋艦に変更された為、しばらくの間新鋭軽巡洋艦は存在しなかった。さらに駆逐艦の高速化により従来の軽巡洋艦の速度が不足し始めたので、より高性能な軽巡洋艦が求められて建造されたのがこの阿賀野型。同型艦三隻を含めて全て戦中生まれ。しかし時代はすでに水雷戦隊の時代ではなく、航空機に移っていたのであまり活躍する機会はなかった。そんな阿賀野型の一隻である『矢矧』の艦魂は親友の大淀と同じく真面目な性格。だが水雷戦隊旗艦としての水雷技術は他の巡洋艦の子より秀でている。後に連合艦隊最強と謳われる第二水雷戦隊旗艦に就任する。しかしその当時の第二水雷戦隊はその栄光はなかった。レイテ沖海戦の後崩壊した日本海軍の中、第二艦隊旗艦となる大和の腹心として彼女を支える。そしてその後『大和』と共に沖縄に突入する一隻となる。

第十一章　第一節　負けられない戦いへの道

一九四四年五月、日本軍は決戦作戦である《あ号作戦》の用意を開始した。これは米軍主力部隊であるＰＯＡ（太平洋地域軍）とＳＷＰＡ（南太平洋地域軍）が合流し、フィリピンに上陸するであろうという希望的観測を基礎に立てられた作戦であり、日本海軍はこれを迎え撃って殲滅しようと全主力部隊をフィリピン付近のタウイタウイに集結させていた。

五月二七日、米軍はニューギニアのビアク島に上陸を開始した。ビアク島は日本軍の飛行場があり、米軍はこれを占拠して使用しようとしていたが、同島を守る一万人を超える守備隊が奮戦し、米軍の侵攻を遅らせていた。

米軍の侵攻に対し、日本軍は防衛作戦として《渾（こん）作戦》を発動した。これはビアク島に増援部隊を送り逆上陸。同島を死守するというものだった。

第一次渾作戦として六月二日、ビアク島守備隊支援及び兵力増強の為に陸軍兵員を載せた輸送艦隊を派遣。その護衛に戦艦『扶桑』以下重巡洋艦三隻、軽巡洋艦一隻、駆逐艦八隻。輸送部隊として輸送艦一隻、駆潜艇二隻、敷設艦二隻が派遣された。

艦隊はビアク島に向かったが、翌日に敵機動部隊発見の報に作戦を中止。ソロンに転進した。

第二次渾作戦は敵の動向から一挙に全軍を輸送するのは不可能と判断し、駆逐艦による高速小規模輸送に転換。八日にソロンから駆逐艦六隻が再出撃した。だが、途中空襲で一隻沈没。さらにその夜米豪連合巡洋艦隊（重巡洋艦一隻、軽巡洋艦二隻、駆逐艦十四隻）に遭遇してレーダー射撃を一方的に受けた。輸送部隊は高速な巡洋艦隊からなんとか離脱。しかし至近弾などを受けて被害が大きく、再出撃は不可能となって作戦は失敗した。

第三次渾作戦は二度の失敗から日本海軍も本気を見せた。参加艦

艇は戦艦『大和』『武蔵』以下重巡洋艦三隻、軽巡洋艦二隻、駆逐艦六隻、輸送艦一隻、駆潜艇二隻、敷設艦二隻、掃海艇一隻、油槽船一隻の大艦隊を編成した。

タウイタウイに錨を下ろしていた戦艦『大和』『武蔵』は作戦参加の為に抜錨。一路集合地点であるソロンを目指した。

蒼い海を護衛の駆逐艦数隻に守られながら二隻の超弩級戦艦が翔ける。大艦巨砲主義の頂点に君臨し、日本海軍の象徴である戦艦『大和』『武蔵』。全長二六三メートルの巨艦が作り出す白波は横にいる駆逐艦を大きく揺らす。その巨艦に載る世界最大最強の四六cm砲。ついにこの主砲が敵に向かって砲弾を撃ち出す時が来たのだ。

海を翔ける『大和』の艦橋には机の上に航海図を置いて鉛筆を走らせる翔輝がいる。その横ではそんな彼を嬉しそうに見詰めている大和。その笑みはいつになく幸せそうだ。

どうして大和がこんなに幸せそうかというと、今は翔輝を独り占めできるからだ。伊勢や榛名達はタウイタウイにいるし、武蔵は距離が離れているので瞬間移動が使えないので『大和』へは来られない。

文字通り、独り占めなのだ。こんな邪魔者のいない事はほとんどない・・・いや、部外者が一名いるにはいるが・・・

「大和。口の端からよだれが垂れてるぞ」

「垂れてませんよッ！」

顔を真っ赤にして怒る先にはイタズラっぽい笑みを浮かべた森下がいる。人望厚い戦艦『大和』艦長だ。

「ははは、これから作戦があるというのに楽しそうだな君達は」

そう言ったのは今年の二月に戦艦『大和』『武蔵』『長門』が所属する第一戦隊司令官に就任した宇垣纏中将。彼は『大和』と『武蔵』を交代して旗艦にしている。今は『大和』が旗艦なので、マストには彼の中将旗が翻っている。

宇垣は艦魂が見えないながらも紙とペンを使って会話する武蔵と

仲がいい。作戦会議には彼女の意見を提出したりするなど、艦魂の意見を上層部に送れる数少ない人物だ。

元連合艦隊参謀長を務めていた宇垣にとっては第一戦隊司令官というのは司令部から前線に左遷されたと言っても過言ではないが、元々大艦巨砲主義者にして大和型戦艦建造推進者である彼は適任であった上、大和や武蔵といった艦魂とも見えないながらも良好な関係を持っていた彼はこれを喜んで引き受けた。

司令官席に座る宇垣の言葉に森下は「す、すみません・・・」と腰を低くする。そんな彼を大和は「いい気味です」と小さく笑う。

「なぁ、お前俺の事嫌いなのか？」

「そんな事ありませんよ。好きでも嫌いでもない至って普通の人です」

「ある意味それが一番傷つくよ」

苦笑する森下の脇を大和が楽しそうにうりうりと笑顔で肘を入れる。なんとも仲のいい二人だ。そんな二人を見て仕事をしていた翔輝は笑みを浮かべる。

「仲いいね。艦長と大和は」

「そ、そんな事ないですよ！　艦長は艦長です！　私がお慕い申し上げているのは大尉ただ一人ですッ！」

「何の話？」

翔輝は首を傾げ、大和は顔を真っ赤にし、森下は笑いながら宇垣に事の成り行きを説明し、説明を聞いた宇垣も微笑ましく見詰めている。

楽しげな『大和』の艦橋。これが新たな『大和』の司令部の面々だ。翔輝は良くなったなぁと思う。もちろん高柳少将や松田少将など歴代の艦長達も良かったが、艦魂が見える森下とは話が合うし、開戦時からミッドウェーまでずっと共にいた宇垣が司令官になってくれたのも嬉しい。翔輝としては歴代最高が揃っている。

「あ、しまった」

翔輝はよそ見していて間違った場所に線を入れてしまった。

「はい。消しゴムです」
「あ、ありがとう」
突如現れた一七五センチという長身に膝まで掛かるような超ロングヘア少女は笑顔で消しゴムを渡してくれた。翔輝はその自分の身長を超える少女にびっくりしながらも礼を言って受け取る。
少女は消しゴムで線を消す翔輝をじっと見詰め、小首を傾げた。
「貴官は、長谷川翔輝航海大尉ですか？」
「え？　あ、そうだけど」
「そうですか。とてもお優しい方だと伺っています」
「あ、ありがとう・・・」
翔輝は少女の笑顔に照れてしまう。よく見ると、自分より身長は高いが年齢は下に見える。だが幼顔の中にもしっかりとした大人の女性への兆しが見えている。服装が水兵服だと見ると、どうやら駆逐艦の子らしい。きっと護衛している駆逐艦の一隻なのだろう。
「おや？　誰だいその子？」
森下がそんな二人に気づいて声を掛けてきた。すると、横にいた大和も振り返って驚く。
「あ、島風（しまかぜ）。どうしたの？」
大和は長身の少女――島風に笑みを向ける。
少女の名は島風。日本海軍最新鋭駆逐艦『島風』の艦魂。『島風』は日本海軍の保有する最大級にして最速の駆逐艦。雷装も充実した、まさに日本海軍最強の駆逐艦である。
「武蔵司令からの命令で来ました」
「武蔵から？」
「はい。長谷川大尉を連行して来い、と」
「第一戦隊旗艦からの命令。即刻その命令は破棄しなさい」
「は、はぁ」
わがままな大和。戸惑う島風。呆れる翔輝。宇垣に説明して共に苦笑いする森下。
「え？　じゃあ、私は戻っていいんですか？」

「いいよ。それともう武蔵の命令は聞かなくていいから」
「そ、それはちょっと・・・」
きっと無理だろう。相手は彼女にとっては超が付くほどの上官。逆らえば軍法会議ものだ。
「まぁ、僕からも無茶言うなって言っておくから。安心して」
翔輝が笑顔で言うと、島風は笑みを浮かべて「ありがとうございます」と礼を言う。
それにしても、高い身長だ。自分や長門よりも高い。金剛や蒼龍と同じくらいの長身だ。
翔輝がじっと見詰めていると、島風は恥ずかしそうに笑みを浮かべる。
「身長が高いと思ってますか？」
「え？　あ、いや・・・」
「いいんですよ。まわりにも言われてますから」
「え、いや・・・」
島風はくすくすと笑う。なんとも優しげな少女だ。幼さを残していてもどこか大人びている。かわいい子だ。ちょっと自分よりも身長は高いが。
一方、翔輝と島風のやり取りを見ていた大和は不満そうな顔をする。そりゃあそうだろう。せっかく二人っきりだったのに島風がやって来て翔輝を取られてしまったのだから。だから・・・
「ねぇ、島風って付き合ってる人がいるんだよね？」
以前雪風から聞いた情報。それは彼が自艦に乗る士官の少年と付き合っているという情報だ。
大和の言葉に、島風は顔を真っ赤にする。
「ち、違います！　だ、誰があんなチビを・・・ッ！」
「確か身長差二〇センチのカップルだっけ？」
「カップルじゃありません！　わ、私と九重（ここのえ）はそんな関係じゃ・・・ッ！」
「へぇ、九重さんって言うんだ」

「・・・ッ！」

大和の言葉に島風はもう顔を真っ赤に染めている。一七五センチもの長身なのに、すっかり小さくなっている。翔輝はそんな彼女の表情から恥ずかしさと嬉しさを感じ取った。きっとその人の事が本当に好きなのだろう。

「へぇ、幸せにね」

「違いますよぉッ！　あぁもう九重のバカぁッ！　チビぃッ！」

島風は顔を真っ赤にしたままそう叫ぶと艦橋を出て行ってしまった。不思議そうに首を傾げる翔輝に対し大和はちょっとからかい過ぎたと反省する。

「おいお前ら、これから初めての実戦になるかもしれないってのに、何浮かれてるんだ」

森下の言葉に二人は「すみません」と謝る。

そう、これから『大和』と『武蔵』は初めての実戦になるかもしれないのだ。輸送部隊の護衛というのは少し不満があるが、それでも今までずっと待機していたのに比べればずいぶんマシだ。

大和は嬉しさと怖さという全く違った感情に挟まれて複雑そうな顔をする。《戦艦大和》としては嬉しいけど、《大和》としては怖いのだ。

そんな大和の心内を感じたのか、翔輝は彼女の肩をそっと叩いた。

「まぁ、がんばろうよ。僕じゃ力不足だけど、協力するから」

「そ、そんなもったいないお言葉・・・ッ！　ありがとうございます！」

「いや、お前一人いてもいなくても『大和』は動くけどなぁあぁぁぁッ！？」

「艦長？　あまり大尉を侮辱しないでくださいね」

「してないだろッ！？　っていうか俺は艦長だぞ！　一介の航海士との待遇が違い過ぎのわあぁぁぁぁぁッ！？」

「かーんーちょーおー？」

「ぎゃあああぁぁぁぁぁぁッ！」

「おい大和ぉッ！　艦長の背骨が変な方向に曲がってるぞぉッ！？　やめろってばぁッ！」

宇垣はそんな三人（彼には大和は見えないが）を見詰め小さく笑みを浮かべると、前を向き直って深く軍帽を被る。そしてそっと、腰に挿した亡き山本元帥の短刀を掴む。その時何を彼が思っていたのか、それは彼にしかわからない。

超弩級戦艦『大和』と『武蔵』は、白波を立てながら自らの作戦を成功させる為にソロンを目指して進んだ。

艦隊は十二日にソロン沖に集結した。だが、肝心のその作戦は中止された。

米軍がついに日本の絶対国防圏の重要拠点――マリアナ諸島に来襲して来たからだ。

米二軍は合流する事なくＳＷＰＡがビアク島に、ＰＯＡがマリアナ諸島を奇襲攻撃。マリアナ沖には敵の機動部隊が展開を開始した。十三日にマリアナ諸島重要拠点であるサイパン島に空襲を敢行。続いて戦艦部隊が艦砲射撃を開始。十五日には上陸を開始した。

サイパンが陥落したら絶対国防圏が崩壊する。そうなれば日本の戦争継続は不可能になる。日本海軍は持てる力を全て投入する事にした。

豊田連合艦隊司令長官はこの危機的状況に決戦作戦――あ号作戦の発動を決定した。

機動部隊旗艦・空母『大鳳』の会議室で旗艦である大鳳を中心に作戦会議が開かれていた。

「連合艦隊司令部から出撃命令が下った！　我が機動部隊は明日夕方には出撃し、マリアナに向かう！」

翔鶴は机上の地図に描かれたマリアナ諸島を指差して力強く言った。そんな機動部隊艦魂参謀長の翔鶴を瑞鶴達が補佐する。

「敵はおそらく大機動部隊を進出させているわね」
「正式空母と護衛空母が無数にいる大機動部隊ね」
瑞鶴と瑞鳳の表情は余裕のないものだった。こちらの空母は数も足りなければ大型空母の数はもっと用意できない。艦載機の数は半分ほどしか使えない。圧倒的にこちらが不利なのだ。
「角田中将が指揮してる第一航空艦隊は連日の戦闘でほとんど壊滅してるから、基地航空隊の支援はあまり期待できないね」
瑞鳳の言葉に隼鷹が浮かない顔をする。彼女にとって角田中将は南太平洋海戦で翔鶴の仇を討つ機会をくれた恩人なのだ。その彼の部隊が壊滅したという報告は、彼女を苦しめるのだった。
「姉さん、大丈夫よ。角田中将の為にもがんばりましょう」
「うん」
隼鷹は小さく笑みを浮かべる。そんな二人の同戦隊に所属する龍鳳がじっと見詰める。自分は彼女達より役に立たないかもしれない。速度は速いが、搭載機数は彼女達の半分もない軽空母。今まで出番がなかったのは、その少ない搭載機数のせいだろう。だが、それでも妹の瑞鳳は常に前線に立ち続けた。立派な軍人だ。
「ねぇ、姉さん」
その声に振り返ると、そこには妹の龍鳳が立っていた。小さな笑みを浮かべる、かわいい妹だ。
「何？」
「いやぁ、初めて一緒の作戦だからさ――がんばろうね」
瑞鳳は恥ずかしそうにしながらも満面の笑みを浮かべる。そんな彼女に、龍鳳も自然と笑みが浮かぶ。
「えぇ、がんばりましょう」
瑞鳳と龍鳳は笑みを浮かべ合って、初めての共同作戦に場違いかもしれないが喜びを感じていた。
そんな二人を見詰める下士官服を着た少女が二人。どちらも長い髪を流した瑞鶴達よりも年上の少女達だ。
「千歳、千代田。何か意見はあるか？」

翔鶴はその二人の少女に尋ねる。
「い、いえ。特に何もありません」
そう言ったのは白いリボンを付けたかわいらしい少女。
「別にないわよ」
そう言って少し釣りあがった瞳で翔鶴を見詰める少女。
二人は千歳姉妹。千歳型航空母艦一番艦『千歳』と二番艦『千代田』の艦魂だ。優しそうなのが千歳で、少し怖そうなのが千代田だ。
千歳型空母は祥鳳型空母と同じで軍艦を改造した安定した性能を持つ軽空母である。元々両艦は水上機母艦だったが、空母に改造された。どちらも『翔鶴』や『龍鳳』より艦齢は上だが、空母に改造が終わったのは去年である。外見は軽空母なので艦橋が甲板にない祥鳳型空母に類似している特徴がある。
そんな千歳姉妹は生まれた時期が近いので双子のように似ている。ただし、性格は正反対で姉・千歳は穏やかで優しく、弱気な性格。妹・千代田は姉と違って強気で姉想いな性格。外見の特徴は二人とも同じ長髪だが、千歳はリボンをつけているのですぐにわかるし、千代田も釣り目なのですぐにわかる。
そんな二人も龍鳳と同じく輸送任務や訓練に従事していので表舞台にはあまり出てこなかったのだ。
空母『龍鳳』はこれが初陣。『千歳』と『千代田』はミッドウェー海戦以来の出撃である。
「今作戦では小沢長官提案のアウトレンジ戦法を使う」
翔鶴の声に千歳が申し訳なさそうに手を上げる。
「すみません。アウトレンジ戦法って一体どんな戦法なんですか？」
まだ機動部隊では新入りの千歳の質問に歴戦の空母瑞鳳が答える。
「アウトレンジ戦法とは敵射程範囲外から一方的な攻撃を行う事。私達日本海軍の飛行機は米軍機に比べて航続距離が長い。だから敵の艦載機が来る距離よりも遠くから攻撃隊を出す事で敵よりも先に攻撃でき、こちらは攻撃されないと言う画期的な戦法なのよ」
「へぇ、それはすごいですね」

千歳は柔らかな笑みを浮かべる。戦争とはまったく無縁な感じの千歳は緊迫した空気までも柔らかくする優しい存在感を放つ。だが、そんな千歳の頭を千代田が小突く。

「すごいですねじゃないよ。わかってるの？　この戦法は少ない艦載機で敵に大打撃を与える危険な戦法なのよ。距離が遠ければただでさえ弱い搭乗員の集中力が下がる。そのまま敵の猛烈な防空網に突っ込めば戦果よりも被害の方が多くなるの」

「え？　じゃあ、被害は大きいの？」

「犠牲はかなり出るのを覚悟した方がいいわよ」

「えええええぇぇぇぇぇッ！　それは困るよぉッ！」

千歳はおろおろと動揺する。基本的に平和主義な彼女にとってこれはあまりにも過酷な現実なのだ。そんな千歳に龍鳳は、

「犠牲が多いなら、それ以上の打撃を敵に与えるまで。それこそ、敵全空母撃沈を目指す。私達空母にできるのはそれぐらいのものよ」

龍鳳はしっかりと意見を放つ。義妹瑞鳳よりもしっかりした少女だ。そんな姉の姿を見て嬉しそうに瑞鳳は微笑む。

「あー、瑞鳳。悪いんだが和む雰囲気を放たないでくれないか？」

翔鶴が申し訳なさそうに言うと、瑞鳳は慌てて姿勢を正す。

「今作戦には新型艦上爆撃機彗星（すいせい）と新型艦上攻撃機天山（てんざん）が作戦に導入されている。両機種の艦載機としての実戦はこれが初だ。この二種類の新鋭機投入は戦果増大を期待できる」

翔鶴の言う彗星と天山とは九九式艦上爆撃機と九七式艦上攻撃機の後継機である。基地航空隊としては配備されていたが空母艦載機としてはこれが初めての実戦となる。

瑞鶴は書類を見詰める。そこにはサイパン島守備隊の兵員の配置などが書かれていた。その中の名簿表に守備隊に守られている中部太平洋方面艦隊の名簿があった。その中に懐かしい名前、中部太平洋方面艦隊司令長官南雲忠一中将の名があった。

「ミッドウェー海戦では失敗したけれど、私達空母を輝かせてくれた司令長官です。何としても、彼は守りたい」

「南雲か・・・機動部隊司令長官を小沢に任せた後どこに行ったかと思っていれば、こんな所にいたのか・・・確かに、奴には生きていてもらいたいな」

翔鶴と瑞鶴にとっては真珠湾攻撃を成功に導いた大事な司令官である。そんな彼を守りたいという意思も、この作戦に気合を入れる理由の一つだ。

「出撃は明日一六〇〇！　各員、準備に入れッ！」

翔鶴の号令一下、空母艦魂達は解散した。そんな中、部屋を出て行こうとする大鳳を隼鷹が止める。

「ねぇ、大鳳。ひとつ訊きたい事があるんだけど」

隼鷹の言葉に大鳳は振り返ってじっと彼女を見詰める。それは「・・・何？」と訊いているのだ。隼鷹は一度大きくうなずいて彼女を見詰める。

「お兄ちゃんの事、どう思ってるの？」

「・・・翔輝さんの事？」

「うん」

大鳳は真剣な瞳で見詰める隼鷹を見詰め、小さく口を動かす。

「・・・とても、大切な人」

「それって、好きって事？」

「・・・わからない。そういう感情が、どういうものか」

大鳳はまだ生まれて三ヶ月である。まだ自分の中に渦巻く感情が一体何なのか、わかるような年ではない。

うつむく大鳳に、隼鷹は握りこぶしを握って彼女を見詰める。その頬は赤く、瞳には真剣な光が煌いていた。

「わ、私はお兄ちゃんが好きぃッ！　大好きだもんッ！　だから、誰にもお兄ちゃんは渡さないッ！　大和や武蔵、もちろん大鳳にもぉッ！」

そう宣言すると、隼鷹は身を翻して走り去った。

残された大鳳はぼーっと窓の外を見詰める。窓の向こうは厚い雲に覆われている。昨日までは晴れていたのに、まるで迫り来る敵を

隠すかのように不気味に漂う。
大鳳が見詰める方角は、あ号作戦発動の為に第三艦隊に合流する予定の第二艦隊が艦隊編成を行っているであろう海。
――そして、翔輝がいる海だ。
「・・・翔輝さん」
大鳳はじっとその方向を見詰める。その顔は無表情で何を考えているかわからない。だが、その瞳にはわずかに不安の色があった。
大鳳は灰色の雲に覆われた海をずっと見詰めていた・・・

一方、艦隊の編成を行っている第二艦隊でも第二艦隊旗艦・重巡洋艦『愛宕』で会議が開かれていた。
「今回我々第二艦隊は第一機動艦隊に属し、前衛部隊として第三艦隊に対する敵の攻撃を吸収する事が任務です。私はあくまで第二艦隊旗艦なので、全体的な作戦の指揮は第一機動艦隊兼第三艦隊旗艦を務める大鳳長官に一任します」
第二艦隊旗艦の愛宕の言葉を皆は静かに聞いている。事前に今回の作戦が航空機主力の作戦だと聞いていたので、機動部隊が主役を務める事は先刻承知であった。だが、
「我々戦艦が空母ごときの囮になるというのか・・・ッ！」
一人、戦艦こそ海戦の主力であるという前時代的な考え方を捨て切れない金剛がすぐさま激怒の声を上げる。いきなり立場上部下であっても実質的には上官に位置する金剛に怒鳴られ、愛宕はビクリと震える。
「仕方ありません。今回は第三艦隊と第一航空艦隊が主力ですので、戦艦や巡洋艦で編成された我々は敵の攻撃を吸収する事になります。護衛及び攻撃には第三航空戦隊が我が艦隊に協力してくれます」
「結局は空母ではないかッ！　貴様は自らの主砲で敵を殲滅したいという海軍軍人の志はないのかッ！？」
「そ、そんな事言われましても・・・」
「ちょっと金剛。そんな無茶な事言わないでよ。愛宕が困ってるじ

やない」
　そう言って助け舟を出したのは長門。この中で唯一金剛の暴走を止める事ができる重要人物だ。
「今度の敵はマリアナ諸島近海に展開している敵機動部隊なのよ？空母には空母で挑む戦む。この戦争の常識でしょ？」
「構うものか！　艦砲射撃で撃滅するのみ！」
「無理言わないで。敵空母に近づく前に撃沈されるわよ」
「戦艦は航空機の攻撃ごときでは沈みはせんッ！」
　金剛の理解不能な戦艦無敵発言に長門は頭を抱える。
　もう航空機戦争に入って三年以上過ぎていると言うのに、彼女はいまだに戦艦無敵神話を信じ続けているらしい。とんでもない堅物だ。
「・・・今回の作戦では空母が主力となる。だからこそ護衛部隊である私達には高速艦隊が重視される。その為、苦渋の決断だが今作戦には戦艦『扶桑』『山城』『伊勢』『日向』は不参加となる」
　この四艦は日本戦艦の中でかなり低速なので高速艦隊には向かないのだ。準低速な『長門』『大和』『武蔵』はその攻撃力が重要視されたので参加している。『金剛』と『榛名』は言うまでもなく高速戦艦なので参加している。ただし、『長門』だけは機動部隊の方に配置される事になっている。
　だが、武蔵の説明に外された四人は納得いかない。これから始まるのは日本海軍が総力を掛けて行う決戦である。そんな戦いに参加できないのは彼女達には不満でしかない。
「私や山城が抜けるのは仕方ない事よね」
　扶桑と山城は自分達がお荷物だと理解しているので作戦に参加できない事を仕方ないと思っている。だが、
「なぜ、航空戦艦となった『伊勢』と『日向』は参加できないのだ？」
　山城が長門や武蔵を睨み付ける。その瞳は真剣に妹達に航空戦艦としての初陣を飾ってやりたいという姉の気持ちが溢れていた。そ

んな扶桑と山城の想いに伊勢と日向は嬉しくなった。だが長門は・・・

「今の日本は飛行機が足りないの。少ない飛行機をわざわざ『伊勢』と『日向』に分割する余裕はないのよ。今回は正式空母、軽空母、商戦改造空母を合わせて九隻が参加してるから、その全部に飛行機分散して十分足りる量しかないの。言い方は悪いけど、戦艦としての能力は四隻とも低いでしょ？　はっきり言って、足手まとい」

「長門さんッ！」

「大和。何も言うな。それは私達が一番理解している」

怒る大和を山城が押さえる。その瞳は何も言うなと訴えていた。そんな山城の瞳に大和は黙ってしまう。

「うちらは大丈夫やでぇ。それよりも、大和はん達はうちらの分までがんばってきてぇな」

明るく微笑む伊勢に大和はもう何も言わなかった。

「こら大和ぉ。そんな悲しそうな顔しないでよぉ。大丈夫よ。これから先私達が出撃する機会は必ず来る。だから、ね？　笑って私達の分までがんばってよ」

天真爛漫な笑みを浮かべる日向に大和にも自然と笑みが浮かんだ。そんなほがらかな空気に金剛がイラ立つ。

「笑っている場合か！　敵はもう日本本土手前まで来てるのだぞ！　このままでは本土決戦という最悪の事態になる！　この戦いで敵を殲滅できねば、本土にいる一億人の国民を戦闘に巻き込む事になる！　それだけは絶対に避けねばならんのだッ！」

金剛の必死な叫びに一同は沈黙する。そんな中、常に無表情の武蔵の顔が苦しそうにゆがんだ。

「・・・金剛。本土決戦といかなくても、日本が火の海になるかならないかは、この戦いに掛かっている」

「何ッ！？　どういう事だッ！？」

金剛のみならず全員が武蔵を驚愕の視線で見ている。それに対し、武蔵はある書類の束を取り出した。その資料には――米陸軍が開発

した新型四発長距離戦略重爆撃機の情報が記されていた。
「・・・米陸軍新型四発長距離戦略重爆撃機Ｂ－２９。《超空の要塞》と称されるこの新鋭機は現在中国成都に配置されて日本陸軍を苦しめている。その爆撃機の性能は爆弾搭載量九トン、高々度一万mを戦闘機並みの高速で飛行可能。そして、その最大航続距離は・・・約五〇〇〇キロ」
「ご、五〇〇〇キロだとッ！？」
金剛が悲鳴を上げる。長門も苦しそうに顔をゆがめる。ただ一人その言葉の意味がわからない大和は不思議そうに首を傾げる。そんな大和に、武蔵は苦しそうに言う。
「・・・もしも本作戦が失敗してサイパンが陥落すれば、米軍はサイパンに飛行場を建造する。そして新鋭機Ｂ－２９を配置すれば・・・その広大な攻撃範囲は、日本本土ほぼ全域を占める」
「そ、それって・・・ッ！」
ようやく理解し、大和の顔から血の気が失せる。それはここにいる全員が同じだ。そんな彼女達に、武蔵は泣きそうな声で結論を言う。
「・・・つまり、この作戦が失敗すれば、日本機の限界を超える高々度から飛来する爆撃機に有効な迎撃手段もできず、日本本土は火の海になる」
武蔵の言葉に、一同は愕然としてその場に崩れ落ちた。
もし、この作戦に失敗すれば愛すべき祖国、守るべき祖国を、火の海にしてしまう。
もはや、絶対に失敗が許されない状況に陥っていた。
誰もが沈黙する中、長門は必死な表情で皆に訴える。
「今度の作戦・・・絶対に失敗はできない。日本海軍の総力を結集して行わなければならない。それこそ――死んでも成功させなくてはならない」
長門の言葉に、全員がうなずく。
連合艦隊旗艦大淀不在の今、連合艦隊旗艦代理を務める連合艦隊

艦魂参謀長の武蔵は、真剣な眼差しで全員に今作戦の意気込みを放つ。
「・・・今作戦・・・大鳳達機動部隊は、その命に代えても守り抜け」
武蔵の言葉に、ついに金剛も決意を決めて立ち上がった。もはや誇りはプライドは足手まといでしかない。地面に這いつくばってでも、勝たなければならない戦いなのだ。
「今回、私は意地もプライドも捨てる。この命にかえても、必ずや機動部隊を守り抜く。祖国を守る為に・・・ッ！」
真剣な表情で言う金剛に、榛名もうなずいて立ち上がる。
「あの姉貴が空母死守にその身をかけるって言うなら、俺はもう何も言わない。ただ、大鳳達を守るだけだ」
金剛と榛名。日本海軍戦艦古参の二人の決意に、全員が覚悟を決めた。
長門は皆の決意にうなずくと、愛宕を見詰める。愛宕は小さくうなずく。
「全力を注ぎましょう。必ず、機動部隊を守り抜いてみせましょう」
愛宕の言葉に全員がうなずく。
「・・・おそらく、この戦いには各艦それぞれのマストにZ旗が翻る。その旗の意味と、今作戦の重大性を胸に刻み、作戦に当たってほしい」
連合艦隊艦魂参謀長である武蔵の言葉に全員は立ち上がって敬礼する。そんな中、金剛はテーブルに置いていた軍帽を被り直して不敵に笑う。
「――だが、敵戦艦部隊と出会ったら、私は艦隊決戦をするぞ？」
「金剛・・・本当、あなたって人は・・・」
長門も金剛の諦めの悪さには苦笑する。そんな長門に金剛は唇を吊り上げて笑う。
「明日の午前中に出撃します。各員準備用意」
愛宕の解散命令に、全員は散った。

たった一人残された武蔵は、窓の外の厚い雲に覆われた空を見て唇を噛んだ。
負けられない戦いが、始まろうとしていた。

翔輝と合流した大和の表情は暗いものだった。それは翔輝も同じ事。何だかんだ言っても戦争が始まって三年、今まで二人とも実戦経験はないのだ。
「この作戦に失敗したら、日本本土が――」
「火の海になります」
「そんな事になったら、海軍の駐屯基地がある呉が狙われる。そしたら瑠璃や呉のみんな――翔香の墓までもが危ない」
翔輝の顔は真っ青だった。大切な者を失うという危険性が、現実を帯びた事によって翔輝は戦争に改めて恐怖する。
そんな真っ青な顔をした彼を、大和は今まで見た事がなかった。彼女が知っているのは、いつも優しく微笑み、だけど本当は心が弱い、そんな人。
「大尉、大丈夫ですか？」
「う、うん」
そう答えるが、翔輝は明らかに動揺していた。あのいつも余裕でそれなりに冷静な彼とは思えないほどの慌てぶりだ。当たり前だ。自分の故郷が火の海になるかもしれないと聞いて落ち着いてられる訳がない。
翔輝は一度立ち止まると、大和の肩を持った。急な行動に大和も驚く。そんな彼女に、翔輝は優しい笑みで言う。
「僕達にってこれが初めての実戦だけど、いきなり負けられない戦いになっちゃったね。でも、全力を出そう――お前なら必ずかのん達を守れる。僕は、信じてるよ」
「大尉・・・」
翔輝の言葉に、大和は嬉しそうにうなずいた。
彼がいればできる。そんな根拠のない力が体の奥から溢れ出して

くる。

辛い戦いになっても、彼がいれば乗り越えられる。そう思えた。

翔輝と大和は覚悟を決めた。この戦いは、絶対に勝利しようと。

敗北を許されない戦いが、始まろうとしていた。

第十一章　第一節　負けられない戦いへの道（後書き）

いよいよマリアナ沖海戦編に突入です！
日本海軍が米軍に挑む空前絶後の大航空決戦であるマリアナ沖海戦。
それは日本機動部隊の破滅への道に拍車を掛ける事となった。
新鋭空母『大鳳』、歴戦空母『翔鶴』『瑞鶴』、その他大勢の空母や戦艦、巡洋艦や駆逐艦などが投入されてたその戦いは、決して負ける事が許されないものだった。
連合艦隊最後の決戦を描くマリアナ沖海戦編が今始まります！

評価や感想、及び意見などをお待ちしていますよぉ！

第十一章　第二節　あ号作戦発動　連合艦隊総出撃（前書き）

《千歳（ちとせ）》

千歳型航空母艦一番艦――軽空母『千歳』

出身　呉海軍工廠（広島県）

身長　１５５ｃｍ

髪型　長髪

実年齢（１９４４年６月現在）５歳

外見年齢　１５、６歳

誕生日　７月２５日

好きなもの　千代田・剣・平穏な日常・平和

嫌いなもの　争い事・悪口・暴力・戦争

家族構成　妹・千代田

軽空母『千歳』の艦魂。水上機母艦として起工・竣工し、長年水上機母艦として活躍し、ミッドウェー海戦、第二次ソロモン海戦に参加。その後一九四三年の終わりに空母へと改装された。外見は祥鳳型と酷似しており似たような性能を持っている。空母としての出撃はこれが初陣となる。妹艦『千代田』、『瑞鳳』と共に第三航空戦隊を組む。そんな『千歳』の艦魂である千歳は白いリボンを付けた外見通りのかわいく優しい性格の女の子。争い事が嫌いで平和を望む。搭乗員の命を大切にしていて無謀な作戦にはいつも小さい声ながらも反撃の声を上げる力強さを持つ。誰に対しても優しく、柔らかな笑顔を向ける無防備な子。その為いつも妹の千代田をハラハラさせる。同じ戦隊を組む事になった『瑞鳳』に乗る剣に好意を持っているが勇気がなく積極的な行動には出られない。剣と一緒にいるたびに千代田の妨害行為がある為いつもいいところで失敗してしまうかわいそうな子。

《千代田（ちよだ）》

千歳型航空母艦二番艦――軽空母『千代田』
出身　呉海軍工廠（広島県）
身長　１５５ｃｍ
髪型　長髪
実年齢（１９４４年６月現在）５歳
外見年齢　１５、６歳
誕生日　１２月１５日
好きなもの　千歳・千歳の笑顔
嫌いなもの　金剛・千歳を取られる事・千歳をいじめられる事・千歳の泣き顔
家族構成　姉・千歳
千歳の妹で軽空母『千代田』の艦魂。生い立ちは『千歳』と同じようなもの。千歳よりやや釣り目で性格は優しい千歳とは反対に強気な性格で言葉遣いも結構乱暴。以前その態度から金剛を怒らせた事があり金剛は苦手。誰にでも優しく笑顔がかわいい姉の千歳が大好き。誰にも渡したくないというちょっとシスコン気味。千歳の剣への想いに気づいていて嫉妬し、剣によく暴力を振るう。そのたびに千歳に怒られて落ち込んでしまう。根は優しいので千歳も彼女の優しさには気づいてはいる。剣に対して乱暴に接していたが、だんだんと彼の優しさに惹かれ始めている事に気づいていない。

第十一章　第二節　あ号作戦発動　連合艦隊総出撃

六月十五日の朝、大和達第二艦隊が出撃した。
戦艦『大和』『武蔵』を主軸としたこの艦隊の指揮官は栗田健男中将。後の世で日本海軍一の批判を受ける事になる指揮官だ。それはまたの機会に。
戦艦『大和』『武蔵』で構成された第一戦隊司令官にはかつて山本元帥の右腕として活躍した宇垣纏中将が手腕を振るっている。
「長谷川君。ようやく『大和』『武蔵』の出撃だ。私はこの時をずっと待っていた――だが、こんな最悪な状況下では嬉しくもない」
艦橋にある司令官席に座りながら不機嫌そうに眉をひそめる宇垣。そんな宇垣に翔輝は小さく微笑む。
「そうですか？　僕は嬉しいです――やっと、この『大和』で出撃できるのですから」
翔輝の言葉に宇垣はずっと黙っていたが、フッと小さく笑みを浮かべる。
「そうだな。俺もこの大和型戦艦建造を推進した一人だ。まるで息子の就職が決まったような気持ちだな――いや、娘と言うべきか」
宇垣はそう言って後方を走る『武蔵』を見る。今武蔵は自艦で待機しているだろう。
「この戦いでは我々戦艦部隊は敵を引き付ける囮だが、いつか主力部隊として戦わせたいな」
「そうですね。艦長」
「何だ？」
声を掛けると艦長席に座る森下が振り向く。そんな彼に翔輝は優しく笑みを浮かべる。
「『大和』の命、任せましたよ」
「わかってる」
森下の笑みに翔輝もうなずく。そんな二人を優しげに見詰める宇

垣。
「小沢さんにはがんばってほしいな」
宇垣がそうつぶやくと、窓の外を見詰めた。そんな宇垣を一瞥し、翔輝はふと隣で少し不安そうな表情を浮かべている大和を見る。
前回出撃したのは日本の全盛期だったミッドウェー海戦。だが今回は完全な劣勢状態である。不安があるのは当たり前だ。そんな大和を励まそうと翔輝は優しく微笑む。
「なあ大和」
「な、何ですか？」
不安そうに見上げる大和。その瞳は揺れている。そんな大和に、翔輝は優しく微笑む。
「がんばろうな」
「はいッ！」
満面の笑みを浮かべる大和の頭を翔輝は撫でる。それに対し大和は顔を赤らめながら喜ぶ。
大和の不安はほとんどなくなり、嬉しそうに笑みを浮かべた。
第二艦隊は旗艦『愛宕』を先頭にソロン沖を出撃した。一路、第二艦隊はマリアナ諸島を目指して進撃を開始した。

その日の夕方、暁の海を九隻の空母を主軸とした第三艦隊こと機動部隊が出撃した。
正式名称大日本帝国海軍第一機動艦隊所属第三艦隊。それはもはや開戦当初の荒鷲ではなく、まだまだ弱々しい雛鳥が主力になっていた。しかし、もはや一刻の猶予も許されない状況では、これが大事な主力兵力なのだ。
機動部隊旗艦・空母『大鳳』の艦橋にはこの戦いの全指揮を任された日本機動部隊生みの親――小沢次三郎中将が天を見上げていた。その隣には機動部隊参謀長の古村啓蔵（こむらけいぞう）少将が立っていた。
「ついに来ましたな・・・決戦の時が」
「そうだな・・・本当は、もっと搭乗員を育成したかったんだが」

「仕方ありませんよ。い号作戦とろ号作戦で我が機動部隊の艦載機は極限まで失われてしまったのですから。それをここまで復興できたのは、長官のおかげです」
「私は何もしておらん。がんばったのは搭乗員達の方だ」
「相変わらず謙虚な人です」
小沢の言葉に古村も笑みを浮かべて天を見上げる。
「この新鋭空母『大鳳』の力を引き出せば、この戦いは勝てます」
「そうだな。この戦いは負けられん。絶対に」
小沢の言葉に古村も天を見上げる。
そんな彼らがいる艦橋の上の防空指揮所では大鳳がぼーっと空を見詰めていた。空はこの前までの雲は一切なく、透き通った蒼い空が広がっていた。
ぼーっと空を見詰める大鳳。その視線の先には何もない海。だが、その海の向こうには自分達と合流する為にこちらに向かっている第二艦隊がいる。
「大鳳」
その声に振り向くと、そこには飛行服を着た刹那が立っていた。
刹那は笑みを浮かべて大鳳の横に立つ。大鳳はそんな彼を気にした様子もなく再び海の向こうを見詰める。
「なぁ、お前はこの戦いをどう思うんだ？」
刹那の問いに、大鳳は答えずぼーっと空を見詰め続ける。
一方、無視された刹那は苦笑いを浮かべる。こうして話し掛けては無視されてしまう事が多い。翔鶴達もあまり話せないらしい。彼女がこの部隊に加わってから三ヶ月も経つが、彼女はあまと接しようとしない。瑞鶴の話では『大和』に乗っているある士官の少年には懐いているらしい。ちょっとうらやましい。
「まぁ、がんばろうよ」
刹那はそう言って笑顔を向ける。反応がない大鳳にため息し、艦内に戻ろうと入り口に向かう。
「・・・がんばってください」

「え？」
その小さな声に振り返ると、大鳳がじっと自分を見詰めていた。その表情はいつもの無表情だが、ほんのわずかだがその瞳が揺れている。そんな彼女を見て、刹那は小さく微笑む。
「あぁ、がんばるよ」
刹那はそう笑顔で言うと防空指揮所を後にした。大鳳は再び海の向こうを見詰める。
大鳳はずっと海を見続けていた。

空母群の先頭を翔ける『大鳳』の後方に並んで翔ける『翔鶴』と『瑞鶴』。そんな『瑞鶴』の防空指揮所では瑞鶴と貝塚が並んで立っていた。
甲乙合わせた両部隊を合わせた約三〇隻。それが第一機動部隊主力を務める機動部隊の面々だ。『大鳳』のような新鋭艦もあれば歴戦の艦も数多い。久しぶりの大艦隊である。
海を翔ける艦隊を見詰め、貝塚は誇らしげな顔をする。
「いよいよ小沢機動部隊の出撃か」
「はい。南雲機動部隊での出撃も南太平洋海戦以来ですからね。懐かしいです」
「そうだな。待ちに待った出撃だ。気合を入れろよ」
「そうですね・・・」
貝塚はどこか元気のない瑞鶴を見る。いつもは優しげに笑う瞳は少し悲しげに揺れている。
「何だ。嬉しくないのか？」
「そ、そりゃ嬉しくはない事はないですけど・・・」
「・・・怖いのか？」
瑞鶴は力なくうなずく。
それはそうだろう。瑞鶴は生まれて二年半ぐらいしか経っていない。瑞鶴自身も外見は十三、四歳ぐらいでしかない。そんな彼女はこれかた戦場に向かうのだ。怖いに決まっている。戦場は大人でも

恐れる場所だ。それをこんな子供が行くというのだから、その恐怖は大きい。そんな恐怖を、彼女も抱いているのだ。

「・・・私は今まで無傷で生き残ってきました。でも今度は、今までとは違います。私が体験したのは敵空母は二隻とか三隻という規模でした。それでも十分な脅威だったのに、今度の敵空母は十隻以上。そしてこっちは大小合わせて九隻。今までにない、史上最大の航空戦になるでしょう。そんな中、私は無事に生き残れるのか。もしかしたら、私はここで命を落とすかもしれません。そう思うと、すごく怖いんです」

瑞鶴は横を走る『翔鶴』を見詰める。姉は今までの戦いでいつも自分の代わりに被害を受け続けていた。もしかしたら、姉も命を落とすかもしれない。それが怖くてたまらない。

「艦長は、怖くないんですか？」

瑞鶴は不安げに見詰める。その視線の先にいる貝塚はその視線を真っ直ぐ受け止め、小さく首を横に振る。

「そりゃ、俺だって怖いさ。何しろ空母の艦長で実戦なんて初めてだからな」

「そうは見えませんけど」

「俺は一七〇〇人の命を預かっている空母『瑞鶴』の艦長だ。そんな俺が平然とそういう感情を表に出していては士気に関わるからな」

「そ、そうですよね」

「でも、俺はお前を絶対に守り抜くからな」

「艦長・・・」

瑞鶴は頬を赤らめながら小さくうなずく。そんな瑞鶴を見詰め、貝塚は小さく微笑むと再び前を見詰める。

横に勇ましく立つ己が艦長を見詰め、瑞鶴は微笑む。

この人となら大丈夫。きっと生き残れる。そんな気がした。

この人になら、自分の命を預けられる。そう確信した。

軍帽を深く被り直し、まだ見ぬ敵艦隊がいるであろうマリアナ諸島の方を向く。そこが今回の戦地であり、決戦場だ。

真珠湾から生き残る歴戦の空母の艦魂として、瑞鶴はこの戦いに全力を注ごうと決意する。
必ず勝つ。それだけを胸に刻み・・・

第三艦隊に属する空母六隻を前に見詰め、第二艦隊が合流次第そちらに回る予定の第三航空戦隊旗艦、空母『瑞鳳』の甲板では瑞鳳と剣が立っていた。
風に揺れる髪を押さえ、ずれたメガネのブリッジを上げる。メガネの奥にあるクリッとした瞳を輝かせ、瑞鳳は空母群を見詰める。
「はぁ、いよいよ出撃かぁ」
「そうだけど、瑞鳳は嫌なのか？」
「別に嫌って訳じゃないわよ。私は空母の艦魂よ？　戦う事が使命だもの。でも、怖いのは変わらないわよ。恐怖心ってのはいつまでも消えないものなの」
「まぁ、その気持ちはわかるけどね」
剣はうんうんとうなずく。ここまで数々の修羅場を潜り抜けて来た彼だからこそ、瑞鳳の気持ちは痛いほどわかる。まわりから撃墜王とまで言われても、恐怖に慣れる事はない。恐怖に慣れてしまった時、それは死へと繋がる。恐怖を感じない者は早死にするのだ。
小さく笑みを浮かべる剣を見て、瑞鳳は唇を尖らせる。
「何ヘラヘラしてんのよ」
「いや、別にヘラヘラしてる訳じゃないけど・・・」
「してるわよ。まったく、ほんと緊張感ってものがないんだから」
「ははは・・・」
「笑い事じゃないでしょ」
瑞鳳はふんと不機嫌そうに背を向ける。そんな彼女に剣は苦笑いするしかない。と、
「瑞鳳さん」
その声に振り返ると、そこには同じ戦隊を組む千歳と千代田がいた。

「二人ともどうしたの？」
「いやぁ、これから第二艦隊の方に属すると思うと頭が痛くて」
千代田は顔を片手で覆ってため息する。彼女は以前この無礼な態度からあの鬼の金剛の逆鱗に触れて粛清（しゅくせい）を受けた経験があるのだ。だからこそそんな彼女が配置されている第二艦隊に合流するのが嫌なのだ。
「まぁ、金剛さんも悪い人じゃないんだから」
「甘いわね姉さん。あの人は鬼よ。悪魔よ。生ける災厄なのよ」
千代田は身を震わせて顔を真っ青にする。一体どんな調教をされたというのだろうか。それは誰にも想像付かないし、想像したくもない。
「ははは、そりゃ大変そうだな」
「人事みたいに言ってんじゃねぇよバぁカ」
「バカとはひどいな。これでも頭脳派の戦闘機乗りだよ」
「はん。あんたなんかがエースパイロットとは、日本海軍航空隊も落ちたもんだねぇ」
「ちょっと千代田！　大空さんに失礼よ！」
「いいっていいって。こう言ってても僕の事はこいつも認めてくれてるから」
「ば・・・ッ！　バカッ！　私はあんたなんか全然認めてないんだから！　認めてほしかったら三回回ってワンと鳴きなさい犬」
「だれが犬だぁッ！」
ギャーギャー言い合う剣と千代田。そんな二人をあわあわと見詰めるしかない千歳。これが『瑞鳳』が第三航空戦隊になってからの日常的な風景。
瑞鳳は千歳と千代田と楽しそう（？）に話している剣を見詰め、イライラとイラ立つ。
「だいたいお前はもう少し女らしくしろよ！」
「バっカじゃないのあんた？　軍人の私が今さら着物を着ておしとやかになっても意味ないでしょ」

「いや、お前なら着物似合うと思うけど」
「・・・ッ！」
剣の何気ない言葉に、千代田は顔を真っ赤にする。そりゃあもうまるで熟れたトマトのごとく。それを隠すようにうつむく。
「うん？　どうした？　顔が赤いけど、熱でもあるの？」
剣が顔を覗き込もうとすると、千代田はいきなり腰の軍刀を引き抜いた。それは艦魂が常備している軍刀。もちろん真剣である。
「う、うるさいうるさいうるさいッ！　黙れ黙れ黙れッ！」
「バカッ！　真剣を振るうなよッ！」
「ち、千代田ぁッ！」
一騎当千のごとく突貫する千代田を剣が必死になって避け、千歳が慌てて千代田の暴走を止める。そんないつもの光景。
なのに、どうしてこんなにイライラするのか。
「まったく、お前って奴は」
「ほ、本当にすみません」
「いや、千歳が謝る必要はないよ」
「あの、千代田は悪い子じゃないんです。ちょっとわがままなだけで」
「わかってるよ」
剣の言葉に、千歳は満面の笑みを浮かべる。その笑顔はまるで天使のように優しく、かわいらしい。白い雪のような肌がほんのりと赤く染まっている。
「ありがとうございます。大空さんにはいつもお世話になってしまい」
「いいって別に。千歳は少し引っ込み思案だから、もっと僕を頼ってくれよ」
「はい！　大空さん！」
嬉しそうに微笑み合う二人。なんとも幸せそうな雰囲気だ。そんな二人の仲に怒り心頭の者が約一名。
「死ねぇッ！」

空中から落下速度を利用した踵落としを寸前で避ける。降り立った千代田はちっと舌打ちをして避けた剣を睨む。
「避けんなバカッ！」
「避けるに決まってるだろ！　危ないよ！」
「うるさいッ！　姉さんは誰にも渡さない！　死ね犬空ぁッ！」
「点一個多いってばぁッ！　ちょっと瑞鳳もぼーっとしてないで何とかしてよぉッ！」
剣は千代田の剣撃をかわしながら瑞鳳に叫ぶ。が、
「うるさいわね！　勝手にやってればいいじゃない！」
瑞鳳はふんと背を向けて去ってしまった。これには暴走していた千代田も手を止めて首を傾げる。
「瑞鳳の奴、どうしたんだ？」
「あなたが暴れまわるから呆れて疲れたのよ！」
「わ、私のせいなのか？」
「当たり前でしょ！　もうほんとバカ妹なんだから！」
千歳の怒りに、千代田はまるでハンマーで頭を殴られたような感覚が走った。
千歳の目が、口が、表情が、全て怒っている。いつもはあんなに優しくてかわいい姉が、自分に怒っている。千代田は愕然とする。
千歳は立ち尽くす千代田にため息して瑞鳳に謝ろうと彼女の後を追う。が、
「ね、姉さん！　それはないよ！　私はこんなに姉さんを愛しているのに！」
千代田がそんな千歳の背後から抱きつき押し倒す。いきなりの事で千歳は避ける事もできずに顔面から甲板に激突する。
「な、何するのよ！」
ヒリヒリとする鼻を押さえながら怒ると、そこには・・・
「あぁ、姉さん。こんなに可憐でかわいいのに・・・」
「え・・・？　ちょっと・・・千代田・・・？」
「大好きだよ姉さん！」

「ちょっと落ち着いて！　あぁッ！　上着を返して！　ベルトを取らないで！　大空さん助けてください！」
「いやぁ、僕はこういう女の園でありそうな事はちょっと・・・」
「ち、違いますよ！　私はノーマルですからね！　私が好きなの大――」
「姉さんは私のものよぉッ！」
「助けてぇッ！」
甲板の上で襲われる千歳と襲う千代田のちょっと間違った姉妹愛から目を離す。その先には彼女の姿はない。
甲板に吹く風が妙に冷たく、剣はその風に何か違和感を感じた。
まるで、この先にとてつもない恐怖があるかのように・・・

千歳と千代田と別れた剣は自室に戻った。すると、そこには思ったとおり瑞鳳が自分のベッドで横になっていた。こちらに向けられた背中はどこか不機嫌そうだ。
「瑞鳳。何してるの？」
「剣には関係ないでしょ。ほっといてよ。出てってよ」
「いや、ここ僕の部屋なんだけど・・・」
剣は困ったように頭を掻くと、仕方なくと言った感じで部屋の隅の椅子に腰掛ける。そっと瑞鳳を見るが、彼女は依然背を向けたままだ。一体何が彼女をこんなにも不機嫌にさせてしまったのか考えるが、もちろん浮かんでこない。
「なぁ、僕何か怒らせるような事した？」
情けないが、ここは聞いてみるのが一番効率が良い。だが、瑞鳳は「知らない」とだけ短く答えてやっぱり背を向け続ける。
どうやら彼女はかなり不機嫌らしい。ここはそっとしておくのが一番のようだ。
剣はため息を吐いて部屋を出て行こうとする。と、
「ちょっと、どこ行くのよ」
その声に振り返ると、瑞鳳は身体を転がしてこっちに身体を向け

ていた。そして横になっていたからかメガネは外されていて、どこか不機嫌そうな瞳がじーっと見詰めてくる。
「いや、どこって出て行こうかと」
「何でよ」
「何でって・・・お前が出てけって・・・」
「う、うるさいわね。じゃあここにいなさい。これ命令」
「無茶苦茶だなぁ・・・」
剣は仕方なくといった感じで再び椅子に腰掛けようとする。と、
「何でそこなのよ」
「え？　だってここ以外座れるような場所ないし」
「ここ」
そう言って瑞鳳はベッドをポンポンと叩く。どうやらそこに座れというらしい。
「え？　いやだって・・・」
剣は困ったように頬を掻く。すると、そんな彼を瑞鳳はじっと見詰める。
「ここ座る。これ命令」
「わかったわかった」
剣は仕方なくベッドに腰掛けた。すると、瑞鳳は身体を起こしてメガネを掛け、剣の横に腰掛ける。顔を横に向けると、じーっと見上げてくる。
「な、何？」
「あんた、最近調子にのってない？」
「は？」
剣は突然の言葉に驚く。そんな彼を瑞鳳はじーっと見詰めてくる。その目はどこか不機嫌そうだ。
「いや、調子にのってるって言われても・・・」
「あんた最近千歳や千代田と仲良さそうじゃない」
「え？　千歳と千代田？」
確かに最近は同じ第三航空戦隊で組んでいる千歳と千代田と話す

機会が多い。特に千歳は何か用がなくても話をしにやって来て、千代田はそんな姉を心配してついて来るので、必然的に会話する機会は多い。

「ま、まあ、仲はいいと思うよ。千代田とはどうだかわからないけど」

「ふーん、あっそう」

瑞鳳は明らかに不機嫌そうにそう言うと、ふてくされたようにぷいっと反対方向を向く。一体どうしたのいうのか。

「あのさ瑞鳳。僕、やっぱり何か怒らせた?」

「別に。あんたに言ってもどうせわかんないし」

「え?」

「ふん」

瑞鳳は不機嫌そうに頬を膨らませる。

心の中では「何で千歳や千代田とばっかり・・・」と理不尽な怒りを燃やしている。その怒りは最近自分よりも二人に構う事が多い剣へのやきもちであった。

「どうして千歳と千代田ばっかり・・・」

「え? 何か言った?」

「い、言ってないわよバカッ!」

瑞鳳は顔を真っ赤にして怒鳴ると、ふんと反対方向を向いてしまう。そんな瑞鳳に剣は困ったように頬を掻く。

「やっぱり、怒ってるよね」

瑞鳳は答えなかったが、再びじっと見詰めてくる。その視線に耐え切れず、剣は苦笑いしながら「何かな?」と声を掛ける。と、

「あんたは私の搭乗員なんだからね。千歳航空隊でも千代田航空隊でもない、瑞鳳航空隊なんだから。私の傍にずっといなさい。これ命令」

そう顔を真っ赤にしながら言うと、瑞鳳は再びぷいっと別方向を向いてしまう。

そんな彼女に、ようやく剣も理解した。

彼女は、ずっと寂しかったのだと。
確かに最近は忙しい訓練ばかりだったし千歳と千代田にばっかりで瑞鳳と構う時間はなかった。それが彼女を知らず知らずのうちに傷つけていたのだ。
「ごめん」
そう謝ると、「わかればいいのよ。わかれば」と瑞鳳も小さく返してきた。そんな彼女に、剣は優しく微笑む。
「あ、あのさ瑞鳳。今からちょっと散歩でもしない？　二人っきりで」
「え？　あ、あんたがしたいって言うなら。仕方ない。ついてってあげる」
「ははは、ありがとう。じゃあ行こっか」
剣は立ち上がると、そっと手を彼女に伸ばす。瑞鳳はその手をそっと掴み、久しぶりに嬉しそうな笑みを浮かべた。
二人はそのまま部屋を出て、散歩に向かった。

その後、千歳が泣きそうな顔でやって来て剣の手を掴み、千代田がそれを見て怒り狂って剣を襲い、剣は千歳を連れながらそれを避け、瑞鳳はすっかり気分を害してふてくされてしまいと、結局また同じ事を繰り返すのだった。

第十一章　第二節　あ号作戦発動　連合艦隊総出撃（後書き）

今日終業式があり、明日から夏休みです。と言っても、受験生なのでかなり苦しいものになると思いますが。まぁ、それでもこの作品だけは何とか終わらせたいと思います。

いよいよ発動したあ号作戦。しかし彼我の戦力差は一目瞭然。この戦いが、日本機動部隊の崩壊に繋がる決定的なものになります。

一応マリアナ沖海戦の流れに沿って書いてありますが、一部省略している部分もあるので、事前にマリアナ沖海戦の流れを見ておいた方がいいかもしれません。

ではまた次回。

第十一章　第三節　戦姫翔鶴の決意と隠してきた想い（前書き）

今回は微笑ましい話です。
サブタイトル通り翔鶴が主役の作品で、翔鶴ファンには必見の作品です。

第十一章　第三節　戦姫翔鶴の決意と隠してきた想い

海を進む艦隊の中央部に位置する空母『翔鶴』。真珠湾から生き残る数少ない空母。その艦体は幾多の戦いで傷つき、歴戦の戦士を思わせる。

そんな『翔鶴』の一室にある翔鶴の部屋に、翔鶴はいた。椅子に座り、机の上に詰まれた作戦書などを読んでいる。行動型である翔鶴が作戦書を読むのは、それだけ今回の作戦が重要だという事だ。

翔鶴はコーヒーを一杯飲んで再び文面に目を戻す。と、ドアがノックされた。

「うん？　誰だ？」

だが、返事は返って来ない。不思議に思って立ち上がってドアに近づき、開くと、その向こうには大鳳がぽつんと立っていた。

「大鳳？　私に何か用か？」

大鳳は無言でうなずく。とりあえず立ち話もなんなので翔鶴は彼女を部屋に招き入れる。大鳳はその間一言も何も発しない。

翔鶴は彼女に向き直ると前機動部隊旗艦として威厳ある声で尋ねる。

「一体艦隊旗艦ともあろう者が私に何の用だ？」

翔鶴の問いに大鳳はうつむく。何か言いづらい事なのか、翔鶴が困ったように残っていたコーヒーを一気に飲み干す。

「・・・翔輝さんを、どう思いますか？」

「ぶほぉッ！」

翔鶴は飲んでいたコーヒーを全部噴き出すと、苦しそうに咳き込む。いきなりの事ですっかり対処を忘れていた。天下無敵、国士無双と称される翔鶴であっても油断があればこうも弱いのだ。

「い、いきなり何だそれは」

翔鶴がタオルで服に付いたコーヒーを拭いながら問うと、大鳳は再びうつむいてしまう。そんな彼女の様子に何かを悟ったのか、翔

鶴はタオルを置く。
「何かあったのか？」
「・・・（コクリ）」
大鳳は小さな声でこの前隼鷹に言われた事を言った。自分が彼をどう想っているのかわからない、と。
翔鶴は大鳳の言葉を黙って聞いていたが、やがて口を開く。
「どちらにせよ、貴様は長谷川に他とは違う何かを感じている。違うか？」
大鳳は首だけを動かしてコクリとうなずく。
「・・・あと、変な気持ちがあります」
「変な気持ち？」
「・・・翔輝さんが、他の艦魂と話していると、胸が痛くなるんです」
翔鶴はその言葉に目を丸くする。そして、
「なるほどなぁ」
笑いながらそう言葉を出す。大鳳は首を傾げる。
「それはやきもちというやつだろうな」
「・・・やきもち？」
「あぁ。お前は長谷川が好きなんだ。そしてそいつが他の女としゃべっているのが辛くて悲しい。時には理不尽な怒りにもなる。そういう感情が胸を痛ませる。それがやきもちだ」
翔鶴の言葉に、大鳳は否定できなかった。
胸が痛くなる時、同時にすごく辛く悲しくなった。それに変な怒りもあった時もある。彼女が言っている事は全てそのとおりだった。
という事はつまり、自分は――翔輝の事が好きなのだ。
初めての感情に困惑する大鳳。そんな大鳳に対し翔鶴は頭を抱えていた。
「これ以上長谷川のまわりをややこしくしては、あいつにも迷惑が掛かってしまう・・・」
翔鶴の言葉に、大鳳はふと何か違和感を感じた。それはさっき彼

女が教えてくれた嫉妬に似た感情。
「・・・翔鶴さんは、翔輝さんの事、好きですか？」
「はぁッ！？」
翔鶴は顔を真っ赤にして驚愕する。そんな彼女を大鳳はじっと見詰める。
「ば、バカを言うなッ！　なぜ私があんな平和ボケした奴なんかを好きにならなければならんのだッ！」
翔鶴は真っ赤な顔で怒鳴る。が、大鳳はそれをじっと見詰める。その瞳には真剣な光が灯っている。
「・・・本当の事を、言ってください」
「本当だ！　あんな弱い男などにそのような感情は一切ない！」
そう断言する翔鶴だが、心の底からそう言い切る事はできなかった。
なぜだが、一瞬奴の笑顔が頭を過ぎった。一体どうして・・・まさか・・・
否！　断じて否！　それは違う！　自分はあのような弱い男をどう思うなんて事はない！
翔鶴は心の中で改めて否定する。強い女の子は自分より強い男か優しい男に好意を抱くという世間一般的な常識を彼女は知らない。知りたくば秋葉原に行くしかないだろう。
そんな彼女を、大鳳はじっと見詰める。その視線に翔鶴はまるで心の中を見透かされたような恐怖を感じた。
「な、何だ」
「・・・本当に、何とも思ってないんですか？」
「しつこい！　私は奴などどうとも思っていない！」
大鳳は怒鳴り散らす翔鶴をじっと見詰める。その瞳には何かの確信を得たような光が灯っていた。
「・・・私は、たぶん翔輝さんが好きです」
真正面からそんな事を言われ、翔鶴は驚く。
「そ、それが私に何の関係がある」

「・・・いいえ。ただ忠告があります」
「忠告？」
「・・・自分に素直に、ただ、それだけです」
そう言い残し、大鳳は去った。
残された翔鶴は「一体何だと言うのだ」と不機嫌そうに椅子に座り直す。空間からコーヒーを召喚し、口にする。
「・・・自分に素直に、か・・・バカバカしい」
翔鶴はそう吐き捨てるとコーヒーを飲む。だが、今はその苦味も鬱陶(うっとう)しい。
「まったく、訳のわからん事を・・・」
翔鶴は大鳳の話を忘れようとベッドに横になって一眠りする。だが、全く眠気はない。いつもなら寝れる時に寝れるという軍人体質なのに、今はそれが全くない。それもこれも全て大鳳のせいだ。
「・・・何が素直だ。私はあんな奴の事など・・・」
その先を言おうとして、言葉に詰まる。
「私は別に・・・あんな奴の事など・・・」
本当にどうとも思っていないのか、そう問われるとはっきりないとは言い切れない自分がいる事に驚き、そしてその自分がいる事を実は知っていたと気づく。
翔輝の笑顔を、思い出し、知らず知らずに顔を真っ赤にする。
自分の中にある理解不能な感情に戸惑う。
「・・・まさか、な」
翔鶴はさっき自分が大鳳に言った言葉を思い出し、まさかそれはないと首を横に振る。
「・・・私が長谷川を好きだなんて・・・そんな事・・・」
いざそうやって口に出すと、顔から火が出るように真っ赤になってしまう。
戦艦部隊に配置されている『大和』に乗る翔輝と、機動部隊に配置されている自分では接点が少ない。会える機会などほとんどない。
だが、たまにしか会えなくても、彼の優しさは変わらず、しかし

確実に大人の男性に成長している。
数少ない変わらない彼の優しげな笑みを思い出し、翔鶴は顔を真っ赤にする。
胸の中に渦巻く理解不能な感情に、翔鶴はある可能性を導き出す。
だが、それは認められない。認めたくない。だが・・・
彼の笑顔が、いつの間にか自分の支えになっていた。
「・・・私は・・・一体・・・」
胸に痛みが走る。この痛みは・・・
「なぜ私が・・・」
翔鶴は毛布をガバッと被ると、そのまま無理やり目を閉じた。
だが、結局その後翔鶴は一睡もできなかった。

翌日、海を翔ける第二艦隊は電探で味方艦隊を捕捉した。その艦隊は、空母九隻を基軸とした機動部隊――第三艦隊だった。
第二、第三艦隊は再編成を行った。これで前衛及び護衛を第二艦隊が、作戦の主力を第三艦隊が担当する決戦艦隊――第一機動艦隊が編成された。
編成は以下栗田中将率いる前衛部隊は戦艦『大和』『武蔵』『金剛』『榛名』、軽空母『瑞鳳』『千歳』『千代田』、重巡洋艦『愛宕』『高雄』『摩耶』『鳥海』他四隻、軽巡洋艦一隻、駆逐艦七隻の水上打撃部隊。
今作戦主力の小沢中将率いる第一機動艦隊主力甲部隊は空母『大鳳』『翔鶴』『瑞鶴』、重巡洋艦二隻、軽巡洋艦一隻、駆逐艦八隻の空母部隊。乙部隊は戦艦『長門』、改装空母『飛鷹』『隼鷹』、軽空母『龍鳳』、重巡洋艦『最上』、駆逐艦七隻という軽空母部隊となった。
参加艦艇四九隻、うち空母九隻、搭載機数四二八機という当時の日本海軍が動員できる艦艇を集約した大艦隊だった。
そんな中、大鳳や瑞鶴達は翔輝と大和と一緒に『大和』の甲板にいた。甲板を動き回る兵達の横に集まる艦魂達が、今作戦に参加す

る連合艦隊の残存全戦力といっても過言ではない。
「がんばってね。あなた達に日本の運命が掛かってるんだから」
そう言って優しく微笑むのは長門。そんな彼女の激励を受けるのは残存全空母を結集した第一機動艦隊の主力となる九人の少女達。艦齢は皆二桁も生きていないうら若き乙女達。彼女達が日本の命運を分ける最後の希望なのだ。
「あぁ、必ず敵空母を殲滅してみせる」
機動部隊次席指揮官兼参謀長を務める翔鶴はそう宣言すると、腰の刀を引き抜いて天に向ける。銀色に輝く刀身が彼女の決意を輝かせる。
「そうね。姉さんの言うとおり、必ず勝ちましょう！」
「私は瑞鶴を守る。瑞鶴が守りたいものを守るなら、私もそれを守る」
「勝てる勝算は少ないけど、全力を注ぎます」
「お兄ちゃんの為にも、絶対に勝つよぉッ！」
「理由は問題だけど、私も姉さんと一緒に戦い抜きます」
「愛する祖国を守る為、全力を注ぐ事を誓います！」
「姉さんと一緒に、敵空母を一掃してみせるわよッ！」
七人の空母達も皆自らの剣を引き抜き、翔鶴を中心にその剣を天に向けて重ねる。八本の刀がうら若き戦姫達の絆を結ぶ。
最後の一人、第三艦隊、第一機動艦隊、そして日本機動部隊の旗艦を務める今回の作戦の総大将である大鳳は・・・
クイ・・・
「あ、あのさかのん。みんなすごくやる気になって絆を結んでるんだから、君も行ってよ」
先程から翔輝の袖を掴んでいた大鳳は翔鶴達の剣の絆をすっかり傍観していた。
『・・・』
最後の一人が足りずに固まっている翔鶴達。その頬はだんだんと赤く染まっていく。この状態を保つのはあまりにも恥ずかしいのだ

ろう。事実、まわりからだんだん笑いが起き始めている。
「ほ、ほら。かのんも」
翔輝は慌てて大鳳を翔鶴達に向ける。が、
「・・・翔輝さんも」
そんなとんでもない事を言うのだった。
「いや、僕は彼女達の絆に入る理由はないし」
「・・・一緒に行きましょう」
「ちょっと」
翔輝が止める間もなく大鳳は彼の手を引いて連れてってしまう。
翔輝は慌てて大鳳に機関銃を向けている武蔵を止めるように大和達に叫び、仕方なくついて行く。
大鳳は翔鶴達の囲む中心に立つと、腰の軍刀を引き抜いて天に向ける。その刀身は翔鶴達の刀の中心を抜ける。
大鳳を中心とした、新生機動部隊だ。
「・・・必勝」
たったそれだけの短い言葉なのに、その重みに皆は感動して拍手する。剣を腰に戻しても止まない拍手に包まれる中、翔鶴は小さくため息した。
「すまんな。大鳳の面倒を貴様に預けてしまって」
「いいって。翔鶴はただでさえ辛い役目を背負ってるんだからさ。これくらいは協力してやらないと」
そう言って大鳳に袖を掴まれながら翔輝は微笑む。その笑顔に、翔鶴は「うっ・・・」と小さく引く。
「どうしたの？」
「な、何でもない」
翔鶴はなぜか顔を赤らめてそっぽを無向く。そんな彼女に翔輝は首を傾げる。
翔輝の笑顔を見ただけで変に意識してしまう翔鶴。そんな彼女の異変に逸早く気づいたのは妹の瑞鶴だった。
「姉さん？　どうしたの？」

「なんでもない・・・ッ！」
「わかったッ！　わかったから首元に剣を当てないでぇッ！」
瑞鶴は自分を一撃で殺すような位置を確保した剣が収められると、安堵の息を漏らす。こうして幾多の苦境を生き抜いてきたのだろう（きっと）。
翔鶴は妹を追い払うと、背を向けて大和や武蔵と仲良さげに話している翔輝を盗み見る。その左腕には隼鷹が抱き付き、右腕の袖を大鳳が掴んでいる。
「大尉はいつも大変ですね」
「そんな事ないって、それよりお前の方こそ大丈夫か？」
そう言って翔輝が心配したのは松葉杖を付いた雪風。先日『雪風』は対潜掃討中に座礁してスクリューが損傷したのだ。その影響で全力走行ができず、今回『雪風』は補給部隊護衛に回る事になっていた。そして『雪風』の艦魂である雪風も右足を痛め、松葉杖を付く事になってしまっていた。
「平気ですよ。これでも幾多の戦いを生き抜いてきた歴戦の戦士です。これくらいのケガなら問題ありません」
「そっか。でもあんまり無理はするなよ」
「はい」
雪風は翔輝に心配されていた事が嬉しかったのか、松葉杖を付いているというのに嬉しくてジャンプし、着地した瞬間に襲った激痛に悶絶する。姉妹達がすぐに駆け寄ったので、翔輝は駆け寄るタイミングを見失って頬を掻いた。その時、自分を見詰める翔鶴の視線に気づく。
「何、翔鶴？」
「ッ！？　な、何でもない！」
「そ、そう？　ならいいけど・・・」
翔輝は翔鶴に何か怒らせるような事をしたか思い出すが、どうも見当も付かない。そんな腕を組んで考えに耽（ふけ）る翔輝を再び盗み見る翔鶴。

（・・・長谷川、少し見ないうちに大人らしくなったなぁ――って、何を考えているんだ私はッ！？）

「あ、あの、大丈夫か？」

「なぁッ！？　何でもないと言っているだろうがッ！」

「うわぁッ！　剣を振り回すなッ！　危ないだろッ！」

翔鶴のすさまじい剣撃を避け、翔輝は不思議に思いながらも命の危険性を考えてそれ以上の追求はしなかった。振り返ると大和達も同じように首を傾げていた。すると、袖を引かれる感触に視線を下げると、大鳳が袖を引っ張っていた。

「かのん？」

「・・・翔鶴さんから伝言です」

「伝言？」

「・・・今日の夜、『大和』の第二砲塔の上で待つ、と」

「第二砲塔に？　うん。わかったけど、何で？」

「・・・来ればわかります」

大鳳はそれだけ言うと、自分から離れて翔鶴の所に向かった。そこで何事か話した後、大鳳はそのまま光に包まれて消えた。一瞬翔鶴と目が合ったが、睨まれてすぐに視線を外された。熱でもあるのだろうか。頬が少し赤い。

翔鶴はふんと背を向けてしまう。一体あんな状態で自分に何の用なのだろうか。

翔輝は戸惑いながらもとりあえず夜になったら第二砲塔に行こうと思い、わいわいと騒いでいる大和達を見て小さく微笑んだ。

その夜、第一機動艦隊は明日の朝に艦隊の再編成をする為に全部隊を大まかに前衛、本隊と別れて闇夜を進んでいた。

同じ決戦でも、ミッドウェーの時とは明らかに戦力が減っている。唯一勝る点は空母と艦載機の数だが、もちろん米軍もそれ以上の空母と艦載機を有し、さらには日本機の搭乗員の質はあまりにも低く、真珠湾からの生き残りなんてほとんどいなかった。

それでも日本海軍に残された最後の決戦兵力に変わりはない。この艦隊に、日本の命運が掛かっているのだ。

そんな第一機動艦隊前衛部隊の旗艦、重巡洋艦『愛宕』から少し離れた場所を並んで走る戦艦『大和』『武蔵』の第一戦隊。そんな『大和』の第二砲塔の上に翔輝はいた。

月が黄金に輝き、闇夜を薄っすらと照らし上げている。その輝きは美しいと同時に、敵潜水艦に艦隊が発見されないかという不安もある。

今『大和』は初めて敵の主力部隊が展開する海域を攻め込んでいるのだ。どれだけの危険があっても不思議ではない。

そんな『大和』の第二砲塔の上で翔輝は星空を見上げていた。本来なら作戦航海中にこんな場所にいてはいけないのだが、森下と宇垣が事情を知って特別に許可してくれたのだ。何しろいつ敵が現れるかわからない。もし遭遇して砲撃するとなれば、こんな所に生身の人間がいれば、砲撃の衝撃でおそらく即死するだろう。それほど戦艦の主砲の威力はすさまじいのだ。

「遅いな、翔鶴の奴」

翔輝は腕時計を確認する。それは武蔵が以前誕生日プレゼントでくれたものだ。少し傷などがあるが、まだまだきれいで正確だ。

翔輝は遅い翔鶴にため息する。どうやら彼女は来ないらしい。

「仕方ない。もう帰るか」

翔輝は一発あくびをして踵を返す。と、

「待たせたな」

その相変わらず偉そうな声に振り返ると、そこには仁王立ちした翔鶴が立っていた。月をバックにしているせいか、顔色はわからない。だがどうせいつものような少し不機嫌そうな顔なのだろう。

「もう、遅いよ」

「すまん。行くか行かないか迷ったのでな」

自分で呼んでおいて行くか行かないかで迷わないでほしい。すさまじく迷惑だから。相変わらず自分勝手な部分が多い。

翔輝は苦笑いするしかない。
だが、彼女の次の言葉には、言葉を失うしかなかった。
「――で、一体私に何の用だ？」
「は？」
翔輝は思わずまぬけな顔をしてしまった。そのあまりにも予想外な言葉に、一瞬脳がフリーズしてしまった。
「え？　は？　な、何言ってるの？　呼んだのは翔鶴の方でしょ？」
「はぁ？　なぜ私が貴様を呼ぶ必要がある。呼んだのは貴様の方であろう？」
翔鶴も驚いたような顔をする。そんな彼女の反応に彼女も何も知らないと翔輝は悟った。
「え？　でも僕はかのんから君が呼んでるって――」
「うん？　私も大鳳から貴様が呼んでいると――」
そこで何かが繋がった。
「「え？」」
二人は思わずまぬけな顔をしてしまう。だが、ようやく二人の間にあった疑問が一つに繋がった。
「なるほど・・・大鳳め、謀ったな」
「かのん、僕を騙したんだ・・・」
翔鶴は自分を騙した大鳳に静かな怒りを燃やし、翔輝は悲しそうにため息した。二人とも程度は違うが大鳳を信頼していたのに、それを裏切られて少なからずショックを受けていた。
「まったく、あいつは一体何を考えているんだ」
翔鶴はそう呆れたような声を上げ、ふと今の現状を思い出す。
今ここには自分と翔輝の二人だけだ。大和や武蔵といった邪魔者はいない、二人だけの世界。
急に顔が真っ赤になり慌てて彼に背を向ける。
「うん？　どうした翔鶴」
「な、何でもない！」
翔鶴の怒ったような言い方に、翔輝は困ったように頬を掻く。

「なんか、僕怒らせるような事言ったかなぁ？」
「別に何もない」
「いや、何もないならこっち向いてくれないかな？　この状況は結構辛い」
「それは貴様の主観だ。私はどうとも思わない」
「うぅ、わかったよぉ。じゃあ、お互いかのんに騙されたって事で、お開きとしますか」
「え？」
翔鶴はその言葉に驚いて振り返る。月明かりに照らされるその白い頬はまだほんのりと赤みを帯びている。
「いや、このままいても意味ないでしょ？　お互い別に用はないんだからさ」
「そ、そうだな。だが――」
「それじゃ、大和とか武蔵がきっと待ってるだろうから行くね。翔鶴も早く帰った方がいいよ」
翔輝はそう言うと砲塔の横にあるラッタルに向かう。そんな翔輝を見詰め、翔鶴は大鳳の言葉を思い出す。
――自分に素直に・・・
その言葉に、自分の奥底にあるある感情を見つけた。
ずっと隠そうとしていた。認めたくはない、だけどそこにある大切な感情。
次の戦いは決戦になる。生きて帰れる保証はない。もう二度と、会えなくなるかもしれない。そしたら、この想いは永遠にこのまま。
伝えるなら、今しかない。
そう思うと、今まで隠してきた感情は一切の妨害も受けずに心を満たした。
「長谷川。すまんが、もう少しここにいてくれないか？」
「え？」
ラッタルに手を掛けた翔輝は翔鶴のその言葉に驚いて振り返る。
と、月明かりをバックにした翔鶴は、いつもの勇ましい姿ではなく、

普通の女の子のように感じた。
「え？　う、うん。いいけど」
「すまない」
翔輝は翔鶴の所に戻る。
翔鶴はなぜかじっとこちらを見詰めていた。しかもその瞳にはどこか大和や武蔵、伊勢が自分を見る時に輝かせる光があった。一体どうしたというのか。
「翔鶴？」
「――私は武人だ。大日本帝国海軍の軍人だ」
「え？　あ、うん。そうだよね」
「だが、私だって一人の女子（おなご）だ。人並みの女子のような感情を持つ事もあった。だがそれを、軍人である私が無理やり隠し通してきた。だが、もう良い。今の私は、自分に素直になる」
「翔鶴？」
翔鶴は一度顔を伏せた後、再び翔輝を見据える。その黒く凛々しい瞳はしっかりと自分を見詰め、雪のように白い頬は今は真っ赤に染まっている。
薄桃色の唇が、ゆっくりと開く。

「――長谷川、私は貴様が好きだ」

突然の翔鶴の言葉に、翔輝は呆然とした。
脳が彼女の言葉の意味を理解するのにかなりの時間を有し、反応が遅れたからだ。
翔鶴の頬がさらに真っ赤に染まった頃、ようやく、
「え？」
というひらがな一文字が出て来た。
続いて今度は翔輝の頬が真っ赤に染まった。
「な、何だよ突然！　冗談は――」
「冗談じゃない。本気だ」

翔鶴は真剣な瞳で見詰める。その頬は桜色に染まり、常の彼女とは違ったオーラを身に纏っていた。その普通の女の子のような翔鶴の姿に、ドキリとする。

「貴様は、私のような女子は嫌いか？」

少し自信なさげに見詰める翔鶴。そのしおらしい仕草にまたドキリとする。

「え？　あ、いや、嫌いとかそんな事はないけど・・・」

「私は貴様が好きだ。もう自分に背を向けない。この気持ちは変わらない」

翔鶴はじっと自分を見詰めてくる。そんな彼女に、翔輝は先程からずっとドキドキしている。今までこんな事なかったのに。

「わかっている。貴様は今まで私を友として接してきたのだろう？いきなりこんな事になって戸惑っているかもしれない。だが、私はずっとこの想いを持っていた」

「翔鶴・・・」

「それに、私は普通の女子のようなしとやかさなどない。このように筋肉の付いた身体は、見苦しいだろう？」

「そんな事ないよ。健康的だと思う」

「そ、そうか・・・」

「う、うん・・・」

お互い気恥ずかしさから黙ってしまう。そのどちらの頬も月明かりの下でもはっきりわかるくらい赤く染まっていた。

海風に揺れる翔鶴の腰まで伸びる髪にすら、視線が行ってしまう。色々な艦魂と接してきたが、こんなにドキドキする瞬間はなかった。

大和や武蔵が言う好きはあまりにも回数が多くてあまり意識はしてなかったし、陸奥の告白は沈没間際だったのでそれどころではなかった。だから、こうして面と向かって本気の気持ちを向けられたのは初めてで、どう対応していいかわからない。

それは翔鶴だって同じ事。今まで武人として、軍人として生きて

きた彼女はこんな普通の女の子のような事は初めてだった。どうすればいいか、まったくわからない。

（落ち着け。落ち着くのだ翔鶴。今まで幾多の困難も乗り越えてきたではないか。今回もきっと乗り越えられる）

そう自分に言い聞かせるが、残念ながら今まで彼女が乗り越えてきた困難は全部戦いばかり。恋愛経験はない。つまり、初恋である。

（そうだ。こういう時は見習えばいいのだ。普通の女の子を見習う。そうだ、大和や伊勢なんかと同じ行為をすれば・・・）

翔鶴はある考えに至り、顔を真っ赤にしながらもうなずく。

「あ、あのさ翔鶴。その、えっと・・・」

「長谷川ッ！　好きだぁッ！」

「へ？　うわぁッ！？」

翔鶴は突如翔輝に抱きつき、そのまま押し倒した。背中を強力な砲塔の金属にぶつけて痛んだが、それはすぐに忘れる。自分の胸に抱き付いて離れない翔鶴を見て・・・

「しょ、翔鶴？　何で抱き付くの？」

「う、うむ。何をしたらいいかわからなくて、その・・・大和達のように、抱きつけばなんとかなるかと思って・・・」

余計話がややこしい方向に全力疾走してるんだけど、とツッコミを入れたいところだったが、彼女の為にもそれは言わない方が得策だろう。

だが、そんな彼女のかわいさに、翔輝は悪いとは思いながらも笑ってしまった。予想通り、翔鶴はただでさえ真っ赤な頬をさらに赤く染めて不機嫌そうに意志の強そうな瞳を鋭くさせる。

「な、なぜ笑う。何か、いわれのない怒りを感じるのだが」

「あはは、ごめんごめん。なんか翔鶴がかわいくてさ」

「かわ・・・ッ！？」

翔鶴は顔をもう爆発寸前くらいまで真っ赤にする。それに比例して彼女の抱き付く力も強くなる。翔輝の服の裾を握る手が、小刻みに震える。

「・・・私は、かわ・・・いいのか・・・？」
「うん。大和や伊勢にも負けないくらい」
そう言って翔輝は優しく微笑む。月明かりに照らされたその笑顔は、とても柔らかく、やさしげ。
翔鶴はそんな彼の笑みを見て、この笑顔が好きなのだと改めて自覚する。
いつも大和達に向けられていたこの優しげな笑みが好きだった。
そして今、その笑みは自分にしっかりと向けられている。
「長谷川・・・」
翔鶴は翔輝の胸の中に顔を埋める。そんないつになく彼女らしくないが、かわいい仕草に、翔輝は頬を赤く染める。
「あ、あのさ。好きって言ってくれてありがとう。僕も、翔鶴の事は好きだよ」
翔鶴は顔を上げる。瞳が、繋がる。
「でも、僕はみんな好きなんだ。大和も武蔵も、伊勢も榛名も、長門さんや扶桑さんに山城、金剛さんだって。もちろん翔鶴や瑞鶴、隼鷹や飛鷹もみんな好きだ――そういう、好きなんだ。誰か一人に向ける、恋や愛って好きじゃない。そもそも、そういう好きってのは、僕はわからないんだ。情けないけど、僕、今まで恋愛経験がないんだ。だから、そういうのが全然わからなくて、だから・・・翔鶴の気持ちには、今はまだ答えられない」
翔鶴は、何か返すでも、うなずくでもせず、ただじっと翔輝を見詰める。
翔輝はそんな彼女を見詰め、今の自分の気持ちをうそ偽りなく言う。
「いつか、僕がそういう好きってのがわかる時が来るはず。その時に、もう一度、君の気持ちを伝えて欲しい――今はまだ、はいとも、いいえとも返せないんだ」
翔輝はそう言って顔を伏せる。
自分は何て情けないんだ、と思った。翔鶴は勇気を出して言って

くれたのに、自分はそれにはっきりとした事を返せない。逃げてるって言われれば、たぶんそうだろう。でも、本当にどうすればいいかわからないのだ。

何もわからないのに、適当な事は言いたくない。それが、翔輝の気持ちだった。

翔鶴は翔輝の言葉に何も答えずに聞いていた。そして・・・

「そうか・・・」

小さな、本当に小さな声でそう言ってうつむいた。その声には小さな落胆があった。

「翔鶴・・・ごめん・・・」

「謝るな。貴様が悪い訳ではない」

そう言って翔鶴は顔を上げる。そこにはいつものような、彼女らしい勇ましい顔つきがあった。

「貴様の気持ちが聞けて、安心した」

そう言うと、翔鶴は小さく微笑んだ。

「翔鶴・・・」

「だが、女子にもう一度愛の告白をしろというのは、いささか失礼ではないか？」

「うっ・・やっぱりそうだよね」

「普通の女子に言うべき言葉ではない。だが、私は構わん。私は普通の女子ではない。大志を抱いた、武人なのだからな。貴様の気持ちが固まるまで、私は貴様にこの気持ちを伝え続ける。覚悟しておけ」

「あははは、そりゃまた困るな」

「くくく、まったくだ。私もなぜ貴様のような優柔不断な男を好きになったか不思議だし、苦労も多い」

「ご、ごめん・・・」

「構わん。そんな貴様の全てが私は好きなのだ」

「・・・あ、改めて面と言われると照れるな」

「ば、バカ！　貴様が照れるな！　私まで恥ずかしくなる」

「ご、ごめん・・・」
「だから謝るなと言っているだろう」
「う、うん・・・」
翔輝はうなずくと、照れ隠しに笑みを浮かべる。そんな彼を見詰め、翔鶴も小さく微笑んだ。その笑顔には一片の悔いもない、すごく輝いていた。
その後、翔鶴は去った。
残された翔輝はしばし月を見上げていたが、時刻はもう深夜。眠気に根負けして自室に戻った。そんな彼を、月明かりが優しく照らし上げていた。

第十一章　第三節　戦姫翔鶴の決意と隠してきた想い（後書き）

書いてるこっちが照れてしまうような話でした。
本当はここまで翔鶴の想いは明確にはしない予定でしたが、以前翔鶴を翔輝を取り巻く中に入れてほしいという意見があったので、今回は残り少ない翔鶴の出番として追加しました。書いてみるといつの間にかかなりラブな話になっていました。
翔輝と翔鶴の関係が急速に縮まります。
次回はついにマリアナ沖海戦直前になります。そこから展開していくマリアナ沖の死闘。どうかお楽しみに。

追伸、前話に千歳と千代田のプロフィールを入れておくのを忘れていたので追加しました。ご確認ください。

第十一章　第四節　マリアナ沖に集まりし戦姫達

翌朝、『大和』の甲板では一時の別れが行われていた。これから艦隊は前衛部隊と本隊とに分かれて進撃を開始する。距離が離れるので、会えなくなるからだ。

前衛部隊は第二艦隊旗艦愛宕が妹の高雄、摩耶、鳥海や他の巡洋艦などと最後の確認をしている。

一方の本隊は護衛艦隊に属する長門と最上が飛鷹と龍鳳と確認をし合っている。

そんな中から離れた位置にいる翔輝を中心としたメンバー。翔輝とその腕に抱き付く武蔵、袖を引っ張る大鳳、ちゃっかり背中を占領している隼鷹、そんな三人をうらやましそうに見詰める大和と雪風。そして他に翔鶴と瑞鶴、そして瑞鳳などが揃っている。

翔鶴はあまりしゃべらない大鳳の代わりに皆に声を上げる。

「これより、第二艦隊こと前衛部隊、第三艦隊こと本隊甲部隊、乙部隊に別れ、全軍小沢中将の指揮下に入る。及び、マリアナ諸島に展開している角田中将率いる第一航空艦隊とも連携を組み、付近海域に展開している敵機動部隊を殲滅する。壮絶な戦いになるだろう。みんな、覚悟してほしい」

「何だよ翔鶴。急に改まっちゃってさ」

榛名が笑いながら気楽そうに声を掛ける。が、翔鶴の表情は暗く、その瞳は何かを覚悟したような強い意志を煌かせていた。

「今度の作戦――私はもう二度と内地に戻れないかもしれないからな」

『なッ！？』

翔鶴の言葉に、それぞれ話し合っていた艦魂達が一斉に黙って彼女を見詰める。大和や武蔵やもちろん、昨晩会った翔輝も驚きを隠せない。だが、そんな彼の肩を、誰かがぽんと叩いた。振り返ると、そこには悲しそうな顔をした瑞鶴がいた。

「それほど、今回の作戦は危険なんです」
「瑞鶴・・・」
「私達空母部隊は二倍以上の敵空母と対峙しなければならないのです。もし、サイパンを守れたとしても、こちらの空母が全滅するという可能性は十分にあります」
「そんな・・・ッ！」
飛鷹の言葉に翔輝は愕然とする。
この作戦、確かに壮絶で負けられない戦いになるだろうとは覚悟していた。だが、空母全滅という覚悟までするなんて、想像もしていなかった。
驚く翔輝の背中で、隼鷹がギュッと強く抱き付いてきた。
「お兄ちゃん。今回の任務、文字通り――命懸けなの」
「隼鷹・・・」
幼い隼鷹までもが《命》というものを懸ける戦い。それがこんな気の作戦なのだ。だが、そんな彼女達の強い思いに、翔輝は首を振る。
「戦いってのは、生きて帰るのを前提にするものだ。命を懸けるか懸けないかは現場で個人が考える事。だから、最初から命を懸けるなんて言うものじゃない」
翔鶴達は驚いたような目で翔輝を見詰める。そんな彼女達に真剣な瞳で訴えていた翔輝だったが、ふと優しい笑みで大和と武蔵を抱き寄せる。
「た、大尉！？」
「・・・翔輝？」
顔を真っ赤にする大和とほんのりと頬を赤らめる武蔵を一瞥し、翔輝は皆に満面の笑みを向ける。
「それに、今回は大和や武蔵も出る。連合艦隊の象徴であるこの二隻が。敵の目はこっちにも向くはずだ。だから、安心して戦ってよ」
翔輝の言葉に、翔鶴は驚いたような顔をしていたが、フッと口元を緩めて苦笑する。

「いつも頼りないお前がそんな事を言うのは似合わないぞ」
「むぅ・・・頼りないは余計だよ」
「ふん、日頃のお前を見てればそう思うのは仕方ない」
「まぁ、そうですね」
「私もそう思う」
翔鶴だけでなく飛鷹に瑞鳳までもが賛同し、翔輝はがっくりと肩を落とす。そんな翔輝を、隼鷹はようやく背中から降りて笑みを浮かべる。
「大丈夫。お兄ちゃんはとっても頼りになるよ」
「・・・翔輝さんを、信頼してます」
隼鷹と大鳳にそう言われ、翔輝は小さく笑う。そんな三人を翔鶴は一瞥し、天空を仰ぐ。
「姉さん？」
不思議そうに見詰める瑞鶴に、翔鶴は小さな声で言う。
「――瑞鶴・・・今度の戦いでも、お前の幸運が起きればいいな」
「うん・・・でも、そうすると姉さんが・・・」
瑞鶴は言いよどむ。『瑞鶴』が助かれば、『翔鶴』が被害を受ける。それが今までの海戦の基本だった。この戦いで『瑞鶴』がまた無傷でも、今度こそ『翔鶴』は・・・
「気にするな。私も武人。覚悟はできている」
「姉さん・・・」
翔鶴の真剣な瞳に、瑞鶴は背筋が冷たくなるのを感じた。
自分の姉、翔鶴は――この戦いで全てを懸けている、と。
翔鶴は瑞鶴の頭をそっと撫でる。そんな彼女らしからぬ行為に驚く瑞鶴。そんな彼女に、翔鶴は優しく微笑む。
「安心しろ。もし敵機が来ても――私が全て引き受ける」
その言葉に、瑞鶴は目を見開き、慌てて反撃する。
「ね、姉さん！　私も日本海軍の誇る歴戦の正式空母よ！　そんな自分一人で全部を背負わないでよ！」
必死に翔鶴に訴えたが、翔鶴は真剣な瞳で瑞鶴を見詰める。その

瞳には、軍人としての彼女ではなく、姉としての彼女の姿が会った。
「妹を守るのは――姉の役目だ」
そう言うと、翔鶴は大和の下に行く。そんな姉の後姿を見て、瑞鶴の不安は増すばかりだった。
翔鶴が大和の前に立つと、翔輝を取り囲んでいた隼鷹や大鳳は瑞鶴や飛鷹達に所へ戻った。
じっと自分を見詰める大和に、翔鶴は真剣な瞳を向ける。
「大和。今作戦、敵の目をなるべく引き付けてくれ」
「わかりました」
大和にそう言った後、翔鶴は翔輝に声掛ける。昨日の今日だ。二人は一瞬顔を合わせただけで顔を赤らめたが、すぐに翔鶴はいつもどおりの態度をする。
「長谷川。まさかお前と一緒の作戦に出れるとはな」
翔鶴の言葉に、翔輝もいつもの彼に戻る。
「まぁ、いつかは来ると思っていたよ」
「そうなのか？」
「でも、こんなに危機迫った状況下だとは思わなかったけどね」
「まあな。よろしく頼む」
「わかった」
翔鶴はそう答えると、彼の横を通り抜ける。その瞬間、
「・・・もし、この戦いが無事に終わったら、もう一度・・・想いと伝えるからな」
そう言って通り過ぎた。翔輝が振り返ると、翔鶴は多くの空母達や本隊の皆を率いて歩き出していた。
いよいよ、前衛部隊と本隊に分かれる時がきたのだ。
前衛部隊の皆に敬礼して消えていく本隊の艦魂達。そんな中にいる彼女の背中に翔輝は叫ぶ。
「なあッ！　翔鶴！」

翔鶴は皆が消える中でその声に振り返る。そんな彼女に、翔輝は真剣な瞳で、大切な言葉を叫ぶ。

「絶対、死ぬなよぉッ！」

翔輝の言葉に、翔鶴は一瞬驚いたような顔をしたが、コクリとうなずき、頬をほんのりと赤らめながら見事な敬礼をして去った。

翔鶴達がいなくなった甲板で、まだ残っていた二人の子が近づいてきた。武蔵に負けない無表情をした大鳳と、天真爛漫な笑みがまぶしい隼鷹だ。

「かのん？　隼鷹？」

「・・・翔輝さん」

大鳳はじっと翔輝を見詰める。キラキラとしたクリッとした瞳が揺れ、大鳳はわずかに顔を綻ばせる。

「・・・この作戦が無事に終わりましたら・・・一度私のわがままに付き合ってください」

「え？　あ、いいけど」

「・・・約束ですよ」

大鳳の真剣な瞳に翔輝はうなずく。そんな二人を少し離れた所から見ていた大和はなんとなく不安になったりする。

大鳳が離れると、今度は隼鷹が翔輝の胸の中に飛び込んでくる。

「お兄ちゃん、がんばろうね」

隼鷹の屈託のない笑みに、翔輝も満面の笑みを浮かべてうなずく。

「うん。がんばろう」

隼鷹は嬉しそうに笑って走って行った。その後を大鳳が追い、二人は光に包まれて消えた。残された翔輝と大和は互いを見合うが、大和は不機嫌そうに目を逸らす。そんな大和に翔輝は不思議そうに首を傾げるのだった。

自分の艦に戻った大鳳は甲板の上で空を眺めている刹那を見つけた。

近づくと、彼の方から声を掛けてくれた。

「よぉ、大鳳。みんなとのお別れは済んだのか？」
大鳳は無言でいうなずく。そんな彼女の返答に刹那は「そうか」とだけ嬉しそうに答える。そして再び天を見上げる。
雲ひとつない蒼い空がどこまでも続く快晴だ。
大鳳も自然と空を見上げ、その美しい青空に口元がわずかに綻ぶ。
そんな彼女を盗み見て、刹那は優しく微笑む。
「今度の戦いは今までとは比べ物にならない。そんな戦いが初陣になるなんて、君も大変だな」
大鳳は答えずにぼーっと空を見詰める。刹那はそれを見て嬉しそうに微笑む。
「でも安心して。僕は真珠湾から生き残る戦闘機乗りだ。それこそ真珠湾、インド洋作戦、ミッドウェー、ラバウル、ソロモン、い号、ろ号作戦っていう激戦を生き残ってきたんだ。実力は折り紙付きさ。必ず守ってやるからな」
その言葉に、大鳳は刹那を見た。無表情の中にある瞳にはしっかりとした意志があって、それはしっかりと自分に向けられている。
目の前の小さな少女を、命に代えても守ろう。そう決意した。
「僕はミッドウェーで蒼龍を守れなかった。だから、命に代えても君を守ってみせるよ」
大鳳はじっと刹那を見詰める。すると、わずかに口元をフッと綻ばせた。
「・・・ありがとうございます」
「気にするなって。必ず生きて帰ろうな」
「・・・はい」
小さくうなずく大鳳を見て、刹那は故郷に残してきた妹を思い出す。もうずいぶん会っていないが、きっと元気で自分の帰りを待っていてくれてるだろう。その時、
「・・・あ」
その小さな声に向くと、大鳳が空を見上げて普段はあまり変えない表情を喜びに変えていた。その笑顔は、とてもかわいらしい。

「どうした？」
刹那が問うと、大鳳は空を見上げたまま答える。
「・・・鳥が、巣立った」
その声に天を見上げると、マストにある鳥の巣から次々に鳥が飛び出した。巣立ちの瞬間だ。
「ほぉ、あの巣の鳥がもう巣立ったのか。時間が経つのは早いな」
鳥達は一度大鳳の近くで旋回した。まるでお礼を言っているかのようだ。そして、そのまま天高く飛び立って行く。
「・・・バイバイ」
大鳳は小さく胸の前で手を振る。そんな彼女のかわいい仕草に、刹那は小さく微笑んだ。
鳥が見えなくなっても、大鳳はぼーっと鳥が去った方向を見詰め続ける。
ぼーっと空を見詰める大鳳に、刹那はふと瑞鶴から聞いた話を思い出す。
「そういえば瑞鶴達から聞いたけど、お前『大和』にいる艦魂が見える航海士が好きなんだって？」
「・・・」
「・・・」
「・・・（ぽっ）」
「・・・」
「・・・（コクリ）」
「そうか」
それだけを言うと、刹那は大鳳の頭をそっと撫でる。頬を赤らめたまま自分を見上げる大鳳に、刹那は優しく微笑む。
「だったら、その人の為にも必ず帰って来ような」
「・・・はい」
刹那と大鳳はどこまでも澄んだ青空を見上げた。
この空の向こうに、敵の大艦隊が展開する海がある。そここそが、日本海軍が全力を注いで戦うべき決戦場。生きて帰れるかわからな、

戦場なのだ。
だが、必ず生きて帰ってくる。
残してきた家族の為、愛する人の為に、必ず生きて帰って来よう。
そう、決意する。
頬を撫でる風には夏の気配が感じられた。
もうすぐ夏だ。せみがうるさく鳴く、暑い季節。だけどそれが、今はすごく楽しみだ。
刹那は故郷に戻って妹と一緒に海に行きたいと思い、大鳳は初めての夏に心をわずかに躍らせる。
この戦いの後には、幸せが必ず待っている。
それと出会う為、必ず生き残ろう。そう決意した。
輝く太陽の光に照らされる蒼い海を、第一機動艦隊は白波を立てて進撃した。

その後、第二艦隊こと前衛部隊が先に出撃。その後方二〇〇キロ地点を第三艦隊こと第一機動艦隊本隊が続く形で再進行した。
決戦兵力である第一機動艦隊は、無数の敵が展開する敵地――マリアナ諸島に向かって白波を立てて急行した。

一方その頃、アメリカ海軍第５艦隊の第５８任務部隊こと高速空母艦隊はマリアナ諸島を包囲していた。その戦力は空母を主軸とした大機動部隊。海を埋め尽くす空母群がアメリカの底力を思わせる。
そんなアメリカ第５艦隊旗艦は重巡洋艦『インディアナポリス』。
そして作戦の要である第５８任務部隊旗艦・空母『レキシントン』（エセックス級空母６番艦）の防空指揮所では古参エンタープライズが銀髪をサイドテールで纏めた少女と口論をしていた。
「だからッ！　今すぐに全艦載機を使ってサイパンを攻撃しろと言っているんだ！」
きれいな金髪を乱暴に振り回して怒鳴るエンタープライズに対し、目の前の少女は小さく首を横に振る。

「無理ですよ。今攻撃すれば上陸した味方まで空爆してしまいます。それに我々空母部隊の真の目的は必ずや進出して来るであろう敵機動部隊を迎え撃って殲滅する事です」
「そ、それはそうだが」
エンタープライズは不服そうな顔をする。そんな彼女を諭すように少女は言葉を繋げる。
「エンタープライズさん。お気持ちはわかりますが、ここは陸軍に任せましょう。遅かれ早かれマリアナには星条旗が翻ります。我々海軍は来たるべき敵艦隊撃滅に全力を注ぎましょう」
「う、うむ・・・」
少女の言葉にさすがのエンタープライズも黙ってしまう。まわりの皆はそんな少女に改めて感心する。
彼女こそ今回の作戦の要となる第５８任務部隊旗艦を務める空母『レキシントン』の艦魂だ。エセックス姉妹の６女だが、冷静沈着で的確な指揮を執る有能なリーダー。そして何より人を説得するのがうまく、暴走したエンタープライズを止められる数少ない一人。ちょっと長い名前なので皆から親しみを込めて《レン》と呼ばれている。
そんな感情的なエンタープライズの腕に抱き付く少女がいた。エンタープライズのもう一人の妹、ホーネットだ。ホーネットは血は繋がっていないが本当の姉のように慕っているエンタープライズに優しく微笑む。
「お姉ちゃん。落ち着いてよぉ」
子猫のようなかわいい声を上げるホーネットにさすがの猛将エンタープライズも牙をもがれた虎のようにおとなしくなる。
「だ、だがなホーネット」
「頭を冷やしてよぉ。お姉ちゃんは笑った方がかわいいってば」
「か、かわいいとかそういうのは私には関係――」
「お姉ちゃんは顔はかわいいんだからもっと笑ってよぉ」
「うむむ・・・ッ！」

何も言えなくなるエンタープライズにまわりを囲む他の艦魂達もおかしそうにくすくすと笑う。
「わ、笑うなっ！」
エンタープライズはそう怒鳴るとホーネットを引き剥がして姿勢を正す。これでもこの空母部隊の最古参の空母艦魂なのだ。威厳というものがある。
コホンと咳払いをして一度話を立て直す。
「ともかく、ジャップの守備隊は陸軍が何とかしてくれるだろう。なら、私達海軍はこちらに来るだろう敵空母部隊を叩くまでだ」
「ですから、それは私が先程から何度もご説明していたんですけど」
「うっ・・・」
もはや威厳も何もなくなったが、空母の艦魂は全員エンタープライズを慕っている。そんな彼女も自分達のリーダーなのだ。一応『レキシントン』が旗艦だが、艦魂達にとってのリーダーは頼れる姉貴――エンタープライズである。
エンタープライズは作戦の大まかな説明を行うと解散命令を出した。
散っていく艦魂達を一瞥し、エンタープライズは自分の防空指揮所に移ると海を埋め尽くす艦隊を見詰める。そのどの艦のマストにも星条旗が掲げられ、遠く離れた故郷を守る為に戦う戦士達がいる。
頬を撫でる風に、エンタープライズは不敵な笑みを浮かべる。
「・・・来るなら来いジャップども。一隻残らず海に沈めてやる。そして、黄色い猿どもに思い知らせてやる。世界の正義であるアメリカに逆らって、生き残れると思うなとな！」
エンタープライズは敵艦隊が来るであろう西の海を睨む。その海に必ず奴らはやって来る。そして、その向こうに敵の本拠地である日本本土がある。手を伸ばせばもう届く距離。己が艦載機で、その地表を焼き払ってみせる。そう決意していた。
海のように澄んだ蒼い瞳は、美しく、そして勇ましく煌いていた。

一方その頃、ヨークタウンは自艦の烹炊所にいた。
むあっとするような熱気と色々な食材の匂いが混ざったこの空間は、戦闘時以外は常に戦争状態だ。
軍艦には比較的大変な役職が３つある。
艦の針路や運動など全てに関わるので休暇が少ない航海科。艦の心臓とも言うべき機関を常に動かし続け、沈没の際は真っ先に死の恐怖が襲い掛かる機関科。そして３６５日３回戦争状態に突入する主計科烹炊班だ。
そんな大変な役職のひとつである烹炊班が活動する烹炊所ではすでに今晩の夕食の用意がされていた。大きな肉を豪快に切り、野菜を切り、パンを用意したりと忙しく兵達が動き回る中、ヨークタウンは彼の傍にいた。
「悪いな。手伝ってもらっちゃって」
「いいの。気にしないで」
そう言って包丁で肉を切るヨークタウンが微笑む先にいるのはこの空母『ヨークタウン』烹炊班副班長を務めるフェイト・Ｊ・フォックス主計少尉だ。優しげな笑みにはこの部屋のすさまじい暑さに玉のような汗を掻いている。
包丁を器用に動かして肉を切るヨークタウンに、フェイトは感心したような顔をする。
「へぇ、すっかり包丁さばきがうまくなったな」
「えへへ、フェイトが丁寧に教えてくれたからだよ」
「そっか、そう言ってもらうと嬉しいよ」
「えへへ、それに今晩はミートローフでしょ？」
「おうよ。ちゃぁんとお前の分も作ってやるからな。楽しみにしとけ」
「うん。私フェイトが作るミートローフが一番好き」
「そう言ってもらえるとこっちも作りがいがあるよ。それじゃ張り切ってがんばらないとな。ヨークもちゃんと手伝ってくれよ」
「うん！」

ヨークタウンは嬉しそうにうなずくと、上機嫌に鼻歌を歌いながら肉をきれいに切る。そんな彼女の横でフェイトも部下達に指示を出しながら肉を切る。

ヨークタウンはそんなかっこいい彼をそっと盗み見て、嬉しそうに顔を綻ばせる。

今日の夕食はミートローフ。それは決戦前のアメリカ艦隊の将兵達を歓喜させた。

そして今日もまた、烹炊班で働くフェイトは忙しそうに動き回り、そんな彼を手伝うヨークタウンは嬉しそうに微笑んでいた。

世界最長の戦艦であるアイオワ級戦艦1番艦である戦艦『アイオワ』の艦橋では桃色の髪をポニーテールで纏めた少女――アイオワが作戦書を読んでいた。司令部の皆はＣＩＣにいる中、彼女はこの外が見える艦橋が気に入っていた。

「アイオワ。コーヒーでも飲むか？」

「うん。ありがとうクルス」

アイオワは笑みを浮かべて士官服を着た青年からコーヒーを受け取る。彼の名はクルス・Ｆ・ブレード航海中尉。戦艦『アイオワ』の航海士をしている青年だ。アイオワとは竣工すぐからの間柄で、この戦争はいつも共に行動して来た親友同士でもある。

クルスは彼女が読んでいる作戦書を覗き込む。

「今回はずいぶんと厄介だな。サイパン島上陸部隊の援護と敵艦隊迎撃っていう2つの事をしなくちゃいけないんだからな」

「そうね。確かに厄介よ」

「それに今度の戦いは、きっと空母達ばっかりが活躍するだろうな。まったく、やっとの思いで戦艦に乗れたってのに、これじゃ張り合いがないよ」

「後悔してるの？」

イタズラっぽく訊くアイオワに、クルスは「まさか」と苦笑いする。

「俺は夢だった戦艦の乗組員になった。それにお前とも出会えた。これ以上の幸せはないってぇの」
「そうか。そう言ってもらえると私も嬉しい」
アイオワが小さく微笑むと、クルスは照れ隠しの笑みを浮かべる。
「まぁ、これからも色々と大変だろうけど、一緒にがんばろうな」
「えぇ」
クルスから出された手を、アイオワはそっと掴む。
今や時代遅れとなった戦艦は、何も日本だけでない。アメリカもまた、時代遅れとなっていた。それでも、戦艦に憧れる者は数多い。それが、この時代だった。
再び作戦書を読み始めるアイオワに、クルスは静かに微笑んだ。

海を埋め尽くす星条旗を掲げた大艦隊。それがアメリカ海軍第５艦隊だ。
総戦力は正式空母『エンタープライズ』『エセックス』『ヨークタウン』『ホーネット』『レキシントン』他２隻、軽空母『プリンストン』他７隻、戦艦『アイオワ』他６隻、重巡洋艦『インディアナポリス』他７隻、軽巡洋艦８隻、防空巡洋艦（通常主砲の代わりに対空砲を積んだ軽巡洋艦）４隻、駆逐艦６７隻の大艦隊は迫り来る日本艦隊を万全の防御態勢で待ち構えていた。

互いに接近する両軍艦隊。その戦力は今までとは比べ物にならない大規模なもので、マリアナ沖にすさまじい嵐が吹き荒れようとしていた。
時に一九四四年六月十六日、マリアナ沖海戦の全ての駒が揃った瞬間だった。

第十一章　第五節　壮絶　史上最大マリアナ海空決戦（前書き）

《レキシントン》
エセックス級航空母艦６番艦――空母『レキシントン』
愛称　レン
出身　ベスレヘム・スチール株式会社
身長　１５５ｃｍ
髪型　サイドテール（銀髪）
実年齢（１９４４年６月頃）１歳
外見年齢　１４、５歳
誕生日　２月１７日
好きなもの　姉妹・仲間・完璧な作戦・無血勝利・思い通りに事が運ぶ事
嫌いなもの　敵軍・失敗・予想外な展開・自分の思い通りにいかない事
家族構成　姉・エセックス・ヨークタウン・ホーネット他２人
妹５人
空母『レキシントン』の艦魂。建造当初は《カボット》という名前だったが、コーラル海海戦（珊瑚海海戦）で沈んだレキシントン級空母１番艦・空母『レキシントン』の名前が受け継がれる事になった。トラック島空襲などに参加し、今度のフィリピン海海戦（マリアナ沖海戦）では第５８任務部隊の旗艦として参加。後のフィリピン沖海戦（レイテ沖海戦）にも参加する。日本側では戦果誤認や大本営発表などで３度沈められているという日本側ではすでに存在しない事になっている空母でもある。そんな『レキシントン』の艦魂はエセックス姉妹でも最も優秀な指揮官。頭が良く、切れもいいので参謀を必要としない。その為まわりから《参謀司令官レキシントン》という異名を持つ。冷静沈着で、人の話を聞き、的確な意見を返す。その為揉め事などの仲裁が得意で、暴走したエンタープライ

ズを止める事ができる数少ない一人。実はとても姉妹および仲間思いで、休みの日は皆と遊んだり悩み相談にのったりしている。とても優秀な指揮官だが、自分の思った通りに状況が進まなくなると混乱してしまうという弱点も持つ。しかし、みんなに頼られている立派な指揮官である。最近はフェイトと仲がいい。

《フェイト・J・フォックス》

役職　アメリカ合衆国海軍軍人・空母『ヨークタウン』烹炊班副班長

出身　カリフォルニア州

身長　１６８ｃｍ

年齢　２３歳

誕生日　５月５日

好きなもの　料理を作る事・誰かに料理を食べてもらう事・みんなの嬉しそうな笑顔

嫌いなもの　無駄に味つけされた料理・健康に悪い料理・濃かったり薄い味

家族構成　父　母　姉　妹

空母『ヨークタウン』の烹炊班副班長を務める青年。実家は両親が結構大きなレストランを経営していて、姉も妹もそこの手伝いをしている。そんな家に生まれた彼は両親から受け継いだ料理の才能を発揮して『ヨークタウン』でその腕を振るっている。『ヨークタウン』の食事が他艦よりもおいしいと評判なのは彼の力量だ。ヨークタウンとは仲が良く、彼女に料理を教えたりもしている。ヨークタウンを妹のようにかわいがっていて、彼女の悩みや愚痴なんかを聞くのが彼の日課になっている。父が日本人の料理人と親しかった事もあり、日本も日本人も、日本料理も好きな方だが、今は敵国となった日本と戦う事に密かに悲しんでいる。一番得意な料理はミートローフ。夢は自分で飲食店を経営する事。最近はホーネットやレキシントンとも仲がいい。以前も登場していたが、設定がなかったの

で今回発表しました。

《アイオワ》
アイオワ級戦艦1番艦――戦艦『アイオワ』
愛称　なし
出身　ニューヨーク海軍造船所
身長　１６２ｃｍ
髪型　ポニーテール（桃髪）
実年齢（１９４４年６月頃）１歳
外見年齢　１５、６歳
誕生日　２月２２日
好きなもの　クルス・海・平和・アメリカ
嫌いなもの　命を大切にしない者・無茶な作戦・民間人を巻き込んだ戦い
家族構成　妹５人

アメリカ海軍最新鋭戦艦級のネームシップ。近年よく大和型戦艦のライバル扱いされるが、それは愚かな考えである。そもそも完成した時期が戦前と戦中なので比較する方がおかしい。アイオワ級は世界最長の戦艦。大和型より7メートルほど大きいが、主砲口径、全幅、排水量などは劣る。しかし最先端のレーダーとエンジンを持つので、命中率、早期警戒、速度などは極めて優れている。日本では戦艦と空母の連携は主に金剛型のみに対し、アメリカは空母部隊の護衛にこうした戦艦を配置し、その威力を見せている。アイオワ級戦艦3番艦では日本の降伏文書調印の場になった事が有名である。アイオワ級は戦後も新たにミサイルを配備して朝鮮戦争、湾岸戦争にも参加している。その後もアメリカ海軍の軍艦として活躍したが、老朽化と膨大な維持費の為に次々と退役し、現在は全ての艦が除籍している。そんなアイオワの艦魂はとても冷静な少女で、指揮官としての才能がある。先輩の艦魂達にも間違っている事には抗議や批判をする強い一面も持つ。妹達を率いて数々の戦場を翔け抜けて来

た勇猛かつ優秀な軍人。指揮官として厳しい一面を持つ反面、休暇の時などは妹達と一緒に遊んだり、部下達には優しく接するなど柔和な一面もある。本心は平和を望んでいるのであまり戦争には乗り気ではない。完成当時から乗る自分の航海士であるクードとは極めて仲がいい。自分の考えをわかってくれる数少ない味方だと思っている。そんな彼をここ最近特に気になって仕方がない自分がいる事やクードが他の艦魂と話していたりすると不機嫌になる事などに戸惑う乙女らしい一面もある。数少ないアメリカ戦艦キャラの一人。

《クルス・Ｆ・ブレード》

役職　アメリカ合衆国海軍軍人・戦艦『アイオワ』航海士

出身　ニューヨーク州

身長　１６５ｃｍ

年齢　２２歳

誕生日　１２月２４日

好きなもの　アイオワ・家族・故郷・友人・平和

嫌いなもの　戦争・争い事・辛いもの

家族構成　父　母　兄　姉　妹２人

戦艦『アイオワ』の航海士。父が陸軍、兄が海軍の軍人なので、二人にあこがれて海軍に入った。故郷の姉と妹にこまめに手紙を送っている。初めて配置されてその後ずっと乗っているのが最新鋭戦艦『アイオワ』だった。アイオワとはその時からの親友のような関係で暮らしている。幾多の戦いを共に戦い抜いて来たので、お互いの事は色々とよくわかっている。パールハーバーを奇襲された事には日本に恨みはあるが、元々平和が好きな彼はあまりこの戦争には乗り気ではない。アイオワも同じ気持ちだとも知っている。彼女が先輩の艦魂などに嫌われている事も知っていて、彼女の味方になろうといつも必死に動いている。他の戦艦の艦魂達とも親しくなり、最近はアイオワを理解する艦魂も数多くできて嬉しく思っている。だが、最近アイオワが自分を時折殺気を含ませた瞳で見ている事が気

になって仕方がない。

ついに始まったマリアナ沖海戦。レイテ沖海戦に続く史上最大規模の両軍機動部隊の決戦。日本はこれを決戦として残存全戦力を投入して挑み、アメリカも太平洋に展開していた機動部隊のほとんどを集中し、壮絶な戦いが行われました。

結果はご承知の通りですが、その戦いの中で大和達は、大鳳や翔鶴達はどう戦い抜いたのか。

久しぶりの壮絶な戦闘シーンの数々。連合艦隊の崩壊編の始まりです。

第十一章　第五節　壮絶　史上最大マリアナ海空決戦

そして六月十八日、ついに第一機動艦隊はマリアナ沖に姿を現した。

サイパン島守備隊を救う為、そして日本を守る為、持てる全ての力を結集させた日本海軍最後の決戦兵力だ。

第一機動艦隊司令長官小沢治三郎中将はすぐさま索敵機を発進させた――そして午後三時、

「長官！　索敵機から無電が入りました！」

若い通信士官が、旗艦『大鳳』艦橋に飛び込んで、興奮した声で叫んだ。

「読んでくれ」

小沢は静かに、しかし威厳の感じられる声で言った。

「読みます。『敵機動部隊ヲ《サイパン島》西南洋上ニ発見ス。敵艦隊ハ空母多数ヲ含ム。速力二五ノット』」

読みながら通信士官は小沢に電文を訳したものを書いた紙を渡した。小沢はそれを受け取るとじっと見詰める。

「長官。すぐに攻撃隊発艦準備を！」

詰め寄る航空参謀。まわりの参謀達も皆同じ意見だった。だが小沢は、

「今はまだ遠すぎる。それに、今からの発艦では帰艦は夜になる。夜間着艦をこなすには、搭乗員の技量が無さ過ぎるし、そんな訓練は基地ではしていない。攻撃はいいが、みすみす殺す事はできん。まだ機会はある。明日から忙しくなるぞ。全艦の烹炊長に前祝だと言ってくれ」

「はいッ！」

通信士は嬉しそうに艦橋を出て行った。

この奇襲になるであろう攻撃を取りやめ、温情ある決断をした彼に搭乗員達の士気は大いに上がった。これが後に最悪を招くとも知

らずに。

翌朝の夜明け前、第一機動艦隊から四三機の索敵機が出撃した。ミッドウェー海戦の時が七機だったのに比べ、その量は桁違いだ。あの敗北の経験は、ちゃんと生かされていたのだった。

六時半、偵察機が敵機動部隊を発見。その距離は前衛艦隊から西方七〇〇キロ地点だった。

その頃米軍も偵察機を飛ばしていたが、小沢の目論見通り日本機の長い航続距離のおかげでこちらが先に敵を発見できたのだ。

敵機動部隊発見の報に小沢の固くつむられていた瞳が見開いた。

「第三航空戦隊に命令！　攻撃隊を発進させよッ！　すぐに敵機動部隊を先制攻撃するんだ！」

『了解！』

命令を発する参謀達を見詰め、大鳳はいよいよの決戦に小さな拳を握った。

「・・・必ず、勝つ」

そう信じ、大鳳は海の向こうにいる前衛部隊に属する第三航空戦隊、軽空母『瑞鳳』『千歳』『千代田』に静かに敬礼した。

そして、そこにいる彼の事を想う。

「・・・翔輝さん、がんばりましょう」

大鳳は空間から日の丸が描かれた鉢巻を発現し、軍帽の上から縛った。そこには達筆で《必勝》と書かれている。

負けられない戦い、それがこの戦いだった。

「・・・勝つ」

大鳳が静かにつぶやくと同時に第一機動艦隊司令部から第三航空戦隊へ命令無電が送られた。

――『総力ヲ以ッテ敵機動部隊ヲ攻撃セヨ』――

前衛部隊所属第三航空戦隊、空母『瑞鳳』『千歳』『千代田』の

三空母の甲板には多くの艦載機が並べられていた。だが、飛行機不足の影響で攻撃隊の大半を占める爆撃機隊は爆装零戦で編成されている。攻撃機の天山はわずかしない。とてもじゃないが、敵の大艦隊に殴り込みを掛けるにはあまりにもひ弱な戦力だった。

そんな三空母の一隻、空母『瑞鳳』の甲板に並ぶ一機の零戦の前に、出撃命令が下った剣と瑞鳳、千歳、千代田の四人がいた。

飛行服を完全武装した剣は慌しく走り回る搭乗員や整備兵を一瞥して彼女達を見詰める。

「じゃあ、行って来る」

「えぇ、がんばってね」

「大空さん、必ず生きて帰って来てくださいね」

「死んだら、ただじゃおかないから」

三人の激励に、剣は「わかった」と静かに微笑みながらうなずくと、零戦に乗り込む。乗り慣れた相棒の側面をそっと撫で、エンジンを点火させる。

エンジンが点火し、プロペラが高速回転を始めて強烈な風が発生する。軍帽が飛ばされないように押さえ、瑞鳳は剣に叫ぶ。

「必ず帰って来なさいよ！　あんたの居場所はここなんだから！」

「あぁッ！　わかったッ！　約束だ！」

手を振ってくれる瑞鳳達に手を振り返し、剣は飛行ゴーグルを掛ける。

まわりでは同じように轟音を轟かせてプロペラを回す零戦や爆装零戦、天山が並んでいる。

そして、いよいよ出撃命令が下った。

剣は一気にスロットルを上げて甲板を滑走する。正式空母に比べれば短い甲板も、剣の実力の前では簡単に発艦速度に到達する。一瞬、甲板の上で帽子を振ってくれている三人の少女達に手を振り、剣の零戦は空へ舞い上がった。

続いて他の零戦、そして爆装零戦、天山と出撃し、上空を旋回して編隊を整えると、一路敵機動部隊目指して飛んで行った。

瑞鳳達だけでなく、まわりを囲む前衛部隊全将兵に見送られて飛び立つ六四機（零戦十四機、爆装零戦四三機、天山七機）の攻撃隊。

天空を翔けて行く攻撃隊を見て、瑞鳳は静かに敬礼し、千歳は手を組んで健闘を祈り、千代田は応援の声を上げる。そんなみんなに見送られて敵に向かう攻撃隊を、大和は心配そうに見詰める。

「大丈夫でしょうか？」

「何が？」

艦橋の窓から飛び立っていく攻撃隊に手を振っていた翔輝が不思議そうに振り返る。

「今飛び立った攻撃隊――零戦が爆装していたんです」

「何だって！？」

翔輝は慌てて飛び立つ攻撃隊を見詰める。その中の飛び立つ零戦のほとんどが下に燃料増装の他に二発の二五〇キロ爆弾を装備して飛び立っていた。

翔輝は急いで宇垣に報告する。と、

「そうだ。今回の第一次攻撃隊の主力爆撃機隊は爆装零戦だ」

「そんなッ！　これでは急降下爆撃ができません！　あれでは水平爆撃か緩降下爆撃しか――」

「長谷川君・・・今の日本は飛行機の消耗率が激しく生産数が少ない。特に最も消耗率の高い爆撃機は今の日本には足りないのだ。それに、元々第三航空戦隊の今回の任務は我々前衛艦隊の護衛だ。だからこそ、艦載機のほとんどが制空の為の零戦で、爆撃機も零戦で補うしかないのだ」

宇垣の言葉に、翔輝は改めて日本の現状を理解した。その間、大和は空に溶けて行く攻撃隊を心配そうに見詰め続けた。

攻撃隊は敵機動部隊に向かった。しかし途中乱れた編隊を再編成するのに旋回し、到着に十数分の遅れが出た。練度の低い搭乗員に長距離飛行は荷が重かったのだ。

だが、この十数分の後れが最悪を招いた。この時米軍はグアム島

に攻撃を行っていたので甲板が大忙し。さながらミッドウェー海戦の南雲機動部隊のように甲板も艦内もめちゃくちゃだった。その為レーダーで日本の攻撃隊を探知しても制空の戦闘機隊を出すのに時間がかかった。だが、日本の攻撃隊が陣形整列に時間を費やしてしまった為に時間が足り、十分に戦闘機隊を出す時間を与えてしまった。

蒼い空を進む六四機の第一次攻撃隊。編隊の再編成が終わった攻撃隊は遅れを取り戻すかの勢いで空を翔ける。

その先頭集団を飛ぶ剣はここまでの長距離飛行で疲れ果てている他の新米搭乗員が操縦する飛行機を見詰めてため息する。

真珠湾の頃のような勇ましさは今の攻撃隊にない。

これが現実なのだ。一体こんな攻撃隊で敵に打撃を与えられるのだろうか、剣は心配で仕方がなかった。

――まさにその時、太陽を背にして敵戦闘機が殺到して来た。

「全機散開ッ！」

すぐに剣は操縦桿を倒して一気に急降下する。空中戦で上空を取られるのは死を意味する。

攻撃隊は次々に散開する。普通なら爆撃機や攻撃機には後部機銃が備え付けられており、そこで反撃の射撃を行うのだが、攻撃隊の大半は零戦である。そんな装備はもちろんない。

爆弾を積んだ零戦は得意の機動力を発揮できず、襲い掛かる味方戦闘機の五、六倍の数の敵戦闘機に次々に撃ち落とされた。

「くそぉッ！」

剣はすぐさま反転して襲い掛かるＦ６Ｆを一機撃ち落とす。だが、すぐ後方に敵機が割り込んできた。すぐに宙返りして後ろを奪い返すと、その一機を撃ち落とす。

窓の外を駆け抜けていくネイビーブルーのＦ６Ｆは逃げ回る友軍を次々に撃ち落としていく。黒煙を噴いて落下していくのはどれも日の丸を付けた味方機だ。

「このぉッ！」

剣は上空から一気に操縦桿を倒して急降下した。すさまじいGに耐えながら、爆装零戦に狙いを澄ます敵機に必殺の二〇ｍｍ機銃を撃ち出す。爆発し、黒煙を噴いて落下していく敵機を無視し、また別の一機を撃ち落とす。いくら相手の力量が良くても、こっちは数々の死線を潜り抜けてきたエース中のエース。そう簡単に後ろは取らせない。

簡単に撃ち落とされる中軽快に動いて味方を次々に撃ち落とす剣の零戦はすぐに目を付けられ、五機のＦ６Ｆが執拗に追いかけてくる。だが、零戦は確かに防御力はないに等しい。だが、それを差し引いても余りある機動力こそ、零戦の本領。弾なんて、当たらなければ怖くない。それが歴戦のエースパイロット達の戦い方だった。

空中で敵機の機銃を器用に避け、宙返りの次にまた宙返りなどアクロバット飛行を繰り返し、敵機を追っ払うと、残った攻撃隊を助ける為に空を翔ける敵機に次々に機銃を撃ち込む。

「喰らえッ！」

必殺の二〇ｍｍ機銃がＦ６Ｆの翼をもぎ取り、また一機を屠る。

すさまじい空中戦だった。

攻撃隊はなんとか敵機の猛攻撃の中必死に進み続ける。と、

『前方に敵艦隊を視認ッ！』

無線で入って来たその声に目を凝らすと、海の向こうに目的の敵機動部隊の姿が見えた。

『全軍突撃せよッ！』

隊長の声が無線から流れ、残った爆装零戦と天山が敵艦隊に襲い掛かった。だが、

ドドンッ！　ドンドンッ！　ドドドンッ！

迎え撃つはすさまじい対空砲火。空母はもちろん護衛の駆逐艦や巡洋艦、そして戦艦からのすさまじい対空砲火、そして敵機の壮絶な機銃の嵐に次々に味方機は撃ち落とされる。

「うわッ！？」

剣の零戦のすぐ近くで敵艦からの対空砲が爆発した。小刻みに震える零戦は、まるですさまじい敵の強さに怖がっているかのようだ。

隣を飛んでいた零戦がそのうちの一発を受けて一瞬で吹き飛んだ。剣の顔が真っ青になる。慌てて上空へ急上昇すると、敵艦に向かって突撃していた三機の爆装零戦が一瞬で吹き飛んだ。もしもう少し遅ければ、自分もあの仲間だっただろう。

すさまじい対空砲火と敵機の攻撃から生き残った爆装零戦が連続して緩降下爆撃を開始する。剣もその護衛にと急降下する。

前方を飛ぶ爆装零戦五機のうち立て続けに三機が対空砲火に撃墜された。襲い掛かる敵機は剣が蹴散らすも、対空砲火はどうしようもない。再び視線を戻した時、そこに零戦の姿はなかった。

「くそぉッ！」

剣は一度高度まで昇ると、次に護衛すべき味方機を探す。と、

ドオオォォォンッ！

その爆音に視線を向けると、一隻の戦艦が黒煙を上げていた。どうやらやっと命中弾を出せたらしい。

だが、喜びのつかの間、敵機が一斉に剣の零戦に向かって機銃を撃ちこんで来た。慌てて機体を回転させながら急降下して避けたが、

「あぐぅッ！」

コックピットの窓を貫通した弾が肩を撃ち抜いた。同時に飛散したガラス片が頭や腕を切りつけた。

真っ赤な血が流れ出し、痛みに耐えながらも敵機の攻撃を回避する。

だが、ついに隊長機から撤退命令が下った。

剣は悔しそうに唇を噛み、母艦を目指して反転する。

敵機のしつこい追撃を振り切った時には、目の前の残存機の数に愕然とする。

生き残ったのは零戦は自分を含めて六機、爆装零戦十二機、天山五機。出撃時の三分の一しか残っていなかった。

剣は悔しそうに唇を噛んだ。操縦桿を握る手は、悔しさに小刻み

に震えていた。
剣は悔しさと痛みに耐えながら、長距離飛行を続けた。

結局、第一次攻撃隊は敵機動部隊から約一〇〇キロ地点で敵戦闘機隊の迎撃に遭い、攻撃隊は壊滅した。いくら高機動の零戦と言えど二五〇キロ爆弾を装備したままでは満足な機動力も出ずに一方的にやられた。

後にこの簡単に撃墜される日本機を米軍航空隊の搭乗員は《マリアナの七面鳥撃ち》と称した。まるで飛ぶのが下手な七面鳥を撃つかのように次々に落ちたと言われた。この時の日本の搭乗員がどれだけ未熟だったかがわかる。

だが、そんな攻撃隊も敵戦闘機隊の防空網を通り抜けて敵機動部隊に到達。戦艦一隻に一発爆弾を命中。重巡洋艦に一発の至近弾を命中させた。

だが結局、攻撃隊はその総数の三分の二を失い、結果的は攻撃は失敗となってしまった。

時間は戻って第三航空戦隊から第一次攻撃隊が発進した直後、第一機動艦隊本隊の甲部隊、第一航空戦隊にも攻撃隊発進命令が出された。

「第二次攻撃隊発進！　攻撃隊は我が艦隊から発進させよ！」

小沢の命令に、『攻撃隊発艦用意！』と航空参謀達が伝声管に向かって叫び、急いで第二次攻撃隊の用意を始めた。

甲板に並ぶ日の丸を掲げた攻撃隊。それは第一次攻撃隊とは違い、零戦、彗星、天山で編成されたちゃんとした攻撃隊であった。

その中の一機の零戦の前で整備兵と最後の確認を終えた刹那。その時、

「・・・出撃ですか？」

小さな声に振り返ると、そこには《必勝》と書かれた日の丸の鉢巻をした大鳳が立っていた。その瞳は相変わらず何の感情も窺えな

い。
「うん。第二次攻撃隊の護衛さ」
「・・・そうですか」
大鳳はぼーっと刹那の愛機である零戦五二型を見詰める。濃い緑色の機体に描かれた赤い日の丸が、日本機の証だ。
ぼーっとしている大鳳の頭を、刹那はそっと撫でる。
「見送ってくれてありがとうな。お前の為にも、必ず敵艦隊まで攻撃隊を守り抜いてみせるさ」
「・・・」
「本当は母艦の護衛が良かったんだけど、仕方ないな」
少し残念そうな顔をする刹那の袖を、大鳳はクイッと引っ張った。
視線を下げると、彼女が自分をじっと見詰めていた。
「大鳳？」
「・・・ご武運を」
その短い言葉に、刹那は嬉しそうに「あぁ」とうなずいた。
そして、いよいよ出撃の時刻が来た。
大鳳は防空指揮所に移って、今か今かと出撃の時を待つ攻撃隊を見詰める。
甲板に並ぶのは歴戦の零戦に新鋭機彗星に天山。まさに、決戦に相応しい面々だ。他の二隻の空母、『翔鶴』と『瑞鶴』の甲板も同じような状態なのだろう。
ついに発進命令が下り、甲板を次々に艦載機が翔けていく。
零戦が、彗星が、天山が。その大きな翼を力強く羽ばたかせて空へ舞い上がる。他の二隻からも次々に攻撃隊が舞い上がる。
そして、後部甲板に並んでいた刹那の零戦が疾走した。大鳳は刹那の零戦に向かって帽子を脱ぐと、見よう見まねで帽を振った。
スロットルを全開まで上げて甲板を走る零戦。ふと防空指揮所を見ると、大鳳がぎこちなく帽を振ってくれていた。それだけで、刹那は自然と笑みが浮かぶ。

そして、十分速度がつくと、一気に操縦桿を引き上げた。
タイヤが甲板から離れる感触がし、次に機体が浮く感覚が走る。
グングンと上がり、刹那の零戦は『大鳳』から離れていく。
遠くなっていく母艦に敬礼し、刹那は操縦桿を掴みながら何気なく右を見た刹那の瞳に、何かが映った。目を凝らして確認する。
「あ、あれはッ！」
刹那はそれを見て目を見開いた。
それは、水中を白い軌跡を残しながら翔ける魚雷だった。六本の魚雷は真っ直ぐ、『大鳳』に向かって走っていた。
慌てて後方を確認するが、『大鳳』は回避運動をする気配はない。まだ気づいていないのだ。
このままでは、『大鳳』は魚雷を受けてしまう。
瞳に、大鳳が見せたかわいげな笑顔が思い浮かんだ。
命に代えても守る。
そう約束した。

――刹那は決断した――

刹那は操縦桿を右に倒した。
零戦はその命令に従って機体を右に倒しながら急旋回する。そして、そのまま一気に操縦桿を倒して必殺の急降下。
高度計がすさまじい速度で〇に近づいていく。
窓の外に一瞬見えた三隻の空母。
一騎当千のごとき強さと勇ましさを持った翔鶴。
二代目の母艦で、とても優しくてかわいい、守ってあげたいような瑞鶴。
そして、三代目母艦で、いつも何を考えているかわからない無表情だが、時にとてもかわいらしい笑みを見せる大鳳。
――必ず守ってみせる。
ふと、操縦席の下に置いてある鉛筆入れに使っている妹が送って

くれたドロップ缶を見た。自然と笑みが浮かぶ。
「ごめんな小牧(こまき)。兄ちゃん、約束守れなかったよ。ダメな、兄ちゃんで、ごめんね」
迫る海面。そして・・・
「みんな、元気でね――さようなら」
直後、零戦は海面に激突して大爆発を起こした。

大鳳は振っていた軍帽を落とした。
大きく見開かれた瞳は、何が起きたかわからないといった感じだ。
目の前で起きた事が信じられなかった。
今飛び立って海面に激突したのは――刹那の零戦だった。
真珠湾からの生き残りで、自らの腕をあれだけ信じろと言った彼が、墜落した。
信じられなくて、呆然と立ち尽くす。
「・・・何で・・・神風さん・・・？」　さっきまであんな笑顔を浮かべていた彼が、死んだ・・・
瞳から、涙が一滴流れた。その時、
「雷跡四本！　向かってくるッ！」
隣にいた見張り兵の悲鳴に大鳳は慌てて身を乗り出して魚雷を探す。と、刹那が激突した方向から四本の白い雷跡が向かって来た。
この瞬間、全てが繋がった。
刹那ほどの腕を持った搭乗員が、発艦に失敗するはずがない。
――つまり、彼は身を挺して自分を守ろうとして、海面に突っ込んだのだ。
全てが繋がった瞬間、大鳳はその場に崩れた。
「・・・そんな」
自分なんかの為に、本当に命を懸けてしまうなんて・・・
愕然とする大鳳がいる防空指揮所の下にある艦橋では空母『大鳳』艦長、菊池朝三(きくちともぞう)大佐が回避命令を出していた。
「取舵いっぱぁぁぁいッ！」

菊池の命令に『大鳳』は急速回頭をする。が、気づくのが遅すぎた。
迫る魚雷はとてもじゃないが全てを避け切る事はできなかった。
「総員衝撃に備えええええええぇぇぇぇぇッ！」
菊池は絶叫に近い声で伝声管に向かって叫んだ。
防空指揮所にいる大鳳は、そんな声も聞こえなかった。
ただ、目の前で起きた事が、信じられなかった。
そして・・・
ドオオオオォォォォォンッ！
「・・・ひぐぅッ！」
大鳳の足から赤い鮮血が噴出した。すさまじい痛みに耐えられずに、大鳳はその場に倒れた。
鋭い痛みに大鳳は苦しそうに顔をゆがめて何度も身をよじらす。
その姿は大鳳のような女の子がすると何倍も痛々しく見える。
大鳳は必死に立ち上がろうとするが、軸足をやられたので立ち上がれず、再び金属の床に叩き付けられた。その拍子に紐が解け、腰に挿した軍刀が床にある自分の血の池に落ちた。その自分の血で赤く染まった軍刀を杖代わりにして大鳳は再び立ち上がる。と、
「大鳳ッ！」
そこに顔を真っ青にした翔鶴が現れ、彼女の肩を持った。反対側は同じく現れた瑞鶴が肩を貸してくれ、大鳳は倒れずに済んだ。
「・・・ありがとう、ございます」」
「何を言っている！　礼など必要ない！」
「そうだよ！　私達仲間でしょ！」
大鳳は二人の仲間を嬉しそうに見詰める。そんな視線を気にせず、翔鶴は大鳳の靴と靴下を脱がせ、自分自身も上着を脱いで胸に巻いている晒を解き、それを包帯代わりにして大鳳の足に巻き付ける。
「とりあえず応急処置だ」
「・・・ありがとう、ございます」
「わかったから、とにかく今は艦橋に降りよう。おぶってやる」

翔鶴は上着を着直して大鳳の小さな身体をおぶると、瑞鶴を連れて艦橋に降りる。その時、彼女の日と味方流れた涙に、二人は言葉を失った。それは痛みの為ではないと、すぐにわかった。

「大鳳？　一体どうしたの？」

瑞鶴が心配そうに問うと、大鳳は涙をぽろぽろと流した。

「・・・瑞鶴さん、ごめんなさい・・・私、私のせいで・・・」

「え？　な、何？　どうしたの？」

瑞鶴が詳しく説明を求めた時だった。艦橋で被害状況を確認していた小沢と菊池の声が聞こえた。

「あの零戦は身をもって我々に魚雷の存在を知らせようとしたのだろう・・・パイロットは？」

「はい。本艦所属の戦闘機乗り、神風刹那大尉です・・・」

「え・・・」

二人の会話の中で聞こえたその聞き覚えのある名前に、瑞鶴は言葉を失った。

彼らが話しているのは先程敵潜水艦からの魚雷攻撃があった方向の海に激突した零戦の話だ。そしてそのパイロットの名は、自分もよく知っている、共に戦って来た戦友だった。

「大鳳・・・さっき・・・海に突っ込んだ零戦の搭乗員って・・・神風大尉なの？」

「何？　神風だと？」

翔鶴も驚いたような声を上げる。が、瑞鶴はそれも聞かずに大鳳に詰め寄る。信じたくない。そんな想いが胸を締め付ける。

「ねぇ、うそでしょ？　神風大尉が死んだなんて・・・ねぇ、うそって言ってよ。ねぇッ！」

瑞鶴は泣き出しそうな顔で大鳳に必死に叫ぶ。だが、返ってきたのは、あまりにも残酷な現実だった。

「・・・本当です・・・神風さんは・・・私を守ろうとして・・・海に・・・」

「そ、そんな・・・ッ！」

瑞鶴はショックのあまりその場に崩れ落ちた。
「瑞鶴・・・」
「うそ・・・そんな・・・神風大尉が・・・」
神風はまさに戦友だった。ミッドウェー海戦の後はラバウルからやって来てずっと瑞鶴飛行隊の戦闘機乗りとして幾多の戦いを共に生き残ってきた。転属で大鳳飛行隊になったけど、それ以降も親交はあった。そして今度の戦いも、一緒に戦える事を嬉しく思っていた。なのに、彼は死んでしまった。あの笑顔を、もう見る事はできないのだ。
「神風大尉・・・」
「・・・ごめんなさい、私のせいで」
「いや、貴様のせいではない。奴は己が志を真っ当したのだ。よくやったよ」
そう言う翔鶴だが、その顔は苦しげにゆがんでいた。
今までずっと妹を支え続けた彼には、返し切れないほどの数々の礼があった。だが、その礼を返す前に、また彼は仲間の為に命を失ってしまった。
あまりにも、彼らしい最後だった。
翔鶴は艦橋の隅に大鳳を座らせると、落ち込む瑞鶴の頭を撫でる。うつむく瑞鶴の瞳からはぽろぽろと涙が流れている。その一滴を、そっと指で拭き取る。
「瑞鶴、いつまでも泣いていても仕方ない。奴の事を想うなら、奴の仇を討ってやろう。それが奴へのせめてもの手向けだ」
翔鶴はそう言うと腰に挿した軍刀を引き抜く。ギラリと輝く銀色の刀身は一抹の汚れもなく、鋭利に輝いている。
「瑞鶴！　全艦魂に命令！　今より指揮不能となった大鳳の代わりに私が航空戦の指揮を執る！　貝塚に第三次攻撃隊を編成を要請しろッ！」
「う、うんッ！」
瑞鶴は涙を拭いて敬礼し、急いで自艦に戻った。

翔鶴は振り返って大鳳を見詰める。その顔は歴戦の戦士、一騎当千の強さを持つ日本最強の武人のものだった。真剣な瞳は刀のような鋭さを輝かせる。

「大鳳。貴様はここで休んでろ。必ず、敵空母を殲滅してみせる」

「・・・お願いします」

「あぁ、必ず、日本に帰ろう」

翔鶴はそう言い残して光に包まれて消えた。その勇ましい背中に、彼女ならきっとやってくれる。そんな希望が溢れた。

まだ足には痛みがある。だけど、絶望はしていない。己が艦体は日本海軍が希望を込めて作り出した最強空母。魚雷一本ごときでは絶対に沈まない、不沈空母だから。

そう思うと、心に余裕が生まれる。

ふと目を閉じると、思い出すのは今はここにはいない彼の笑み。つい、その袖を掴みたくなるが、今は手を握っても虚空を掴むだけ。

彼の笑顔が、彼の存在が、自分を支えてくれている。

「・・・翔輝さん」

言葉にするだけで、心が温まる。まるで魔法の呪文だ。

彼を想うだけで、力が湧き上がる。

すぐにでも傷を治して初陣を勝利で飾りたい。そう思った。すると突然大鳳は咳き込んだ。

「・・・翔輝さん・・・ゲホッ！　ゴホッ！」

すさまじい咳に大鳳は戸惑う。今までこんな咳は出た事がない。しかも身体が熱っぽい。これも被雷の影響だろうか。

大鳳はまた激しく咳き込む。そんな彼女の近くでは菊池が被害状況を確認していた。

「左舷前部に魚雷一本命中。破口自体は問題はありませんが、魚雷爆発の影響で前部エレベーター昇降用のワイヤーが滑車から外れて飛行甲板と上部格納庫の間で停止して昇降不能。復旧の見込みはまだ立っていません」

それは空母としては致命的であった。これでは飛行機を収容する

事も発進する事もできない。空母としての戦闘力は失われたに等しい。魚雷一本の被害に対してはあまりにも被害が大きかった。

「しかし、現在飛行甲板を使用する事だけは可能にする為の応急処置を行っています。問題はありません」

「そうか。ならいいんだが」

菊池の報告に対し、小沢は釈然としない顔をしている。

「長官？　何か心配事でも？」

「いや――だが何か嫌な予感がするんだ」

「嫌な・・・予感ですか？」

菊池が小沢にその予感について声を掛けようとした刹那、

「大変です！」

伝令らしき兵が艦橋に飛び込んで来た。その表情は真っ青で何かとんでもない事が起きた事を物語っていた。

「どうしたんだ？」

菊池の質問に対し、兵は悲鳴に近い絶叫で叫んだ。

「先程の被雷でガソリンタンクが損傷し、艦内部に漏れたガソリンが気化して艦内に充満しています！」

「な、何だって！？」

「それかッ！」

驚く菊池に対し小沢は自分の不安の原因を確証した。だがそれは、あまりにも最悪な事態であった。

「菊池君！　これはまずいぞ！　この艦は徹底した防御対策で他艦に比べて極端に窓の数が少ないんだ！　これでは気化ガスの出口が少なすぎる！」

小沢の指摘にようやく理解した菊池の顔も真っ青になる。急いで菊池は伝声管に向かって悲鳴に近い声で叫ぶ。

「艦内の全窓を開けろ！　及び火気厳禁命令を発令！　急げぇッ！」

「菊池君。エレベーターを下げて空気を入れ替えてはどうだ？」

「ダメです！　前部エレベーターは先程の被雷の影響で滑車が外れて現在昇降不能です！」

「なら後部エレベーターだけでも下げてみろ。少しでも艦内に溜まっているガスを外に出すんだ」
「わ、わかりました！」
菊池は急いで後部エレベーターの下降を命令した。そんなドタバタ騒ぎを見て、大鳳はようやく自分の身体の異変を理解した。
艦内のガスの影響で自分の体が熱っぽく、咳が止まらないのだと。
「・・・ケホッ！　コホッ！　は、早く気化ガスをなくさないと・・ゲホッ！」
大鳳は苦しそうに咳き込み続ける。
空母『大鳳』の短き命のカウントダウンが・・・始まってしまった瞬間だった。

一方、翔輝達の前衛部隊にも動きがあった。
『敵機来襲ッ！』
突然の空襲警報に大和に緊張が走る。
前衛部隊の上空を飛行機群が編隊を組んで通過していたのだ。
「戦闘開始！　対空戦闘！」
森下の号令一下、『大和』の高角砲と機銃が一斉に火を噴く。他艦もすでに対空砲火を開始していた。
猛烈な対空砲火の中、敵機は編隊をバラバラにして回避する。だがその甲斐なく数機が火を噴いて墜落した。その時、
『誤認ですッ！　攻撃を止めてください！　あれは味方機です！』
見張り兵の言葉に艦橋は凍りつく。慌てて森下が防空指揮所に上がって確認すると、それはまさしく日の丸を掲げた日本機だった。
「対空砲撃ち方止めッ！　他艦にも知らせろ！」
森下の悲鳴に近い声が艦橋に伝声管を伝わって響き、慌てて参謀達は信号員に連絡して発光信号を打った。
程なくして対空砲火は中止されたが、各艦の将兵は真っ青な顔で上空を通過する味方の攻撃隊を見詰める。
攻撃隊は被弾して作戦続行不能になった飛行機を切り離し、艦隊

上空で陣形を再編成する。それはまるで同士討ちをした艦隊への見せしめのように見えた。

攻撃隊は陣形を整えると再び進撃を開始した。そんな攻撃隊に艦隊将兵は帽を振って見送る。その表情は罪悪感一色だった。

「まさか同士討ちしてしまうなんて・・・」

翔輝の顔は真っ青だ。そんな翔輝を心配そうに大和は見詰める。そんな大和自身の表情も暗い。それはそうだ。味方を撃ってしまったのだから。

「まあ、こういう事もあるさ。何せ海に浮かぶ流木ですら敵潜水艦の潜望鏡と見間違えるほど、今の兵達の練度は不足しているのだ。これも運が悪かったと言うしかあるまい」

宇垣の言葉に、翔輝は苦い顔をしたままだった。

艦隊は再び陣形を変更し、対潜水艦陣形に変形した。

攻撃隊は同士討ちで多少数が減ったが問題はなかった。

総数一二八機（零戦四八機、彗星五三機、天山二九機）の第二次攻撃隊は気を取り直して敵機動部隊に向かったが、米軍はこの攻撃隊をすでにレーダーで捕捉。制空戦闘機を向かわせていた。その為攻撃隊は敵機動部隊から約七〇キロ離れた地点で敵戦闘機に襲われ、次々に撃ち落とされた。だが、敵戦闘機の防空網を突破して、残った攻撃隊が敵機動部隊に襲い掛かった。

すさまじい空中戦の下を走る空母『エンタープライズ』にも対空戦闘警報が鳴り響く。

「クソッ！　ジャップめッ！　一体どこから沸いて出てきやがんだ！」

エンタープライズは悔しそうに歯を食いしばる。

先程の空襲で味方2隻に被害が出た上の再空襲。なのにこちらはまだ敵機動部隊がどこにいるのか発見できずにいる。これほど彼女にとって屈辱的なものはないだろう。

「対空戦闘始めッ！」

艦長が叫び、『エンタープライズ』の艦体中から猛烈な対空砲火が開始される。横を見ると隣を走る旗艦『レキシントン』も対空砲火を開始していた。

敵機は編隊のほとんどを撃ち落とされながらも米軍の最先端の防空網に突撃して来た。結果は言うまでもなく次々に撃墜される。その様子を見てエンタープライズは余裕の笑みを浮かべる。

だが、日本人という戦闘民族で形成された日本軍は《死》というものを恐れない狂った民族の集団だった。

敵機1機が燃えながらも爆弾を落とし、それは空母『バンカーヒル』のすぐ横で炸裂。高々と水柱を上げて至近弾となった。

さらに、エンタープライズは我が目を疑った。1機の零戦が機体を炎で包みながら突進。なんと戦艦『サウスダコタ』に体当たりしたのだ。小さな爆発が起こり、『サウスダコタ』では火災が起きた。

「なぁッ！？　零戦（ジーク）が『サウスダコタ』に突っ込みやがった！」

エンタープライズは驚いたが、すぐに歯ぎしりをして地団駄する。悔しそうに敵機が来た方向を睨み付ける。

「クソッ！　必ず貴様らを見つけて血祭りにしてやる！　黄色い猿がどもが調子に乗りやがって！」

エンタープライズは殺気をみなぎらせた瞳で空を睨み付ける。その空にはもう日本機の姿はなかったが、彼女の瞳には憎い敵機の姿が映されていた。

攻撃隊は壊滅した。戦果は戦艦、空母、重巡洋艦それぞれ一隻ずつ小破という微々たるものなのに被害はそれをはるかに上回る大損害だった。

第二次攻撃隊の計一二八機のうち全体の四分の三以上の九九機（零戦三三機、彗星四三機、天山二三機）が撃墜というもはや言葉にならない大被害。これはもはや壊滅ではなくほぼ全滅と言うべきだった。

第一次、第二次攻撃は失敗どころか大敗という結果に終わった。

第十一章　第五節　壮絶　史上最大マリアナ海空決戦（後書き）

マリアナ沖海戦第一話、どうでしたでしょうか？
ついに神風が戦死し、大鳳も魚雷を受けて重傷を負います。それに対し戦果はないに等しいもので、艦載機も敵の猛反撃を受けて大損害を受けています。
すでに日米の戦力差は小細工では対処できないまでに開き、日本には寸分の勝ち目も残されていませんでした。
次の話は翔鶴を中心にした話です。
歴戦の戦士翔鶴の壮絶な最期を、皆さんで見届けてあげてください。

第十一章　第六節　天翔ける鶴　歴戦の戦士翔鶴の最期（前書き）

今回の話はタイトル通りのお話です。
真珠湾からずっと日本海軍の前線で戦い続け、幾度となく傷つきながらも必死に戦い抜いた歴戦の空母『翔鶴』。そしてそんな『翔鶴』に宿る艦魂――翔鶴。
一騎当千、国士無双、天上天下。史上最強の強さを持つ真の武人であった翔鶴。その艦生は激動のものでした。
そんな翔鶴の最期を、どうか皆さんで見届けてあげてください。

第十一章　第六節　天翔ける鶴　歴戦の戦士翔鶴の最期

一方、第一機動艦隊本隊こと機動部隊は大変な事態に陥っていた。
旗艦『大鳳』は後部エレベータを下げ、窓を全部開けて発生した気化ガスを逃がしていたが、断続的に第二次攻撃隊が帰艦し、その度にエレベーターの上げ下げしなくてはならないので換気は思うように進まなかった。しかも帰って来るのは悲惨なほど機数が減った攻撃隊。そのあまりの消耗率に、艦隊将兵皆愕然とした。
だが、この戦いは日本海軍が挑む、残存戦力上最後の決戦。決して負ける訳にはいかない戦い。それがこのあ号作戦だった。

第一機動艦隊本隊・乙部隊、第二航空戦隊空母『隼鷹』『飛鷹』『龍鳳』の三空母から第三次攻撃隊の発進命令が出された。
第二航空戦隊旗艦・空母『隼鷹』の防空指揮所では、甲板を蹴って次々に空へ舞い上がる艦載機を見送る隼鷹の姿があった。
「がんばってねぇッ！　応援してるよぉッ！」
軍帽をブンブン振って笑顔で見送る隼鷹。
三隻の空母から発進した第三次攻撃隊四九機（零戦十七機、爆装零戦二五機、天山七機）は上空で旋回しながら編隊を組み終えると、一路敵機動部隊を目指して空の向こうに向かっていった。
雲の向こうに攻撃隊が消えると、笑顔で帽を振っていた隼鷹から笑顔が消える。
軍帽を被り直すその表情は先程までの笑顔に対し悲しげにゆがんでいる。
今までずっと搭乗員達の訓練を見続けてきたが、明らかに自分が大活躍した南太平洋海戦の頃とは比べられないほど腕は落ちている。その力はあの頃を荒鷲とするなら雛鳥だ。まだ巣立ちには早い、そんな雛達。
先程帰って来た第一航空戦隊から出撃した第二次攻撃隊は、全体

の四分の三を失って帰って来た。
情報によると敵艦隊は事前にレーダーを使って迫るこちらの攻撃隊の来襲を探知し、迎撃の戦闘機をこちらの攻撃隊の数と同等、またはそれ以上の数で迎え撃ち、なんとかその空中戦から脱しても、敵艦隊は最先端の対空砲弾である近接信管と艦艇の数を使ったすさまじい防空能力を発揮し、襲い掛かる攻撃隊を殲滅しているのだという。
これでは、今飛び立って行った攻撃隊の運命も、同じ道を辿るのではないか。そんな不安でいっぱいだった。
笑顔で仲間と笑い合っていたあの少年兵も、少年兵達を支え続けたあの青年兵も、少年兵達を厳しく指導していたあの下士官も、みんな死んでしまうのではないか。そんな想いが重なり、胸が苦しくなる。
それでも、戦わなければならない。それがこの戦いなのだ。
隼鷹は腰に挿した軍刀を引き抜く。その柄にあうネコのストラップが彼女の幼さを表しているかもしれない。だが、彼女だって日本海軍の軍人。銀色に輝く刀身が、その全てを表している。
「お兄ちゃん、私、がんばるからね」
そうつぶやき、隼鷹は自分達を守る為に敵艦隊に肉薄する第二艦隊が展開する海を見詰める。そこには、大好きな兄と慕う彼がいるから。
きっと、彼は自分を応援してくれている。そう想うだけで、力が溢れる。
銀色に輝く軍刀を天に上げ、真剣な顔で天を見詰める。
「お兄ちゃんの為にも、私、がんばるから！」

第二航空戦隊から飛び立った第三次攻撃隊は母艦隊の期待に応えようと敵艦隊目指して空を飛翔した。だが、誘導の失敗により攻撃隊は敵艦隊を捉える事はできずに引き返した。その際に七機（零戦一機、爆装零戦五機、天山一機）の未帰還機を出してしまった。

続いて第四次攻撃隊五〇機（零戦二〇機、九九艦爆二七機、天山三機）が発進。この攻撃隊は攻撃後にグアム島かロタ島経由でヤップ島に向かう手はずだったが、敵艦隊を発見できなかった上にグアム島付近で敵戦闘機の迎撃を受けて二六機（零戦十四機、九九艦爆九機、天山三機）が撃墜された。

第二航空戦隊の攻撃は、隼鷹の想いに反して大失敗に終わった。

一方第一航空戦隊が基幹となっている第一機動艦隊本隊・甲部隊、空母『大鳳』『翔鶴』『瑞鶴』は第二航空戦隊の攻撃の不発の連発に第五次攻撃隊の編成に掛かっていた。

気化ガスの排気に躍起になっている空母『大鳳』の艦橋には依然咳を続ける大鳳と、看病する瑞鶴がいた。

「・・・ゲホゴホッ！　ケホッ！　コホッ！」

「だ、大丈夫大鳳？」

「・・・（コクリ）。ゲホコホッ！」

激しく咳き込む大鳳の背中を瑞鶴はそっとさするが、たいして効果はない。

いつもは無表情の彼女が苦しそうに咳き込む姿は、瑞鶴の心を苦しめる。

また、自分が傷つかずに仲間が傷ついてしまった。これではまるで幸運の女神ではなく仲間を傷つける死神ではないか。

「ごめんね。あなたの代わりに、私が被雷すれば良かったのに」

「・・・（フルフル）」

「でも、だって私はいつもいつも守られてばっかりで・・・ッ！」

「・・・ゲホゴホッ！　守られる事は、幸せな事です」

「そ、そりゃそうだけど・・・」

「・・・私も、守られてます――翔輝さんに」

「長谷川大尉に？」

「・・・（コクリ）。幸せです」

「・・・そっか」

「・・・だから、瑞鶴さんも、守られている事を気に病む必要はありません。それが、皆を結ぶ関係なんですから」
大鳳はそう言うと、辛いのにも関わらず小さな笑みを浮かべた。
その笑顔は小さくも力強い、瑞鶴を励ますものだった。
「大鳳・・・」
瑞鶴は胸が温まるのを感じた。
大鳳はこんなにもいい子なのだ。いい子で、優しく、たくましい。
感情表現が少なくも、その奥にはこんなにも温かい心を持っているのだ。
こんないい子を、守ってあげたい。そう思ってしまう。
「大鳳。あなたを、私も守ってあげるからね」
瑞鶴はそう言うと、満面の笑みを浮かべる。その笑顔に、大鳳もまた小さく微笑む。
「・・・ありがとうございます」
その時、甲板に轟音が響き渡った。第五次攻撃隊の編成が終わったのだ。
「じゃあ、私行かなきゃいけないから」
「・・・（コクリ）」
瑞鶴は立ち上がると静かにその場から消えた。残された大鳳は再び激しく咳き込むと、窓から見える空へ飛び立っていく第五次攻撃隊を見詰め、小さく敬礼した。
「・・・ご武運を」

空母『大鳳』『翔鶴』『瑞鶴』の三空母から発進した第五次攻撃隊十八機（零戦四機、爆装零戦十機、天山四機）は敵艦隊目指して進んだが、結局敵艦隊は発見できずに引き返し一部不時着、九機（爆装零戦八機、天山一機）が未帰還となった。
この第五次攻撃隊に呼応して乙部隊（空母『隼鷹』『飛鷹』『龍鳳』）から第六次攻撃隊十五機（零戦六機、彗星九機）が発進した。
第六時攻撃隊は敵艦隊を発見して空母目掛けて襲い掛かったが、全

く戦果は上げられなかった。この戦いで九機（零戦四機、彗星五機）を撃墜された。

いくら攻撃しても戦果に対して圧倒的に損害が多い中、第一機動艦隊司令部はその壮絶な被害の多さに頭を悩ましていた。さらに『大鳳』艦内に充満する気化ガスが全然排出できず、濃度が高まってついに兵達が倒れる事態に陥っていた。防毒マスクを付けた兵達が懸命の復旧作業を行っているが、成果はいまだ上がっていない。

待ちに待った決戦だというのに思うように戦果が上がらない機動部隊。だが、そんな機動部隊をさらなる災難が襲う。

それは『大鳳』が被雷した三時間後に起きた。

蒼い空の下、翔鶴は防空指揮所で少し早い昼食を取っていた。

「今日の握り飯は塩加減が絶妙だな」

翔鶴はそう言って嬉しそうに握り飯を頬張る。ちなみにこの握り飯は先程兵達に配布されたうちの一つだ。どさくさに紛れて一個失敬したのだ。

翔鶴はそれをさっさと片付ける。食べ終わってから自分の頬に米粒が付いているのに気づいて顔を赤くする。

「・・・良かった。誰にも見られなくて」

恥ずかしそうに顔を赤らめながら心の底からそう思う翔鶴だった。もしも今のを他の誰か――特に翔輝になんか見られたら恥ずかしくて外が歩けなくなる。

翔鶴は気を取り直して外を眺める。そこには兵達が忙しく動き回る甲板。遠くには『瑞鶴』、復旧作業を行っている『大鳳』が見える。

翔鶴はため息する。

ここまでの戦いで機動部隊は大小合わせて合計六次に亘る攻撃隊を送ったが、そのどれもが接触失敗や接触できても大損害を受けて戦果がほとんど挙がらないという惨憺（さんたん）たるものだった。

ようやくの決戦なのに、この結果は納得できないものだ。

だが、状況はより悪い方へ転がっている。そう感じていた。
自分は真珠湾の頃から、この大東亜戦争の最初から見続けてきたが、今の飛行機は性能こそは以前より高いが、搭乗員の質は圧倒的に落ちている。そこへさらに敵艦隊の最先端の防御体制と物量戦。これでは勝てるはずがない。あの頃の搭乗員が揃っていても、この戦いはあまりにも厳しい。今の搭乗員では荷が重過ぎる。
このまま第七次攻撃隊を編成でも、犠牲が増えるだけで戦果はたぶん上がらないだろう。でも、諦める訳にはいかない。自分はこういう苦境をいくつも乗り越えてきたのだから。
その時、ふと思い浮かんだのは翔輝の顔。一瞬それに顔を赤くするが、すぐに軍帽を深く被り直して、口元に小さくも不敵な笑みを浮かべる。
「見ていろ長谷川。必ず貴様を驚かせるような勝利を掴み取ってみせる」
翔鶴は軍刀を引き抜くとそれを天に向ける。夏のように強い日差しが、銀色の刀身に跳ね返されてキラキラと輝く。その光を見詰め、翔鶴は不敵な笑みを浮かべ続ける。
「覚悟しておけ」
そう宣言すると翔鶴はすぐに緊急の作戦会議を開いて今度の打開策を練る事にした。その為に瑞鶴の所へ行こうとした時、それは襲い掛かった。
「くぅッ！」
突如胸を締め付けられるような鋭い痛みが電撃のように走った。その鋭い痛みに翔鶴は苦しそうに胸を押さえる。それは戦場を駆け抜けた彼女だからこそわかる殺気・・・
「な、何だ・・・この胸を締め付けられるような痛みは・・・ッ！？」
翔鶴は脂汗を垂らして振り向く。そこには蒼く輝く空があった。
いや――空には脅威はない。残るは海・・・
「あれは・・・ッ！」

翔鶴の人間離れした視力が捉えたのは、遠くの海に浮かんでいる棒状の何か――それは、潜望鏡だった。

「敵潜水艦！？」

翔鶴に見付かったのに慌てたように潜望鏡が海に消えた。刹那、海中を六本の魚雷が自分に向かって白い軌跡と共に翔け出した。

「敵潜魚雷！？　くそッ！　『大鳳』をやった奴か！？」

正確に言えば『大鳳』を攻撃した敵潜水艦とは違う潜水艦だが、今の彼女はそんな事を知る由もない。今の彼女がわかるのは――自分に危機が迫っているという事だけだった。

「右三〇度方向より魚雷六本接近！」

翔鶴の隣にいた見張り兵が青ざめた顔で伝声管に向かって叫んだ。その絶叫に『翔鶴』艦長、松原博大佐（まつばらひろし）が急いで取舵を回すが、航海速度で航行していた『翔鶴』の速度では回避するのは間に合わなかった。

左に急速回頭する艦は大きく右に傾斜し、甲板にいた兵や飛行機が右に流れる。それだけのカーブをしても、海を翔けて迫る魚雷の射線はほとんど変わらなかった。そして・・・

ズドドドドオオオオォォォォォンッ！

すさまじい振動と爆音が響き、『翔鶴』の右側面に四本の水柱が高く立ち上った。刹那、翔鶴の脇腹から真っ赤な血が肉を切り裂いて飛び出た。一瞬にして防空指揮所は見えない血で真っ赤に染まる。

すさまじい痛みが体中を駆けるが、翔鶴は決して倒れる事はなかった。

「くそぉ・・・ッ！　ゲホッゴホッ！」

激しい咳と共にべっとりとした血の塊を吐き、翔鶴は唇を噛んで痛みに耐える。その痛みは彼女が今まで体感した痛みとは異なるものだった。

翔鶴は震える身体を必死に立たせながら真っ青な顔で不気味に笑う。

「さ、さすがに爆弾と魚雷では痛みの桁が違うな・・・ッ！」

今まで『翔鶴』は珊瑚海海戦と南太平洋海戦で損傷したが、その両海戦での被害は爆弾だった。だから今回受けた魚雷の痛みは初めてだった。

生温かいぬるっとした血が腹を押さえる手にべっとりと付着している。それを見て翔鶴は苦笑いする。

「私ともあろうものが、魚雷ごときで倒れるとは・・・な・・・」

その途端、翔鶴はついに必死で足に入れていた力が抜け、その場にぐったりと崩れ落ちた・・・

「『翔鶴』被雷ッ！」

「姉さんッ！」

後方で陣を張っていた『瑞鶴』の防空指揮所から瑞鶴は叫んだ。その瞳からはボロボロと涙を流し、顔は真っ青で身体は小刻みに震えている。

「『翔鶴』の被害状況を確認しろッ！」

僚艦被雷の報告を受けて防空指揮所に慌てて駆け込んで来た貝塚は急いで命令を下す。そんな彼にすぐに瑞鶴が駆け寄る。

「瑞鶴・・・」

「艦長！　姉さんが・・・姉さんが・・・ッ！」

「落ち着け！　今『翔鶴』に発光信号を打ってる。お前は急いで翔鶴の所に行ってやれ」

「で、でも・・・」

涙でいっぱいの不安そうな瞳で瑞鶴は貝塚を見詰めるが、そんな彼女に貝塚は優しい笑みを送る。

「安心しろ。お前の本体は俺が守ってやる」

貝塚の言葉に瑞鶴はしばらく黙っていたが、泣きそうな顔のままコクリとうなずく。涙でいっぱいの瞳に輝く光には、彼を信頼しているという意思が込められていた。

「艦長・・・私の命、任せましたよ！」

「おう」

瑞鶴は急いで『翔鶴』に向かって消えた。残された貝塚は黒煙を上げて傾斜している『翔鶴』を見詰め、その煙の量を見て苦しそうに唇を噛んだ。

「瑞鶴・・・最悪の状況を考えておけ・・・」

そう苦しげにつぶやくと、貝塚は艦橋に戻った。

「姉さんッ！」

瑞鶴は急いで『翔鶴』の防空指揮所に向かった。そこには・・・

「ね・・・姉さん・・・ッ！」

今までの戦いで傷ついた時とは違い、翔鶴は血の海に倒れて苦しそうに顔をゆがめていた。だが、瑞鶴の姿を見ると、その顔にわずかに余裕が生まれる。

「瑞鶴・・・お前また・・・作戦中に自艦を離れおって・・・」

翔鶴は不機嫌そうに言うが、その声は常の彼女のと違ってすごく弱々しいものだった。

瑞鶴が慌てて近づくと、翔鶴はそれを制して立ち上がろうとするが、すぐにまた倒れて小さな悲鳴を上げる。

「姉さん！　無理しないでよッ！」

「耳元でやかましい声を立てるな・・・」

翔鶴は血でべっとりと濡れた拳で瑞鶴の額を小突く。その時の彼女の表情はいつになく優しいものだった。そんな翔鶴らしくない姉の表情に瑞鶴は恐ろしい戦慄を覚えた。

「ね、姉さん・・・？」

「瑞鶴・・・私の被害はどうやら・・・致命傷らしい・・・」

この時『翔鶴』は四本の魚雷を受け、燃料庫や火薬庫、弾薬庫に次々誘爆して艦内は火の海になっていた。とても、復旧できるような状態ではなかった。

突如鈍い振動と爆音が響き、翔鶴は吐血を吐いた。

「ね、姉さんッ！？」

「ど、どうやら・・・航空機格納庫にまで火が回ったようだ・・・

瑞鶴。貝塚に伝えろ。もうすぐ『翔鶴』は沈む・・・その爆風を警戒して『瑞鶴』を離れさせろと」

瑞鶴の顔から血の気が失せて真っ青になる。その言葉に含まれていた《沈む》、それは艦の死、艦魂が死を迎える瞬間であった。

「瑞鶴・・・聞け・・・」

翔鶴の言葉に瑞鶴は首を振って聞きたくないという意思表示をする。ギュッとつむられた瞳からはボロボロと涙が溢れ続ける。だが、翔鶴はそんな妹に一喝する。

「聞け瑞鶴！　この辺は敵潜水艦が潜伏している。早くこの海域から離脱するんだ！　このままではお前まで――」

「そんな事できないよ！　姉さんや大鳳を置いて私一人逃げられないよ！」

「逃げるんだ！　ここで空母が全滅すれば、出撃した攻撃隊はどこに戻るというのだ！　ミッドウェー海戦の悲劇を繰り返すつもりか！」

「でも・・・でも・・・ッ！」

瑞鶴はいつの間にか瞳からぽろぽろと涙を流して真っ赤に染まった自分の姉を抱き締めていた。そんな妹を、翔鶴もそっと抱き締める。

「『大鳳』はあの煙なら・・・たぶん大丈夫だろう・・・だが・・・ここで正式空母をこれ以上失う訳には・・・いかんのだ・・・わかってくれ・・・」

翔鶴の言葉に、瑞鶴は泣きながら叫ぶ。姉を失う、それだけは絶対に嫌だった。

「お姉ちゃんは何もわかってない！　お姉ちゃんが死んだら、私はどうしたらいいの！？　私、一人じゃ生きていけないよぉ・・・ッ！」

「情けない顔をするな。お前は私の妹だ。お前なら大丈夫――それに、お前は一人じゃない。飛鷹達空母もいれば大和達のような奴らもいる。そして貝塚もだ。決して、お前は一人ぼっちじゃない――

そうだろ？」
　翔鶴の問いに、瑞鶴は小さくうなずく。彼女の瞳にはいつも憎まれ口を叩く扱いにくい姉の姿はなかった。あるのは、幾多の戦場を翔け抜けて敵空母部隊を殲滅してきた最強の武人の最期の姿だった。
　翔鶴は瑞鶴から視線を外して蒼い空を見上げる。蒼い空はここが戦場である事を忘れさせるくらい輝き、煌いていた。
「空は美しい。人間や私達艦魂がいくらその命を削って戦いに身を投じていても、空の美だけは変わらない。暗く重い雲の向こうは青く輝く空があり、夜が来れば星達の煌きが世界を包む。過去から現在、現在から未来、未来永劫その輝きは失われる事なく続く」
　空の美しさは決して変わらない。その言葉に瑞鶴もうなずく。
「そうだね。それは美しい事だけど、何かすごく寂しい」
「そうだ。無限の美しさは同時にそれと比べる自分の儚さや空しさに繋がる。私達のしている戦争など、空から見れば些細な国同士のケンカに過ぎん。だが、その些細な事に触れる人間や艦魂の数だけ物語がある。所詮それが短く儚いものでも、それはたった一つだけの物語に変わりはない。その中に生きる者がその平和を守る為に戦って何が悪い？　私はそれを守る為にこの命を捧げても悔いはない、そう思う。例え、そんな中にある私の物語がここまでだとしても、私に悔いというものはない。あるとすれば・・・お前が心配なくらいだ」
「姉さん・・・」
　瑞鶴はぐったりとしている姉を抱き締める。
　自分の姉は強い武人だと心から思う。幾多の戦いの中でも決して弱音は吐かず、いつも情けない自分の傍にいてくれた。いつも力になってくれたたった一人の姉――それが翔鶴だ。
　自分はいつも彼女の背中に憧れ、安心し、守られてきた。
　今の自分にできるのは、姉が自分に向ける心配を消してあげるくらいだ。
　もう私は大丈夫。姉さんがいなくても私はみんなと戦い続けられ

るよ。そう言うだけだった。だが、
「姉さん・・・お姉ちゃんッ！」
自分の情けなさに、本当に呆れてしまう。だがそれでも、自分のたった一人の姉を失いたくない。その気持ちにうそはつけなかった。
「嫌だよぉ・・・死んじゃ嫌だよぉッ！　私はお姉ちゃんがいないと何もできないんだよ！　だから死なないでよ！　生きて一緒に日本に帰ろうよ！」
泣き叫ぶ瑞鶴を、翔鶴は怒鳴る事なくそっと言い聞かせる。
「瑞鶴。私はお前が無事ならいいんだ」
「私は嫌だよッ！」
「これからの戦い、お前が先頭に立って空母達の陣頭指揮を執るんだ」
「そんなのできないよぉ」
「お前がしなくてはならんのだ。日本機動部隊を再び再建するには、お前の力が必要なのだ。今までは私が、これからはお前がするんだ」
「嫌だよぉ、お姉ちゃんじゃないと、お姉ちゃんがいないと・・・ッ！」
「いつまでも私に頼るな。お前はもう一人前だ――これ以上私を心配させてどうするのだ？」
翔鶴の言葉に、瑞鶴は「だって・・・ッ！」しか言えなくなる。そんな瑞鶴の頭を、翔鶴はそっと撫でる。その表情は妹を優しく励ます姉の姿そのものだった。
「どうせ、時間が来れば私は死ぬ。今は、私に言わせろ」
翔鶴はいつもの力強い瞳で瑞鶴を見詰める。
「生きろ瑞鶴。お前は天翔ける鶴――この翔鶴の妹だ。何も恐れる事はない。前だけを見て、戦い抜け。自分の大切なものを守る為に」
その言葉に、もう、瑞鶴は何も言わなかった。
必死に涙を拭いてがんばって笑顔を作る。そして・・・
「うん。わかったよ・・・お姉ちゃん」
瑞鶴の言葉に、翔鶴は嬉しそうに笑う。

「そう。それでいい――もう行け。もう私の命も短い。お前にはする事があるだろう？」
翔鶴はそう言って自分の軍刀を瑞鶴に渡す。自分の形見として。
「うん――わかった」
瑞鶴はそれを受け取って翔鶴を床に座らせ、立ち上がる。その瞳には我慢できずに涙が溜まり、溢れ、流れているが、瞳の輝きは強く輝いていた。
「じゃあ、姉さん。またいつか――平和な世界で会おうね」
「あぁ。その時を・・・楽しみにしてるぞ」
翔鶴の嬉しそうな笑みに、瑞鶴も最高の笑みを送る。
「さようならは言わないよ？　またいつか会うんだから」
「そうだな――なら、またいつか会える日まで」
「うん。また、いつか・・・」
瑞鶴は踵と踵をカッと合わせ、右手を構えて見事な敬礼をする。
そのまま光に包まれて消え、二度と『翔鶴』に現れる事はなかった・・・
一人残された翔鶴はどこまでも澄み切った蒼い空を見詰め、目をつむる。
「我が名は翔鶴。大日本帝国海軍翔鶴型空母一番艦、空母『翔鶴』の艦魂。我が使命は果たされ、消えゆく運命。だが・・・」
翔鶴は目を開ける。その目は濡れ、淡い日の光をゆらゆらと映していた。
「我が志は、妹の瑞鶴に託され生き続ける。我が人生に一点の悔いなし。そうだろ？　瑞鶴」
翔鶴はそう優しくつぶやく。
しばし洋上に浮かぶ『翔鶴』は、すでに総員退去の命令が出されていた。その命令は、乗組員達が死に逝く艦を捨てる事を意味していた。
自分はもうすぐ死ぬ。なのに不思議と恐怖は一切なかった。絶望は、していない。

妹は立派に自分の下から巣立っていった。これでもう自分に心残りはない・・・はずだった。

「・・・くそぉ・・・もう少し早く・・・自分の気持ちに素直になっていれば・・・良かったなぁ・・・」

そうつぶやき、翔鶴は瞳からぽろぽろと涙を流す。

思い浮かぶのは生きて帰ってもう一度告白すると約束した彼の笑顔。

もう少し早く気づいていれば、彼といる時間を、少しでも充実したものになったはず。自分の素直になり切れない一面のせいで、こんなにも後悔をするなんて。

自分に素直に・・・

大鳳の言葉をもう少し早く実践していれば、こんな後悔もしなかったのに。

悔いのないように生きてきたつもりだったのに、最後の最後でこんな失態をするとは、自分もまだまだ甘い。そう思った。

「長谷川・・・すまない・・・約束を・・・守れなかった・・・」

死ぬなと言われ、自分はうなずいた。生きて帰って来る事はできないかもしれないと覚悟していたのに、彼はそんな自分に生きる意味を教えてくれた。

生きて帰って、もう一度想いを伝えよう。そう思った矢先にこの状況。悔しくて仕方がない。

もう、二度と会う事はできない。それは辛く悲しい。だけど、受け入れなければいけない現実なのだ。

「もっと早く・・・自分の気持ちに素直になれば・・・こんな事には・・・」

もう少し早くこの気持ちを伝えていれば、彼と両想いになれただろうか。

さぁ、それはどうだろう。今現在だって翔輝は大和や武蔵、伊勢といった強硬派のすさまじいアタックにも負けない（気づかない？）猛者だ。きっと不可能だっただろう。だが、可能性はゼロじゃない。

努力すれば、きっと今よりはもっと良い関係が築けていただろう。
今さら後悔しても遅いが、そんな想いが胸を痛める。
「・・・大和達に・・・長谷川を取られるのは・・・嫌だなぁ・・・」
胸が熱く、痛くなる。これがやきもちという感情なのだろうか。
良かった。
こんな感情を抱くとは、自分も一人の女子だったのだ。
今も目を閉じれば思い出せる彼の笑顔。
いつも笑顔で優しく、誰にでも好かれる真っ直ぐな心を持ち、皆の心の支えとなっている。だがその優しい笑顔の奥にはとてつもない闇があって、本当は誰よりも弱い一面を持つ。それが長谷川翔輝という少年――自分が好きになった奴だ。
いつの間にか、彼の笑顔に自分は支えられていた。彼と会える。彼と話せる。そんな楽しみが自分に生きる希望を与えていた。
だから、今度は自分が彼の闇を支えてあげよう。そう思った――なのに、もう自分には何もできない。
やっぱり・・・死にたくないな・・・・
そんな想いが胸を満たす。それはそうだ。誰が好き好んで死を受け入れる覚悟なんてできるものか。
だが、これは変える事はできない辛い現実――受け入れるしかない。
「長谷川・・・」
内部の爆発状況を見ると、もうすぐ最期の瞬間が訪れる。
せめて最期に、翔輝の笑顔が見たかった。
優しく包む、まるで太陽のような明るい笑顔。
あの笑顔を最期に見れれば、きっと迷わず成仏できただろうに。
そう思うと、思わず笑みが浮かんだ。
こんな状況でも、こんなにも自分らしさを保っていられる自分に驚く。
誰も見てはいない。だけど、せめて最期に自分の最高の笑みを残

したい。
翔鶴は一度大きく深呼吸をする。もう呼吸するだけで痛いのに、自然と今はそれが気にならない。
そして、目や眉、唇を柔らかに曲げ、頬を優しく上げた。
「長谷川・・・」
翔鶴が浮かべる最期の笑み――それは、わずか約三年しか生きていない、だけど充実した短き艦生の中で、最も優しく、柔らかい、最高の笑顔であった。
「・・・貴様を・・・心から・・・愛している・・・頼むから・・・私を・・・忘れ・・・ないで・・・くれ・・・」
そう言って瞳から一筋の涙が流れた刹那、翔鶴は静かに目を閉じた。
直後、日本が誇る世界最強の空母の一隻――空母『翔鶴』はどこにこれほどまでのエネルギーがあるのか、と思わせるほどの火炎を天高く奔出(ほんしゅつ)させると、艦体を真っ二つに折り、艦首と艦尾を抱き合わせるようにして沈んだ。
それは悲壮(ひそう)の中にも雄々しさを感じさせる堂々たる最期だった・・・

――空母『翔鶴』、日本の空母技術の粋を結集させて完成した最新鋭最強空母。太平洋戦争の火蓋を切った真珠湾攻撃から常に日本海軍の最前線で戦い抜き、ミッドウェー海戦で機動部隊が壊滅した後も妹艦『瑞鶴』と共に太平洋を縦横無尽に駆け回りながら全力で戦い続け、幾多の敵空母を葬ってきた歴戦の空母。妹艦の代わりに自らの体を傷付けながらも戦い抜いた武勲艦は、日本海軍が挑んだ最後の決戦とも言うべきマリアナ沖の決戦で、敵機の攻撃ではなく、敵潜水艦の雷撃を受けて致命傷を受け、その激動の歴史についに終止符を打ち、その長き戦いの間で傷ついた巨体を海深くに沈めていった。常に最前線で戦い続けたその歴戦の空母の艦魂は、その激動の艦生には不釣合いなほどうら若き少女であった。常に勇ましく、

一騎当千の強さを持った武人は、いつもまわりの艦魂達の希望として先頭に立ち続けた。そして、そんな少女は自分の本当の気持ちを隠し続けていたが、ようやくその気持ちに正直になり、初恋を認めた。だが、すでに時遅く、少女はこの決戦で命を落とした。本当はまだ生きたい。もっと彼と一緒にいたい。そんな想いも空しく、少女はその激動の艦生に終止符を打って永遠の眠りについた。その少女の壮絶な最期を、機動部隊の艦魂達は敬礼しながら、看取った――

空母『翔鶴』沈没の訃報は、すぐに大和達の前衛部隊にも伝わった。もちろん、大和や翔輝の耳にも入った。

「翔鶴が・・・死んだ・・・ッ！」

翔輝はその報告に愕然とし、悔しそうに拳が真っ白になるくらい強く握った。その拳は翔鶴を殺した敵に対しての怒りでもあり、何もできなかった自分への憤りも合わさっていた。

「翔鶴さんが・・・そんな・・・ッ！」

大和は翔輝に抱き付いて泣いている。そんな大和の頭を翔輝は苦しげな顔を必死に隠しながらそっと撫でてやる。

翔鶴は大和や翔輝にとっても長い付き合いを持つ友人だ。幾多の戦いを駆け抜けた真の武人である彼女を、二人は少なからず尊敬していた。

そして何より、彼女は翔輝に恋をしていて、つい先日告白されたばかりだった。この戦いが終われば、もう一度告白すると言っていた。

彼女の勇ましい常の顔と、月明かりの下の乙女らしい顔が重なり、翔輝の胸は引き裂かれるような痛みを受けた。

本当の彼女の一面を知ったばかりだというのに、そんな彼女はもういない。

涙を流さないようにするのが必死だった。

「さっきは『大鳳』が被雷して、今度は『翔鶴』が被雷して沈没。それに対し戦果はほとんどない。このままじゃ惨敗だよ」

翔輝の言葉に大和は瞳を見開くと、怒りに染まった瞳で睨みつける。
「そんな事今はどうでもいいじゃないですか！　翔鶴さんが死んだんですよ!?　今はそっちの事の方が重要じゃないですか！」
「・・・別の事を考えてないと、やってられないんだよ・・・ッ！」
悔しそうに唇を噛む翔輝を見て、大和はそれ以上何も言えなかった。
落ち込んでいる二人を見詰め、森下もうつむく。
「艦長？　どうしたのだ」
森下の様子にいち早く気が付いた宇垣が声を掛ける。
「いえ、長谷川と大和が『翔鶴』沈没を知って落ち込んでいたので」
宇垣は艦橋の隅で海図を見詰めている翔輝を見詰める。翔輝は唇を噛んで海図を見詰めている。そんな翔輝に宇垣は立ち上がると近寄る。
「長谷川君」
「な、何ですか？」
宇垣に突如呼ばれて驚いたように翔輝が顔を上げると、宇垣は優しげな眼差しで翔輝を見詰めていた。
「少し落ち着け。友人が死んだのに落ち着くなと言う方が無理かもしれんが、今は冷静になるべきだ。わかったか？」
宇垣の言葉に、翔輝は素直にうなずいた。それを見て宇垣は満足したのか司令官席に戻る。そんな宇垣を見て翔輝は大和を見詰める。
「大和。宇垣司令の言うとおりだ。今は落ち着いて作戦に集中しよう」
大和は小さくうなずくと、涙を拭き取る。
「そう・・・ですね・・・翔鶴さんの死を無駄にしない為にも。私達の活躍によっては、瑞鶴や大鳳達を危険にさらす事になりますから」
大和も真剣な眼差しで窓の外の空を見詰める。
多くの死を体験したのか、大和は友人の死にもある程度の対応が

できるようになっていた。それは決していいとは限らないが、軍人としてはそれは大事な事だ。だが、翔輝から見れば大和はまだ子供。そんな子供にそんな辛い免疫ができてしまうのは、正直辛い。

翔輝と大和は瑞鶴達のいる空を見詰め、無事を祈った。

第十一章　第六節　天翔ける鶴　歴戦の戦士翔鶴の最期（後書き）

ついに翔鶴が戦死しました。
今作では機動部隊の主人公である瑞鶴の姉として、そして翔鶴を想う一人として活躍してきました。
そんな翔鶴も、ついに海底深くに没しました。
歴戦の空母『翔鶴』の武勇は、これからも語り継がれていくでしょう。
そして次のお話は、翔鶴に続いてもう一人、わずか三ヶ月の命しかなかった悲劇の新鋭空母『大鳳』の最期です。
マリアナ沖で繰り広げられる悲劇は、まだまだ続くのです・・・

第十一章　第七節　恋姫大鳳最期の優しき笑み（前書き）

マリアナ沖海戦の悲劇の一つ、悲運の新鋭空母『大鳳』の最期。
わずか三ヶ月しか命を得られなかった小さな少女の最期。それは・・・
・

第十一章　第七節　恋姫大鳳最期の優しき笑み

その頃、第一機動艦隊本隊は甲部隊と乙部隊が合流していた。そんな中、隼鷹が飛鷹の胸の中で泣き叫んでいた。大好きな姉のように慕っていた翔鶴が死んだのだ。しかも、その最期に立ち会えなかったのが一番辛い。

飛鷹も憔悴し切った表情を浮かべ、龍鳳は『翔鶴』が沈んだ蒼い海に静かに黙祷を捧げていた。そんな中、死んだ翔鶴の妹である瑞鶴は落ち込む皆とは別行動をして大鳳の下にいた。

大鳳の症状は悪化していた。『翔鶴』爆沈のすぐ後、突如『大鳳』も大爆発。艦内に充満していた気化ガスが何かに引火したものだった。そのすさまじい爆発の威力に強力な飛行甲板は砕け、『大鳳』は火の海になっていた。その時の爆発の威力はすさまじく、爆発の衝撃で重装甲の甲板が大きく変形するほどの大爆発だった。その甲板の裂け目からは煙と炎が立ち上がっていた。さらに各機関に潤滑油を送る装置が損傷し、潤滑油を送れなくなった。これにより各機関が摩擦を起こして焼け千切れ、損傷を起こしてついに停止。『大鳳』の全機関が停止し、航行不能。及び消火装置も停止して鎮火もできない状況に陥っていた。

本体が大損害を受けているので、その艦魂である大鳳の傷も症状も悪化していた。

大鳳の咳は止まらず、時折血の塊を吐くという状況まで起きていた。しかも先程の爆発で上着は吹き飛び、真っ赤に染まった彼女のか細い体が露になっていた。誰が見ても満身創痍――虫の息だった。さらに『大鳳』は炎上した今でも気化ガスが噴出し続け、爆発が続いている。

命のタイムリミットは刻々と迫っていた。

「大鳳・・・」

「・・・ケホッ！　ゴホッ！　ごめんなさい、お姉さんを失って・・

・大変だというのに・・・ゲホッ！　ゴホッ！」
「気にしないで。姉さんは私を一人前って言ってくれた。だから私は日本機動部隊の猛将――翔鶴の妹である誇りを持ってこれからも戦場を翔ける。辛いのは事実だけど、それ以上に姉さんの分まで戦い抜くって気持ちの方が上だから」
「・・・強いですね・・・ゲホッ！」
「強くなんかないよ。ただ、少しでも姉さんの役に立ちたくて、自分を高く見せようと背伸びをする少年のような行動をしているだけ」
「・・・ケホッ！　それが・・・強いんです・・・ゲホゴホッ！」
大鳳は絶えず咳を続ける。そんな大鳳に瑞鶴は自分の上着を着せる。瑞鶴は翔鶴と違って上着の下に晒ではなくワイシャツを着ている。
上着を掛けられると、大鳳は嬉しそうに小さく微笑むとそれを着込む。
「・・・ありがとう・・・ございます・・・ゲホゴホゴホッ！」
大鳳はひと際大きな咳をし、大量の吐血を吐いた。そのあまりの量にさすがの瑞鶴も驚く。
「大鳳！？　しっかりしてッ！」
激しく咳き込む大鳳の体はか細く、こんな自分よりも幼くまだ小学生のような少女が日本海軍の最後の希望の空母の艦魂だと思うと、自分は今まで一体何をやっていたのかと責めたくなる。
大鳳は激しく咳き込んだ後大量に吐血する。
「大鳳ッ！」
瑞鶴は慌ててタオルで彼女の血を拭おうとしたが、それを大鳳が制す。
「大鳳・・・」
「・・・私の事は・・・もういいです・・・私の代わりに・・・機動部隊艦魂の指揮を・・・執って・・・ください・・・」
「ダメよ！　大鳳を置いて行けないよ！」
瑞鶴の言葉に、大鳳は小さな笑みを浮かべる。その笑顔は、今ま

で瑞鶴が見てきたどんな笑みよりも、美しいものだった。
「・・・これでも・・・第一機動艦隊旗艦・・・空母『大鳳』の艦魂です・・・自分の事は・・・自分でやります・・・」
「でも・・・ッ！」
「・・・それより・・・今は機動部隊の機能を回復させるのが・・・先決です・・・この場合・・・指揮官である私が指揮できないなら・・・次席指揮官にやってもら・・・うのが普通ですが・・・その次席指揮官である翔鶴さんが戦死した今・・・機動部隊を指揮できるのは・・・瑞鶴さんしかいないのです・・・」
大鳳の言葉に、瑞鶴はハッとして今の自分の立場を改めて理解する。
今自分は、第一機動艦隊全ての艦魂達を指揮する司令官になっている。その事を思い出し、瑞鶴は大鳳を見詰める。大鳳も瑞鶴を見詰め返す。その瞳は、力強い意志が込められていた。
「・・・機動部隊を・・・任せましたよ・・・」
その言葉は、まるで彼女の遺言に聞こえた。
瑞鶴はうなずいて立ち上がると、踵をカッと揃えて見事な敬礼をした。
「大鳳・・・元気でね・・・」
「・・・（コクリ）」
瑞鶴は頬に一筋の涙を流しながら光に包まれて消えた。
大鳳はふっと力が抜けてぐったりとした。そんな残された大鳳の耳には菊池と参謀達の会話が聞こえていた。
「艦長！　火災の勢いは止まりません！　もう火薬庫に弾薬庫、飛行機格納庫まで火の海です！」
「何としても火災を食い止めるんだ！」
「無理です！　全消火装置は沈黙しています！」
「手作業でなんとかならんのか！」
「火の勢いが強すぎます！」
兵達の悲鳴に、菊池は悔しそうに唇を噛んだ。

菊池は司令官席に座って目を閉じている小沢に申し訳なさそうな声で進言する。

「長官。『大鳳』はもう指揮能力はありません。重巡『羽黒』に移艦してください」

菊池の言葉に、小沢は静かに瞳を開いた。

「『大鳳』の復旧は無理そうか？」

「・・・残念ながら、今はいつ爆沈するかわかりません。ですが、できる限り消火作業をするつもりです」

「そうか・・・がんばってくれ・・・」

そう言うと、小沢は『大鳳』の横に接舷した『羽黒』に向かった。『大鳳』のマストから小沢の中将旗が下がり、新たに『羽黒』のマストに上がった。この瞬間、第一機動艦隊旗艦は『大鳳』から『羽黒』に移った。

残された『大鳳』乗組員の必死の消火活動も空しく、『大鳳』はさらに炎上し続けた。そして・・・

夕暮れの海。橙色の空と海を真っ黒に塗る黒煙は『大鳳』から上がっていた。消火作業は失敗し、『大鳳』は燃え続けていた。

甲板は火の海になり、装甲を吹き飛ばして巨大な爆炎が天高く上る。そんな爆発があるたび、大鳳の身体からはおびただしい量の血が噴き出す。その結果、大鳳の体力はもうほとんど残っていなかった。

大鳳は空が見たくなって防空指揮所に移っていた。そこは空の赤と炎の赤で真っ赤な世界だった。

「・・・ここまで・・・ですか」

もはや咳ではなく吐血を繰り返す大鳳の口から出た言葉は、自分の死が近づいている事を告げるものだった。

「・・・役に立たなくて・・・ごめんなさい・・・」

大鳳の瞳からは涙が溢れる。それは痛みや苦しみではなく、皆の期待を裏切る自分に対する憤りと空しさの表れだった。

その時、瞳に浮かんだのは翔輝の顔だった。
生きて帰ろうと決めたのに、自分の艦体はもう動かず、死を待つだけ。これほど悲しく辛い事はない。
「・・・翔輝さん・・・ごめんなさい・・・」
翔輝と約束した《私のわがままに付き合う》とは、彼にもう一度自分に来てもらい、二人だけの空間を作ったら――告白するつもりだった。
初めて会った時はそうでもなかったが、ずっと一緒にいるうちに彼の優しさに惹かれ、好意を持つようになっていた。それが恋だと気づいたのはついこの前の事だった。そんな自分でも彼を好きという気持ちだけは真実で、敵が多い中意を決して実行しようとしたその矢先にこれである。本当に自分の情けなさにため息する。
大鳳が見上げる空は夕焼けの暁色に染まり、自らの身体を燃やす炎と合わさり赤の世界を作り上げていた。
大鳳のいる防空指揮所にももう火が回り、荒れくれる炎が彼女を包み込もうとしていた。
吹き付ける火の粉を払う力もなく、大鳳はもはや床に倒れて吐血を続ける。爆発のたびの痛みも、今の彼女には何の影響も与えなかった。
先程菊池が消火活動を中止して総員退去を発令した。だが、逃げる者、艦と運命を共にする者など分かれる者も多かった。
もはや機関が完全に停止し、『大鳳』は空母としての能力を失い、ただの浮かぶ瓦礫に陥っていた。そんな『大鳳』だが、その命の灯火を尽きようとしていた。
突如今まで以上の大爆発が響き、『大鳳』の飛行甲板と左舷装甲が粉砕して大爆炎が天空を貫いた。さらに連続して艦内で次々に誘爆。飛行甲板が完全に吹き飛び、そこにいた多くの兵達も一瞬で消えた。
新鋭空母『大鳳』はその巨体を維持できなくなり、急激に艦体が傾斜を始めた。左舷に開いた巨大な穴からトン単位の海水が浸水し、

一気に左から海の中に吸い込まれる。
艦が左に倒れていく中、大鳳はもはや生気のない瞳で沈みゆく太陽を見詰めた。それはまるで、自分の運命を表したようなものだった。
「・・・さよなら・・・皆さん・・・」
大鳳の瞳から一筋の涙が流れた。
悔しさではない。悲しさだ。せっかく出会った皆との絆を全て失う事への悲しみ。
本当は死にたくない。だってまだ三ヶ月しか生きていないのに、こんな所で死にたくはなかった。
だけど、運命は変えられない。
自分は、もう死を受け入れるしかないのだ。
変えられない運命ほど理不尽で、悲しいものはない。
死は暴力だ。
生きる事を望むものから、その命を奪う。暴力以外何ものでもない。
自分はもっと生きたい。もっと彼の傍にいたい。もっと彼と一緒にいたい。
――もっと、彼に好かれたい。
もっともっと彼と一緒にいたい。そうすれば、自分はもっと笑えるかもしれないし、もっと彼に好かれるかもしれない。
そんな淡い期待も希望も、全て失われてしまう。
たった三ヶ月の短い命だったけど、とても充実して、嬉しい日々だった。それだけは、代わらない事実だ。
みんなと出会えて、彼と出会えて、幸せだった。
この思い出があれば、それでいいのかもしれない。
艦魂として生まれた自分は、戦う事が責務であり宿命であった。
だから、この戦死は名誉なのかもしれない。人間だったら、きっと二階級特進とかだっただろうに。艦魂だからそれはない。
でも、そんな戦う事が使命である艦魂の自分が、こんなに幸せに

生きたなら、それは十分だったのかもしれない。
世の中には、長く生きても幸せがなかった者もいる。それに比べれば、自分は己が艦生を真っ当したのだろう。
戦う事が全てのこの時代、それは幸せなのだ。
自分は幸せだった。
皆に愛され、好きな人ができ、本当に幸せだった。
そう思うと、これが最後だというのに、そんな気持ちはない。
きっと天国で、幸せになれる。そう信じていた。
せめてもの心残りは、翔輝に告白できなかった事と、最後にもう一度、彼の笑顔を見たかった。それだけである。
「・・・翔輝さん」
小さく愛する彼の名をつぶやく。
その名前を口にするだけで、幸せな気分が胸を満たし、不安を消してくれる。最後の最後まで、自分を支えてくれる。
大鳳はその瞬間、その短くも幸せだった艦生で最高の笑みを浮かべた。
「・・・翔輝さん・・・どう・・・か・・・生きて・・・くださ・・・い・・・」
その頬を、一筋に涙が流れた。
「・・・そして・・・また・・・いつか・・・生まれ・・・変わったら・・・もう・・・一度・・・会いま・・・しょう・・・ね・・・」
その言葉を最後に、大鳳の瞳は永遠に閉じられた。刹那、日本海軍期待の新生にして日本の空母造船技術の粋を結集させて完成した新鋭空母『大鳳』は、そのあまりに短い命を終え、海底深くに沈み――大爆発を起こした。その時の爆発で吹き飛んだ海水は、天高く上がり、巨大な水柱となって消えた・・・
――新鋭空母『大鳳』、日本の空母造船技術の粋を結集させた日本海軍最後の切り札。空母の弱点であった急降下爆撃を克服する為

に五〇〇キロ爆弾にも耐えうる強力な装甲を施し、要塞のような装甲空母として竣工した。機動部隊の旗艦として、日本海軍の切り札として、そして最後の希望として生まれた空母だったが、その装甲が活躍する機会はなく、魚雷の爆発でむしろその強力な防御設備が爆発エネルギーや気化ガスの放出を妨げ、一発の魚雷が致命傷となった。その結果、わずか三ヶ月でその命を失う事になった。そんな大鳳の艦魂は無口で無表情な少女。そして誰よりも純粋な女の子だった。小学生くらいの外見でありながら、日本海軍の希望として生まれた彼女は、その責務を果たそうとした。そんな小さな少女の心の支えとなったのは、艦魂達の心の支えとなっていた少年だった。彼の傍にいれば、安心した。彼が好きで、それが恋だと気づくには少しの時間が掛かったが、ようやくそれに気づいた。そして、この想いを告白しようと決意した。だが、皮肉にも運命はそれを妨げるかのように彼女に死を与えた。短い命だったが、彼女は幸せであった。またいつか、彼と出会える事を信じながら、わずあ三ヶ月の命しかなかった少女は、マリアナ沖の海深くに沈み、永遠の眠りについた――

マリアナの海に夜が訪れた。

サイパン島では今も激しい陸戦が続いているだろうが、海は穏やかだった。ただ、いつその静寂が破られるかは神のみぞ知る、といったところだが。

波も静かだったが、その分敵潜水艦の脅威は増す。

ソナー員は、決して良質と言えないレシーバーに耳を澄ませ、見張り員は敵潜水艦の潜望鏡や雷跡を見逃さんと海面に全神経を尖らせる。

「対潜警戒を厳にせよ。ソナー員、敵潜を見逃すな！」

艦橋で貝塚は迅速な指揮を執っていたが、その表情には相当疲れているのを物語っていた。

「艦長。もう休まれたはいかがですか？」

副長が貝塚を心配するが、貝塚は笑ってそれを断る。
自分まで倒れる訳にはいかない。そんな想いが彼の身体を奮い立たせていた。今、彼の横にはいつもいる少女の姿はない。
瑞鶴は今・・・自分の部屋に閉じこもっている。そんな彼女の分まで貝塚は力量を振るっていたのだ。
貝塚が次なる指示を出した時だった。
『旗艦『羽黒』より発光信号！　『全艦北上セヨ』！』
伝声管から響いたその報告に貝塚の表情が変わる。
「撤退・・・か」
貝塚は苦虫を噛み潰したような顔で唸る。
この海を――『翔鶴』や『大鳳』が沈んだ海を捨てて別の海に逃げるなんて、一個人としてはしたくない。だが、自分は一隻の軍艦の艦長だ――それも、日本海軍最後の正式空母の艦長。自分の判断が日本の命を握っていると言っても過言ではないのだ。
その時、貝塚は一瞬立ちくらみをした。そんな貝塚に艦橋にいる全員が驚いて駆け寄る。
「艦長！　大丈夫ですか！？」
副長が彼の肩を支える。そんな彼に貝塚は「大丈夫」と答える。だが、副長をその答えに首を振る。
「艦長。もうお休みください。後は副長である私に任せてください」
「ダメだ。それはできない」
「艦長！　自分のお身体の事を考えてください！」
「私は立ち止まる訳にはいかんのだ！」
貝塚の一喝に、副長は彼から手を離す。そんな彼に「すまない」と言って、貝塚は再び仕事に戻った。
空には星々がきれいに輝いていたが、それを見上げる者は誰もいなかった。

夜中、瑞鶴は艦内を歩いていた。
姉である翔鶴に続き生まれて間もない大鳳まで死に、生き残って

いる正式空母はもう自分一人。さらには信頼していた刹那まで大鳳を救おうとして命を落としてしまった。そんな現実に瑞鶴の表情は暗いままだ。

瑞鶴はそんな状態で艦橋に向かった。すると、艦橋にはいまだに貝塚が仕事に没頭していた。だが、そんな彼は時々目頭を押さえて辛そうに顔をしかめていた。

「艦長・・・」

「ん？　あ、瑞鶴か。もう大丈夫か？」

「大丈夫かじゃないですよ。艦長こそ大丈夫なんですか？」

瑞鶴も慌てて貝塚を心配するが、貝塚は笑ってそれを制する。

「大丈夫だよ。心配するな」

貝塚の言葉に瑞鶴は首を振る。彼を見詰めるその心配な眼差しは光り輝く。それは、彼女の瞳が濡れて輝いていたからだ。

「無理はしないでください――姉さんや大鳳、神風大尉に続いて艦長まで死なれたら、私、今度こそ本当に――」

必死に訴える瑞鶴の頭を、貝塚はそっと撫でる。

「おいおい、勝手に人を殺すなよなぁ」

「だって・・・だって・・・ッ！」

「泣くなってばぁ。何か俺が泣かしてるみたいじゃねぇか」

「す、すみません・・・」

しゅんとする瑞鶴を、貝塚はそっと抱き締める。驚く瑞鶴に、貝塚は優しげな声を掛ける。

「瑞鶴。人の心配はいいから、お前はゆっくり休め。お前は姉や大鳳、神風という一人の姉と二人の仲間を失ったんだ。無理するな」

貝塚の言葉に、瑞鶴は彼の腕の中で頬を赤らめながら口を開く。

「そのお言葉、そっくりそのままお返しします」

瑞鶴のかわいい反撃に、貝塚は小さく笑う。

「ほら、早く寝なさい」

「いいえ、ここにいさせてください」

「いや、それは・・・」

言葉に詰まる貝塚に、瑞鶴は訴えるような瞳を向ける。
「今は・・・一人になりたくないんです」
「・・・わかった」
貝塚はうなずき、瑞鶴は彼の横で仕事を手伝った。そうしていれば、姉や大鳳、刹那の死の辛さが少しは和らぐから。
光り輝く月の下、二人の軍人はその夜一睡もせずに互いの温もりを感じ合っていた。

一方、瑞鳳は昼間の戦闘で疲れ切っていた剣の腕の中にいた。
場所は剣の部屋。月明かりが差し込む部屋の中、二人は互いを抱き合っていた。
「瑞鳳、大丈夫か？」
「・・・剣こそ、ケガは大丈夫なの？」
「うん。もう平気だよ」
そう笑顔で答える剣の頭には包帯が巻かれていた。包帯はそれだけでなく腕や肩にも巻かれている。昼間の出撃で負ったケガだ。幸いにもたいしたケガではなかったので、出撃命令が出てもすぐに出撃できる。
「もう、無茶するんだから・・・」
そう言って瑞鳳は震える手で剣の肩を掴む。そんな彼女の手を、剣はそっと触れる。
「ごめんね」
「・・・一体私がどれだけ心配したかわかってるの？」
「ごめん」
「・・・剣の、バカ」
「ごめん・・・」
「・・・謝らないでよ」
「ごめ――あ、うん」
剣の腕の中、瑞鳳は彼の胸にギュッと抱き付く。もう放さない。
そんな想いを込めて。

剣はそんな震える瑞鳳の身体をそっと抱き締める。

「・・・瑞鳳」

瑞鳳は身体を小刻みに震わせながら彼に抱き付く。その頬を、涙がぼろぼろと流れる。それは悲しみと同時に何もできなかった自分への怒りでもあった。

自分が前衛部隊に配置されているのは、前衛部隊に敵機の攻撃を吸収し、襲い掛かる敵機を迎え撃つのは役目であった。なのに、守るべき本隊はまさかの敵潜水艦の攻撃で『翔鶴』と『大鳳』を失った。

守るべきものを、失った。

それも、まだ仲間になったばかりのまだ幼い上官――大鳳と、幾多の戦場を共に駆け回った歴戦の戦士――翔鶴。どちらも大切な仲間だ。

大鳳の小さな優しさも、厳しくも優しく、自分に空母とは一体何かと教えてくれた姉のような存在の翔鶴。どちらも失うにはあまりにも大きすぎる存在だった。

特に翔鶴は大好きな瑞鶴の姉。自分ももちろん辛いが、姉を失った瑞鶴はきっと自分以上に辛い想いをしているだろう。そう思うと、胸が引き裂かれるような思い。

今すぐにでも彼女の所へ行って彼女を抱き締めてあげたい。そう思う。

でも、自分ももちろん二人の死は悲しい。

目をつむれば、いつも危険な戦場で常に先頭に立ち続けた勇ましい尊敬する上官の顔や頼れる背中を思い出せる。

ミッドウェー海戦の後の海戦では、いつも一緒に戦い続けた。そんな彼女がもういないのだ。そう思うと、涙が止まらない。

嗚咽を漏らしながら泣く瑞鳳を、剣は無言で抱き締め続ける。

彼女の痛みは痛いほどわかる。

以前何度か『翔鶴』の艦魂には会った事がある。自分よりもずっと若い少女だったが、その勇ましさは今まで自分が会って来た人間

や艦魂の中で一番だった。
あの勇ましくも本当は誰よりも優しい彼女が、もういないのだ。
全然接点がない艦魂だとはいえ、今自分の腕の中にいる瑞鳳をずっと支えてくれていた大切な人。失うにはあまりにも大きすぎる存在だ。
嗚咽を漏らしながら泣き続ける瑞鳳。その胸の中には一体どれだけの苦しみがあるか計り知れない。
自分にできる事は、こうして彼女の苦しみをほんのわずかでもいいからわかってあげる事。ただそれだけだった。
「・・・ねぇ、剣。私、情けないよね？」
瑞鳳は力ない声で言う。剣はそんな彼女の言葉に何も返さない。
瑞鳳はそんな彼の心に届くようにゆっくりとした口調で話す。
「私は空母の艦魂。人の死は誰よりも接してきて、わかっていたつもりなのに。いざ自分の知り合いが死んだら、今までのそんな経験なんて全部無意味だった。悲しくて仕方がない。辛くて、苦しくて・・・軍人なのに、情けないよ・・・私」
「そんな事ないさ」
剣はそうハッキリと否定した。
瑞鳳は涙に濡れた瞳でじっと剣を見詰める。その瞳は剣が一体何を言ってくれるのかという小さな期待が込められていた。そんな彼女の瞳を、剣もじっと見詰める。
「軍人だからって、死を慣れる事なんてできないさ。もし死に慣れたなら、それは軍人として最もいけない事だ。死に慣れるというのは恐怖を感じなくなる事。それは人間じゃない。ただの戦う為だけの機械だ。僕もお前も、そんな機械じゃない。心を持った人間と艦魂だ」
「剣・・・」
じっと見詰める瑞鳳の頭をそっと撫で、優しげな笑みを向ける。
「死に慣れるな。僕が言いたいのはそれだけだよ。友人の死は苦しみや悲しみと共に、胸に刻むんだ。そうすれば、決して忘れる事は

ない」
剣の言葉はとても深い想いが込められていた。きっと彼自身もそんな想いを抱いて来たのだろう。
空母の艦魂である自分より、飛行機の搭乗員である彼の方がずっとそのような苦しみを受けてきたのだ。
その胸の中には一体どれだけの苦しみと友の死の辛さを感じ続けたのだろうか。
ギュッと自分を抱き締める力が強くなり、瑞鳳はドキッとする。
そんな自分に、剣は優しげな笑みを向ける。
「苦しい時、悲しい時は誰かを頼れ。誰でもいい。信頼できる仲間でも、この僕でも」
「剣・・・」
「僕じゃ情けないかもしれないけど、瑞鳳は女の子で僕は男だ。女を守るのは男の責務だ。だから、お前も僕を頼れ。な？」
「剣・・・ありがとう」
今度は瑞鳳からも抱き付く。そんな彼女を、剣もギュッと抱き締める。
月明かりに照らされる二人は、そのままいつまでもお互いを支え合うかのように抱き合い続けた。

その頃、戦艦『大和』に乗る翔輝は光り輝く空を見上げていた。その横には泣きじゃくる大和とそんな彼女を抱き締める武蔵がいた。
大和は嗚咽交じりで泣き続け、武蔵はそんな姉を抱き締めながらもその表情は苦しそうにゆがんでいた。
一方、翔輝はずっと黙ったまま星空を見上げている。その瞳は翔香の事を思い出している時に近いものがあった。
「翔鶴の奴・・・最後の最後まで武人だったな・・・」
翔輝の突然の言葉に、武蔵は少し驚いたが、無言でうなずく。
「かのんも・・・まだまだしたい事もあったろうに・・・」
「・・・まだ竣工して三ヶ月しか経っていない新入りだったのに、

残念」
「あぁ。天国で元気でいてほしい、そう思う」
そう言う翔輝の表情は苦しそうにゆがんでいる。そんな彼を、武蔵は悲しそうな目で見詰める。その時、
「大尉・・・」
大和が翔輝に飛び付いた。その肩は震え、身体を伝って彼女の悲しみや不安な気持ちが流れ込んでくる。
「大尉・・・ッ！　このままだと瑞鶴まで・・・ッ！」
「大丈夫だ。瑞鶴は幸運艦だ。敵の攻撃で沈むような奴じゃない」
翔輝の言葉は、まるで自分自身へ言い聞かせるように武蔵には聞こえた。その言葉に大和はすがるようにうなずく。そんな大和を、翔輝は離す。
「武蔵。大和を頼む」
「大尉・・・？」
「お前はゆっくり休め。僕はもう少しここで風に当たる」
それは、大和にここにいるなという指示だった。大和はそんな彼の瞳を見て素直に従い、武蔵の肩を借りて去った。
残された翔輝は星空を見上げる。そこには光り輝く星々が満ち溢れていたが、翔輝はそれを見詰めて無言で涙した。時間が経つにつれてそれは嗚咽となり、声に変わった。
友人を亡くした苦しみに耐える翔輝を、大和を寝かし付けた武蔵がそっと陰から何もできずに見守っていたのを、彼は知らない・・・

第十一章　第七節　恋姫大鳳最期の優しき笑み（後書き）

ついに大鳳も戦死しました。
わずか三ヶ月しか生きられなかった彼女は、あまりにもかわいそうですが、その短い時間の中は、彼女にとっては幸せな日々だったのでしょう。
大鳳は幸せだった。そう信じましょう。
さて次はマリアナ沖海戦第二戦に突入します。そしてここでも一人の艦魂が命を落とします。
次回作もどうか読んでください。

第十一章　第八節　米機動部隊猛反撃　機動部隊の壊滅

翌朝、第一機動艦隊は重巡洋艦『羽黒』から空母『瑞鶴』に旗艦を再変更して機動部隊の体勢を立て直す事に全力を挙げ、ようやく機動部隊は再編成を終了した。すぐさま索敵機を飛ばして敵艦隊見つけようとしたが、その日の午前は敵艦隊を発見する事はできなかった。

二隻の正式空母と全艦載機の大半である三一五機を失い、まともな数の偵察機を飛ばす事ができなくなってしまったからだ。

そしてその日の午後、戦局は大きく転換した。

先に敵機動部隊を発見したのはアメリカ海軍の方だった。

海を白波を立てながら翔けるアメリカ高速空母艦隊はすぐさま攻撃を敢行した。

「やっと見つけたぜ、クソジャップどもッ！　日本軍は殲滅しろ！　日本人は殺し尽くせ！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！」

エンタープライズは興奮しながら叫ぶ。そんな狂乱する彼女を見てホーネットはフルフルと小さく震えながら怯えている。そんな妹をヨークタウンは静かに抱き締めている。

「すぐに攻撃隊を発艦させろ！　全艦載機を使って日本の空母を海の藻屑にしてやれ！　日本人は殺し尽くせ！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！」

エンタープライズはギラギラと危ない目で甲板に並び始める艦載機を見詰める。そんな彼女を見てエセックスがヨークタウンに耳打ちする。

「なぁ、エンターの姉貴って実は結構ヤバイんじゃねぇか？」

「そうかもね。頭に血が上るとちょっと危険な人になるのよね」

ヨークタウンは前回ヘイルストーン作戦（トラック島空襲）でエ

ンタープライズと作戦に参加したが、その時に彼女の戦い方を目の当たりしたヨークタウンは十分彼女の戦闘中の危険性を身をもって体験していた。

エセックスとヨークタウンの会話など知らずにエンタープライズは叫びまくる。そして、各空母の甲板一面がネービーブルーの艦載機で埋め尽くされると、艦魂達は自艦に戻った。残されたエンタープライズは武者震いをして嬉しそうに艦載機群を見詰める。そして、ついに攻撃隊が発艦を始めた。

天空へ上っていく攻撃隊を見詰め、エンタープライズは歓喜する。

「待っていろクソジャップども！　今すぐ貴様らを皆殺しに行くぞ！　黄色いサルに未来などはない！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！」

エンタープライズが日本軍全滅宣言をしている間も攻撃隊は次々に天空に舞い上がっていく。

空を埋め尽くすＦ６Ｆヘルキャット戦闘機８５機、ＳＢ２Ｃヘルダイバー急降下爆撃機５１機、ＳＢＤドーントレス急降下爆撃機２６機、ＴＢＦアベンジャー雷撃機５４機の計２１６機は上空で大編隊を編成すると母艦隊に見送られながら蒼い空の向こうに消えて行った。

一方第一機動艦隊本隊は前衛部隊と合流した。瑞鶴と大和は再会してお互いに無事だった事を喜びながら抱き締め合った。だが、そんな彼女達を敵は待ってくれなかった。

日本海軍でもトップクラスの電探を装備する『大和』の電探が艦隊に接近して来る敵大編隊を探知した。

『敵大編隊を電探にて確認！　二時方向より約二〇〇機襲来！』

レーダー員の報告に宇垣はすぐさま第一機動艦隊司令長官である小沢がいる『瑞鶴』、前衛部隊指揮官である栗田が乗る『愛宕』に打電。小沢はすぐさま全艦に通知して対空戦闘用意を開始した。艦隊も対潜水艦陣から対空輪陣に編成を変える。残存空母からは次々

に直掩戦闘機として零戦が舞い上がる。その中には『瑞鳳』から飛び立った剣の姿があった。まだ少し昨日の傷の痛みがあるが、空戦には支障はなかった。

自分のまわりに飛ぶ多くの零戦。かつては世界最強の戦闘機として連合国を畏怖された零戦も、今では性能は敵機に負け、搭乗員の質も比べ物にならないほど落ちている。数こそはそれなりに揃ってはいるが、そのほとんどはきっと敵戦闘機の格好の餌食となるだろう。

例え、零戦隊が壊滅しても、何としても『瑞鳳』は守り抜く。そう決意していた。

剣は瑞鳳航空隊の零戦と共に敵急降下爆撃機を警戒して高度を守る。他の零戦は同じように高度を守ったり、雷撃機を警戒して低空飛行をしていたり、どちらにも対応できるように中高度に位置するなど様々に展開した。

下を見ると、空母部隊を囲むように戦艦及び巡洋艦、駆逐艦などが移動している。

眼下に見える連合艦隊の象徴である戦艦『大和』と『武蔵』の巨砲。あの巨砲が敵機に向けられれば、敵機もただでは済まないだろう。

剣は艦隊に向かって敬礼すると、操縦桿に巻き付けられている亡き飛龍の御守りを握る。

彼女は守れなかった。だけど、今度は必ず瑞鳳を守り抜いてみせる。

例え、敵機に体当たりしてでも・・・

剣は操縦桿を強く握ると、さらに高度を上げる為に思いっ切り引いた。

一方、空母部隊を守るように外円にその巨艦を走らせている戦艦『大和』の艦橋では大和が不安そうな顔をしていた。

「大和。大丈夫か？」

翔輝が声を掛けると、「だ・・・大丈夫です・・・」と小さく震える声で返した。

大和は極度に緊張している。彼女自身敵航空機と交戦は初めてなのだ。緊張するのは当然だ。そんな大和の傍に翔輝はいてやる。

「大丈夫だ。艦長の操艦を信じよう」

森下は必ず『大和』を守ってくれる。そう信じていた。それは大和も同じ事。

「そうですね。私達にできるのはこれぐらいです」

大和も覚悟を決めて敵が来るであろう空を見詰める。

戦艦部隊以下護衛艦隊は残存空母部隊を守るようにして円陣を組み終えた。防空輪型陣形である。その間に空母部隊は甲板などに移動式の機銃台などを配置して対空能力を上げる。

全ての艦が対空戦闘の用意を終えると、艦隊には不気味な静けさが漂った。響くのは零戦のプロペラ音と波の音、風の音だけ。

不気味な沈黙はしばし続いた。だが、それもついに終わりを迎え、空の向こうから空気を震わせる音を立てながら――敵攻撃隊がその姿を現した。

「敵機来襲！　右七〇度方向より接近！」

防空指揮所に上がった森下は見張り兵の声に空を睨む。その先の空は無数の黒い点で埋め尽くされていた。

「撃ち方用意ッ！　目標右七〇度方向、距離二万ッ！　主砲三式弾装填始めッ！」

森下の命令に従い、『大和』の巨大な主砲がゆっくりと旋回を始める。と同時に甲板に待機していた兵達に退避命令のブザーが鳴り響く。巨砲の衝撃波に吹き飛ばされたら内臓破裂を起こしてもおかしくはないからだ。そしてその巨大な砲身で敵攻撃隊を捉える頃には全戦艦部隊が敵攻撃隊を睨んでいた。

不気味な沈黙、そしてそれは唐突に破られた。

「撃ち方始めッ！　撃てぇッ！」

ドゴオオオオオオオォォォォォォォォォォンッ！

すさまじい爆音と激震が響き、『大和』の三基九門の巨砲が唸る。空気を破壊するようなその一閃は確実に敵攻撃隊を捉えた。そして・・・

突如敵攻撃隊の上空で巨大な大輪花を咲き乱れ、焼夷粒子と砲弾の破片が空中を切り裂き、敵機は次々にそれに触れて炎上――墜落した。

それを見て『大和』の乗組員達はその巨砲の威力を見て感動していた。その時、後方を走る『武蔵』の巨砲が唸りを上げた。さらに続いて『長門』『金剛』『榛名』も砲撃を始め、空中に大量の焼夷粒子がバラ撒かれる。敵機は次々に火の玉になって落ちた。敵機は集中していると危ないと気づいたのか散開を始めた。だが、それで諦める日本海軍ではなかった。

「第二射撃ち方用意ッ！」

四六ｃｍ砲の一門一門に新たな砲弾が装填され、再び敵機を捉える。迫る敵機はかなり近づいていたが、構う事はない。森下はすぐさま命令する。

「良しッ！　撃てぇッ！」

再び『大和』の巨砲が爆音と共に唸りを上げて砲身で爆発のような火炎が噴き出す。

撃ち出された巨弾は敵機群に飛び込み炸裂。無数の焼夷粒子を放出して敵機を撃墜する。

距離が詰まると戦艦部隊は副砲射撃を、巡洋艦部隊も砲撃を始めて空を赤き流星が翔け抜ける。

護衛艦隊の猛攻撃で敵機はかなりの数を撃墜された。だが、ついに敵機群は戦艦の主砲射程範囲より内側に侵入。巨砲達はその轟音を沈黙させる。残った副砲で応戦するが、もう敵はすぐそこまで迫っていた。

「対空戦闘用意ッ！」

森下の号令の後、甲板に無数の兵達が現れて自分の持ち場である機銃や高角砲に再配置する。考えてみれば彼らだって大半は戦闘は

初めてだ。なんやかんやで今ままで『大和』はずっと実戦からは離れていたのだから。

迫る敵機を睨み、森下は操舵室直通の伝声管の前に立つ。

宇垣は危険な窓の傍に立って敵機を睨み付けている。そんな彼らから離れた位置にいる翔輝の横で大和は敵機を睨み付けている。それは彼女のような少女がする目ではなく――軍人のそれになっていた。だが、その小さな白い手はしっかりと翔輝の手を握っている。震えるその拳が、彼女の恐怖を伝える。

そして、ついに『大和』の甲板に所狭しと立てられた機銃や高角砲が唸りを上げ、耳を劈く金属音が響き渡った。

今では『大和』だけでなく他艦の対空兵器も唸りを上げて敵機の撃墜を開始する。同時に戦艦部隊の三式弾に当たらない為に上空に待機していた戦闘機隊が敵機に向かって突撃を開始。壮絶な空中戦が繰り広げられた。

すさまじい弾幕を張る第一機動艦隊に敵急降下爆撃機は次々に轟音と共に急降下をして迫る。どうやら今回の目標は超大型戦艦である『大和』や『武蔵』ではなく『瑞鶴』以下残存空母部隊のようだった。

空母群に突撃する敵機を全艦隊や戦闘機隊が攻撃して撃墜する。だが、必死の迎撃網もついに突破され、敵機は空母部隊に群がった。

「あぁッ！　瑞鶴達が・・・ッ！」

焦る大和を落ち着かせ、翔輝は悔しそうに敵機を睨む。

こうなってしまった以上、後は『瑞鶴』以下空母部隊に奮戦してもらうしかない。

祈るような視線で翔輝が見詰めると、『瑞鶴』の対空砲火が始まっていた。

「敵機接近ッ！」

見張り兵の言葉を聞かずとも、貝塚にはわかっていた。

迫り来る敵機を睨み、貝塚は防空ヘルメットを被り直し、ついに

攻撃命令を下した。
「対空戦闘始めッ！」
艦体中の機銃、高角砲がその本来の役目を真っ当するように火を噴いて鉄の弾丸や砲弾を天空へ舞い上げ、それは次々襲って来る敵機を襲う。
すさまじい対空砲火の嵐の中、貝塚は隣にいる少女を見詰め、不敵に笑う。
「必ず守ってやるぞ！　瑞鶴ッ！」
「はいッ！」
その言葉に、瑞鶴は嬉しそうにうなずいた。
貝塚は迫り来る敵機を睨み、真剣な表情で伝声管に向かって回避行動命令を出す。
「取舵いっぱぁぁいッ！」
きれいな白波の弧を描いて『瑞鶴』は急速カーブする。そんな『瑞鶴』に敵機は集中した。もはや、大型空母は『瑞鶴』しか残っておらず、敵機の攻撃が集中していたのだ。
「敵機急降下ッ！」
グオオオォォォォォンッと急降下音が響き渡り、敵機数機が『瑞鶴』に向かって急降下して来た。
「面舵いっぱぁぁいッ！」
貝塚はすぐさま回避行動を取った。その指示は的確で、敵機から投下された爆弾は『瑞鶴』の左舷から少し離れた地点に落ち、爆発して水柱を上げた。だが、敵機の猛攻はやむ事はなかった。続いて右舷から敵雷撃機数機が接近して来ていた。そして、ついに機体下部から魚雷が投下された。
水中を翔けて接近する魚雷を見て、貝塚は即座に艦を右に転進させる。その結果、魚雷は『瑞鶴』の右側を素通りしていった。
次々に爆弾や魚雷を回避する貝塚を見て、瑞鶴は歓喜する。
「すごいです艦長！　操艦の神様って感じですよ！」
「黙ってろッ！　死にたいのかッ！」

せっかくほめたのに怒られ、瑞鶴は詰まらなさそうに唇を尖らせる。だが、そんな彼女だって彼の言う事は理解している。彼は自分の命を守る為に全神経を集中させて操艦をしている。邪魔をするのはいけないのだ。

「敵爆撃機！　雲の切れ間から急降下！」

「面舵いっぱぁぁぁいッ！」

『瑞鶴』はこれを右に回避して事なきを得た。だが、敵機はさらに猛攻撃をする。爆弾や魚雷だけでなく敵戦闘機が機銃を掃射して来た。甲板に無数の火花と金属音が響く。

「左三〇度より魚雷三本接近！」

「取舵いっぱぁぁぁいッ！」

次々に転進を繰り返して『瑞鶴』にはいまだに命中弾はなかった。だが、

ドドドオオォォォンッ！　というすさまじい爆発音が響き、二人は思わず音の発信源を見た。

貝塚と瑞鶴が見たのは――黒煙を上げて減速する『龍鳳』の姿だった。

「『龍鳳』が・・・ッ！」

悲鳴を上げる瑞鶴。さらに、

ドドドオオォォォンッ！　と別の場所で爆音が響いた。確認すると少し離れた所にいた『千代田』の甲板が炎上していた。

「『千代田』まで・・・ッ！」

「くそッ！」

貝塚が再び敵機を睨んで転進をかけようとした時だった。突如敵戦闘機が彼らのいる防空指揮所に機銃掃射をしたのだ。

キンキンキンッと金属音と火花が散る指揮所。自分の足元でも火花が上がり瑞鶴は驚く。その時、

「うわッ！」

突如悲鳴が響いて瑞鶴が慌てて見ると、そこには右肩から出血している貝塚の姿があった。

「艦長！」
瑞鶴は急いで貝塚の下に駆け寄るが、貝塚はそれを制す。その顔は辛そうにゆがんでいたが、それを必死に隠そうとしているのも見えていた。
「大丈夫だ・・・心配するな・・・」
「でも・・・ッ！」
「心配するな」
貝塚は再び天空を見上げる。その時、雲の切れ間から急降下して来る敵機を視認した。貝塚の顔から血の気が引いた。
「まずいッ！　面舵いっぱぁぁぁいッ！　急げッ！」
貝塚はすぐさま取舵を回して回避しようとしたが、すでに敵機との距離はかなり縮まっていた。
「艦長ッ！」
瑞鶴の表情も険しくなり、その顔は真っ青だった。
敵機は流星のように高速で『瑞鶴』に向かって迫る。そんな敵機に向かって機銃が迎撃をする。そのおかげで接近して来るほとんどの敵機は撃墜できた。だが、残った一機が味方の仇と迫って来る。
バンバンバンッと高角砲の砲弾の爆発が起きて敵機の侵入を食い止めるが、そんな防空網を突破してついに敵機は爆弾を投下した。
「瑞鶴ッ！」
貝塚は駆け出して瑞鶴を抱き締めた。驚いた瑞鶴が彼の名を呼ぼうとしたが、その瞬間、爆弾が命中した。
ドガアアアアァァァァンッ！　とすさまじい爆音が響き、艦橋がまばゆい光に包まれた。
暴風のような爆風で貝塚の身体は吹き飛ばされ、防空指揮所の壁に叩き付けられた。
瑞鶴も悲鳴を上げてその場に倒れた。
少しすると貝塚が苦しそうな声を上げて自力で立ち上がった。そしてその目で目の前に広がる惨状を目の当たりにした。
どうやら艦橋のすぐ傍に爆弾が命中したらしい。すぐ横から炎と

黒煙が上がっていた。すさまじい熱気が吹き付ける中、貝塚は傷む肩を押さえてまわりを見る。すると、彼から少し離れた所に――頭から血を流してぐったりとしている瑞鶴の姿を見つけた。

「瑞鶴ッ！」

貝塚が慌てて駆け寄ると、瑞鶴は顔の半分を血で真っ赤に染めて苦しそうに顔をゆがめてその場に倒れていた。

「瑞鶴！　しっかりしろ！」

貝塚は慌てて彼女を抱き上げる。すると、閉じられていた彼女の瞳がわずかに開いた。

「艦・・・長・・・」

瑞鶴は小さな声で彼の呼ぶ。どうやら意識はあるらしい。それだけで貝塚は多少安堵した。

「大丈夫か？」

「はい・・・これくらい・・・へっちゃらです・・・」

そうは言うが、彼女の容態は明らかに危険な状態だった。

「瑞鶴、お前――」

貝塚が言い終わる前に、敵機の急降下音が響き渡った。それを聞いて驚く彼に、瑞鶴は力強く言う。

「艦長・・・操艦を・・・続けてください」

瑞鶴の必死な言葉に貝塚は無言でうなずき、急いで伝声管の前に立って再び操艦を始める。そんな彼を、瑞鶴は微笑みながら見詰めた。その時、ふいに爆音が響き渡った。何事かと思っていると、見張り兵が悲鳴に近い声を上げた。

「『飛鷹』被雷！　速度低下！」

二人が見詰める先では、艦の横から煙を上げて速度が急激に低下した『飛鷹』が走っていた。その時、そんな『飛鷹』の真上から敵急降下爆撃機が急降下して来た。

「ひ、飛鷹ぉッ！」

瑞鶴は悲鳴のように大切な仲間を名前を叫んだ。

だが、低速になった『飛鷹』はすでにそれを避ける力は残されて

いなかった。そして・・・

「飛鷹おおおぉぉぉッ！」

すさまじい大爆発と同時に紅蓮の炎が『飛鷹』の甲板を貫いた。真っ黒な煙が『飛鷹』を包み、『飛鷹』は炎に包まれた。

目の前で大爆発を起こした『飛鷹』に、瑞鶴の頭は真っ白になった。

「飛鷹ッ！」

炎上する『飛鷹』の後方を走っていた『隼鷹』の防空指揮所で隼鷹は叫んだ。その表情は泣き寸前。もう大事な人を失いたくなかった。

「飛鷹ッ！　今行くね！」

慌てて隼鷹が『飛鷹』に転移しようとした時、突如急降下音が響いた。

「敵機直上！　急降下！」

見張り兵の絶叫に隼鷹は凍り付いた。空を見上げると、敵機数機が垂直に急降下して来るのが見えた。

「取舵いっぱぁぁいッ！」

空母『隼鷹』艦長、渋谷清見（しぶたにきよみ）大佐がすぐに転進命令を出すが、すでに手遅れだった。

迫る敵機を睨み、渋谷は絶叫する。

「総員衝撃に備えろおおおおぉぉぉぉッ！」

渋谷の言葉に、隼鷹はその幼い顔を真っ青にして天空を見上げる。ネイビーブルーの機体に星が描かれた見慣れた恐ろしき敵機が、もうすぐ目の前まで迫っていた。

迫る敵機を見詰め、隼鷹は悲鳴を上げた。

「キャアアアアァァァッ！」

隼鷹の悲鳴が響いた刹那、『隼鷹』の後部甲板に一発爆弾が命中し、甲板の木板が粉々に吹き飛び、火災が発生した。

爆発と同時に隼鷹の腰から鮮血が流出し、隼鷹は苦悶の表情を浮

かべてその場に叩きつけられるように倒れた。
腰にすさまじい痛みを感じ、隼鷹は苦しそうに歯を食いしばる。目の縁にはたっぷりの涙が溜まり、今にも泣き出しそうだった。
「痛い・・・よぉ・・・痛いよぉ・・・」
隼鷹は泣きながら小さな声を絞り出すようにしてつぶやいた。痛みのせいで大きな声が出せなくなっていたからだ。
顔を上げると、『飛鷹』が数度の爆発を起こして炎上していた。しかも右にわずかに傾斜している。被害は甚大であった。
「ひ・・・ひよぉ・・・」
隼鷹は必死に妹に向かって手を伸ばしたが、そのすさまじい激痛にそのまま気を失い、伸ばされていた手は力なく床に落ちた。

一方、『隼鷹』より先に被弾した『飛鷹』の防空指揮所では飛鷹が自らの血で真っ赤に染まってぐったりと力なく倒れていた。こちらの被害は瑞鶴や隼鷹よりもはるかに重傷だった。魚雷一本を受け、さらに後部マストに爆弾を一発被弾し、艦橋にもその破片が襲い掛かって司令部要員も負傷者多数であった。
真っ赤な血の海に倒れる飛鷹はもはや身体を動かす力も残されていなかった。口からは咳をするたびに血の塊を吐き出し、苦しげに顔をゆがめる。
「・・・姉・・・さん・・・」
すさまじい激痛の中でも、彼女は被弾した姉の方を心配していた。自分よりも幼い姉を必死に心配するのはあまりにも彼女らしい。そして、良き妹である。
黒煙を上げる『隼鷹』はあまり大した被害はなさそうだった。それを見て飛鷹は安堵の息を漏らし、すさまじい痛みに顔をゆがめる。
艦体中で連続した爆発が起き、『飛鷹』は紅蓮の炎に包まれる。
燃える自分の艦体を見詰め、飛鷹は最期を覚悟した。
「・・・姉さん・・・あなたは・・・死なないでね・・・」
飛鷹はそうつぶやくと、突如大量の血の塊を吐いてぐったりとす

る。立とうとするが立てず、傷口を押さえるとその手はべとりと真っ赤に染まった。
苦しそうに息を吐き、飛鷹は後ろを走る姉を見詰める。
「・・・姉さんが・・・生きてれば・・・希望は・・・繋がる・・・から・・・」
そう搾り出すようにつぶやくと、飛鷹はぐったりと倒れ、そのまま気を失った。
爆弾、魚雷それぞれ一発を被弾した『飛鷹』は、すさまじい爆発の連続と、紅蓮の炎に包まれて真っ赤に染まった。
それはまるで、『飛鷹』の血のようだった・・・

第十一章　第九節　飛鷹の姉への想い　マリアナ沖の大敗北（前書き）

日本軍が絶対国防圏の要であるマリアナ諸島を死守すべく挑んだ決戦は、米軍の圧倒的な戦力の前に有効な手を打つ事もできず、期待の新鋭空母『大鳳』と歴戦の英雄空母『翔鶴』を失い、さらには艦載機のほとんどを消失した。

もはや日本海軍が求めていた米機動部隊との決戦は、不可能となっていた。そして、マリアナに新たな嵐が吹き荒れようとしていた・・・

・

第十一章　第九節　飛鷹の姉への想い　マリアナ沖の大敗北

敵機の空襲は終わった。結果は第一機動艦隊の空母七隻中五隻が損害を受けた。その中でも『飛鷹』の被害は甚大で、飛行甲板は真っ赤な炎を上げていた。

五隻の空母の甲板では消火活動がされ、その火は徐々に鎮火されていた。だが、『飛鷹』だけはどうしても鎮火できなかった。

炎上を続ける『飛鷹』の甲板には多くの艦魂が集まっていた。その中には大和に頼んで来た翔輝の姿もあった。

彼らの先には血まみれの妹を抱き締めて泣き叫ぶ隼鷹がいた。

「飛鷹・・・飛鷹・・・ッ！」

涙でぐしゃぐしゃになった顔で隼鷹は死に掛けている飛鷹を抱き締める。そんな彼女の胸の中にいる飛鷹は苦しそうに顔をゆがめて吐血を繰り返す。

「飛鷹ッ！　しっかりしてよ！　死んじゃ嫌だよぉッ！」

「・・・姉・・・さん・・・」

飛鷹は嗄れた声で姉を呼ぶ。

泣き崩れる隼鷹を頬を、飛鷹は血で濡れていない右手でそっと撫でる。その時の彼女の表情はとても優しいものだった。

「・・・姉さん・・・けがは・・・大丈夫？」

「私は大丈夫だよぉ！　それよりも今は自分の心配をしてよぉッ！」

隼鷹の言葉に、飛鷹は力なく首を振る。

「ダメよ・・・私はもう・・・長くないから・・・」

「そんな事言わないでよバカぁッ！」

隼鷹は飛鷹に泣き叫ぶが、飛鷹は反撃もせずに彼女の頬を撫で続ける。そんな妹を隼鷹は抱き締め続ける。

最期の会話をする二人を見て、全員が悲愴な表情で見詰める。ケガの手当てを終えた瑞鶴は瑞鳳に、大和は武蔵に抱き付いて泣いている。そんな中、苦しげな表情をしている者が一人いた。

「おい長谷川、大丈夫か？」
翔輝に声掛ける榛名。そんな彼女の頭には包帯が巻かれている。昼間の空襲でたいした事はなかったが、『榛名』も被弾したのだ。
一方、声掛けられた翔輝の表情は真っ青だった。
「大・・・丈夫・・・」
「とてもそうには見えねぇぞ」
「心配・・・しないで・・・本当に・・・大丈夫・・・だから――うぅッ！」
「おいッ！　長谷川!?」
榛名の大声に全員が驚いて振り向くと、そこには甲板に倒れている翔輝がいた。
「大尉!?」
「・・・翔輝ッ！」
大和と武蔵が慌てて駆け寄ると、翔輝の表情は真っ青で苦しそうにゆがんでいた。
「大尉！　大丈夫ですか!?」
大和はもうパニックになっていた。その時、長門が慌てて駆け寄って来た。
「しまったッ！　こんな所に長谷川君を連れて来るんじゃなかった！」
常に余裕を持つ長門が今回はかなり焦っていた。そんな長門の常とは違う態度に皆の視線が彼女に集中する。
「おい長門！　一体どういう事だ!?」
必死な形相で詰め寄る榛名に、長門は唇を噛みながら自分の犯した失態を語る。
「翔香ちゃんの死で人の死に過敏に反応する長谷川君に飛鷹の現状を見せればどうなるかなんて簡単に予想できたのに・・・ッ！」
「おいッ！　どういう事だ!?」
「死に掛けた飛鷹を長谷川君に見せてしまったから、たぶん翔香ちゃんの死と重ねて精神が耐えられなくなったのよ」

長門の説明に皆驚愕して苦しそうな顔をする翔輝を見詰める。そこにはいつも笑顔を振り撒く優しき彼の姿はなかった。あるのは、大切な者を失った苦しみにもがく一人の少年の姿だった。

榛名はそんな翔輝を見詰め、何かを決心したような顔をする。

「・・・そっか――よし、俺がこいつを『大和』まで連れて行く」

「そんなッ！　私が連れて行きます！」

大和が慌てて名乗り出るが、榛名は首を振る。

「俺はケガ人だ。それに――お前は飛鷹の最期を見届けてくれ。これから先、嫌でも見るはめになるからな」

榛名の言葉に、大和はしばし考えてうなずいた。

「・・・私は行く」

武蔵は真剣な瞳で榛名を見詰める。その瞳を見て、榛名は静かにうなずいた。

榛名は気絶した翔輝を背負う。榛名の後ろで荒い息を立てて苦しそうにしている翔輝を、大和は泣きながら見詰める。

「大丈夫だ。俺が付いててやるから」

「お願いします」

榛名は親指を立ててにこやかに笑い、三人は光に包まれて消えた。

翔輝と榛名、武蔵が消えると、再び皆の視線は飛鷹に向けられる。

その時、

ドガアアアァァァァンッ！

「があああああぁぁぁぁぁぁッ！」

突如『飛鷹』の甲板や側面装甲が吹き飛ぶ大爆発が起き、飛鷹が今までとは比べほどにならないほどの吐血を吐いた。

「飛鷹！　飛鷹！　飛鷹ッ！」

隼鷹は狂ったように妹の名を呼ぶ。そのあまりの異変に瑞鶴達空母艦魂が彼女に駆け寄る。

「飛鷹！　しっかりして！」

叫ぶ瑞鶴の後ろでは長門が大爆発を起こす『飛鷹』を見て「総員退避！」と叫んでいた。

「『飛鷹』は沈没するわ！　みんな早く自艦に戻って！」
長門の言葉に駆逐艦や巡洋艦達は次々に脱出した。残るは戦艦と空母の艦魂だけだった。
「さあッ！　あなた達も自艦に戻りなさい！　もう『飛鷹』は長くは持たないわよ！」
長門は必死に叫ぶ。だが、彼女のの言葉に反応する者は誰もいなかった。
「何してるのよ！　早く逃げなさい！」
「絶対に嫌ッ！」
長門の言葉を一蹴し、隼鷹は泣き叫ぶ。
死に掛けた妹を置いて行くなど、彼女にできるはずもなかった。
そんな優しき姉に飛鷹は最後の力を振り絞る。
「・・・姉さん・・・逃げ・・・て・・・」
「嫌だよ！　私は飛鷹の傍にずっといる！」
「・・・生きろって・・・言ってるのが・・・わからないの・・・ッ！」
血を吐きながら訴える飛鷹に、隼鷹は首を振って聞きたくないと意思表示するが、飛鷹はそんな隼鷹を自分から離す。
「・・・生きなさい・・・姉さんは・・・瑞鶴さんの手助けになって・・・機動部隊を支えて・・・・それが・・・姉さんの責務よ・・・」
「飛鷹・・・ッ！」
「生きて姉さん！　姉さんは日本海軍に残された数少ない空母なのよ！　姉さんの艦首に輝く菊花紋章は飾り物じゃないでしょ！」
飛鷹は怒気を含んだ声で姉を叱咤（しった）する。そのすさまじい迫力に隼鷹は無言になる。直後、飛鷹はすさまじい量の血を吐いて倒れた。
隼鷹は再び駆け寄るが、飛鷹がそれを止める。
「・・・もう行って・・・これ・・・以上・・・私を・・・心配させ・・・ないで」
飛鷹の最期の願いに、隼鷹は苦しそうに顔をゆがめ、泣きながら

うなずいた。
隼鷹は立ち上がり、泣きながら飛鷹に敬礼する。
「・・・飛鷹・・・さようなら・・・ゆっくり・・・休んでね」
「そう・・・させて・・・もらうわ」
飛鷹の返事を聞くと、隼鷹は静かに夜の闇に消えた。
残された他の艦魂達も血まみれになってぐったりしている飛鷹に敬礼をして去る。
「飛鷹・・・天国に行ったら・・・お姉ちゃんに伝えて――必ず仇は討つからって」
「了解・・・しました。瑞鶴さん・・・お元気で・・・」
瑞鶴は泣きながら敬礼してその場を去る。長門達も消え、瑞鳳以下他の空母達もいなくなった。燃える甲板に残されたのは大和だった。
飛鷹は残った自分よりもずっと上の上官に、最期の頼みをする。
「大和さん・・・長谷川大尉に伝えてください――姉をお願いします、と」
「わかりました。飛鷹さん・・・また来世で会いましょう・・・」
「はい・・・その時は・・・平和な日本であって・・・ほしいです・・・」
その言葉を最後に、飛鷹の瞳は永遠に閉じられた。
燃え盛る火の海の中、大和は飛鷹に向かって敬礼して去った。直後、『飛鷹』は連続的に爆発を起こしその艦体をゆっくりと沈め始めた。そして、ついに『飛鷹』はマリアナの海に轟音と共に消え去った。
――空母『飛鷹』、低速な商戦改装空母という身でありながらもミッドウェーの大敗北の後足りなくなった空母を補う為に力戦奮闘して機動部隊の主力まで上り詰めた歴戦の空母。姉艦『隼鷹』に比べてその活躍の機会は少なく、いつも悲劇に見舞われていたが、その激動の歴史はどんな空母にも負けないほど壮絶なものだった。そ

んな『飛鷹』の艦魂は、幼い姉よりも大人びていて、機動部隊艦魂の参謀として活躍。規律に厳しく、特に階級は絶対的だと信じていた。姉の幸せを誰よりも強く願い、子供っぽい姉を常に支え続けたとても姉想いな妹。そんな飛鷹はその激動の歴史に終止符を打ち、マリアナの海深くで永遠の眠りについた――

『飛鷹』沈没後、すぐに艦魂達は作戦会議を開いた。だが、多くの仲間を失った影響で会議はまともに進行できなかった。

金剛も、今回だけは何も文句を言う事はなかった。

そんな艦魂達がまともな会議もできずにいる頃、榛名と武蔵はいまだに気絶して眠っている翔輝の看護をしていた。

布団の中で苦しそうに唸る翔輝を、武蔵が青ざめた顔で見詰めていた。

「おい武蔵。落ち着けよ。別に長谷川が死ぬわけじゃねぇんだし」

「・・・そ、そうだけど」

武蔵は翔輝の脂汗をタオルで拭きながらおろおろする。常の彼女とは思えないほどのうろたえぶりだった。そんな常とは正反対な武蔵を見詰めて榛名は呆れる。

「まったく、お前は戦局がどう動こうが冷静に判断する指揮官なのによ、長谷川が絡むと本当にダメな奴だな」

「・・・だ、だって」

「だってじゃねぇ。少し落ち着け」

武蔵は無理に無表情をつくるが、一分も経たないうちに再び部屋をうろうろする。榛名は呆れてまたため息する。その時、今まで眠っていた翔輝がゆっくりと目を覚ました。

「長谷川！」

「・・・翔輝！」

二人は慌てて翔輝に駆け寄る。すると、翔輝は辛そうに頭を押さえながら二人を見詰める。

「あぁ・・・榛名、武蔵・・・僕・・・一体・・・？」

「覚えてねぇのか？　お前飛鷹の前で急に気を失ったんだぜ？」
「――そうだ！　飛鷹は！？　彼女はどうなったの！？」
翔輝が慌てて訊くが、返って来るのは最悪の返答でしかなかった。
「『飛鷹』は・・・一時間前に・・・沈んだよ」
榛名の返答に翔輝は瞳を大きく見開いた後肩を落とした。その瞳に涙が浮かんでいた。
「そっか・・・飛鷹が・・・」
落ち込む翔輝を元気付けようと、榛名はあえて明るく振舞う。
「んまぁ、飛鷹は元々戦争には向いていないタイプだったし、あいつとしてはこの方が良かったと――」
「いい訳ないだろ！」
突如翔輝は激昂して榛名の襟首を掴んだ。睨みつける彼の瞳はそれだけで人を殺せそうなほど鋭く、凶悪なものだった。怒りに理性が吹き飛びそうな、そんな殺気が感じられた。翔輝のそのあまりの迫力に榛名も恐怖する。
「は、長谷川・・・？」
「――ご、ごめん」
少し怯える榛名の瞳を見て翔輝は我に返り、慌てて手を離した。手を離された榛名は軽く咳き込む。
「な、何すんだよぉ・・・」
その言葉は責めたのではなく、ただの彼女の強気な言葉だった。榛名の目は少し怯えていた。そんな彼女に翔輝は謝る。
「ごめん。悪かった――でも、死んでいいなんて・・・言うもんじゃない」
翔輝の言葉は、心の底からの想いだった。そんな彼の言葉には重みがあり、榛名は力なくうつむく。
「悪かった・・・」
「いや、榛名が謝る必要なんてないよ。悪いのはこっちだし」
それを最後にお互いに黙る。そんな気まずい雰囲気の二人の間に武蔵が入る。

「・・・それより、翔輝。もう動いて平気？」
「うん。ごめんね。心配かけて」
「・・・ううん。翔輝を心配するのは当然の事だから」
上目遣いで見上げる武蔵は本当に心配していた。そんな彼女に翔輝は心配掛けまいと笑顔をつくろうとした時、頭を締め付けられるような頭痛がした。
「うぐッ！」
「・・・翔輝！？」
「だ、大丈夫・・・心配しないで・・・」
「・・・でもッ！」
「本当に・・・平気だから・・・」
翔輝はしばらく苦しそうに頭を押さえていたが、徐々に痛みも引いた。
「ほら、もう平気だからさ」
翔輝は笑顔で言う。そんな彼を武蔵はしばし見詰めていたが、大丈夫そうだと判断すると胸を撫で下ろした。その時、タイミング良く大和達が戻って来た。翔輝の姿を確認すると、大和は慌てて駆け寄る。
「大尉！　もう動いて平気なんですか！？」
「あ、うん。大丈夫だよ」
「良かったぁ・・・」
大和は本当に嬉しそうな顔をする。そんなかわいい大和を見て、翔輝も安堵したのか自然と笑みになった。
「ごめんね。私の不注意のせいで」
長門が申し訳なさそうに謝る。その瞳は本当に申し訳ないという思いでいっぱいであった。そんな彼女を翔輝が不思議そうに見詰める。
「何で長門さんが謝るんですか？」
「死に掛けている飛鷹の所にあなたを連れて行ったらどうなるかくらい簡単に予想できたのに」

「長門さんの責任じゃありません。僕が情けないのがいけないんですから」
「そんな・・・」
「まぁいいじゃねぇか。長谷川もいいって言ってんだしよ」
榛名がその豪快な性格で間に入ったおかげで話はひと段落した。
翔輝は笑みを浮かべ合う皆を一瞥し、ふと時計を見詰める。
「そろそろ艦橋に戻らないと」
「え？　でも・・・」
「今は作戦中だ。こんな事ぐらいじゃ休めないよ」
「・・・そう、ですよね」
大和も一応納得するが、その顔は苦渋の決断をしているように見えた。
翔輝は上着と軍帽を着直して部屋を出る。その後を大和と武蔵が続いた。その時、
「待って長谷川君。ちょっとお願いがあるの」
「何ですか？」
声掛ける長門に振り向くと、長門が懇願するような眼差しを向けていた。
「仕事を終えたら――隼鷹の所に行ってほしいの」
「隼鷹に？」
「えぇ、彼女は、実の妹と姉のように慕っていた翔鶴を亡くしているからね。今回一番苦しんでいるのは、きっとあの子なのよ」
「・・・わかりました」
「それから大和。あなたは瑞鶴の所に行って。あの子も、実の姉を失ったからね」
「そうですね。わかりました」
大和はそう答えて消え、武蔵と翔輝は去った。残された長門達もそれぞれ自艦に戻った。
『瑞鶴』の艦長室（現在瑞鶴の部屋）には大和と瑞鶴が肩を寄せ

合っていた。
　月の光に照らされる瑞鶴の表情は憔悴し切っていた。それはそうだろう。姉を失い、仲間を失い、友を失ったのだから。精神的にも肉体的にも疲弊し切っている。
「大丈夫？　瑞鶴」
「うん。平気だよぉ」
　大和の言葉に瑞鶴は無理して笑みを浮かべるが、そんな表面だけの笑顔は彼女の親友である大和には丸わかりだった。
「無理して笑わなくていいよ。悲しい時は悲しんだ方がいいよ」
　大和の言葉に、瑞鶴は少し目を見開いて驚いたような顔をする。
「・・・大和からそんな言葉が出るとは思わなかったなぁ」
「そうでしょうね。これは大尉が以前私に言った言葉だから」
「なるほどね。長谷川大尉が言った事なら説得力があるよね」
「そうだよね」
　そこで二人は黙ってしまう。お互いに何を言っていいのかわからず、二人とも沈黙したまま時間だけが過ぎた。大和が何か話し掛けようと模索していると、瑞鶴の方が重い口を開いた。
「私・・・ずっと姉さんと一緒だった。いつもいつも、あの頼りになる背中の後ろで戦って来た。南太平洋海戦後半で一人になった時、すごく不安だったの。姉さんがいないだけですごく海が怖いと思った。だから、私はずっと姉さんの後ろにいたいって思った。この背中にいれば、怖いものは何もない。そう思えたの」
　そう言う瑞鶴の表情は暗く、闇に怯える子犬のように弱々しかった。
「そんな怖い海しか、私には残されてないの。暗い闇の中しか、もう私に残ってないの」
　いつの間にか、彼女の瞳からは涙が流れていた。ぽろぽろと流れ出る雫を拭こうともせず、苦しそうな表情のままだった。そんな瑞鶴の手を、大和はそっと握る。
「そんな事ないよ。あなたにはまだ瑞鳳や隼鷹達も残ってるし、私

や長門さん、長谷川大尉だっているんだよ？　あなた一人じゃないよ」

「そうだけど・・・でも・・・」

「・・・そんなに私って・・・頼りないかな？」

少し自信なさげに言う大和に、瑞鶴は首をブンブンと横に振って否定する。

「そんな事ないよ！　そんな事ないけど・・・」

うつむいてしまう親友の頭を、大和はそっと撫でる。

「確かに、翔鶴さんに比べたら私なんて全然頼りないかもしれないけど、でも、瑞鶴を大切だと思う気持ちは負けてないよ。みんなも、私も」

大和の優しい言葉に、瑞鶴はぽろぽろと涙を流す。

「大和・・・ありがとう」

瑞鶴はそっと大和を抱き締めた。大和も彼女を抱き締め、お互いの存在を感じ合う。

瑞鶴にはわかっていた。大和だって本当は辛いのだ。翔鶴との付き合いはかなり長い方だ。それなのに辛い気持ちを抑えて自分を励ましてくれている。ほんの少しとはいえ自分の方が年上なのに。そんな彼女に、瑞鶴は本当に感謝した。

「そうだよね。私にはまだ大和がいるもの」

「あんまり頼りにならないけどね」

「そんな事ないよ。すごく頼りになるよ」

「ありがとう」

大和の笑顔に、瑞鶴は微笑んだ。

まだ心は痛いが、大和が傍にいるので瑞鶴の表情は柔らかかった。

その夜、瑞鶴は大和に頼んで一緒の布団で眠った。その時の二人の手は、しっかりと握り合っていた。

深夜、休憩の時間に貝塚は自室に戻って来ると、そこにはベッドで気持ち良さそうにお互いの手を握りながら眠っている大和と瑞鶴

がいた。
「何だ。今日は女の子同士で寝てたのか」
貝塚は微笑みながら近づくと、そっとめくれている布団を掛け直してやる。
「こうしてるとかわいいもんだな」
寝息を立てている瑞鶴を見詰め、貝塚は柔和な笑みをする。
「お前には、こんなに優しい親友がいるんだ。辛いだろうが、元気出しな」
貝塚はそうつぶやくと、そっと部屋を出て行った。

同時刻、翔輝は『隼鷹』にいた。その横には長門がいる。
「じゃあ、お願いね」
「はい」
長門は翔輝にそう言うと、光となって消えた。残された翔輝は目の前にある扉を開ける。そこは隼鷹の部屋だった。
部屋に入ると、窓から注ぐ月の光だけが部屋を照らし上げていた。その部屋の奥には一つベッドがあり、そこには隼鷹が横たわっていた。
近づくと、隼鷹は小さな寝息を立てて眠っていた。その顔は涙でぐしゃぐしゃになっていた。どうやら泣き疲れて眠ってしまったらしい。
「・・・寝てたのか。こりゃ僕は必要ないな」
翔輝は頭を掻いて困ったよう表情を浮かべる。これでは自分がここにいる意味はない。どうやって帰ろうか迷っていると、
「う・・・うぅん・・・お兄ちゃん・・・？」
小さな声を上げて隼鷹の瞳が小さく開かれた。
「あ、起こしちゃった？」
翔輝が謝ろうと彼女と同じ視線の高さにする為に腰を下ろした瞬間、
「お兄ちゃん！」

「うわッ！」
隼鷹は突如ベッドから飛び出して翔輝に抱き付いた。翔輝はその衝撃に耐えきれずにそのまま押し倒された。
「隼鷹。いきなり何す――」
翔輝の言葉はそれ以上続かなかった。
「ひぐっ・・・ううっ・・・」
――隼鷹が、泣いていたから。
「お兄ちゃん・・・お兄ちゃん・・・ッ！」
「隼鷹・・・」
隼鷹は翔輝の胸の中で泣いていた。ギュッと翔輝の服を掴み、胸に顔を埋める。そんな彼女の嗚咽に、翔輝は何も言えなかった。
「翔鶴お姉ちゃんが・・・飛鷹までえええええぇぇぇぇぇッ！」
泣き叫ぶ隼鷹を、翔輝は慌てて抱き締めた。
「落ち着いて！　隼鷹！」
「いやあああああぁぁぁぁぁッ！」
取り乱す隼鷹を抱き締めて落ち着かせるが、隼鷹は全く落ち着かなかった。小さな女の子とはいえ、相手は艦魂。その力はかなり強く、翔輝は押されて二人は徐々に移動した。その時、部屋の隅に置いてあった本棚にぶつかり、棚の上から分厚い本が落下。不運にもそれは翔輝の頭に直撃した。
「ぐあッ！」
あまりの激痛に翔輝は頭を押さえた。だが、それが隼鷹を我に返らせた。
「お、お兄ちゃん！　大丈夫！？」
隼鷹は慌てて翔輝の上を降りて心配する。そんな隼鷹に翔輝は目の縁に涙を浮かべながら笑顔をする。
「良かったぁ。落ち着いた？」
「う、うん・・・」
一度落ち着いてしまえばもう暴走する事はなかった。
翔輝と隼鷹はベッドに腰を下ろした。

月の光に照らされる彼女の表情は暗く、常に太陽のように明るい彼女とは似ても似つかないものだった。
「隼鷹・・・大丈夫？」
「わかんない・・・何にもわかんないよぉ・・・」
「そっか。無理しないでね」
「・・・ねぇ、お兄ちゃん」
「うん？　何？」
翔輝が隼鷹を見詰めると、隼鷹は小さな声でつぶやいた。
「もう・・・翔鶴お姉ちゃんや飛鷹は・・・帰って来ないのぉ？」
隼鷹の言葉は真剣だった。生まれたばかりで子供っぽい彼女は本気で訊いていた。
――死んだ人は二度と帰って来ないというのに。
隼鷹は自分の言った事を否定してほしいという目で哀願している。だが、翔輝は彼女の期待には答えられなかった。
「あぁ、もう帰って来ない。永遠にな」
翔輝の言葉に隼鷹は再び動揺する。
「そんなの嫌だよ！　飛鷹達は帰って来るもん！」
「帰って来ないんだよッ！」
翔輝の突然の大声に隼鷹はビクリと震える。そんな隼鷹を見詰める翔輝の瞳は濡れていた。
「帰って・・・来ないんだよぉ・・・」
「お兄・・・ちゃん・・・」
忘れていた。自分だけで精一杯で忘れていたが、翔輝は自分よりもずっと前に家族を亡くしている。その彼だって、帰って来てほしいと願ったはず。でもそれは叶わぬ幻。そんな彼にこんな愚問をするなんて。隼鷹は自分を責めた。
「帰って来ないんだ。帰って、来ない・・・」
翔輝の涙を流しながらの言葉に、隼鷹はうつむく。
「ごめんなさい・・・」
こんな自分が嫌だった。

誰の力にもなれず、人に迷惑を掛けるしかできない。そんな自分が嫌だ。

落ち込む隼鷹の頬を、翔輝はそっと撫でる。

「隼鷹。死んだ人は帰って来ない。それは変えようがない事実なんだ」

翔輝の言葉に、隼鷹は涙する。そんな隼鷹を、翔輝は無言で抱き締める。そんな彼の胸で、隼鷹は泣いた。

大好きな翔輝の腕の中だからだろうか、徐々に温かなものが胸を満たした。それはまるで自分を励ますかのように、温かく、優しいもの。

しばらくして泣き終わる頃には、隼鷹は少し明るさを取り戻していた。

「ありがとう、お兄ちゃん。私を心配してくれて」

「気にするな。当然の事だろ？」

翔輝の言葉に隼鷹は嬉しそうにうなずく。その笑顔はまだ暗いものがあるが、いつもの彼女の笑顔であった。すると、隼鷹は翔輝の服の裾をちょこんと掴む。

翔輝が不思議そうに見詰めると、隼鷹は上目遣いに翔輝を見詰め返す。

「お兄ちゃんに、お願いがあるの」

「お願い？」

「うん――今日は、一緒に寝てほしいの」

隼鷹の言葉に、翔輝は素直にうなずいた。

一人でいるのが怖い。そんな経験を彼もした一人だったからだ。

隼鷹は翔輝の隣で目を閉じた。思い出すのは翔鶴と飛鷹の笑顔。もう戻らない笑み。そんな笑みに苦しむが、自分の隣には翔輝がいる。それだけで、隼鷹は戦える。そう思いながら静かに眠った。

翌朝、翔輝は隼鷹に送られて『大和』に戻った。艦橋では宇垣が艦隊決戦で殲滅しようと豪語していたが、それは叶わぬ夢でしかな

かった。

マリアナ沖海戦は終わった。

結果は日本側の圧倒的な大敗北だった。

米軍は沈没した艦はなく、戦艦、空母、重巡洋艦のそれぞれ二隻ずつの小破程度の損害に留まったのに対し、日本海軍は空母『大鳳』『翔鶴』『飛鷹』沈没。戦艦『榛名』、空母『瑞鶴』『隼鷹』『龍鳳』『千代田』、重巡洋艦『摩耶』が損傷。航空機の損失も米軍が一二〇機（うち約八〇機は夜間着艦失敗）に対し、日本海軍は参加機のほとんどの三七八機を失った。これは日本軍の航空機の防御力の低さと搭乗員の練度の低さ、そして米軍の優れたレーダー射撃とＶＴ信管が原因だった。ちなみにＶＴ信管とは直撃して爆発する従来の対空弾ではなく、電波を発しながら飛び、敵機が近くを通っただけで起爆する当時最先端の対空弾だった。これらの要因が重なった結果、日本機の損失は激しかった。さらに空母三隻と運命を共にした艦載機も多く、これだけの損失に繋がってしまったのだ。

第一機動艦隊の壊滅的打撃を受けて豊田連合艦隊司令長官は作戦の中止を決定。

決戦兵力である第一機動艦隊は満身創痍の艦隊を率いて日本に逃げ帰った。

連合艦隊に見捨てられたサイパン島守備隊に希望はなかった。残るは降伏するか徹底抗戦かを迫られたが、守備隊は後者の徹底抗戦を選んだ。

上陸を終えた敵軍に水際で一斉砲撃や突撃を行い、さらにはジャングルの中でゲリラ戦をして徹底抗戦したが兵力、装備面で圧倒的優勢な米軍の進撃は止まらず、守備隊は洞窟を利用した神出鬼没な攻撃で抗い続けた。

だが必死の抵抗も空しく七月七日、守備隊は残存全兵力三〇〇〇人で最後の総攻撃を敢行――全滅した。

守備隊司令官や司令部はその後自決。真珠湾攻撃を成功に導くもミッドウェーで大敗し、その後は得意の水雷戦隊の司令官になる事はなく、中部太平洋方面艦隊司令長官としてサイパン島にいた南雲中将も自決。彼の下にいた司令部も共に大勢自決した。

そして、南太平洋海戦の英雄――闘将角田中将もテニアン島で戦死した。

七月九日、サイパン島陥落。

同島の陥落は、日本軍が死守しようとした絶対国防圏の崩壊を意味していた。

日本本土はついにＢ－２９の攻撃範囲内に位置し、これ以降本土空襲が始まる事となった。

そして何よりこの海戦は、開戦当初世界最強とまで謳われた日本機動部隊の事実上壊滅を意味していた。日本機動部隊は再建不能の大打撃を受けたのだった。

日本はもはや米軍に対抗できる力を失い、これ以降日本の敗北は決定的となった。

マリアナ沖海戦以降、米軍はマリアナ諸島、ウルシー環礁、パラオ諸島を次々に攻略し、確実に日本本土に迫って来ていた。

そして、その勢力範囲は日本の継戦上絶対に死守しなければならないフィリピンまで目前となっていた。

第十一章　第九節　飛鷹の姉への想い　マリアナ沖の大敗北（後書き）

マリアナ沖海戦は日本の圧倒的敗北に終わりました。
これ以降、艦載機を失った日本空母は主力の座を再び戦艦に譲り、集まる気配のない艦載機を内地で待ち続ける事になります。
そして、海戦の主力の座を取り戻した戦艦達も、航空機主力の時代ではすでに時代遅れとなっていました。
それでも、大艦巨砲主義が日本を救う最後の希望となりました。
マリアナ沖海戦が終われば、米軍はいよいよフィリピンに迫ります。
フィリピンは日本の生命線。これを失えば、にほんは戦う力を失います。
そこで、日米両海軍の最後の決戦が行われます。
そして大鳳、翔鶴、飛鷹、刹那を失った大和達はこれからどうなっていくのか。そして日本の運命はどうなるのか。
次章、連合艦隊壊滅編――レイテ沖海戦編がスタートします。
このマリアナ沖海戦よりも多くのキャラが命を落とす戦い、それは悲惨以外のなにものでもありません。

第十二章　第一節　伊勢の涙　日向の決意（前書き）

新たな章に入り、連合艦隊の壊滅編は続いていきます。
この章ではレイテ沖海戦を含めて一気に進みます。
まず最初はレイテ沖海戦が始まるまでの間、ちょっとしたいつもの感じの話を挟み、そしてレイテ沖海戦に流れていきます。
今日はその第一話。どうぞご覧ください。

第十二章　第一節　伊勢の涙　日向の決意

水平線に日が昇り、今日も長い一日が始まった。
リンガ泊地に停泊している戦艦部隊のうちの一隻、戦艦『大和』の忙しい朝が始まった。
起床ラッパが鳴り響き、眠っていた将兵達は次々に起床して着替える。その速度は常人とは違う。すぐに着替え終えると自分の配置に駆け足で向かう。
甲板に無数に増設された機銃座に次々に兵達が配置されていく。その動きを見ていた艦橋の者の顔は皆どこか不機嫌そうだ。
「高角砲、機銃配置良しッ！」
兵が副長に報告すると、副長は時計を止める。そのタイムを見て副長は頭を抱えた。
「総員配置終了・・・時間、九分五四秒」
「ほとんど十分ではないか。これでは敵機が来るまでに対空戦闘の用意ができんなぁ。もう五分短縮するまで訓練を繰り返そう」
森下の判断には全員がうなずいた。
学徒出陣以降特別年少兵の配置が盛んになった。兵員の補充はできたがまだ子供なので質はあまり良くなく、実戦で期待した通りの結果が出せるか不安だった。
森下はため息する。スピードが命の対空戦闘用意に十分もかかるなんて問題外である。確かに少年兵の配置や副砲二基撤去してその分機銃や高角砲を配置したので兵員がより多く必要になったとはいえこれはひど過ぎた。
「かつては日本海軍の精鋭兵が配置されていた私が、今ではこんなに弱くなってしまっているなんて・・・がっかりです」
大和も肩を落とす。そんな彼女の横にいる翔輝は窓から下を見詰めているが、その表情は複雑そうな顔だった。
「大尉？　どうされたんですか？」

「いや、なんかずいぶんと少年兵が増えたなぁって」
「確かにな。多い所じゃ一班の半数以上が少年兵という所もあるからなぁ」
森下がぼやくように言う。そんな彼の言葉に副長はまったくですとうなずく。
「空母では母艦搭乗員が足りないと騒いでいるようですが、戦艦部隊だって他所に兵を移動させたりで兵員が不足してるんです。それを補う為に少年兵の補充をした結果がこれです。吉と出たか凶と出たかわかりませんよ」
副長のぼやきに艦橋の者はうなずく。だが、そんな彼らの反応に一部の者が申し訳なさそうにしている。艦橋任務の少年兵達である。それに気づいて翔輝が苦笑いする。
「副長。そこの少年兵達が落ち込んでますよ」
「あ、すまんすまん」
「それに、僕だって一応少年兵の部類に入るんですよ？」
確かに、翔輝はまだ十九歳。特別年少年兵よりは年上だがまだまだ少年兵という歳だ。だが、そんな翔輝の言葉に副長は苦笑いする。
「それはそうだが、普通少年兵が大尉まで上り詰めるか？」
「それはほら、僕は一応海軍兵学校を航海科目トップクラスで出てエリートコースを歩んでますので。いつかは航海長まで上り詰めますよ」
「調子に乗るなアホ」
航海長に頭を小突かれ、艦橋は笑いに包まれた。そんな翔輝を大和は小さく笑みを浮かべながら見詰めていた。

マリアナ沖の大敗北から一ヶ月あまりが過ぎた。
その海戦で連合艦隊は決戦兵力である第一機動艦隊の主力である空母部隊が壊滅した。最後の切り札とも言うべき空母『大鳳』、歴戦の空母『翔鶴』、改装空母ながらすさまじい搭載機数を誇る『飛鷹』を失った事はあまりにも大き過ぎる。

特に『大鳳』と『翔鶴』は第一航空戦隊という日本海軍の精鋭空母部隊に属していた。両艦を失い、第一航空戦隊は『瑞鶴』だけとなり解体され、『瑞鶴』は第三航空戦隊に編入。軽空母『瑞鳳』『千歳』『千代田』を配下に入れた新たな機動部隊が発足した。

現在マリアナ沖海戦で被弾した艦は内地で修理を行っている。もちろん空母『瑞鶴』『隼鷹』『千歳』『龍鳳』、そして戦艦『榛名』も内地でドッグ入りとなっている。同時に対空兵装の強化を行っているので出てくるのはあともう一ヶ月くらいは先になる予定だ。

現在このリンガ泊地にはマリアナ沖海戦に参加した戦艦『大和』『武蔵』『長門』『金剛』と、タウイタウイに待機していた戦艦『扶桑』『山城』『伊勢』『日向』が先日合流し、連合艦隊の戦艦部隊が勢ぞろいしていた。他にもマリアナ沖海戦を生き残った艦艇がこのリンガやタウイタウイ、ブルネイ、シンガポール、沖縄、内地などに展開している。

そんな中、『大和』は連日の猛訓練に励んでいた。少年兵が入ってからあまりにも機敏さに欠けるからだ。主にこれからの戦いでは絶対に必要な対空戦闘に重点を置いている。

今日もそんな猛訓練を終え、翔輝は大和と一緒に艦橋を出た。

マリアナ沖海戦――翔鶴や大鳳の死から一ヶ月。二人ともそれなりには立ち直っていたが、まだ完全復活とはいかない。特に翔輝はこの二人には特別な思い入れがあった。大鳳（かのん）は短い間だったけれどまるで妹のように大切な存在だったし、翔鶴は自分の事を好きと言ってくれた。どちらも失うにはあまりにも大き過ぎる存在だった。ちなみに翔鶴の告白は彼女の誇りを気にして誰にも話していない。ただ、瑞鶴が戻って来たら話すべきかどうか悩んでいる。

大和はそんな翔輝の不安を身近で感じているので、心配で仕方がなかった。ギュッと握る彼の手はいつになく力ない。そんな彼の小さくなった背中を、大和は泣きそうな目で見詰める。

自分に、彼を元気付ける事はできないのだろうか。

二人とも何も話さずに無言で廊下を歩き続ける。と、

「あ、司令。それに長谷川大尉も」
そこへ現れたのは相変わらず水兵服がよく似合う雪風だった。手に何かの資料を持ちながらパタパタという擬音が合っているような走り方で走ってくる。
「雪風。どうしたの？」
「はい。この資料を連合艦隊艦魂司令部に方へ持っていくようにと言われて」
連合艦隊艦魂司令部。ずいぶん懐かしい名前だ。それは昔大和が政権を握っているまで使われていた艦魂達の首脳組織だ。武蔵が旗艦になってからは代行組織が作られたが、大淀が連合艦隊旗艦に就任すると同時にその武蔵を中心とした首脳組織である極上幹部会（正式名称・連合艦隊極大権限保有最上級幹部会）は廃止されたのだ。まぁ、総理大臣が変わったら衆議院の議員も変わるあれのようなものだ。
「そうだったんだ。じゃあ私が預かるよ」
「え？　ですが・・・」
「これでも私は連合艦隊艦魂司令部の先任参謀よ。どうせその資料も私にも回ってくるものだし」
「そ、そうですか？　ではお願いします」
雪風から大和は資料を受け取ると、それに目を通す。翔輝も不思議そうにそれを覗き込もうとするが、「軍の機密ですから大尉にも内緒です」と怒られてしまう。まぁ、一介の航海士に過ぎない自分には見せられないような内容なのだろう。一瞬見えた差出人が宇垣纏中将と書いてあったので納得はできる。きっと武蔵経由で回ってきた極秘書類なのだろう。
「へぇ、やっぱり軍の機密とかも管理してるんだね」
「そりゃそうですよ。それとも何ですか？　私達艦魂は仕事もしない無能の集まりだとでも言いたいんですか？」
「そ、そんな事言ってないだろ」
「どうでしょうか？」

「何だよ」
「お二人とも、ケンカはやめてください」
雪風がおろおろとしながら仲裁に入り、二人は一応黙る。そんな二人を見て雪風はふぅ、とため息を吐く。
「お二人は本当に仲がいいんですね」
「そ、そうかな？」
「そ、それはどういう事ですか！　私達の仲は艦魂一の良さではないですか！」
「・・・それは違う」
『うわぁッ！？』
突然の声に驚いて振り返ると、そこにはじっと見つめて来る武蔵がちょこんと立っていた。
連合艦隊旗艦という役職を降り、極上幹部会も廃止された今では武蔵は連合艦隊艦魂司令部参謀長という大和政権の頃の役職に戻っていた。肩に掛けた金色の飾り紐（飾緒と言う）もずいぶんと懐かしい。
「む、武蔵？　どうしたの？」
「・・・姉さんの言った事には大きな間違いがある」
「え？　そうなの？」
翔輝の問いに武蔵はコクリとなぜか力強くうなずく。無表情の中で輝く瞳だけは力強く輝いている。
「・・・艦魂一仲がいいのは、私と翔輝。私達は一心同体、以心伝心」
翔輝は予想通りな事を言う武蔵に頭を抱える。そして、この後に起きる事態を予想し、ため息を吐く。
「ちょッ！　何よそれぇッ！　大尉と一番仲がいいのは私なんだから！」
もう予想通り過ぎて頭が痛くなるような反撃をする大和に、翔輝はまたため息する。
「・・・哀れね。妄想でしか生きられない哀れな姉」

「い、言わせておけば・・・ッ！　表に出なさい愚妹ッ！　決着をつけてやるわッ！」
「・・・了承。勝った方が翔輝と最も親しい関係」
「いいわよ！　その条件呑んだ！」
「あのさ、当事者である僕の意見は無視？」
「まぁ、どうせ私が勝つけどね！　こう見えても私だって日々の修行は忘れてないんだから！」
　それはきっとついこの前まで金剛に精神がたるんでると怒鳴られて無理やりやらさせていた早朝の素振り一〇〇〇回の事だろう。あれは鍛錬というよりは拷問だったな。泣きながらやってたし。
「・・・おもしろい。翔鶴が亡き今、私は国士無双の強さを持つ。力も、頭脳も」
　確かに、翔鶴こそ連合艦隊艦魂最強の武人であった。彼女に勝てるような艦魂や人間は今まで会った事がない。今では金剛、榛名、武蔵の三人が頂上決戦とも言うべき強さの持ち主達だ。正確には強さだったら金剛や榛名の方が上だが、その直情的な性格からよく武蔵の計略にはまったり、隙を突かれたりするので負ける事が多い。まぁ、真正面から戦ったら武蔵もだいぶ苦戦するだろうが。
　とにかく、そんな相手にも互角以上の戦いができる武蔵に大和が勝てる可能性は奇跡でも起きない限りないし、どちらかというと武蔵の方が奇跡は味方する事は多い。この勝負は最初から勝利者が決まっている。勝利者はもちろん武蔵だ。
「長谷川大尉の為にも、負けられない」
「・・・翔輝、必ず勝って、愚姉の束縛を解いてあげる」
　そんな言葉を残して立ち去ろうとする二人の頭を翔輝は引っ叩いた。
「姉妹は仲良くしろ。いいな？」
「これは私達の問題です・・・」
「・・・私達は一度決着をつける必要がある」
　そう言って再び睨み合う二人に、翔輝は大きくため息すると頭を

掻いた。彼が頭や頬を掻く時は大抵困った時の仕草だ。長年一緒にいた大和や武蔵、そして雪風も彼のその仕草に気づく。

「で、でも姉妹は仲良くするべきですよ」

多くの姉や妹を持つ雪風は翔輝を援護するように言う。だが、

「雪風。あなた、こんな妹がいても同じ事が言える？」

大和の言葉に雪風は「うっ・・・」と言葉に詰まる。誰が計測したかわからないが、全艦魂の中で一番妹にしたくない子第一位が武蔵である。それは雪風だって同じ気持ちだろう。翔輝自身は別に武蔵が妹でも問題はないと思っているが（それは彼が好かれているからだが）。ちなみに兄にしたい人ランキングでは翔輝がぶっちぎりのトップだったりする。

「よしわかった」

翔輝は何かを考えたのかそう声を上げて大きくうなずく。そしていまだにいがみ合う二人を笑顔で見詰める。だが、その笑みはいつもの優しいものとは違う。大和はその笑顔に首を傾げるが、武蔵は顔からさーっと血の気が引いた。

「・・・ま、まさか」

「これ以上ケンカをするなら、大和の事は一号艦。武蔵は二号艦と呼ぶ」

「は？　何ですかそれ？」

「・・・お姉様。此度の件は私に全面的な責任があります。申し訳ありません。この通りです」

「って武蔵！？　何でいきなり土下座しているの！？」

いつの間にか見ているのも清々しいほど立派な土下座を炸裂させている武蔵。三人からは見えないが、その顔は脂汗ダラダラで真っ青になっている。

大和と雪風が知らない。誰もが恐れ戦く金剛ですら恐怖しない武蔵が最も恐れるのはもちろん翔輝に嫌われる事だが、その次くらいに恐れている事――それが翔輝から《二号艦》と呼ばれる事なのだ。

「・・・もはや切腹も覚悟の上。何なりとこの愚者に罰をお与えく

ださい」
「な、何がなんだかわかんないけどとりあえず顔を上げて！　私だって悪いんだから罰なんて与えられないよ！　っていうか何で敬語！？」
大和までも土下座してお互いに謝り合うという事態に陥った。それを見て翔輝は安堵したようにため息し、雪風は目の前の状況に混乱していた。
散々謝り合った後、ようやく二人は顔を上げた。
大和はやっぱりどこか不思議そうな顔をしていたが、武蔵は今にも泣きそうな顔をして翔輝に抱きついた。これにすぐ大和が反撃するかと思いきや、武蔵の常とは違う態度に何も言わなかった。
「・・・翔輝。私、ちゃんと謝った。だから――」
「わかったわかった。ちゃんと《武蔵》って呼ぶから」
「・・・翔輝ッ！」
それが引き金だったのか、武蔵はそのまま翔輝の腕の中で泣き出してしまった。これにはさすがの翔輝も大慌て。もちろん事情を知らない大和と雪風はもっと大慌てだった。
この時翔輝はもう《二号艦》って呼ぶのはやめにしよう、と硬く決意した。
その後武蔵が泣き止むまで三人はその場を動けなかった。
泣き続ける武蔵を抱きながらため息する翔輝を見て、大和と雪風は互いの顔を見合って苦笑いした。

その日の夜、戦艦『伊勢』のどこかにある伊勢の部屋では伊勢が一人やる気の炎を燃やしていた。
三日前にやっとの想いで『大和』と合流できた。
きっとマリアナ沖海戦で翔鶴や大鳳、飛鷹を失って翔輝は悲しんでいるだろう。そんな彼を癒してあげようと考えていた伊勢は、ようやくその作戦を実行する用意が整った。
「明日、見ててぇな。長谷川はんの心をウハウハにしてやるんやぁ

！」

気合を入れる伊勢が見詰める先にはマリアナ沖海戦の後に翔輝を喜ばせる為に必死に考えて作成（艦魂の力で）したある物がある。それが今回の切り札だ。

「これで長谷川はんもうちにメロメロ！　最近出番が少なくなって来たけど、ここで盛り返してみせるんやぁッ！」

最近どうも目指す京都弁から大阪弁に侵食され始めている伊勢だが、その翔輝を想う気持ちは誰にも負けないほど強い。

「今までは大和はんや武蔵はんに譲ってきたけど、うちの本気を見せてやるんやぁッ！」

その日、伊勢の隠しきれない笑い声に、一緒に寝ようとドアの前まで来た日向は怖がって抱いていた枕を捨てて逃げ出した。

翌日、いつものように対空訓練を終えて翔輝は防空指揮所で涼んでいた。

森下はなかなか伸びない配置時間に頭を悩ませていた。彼の気持ちは痛いほどわかる。自分だって開戦時からずっと『大和』に乗っているが、明らかに兵達の質が落ちている事は感じていた。

まぁ、おかげで最近は自分より若い人が大勢いて少し気が楽になったのは確かだが。

それとマリアナ沖海戦以降足りなくなった兵の補充として『大和』や他の艦から兵達が引き抜かれていた。翔輝の属する航海科も人員を割かれ、今は一人一人の仕事の配分が多くなっている。特に翔輝は先任航海士という普通より上級役職なので仕事の量も多い。

最近はそのあまりの仕事量に疲れがたまっていた。自然とため息が増えてしまう。

「あぅ・・・疲れた・・・」

肩をトントンと軽く叩く。最近はあまりの忙しさにこの歳で肩こりが大変になっている。

数少ない心和む場所、それがこの海や空を一望できる防空指揮所。

ここにいるだけでいつもの疲れが癒される。
蒼い海を見詰め、翔輝は小さくため息した。それは疲れの為ではない。この海の向こうに消えた多くの少女達に向けられた悲しみのものだった。
この海の向こうで、翔鶴と大鳳、飛鷹が死んだ。あっちの海は霧島と比叡が、向こうの海では赤城達が、そっちの海の向こうで、陸奥が死んだ。
たった三年も経っていない間に、多くの仲間を失った。
特に霧島、陸奥、翔鶴、大鳳は翔輝の心に深い悲しみを与えた。この四人はあまりにも翔輝に近すぎる存在だったのだ。
「みんな・・・元気に・・・してるかな・・・」
今も思い出せる陸奥の満面の笑み、霧島の優しげな瞳、自分に好きと言ってくれた翔鶴の瞳、クイッと袖を引かれる感触と共に小さな笑みを浮かべる大鳳。
何もかも、今でも鮮明に思い出せる。
胸が苦しく締め付けられるような痛みがする。
どうして自分のまわりの皆が死んでいくのか、それが悔しくて、悲しくて仕方がない。
「・・・翔鶴・・・大鳳・・・陸奥・・・霧島・・・みんな・・・」
うつむく翔輝。その瞳からはぽろぽろと涙が流れた。
翔輝は慌てて袖で涙を拭き取る。
泣かないって決めてたのに、やっぱり自分は情けない。こんな情けない自分が嫌で仕方がなかった。
こんな情けない自分を、誰にも見られなくて良かった。そう安堵した時だった。
「長谷川はん」
その独特な呼び方とゆっくりとした口調ですぐに誰かわかった。
翔輝は慌てて顔に笑顔を貼り付けると振り返り・・・
「え？　い、伊勢・・・？」
翔輝はその後の言葉を失った。

「えへへ、うち・・・似合うん？」
そこにいたのは照れたような笑みを浮かべた伊勢。だが、その姿はいつもの第一種軍装ではなく、優雅な、ゆったりとした、白地に桜の木と花が描かれた美しい着物を着ていた。
翔輝が知る艦魂の中で最も大和撫子という言葉がピッタリな伊勢が着物を着ると、その美しさは桁違いだった。
「あ、う、あ・・・？」
どう言葉を切り出すべきか困惑する翔輝に、伊勢は笑みを浮かべたままそっと近づく。たったそれだけなのに、翔輝の顔はさらに真っ赤に染まる。
「ねぇ長谷川はん。うち、この着物似合ってるん？」
「あ、いや、に、似合ってるよ」
「ほんまぁ？　うち嬉しいわぁ」
頬を赤らめて本当に嬉しそうな笑顔を浮かべ、伊勢は翔輝に抱きついた。その瞬間甘くいい匂いがし、黒く美しい髪が頬を撫でる。
「ちょ、ちょっと伊勢！」
「うち、長谷川はんに喜んでもらいとうて化粧までしたんやでぇ？　こんな姿、金剛はんに見られたら一大事やなぁ」
「そ、そりゃそうでしょ」
「せやけど、うちがこんな姿見せるんは長谷川はんだけやよ？」
「そ、そうなの？」
「当たり前やんかぁ。だってうち、長谷川はんの事大好きなんやもん！」
キラキラした瞳でそう言うと、伊勢は満面の笑みを浮かべて翔輝にギュッと抱き付く。大和や武蔵にはほとんどない柔らかな二つの感触に、翔輝は顔を真っ赤にして慌てる。
「ちょ、ちょっと伊勢！　離れてよ！」
「嫌や。うちは長谷川はんを放しとうないもん」
「放してってばッ！」
必死に放れようとする翔輝に、伊勢はうるうるとした上目遣いで

見詰める。
「長谷川はん、うちの事嫌いなんか？」
泣きそうな目で見詰める伊勢に、翔輝はあわあわと慌てる。
「い、いや、そんな事ないけど・・・ッ！」
「長谷川はんは、うちの事好き？」
「え？　あ、いや・・・」
「好きなんか？」
子犬のようなうるうるとした瞳に、翔輝はもう大慌て。基本的にこういう状況に恐ろしいほど弱い翔輝は大慌て。
「す、好きだよ」
「ほんまッ！？」
「う、うん」
「うち嬉しいわぁッ！　長谷川はん大好きやぁッ！」
「うわぁッ！」
抱き付いたまま跳ねる伊勢の力に押され、翔輝はバランスを崩して倒れてしまう。もちろん伊勢と共に。
倒れた向きのせいで伊勢が下、翔輝が上に来る形に倒れたので、一見しただけではまるで翔輝が伊勢を押し倒したように見える。
「あ、ご、ごめん・・・」
「え？　あ、うちは大丈夫どす」
顔を赤らめる伊勢に翔輝は慌てて退こうとする。と、その最悪なタイミングに現れたのは・・・
「あ・・・」
その小さな声に振り返ると、そこには顔を驚愕一色に染めている雪風がいた。
「ゆ、雪風・・・？」
「そ、そんな・・・長谷川大尉と・・・伊勢さんが・・・」
雪風は泣きそうな顔で背を向け、逃げ出すように防空指揮所を出て行った。なんであんな悲しそうな顔をして出て行ってしまったかわからないが、翔輝は慌てて彼女の後を追おうとする。が、

「ダメやぁッ！」
「うわッ！」
立ち上がろうとした翔輝を伊勢が抱き付いて再び翔輝は押し倒される。
「い、伊勢ッ！　放して！　雪風を追わないとッ！」
「嫌やッ！　長谷川はんはいつもそうやってどっかに行ってしまうんやッ！　うちが傍にいてって言っても行ってしまう！　もう、うちは長谷川はんに見捨てられたくないんやッ！」
「伊勢・・・」
いつの間にかぽろぽろと涙を流しながら必死に抱き付く伊勢。その顔からは心の底からここにいてほしいという想いが伝わって来る。
ギュッと強く抱きつき、逃がさないと必死になっている。
「うちは、大和みたいにいつも一緒にいる訳でもないし、武蔵みたいに長谷川はんの力にはなれんし、陸奥みたいに積極的にはなれへんし、隼鷹みたいに長谷川はんを癒す事もできへん。うちは何にも取り得がないんどす。せやけど、うちはほんまに長谷川はんの事が好きなんや。ずっと傍にいてほしい。こんな事も思ってはあかんのか？　うちにそんな人並みの幸せを願う権利なんてないんか？」
ぼろぼろと涙を流しながら自虐的な言葉を繋げる伊勢。その白い頬を流れる雫は、今まで彼女が耐え続けてきた不安や苦しみを少しでも表しているかのようだった。
「そんな事ないよ」
やっと出せた言葉がそれだった。
「そんな自分を責めるような事言うなよ」
「だって、長谷川はんがうちをいつも置いて行かれるから」
「そんなつもりはないよ。僕は誰も見捨てない。誰も傷つけたくない。だから、伊勢を見捨てたなんて事は一度もないよ」
翔輝の言葉に、伊勢は聞きたくないと言わんばかりに首を横に振る。
「長谷川はんはいつもそうや。そうやってみんなの事ばかり考えて、

私個人の事なんか全然考えてくれへん！」

「そんな事ないよ！」

翔輝が怒るような声で反撃の声を上げるが、伊勢は小さく首を横に振ってそれを否定する。

「長谷川はんは助けを求めている人がいたら放っとけずに助けに行く。それはあんたが誰よりも優しいからや。でも考えてみてぇな。あんたが誰かに手を伸ばしている間、他の子は誰も守れないんやで？　あんたは誰でも助けようとする。でもそれは中途半端な優しさや。そして、中途半端な優しさは、必ず誰かを傷つける。わかるか？　それとも、あんたはこんな事もわからんほどのお人好しなんか？」

声はのどに貼り付き、身体は動かす事もできず、ただ伊勢の顔を見返していた。何も言えなくなり、何か言う権利なんかないと思えた。ただ愕然とし、伊勢の言葉を何度も何度も反芻し、自分のした事を考える。

その沈黙は、伊勢を失望させるには十分な時間だった。

震える声が、翔輝に告げる。

「・・・それは、全然優しさなんかやない・・・ものすごく・・・ものすごく！　残酷な、事なんやで」

伊勢はそう言い残すと、そのまま光輝いた。

身体を戒める重さがなくなったとき、彼女の姿はどこにもなかった。

翔輝は身体を起こすが、その身体は鉛のように重かった。

「・・・結局・・・また僕は・・・傷つけたのか・・・」

小さな声でそうつぶやくと、翔輝はがっくりとうな垂れたまま、しばしそこへ居続けた。

伊勢と初めてのケンカから部屋に戻ると、そこには翔輝を驚かせるのには十分な光景が広がっていた。

「・・・おかえり」

「・・・ッ！　むぐ・・・ッ！」
翔輝は思わず頭を抱えてしまった。
そこには武蔵と、縄でグルグルに巻かれた上に猿轡（さるぐつわ）をされた雪風がベッドの上に寝かされていた。
翔輝はとりあえず武蔵の頭を引っぱ叩いた。
「・・・痛い」
「お前なぁッ！　どうしていつもこういう人間としてやっちゃいけない事をするのかなッ！」
「・・・私、艦魂」
「揚げ足を取るなぁッ！」
翔輝はもう一発引っぱ叩くと、雪風を解放してやる。どうも最近この子はこういった不幸な役目が多い。《幸運艦》と呼ばれているにはかなり運がない子だ。
「大丈夫か？」
翔輝が声を掛けるが、雪風はうつむいたまま沈黙する。
「なぁ、さっき何で逃げたんだ？」
翔輝の問いに、雪風は答えない。ただずっと沈黙を続けるだけ。
そんな彼女に困ったように翔輝が頬を掻いていると、
「・・・先に言っておく」
武蔵はそう話しを切り開くとじっと雪風を見詰める。
「・・・翔輝と伊勢はあなたが思っているような関係じゃない」
その言葉に雪風はガバッと頭を上げる。一方の翔輝は全く意味がわからずきょとんとしている。
「ほ、本当ですか？」
雪風はすがるように武蔵に詰め寄る。武蔵はそんな彼女をしっかりと見据え、コクリと小さくうなずく。
「よ、良かったぁ・・・」
雪風は何かに安堵したのかその場にぐったりと倒れ込んだ。その顔は至極嬉しそうな顔だった。一体今のやり取りの中に彼女がこれほどの喜びを受けるような内容があっただろうかと翔輝は模索する。

「・・・あれは事故。あの女が無理やり翔輝に詰め寄った結果。浅はかな考え」
「そ、そうですか。良かったぁ、本当に良かったぁ」
「ねぇ、何でそんなに喜んでるの？」
「ひゃぁッ！？　い、いえッ！　何でもないんです！　失礼しましたぁッ！」
雪風は翔輝の問いに逃げるようにして部屋を入り口に向かう。出て行く寸前、彼女は武蔵に深々と頭を下げてから出て行った。
武蔵はそんな彼女の行動に口元に小さな笑みを浮かべるが、翔輝はもうちんぷんかんぷんといった具合で首を横に傾け続ける。
武蔵はしばし沈黙していたが、やがて、
「・・・伊勢の事は、いいの？」
そう訊いてきた。その言葉に翔輝は驚く。
「え？　お、お前知ってるの？」
「・・・見てたから。二人のケンカ」
「うぅ・・・だから覗きはダメだって」
「・・・覗きじゃない。翔輝を襲いに行ったらその光景に出くわしただけ」
「あのさ、今セリフの中に危険な言葉が混ざってなかった？」
翔輝は一応ツッコミを入れておくと、心底困ったように頭を抱える。そしてそのままベッドに腰掛ける。そんな彼の横に武蔵は擦り寄って来る。
「また傷つけちゃったよ」
「・・・翔輝のせいじゃない」
「いや、また僕のせいだ。僕がハッキリしない人間だから」
「・・・翔輝は優柔不断だから仕方がない」
「さりげなくひどい事言ったよね？」
翔輝ははぁと小さくため息する。そんな彼の手を武蔵はそっと握る。何を言うでもなく、ただじっと見詰める。
「なぁ、武蔵。僕って最低な男だと思うか？」

「・・・（フルフル）」
「だって、こうしてまた伊勢を泣かしたんだ。最低以外何ものでもないよ」
「・・・翔輝は優しい。だけど、時にその中途半端な優しさは人を苦しめる事になる。今回の伊勢のように」
「・・・やっぱり、僕のせいだ」
「・・・そうじゃない。これは不可抗力。仕方がない事」
「でもさ・・・」
「・・・悩んでも仕方がない。誰にでも優しい、それが翔輝のいい所なんだから」
「武蔵・・・」
武蔵はそっと翔輝に抱き付いた。翔輝は抵抗する事なく、武蔵はそんな翔輝の胸の中でまるで子猫のように丸まる。
「・・・翔輝はもっと自分に誇りを持つべき。翔輝はこんなにもかっこ良くて、かわいくて、優しくて、温かいんだから」
「うーん、途中喜べないような言葉が入ってたけどなぁ」
そう言う翔輝の顔には笑顔があった。どこか吹っ切れたような、そんな笑顔が。
抱き付く武蔵をそっと離し、翔輝は立ち上がる。
「・・・どこへ行くの？」
「もちろん、伊勢の所さ」
「・・・そう」
「武蔵？」
武蔵は立ち上がると翔輝の手をそっと握った。そして、じっと翔輝を見詰める。その表情はどこか嬉しそうだ。
「・・・私が『伊勢』まで連れて行く」
「あ、ありがとう」
「・・・礼なんていらない。翔輝の為だから」
武蔵はそう言うと小さな笑みを浮かべた。
翔輝は知っている。

それが、彼女の最高の笑顔だと。
翔輝と武蔵は手を握ったまま光に包まれて消えた。

一方、伊勢は自室の中にいた。だが、一人ではない。ベッドの上で泣き崩れる彼女を抱くように座っているのは、とても幼い外見をした伊勢の妹――日向。
泣き崩れる姉を、日向は悲しそうな顔で抱き締める。
「うち、長谷川はん何て事を言ってしまったんやぁ・・・ッ！」
伊勢は翔輝に言った事を後悔していた。これでもし彼に嫌われたらと思うと、不安で仕方がない。
「・・・もしも、長谷川はんに嫌われたら、うち・・・ッ！」
「お姉ちゃん・・・」
「嫌や・・・ッ！　それだけは嫌や・・・ッ！」
泣き崩れる姉を見て日向は悲しくなるのと同時に、大切な姉を泣かせた翔輝に対してふつふつと怒りを感じていた。
彼女は知っている。姉がどれだけ彼の事が好きで、彼の為にがんばっているかを。今姉が着ているこの着物も、彼を励まそうと思って用意していたのだ。立ち振る舞いなどの練習をして、本当に彼に喜んでもらえるのを楽しみにしていた姉の姿が昨日まであった。
だが、そのせっかくの着物を着た今日、姉は泣きながら帰って来た。彼とケンカをしたらしいが、聞く限り悪いのは向こうだ。姉は、翔輝に泣かされたのだ。
いくら子供っぽくて温厚な日向とはいえ、大切な姉を泣かされて黙っているような子ではなかった。
その時、ドアがノックされた。二人の視線は自然とドアに向かう。
と、
「あ、あのさ伊勢。僕だよ」
その声に二人の目が大きく見開かれた。だが、伊勢は驚愕と嬉しさが混ざったような表情だが、日向は驚愕と怒りが混ざったような顔。同じ姉妹でも、今の二人は全く違う反応をしていた。

「は、長谷川はん・・・ッ！」
伊勢は彼が訪ねて来て事が嬉しくて、すぐにでもドアを開けようと腰を上げる。が、
「お姉ちゃんはここにいて」
「ひゅ、日向？」
驚く伊勢が見詰める先には、いつもの天真爛漫な笑みを消して、真剣な中にも怒りを混じらせためったに見る事はない妹の本気の顔だった。
日向は言葉を失っている姉を置いて立ち上がると、ゆっくりとドアに向かう。そして、そのままそっとドアを開けると、顔だけちょこんと出す。そういった仕草はやっぱりかわいらしい。
ドアから顔を出すと、そこには案の定翔輝がいた。そしてそんな彼の横には武蔵もいる。きっと彼女がここまで連れて来たのだろうが、武蔵の存在に日向ははらわたが煮えくり返るような感覚がした。
「なぁに？」
自分でもあまりにも冷静な声に驚きながらも、日向はじっと睨むように翔輝を見詰める。
一方の翔輝は出て来たのが伊勢ではなく日向だった事に多少は驚いたが、すぐに常の彼に戻る。
「あ、あのさ日向。伊勢はいないかな？　彼女と話がしたいんだけど」
その言葉にベッドに腰掛けていた伊勢は嬉しそうな顔をした。が、
「いるけど、会わせない」
日向の冷たい言葉に、伊勢はもちろん翔輝と武蔵も驚いた。
「え？　会わせないって・・・中にはいるんでしょ？」
「うん、いるよ。でも会わせない」
「どういう事・・・？」
「ちょっと日向！　あんた何て事を！」
奥から伊勢の声が聞こえたが、日向が一度振り向くとピタリとその声が止んだ。一体何があったのだろうか。

再びこちらを向いた日向は、じっと翔輝を見詰める。そんないつもとまるで違う日向に、翔輝は戸惑いを隠せない。
「あ、あの、日向？」
「ねぇ長谷川君。私ね、お姉ちゃんが大好きなの」
いきなりの話に翔輝は一瞬困惑したが、すぐに話しに付いていく。
「そ、そうなんだ」
「だからね、私、お姉ちゃんをひどい目に合わせる人は嫌いなの」
そう言う日向の言葉には怒りの感情が込められていた。いくら色々と鈍感な翔輝でも、さすがにこのすさまじい怒気には気づいた。
――日向は、ものすごく怒っている。と、
日向は一瞬の沈黙の後一度目をつむった。そして次に開けられた時、その瞳は鋭利な鋭さを持って翔輝を睨み殺すかのような勢いで見詰める。
「私、今ものすごく長谷川君が大嫌いなの。だから、近寄らないで。さようなら。あなたにお姉ちゃんは渡さない。あなたなんかにお姉ちゃんを渡したら、絶対お姉ちゃんは不幸になるもん。だから、さようなら」
そう言って、日向はドアを閉めた。
残された翔輝は、愕然としたような顔をして閉められたドアを見詰める。その横にいる武蔵は一瞬ドアを睨んだが、すぐに彼を心配するように見上げた。
翔輝はショックのあまりその場から動く事ができず、武蔵がそんな彼を『大和』へ連れ帰った。
閉められたドアの向こうでは伊勢が猛烈な勢いで怒鳴り声を上げていたが、日向も泣きながら怒鳴り返し、二〇年以上生きてきた二人はその艦生の中でも一、二を争うほどの大ゲンカとなった。
その日、翔輝は一度も口を開く事はなく、武蔵から事情を知った大和や長門は不安そうに彼を見詰めていた。

第十二章　第一節　伊勢の涙　日向の決意（後書き）

今までメインキャラでありながら他のキャラよりあまり出番が少なかった伊勢、そして本当に出番が全然なかった日向を軸にしたお話はどうでしたでしょうか？

これから約三話で話を進めていく予定です。その後はいよいよレイテ沖海戦に入ります。

この第十二章は前回の第十一章よりも悲惨な話となっていて、書いてるこっちも辛いですが、がんばって書き続けたいと思います。

第十二章　第二節　戦姫復活　榛名師匠の鍛錬（前書き）

ストックが多くなり過ぎて四日続けて更新させていただきましたが、ついに《艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～》も１００部を突破いたしました！　あれ？　前回は２１部だったのにすごい差です。

そして、今回はサブタイトル通り榛名が再び戻って来ます。

第十二章　第二節　戦姫復活　榛名師匠の鍛錬

日向に嫌われてから数週間が過ぎた頃、戦艦『榛名』が修理を終えてリンガ泊地に戻って来た。直撃弾二発を被弾した部分は修理を終え、さらに対空機銃などを増設して対空能力を向上させていた。

戦艦群の中に錨を降ろした『榛名』の第二砲塔の上には被弾という苦境を乗り越えてより強くなった榛名が立っていた。

その姿は前とは幾分か違っていた。

ポニーテールに纏めていたのは今まで茶色い短い紐だったが、純白の長い紐で結っていた。風で髪と共にその純白の紐もゆらゆらと揺れる。腰には軍刀だけでなく短刀と拳銃を構え、首元には炎のように真っ赤な日の丸に力強い文字で《峻烈（しゅんれつ）》と書かれた純白のスカーフを巻いている。風に揺れる余った部分の長いスカーフは今まで以上の勇ましさを彼女から放たれていた。

実に約二ヶ月ぶりの姉達の姿を見詰め、榛名は不敵な笑みを浮かべた。

「・・・やっぱり俺は、前線のこの張り詰めた空気が性に合ってるぜ」

榛名はそう言うと、光に包まれて消えた。

海風が吹き、『榛名』のマストに掲げられた軍艦旗が力強くはためいた。

戦艦群の中央に錨を下ろす『大和』の甲板に集まった艦魂達の前に実に二ヶ月ぶりに戻って来た榛名が現れた。

現れた榛名に少なからず皆驚いた。そんな皆の反応に榛名は満足げに胸を張る。そんな中、先の方にいた長門がぽつりと、

「イメチェン？」

「アホかッ！　んなんじゃねぇよッ！」

榛名は顔を真っ赤にして怒鳴る。格好は多少変わっても、やっぱ

り榛名は榛名だった。
「決意を新たにする為にまず格好から入ったんだよ。悪いかよ」
「悪くはないわよ。でも制服の着方にうるさい金剛が何て言うかしらね？」
「う・・・」
榛名は恐る恐る長門の後ろに立っている自分の姉にして規律の鬼である金剛を見る。と、
「榛名には榛名の考えがあるのだろう。己が志を貫くならば、私は何も言わん」
「あ、姉貴・・・」
「あら、ずいぶんと丸くなったじゃない」
「うるさい」
金剛は少し照れたように頬を赤らめながらそっぽを向く。そんな金剛の姿に長門と榛名は顔を見合って小さく笑った。まわりの艦魂達も嬉しそうに微笑んでいる。
「でも榛名、悪いけど今私達は危機的状況に陥っているのよ」
突如真剣な表情でそう言った長門の言葉に榛名は驚愕する。
「な、何だって！　まさかこのリンガも敵の攻撃を受けたのかッ！？」
トラック、パラオと転々と拠点を変えてきてこのリンガまで後退してきたのに、もうここも危険となれば、一体どこに拠点を置けばいいのか。榛名は悔しそうに唇を噛んだ。が、
「いや、違うわよ。まだこのリンガは安全よ」
「は？　じゃあどっかの重要拠点が陥落したとか？」
「違うわよ」
「大型軍艦が撃沈されたとか？」
「それも違う」
「は？　他に何があるってんだ？」
心底わからないという感じの榛名に、長門は深刻そうな顔でため息する。

「実は、長谷川君の事なんだけど」
「何だよ！　あいつの事でんなに絶望的な顔をすんじゃねぇよッ！　誤解するだろうが！」
　榛名は拍子抜けした様子で身体中に込めていた力を一気に抜いた。何しろ祖国の一大事かと思って聞いていたのにどうでもいい翔輝の話だったというオチだったのだ。笑えないしすっかり肩の力まで抜いていた。
「長谷川のまわりはいつも一大事じゃねぇか。今さら驚く事じゃねぇだろうが」
「そうもいかないのよ。絶交関係が起きてるの」
「あん？　どうせまた大和か武蔵があいつを怒らせたんだろ？　いつもの事じゃねぇか」
「違うのよ。長谷川君が絶交宣言をされたの」
「長谷川が？　誰に？」
「日向に」
「日向ぁッ！？」
　あまりにも予想外な名前に榛名は驚愕する。まさか翔輝のまわりで起きる事件に翔輝派ではない日向が絡むとは、しかも絶交宣言を出したとは到底状況が理解できるものではない。
「かれこれもう数週間も冷戦状態なのよ」
　長門はまだこの時代にはない名称を口にしながら困ったようにため息する。まわりの艦魂達も皆同じように困ったような表情を浮かべている。
「一体何が原因なんだ？」
「それが、どうも最初は長谷川君と伊勢のちょっとした行き違いだったらしいんだけど、謝りに来た長谷川君を日向が追い払っちゃったらしくてね」
「あん？　何だそれ」
　榛名は心底わからないといった感じに首を傾げる。そりゃあそうだろう。長門達ですら状況を把握し切れていないのだから。

「その後伊勢と日向が殴り合いのケンカになっちゃってね。騒ぎを聞きつけた私達が慌てて止めに行ったのよ。それから二人はずっと戦争状態なのよね」
「伊勢と日向が？　あの仲良し姉妹でケンカなんて珍しいな」
「えぇ、その後長谷川君と伊勢は仲直りはできたらしいんだけど、いまだに日向は長谷川君を許してないの。そのせいで伊勢も日向とは引き続き決別状態で、今に至るわけ」
長門はそう説明を終えるとため息した。他の皆も同じような状態なのだ。
ようやくなんとか状況を呑み込めた榛名は「はーん」と興味なさそうな声を上げる。
「で？　その当の二人はどこにいるんだ？」
榛名は集まった艦魂達を見回す。そこには伊勢はいたが翔輝と日向はおらず、それどころか大和と武蔵、扶桑の姿もない。
「あぁ、長谷川君は今日は仕事があったから不参加。残念だったわね」
ニヤニヤと笑いながら言う長門に「なぁッ！？」と顔を真っ赤にさせる榛名。本当に感情が顔に出やすい少女だ。
「ば、バカ！　何が残念だ！」
「あら、そうなの？　ごめんねぇ」
妙に間延びした言い方に榛名は激昂しそうだったが、長門はそれをさらりを回避する。相変わらず話のよけ方がうまい。
「それから武蔵はもちろん長谷川君のお手伝いね。本当に仲がいいのね」
何か引っかかる長門の言い方に榛名は睨む。が、すでに長門は視線を外していた。さすがといおうか何といおうか。
「そして大和は扶桑と一緒に篭城している日向の説得しに行ってるわ」
長門が説明を終えた時、ちょうど大和と扶桑が戻って来た。だが、その顔は明らかに浮かないものだ。

「首尾は？」
長門のわかりきった問いに二人は力なく首を横に振った。
「ダメね。全然出て来ないわよ」
「それどころか返事ひとつ返してきませんでした」
二人の言葉に長門は「そう・・・」とため息しながら答える。
「仕方ないわね。二人ともご苦労さん」
「当然よ。妹の為だもの」
「そうですね。あ、榛名さん。お久しぶりです」
大和は榛名の存在に気づいて慌ててあいさつする。もちろん榛名は「おう」とだけしか返さない。彼女らしいといえばらしいが。
「あれ？　榛名さんいめちぇんしたんですか？」
「だから違うっつーのッ！　新しい心構えだ！　それと英語を使い慣れてないなら無理して使うなッ！　何だその日本語訛りのヘタな英語は！」
「うぅ、そんなにひどいですか？」
それは仕方がない。三〇年近く生きてきた榛名と四年も生きていない大和では英語に触れる機会が桁違いなのだから。
「あら、それなら金剛に教われば？　彼女元がイギリス出身だから英語はペラペラよ？」
「え？　そうなんですか？」
「ふん。そんな不要な言語は当の昔に捨てた」
「あら、照れてるの？」
「だれが照れてなどいるか！」
長門と金剛の相変わらずなコンビを見て、榛名は安心したように小さく笑みを浮かべた。そんな彼女を大和はじーっと見詰める。
「あん？　何だ大和」
「いえ、そのスカーフかっこいいなぁと思って」
「そうか？　ありがとな」
榛名の照れ隠しの言葉に大和はにっこりと微笑む。こちらも相変わらず無垢な女の子だ。

長門と金剛のいつもの会話が終わった頃、榛名は「さてと」と何かを仕切り直すような声を上げた。
「そんじゃ、ちょっくら俺は用ができた」
「用、ですか？」
「まぁな」
榛名はそれだけ言い残すと、光に包まれて消えた。
大和達は一体どうしたのかと思っていたが、それはわずか数秒後に発覚した。

「こんのアホがあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
「どわあああああぁぁぁぁぁぁッ！？」
艦橋に響くすさまじい怒声と悲鳴。
翔輝は突如として襲い掛かって来た日本刀（もちろん真剣）を間一髪で避けた。もし武蔵が気づいて手を引いてくれなかったら、きっと腕が一本飛んでいただろう。
「ちっ、邪魔しやがって」
舌打ちする襲撃者を見て翔輝は目を見開いて驚く。
「は、榛名？　ひ、久しぶりだけどいきなり何すんだよッ！」
友好的なあいさつをしようとしたが、彼女のいきなりの武力行使にさすがの翔輝も激怒する。
「危ないだろうが！」
「はん。相変わらず変に運動神経はいいらしいな」
榛名はそう吐き捨てるように言うと刀を構える。すると、
「・・・翔輝は私が守る」
そう言って翔輝を守るように前に出たのは武蔵。その手にはしっかりと刀が握られている。そんな彼女を見て榛名はわずかに嬉しそうな笑みを浮かべる。
「はん。テメェとはいずれ決着をつけなきゃいけなかったんだ。いい機会だぜ！」
「・・・同感」

睨む合う両者を見詰め、翔輝はため息した。
「あのさ二人とも」
「何だよ？」
「・・・何？」
「頼むから、宇垣司令官の前でそういう事はやめてくれないかな？」
二人はその言葉に驚いたような顔をして振り向くと、そこには艦魂は見えないが訳のわからない事になっている事に気づいた宇垣が困惑していた。
「は、長谷川君？　一体どうしたのだ？」
「いや、ちょっとケンカというか殺し合いというか・・・」
「ずいぶん物騒だな」
宇垣は困ったような顔をする。そんな彼に武蔵は一度ため息を吐いて刀を腰に戻す。武蔵の行動に榛名も渋々といった具合に刀を納めた。と、
「相変わらず名前に対して恐ろしく合ってない性格だなお前は」
呆れ切った声を上げながらやって来たのは森下だった。そうえいば彼は『大和』の前は『榛名』の艦長をしていた。
「あん？　何だ森下か。テメェも相変わらずタバコを吸いまくってるらしいな」
「うるせぇ」
森下そう言っている最中もタバコを吸っている。別に彼はヘビースモーカーではないが、大和は何度も彼の健康を気にして禁煙を要求したが、現在彼がタバコを吸っている時点で失敗に終わっているのは丸わかりだ。
「すみません。自分が前艦長だったバカがご迷惑を掛けてしまい」
「いや、私は構わないが」
「おいゴラ。誰がバカだと」
「お前だ。猪突猛進バカ一直線単純思考単細胞」
「表出ろゴラぁッ！　テメェとは一度しっかりと決着をつけねぇとダメなようだな！」

「残念だが俺はお前のように暇ではないんでな」
「んだとゴラぁッ！」
「ちょっと榛名！　落ち着いてよ！　艦長も火に油を注がないでください！」
翔輝が慌てて榛名の背後から抱きついて止める。と、
「ん？　榛名どうしたの？　顔が赤いけど」
「う、うるせぇッ！」
「ごはぁッ！」
理不尽な鉄拳が腹に喰い込み、翔輝は悲鳴を上げる。そこへ現れたのが先ほどの悲鳴を聞きつけた大和達。運悪く、翔輝が床に倒れる瞬間に現れた。
「た、大尉！」
「長谷川はん！」
大和と伊勢が慌てて駆け寄る。
一方武蔵は愛する翔輝を倒されて怒りに燃えていた。手には機関銃を構え、いつでも榛名に向かって射撃可能。榛名も新たに装備した拳銃を構えている。
一触即発な雰囲気の中、長門が慌てて仲裁に入った。
一方翔輝は何度か咳き込みながらフラフラと立ち上がった。
「い、いきなり何すんだよぉ・・・」
少し涙目の翔輝が力なく抗議の声を上げるが、榛名はそっぽを向く。そんな榛名を見詰め、武蔵に機関銃を下ろさせた長門に不思議そうに問う。
「長門さん、僕榛名を怒らせるような事言いましたか？」
「うーん、長谷川君にはちょっと難しいかもねぇ」
長門はそう言うと困ったように苦笑いした。彼女の中では翔輝に榛名の暴力を理解しろというのは無理だと判断していた。何せ相手は史上最強に鈍感男なのだから。
「それよりごめんね長谷川君。大和と扶桑を派遣したけど、日向は徹底抗戦の構えをして篭城し続けているの」

「そ、そうですか・・・」
長門の報告に翔輝は肩を落とす。わずかながら希望を抱いていたのだから当然だ。仲直りしたくてもまず話し合いの席に着いてくれなければどうしようもない。
翔輝は疲れたようにため息する。
この数週間ずっと日向の事を気にしているのだ。いくら伊勢と仲直りできても日向とこれでは解決はしていない。人一倍優しい彼にとってこれは苦痛以外の何ものでもない。
そんな翔輝を心配するような目をするのは大和と武蔵。この数週間ずっとこんな彼を見てきたのだ。どうにかしてあげたくても日向が出てこなければどうしようもない。
「・・・こうなったら、引きずり出して捻り上げるしか」
「やめなさい」
翔輝にデコピンされ、武蔵は不満そうに痛むおでこをさする。その瞳には他に何があるのと訊きたいという意思が込められていた。
翔輝もどうしたもんかと頭を抱える。と、
「おい長谷川。ちょっと付き合え」
「え？」
榛名に腕を掴まれて驚いて顔を上げると、そこには真剣な眼差しを向ける榛名がいた。
「榛名・・・」
「あら、ずいぶん力強いプロポーズね」
長門がからかうように言うと、榛名は辻斬りのような殺気ギラギラの目で睨みつける。さすがの長門もこれには口を閉じた。
「な、何するの？」
恐る恐る訊くが、榛名は何も答えない。ただ、その瞳だけは鋭利な刃物のような鋭さを持っていた。
「いいから来い！」
「ちょっと理由だけ教えて！　なんか目がマジで怖い！」
「やかましい！　黙ってついて来い！」

「嫌だ！　絶対恐ろしい結末しかない！」
「うるせぇッ！　さっさと来い！」
「ち、近寄るな！　それ以上近寄ったら舌を噛むぞ！」
「お前は女かッ！　いいから来い！」
「いやあああああぁぁぁぁぁッ！」
奮闘空しく翔輝は襟首を掴まれて榛名に引きずられて行った。その後を心配した大和と武蔵、雪風、山城が追った。伊勢も行こうとしたが、長門に腕を掴まれた。
「あなたは日向の方よ」
「う、うちはあん子を許した訳やおもへんどす」
「わかってるわよ。でも、このままじゃダメだとも思ってるでしょ？」
「・・・」
伊勢は静かにうなずくと、長門達と共に日向をまず部屋から出す事に全力を注ぐ事になった。とにかく出てきてくれなければどうしようもないからだ。
様々な想いが交錯し、艦魂達は緊急の会議を開く事になった。

一方、榛名に連行された翔輝はそのまま『榛名』の甲板につれて来られた。
「こんな所で何するんだよ」
襟首をずっと掴まれていた翔輝が首を押さえながら問う。その横には大和と武蔵も共いる。そんな三人の視線の先で、榛名は空間から木刀を二本取り出す。ここは『榛名』なのでここでは榛名しか力は使えない。
榛名はその木刀の一本を持つと、もう一本を翔輝に向かって放った。
「え？　木刀？」
翔輝はそれを手に取ると不思議そうに見詰める。と、榛名はブンッと力強く木刀を横一線に振るう。

「テメェの動きはたいしたもんだ。だが、避けてるだけじゃ勝てないぞ」
「勝つって、何に？」
「んなもん自分で見つけろボケッ！　行くぞッ！」
「行くって？　のわあああぁぁぁッ！？」
突如突貫して来た榛名はすさまじい速度で木刀を縦に振り下ろした。翔輝は慌てて木刀を両手で構えてガードする。すさまじい力に膝が着きそうになる。
「お、重い・・・ッ！」
「失礼だな！　俺は太ってなんかねぇッ！」
「その重いじゃねぇよッ！」
翔輝は後ろに跳んで体勢を立て直すが、榛名はすかさず突貫して来る。今度は横へなぎ払うような一閃。身体をわずかに後方に下げて回避すると、反撃の突きを入れる。
「おっと」
榛名は多少驚いたようだが、簡単にそれを避けて後方に下がる。
「やっぱり、テメェは剣の素質があるぜ」
「そ、そうかな？」
「その身のこなし、天性のものにしてはたいしたもんだ。磨けばもっと輝く」
「いや、陸軍軍人ならともかく僕は海軍軍人だし、航海士だし」
「うるせぇッ！　おらぁッ！」
腰を低くして突貫する榛名。一瞬で翔輝の懐に入り込むと突き上げるような一撃を入れる。翔輝はこれを間一髪避けたが、無理な体勢で避けたのでバランスを崩して転倒してしまった。しかし榛名は立ち上がらせる暇を与えずに踏み込むと木刀を叩き込む。慌てて木刀でガードするが、とっさのものだったので甘く、木刀は飛び、脇腹にすさまじい一撃が入る。
「ぐあぁッ！」
翔輝はあまりの痛さに悶絶する。今まであまりの展開に呆然とし

ていた大和と武蔵が慌てて駆け寄る。
「・・・翔輝！　しっかりして！」
「大尉！　大丈夫ですか！　榛名さんひどいですよッ！」
悶絶する翔輝を見詰め、榛名はため息する。
「やっぱりまだまだ甘いか。つーか素人なのにここまで粘れただけでもたいしたもんか」
一人納得する榛名に、翔輝は苦しげに声を出す。
「榛名お前・・・ッ！　転んだ時に一撃を入れるなんて・・・卑怯だぞ・・・ッ！」
「卑怯？　バカかテメェ。卑怯もクソもねぇんだよ。だったら何だ？　敵は転んだ相手が立ち上がるまで待ってくれるか？　待つ訳ねぇだろうが。それこそチャンスじゃねぇか。俺がやるのは剣道じゃねぇ。本物の斬り合いだ。剣道で敵が倒せるかってーの」
榛名の言葉に翔輝は反論できない。確かの彼女の言うとおり。これがもし本物の戦いなら、今自分は確実に死んでいた。
本物の戦いで敵が待ってくれる事なんてない。一瞬で考え、一瞬で行動しなければその先には死しかない。転んだ時点で自分は死んでいたのだ。
「確かに、今まで戦艦の上じゃ平和だったかもしんねぇ。だがな、これからは違う。機動部隊が壊滅した今、戦艦は最後の希望だ。必ず実戦に送られ、そこで陸戦になるかもしんねぇ。その時、テメェみたいなド素人に何ができる。銃の撃ち方くらいは教わったかもしんねぇが、弾がなくなったら銃なんて役に立たねぇ。残るのは己が拳か刀だけだ。そん時、テメェはまず死ぬぞ」
榛名のもっともな言葉に、翔輝は返す言葉もない。
実際、艦に乗った水兵達が陸戦隊として上陸して敵兵と戦った事だって今までの戦いの中で起きている。決して、『大和』に乗る自分も例外ではない。機動部隊が壊滅した今、敵の艦隊や拠点に殴り込みを掛ける作戦だって考えられるかもしれない。『大和』の主砲で敵の部隊を潰した後、上陸して陸戦。十分考えられる事だ。

榛名は黙る翔輝に木刀を向ける。顔を上げると、そこにはニッと白い歯を見せて笑う榛名が立っていた。

「残念だけどよ、俺は艦魂だから陸戦はできねぇ。敵が『榛名』に乗って来たら全滅させる自信はあるけどよ、そんな事なんて起きる訳がねぇ。だったらな、テメェに少しでも剣を教えておきたいんだよ。テメェは俺達の大事な仲間だ。勝手に死なれたら迷惑だしな」

「榛名・・・」

翔輝はじっと榛名を見詰める。

言葉は乱暴だが、その言葉の奥には優しい想いが込められているのを感じた。彼女は自分を心配してくれている。それだけで、翔輝の心は明るくなった。

「まぁ、テメェがどうしても剣なんかやりたくねぇってんなら、無理強いしねぇ。どうだ？」

榛名はニヤリと笑う。それは挑発しているような笑みだった。ならばその挑発、受けてたとうじゃないか。

「そこまで言われたらやるしかねぇな」

「そう来なくっちゃな」

「た、大尉ッ！」

大和が翔輝の腕を掴んで止めようとするが、翔輝はそれを振り解く。

「止めないでくれ」

「で、でもッ！」

「生きる可能性が高まるのなら、僕は何だってやるさ。それに剣が使えれば守りたいものも守れるかもしれないしね」

そう言って翔輝はニッコリと微笑んだ。その笑顔に、大和はドキリとする。

（も、もしかして守りたいものって・・・私の事・・・？）

（・・・剣がうまくても、鉛弾一発喰らえばおしまいだと思うけど）

照れまくる大和の後ろでは冷静すぎる武蔵が無表情で見詰めていた。こんな時でもこの姉妹は正反対な反応をする。

翔輝は大和から離れると榛名と対峙し、木刀を構える。
「榛名、手加減は無用だ」
「おう、そうこなくっちゃな。わかった」
榛名も木刀を再び構える。
一陣の風が吹き、榛名のポニーテールを、大和の長い髪を、武蔵の柔らかな髪を揺らし、翔輝の軍帽が空へ舞った。
その瞬間、翔輝は一気に踏み込んだ。
木刀を構え、自分の中にある力を全て込めて、一撃を突き出した。

五分後・・・

「も、もう勘弁して・・・」
ボコボコにされた翔輝は大和と武蔵の必死の看護を受ける事になった。一方の榛名はまったくの無傷。実力の差は歴然であった。
「あぁ、テメェは攻めには向いてねぇかもな。避けるのはうまいけど剣の腕はボロボロ」
榛名はどうしたもんかと腕を組んで考える。
翔輝は荒い息と身体中の激痛に耐えるという、今までの彼の人生の中でもトップレベルの苦痛を味わう事となった。
本気を出した榛名にただの人間である翔輝が勝てる訳など、最初からなかったのであった。

「んで？　どうすんだ？」
休憩だと言って翔輝の隣に胡坐(あぐら)して座る榛名の言葉に、ようやく痛みが落ち着いたばかりの翔輝は不思議そうに首を傾げる。
「もちろんこれからも続けるつもりだけど」
「当たり前だ。テメェがまともに剣が振るえるまで毎日でも稽古(けいこ)してやらぁ。問題はそれじゃなくて日向の事だよ」
「あぁ・・・」
その名前に翔輝は少々落ち込む。もう数週間口を利いてなければ

顔も見ていない。
　日向と翔輝はあまり接点はない。伊勢とはよく話したりするが、日向と話す事は少ない。だから言い方は悪いが翔輝がそこまで落ち込むような相手ではないのだ。だが、根っからのお人好しである翔輝はそんな相手にですら嫌われるととても傷つく。
「一体何があったんだ？」
　翔輝は榛名に事の経緯を説明した。すると話を聞き終えた榛名は大きくため息を吐いた。
「そりゃ日向が怒るのも無理ないぜ」
「え？　や、やっぱり僕が悪いの？」
「まぁな」
　榛名の返事に、翔輝は激しく落ち込む。
　がっくりとうなだれる翔輝を慌てて大和が元気付け、武蔵は腰から拳銃を抜いて愛する人の心を折った憎き敵を撃ち殺す用意を整える。
　榛名は翔輝に武蔵の拳銃を下ろさせると照り付ける太陽にスカーフを緩めて胸元を開く。その際そんな自分の無防備な行為に顔を赤らめていた翔輝を一発殴って少し閉めた。
「お前もわかってるだろうが、日向は誰からも好かれる優しい子だ。そして姉の伊勢を本当に大切に思っている。だからこそ、姉の心を傷つけたお前が許せないんだな」
「ぼ、僕が伊勢の心を傷つけたって・・・」
「そうだろ？　伊勢はあの時雪風を追わないで傍にいてほしいと願ったんだ。でもお前は雪風を追おうとした。確かにお前は優しい。気持ち悪いくらい困った人を見捨てられない優しい奴だ。だがな、伊勢も言ってたけど、そうやって誰彼構わず助けるのは本物の優しさじゃない。中途半端なその場しのぎのもんだ。伊勢はお前にそんな優しさじゃなくて、自分一人に向けられる本当の優しさがほしかったんだ。それが伊勢を傷つけたんだな」
「そ、そんな・・・」

「まぁ、長谷川はそういう自覚はなかったんだろうけど、それが伊勢を傷つけたんだ。それで傷ついた伊勢を見て、日向は姉を傷つけられたお前を嫌ったんだ。そしてそんな奴に姉を近づけたくないと思ったから日向は謝りに行ったお前を追い返したんだ。まぁ、それで伊勢ともケンカに発展しちまったってところだろ」

「ぼ、僕のせい、なの・・・？」

「残念だが、そのようだな」

「そ、そっか・・・」

自分のせいだとわかり、翔輝は激しく落ち込む。そんな翔輝の肩を榛名は叩く。顔を上げると榛名はニッと白い歯を見せて笑っていた。

「まぁ、せめてもの救いはテメェと伊勢の関係が修復されてる事だな。後はテメェと日向が何とかなれば伊勢と日向も自然と和解するだろう」

「そうなの？」

「・・・テメェ今まで何聞いてたんだ？　テメェと日向がこじれたから伊勢も日向とこじれたんだろうが」

「そ、そっか・・・」

「とにかく、今頃は長門達が動いてくれてるだろう。俺も協力してやっぁらさっさと終わらせろ」

「え？　協力、してくれるの？」

驚いたように見詰める翔輝に、榛名は顔を赤くしてプイッとそっぽを向く。

「か、勘違いすんじゃねぇ！　俺はテメェなんかどうでもいいんだ！　ただこのクソ忙しい時に仲間割れなんかしたくねぇだけだ！」

「う、うん。わかった」

ならどうしてここまで全力否定するのかと思いながら、たぶんそれを口にしたら殺されそうなので一応黙っておく。

「ほ、ほら！　さっさとしろボケ！」

翔輝の頭を引っ叩き、榛名は先に歩き出した。

翔輝は榛名に拳銃を向けている武蔵の首根っこを掴んで大和と共に後に続いた。
榛名は光に包まれて消え、三人もすぐに光に包まれた。
向かうべき場所は、航空戦艦『日向』だ。

第十二章　第二節　戦姫復活　榛名師匠の鍛錬（後書き）

皆様の応援のおかげついに１００部を突破いたしました。
いやぁ、まさか１００部までいってしまうとは自分でも驚きです。
これも読者の皆様のおかげです。
これからも応援よろしくお願いします。

第十二章　第三節　日向の計略　大和達の死闘（前書き）

先日累計ＰＶアクセス数がついに２０万アクセスを突破しました！
ちなみユニークの方は３万５０００アクセスを突破しました！
これも皆様方の応援のおかげです。これからも艦魂シリーズを応援よろしくお願いします！

第十二章　第三節　日向の計略　大和達の死闘

日向の部屋の前にいた長門に案内されて別室に入ると、そこには驚いた事に頬を膨らませてご機嫌ななめという具合だが日向がソファに腰掛けていた。
「あん？　何だ日向の奴出て来たのか？」
「えぇ、何とかね」
長門は小さくため息すると驚いている翔輝の肩をポンと叩いた。
「雪風と最上に感謝しなさい」
「え？　雪風と最上が？　どういう事ですか？」
「あの子は巡洋艦や駆逐艦の子と仲がいいから、心配した二人がそれぞれの仲間数人を引き抜いて日向を説得してくれたのよ。私達だけじゃたぶんダメだったわよ？」
「そ、そうだったんですか・・・」
「あと潜水艦の子達には特に礼を言っておきなさい。彼女達の説得が決定的だったんだから」
「潜水艦達もですか？」
驚く翔輝だが、長門は「そうよ」と自分も驚いたと言いたげに言葉を返す。
「基本的に自分から行動しない潜水艦の子達が説得してくれたからこそ、日向は渋々出て来てくれたのよ。まったく、あなたの人望の厚さには脱帽するわね」
「そ、そうですか？　僕そんなに潜水艦達と親しいって訳じゃないですけど」
「そんな事ありませんよ。あの子達は基本仲間内でしか行動も会話もしないです。部外者での例外は日向さんと大尉だけです」
大和の言葉に長門は「あの子達を動かせるのはあなた達二人ぐらいのものよ」とうんうんと何度もうなずきながら答える。まぁ、確かに潜水艦の子達が他の艦魂と話しているのを見た事はほとんどな

い。下士官の子と話していたと思ったら潜水母艦の艦魂だったりするし。

とにかく、そんな皆の力のおかげで今この状況が成立しているのだ。後で最上と雪風、そして潜水艦の子達には礼を言っておかなければならない。

「とにかく、ここに座ってよ。あなたが来るのを待ってたんだから。ほら伊勢も横に座って」

長門は翔輝と伊勢の腕を掴むと日向とは反対側のソファに腰掛けさせると、自分は日向の隣に座った。どうやら進行役を務めてくれるらしい。

「榛名や大和達は悪いけど出てってくれないかしら？」

「わーってるよ」

「うぅ、し、仕方ないですね」

「・・・翔輝」

「大丈夫だって。僕の部屋ででも待っててよ」

「・・・わかった」

三人は部屋を出て行った。気まずい雰囲気に包まれた部屋に残ったのは翔輝と伊勢、長門と日向の四人。話し合いが始まった。

「ごめん。僕が悪かった」

話し合いの最初の口火を切ったのは翔輝。その開口一番がこれだった。長門と伊勢はそんな翔輝をじっと見詰めているが、日向は視線すら合わそうとしない。

「僕があの時伊勢を傷つけたから、日向はそれに怒ったんだ。その原因は完全に僕にある。本当にごめん」

深々と頭を下げる翔輝。そんな翔輝に伊勢はおろおろとする。だが、長門はそんな翔輝に続いて自らも頭を下げた。

「ふ、二人とも顔を上げてぇな。何も長門はんまで頭下げんでもええのに」

「いえ、今回の事態を事前に防げなかった私にも責任があるわ」

「長門はん・・・」
二人は日向に向かって頭を下げ続ける。日向はそんな二人に一切視線を合わせようとしないが、しばらくしてようやく視線をそっちに向けた。
「いくら頭下げたって、私は許さないから」
「日向！」
「いいんだ伊勢。悪いのは僕の方なんだから」
「長谷川はん・・・」
腰を上げた伊勢を座らせると、翔輝はじっと日向を見詰める。今度は日向も視線を逸らす事はなくじっと見詰め返す。だが、その瞳には小さな怒りがあった。まだ彼女は許してくれている訳じゃないのだ。
「僕が伊勢を傷つけたのは事実だ。それは僕は謝るしかない。でも、伊勢とのケンカはそれが原因であって伊勢には責任はないんだ。最悪、僕は許してもらわなくてもいい。でも、伊勢は許してあげて。二人は姉妹じゃないか。姉妹は仲良くしてなきゃ」
「長谷川君に言われなくたってそれくらいわかってるもん」
「なら、最低限二人は仲直りしてよ」
翔輝の言葉に、日向はうーっと低く唸りながら伊勢を見詰める。が、今度は伊勢が首を横に振った。
「うちは日向が長谷川はんに謝らんと許さへん」
「い、伊勢」
「わ、私は謝らないもん！　悪いのは全部長谷川君の方だもん！」
「そんな事あらへん！　悪いのみーんなあんたや！」
「違うもん！　長谷川君だもん！」
「いいや！　絶対あんたが悪い！」
「お、おい二人とも・・・」
せっかく翔輝が仲裁に入って仲直りにさせようとしたのに、二人はさらにこじれていく。どうやら根本的な自分と日向の壁と取り除かないとどうしようもないらしい。これは先が長くなるなぁと思っ

て翔輝はため息する。
「ちょっと二人とも、いい加減にしてよね」
八方塞という状況の中、凛とした言葉を放ったのは今までほとんど口を開いていない長門だった。その顔はいつもの優しい笑顔は消え、真剣なものに変わっていた。
「な、長門はん・・・？」
「今がどういう状況か、わからない訳ないわよね？　今帝国はサイパン島の陥落で絶対国防圏の崩壊の危機に瀕しているのよ？　そして敵は着実に日本に迫っている。次はフィリピンが決戦になるかもしれないって時に、姉妹ゲンカなんて起こしてる場合じゃないでしょ？」
「で、でもッ！　私はお姉ちゃんの為を思って！」
「伊勢はそれを望んでなんかいないわ。それはあなたのわがままでしかない。その証拠に、長谷川君と伊勢はもう仲直りは済んでいるわ。なのにあなたがわがまま言うから、こんなに話がこじれてるんじゃない。あなたが折れれば、全て解決するのに、あなたが意固地になってるから解決しないの。今回の事態で一番悪いのは、日向、あなたよ」
長門の言葉に、日向はしゅんとする。さすがに言いすぎだと思って翔輝が口を開くと、長門は「黙ってて」とだけ言ってそれを制す。その時の彼女の瞳には邪魔する者は誰であろうと許さないという力強いものがあった。
「確かに長谷川君も悪いところはあるわ。でもそれは誰にでも優しいという長谷川君そのものの問題。そんな彼だからこそ大和も武蔵も信頼しているの。伊勢だって、あの後にちゃんと理解したからこそ、今こうして二人並んで座っていられるの。これで、伊勢は幸せなのよ？　あなたにその幸せを壊す権利なんてある？　伊勢を不幸にさせたいの？」
「そんな事ないもん！　お姉ちゃんには幸せでいてほしいもん！」
「だったら、今こうしてあなたが意固地になり続けている限り、伊

勢は不幸のままよ？　あなたはそれでもいいの？」
「そ、そんな事ないけど・・・」
日向は言葉に詰まる。今回の騒動も基本的に根が優しい日向が姉の為を思って起こしたもの。そんな彼女が伊勢の幸せを願ってない訳はない。
黙ってしまう日向を一瞥し、今度は伊勢に視線を向ける。
「伊勢も伊勢よ。あなたはこの子のお姉さんでしょ？　なのにあなたまで意固地になって。いくら長谷川君が絡んでいるとはいえ、少し大人気ないわよ」
「も、申し訳ありまへん」
長門のいつになく真剣な言葉に、二人はすっかり反省モードに入ってしまった。さすがは元連合艦隊旗艦。こういう揉め事には慣れているのだろう。
「それじゃ二人とも。今自分がすべき事はわかってるわね？」
長門の言葉に、伊勢と日向は「はい・・・」と小さく答えた。そして、
「ごめんねお姉ちゃん、私が悪かったよ」
「う、うちも悪かった。ごめん」
「お姉ちゃんが謝る事ないよ。私が悪いんだもん。でもこれだけはわかって。私はお姉ちゃんの為を思ってやったの」
「わかってる。でも、うちはこれでええんや。せやから日向。うちはあんたに温かく見守っててほしいんや。わかるやろ？」
「うん。ごめんね」
「ええんや。うちら姉妹やないか」
「お姉ちゃん・・・ッ！」
日向は涙をボロボロと流しながら立ち上がると、対面に座る伊勢に抱きついた。胸の中に飛び込んできた妹を、伊勢はしっかりと抱き締めると、頭をそっと撫でた。
翔輝は邪魔しちゃ悪いと席を立ち、日向の座っていた席に腰掛けた。隣にいる長門は嬉しそうにニコニコと笑っている。

「ありがとうございます」
「別に長谷川君がお礼を言う事ないじゃない」
「そんな事ありませんよ。長門さんのおかげですから」
「うふふ、優しいのね」
長門の言葉に翔輝は微笑むと、互いに抱き合う伊勢と日向の姉妹を見詰める。そんな二人の姿に、少しうらやましいなぁと思う。
仲のいい伊勢姉妹。そんな二人を見てふと昔を思い出す。
自分も昔はこうしてよく泣きじゃくる翔香を抱き締めて涙を拭いてやった事があった。
あの時の感触を、今でも思い出せる。
あの頃は毎日が楽しかった。もちろん辛い事もあったが、翔香と子供二人だけの二人三脚で歩いた道は、楽しい事が多く、充実した日々だった。
あの笑顔に、何度助けられた事か。
まぁ、もう四年以上も昔の話だが。
「長谷川君、今遠い目してたわよ？」
「え？　そうですか？」
見抜かれた翔輝はドキリとする。そんな翔輝に長門は全てを見透かしたような笑みを向ける。その笑みはとても嬉しそう。
「翔香ちゃんの事思い出してたでしょ？」
「うっ、何でわかるんですか？」
「そりゃあ私はあなたのお姉さんだもの」
「いつからそんな設定になったんすか？　僕の姉は瑪瑙姉さんだけですよ？」
「んもう、いじわるなんだからぁ。私が抱き締めてあげてもいいわよ？」
いらっしゃーいと手をいっぱいに広げる長門に翔輝は苦笑いする。
「遠慮しておきます」
「んもう、いじわるねぇ。でも、えいッ！」
「うわぁッ！？」

長門は翔輝の腕を掴んで引っ張ると、そのまま彼を抱き締めた。
翔輝は恥ずかしさに長門の柔らかさや甘い香りなどを受けて顔を真っ赤にして抵抗する。
「な、長門さんッ！　ちょっと離してください！」
「だぁめ。あぁ、長谷川君って本当にかわいいなぁ」
「ちょっと長門さぁんッ！」
翔輝は必死になって長門から逃れようとするが、長門はしっかりと抱き付いて離そうとしないどころかさらに強く抱き付いて頬擦りまでしてくる。翔輝が色んな意味で限界に達しようとした時、
「あぁッ！　長門はん何してんねん！　うちの長谷川はんを取らんといてぇな！」
「うわぁッ！？」
日向を離した伊勢が慌てて翔輝の腕を掴んで長門から彼を引き離す。長門は「いやん」となぜかなまめかしい声を上げて不満そうに翔輝を見詰める。
解放され安堵する翔輝だったが今度は伊勢が抱き付いてきて慌てる。慌てる翔輝に抱き付く伊勢は長門に向かって宣言する。
「うちの長谷川はんに手出さんといてぇな！　長谷川はんは誰にも渡さへんからなッ！」
「はいはい。取らないわよ」
長門はニヤニヤと笑うが、伊勢は気にした様子もなく翔輝に抱き付いて幸せそうな笑みをする。抱き付かれている翔輝は顔を真っ赤にして大慌てで、一人取り残された日向は不満そうに頬を膨らませている。
「あたし、まだ長谷川君を許した訳じゃないもん」
「あ、そういえばそうね」
長門に促され、再び席に戻る。
「じゃあ、長谷川君はもう謝ってるわよ。だから、今度は日向ね」
「うん。ごめんなさい」
長門の言葉にうなずいた後、日向はペコリと頭を垂れて謝った。

いつもはピョコピョコとかわいく揺れるツインテールも今は元気なく垂れている。
「あ、うん。こっちこそごめんね」
翔輝も謝り、長門は満足げに微笑み、伊勢は翔輝に向かってお礼なのか頭を下げた。
顔を上げた日向は「てへっ♪」といつものかわいい笑顔に戻る。
これでこそ日向なのだ。
立ち上がった日向はとことこと歩いて翔輝に近づくと、そのままギュッと抱き付いた。
「ひゅ、日向？」
「えへへ、やっぱり長谷川君はいい人なのだ！」
「そ、そっかな？」
日向はじっと翔輝を上目遣いに見詰める。うるうるとした瞳がいかにも彼女らしい。
「な、何？」
「あのさ、一つお願いがあるんだけど」
「何？　命に関わる事じゃなければできる限り協力するけど」
翔輝の嬉しい返答に日向はニャハとかわいげな笑みをすると「立って立って！」と翔輝を立たせると伊勢も立たせた。そして・・・
「はいッ！」
「うわぁッ！？」
「ひゃあッ！」
日向に押され、二人は再び抱き付いた。そして、
「長谷川君！　明日お姉ちゃんとデートして！」
『えええええぇぇぇぇぇッ！？』

翌日、『大和』の前甲板で立つ伊勢は、いつもと違ってきれいな着物を着ていた。白い肌には薄っすらと軽く化粧をしてちょっと《なちゅらる系》というのを試してみた。頭には軍帽ではなくかんざしを装飾している。

元が日本艦魂一の大和撫子な伊勢が着物を着てお化粧をすると、その美しさはかなりの域に達する。

伊勢は何度も何度も確認したセットを海風で乱されないように気をつけながら何度も腕時計で時間を確認する。

「そ、そろそろやなぁ」

伊勢が乱れた場所がないか確認していた時、

「連れて来たよぉ！」

そんな元気な声に振り返ると、そこにはピョコピョコとツインテールを揺らしながら駆け寄って来る日向と、そんな彼女に手を引かれて来る愛しの人――翔輝がいた。もちろん翔輝は私服なんて着れないので軍服だが、伊勢はそれで満足であった。

日向は伊勢の前に翔輝を立たせると「ごゆっくり～ぃ♪」と意味ありげな笑みをしながら光に包まれて消えた。

残された二人は日向が消えるとどちらも何と話し掛けていいかわからず黙ってしまう。海風と波の音が二人を包み込む。

しばしの沈黙の後、翔輝は頬を赤らめたまま照れたように微笑む。

「ま、待った？」

「え？　あ、そんな事あらへんよ。今来たばっかやしぃ」

本当は三時間も前から待っていた事は秘密だ。

「そ、そっか。良かった――その着物、すごく似合ってるよ」

「え？　ほんまどすか？」

「うん。すっごくきれい」

翔輝にほめられ、伊勢は嬉しそうに身体をくねらせて身体全体を使って喜びを表現する。その頬を桜色に染まり、顔は嬉しさに華やぐ。

「うち、長谷川はんにきれいなんて言われてほんま嬉しいわぁ」

「そ、そっか。じゃあ、とりあえず行こうか。って言っても『大和』の中だからつまらないとは思うけど」

「そんな事あらへんよ。『大和』はそないに詳しくないし、何より長谷川はんと一緒なら例え青木ヶ原の樹海でもディズニーランドの

ごとく楽しむ事ができるどす」
「時代考証を無視した上にとんでもない例えはやめようね。まぁ、じゃあ行こう」
「はいどす」
伊勢は嬉しそうに翔輝の腕に抱きつくと、満面の笑みを向ける。
翔輝はそんな笑顔全開でいつもとは違う魅力を放つ伊勢に照れながらも、内心ちょっと嬉しそうに甲板を歩き出した。

「こちらイーグル1。ターゲットは移動を開始。密着度一二〇パーセント・・・うらやましい」
「・・・こちらイーグル2。ターゲットを確認。ターゲット2の狙撃許可を」
「こちらイーグル3！　ターゲット1を狙撃しろッ！」
「こ、こちらイーグル4。そんな乱暴な事はやめてください」
「・・・あんた達何やってるの？」
防空指揮所から双眼鏡やライフルのスコープで翔輝と伊勢を見詰める大和、武蔵、榛名、雪風に隣に立つ長門は呆れたようにため息する。
「そもそも大和と武蔵、榛名はわかるけど、どうして雪風までいるのよ？」
「え？　あ、それは・・・」
頬を赤くして口ごもる雪風に、長門は「もういい、みなまで言うな」とため息しながら言う。
一方、大和は肩を寄せ合って歩く二人にその小さな身体から激しいやきもちの炎を舞い上げている。隣にいる武蔵はライフルのスコープで覗きながら震える人差し指が今にも引き金を引きそう。そして榛名は双眼鏡を片手に構えて二人を睨み、もう片方の手は軍刀を掴んでいる。少しでも変な事が起きたら斬り込みを掛ける勢いだ。
長門は頭を抱えた。
翔輝と伊勢のデートはあの場にいた四人しか知らないはず。なの

にこうして大和達がいる事を考えると、どこからか情報が漏れた事になる。あの場にいた誰もが話すような人ではない。となると、聞き耳を立てていた者がいるのだ。

まぁ、誰かはわからないが、とにかく今は情報が漏れたという事実があり、二人のデートには監視の目があるという事だ。

「まったく、人のデートを覗くなんて趣味が悪いわよ？」

「あ、あれはデートじゃないです！　ただその、二人で仲良く一日を楽しんでいるだけです」

「それがデートって言うのよ」

長門の言葉に大和は「むぐぐ・・・」と言葉に詰まる。

「そ、それに悪趣味なのは私達だけじゃないです！」

「何言ってるのよ。覗いているのはあなた達だけじゃない」

不思議そうに首を傾げる長門に、大和は何をバカな事をと言いたげな瞳を向けると、なぜか無線機を取り出した。スイッチを入れると・・・

『こちら第三偵察部隊。ターゲットは高角砲エリアを通過中』

『こちら第二妨害部隊！　いつでも行動可能です！　何としてでもこのデートを失敗させてみせます！』

『こちら第一狙撃部隊。不審な行動あらばただちに狙撃します。選りすぐりの精鋭を集めましたので、腕は確かです』

『こ、こちら第一暗殺部隊です・・・あ、あの・・・もう動いても・・・いいんですか？』

『こちら第二偵察部隊！　伊勢司令が長谷川様に身体全体で抱き付きました！　う、うらやましすぎます！』

『こちら第一妨害部隊！　もう我慢できません！　今すぐにでも突撃命令を！』

「・・・」

「ね？　私達だけじゃないでしょ？」

「・・・ねぇ、一体どれだけの数の子が参加してるの？」

頭を抱える長門の質問に、大和は人差し指をあごの下に当てて考

える。
「えっとですね、巡洋艦、駆逐艦、潜水艦の子が参加していて、おおよそ八〇人くらいですね。そのうち約五〇人くらいは我ら長谷川連合の艦魂ですね」
「あの子、どれだけ陰から艦魂達に好かれてるのよ。特に潜水艦の子達まで動くなんて」
「まぁ、大尉は誰にでも優しいですから、みんな惹かれてしまうんですよ」
苦笑いする大和から無線機を奪うと、長門はスーッと息をたっぷり吸い込み・・・
「総員解散ッ！　ただちに武装を放棄して投降しなさい！　これは連合艦隊艦魂司令部先任参謀・戦艦『長門』艦魂からの命令よッ！」
すさまじい勢いでそう怒鳴った。無線機からは悲鳴が流れて来て、わずか五分後には翔輝派の艦魂を抜いた約三〇人が『大和』の第三会議室に現れ、長門は金剛に頼んで徹底的にしかってもらった。途中泣き出した子がいたらしいが、自業自得なので今回は助けない。
榛名は金剛が直々に首根っこを掴んで特別室に連れて行かれた。部屋から聞こえた悲鳴は聞かなかった事にする。
大和と武蔵、そして雪風の三人は長門や金剛に捕まる直前に武蔵の先を見越した行動で逃げられた。現在長門隷下の艦魂達が捜索及び捕獲に向かっているが、追撃部隊はことごとく武蔵の反撃に撃破されているらしい。これは捕まえるのは至難の業だ。
ともかく翔輝と伊勢のデートはとりあえず障害はなくなった。妨害工作をしようものなら日向率いるデート防衛隊が容赦なく襲い掛かる。ちなみに先程扶桑が妨害未遂で捕縛された。服を引っぺがすと拳銃五丁、機関銃二丁、擲弾筒一丁、手榴弾十発が発見され押収された。
長門は双眼鏡で二人が問題なくデートをしているのを確認すると、自らも大和達を追う為に防空指揮所を後にした。

鳴り響く突撃ラッパと共に駆逐艦数人が突撃を行った。
「伊勢司令！　大人しく長谷川大尉から離れてください！」
「突撃ーッ！」
突撃する駆逐艦達の前に、日向率いるデート防衛隊の艦魂が立ち塞がる。
「ここは通さないわよッ！」
「ね、姉さんッ！？　何でここにッ！　クソォッ！」
「大人しく捕まりなさい！」
「やめてお姉ちゃん！　これは聖戦なのよ！」
「構わん！　突撃ーッ！」
「ここは死守するのよッ！」
激しくぶつかる防衛隊と妨害隊。別方向でも突撃して来た艦魂達を防衛隊が死守している。さらに別の場所では両軍狙撃部隊による激しい銃撃戦が行われている。
「突撃ーッ！　突撃ーッ！」
「撃ち方始めぇッ！」
「迎え撃てぇッ！」
「反乱軍は予想よりも手ごわいわ！　催涙弾と煙幕を用意して！」
「えぇい面倒だ！　全員を撃て！　大丈夫！　我ら艦魂は艦が沈まなければ死なない！　ただ撃たれた痛みはあるが」
「それってまずいのではないですか軍曹！？」
「構わん！　我らは日向様配下の親衛隊！　我らの行為は全て正義となる！　撃てぇッ！」
ドンッ！　ドドンッ！　ドドドンッ！
「隊長！　後方に反乱軍の落下傘部隊が降下して来ましたッ！」
「何だって！？　余剰兵力を全部向かわせろ！　補給路を守り抜け！」
「了解！」
「大変です隊長！　敵は戦車部隊を率いて来ました！」
「クソォッ！　めちゃくちゃな事をしおって！　こちらも戦車を用

意しろ！」
防衛隊司令部の怒号が辺りに響き渡る。
一方の妨害隊はさらに援軍を投入した。今まで中立立場を取っていた潜水艦や駆逐艦が次々に参戦、歩兵、騎兵、砲兵などさまざまな役職について攻撃を慣行。その動きは本物の軍隊のようだった。
寄せ集めの妨害隊の総司令官は・・・
「・・・戦車部隊を正面にぶつけ、空挺部隊を敵軍の後方へ。重砲部隊は遠距離からの砲撃を行い、できる限り突撃は控えるように。補給部隊と工作部隊はトーチカを用意して」
武蔵の的確な指揮に艦魂達は規則正しい動きを見せる。
大和は総攻撃の場合に備えた主力突撃歩兵部隊の指揮官に就任していた。配下には雪風を置き、いつでも命令あらば突撃して敵の防衛線を突破し、翔輝を奪還する覚悟をしていた。
壮絶な死闘の末、ようやく道が開け始めた。まさにその瞬間、武蔵は突撃命令を発した。
突撃ラッパが鳴り響き、大和は「全軍突撃ーッ！」と叫んで突撃を慣行した。
慌てふためく防衛隊。ついにその防衛線が突破しようとした時だった。
「待たせたわねッ！　精鋭部隊の登場よ！」
大勢の配下を連れた長門が現れた。その兵力は主力突撃隊とほぼ互角。武蔵は自分の失策に唇を噛んだ。
「・・・・重砲隊砲撃開始！」
「こっちも行くわよ！　重砲隊撃ち方始め！　歩兵隊及び騎兵隊は突撃ーッ！」
両軍は最後の決戦として持てる全ての力を使って壮絶な激戦を繰り広げた。
「なぁ、伊勢。後ろですさまじい戦闘が繰り広げられてる音がするんだけど」

「き、気のせいや。うん」
風の音、波の音、戦闘のすさまじい怒声と爆音を聞きながら、二人は苦笑いしながら第二主砲の上から海を眺めていた。蒼い海は今日も平穏そのものだ。
「やっぱり海はいいなぁ」
「そうやね」
笑みを浮かべながら言う翔輝の言葉に、海風に揺れる髪を軽く押さえながら、伊勢も笑顔で答える。
「季節もちょうど夏やし、泳ぎたくなるやなぁ」
「いや、僕は海を泳ぐのはちょっと」
苦笑いしながら返す翔輝に、伊勢は不思議そうに首を傾げる。
「何でや？　めっちゃ気持ちええのに――もしかして長谷川はん、カナヅチなんか？」
「いや、そんな事はないけど。あまり長くは泳げないんだ」
「そうなんか。せやけど『大和』は不沈艦やから海に投げ出される事はあらへんから、問題ないわな」
「正確には沈みにくい艦だけどね」
「それによく考えればカナヅチな海軍軍人なんている訳あらへんよな」
「いや、僕の知り合いにいるけど」
「・・・ほんま？」
「本当に」
「・・・世の中ゆがんでるなぁ」
「まぁ、そうかもね」
二人は顔を合わせると笑みを浮かべ合った。後ろから聞こえる爆音などはこの際は無視する事にする。
伊勢はニッコリと微笑むと翔輝の腕に抱き付いた。翔輝も今回も必死に抵抗はしない。少し照れながらも伊勢の直球勝負の愛情を受け止める。
「ほんまに、うち長谷川はんと一緒の時が一番嬉しいわぁ」

「そっか。良かった」
「えへへ、ほんま長谷川はんは優しいなぁ」
「ありがとう」
「うふふ、長谷川はん大好きやでぇ」
伊勢はもう腕だけでは我慢できなくなったのか、思いっ切り翔輝に抱き付いた。
「ちょっと伊勢！　それはダメぇッ！」
「ええやないかぁ、減るもんでもないしぃ」
「女の子が言う言葉じゃないだろぉッ！？」
伊勢は嬉しそうに強く抱き付く。そんな彼女に翔輝は顔を赤くしながら引き剥がそうとするが、伊勢は離れようとしない。
そんな密着度一二〇パーセントな二人を睨み殺すかの勢いで双眼鏡を通して見詰める者達がいた。場所は再び防空指揮所に戻る。
「うーっ、あんなに密着して・・・ッ！」
「・・・引き金を引いていい？」
「だ、ダメですよ！　今動いたら長門さん達に見つかっちゃいます！」
悔しげな表情をする大和と武蔵を、雪風がなんとかなだめる。彼女自身も二人の密着度は大変な事態だが、今は目の前の方の二人を止める事が最優先事項だった。
「あぁッ！　大尉と伊勢さんが見詰め合ってる！　そして何で桃色の空気が流れてるのよッ！」
「・・・もう我慢できない。この引き金を引いてあの女狐の額に風穴を開けてくれる」
「だからダメですってばッ！」
雪風は必死になって二人の暴走を止めようとするが、すさまじく強力な大和姉妹を止められる訳もなく、雪風の必死の制止を振り切って二人は動いた。
「ッ！？　危ないッ！」

「ひゃあッ！？」
翔輝は突如すさまじい殺気を感じて伊勢を押し倒しながら共に横へ転がった。刹那、すさまじい金属音が響いた。驚いて振り返ると、『大和』の六五〇ｍｍある強力な主砲砲塔の装甲に弾痕があった。間違いなく、誰かに狙撃されたのだ。
辺りを見回すが、先程のすさまじい殺気を放っていた者の気配は一切ない。どうやらかなりの切れ者らしい。
「あ、あの、長谷川はん・・・？」
その恥ずかしそうな声に下を見ると、顔を真っ赤にさせた伊勢が倒れていた。とっさに動いたとはいえ、自分は彼女を押し倒してしまったらしい。倒された衝撃でか、着物の胸元がわずかにはだけて彼女の下着が見える。
「ご、ごめん！」
翔輝は慌てて彼女の上から退くと伊勢もゆっくりとはだけた胸元を正しながら起き上がった。その頬はまだ赤い。目はおろおろと泳いでいる。
「あ、案外長谷川はんって積極的なんやなぁ」
「ち、違う！　今のは誰かに狙撃されたから――」
「何見詰め合ってるんですかあああぁぁぁッ！」
そのすさまじい怒号に驚いて振り返ると、そこには軍刀を構えた大和と機関銃を構えた武蔵、そしてなぜかぐったりと倒れている雪風がいた。
「お、お前らッ！　っていうか、雪風どうしたの！？」
驚く翔輝の横で、伊勢はむっと眉を不機嫌そうにわずかにゆがめる。
「大和はん、武蔵はんや雪風はんまで。今日はうちと長谷川はんのデートやで？　邪魔せんといてくれる？」
「そうはいかないですよッ！　さっきからベタベタと大尉にくっ付いて！　もう堪忍袋の緒が切れました！　私達は最後の一兵まで断固としてこれを妨害します！」

「・・・伊勢、殺す」
突撃用意を整えた二人に、翔輝は伊勢の腕を引っ張った。伊勢は困惑しながら彼に従うと、彼の後ろに隠された。目の前には彼の背中があり、ドキドキする。伊勢を守るように翔輝は前へ出る。
「お前らいい加減しろ！　伊勢には指一本触れさせないからな！」
「は、長谷川はん・・・」
その勇ましくかっこいい言葉に、伊勢は頬を赤らめて嬉しそうに彼の背中に抱き付いた。それを見て大和と武蔵の怒りは最高潮に達する。
「武蔵！　あいつをぶっ殺す！」
「・・・了解した姉上！　一撃で仕留める！　姉上は前衛をお願い！」
「わかったわ！　私の背中、任せたからね！」
「何でこんな時だけ恐ろしいほど姉妹の絆を結ぶのかな!?」
ある意味史上最強のコンビである大和姉妹の本気。そんな猛攻撃に晒されて、伊勢を守り切れるかはわからない。でも、負けられないのだ。
「伊勢は僕が守る！」
「は、長谷川はん・・・」
伊勢は嬉しくて嬉しくてギューッとさらに強く抱き付く。そんなまるで本物の恋人同士のような二人に、大和と武蔵の中で何かが壊れた。
「・・・ねぇ、武蔵。大尉を生け捕りにしましょう。そしたらちょっときつーい罰を与えよっか？」
「・・・荒療治だが、仕方がない。いくら翔輝だからって、やっていい事と悪い事はある。翔輝には少しお灸が必要だ」
不気味な笑みで互いを見詰める大和と武蔵に、翔輝は背筋が凍りつくのを感じた。
あの目はヤバイ。奴らは本気だ。捕まれば、自分の命もない。いや、あっても人格崩壊の危機は脱する事はできない。

翔輝は唇を噛む。
圧倒的にこっちが不利だ。
ここは『大和』なので大和は自由に力を使えるし、武蔵は歩く武器庫のような子だ。確実にこっちが負ける。
迫る二人に、翔輝は苦しげに後退した。その時、
「堪忍なさい大和！　武蔵！　ついでに雪風！」
その声に視線を下げると、第二砲塔を包囲するように長門・日向連合軍が取り囲んでいた。向こうで倒れているのは反乱派の艦魂達だろう。
「長門さん！　日向！」
「安心なさい長谷川君！　あなた達は私達が守って見せるわ！」
「お姉ちゃんの幸せは、私が守るもん！」
長門と日向はそう叫ぶとそこから消え、翔輝と伊勢の前に立ち塞がった。二人とその他大勢の登場に大和と武蔵の顔から余裕が消えた。
「ま、まさかあれだけの部隊を撃破したんですか！？」
「・・・バカな。長期戦できる配置にしてあったのに・・・ッ！」
驚く二人に、長門は艦魂達の中では大きめな胸を強調するように反らすと、自慢げな笑みを浮かべる。
「あんなの簡単に突破できるわよ。忘れちゃダメよ？　これでも私は二度の内乱を起こした艦魂なんだから」
「いえ、それは自慢になりませんよ？」
翔輝のツッコミが炸裂したところで、日向は笑顔で振り返った。
「今のうちに逃げて。お姉ちゃん達の幸せは、私が守るから」
「日向・・・」
「ねぇ？　何で僕と伊勢の幸せがセットなの？　これはもう決定事項なの？」
睨み合う双方はピクリとも動かない。まるで動いたら戦いが始まるのを警戒しているかのようだ。武蔵の引き金を引くのと長門が突っ込むのはほぼ同時くらいの距離。動いたらどうなるか、それを恐

れているのだ。
だが、まわりを囲む大勢の艦魂達がいる限り、大和と武蔵、ついでに雪風には勝ち目はない。
武蔵はもはや覚悟を決めて引き金に手を掛け、長門は姿勢を低くした。
「待たせたなテメェらッ！」
その瞬間に響いた聞きなれた声に振り返ると、第二砲塔を囲む艦魂達に向かって別の艦魂達が襲い掛かった。その先頭で長門・日向連合を蹴散らすのは軍刀を片手に首には日の丸が描かれたスカーフを勇ましくはためかす一騎当千の戦士――榛名だ。
「大和！　武蔵！　俺が来るまでよく耐えた！　この下の雑魚どもは俺達に任せろ！」
「榛名姉様の為なら軍法会議でも受ける覚悟です！」
「榛名姉者！　あとで私をギュってしてくださいね！」
「榛名お姉様！　私は今度一緒にお食事にでも！」
「は、榛名姉さん！　わ、私は一緒に添い寝を！」
「わかった！　成功したらみんなまとめて相手にしてやらぁッ！」
『うおおおおおぉぉぉぉぉッ！』
榛名率いる部隊は総数は長門・日向連合の半分にも満たないが、すさまじい士気の高さと異常なほど飛躍した戦闘能力で次々に長門・日向連合を蹴散らしていく。
「は、榛名ッ！？　何であなたがここにいるの！？」
「金剛お姉ちゃんに捕まったんじゃなかったのッ！？」
驚く長門と日向に対し、榛名はおろおろとする駆逐艦の子に峰打ちを叩き込むと、肩を震わせながら激怒した。
「テメェらのせいで姉貴の紅茶に睡眠薬を盛らなくちゃいけなかったじゃねぇかッ！」
『なぁッ！？』
榛名の口から出たのは想像を絶する恐ろしいものだった。
金剛に薬を盛る。それは死を意味するのと同じものであった。

「な、何て事したのよあんたッ！　死にたいのッ！？」
「う、うるせぇッ！　俺はそれでもこんな茶番はぜってぇに認めねぇッ！」
そう怒鳴る榛名の瞳は濡れていた。剣もわずかだがいつもの鋭さに欠ける。それほど金剛に恐ろしい事をしてしまった事を恐れているのだ。
「・・・安心して、私が説得してみせる」
「うにゃあッ！？」
「日向ッ！？」
榛名の登場による混乱の中、武蔵は一瞬で距離を詰めて日向を押し倒した。長門は舌打ちすると慌てて後方に下がった。日向が泣きながら助けを求めるが、今は助けられない。
「武蔵！　それは本当か！」
包囲網の一角を占領した榛名の涙が含まった声に、武蔵がはしっかりとうなずく。
「・・・私は、受けた恩は必ず返す。約束する」
「あ、あんがとなッ！　うっしゃぁッ！　全軍突撃ーッ！」
『うおおおおぉぉぉぉぉッ！』
榛名は長門・日向連合の主力部隊が展開する陣地に突撃した。その勇ましさは日本艦魂の歴史に残る勇猛果敢なものだった。
「テメェらに恨みはねぇが、倒れてもらうぞッ！」
「・・・はる・・・な・・・ッ！」
「・・・ッ！？」
すさまじい殺気に榛名の足が止まった。額からは玉のような汗が噴き出し、顔は恐怖にゆがむ。この殺気は・・・ッ！
恐る恐る振り返ると、そこにはさっきまでいた自分の部下達が全員倒れていた。そして、その中心にいたのは、竹刀を杖代わりにしながらもフラフラと歩き、長い金髪をだらんと垂らした――金剛だった。
「あ、姉貴・・・ッ！」

榛名の顔が真っ青になる。握られていた拳は解かれ、軍刀が音を立てて落ちた。
金剛はギロリと金髪の間から蒼い瞳で睨む。それだけで、榛名は腰が抜けた。
「貴様・・・この私に・・・薬を盛るとは・・・覚悟はできておるな・・・ッ！」
「ひ、ひいいいいいいいいいッ！」
金剛はフラフラと歩く。どうやら睡眠薬を気合で押さえ込んでいるらしい。相変わらずの化け物である。
戦いは再び振り出しに戻った。
再び嵐の前の静けさになった中、すっかり忘れられていた翔輝と伊勢。
「い、一体どうなってるんや？」
「さ、さぁ？　でももうそろそろ止めないとダメだよね」
翔輝がため息しながら仲裁に入ろうとした時だった。
「長谷川大尉！　長谷川大尉！」
その声に驚いて振り返ると、甲板を慌てて走って来る水上の姿があった。
「水上？」
翔輝は不思議そうに首を傾げながらラッタルを使って階段を下る。伊勢もその後に続いた。まわりの艦魂達も突然の水上の登場に争いを終えていた。
甲板に降りると、肩を激しく上下させて荒い息をする水上に駆け寄る。
「どうしたんだ？　そんなに急いで」
「は、長谷川大尉に緊急のお手紙です」
そう言って手に持っていた手紙を手渡す。差出人を確認すると、瑠璃からだった。
「瑠璃から？　いつもの事でしょ？　緊急ってなんだろう」
翔輝は不思議に思いながらも封を切って中身を取り出す。中には

折りたたまれた一枚の紙があった。翔輝はそれを開くと読み始める。
その瞬間、翔輝の顔に戦慄が走った。大和達も今は休戦条約を結び、肩を震わせている翔輝に近づいてきた。
しばし無言のまま手紙を読んだ翔輝は苦しそうに唇を噛んだ。
「ど、どうしたの？」
長門が不安そうに声を掛けると、翔輝は手紙を内ポケットに入れる。
「瑠璃からだ」
「瑠璃さんから？　で、内容は何だったんですか？」
大和の問いに、翔輝は悲しげにため息した。
「・・・知り合いの戦死名簿だった」
「え・・・」
その瞬間、皆の顔が悲痛にゆがんだ。
翔輝は一度目をつむると、再び静かに開く。
「小学校や中学の頃の友達に、海軍学校の頃の友達なんか、およそ三〇人くらいのね。中にはサイパン島で戦死した奴もいたよ」
「サイパン・・・私達が守れなかったから・・・」
「いや、お前達のせいじゃない。お前らは最善を尽くしたんだ。気にするな」
翔輝はそう言うと首を横に振り、静かに笑みを浮かべた。
「まぁ、そう悲しむなって。このご時世じゃ仕方がないんだから。それより、もうお前らケンカはやめろって。みんな仲良く。な？」
翔輝の言葉に、皆はうなずいた。それを見て翔輝も嬉しそうに微笑む。と、
「やっぱり長谷川はんはええ人やぁ」
伊勢は満面の笑みを浮かべて翔輝に抱き付いた。
「あぁッ！　伊勢さん！　離れてください！」
「・・・殺す」
「伊勢！　テメェ何してんだゴラッ！」
「・・・榛名・・・ッ！」

「あ、姉貴ッ！？」
「総員待避！　巻き込まれるわよ！」
甲板の上はまた騒がしい雰囲気に包まれた。艦魂が見えない水上も、どこか嬉しそうな顔をしている。
いつもの雰囲気が戻った甲板の上で、翔輝は大和達に囲まれて終始笑みを浮かべ続けていた。

第十二章　第三節　日向の計略　大和達の死闘（後書き）

今回はかなりコメディー要素を満載にしてみました。
翔輝と伊勢のデート（？）と、それを阻止する大和達、守る日向達の死闘。艦魂シリーズにふさわしいドタバタコメディー風となりました。
さて、これで日常編はおしまいです。次からはレイテ沖海戦に向けての物語となります。
史上最大の海戦を、どうか最後までお付き合いください。

第十二章　第四節　捷一号作戦発動　交差するそれぞれの想い（前書き）

ついに発動した捷一号作戦。
日米海上決戦がいよいよ本格的に始動します！
そして、あの悲劇のレイテ沖海戦を艦魂シリーズで完全再現！
あの子にあの子、そしてあの子までも命を落とす壮絶な史上最大の海戦が始まります。
始まりから終わりまで、どうか最後まで読んでください！

第十二章　第四節　捷一号作戦発動　交差するそれぞれの想い

マリアナ沖海戦終了後、戦艦部隊は訓練をする日々を続けていた。機動部隊はシンガポール方面で搭乗員の育成訓練を行っている。

サイパン島陥落以降マリアナ諸島の制海空圏は失われ、マリアナ諸島の日本軍は孤立していた。日本軍はこれを取り返そうとサイパン島に再上陸しようと考えたが、そんな事できる訳もなかった。

八月二日にはテニアン島、十一日にはグアム島の守備隊が玉砕した。両島もサイパンと並ぶマリアナ諸島の重要拠点であり、事実上マリアナ諸島は陥落した。

日本の絶対国防圏は完全に崩壊し、もはや本土決戦も時間の問題だった。

戦艦『大和』の会議室では会議が開かれていたが、もはや一刻の猶予もない状況なので会議は切羽詰っていた。

「絶対国防圏が崩壊したんだぞ！　もうこうなった以上ほとんど無傷の全戦艦部隊をサイパン島に突撃させるしかないだろ！」

金剛の意見はもはや愚策を飛び越えてヤケクソの一撃だった。そんな彼女の横にはいつも彼女の補佐をしている榛名の姿はない。今彼女はきっと甲板で翔輝の鍛錬をしているだろう。榛名の強い要望に長門からも頼まれて金剛が折れたのだ。

咆哮する金剛を長門が抑える中、大和と武蔵は手元の資料を見詰めていた。

「ねぇ武蔵。敵軍の次の目標はどこになると思う？」

「・・・恐らく米軍は日本の継戦能力を奪う為、そして自らの植民地を取り戻す為に、南方資源地帯との補給路の中継点――フィリピンを攻略すると思う」

「フィリピンが落ちれば、私達軍艦が動く為に必要な石油の確保ができなくなる。そうなったら――」

「・・・間違いなく、日本は終わる」
「そんな事は絶対させんッ！」
金剛がテーブルを激しく叩いて叫ぶと、まわりの者もうなずく。
「もしフィリピンが落ちれば、今度こそ本土決戦という事態になる。日本海軍は全力でフィリピンを死守しなくてはならない」
「山城の言うとおり。さすがに、ここまで来たら老兵の私達も行く事になるでしょ？」
「ふん。今度は貴様らも死力を尽くして戦う事になるぞ」
「望むところよ」
扶桑と金剛は互いを見合って不敵に笑う。いつもふざけている扶桑だって、日本海軍の古参に入る艦魂だ。祖国を想う気持ちは揺るぐ事はない。
「まぁ、その時はいずれ来るでしょう。だから、その時まで笑っていましょうよ」
長門の微笑みに、金剛も苦笑した。他の艦魂も長門の意見に賛成だ。
大和と武蔵は近い将来必ず来るであろう総力決戦に数多くの不安を抱きつつも、長門の笑みを信じる事にした。

十月十日、ハルゼー提督率いる米軍機動部隊は突如沖縄、台湾を空襲した。日本軍は本土防衛用の航空隊を派遣した。総数約六〇〇機の新生第一航空艦隊と第二航空艦隊、第一機動艦隊の艦載機は沖縄と台湾の基地航空隊と合同で反撃を試みた。
十二日～十六日にかけて基地航空隊は総攻撃を敢行した。その後国民に向けられて大本営が発表した戦果は以下の通り。
空母三二隻、戦艦四隻、巡洋艦六隻、駆逐艦三隻、艦種不明三隻轟撃沈。空母十五隻、戦艦五隻、巡洋艦十隻、駆逐艦一隻。艦種不明四〇隻撃破。損害三一二機未帰還というすさまじい戦果だった。
だが、これは戦果のとてつもない誤認と大本営の誇張発表が重なった結果で、本当は重巡洋艦二隻大破。空母一隻小破、他五隻に損傷、

航空機八九機損失という軽微なもので沈没した艦はなく、損失航空機だけは正確な数字だった。

国民の戦意を保つ為の大本営の誇大戦果は今までにも幾度となくあったが、今回の膨張はそれまでとは桁が違う大戦果になってしまった。

国民は歓喜及び海軍部も歓喜に沸いた。連合艦隊司令部はすぐさま第五艦隊に追撃命令を下したが、その後偵察機が捉えたのは、無傷の大機動部隊の姿だった。この時に海軍部はようやくこの航空戦の戦果は幻であった事を痛感した。だが、この情報は陸軍には流される事はなかった。陸海軍不仲という日本軍も問題が露呈した瞬間であった。

この台湾沖航空戦という名称のこの戦いの誇大戦果は、後の作戦に大きな影響を与える事になった。

時は戻って一九四四年九月二九日、連合艦隊司令部は神奈川県慶應義塾大学にある地下壕に移り、軽巡洋艦『大淀』は連合艦隊旗艦の任を解かれた。こうして事実上連合艦隊旗艦という艦職は消滅した。

その二週間後の十月十七日、ダグラス・マッカーサー陸軍大将率いる米陸海軍は突如フィリピン東南部のレイテ湾口のスルアン島に来襲。二〇日にレイテ島に大挙して上陸を開始した。

再びフィリピンに舞い戻って来たマッカーサー率いる全兵員は十万人を超え、最終的には二〇万人に達する大部隊だった。

艦魂会議の行われている会議室は緊迫した雰囲気に包まれていた。あの長門でさえ資料を見て苦しそうに顔をゆがめている。

「ついに、アメリカはフィリピンまで来たわね。きっともうすぐ豊田連合艦隊司令長官から出撃命令が下るわよ」

「言われるまでもない。フィリピンを失えば南方資源地帯との補給路を断たれ、戦争継続が不可能となる。それは絶対に防がなければ

ならないぞ」
　金剛も苦しそうに顔をゆがめている。他の艦魂も同じような顔をしている。
　大和と武蔵も落ち着かないという様子をしている。特に武蔵は資料を見て自分なりの敵の位置、兵力、その攻略方法を幾度となく計算していたが、そのどれも日本の負けを示していた。
「先の台湾沖航空戦の誤認戦果はみんな聞いてるやろ？　それを考えると敵の機動部隊はおそらく健在やと思うどす。そもそもあの機動部隊が総力で攻撃しても沈められんかった敵空母を三〇隻以上も撃沈するなんて考えられまへんで」
「伊勢の言うとおりだ。また大本営の誇張された発表だと判断するべきだ。最悪、敵機動部隊は無傷と考えなければならないと思う」
　山城の意見にはさすがの金剛も余裕のない表情を浮かべる。この最悪な状況で敵機動部隊が健在ならこちらに勝ち目なんてないのだ。
「これは、本当に死ぬ気で挑まねばならんな」
「敵空母はあ号作戦の時より多いはずだから、二〇隻くらいの大小の空母がいるはずだ。それに対してこっちは大型空母は『瑞鶴』だけ、軽空母は三隻、商戦改造空母は『隼鷹』以外はとてもじゃないが力にならねぇしな」
　榛名の意見に全員が気まずい沈黙に陥る。今までの経験で敵空母がとてつもない脅威になるのは身に染みている。それが今回は今までの十数倍の数を相手にしなければならないのだ。
　気まずい沈黙の中、日向が武蔵を見詰めた。
「ねぇ、まだ完成しないの？」
「・・・何が？」
「大和型戦艦三番艦の改造空母『信濃』だよ。そろそろ完成してもいい頃だと思うけど」
　日向の言葉に全員の視線が武蔵と大和に向かった。その目線はわずかな期待が込められていた。だが武蔵は静かに首を振る。
「・・・空母『信濃』はついこの前進水式を終えたばかり。まだ戦

えるようになるには時間がかかる」
「そらおかしくないか？　日向の言うとおり建造速度から考えたらもうとっくに完成してるはずやろ？」
伊勢の質問に武蔵は再度首を振る。
「・・・『信濃』は戦況の悪化で何度も建造中止になったり事故が多発したせいで建造が遅れている。それに傷ついた艦艇の修理やあなた達の航空戦艦への改造とかに時間と資材が優先されていたのも建造の後れの一つ」
「それならうちらを改造するより『信濃』を造った方が断然ええと思うんやけど」
「・・・悪化する戦局の中で後に戦力になる『信濃』より即戦力になる『伊勢』『日向』の方を優先したのは当然の判断。そもそも空母を揃えても肝心の艦載機が揃わない」
武蔵の言葉に伊勢も納得して黙る。だが、金剛はその言葉に鼻で笑う。
「ふん。肝心な時に役に立たんとは、使えない奴だな」
「金剛さんやめてください！　いくら金剛さんでも妹を侮辱するのは許せません！　失言を撤回してください！」
怒鳴る大和の言葉に武蔵は少し驚いたような顔をしたが、彼女にとっても信濃は妹だった。今の彼女の言葉は許せない。
「・・・姉さんの言うとおり。妹を侮辱するのは許さない」
まだ会った事のない妹を守る姉の姿に、さすがの金剛も気まずそうに視線を逸らす。
「はいはい。今は仲間割れしてる時じゃないでしょ？」
「長門の言うとおりよ。今は仲良くしましょ。ねぇ山城？」
「黙れ愚姉」
笑顔で言う扶桑の言葉を山城は一刀両断。そんな二人を伊勢は苦笑いしながら見詰める。だが、今はそれどころではなかった。
金剛は目をつむったまま口を開いた。
「今度の戦いは日本海軍の全兵力を用いて敵を殲滅でねばならん。

例え、連合艦隊の全艦艇を失ってでも、今度の戦いには勝たねばならん。それを心に刻み付けておけ」

金剛はそう言うと静かに部屋を去った。残された者の表情は皆暗く、これから先の壮絶な戦いに恐怖していた。武蔵はそんな彼女達解散命令を出すと、自らも静かに部屋を後にした。

自艦に戻った金剛は部屋で椅子に座りながら本を読んでいた。先に言うが平和小説や恋愛小説ではない事は断言する。彼女が読んでいるのは《高貴なる帝国海軍》という名の本だ。この本が最近の彼女の愛読書である。

金剛は無表情でそれを読み進める。大正時代を読み終えた時、突如ドアが大きな音を立てて開いた。

金剛はノックもなしに入って来た無礼者の方を見て。驚きのあまりそのまま椅子から転げ落ちた。

「な、なぜ貴様がここにいるのだ！」

金剛は驚愕一色の顔で叫びながらその人物を指差した。その先にいた青年はイタズラっぽい笑みを浮かべながら金剛に手を振る。

「久しぶりじゃねぇか――金髪ヤローッ！」

そこにいたのは日本海軍一の変人――滝川健太大尉だった。

「た、滝川！　なぜ貴様がここにいるのだ！」

金剛は悲鳴に近い声で滝川を問い詰める。それに対し滝川は何をバカな事をと言いたげな涼しい顔で答える。

「なぜって・・・今日から『金剛』に配属されたからだけど」

「な・・・ッ！」

金剛は驚愕のあまり開いた口が閉じられなかった――いや、脳が理解するのを拒んだらしく彼の声が脳に浸透するのに時間がかなり掛かったのだ。

「ちょ、ちょっと待て・・・なぜ貴様が私に配属されるのだ？」

金剛はとにかく冷静になろうと努めて冷静な声で問う。それに対し滝川はまったくいつもどおりに振舞う。

「さぁ？　兵員が足りないからじゃねぇの？」
「だからと言って何も貴様が来なくても・・・」
「俺だって金髪に乗るとは思わなかったぜ――はぁ、最悪の貧乏クジ引いちまったなぁ」
「それはこっちのセリフだ・・・」
金剛は頭を抱えて心底嫌そうな顔をする。滝川が自分に配置されるなんて最悪以外なにものでもない。そんな彼女を見て滝川はニッと笑顔になる。
「まぁ、こうなった以上一緒にがんばろうぜ」
「だ、誰かうそだと言ってくれ・・・」
滝川は気にした様子もなく声を上げて笑い続け、金剛は頭を抱えたまま全力で首を振り続けるのだった。
久しぶりの迷コンビは、まさかの展開をしたのであった。

翌日、久しぶりに艦魂会議に参加した翔輝の目の前に、まるで一週間ほとんど寝ずに仕事をし続けたような疲れ切った表情をする金剛が現れた。いつもは整われている美しい金髪は乱れ、目の下の白い肌には薄っすらと隈が浮かんでいる。何より、彼女から流れるオーラはあまりにも弱々しい。
「ど、どうしたんですかその隈？　徹夜続きなんですか？」
翔輝の心配する声に、金剛は目を合わせると大きくため息した。
「昨日滝川が私に配属されたのだ・・・」
「ほ、本当ですか！？」
翔輝は驚いた。まさかあの滝川が『金剛』に配置されるとは。運命というのもこうしてとんでもない事態を引き起こすのだろうか。
金剛は額に手を当てると力なくうな垂れる。
「本当だ。でなければ私がこんなになる訳がないだろう？　昨夜も何かにつけて絡んで来るのでうざくてな」
いつものような勢いは微塵も残されていないようだ。それだけ彼女は疲れ切っている。一体滝川は金剛にどんな事をしたのだろうか？

「これから先あいつとずっと一緒だと思うと生きる希望を失う」
「その気持ち、よくわかります」
金剛は苦笑いしながら言う翔輝の言葉に少し顔をほころばせた苦笑した。
「そういえば、貴様もあいつに困ってる一人だったな」
金剛も苦笑する。
「まぁ金剛さんほど苦労はしていませんが・・・がんばってください。僕もあいつの暴走を止める手助けはしますよ」
「すまぬが、頼めるか。私一人には荷が重過ぎる」
「ですよね。まったく滝川にはいつも振り回されますからね」
「これも試練という訳か・・・」
金剛は肩を落としながら自分の席に着いた。そんないつにないくらい疲労感を漂わせる彼女を心配してか榛名が翔輝の胸倉をグイッと掴む。
「おい長谷川。姉貴の様子がおかしいんだけど、何かあったのか？」
「なんか滝川が『金剛』に派遣されたんだってさ」
「マジかよッ！　あの変人がか！？」
「変人は言い過ぎ・・・かな？　どうなのかな？　どうなんだろ？」
「一人漫才はいいからよ。でもこれから先姉貴の地獄は続くだろうなぁ」
「そうかもしれないけど、結構いいコンビだと思うなぁ、あの二人」
「どこがだよ！？」
「さぁ？　何となくだよ」
「適当な事言うなよなぁ」
榛名は呆れながら金剛の下に戻った。そんな彼女を見詰める翔輝の顔は少し浮かない表情をしていた。
「とうとう、滝川まで実戦に配備されたのか・・・」
翔輝は窓の外の蒼い空を見詰めて、静かにため息した。

十月十八日、豊田連合艦隊司令長官はフィリピンを攻め込んでい

る米陸海軍に対し《捷一号作戦》を発動した。
捷一号作戦とは日本軍が立てた生命線ギリギリの最終防衛線とも言うべき捷号作戦の一つで、フィリピンに敵が侵攻してきた場合に備えたものだ。ちなみに捷二号作戦は九州南部、南西諸島、台湾方面に対するもの。捷三号作戦は本州、四国、九州方面、および情勢によっては小笠原諸島に対するもの。そして捷四号作戦は北海道、千島列島に対するもの。まさに生きるか死ぬかの最後の最終防衛線――絶対死守線とも言うべきものだ。
発令された捷一号作戦は残存連合艦隊の全戦力を投入してレイテ湾にいる敵輸送船団と上陸部隊を殲滅させて米軍のフィリピン侵攻を頓挫させるという希望的な勝利を望む作戦だった。
今回の主力は太平洋戦争以前の前時代的な艦隊が主力だった。すなわち、戦艦『大和』『武蔵』を基幹にした戦艦部隊率いる水上打撃部隊である。この艦隊には今や海戦の基幹である空母が参加しておらず、護衛戦闘機は一機もなく、裸の艦隊であった。
豊田司令長官はこの作戦に連合艦隊の全艦艇を失ってでもフィリピンを死守せよとの壮烈な命令を出していた。それほど、フィリピンは日本にとっては必要不可欠な最重要拠点であった。
捷一号作戦の発動に伴い、リンガ泊地に残存連合艦隊の主力が続々と集結していた。

ついに戦艦『大和』『武蔵』にも出撃が命令された。だが、艦橋に向かう大和の表情は浮かないものだった。
世界最大最強と謳われる自分がついに実戦で活躍できるという嬉しさと今まで体験してきた戦地での恐怖が両立し、その表情は複雑なものだった。
自分の役目を果たせる嬉しさ、本物の戦いへの恐怖感。
決して交わる事はない二つの思いが、大和の中で複雑に交差する。
「今度の戦いは護衛の空母が一隻もいない。なら、狙われるのは私や『武蔵』の可能性が高い・・・死んじゃうのかな？」

空母がいないなら狙われるのは空母に続く脅威である戦艦。それも超弩級巨大戦艦である自分達だ。それは自分が死ぬ可能性が高いというものであり、少女には辛い現実だった。

大和がため息しながら艦橋に入ると、そこには不安げに窓から甲板を見詰めている翔輝の姿があった。

「大尉？　どうされたんですか？」

大和が声を掛けると、翔輝はため息交じりに口を開いた。

「今度の作戦・・・生きて帰れるかなって思ってさ」

「な、何ですか突然？」

翔輝のあまりに突拍子もない発言に大和は意表を突かれる。だが、そんな大和を見詰める彼の瞳は真剣だった。

「護衛戦闘機はない裸の艦隊で敵の懐に突っ込む。それも艦隊の数は五〇隻にも満たない。こんなひ弱な艦隊じゃ死にに行くようなもんだよ」

護衛戦闘機のない裸の艦隊ほど、航空機の攻撃に対して弱いものはない。それも今回は敵の主力が集まっている激戦地。とてもじゃないが大損害は免れない。いくら『大和』が不沈戦艦と謳われるほどの優れた防御機構を備えていても、限界というものがある。そして、その限界を超えれば沈んでしまう。当然の結果だ。それに、今回は自分の乗る『大和』だけでなく数多くの艦艇が出撃する。そのどれもとも、最後のお別れになるかもしれないのだ。

いつになく弱々しい翔輝に大和は励ますように努めて笑顔になる。

「そ、そんな事ありませんよ。うまくいけばこの私の巨砲がその真価を発揮するかもしれないんですよ？」

「その前に沈められちゃ元も子もないけどね」

「し、沈みませんよ！　私は不沈艦です！」

大和は必死に訴えるが、翔輝の表情は変わらなかった。そんな彼を見て自分の無能さと彼の悲しい顔に落ち込んでいると、

「・・・安心して。私が翔輝や姉さんを守るから」

「む、武蔵？」

突如現れた武蔵に二人は驚いた。いつも神出鬼没な彼女の登場に驚く事は最近はあまりなくなっていたが、今回は一味違かった。
「ど、どうしたの？　化粧なんかしちゃってさ」
そこにいた武蔵は長年着ていたのではなく新品の軍服を着た上にきれいに化粧をして見違えるほどきれいになっていた。彼女の幼さと合った、最高のできばえだ。
武蔵は翔輝の視線に少し顔を赤らめながら窓の外の遠くに浮いている自艦を見詰める。そこにいた『武蔵』の艦体は新品同様な鈍い銀色の輝きを放っていた。
「・・・艦長が出撃前に艦体のお色直し（艦体の再彩色）をした。今や『武蔵』は新品同然な輝きを放っている」
「いいなぁ、私は完成以来お色直しなんかしてないから水面下はサビやフジツボだらけだよぉ」
大和はすごくうらやましそうに言うが、せっかくお色直しをしたというのに武蔵の表情は暗いものだった。
「・・・空母のないこの艦隊で狙われるのは私か姉さん。でもきっと、敵は新品同様に輝く私に集中するはず。そうなれば姉さんを狙う敵機の数は減るはず」
「ちょ、ちょっとそれって――」
「・・・姉さんは無事でも、私は生き残れない」
武蔵のいつもと同じ無表情で放たれた言葉だが、その言葉には悲痛な想いが込もっていて瞳には暗い陰があった。
翔輝はそんな武蔵を見詰める。翔輝の真剣な目線に武蔵は気まずそうに視線を逸らす。わずかに見える黒い澄んだ瞳は悲しげに揺れている。
「・・・私は、二人が無事ならそれでいい・・・それで・・・」
「本当に、それでいいの？」
翔輝の本心を訊こうとする真剣な言葉に、武蔵はうつむく。
「・・・本当は、死ぬのは嫌。でも、明日へ希望を繋ぐ事はできる。翔輝と姉さんに希望を繋げられれば、私は本望」

武蔵は顔を上げて翔輝の目を見て真剣な言葉を放つ。そんな武蔵に、翔輝は少し怒ったように冷たく言い放つ。
「言っておくけど、僕は死を覚悟する奴は大嫌いだから」
「・・・それでもいい。翔輝に嫌われても、翔輝が無事なら、それで――」
二人にはわかっていた。彼女は本心とは違う事を言っていると。彼女だって死にたくない。生きたいと思っているのだ。それは誰だって思う当然の事だ。
翔輝は武蔵の軍帽をそっと外す。驚く武蔵に翔輝は自分の軍帽を被せる。
「生きて日本に帰ろう。約束だ」
「・・・で、でも――」
反論しようとする武蔵の唇に、翔輝はそっと人差し指を当てる。その時の表情は兄のようにとても優しげなものだった。
「や・く・そ・く・ね？」
翔輝の反論を許さないという行為に、武蔵は沈黙した。そんな武蔵の頬を翔輝はそっと撫でる。まるで大切な妹に向ける兄のような優しさがあった。
「生きて日本に帰ろうな。約束だぞ」
翔輝の強固な言葉に、武蔵は根負けして静かにうなずいた。
「・・・わかった。約束する」
「約束だぞ？　破ったら許さないからな」
「・・・了解」
武蔵の表情は少し緊張が解けて優しげなものになっていた。わずかな笑みを浮かべるをそんな彼女に背を向け、翔輝は窓の外を見詰める。
「・・・翔輝、この帽子」
「お前に貸しておく。無事に日本に帰れたら返してくれ」
「・・・わかった。必ず返す」
翔輝は嬉しそうに笑い、仕事の為に艦橋を去った。残された正反

対な姉妹はお互いに顔を見合う。そのどちらの視線の先にも、大切な姉、妹の姿がある。今まで幾度となく対立したりケンカしてきたが、大切な家族である。

大和は自分を見詰める妹に、優しく笑みを浮かべる。

「大尉もああ言ってるし、がんばろうよ」

いつの間にか、自分の中にあった恐怖感が和らいでいた。

大好きな彼が覚悟を決めているのに、自分が迷っていた事が恥ずかしかった。そして何より、不安や恐怖感は和らいでいる。彼の笑顔が、こんなにも自分に希望の光を差し込む。それが嬉しくて、優しくて、温かくて、自分に勇気をくれる。

もう迷わない。そう決めていた。

大和の言葉に、武蔵は少し大きめの翔輝の軍帽を被り直すと、強い想いが輝く瞳を向け、静かにうなずいた。

「・・・そのつもり。翔輝との約束は死んでも守る」

「死んじゃ意味ないと思うんだけど・・・」

「・・・むぐ」

言い返せない妹を見て大和は楽しそうに笑みを浮かべた。

武蔵もそんな姉を見詰め、口元をわずかにほころばせた。

大和が差し出した手を、武蔵も手を伸ばしてしっかりと掴む。互いの温もりを手の平で感じ合い、二人の戦姫は覚悟を決めていた。

一方、金剛は相変わらず滝川に付きまとわれていた。

廊下を早歩きで歩く金剛を滝川が後ろからついて来る。

金剛はピタッと足を止めて立ち止まると、振り返って滝川を睨む。

「いい加減私から離れろ。もう作戦が下令されてるのだぞ」

不機嫌そうに言うが、滝川はのんきに頭を掻く。

「そうは言っても、俺は補給兵だからな。戦闘中に機銃座へ弾を補給するのが仕事だからする事がなくて」

「本当に役に立たん奴だなぁ」

「ため息交じりに言うのはやめてくれるかな？　なんかすげぇムカ

つくんだけど」
「事実だろう？」
「まぁ、そうなんだけど」
言い返せずに困っている滝川を見詰め、金剛は口元を吊り上げて笑う。そんな彼女に滝川は不気味そうに半歩引く。
「な、何だよニタニタしやがって」
「――いや、貴様とこうしたバカ話ができるのもこれが最後かもしれんと思ってな」
「はあ？　お前何言ってんだ？　これからも続くに決まってんだろ？」
何言ってんだと言いたげな目で見詰める滝川に対し、金剛は窓の外を見詰める。その瞳はどこか寂しげなものだった。
「今度の戦いは生きて帰れる保障はないからな」
「お前・・・」
滝川の顔からも笑みが消えて真剣な瞳で見詰める。そんな滝川の視線を無視して金剛は袖をめくって腕時計を見詰める。
「出撃時間が近い。貴様も早く配置に戻れ」
「言われなくても行くぜ」
滝川は背を向けて歩き出す。彼の背中を金剛は静かに見詰める。そんな彼女の視線に気が付いてか滝川はふと振り返った。
「何だ？　人の背中をジロジロと見てさ」
「な、何でもない！」
金剛は慌てて滝川から視線を逸らす。そんな彼女の姿を見て滝川は不思議そうに首を傾げる。
「変な奴だな」
「う、うるさい！　さっさと行けッ！」
「わーってるよ。うるせぇな」
滝川はめんどくさそうに頭を掻きながら再び背を向けて歩き出す。
金剛も不機嫌そうに顔をしかめて滝川とは反対方向に歩く。その時、

「おい金髪」
突然の滝川の声に金剛はめんどくさそうに振り向く。すると、滝川が優しげな笑みでこちらを見ていた。その笑顔にドキリとした自分がいる事にも驚く。
滝川は笑顔のまま金剛に手を振る。
「必ず日本に帰ろうな！　それじゃ！」
滝川はそう言い残すと走り出した。小さくなって行く彼の背中を見詰め、金剛はふと我に返る。
「ふ、ふん。当然の事を」
そう吐き捨てる彼女の頬は赤くなっていた。だが、その表情は悔しげにゆがんでいた。
「くそ、今一瞬でも胸を打たれた自分が情けん。もっと修行せんと」
不機嫌そうに言い放ち、金剛は早歩きでその場を立ち去った。

第十二章　第四節　捷一号作戦発動　交差するそれぞれの想い（後書き）

捷一号作戦の発動、武蔵の決意、そして滝川と金剛の迷コンビ復活など、盛りだくさんでお送りしました。
次は瑞鶴達のお話です。
空母達に託されたその任務とは！？
そして、彼女達の想いと決意は！？
お楽しみに。

第十二章　第五節　瑞鶴達の決意　機動部隊最後の任務（前書き）

ついに捷一号作戦が発動。日本を守る為、日本海軍に残る戦姫達が最後の決戦に向かって出撃した。
大和や武蔵、長門などの戦艦達の次々に出撃。最後の決戦に向かって海を翔ける。
だが、今回の作戦の要である戦艦部隊がレイテに突入するには強大な敵機動部隊の存在が障害となっていた。
その為、連合艦隊司令部はこの艦隊を誘き寄せる為にある奇策を用いた。
それは・・・

第十二章　第五節　瑞鶴達の決意　機動部隊最後の任務

捷一号作戦は発動された。

残存連合艦隊の全戦力を投入するこの戦いは日本海軍が米軍に挑む名実共に最後の決戦であった。

今までトラックや内地でその巨体を浮かべているだけだった戦艦部隊を余す事なく参加させたこの戦いは日本海軍の本気を思わせていた。だが同時に日本には護衛させるだけの空母も残っていないという状況でもあった。

残存連合艦隊はその全戦力を結集させて一路レイテに向かった。

その戦力は第二艦隊司令長官栗田健男中将率いる戦艦『大和』『武蔵』『長門』、重巡洋艦『愛宕（旗艦）』『高雄』『摩耶』『鳥海』以下二隻、軽巡洋艦『能代』、駆逐艦『島風』以下八隻の第一遊撃部隊第一部隊と戦艦『金剛』『榛名』、重巡洋艦『鈴谷』『熊野』『利根』『筑摩』、軽巡洋艦『矢矧』、駆逐艦『雪風』以下五隻の第二部隊。総数三二隻の第一遊撃部隊こと栗田艦隊が主力となってレイテに向かう。その他別方向から主力部隊と同時に突撃する西村祥治中将率いる戦艦『扶桑』『山城（旗艦）』、重巡洋艦『最上』、駆逐艦四隻の第一遊撃部隊第三部隊こと西村艦隊と志摩清英中将率いる重巡洋艦二隻、軽巡洋艦一隻、駆逐艦四隻の第二遊撃部隊こと志摩艦隊。主に主力部隊はこの三部隊に分かれてレイテに突入する為、栗田艦隊は十八日にリンガを出港。ブルネイで燃料補給後二二日に西村艦隊と同時にブルネイを出撃。途中両艦隊は別れてレイテに突撃した。その前日には志摩艦隊も台湾を出撃してレイテに向かった。

だが、この栗田艦隊にはある脅威がその進撃地点を占領していた。

――それは、主力部隊である栗田艦隊が通過するフィリピンのサンベルナルジノ海峡を守るハルゼー大将率いる空母十七隻の強力な高速空母艦隊だった。

連合艦隊司令部はこれを排除して栗田艦隊を無事に海峡を突破させて三艦隊同時にレイテに突入する為に、ハルゼー機動部隊を引き付ける囮艦隊を編成した。

それは、マリアナ沖海戦でもはや戦う力を失った――小沢治三郎中将率いる第三艦隊こと日本機動部隊だった・・・

栗田艦隊がブルネイに向かった頃、修理を終えて内地に待機している連合艦隊唯一の正式空母にして第三艦隊旗艦の空母『瑞鶴』に、連合艦隊司令部の参謀達がやって来た。

「・・・で、連合艦隊司令部の者が私の所に何の用かね？」

「小沢機動部隊の行動をお知らせに来ました」

小沢の長官室に連合艦隊参謀長の草鹿、同じく首席参謀の神重徳（かみしげのり）大佐が訪れていた。

「現在米軍はフィリピン東南部レイテに攻撃を開始しています」

小沢と草鹿が互いに席に着くと、開口一番に神が言った。

「長官もおわかりかとは思いますが、フィリピンを失えば我が国の海上補給路は断たれ、戦争継続は不可能になってしまいます。よって、この作戦では海軍の全艦艇を喪失してでも、フィリピンは守り通さねばなりません」

「うむ、それで？」

神の言葉に、小沢は続けるようにうながした。

神はフィリピン近海の地図を広げ、レイテ島を指して言った。

「捷一号作戦の発動にともない、すでに栗田中将率いる第一遊撃部隊はリンガを出航してブルネイに進出しました。そこで給油の後、二五日のレイテ突入を目指します。狙いは上陸部隊の粉砕、輸送船団の撃滅にあります」

「うむ」

「しかし、栗田艦隊の通過するサンベルナルジノ海峡には、猛将と名高いハルゼーの機動部隊がいます。空母十七隻、搭載機一〇〇〇機の強大な敵に叩かれては、いくら我が『大和』『武蔵』が堅牢と

いえども、大損害は必至。とても海峡の突破は不可能でしょう」
「栗田艦隊の事はわかった。で、私の部隊は何をすればいいんだ？」
小沢の言葉に、神はうなずく。
「ハルゼーの機動部隊を北方に吊り上げ、その隙に栗田艦隊が海峡を通過して、レイテに突入するのを助けていただきます」
「私の部隊で、敵を北方に吊り上げる、だと？」
小沢の表情が変わった。
「そうです。ハルゼーも空母部隊が主力と考え、機動部隊に攻撃を集中するでしょう」
「・・・神君。まさか、君は・・・」
神は一瞬戸惑う様子を見せたが、言った。
「・・・左様です、長官。長官の部隊には、敵を引きつける為の囮となっていただきたい」
これが、日本機動部隊最後の作戦となった。

「これはどういうことなの！？」
空母『瑞鶴』の作戦室に千代田の怒声が響き渡った。
瑞鶴が機動部隊全艦魂を集め、フィリピン方面防衛作戦、捷一号作戦の説明をした時の事だった。
「連合艦隊司令部は私達機動部隊に死ねと言うの！？」
千代田は拳で机を思いっきり叩いた。その瞳は怒り一色だった。
当然だろう、主力部隊の為に、自分達が囮になるのだ。怒らない方がおかしい。
「そうです！　連合艦隊司令部は何を考えているんですか！」
「そうよッ！　我が栄光の機動部隊を無駄死にさせる気なの！？」
千歳と瑞鳳がこれに追い討ちを掛けるように立ち上がって叫ぶ。
作戦室は一時騒然としたが、瑞鶴の静かな声は一瞬で皆を黙らせた。
「落ち着いて、みんな」
マリアナ沖海戦以降機動部隊再建に全身全霊で身を削って来た瑞

鶴の統率力には目を見張るものがある。翔鶴の意思をしっかりと受け継ぐ瑞鶴を、皆は見詰める。

「みんなの言いたい事はよくわかる。そしてみんなが私達機動部隊を愛している事もわかる」

作戦室は水を打ったように静まり帰って瑞鶴の言葉に耳を傾けている。

「でもこれ以上、作戦の取りようが無いの・・・わかって欲しいの。お願い。この私だって命懸けで望むんだから」

瑞鶴の言葉に全員が沈黙する。そんな中部屋の重苦しい雰囲気を和らげる陽気な声が部屋に響いた。

「大丈夫だよぉ。私とお姉ちゃんが三式弾をバンバン撃って守ってあげるから。安心してよ」

今回機動部隊護衛の任を受ける事になった日向が無邪気な笑顔を浮かべながら言った。

「私とお姉ちゃんが敵機を引き寄せるからさ。まぁ、一筋縄じゃ行かないと思うけどさ。でもがんばるから！」

日向の言葉は、皆を安心させようとして出たものだったが、隣に座る伊勢には気休めにか聞こえなかった。

「日向落ち着きなさいな。今度の作戦は囮なんよ？　うちは正直嫌や。最も狙われる可能性がある瑞鳳達が怒るのも仕方ないで」

「私だって囮なんか嫌だよぉッ！　でも・・・でもそうしないと大和達が敵機の嵐の中に突っ込むんだよ！？　私達ががんばらないと、主力部隊は全滅するかもしれないんだよ！？　そんなの私は嫌だよ！」

「それはうちやって同じや！　大和はん達を守りたいし、『大和』には長谷川はんだって乗ってるんや！　絶対守ってあげたい・・・でも、私達だって死にたくないんよ！」

伊勢と日向は激しく言い合うと互いを睨み合う。いつも温厚で仲の良い二人がここまで激論をするのは珍しい。

そこまでこの作戦に掛ける想いが正反対なのだ。

この二人の言い合いが起爆剤となり作戦室は囮賛成派の日向と伊勢や瑞鳳達を中心とした囮反対派が激論を交わした。

だがしばらくすると日向が劣勢になり始めて泣き出してしまった。だが命が懸かっている皆は追撃の手を緩めない。その時、

「ともかく」

瑞鶴の声が再び貫いた。皆の視線は再び瑞鶴に注がれる。

「これ以外に、日本が生き延びる道はないの。理解してほしい。解散」

瑞鶴の解散宣言の後、艦魂達は自艦に戻った。だが、日向だけは残って瑞鶴の横に立った。その瞳は涙でいっぱいだった。

「さっきはありがとう。助けてくれて」

「気にしないでください。こちらこそ感謝してます。味方が一人でもいてくれるのはとても嬉しいです」

「・・・でも、どうしてそんなに落ち着いてるの？　この作戦、正式空母のあなたが一番狙われるのよ？」

「そうですよ？　でも、旗艦である私が折れては艦隊の士気に関わります。だからこそ気合を入れねばなりません」

「でも、無理はしちゃダメだよ？」

日向は笑顔で言うが、瑞鶴は表情を和らげず堅いままだった。

マリアナ沖海戦以降瑞鶴は変わった。

亡き姉の後を継いで機動部隊旗艦になった彼女はめったに笑う事はなくなった。姉のように立派な機動部隊旗艦になる事を目指して日々仕事に打ち込んできたおかげで常に冷静沈着な指揮が執れるようになっていた。

「日向さん。あなたには伊勢さんの説得をお願いします」

「うん。わかった」

日向はそう返事すると急いで姉の後を追った。

一人部屋に残された瑞鶴は作戦書類を見詰める。その表情は先程までとは違い不安そうなものだった。

「こんな作戦・・・私一人だけでいいのに・・・」

自分はともかく、自分以外の者を巻き込みたくない。そんな思いがあって瑞鶴の表情は暗いのだ。

一人瑞鶴が暗い表情を浮かべていると、突如ドアが開いて誰かが入って来た。それは、

「艦長？」

「お、瑞鶴。もう会議は終わったのか？」

「はい。先程終わりました」

瑞鶴の返事に貝塚はうなずくと部屋を出て行った。その後を慌てて瑞鶴も追う。

貝塚の背中に瑞鶴は黙ったまま続く。そんな彼女に貝塚は突如振り向く。

「ひゃぁッ！」

瑞鶴は至近距離から突然見詰められて慌てて彼から離れる。そんな彼女を見て貝塚は不思議そうに見詰める。

「どうしたんだ？」

「な、何でもありません」

「そうは見えないけど」

「何でもありませんったら！」

瑞鶴は顔を赤らめたまま怒ったような表情を浮かべて貝塚を追い抜く。

「おい、ちょっと待て」

貝塚は突如瑞鶴の肩を掴んだ。

驚く瑞鶴に貝塚は真剣な瞳で見詰める。

「瑞鶴――お前は俺が守ってやるから・・・安心しろ」

「な、何ですか突然？」

困惑する瑞鶴に、貝塚は真剣な眼差しを向けたまま口を開く。

「今度の戦い、敵機は『瑞鶴』に集中するだろうけど、必ず俺が守ってやるからな」

貝塚の言葉に瑞鶴は顔を赤らめたが、すぐに冷静になる。

「でも、今回の作戦は囮任務です。生きて帰る事を前提にしている

訳じゃないんですよ？」
「それは大和達だって同じだろ？」
「でも向こうは主力ですよ？　それに対してこっちは囮です」
「あ号作戦の時は大和達が囮になってくれただろ？」
《あ号作戦》という言葉に瑞鶴の表情が暗くなり腰に挿してある姉の刀を見詰める。貝塚は自分が地雷を踏んでしまった事に気づき慌てて話題を変える。
「今各地から飛行機を集めてるけど、ギリギリ一〇〇機を超えるくらいしか集まりそうにない」
「た、たったそれだけなんですか？」
「これでも無理してるんだ。無理言うなよな」
「でも、さすがに少な過ぎるんじゃ・・・」
「安心しろ。今回の任務は敵空母を攻撃する事じゃなくて敵空母を誘き寄せる事だ。艦載機の少なさは問題にはならない」
「・・・そ、そうですよね。今回は囮なんですよね」
落ち込む瑞鶴に貝塚は悔しそうにつぶやく。
「それにしてもかつて最強と謳われた日本機動部隊が囮作戦をするとは、昔の栄光はどこへ行ってしまったんだ」
「仕方ありません。それはかつての栄光でしかありません。それに、その栄光を築き上げたのは赤城さん達です。私は何もしてません」
「それは違うと思うぞ。お前だって真珠湾からずっと戦い抜いて来たんだからさ」
「そうでしょうか？」
「そうだよ」
貝塚の言葉に瑞鶴の表情は少しほころぶ。そんな彼女に向かって、貝塚は真剣な瞳で見詰める。
「だからこそ、俺達で日本機動部隊の歴史に終止符を打とう。最高の有終の美を飾ってな」
貝塚の言葉に瑞鶴は静かにうなずいた。
再び歩き出した貝塚の背中を見詰めながら、瑞鶴は覚悟を決めた。

日本連合艦隊の歴史に終止符を打つ。
貝塚の言った言葉が、瑞鶴の決意となった。

その夜、瑞鶴は再び艦魂達を集めた。
再び集まった彼女達の表情は暗く、誰もが囮艦隊になった事に悔しそうに顔をゆがめていた。
そんな中、瑞鶴は落ち込む彼女達に宣言した。
「私達大日本帝国海軍機動部隊は戦争開始からずっと戦い続け、戦争初期は世界最強と謳われた。でも、今やその面影は残ってない。だからこそ、私達は最後の日本機動部隊として、日本機動部隊の歴史に終止符を打つ。それがこの作戦に対する私の想いよ」
瑞鶴の言葉に瑞鳳達は驚いたような表情を浮かべる。誰もが彼女の宣言に耳を疑っているのだ。そんな中、
「私は瑞鶴の味方だよ！　私だって半分空母みたいなものなんだもの！」
日向は力強く手を上げた。そんな日向を瑞鶴は嬉しそうに見詰める。だが、そんな二人を見詰める伊勢は厳しい顔のままだ。
「あんたの決意はようわかった。せやけど、そんなんで瑞鳳達が納得すると思うんか？」
伊勢の厳しい言葉に瑞鶴少し不安げには瑞鳳達を見詰める。
千歳と千代田は互いの顔を見合って悩んでいる様子だったが、瑞鶴の親友である瑞鳳は・・・
「――私は、瑞鶴を信じる。私は瑞鶴の親友で、彼女を守る事に誇りを持っている。彼女が最後の決戦に行くと言うなら、私も行く」
瑞鳳はそう力強く言うと瑞鶴に笑みを向ける。そんな瑞鳳の言葉に瑞鶴は嬉しそうに笑みを浮かべる。すると、それが起爆剤になったかのように出撃賛成の意見が続出した。
「私も行きます。今の私達の指揮官は瑞鶴さんなんですから。私は瑞鶴さんにどこまでもついて行きます」
前連合艦隊旗艦にして機動部隊護衛を務める大淀はそう言うと口

元にわずか笑みを浮かべてメガネのブリッジを人差し指で上げる。
「瑞鳳だけにこんな危険な任務は与えられません。私も瑞鶴長官について行きます」
そう言ってメガネの奥の瞳を強く輝かせたのは瑞鳳の義姉の龍鳳。マリアナ沖海戦の傷も癒え、今まで他の空母と同じく内地で待機をしていた。そんな彼女も瑞鶴の強い想いに触れ、自らも命を懸けると決意したのだ。
「姉さん・・・」
「瑞鳳。がんばりましょう」
「うん！」
瑞鳳と龍鳳は互いを見合うと笑みを浮かべ合った。そんな仲のいい姉妹を見詰め、瑞鶴は少しうらやましそうな顔になる。
瑞鳳と龍鳳の言葉に、横で複雑そうな顔をしていた千歳と千代田も決意したような顔をしてうなずき合う。
「千代田。私達もがんばりましょう」
「ま、まぁ、姉さんがいいなら私が反対する理由はないけど」
「じゃあ決まりね」
千歳と千代田の言葉に、まわりからは惜しみない拍手が送られた。そして、この二人が賛成に回った事で、残された反対者は伊勢ただ一人となっていた。
伊勢は目を閉じてずっと沈黙を続けている。そんな彼女に瑞鶴と日向は不安そうに近づくと声を掛ける。
「伊勢さん」
「お姉ちゃん」
瑞鶴と日向が見詰める中、しばし伊勢は目をつむって沈黙を続けていたが。やがてその瞳がゆっくりと開かれた。その黒く澄んだ瞳には燃え上がる闘志が宿っていた。
「――やっと決意を固めたんやね」
「え？　それは一体・・・」
伊勢は立ち上がってうーんっと背中を逸らして力一杯伸びる。そ

の表情はとても優しげなものだった。
　そんな先程までとは打って変わった伊勢に一同が唖然としていると、伊勢は優しい笑顔で皆を見詰める。
「まったくもう。さっさと意思統一してくれへんから寝てまうところやったやない」
　その笑みに気づいたのは彼女の妹の日向だけだった。
「もしかしてお姉ちゃん・・・みんなの心を一つにする為にわざと悪役に・・・？」
「まぁ、そんなところやねぇ」
「でも、それなら伊勢さんが統一してくれれば・・・」
「バカやな。この部隊の旗艦はあんたやろ？　うちが統一しても意味がないやろ？」
「伊勢さん・・・」
　瑞鶴が感動の視線を浴びせると、伊勢は少し照れたようにはにかむ。
「これでも、うちはこの部隊では最古参の艦魂やからね。ちっとは考えてるんよ？」
　伊勢はそう言うと、表情を再び表情を固くする。そんな伊勢に、瑞鶴達も自然と表情が引き締まる。皆を見詰め、伊勢は口を開く。
「これでうちらの意思統一はできた。後は、全力で敵機動部隊を誘い出すだけやな。うちらの奮闘によっては、大和はん達主力部隊を全滅させる可能性もあるんやから」
「そうですね――明日には出撃します。各自、自艦に戻って明日の出撃の用意をするように」
　瑞鶴の言葉を最後に、艦魂達は自艦に戻った。
　瑞鶴も、伊勢と日向に敬礼してその場を去った。

　艦橋に戻った瑞鶴はそこで部下達を陣頭指揮していた貝塚に声掛けた。
「艦長」

「お、瑞鶴――その様子だとうまくいったみたいだな？」
ニッと笑う貝塚に、瑞鶴は笑顔でうなずく。
「はい。艦長のおかげです」
「俺は何にもしてないぞ？　やったのはお前だ」
「それはそうかもしれませんが、でも艦長の助言のおかげで助かりました」
「それは良かった」
貝塚はそう言うと再び仕事に戻る。
機動部隊が所属する第三艦隊司令長官小沢治三郎中将の乗る機動部隊旗艦の『瑞鶴』艦長の貝塚は出撃前でとても忙しい日々を送っているのだ。
「何か手伝いましょうか？」
「いや、いいよ。明日は出撃なんだから、ゆっくり休め」
「で、でも・・・」
「女の子が無理をするもんじゃない。休んでなさい」
貝塚の温情に瑞鶴は素直に従って部屋を出ようとした時、指揮官である小沢が現れた。
「貝塚君。出撃の用意は進んでいるかい？」
「はい。各艦の艦長との打ち合わせも終わりました。皆長官について行く覚悟をしております」
貝塚の言葉に小沢の表情は暗くなる。
「長官？　どうされたんですか？」
「すまない」
小沢は突如貝塚に頭を下げた。驚く一同に、小沢は自らの胸の内を明かした。
「君達が愛する機動部隊をこんな作戦に参加させてしまう事になってしまって、本当にすまないと思っている」
「長官の責任ではありません。連合艦隊参謀長直々の命令なら逆らう事などできませんからね」
「いや、私が本気で抵抗すれば草鹿も諦めてくれただろう。だが、

私はそれを引き受けてしまった。これは全て艦隊司令長官である私の責任だ」

「長官・・・」

「あの時、私はそんな任務を受けるつもりはないと言おうとした。だが、その時草鹿が栗田艦隊はもうブルネイに進出したと言ったんだ。この言葉に、私は逆らうのをやめた。栗田や宇垣、西村に志摩といった連中が命懸けで戦地へ向かったと言うのに、私の艦隊だけ内地で安穏としている訳にはいかない。そう思ってしまった。今考えれば、もっとあの時冷静になっていれば、こんな事には・・・」

小沢の言葉に、貝塚は優しく微笑む。それは周りを囲む皆にも伝わる。もちろん瑞鶴にも。

「それは長官がお優しい方だからです。栗田中将の艦隊を助けたいという気持ちがあったからこそ、この任務を引き受けたのでしょう？　我が艦隊の将兵皆長官の気持ちを理解しております。だからこそ、皆は大きな抵抗もなくこの任務を引き受けたのです――長官の責任ではありません。私達も皆長官と同じく日本を、同志を守りたいという想いは同じなのですから」

「貝塚君・・・」

小沢はしばし貝塚を見詰めていたが、ふと優しい笑みを浮かべた。

「君の言葉は・・・温かく受け取っておく」

小沢の言葉に貝塚は嬉しそうに瑞鶴を見詰める。

瑞鶴も貝塚の視線に気づいて笑みを浮かべる。その時、

「そこにいるんだろ？　瑞鶴」

突如話し掛けられて瑞鶴は驚いたが、彼には艦魂は見えない。でも、貝塚の視線を追って彼女の存在に気づいたのだ。

小沢は瑞鶴のいる空間を見詰め、申し訳なさそうな顔で口を開く。

「すまない。この戦争で常に前線で活躍し続けた君に、こんな作戦を押し付けてしまって・・・すまないと思っている」

「長官・・・」

「でもこれが、機動部隊が戦える最後の戦いになるかもしれん。嫌

な任務だと思うが、やってくれるか？」
　小沢の質問は愚問としか言いようがなかった。
　瑞鶴は貝塚に自分の気持ちを伝え、貝塚はそれを小沢に伝える。
「瑞鶴の言葉を代弁します。《命令ならどんな戦地へも向かう。それが帝国海軍軍人です。ですが、私は自らこの戦いに赴きたいと思っています。他の艦魂達も皆同じ想いです。皆、愛する祖国を、愛する者を守りたい。その気持ちは皆同じです。だから、長官のお気持ちはわかります。だからこそ、私達は長官と共に行きます――日本機動部隊の有終の美を飾る為に》」
「そうか・・・ありがとう」
　小沢は瑞鶴の言葉に小さくうなずき笑顔を向けた。
　その後小沢は各員に命令を下すと長官室に戻って行った。そんな彼の背中を、瑞鶴と貝塚は笑顔で見詰めるのであった。

　一方、作戦に参加する事となった『瑞鳳』の格納庫では剣が愛機、零式艦上戦闘機五二型の整備をしていた。
　緑色の機体に描かれた大きな日の丸。それが自分の愛機の勇ましい姿だった。
「剣、ここにいたのね。捜したじゃない」
　その聞き慣れた声に振り返ると、そこには瑞鳳の他に千歳、千代田、龍鳳といういつものメンバーが揃っていた。龍鳳は千代田の後ろに隠れている。彼女は極度の男性恐怖症らしいので、あまり近づかないようにはしている。
「みんなどうしたんだ？　会議は終わったの？」
「もうとっくに終わったわよ」
　瑞鳳は呆れたような声で言う。その横では千歳がニコニコを笑みを浮かべ、千代田が敵対心むき出しで睨んでいて、龍鳳が少し怯えた目をしていた。いつもと同じメンバーだ。
「そっか、じゃあみんな明日の出撃に備えてもう休んだ方がいいよ」
「わかってるわよ。で？　あんたはどうするの？」

「僕はもう少し整備をしてからにするよ」
「っていうか何で整備兵に任せないのよ」
千代田の問いに、剣は雑巾を絞って配線などに付いた油を拭いながら答える。
「こいつは僕の相棒だ。だから、自分で手入れしたいんだよ。一緒に戦地を潜り抜けて来た大切な相棒だからな」
「うわぁ、こいつ何？　ゼロフェチ？」
「そんなんじゃないよ！」
気持ち悪そうにジト目で見詰める千代田に剣は雑巾を床に叩き付けて怒る。確かに零戦は好きだがそんな言われ方をしたくない。
「うっさいわね！　だったらゼロ萌えよ！」
「その不適切な言葉を撤回しろ！」
睨み合う両者を見詰めて瑞鳳は頭を抱え、龍鳳は怒る剣を怖がる。そんな中ポカーンとしているのは千歳。
「虚無の魔法？」
「あのさ姉さん。わかる人にしかわからないネタはやめようね」
千代田のツッコミに千歳は不思議そうに「釘宮――」と言いかけて「だからやめなさいってばッ！」と千代田に口を塞がれる。
剣はそんな皆にため息すると床に叩き付けた雑巾を拾ってバケツの中の水で洗って絞ると、再び油を拭い、スパナを取り出してボルトを締め直す。
そんな彼を見詰め、瑞鳳は不機嫌そうに頬を膨らませる。
（何でこんな事してるのよ。明日は出撃なのよ？　なのに、どうして一緒にいようとか考えないのよ）
瑞鳳はうーっと唸りながら睨む。そんな彼女の視線に剣は困惑する。すると、
「あ、あの。私もお手伝いしますね」
そう言ってうんしょと新しい水の入ったバケツを持って来たのは千歳。いつの間に。
「ね、姉さん！　何してるのよッ！？」

千代田が慌てて駆け寄ってバケツを奪い取ろうとするが、千歳はそれを拒むと剣の近くに置く。途中何度も零したのか、服が濡れている。

「あ、ありがとう」

「いいんです。それより私に手伝える事はありますか？」

千歳はニッコリと微笑む。そんな彼女の優しさに剣は自然と微笑んでしまう。そんな彼のにやけ顔を、瑞鳳はキッと睨む。

「じゃ、じゃあそこの工具箱を取って――」

「ほら」

剣が言い終わる前に、瑞鳳は彼が求めていた物を差し出す。そのあまりの早業に皆驚きを隠せない。そんな皆――特に剣に見詰められ、瑞鳳は恥ずかしそうにそっぽを向く。

「ほら、早く取って。腕が痛い」

「あ、うん、ありがとう」

剣は瑞鳳から工具箱を受け取ると、中から別のスパナを取り出して別のボルトを締め直す。一方瑞鳳に役目を奪われた千歳は慌てる。

「あ、あの！　他に何かお手伝いは！？」

「いや、これは油とか汚れが付くからなぁ。女の子にはさせられないよ。だから、今は特にはないかな」

「そ、そうですか・・・」

剣の言葉に千歳は明らかに落ち込む。そりゃあもう咲き誇っていた美しい花が萎れていくかのような勢いだ。そんな姉の落ち込み具合に、千代田は不機嫌そうにボルトを締める剣に跳び蹴りを放った。

「姉さんを悲しませるなぁッ！」

「ごふぅッ！？」

完全に油断していた剣は呆気なく吹き飛ばされた。そして、その先には――

「ひぃッ！？」

迫る男にすさまじく恐怖する龍鳳がいた。気づいた時にはもう、剣の手が龍鳳の胸を――

「いやあああああぁぁぁぁぁぁッ！　怖いよぉッ！　怖いよおおおおおぉぉぉぉぉッ！」

「ぎゃあああああぁぁぁぁぁぁッ！」

目に見えぬ神速の拳が剣の顔面に突き刺さり、続いて飛び膝蹴り。倒れた剣に追い討ちの全体重を込めた一撃必殺の踵落としが炸裂。剣の身体が曲がってはいけない方向に曲がった後、ピクリとも動かなくなる。

「ってちょっと剣ッ！？」

「ちょっとこれはマズくない？」

「大空大尉ッ！」

「怖いよぉッ！　怖いよおおおぉぉぉッ！」

ぐったりと倒れて動かない剣のまわりに瑞鳳達が慌てて駆け寄ったが、すでにその時には彼の意識はとっくに旅立ってしまっていた。

その日の夜、剣はいつもより早く床に着くことにした。

瑞鳳達は明日の出撃に備えて最後の会議をしている。だから今ここには自分一人だ。

囮艦隊としての出撃。真珠湾の頃からずっと戦い続けて来た剣にとっては、機動部隊が壊滅していくのをずっと見て来た剣にとっては、ついにここまで落ちたかという落胆があった。

かつては世界最強とまで謳われた日本機動部隊も、今では先程の格納庫のよう飛行機がほとんどなくガラガラ。搭乗員の質も隊列を組むのが難しいほど衰えていた。

時間にして約四年。その間に自分も多くの仲間を失っていた。

そしていよいよ明日は最後の決戦に向けての出撃。生きて帰れるかわからない、死地への旅立ちである。

そう思うと、せっかく早めに横になったのに全然眠れない。

もう何度目かの寝返りを打った時だった。ドアが小さくノックされた。

「はい？」

剣は上着を着てドアを開ける。と、そこにはかわいげなツインテールを揺らした小さな女の子が立っていた。瑞鳳や千歳達よりももっと幼い、十歳くらいの女の子。下士官用の軍服は、その小さな身体にはあまりにも不釣合いだ。

「君は・・・」

剣は少女の事を知っていた。確か何度かしか会った事なくあ号作戦の時に沈んだ『翔鶴』の艦魂に甘えていた子だ。名前は確か・・・

「隼鷹、だっけ？」

少女――隼鷹はコクリとうなずいた。

「えっと、中に入る？」

「うん」

剣は隼鷹を部屋に招き入れる。隼鷹は部屋に入ると振り返り、じっと剣を見詰める。

剣は困惑した。彼の記憶の中ではこの子はいつも笑みを浮かべていたかわいい女の子だった。だが、今目の前にいる彼女は無表情だ。きっと、翔鶴と妹の飛鷹を失った悲しみからこうなったのだろう。

剣は勝手ながらそう判断した。

「えっと、僕に何か用かい？」

「うん。あなた、大空剣君でしょ？」

「そうだけど」

「お願いがあるの」

「お願い？」

隼鷹はコクリとうなずくと、トテトテと剣に駆け寄り、そっと彼の手を握った。白くて柔らかい、小さな手が自分の手を優しく包み込む。うるうるとした瞳は、しっかりと剣を捉えて離さない。

「私は今回の作戦には参加できない。だから、何もできない。でも、みんなに無事でいてほしいの。だからお願い剣君――みんなを守って」

隼鷹は必死な顔で訴える。そのつぶらな瞳からはぽろぽろと涙が流れる。

「私は、前の戦いでお姉ちゃんも、飛鷹も守れなかった。もう、誰も失いたくないの。それに、主力部隊の『大和』にはお兄ちゃんが乗ってる。もし、お兄ちゃんまで死んじゃったら、私・・・」
「隼鷹・・・」
「だからお願い。みんなを守って。もう誰も、死んでほしくないの」
必死に頼む隼鷹に、剣は悲しげに顔をゆがめた。
こんな小さな子の心を傷つけてしまう、それが戦争なのだ。
自分にもこれくらいの妹が故郷にいる。
目の前にいる隼鷹と、妹が重なる。こんな小さな女の子に、泣いてほしくない。
「わかったよ」
剣の言葉に、隼鷹の瞳の中にわずかな希望の光が灯った。
「ほ、ほんと？」
「うん。約束する。必ずみんなを守ってやる。僕は戦闘機乗りだ。味方を守る、それが戦闘機の役目だ。だから、僕は絶対に守ってみせる」
剣の力強い言葉、そしてその優しさに、隼鷹の瞳が大きく見開かれる。
――彼の姿が、もう四ヶ月も会っていない大切な兄の姿と重なった。
「お兄ちゃん？」
「へ？　何？」
「お、お兄ちゃんッ！」
「うわぁッ！？」
隼鷹は突如剣に抱き付くと、その胸の中でわんわんと泣き出した。
そんな彼女に驚きながらも、剣はそんな彼女の頭を撫でる。
「寂しかったんだね」
「お兄ちゃん・・・ッ！　お兄ちゃんッ！」
「でも、大丈夫。必ず、みんな生きて帰ってくるから、だからもう泣かないでよ」

「・・・お兄ちゃんッ！」
「隼鷹、君は一人じゃないんだからね」
「好き！　お兄ちゃん好き！　好き好き大好き！」
ガチャンッ！
突如響いた音に驚いて振り返ると、そこには・・・
「・・・へぇ、そうなんだ。ふーん・・・」
「・・・そんな、大空さん・・・ッ！」
「あんた・・・最低ッ！」
そこにはすさまじい軽蔑、驚愕、敵意が込もった瞳を向ける瑞鳳、千歳、千代田が立っていた。その足元にはお茶や和菓子が散乱していた。さっきの音はきっとあれが落ちた音だろう。
「み、みんな？」
驚く剣の胸の中ではいまだに隼鷹が泣いている。そして、そんな自分を見詰める三人の瞳がいつになく冷たい。
「ず、瑞鳳？　ど、どうしたの？」
「・・・へぇ、あんた・・・ロリコンだったんだ」
「へ？」
「・・・そ、そんな・・・ッ！　大空さんが・・・ロリ属性の方だったなんて・・・ッ！」
「は？」
「最低ねあんたッ！　人間失格じゃないッ！」
「はいッ！？」
そこでようやく気づいた。
彼女達は恐ろしい誤解をしていると。
「ち、違うッ！　僕はロリコンなんかじゃないッ！」
「お、お兄ちゃん！」
「しかも自分を《お兄ちゃん》なんて呼ばせるなんて、最低の鬼畜じゃないッ！」
「ち、違うってばッ！　僕が呼ぶように言ったんじゃないよッ！」
「・・・うぅ、信じてたのに・・・ッ！　大空さんのバカぁッ！」

千歳は泣きながら部屋を出て行ってしまった。千代田は瑞鳳に後を任すと、急いで姉を追った。そして、残されたのは瑞鳳と剣、そして隼鷹。

瑞鳳はゆっくりと、とてもゆっくりと近づいて来た。その背後からはドス黒い邪悪な妖気が漂っている。剣の顔からサーッと血の気が引いた。

「ねぇ、剣？」

「は、はいッ！」

声が裏返っていた。そんな彼に、瑞鳳はとても優しい笑みを向ける。まるで天使のように優しげな笑み。だが、その目は一切笑っていなかった。

「あんた、ロリコンはダメなの。わかってる？」

「だ、だから僕はロリコンじゃ――」

「なぁに？　口答えする気なのバカ犬？」

「あ、それゼ○の使い魔――」

「あれのメインヒロインもロリ属性じゃないッ！」

「ぎゃあああああぁぁぁぁぁッ！」

その日、月が明るく照らし上げる軽空母『瑞鳳』に、すさまじい悲鳴が響き渡った・・・

出港の日を迎えた『瑞鶴』を旗艦とする日本機動部隊こと小沢艦隊の任務はフィリピン北方で米軍の中核を為すハルゼー大将率いる第３８任務部隊を吊り上げる為の囮となり、建造から三年経った今でも世界最強の座を不動のものとする戦艦『大和』『武蔵』を主力とする栗田部隊のレイテ突入を助ける事である。

元より生還を期さない、死出の旅である。

だが、瑞鶴にはもはや一片の迷いも、淀みもない。

――約束――

それを守り通す為に、自分はやれるだけの事をやるだけ。

真剣な眼差しで空を見詰める瑞鶴の横で貝塚は息を吐くと、「そ

ろそろ行くか」とつぶやき、正式空母『瑞鶴』艦長貝塚武男少将（昇級）は命令した。

「錨上げ。両舷、前進微速！」

時に、一九四四年十月十九日。

日本最後の機動部隊となる小沢艦隊は、その全力である旗艦・正式空母『瑞鶴』中心に、軽空母『瑞鳳』『千歳』『千代田』、航空戦艦『伊勢』『日向』、軽巡洋艦『大淀』他二隻、駆逐艦八隻の合計十六隻で呉を出撃し、豊後水道を南下した。

しかし、『瑞鶴』以下四隻の空母に搭載された艦載機はわずかに一一六機。それは米空母の一隻分にしかすぎなかった。

これが、日本機動部隊の最後の出撃となった。

第十二章　第五節　瑞鶴達の決意　機動部隊最後の任務（後書き）

日本機動部隊最後の任務である囮作戦を引き受けた小沢長官。その胸中は誰にもわかりません。
そして、瑞鶴達はそんな彼について行く事を決め、最後の作戦を完遂させる為に出撃しました。
ここにレイテ沖海戦の日本海軍側の全ての駒が揃いました。
次はアメリカ海軍側のレイテ沖海戦への話です。
エンタープライズ大活躍のアメリカ側の物語。そしてあのキャラが大活躍する予定です。
いよいよ始まったレイテ沖海戦。
この戦いで最期となる艦魂も数多く、とても辛い話になるのは確実ですが、僕も涙を堪えながらがんばって書き続けたいと思いますので、応援よろしくお願いします。
評価・感想・意見等もどんどん送ってください。待ってます！

第十二章　第六節　キング２作戦　集結するアメリカ艦隊

その頃、フィリピン周辺海域に展開しているアメリカ艦隊は上陸した陸軍の援護を続けながら、来るべき敵との決戦に備えていた。

アメリカ艦隊はフィリピン周辺に徹底した防御体制を展開させていた。

フィリピンに展開するアメリカ艦隊は大きく分けてハルゼー大将率いる大型空母と軽空母の高速空母艦隊を主力とした第３艦隊と、トーマス・Ｃ・キンケイド中将率いる護衛空母部隊、戦艦部隊、巡洋艦部隊などがマッカーサー陸軍大将率いる輸送船団と上陸部隊を援護する第７艦隊の２種類に分かれていた。

その総数は迫る日本艦隊とは桁違いの７３４隻（戦闘艦艇１５７隻、輸送船４２０隻、特務艦船１５７隻）。うち空母は４４隻（大型空母９隻、軽空母隻８、護衛空母２７隻）。艦載機は１０００機どころではなかった。

太平洋に展開しているアメリカ艦隊のほぼ全力がこのフィリピンに集中していた。

アメリカ軍の目的は第３艦隊で周辺付近の日本軍の基地を機能停止にし、第７艦隊の護衛を受けながら陸軍がフィリピンに上陸。フィリピンを奪還すると同時に日本の南方資源地帯との補給路と絶ち、日本本土への中継基地とする《キング２作戦》を成功させる事だった。

この作戦が完了すれば、日本を敗戦に追い詰めるのに大きな一歩となる。

それにフィリピンはアメリカの植民地である。なんとしてでも奪い返さなければ、アメリカという国の顔に泥を塗り続ける事になる。

アメリカ軍はその持てる全力でフィリピン攻略を進めていた。

ハルゼー大将率いる高速空母艦隊こと第３８任務部隊は敵が侵攻

してくる可能性が高いサンベルナルジノ海峡の北方海域に展開していた。
　第３艦隊司令官のハルゼー提督は旗艦・戦艦『ニュージャージー』に座乗して隷下の艦隊に指示を送っていた。
　そんな第３８任務部隊の旗艦・空母『レキシントン』の横を走る空母『エンタープライズ』の防空指揮所ではエンタープライズが日本軍の襲来を今か今かと待ち受けていた。
　いつにも増して戦意爆発なエンタープライズの周りには第３８任務部隊旗艦レキシントンを始め、エセックス、ヨークタウン、ホーネットなどエセックス姉妹や軽空母の艦魂達が揃っていた。
　エンタープライズは天を睨み付け、蒼い瞳を荒々しく輝かせると、居並ぶエセックス達にニヤリと不敵な笑みを浮かべた。
「前回のフィリピン海海戦（マリアナ沖海戦）じゃカヴァラ（潜水艦）に先越されて『ショウカク』を沈められたが、『ズイカク』は今度こそこの私が仕留めてくれる！」
　エンタープライズは相変わらず翔鶴型空母２隻にライバル心むき出しにしている。そんな彼女をエセックス姉妹長女のエセックスが問う。
「エンターの姉貴。そんなに肩に力を入れなくていいんじゃないっすか？」
　エセックスの言葉にエンタープライズは何をバカな事をと言いたげな目で見詰める。
「エセックス。このフィリピンを取り返せば日本軍はクズ艦艇を寄せ集めて取り戻しにやって来る。それを殲滅できるチャンスなんだぞ？　これでも気合は少ないくらいだ！」
「・・・前から思ってたんだけどさ、エンターの姉貴って日本を目の仇にしてるよな？」
「当たり前だろ！？　奴らはこっちが黄色い猿どもごときに下出に回って交渉という平和的話し合いをしてやっていたのに、いきなりパールハーバーを宣戦布告なしに攻撃して来たんだぞ！？　そんな

奴らを殺し尽くして何が悪い！？」
「まぁ、そうなんだけどよ・・・」
エセックス自身愛する祖国を攻撃してきた日本は嫌いだ。だが、エンタープライズの日本嫌いは桁が違う。やはり、当時を生きていた彼女と戦中生まれの自分とでは違うのだろうか？
エセックスがそんな事を考えていると、ふとエンタープライズは窓の外に広がる蒼い海を見詰めた。
蒼き海を見詰め、エンタープライズの表情は不安げに揺れた。
「姉貴。ホーネット。二人の仇は必ず討ってやるからな」
エンタープライズのつぶやきに、エセックスは顔を上げた。その視線の先には、悲しげに表情をゆがめるあまり見られない彼女の弱い一面があった。
「私は決してジャップを許さない・・・ッ！　私の大切な姉を、妹を、仲間を殺した奴らを、絶対に許さない！　ジャップどもを皆殺しにするまで、私の戦いは続くッ！」
エンタープライズは蒼い空に向かって怒鳴った。その後姿は、勇ましい中にも悲しみがあり、悲痛な想いが感じられた。
自分達にはわからない、姉妹という大切な者を失った悲しみ。彼女はそれを姉と妹、二人で体験している。そして、彼女にはもう姉妹は誰一人残されていない。
自分がもう少し早く完成していれば、こんな事にはならなかったかもしれないのに。
頼れる姉貴にして空母としての心得や戦い方を基礎から教えてくれたエンタープライズを、エセックスだけでなくここにいる皆大好きだった。
ちょっと暴走したり言論が過激ではあるが、本当は誰よりも優しく、仲間想いな人だとみんな知っている。
だから、そんな彼女にこんな悲しい姿をしてほしくはない。
「お姉ちゃん・・・」
エンタープライズの袖を掴むホーネットが悲しげに瞳を揺らす。

そんな彼女に、エンタープライズはハッとして慌ててニッと白い歯を見せて笑みを浮かべる。
「わ、悪い悪い。そんじゃ取り合えず敵を発見次第すぐに戦闘態勢に入る。それまでは各自待機でいいな？」
エンタープライズは一応部隊の旗艦のレキシントンに確認を取る。
レキシントンもコクリとうなずいた。
「それじゃ、それぞれ解散」
「そんじゃな」
レキシントンの解散命令を聞き、エンタープライズは皆に手を振ると光に包まれて消えた。残ったエセックス達もそれぞれ解散しようとした時、
「待ってよぉ！」
その声に振り返ると、ホーネットがじっと皆を見ていた。その瞳はうるうるとしていて今にも泣きそうだ。ヨークタウンはそんな妹に不思議そうに首を傾げる。
「どうしたのホーネット？」
「みんなにお願いがあるの！」
「お願い？」
「エンターお姉ちゃんを元気にさせたいの！」
ホーネットの必死な言葉に、ヨークタウンは腕を組んで考える。
「まぁ、あなたの気持ちはわかるし、私達も同じ気持ちだから協力してあげたいけど、一体何をすればいいの？」
「うっ・・・それは・・・」
言ったはいいけど、細部までは考えていなかったのだろう。ホーネットは言葉に詰まってうつむいてしまう。そんな妹にエセックスはため息する。
「あのなホーネット。そういう時は何か考えてから言えよな」
「あら？　姉さんも結構考えなしに行動するけど？」
「うっ・・・」
ヨークタウンの鋭い一撃に、エセックスは気まずそうに視線を背

ける。そんな姉を見詰め、ヨークタウンはくすくすと笑う。
「笑ってる場合じゃないよぉッ！」
ホーネットは頬を膨らませて怒るが、そういった仕草もかわいくてあんまり迫力はない。
「ごめんごめん。でもどうするのよ実際。何かあるフラン？」
ヨークタウンは隅の方で今までずっと本を読んでいた銀色の髪をボブカットで纏めたメガネの少女に問う。彼女はエセックス級空母５番艦、空母『フランクリン』の艦魂だ。皆からは《フラン》と呼ばれている彼女は本が好きでいつも本を読んでいる。しかも無口で無表情。感情表現がかなり乏しいが、根はいい子である。そして何より姉妹で最も身長が低く、１４５センチしかない。かなり小柄な子だ。
ヨークタウンの問いに、フランクリンはパタンと本を閉じると、じっと姉を見詰める。
「・・・パーティ」
ただそれだけを発した後、再びを本を開いて読み始める。だが、彼女の言った意見はホーネットの心を貫いた。
「そうだよ！　パーティをすればいいんだぁッ！」
根が純粋（単純？）なホーネットはすぐにそのアイデアに飛び付いた。
「しかしどういった理由で行いますか？　別にエンタープライズさんの誕生日ではありませんし」
プリンストンの言葉に、ヨークタウンも「そうよね・・・」と困ったようにつぶやく。何も理由もなくてはパーティを開くのはおかしい。
皆はどうしたもんかを考える。そんな中、
「こういうのはどう？」
そう声を上げたのは炎のように赤い長髪に気の強そうな赤い瞳をした少女。プリンストンの妹でインディペンデンス級航空母艦６番艦、軽空母『ラングレイ』の艦魂。愛称は《レイ》。瞳の通りかな

り強気な女の子で、6女でありながらインディペンデンス姉妹では姉貴的存在の艦魂だ。
「そろそろホーネットさんの命日が近いから、エンタープライズさんを励ますっていう口実はどう？」
ラングレイの言った《ホーネット》とは今ここでその名前にしゅんとしているホーネットではなく、サンタ・クルーズ諸島海戦（南太平洋海戦）で沈没したヨークタウン級航空母艦3番艦、空母『ホーネット』の艦魂。エンタープライズのたった一人の妹だ。
あの戦いからもう2年が経とうとしていた。そして、エンタープライズが妹を失ってから2年が経った事にもなる。
ホーネットはしゅんと落ち込んでいる。自分は姉のように慕っている大好きなエンタープライズの妹の名前を受け継いでいる。まるで、彼女の妹の代わりみたいで、ずっと心の奥でトゲのように刺さっていた辛い現実だった。
「そうね、もう2年も経つのよね」
ヨークタウンは海の向こうで白波を立てて走る『エンタープライズ』を見詰める。彼女は自分達が配備される前、まだ敵がこちらより強力な部隊を有していた最も辛い時期を生き抜いた。その艦体はボロボロなはずだ。なのに、国の為、必死になって戦っている。そして、そんな中で大切な姉妹を失った。姉の名前は自分が受け継ぎ、妹の名前も自分の妹が引き継いだ。そしてもうすぐそんな妹の死から2年が経つのだ。
「そうだな。それがいい！　姉貴を励ますパーティしようぜ！」
エセックスが拳を上げて笑顔で言った。その言葉に他の者も『おーッ！』と拳を上げる。どうやら方向性が決まったらしい。
「なら、場所は私の会議室を使って。あそこは今日は使われないはずだから」
「ありがとうレン」
場所は『レキシントン』の会議室で決定。日時は今日の夜。急遽決まったが、エンタープライズの為、エセックス姉妹、インディペ

ンデンス姉妹が結束した瞬間であった。

夜、エンタープライズは一人で『レキシントン』の廊下を歩いていた。

すでに消灯時間を過ぎているので、艦内は必要最低限の明かりしかなく薄暗く、人の気配はない。皆寝ているのだ。

そんな中、エンタープライズは歩いている。

「まったく、こんな時間に呼び出して一体何の用だっていうんだ」

エンタープライズはめんどくさそうに頭を掻く。夕方、ホーネットに笑顔でこの時間になったら『レキシントン』の会議室に来てと言われた。理由を訊いたが彼女は言わなかった。ただニコニコと笑うだけ。仕方なくこうして来たという訳だ。

「まったく、今は戦時中。しかも作戦中だというのに・・・」

エンタープライズはまだまだ幼い後輩達を思い出し、疲れたようにため息する。

ふと、月明かりが差し込む窓の前で足が止まった。

外には消灯しているので各艦明かりがないが、満月の柔らかな光が薄っすらを艦隊を照らし挙げている。そして、その向こうにある蒼い海も・・・

「姉貴・・・ホーネット・・・」

この海の向こう。2年前にミッドウェー沖で姉が、サンタ・クルーズ沖で妹が戦死した。今もなお、2隻——2人は海の底で安らかに眠り続けている。

優しく、誰にでも好かれた姉——ヨークタウン。

幼さの中にも強さを持ったかわいい妹——ホーネット。

大切な、大切な2人の姉と妹。

そんな2人を殺し、自分から奪い去った憎き日本軍。

絶対に許さない。日本という土地を焼き尽くしても、日本という国が滅んでも、日本人を皆殺しにしても、この恨みは未来永劫消える事はない。

姉と妹の仇を討ち、祖国を平和にする。それが自分の想いであり、責務だ。

「姉貴、ホーネット。私を見守っててくれ。必ず、仇は討つ」

エンタープライズは悲しみの中にも力強い光が灯った瞳で月を見上げ、見事な敬礼をすると、再び歩き出した。

しばし歩き、目的の場所に着いた。

「ここか、おい！　来てやったぞ！　一体何を考えて――」

大声を上げながら部屋に入った瞬間、

パンッ！　パパンッ！　パンッ！

「なぁッ！？」

『エンタープライズさん！　ようこそッ！』

そこは自分が知っている一国の運命を変える作戦の審議を行う会議室ではなかった。明るい照明に、部屋中にきれいな装飾がされ、テーブルの上には多くの料理や飲み物が置かれた――パーティ会場だった。

「えへへ、驚いた？」

呆然としているエンタープライズに駆け寄ったのは今回のパーティの主催者であるホーネット。柔らかな笑みを浮かべるホーネットはいつもの軍服ではなくかわいげな白いフリルたっぷりのドレスを着ている。

「みんなお姉ちゃんの為に集まってくれたんだよ？」

ホーネットは満面の笑みでエンタープライズに抱き付く。

まわりには同じようにドレスを着たり軍服のままの艦魂達が取り囲んでいる。多くはエセックス姉妹とインディペンデンス姉妹、そして護衛の巡洋艦や駆逐艦。集まっているのはレキシントン隷下の第３８任務部隊の艦魂達だ。ただし、戦艦の艦魂はいない。

エンタープライズが戦艦の艦魂を嫌っているからだ。

今の時代では戦艦は護衛か待機かしかない。なのにいまだに海戦の主力は戦艦だという大艦巨砲主義者ばかり。そんな無能な戦艦を、叩き上げのエンタープライズは嫌っている。

無意味なプライドを捨てきれない戦艦が、エンタープライズは大嫌いだった。

今回のパーティに戦艦が参加していないのはそういった理由からだった。

エンタープライズはまわりを見詰め、状況を呑み込むと不機嫌そうに眉をしかめる。

「貴様ら、今が作戦中だという事を忘れていないか？」

その声にはイラ立ちが感じられた。

これから日本艦隊との決戦だというのに、こんなパーティを開くなんて気が緩んでいるとしか思えない。根っからの軍人であるエンタープライズは、それが許せなかった。

「もうさっさと寝ろ！　こんな茶番をしている暇があったらしっかりと睡眠を取って次の戦いに備えろ！」

エンタープライズの怒号に、艦魂達はビクリと震える。

違う、みんな彼女の為を思ってこんなパーティを開いたのだ。そう伝えたいが、誰もがエンタープライズの怒号に言葉が出ない。タイミング悪く今現在レキシントンは抜けている。後で合流するらしいが、今彼女がいないのは極めてまずい。暴走したエンタープライズを止められるのは彼女ぐらいなのに。

エンタープライズの怒号に、皆しゅんと落ち込んでしまう。

怒ってほしくない、笑ってほしかったのに・・・

艦魂達はすっかり落ち込んでいた。

「まったく！　それでも貴様らは合衆国海軍軍人か！　恥を知れ！」

「もうそのくらいにしてあげたら？」

その柔らかな声に皆の視線はドアに注がれた。そこには、桃色の髪をポニーテールで纏めた士官服を着た少女がドアの付け根に身体を預けていた。

彼女の登場に、艦魂達は安堵したが、すぐに蒼白になる。

エンタープライズは現れた少女をギロリと睨む。その瞳には敵に向ける光が輝いていた。

「一体何しに来た――アイオワ」
そこにいたのはアメリカ海軍最新鋭戦艦の一隻、戦艦『アイオワ』の艦魂だった。
「別にいいじゃない。パーティはみんなで楽しむものよ」
戦中生まれ、つまりエンタープライズより後輩なのに、アイオワは一切敬語を使わない。その言葉の一つ一つに、艦魂達は恐怖する。
エンタープライズが嫌いな戦艦の艦魂。しかも敬語を使わないという無礼さ。パーティ会場は戦慄に包まれた。
アイオワは自分を睨むエンタープライズを気にした様子もなく部屋に入ると、並べられている料理を見る。
「おいしそうね。これ、レンが出したの？」
「え、えぇ」
生まれた時期が近いヨークタウンが答えると、アイオワは「へぇ、さすがレンね」と感心する。だが、そんなアイオワの肩をエンタープライズが掴んだ。
「出てけ。ここは貴様のような戦艦が来る場所ではない」
「私がどこにいようと勝手でしょ？」
「黙れ！　戦艦などと役に立たない者は神聖な空母から去れ！」
怒号を飛ばすエンタープライズに、アイオワははぁとため息する。その表情はまったく何もわかってないのねと言いたげだ。
「私達アイオワ級戦艦は前の艦隊決戦用のサウスダコタ級と違ってあなた達空母部隊の護衛に造られたのよ？　だから３０ノット越えの高速力を持ってるの。あなた達を守ってるのに、そんな言い方はないんじゃない？」
「黙れ！　戦艦の、それも新参者が無礼な口を叩くな！」
「そう、ならあなたも無礼極まりないわね。軍人のくせに上官に向かってなんて態度をするのよ」
アイオワの言葉に、エンタープライズは「くっ・・・」と言葉に詰まった。彼女の言うとおり、アイオワはエンタープライズの上官である。第３艦隊旗艦、戦艦『ニュージャージー』の僚艦である『

アイオワ』は、この艦隊の副司令官に就任している。
アイオワはまわりに並ぶ艦魂達を見回し、エンタープライズと対峙する。
「第3艦隊副司令官として命令するわ。このパーティは断固として中止はさせない」
アイオワの力強い言葉に、エンタープライズは「勝手にしろ！」と怒鳴って部屋を出て行こうとする。が、
「ちょっとどこへ行くのよ。あなたも参加するのよ」
「何？」
アイオワはエンタープライズの肩を掴むと部屋を出て行こうとする彼女を止める。振り返った不機嫌そうなエンタープライズに、アイオワは笑みを向ける。
「一緒に楽しみましょうよ」
「バカバカしい。私にそんな時間はない」
「これは命令よ。破れば軍法会議。ＯＫ？」
「くっ・・・」
エンタープライズはアイオワの手を弾くと、再び部屋に戻った。だが、明らかに不機嫌そうなエンタープライズに、皆は恐怖している。そんな中、アイオワは気にした様子もなく笑みを浮かべた。
「さぁて、メンバーも揃った事だし、始めましょうか」
アイオワはヨークタウンに目で合図した。それきに気づき、慌ててヨークタウンはグラスを持つ。それにまわりの艦魂達もグラスを持つ。
「じゃ、じゃあ！　乾杯！」
『かんぱーいッ！』
本当は開会のあいさつがあったのだが、今の流れで全部吹っ飛んでしまっていた。皆ヨークタウンの開会の言葉に疑問を抱く事もなく、パーティを始めた。だが、
「・・・」
明らかに一人だけで部屋の空気を黒く染めているエンタープライ

ズに、皆警戒していてグラスの中の飲み物をちびちびと飲み、第３８任務部隊の誰一人料理には手をつけない。が、
「このミートローフおいしいわね」
たった一人、アイオワだけは気にした様子もなく料理を食べている。かなり肝が据わっている。
「あ、そ、それは私の烹炊班副班長が作ってくれたの」
ヨークタウンはおずおずと言った。それはフェイトがわざわざ作ってくれたミートローフだった。ヨークタウンの一番好きな料理だ。
「そうなの。本当においしいわね」
「そうなんだ、本当においしいの」
アイオワにフェイトの料理をほめられ、ヨークタウンはまるで自分の事のように喜んだ。そんな彼女の笑みに、皆の緊張感は幾分か和らいだが、依然エンタープライズは不機嫌そうだ。
「ちょっとエンター。もう少し楽しめる雰囲気にできないの？」
アイオワの言葉を無視し、エンタープライズはそっぽを向く。そんな彼女に、アイオワはため息する。
「まったく、せっかくこの子達があなたの為に開いたパーティだって言うのに」
「何？」
エンタープライズはその言葉に視線を戻す。そんな彼女にアイオワはうなずく。
「今日のパーティはあなたを元気にさせる為のものなのよ？」
「私を？」
「えぇ、もうすぐあなたの妹、ホーネットの命日でしょ？　どこか落ち込んでるのあなたの為に、エセックス達が考えて実行したのよ」
エンタープライズはエセックス達を見詰める。エセックス達はそんな彼女の視線に照れたような笑みを浮かべる。
「そうだったのか・・・」
エンタープライズから不機嫌そうなオーラが消えた。部屋の緊張感も、消えた。

「すまない、そんな事も知らないで。私は・・・」
「いいんだよ！　お姉ちゃんにはずっと笑っててほしいもん！」
ホーネットの言葉に、エンタープライズは笑みを浮かべた。
「ありがとう、ホーネット」
「えへへ」
「良し！　そうとわかれば今日は宴会だぁッ！　今日は朝まで騒ぐぞッ！」
『おおおおぉぉぉぉぉッ！』
エンタープライズの掛け声に、皆は声を上げた。
部屋の空気はすっかり宴会モードだ。エンタープライズはその中心で笑顔を浮かべている。そんな彼女を見て、エセックス達は微笑んだ。その時、部屋を出て行こうとしたアイオワに気づく。
「ちょっと待てよ。どこへ行くんだ？」
エセックスの問いに、アイオワは振り返る。
「戦艦の艦魂はいない方がいいでしょ？　だから帰るわ」
「そんな事ないよ。あなたのおかげでパーティは成功したんだもの」
ヨークタウンの言葉に、アイオワは首を横に振る。
「いえ、成功したのはあなた達の努力よ。本当にあの人の事が好きなのね」
エセックスとヨークタウンは照れたような笑みを浮かべる。そんな2人に、アイオワも笑みを浮かべた。
「っていうかお前も一緒に騒ごうぜ。歓迎するよ」
「そうね。アイオワも一緒にどう？」
「・・・いいの？」
「何を今さら。さっきまで十分参加してただろ？」
「それに、さっきエンタープライズさんに「一緒に楽しみましょうよ」って言った。責任は取ってよね」
二人の言葉に、アイオワは笑みを浮かべる。
「確かにそうね。じゃあ、お言葉に甘えさせてもらうわ」
「大歓迎だ」

「そうね」
アイオワは2人に連れられて再び部屋に戻る。そこでふとエセックスはある事に気づく。
「っていうか、何で戦艦のあんたがこのパーティの内容を知ってんだよ？」
「うん？　それは私の親友が教えてくれたのよ」
「親友？」
「えぇ」
そう笑顔で言うと、アイオワは部屋の隅でさっきからストローが挿さったジュースを片手に本を読み続けているメガネの少女――フランクリンに抱き付いた。
「この子が私の親友のフラン」
「「えええええぇぇぇぇぇッ！？」」
2人はひっくり返るような勢いで驚く。あの社交性が恐ろしく低いフランクリンに親友がいたなんて、それも、戦艦の艦魂に。
アイオワに抱き付かれたフランクリンは無言で本を読んでいたが、うりうりと頬を引っ張ったりするアイオワの額に本の角を炸裂させた。
「い、いったあああぁぁぁぁいッ！」
「・・・うるさい」
「ちょっとフラン！　角はなし！　これは本当に痛いから！」
「・・・うるさい」
あまりにも珍しい異色の組み合わせに、姉でありながらもエセックスとヨークタウンは唖然とする。いつの間に二人はこんな仲になっていたのか。しかも戦艦と空母で。
「まぁ、とにかくそういう訳。改めてよろしくね」
アイオワは屈託のない笑みを浮かべた。そんな彼女の腕の中ではフランクリンが無表情で本を黙々と読んでいる。何とも妙な組み合わせだ。
「えぇ、こちらこそよろしく」

「まぁ、妹をよろしくな。そいつあんまりしゃべんねぇからな」
「そうね。もう少ししゃべってくれると嬉しいんだけど。ねぇ？」
「・・・」
「食事中は本は読まない」
アイオワはそう言ってフランクリンから本を取り上げる。フランクリンは珍しく表情を変えて不満そうな顔をしながら手を伸ばして本を取ろうとするが、２０センチ近い身長差がそれを阻む。
「・・・返して」
「ダメ。食事中に本を読むなんてお行儀が悪いでしょ。食事が終わったら返します」
「・・・」
フランクリンは渋々といった具合にジュースをストローを使って飲む。そんな彼女を「いい子いい子」とアイオワは頭を撫でる。身長差のせいかかなり自然に感じられる。フランクリンは無言でそれを受け入れる。その瞳はぼーっとしている。
そんな二人を見て、ヨークタウンはくすくすと笑った。
「どうした？」
「いえ、なんかすごく仲がいいなぁと思って。あの二人」
「そうだな。なんかちょっと悔しいかもな」
「あら？　姉さん嫉妬？」
「そうかもな」
互いの顔を見合って笑い合うエセックスとヨークタウン。そんな二人の前ではフランクリンがアイオワの隙を見て本を奪い返そうとしたが、再び身長差という大きな壁に阻まれて残念そうに食事を開始していた。アイオワもそんな彼女の横で楽しそうに食事を始める。本はしっかりと彼女の尻の下に置かれている。
さすがにこれは奪い返せないと判断し、フランクリンは仕方なく意識を食事に向けた。
「さぁて、私達も食べるとするかな」
「そうね。じゃああそこが空いてるから一緒に座りましょう姉さん」

「おうよ」
エセックスとヨークタウンは並んで席に座ると食事を開始する。
少し離れた所ではホーネットが隣に座るエンタープライズにあーんしてもらってすごく幸せそうな笑みを浮かべていた。エンタープライズも満更でもない様子で次の料理をフォークで挿してホーネットの口に運んでいる。そのまわりではそんなホーネットをうらやましそうに見詰めている者が何人もいる。エンタープライズは人気者なのだ。
一方、アイオワはフェイトの作ったミートローフをパンに挟んでハンバーガー風にしておいしそうに食べている。その際に《もきゅもきゅ》と不思議な音を立てて食べていた。その隣ではフランクリンが一人でパーティ用の大きなサラダを半分以上を頬張りながら食べていた。
部屋を包む和やかな雰囲気に、エンタープライズは嬉しそうに微笑んだ。
自分にはまだこんなにもいい仲間がいる。
自分はまだ戦える。そう思った。
今日の思い出は、ずっとエンタープライズの心の中あり続けるだろう。
用を終えて戻って来たレキシントンは、部屋の中の雰囲気を見て口元に小さな笑みを浮かべて自らもパーティに参加した。

翌日、空母『エンタープライズ』の甲板では第３８任務部隊の艦魂達が勢揃いしていた。
年齢も髪型も髪の色も違う艦魂達は自分達の司令官であるレキシントンの作戦説明を微動だせずに聞いている。
レキシントンの話が終わると、皆が最も信頼するエンタープライズが壇上に上がった。レキシントンがマイクを渡すが、エンタープライズはそれを断って自らの声を艦魂達に向けた。
「いよいよ決戦だ！　総員気を引き締めてこの戦いを勝ち抜け！

このフィリピン沖の海をジャップの艦艇の墓場にしてやるんだ！
ジャップは皆殺しにしろ！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！　パールハーバーの恨み、今こそ晴らそうぞッ！」
『サー、イエッサーッ！』
相変わらず過激な演説である。だが、それも彼女らしい。その蒼い瞳には燃え上がる闘志が宿っている。その炎が、皆の心を震わせるのだ。

アメリカ艦隊は、必ずや来る日本艦隊を迎え撃つ為に、そのほぼ全力を集中させ、日本海軍との決戦に備えていた。

第十二章　第六節　キング2作戦　集結するアメリカ艦隊（後書き）

相変わらずなエンタープライズに対し新キャラであるアイオワの絶妙さが炸裂した今回の話。
妹のホーネットの死を、自分を思う仲間達のおかげで克服した彼女は、迫る一大作戦に全力を注ぐ事を決心しました。
次からはいよいよレイテ沖海戦の幕開けです。
まずはパラワン水道の悲劇をお送りします。久しぶりの登場である高雄姉妹。だがそれは最後の姿でもありました。
次回もよろしくお願いします。
意見や感想などお待ちしてます。

第十二章　第七節　旗艦爆沈　命懸けの進撃（前書き）

《フランクリン》
エセックス級航空母艦５番艦――空母『フランクリン』
愛称　フラン
出身　ニューポート・ニューズ造船所
身長　１４５ｃｍ
髪型　ボブカット（銀髪）
実年齢（１９４４年１０月頃）０歳
外見年齢　１３、４歳
誕生日　１月３１日
好きなもの　姉妹・アイオワ・サラダ・本・本に囲まれる事
嫌いなもの　うるさい場所・うるさい人・本を大切にしない人
家族構成　姉・エセックス・ヨークタウン・ホーネット他１人
妹６人
空母『フランクリン』の艦魂。アメリカ海軍キャラ唯一のメガネキャラ。皆からは《フラン》と呼ばれている子で、無口無表情の子。本が好きで放っておくと一日中本を読んでいる。根はとてもいい子。姉妹で一番背が低く幼い外見をしている。参謀としてはかなり優秀で、レキシントンの補佐をしている。アイオワとは親友関係を持っている。何が合うのかわからないが、何か二人の間には強い絆があった。言う事を聞かないとアイオワにはいつも本を取り上げられてしまう。そして身長の差がいつも奪還を邪魔する。日本の本も読み、芥川龍之介や宮沢賢治の本も好き。そんな事から対日戦には反対している立場にいる。

《ラングレイ》
インディペンデンス級航空母艦６番艦――軽空母『ラングレイ』
愛称　レイ

出身　ニューヨーク造船所
身長　１６２ｃｍ
髪型　長髪（赤髪）
実年齢（１９４４年１０月頃）１歳
外見年齢　１４、５歳
誕生日　８月３１日
好きなもの　姉妹・エンタープライズ・空母部隊・アメリカ
嫌いなもの　日本・口だけで行動しない人・祖国に反する行為
家族構成　姉・プリンストン・他４人　妹・３人
軽空母『ラングレイ』の艦魂。インディペンデンス姉妹では姉貴的存在となっている。勝ち気な性格で力強い瞳をした子で、軽空母部隊ではエンタープライズのような立ち位置にいる。先代の軽空母『ラングレイ』はアメリカ海軍初の空母。ただし太平洋戦争では水上機母艦に改造されて参戦したが、開戦初期に沈没した。ちなみにこの二隻の空母の名前が某有名アニメのセカンドチルドレンとなる。

第十二章　第七節　旗艦爆沈　命懸けの進撃

一方、栗田艦隊はパラワン水道を東に進んでいた。

時刻は出撃翌日の朝六時半頃、栗田艦隊旗艦・重巡洋艦『愛宕』艦橋では第一遊撃部隊を指揮する第二艦隊司令長官栗田健男中将とその腹心にして参謀長の小柳富次（こやなぎとみじ）少将が陣頭指揮を執っていた。そんな彼らの横で愛宕が今回の作戦書を読み直していた。

何度読んでも勝ち目の薄い作戦だと愛宕は思った。

敵の空母が全力で守っている場所へ、護衛戦闘機なしの裸の艦隊で突っ込む。それは自殺行為以外なにものでもない。そして、命懸けの自分達を何としてもサンベルナルジノ海峡を突破させる為に、瑞鶴達機動部隊が囮になってくれている。

自分達第二艦隊と瑞鶴達第三艦隊とは第一機動艦隊という決戦艦隊を組んでいる。前回のマリアナ沖海戦では第一機動艦隊の主力である第三艦隊が主役だった。しかし、今回は前衛部隊であった第二艦隊が主力である。それだけ、前回の戦いでの航空機の損失が大きかったのだ。

自分は日本に残された最後の希望である戦艦部隊、第二艦隊の旗艦である。自分の腕に、参加全艦艇、連合艦隊の存亡――いや、日本の運命が掛かっている。

フィリピンは開戦初期に今は亡き赤城達史上最強の南雲機動部隊が反撃兵力を壊滅させ、陸軍が南下して欧米列強から奪い取った、資源の少ない日本の生命線である南方資源地帯と日本を結ぶ重要な補給路である。もし、ここが奪われれば、日本は石油やその他資源が枯渇し、満足に作戦を遂行させる事ができなくなる。特に、大型艦はもう動く機会は失われる可能性が高い。それは、連合艦隊の終焉である。

明治時代から現在まで、日清、日露戦争を勝ち抜き、日本海軍は現在の大東亜戦争を戦っている。その激動の歴史に終止符を打つ訳

には、いかないのだ。
　今回の作戦では自分が旗艦を務めている。これは栗田が巡洋艦部隊の司令官であったのと同時にもし艦隊決戦となったら軽快な動きができる巡洋艦の方が安全だという為からだが、そんな事など、本当に起きるのだろうか。
　この作戦の前、豊田連合艦隊司令長官は今回の作戦の目的は小沢艦隊が敵機動部隊を誘き出している間に海峡を突破。志摩、西村両艦隊と同時にレイテ湾に突入して所在の敵輸送船団を殲滅。及び上陸部隊を粉砕。米軍からフィリピン奪還を頓挫させる事だ。フィリピンを奪われる訳にはいかない今回の作戦では、例え全艦艇を失ってでも成功させなければならない、生きて帰る事は難しい作戦だ。だが、栗田中将以下第二艦隊司令部は敵輸送船団よりも敵主力艦隊との艦隊決戦を望んでいる。その為、もし敵の主力部隊が現れたら作戦を中断してでも艦隊決戦を行う事を条件に栗田はこの作戦を引き受けている。
　連合艦隊司令部と第二艦隊司令部とでは思惑の違いが発生していた。この思惑の違いが、何か良からぬ事態を引き起こさなければいいが。愛宕はそれを心配していた。
　作戦書を読む愛宕はため息した。
「こんなヤケクソな作戦で勝とうと思う方がどうかしてるけど、私達に残された道はこれしかないのよね」
　愛宕は作戦書から視線を外すと、窓の外を見詰める。そこには同じ第四戦隊を組む『高雄』『摩耶』『鳥海』を見詰める。白波を立てて走る三隻は今まで共に戦場を潜り抜けてきた戦友にして大切な妹達だ。今回はそんな妹達だけでなく、今の自分には多くの艦艇の命を預かっている身。例え無茶な作戦だとしても、気を引き締めなければならない。
「さて、新しい資料を持って来ますか」
　愛宕は旗艦としてがんばらなければと新たな資料を取りに行こうと立ち上がった。その時、

『雷跡右四〇度！　向かって来る！』
見張り兵の突如の悲鳴に艦橋に戦慄が走った。
「緊急回避！　回避だ！」
『愛宕』の艦長が慌てて緊急回避を絶叫したが、気づくのが遅過ぎた。
迫る六本の白い雷跡。それは真っ直ぐ自分に向かって翔けて来た。
それは死へ直結する恐怖。愛宕の顔からサーッと血の気が引いた。
「そ、そんな・・・ッ！　こんな所で・・・ッ！」
ドガアアアァァァァンッ！
白い水柱が四本立ち上った。
「がはッ！」
愛宕は持っていた資料に大量の吐血を吐いてその場に倒れた。すると、あっという間に『愛宕』は右に三〇度も傾斜した。
この時、栗田艦隊を六時間も追跡していた敵潜水艦がついに魚雷攻撃を行ったのだ。そして、最も狙いやすい位置にいた『愛宕』の右舷に魚雷四本が命中したのだ。
「敵・・・潜水艦・・・ッ！？」
愛宕は真っ赤な血を吐きながら傾斜して立っているのも難しい状況で立ち上がった。その時、さらに爆音が轟いだ。だがそれは、自艦のものではなかった。
愛宕が慌てて確認すると、すぐ横を走っていた『高雄』が黒煙を上げて傾斜しているのが見えた。
「高雄・・・ッ！」
愛宕が悲鳴を上げたが、そのすぐ後爆音が響いて『愛宕』の第三主砲が吹き飛び、愛宕は再び床に倒れた。
「艦長！　被害甚大です！　艦が傾斜を始めています！」
「・・・総員退去を命じる。総員ただちに本艦を離れろ！」
艦長はあまりの被害に総員退去を命じた。
「長官！　早く逃げてください！」
艦長は栗田と小柳を率いて艦橋を出て行った。

艦橋に残された愛宕は自らの血で真っ赤に染まった床に倒れていた。その表情は苦しそうにゆがみ、何度も吐血を繰り返す。
「まだ何も・・・始まってないのに・・・ここまで・・・？」
愛宕はそうつぶやくと、意識を失った。その瞳は再び開く事はなかった。

――重巡洋艦『愛宕』、幾多の戦いに参加してその強大な砲雷撃力を発揮し、常に戦場に身を置き続けた歴戦の重巡洋艦は敵潜魚雷四本を受けて右舷に急速傾斜。そのまま復原する事なく、被雷二〇分後に沈没した――

突如敵潜水艦の魚雷攻撃で旗艦『愛宕』爆沈。『愛宕』被雷後に被雷した『高雄』は駆逐艦二隻に護衛されて撤退した。さらに、『愛宕』爆沈後に『摩耶』も被雷。わずか十分後に轟沈した。
艦隊は重巡洋艦三隻が落伍して大混乱に陥ったが、戦艦『大和』に乗っている次席指揮官の宇垣が陣頭指揮を執り艦隊は連携を取り戻した。
陣形を組み直した部隊を再編成して再びレイテに向かって突撃を再開した。

「わ、私が旗艦にですか？」
『愛宕』『摩耶』の沈没、『高雄』戦線離脱後、海に投げ出されていた栗田は駆逐艦『岸波（きしなみ）』に救助された。その後栗田は『岸波』から『大和』に移艦した。その際艦橋にいた宇垣の言葉に、大和は驚く。
「『大和』を旗艦にするんですか？」
森下の問いに、宇垣はうなずく。
「そうだ。栗田長官は『大和』に旗艦を変更するらしい」
「で、ですが栗田長官は作戦前に旗艦を『大和』にしたらどうかという司令の意見を無視して『愛宕』を旗艦にしたんじゃないですか。

それを今さら『大和』ですか？」
「あぁ、それなら私としては『武蔵』に移りたいのだが、そんな余裕はないからな。仕方ないが、『大和』には第一遊撃部隊司令部と第一戦隊の司令部が置かれる事になる」
「そ、そうですか・・・」
宇垣の言葉に森下は落胆したような声を上げた。まわりからもため息が漏れる。そんな皆に大和は不思議そうに首を傾げる。
「ど、どうしたんですか？　司令部を二つ設置する事に何かおかしい点がありますか？」
通常艦隊を組む戦隊というのはそれぞれ司令官がいるのだが、一個艦隊となった場合は旗艦の属する戦隊はその艦隊の司令長官が直率するのが通例である。それでも旗艦に何かあった場合は代行して別の戦隊司令部がある戦隊を司令長官が指揮する。それは別に何の問題もないはずだ。だが、
「ちょっと今回はまずいぞ」
翔輝の言葉に、大和はさらに不思議そうに首を傾げる。
「何か問題でも？」
「大問題だよ。まさか栗田長官が来るなんて・・・」
「ど、どうしてですか？」
「――それは、私と栗田が犬猿の仲だからだ」
翔輝の言葉に大和が不思議がっているのを悟った宇垣の言葉に、大和は驚く。
「犬猿の仲、ですか？」
「私はあいつを好かん。ガダルカナルの飛行場を『金剛』と『榛名』で砲撃した事は評価するが、あんな敵前逃亡や味方艦を衝突させて致命傷を与えるような指揮官の下で動く自体私は嫌だった。同じ艦橋にいるだけで虫唾が走る」
心底嫌そうな顔をする宇垣に、大和もようやく宇垣が栗田を本気で嫌っているとわかった。こんなに不機嫌そうな宇垣は見た事がない。

「で、ですが、今は作戦中です」
「わかっている。命令とあれば仕方がない。不服だが、あいつの下で動くさ」
さすが軍人。例え嫌いな相手でも命令とあれば従う。そんな彼を、大和は心から尊敬していた。
艦橋で第一遊撃部隊司令部設置を終えた頃、
「栗田長官が参りました！」
その声に振り返ると、兵が敬礼していた。その後ろから現れたのは宇垣がこの世で最も嫌う男――栗田健男中将であった。
「宇垣君。突然ですまんが、よろしく頼む」
「はい。こちらこそ長官に乗っていただき、光栄です。海に投げ出されてお疲れでしょう。そこの椅子にお掛けください」
「おぉ、すまんな」
そう言って握手をする二人。表情は笑みを浮かべているが、どちらも目は笑っていない。その恐ろしさに大和は背筋が凍り付いた。
「め、目が笑ってません・・・ッ！」
「そ、そうだね」
翔輝も苦笑いするしかない。
艦橋の左側に栗田以下第一遊撃部隊司令部が、右側に宇垣以下第一戦隊司令部が陣を置いた。お互いの参謀達がキッと睨み合っている。すでにここが戦場である。
「い、息苦しいですぅ」
大和があまりの空気の窮屈さに軍服の胸のファスナーを少し下ろす。
「我慢しろ」
横で怒る翔輝自身息苦しく大和のように服を緩めたいが、見えない大和に対し翔輝は普通の人間なのでそうもいかないのだ。
「大尉ぃ、こんな息苦しい雰囲気は初めてですぅ」
「僕もだよ。まさかあの栗田長官と宇垣司令が同じ艦橋に入るなんて誰も想像してないよ」

翔輝と大和は互いに沈黙を続けている両司令部を見て深いため息を吐くのであった。

その日の夜、『大和』の会議室で開かれた艦魂会議ではぐったりとする翔輝と大和の姿があった。

「それは災難だったわね」

長門が苦笑いしながら二人に紅茶を差し出した。

「本当に、艦橋がすでに戦場なんですもの」

「ははは、あそこでこれからも過ごさないといけないなんて・・・」

翔輝と大和は心底疲れ切っていた。そんな二人を見詰め、金剛も少し同情したような顔をする。

「まぁ、栗田は確かに消極的というか慎重過ぎる司令官ではあるな。それに対し宇垣は連合艦隊参謀長などを歴任した切れ者だが、基本は敵と徹底した砲撃戦を繰り広げる勇ましい司令官だ。正反対な二人だから、仕方あるまい」

「確かに、でも栗田も悪い指揮官じゃないぜ？　俺達をガダルカナルの飛行場砲撃を成功させた司令官だからな」

「・・・でも、ミッドウェー海戦で『最上』と『三隈』を衝突させ、トラック島空襲で隷下の艦隊に被害を出して作戦を中止して逃げ帰って来た」

「ま、まぁ、そうだがな・・・」

武蔵の栗田の失敗例に、榛名も困ったように頬を掻く。

「まぁ、いつも成功するとは限らないさ。それが戦争なんだもの。ほら、南雲大将も真珠湾は成功したけどミッドウェーでは失敗したじゃない」

翔輝の言葉に、武蔵はうなずくと沈黙した。

必ず勝てるなんて事はない。それが戦争なのだ。

「しっかし、ずいぶんと寂しい司令部だな」

榛名の言葉に、大和も「そうですね」と悲しげにつぶやいた。

現在ここには伊勢と日向、扶桑と山城の姿はない。伊勢と日向は

小沢艦隊の護衛に、扶桑と山城は西村艦隊の主力として参加しているのでここにはいない。戦艦が四人も抜けると、残っているのは大和、武蔵、長門、金剛、榛名の五人だけ。ずいぶんと少ない。他のメンバーは姉三人が脱落した愛宕姉妹四女の鳥海や妙高羽黒姉妹。矢矧や雪風などが揃っている。

「す、すみません・・・何かお役に立てなくて・・・」

雪風が申し訳なさそうに言う。

「そんな事ないよ。一緒にがんばろうね」

「大和司令・・・ありがとうございます」

「本当の事だもん」

大和と雪風という仲のいいコンビは久しぶりだ。今まで雪風は別任務などで海を翔け回っていたからだ。その後大和は矢矧やその妹の能代などと楽しげに会話している。

翔輝はふと部屋の隅の方でしょんぼりしている少女を見た。それは一瞬にして姉二人を失い、一人が大怪我を負った鳥海であった。

「大丈夫?」

翔輝は彼女に近づくと、声を掛けた。

「あ、はい・・・」

鳥海は力なく答えた。彼女は姉達が死ぬ瞬間や攻撃を受けた瞬間を目の前で見ていた。そのショックはあまりにも大きいだろう。

「ラムネ、飲む?」

「・・・ありがとうございます」

鳥海はそれを受け取ると、ちびちびと飲み始める。その仕草はかわいいが、今はそのかわいさも悲しみで幾分か失われている。

「長谷川大尉? 何をしているんですか?」

そう声を掛けて来たのは最上に良く似た顔立ちに桜色のリボンを頭の両側で結んでちょこんと触覚のような小さなツインテールをした少女。最上の妹――鈴谷だ。

「鈴谷。いや、ちょっと鳥海が心配で」

「あぁ、鳥海さんですか」

鈴谷はしょんぼりとしている鳥海を見詰め、瞳を揺らす。彼女も姉一人を失っている。鳥海の気持ちは痛いほどわかっている。
「鳥海さん、元気出してください。これから戦いは続きます。お姉さん達の分までがんばりましょう。私や部下達もご協力します」
「ありがとう、鈴谷、長谷川さん」
鳥海はほんの小さな笑みを浮かべた。
鈴谷は「後は任せてください」と言って妙高や羽黒と一緒に鳥海の傍にいた。特に妙高と羽黒は鳥海の先輩重巡洋艦だ。鳥海もわずかながら笑みを浮かべた。
翔輝は安心し、再び大和達の所に戻る。すると、少し離れた場所に一人でいた長門が腕を組んで何かを考えていた。
「長門さん？　どうしたんですか？」
翔輝が声を掛けると、長門は笑顔で振り返った。
「別に。特に何もないわよ」
「そ、そうですか？　何か考えていたようですけど」
「うーん、まぁ。この作戦、瑞鶴達が敵を引き付けてくれないと失敗に終わるのよね」
「そうですね。でもまさか、瑞鶴達が囮任務を命令されていたなんて」
「私達の為に、瑞鶴達は必死に戦ってくれるわ。もちろん伊勢と日向もね」
「こう言ったら失礼ですが、僕は隼鷹が参加しなかった事が唯一嬉しいです」
隼鷹は翔輝にとっては特別な存在だ。もちろん瑞鶴達も大切な存在だが、隼鷹は自分にとってもう一人の妹みたいなものだ。そんな危険な任務には参加してほしくない。
「まぁ確かにそうね。もっとも、『隼鷹』が囮作戦から外されたのはきっと低速な上に防御力が低いからだからでしょうね。いくら搭載力があっても、今じゃ載せる飛行機がないから、そうなると『隼鷹』のメリットはないからね」

長門の意見はもっともだ。囮作戦はスピードが重要な要素になってくる。『隼鷹』の低速さと防御力の低さは即沈没の可能性に結びつく。

「隼鷹・・・元気にしてるかな」

もう隼鷹とはマリアナ沖海戦以来四ヶ月も会っていない。しかも彼女は姉のように慕う翔鶴と妹の飛鷹を失っている。そんな状態で離れ離れは心配で心配で仕方がない。

不安げな瞳を揺らす翔輝に、長門は優しく微笑む。

「きっと大丈夫よ。隼鷹は強い子だから」

「・・・そうですね」

隼鷹は強い子だ。

幼くて優しい女の子だが、彼女だって日本海軍の軍人だ。とても強い、戦姫なのだ。

「きっと、大丈夫だ」

「そうね」

長門の笑みはとても温かく優しい。

今まで幾度となくこの笑顔に助けられた。本当に、いい人だ。

「長門さん。いつもありがとうございます」

「な、何よ突然。改まっちゃって」

「いえ、長門さんにはいつもいつもお世話になってしまって、本当にありがとうございます」

「いいのよ。これもお姉さんの役目なんだから」

優しげな笑みを浮かべる長門。

ふと、その笑みがニヤぁっとした何かたくらんだ笑みに変わった。

「じゃあ、そんな長谷川君にお願いがあるの」

「何ですか？　僕で良ければ何でもしますよ」

「何でも、ねぇ・・・」

ニヤニヤと笑みを浮かべる長門は一度話に夢中になっている大和達を一瞥し、翔輝を手招きする。そして、不思議そうに近づいた翔輝に、

「えいッ！」
「うわぁッ！」
思いっ切り抱き付いた。突然長門に抱き付かれた翔輝は顔を真っ赤にして慌てる。
「な、長門さん！？」
「えへへ、長谷川君って抱き心地がいいんだよねぇ。ねぇ？　今日は私の抱き枕になってくれない？　私の布団で一緒に寝ましょう」
「ええぇぇぇッ！？　ちょっとそれは・・・ッ！」
「何よぉ。何でもするって言ったじゃない」
「そ、それはそうですが・・・ッ！」
「えへへ、かわいいよぉ」
「た、助けてぇッ！」
翔輝は必死に逃げ出そうとするが、長門はギューッと抱き付いて離さない。
だが、翔輝の悲鳴（？）に大和達が驚いて振り返り、翔輝を襲っている長門に驚愕する。
「ちょっと長門さん何してるんですかッ！？」
「・・・殺す」
「長門テメェッ！　何してんだゴラぁッ！」
大和、武蔵、榛名が慌てて二人に駆け寄ると、翔輝を長門から解放する。すると、長門はすごく不満そうな顔をする。
「もう、長谷川君を獲らないでよぉ」
「何言ってんだゴラぁッ！」
「そうですよ！　大尉は長門さんのものではないです！」
「・・・そう。翔輝は私のもの」
「武蔵司令！　どさくさに紛れて何爆弾発言してるんですかぁッ！」
雪風のツッコミが力強く炸裂したのを合図に翔輝を奪い合っての大戦争が勃発した。敵味方入り乱れての大乱闘に、激怒した金剛が加わってさらに過激になった。
いつの間にかまだ会議も始まっていないのに会議は中断となった。

矢矧と鈴谷、妙高と羽黒も慌てて止めに入ったが、事態の収拾にはならなかった。

こんな迷惑極まりない乱闘の中、そんな皆を見詰めて、鳥海が小さく笑みを浮かべていたのがせめてもの救いだったであろう。

第十二章　第七節　旗艦爆沈　命懸けの進撃（後書き）

ついに始まったレイテ沖海戦。
ここから史上最大の海戦が幕を開けます。
そして、多くの艦魂達が命を落とす、壮絶な戦いが・・・

第十二章　第八節　史上最大の海戦　仲間を守りし戦姫武蔵の死闘（前書き）

ついに、来てしまいました・・・
以前行った艦魂年代史シリーズキャラクター人気投票でメインヒロインである大和に圧倒的大差で見事一位に輝いた恋姫武蔵の、最期の戦いが・・・
空前絶後、史上最多の被害を受けて沈んだ戦艦『武蔵』。その戦いは壮絶かつ悲惨なものであった。
仲間を守る為、自慢の自ら巨体を盾にし、仲間を守り抜き、海底に没した『武蔵』。
そんな『武蔵』の艦魂の最期も、壮絶かつ悲惨、そして悲し過ぎるものだった。
今日と明日、二日連続でお送りするシブヤン海海戦こと武蔵の最期の戦い。
どうか、武蔵の最期の姿を、見守ってください。

第十二章　第八節　史上最大の海戦　仲間を守りし戦姫武蔵の死闘

翌日二四日午前八時、米軍はシブヤン海を進撃中の栗田艦隊を発見した。

ハルゼー大将は隷下の主力空母部隊である米機動部隊の全四群のうち補給中の第一群（空母『ホーネット』を旗艦とした空母五隻の艦隊）以外の展開させていた三群を集結させた。

そしてついに、米機動部隊の第二群所属空母二隻から第一次攻撃隊が発艦。全機シブヤン海を通過中の栗田艦隊に向けて襲い掛かった。

時刻は十時半に近づいた頃、『大和』『武蔵』の電探が接近する敵機大編隊を捕捉した。

「対空戦闘用意急げ！」

森下の命令でただちに乗組員は各戦闘配置に向かった。

森下は参謀達にそれぞれの命令を下すと、宇垣と栗田に敬礼して反転する。

「艦長ッ！？　一体何を！？」

防空指揮所に向かおうとした森下を副長が慌てて止める。それに対し森下は不思議そうに首を傾げる。

「防空指揮所で操艦をするんだが」

「なら防空ヘルメットと防弾チョッキをお付けください！」

副長の絶叫に全員が森下の格好を見て驚愕した。

森下は何の防弾装備もせずに通常の軍服で防空指揮所に向かおうとしていたのだ。敵機の機銃が飛び交う中を防弾装備をせずに出るなんて、死にに行くようなものだ。

「艦長！　ちゃんとヘルメットとチョッキを――」

「そんな物邪魔になるだけだ。必要ない」

森下は気にした様子もない。副長は驚いたように声を上げる。

「死んでしまいますよ！？」
「戦場じゃどこにいたって死ぬ時は死ぬんだ。気にする事じゃない」
「しかし・・・ッ！」
「じゃ、俺は急ぐから」
「艦長！」
副長を無視して防空指揮所に上がろうとする森下に翔輝と大和が近づく。その瞳は彼を心配しているという想いが込められていた。
森下は自分を心配する翔輝と大和にまるで父親のような優しい笑みを向ける。
「安心しろ。俺の役目は『大和』を守る事だ。そう簡単には死にゃあせんよ」
「本当ですか？」
「大和も俺を信じられないのか？」
「そんな事ありませんけど・・・」
うつむく大和の頭を森下は優しげな笑みを浮かべてそっと撫でた。その手つきはとても優しげなもので、とても温かい。頭を撫でられた大和はじっと森下を見詰める。
「じゃあ俺を信じてくれ。お前は俺が守ってやる」
その言葉に、大和は静かにうなずいた。瞳の中にあった心配の光が、信頼の光に変わっていた。
「・・・はい。お願いします」
森下は笑みを浮かべると深く軍帽を被り直して防空指揮所に上がった。その背中に二人は敬意を込めて敬礼した。
防空指揮所に上がった森下は胸ポケットからタバコを取り出して口に突っ込み火をつけた。
タバコをくわえたまま森下は敵機が迫っている空を見詰める。その空は敵機が迫っているとは思えないほど蒼く美しいものだった。
「操舵室！　俺の乱暴な操艦について来いよ！」
『了解！』
森下はニヤリと笑って再び空を見上げる。その表情は再び真剣な

ものに変わった。
「俺は乗組員二五〇〇人の命を預かってるんだ。そいつらを守るのは俺の責務だ。それに――」
たっぷりと吸った煙を細く吐き、森下は天高くに浮かぶ太陽を見詰める。
「この冷たい海に、あんな子供を沈める訳にはいかないしな」
「敵機！　左二〇度方向から多数接近！」
見張り兵の言葉に森下の顔にも緊張が走る。
いつの間にか、さっきまで蒼かった空に多数の黒いシミが現れた。
「主砲三式弾砲撃用意！」
森下は伝声管に向かって戦艦の存在意義である巨砲の砲撃命令を下した。
鈍い轟音を立てながら巨大な第一第二主砲塔が旋回し、六本の巨大な砲身がゆっくりと上がり敵機を睨む。
不気味な静けさの中、艦隊将兵は世界最大最強の主砲が咆哮する瞬間を今か今かと見詰めていた。そして、
「主砲三式弾撃ち方始めッ！　撃てぇッ！」
森下の声の直後、六門の巨砲が唸りを上げて六本の砲身から巨大な黒煙と火炎が爆発のように噴き出し、ビリビリと空間を揺らす振動と衝撃を発する。撃ち出された巨大な砲弾を天空を貫き、敵機周辺で炸裂して無数の焼夷粒子を撒き散らし、敵機十数機が火の玉になって墜落した。
旗艦『大和』の砲撃に呼応して他の戦艦も砲撃を開始した。
すさまじい爆音を響かせて各戦艦が己が主砲で敵機に向かって次々に砲撃をする。炸裂する三式弾の嵐の中を敵機は味方を撃ち落されながらも突っ込んで来る。
次弾装填を終えた『大和』の主砲が再び火を噴く。
爆音と振動が巨艦を振るわせる。
しばらくして敵機は戦艦の主砲射程範囲の内側に侵入。戦艦の代わりに巡洋艦部隊が砲撃を開始。『大和』も二基の副砲で砲撃する。

そしてついに敵機は三式弾の攻撃範囲の内側に侵入。各大型中型艦の主砲副砲が沈黙。最後に駆逐艦部隊が砲撃を開始している間に戦艦部隊の甲板には機銃兵が配置を急いだ。

直後、敵機はついに栗田艦隊に向けて攻撃を開始した。

「対空戦闘始めッ！」

森下の号令で鈍い音を立てて高角砲が唸り、空気を切り裂く鋭い音を立てて機銃が何百発の鉛の弾を空にバラ撒いた。

艦隊上空を飛び回る敵機を狙って各砲が砲弾や弾丸を撃ち出す。

艦隊の上空に達した敵急降下爆撃機が一斉に機体を翻して流星のように急降下して来た。

「敵機急降下！」

「面舵いっぱぁぁぃッ！」

森下はすぐさま回避行動を取る。『大和』の巨艦が横に滑り、敵機から投下された爆弾は艦体の右数十メートル先に空しく水柱を立てた。

「右四〇度魚雷二本接近！」

「面舵三五度ぉッ！」

「敵機直上！　急降下ぁッ！」

「取舵いっぱぁぁぃッ！」

巨艦『大和』は敵機のすさまじい空襲の中、的確に敵機の攻撃を避ける。艦のまわりには空しく爆弾が水柱を上げ、魚雷が海を通り過ぎていく。

「敵機急降下！」

「面舵いっぱぁぁぃッ！」

森下は襲い来る敵機の動きをすぐさま把握して操艦の難しい『大和』を絶妙な動きで海面を滑らせて次々に敵機の攻撃を回避した。

まわりで水柱が立ち続ける海を見て大和は歓喜する。

「艦長すごいですッ！　敵機の爆弾を次々に回避してますよ！」

「さすが艦長。日本の軍艦の中でも最も扱いづらい『大和』をここまで器用に動かせるなんて」

翔輝も嬉しそうに言うが、その手に握られた鉛筆は休む事なく細かく動き続けている。
次々に敵機の攻撃を回避する『大和』。だが、突如爆音が響き渡った。
「な、何ですか!?」
「僕達じゃないみたい」
大和はピンピンしているので『大和』が被害を受けたのではない。
急いで確認しようと大和が窓に張り付くと、
『『妙高』に魚雷一本命中!』
見張り兵の報告に艦橋の者は黒煙を上げる重巡洋艦『妙高』を見詰めた。
『妙高』は被雷の影響でか速力が低下したらしく回避行動が鈍くなった。
翔輝と大和は心配そうに『妙高』を見詰めたが、どうやら沈没する気配はなく、二人は安堵した。

一方、旗艦として艦隊中央にいる『大和』の横を走る『武蔵』の防空指揮所では武蔵が無表情で敵機を見詰めていた。
そんな彼女から少し離れた所にいる『武蔵』艦長、猪口敏平(いのぐちとしひら)大佐は『武蔵』に着任して二ヶ月程と日が浅く、熟練の森下と違って巨体『武蔵』を操艦するのに相当苦労していた。
『敵機急降下!』
「取舵いっぱぁぁぁいッ!」
それでも猪口は必死に『武蔵』を回避させる。そんな彼を武蔵は少し頼りなさげに一瞥し、再び襲い来る敵機を無言で見詰める。
猪口の努力で『武蔵』は被害なしで海を翔ける。だが、着任間もない猪口の腕と『武蔵』の操艦の難しさが重なり、ついに限界が来た。
『敵機直上! 急降下!』
「面舵いっぱぁぁぁいッ!」

「艦長！　左舷魚雷接近！」
猪口が面舵を回した刹那、突如左から魚雷接近の報告が入った。
この報告に艦橋に戦慄が走る。動き始めた『武蔵』はもう曲がる事をやめる事はできない。
「・・・」
迫る魚雷を無言で見詰め、武蔵はその瞬間を覚悟した。そして・・・

ズドオオオオォォォォォンッ・・・
鈍い音と振動が響き、『武蔵』の左舷に水柱が上がった。と同時に武蔵の腕の皮膚が裂けて真っ赤な血が噴き出した。だが、武蔵は表情一つ変えずにそれを耐える。
「・・・損傷軽微。戦闘続行に問題なし」
武蔵の言うとおり、『武蔵』の強力な装甲の前では魚雷の一本程度は弾かれて甚大な被害にはならず、『武蔵』は減速する事もなく進み続けた。

敵機が去った後、武蔵は平然とした顔で『大和』の艦橋に現れた。
「「武蔵ッ！？」」
翔輝と大和が驚きながら慌てて駆け寄ると、武蔵の左腕には包帯が巻かれていた。
「だ、大丈夫なの！？」
「・・・問題ない。この程度の攻撃で私を止める事はできない」
「武蔵、傷は痛む？」
「・・・大丈夫。心配してくれてありがとう翔輝」
少し微笑む武蔵に翔輝は安堵する。そんな二人を見て自分に対する時と明らかに対応の違う妹にちょっとした怒りと寂しさを感じる大和だった。
「あらあら、武蔵は大丈夫そうね」
そこへ金剛と榛名を率いた長門が現れた。武蔵の無事な姿を見て三人は安堵したような顔をする。

「武蔵の傷の具合はどうだ？」
「軽傷みたいですね」
「そうか。それは良かった」
金剛はそれだけ言うと反転して光に包まれて消えた。そんな彼女の背中を見詰め、榛名は苦笑いする。
「相変わらず素直じゃねぇな姉貴は」
「・・・あなたも生きてたんだ。残念」
「うぉーい、テメェ何どさくさに紛れて言っちゃってくれちゃってるの？」
武蔵と榛名が無意味に睨み合うのを見て、翔輝と大和は笑ってしまった。
戦闘の合間のいつもの景色が、今はとても幸せに感じられた。これがさっきまで敵機を死闘を繰り広げていた者達とは思えないほど、優しげなものだった。
「おい長谷川。少し静かにしろ」
森下がタバコをくわえながら注意し、翔輝は恥ずかしそうに小さくなってしまった。そんな彼を見詰め、大和達はおかしそうに笑みを浮かべた。宇垣も嬉しそう微笑んでそんな彼を見詰めていた。

栗田艦隊は『妙高』が魚雷一本を受けて速度が低下して被害甚大となって離脱したが、艦隊は再び陣形を組み直してレイテに向かって突き進んだ。

一方、敵機動部隊が栗田艦隊を攻撃した事で助かった艦隊があった。
戦艦『山城』を旗艦とする西村艦隊だった。
実は栗田艦隊よりも先に西村艦隊は敵機動部隊に発見されて小規模な敵機に襲われたが、敵機動部隊が栗田艦隊を主力部隊を判断して攻撃を開始した為、西村艦隊への攻撃は中止された。
この空襲で西村艦隊は戦闘艦の二隻が小破しただけに留まってい

た。
　シブヤン海を突破する栗田艦隊に対し、西村艦隊はスリガオ海峡を通過するという針路を取ってスールー海を進撃中だった。
　艦隊の中心にいる旗艦・戦艦『山城』の艦橋では西村祥治中将が窓の外を見詰めていた。
「栗田の艦隊に敵機が集中しているらしいが、小沢さんはまだハルゼーを引き付けてはいないか。どう思う――山城」
　西村は隣に立っていた山城に声掛ける。彼は艦魂が見える人間だった。
　西村の質問に対し、山城は無表情で返す。
「機動部隊の仕事も気になるけど、私はこの艦隊の連携の低さが気になる」
　山城は輪形を組んでいる艦隊を見てつぶやいた。確かによく見ると艦隊の動きに少しバラつきがある。
「仕方ないだろ？　この艦隊はこの戦いの為に各艦隊から寄せ集めた艦隊なんだから。まともな訓練をする暇もなかったんだ。それを完璧に動かせと言う方が無茶な話だ」
　西村はため息交じりに話す。
　なぜ山城と西村がこれほど仲がいいかというと、実は西村は以前『山城』の航海長を務めていたのだ。その関係で今でも山城とは仲がいい。
　西村は今回の作戦書を見詰める。
「志摩の奴がちゃんと俺と合流してくれればいいんだが」
「・・・」
「何だよ？　相変わらず志摩と仲が悪い事を責めてるのか？　仕方ないじゃないか。あいつとは昔から気が合わないんだから」
　西村と志摩は途中合流する予定だったが、両者は仲が悪い。どうも今回の作戦を任されている指揮官は仲の悪い者が多い。
「栗田も宇垣と鉢合わせしているらしいが、作戦だけはちゃんと遂行してもらわんと困る」

「それはあなたと志摩長官も同じ」
「痛いところを突いてくるなぁ」
山城の言葉に苦笑いする西村。その時、
「ハロハロー！　みんな元気ーぃッ？」
陽気な声を上げて扶桑とその横で敬礼している最上が現れた。
「おい扶桑。お前作戦中に自艦を離れるな」
呆れながら言う西村に、扶桑は気にした様子もなく屈託のない笑みを浮かべる。
「いいじゃない。相変わらず西君は頭が固いのねぇ」
「・・・だから、西君言うなって言ってるだろ？」
「いいじゃない。かわいい名前だと思うけど」
扶桑の能天気ぶりに西村は呆れて何も言えなくなる。そんな彼をおちょくる扶桑の横で二人の戦艦の補佐を行っている最上は山城に声掛ける。
「損傷した駆逐艦の子ですが、今は休息をとっています」
山城は最上の説明にうなずいた。その行為に最上が理解を困っていると扶桑が優しく微笑む。
「気にしないで。この子無口だから」
「そうでしたね。では私はこれで」
「あ、ちょっと」
扶桑が止める暇もなくも最上は会釈して去った。そんな彼女に扶桑が頬を膨らませる。
「むぅ、最上だって私達第二戦隊のメンバーなんだからさ、もっと仲良くした方がいいと思うんだけど」
一人扶桑が腕を組んで悩む姿を見て西村は苦笑し、山城は眉間にわずかなしわを寄せて見詰めていた。
西村は艦艇が少なく訓練不足な艦隊を率いて、ひたすらレイテを目指して進撃を続けるのであった。

一方の小沢艦隊では栗田艦隊が敵機動部隊の攻撃を受けている事

に焦っていた。
旗艦・空母『瑞鶴』の長官室で小沢と貝塚がこの事態の打開策を相談している頃、瑞鶴は『伊勢』の艦橋にいた。
「大和達が敵機動部隊の攻撃を受けたそうです。しかも『武蔵』も被雷したそうです」
「その報告はうちも聞いてるよ。でもこんだけ大胆に平文電報を打ってるっつーのに敵が気が付かへんてのもおかしいなぁ」
伊勢も敵の動きに疑問を抱いていた。もう敵が自分達に気づいていてもおかしくない頃なのに、その気配は一切ない。
「もしかして、私達が囮だって気づかれちゃったのかな？」
「うーん、たぶんそれはないと思うんやけど」
「でも日向さんの意見も考えられる事です。大和達を主力と判断して襲っているのかもしれませんし」
「それじゃうちらの存在意義がないやないか」
伊勢自身相当焦っている様子だった。そんな彼女を瑞鶴と日向が心配そうに見詰めていると、艦橋に一人の高級士官が入って来た。
彼の名は第四航空戦隊司令官松田千秋少将。元『大和』第二代艦長を務めた人物だ。
「どうもハルゼーはこっちに気が付いてくれないんだが、このままではまずいなぁ」
「そうですね。小沢長官もやきもきしているでしょう」
松田に相槌を打つのは『伊勢』艦長、中瀬泝（なかせのぼる）大佐だ。
「このままでは『大和』が被害を受ける。私が担当した艦だし、あそこには私のお気に入りの青年士官がいる。どうにかして守ってやりたいんだが」
松田の言葉に瑞鶴達は誰の事かすぐにわかって笑顔になった。
「まぁ、早くハルゼーが気が付いてくれないと、俺達はただ無駄にアホ面を晒してただけだと言われかねんな」
松田は蒼い空を見詰めてため息した。
小沢艦隊はいまだに敵機動部隊を引き付ける事ができずにいた。

瑞鶴達にも大和達の無事を祈るしかできなかった。

一方、栗田艦隊に再び悲劇が襲い掛かった。

正午を少し回った頃、敵機動部隊第二次攻撃隊が襲い掛かったのだ。

対空機銃の甲高い鋭い音が響き渡る中、敵機は艦隊の中心部にいる『大和』と『武蔵』に集中していた。

「敵機直上！　急降下！」

「左四〇度より魚雷三本接近！」

「右六〇度雷撃機！」

『武蔵』の防空指揮所では悲鳴に近い声が響き渡っていた。そんな中猪口は必死に舵を回してこれを回避し続ける。だが、護衛戦闘機がいない状況では敵機の数はほとんど減らず、敵機は次々に群がってくる。

武蔵は相変わらず無表情で迫り来る敵機を見詰めていた。すると、武蔵はふと隣を走る『大和』を見詰めた。『武蔵』に比べて群がる敵機の数は少し少ない。やはり目立つ上中心部から少し離れている『武蔵』の方が狙われているようだ。それに対し武蔵は小さく笑う。

「・・・やっぱり、敵機は私に集中してる。予定通り」

だが、武蔵が姉の心配をしていた時、突如鈍い爆音が響いた。

武蔵の右腕から鮮血が飛び出たが、彼女は眉一つ動かさない。とんでもない精神力の持ち主だ。

『右舷機関室付近に魚雷一本命中！　速力低下！』

その悲鳴のとおり、『武蔵』は最大速力が二二ノットに低下した。

だが、まだ『武蔵』の悲劇は終わらない。

『敵機直上！　急降下！』

けたたましい急降下音が天空に響き、敵機三機が急降下して来た。

「面舵いっぱぁぁぁいッ！」

猪口はすぐに回避行動を取るが、大和型戦艦は舵の反応速度は遅く、とてもじゃないが回避できる距離じゃなかった。

武蔵は迫る敵機を見詰め、一瞬だけ表情凍り付いた。
ドガアアァァァンッ！　ドガアアアアァァァァンッ！
爆発音が二度響き、すさまじい黒煙が上がった。この時『武蔵』の第二主砲付近と機銃高角砲が陣を張っているいる右舷艦中部に爆弾が命中した。人が瓦礫などと一緒に真っ赤に染まって吹き飛ぶ。
武蔵の肩と腹部から赤い血が勢い良く噴き出た。さすがの武蔵もこれには小さな悲鳴を上げて苦悶の表情を浮かべる。
武蔵が苦しんでいる時、群がる敵機についに業を煮やした猪口は恐るべき命令を発した。
「主砲三式弾砲撃用意！」
この命令には武蔵は目を見開いて驚愕した。
「艦長何言ってるんですか！　こんな大混戦じゃ機銃兵達を艦内に収容している暇がありません！」
「構わん！　収容はせずに砲撃しろ！」
この言葉に副長は驚愕する。
「正気ですか！？　そんな事をしたら兵達にも被害が――」
「甲板の兵と乗組員全員の命ならどっちが大事だ！」
猪口の怒号に副長は何も言い返せなかった。
「・・・ダメッ！　甲板にいる兵達が！」
「主砲三式弾撃てッ！」
「・・・ダメエエエェェェッ！」
武蔵の悲鳴も空しく『武蔵』の主砲三基九門から一斉に火炎が噴き出した。
迫る敵機の編隊は一瞬にして吹き飛んだ。だが、同時に甲板にいた多くの兵達も吹き飛び、『武蔵』の防空能力は極端に低下した。
さらに、低空で展開した焼夷粒子がそのまま味方駆逐艦や巡洋艦に降り注いでしまった。
武蔵はそれらの光景を見て絶句した。
彼女の瞳が怒りに染まり、猪口を睨み付ける。だが、
「・・・あぐぅッ！」

武蔵は突如悲鳴を上げて左脇腹が砕けておびただしい量の鮮血が噴き出し、武蔵はその場に倒れた。
『左舷中部に魚雷二本命中！』
武蔵は苦しそうに顔をゆがめてその場で悶えた。
自らの血で真っ赤に染まった床の上で武蔵は吐血をしながら苦しそうに悶える。
「・・・翔輝・・・ッ！」
武蔵は大好きな彼の名前をつぶやき、歯を食い縛った。
この攻撃を最後に敵機は去った。
攻撃終了後、大和は慌てて『武蔵』の艦橋に現れた。すると、そこには床にぐったりと倒れている妹の姿があった。
「武蔵！　大丈夫！？」
大和が駆け寄ると、強い血の臭いを感じた。見ると武蔵は身体中に血が染み込んだ包帯を巻いて苦しそうに息をしていた。
「武蔵ッ！　しっかりしてッ！」
「・・・大丈夫。まだ死んでないから」
武蔵から返って来た返事はいつもよりも小さく弱々しいものだった。その声と表情に大和の顔は凍りつく。
「武蔵！　武蔵ッ！」
必死に妹の名を呼ぶ大和に、武蔵は少し不機嫌そうに顔をゆがめる。
「・・・姉さん、うるさい」
「うるさいって何よ！　大切な妹を心配して何が悪いの！？」
「・・・傷に響く」
「・・・ごめんなさい」
先程までの勢いはどこへ行ったか、大和は一瞬でおとなしく静かになった。
そんな落ち着きのない姉を見て、武蔵は口を尖らせる。
「・・・姉さん。早く翔輝の所に戻って。翔輝を一人にさせないで」
「今は大尉の事はいいの！　今はあなたの方が――」

「・・・私は、翔輝の方を優先してほしいの」
「でも・・・ッ！」
まだ納得しない大和に、武蔵は小さく不敵に笑う。
「・・・私は戦艦『武蔵』の艦魂。不沈艦よ。安心して」
武蔵の小さくも力強い言葉に、大和は小さくうなずいた。
武蔵は小さく微笑み、フラつきながらもゆっくりと立ち上がった。
「本当に大丈夫なのね？」
「・・・くどい。お姉ちゃんは早く翔輝の所に帰って」
武蔵の強い口調に押されて大和は名残惜しそうに妹を見詰めながら光に包まれえ消えた。
大和が去った後、武蔵は突如力が抜けてその場にぐったりと倒れた。その額は玉のような汗でいっぱいだった。
「・・・か、かっこつける・・・ものじゃないね・・・これは・・・」
そう苦笑すると、武蔵は真っ赤な血の塊を吐いた。鉄の床が見えない血で真っ赤に染まると、武蔵は苦悶に顔をゆがめる。
小さな身体を真っ赤な血に染めながらも、武蔵の黒い透き通った瞳は強く輝いていた。

鎮火を終えた『武蔵』にさらなる悲劇が襲い掛かる。
一時半頃に敵第三次攻撃隊が来襲。出撃前のお色直しで光り輝く『武蔵』を旗艦と誤解し、敵機は総力をもって襲い掛かって来た。
ズドオオオオォォォォォンッ！　と鈍い振動が響き、『武蔵』にさらに魚雷が命中した。
『敵機急降下ッ！』
何度も聞いた見張り兵の絶叫に猪口は舵を回し続ける。だが『武蔵』は完全に敵機にマークされ、襲い来る敵機の数はすさまじく、猪口の腕では全てを回避する事はできなかった。
爆音と同時にすさまじい火炎が立ち上り、巨艦が小刻みに振動した。

『左舷中部に爆弾命中！』
『右舷後部に爆弾命中！』
『第三主砲塔付近に爆弾命中！』
一瞬にして三ヶ所に爆弾が命中し、無口な武蔵の口からすさまじい悲鳴が出た。さらにその隙を突いて魚雷が命中。『武蔵』は真っ黒な黒煙に包まれた。
「・・・この程度の攻撃で・・・この私を沈める事は・・・できない・・・」
武蔵は口元を吊り上げて不敵に笑う。その血に汚れた顔から出る笑みは不気味としか言いようがない。だが、その瞳の奥の強さは本物だった。
「・・・日本海軍の象徴と・・・謳われる一隻のこの私が・・・そう簡単に沈む事は・・・ありえない・・・」
武蔵の軍服はおびただしい量の血が付着していたが、翔輝から預かっている軍帽だけは一抹の血も付いていなかった。
「・・・翔輝と約束した・・・必ず・・・この作戦を・・・成功させて・・・一緒に・・・日本に帰るって・・・」
武蔵は頭の上に乗っている軍帽を血の付いていない方の手で深く被り直した。

一方、『武蔵』が攻撃を吸収しているおかげで『大和』に群がる敵機は『武蔵』よりは少なかったが、それでもすさまじい数の敵機が襲い掛かっていた。
「『武蔵』に攻撃が集中ッ！　爆弾三発、魚雷一本命中を確認！」
見張り兵の報告に森下はタバコをくわえたまま顔をゆがめる。
「まずいなぁ、『武蔵』に攻撃が集中してやがる――第一第二副砲旋回ッ！『武蔵』上空の敵機は吹き飛ばせッ！」
森下の指示に二基の副砲が『武蔵』上空の敵機を捉える。
「副砲三式弾撃てッ！」
副砲が火を噴き、『武蔵』上空にいた敵機十数機を撃ち落した。

それを見て大和は泣きそうな顔で喜ぶ。
「艦長が武蔵を助けてくれた！」
大和はほとんど泣きそうな顔で翔輝に服の裾を掴んで喜ぶ。そんな大和の横で翔輝も顔をゆがめながら『武蔵』を見詰める。
「武蔵・・・大丈夫かなぁ」
「あの愚妹がそう簡単に死ぬように見えますか？」
「愚妹っておい・・・」
翔輝が苦笑いした時、突如急降下音が響き渡った。敵機数機が『大和』に向かって急降下して来たのだ。
「まずいッ！　面舵いっぱぁぁぁいッ！」
森下はタバコを捨てて絶叫する。だが、敵機の速度はいつもよりも速くて回避が間に合わなかった。
ズドオオオオォォォォォンッ！
「ぐあああぁぁぁぁッ！」
「大和ぉッ！」
敵機の投下した爆弾のうち一発が『大和』の左舷中部に命中した。それと同時に大和の背中が裂けて血が噴き出た。
「大和！　しっかりしろ！」
「うぐぅっ・・・い、痛ぃ・・・ッ！」
大和は苦しそうに顔をゆがめてその場に倒れる。それを翔輝が慌てて支えてやる。
「大和。傷はそんなに深くないはずだ。大丈夫か？」
「は、はい・・・大丈夫です・・・」
大和は痛みを堪えて必死に笑顔をつくる。翔輝を心配させたくないという想いの行為だったが、それに翔輝は自分の無力さを感じた。
彼女が傷ついて苦しんでいても、自分には何もできない――それがとても悔しかった。
「大和。僕の部屋に戻ってベッドで寝てて」
「そんな事・・・できません・・・今は・・・作戦中です」
「今はそんな事関係ないだろ！」

「私はこれでも・・・帝国海軍軍人です。やる時は・・・やらねばならないんです」
「大和・・・」
大和の強い意志に、翔輝は何も言えなくなった。
さっきまで強く自分を心配してくれていた翔輝が急に花が萎れるようにおとなしくなったのを見て大和は心配そうに翔輝の顔を覗き込む。
「大尉・・・？」
その時、突如すさまじい爆音が響いた。
『『武蔵』に爆弾命中！　炎上しました！』
二人は真っ青な顔でで窓の外を見ると、『武蔵』が黒煙を上げて速度を低下させているのが見えた。

炎上する『武蔵』の艦橋では武蔵が立つ力もなくその場にぐったりと倒れ込んでいた。
「・・・そ、速度が・・・」
速度低下する『武蔵』に武蔵の表情は苦しそうにゆがむ。
「・・・ま、まだまだ進め――うぐぁッ！」
突如鈍い振動が響き、武蔵は悲鳴を上げて血を吐いた。
『左舷後部に魚雷命中！』
『左舷前部に魚雷二本命中！』
一瞬にして三本の魚雷が命中し、『武蔵』の速度はさらに低下する。しかも三本も左舷に命中した為、『武蔵』は左に十度傾斜した。
「右舷タンクに注水！　傾斜復原急げッ！」
猪口はすぐさま注水命令を出して艦の傾斜を直そうとする。
注水がされ、艦の傾斜は一分もしないうちに元に戻った。だが、注水の影響で艦が重くなり、さらに速度は低下。そこを狙われた。
『敵雷撃機右三〇度接近！』
猪口が確認した時にはもう敵機は近距離で魚雷を投下していた。
数秒後、『武蔵』の右舷前部に魚雷が命中し、武蔵は悲鳴を上げ

て吐血しながらその場に悶え苦しむ。
被雷の影響で今度は艦が右に五度ほど傾斜したが、猪口はすぐさま左舷タンクに注水して傾斜を直す。
傷だらけになっている『武蔵』と同時にその艦魂である武蔵も血まみれになって倒れていた。その表情は苦しそうにゆがみ、時折吐血を吐いている。
「・・・この程度の痛みで・・・倒れる訳には・・・いかない・・・ッ！」
武蔵は傷む体を奮い立たせて壁に寄り掛かりながら立ち上がる。
「・・・翔輝と・・・約束したんだ・・・必ず・・・生きて・・・日本に帰るって・・・ッ！」
武蔵は軍帽を深く被り直し、迫る敵機を睨み付けた。
「・・・だから・・・負ける・・・訳には・・・いかないの・・・ッ！」
武蔵は刃物のように目を鋭くさせ、襲い来る敵機を睨み続けた。

米第三次攻撃隊の猛攻撃で戦艦『武蔵』は爆弾四発、魚雷五本を受けて速力を十六ノットに低下。低速になった『武蔵』は輪型陣形から脱落。艦隊の少し後方から追い掛ける事になった。
栗田艦隊旗艦・戦艦『大和』も爆弾一発を受けたが、戦闘・航行に問題はなく進み続けた。
栗田艦隊は傷ついた艦隊を率いて再びレイテを目指して進んだ。

消火作業に追われる『武蔵』の艦橋には大和の他に長門、金剛、榛名の四名が集まっていた。
「武蔵！　しっかりして！」
泣き叫ぶ大和の前には血の海にぐったりと倒れている武蔵の姿があった。
小さな少女は黒い軍服にバケツに溜めた血をぶちまけたかのような量の血が付着し、その身はだらんと床に投げ出されていた。

「武蔵！　武蔵！」
泣き叫ぶ大和に対し、武蔵は苦しそうに息をしながらも必死に口を動かそうとしている。
「・・・ね、ねえ・・・さん・・・」
やっと搾り出された声は小さく、叫び疲れたのか嗄れた声だった。
「武蔵！　は、早く傷の手当てを――」
「・・・いら・・・ない」
「何言ってるのよ！　少しでも痛みを和らげないと！」
「・・・いらない・・・ってば」
そう言う武蔵は起き上がろうと傷む身体を動かす。その行為に大和は驚く。
「な、何考えてるのよ！　そんな体で！」
「・・・う、うるさい。私の体が・・・どうなろうと・・・私の勝手・・・」
「そうはいかん。貴様には二三〇〇人の将兵が乗っている。お前が死ねば、そいつらも巻き込む事になる」
「・・・そ、それは・・・」
「金剛。今はそういう事を言うもんじゃないわよ」
「不謹慎なのはわかっているが、私達の命は自分自身だけのものではない。私達の死は同時に多くの将兵も巻き込むものだ。それだけは覚えておけ」
金剛の言葉に、武蔵は静かにうなずいた。
自分達は艦魂。軍艦に宿る魂の化身。艦魂が死ぬのは艦が沈む時。艦が沈めばそれに乗る多くの将兵も巻き込む。金剛の言うとおり、艦魂は自分の死だけでなく多くの将兵も巻き込む死に繋がってしまうのだ。
「姉貴の言うとおりだけどよ、今はそういうのやめねぇか？　それじゃ死ぬのを前提にしてるとしか聞こえねぇぜ？」
「それもそうだな。『大和』『武蔵』は不沈艦だから沈む事はないか」

マジメな顔で言う金剛を見て、大和は安堵し、長門は笑顔になった。だが、武蔵だけは彼女の言葉を信じるつもりは少しもなかった。

「・・・姉さん・・・翔輝は・・・？」

武蔵は満身創痍な自分よりも大好きな翔輝の方を心配した。彼女らしい考えだ。

「大尉なら大丈夫よ。機銃兵とかじゃなくて航海士だからずっと艦橋にいるからケガ一つしてないわよ」

「・・・そう――なら、姉さんは？」

「私？　私は平気。あなたが敵を引き付けてくれたからほとんど攻撃を受けてないし、被弾したけどたいしたケガじゃなかったし」

そうは言うが、時折大和は痛みを耐えているような顔をする。そんな姉の姿を見て、武蔵の表情が少し悲しげに揺れる。が、

「・・・ゲホッ！　ゴホッ！」

「武蔵！？」

突如武蔵は大量の真っ赤な血を吐いた。その量に大和の顔が真っ青になる。

「だ、大丈夫！？」

「武蔵！　しっかりするのよ！」

「おいッ！　お前大丈夫か！？」

大和、長門、榛名の三人が慌てて駆け寄るが、武蔵はそれを断る。

「・・・平気・・・これくらいの血・・・問題ない」

「問題ないって・・・」

「・・・それよりも・・・早く戻った方がいい」

「そんな事できる訳もないじゃない！」

大和が叫んだと同時に艦橋に慌てた様子の兵が走りこんで来た。

「どうやら、武蔵の言うとおりにしなきゃいけない状況になったみたいね」

長門は悔しそうに唇を噛みながら言った。その言葉に全員が兵を見詰める。

「旗艦『大和』より！『敵大編隊我方ニ接近ス。其ノ数三〇』！」

「対空戦闘用意ッ！」
猪口は兵の報告にすぐさま対空戦闘命令を発令した。
慌しくなる艦橋の中、武蔵は大和達に声掛ける。
「・・・ほら、敵機が来た・・・早く・・・戻って」
大和は悔しそうに顔をゆがめると、苦渋の決断で戻る事にした。
「あ、後でまた会おうね」
「・・・当然」
大和は長門達と共に自艦に戻った。残された武蔵は身体中の力を振り絞って立ち上がる。その表情は痛みに耐え苦しそうにゆがむが、その瞳だけは轟々と闘志が宿って輝いていた。
「・・・さっきの空襲で・・・一番主砲は炎上した火薬庫を・・・注水消火で砲撃不可・・・でも、まだ二基主砲が残ってる・・・まだ、戦える・・・」
武蔵はそうつぶやくと、翔輝から預かっている軍帽を被り直し、敵機が迫り来る空を睨み付けた。その瞳には、まだ希望の光が輝いていた。
まだ、諦める訳には、いかなかった。

敵第四次攻撃隊が現れた。
だが幸運にも『武蔵』は速力不足で隊列から離れていたおかげで今回は襲われなかった。
しかし、その代わりに陣形の中心にいるもう一隻の超大型戦艦が狙われた。
栗田艦隊旗艦――戦艦『大和』。

「敵機直上！　急降下！」
「二時方向より敵爆撃機急降下体勢！」
「左四〇度！　雷撃機五機接近！」
「右四五度方向！　魚雷二本接近！」
今までは『大和』『武蔵』の二隻が狙われていたが、『武蔵』を

狙わない今は残った一隻の『大和』に敵機のほとんど集中した。
後方に『長門』が走っていたが、敵機にとっては『大和』の方が沈めがいのある戦艦らしく、『長門』を狙う敵機はほとんどいない。
森下は依然タバコを口にくわえ、防弾装備無装備状態で操艦の指示を出していた。
「面舵四〇度！　魚雷を避けたらすぐに取舵いっぱい！」
森下紙一重で魚雷を回避し、すぐさま敵爆撃機の投下した爆弾を回避する。
『大和』のまわりには何本もの水柱が上がったが、それは全て無意味に炸裂する爆弾でしかなかった。
「敵機急降下！」
「面舵いっぱぁぁいッ！」
森下が獅子奮迅の活躍をしている頃、艦橋も各戦闘所からの悲鳴が報告されていた。
「第四機銃群！　敵戦闘機の機銃掃射で全滅！」
ついに一機銃群が全滅との報告が入った。これには艦橋の者も苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。
窓の外を見ると、敵機が無数に飛び交い、爆弾が海に炸裂し、魚雷が海を翔け、機銃が嵐のように飛び交っている。
翔輝は水上の事を心配していた。
通常兵である水上は、今は機銃への弾の補充する為に甲板を走り回っているはず。このすさまじい戦闘の中、彼は大丈夫だろうか。
首を横に振る。
水上ならきっと大丈夫。彼は、きっと生きて今も戦っている。そう信じた。
ふと振り返ると先程から顔色真っ青な大和がいた。身体には包帯が巻かれているが、これは先程までの空襲の被害だ。現在はまだ『大和』は被弾も被雷もしていないはず。なのに、大和の顔色は悪い。
心配した翔輝はそっと彼女に近づくと声を掛ける。
「大和、顔色悪いけど大丈夫か？」

「へ、平気です。ちょっと気分が悪いだけ」
「気分が悪いって・・・どこか艦内でガス漏れかなんかが起きてるって事？」
艦魂の体調異常は本体である艦の状態と直結している場合があるのだ。気分が悪いとかそういうものかもしれない。だが、
「い、いえ、『大和』は何もありません。ただ・・・私の方が」
「大和の方？　どういう事？」
大和はげっそりとした顔で翔輝を見詰める。いつもは黒く澄んだ瞳も、今は濁っている。
「先程武蔵の様子を確認した後、艦橋に戻ろうとしたんですが、『武蔵』が隊列を離れたせいで艦魂の瞬間移動距離の限界を超えてしまったんです。そのせいで甲板に出てしまったんですが・・・そこには、たくさんの人の死体がありました」
大和の言葉に翔輝は何も言わない。
こんな小さな女の子が血まみれの死体の海を見ればどうにかなってしまうのは当たり前だ。
今の甲板は地獄である。
人の死体がゴロゴロと転がり、手や足が吹き飛んで散らばっている。真っ赤な人の血が壁や甲板にぶちまけられ、そこはまさに地獄だ。
大和は辛そうに瞳を揺らせると、口に出すのも苦しいといった具合にゆっくりと口を開いた。
「だから・・・今も一機銃群が全滅したって事は・・・たくさんの人が死んだって事ですよね？　私の上で――なんか、それを考えたら胸が苦しくて」
大和は胸を押さえて辛そうに顔をゆがめる。その表情は本当に辛そうで、見てるこっちまで苦しくなりそうなほどひどかった。
「大和・・・」
「私・・・今までずっと戦争をしている実感があまりありませんでした。ずっと平穏な海だけを見詰めて来て、あ号作戦で敵機という

ものと仲間の死を目の前で知り、そして今度は乗組員の・・・」
「それは仕方ない事だよ。今まで『大和』には実戦の場がなかったんだもの」
「でも――にやぁッ！」
大和の悲鳴と同時に艦が大きく傾いた。森下の敵機回避の急速回頭のせいでさすがの巨艦も大きく傾いて曲がっているのだ。その傾斜に艦橋の者は必死に踏ん張って耐えるが、大和と会話していた翔輝はバランスを崩して転んでしまった。
「大尉！」
心配して駆け寄る大和に翔輝は「大丈夫大丈夫」と笑いながら立ち上がった。それを見て大和は本当に嬉しそうに笑顔になった――だが、その笑顔は突如真っ赤に染まった。
「ぐがあッ！」
一際大きな爆発が起き、爆音と振動が響いた瞬間大和の肩が裂けて大量の血が噴き出て、大和の小さな身体は真っ赤に染まった。
「大和ッ！」
『二番高角砲被弾！　総員戦死！』
艦橋に入った報告など、大和を抱える翔輝には聞こえなかった。自分の腕の中で激痛に苦しむ彼女を見詰め、ただ抱き締めてやるしかできなかった。
「い、痛いぃ・・・ッ！　痛いよぉ・・・ッ！」
「大和！　しっかりしろ！」
それしか言えない自分が本当に情けなかった。彼女がこんなに苦しんでいるのに、自分はそれを見ているしかできない。
何もできない自分の目の前で、大切な人が苦しむ。
――あの時と同じ・・・――
「うぐっ・・・こんな時に・・・」
翔輝は苦しそうに頭を押さえながら顔をゆがめる。
今の大和の状況が翔香の死の時と重なり、翔輝の心の大きな古傷が痛み出した。それに耐える翔輝の顔は外傷を受けている大和より

もひどかった。
「た・・・大尉？　ど・・・どうし・・・たんですか？」
大和が痛みに耐えながら苦しむ翔輝を心配する。自分よりも翔輝を優先するのは彼女らしい行動だ。だが、それは翔輝には残酷な行為だった。
「だ・・・大丈夫。大丈夫だから」
必死に言うその言葉は自分自身へ言い聞かせているように聞こえる。
しばらくすると、翔輝は元に戻った。それを見て安心した大和に激痛が走り悲鳴を上げる。
「大和。痛むか？」
そんな質問愚問でしかなかったが、それ以外何も掛けてやる言葉がなかったのだ。
翔輝の質問に対し、大和は力なく首を縦に振る。それはそうだ。これだけのケガをして、痛くない訳がないのだ。
「でも・・・もう大丈夫です。これくらいなら・・・我慢・・・できます」
「大和・・・僕の部屋に戻れ。少し横にならないと――」
「そんな事・・・できません・・・今は・・・作戦中です・・・それに・・・武蔵が・・・苦しんでいるのに・・・私一人楽をする・・・事はできません」
必死に立ち上がろうとする大和を翔輝は手助けして起こしてやる。
――ずいぶん立派になったものだ。会った頃は年相応の女の子だったのに、今では立派な帝国海軍軍人になった。でも、それは彼女をずっと見守って来た翔輝にとって少し寂しいものだった。それに対し、自分は苦しむ彼女に何もできない。
――何も、変わっていない――
「本当に・・・何やってんだろ僕・・・」
「大尉・・・？」
悲しそうにため息する翔輝を大和が心配そうに見詰める。そんな

彼女の頭を、翔輝はそっと撫でてやる。
「・・・大和・・・強くなったな」
「そ、そんな事・・・ありませんよ」
「ううん。強くなったよ。本当に強くなった――もう僕が傍にいる必要がないくらいな」
「え？　大尉・・・それって――」
『敵増援部隊接近！　その数七〇機！』
大和の声を掻き消して入った報告は、最悪な状況を物語っていた。
「そ、そんな・・・ッ！」
翔輝は大和を床に座らせて急いで窓の外を確認する。そこには青空一面に広がる敵大編隊が迫って来ているのが見えた。
「これはまずいぞ」
横にいた宇垣も唇を噛んで苦しそうに敵機を見詰める。そんな宇垣を不機嫌そうに栗田は見詰めていた。
翔輝は慌てて大和の下に戻る。大和も敵大編隊を見て震えていた。
「わ、私・・・今度こそ本当に・・・殺される・・・ッ！」
「大丈夫！　大丈夫だから！」
翔輝は震える大和を抱き締めてやる事しかできなかった。腕の中で震える彼女に、自分は何もできない。何も・・・何もできない・・・ッ！
敵機は轟音を立てながら迫って来る。そして、ついに敵機は『大和』上空に到達した。
「大尉・・・ッ！」
大和は翔輝に強く抱き付いた。
全員が覚悟した――だが、敵機のほとんどは『大和』上空を素通りした。
「ど、どういう事！？」
翔輝は後ろに消える敵機を見詰めて呆然とする。艦橋の者も同じような状態になっている。だが、大和は敵機の行動に感づいて真っ青になる。

「大尉・・・ッ！　敵機は・・・『武蔵』を狙ってるんです・・・ッ！」
「何だって!?」
その刹那、後方から後を追うのも必死な『武蔵』に敵機が雨のように降り注いだ。反撃の対空砲火も、最初の頃に比べるとはるかに弱々しくなっていた。
「大尉・・・ッ！　もう武蔵に・・・あれだけの敵機を・・・避ける力は残ってないです・・・ッ！」
大和の言うとおり。もはや『武蔵』にはほとんど戦闘能力は残っていない。そんな『武蔵』に今日最多の敵機を回避する事などできるはずがなかった。
「くそッ！　これ以上武蔵を傷つけるな!」
翔輝が悲鳴を上げるが、無数の敵機は轟音を立てながら、満身創痍の『武蔵』に向かって襲い掛かった。

迫る敵機を睨み付けている武蔵は――立っていた。これだけの傷を受けているのに立ち上がれるというのは並大抵の精神力を持っていないと激痛に耐えられずにできはしない。
武蔵は歯を食いしばり、壁に寄り掛かりながら敵機を睨み付けていた。
「・・・まだ・・・来るって言うの？　もう・・・私・・・ッ！」
敵機は武蔵の想いに反して攻撃を開始した。
敵急降下爆撃機八機が轟音を立てながら垂直に『武蔵』に降り注いで来た。
武蔵は迫る敵機を睨み付けていたが、敵機から爆弾が分離すると、武蔵は表情を変えて苦笑いした。
――それは、彼女が全てを諦めた瞬間でもあった・・・
「・・・ここまでね」
武蔵が諦めた刹那、甲板に三つの爆弾が命中して大爆発した。
甲板の上の構造物が粉々に吹き飛び、そこにいた兵達も一瞬にし

てその命を絶命させた。
武蔵も今まで以上の絶叫を響かせてその場に倒れた。一瞬にして三発の爆弾が命中した『武蔵』の艦魂である武蔵はおびただしい量の血でその身を赤く染めた。
「・・・ぐあッ！　あぐぁッ！　しょ、翔輝――――があああああぁぁぁぁぁッ！」
武蔵が悲鳴を上げた刹那、左舷で数本の水柱が上がった。それは魚雷が命中したものだった。今の被雷で『武蔵』の強力な装甲に穴が開き、すさまじい量の海水が艦内に入り、艦内の兵を呑み込みながら奥に浸水し、その重みで艦は左に傾斜して艦の速度はさらに低下した。そんな『武蔵』に止めを刺そうと敵機は総攻撃を敢行した。
爆撃機は空から一斉に急降下し、雷撃機は海面すれすれを滑空して雷撃針路に入った。
武蔵はすさまじい急降下音を響かせて駆け降りて来る敵爆撃機を見詰めていたが、敵機が爆弾を切り離すのを見ると、諦めたように次の瞬間を覚悟した。
次の瞬間――武蔵は真っ赤に染まった。

一瞬にして艦橋が吹き飛んだ。
爆弾の一発が艦橋に直撃したのだ。
防空指揮所は粉砕。武蔵達のいた第一艦橋を貫通し、爆弾は下の作戦室で爆発。艦橋上部が爆炎を上げて吹き飛んだ。
一瞬にして露天化した艦橋ではほとんどの者が絶命し、猪口は生き残ったが重傷を負っていた。そして武蔵は・・・
瓦礫だらけになった艦橋に真っ赤な血の海ができていた。その中心に、ぐったりと倒れている小さな少女――武蔵がいた。
軍艦の頭とも言える艦橋が破壊され、武蔵の頭からはおびただしい量の血が溢れ出していた。鼻や頬を血が流れ落ちる。
武蔵は床に五体をだらんと投げ出して動こうとしない――いや、動けないのだ。体中に激痛が力を奪い、指一本動かす事も、悲鳴を

上げる事もできないのだ。その間も爆弾や魚雷が艦長が負傷して操艦能力を失った『武蔵』に次々に当たる。

甲板は無数の爆弾の命中で構造物のほとんどが破壊され、同時に多くの兵も死に絶えて防空能力を失っていた。そこにはかつて世界最強と謳われた超大型戦艦の勇姿の面影は残っておらず、『武蔵』は海に浮かぶ煙を吐く廃墟と化していた。甲板は瓦礫と人の死体で埋もれ、まさに地獄だった。

速力が低く、さらには操艦能力を失い前進しかできなくなった『武蔵』は敵機の格好の餌食だった。

敵機は傷ついた『武蔵』を容赦なく攻撃する。

『武蔵』の甲板には爆発の嵐が吹き荒れ、魚雷は堅固な装甲を爆破して破口を生み出し、大量の海水を艦内に押し込んだ。

巨艦『武蔵』は巨大な黒煙を上げ、大量の浸水で艦は傾斜していた。特に艦首部分は大量の浸水で先端部分はすでに水に浸かる寸前だった。

もはや、『武蔵』に力は残されていなかった。

速力は浸水や機関部の損傷で六ノットまで下がっていたが――ついに、巨艦『武蔵』はその機関を全て停止し、航行不能となった。

敵機はもはや『武蔵』は沈没確実と判断し、東の空に消えた。

残されたのはボロボロになった日本艦隊と、死する寸前の超弩級戦艦『武蔵』だけが残されていた・・・

第十二章　第八節　史上最大の海戦　仲間を守りし戦姫武蔵の死闘（後書き）

明日はついに、戦艦『武蔵』が沈み、武蔵が死にます。
今まで幾多の恋敵（ライバル）達を蹴落として翔輝の為に尽くしてきた武蔵も、
次で最期です。
次回、武蔵の死を見届けてあげてください。

第十二章　第九節　さよなら武蔵　いつかきっとまた会えるその日まで（前書き）

仲間を守る為、自らの巨艦を盾にして必死に戦った戦艦『武蔵』。
その戦いはあまりにも壮絶で悲惨なものであった。
そして、全ての役目を終えた『武蔵』は、静かに、最期の時を迎えようとしていた。
そんな『武蔵』の艦魂である武蔵もまた、その命の灯火が消えつつあった。
日本海軍の象徴として生まれ、多くの艦魂達を指揮し続けた歴戦の司令長官である武蔵も、もはやレイテに向かう力はなく、仲間達と最期の別れを迎えようとしていた。
恋姫武蔵の最期を、どうか見届けてあげてください。

第十二章　第九節　さよなら武蔵　いつかきっとまた会えるその日まで

空襲で乱れた隊列を直す栗田艦隊は停止して燃える『武蔵』を悲しげに見詰めていた。

すでに艦首部分は水に浸かり、『武蔵』はゆっくりとその巨体を海に沈めていた。

瓦礫だらけの第一艦橋にはもう誰もいなかった。使い物にならない第一艦橋に変わりに、第二艦橋に司令部を移したからだ。

だが、瓦礫だらけの艦橋には多くの艦魂と一人の人間がいた。

「武蔵ッ！」

大和達に連れられて『武蔵』にやって来た翔輝は床でぐったりとしている武蔵を抱え上げ抱き締めた。その体には力はなく、どす黒く変色した血は黒い軍服をさらに黒々とさせていた。

長門達はぐったりと血だらけで倒れている武蔵を見詰め、苦しげに唇を噛んだ。大和は、あまりの惨状に呆然としていた。

「武蔵！　武蔵ッ！」

翔輝は抱き締めた武蔵の名前を必死に叫ぶ。

白く美しく整った、まだ幼さを残した彼女の顔は、今は自らの血で真っ赤に染まり、その悲惨さを表していた。翔輝はポケットからハンカチを取り出すと、必死にその血を拭い取る。

「・・・しょ・・・き・・・？」

翔輝の声に武蔵はわずかに反応した。その顔は真っ青で血の気がなく、彼女の白い肌のほとんどの部分が今も流れ出る真っ赤な血で染めていた。わずかに搾り出すように出た声も、弱弱しく、微かに震えていた。

「武蔵！　しっかりしろ！」

翔輝は必死に武蔵に声を掛け続ける。そんな彼に、武蔵はもう意識を保っているだけでも精一杯なのを必死に耐え、彼の瞳をじっと見詰める。

「・・・ご・・・めん・・・約束・・・まも・・・れない・・・よ」
その小さな言葉に、翔輝は辛そうに唇を噛み、武蔵を見詰める。
「うそつき！　約束しただろ！　一緒に日本に帰るって！　日本に帰って、僕の軍帽を返すって約束しただろ！」
泣き叫ぶ翔輝に、武蔵も瞳から涙を零し、泣きながら謝る。
約束を守れなかった。
彼と約束したのに、守れなかった。
「・・・ごめ・・・ん・・・約束を・・・守れ・・・なくて」
武蔵は残った力を振り絞って翔輝に抱き付く。その力は弱かったが、翔輝が抱き返したので二人の身体は柔らかく密着した。
「武蔵・・・」
大和や長門、金剛や榛名など多くの艦魂達が武蔵の最期を見詰めていた。自らもケガを負った艦魂達も集まり、苦しげに顔をゆがめたり、悲しげに涙を流していた。
「武蔵！　死んじゃダメ！　死んじゃダメだよ！」
呆然から脱した大和も泣き叫びながら武蔵に抱き付く。必死に妹の力を失った身体を抱き締め、離さないという思いで彼女を抱き締める。
姉に抱き締められ、武蔵の顔にもわずかな笑顔が浮かぶ。
「・・・ねぇ・・・さん・・・今まで・・・ありが・・・とぅ」
「何言ってるのよ！　縁起でもない事言わないでよ！」
武蔵の言葉に、大和は怒鳴る。だが、その声は震え、あまりにも弱々しい。そんな大和に、武蔵の顔も悲痛にゆがむ。
「・・・今まで・・・生意気な・・・事言って・・・ごめん・・・なさい」
「やめて！　もうそれ以上言わないで！」
大和は耳を塞いで泣き叫ぶ。もう聞きたくない。それ以上聞きたくない。
武蔵は必死に大和に手を伸ばし、その頬を撫でる。
「・・・ありがとう・・・姉さんが・・・いたから・・・がんばれ・

・・たんだよ？」
「武蔵・・・ッ！」
「・・・私・・・姉さんの・・・妹で・・・本当に・・・良かった・・・」
「・・・私も、あなたのお姉さんになれて・・・良かったよ」
「・・・ありが・・・とう――ゲホゴホッ！」
『武蔵！？』
武蔵は突如咳き込むと大量の血を吐いた。大和達の顔に戦慄が走った。咳き込む武蔵の背中を翔輝は慌てて支える。
「・・・あ、ありが・・・とう・・・ゲホゴホッ！」
「しっかりしろ！」
武蔵は咳を続けるが、しばらくして咳が収まった時には、武蔵はぐったりと力をほとんど失っていた。翔輝はそんな武蔵の口元をハンカチでそっと拭い取る。
「武蔵・・・」
「・・・もう・・・平気・・・ありが・・・とう」
武蔵はそう言うと、再び翔輝の腕の中に納まる。武蔵の小さな身体は、今はもうさらに小さく見える。だが、その身体は小刻みに震えている。
「寒い、のか？」
「・・・うん・・・浸水してる・・・からだと・・・思う」
こうしている間にも、『武蔵』の巨艦はゆっくりと沈んでいる。再び浮上する事はもう――ない。
「武蔵、平気？」
大和は泣きながら武蔵の頬を撫でる。そんな姉に武蔵は小さくうなずくと、武蔵は翔輝を見詰める。翔輝も武蔵の死に掛けた姿に苦しげに顔をゆがめている。
「・・・翔輝・・・ありがとう・・・」
武蔵はそう言うと、今まで彼女がした事のないほど優しげな笑みを向けた。

「・・・翔輝が・・・傍にいてくれたから・・・私は戦えた・・・翔輝のおかげで・・・今の私がいるの・・・だから・・・ありがとう・・・」

「武蔵・・・」

「・・・翔輝――大好きだよぉ」

武蔵は涙を流しながら自らの想いを伝える。

今までも幾度となく伝えて来たこの想い。もう伝えられない。

そんなのは嫌だが、もう運命はそれを許さない。

ならば、今、できる限り伝えよう。

もう伝えられない分、今、伝えよう・・・

「・・・大好き・・・心の底から愛している・・・あなたと会えて・・・本当に・・・良かった」

沈みゆく艦は、彼女の命が助からないのを物語っていた。それを見て、ここにいる者は確信した。

――武蔵はもう・・・助からない――

「武蔵・・・お前・・・」

何かを口にしようとした翔輝の唇に指を当て、武蔵は彼を見詰める。その瞳は黒く澄み、弱りながらも光り輝いていた。

「・・・それ以上・・・何も・・・言わなくていい・・・」

武蔵はそう言うと、腰に挿してある軍刀を翔輝に渡す。

「・・・これを受け取って・・・私を・・・忘れないように・・・」

「忘れる訳・・・ないだろぉ・・・」

翔輝の言葉に、武蔵は小さく笑みを浮かべた。

「・・・そうだね・・・でも・・・持ってて・・・ほしいの――私の形見として・・・私が・・・生きた・・・証として・・・」

武蔵の言葉に、翔輝は小さくうなずくと、静かにそれを受け取った。それを見て、武蔵は嬉しそうに微笑む。

「・・・ありがとう・・・これで・・・もう心残りは・・・ない・・・」

「武蔵・・・」

武蔵は翔輝の腕の中で小さく微笑んだ。
この腕の中は、とても落ち着く。
いつも、この腕が、自分を支えてくれた。
そして今も、自分を支えてくれる。
本当に、優しい温もりを感じる。
武蔵はわずかに顔を上げ、自分を見詰める皆を見詰める。
「・・・長門・・・金剛・・・榛名・・・みんなも・・・ありがとう・・・」
「な、何言ってるのよ。仲間なんだもの、礼なんていらないわよ」
「そうだ。貴様は良くやった。本当に、良くやった」
「テメェが礼を言うなんて・・・似合ってねぇよ・・・」
三人は武蔵の言葉にそれぞれ言葉を返す。それだけで、武蔵は満足そうにうなずいた。再び翔輝と大和を見詰め、小さく微笑んだ。
「・・・翔輝・・・姉さん・・・ありが・・・とう・・・」
「礼なんていらないよ。だって僕ら、仲間じゃないか」
「そうだよ。それに私は、あなたのお姉さんなんだから」
二人の言葉に、武蔵は小さく微笑んだ。
三人は静かに抱き合った。もう会えなくなる。そんな想いに、三人はお互いの温もりを感じながら涙した。そんな三人を見て、長門は苦しそうにつぶやく。
「これが戦争なのね・・・」
「あぁ、これが戦争だ」
「仲間の死は、何度見ても辛いなぁ」
長門、金剛、榛名の三人の瞳は濡れ、涙を必死に耐えている。彼女達も、妹や姉をこの戦争で失っている。そして、仲間も多く失っている。でも、その悲しみはいつも辛い。変わる事はないのだ。
武蔵はしばし翔輝と大和と抱き合っていたが、そっと離れた。うつむいていた顔を上げると、その顔は――悲しげな笑みだった。
「・・・お別れの時間」
武蔵の言葉に全員が苦しそうに顔をゆがめた。

――栗田艦隊は相次ぐ敵機の空襲を避ける為に、一時空襲圏外へ退避する為に反転する事になった――傷ついた『武蔵』を捨てて・・・

「嫌だッ！　お前を一人じゃ絶対に逝かせない！　僕はここに残る！」

泣きながら必死に武蔵に叫ぶ翔輝に、武蔵は小さく首を横に振る。

「・・・それはダメ・・・翔輝は生きるの・・・生きてほしいの・・・」

「そんなの・・・もう翔香の時で十分だよ！」

翔輝は大切な妹、翔香を失った後も必死に生きた。

まわりに支えられながらも、それでも必死に生きた。

辛い苦境を乗り越え、そして今に至る。

それと同じ苦しみをもう一度味わうなんて、もう嫌だった。

首を横に振る翔輝の頬を、武蔵はそっと撫でる。見ると、武蔵は真剣な瞳を向けていた。黒く澄んだ瞳が、しっかりと離さない。

「・・・生きて・・・これが私からの・・・最期のお願い・・・」

武蔵の言った《最期》という単語に、翔輝はその場ぐったりと崩れた。そんな翔輝に、武蔵は残った力を振り絞って起き上がると、そっと翔輝を抱き締めた。そして、悲しむ彼に優しく声掛ける。その瞳はとても優しく、柔らかなものだった。

「・・・私は・・・私の愛した人に・・・生きててほしい・・・それだけが・・・私の願いなの・・・」

「武蔵・・・ッ！」

翔輝は武蔵を抱き締めた。

細い、ちょっと力を入れたら折れてしまうそうなほど細い彼女の身体を、離さまいと必死に抱き締める。そんな彼を、武蔵もそっと抱き締める。

「・・・翔輝は・・・生きて・・・お願いだから・・・生きて・・・」

「武蔵・・・ッ！」

声を殺して泣く翔輝を、武蔵は優しく抱き締める。
本当は、彼にこんな風に泣いてほしくはない。
彼には、ずっと笑っててほしい。
最後まで、笑っていてほしいのに、彼は泣いている。
「・・・翔輝・・・笑って・・・」
武蔵の言葉に、翔輝は首を横に振る。
「そんなの・・・無理だよ・・・」
「・・・無理かもしれない・・・でも・・・翔輝には・・・笑ってて・・・ほしい・・・」
武蔵の言葉に、翔輝は何も答えずに泣き続ける。そんな彼を見詰め、武蔵は悲しそうに瞳を揺らす。
その時、泣き続ける翔輝の肩を、長門がそっと叩く。振り返ると、長門は首を振っていた。もう無理という意味だった。
艦隊は反転を開始していた。もう、ここに残る事はできないのだ・・・
「・・・さぁ・・・行って・・・生きる為に・・・」
武蔵の言葉に、翔輝は力なくその場にうな垂れる。そんな彼を、武蔵は悲しそうに見詰める。見つめる瞳は悲しみに染まる。
「・・・翔輝」
「・・・わかった」
翔輝は静かにそう言うと、ゆっくりと立ち上がった。ショックのあまりフラつく身体を長門に支えられて立ち上がった翔輝は、もう泣いてはおらず、いつものような優しい笑みを浮かべていた。その笑みが無理しているのは、誰もがわかっていた。でも、その笑みはとても優しげなものだった。
翔輝は床にぐったりと横になる武蔵を見詰め、一瞬顔をゆがめたが、すぐに優しげな笑みを浮かべる。
「武蔵・・・またいつか・・・会えるよな・・・？」
翔輝のその問いに、武蔵は小さく微笑むと、うなずいた。
「・・・会える・・・今度・・・私が・・・人間に・・・生まれ・・・

・変わったら・・・必ず翔輝に・・・会いに行くから・・・」
「約束だぞ。今度こそ守れよ」
「・・・約束」
翔輝はしゃがむと、手を伸ばした。その拳からは小指が立てられている。武蔵はその意図を察し、自らも手を伸ばして互いの小指を絡めあった。見詰める二人の瞳は互いの顔を映し合いった。
「・・・最後に・・・お願いがある・・・」
「何？　何でもするよ」
翔輝は自分にできる範囲なら何でもしようと思った。そんな翔輝に、武蔵はわずかに微笑むと、頬をほんのりと赤らめた。
「・・・キス・・・してほしい・・・」
「え・・・あ、いやぁ・・・」
武蔵の言葉に、翔輝は顔を赤らめて気まずそうに視線を逸らす。
「・・・ダメ？」
武蔵は不安そうに翔輝を見詰める。その瞳は別の意味でうるうると震えていた。
翔輝はしばし迷っていたが――決意した。
「わ、わかった」
「・・・ほんと？」
「うん」
「ちょっと！　いくら何でもそれはダメです！」
大和が顔を真っ赤にして慌てて止めに入ろうとしたが、長門に口を塞がれてそのまま押さえ込まれた。
そんな後ろの気配をわずかに感じつつ、翔輝は「いくよ」と言葉を繋げた。
「・・・はい」
武蔵は静かに目を閉じ、身体を翔輝に任せる。
翔輝も目をつむり、そっと唇を向ける。そして・・・

チュ・・・

キスが終わった後、瞳を開いた武蔵は心底不満そうな顔をしていた。

「・・・ちゃんと・・・唇にして・・・」

武蔵はキスされたおでこを押さえながら怒る。だが、その頬が赤いのは怒りの為ではない。おでこでも十分威力はあった。

「い、いやぁ・・・さすがにそれは・・・」

目を逸らす翔輝に、武蔵は力なくため息した。だが、それはすぐに笑みに変わる。

あまりにも彼らしい。

こんな彼だからこそ、自分は好きになったのだ。

「・・・わかった・・・我慢する・・・」

「ご、ごめんね」

「・・・いいの・・・でもその代わり・・・次に会った時は・・・今度こそ・・・」

「わかった。その時は、ちゃんとしてあげるから」

「・・・約束」

「あぁ、約束だ。

「・・・必ず守って」

「わかってるって。お前こそ、約束を守らないと・・・許さないからな」

「・・・大丈夫――必ず守るから」

武蔵の言葉にうなずき、翔輝は長門と共に去った。去る寸前まで、二人は互いを見詰め合っていた。互いの最後の姿を瞳に焼き付けた。

「ほら、行くぞ」

榛名に抱えられ、大和は力なくうなずいた。そんな彼女に、武蔵は声を絞り出す。

「・・・姉さん・・・翔輝や・・・私や・・・姉さんや・・・みんなの生まれ育った・・・大切な・・・大切な・・・日本・・・お願い・・・必ず・・・アメリカから・・・守っ・・・て・・・」

その言葉に、大和は小さくうなずいた。
「・・・わかった。必ず、守るから」
「・・・お願い」
大和は顔を上げると武蔵と見合い、力いっぱいの笑みを浮かべた。
それは、妹に向けた最後の笑みだった。
「さよならは言わないよ！　また会うんだから！」
その言葉に武蔵は小さくうなずいた。
「・・・また・・・いつか・・・」
大和もその言葉にうなずくと、榛名と共に消えた。
他の艦魂も消え、残った金剛は最後に武蔵と握手した。
「貴様の事は絶対に忘れん。貴様も、私の妹達と共に、安らかに眠れ」
「・・・ありがとう」
金剛はその言葉に一瞬苦しそうに顔をゆがめたが、すぐに反転し、そのまま何も言わずに去った。
残された武蔵は反転運動に移る艦隊を見詰めた。その瞳からは一筋の涙が流れた。
「・・・さよなら・・・みんな」

栗田艦隊は一時空襲圏外に退避する為に反転した。
反転する各艦から艦魂達が『武蔵』に向かって敬礼していた。
翔輝と大和も小さくなって行く『武蔵』を見詰め、涙を流しながら敬礼を続けた。
それは兵達も同じく皆敬礼して『武蔵』を見送った。森下と宇垣も・・・
午後三時三〇分――栗田艦隊反転。
そのまま来た道を戻っていたが、敵機が来る気配がなくなると栗田は再反転を命じた。
午後七時四五分――栗田艦隊再反転。再びレイテを目指した。

月が明るく照らす戦艦『武蔵』。
栗田艦隊の反転から四時間近くが経ち、艦首は第一主砲まで水没していた。
露天化して艦橋の上で星々が煌く空を見詰めながら、武蔵は自らの命の最期を感じていた。
「・・・もう・・・時間ね」
武蔵は目をつむる。
もう何百回もした今までの思い出に再び浸る。
思い出すのは、みんなの笑顔。でも、もっとも多いのは――大好きな翔輝の笑顔だ。
戦中に生まれた自分に、みんなは、翔輝は優しく接してくれた。
翔輝と出会い、姉と出会い、皆と出会い。自分の人生はとても楽しいものだったと振り返る。
皆からは仏頂面とか言われたが、翔輝だけは私を見詰めててくれた。
優しげな笑み、優しげな声、優しい心。全てが自分を包み込み、幸せにしてくれた。
そんな彼を好きになり、自分は恋に生きた。
彼の事が好きで好きで仕方なく。彼に迷惑を掛けながらも、彼を愛し、ずっと一緒にいた。ずっと一緒にいて、一緒に笑い、一緒に幸せを感じた。
彼を、心の底から愛していた。
幸せだった。
後悔は、何もない。
彼は生きている。それだけで自分は満足だった。
武蔵はそう思うと、笑みを浮かべた。その笑みはとても優しく、幸せなものだった。
「・・・翔輝・・・あなたと出会えて・・・本当に良かった」
明るい月が、自らを淡い光で照らす。
そして、武蔵の身体が淡い光に包まれ、消え始めた。

もう、『武蔵』は沈む。武蔵の命も、尽きようとしていた。
「・・・あなたといつも一緒にいて・・・私は幸せだった・・・」
自らの身体が消えていく感触に多少の恐怖はあるが、今はそれも気にならない。今の自分を満たすのは、彼との幸せの思い出の数々。これらがあれば、自分は大丈夫。
「・・・翔輝・・・これからも・・・私の分も・・・生きて・・・」
武蔵は消えていく自らの手を天に向け、月にかざす。透けていく手から見える月は、とてもきれいだった。
そして、武蔵は最後の言葉を繋いだ。
「・・・翔輝・・・ありがとう――そして」
武蔵は、ゆっくりと目をつむった。
「――愛してる。誰よりも、世界で一番・・・あなたの事を・・・」
瞳から、一筋の涙が流れた・・・
「・・・愛してるから・・・」
刹那、超巨大戦艦『武蔵』はその巨艦を持ち上げ、艦尾は天高く上がった。そして――そのまま海中に引きずられるようにして轟音を立てながら海中に沈み、海中でその巨体を破壊するほどの大爆発を起こし、シブヤンの海に消えた。その時の爆発で舞い上がった黒煙は、月のきれいな夜の空を真っ黒に塗り潰した。

――戦艦『武蔵』、大和型戦艦二番艦、世界最大最強の戦艦として生まれた空前絶後の巨大戦艦の一隻は、ミッドウェー海戦の敗北で落ち込んだ士気を盛り返し、日本海軍の象徴としてその王座に君臨した。『大和』から連合艦隊旗艦を受け継ぎ、激動の時代を生き抜いた。だが、本来の戦う場所を得られず、常に待機を続けるという悔しさを感じ続けた。そして、いよいよ戦うべき戦場に向かったが、その真の力を発揮する事ができずに爆沈した。それも、魚雷二〇本あまり、爆弾二〇発以上という軍艦史上最多の空前絶後の損害と言われる損害を受けて沈み、今もなおその正確な沈没地点は不明である。そんな『武蔵』の艦魂は、連合艦隊艦魂の歴史上一、二を

争うような優秀な指揮官であった。だが、まだまだ子供部分が多く、人を怒らせる事もまた優秀であった。そんな彼女は一人の少年士官を好きになった。その淡い恋心は、彼を愛し、ずっと彼の傍にいたいという想いに繋がった。彼の事が好きで、彼を失いたくなくて、少女はいつも彼の傍にいた。姉や多くの仲間を敵に回しても、彼を愛し続けた。そして、そんな少女は、彼にその最後の想いを告げ、また会う事を約束し、静かに永遠の眠りについた・・・――

栗田艦隊が戻って来た頃には、もう『武蔵』は沈んでいた。

艦隊将兵の全員が沈んだ『武蔵』へ永遠の眠りを祈った。

翔輝と大和も互いを抱き合いながら、もう会えぬ亡き親友を、妹の安らかな眠りを祈った。

栗田中将は残った艦艇を率いて、再びレイテを目指して進撃を開始した。

戦艦『武蔵』沈没の報はすぐさま他の艦隊にも知らされた。

小沢は闇の向こうの海底に没した『武蔵』に静かに敬礼し、瑞鶴達も涙を堪えて南南西の方向に敬礼した。

小沢艦隊は敵機動部隊を発見。護衛戦闘機を残して全艦載機を出撃させて基地航空隊と合同でこれを攻撃した。目立った戦果はなかったが、出撃した艦載機は全機フィリピンの基地航空隊に向かった。さらに栗田艦隊が第四時攻撃隊の攻撃を受けている頃、松田率いる戦艦『伊勢』『日向』を基幹とした前衛部隊が急遽編成されて米機動部隊に砲撃を敢行する為に艦隊から離脱。一路敵機動部隊を目指していた。

一方の米機動部隊も栗田艦隊の反転を撤退と判断した直後に小沢艦隊を発見。ハルゼーは全主力空母を集結させて小沢艦隊のいる北方海域に移動を開始していた。

こうして、小沢艦隊の任務は成功しつつあった。

第十二章　第九節　さよなら武蔵　いつかきっとまた会えるその日まで（後書き）

今日は戦後６３年目の終戦記念日です。
あの戦いで死んだ日本人は約３００万人。
人々の記憶から消えつつある太平洋戦争が終わって、もう６３年の月日が流れたのです。
しかし、生き残った人々には、忘れられない日であり、記憶です。
武蔵の死もまた、そんな戦争の悲劇の一つでした。
今までこの作品を支え続けてきたメインキャラの一人である武蔵も、ついにその戦乱の時代に振り回された末に、命を落としました。
彼女が生きた証は、今も皆さんの胸の中にある事を信じたいです。
戦艦『武蔵』は今もシブヤン海に沈んでいますが、いまだにその正確な沈没地点は判明していません。
次はさらに悲劇が続きます。
一時反転した栗田艦隊。その影響で突入日時が狂ってしまい、扶桑や山城、最上が属する西村艦隊は単独でレイテに突入する事になった。
しかし、彼女達が通ろうとするスリガオ海峡にはすでに敵の陰が・・・
壮絶かつ悲惨な日米両艦隊による艦隊決戦が、スリガオ海峡で勃発する。
扶桑、山城、最上の最期の戦い――スリガオ海峡海戦が、ついに幕を開けます。

第十二章　第十節　スリガオ海峡の死闘　戦姫山城の最期の戦い（前書き）

武蔵が死に、右往左往する栗田艦隊に対し、扶桑や山城が率いる西村艦隊は予定位置に着いていた。しかし、栗田艦隊の遅れにより、西村艦隊は独断でスリガオ海峡に突入。待ち受けていた敵戦艦部隊と壮絶な艦隊決戦が繰り広げられた。

山城の最期の戦いにして、欠陥戦艦の汚名挽回の壮絶な艦隊決戦。

戦艦にとって最も勇ましく、最も美しい最期であった。

レイテ四大海戦の一つ――スリガオ海峡海戦が、始まります。

第十二章　第十節　スリガオ海峡の死闘　戦姫山城の最期の戦い

一方西村艦隊にも『武蔵』沈没の報は届いていた。だが、同時に栗田艦隊が反転した事で同時にレイテ突入するはずだった作戦は完全に狂ってしまった。

栗田艦隊を待つ為に危険海域で待つか、それとも・・・

「俺達の艦隊だけで殴り込むか」

作戦室で会議していた西村が言い放った言葉は無謀なものだった。その言葉に会議室には戦慄が走った。

「無茶です！　我々の艦隊だけでレイテに突っ込むなど、不可能です！」

すかさず参謀が悲鳴に近い声を上げた。

敵の主力部隊が展開している場所に十隻にも満たないこんな小規模な艦隊が単独で突っ込んでも壊滅するのは目に見えている。大艦隊である栗田艦隊と合同で突入するからこそ、成功の可能性が発生するのだ。だが、

「それじゃ、栗田の艦隊が予定位置に来るまで敵機や敵潜水艦に撃沈されるかもしれないこの危険海域で待ち続けるとでも言うのか？」

西村の言葉に参謀は黙ってしまう。

今作戦の主目的は栗田艦隊、志摩艦隊と合同でレイテに突撃するというものである。だが、その主力である栗田艦隊は反転で予定よりも到着が遅れ、志摩艦隊も後方にいるのですぐには合流できない。つまり、西村は二個艦隊抜きで突っ込もうと言っているのだ。しかも今西村艦隊がいるのは敵地。いつ何に襲われるかわからない危険な海にいるのだ。行くも地獄。引くも地獄。留まるも地獄という八方塞がりという状況だったのだ。

「他に何か案のある奴はいるか？」

西村の質問に挙手する者は誰一人いなかった。いや、他の案などない。皆、自分達が命を預ける西村を信じていた。

「長官。やりましょう！　我々だけでもレイテに！」
「レイテに行きましょう！」
「どこまでもお供します」
参謀達は皆西村の意見に従った。それを見て西村はうなずき、命令した。
「これより我が艦隊はスリガオ海峡を突破して単独でレイテに突撃する！」
『了解ッ！』
散っていく参謀達の背中を見詰め、西村はそっと口を開く。
「これでいいと思うか？」
「やっぱりあなたはいつも無茶をする」
西村の背後で山城は壁にもたれ掛かりながら苦笑した。その表情はとても穏やかなものだった。彼女も、彼を信じているのだ。
「無茶で結構。これが、俺達の任務だからな」
「そう――私はあなたに従う。必ずレイテに行こう」
「そうだな。その時は、思う存分に暴れてやろう」
「えぇ、砲弾を全て敵に撃ち込んでやりましょう」
山城はそう言うと静かに消えた。
西村は山城が消えると、皆のいる艦橋に向かった。そこですぐさま艦隊の指揮を再開した。
消えた山城は自艦の防空指揮所にいた。
星空の下、山城はその表情をわずかに柔らかくした。
「長谷川・・・私は一足先にいくぞ」
その時に言った《いく》は、《行く》だったのか、それとも《逝く》だったのか、それは彼女にしかわからない。
西村艦隊は全艦スリガオ海峡に向けて白波を立てて進撃を開始した。
西村艦隊はついにスリガオ海峡手前まで到達。針路を北に向けて一斉に海峡に向かった。途中敵魚雷艇数隻が襲って来たが、艦隊は

これを一蹴した。
海峡を通る寸前、艦隊は陣形を単縦陣に切り替えた。狭い海峡を突破するには一本の槍のような陣形でなくてはならないのだ。
駆逐艦四隻が前方を走り、その後ろから『山城』と『扶桑』が続き、『最上』は最後尾に殿として位置した。
闇夜の中海峡を突貫しようと海峡に迫る。月と星の光だけの薄暗く、ずっと前は真っ暗で何も見えない闇夜を見詰め、山城は身体を震わせていた。
寒いからではない。怖いのだ。
この海峡を突破すれば、敵の懐に殴り込みができる。本当は栗田艦隊、志摩艦隊との合同作戦だったが、各艦隊の遅れからそれはできず、今は自分達西村艦隊だけで突撃している。
この海峡を突破すれば、レイテはもうすぐだ。
だが、どうしてこんなにも恐怖を感じるのか。
「どうしたの山城？」
隣でコーヒーを飲んでいた扶桑が心配そうに声を掛けて来た。姉の優しげな声に、山城は小さく首を横に振る。
「大丈夫。なんでもない」
「そ、そう？　ならいいけど。寒いならコーヒーでも飲む？」
山城は首を横に振った。今はコーヒーはいい。
「そう。もうすぐ海峡ね。これを抜ければ、レイテはもうすぐよ。そしたら、私達で散々暴れ回ってやりましょう。欠陥戦艦なんていう汚名を挽回するのよ」
「汚名は挽回じゃなくて返上。返上するのは名誉。正しい日本語を使って」
「うぅ・・・ごめん・・・」
しょんぼりと落ち込む姉を見詰め、山城は小さく微笑んだ。
いつもは頭がハチャメチャな姉も、いざ戦場となれば一人の軍人となる。その姿は勇ましく、その背中をいつも見て来た。だが、結局はいつもの姉に戻ってしまった。

でも、やっぱり自分はこっちの姉の方がいい。
「ま、まさかこんな所まで来て妹にダメ出しされるなんて思わなかったわ・・・」
「私もよ」
「うぅ・・・姉としての威厳が・・・」
「元々ない」
「うえええぇぇぇん！　山城のいじわるぅッ！」
「抱き付くな。うざい」
ギューッと抱き付いてくる姉を無理やり引き剥がそうとする。だが、扶桑が意外にも力強く、自分を放さない。しかも、唇を尖らせて近づけてくる。
「山城ちゃんの唇を奪って――」
ドゴォンッ！
「いったあああぁぁぁいッ！」
頭を押さえて床の上で悶絶しながら転げ回る扶桑を見詰め、山城は小さくため息した。そんな姉の近くには先程彼女の頭を襲った空の一升瓶が転がっていた。さっきまで気合を入れる為に飲んでいた酒だが、もちろん一升瓶一本程度では山城は倒れない。連合艦隊艦魂一の酒豪の肝臓は史上最強である。
「ちょっと山城！　ビンはダメぇッ！　ほんとに痛いし当たり所が悪ければ死んじゃうもん！」
扶桑は泣きそうな目で訴えるように自分を見詰めるが、もちろん山城は無視した。
無視された扶桑は不満そうに痛む頭を押さえながら立ち上がった。
「もう、伊勢ちゃんは私を心の底から癒してくれるのにぃ・・・」
「だったらこれが終わったら伊勢に癒してもらって」
「あらぁ？　もしかしてやきもち焼いてる？」
「・・・」
「いったあああああぁぁぁぁぁいッ！」
一升瓶が再び炸裂して悶絶する姉を見詰め、山城は呆れながらも

わずかに微笑んだ。
いつもと同じ姉を見詰め、不安も和らいだ。
「――ありがとう」
「え？　何か言った？」
涙目の扶桑は不思議そうに山城を見詰めたが、山城は再び窓の外を見詰めていた。そんな妹を見詰め、扶桑は微笑んだ。その笑みはいつもの能天気な笑みではなく、笑顔の中にも凛々しさのある、姉が妹を見詰める優しげな笑みだった。
二人の姉妹は窓から真っ黒の闇夜を見詰める。
そして、艦隊はついに海峡に侵入した。その時、突如爆音が響いて前方を走る駆逐艦二隻が爆発炎上し、一瞬にして航行不能となった。
『敵襲！　前方に敵駆逐艦多数！』
その報告に西村は急いで前方を見詰めた。すると、燃える二隻の駆逐艦の炎に薄っすらと照らされて、闇夜に紛れて見つかりにくいように砲撃でなく雷撃を行っている敵の駆逐艦群が見えた。
「水上戦闘！　主砲撃ち方用意！」
戦艦『山城』艦長、篠田勝清（しのだかつきよ）少将が砲撃命令を出すと、『山城』の三五・六ｃｍ砲二基四門が鈍い轟音を立てて旋回し、四本の砲身が上がって敵駆逐艦を捉えた。そして、
「砲撃始めぇッ！　撃てぇッ！」
『山城』の三五・六ｃｍ砲が闇夜を切り裂く赤き閃光と共に爆炎が貫き、噴き出された黒煙が闇をより黒く染める。撃ち出された砲弾が闇夜を貫き、敵駆逐艦隊のまわりに炸裂して四本の水柱が立ち上った。初弾は少し奥に行ってしまったらしい。
「じゃあ山城！　お互いがんばりましょう！」
扶桑は満面の笑みを浮かべると、一転し、真剣な顔で敬礼して消えた。山城も静かに敬礼すると、再び窓から敵艦隊を見詰める。
『次弾装填完了！』
「良しッ！　仰角を四〇度に修正！　撃てぇッ！」

『山城』の主砲が再び火を噴き、砲弾が撃ち出される。数秒後に敵駆逐艦隊に砲弾が襲い掛かり、爆発と共に二隻の駆逐艦が炎上した。

山城はそれを見て嬉しそうにうなずき、次弾装填を見守った。

『山城』の砲撃に続いて後ろを走る『扶桑』も砲撃を開始した。唸りを上げる主砲を一瞥し、扶桑は真剣な瞳で自分達の砲撃に包まれる敵駆逐艦隊を見詰めていた。

砲撃を終えた主砲が左右の砲身を交互に上げ下げする。その間に新たな砲弾を装填し、砲撃準備を終える。

『扶桑』艦長、阪匡身（ばんまさみ）大佐は次弾装填を終えると再び「撃てぇッ！」と叫ぶ。刹那、再び『扶桑』の主砲が唸り、火炎と黒煙と共に砲弾が撃ち出され、次の瞬間には敵駆逐艦隊に炸裂。一隻が爆発炎上した。

燃える敵駆逐艦を見詰め、扶桑はニヤリを笑みを浮かべる。

「こんな老兵でも、まだまだ戦えるって事を見せてやらないとね」

不敵に笑う扶桑はいつもおちゃらけている彼女とは大きく違っていた。いつもは能天気なお姉さんキャラでも、彼女だって立派な帝国海軍軍人なのだ。

そして主砲次弾が装填され、敵艦を再び睨む。

「これでも食らって――え？」

その瞬間、扶桑の視界は光に包まれた。

ドゴオオオオォォォォォンッ！

「な、何ッ！？」

山城は彼女の長い艦生でも経験のない大爆音と振動を感じた。その音と振動の発信源を見て、彼女は絶句した。

さっきまで自分の後ろで砲撃を行っていた戦艦『扶桑』が、巨大な爆炎を天を貫くように上げ、その艦体を真っ二つに折って沈むの

が見えた――
『『扶桑』轟沈！』
その報告に誰も驚愕し、絶句した。
『扶桑』は艦首と艦尾を天高く持ち上げて、それぞれを抱き合うようにしてそのまま海中に引きずり込まれた。
「な、姉さん・・・ッ！」
山城の口から初めて扶桑を姉と呼ぶ声が漏れたが、それは永遠に伝えるべき姉――扶桑には届く事はなかった。
炎上しながら海底に消えていく『扶桑』を見詰め、小刻みに肩を震わせる。心の底から、紅蓮の炎が燃え上がった。それは怒り。堪え切れない、業火のような憤激が身体を貫く。
「く、くそ・・・ッ！　クソオオオオォォォォォッ！」
山城は心の底から噴出した怒りに激昂して咆哮した。同時に『山城』の主砲が今まで以上の連続砲撃を行う。それはまるで、彼女の怒りの表しているかのようだった。
目の前で姉を失い怒り狂う山城の横で、西村は怒りながらも冷静な指揮を続けた。水雷戦のプロである西村の的確な指示で艦隊はなんとか敵駆逐艦隊を撃破した。その際『山城』は敵の魚雷一発を被雷したが入射角が浅かった為にたいした被害はなく、山城も擦り傷程度で済んだ。だが、この戦いで参加艦艇のほとんどが沈没した。
戦艦『扶桑』沈没。駆逐艦は四隻中三隻が沈没。残ったのは戦艦『山城』、重巡洋艦『最上』、駆逐艦『時雨（しぐれ）』の三隻だけだった。
西村は半分以下になった艦隊を率いてさらに海峡の突貫を続けた。
進み続ける西村艦隊旗艦・戦艦『山城』の艦橋では山城が無言で闇夜を見詰めていた。その表情はいつもと同じ無表情だったが、いつもは黒く澄んだ瞳も今は濁り、悲しげに揺れていた。
「山城。大丈夫か？」
西村が心配そうに山城に声掛けると、山城はそっと振り向く。
「顔色悪いぞ。さっき受けた魚雷のせいか？　それとも扶桑の――」

「大丈夫。もう心の整理は付いた」
「だが・・・」
「いつもうるさかったあいつがいないと、こんなにも静かになるのだな」
山城は苦しそうにつぶやいた。
口から出たのは皮肉だが、その言葉の奥には言い知れぬ悲しみがあった。
扶桑とは、自分が生まれてからずっと、二七年間もずっと一緒にいた。
能天気な姉を、呆れながらもどこかでは尊敬していた。やる時はやる。扶桑はそんな姉であり軍人であった。
二度の内乱の際、自分は日本の平和を願って長門共に反乱を起こした。姉は中立的立場にいたが、その際に一度だけ剣を交えた事があった。それは金剛との最後の決戦の時、死闘を繰り広げていたところへ扶桑が入り込み、疲れ切っていたとはいえ、金剛や榛名、長門や自分他十数人を一斉に相手にして勝った。そのおかげで、自分達は最後は平和的敗北を喫した。もし、あの時扶桑が命懸けで仲裁に入り、その後敗北した長門達を土下座までして必死にかばってくれなかったら、今頃自分達は金剛とこんなにも良好な関係はなかった。いや、日本海軍の艦魂が分裂していたかもしれない。
あの時、自分は姉への見方が変わった。
それまでもいざとなれば自分以上に立ち回る姉を尊敬はしていた。だが、これ以降、自分は姉を尊敬するだけでなく、目標となった。
誰もを幸せにして、そして自分の命を懸けてでも平和を願う姉を、心の底から誇りに思っていた。
口には出せない恥ずかしい想い。だけどそれは、いつも自分の傍にあり、自分を支え続けてくれた。
そんな姉の、壮絶な最期を目の前で見た。
見張り兵の報告では、『扶桑』は敵駆逐艦の放った魚雷四本を受けて一瞬にして爆発炎上。艦体を真っ二つに折って轟沈した。まさ

に一瞬であった。
元々防御力が低く、速度も遅く、そして何より旧式化していたからか、あっさりと魚雷が内部まで喰い込み爆発。火薬庫や弾薬庫を吹き飛ばし、一瞬にして艦が折れたのだ。
きっと、姉は即死だっただろう。
今までの思い出を走馬灯のように巡る事もなく、最後の言葉を誰かに繋ぐ事もなく、最後の夜空を見る事もなく、一瞬にして戦死した。
壮絶な、戦死だった。
あの姉にはあまりにも不似合いな死に方で、あの歴戦の戦士には相応しい死に方で、扶桑は――戦艦『扶桑』はその約三〇年の歴史に終止符を打ち、海底深くに没した。
姉は、任務には失敗したが、自分の責務を果たしたのだ。
今度は自分が、姉の分も任務を成功させ、己が責務も果たす時。
悲しんでなど、いられなかった。
うるむ瞳を袖で拭い、窓の外を双眼鏡で見詰める西村を見る。
「西村。必ず、レイテに行こう」
「あぁ、任せておけ。俺が必ずレイテまで連れてってやる」
西村の言葉を信じ、山城は深い闇夜を見詰めた。
この海の向こうに自分達の目的地、レイテ湾がある。そこには敵の上陸部隊と輸送船団が展開している。無論、護衛の部隊も無数にいるはずだ。わずか七隻の艦隊も今は三隻にまで減っていた。成功する可能性など、限りなくゼロに近い。だが、ゼロではない。例え〇・一パーセントでも可能性が残っているなら、やる価値はある。
何より、この作戦には日本の命運が懸かっている。失敗は許されないのだ。
山城はこんな死闘の中にはあまりにも不似合いな美しい空を見上げた。天に輝く星空を見詰め、彼女は思う。
――もう一度、日本の天の川を見てみたい――
生きて帰る事などできない作戦だが、そう思った。

そして、目をつむれば思い出すのは姉の能天気な笑みと仲間達の温かい笑み、そして、翔輝の優しげな笑みだ。
彼の笑みが、今の自分に勇気を与えてくれる。
年下の少年だが、その心は誰よりも強く、誰よりも弱い。
守ってあげたい、そう思ってしまう。
今彼はきっと武蔵を失った悲しみに打ちひしがれている事だろう。
そんな彼の震える肩を、抱き締め、「大丈夫」を言ってあげたい。
この気持ちは、まだよくわからない。
でもきっと、嫌じゃない、幸せな気持ちなのだろう。
「・・・長谷川、レイテで会おう」
山城は栗田艦隊が通過する予定のサンベルナルジノ海峡に向かって、踵を揃え、手を真っ直ぐと伸ばした見事な敬礼をした。そんな彼女を見詰め、西村も静かに敬礼していた。

敵駆逐艦隊との交戦から一時間後、ついに西村艦隊は海峡の中頃に到達した。後は残りの海峡を突破すれば、レイテ湾は目と鼻の先である。
四隻の味方艦を失いながらも、いよいよここまで来た。
西村は『山城』の艦橋の窓から真っ暗闇を見詰める。その闇は濃く、どこまでもどこまでも黒く、光さえ届かない。
だが、この先に、自分達の目的地がある。
西村は振り返ると、自分を見詰める艦橋の者、山城を見詰め、命令した。
「これより海峡を突破する！　全艦両舷前進全速！」
西村の命令で艦隊は海峡に速力を増して一気に海峡を突破しようとした。その時、闇夜を見詰めていた山城が何かに気づいた。
それは、自分目掛けて突っ込んで来る魚雷であった。
「左四〇度雷跡二！」
「何ッ！？　艦長！　取舵いっぱぁぁぁいッ！」
「了解！　取舵いっぱぁぁぁいッ！」

山城の言葉にすぐさま西村は回避命令を出した。『山城』は左に大きく曲がって魚雷を回避しようとしたが、気づくのが遅く、一本は艦首の十メートルほど先を通り過ぎて行ったが、猛一本が轟音と共に『山城』の左舷中央部に命中した。

「あぐぅッ！」

「山城！」

西村は左脇腹が裂けて血を噴き出した山城に駆け寄る。だが、山城はそれを制した。痛みを堪えながら西村を見詰める瞳には、強い想いが込められていた。

自分に構わず、任務を遂行してほしいという想いが・・・

「わかった――水上戦闘用意！」

「了解！　水上戦闘用意！　主砲砲撃用意！」

西村はすぐに敵艦隊を捕捉しようと双眼鏡で前方を見詰めた。その時、見えた。前方に横二列になって海峡を封鎖している敵大艦隊の姿を――

『敵大艦隊！　我が方の五倍以上の数で海峡を封鎖！』

西村艦隊は日本海海戦の際東郷平八郎元帥がバルチック艦隊に勝利した際に使われたT字戦法を敵に取られる形のまま、突撃を続けた。

海峡防衛線の最深部に一列に並ぶアメリカ戦艦部隊。旗艦『ミシシッピ』の他5隻全てがパールハーバーから舞い戻って来た戦艦であった。

そんな部隊の中央部に浮かぶ戦艦『ペンシルベニア』の艦橋にはこの艦の艦魂であるペンシルベニアが立っていた。腰まで伸びる金髪が美しい。

ペンシルベニアは迫る日本艦隊を睨む。その蒼き瞳の奥には怒りの炎が燃えていた。

思い出すのは平和な休日、今は亡き妹、戦艦『アリゾナ』の艦魂と共にキャッチボールをしていた。天真爛漫、そんな言葉が相応し

い姉想いの優しくかわいい妹、アリゾナ。
アリゾナの投げたボールが外れ、笑いながらそのボールを拾い、投げ返そうとした時だった――
突如轟音を立てて憎き日の丸を付けた敵機が襲い掛かって来た。
慌ててアリゾナは自艦に戻って行った。
「姉さん！　気をつけてねッ！」
真剣な瞳をしながらも、優しく微笑みながらアリゾナは消えた。
――それが、彼女を見た最後の姿だった。
戦艦『アリゾナ』は被雷1、被弾8を受け、大爆発を起こして艦体を真っ二つに折って轟沈した。
私は、沈んでいく妹の名前を泣きながら叫んだ。その時、自分にも爆弾が命中した。
痛みを堪え、真っ赤に染まりながらも怒り狂って空を飛び回る日本機に反撃した。
そして、全てが終わった時、そこは黒い煙と真っ赤な炎に包まれたアメリカ太平洋艦隊の根拠地であるパールハーバーの悲惨な景色があり――妹の姿はどこにもなかった。
それから時は流れ、自分は修理及び大改装を受けて近代戦艦として生まれ変わり、日本に復讐するときを待っていた。
そして、ついにやって来た。妹を殺した日本機動部隊はミッドウェー沖でエンタープライズ達が仇を討ってくれた。まだ一隻残っているらしいが、それは空母達に譲ろう。今は目の前の敵を葬るまで！
しかも相手は日本の戦艦。相手にとって不足はない。
『ペンシルベニア』の3連装14インチ砲4基、計12門が敵艦隊を捉える。闇夜でも敵艦の動きがわかるレーダー。これがアメリカの底力であった。
ペンシルベニアは憎き敵を睨み、あの日妹と最後のキャッチボールをしたボールをギュッと握った。
瞳からは涙が溢れ、悔しげに唇を噛む。そして・・・
「妹の仇ッ！　ファイアッ！」

『ペンシルバニア』他5隻の主砲が一斉に咆哮した。

「くそッ！　俺達は敵のT字戦法にはまってるって事か！」

海峡を封鎖するように横に並んだ陣形を取る敵艦隊を睨み、西村は悔しそうに唇を噛む。その瞬間、前方の海一面で砲撃の閃光がほとばしった。次の瞬間には艦隊は無数の水柱に包まれた。そのうちの一発が『山城』に命中した。

爆音を響かせて『山城』の甲板に火の柱が立ち上った。

「うぐぅッ！」

山城の肩が砕けたが、彼女は倒れる事なくその場に踏ん張った。そんな彼女を見詰める西村に、山城は瞳を向けた。その瞳は《構わず戦え》という想いが込められていた。

西村はうなずくと、篠田を見る。篠田はうなずき、伝声管に向かって叫んだ。

「砲撃始めッ！　撃てぇッ！」

『山城』は敵艦の砲撃の閃光を頼りに三五・六ｃｍ砲を唸らせた。撃ち出された砲弾は天を舞い、空を切り裂き、敵艦隊に襲い掛かった。

戦艦『山城』の最後の戦いが始まった。

一方、後方を走る『最上』も被弾。装備していた電探が使用不能となった。

慌しく動き回る艦橋の中、最上は頭から血を流しながらもしっかりと立っていた。白いリボンは血で真っ赤に染まっていたが、その輝きはまだ失われてはいない。

「まだまだッ！　私達日本海軍は夜戦のプロよ！　電探がなくてもこの目で戦える！」

最上はそう声を上げると腰から軍刀を引き抜いて構えた。自分達を襲う敵艦隊を睨むその瞳の中の闘志は真っ赤に燃え上がっていた。

電探を失った今、日本艦隊の夜戦の戦い方は伝統の戦い方となる。

かつて水雷戦、夜戦に関しては世界最強と言われた日本海軍の底力を、今こそ見せる時！

「山城さん！　時雨！　頼むわよッ！」

『最上』は自分が狙われる覚悟で照明弾を放った。

撃ち出された照明弾は空中で炸裂。そして、闇夜に映し出された敵艦隊は見張り兵の報告以上のものだった。

西村艦隊を待ち構えていた米第７７任務部隊は戦艦六隻、重巡洋艦四隻、軽巡洋艦四隻、駆逐艦二九隻という計四三隻の大艦隊だった。五倍どころか十倍以上の戦力差だった。

「なんて数を用意してやがるんだ」

闇夜に映し出された敵大艦隊を見詰め、西村の顔は真っ青だ。まさかここまで敵艦隊がいるとは思っていなかったのだ。

巨大過ぎる敵大艦隊に戦意を失いつつある西村の肩が誰かに叩かれた。振り返ると、そこには自分をじっと見詰める山城の姿があった。

「何を恐れる必要がある。この作戦は元々生きて帰るのを前提にしていない。逃げる事はできない。なら、全滅覚悟で突撃あるのみだ」

「いくら何でも無茶だ！　向こうは戦艦だけでも三隻以上いる！　見えないだけでもっといるかもしれん！　駆逐艦など無数だ！　勝てる訳が――」

「この戦いに勝利はない。あるのは敗北だけだ」

「ならやるだけ無駄――」

「それはこの戦争自体もそうだ。あるのは負けしかない。だが、日本は闘って死ぬか、座して死ぬかという選択を戦って死ぬを選んだ。それはこの戦いも同じだ」

山城の瞳に、西村は彼女の覚悟を見た。

彼女は本気だ。

瞳の奥に燃える炎は、まだ消えることを知らず燃え上がっている。

彼女は諦めていない。

希望を繋ごうとしている。

「山城・・・」
「この戦いに勝利はない。あるのは、どれだけ敵艦を道連れにできるかという悪あがきだけよ」
不敵な笑みを浮かべる山城を見て、西村の覚悟も決まった。
瞳の中に決意の炎が灯った西村を見詰め、山城は力強く言い放った。
「西村。死に花を咲かせてやろう」
「あぁ、それも満開のなッ！」
西村は残る二隻の艦に突撃命令を出し、全艦圧倒的な敵に向かって白波を立てながら全速力で突撃した。
西村が送った最後の電文が、その壮絶な戦いを物語っていた。

――我魚雷攻撃ヲ受ク。各艦ハ我ヲ省ミズ前進シ敵ヲ攻撃スベシ――

西村艦隊は十倍以上の敵艦隊に突撃した。だが、所詮はたった三隻の艦隊とも言えない部隊。結果は目に見えていた。
戦艦『山城』は砲撃を続行したが、敵の砲弾や魚雷が大量に命中して機関が停止した。主砲もことごとく破壊されて全基使用不能。
残ったわずかな副砲が諦めずに敵艦隊を砲撃し続けた。
暗闇を照らす『山城』は火薬庫や弾薬庫に引火して爆発を続けた。
その間も砲弾や魚雷が次々に命中して『山城』は爆炎に包まれる。
燃える艦体は溶鉱炉から取り出したばかりの鉄のように真っ赤に焼けていた。
艦橋にも砲弾が命中して司令部は全滅。西村も篠田艦長も戦死していた。
大破した艦橋で倒れている山城の命はもはや風前の灯だった。
瓦礫に力なくもたれ掛かっている血まみれの山城は燃える艦体を見て小さく笑った。
「欠陥戦艦・・・にしては・・・壮絶な・・・最期ね」

扶桑型戦艦は欠陥戦艦と呼ばれていつも戦線には行かなかった。
そんな彼女にとって、これほど戦艦らしい死を迎えられるのはとても嬉しい事だった。
いまだに敵艦隊は『山城』を狙っている。『時雨』はいまだに被害なしだが、『最上』ももはや戦闘能力はほとんど残されていなかった。
山城は星一面の夜空を見詰めた。
星々はきれいに輝き、明るい光を放っていた。
もうすぐ自分も姉の下に逝く。不安はなかった。
目をつむれば、翔輝の笑顔が思い浮かんだ。
胸に温かいものが流れる・・・
この気持ち、この感情・・・あぁ・・・
「これが・・・恋という・・・ものか・・・」
山城は自分の胸の中に渦巻くその想いを理解し、安堵した。だが同時に、悲しさが一気に溢れた。
もう少し早く、この想いに気がついていれば、こんな後悔はしなくて済んだのに・・・
この心を包み込む柔らかな想い、それは大切な大切な恋であった。
この想いに、もっと早く気づきたかった。
思い出すのは彼の笑顔・・・いつの間にか、彼の笑顔に支えられている自分がいた。
この海の向こうに、彼はいる。生きている。そう思うと、不思議と安堵する。
そして、艦体が真っ赤に燃えながら悲鳴のような摩擦音と破壊音が響いた。
――最期の時が、やってきたのだ・・・
光り輝く星空を見上げ、山城は最後の力を振り絞って、優しげな笑みを浮かべた。
「長谷川よ・・・お前は・・・生き残れ・・・必ず・・・」
山城はそれを最後に目を静かに閉じた。その瞬間、『山城』は大

爆発を起こした。
　爆発の影響で艦橋は崩れ落ちた。そして、艦体は真っ二つに折れて大量の海水と水蒸気を巻き上げて白の世界の中海に没し、海の底で大爆発した。

――戦艦『扶桑』『山城』、金剛型戦艦の後に竣工した日本戦艦造船技術の粋を結集させた期待の新鋭戦艦は、完成後に様々な不都合が発生し、改修工事が幾度となく行われた。欠陥戦艦という不名誉なレッテルを貼られ、一時は練習艦まで降格された老兵は、わずかな仲間と共に敵の大艦隊に突撃。すさまじい砲雷撃戦の末、己が責務を真っ当し、疲れ切ったボロボロの艦体を海の底深くに沈めた。そんな二隻の艦魂は、いつも日本を守り続けた。姉の扶桑は能天気な笑顔を浮かべてみんなに好かれた。しかしやる時はやり、その時の彼女は日本艦魂の中でもトップクラスの実力を持っていた。そんな妹の山城はそんな姉とは違いあまり感情を表には出さない子だった。姉の執拗なスキンシップを掻い潜り、お酒を浴びるように飲みながらも全く乱れない最強の酒豪でもあった。そして何より参謀としてとても優秀で、常に皆の作戦の前には彼女の姿があった。扶桑はみんなに幸せになってほしいと願い、山城は少し気になる少年士官ができた。胸を渦巻くこの感情に戸惑い続けていた。だが、その想いに気がついたのは死ぬ間際。彼女は後悔した。もう少し早く気づいていれば良かった、と。山城は後悔の想いを抱きながらも、彼の笑顔を思い出し、安らかに息を引き取った。そしてまた、能天気な笑みを浮かべる姉の下へ、走り出した・・・――

　その後、残った二隻は旗艦を失った事で撤退を決意。満身創痍の『最上』と無傷の『時雨』はなんとか海峡を離脱した。
　こうして、西村艦隊は壊滅した。
　西村艦隊壊滅の二時間後、志摩艦隊が到着したが魚雷艇隊の攻撃を受け軽巡『阿武隈（あぶくま）』が被雷。志摩艦隊は戦闘序列で突入を開始し

た。

その頃、敵艦隊とのすさまじい砲雷撃戦を繰り広げて満身創痍な『最上』は機関の損傷で低速だったがなんとか戦闘海域を脱出した。燃える『最上』の艦橋は戦闘で破壊され、艦長、副長、航海長といった艦を指揮する幹部が一人残らず戦死した『最上』は臨時の指揮官を立てて進んでいた。

瓦礫と化した『最上』の艦橋に、最上はぐったりと倒れていた。真っ赤な血の海に倒れる最上は息を荒くして苦しそうに吐血を繰り返しながら血で真っ赤に染まった身体立たせようと必死に起こしたが、身体は二度と起きる事はなかった。

「・・・逃げ帰って来て・・・このざまか・・・」

最上は悔しそうに唇を噛んだ。仲間はほとんど死に、残った自分はこんな惨めな格好を晒している。それは、彼女のプライドをズタズタに引き裂くものだった。

「・・・もう・・・戦うのは嫌・・・静かに・・・暮らしたい・・・」

元々戦争は嫌いだ。争い事もなく、平和に暮らしたい。そう思っていた。

ふと思い出したのは翔輝の笑顔。

自分と同じ苦しみを味わいながらも強く生きている人。

「・・・長谷川大尉・・・もう一度・・・あなたの・・・笑顔を・・・見たかった・・・」

最上は泣きながらそうつぶやき意識を失った。

その後、『最上』は順調に戦線離脱をしていたが、闇の中から突如軍艦が現れた。指揮系統が壊滅している『最上』には避ける力はなく、両艦は衝突した。

この時衝突したのは、なんと味方である志摩艦隊旗艦・重巡洋艦『那智』だった。『那智』は炎上停止している『最上』を敵艦と誤認。さらにわずかだが動いていた『最上』を停止と誤認したせいで

衝突したのだ。
志摩中将は敵艦隊不明、旗艦故障で撤退を決定した。本当なら逃げられるような海域ではなかったが、この時米第７７任務部隊は砲撃を中止していた。レーダー射撃でレーダーに映る日本艦隊らしき艦影を砲撃しまくってたらありとあらゆる味方艦を攻撃し合ってしまい攻撃を中止せざるを得なかったのだ。
この事故のおかげで志摩艦隊はフィリピンを離脱。『最上』はその後駆逐艦一隻に護衛されて撤退したが、翌朝空襲に遭い、完全に航行不能。味方駆逐艦の雷撃処分を受けて沈んだ。

第十二章　第十節　スリガオ海峡の死闘　戦姫山城の最期の戦い（後書き）

ついに山城、扶桑、そして最上が戦死。
さらには志摩艦隊は反転。
もはや残るレイテ突入の希望は栗田艦隊だけであった。
そんな栗田艦隊に思いもよらぬ敵が現れた。
次回、サマール沖海戦をお届けします。ただし、これは短いので明日投稿予定です。
意見・感想などお待ちしてます。

第十二章　第十一節　夢にまで見た艦隊決戦　米空母を襲う神風（前書き）

今回は短いですが、サマール沖海戦を描きました。
栗田艦隊が敵主力空母部隊と誤認したのは護衛空母部隊だったが、それでも戦艦ＶＳ空母という太平洋戦争史上初めての戦いが始まります。
さらに、エンタープライズ達を襲う神風特攻隊。
短いながらも壮絶な戦いが繰り広げられます。

第十二章　第十一節　夢にまで見た艦隊決戦　米空母を襲う神風

一方、敵を引き付ける為の囮部隊である小沢艦隊に喜ばしい報告が入った。
防空指揮所で夜空を眺めていた瑞鶴の下に貝塚が走って来た。
「瑞鶴ッ！　栗田艦隊がサンベルナルジノ海峡を通過したって報告が入ったぞッ！」
「ほ、本当ですか!?」
瑞鶴は嬉しそうに喜んだ。
大和達が海峡を突破したという事は、敵機動部隊がまんまとこちらの罠に引っ掛かったという事だ。任務の第一段階が成功したのだ。
「長官は敵機動部隊を北方に吊り上げた判断して艦隊をさらに北方に進出させる事にしたぞ」
「そうですか。これで大和達は無事にレイテに行けます。武蔵は守れなかったけど、せめて残った大和達だけでもちゃんと無事にレイテに行かせてあげなくちゃ」
「・・・でも結局は、大和も死ぬんだろ?」
「そ、それは・・・」
答えられずにうつむく瑞鶴に貝塚は真剣な瞳で見詰める。
「それに、俺達だって敵を引き付けたんだ。生きて帰れる保証はない」
「わかってます。それでも、私は任務を全うします。死んでいった多くの仲間たちの為に――そして」
瑞鶴は腰に挿してある今は亡き日本海軍艦魂最強の武人であった姉、翔鶴の刀を握る。
「姉さんの為にも」
「そうだな。俺達は必ずこの作戦を成功させねばならんからな」
「はい――艦長。信じてますから」
「俺もお前を信じてる。必ず成功させよう」

「はいッ！」
瑞鶴と貝塚は手を握って艦橋に戻った。その表情はこれから死地へ赴く者同士とは思えないほど幸せで、とても嬉しそうな笑顔だった。

小沢はハルゼー機動部隊を北方に吊り上げたと確信し、全艦隊を率いてさらにレイテから遠く、北方海域に向かって進出した。

翌朝、栗田艦隊は何の妨害も受けずにサマール島沖を東に進み、レイテに向かって突撃していた。
昨日までの敵の攻撃で艦隊はボロボロであったが、その強力な戦力はまだまだ健在であった。これだけの艦艇が残っていれば、まだ希望はつながれる。
艦隊の中心を翔ける旗艦・戦艦『大和』の艦橋に翔輝はいつものようにいた。
「おいおい、お前大丈夫なのか？」
そう心配そうに声を掛けたのはなぜか『大和』にいる榛名。だが、翔輝は榛名に小さな笑みを向けるだけで何も答えない。
今現在大和は翔輝の部屋で寝込んでいる。本当は翔輝も寝込みたかったが、自分には仕事があるのでがんばって仕事をしていた。
二人とも武蔵の死で相当精神を疲弊させていた。
出撃してから二日間徹夜している上親友であった武蔵と山城、さらには扶桑の死という仲間の死で、翔輝は疲れ切っていた。
「なぁ長谷川。お前少し休んだ方がいいんじゃねぇか？」
「それはできないよ。仕事だし――どうせ眠れないしね」
「長谷川・・・」
すっかり元気を失った翔輝を榛名が悲しげな瞳で見詰める。
こんなにやつれた翔輝を見たのは初めてであった。いつもは輝いている瞳も、今は濁り、笑顔が似合うその顔も、今は悲しみに包まれている。

扶桑や山城の死も辛いが、翔輝にとって武蔵の死はあまりにも大き過ぎた。

武蔵は艦魂達の中でも最も翔輝に近い存在であった。いつも彼女は翔輝のまわりにいて、翔輝を笑わせ、困らせ、怒らせ、そして泣いたりもした。

あまりにも、あまりにも武蔵の存在は大き過ぎたのだ。

榛名はそんな翔輝を見ているのが辛かった。

彼には笑っていてほしい。無理なのはわかっているが、それが彼女の心からの願いであった。だから、榛名はなんとか翔輝を励まそうと絡む。

「ほら元気出せよ！　確かに武蔵も扶桑も山城も死んじまったけど、みんなお前にんな顔をしてほしいと思ってる訳ねぇだろ？」

「・・・うん。そうだね」

力なく言う翔輝に、榛名はもはや何も言えなくなった。

榛名は窓の外に輝く朝焼けを悲しげな瞳で見詰めた。その時、彼女の人間よりもはるかに性能のいい視力が水平線の向こうに何かを見つけた。

最初は何かわからず首を傾げていたが、徐々にはっきりと見えるようになり、榛名の顔色が変わった。

「――おい、あれって空母・・・じゃねぇか？」

「え？　空母だって？」

「何？　空母だと？」

榛名の言葉に反応した翔輝の不思議そうな声に、横にいた宇垣が鋭く反応した。

「長谷川君！　空母とはどういう事だ！？」

「え、あ、いや、は、榛名が・・・」

「榛名？　大和じゃないのか？」

「大和は妹の死を落ち込んで今はここにはいません。その代わりなぜか榛名が今ここにいるんです」

一瞬榛名に足を蹴られたが、なんとか耐えた。

「そうか――それより空母とは何だ？」
翔輝は榛名を見詰めた。榛名は先程までのようないつもの表情ではなく引き締まった凛々しい顔をしていた。
「右三〇度方向、距離三万五〇〇〇ｍに空母のマストみたいなもんが見えたんだよ！」
「右三〇度方向、距離三万五〇〇〇ｍに空母のマストみたいなものを見たって榛名が」
「それは本当か！？」
宇垣は急いで双眼鏡でその方向を見詰める。そんな宇垣を隣に陣を張る栗田以下第一遊撃部隊司令部の者達が見下すような視線で見詰める。
「宇垣君。君はあんな子供の言う妄言を信用するのか？」
「長谷川は艦魂が見えるんです。その彼が友人の艦魂が空母を見たというんです。信用性はあります」
「何をバカな事を。そんなバカバカしい事がある訳――」
「いたッ！　長谷川の言うとおり、右三〇度、距離三万五〇〇〇ｍに空母部隊がいたぞッ！」
宇垣の言葉に艦橋に戦慄が走った。慌てて全員が双眼鏡を構えて確認すると、確かに水平線の向こうに空母のマストらしきものが確認できた。
「う、うそだろ。本当にいただと・・・ッ！」
栗田も信じられないという顔をする。
元来戦艦が空母を砲撃できるという可能性は皆無に等しいからだ。まさか空母が戦艦の攻撃範囲内に入って来るなんて――夢にまで見た艦隊決戦の時が来たのだ。艦橋は沸いた。
「長谷川でかしたぞ！」
宇垣は翔輝にそう叫ぶとすぐに森下に命令する。
「あれはきっとハルゼー機動部隊だ！　すぐに砲撃をしろッ！」
「了解ッ！」
「ちょっと待て宇垣君」

敵空母砲撃という二度とないだろう幸運に恵まれて意気込む宇垣を栗田が止める。そんな栗田を宇垣が睨み付ける。
「長官！　なぜ止めるのですか！？」
「あれが敵空母だとどうしてわかる？」
「何をバカな事を。あれが敵空母でないなら何だと言うのだ！」
「この海域には小沢艦隊もいるだろう。あれが小沢艦隊でないという保証はない。もしあれが小沢艦隊なら同士討ちになる可能性がある」
「そ、それは・・・しかし・・・ッ！」
宇垣と栗田は所属不明の空母部隊を敵か味方かで大口論した。そんな二人に榛名は激怒する。
「早くしねぇと敵空母なら逃げちまうだろうが！　もういいッ！　俺は戻る！　攻撃命令があればすぐに突撃する！」
「うん、気をつけてね」
翔輝は榛名の裾を掴んだ。そんな彼の行為に榛名は「キモイ！」と叫びたくなったが、不安で掻き消えそうな弱々しい彼の瞳を見詰め、言葉を失う。
昨日までに多くの仲間を失ってきた。
彼はまた、自分が死んでしまうのではないかと心配していたのだ。
フッと、口元にわずかな笑みが浮かんだ。
「安心しろ。俺は姉貴の妹だぜ？　鬼畜米英ごときに死にはしねぇよ。安心しな」
「ほ、本当？」
「おうよ。約束してやらぁ。だから、お前もがんばれよ」
榛名は凛々しい笑みを浮かべ、『大和』を去った。その入れ違いに入って来たのは大和。どうやら艦内が騒がしくなって来たので慌ててやって来たのだろう。
「大尉？　これは一体何があったんですか？」
疲れ切った顔に頬には涙の跡が見て取れる。きっとずっと泣いていたのだろう。そんな大和の頭をそっと引き寄せる。大和はそれに

抵抗もなく従う。
「実は、敵の空母らしくものが『大和』の射程範囲内にいるんだが、それが敵機動部隊なのか小沢艦隊なのかで宇垣司令と栗田長官が揉めてて」
「ほ、本当ですか？」
大和は双眼鏡を発現させると、窓の外を見た。すると、確かに水平線の向こうに空母のマストらしきものがいくつも見える。そして、そのまわりの点々などはきっと護衛の駆逐艦だろう。
「本当です！　ですが、あれは本当に敵なんですか？」
「それで今司令部が揉めてるんだよ」
大和は言い争いを続ける二人を不安そうに見詰めていたが、艦橋に響き渡った見張り兵の声で状況が一転した。
『空母部隊！　我が方から離れて行きますッ！』
その報告は宇垣の意見を決定付けるものだった。宇垣は勝ち誇った笑みを浮かべ、栗田は苦虫を噛み潰したような表情をする。そして、
「敵主力空母部隊を攻撃せよ」
栗田の命令で森下は砲撃命令を出した。
続いて全戦艦に砲撃命令を出すと、まず旗艦『大和』が自慢の四六ｃｍ砲を放った。すさまじい爆発と衝撃波と共に、撃ち出された砲弾は敵空母目掛けて飛翔し、炸裂。巨大な水柱を上げた。
そしてこの瞬間、『大和』の主砲が初めて敵艦目掛けて発射された瞬間でもあった。
続いて『長門』が砲撃を開始。『金剛』と『榛名』はその速力を生かせて全速力で敵主力空母部隊に接近し、追撃しながら砲撃した。
敵主力空母部隊のまわりで無数の水柱が上がった。
逃げ惑う敵主力空母部隊に戦艦部隊は連続砲撃を行い、敵主力空母部隊に襲い掛かる。
だが、これは誤解だった。敵はハルゼー率いる主力機動部隊ではなく、上陸部隊支援の護衛空母部隊だった。

護衛空母六隻、駆逐艦七隻の艦隊は突如現れた栗田艦隊に動揺して撤退しようとしたが、栗田艦隊の猛攻撃で陣形が破壊された。

巨艦『大和』『長門』はその巨砲で連続砲撃を行い、『金剛』『榛名』は駆逐艦部隊を率いて敵空母部隊を追撃した。

そして、ついに『金剛』の放った一閃が敵空母を貫き、一瞬にして轟沈させた。これには艦橋の者全員が歓喜する。

「やったぁッ！　大和やったぞ！　敵空母を、戦艦で沈めたぞッ！」

翔輝は心から嬉しそうな顔をして喜ぶ。そんな彼の横にいる大和も、興奮に身体を小刻みに震わせていた。

「わ、私の主砲で・・・敵艦隊を砲撃してる・・・」

大和も嬉しそうな笑みを浮かべる。どんなに心優しい大和でもその根源は兵器である。戦う事に喜びを感じるのは当然と言えるだろう。

「武蔵の仇ッ！　これでも食らえッ！」

大和の咆哮と同時に『大和』の巨砲が唸る。次の瞬間、敵駆逐艦が一瞬にして吹き飛んだ。艦橋は再び歓喜に沸いた。

栗田艦隊は敵空母部隊を砲撃し続けた。だが、敵空母部隊も黙っていない。すさまじい砲撃の嵐の中で発艦可能な艦載機を舞い上げて栗田艦隊へ襲い掛かった。

栗田艦隊は敵機の猛攻の中でも砲撃を続けた。敵空母部隊は駆逐艦が煙幕を張って隠れた。日本戦艦は目視射撃が基本なのでこれで照準不能になったが、偵察機を出撃させてこれを《目》にして砲撃を続けた。

一進一退の攻防戦の末、速度の速い敵空母部隊が速度の遅い栗田艦隊を引き離して逃げ去った。追撃していた『金剛』『榛名』も敵機の猛攻撃に阻まれ、追撃を断念した。

海戦を終えた艦隊は一度集合した。

この戦いで敵空母部隊のうち護衛空母一隻、駆逐艦三隻を撃沈した。だがこちらも敵機の攻撃で重巡洋艦『鈴谷』『筑摩』沈没。『熊野』『羽黒』が航行不能となり戦線離脱という被害を受けた。

栗田艦隊は逃げた敵空母部隊を追う事はなく、本来の任務いであるレイテに向かって再び進撃を再開した。

一方、アメリカ高速空母艦隊はその多くの空母を率いて小沢艦隊撃滅の為に北方海域に急行していた。

そんな空母部隊の中心部を翔ける空母『エンタープライズ』の防空指揮所にいたエンタープライズは震えていた。

怖いからではない。嬉しいからだ。

この海の向こうに、憎き敵機動部隊がいる。そして、最も沈めたい空母『瑞鶴』も必ずいるはず。ついに、決着を着ける時が来たのだ。

「待っていろ『ズイカク』ッ！　今すぐ貴様の命を刈り取ってくれる！」

エンタープライズは開戦以来の宿願であった空母『瑞鶴』を始末できるの事を思って今まで以上にその瞳を爛々と輝かせていた。

白波を立てながら海を全速力で翔けるアメリカ高速空母艦隊。それはまるで騎兵の突撃のごとく勇猛果敢なものだった。

エンタープライズは海風に揺れる金髪を押さえる事もなく、敵空母を目指して突撃を続ける。と、その時、

「敵機来襲ッ！」

隣にいた見張り兵の声に空を見上げると、敵機が接近していた。それを見てエンタープライズは驚愕する。

「ど、どういう事だ!?　レーダーには何も・・・そういう事か」

エンタープライズはその理由を理解した。

レーダーは決して万能ではない。雷撃機の魚雷投下時のような海面すれすれの超低空飛行をすればレーダーにはかからない。敵艦隊を見つけて急上昇した所を見つかったって訳だ。

「小賢しいまねを！　だがそんな数の航空機で何ができる！」

空母部隊上空に現れた敵機は十機にも満たない小規模なものだった。その程度の日本機など、対空砲火だけで十分。鎧袖一触であっ

た。しかも、
「敵機は零戦（ジーク）です！　爆装をした零戦（ジーク）です！」
その報告にエンタープライズは見下したように高らかに笑う。
「もはや爆撃機も使えぬほど日本は落ちぶれたか。貴様らにはお似合いの格好だっ！　くははははははッ！」
エンタープライズが笑っている間に、敵機は轟音を立てて急降下して来た。だがエンタープライズではなく無数にいる空母の一隻に突撃した。
「クソジャップが全滅するのを見ていてやるか」
エンタープライズは勝利を確信していた。が、
「お、おい。いくら何でも接近しすぎじゃ――」
エンタープライズが爆撃高度を超えても急降下を続けるの零戦に疑問を感じた刹那――零戦は護衛空母の一隻に激突した。
「なあッ！？」
驚愕するエンタープライズ。
零戦の突っ込んだ護衛空母は大爆発を起こして一瞬で轟沈した。
エンタープライズは目の前で起きた現実が信じられなかった。
今の敵機は被弾してもう基地には帰れないと悟ったから突っ込んだという従来のものではない。明らかに、一直線に空母に向かって突っ込んで来た。
それはつまり、通常攻撃ではなく、最初から敵の空母に体当たりする為の部隊・・・
すさまじい嫌悪感と吐き気、そして怒りが込み上げて来た。
さらに他の零戦も次々に空母達に激突。空母部隊の至る所で爆発が起きて次々に空母が火災を引き起こして真っ赤に燃えた。
黒煙を上げて燃える空母達も見て、エンタープライズはすさまじい怒りを放出した。
それは、決して許されるべきではない戦法。
アメリカ人の常識では決して考えられない非道な戦法だった。
戦いとは、常に何を目的に行うか。それはもちろん任務を遂行す

るとか祖国を守るとかだが、もっと基本的な事。それは――生きて帰って来る事だ。

生きて帰って来て、仲間と笑い、家族を想い、そして次の戦場に行く。

戦うとは、つまり生きる事なのだ。

皆、生きる為に戦っている。

なのに、今の敵機は最初から死ぬ事を前提にしていた。

そんなの問題外どころか考えられない。

キリスト教は自殺を禁じている。そして、キリスト教が浸透しているアメリカでも、自殺というのは決して許されるべきものではない。

だが、敵機はその禁忌を破った。

確かに日本はキリスト国家ではない。だからといって、死ぬ事を前提にした作戦や攻撃をするなど、狂ってるとしか思えない。

狂ってる。

狂ってる！

狂ってるッ！

「狂ってやがるッ！」

エンタープライズは対空砲火の中を突き抜けて味方空母に突っ込む敵機を見て絶叫した。

「ジャップは狂ってやがるッ！　自殺機部隊をつくるなんてッ！　クレイジーだッ！」

この時、米機動部隊に襲い掛かったのはフィリピンの基地航空隊だった。

サイパン島で戦死した角田中将に代わって第一航空艦隊司令長官となった大西瀧次郎（おおにしたきじろう）中将は、台湾沖航空戦で壊滅した消耗し切った第一航空艦隊で連合艦隊を援護する事になったが、稼動機がわずか零戦三〇機しか残っていなかった。これでは有効な攻撃などができる訳もなく、大西中将は苦肉の策として爆弾をくくり付けた体当た

りを目的とした特殊攻撃隊を編成した。
そして、二度と帰って来る事のない攻撃隊は天に舞い、見事敵空母に突っ込んだ。その戦果はこれまでに比べて格段にすさまじいものであり、追い詰められた日本軍はこの戦法を主力攻撃にする事となった。
これが後に日本軍の主力攻撃となる――神風特別攻撃隊の初出撃だった。

神風特別攻撃隊の攻撃を怒りに変えてアメリカ高速空母部隊は小沢艦隊に接近。ついにその攻撃範囲に捉えた。すぐさま艦載機を舞い上げて総攻撃を敢行。
蒼い海を埋め尽くすのはアメリカ高速空母艦隊。蒼い空を埋め尽くすのはその攻撃力である大量の艦載機。
各空母から次々に艦載機が舞い上がり、上空で見事な編隊を次々に組む。日本軍とは大違いなほど勇ましく、凛々しい。
そして、出撃全艦載機が編隊を組み終えると、攻撃隊は空の向こうへ飛んでいく。
すさまじい数の攻撃隊を見送るエンタープライズのその瞳は怒りに燃えていた。
「必ず『ズイカク』を沈めろよッ！　撃ち漏らしたら承知しないぞッ！」
高速空母艦隊の全空母から発艦した一八〇機の第一次攻撃隊は母艦に見送られて、一路小沢艦隊を目指して飛翔した。

第十二章　第十一節　夢にまで見た艦隊決戦　米空母を襲う神風（後書き）

レイテ四大海戦のうち、三つが終了しました。
ちょっと時間軸がずれているかもしれませんが、その辺は執筆中の都合でどうにも連結できなくなったのです。すみません。
さて、次回はついに瑞鶴達日本機動部隊最後の戦いとなります。
囮艦隊として出撃した小沢艦隊。その旗艦を務める瑞鶴と艦長貝塚。
瑞鳳と剣。二つの物語が重なるエンガノ岬沖海戦です。
次回もまたお楽しみに。
評価や感想、意見などお待ちしてます。

第十二章　第十二節　囮作戦成功　機動部隊最期の戦い（前書き）

栗田艦隊が進撃を続ける頃、小沢艦隊がついに動き出した。
大和達戦艦部隊を無事にレイテ湾に突入させる為に引き受けた囮作戦も、成功間近となっていた。
大和達の突撃を成功させる為にも、ハルゼー機動部隊を引き付け続けないといけない。
親友を守る為、そして、日本機動部隊の有終の美を飾る為に、瑞鶴、瑞鳳、千歳、千代田の空母四人と伊勢や日向、貝塚や剣の壮絶な死闘が始まろうとしていた。
レイテ四大海戦の一つ、エンガノ岬沖海戦、いよいよ開戦です。

第十二章　第十二節　囮作戦成功　機動部隊最期の戦い

その頃、小沢艦隊では直掩機を舞い上げていた。
穏やかな朝だった。
海とあって風は強かったが波は低く、空は果てしなく蒼い。
今が戦時中で、ここが戦場であるということすら忘れさせてしまうような良い天気だ。
だが、その陽光とは相反して、小沢艦隊の将兵の表情は緊張感を露にし、今日の月を拝むことが出来る事を祈る。
「搭乗員、整列！」
『瑞鶴』艦上に、飛行長の声が響き渡る。
甲板上には、既に直接掩護隊の零戦五二型が繋止され、《発艦始め》の命を待っている。
バタバタバタ・・・ッ！
搭乗員が艦橋前に据え付けられた黒板に集結する。
今日、小沢艦隊がどのような末路を辿るか。それは、まだ二〇にも満たぬ者の多いこの直掩の零戦隊の活躍に、間違いなくかかっている。
全員が整列を終わると、飛行長が今日の戦闘について話しはじめる。
その様子を、艦橋から瑞鶴が見ていた。
「・・・やっぱり、若いですね」
「予科練を卒業したばかりの連中が大半だからな」
瑞鶴のつぶやきを聞き、貝塚はため息交じりに答える。搭乗員を見詰めるその瞳は悲しく揺れている。
「・・・あれほど若い人達を、死地に追いやらねばならないなんて。思えばずいぶん、落ちたものですね。私達の空母航空隊も」
瑞鶴がどこか遠いところを見るように言う。
「あぁ、罪深い事だ。だが、死地に赴くのは俺達も同じだ――必ず、

お前を本土に連れ帰ってやるよ」
「そうですね・・・そうでしたね、艦長。私を守れるのは、あなただけです。信じていますよ？」
瑞鶴に言葉を返そうと口を開きかけた瞬間、見張り兵の緊迫した叫び声が、伝声管を通じて艦橋内に飛びこんだ。
『『伊勢』より発光信号！『電探二感。敵大編隊、四時方向ヨリ急速接近中。其ノ数一五〇乃至二〇〇機』！』
瑞鶴と貝塚の表情が引き締まる。
いよいよ、戦いが始まろうとしていた。

ゴオオォォォォッ！　というエンジン音が甲板に満ち、アンテナが左右に倒される。
甲板をプロペラから発生した風が包み込む中、『瑞鳳』の甲板には大勢の兵達が世話しなく動き回っている。そんな中に、剣と瑞鳳はいた。
剣の愛機の前で、二人は別れのあいさつをしていた。
「じゃあ、行って来る」
「えぇ。せいぜいがんばって私を守りなさい。あなたの役目は私を守る事なんだから」
メガネの奥のクリッとした瞳がイタズラっぽく光った。そんないつもの彼女に剣にも自然と笑みが零れる。
「あぁ、任せておけ。必ず守り抜いてみせる。そして、二人で日本に帰ろう」
「えぇ、この作戦を終えて、日本に帰りましょう。そしたら・・・」
「そしたら？」
そこまで言って顔を真っ赤にしながらごにょごにょと言葉を口の中に戻してしまう瑞鳳に、剣は不思議そうに首を傾げる。そんな彼女を心配して顔を近づけると、
「な、何よッ！？」
「い、いや顔が赤いから・・・」

「べ、別に赤くなんかなってないもん！　ドキドキなんかしてないもんッ！」
「は？　ドキドキって？」
「・・・ッ！　う、うるさいうるさいうるさいッ！」
「ちょっと殴るなって！　僕これから出撃！」
ポカポカと殴って来る瑞鳳に、剣は慌てる。だが、その顔には嬉しげな笑みを浮かべた。
死ぬかもしれないなんて、考えていない。
必ず生き残る。それだけが二人を動かしていた。
「大空さんッ！」
その声に振り返ると、轟音を立ててプロペラを回す零戦群の中から長い黒髪を流し、手を元気良く振りながらやって来る千歳の姿があった。
「千歳！」
「大空さんッ！」
千歳は大空に駆け寄るとそのまま勢い良く抱き付いた。驚く剣の横ではピクリと眉を動かして明らかに不機嫌そうな瑞鳳が・・・
千歳はキラキラした瞳で大空を見詰める。その顔には柔らかな笑みが浮かんでいた。そんな仕草がかわいらしい。
「大空さん！　がんばってください！」
「任せといてよ」
「えへへ、私を守ってくださいね」
「もちろん」
「あんたが守るのは私じゃなかったの？」
不機嫌そうに睨み付ける瑞鳳に、剣は困惑する。
「そ、そりゃそうだけど。僕の役目はこの艦隊全体を守る事だから、必然的に瑞鳳も千歳も守る事になるけど」
「そうかもしれないけど、あんたは私を守るって言ったじゃない」
「だからちゃんと守るってば」
「私が言いたいのはそんな事じゃない！」

急に怒り出した瑞鳳に、剣は困惑する。
「な、何怒ってんだよ」
「怒ってなんかないもん！」
「いや、怒ってるじゃん」
「怒ってないもん！　もうッ！　何でわかんないのよ！　バカぁッ！」
「わ、わかんないよ」
フンッとそっぽを向く瑞鳳。その背中からはすさまじい不機嫌さが噴き出していた。そんな瑞鳳に剣は困ったように頭を掻く。
これから出撃なのに、こんな別れ方をするつもりはなかったのに。
「もう、何だってんだよ」
「瑞鳳は素直じゃないね」
千歳の言葉に、瑞鳳は不機嫌そうに睨み付ける。
「な、何よ。千歳には関係ないでしょ」
「ううん、関係なくないわ。だって私、大空さんの事が大好きだもん」
「ッ！？」
目を見開いて驚愕する瑞鳳に、千歳は笑みを浮かべる。だが、その笑顔はいつもの天真爛漫なものではなく、不敵な笑顔だった――まぁ、それでもかわいいのだが。
「私、瑞鳳をライバルだと思ってるもん」
「な、何がよ」
千歳は瑞鳳に近づくと、そっと耳元で宣言する。
「――私、この作戦を無事に終えて日本に帰ったら、大空さんに好きだって告白するから」
「なぁッ！？」
「いいでしょ？」
「だ、ダメに決まってるでしょッ！」
「どうして？」
「どうしてって・・・どうしてもよッ！」

顔を真っ赤にして怒る瑞鳳に千歳は全てを見透かしたかのような透き通った瞳を向ける。
「瑞鳳も、大空さんの事が好きなんでしょ？」
「ち、違うわよッ！　そんな訳ないでしょッ！　バカじゃないのッ！？」
顔を真っ赤にして否定する瑞鳳だが、千歳は真剣な瞳を外さない。その瞳は全てわかっているという想いが込められていた。
「ふぅん。じゃあ大空さん――私がもらっちゃっていい？」
「え・・・」
真剣な瞳を向ける千歳に、瑞鳳は言葉を失う。
剣を、千歳に取られる・・・
勝手すればいいじゃないか。自分には関係ない事なんだから・・・と、言い切れない自分がいた。
剣と千歳。確かにいいカップルになりそうだ。だが、納得できない。
今までずっと一緒にいた剣を、誰か他の女の子に取られるのは――嫌だった。
ずっと傍にいてほしい、そう願う自分がいた。
「だ、ダメ・・・ッ！」
瑞鳳は泣きそうな瞳で千歳を睨み付ける。その瞳の奥には必死な想いが煌いていた。
「ダメッ！　絶対にダメ！」
「どうして？」
「ダメなものはダメだもん！　絶対にダメぇッ！」
「だって、瑞鳳は別に大空さんの事をどうとも思ってないんでしょ？」
「そ、そうだけど」
「だったらいいじゃない」
「ダメだもん！　絶対ダメぇッ！」
「どうしてよッ！」

「だ、だって――とにかく剣はダメなの！」
「ダメじゃない！　私は好きですって大空さんに言うし、ずるい瑞鳳に邪魔される事もないんだから！」
「ずるくなんかない！　ダメったらダメなの！　剣は私と一緒の方が絶対いいんだから！」
「そんな事ない！　それを決めるのは大空さんよ！」
「剣の事何にも知らないくせに！」
「これから知るもん！」
「無理よ！」
「何で！？」
「無理ったら無理なの！」
「無理じゃない！」
「無理ったら無理！」
「無理じゃない！」
「ちょっと二人とも！」
すさまじく言い合う二人を慌てて剣が引き離す。剣が間に入っても二人の瞳は互いを睨み付け合って離さない。
千歳はキッと瑞鳳を睨み付ける。その瞳は本気で、瑞鳳を離さない。
「私、負けないから！」
千歳はそう言い残すと、踵を返して消え去った。
残された瑞鳳は千歳が消えた方向を睨みながらプルプルと身体を小刻みに震わせている。そんな彼女に剣はそっと声を掛ける。
「な、なぁ、どうしたんだ？」
「うるさいうるさい！　あんたには関係ないの！　早く行きなさいよ！」
瑞鳳は突然キレて剣の尻をゲシゲシと蹴る。
「痛いって！　わかった！　わかったから蹴るな！」
剣は逃げるようにして愛機に乗り込む。エンジンはもう点火し、プロペラも回っている。いつでも出撃可能だ。

「剣！」
瑞鳳は下から剣に向かって叫んだ。その声に、剣もそっと振り返る。
見詰める先には、瑞鳳が真剣な瞳を向けていた。
しばし見詰め合う二人。まわりにはプロペラの轟音が響き渡る。
風が流れた刹那、瑞鳳は硬い表情を崩して満面の笑みを浮かべた。
その笑顔はどんな笑みよりも柔らかく、優しげなものだった。
「約束！　必ず守ってねッ！」
瑞鳳の言葉に、剣は静かにうなずく。
そして、並べられたわずかな零戦全機が出撃準備を終えると、発艦命令が下された。
「チョーク外せ！　直掩隊、発艦始めぇッ！」
整備兵が車輪止めをさっと引き、飛行甲板の隅に走る。
風に靡いて紅白の旗が振るわれ、発艦許可を示す。
一番機の零戦がぐぃと前に出る。全速直進中の『瑞鳳』の甲板を滑るようにして、次々に零戦が飛び出す。『瑞鶴』の甲板からも直掩機が舞い上がるのが見えた。
そして、剣の零戦も甲板を駆け抜けた。一瞬横を見ると、瑞鳳が軍帽を振って見送ってくれていた。それにうなずき、剣は飛龍のお守りが結ばれた操縦桿を思いっ切り引いた。
機体がフワァッと浮く感触の後、空へ飛び出したという感触に変わる。
後ろへ小さくなっていく母艦を見詰め、剣は静かに敬礼した。
空母四隻から発進した十八機の直掩機は決戦の大空へと飛び立った。
そして、軍艦旗と小沢の中将旗の掲げられる『瑞鶴』のマストにはZ旗が上がり、まさにこの戦いで日本の運命が左右されるのを物語っていた。
「十三号電探、探知始め！」

「十三号電探、探知始めます！」
直掩隊が全機無事に発艦を終えたのを見届けると、貝塚は後ろの司令官席に座る小沢に向き直る。小沢の瞳も貝塚を向き、瞳が重なった。
「長官、防空指揮所へ上がります」
「うむ。よろしく頼んだぞ、貝塚君」
敬礼をして、幾度となく登った防空指揮所へと続く階段を駆け上がる。
空母の艦橋は低く、トップにあがるまで時間はそうかからないが、一段、二段、三段、と踏みしめているほどの余裕は無い。
貝塚は指揮所に辿り着いた。そこにはすでに瑞鶴がいた。
「瑞鶴、お前・・・」
「私は艦長の隣にいます。降りろと言っても降りませんよ？」
瑞鶴の言葉に、貝塚は優しく微笑んだ。
「まったく、お前は頑固だな」
「あの人の妹ですから」
「ふっ、そうだな」
貝塚はそう笑うと一転して真剣な顔で空を見上げた。
「敵機の目視は！？」
「まだです！」
若い見張り兵は威勢良く返した。
貝塚は風で軍帽が飛ばされぬように帯紐を顎にかけると、まだ見ぬ敵機が疾る蒼穹の空を睨んだ。

空へと飛び立ってから、何分経っただろう？
剣は、左右はいうまでもなく、下方を除く全方位にくまなく目をこらしていた。
「そろそろのはずだが・・・」
と、一機の零戦がふわりと刹那機の前に出た。
敵機発見、の合図である。

「石動（いするぎ）か・・・相変わらず、遠目のきく奴だな」
それは自分と同じ瑞鳳飛行隊の石動一等兵だった。剣は手信号で方位を尋ねる。
コックピットにいる石動は前方上方を指差した。見上げると、確かに空を埋め尽くす敵機の大編隊が飛んでいた。それを見詰め、剣は舌打ちした。
「高度は敵のが上、か。厄介だな」
剣は《了解》と返すと、翼を軽く上下に振り、慣れた手付きで増槽を落とし、操縦桿をグイッと引く。それに続いて十七機の零戦隊も次々に急上昇する。
こちらが上昇に移ったところで、太陽光を反射したためか、敵機の方も気がついたようだ。
前方に位置する何機かの機体が、円筒状の物体を切り離すのが見えた。
武骨そのものと言った胴体に、角張ったピンと張り出す翼。マリアナ沖海戦の勝利の一翼を担った機体――Ｆ６Ｆヘルキャットに間違い無かった。
Ｆ６Ｆは翼を閃かせて《滑り落ちる》とでも形容すべき軌道で零戦隊に鼻面を向けた。
彼我の相対速度、一〇〇〇キロ以上という高速で、両者の距離は急速に縮まって行く。
距離が一〇〇〇ｍを切ったところで、刹那はおもむろに操縦桿を横に倒した。
刹那の乗機――零戦五二型が、世界でもトップクラスを誇る小さい旋回半径を描いて空を切るのと、Ｆ６Ｆの両翼から機銃の発射炎が迸ったのが同時であった。
そしてこの時、ベテランパイロットと、まだ予科練を出たばかりの新米パイロットの差が、残酷なまでに現れた。
開戦以来、もしくは開戦初頭から生き残っている数少ない歴戦の海鷲達が、刹那と動きを同じくし、Ｆ６Ｆの十二、七ｍｍ機銃弾を

かわしたのに相反し、新米は敵機の銃撃を避ける術すら知らなかった。

結果、海軍が戦意昂揚を目的として作り出した軍歌《若鷲の歌》において歌った《心は火弾》の一文が、意味を一八〇度変えて現実となった。

若い新米パイロットは、憧れた零戦の機体のみならず、己の肉体をもＦ６Ｆの銃弾に貫かれ、血を吐き、頭を叩き割られ、火の玉と化した愛機の中で、今はもう会うことすらないだろう、母の姿や郷土の山、川を思いながら、遠い異郷の海に散った。

刹那は機体を再び翻すと、陸軍では《機関砲》とさえ呼称される、航空機装備の物としては世界最大級の二〇ｍｍ機銃をＦ６Ｆのコックピットに叩きこんだ。

一秒前まで、新米搭乗員の零戦を撃墜し、いい気になって口笛を吹き鳴らしていた米兵は、一瞬にしてただの無機質な肉と皮と骨の塊に換えられた。

生き残ったベテランは、新米の雪辱を果たさんと涙を堪えながら操縦桿を倒し、Ｆ６Ｆヘルキャットに、ＴＢＦアベンジャーに、ＳＢ２Ｃヘルダイバーに機銃弾をぶち込んだ。

負けじと、米攻撃隊も二〇ｍｍ、十三ｍｍ、七、七ｍｍの火矢を、薄い装甲板しか持たない零戦に向ける。

一機、また一機と、敵か味方かもわからない機体が炎に包まれて海面に落下していく。

Ｆ６Ｆは零戦隊を襲い、その間にＴＢＦとＳＢ２Ｃが小沢艦隊目掛けて殺到する。

「クソぉッ！」

剣は操縦桿を思いっ切り引いて機体を反転させると、艦隊に向かう鈍重なＴＢＦを機銃で襲う。その猛火の前に敵機は次々に落ちていく。

後ろからＦ６Ｆが味方の仇と機銃を撃ち込んで来るが、操縦桿を倒して機体を滑らせるようにして横へ避けると、何もない場所に敵

機の機銃が空しく過ぎ去る。その時、目の前をＳＢ２Ｃが編隊を組んで急降下して行った。すぐさま機体を翻して追い掛ける。敵機も必死に後部機銃で応戦して来るが、剣は零戦を横へ滑らせながら急降下を続け、機銃を放つ。二〇ｍｍと七・七ｍｍ機銃が敵機の装甲を撃ち抜き、火を噴かせる。そのまま次々に敵機に機銃を撃ち込み、敵機は全滅した。

海に落ちて行く敵機を一瞥し、再び急上昇して敵機に中に突っ込む。

必死に奮闘する剣以下零戦隊だが、航空戦において最も重要な要素、《数の優位》を圧倒的なまでのものにしていた米軍の航空隊は、わずか十数機の零戦隊の防衛線突破した。

日本時間、一九四四年十月二五日　午前八時十五分。

レイテ沖四大海戦のうちの一つ、エンガノ岬沖海戦の始まりの鐘が鳴った。

「直掩隊、突破されました！」

見張り兵の悲痛な叫び声が響いた。空を見上げると、敵機の大編隊が艦隊に向かって殺到して来ていた。

「たった十八機の零戦や仕方ないかぁ」

空母四隻を守るように陣形を形成している戦艦『伊勢』の防空指揮所にいた伊勢はため息交じりにそう言った。

敵機は二〇〇機近い。それをわずか十八機、しかも戦闘機の質も搭乗員の質も劣る零戦では押さえ切れるはずがなかった。

迫る敵機を睨み、伊勢は軍帽を深く被る。

再び空を見上げた時、その瞳は鋭利な刃物のように鋭く煌いた。

それはいつもの少女の瞳ではなく、一人の――帝国海軍軍人の鋭い瞳であった。

遠くに見えていた豆粒が次第に大きく、はっきり見えてくる。それは今まで日本を苦しめ続けた憎きネイビーブルーの敵機であった。

「主砲三式弾砲撃用意！」

『伊勢』艦長中瀬の命令に、伊勢の瞳がさらに輝いた。迫る敵機に横を見せ、『伊勢』は三五・六ｃｍ砲四基八門で敵機を捉える。そして・・・

「主砲三式弾砲撃始めッ！　撃てぇッ！」

中瀬の腹の底から出された砲撃命令の後、『伊勢』の主砲が《晴天の霹靂（へきれき）》とでもいうべき咆哮を発した。

砲弾が敵機の上空に達したその時、空を覆い尽くすかと思われるような大輪の花が咲き誇り、同時に何機かの敵機が火だるまになった。

『伊勢』『日向』以下三隻の軽巡洋艦の砲撃により、敵機は十数機を撃墜された。が、二度と同じ徹は踏むまいと、敵機は一斉に編隊を散開させる。こうなっては三式弾も使えない。効果はあるが一度きり。三式弾は一回か二回が勝負の砲弾なのだ。残るは対空機銃や高角砲の奮戦だけだ。

敵機は次々に艦隊の上空に達するが、そのほとんどがそのまま通過して防空陣の内側へ向かう。その先には瑞鶴達空母部隊がいる。

「敵機上空を通過！　一直線で空母部隊に向かいます！」

「うちら戦艦には興味ないっちゅー事やね――上等やないのッ！　あんたらみんなこの航空戦艦『伊勢』が葬ったるわッ！」

戦闘モードに切り替わった伊勢は軍帽を深く被り直して空母を襲う敵機を睨み付けた。その瞬間、対空戦闘が開始され、『伊勢』の艦体中から無数の機銃や砲弾が撃ち出され、すさまじい対空砲火が敵機を貫いた。

襲い掛かって来る敵機を睨み、貝塚はすぐさま転進命令を出す。

「面舵いっぱぁぁぁいッ！」

敵機とは逆方向に艦首を向けて『瑞鶴』は敵機から逃れる。だが、敵機は次々に空母達に襲い掛かる。特に軽空母三隻よりも大型空母である『瑞鶴』を狙う敵機の数は半端なかった。

無数の敵急降下爆撃機が上空から一斉にダイブして雨のように『瑞鶴』を襲う。雷撃機も負けずに五機以上の編隊を組んで一斉に魚雷を放つ。

「取舵いっぱぁぁぁいッ！」

貝塚はすぐさま艦を転進させて回避する。

『瑞鶴』のまわりで無数の水柱が上がり、甲板や指揮所に雨のように打ち付けて来る。魚雷は魚雷で『瑞鶴』の横を次々に空しく過ぎて行く。

貝塚の見事な操艦技術で『瑞鶴』は敵の第一撃を何とかかわした。だが、敵機はすぐに第二撃を開始する。

貝塚は再び敵機を回避しようと転舵する。

貝塚は巨艦『瑞鶴』を紙一重で敵機を回避し、敵機はなかなか『瑞鶴』に命中させられない。しかもマリアナ沖海戦で負った損傷を修理すると同時に装備されたの最新鋭の十二ｃｍ二八連装噴進砲が敵機に襲い掛かる。噴進砲とは今で言う対空ロケットランチャーみたいな物だ。命中率は悪いが、敵機に対する威嚇に相当の実力を発揮する。

敵機が噴進弾を避けると機銃がそれを叩く。これによって敵機は次々に撃墜された。

『瑞鶴』はそうした噴進砲と機銃の見事な連携と貝塚の操艦技術で次々に敵機の攻撃を避ける。だが、他の空母はそうもいかない。噴進砲が装備されているのは『瑞鶴』と『瑞鳳』だけだ。残る『千歳』と『千代田』には装備されておらず、頼れるのは機銃と高角砲、そして艦長の技量だけだった。

「面舵二〇度！」

『面舵二〇度！』

『瑞鶴』の艦首が徐々に右へ右へと反れ、敵艦爆隊の懐に潜りこむ。

投弾位置に達し、艦爆隊が爆弾を投下する。

だが、その全てが空しく海面をえぐるばかりだった。

海戦前貝塚は、一〇〇〇機近い敵機の猛攻を防ぎ切れるだろうか、と不安に思い、悩んだことも一度や二度ではなかった。

だが、よく考えてみれば、一度に一〇〇〇機が急降下爆撃や水平雷撃をかけることはできない。多くて二〇機程度である。

だが、それらの三割から五割は噴進砲と機銃の連携攻撃で撃墜または牽制で守られている。残った敵機だけなら貝塚の腕ならば操艦でかわしきる事はなんとかできた。

急降下が終わったと思えばまたもや急降下、ということは幾度となくあり、貝塚は防空指揮所を右へ左と走り回る羽目にはなった。

「面舵いっぱぁぁぁいッ！」

白波の軌跡を残しながら『瑞鶴』は右に大きく曲がる。そしてそのまわりに敵機の放った爆弾が炸裂し、巨大な水柱がいくつも立ち上る。

「艦長！　左三〇度から魚雷二本接近！」

「おうッ！　取舵いっぱぁぁぁいッ！」

瑞鶴が見つけた魚雷を貝塚は見事に避ける。空しく通り過ぎていく魚雷を見詰め、瑞鶴は歓喜の声を上げる。

「さすが艦長です！　すごいです！」

瑞鶴は嬉しそうに声を上げるが、貝塚はそれを無視して襲い掛かる敵機を次々に避ける。そのたびに『瑞鶴』は右左へ大きく蛇行し、艦が遠心力で斜めに傾く。

「キャアッ！」

「おっと」

傾いた床に瑞鶴はバランスを崩して貝塚にぶつかった。

「す、すみません」

「何かに掴まってろ。俺の操艦は荒っぽいからな」

「はいッ！　がんばってください！」

「おうッ！」

貝塚は再び襲い掛かる敵機を睨み、伝声管に向かって転進命令を出す。そんな彼の手を、瑞鶴はギュッと掴んでいた。何かに掴まれ

と言われ、彼女は彼の手を掴んだのだ。だが、その手を伝って二人の温もりが交差する。

自分はここにいるという想いが二人の胸を包み、勇気を与える。彼が、彼女がいれば、負けない。そんな気持ちが二人を満たす。艦長と心が以心伝心した瑞鶴。そしてその本体である『瑞鶴』は今まで以上の機敏さを発揮し、全速力で蒼い海を翔けた。

一方、『瑞鶴』から少し離れた場所を走る『千歳』は敵機の攻撃に晒されて必死の奮闘をしていた。

艦体内部にある艦橋で、千歳は自分に向かって襲い掛かって来る敵機を睨み付けていた。

左右へ次々に蛇行して敵機の攻撃を回避するが、敵機はまるでどこからか湧き出すかのごとく次々に現れて爆弾や魚雷を叩き込んで来る。

横ギリギリを魚雷が通り過ぎ、大きく右へ回避すると、そのまわりに艦を包む込むように水柱が次々に立ち上る。

艦体中から次々に機銃弾や高角砲弾が撃ち出され、敵機を襲うが、『千歳』と『千代田』の防空能力は『瑞鶴』や『瑞鳳』に比べると劣るので、かなり危ない場面が今までにもあったが、それらは全て艦長岸良幸大佐が避けてくれた。

空を飛び交う敵機を一瞥し、千歳は何倍もの戦闘機に追われながらも次々に敵機を撃ち落す零戦を見つけた。その動きですぐにわかる――あれは剣の零戦だ。

「大空さん！」

千歳は窓に駆け寄って剣の零戦を見詰める。

彼が必死になって自分達を守ってくれている。そう思うと、胸が温かいもので満たされる。

そんな彼を見詰め、千歳は胸の中の想いを広げる。

この作戦が終わったら、剣に告白しよう。そう決意していた。その為にも、必ず生き残らなければならない。

必ず生き残る。そんな想いが今の自分を突き動かしていた。
「大空さん、私、大空さんの事・・・」
『敵機直上！　急降下！』
見張り兵の悲鳴が艦橋に響き渡った。その言葉に、千歳の表情が凍り付いた。
「そ、そんな・・・ッ！」
「面舵いっぱぁぁぁいッ！」
岸良が慌てて転進命令を出すが、すでに遅かった。
不気味に響く急降下音が響き渡り、千歳の顔色が真っ青になる。
「大空さん・・・ッ！　た、助け――」

ドゴオオオオォォォォォンッ！
「な、何だ！？」
貝塚が突如響き渡った爆音を急いで確認すると、遠くで猛攻していた『千歳』が巨大な火柱を上げて艦体を真っ二つに折って爆沈するのが見えた。
「『千歳』轟沈ッ！」
見張り兵の絶叫に貝塚は苦しそうに唇を噛んだ。
「よくも『千歳』を・・・ッ！」
「艦長ッ！」
すっかり意識がずれていた貝塚は瑞鶴の悲鳴に我を取り戻す。だがその時にはすでに魚雷がすぐそこまで迫っていた。それを見て貝塚の顔が真っ青になる。
「まずいッ！　面舵いっぱぁぁぁいッ！」
貝塚はすぐに転進させるが、もう遅かった。
魚雷群のうち一本が『瑞鶴』の側面に激突し、巨大な水柱を上げた。
「ぐがあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
「瑞鶴ッ！」
爆発と同時に瑞鶴の脇腹が砕けて大量の血がその身から噴き出す。

一瞬にして瑞鶴の身体が真っ赤に染まった。
「瑞鶴ッ！」
貝塚が振り返ると、瑞鶴が辛そうな表情で彼を見詰めていた。
「だ、大丈夫です・・・ッ！　わ、私の事は気にしないで、か、艦長は操艦を・・・ッ！」
瑞鶴は痛みを堪えて必死に貝塚に訴える。そんな瑞鶴の瞳を見詰め、貝塚は苦しそうにうなずいて操艦を続ける。だが、
『艦長！　こちら機関長！　第一、第三機関室に浸水ッ！　速力は二四ノットに低下！ッ』
「何だってッ！？」
『瑞鶴』の最高速力は三四ノット出る。それがたった一本の魚雷で一〇ノットも低下するなんて、貝塚は愕然とした。
幾多の戦いをほぼ無傷で生き残ってきた幸運艦『瑞鶴』の幸運も、ついに朽ち果ててしまったのだ。
「二四ノットじゃ完全な回避行動はできないじゃないか・・・ッ！」
「か、艦長・・・ッ！」
愕然としている貝塚の服の裾を、瑞鶴が掴んだ。視線を下げると、瑞鶴の必死な瞳がそこにあった。
「瑞鶴・・・」
「艦長なら・・・できます・・・信じてますから・・・」
瑞鶴の必死な言葉に、貝塚は静かにうなずき、再び操艦を始める。
被雷した『瑞鶴』は十分な速度が出ないまま敵機の猛攻撃を避け続ける。傷ついた『瑞鶴』をここまで自在に操れるのは貝塚の操艦技術のおかげだ。
最初の被雷から三〇分後、敵機は爆弾と魚雷を全て投下し終えて青空の向こうに去って行った。
残された艦隊は空母『千歳』と駆逐艦一隻が沈没し、軽巡洋艦一隻大破、『瑞鶴』も被弾した。
小沢艦隊は再び陣形を編成し終えたが、空母の甲板には臨時の機銃座を設置したので直掩機は燃料切れで着水した。これで、これ以

降直掩機の掩護は受けられなくなった。

静かになった小沢艦隊の旗艦・空母『瑞鶴』の会議室には再び艦魂達が集まっていた。だが、そこには沈んだ千歳の姿も、千代田の姿もなかった。

「千代田は？」

軍服の下に包帯を巻いた瑞鶴が訊くと、瑞鳳が小さく首を振る。

「部屋から一歩も出て来ないのよ。彼女大の姉っ子だったから、千歳が死んでショックから立ち直れないみたい」

「そう・・・なら、今は一人にさせて上げましょう」

「瑞鶴がそう言うなら、そうするね」

瑞鶴が瑞鳳の隣に腰下ろすと、護衛隊代表の大淀が立ち上がった。

「私達護衛艦隊では駆逐艦『秋月（あきづき）』が沈没。軽巡洋艦『多摩』が魚雷一本を受けて大破。それ以外の艦も多く損傷しています。次に同等以上の敵機に襲われたら、艦隊は壊滅する可能性もあります」

「当然やろ？　この作戦は連合艦隊の全艦艇を失ってでも成功させなくちゃあかんの。姉さん達やって・・・命を懸けたんやから・・・ッ！」

伊勢が苦しそうに言うと、日向も目を潤ませながらうなずいた。

そんな二人を見て、大淀は「そうですね」と静かにつぶやいて席に着いた。その時、部屋のドアを開けて貝塚が入って来た。

「おうみんな。これでも食って元気出せよ」

そう言って持って来たのはお盆いっぱいの塩むすびだった。

「艦長!?　どうしたんですかそれ!?」

「ん？　炊事長に頼んで握ってもらったんだ」

「そんなッ！　私達よりも兵達にちゃんと供給すべきです！」

「気にすんなって。兵達にはちゃんと行き渡ってるし――残しても仕方ないしな」

貝塚の瞳は瑞鶴の脇腹を見詰めていた。そこには軍服で見えないが、その下には先程の被雷の傷がある。彼は瑞鶴を守り切れなかっ

た事を気にしていたのだ。
「艦長・・・」
「ほら。みんな食ってくれ」
艦魂達はどうすべきか困っていると、瑞鶴は優しげな笑みを浮かべた。
「食べていいわよ。艦長がこう言ってるんだし」
瑞鶴の言葉にみんな嬉しそうに塩むすびをほお張った。その表情は年相応のかわいい少女達だった。
「あ、これ持って帰ってもいいですか？」
瑞鳳は塩結びを見詰めながら皆のおにぎりを頬張る姿を嬉しそうに見つめる貝塚に問う。
「構わないが、どうするんだ？」
「剣に食べさせるんです」
「あぁ、大空大尉よね？　今どうしてるの？」
「さっきの空襲の時に敵機と交戦していたけど、燃料切れで着水して、今は機銃兵に加わってるよ」
「へぇ、疲れている彼におにぎりを持って行ってあげるのね？」
「そ、そんなんじゃないよッ！」
瑞鳳は顔を真っ赤にしながら怒る。そんな素直じゃない親友を見詰め、瑞鶴は嬉しそうに微笑む。
「んじゃ、俺はもう戻るよ」
「あ、艦長もう戻るんですか？」
「そりゃ忙しい身だからな。悪いな」
「か、艦長！」
瑞鶴が呼び止めるが、貝塚はそれを無視して部屋を出て行った。
少し自信なさなさげなその背中を、瑞鶴は心配そうに見詰めた。
そんな瑞鶴の肩をポンと瑞鳳が叩く。
「大丈夫よ。貝塚さんはとても立派な人だから――まぁ、杉浦さん（空母『瑞鳳』艦長杉浦矩朗（くろう）大佐）ほどじゃないけどね」
瑞鳳の挑発的な言い方に、瑞鶴はムッとする。

「そんな事ないよ！　艦長はどこの艦長よりも立派な人です！」
「それは違うわよ。真の艦長は杉浦さんだもの」
「それは違うよ！　野村っち（戦艦『日向』艦長野村留吉（とめきち）大佐）が一番だよ！」
「あ、あの・・・牟田口大佐（軽巡洋艦『大淀』艦長牟田口格朗大佐）の方が・・・」
自分達の艦長を自慢し合う瑞鶴達を伊勢は優しげな笑みで静かに見詰めていた。

午後十時、敵第二次攻撃隊三六機が襲い掛かった。
三六機とはいえ群がる敵機を『瑞鶴』は器用に回避を続けた。『瑞鳳』も的確な転進で敵機を回避するが、『千代田』は回避し切れずに被弾した。
爆弾三発を受けて炎上して航行不能となった『千代田』の甲板には血まみれの千代田が倒れていた。だが、その顔は苦しみなどにゆがんではおらず、むしろ優しげな笑みを浮かべていた。
「・・・ね・・・姉さん・・・今・・・そっちに行くからね・・・」
千代田はそうつぶやくと、ゆっくりと目を閉じた。
結局、大破炎上して航行不能となった『千代田』は艦隊から脱落。小沢艦隊も行方不明となった『千代田』を捜索したが、沈没したと判断して捜索を打ち切った。
その後、『千代田』は単艦で海を漂っていたが、通りすがった米巡洋艦部隊の砲撃で沈没した。

――空母『千歳』『千代田』、後に空母に改造される事を前提に水上機母艦として竣工した両艦はミッドウェー海戦で初陣を飾るが、その後同海戦の正式空母一斉喪失に空母へと変更された。しかし完成した当時『翔鶴』『瑞鶴』『瑞鳳』の奮闘も空しく戦局は悪化し、肝心の艦載機不足の為に両艦は本来の任務である空母としての役目を行う機会はなく、ずっと船団護衛や航空機輸送などに従事し続け

た。そして、待ちに待った空母としての初陣であるマリアナ沖海戦だったが、惨憺(さんたん)たる結果に終わった。そして再び載せるべき艦載機を失い、二度と出撃の機会はないと思われたが、機動部隊最期の任務である囮作戦を引き受ける事となり、最後の航海に出撃した。そして、すさまじい死闘の末に見事その任務を完遂し、その悲運の歴史に終止符を打った。そんな『千歳』の艦魂は純粋な女の子で、どこにでもいる普通の子だった。そして、普通の女の子のように恋をした。彼に想いを伝える決心をしたが、結局その機会は訪れずに海底深くに没した。『千代田』の艦魂はそんな姉、千歳が大好きであった。姉が好きになった男をどうしても認められず、幾度となく妨害を続けた。だが、次第にそんな彼の存在が自分の中で大きくなるのに困惑した。だが、胸の中に広がる想いに気づく事なく、千代田も姉の後を追ってその艦生に終止符を打った――

空母が二隻になった艦隊はそれでも任務を完遂する為に囮任務を続けた。

艦魂達はわずか一日で空母を二隻も失った事にショックを隠し切れなかった。

落ち込む瑞鶴を貝塚はそっと肩を叩いてやる。

「千歳は死に、千代田も行方不明。残ったのはお前と瑞鳳だけになっちまったな」

「・・・彼女達の為にも、この作戦は必ず成功させなくてはいけません」

「――そうだな。必ず完遂させよう」

貝塚はうつむく瑞鶴の肩を、そっと抱き締めてやった。

小沢艦隊は空母二隻を失いながらも、その責務を果たす為にさらに敵をレイテから引き離す為に北上した。

第十二章　第十二節　囮作戦成功　機動部隊最期の戦い（後書き）

壮絶な死闘の末、千歳と千代田が戦死。
残った艦艇も傷だらけであった。
だが、まだ敵の攻撃は終わらないし、終わらせる訳にはいかない。
必ず囮作戦を成功させる。そんな想いが瑞鶴を動かしていた。
瑞鶴、瑞鳳、貝塚、剣。それぞれの想いと決意が重なり、次回に続きます。
次回でエンガノ岬沖海戦は終了します。
瑞鶴達の死闘とその想い、どうかご覧になってください。
意見や感想お待ちしてます。

第十二章　第十三節　瑞鶴と瑞鳳　戦乱の戦姫の壮絶な最期（前書き）

エンガノ岬沖海戦後半戦です。
すでに千歳と千代田が脱落。残る瑞鳳と瑞鶴は二人の分まで敵機動部隊を引き付け続けます。
日本機動部隊の有終の美を飾る為、瑞鶴と瑞鳳。《瑞》の名を持つ二人の最期の戦い。どうか最後まで見届けてあげてください。

第十二章　第十三節　瑞鶴と瑞鳳　戦乱の戦姫の壮絶な最期

一方、小沢艦隊に猛攻撃するアメリカ高速空母艦隊所属空母『エンタープライズ』の艦橋ではエンタープライズが哄笑（こうしょう）していた。
「くははははッ！　もう二隻を沈めたぞ！　残るは軽空母一隻と『ズイカク』だけ！　貴様の命もここまでだ！　今度こそ息の根を止めてくれる！」
もはや勝利を確信するエンタープライズは大笑いを続けた。その時、
「キャップテンッ！　太平洋艦隊司令長官ニミッツ提督から電報です！」
「提督から？　読め」
「はッ！『第３４任務部隊ハ何処カ。全世界ハ知ラント欲ス』ッ！」
「何だとッ！　ニミッツのヤローッ！」
この電文にエンタープライズはこれまで以上の怒りを露にした。
太平洋艦隊司令長官チェスター・W・ニミッツ大将から送られたこの電文には本来の任務を放棄したハルゼー高速空母艦隊への嫌味たっぷりな皮肉が込められていた。同時に日本艦隊（栗田艦隊）が海峡を突破したという報告も入り、エンタープライズの怒りの火山に爆薬をぶち込むような追い討ちをかけた。
「クソったれがッ！　日本艦隊が戻って来た事よりも、ニミッツのヤローが許せねぇッ！　戦争は司令室で起きてるんじゃねぇ、戦場で起きてんだ！　それなのにこんな皮肉を込めた電文を送り付けて来やがって・・・ッ！」
エンタープライズは壁に強烈な一撃を加えて怒りを露にする。
「クソッたれッ！　クソニミッツがあああああぁぁぁぁぁッ！」
エンタープライズの怒号は艦隊中に響き渡った。
ハルゼー大将はこの電文に大激怒。ほとんどヤケクソで空母四隻

と戦艦部隊を率いてレイテに戻った。残った空母部隊は空母部隊司令官マーク・A・ミッチャー中将が指揮して小沢艦隊への攻撃を続行。第三次攻撃隊二〇〇機を編成して発艦させた。

電探で敵機大編隊を捕捉した小沢艦隊は対空戦闘の用意に入った。防空指揮所で防空ヘルメットを被る貝塚の横で、瑞鶴は小さく震えていた。

「・・・怖いのか？」

貝塚の質問に、瑞鶴は小さくなずいた。

「怖いです。私、今まで多くの戦いを経験して来ましたけど、これほど多くの敵機に襲われた事はありません・・・だから、怖いんです」

「お前の気持ちはよくわかる。その胸を押し潰すような恐怖感もわかる。でも安心しろ。お前はこの俺が守ってやるからな」

貝塚の言葉に瑞鶴は嬉しそうに笑みを浮かべる。

「そうですね。艦長、信じて――」

「――なんて偉そうな事を言える義理はねぇな、俺には」

「艦長？」

悲しげに顔をゆがめる貝塚。先程、自分のミスで『瑞鶴』は被雷し、彼女は傷ついた。守ってやると約束したのに、ケガをさせてしまった。

「俺はお前を守り切れなかったんだ。そんな俺にお前を守るなんて言う権利はない」

苦しそうに言う貝塚を、瑞鶴は不安げに見詰める。

「艦長・・・私は別に・・・」

「気にしてないってか？　お前はそうかもしれんが、俺は男が一度守ると決めた奴を守り切れなかったんだ。もう俺にそんな軽はずみな事を言う権利はないんだよ」

貝塚はそう言うと悲しげに空を見上げた。そんな自信をなくした貝塚を瑞鶴は悲しげな瞳を見詰める。

「艦長・・・そんな顔しないでくださいよぉ」
「もちろん。『瑞鶴』艦長として『瑞鶴』は全力で守るさ」
貝塚に言った《瑞鶴》とは彼女の事でなく軍艦として《瑞鶴》であり、その言葉に瑞鶴の表情はさらに悲しくゆがむ。
瑞鶴は天を見上げる貝塚に――後ろから抱き付いた。
「ず、瑞鶴？」
「そんな言い方・・・しないでください」
ほろほろと涙を流しながら言う瑞鶴に貝塚は驚く。だが、そんな貝塚を無視して瑞鶴は彼に訴える。
「・・・前に、言ってくれたじゃないですか。私を守ってくれるって、『瑞鶴』じゃなく、私を・・・」
「・・・瑞鶴」
「――好きです」
「え？」
瑞鶴は貝塚に抱き付いたまま顔をもたげて言った。その瞳は涙で濡れ、火の光を返して煌いていた。頬は赤く染まり、瑞鶴は一人の少女になっていた。
「好きなんです。艦長の事。ずっとずっと、好きだったんです」
真剣な瞳で訴える彼女に、貝塚は顔を赤らめて視線を逸らす。
「・・・な、何言ってんだ。俺はもうおじさんだぞ。ふざけた事を――」
「ふざけてなんかいませんッ！　私は本気です！」
顔を真っ赤にしながら怒る瑞鶴に、さすがの貝塚もたじたじになる。真剣な瞳で見詰める瑞鶴に、貝塚は沈黙する。
「お、俺はバツイチだぞ？」
「知ってます。五年前に奥さんを亡くしてらっしゃるのも知っています」
「きゅ、急にそんな事言われても・・・」
貝塚は純情な少年のように顔を赤くして困る。そんな彼の頬に、瑞鶴はそっと唇を当てる。

「ず、瑞鶴お前・・・ッ！」
「敵機！　左三〇度高角四〇度方向より接近！」
見張り兵の言葉で貝塚の視線は天空に向けられる。そんな彼に、瑞鶴は満面の笑みを向ける。
「無事に日本に帰れたら、デートしてくださいね」
「・・・この中でか？」
苦笑する貝塚に瑞鶴は「そ、そうでしたね」と恥ずかしそうにうつむく。だが、貝塚はそんな彼女の頭をそっと撫でる。
「いいぜ。いくらでも付き合ってやるぞ」
「ほ、本当ですか！？」
「ただし、娘としてな」
「えええぇぇッ！　それは嫌です！」
「悪いな。俺は子供には興味ないんだ」
「そんなあああぁぁぁッ！」
「安心しろ。嫁にもらわれるまでは俺が預かっててやるからさ」
「これっていい結果なんですか！？　どうなんですか姉さんッ！」
ほとんど泣き叫ぶ瑞鶴を笑顔で見詰め、貝塚は操艦を始める。
「・・・まぁ、俺もそろそろ再婚を考えてもいいかな」
「え？　今何か言いましたか？」
「気にするな――それより、来たぞ」
「はい――私の命、預けましたよ」
「任しときな。必ず守ってやるよ――瑞鶴」
「はいッ！」
瑞鶴は満面の笑みを向けて返事した。貝塚はそれを確認すると再び敵機を睨み付けた。その時の彼は一空母の艦長の顔になっていた。
「両舷前進全速！　必ず日本に帰るぞ！　各自奮闘せよ！　俺はお前達を信じるぞッ！」
『おおおおぉぉぉぉぉッ！』
空母『瑞鶴』に乗る一七〇〇名の男達が貝塚の言葉に咆哮する。
そんな彼らを見て、瑞鶴は笑顔になった。

迫る敵機に、『伊勢』と『日向』が砲撃を開始した。
敵機は炸裂する三式弾の嵐の中を犠牲を出しながら突貫して来る。
貝塚はそんな敵機を睨み、命令した。
「対空戦闘開始ッ！」
貝塚の命令の後、『瑞鶴』の艦中からすさまじい弾幕を張られた。
これが、空母『瑞鶴』最後の戦いとなった。

小沢はこの敵機の猛攻撃でハルゼー機動部隊を完全に吊り上げたと確信し、栗田艦隊と豊田連合艦隊司令長官へ無電を送った。
――我作戦ニ成功。敵機動部隊ヲ北方ニ誘致セリ――
だが、この電文はなぜか栗田艦隊へは届かなかった。

『左舷、敵雷撃機！』
「取舵いっぱぁぁいッ！」
『取舵いっぱぁぁいッ！』
『瑞鶴』の艦体が艦首を雷撃機方向に向け、雷撃機との相対面積を最小のものにする。これで当たったら運が悪いとしか言い様がないが、それでもそのような事態にはならなかった。
十本の雷跡は、いずれも『瑞鶴』の右舷、左舷を通り抜けてはるか遠くの洋上に消えた。
「艦長！　敵急降下爆撃機直上！　急降下！」
瑞鶴は悲鳴を上げ、貝塚は急いで取舵を回す。
爆弾は『瑞鶴』のまわりに落下して爆発。艦橋よりも高い水柱を上げた。巻き上げられた海水が『瑞鶴』に雨のように降り注ぐ。
もう貝塚は二〇分近く命懸けで操艦を続けていた。そんな彼の横で瑞鶴も彼を信じて手助けしていた。
敵戦闘機の機銃が鉄の甲板に当たって火花を散らす。指揮所にも機銃が掃射されて火花が散る。
「うわッ！」
「艦長！」

機銃の一発が貝塚の肩を貫通した。苦悶にゆがむ彼を心配する瑞鶴を止めて貝塚は痛みを堪えて指揮を続ける。
「右四〇度方向、魚雷四本！」
「取舵四〇度おおおぉぉぉッ！」
勇ましく戦う貝塚に、瑞鶴は彼を信じて見守り続けた。その時、鈍い爆音が響いた。
「『瑞鳳』左舷に魚雷命中！　浮き足止まった！」
見張り兵の絶叫に瑞鶴が顔を真っ青にして左舷を走っていた『瑞鳳』を見詰めた。
『瑞鳳』はこれまでに爆弾数発を受けて炎上していた。そこへ止めの魚雷が命中して『瑞鳳』はついにその動きを停止させた。
「瑞鳳おおおおぉぉぉぉぉッ！」
瑞鶴は泣きながら親友の名を叫んだ。

傾斜しながら炎上する空母『瑞鳳』の艦内に起きた火災はもはや鎮火不能となっていた。艦内は火の海となり、めちゃくちゃになっていた。
甲板には巨大な穴が開き、もうもうと黒煙が上がっていた。そんな甲板に瑞鳳は血まみれでその場に倒れていた。
ミッドウェー海戦以降壊滅した日本機動部隊の主力となって太平洋の海を翔けて来た『瑞鳳』はその小さ過ぎる体に多くの希望を載せて戦って来た。
そんな『瑞鳳』の艦魂はもはや立ち上がる気力も残されていなかった。
燃える甲板に血まみれな体で倒れる瑞鳳の瞳はいまだに敵機を必死に避ける『瑞鶴』を見詰めていた。その時、
「瑞鳳！」
その声に視線を外すと、自分に向かって駆け寄ってくる剣が見えた。
「つる・・・ぎ・・・？」

剣は血まみれでぐったりと倒れている瑞鳳に駆け寄ると、その身体を抱き上げた。ベチャっとした嫌に生温かい感触に、剣はぞっとする。

自分の腕の中の瑞鳳は、もうさっきまで一緒に笑ってくれた太陽のような輝きはなかった。

ぐったりとした身体はすでに力を失っている。

「・・・つる・・・ぎ・・・逃げ・・・て・・・」

瑞鳳は必死に訴える。

もう自分の命は長くない。もうすぐ沈む。だから、剣には降りてほしいと願ったが、剣はその言葉に首を横に振る。

「バカッ！　傷ついたお前を置いて行けるか！」

「ダメよ・・・あなたは・・・死んじゃダメ・・・」

「絶対に嫌だ！　もう、飛龍の二の舞はもう嫌なんだ！」

思い出すのはミッドウェー海戦の敗北の時。

炎上する『飛龍』の上で、自分は彼女と運命を共にする事を願った。だが、彼女はそれを許さず、自分を無理やり転送して助け、そして命を落とした。

もうあんな想いは嫌だった。

守ると決めた奴を守れず、自分一人だけが生き残るなんて、もう飛龍だけで十分だった。

だが、瑞鳳は首を横に振る。

「・・・ダメよ・・・あなたは・・・生きている・・・生きてるなら・・・その命を・・・大事にして・・・」

「お前だって生きてるだろ！」

「・・・ダメ・・・私はもう・・・長くないから・・・」

その瑞鳳の悲痛な声に、剣はボロボロと涙を流す。

「約束しただろ！　一緒に日本に帰るって！」

「・・・無理・・・私・・・もうすぐ・・・沈んじゃうから・・・」

瑞鳳の言葉に、剣は力なくうな垂れた。

今自分がいる『瑞鳳』は確かに沈んでいる。もう時間はない。

ならば、せめて彼女が寂しくないように、最期までずっと一緒にいよう。そう思ってたのに、瑞鳳はそれを許さない。

「・・・あんたは・・・生きなさい・・・いいわね・・・？」

「嫌だ！　絶対に嫌だ！」

瑞鳳を抱き締めながら全力で否定する剣。そんな彼を、瑞鳳は悲しげに見詰める。

「・・・私は・・・私が好きな・・・あんたに・・・生きてほしいの・・・何でわかって・・・くれないのよ・・・」

「瑞鳳・・・」

どうせ死ぬんだ。だったらせめて、最後ぐらい自分に素直になろう。そう思うと、自然と言葉が漏れる。それは今まで自分が心の奥底に封じてきた想い。

「・・・好きなの・・・あんたの事が・・・好きなのよ・・・悪い・・・？　文句ある・・・？」

訂正。やっぱりちょっと素直にはなれません。

それでも、瑞鳳は言葉を繋げる。

「・・・好きな人に生きてほしい・・・そんな事も願っちゃ・・・ダメなの・・・？」

「瑞鳳・・・」

瑞鳳は右手をゆっくりを上げ、剣を指差す。そして、弱々しかった瞳をキッと尖らせる。いつもの、強気な瑞鳳が、そこにいた。

「・・・あんたは生きなさい・・・これ命令・・・わかったわね・・・？」

その瞬間、瑞鳳の指先が光り出した。その光に、剣はミッドウェーの時を思い出す。

あの時も、飛龍がこうして自分を助けた。

「や、やめろッ！　僕はここに残る！　絶対に降りない！　だから、だからッ！」

「・・・さよなら・・・私の大好きな人・・・剣・・・私が・・・愛してあげ・・・たんだから・・・ありがたく・・・思い・・・な

さい・・・よ・・・」

「瑞鳳！　瑞鳳ッ！　瑞鳳ぉッ！　瑞鳳おおおおおぉぉぉぉぉぉ――」

少年の悲痛な声は、光に包まれて消えた。光が消滅した時、彼の姿はなかった。

これでいい。

もしかしたら恨まれるかもしれないけど、これでいい。っていうか私がわざわざ残った力を振り絞って助けてあげたのに恨んだら許さないから。

やっぱり自分は素直じゃないなぁっと改めて思う。

最初はただの戦友だったのに、いつの間にか自分の中で彼の存在が大きくなって、気がついた時には、彼が気になって気になって仕方がなくなっていた。なのに、彼は千歳や千代田と仲良くなったりして、本当に許せない。特に千歳と親しげに話しているのが一番嫌だった。

こんな想いを何でしなきゃいけなかったのか、ようやくわかった。

自分は彼に恋していたのだと・・・

そう気づいたのは、きっと千歳の気持ちを聞いたからだろう。

確かに、自分は彼女の言うとおりずるかったかもしれない。こんな曖昧な気持ちのまま剣の傍にいて、はっきりとした想いを持っていた千歳を妨害した。ずるいと言われても、仕方がない。

だから、素直になった。まだまだ素直になり切れなかったけど、それでも十分だった。

後悔はない――と言えばうそになる。

本当はもっと生きたい。

もっと生きて、彼と一緒にいたかった。

でも、それはもうできない。

思い出すのは、彼との思い出ばかり。

いつに間にか、自分は彼との思い出ばかりを胸に大切にしまっていた。

彼の笑顔、彼の声、彼の匂い、彼の温もり。

全てが、今の自分を包み込んでくれる。
それだけで、何も怖くなかった。死の恐怖も、感じない。
彼が生きている。それだけで、自分は良かった。
瑞鳳はふといまだ敵機の猛攻撃を受けている『瑞鶴』を見詰める。
そこには親友がいる。今まで一緒に戦ってきた、親友がいるのだ。
「・・・瑞鶴・・・ごめんね・・・最後まで一緒に・・・いられなくて」
涙を流しながら言う彼女の命はもう長くはなかった。消える事のない炎が艦中を包み込む。もうじき・・・
「・・・瑞鶴・・・私はもう・・・ダメだけど・・・せめて・・・あなただけは・・・あなただけは生きてね・・・それが・・・私の願いだから・・・」
突如今まで以上の爆発が起き、『瑞鳳』の傾斜はさらにひどくなり、飛行甲板の左舷が水に浸かり始めた。
瑞鳳は涙を拭いて、満面の笑みで『瑞鶴』に最期の力を込めて手を振った。
「瑞鶴ッ！　忘れないでね。私の事、あなたと一緒に太平洋の海を翔けた小さな空母――『瑞鳳』の事を！」
そして――
「剣！　大好きよッ！」
その叫びの後、瑞鳳の手は糸の切れた人形のように床に倒れ、二度と指一本動かす事はなかった。だが、その顔は、とても幸せそうなものだった・・・

「『瑞鳳』、沈没する！」
「何ッ！？」
貝塚は『瑞鶴』の左舷を走っていた『瑞鳳』に目をやった。
『瑞鳳』は左舷からゆっくりと転覆しながら沈み始めた。甲板の左半分近くが海中に沈むと、『瑞鳳』はそのまま傾斜して横転した。
皆が見守る中、『瑞鳳』はその激動の歴史を終え、海中に沈んだ。

――空母『瑞鳳』、高速給油艦『高崎』として建造され、途中で潜水母艦に変更され、さらに紆余曲折を経て空母として竣工。名前も新たに『瑞鳳』に変更され、ミッドウェー海戦でその初陣を飾り、軽空母ながらミッドウェー海戦で崩壊した機動部隊を『翔鶴』『瑞鶴』と共に支え続け、幾多の戦いを生き抜いた小さな歴戦の空母であった。そんな『瑞鳳』の艦魂はメガネを掛けた女の子で、同じ≪瑞≫の名を持つ瑞鶴とは親友のような関係であった。参謀としても活躍し、翔鶴の補佐を幾度となくこなしてきた。そして、そんな彼女に運命の転機が訪れたのは、ミッドウェー海戦で沈んだ『飛龍』に乗っていた戦闘機乗り、大空剣との出会いだった。彼の優しさに触れ、いつの間にか彼の存在が自分の中で大きくなっていた。素直になれず、幾度となく彼に冷たく接してきたが、本当は彼の事が好きだった。その気持ちに気づいた時には、すでに自分の命は風前の灯となっていた。もう少し早く気づいていればという後悔もあったが、最期の力を振り絞って、彼を生き残す事はできた。希望は繋ぐ事はできた。そして、瑞鳳は静かに海の底深くに沈んでいった――

火炎と黒煙を上げながら『瑞鳳』は海底に没していく。そんな親友の最期の姿を見詰め、瑞鶴は今まで以上に泣き叫び、貝塚も苦しげに唇を噛む。だが、その時はちょうど『瑞鶴』も敵艦爆の猛攻に晒されており、『瑞鳳』の消えた海をずっと見詰める時間などなかった。

貝塚は悔しそうな目で敵機を睨んだ。

「ちくしょうッ！　よくも『瑞鳳』を・・・ッ！」

だが、米軍は感傷に浸る余裕すら与えようとはしなかった。

「敵機直上！　急降下！」

「くそおおおぉぉッ！　面舵十五度おおおぉぉぉッ！」

敵機は小沢艦隊最後の空母『瑞鶴』に集中して襲い掛かった。瑞鶴はすさまじい数で襲い掛かる敵機に悲鳴を上げた。その時、襲い

掛かってきた敵機群がすさまじい爆発と同時に吹き飛んだ。驚く貝塚と瑞鶴が視線を下げると、『瑞鶴』上空に向かって三式弾を連続して撃ち込む『伊勢』と『日向』がいた。

「伊勢さん！　日向さん！」

喜ぶ瑞鶴が見詰める先に浮かぶ『伊勢』の防空指揮所では伊勢が立っていた。命中弾や至近弾を受け、伊勢も自らの身体を血で汚していたが、その瞳の中の炎はより強く燃え盛っていた。

「なんとしても瑞鶴は守り抜くんやッ！　全艦『瑞鶴』上空の敵機を一斉砲撃ッ！　撃てぇッ！」

伊勢の号令に合わせるかのように、各艦一斉に『瑞鶴』上空の敵機を砲撃した。すさまじい対空砲火に次々に敵機が炎に包まれて落下する。

瑞鶴は自分の上空で起きる連続爆発と、それで撃ち落とされる敵機を見詰めて歓喜した。

「みんなが、私を守ってくれてる！」

「あぁ、お前は一人じゃないんだ。こんなにもいい仲間がいるじゃないか」

「はいッ！」

瑞鶴は満面の笑みを浮かべた。その笑顔に貝塚はうなずくと、再び操艦に戻る。

一時は各艦の一斉砲撃で『瑞鶴』は守られたが、他の艦も敵機に襲われているのでそんな奇跡は二度も起きる事はなく、『瑞鶴』はすさまじい敵機に襲われた。

大量の敵機が一斉に、しかも連続して襲い掛かる。そのすさまじさに、『瑞鶴』の回避も限界に近くなっていた。

「敵機急降下！」

「面舵いっぱぁぁぁいッ！」

猛爆撃をする敵機を貝塚は避け続けた。だが、先程まで『瑞鳳』と二隻で分配していた敵機が一隻に集中した事でもはや回避できる限界を超えてしまった。

「艦長！　左舷から魚雷三本！」
「何だと！？」
瑞鶴の悲鳴に貝塚は驚愕する。刹那、『瑞鶴』左舷に三本の魚雷が命中。艦が大きく揺れ、瑞鶴の体から大量の血が噴き出す。
「ぐがあああああぁぁぁぁぁッ！」
「瑞鶴ッ！」
「敵機急降下！」
貝塚の一瞬の隙を突いて敵機が急降下。爆弾を投下し、そのうちの三つが甲板を砕いた。
絶叫する瑞鶴。だが、敵機はさらに攻撃を加える。
ズドンッ！　ドカンッ！　ドゴオオオォォォンッ！
すさまじい爆音が響き、甲板は一瞬にして破壊され、右舷も左舷も大量の魚雷が命中して水柱を上げた。
『瑞鶴』は一瞬にして炎上。数分後には機関が停止した。
『瑞鶴』の沈没は確実と判断したのか、敵機は燃える『瑞鶴』を一瞥して空の向こうに去って行った・・・

敵機が去った後、指揮所でぐったりとしている瑞鶴に貝塚が近寄った。
瑞鶴は自らの血の海に力なくぐったりと倒れていた。
「瑞鶴・・・すまない」
「・・・艦長」
瑞鶴は血まみれの体で貝塚に抱き付く。
小さな身体を真っ赤に染め、ぐったりとしている瑞鶴を、貝塚はそっと抱き締めた。そんな彼女に、貝塚は涙を流す。
「すまない・・・ッ！　俺は、お前を守ってやるって誓ったのに・・・ッ！」
「・・・艦長・・・もういいですよ・・・これでやっと・・・戦いをしなくて・・・いいんですから・・・それに・・・姉さんの所に・・・逝けるんで・・・すから・・・」

瑞鶴の表情は死際だというのに穏やかなものだった。
もはや痛みはなく、ただ意識を保っているのがやっとだというのに、瑞鶴はそれをやってのけていた。貝塚の存在が、自分を大きく支えていた。
涙を流す貝塚を見詰め、瑞鶴は小さく微笑んだ。
「・・・艦長には・・・感謝してます・・・やっと・・・私を戦いから・・・救って・・・くれたんですから・・・」
「バカな事を言うなッ！　俺は艦長だ！　艦を守る役目の俺が、お前をこんな目に遭わせたんだぞ！　怒ってくれよ！」
「・・・どうしてですか？　愛する人を・・・怒るつもりはないですよ」
瑞鶴の優し過ぎる笑みに、貝塚はうつむく。その胸を埋め尽くすのは、彼女を守れなかった悔しさと自責の念だった。
「俺は・・・お前を守れなかった・・・約束を守れなかった・・・」
「・・・もういいんです――それより艦長。早く総員退去を・・・」
「あぁ、わかった」
貝塚は副長に総員退去を命令した。
しばらくすると、左に大きく傾いた甲板に兵達が集まり、右舷に立って日本の方に向かって万歳三唱や《君が代》を歌い始めた。
貝塚は続いて軍艦旗と小沢中将の中将旗をマストから降ろした。
小沢はすでに『瑞鶴』に横付けされた『大淀』に移動していた。
小沢は移艦を拒んだが、貝塚の命令で力ずくで移艦させたのだ。
総員退去、軍艦旗降下、小沢長官の移艦。貝塚は『瑞鶴』艦長としての役目を全て終えた。残るは・・・
「副長。最後の仕事だ――キングストン弁を開いてくれ」
――キングストン弁。それは艦船の重要なバルブである。その為、戦時中は使用不能になった軍艦の処分に使う自沈装置でもあった。
「艦長・・・」
副長は貝塚を見詰める。そんな彼に、貝塚は悲しげな笑みを向ける。

「いつまでもあいつを苦しめる訳にはいかないからな」
「・・・わかりました――艦長は？」
「――俺は『瑞鶴』に残る。あいつを一人では逝かせない」
「・・・わかりました。では」
副長は敬礼して去った。残された貝塚は急いで防空指揮所に登る。
そこにはぐったりとしている瑞鶴が横になっていた。
「・・・艦長？」
貝塚に気づいて瑞鶴は身体を起こそうとしたが、もはや彼女には起き上がる力も残っておらず、身体が起き上がらなかった。
「無理するなよ・・・もう、終わったんだからさ」
貝塚はそう優しく微笑むと、そんな瑞鶴の横に腰を下ろした。
「・・・キングストン弁・・・開いたんですね」
「あぁ、これ以上お前を苦しめても仕方がないからな。まぁ、俺の勝手だが」
「・・・いえ、ありがとうございます」
瑞鶴は苦しいのを我慢して笑顔を向けた。そんな彼女の笑みに貝塚も笑い返す。しかし、瑞鶴は少し悲しげな目になった。
もう、お別れの時間だ・・・
「・・・艦長・・・今までありがとう・・・ございました・・・もう付き合わなくて結構です・・・早く・・・艦長も退艦を――」
「俺は残る。お前を一人では逝かせん」
貝塚の言葉に瑞鶴は大きく目を見開くと、続いて顔を真っ青にし、慌てて貝塚に詰め寄る。
「艦長ッ！　ダメです！　艦長は生きてください！」
「断る。俺は『瑞鶴』に残る。お前一人では逝かせない」
「そんなのダメですッ！　は、早く退艦を――ゲホゴホッ！」
瑞鶴が苦しそうに咳き込むと、貝塚はそっと抱き締めた。そんな彼の行為に驚き、顔を上げると、そこには彼の優しげな笑みがあった。
「こんな弱ったお前を置いて、俺一人だけ逃げられんよ」

「・・・艦長・・・ダメですよぉ・・・」
「何だよ？　俺と一緒じゃ嫌なのか？」
「そんな事ないですよッ！　一緒にいられてすごく嬉し――あ・・・」
自分の失言に瑞鶴は慌てて訂正しようとするが、貝塚はそんな瑞鶴に優しげに微笑むと、そっと抱き締める。
彼の腕に包まれ、瑞鶴は言葉を失った。
「なら、いいだろ？　俺はお前と一緒にいたいんだ」
「艦長・・・」
もう瑞鶴は何も言わなかった。何も言わず、ただ貝塚の胸の中で涙した。
涙を流して貝塚の胸の中で言葉にならない声を上げている。そんな彼女の頭を、貝塚はそっと撫でる。貝塚に撫でられると、瑞鶴は嬉しそうに微笑む。
「艦長・・・大好きですよ」
「・・・まさかお前がフケ専だとは思わなかったな」
「むぅ・・・艦長は老けて・・・ませんよぉ・・・とてもお若いです・・・」
「そんな事ないよ」
少し照れたような表情を浮かべる貝塚に、ふと瑞鶴は訊く。
「・・・艦長の奥さん・・・ってどんな人・・・だったんですか？」
「君代（きみよ）の事か？」
「・・・そうです・・・どんな方だったんですか？」
「うーん、すんごい美人で気配りの利く優しい女だったな」
「・・・何か・・・とてつもない敗北感を感じるのは・・・気のせいですか・・・？」
「まぁ、お前が勝てるような奴じゃないな。それに俺に惚れてたからな」
「・・・今の艦長の顔・・・とても殴りたい」
睨む瑞鶴に貝塚はイタズラっぽく笑う。だが、すぐに悲しげな顔

に、
「でもまぁ、そんなあいつも病には勝てなかったがな」
「艦長・・・」
瑞鶴は落ち込む貝塚にさらに身体を密着させる。貝塚もそんな彼女を優しく抱き込む。
しばし二人は沈黙していたが、時間はそれを待ってはくれなかった。
すさまじい大爆発と共に、『瑞鶴』は急激に左舷に傾き始めた。甲板の左側は海に沈み、転覆に近い角度にまでなっていた。
「艦長・・・もう時間です・・・本当にいいんですか・・・？」
「何度も言わせるな。それに、もう降りれんしな」
「・・・そうですね・・・では・・・行きましょうか――貝塚さん」
「あぁ、行こう。散って逝った皆の所にな」
「・・・姉さんにも・・・会えますね」
「あぁ、そうだな」
瑞鶴は貝塚の胸の中で満面の笑みを浮かべるとそのまま目をつむり、永遠の旅に二人で出掛けた。
刹那、『瑞鶴』は少なくなった仲間達に見送られ、ゆっくりと艦尾から海中に引き込まれ、ついに、艦首に輝く菊花紋章の輝きも海中に消えた・・・

――空母『瑞鶴』、開戦以来常に日本海軍の前線で活躍し、その実力を遺憾なく発揮。常にその幸運力で幾多の戦いを生き抜いた歴戦の戦闘空母だった。そのすさまじい生涯は、太平洋戦争で日本機動部隊の初陣を飾り、数々の戦いを生き抜き、劣勢な温かいでも諦めず、姉や仲間を失いながらも必死に戦い抜き、そして、その壮絶な歴史に終止符を打つ事となった。日本機動部隊の歴史は『瑞鶴』に始まり、『瑞鶴』に終わったと言っても過言でない。日本機動部隊の行く所に『瑞鶴』あり。『瑞鶴』は日本海軍で最も戦局に貢献し、最も勇猛果敢な軍艦であった。そんな『瑞鶴』の艦魂は誰より

も心優しい普通の女の子であった。戦争なんかには向かない、普通の女の子。勇ましく頼もしい姉と心強い仲間と一緒だったからこそ、彼女は壮絶な戦争の中でも生きていられた。そして、自分の命が預けられる心から信頼する艦長に恋をし、自ら日本機動部隊の有終の美を飾り、また新たな戦いへと旅立った――

――あ、でも、天国に行ったら君代がいるかもな――

――えぇッ！？　それは困りますぅッ！　でも、負けませんから！――

――まぁ、無理だろうけどがんばりな――

――絶対絶対負けませんからあああぁぁぁッ！――

――瑞鶴の本当の戦い（？）は、これからだった・・・――

全空母沈没。

軽巡洋艦『大淀』に旗艦を移した小沢は任務を完遂した残存艦隊を率いて北方海域に脱出した。だが、いまだに『瑞鶴』『瑞鳳』の生存者を救出する二隻の駆逐艦や行方不明の『千代田』を捜す軽巡洋艦『五十鈴』などが戦闘海域に残っていた。そのうち駆逐艦『若月（わかつき）』が生存者を救出して小沢本隊を追い掛けて北上した。その後『五十鈴』も北上。その際残った駆逐艦『初月（はつづき）』に『千代田』の捜索を任せた。

――戦闘は、この瞬間に起きた――

闇の中、すでに『瑞鶴』沈没から四時間が経った今も漂流している生存者を『初月』は必死に救助していた。

燃料が少なく、もう『千代田』の捜索ができなくなった『五十鈴』は捜索を『若月』に任せて北方へ針路を取った。その時、二隻のまわりに無数の水柱が上がった。

「な、何ッ！？　一体どうしたの！？」
「ま、まさか・・・ッ！」
突然の事に慌てる少し奇妙な具合に跳ね上がって額を覆い隠すクセっ毛を小さくポニーテールでまとめた少女――初月に対し、五十鈴は顔を真っ青に染めて窓の外を睨み付けた。
月明かりの下の闇は何も見えない――その瞬間、闇夜の水平線の向こうに無数の光がほとばしった。次の瞬間、二隻のまわりに水柱が荒れ狂った。
「敵艦隊からの砲撃よッ！」
五十鈴の言葉に今度は初月が顔を真っ青にする番だった。
「敵襲ッ！」
二人に遅れて敵に気づいた『初月』艦長が急いで艦内に怒鳴る。
闇夜の向こうから一方的に砲撃する敵艦隊を睨み、五十鈴は悔しそうに唇を噛んだ。
「まさかこんな所まで来るなんて・・・ッ！」
悔しそうに唇を噛み、真っ白になるほど拳を握る五十鈴。
しばし驚愕で思考が停止していた初月ははっと正常に戻ると慌てて五十鈴に叫んだ。
「五十鈴さん！　あなたは早く逃げてください！　ここは私が食い止めますッ！」
初月の言葉に五十鈴は目を見開いて驚くと、力いっぱい首を横に振って彼女の言葉を拒否する。
「何言ってるのよ！　私も戦うわ！」
「無理です！　もうあなたには燃料が残ってないじゃないですか！」
「そ、それは・・・」
確かに、もう『五十鈴』には帰る分の燃料しかない。今ここで帰らないと燃料が足りずに日本に帰る前に海を漂流するしかなくなる。
悔しそうに唇を噛む五十鈴に、初月は真剣な顔で叫ぶ。
「五十鈴さん。私が敵を引き付けます。その間に逃げてください！」
「初月・・・」

五十鈴はしばし沈黙したが、無数の爆音に後押しされ、五十鈴は初月に向かって最上敬礼をし、静かにその場を去った。五十鈴が消えると、『五十鈴』は急いで撤退を始めた。

初月は水兵用の軍帽を深く被り直すと自分の定位置である第二主砲塔の上に瞬間移動し、敵艦隊の砲撃の閃光を見詰める。

この時『初月』を攻撃したのは米巡洋艦部隊（重巡洋艦三隻、軽巡洋艦一隻、駆逐艦十二隻）だった。

圧倒的な戦力を前にして一瞬顔が恐怖にゆがむが、一度パンッと頬を両手で叩いて気合を入れると、真剣な瞳で闇夜の敵艦隊を睨み付け、不敵に笑みを浮かべた。

「今や私達駆逐艦の英雄になった夕立さんや綾波さんも、こんな戦い行ったのでしょうね。私も、英雄に負けぬようがんばらくちゃね」

初月は腰に挿してある軍刀を鞘から引き抜いて構えると、金色に輝く月に剣先を向けた。

月の光を反射してキラキラと煌く刀を見詰め、初月の表情から完全に少女のものが消え――侍の顔になった。

ドガアアアアァァァァンッ！

すさまじい爆音と共に主砲が唸り、空中でまばゆい光を辺りに振り撒いた。

闇夜に一瞬にして神々しい光が灯り、闇夜の向こうに隠れていた敵艦隊の艦影が見えた。

『初月』が放った照明弾が、開戦の合図となった。それを見て、初月は咆哮した。

「日本海軍の誇る最強の対空砲を味わえッ！　主砲発射ッ！」

すさまじい速度で刀を振り下ろした刹那、『初月』の前部第一、第二主砲が火を噴いた。

六五口径三八式十ｃｍ高角砲――通称《長十ｃｍ高角砲》は自慢の長い砲身から砲弾を撃ち出すと狙った敵に砲弾の雨を降らせた。

敵の砲撃閃光とは明らかに違う光が敵駆逐艦を包み、次いで爆音が空気を震わせた。

初月は小さく笑みを浮かべると、再び剣を振り込んだ。
このままこの強力な敵艦隊を野放しにすれば、『五十鈴』は危険に晒される。本隊だって被弾して速度の遅い艦もいる。追いつかれれば、それこそ一巻の終わりである。
十六対一という絶望的劣勢な状況の中、仲間を守る為、殿となった『初月』は全速力で海を翔けた。

これが二時間にも及ぶ大海戦になるとは、日米の将兵誰もが思わなかった。

――駆逐艦『初月』、日本海軍が生み出した最新鋭防空駆逐艦である秋月型駆逐艦四番艦。味方を助ける為、圧倒的優勢な米巡洋艦部隊十六隻とたった一隻で互角の戦いを行い、敵艦隊に大損害を与え、二時間にも及ぶ戦いで時間稼ぎをし、見事『五十鈴』を逃がす事に成功し、その後瓦礫と化した『初月』は午後八時五七分、激闘の末に見事殿を完遂させ、ついに力尽き、海の底深くへと沈んでいった――

小沢艦隊は空母四隻、軽巡洋艦一隻、駆逐艦二隻を失ったが、当初の目的であったハルゼー機動部隊を北方に吊り上げる事は成功した。
栗田艦隊がレイテに突入する為の駒は全て揃った。
小沢艦隊は残存艦艇を率いて呉に撤退した。
小沢艦隊の誰もが栗田艦隊のレイテ突入を信じて疑わなかった。
だが、小沢艦隊の犠牲は、最悪の形で裏切られる事となった。

第十二章　第十三節　瑞鶴と瑞鳳　戦乱の戦姫の壮絶な最期（後書き）

えっと、お気づきの方がいるかもしれませんが、最後の初月のシーンは艦魂年代史外伝短編《初月絶対防衛戦》から引用しています。これから先こうして引用が多くなると思います。そしたらたぶん短編のいくつかが存在意義を失って削除される可能性もありますが、その際は必ずこの本編で代わりをしますので、その辺はどうかご了承ください。

さて、ついに空母全滅。
小沢艦隊は多大な犠牲を払いましたが、敵機動部隊を引き付ける事には成功しました。
瑞鶴は真珠湾攻撃――開戦からずっと日本海軍の最前線で戦い続けた日本海軍有数の戦姫であった。
そして瑞鳳も、ミッドウェー沖海戦で機動部隊が壊滅した後は主力空母として常にその身を前線に置き続けた。
そんな二人の戦姫は、見事にその責務を完遂させ、深い海の底に没した。
瑞鶴達の為にも、武蔵や山城達の為にも、大和達栗田艦隊はレイテに突入しないといけなかった。
必ず成功させる。
作戦の成功はもう目前と迫っていた。
だが、後に《謎の反転》と言われ、非難の対象となる出来事が、大和達の希望を脆くも打ち砕く。
次回第十二章、レイテ沖海戦編終了です。
多大な犠牲を払って得たものはあったのか。
大和と翔輝、それぞれの想い、そして・・・

第十二章　第十四節　栗田艦隊謎の反転　連合艦隊の壊滅（前書き）

ついに瑞鶴達も命を落とし、彼女達や武蔵、山城達の想いを胸に、大和達はレイテ湾に突撃しようとしていた。
もはやレイテ湾に上陸した敵上陸部隊や輸送船団は、『大和』の巨砲から逃れる術はなかった。
誰もが作戦の成功を信じたまさにその時、太平洋戦争史上類を見ない展開が大和達を待ち受けていた。
残された大和達の想い、揺れる艦隊司令部、そして、翔輝は・・・
怒涛の第十二章レイテ沖海戦編もついに完結です。

第十二章　第十四節　栗田艦隊謎の反転　連合艦隊の壊滅

「バカなッ！　レイテはもうすぐだッ！　今さら何を考えているッ！」

時系列は少し遡る。

小沢艦隊がエンガノ岬沖でハルゼー機動部隊の猛攻を受けている頃、第一遊撃部隊旗艦『大和』の艦橋で、第一戦隊司令宇垣が、相手が上官であることもかまわず大喝を発していた。

「あと二時間ッ！　あと二時間走れば、レイテ湾に突入できるんだぞ！　ここまで来て、一体何を迷うのだ！」

相手は――栗田であった。

宇垣が怒るのも無理はない。二四日の空襲で艦隊の半数を失い、宇垣自身も僚艦『武蔵』を撃沈されている。あの熾烈な空襲を耐え、やっとのことで作戦目標であるレイテ湾の目前までやって来たのである。そんな時にいきなり、なんの前触れもなく、栗田は艦隊の反転を命じたのである。

宇垣は、栗田が臆病風に吹かれた事を確信していた。

栗田が臆病風に吹かれたのは今回だけではない。

一度目は開戦初頭。潜水艦が北上する英東洋艦隊を発見し、味方の水雷戦隊が栗田の部隊に宛てた《貴隊ト合同ニテ敵ノ撃滅ヲ願ウ》という無電を無視して走り続けた。

二度目はミッドウェー海戦の時である。

少数機の空襲を受けただけで混乱し、持場を離れて逃げまくった栗田が戦場に復帰したのは、ミッドウェー作戦の中止が決定してからであった。あまつさえ、『最上』と『三隈』を衝突させ、『三隈』を喪失するという失態を演じている。

三度目は高雄型重巡洋艦四隻を率いてラバウルに進出して空爆され、艦隊に損害を出した上すぐに逃げ帰ってきた。

いくらヘンダーソン飛行場の砲撃を成功させたとはいえ、それ以

外はこんな失態を起こしまくっている。
そしてまた、この男は失敗をやらかそうとしている。
己の保身を計る為、部下の死を全て無駄にしようとしている。
臆病や卑怯を生理的なまでに嫌う、九州に親交の多い九州の気風あふれる宇垣には、到底耐えられなかった。
怒鳴る宇垣を栗田は冷静過ぎる瞳で見詰める。
「小沢艦隊の囮作戦は失敗したらしい！」栗田は続けた。
「現に今まで一度も、作戦成功の報告が入っていないではないか！」
そうなのである。この時、何故か栗田の元に小沢の発した《作戦成功》のあの電文も連合艦隊司令部から送られた激励文も、栗田の元には届いてはいなかったのである。この栗田の考えを鈍らせた謎の電波障害は今も謎のままである。
「そして今、ハルゼーの機動部隊が、我々の背後に迫っている！」
この時、南西方面艦隊司令部から無電があり、栗田艦隊の後方に敵機動部隊がいるとの報告が入っていたのだ。だが、これは全くの幻で、敵機動部隊もなく、南西方面艦隊司令部が打電した事実もないものだった。これがレイテ沖海戦で栗田艦隊の謎の反転と同じく謎とされている一つだ。
しかし、そんな事を栗田以下艦隊将兵は知る由もない。
「状況がどう変わろうとも！　我々の任務はレイテ湾に突入する事だ！」
宇垣は吼えた。
レイテに突入する。それを成功させる為に艦隊の多くの艦艇や将兵、西村艦隊も命を懸けて、自分達はここまで来たのだ。それをこんな所まで来てやめる訳にはいかなかった。
だが、栗田の決意は変わらなかった。
栗田は深い沈黙の後、暗い海を見詰め、静かに口を開いた。
「・・・艦隊針路、三三〇度」
「長官！」
宇垣が叫ぶが、艦内に見張り兵の復唱が空しく響く。

「信号！　艦隊針路、三三〇度！」
「長官！」
もはや宇垣の言葉は意味を成さなかった。
森下は愕然としてその場に崩れた。それは翔輝と大和も同じ事だった。
多くの仲間を失いながら、必ずレイテに突入すると決意してここまで来たというのに。しかも、目的地はもうすぐという所まで来て反転だなんて・・・そんなの・・・ッ！
「ここまで来て、武蔵や山城、扶桑さんの仇も討てないなんて・・・ッ！」
翔輝は愕然としてその場に崩れた。悔しそうに瞳からは涙が流れ出し、胸の中には悲痛な悔しさが溢れる。その横でも大和が力なく崩れて泣いていた。
「武蔵は・・・一体何の為に命を懸けたのよ・・・これじゃ・・・無駄死にじゃない・・・」
大和の表情は怒り、悲しみ、悔しさなど色々な感情が渦巻いていた。
栗田の命令に各艦の艦長や司令官達が抗議電文を送って来たが、栗田は断固として命令を撤回する事はなかった。
混乱が広がる中、司令長官に逆らう事などできず、各艦は南に向けていた艦首を悔し涙を流しながら北へ向けた。そして『大和』も、針路を北に向け、目的地であるレイテに艦尾を向けた。
反転を開始した艦隊を一瞥し、『大和』の艦橋では宇垣が栗田に迫り続ける。宇垣以下の第一戦隊司令部や森下以下『大和』司令部が一貫してレイテに突撃する事を強く望み抗議の声を上げるが、栗田以下第一遊撃部隊司令部は一貫して反転を命令した。だが、栗田の部下達にも数人レイテに突撃する事を望む者もおり、艦橋は任務遂行派と作戦中止派に分かれて殴り合い寸前の言い争いが続いた。
「考え直せ栗田！」
怒鳴りつける宇垣はもはや彼を《長官》とは呼ばなくなっていた。

臆病風に吹かれて作戦を放棄した司令長官など、敬意を込める必要はない。

沈黙を貫く栗田に、宇垣は身体中から怒りの炎を奔出させて怒鳴る。

「貴様は艦隊将兵に惨い戦いをさせて逃げるつもりか!?　フィリピンが落ちれば日本は終わる!　それは貴様もわかっている事だろうが!」

「この状況でレイテに突入しても、被害の方が多くて戦果はない」

「そんなの関係あるか!　我々の任務はレイテに突入する事だ!　元々生きて帰れる保証はなかったのだ!　被害など恐れるものではない!」

「宇垣君!　私はお前の上官だ。命令を聞かんか!」

声を荒げる栗田に、宇垣は悔しそうに唇を噛む。切れて、血の味が口の中に広がる。

「・・・こんな時ばかり上官面しやがって・・・ッ!」

怒りでどうにかなりそうな宇垣を森下が止める。その表情は「もう諦めましょう」という、彼の悲痛な想いが込められていた。

「・・・帰りましょう・・・日本へ」

「森下・・・クソッ!」

宇垣は悔しげに床を蹴ると、部屋を出て行こうとする。こんな腰抜けと一緒の空気を吸いたくはなかった。森下はそんな彼について行く。

そんな二人を見詰め、翔輝は悔しげに唇を噛んだ。

武蔵は、山城は、扶桑は、その他多くの艦魂や各艦の死んでいった将兵達はなぜ死んだのか。それはレイテに突入するという目的を遂行する為だ。なのに、そんな彼らの想いを裏切りり、自分達は反転するしかない。

死んでいった奴らに、顔向けできなかった。

「武蔵・・・クソ・・・ッ!　クソォッ!」

翔輝は悔しげに拳を握った。その拳は真っ白に染まり、爪が皮膚

に鋭く喰い込む。
翔輝の頬を悔し涙が流れる。
腰に挿した武蔵の形見である軍刀を見詰め、翔輝は声を押し殺して涙した。
肩を小刻みに震わせ、怒りや悔しさ、悲しみなどが渦巻く胸を押さえ、涙を流し続ける。
そんな彼の横にいる大和は声を上げて泣いていた。
自分達は一体何の為にここまで来たのか。
レイテに突入し、日本を救う為だ。その為に、ここまで命懸けでやって来たのだ。
護衛戦闘機のない裸の艦隊で、親友に囮になってもらい、敵の機動部隊から発進して来る敵機と壮絶な死闘を繰り広げ、妹や、多くの仲間を失い、それでも、日本を守る為、死んでいった仲間達の為、ここまでやって来たのだ。
なのに、ここまで来て反転――逃げ帰るなんて・・・ッ！
・・・そんな事、できるはずがない。
仲間達が命を懸け、そして死んでいった。レイテに行く事を信じ、死闘の末に死んでいった。
妹の武蔵は、自らが囮になって艦隊の保全を行い、見事にそれを果たし、軍艦史上最多の空前絶後な被害を受けて沈没した。その痛みはどんなものよりも痛く、苦しかっただろう。なのに、彼女はそれを耐え抜いてひたすら前へ前へ進み続けた。艦が傾いても、速力が一桁を切っても、レイテを目指して走り続けた。そして、ついに力尽き、姉である自分に全てを託して、この世を去った。
妹の想いを、無駄にする訳にはいかない・・・ッ！
私は、必ずレイテに突入しなければいけないのよッ！
その瞬間、大和の身体を怒りが包み込んだ。
「おい大和！　何やってるんだ！」
突如翔輝の悲鳴に宇垣と森下が振り向き、森下が驚愕した。
――そこには、拳銃を構えた大和が立っていた。その銃口は栗田

に向いている。
「・・・今すぐレイテに向かってください！」
「大和！　落ち着け！」
必死に翔輝が止めるが、大和は暴れてそれを拒む。そんな二人（栗田には翔輝の一人騒ぎにしか見えないが）を見て栗田は見下すような目で見る。
「お前は頭がおかしいのか？　精神障害者がこんな所にいるもんじゃない」
「栗田！　貴様！」
宇垣が栗田に取っ組みかかった刹那、大和の銃口が栗田を捉えた。
「死ねッ！　愚将栗田！」
大和は迷う事なく引き金を引いた。
鋭い発砲音と共に放たれた銃弾は栗田に当たる直前に射線上に侵入した何かに当たり、赤く砕けた。それは・・・
「うぐぅッ！」
「大尉！？」
栗田の身代わりになったのは翔輝だった。
翔輝の右肩は赤く染まり、苦しげに顔をゆがめている。
「救護班を呼べ！」
森下がすぐに命令した。
突如目の前で肩が裂けた翔輝に栗田は驚愕する。
「い、一体何が？」
「大和の怒りだ！　貴様が撤退しようなどと言うから、妹を失った彼女がお前に怒りを放ったのだ！　それを長谷川が守ったのだぞ！　貴様ごときの為にな！」
宇垣の剣幕に押され、栗田は逃げるように艦橋から出て行った。
一方、翔輝に必死に声を掛ける大和の顔は真っ青だった。
「大尉・・・どうして・・・？」
「いくら理不尽な命令でも、上官の命令は絶対だ。守らなければいけない。あまつさえ、その上官を撃ち殺そうとするなんて、問題外

だ」

翔輝の言葉に大和、そして宇垣も冷静さを取り戻した。

冷静になった大和は翔輝の肩を不安げに見詰めたが、翔輝はそれに笑顔で応える。

「大丈夫だよ。ちょっとかすっただけだからさ」

「・・・そうですか？　でも、ごめんなさい」

「いいって。気にしないで」

その後、翔輝は適切な処置を受けてすぐに艦橋に戻った。だが、そこには栗田の姿はなかった。

栗田艦隊はレイテ目前で反転――撤退した。

栗田艦隊の反転で、レイテ突入の機会は永遠に失われてしまった。

フィリピンから脱出しようとする栗田艦隊だったが、敵はそう易々と逃がしてくれるはずがなかった。

逃げる栗田艦隊を米軍は連続空爆を行った。これにより重巡洋艦二隻が自沈に追い込まされた。この二隻のうち一隻は『鳥海』だった。これで、この捷一号作戦で高雄型重巡洋艦は全滅した。

その後も敵は基地航空隊と護衛空母部隊の艦載機で執拗に栗田艦隊に攻撃を加え続けた。

そして、悲劇は翌朝に起こった。

朝の気持ちいい風も今の彼らには関係なかった。

栗田艦隊は朝早くから空襲を受けていたのだ。

やはり敵機は巨大な『大和』を集中的に襲うが、森下の見事な操艦で『大和』は無傷だった。だが、爆弾や魚雷が当たらなくとも、敵戦闘機の機銃は命中し、機銃座で機銃を連射する兵や弾薬補給をしていた兵達は次々に真っ赤に染まって倒れた。それは甲板だけでなく防空指揮所も同じだった。

森下が気が付くと、指揮所にはもう半分も生存者がいなかった。

これでは敵機の動きの報告が鈍くなる。

森下は急いで伝声管を使って艦橋に叫んだ。
「手空き航海士！　誰でもいいから指揮所に上がってくれ！」
森下の叫びに航海士達は動揺した。
防空指揮所は弾除けなんてものはない露天である。敵機の機銃が乱れ飛び、あたれば死ぬ。
上に行けば死ぬ。誰も好き好んで死地には行きたがらないものだ。だが、
「僕が行きます」
「大尉！？」
挙手したのは翔輝だった。翔輝が艦橋を出ようとすると、大和が彼に抱き付いてそれを必死に止める。
「大尉ダメです！　防空指揮所なんて上がったら、死んでしまいますよ！」
「艦長が呼んでるんだ。誰も行かないなら僕が行くしかないだろ？」
「絶対にダメです！　絶対に行かせません！」
「離せよッ！」
翔輝は大和を無理やり引き離した。大和は慌てて翔輝の手を掴もうとしたが、伸ばした手は虚空を横切っただけだった。
翔輝は泣きそうな目で自分を見詰める大和の肩に手を置き、そっと笑みを向ける。
「大丈夫。僕は死なないよ。安心して」
「でも・・・ッ！」
「これは仕事だ。それに、僕ばっかり安全地帯にいる訳にはいかないよ」
その言葉には、重い自責の念が込められていた。
艦魂達に安全な場所はない。艦が傷つけば自らも傷つく。そこには自分の身を守るものなどなにもない。完全な危険。それに対し、自分は今までずっと艦橋という安全地帯にいた。武蔵達が命を懸けたのなら、自分も命を懸ける。そう決意した。
翔輝の決意に押され、大和は本当は嫌だがうなずいた。

「で、でも私も行きます！」
「それはダメだ。お前はここにいろ」
「嫌です！　私も一緒に――」
「ここにいろッ！」
突然の翔輝の激昂に、大和は涙目になって怯える。そんな彼女に翔輝は一言「ごめんね」と言って指揮所に上ってしまった。
残された大和は彼の安全を願うしかなかった。
指揮所に上がった翔輝は森下に声掛ける。
「艦長！　長谷川先任航海士来ました！」
「長谷川！？　お前が来たのか！？」
「はいッ！」
「ええぇいッ！　今は緊急時だ！　長谷川！　敵機の動きをよく見てろ！」
「了解ッ！」
翔輝はすぐさま敵機の動きを森下に知らせる。
「敵急降下爆撃機五機直上！　急降下！」
航海技術の天才と言われる翔輝の腕はすさまじかった。学校で習った敵機の動きを見て次の行動を予想するという能力と、その動体視力は通常の見張り兵の二倍から三倍の活躍をし、森下はそれを聞いて舵を回した。
翔輝と森下の連携プレーで『大和』は他の艦が損害を受ける中でも一発の爆弾を受ける事はなかった。
そして、次第に敵機の数が減って来た。
「よしッ！　これを乗り切れば終わりだ！」
森下の言葉に汗だくの翔輝にも笑みが浮かんだ。が、その瞬間敵戦闘機が指揮所に向かって機銃を放った。
森下はとっさに屈んで避けたが、翔輝は避ける暇もなく――撃ち抜かれた・・・
「ぐがあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
翔輝は悲鳴と同時に身体が吹き飛び、壁にぶち当たって倒れた。

彼の当たった壁は真っ赤に染まっていた。
「長谷川ッ！」
森下は叫んだが彼は手が離せず、他の見張り兵は皆戦死していた。
翔輝は頭とや数ヶ所に貫通弾を受けて真っ赤に染まっていた。
「あぐぁ・・・うぐっ・・・」
口いっぱいに広がった鉄の味を吐き出すと、床は真っ赤に染まった。
あまりの痛さに翔輝は声が出せなかった。
声にならない悲鳴を上げて悶絶する翔輝。だが、森下は操艦で手が離せず、頼みの綱の大和は艦橋にいる。
翔輝は薄れそうな意識を保つのが精一杯だった。
そして、翔輝が三回目の吐血を吐いた時、敵機は回れ右して去った。すぐさま森下は翔輝に駆け寄る。
「長谷川！　しっかりしろッ！」
森下の声に、翔輝は嗄れそうな声で「だ、大丈夫・・・です」と答えた。
「しっかりしろ！　今すぐ医務室に連れてってやる！」
森下はぐったりとしている翔輝を背負うと急いで艦橋に下った。
慌てて降りて来た森下に艦橋の者全員が驚いたが、その彼の背中でぐったりとしている翔輝を見てさらに驚愕した。
「た、大尉ッ！」
大和は悲鳴を上げて彼に駆け寄った。
三〇分前に優しげな笑みを向けてくれた彼は、今は自らの血で真っ赤に染まっていた。
「大尉！　大尉ッ！」
大和の声に、翔輝が反応した。
「・・・や、やま・・・どぉ」
いつもの優しい彼の声とは違う嗄れた声に大和はさらに錯乱する。
「大尉！　大尉ッ！　大尉ぃッ！」
必死に彼を呼び続けるが、翔輝はそこで気絶した。瞳を閉じた彼

に、大和は何も考えられなくなった。
「大尉ッ！　しっかりしてください！　大尉！」
もはや正常な思考が完全に停止している大和に森下が叫ぶ。
「大和！　俺と長谷川を医務室に転送してくれ！」
「大尉！　大尉ッ！」
「大和ッ！」
森下のすさまじい怒声にようやく大和は我に返った。そんな彼女に森下は再び叫ぶ。
「大和！　急いで俺と長谷川を医務室に転送しろ！　急げッ！」
「わ、わかりました！」
大和はすぐさま瞬間移動能力を発動して医務室に転移した。が、そこで見たのはまさしく地獄だった。
医務室に入り切らない負傷した兵達が通路に歩く隙間もなく倒れていた。
医務室と通路は真っ赤に染まり、血生臭い臭いが充満していた。特に医務室は大量の出血で床に十センチくらいの血が溜まっている。
「うぅッ！」
あまりにも悲惨な光景に慣れていない大和はひどい吐き気を感じた。
森下は隙間に足をねじ込んで医務室まで向かった。
「軍医！　軍医はいるか！？」
「艦長！？　どうされたんですか一体！？」
血で真っ赤に染まった白衣を着た男が駆け寄って来た。森下はすぐに背中でぐったりとしている翔輝を見せる。
「こいつの手当てをしてやってはくれんか！？」
「そ、そうは言われましてもこちらも手がいっぱいで――」
「艦長命令だ！　それにこいつは士官だ！　優先順位だろ！？」
「は、はいッ！」
艦長命令。
この言葉に逆らえる人間は軍艦には乗っていない。それに何事も

兵や下士官達よりも士官が優先されるのは事実。それが例え順番待ちしている兵達を押しのける結果になっても、それが士官の優遇なのだ。

翔輝はすぐに軍医直々の処置を受けてなんとか一命は取り留めたが、誰が見てもひどい重傷だった。軍医も「生きているのが不思議だ」と言っているほどだった。

翔輝は自室のベッドに寝かされた。その横には、心配そうに見詰める大和の姿があり、ずっと彼の手を握り続けた。

栗田艦隊は敵機の攻撃の中を突き進み、軽巡洋艦『能代』、駆逐艦三隻を失いながらもやっと敵機の空襲圏外に脱出した。

長門達が翔輝の重傷を知ったのもこの時だった。

長門、金剛、榛名、雪風は急いで翔輝の部屋に向かった。

「長谷川君！」

「長谷川ッ！」

「長谷川大尉！」

四人が駆け込むと、そこにはベッドで意識を失っている翔輝と泣き崩れている大和がいた。

四人はそのまま部屋に入ると、翔輝を見詰めた。彼女達の見詰める先にはベッドで静かに眠る翔輝がいた。そんな彼の頭には痛々しく包帯が巻かれていた。

長門は泣き崩れている大和に事情を訊く。

「一体長谷川君はどうしたの？」

長門の質問に大和は泣きじゃくりながら口を開く。

「せ、戦闘中に・・・防空指揮所に上がって・・・敵機の機銃に撃たれて・・・」

「敵機の機銃を受けたのかよ！　何でだよ！」

榛名が驚く。それはそうだ。翔輝は元々艦内にいる航海士だ。そんな彼がどうして指揮所に上がるという行為に出たのかが不思議なのだ。

「み、見張り兵が壊滅して・・・き、緊急に航海士が・・・指揮所に必要になって・・・それで大尉が」
「森下の命令でか!?」
「い、いえ、艦長の呼び掛けに・・・大尉が自分から志願して」
「こんのお人好しバカッ!」
榛名は怒りを露にして長谷川を睨む。だが、その瞳は涙いっぱいだった。
「大尉は誰かが犠牲なるのが嫌な方です。他の航海士達の代わりに自ら危険地帯に向かったのでしょう?」
雪風の質問に大和は力なくうなずいた。
だが、そんなお人好しな彼に榛名は激怒する。
「だからって自分を犠牲にする必要はないだろ!? 自己犠牲を生き甲斐にしている衛〇士郎かよッ!?」
「当たり前だろ。僕は彼の生き方を目標にしてるんだから」
突然の声に全員が驚愕して声の主を見詰めると、そこには不機嫌そうに顔をしかめている翔輝がいた。
「「長谷川ッ!」」
「長谷川君ッ!?」
「「大尉!?」」
驚く一同。翔輝は別段気にした様子もなくいつもの笑みを浮かべている。そんな彼に大和達は安堵の息を漏らす。
「い、いつからお目覚めに!?」
「今さっきだよ。榛名がギャーギャーうるさいから起きちゃったよ」
「何だよ! 俺のせいだってのか!?」
「それ以外の何ものでもないと思うんだけど」
「んだとゴラァッ!」
翔輝に殴り掛かろうとする榛名を大和と長門が必死に止める。そんな榛名を見て翔輝は一言、
「僕一応けが人なんだけど」
この言葉にさすがの榛名もおとなしくなった。いくら乱暴な榛名

でもけが人を殴り倒す訳にはいかない。
翔輝はそんな榛名を見て笑みを浮かべる。そんな翔輝の優しげな笑みに榛名は不機嫌そうに顔を背ける。その頬は少し赤らいでいた。
「おい榛名。なぜそこで赤くなるのだ？」
金剛が不思議そうに訊くと、榛名は慌てる。
「べ、別に赤くなってなんかねぇよ！」
榛名が不機嫌そうに言うと、翔輝がくすくすと笑う。
「わ、笑うなッ！」
「あはは、ごめんごめん――うぐぅッ！」
突如笑っていた翔輝の顔が苦しげにゆがんだ。
「た、大尉！？　痛むんですか！？」
大和が不安げに見詰めると、翔輝は痛みを堪えて無理に笑う。
「だ、大丈夫・・・心配しないで・・・」
「でも・・・ッ！」
今にも泣きそうな大和を長門が落ち着かせる。
「そんな大きな声じゃ長谷川君の傷に響くわよ？」
長門の言葉に大和は慌てて口を塞ぐ。そんな彼女のかわいい仕草に翔輝は優しく微笑む。
「だが、その傷では内地の病院に送られるのは確実だな」
金剛の言葉に大和の表情が凍り付いた。
「そ、そんな・・・ッ！」
「仕方ないわね。この傷は軍艦の医務科の限界を超えてるわ」
「確かに、こりゃ内地送りだな」
「これだけの大けがです。内地送りはしょうがないです」
翔輝が内地に送られるだろうという長門達に大和一人が食い付く。
陸に上がるというのは、艦から離れるという事である。そして、艦から離れるというのは、艦から出られない艦魂である自分と、彼を繋ぐ絆が失われるという事を意味していた。
「そ、そんなのダメですぅッ！　大尉が内地に行くなんて！」
「大和。長谷川君はけが人なのよ？　それも重傷」

「でも、でも・・・ッ！」
まだ納得できない大和に、翔輝は小さく微笑む。
「大丈夫だよ。これくらいのけがで内地には行かないよ」
「ほ、本当ですか！？」
喜ぶ大和を無視して榛名が冷たい視線を翔輝に浴びせる。
「お前自分のけがの具合わかってんのか？　軍医だって生きてるのが不思議宣言したんだぞ？　それが《このくらい》で済む訳ねぇだろ？」
「大丈夫だよ。僕昔から体は丈夫な方――ひぎぃッ！」
笑顔で言っていた翔輝に突如竹刀が飛来。傷口に直撃して死にもの狂いで悶絶した。
「あ、姉貴・・・？」
悶絶する翔輝を不敵な笑みで見詰める金剛。その手にはけが人を襲った凶器が握られていた。
「この程度の攻撃で悶絶するような傷で生意気な事を言うな」
「――いや、俺も今の一撃はないと思う。ほとんど一撃必殺の領域だし」
恐怖に榛名が顔を引きつらせている間悶絶する翔輝を大和が泣きながら心配し、長門と金剛が大声を上げて言い争いをし、それを見て雪風はおろおろするのだった。
翔輝がようやく回復した頃には金剛と榛名はもういなくなっていた。
「後はお願いね」
「大尉。お大事に」
長門と雪風も仕事でいなくなった。残された大和と翔輝はお互いに何も言わずに沈黙していた。
「なぁ大和」
先に声を掛けたのは翔輝だった。
「な、何ですか？」
「お前には悪いけど、やっぱり、僕は一度内地に戻るよ」

翔輝の言葉に大和の表情が曇る。
「そ、そうですよね。今は私のわがままよりも大尉の傷の治療を優先すべきですよね」
「ごめんね。肝心な時に役に立たなくて」
「そんな事ないですよ。内地に戻って傷を治して戻って来てください」
「ありがとう」
「そ、それで、どれくらいで帰って来れるんですか？」
大和は一番心配な事を怯えながら質問した。
「これだけの傷だからね。長くなると思う」
「長くなるって・・・に、二週間くらいですか？」
「そんなに早くないよ――たぶん、短くて二、三ヶ月ぐらいだと思う」
「そ、そんなに長い間ですか！？」
大和は予想をはるかに超える結果に愕然とし、その場に崩れてしまった。そんな彼女の頭を、翔輝はそっと撫でてやる。
「そ、そんなに長い間大尉と離れるなんて・・・嫌です」
「ごめん。ごめんね」
翔輝にできる事は、ただ大和に謝る事だけだった。
大和は真っ青な顔で涙を流す。そんな大和に何か言おうと翔輝が声掛けると、大和は「聞きたくないです！」と叫んで部屋を出て行ってしまった。
「や、大和――うぐぅッ！」
追い掛けようとした翔輝は完全に傷の事を忘れていた。突如襲った体中を針で刺されたような激痛に翔輝はバランスを崩してベッドから転げ落ちてその場に突っ伏した。
翔輝はそのまま動かなかった。だが、
「・・・ひぐッ・・・ううぅッ・・・」
小さな嗚咽が無音の部屋に響いた。
ゆっくりと顔を上げた先には机があった。そこには一つの水兵帽

が置いてあった。それは――水上の物だった。
水上は機銃に弾を補充する兵としてこの戦いに参加していたが、そこで戦死していた。
翔輝は再び床に倒れた。
この戦いで自分は大切な部下や仲間、親友を多く失った。なのに、自分は戦傷だけで済んでいた。それが、許せなかった。
「・・・水上・・・武蔵・・・山城・・・扶桑さん・・・ッ！」
翔輝は散って逝った者達の顔を思い浮かべ、自分に対する憤りを堪えて小さく泣いた。

翔輝の部屋から飛び出した大和は甲板にいた。
甲板では消火作業や戦傷者の手当て、死体の片付け、血だらけになった甲板の掃除などが世話しなく行われていた。
大和はそれらの行為を無視してただ一人で天を見上げていた。その表情は苦悶にゆがみ、眼の端からは一筋の涙が流れていた。
「・・・武蔵を失った私から・・・大尉まで離れたら・・・私・・・もう立ち直れないよぉ・・・」
大和は大事な妹を失った。
よく衝突してケンカばかりしていたが、彼女は自分にとってたった一人の妹なのだ。そんな武蔵を失い、大和の心は疲弊し切っていた。そこへ止めの一撃と言える翔輝の内地送り。もはや大和の精神力は限界だった。
「今なら・・・翔香さんを失った大尉の気持ち・・・痛いほどわかります・・・」
大事な妹を失った悲しみと苦しみ、今まで自分は何もわかっていなかった。それなのに、こんな苦しみを味わっていた翔輝に何もわかっていないのに生意気な事を言って、自分が情けなかった。
だが、武蔵だけはそんな翔輝の苦しみを理解し、ずっと彼の傍で彼を支えて来た。
「・・・武蔵・・・あなたの方が、ずっと大尉の事をわかってたん

だね・・・」

自分は翔輝のお荷物でしかなかった。武蔵の方がずっと彼の傍にいるのは適任だったのだ。

――どうして、私の方が死ななかったんだろ・・・？――

大和は武蔵が死んで自分が生き残ったのが悔しくて仕方なかった。こんな情けない自分は、翔輝の傍にいる資格はない。そう、思った。

大和はそのままどこかへ消えてしまった。

捷一号作戦は、最悪の形で終わりを告げたのだった。

日本海軍はレイテ沖の大海戦で、完膚なきまでに負けたのだ。

彼らは今こそ、全艦でZ旗の翻して挑んだ戦いに負けた意味を、体の芯から思い知らされた。

日は、没しつつあった。

その沈む夕日はあたかも、日本というの国家の終焉を、意味しているかのようだった。

栗田艦隊はブルネイへ、小沢艦隊は呉へ撤退した。途中艦艇を幾多に分散したが、主だった部隊先の目的地に向かった。その際、栗田艦隊は小沢艦隊が任務を完遂してハルゼー機動部隊を北方に誘致していたのを知った。

――同時に空母四隻全滅の悲報も知った。

大和は親友である瑞鶴を失った事が止めとなり、それ以降誰とも口を利かなくなった。

その後、ブルネイに戻る途中で『大和』は水葬を行い、水上の遺体もまた海に流された。そして、『大和』は重傷者を内地に送る事になった。

翔輝は士官であった為、一番最初に送られる事になった。

翔輝が『大和』を離れる日、大和は泣きながら必死になって翔輝

の内地行きを止めたが、長門達に説得されて泣きながら翔輝を見送った。

「必ず・・・戻って来てくださいよッ！　約束ですよッ！」

病院船に運ばれる翔輝は傷の痛みに耐えて小さく手を振った。

出港する病院船に大和は必死に手を振った。

海の向こうに消えて行く病院船と護衛駆逐艦の部隊を見詰め、大和は泣き崩れた。そんな彼女を、長門が後ろからそっと抱き締めてやった。

栗田艦隊のレイテ突入が失敗し、フィリピンはほぼ米軍の手に落ちてしまった。海軍に見捨てられた陸軍は強力な米陸軍に対して次々に拠点を落とされ、ついにフィリピン北部まで追い詰められてしまった。

後年レイテ沖海戦と呼ばれる歴史上最大の大海戦で日本海軍は戦艦『武蔵』『扶桑』『山城』、空母『瑞鶴』『瑞鳳』『千歳』『千代田』、重巡洋艦『愛宕』『摩耶』『鳥海』『最上』『鈴谷』『筑摩』、軽巡洋艦『能代』、駆逐艦六隻、潜水艦六隻を失った。残った艦艇も重巡洋艦『高雄』『妙高』『熊野』『利根』、駆逐艦一隻が大破。戦艦『大和』『長門』『金剛』、軽巡洋艦『矢矧』、駆逐艦一隻が中破。戦艦『榛名』、重巡洋艦『羽黒』、駆逐艦六隻が小破。その他の艦艇も傷だらけであった。

日本軍が米軍に挑んだこの最後の決戦に敗北した日本海軍はその主力艦艇のほとんどを失い、組織的な能力を失った。

これ以降、日本と南方資源地帯との補給路を断たれた日本海軍は艦艇を動かす石油も不足し、ほとんど軍港や泊地から動かなくなってしまった。

第十二章　第十四節　栗田艦隊謎の反転　連合艦隊の壊滅（後書き）

このレイテ沖海戦で連合艦隊は事実上壊滅し、以後特攻作戦が執られるようになりました。
大和達、そして武蔵や瑞鶴達の想いは一体何だったのか。
そして、大怪我を負った翔輝や残された大和達に待ち受ける出来事とは。
次回、第十三章はいよいよ１９４５年に流れ込み、一気に大和の特攻までを駆け抜きます。
ついに《艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～》も終わりに近づきつつあります。
まだまだこれから先も続きますが、応援よろしくお願いします。
意見・感想お待ちします。

第十三章　第一節　瑠璃の想い　珊瑚の不安　瑪瑙の涙（前書き）

新章である第十三章は坊の岬沖海戦までを描きます。
その第一節である今話は大怪我を負って大和達の手の届かない陸に上がった翔輝の話です。
久しぶりに瑠璃、珊瑚、瑪瑙が登場します。

第十三章　第一節　瑠璃の想い　珊瑚の不安　瑪瑙の涙

内地に戻った翔輝は呉の軍病院に移されたが、そこへ初日から瑠璃が殴り込みをし、ほとんど拉致の形で翔輝を霞家に連れてってしまった。

翔輝が連れて来られた霞家の一室には瑠璃が金に糸目をつけずに最先端の医療機器と名医が集められていた。それを見て翔輝は半分感心し、半分呆れたてため息した。

「翔輝様はここで傷の療養をしてくださいですわ」

瑠璃はそう言って寝巻に着替えた翔輝を布団に寝かせた。頭には包帯が巻いてあり、傷が痛くないように枕を調整する。相変わらず高そうな布団だなぁと翔輝は思った。

「京都にいる瑪瑙姉様と珊瑚様ですが、翔輝様がケガをしたと伝えましたら全速力で来ると言ってましたので、私専用の自家用機を迎えに行かせましたわ」

「じ、自家用機って・・・」

相変わらず霞家の資産力は桁違いだ。翔輝は知らないが、霞家は空襲に備えて市民が逃げ込める防空壕を各所に作っている。さらに霞家本家を守るとして、私部隊を保有し、大量の高射砲や機銃を領地の各所に配置している。着実に、霞家は要塞化していた。

ちなみに自家用機とは陸軍から買い取った一〇〇式司令部偵察機である。最高速度は六〇〇キロを超える高速偵察機で、その性能の高さから海軍も借用しているくらいの優秀な偵察機である。そんなものを保有するなんて、霞家はすごいとしか言いようがない。

その後医師の診察を終わらすと、医師は去り、部屋には翔輝と瑠璃だけが残された。だが、瑠璃はうつむいたまま何も言わず、翔輝もどう声を掛ければいいかわからず、部屋には深い沈黙が流れていた。それに耐えられなくなり、翔輝が話し掛けようと身体を起き上がらせる。

「あ、まだ寝ていなくてはいけませんわ」
瑠璃はすぐさま翔輝を再び横にする。翔輝はそれに従い横になる。するとまた沈黙が舞い降りた。
翔輝がこの状況をどうしようかと模索していると、瑠璃の方が声を掛けてきた。だが、それはいつもの彼女と違い、とても弱々しげな声で、その白い頬を涙が流れた。
「・・・無事で良かったですわ」
涙を流しながら言ったその言葉に、翔輝は何も言えなかった。
瑠璃は泣きながら袖の下から一枚の紙を取り出した。
「いきなりこんな手紙を送りつけて来て、一体翔輝様は何を考えていたんですの？　この手紙――どう見ても遺言にしか見えませんでしたわ」
泣きながら手紙を開いて翔輝に見せ付ける瑠璃に、翔輝は視線を逸らした。
「・・・そうだよ。それは遺言のつもりで送ったんだ」
「・・・やっぱり、そうでしたのね」
瑠璃は翔輝の言葉を予想していたのだろうが、やっぱり、と肩を落とした。
実は捷一号作戦発動の前に翔輝は瑠璃や瑪瑙と珊瑚へ手紙を送っていた。その内容は簡略すると今度の作戦は生きて帰れる保証はない。自分がいなくても元気で生きてほしいという――遺言だった。
うつむきながら声を押し殺して泣く瑠璃に、翔輝は「ごめん」と小さくつぶやいた。
「翔輝様のバカッ！」
突如瑠璃は怒鳴った。驚く翔輝が見たのは、涙でぐちゃぐちゃになった顔で怒りを露にしている瑠璃の姿だった。
瑠璃はケガ人である翔輝の襟首を掴んで無理やり起き上がらせ、至近距離で激怒した。濡れてキラキラと光る瞳の奥には、怒りの炎が燃えている。
「私をこんなに心配させて、翔輝様は一体何をお考えでしたの！？

私、この手紙を読んでからずっと心配していたのですのよ！　慌てて海軍の作戦計画の情報を集めたら、生きて帰れる事を前提にしていない突撃作戦だったんですのよ！？　私、心配で心配で・・・ずっと・・・心配して・・・ッ！」

もはや言葉にならない嗚咽をし、瑠璃はその場に泣き崩れた。

ようやく解放された翔輝は床に突っ伏して泣き続ける瑠璃を見て、ただ謝るしかなかった。

「ごめん・・・本当に、ごめん」

翔輝はそう言って――瑠璃をそっと抱き締めた。

瑠璃は翔輝の腕の中に抱かれると、今まで以上の泣き声を上げて泣き出した。それは、ずっとその小さな身体で耐えていた苦しみを解放するものだった。

泣き続ける瑠璃を、翔輝はずっと何も言わずに抱き締め続けた。

ずっと離れていた二人はこうしてお互いの温もりを感じ合えた。

長く苦しい時の中で、ようやく二人は再会できたのだ。

しばらく翔輝の腕の中で泣き続けた瑠璃だったが、落ち着きを取り戻すと自分が行っていた行為に赤面して慌てて翔輝から離れた。

そんな彼女を見て翔輝は小さく笑った。

昔と変わりなく優しげな笑みをする翔輝を見て、瑠璃も嬉しそうに笑った。

「でも、無事でなによりでしたわ」

「まぁ、無事って言えるような傷じゃないけどね」

医者も驚くほどの大ケガである。まぁ、日頃大和達と接していて過激な生活が長かったからか、それを感じさせないほどピンピンしているが。

「そ、そうでしたわ！」

慌てる瑠璃を見て、翔輝は再び笑った。だが、その笑みにどこか悲しげなものがある事に、十数年来の付き合いの瑠璃は気づいた。

そして、海軍の重要機密であったある情報を思い出す。

彼がケガしたのは捷一号作戦という決戦作戦で行われた海戦のも

ので、その海戦で数多くの艦が沈み、そして艦魂が死んだ。その中には彼が自分に紹介してくれた子達も含まれていた。

「翔輝様。元気をお出しくださいね」

瑠璃の突然の言葉に翔輝は不思議そうに首を傾げたが、すぐに彼女の気持ちを悟り、静かにうなずいた。

「ごめんね、心配かけさせちゃって」

「何言ってるんですの？　私と翔輝様の仲じゃないですの」

「そう言ってもらえると嬉しいよ。ありがとう、瑠璃」

「当然ですわ」

少しは大きくなってもやっぱりあんまりない胸をえっへんと言いたげに反らす瑠璃。

この時、翔輝は瑠璃がいて本当に良かったと思った。こんなにも優しい（たまに暴走するが）彼女がいたからこそ、彼はここまで生きて来られたのだ。

瑠璃は翔輝にじっと見詰められて恥ずかしげに笑っていたが、突如真剣な瞳で翔輝を見詰めた。その瞳に、翔輝も自然と真剣なものになる。

「今回の戦いで、翔輝様は多くのご友人を失われましたわね」

瑠璃の言葉に、翔輝は悲しげに瞳を揺らす。

「うん。同じ部隊にいた武蔵。別行動していた山城と扶桑さん。それに撤退してから沈没の報告が入った瑞鶴達。それと、僕の従兵の水上もこの戦いで死んだ――みんな、死んじゃったんだ」

「戦争ですから、仕方ありませんわ。私の友人の方ももう何人もお亡くなりなられてますから」

「・・・戦争だから仕方ないか・・・そんなの平然と言えるような時代なんだね、今の日本は」

「そうですわね・・・一体、私達はどこから間違った道に進んでしまったのでしょうか？」

「さあね。どこから間違ったかなんて僕にはわからない。でも、今僕達は生きてるんだ。それだけは何にも変わらない真実だと僕は思

う」

「そうですわね――でも翔輝様。翔輝様にそんな哲学的な言葉は似合いませんのよ？」

「ひどいなぁ・・・」

怒る翔輝に瑠璃は嬉しそうに笑った。その時、「失礼します」という声が響き、襖が開いて神鳴が入って来た。

「そろそろお昼です。お食事を運びましょうか？」

「お願いしますわ」

「かしこまりました」

その後運ばれてきた数々の高級旅館顔負けの高級日本料理に、翔輝は再びため息するのであった。

夕方、布団で横になる翔輝とその看病をする瑠璃がいる部屋の襖が何の合図もなしに突如勢い良く開いた。

「な、何ですのッ！？」

驚く瑠璃に対し、こんなに唐突な登場をするのは今目の前にいるこの少女以外にはあの二人ぐらいしかいない。

現れたのはぜぇぜぇと荒い呼吸をする翔輝の家族のような二人にして瑠璃のいとこ――瑪瑙と珊瑚だった。

「珊瑚、瑪瑙姉さん・・・」

予想はしていたがやっぱり驚く翔輝と、いきなりの登場に驚いたが二人だとわかると安堵する瑠璃。

「びっくりしましたわ。ようこそ瑪瑙姉様、珊瑚様」

瑠璃は立ち上がると優雅にお辞儀する。いくらわがままで暴走しがちな困った女の子でも、貴族なのでその作法はとても美しい。だが、二人はそんな瑠璃のあいさつにも何も答えない。困惑する瑠璃を通り抜け、珊瑚は翔輝に近づく。そして・・・

「あ、珊瑚久し――」

「こんのバカ翔輝いいいいいいいいいッ！」

「ごふぁッ！？」

突如跳躍した珊瑚は一応ケガ人である翔輝に向かって跳び蹴りを炸裂させた。もちろん寝ていた翔輝が避けられるはずもなく直撃。吹き飛ばされた翔輝はあまりの痛さに悶絶する。偶然か、傷は避けられたがすさまじい激痛。どうやら彼女も日々成長しているらしい――凶暴性が。

「翔輝様ぁッ！」

瑠璃が泣きそうな顔で慌てて悶絶する翔輝に駆け寄る。そしてキッと翔輝を蹴り飛ばした珊瑚に激怒する。

「珊瑚様！　これは一体どういうおつもりですの！？」

「うるさいわねッ！　このバカがむかつくのよッ！」

「ケガをされた翔輝様にあんな一撃必殺を加えて、死んでしまったらどうするんですの！？」

「あんな奴いっぺん死ねばいいのよッ！」

「翔輝様は今人間になりたいゾンビのごとく生きてるんですの！それを止める権利なんてあなたにはないですわ！」

「・・・お、お前ら・・・ッ！　しかも・・・瑠璃・・・訳わかんないそ・・・それ・・・ッ！」

相変わらず意味不明な毒舌が炸裂し、瑠璃と珊瑚は睨み合う。痛みが引き始めた翔輝は慌てて二人の仲裁に入ろうとする。が、突如その前に瑪瑙が立ちふさがった。しばらく見ないうちにまた美人に磨きが掛かっていた。だが、今はその美しい顔は見えない。彼女がうつむいているからだ。

「あ、ね、姉さん？　ちょっと、あの二人を止めたいんだけ――」

パンッ！

鋭い破裂音に、瑠璃と珊瑚も驚いて争いを終える。そんな二人が見詰める先には、頬を押さえる翔輝と振ったばかりの手を構えた瑪瑙がいた。

翔輝は驚いた。頬に走った痛みに、自分が彼女に平手打ちされた事に気づく。

頬を押さえながら、翔輝は驚きで大きく開かれた瞳で目の前の姉

を見詰める。
「ね、姉さん・・・？」
「・・・バカ」
瑪瑙は、瞳からぽろぽろと涙を流していた。
言葉を失う翔輝に、瑪瑙は「バカッ！」と声を上げて抱き付いた。
翔輝よりも身長の高い瑪瑙に耐え切れず、翔輝は尻餅をつく。そんな彼を、瑪瑙は泣きながら抱き締める。
「ね、姉さん・・・」
「翔輝のバカッ！　あんな手紙を送って・・・私がどれだけ心配したか・・・バカぁッ！」
瑪瑙はそれだけ言うと、声を上げて大泣きした。そして、強く、ここに翔輝がいる事を感じるように、強く抱き締める。
声を上げて泣く瑪瑙に、翔輝はどう声を掛けていいかわからず黙ってしまう。そんな彼に、珊瑚が声を掛ける。
「姉さん、その手紙をもらってからずっとあんたを心配してたのよ？　夜な夜な泣いて、毎日神社にお参りに行ったりして、あんたを心配してたのよ」
「そ、そうなんだ・・・ごめん・・・」
翔輝はしゅんとする。まさか、自分が出した手紙で彼女をここまで不安にしていたなんて思っていなかった。泣き崩れる姉を見詰め、翔輝は落ち込んだ。
「ごめん姉さん・・・僕・・・」
その時、瑪瑙は翔輝の後頭部に手を回して、そっと抱き締めた。
その時に見えた彼女の顔には、優しげな小さな笑みが浮かんでいた。
「でも、良かった・・・翔輝が無事で・・・本当に・・・良かった・・・ッ！」
「姉さん・・・」
「・・・あぁ・・・翔輝・・・翔輝」
「姉さん・・・」
「翔輝の温もり・・・翔輝の匂い・・・翔輝の味・・・」

「あ、あの姉さん・・・？」
「・・・翔輝好き・・・翔輝大好き・・・翔輝・・・もう放さない・・・」
「のわあああぁぁぁッ！　何してんの姉さんッ！？　着物脱ぐなああぁぁぁッ！」
「ああんッ！　翔輝の手が私の胸をを揉みまわして・・・ッ！」
「自分で押し付けてるだけでしょッ！？」
手に伝わる本物の胸の感触に翔輝は死にそうになる。そして、勢いに乗った瑪瑙はあられもない姿のままそっと翔輝の来ている着物の帯を緩め・・・
「何してますのぉッ！？」
瑠璃の強烈なハリセンが瑪瑙の頭に直撃した。助かった・・・
縷々と珊瑚が瑪瑙を押さえ付ける。慌てて翔輝は緩んだ帯を締め直しぞっとする。あの時の瑪瑙の目はマジだった。それに、伸びた手が一瞬だったが股間の辺りに触れていた。もしもう少し瑠璃のハリセンが遅かったらと思うと、気絶しそうになる。
一方、珊瑚と瑠璃に止められて瑪瑙はすこぶる不満そうな顔をしている。脱げ掛けていた着物は二人がピッチリと着せ直した。
「・・・もう少しで、翔輝と一つになれたのに」
「なってどうすんのよッ！？　翔輝は姉さんにとって弟みたいなもんでしょッ！？」
「いいえ、違うわ」
「え？　違うんですの？」
「えぇ――結婚を前提に付き合ってる恋人」
「ごふぁッ！？　何言ってんの姉さんッ！？」
「だって、私達はそういう関係じゃない」
ぽっと頬を赤らめる瑪瑙に対し、翔輝はもうすさまじい姉のブラコンぶりに頭を抱える。そんな翔輝を見詰める外野となってしまった二人の目線は冷たい。
「ちょっと二人とも！　何でそんな道端のゴミを見るような目で僕

を見るのッ！？」
「さぁ、ダーリン。一緒に夜のお仕事をして、いっぱい子供を生みましょう。そして円満な家庭を作って・・・」
「一応突っ込むぞッ！　結婚なしに何でその先に行くんだッ！？」
「今流行りのできちゃった婚？」
「流行ってねぇッ！　何これッ！？　久しぶりに姉に突っ込んだわッ！」
「やだぁ・・・突っ込んだなんて・・・でも、翔輝のなら受け止められるわ」
「何の話だあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
一応ケガ人（しかも医者も生きているのは不思議と驚くケガ）な翔輝だが、あまりにもツッコミどころ満載な会話に頭を抱える。そんな翔輝を、そっと瑪瑙が抱き締める。
「傷、痛むの？」
「いや、姉さんのせいなんだけど」
「わ、私のせいなのね？　だったら、私が癒してあげるわ」
「だから服を脱ぐなあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
どうやら瑪瑙もしばらく会わないうちにずいぶん成長したようだ――ブラコンが（もうここまで来るとブラコンという幅では納まらないが）。
暴走し始める瑪瑙を珊瑚と瑠璃が慌てて止め、翔輝は安堵して横になる。これでも一応ケガ人である。体力も極端に落ちている。
横になった翔輝に三人も静かになった。彼女達もすっかり忘れていたが、翔輝はケガ人である。ちょっとはしゃぎ過ぎた。
「翔輝、大丈夫？」
まるで寒空の下に捨てられた子猫のようにうるうるした瞳で心配そうに訊いてくる瑪瑙。年上なのに、そのかわいい仕草はまるで小さな女の子のようだ。
「ははは、平気平気。姉さんが暴走しなければ寝たら治るって」
「・・・」

「ちょっと姉さんッ！？　何首を吊ろうとしてんのッ！？」
翔輝が慌てて止めると、瑪瑙は今にも泣きそうな顔で、
「わ、私がいなくなれば、翔輝は元気になる」
「わかった！　もういじわるしないからッ！」
これでは普通に病院にいた方がしっかりと療養できただろう。
すっかり疲れた翔輝は再び横になった。そんな彼にこれ以上負担を掛けないように、三人は大人しくなった。できれば部屋を出て行ってほしいが、そんな事を言ったらまた瑪瑙が何かしそうなので、我慢する。と、
「お嬢様。お客様です」
襖を丁寧に開けて入って来たのは神鳴だ。そんな彼の言葉に瑠璃は不思議そうに首を傾げる。
「今日は来客者はいないはずですわ」
「いえ、加奈子様が」
その名前にピクリと瑠璃の眉が動いた。
「そうですの。通してよろしい」
「はい」
神鳴は礼をして去ると、お客様を連れてやって来た。それはすっかりかわいい女の子に成長した加奈子だった。加奈子はペコリと頭を垂れると、パタパタと翔輝に駆け寄って来た。
「翔輝お兄ちゃん！　ケガ大丈夫！？」
「うん、なんとかね。心配してくれたんだ。ありがとう」
翔輝は加奈子の頭を優しく撫でる。頭を撫でられた加奈子は幸せそうな笑みを浮かべて翔輝に擦り寄る。
「えへへ、翔輝お兄ちゃんに頭撫で撫でしてもらうの久しぶりだなぁ」
「そうだな。ごめんな、なかなか会いに来れなくて」
「ううん。翔輝お兄ちゃんは兵隊さんだもん。お国の為にがんばってるんだから、私文句は言わないもん」
笑顔で言う加奈子に、翔輝は複雑な心境になる。今の日本はこう

した戦争教育が徹底されている。その為、国民は軍の為に働いたりなどが多い。今年からは男が軍隊に取られて不足した人員を補充するとして女が軍需工場などで働く事になっている。それが今の日本なのだ。加奈子も、そんな戦争の犠牲者の一人なのかもしれない。

「ははは、僕はそんな大したもんじゃないよ」

「そんな事ないもん！　翔輝お兄ちゃんは士官さんだもん！　すごいよ！」

「ありがとう」

嬉しそうに笑みを浮かべる加奈子。そんな加奈子の肩を、そっと叩かれた。振り向くと、そこには優しげな笑みを浮かべた瑪瑙がいた。

「さぁ、少し翔輝は休ませた方がいい。あっちでお茶でもしよう」

「うん！　お兄ちゃん！　元気になったらまた一緒に遊ぼうね！」

「あぁ、約束だ」

「じゃあ行こっか」

加奈子は珊瑚に手を引かれて部屋を出て行った。そしてその後ろから瑪瑙と瑠璃が続く。

「では翔輝様。ごゆっくり休んでください」

「後でお菓子を持ってくる。その時は喜べ」

「ははは、期待してるよ」

二人も部屋を出て行き、先程までうるさかった部屋は静かになった。そんな部屋に敷かれた布団に寝る翔輝はふと顔を横に向けて縁側を見詰める。そこからは高めな地形に位置する霞家から夕暮れに照らされる呉の海が見えた。だがその海には彼女の姿はなかった。

捷一号作戦が失敗に終わり、敗退した艦隊はまだブルネイにいるだろう。そしてそこには残して来た大和達がいる。

榛名や金剛、長門達は心配はいらないだろう。だが、大和は心配だ。

今頃、彼女はどうしているだろうか。

自分がいなくなってしまって、悲しんでいるだろうか。

いや、きっと長門達がいるから大丈夫だろう。
彼女だって帝国海軍の軍人だ。心配は要らないだろう。
翔輝はそんな風に大和の事を思いながら、布団の横に置いてある軍刀を掴む。それは今は亡き武蔵の形見の刀だ。今の自分にとって、これは命と同じくらい大切なものだ。
「武蔵、大和を守ってくれよ」
翔輝はそう言って刀を抜いた。光を反射して銀色に輝く刀身は、彼女の強い瞳を思い出させる。
優しい子だった。
きっと、彼女ならいつまでも大和を守ってくれるだろう――いや、あいつならきっと僕の事ばかり構うに違いない。それはちょっと困るなぁ。
いつか必ず会える。そう信じていた。
大和にも、そして、武蔵にも。
翔輝は小さく微笑むと、傷のせいで極端に低下した体力の限界から静かに目を閉じて夢の中に入った。
夢の中でなら、武蔵にも、山城にも、陸奥や霧島、翔鶴や大鳳（かのん）にも会える。
あの笑顔に、近づく事ができる。
秋の風が広大な庭に生える紅葉を木を揺らし、葉を舞い上げた。空に舞った紅葉が風にのり、そっと部屋の中に入って来た。そして、眠る翔輝の横に置かれた武蔵の軍刀に一度触れ、布団からはみ出た翔輝の手にそっと重なった。
それはまるで、天国にいる武蔵がそっと翔輝の手を掴んだ・・・のかもしれない。

その夜、ずっと眠っていた翔輝は目を覚ました。さすがに夕方から寝ていたのでもう眠気はなかった。
困った・・・
時計を見るともう夜中だ。

電気を点けようとして手を伸ばしたが、その手はすぐに止まった。
「そうか・・・灯火管制がしかれてるんだった」
敵機による夜間偵察、夜間空襲、そして敵艦による夜間砲撃を警戒して一般家庭の灯火を規制する制度だ。自分が海にいる間に、日本は変わってしまった。
翔輝は仕方なく起き上がった。すると、月明かりが以外と明るく、明かりには困りそうもなかった。ふと横を見るとそこにはおまんじゅうが置いてあった。きっと瑠璃達が寝ている間に置いてくれたのだろう。夕食を食べていなかったので空腹のお腹にはちょうどいい。翔輝はおまんじゅうを頬張った。普通のよりもずっとおいしい。一体どれくらいの金額なのだろうか。
翔輝はそんな事を思いながらおまんじゅうを頬張ると、そのまま縁側に出て腰をかけた。
月がとてもきれいで、幻想的な光景だった。
いつも『大和』の防空指揮所から見ていた夜景と同じく、美しい星空だ。
こうして星空を見ている時が、一番落ち着く。
翔輝はしばし星空を見上げ続ける。と、
「翔輝？　あんたどうしたのよ？」
その声に振り返ると、そこには寝巻きをきた珊瑚が立っていた。
「珊瑚？　お前こそどうしたの？」
不思議そうに問うと、珊瑚はなぜか顔を赤くした。
「べ、別にあんたには関係ないでしょ」
「厠（かわや）か？」
「ち、違うわよッ！」
そう怒鳴りながらも、体を微妙にくねらせる珊瑚。その仕草に彼女の言葉がうそだとはすぐに見抜けた。すると、翔輝は意地悪な笑みを浮かべた。
「何だ？　まだ夜に一人で厠に行けないのか？」
「・・・ッ！」

その言葉に珊瑚はさらに顔を真っ赤にした。その反応に翔輝はおかしそうに笑った。

珊瑚は昔から夜中に厠へ一人では行けなかった。いつも瑪瑙を起こして行き、翔輝がいる時は翔輝を夜襲して行く。きっと今回もケガ人であるはずの自分を夜襲しに来たのだろう。

「ち、違うもん！　そんな訳ないでしょッ！」

そう言いながらもしきりに体をくねらせる。そろそろ限界が近いのだろう。

翔輝は仕方なくため息すると、小さく笑みを浮かべた。

「わかったわかった。付き合ってやるよ」

「ほ、本当ッ！？」

「やっぱり一人が怖いんだ」

「ち、違うわよッ！　あんたが一人でいるのがかわいそうだから付き合ってあげてるのよ！　勘違いしないでよねッ！」

「はいはい」

「ほ、本当にそうなんだからね！　夜中の厠に一人で行くのが怖い訳じゃないからね！」

「はいはいはい」

「べ、別にトイレの花子さんを信じてる訳じゃないからねッ！」

「はいはいはいはい」

「はいは一回ッ！」

「はい」

おかしそうに笑いながら歩く翔輝の後ろで彼の袖を掴む珊瑚。その姿はいつもの強気さはなく、まるで年齢相応の女の子そのものだ。

いつもと変わらない行動。だが、しばらく会わないうちにお互いは大人に成長していた。

翔輝はいつの間にか女らしくきれいになった珊瑚に、珊瑚はいつの間にか男らしくたくましくなった翔輝を少なからず意識していた。

「あ、あのさ、もう少し離れてくれない？」

昔はあまり感じなかった胸の柔らかい感触に頬を赤くしながら言

う翔輝。
「べ、別にくっ付きたくてくっ付いてる訳じゃないわよ！　あんたが歩きやすいように支えてあげてるんじゃない！　ありがたく思いなさい！」
顔を真っ赤にして怒鳴る珊瑚。そんな彼女に「はいはい」と呆れ半分、安堵半分といった具合の翔輝。
やっぱり、珊瑚は珊瑚なのだ。
二人はそのまま厠に着いた。もちろんここまでの道のりで幽霊や妖怪、お化けなんかは出て来ない。意外にも現実主義者な翔輝は全く怖くない。
「こ、ここで待ってなさいよ！　あんたが怖くないように配慮してるんだからね！　ぜ、絶対逃げんじゃないわよ！　いいわね！？」
「はいはい」
翔輝は苦笑いしながら厠に入る珊瑚を見送る。
自分一人だけの空間の中、翔輝は暗い廊下で黙って待っていた。
すると、
「ちょ、ちょっと、ちゃんといるんでしょうね？」
どこか不安そうな珊瑚の声が厠から聞こえ、翔輝は小さく笑った。
「大丈夫。ここにいるよ」
「だったら黙ってないでよッ！　何か話してくれないと不安になるじゃない！」
「そ、そう？　じゃあ何か話そうか。何がいいかな」
翔輝は何か話題を考える。だが、いきなりそんな事を言われてもなかなか出てくるものではない。腕を組んで考えていると、
「・・・ここに、いなさいよ」
小さな、弱々しい声が響いた。その言葉に翔輝は首を傾げる。
「ちゃんと待ってるだろ？」
「違うわよ。あんた、そのケガが治ったら、またあの子の所に戻るんでしょ？」
「あの子？」

「大和よ。翔香に似たあの女の子」
「あぁ、うん。もちろんそのつもりだよ。必ず戻るって約束したしね」
「・・・ダメ」
「え？」
扉の向こうから響くその小さく弱々しい声に、翔輝は驚く。すると、わずかに開いた扉の隙間からそっと差し出された手が翔輝の手を掴んだ。
「さ、珊瑚？」
「あんた、そんな大ケガして、まだあんな戦場に戻りたいの？」
「別に戦場に戻りたい訳じゃないよ。僕はただ――」
「そんなに、あの子の傍にいたいの？」
「・・・うん。心配なんだよ。それに、僕にとっては大切な子だし」
手を握る珊瑚の手がギュッと強くなる。
「・・・それは、あの子が翔香に似てるから？　翔香の代わりになるから？」
「違うよ。大和は大和さ。翔香とは違う」
「でも、大切なんでしょ？」
「うん。とっても大切な奴だ」
「その子の場所に、戻りたいの？」
「うん」
「でも、そこは戦場よ？　またケガをするかもしれないし、最悪・・・死んじゃうかもしれないのよ？」
「それはわかってる。でも、僕は戻らないといけない。みんなが、僕を待ってるから」
「・・・ここにだって、あんたを待ってる人がいるじゃない」
「珊瑚？」
「瑠璃も、姉さんも、あんたに無事でいてほしいの・・・私だって、あんたに死なれたら困るもの。だから、ここにいなさい。霞家の権力を使えば、あんた一人くらい軍役を解除できるわ。そしたら、ず

っとここにいられるし、生きられる。だから、ここにいなさいよ」
ギュッと、痛いくらい掴まれた手。その手は小刻みに震えていた。
そっとその手に、翔輝はもう片方の手をそっと重ねた。彼女を心配させないように。
「珊瑚の気持ちはわかる。僕だって死にたくはない」
「だったら――」
「――でも、あそこには僕の帰りを待つ奴らがいる。今までの戦いで、僕は多くの艦魂を亡くしてきた。武蔵も、死んじゃった。でも、まだ生きている子もいる。大和だって、まだ生きてるんだ。だから、彼女の為にも、僕は戻らないといけない。あいつ、僕がいないと何にもできないからさ」
翔輝は小さく笑みを浮かべる。
「だから、ごめんね」
「・・・謝らないでよ・・・バカ」
「・・・ごめん」
「・・・だから謝らないでよバカ」
その声の後、手は放された。そして中でゴソゴソという動く音が聞こえた後、扉が開いて珊瑚が出て来た。その表情はどこか落ち込んでいた。
「珊瑚・・・」
「どうせ、あんたはそう言うと思ってたわよ」
そう言うと、珊瑚は顔を上げた。その表情はどこか柔らかく、優しげなものだった。
「じゃあ勝手にしなさい。私は知らないから」
「そんな冷たい事言うなよ」
「私知らないもん――その代わり、死んだりなんかしたら、許さないからね」
「わかった」
「それと、女の子を泣かせたりもしたら跳び蹴りよ」
「善処する」

「よろしい。じゃあさっさと戻るわよ」
「はいはい」
翔輝と珊瑚は来た時と同じように歩く。もちろん珊瑚は翔輝の手をしっかりと掴んでいる。
「さ、さっさと行きなさいよバカ！」
「お、押すなよ！」
「いいから早く行きなさい！」
「ちょ、ちょっと――あれ？」
突如混乱の声を上げて立ち止まった翔輝に、珊瑚は驚愕する。
「な、何ッ！？」
「いや、今あの木の陰で何かが動いたような・・・」
「い、いやあああぁぁぁッ！」
珊瑚は悲鳴を上げて翔輝にも思いっ切り抱き付いた。そんな彼女に翔輝は顔を真っ赤にして驚く。
「ちょ、ちょっと珊瑚！」
「いやぁッ！　いやぁッ！」
「何しているのだ？」
その声に驚くと、外の木の陰にいた誰かが現れた。それは珊瑚と同じ寝巻きを着た瑪瑙だった。同じ寝巻きなのに珊瑚とはえらい違いだ。
現れた瑪瑙に二人は安堵する。すると、瑪瑙はそんな二人を見詰めジト目になる。
「なぜ、珊瑚が抱きついてるの？」
「えぇッ！？　ち、違うわよッ！」
「痛いなぁッ！　いきなり殴る事はないだろッ！？」
「珊瑚ッ！　私の翔輝に手を出すなッ！」
「って、瑪瑙姉さんも抱き付くなぁッ！」
「・・・あんた達」
「珊瑚！　何で人を道端のゴミを見るような目で見るのッ！？」
「あぁ、翔輝。私のかわいい翔輝。もう放さない」

「放してぇッ！」

翔輝に抱き付いて幸せそうな笑みを浮かべる瑪瑙と、そんな瑪瑙に抱き付かれて顔を真っ赤にして慌てる翔輝。そしてそんな二人を冷たい目で見詰める珊瑚、そしてそんな三人の大騒ぎに起きた瑠璃が二人の抱きつき現場を目撃し、激昂しながら翔輝を奪還。翔輝を巡って瑪瑙と大ゲンカを勃発させた。

そんな中で、翔輝は結局変わっていない三人に呆れながらも安堵した。

月明かりが、昔から仲のいい四人を優しく照らし上げていた。

第十三章　第一節　瑠璃の想い　珊瑚の不安　瑪瑙の涙（後書き）

今回は霞家三大輝石の中でも意外と出番が少ない珊瑚に重点を置いてみました。
珊瑚のかわいさが爆発だった今回の話。こうしておかないと人間側のヒロインが忘れられそうなので（苦笑）

えっと、実は今同時進行しているモンスターハンター小説の方が人気があって正直大変です。
アクセス数もこちらの二倍ですし、点数も急激な勢いでこの作品を追いかけて来ます。
あぁ、僕は確か戦争小説家だったのに、何でこんな事態に・・・
いつか、僕は戦争小説家からそっち系に転向するかもしれません・・・悲しい・・・

と、まぁ、最近の僕のグチでした。
まぁ、皆さんに好かれてるならいいですけど。
でも、昨日のユニークアクセス数、こっちが２７４アクセスなのに、向こうは８９６アクセス・・・
あぁ、なんか本気で転向の予感が・・・

ですがッ！　せめてこの作品を終わらせるまでは続けます！
次回は武蔵達を失って悲しむ大和を支える雪風と矢矧。そして久しぶりにあのキャラが戻って来るッ！？
乞うご期待！

→
ほとんどヤケクソです。

第十三章　第二節　翔輝のいない日々　もう会えない妹達

翔輝が内地に帰って数週間が経過した。

今日もブルネイに浮かぶ戦艦『大和』の防空指揮所では、大和が寂しげに日本の方向を見詰めていた。頭に巻かれた包帯はレイテ沖海戦で負ったケガだが、今はもうほとんど痛みはない。

そんな大和は時々ため息をしては、再び日本の方角を見詰め、またため息する。

最近の大和はこんな事ばかりだ。

そんな彼女の横には彼女の従兵である雪風立っていた。その瞳は心配の想いが込められていた。そんな雪風も姉の不知火と妹の野分を失っていた。

それでも、雪風は上官である大和の心配をしていた。

彼女も妹の武蔵、仲が良かった扶桑、山城、瑞鶴、瑞鳳を失い、そして大切な人である翔輝は負傷して内地に戻ってしまった。

特に、武蔵と翔輝がいなくなってから、大和のまわりは静かになってしまった。いつも翔輝を巡って武蔵とケンカをしていたからだ。

伊勢と日向も、今はシンガポールに待避している。

すっかり、静かになってしまった。

寂しそうな瞳で日本を見詰める大和。時折別方向を見るのは、日本とは反対側。その方向にはフィリピンがある。今もなお、大切な妹や仲間が沈んでいるフィリピン。

あの戦い、もしあの時反転をしなかったら、せめて、武蔵や瑞鶴、扶桑や山城の死を無駄にする事はなかっただろうか。そんな想いが胸の中を渦巻く。

自分が、あの時無理にでも翔輝を押しのけて愚将栗田を殺していれば、宇垣が指揮をし、何かが変わったのかもしれない。

その宇垣も、今は第一戦隊司令官を外されて軍令部に行ってしまった。

あの戦いで、全てが変わってしまった。
今は、後悔しか残されていない。
もう、何もかもがどうでも良かった。
日本の未来？
日本海軍の象徴？
この戦争の行方？
そんなものどうでもいい。
そんなくだらない事の為に、武蔵達は死に、翔輝は大怪我をした。
何もかもを、失ってしまった。
そう思ってしまう。
本当は、そんな事は思っていないのに。
祖国である日本は平和であってほしいし、日本海軍の象徴としてのプライドもあり、この戦争をどう終わらせるかも考えている。
なのに、何を信じ、何をすればいいかわからない。
レイテ沖海戦は、自分から全てを奪った戦いであった。
何も残っていない自分に、何ができるのか。
武蔵と約束した。
必ず日本を守る、と。
では、自分はその為に何ができるか――わからない。
自分は頭は良くない。参謀の武蔵がいたからこそ、自分は今までやって来れたのだ。
武蔵の存在は、あまりにも大き過ぎた。その穴を埋める事は、決してできない。
そして、翔輝の穴も・・・
思いつめたような表情で海の向こうを見詰める大和に、どう声を掛ければいいかわからずずっと沈黙していた雪風。するとそこへ、
「大和長官」
その声に二人が振り向くと、大和の部下にして雪風の直属の上官である矢矧がいた。柔らかなポニーテールが海風に優しく揺れる。
「どうされたのですか？　そんな浮かない顔をされて」

矢矧は優しげな笑みを浮かべると大和の横に立った。気持ちのいい風に揺れる髪を押さえながら、大和と同じ方向を見詰める。
「やはり世界最高の防空指揮所から見る光景は格別ですね。風も気持ちがいい」
「そ、そっかな？」
「そうですよ。ほら雪風。あなたもそんな所に立ってないでこちらへ来なさい」
「は、はい」
大和はそこで初めて雪風の存在に気づいた。そんな事にも気づかないほど自分の世界に入っていたのだ。
雪風は大和の横に立つと、ギュッと胸の前で両拳を握って大和を見詰める。
「や、大和司令！　元気出してくださいね！　武蔵司令の死や扶桑さんや山城さん、瑞鶴さんの死がお辛いのはわかります！　でも、司令にそんな顔はしてほしくないんです！　司令には、いつも笑顔でいてほしいんです！　私、司令の為なら何でもがんばります！」
「雪風の言うとおりです長官。長官は笑顔がとても素敵な方。そんな思いつめた顔は似合いませんし、我々もあまり見たくはありません。私でよろしかったら協力は惜しみませんよ」
「雪風・・・矢矧・・・」
目の前にいる自分の部下――もとい仲間の言葉に、大和の中で何かが変わった。
そうだ。
確かに失ったものは多い。
でも、自分にはまだこんなに仲間がいる。
自分を信頼し、ついて来てくれる仲間が。
だったら、まだ大丈夫だ。
まだ、希望は繋がっている。
二人の言葉に、そんな想いが胸の中で生まれ、それは笑顔となった。その笑みは、いつもの彼女の笑みそのものであった。

「ありがとう雪風、矢矧。あなた達は本当にいい部下よ」
「もったいなお言葉です」
「矢矧。あなたも能代を失って辛いのに、私に気を遣わせてごめんね」
「構いません。能代は戦争が嫌いでした。だから、きっと今は戦いのない、平和な天国で私を見守ってくれているでしょう。もちろん、阿賀野姉さんも」
「そうですね。私も武蔵が見守ってくれてる訳ないか」
「武蔵司令はどちらかというと長谷川大尉を見守ってるかもしれませんね」
「そうね」
雪風の言葉に大和は笑みを浮かべた。その笑顔は広がり、雪風と矢矧も笑みを浮かべる。
これが、大和の笑みだ。
まわりを幸せにする、そんな笑顔。
この笑顔を守りたい。矢矧はそう思った。
大和は元気を取り戻すと何か名案が浮かんだのか、嬉しそうな笑みを浮かべた。
「ねぇ、今からお茶にしない？」
「よろしいのですか？」
「もちろん。どうせ今は海軍の再建が最優先にされているだろうから仕事はないわよ」
「そうですね。ではお言葉に甘えさせていただきます」
「わ、私もいいんですか？」
「もちろんよ」
雪風はぱあっと笑みを浮かべると「ありがとうございます！」と大きな声で礼を言い、感極まったせいかそのまま勢い良く頭を下げ、壁に額を強打して悶絶した。そんな雪風に大和が慌てて駆け寄り、矢矧は目の前で起きたハプニングに口に手を当てて必死に込み上げる笑いを押さえていた。

その後、三人は防空指揮所を出て翔輝の自室でお茶会をする事になった。

海の浮かぶ戦艦『長門』の甲板の上を、長門は何をするでもなく散歩していた。だが、いつものように軍帽は被っていない。その代わりにあるのは頭に巻かれた包帯だ。レイテ沖海戦で負ったケガだ。まだ時折軽く痛むが、すでに被害部分の応急処置は終わっているので、長門のケガもだいぶ良くなっていた。

長門はふと居並ぶ戦艦部隊を見詰める。

自艦である『長門』に、『大和』『金剛』の計三隻。一週間ほど前に『榛名』は修理の為に一足先に内地へ戻った。さらにシンガポールにいる『伊勢』と『日向』を合わせても総計六隻。十二隻もいた戦艦は、半数にまで数を減らし、何より全艦傷だらけだ。

現在第二艦隊の各艦魂には第二艦隊旗艦である大和からの命令で全員が休暇を取っている。傷ついたもの、姉妹や仲間を失った者に対しての配慮だ。何とも彼女らしいが、その中には彼女自身も含まれている。

妹の武蔵や親友の瑞鶴、信頼していた先輩である扶桑よ山城の死。そして、翔輝の内地への帰還。全てが彼女を苦しめているはずだ。

自分に何かができればいいが、何もできないとわかっているからこそ、長門は苦しい。

そんな事を考えながらとぼとぼと甲板を歩いていた。ふと海を見詰めると、湾口に護衛の駆逐艦に守られた一隻の空母が姿を現した。それを見て長門の表情が明るくなった。

長門はすぐにその空母に向かって瞬間移動した。防空指揮所の上にタンと降りると、そこには少女が一人湾内に浮かぶ戦艦部隊をぼんやりと見詰めていた。そんな彼女に長門はそっと背後から近づき、思いっ切り抱き付いた。

「隼鷹！」

「ひゃぁッ！？　な、長門ぉッ！？　お、驚かさないでよ・・・」

そこにいたのはかわいいツインテールをした少女――隼鷹であった。少し見ない間に少し大きくなったような気がする。そして何より彼女は上は海軍の下士官服を着ているが、下はそれに合わせたヒラヒラの黒いスカートをしていた。さらにはツインテールを縛るゴムが新しくなっていた。今までのは簡素な白いゴムだったが、今の彼女は明るいピンクのゴムに左右二個ずつ金色の鈴が付いていた。動くたびにシャラン・・・と柔らかな音を立てる。

「あら？　隼鷹もイメチェン？」

「えへへ、似合うかなぁ？　龍鳳は似合うって言ってくれたけど」

「うん。とってもかわいいわよ」

「えへへ、ありがとう」

隼鷹は天真爛漫な笑みを浮かべる。その優しい笑顔は全く変わっていない。

隼鷹とはマリアナ沖海戦以降の再会だ。

被弾した『隼鷹』は内地に戻って修理を受けたが、載せる飛行機がなく内地でずっと待機していた。レイテ沖海戦にも搭載機がなく、さらには防御力と速力が低いという理由から囮作戦にも適用できずに待機していた。

隼鷹は空間から書類の束を発現すると、それを長門に渡す。

「頼まれた弾薬は全部運んで来たよ」

「そう、ありがとう」

今回の『隼鷹』の任務は先のレイテ沖海戦で消費した弾薬を前線部隊に供給する輸送作戦であった。この頃再度残存戦艦部隊によるレイテに突入作戦が検討されていた事もその要因の一つだ。その為、輸送船より速力や航続距離が有力な『隼鷹』が航空機格納庫に弾薬を満載して輸送する事になったのだ。しかしすでに先のレイテ沖海戦の敗北でフィリピン周辺の制海空権は米軍の手に落ちていた。そんな中を弾薬を満載した状態で航行するのは自殺行為に等しいものだった。何しろもし敵潜魚雷を一本でも喰らったら弾薬が誘爆し、一瞬で轟沈する可能性が高いからだ。

だが、そんな危険な任務を『隼鷹』はやり遂げたのだ。
立派な任務を終えた隼鷹を、長門は「よしよし」と頭を撫でた。
隼鷹は長門に頭を撫でられて嬉しそうな笑みを浮かべる。
隼鷹は長門から離れると、海に浮かぶ戦艦部隊を見詰める。そこには、見知った艦が数隻いなかった。
「武蔵達、がんばったよね」
ふとつぶやいた隼鷹の言葉に、長門は一瞬目を見開いたが、すぐに優しい笑みを浮かべる。
「えぇ、武蔵も、扶桑も、山城も、瑞鶴や瑞鳳達も、みんながんばったわ」
「無意味だった訳じゃ、ないよね？」
「それは・・・」
長門は言葉に詰まる。
あの戦いは失っただけの戦いだ。何も得たものはない。無意味で、無駄な戦いだった。みんな口々にそう言っていた。栗田中将を《愚将》と言う艦魂も少なくない。そして長門自身、あの戦いは無駄な戦いだったと思っていた。だが、不意向いた隼鷹の澄んだ瞳は、長門の心を見透かすように輝いていた。
「無駄なんかじゃない。米軍に見せ付けてあげたんだから。《我が大日本帝国海軍は死を恐れない》って。レイテ沖海戦で死んだ艦魂や人、神風特別攻撃隊の搭乗員の死だって、無駄なんかじゃないもん。武蔵や瑞鶴が命を懸けて戦い、そして死んだ。今度は私が命を懸ける番だもん。飛鷹や、翔鶴姉さんの仇を討つ為なら私――特攻でも何でもする」
隼鷹はそう言うと、クリッとした瞳をまるで刀のように鋭くさせた。その瞳には冷徹な、そして激しい憎しみの炎が燃えていた。その炎に、長門は恐怖した。
この子は本気だ。
そう本能で悟った。
隼鷹は、みんなの仇を討つ為、本気で己が命を投げ出し、特攻作

戦でも何でも受ける覚悟をしていた。
その鋭い瞳は、まるで小さな翔鶴を思わせた。
小さな身体から放たれるすさまじい迫力に気圧されて言葉が出ない長門。だが、その迫力はピタリと止み、隼鷹はいつものかわいい笑顔を向けた。
「まぁ、時が来ればの話だよ。今はまだその時じゃないもん」
隼鷹がいつもの彼女に戻ると、長門は安堵の息を漏らした。そして苦笑いを浮かべる。
「もう、あんまり驚かさないでよ」
「えへへ、さっきのお返しだもん」
そう言って隼鷹はその場でクルリと回った。スカートが回転してふわりと浮かび、ゴムに付いた鈴がシャラン・・・と柔らかな音を立てた。
「じゃあ私、大和の所に言って来るね！　バイバイ！」
隼鷹はピョンと防空指揮所から飛び降りた。そしてそのまま光に包まれて消えた。
海風が優しく吹く『隼鷹』の防空指揮所で、長門は風に揺れる髪を押さえながら悲しげな表情を浮かべていた。
「・・・あんな子供が命を捨ててでも戦うなんて・・・これが、私達が守ろうとしていた日本の姿なの？　教えてよ――陸奥」
天空を見上げそうつぶやいた長門の白い頬を、一筋の雫が流れた。

その頃、大和は矢矧と雪風と一緒にお茶会をしていた。
「もぉッ！　大尉はいつになったら帰って来るのよぉッ！」
「そ、そんな、まだ一ヶ月も経ってませんし、あの傷では当分は・・・」
「やだやだぁッ！　もう大尉がいない生活なんて耐えられないよぉッ！」
大和は泣きながら机をバンバンと叩く。雪風はそんな大和の暴走をあわあわと止めようとするが、うまくいかない。矢矧は大和が飲

んでいたラムネにアルコールが入ってないか疑った。
「長官、少し落ち着かれては？」
矢矧はいつに真にか立ち上がっていた大和に冷静に声を掛ける。
すると、
「矢矧は恋をした事がないからそんなに冷静なのよぉッ！」
大和はそんな涼しい矢矧が気に入らないのか、バンバンと机を叩きながら矢矧に食って掛かる。だが、それでも矢矧は紅茶で口を潤すと冷静に返す。
「私は軍艦の魂である艦魂です。戦う事が使命。恋などといったものはいりません」
「女は恋に生きるものなのよ！」
「第二艦隊旗艦ともあろう人が言うセリフではありませんよ？」
「ムキーッ！　何でわかんないのよぉッ！」
バンッバンッと激しく机を叩く大和。そんな大和を見て「言ってる事がめちゃくちゃですよぉッ！」と雪風が泣きそうな顔で叫ぶ。
と、その時だった。
「お邪魔しまぁすッ！」
その元気で幼い聞き覚えのある声に振り返ると、そこには隼鷹がいた。その元気な姿を見て、大和の顔がぱぁっと明るくなった。
「隼鷹！　久しぶり！」
「うん。大和も元気そうだね」
「まだケガが少し痛むけどね」
そう言って大和は頭の包帯を手で押さえる。
「大丈夫？」
「大丈夫よ。それよりあなたこそ――どうしちゃったの？」
大和はイメチェンした隼鷹に驚く。特にその視線はあまりにも目立つ黒いヒラヒラのスカートに注がれる。普段は絶対に見えない白く細い足がなんとも言えない女の子らしさを放っていた。これには大和だけでなく矢矧と雪風も目を丸くする。
三人の視線に隼鷹はえへへとはにかむ。

「えへへ、かわいいでしょ。女の子ならこれくらいはしなくちゃ」
「で、でもさすがにスカートは・・・」
「常時は正式採用されている第一種軍装を着用するという規律が・・・」
「金剛長官に怒られるわよ」
三人の反応に隼鷹は「大丈夫大丈夫」と全く気にした様子のない笑みを浮かべる。
「どうせ私またすぐに別の輸送任務があるからあまり長居はできないし、今は壊滅した連合艦隊の再建でそれどころじゃないもん」
隼鷹の言葉に、大和の表情が暗くなる。
そう、連合艦隊は壊滅した。
武蔵や扶桑、山城、瑞鶴や瑞鳳達を失い、もはや日本海軍には大規模な艦艇による作戦は不可能になっていた。そして何より、多くが死に、多くが傷ついた。
武蔵も、命を落としたのだ。
落ち込む大和の肩を、隼鷹がぽんと叩いた。顔を上げると、そこには優しげな笑みを浮かべる隼鷹の顔があった。
「武蔵や瑞鶴達の死は、辛いと思う。でも、私だって飛鷹や翔鶴姉さんの死の悲しみを乗り越えて、今はこうして笑えるようになったんだから。大和もがんばって。大和は笑顔が一番！　お兄ちゃんだって、きっと大和の笑顔が好きに決まってるんだから！」
「大尉も・・・？」
ボンッと、急激に大和は顔を真っ赤にすると、おろおろとし始める。指と指を絡ませて、落ち着きがなくない。
「た、大尉が、わ、私の笑顔が、好きって・・・そ、そんなぁ、照れちゃうよぉ」
えへへとデレデレした笑みを浮かべる大和に、矢矧と雪風は苦笑いを浮かべる。そして隼鷹もまた、嬉しそうにはにかむ。
「うわぁ、おいしそうなカステラぁ」
隼鷹は机の上に並べられた様々なお菓子を見て目を輝かせる。そ

んな隼鷹に大和は笑みを浮かべる。
「隼鷹も一緒にどう？」
「いいの！？」
「もちろん」
「やったぁッ！　いただきまぁすッ！」
隼鷹は嬉しそうにお菓子を頬張って食べる。そんな彼女を見詰め、三人は自然と幸せな気分になった。
それから、四人は楽しげにお茶会を再会させた。
途中大和と隼鷹が翔輝を巡って対立したが、雪風と矢矧がうまく立ち回って停戦にする事ができた。
その光景は、まるでいつもの風景を思い出させる。
大和はいつの間にか、心の底から楽しめる事ができていた。

その夜、三人と別れた大和は一人防空指揮所へ上がった。
翔輝が好きだったここからの満開の星空。それを見上げ、一人大和は小さくため息をした。
この数週間、最初こそは武蔵や瑞鶴の死で気が狂いそうになったが、長門達のおかげで絶望状態は脱した。しかしその後の武蔵や翔輝のいない日々の繰り返しに、大和は疲れ切っていた。
会いたいと思っても、会えない。
それはまるで手に届きそうで届かないこの星空と同じだ。
死んでしまった武蔵とはもう会う事はできない。彼女との最期の別れの時、また会えると言ったが、現実というのはそれを完全否定する。
もう会えない、会うには、自分も死ぬしかない。
だが、まだこの世界には翔輝がいる。彼と別れるのは絶対に嫌だ。
しかしその彼も、今はここにはいない。
こんな悲しみを、数週間も感じているのだ。
大和は煌く星空を見上げる。その白い頬を、一筋の涙が流れた。
うつむき、両手で顔を覆うとそのまま膝を着いて座り込んでしま

う。

静かにすすり泣く大和。

昼間の笑顔は偽りではない。本当に心の底から楽しめた。だが、この夜の顔も本当の彼女なのだ。

悲しみは、どんなものであっても消せるものではない。

寂しさは、どんなものであっても覆い隠せるものではない。

愛しさは、どんなものであっても防がれるものではない。

会いたいという想いは、変わる事はないのだ。

「大尉・・・会いたいですぅ・・・私・・・大尉がいない日々なんて・・・耐えられないよぉ・・・ッ！」

煌く星空の下、月明かりに照らされる防空指揮所に、悲しき少女のすすり泣く声が小さく響いた。

翌日、大和はいつものように防空指揮所にいた。風が気持ちいいこが大和の数少ない憩いの場になっている。

そして今日も大和は悲しげな瞳で日本の方向を見詰めている。その横では長門がそんな大和を不安げに見詰めていた。

「大和、長谷川君はまだ戻って来れないのよ？　いつまで待っても、あと数ヶ月は帰って来ないの」

「わかってます・・・でも、こうしていないと自分が保てないんです。大尉がいない生活がもう数週間。武蔵も瑞鶴もいない、こんな日々なんて、正面から向き合いたくないんです。だったら、こうして現実から逃げるのがいいんです。こうして空や海を見ているのが」

「大和・・・」

大和の悲し過ぎる瞳に、長門はかける言葉を失う。

こんなに悲しげな大和は見た事がない。それほどまでに、大和は苦しみ、悲しんでいるのだ。なのに、自分には何もできない。彼女の先輩であり仲間なのに、自分は何もできない。

結局、自分は無力でしかないのだ。

長門も力なくため息をし、大和は再び海の向こうを見詰める。その時、

「大和。いるか？」

聞き覚えのある男の声が響き、防空指揮所に森下が入ってきた。

「あら森下さん。どうしたの？」

「お、長門か。いらっしゃい。ところで大和は――お、いたいた」

森下は海の向こうを見詰める大和を見つけると近づいた。森下の気配が近づいたのに、大和は顔を向ける事もなかった。そんな大和を見て森下は呆れる。

「おいおい、いつもいつもそうして海見てて楽しいか？　たまにはみんと遊んだらどうなんだ」

「私の勝手です。ほっといてください」

大和はつんと突き放す。そんな大和の反抗的な態度に、森下はニヤリとイタズラっぽい笑みを浮かべた。

「お、いいのかな？　長谷川からお前に手紙が来てるってのにさ」

「ほ、本当ですか！？　見せ――のわッ！？」

急旋回した大和はバランスを崩してそのまま床に激しく転んだ。そんな大和を見て森下は呆れる。だが、そんなの大和には関係なかった。

床にぶつけた鼻を押さえながら大和は鬼気迫るような勢いで森下に迫る。

「ほ、本当に大尉から手紙が！？」

「おう。宛て先は俺になってるけど、中身はお前宛だった。ほらよ」

森下の手からほとんど引っ手繰るような勢いで手紙を受け取ると、大和はそれは嬉しそうな顔をした後、森下をじとーっと睨む。その視線に森下は苦笑い。

「安心しろ。中身は読んでないぞ」

「本当ですか？」

「・・・お前、どれだけ俺を信用してないんだ？」

森下の心に強烈な一撃を入れた大和は別段気にした様子もなく手

紙をきらきらした目で見詰める。そんな大和を置いて自信をなくした森下は長門にあいさつして防空指揮所を去った。弱々しくなった背中を、長門は苦笑いしながら見送った。

一方、森下の心に深い傷を与えた事など気づいていない大和はルンルン気分で手紙を読む。そこには大和が知りたかった翔輝のケガの具合や今何をしているかが書かれていた。ついでに瑠璃や瑪瑙、珊瑚と何してるのかも。

笑ったり驚いたり怒ったりと喜怒哀楽しながら手紙を読む大和はいつもと変わりない元気な女の子だった。

長門はそんな大和を呆れながらも優しげな笑みで見詰めていた。

これでいい。

結局、彼女の心を動かせるのは、翔輝しかいない。

そう改めて長門は思った。

第十三章　第二節　翔輝のいない日々　もう会えない妹達（後書き）

今日で夏休みが終わりです。ちょっと同時進行のモンハンは作成が止まっていますが、こちらはストックがあるのでこれまでどおり二日に一回ペースで更新できますので、安心してください。

次回は呉軍港を舞台にした話です。もちろんブルネイにいる大和達は出て来ませんが、日本に戻って来た隼鷹の他に新キャラクターが続々と現れます。
そしてさらに翔輝が仰天行動に！？
終わりが近いというのに新キャラの投入。物語はさらにややこしくなっていく！？
ではまた次回。

第十三章　第三節　久しぶりの再会　変わらぬ優しさ（前書き）

今回は呉が舞台です。
無事に輸送任務を終えた隼鷹を待っていたのは呉の海に浮かぶたくさんの軍艦と艦魂達。そして何よりここは大好きな翔輝がいる場所。
様々な想いが交錯する中、翔輝がついに動く！？
そして新たな新キャラ達と新たな恋敵（ライバル）の出現！？

第十三章　第三節　久しぶりの再会　変わらぬ優しさ

十一月十七日、呉軍港に一隻の空母が護衛の駆逐艦に守られながら入港した。だが、その飛行甲板や航空機格納庫には一機も飛行機は積まれていなかった。

第二艦隊への弾薬輸送作戦を終えた空母『隼鷹』は空っぽの格納庫を少し寂しく思いながら呉軍港に帰って来た。

そんな『隼鷹』の防空指揮所ではいつもの下士官服の上着に黒いヒラヒラのスカート、ツインテールを縛るゴムに鈴を付けた隼鷹が立っていた。

風が吹くたびにスカートがふわりと浮かび、髪が揺れ、シャラン・・・ときれいな鈴の音が辺りに優しく響く。

隼鷹はまわりに停泊している各艦艇の甲板から自分の入港に敬礼している艦魂達にも気づかず、軍港も見ずに、陸の上を見詰める。

翔輝がここにいる。

負傷した翔輝は呉の軍病院に入ったらしいが、きっと今は瑠璃の所にいるに違いないと確信していた。あの瑠璃が負傷した翔輝を見つけられない訳がない。

どちらにしても、軍病院も、霞家も、翔輝の家も、この呉にあるのだ。このどこかに、大好きな、お兄ちゃんがいるのだ。

そう思うと、叫ばずにはいられない。

「お兄ちゃあああぁぁぁんッ！　大好きだよおおおぉぉぉッ！」

隼鷹はこのどこかにいる翔輝に聞こえるように大声で叫んだ。

その声は風に乗り、静かな空に溶けていった・・・

「何してるのよ」

「ひゃぁッ！？」

突然の声に思わず変な声を出してしまった。慌てて振り向くと、そこには腰に手を当てて苦笑いする細メガネに三つ編みの少女が立っていた。

「龍鳳かぁ。驚かさないでよ」
隼鷹は胸に手を当てて安堵したようにため息する。そんな隼鷹を見てくすくすと笑い、メガネのブリッジを上げる龍鳳。
「久しぶりに帰って来たと思ったら、いきなり長谷川さんに愛の告白？」
「べ、別にそういう訳じゃ・・・」
おろおろとする隼鷹に、龍鳳はくすくすと笑いながら近づく。
「相変わらずかわいいわね隼鷹は」
「えへへ、ありがとう。でも早くお兄ちゃんにこの姿見せてあげたいな」
「そうね。でも、こんなかわいい隼鷹の姿、長谷川さんに見せるにはもったいないわね」
「そ、そんなぁ、照れちゃうよぉ・・・」
真っ赤な頬に手を当てて照れた笑みを浮かべる隼鷹。そんな隼鷹を、龍鳳は優しい瞳で見詰める。
かわいく微笑む隼鷹を見詰め、龍鳳は今は亡き妹――瑞鳳を思い出す。
自分が出撃できなかった戦いで、見事その任務を果たした末に命を落とした大切な妹。
そんな妹と、隼鷹の姿が重なる。
瑞鳳は守れなかった。でも、せめて妹のように思っている隼鷹は、せめて守ってあげたい。
この笑顔を、絶やしたくはない。
「龍鳳ぉッ！」
「ひゃあッ！？　な、何何ッ！？」
突如隼鷹に抱き付かれた龍鳳は驚く。隼鷹は龍鳳の頬に自らの頬をすり寄せる。そんな隼鷹の行為に龍鳳は顔を真っ赤にする。
「えへへ、お兄ちゃんは大好きだけど、龍鳳も大好きだよぉ」
「隼鷹・・・」
自分の腕の中で嬉しそうに笑みを浮かべる隼鷹を見て、龍鳳は幸

せな気持ちになった。
レイテ沖海戦で瑞鳳が死んだと知らせを聞いた時、もし彼女がいなかったら、きっと自分はこうして笑っている事はできなかったのかもしれない。
そう思うと、この子にはいつも支えられてばっかりだ。
だから、この子を守るのは自分の役目。
ずっとこうして、彼女の温もりを大切にしたいから。
今日も蒼く澄み切った空が美しい。
燦々と輝く太陽が、二人の少女の姿を優しく、そして美しく輝かせていた。

久しぶりの呉に錨を下ろした『隼鷹』の会議室では、危険な任務を完遂させた隼鷹の為に祝賀会が開かれていた。
呉に残る艦艇の数多くが隼鷹を祝う為に部屋に集まった。
各艦魂が持って来た料理やお酒で部屋の中は豪華になっていた。
これは料理やお酒を召喚するのが苦手な隼鷹に対する配慮であった。
和気藹々（わきあいあい）と宴会をする中、隼鷹はその真ん中で嬉しそうに微笑んでいた。みんなの優しさが嬉しくして、優しげな笑みが続く。
艦魂達も久しぶりの宴会に嬉しそうにその大切な時間を過ごしていた。
「まったく、隼鷹殿は相変わらず天真爛漫でござるなぁ」
そう言ったのは長い髪に黒い眼帯を左目に付けた柔らかな笑みを浮かべた女性。日本海軍最古参の空母にして今は練習空母として活躍している空母『鳳翔』の艦魂。第一線を退いた今でも日本の為に日々努力している。
「てんしんらんまん？」
鳳翔の言葉に隼鷹は眉間にしわを寄せて首を傾げる。どうやら難しい言葉に頭が混乱しているらしい。
「まぁ、簡単に言うと無邪気という事ですね。隼鷹さんは自分を飾

ったりしないでいつも直球勝負ですから」
そう言ったのは長い髪にメガネを掛けた知的な外見をした少女。
ミッドウェー海戦の敗北から機動部隊再建の為に建造が進められていて完成した最新鋭空母――雲龍型空母一番艦、空母『雲龍』の艦魂だ。
だが、期待の新生である彼女も今は載せるべき艦載機がなく、こうして呉の海にただ浮かび続けるしかない。彼女が生まれた時にはもう、マリアナ沖海戦で機動部隊が壊滅した後だったのだ。
もし、あと少し早く自分が完成していたら、もしかしたら先に死んでいった先輩達を少しでも助ける事ができたかもしれない。そんな事を考えた事もあった。
今でも出撃命令があればいつでも出撃する覚悟はしている。だが、いまだにそんな出撃命令はない。もうこの戦争に、自分達空母が戦う場所は、どこにもないのだ。
「コラぁッ！」
「な、何ですかッ！？」
突如怒り出した隼鷹に雲龍は目を丸くして驚く。そんな雲龍の額を、隼鷹はデコピンした。
「私達は瑞鶴達の意志を受け継いだ第一航空戦隊の仲間でしょ！？敬語はなしって言ったじゃない！」
どうやら隼鷹は雲龍の敬語が気に入らないらしい。というか本来は隼鷹が敬語を使わなければならないのだが。
雲龍型空母は空母として建造されて竣工した正式空母。そして正式空母は翔鶴や瑞鶴達と同じ士官。雲龍自身士官服を着ている。一方隼鷹は下士官である。本来ならば雲龍が上官で敬語を使うのは隼鷹の方なのだが、雲龍は歴戦の空母であり良き先輩である隼鷹を目上の艦魂と思っている。だからこそ士官が下士官に敬語を使うという奇妙な風景が展開されているのだが。
「私は隼鷹さんを尊敬しています。だからこそ敬語を使うんです」
「私達は仲間だもん！　だから敬語はなしなのッ！」

わがままを言う隼鷹を、雲龍は苦笑いしながら見詰める。こんな子供っぽいところもまた、雲龍は好きだった。規律に厳しい人よりは、ずっと親しみが沸く。

不満そうな顔をする隼鷹に、まわりからは笑みが零れた。みんな、そんな彼女を信頼しているのだ。

「隼鷹は相変わらず子供っぽいわね」

そう言ったのはツインテールをした吊り目の少女――雲龍型空母二番艦、空母『天城（あまぎ）』の艦魂だ。

「むぅッ！　子供っぽいってどういう事よ！」

頬を膨らませて怒る隼鷹を、天城はフフンと鼻を鳴らして対峙する。

「その頬を膨らませる行為自体が子供っぽいのよ」

「違うもん！　私は子供じゃないもん！　もう立派な一人前の《れでぃ》だもん！」

「今度あなたには和英辞典をプレゼントするわ。もう少し勉強しなさい」

「何ですってぇッ！」

睨み合う隼鷹と天城。この二人は会うたびにいつもこうしてケンカになってしまう。どちらも負けず嫌いな為、張り合ってしまうからだ。

そんな二人を見詰め、雲龍はため息する。こうして毎回毎回ケンカし、それを止めるのはいつも自分の役目だ。天城にはいつも隼鷹は先輩なんだから礼儀正しくしなさいと言っているが、わがままな性格をした天城は聞いちゃくれない。反抗期なのだろうか。

依然睨み合う隼鷹と天城。そろそろ止めなきゃと動き出した時だった。二人の間にキラリと不気味に輝く軍刀が現れた。二人は顔を真っ青にすると慌てて離れた。そんな二人を離した軍刀を構えるのは長いポニーテールを揺らす鋭い眼光をした長身の少女。雲龍型空母三番艦――空母『葛城（かつらぎ）』の艦魂だ。

「いい加減になさい。まわりに迷惑だ」

「「ごめんなさい」」
二人が頭を下げると、葛城は腰の鞘に刀を納める。そしてそのまま壁に寄り掛かると目を閉じた。そんな彼女を見詰め、二人は安堵の息を漏らす。
葛城は武術に長けており、まわりからは翔鶴の跡を継ぐ者などと称されているが、本人は翔鶴とは面識がないのでそんな事はどうでもいいと思っている。
雲龍姉妹の異色さは金剛姉妹にも並ぶものであった。
「葛城！　人に簡単に剣を向けないの！」
雲龍は怒るが、葛城は気にした様子もなく無視して瞳を閉じ続ける。
「まったく。すみません隼鷹さん」
雲龍は隼鷹に頭を下げて謝るが、隼鷹は気にした様子もなかった。
「いいよ。なんか葛城って翔鶴お姉ちゃんに似てるし。なんかすごく懐かしいなぁ」
そう言って屈託のない笑みを浮かべる隼鷹。
雲龍は自分達が生まれる前に死んだ翔鶴を知らない。まわりからは日本空母艦魂で最も勇猛果敢で、国士無双の実力を持ち、そして何より、誰よりも強い志を持った日本艦魂史上最強の艦魂であったと聞いている。一度でいいから、会ってみたかった。
隼鷹はそんな翔鶴を姉のように慕っていたとも聞いている。だからこそ、翔鶴の話になると彼女はとても楽しそうに話をするのだろう。
「さぁッ！　盛り上がっていくよぉッ！」
隼鷹の掛け声に皆が大声で答えた時だった。
「お邪魔するよー」
そんな能天気な声な声が響いた刹那、部屋の中にいた艦魂達は一斉に敬礼した。
部屋の中に入って来たのは敵性国民のような光り輝く金色の長い髪を流し、海のような蒼い瞳に柔和な笑みを浮かべた女性。隼鷹は

そんな彼女に近寄ると笑みを浮かべた。
「えへへ、嬉しいな。出雲さんまで来てくれるなんて」
「あなたの祝賀会でしょ？　来ない訳ないじゃない」
「えへへ、ありがとう」
そう言って皆から最上級敬礼を受ける出雲と呼ばれた女性はニャハハと屈託のない笑みを浮かべると、まわりの艦魂達を見る。
「もう、そんなに硬くならないでよぉ。みんな楽しく楽しく。私もおみあげ持って来たんだよ？」
「うわぁ、ありがとう！」
隼鷹は嬉しそうにおみあげを受け取る。
他の艦魂達は敬礼こそやめたが、女性に対してかなり緊張していた。
雲龍達艦魂が最上級敬礼を向けた女性は、あの金剛でさえ頭が上がらない日本海軍の重鎮中の重鎮。練習巡洋艦『出雲』の艦魂。かつては出雲型装甲巡洋艦一番艦、装甲巡洋艦『出雲』として日露戦争に参加。あの日本海海戦にも参加した経歴を持つ艦魂だ。そして金剛と同じくイギリス出身者だ。
現在は練習艦として訓練生が彼女で学び、そして多くの彼女の後輩達に乗っていく。今でも彼女は日本海軍を支えているのだ。
「みんな楽しそうだね。私も混ざろうっと！」
そう言ってニャハハと笑う出雲。その姿はあの歴史に残る激戦を戦い抜いた軍人とは思えないほど能天気さだ。妹の磐手も彼女と同じく今でも練習艦として活躍しているが、規律に厳しく威厳のある人物だ。あの金剛が尊敬する艦魂の一人でもある。
そんな大御所が入った宴会はさらに盛り上がった。
艦魂達はいつの間にか隼鷹の為の宴会からただの宴会に変わっていた。でもそれは隼鷹にとってはとても嬉しいものだった。
みんな幸せそうな表情を浮かべている。これこそが自分達が求めていた平和なのだ。
このひと時の平和を大切にする。だからこそ、こういう時は笑っ

ていていいのだ。
こうしてみんなで騒ぐのは、いつも大和達と一緒の時が多かった。
今頃彼女達は何をしているのだろうか。
きっと、笑ってくれているだろう。
じゃあ、翔輝は？
翔輝の事を思い出すと、隼鷹の表情は暗くなった。
翔輝はレイテ沖海戦で大怪我を負ったらしい。だから内地で療養をしているのだが、今どんな状態なのか、そして大丈夫なのか。そんな事が気になっても、自分には確かめる術がない。
落ち込む隼鷹に雲龍が心配そうに声を掛ける。
「隼鷹さん？　どうされたのですか？」
「ううん、何でもない・・・ただ、お兄ちゃんは、今頃何をしてるのかなぁって思って・・・」
彼女がある少年士官を兄のように慕っている事も、その彼がレイテ沖海戦で大怪我を負って内地で療養をしている事も知っている。あの元気で明るい隼鷹がこんな表情を浮かべるのは、それほどまでにその彼を想っているのだろう。
雲龍は掛けるべき言葉を探すが見つからず、仕方なくテーブルの上のラムネを取って彼女に渡した。
「これでも飲んで、落ち着いてください」
「ありがとう」
雲龍からラムネを受け取ると、隼鷹はそれを口に含む。爽やかな甘さと共にシュワシュワと炭酸の心地良さがのどを滑る。いつ飲んでも幸せな気分になれる。
ラムネは隼鷹の一番好きな飲み物だ。おいしさもだが、ラムネはいつも翔輝がくれたからだ。一緒に宴会にいると、必ず彼は隼鷹にラムネを渡し、隣で一緒に飲んでくれた。
ラムネは、翔輝との大切な思い出が詰まった宝物なのだ。
またどこか寂しげな表情を浮かべる隼鷹に、雲龍は不安げな表情を浮かべる。

隼鷹が暗くなったのを感じ、まわりから話し声が消えた。
不気味な沈黙の中、隼鷹の瞳に涙が浮かぶ――

コンコン・・・

そんな不気味な空間に響いたのはドアが叩かれる音だった。
近くにいた駆逐艦が首を傾げながら扉を開くと、そこには着物を着た女の子が立っていた。
「あ、あの、どちら様ですか？」
困惑しながら問う駆逐艦の子に少女はニッコリと微笑むと、部屋の中に入って来た。まわりの艦魂達は見知らぬ少女に首を傾げるが、隼鷹はその姿に目を見開いて驚く。
「瑠璃！？　何でここにいるの！？」
「あら？　私がここにいてはいけないんですの？」
瑠璃は不機嫌そうに唇を尖らせる。
「ひ、久しぶり」
「えぇ、お久しぶりですわ」
一応当たり障りのないあいさつで口火を開くと、隼鷹は再び問う。
「で、でも何でここにいるの？」
すると、瑠璃は不満そうに唇を尖らせる。
「別に私は来たくて来た訳じゃありませんのよ」
「じゃあ、どうして？」
「それはこんな無茶な事を頼み込んで来た本人に言うべきですわ」
そう言って瑠璃は自らが入って来た開かれたドアを見詰める。自然と、艦魂達の視線もそちらに注がれた。すると、そこへ瑠璃と同じく着物を着た女性の肩を借りてフラフラながらも歩く軍服を着た少年が現れた。
その瞬間、隼鷹の瞳は今まで以上に大きく見開き、涙がポロポロと流れ出した。
そこにいたのは、会いたくて、会いたくて仕方がなかった。愛し

い彼だった。
「お、お兄ちゃんッ！」
「隼鷹！」
瑪瑙の肩を借りた翔輝は嬉しそうに笑みを浮かべた。そんな彼の胸の中に、隼鷹は飛び込んだ。
「あ、危ないって――のわぁッ！？」
「翔輝！？」
隼鷹の激しいタックルに一人で歩くのも難しい翔輝は呆気なく押し倒された。その胸の中には涙をボロボロと流す隼鷹がいた。
「お兄ちゃんなんだよね！？　うそじゃないよねッ！？」
「あぁ、僕だよ隼鷹。久しぶり」
「お兄ちゃん！　私の大好きなお兄ちゃん！」
隼鷹は泣きながら懐かしき彼の腕の中に身を埋めた。翔輝に抱き締められる隼鷹は、涙を流しながらも、本当に嬉しそうな顔をしていた。
そんな突然三人の人間の出現と隼鷹の豹変に、残された艦魂達はすっかり呆然としていた。そんな中、一番早く回復したのは大御所の出雲であった。
「へぇ、君が金剛が言ってた長谷川翔輝君か」
「え？　あ、はい。えっと、どちら様？」
「ごめんごめん。私の名前は出雲。練習艦『出雲』の艦魂だよ。よろしくね」
出雲のお気楽なあいさつに、翔輝は目を丸くする。
「え？　練習艦『出雲』って、装甲巡洋艦だった『出雲』？」
「そうだよ。これでも日本海海戦でバルチック艦隊を打ち負かした経験もあるんだよ」
「日本海海戦！？」
驚く翔輝に出雲はえっへんと胸を反らす。その姿はどこか長門を思い出させた。
「いやぁ、あの戦いはすごかったなぁ。今じゃ考えられないくらい

の接近戦で撃ち合ったんだから。あれはみんな厳しい訓練のおかげだよ。知ってる？　日本海海戦の前に私達は一年分の弾薬を十日間で消費しちゃうほどがんばって訓練したんだよ？　やっぱり努力は大切なんだよね。あ、これテストに出るからちゃんとチェックしといてね」

出雲はニャハハと明るい笑みを浮かべた。

一方の翔輝は目の前の出雲に唖然としていた。

日本海軍が世界に名を広げた戦いである日本海海戦の生き残りをいきなり目の前にし、かつあまりにも能天気な彼女の姿など、色々な事が頭の中で混乱していた。

そんな翔輝を気にした様子もなく、出雲はニャハハと笑みを浮かべる。そして隼鷹はいつの間にか泣き止んで嬉しそうに翔輝に抱き付いている。

「離れなさい」

その声と共に隼鷹は背中を引っ張られてコロンと転がった。その際ズボンではなくスカートを穿(は)いていたのでスカートが捲れ、白いパンツが丸見えになった。そこで初めて翔輝は彼女がスカートを穿いている事に気づいた。

「何でスカートなんか穿いてるの！？」

「え？　きゃあッ！　お兄ちゃんのエッチ！」

「僕ッ！？　僕が悪いのッ！？」

「うえええぇぇぇんッ！　女の子の大事な所見られちゃったよぉッ！」

パンツを隠した隼鷹は小さく握った拳を目頭に当ててうそ泣きを始めた。もちろん他の者はうそだと気づいているが、当の翔輝は見破れずおろおろとする。

「えぇッ！？　な、何が何だかわかんないけど、とりあえずごめん！」

「責任とってよぉッ！　そして私と結婚してぇッ！」

「調子に乗るな」

そう言って隼鷹の額をデコピンしたのは瑪瑙。誰もが認める絶世の美女である瑪瑙に、艦魂達は羨望の眼差しを向ける。

だが、瑪瑙はそんな皆の視線なんか気にせず翔輝に向き直るとポッと頬を赤らめる。そして、

「さぁ、これで邪魔者は消えた。だから・・・」

「だから何ッ!?　姉さん目がすごく怖いッ！　それと着物の帯を緩めるなぁッ！」

襲い掛かる瑪瑙を翔輝は何とか回避する。まだケガは治り切っていないのにこれだけの動きができるのは、捕まったらおしまいだと今までの経験でわかっているからだ。瑠璃が慌てて瑪瑙の暴走を止め、隼鷹が翔輝に抱き付き、瑠璃と瑪瑙が怒る。そんな光景にすっかり雲龍達は取り残されてしまった。

「あ、あの・・・」

雲龍が申し訳なさそうに声を掛けたのは、いつの間にか瑠璃、瑪瑙、隼鷹でケンカを始めた三人を止めようとしていた翔輝だった。

「え？　あ、何？」

「そ、その、あまり騒がれると、困るんですが」

もごもごと言う雲龍に、翔輝は「ごめん！　今すぐ何とかするから！」と言って三人の額をデコピンして止めた。それから少々のお説教。さすがと言おうかなんと言おうか。

翔輝に怒られてしゅんとする三人を一瞥し、翔輝は雲龍達に謝ろうと彼女達に向き直る。が、無理して立っていたのでバランスを崩した。

「うわッ！」

倒れそうになった翔輝の肩を持って支えたのは今までずっと事の流れを傍観していた葛城だった。葛城はフラフラな翔輝の腕を取って彼を支えた。

「あ、ありがとう」

「無理はしない方がいい」

そう言って葛城は椅子の所まで彼とつれて行くと、そっとその椅

子に翔輝を座らせた。
「ありがとう、えっと・・・」
「葛城」
それだけを言い残し、葛城は離れると壁にもたれ掛かった。そんな葛城に言葉を掛けそびれた翔輝はどうすればいいか困惑したが、そんな彼にペコリと頭を下げた少女がいた。
「妹が無礼を働いて申し訳ありません」
「別に気にしてないけど、えっと・・・」
「あ、私は雲龍型空母一番艦、空母『雲龍』の艦魂です。あの子が次女の天城、そしてあの無礼な子が三女の葛城です。以後お見知りおきを」
「雲龍型空母？」
翔輝は聞き覚えのない名前に首を傾げる。と、
「雲龍型空母は改マル五計画で建造を開始した中型空母の事ですわ。ミッドウェー海戦で失った空母を補充する為のもので、計画上は十五隻建造ですけど、実際は戦況の悪化から六隻が建造され、現在は一番艦『雲龍』、二番艦『天城』、三番艦『葛城』のみが完成してるんですわ」
そう言ったのはもちろん瑠璃。そんな彼女の説明に雲龍は目を大きく見開き、翔輝は頭を抱えた。
「お前、相変わらず軍の情報を収集してるのか・・・」
「当然ですわ。霞家の実力を甘く見てもらっては困りますわ」
「威張れる事じゃないと思うぞ」
あまりにも相変わらずな幼なじみに呆れ半分安堵半分という感じで苦笑いする翔輝。また取り残されている雲龍に向き直ると、優しい笑みを向ける。
「僕の名前は長谷川翔輝航海大尉。今はちょっと療養中だけど、これでも一応戦艦『大和』に乗ってるんだ」
翔輝の笑顔に、雲龍は顔を真っ赤にした。彼を正視できず、赤くなった顔を隠すようにうつむいた。

「う、雲龍？　大丈夫？」
「は、はい！　何でもありません！」
「そ、そう？」
そんなに必死に返さなくてもと思う翔輝に対し、雲龍は「失礼しまぁすッ！」と顔を真っ赤にしたまま艦魂達の群れの中に隠れてしまった。
一人残された翔輝は困惑するが、この雰囲気に鋭く気づいたのは瑠璃と瑪瑙。翔輝を想う気持ちと経験が、二人の第六感（通称《女の勘》）を飛躍的に鋭くさせているのだ。
「これは・・・」
「まずいですわ・・・」
背後から黒いオーラを噴き出す瑠璃と瑪瑙には気づかず、翔輝は消えてしまった雲龍に首を傾げた。その時、
「ちょっとあなた！　私の姉さんに一体何をしたのよ！」
そう言って怒鳴り込んで来たのはかわいげなツインテールに吊り目をした少女――天城だった。
「えっと、君は確か天城だよね？　えっと、何をしたと言うと？」
「あんたなんかに呼び捨てにされるなんて嫌よ！」
「え？　だ、だったらどう呼べば？」
天城はその問いを待ってましたと言わんばかりに小さな胸を反らす。
「私の事は天城様と呼びなさい！」
「え？　えっと・・・」
今までにないキャラに完全にどう対応していいか困る翔輝に、天城はビシッと人差し指を向けると、イタズラっぽい笑みを浮かべる。
「さぁ天城様と呼びなさい！　そして私の下僕に――」
「いい加減にしろ」
調子に乗る天城の後頭部に鞘が直撃した。ズキズキと痛む頭を押さえ、目の縁には涙を浮かべながら天城はキッと振り返る。
「ちょっと葛城！　一体何すんのよッ！」

軍刀を腰に戻した葛城はウーッと睨む姉を冷めた瞳で見詰める。
「少し黙りなさい。まわりに迷惑」
「ちょっと！　それが実の姉に向ける言葉なのッ！？」
ガルルルッと今にも噛み付きそうな天城と、氷のように冷たい瞳を向ける葛城。ちなみに長身の葛城に対し天城は小柄な為、傍から見れば天城の方が妹に見えるのは彼女には黙っておこう。
葛城はギャーギャー叫ぶ天城を無視し、再び壁に背中を預ける。どこまでもクールな少女だ。そんな彼女をどこか翔鶴に似てるなぁと思う翔輝。
「あ、あの」
その声に振り返ると、自分から一メートル半ほど離れた所に少し顔色が悪そうな龍鳳が立っていた。
「龍鳳？　久しぶりだね」
「は、はい。久し、ぶりです」
顔が真っ青な龍鳳に、翔輝は彼女が男性恐怖症だった事を思い出す。
「あ、ごめん！　男の人が怖いんだよね？　すぐ離れるよ」
「あ、いえ、大丈夫です・・・長谷川さんは、信用できる、男性ですから・・・その、触れなければ、一メートルくらいなら、大丈夫です」
「え？　そ、そう？　大丈夫なの？」
「はい」
しかしそれでもあまり顔色は良くない。やっぱりかなり無理をしているのだろう。根が優しい龍鳳は翔輝に不快な思いをさせまいとがんばっているのだ。そんな彼女の健気さが嬉しくもり、悲しくもある。
「無理はしなくていいよ。龍鳳は少し離れた方がいい」
「す、すみません。失礼します」
ペコリと頭を垂れた後、龍鳳は逃げるようにして艦魂達の中に消えた。やっぱり結構無理をしていたのだろう。

「えへへ、お兄ちゃん大好きぃ！」
突然翔輝にピョンと抱き付く隼鷹。翔輝は「ちょっと隼鷹！　僕一応ケガ人！」と慌てる。そんな二人を見て艦魂達は微笑んでいた。
いつの間にか、部屋の中には和やかな雰囲気が漂っていた。
それから宴会は翔輝の歓迎会に変わってしまった。その途中瑪瑙と隼鷹が翔輝を襲ったり、瑠璃と天城がケンカになったり、出雲が翔輝をからかったり、龍鳳が翔輝を殴り飛ばしたりというハプニングもあったが、宴会はとても楽しげなものであった。
そんな中、葛城はいつの間にか艦魂達の中心にいる翔輝を終始見詰めていた。その時の瞳は氷のような冷たさはなく、春の朗らかな日差しのように温かいものであった。
「長谷川・・・翔輝・・・」
そう葛城が小さくつぶやいたのは、誰にも聞こえなかった。

十一月二三日、空母『隼鷹』は呉を抜錨した。再度輸送作戦を担当する事になったのだ。
呉軍港の埠頭（ふとう）で車椅子に乗りながら翔輝は出航して行く『隼鷹』を見送った。『隼鷹』の甲板の上でも隼鷹が嬉しそうに手を振っていた。
これでまたしばらく二人は会えなくなる。
せめて別れ際の相手の顔を目に焼け付けようと、二人は互いが見えなくなるまでずっと手を振り続けた。
そして、『隼鷹』が湾を出て行くと、車椅子の取っ手を掴む瑪瑙と隣に立つ瑠璃が目を合わせた。
「さぁ翔輝様。そろそろ戻りましょう。お体に障りますわ」
「うん」
翔輝が小さく微笑むと瑪瑙は車椅子を押し、三人は静かに呉軍港を後にした。

第十三章　第三節　久しぶりの再会　変わらぬ優しさ（後書き）

えっと、今回は原作にはいなかった雲龍三姉妹を登場させてみました。正直に言うと同じ艦魂作品を書いている伊東先生の作中に出て来る雲龍三姉妹に触発されてこうなりました。ちょうどキャラ不足で困ってたところですし。

外伝の方の雲龍三姉妹の作品をご存知の方は気づいたでしょうが、そちらとはキャラ設定が変わっています。こっちの方がおもしろいですからね。

姉としてがんばる雲龍と天上天下唯我独尊のわがままっ子の天城、そして孤高の戦士葛城。金剛姉妹に匹敵するほどの異色の姉妹がこれからどうなっていくのかをお楽しみに。

それと久しぶりの鳳翔の登場です。まぁ一度だけ、しかもミッドウェー海戦の前に出たキャラなのですっかり忘れられてると思いますが（苦笑）

一方、練習艦として登場したのは日露戦争で活躍した装甲巡洋艦『出雲』の艦魂。実は知っている人は知っているかもしれませんが、以前僕は日露戦争の艦魂作品を投稿していたんですが、執筆に行き詰って中止して削除しました。その際に出て来たキャラなんです。まぁ日露戦争から４０年以上も経っていて、すっかり大人になっているのでキャラ設定が変わってますが（笑）

とまぁ、これからは主に雲龍三姉妹を新たなメインキャラに入れてがんばっていきますので、応援よろしくお願いします。

そういえば私事ですが、先日『スカイクロラ』を見ました。

いやぁ、空戦シーンが大迫力でおもしろかったですよ。まぁ、話は全体的に悲壮でしたが。

いつか僕もあんな戦闘機による空中戦の作品を書いてみたいですね。

え？　それよりさっさとこの作品を完結させろ？

・・・はい。すみません。

次回はレイテ沖海戦に続く悲しいお話です。
ついにあの金剛の最期の時がやって来ました。
常に規律に厳しく、威厳があり、艦魂達を統制し続けた歴戦の戦士金剛。そんな彼女をからかって、そのたびにケンカになる軍楽隊員の滝川。
艦魂年代史シリーズの迷コンビであった二人による最後の物語。
次回もよろしくお願いします。

第十三章　第四節　歴戦の戦士金剛の最期　滝川の優しき笑み（前書き）

《雲龍（うんりゅう）》
雲龍型航空母艦一番艦――空母『雲龍』
出身　横須賀海軍工廠（神奈川県）
身長　１５２ｃｍ
髪型　長髪
実年齢（１９４４年１１月現在）０歳
外見年齢　１３、４歳
誕生日　８月６日
家族構成　妹・天城・葛城
好きなもの　姉妹・紅茶・嬉しそうな笑顔・何気ない日常・輸送作戦・平和
嫌いなもの　コーヒー・争い事・血・戦争
雲龍型空母一番艦、空母『雲龍』の艦魂。雲龍型空母はアメリカのエセックス級空母に対抗して戦前に計画された空母。だが、ミッドウェー海戦で主力空母四隻を失った事によって計画が拡大して三隻から十五隻に建造数を増大。しかし実際は戦局の悪化や日本の工業力の低さから三隻しか竣工されなかった。そんな雲龍型空母一番艦である『雲龍』（候補名に《蚊龍》があった）は完成するも所属の航空隊がなくレイテ沖海戦に不参加。石油不足の為にその後は待機が続く。そんな『雲龍』の艦魂はまじめなメガネを掛けた女の子。妹達があまりにも独特な為、いつも火消しに振り回されているかわいそうな子。瑞鶴の意志を継いだ第一航空戦隊の旗艦となる。どうやら翔輝に何かしらの想いがあるようだが、一体・・・？

《天城（あまぎ）》
雲龍型航空母艦二番艦――空母『天城』
出身　三菱重工業長崎造船所（長崎県）

身長　１４５ｃｍ
髪型　ツインテール
実年齢（１９４４年１１月現在）０歳
外見年齢　１０、１１歳
誕生日　８月１０日
家族構成　姉・雲龍　妹・葛城
好きなもの　姉妹・人をからかう事・いたずら・甘いもの
嫌いなもの　自分の思い通りにならない事・敗北・辛いもの
雲龍型空母二番艦、空母『天城』（候補名には《那須》があった）の艦魂。『雲龍』とほぼ同じ道を歩み、飛行機と燃料の不足から出撃の機会はなかった。そんな『天城』の艦魂は天上天下唯我独尊。自分絶対至上主義という迷惑極まりない性格。先輩である隼鷹とはよく衝突する負けず嫌い。いつもは言う事を聞かずに雲龍を困らせているが、本当は誰よりも雲龍を尊敬している。妹の葛城には姉としての威厳がなく、いつもケンカしている。雲龍や葛城に近づく翔鶴を敵視していて、時々ケンカを売って来る。

《葛城（かつらぎ）》
雲龍型航空母艦三番艦――空母『葛城』
出身　呉海軍工廠（広島県）
身長　１６４ｃｍ
髪型　ポニーテール
実年齢（１９４４年１１月現在）０歳
外見年齢　１５、６歳
誕生日　１０月１５日
家族構成　姉・雲龍・天城
好きなもの　姉妹・翔鶴・武道・武士道
嫌いなもの　なし
雲龍型空母三番艦、空母『葛城』（候補名には《岩木》があった）の艦魂。姉妹の中では一番年下だが、外見は一番年上に見える。冷

静沈着でいつもクール、孤立無援の一匹狼。武術や剣術では現在では彼女の右に出る者はいない。まわりからは翔鶴の生まれ変わりと言われているが、本人は翔鶴に会った事がないので無視している。常に単独行動し、何事にも刀で解決しようとするので雲龍を困らせる。どうやら自分が仕えるべき主を捜しているらしいが、そんな彼女の前に現れたのは多くの艦魂に好かれる翔輝だった。じっと彼を見詰め、何かを想う。一体これから彼女はどのような行動に出るのか期待大である。

第十三章　第四節　歴戦の戦士金剛の最期　滝川の優しき笑み

レイテ沖海戦から一ヶ月後、戦艦部隊はブルネイを出港した。レイテ沖海戦で負った傷を修理する為に内地へ戻るのだ。

戦艦『大和』『長門』『金剛』の三隻を軽巡洋艦『矢矧』、駆逐艦『雪風』以下五隻が護衛をして呉まで送る事になった。

海を翔ける『金剛』のまわりには九隻の艦艇が走っていた。

幾多の戦いを戦い抜いて来た戦艦『金剛』は今年で三二歳を迎える。日本海軍の主力艦一の老兵で、本当ならもうとっくの昔に現役を引退して練習艦になっているはずの『金剛』はその日本戦艦一の速力で太平洋の海縦横無尽に翔け回った。

そして今、傷付いた艦体を癒す為に内地に向かっていた――新たな戦場を翔け回る為に。

そんな『金剛』の第二主砲の上にその老兵と変態という意味不明な組み合わせの二人がいた。

「風が気持ちいいな――滝川」

威風堂々と立ち、海風に長い金髪を靡かせて小さく口元に笑みを浮かべている金剛。その横で砲塔の上で寝転がる滝川はめんどくさそうな表情を浮かべている。

「そうか？　潮風はべとべとするから嫌いなんだが」

「お前それでも海軍軍人か？」

「安心しろ。俺の知り合いには海軍軍人なのにカナヅチがいるから」

「・・・世も末だな」

金剛は呆れた目で滝川を睨む。そんな鬼神金剛に睨まれる滝川は別段気にした様子もなく空を見上げていた。

金剛は相変わらずやる気のなさそうな滝川を見て小さくため息した。その時、目の前にショートカットにクリッとした瞳がかわいい少女が現れた。陽炎型駆逐艦十一番艦、駆逐艦『浦風（うらかぜ）』の艦魂だ。

浦風は金剛の前に立つとビシッと見事な敬礼をする。
「司令官。まもなく台湾近海に到達します」
「ふん。わかっている。いちいちそんな事を報告に来るな」
鼻を鳴らして金剛は冷たく答えた。その言葉に滝川が眉をピクリと動かして起き上がった。
金剛に怒られた浦風は「す、すみません」と謝って落ち込む。そんな浦風をかばうように滝川が文句を言う。
「おいおい、せっかく知らせに来てくれたのにそんな態度はねぇだろ？」
「ふん。私は何度もこの海を翔けている。あそこに見える島が台湾だという事くらいわかる」
「そうじゃなくて、こういう時は「そうだな。ありがとう」とか言うのが当然だろ？」
「ふん。誰がそんな事を言うか」
金剛は不機嫌そうに空を見上げる。そんな堅物な金剛を呆れた目で見詰め、滝川はしゅんとしている浦風に謝る。
「悪いな浦風。こいつの堅物ぶりは筋金入りなんだ」
「構いません。私はそんな司令官をとても尊敬しているのですから」
そう言って浦風は小さく微笑んだ。その笑顔はとてもかわいく、滝川も自然と癒されてしまう。
「まったくお前はマジメだな――おらおら」
滝川はニヤニヤと笑みを浮かべると突如浦風の軍帽を取り上げて髪の毛をクシャクシャと掻き乱した。
「た、滝川さん！　やめてくださいよぉ！」
「ははは、お前は相変わらずこれが弱いんだな」
「お、怒りますよ！」
「現在進行形で怒ってるぞ？」
恥ずかしくて顔を真っ赤にして怒る浦風をからかう滝川。その光景は見た感じは仲のいい兄妹みたいだ。
一方、自分の横でそんな幸せオーラを放つ二人にふつふつと怒り

の炎を燃え上がらせる金剛。その火花に気づいたのか滝川は慌てて浦風に自艦に戻るように言い、浦風は軍帽を返してもらうと少し寂しそうな顔をしながら自艦へ去った。

残った二人の間にはとてつもない緊迫感が横たわっていた。

金剛はギロリと横でヘラヘラと笑う滝川を睨む。視線だけで人を殺せるとしたら、これぐらいの域にまで達しないと不可能だろう。

「滝川。貴様は相変わらず女に目がない最低男だな」

「いやー、だって男の子だもん」

「斬るぞ？」

「目が本気なんだけど！　命の危険を感じるんだけど！」

ふざけ声を上げながらもしっかりと金剛の攻撃範囲外に身を置いている。相変わらず油断できない人物だ。

「まったく・・・」

呆れる金剛だが、その頭は別の事を考えていた。

さっき滝川と浦風が楽しそうに話していたのがなぜあそこまでイラつくのがわからなかった。こんな事一昔前まではなかったのに、最近はどうも滝川が他の艦魂と楽しく話していると竹刀を振り回したくなる。

一体自分はどうしたのだ？　以前この事を長門に相談したが、今考えればなぜあいつに相談したのだ！　人が真剣に相談しているというのにあいつはニタニタと笑い続け、挙句の果てには「それは恋心よッ！」とか意味不明な事を言い放った！　私がそれを完全否定してもあいつは「あなたは滝川さんに恋してるのよ！　だからこそ彼が他の女の子と話しているのを見てイライラするのよ！　それはヤキモチだわッ！　いやー、金剛も実は恋する乙女だったのねぇ。実は金剛はツンデレの属性が――」と言ったところで限界が来て竹刀を一撃入れてやったが。そもそも私にデレの部分はない。長門は思いっ切りツンデレの使い方を間違っただけだ。ツンデレとは普段はツンツン、ある条件下に入るとデレデレして――って、何を考えておるのだ私はあああぁぁッ！

「お、おい金髪？　いきなり頭を掻きむしってどうしたんだ？」
「うるさいッ！　黙れッ！」
「意味わかんねぇよッ！　つーか竹刀を振り回すなッ！」
逃げ回る滝川を金剛は真っ赤な顔で追い回す。それは自分の中に生まれたある感情を必死に否定する為だった。
金剛は気づいていた。だが、それを認めたくはなかった。

――自分が、滝川健太という人間が好きな事を・・・――

台湾近海に到達すると、もうすぐ祖国だという気持ちが生まれてくる。
星空の下、金剛自身も愛する祖国の方向を見詰めて小さな笑みを浮かべる。そんな彼女の横では滝川が苦笑いを浮かべていた。
「相変わらずお前は生粋の愛国家だよなぁ」
「当然だ。私は祖国大日本帝国を心から敬愛している」
「元はイギリス人じゃん」
「殺すぞ」
「冗談だってば。まぁ、祖国を愛するのはいい事だな」
「ふん。貴様にしてはまともな事を言うな」
「そりゃどうも」
滝川の返事に二人はほぼ同時に笑った。この二人。本当はこんなにも相性ぴったりのコンビなのだ。ただ、お互いが素直になれないだけ。それがなくなれば、こんなにも幸せな雰囲気が二人を包むのだ。
深夜の暗い海を月の光が明るく照らし上げる。お互いの顔もくっきりとわかるほど明るい光は二人の朗らかな笑顔も映し出す。
「なぁ金髪。内地に戻ったら一杯やんねぇか？」
「酒か？　まぁいいが、程ほどにしろよ。体を壊すぞ」
「お前が俺を心配するなんて珍しいな」
「なあッ！　そういう意味で言ったのではない！」

顔を真っ赤にして否定する金剛。そんな彼女を滝川はニヤニヤとイタズラっぽい笑みを浮かべながら見詰める。
「何だよ何だよぉ、本当は俺の事が気になるのか？」
「ふ、ふんッ！　そんな事があるものか」
「顔が赤いぜ嬢ちゃん」
「誰が嬢ちゃんだ！　私の方が年上だ！　それに赤くなどなっておらん！」
「嫌よ嫌よも好きのうちってか？」
「だから違うッ！」
「だが甘いな。俺の恋人になるには条件がある」
「条件だと？」
金剛はその言葉に息を呑み真剣な表情で滝川を見詰める。そして滝川も金剛をじっと真剣な瞳で見詰める。そして、十分な間を置いてから、
「そうだ。まずは絶対メガネ着用！　そして俺のコスプレコレクション全服着用義務をこなさなければ俺と関係は持てねぇぜ？　ちなみに俺が今まで相手にした女はみんなコスプレしてくれたぞ。だからお前も――」
「腐った産業廃棄物的な事を考えるのはこのクソ頭かあッ！」
竹刀を真剣に切り替えて襲い掛かる金剛にさすがの滝川も冷や汗を流す。
「ちょっと待て！　それは冗談にならねぇぞ！」
「安心しろッ！　痛みを感じる間もなく仕留めてやる！　せめてもの武士の情けだ！」
「やめえええぇぇぃッ！」
滝川は悲鳴を上げて逃げる。それを金剛は跳躍して追い掛ける。まったくもっていつもと同じ変わらない光景だ。
闇夜を超人的な速さで走る二人の影はどちらもどこか嬉しそうな表情だった。
いつもと変わらない。

これからも変わらない。
そんな想いを感じた。
――だが、それは突如終わりを告げた。
ズドオオオォォォォォンッ！
「うぐあッ！」
「金髪！？」
突如闇を切り裂く爆音と振動が『金剛』を襲った。艦首左横と左舷中部に巨大な水柱が上がったのだ。その瞬間、金剛の首と腹が裂けて真っ赤な血が噴き出し、金剛は悲鳴を上げて甲板に倒れた。放された軍刀はカラカラと甲板を回転しながら滑ると、そのまま海に落ちた。
滝川は敵襲の警報が鳴り響く中金剛に駆け寄った。
甲板に倒れた金剛は首と腹が裂けて大量の出血をし、苦しそうに顔をゆがめていた。そこにはいつも勇ましく、憎たらしい笑みを浮かべていた彼女の姿はなかった。
「金髪！　しっかりしろ！」
「くそぉ・・・敵潜水艦か・・・ッ！」
この時、『金剛』は敵潜水艦の放った魚雷を艦首左横と左舷中部を受けていた。浸水した海水の重みで『金剛』は左に五度傾斜した。
突如とした敵襲に艦隊は対潜水艦戦闘に入った。護衛の駆逐艦が次々に敵潜水艦がいるであろう方向に向かって走り出す。
さらに第二次魚雷群が艦隊を襲った。そのうち一本が『長門』の艦首をかすめて『浦風』に命中。『浦風』は一瞬で轟沈した。
被雷した『金剛』は敵潜水艦の追撃を避ける為に速力を上げた。さらに副砲や機銃でまわりの海を掃射し、敵潜水艦の接近を防いだ。
そんな奮戦する『金剛』の甲板の上ではぐったりと倒れる金剛を滝川が抱き起こしていた。
「おい金髪！　しっかりしろ！」
「ふん・・・誰にそんな口を利いている・・・斬り殺すぞ・・・」
重傷を負っているにも関わらず、滝川は苦しげに顔をゆがませな

がらも不敵な笑みを浮かべる。すさまじい精神力だ。だが、すでに彼女には立ち上がる力はなく、滝川に抱きかかえられながらぐったりとしていた。

急激に左に傾く甲板の上で、滝川は必死に金剛を呼びかけ続ける。その時、敵潜水艦を追い払った大和と長門が慌てて現れた。

「金剛さんッ！」

「金剛ッ！」

二人は滝川の腕の中で力なくぐったりとしている金剛を見て絶句した。それに対し金剛は無理して不敵な笑みを浮かべた。

「安心しろ・・・この程度の傷なら・・・速度が落ちるだけだ・・・お前達は先に行け・・・」

「そんな事できないですよ！」

そう叫んで駆け寄ろうとした大和を長門が制した。驚いて振り向くと、長門の瞳は真剣なもので、その瞳は金剛の蒼い瞳をしっかりと見詰めていた。互いの瞳を見詰め合い、相手の気持ちを感じる。それは、金剛と長門の長年の付き合いが成せるものだった。

「・・・行きましょう。大和」

「そ、そんな長門さん！」

長門は嫌がる大和の手を取って無理やり歩き出す。そんな長門に大和は激怒して声を荒げる。

「長門さん！　金剛さんを見捨てる気ですか！？」

「行くのよッ！」

長門の突然の怒号に大和は驚き言葉を失う。

そして、見た。

長門が苦しそうに顔をゆがめ、唇を噛み、静かに泣いているのを・・・

「長門・・・さん・・・？」

その瞬間、長門は大和を連れて消えた。直後、『金剛』とその護衛に駆逐艦三隻を残して『大和』と『長門』の艦隊は進みだした。

遠くなる二隻の巨艦の艦影を見詰め、滝川は金剛の決意を知った。

「金髪・・・お前・・・」
「ふん・・・自分の体は・・・自分が一番わかっているものだ」
金剛の笑みはどこか不気味げに感じた。
通常なら魚雷二本程度では打ち所が悪くない限り沈まない。だが、その傷つき老いた艦体に無理をさせて高速航行した事が、『金剛』の悲劇を生んだ。
老朽化していた『金剛』は破口から亀裂が発生し、さらには金属疲労などで緩んでいたネジや接続部が次々に限界を超えて損傷。浸水は防ぐどころかさらに増大していた。
もはや、沈没は免れなかった。
徐々に傾いていく『金剛』の甲板で、滝川は金剛を抱いたまま無言だった。そんな滝川に金剛は必死に声掛ける。
ここで彼を死なせる訳にはいかない。
「おい滝川・・・聞いているのか？　早く退艦しろ・・・おいッ・・・」
「なぁ金髪。星がきれいだと思わねぇか？」
滝川はどこか遠い目をしながら星空を眺めていた。
「何を言っている・・・早く退艦を・・・うぐぅッ」
「こんなきれいな星の下で死ねるのは、ある意味幸運かもしれねぇな」
「た、滝川・・・貴様一体何を・・・」
彼が言っている事がわからない――いや、わかっているが、頭が理解するのを拒んでいる。だって、彼は――
「別に・・・ただ――俺もお前と一緒に死のうかなって思って」
心のどこかで予想していた滝川の言葉に金剛は驚愕し蒼い瞳を大きく見開く。
「な、何を言っておる！　早く艦を降りろ！　今ならまだ――うぐわッ！」
海水が重要機関を満たす度に金剛は悲鳴を上げて苦しそうに顔をゆがめる。そんな金剛を、滝川はそっと、優しく抱き締める。

「こんな弱った金髪なんて、金髪らしくねぇな」
「う、うるさい・・・ッ！」
「ったくよぉ、死際まで口は悪いんだなお前は」
そう言う滝川の瞳からはポロポロと涙が流れていた。それは、何もできない自分が情けなく、何もできない事が悲しくて出たものだった。
常の彼とは思えない涙に、金剛は驚くも、そっと優しげな笑みをする。
「まったく・・・貴様こそそんな弱々しい姿をしおって・・・貴様らしくないぞ」
「うるせぇよぉ」
泣き続ける滝川の腕の中で、金剛も静かに涙した。
泣きながら自分を心配し、守れなかった事に責任を感じている彼を見て、やっと自分の気持ちに整理がついた。
「滝川・・・聞いてほしい事がある」
常の彼女なら死んでも嫌がるが、今の自分なら本当の気持ちを言える。そんな何の根拠のない自信が身体を満たした。
とても温かい、その何かが、金剛のプライドという氷を優しく溶かした。
「滝川。私は貴様の事を――愛しているぞ」
突然の金剛の告白に、滝川は驚きのあまり一瞬硬直したが、すぐにいつもの口調に戻る。だがその顔は真っ赤に染まっていた。
「い、いきなり変な事言うな。冗談キツイぜ」
笑い飛ばそうとした滝川を、金剛は真剣な瞳で見詰める。
「冗談ではない・・・私は本気だ」
「・・・マジで言ってるのか？」
「あぁ。直球勝負だ」
その後しばらく二人は沈黙した。
不気味な沈黙の後、滝川は今まで以上に涙を流しながらニッといつものイタズラっぽい笑みを浮かべながら金剛の頭を小突く。

「俺と恋人になりてぇなら、メガネは最低限付けろよなぁ」
「良かろう・・・それくらい、多めに見てやる・・・」
「こいつ・・・」
滝川は静かに微笑む金剛を愛おしそうに抱き締めた。そんな彼の腕の中で、金剛はそれを無言で受け入れた。常に凶暴な金剛も、今は恋する乙女として清楚でしおらしい女性に見えた。
運命の時間が来るまで二人は何の脈略のない会話をした。
関係のないただの話が、今はとても幸せに思えた。
この時間を大切にしたい。そんな想いが二人の胸の中を満たしていた。
だが、運命の時間は二人に最後の会話をさせるほど長い沈黙を与えなかった。
すでに『金剛』の傾斜は六〇度を超え、総員退去も出されていた。マストに掲げられていた軍艦旗も降下され、『金剛』は最期の時を迎えようとしていた。
今にも海に落ちそうな状況の中、滝川はしっかりと金剛を抱き締め続け、金剛もまたそんな彼女に身を預けていた。その表情はとても朗らかで、今はただの美しい恋する乙女であった。
傾斜が進み、第一砲塔の弾薬庫の中で主砲弾が横倒しになり、誘爆したのがとどめとなった。
爆発の際苦しそうに顔をゆがめた金剛を、滝川は静かに、優しく抱き締めた。
そして、最期の時が来た――
もはや直角に近くなった甲板の上で滝川は壁に足を付けて踏ん張りながら力なくした垂れる金剛を優しく抱き締めた。その時の表情はどちらも優しげなものだった。
「金髪――いや、金剛。行こうか。俺達の新しい海に」
「あぁ、そうだな。貴様と一緒だとなると、大変そうだな」
「お互いにな」
「そうだな」

そう言い合って小さく笑みを浮かべた二人は静かに目をつむると、そっと口付けを交わした。

――だから、滝川には見えなかった。

金剛が見た事もないような優しげな笑みを浮かべ、涙した事を・・・

それは、彼女が三一年生きてきて、やっと手に入れた最高の幸せに涙した瞬間であった。

直後、『金剛』は横転。そのまま大爆発を起こして海中に没した。その時の壮絶な火柱は『大和』の艦橋でも確認できた。

――戦艦『金剛』、日本戦艦の最年長者であるにもかかわらず日本戦艦の中で最も太平洋を翔けた巡った戦艦であった。そんな『金剛』の艦魂は第一次世界大戦、第二次世界大戦とを戦い抜いた歴戦の戦士であった。イギリス生まれの日本育ちの彼女は常に祖国である日本に誇りを持ち、日本海軍の艦魂達を支え続けた。金色の髪を揺らし、透き通った蒼い瞳をしながらも、誰もが認める愛国家であった。金剛は常に自分や他人に厳しく生きてきた。規律や伝統に厳しく鉄拳制裁を加える彼女をまわりは《鬼の金剛》と呼んで恐れながらも全幅の信頼を向けていた。そんな彼女は太平洋戦争ではその高速力を生かして姉妹艦と共に空母の護衛として太平洋を縦横無尽に翔け回った。そしてそんな彼女の傍にはいつも彼の姿があった。能天気で変態で楽観主義者という破天荒な性格をしながらも、いつも彼女にちょっかいを出していた。彼女は最初こそそんな彼をうざがっていたが、次第にその優しさに触れ、彼の存在を生きる希望にしていた。そして、自らが愛する祖国へ帰る途中、日本戦艦で唯一敵潜水艦の魚雷攻撃を受けて沈没した。傾斜していく自艦の上で、彼女は愛する彼に想いを告げ、彼の腕の中でその長く厳しい激動の歴史に終止符を打ち、愛する彼と共に深い海の底へ静かに沈んだ――

その後、残存部隊は無事に呉に到着。『大和』は船渠に入って修

理作業を始めた。
だが、『長門』が入るべき船渠は空いておらず、『長門』は横須賀に移動する事になった。
別れの日、『大和』の甲板で二人は対峙した。
金剛の死にずっと泣いていたのだろう、大和の瞳は赤くはれ上がっていた。今でも目の縁には涙が浮かぶ。
そんな大和を見詰める長門も、表情こそ優しげな笑みを浮かべてはいるが、その瞳はとても暗く、悲しいものであった。
「じゃあ大和。またいつか会いましょうね」
「はい、長門さんもお元気で」
「えぇ、長谷川君が来たらよろしく言っておいてね」
「はい、わかりました」
長門は小さく微笑むと大和の頭をそっと撫でた。その柔らかく優しい手に、大和はわずかながら小さな笑みを浮かべた。そんな彼女を見詰める長門も、小さく微笑んでいた。

戦艦『長門』はは駆逐艦三隻に護衛されて横須賀に向かい、そこで修理を受ける事になった。
これが――大和と長門の最後の会話となってしまった。
これ以降『大和』は呉、『長門』は横須賀にずっと浮かび続け、二度と会う事はなかった。

長門との別れの後、大和は一人落ち込んでいた。
武蔵や瑞鶴の死、金剛の死、翔輝のケガ、長門との一時の別れ。
それら全てが大和の心を深く傷つけていた。
だが、そこへとどめの一撃になる情報が入った。
大和型戦艦三番艦を空母に転換した巨大空母『信濃』が横須賀から呉に移動中に敵潜魚雷を受けて沈没したという情報だった。
空母『信濃』は世界軍艦最短記録である竣工後わずか十日で沈んだ。

『信濃』護衛の任を受けていた雪風は呉に戻ると泣きながら大和に土下座した。『信濃』を守れなかったのは自分だと自分を責め続ける彼女を、大和は泣きながら抱き締めた。そんな彼女の胸の中で、雪風は声を上げて泣き叫んだ。

第十三章　第四節　歴戦の戦士金剛の最期　滝川の優しき笑み（後書き）

ついに金剛が死に、滝川も運命を共にしました。
金剛は最後の最期で素直な気持ちになれ、彼に想いを告げる事ができた。
長い間日本の為に尽くして来た金剛は、ようやくその大役を終え、一人の女性として天国で生きる事でしょう。そしてその横にはきっと、滝川の姿もあるでしょうね。
二人の物語はこれからなのです。きっと天国で今日も二人は夫婦ゲンカをしているかもしれませんね。
金剛と滝川が脱落し、さらに使用できるキャラが少なくなりました。
さらに大和は呉に、長門は横須賀に移動したので、これで長門も事実上の使用不能。さらにキャラは減りました。その対策として雲龍三姉妹を投入したのですが、どうなるでしょうか？
次回は早くも大和と葛城が頂上決戦となる！？　一体何が二人を対立させたのか！？　そして早くもあの子が脱落。戦争の悲惨さが少女の想いを引き裂きます。
ではまた次回お会いしましょう。
意見や感想をお待ちしてます。

第十三章　第五節　恋姫戦争勃発！！　大和ＶＳ葛城　いきなり頂上決戦！？

サブタイトル通り、今回は大和と葛城のいきなりの決戦です。
新キャラである葛城は一体どんな波乱を巻き起こすのかお楽しみに。
そして、早くもあのキャラが脱落。
どうぞ最後までお読みください。

第十三章　第五節　恋姫戦争勃発！！　大和ＶＳ葛城　いきなり頂上決戦！？

呉に戻った大和は輸送作戦を終えて帰って来た隼鷹から翔輝が一度来た事を知った。そして翔輝が意外と元気そうだという事も知り、安堵の息を漏らした。

日本海軍最後の艦隊である第二艦隊旗艦である大和は亡き瑞鶴の意思を継ぐ隼鷹が所属する新第一航空戦隊の艦魂達にあいさつした。

新第一航空戦隊は新鋭空母『雲龍』『天城』『葛城』の三隻に歴戦空母『隼鷹』『龍鳳』の計五隻で編成された部隊であった。本当は旗艦として空母『信濃』が加わる予定だったが、『信濃』が沈没した今は『雲龍』が旗艦として就任している。

これが、日本の最後の機動部隊であったが、その攻撃力である艦載機は一機もなく、空っぽの艦隊であった。

そんな第一航空戦隊の艦魂達と大和は会った。隼鷹はもちろん龍鳳も何度か面識があったので大丈夫だった。残る三人、雲龍三姉妹は長女雲龍はとても話がわかるいい子だったが、他の二人はかなり厄介な相手だった。天城はかなりわがままな性格な上に協調性がなく、葛城は独立した行動が多くこちらも非協力的だった。

旗艦『大和』の第三会議室に集まった空母達にどう対応すればいいか困っていた大和に、雲龍が不安そうな顔で近づいて来た。

「あ、あの、妹達が無礼を働いてすみません」

ペコリと頭を垂れる雲龍に、大和は「気にしないで」と小さく微笑む。確かに厄介な相手に違いはないが、史上最強に扱いづらい妹と共にいた大和にとってはこれくらいは問題なかった。

その後簡単な今後の日本の防衛作戦を話した。大和はおそらく自分達艦艇の出番はほとんどないと判断していた。主に攻撃の主力になるのは特攻機である。レイテ沖海戦で大戦果を生んだあの外道の戦法を主力にした今の日本軍。

軍人として、敵とは真っ向から戦うのが最高の誇りである。それ

を、生きて帰る事を許さない特攻で戦わないといけないほど、日本は必死なのだ。

もはやこれは戦争ではない。ただの悪あがきだ。

「私や榛名さん、今は横須賀にいる長門さんはおそらく本土で待機ね。あなた達空母もおそらくは本土待機だろうけど、もしかしたら輸送任務はあるかもしれない。あなた達の航空機格納庫は十分輸送船としても使えるからね」

「・・・飛行機のない空母には、居場所はないですね」

寂しそうに言う雲龍に、大和は小さく首を振る。

「そんな事ないよ。いつかきっと、あなた達の専属航空隊が配備されるはずよ。そうなったら私達の方こそ居場所なんかない。私達戦艦は、今まで多くの戦う場所を待機し続けて逃して来たんだから、瑞鶴達空母には、本当に申し訳がないわよ」

「長官・・・」

大和悲しそうに微笑むと、自分を見詰める空母達を見詰める。その誰もが、自分と同じくらいか、それより下という若い艦魂達ばかりだ。

大和は第二艦隊旗艦として、彼女達の前に立つ。

「もうすぐ、この戦争は終わる――日本の負けという形でね」

大和の言葉に、皆は目を見開いた。

第二艦隊旗艦ともあろう艦魂が、それも、日本海軍の象徴である戦艦『大和』の艦魂が日本が負けると言ったのだ。薄々敗戦は予想していた皆も、面と言われると頭を殴られたかのような衝撃を受ける。

「でも、今はまだ負けられない。私達が戦争を始めたのは、日本を守る為なの。アメリカは日本を潰す気でいたわ。中国を手に入れたいアメリカは、日本が邪魔だったのよ。だから色々と難癖をつけて来て、しまいにはその絶大な権限を使って資源のない日本を自滅させようと日本に対する全ての輸出を禁止した。滅び行く我が国はその時にある選択肢に迫られた。《戦って死ぬか、座して死ぬか》っ

てね。それで日本は前者を選んだ。どうせ国が滅ぶなら、少しでも生きる可能性のある戦いに賭けたのよ。だからこそ、日本は生き残らなきゃいけない。だったら、私達にできるのはどう負けるかって事。どういう負け方が、一番日本の為になるか、それが大切なの。その為に、私たちは諦めずに戦うの。死んでいった仲間達の為に」

大和の言葉に、雲龍達は静かにうなずいた。

自分達が生まれる前、必死に戦って散って逝った先輩達の為にも、自分達も必死に戦わないといけない。もはや勝つ事は不可能でも、より良い負け方を掴み取る事が、今の自分達にできる唯一の事なのだ。

大和は自分を見詰める空母達を見詰め返す。その表情はこの壮絶な戦争を三年も続けて来た歴戦の軍人の顔をしていた。

「必ず日本を、鬼畜米英から守りましょう。私達の活躍に、日本国民一億人の命が懸かってるんだから」

大和の言葉に、雲龍はカッと踵を揃えて敬礼した。その彼女の行動に、隼鷹と龍鳳、天城も見事な敬礼をして見せた。そして、今まで瞳を閉じて壁に腰掛けていた葛城も直立すると、静かに敬礼した。大和もそんな彼女達の敬礼に答え、静かに敬礼する。

大和が手を下ろすと、雲龍達も静かに手を下ろした。すると、大和は先程までの威厳のある顔から歳相応のかわいい笑みを浮かべる。

「まぁ、堅苦しいあいさつはこれくらいにして、改めてよろしくね」

大和の突然の変化に驚きつつも、雲龍は「は、はい！」と敬礼して答える。隼鷹は気にした様子もなく龍鳳にちょっかいを出し、龍鳳はそんな隼鷹のちょっかいを抗う事なく受ける。どうやらあまり嫌ではないらしい。

「じゃあ、用がないなら解散していいわよ」

大和はそう言うと椅子に座って手元の書類に目を移す。そんな彼女に雲龍は邪魔をしないように隼鷹達と共に退出しようとする。と、

「大和長官」

名前を呼ばれて視線を上げると、そこには先程まで壁に寄り掛か

って非協力的だった葛城が立っていた。鋭利な刃物のように鋭い瞳が自分を捉える。
「何、ですか？」
あまりの迫力につい敬語を使ってしまった。相手は自分よりもずっと年下なのに・・・まぁ、艦魂の外見は葛城の方が年上に見えるが。
葛城は後ろで怒る雲龍の声を無視し、口を開く。
「長谷川翔輝大尉というのは貴殿に乗艦されてるか？」
「え？　あ、うん。大尉なら私の航海士だけど、今は療養中で乗ってないわよ？」
突然翔輝の名前が出て大和は首を傾げる。確か以前彼が隼鷹に会いに来た際に葛城達とも会っているらしいから、きっとその繋がりだろう。
「えっと、大尉がどうかした？」
「いや、少し困った事があってな」
「困った事？」
「うむ、長谷川殿と初めて会った時、なぜか胸が熱くなったのだ」
ピクリと、大和の眉が動いた。そして、女なら誰にでも備わっている第六感（通称《女の勘》）が鋭く何か不穏な雰囲気を察知した。
葛城はそんな臨戦態勢に入っている大和など気づかず、白い頬をわずかに桜色に染めて頬を掻きながら続ける。
「そ、それでだな、それ以来長谷川殿の事を考えると食事がのどを通らなくてな。一体自分はどうしたのだろうかと思っていたのだ。それで先輩である長官に相談すれば、何かわかると思ったのだが・・・」
そう言う葛城はどうやら外見はともかくまだ子供らしい。自分の中の感情が理解できていないのだ。
だが、大和にとってこれは緊急事態であった。
不謹慎かもしれないが、レイテ沖海戦で武蔵が脱落し、伊勢がシンガポールのいる今、彼さえ戻ってくれば天国という最高の状態で

あった。しかし、まさかこの時期に新たな恋敵（ライバル）が現れるなんて全く予想していなかった。

これはまずい。

先制攻撃を掛けないとこちらの身が危うい。だが、相手はまだ自分の感情を理解できていない。ならばここは危険を避けて放置しておくのが一番・・・

「お兄ちゃんは渡さないもんッ！」

大和が必死に打開策を考えていた時、何も考えずにとにかく動く行動派の隼鷹のバカ一直線の声が響いた。それと同時に、大和は頭を抱えた。

葛城は突如激昂した隼鷹に怪訝そうな顔をして振り返る。

「隼鷹殿、どうしたのだ？」

「お兄ちゃんは私のお兄ちゃんだもん！　誰にも渡さないもんッ！」

「渡す？　長谷川殿は物ではないぞ」

「私のものだもん！　お兄ちゃんに頭なでなでしてもらったり抱っこしてもらうのは私だけなんだもん！」

「それは違うわ隼鷹！　大尉に頭を撫でてもらったり抱き締めてもらうのは私だけなのッ！」

そう激昂したのは大和。もはや隼鷹の横暴の言葉の数々に耐えられなくなったのか、先程まで必死に冷静な作戦を考えていたとは思えないほど感情的に隼鷹と対峙する。

一方の隼鷹も大和の言葉にかわいらしい顔で精一杯怒りの表情を浮かべる。

「大和ばっかりいつもずるいよッ！　今度は私の番だもん！」

「そんなの関係ないわよ！　大尉は私だけを見ていればいいんですッ！」

「ムキーッ！　この独占欲の塊！」

「何よッ！　今時もう妹属性なんて時代遅れなのよッ！」

極限にまで高められた怒りがキャラ設定や時代設定を飛び越えてしまっている。そんなギャーギャー言い合う二人を見て、雲龍はこ

れが自分達の上官と先輩だと思うと、一抹の不安を感じずにはいられなかった。
天城はそんなケンカする二人を冷めた目で見ると、「バッカじゃないの」と冷たく吐く。
一方の葛城はそんな二人の言い合う言葉に何やら胸の内から湧き上がる今までに感じた事のない怒りを感じていた。
それが嫉妬とかやきもちという類の感情だと知るのはもっと後の事だ。
「あ、あの、ケンカはダメですよ?」
メガネの奥の不安そうな瞳で二人を見詰める雲龍。彼女のうるうるとした瞳に二人は戦意を失って離れた。だが、それでも隼鷹と大和は睨み合ったままだ。どちらも翔輝が大切で、翔輝に好いてほしいという強い想いは変わらないのだ。
そんな睨み合う二人にどうすればいいかおろおろとする雲龍の肩をポンと天城が叩いた。
「ほっときなさいな。バカはバカ同士バカ言い合ってればいいんだからさ」
「「バカバカ言うなッ!」」
大和と隼鷹が同時に天城に怒鳴る。が、天城は気にした様子もなく口に手を当てて芝居染みた笑顔をする。
「あらごめんね。あまりにもバカ過ぎるからてっきりバカの神様なのかと」
「むーッ!　バカって言った方がバカなんだもんッ!　だから天城の方こそバカなのッ!」
「あ、天城!　あなた私は一応上官よッ!?　その無礼な言葉は何ッ!?」
怒る大和と隼鷹を前にして怯える雲龍。だがその前に天城は毅然と立つ。そして身体をやや後ろに反らし、腕を組む。この偉そうな態度が天城のお気に入りの姿勢らしい。
「私上官とかそういうの気にしないタイプなの。優秀かつ人望があ

る人には従うけど、あなたはその真逆に位置してるじゃない。だから、私はあなたには従わない。従うのは、私の直属の上官の姉さんだけよ」

天城の容赦ない言葉に、大和は思いっ切りハンマーで頭を殴られたかのような衝撃が走った後、フラフラと席に戻って突っ伏した。そんな大和を見て天城は勝ったと勝利の笑みを浮かべるのに対し、大和は突っ伏したままブツブツと何かをつぶやく。「どうせ私は無能よ」とか「人望もないし武蔵と違って全然指揮官に向いてないし」とか「だからってそんなにはっきり言わなくてもいいじゃない」などなど、完全にいじけていた。

完全に落ち込んでしまった大和に、雲龍は顔を真っ青にすると、隣に立つ天城をキッと睨む。メガネの奥にあるクリッとした瞳が刃物のように鋭くなる。

「失礼よ天城！　大和長官に謝りなさい！」

雲龍が本気で怒鳴ると、天城はしゅんとする。そしてそのまま小さな声で「ごめんなさい・・・」とつぶやくと、プイッとそっぽを向いて部屋を出て行ってしまった。

「ちょっと天城！　ほ、本当にすみません！　妹の失態は姉の責任です！　何でも罰は受ける覚悟です！」

「あ、いや、別にあなたがそこまでしなくても・・・」

上半身を起こして責任感の塊のような雲龍の勢いに大和は押される。

「言ってくだされば何でもします！　それこそ切腹でもします！」

「姉上、これを」

「ありがとう――って、本気で切腹しなきゃいけないのッ！？」

葛城がまるで借りていたＣＤを返すような軽い勢いで渡したのは短刀であった。もはやこれは切腹しろという無言の圧力だ。

あわあわとする雲龍を、葛城はじっと鋭い瞳で実の姉を見詰める。

「女に二言はない、それが武士道」

「――わ、わかったわよ！　すればいいんでしょッ！？　切腹すれ

ばいいんでしょッ！？」

「ちょっと雲龍やめなさい！　隼鷹！　雲龍を止めて！　龍鳳さんもお願いします！　って、葛城！　何であなた口元にわずかだけと楽しそうな笑みを浮かべてるのよッ！？　だから雲龍は切腹はいいから！　上着を脱いでお腹に刀を向けないでぇッ！」

大和は悲鳴に近い絶叫を上げて雲龍に飛び掛った。

すさまじい混戦の末、ようやく雲龍から短刀を奪って彼女を縛り上げた。捕獲された雲龍は「切腹させてください！　全責任は私にあるんですぅ！」と泣き喚いていた。そんな雲龍を見て呆れる大和に、龍鳳は「雲龍はちょっと責任感が強過ぎるのよ」と耳打ちした。どうやらこういう事は幾度となくあったのだろう。そう言った龍鳳の瞳には同情の光があった。きっとその時はいつも彼女が止めていたのだろう。お疲れ様です。

「葛城も、あんまりお姉さんをからかわないで。この子本気にしちゃうから」

「姉上は冗談が通じないお方だ」

「いや、あなたのはかなりリアルだから冗談に聞こえないの」

泣き喚く雲龍は隼鷹と龍鳳、葛城に任せて、なんかとてつもなく疲れた大和はフラフラと部屋を出て行った。そんな彼女を、泣き喚く姉と必死に励ます二人を無視し、葛城はじっと見詰めていた。

大和は防空指揮所に上がると胸ぐらいの高さの壁の上に頬杖した。そしてそのまま前方に広がる呉の街並みを見詰める。海鳥が空を飛び回る呉の街はとてものどかに見える。

この街のどこかにきっと彼はいる。これだけ目立つ艦だ、彼もきっと自分を見てくれているはず。そう思うと、自然と力が湧き上がる。寂しさも生まれる。

彼と別れてもう一ヶ月半が経った。数週間前には金剛を失った。

辛い事ばかりで身が引き裂かれそうなのに、心許せる彼が傍にいない。それはとても辛く、悲しい事だ。

昨日は翔輝の誕生日だった。この日の為にプレゼントを用意してたのに、やっぱり彼は帰って来なかった。

今現在頼れる翔輝は今も療養中、長門は今は横須賀にいてどちらも会えない。

ふと大和はここから少し離れた場所に浮かぶ『榛名』を見詰める。金剛の死以来榛名はずっと部屋に引きこもっている。あれだけ尊敬し、ずっと一緒だった姉の死はとてつもなく辛いのだろう。特に、姉の最期に立ち会えなかったのも彼女を苦しめているらしい。

今現在伊勢や日向はシンガポールにいる。なのでこの呉で榛名が指揮不能な今、自分は第二艦隊旗艦として一人でがんばらないといけない。もちろん直属の部下である矢矧や雪風など多くの仲間達に支えられているが、それでも今現在一人でほとんどの実務などをこなさなければならない。

こういう時こそ、翔輝の温もりが恋しい。

「大尉・・・」

このどこかに必ず彼はいる。せめて、顔を見せてくれるだけでもいいから会いたい。元気な彼の姿を見たい。そんな想いが胸の中で渦巻くが、それらは全て無駄だ。彼は生きているのが不思議なほどの重傷を負ったのだ。隼鷹に一度会いに来たのも身体や瑠璃にかなりの無理を言って来たのだろう。そんな奇跡はもう起きない。そう覚悟していた。

――それでも・・・

「会いたいです・・・」

彼の笑顔をもう一度みたい。それだけが、大和の願いであった。

その時、

「今日もきれいな空だ。そう思わぬか長官」

その声に驚いて振り返ると、すぐ後ろに葛城が立っていた。まるで気配を感じなかった。だが、驚くと同時に懐かしさを感じるこの展開。それはきっと今は亡き武蔵を重ねたからだろう。彼女もいつも気配を消して神出鬼没を繰り返していたから。

「葛城か、驚かせないでよぉ」
「すまない。そこまで驚かせるつもりはなかったのだが」
口調や態度が翔鶴にそっくりだなぁと思った。そしてどこか武蔵に似た雰囲気。なぜか、葛城には親近感が沸いた。それもきっと信頼できる仲間であった翔鶴、大切な妹だった武蔵が重なるからだろう。
「それで、わざわざこんな所まで私を追いかけてきて、一体私に何の用？」
大和は葛城に向き直ると真剣な瞳で見詰める。その鋭い眼光を目にしても、葛城は何ら反応は示さない。
葛城はそんな大和の視線を無視し、彼女の隣に立つと先程まで彼女が見ていた呉の街並みを見詰める。
「この街のどこかに、長谷川殿はいるのか？」
やっぱりそれかと言いたげな瞳で大和は葛城を見詰める。
「そうよ。まぁ、どこにいるまでは確定できないけど、この街にいるのはほぼ確かね」
「なるほど。それで長官はその長谷川殿が居られる呉の街を見ていたのだな」
「そうだけど、何か問題でもある？」
「いや、そんな長官に訊きたい事があってな」
「何かしら？」
「貴殿は長谷川殿と親交が長いと聞く。長谷川殿は一体どのような人柄だったのだ？」
「別にあなたには関係ないでしょ」
ここで翔輝の話をする訳にはいかない。もちろん翔輝の良さなんて星の数ほど浮かぶが、そんな事を彼女に言えば、自らライバルを増やす事になる。それだけは避けねばならない。
「なるほど、言葉にはできぬほど貴殿にとっては大切なお方なのだろうな」
葛城の全てを見通したような言葉に大和は息を呑む。自分の考え

は全て見透かされていた。
（葛城・・・油断できない・・・ッ！）
葛城の武蔵並みの冷静な分析力、そして彼女の履歴にあった翔鶴並みの戦闘能力。
敵にはしたくない、そんな相手だった。
大和はこれ以上自分の考えを探られないように黙って目の前の神童――葛城を見詰める。その視線に対し、葛城はフッと口元に笑みを浮かべる。
「ますます興味が沸いた。ぜひもう一度長谷川殿にはお会いしたいな」
「だ、ダメよッ！」
大和は慌てて叫ぶが、葛城は気にした様子もなく身を翻す。
「ま、待ちなさい！　まだ話は終わってないわよ！」
勝手に去ろうとする葛城の肩を慌てて掴む。すると、葛城は静かに振り返った。
振り返った葛城の長いポニーテールが風に揺れ、その凛とした表情が太陽を背に輝く。その勇ましさ、華麗さに大和は言葉を失った。
葛城は自分より頭一つ分大きい先輩にして上官である大和を静かに見詰める。
「私は使えるべき主を探していた。そして見つけた――」
――刹那、一陣の風が吹き、二人を包み込んだ――
「――長谷川殿こそ、私が仕えるべき主であると」
そう言い残すと、葛城は背を向けて歩き出し光に包まれて消えた。
海風が吹く防空指揮所に一人残された大和は、葛城のそのあまりの勇ましさにただただ言葉を失っていた。
ハッと気づいた時にはもちろん葛城の姿はどこにもなかった。
そして、戦争をしているとは思えないほど平穏な呉の街並みを見詰め、ぶわぁっと涙が噴き出し、瞳から零れた。
「大尉は一体どれだけの艦魂に好かれてるんですかあああぁぁぁッ！　大尉のバカアアアアァァァァッ！」

少女の悲痛な声が、呉の海に悲しく響き渡った。
時に一九四五年十二月九日。翔輝の二〇歳の誕生日の翌日、大和に新たな戦いの火蓋が切って落とされた。

同年十二月十九日、宮古島沖をフィリピンへの物資輸送任務中の『雲龍』が護衛の駆逐艦数隻に守られながら航行していた。敵潜水艦を警戒してジグザグ走行をする『雲龍』の防空指揮所には嬉しそうに微笑む雲龍がいた。
本来の使命である敵艦隊撃滅任務ではなく物資輸送任務だったが、それでも雲龍は喜んでその任務を受けていた。
自分でも祖国の為にできる事がある。そんな思いが雲龍の心を突き動かしていた。
だが、この時彼女が運んでいたのは《震洋(しんよう)》と呼ばれる特攻艇であった。モーターボートのような小型艇で艇首に爆弾を搭載。水上を滑走して敵艦に体当たりする特攻兵器だった。
意気揚々としている彼女は、自分が運んでいるのが特攻兵器とは知らない。食糧や弾薬だと思っている。だからこそ、受け取った時の陸軍兵の顔を想像して嬉しそうに微笑む。
雲龍は笑顔が好きな子であった。だからこそ、みんなの笑顔が見れる輸送作戦が好きだった。せめて艦魂になるんだったら、輸送船や輸送艦、給糧艦などみんなを笑顔にする艦が良かった。
しかし空母でもみんなを幸せにできる。それがとても嬉しかった。
自分の受けた任務に誇りを持って期待に胸を膨らませる雲龍の表情はとても楽しそうだった。メガネの奥の瞳も幸せそうだ。
ふと、内地に置いて来た天城と葛城という厄介な二大妹を思い出す。今頃大和達に迷惑を掛けていないか心配で仕方がない。
「お願いだから、私が帰るまで面倒な事を起こさないでね」
これ以上二人に振り回されたくない。何ともかわいそうな子だ。
蒼い海を見詰め、雲龍はメガネのブリッジを上げる。
今日は快晴の天気であった。澄んだ空が蒼く美しい。

その時、ふと出撃の少し前に言われた葛城の言葉を思い出した。
――姉上、私はついに仕えるべき主を見つけた。長谷川翔輝大尉殿こそ、私が仕えるべき主だ――
葛城はずっと自分が仕えるべき主を探していた。
もちろん仕えるのは天皇陛下であり現在事実上最高司令官である大和だが、彼女は自分が真に仕えるべき相手は他にいると言ってずっと探していた。それがどうやら見つかったらしい。
長谷川翔輝。一度会った事があるが、とても優しい人だった。確かにあの人なら、自分も仕えたいと思ってしまうほど人柄も良く、他の艦魂達からの人望も厚かった。
あの人になら、妹を任せられる。そんな気がした。
しかし、どこか納得できない。
妹が幸せになるのなら、姉としてこれ以上幸せな事はない。だが、どうにも素直に喜べない。
初めて翔輝に会った時、胸がすごくドキドキした。あの優しい笑顔、優しい声、優しい雰囲気。全てが自分を優しく包み込んでくれ、自然と安心できた。
一体あの気持ちは何だったのだろうか。
いくら考えても答えはなかなか出て来ない。
十分ほど考え、結局何も出て来なかった。
「まぁ、もう一度お会いしたら何かわかるかもしれないわね」
そう言って笑顔を浮かべると、さっさと任務を終えて呉に戻ろうと決意した。
だが、運命とはあまりにも残酷なものであった。
完成時にはすでに自分が戦う場所も艦載機もないという悲運に見舞われた空母『雲龍』。その艦魂である雲龍の想いも無視し、運命というのはそんな彼女のわずかな想いさえも、奪ってしまった。
蒼い海を見詰めていた時だった。
「え？　あれって・・・ッ！」
顔を真っ青にした雲龍は指揮所から見えた景色に我が目を疑った。

海の中を、白い軌跡を残して突っ込んで来る何か。
――それは、海中を翔ける数本の魚雷だった。
「敵潜魚雷！？」
そして魚雷は護衛の駆逐艦と駆逐艦の間の海を突き抜け、フッと視界から消えた。次の瞬間、
ドガアアアァァァァンッ！
突如『雲龍』右舷で大爆発が起きた。
「あああぁぁぁッ！」
雲龍の左脇腹が砕け、真っ赤な血が噴き出した。苦悶に顔がゆがみ、床の上に倒れた。
「い、痛い・・・ッ！」
すさまじい激痛に顔がゆがみ、瞳からは涙が零れる。倒れた衝撃でメガネがどこかに飛んでしまった。
霞む視界で見えたのは巨大な黒煙だった。
「ま、まだ・・・倒れる・・・訳には・・・ッ！」
雲龍は必死に足に力を入れて壁を掴みながら立ち上がる。その瞬間、再び敵潜水艦が放った魚雷が命中し、雲龍は悲鳴を上げて倒れた。
「痛い・・・ッ！　た、助けて――ぎゃあああああぁぁぁぁぁッ！」
突如すさまじい爆発が起き、右舷の装甲や甲板が吹き飛んだ。破口からすさまじい炎と黒煙が立ち上ると共に、甲板は火の海になり、右に大きく傾斜した。
被雷によって発生した火災が、満載した物資に引火して誘爆したのだ。
傾斜は一気に大きくなり右に大傾斜した『雲龍』の右舷は海に洗われ、兵達が甲板を滑り台のように滑って海に投げ出された。
兵達の想いも空しく、『雲龍』の被害は致命的でもはや復興の見込みはなくなっていた。
徐々に沈んでいく『雲龍』の防空指揮所では、その艦魂である雲龍が血まみれの顔で泣き叫んでいた。

「こんなの・・・嫌だよぉッ！」

一体自分は何の為に生まれてきたのか。

たった四ヶ月の命で、自分は死ぬ。

まだ生きていたい。

まだ妹達や仲間と一緒にいたい。あんな厄介な二人の妹だけど、自分にとっては大切な妹なのだ。それにまだ、建造中の妹達もいる。そんな子達に会わないで死ぬなんて嫌だった。

そんな想いも空しく、雲龍は泣き叫び続けた。

その悲痛な叫び声は、護衛に当たっていた駆逐艦の艦魂にも届き、涙した。

まだ翔輝に対しての想いもわかっていないのに、死ねない。死んではいけない。

彼ともう一度会いたい。

妹達ともう一度会いたい。

「お願い・・・ッ！　誰か、助けて・・・ッ！　私、まだ死にたくない・・・ッ！　死にたくないよおおおおぉぉぉぉぉッ！」

その瞬間、『雲龍』は大爆発を起こしてゆっくりとその艦体を艦尾から静かに海に消した・・・

――空母『雲龍』、ミッドウェー海戦で失った空母を補充する為に建造された最新鋭空母。中型空母ながら日本の空母造船技術の粋をコンパクトに結集させた空母であった。だが、戦局の悪化から建造が大きく遅れ、完成した時にはすでに日本機動部隊は壊滅し、『雲龍』は戦うべき場所も、共に戦う艦載機もなかった。空母としての能力を発揮する事もなく、その大きな航空機格納庫に物資を詰め込んで輸送作戦に従事した。そしてこの日も輸送作戦の最中、『雲龍』は敵潜水艦からの魚雷攻撃を受け、満載した物資に誘爆。一瞬にして轟沈した。そんな『雲龍』の艦魂は妹二人に振り回される不運な少女であった。まじめで強い責任感を持ち、誰よりも優しい子。それが雲龍という子であった。そんな彼女はある青年士官に今まで

感じた事のない感情を持っていた。だがそれを確かめる事もできず、
わずか四ヶ月という短く儚い命を終え、海の底に沈んだ――

第十三章　第五節　恋姫戦争勃発！！　大和ＶＳ葛城　いきなり頂上決戦！？

ほとんど出番なく早過ぎる脱落をした雲龍。
残る葛城と天城は、大和達はどうなっていくのか。そして、翔輝達は一体どうなっていくのか。
終わりが近いというのに、まだまだ悪あがきのごとく新キャラを投入して作品を持たせようとするいやらしい作家、それが黒鉄大和ですが、これからも応援よろしくお願いします。
次回、レイテ沖海戦以来全く出番がなくシンガポールに待機し続けている伊勢と日向が、祖国に帰る為に決死の大作戦を敢行します。
お楽しみに。

第十三章　第六節　奇跡の大作戦　北号作戦（前書き）

キスカ撤退作戦と並び称される日本海軍が起こした奇跡の作戦の一つ――北号作戦。
それはレイテ沖海戦でシンガポールに逃げ込み、そして孤立した戦艦『伊勢』『日向』を基幹とした艦隊に物資を満載し、危険な敵地と変貌した東シナ海を突っ切って日本へ帰るという命懸けの作戦であった。
だが、一縷（いちる）の希望であっても、愛する祖国へ戻れる事を信じ、戦姫達は命懸けの出撃をするのであった。
久しぶりに伊勢と日向が登場します。ぜひ最後まで読んでください。

第十三章　第六節　奇跡の大作戦　北号作戦

それから大和にとってはひと時の平和が続いた。

呉のドッグで整備作業をしている『大和』は日本海軍最後の艦隊である第二艦隊旗艦に就任。さらに新しく有賀幸作（あるがこうさく）大佐が『大和』艦長に就任した。

森下との別れを悲しむ大和だったが、森下は少将に昇級してなんとそのまま第二艦隊参謀長として『大和』に残る事になった。これには大和も大いに喜んだ。

だが、その間もフィリピンの日本軍が劣勢に追い込まれ、マリアナ諸島からついにＢ‐２９が襲来して日本本土を空爆し始めるなどがあった。

日本海軍はレイテ沖海戦以前から多号作戦というフィリピンへの輸送作戦を続けていたが、輸送船や輸送艦が次々に撃沈されるという状況が続いていた。

そして十二月十五日、米軍はミンドロ島に上陸。これに対し日本海軍は礼号作戦と呼ばれる敵上陸部隊粉砕を企画、発動した。

戦力は軽巡洋艦『大淀』以下重巡洋艦『足柄』、駆逐艦六隻というほんのわずかなものであった。

唯一の希望は敵艦隊が台風によってかなりの損害を受けているという事だけだった。日本海軍は台風によって損害を受けた事が幾度とあり（友鶴事件、第四艦隊事件）、台風や荒波への対策はしていたが、アメリカ海軍はそんな事をしておらず、大損害を受けた。空母は飛行甲板が被害を受け、戦艦『アイオワ』は推進軸が曲がるという致命的な損傷を受け、同艦は翌年一月に真珠湾へ帰還した。

だが、もちろん日本軍側はそんな事は知らない。少数の艦艇による決死の作戦であった。

そんな礼号作戦を指揮するのは奇跡のキスカ島撤退作戦を指揮した名将、木村昌福（きむらまさとみ）少将であった。

艦隊は敵機の空襲や魚雷艇の攻撃を掻い潜り、駆逐艦『清霜（きよしも）』が脱落しながらもマンガリン湾に突入。偵察機から投下された照明弾を頼りに一方的な砲撃を加えた。この攻撃により敵輸送船一隻大破、同三隻に損害を加えた（実際は輸送船一隻撃沈と荷揚作業が一時中断された程度）。

木村艦隊は攻撃終了後迅速に撤退。途中沈んだ『清霜』の乗組員を旗艦『霞（かすみ）』自ら行い、生存者を救出。その後幾度か敵機の空襲や敵潜水艦からの攻撃を受けたが、艦隊は無事に基地へ帰還した。

これがミンドロ島沖海戦と呼ばれる海戦で、戦果事態は大した事はなかったが、圧倒的不利な中わずかでも敵に損害を与えたこの戦いは日本軍の戦術的勝利となった。

これが、日本海軍の組織的戦闘における最後の勝利でもあった。

そしてついに時代は太平洋戦争最後の年である一九四五年に突入した。

一月にはフィリピン最後の日本軍の重要拠点であるルソン島に米軍が上陸を始め、日本陸海軍は上陸阻止の為に四日～九日の間に特攻機を大量に突入。空母三隻、輸送船三〇隻以上が損害を与えた。しかし圧倒的な戦力差の前ではわずかな被害でしかなく、フィリピンはほぼ陥落となった。

フィリピンの制海空権を失い、日本は南方資源地帯との補給路を完全に寸断された。ただでさえシーレーンが危うく輸送船や輸送艦が敵潜水艦や航空機の攻撃を受けて沈没が多発していたのに、補給路を断たれた今では確実に撃沈される。これでは日本に必要な石油や鉄は海上路では運べない。陸路も連合陸軍が暴れまわっている中国を貫通して送るなど不可能だった。

こうして、資源を全て諸外国に頼っていた日本はついにその資源補給路を完全に失い、戦争継続はもはや不可能となっていた。特に艦艇などは動けるだけの重油がなく、浮き砲台として湾内に待機す

る事となった。
だが、日本本土の艦艇はもはや石油不足で動けなくなっていたが、南方資源地帯に停泊している日本海軍の艦艇は今までのように動き回れた。だが、フィリピンを失った今ではその艦艇も日本に帰る事はできなくなっていた。
そして、シンガポールに残された航空戦艦『伊勢』『日向』も、その例外ではなかった。
もう日本に戻る事はできない。
伊勢や日向もその事を覚悟して、毎日日本の方向に向かって静かに敬礼をしていた。
――だが、

連合艦隊司令部よりシンガポール駐屯艦隊にある作戦が命令された。
それは、第四航空戦隊所属の戦艦『伊勢』『日向』を基幹にした艦隊を編成し、その艦艇に石油や鉄などの物資を満載し、日本へ向かえという無謀な輸送作戦――北号作戦だった。
物資を満載した艦は重くなり、速力や回避行動が鈍くなる。それに駆逐艦なら物資を載せる為には甲板の魚雷を撤去しなければならない。そうなれば戦闘能力も下がる。
本来戦闘艦は戦闘をする為の艦であり、物資を載せる艦ではない。だが、今の南シナ海は低速で防御力が低く戦闘力もない輸送船はすぐに沈められる。だからこそ高速・重武装の戦闘艦が輸送任務に就くしかなかった。
命令を受けた第四航空戦隊司令官である松田千秋少将は軽巡洋艦『大淀』と駆逐艦三隻をその指揮下に入れて物資の搭載を開始した。

南海の空は本当に今は戦時中なのかと思わせるほど蒼く澄み切ってきれいで、海も珊瑚礁が美しく平和な時が流れていた。
蒼い空の下、物資を詰め込む戦艦『伊勢』の防空指揮所には南国

の日差しをまぶしそうに見上げる伊勢と日向がいた。どちらも暑い日々を過ごしていたので上着は脱いでワイシャツ姿というラフなものだった。

航空戦艦として生まれ変わった際に造られた航空機格納庫に大量の物資が積み込まれる。そんな光景を見詰め、伊勢は苦笑いした。

「まさか、飛行機を入れる為の格納庫に飛行機の代わりに補給物資を入れるとは思ってもみーひんかったわ」

「まあまあ、何にも使われないよりはいいじゃない」

一人苦笑する伊勢の横で日向がお気楽そうな明るい声を上げる。いつでも天真爛漫な日向はあまり気にしたそうもなく屈託のない笑みを浮かべる。そんな妹を、伊勢は少し呆れながら見詰める。

「あんたはええなぁ、何でも前向きで。少しはうちみたいに戦艦としての誇りを持ったらどうなんや？」

「戦艦の誇りなんてこの戦争じゃ無意味だよ。艦隊決戦なんてもう儚い夢でしかないもん。今は戦艦で何をすべきかじゃなくて、戦艦で何ができるかを考えるべきだよ」

ニャハハと無邪気な笑みを浮かべながら日向は至極まともな意見を言う。そんな驚愕の言葉を言った妹を見詰め、伊勢は驚いたように目を見開く。

「あ、あんたから説教を受けるなんて思ってもみーいんかったわ」

本気で驚く伊勢に、日向むぅと頬を膨らませて怒る。

「ひどいよぉッ！　私だってこれでも今年二七歳なんだもん！　いつまでも子供扱いしてほしくないよ！」

「せやかてチビやないか」

「チビって言うなあああぁぁぁッ！」

手をぶんぶん振って怒る日向を見て、やっぱり子供だなぁと伊勢は思いながらくすくすと笑った。

だが、こんな幼稚な怒り方をする妹は、伊勢にとってはたった一人の妹だ。そんな彼女を守りたい。伊勢は素直にそう思った。それに、

「あんたの言うとおり、今はうちらに何ができるかを考えなきゃあかんね」
「うにゃ？　お姉ちゃん？」
伊勢は日向に向き直って満面の笑みを向ける。背景がどこまでも澄んだ美しい蒼い空なので、伊勢はまるで天使のように見えた。
「日向！　うちら一緒に、絶対に日本に帰るんや！」
「もちろん！　お姉ちゃんとまた日本の桜を見るんだもん！」
日向はそう言って満面の笑みで姉に抱き付いた。伊勢もそんなかわいい妹を優しく抱き返してやる。
二人の淡い姉妹愛は蒼い空をより一層輝かせた。
腕の中で愛しい妹を感じながら、伊勢は遠い祖国にいるであろう仲間達、そして愛する彼の事を思い出した。
もう会えないと覚悟していたのに、また会えるかもしれない。
胸の中に、希望という光が輝いた。
また彼に会える。彼の笑顔が見れる。
そう思うと、何としてでも日本に帰って彼に会いたい。そんな強い想いが心の底から湧き上がり、力になる。
南国の日差しが照らす戦艦『伊勢』の上で、戦争から忘れられた戦姫が祖国へ帰り、愛しき彼に会う事を夢見て、危険な航海への出撃を決意した。

翌日、《任務を完遂する》という松田の想いを込めて命名された戦艦『伊勢』『日向』、軽巡洋艦『大淀』、駆逐艦三隻の小艦隊――《完部隊》はシンガポールを出港。一路日本を目指した。
総数六隻の小艦隊は多くの期待が込められて出撃した。だが、敵地をこんなわずかな艦隊で突破する事は不可能に近く、良くて半滅。悪くて全滅を覚悟したこの作戦が成功するは、戦艦『大和』艦長を務めた日本海軍有数の砲術家である松田千秋少将の肩に掛けられていた。
航空機格納庫に物資を満載しながら海を翔ける『伊勢』の防空指

揮所では、海風に揺れる長い黒髪を押さえながら、伊勢は小さな笑み浮かべていた。
確かに命懸けの航海になるのは事実だ。でも、それ以上に日本に帰れる、仲間に会える、翔輝に会える。そんな想いの方が強かった。
必ず生きて帰って、みんなに会う。
そして、もう一度、愛する彼に会う。その為なら、危険な海だろうと突っ切ってみせる。
伊勢の心には強く燃える炎があった。
「みんな、待っててぇな。うち、この作戦絶対に完遂してみせるから！」
そう蒼い海に向かって叫ぶと、伊勢はどこまでも澄んだ蒼穹の空を見上げた。
「扶桑姉はん、山城姉はん。うちらを守ってな」
白波を立てて海を翔ける完部隊。
あまりにも無謀で、成功する見込みはゼロに近い危険な航海。それでも、必ず日本に帰る。そんな思いを胸に、伊勢達六人の戦姫達は祖国に向かって進撃した。

それから十日後、呉に一つの艦隊が到着した。
それは、資源物資を満載した松田司令官率いる完部隊であった。
しかも、落伍した艦はなく、無傷で全艦艇が無事に到着した。
完部隊は航海中に二度敵機の空爆に晒されたが、松田の指揮で近くに発生していたスコールに逃げ込み、二度ともやり過ごし、こうして無事に呉に帰って来たのだ。
この全滅覚悟だった完部隊の無傷での到着に海軍上層部は歓喜した。
しかしながら六隻の艦艇での輸送でありながら、物資の量としては中型貨物船一隻分に過ぎなかった。専用の輸送船ではなく戦闘艦艇である以上は仕方ない事だったが、この程度の量の物資の輸送に成功した事に歓喜しなければならないほど、日本は資源が枯渇して

いたのだ。
そしてこれが内地に持ち帰られた最後の航空機燃料となった。
そんな奇跡の作戦を完遂させて呉に到着した完部隊を多くの将兵が出迎えた。
多くの者に祝福される完部隊。そんな中、伊勢と日向は連合艦隊最後の艦隊である第二艦隊旗艦・戦艦『大和』の会議室にいた。そこには事実上連合艦隊最高司令官である第二艦隊旗艦を努める大和がいた。
大和はケガひとつなく帰って来た二人に嬉しそうに満面の笑みを向ける。
「お帰りなさい。伊勢さん、日向さん」
「ただいまぁ♪」
「久しぶりやねぇ」
大和の今にも泣きそうな嬉しそうな笑みに、二人も嬉しそうに微笑む。そのどちらの顔にも明るい笑顔が浮かんでいた。
こうして大和が伊勢と日向と顔を合わせるのはレイテ沖海戦前から実に四ヶ月ぶりの事であった。
大和は栗田艦隊として、伊勢と日向は小沢艦隊としてレイテ沖海戦に参加したので、武蔵と金剛の最期には立ち会えなかったし、翔輝と別れのあいさつをする事もできなかった。
この年をまたいだ四ヶ月の間に、多くの仲間を失った。
かつて世界三大海軍国であった日本海軍は、今は見る影もないほど衰退した。その戦力を大きく消費したのがマリアナ沖海戦以降の戦いだ。
そして、生き残った艦艇も多くが浮き砲台と化していた。艦を動かす重油が不足しているからだ。油がなければ、艦艇もただの鉄くずも同然である。資源もなく、資源地との補給路を閉ざされた日本には、もはや打つ手がなかった。
シンガポールにいてすっかり日本の情報が回って来なかった二人は、レイテ沖海戦で翔輝が大怪我と負って今は陸の上で療養をして

いる事、金剛と滝川が戦死した事、長門は横須賀にいる事などを伝えた。

金剛の死と翔輝の大怪我を知った二人は深く悲しんだ。

きっと会えると思ってここまで来たのに、会いたかった彼は大怪我を負っておらず、尊敬していた金剛が死んだ事を知り、伊勢は静かに涙した。その隣でも日向が泣いていた。

そんな伊勢と日向に掛けるべき言葉もなく、大和は無言でそんな二人を見詰める。

こんな時に頼りになる翔輝や長門もいない今、大和は無力の自分が悔しかった。

しばし泣いた後、何とか平静さを取り戻した伊勢は涙を拭うといまだ泣き続ける日向の頭をそっと撫で、大和に向き直る。

「それで、長谷川はんは今どうしてるん？」

伊勢の問いに、大和の表情が悲しげに曇った。その悲痛な表情に伊勢の背筋に冷たいものが流れた。

何か、嫌な予感がした。

「わかりません。十一月の終わりに大尉から手紙を頂いたんですけど、それ以降音信不通なんです。瑠璃さんからはつい先日手紙があったんですが――」

「瑠璃はんから？　内容は？」

「・・・大尉をもう艦隊勤務にはさせないと、書かれていました」

大和の言葉に伊勢は「そんな・・・」と悲しい表情を浮かべる。

しかし、それを言う大和自身もまた辛い想いを抱いているのだ。

「私も手紙を書いて参謀長――あ、森下さんですけど――に渡して送ってもらったんですけど、まだ返事はないんです」

「そうなんや・・・」

大和と伊勢は互いの顔を見合って静かにため息した。そんな二人に涙を拭った日向がむくれた顔で怒る。

「もうッ！　二人とも暗いよ！　大丈夫！　いくら優柔不断な長谷川君でも瑠璃ちゃんの横暴には反撃するはず！　きっと戻って来る

よ！」

日向の金剛の死の辛さを我慢しながら言った言葉に、二人は静かに小さな笑みを浮かべた。

「そうですね。きっと帰って来ますよね」

「今は、そないに信じるしかないんや。せやから、信じようや」

三人は小さく笑みを浮かべ合うと窓の外の蒼い空を見詰めた。

きっと彼は戻って来る。そんな想いを込めて・・・

「失礼する」

その声に窓の外を見詰めていた三人は振り返った。するとそこには威風堂々と部屋に入って来る長身に長いポニーテール、鋭い眼光をした少女――葛城だった。

「ちょっと、今は会談中よ。部外者は立ち去りなさい」

「いいではないか。私は先輩の顔を見に来ただけだ」

葛城は気にした様子もなくクールに返す。そんな葛城を睨む大和はひどく不機嫌そうだった。

伊勢と日向はそんな二人に首を傾げる。

「えっと、あなただぁれ？」

日向の問いに、葛城はカッと踵を揃えると敬礼した。

「お初にお目にかかる。第一航空戦隊所属、雲龍型空母三番艦、空母『葛城』の艦魂だ。以後よろしく」

「は、はぁ、うちは第四航空戦隊所属、伊勢型戦艦一番艦、戦艦『伊勢』の艦魂や。よろしくなぁ」

「私は戦艦『日向』の艦魂。伊勢お姉ちゃんの妹だよ」

伊勢と日向は困惑しながらも自己紹介を済ませる。すると、伊勢が大和にそっと耳打ちする。

「ずいぶんと偉そうな態度の子やなぁ」

「厄介な相手ですよ。しかも、どうやら大尉に何やら気があるみたいなんです」

「ほんまかッ！？」

「しーッ！　声が大きいですよ！」
小声で怒鳴る大和に、伊勢は「す、すんまへん」と声を小さくする。そんな二人を葛城は首を傾げながら見ていたが、日向が話し掛けたおかげで危機は脱した。日向のとっさの機転のおかげだ。
「ほんで、それはほんまなんか？」
「はい。まだよくわかりませんが、それでも大尉に対して何か特別な感情を抱いているのは確かです」
伊勢はそっと日向が時間稼ぎをする葛城を盗み見る。凛々しい顔つきをした葛城は端整な顔つきをした美少女であった。これは極めてまずい。
「ど、どうするんや？」
「わかりませんよ。私だってこの二ヶ月ずっとがんばってるんですけど、ダメなんですよ」
「と、とにかく何か策を考えないとあかんなぁ・・・」
二人はそんな自分達の気持ちも知らないであろう葛城をじっと見詰める。日向と表情を変えずに会話する葛城は、並大抵ではない強敵であると、二人は静かに感じていた。

葛城と別れた大和と伊勢はある場所に訪れていた。
同じく呉の海に浮かぶ戦艦『榛名』のとある一室。榛名の自室となっている部屋だ。その扉の前には駆逐艦の子が一人立っていた。大和が当番制で榛名の様子確認や食事を持って来る役目の艦魂だ。
水兵服を着た少女はカッと二人に見事な敬礼をする。二人もそんな彼女の敬礼に答礼する。
「ご苦労様。ちょっと私達榛名さんに用があるから、ちょっと席を外してくれないかしら？」
「わかりました」
少女はそう言うと光に包まれて消えた。
大和と伊勢は再びドアに向き直ると、静かにノックした。
「私です、大和です。伊勢さんをお連れしました。入室の許可をも

らえますか？」
　数秒の間の後、「・・・入れ」という小さな榛名の声が扉の向こうから響いた。
「失礼します」
　大和はドアノブを捻ってドアを開くと静かに部屋に入った。その後ろから伊勢も「入るわよぉ」と静かに言って入って来た。
　部屋の中には涼しい風が通っていた。
　部屋の中は机とベッド、その他来客用のソファと本棚等々、一通りのものは揃っていた。そして、白い清潔そうなカーテンが揺れる窓のすぐ近くにある白いベッドの上には、ポニーテールを下ろして本を読む榛名の姿があった。
　榛名は部屋に入って来た二人に気づき、パタンと本を閉じると静かにそちらに顔を向け、静かに笑みを浮かべた。それはいつもの不敵な笑みではなく、とても優しげなものだった。
「いつもご苦労だ大和。それと伊勢。お前もよく無事作戦を完遂してくれた。二人とも立派だぞ。それでこそ日本海軍の軍人だ」
「は、はぁ、ありがとうございます」
　緊張したように礼を言う大和。だが、その横では伊勢が目を丸くしていた。
「は、榛名？　一体どうしたん？」
「うん？　どうしたとは、一体何がだ？」
　キョトンとする榛名。その仕草もまた常の彼女では見られなかったかわいいものであった。そのあまりにも女の子らしい榛名に、伊勢は身震いする。
「一体どうしたん榛名。まるで病院に入院している物静かで優しい心を持っていて、せやけど不治の病に身を犯され、本人もそれに気づいている。だからこそ今を大切に生き、外の世界を見てみたい。本だけやなく、自分の足で、自分の目で、自分の身体で世界を感じたいとか思ってそうなメインヒロインみたいな雰囲気は？」
「意味わからんぞ」

困惑する榛名に対し、大和はなんとなくわかった。それほどまでに榛名は以前のような歩く戦闘兵器のような凶暴さを失っていた。
「金剛さんの死で二週間ほど泣き続けた後、こんな感じになってしまったんです」
そっと伊勢に耳打ちする大和。
どうやら尊敬する大切な姉である金剛を失い、目標を見失った彼女はそれまでのすさまじい闘争心をすっかり失ってしまったらしいと大和は考えていた。他の艦魂達も同じような考えに至っている。
「うーん、榛名が静かなのはええんやけど、ここまでキャラを変更されたらこっちが気味悪いわなぁ」
「そ、そうですね。私の地位も危ないですし」
かなり真剣な表情で悩む二人に対し、榛名は呆れたような目で見詰める。
「さっきから聞いてれば人を何だと思ってるんだよ」
「あ、すみません！　そういう訳ではないんです！」
大和は慌てて謝る。そんな彼女の横では伊勢がじっと榛名を見詰めていた。口調こそ変わらないが、すっかり牙の折れた虎と化している榛名を、伊勢はじっと見詰める。その時、榛名の瞳の奥に炎が見えた。それはいつも彼女が持っていたすさまじい業火のような炎。今はそれも小さくなっているが、消えてはいなかった。
フッと、小さな笑みが口から漏れた。
「伊勢さん？」
「大和、大丈夫やで。榛名は昔のままの榛名や」
「え？　どういう事ですか？」
すっかり意味がわからないという具合の大和に、伊勢は静かに微笑む。
「ちょっとした充電期間ってもんかな。金剛はんの死で一度彼女の緊張が解けたんや。せやから、今は次の戦いに備えて休んでるだけや。その証拠に、榛名の瞳はまだ死んでへん。ちゃんと燃えとるで」
大和はじっと榛名の瞳を見つめるが、さっぱりわからない。だが、

榛名はニッと唇を吊り上げていつもの笑みを浮かべた。
「当たり前だ。この俺がそう簡単に倒れる訳ねぇだろ？　今はまだ出撃がねぇ。だからゆっくりしてるだけだ。だがそろそろ動き出さねぇとな」
そう言って不敵な笑みを浮かべる榛名は、先程までの病弱な少女のような雰囲気は消え、いつもの歩く戦闘兵器のような勇ましい雰囲気に変わっていた。その雰囲気に、大和は安堵する。
「良かったです。これで榛名さんも味方になってくれそうです」
「味方？　何かあったのか？」
首を傾げる榛名に、大和は葛城が翔輝争奪戦争の新たな敵になりそうだという事を話した。今まで幾度となく対立してきたが、大いなる脅威の前ではまずそれの排除を最優先とし、一事休戦及び同盟を組む。それが賢いやり方だ。
そして、全てを話し終えた後、榛名は――
「あのヘラヘラ平和ボケがぁッ！　一体どんだけ女を丸め込む鬼畜なんだッ！」
当然ブチギレた。もちろん彼女自身は翔輝の事を何とも想っていないと言っているが、すでに大和も伊勢もとっくに彼女も恋敵（ライバル）だと思っている。
「とにかく葛城を潰すぞッ！　俺の配下の信頼できる親衛隊に夜襲を掛けさせるッ！」
「そんな乱暴なッ！」
「それに、葛城はめっちゃ強いで。噂によると翔鶴なみっちゅーしな」
「マジかよッ！？　そんな奴にあんな雑魚集団が勝てる訳ねぇだろうが！」
「榛名さん。あんまりあなたを慕っている子達を上げに上げた後に突き落とすような事は言わないでくださいね。ドアの向こうからすすり泣く声が聞こえますよ」
その後三人はどう葛城を諦めさせ、及び突き落とすかを緻密（ちみつ）に話

し合った。しかし武蔵のような優秀な参謀のいない実戦指揮だけの彼女達からまともな作戦などでるはずもなく、時間は無意味に過ぎていった。

大和はこの時、本当に武蔵の存在が大きかったんだなぁと実感し、今は横須賀にいる長門がせめていてくれればなぁとため息した。

日が傾き始めた呉に浮かぶ戦艦『榛名』では、そんな作戦会議が続けられていた。

第十三章　第六節　奇跡の大作戦　北号作戦（後書き）

無事に日本に帰って来た伊勢と日向。
翔輝が戻ってくる事を信じ、ひたすら待ち続ける大和。
まだ志は折れていない榛名。
そして、新たなライバルとなる危険性をもった葛城。
新旧入り乱れる翔輝を巡るすさまじい戦いはまだまだ続きます！
しかし、当の本人は一体どうしているのか、次回その全てが明らかになります！
次回、再び運命の歯車が回り出す！？

2013

第十三章　第七節　想い人再会　新たな波乱の始まり（前書き）

ついに翔輝が動き出す。
内容的には短くも、時間的には長い間離れ続けていた翔輝と大和。
レイテ沖海戦以来止まり続けていた様々な歯車がゆっくりと動き出します！

2014

第十三章　第七節　想い人再会　新たな波乱の始まり

二月の終わり。連日のように敵潜水艦が日本近海に堂々と現れ、Ｂ－２９が近い将来の大空襲を予言させるように偵察飛行で飛び回ったり、特攻隊が本土近海の敵艦隊に体当たり攻撃をするという日々が続いた。

そんな中、新たな兵員補充が『大和』に訪れた。

まだ十代後半でしかない訓練期間を短縮された特別年少兵達は巨艦『大和』を純粋なキラキラとした瞳で見詰めた。そんな中、少し彼らより年上の青年が慣れた手付きで甲板に上がった。

刹那、一陣の風が吹いた。

アタッシュケースを片手に士官用軍服を着たその青年は巨艦『大和』の艦橋を見上げた。その顔には太陽の光に反射して光り輝く縁なしの細い四角メガネが掛かっている。

青年はメガネのブリッジを上げながら巨大な浮かべる城である『大和』をまるで同窓会に現れた古い友人を見るような眼差しで見詰めた。

「――ただいま・・・大和」

以前よりも大人らしくなった青年は迷う事なく艦内に吸い込まれた。

それは、レイテ沖海戦で負傷して内地に上がっていた――戦艦『大和』先任航海士・長谷川翔輝少佐（昇級）であった・・・

まず艦橋に現れた翔輝は森下と再会し、新艦長有賀にあいさつした。その後、翔輝は自室に荷物を置いて――大和達のいる第三会議室に向かった。

翔輝は部屋の前に来ると迷う事なくその扉を開けた。

扉の向こうには会議中の艦魂達がいた。

伊勢や日向、榛名に隼鷹、龍鳳や雪風他十数人の艦魂達がいた。

参謀長席に座っている伊勢は驚きのあまり目を見開き、そして――海図に指揮棒で何かを説明していた大和が突如現れた人物に唖然としていた。

予想通りの反応に翔輝は驚きもせず、いつもの優しげな笑みを向けた。

「みんな、久しぶり。元気にしてた？」

沈黙が返ってきた。

「あ、あれ？」

さすがの翔輝もこの反応には困惑した。すると、伊勢が震える手で自分を指差し、同じく震える声で質問してきた。

「も、もしかして・・・長谷川はん？」

「そうだけど」

翔輝の回答の数秒後、部屋の中に爆発が起きた。

『大尉ッ！？』

全員が悲鳴に近い歓喜の声を上げた。と同時に指揮棒を投げ出して大和が泣きながら翔輝に抱き付いた。

「大尉！　大尉なんですね！？　本当に大尉なんですね！？　夢なんかじゃないですよね！？」

押し倒すような勢いの大和を、翔輝はなんとか受け止めた。懐かしい感触、懐かしい匂いがお互いを包み込む。

「久しぶりだね――大和」

その言葉に、向けられた笑顔に、大和は彼のいないこの四ヶ月の寂しさや悲しさが涙となって溢れ、頬を流れた。

「ずっとずっと、会いたかったですぅッ！」

「それは僕もだよ」

大和はそれはそれは嬉しそうに泣きながら翔輝に抱き付く。翔輝もそれに応えて大和を抱き締める。

実に四ヶ月ぶりの再会だ。

その間に、二人とも大きく成長していた。

「少し、背が大きくなられましたか？」

「え？　あ、うん。この間測ったら一七〇センチだった。この戦争中に五センチ伸びたよ」
「そうですか、前よりもずっと、頼れるお方になられました」
「そういう大和だって大きくなったろ？　なんだろ、子供から大人の女へゆっくりとだけど上ってるみたいな」
「そ、そんなぁ・・・お恥ずかしいです・・・」
顔を赤面させながらも嬉しそうに微笑む大和に、翔輝はやっと戻って来たんだと思った。
ここが自分のいる場所。自分を頼るみんながいる場所なのだ。
嬉しそうに泣きながら喜ぶ大和を抱き締めていると、
「長谷川はん！　お久しぶりやなぁ！」
その特徴的なゆっくりとした口調に振り返ろうとした刹那、後ろから抱き付かれた。大和とは比ではない柔らかい二つの感触が背中に押し当てられ、翔輝は顔を真っ赤にして慌てる。
「ちょっと伊勢！　離れてよぉッ！」
「嫌やぁッ！　もう、放したりなんかせぇへんから・・・ッ！」
そう叫ぶ伊勢の大きな瞳からは涙が零れていた。
伊勢は大和以上に長い間翔輝とは会えなかった。
怖かった。翔輝が姉二人と同じように命を落とすんじゃないかって。
怖くて怖くて仕方なく。だからこそこうしてまた出会える事が嬉しかった。
泣きじゃくりながら抱き付き続ける伊勢に、翔輝は「ごめんね」と小さくつぶやいた。彼女にこんなにも心配をかけさせてしまった。
前には大和、後ろには伊勢。どちらも再会に喜び、涙を流している。そんな二人を、翔輝はそっと抱き締めた。と、
「お兄ちゃあああぁぁぁぁぁんッ！」
そんな一段と大きな声とシャラン・・・という柔らかい音に首だけ回すと、右腕に隼鷹が泣きながら抱き付いてきた。彼女は三人の中では一番最近出会っている。それでも、すでに三ヶ月近くが経っ

ていた。この小さな少女に、それだけ辛い期間を与えた事に翔輝は一瞬顔を曇らせるが、隼鷹の泣きながらも満面の笑みを浮かべる姿に、それは笑みに変わった。

「久しぶり隼鷹。まだスカート穿いてたんだ」

苦笑しながら見たのはまだスカートを穿いている隼鷹であった。すると、ある事に気づいて翔輝は顔を真っ赤にする。

「っていうかお前ら全員スカートッ！？」

翔輝は今さらながら気づいた。見ると、この部屋にいる艦魂全員がスカートを穿いていた。もちろん大和と伊勢もだ。

自分が艦を降りた時はそれまでどおり全員ズボンだったのに、今は全員膝くらいの位置までしか掛かっていない、柔らかなスカートをしていた。水兵の子が穿くとまるで女学生にしか見えないが、今までのズボンよりもずっと女の子らしい。

「はいッ！　金剛さんという古い伝統に囚われる保守派の艦魂がほとんどいなくなった今、この改革はあっという間に完成しました！　どうですか？　やっぱり艦魂も女の子なんだから少しはこういう方が女の子らしくていいんじゃないですか？」

大和はこの一ヶ月前、艦魂の軍服基準を変更。ズボンからスカートに変えた。一応丈の長さは決まっているが、長くしたり短くしたり艦魂それぞれの個性が出ていた。その他アクセサリーも許可。さらには非番の時は私服可というのも新たに設け、長年古いしきたりが続いた日本艦魂社会に新たな歴史をスタートさせた。

これは後に武蔵が行った下着革命こと《昭和下着内乱》と同時に上げられる大和の《乙女主義革命》と呼ばれる出来事。後の艦魂達の歴史の教科書ではこの二つがよく試験に出るほど知名度は高く、後の評論家も「この姉妹による二大革命は、戦後の多くの日本艦魂や船魂（せんこん）を大きく変えた一因でもある」と評価している。

・・・とまぁ、そんな余談は置いておいて、話を戻します。

翔輝は顔を赤くして視線を逸らした。当時の日本はこういうスカート文化は浸透していない。しかも戦争確実とわかった戦前から女

子はモンペ服が国民服と制定され、オシャレというものはなくなった。そんな時代を生きた翔輝にとって、スカートというのはあまりにも過激過ぎた――まぁ、すでに大和達の水着を見てはいたが、あの時も翔輝は右往左往していた。

翔輝は頬を隠したまま努めて冷静を装う。

「隼鷹。久しぶりだね。元気にしてたか？」

「ずっとずっと会いたかったよぉッ！　寂しかったよぉッ！」

泣きながら翔輝に甘える隼鷹を、翔輝は優しく頭を撫でてやる。

鈴の付けられたツインテールが嬉しそうにピョコピョコと揺れる。

三人の女の子に泣きながら抱きつかれる。なんともうらやましくも感動的な光景だ。その光景に、まわりの艦魂達も涙を浮かべながら見守る。

翔輝の腕の中に顔を埋めていた大和はもう一度彼の顔を見ようと視線を上げ、ある事に気づいた。

「あれ？　大尉メガネ掛けてますね。どうしたんですか？」

大和の問いに翔輝は「あ、これ？」と言ってメガネを指差す。

「ほんまやぁ。長谷川はん一体で何でメガネなんか・・・」

「あ、これはね――」

説明しようとした翔輝の左から何かが突撃してきた。大和と伊勢、隼鷹はそれに気づいて慌てて翔輝から離れたが、翔輝はそれに気づかなかった。

「この大バカヤロオオオオォォォォォッ！」

突如響いた鬼の咆哮に翔輝が気づいた時には、もう翔輝の横腹に強烈な跳び蹴りが炸裂していた。

翔輝はそのまま吹っ飛ばされて壁に激突。あまりの激痛に悶絶する。一方の蹴りを入れた張本人はきれいに着地すると不思議そうな顔をしている。

「あ、あれ？　長谷川なら今のは避けられるだろ？」

「榛名さん！　大尉になんて事を！」

大和が顔を真っ青にして慌てて倒れて悶絶している翔輝に駆け寄

る。その間、榛名は伊勢に辻斬りのような鋭い瞳で睨まれた。
「榛名。長谷川はんはこれでも大けがを負って今まで療養中だったんやで？　その彼にいきなり跳び蹴りはないんやないか？」
「え？　で、でもよ、さっきの長谷川はおかしいぜ？　いつもの長谷川ならあれくらい避けられるのに」
「せやから、まだ完全には復活してないんとちゃうの？」
「マジかよ。やべぇ・・・」
榛名は気まずそうに翔輝を見詰めるが、意外にも翔輝は結構普通に起き上がった。その姿に榛名は安堵する。先に言うが彼女は他の艦魂と違ってズボンを穿いている。まぁ、榛名のスカート姿なんて想像できないが。
一方の翔輝は大和の肩を借りて立ち上がる。
「いてて、榛名。いきなり何すんだよぉ」
瞳に涙を浮かべて怒る翔輝に、榛名は苦笑いしながら視線を逸らす。
「いや、久しぶりに蹴りを一発入れたんだけど」
「勘弁してくれよ。これでも軍医に生きてるのが不思議って言われたけがを克服して来たんだからさ」
「あぁ、悪い」
「気をつけてよね――それに」
翔輝は悲しげな表情でずれたメガネのブリッジを上げて戻す。その瞳は、悲壮の色に染まっていた。
「僕――左目見えないんだからさ」
その言葉に、部屋が一瞬にして沈黙した。
「え？　大尉？　目が見えないって・・・どういう・・・」
目を大きく見開いて驚く大和の声は震えていた。そんな彼女に、翔輝は小さく首を横に振る。すると、左目がわずかに生気がないように感じられた。
「言葉どおり。僕、左目を失明しちゃったんだ」
翔輝の言葉に、全員が驚愕した。そんな反応を予想してたかのよ

うに、翔輝はため息を一つ零して説明する。
「前の作戦で負った銃弾の一つが頭に命中してたろ？　それが視神経を傷つけちゃったみたいで、左目失明。右目も失明は逃れたけど視力が二・〇から〇・五まで下がっちゃったんだよね。そのせいでメガネ掛けてるんだけど。後もう少し視力が落ちたら軍隊に戻れないところだったよ」
　あははは と明るい笑みを浮かべて説明する翔輝に対し、それを聞く艦魂達は誰一人笑っている者はいなかった。その反応に翔輝からも笑みが消える。
「あれ？　みんなどうしたの？　気にしないでよ。死ななかったよりは全然マシなんだからさ」
「大尉・・・」
　大和は悲しげな表情で翔輝に近づくと、翔輝のメガネを取り、彼の左目部分にそっと自分の小さな手を触れさせる。その手は小刻みに震えていた。そしてそれを見詰める大和の瞳も涙で一杯だった。
「本当に・・・失明されたんですか？」
「・・・うん。残念だけど、左側は全然見えないんだ。だからさっきの榛名の蹴りも避けられなかったんじゃなくて、見えなかったんだ」
「・・・そんな」
　大和は何度も何度も翔輝の左目に触れるが、彼にはそれが見えない。
　気まずい沈黙の中、いち早く元気を取り戻したのは今まで黙っていた日向だった。
「まぁ、長谷川君が戻って来たんだし、一応良かったじゃない。目以外は結構元気そうだし」
　そう言う日向はニッコリと笑みを浮かべる。彼女の臨機応変の天真爛漫な笑みはこういう時にはとても頼りになる。
「ま、まぁそうだな。とりあえずお帰り。テメェの帰りを待ってた奴はたくさんいるんだからな」

榛名も恥ずかしそうに翔輝を迎える。そんな榛名の頭を、メガネを掛け直した翔輝がそっと触れる。

「触るなボケッ！」

榛名は顔を真っ赤にして自分の頭の上に置かれた翔輝の手を弾こうとする。

「僕がいない間に、金剛さんが亡くなったんだってね」

翔輝の言葉に榛名の表情が凍り付き、振りかざさした手がピタリと止まった。

悲しそうに瞳を翳らせる榛名に、翔輝はそっと心配そうに声を掛ける。

「あれからずいぶん経ったけど、もう大丈夫？　金剛さんのいない悲しみは少しは落ち着いた？」

「んなもん落ち着く訳ねぇだろッ！」

榛名は翔輝の手を振り解いて彼を睨み付ける。その瞳は鋭利な刃物のように鋭く、すさまじい怒りの炎が燃え上がっていた。

「まだ引きずってるに決まってんだろ！？　姉貴とは三〇年一緒にいたんだぞ！　それがいきなり死んで、平気な訳ねぇだろ！」

すさまじい怒気を噴き出し睨み付けてくる榛名に、翔輝は「ごめん・・・」と小さく謝った。

「謝んじゃねぇよッ！　テメェに謝られたからって姉貴が戻って来る訳でもねぇだろうがッ！」

「それでもさ、怒らせたみたいでごめん。そういうつもりじゃなかったんだけど・・・」

しゅんとする翔輝。これが二〇歳の成人になった男だと頭ではわかっていても、少し女の子っぽい童顔の翔輝は、あまりにもかわいそうに見える。

「あ、いや、すまん。俺も言い過ぎた・・・」

外見が同じくらいに見えるからすっかり忘れていたが、翔輝は自分よりも十歳も年下である。少しどころかかなり大人げがない。

すっかり勢いを失った榛名に、翔輝はそっと声を掛ける。

「でもさ、死んだ人は二度と帰って来ないんだよ？」
「そりゃあ俺だってわかってるよ。だけどさ――」
「辛いのはわかるけど、こういう時こそみんなを頼らなきゃ、ね？」
「長谷川・・・」
翔輝はそう言うと、優しげな笑みを浮かべる。そんな彼を見詰める榛名の瞳からポロポロと涙が流れた。そして榛名は泣きながら翔輝に抱き付き、声を出して泣き出した。それは、榛名の本当の姿だったのかもしれない。
「榛名・・・」
「今だけ・・・今だけでいいからよ・・・こうさせてくれよ」
「別にいいよ。泣きたい時は泣いた方がいいよ」
優しく微笑む翔輝の腕の中で、榛名は泣いた。大和も伊勢も今だけは榛名に翔輝を渡した。
声を上げて泣く榛名は、今では現役主力艦の中では連合艦隊最古参の艦魂だ。そんな彼女の弱い一面を見て、責める者など誰もなかった。
榛名を見詰める伊勢は、いつも以上に優しげな瞳だった。と、その時部屋の隅で丸くなっている雪風に気が付いた。
「雪風。あなたも大尉との再会を喜びなさいよ」
大和に声掛けられた雪風はうつむかせていた顔を上げた。その顔は涙を流して真っ青になっていた。
「わ、私は・・・ごめんなさい！」
雪風は泣きながら部屋を出ようとする。そんな雪風をドア付近にいた翔輝が慌てて止める。
「雪風？　どうしたんだよ」
「離してください！　お願いですから離してください！」
「ちょっと待ってよ。いきなりどうしたんだよ？」
「離してください！　今は、みなさんに会わせる顔はないんです！」
泣きながら逃げようとする雪風を翔輝は必死に止める。すると、泣いていた榛名までもが雪風の首根っこを掴んだ。

「雪風。逃げるんじゃねぇ」
「ひいッ！」
榛名に睨まれ、雪風は再び小さくなり、その場に力なく崩れた。
そしてそのままうな垂れうつむく雪風の肩を、今まで部屋の隅にいた矢矧がそっと叩く。
「あなたの気持ちはわかるけど、役目はちゃんとしなさい」
矢矧の真剣な言葉に、雪風は沈黙した。
「い、一体何があったの？」
状況を呑み込めない翔輝が矢矧に訊くと、雪風が小さな声で話し始めた。
「私は、戦艦『金剛』、空母『信濃』を護衛してたにもかかわらず、そのどちらをも敵潜水艦に沈められました。私は無能なんです」
「そんな事ないよ。それは仕方がない事さ。今の日本の海軍艦艇の掃海能力より敵潜水艦の静寂能力を上回る状態だし、それに乗組員の練度不足で見張りも完全とはもう言えないんだ。君の責任じゃないよ」
「でも、私はみすみす二隻の大型艦を沈められ、同時に滝川さんの命を奪ってしまいました・・・私のせいで・・・ッ！」
泣き崩れる雪風。こんなに弱々しい彼女を見たのは初めてだった。
そんな雪風の肩を、ポンと大和が叩いた。
「あなたのせいじゃない。金剛さんも信濃も、あなたを責めたりなんかしてないわよ」
「で、でも・・・ッ！」
納得できない雪風。そんな彼女を、大和はそっと抱き締めた。驚く彼女の耳に「もういいの・・・もう、いいの・・・」と小さく弱々しい声が届く。その言葉に、雪風は「はい・・・」と泣きながらうなずいた。
――いくら自分を責めても、帰って来ない。金剛も、滝川も、信濃も、彼女に乗っていた少女も、戻って来る事はないのだ。
大和に抱き締められながら涙する雪風。そんな彼女の頭を翔輝は

そっと撫でた。顔を上げると、もう見られないかもしれないとまで覚悟していた大好きな笑顔がそこにあった。
「雪風。もう泣くなよ。僕は大怪我を克服してまでお前の泣き顔を見に来た訳じゃないんだぞ？」
「す、すみません・・・」
「相変わらずだな雪風は」
そう言って優しく微笑む翔輝。そんな彼の笑顔を見て、雪風は小さくうなずき、微笑んだ。「そうそう、雪風は笑ってた方がずっといいんだからさ」
「大尉は、本当にお優しい方なんですね」
「そんな事ないよ。あ、それと言ってなかったけど、僕はもう大尉じゃないよ。少佐になったんだ」
翔輝の突然の昇級の話に大和達は瞳を大きく見開いて驚くと、満面の笑みを浮かべる。
「本当ですか！？」
「すごいやないか長谷川はん！」
「これで大尉も――じゃなかった。少佐も佐官入りです！」
「うわぁいッ！　お兄ちゃんが少佐になったぁッ！」
まるで自分の事のように喜ぶ大和達の笑顔を見て翔輝は嬉しそうに微笑む。と、そんな彼をじっと見詰める大和の視線に気づいた。
「大和？　どうしたの？」
「あ、あの少佐。こんな事を言うのは不謹慎だと思うんですけど」
「何が？」
「そのメガネ、とてもお似合いですよ」
「え？　あ、ありがとう」
大和に突然そんな事を言われ、翔輝は照れたようにメガネのブリッジを上げて直す。すると、そんな彼の横にいた伊勢が頬を膨らませる。
「大和の言うとおりや。長谷川はん、メガネめっちゃ似合ってるでぇ」

「ありがとう、伊勢」
すっかり仲間に溶け込めた翔輝。と、そんな翔輝を嬉しそうに見詰めていた榛名が何かを思い出す。
「でもよ、瑠璃がよく許してくれたな。てっきり呉の鎮守府に送られるもんだと思ってたぜ」
榛名の疑問は皆の疑問だった。あの瑠璃が大怪我を負った翔輝を素直にまた危険な軍艦に戻すとは考えにくいのだが、彼が説得したのだろうか。
みんながそれを知る翔輝を見ると、翔輝は悲しげに笑った。
「ケンカ別れしちゃってさ」
「け、ケンカですか！？」
大和は目を見開いて驚愕する。そんな大和のオウム返しに翔輝は力なくうなずく。
「うん。『大和』に戻りたいって言う僕と、鎮守府に行ってほしいと言う瑠璃と大ゲンカしちゃって、瑪瑙姉さんと珊瑚は一応僕が『大和』に戻る事を押してくれたんだけど、瑠璃は断固として許さなくて、大ゲンカになっちゃって、そのまま出て来ちゃったんだよね」
「そ、そんな・・・ダメですよ！　お二人がケンカするなんて・・・」
「仕方なかったんだ。僕が『大和』に戻る為には」
「少佐・・・」
大和達の視線に気づき、翔輝は無理して笑みを浮かべる。
「大丈夫だって。あいつとは長い付き合いだからさ。何度もケンカしてるからね、たいした事じゃないよ」
笑って言う翔輝の瞳を、大和はじっと見詰める。
「でも、ちゃんと仲直りしてくださいね」
「そりゃするつもりさ。まぁ、あいつの怒りの火山の噴火が小康状態になったらだけどね」
「そうですね。今行ったら少佐は瑠璃さんの家に監禁されるでしょうしね」

おかしそうに笑い合う二人を見詰め、笑顔の伊勢は力強く叫ぶ。
それは本来は長門の役目だったが、ここにいない長門の代役として伊勢が輝いた。
「ほんじゃあ、長谷川はんが戻って来た事を祝して今日は大宴会やぁッ！」
『おおおおぉぉぉぉぉッ！』
嬉しそうに咆哮する艦魂達を見詰め、翔輝は苦笑い。
「・・・なんか、本当に宴会ばっかりしてる気がする」
「まぁ、今は場の流れに身を任せましょう。さぁ、私達も」
そう笑顔で言う大和は翔輝の右手を掴んで駆け出した。ちゃんと彼の瞳に自分が映るように・・・

そんな二人を――翔輝を壁にもたれ掛かりながら見詰める少女がいた。長いポニーテールに凛とした瞳をした長身の少女――葛城。
いつの間にかすっかり艦魂達の輪の中に入った翔輝をじっと見詰め、口元をわすかに綻ばせる。
「人望も厚い。さすが我が主となるべきお方――必ず、主の隣に立ってみせる」
澄んだ黒い瞳は、どこか不気味なほど強く輝いていた。
やる気十分。葛城はいつでも動ける用意を整えた。
そんな妹を見詰める天城は、静かにため息した。
「姉さん、葛城の暴走は私には止められないよ」

その夜、『大和』の第三会議室では宴会が開かれた。もちろん翔輝の《お帰りなさいパーティー》だ。
部屋の中は大和達ががんばって装飾し、色々な料理がテーブルに並べられていた。
多くの艦魂達が集まり、その料理やお酒、ラムネなどを飲み食いしながらそのひと時を楽しんだ。
大和も翔輝の隣で笑みを浮かべていた。そりゃあもうずっと翔輝

の腕にしがみ付きっぱなしなほどだ。他にも隼鷹や伊勢が抱き付き、雪風がちょこんと裾を握っていた。

すっかりいつもの雰囲気に包まれる大和達。いなくなってしまった子も多いが、それでもこの楽しさは本物であった。

艦魂達は敗北続きですっかり落ち込んでいた士気を回復した。

翔輝との再会にものすごく嬉しそうに笑顔を浮かべる大和達に包まれる翔輝は、そんな大和達を見詰め、嬉しそうに微笑みメガネのブリッジを上げた。

――だが、その楽しげな雰囲気は突如崩壊した。

「長谷川殿。私を貴殿の懐刀（ふところがたな）にしてくれ」

楽しげな雰囲気を突如打ち破ったのは、楽しげに大和達と話していた翔輝の前に直立して彼を見詰める――葛城であった。

「か、葛城？」

驚く翔輝とそんな翔輝に抱き付いて警戒する大和。そしてそんな大和を無視して翔輝をじっと見詰める葛城。その澄んだ黒い凛とした瞳が翔輝を捉えて放さない。

「えっと、一体君は何を言ってるの？」

「言葉通り。私を貴殿の懐刀にしてほしいだけだ。どうだ？」

「えっと、どうだと言われても・・・」

「絶対にダメですッ！」

翔輝に代わって怒鳴り声を上げたのはそんな彼に抱き付いてウーッと唸る大和。その瞳にはすさまじい敵対心があった。だが、大和の威嚇（いかく）なんて気にした様子もなく、葛城はそんな大和を一瞥もせず翔輝をじっと見詰める。

「私は仕えるべき主を捜し求めていた。そして見つけた。貴殿こそ、我が主に相応しい。私は貴殿に主になってほしいし、貴殿の剣となりたい」

葛城の真剣な言葉に対し、翔輝はまだどうも現状が把握できておらず、不思議そうに首を傾げ続ける。

「えっと、どうにも状況が掴めないんだけど」
「少佐！　即刻断ってください！　こんな子の言葉に惑わされてはダメです！」
　大和が必死になって翔輝を魔の呪縛から解こうとする。その時、すさまじい殺気が身体を突き抜け硬直した。視線を向けると、葛城がじっとこちらを見ていた。別に睨まれている訳ではない。だが、確実に彼女の瞳には殺気があった。
「大和長官。邪魔をされては困る。お引取りを願いたい」
　すさまじい殺気。大和の中にある本能が《逃げろ！》と叫んでいた。奴はまずい。葛城の瞳は本気だ。
　大和は恐怖してギュッと翔輝の腕を握った。その感触に振り返ると、大和が小刻みに震えていた。
「大和、大丈夫？　顔真っ青だよ？」
「長谷川殿。私の質問に答えてくれ。我が主になってくれるか？　それとも否か？」
　葛城はズイッと前へ出ると翔輝の目の前まで迫る。いきなり息が掛かるような距離に葛城の顔が迫りびっくりする。翔輝と葛城はそれほど身長の差がないので顔が間近に来るのだ。
「私は貴殿の剣として力量を振るいたい。頼む。私と使ってくれ」
　そう言って葛城は頭を下げた。その角度もまたすばらしいものだった。そんな葛城の行動に翔輝は慌てる。
「ちょ、ちょっと頭を上げてよぉッ！」
「長谷川殿の答えを聞くまでは頭は上げぬ」
　そう言って葛城は第二段階――土下座に取り掛かろうとしていた。だが、翔輝がそんな事をさせる訳もなく、
「わ、わかった！　主でも何でもなってあげるから、とにかく頭を上げて！」
「少佐ぁッ！？」
「真（まこと）か？　本当に、私を配下にしてくれるのか？」
　そこで初めて葛城の瞳が変わった。大きく見開かれ、じっと翔輝

を見詰める。そんな彼女に戸惑いながら、翔輝はうなずく。
「う、うん。何だかよくわからないけど、君がそうしたいならそうすればいい」
その言葉に、葛城の顔がぱぁっと輝いた。先程までの鋭さはなくなり柔らかな曲線を描く瞳はクリッとしてとてもかわいらしい。目の前の事に、翔輝は顔を真っ赤にさせる。すると、葛城はそんな翔輝の手をグッと掴んだ。
「では私は貴殿を何と呼べばいい？」
「え？　普通に長谷川でいいんじゃない？」
「それはできぬ。主にそんな口は利けぬ」
「べ、別に僕は構わないんだけど・・・」
「では《主殿》と呼ぶ事にする」
「いや、もう少し何とかならない？」
「そうか？　では《旦那様》というのは？」
「葛城。そういうのはやめて。何かすごく怖い視線を後ろから感じる」
「ふむ。では今はやりの萌えというのを使い、《ご主人様》なんて――」
「やめて葛城！　何か後ろから殺意の視線！　まわりからは軽蔑の視線を感じるぅッ！」
翔輝は慌てて葛城の口を塞いだ。このままだと自分の立場が危うい。ただでさえ色々と変な噂（ロリコンとかシスコンとか、もちろんそんな事はないと彼は全力で否定しているが）が流れているのに、これ以上は危な過ぎる。
一方、いきない翔輝に口を塞がれた葛城は顔を真っ赤にさせて驚く。そして、ドキドキとする胸と、心を満たす温かい何かに困惑する。
（まただ、一体、この温かいものは何なのだ・・・ッ！？）
困惑しながらも、そっと翔輝の服の裾をギュッと握る。と、刹那すさまじい勢いで何かが翔輝の死角である左側から風が吹いた。

「こんの変態がああああぁぁぁぁぁッ！」
怒声と共に飛び蹴りして来たのはツインテールを激しく揺らす天城だった。だが、翔輝に直撃寸前、葛城が目にも止まらぬ速さで足を踏み込んで翔輝の左に立つと飛んで来た天城の足を掴み、軸足に力を込めて回転。その勢いを腕に込め、天城の身体を振り回し、そのまま投げ飛ばした。
「キャアアアアァァァァッ！」
天城は悲鳴を上げながら床に叩き付けられ、その上を滑走して壁に勢い良く激突した。
唖然とする一同の中、実の姉を投げ飛ばした葛城は気にした様子もなく翔輝に向き直る。
「ケガはないか？」
そう言って翔輝の身体に触れてケガはないか確認する葛城。
「だ、大丈夫だけど・・・いいの？　天城、ピクリとも動かないけど」
「平気だ。奴はあの程度で死ぬような者ではない」
「いや、死なれたら困るんだけど・・・」
困ったように頬を掻く翔輝を、じっと見詰める葛城。その潤んだ瞳に気づいた翔輝は不思議そうに首を傾げる。
「どうしたの？」
「いや、貴殿をどう呼べばいいか考えているのだ」
「まだそんな事考えてたの？　もう好きに呼んでいいよ」
「ふむ。ならば主殿と呼ぼう。その方が私も言いやすい」
「まぁ、君がいいならそれでもいいや」
「うむ。貴殿が私の主殿だ。何なりと命令してくれ」
「いや、いきなり命令とか言われても・・・」
「命令とあれば夜の相手も可能だが、私も経験がないので技術は自信はないが――」
「命令発動黙れッ！　お前はそれ以上じゃべるなぁッ！　それとお前ら人を道端のゴミを見るような目で見るなぁッ！」

すっかり葛城に振り回される翔輝。そんな翔輝に先程からずっと構われている葛城の瞳はどこか嬉しそうだ。

だが、こんな横暴を見過ごすほど、ここにいるメンバーは優しくはなかった。

「そんな関係認められません！」

そう怒鳴り声を上げたのは大和。その後ろには伊勢や榛名、隼鷹や雪風などが揃っていた。現在残っている翔輝連合の全戦力だ。

葛城はそんな大和達を静かな瞳で見詰める。大和も負けじと睨み返す。

「少佐は私達との関係があります！　新参者にいきなりそれを壊す権利なんてありません！」

「これは主殿の意思だ」

葛城の言葉に、大和はキッと翔輝を睨む。そのすさまじい血走った危険な瞳に、翔輝は恐怖する。

「少佐！　あなたは私達の関係よりも、こんな新参者を優先させるんですか！？」

「いや、別にそういう訳じゃ・・・」

「だったらすぐに葛城との関係を断ってください！」

大和のすさまじい迫力に、翔輝はたじたじになる。これでも一応成人した立派な大人なのだが。

翔輝は仕方なく気まずそうに葛城に振り向く。と、

「主殿、私を見捨てるのか？」

「うっ・・・」

そこには今にも泣き出しそうな顔をした葛城がいた。こっちはこっちで翔輝には対処できないような状況であった。

「あ、いや、その・・・」

「主殿・・・」

「少佐ッ！」

「長谷川はん！」

「お兄ちゃん！」

「長谷川テメェッ！」
「長谷川少佐ぁッ！」
「だ、だれか助けてぇッ！」
少女達の様々な声に包囲され、翔輝は悲鳴を上げたが、もちろんこういう時に頼りになる長門はいないので、止めてくれる人は誰もいないと誰もが思った。と、
「はいはいそこまでねぇ。あんまり長谷川君をいしめないでねぇ」
そう言って仲介に入ったのは小さなツインテールをピョコピョコと揺らす日向であった。日向ではあまり頼りにはならないかもしれないが、それでも翔輝は日向に助けを求めた。
「日向助けてぇッ！」
泣きついてくる翔輝に、日向は「まったくもう」と言葉を零して腰に手を当てて呆れる。
「もう、長谷川君はもう子供じゃないんだから、これくらい自力で何とかできなきゃダメだよ？」
「うっ・・・」
返す言葉がなく黙ってしまう翔輝に日向は優しく微笑むと、そっと翔輝の頭を良し良しと撫でる。彼が屈んでいるからこそできるのだが、それでも今は日向の方が大きく見えた。
「人生のお姉さんに任せなさい」
そう言って妹お姉さんは翔輝の前に立つと、葛城を睨む大和達とそんな視線を気にした様子もない葛城に向かってビシッと指差す。そして、あまり怒っても威力がない顔を引き締める。
「お姉ちゃん達！　いい加減にしなさい！　長谷川君がかわいそうでしょッ！？」
いつになく真剣な日向に、大和達も睨むのをやめて日向に向き直る。葛城もそんな大和達の行動に同じく日向を見る。
「長谷川君が大好きだって事はわかってる。でも、無理強いは良くないよ。こういうのは長谷川君の意見を尊重しないと」
しごく当然でまともな事を言う日向に、大和達もようやく冷静に

なる。
「ご、ごめんなさい」
「悪かったわ。うちもやり過ぎた」
「あぁ、日向に説教されるなんて・・・でも、悪かったな」
「ごめんなさい・・・」
「申し訳ありません」
大和達は素直に謝った。それを聞いて日向は満足そうに何度もうんうんとうなずく。
「わかればいいのよ」
日向は嬉しそうに微笑み、大和達も照れ笑いをする。そんなみんなを見て翔輝も嬉しそうに微笑む。と、
「主殿、迷惑を掛けてすまない」
そう言って頭を下げる葛城に、翔輝には「気にするなって」と言うと、そっと彼女の頭を撫でた。その行為に葛城はビクッと震える。
「ご、ごめん！　ついいつものクセで・・・ッ！」
慌ててを引っ込める翔輝だったが、その手は葛城に掴まれた。
「か、葛城？」
「このまま続けてくれ」
「え？　でも・・・」
「私は構わない――いや、してもらいたい」
そう言って頭を差し出す葛城。だが今考えれば葛城と翔輝の身長差はそんなにない。なのに意識して頭を撫でるのはちょっと気が引けたが、彼女がしてほしいと言っているのだからと、翔輝はそっと葛城の頭を撫でた。
「主殿・・・」
葛城は何やら幸せそうな表情を浮かべていた。それほどまでに嬉しいのだろうか。
「主殿、私は今すごく嬉しい」
「そ、そうなの？　良かった」
「あああああぁぁぁぁぁッ！　何してるですかあああああぁぁぁぁ

ぁッ！」

そのすさまじい怒号に振り返ると、そこには灼熱の炎が背後に見えるほど激怒している大和がいた。いつもかわいい笑みを浮かべるその顔も、今はめちゃくちゃ怖い。

「や、大和？」

「少佐！　今すぐ離れてください！」

大和はそう怒鳴るとズンズン迫って来る。が、その前に葛城が立ち塞がった。その態度に大和が睨み付ける。

「そこをどきなさい」

「我が主殿に危害を加える可能性のある者は、誰であろうと近づける訳にはいかない」

「何なのよあなた、ナイトのつもり？」

「私は主殿の剣だ。主殿の前の敵を倒すのが、我が役目」

睨み合う大和と葛城。だが、その光景はまるでいつも見ていた大和と武蔵のやり取りみたいで、翔輝はおかしくて笑ってしまった。

「何がおかしいんですか少佐！」

「あ、いや、なんかいつものノリが戻って来たなぁって思ってさ」

翔輝の言葉に大和はきょとんとする。

「ほら、なんか葛城って武蔵に似たところがあるだろ？　大和と武蔵のやり取りを見たような気がしてさ、笑えて」

「せやなぁ、確かにそんな光景やなぁ」

伊勢もうんうんとうなずく。そして当人である大和も「そうですね。なんかおかしいです」とくすくすと笑う。まわりも自然と笑みに包まれた。

一方、全くこの状況を理解できていない葛城であったが、すぐに気を取り直して翔輝の横に付く。どうやらこの位置が好きらしい。

大和はそうやって少し笑った後、再び葛城を見詰める。だが、その瞳には先程までのような鋭いものはなくなっていた。

「まぁ、あなたの少佐を想う気持ちはわかったわ。少佐も嫌って訳じゃなさそうだし、認めるしかないわね」

そう言って笑みを浮かべる大和。その笑顔に、榛名達もしょうがないなぁと笑みを浮かべた。

どうやら、葛城が皆に認められたらしい。これには翔輝も安堵する。

「良かったな葛城」

そう笑顔で振り向くと、じっと自分を見詰める葛城の視線と目が合った。そして、その口元がフッと笑みを浮かべた。

「皆に認められたのなら、契約を交わそう」

「契約？　そんなものがあるの？」

「簡単なものだ。だが、これで私は晴れて貴殿の配下となれる」

「別に配下とかじゃなくて友達でいいと思うけど」

苦笑いする翔輝に、葛城はじっと見詰める。すると、突然翔輝の両頬を優しく押さえると、目をつむり、そっと唇を近づけて来る。その行動が何を表しているのか理解して離れようとした瞬間――

葛城の唇が、翔輝の唇に重ねられた。

刹那、部屋が一瞬にして凍りついた。

凍てつくブリザード吹き荒れるツンドラ気候のごとく絶対零度の雰囲気が包む中、無理やり葛城を離した翔輝は顔を真っ赤にしていたが、すぐに部屋の空気に顔を真っ青にする。

苦笑いしかできない翔輝と、ほんのりと頬を赤らめて唇に手を当てている葛城。そんな二人を包むブリザードは、いつまで経っても消える事はなかった。

二月十九日、米軍はついに初めて和名の島である硫黄島（いおうとう）に上陸を開始した。

硫黄島の戦い。あまりにも有名なこの小さな島を巡る戦いは日本軍の島防衛戦術の粋を結集させた空前絶後の大激戦となった。

硫黄島守備隊はこれまでの島防衛戦術として総延長約十八キロに及ぶ地下大トンネルを作り、これを利用して防衛戦を展開した。

一方の米軍は上陸前に艦砲射撃、爆撃で島を攻撃したが、地下に

いた守備隊は無傷でこれを乗り切った。そして上陸して来る敵部隊を素通りさせ、海沿岸に米軍が陣地を展開させたと同時に一斉砲撃。これを壊滅させた。

従来の水際戦術ではなく、時間稼ぎの持久戦という新たな戦法であった。

この攻撃以降米軍は再び艦砲射撃を開始。その後第二次、第三次と次々に上陸部隊を進出させ、ついに沿岸部を突破。米軍は島内に流れ込んで来たが、地の利を受けた守備隊は地形と地下陣地を駆使し、ゲリラ戦法でこれと互角以上の戦闘を繰り広げた。

だが、日増しに被害は増え、敵の数は増えていく。これには守備隊も劣勢に追い込まれ、島の砲撃陣地の一つになっていた擂鉢山（すりばちやま）陥落。守備隊は地下道を利用して神出鬼没の攻撃を続けていた。

しかし、ついに米軍は守備隊司令部に到達。この硫黄島の戦いを指揮し続けた守備隊総司令官にして後に名将と呼ばれる事になる栗林忠道（くりばやしただみち）陸軍中将は自ら最後の突撃部隊四〇〇名を率いて最後の総攻撃を敢行。全滅した。

三月二六日、硫黄島は完全に占領された。

日本軍守備隊は約二万人いたが、捕虜一〇〇〇人を残してほぼ全軍が玉砕した。だが米軍の上陸部隊七万人のうち被害は戦死七〇〇〇人、戦傷者二万二〇〇〇人という日本軍以上の被害が出て、戦争後期の劣勢状況で日本軍が自軍以上の損害を敵に与えた唯一の戦闘だった。

硫黄島という日本本土爆撃の中継基地を手に入れた米軍は今までＢ－２９だけで空爆していたが、敵機の反撃で撃墜機もあった事からここに飛行場を建築。ここから護衛戦闘機を出撃させる事となり、日本やより不利な状況に陥った。

時は少し戻って２月２１日、硫黄島攻略作戦――デタッチメント作戦が始まって数日後のその日、アメリカ空母部隊は硫黄島へ空爆を続けていた。

海に展開する12隻の空母を基幹とした艦隊の中央には空母『エンタープライズ』、そして『サラトガ』が配置されていた。
海風が心地いい空母『エンタープライズ』の甲板ではエンタープライズ、そしてサラトガが二人で立っていた。
「今日もいい天気ねぇ」
うーんと体を伸ばすサラトガ。今までエンタープライズ達とは別行動していてあまり出番がなかったが、『サラトガ』も十分な活躍をしていた。
「久しぶりにサラとコンビを組めて嬉しいな」
「そうねぇ、私もエンターと一緒の方が安心できるから嬉しいよ」
サラトガは海のように鮮やかな長い蒼い髪を撫で、嬉しそうに微笑む。そんな親友を見詰め、エンタープライズも久しぶりに嬉しそうに微笑む。
気心が触れた戦前生まれ同士。エセックス達が知らない史上最強とまで言われた日本機動部隊との戦いを生き抜いた者同士だからこそわかるものがある。
しばし二人は無言のまま空爆される硫黄島を見詰める。まわりを囲む戦艦部隊もまた壮絶な艦砲射撃をし、硫黄島は火に包まれている。
「この作戦が終われば、いよいよオキナワね」
「あぁ、ジャップの本土だからな。クソジャップどもを皆殺しにできるいい機会だ」
「あなたって人は、まだそんな恐ろしい事を言ってるの？」
「何言ってんだ。ジャップは皆殺しにする。んなのは当然だろうが」
「相変わらずねぇ、エンターは」
呆れ半分、感心半分というサラトガに、エンタープライズはフッと口元に笑みを浮かべる。
「私は姉貴やホーネット、死んでいった多くの仲間達の為にも、戦い続けなきゃいけねぇんだよ」
「エンター・・・」

「それよりもサラ、お前この後単独の夜間爆撃の任務があるだろ？大丈夫か？」

「あら、心配してくれるの？」

くすくすと微笑むサラトガに、エンタープライズは頬を赤く染めて「んなんじゃねぇよ！」とそっぽを向く。そんな親友をサラトガは優しく見詰める。

「大丈夫よ。この海域は私達の手にあるもの。心配はいらないわ」

「それもそうだな。だが、カミカゼだけは気をつけろ」

「カミカゼか・・・そうね、守りたいって気持ちか・・・」

意味深な言葉をつぶやくサラトガに、エンタープライズは不思議そうに見詰める。そんな彼女にサラトガは優しく微笑み、エンタープライズは再び顔を赤くしてそっぽを向く。

目の前では激戦の硫黄島。だが、海に浮かぶ安全地帯にいる空母部隊は、ひと時の平和な時間を過ごしていた。

蒼い海に響く爆音が、今ここは戦場であるという事を思い出させる。

他空母から分岐した『サラトガ』は護衛の駆逐艦3隻を引き連れて単独任務の為に海を翔けた。だが、一人戦いに挑む彼女に日本の特攻隊が突撃。必死の反撃も空しく『サラトガ』は被弾。大火災を引き起こして大破した。

燃える甲板に自らの血で赤く染まって横たわるサラトガは、エンタープライズ達がいる方向に向かって小さく微笑むと、気を失った。

この攻撃で『サラトガ』はアメリカ本土に回航、修理を完了したが二度と前線に出て来る事はなかった。

第十三章　第七節　想い人再会　新たな波乱の始まり（後書き）

葛城の突然のキス攻撃と大和達の危機。
これから一体どうなっていくのか、僕にもわかりません。
さらに硫黄島陥落。久しぶりに登場するもまたいなくなってしまったサラトガ。
充実した内容だと思います。
あと作中に名前だけ出て来た信濃とある少女の話というのは外伝シリーズの一つ、《艦魂年代史外伝　～大和の妹　幼き戦姫信濃の短き命の物語～》を読んでもらえばわかります。
この短編は空母『信濃』の短い命を描いた作品で、現在が外伝史上最高傑作となっているお話ですので、お暇な時にぜひ読んでください。
次回は翔輝と葛城が急接近!?　そして大和達はどんな動きをするのか。お楽しみに。

第十三章　第八節　葛城の優しさ　大和達の逆襲（前書き）

葛城と翔輝の新たな絆（キス）。それに対し大和達は一体どんな行動を起こすのか、そして葛城と翔輝の関係は一体！？

第十三章　第八節　葛城の優しさ　大和達の逆襲

翌日、翔輝は仕事の為に艦橋にいた。
机の上は海図の右側に全ての物が揃っていた。翔輝の視覚上こうした方がやりやすいからだ。
そして、そんな翔輝の横にはいつものように大和が――ではなく葛城がいた。
「主殿。何か手伝える事はあるか？」
「いや、特にはないかな。ありがとうね」
「うむ。何かあったら何でも言ってくれ」
そう言うと再び壁にもたれて目を閉じる葛城。そんな彼女をため息しながら見詰める翔輝に森下が声を掛ける。
「で？　あの『葛城』の艦魂が原因で大和達とケンカしたのか？」
「いえ、ケンカというよりは向こうの一方的な決別宣言です。大和からも「もう少佐なんか知りませんッ！」って言われる始末で・・・」
「一体何があったんだ？　お前、その話まだ何か隠してる事があるだろ」
森下の勘は鋭かった。
翔輝はこの決別の最も重要部分である契約（キス）の話はしなかった。もちろん言うのが恥ずかしいからだ。
「まぁ、言いたくないならいいさ。でもよ、早く仲直りしろよな」
「わかってますよ」
森下が去ると、翔輝は海図に走らせていた鉛筆を止めてため息した。
一体どうすればいいのか。このままではせっかく再会できたのに、また離れるなんて事があるかもしれない。
こういう時に頼りになる武蔵はもういない。こうなると一人で考えるしかないが、航海士としての技術ならともかく、こういう事は

苦手な翔輝は頭を抱えるしかない。すると、
「主殿？　どうした？」
心配そうに声を掛けてきた葛城。
そもそもの問題は彼女の数々の仰天行動のせいだが、翔輝は別に彼女を怒ってなどいない。これも自分が不甲斐ないからだと思っていた。なんとも彼らしい考えだ。
「いや、大丈夫だ。心配しないで」
「そうか？　でもあまり無理はするな。主殿が身体を壊されては大変だからな」
「ははは、看病がか？」
ふざけて答える翔輝を、葛城はキッと真剣な鋭利な瞳で睨み付ける。
「ふざけるな。私は貴殿の身を案じているのだ。せっかく大変な大怪我を克服して来たのに、また逆戻りする気か？」
「ご、ごめん」
気まずそうに謝る翔輝を、じっと見詰める葛城。すると、葛城はフッと小さな笑みを浮かべた。
「だがまぁ、そういう相手を気遣う主殿が、私は好きだぞ」
「え・・・？」
翔輝は驚いて目を見開く。先程の発言の真意を見抜いた事もそうだが、いきなり《好き》なんて言われ、翔輝は顔を赤くする。
一方の葛城は再びいつものように無表情になると、海図を覗き込んだ。
「本土近海の海図だな」
「え？　あ、うん。もう太平洋全体の地図は使わないだろうからね。こっちに重点を置いてるんだ」
「悲しいな・・・」
葛城の小さな声に、翔輝は彼女を見る。表情こそはいつもどおり無表情だが、瞳の奥には悲しい光がある気がした。
「私はその時代を生きていないから知らないが、かつて日本海軍は

太平洋の半分を席巻したのだろう？　それが今では本土防衛。悲しいではないか・・・」

「まぁ、そうだね。ちょっと日本は欲張りすぎたんだと思うよ？戦線の拡大は国力の低い日本には不可能だったんだよ」

「なるほど。元々無理な戦いだったのだな？」

「そうだね。まぁ、あんまりこういう場所でそういう事は言っちゃいけないんだけどね」

苦笑いする翔輝に、葛城はその言葉の意味を汲み取りうなずく。

しばらくし、翔輝は今度は防空指揮所に上がった。交代制の見張りである。湾内に停泊していると、航海士というのは結構やる事が制限される。しかも最近は少年兵が多く入った事によって兵の質自体も下がっているので、こうした兵や下士官の役目を士官が行う事も多かった。

防空指揮所に上がると、数人の少年兵達が見張りをしていたが、翔輝の気配を感じるとカッと踵を揃えて敬礼した。翔輝もそんな二人に答礼すると、こんどはさらにその上、測距儀の上に上がった。

どうせ敵機が来れば艦隊よりも先に陸上の基地の方が先に敵機を発見するのだ。見張りなんかしても仕方がないのは知っている。しかしこうした事も少年兵達には重要な事なのだが、もちろん翔輝にはそんな事は必要ないので、名目は見張りだが、実際は休憩のようなものだ。だからこそ時間も短いのだが。

床に腰掛けると、その隣に葛城も静かに座った。しかも正座で。

「それ、足痛くなんない？」

「問題ない。私はいつもこれだからな」

「そ、そっか」

翔輝は今度は蒼い海を見詰める。相変わらず海はとても静かでのどかだった。平和そのものである。

こうして海を眺めているのが、ひと時の平和を味わえるのだ。星空も好きだが、青空も、そして蒼い海も好きだった。

海を楽しそうに眺める翔輝に、隣に座る葛城も自然と海を見詰め

る。
　それからどれくらいの時間が過ぎたかの頃、お腹が小さく鳴った。時計を見るとまだ昼食には早い。
「うわぁ、昨日あんな事があったからって朝食をちゃんと食べなかったからなぁ・・・」
　やっぱり朝食をあまり食べなかった事が今になって響いてきた。
　昼食にはまだ時間がある。耐えるしかないだろう。と、
「主殿、これを」
　そう言って葛城が上着の内ポケットから取り出したのは笹の葉に包まれたおにぎりだった。
「おにぎり？　嬉しいけど艦魂の力で出したのじゃ腹は膨れないから」
「安心しろ、これは本物だ」
　彼女が言う本物とは艦魂の力で出したのではなく人間にも見える普通のものという意味だ。つまり、これは本物の白米となるが。
「そんなものどうしたの？」
　翔輝が問うと、葛城はなぜか頬を赤らめて視線を逸らす。
「朝食の際、主殿があまり食べなかったからな。途中で空腹になるのではないかと思って念の為に烹炊室で失敬したのだ」
「素直に喜べないけど、ありがとう」
　つまりは盗んで来たのだ。あまり気は進まないが、今さら返しに行く訳にもいかないので、とりあえず素直に食べる事にする。
　包んでいる笹の葉を外すと、そこには二つのおにぎりがあった。だが、それはかなりいびつな形をしている。とても烹炊員が作ったとは思えないが。
「これって・・・」
「わ、私が握ったのだ。おにぎりはもうなくて、仕方なく白米を私が握ったのだが、初めてだったから、形がうまくできなくて、その・・・」
　言い淀む葛城は顔を赤くして視線を逸らす。そんな葛城に翔輝は

ついドキリとしてしまった。完璧そうに見える女の子の不器用な一面を見るとついかわいく思えてしまうあの現象が翔輝を襲ったのだ。

翔輝は恥ずかしそうに顔を隠す葛城に静かに微笑むと、彼女が握ったおにぎりを一個頬張った。

「ど、どうだ？」

葛城が不安そうに見詰める先では翔輝がもぐもぐとおにぎり半分を頬張る。

（ちょっとしょっぱいなぁ・・・）

翔輝は口の中に広がる塩のすさまじい攻撃に苦笑いした。どうやら塩の加減も間違えたらしい。食べられない事はないが、これはかなり塩をかけているだろう。

だが、不安そうに見詰める彼女にこんな事は素直には言えないし。

「う、うん。おいしいよ」

翔輝はとりあえず彼女を傷つけないようにかなり甘い（しょっぱい？）判定を口にした。すると、葛城は安堵したのか、嬉しそうに微笑む。

「良かった。主殿に喜んでもらえて」

そう言うと、葛城は残ったおにぎりを掴んだ。翔輝が止める間もなく葛城はそれを頬張る。そして、その顔から笑みが消えた。

「・・・しょっぱい」

「あ、うん。あはは・・・」

「主殿のも、しょっぱいか？」

「え？　あ、うん。まぁ・・・」

言いづらそうに視線を逸らすと、葛城もその真意を悟ったのか、静かにため息した。

「申し訳ない。私は役立たずだ・・・」

「そんな事ないよ。気持ちだけでも嬉しいよ。

「気持ちでは腹は膨れん」

「まぁ、そうだけど・・・」

かなり落ち込む葛城。目には薄っすらと涙まで浮かんでいる。そ

んな葛城に、翔輝は手元にある残り半分のおにぎりを頬張る。そんな彼の行為に葛城は目を見開いて驚く。
「主殿！　身体を壊すぞ！　そんなもの食べなくていい！」
「せっかく葛城が僕の為に作ってくれたんだもん。食べなきゃもったいないよ」
「主殿・・・」
葛城のキラキラした瞳を感じながら、翔輝は最後まで食べた。口の中はかなりしょっぱいが、これもまたいい経験であった。
食べ終えた翔輝は葛城に向き直ると笑みを浮かべる。
「ごちそうさま」
「主殿」
葛城は手を伸ばして翔輝の頬に付いたごはん粒を取ると、それをそのまま食べた。そんな自然な彼女の行為に、翔輝はドキリとする。以前彼自身も武蔵にやった事があったが、こんなにドキドキするものとは知らなかった。
「お粗末様」
そう言って、葛城は静かに微笑んだ。その瞬間、彼女の長いポニーテールが揺れ、それを葛城は押さえる。大和もよくやる仕草だが、葛城がやるとかなりドキドキする。
翔輝は自分の顔が赤くなってるんじゃないかと慌てて視線を逸らす。すると、いきなり肩を掴まれ、次の瞬間視界が下に向かって激しく動いた。そして柔らかい感触が後頭部を優しく受け止めると、目の前には葛城の笑みがあった。
「か、葛城？」
「主殿、先程寝不足だと言った。少し横になった方がいい」
葛城は翔輝の体調を気にしていた。それは嬉しいのだが、この状況は・・・
「な、なぁ葛城。今僕の頭を支えてるのって・・・」
「うむ？　私の膝だが、嫌か？」
つまりいわゆる膝枕というものだ。そうとわかると、恥ずかしく

て顔が真っ赤になる。
「大丈夫！　全然大丈夫だから！」
慌てて起き上がろうとするが、
「ダメだ。主殿はもっと自分の身体を考えて」
そう言って再び横にされる。そしてまた膝枕状態。どうやら彼女は意地でもこの状態にしておきたいらしい。こうなってはどうしようもない。翔輝も観念してこの状態に耐えるしかない。先に言っておくが、もちろんこんな状態でゆっくり眠れるなんて事は、ない。
何を話し掛けていいかわからず沈黙し、恥ずかしさから身体を横向きにして海を見詰める翔輝に対し、葛城はおもむろにポケットから何か細い木の棒を取り出した。先端がヘラ状になっていて、後ろには鳥の羽毛で纏められた梵天（ぼんてん）が付いている特徴的なものだ。そしてそれを翔輝の上に向けられている左耳に差し込んだ。
「なぁッ！？　何するの！？」
「耳かきだ」
「耳かきッ！？」
「うむ。殿方というのは女子（おなご）に膝枕してもらいながら耳かきをしてもらうのが喜ばれると本で読んだ事があってな」
「いや、確かにそうかもしれないけど・・・ッ！　だからと言って・・・ッ！」
「主殿は耳かきは嫌いか？」
「嫌いって訳じゃないけど・・・」
「私に任せて。主殿は楽にしていればいい」
そう言って葛城は耳かきを器用に動かし始めた。その腕は確かになかなかなもの。言葉にし難い快感が耳を包み、翔輝は反撃する力を失ってされるがままになってしまう。
「あう・・・」
「どうだ？　なかなか気持ちいいだろう？」
（悔しいけど・・・めちゃくちゃ気持ちいい・・・）
葛城は翔輝の表情が緩むのを見て彼が気持ちいいと思っていると

確信し、微笑みながら耳掻きを動かす。
美少女に膝枕されながら耳かきをしてもらう。世界中の男性を敵に回しそうな光景だが、翔輝も今回ばかりは葛城に身を任せる。
立春の朗らかな日差しが、二人をそっと包み込んだ。
その光景は、まるで仲のいい恋人か夫婦に見え、とても幸せそうだった・・・

一方、そんな二人を少し離れた場所に浮かぶ戦艦『榛名』の防空指揮所から見詰めてすさまじい業火を放出させている者がいた。
「少佐に耳かきまで・・・ッ！」
紅蓮の業火を奔出させながら双眼鏡でイチャイチャ（？）している翔輝と葛城を睨むのは大和。その他伊勢や榛名、隼鷹に雪風というメンバーが揃っていた。
「あんのボケッ！　何ヘラヘラした顔をしてんだぁッ！」
「うぅッ！　お兄ちゃん、すごく気持ち良さそうだよぉ・・・ッ！」
「長谷川少佐にあんな事を・・・」
「う、うちの方がうまいんやぁッ！　なのに何でよりにもよって葛城なんやぁッ！」
ここにいる者全員が双眼鏡を携帯し、ブチギレていた。
翔輝と決別した翌朝、皆は少し言い過ぎたと思って謝りに向かった。すると、彼はすでに部屋にはおらず、艦橋に向かったら森下が防空指揮所に葛城と共に上がったと聞き、慌てて『榛名』の防空指揮所に移動して確認した結果がこれだ。
双眼鏡から見えるのは膝枕に耳かきをしてもらって心地良さそうな翔輝とそれをする葛城の両名。その光景に、皆の怒りの炎が吹き荒れても仕方がない事だ。
「ぶっ潰すッ！」
榛名は激怒して空間からバズーカを取り出すと構わず二人に照準を合わせる。さすがにそれはまずいので慌てて雪風が止めに掛かる。
そんなやり取りを背後に感じながら、大和は唸りながら睨み続け

る。その奥底からすさまじい嫉妬の炎が燃え上がる。
「少佐・・・ッ！　私より、葛城を選ぶんですか・・・ッ！」
ギリリと歯軋りし、握る双眼鏡が手の震えでガチャガチャと音を立てる。
そして、翔輝に膝枕をして彼の耳を掻く葛城を睨み殺すかの勢いで睨み付ける。
「少佐にこれ以上変な事をしたら、殺すッ！」

「・・・ッ！？」
「ど、どうした？」
心地いい気持ちになっていた翔輝は突如手を止めて辺りを警戒する葛城を不思議そうに見詰める。
「今、すさまじい殺気を感じた」
「殺気？　何でそんなものが」
「わからない。でも、すさまじい殺気だった。この私が、恐怖に身体を震わせたほどだ」
「そりゃまたすさまじい殺気だな」
翔輝は起き上がると彼女のと同じように辺りを見回すが、葛城を恐怖させたほどの殺気を放った張本人は見当たらなかった。
葛城はまだ辺りをキョロキョロしているが、翔輝はふと時計を見る。すると、そろそろ艦橋に戻らないといけない時間になっていた。
「あ、まだ耳かきが・・・」
「もういいよ。それにそろそろ戻らないといけないからね」
「わかった。では行こう」
階段を下りる翔輝の後ろから葛城が続き、防空指揮所に降りると、再び兵達が敬礼した。それに答え、翔輝が歩き出すと、その手を葛城がそっと掴んだ。
「何かあれば言ってくれ。私は主殿の為なら何でもする」
「ありがとう葛城」
翔輝は嬉しそうに微笑むと、そんな彼女の手を握り返した。そし

てそのまま、二人仲良く艦橋へ下る階段を下りた。

「て、手まで繋ぐなんてぇッ！」

ガシャンッ！　と派手な音を立てて、床に叩きつけられた双眼鏡が木っ端微塵に砕けた。それを投げ付けたのはもちろん大和。そのあまりの激昂ぶりに、伊勢達もたじたじになる。

「お、おい大和。お前少し落ち着いた方が・・・」

「皆さんッ！　今すぐ少佐と女狐を追い掛けますよッ！」

そう怒号を飛ばすと、激怒しながら大和は光に包まれて消えた。伊勢達はそんな大和に恐怖して慌てて後に続いた。

「少佐ぁッ！　いい加減にしてくださいッ！」

突然の怒号に翔輝が驚いて振り返ると、そこには大和以下伊勢達がいた。すぐに葛城が翔輝の前に出て彼を守るような配置につく。

大和は怒りの炎を激しく燃え上がらせ、翔輝と葛城を睨み付ける。後ろにいる伊勢達も一応怒っているようだが、大和ほどではない。むしろ大和の怒りに引いている。

「少佐！　何で葛城とずっと一緒にいるんですか！」

大和の言葉に、葛城はハッとする。《ずっと》という単語から、先程の殺気の正体が彼女であると悟る。

一方の翔輝は大和の激怒ぶりに恐怖していた。

「あ、あの大和？　ちょっと落ち着こう」

「落ち着いてなんかいられませんよッ！　少佐は何で葛城ばっかりに味方するんですかッ！」

「べ、別にそういう訳じないよ。ただ、昨日の今日で会いづらかった上にお前どこにもいなくて、その時葛城が付き添いをしてくれただけだよ」

翔輝の説明にうっと言葉に詰まる大和。確かに会いづらいのはわかるし、今日は朝から伊勢達の所へ行ってたので会えないのもわかる。だが、

「で、でもだからって何で葛城となんですかッ！」
「別にいいだろ。たまたま会ったのが葛城だったんだ。そしたら色々と協力してくれてさ」
「・・・おにぎりや膝枕、耳かきが協力の内容ですか？」
ものすごいジト目で見詰める大和に、翔輝は顔を真っ赤にさせて驚く。
「お、お前・・・ッ！　見てたのかッ！？」
「えぇ、少佐のデレデレした顔もハッキリと見えましたが？」
完全に悪びれた様子もない大和に対し、翔輝は顔を真っ赤にさせて怒る。
「覗き見なんて汚いぞッ！」
「そもそもあんな目立つ場所でイチャイチャしてるのが悪いんです」
そう言われてしまうと返す言葉もない。イチャイチャという部分は気になるが、今の大和には何を言っても無駄だろう。
その時ふと大和の顔を見ると、確かに彼女は怒ってはいるが、その瞳はとても寂しげだった。どうやらこの怒りの奥には悲しみがあるらしい。
翔輝はふてくされている大和の頭をそっと撫でた。驚く大和に、翔輝は優しく微笑む。
「あのさ大和、後で一緒に散歩しようよ。二人っきりで」
「え？　ふ、二人っきりで、ですか？」
「うん。お詫びもかねてさ」
翔輝の言葉に大和はしばし呆然と見詰めていたが、言葉の意味を理解した瞬間、その表情がぱぁっと華やいだ。
「ほ、本当ですかッ！？　少佐とデートですか！？」
「いや、散歩だってば。何でデートになるの？」
翔輝のツッコミも聞かず、大和は嬉しさのあまり超ハイテンションになる。満面の笑みを浮かべて、クルクルと回る。
「ず、ずるいよぉッ！」
そう泣き声を上げたのは隼鷹。頬を膨らませて腕をブンブン振っ

て怒る。あんまり迫力はないが、結構怒っている。
「そうやッ！　何で大和だけなんやッ！」
伊勢も続いて怒りの声を上げる。その後ろでは雪風もうらやましそうな瞳で見詰め、榛名が今にも飛び掛りそうな勢いだった。
「わかったわかった。全員ちゃんとそれぞれ二人っきりの時間を設けるから。それでいいだろ？」
翔輝の提案に大和達は一瞬不満そうな顔をしたが、すぐに上を見て何かを想像する。すると、二ヘラと笑みを浮かべてうなずいた。
「えへへ、がんばってお弁当の用意しないと」
「うちは着物を選ばんとなぁ。そうや、最近はやりのミニスカ着物なんかどうやろか」
「わーいッ！　お兄ちゃんと一日中遊べるよぉッ！」
「わ、私もいいんですか？　じゃ、じゃあ、一日中手繋ぎたいです・・・」
「お、俺はいいからなッ！　誰がテメェなんかとッ・・・ま、まぁ、テメェがどうしてもってんなら、仕方ねぇけどよ」
そんな大和達それぞれの反応を見て、翔輝は苦笑いする。なんか楽しそうな一日になりそうな子もいれば、なんか危険そうな子もいる。
一方、そんな翔輝と大和達を見詰める葛城はどこか不機嫌そうだった。
「葛城？　どうしたの？」
「何でもない」
「そ、そう？　あ、葛城もみんなみたいに二人で何かしたい事とかってある？」
そう問うと、葛城はプイッと反対を向いてしまった。どうやらかなり機嫌が悪いらしい。一体どうしたのかと翔輝が困ったように頬を掻くと、
「・・・また、おにぎり食べてほしい」
葛城は消えそうな小さな声で言ったが、翔輝はそれをちゃんと聞

き取った。
「うんいいよ。でも今度は塩をかけ過ぎないでね」
翔輝の言葉に葛城は驚いて振り返る。そこには翔輝の優しげな笑みがあった。その笑顔に顔を赤くし、葛城は小さくうなずく。
「主殿。私、がんばるからな」
「うん。期待して待ってるよ」
その言葉に葛城は小さく笑みを浮かべると、翔輝の手を握った。
驚く翔輝に、葛城はじっとその瞳を見詰める。
「やっぱり、長谷川殿が主殿で良かった」
「そ、そっかな？」
「あぁ。だから私は、主殿にどこまでもついて行くぞ」
「そ、そう。ありがとう」
「あああぁぁぁッ！　少佐また葛城ばっかりぃッ！　私もぉッ！」
その怒鳴り声に振り向いた瞬間、翔輝の胸の中に大和が突っ込んで来た。危うく押し倒されるところを、後ろから葛城が支えてくれて助かった。
「お、おい大和危ないだろ」
「だって少佐が葛城ばっかり構うんですもん！」
「べ、別にそういう訳じゃ・・・」
「ずるいでぇッ！　うちもやぁッ！」
「私もお兄ちゃんにギュってしてもらうッ！」
「あ、私は手だけで結構です・・・」
いつの間にか翔輝は伊勢や隼鷹、雪風にもくっ付かれた。さすがにこの状況には苦笑いするしかない翔輝に榛名が怒鳴る。
「長谷川テメェッ！　女ったらしにもほどがあるだろうがッ！」
「そ、そんなんじゃないよぉッ！　お前ら離れろよッ！」
「嫌ですッ！」
「主殿の命令でも、これは聞けない」
「嫌やぁッ！」
「やだやだやだぁッ！」

「私、このままがいいです・・・」
大和達は離れる気ゼロであった。翔輝は必死に逃れようとするが、五人の艦魂に押さえられてはどうしようもない。そんな中、榛名は激怒する。
「表出ろやゴラぁッ！」
「誤解だあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
翔輝の悲痛な声が響いた瞬間、榛名が跳び蹴りを放つが、それは葛城に防がれ、榛名と葛城がかなり本格的な戦いを始め、翔輝は大和達に押し倒された。
そんなやかましい騒ぎは、森下が艦橋に戻って来て怒鳴るまで続いた。

第十三章　第八節　葛城の優しさ　大和達の逆襲（後書き）

葛城かわいいッ！
とまぁ、自分で書いていてそう思ってしまうキャラです。
マリアナ沖海戦とレイテ沖海戦で脱落した翔鶴と武蔵の代わりに投入した葛城ですが、新たな強力キャラの予感です。
何でもできそうで実は不器用なところや耳かきといった仰天行動をする葛城。一体これからどうなっていくのか楽しみです・・・って、僕が書かないと進まないですね（苦笑）

最近どうも忙しくて二日に一回の更新が三日に一回に減ってしまいました。
それでもこれからもがんばっていきますので、応援よろしくお願いします。
意見や評価、感想などがあれば送ってください。
そんな些細な事でも、僕は励まされます。

第十三章　第九節　帝都空爆　葛城の瞳と大和の涙（前書き）

ついに東京大空襲まで来ました。
といっても呉にいる大和達には直接は関係ないので短いです。
今回は基本的にタイトル後半通り大和と葛城が大活躍する物語になっています。
どうぞお読みください。

第十三章　第九節　帝都空爆　葛城の瞳と大和の涙

三月十日、サイパン・グアム・テニアンから発進したＢ－２９戦略爆撃機三二五機が東京を襲った。東京の下町は一夜にして焼け野原となり、約十万人の民間人が亡くなった。いわゆる東京大空襲であった。

さらに十二日に約三〇〇機のＢ－２９が名古屋を空爆。十三、十四日には大阪も二七四機のＢ－２９の空爆で街が燃えた。

大和達は帝都空襲という情報に緊迫感を高めていた。

帝都や大阪、名古屋などの大型都市が空爆された今、次に狙われるのは軍事上の重要拠点。横須賀、佐世保、舞鶴――そして呉だ。

大和は主要艦魂を第三会議室に集めると緊急の会議を開いた。

主要都市空襲の報を受け、集まった艦魂達の表情は暗いものだった。

「帝都東京および大阪、名古屋が空爆され、死者は帝都だけで十万人を突破したそうです」

大和の悲しげな報告に、榛名がバンッとテーブルを叩いて立ち上がった。

「クソッ！　鬼畜米英め、よくもぉッ！　各航空隊は何をしていたんだッ！　これだから飛行機はあてにならねぇんだよッ！」

「そうでもないで。帝都には精鋭部隊がまだ残ってたから、陸海軍戦闘機隊が迎撃に上がってそれなりの戦果を出してるで？　特に陸軍飛行第２４４戦隊の活躍が目覚しいなぁ。さっすが帝都及び皇居を守る近衛飛行隊や。せやけど、その中でも震天制空隊の活躍こそ、一番やとうちは思うで」

飛行第２４４戦隊とは、陸軍の帝都及び皇居を管轄する精鋭飛行隊である。今度の空襲でもかなりの活躍をしていた。そして震天制空隊とは、空対艦特攻である海軍の神風に対し、空対空の敵爆撃機に突っ込む特攻隊の事である。この戦法は初期こそはうまくいって

いたが、硫黄島陥落で奪われた飛行場から発進する護衛戦闘機がつくと、その戦果は激減した。
伊勢の言葉に、榛名は舌打ちして席に着く。
榛名の気持ちは皆痛いほどわかっていた。
自分達の祖国、それも帝都が空爆され、無抵抗な国民が十万人以上が亡くなったのだ。辛くない訳がない。
部屋に不気味な沈黙が流れ始めると、大淀がメガネのブリッジを上げた。
「しかし、帝都が空爆された今、この呉も危険ですね。呉には帝都のように精鋭部隊はありませんし、敵機に侵入されたら私達の対空砲だけが頼りですからね」
「そうだね。私もそう思います。呉は他の軍港よりも大型艦が揃っています。重油がなくて動けなくても、十分米軍にとっては脅威になりますから」
大淀と矢矧の言葉に、大和も静かにうなずく。
確かに、むしろ今まで呉が平和だった方がおかしいのだ。これだけの大型艦、しかも葛城達空母や大和がいるのに、一切空襲がなかった方が変だ。
「大淀や矢矧の言うとおり、この呉も敵機の空爆を受けるのは覚悟してください。それも、いつ起きるかわかりません。明日か、それとも今日の午後か。とにかく、警戒は怠らないようお願いします」
大和の言葉に皆は静かにうなずいた。その時、
「大和長官の意見は正しい。だが、大淀。貴殿の報告には少し誤解があるぞ」
そう静かに言ったのは長いポニーテールを揺らす葛城。
「うそ、私何か間違った事言った？」
おろおろとする大淀に、葛城は静かにうなずく。
「確かに呉には精鋭航空隊はない。だが、松山の第三四三航空隊は頼りになるぞ」
葛城の言葉に、まわりから『おぉ・・・』と声が漏れた。

第三四三海軍航空隊とは南雲機動部隊で航空参謀として飛行機オンチの南雲中将と飛行船専門の草鹿少将の代わりに航空指揮を執っていた源田実（げんだみのる）大佐が各飛行隊から選び抜いたエースパイロットと新鋭戦闘機《紫電改》で編成した日本海軍最強の精鋭航空隊であった。パイロットは真珠湾からの生き残りやフィリピン、ラバウル、硫黄島などの激戦地の生き残りばかりが集まっており、まさに日本海軍の起死回生の精鋭部隊であった。

「確かに松山の第三四三航空隊は頼りになりますね」

大和も第三四三航空隊は頼りになると思っていた。だが、

「あんな小さい空襲のたびに逃げ回る航空隊のどこが頼りになるってんだ」

榛名は全く頼りにはしていない。

そう、榛名が言った言葉こそが、皆の不安であった。

第三四三航空隊は今まで小規模な空襲のたびに全機を空に待避させて、敵機が去ると逃げ帰って来るという行動を繰り返していた。これは源田司令官の来るべき決戦への戦力温存というものであったが、当時このやり方には海軍上層部や別の航空隊、さらには内部の者にも不満を与えていた。

榛名はどんな圧倒的な敵に対しても絶対に背を向けない子だ。だからこそ、逃げ回る第三四三航空隊を信じられないのだ。

しかし、ラバウルなどの生き残りと最新鋭戦闘機である紫電改が組み合わさっているというだけでも、十分な頼りにはなる。

「とにかく、今は敵機の空襲がない事を祈るだけです。ただし、もし空襲があれば、私達は例え自らの艦体を盾にしてでも、市街地への攻撃は避けさせてください」

大和の言葉に、皆は再び心を引き締める。

ここはトラックやパラオと違って多くの民間人が住んでいる。ここで自分達が戦わなければ、多くの民間人に犠牲を出す事になる。それだけは、何としてでも避けなければならなかった。

大和はその後会議を進め、お昼頃には全ての議題が片付き解散し

た。

翔輝はその頃食堂で昼食を食べていた。

今日のお昼は海軍伝統のカレーライスであった。ピリピリとした辛さがなんとも言えない絶妙なうまさを引き立てていた。

翔輝は嬉しそうにパクパクとカレーライスを食べ、辛さが満ちた口にコップ一杯の水を流し込んだ。この心地良さが何とも・・・

「主殿」

「・・・ッ!?」

いきなり声を掛けられ、驚きのあまり水を噴きそうになったが寸前でなんとか耐えた。咳き込みながら振り向くと、そこには葛城が立っていた。

「な、何だ葛城か。驚かすなよ」

「すまぬ。そんなつもりはなかったのだが」

「まぁ別にいいけどね」

「隣、いいか?」

「え?　う、うん」

葛城は翔輝の隣の空いている席に着くとわざわざ椅子を横に向けてじっと翔輝を見詰める。正直言って、食事中にじっと見られるのはあまりいい気分はしないものだ。

「あ、あのさ。あんまり見ないで」

「うん?　なぜだ?」

「いや、なぜだって言われても・・・」

返答に困る翔輝に、葛城は不思議そうに首を傾げる。ふと、翔輝の食べるカレーライスを見詰める。その視線に翔輝は気づいた。

「あ、食べてみる?」

「いいのか?」

「うん。ほら」

そう言って翔輝は皿ごと彼女に渡す。が、

「主殿が食べさせてくれ」

「え？」
　葛城は突如そんな爆弾発言をし、翔輝を見詰める。だが、そんな事・・・
「いや、それはちょっと・・・」
「ダメ、なのか？」
　不安げに見詰める葛城。そして、そんな瞳にものすごく弱い翔輝。翔輝は葛城の視線に耐えながら、「葛城ってこんなに瞳で訴えるような子だったっけ？」と内心困っていた。だが、そんな翔輝を逃がさぬように葛城はじっと見詰め続ける。いつもは頼れる凛とした瞳も、今はうるみ少女のものになっている。
　しばし耐える事にはできたが、やっぱり根負けし、
「わかった。わかったからもうそんなキラキラした瞳で見ないで」
　翔輝はため息すると仕方なくスプーンを掴み、ルーとライスを絡めてスプーンに盛る。そして葛城を向くと、葛城はすでに口を開け、目までつむって準備万端であった。
「ほら、いくぞ」
　翔輝はものすごく恥ずかしいのを堪えながら、スプーンをそっと葛城の口の中に入れる。そして葛城はすぐに口を閉じて含む。同時に翔輝はスプーンを抜き取った。
　モグモグと食べる葛城を見詰め、翔輝はいつの間にか給仕の水兵が入れてくれた水を飲む。
「うむ。なかなかの美味だ」
「だろ？　ここの料理はどれもうまいんだ。内地のどの店よりもいい品が揃ってるしな」
　『大和』の料理は海軍一のうまさを誇るのはもはや常識である。それは国民が配給制で食糧確保が難しい中でも軍隊は食事に困る事はなく、さらには『大和』には士官だけでなく下士官や水兵用の大型の冷蔵庫を完備。おかげで新鮮な野菜や魚を調理できるので、抜群のうまさを誇っているのだ。まぁ、これが大和ホテルと言われる原因の一つなのだが。

「私の所よりもうまいな」
「ははは、何だかんだで『大和』は兵の質は他艦よりはいいからね。烹炊班の腕も天下一品なのさ」
「なるほど。猫に小判とはこの事か」
「おい、それは僕達をバカにしてるのか？」
「いや、そういう訳ではないんだ。言い方が悪かった。すまぬ。豚に真珠――」
「結局意味は同じじゃぁッ！」
翔輝は怒鳴るが、葛城は気にした様子もなく今度は自分でパクパクと食べ進める。
「あのさ、それ僕のなんだけど」
「おかわりすれば問題はない」
「いや、そうじゃなくて・・・」
話が噛み合わずため息する翔輝に、葛城は不思議そうに首を傾げると、ハッと何かに気づいた。
「すまぬ。そうだったな」
「いや、別にいいんだけど」
「今度は私が主殿にあーんをする番だな」
「違うわぁッ！」
翔輝は思わず大声でツッコミを入れた。その声にまわりの士官達が振り向いた。だが、葛城が見えるのは翔輝だけなので、翔輝一人で騒いでいるように見える。
「あ、すみません・・・」
顔を真っ赤にしてしゅんとする翔輝に、まわりから笑い声が漏れた。
「何だ長谷川。お前また艦魂と楽しくしてるのか？」
「見せつけてくれちゃて、このこの」
「あぁッ！　俺も艦魂が見てぇッ！　こんな男だらけの世界は嫌だぁッ！」
「ははははッ！　確かにな。俺なら巨乳の子がいいな」

「だよなッ！　やっぱり女は大きな胸だな！」
「いやいや、むしろその逆。ない方が俺は好みだ」
「うぇ・・・、お前ロリコンかよ・・・」
「確かお前妹いたよな・・・まさか・・・」
「ちょっと待てッ！　何その蔑（さげす）んだ目ッ！　別に俺は妹には何もしてねぇよッ！」
「まあまあ、そこまでにしたらどうだ。ちなみに俺はボーイッシュな女の子が好きだ。特に体育会系がな」
「わかるぞ同志ッ！　あの燦々と輝く日の下でスポーツで流す汗！　そして程よく日焼けしたあの健康そうな体！　もはや最高ではないか！」
「おぉッ！　わかるか同志よぉッ！」
「いや、俺はむしろ図書室とかで本を読んでいる子の方が好きだな」
「お、文学系か。それもなかなかな。ベタだけどメガネに三つ編みなんかいいよな」
「俺はやっぱり巫女さんだな」
「おい、それはもう女の問題じゃなくて着る服の問題だぞ」
「・・・女の子はやっぱり三歳から十歳くらいが一番かわいい」
「総員この危険人物を捕縛しろッ！　こいつはマジでロリコンだッ！」
　ワーワー大騒ぎする皆を見詰め、翔輝は苦笑いした。自分が艦魂が見える事はすでにこの艦の中では常識になっているらしい。助かったようなそうでないような微妙な気持ちだ。
　最後の方で危険発言をした士官を捕縛する皆を苦笑いしながら見ていると、目の前にルーとライスが絡まったスプーンが差し出された。
「あーん」
「いやだから、しないってば」
「あーん」
「だからしないって――」

「あーん・・・（キラキラした瞳）」
「・・・わかったよ」
またも根負けする翔輝。これではどっちが主で僕（しもべ）だかわからない。
そもそも翔輝自身はそんなものはないのだが。
翔輝は仕方なく目をつむって口を開く。そんな翔輝の口に向かって葛城はそっとスプーンを近づける。
「はい、あーん」
「あ、あーん・・・」
「何してやがるんですかあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
すさまじい怒号が空間を震わせる。慌てて振り向くと、そこには激怒している大和が立っていた。
「あ、や、大和・・・」
「少佐ぁッ！　あなたは一体今何をしていたんですかぁッ！？」
「いや、何って、その・・・」
恥ずかしそうに視線を逸らす翔輝の前に、葛城が立ち塞がる。
「主殿は私が守る」
「か、葛城・・・」
「って、何でいつの間にか私が悪役なのよぉッ！」
葛城は怒鳴る大和に向かって腰の刀を引き抜いた。それは普通の刀よりも長い長刀。柄の部分には鳥の羽が装飾されているという、なんかちょっと軍人が持つには不釣合いなものであった。
葛城はキッと瞳を鋭利に尖らせる。戦闘モードに移行した。
「あくまでも逆らうのならば致し方がない。我が蒼龍炎月刀（そうりゅうえんげつとう）の錆にしてくれよう」
「なぁ、「それは三国志に出て来る関羽の武器のパクリだろうがぁッ！」っていうツッコミはいる？　もうめんどくさくて」
翔輝はため息するとそのまま立って部屋を出る。そんな翔輝に慌てて大和と葛城が追う。
「待て主殿！」
「少佐！　置いて行かないでください！」

二人が追いつくと、翔輝は疲れたようにため息する。実際かなり疲れているのだが。
「お前ら、少しは大人しくしてろよな。もう疲れた」
「すまぬ」
「ご、ごめんなさい」
二人はしゅんとして謝る。だが、すぐに大和はキッと葛城を睨む。
「だ、だけど葛城の横暴は許せない！」
「横暴？　一体何を言っているのだ？」
「キーッ！　よくもまぁそんないけしゃあしゃあと！　さっき少佐にあーんしてたじゃない！　ずるいよぉッ！」
「うん？　別にいいではないか」
「ダメに決まってるでしょッ！」
「だが、私は主殿にもしてもらったぞ。その礼に返したのだが」
「なぁッ！？　しょ、少佐にあーんをされたッ！？」
信じられないと驚愕する大和に対し、葛城は涼しい顔を続ける。
「ほ、本当ですか少佐！」
泣きそうな顔で大和は翔輝に叫ぶ。そんな彼女に翔輝は額を押さえてため息した。何も泣く事はないだろという顔だ。
「ま、まぁ一応は本当だ」
「そんなぁッ！　ずるいですぅッ！　何でいつも葛城ばっかりぃッ！」
大和はついに泣き出してしまった。そしてそのまま翔輝に向かって抱き付いた。翔輝は驚きながらも自分の腕の中で小さな子供のように泣く大和に困ったように頬を掻く。
「うわあああぁぁぁぁんッ！　少佐のバカあああぁぁぁぁッ！　大嫌あああぁぁぁいッ！」
「ごめんよ！　な？　泣き止んでくれ。頼むよぉ」
「バカバカバカあああぁぁぁぁッ！　少佐なんか大嫌あああぁぁぁぁいッ！」
いつになく大泣きする大和に、翔輝はおろおろとする。葛城はそ

んな二人をじっと見詰めるだけで、それ以上は何もしなかった。
「な、泣くなってば・・・」
と、翔輝は大和を抱き締めて、頭を抱えてやった。すると大和はさらに激しく泣き出した。
「葛城ばっかり・・・ずるいですぅ・・・ッ！　何で、何で葛城ばっかり・・・ッ！」
「わ、わかった。今度お前にもしてやるから。な？」
すると、大和の泣き声がピタリと止んだ。不思議に思っていると、大和がバッと顔をもたげた。そのクリッとした大きな瞳の縁には大粒の涙が溜まっていて、またすぐにも泣き出しそうな不安そうな顔で、翔輝を見詰める。
「ほ、本当ですか？」
「あぁ、約束するよ」
その言葉に、大和の顔がぱぁっと華やいだ。
「必ずですよ！　約束ですよ！　やったぁッ！　少佐にあーんしてもらえるぅッ！」
今度は一転して満面の笑みを浮かべて翔輝から離れると、その場でクルクルと回ってスカートをふわりと浮かばせる。そして、翔輝の方へ向き直ると、天使のような笑みを向ける。
「少佐！　大好きです！」
翔輝はその言葉に頬を赤くすると「まったく、何でこうなるんだよ・・・」と照れ隠しのグチを言う。そんなちょっと素直じゃないところにも、大和はくすくすと笑う。
ほんのりと赤い頬を掻く翔輝の空いている方の手を大和は掴むと、嬉しそうに引く。
「お、おい・・・ッ！」
「ほらほら！　早く艦橋に戻らないと艦長や参謀長に怒られますよ！」
「わ、わかったから引っ張るなぁッ！」
大和は満面の笑みを浮かべながら慌てる翔輝の手を掴んで走り出

した。
　二人楽しそうに走って行くのを、葛城はじっと見詰める。その瞳の奥には一体どんな想いが隠れているのか、計り知る事はできない。だが、彼女の拳は、ギュッと白くなるほど強く握られていた。
　そして、二人の姿が消えると、葛城は静かに光に包まれて消えた。

　湾内の一角に浮かぶ不運の新鋭空母『天城』の甲板には四人の艦魂がお茶会をしていた。
「いやぁ、やっぱり鳳翔が入れたお茶は最高ねぇ」
「気に入っていただき嬉しいでござる」
　隻眼を柔らかく曲げ、嬉しそうに微笑む鳳翔とそんな彼女の淹れたお茶を幸せそうな笑みを浮かべて飲む出雲。どちらも今では現役を引退した訓練艦。太平洋戦争が始まる前から同じ役職同士の二人は仲がいい。
　そんな巡洋艦、空母それぞれの重鎮と一緒にお茶を飲むのは歴戦の戦士ながら全く威厳のない隼鷹と悲運の新鋭空母にして天上天下唯我独尊の権化である天城。あまりにも異色な組み合わせだ。
「うーん、この水羊羹おいしーぃッ！」
「ほんと。こんなの初めてよ」
　嬉しそうに鳳翔が用意した水羊羹を嬉しそうに頬張る隼鷹と天城。そんな二人の後輩を見詰め、鳳翔は嬉しそうに微笑む。
「それは良かったでござる。その羊羹は以前私の艦長をしていた男が買って来てくれた老舗和菓子店の味をできるだけ再現したものでござる」
　そう言う鳳翔はどこか嬉しそうだ。きっとその艦長とは仲が良かったのだろう。彼女を見て天城はそう思った。
「へぇ、鳳翔さんってその人の事好きだったの？」
「そういう感情ではないでござるよ。信頼できる、最高の戦友だったでござる」
「ふーん、それで今その人はどうしてるの？」

天城は何気なしに訊いてみたが、鳳翔はその言葉に隻眼を悲しげに揺らすと、首を力なく横に振る。
「艦長殿は、戦死したでござるよ」
「あ、ごめん・・・」
「いいでござるよ。彼は自らの責務をまっとうしたのでござるから」
鳳翔は優しく微笑むが、大切な仲間が死んだ悲しみは計り知れない。実際、天城もよくわかる。彼女は姉を失っているのだから・・・
「私も、姉さんが死んじゃったしね・・・」
あまりにも短い命であった姉の雲龍。彼女は元々戦争には向かない性格だった。輸送作戦を誰よりも好んで行うその背中を、そっと尊敬していた。
だが今は、もうその背中もない。雲龍は彼女が最も好きだった輸送作戦の最中に敵潜水艦の攻撃を受けて撃沈した。
どこか悲しげな二人に、出雲は無言で空を仰いだ。
自分も、多くの仲間が先に逝ってしまった。
大活躍した日露戦争からもう四〇年。彼女の戦友である艦魂達のほとんどはすでにその責務を終えて解体された。残った者達も皆自分と同じように現役を引退して練習艦になっている。この戦争には、自分達はもう時代遅れなのだ。
今はもう亡き懐かしい戦友達の顔を思い出し、出雲もまた表情を暗くする。
そんな中、口の周りを汚しながら水羊羹を頬張る隼鷹はふとある事を思い出し鳳翔を向く。
「ねぇ鳳翔。その艦長ってもしかして貝塚中将の事？」
その何気ない問いに鳳翔は隻眼を大きく見開いて驚く。
「隼鷹殿は、貝塚殿を知っているでござるか？」
「うん。瑞鶴の艦長だったから」
「・・・そうでござったな」
鳳翔は納得したようにうなずくと、片方しかない瞳を懐かしそうに細める。

「瑞鶴殿とは親しかったのか？」
「うん。瑞鶴も翔鶴お姉ちゃんも、飛鷹やみんなが慕ってた。機動部隊ではお兄ちゃんみたいな存在だったよ」
　このお兄ちゃんとはもちろん翔輝の事だ。それだけ貝塚は空母達に信頼されていたのだ。
「そうか。貝塚殿は立派に己が責務を真っ当したのでござるか」
　鳳翔は今は亡き戦友の功績に瞳を柔らかく細める。そこには、大切な仲間だった貝塚への優しい想いがあった。
　出雲はそんな二人の会話に小さく微笑む。
「二人とも、大切な人なのね」
「出雲さんはどうなんですか？　そんな方はいらしたんですか？」
　天城の何気ない問いに出雲は「えぇ・・・」と小さくつぶやき、天を仰いだ。
「彼は今も、戦ってるわ・・・」
　そう言って、出雲は小さく微笑んだ。その笑みはいつもの彼女の屈託のない優しげな笑みではなく、どこか大人びた、まわりを包み込むような、そんな優しげな笑みであった。
「出雲さん・・・」
「何よぉ、そんなに暗い顔してぇ。笑って笑って」
　ニャハハといつもの屈託のない笑みを浮かべる出雲。やっぱり彼女はこの笑みが似合う。皆そう思った。彼女の笑みを見ると、幸せな気持ちになる。
　戦前から長門や扶桑、比叡と親しかった出雲。きっと長門や扶桑、比叡のあの優しさは、彼女から伝わったのだろう。
　彼女を慕う艦魂は数多い。だが、今ではそれもわずかになってしまったが・・・
「ここにいたのね姉さん」
　その声に振り返ると、そこには出雲と同じく金色の長い髪を流した碧眼の女性が立っていた。凛々しい瞳に腰に挿した二本の刀が特徴的な彼女は、金剛が天皇の次くらいに崇拝していた出雲型装甲巡

洋艦二番艦『磐手』の艦魂。姉の出雲と共に日本海海戦でバルチック艦隊を撃滅した一人だ。そしてそんな彼女の横にはなぜか葛城がいた。

皆が敬礼する中、出雲は笑みを浮かべる。

「あはは、磐手どうしたの？　葛城なんか連れちゃって」

「敷島長官と会議をしていてね。帰る途中で出会ったのさ」

敷島とは敷島型戦艦一番艦『敷島』の艦魂の事で、現在日本海軍艦魂社会で最も権力を持った艦魂だ。ちなみにその妹で日露戦争で連合艦隊旗艦を務めた英雄である敷島型戦艦四番艦『三笠』は記念艦として現在は完全に現役を引退している。

磐手は小さくため息すると後ろに立つ葛城を見る。

「この子が大和への奇襲攻撃の準備をしていたから捕まえたのよ」

その言葉に隼鷹達は二つの意味で驚く。一つはもちろん葛城の大和への奇襲未遂。そしてもう一つはあの葛城を磐手が止めたという事だ。

「あ、あの葛城を捕まえられるなんて・・・」

「磐手はあの金剛に剣術を教えた師匠だからね。あの子に勝てる者なんてこの世には存在しないわ」

出雲の何気ない言葉に、隼鷹達は驚愕する。あの鬼の金剛に戦闘能力を授けた磐手。葛城が勝てるはずもない。意外にも、日本最強の戦士はこんな所にいたのだ。

「私の事はいい。それよりも葛城。なぜ大和を狙った」

磐手は葛城を真剣な瞳で見詰める。返答によってはただでは済まさないという鋭利な光があった。さすがは日本最強の艦魂。隙が全くない。隼鷹達も不安げに見詰めるが、天城は疲れたようにため息した。

「どうせまたあの長谷川っていう人間が原因でしょ？」

天城の問いに、葛城は迷う事なくうなずいた。「やっぱり・・・」と天城は予想通りの回答に額を押さえる。

「あんたって子は・・・」

呆れる天城の横では出雲が苦笑いしている。そして磐手もまた疲れたようにため息する。
「まったく、世話を焼かせおって」
「まあまあ、その辺にしてあげなよ」
「姉さんは楽観的過ぎる。まったく、これではあの頃の皆と変わらないじゃないか」
「ふふふ、そうね。確かに、長谷川君ってあの人にどこか似てるしね」
彼女達が言うのは日露戦争の時、今とまるで同じようにある少年士官をめぐって艦魂達が激突した話だ。もちろん出雲もその一人であり、磐手は呆れていた。
「時代は変わっても、そういう事は変わらないものね」
「まぁ、恋の前ではそれくらいなんて事もないのよね」
「私にはわからん」
そう言って磐手は踵を返して去った。こういう馴れ合いはあまり彼女は好かないのだ。
一方、葛城に事の詳細を聞いた隼鷹は目を丸くする。
「や、大和がお兄ちゃんにあーんの約束ッ！？」
葛城の話（自分もあーんした事やされかかった事は秘密）に隼鷹は顔を真っ赤にして激昂する。
「そ、そんなの許さないんだからッ！　葛城！　大和を力ずくでも止めるわよッ！」
「・・・了解」
二人の恋姫はすさまじい勢いで光に包まれて消えた。一体これからどうなるのか、出雲はおもしろそうに微笑む。その隣に座る鳳翔は「これも青春でござる」とお茶をすすった。

第十三章　第九節　帝都空爆　葛城の瞳と大和の涙（後書き）

今回はさらに磐手が登場しました。どんどん賑やかになっていきますね。
さて次はついに呉にいる大和達に米機動部隊が襲い掛かる呉空襲です。
逃げられずに必死に戦う榛名達と必死に逃げ回る大和。さらにあの彼がついに戻って来ます！
怒涛の呉空襲編、どうかお楽しみに。

追伸
黒鉄大和初めて詩っぽい作品を書いてみました。
その名も《爆撃機の気持ち》。
爆撃機の悲しい想いを書いた作品、お暇があったらぜひお読みください。

第十三章　第十節　呉大空襲　大和達の猛反撃と剣部隊の出撃（前書き）

東京大空襲から一週間後、米機動部隊は日本本土を空襲する為に日本近海に出現した。
そこから発艦した攻撃隊は次々に日本の街を空爆。そして、ついに呉の街にも敵機が襲い掛かって来た。
迎え撃つ大和達、襲い掛かるエンタープライズ以下空母達、そしてついに動き出すあのキャラ。
日米双方に被害を与えた九州沖航空戦と呉湾空襲を同時に描きます！

第十三章　第十節　呉大空襲　大和達の猛反撃と剣部隊の出撃

３月１８日、日本本土近海に突如アメリカ機動部隊が姿を現した。その戦力は日本軍を圧倒する空母『エンタープライズ』以下エセックス級空母９隻からなる大艦隊であった。

アメリカ機動部隊はすでに九州・四国などを攻撃していた。その際出撃してきた特攻隊の攻撃を受け、『エンタープライズ』『エセックス』『イントレピッド』が小破していたが、アメリカ空母自慢のダメージコントロールの高さからその傷はすでに応急処置を終えて作戦遂行に問題はなかった。

そんな艦隊の中央部に配置されている『エンタープライズ』の甲板ではエンタープライズが揃った艦魂達と最後の作戦の打ち合わせをしていた。

「この作戦での目的は次の大作戦で障害となる可能性がある日本艦隊の撃滅。及び軍事関連施設を空爆する事です。各空母は先刻に知らせた管轄の攻撃目標を攻撃してください」

旗艦であるレキシントンの言葉に他の姉妹達はうなずく。一方書類を見詰めるエンタープライズは不満そうだ。その頭には包帯が巻かれているが、もう痛みはない。

「しかし、私が基地攻撃とはな・・・」

今回の作戦では『エンタープライズ』は基地攻撃が担当であった。本当は呉に溜まっている日本艦隊を撃滅したいのだが、任務とあれば仕方がない。

「いいかホーネット。必ず日本艦隊は撃滅しろ。特に空母は徹底的に潰せ」

「う、うん・・・」

エンタープライズの横にいたホーネットは彼女の言葉に力ない返事をした。

「うん？　どうしたよ？」

エンタープライズが不思議そうに問うと、ホーネットはしゅんとしていた。
「私、あんまりこの作戦やりたくないなぁ・・・」
「何だと？　どういう事だ？」
「だって、この空襲だと民間人にも被害が出ちゃう・・・無抵抗な人は、あんまり傷つけたくないもん・・・」
そう言うホーネットの言葉に、皆が沈黙した。すると、エンタープライズが小さくため息した。
「ホーネット。日本人は敵だ。敵を何人殺そうと構わん。民間人だろうが軍人だろうが、徹底的に殺せ。パールハーバーの時も民間人が大勢死んでいる。奴らにも同じ思いをさせてやれ」
「で、でも、トウキョウへの無差別爆撃は、やり過ぎだと思う・・・」
東京大空襲に関してはアメリカ艦魂達にも賛否両論している。もちろんエンタープライズは賛成派で、ホーネットは反対派だ。元々戦争が好きではないホーネットは、せめてできるだけ民間人に被害が出ない事を望んでいた。しかし東京では１０万人以上が死んだ。それがホーネットを悲しませている。
落ち込むホーネットの肩を、エセックスがポンと叩いた。
「まぁ、もうすぐ戦争は終わる。このまま続けば日本人はもっと死ぬ。日本人を生き残す最低限の犠牲と考えるしかないな」
「そ、そんなぁッ！」
「エンタープライズの姉貴なら、日本人１億人本当に殺しかねないぞ。言い方は悪いが、１０万人や１００万人でとどまるなら、その方がいいだろ？」
「そ、それはそうだけど・・・」
「結局、戦争は犠牲者の数で決まるものなのよ。戦争に勝つというのはどれだけこちら犠牲者を少なくし、敵の犠牲を増やすかって事なのよ」
ヨークタウンの言葉に、ホーネットはしゅんとする。二人の言葉

には少し反撃したい部分もあったが、エンタープライズは目をつむった。

一方、レキシントンはフランクリンと打ち合わせをしていた。

「あなたの率いる部隊が一番日本に近づくから最も危険。奴らはきっとまたカミカゼを突っ込ませてくる。気をつけて」

レキシントンの忠告に、フランクリンはコクリとうなずいた。

そして、ついにその時が来た。

各艦魂が自艦に戻ると、すでに甲板を艦載機が翔け抜けて空へ舞い上がっていた。

ネイビーブルーの機体が日の光を反射して鮮やかに光る。なんとも美しい光景だ。

艦隊上空には数百機の艦載機が飛び上がった。それら全ては見事な編隊を組むと次々に己が目的地に向かって空を翔けていく。

エンタープライズは相変わらず「Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！」と叫んでいた。だが、ホーネットの顔は曇ったままだった。

せめて、犠牲者はなるべく少なくなってほしい。そう願いながら空の蒼に溶けていく攻撃隊を静かに見送った。

その日もいつもと同じ蒼い空が美しい日だった。

翔輝はいつものように防空指揮所にいた。そのまわりには大和や伊勢、隼鷹や榛名、雪風が楽しそうに話していて、葛城が壁にもたれ掛かって瞳を閉じていた。

いつもと変わらない、平和な日になると誰もが思っていた。その時、葛城の瞳が静かに開かれた。その双眸（そうぼう）は蒼い空をしっかりと捉えていた。

「主殿、有賀艦長に対空戦闘用意を伝えてくれ」

「え？　な、何だよ急に？」

きょとんとする翔輝に対し、葛城はギロリと瞳を鋭くさせて空を睨む。

「空を見てみろ」
その言葉に皆が不思議そうに空を見回す。そこにはいつもと変わらない蒼い空が広がっていた。白い雲が美しく、なんとも平凡な空に見えた――だが、それは突如破られた。
雲の中、空の向こうから次々に黒い点が現れた。それも一個や二個ではない。あっという間に一〇〇は軽く超えただろう。迫り来る黒い点は次第に横へ細くなり、翼を生やした飛行機だとわかった。
それを見詰め、翔輝の顔から笑顔が消えた。
「ま、まさかあれって――」
その時、敵機来襲の警報が鳴り響いた。すでに敵機はかなりの距離にまで迫っている。
「敵襲だッ！　全員自艦に戻れッ！　長谷川も艦橋に入れ！」
そう怒鳴り、榛名が急いで消えると、他の艦魂達も次々に消えていく。そして、最後まで残った葛城は翔輝に敬礼すると、自らも消えた。
残された大和は翔輝の手を握る。
「少佐！　ここは危険です！　早く艦橋へ！」
「う、うんッ！」
翔輝は大和に手ほ引かれながら防空指揮所を出た。その時背後に振り返ると、空一面に敵機が埋め尽くしていた。
すさまじい数の敵機に、翔輝は顔を真っ青にした。

時間は少し戻って、ここは第三四三海軍航空隊――通称《剣部隊》が展開する松山基地。
第三四三航空隊は源田実大佐率いるエースパイロットばかりが集結し、さらには最新鋭戦闘機である紫電改や新鋭偵察機《彩雲（さいうん）》が配置された精鋭部隊であった。
すでに敵攻撃隊の位置は彩雲の偵察でわかっている。
そして、今まで逃げていたと非難されても温存し続けた戦力を、ついに解放する時が来た。

司令官である源田は居並ぶ己が配下の荒鷲を見詰める。
「いよいよ決戦の時が来た！　しっかりやって来い！　必勝を祈る！　全機出撃！」
源田の声に皆は敬礼すると、各飛行隊隊長の指示に従って己が愛機に向かって走った。
第三四三航空隊は紫電改部隊である三〇一飛行隊、七〇一飛行隊、四〇七飛行隊の三つに別れ、それぞれ新撰組（三〇一隊）、維新隊（七〇一隊）、天誅組（四〇七隊）の通称を持ち、さらに彩雲で編成された偵察第四飛行隊（奇兵隊）で編成された部隊であった。
そんな中、三〇一飛行隊隊長が愛機である紫電改に乗り込もうとした青年に声を掛けた。
「おい大空！　いつものように俺とお前で敵機を挟み撃ちにしてやろうぜ！」
その声に振り向いた青年――大空剣大尉はニッと笑みを浮かべた。
「はいッ！　僕たちのコンビは世界最強です！」
「ははははッ！　そうだな！　それじゃお互い紫電改じゃ初出撃だが、零戦の時と同じように敵機をぶっ潰すぞ！」
「はいッ！」
隊長は豪快に笑うと、自分の愛機に向かって走って行った。
剣は愛機である紫電改に乗り込むと、シートベルトを付けて飛行ゴーグルを付ける。その行動は長年の経験からスムーズなものだ。
「エナーシャ回せ！」
整備兵がエンジン下部にハンドルをつけて思いっ切り回す。と、エンジンから何かが回転する音が響いてきた。そしてそれがある一定を超えた瞬間、
「コンタァクトッ！」
エンジンのメインスイッチを入れる。その瞬間、エンジンが轟音を立てて起動し、プロペラが高速回転を始める。これまでの経験で慣れた手つきだ。機体こそ違えど基本は同じなのだ。
そして、滑走路に進入して発進の合図を待つ。

剣はポケットからいつものように何かを取り出す。それは亡き飛龍の形見のお守りだ。それを操縦桿にくくり付け、目をつむる。

思い出すのは守れなかった二人の少女――飛龍と瑞鳳の顔。

守ると決めたのに守れず、一緒に死のうと思って、生かされた。

大切な二人が、きっと今の僕を見守っててくれる。

レイテ沖海戦の後、この第三四三航空隊に徴集され、零戦から紫電改に機体を変えた。馬力もあり攻撃力も防御力もずっと高く、自動フラップという最先端の装備などが零戦以上の性能を発揮させる。唯一の欠点は量産数が少なくそのほとんどがこの航空隊で使用され、局地戦闘機なので航続力が短い事だが、幸か不幸かこれは防衛戦。一定の距離内なので問題はない。

そして、その精鋭部隊に今自分がいるのは、彼女達のおかげなのだ。

瞳を開くと、そこには戦場が見えていた。

ついに出撃の合図が下り、次々に紫電改が空へ舞い上がる。そして、それに続いて剣もスロットルを上げて加速。操縦桿をゆっくり引いて機体後部を浮かせると、一気に引いて空へ舞い上がった。

車輪をしまい、風防を閉めてゴーグルを外す。

後ろには松山基地がどんどん小さくなっていく。そして前を見れば、その先には戦場がある。

敵は呉に向かっているらしい。あそこには瑞鳳の義姉である龍鳳や瑞鳳の親友だった瑞鶴の親友、大和がいる。他にも榛名や多くの艦魂達がいる。

今度こそ、必ず守ってみせる。

剣はさらに速度を上げ、蒼い空を貫いた。

呉に襲い掛かった敵機は主に日本最大の軍港である呉軍港や船渠、燃料タンクなど軍事関連施設、そして広島湾に浮かぶ大和達軍艦に攻撃を集中した。

『大和』はいち早く危険な広島湾を脱したが、残された艦艇は動

くことができぬまま必死の対空戦闘を続けていた。
黒煙を上げる戦艦『榛名』の防空指揮所では榛名が刀を振り回していた。その刀身が敵機を捉えると、それは機銃や高角砲で撃ち落とされる。
轟音を立てて急降下して来る敵機に向かって、榛名は刀を振り下ろす。途端に敵機は機銃の攻撃を受けて炎上。真っ二つになって海面に激突した。
頭から血を流しながらも、榛名の瞳には力強い炎が燃えていた。
「さぁ掛かって来い鬼畜米英ッ！」
紐が切れ、パサリと結えられていた髪が重力に従って下へ流れ、風に揺れる。
榛名は編隊を組んで突撃して来る敵機に横一閃に剣を振るう。その瞬間、四機の敵機は全機撃墜された。
「出て行けッ！　日本の空から出て行けぇッ！」
次々に迫る敵機に向かって、榛名は全力を込めて刀を振り下ろした。

一方、『伊勢』と『日向』も襲い来る敵機に必死の奮戦を続けていた。
己が防空指揮所で刀を片手に戦う伊勢。すでに三式弾を撃ちまくって多数の敵機を撃墜している。だが敵機は無数。雨のように一斉にダイブして来る。
「ここはうちが守るんやッ！」
振り下ろした一閃に敵機が吹き飛ぶ。
轟音を立てて流星のように落ちて来る敵急降下爆撃機。航海中なら回避できるが、今は係留されているので動けない。敵機の攻撃を回避する術は――なかった。
敵機から放たれた爆弾が一斉に『伊勢』に降り注ぐ。伊勢はその瞬間を覚悟した。だが、爆弾は全て艦体のギリギリ横に炸裂して直撃弾はなかった。

伊勢は敵機の攻撃の外れに安堵の息を漏らした。その時、
ドガアアアアァァァァンッ！
すさまじい爆音と爆風に伊勢は驚く。だが、それは自分ではなかった。慌てて振り返ると横に並んで係留していた『日向』が炎と黒煙を舞い上げていた。
「ひゅ、日向ぁッ！」
伊勢は妹の名前を叫んだ後、ギリリと歯軋りして襲い掛かる敵機を睨み付ける。その瞳にはすさまじい怒りの炎が燃えていた。
「おどれらぁッ！　うちの妹に手ぇ出してといて生きて帰れると思うなやぁッ！　皆殺しにしてくれるわぁッ！」
伊勢は怒りに身体を任せてすさまじい一撃を叩き込む。その一撃で敵機三機が一斉に撃墜された。さらに振り向きざまに剣を振るって敵機一撃が撃墜された。
「これ以上日向には指一本触れさせへんでぇッ！」
襲い掛かる敵機に向かって、伊勢は斜め一閃に斬りかかった。

戦艦部隊から少し離れた場所に係留していた『葛城』にも敵機は襲い掛かっていた。次々に爆弾を放り投げて来る敵機の中、防空指揮所では葛城が奮戦していた。
「はあああぁぁぁぁッ！」
横に並んで突っ込んで来る敵機に向かってすさまじい横一閃の一撃をなぎ払った。そのたった一撃で敵機五機が粉々に吹き飛んだ。
艦体中から次々に放たれる機銃弾や高角砲と噴進砲の砲弾。敵機はそのすさまじい弾幕の中でも恐れずに次々にダイブして攻撃して来る。
轟音を立てて急降下して来る敵機だったが、葛城は冷静にそれを睨んで刀を振るった。その一撃と同時に放たれた機銃が敵機を撃ち落とす。
「甘いな。その程度の攻撃で私に傷は付けられぬぞ」
葛城は不敵に笑うと、再び迫る敵機に刀を振るった。その時、視

界の隅に別の方向へ飛んでいく敵機群が見えた。その方向の先には、湾外へ脱出した『大和』がいるはず。そしてそこには彼も――

「主殿ッ！」

一瞬葛城の意識が逸れた瞬間、敵機が一斉に急降下して来た。

「しまっ――」

その瞬間、『葛城』の側面で爆発が起きた。爆弾一発がついに命中したのだ。

すさまじい黒煙に包まれる己が艦体を見詰め、右腕を押さえながら立つ葛城。その口の端からは血が流れるが、左手の袖で静かに拭う。

「油断した・・・だが、私は負けないッ！　掛かって来い鬼畜米英！　一騎当千で打ち負かしてくれるッ！」

聞き手を封じられた葛城は左手に刀を握ると、襲い来る敵機に向かって身体を回転させてすさまじい一撃を放った。

一方、徳山沖に避難する『大和』だったが、その途中で敵機の空爆に晒されていた。

次々に襲い掛かる敵機に、大和は震えながら翔輝にしがみ付いていた。そして翔輝もそんな大和を強く抱き締める。

「みんな、大丈夫かな？」

なんとか『大和』は湾から脱出する事ができたが、伊勢や榛名、葛城達の事が心配だった。だが、現在『大和』も敵機の空襲されている。今はこの腕の中で震える大和の事だけを考えた。

「大丈夫だよ。きっと無事に逃げられる」

「少佐ぁッ！」

泣きそうな顔で必死に翔輝にしがみ付く大和。翔輝はそんな彼女を一瞥して窓の外の空を飛び回る敵機を見詰める。

『敵機直上ッ！　急降下ッ！』

伝声管を伝わって来る敵機が迫る声や見当違いな場所に落ちて爆発する爆弾の音を聞くたびに、大和はビクリと震える。そんな大和

を翔輝はずっと抱き締め続ける。
改装に改装を続けて増強された『大和』の防空能力は連合艦隊一である。だが、それをもってしても圧倒的な敵機の数の前では焼け石に水状態であった。
すさまじい爆音を立てて、『大和』のすぐ横で爆弾が次々に炸裂する。命中こそしなくてもそれらは至近弾ではり、大和はかすり傷を負う。だが、有賀の見事な操艦で敵機の攻撃を次々に避けてそれ以上の被害はなかった。
だが、このまま戦い続ければ直撃弾を受ける可能性も高い。大和は迫る敵機に恐怖した。
『敵機急降下！』
その報告に、大和の顔が真っ青になる。
迫る敵機の気配に、大和は今まで以上に力強く翔輝に抱き付き、翔輝もまたそんな彼女を強く抱き締めた。
そして、敵機が爆弾を放とうとした刹那――
ダダダダダダダダッ！　というすさまじい機銃掃射が横から放たれ、敵機は火を噴いて落下した。
驚く大和や翔輝達の目の前を、日の丸を付けた戦闘機が次々に敵機に向かって突撃して行った。
翔輝はその戦闘機隊の華麗な動きに驚く。
「あ、あんな機敏な動きができるパイロットがあんなに!?　しかも、あれは零戦じゃない？」
「きっと松山の第三四三航空隊です！　あれは新鋭戦闘機紫電改です！」
大和が嬉しそうに次々に敵機を撃墜する精鋭戦闘機隊を見詰める。
翔輝は大和ほど知識はなく第三四三航空隊を知らない。だが、大戦後期からずっとに見て来たどの零戦よりもすさまじい動きと、熟練の勘を見た。それだけで、彼らが歴戦の撃墜王だとわかった。
「すごいッ！　あれが第三四三航空隊の実力なんだ！」
翔輝だけではない。『大和』に乗る皆がそのすさまじい戦闘能力

を持つ紫電改部隊に歓喜した。
そんな『大和』の上空を飛ぶ剣は、間近で見る初めての『大和』に驚く。
「あれが『大和』か。でかい艦だな。でも、『大和』の艦魂は瑞鳳と同じくらいの歳。そんな子をこれ以上傷つけさせるかッ！」
剣は操縦桿を倒すと一気に急降下。別の紫電改に追われて逃げ惑う敵機に容赦なく機銃の雨を叩き付ける。敵機は火を噴いて落下した。
続いて操縦桿を横に倒して旋回する。自動フラップが働き、敵機の旋回よりも小さく旋回して相手の後ろを取った。そして再び機銃を撃ち込む。敵機はなす術なく散った。
その時、後ろから機銃が飛んで来た。振り向くと後ろに敵機がくっ付いていた。舌打ちして逃げようとした瞬間、別の紫電改が敵機を吹き飛ばした。コックピットを見ると、隊長が手を振っていた。
「さすが隊長だ！」
剣は再び敵機を見つけると急降下して襲い掛かる。そしてその一機に機銃を撃ち込むが、逃げられた。機体を再び水平にすると、次の目標を探す。と、一機の爆撃機が『大和』に向かって急降下した。
「させるかッ！」
剣は機体を反転させて一気に急降下する。どんどん『大和』に迫る敵機に照準を合わせ、機銃を叩き込む。敵機は不意の一撃に逃げる事もできずに被弾。機銃の一発が爆弾を貫き、敵機が爆発して粉々に散った。
それから数分後、敵機は全滅していた。
風防を空けると、風を切る音やエンジンの音に混じって大勢の人々の歓声が聞こえた。見ると、『大和』の甲板にいる大勢の兵達がこっちに向かって手を振っていた。
ふと剣は防空指揮所を見た。すると、そこには満面の笑みを浮かべてこっちに手を振る女の子――大和がいた。その横にはもちろん翔輝も立って手を振っている。

「あれが大和か。瑞鳳や飛龍よりも幼いじゃないか。あんな子が死ぬなんて事は絶対にダメだ。必ず生き残れよ」
剣は大和に向かって手を振ると、機体を反転させて松山へ帰投する。
防空指揮所から去っていく紫電改を見詰め、大和は満面の笑みを浮かべた。
「見ましたか！？　今パイロットさんに手を振られました！」
「まさか。ただ手を振っただけだろ？　お前が見えていた訳ないだろうし」
「むぅ、少佐はでりかしーがなさ過ぎです」
「・・・お前、本当に英語下手くそだな」
「ひ、ひどいですッ！」
顔を真っ赤にして怒る大和を見詰め、翔輝は静かに微笑んだ。
なんとか、彼女が死なずに済んだ。それが嬉しくて、つい笑みが零れてしまう。
それから『大和』は無事に徳山沖に避難し、以後空襲はなかった。

一方アメリカ機動部隊は何事もなく日本本土近海に展開していた。
だが、あまりにも何もなさすぎる。各空母の甲板に並ぶ戦闘機隊も暇そうにあくびをしていた。
そんな中、中心から少し外れた位置に展開する空母『フランクリン』の防空指揮所ではフランクリンがいつものように本を読んでいた。
のどかな午後だった。ここが敵の本土近海だという事も忘れてしまいそうだ。
フランクリンは今日1日ずっと、いや、ウルシー環礁を抜錨してからを読んでいた。すでに2冊読み終えている。今は3冊目だが、まだまだ読む本はたくさんある。
椅子に腰掛けながらメガネをクイッと上げて読みふけるフランクリン。だがそれは突如パタンと閉じられた。

無言で顔を上げて空を見詰めた。その時、警報が鳴り響いた。

『敵機来襲ッ！　対空戦闘用意ッ！　護衛戦闘機隊発艦開始ッ！』

すさまじい警報と共に甲板に並ぶ艦載機が次々に舞い上がった。

それ以外の兵達は急いで自分の配置に向かう。

各空母から発進した戦闘機隊は艦体上空で編隊を組むと敵機が迫る方角に向かって突撃する。すると、雲の切れ間から敵機が次々に現れた。

フランクリンは本を消すと、腰のホルスターから拳銃を2丁引き抜き構える。

空を見ると、すでに空中戦が開始されていた。だが、その戦闘は圧倒的であった。数も質もこちらが圧倒的であった。敵機は次々にＦ６Ｆの迎撃を受け、火を噴いて落下していく。

もはやこれは戦闘ではない。一方的で勝敗が決まっているゲームだ。

フランクリンは拳銃をホルスターに戻すと、再び本を発現させる。と、すさまじい対空砲火の音が聞こえて顔を上げると、護衛の戦艦が戦闘機隊の防空網から突破した敵機を攻撃していた。

フランクリンは無言のまま再び本を消して拳銃を構える。と、敵機2機が自分に向かって突撃して来た。フランクリンは冷静にそれを見詰め、拳銃を一瞬で構えて速射する。と、その瞬間敵機2機は対空機銃に機体を貫かれて爆発した。

さらに横の巡洋艦に迫る1機も振り向かずに速射。見事撃墜した。

戦いは一方的であった。だが、気は抜けない。敵機はただの攻撃隊ではない。先程から敵機は爆弾を投下したり魚雷を落としたりはしない。

アメリカ人には決して理解できない己を犠牲にして国を守るという狂った考え方の象徴。それがカミカゼであった。

国民がいてこそ国なのだ。

生きて帰る事こそが、最高の幸せであり誇りである。

そんな考え方のアメリカ人にとって、その全く逆な考え方の日本

人は理解できない。
なぜ突っ込んで来るのか。
なぜ死ぬ事を恐れないのか。
アメリカ人には理解できない。だが、フランクリンはわかっていた。多くの日本書物を読み、日本には武士道というものがある。
主君に命を捧げ、主君を守る為ならどんな敵に対しても恐れずに突っ込み、負けて捕虜になるのは最大の恥であり、捕虜になるくらいなら自決をする。そんな考え方だった。
イギリスにも騎士道というものはある。だがこれは武士道とは違う。
武士道とは見返りを期待せずに死ぬ覚悟。
騎士道とは死ぬ覚悟を内に秘めて人に恥じぬ生き方をする事。
死ぬ覚悟と、生きる覚悟。それが武士道と騎士道であった。
ならば、死を覚悟して挑み来る敵に、最高の名誉を与えるのが、同じ軍人である自分の役目。
フランクリンは襲い来る敵機を次々に撃墜する。
敵機が撃ち落とされるたび、フランクリンは心に想う。
――せめて、来世では平和な世で幸せに生きてほしい。
日本人は好きだ。
日本の書物も好きだ。
エンタープライズやみんなが日本人は敵であると言っても、フランクリンはそれに首を振る。
確かに今は敵だが、日本はきっとアメリカの良き理解者となるだろう。
フランクリンにとって、この戦争は日本との友情を結ぶものだと考えている。お互い本気でケンカをすれば、分かり合える。そんな気持ちだった。
敵は日本ではない。日本の北、アジアを上から見下すアメリカ最大の敵国であり、社会主義という世界を破滅に導くしかない考えを持ったソビエト連邦。

ソ連こそ、世界の敵である。
この戦いで日本を味方にし、共に社会主義と戦う。それこそが、アメリカと日本の本来の姿なのだ。
思想や考え方は違えど、日本はアメリカに近い国だ。
そして何より、最高のライバルであり、最高の友でもある。
今こそ、世界から孤立した日本を救う時。
襲い掛かる敵機を撃ち落とすたび、一体何度心で謝っただろうか。
フランクリンは自分に突っ込んで来る敵機を撃ち抜く。敵機は火炎に包まれた。だが、突撃はやめない。必死になって、敵機は自分に向かって突っ込んでる。もはや撃ち落とす事はできない。
すさまじい恐怖がフランクリンを襲う。だが、フランクリンは逃げない。
じっと迫る敵機を見詰め、腕を開く。
絶対逃げない。
彼らが命を懸けるなら、自分も命を懸ける。
一瞬、燃えるコックピットの中にいる搭乗員の顔が見えた。頭から血を流しながら必死に突っ込んで来るのは、まだ幼さが残った少年であった。
あんな子が、命を懸ける国。それが日本なのだ。
瞳を閉じず、腕を一杯まで広げて特攻機と対峙する。次の瞬間、特攻機は『フランクリン』の甲板に激突。大爆発を引き起こした。
背中が裂け、すさまじい鮮血が噴き出し、フランクリンは苦痛に顔がゆがむ。その瞬間すさまじい爆風が彼女の身体を吹き飛ばし、血まみれのフランクリンは壁に激しく叩き付けられた。
被弾した『フランクリン』は炎に包まれ、右舷に傾く。
敵機の空襲が去り、エンタープライズが慌てて駆けつけた時、フランクリンは血の海にぐったりと倒れていた。だがその顔は、どこか何かをやり遂げたようなものだった。
約一時間に及ぶ続く空襲を受けたが、呉軍港に停泊する日本残存

艦艇は大した損害はなかった。最も被害の大きいのは『大淀』中破。その他は小破か損害軽微であった。原因は攻撃の対象が主に軍事施設が狙われたからだが、その軍事施設もたいした被害はなかった。その際建造中であった雲龍型空母六番艦『生駒』も被弾して小破した。

被害は軽巡洋艦『大淀』中破。戦艦『榛名』『日向』、空母『天城』『龍鳳』、重巡洋艦『利根』、潜水艦二隻がそれぞれ小破。戦艦『大和』、空母『葛城』『鳳翔』他一隻が被害軽微となった。

空襲によって発生した火災は小さく、住宅街へ回る事もなかった。しかし、呉の街にも敵機が襲い掛かり、多くの死傷者が出てしまった。

九州沖航空戦と呼ばれる日本の反撃では十八日～二一日にかけて行われ、十八日には特攻隊が米機動部隊に襲い掛かり、空母『エンタープライズ』『エセックス』『イントレピッド』が小破。十九日にも空母『フランクリン』『ワスプ』が大破。『エセックス』が中破した。

被弾した『フランクリン』は必死の復旧作業の結果なんとか沈没は免れたが、ウルシー環礁に戻る事となった。

さらに十九日には日本海軍の精鋭戦闘機隊である第三四三航空隊の紫電改が五四機が出撃。敵機と壮絶な空中戦を繰り広げ、敵機五八を撃墜するという大戦果を挙げた（米軍側ではの記録では未帰還機十機）。被害は未帰還機十六機、地上炎上五機であった。

真珠湾の仇とも言える米機動部隊の大空襲であったが、結果は真珠湾攻撃に比べると少々物足りない結果に終わった。

呉空襲の後、『大和』の会議室は重苦しい空気に包まれていた。日本海軍最大の軍港都市呉が空爆されたのだ。もはや勝ち目など微塵も残されていないというのが嫌というほど見せ付けられた。

「まさかなぁ、呉が空爆されるなんて・・・」

伊勢も驚きを隠せない様子だった。だが、考えてみれば呉は米軍

にとっても重要な戦略都市だ。いつ空爆されても不思議はないのだ。大和だって敵機の空襲は予想していたので、正直に言えば今回の空襲はそこまで驚かなかった。

大和は驚愕や怒る皆を無視して日本近海の海図に何かを書き込んでいた。それは現在の前線、及び特攻隊の攻撃集中地点、空爆された重要所などだった。

そして、特に危険と判断される場所には丸を付けてある。そこは・・・

「沖縄か・・・」

日本本土の最南端に位置する沖縄は九州や四国を攻めるには中継地点とするに必要な地点に位置していた。それに敵機動部隊もどうやら今は沖縄近海に布陣しているという情報もある。

もはや沖縄が次の戦場になるのは明らかだった。

沖縄を見詰めて沈黙している大和を見て、彼女の横に座る翔輝は力なく口を開いた。

「兵達の間では、『大和』が沖縄に行くんじゃないかって噂で持ちきりだよ」

「私が、沖縄へ？」

大和は翔輝の言葉に驚く。だが、考えてみれば空母が頼りにならない今、戦艦である自分が出撃する可能性は十分ありえる。

「詳しい話は知らない。事実か、ただの噂かもね」

翔輝の言葉に大和は考え込むように再び沈黙する。そんな大和に気づき、伊勢が優しげな笑みを送る。

「安心してや大和。あんたが沖縄に行くんやったら、うちもついていくでぇ」

「そうだぜ大和。お前一人死地には行かせねぇよッ！」

「お姉ちゃんが行くなら私も行くぅッ！」

「お兄ちゃんが行くなら私も行く！」

「みんな・・・」

伊勢達は笑みを浮かべる。その笑顔はとても頼もしく、大和の心

を優しく包み、嬉しくて笑顔になる。そんな大和の頭を翔輝はそっと撫でる。

「その時は、僕も付き合ってやるよ」

「少佐・・・ありがとうございます！」

大和は嬉しそうに翔輝に抱き付く。大和の突然の行為に慌てる翔輝。だが、そんな二人を殺気に近い視線で見詰める者が約三名。

「大和！　あんたどさくさに紛れて何してんねんッ！」

「長谷川ッ！　テメェ何顔を赤くしてんだよッ！」

「大和ぉッ！　私のお兄ちゃんを返して！」

伊勢と榛名、隼鷹が今にも飛び掛ってきそうな勢いで二人を睨むと、二人は互いの顔を見合い、以心伝心。

回れ右して全力疾走！

「あ、待ちやがれ長谷川ッ！」

「大和！　何であんたが長谷川はんと手ぇ繋いで逃げんねんッ！」

「お兄ちゃんを返せッ！　この女狐ッ！」

榛名と伊勢、隼鷹が逃げる翔輝と大和を追って部屋を出て行く。

すると、今まで瞳を閉じて座っていた葛城が「主殿は、私が守る」と言って部屋を出て行った。

翔輝達が出て行くと、室内は急に静かになった。そんな部屋の中で天城は妹の暴走にため息した。

「い、いいのかな？」

「ほっときなさい。いつもの事じゃない」

心配そうに皆が消えたドアを見詰める龍鳳に、天城は気にした様子もなく机に突っ伏す。これでもケガをした身だ。こっちは自由にさせてもらう。しかも肝心の総司令官が出て行った今、自分は何もしなくていい。

すっかりマイペースな天城とどこか落ち着かない龍鳳。そんな二人の横では日向が静かになった部屋でお茶をすすった。そんな彼女を、皆が不思議そうに見詰める。

「・・・ずいぶん少なくなっちゃったなぁ。長谷川君を追い掛ける

子も」
今まで翔輝に好意を持った艦魂は大勢いた。だが、この戦争でその多くが死んでしまった。
日向はお茶をテーブルに置き、蒼い空を見上げた。かつて翔輝に想いを寄せた多くの仲間達を思い出しながら。
「みんな、戦争が始まってから四度目の春が着たよ・・・」
蒼い空はどこまでも澄んでいて、その向こうにみんながいるのではないか。そう思ってしまう。きっと見守っててくれる、と。
「日向さん。お茶のおかわりはどうですか？」
雪風が急須を持って日向の横に付く。そんな雪風を見て日向は目を丸くして驚く。
「あれ？　雪風は長谷川君を追い掛けなくていいの？」
「え？　ど、どうして私が・・・」
「だって、あなた長谷川君の事好きじゃないの？」
「そ、そんな私は滅相もありません！」
はわわと顔を真っ赤にして首を必死に横に振る。そんな雪風を見て、日向はムッと表情を険しくする。それでもあまり迫力はないが。
「あなたに一つ忠告。恋は手加減無用。例え相手が上官でもね。これ長門の受け売りね」
「い、いいんです！　私は少佐を遠くから見詰めているだけで」
「もうッ！　そんな初期の宮崎の〇かみたいな事言わないの！　ほらッ！」
日向は雪風の手を掴むと、驚く彼女を引っ張って部屋を出る。
「な、何するんですか日向さん！？」
「長谷川君を追い掛けるのよ！」
「えええぇぇぇッ！？　そ、そんなストーカーみたいな事・・・」
「何言ってんのよ！　恋は相手が嫌って言うくらいまでしつこくなきゃ！」
「それを世間一般にストーカーって言うんですよぉッ！」
ほとんど泣きそうな雪風を引っ張って日向は翔輝の追跡を開始し

た。

蒼い空の下にその巨体を置いている『大和』はさらなる対空兵装強化を行い、まさしく浮かべる城にふさわしい勇ましさを放っていた。

太平洋戦争開戦のきっかけになったこの超巨大戦艦はもはや事実上日本海軍最後の切り札と同時に日本国の最後の希望となっていた。つまり、当時世界最大最強と謳われた日本海軍の誇る超弩級不沈戦艦、戦艦『大和』が沈没するような事があれば、それは日本の完全敗北を意味していたのだ。

だが、もはや『大和』が活躍できる戦場はどこにもない。しかし、それでも追い詰められた日本は『大和』を連合国に対する最後の抵抗として使うだろう。それが、日本と言う国に象徴である戦艦『大和』の責務なのだから・・・

沖縄に米軍が大挙して攻めて来る。それを阻止する為に『大和』が沖縄に突撃するという噂はもはや兵達だけの噂という次元を超え、現実になりつつあった。

そんな現実味を帯びてきた噂が駆け巡るある日、大和は翔輝に一枚の紙切れを手渡した。それを見た翔輝の顔から笑顔が消え、冷たい怒りの炎を噴き出させた。

「これは、どういう事だ・・・ッ！」

翔輝とは思えない低く威圧感のある声に大和は震えながらも必死に声を絞り出して返答する。

「どういう事って、退艦手続きです」

「そんな事はわかっている！　だがそれをなぜ僕に渡すんだ！」

翔輝は紙をクシャクシャに丸めて床に叩き付けた。それは、長男、家業を継ぐ立場にある者を退艦させる為の書類だった。

クシャクシャにされた書類を拾って開き直すと、大和はキュッと口を引き締めて今にも泣きそうな顔で翔輝を見詰める。

「少佐は長谷川家の長男です！　十分これに該当します！　だから、

どうか私から降りてください！」
翔輝を死なせる訳にはいかない。
大好きな人に、愛する人に、生きてほしい。それが人の心だ。自分は艦魂だが、人のように心を持つ、そして普通の女の子だ。
翔輝に生きてほしい。
それは心からの願いであった。
そんな大和の想いは、翔輝も十分理解していた。だが、だからこそ彼女から離れる訳にはいかない。
ずっと一緒にいる。
死ぬときは一緒だ。
そんな想いを根底から否定する大和の申し出は、受ける訳にはいかない。
「長男と言っても、俺には家族はもういない！　陸に戻る理由はない！」
「少佐には守るべき人がいます！　瑠璃さんがいるじゃないですか！」
「そんなの関係あるか！　あいつは霞家の次期当主だ！　あいつの命は霞家が守ってくれる！　僕は必要ない！」
「そんな事ありません！　瑠璃さんには少佐が必要なんです！　瑪瑙さんや珊瑚さんだって少佐を必要としています！　それに、このまま『大和』にいれば死地に行く事になるんですよ！？」
「それがどうした！　僕は『大和』は降りないぞ！　絶対にな！」
翔輝はそう言い放つと、大和を突き飛ばして部屋の出口に向かう。
そんな彼の背中を、大和が苦しげに見詰める。
翔輝は大和に顔を向ける事なく、小さな声で言い放った。
「大切なお前を、一人では逝かせない。逝く時は、僕も逝くって決めたんだ」
そう言って立ち去る翔輝の背中を見詰め、大和は涙した。
そんな彼の優しさが嬉しい。でも、それは彼を殺す事になる。そんな事は絶対にしたくない。でも、ずっと傍にいてほしい。それら

の彼女の本当の気持ちが大和の心の中で渦巻き、涙となって瞳から流れた。

自分はどうすればいいのか、そんな虚空の想いを胸に抱き、大和は小さな声を上げて泣き続けた。

第十三章　第十節　呉大空襲　大和達の猛反撃と剣部隊の出撃（後書き）

久しぶりに登場したエンタープライズ達アメリカ艦魂。そして今まで行方がわからなかった剣の登場。そして大和達の死闘とフランクリンの想い。

今回は双方痛み分けという結果に終わりました。

ですが、これ以降日本の制空権は崩壊していきます。

そして、大和はこのまま敵機の空襲を受けて傷ついていくのか。それはさらに先のお話です。

次回は翔輝が久しぶりの上陸。瑠璃や珊瑚、瑪瑙と再会するお話です。

しかし、今回ばかりはクリュウもただでは済まない。瑠璃達もついに動く！？

霞家を舞台にした大波乱に乞うご期待！

第十三章　第十一節　翔輝と瑠璃　衝突する互いの想いと瑪瑙と珊瑚の決意（前）

今回は最後の上陸をする翔輝とそれを待ち受ける瑠璃、珊瑚、瑪瑙の四人のお話です。
瑠璃に最後の別れを告げに行こうとする翔輝とケンカ別れした瑠璃。
その二人の再会は一体どんなものになるのか。瑪瑙や珊瑚、霞家三大輝石全員集合です。
そして、瑠璃の恐るべき行動、珊瑚の苦痛の想い、瑪瑙の決意。
様々な物語が交錯します。
物語自体は悲しげですが、基本的にいつものノリです。
翔輝と三人の姫達の物語、どうか最後までお楽しみください。

第十三章　第十一節　翔輝と瑠璃　衝突する互いの想いと瑪瑙と珊瑚の決意

三月二五日、戦艦『大和』乗組員の休息上陸が行われた。だが、その彼らの顔はどれも真剣なものだった。

――皆、これが最後の上陸だと覚悟していたのだ。

翔輝もこの上陸に参加した。せめて、最後だけでも瑠璃と話をしよう。そんな決意を胸に抱いて、翔輝は故郷の土を踏んだ。

大通りに出た翔輝が霞家に向かおうとした時、目の前に黒塗りの高級外国車が停止した。それを見た翔輝に緊張が走る。と、運転席から神鳴が現れた。

「お迎えに上がりました。さぁ、お乗りください」

「瑠璃は？」

「お嬢様なら霞家本家にて翔輝様をお待ちです。さぁ」

翔輝は神鳴の言葉に従って車に乗り込んだ。

車は街中を走り抜けた。

だが、そこは自分の知っている呉ではなかった。

大通りなのに車はこの車しか走っていない。石油不足で特別許可を受けた車しか走れないのだ（もちろん霞家は許可済み）。さらに十九日の空襲の爪痕がいたる所に残っている。

かつて日本最大の軍港都市として栄えた呉は見る影もなかった。

そんなすっかり変わってしまった故郷を悲しげに見詰めていると、車は霞家に到着した。

翔輝は車から降りて中に案内された。だが、通されたのはいつも瑠璃と話す茶の間ではなく、霞家当主――瑠璃の父の部屋だった。

驚く翔輝は部屋に入ってさらに驚いた。内装がすっかり変わり、かつて壁一面を占めていた本棚はなくなり、代わりに瑠璃の部屋にあった彼女の私物が置かれていた。

呆然としている翔輝に懐かしい声が響いた。

「ようこそ長谷川翔輝様。我が霞家当主の屋敷へ」

翔輝がその声に顔を向けると、そこにはいつも以上に立派な着物を着こなした瑠璃が霞家当主専用の席に座っていた。それだけでも不思議なのに、それ以上に瑠璃の瞳はとても冷たい。まるで何ら感情が込められていないような、そんな得体の知れない冷徹さがあった。

「瑠璃？　何で君がここに？」

翔輝の不思議そうな質問に、瑠璃は顔色を一切変える事なく淡々と、事務的に、一切の感情を込める事なく返した。

「霞家前当主である私の父様。そしてその夫人であった母様は、今月十九日の空襲で市民を霞家専用の防空壕へ避難させている最中に、敵機の凶弾に倒れ、亡くなりましたわ」

瑠璃の言葉に、翔輝は目を丸くする。

翔輝にとっても、瑠璃の父と母は大切な人であり何度も助けられた。そんな二人の死に悲しみが起こるが、それ以上に気になるのは瑠璃の対応だ。そんな大事な事をなぜ知らせなかったのか。確かにあれからまだ一週間も経っていない。だが、霞家の緊急電報なら一日もかからずに通達できるはず。なのに、彼女はそれをしなかった。

「どうして、教えてくれなかったのさ」

翔輝の何が何だかわからないというような問いに対し、瑠璃は冷たい瞳で彼を見詰めると、再び感情の込もっていない声で返してきた。

「当然ですわ。なぜ部外者であるあなたにそのような事を言う必要がありますの？」

「ぶ、部外者って・・・」

翔輝は愕然とした。そんな言葉が、瑠璃の口から自分に向けられるとは思ってもみなかったからだ。

瑠璃との長い付き合いで、これほどまでに瑠璃から距離を置かれた言葉は初めてだった。そして何より、瑠璃の瞳は冷たく、感情は一切感じられなかった。まるで人形だ。

翔輝はそんな瑠璃を見て確信し、絶望した。

――瑠璃は、彼女を裏切った自分を他人として処理したのだと――

その考えが頭を満たした瞬間、翔輝はその場に崩れ落ちた。

子供の頃からの長い付き合いで、ずっと一緒にいて、本当の家族のように接してきた瑠璃はもういなかった。そこには、日本を動かす事もできる霞家の当主である、霞瑠璃しかいなかった。

「瑠璃・・・」

「今日はそれを一応教える為にお越しいただいたのですわ。あなたも一応は私の親戚ですから。ですので、もう用件は済みましたわ。お帰りください」

「る、瑠璃ッ！　待ってよッ！　僕の話を聞いて！」

「神鳴。彼を送り届けてください」

「・・・かしこまりました」

「瑠璃ッ！　僕の話を聞いてよッ！」

翔輝は必死に瑠璃に叫ぶが、瑠璃の瞳は自分を見ているようで、どこか遠くを見ている。そんな感じがした。

その瞳に、自分が映る事はなかった。

「あなたのような方の戯言（ざれごと）を聞く耳など持ち合わせていませんわ」

瑠璃の冷た過ぎる言葉に、翔輝はまるで自分の心まで凍ってしまったような気がした。

がっくりと力なく膝を着き、うな垂れた。そんな彼を、瑠璃は冷たい瞳で見詰める。

「瑠璃・・・僕は・・・もう・・・」

――君の、幼なじみでも何でもない、ただの他人なんだね・・・

――

翔輝はついに諦め、その瞳からは一筋の涙が流れた。

もう、彼女の心には触れられない。

彼女の必死に制止の声を振り切って、翔輝は『大和』に戻った。
それは同時に、瑠璃と大和という選択肢で、瑠璃を捨て、大和を選んだ事にもなる。きっと瑠璃は長年付き合ってきた自分に裏切られた。それも、まだ会って五年も経っていないような、人間ですらない相手に負けた事が悔しくて、悲しくて、許せなくて・・・
自分を、切り捨てたのだろう・・・
「・・・もう・・・終わりなんだね・・・僕達・・・」
「当然ですわ。あなたのような方、もう二度とお会いしたくありませんわ。さっさとお帰りください」
瑠璃の冷たすぎる言葉に、翔輝はもはや何も言えなかった。
もう、全てが手遅れであった・・・
翔輝は上着の下に掛けてあった翔香のペンダントを隣に立つ神鳴に渡した。
「これは翔香様の・・・」
「それはもう・・・捨ててください」
「な、何ですと!? し、しかしこれは翔輝様の大切な宝物――」
「今日は、これを瑠璃に渡しに来たんです――僕の形見として」
「「ッ!?」」
この翔輝の驚愕の言葉に神鳴、そして瑠璃でさえも瞳を大きく見開いて驚愕した。そんな二人に、翔輝は悲しげな笑顔を向ける。
「『大和』は沖縄へ行く・・・今度こそ死ぬかもしれない・・・だから・・・これを瑠璃に渡そうと思った・・・でも・・・瑠璃は僕を他人扱いしている・・・そんな彼女にこんな物を押し付けるなんて・・・できる訳がありませんよ・・・」
翔輝はそう言うと、力なく立ち上がって、無言のまま部屋を出た。その背中はあまりにも小さく、寂しげであった。その後を神鳴が続く。
大きな部屋に一人残された瑠璃は先程までの一切の感情がない表情から一転して、悲しげに顔をゆがめた。そして、翔輝が消えた方を見詰め、震える口を開く。

「翔輝様のバカ・・・こんな事・・・言いたくないのに・・・ッ！」
涙する瑠璃は手に顔を埋め、声を出して泣き出した。
これが彼に会える最後のチャンスかもしれないのに、自分は自分の下から離れた彼を許せない。彼は自分よりも艦魂であるあの子達を選んだ。それは自分に対する最大の裏切りである。絶対に許さない。だけど、もうこれで最後になってしまう。あの笑顔を、もう見る事はできなくなってしまうかもしれない。そんな時なのに、それでも彼を許せない。でも、もう彼には・・・
「翔輝様ぁッ！」
瑠璃は脇目も振らず駆け出した。
もう会えないかもしれない。そんな恐怖が体を突き動かす。
動きづらい着物なのに瑠璃はまるで飛んでいるかのように華麗な動きと驚異的な速度で翔輝を追い掛ける。
もう会えないなんて、そんなのは絶対に嫌。これからもずっと傍にいてほしい。いつまでも隣で、笑っていてほしい。
全力で走る瑠璃は下駄を履いて玄関を飛び出す。すると、そこには今にも車に乗りそうな翔輝の姿があった。
また、彼が離れてしまう・・・ッ！
涙でゆがむ視界の中に見える彼は、まるで本当にどこか遠くへ行ってしまうように見え、胸が張り裂けそうになる。
瑠璃は泣きながら自分から再び離れてしまいそうな大切な幼なじみを、兄のように頼れる彼を、愛しい彼の名を叫んだ。
「翔輝様ッ！」
瑠璃の声に翔輝が驚いて振り向いた刹那、飛び込んで来た瑠璃が抱き付いた。
「る、瑠璃？　ど、どうして・・・」
何がなんだかわからないという翔輝に抱き付いた瑠璃は、久しぶりの彼の温もり、そして愛しい彼の匂いを感じ――泣いていた。
「る、瑠璃――」
「翔輝様のバカッ！　どうしてもっと必死になって私に当たってく

れないんですの!?　本当は嫌なのに、どうして自分を押し殺すんですの!?」

瑠璃は泣きながら翔輝の胸倉を掴んで叫び続ける。そんな瑠璃の迫力に押される翔輝は何も言い返せない。その間も瑠璃は泣き叫ぶ。

「私がどんなに辛い思いであんな言いたくない事を言っていたかおわかりですの!?　私にとって大切な翔輝様に、あんなふうに言う私の気持ち、とても辛いんですよ・・・」

「瑠璃・・・」

「あの日、翔輝様は私の反対を押し切って『大和』に戻った。その事を思い出すだけで、翔輝様と無力な自分に怒りが湧き上がりますの・・・どうして翔輝様は行ってしまわれたんですの?　私は翔輝様の事を想って言ったのに、それを翔輝様は破棄しましたわ。そんなに、あの人達の方がよろしいんですの?　私より、長年一緒だった私よりも・・・ッ!」

その言葉を最後に、瑠璃はその場に崩れて大声で泣き出した。

瑠璃の気持ちを知った翔輝も愕然として力なくその場に崩れた。

瑠璃は自分が彼女よりも大和を優先した事にとてつもない衝撃を受けていたのだ。

十数年の付き合いの自分より、出会って四年の大和の方が大事。

そんな誤解が彼女の心をとてつもなく痛め付けていたのだ。

「翔輝様は・・・私よりもあの方を選んだんですのよね?　だから、私から離れたんですのよね?　そんなの・・・ひどいですわ・・・」

泣きじゃくる瑠璃を、翔輝はそっと抱き締めた。

違う。瑠璃にこんな想いをさせる為に、離れた訳じゃないのに。

結果的には彼女をこんなにも苦しめていたのだ。

自分の浅はかな考えが、大切な彼女をこんなに悲しい想いをさせていたのだ。

責任は全て、自分にある。

「ごめん・・・お前をこんなに苦しめていたなんて気づかなかったんだ。本当にごめん・・・」

翔輝の言葉に、瑠璃は一瞬安堵したような表情を浮かべたが、すぐにそれは悲しげな笑みに変わった。
「翔輝様・・・いいんですわ・・・私は所詮翔輝様にとってその程度の存在でしかないんですもの」
瑠璃の悲し過ぎる言葉に、翔輝は叫ぶ。
「そんな事ないよ！　そんな事ない。だから、そんな悲しい事言わないでよ。瑠璃は、僕にとってかけがえのない家族なんだ。そんなお前をこんなに苦しませてたなんて・・・本当にごめん。一番・・・僕の事を想ってくれてたのに、なのに僕は・・・ッ！」
いつの間にか泣いていた翔輝を見て、瑠璃は泣きながら小さな笑みをした。
「翔輝様が泣くなんて・・・みっともないですわよ」
「ごめん・・・本当にごめん・・・でも・・・僕はお前と同じくらいあいつらも守ってやりたいって思ってる・・・だから――」
翔輝が次の言葉を口にしようとした時、それは防がれた。
瑠璃の小さく温かい指が翔輝の口に触れて、《もう何も言うな》と示していた。
瑠璃は手の甲でごしごしと自ら流した涙を拭き、顔を上げた。その表情はとても穏やかなものだった。
「まったく、翔輝様という人は本当にお優しい方なんですのね」
瑠璃はそう言うと、いまだ涙を流し続ける翔輝をそっと抱き締めた。
「私はそんな翔輝様が好きなんです。困っている人を見たら助けずにはいられない、傍にいてあげたいと思う翔輝様が、大好きなんですの。だから、これも仕方がない事ですの。でも、翔輝様が私から離れていくのが、私には耐えられませんでしたわ。けれどもう大丈夫。翔輝様はちゃんと私の事も見ていてくださったのですから。私は、瑠璃は満足ですわ」
「瑠璃・・・」
「さぁ、涙を拭いて。明日までいられるのでしょ？　なら、今晩は

ここにお泊まりください・・・もしかしたら、本当にこれが最後になるかもしれませんものね」

「それは・・・」

言いよどむ翔輝に、瑠璃は静かに微笑むと、翔輝の両頬を手で押さえ、自らの唇を彼のそれに当てた。

顔を真っ赤にして驚く翔輝に、瑠璃はそっと離れると自らも頬を赤らめながら小さく微笑む。

「ですけど、必ず生きて帰って来てくださいね。私、ずっと待っていますわ」

その言葉に、翔輝の顔にも自然と笑みが浮かんだ。

何だかんだいっても、瑠璃はいつも自分を助けてくれる。心が折れそうになったり挫折しそうになったり、悲しかったりした時、彼女がいつも励ましてくれた。

そして今もまた、彼女に救われたのだ。

「あぁ、ありがとう。瑠璃」

「私と翔輝様の間にそのような言葉は不要ですわ」

自信満々に言う瑠璃を見て、翔輝の笑みもより一層強くなる。

翔輝はそっと瑠璃を抱き締める。瑠璃もそれに応えて抱き返す。

お互いの温もりを肌で感じ合う二人。それは、今まで幾度もしてきた事であり、これ以降もうできぬかもしれぬ事だ。

だけど、必ずまた会える。そんな想いが二人の中にあった。

だが、もし大和が死ぬような事があったら、その時の自分はどうするのか。

瑠璃を選んで生きる道。

大和を選んで死ぬ道。

今はまだわからない。でも、きっとどちらを選んでも、正解であり不正解である。

きっとどっちを選んでも、誰かを悲しませ、そして後悔する。

その時にならないと、わからない。

でも、今はせめて、瑠璃を選んで生きる道を考えよう。それが、

せめてもの彼女への感謝の気持ちでもあった。
この腕の中で嬉しそうに微笑む幼なじみを、守る為にも・・・
そんな自分達の世界に入っている二人に気を遣って立ち去った神鳴の心遣いはとても優しげなものだった。
その後、翔輝は瑠璃に手を引かれて霞家に入った。その繋がれた手はお互いを決して離さないという想いが込められていた。

霞家に来てから一時間後、瑠璃と他愛のない話をしていた翔輝に突如背後から音もなく誰かが抱き付いてきた。
「ふむ。翔輝また背伸びたか？」
「め、瑪瑙姉さん！？　ど、どうして・・・ッ！？」
「私がお呼びしましたのよ。もちろん珊瑚様も一緒ですわ」
瑠璃の言葉に振り返ると、そこにはうつむいて立つ珊瑚の姿があった。柔らかな日差しを背後に受ける珊瑚の表情は読めない。
「珊瑚？　どうしたの？」
「――何で」
「え？」
「何でなのよぉッ！」
突如怒鳴った珊瑚は瑪瑙を引き剥がすと翔輝の襟首を掴んでそのまま畳の上に叩き付けた。
「な、何す――」
背中の痛みにいきなり暴力を振るった珊瑚を怒鳴ろうとした翔輝は――言葉を失った。
頬に、温かい水滴がポタポタと落ちる。それは悲しげにゆがんだ珊瑚の瞳から落ちる涙だった。
「何で・・・ッ！　何でよぉッ！」
珊瑚は翔輝の襟首を掴んだままガクガクと激しく彼の身体を揺らす。握り締められた拳は、真っ白だった。
「何であんたが死ななきゃいけないのよッ！」
珊瑚は翔輝の襟首をグイッと眼前にまで引き寄せる。目の前には

ボロボロと涙を流した珊瑚の顔があった。そんな彼女に、翔輝は返す言葉がない。

「あんた言ったじゃない！　死んだりしたら許さないって私が言ったら、あんたは「わかった」って言ったじゃないッ！　なのに何でこれが最後なのよッ！　ふざけないでッ！」

「何でよッ！　何でなのよッ！」と叫びながらガクガクと翔輝を揺さぶる珊瑚を、瑪瑙が「そこまで」と彼女の肩を掴んだ。

「姉さん！　姉さんも言ってよッ！　翔輝が死ぬかもしれないのよッ！　もうどっかに閉じ込めてでも止めないと・・・ッ！」

「――それは、ダメよ」

驚く珊瑚に、瑪瑙は優しげな笑みを向ける。その笑顔には、信じる気持ちが込められていた。

「大丈夫よ。翔輝は死なない。きっと生き残るわよ」

「そんな事わからないじゃないッ！　瑠璃ッ！　あんた言ったわよね？　沖縄に展開する敵艦隊に向かって、『大和』が突っ込む可能性が高いってッ！」

睨み殺すかの勢いの珊瑚の鋭い瞳に、瑠璃はビクリと震えてうなずく。

「は、はい。空母が艦載機なしで役に立たない今、『大和』が突っ込む可能性は十分ありますわ」

「なのに、翔輝をそんな危険な『大和』に残せないわよッ！」

「・・・確かにそうね。翔輝をそんな危険な場所には残しておけない」

「ね、姉さんまで・・・」

「でも・・・」

瑪瑙は二人をそっと抱き締めた。瑪瑙の柔らかな身体に包まれた瞬間、二人の心に温かいものが満たした気がした。

驚く二人に微笑し、瑪瑙は優しく抱き締める。

「私は、翔輝が選んだ道を応援したい。この子は誰よりも優しい子。だから、困っている人がいたら助けずにはいられない。あの子達を

守りたい。この子はそういう子で、私はそんな翔輝が好き。そしてそんな翔輝は、あの子達を守る道を選んだ。だったら、私はそれを応援する。それが、私にできる唯一の事だから」

「姉さん・・・」

「で、でも翔輝死ぬかもしれないのよ！？」

珊瑚の言葉に、一瞬だけ瑪瑙の瞳が悲しげに揺れた。だが、すぐにそれは優しげなものに変わり、翔輝を見詰める。

「だから、約束して。必ず生きて帰って来るって」

「そ、それは・・・」

翔輝は視線を逸らして唇をキュッと噛む。

今度ばかりは、そんないい加減な事は約束できない。

生きたいし、瑠璃達を悲しませたくはない。だけど、大和達も失いたくない。彼女が死ぬような事があれば、きっと自分も彼女の後を追うかもしれない。

だから、約束できない。

そんな翔輝の心情を察したのか、瑪瑙は小さく首を横に振った。

「いいの。例え無理かもしれない。どうなるかわからない。そんな気持ちでも、約束してほしい。そうすれば、私も信じられるから」

「姉さん・・・」

「約束は守るように最善を尽くして。無理かもしれない。それでも、生きられるようにがんばって。私は、ずっとあなたの帰りを待ってるから」

そう言って微笑む瑪瑙の頬を涙が流れた。その涙に、翔輝は何も答える事ができなかった。

彼女は、希望を抱きたいのだ。

ここで約束すれば、彼女はきっと何年でも、何十年でも自分を待ち続けるだろう。でもそれは、彼女を束縛する事にもなる。そんな約束、したくはない。

黙る翔輝に、瑪瑙はすがるように迫って来る。

「お願い。せめて、それだけは約束して。じゃないと私、翔輝を忘

れてしまうかもしれない！　そんなの嫌だ！　私は、私は――」
「――忘れられるなら、忘れてほしい」
『ッ！？』
翔輝の言葉に、三人に戦慄が走った。
「な、何・・・言ってる・・・のよ・・・」
震える声で言う瑪瑙に、翔輝はじっと見詰める。
「僕の事は忘れてほしい。僕なんかのせいで、姉さんや珊瑚、瑠璃の残りの人生を束縛したくはない。僕の事は、きれいさっぱり忘れてほしい。そうすれば、姉さん達もいずれ幸せに――」
鋭い破裂音と共に、頬に強烈な痛みが走った。驚いて目を見開くと、そこにはボロボロと涙を流した瑪瑙がいた。
唇をキュッと噛み、キッと睨むその瞳は今まで見たどんな瞳よりも鋭利で、鋭いものだった。
「・・・ふざけないでッ！　翔輝の事を忘れろ？　そんな事できる訳ないじゃないかッ！」
「それでも忘れてほしいんだ！　今度こそ、生きて帰れない可能性が高い。なのに、もう帰って来ないかもしれない僕を待ち続けて、そんな一生を姉さん達にしてほしくないんだ！　それには、僕の事を忘れて、幸せになってほしいんだ！」
「私の幸せは、この四人でこれからも楽しく生きて行く事だ！　もうこれ以上、この関係は欠けさせない！」
「どうしてわかってくれないんだ！」
「どうしてわかんないんだ！」
睨み合う翔輝と瑪瑙。すると、瑪瑙の背後に瑠璃と珊瑚が立ち、二人は無言のままお互いを見詰め合ってうなずいた。そして再び翔輝を見詰める時には、もうその瞳には先ほどまであった信頼の光はなくなっていた。
「翔輝様。あなたには失望しましたわ。私は、あなたを信じ、またあなたが帰って来る事を前提にして、あなたを見送る決意をしていましたわ。それが、翔輝様の事を忘れろですって？　ふざけるにも

いい加減にしてください！」
「ふざけてなんかいない！　僕は本気で――」
「余計厄介じゃないッ！　あんた、命ってものがどんなものか全然わかってない！」
「わかってるよ！　そんなの、翔香の時で嫌ってくらいわかったさ！」
「いいやわかってない！　あんたは何もわかってない！　私達の気持ちも、何にもわかってない！　わからなきゃ何をしてもいいって、そんな事ある訳ないじゃない！」
「翔輝様。ご無礼をお許しください」
瑠璃はそう言うと、パチッと指を鳴らした。すると、部屋中の襖が開いて男達が入って来た。それは霞家親衛隊であった。
「お、お前一体何を・・・」
「この者を捕縛しなさい！」
『わかりました。当主様』
男達は慌てて逃げる翔輝を包囲すると、そのまま腕を掴んで後ろにねじ上げ、動きを封じる。たったそれだけで、翔輝は動けなくなった。
「は、離せ！　僕をどうするつもりだ！」
瑠璃は男達の間を抜けて翔輝の前までやって来ると、静かに言った。
「頭を冷やしていただきます。今の翔輝様は我を失っているのですわ」
「失ってなんかいない！　僕は普通だ！」
「いいえ、ダメですわ。翔輝様には、『大和』が沖縄に向かうまで、牢屋に入っててもらいます」
「瑠璃・・・ッ！」
「この者を牢屋へぶち込んでおきなさい！」
男達はうなずくと、暴れる翔輝を無理やり連行した。翔輝は必死に抵抗して瑠璃や瑪瑙、珊瑚の名前を叫んだが、誰一人、助けてく

れる者はいなかった。

その夜、翔輝は冷たい石壁に包まれたなんとも無機質な牢屋に閉じこまれていた。小さな窓はあるが、もちろんここからは出れそうもない。鉄格子は先程さんざん苦戦したが、結局開かなかった。

ベッドなどは用意されていたが、翔輝はそんなものは使わず、冷たい石の床にそのまま倒れていた。

ここは霞家に反逆した者を閉じ込めておく牢屋だ。あの霞家が自分に牙を向いた者を閉じ込める場所だ。そう簡単には脱出できないだろう。

そしてまた、自分もきっと瑠璃に、霞家に逆らった人間の一人だった。

瑠璃達の気持ちもわかる。あんな事を言われれば、誰だってショックは受ける。でも、そうしなきゃ、瑠璃達に幸せはない。

生きて帰ってくれれば何でもないが、もし死んでしまえば、彼女達に残るのは未練だけだ。そんなものの為に、彼女達に一生を過ごしてほしくはない。だから、あんな事を言った。彼女達が怒る事も想定できた。そしたらまたケンカ別れでもして、この家を飛び出すつもりでもいた。でもまさか、瑠璃が実力行使に出て自分を投獄するところまでは想像できなかった。彼にしてみれば、今回の瑠璃の行動は予想外であった。彼女は自分に何か暴力を振るうような事はいない。そういう子だった。

ちょっと見ない間に、彼女も大人になった、という事だろうか・・・

武蔵からプレゼントされた大切な腕時計を見ると、もう日付が変わっていた。朝には『大和』に戻らないといけない。だが、この状況では戻れるはずもない。窓の外には、狭いながらも美しい夜空が広がっていた。

「クソッ！」

翔輝は起き上がると鉄格子を掴んで激しく揺らそうとする。だが、

ビクともしなかった。
「頼むよ！　ここから出してくれ！」
この通路の向こうには看守がいるはず。だが、彼に何を言っても無駄だとはわかっていた。それでも、叫ばずにいられなかった。
「僕を待ってる子がいるんだ！　頼む！　僕をここから出してくれ！」
「夜中に騒ぐものではないぞ」
その声に驚いて目をこらすと、通路の向こうから瑪瑙が現れた。
「姉さん！？　た、頼む！　ここから出してくれ！」
「さぁな。私はお前に約束をしてもらいに来ただけさ」
瑪瑙は翔輝の前に立つと、真剣な瞳で彼を見詰める。そんな彼女に、翔輝も頭を冷やして冷静に向き直る。
「翔輝は、死が怖くないのか？」
「怖いさ。すごく怖いし、死にたくない」
「なら、今からでも瑠璃の言うとおり、鎮守府に来て・・・」
「それはできない。今、彼女達を――大和を見捨てて自分だけ逃げるなんて、僕にはできない」
「・・・なるほど。何を言っても、無駄だと」
「ごめん・・・」
押し黙ってうつむく翔輝の頭を、瑪瑙は鉄格子の間から手を伸ばしてそっと彼の頭を撫でた。その手はとても温かく、柔らかく、優しかった。
「・・・せめて、約束してくれ――必ず生きて帰ってくると」
翔輝を見据える瑪瑙の瞳は、諦める事を知らないまっすぐな瞳。まぶしいほどに輝いて、燃えるみたいに熱い目だ。
そんな彼女の視線に対し、翔輝はその視線から目を逸らした。
「悪いけど、それは約束できない。今度の作戦は生きて帰れる保証は一切ない。それなのに、そんな軽率な約束できないよ」
「・・・」
「・・・僕は今まで多くの約束を交わし、それを守れなかった。僕

には約束を守る力はないんだ。だから――」
「だから、何だというのだ？」
驚いて彼女の瞳を見ると、瑪瑙の瞳には熱く燃え上がる炎が宿っていた。
「約束に必要なのはそれに対する大切な想いだ。約束に力などいらない。生きて帰ってくる。そんな想いがあればそれで十分だ」
「でも・・・」
「翔輝。約束は人を強くする。良くも悪くも、約束によって人はさらに大きく、たくましく成長する。約束をする事は決して無意味ではないのだ」
瑪瑙の言葉に、翔輝は胸打たれた。
何か、胸の奥にあった冷たいものが、そっと溶けたような気がした。
「約束、か・・・」
「それに、約束をする事で私は翔輝を近くに感じられる――だから、約束してくれ。生きて帰ってくると、私は、ずっとずっと翔輝の帰りを待っているから」
「姉さん・・・ありがとう」
翔輝は優しげな笑みを浮かべ、瑪瑙の瞳を見詰める。その瞳にはもう迷わない。そんな決意の炎があった。
「約束する。僕は生きて日本に帰り、姉さん達の前に現れる」
「わかった・・・」
そう言うと、瑪瑙は何かを取り出した。それは刀であった。それも、霞家の家宝である名刀《月光》であった。月の光を浴びると浮き上がる波紋から、この名が付いたといわれる国宝級の代物である。
瑪瑙は月光を構えると静かに、そして鋭く振った。そして、刀を下げると、その瞬間鉄格子がバラバラに切り刻まれた。
驚愕する翔輝の手を掴むと、瑪瑙は走り出した。
「ね、姉さん！？　どうするの！？」
「なぁに。かわいい弟の為に霞家に反旗を翻すだけさ」

「なぁッ！？　そ、そんなのダメだよぉッ！」
「心配するな。翔輝の為なら、私は何でもする――私は翔輝の姉だからな」
「姉さん・・・」
その時、床に男が倒れていた。きっと看守だろう。すでに打ち倒して来たという事か。無茶をする人だ。
階段を駆け上がって牢屋棟から出ると、そこには美しい夜空と、大勢の親衛隊の姿があった。奥の方には戦車が数台停止し、砲身をこちらに向けている。完全に待ち伏せされた。
瑪瑙は舌打ちすると、翔輝の前に出る。すると、親衛隊の間から瑠璃と珊瑚が出て来た。その瞳はどちらも悲しみに包まれている。
「まさか、瑪瑙姉様まで私を裏切るのですの？」
「姉さん！　もうやめて！　翔輝を失ってもいいの！？」
二人の声に、瑪瑙はフッと口で小さく笑った。
「翔輝は死なないさ。私と、必ず帰って来ると約束した」
「そんなの、信用できる訳ないじゃない！」
「弟を信じるのは、姉の責務だ」
「じゃあ私は、妹として、姉さんを止める！」
「総員反逆者を捕縛しなさい！」
瑠璃の号令一下、男達が一斉に襲い掛かった。すると、瑪瑙はそんな彼らに突貫した。彼女の叩き方は攻めの一手。攻撃は最大の防御。それが彼女の戦い方だ。
瑪瑙は月の光を浴びて煌く月光を振るって何十人の親衛隊と互角の戦いを繰り広げる。
「翔輝ッ！　行けぇッ！」
「で、でも姉さんが・・・ッ！」
「二度とあの子達に会えなくてもいいのかッ！？　行けぇッ！」
瑪瑙の怒号に、翔輝は唇を噛んで走り出した。慌てて追いかけようとする男達に向かって瑪瑙は峰打ちを決める。
必死に翔輝を追おうとする男達に襲い掛かる。次から次に峰打ち

して気絶させていく。その動きは苛烈で、そして可憐であった。
すさまじい戦闘を続ける瑪瑙だが、さすがに数に圧倒され、ついに背中から押し倒された。
「クソォッ！　離せぇッ！」
「瑪瑙様！　無礼をお許しください！」
その瞬間手が後ろに羽交い絞められ、手錠がされた。振り返って驚く翔輝に、瑪瑙は必死に叫ぶ。
「私に構うなッ！　行けッ！」
捕まっても尚自分を守ろうとする瑪瑙の言葉に、翔輝は彼女の為にも必死に走った。
とにかくこの家を脱出しないといけない。だが、そんな翔輝の前に現れたのは、
「ここは通さない！」
「翔輝様。多少の暴力はお許しください」
そこにはある意味最強のコンビが待ち構えていた。
「瑠璃！　珊瑚！　そこをどいてくれぇッ！」
「どく訳ないでしょッ！？　無理やりでもあんたを倒してもう一度牢獄に入ってもらうわよ！」
「ただし、今度はより厳重な地下牢に。それも瑪瑙姉様と一緒に入ってもらいますわ」
二人はジリジリと迫って来る。さらに後ろからは瑪瑙を捕まえた事による余剰戦力の親衛隊が退路を塞いだ。
前は瑠璃と珊瑚が。後ろには親衛隊が。頼みの綱である瑪瑙も今は捕まってしまっている。もう、策はなかった。
だが、諦める訳にはいかない。
何としても大和達の所へ帰るのだ。
翔輝は一番手が薄い瑠璃と珊瑚のいる前方へ走った。すると、珊瑚が手に持った竹刀を振って襲い掛かって来た。女の子にしてはかなり殺人的な技だが、こちとら榛名という歩く戦闘兵器の特訓を受けている。これくらい訳なかった。

振り掛かる珊瑚の竹刀を紙一重で回避し、その横へ抜ける。驚く珊瑚の顔を一瞥し、翔輝は走った。すると、前方には瑠璃一人が立っていた。確かに戦闘能力は高いかもしれないが、避けて走れば問題はない。

「翔輝様！」

「瑠璃ごめん！」

翔輝は瑠璃の横を通り抜ける。だが、瑠璃も負けじと走り抜ける翔輝の裾を掴んで引き止める。いきなり掴まれた翔輝はバランスを崩して転倒した。そこへ瑠璃が逃がさまいと抱き付いて来る。

「翔輝様！　行かないでください！」

瑠璃が泣きながら必死に抱き付いて来るが、翔輝も負けじとそんな瑠璃から離れようと抵抗する。

「離して瑠璃！　僕は行かなきゃいけないんだ！」

「絶対に離さないですわ！　翔輝様を失いたくないんですの！」

「お願い！　離して！」

「絶対に嫌ですッ！」

瑠璃は必死になって泣きながら翔輝に抱き付く。そんな彼女に、翔輝は抵抗する力を失った。その間に珊瑚や親衛隊が取り囲んで退路が断たれた。

「翔輝・・・どうやら・・・ここまでのようだな・・・すまない」

そう言って現れたのは手を捕まれ、刀を奪われて抵抗できなくなった瑪瑙。その表情は全部の責任は自分にあると言いたげな、辛いものであった。

「姉さんのせいじゃないよ・・・ごめんね」

翔輝もすっかり抵抗する力を失い、瑪瑙に謝る。

そして、無抵抗になった翔輝の手を男が後ろから拘束しようとする。と、

「待ってください」

「当主様？」

男の手を止め、瑠璃は翔輝に向き直る。その瞳は涙でいっぱいで、

悲しみに染まっている。三度も裏切られ、その表情はもう見ていられないくらい悲しい。翔輝も、目を合わせられずに逸らしてしまう。
「こっちを見てください」
瑠璃の消えそうな声に、翔輝は素直に従って彼女を見詰める。瑠璃はうつむき、キュッと翔輝の服の裾を掴んだ。
「・・・お願いです・・・もう・・・行かない・・・ください」
消え入りそうな声に、翔輝は何も返せない。そんな翔輝に、瑠璃はそっと抱き付く。耳の傍に彼女の口が来て、悲痛な嗚咽が聞こえてくる。
「翔輝様は・・・私の事が嫌いなんですの・・・？」
「そうじゃない・・・瑠璃の事は好きだよ。でも・・・大和達だって・・・」
「私とあの方々・・・どちらの方が大事ですの・・・？」
「そんなの、決められないよ・・・」
その瞬間、キュッと裾を握る瑠璃の手が強くなった。その感触に、翔輝は黙ってしまう。そんな翔輝に、瑠璃は唇を噛んだ。
「・・・どうしても・・・行かれるんですの・・・？」
「ごめん。でも僕は――」
「――もう、いいですわ」
「瑠璃？」
驚く翔輝から瑠璃はそっと離れると、そのまま力なく立ち上がった。そして、
「作戦を中止しますわ。各員解散。翔輝様を、行かせてあげてください」
「瑠璃ッ！？　あんた何言ってるのよッ！？」
驚く珊瑚に、瑠璃はそっと抱き付いた。
「もう、いいんですわ・・・」
「瑠璃・・・」
小さく泣き崩れる瑠璃を、珊瑚はそっと支える。
親衛隊は困惑したまま主の命令どおり解散した。瑪瑙も解放され、

残されたのは呆然とする翔輝と泣く瑠璃、そんな彼女を支える珊瑚と、沈黙する瑪瑙だけだった。

「瑠璃。あ、ありが――」

「――もう、翔輝様なんて知りませんわ。どこへでも勝手に行ってください。もう翔輝様が死のうと生きようと、知りませんわ。翔輝様なんて、大嫌いです・・・ッ！」

瑠璃の悲痛な声に、翔輝は言葉を失ってうつむく。そんな翔輝を、珊瑚がキッと睨み付ける。

「あんたは最低よ。私も、あんたなんか知らない。わかったわよ。あんたなんか忘れるわよ。もう二度と会いたくない。さっさと消えなさいッ！」

珊瑚の言葉に、翔輝は胸が引き裂かれるような気持ちになった。

これで良かったのだ・・・でも、こんな終わり方は、なるべくしたくはなかった。

「翔輝。二人はこう言っているが、せめて今日だけはここにいろ。部屋がないなら、私の部屋に来い」

そう言って瑪瑙が翔輝の手を掴んで連れて行く。瑪瑙について行きながら、一度二人に振り向いたが、瑠璃も珊瑚も、一度もこちらを見る事はなかった。

雲に隠れていく月を見上げながら、翔輝の頬を一筋の涙が流れた。

瑪瑙に連れられて翔輝は彼女の部屋に向かった。

日頃彼女が霞本家に来た時に使われるその部屋は、とても清潔なものであった。

もう時刻は真夜中である。部屋に着いた二人はもう寝る事になった。ただしその際にちょっとした事件が・・・

「あ、あのさ姉さん？」

「うん？　何だ？」

「せめて、布団は別にして寝ようよ・・・」

今現在翔輝は瑪瑙と一緒の布団で寝ていた。押入れから新しい布

団を取り出そうとした翔輝を襲い、ほとんど無理やり一緒に寝ているのだ。
「今日ぐらい良いではないか。だから翔輝もこっちを向いてくれ」
「そ、それだけはご勘弁を」
翔輝は現在なるべく布団の端で瑪瑙に背を向けて横になっている。言っておくが、翔輝はもう二〇歳で、瑪瑙も二五歳である。普通に考えてこれぐらいの年齢の男女が布団を一緒にすれば、何かイベント（？）が発生するものだが、翔輝では絶対にそれはありえないから安心だ。
「まったく、翔輝はつれないな。だが、そこがかわいいんだがな」
「あ、あのさ。僕もう大人なんだけど」
「私にとっては翔輝はいつまでも子供さ」
「あははは・・・」
「だから――」
小さく微笑むと、瑪瑙は翔輝に後ろから抱き付いた。
「なぁッ!?　ちょっと姉さん!?」
「あぁ、やはり翔輝はかわいいなぁ。この抱き心地、もう堪らない・・・」
「のわあああぁぁぁッ!?　姉さん何すんだよぉッ！　ちょっと本当にやめてッ！　背中に当たってるぅッ！」
「うむ？　一体何が当たっているというのだ？」
「・・・それは、その・・・姉さんの・・・胸・・・が・・・」
顔を真っ赤にしながら言うと、布団の中に潜る。そんな彼女を見詰め、瑪瑙は嬉しそうに微笑む。
「くそぉ・・・照れるなんて、やっぱり翔輝はかわいいなぁ♪」
「抱き付かないでえええぇぇぇッ！」
そんな絶叫する翔輝を嬉しそうに抱き締める瑪瑙。二人の入る布団は世話しなく動き回る。と、その時、瑪瑙がピタリと動きを止めた。
「ね、姉さん？」

「翔輝。寝る前に厠に行って来い」
「え？　大丈夫だよ。それにもうとっくに行ってるし」
「いいから行け」
「あ、うん・・・」
瑪瑙のすさまじい迫力に押され、翔輝は首を傾げながら渋々と布団を出た。そんな翔輝に背を向ける瑪瑙は、静かに口元で微笑んだ。
翔輝は尿意を感じないまま仕方なくと襖を開いた。すると、
「え？」
「ひゃあッ！？」
「なぁッ！？」
そこには瑠璃と珊瑚が立っていた。二人とも翔輝の突然の登場にかなり驚いている。もちろん翔輝もだ。
だが、三人は動けないまま沈黙し、誰一人言葉を発しない。
先程のあの別れ方の後だと、あまりにも気まず過ぎる。どう話し掛けたらいいか、お互いに言葉を失っている。
翔輝は瑪瑙に助けを求めようと振り向いたが、彼女はこちらに背を向けている。そこで初めて彼女は二人の存在を知っていたと気づいた。
どうしたものかと困ったようにおろおろとする翔輝。その時、
「翔輝様・・・あの・・・」
その声に振り向くと、そこには瑠璃が悲しげな瞳でこちらを見詰めていた。
「瑠璃・・・」
翔輝の声に、瑠璃は泣きそうな顔になる。それにはさすがの翔輝も大慌てになる。
「ちょ、ちょっと泣かないでよッ！」
「翔輝様ぁ・・・ッ！」
瑠璃は急にさらに泣き出すと、翔輝に抱き付いた。いきなりの事で翔輝は転倒しそうになるが、何とか踏ん張って耐えた。
「る、瑠璃？」

「ごめんなさい・・・ッ！　翔輝様ぁ・・・ッ！」
翔輝の腕の中で、瑠璃は泣きながら謝った。そんな彼女に驚いていると、そっと珊瑚が近づいて来た。
「私も悪かった。ごめん・・・」
珊瑚も、頭を下げて謝った。そしてそんな二人に、翔輝はようやく二人がわざわざ謝りに来たとわかった。すると、自然と笑みが浮かぶ。
「いいよ。別に謝らなくても。むしろ謝るのは僕の方だし」
「そんな事ありませんわ。だって、私は翔輝様に大嫌いって・・・」
「うーん、ちょっと傷ついたけど、まぁ許す。僕とお前の仲だろ？」
「翔輝様ぁ・・・ッ！」
瑠璃はぶわっと涙を噴き出すと、翔輝に泣き付いた。
「翔輝様ぁッ！　翔輝様ぁッ！」
「わかったわかった。ほら、もう泣き止めって」
「ねぇ、私は？」
すっかり忘れられてしまった珊瑚はピクピクと眉を動かす。明らかに不機嫌そうだ。
「あ、もちろん許すよ！」
「何その取って付けたような、しかも上から目線の言い方は」
「いや、別にそういう訳じゃ・・・」
「生意気なのよバカ翔輝ぃッ！」
「ちょっと待ってッ！　それはあまりにも理不尽すぎるッ！」
いつの間にか翔輝達はいつもの雰囲気に戻っていた。
さっきまであれだけの大ゲンカをしていたのがうそのような明るい雰囲気であった。
翔輝の顔にも、自然と笑みが浮かんだ。と、
「どうやら、仲直りは済んだようだな」
その声に振り返ると、瑪瑙が小さく微笑んで立っていた。どうやら今まで完全に傍観者に徹していたらしい。
「姉さん、少しは助けてくれても良かったのに・・・」

「お前達なら放っておいても大丈夫だと信じてたんだ。今までだって多くのケンカを乗り越えて来たであろう？」
瑪瑙はそう言ってニッと微笑む。その笑みはとても凛々しく頼もしいものだった。
「もう、姉さんの無茶をするのね」
「かわいい弟の為ならこれくらい問題ない」
「問題ないって・・・霞家を裏切るなんて、ある意味アメリカよりも怖いわよ？」
「安心しろ。私なら敵機の一機や二機くらいなら撃ち落とせるぞ」
「ね、姉さんならやりかねない・・・」
苦笑いする一同に、瑪瑙は「どうしたの？」と不思議そうに首を傾げる。そんな瑪瑙や瑠璃、珊瑚に囲まれた翔輝は嬉しそうに微笑む。
「では、二人はもう戻れ。そして翔輝、今度こそ抱き合って寝てもらうぞ」
すごく嬉しそうに言う瑪瑙に、翔輝から笑みが消える。
「い、いや、それはちょっと・・・」
「だ、ダメですわッ！　翔輝様は瑪瑙姉様にも渡しませんわ！　私もご一緒に寝ますわ！」
「何言ってんのあんた達ッ！？」
夜中だという事も忘れ、ギャーギャーと騒ぐ霞家三大輝石と称される瑠璃達に振り回され、翔輝は嬉しくもあり悲しくもあり、呆れたりもした。
結局その後、瑪瑙の部屋で四人は寝る事になった。一つの布団に翔輝を挟んで瑪瑙と瑠璃の三人が寝て、隣には珊瑚が布団を敷いて眠るという形。
顔を真っ赤にする翔輝に抱き付いて幸せそうな笑みを浮かべる瑠璃と瑪瑙。
翔輝はまた眠れない夜になるなぁとため息した。と、
「翔輝様、今日の朝には、行かれてしまうんですよね？」

瑠璃の声に顔を向けると、瑠璃が悲しそうな顔をしていた。そんな彼女を見て、一瞬ためらいがあったが、翔輝は正直にうなずく。
「うん。朝になったら帰るよ」
「そうですか・・・」
しょんぼりとする瑠璃に、翔輝は小さく微笑んだ。
「でも、必ず生きて帰って来るって姉さんと約束したから。大丈夫だよ」
「本当ですの？　本当に？」
「うん。瑠璃とも約束する。必ず帰って来るから」
翔輝の言葉に、瑠璃はぱぁっと微笑んだ。
「わかりましたわ。だったら私、いつまでも翔輝様のお帰りを待っていますわ」
「あぁ、必ず帰って来るから」
「はいッ！」
瑠璃は嬉しそうに笑みを浮かべると、翔輝に思いっきり抱き付いた。そんな瑠璃を翔輝は慌てる事もなく、そっと抱き締めた。と、
「うむぅ、瑠璃ばかりずるいぞ。私もだ」
そう言って瑪瑙がギュッと背中から抱き付いて来る。
「は、離れてぇッ！」
「嫌ですわ」
「断る」
「さっさと寝なさい！」
そんないつもの四人。
必ず生きて帰って来ると信じているから、瑠璃達は笑えるのだ。
四人はその夜、心を一つにした。
約束を守る為に、四人は新たな場で戦うと誓った。
どんなに離れていても、四人の思いは変わらず、輝き続ける。
約束がある限り、翔輝と瑠璃、瑪瑙や珊瑚の四人の絆は永遠に不滅であり、想いもずっと繋がり続ける。それが、四人の絆であった。
星空の下、わずかな明かりが照らす部屋の中で、四人は結局ずっ

と話し続けた。
寝る時間があれば、四人の思い出に四人でいるこの時を刻みたい。
そんな想いが四人から眠気を遠ざけた。
ずっとこの時が続けばいい。
このまま朝が来なければいい
そんな叶わぬ思いが四人の心の中を満たした。
朝が来れば四人は引き離される。それが嫌で、四人は互いを感じ合う為に話し続けた。
まるで、そこに大切な人がいるのを確かめるように・・・

翌朝、翔輝は霞家を後にした。
軍港まで送ってくれる車の中で、翔輝と瑠璃、瑪瑙と珊瑚は沈黙していた。そんな瑠璃の胸には翔香のペンダントが輝いていた。
車が軍港に着き、翔輝と瑠璃達の別れがきた。
軍港には多くの将兵とそれを見送る家族の姿があった。そんな中、翔輝は瑠璃と瑪瑙、珊瑚と見詰め合った。
「瑠璃、姉さん、珊瑚。しばらくのお別れだ」
「翔輝様。これはお別れではないのですよ。必ずまた会う。そう約束したではないですか」
「そうだね。なら、さよならは必要ないね」
「当ったり前でしょ――また会えるに決まってるじゃない
「また会えると信じているから、笑顔で見送れるのだ」
「わかった――また会おう、瑠璃、姉さん、珊瑚」
「はい。翔輝様」
「ふん。ちゃんと帰って来なさいよ」
「帰って来たら、またギュッとしてやるぞ」
互いを見詰め、三人翔輝とそれぞれ静かに抱き締め合った。
ずっとこうしていたい。そんな想いが瑠璃達の心をよぎったが、三人はそれを打ち消した。
――また会う。そう約束した――

瑪瑙にはかなり強く抱き締められ、珊瑚には脛を蹴られ、最後の瑠璃は翔輝の体をそっと離した。
「これ以上こうしていると、別れが辛くなりますわ」
「あぁ、そうだね」
「ではこれを持って行ってください」
そう言って、瑠璃は首に下げていた翔香のペンダントと渡す。
「翔香ちゃんならきっと、翔輝様をお守りしてくれるはずですわ。ですから、持って行ってください」
「・・・わかった」
翔輝はペンダントを受け取って首に掛ける。結局戻って来た妹の形見。だが、これで良かったのだと思う。
翔輝は自分を見詰める瑠璃、瑪瑙、珊瑚を見詰め、小さく微笑む。
「じゃあ、行ってくる」
「行ってらっしゃいですわ。ずっと待ってますわ！」
「がんばって来なさいよ！」
「翔輝！　ずっと待ってるからな！」
翔輝は歩き出し、大勢の将兵の中に溶け込んだ。その後ろでは瑠璃と瑪瑙が泣きながら、珊瑚が笑顔で翔輝の名を呼んでいた。翔輝はその呼び声に答える。
「みんなッ！　元気でなあああぁぁぁッ！」
「翔輝様ッ！　翔輝様ッ！」
「バカ翔輝！」
「帰って来たら結婚してくれ翔輝ッ！」
ちょっと間違った声も聞こえるが、翔輝は笑顔でそれに応えた。
そして、翔輝の乗った内火艇はゆっくりと岸を離れた。だが、翔輝はずっと瑠璃、瑪瑙、珊瑚の名を呼び続けた。
ずっと、いつまでも・・・

海に浮かぶ『大和』に戻った翔輝を、満面の笑みを浮かべて大和が出迎えた。

「少佐！　お帰りなさい！　瑠璃さんとは仲直りできたんですか？」
「あぁ。ちょっと牢屋にぶち込まれたけどね」
「何があったんですか？」
「いつもの事だ。それに約束もした」
「約束ですか？」
「うん――必ず生きて帰ると、そう約束した」
「そうですか、なら、少佐はその約束を死んでも守らねばなりませんね」
「おいおい、死んだら約束が果たせないだろ？」
「あ、そうですね」
大和は自分の言った間違いに笑い、翔輝もそんな大和を見て笑った。
笑い合う二人。そんな二人を遠くから榛名、伊勢、隼鷹、雪風、葛城が見詰めていた。
「ちっ、長谷川め。大和の前だといつもあんな笑顔をしやがって」
「本当やね。大和はほんまうまい所をもらい過ぎや」
「むぅっ！　お兄ちゃんは私のものだもん！」
「・・・でも、ちょっとうらやましいですね。少佐と大和司令」
「主殿・・・」
五人はそれぞれの思いで二人を見詰めた。悔しくもあるが、どこか微笑ましい光景と、翔輝が無事に帰って来た事に、五人はどこか嬉しそうだった。
そんな事も知らず、翔輝は蒼い空を見上げた。
「必ず生きて帰ってくる。僕も、お前もな」
「はい」
二人の見詰める青空は雲一つない快晴だった。それはまるで二人の新たな戦いを見守っているかのようだった。

この日――三月二六日、以前から艦砲射撃や空爆で沖縄を攻めていた米軍はついに沖縄県の慶良間（けらま）諸島に上陸、攻撃を開始した。

この瞬間、日本本土唯一の地上戦――沖縄戦が開始された。

第十三章　第十一節　翔輝と瑠璃　衝突する互いの想いと瑪瑙と珊瑚の決意（後）

ええぇ、昨日入試を終えました。これから結果発表が怖い日々を送る予定です。もしも突然更新が全くされなくなったら、それはきっと・・・

安心してください。もし落ちても書き続けます！　そりゃあもう嫌ってくらいに！（ヤケクソ）

えっと、今回は戦争というものに引き離された四人の物語をお送りしました。

翔輝を実力行使で拘束する瑠璃。翔輝を拘束してでも守りたい珊瑚。霞家に反旗を翻してでも弟を想う瑪瑙。

それぞれの想いが交錯する、そんな物語でした。

そしてついにいよいよ米軍が沖縄に攻撃を開始。物語もいよいよ終盤に入ります。

今回で第十三章は終了です。次回はついに大和が特攻する第十四章に入ります。

残り少ない物語、そして伊勢や榛名、葛城や隼鷹、そして翔輝と大和の二人は一体どうなっていくのか。

次回、第十四章をお楽しみに。

第十四章　第一節　故郷出港　孤高の第二艦隊の運命（前書き）

ついに第十四章まで来ました。
この章ではついに大和の特攻が行われます。
今回の話は原作の頃には僕の無知で描かれていなかった呉からの出撃の話です。
大和と翔輝、伊勢や榛名、隼鷹に葛城、龍鳳達の想いが交錯する物語。そして、十勇士と呼ばれた大和の配下である矢矧や雪風他の第二水雷戦隊の艦魂達は一体どうなるのか。
今回は外伝の方の《連合艦隊最後の希望　十勇士出撃》を引用していますので、向こうを読んでいる人にはちょっとすみません。ですがキャラ設定を変えたのもありますので、ご勘弁を。
では、大和と翔輝の最後の物語、第十四章をお楽しみください。

第十四章　第一節　故郷出港　孤高の第二艦隊の運命

三月二八日、広島湾に浮かぶ第二艦隊旗艦、戦艦『大和』とその隷下の第二水雷戦隊の各艦に重油や弾薬が運び込まれた。

旗艦『大和』と第二水雷戦隊の九隻は呉から佐世保へ向かう準備を進めていた。

理由は二日前に米軍が慶良間諸島に攻撃を開始した事に関係する。現在陸海軍は沖縄海域に集結しつつある連合軍主力部隊に対して大規模な反撃作戦を考えていた。

千機以上の特攻機を沖縄海域の敵艦隊に突撃させる――菊水作戦だ。

大規模な特攻攻撃を行い、沖縄で奮闘している守備隊を掩護しようという作戦だった。

もはや特攻が主力攻撃となった今の日本軍は、特攻以外の戦法は考えられなかった。

無誘導の爆弾や魚雷で攻撃するよりも敵艦まで搭乗員が誘導する特攻の方が断然命中率がいいからだ。

菊水作戦は全部で第十号作戦まで用意されていた。最初こそは通常機での作戦だが、後半になると練習機なども投入される、まさに日本にある全ての航空機を叩き込むと言っても過言ではなかった。

陸海軍は、本土にある航空機を掻き集めて特攻部隊編成を急いだ。

沖縄を舞台に、日本軍の最後の総攻撃が開始されようとしていたのだ。

そして、『大和』以下第二艦隊には菊水作戦の援護をする事になっていた。その為、沖縄により近い佐世保へと移動する事になったのだ。

第二艦隊は日本最後の艦隊であった。しかしその戦力は寄せ集め

な上に数も少なく兵達の質も開戦初期に比べれば圧倒的に下がっていた。

ここで『大和』直属の隷下の部隊である第二水雷戦隊を説明する。

水上雷撃戦部隊として世界最強の破壊力を誇っていた日本海軍水雷戦隊の中でも練度・攻撃力共に最強と謳われた名実共に世界最強の水雷戦隊。それが第二水雷戦隊である。

日本海軍自慢の酸素魚雷を余す事なく使用し、ソロモン海の激戦では多くの米艦艇を沈めた第二水雷戦隊は、まさに日本海軍の精鋭部隊であった。

しかし、長きに渡る戦争で第二水雷戦隊は次々に所属駆逐艦を失い、かつて最新・最強の駆逐艦が配備され、世界中の海軍を震え上がらせた第二水雷戦隊も、今では古参・新米入り混じりの集成部隊と成り果てていた。

そんな現第二水雷戦隊旗艦を務めるのは軽巡洋艦『矢矧』。戦中生まれの『矢矧』は水雷戦隊旗艦に特化した新鋭艦であり、その性能は第二水雷戦隊には申し分なかった。

そんな旗艦『矢矧』の配下には四つの駆逐隊が存在し、計八隻の駆逐艦を従えていた。

開戦以来太平洋の海を無尽蔵に駆け回り、数々の戦果を勝ち取った陽炎型で編成された第十七駆逐隊――駆逐艦『磯風（いそかぜ）』『浜風（はまかぜ）』『雪風』。

戦中生まれ、戦前生まれの新旧混成第二一駆逐隊――駆逐艦『朝霜（あさしも）』『初霜（はつしも）』『霞（かすみ）』。

最新鋭の秋月型及びその改良型の新鋭駆逐艦で編成された第四一駆逐隊――駆逐艦『冬月（ふゆづき）』『涼月（すずつき）』。

それら九隻の艦艇で編成されたのが第二水雷戦隊である。

第二水雷戦隊の艦魂達は年齢はバラバラだが、矢矧の指揮官としての能力は申し分なく、現在士気の高さでは日本海軍一と言っても過言ではなかった。

そんな第二水雷戦隊の艦魂達は今は第二艦隊旗艦である『大和』

に集まっていた。
　日本海軍の象徴である戦艦『大和』の第三会議室。常日頃あまり使用される事のないこの部屋は三年以上続く太平洋戦争の間、連合艦隊艦魂司令部の会議場として使用されていた。
　そんな歴史ある部屋には、第二水雷戦隊の艦魂および連合艦隊司令部の艦魂のほとんどが揃っていた。
　そんな中、下士官用の軍服にスカートを着て、柔らかなポニーテールを静かに揺らす矢矧が作戦書類を眺めていた。その作戦書には菊水作戦の概要が書かれていた。それは本土にある航空兵力のほぼ全てを特攻させるすさまじい作戦内容であった。矢矧自身は特攻は認めていないので、それを見るたびに微かな怒りを覚える。
　戦争とは、生き残る為にするものだ。だが、特攻はその逆で命を捨てた攻撃なのだ。これは戦争の理念に背く行為だ。だが、今の日本軍が特攻以外で敵に一矢を報いる事ができないのも事実であった。
　本当は嫌だが、国を守る為なら仕方がない事かもしれない――仕方がないの言葉一つで片付けたくはないが・・・
　そんな事を考えながら、マグカップに入った残ったコーヒーをすする。と、
「矢矧。もしかしたら、これが最後の作戦になるかもしれないわね」
　そう言って矢矧のマグカップに新しいブラックコーヒーを注ぐ黒く美しい長い髪をした端整の顔つきをした矢矧より年上の水兵服を着た女性。彼女は初春型駆逐艦四番艦、駆逐艦『初霜』の艦魂だ。幾多の戦いに参加した歴戦の駆逐艦の艦魂である。
　初霜は第二水雷戦隊最古参の艦魂であり、矢矧の頼れる参謀だ。
「そうですね。栄光の第二水雷戦隊の歴史を私達で終止符を打ってしまうのは忍びないですが、仕方ありません」
　戦隊旗艦である矢矧は冬月以外は皆年上になる。同年代の雪風達とは敬語抜きで接するが、初霜ほどの古参には敬語を使っている。これも、寄せ集めの部隊だから仕方がない。
　矢矧は参謀として未熟な自分を支えてくれる初霜を心から尊敬し、

信頼していた。

「昔は第二水雷戦隊と言ったら私達駆逐艦の誰もが憧れる最高の部隊だったのよね」

初霜は懐かしそうに虚空を見詰める。彼女の言うとおり、第二水雷戦隊に所属するというのは日本駆逐艦では最高の名誉であった。だがそれも今はメンバーが足りないという理由から今回のメンバーは入ったのだ。その事実に、どこか初霜は残念なのだ。

「そうだな。私も昔は憧れたものだ」

そう言って現れたのは長い夜叉のような髪に左目に眼帯を付け、鋭く意志の強そうな隻眼が二人を見詰める少女は朝潮型駆逐艦九番艦、駆逐艦『霞』の艦魂だ。

霞は歴戦の駆逐艦である。初陣は真珠湾攻撃で雪風の姉である陽炎と不知火と第十八駆逐隊を組んで機動部隊の護衛をし、インド洋作戦にも参加。ミッドウェー海戦でも攻略部隊で参加した。その後は船団護衛に従事し、レイテ沖海戦にも参加。初霜と共に第二次多号作戦に参加。第四次多号作戦も行い、礼号作戦では旗艦を務めて日本海軍の最後の組織的戦闘に勝利した。そして再び初霜と共に伊勢と日向の護衛をして北号作戦を完遂させた。まさに歴戦の戦士であった。

そんな霞は一九四二年の七月に敵潜水艦の魚雷攻撃を受け、左目を失った。

歴戦の戦士である霞もまた矢矧の参謀の一人だ。むしろこの部隊では最も指揮官に向いている艦魂でもあるが、今は矢矧の部下として活躍している。ちなみに彼女だけは第二水雷戦隊で唯一ズボンを着用している。

「第二水雷戦隊に配属される事は最高の勲章のだったからな」

「そうよね。懐かしいわ」

戦前生まれの二人が平和だった昔を思い出して微笑み合うのを見て、戦中生まれの矢矧はどこか寂しそうに微笑んだ。

矢矧は平和な日本を知らない。だからこそ、自分達ががんばって、

日本を平和にするという想いが強いのだ。
「しかし、今では我々が第二水雷戦隊だ。士気は高くても練度が低い。せめて、後の世に語り継がれるだけの功績は残したいな。でなければ、二水戦の先輩達に申し訳がない」
「そうよね。でもまぁ、そういう難しい事は矢矧が考えてくれるわよ」
「初霜さん。冗談言ってないで手伝ってください」
「はいはい」
「まったく初霜は。仕方がない私も手伝おう」
そう言って二人は矢矧から作戦書を受け取ると、それを読み始める。何だかんだ言っても、古参組であるこの二人は何かと頼りになるのだ。
矢矧はそんな頼れる部下にして先輩である二人に小さく微笑むと、再び作戦書を見詰める。
一方、そんな三人のすぐ横では六人の少女が今回の作戦について話し合っていた。
「今度の作戦に参加する艦艇は少なすぎるわね。かつて世界三大海軍国として英米に肩を並べていたあの頃の日本海軍の姿はどこにもないわ」
セミロングの髪に強気な瞳をした少女がため息しながら言う。彼女の名は陽炎型駆逐艦十三番艦、駆逐艦『浜風』の艦魂で、もう数少ない雪風の妹の一人だ。
「まあ、仕方ないわね。まだ私達以外にも横須賀、佐世保、呉、舞鶴に三〇隻以上の駆逐艦はいるけど、艦を動かす肝心の重油の残量が少ないから、これが限界なのよね」
ため息しながら言うクリッとした瞳に細メガネが良く似合うボブカットの少女。彼女は浜風の姉である陽炎型駆逐艦十二番艦、駆逐艦『磯風』の艦魂だ。陽炎姉妹では頭脳派の艦魂である。常に用意周到に準備をして事に当たるも、なぜかいつも失敗してしまう。得意技は何もない所で転ぶ事だ。

そんな磯風と浜風はかつて真珠湾攻撃に参加した歴戦の戦士でもある。
「でもさ、いくら何でもこの数はないと思うけど」
「それだけ、残りの重油が少ないのよ。そもそも、これだけの艦艇を一斉に動かすだけでも、今の日本にはかなり辛いはずよ？」
「そうね。もし、捷一号作戦（レイテ沖海戦）が成功していれば、こんな事にはならなかったのにね」
二本の胸まで掛かる長めの三つ編みをした少女の言葉に二人は残念そうにうなずいた。彼女の名は夕雲型駆逐艦十四番艦、駆逐艦『朝霜』の艦魂だ。朝霜は雪風や磯風、浜風の義理の妹でもある。
磯風、浜風、磯風の三人はレイテ沖海戦の際に主力部隊である栗田艦隊に属していた。だからこそ、あの反転には今でも不満の残る艦魂なのだ。
「成功していれば、こんな座して死ぬ仲間を生まなくてすんだのに」
「この作戦だって、もっと艦艇が増やせたのに」
「全部栗田長官のせいよね」
悲しげにため息する三人を見て苦笑いするのは、今となっては彼女達の最も上の姉に当たる雪風だ。
「もう、みんな終わった事をいつまでも悔やんでも前には進めないよ？　今は今できる事をがんばらなくちゃ」
今まで数多くの戦場を無傷で生き抜いて来た幸運艦『雪風』の艦魂である前向きな雪風と違い、三人はかなり消極的である。
「今できる事って、一体何さ？」
浜風が不思議そうに訊くと、雪風はあまりない姉としての尊厳をフルに使って堂々と宣言した。
「祖国を、大切な人を守る為に全力で敵に立ち向かう事よ」
かっこいい事言った！　と満足する雪風。だが、そんな雪風を浜風がニヤニヤと笑顔で見詰める。そのムカつく笑みに雪風はムッとする。
「な、何よ」

「私も義姉さんみたいに恋すれば強くなれるのかな？」
「なぁッ！？」
頬を赤らめてニコニコと笑う朝霜の言葉に雪風は顔を真っ赤に染める。
「そ、そんなんじゃないわよッ！」
「顔を真っ赤にさせて言っても説得力ないわよ。ね・え・さ・ん♪」
嬉しそうに言う浜風に雪風はこれ以上ないってくらい顔が真っ赤になる。
「『よぉ、俺は長谷川翔輝。俺は雪風が好きだぜ。愛してる』」
浜風は自分の十八番の声マネを披露する。見事に雪風の想い人そっくりな声だが、キャラは完全に違う。だが、今の雪風はそれで十分だった。
「はうぅ・・・ッ！」
想い人の声で《愛してる》なんてセリフを言われたせいで雪風はもうとろんとした最高に幸せそうな笑顔で椅子から転げ落ちると、その場でのた打ち回った。
「姉さん、あまり騒がない方がいい」
磯風が冷静すぎる声で止めるが、雪風はもうはしゃぎまくり。と、
「おい雪風ッ！　テメェ何騒いでんだッ！　静かにしてろッ！」
その怒鳴り声に雪風は顔を真っ青にして慌てて椅子に座り直して姿勢を正すと、真っ青な顔で今自分に怒鳴った榛名を見詰める。
榛名は大和達の出撃に反対している一人だ。むしろ自分が行くとまで言っているが、もちろん艦魂の一存で海軍が動くなんて事はなく、こうして全方位に不機嫌なオーラを振りまいているのだ。
「す、すみません・・・」
もう先程までのハッピー気分はどこかに吹き飛んでしまった。相手は士官で自分は水兵。縮こまってしまうのは当然だろう。
「ったく、テメェって奴は――」
「榛名。あんまりまわりに迷惑は掛けなはるな」
愚痴を零す榛名にそう言ってなだめたのは伊勢。彼女だって大和

達だけで行かせるのには反対だが、冷静な分だけまわりがちゃんと見えている。
伊勢の言葉に、榛名は仕方なく黙るが、依然不機嫌なオーラは変わらない。
榛名を注意した伊勢はどこか落ち着かない様子で先程からチラチラとドアを見る。いつ大和達が来るかわからないからだ。そんな伊勢の隣に座る日向、そしてその横に腰掛けている隼鷹や龍鳳もどこか悲しげだ。天城は相変わらず頬杖しているが、その瞳はやはりどこか寂しげだ。しかし葛城はいつもと変わらず腕を組んで瞳を閉じて沈黙している。
他にも巡洋艦と駆逐艦の艦魂が数人いて、現在これが日本海軍艦魂司令部の要員である。本当ならこの場の雰囲気を和ませてくれる長門がいつのだが、彼女は依然横須賀にいてここにはいない。
幾多の戦いの作戦を検討したり議論したりしていた司令部も、すっかり寂しいものになっていた。
一方雪風は恨めしそうな目で浜風を睨むが、浜風は目にたっぷりの涙を溜めて腹を抱えながら必死に声を抑えて笑っている。
「は、浜風・・・ッ！」
「雪風。その辺にしとけって。それでも私達の先輩？」
そう言って呆れるのは榛名とは違った柔らかなポニーテールをゆらゆらと揺らしている。彼女の名は冬月型（改秋月型）駆逐艦一番艦、駆逐艦『冬月』の艦魂。翔輝がケガで内地に上がっていた頃に仲良くなった雪風の親友（悪友？）だ。
「ううぅ、冬月まで私の事を・・・」
「また恥をかかせおって・・・」
冬月は今にも泣きそうな情けない親友にして先輩である雪風を見てため息する。
「それでも汎用駆逐艦最高峰と謳われる陽炎型駆逐艦の最年長者なの？」
「そんな事言われても、陽炎姉さんや不知火姉さんもみんな死んじ

やって、成り行きで最年長者になっただけだし・・・」
陽炎型駆逐艦は全部で十九隻存在したが、今ここにいる三隻とシンガポールに配置されている九番艦『天津風（あまつかぜ）』のみになった。その『天津風』も四月六日に船団護衛中に敵機の攻撃を受けて大破。自力航行で帰還しようとしたが、途中で機関が沈黙し、爆破処分された。
今ではたった四人に減ってしまった陽炎姉妹は、雪風より上が皆戦死してしまった為に最年長者になっているが、雪風には姉としての威厳は微塵もなかった。
「私、姉失格だよね？」
「失格どころか、入試ならテストさえ受けさせてもらえないね」
冬月の鋭過ぎるすさまじい追撃に、もはや雪風は爆沈寸前であった。
「こら冬月。あんまり雪風さんをいじめないでよね」
冬月を少し大人にしておとなしくさせたような長い髪に白いリボンを額のちょっと上にかわいく付けた少女が冬月を叱る。彼女は秋月型駆逐艦三番艦、駆逐艦『涼月』の艦魂で、冬月の義理の姉に当たる。
「でも姉さん、雪風の情けなさは天下一品だよ？」真顔で言う冬月。
「そ、それはそうかもしれないけど・・・」困る涼月。
「涼月！？　助け舟になってないよ！？」驚愕する雪風。
「まあ、姉さんは姉としてはまだまだ未熟だね」うなずく浜風。
「そうね。もう少し威厳がほしいわね」苦笑いする朝霜。
「満場一致」諦めなさいと言いたげな目で雪風を見詰める磯風。
雪風はそんな白状な仲間達を見詰め、ぷるぷると体を怒りで震わせる。そして煮えくり返った怒りはついに爆発し、絶叫した。
「みんなひどいよおおおぉぉぉッ！」
「うるせえええぇぇぇッ！」
今にも跳び蹴りを放ちそうな榛名を伊勢が止めていると、部屋のドアが開いて大和と翔輝がやって来た。

矢矧以下第二水雷戦隊の所属の九人は立ち上がって敬礼する。
「第二水雷戦隊旗艦軽巡洋艦『矢矧』艦魂以下、駆逐艦『磯風』『浜風』『雪風』『朝霜』『初霜』『霞』『冬月』『涼月』の艦魂。すでに揃っています」
「ご苦労様」
大和は小さく微笑むと、空いていた自分の席に腰掛ける。その隣に翔輝が座り、雪風達も腰掛けた。一応これで今回の会議の面子(めんつ)は揃った。
大和は一度瞳をつむって心を整えると、スッと瞳を開いた。その奥に宿る光は、国を想う、一人の帝国軍人の姿があった。
「本日の午後、我々第二艦隊は次期作戦に向けて佐世保へ出港する。作戦概要はいまだ不明だが、おそらくは菊水作戦の援護だと思われる。第二水雷戦隊各員は出港用意の整え、知人や姉妹と別れのあいさつを済ませるように。長門さんのようにそのまま佐世保で待機になる可能性ある事を覚悟するように。以上」
大和の言葉に、第二水雷戦隊各艦魂は立ち上がると見事な敬礼をした。そして、再び腰掛けると、大和は榛名達に向き直る。
「という事ですので、私達は佐世保に向かいます。榛名さんや伊勢さん、隼鷹や葛城達は呉に待機し、ここを死守してください」
大和のその真剣な言葉に、榛名はバンッとテーブルを叩いて立ち上がった。
「大和一人で行かせられるか！　俺も行くぞッ！」
「うちも行くッ！　日向の仇を討つんやッ！」
榛名と伊勢が声を荒げると、続いて巡洋艦や駆逐艦の代表達が次々に挙手する。皆、大和達だけを危険な戦地に行かせるのは大反対だった。
「主殿が行くなら、私も行く」
そう言って葛城が立ち上がると、「お兄ちゃんが行くなら私も行く！」「わ、私も行きます！」「葛城が行くなら私も行ってあげる。姉さんの仇を討ってみせる」と隼鷹に龍鳳、天城までも志願する。

だが、そんな彼女達に想いに対し、大和は小さく首を横に振った。
「今回の主役はあくまで特攻機なの。残念だけど、私達よりも特攻機の方が戦果を挙げている。その特攻機は九州の基地から飛び立っているから、言い方は悪いけど、あなた達空母の出番はないわ」
その言葉に、葛城は無言のまま席に着いた。だが、隼鷹は納得できない。
「わ、私だってできるッ！　大和達の囮になる事もできるよ！」
「隼鷹。あなたは速力も防御力も低い。だから捷一号作戦の時も瑞鶴達から外された。艦載機がなくて戦力にならないあなたの為に、速力を落としていたら、私達が全滅するわ」
大和の言葉は正論であった。艦載機がなく速力も防御力も低い『隼鷹』は、今の現状なら出撃すればほぼ確実に沈没する。そんな危険な事はできるはずもなかった。だが、隼鷹は諦め切れない。
翔鶴や飛鷹が死んだ時、瑞鶴が死んだ時、自分は何もできなかった。
そして今度は大和、そして大好きな翔輝が命懸けの出撃をする。なのに、自分はまた何もできない。そんなのはもう嫌だった。
バンッ！
手をテーブルに叩き付けてすさまじい音を立てて立ち上がった隼鷹に、皆が驚く。いつもはクリッとした瞳に温かい笑みを浮かべるみんなの妹的存在の隼鷹だが、今の彼女の瞳は鋭利な刃物のように鋭く、背後から放たれるオーラは小さいながらも翔鶴に近いものを感じさせた。
隼鷹は驚く翔輝を見詰め、己が決意を叫ぶ。
「私はお兄ちゃんを失いたくない！　もう翔鶴お姉ちゃんや飛鷹、瑞鶴達みたいにいなくなっちゃうのは嫌なのッ！　私は戦うッ！　特攻機を満載して敵艦隊近海で出撃させた後、私も特攻する覚悟はできてるッ！　私は死を恐れない！　この命を捨ててでも、お兄ちゃん達を守れるなら、私は喜んで死んでみせるッ！」
隼鷹の泣きながらの絶叫に、翔輝達は言葉を失った。

隼鷹は本気で命を捨てる覚悟はできている。己が命を失ってでも、守りたい人を守る。その想いは誰もが一緒であったが、小さな隼鷹が泣きながらそう言うと、改めてその悲しい決意に胸が痛む。

――特攻、それは自らの命をも爆薬にして敵艦に体当たりする日本軍の最後にして最強の攻撃。二度と帰れない出撃である。

ポタ・・・ポタ・・・

隼鷹の瞳から零れる涙が、静かにテーブルを濡らす。

「もう・・・嫌だよ・・・誰かが死ぬなんて・・・それも・・・お兄ちゃんがなんて・・・私にはもう・・・お兄ちゃんしかいないんだもん・・・お兄ちゃんのいない世界なんて・・・生きてても仕方ないよ・・・」

「隼鷹・・・」

「お兄ちゃん・・・ッ！」

隼鷹は翔輝に泣きながら抱き付いた。

「嫌だよ！　お兄ちゃんまで失ったら私、もう嫌ぁッ！」

「隼鷹・・・」

翔輝はそっと彼女を抱き締めた。すると、隼鷹は今まで以上に泣き出した。

ここに彼がいる。彼が自分を包んでくれている。それだけで、嬉しかった。彼がここいて、生きている。そうわかるから。

腕の中で泣き崩れる隼鷹を見て、翔輝は唇を噛んだ。そんな彼を見て、大和の瞳も悲しみに染まるが、首を振って再び皆を見詰める。

「私達は確かに命を懸けて出撃します。ですが、それは《決死》であって《必死》ではありません。生きて帰る事を前提にした、生きる為の戦いです。特攻とは違います。私達は死ぬ為に戦ってるんじゃありません。皆、生きる為に戦っているんです。例えこの戦争に負け、日本がアメリカに占領されて国が変わってしまっても、例え、分地統治を受け、日本という国がバラバラになって消滅しても、そこに生きる民は、大和魂は生き続けます。私達は、日本という国を守るのはもちろん、日本人としての誇りを守るべきなのです。例え、

敗戦しても、その想いがあれば、心の底から欧米に屈する事はありません。今の私達にできる事は、後世の日本を守る事。それが、私の決意です」

大和のその言葉に、今まで反対の声を上げていた榛名達は勢いを失った。

生きる為の戦い。

それは日本がこの戦争を始めた理由である。

日本を滅ぼそうとする鬼畜米英から愛する祖国を生き残らせる為の聖戦。それがこの戦いのきっかけであり根本だ。

なのに今、日本は《一億総特攻》、《一億玉砕》を叫んでいる。

生き残らせようとした祖国は今や、敵に屈しない為に国民全てが命を投げ出して戦うという姿勢に変わっている。そこまで、今の日本は追い詰められていた。

だが、それでもいい。

鬼畜米英に潰されるくらいなら、自らの手で日本という国の歴史を終わらせる。そんな覚悟を榛名はしていた。

尊敬する姉が守ろうとした祖国を敵に壊されるくらいなら、自分で壊す。

だが、大和達は違った。

例えアメリカに屈してでも、日本を生き残らせる。

愛する祖国を守る為なら、顔に泥を塗られても、土下座をしてでも、必ず守り抜く。そんな決意であった。

だがそれは、日本という国をアメリカに渡すという事にも繋がる。それだけは阻止しなければならない。だが、それを主張し、大和の意見を反対する事は、榛名にはできなかった。

姉が愛した祖国を、どんな形でも残してみたい。そう思ってしまったから・・・

誰も何も発しない空間の中、隼鷹のすすり泣く声だけが悲しげに響く。

大和は一度瞳を閉じると、再び開いて矢矧達を見詰める。

「出港は、一四〇〇。第二水雷戦隊各員は準備を完了させておくように」

『了解！』

大和は静かに解散命令を出すと、一人部屋を出た。

翔輝をつれて行かなかったのは、泣き崩れる隼鷹を想っての事だという事を、皆はちゃんとわかっていた。

残された翔輝は、泣き崩れる隼鷹をそっと抱き締め続けた。

午後、おそらく最後の作戦に向けて出港用意を終えた艦隊は出港の時刻が迫っていた。

祖国を一目見ようと多くの兵達の集まる甲板の一角に多くの艦魂達が集まっていた。そんな彼女達に見送られるのは十人の少女達と一人の青年だった。

「今さらうちが言う事は何もないわ。ただ、あんたらの健闘を祈るだけや。沖縄を救えるか救えないかは、あんたらに懸かってる。がんばって来てぇな」

そう言ったのは穏やかな笑みを浮かべてはいるが、悲しげな瞳をする伊勢。そんな彼女の言葉に、大和は静かにうなずく。

「任せてください。伊勢さん達の分までがんばりますから」

そんな大和と伊勢の別れのあいさつを、翔輝は少し離れた場所からそっと見詰めていた。そして、そんな彼の横には榛名が無言で立っていた。そのどちらの表情も暗く、お互いに何も言葉を発せずにいる。無理もない。片方は死地へ行き、片方はそんな彼を見送る立場なのだから。

しばし続く無言の世界の中、榛名はチラチラと彼を盗み見ては口を開いたり閉じたりを繰り返す。何かを言うタイミングを探っていたのだ。言う事は決まってるのに、言うタイミングがわからない。

そしてさらに無言が続いたが、榛名はついに意を決して口を開いた。

「長谷川。テメェ、必ず生きて帰って来いよな」

沈黙を破って口を開いた榛名の第一声がそれだった。
「何だよいきなり」
きょとんとしながら見詰めて来る翔輝に、榛名は顔を赤くしてプイッと視線を逸らす。
「うるせぇ。ともかく必ず戻って来い。例え『大和』が沈んだとしても、テメェだけは生きて戻って来い」
「・・・それは、僕に大和を見捨てろって言うのか？」
険悪な表情になる翔輝。そんな事、彼に出来るはずはなかった。だが、榛名はそんな彼を正面から逃げずに見据える。
「違う。でも、お前にはまだ未来がある。それを決めるのはお前次第だが、俺はお前に帰って来てほしい。ただそれだけだよ」
「何だよ。榛名らしくないな」
「好きに言え。だがな、これから先も戦争は続くんだ。そん時、テメェがいれば他の艦魂達の支えになれんだろ。特に、隼鷹にはお前が必要だ。葛城も、伊勢もだ」
榛名のその真剣な言葉に、翔輝は天を仰いだ。空は雲ひとつない快晴で、どこか清々しい気持ちが心を包んだ。
「榛名、聞いてくれ。今の俺は一応帰って来るつもりはある。瑠璃や珊瑚、瑪瑙姉さんとの約束もあるしね。でも、いざ何かあったら僕は何を選ぶかわからない。だから必ず帰って来るとは断言できない。それに、僕だって即死するかもしれないし」
翔輝の悲しげな瞳を見て、榛名は「そうか」と小さくつぶやいて沈黙した。
二人の間に落ち着かない沈黙が舞い降り続ける。その時、
「長谷川はん？　榛名はんと何を話してるんや？」
そう言って伊勢が二人に近づいて来た。その目は真っ赤に染まって目の下には薄っすらと隈が浮かんでいた。さっきまで泣いていたのが見てわかる。
そんな伊勢に、翔輝は小さく微笑んだ。
「伊勢――今までありがとう」

「な、何を言いはるんや！」
翔輝の突然の悲しげな言葉に、不安で胸が張り裂けそうな状態の伊勢はとてつもない動揺をする。
「いや、もう戻って来れないかもしれないから、一応言っとこうと思ってさ」
「こいな時に冗談はやめてぇな！」
「冗談なんかじゃないさ。僕は本気だ」
「必ず帰って来るって瑠璃はんらと約束したんやないんか！？」
「それはそうだけど、危険な出撃となった今じゃそれも叶えられるかわからないから」
「長谷川はん・・・」
「まぁ、生きて帰って来るつもりだけど、戦場じゃ何が起きるかわからないからね。もしかしたら、僕は死ぬかもしれないし」
翔輝の言葉に伊勢は涙する。そんな悲しい事を彼に言ってほしくなかったのに、自分に彼を救う力はないのが辛かった。
艦魂は所詮傍観者でしかない。決して、主役にはなれないのだ。
どんなに生きたい、どんなに共に出撃したいと思っても、艦魂は己が身体である艦体を動かす事はできないのだ。
涙をぽろぽろと流す伊勢を、翔輝は無言でそっと抱き締めた。今の彼に伊勢に掛けてやる言葉はないのだ。
翔輝が泣きじゃくる伊勢を抱き締めていると、同じく泣きじゃくっていた隼鷹までもが翔輝の下にやって来た。
「お兄ちゃん・・・ッ！」
「隼鷹。僕が戻るまで待っててね」
「うん・・・ッ！」
「でも、悲報が届いた時には、それを受け入れるんだ。いいね？」
「うん。わかった・・・ッ！　お兄ちゃん・・・ッ！」
隼鷹は泣きながら翔輝に抱き付いた。そんな隼鷹も翔輝は抱き締める。
伊勢と隼鷹を抱き締めて「ごめんね。ごめんね」とつぶやき続け

る彼を見て多くの艦魂達が涙した。
　このままずっとこうしていたい。そんな事を皆思ったが、それは叶わぬ夢でしかない。
　そんな彼らを見詰め、少し離れた場所にいる矢矧は小さくため息した。
「最後の別れか・・・」
「やっぱり、ちょっと辛いわね」
「別れが辛くないなんて思う者など、いる訳なかろう」
　矢矧の側近である初霜と霞も悲しげに最後の別れをしている大和達を見詰める。その瞳は、どこかうらやましげであった。
「私も、姉や妹に、見送られたかったな」
「私もだ。だが、武蔵長官を失っても、気の通った友に見送られる司令達がうらやましい」
　初霜の初春型駆逐艦、霞の朝潮型駆逐艦は彼女達を除き、すでに全艦戦没していた。重鎮であるが故に、新鋭艦が揃うまで危険な戦いを続けていた彼女達は、その戦死率も高かったのだ。
　悲しそうに大和達を見詰める二人に矢矧はそっと手を伸ばそうとする。
「初霜さん、霞さん、あの――」
「初霜先輩ッ！　必ず生きて帰って来てくださいねッ！」
「霞姉様も、必ず帰って来てくださいッ！」
「初霜さんッ！」
「霞さんッ！」
　突如現れた少女達に二人はあっという間に包囲された。集まった皆水兵服を着た艦魂ばかり――駆逐艦の艦魂だ。
「みんな・・・」
「お前達・・・」
　二人は自分達の為に必死に涙を堪えて別れを言う後輩達を見詰め、そっと微笑んだ。霞の隻眼も、どこか嬉しそうに光った。
「みんな・・・」

「ありがとう・・・」

二人がそっと流した涙は、皆の涙の引き金となった。

初霜と霞を中心に大勢の少女達が泣き出した。

大先輩である二人だけでなく、雪風や磯風達、冬月達にも駆逐艦の艦魂が駆け寄って花束を渡したり熱い抱擁(ほうよう)をしたりして、辺りは泣き声を中心とした雑音に包まれた。

仲間想いな駆逐艦達を見詰め、矢矧は少しうらやましいなと思った。

彼女の姉である阿賀野も能代も、すでに戦死している。唯一の妹である阿賀野型軽巡洋艦四番艦『酒匂(さかわ)』は、今は舞鶴で待機している。

実は『酒匂』はレイテ沖海戦の後に竣工した新鋭艦であった。だが、誕生した時には自らを動かす燃料もなく、舞鶴で待機を続けている。その為、矢矧はまだ実の妹である酒匂には会った事はない。それでも、せめて最後には会ってみたかったが、それも叶わないものだった。

諦めているとはいえ、やっぱり悲しい。

そっと落ち込む矢矧。だが、そんな彼女の想いに気づくものは誰もいなかった――ただ一人を除いて・・・

「矢矧・・・」

その声に振り向くと、そこには駆逐艦の子に支えられながら立つ彼女の親友にして前連合艦隊旗艦、大淀がいた。

「お、大淀ッ！？　あなたどうして・・・ッ！」

先日の呉空襲で『大淀』は中破した。その為、その艦魂である大淀も大怪我を負い、ずっと寝込んでいたはずだ。なのにどうして・・・

矢矧の問いに対し、大淀はメガネの奥にある瞳を優しく細める。

「何言ってるのよ・・・親友の出撃を見送りに来ないなんて・・・そんなの親友失格じゃない」

「大淀・・・」

「・・・どうして？」
「え？」
大淀は駆逐艦の子の手を離れると、フラフラとふらつきながら一人で歩き、矢矧に近寄る。
「ちょ、ちょっと無理はしない方が――」
「どうしてよッ！」
矢矧の胸に飛び込んだ大淀は、いきなり彼女の胸倉を掴み上げた。
驚く矢矧。だが、それ以上に驚いたのは・・・
――大淀は、泣いていた。
あの冷静沈着で誰よりも努力家で、リーダーとして常に頼れる背中を皆に向けていた大淀が、泣いているのだ。親友である矢矧も、彼女が泣いているのは初めて見た。
「大淀・・・」
「どうして、どうしてなのッ！？　何で矢矧が行かなきゃいけないのッ！？　矢矧が死んだら、私一人になっちゃうじゃないッ！　お願いだから行かないでッ！」
いつも冷静な大淀の必死な感情的な姿に、矢矧は驚くが、それよりも自分を心配してくれる彼女の姿に嬉しく思った。だが、彼女の願いは聞く訳にはいかない。だから、矢矧は小さく首を横に振った。
「それはダメよ。これは私達第二水雷戦隊に任された任務。だから、私はいく。例え死ぬかもしれなくても、私は行くわ」
「そんな・・・ッ！　お願い行かないでよッ！　何で矢矧じゃなきゃいけないのよ！？」
「他の誰かだったら良かったの？」
「え？」
驚く大淀を、矢矧は真剣な瞳を向ける。
「他の誰かなら、良かったの？」
「そ、それは・・・」
言葉に詰まる大淀のさらさらした髪を、そっとすくう。
「私は帝国海軍、かつて世界最強と謳われた第二水雷戦隊の旗艦。

私は自分の責務を完遂させたいの」
「その第二水雷戦隊だって、今じゃただの寄せ集めじゃないッ！」
「そうよ。新旧入り混じりの集成部隊だわ。でも、彼女達は私にとってかけがえのない仲間なの。彼女達が行くなら、私も行く――姉さん達が命を懸けて守ったこの日本を、アメリカの魔の手から救う為に」
ぽろぽろと涙を流す大淀を、矢矧はそっと抱き締めた。
「ごめんね。わがままね友達で。でも、私もあなたも日本を守りたい。その気持ちだけは変わらないわ。私は日本を、あなたを守りたいの。だから、私は行くの。だから、ごめんね・・・」
「謝らないでよ・・・矢矧・・・ッ！」
大淀は矢矧の腕の中で泣き崩れた。
小さな体を必死に親友にこすり付け、大淀は泣いた。そんな彼女の震える体を、矢矧は「ごめんね」とつぶやいて抱き締めた。
親友の最後の別れをしている二人を見て、冬月は静かに涙していた。そんな彼女のまわりには自分の妹達が泣いていた。
幸いな事に、冬月型駆逐艦は新しい艦級なので、死んだ妹は一人もいなかった。
すすり泣く妹達を見詰め、冬月は笑った。
「何泣いてるのよ、一生の別れじゃないかもしれないじゃない。私は笑って見送られる方が好きよ？」
そう言うが、妹達は泣きやまない。そんな彼女達一人一人を抱き締め、冬月は笑った。
「春月、宵月、元気でね。立派に生きるのよ」
春月と宵月と呼ばれた少女二人は泣きながら何度もうなずく。冬月はもう一人の妹、次女の花月を見た。冬月をもっと優しくした感じの花月は泣きながら敬礼した。
「姉さん・・・ッ！」
「花月。途中まで、護衛をお願いね」
「はいッ！」

駆逐艦『花月』他二隻の駆逐艦は第二艦隊を護衛する手はずになっていた。佐世保までは同じだが、その後の作戦では外される事になっている。

冬月はそっと三人の妹達を抱き締めると、一人そんな光景を見て小さく微笑んでいる涼月の手を引っ張った。

「ふ、冬月？」

「ほら、姉さんも」

「い、いいわよッ。私は秋月姉妹だし――」

「秋月姉妹って言っても、もう姉さん以外いないじゃない」

「そ、それは・・・ッ！」

「それに――私達冬月姉妹は秋月姉妹の義妹。姉さんの妹だよ」

冬月の言葉に、涼月は涙をぽろぽろと流し、「ありがとう」と小さくつぶやいた。

「お礼なんてなし。みんなで抱き合おうよ」

「うん・・・ッ！」

五人の少女は互いの温もりを感じ合いながら抱き合った。

もう会えないかもしれない。

でも、今はこうしていよう。

そんな想いが、五人の心を包んだ。

姉妹で抱き合う冬月達を、大和達のすぐ横にいる雪風は微笑ましげに見詰めた。すると、そんな彼女にこっそりと背後から近づいた磯風と浜風、朝霜が抱き付く。

「え？　な、何？」

「姉さん。私は姉さんとずっと一緒だからね」

「私も、姉さんと一緒」

「私も雪風姉さんとずっと一緒がいい！」

三人の言葉に、雪風は嬉しそうに泣きながらうなずいた。

最後の別れをする艦魂達。

どこもかしこも悲しい雰囲気に包まれている。そんなまわりを見回しながら、翔輝はそっと伊勢と隼鷹を抱き締め続ける。と、

「主殿」
その声に振り返ると、葛城が立っていた。
「あぁ、葛城か」
「主殿、また、会えるだろう？」
葛城は真剣な瞳を向ける。その瞳は生きて帰って来てほしいという想いが込められていた。その瞳を見るとうなずきたくなってしまうが、そんな軽はずみな事はできない。
「わからない。帰って来るようには努力するけど、生きて帰れる保証がないから」
「主殿・・・」
不安そうに見詰める葛城。そんな彼女の頭を、翔輝はそっと撫でた。
「ごめんね、頼りない答えで」
翔輝の言葉に、葛城は静かに首を横に振る。
「主殿の決意はわかった。そして、危険な任務である事も・・・」
伊勢と隼鷹を抱き締める翔輝。そんな彼に、葛城もそっと抱き付いた。
わかっている。もう、会えないかもしれない。
だからこそ、今はこうしていたい。そんな想いが、彼女の胸を包む。
「情けないな、主殿の命懸けの出撃に同行できないなんて。これでは、主殿を守ると決めた誓いが果たせないな」
「ごめんな。でも、君の気持ちは嬉しいよ。それに、僕には大和達がいる。頼れる仲間がね」
「そうか・・・」
それだけ言うと、葛城はそっと彼を抱き締めた。そんな彼女を、翔輝もそっと抱き締める。彼の腕の中、葛城は静かに声を殺しながら泣いた。
もう二度と会えないかもしれない。そんな想いが彼女の中で膨らみ、胸を締め付ける。

そんな葛城を安心させるように抱き締める翔輝。と、突然後頭部を引っぱたかれた。
「ちょっと、勝手に人の妹に手を出さないでくれる？」
振り返ると、そこには不機嫌そうな顔をした天城が腕を組んで立っていた。その横には出雲と鳳翔の姿もあった。
「長谷川君はもてるのね？　青春ねぇ」
「別れというのは、悲しいでござるな」
「天城、出雲さん、鳳翔さん・・・」
出雲はフッと笑みを浮かべると、そっと翔輝の頭を撫でた。驚く翔輝に、出雲はまるで弟に接するように優しく微笑む。その姿は、どこか長門に似ていた。
「長谷川君。生きて帰って来なさい。あなたを待つ子は、たくさんいるんだから」
「出雲さん・・・」
「そうでござるよ。長門殿もきっと、長谷川殿の帰りを待っているはず。必ず生きて帰って来て、長門殿を安堵させてやるべきでござるよ」
「でも、僕は大和と一緒に・・・」
「あなたの気持ちはわかるわ。でもね、少しは残された子の気持ちも考えてあげて。きっと彼女達は、ずっとずっとあなたの帰りを待っているはずよ」
「貴殿は駆逐艦や潜水艦に好かれている。もはや士気など根底に落ちている彼女達を心から支える事ができるのは、長谷川殿だけでござる。みんな、貴殿には帰って来てほしいのでござるよ」
そう言って鳳翔は笑みを浮かべるとまわりを見回す。翔輝もそれに続いて見ると、いつの間にか、彼は多くの女の子達に囲まれていた。大和も、今日ばかりは伊勢達に彼を譲っていた。
まわりには大勢の駆逐艦や潜水艦の子達が涙している。
「長谷川少佐！　生きて帰って来てくださいね！」
「長谷川さん！　死なないでください！」

「長谷川様！　愛してます！」
大勢の艦魂達に囲まれ、翔輝は嬉しそうに微笑んだ。ちょっと間違った声が聞こえたが、この際これは無視しよう。
「あ、あの！」
そう声を掛けて来たのは身体を小刻みに震わせてギュッと目をつむった龍鳳であった。
「りゅ、龍鳳？」
「あの、その、し、死なないでください！」
開かれた瞳は涙で一杯であった。そんな彼女に、翔輝は驚きつつも小さく微笑む。
「そう努力するよ。またみんなとも会いたいし」
「ほ、本当、ですか！？」
「うん。だから、またきっと会えるよ」
「はいッ！」
龍鳳は本当に嬉しそうな笑みを浮かべると、そっと震える手を伸ばしてきた。驚く翔輝に、龍鳳は身体を震わせながらも、真剣な瞳を向ける。
彼女の意思を察した翔輝は小さくうなずくと、抱き付く伊勢、隼鷹、葛城を危険がないように離す。
龍鳳と向き直り、震えながらも差し出された龍鳳の手をそっと握った。その瞬間、龍鳳はビクリと大きく震えた。
また殴られると一瞬恐怖した翔輝だったが、それはなかった。
「長谷川さんだから大丈夫・・・長谷川さんだから大丈夫・・・」
そう小さくつぶやいて、必死に恐怖心を耐える龍鳳。彼女にとって、男と握手するというのは死に匹敵するほどの恐怖のはずなのに、彼女はそれに耐えている。そんな彼女の強い思いに、翔輝は勇気をもらった気がした。
龍鳳は翔輝の手をしっかりと握りながら、小さく微笑んだ。
「私も、がんばりましたよ？」
「うん。偉いぞ」

「えへへ・・・だから・・・もういですよね・・・？」
「へ？」
「ご、ごめんなさいいいいいいいいッ！」
その絶叫の後、すさまじい勢いで放たれた龍鳳渾身の一撃。だが、その一撃は葛城のおかげでなんとか助かった。
「あ、ありがとう葛城」
「構わない。これくらいしか、私にはできないからな」
「そんな悲しい事言うなよ」
「あんたのせいでしょ、バカ」
そう言って天城は不機嫌そうに翔輝を睨む。だが、その瞳にあるのは小さな悲しみ。葛城とばかり接点が多いが、天城も翔輝と友達の関係でいた。だからこそ、彼の命懸けの出撃は、悲しいのだ。
「ちゃんと生きて帰って来なさい。これ命令。葛城を泣かせたら、許さないからね」
「天城・・・」
「――葛城には、あんたが必要なのよ」
そう言い残すと、天城は背を向けた。その小さな背が小刻みに震えるのを見て、葛城は静かに「ありがとう・・・」と礼を言った。
「天城・・・」
「いいわね！？　絶対帰って来なさい！」
振り向いて力強く言った天城は、ニッとたくましい笑みを浮かべていた。その笑顔を見て、葛城も、伊勢も、隼鷹も、そして翔輝も笑みを浮かべた。
いつの間にか、辺りには笑みが零れていた。
悲しい別れのはずなのに、なぜか笑みが浮かぶ。
それはきっと、翔輝の存在が大きいからであろう。
笑い合う艦魂達を見詰め、この場にいる艦魂では最も重鎮である出雲は小さく微笑んだ。
「長谷川少佐・・・どこか、あの人に似ているなぁ・・・」
出雲はかつて恋した愛しいある少年士官を思い出した。彼は今も

海軍で活躍しているはず。きっと今も、どこかの海を駆け回っているのだろう。

仲間や姉妹との最後の別れに微笑み会う艦魂達。

ずっとこの時が続けばいい。誰もがそう思った。

だが、時間とは残酷なもので、ついに、出港時刻になった。

大和達第二艦隊艦魂は整列すると、見事な敬礼をする。翔輝も大和の横で敬礼し、同じく敬礼して見送ってくれる艦魂達を見詰める。

榛名、伊勢、隼鷹、葛城、龍鳳などの姿をしっかりと見詰め、目に焼き付ける。

大和達は榛名達に別れを告げ、各艦に戻った。榛名達も自艦に戻り、翔輝は大和と共に艦橋に向かった。

艦橋に着くと、そこには森下が待っていてくれた。

「別れは済んだのか？」

「はい。でも参謀長も榛名と別れをすれば良かったのに」

大和の言葉に、森下は苦笑いする。

「さっき榛名が来て「絶対大和を守れッ！　お前だけ生きて帰って来たら殺すからなッ！」って怒鳴り込んできたよ」

「ははは、榛名らしいな」

翔輝は苦笑いする。あまりにも彼女らしい。

有賀はそんな森下に声を掛け、自分達の定位置に着く。

程なくして、超巨大戦艦――戦艦『大和』を先頭に、第二艦隊は白波を起こしながら出港した。

すでに日本近海は敵潜水艦が動き回る危険な海になっている。だが、それでも彼女達は戦いの舞台へ進みだした。

蒼い空の海の向こうへ出撃して行く第二艦隊を見詰め、榛名達はいつまでも手を振り続けた。

そして、戦艦『大和』以下十三隻の艦隊は海の向こうへ消えた。

「必ずッ！　生きて帰って来てねぇッ！」

皆の気持ちを代表した大淀の声は、汽笛の音色の中に静かに溶けた・・・

大勢の艦魂達に見送られて出撃した第二艦隊。その司令長官を務める伊藤整一（いとうせいいち）中将は開戦時は軍令部次長であり、開戦反対派の一人だった。

そんな伊藤に率いられた第二艦隊だったが、太平洋へ出る為に豊後水道を南下していた時、驚きの知らせが入った。

「作戦を中止？」

怪訝そうな顔で報告に来た森下を見詰める伊藤。そんな彼に、森下は手に持つ連合艦隊司令部からの電文を渡した。

「はい。敵機動部隊の動きが活発になっているそうで、このまま外洋に出るのは危険なので作戦は中止されました」

「そうか・・・」

元々この作戦に反対していた伊藤は作戦の中止に安堵の息を漏らした。だが、まわりにいる将兵の顔は浮かない。

この作戦は本格的に沖縄を攻撃し始めた連合軍に対するものであり、その中止は沖縄をより危険に晒すことに繋がるからだ。すでに沖縄は二三日に沖縄の全飛行場に一〇〇〇機以上の敵機の空襲を受け、その翌日には艦砲射撃を受けたらしい。それらの攻撃で沖縄の航空隊は壊滅していた。

すでに沖縄の制海空権は連合軍の手に落ちていた。だからこその第二艦隊の出撃であったが、その作戦は成功する確率などゼロであった。

無駄死にをせずに済んだという思いと、沖縄を助けたいという相反する思いが、伊藤の胸の中で渦巻いていた。

一方、大和はほっと胸を撫で下ろしていた。

あんなかっこいい事を言っておきながらと思いながらも、やっぱり戦うのは怖い。それをしなくて済むなら、これ以上に嬉しい事はない。

「良かったな」

翔輝の言葉に、大和は小さく微笑む。
「はい。これで帰ったら榛名さん達に怒鳴られそうですけど」
「ははは、それは覚悟しておかないとな」
笑い合う二人。そんな二人を見て、森下は小さく微笑んだ。
艦隊は作戦を中止して徳山沖に向かった。
命懸けの作戦は、意外にもあっけなく終わったのであった。

呉へ帰れる事を喜ぶ大和達だったが、運命とはあまりにも残酷であった。
三〇日に呉軍港と広島湾に敵機が飛来。実に一〇三四個の機雷を投下したのだ。その為、広島湾に浮かぶ艦隊は出る事はできず、そして大和達も帰る事ができなくなってしまった。

徳山沖に一時避難した第二艦隊。雪風達は安堵したような表情を浮かべていたが、同時に浮かない顔をしていた。
命が助かったのは嬉しい、だが同時に仲間達とはもう会えない。そんな思いが十三人の艦魂達の胸で渦巻く。
旗艦『大和』の第三会議室では大和と矢矧以下第二水雷戦隊の艦魂と、第二艦隊護衛の第三一戦隊の艦魂、全十三名がいた。そこへ、森下と有賀の許可を得て時間をもらった翔輝がやって来た。
部屋に入ると、そこは重苦しい雰囲気が漂っていた。
「おーい、クーラーの設定温度低過ぎないかぁ？　環境に悪いぞぉ。設定温度は二八度だ」
翔輝が冗談を言いながら入ると、皆から小さな笑みが零れた。
「あ、少佐。すみません、お忙しいところを」
雪風がペコリと頭を垂れる。
「いいよいいよ。これくらいしか僕は助けにならないからね」
そう言って翔輝は空いている大和の隣の席に着く。雪風も慌てて自分の席に着いた。
「参謀長の話だと、とりあえず僕らはここで待機だそうだ」

翔輝の言葉に大和は「そうですか・・・」と悲しげにつぶやく。
そんな落ち込む大和や他の艦魂達を一度見回し、十分な間を置いて、
「だけど今は掃海艇なんかが機雷の除去に入ってるらしい。時間はちょっと掛かるけど、何とか呉には帰れるそうだ」
翔輝の言葉に、皆は驚いて顔を上げる。
「それは、本当か？」
霞の問いに、翔輝は力強くうなずく。
「うん。森下参謀長が言ってたんだ。間違いないよ」
その言葉の後、大和達は一斉に歓喜の声を上げた。
「やったぁッ！　呉に帰れる！」
浜風が嬉しそうな声を上げると、涼月も涙を浮かべ、朝霜は万歳して大喜び。磯風は表情こそは平静だが、その瞳はやはり嬉しそうだ。
霞は胸を撫で下ろし、初霜は大喜びして矢矧に抱き付き、矢矧はそんな初霜の抱擁に顔を真っ赤にしている。
冬月もふぅと安堵の息を漏らし、花月と二人の駆逐艦は嬉しそうに抱き合った。
そして、大和は雪風と抱き合って嬉しそうな表情を浮かべる。
そんな皆を見詰め、翔輝も嬉しそうに微笑む。
「それと敵機は機雷投下だけだったみたいだから、呉にいる艦艇は無傷だそうだ」
翔輝の追伸に、大和達はさらに嬉しそうに歓喜する。
「また皆さんに会えるんですね！？」
「あぁ、また会えるさ」
その言葉に大和は嬉しそうに笑みを浮かべて翔輝に抱き付く。そんな彼女を翔輝はそっと抱き締める。
愛しい彼の腕の中で、大和は満面の笑みを浮かべる。と、そんな光景をうらやましそうに見詰める雪風。そしてなぜか浜風と朝霜がそっとその背後から近づく。
「姉さんゴーッ！」

浜風の掛け声と共に、雪風は二人に突き飛ばされた。
「きゃあッ！」
「おっと」
転倒しそうになった雪風を、間一髪翔輝が支えた。おかげで転倒はしなかったが、雪風はある意味最大の窮地に陥っていた。
「雪風、大丈夫？」
隣にはなぜかかなり顔の近い大和。そしてそんな彼女が身体を密着させている何かと、自分は同じく密着していた。顔が真っ赤になり、心臓の鼓動が早くなる。そろりそろりと顔を上げると、そこには自分をそっと覗き込む翔輝の顔があった。
「大丈夫か雪風？」
そして、理解する。
――自分は今、翔輝に抱き締められている事に。
その瞬間、雪風の意識は飛んだ。
「おい雪風ッ！？」
「雪風！？　どうしたのッ！？」
いきなり意識を失った雪風に、翔輝と大和が慌てる。一方の浜風と朝霜もまさか気絶するとは思っていなかったので、大慌て。ため息しながら磯風がフォローに入り、涼月も慌てて駆け寄り、六人は気絶した雪風を看護する。そんな皆に囲まれて気絶している雪風を一瞥し、冬月は「バカ」と小さくつぶやいた。
矢矧と初霜、そして霞の三人はそんなやかましくも微笑ましい皆に小さく微笑んでいた。
命懸けの出撃から一転、いつものような平和でのどかな時が流れた。
こんな日々を送りながら、再び呉に戻る。そんな事を誰もが考え、誰もが願っていた。
だが、運命というものはあまりにも残酷であった。
この向こうにある結末が、悲しく、辛く、苦しいものだとは、まだこの時の翔輝達は誰も知らなかった。

第十四章　第一節　故郷出港　孤高の第二艦隊の運命（後書き）

先に行っておきます。
残念ですがもう呉に残して来た艦魂達は登場しません。これからは十勇士と翔輝の話になります。
一応最終話では残ったキャラは出す予定ですが、とりあえず大和が特攻するまではもう登場しません。
さて、次期作戦に向けて呉を出港した第二艦隊ですが、作戦中止。さらには呉に機雷が投下されて戻る事もできず徳山沖に避難しました。
これで再び平和が訪れる。そう喜ぶ大和達でしたが、運命というものは彼女達に辛い現実を与えるのでした。
次回はいよいよ本格的な沖縄戦の開始。さらに、ついに『大和』以下の第二艦隊に特攻命令が下されます。
予定ではここから原作と違って多少架空戦記が入ってきますが、大局に大きな動きはありません。まぁ、すでに隼鷹が無傷な時点で架空戦記っぽいですが。

あと読者の方から忠告があったのですが、僕の作品は演出効果で戦艦がバンバン敵機を撃墜していますが、当時の日本戦艦の迎撃率は恐ろしく低くてあまり当たりません。誤解された方がいましたらすみません。

ＰＳ　ついにアクセス数が３０万を突破！　ユニークアクセス数も５万を突破しました！
さらに文字数もついに１２０万文字を突破！　読了時間も２４００分を突破！　どこまでやるのか僕でもわかりません！
これからも応援よろしくお願いします！

第十四章　第二節　連合艦隊最後の作戦　特攻へ向かう大和達の決意（前書き）

《霞（かすみ）》

朝潮型駆逐艦九番艦――駆逐艦『霞』

出身　浦賀船渠（神奈川県）

身長　１６８ｃｍ

髪型　ポニーテール

実年齢（１９４５年３月現在）５歳

外見年齢　１５、６歳

誕生日　６月２８日

家族構成　姉８人（すでに全滅）

好きなもの　姉妹・刀・武士道・桜・蒼い空・平和・日本

嫌いなもの　戦乱・欧米列強・航空機・仲間や姉の死

十勇士の一人、駆逐艦『霞』の艦魂。十勇士の中では比較的古参に入る。朝潮型駆逐艦は中型駆逐艦での高性能化の限界から、軍縮条約が破棄される事を見越して建造された大型駆逐艦。『霞』はその最後の九番艦。初陣は真珠湾攻撃。ミッドウェー海戦、レイテ沖海戦に参加した歴戦の駆逐艦。一九四三年七月に敵潜水艦の魚雷攻撃を受け、その際に霞は左目を失った。多号作戦に『初霜』と共に参加。北号作戦でも『初霜』と共に日本へ無事帰投する。水上特別攻撃隊十勇士の一人として沖縄へ向かう事となる。そんな『霞』の艦魂は駆逐艦の艦魂の中では一、二を争うほどの剣豪として知られている。とても仲間想いで、時に厳しく、時に優しく皆に接する彼女には、多くの駆逐艦が信頼を置いている。同じ戦隊を組んで来た初霜とは親友同士。武士道を貫き、己が責務を真っ当する事を使命としている。十勇士の一人として、まだまだ子供の大和達を率いる事となる。

《初霜（はつしも）》

初春型駆逐艦四番艦――駆逐艦『初霜』
出身　浦賀船渠（神奈川県）
身長　１６５ｃｍ
髪型　長髪
実年齢（１９４５年３月現在）１０歳
外見年齢　１７、８歳
誕生日　９月２７日
家族構成　姉３人　妹２人（すでに全滅）
好きなもの　霞・仲間・姉妹・みんねの笑顔・みんなを支える事・甘いもの・平和な日々
嫌いなもの　戦争・争い事・誰かが傷つく事・苦いもの
十勇士の一人、駆逐艦『初霜』の艦魂。十勇士の中では最古参の艦魂である。初春型駆逐艦はワシントン海軍軍縮条約で特型駆逐艦を量産していた日本海軍が新たなロンドン海軍軍縮条約でより厳しくなった中で建造した小型駆逐艦。キスカ島撤退作戦に参加。マリアナ沖海戦参加後は船団護衛に従事。捷一号作戦では志摩艦隊に合流する予定だったが敵機の空爆を受けて中止。その後は『霞』と共に多号作戦に、北号作戦に参加。水上特別攻撃隊として沖縄へ出陣する。その『初霜』の艦魂は、駆逐艦達のお姉さん的存在。長門や比叡、扶桑などとも親しかったらしい。今回の十勇士の中でもお姉さん的存在として、死地へ向かう皆を支えている。少々長門のように行き過ぎた所もあるが、それも全て愛情。大和や雪風のような若い子達に特攻をさせなければいけない事に、古参である自分達の努力が足りなかったと後悔している。霞とは共に戦地を駆け抜けた戦友であり親友のような存在。今回の作戦で唯一嬉しかった事は、死ぬ時が彼女と一緒だという事。

《磯風（いそかぜ）》
陽炎型駆逐艦十二番艦――駆逐艦『磯風』
出身　佐世保海軍工廠（長崎県）

身長　１５６ｃｍ
髪型　ボブカット
実年齢（１９４５年３月現在）４歳
外見年齢　１４、５歳
誕生日　１１月３０日
家族構成　姉・雪風・他１０人　妹・浜風・他６人
好きなもの　翔輝・姉妹・本・平和な日々・時たま会う姉妹達とのお茶会
嫌いなもの　特になし

十勇士の一人、駆逐艦『磯風』の艦魂。雪風の妹。クリッとした瞳に細メガネが特徴的な女の子。陽炎姉妹では頭脳派の子で、十勇士の中では参謀の役割をしている。暇な時間があれば読書をする。しかし他の本好きなキャラと違って孤立はしておらず、結構友好的。頭もいいので今まで多くの仲間の相談を受けてきた実績を持つ。今では一番上の姉となった雪風と自分よりも年下でもがんばっている矢矧を陰ながら応援している。時折夜遅くまでがんばる矢矧に、そっと気づかれないようにおにぎりやお茶などを差し入れしている、とても優しい子。今回の特攻作戦は無謀なものなので彼女自身は好きではないが、姉や仲間の為に命を捧げる覚悟はできている。ネタバレになるが、実は隠れ翔輝ファン。しかもかなり熱烈な信望者。その為、これからひと波乱起こす予定。

《浜風（はまかぜ）》

陽炎型駆逐艦十三番艦――駆逐艦『浜風』
出身　浦賀船渠（神奈川県）
身長　１５５ｃｍ
髪型　セミロング
実年齢（１９４５年３月現在）３歳
外見年齢　１４、５歳
誕生日　６月３０日

家族構成　姉・雪風・磯風・他１０人　妹・浜風・他６人
好きなもの　楽しい事・人をからかう事・みんなの笑顔
嫌いなもの　悲しい事・みんなの悲しい顔・涙・争い事
十勇士の一人、駆逐艦『浜風』の艦魂。雪風の妹。陽炎型駆逐艦で最も明るいキャラで、十勇士のムードメーカー的存在。初霜と一緒によく仲間をからかったりしている。今回の作戦には否定的だが、自分達艦魂には何もできないという事も知っており、せめてみんな笑顔でいられるように初霜と結託して皆を盛り上げている。いつも楽しそうに笑っていて、仲間をからかっている。皆もその行為が自分達の為とちゃんとわかっている。特攻作戦では誰よりも皆を守りたいと思っている。実は『武蔵』『信濃』の最期を見届け、そして最期の任務では『大和』と共に出撃するという、大和型に深い関わりを持つ艦。

《朝霜（あさしも）》
夕雲型駆逐艦十四番艦――駆逐艦『朝霜』
出身　藤永田造船所（大阪府）
身長　１５３ｃｍ
髪型　三つ編み
実年齢（１９４５年3月現在）１歳
外見年齢　１３、４歳
誕生日　１１月２７日
家族構成　姉１３人・妹５人（すでに全滅）
好きなもの　姉妹・みんなの笑顔・困っている人を助ける事・甘いもの
嫌いなもの　航空機・悲しい顔・苦いもの・辛いもの
十勇士の一人、駆逐艦『朝霜』の艦魂。雪風の義妹。夕雲姉妹の生き残り。頼れる姉はもうおらず、今は雪風や浜風、磯風を頼っている。ちょっと自信なさげで戦いは嫌い。大先輩である霞と初霜を率いる第二一駆逐隊の旗艦を務めているが、実際は霞が取り仕切って

いる状況。本人は情けなくもそれで助かってる様子。雪風の恋を冬月と一緒に応援している健気な子。水上特別攻撃隊として沖縄へ向かう事になるが、義姉達と一緒に行けるのは嬉しいらしい。しかし、その夢は・・・

《冬月（ふゆづき）》

冬月型（改秋月型）駆逐艦一番艦――駆逐艦『冬月』

出身　舞鶴海軍工廠（京都府）

身長　１５３ｃｍ

髪型　ポニーテール

実年齢（１９４５年３月現在）０歳

外見年齢　１２、３歳

誕生日　５月２５日

家族構成　妹３人

好きなもの　雪風・姉妹・自分に従う奴・人をからかう事・

嫌いなもの　人の心に土足で入る奴・思い通りにいかない事・なまいきな奴・言う事を聞かない奴

十勇士の一人、駆逐艦『冬月』の艦魂。日本海軍の最新鋭防空駆逐艦、秋月型駆逐艦の改良型。主砲に長十ｃｍ高角砲という対艦・対空両方砲を装備。これは米軍ですら《秋月型には近づくな》と命令を下していたほど強力で優秀な対空砲であった。従来の駆逐艦用の十二・七ｃｍ砲よりも口径は小さいが性能的には高性能であった。しかし砲身寿命が短いので予備を艦に搭載しなければいけないのと、量産性に優れない複雑な構造から搭載された艦は秋月型以外はあまりいない。そんな防空駆逐艦ともいうべき『冬月』の艦魂はちょっと強気な性格。先輩や上官にもあまり敬語は使わない失礼な面もあるが、根はいい子。だが素直ではないのでその優しさを追求すると機嫌を悪くしてしまう。翔輝がいない間、落ち込む雪風を支えて彼女と親友のような関係になった。雪風も彼女の事を信頼している。しかし、素直でないので彼女の感謝の声にも反撃し、からかってし

まう。それでも雪風は彼女を信じている。雪風が翔輝の事を好きという事はもちろん知っていて、最後のチャンスと無理にでも雪風と翔輝をくっ付けようと努力している。誰よりも雪風を想っている子。

《涼月（すずつき）》

秋月型駆逐艦三番艦――駆逐艦『涼月』

出身　三菱重工業長崎造船所（長崎県）

身長　１５６ｃｍ

髪型　長髪（額に白いリボン）

実年齢（１９４５年3月現在）２歳

外見年齢　１３、４歳

誕生日　１２月２９日

家族構成　姉　２人・妹　３人（すでに全滅）

好きなもの　姉妹・笑顔・日向ぼっこ・休日の午後に仲間とのキャッチボール

嫌いなもの　戦争・争い事・日が出ていない日・規律を乱す行為

十勇士の一人、駆逐艦『涼月』の艦魂。冬月の義姉。防空駆逐艦として姉妹達と共に機動部隊の護衛に従事していたが、度重なる激戦に姉妹は全滅。残るは冬月達しかいなくなってしまった。秋月姉妹（冬月姉妹・満月姉妹）の残存最年長者として、残った義妹達を支えてきた。同じ第二水雷戦隊を組む事になった冬月は特に手のかかる子で、彼女の苦労も絶えない。十勇士の中であまり目立たない存在だが、みんなを守りたいという気持ちは人一倍強い。翔輝の事がちょっぴり気になる様子で、冬月は気に入らないらしい（彼女は雪風派だから）。十勇士の一人として、死ぬ事は怖いが、必死に戦おうと決意している。

ついに沖縄戦が開始され、大和達に特攻命令が下されます。

連合艦隊最後の作戦に、連合艦隊最後の艦隊である第二艦隊が再び動き出す。

後世にも語り継がれる日本海軍の悲劇の一つ、水上特別攻撃隊。その勇姿と、うら若き戦姫達の決意が、日本海軍の終焉を映し出していた。

特攻に対する大和達の想いとは、最後までご覧ください。

第十四章　第二節　連合艦隊最後の作戦　特攻へ向かう大和達の決意

沖縄を守る牛島満陸軍中将率いる十一万六〇〇〇人の守備隊は海軍の掩護も得られない状況の中サイパン島や硫黄島と同じ持久戦を行う事にした。

すでに沖縄のまわりは戦闘艦艇一五〇〇隻、航空機二〇〇〇機、総兵員五四万八〇〇〇人（うち上陸部隊は十八万人）の大規模な敵軍に包囲されていた。

四月一日、米軍は本格的に沖縄本島へ上陸を開始。守備隊は持久戦の為にこれをそのままとした。その結果、沖縄本島は中央部から南北に分断されてしまった。

その後日本軍は徹底した防衛戦を展開。艦砲射撃や航空機支援の恩恵を受ける二倍近い敵軍に善戦。一ヶ月にわずか五キロしか敵を進軍させなかった。だが、米軍とすさまじい戦闘を行っていた第六四師団はその時には初期部隊数の三分の一にまで兵力を減少していた。

一方、日本軍内部では前線指揮官達が防衛戦ではなく総攻撃を仕掛けるべきだという意見が続出。牛島中将は持久戦を主張し徹底してこれを阻止したが、ついに根負けして五月四日に総攻撃を敢行。日本守備隊全軍を一斉に敵部隊に突撃させたが、結果は大失敗。日本軍は兵員を大量に失い、これ以降防衛戦もまともにできなくなった。

追い詰められた守備隊は首里城付近に新たな防衛陣地を展開。米軍と再び壮烈な戦闘を行ったが、これに敗北。守備隊はさらに南に逃げ、ついに沖縄本島南端の摩文仁に撤退。あらたに防衛陣地を展開させたが、すでに日本軍は総兵力の八〇パーセントを失っていた。

その後も日本軍は防衛戦を繰り返したが、もはや弾薬も兵員もほとんど残されてはおらず、まともな防衛戦術も使えなくなっていた。そして、ついに六月二三日、牛島中将は自決。他の指揮官も次々に

自決し、ここに日本軍の組織的な抵抗は終了した。しかし、その後も各部隊ごとに徹底抗戦を行い、完全に戦闘が終了したのは戦後になってからだった。

この一連の戦闘で沖縄では多くの民間人が犠牲となり、地形が変わるほどのすさまじい艦砲射撃や空爆が行われ、『鉄の暴風』と呼ばれた。

日本本土唯一の戦闘が行われた沖縄戦での犠牲者は日本軍が約九万人、民間人が十万人と二〇万人近い日本人が亡くなった。それに対し米軍の戦死者は一万三〇〇〇人だった。

沖縄が陥落すると、もはや日本本土に米軍が上陸してくるのも時間の問題となっていた。

もはや、日本には自国を守るだけの力も残されてはいなかったのだ。

沖縄に米軍が上陸したその日、呉に戻れない第二艦隊は徳山沖に停泊を続けていた。そんな第二艦隊の旗艦『大和』の艦橋にいた翔輝は沖縄近海の海図を見詰めていた。すでに沖縄に敵軍が上陸して来たという情報は第二艦隊にも伝わっていた。

「長谷川」

森下が真剣な瞳で海図を見詰める翔輝に声掛ける。

「あ、参謀長」

「どうしたんだ？　難しい顔をして。また大和が何か起こしたのか？」

「いえ、違います。ただ、ちょっと気になる事が」

「気になる事？」

「菊水作戦の事です。陸海軍の航空機を練習機まで特攻させるなんて、そんな事をしても意味があるのかと思って・・・」

翔輝の疑問は誰もが思う事だ。

確かにレイテ沖海戦の時は敵の度肝を抜いて損害に対して大戦果を挙げた。しかし今では米艦隊も神風を警戒してレーダーで接近を

捉えるとありったけの戦闘機を舞い上げて待ち受けている。そのすさまじい防空網を突破しても、すさまじい対空砲火が特攻隊を襲う。
今では出撃しても敵にたどり着けずに撃墜される始末だ。そんな状況なのに、大量の特攻機を叩き込むなんて、勝ち目なんてない。
海図を見詰める翔輝に、森下は「そうだなぁ」と小さくつぶやく。
「確かに無茶苦茶な作戦だ。特攻なんて、俺は認めない。俺達は生きる為に戦ってるってのに、死ぬ事を覚悟して敵に突っ込むなんて俺は真っ平ごめんだ。だがな、特攻でもしないと、沖縄は守れない――いや、沖縄はあくまでも本土決戦の戦力が整うまでの時間稼ぎだ。なるべく長く敵を沖縄に留め、戦力の充実を急ぐ。それが今の陸海軍の作戦方針だ。噂じゃ女子供にも竹槍を持たせて訓練しているらしい。本土決戦の主力は、そういう一般市民だそうだ」
「そんな滅茶苦茶でいいんですか？」
「いいも何も、それしか方法がないんだ。この『大和』もいつ出撃するかわからないし、もしかしたらこのまま浮き砲台になるかもしれない。そしたら『大和』は敵機のいい的だ。ここは湾内だから真珠湾の時のアメリカ戦艦のように着底するだけだ。外洋なら沈没だが、ここなら大丈夫。もしかしたら、ここにこうしているのが、あいつの為にもいいのかもしれないな」
森下が言うあいつとはもちろん大和の事だ。
そう、ここなら大和は敵機の攻撃を受けても大怪我はするだろうが死ぬ事はない。ある意味ここは、艦魂にとっては不死の世界なのかもしれない。だが、それは同時に長い時の中、傷に苦しみ続ける事にも繋がる。どちらがいいのか、それはわからない。
大和の為を想うなら、いっそ・・・
「どうした？」
森下の声にハッとし、翔輝は首を横に振る。
「いえ、何でもありません」
何を考えているんだ自分は。
あれだけ死ぬ事だけは認めないと言ってきたのに、何でこんな時

に――死んだ方がいいのかもしれないなんて事を思ったのだろうか。
「大丈夫か？　顔色が悪いぞ」
「大丈夫です。ちょっと疲れただけですから」
「そうか？　だったら少し休んだらどうだ？　艦長や航海長には俺から言っておくぞ。お前はただでさえ大和達の事で疲れてるんだからな」
「いえ、平気です」
翔輝はそう答えるとメガネのブリッジを上げて再び海図を見詰める。と、
「長谷川少佐」
その声に振り返ると、そこには長い夜叉のような髪に左目を眼帯を付けた隻眼の少女がいた。それは・・・
「霞？　どうしたんだ？」
それは霞であった。大和が自分の頼れる部下だと言っていつか第二水雷戦隊の艦魂を紹介してもらった事がある。その中に彼女もいた。
「いや、大和長官を捜していたのだが、知らないか？」
「大和？　そういえば朝からいないけど、どうしたの？」
「さぁ？　矢矧と雪風が用があると言っていたのだが」
「ふーん、じゃあ見つけたら二人の場所に行くよう言っとくよ」
「それは助かる。すまないな」
「仲間だろ？　礼なんていらないよ。まぁ、僕は人間だけどね」
そう言って翔輝は微笑むと再び仕事に戻った。そんな彼を霞は隻眼でじっと見詰める。
「うん？　どうしたの？」
視線に気づいて振り返ると、霞は小さく笑った。
「少佐の人柄は仲間からよく聞いていたが、その通りの方らしいな」
「え？　駆逐艦達、なんて言ってたの？」
「さぁな。自分で調べてみたらどうだ？」
そう言うと、霞は背を向けて艦橋を出て行く。と、

「あっ」
「うむ」
そこへ捜し人である大和がやって来た。ちょうど霞と対峙した形だ。
大和は目の前にいる霞にきょとんとする。
「霞さん？　何でこんな所にいるんですか？」
「うん？　ちょっと長谷川少佐と話していただけさ」
「少佐と？」
こちらに目を向ける大和。その瞳は細く、じーっとなぜかジト目で見られているような気がする。なぜか、彼女の中で大きな誤解が発生しているような気がした。
「ふーん・・・霞さんと・・・確かに霞さんはきれいな方ですよね・・・マニアには眼帯キャラもかわいいらしいですが・・・ふーん・・・少佐はそういう方なんですか・・・ふーん・・・」
ものすごく、大和が怖いです。
「ちょっと待て！　何かお前激しく誤解してないか！？」
「何が誤解ですか！　霞さんに失礼な事してませんよねッ！？」
「するかぁッ！」
ギャーギャー言い合う二人を見詰め、霞はフッと小さな笑みを浮かべた。
「長官。別に私と少佐はただ話しただけだ。貴殿が想像しているような事はない」
「ほ、本当ですか！？　良かった・・・」
「お前、何を想像してたんだ？」
ズレたメガネを正して呆れる翔輝に対し、大和は顔を真っ赤にさせる。
「で、でも一体何を話していたんですか？　まさか少佐、霞さんを口説いていたのでは――」
「いい加減怒るぞッ！　僕は滝川みたいな女ったらしじゃないッ！」
「死者を冒涜するのはどうかと思いますけど」

「うっ・・・」
どうやら今回の戦いは大和の勝利に終わったらしい。一体何の勝負だったかは不明だが。
一方の霞はようやく言い合いが終わった大和に近づく。
「長官。矢矧と雪風が呼んでいたのだが」
「矢矧と雪風が？　何でしょうか？」
「さぁな。私は捜していただけだ。では」
今度こそ霞は艦橋を出て行った。どこかその雰囲気に翔鶴や葛城のような気配を感じたのは、きっと彼女が駆逐艦の中でも指折りの剣豪だからであろう。かつては《二刀流の綾波》と《一刀流の霞》と言われていた事もあるほどの実力者らしい。綾波というのは第三次ソロモン海戦で単艦敵駆逐艦四隻に大打撃を与えた後に沈没した駆逐艦『綾波』の艦魂だ。彼女もまたかなりの剣豪だったらしい。
大和は霞が消えた出入り口をしばし見詰めていたが、ポンと翔輝に肩を叩かれて振り返る。
「早く雪風の所に行ってあげな」
「あ、はい。じゃあ少佐も一緒に」
「無理言うなよ。僕は仕事で忙しいんだ」
「そ、そうですね。すみません」
「ほら、早く行ってやれ」
「いえ、ここにいた方がいいと思います。きっと二人もここに来ると思いますから」
「そ、そう？」
翔輝はとりあえず仕事に戻る。そんな翔輝の横に大和は立つと、そっと翔輝の服の裾をちょこんと握った。
「うん？　どうしたの？」
「い、いえ。何でもありません。お気になさらずに」
そう言って大和はなぜか頬を赤らめてすり寄って来る。一体どうしたのか不思議に思いながらも、翔輝は仕事に戻る。
翔輝は無言で鉛筆を走らせる。そんな彼を、大和はそっと横から

見詰める。彼の凛々しい横顔は、いつに間にかずいぶんと大人らしくなった。キラリと光るメガネもまた知的に見えてかっこいい。

ここの徳山沖。伊勢や榛名、葛城は呉湾にいる。会えないのは辛いが、その分翔輝を独占できる。事実、出撃してからずっと翔輝は独占しっぱなしだ。

嬉しそうに大和は翔輝の空いている方の腕に抱き付く。そんな大和に翔輝は戸惑いながらも彼女の嬉しそうな笑みに小さく微笑むと仕事に戻る。と、

「あッ！　いました！」

その声に振り返ると、そこには雪風と矢矧が立っていた。大和は慌てて翔輝から離れる。矢矧はペコリと頭を垂れ、翔輝も笑顔を向ける。

「いらっしゃい。大和に用があるんだって？」

翔輝がそう言うと、大和も「そ、そうでした。私に何の用があるの？」と二人に問う。すると、雪風と矢矧はお互いに顔を見合わせると、真剣な瞳で翔輝を見た。

「今日は――長谷川少佐の妹さんの命日でしたよね？」

雪風の言葉に、翔輝から笑みが消える。大和もハッとして翔輝を見詰める。

――四月一日。それは翔香の命日であった。

もうあれから五年。今でも彼女の笑みは思い出せる。

大和は不安げに彼を見詰める。

翔香の命日の日、それは翔輝にとっては辛い日でしかない。今までの五年間、ずっとこの日の翔輝は悲しげであった。

でも・・・

翔輝はフッと笑みを浮かべると隣で不安げに自分を見詰める大和の頭をそっと撫でる。驚く彼女を見詰める翔輝の瞳はとても優しい。

「そっか、もうそんなに経つのか」

「少佐？」

「――でもまぁ、今の僕には大和がいるから。もう寂しくないよ」

そう言って微笑む翔輝に、大和はボンッと顔を真っ赤にして「あう・・・その・・・えっと・・・」と狼狽する。
「で、でもどうせまた翔香さんの代わりとかなんでしょう？」
ツンと唇を尖らせてそっぽを向く大和に、翔輝は困ったように首を傾げる。
「そんな事言ってないだろ？」
「ど、どうせそうに決まってるですぅ」
背を向けてツンとする大和に、翔輝はどうしたもんかと首を傾げる。そんな彼に苦笑いしながら近づくのは雪風。
「素直じゃないですね、大和司令も」
「そうなの？」
「はい。素直に喜べばいいですのに。せっかく長谷川少佐にそんなうらやましい事を言われたんですから、ずるいですよ」
そうどこか寂しげに言う雪風。そんな彼女の頭を翔輝はそっと撫でた。驚く雪風に、翔輝は微笑む。
「何言ってんだよ。雪風だって僕にとっては大切だぞ」
「しょ、少佐・・・ッ！」
パァッと明るい笑みを浮かべる雪風は、翔輝の言葉に嬉しさのあまり思いっ切り彼に抱き付いた。
「えへへ、ありがとうございます少佐！」
「わかったわかった！　わかったから抱き付くな！」
「少佐！　大好きですぅッ！」
「ゆ、雪風・・・ッ！」
「何してるですかあああぁぁぁッ！」
イチャイチャ（？）する翔輝と雪風に、今までそっぽを向いていた大和は顔を真っ赤にして大激怒する。
「や、大和？」
「し、司令！？　す、すみません！」
「今すぐ離れるですぅッ！」
大和は慌てて雪風を翔輝から引き剥がそうとする。だが、この日

の雪風はいつもの彼女とは違っていた。
フルフルと肩を小刻みに震わせ、キッと大和と対峙する。
「は、離れません！」
「なぁッ！？」
雪風は顔を真っ赤にしながら翔輝の腕に抱き付く。その驚異的な彼女の行動に、大和と翔輝は呆然とする。
「ゆ、雪風？」
「大和司令！　私、負けませんからッ！」
「な、何言ってるのよッ！　と、とにかく少佐から離れなさい！」
「嫌です！　私だって、長谷川少佐とこんな事したいんですッ！」
「ゆ、雪風・・・ッ！」
二人の背後から激しく炎が燃えているように見えたのは、翔輝の気のせいではないだろう。
大和と雪風。いつもは頼れる上官と部下にして親友でもある二人だったが、今日はその二人も恋敵（ライバル）となっていた。
睨み合う二人に翔輝は慌てるが、二人の迫力に声も掛けられない。そんな彼に、そっと近づく者がいた。すっかり忘れられていた矢矧だ。
「私はどちらを応援すればいいのでしょうか？」
「いや、僕はどう判断すればいいかわからないんだけど・・・」
「・・・少佐。もう少し大人になりましょう。無益な争いの引き金になりますから」
「え？」
意味不明な事を言う矢矧に翔輝は首を傾げる。そんな彼を見て矢矧は小さくため息すると睨み合う二人の仲介に入る。
矢矧の説得で二人はやっと停戦する。そんな三人を見てふと翔輝はある事を思い出す。
「確か、この中では矢矧が一番最年少だったような・・・」
年下の女の子に説得される大和と雪風。そんな二人を見て翔輝は苦笑いするしかない。矢矧は第二水雷戦隊旗艦として優秀な指揮官

である。彼女だからこそできる技なのだろう。
すっかりしゅんとする大和と雪風を一瞥し、矢矧は次に翔輝を見る。その瞳は何かを掴んだような、そんな光があった。
「どうやら、問題なかったようですね」
「え？」
矢矧は雪風の肩をポンと叩くと背を向ける。
「今日は長谷川少佐が落ち込む日と聞いていたから、大和司令と一緒に元気付けようと企画していたのが、どうやら必要ないみたいです」
そう言って矢矧は振り返ると、優しげな笑みを浮かべた。
「少佐には、もう大和司令や雪風がいます」
矢矧はそう言って一礼すると、光に包まれて消えた。
残された雪風は翔輝に向き直ると笑みを浮かべる。
「矢矧は、とても仲間想いな人なんです。今回の事も、彼女が言い出した事なんですよ。でも良かったです。少佐はもう、その必要もないようですから」
「そうね。少佐には、もう私や雪風がいます。呉に帰れば、榛名さんや伊勢さん、隼鷹や葛城もいます。もう、寂しくはありませんね？」
「あぁ。ありがとう・・・」
翔輝はそう言って小さく微笑むと、そっと二人を抱き寄せた。二人は顔を赤くしながらも、抵抗する事なく、彼のその行為を受け入れる。
しばらくして、雪風は仕事の為に矢矧を追いかけていった。残された翔輝と大和は互いの顔を見合うと、静かに微笑んで再び抱き合う。
腕の中で、大和は嬉しそうに微笑む。
この温もり、優しさが、今の自分を支えてくれているとわかっているから。
そして、翔輝の顔には、もう迷いはなかった。

今の自分には守るべき者がいる。自分が傍にいてあげないといけない。そんなふうに思える大切な奴が、

「なぁ、大和」

だから、そんな彼女のそばにいてあげたい。

「また来年も、あの桜を二人で見たいな」

もう彼女を離さない。絶対に、

「はい。そうですね。また来年も、あの桜を・・・」

二人は互いの手を繋ぎ、強く結んだ。そんな二人の見詰める先には、まだ咲き始めたばかりの桜が、美しい輝きを放っていた。

四月五日、第二艦隊旗艦戦艦『大和』に連合艦隊参謀長草鹿龍之介中将が来艦した。

長官室に案内された草鹿はそこに座っていた伊藤以下第二艦隊司令部要員と対峙した。

「連合艦隊参謀長が直々に来るとは、一体どういった用件だ?」

伊藤は草鹿をじっと見詰める。その瞳にある光は力強く、刃のように鋭い。

「連合艦隊最後の作戦を命令します――第二艦隊に出撃命令です」

「何だと? 今の状況で私の艦隊がする事などある訳がなかろう」

伊藤の言葉に草鹿は一瞬躊躇したが、伊藤の瞳を見詰めて言った。

「戦艦『大和』以下第二艦隊は、沖縄に行ってもらいます」

「沖縄へ? 何をバカな事を。今の沖縄は完全に敵地だ。こんな十数隻の艦隊とも言えぬ艦隊で行ける訳なかろう」

「長官は菊水作戦をご存知ですね?」

「あぁ、私の耳に入っている。大規模な特攻による反復攻撃だろう?」

「はい。実は明日にはその第一回、菊水一号作戦が発動します。約三〇〇機の特攻機が沖縄の敵艦隊を攻撃します。それと同時に長官の部隊も出撃し、特攻で弱っている敵艦隊の隙を突いて沖縄に行ってもらいます」

草鹿の言葉に伊藤は沈黙したままだった。何も言わず、ずっと草鹿の言葉を聞き入れている。そんな伊藤を見て草鹿は胸元から一枚の紙を取り出した。それは、作戦命令書だった。

「『第二艦隊『大和』以下ハ、水上特別攻撃隊トシテ沖縄ノ敵泊地ニ突入シ、所在ノ敵輸送船団ヲ攻撃、撃滅スベシ。敵船団ヲ撃滅シタル後、嘉手納基地ニ突入シ、艦砲射撃シツツ陸地ニ乗リ上ゲルベシ』」

草鹿の言葉に、第二艦隊司令部要員は絶句した。彼の言った《水上特別攻撃隊》という単語に、全員が彼が自分達に死んで来いと言っていると知った。

そんな中、伊藤は冷静に草鹿を見詰めていた。

「掩護の飛行機は何機出るのだ？」

「連日大規模な特攻が行われるので、護衛戦闘機は一機も出ません」

「一機の飛行機の掩護もなく、こんな作戦が成功すると思うか？――私はこの『大和』だけで三〇〇〇人、艦隊全部では七〇〇〇人の命を預かっている。その将兵のただの一人も、無駄に死なせる訳にはいかん」

伊藤の言葉に、彼の部下は感動した。だがそれもつかの間の事、すぐに彼らは自分達に死んで来いと言っている草鹿を睨む。そんな中、一人の男が立ち上がった。それは森下だった。

「第二艦隊参謀長森下です。草鹿参謀長にお聞きしたい事があります」

森下は草鹿を見詰め、その心に抱いていた質問をぶつけた。

「連合艦隊最後の作戦と言いましたが、豊田連合艦隊司令長官は、どの艦に乗艦されてるのですか？」

草鹿は森下を見詰め、正直に言った。

「長官は、九州の鹿屋（かのや）の前線基地に移動されて、そこで指揮を執られる」

「なぜ連合艦隊最後の作戦に司令長官も参謀長も乗艦せず、特攻作戦の陣頭指揮を執られないんですかッ！？」

第二水雷戦隊司令官、古村啓蔵（こむらけいぞう）少将が怒りの声を上げた。そんな古村を同期の有賀が抑える。

そんな重苦しい雰囲気の中、伊藤は毅然とした態度で草鹿に対峙する。

「私は、特攻作戦などに陛下からお預かりしている私の大切な艦隊を使うつもりはない」

伊藤の言葉に全員がうなずく。だが、草鹿は作戦書をしまう事はなく、伊藤に向かって口を開く。

「長官のお気持ちはわかります。しかし、軍令部総長に陛下が尋ねられたのです。「海軍にはもう、軍艦はないのか」と。総長は答えました。「いえ、まだ『大和』がおります」と」

「陛下のお気持ちは理解できる。だが、だからとしてもそんな事で私の艦隊を犬死させる訳にはいかん――だが、一つ問おう。これは、誰の命令だ？」

「これは連合艦隊司令長官、海軍大臣、軍令部総長からの命令です。それに、まもなく敵は日本本土に来るでしょう。そうなれば本土決戦という事になります。本土にいる一億の国民総出で敵に対抗するでしょう。その決意として、長官。あなたの艦隊には一億総特攻、一億玉砕の先駆けとなってほしいのです」

草鹿の言葉に、全員がもはや何も言えなくなっていた。反対する力もなく、皆は伊藤を見詰め続けた。そんな彼らに見詰められる伊藤は目をつむって沈黙を続けていたが、しばらくして瞳を開けた時には、決意の炎が宿っていた。

「第二艦隊は一億総特攻、一億玉砕の先駆けなれと言う事だ。我々は死に場所を与えられた――出港は、明日一六〇〇。ただちに出撃準備に掛かれ」

『了解ッ！』

伊藤の決意に、もはや覚悟を決めた司令部要員は、後世に永遠に語り継がれるような見事な敬礼を見せ、散った。

戦艦『大和』は出撃命令が下り、兵達は出港用意を進めていた。可燃物は全て揚陸し、機銃や高角砲のまわりには土嚢（どのう）を積んで火花避けを作る。

そんな中、翔輝は艦魂達の集まる会議室にいた。そこへ今作戦の司令官を務める大和が現れた。指揮官の登場に部屋にいた艦魂九人が立ち上がって敬礼した。それは、『大和』と共に出撃する第二水雷戦隊の艦魂だった。

「第二水雷戦隊旗艦・軽巡洋艦『矢矧』艦魂以下、駆逐艦『磯風』『浜風』『雪風』『朝霜』『初霜』『霞』『冬月』『涼月』の艦魂。戦艦『大和』と共に出撃します」

矢矧の言葉に大和はうなずき、艦魂達は座った。

「今作戦は沖縄へ出撃です。かなり危険な任務ですが、諸君らの奮闘を期待します。出撃は明日一六〇〇です」

大和の説明に第二水雷戦隊の艦魂達は静かにうなずいた。そんな中、作戦参加艦魂で最年長である初霜が静かにため息した。

「まさか、決死の出撃をした私達が、必死にならないといけないなんて」

「特攻作戦・・・私達はこんな作戦で命を落とさねばならないのか」

霞は苦虫を噛み潰したように顔をしかめる。

年長者二人の言葉に、雪風や矢矧の表情も暗くなる。

呉を出撃する時、みなには必ず生きて帰って来ると言って来たのに、特攻作戦ではその約束も果たせない。なぜなら、必ず死ぬ作戦――それが特攻作戦なのだから。

磯風や浜風も、自分達に突きつけられた現実に愕然としている様子。

落ち込む部下達を見詰め、大和は寂しげにため息する。誰だって、死ねと言われて落ち込まない者は誰もいない。だが、それでも任務は完遂しなければならない。

大和は自身も落ち込んでいるのを我慢してキッと力強い瞳で雪風達を見回す。

「みんな、そのまま聞いてほしい。今回の作戦は特攻作戦。だけど、それと同時にこれは連合艦隊最後の作戦でもある。そして私は連合艦隊の象徴、戦艦『大和』の艦魂。例え特攻作戦でも、私はこの作戦に命を捧げる覚悟はできている」

大和の言葉に、雪風達はうつむかせていた顔を上げる。そこには、力強い瞳をした大和が――自分達の司令長官がいた。

「瑞鶴達は日本機動部隊の有終の美を飾った。なら、私は日本連合艦隊の有終の美を飾る。誰かが終わらせねばいけないなら、私が終わらせます。連合艦隊の象徴として、そして――戦艦『大和』の艦魂として」

大和の決意は揺るがなかった。彼女の見た事のないほどの真剣な瞳に、雪風達は沈黙した。そんな彼女達を見詰め、大和は一転して優しげな笑みをする。

「皆さん、どうか私のわがままに最後まで付き合ってください」

大和の言葉に、矢矧は立ち上がると見事な敬礼をしてみせた。それに続いて雪風、霞と次々に立ち上がって敬礼する。皆、大和と同じ思いであった。

大和はそんな彼女達に涙を浮かべながら嬉しそうに笑みを浮かべると、隣にいる翔輝を向く。そんな彼もまた、優しげな笑みを浮かべていた。

「もちろん、僕も付き合ってやるよ」

「ありがとうございます。少佐がいれば、私は何だってできます」

「僕なんか頼りないと思うけど」

「そんな事ありません。私にとって、一番頼りになる方は少佐です」

見詰め合う二人に、もはや何も言う言葉はなかった。

雪風達も沈黙し、矢矧は自分の配下にいる八人の艦魂を見詰め、その八人も彼女を見詰め返した。その瞳には皆、強い決意があった。

心を一つにした艦魂達を見詰め、翔輝は笑みを浮かべる。

「連合艦隊最後の作戦だ。ここはかっこよく決めないとね。で、僕から意見なんだけど、今作戦に参加する艦魂は十勇士（じゅうゆうし）って呼ぼうよ」

「それはいいですね。では、十勇士の方々。共に敵を討ちに行きましょう！」
『了解ッ！』
決意をした十人の艦魂を見詰め、翔輝は小さく笑った。
「なら、写真を撮りましょう。私達十人を写した、十勇士の勇姿をね」
初霜の妙案に大和はうなずいてカメラを発現。九人を艦魂を率いて撮影位置に付く。
「じゃあ僕が撮るね」
「何言ってるんですか。少佐も一緒ですよ」
大和は当然のように言うと翔輝の腕を引く。だが、それは無茶な要求であった。
「ちょっと待って。僕以外にみんなを撮れるような奴はいないだろ？」
「そ、そういえばそうですね・・・」
しゅんとする大和に翔輝は苦笑いしてカメラを構える。
「俺にやらせてくれ」
その突然の声に振り返ると、そこには森下が立っていた。
「参謀長？」
「お前はいいから、みんなの中に入れ」
「し、しかし・・・」
「いいから」
森下は翔輝の背を押してカメラを構える。そんな彼に翔輝は苦笑いしながら端に写ろうと隅に行くと、大和が怒って「少佐はこっちです」と言って引っ張り戻した。そこは中央だった。
「ちょっと待って！　いくら何でもここはまずいって！　僕は十勇士じゃないよ！」
「いいんですよ！　ほら、森下さん早く撮ってください！」
「はいはいわかったよ。準備いいか？」
森下が撮影モードに入ると翔輝も諦めて中央に立った。大和はそ

んな翔輝に笑顔で抱き付いた。すると、反対側から雪風が恥ずかしそうにそっと翔輝に抱き付いた。大和が何か言おうとした刹那、森下はシャッターを押した。

結局、翔輝を中心に艦魂達が写り、大和と雪風が翔輝に抱き付くという形になった。

その後写真は焼き増しされて十人の艦魂、そして翔輝に渡された。

十勇士と名づけられた十人の艦魂はそれぞれ散った。

大和は翔輝の手を引いて走り出す。翔輝もそんな彼女に引かれながら優しげな笑みを浮かべて走る。そんな二人の手はしっかりと握られ、絶対に離さないという想いが込められ、いつまでも繋がり続けていた。

その後『大和』乗組員は甲板に呼び出された。翔輝も第二砲塔の上に立っており、その横には大和の姿もあった。

三〇〇〇人の男達はきれいに並び、同じ方向を見詰めていた。そこは艦首付近であり、そこには伊藤長官以下第二艦隊司令部要員や有賀がいた。

有賀は一枚の紙を持って用意されていた台に上り、その紙を読み始めた。

「『茲ニ特ニ、海上特攻隊ヲ編成シ、壮烈無比ノ突入作戦ヲ命ジタルハ、光輝アル帝国海軍海上部隊ノ伝統ヲ発揚スルト共ニ、其ノ栄光ヲ後世ニ伝ヘントスルニ他ナラズ。皇国ノ興廃ハ正ニ此ノ一挙ニアリ。各隊ハ、特攻隊タル事ヲ胸ニ秘メ、殊死奮戦、敵艦隊ヲ随所ニ壊滅シ、以テ、皇国無窮ノ礎ヲ確立スベシ』ッ！　以上ッ！」

「敬礼ッ！」

乗組員達は一斉に敬礼した。その顔は辛そうにゆがんでいる。皆、ここで初めて今作戦が特攻作戦であると知ったのだ。

大和からすでに今回の作戦が特攻作戦と聞いていた翔輝も、改めての艦長有賀の言葉にやはり愕然とする。

生きて帰って来る。そう約束したのに、この作戦は生還を許さな

い特攻。一瞬、呉に残して来た瑠璃達の顔が浮かんだが、首を振って忘れる。

帰れない事は覚悟していた。

もう迷わない。

「少佐？」

隣に立つ大和は、どこか辛そうな表情を浮かべる翔輝を不安げに見詰めていた。

動揺する乗組員達を見詰め、有賀は『大和』艦長としての言葉を発した。

「出撃に当たり、今さら改めて言う事はない！　乗員各員が、捨て身の攻撃精神を発揮し、日本海軍最後の艦隊として、全国民の輿望（よぼう）に応えよ！」

『おおおおぉぉぉぉぉッ！』

有賀の言葉に、乗組員達は咆哮した。

もはや、これしか方法は残されていないのだ。今さら逃げる事はできないしするつもりもない。

特攻という任務だが、皆その最後に任務を全うしようと心に決めた。

翔輝も改めて決意を固めた。

瑠璃や瑪瑙、珊瑚との約束、いきなり破る事になるかもしれないが、これでいいと。自分には守らなければならない者がいる。そいつと一緒に旅立てるのなら、これ以上の幸せはない。

翔輝は横で自分を不安げに見詰める大和の手をそっと握った。大和もそれをそっと握り返した。

二人の繋がりはさらに強くなり、互いの手を通じて心を通わせた。

その後、兵達は解散したが、愕然とする者、泣く者、行き場のない怒りを燃やす者大勢いた。だが、特に辛いのは、もはや会えぬ愛する者に向かって故郷の方角へ叫ぶ者達だった。

そんな彼らを見詰め、伊藤は目をつむって沈黙していた。

第十四章　第二節　連合艦隊最後の作戦　特攻へ向かう大和達の決意（後書き）

ついに大和達に最後の出撃命令が下りました。
明日には死地へ向かって旅立たねばならない、まだ子供ばかりの艦隊。その先頭に立つ大和の決意は、果たして本心からなのか。
そして、この無謀な作戦に対する、多くの想いはどうなるのか。
次回は十勇士の最後の夜編。
明日には死地へ旅立たねばならない十人の戦姫達と翔輝の最後のバカ騒ぎ。だが、その奥にある悲しみは・・・
お楽しみに。

追伸、実は僕の方のミスでキャラの名前を一部変更しました事を報告するを忘れていました。
アイオワとコンビを組む航海士のクードですが、名前をクルスに変更しました。実はすっかり忘れていましたが、外伝のエンタープライズの話に出て来るキャラが《クーゴ》と言うんです。あまりにも被っていたので直しました。
ご迷惑をかけて申し訳ありません。

第十四章　第三節　最後の夜　仲間と共に・・・（前書き）

今回は特攻へ向かう大和達の最後のバカ騒ぎです。
もう無礼講とばかりにおおはしゃぎする大和達と、それに巻き込まれる翔輝。
昭和というジャンルを無視してのバカ騒ぎの奥にあるのは、深い悲しみや恐怖。
バカ騒ぎを終えた後、大和の本当の気持ちを知った翔輝は・・・
そして、雪風達の想いとは。
おそらくは《艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～》最後の宴会となります。
今回はかなり長いですがどうか最後まで読んでください。

第十四章　第三節　最後の夜　仲間と共に・・・

その夜、翔輝は大和達十勇士と最後の宴会を行った。
「飲めッ！　死んでから悔いても遅いぞ！」
霞の掛け声と共に矢矧、初霜、磯風や浜風などが一斉にお酒をのどの奥に流し込んだ。普段はあまり飲まない大和も、この時ばかりは結構な量を飲んでいた。
わいわいと騒ぐ艦魂達を見詰める翔輝はそんな大騒ぎの中、部屋の隅に陣取っていた。そのまわりには大和、雪風の二人がいた。
「むにゃむにゃ・・・長谷川しょうしゃ・・・」
雪風は慣れない酒を大量に飲んですっかり夢の中に入ってしまった。
「疲れたんでしょうね。今は寝かせといてあげましょう」
「そうだな」
大和の言葉にうなずき、翔輝は雪風の頭をそっと膝に乗せて膝枕してあげた。そんな翔輝を見詰め、お酒を飲んで赤くなった顔で大和は彼を見詰める。
「明日――いえ、今日の午後四時には出撃ですね」
アルコールが回ってすっかりいい気分の大和は翔輝にそっとした垂れながら問う。表情こそはうっとりとしているが、その瞳はどこか暗い。いくらアルコールが回っていても、根底にある悲しみは消えないのだ。
「そうだね。いよいよ出撃だ」
翔輝も今日はラムネではなく日本酒をグイッと飲む。ほんのりと頬が赤いのは、アルコールが回っているからだ。
「怖くありませんか？」
大和は翔輝をじっと見詰めてそっと問う。
「怖いさ。すごく怖い。でも、お前や雪風、外にも多くの艦魂がいるしね。たぶん大丈夫だよ」

「そうですか――もっと、飲んでください」
「ありがとう」
翔輝は大和の淹れた酒をグイッと飲む。翔輝自身は酒は苦手な方だった。だが、《最後》という単語が彼に酒に対するあらゆる抵抗を排除しているせいか結構飲んでいた。
「ちょっと、雪風寝ちゃったの？」
そう言って来たのは冬月。その頬は赤くないのでどうやらお酒は飲んでいないらしい。
「冬月は飲まないのか？」
「昔、ちょっと酒を飲みすぎて羽目を外した事があってね。二度と飲まないって決めたのよ」
「そっか、どう？　これ食べる？」
そう言って翔輝が差し出したのは芋羊羹。それを見た冬月は「もらう」と言って眠る雪風の横に腰掛けた。すると、今まで各所に散っていた他の艦魂達も集まって来た。いつの間にか、翔輝のまわりに第二艦隊の艦魂全てが揃っていた。
「あれ？　朝霜はお酒飲まないの？」
「もうたくさんいただきました。そりゃもう一年分くらいは」
朝霜もお酒は苦手らしい。日本酒をペロペロと舐めるくらいしか飲めない。
「そっか、ならこのチョコ食べるか？」
「あ、はい。いただきます」
「あ、長谷川少佐。私にもください」
翔輝が差し出した板チョコを、大和達は嬉しそうに受け取る。浜風と磯風、朝霜、涼月、そして大和も嬉しそうに板チョコを食べる。その横では冬月が芋羊羹を食べている。すると、まわりの声に雪風が目を擦りながら起きた。
「あ、雪風起きた？」
「へ？　しょ、少佐ッ！？　わ、わわわ私一体何をして・・・ッ！？」

自分が膝枕されていた事に顔を真っ赤にして慌てて起きる雪風。
だが、そんな彼女の頭を冬月はグッと掴んで、再び翔輝の膝に叩き伏せる。
「ふ、冬月ッ！？　一体何するのよッ！？」
「あんたは少し積極的になりなさい。これ親友からの忠告」
「そうだよ。姉さんはもっとわがまま言うべきよ」
「私もそう思う」
「姉さんは幸せになる権利があるよ！」
冬月だけではなく、雪風の妹である浜風、磯風、朝霜までもが雪風を無理やり押さえつけて翔輝に抱きつかせる。
一方、そんな無理やり抱きつかれる翔輝は混乱する。
「な、何がどうなってんのッ！？　ちょっとやめろって！」
「黙れボケッ！」
「ごふぅッ！？」
冬月の蹴りが翔輝の脇腹を砕く。そのあまりの痛さに翔輝は声も出せずに悶絶する。そんな彼を見詰め、雪風と大和は慌てて冬月に怒鳴る。
「冬月ッ！　少佐に何て事するのよッ！」
「少佐！　大丈夫ですかッ！？」
だが、冬月はそんなのを無視して起き上がろうとする雪風を再び翔輝に抱きつかせる。すると、今度は目の前に翔輝の顔があった。悶絶しているとはいえ、愛しい彼の顔が目の前にある。それだけで、雪風の顔は真っ赤になる。
「そのまま行っちゃえッ！」
浜風が雪風の顔を両手で押さえて無理やり翔輝の顔に近づけさせる。これはまさか・・・
「そのままチューッ！」
「だ、ダメだよおおおぉぉぉッ！」
雪風は全力で体を回転させて脱出。一瞬冬月の舌打ちが聞こえたが、これは無視しよう。

顔を真っ赤にしてぜぇぜぇと荒い息をする雪風を、四人は残念そうに見詰める。
「意気地なしね雪風は」
「冬月！　あなたがこんな事するからぁッ！」
「私は手伝ってあげただけじゃない。感謝されても怒られる事なんてないわよ」
「それはおせっかいって言うのよぉッ！」
「何よ！　あんたの為にしてあげたんじゃない！」
「冬月はいつも無茶苦茶なのよッ！」
ギャーギャー言い合う二人を見て、浜風は「もっとやれぇッ！」と喜び、朝霜は「け、ケンカはダメだよぉッ！」と慌てて仲介に入り、「ふ、冬月やめなさいよぉッ！」と涼月も慌ててケンカを止めようとし、磯風は「バカ」と小さくつぶやいてメガネのブリッジを上げる。
そんなギャーギャー言い合う一行を見詰め、初霜は小さな笑みを浮かべた。
「みんな楽しそうで何よりね」
「そうだな。せめて最後は、笑っていてほしいものだ」
初霜と霞という艦隊の重鎮二人は、若い大和達の騒ぎを微笑ましく見詰めている。本当は、自分達だけでやるべきだと思っている。何で、こんな若い子達まで巻き込まねばいけないのか、やるんだったら、重鎮である自分達がやるべきだ。そんな想いがあった。
だけど、そんな想いも大和の演説に消えた。
彼女も一人の軍人、自分達と同じ帝国海軍の軍艦なのだ。しかも、日本の象徴である戦艦。誰よりもこの作戦に対する想いは強いのだろう。
「私は、皆さんの指揮官です。ですが、同時に新参者です。何せこの艦魂の中では冬月以外はみんな先輩ですからね。私なんかが皆さんの命を預けるのは、正直重いです」
どこか自身なさげな矢矧に、初霜は笑顔で彼女の背中をポンと叩

く。驚く矢矧に、初霜はそっと抱き付く。
「何言ってるのよ。私達はあなただからこそ従うのよ。あなただから、命を預けられる。矢矧、あなたは最高の司令官よ」
「初霜さん・・・」
涙ぐむ矢矧を、初霜はそっと抱き締める。自分よりも九歳も年上に部下にの胸の中で、矢矧は静かに涙する。そんな彼女を優しく抱き締める初霜の笑みはとても優しげなものだった。
そんな二人を見詰め、霞は口元に小さな笑みを浮かべて日本酒を飲む。いつもは鋭い隻眼も、柔らかく弧を描く。
その時、痛みからようやく抜け出せた翔輝がやって来た。
「霞。これは一体・・・？」
翔輝は抱き合う初霜と矢矧を見詰め困惑するが、霞は口元に笑みを浮かべる。
「気にするな。時にはこういう事も必要だ」
「そっか・・・」
「長谷川。君は何かを守りたいと思った事はあるか？」
霞の突然の問いに、翔輝は驚くが、とりあえずちゃんと答える。
「いっぱいあるさ。同時に、失ったものも多いけど。それでも守りたいものはある。今だって・・・」
翔輝は楽しげに会話をしている大和を見詰めながら、静かにそう言った。
「そうか・・・」
霞はその言葉にうなずくと、日本酒をクイッと飲んで静かに微笑む。
「その気持ち、皆も同じだ。長谷川、やはり君も十勇士の仲間だ。共に、戦ってくれ」
「もちろん」
霞はそっと手を差し出した。その手を翔輝はそっと掴む。
固い握手は、友情の印であった。
霞は小さく口元で微笑むと、手を離して再び日本酒を飲む。そん

な彼女に一礼し、翔輝は再び大和達の輪の中に戻った。
しばらくすると、ようやく雪風と冬月の言い合いも終わり、また楽しげな雰囲気に包まれた。そんな中で翔輝は大和や雪風と一緒に楽しげなひと時を過ごす。
嬉しそうに笑みを浮かべる大和を見詰め、翔輝の瞳が一瞬曇る。
こんなどこにでもいそうな女の子が艦魂で、今日の夕方には死地へ行かねばならないなんて、そんなの信じたくなかった。
突然沈黙した翔輝の裾を不安そうに雪風がそっと掴んだ。
「少佐？　大丈夫ですか？」
「え？　あ、うん。平気」
「長谷川君ッ！　もうバンバン飲んでるかい！？」
すっかりハイテンションモードになった初霜が元気良く翔輝に声を掛けてくる。その明るさとみんなを包むような優しさは、どこか長門を思い出させる。
「はい。飲んでますよ」
「いやいや、もっともっと飲まなきゃダメだよぉ！」
「あはは、初霜さんって長門さんに似てますね」
「そりゃそうよ。私は長門さんや出雲さん、扶桑さん、比叡さんとは仲がいいもの」
初霜が挙げたのはどれも日本連合艦隊で常に皆の心を支え続けたお姉さんキャラの者ばかりだ。
「だから、私が長門さんの代わりに、みんなを盛り上げてあげる」
「ありがとうございます」
翔輝は自然と微笑んでいた。
もうずっと会っていない、瑪瑙と同じく姉のように慕っていた長門を思い出させる初霜に、どこか親しみを感じていたのだ。
すると、初霜はむふふと笑みを浮かべた。そしてそれは、長門が何かとんでもない事を思いついた時の笑みに似ていた。
嫌な予感がした。
そして、予感は的中した。初霜はひょいと割り箸取り出した。そ

れは全て切り離された状態で、なぜか先端には番号が書いてある。
そして、一本には《王様》――
「って、これ完全に伝説の王様ゲームじゃないですか!?　平成の遊びですよこれッ！」
「むふふ、そうなのだ。じゃあ今から王様ゲームをするのだ！」
「やっぱりーッ！」
何やらまずそうな雰囲気の中で逃げようとする翔輝と霞、冬月をとっ捕まえ、初霜は王様ゲームを強行開始した。もちろん矢矧達も巻き込んでだ。
まず一回戦の王様は浜風だった。
「んとね、3番が5番に抱き付けぇッ！」
「ッ!?　わ、私が5番だと・・・ッ!?　それでは3番は一体・・・まさか長谷川か!?」
「いや、僕は2番だよ?」
「はいはーいッ！　3番は私だよぉッ！　さぁ霞、堪忍なさい！」
「・・・ッ！」
必死に逃げようとする霞を捕獲して初霜は扶桑と同等かそれ以上の抱擁（？）を行い、霞は口からよだれを流しながら痙攣し、完全に腰が抜けていた。そんな霞に同情的な視線を向ける浜風、朝霜、涼月だった。
二回戦の王様は朝霜だった。
「えっと、じゃあ1番が4番に愛の告白をするのはどうでしょうか？」
「それいいッ！」初霜はそれだッとばかりに指を挿す。
「何よそれぇッ!?」意味不明な事に怒る冬月。
「愛の告白って、長谷川少佐がセットされなきゃある意味危険なのでは?」苦笑いする涼月。
「おもしろそうだから私は賛成！　ちなみに私は3番だから問題なし！」大笑いする浜風。
「大丈夫ですか?」

「み、水をくれ・・・」
　少し離れた場所では倒れている霞を磯風が看護していた。ちなみにそこに行くまでで、磯風は見事何もない平坦な場所で転倒していた。ある意味すごい。
「で、では一体誰が？」不思議そうにまわりを見回す矢矧。すると――
「はわわわッ！　私が４番ですぅッ！」
　顔を真っ赤にしておろおろとする雪風。そんな彼女を見詰め、大和は自分の札を見る。幸い自分は２番だったので雪風に告白をするという恥ずかしい事態は免れた。
「一体誰なんでしょうね？　そういえば少佐は何番でしたか？」
　大和はふと隣にいる翔輝に問う。すると、なぜか翔輝の顔が真っ赤に染まって硬直していた。まさか・・・
「少佐・・・まさか・・・」
「・・・ははは、どうやら・・・僕みたい」
『うえええええぇぇぇぇぇッ！？』
　皆が驚愕の視線で翔輝を見詰める。そんな皆の視線に翔輝はさらに顔を真っ赤にする。一方、翔輝に告白される事になった雪風、そして大和は顔を真っ赤にして驚愕する。
　皆が言葉を失う中、初霜はいたって冷静に、
「んじゃ、さっさと告っちゃいなさい」
「何でそんなあっさりとッ！？　それに僕告白なんてした事ないですよぉッ！」
「安心しなさいな。何を言えばいいかはお姉さんが教えてあげるからん♪」
　初霜はむふふと何やら意味ありげな笑みを浮かべて翔輝の耳元で何事かをつぶやく。すると、翔輝は顔を真っ赤にして「そんな事を言うんですか！？」と叫び、「当然でしょ。告白は心よ心」と力説する。その姿はものすごく長門そっくりだ。「で、でもぉ・・・」と翔輝が拒むと初霜は「仕方ないわね」と比較的簡単なセリフを教

えた。
観念した翔輝は雪風の前に立つ。まるで本当の告白のような桜色の雰囲気が流れ、雪風は顔を真っ赤にして挙動不審になっている。そんな二人を大和は殺気に近い視線で睨み付ける。そして、
「ゆ、雪風ッ！」
「は、はいッ！」
「ぼ、僕はお前の事が好きだッ！　ずっとずっと好きだったッ！これかもずっと一緒にいてくれッ！　お前を、愛してるッ！」
翔輝の一世一代の大告白に雪風は――
「はうわあああぁぁぁ・・・ッ！」
大量の鼻血を出して雪風は気絶しながら転倒。浜風と朝霜が慌てて抱き起こすが、雪風は目をぐるぐると回しながら幸せそうな笑みを浮かべていた。どうやら、彼女にとっては最高の瞬間だったようだ。
一方、ものすごく疲れた翔輝はその場にぐったりと腰を落とした。そんな翔輝に初霜は拍手する。
「いやいや、なかなか情熱的な告白をありがとう」
「普通王様ゲームで最初の方からこんなに強烈な事はしませんよ？」
「まぁいいじゃない。楽しければいいのよ」
「本当に、初霜さんが長門さんそっくりですね」
「よく言われるわ。でもまぁ、今の過激な告白、どうやら良かったみたいよ」
初霜のが指差した先を見ると、そこでは大和が鼻血を出していた。雪風ほどじゃないが幸せそうな笑みをしていた。その隣では涼月がキャーキャー嬉しそうに騒いでいて、冬月が顔を真っ赤にしてそっぽを向いている。雪風を看護する浜風と朝霜の頬も赤い。その威力の高さは少し離れた場所にいる霞と磯風が頬を赤くしている事からもわかるだろう。
そんな一同に翔輝がため息すると、初霜が第三回戦をする。
三回戦目の王様は――

「キタ――ノ（゜◇゜）ノ――ッ！　私の天下よぉッ！」
「うそでしょおおおぉぉぉッ！？　初霜がぁッ！？」」愕然とする冬月。
「総員退避してくださいッ！」大和が慌てて逃げ出す。
「いやあああああぁぁぁぁぁッ！」朝霜が顔を真っ赤にしてあわあわとする。
「おもしろくなってきたぁッ！　でも私はごめんだぁッ！」テンション急上昇の浜風。
大和達が大騒ぎしている間に、初霜はニヤニヤと笑い続ける。その不気味な笑みに、全員の背筋に悪寒が走った。そして――
「6番の子が2番の子にキスッ！」
『えええええぇぇぇぇぇッ！』
初霜のあまりにも破壊的な命令に一同絶叫。そんな大和達を見て初霜は少し怒ったような顔をする。
「もうみんなったら、王様ゲームはこうでなきゃいけないの！　で？　結局誰と誰がブチューってするの？」
初霜がものすごく楽しそうにまわりを見ると、無理やり引かされて強制参加した霞が真っ赤な顔しながら割り箸を持ってぷるぷると震えていた。
「おんやぁ？　霞ちゅわぁん？　どうちたのかなぁ？」
「・・・ッ！　黙れッ！　私がき、ききききキスをするだとッ！？　だ、誰だッ！？」
どうやら霞がキスをする方の役目らしい。そして、される方はというと、
「また僕なのッ！？」
「えええぇぇぇッ！？　もしかして少佐が当たっちゃったんですか！？」
大和が顔を真っ赤にして驚く翔輝を見詰める。どうやら霞のお相手は翔輝のようだった。
翔輝を見て霞はさらなる絶叫をして顔を限界まで赤く染める。

「待て初霜！　これは冗談では済まんぞッ！　なぜ私がまだ会って間もない長谷川とき、ききキスをせねばならんのだッ！？」
「それは、王様である私が命令したからよん」
「私は絶対にせぬぞッ！」
「あら？　もしかしてファーストキスなのかな？」
「・・・ッ！　黙れッ！」
本気で嫌がる霞に対し、翔輝もさすがにこれには必死の抵抗した。
「初霜さん。勘弁してくださいよ。キスなんて命令は違法ですよぉッ！」
「えぇ、結構普通だと思うけど」
「長谷川も私みたいな女らしくない私とキスなど嫌であろう！？」
「え？　いや、霞は十分魅力的だと思うけど」
「え・・・」
翔輝の突然の言葉に、霞はうるむ隻眼で彼を見詰める。その双方の頬は桜色に染まり、二人のまわりに桜色の雰囲気が流れる。
これは・・・
「あらぁ？　新たな恋の予感かなぁ？」
「・・・ッ！　黙れぇッ！　いい加減にしないと手加減せんぞッ！」
「むふふ、安心して。ちゃんと応援してあげるから」
「黙れぇッ！」
ついに抜刀した霞。そんな彼女の疾風のような追撃を初霜は神業的な身のこなしでそれらを全て避ける。その光景はまるで長門と金剛か榛名のやり取りを見ているようなものだった。
しばし激戦を繰り広げた二人が戻って来ると、初霜は「仕方ないわね。じゃあリセットしてあげるわよ」と言って今のはなしとした。
そして再び王様ゲームを再開する。しかし神様というのはあまりにも残酷な存在であった。
「あら、また私ね♪」
「よっしゃぁッ！　行けぇ初霜姉さんッ！」
テンションが上がる初霜と浜風に対し、残ったメンバーのテンシ

ョンは極めて低い。何だかんだ言っても結局はちゃんと参加する霞は律儀である。皆必死になって自分が当たらないように願っている。そして・・・

「うーんっとね、８番が６番のほっぺにチューね。これならいいでしょ？」

「それでも十分アウトじゃない！」

冬月の言葉に皆うんうんとうなずく。特に朝霜と涼月という第二水雷戦隊の中でも純粋そうな女の子が必死になって抵抗する。だが、自分達の札を見て安堵の息を漏らした。どうやら二人は外れたらしい。

「じゃあ一体誰が？」

大和は辺りを見回す。すると、隣でぐったりと倒れている翔輝を見て顔が引きつる。

「ま、まさかまた少佐が？」

「・・・あのさ、これって陰謀？」

「何言ってるのよ。十分公平じゃない。細工があるって言うなら言ってみなさいよ」

確かに、細工などなく札は翔輝自身が引いた。自分の変なくじ運の悪さ（良さ？）にもう言葉も出ない。そんな彼をちょっとかわいそうに思えてきた大和の隣ではいまだに雪風が気絶している。

「それで、長谷川君は一体何番を引いたのかしら？」

ニヤニヤと問う初霜に、翔輝はもう答える気力もなく札を見せる。そこには《６》と書かれていた。

「ふむふむ、長谷川君が受けか。いい思いしちゃってこのこの」

肘をグイグイと翔輝の脇腹を突付く初霜は再び辺りを見回す。まだ８番、翔輝にキスをする側が不明なのだ。

「さぁて、長谷川君にキスをするのは誰なのかなぁ？」

初霜はニヤニヤとしながら見回す。すると、霞の様子がおかしい。まさか・・・

「おんやぁ？　また霞ちゅわんでしゅかぁ？」

「残念だな。今回私は7番だ」
「え？　じゃあ一体誰が・・・」
そこで霞は隣を見る。初霜もその視線を追うと、そこには知的なメガネを掛けながら、ほんのりと頬を赤らめている磯風が札を見詰めて硬直していた。
ニヤぁと、初霜の口元が緩みまくる。
「おんやぁ？　もしかして今回は磯風ちゅわんですかぁ？」
「そうみたい」
磯風のぼそりとつぶやいた返事に、一同驚愕。
「ちょっと初霜。そ、それはちょっとNG出してもいい？」
妹の一大事にさすがの浜風がストップを掛ける。雪風の時は思いっ切りゴーサインを出していたくせに。その当人である雪風は先程復活して大和に事情を聞いて驚愕している。
「あ、あの初霜さん。磯風はこういうの初めてなので、あんまりこういう事はちょっと・・・」
雪風も妹をかばうように初霜の説得に入る。だが、
「やる」
『えええぇぇぇッ！？』
磯風は頬を赤らめたまま立ち上がると、驚く翔輝の前に立った。小柄な磯風の目の高さは翔輝の胸辺りになる。視線を上げ、メガネの奥の瞳でじっと上目遣いで翔輝を見詰める。
「あ、あのさ、やっぱりやめない？」
「問題ありません」
磯風はじっと見詰め続ける。その後ろでは初霜がなぜか旗を振ってがんばれと応援している。あの人はどうやら長門以上に厄介な人物らしい。
逃げられないとわかった以上、翔輝は諦めた。背中にすさまじい殺気を感じたが、この際は無視しよう。
「じゃ、じゃあこっちの頬にね」
翔輝は少し屈んで磯風に朱色に染まる頬を差し出す。すると、磯

風は一度深呼吸して覚悟したような瞳で見詰める。そして、
「――え？」
磯風は翔輝の両頬を両手でしっかりと掴むと、無防備なその唇に自らの柔らかな唇を押し付けた。
辺りが、一瞬にして沈黙した。あまりにも突然の事で、大和や雪風も言葉を失っているからだ。
一方、いきなり唇を奪われた翔輝は、甘いキスの味に気を失いそうになる。それを繋ぎ止めているのはこの甘さが先程彼女が食べていたチョコレートのものだというわずかに残る冷静さであった。
顔を真っ赤にしながら磯風はしばし翔輝とキスをした後、そっと離れた。
メガネがずれて呆然とする翔輝の前で、磯風は一度メガネのブリッジを上げて冷静さをアピールする。
「これでいい？」
磯風は後ろに立つ初霜に問う。だが、初霜も目の前で起きた事態にフリーズしていた。まさか唇同士のキスとは思っていなかったのだ。
「え、えっと磯風？　なぜいきなりこんな暴挙を？」
いち早く復活した初霜は混乱しながらも磯風に問う。すると、磯風は頬を赤らめたままポケットから何かカードを取り出した。それは――
「そ、それは長谷川翔輝ファンクラブの会員カードッ！？」
いち早く反応したのは大和。その手にはなぜか磯風と同じカードが。ちなみに雪風の手にもおずおずとカードはあった。それを見て、翔輝は頭を抱えた。
「な、何してんだお前ら・・・」
「ま、まさか磯風、あなたも会員だったなんて・・・ッ！」
「姉さん、黙っててごめんなさい。でも、私も本気だから」
そう言って磯風は姉に向き直る。すると、横にいる大和が激怒する。

「だからっていきなり、きききキスはないでしょうッ！？」
「チャンスだから」
「何よチャンスってッ！？　私は会員ナンバーが十番台なのよッ！？」
「わ、私も十番台だよ！」
そう言う二人のカードの番号は大和が《１０》で雪風が《１５》だ。だが、磯風はそんな二人を見て小さな笑みを浮かべた。
「甘いですよ長官、そして姉さん。私は――」
磯風は自らのカードを見せ付けた。そして、その番号を見て二人は絶句する。そこには、驚異的番号《３》の数字があった。夢の一桁、しかもベスト３以内という破壊的なものだった。ちなみにかつて武蔵は《１》番を保有していた。これは彼女が立ち上げた組織だからである。
ここまでの流れで、磯風が驚異的な翔輝のファンだという事が判明した。
「し、知らなかった・・・全然気がつかなかった」
「私は姉さんがうらやましかった。憧れの長谷川様に親しいあなたが」
「磯風・・・」
「でも、私は姉さんを越えた。憧れの長谷川様とキスした。もう私は負けないから」
メガネの奥の瞳はいつにも増して鋭い。その刃のような鋭利な瞳に雪風は恐怖すら覚える。だが、大和は納得できない。
「い、いくらあなたが熱狂的な少佐の信者だとしても、いきなりキスなんて違法行為よ！」
「そうでしょうか？　今まで散々私達が崇拝する長谷川様を独占していた罪。これは万死に値すると思いますが」
「な、何なのよこの子ッ！　雪風！」
大和は雪風に迫るが、雪風はあまりの展開の速さに混乱に陥っていた。

ちなみに彼女は以前伊勢と翔輝のデートの際、一騎当千の勢いで防衛側の艦魂を蹴散らしていた。仕事や翔輝に直接甘える大和達は、そんな彼女の存在に全く気づいていなかったのだ。

「あ、あの長谷川さん？　大丈夫ですか？」

涼月が硬直している翔輝に声を掛ける。その声に、翔輝はようやく我に返る。

「あ、えっと・・・」

翔輝は目の前にいる長い髪に額のちょっと上に白いリボンを付けたかわいげな少女を見る。先程の磯風の突然のキスにすっかり混乱している頭は、彼女の名前を忘れてしまう。

「涼月です。第四一駆逐隊所属、秋月型駆逐艦三番艦『涼月』の艦魂です。お忘れですか？」

泣きそうになる涼月に、翔輝は慌てて首を横に振る。

「い、いや違う！　そ、その磯風のあれでちょっと混乱してて！」

「い、いいんです！　わ、私あんまり目立たないし、影薄いし、冬月を従えなくて姉失格だし、何をやってもダメですから・・・」

「いやいやいや！　そんな事ないよ！　涼月だっていいところはあるって！」

「ど、どこですか？」

翔輝の言葉に、涼月はすがるような瞳で翔輝を見詰める。上目遣いの薄っすら涙が浮かぶクリッとした瞳がそのかわいさを爆発させる。

翔輝は少し照れながらぼそりと、

「・・・そ、そのリボンとか」

「え？」

その瞬間、二人のまわりに桜色の雰囲気が漂う。また新たな恋の予感。そんな気配に敏感に反応したのはもちろん――

「何してるですかぁッ！」

「ちょっとッ！　姉さんに近づくな鈍感色男！」

二人の間に飛び込んできたのは大和と冬月。珍しい組み合わせだ

なぁと思いながらも、一体なぜ彼女達が怒っているのかわからない。特に冬月の最後のセリフは意味不明だ。
「姉さんから離れろッ！　近づくなッ！　そして雪風の所に行け！」
「ふ、冬月！　ちょっと押すなって！」
涼月の前に立つと、冬月は威嚇するように睨み付けてくる。その後ろにいる涼月はあわあわとしている。
一方、冬月の言葉に若干傷ついている翔輝は、
「あ、あのさ、冬月って、僕の事嫌い？」
「そんな訳ないでしょ」
「そ、そっか。良か――」
「大嫌い」
翔輝撃沈。
「少佐！　お気を確か――ごぶぅッ！？」
「長谷川少佐ぁッ！　大丈夫ですか――って、冬月ぃッ！？」
がっくりと膝を着いてすさまじく落ち込む翔輝。そんな彼に慌てて駆け寄る大和と雪風だったが、大和は冬月の踵落としを受けて撃沈。雪風も慌てて急停止する。
一方、大和の背中に片足を乗せて腕を組む冬月はいきなり急停止した雪風を見て大きなため息をする。
「ちょっとぉ、せっかく私がフォローしてあげたのに何で行かないのよ」
「大和司令に何て事をぉッ！」
あわあわと恐怖する雪風に、冬月は額に手を当ててため息する。
「今がチャンスじゃない。私はそこの人間は好きにはなれないけど、親友のあんたが好きだっていうなら、応援してあげるわよ」
「冬月・・・」
「あんたは少しわがままになってもいいのよ。今がそのチャンスだから」
「冬月――ありがとう」
満面の笑みを浮かべて礼を言う雪風に、冬月はぽっと頬を赤らめ

てプイッとそっぽを向く。その素直じゃないところもまた、彼女らしい。
「う、うるさいわね。礼なんていらないのよ」
「でも、ありがとう冬月」
「――わかったから。さっさと行きなさい。あんたが遅いから先を越されたわよ」
「え？」
冬月の言葉に驚いて振り返ると、倒れている翔輝のまわりには磯風と涼月が集まっていた。
「長谷川様！　大丈夫ですか！？」
「ごめんなさい！　バカ妹がとんだご無礼を！」
「あ、うん。大丈夫・・・」
起き上がった翔輝は苦笑いしながらずれたメガネを正す。それを見て、磯風と涼月は安堵の息を漏らす。
「良かったです。あぁ、長谷川様ぁ・・・」
「磯風！　何で抱き付く必要があるんだよッ！」
「あ、あの、長谷川少佐。こんな時に何ですが、その・・・リボン・・・似合ってますか？」
「え？　あ、うん。すごく似合ってる、と、思うけど」
「ほ、本当ですか？　う、嬉しいですぅッ！」
「だから抱き付くなぁッ！　磯風は何で泣いてるのぉッ！？」
「・・・憧れの、長谷川様に触れられて・・・感激です！」
いつの間にか新たなキャラに囲まれる翔輝。彼の艦魂（女の子）を集める能力はすさまじい事この上ない。かつて手相占いですさまじい女難の相が出ていた翔輝。これはもはや宿命としか言いようがない。
その時、今まで倒れていた邪神が覚醒した。
「きゃあッ！」
「少佐ぁッ！　一体何をしてるですかぁッ！」
上に乗っていた冬月を吹き飛ばして起き上がった大和はものすご

い勢いで翔輝に迫るとその胸倉を掴んだ。
「ちょ、ちょっと大和ぉッ！」
「大和長官。長谷川様に乱暴は――」
「黙ってなさいッ！」
すさまじい怒号に、磯風と涼月は慌てて離れた。残されたのは翔輝と大和。そんな二人を見詰めてため息する冬月と霞、不安げに見詰める磯風、雪風と涼月、朝霜はあわあわと震え、矢矧は口元に小さな笑みを浮かべ、初霜と浜風は大笑いしている。
顔を真っ赤にして激怒する大和は恐ろしい瞳で翔輝を睨みつける。
「少佐は一体どれだけ女ったらしなんですかッ！」
「べ、別にそんなつもりじゃ・・・ッ！」
「そんなつもりがないから余計厄介なんですッ！　無自覚ほど恐ろしいものはありません！　もっと自覚を持ってください！」
「わ、わかったから、そんなに怒らないでよぉ・・・ッ！」
「私がいつもどれだけ辛い思いをしているか、わからないんですか！？」
「え？」
大和の言葉に、翔輝は頬を赤らめて固まる。そんな彼の異変に自分が言った事を思い返して大和も顔を真っ赤にする。
「あ、その、えっと・・・ッ！」
「大和・・・お前・・・」
「少佐・・・私・・・少佐の事・・・」
「大和・・・」
「あー、盛り上がってる所悪いんだけど。こういう事はできれば二人っきりの時にお願いしたいんだけど」
困ったような笑みを浮かべながらの初霜の言葉に、大和は顔をさらに真っ赤にして慌てて離れる。翔輝も慌てて大和に背を向けるが、その頬はいつになく赤い。
一方、雪風と磯風はかなり怖い目で二人――特に大和を見詰めている。涼月も頬を膨らませてプイッとそっぽを向いている。初霜は

そんな彼女達を見て苦笑いしながら背を向けている翔輝に近づく。
「ねぇ長谷川君」
「は、はい？　何ですか？」
「長谷川君って、ロリコン？」
「・・・何でみんなそう思うんですか？　僕は正常です」
「そう？　長門さんは長谷川君がロリコンだって言ってたけど」
「・・・長門さん、今度会ったら本気で怒ろう」
翔輝はそんな決意を胸に立ち上がった。振り返ると、大和はいまだ顔を真っ赤にしてしゃがみ込んでいる。
「あ、あのさ大和。その、えっと・・・」
「知らないです！　私は何も知らないですぅッ！」
大和は真っ赤な顔で両耳を塞ぎながら走って部屋を出て行ってしまった。残された翔輝は呆然とし、初霜は「王様ゲーム、どうしよう？」と本気で困っていたし、朝霜はどうすればいいかあわあわとし、雪風と磯風、涼月は呆然としている翔輝を心配して近づき、霞と矢矧はお互いに口元に笑みを浮かべてお酒を飲み、浜風は大笑いしていた。

出撃に備えて宴会は二時にはお開きとなり、艦魂達は自艦に戻った。
磯風や雪風の攻撃を避け続けてなんとか生き残った翔輝は少し疲れたように肩を叩いて自分の部屋に戻った。すると、翔輝のベッドの上に敷かれた掛け布団が膨らんでいた。それを見て翔輝は小さな笑みを浮かべる。
「大和。そこはお前の布団じゃないぞ」
翔輝はそっとベッドに腰掛けると膨らむ布団にそっと手を置いた。
「あ、あのさ大和。さっきの事なんだけど・・・」
少し照れたように話を始める翔輝の言葉に、布団がビクリと震えた。きっとこの中にいる子は顔を真っ赤にしているだろう。そんな事を想像し、翔輝は微笑むと赤くなった頬を掻く。

「その、ごめんね。大和にそんな辛い思いをさせちゃって。僕がいつも無自覚だから、本当にごめん。でもさ、不謹慎かもしれないけど、大和が僕の為に不安になっていたって聞いて――ちょっと嬉しかった」

照れながら言うと、ゴソゴソと布団の中で何かが動いた。次いで布団からのそりと出て来たのは、顔を真っ赤にした大和であった。

「あ、少佐・・・あう・・・」

顔を真っ赤にしながらもじっと翔輝の顔を見詰める大和。そんな彼女に、翔輝もさらに顔を赤くなり、照れ隠しの笑みを浮かべる。

「な、なんか、大和と一緒にいてこんなにドキドキするのって、初めてだな」

「むぅ、今までは全然ドキドキしていなかったんですか？」

頬を膨らませて怒る大和に、翔輝は苦笑いする。

「いや、そういう事じゃないよ。ただ、今日は特別だなぁって」

「・・・そうですね、これが最後になるかもしれないんですから」

「そうだね。明日は早い。もう寝よう」

「・・・はい」

すると、大和はもじもじとする。何かを言いたそうだと感づいたが、翔輝は何も言わずそんな彼女を見詰め続ける。

顔を真っ赤にしたまま、大和は口を開いたり閉じたりを繰り返していたが、ついに決意したのか真剣な瞳で翔輝を見詰める。

「きょ、今日はご一緒に寝てもいいですかッ！？」

大和の渾身のお願いに、翔輝は「え？」とつい口から言葉が漏れて頬を赤らめる。本当なら断るはずであった。だが、大和の瞳があまりにも弱々しく、今にも壊れてしまいそうだったので、翔輝は仕方なくといった具合にため息しながらうなずく。

「わかったよ」

「ほ、本当ですか！？」

「本当だから。早く寝よう」

「はいッ！」

大和は満面の笑みを浮かべて布団に横になった。翔輝も上着を脱いでメガネを置くと、静かに横になる。
掛け布団を掛け、二人は横に並んで眠る。
互いに照れているので何も言葉を発しない。翔輝はこのまま寝てしまおうとしたが、そんな彼の手をそっと大和の手が握った。
「大和？」
振り向くと、そこには柔らかな笑みを浮かべる大和がいた。
「えへへ、こうしていると少佐を近くに感じられて嬉しいです」
「そ、そう？」
「はい。少佐ぁ」
大和は笑みを浮かべながら翔輝に抱きついて来た。
「ちょ、ちょっと大和！」
「逃げないでくださいよ――今日が最後かもしれないんですから・・・」
「大和・・・」
翔輝の腕の中、大和は一瞬悲しげな表情を浮かべたが、すぐにいつもの彼女らしい柔らかな笑みに戻る。
「だから、今日くらいは少佐をすぐそばに感じていたいんです」
そう言って抱きついて来る大和に、翔輝は何を言うでも拒むでもなく、そっと抱き締めた。
しばし二人は黙って互いの温もりを感じていた。
大和は内心、このまま出撃が中止になる事を願った。
確かに彼にはそばにいてほしい。だけど、このまま出撃したら彼を死なせてしまう。大好きな大切な人を、殺してしまう。そんなのは嫌だった。
でも、そばにいてほしい。
矛盾する想いに、大和は苦しむ。
そんな彼女の想いを感じ取ったのか、翔輝はそっと彼女を抱き締める。顔を上げると、そこにはいつもの彼の優しい笑みがあった。
「少佐・・・」

「僕はお前のそばにいるから、例えそれで僕が死んでも、お前のせいじゃない。僕は、ずっとお前のそばにいるから――泣かないでよ」
「・・・え？」
そこで初めて、自分が涙を流していた事に気づいた。
ポロポロと涙が頬を流れ、白いシーツにいくつもシミを作る。
「ど、どうして・・・？」
「さぁ？　僕にはわかんない。でも――」
翔輝はそっと、涙する大和を抱き締める。
「僕には、これくらいしかできないから・・・」
彼の温もりに安堵したのか、大和は我慢できずに泣き出した。
「少佐・・・ひぐぅ・・・うぅッ・・・少佐ぁ・・・ッ！　私・・・まだ・・・死にたくないです・・・ッ！　もっと、少佐と一緒に・・・いたいですぅ・・・ッ！」
泣きながら自分の胸の想いを吐き出す大和に、翔輝はギュッと彼女を抱き締める。
改めて、彼女の華奢（きゃしゃ）な体に驚く。
本体の艦体自体は世界最大の戦艦だ。だが、その艦魂である彼女は、あまりにも弱々しく細い。この白くて小さな体には、日本国民一億人の想いと、彼女の想いが渦巻いている。
こんな、普通の女の子が、死地へ行かなければ行けないのだ。
彼女を助けたい。でもそれは無理だ。
戦艦『大和』は沖縄へ特攻する。その『大和』の艦魂である大和は決して逃げる事はできないのだ。だからこそ、翔輝は決めていた。
逃げられない彼女の為に、自分はせめて彼女を最後まで支え続けると。
――でも、
「・・・うぅっ・・・ひぐぅ・・・死にたく・・・ないです・・・ッ！」
腕の中で必死に《生きたい》と願う彼女を見ていると、涙が出てきそうになる。

でも、泣いてはいけない。
彼女の隣に立つ為には、彼女に自分の弱い一面は見せてはいけないのだ。
――だから。
翔輝は無言で彼女の華奢な体を抱き締める。
自分を押し殺してでも、彼女には頼れる背中を見せてないといけない。
一瞬、瑠璃や瑪瑙、珊瑚の顔を思い出したが、首を振って忘れる。
もう、彼女達には会えない。
生きて帰ると約束はしたが、その約束は果たす事はできない。
自分は、ただ彼女のそばにいてあげるだけだ。
暗闇の中、泣き崩れる大和を、翔輝はずっと抱き締め続けた。
腕の中にいる愛しい彼女の悲しみ、苦しみを、せめて、この腕で少しでも和らげる為に――

しばし泣いていた大和だったが、疲れたのかそのまま寝てしまった。そんな彼女を抱き締めながら、翔輝は静かに涙を流した。
こんな小さな少女に死の覚悟をさせているのに、自分は何もできない。
自分の無力さが、悔しくて仕方がなかった。
夜が更けても、翔輝の涙は止まる事はなかった・・・

その頃、霞は自らの第一主砲の上に立っていた。
長い夜叉のような髪を風に流す彼女の隣には初霜の姿もあった。
だが、その表情にはいつもの明るい笑みはなかった。
水上特攻隊の重鎮二人の表情はどちらも暗く悲しいげなものだった。
「散る桜、残る桜も、散る桜・・・か」
「本当に、これで良かったのかな？」
「良いも何も、我々にできる事はこれだけさ。だがせめて、特攻を

するなら私だけにしてほしかった。大和達のような若者を連れて行くのは、胸が痛い」

「あら、その時はもちろん私も一緒よ？　これでもあなたよりは年上なんだから」

「そうだな・・・」

霞はそう言って小さな笑みを浮かべると、そっと夜空を見上げた。だが、きれいな星空を見上げる霞の瞳は寂しげだ。それは初霜も同じ。その二人の頭の中には先程『大和』の兵員室で見た光景が浮かんでいた。

それは死を間際にして特攻推進派と反対派が酒が回って大ゲンカした時の事、突如入って来た士官がそのケンカを止めた時の事、彼らを止めた士官の言葉だ。

進歩のない者は決して勝たない。
負けて目覚める事が最上の道だ。
日本は進歩という事を軽んじ過ぎた。
私的な潔癖や徳義にこだわって、本当の進歩を忘れてきた。
敗れて目覚める、それ以外にどうして日本が救われるか。
今目覚めずしていつ救われるか。
俺達はその先導になるのだ。
日本の新生に先駆けて散る。
まさに本望じゃないか。

その言葉に、霞と初霜の心打たれた。
彼の言葉には強い想いと、強い決意が込められていた。
自分達は新たな日本の為に散る。
そう思うと、自分達の死にも何か意味があるような気がした。
だが、その死に大和達のような若者を巻き込みたくはなかった。
でも、それは変えようがない事実で、どうしようもない。
「霞・・・」

そっと、初霜はハンカチを差し出してきた。そこで初めて霞は自分が泣いている事に気づいた。片方しかない瞳から、ポロポロと涙が流れる。

「情けないな・・・」

「そんな事ないわよ。それに、大和達は強い子。きっと、大丈夫よ・・・」

「そうだな・・・」

言葉ではそう言っても、悲しみは晴れない。

そんな霞を、初霜はそっと抱き締めた。

何を言うでもなく、ただ抱き締める。たったそれだけの事なのに、霞は自然と安堵していた。

親友の腕の中、霞は静かに一筋の涙を流した。

夜の星空を、矢矧は防空指揮所から静かに見上げていた。

明日は出撃である。こんな穏やかな海と星を見れるのは、今日が最後かもしれない。そんなふうに思うと、ふと哀愁に心が染まる。

本当は自分だって死にたくない。でも、艦魂である自分には何も変えられない。何も起こせない。

艦魂である自分は無力だ。

そんな悲しく夜空を見上げる。

どこまでも澄み切り、星々が輝く夜空は、幻想的以外何物でもない美しさを放っている。

矢矧はいつまでもそうして見詰める。

「こんな所で何やってるんですか？」

その声に振り返ると、そこには朝霜が立っていた。その横には浜風と磯風の姿もある。

「どうしたのよ、こんな時間に」

「それはこっちのセリフよ。こんな寒空の下にいたら艦魂と言えど風邪引いちゃうわよ？」

矢矧の顔を覗き込んで浜風は心配する。

「そうですよ。温かい飲み物でも作りましょうか？」朝霜は優しげな笑顔で言う。
自分を心配してくれる信頼できる部下にして頼れる先輩を見て、矢矧はじーんと目頭が熱くなった。
これから共に死地へ行く仲間の温かさが、何よりも彼女の冷え切っていた心を暖めてくれた。
「ありがとう」
「お礼なんていいからさ。さっさと入ろうよ」
「コーヒーがいいですか？　それとも紅茶ですか？」
そう言って冷えた自分の手を握る二人。冷え切っていた手は、二人の温もりで温まる。その時、首に何かが掛けられた。驚いて振り返ると、そこには磯風が立っていた。
「磯風・・・」
「今日は寒い。それをあげる」
矢矧は自分の首に掛けられた白いマフラーを見て、小さく微笑んだ。
「ありがとうございます」
――そうだ。自分は一人じゃない。共に戦う仲間がいるじゃないか。
矢矧は三人の温かさに、目頭が熱くなった。
死ぬのは怖い。
しかし、それでも共にいてくれる仲間がいると思うだけで、その恐怖は幾分かでも和らぐ。それだけで十分だった。
艦内に入る矢矧の右手を浜風が、左手を朝霜に引かれ、後ろからは磯風がトコトコとかわいく歩いてく来る。
自分を励ます仲間の想いに、矢矧はそっと涙した。
一方その頃、『雪風』の一室では雪風と冬月が一緒のベッドで横になっていた。一人では寂しいという雪風に、親友である冬月が付き添う形となった。

あれだけ騒いだのに全く眠れない冬月。鉄の天井を見詰めながら、静かにため息する。

まだ自分は一年も生きていない艦魂だ。隣にいる親友は、すでに五年も生きている。それだけ、この戦争を必死に戦い抜いて生き残ってきたという事だ。

第二水雷戦隊を彼女と組んでから、自分達は親しい仲になった。でも自分は、彼女に比べたら全然新参者だし、駆逐艦の墓場と言われたソロモン海での死闘も経験した事はない。本当なら、彼女の親友だなんておこがましいかもしれない。それでも、彼女はこんな自分に笑顔を向けてくれた。そんな彼女と、ずっと一緒にいたいと思った。だから、こうして彼女に頼られる事は本当に嬉しい。

冬月は横で自分に背を向けているそんな親友を見る。

「ねえ、雪風」

「・・・何？」

声を掛けると、小さな声で雪風が答えた。どうやら彼女も自分と同じで眠れないらしい。

「眠れないの？」

「うん。明日死ぬかもしれないのに、寝れないもの」

雪風の言葉に、冬月は隣のベッドで気持ち良さそうに眠っている涼月を見詰めた。周りの布団には浜風や磯風、朝霜が眠っていたが、今はなぜか皆いなくなっている。

「あれはバカって事？」

冬月は己が姉を見詰めて苦笑いする。

「疲れてるんだから、仕方ないよ」

「あなたの言ってる事が全然わかんないんだけど」

「そっかな？」

「そうだよ」

いつの間にか向き合った二人は小さく微笑み合った。

「私達、まだ出会って一年も経ってないのに、明日は最後の出撃になるかもしれないなんて、信じたくないね」

悲しそうに言う雪風に、冬月は小さく笑う。
「まぁ、私は一年も生きてないけどね」
「・・・そうだよね。でも、それも明日まで、か」
落ち込む雪風の頭を冬月はそっと撫でる。
「何言ってるのよ。雪風は幾多の戦場を翔けて来たんでしょ？　そこで死んでればそこで終わりだったのよ？　今度が特別な訳じゃない」
冬月の言葉に、雪風は小さく首を横に振る。
「特別だよ。だって、今までの戦いは《生きる》事を目的に戦ってきた。必ず生きて帰ってくる、それを信じて戦ってきた。でも、今回は違う。今回の戦いは《死ぬ》事が目的なんだもの。私達は、連合艦隊司令部から――祖国から見捨てられたのよ」
雪風は悲しそうに顔を伏せる。無理もない。彼女は今まで祖国の為に戦ってきた。なのに、その祖国に死んで来いと言われたのだ。信頼していた分、ショックも大きい。
自分よりもずっと生きて戦ってきた彼女は、薄っすらと涙を浮かべている。
その小さな体の中に、一体どれだけの苦しみを抱いているのだろう。
きっと計り知れない。
多くの姉妹を失いながらも、必死に生きて戦い続けた戦姫は、小さく肩を震わせている。そんな肩を、冬月がそっと掴む。
「何泣いてるのよ。しっかりしなさい。あなたは私達の先輩でしょ？」
冬月の言葉に雪風は小さく首を横に振る。
「私、情けないもん。今までだって、ずっと姉さん達や大和司令の後ろにいただけ。私の力で切り開いた事なんて、一つもないもの」
「雪風・・・」
「私、また足手まといになっちゃうのかな？」
「そんな事ないわよ。あなたは戦乱の中を生き残ってきたじゃない。

もっと自信を持って」
冬月の言葉にも、雪風はうなずかない。
今の彼女は激戦の中を生きてきた歴戦の戦士ではない。ただ迫る死に怯える小さな少女でしかない。
そんな雪風を、冬月はそっと抱き締めた。
「冬月？」
「そんな悲しい事言わないでよ。あなたは私の親友でしょ？」
「・・・冬月」
冬月の優しい言葉に雪風は今にも泣きそうな顔をする。そんな彼女に見詰められ、冬月は照れ隠しでそっぽを向く。
「な、何よ。私じゃ不満だって言うの？」
顔を赤らめながら不機嫌そうに言うと、雪風は慌てる。
「そ、そんな事ないよッ！　私冬月が一緒にいてくれて嬉しいもん！」
「さーて、それは本心からかな？」
「本心だもんッ！　本気だもんッ！」
「うるさいってば。姉さんが起きちゃうわよ」
冬月の言葉に慌てて雪風は口を閉じて涼月を見詰めるが、涼月が気持ち良さそうに寝息を立てているのを確認して安堵の息を漏らす。
「良かったぁ・・・」
「後先考えない所は雪風らしいよね」
「むぐぐ・・・」
反論できずにいる雪風を見て冬月は小さく笑った。
「まあ、雪風の気持ちとは関係なく、私はあなたを親友だと思ってるから」
冬月の言葉に、もう雪風は肩を震わせて泣き出した。
「ふゆぢゅきぃ・・・」
もう今にも抱き着いて来そうな雪風に冬月は顔を赤らめて視線を外す。
「まあ、私が勝手に思ってるだけだけどね。迷惑なら正直に言って

よ」
「迷惑なんかじゃないよッ！　どうして冬月はそう素直じゃないの！？」
「しーッ！」
あまりの大声に冬月は慌てて指を口元で立てると、雪風も慌てて口を塞ぐ。疲れている涼月はぐっすりである。
胸を撫で下ろす雪風は同じくほっとしている冬月を見て小さく笑みを浮かべた。
「ありがとう」
「な、何が？」
「私を元気付けてくれてるんでしょ？」
「そ、そんなんじゃないわよ」
顔を赤らめながら言う冬月に雪風は優しく微笑む。
「あのね、冬月みたいな人をなんて言うか知ってる？」
冬月は首を傾げるが、少しだけ興味が沸いて、聞いてみる。
「・・・どう言うの？」
「ツンデレ」
「私が、いつ、どこで、あなたにデレたのよ！？」
今度は冬月が怒鳴る番だった。
顔を真っ赤にさせて怒る冬月の口を雪風が慌てて塞ぐ。
「うるさいよ」
「ご、ごめん・・・」
そんな可愛らしい反応をする冬月を、雪風は嬉しく微笑む。
「これからも、ずっと親友でいようね」
真正面からそんな事を言われ、冬月は視線を外すが、一度だけ雪風の顔を一瞥し、ゆっくりとうなずいた。
「う、うん・・・」
その返答に雪風は嬉しそうに冬月に抱き付いた。
明日死ぬかもしれないというのに、結局この二人も楽しげに話した後、睡魔に襲われて眠ってしまった。

第十四章　第三節　最後の夜　仲間と共に・・・（後書き）

生きたいと願う大和。しかし、その願いは決して叶えられる事はない。それが、艦魂の運命だから。
霞と初霜の古参としての辛い想い。
矢矧の不安を包み込む磯風、浜風、朝霜。
親友の言葉に元気をもらう雪風。
実はツンデレ疑惑がある冬月。
爆睡中の涼月。
そして、泣き崩れる大和をいつまでも抱き締め続ける翔輝。
様々な想いが交差しながら、非情にも物語は進んでいきます。
とまぁ暗い話題はここまでにして。
いやぁ、昭和の軍艦の中で王様ゲームとは、僕もよく思いついたものですよ（僕はやった経験はありませんが）
もう初霜の策略にバンバンはまってどんどんフィーバーしていくのは書いてて楽しいですね。
さらに磯風の突然の翔輝へのキスとか、彼女が熱狂的な翔輝ファンという事実。
冬月達の雪風の恋を叶えちゃおう作戦とか、盛りだくさんな内容でした。
前半のバカ騒ぎと後半の悲痛な想いが、この物語の終わりが近づいている事を表してますね。
次回はついに出撃となります。
美しい桜咲く故郷に見送られて出撃する大和達。その先に待つのは・・・
また次回をお楽しみに。

伊勢「なぁ、作者はん。ほんまにうちら出番はないんか？」
作者「そうだね。ここから先は十勇士しか出ないから、悪いけど伊

勢達の出番はなし」
葛城「主殿に会いたい」
隼鷹「お兄ちゃんに会いたいよぉッ！」
作者「それはもっと無理」
榛名「テメェいい加減にしろ！　俺達の出番はもうないだぁッ！？
　このまま呉で敵機の空爆を受けて大破着底しろってのか！？
作者「いや、あんまり先の史実は言わないでね。一応ネタバレって言われるから」
日向「いいんじゃない？　どうせ適当なんだし」
作者「何て事を言うんだ！　僕はがんばってるんだぞ！」
榛名「いいじゃねぇか。どうせ今架空戦記っぽいのを書いてるんだからさ」
作者「ほんとにネタバレになるからやめて！」
長門「まあまあ、作者君も大変なんだから」
伊勢「な、長門はん！？　何でここに！？　横須賀にいるんやなかったの！？」
長門「うーん、なんかこの空間ってそういうのなしみたいね。ほら、作者君だって埼玉に住んでるんだし」
作者「まぁ、そうですね」
長門「あ、そういえば東京の大学に合格したんだよね？　おめでとう」
作者「あ、ありがとうございます！」
伊勢「ほんまぁッ！？　良かったなぁ！」
日向「おめでとう！」
作者「いやぁ、嬉しいです。がんばったおかげですね」
榛名「一般入試が嫌で逃げたんだろ？」
葛城「周りはまだ受験生。邪魔しないで」
隼鷹「これだから作者くんはいつも英語が悲惨なんだよ」
作者「・・・あのさ、君達も少しは喜んでよ。これで小説に力入るんだしさ」

日向「えー？　だってモンハン作品の方が人気あるんでしょ？」
作者「・・・だから、これ以上僕を追い詰めないで」
長門「まあまあ、作者君も無事に大学合格したんだから、もっと喜びましょうよ」
作者「な、長門さん・・・ッ！」
隼鷹「ねぇ、だったらこれから先のあとがきこんな感じでいくのはどう？　ほら、独立機動艦隊シリーズはこんな感じだよ？」
榛名「あぁ、あの爽快なほどアメリカをボコボコにする作品か。あれは読んでて清々しいぜ」
日向「空母数百隻撃沈って、すご過ぎだよね」
伊勢「あら、護衛戦艦『神龍』もいいわよ。あぁ、向こうの私と会ってみたいなぁ」
葛城「向こうの私、どこか似てる」
日向「それはきっとパクったのね」
作者「参考にしたと言ってください！　僕の方は積極性があります！」
隼鷹「でも大和かっこいいよね。なんか金剛お姉ちゃんみたいだし」
長門「どちらかって言うと神龍ちゃんが大和っぽいわね。まぁ、向こうの方がかわいいけど」
榛名「向こうの俺も勇ましいらしいからな」
長門「あら？　向こうの榛名はあなたよりは礼儀正しいわよ？」
榛名「殺すぞ」
伊勢「せやけど、いつの間にかいっぱい艦魂作品ができたなぁ。草薙先生に伊東先生。《新太平洋戦争》の零戦先生とか、大和も三種類もいるしなぁ」
日向「私は凛ちゃんに会ってみたい！」
伊勢「独立機動艦隊の戦艦『紀伊』の艦魂やねぇ。あの真名ってええなぁ」
作者「すみませんね。そこまで考えが及ばなくて」
伊勢「ええんよ。うちこの名前気に入ってるし」

榛名「しかし、このままだとこのシリーズ、紀伊か神龍に地位を奪われるんじゃないか？」
作者「・・・薄々感じてます」
日向「護衛戦艦『神龍』の方がおもしろいし」
作者「・・・」
伊勢「こ、こら日向！　作者はん落ち込んで出て行ってもうたやないか！」
葛城「どうするのこれ？」
隼鷹「うーん、別にいいんじゃないこのまま終わっても」
榛名「そうだな。あぁ、読者のみんな。今紹介した独立機動艦隊『紀伊』シリーズと護衛戦艦『神龍』は読んでおけ。これは必読だ」
長門「作者君の台本にも紹介したかったみたいね。うふふ、律儀なのね」
榛名「まぁ、いよいよ大和達が特攻へ向かうらしいが、どうなるかわかってるけどがんばってほしいな」
長門「そうね。早く戦争なんて終わってほしいわよ」
葛城「主殿がんばれ」
伊勢「ほんじゃ、また次回どこかで会える事祈ってるでぇ！」
隼鷹と日向「バイバーイ！」
？？「・・・」
伊勢「なぁ、向こうの陰から武蔵や陸奥はん達が恨めしげに見てるで？」
長門「まぁ、あの子達はもう物語から脱落しちゃったし、とりあえず作者君に相談しましょう」
伊勢「せやな」

第十四章　第四節　桜花爛漫　特攻の海へ旅立つ十勇士（前書き）

ついに特攻へ出撃する大和達。
二度と帰れぬ事を決意した大和達は、互いを信じ合い、祖国を守る為、己が責務を果たす為に旅立つ。
その先陣を翔ける戦姫大和。その隣に立つのは彼女が最も信頼し、愛している少年――翔輝。
二人の物語はこれで終わってしまうのか。それとも・・・
大和達の最後の戦いが、始まろうとしていた。

第十四章　第四節　桜花爛漫　特攻の海へ旅立つ十勇士

翌日、鉛色の空の下、第二艦隊こと水上特別攻撃隊の各艦は出港用意が忙しく、翔輝も駆り出されて休憩している暇もなく一日が流れた。

そして、ついに出港の時刻になった。

戦艦『大和』の甲板には多くの兵達が集まっていた。皆、もう戻って来れぬ祖国を目に焼き付けようとしていたのだ。そんな彼らが見詰める先には、満開の桜が大地を桜色に彩っていた。今年の桜は遅咲きだったおかげで、最後の桜を見る事ができた。

満開の桜はその淡い桜色で沿岸を美しく染める。風が吹くたびに枝が揺れて桜吹雪が舞う。その花びらは海上に浮かぶ第二艦隊の各艦の甲板にもヒラヒラと舞い落ちる。

桜吹雪に見送られながら、死地へ旅立つ。

まるで、日本という国そのものが、自分達に別れを告げているかのようで、目頭が熱くなった兵は多かった。

皆、祖国を、最期の桜を見ようと用のない者は甲板に集まってその景色を見詰める。艦橋にいる森下や有賀、伊藤もその景色を見詰め、祖国に別れを告げる。

そして、多くの兵達の集まる『大和』の甲板の一角に十三人の少女達と一人の青年が立っていた。水上特別攻撃隊本隊である大和達と、途中まで護衛する事になっている駆逐艦達だ。

ささやかな桜吹雪の中、大和はそっと淡い彩を見せる桜を見詰める翔輝を見る。メガネの奥の瞳が赤い。その理由はきっと・・・

フルフルと、大和は首を横に振る。

聞いてはいけない。そんな気がした。

大和は桜を見詰める翔輝を一瞥し、後ろに立ち並ぶ矢矧、初霜、霞、雪風、浜風、磯風、朝霜、冬月、涼月を見詰める。その奥には一時的に離れていたが結局合流した花月達が立っている。彼女達も

一応共に出撃するが、豊後水道までの護衛で、その先からは反転して離脱する予定である。それは石油不足と乗組員の錬度の低さが一番の原因だ。

大和は最期の桜を見詰め、どこか悲しげな表情を浮かべている仲間達に小さく微笑むと、一人一人の肩を叩いた。皆、そんな彼女をじっと見詰める。

大和は静かに軍帽を被り直すと、自分を見詰める雪風達に真剣な瞳を向ける。

「いよいよ出撃よ。各員、祖国の姿を目に焼き付けなさい」

その言葉に、雪風達は桜景色に包まれる愛する祖国をしっかりと目に焼け付ける。これが最後になる事を思って・・・

翔輝はしばし桜を眺めていたが、振り返り、そこに立つ十人の少女達を見回す。

誰もが皆うら若き乙女ばかりだ。中には見た目小学生くらいにしか見えない子もいる。それはそうだろう。一年も生きていない艦魂もいるのだから。

こんな子達が、死の出撃をしなければいけないと思うと、胸が痛い。だが、

「少佐。共に行きましょう」

「長谷川少佐、一緒に行きましょう」

「長谷川様」

「長谷川さん、がんばりましょう」

自分を囲む大和、雪風、磯風、涼月を見回す。彼女達はこれから死地へ向かうというのに、そんな素振りも見せずに自分に笑顔を向ける。なんて強い子達なのだろう。

そうだ。彼女達は女の子である前に帝国海軍の軍人なのだ。

そして自分も、そんな帝国海軍の軍人だ。ここで自分が情けなくては死んでいった仲間達に申し訳がない。

自分をそっと見詰める大和達を見詰め、翔輝は静かに微笑んだ。

「あぁ、一緒に行こう」

翔輝が差し出した手の上に、大和達は次々に手を重ねる。
翔輝の手の上には十人の少女達の手が重ねられた。
大和は周りを見回し、そして翔輝を顔を見詰め、決意した表情で宣言する。
「水上特別攻撃隊！　必ずや、沖縄を救いましょうッ！」
「十勇士万歳ッ！」
『ばんざーいッ！』
翔輝の掛け声に、十人の少女達は一斉に手を上げた。そんな光景を見詰める三人の少女達。彼女達は今回の作戦は途中までしか参加できない。だからこそ、彼女達の運命を知っているからこそ、余計悲しいのだ。
「姉さん、あの・・・」
花月は姉である冬月の服の裾をちょこんと握る。すると、振り返った冬月はそんな妹の頭を優しく撫でた。
「花月。護衛、頼むわよ」
「姉さん・・・」
冬月の笑みには、どこかいつもと違う何かがあった。
その笑顔に、花月は姉の決意を知る。
ギュッと裾を握る花月の頭を、冬月はいつまでも名で続ける。そんな彼女を見詰め、浜風は雪風に抱きついた。
「ちょ、ちょっと浜風！」
「えへへ、お姉ちゃぁん」
浜風に続いて、朝霜も雪風に抱きつき、雪風は二人の妹に振り回される。だが、その光景はとても優しくて、微笑ましい。
初霜と霞はそんな皆を見詰め、静かに微笑んでいた。
そんな皆を見詰め、翔輝は改めて決意する。彼女達の、彼女の支えになろう、と。
空から降ってきた小さな桜の花びらが、翔輝の肩に静かに載った。
それをそっとつまんで見詰めると、今まで散って逝った仲間達の顔が思い浮かんだ。

――赤城、加賀、蒼龍、飛龍、比叡さん、霧島、陸奥、翔鶴、大鳳、飛鷹、扶桑さん、山城、武蔵、瑞鶴、瑞鳳、水上、最上、金剛さん、滝川、雲龍――

色々な人や艦魂達の顔が走馬灯のように蘇る。

翔輝はそっとメガネを上げると、腰に挿した武蔵の形見である彼女の軍刀の柄をそっと握る。きっと、皆が自分達を守ってくれる。そう思った。

大和はそっと、翔輝の裾を引っ張った。振り返ると、そこには小さな笑みを浮かべた大和が立っていた。一瞬、昨晩見た彼女の涙を思い出すが、首を振って忘れる。

今の自分は、そんな彼女を支えてやる存在。あの姿は、今は自分の胸の内に秘めておこう。

「少佐。そろそろ時間です」

「わかった」

大和の言葉に翔輝は天を仰いだ。連合艦隊最後の出撃という日なのに、空はどんよりと鉛色に曇っていて晴れるような兆候は一切見られない。

甲板にいた兵達は皆艦内に戻り始め、翔輝と大和も艦橋に戻る時が来た。

二人は矢矧達を見詰め、力強く敬礼した。

「出港用意ッ！　次に皆が会う時は靖国で会うと覚悟せよ！　解散ッ！」

大和の言葉に、矢矧達は見事な敬礼をして光に包まれて消えた。

翔輝は隣に立つ大和にそっと手を差し伸べる。大和はその手を笑顔で掴むと、一緒に歩き出す。目指すは艦橋だ。

先を歩く大和は一度振り返ると、満面の笑みを浮かべる。

「少佐！　共に沖縄を救いに行きましょう！」

「あぁ」

翔輝は知っている。

その笑顔の奥に、彼女は生きたいと願っている事を。

翔輝はただギュッと彼女の手を握った。今の自分にできるのは、これくらいしかなかった。

艦橋に戻ると有賀が出港用意を進めていた。その隣には森下、そして伊藤の姿もあった。皆、翔輝と大和の到着に首肯すると、静かに決意した。

――そして、

『錨収納完了ッ！』

兵の声が伝声管を伝わって艦橋に響き、有賀はそれを聞いて司令官席に座る伊藤を見詰める。

伊藤は静かにうなずき、有賀は伝声管に向かって命令した。

「『大和』発進！　両舷前進減速！」

ついに、超巨大戦艦――戦艦『大和』は白波を起こしながらその巨体を動かし出港した。

第二艦隊こと水上特別攻撃隊の戦力は戦艦『大和』以下第二水雷戦隊旗艦・軽巡洋艦『矢矧』、第二水雷戦隊所属・駆逐艦『磯風』『浜風』『雪風』『朝霜』『初霜』『霞』『冬月』『涼月』の十隻と途中まで護衛に務める駆逐艦三隻だけだった。燃料不足でこの三隻の同行を断念せざるを得なかったのだ。

そんな第二艦隊の各艦も当初は特攻なので片道分の燃料しか積まないはずだったが、現場の給油担当者が独断往復できる分の燃料を確保し、第二艦隊全艦に分け与えた。『生きて帰って来れるなら帰って来い』という現場の想いが込められていたのだ。

だが、連合艦隊最後の艦隊にしてはあまりに貧相な艦艇数だった。かつては日本海軍数百隻の頂点に君臨した『大和』も、今では配下もこんな艦艇しか残っていないのだ。

海の向こうへ出撃して行く第二艦隊を見詰め、沿道にいる人々はいつまでも手を振り続けた。まさか彼らが特攻で死地に向かうとは知らずに・・・

だが、せり出した崖の上に立って出港して行く艦艇を見詰める二人の少女と、一人の女性だけは知っていた。

「翔輝様ぁッ！　翔輝様ぁッ！」
「このバカ翔輝ッ！　生きて帰ってきなさいよッ！」
「翔輝・・・」
瑠璃、珊瑚、瑪瑙の三人は、死地へ向かう艦隊にいつまでも手を振り続けていた。その姿は、愛しい彼の瞳には映る事はなかった。

呉を出撃した艦隊は豊後水道手前で三隻の護衛駆逐艦と別れた。
第二艦隊の任務を知っている駆逐艦の乗組員達は甲板に集まって第二艦隊旗艦『大和』へ別れを惜しむかのように帽子を振り続けた。その中にはその駆逐艦の艦魂、花月や他二人の艦魂も涙しながら帽子を振り続けていた。
各艦魂は自艦の甲板の上で、反転して行く三隻の駆逐艦を見送る。そして『大和』の甲板でも、翔輝と大和が手を振っていた。
「これで、本当に十勇士だけになってしまいましたね」
「そうだね。くそぉ、大和を抜いた第二水雷戦隊の十二人にそれぞれ干支を振り分けて十二士を考えてたのに・・・」
「ふふふ、それは残念ですね。私もそれた見たかったです」
翔輝の冗談に、大和は本当に楽しそうに微笑む。その笑みは、これから死地へ向かうとはとても思えないほど明るい。そんな大和に、翔輝はふと問う。
「なぁ大和。これから特攻に向かうけど、怖くはないか？」
こんなのは愚問だ。怖くない訳がない。事実、翔輝だって怖い。大和も、その質問に表情を暗くする。
「あ、ごめん。変な事訊いちゃって」
「――怖くありませんよ？」
「え？」
驚く翔輝に、大和は満面の笑みを浮かべると、そっと翔輝の手を握った。白くて細いその小さな手は、とても優しく、柔らかく、温かい。
「怖くなんかありません。だって、少佐と一緒ですから。少佐が一

緒にいてくれれば、私は怖くありません。どこにだって行けます」
「大和・・・」
「覚悟の上です。それに、もし死んでしまっても悪い事ばかりではありませんよ。だって、そしたら天国にいる陸奥さんや武蔵、瑞鶴にだって会えますから。えへへ、こういう時こそ《ぽじてぃぶしんきんぐ》ですよ」
そう言って笑う大和。その笑みは天使のように優しい。全てを包み込むような、そんなかわいい笑みに、一瞬翔輝はドキリとする。少し赤くなった頬を隠すように彼女に背を向けると照れ隠しに口を開く。
「本当にお前は英語の発音がヘタクソだな」
「ひ、ひどいですよッ！　そんなにヘタじゃないです！」
顔を真っ赤にして怒る大和。そんな彼女を見て、翔輝は小さく笑ってしまう。
「な、何で笑うんですかッ！？」
大和はさらに顔を真っ赤にして怒るが、翔輝は「ごめんごめん」と小さく謝る。
「いや、あまりにもいつもの会話になっちゃってさ。おかしくて――もうすぐ、こんな他愛もない事も、できなくなるんだなぁって思うとさ」
「・・・そうですね」
「大和。一つ言うけど、どれだけ前向きに考えても、死は死だ。死んでしまったら、そこで何もかもがおしまいなんだ。だから、今は生きる事だけを考えろ」
「少佐・・・」
「例え、敵の攻撃でこの『大和』が沈みそうになっても、僕はお前の傍にいてあげるから。もしも無事に海を突破して沖縄に着いて陸地に乗り上げたら、僕は陸戦隊として戦う事になる。でも、僕はそれでも艦からは降りない。お前の前で、お前に土足に乗り込んで来るアメ公を片っ端から斬り殺してやる――お前は、僕が守るから」

そう言って小さく微笑む翔輝に、大和は安堵と不安を感じた。
傍にいてくれるという彼の優しさは嬉しい。でも、甲板の上で、自分の目の前で血まみれになりながら敵兵を斬り殺す彼を想像して、泣きそうになった。
優しい彼が、目の前で自分を守る為に人を殺す姿なんて、見たくない。
そう思うと、それなら海で沈む方がマシであった。
行く途中も地獄。行き着いた先も地獄。
これから先、あとどれくらい彼と一緒にいられるのだろうか？
あとどれくらい、彼とこうして幸せな時間を過ごせるのだろうか？
でもなぜだろう、残り少ない時間だと思うと・・・
「大和？」
大和はそっと彼に抱き付いた。
彼の腕に囲まれ、彼の頼れる胸に体を預け、彼の温もりを感じ、幸せな気分になれる。
残り少ない命。こうして彼と一緒にいられる時間が、今までのどの時間よりもすばらしく思える。
彼はずっと傍にいてくれる。
それだけで大和の不安は消えた。
彼がいれば、自分はどこまでも戦える。
自分は日本海軍が世界に誇る世界最大最強の戦艦にして日本の象徴。そして第二艦隊の旗艦で十人の部下を率いる司令官だ。でも、今だけは違う。
「少佐、ずっと、このまま・・・」
愛する彼の腕に包まれる自分は、今はただ《大和》という、恋する女の子なのだから。
遠くなっていく駆逐艦と桜色に染まる祖国を後にして、二人はいつまでもそうして抱き合っていた。
お互いの存在を確認し合うように、いつまでも・・・

護衛艦隊と分離した水上特別攻撃隊こと第二艦隊は出撃前に各艦の煙突に描いた菊水の紋章を輝かせ、全艦マストにZ旗を掲揚して豊後水道を南下した。

これが、連合艦隊最後の出撃であった・・・

第十四章　第四節　桜花爛漫　特攻の海へ旅立つ十勇士（後書き）

武蔵「・・・文字数不足の応援参上」
作者「あのさ、あんまりハッキリ言わないでくれる？　これでもがんばって書いたんだからさ」
陸奥「でも、私達は史実ではもう死にましたよ？　何でまたこんな所で」
作者「・・・それがいきなり僕に四一ｃｍ砲で脅した奴の言うセリフか？」
陸奥「そ、そうでしたっけ？　武蔵ちゃんの四六ｃｍ砲も怖いと思いますけど」
作者「霧島の三五・六ｃｍ砲でも十分脅威だよ」
霧島「・・・す、すみません、つい」
作者「まったく。えっとこれから残り少ない話数ですが、これからあとがきはこんな感じでいきたいと思います。理由はあまりにも話が悲惨になっていくので、せめてあとがきくらいはいつものノリで書きたいと思ったからです」
武蔵「・・・要するにアホ」
作者「と、とりあえず今回は今は亡き戦艦の皆さんです」
金剛「なるほど。だから私が呼ばれた訳か」
比叡「あ、みんな覚えてる？　比叡お姉様だよぉ？」
扶桑「比叡。たぶんあなたはこの中で一番忘れられてるわよ」
山城「貴様もな」
比叡・扶桑「・・・」
作者「おいッ！　いきなり臨戦態勢に入るなッ！」
武蔵「・・・統率力なさ過ぎ」
作者「うるさい！」
霧島「で、でもこれから大和達は沖縄に行くんですよね？　どうなるんですか？」

金剛「この作者は昔架空戦記に挑戦して失敗したダメ作者だからな。保全に走って史実どおり行くな。だから伊東殿のような流れはないだろう」
陸奥「え？　そうなんですか？　じゃあ敵機の攻撃で？」
比叡「そうなの？　でもさっき原稿を見たら紫電か――」
作者「おいッ！　本当にそれはネタバレだから言うなッ！　今のは忘れてくださいッ！」
扶桑「本当に作者はモテモテね」
作者「いや、これは違うと思う」
山城「女子にもてた経験がほとんどない哀れな少年だからな。どうしても作風が妄想に行ってしまうんだろ」
作者「マジでぶっ殺すぞッ！」
陸奥「不潔・・・」
作者「それは伊吹さんのマネ？」
霧島「え、エヴァネタはわかる人が極端に減りますからやめた方が・・・」
武蔵「・・・このアホ、この前《ゼロの使い魔～三美姫（プリンセッセ）の輪舞（ロンド）～》と《恋姫†無双》が終わってものすごく落ち込んでた」
扶桑「生粋のアニメ好きだからね」
金剛「はぁ、私達が守れなかったばかりに、こんな日本人が生まれてしまうなんて」
扶桑「でも滝川君はこの時代の人じゃないけど？」
金剛「あいつは特別だ」
扶桑「ふーん、特別ねぇ・・・」
金剛「何だ扶桑。言いたい事があればハッキリ言え」
扶桑「べーつーにー♪」
武蔵「・・・これで１０００文字は稼げた」
作者「数えなくていいから！」
陸奥「はぁ、最低あと２０００文字はがんばらないと」
霧島「この作者さん最低でも８０００文字は超えないと嫌なんです

か？」
作者「なんか、それくらいないと読者の皆さんに悪いかと思って」
金剛「どうせ貴様の作品など誰も楽しみにはしておらんだろ。この程度の作品を読むなら『紀伊』か『神龍』を読んだ方がためになるからな」
陸奥「なんかこの作品って、ダラダラ書いて長引かせてるだけですもんね」
霧島「私なんか七章で脱落だったもんなぁ。私も水着着たかったです」
比叡「結局、この作者アイデアだけは一人前だけど文章力が恐ろしくないからね」
武蔵「・・・アイデア力なら草薙先生。キャラクター構成・文章力なら伊東先生。このアホ作者はダラダラさナンバー1」
扶桑「そういえば、草薙先生からお互いの作品のキャラをあとがきで出そうって話が来てたわよね？」
金剛「そういえば伊東殿もそのような事を言っていたな」
作者「あぁ、あれね。いやぁ、嬉しい話なんだけど僕って他の人が作ったキャラの運用の仕方が恐ろしくヘタクソなんだよねぇ。だから断ろうかと――」
金剛「士道不覚悟ッ！」

ドゴオオォォォンッ！（金剛の竹刀が作者に炸裂した音）

作者「・・・ッ！　・・・ッ！（マジで声が出ないほど痛い）」
金剛「貴様程度の人間が草薙殿と伊東殿の提案を断るだと？　片腹痛いわ。恥じを知れッ！」
比叡「まぁ、姉さんはやり過ぎだけど、確かに断っちゃダメよ。これからもいいお付き合いをしていきたいんでしょ？」
扶桑「それにこれも練習になるわよ。私だって向こうの艦魂とは会ってみたいし」

山城「私は三作品全てで戦死」
陸奥「そ、そういえばそうでしたね。あぁ、草薙先生の長門お姉様って、一体どんな方なんでしょうかぁ？」
霧島「ねぇ、私ってどっちの作品にもいないんじゃないかな？」
作者「うーん、僕の記憶にはないなぁ」
陸奥「立ち直り早ぁッ！」
金剛「まったく、草薙殿。伊東殿。どうだろうか、もしこれを読んでいたら私達をそちらの作品に使ってみてはくれないか？　私達をヘタな作者という呪縛から解き放ってくれ」
作者「・・・」
霧島「はわわわッ！　作者さんが泣きながら幼稚園の頃から懺悔（ざんげ）を始めちゃいました！　ど、どうするんですか！？」
比叡「放っておきなさい」
霧島「だ、だってこの人がいなきゃ物語進まないし・・・」
扶桑「たぶん草薙先生か伊東先生が受け継いでくれるわよ」
作者「あのさ、二人とも忙しいんだから無茶言うな」
武蔵「・・・黙れニート候補」
作者「・・・」
陸奥「だからこれ以上作者さんを傷つけないでってば！　本当に続きが書けなくなっちゃうよ！」
武蔵「・・・大丈夫。この作者用心しまくって5話分くらいストックを貯めてるから。もし壊れても2日に1回ぐらいで10日は大丈夫」
比叡「この本編が終わったら外伝の方も修正するのよね？　私達がまた表舞台に立てるエピローグはいつになったら修正できるのかしら？」
山城「作者の努力次第」
金剛「確かにあれはすぐにでも修正してほしい。あれでは私の立場が・・・」
比叡「何言ってるのよ姉さん。エプロン姿、とってもかわいかった

じゃない」
扶桑「確かに、あの金剛が女の幸せに目覚めるなんてねぇ」
金剛「き、貴様ら・・・ッ！」
作者「だぁかぁらッ！　ネタバレはやめろって！」
金剛「やかましい！　貴様が私を辱めたんだろうが！」
作者「うるさいな！　僕はただお前と滝川を幸せにしてやろうと――」
金剛「黙れッ！」
武蔵「・・・あ、いつに間にか２０００文字稼いでた」
作者「お前も黙れ！　いい加減にしないとエピローグに出て来るあの子を大活躍させるぞッ！」
武蔵「・・・ッ！　ま、まさかメイを・・・ッ！？」
陸奥「そ、そんなのダメですッ！」
霧島「そんな事させませんッ！」
武蔵「・・・撃ち方始めッ！」

ドガアアアァァァァンッ！（四六ｃｍ砲九門＋四一ｃｍ砲八門＋三五・六ｃｍ砲八門一斉発射）

作者「ギャアアアアァァァァッ！」

比叡「ねぇ、これって完全に草薙先生のあとがき風よね？」
扶桑「まぁいいんじゃない。この方がおもしろいし」
山城「・・・」
金剛「忘れていたが、次回はアメリカの艦魂達の話らしい。詳しくは知らんが、菊水一号作戦の発動で特攻機が雨のように襲い掛かって来る話らしい。鬼畜米英が滅ぶのはいいが、特攻というのは私は好かん。だがまぁ、それしか道がないというなら、これも運命だ。次回を楽しみに待っていてくれ。あと、こんな作者だがよろしく頼むぞ。一応は生みの親なのだからな。せめて感想くらいは送ってや

ってくれ。頼んだぞ」
比叡「姉さん？　何してるの？」
金剛「気にするな。お前は霧島の所に行ってろ」
比叡「え？　うん、わかった」
金剛「・・・行ったか。草薙殿、伊東殿。今そこに転がってる作者からの返事だ。『もちろんやらせてもらいます！　粉骨砕身刻苦勉励粒粒辛苦の覚悟でがんばりますッ！』だそうだ。現在思考中らしいが、こう言っているので気長に待ってくれ。それと、こんな作者だがよろしくな。我々もそちらの要求次第参らせてもらうぞ。体に気をつけて精進せよ」

武蔵「・・・金剛は実はツンデレ」
金剛「表出ろ武蔵。貴様とは一度ゆっくり話し合った方がよさそうだな」

作者「・・・という訳で草薙先生、伊東先生。早速がんばって書きますので、何かしらそちらのキャラの設定かなんかを詳しく教えてください。じゃないととんでもない事になります。こっちもちゃんと書かないと・・・みんなに殺されますから。ではまた」

第十四章　第五節　特攻の嵐　待ち受けるアメリカ艦隊（前書き）

今回は菊水一号作戦の発動によって特攻機の嵐に襲われるアメリカ艦隊の話です。
襲い掛かる特攻機にエンタープライズ、ヨークタウン、ホーネット、レキシントンやアイオワなどはどう立ち向かうか。
そして、その壮絶な戦いの中で見た事とは！？
今回はヨークタウンがある意味大活躍します。ぜひ読んでください。
あと今回のあとがき、何やら波乱の予感が。
僕も防弾チョッキを付けた方がいいでしょうか？
ではまたあとがきでお会いしましょう！
・・・ほんとに、大丈夫かな？

第十四章　第五節　特攻の嵐　待ち受けるアメリカ艦隊

一方、アメリカ高速空母艦隊は菊水一号作戦の発動により来襲した数百機の特攻機に悪戦苦闘していた。

空から無数に襲い掛かるすさまじい数の特攻機に、護衛の戦闘機隊も撃ち落とし切れずに次々に特攻機が流星のように落下してくる。

艦隊の中央に位置する空母『エンタープライズ』の防空指揮所ではエンタープライズが頭から血を流していた。その瞳にはすさまじい憎しみの炎があった。

迫る特攻機に拳銃を撃ち込み、その特攻機を撃ち落とす。だが、敵機はまるで無限にいるかのように次々に急降下して来る。そんな敵機を睨み、エンタープライズは唇を噛み、怒号を放つ。

「クソッ！　狂ったジャップどもめッ！　もはやカミカゼに頼らなければ私達アメリカ合衆国と戦えないとでも言うのッ!?」

頭の傷を押さえながらエンタープライズは激昂する。『エンタープライズ』も特攻機の突撃を受けて甲板が炎上し、今は必死に消火作業が行われていた。そのまわりでも大小さまざまな味方艦が特攻機の攻撃で炎上していた。中には沈没したもの、沈没寸前のものもある。そのそれぞれの艦魂の顔を思い浮かべ、エンタープライズは悔しそうに、憎しみを込めて怒鳴る。

「クソッたれッ！　狂ったジャップどもッ！　こんなクレイジーな戦法がいつまでも通用すると思うなよッ！　貴様らにもすぐ地獄を見せてやるわッ！」

怒りを露にするエンタープライズは空を埋め尽くす特攻機を見て悔しそうに唇を噛んだ。そして、再び迫る敵機に向かって怒りの銃弾を撃ち込んだ。

一方、空母『ヨークタウン』の第2機銃群ではすさまじい数の敵機を撃ち落とす為に大量の銃弾を空にばら撒いて弾幕を張っていた。

だが、敵機はその中を突っ込み、機体が燃えても必死になって突っ込んで来る。

死を恐れない特攻機の数々に、アメリカ兵達は恐怖していた。

中には気が狂う者もいた。それだけ、特攻というのは物理的・精神的に恐ろしい攻撃なのだ。

そんな特攻機を必死に撃ち落とす第2機銃群を走り回るのはフェイト・J・フォックス主計中尉。平時は烹炊室で皆の為に食事を作る彼も、今は弾の補充兵として戦っていた。烹炊員は毎日3回の激戦を戦い抜き、そして有事の際は敵機の機銃や爆弾、特攻機が飛び交う外で補充兵として活躍する。機関科、航海科と並ぶ海軍で最も大変な役職なのだ。

「弾をくれッ！　急げぇッ！」

「イエッサーッ！」

フェイトは弾の入った木箱をそれぞれの機銃座に置き、また次の木箱を受け取って機銃座に渡す。その単調にして恐怖の繰り返しだ。

フェイトは木箱を背負って走った。そこへ、特攻機とは別の敵機が襲い掛かってきた。機銃が、フェイト達めがけて掃射される。

「フェイトッ！」

そこへ突っ込んで来たのはヨークタウン。すぐさま鉄板を何重にも発現させて彼を守るようにして空中に並べる。

間一髪だった。

機銃弾はヨークタウンの発現させた簡易シールドに防がれた。だが、守れたのはフェイトだけ。シールドのまわりにいた兵達は頭や腰、足などを撃ち抜かれ絶命した。

敵機の機銃掃射が終わると、鉄板は音を立てて崩れた。そして、まわりの真っ赤な光景を見て、フェイトは絶句する。だが、それ以上に、突如目の前で倒れたヨークタウンに驚いた。

「ヨークッッ！」

倒れたヨークタウンは頭から血を流していた。『ヨークタウン』は先程特攻機の攻撃を受けて小破していた。その結果、ヨークタウ

ンも傷を負っていた。
「ヨークッ！」
フェイトは倒れるヨークタウンを抱き起こすと、ヨークタウンは憔悴し切った顔で彼に笑顔を向けた。その笑顔は血にまみれ、あまりにも痛々しい。
「フェイト、ケガはない？」
「あぁッ！　お前のおかげだ！」
「良かった・・・本当に、良かった・・・」
「ヨーク・・・」
フェイトはヨークタウンをしっかりと抱き締めた。腕の中の彼女は、あまりにも白くて細い。折れてしまいそうで、弱々しい。
でも、そんな彼女を守ると決めたのだ。
まわりにいる血まみれの同胞、そして腕の中の彼女。それらの想いが頭に流れ、憎き敵機を睨み付ける。
「クソジャップめぇッ！」
「ダメ・・・ッ！」
その瞬間、腕の中のヨークタウンが必死になってフェイトに抱き付いてきた。驚くフェイトに、ヨークタウンは涙を浮かべながら必死に訴える。
「ダメ・・・ッ！　憎しみは、何も生まない！　フェイトが、怒り狂う姿なんて・・・私は見たくない・・・ッ！」
「ヨーク・・・」
「憎いのはわかる・・・でも、フェイトには・・・そんな感情で狂ってほしくない・・・お願い・・・いつもの・・・フェイトでいて・・・」
「ヨーク・・・」
すっかり弱っているヨークタウン。そんな彼女に、これ以上負担は掛けたくなかった。親しい兵達の顔を思い出し、フェイトは悔しそうに唇を噛むが、必死に自分に抱きついて来る彼女のおかげで、冷静でいられた。

「わかった。いつもの僕でいるよ」
「良かった・・・」
それを聞いてヨークタウンは安堵したような笑みを浮かべると、そのまま気絶した。フェイトはしばし動かなかったが、そっと彼女の体を端に寝かせると上着を被せて立ち上がる。そこへ新たな機銃兵達が現れ、血にまみれた機銃を握り、仲間の仇と敵機に向かって機銃を放つ。
フェイトは気絶するヨークタウンを一瞥し、再び補充兵として走り回る。その瞳には憎しみはあったが、それで狂う事はなかった。
彼女がいるからこそ、自分はここにいる。
彼女の為にも、自分は必死になる。ただ、それだけだった。

次々に襲い掛かる特攻機に、ホーネットは恐怖する。
上空を護衛戦闘機隊が必死の奮闘をして『ホーネット』を守る。
『ホーネット』は艦隊の端にいた為、中央にいる『エンタープライズ』や『ヨークタウン』、『エセックス』よりは襲い掛かる敵機の数は少ない。だが、それでも十分脅威であった。
轟音を立てて襲い掛かる敵機に、ホーネットは恐怖する。
「こ、来ないでぇッ！」
ホーネットが悲鳴を上げ、見詰める先には襲い掛かる特攻機。だが、その特攻機は護衛戦闘機Ｆ６Ｆの１２・７ｍｍ機銃に撃ち抜かれて撃墜された。
ホーネットは安堵するが、敵機は次々に機体を反転させて急降下して来る。
死を恐れない特攻。
アメリカ人が最も恐れる日本軍のクレイジーな戦法――いや、もはやこれは戦法ではない。外道である。
だが、外道であるがゆえに、その威力はすさまじい。
ドォンッ！
すぐ横の海に敵機が特攻に失敗して激突。巨大な水柱を上げた。

それを見て、ホーネットは背筋が凍りつく。
もしもあれが、自分に当たっていたら。
そう思うと、震えが止まらない。
その時、自分を護衛して必死に対空砲火を放っていた駆逐艦に特攻機が激突した。
「きゃあッ！」
すさまじい爆発にホーネットは尻餅を着く。慌てて立ち上がって見ると、駆逐艦が巨大な炎を上げて大傾斜していた。刹那、内部からのすさまじい爆発が駆逐艦を包み、光が消えた後、そこには海中から立ち上る黒煙しかなかった。
ホーネットは愕然とする。
確か今沈んだ駆逐艦は完成したばかりで今回の作戦が初陣であった。その艦魂はとても明るい女の子で、ホーネットの事を心から信頼していた。
そんな彼女が、死んだ。
――特攻機のせいで。
上空から轟音を響かせながら特攻機が襲い掛かる。それに対しホーネットは拳銃を抜き放つと、狙いをその一機に集中し、引き金に指を掛ける。
「よくも、よくも大切な仲間をぉッ！」
ホーネットは生まれて初めて拳銃の引き金を引いた。
バァンッという鋭い発砲音の直後、敵機を機銃弾が貫いて撃墜した。
初めて敵を自分の手で撃ち落としたいう想いに、ホーネットは恐怖する。自分のこの手が、今海に激突した特攻機のパイロットの命を奪ったのだ。
目の縁に涙が浮かぶ。
「わ、私・・・人殺しに・・・なっちゃった・・・」
その瞬間、ホーネットは糸の切れた人形のようにぐったりと甲板の上に倒れ、そのまま気を失った。

争いを好まない優しい性格のホーネットの精神は、自らの手で人を殺したという現実に耐えられなかったのだ。
気絶して倒れるホーネット。だが、その間も兵達の必死の死闘は続いていた。

艦隊中央に位置する『エセックス』は、すでに特攻機の攻撃を受けて甲板が炎上していた。
防空指揮所でぐったりと倒れているのはエセックス。いつもは刃のように鋭い瞳も、今は弱々しい。
「クソォ・・・ッ！　ジャップめぇ・・・ッ！」
エセックスは上空を飛び回る特攻機を睨み、悔しそうに唇を噛む。
必死になって起き上がろうとするが、体中が痛くて立ち上がれない。
情けない。
横で必死に弾幕を張っている『エンタープライズ』はすでに自分と同じく特攻機の攻撃を受けている。なのに、威風堂々としている。あそこではエンタープライズが今も必死の戦いをしているのだろうと思うと、今こうして倒れている自分が情けない。
自分はエンタープライズに憧れている。なのに、自分はこうしてもう体が動かない。
情けなくて仕方がない。
でも、もう体は動きそうにない。
まわりを見ると、自分の妹達や仲間達が必死の戦いを繰り広げている。
せめて、誰も死んでほしくはない。
妹達が無事に生き残れるよう、柄には合わないが、祈る事にする。
疲れが出て来たのか、エセックスは静かに目を閉じ、気を失った。

艦隊の端に位置して空母を護衛している戦艦『アイオワ』。そのＣＩＣには各艦からの悲鳴電文や無線が飛び交っていた。

『空母『エセックス』被弾！　被害は軽微ッ！』
『駆逐艦『エモンズ』沈没ッ！』
『戦艦『ミズーリ』被弾ッ！』
『空母『ハンコック』に敵機激突ッ！』
『空母『サン・ジャシント』大破炎上中ッ』
次々に飛び込んで来る悲鳴に、電光板を見詰めるアイオワは悔しそうに唇を噛む。そんな彼女の肩をポンと叩いたのはクルス。振り向くと、彼の顔には小さな笑みが浮かんでいた。
「さっき『エンタープライズ』の火災は鎮火されたそうだ」
「そうか・・・」
「だけど、『サン・ジャシント』の火災は広がって、もしかしたら・・・」
「沈没する可能性もあるのね？」
「あぁ」
「そうか・・・」
アイオワは悔しそうに唇を噛むと、ギュッと拳を握る。その白く染まる手を、クルスはそっと包み込むように握った。そんな彼の突然の行動に、アイオワは頬を赤くして驚く。
「な、何よいきなり」
「大丈夫だから」
「え？」
「きっと、守れる。お前なら、きっとできる」
誰かが聞けば意味不明な言葉だ。だが、アイオワはわかっている。それは、自分の心を見透かした言葉だという事を。
襲い掛かる敵特攻機のせいで、今や艦隊は阿鼻叫喚となっている。その艦隊を守る役目を持つ自分の前で、仲間達が次々にケガを負い、すでに戦死した者もいる。
守ると決めたのに、守れなかった。
そんな自分を責めるアイオワにクルスが言ったのがそれだった。
クルスの言葉が、アイオワの不安を取り除いてくれる。

いつも横にいて、いつも自分を支えてくれた。
彼がいるから、ここまで来られたのだ。
だから、彼が信じてくれている。そう思うだけで、力が湧き出してくる。
「そうね。私はアイオワ級戦艦1番艦、戦艦『アイオワ』の艦魂。負ける訳にはいかないのよ」
「その調子だ。お前はできる子だ。がんばれ」
「えぇ――じゃあ、行って来る」
その声の後、アイオワは光に包まれて消えた。それを見詰め、クルスは「がんばれ」と小さくつぶやくと、忙しいＣＩＣの中で自らの仕事に全力を注いだ。
一方、アイオワは防空指揮所に移動していた。そこからは襲い掛かる敵機と燃える味方艦が一望できる。
燃える仲間達を一瞥し、アイオワはキッと敵機を睨むとまあゆい光を手に集約した。次の瞬間、その手にはアーチェリーが握られていた。そして、もう片方の手に光を集めて矢を発現させると、弦に矢尻を構える。
襲い掛かる敵機に狙いをすまし、限界まで引き絞った力を解放して矢を放った。
閃光のようなまばゆい光を伴いながら空中を翔ける矢は敵機に命中。その瞬間高角砲の砲弾が炸裂して敵機は粉々に吹き飛んだ。
アイオワはすぐさま矢を発現させると構え、再び矢を放った。
アイオワから放たれた一撃は、敵機飛び交う鉛色の空に向かって鋭い閃光を発した。

菊水一号作戦の大規模な特攻攻撃でアメリカ艦隊は大混乱に陥った。この影響で第二艦隊は敵にしばらく見つかる事もなく南西へ進む事ができた。
この菊水一号作戦では海軍二一五機、陸軍八五機が特攻攻撃を行い、駆逐艦九隻撃沈、空母十八隻他大小艦艇に壊滅的な損害を与え

た。

敵機が去った後、被弾した艦は消火作業に追われていた。

一日の損害にしては今までで最大とも言える被害であった。航空機一機で駆逐艦一隻を葬る一機一艦必中の特攻は、アメリカ軍にとっては悪魔以外何者でもなかった。

生き残った者も、そのクレイジーな攻撃の数々に精神障害を負う者も多かった。

そして、生き残った艦魂達は機動部隊旗艦『レキシントン』の甲板に集まっていた。『レキシントン』は敵機の壮絶な空爆の中でも生き残った数少ない大型空母であった。

「各員被害状況の報告を」

レキシントンの言葉に駆逐艦や巡洋艦の艦魂が以外を報告する。大型艦の沈没艦はないが損害がひどい艦があり、駆逐艦9隻が沈没という大被害を受けた。

レキシントンは被害報告を受けると頭に包帯を巻いて不機嫌そうに空を睨んでいるエンタープライズを見る。

「エンタープライズさん。おケガは大丈夫ですか？」

「問題ない。怒りで気が狂いそうになるくらいよ」

レキシントンはうなずく。どうやら大丈夫そうだ。『エンタープライズ』自体も被害は極めて軽微という報告も受けている。

不機嫌そうに空を睨むエンタープライズに突如抱き付いた者がいた。それは先程まで気絶していたホーネットだった。

「ホーネット？　どうしたの？」

いきなり抱き付いたホーネットに驚くが、彼女の顔を見てさらに驚く――ホーネットは泣いていた。

「ホーネット？　どうしたのよ？」

「うぅ、お姉ちゃん・・・私、人を殺しちゃったよぉ・・・ッ！」

それ以上何を言うでもなく、ホーネットは泣き崩れた。エンタープライズは訳がわからなかったが、それでも泣き崩れるホーネット

を静かに抱き締めた。
その時、甲板の一角に光がほとばしりエセックスが現れた。その頭には痛々しい包帯が巻かれているが、それほどひどいケガではなかった。
「姉さん？　ヨーク姉さんの具合は？」
レキシントンは少し不安そうに問う。エセックスは被弾したヨークタウンの場所に行っていたのだ。そんなレキシントンの問いにエセックスは静かに微笑んだ。
「大丈夫だ。ヨークの看護は今フェイトに任せてるから」
「そう。フォックス中尉なら安心」
レキシントンは安堵の息を漏らして再び旗艦としての仕事に戻る。
その時、
「人間になんて任せていられるか。行くぞ」
エンタープライズは泣きながら抱き付いてくるホーネットを離すと光に包まれて消えた。そんな彼女にレキシントンは小さくため息する。
「ラングレイ。後は任せた」
「はぁ？　何で私がそんな事しなきゃいけないのよ！」
ラングレイはすさまじく嫌どうな顔をして拒否するが、レキシントンは無視してエセックス、ホーネットを連れて光に包まれて消えた。その向かう先は皆同じ・・・

その頃、ヨークタウンの自室ではちょっとした幸せな時間が流れていた。
ケガをしてベッドに横たわっていたヨークタウンに仕事を終えたフェイトがお見舞いにやって来たのだ。そしてそのまま看護までしてもらっているのだ。
今は彼が器用にリンゴをうさぎさんにカットしてお皿に並べてくれている。その手さばきは見事なもの、さすがプロである。
「ほら、ご注文どおりのラビットカットだ」

「えへへ、ありがとう」
ヨークタウンはお皿を受け取るとその上に乗るうさぎ達を見詰めて嬉しそうに微笑む。そんな彼女を見詰め、フェイトも苦笑いした。
さっきまでケガを負って血だらけで気絶していたとは思えない回復ぶりだ。艦魂は傷が治るのが早いとはいえこれは驚異的である。
「他に何か僕にできる事はあるか？」
「そうだなぁ、じゃあこれを食べさせてよ」
「はぁ？　いや、それはちょっと・・・」
「何でよぉ。いいじゃないこれくらい」
頬を膨らませて怒るヨークタウン。いつもは皆に頼られる姉として優秀な参謀だが、フェイトと二人きりでは子供っぽくなるのだ。
ちなみにこれはエセックス達には秘密にしているがとっくの昔にバレている。
「むぅ、何でしてくれないのよ」
「べ、別にいいだろ。自分で食えるんだし」
「・・・ホーネットには前してたじゃない」
「なぁッ！？　お前見てたのか！？」
「ホーネットにできてどうして私にはできないのよッ！」
「ホーネットとお前は違うだろ！？」
「何よ！　私よりもホーネットの方がいいって言うのッ！？」
「いや、そうじゃなくて・・・」
「こっちはあなたの命を救ってあげたのに、礼の一つもないの？」
それを言われてしまうとフェイトは返す言葉もない。こうして五体満足でいられるのは彼女のおかげなのだから。
「わ、わかったよ・・・」
フェイトは諦めてフォークをリンゴに挿す。それを見てヨークタウンは小さな子供のように嬉しそうに微笑む。
正直言って、ホーネットは妹のような存在だから気にはしなかったが、ヨークタウンは別だ。フェイトとしては一人の女の子として彼女を見ている。だからこそ、こういう行為は恥ずかしいので嫌な

のだが、今回ばかりは逆らえない。
ヨークタウンは嬉しそうに微笑むと、目をつむって口を開く。フェイトは覚悟を決めてフォークで挿したリンゴを彼女の口に向ける。
「あーん」
嬉しそうな彼女の声を聞きながら、フェイトはリンゴを彼女の口へ・・・
「何をしているのだ？」
その突然の声にヨークタウンは目を見開いて声のした方を見る。すると、そこには少し頬を赤らめて不機嫌そうな顔をしたエンタープライズと頬を赤らめて視線を逸らしているエセックス、無表情のレキシントン、頬を膨らませて怒るホーネットなどが立っていた。
「いやあああぁぁぁッ！」
「のわぁッ！？」
ヨークタウンは顔を真っ赤にして目の前のフェイトを突き飛ばした。突き飛ばされたフェイトは受身も取れずにベッドから転落。後頭部を床に強打して悶絶した。
一方真っ赤な顔を毛布で隠してヨークタウンは必死に首を横に振る。
「ち、違うんです！　こ、これは違うんです！」
布団の中に潜って必死に叫ぶヨークタウンに、エンタープライズはため息する。
「安心しろ。私は何も見ていないから」
「そ、その微妙な優しさが余計傷つきますッ！」
布団の中で恥ずかしくて死にそうになる。一方突き飛ばされて後頭部を強打したフェイトはいまだに悶絶している。そんな彼に駆け寄ったのはホーネット。
「あ、あのフェイトお兄ちゃん大丈夫？」
「うぅ、なんとか大丈夫」
ホーネットの肩を借りて立ち上がるフェイト。すると、レキシン

トンがとことこと駆け寄って来た。その手にはさっきの騒動で吹き飛んだリンゴの入ったお皿があった。
「これ、落とした」
「あ、ありがとう」
「うわぁッ！　うさぎさんだぁッ！　ねぇ食べていい？」
「え？　ちょ、ちょっと待ってそれ私の・・・ッ！」
「あぁ、別にいいよ」
「ちょっとフェイトッ！？」
「では、私ももらいます」
そう言ってホーネット、レキシントンはパクパクとリンゴを食べていく。それを見て、愕然とするのはヨークタウン。しばし硬直していたが、キッとフェイトを睨みつける。
「ちょっとフェイトッ！　それ私のじゃない！」
「別にいいだろ。食べたいって言ってるんだから」
「いい訳ないでしょッ！？　ちょっと返しなさい！　フェイトが私の為に切ってくれたんだからぁッ！」
「嫌ぁッ！　お兄ちゃんの手作りは私のだもん！　ううんッ！　私とエンターお姉ちゃんのだもん！」
「渡さない」
「いい加減にしてよッ！　何なのよあなた達！　いつもいつもフェイトに絡んで来てッ！　妹だからって手加減しないわよッ！」
ギャーギャー言い合うヨークタウン達に、エンタープライズは頭を抱える。最近はすっかりこんな調子で、疲れる毎日だ。
「まったく、女が男を取り合ってケンカとは見苦しい」
「ったく、いい加減にしてほしいぜ」
エセックスは憎まれ口を叩いているが、その表情は明るい。こうして妹達が元気にしているのを見て楽しんでいるのだ。
エンタープライズも先程の死闘の後だ。少しくらいは彼の存在に感謝する。だが、
「お兄ちゃんとお姉ちゃんは私のだよ！」

「何言ってるのよッ！　フェイトは私の乗組員なんだから！」
「フォックス中尉は、自由にあるべきです」
「あ、あのさ、何でみんな拳銃を構えてるの？」
ギャーギャー言い合うヨークタウン達を見詰め、さすがのエンタープライズのもろい堪忍袋がブチギレた。
「いい加減にしなさあああああぁぁぁぁぁいッ！」
エンタープライズの怒号が、ようやく静かになった艦隊中に響き渡った。

その頃艦隊旗艦、ニューメキシコ級戦艦1番艦、戦艦『ニューメキシコ』のＣＩＣには多くの戦艦部隊の艦魂が集まっていた。
「空母部隊は被害を受けているものの、一部を除いてほとんどが軽微ね。戦艦部隊も『ミズーリ』が多少の被害を受けたけど、それ以外は問題はない。残念だが、敵は私達戦艦よりも空母を優先したと考えるしかないわね」
そう言うのは海のように蒼い長髪に鋭い碧眼、細メガネ掛けた女性。艦隊旗艦戦艦『ニューメキシコ』の艦魂だ。その言葉に、悔しそうに舌打ちする少女がいた。
「クソォッ！　空母なんて載ってる艦載機が活躍するだけの腰抜けなのに、何で海の覇者である私達が格下扱いされなきゃいけないのよ！」
そう激怒するのは美しい桃色の長い髪を後ろで雑に纏めたポニーテールをした少女。アイオワ級戦艦2番艦、戦艦『ニュージャージー』の艦魂。アイオワの妹である。
「仕方ないですよ。今や時代は航空機、空母の時代なんですから。私達にできるのはその護衛くらいですよ」
そう言ったのは桃色の柔らかな長い髪を先端で縛った笑みのかわいい少女。アイオワ級戦艦4番艦、戦艦『ウィスコンシン』の艦魂。愛称は《ウィン》。アイオワの妹の一人だ。
「まあまあ、一応みんな無事で何よりじゃない。駆逐艦の子が数人

戦死しちゃったけど、これくらいの被害に抑えられたんだから」
　桃色の長く柔らかい髪を流した柔和な笑みを浮かべる少女。その頭には包帯が巻かれていた。彼女こそ戦艦部隊で唯一被害を受けたアイオワ級戦艦3番艦、戦艦『ミズーリ』の艦魂。姉妹の中ではいつも仲裁役を務めている。一応『ウィスコンシン』の姉艦だが完成したのは『ミズーリ』よりも後なので、艦魂上はミズーリが姉となる。
「ミズーリの言うとおりだよ。とりあえず今は艦隊の再編成を急ぎましょう」
「ウィン！　ミズーリ！　お前達は悔しくないのか！　私達戦艦が空母なんかに負けているんだぞッ！」
「うーん、私達が生まれた時にはもうそうだったから、別にいいと思うけど」
「ミズーリッ！」
「ちょ、ちょっとケンカはダメだよッ！」
　争うアイオワ姉妹を見詰め、ニューメキシコはため息した。と、
「おぉ、盛り上がってるなぁ」
　のん気な声が響き、ニューメキシコはそちらに視線を向ける。すると、そこには作戦書を扇ぎながら上着のボタンを外した男がいた。彼こそがこの艦隊を指揮しているレイモンド・A・スプルーアンス大将だ。
「提督。そのようなだらしない格好では困ります」
「まあまあ、気にするなって」
　屈託のない笑みを浮かべるレイモンドに、ニューメキシコはため息する。
「まったく、あなたという人は・・・」
「大丈夫だって。まぁ難しい事はデイビス参謀長がやってくれるからな。俺はこうしてのん気にしてればいいのさ」
　そう言って椅子に座るレイモンドを、ニュージャージーは不機嫌そうに見詰める。これが自分達を指揮している司令官だと思うと嫌

気が差すのだろう。だが、ニューメキシコは知っている。常時はこうしてやる気のない風に見えるが、その裏では誰よりも努力をして皆に指示を送っている事を。戦闘の際、震える自分をそっと抱き締めてくれた事も・・・

「ったく、これだったらデイヨーの方がまだましよ」

「ニュージャージー！　言葉を慎みなさいッ！」

ニューメキシコの怒号に、ニュージャージーはしゅんとする。重鎮であるニューメキシコの威厳は高い。だが、

「あぁ、ちなみにこいつさっきの戦闘で泣いてたぞ」

「・・・ッ！」

レイモンドの突然の暴露にニューメキシコは顔を真っ赤にする。すると、ニュージャージーはニヤニヤと笑みを浮かべる。

「へぇ、司令って泣いたんだ」

「そ、それはそれですごいですね」

「あらぁ、かわいいわね司令」

アイオワ姉妹の三人の言葉に、ニューメキシコは顔をさらに真っ赤にさせると、椅子に座って新聞を読むレイモンドに近寄る。

「提督ッ！　あれは言わないと約束したではないですか！」

「そうだったか？　あまりにもかわいかったからさ」

「かわ・・・ッ！」

もう爆発寸前のように真っ赤な顔をしたニューメキシコに、レイモンドは気にした様子もなく新聞に視線を戻す。だが、その新聞は突如没収。目の前には怒り一色のニューメキシコが。

「提督！　さっさと仕事に戻ってください！」

「おいおい、そう焦るなって」

「提督はマイペース過ぎますッ！　やる事はやってくださいッ！」

「ちゃんとやってるよ。ほら」

そう言ってレイモンドはある報告書をニューメキシコに渡した。ニューメキシコは不思議そうにそれを受け取ると読む。その瞬間、彼女の表情が変わった。

「こ、これは・・・ッ！？」
ニュージャージー、ミズーリ、ウィスコンシンはそんな彼女の異変に彼女の持つ報告書を覗き込む。すると、３人の表情も変わった。
そこへやって来たのは今までクルスといたアイオワであった。
「どうしたのよ？　みんなしてそんな顔して」
「ね、姉さんッ！　これを見てくれ！」
ニュージャージーはニューメキシコから書類を奪うとアイオワに見せる。そして、訝しげに見詰めるアイオワの表情も変わった。
「『ヤマト』が出撃した・・・ッ！？」
戦艦『ヤマト』。日本海軍が生み出したモンスター戦艦。自分達よりも巨大で恐ろしい戦艦だという事はフィリピン沖海戦で空母部隊が苦闘の末に撃沈した『ムサシ』からもわかる。
戦艦部隊にとって、最も戦いたい相手。
その『ヤマト』が出撃した言うのだ。
「潜水艦が見張っているが、どうも沖縄に向かって来るみたいだ」
近寄って来たレイモンドの表情もさすがに真剣なものだった。
この空母大活躍のご時世、戦艦と戦艦が戦えるチャンスがやって来たのだ。
「おいレイモンド！　これは私達の獲物だよなッ！？」
ニュージャージーの問いに、レイモンドは力強くうなずいた。
「もちろんだ。今から戦艦部隊は私の配下とデイヨー少将とに分けてそれぞれで迎撃に向かう。艦隊決戦ができるぞ」
「よっしゃぁッ！」
「あらぁ、艦隊決戦なんて初めてね」
「うんッ！　姉妹みんなで迎撃できるよ！」
ニュージャージー、ミズーリ、ウィスコンシンは大喜びする。もちろんアイオワも嬉備え身を浮かべる。戦艦として、これ以上嬉しい事はない。
「私も、戦えるのですか？」
「もちろんだ」

その返事にニューメキシコも嬉しそうに微笑む。だが、レイモンドの表情はどこか複雑そうだ。その表情に気づいたのは隣に立つニューメキシコ。

「どうされたんですか？」

「うん？　いや、ちょっとあまり嬉しくはない情報が二つほど入ってな。頭も胸も痛いんだよ」

「悪い情報なのですか？」

「まず1つは、ミッチャーが独断で迎撃に向かいつつあるという事だ」

その言葉にアイオワ達に戦慄が走る。ミッチャーとは空母部隊を指揮するマーク・A・ミッチャー中将の事。それはつまり、『ヤマト』を空母部隊も狙っているという事だ。

「ふざけるなッ！『ヤマト』は私達の獲物よッ！　即刻やめさせてよッ！」

「そうは言いたいが、ミッチャーはまるで言う事を聞かなくてな。だからこそ私も急いで艦隊を編成しているのだが、間に合うかどうか・・・」

さっきまで上がっていたテンションが一気に急降下していく。ニューメキシコも残念に思いながらも、もう1つの理由を問う。

「それで、もう1つは？」

その問いに、レイモンドはどこか遠い目で天井を見詰めた。その視線の先には、過去の風景が浮かんでいる。

「『ヤマト』以下の艦隊を率いているのは、私の親友、セイイチ・イトウ中将だそうだ」

『・・・ッ！？』

その言葉に、ニューメキシコ達は言葉を失う。

親友が敵艦隊の司令長官として座乗している。それはつまり、親友同士の艦隊が激突するという事。レイモンドにとって、これほど辛い事はないだろう。

「提督・・・」

不安げに見詰めるニューメキシコの頭を、レイモンドは笑みを浮かべて撫でた。頬を赤くして驚くニューメキシコに、レイモンドは言う。

「安心しろ。戦わないなんて事はないさ。あいつも同じ海軍軍人。だったら、真っ向から本気で迎撃するこそが、最高の礼儀だ。俺はイトウの艦隊を全力で叩く。お前達も、『ヤマト』を全力で叩け。それだけだ」

レイモンドの言葉に、ニューメキシコはうなずくと見事な敬礼をしてみせた。それに続いてアイオワ達も敬礼する。

レイモンドは皆の敬礼にうなずくと、ふと隣に立つニューメキシコの頭を撫でた。

「これが終わったら、今度一緒に食事でもしようか」

「・・・ッ!?　そ、それって・・・ッ!?」

顔を真っ赤にして何かを期待するような瞳で彼を見詰めるニューメキシコ。だが、レイモンドはアイオワ達を見詰め、

「みんなで祝賀会だな」

「よっしゃぁッ！　燃えてきたぞッ！」

「あ、私はお肉が嫌いだから魚料理をよろしくね」

「わ、私は何でも食べますッ！　ゲテモノ以外なら結構対応できます！」

「提督、その時はクルスも呼んでいいかしら?」

「おう！　みんなまとめて来いッ！」

大喜びするレイモンドやアイオワ達を見詰め、ニューメキシコはどこか寂しげな表情をする。その視線の先には笑みを浮かべるレイモンドが・・・

「私と二人じゃ・・・ないんだ・・・」

寂しげに彼女がつぶやいた言葉は、レイモンドには届いていなかった。

レイモンド達と別れた後、アイオワはエンタープライズ達空母部

隊司令部に向かった。すると、そこではすでに『ヤマト』の情報は回っており、エンタープライズを筆頭に迎撃用意を整えていた。
日本の象徴である『ヤマト』を撃沈する事にエンタープライズ以下空母部隊は皆盛り上がっていた。
だが、それは自分達戦艦部隊も同じ。
アイオワはエンタープライズ達に宣戦布告した。
――『ヤマト』を沈めるのは、私達戦艦部隊よ――
その瞬間、空母達からは「時代錯誤だ！」「前時代的な考えよ！」「今更艦隊決戦なんておかしいッ！」と非難の声が上がったが、アイオワは無視してエンタープライズと対峙した。
「本気なのか？」
「えぇ、もちろん本気よ。『ヤマト』は艦隊決戦で沈める。これはスプルーアンス提督の意思よ」
「残念だが、こっちもミッチャー中将以下艦隊将兵皆の意思だ。この獲物は渡せないわ」
「あらそう。だったらどっちが先か、勝負でもする？」
「望むところよ！」
いつになくアイオワは挑発的で、エンタープライズも感情的に対峙する。
睨み合う両者に、ホーネットはあわあわとした。
その後、アイオワは司令部を出た。ドアの向こうからはエンタープライズの怒号と共に掛け声が響き、彼女達の決意の強さを見た気がした。
でも、負けられない。
戦艦として、そして、一人の軍人として。
アイオワが自らのＣＩＣに戻ると、そこにはクルスがコーヒーを飲んでいた。彼はアイオワの存在に気づくと手を振ってきた。
「おかえりアイオワ。情報は来てるぞ。『ヤマト』が出て来たらしいね」
「えぇ、必ず私達戦艦部隊で迎撃しましょう」

「そうだね。戦艦の乗組員（クルー）として、これは楽しみだ」
「日本が世界最大と自負する『ヤマト』は、私達の獲物よ。艦隊決戦で沈めてこそ、私達の存在を世に知らせるし、『ヤマト』にも最大の礼儀になるわ」
「わかった。僕もがんばるから、アイオワもがんばれよ」
「無論よ。その代わり、ずっと私の隣にいなさいよ」
「わかった」
クルスは嬉しそうに微笑む。その笑顔を見て、アイオワも自然と笑みが浮かんだ。彼がいれば大丈夫。そんな気がした。
ずっと、こうして彼と一緒にいたい。こうして、彼の隣にいたい。そう願った。と、
「おーいクルス！」
「クルスさぁん！　お元気ですかぁ？」
「クルスお兄ちゃぁん！」
そこへ現れたのはニュージャージー、ミズーリ、ウィスコンシンの3人。すると、クルスは嬉しそうに彼女達に手を振る。
「おぉみんな！　いらっしゃぁい！」
クルスは屈託のない笑みを浮かべて3人に駆け寄る。すると、彼はすぐに3人に囲まれて笑みを振りまく。そんな彼のまわりで笑みを浮かべる妹達。
クルスと妹達を見詰め、アイオワは不機嫌そうに唇を尖らせる。
「何よ、隣にいるって言ったじゃない・・・」
アイオワは不機嫌そうにテーブルの上にあったコーヒーをグイッと飲む。そして、それがさっきまで彼が飲んでいたものと気づいて顔を真っ赤にするのであった。

第十四章　第五節　特攻の嵐　待ち受けるアメリカ艦隊（後書き）

武蔵「・・・今回は翔輝のすばらしさを永遠に話し合おう」
陸奥・伊勢・霧島・隼鷹『賛成ッ！』
榛名「お前らなぁ・・・」
金剛「まったく、結局こういう流れになるのだな」
伊勢「せやけど、ここはほんまはアメリカの艦魂を入れなきゃあかんちゃうの？　本編はアメリカの話やけど」
作者「いいの。アメリカの艦魂って使いづらいのばっかだし、向こうは日本人を嫌ってるのばっかりだから、たぶんここに出したら僕が殺される」
金剛「まぁ、貴様なら一撃だろうな」
作者「でしょ？　だからやめたの。あ、そうだ。そろそろ翔鶴達を出した方がいいかな？」
金剛「おい貴様。両先生方との艦魂同盟（仮）はどうしたんだ？」
作者「さぁ？」
榛名「おいおいッ！　考えてないのかよッ！」
作者「いやぁ、翔輝は基本的にトラブルが向こうから飛び込んで来るキャラだから、僕もそうなるかなぁって思って――」
榛名「テメェは長谷川とは違うだろうがッ！」
作者「ま、待ってッ！　刀はまずいッ！　本当に死ぬからッ！」

武蔵「・・・まず翔輝は笑顔が素敵だ」
伊勢「せやなぁ、でもうちはあの優しい腕も好きやで？」
陸奥「私がいない間に、長谷川少佐メガネを付けてましたけど、かっこいいです」
霧島「や、優しい所、かな？」
隼鷹「やっぱりお兄ちゃんは世界最高だよッ！」
武蔵「・・・そうだ。翔輝こそ、世界最高だ」

陸奥「うんッ！」
霧島「そ、そうですね」
伊勢「せやなぁ」
隼鷹「お兄ちゃーん！」

作者「おいそこッ！　なごやかな雰囲気してないで助けてよッ！」
武蔵「・・・榛名、そいつうるさい。斬れ」
榛名「言われなくても斬ってやらぁッ！」
作者「おいッ！　僕これでも君達の生みの親だぞッ！」
武蔵「・・・結局、私達はそこのアホの妄想から生まれた」
陸奥「うっ、なんか嫌ね・・・」
霧島「ちょっとがっかりです」
隼鷹「こんなバカの頭の中の存在なんて嫌ぁッ！」
伊勢「あんまりひどい事言っちゃあかんて。がんばってるんやから」
作者「い、伊勢・・・ッ！」
金剛「うん？　伊勢、なぜ貴様先程からこいつをかばうのだ？」
伊勢「だってぇ、ここで点数を稼いでおけば、エピローグとかで長谷川はんとの登場頻度が増えると思うてぇ」
榛名「うわ、こいつ一番腹黒いぞ」
作者「返せッ！　僕の感動を返せッ！」
陸奥「あ、あの作者さん！　このクッキー食べますか!?」
霧島「えっと、肩揉みましょうか？」
作者「お前らもいきなり点数稼ぎに入るな！」
武蔵「・・・次回は――」
作者「勝手に終わらせるな！　まだ余白はあるだろッ!?」
武蔵「・・・次回は翔輝と私の淡い恋の物語を――」
作者「んなもんあるかあああぁぁッ！」

??「恭介えええぇぇぇッ！」

ドガァンッ！（ドアが吹っ飛ばされた音）

作者「何事ッ！？　って、ぐわぁッ！（ドアに踏み潰された作者）」

？？「ここにいるの恭介ッ！？　って、あれ？　何よいないじゃない！」

ダッ！　ガシッ！（？？は出て行こうとしたが、金剛に掴まれた）

金剛「待て」

？？「ちょっと何するのよ！　私は恭介を捜して――」

金剛「貴様見ぬ顔だな。新入りか？　だがそれにしても扉を粉砕しておいて何だその態度は。それにしかもその格好。まるでアメリカ人ではないか。日本人として恥を知れ」

？？「うるさいわねッ！　早くしないと弥生に恭介が――」

金剛「・・・どうやら、久しぶりに私の竹刀が血に飢えたらしいな（目が本気）」

？？「え？（顔面蒼白）」

金剛「貴様のその腐った精神を叩き直してやるッ！　歯食い縛れぇッ！」

？？「な、何なのよあんたッ！？　目が怖すぎッ！」

伊勢「金剛はん、あんまり子供をいじめちゃあかんて」

金剛「伊勢ッ！　また貴様はそう甘やかして！」

伊勢「子供の頃に受けた暴力って、大人になった後に精神が歪む原因になるんやで？　それじゃ逆効果や」

金剛「うっ・・・」

榛名「姉貴。今回はちょっとやり過ぎだ。相手は子供だぞ」

陸奥「そうですよ。それにしてもどうしてこんな所に子供が」

隼鷹「子供がこんな所に入って来ちゃダメだよ」

霧島「アメ食べる？」

？？「私は子供じゃないッ！（しっかりとアメをゲット）」

陸奥「で、でも・・・」
??「特にあなた！」
隼鷹「え？　私の事？」
??「そうよッ！　あなたの方がずっと子供じゃない！」
隼鷹「むッ！　私は子供じゃないよ！」
??「そういう仕草が子供なのよ！」
隼鷹「な、何なんのよあなたッ！」
??「あんた達こそ何なのよ！　恭介はどこッ！？」
榛名「さっきから恭介恭介って、誰の事だ？」
??「恭介は恭介よ！　それ以外の何者でもないわ！」
陸奥「うーん、それってあなたにとってどんな人なの？」
??「ど、どんなって・・・（顔が真っ赤）」
霧島「？」
??「恭介は私の艦長よッ！　悪いッ！？」
伊勢「艦長？　え？　あんたもしかして艦魂か？」
??「え？　じゃあ、あなた達も？」

作者「いてて・・・いきなり何だよ」

武蔵「・・・来い（作者の首根っこを掴んで引きずる）」
作者「ちょっと待て！　まだ傷が――」
武蔵「・・・貴様、まだ本編も片付いていないのに新キャラを出したの？」
作者「はぁ？　何言ってんだよ。こっちは本編で大忙しだぞ」
武蔵「・・・本当？」
作者「当たり前だろ」
武蔵「・・・なら、あれは誰？」
作者「はぁ？　って、あれって・・・ッ！（突如部屋を出て行った作者）」
武蔵「・・・逃げた？」

？？「と、とにかく恭介はどこか知らない？　弥生と一緒にいるのを見て追い掛けて来たんだけど・・・」
榛名「いや、そもそもその恭介ってのを知らないからな」
？？「ちょっとあなたッ！　いきなり名前なんて失礼よ！」
陸奥「いや、さっきからあなたが恭介って」
？？「日向恭介よ！　覚えておきなさい！　いずれ歴史に名を残すすんごい人なんだから！」
榛名「・・・」
霧島「ちょ、ちょっとお姉ちゃんッ！？　相手は子供だから！　跳び蹴りの体勢に入らないでぇッ！」
？？「まったく、もうここに長居は無用ね。邪魔したわ」
作者「お待ちください！」
？？「あんた誰？　私恭介を捜しに――」
作者「まあまあ、これでも食べてください」
？？「何よこれ？」

ガサゴソビリビリ（紙袋と包装紙を開ける音）

？？「こ、これって！？」
作者「左様、ゴディバでございまする」
？？「うっ（よだれを堪える）、あんた何？　これは何なの？」
作者「僕はいつも草薙先生にお世話になっている黒鉄大和と言います。以後お見知りおきを」
？？「黒鉄大和？　あぁ、うちのバカがいつも世話になってるって」
作者「とんでもありません！　むしろこちらお世話になって――」
？？「・・・（ゴディバに夢中）」
作者「どうぞお食べください」
？？「い、いいのッ！？」
作者「もちろんです」

？？「・・・（無言だが幸せな表情を浮かべて食べる）」
作者「良かった良かった」
陸奥「あ、あの作者さん、この子は誰なんですか？」
霧島「作者さんのお知り合いですか？」
作者「この方は草薙先生の小説、独立機動艦隊シリーズに登場する紀伊様だ」
凛「あ、言い忘れてたけど私は紀伊。戦艦『紀伊』の艦魂よ。まぁ、あなた達は艦魂みたいだから真名の凛でいいわ」
金剛「独立機動艦隊・・・貴様、まさか本気で出す事にしたのか？」
作者「読者からの意見はできる限り反映させる。それが作家だ」
榛名「へぇ、いい所あんじゃん」
凛「で？　あなた達はたぶんそこの黒なんとかって人の艦魂でしょ？　艦名と真名は？」
伊勢「うちは伊勢。戦艦『伊勢』の艦魂や。悪いけど、こっちのキャラは真名なんてないから、艦名で呼んでや」
榛名「戦艦『榛名』の艦魂だ」
金剛「戦艦『金剛』の艦魂」
陸奥「戦艦『陸奥』の艦魂です。よろしくね凛ちゃん」
隼鷹「私は空母『隼鷹』の艦魂！　この作品のヒロインだよ！」
凛「マスコットの間違いじゃないの？」
隼鷹・凛「・・・（無言で睨み合う）」
作者「あ、あのさ。少しは平和的にできない？」
武蔵「・・・無理だな」
作者「お前・・・あ、こいつは戦艦『武蔵』の艦魂だ。何考えてるかわかんない顔だけど、よろしくお願いね」
凛「ふぅん。ねぇ、そこに隠れてる子は？」
霧島「・・・え、えっと」
榛名「あぁ、こいつは俺の妹で戦艦『霧島』の艦魂だ」
凛「霧島・・・ッ！？」
金剛「うん？　どうした？」

凛「い、いや。ただ、私の知り合いと同じ名前だったから」
榛名「それってそっちの世界の霧島の事か？」
凛「正確には、私達と同じ未来にいた艦魂よ。原子力戦艦『霧島』、真名は桜。まぁ、一番仲が良かった、親友みたいなものよ」
陸奥「へぇ、で、その子は今は？」
凛「・・・太平洋に散ったわよ」
陸奥「・・・え？」
凛「日本を守る為に、国連軍――まぁ、こっち風で言うと連合軍ね――と戦ってね」
陸奥「そ、そうなんだ・・・ごめん」
凛「謝らなくていいわよ。別にあなたは何も悪くないんだし」
霧島「あ、あの」
凛「な、何よ？」
霧島「・・・えっと、その、あの・・・」
凛「何よ。言いたい事があるならハッキリ言って」
霧島「お、お友達になろ？」
凛「え？」
霧島「私とその霧島――ううん、桜さんが同じ名前なのは偶然かもしれない。でも、それでも、私はあなたとお友達になりたい。あなたと、もっと親しくなりたい。ダメ、かな？」
凛「べ、別にダメって訳じゃ・・・」
霧島「えへへ、じゃあお友達」
凛「え？　えぇ？」
霧島「これ、お友達の証」
凛「これ、御守り？」
霧島「恋愛成就の御守り。えへへ、凛さんがあなたの大好きな恭介さんと幸せになれるように」
凛「・・・なッ（顔真っ赤）！？　ち、違うわよ！　わ、私は別に恭介となんて！」
霧島「え？　だって・・・」

凛「勘違いしないで！　わ、私は恭介をそんな風には思ってないから！」
霧島「え？　えぇ？」
陸奥「素直じゃないですねぇ」
凛「べ、別にそんなんじゃないわよ！」
伊勢「せやったら、うちがその恭介はんってのもらってもええか？」
凛「なぁッ！？　だ、ダメに決まってるでしょッ！」
伊勢「冗談や。うちは長谷川はん一直線やもん」
凛「何よ、驚かせないで」
伊勢「せやけど、めっちゃ必死やったなぁ？」
凛「・・・ッ！（顔真っ赤）」
陸奥「伊勢。あんまちからかっちゃだめだよ」
伊勢「せやな。でも愛は一直線。出遅れたら負けなんや」
凛「ふ、ふぅん・・・（視線は外すが耳だけはしっかり立てている）」
武蔵「・・・それって、私達の事？」
陸奥・伊勢・霧島『え？』
武蔵「私達も出遅れて、しかも早過ぎた幕引き。これじゃ、姉さんに全部持って行かれる」
伊勢「せ、せやなぁ・・・」
陸奥「いつも大和ちゃんばっかり・・・」
霧島「私なんてデートの約束まで行ったのに・・・」
武蔵「・・・翔鶴は告白したらしい」
榛名「マジかよッ！？　あいつ怪しいとは思ってたけど、まさか本気でッ！？」
陸奥「榛名さんもいい加減認めたらどうですか？」
霧島「そ、そうだよ。ずるいよぉ！」
榛名「はぁッ！？　何を認めろってんだ！」
伊勢「長谷川はんが好きっちゅー事や」
榛名「ふざけんなッ！　誰があんなアホを好きになるかボケぇッ！」

武蔵「・・・往生際が悪い」
陸奥「潔くないです」
伊勢「恋は一直線や」
霧島「やる時はやらないと」
榛名「だから違うって言ってんだろうがッ！」
凛「まぁ、がんばりなさい。私には関係ないけど」
榛名「うるせぇッ！　テメェはさっさとその恭介だかに告れボケッ！」
凛「何よそれッ！　私はそんなんじゃないって言ってるじゃないッ！」
榛名「武士なら覚悟を決めろッ！」
凛「私は未来の戦艦だから武士道なんて知らないわよ！」
榛名「表出ろやッ！　三五・六センチ砲でぶっ飛ばしてやらぁッ！」
凛「おもしろい。そんなの私のミサイルで叩き落してやるわよ」
霧島「ちょ、ちょっとお姉ちゃん！　それに凛さんも！　待ってってばぁッ！」

金剛「よくわからんが、妹に新しい友ができるのは喜ばしい。ちょっと服装（ワンピース）が気に食わんが」
作者「まあまあ、これでいいんだよ。これで」
武蔵「・・・そろそろ時間というか文字の限界。これじゃあとがきじゃなくて一つの話」
作者「そうだね。なんか陸奥達も加わって盛り上がってるみたいだし。じゃあ今回は前編って事で次回後編をやる事にする」
伊勢「案外適当やな」
作者「小説は結構そういうものだよ。その時の気分で変わるんだから」
伊勢「せやなぁ」
作者「では今回はここまで！　次回は紀伊（僕が真名で呼ぶと怒られそうだから）との会話の後編です！　本編の方は大和と翔輝の本

当に最後の夜です。明日は決戦。死ぬかもしれないという恐怖の中、大和の想いとは!?　そして、そんな彼女を支える翔輝は!?　とまぁ、なんかここ数日あとがきが騒がしいですが、本編は依然マジメです。嫌気がさして読むのをやめないでくださいね？　それと草薙先生！　とりあえずこんな感じですが、何かありましたらまたご報告ください！　伊東先生も凛が終わり次第そちらの作品からキャラをお借りしますよ？　それと零戦先生もご協力くださるらしいですが、その時は皆さんにキャラの設定などを送ってくださいね！
ではまた次回をお楽しみに！」

武蔵「・・・本編の執筆速度が大幅に低下」
伊勢「そらこんだけのあとがきを書けばなぁ」
陸奥「でも、作者さんもこの作品、どう終わらせればいいか悩んでるみたいですよ？」
伊勢「せやなぁ、伊東はんの作品は終戦後までキッチリ書いてるしなぁ」
陸奥「これから作者さんも大変ですね。本編にあとがきって」
伊勢「まぁ、がんばってほしいなぁ」
武蔵「・・・バカとハサミは使いよう」
伊勢「あんたほんまにひどいやっちゃなぁ」
陸奥「あぁッ！　あの二人本気でケンカ始めちゃった！」
伊勢「あかんてッ！　止めな！」
武蔵「・・・バカばっか」
伊勢「それってルリのマネか？」
陸奥「落ち着いてないで行きますよッ！　なんか謎の飛翔体が榛名さんに迫ってます！」
伊勢「あかんッ！　うちらにはイージスシステムはないんや！」
武蔵「・・・チャフの用意を」
陸奥・伊勢「「了解ッ！」」

金剛「まったく。相変わらずやかましい奴らだ――だが、この平和ボケになりそうなくらい平和な日々が、私達が求めたものなのかもしれないな・・・」

第十四章　第六節　大好きな彼の腕の中で・・・（前書き）

《ニューメキシコ》
ニューメキシコ級戦艦１番艦――戦艦『ニューメキシコ』
愛称　なし
出身　ニューヨーク海軍工廠
身長　１６２ｃｍ
髪型　長髪（蒼髪）
実年齢（１９４５年４月現在）２６歳
外見年齢　２０、２１歳
誕生日　５月２０日
好きなもの　レイモンド・妹達・仲間・祖国・家事全般・平和・洗濯日和
嫌いなもの　レイモンドが他の艦魂と話している事・雨・日本・不摂生な生活・戦争
家族構成　妹２人

太平洋戦争に参加するアメリカ艦魂の中では重鎮に位置する。第一次世界大戦直後に竣工し、第二次世界大戦までの間に近代化改装を受けて近代艦となる。太平洋戦争開戦時は対ドイツ兵力として大西洋艦隊に配置されていたが、日本の真珠湾攻撃で太平洋艦隊の戦艦部隊が壊滅した為太平洋艦隊に加わる。旧式艦なので速度が遅く、スピードが重視される太平洋戦争では速力の遅い輸送船団や護衛空母部隊の護衛に加わった。マリアナ諸島攻略戦では艦砲射撃で日本軍守備隊を攻撃。１９４５年の１月には艦橋に特攻機が突入し艦長以下司令部が戦死するという怪我を負った。その後は第５艦隊旗艦としてアイスバーグ作戦（沖縄作戦）に参加する。そんな『ニューメキシコ』の艦魂はまじめな性格。指揮よりも補佐。命令するより事務。司令官というよりは参謀というキャラ。自らに座乗する第５艦隊司令長官レイモンド・Ａ・スプルーアンス大将の軽い態度や行

動にいつもため息している苦労人。しかし、なぜかそんなレイモンドが気になる様子。皆からは冷静で有能な上官なので慕われている天才軍人であるが、実はとても家庭的な一面もあり、料理が得意。以前レイモンドに自らの料理を振舞った時に「Ｄｅｌｉｃｉｏｕｓ（デリシャス）！」とほめられた事が一生の思い出になるほど嬉しく思っている。いつか自分に振り向いてくれる事を信じ、今日もレイモンドの隣に立つ。しかし最近は他の艦魂とも親しくなった彼にちょっと不満がある。

《ニュージャージー》
アイワワ級戦艦２番艦――戦艦『ニュージャージー』
愛称　なし
出身　フィラデルフィア海軍造船所
身長　１５８ｃｍ
髪型　ポニーテール（桃髪）
実年齢（１９４５年４月現在）１歳
外見年齢　１４、１５歳
誕生日　５月２３日
好きなもの　姉妹・クルス・ケンカ・スリリングな日々・艦隊決戦・大艦巨砲主義・砲撃戦
嫌いなもの　退屈・めんどくさい事・日本・空母・航空機・航空機主義・獲物を奪われる事
家族構成　姉・アイオワ　妹・ミズーリ・ウィスコンシン
アイオワの妹、アイオワ級戦艦２番艦『ニュージャージー』の艦魂。世界各国でいまだ根強い大艦巨砲主義を信じる一人。戦艦こそが海の王者。空母や航空機は外道と思っている。その為空母の艦魂とは仲が悪い。一度エンタープライズと大ゲンカした事もある。自分の想いに反して航空機や空母ばかりを運用する祖国に不満を持っている。日本最強の戦艦である『大和』と戦える事を心の底から楽しみにしている。その『大和』を空母に奪われるかもしれないと知ると

例え仲間の空母であっても攻撃すると宣言した事から見て、彼女の空母・航空機嫌いと大艦巨砲主義の強さは高いと見れる。クルスと仲が良く、たまに二人で散歩をしたり遊んだりする事もある。実は彼の事を・・・

《ミズーリ》
アイオワ級戦艦３番艦――戦艦『ミズーリ』
愛称　なし
出身　ニューヨーク海軍工廠
身長　１５６ｃｍ
髪型　長髪（桃髪）
実年齢（１９４５年４月現在）０歳
外見年齢　１４、５歳
誕生日　６月１１日
好きなもの　姉妹・クルス・海・平和・甘いもの
嫌いなもの　乱暴な事・ケンカ・争い事・辛いもの
家族構成　姉・アイオワ・ニュージャージー・ウイスコンシン
アイオワの妹。４番艦『ウィスコンシン』よりも後に竣工したので艦魂ではミズーリの方が妹になる。冷静沈着な指揮官タイプのアイオワ、乱暴なニュージャージー、温和なウィスコンシンというバラバラな姉を持つ、アイオワ姉妹のマスコット的存在。いつもケンカ早いニュージャージーを止めようとするが、いつもその飛び火を喰らってしまうかわいそうなキャラ。そのたびにウィスコンシンが間に入って仲裁するというのがアイオワ姉妹の定石である。ちなみにその際アイオワは冷静に傍観している。クルスの事をまるで兄のように尊敬し慕っているが、最近はどうもそれ以外の感情も加わりつつある。後に日本の降伏文書調印の調印式の場所となる。

《ウィスコンシン》
アイオワ級戦艦４番艦――戦艦『ウィスコンシン』

愛称　ウィン
出身　ニューヨーク海軍造船所
身長　１６２ｃｍ
髪型　長髪（先端を縛っている）（桃髪）
実年齢（１９４５年４月現在）０歳
外見年齢　１４、５歳
誕生日　４月１６日
好きなもの　姉妹・クルス・みんな仲良くする事・休みの日の姉妹との触れ合い
嫌いなもの　ケンカ・乱暴・仲間の輪を崩す行為
家族構成　姉・アイオワ・ニュージャーシー　妹・ミズーリ
アイオワの妹、４番艦だが３番艦の『ミズーリ』よりも先に竣工した為、アイオワ姉妹では三女に位置する。ケンカ早いニュージャージーと絡まれた相手とのケンカの間に入って仲裁するのが彼女の役目みたいになっている。彼女の柔和で優しい笑みはどんな相手の戦意をも抑えてしまう力を持つ。レキシントン曰く自分以外でエンタープライズを止められるのはウィスコンシンを含めて数名とまで言われる仲裁の天才である。三女ではあるがある意味一番大人でニュージャージーを説教したりアイオワの補佐をしたりする。ミズーリが一番懐く姉。クルスの事が好きらしいが、アイオワやニュージャージー、そしてミズーリの気持ちも知っていて、いつか自分からこの争いは辞退しようと思っている。本当に一番大人なキャラである。

なんか日付が変わってしまいました。
間に合わなかった・・・
ま、まぁ気を取り直して今回は大和と翔輝の最後の夜です。
明日は決戦。
死ぬかもしれないという恐怖の中、大和と翔輝は互いの気持ちを感じ合い、最後の夜を過ごす。
いよいよ最後が近づいてまいりました。と言っても、『大和』が沈

んだ後も物語は続くので終わりはいつになるでしょうか？（知らないよ）

さらにあとがきでは独立機動艦隊から凛が来てくれています。

凛と僕の艦魂達の物語、いよいよ後半です。

最後の夜を過ごす切ない恋の本編とコメディー満載のあとがき。どうかお楽しみください！

第十四章　第六節　大好きな彼の腕の中で・・・

午後七時半、豊後水道を抜けた第二艦隊は日向灘（ひゅうがなだ）付近で単縦陣から艦隊の陣形を変更。艦隊の前方を傘状に『雪風』『浜風』『磯風』『朝霜』『霞』の駆逐艦五隻が警戒し、後方に『大和』を囲むように『矢矧』『初霜』『涼月』『冬月』の四隻が展開する第一警戒序列（対潜陣形）に陣形を組み直してついに外洋に出る事となった。

だが、幸か不幸か陣形を変えた直後に第二艦隊は敵潜水艦に発見された。第二艦隊も潜水艦を発見して『矢矧』が砲撃しようとしたが、距離が離れていた為に砲撃できなかった。艦隊はその後敵潜水艦を振り切る事に成功した。しかし別の潜水艦に発見され、第二艦隊の動きは米艦隊に報告されていた。

一方の第二艦隊も旗艦『大和』の敵信傍受班が司令部に向けての敵潜水艦の電波を傍受していた。

「『『大和』以下十隻、豊後水道ヲ南下。地点二一七五。速力二〇ノット』。なおこれは平文で発信され、暗号文ではありません」

報告書を読み上げる兵の声を聞き、森下は小さくため息した。

「平文とは、ずいぶん舐められたものだな・・・」

「敵潜の位置は？」

有賀の問いに、兵は首を横に振る。

「不明です。断続して我が艦隊の行動を逐一司令部に報告している模様」

敵に発見され、しかもそれが敵の司令部に伝えられている。それはまさに、自分達の動きを敵は完全に掴んでいるという事だ。こちらは一切敵の情報はないというのに。

「行き先を読まれてはまずい。長官、大隅海峡（おおすみ）を突破したら一度北西に針路を向けましょう。うまくいけば、敵に行き先を隠せます」

「そうだな。そうしてくれ」

森下はうなずくと、兵達に通達する。そんなやり取りを艦橋の隅

で見詰める翔輝と大和。司令部の緊張に、二人も緊張する。
「大丈夫なんでしょうか？　敵に動きがバレているなんて極めてまずいと思いますが」
「今の日本近海はもう敵地だ。発見されるのは想定内だよ。決していい状況ではないけど、予想の範疇（はんちゅう）さ」
「悲しいですね。日本の周りが、もう敵地だなんて」
「仕方ないさ。それだけ、日米の戦力差は絶望的だって事さ。情報によると、沖縄には大小含めて最低でも三〇隻の空母がいるらしい。こっちは葛城や隼鷹達だけだっていうのに、よくやるよアメリカさんは」
「驚きました。少佐が皮肉を言うなんて」
「そうか？」
「・・・それだけ、少佐も大人になったという事なんですね」
「そうかもな」
「私はまだまだ子供です。生まれてからもう四年も経ってるのに、全然変わりませんよ」
「そんな事ないさ。大和も十分成長したよ。中身も、もちろん外見も」
「そ、そうですか？　あまり変わらないですよ？」
そう言って大和は自分の胸元を見る。何度見ても、長門や扶桑のような豊満な胸にはほど遠い。本当に成長しているのだろうか？
「変わったよ。前は子供っぽかったけど、今はもう立派な女性だ」
「え？」
大和が顔を上げると、そこには彼の優しげな笑みがあった。それを見て、大和は顔を真っ赤にする。
「え、あ、いや、その・・・」
「ははは、そういう仕草もかわいいな」
「は、恥ずかしいです・・・ッ！」
大和は耐え切れずに真っ赤な顔を手で隠してしまう。そんな彼女を見詰め、翔輝は小さく微笑むと薄暗い艦橋から窓の外を見詰める。

月明かりに照らされる海と『大和』の前甲板、そして巨大な主砲。いつも見て来たこの光景も、明日できっと終わるだろう。敵に発見されたとなれば、敵機に空襲を受けるか、敵戦艦部隊が待ち構えているだろう。そんな場所に突っ込めば、いくら『大和』でも沈没は免れない。

あと一日。

それが隣に立つ少女の寿命であった。

神様はなんて残酷なのだろう。

こんな普通の女の子に、戦う責務を押し付け、その命をたった四年で終わらせてしまうなんて。

今はアメリカよりも、そんな神様を許せなかった。

だが同時に、彼女と巡り合わせてくれた事には感謝している。

彼女に出会えたからこそ、自分はこうして立っていられるのだ。

翔香の死を引きずっていた自分を、救い出してくれたのは紛れもない大和だ。

そんな彼女が二度と生きては帰れない、己が責務を真っ当するのならば、自分はその横で彼女の支えになるだけだ。

「え？　少佐？」

大和は突然自分を抱き締めた翔輝に驚いて顔を真っ赤にする。いつも自分から抱き付く事はあっても彼の方からしてくるのはあまりない。だからこそ、大和は驚き、そして嬉しくて顔を真っ赤にしながらもとろんとした笑みを浮かべる。

「しょ、少佐ぁ・・・」

「大丈夫。ずっと、そばにいるから」

「はい・・・」

その言葉に、大和は本当に嬉しそうに満面の笑みを浮かべた。そんな彼女の笑みを見て、翔輝も笑みを浮かべた。

月明かりだけが照らし上げる薄暗い艦橋の中、翔輝と大和はいつ来るかわからない敵に恐怖を感じつつも、この時が永遠に続けばと願った。

その後、明日が決戦日と予想した伊藤は早めに就寝命令を出した。兵達の中には明日の決戦に恐怖して涙する者などが大勢いた。そして翔輝と大和も翔輝のベッドの中で横になっていた。

暗闇の中、翔輝は眠れずにいた。

明日は決戦なのだという興奮が眠りを妨げる。興奮と言っても嬉しいとか楽しみなどではなく、恐怖や不安の方だ。

明日自分は死ぬかもしれない。そんな状況で眠れる者はそういない。

翔輝はどうしても眠れなくて起き上がった。

「少佐？　眠れないんですか？」

振り向くと、布団で顔の下半分を隠してじっと自分を見詰める大和の黒く済んだ瞳と目が合った。きっと彼女も眠れなかったのだろう。

「あ、大和。起きてたんだ」

「はい。私も寝付けなくて」

そう言って起き上がった大和の顔は不安一色だった。無理もない。こんな小さな女の子が明日には自分が死ぬかもしれないという恐怖を感じているのだ。不安は当然だ。

起き上がった二人は、窓の外の星空を見詰める。大和はそっと、翔輝にしな垂れた。彼の温もりをもっと感じる為に。

翔輝は自分の横で不安そうにしている大和の頭をそっと撫でる。大和もそれを嬉しそうに受けて笑みを浮かべる。

「なぁ、大和。明日はいよいよ決戦らしいな」

「はい。本当は明後日か明々後日に沖縄に突入する予定ですが、私達は一度敵潜水艦に見つかっている以上、明日には敵が攻撃して来るでしょうね」

「・・・怖いか？」

「そりゃ怖いですよ。でも、少佐と一緒なら戦えます。少佐が私の傍にいてくれるだけで私は大丈夫。そうすれば恐怖なんて吹っ飛ん

でしまいますよ」
　大和は本当に嬉しそうな笑みをする。明日死ぬかもしれないというのに、どうしてこんなに優しげな笑みができるのだろうか。翔輝にはわからないが、それは彼の存在があるからだ。彼がいてくれるという安堵が、大和を強くするのだ。そんな優しい大和を見詰め、翔輝は小さく笑みした。
「そうだな。僕も君がいてくれたら戦える。そんなふうに思えるよ」
　翔輝の笑みに大和は安堵する。そこで二人はお互いに気づいた。自分達はいつの間にかお互いの顔の目の前まで接近していた事に、二人は慌てて離れる。その顔はどちらも赤く染まっていた。
　大和は真っ赤な顔のまま翔輝を見詰める。翔輝も顔を真っ赤にしているが大和のように彼女を見ようとはしなかった。そんな彼を見詰め、大和は小さく微笑むとそっと彼に抱き付いた。驚く翔輝に大和は言う。
「少佐。私は少佐が大好きです。いつも思います。初めて会った方が少佐で良かったと、いつも私の傍にいてくれるのが少佐で良かったと思えます」
「それは僕もだよ。お前が傍にいてくれたから、僕はここまで来れた。この先が例え悲しい結末でも、お前が傍にいてくれたら戦える」
「私も、少佐がいれば戦えます。敵機でも敵戦艦でも、私の四六センチ砲で木っ端微塵に吹き飛ばしてみせます」
　そう言って微笑む大和を見て、翔輝は改めて気づかされた。
――大和は軍艦の魂である、艦魂なのだと。
　すっかり忘れていた。
　笑って、怒って、泣いて、悲しんで。
　普通の女の子と何も変わらない。だけど、彼女は戦う事が運命付けられた戦姫。どんなに小さな女の子でも、その根本は兵器の魂なのだ。
　戦艦の艦魂である彼女は、戦う事が存在意義なのだ。
　でも、それでも、自分は違うと願いたい。

だって、どうしてこんな女の子が命懸けの戦いをしなくてはいけないのか。

平和な世で、普通の女の子なら、学校へ行き、友達と遊び、編み物をしたり、お花を育てたりできたのに、戦時で、戦艦の魂だから、こうして運命付けられた死地へ向かわなければならない。

昨晩見た彼女の泣き顔。

――少佐・・・ひぐぅ・・・うぅッ・・・少佐ぁ・・・ッ！　私・・・まだ・・・死にたくないです・・・ッ！　もっと、少佐と一緒に・・・いたいですぅ・・・ッ――

どうして、彼女がこんなに苦しまなければならないのか。

艦魂だから？

戦艦の魂だから？

戦う事でしか存在意義を持たない、兵器の魂だから？

そんなの、ふざけている。

どうして、彼女は艦魂になってしまったのか。

普通の女の子に生まれていれば、こんな重い責務を負わず、あんな悲しい顔をしながら涙を流す事もなかったのに。

それは大和だけじゃない。

散って逝った陸奥も、霧島も、翔鶴や大鳳（かのん）、武蔵だって、死ぬ事はなかった。

どうして艦魂なんてものが存在するのか。

自分では動かす事ができない艦体（からだ）に乗る人間に振り回され、自分で生きる事も死ぬ事も選べない。戦う為だけに存在する命。

そんなものが、どうして必要なのか。

兵器だったら、そんなものはなく、ただ人を殺す為だけに存在すればいいのに。

どうして、彼女達のような命を存在させ、その宿命に無理やり貼り付けるのか。

それも、兵器の魂なのに、《生きたい》《死にたくない》と願う者を。

どうして、そんな残酷な運命を背負わなければならないのか。
こんな小さく細い腕をした少女に、どれほどの苦痛と恐怖を味わわせれば気が済むのか。
運命とは、一体どれだけ残酷なのだろうか。
今こうして自分の腕の中にいる、大切な彼女は、そんな残酷な運命に翻弄される犠牲者だ。
でも・・・
彼女がもし、艦魂ではなかったら、自分は彼女と出会えていただろうか？
「少佐・・・」
気が付くと、目の前には自分を心配してじっと見詰める彼女がいた。その瞳は漆黒の黒い瞳。その瞳が少し濡れているように見えるのは、気のせいではないだろう。
「大丈夫ですか？」
「うん。大丈夫だよ。ちょっと考え事をしてただけだから」
「考え事、ですか？」
「――艦魂って、何なんだろうって」
「艦魂・・・ですか？」
「兵器の魂で、戦う事が存在意義の魂って、必要あるのかなって。あるんだったら、どうして大和みたいに、苦しまなきゃいけないのかって」
翔輝のどこか力ない言葉に、大和はじっと彼を見詰める。ふと、以前金剛が話してくれた話を思い出した。それは、この話の結論なのかはわからない。でも――
「艦魂には、前世があるそうです」
「前世？」
いきなりの話に翔輝は目を丸くする。そんな彼を見詰めながら、大和は言葉を繋げる。
「私達艦魂にも前世があって、その時は少佐みたいな、人間だったらしいんです」

「そうなの？」
「いえ、これは金剛さんが言ってた事で本当かどうかわかりませんが、私達艦魂はその前世で何かしらの強い願いがあったから、艦魂として生まれ変わったというんです」
「強い、願い？」
「はい。それが何なのかわかりませんし、そもそも私達に前世があった事もわかりません。何せその頃の記憶がないんですから。当然ですが」
そう言って大和は笑うが、その笑みはどこか力ない。不思議に思って問おうとすると、彼女の方から口を開いた。
「――もしかしたら、私の前世は翔香さんだったかもしれません」
「え？」
「今の私には、翔香さんの気持ちはわかりません。ですから、これは私の憶測ですが、翔香さんは強い願いを抱きながら死んでしまった。だから、私となって生まれ変わって、そして――少佐と出会う事ができた、と」
大和の言葉に翔輝は驚く。そんな彼を見詰め、大和は言葉を続ける。
「翔香さんはきっと、少佐を守りたかったんです。守りたい、ずっと傍にいたい。そう強く願ったからこそ、私という存在に生まれ変わって、いつか現れるであろう少佐を待って――」
「それはない」
言葉の途中で否定した翔輝に、大和は驚きながらも、泣きそうな顔で尋ねる。その瞳にはどこかすがるようなものがあった。
自分は翔香の生まれ変わりかもしれない。そしたら、この想いは、自分自身の気持ちではなく、翔香の気持ちの延長線という事になる。そんなの、嫌であった。
だからこそ、どこかで否定してほしいと願った。
「どうしてですか？」
「――大和と翔香は違う。顔は似ていても、違うよ。僕にはわかる。

だって僕は、翔香のお兄ちゃんなんだから」
たったそれだけの言葉だったのに、その言葉の重みに、大和は確信した。
翔香は彼にとって大切な、たった一人の妹だ。彼はそんな彼女の為に必死に生きてきた。海軍に入隊したのも、彼女の為だった。自分の人生を、彼女の為に尽くしてきた。その彼が違うというのだから、違うのだろう。
自分の言った事を真っ向から否定されるのは悲しいが、それ以上に、自分の不安を、彼が否定してくる方がずっと嬉しかった。
自分のこの想いは、誰のものでもない。自分のものなのだ。
「それに、翔香は翔香、お前はお前、違う女の子だよ。でも、僕にとってはどっちも大切な存在だ。それは変わらないよ」
「少佐・・・」
大和は嬉しくなって翔輝にそっと擦り寄って彼の体に触れる。その温かみに、一体どれだけ助けれらか。そして、こうしている今も助けられている。
「やっぱり、私は少佐がいないとダメですね。少佐がいなかったら私、きっと壊れちゃいます。明日死ぬかもしれないのに、こうして私を私で保っていられるのは、少佐がいるからなんです」
「僕も同じだよ。明日死ぬかもしれない、でも、こうしていられるのは、お前のおかげだ」
「ふふふ、嬉しいです。私達はもう、一心一体なんですね」
「そうかもな」
翔輝は本当に嬉しそうに微笑む彼女を見詰める。その笑顔に向こうにある恐怖や悲しみは、決して消えるものではない。
「大和、死ぬのは嫌か？」
「当たり前じゃないですか。死にたくないです。本当は、許されるなら、もっともっと生きて、少佐と大切な時間を過ごして、思い出をたくさんたくさん作りたいですよ・・・」
「そっか・・・」

翔輝はそれ以上何も言わなかった。何も言わずとも、彼女の気持ちはわかっていたし、大和も、翔輝の気持ちは十分理解していた。

窓から差し込む月明かりだけが、二人を薄っすらと照らし上げる。そのわずかな光の中でも、二人の顔ははっきりを見え、お互いの表情がわかる。

翔輝は、頬を赤くしながら自分をじっと見詰める大和を見詰める。大和を見詰め、翔輝は自分の心の中で起きる熱に驚く。今まで、彼女を見詰めてこんな想いを抱いた事はあっただろうか？

――いや、あったはず。ただそれは、今まで色々なものに隠れていて、出て来なかっただけ。

ずっと、自分の中にあったのだ。

（僕は、大和の事を・・・）

「少佐」

その声にいつの間にか下がっていた視線を上げると、彼女がじっとこちらを見詰めていた。その頬は桜色に染まり、瞳はうるみ、じっと見詰めて離さない。

「大和・・・」

「少佐、やっぱり私、少佐の事・・・大好きです。好きで好きで、大好きです。少佐を・・・長谷川翔輝さんが・・・大好きなんです」

そう言うと、大和は静かに目をつむって顔をゆっくりと翔輝に近づける。驚く翔輝に向けられた大和の顔は真っ赤に染まっていた。

翔輝は彼女の真意を理解するのに少し時間が掛かったが、理解すると翔輝も顔を真っ赤に染めた。

「大和・・・」

「少佐。お願いします」

大和の決意したような言葉に翔輝はうなずき、自らの体も大和に近づけ、そっと彼女の背中に手を回し、そして――二人は静かに口付けをした。

互いの唇の感触がはっきりとわかるくらいの密着の後、二人は離れてさらに顔を真っ赤にさせて沈黙した。

紅潮が収まるまでしばし沈黙をしていた二人だが、ようやく落ち着きを取り戻すとまだ頬の赤いままの大和が静かに口を開いた。
「ありがとうございます――これで、私は戦えます」
「そっか・・・良かったよ。さぁ、もう寝よう。明日は夜明け前に起きないといけないからね」
「はい」
二人はそう言って笑い合った後、「おやすみ」「おやすみなさい」と互いにあいさつをし、翔輝は静かに瞳を閉じた。
大和はそっと翔輝に近づくと、そんな彼に体を預け、そっと抱き付く。
彼の匂い、彼の温もり、彼の存在を肌で感じ、大和は安堵する。
そして、身を包み込む安心感が、心地良い眠りを呼び寄せる。
大和は翔輝の寝顔を見詰めて小さく微笑むと、自らも瞳を閉じて眠りに落ちる。
翔輝も、そっと大和の小さな体を抱き締めた。彼女を一人にさせない為に・・・
その夜、二人は互いを離さまいと互いに抱き合いながら眠った。

第十四章　第六節　大好きな彼の腕の中で・・・（後書き）

武蔵「・・・目標愚姉ッ！　全艦一斉撃ち方始めぇッ！」
陸奥・伊勢・霧島・榛名・隼鷹『撃てえええええぇぇぇぇぇッ！』
作者「やめろぉッ！　本編をぶっ壊すなッ！」
武蔵「・・・ッ！」

ダァンッ！（作者の首根っこを掴んで締め上げる武蔵）

作者「ちょ、ちょっと武蔵・・・ッ！」
武蔵「・・・どういう事だ？　翔輝と愚姉が一緒に寝て・・・き、キス・・・ッ！」
作者「ちょっと待ってッ！　マジで苦しいッ！」
武蔵「・・・殺す」
作者「目が本気ッ！　マジで怖いから！　誰か助けてぇッ！」
陸奥「武蔵ちゃん！　容赦なく殺しなさい！」
霧島「大丈夫です作者さん！　苦しいのは一瞬ですから！」
榛名「ぶっ殺せッ！」
隼鷹「死んじゃえバカぁッ！」
作者「おいッ！　お前らいい加減に――」
伊勢「作者はん」
作者「い、伊勢ッ！　助けてくれ！　このままじゃ僕――」
伊勢「あんたええ加減にせぇよ？」
作者「はい？」

トン（伊勢が武蔵の肩を掴んで離れさせる）

ガシッ！（伊勢が作者の頭を掴んで持ち上げる）

グキベキボキッ！（伊勢の握力で作者の頭から響く嫌な音）

作者「ギャアアアアァァァァッ！」

伊勢「痛いか？　痛いんか？」

作者「い、痛いです・・・ッ！」

伊勢「甘いで。うちの痛みはこんなもんじゃあらへんで。うちの大好きな長谷川はんを大和に取られて、さらに接吻までしてもうて――覚悟はできてるんやろな？」

作者「ちょ、ちょっと待ってッ！　話せばわか――」

ブチィッ！（恐怖の幕開け）

伊勢「じゃかぁしぃわボゲえええぇぇぇッ！　話でわかる訳ねぇだろうがッ！　ごみクソが調子乗ってんじゃねぇぞッ！　誰のおかげで話っちゅーもんができてるんやあぁんッ!?　うちら艦魂のおかげやろうがッ！　その恩を仇で返すなんてなぁ、覚悟はできてるっちゅー事やなぁッ!?」

作者「ちょっと待って伊勢！　お前キャラ変わってる！　もう関西弁しか設定が残って――」

伊勢「設定とかもうどうでもええわッ！　うちはあんたを殺したいだけやッ！　ひと思いになんて生ぬるい事は言わへんで？　生まれて来た事をそのクサレクソ頭で理解できるまで何度でも死よりも恐ろしか残虐行為の祭りやッ！　本物の血祭りっちゅーのを見せたるさかいッ！　覚悟はええやろなッ!?　あああぁぁぁぁんッ!?」

作者「ひいいいいいぃぃぃぃッ！」

金剛「総員伊勢を確保しろ！　急げぇッ！」

ダァッ！（金剛の怒号に慌てて伊勢を取り押さえる一同）

伊勢「離さんかいボケぇッ！　おどれらもぶっ殺すぞゴラァッ！」

陸奥「伊勢！　落ち着きなさい！　いつものあなたに戻ってぇッ！」
霧島「伊勢さん！　怖いですよぉッ！」
榛名「おい伊勢ッ！　落ち着け！　なッ！？」
隼鷹「お、お兄ちゃんが怖がっちゃうよ！」
武蔵「・・・冷静になろう。まだ逆転のチャンスはある」
伊勢「あんたらバカかぁッ！？　今更逆転サヨナラ満塁ホームランなんて打てると思うてんのかぁッ！？」

凛「ね、ねぇ。伊勢ってあんなキャラだっけ？」
作者「・・・え、えっと、確か物語を書く前に作った初期設定を見ると・・・」

パラパラ・・・（艦魂年代史作成の前に作った本当に実在する資料（主にキャラ設定、キャラ関係図、大まかな流れ、盛り込み予定イベントなどなどが詰まっている）をめくる）

作者「えっと、改訂版での伊勢は、おっとりしてまわりのケンカを仲裁。だけど翔輝が絡むとケンカの輪の中に入る。ちなみに本気で怒ると大阪のヤクザみたいな口調になって木刀を振り回す・・・って書いてある」
凛「本編じゃそんなシーンなかったわよね？」
作者「たぶんそれは忘れてたんだと思う」
凛「それを今更あとがきで再現しなくてもいいんじゃない？」
作者「僕の意思じゃありません！　伊勢の暴走ですッ！」

伊勢「・・・ッ！　・・・ッ！」（縄でグルグル巻きにして猿轡をされる伊勢）

陸奥「な、何とか押さえました。ついでに鎮静剤も打ちましたので、もうしばらくしたら大人しくなると思います」

作者「あ、ありがとう」
榛名「テメェには言いたい事があるが、今は凛が来てるからな。後で覚悟しておけ」
作者「は、はい」
金剛「とりあえず初っ端から大きく脱線したが、一応ここに茶会の用意はしておいたぞ」
隼鷹「うわぁッ！　おいしそうなお菓子ぃッ！」
金剛「紅茶も菓子も全て比叡の手作りだ。味は折り紙付だぞ」
作者「いやぁ、本当に比叡は頼りになるなぁ！」
金剛「そう思うならもっと本編で出してやれ。多少傷ついてる」
作者「でも長門とキャラが被るから」
榛名「んじゃ何でんな設定にしたんだよ！」
作者「いや、比叡をそういう設定にしないと、金剛姉妹が壊滅するかと思って」
金剛・榛名「どういう事だッ！」
作者「いや、金剛と榛名が怖いから霧島が不憫で」
金剛・榛名「うっ・・・」
霧島「わ、私は比叡姉さんが大好きだから」
陸奥「まぁ、結果的に良かったじゃないですか」
金剛「ま、まぁそうだな」
榛名「納得できねぇ所もあるにはあるがな」
隼鷹「気にしない気にしない！　じゃあ早速お茶会ゴーッ！」
武蔵「・・・翔輝は私のもの」

凛「しかし本当においしいわね、このクッキーとか」
榛名「当たり前だろ。比叡姉さんが作ってんだからよ。うまくねぇ訳ねぇだろ」
隼鷹「私比叡お姉ちゃんのお菓子大好き！」
金剛「そうか。それは比叡も喜ぶであろう」
作者「紀伊はまだ比叡には会った事がないから知らないけど、比叡

はこっちの全艦魂で一番料理がうまいんだ」
凛「へぇ、私の所の比叡は朱里って言うんだけど、人懐っこいしゃべり方をする人よ。あと全艦魂最強の強さを持ってるみたい。まぁ、私は見た事がないけど」
金剛「ほぉ。それはいい事を聞いた。私の方の比叡は私の特訓を散々逃げ回ってサボったからなぁ。剣の腕はそんなに高くはない」
榛名「いや、姉貴の本気の追撃を逃れたんだろ？　十分手ごわいと思うぜ？」
凛「私の方の金剛は柚子って言うんだけど、どこかあなたに似てるわね。まぁ、向こうは妹には甘いけど」
金剛「それはいかん。自分に厳しく他人に厳しく。それが帝国海軍軍人だ」
凛「へぇ、あなたって鈴そっくりね」
霧島「鈴って誰ですか？」
凛「長門の艦魂よ。もう嫌ってくらい規律に厳しくて厳しくて・・・」
榛名「おいおい、こっちの長門とはえらい違いだな」
伊勢「そうやねぇ」
作者「ぬおッ！？　伊勢ッ！？」
凛「元に戻ってる？」
伊勢「さっきはお見苦しいとこ見せてすんまへん。ちょっと取り乱してもうたんや」
霧島「あ、あれでちょっと？」
凛「本気出したらどうなるのよ」
伊勢「まあまあ、細かい事は気にせんで。お茶会を楽しもうやないか」
金剛「そうだな。だがしかし向こうの長門はすばらしい軍人らしいな。うらやましい限りだ」
伊勢「まあまあ、うちの長門はんもええ所があるし」
金剛「そうか？」

伊勢「んもう、金剛はんったら照れてもうてかわええなぁ」
金剛「て、照れてなどおらん！」
伊勢「ほんまぁ？」
金剛「当たり前だ」
凛「なんか、こっちの金剛は大変ね」
隼鷹「金剛はマジメだから、長門や伊勢にからかわれるんだ」
陸奥「もう、皆さん楽しくお茶会をしましょうよ」
霧島「そ、そうですよ。みんな楽しく食べよ。ほら、凛さんこれもおいしいよ」
凛「ありがと。っていうか霧島。さん付けはなしよ」
霧島「え？　あ、うん凛」
作者「いやぁ、見ていて微笑ましいなぁ。やっぱり女の子の仲の良い会話は聞いてて心休まるよ」
武蔵「・・・変態」
作者「・・・せめてお茶会の時くらいは平和的で行こうよ」
武蔵「・・・そもそも貴様は椅子に座る権利はない。貴様の席はそこ」

武蔵が指差したのは、皆が取り囲むテーブルの下に敷かれたござ。

作者「そんな所に座れるかッ！」
武蔵「・・・ゼロの使い魔のサイトは最初食事中座ってた」
陸奥「あははは、あれはちょっとサイトさんかわいそうでしたね」
伊勢「せやなぁ。ツンデレと組み合わせるっちゅーのも大変やなぁ」
作者「まぁそうだね。とりあえずこの話は置いておこう。あんまり突っ込まない方がいい。理解できる幅が縮まるからね」
榛名「テメェが始めたんだろ」
金剛「まぁいいではないか。して、何か話題はあるか？」
伊勢「せやなぁ、そっちの艦魂はみんないい人ばかりやね」
凛「まぁそうね。時々変なのもいるけどね」

武蔵「・・・まだ、そっちの私は登場してない」
陸奥「そういえばそうね。向こうの私は鞘って言うんですね。お酒がものすごく悪酔いするようですけど」
凛「さあ？　私はそこにいた訳じゃないからね。そういう事は鈴や炎樹に訊いてよ」
作者「そういえば炎樹って『三笠』の艦魂ですよね？　艦魂の受け継ぎってのは僕も驚きましたよ」
金剛「私はこっちの三笠殿には何度か会った事があるが、どこか武蔵に似ていたな」
作者「それはたぶん前に僕が挫折した日露戦争の艦魂年代史に出て来たキャラだからだよ。武蔵の人気を見て三笠をクーデレにしたんだけど・・・」
武蔵「・・・日露戦争の無知さで執筆断念」
作者「その通りなんだよね。まぁ、まだデータは残ってるから気が向いたらまた書くつもりではいるけど・・・」
武蔵「・・・未定」
作者「そうなんだよねぇ。この作品でいきなり出雲が出て来て読者を驚かせたでしょ？　しかも何か意味ありげな言葉を言って。あれって全部その日露戦争の作品と繋がってるんだ」
榛名「だったら書かなきゃまずいだろ」
作者「まぁ、そうなんだけどまずはこっちをやらないと」
金剛「そういえば、大和は知らないだろうが当時もう一人《大和》という名を持つお方がおられたな」
凛「え？　そうなの？」
榛名「あぁ、大和さんの事か」
隼鷹「誰？」
作者「君達の知っている大和は二代目なんだ。初代の『大和』は（帆船）スループっていう種類の軍艦で、実際に日清・日露・太平洋戦争全てを生き残ってるんだ。と言っても１９３５年に引退しちゃってるんだけどね」

武蔵「・・・会った事ない」
作者「そりゃ僕も考えてないもん。ややこしいし」
陸奥「確かにそうですね」
武蔵「・・・凛の名前の《紀伊》も、八八艦隊の一角であった紀伊型戦艦、そして私達大和姉妹の四女の名前から来てるから」
霧島「え？　四番艦は《紀伊》って名前だったんですか？」
作者「通説ではね。まぁ、結局建造もされなかったんだからここで考えても仕方ないさ」
陸奥「そうですよ。《あなたは過去に生きるのではない。勇気をもって過去を忘れ、将来に新活用を見出す事》と言いますし」
凛「誰かの名言？」
伊勢「特攻隊員の穴澤利夫少尉が恋人に残した最期の恋文からの引用や」
凛「その穴澤って人は？」
金剛「恋人を残して、沖縄の海に散ったそうだ」
凛「そっか・・・」
霧島「大和も、特攻に行っちゃったんだよね？」
榛名「そうだ。今頃は大隈海峡に向かっている頃だろうな」
金剛「特攻は好かん。日本もずいぶんと落ちたな」
凛「・・・私が掩護しようか？」
作者「いや、それはまずいって。歴史が覆るから」
凛「何よ。せっかく私が助けてあげようと思ったのに」
金剛「その気持ちはありがたくもらっておこう。貴様は向こうで活躍するがいい」
凛「え、あ、うん」
隼鷹「もうみんなぁッ！　暗いよぉッ！　ほらもっと盛り上がって盛り上がって！」
陸奥「隼鷹ちゃんの言うとおりです！　もっと盛り上がりましょう！」
榛名「そうだなッ！　おっしゃぁッ！　テンション上げていくぞッ

！」

一時間後・・・

陸奥「それでそれで？　日向さんとはどういう出会い方をしたのよ？」

凛「べ、別にいいでしょ。秘密よ秘密」

霧島「えへへ、やっぱり凛は日向さんが好きなんですね？」

凛「ち、違うって言ってるでしょッ！」

榛名「でもよ、さっきからその日向って奴の話の時、めちゃくちゃ嬉しそうじゃねぇか」

凛「き、気のせいよ！」

武蔵「・・・うそ」

凛「うそじゃないわよ！」

伊勢「素直やないなぁ凛はんは」

凛「だから違うって言ってるでしょ！」

金剛「では嫌いなのか？」

凛「え？　べ、別に嫌ってる訳じゃ・・・」

作者「えっと、結局日向さんが大大大好きな紀伊さんでした」

凛「違うって言ってるでしょッ！　ミサイル撃つわよ！」

金剛「そういえばなぜ貴様は紀伊と呼ぶのだ？　我々は凛と呼ぶが」

作者「なんか向こうの設定では艦魂は真名で呼び合うみたいだけど、人間は通常は艦名で呼ばなきゃいけないんだって。真名が許されるのは信用できる相手だけらしい」

金剛「では貴様は永遠に無理だな」

作者「失礼だな。可能性はゼロって訳じゃ――」

凛「絶対ない（キッパリ）」

作者「・・・」

霧島「あわわわッ！　作者さんが新シリーズのネタ作りを始めちゃいました！」

榛名「おいおいおいッ！　まだ全然終わってねぇのに何新作を考えてんだよ！」
金剛「まったく、これだからあいつは・・・」
武蔵「・・・バカ」

コンコン（ドアがノックされる）

？？「失礼します！」

ガチャ（ドアが開く）

伊勢「何や祥鳳やないか」
祥鳳「お邪魔してすみません」
凛「誰？」
陸奥「軽空母『祥鳳』の艦魂だよ。もっとも、独立機動艦隊の方はミッドウェー海戦からだから、珊瑚海海戦で沈んだ彼女は出てこないだろうけど」
祥鳳「お初にお目にかかります紀伊長官。空母『祥鳳』の艦魂です」
凛「こっちこそ初めまして。戦艦『紀伊』の艦魂。凛って呼んで」
祥鳳「では凛長官をお呼びします」
凛「いや、長官は恭介が――」
武蔵「・・・凛は司令長官クラスだから問題ない」
祥鳳「そうです。えっと、それより黒鉄長官は？」
作者「ここにいるけど」
凛「っていうか、この人も長官なんだ」
榛名「まぁ、一応な」
祥鳳「先程敵信傍受班が謎の電文を掴んだのですが、我々よりも高い技術力を必要とする高度な電波でしたが、何とか解読できました」
作者「ありがとう」
凛「敵信傍受班なんてものが何でいるのよ」

陸奥「名前はそうだけど、ここでは基本的に様々な情報を扱う機関なのよ」
作者「えっと・・・ほぉ、これはめでたいな」
榛名「あん？　何一人でニヤニヤしてんだよ。それは何なんだ？」
作者「どうやらこれは独立機動艦隊あとがき空間から発せられた電文（メール）らしいな」
金剛「何かあったのか？」
作者「いや、大和がもうとっくに着いてるっていう内容さ」
伊勢「へ？　大和、向こうさんにお世話になってるんか？」
作者「うん。なんか向こうから招待状をもらってね。最初はどうしようか悩んでたみたいだけど、翔輝の後押しがあって行ったんだけど、どうやらすれ違っちゃったみたいだね」
隼鷹「ずるいよ！　私も行きたい！」
陸奥「私ももう一人の私である鞘さんに会いたいです！」
金剛「私は一度向こうの私に海軍精神を叩き込んでやりたい」
作者「やめなさい。向こうに迷惑が掛かるから。で、紀伊さんはどうしますか？　なんか向こうも盛り上がってるみたいですけど」
凛「あぁッ！　そういえば私恭介を捜してて！」
霧島「じゃあ帰る？」
凛「そうね。もしかしたら向こうに戻ってるかもしれないし。とりあえず戻るわ」
金剛「そうか。気をつけて帰れよ」
榛名「テメェとはまだ決着がついてねぇんだ！　今度は叩きのめすからな！」
陸奥「じゃあね凛ちゃん」
霧島「向こうの私によろしく」
武蔵「・・・撫子とまだ見ぬ向こうの私によろしく」
隼鷹「草薙さんに言っておいて！　向こうでも私と飛鷹を出してって！」
祥鳳「あの、では私は向こうの妹達によろしくお伝えください」

作者「草薙先生によろしく言っておいてください」
凛「わかったわよ。じゃあみんなもがんばりなさい。あと比叡にはお菓子おいしかったって言っておいて。じゃあね！」

金剛「皆も解散して、今は私と貴様だけか」
作者「いやぁ良かった良かった。みんな仲良くなって」
金剛「そうだな。こういう交流も大切にせんとな」
作者「じゃあ次回の予告をするよ！　次回はついに決戦の四月七日！　大和達十勇士は沖縄に向かって偽装針路を執りながらも目指します。そんな第二艦隊に心強い援軍が現れます。それは宇垣中将が独断で出した戦闘機隊。援軍に喜ぶ大和達。しかしその戦闘機隊の中には・・・。次回は原作と違って架空戦記が入ってきます！」
金剛「まぁ架空戦記というのはおこがましいくらいの規模だがな」
作者「そうだね。さらに次回のあとがきでは今度は護衛戦艦『神龍』のキャラをお呼びしたいと思います！」
金剛「貴様、よくがんばるな」
作者「艦魂同盟を結んでるんだ。とことん行くよ。でもまぁ、ちょっと私用で土日が潰れるから、来週になると思うけど」
金剛「まぁ、がんばる事だな」
作者「ありがとう。ではまた次回！　草薙先生！　今回はこんな感じでよろしいですか!?　それと伊東先生！　楽しみにしててください！」
金剛「あ、その他の読者もよろしくな。評価や感想、待っているぞ」

第十四章　第七節　宇垣の想い　剣の決意　大空を舞う空の戦士達（前書き）

一週間も間を空けてしまってすみません。本当にすみません。
えっと、今回はその分を取り戻そうと比較的長めです。
今回はサブタイトルの通り、剣が動きます。しかし一体大和や翔輝達とどのような接点が。そして宇垣は一体・・・
ここからちょっとした架空戦記に入りますが、大局には影響はほとんどないので、いきなり第二艦隊ＶＳ米戦艦部隊なんて事はありませんから。あくまでその辺は史実どおりです。
では、一週間ぶりの作品、どうか最後まで読んでください。

第十四章　第七節　宇垣の想い　剣の決意　大空を舞う空の戦士達

第二艦隊は夜通し南西へ進み続け、ついに大隈海峡を突破。佐多岬を過ぎた後、行き先を秘匿（ひとく）する為に北西に艦隊を転進させた。

西へ向かい続ける第二艦隊。七日午前六時、艦隊は『大和』を囲むように九隻で円陣を組む第三警戒序列（対空陣形）に陣形を変更。いよいよ決戦準備に取り掛かった。

翔輝と大和もすでに艦橋で待機していた。

艦橋の中はピリピリしていた。今日は長い一日になる。誰もがそう感じていた。

いよいよ決戦の時。

大和は不安を打ち消すように翔輝の手をギュッと握った。翔輝もそんな彼女の不安を和らげようとそっとその手を握り返した。

鉛色の空、これが最期の日になるならば、あまりにも悲しい天気だ。しかしこの天気は第二艦隊にとっては諸刃（もろは）の剣であった。

この天気では敵偵察機に発見される可能性が低くなる。さらにはこのまま天気が荒れれば、敵空母は艦載機を発艦できなくなるからだ。しかし逆にこの天気では敵機の発見が遅れる可能性もあり、何より目視射撃を重視する日本艦艇にとっては照準を合わせづらくなるという危険性もはらんでいる。だからこその諸刃の剣であった。

大和はいつ来るかわからない敵の存在に恐怖しながらも、隣に立つ翔輝の手を握り、その恐怖を押さえ込んでいた。

艦隊は順調に進み続ける。嫌というくらい何もない時間に、恐怖と期待という相反する想いを抱きながら、翔輝と大和は窓の外の鉛色の空を見上げていた。

その時、まだ運命は彼らを見放してはいなかった。

『味方戦闘機の編隊後方より続ぅくッ！』

伝声管を伝わって艦橋に響いた見張り兵の報告に、艦橋にいた者皆が驚愕した。慌てて双眼鏡で確認する参謀達の中で、大和も慌て

て確認する。すると、後方より日の丸を付けた戦闘機二十数機がこちらに向かって突撃して来ていた。

突如現れた掩護機に第二艦隊司令部は驚愕していた。彼らは掩護の飛行機は一機も出ないと知らされていたからだ。

「ど、どういう事だッ!?　掩護の戦闘機は出ないんじゃなかったのかッ!?」

驚く森下の言葉は、ここにいる皆の気持ちの代表であった。伊藤も後方から追い掛けて来る戦闘機隊を見詰めて驚いていた。

「一体、どこから・・・」

「もしかしたら・・・」

その時、大和が小さな声を漏らした。その声に、彼女が見える翔輝と森下が反応した。

「どうしたの？　何か知ってるの？」

翔輝が問うと、大和は「はい」と静かにうなずいた。

「ここは九州沖です。九州は主に鹿屋(かのや)基地を中心に海軍の航空隊は展開しています。鹿屋基地に司令部を置いて部隊を指揮しているのは基地航空隊で編成された第五航空艦隊です。そして、その第五航空艦隊の司令長官は――宇垣纏中将です」

「まさか、宇垣中将がッ!?」

森下はつい大声を出してしまった。その声に皆が振り返る。

「何？　宇垣が？」

伊藤もすぐに反応して三人に近づく。

「どういう事だ？　もしかして、大和が何かを知っているのか？」

「はい。どうやら大和は、この戦闘機隊は鹿屋基地にいる宇垣纏中将が出したのだろうと推理しているのですが・・・」

「宇垣がか・・・確かにあいつなら、自分の志で命令を反する事ぐらいはするだろうな」

「それに、宇垣中将は開戦時は連合艦隊参謀長として、あ号、捷一号作戦の時には第一戦隊司令官としてこの『大和』に座乗して指揮していたいました。あの方にとって、『大和』は大切な存在なので

しょう」

翔輝の言葉に、伊藤は「そうか・・・」と小さくつぶやくと、こちらに向かって来る戦闘機隊を見詰める。その瞳はどこか嬉しそうであった。

彼と宇垣は開戦時に対立していた。その時伊藤は軍令部次長として山本長官が押していた真珠湾攻撃に反対していた。一方の宇垣は山本の右腕として賛成側にいた。あの時、日本の命運を分ける時に対立していた彼が、自分達の為に戦闘機を出してくれた。それも、命令違反をしてまで。

彼にとって、それはどんな味方よりも頼もしい存在であった。

『後方より味方戦闘機隊接近！　零戦多数！　うち一機は紫電改！」

その報告に、再び皆が驚いた。

「紫電改だと？　確かあれは松山の三四三航空隊にしか配備はされておらんが」

「そうですよね。それも一機だなんて・・・」

伊藤と森下もこれには首を傾げた。

「きっと、松山から出撃していた一機が機体不調か何かで鹿屋基地に着陸していた所に、その一機も出撃したのだと思いますが」

そう言ったのは『大和』の副長である能村次郎（のむらじろう）大佐。彼の意見は最も的確なものであった。

「しかし、いくら宇垣でも他の航空隊の機まで出すだろうか？」

「きっと、彼の方から志願されたのでしょう。何か、この艦隊の艦艇に思い入れがあるのでしょうか？」

伊藤と森下はそれぞれ考えを巡らすが、結局答えは出なかった。

そんな二人から離れた大和は上空を旋回して護衛してくれる戦闘機隊を見詰め、満面の笑みを浮かべた。それはもう、本当に幸せそうな笑みだ。

「宇垣中将・・・戦闘機隊の皆さん・・・ありがとうございますッ！」

「宇垣長官、ありがとうございます。これで僕らは、戦えます」

翔輝と大和は嬉しそうに笑うと、一度九州の方に向かって敬礼し、上空を護衛してくれる戦闘機隊に向かってもう一度敬礼する。
その瞳に映る戦闘機に描かれた日の丸は、今まで見たどの日の丸よりも、勇ましく、頼もしく、美しく輝いていた。

上空を旋回しながら第二艦隊を護衛する戦闘機隊。そのほとんどは鹿屋基地所属の宇垣直属の零戦隊である。しかしその中に混ざる一機の紫電改。これは松山基地の第三四三航空隊所属の紫電改であった。そしてその機体に乗るのは・・・
「『大和』は僕が守る。瑞鳳とも親しかった大和を、こんな惨い作戦で殺してたまるか」
そう言って、剣はギュッと飛龍のお守りを握り締めた。

時は少し遡(さかのぼ)ってまだ夜も明けぬ七日午前四時の事、昨日菊水一号作戦の為に多くの特攻機を出撃させた鹿屋基地では慌しい動きが起きていた。
格納庫から次々に零戦が引き出され、滑走路に並べられていく。しかしその機体には特攻機の象徴である二五〇キロ爆弾は搭載されていなかった。つまりこれは、零戦本来の役目である空中戦を行う、戦闘機としての出撃であると物語っていた。
そして、その滑走路の横では多くの搭乗員達が規則正しく並んでいた。そのうち約二〇人が中央に並び、それ以外の搭乗員はそのまわりに並んでいる。その中に、剣の姿もあった。
実は剣は昨日菊水作戦の為に護衛戦闘機隊として出撃するも、機体のトラブルでこの鹿屋基地に緊急着陸をしたのだ。すでに紫電改の整備は終わり、今日の昼には松山へ戻る予定であった。その矢先に、いきなり搭乗員起こしの令が出て、何がなんだかわからないままこうして列に並んでいた。
しばし待っていると、搭乗員達の前に置かれた礼台の上に一人の男が上って皆を見下ろした。剣は初めて会ったが、彼こそがこの鹿

屋基地に陣を置く第五航空艦隊の司令長官、宇垣纏中将であった。
宇垣は居並ぶ搭乗員達を見回す。
皆若い、多くは二〇代前半ぐらい。中には大人にもなっていないような少年の姿もあった。これが自分が指揮する部下達の顔であった。
昔に比べ、ずいぶんと落ちる所まで落ちてしまったらしい。
宇垣は複雑な想いで彼らを見回すと、一度瞳を閉じた。
昨日届いたある情報。それを知った瞬間、怒りで頭がどうにかなりそうだった。
すぐに連合艦隊司令部に電話で怒鳴り、草鹿や神、豊田などの現連合艦隊司令部の要員に激昂した。彼らが命令したのは、もはや作戦ではない。
ただ、自分達の誇りの為に、何千人もの命を犬死させようとしているのだ。
だからこそ、自分は今こうして、連合艦隊司令部の命令を無視した行動を起こそうとしているのだ。
瞳を再び開くと、そこには決意の炎が燃えていた。
「まず皆に言っておかなければいけない事がある。昨日一六四五、戦艦『大和』以下十隻の第二艦隊は徳山沖を出港。沖縄方面に向かった。今頃は豊後水道を南下している頃だ。おそらく、これが連合艦隊最後の出撃であろう」
宇垣の言葉に、皆は深刻そうな顔をする。剣も、つい先日見たあの巨大戦艦がわずか九隻の艦艇を引き連れて敵地となった沖縄へ向かおうとしている。そう思うと、胸が締め付けられた。
沈黙している皆を見詰め、宇垣は言葉を続ける。
「付け加えるが、第二艦隊の艦艇は片道の燃料しか積んでいない」
その言葉に、皆は絶句した。
片道分の燃料しか積んでいない。それはつまり・・・
「まさか、『大和』も特攻に・・・？」
誰かがつぶやいた言葉に、宇垣は静かにうなずいた。

「とうとう、『大和』まで特攻に駆り出されてしまった」
剣は頭が真っ白になった。あの時、呉に来襲した敵機を迎撃に向かった時に護衛した『大和』。そして、その防空指揮所で笑顔で手を振っていた少女。あの子が、特攻へ向かった。
飛龍や瑞鳳の笑顔と重なる。
また、自分は何も守れないのだろうか。
瑞鳳の親友であった瑞鶴の親友、そして瑞鳳とも交流があった大和が、死地に向かって旅立っていった。いや、それだけじゃない。他にも九人の艦魂がそれに続き、そして何千人という兵士達も共に。
戦闘機とは、よく誤解されるが攻撃の飛行機ではない。それは爆撃機、攻撃機での話である。戦闘機は何かを守る飛行機だ。艦隊を守り、味方攻撃隊を守り、基地を敵機から守る。
自分は、守る存在なのだ。
なのに、また何も守れない。そんなのは、嫌だった。
宇垣は一度皆を見回すと、静かに言った。
「今さらだが、私は開戦時連合艦隊参謀長として山本元帥と共に『大和』に乗っていた。そして、あ号、捷一号作戦の時は第一戦隊司令官として『大和』に乗っていた。『大和』は、私にとって特別な存在なのだ。その『大和』を守れずして、私は一体何を守れと言うのか」
皆の視線が集中する中、宇垣は宣言した。
「現在『大和』には空からの掩護が全くない。それでは特攻すら叶わない。私は独断で戦闘機を出す！」
その言葉に、搭乗員達の顔が引き締まった。特に、中央に並ぶ二〇人の若い戦闘機乗り達は、自分達に与えられるであろう命令違反の任務に覚悟を決めた。
「ご苦労だが、諸君に行ってもらう。発進は〇四三〇。ただし他に任務もある事だし、一〇〇〇になったら、必ず帰って来てもらいたい。以上だ」
二〇人の搭乗員達はその言葉に見事な敬礼をしてみせた。その時、

剣も覚悟を決めて一歩を踏み出した。まわりの制止の声を振り切り、剣は恐れ多くも艦隊司令長官の前に立った。そして、

「長官！　私も行かせてくださいッ！」

剣は言った。それは彼の決意の表れであった。

宇垣は突如現れて自分に直訴した搭乗員に驚くが、顔には出させずに冷静に、威厳ある顔でその彼を見詰める。

「貴様、どこの隊だ？」

「第三四三航空隊！　三〇一飛行隊所属！　大空剣大尉であります！」

宇垣は剣の所属隊に再び驚く。そして昨日緊急着陸した紫電改の搭乗員だとわかった。

宇垣はじっと自分を見詰める剣を、鋭い眼光で見詰める。その瞳に剣は一瞬恐怖するが、下がりそうになる足を堪えて立ち続ける。

「お願いします！　私も行かせてください！」

「貴様は源田の航空隊だ。私の命令で、動かす訳にはいかん」

「お願いします！　私は、『大和』を守りたいんですッ！　もうこれ以上、《彼女達》を傷つけたくはないんですッ！」

剣の言葉に宇垣はこれまでで一番驚き、表情にも出てしまった。

彼が言った《彼女達》とは――おそらく艦魂だろう。

自分は艦魂が見えない。しかし、前『大和』艦長であり現在は第二艦隊参謀長として今回も出撃した森下、そして、艦魂達の中心的存在であった長谷川航海士。彼らから艦魂の存在は知っていた。大和がどういう子かをも、聞いていた。そして自分も、姿は見えないが武蔵とは親しい関係であった。

だからこそ、彼の気持ちは痛いほどわかっていた。

宇垣は自分を真っ直ぐ見詰める剣を見返す。

「・・・大空大尉。貴様、艦魂が見えるのか？」

今度は剣が驚く番であった。まさか長官もという疑問が頭を過ぎる。

その反応に、宇垣は確信を得た。

「以前、君は母艦搭乗員だったのか？」
「はい。『飛龍』と『瑞鳳』に乗っていました」
「そうか・・・」
宇垣はそれ以上何も言わずに小さくうなずくと、決意した瞳で剣を見詰める。
「わかった。貴様の出撃を許そう。私から源田には言っておく。思う存分暴れて来い」
「ありがとうございますッ！」
剣は満面の笑顔で敬礼した。そんな彼を一瞥し、宇垣は出撃する搭乗員達を見詰める。そして・・・
「解散ッ！」
宇垣の命令に、搭乗員達は散った。そして出撃搭乗員達は次々に愛機の零戦に乗り込む。剣もまた愛機の紫電改に駆け寄ると機体に描かれた日の丸を一度撫で、コックピットに乗り込もうとする。と、
「大空大尉！」
その声に振り返ると、数人の若い少年飛行兵達が駆け寄ってきた。不思議そうに見詰める剣に対し、少年兵達は見事な敬礼をしてみせた。そのうちの一人、一番小柄な少年が前へ進み出た。
「大空大尉！　お久しぶりです！」
「え？　えっと・・・」
「お忘れですか？　大尉と共に瑞鳳航空隊に所属していた清水隆明（しみずたかあき）二等水兵です！」
「清水？　あ、あの時の坊主かッ！」
剣は思い出した。捷一号作戦の際に全国から掻き集めた航空機と搭乗員の中で一番背が小さかった少年兵の事を。
「思い出してくれましたか？」
「あぁッ！　久しぶりだな！」
「はいッ！　まさか大尉が三四三航空隊に属していたなんて、感激です！」
「ははは、まぁ紆余曲折を経てな」

「私も大尉と共に『大和』の直掩に出撃します！」
「そうか、で？　そこの兵達は？」
「私の知り合いで、私達と共に『大和』の直掩に出撃する兵達です」
清水のまわりの兵達は見事な敬礼をする。それに剣も敬礼で応える。
「大尉！　必ず『大和』を守りましょうッ！」
「もちろんだ。みんなの活躍に期待する」
「敬礼ッ！」
清水の号令に少年兵達は見事な敬礼をし、踵を返して己が相棒に乗り込んでいく。
剣は今度こそ紫電改に乗り込むと最終確認をする。
そして、点検を終える頃には出撃時刻となっていた。
零戦隊と一機の紫電改は滑走路に進入すると、出撃の合図と共に次々に出撃して行った。
整備兵達や司令部要員、そして宇垣は飛び立っていく戦闘機隊に軍帽を振った。
空の向こうに消えていく戦闘機隊。
「頼むぞ・・・」
宇垣は、全機が空の向こうに消えて見えなくなっても、いつまでも帽を振り続けていた。

宇垣纏は終戦の日、自ら最後の特攻機に乗り込み、沖縄海域に突入。戦死した。

第二艦隊の各艦の甲板には兵達が集まって上空を護衛してくれる戦闘機隊に手を振り続けていた。そんな光景を見詰め、大和は目頭を熱くした。
そっと、横からハンカチが差し出された。驚いて振り返ると、そこには優しく微笑む翔輝が立っていた。
「使いなよ」

「ありがとうございます・・・」
大和はハンカチを受け取るとそっと目頭に当てた。そんな彼女を見詰め、翔輝はそっと彼女の頭を優しく撫でる。
「少佐、嬉しいですね。私達はまだ、見捨てられた訳じゃないんですね」
「あぁ。宇垣長官には、感謝してもし切れないよ」
「そうですね。本当に、あの人には助けられてばかりですね・・・」
大和は上空を守ってくれる戦闘機隊を見詰める。その時、上空を旋回していた紫電改に目が行った。そして驚く。
「あ、あの紫電改！　三月十九日の空襲の時に私を守ってくれた紫電改です！」
「そ、そうなのか？」
「はいッ！　あの搭乗員さん、私に手を振ってくれた人ですよ！」
大和は嬉しそうにそう言うと、踵を返して走り出した。翔輝も慌てて彼女を追い掛けると、彼女は艦橋の一番上、防空指揮所に上がった。
翔輝が防空指揮所に上がると、見張り兵達が上空を護衛してくれる戦闘機に満面の笑顔で手を振っていた。
そして、大和は上空を旋回する紫電改に向かって、大きく手を振った。
剣も大和の存在に気づくと、笑みを浮かべる。そして風防を開けて身を乗り出すと、彼女に向かって手を振った。
「や、やっぱり私が見えてるんですよ！」
「本当に？　そりゃまた珍しい」
翔輝も上空を飛ぶ紫電改に向かって手を振った。
他の艦の上でも同じように兵達が上空の戦闘機隊に向かってを振り続け、それぞれの艦の艦魂達もまた、上空の戦闘機隊に感謝していた。
矢矧は見事な敬礼をし、初霜は目に涙を浮かべて手を振り、霞は壁に背を預けて小さく微笑み、雪風は両手を振りながら「ありがと

う！」と叫び、浜風は軍帽を力いっぱい振って上空の戦闘機隊に感謝し、磯風は小さく微笑みながら敬礼をし、冬月はフッと口元に笑みを浮かべて見事な敬礼をし、涼月は泣きながら戦闘機隊に向かって手を振っていた。

皆、彼らの存在に心の底から感謝していた。

この時がいつまでの続けばいい。誰もがそう想い、上空を守ってくれる戦闘機隊に手を振り続けていた。

だがこの時、すでに事件は起きていた。

その頃、艦隊先頭を走る『矢矧』の右横にいた『朝霜』は予期せぬ事態が起きていた。

「ゲホゴホッ！　ゲホォッ！」

上空の戦闘機隊に手を振る者が大勢いる艦橋で苦しそうに朝霜は咳きをしていた。その顔は熱っぽく赤く染まり、額には玉のような汗を掻き、苦しそうに顔に顔をゆがめていた。その姿はかなり疲れ切っていた。

朝霜は苦しそうに自分の胸を押さえると、自分の体に起きている《異変》に戸惑っていた。

「一体、どうしたの、私・・・ゲホゴホッ！」

出撃の時には何ともなかったのに、夜中になってちょっと体調が悪くなった。そして夜が明けると、咳が激しく、体は鉛のように重い。

一体自分の中で何が起きているのか。自分の体なのに、朝霜にはそれがわからないし、知る術はなかった。

その時、咳き込む彼女の横を機関科の水兵が走り抜け、艦長に何かを報告した。その内容と、艦長の下した決断を聞いた朝霜は愕然とした。

「そ、そんなッ！　ダメッ！　私は最後までみんなと――ゲホゴホッゲホッ！」

一際大きく咳をし、朝霜は苦しさのあまりその場に倒れた。

旗艦『大和』に『朝霜』から《機関故障》の信号が送られた。そして、『朝霜』は機関が故障の為に速度が低下し、残念ながら艦隊を落伍する事が決定された。

朝霜はぐったりした体を雪風と浜風に支えられて『大和』の艦橋に来ると、自分を心配そうに見詰める大和や翔輝、矢矧や霞といった十勇士の前で土下座した。

「申し訳ありませんッ！　私は、最後まで皆さんと共に戦いたいのに、こんな所で・・・ゲホゲホゴホッ！」

「朝霜！　無理しないで！」

雪風が激しく咳き込む朝霜の背中をさする。朝霜は激しく咳をし続け、苦しそうに顔をゆがめながらも、必死になって大和を見詰める。

「私も・・・一緒に行きたいです・・・ッ！　行かせてください――ゲホゴホッ！」

朝霜は必死になって大和に懇願するが、大和は首を横に振る。

「それはできません。無理しないで。生きる事も、今は必要な事なんですから」

大和は朝霜に優しく接した。そんな優しい司令官に朝霜はさらに悔しそうに泣いた。

「安心しろ。貴様の分も、私達が暴れてきてやる」

「そうよ。私達に任せといて。あなたは、早く体を治しなさい」

霞と初霜の言葉に、朝霜は返す言葉なく涙を流し続けた。

「朝霜。無事に日本に帰れる事を祈ってるからな」

翔輝の言葉に、朝霜は静かにうなずくと、雪風に体を支えられながらも必死に立ち上がった。そして、自分を見詰める大和や矢矧達、翔輝や森下。さらには見えないはずなのに、こたらを見詰める伊藤長官。

「日本を、頼むぞ」

伊藤の静かな言葉に、朝霜は見事な敬礼をしてみせた。その白い

頬を流れる涙は、彼女の無念を静かに表していた。

駆逐艦『朝霜』は艦隊から落伍。針路を内地に直して北東へ進んだ。

残った九隻の艦隊は直掩護の戦闘機隊を率いてさらに西北西へ進んだ。

落伍した『朝霜』は単艦呉に向けて来た道を戻っていた。

肉体的にも精神的にも疲弊した朝霜は艦橋の隅にぐったりと倒れていたが、状況は急変した。

「敵機来襲ッ！」

突然の敵機襲来に朝霜は力ない体で飛び上がった。

確認すると、右方向から敵機三〇機程が迫っていた。

すぐさま対空戦闘の命令が出るが、機関が不十分な『朝霜』は敵機にとって赤子のように弱々しい敵にもならぬ相手だった。

必死に対空砲火を放つ『朝霜』の艦橋でも朝霜が咳をしながらも必死に刀を振るった。だが、結果は変わる事はなかった。

朝霜はまばゆい光に包まれた瞬間、絶命した。

一方その頃、『朝霜』が脱落した第二艦隊は護衛の戦闘機を引き連れながら東シナ海を西北西に進んでいた。

しかし午前十時、護衛戦闘機隊は引き上げの時間となってしまい、次々に反転して鹿屋基地に向かって飛び去っていく。

「行ってしまいますね」

大和は防空指揮所から飛び去っていく戦闘機隊を見詰め、少し悲しげに手を振って彼らを見送っていた。

「仕方ないさ。これ以上ここに留まれば、燃料切れで基地に戻れなくなってしまうからね。ここまで護衛してくれただけでも感謝しなきゃ」

隣で同じく手を振る翔輝は苦笑いした。その顔は諦めがあるが、

やはりどこか悲しげだ。
「そうですね。彼らの為にもこの作戦、必ず成功させなければいけませんね」
「そうだな」
二人は去って行く戦闘機隊に手を振り続ける。そして、剣の紫電改も機体を反転させて艦隊に背を向ける。
コックピットから剣は離れていく艦隊を見詰め、後ろ髪を引かれる思いだった。
宇垣が帰って来いと命令した午前十時となり、戦闘機隊は引き返さなければならない。だけど、まだ何もしていない。なのに、戻らなきゃいけないなんて・・・
艦隊に背を向けて基地に戻って行く味方機を見詰め、剣は小さくため息した。
「ごめん・・・」
そう小さく謝ると、剣は前を見詰める。自分達が戻るべき鹿屋基地に向かって、剣は機首を向ける。
去って行く戦闘機隊に、大和はいつまでも手を振り続けていた。

直掩戦闘機が去った後、翔輝と大和は艦橋に戻った。
再び静かになった艦橋で今後の航路を計算している航海長の補佐をしている翔輝の横で大和は彼をじっと見詰めていた。
「何か用？」
「い、いえ。何でもありません」
翔輝が不思議そうに質問すると大和は頬を赤らめて慌てて視線を逸らす。そんな大和を翔輝は首を傾げて見詰めたが、すぐに海図に目を戻す。その時、
『左三〇度！　マーチン二機！』
突如艦橋に響いた報告に艦橋に戦慄が走った。
全員が報告の方向を見詰めると、そこにには二機の敵偵察機が飛んでいた。

「対空戦闘ッ！」
双眼鏡で敵機を睨む有賀はすぐに戦闘命令を下礼した。
「主砲三式弾砲撃用意ッ！　目標左三〇度！　第一第二主砲旋回始めッ！」
有賀の命令と同時に前部第一第二主砲が旋回し、敵機をその巨大な砲身で睨む。それを確認して有賀は砲撃命令を出した。
「主砲三式弾砲撃初めッ！　撃てえええええぇぇぇぇぇッ！」
有賀が叫んだ瞬間、あたりはまぶしい光に包まれた。続いて、ドガアアアアアアアアンッ！　という爆音が艦隊を包み込み、『大和』の巨艦が揺れた。
次の瞬間、敵機の手前で三式弾が炸裂し、天空に大輪の花が咲き誇った。だが、結局命中はしなかった。その時の天候は厚い雲が上空を漂っていた為に視界は悪く、ただでさえ命中率の低い艦砲はさらにその命中率が低くなっていた。
その後、三式弾に畏怖（いふ）したのか、それとも任務を終えた為かは不明だが、敵機は空の向こうに撤退して行った。
撤退して行く敵機を睨み、伊藤は有賀を見る。
「もう航路を偽装をしても意味はない。真っ直ぐ、沖縄へ行こう」
伊藤の言葉に有賀はうなずき、機関室直通の伝声管に命令を下した。
「針路変更！　沖縄本島へ向かう！　とぉりかぁじッ！　両舷前進全速！」
ついに敵本拠地に向かう事になり、大和の表情にも今まで以上に緊張が走る。そんな大和の肩を、翔輝はそっと叩いた。
「少佐・・・」
「大和。僕が傍にいてやる。安心して」
「はい。少佐がいるなら、怖いものは何もありません！」
疑う事を知らないかのように満面の笑みを浮かべる大和に、翔輝は苦笑する。
「僕はそんなに頼れる人間じゃないのに」

「そんな事ありません――だから、私の隣にいてくださいね？」
「わかった」
翔輝と大和は互いに笑い合い、大和はそっと翔輝に抱き付いた。
そんな二人を森下は優しげな笑顔で見詰めていた。
艦隊は針路を南に変更して沖縄に向かって全速力で進撃した。それと同時に索敵機との触接を受けて伊藤は敵機が来襲して来ると確信し、全艦対空戦闘用意を発令。超一級非常警戒態勢になった。
同時に、『大和』では昼食としておにぎりとタクアンが配られた。
だが、これが『大和』乗組員の最後の食事となった・・・

その頃、鹿屋基地に向かって帰還する戦闘機隊は順調に九州に向けて飛んでいた。その中で剣はずっと沈黙し続け、手に持つ飛龍の形見の御守りを見詰める。
飛龍も瑞鳳も、守る為に戦った。
そして自分も、今まで彼女達を守ろうと必死になって戦ってきた。
だが、結局はどちらも守れなかった。
今『大和』は沖縄に向かっている。それは特攻作戦だ。生きて帰る事を考えない死の作戦。
防空指揮所で見たか弱い女の子。あれが『大和』の艦魂だ。考えてみれば、飛龍や瑞鳳よりも年下。瑞鶴よりも年下の女の子である。あの子が、特攻に向かっているというのに、自分は何もできない。
――いや、できる事はある。
剣は操縦桿をギュッと握った。
「宇垣長官は、命令違反をしてでも『大和』に戦闘機を付けさせた。だったら僕も、命令違反しでも――大和を守るッ！」
その瞬間、剣は操縦桿を思いっ切り倒した。それに従って紫電改も機体を反転させる。そして、驚く戦闘機隊に背を向けて、剣は第二艦隊を再び追いかける。すると、後方から数にして五機の零戦が追い掛けてきた。驚いてその零戦の一機に視線を向けると、そこにいたのは清水であった。

彼は自分が見ていると確認すると、備え付けの小さな黒板に何かを書くと、剣に向かって示した。
『私達モ行キマス』
剣は首を振って拒否したが、清水は無視して紫電改の後に続く。他の四機の零戦も同じようにしてついて来る。剣はそれ以上何も言わずに視線を前に向ける。
「大和、今行くからな」
そう小さくつぶやいて飛龍の御守りをギュッと握る。
命令違反で反転した戦闘機隊は第二艦隊を追い掛けて全速力で飛翔した。

一方その頃、戦艦部隊を率いて北上をしていたレイモンドに報告が入った。
「機動部隊が『ヤマト』を発見したそうです」
「そうか、間に合わなかったか」
レイモンドはニューメキシコの報告に残念そうに肩を落とした。彼も戦艦同士の艦隊決戦を望んでいたのだ。だからこそ、機動部隊に先を越された事が悔しくて残念だった。
「構うもんか！　攻撃するなって司令が命令すればミッチャーは動かない！　そうすれば――」
「それはできない。機動部隊が見つけた敵を、私達戦艦部隊が横取りするような事があれば、戦艦と空母の間に溝を生む事になる」
ニュージャージーの怒号に、レイモンドはため息交じりにそう答えた。だが、ニュージャージーは納得できない。
「『ヤマト』を潰すのは私達戦艦よ！　空母にばっかりいい格好させられないわ！」
「で、でもミッチャー中将はもうすぐ攻撃準備を整えるそうですよ？」
「そうね。仕方ないけど、ここは空母さん達に譲るしかないわね」
諦めるウィスコンシンとミズーリの言葉に、ニュージャージーは

激怒する。
「ふざけんなッ！　もし空母が攻撃したら、私は空母を攻撃するわよ！」
「やめなさいニュージャージー。見苦しいわ」
そう言って激怒するニュージャージーを止めたのはアイオワ。彼女達の一番上の姉である。だが、ニュージャージーはそれでも納得できない。
「戦艦を叩くのは私達戦艦の役目よ！　空母は大人しく同じ空母を攻撃してればいいのよ！」
「日本の空母はすでに壊滅状態よ。それに、戦艦を攻撃するのに空母とか戦艦とかは関係ないわよ」
「姉さんはいいのかよッ！？　空母なんかに『ヤマト』を潰されて！」
「仕方ないわよ。早い者勝ちなんだから、今回は私達の負けね」
「そ、そんな・・・ッ！」
愕然とするニュージャージーを一瞥し、アイオワはニューメキシコを見る。
「司令。仕方ありません。『ヤマト』は空母に叩いてもらいましょう。私達の夢は、どうやら叶いそうもありませんね」
「そうね。仕方ないわね――司令」
ニューメキシコはレイモンドを見詰める。その視線を受け、レイモンドも彼女を見た。互いの瞳を見詰めながら、ニューメキシコは言った。
「ミッチャー中将へ言ってください。『ヤマト』は貴艦隊で攻撃されよ、と」
「・・・わかった」
レイモンドは静かにうなずくと、参謀達に機動部隊で『ヤマト』を攻撃せよと命令を下した。それらのやり取りを見詰め、ニューメキシコは静かにため息した。
「ヤマト。あなたには悪いけど、どうやら艦隊決戦であなたを沈め

る事はできないみたい。ごめんね」
　ニューメキシコも日本は嫌いだ。だが、日本が生み出した『ヤマト』はどうも憎めない。それは同じ戦艦だからなのかはわからないが。せめて、その最期だけは自分の手で沈めたかった。
　アイオワはそんなニューメキシコを一瞥し、ミッチャー機動部隊がいるであろう方を見詰めて小さくため息した。
「私の負けねエンター。私達の分もちゃんと活躍しなさいよ。そして、ヤマトをあまり苦しめないでね」
　それだけ言うと、アイオワは悔しそうに地面を叩くニュージャージーの頭をそっと撫でた。

　レイモンドから命令を受けたミッチャー中将は直ちに自分の配下の全空母に攻撃命令を発した。
　次々に甲板に並べられる航空機を見詰め、エンタープライズはニヤリと唇の端を吊り上げた。その笑みはまるで獲物を獲た狼のようである。そんな彼女を見詰めるエセックス達はついに来たこの時に歓喜の声を上げていた。
「いよいよだぜ！　狂った日本の象徴の『ヤマト』を潰す時が来たッ！　全員気合を入れてぶっ潰せッ！」
『サーイエッサーッ！』
　護衛空母や軽空母の艦魂達に激励を送るエセックス。そんな彼女を見詰め、ヨークタウンは疲れたようにため息した。
「まったく、すっかりエンターさんに染まっちゃって」
「まあまあ、お姉ちゃんだって昔はエンターお姉ちゃんのファンだったじゃない」
「あの頃の私はどうかしてたのよ。あの人の下で働くってのは、本当に辛いんだから」
　ホーネットの言葉にもヨークタウンはため息する。困った姉やその色に染まっていく妹達の板ばさみ状況なヨークタウンは色々と気苦労が多いのだ。

ホーネットは疲れているヨークタウンを心配そうに見詰める。彼女は昨日特攻機の攻撃を受けているのだ。あまり無茶はしてほしくない。

「お姉ちゃん、傷はもう大丈夫なの？」

「もう平気よ。メイド・イン・アメリカの空母はダメージコントロールが桁違いなんだから」

そう言って笑みを浮かべるヨークタウンに、ホーネットは安堵の息を漏らした。そんな風に会話している二人に、トコトコとレキシントンが寄って来た。

「本当に全空母に攻撃命令が出てる。ミッチャー中将は本気」

レキシントンは無表情でそう言うと、『ヤマト』というラッキーな獲物を狩れる事になって気合を入れているエセックスと小型空母の艦魂達、そしてエンタープライズを見る。

「・・・どうやら、こっちも本気みたいね」

「そうなのよね。私はあんまり戦艦は攻撃したくないのよ。特に日本の戦艦は主砲でも対空砲火できるじゃない？　他を攻撃するよりも犠牲が多いんだもの」

「それでも戦艦の対空砲火ってそんなに強くないから、あんまり弱いものいじめをしてるみたいでいい気にはなれないよ。もう戦いたくないのに・・・」

ヨークタウンとホーネットの言葉に、レキシントンは小さくうなずく。

「『ヤマト』はアイオワやニューメキシコ達に任せれば良かった。私も、時代錯誤かもしれないけど、戦艦同士の艦隊決戦は興味がある」

「奇遇ね。私もよ」

「わ、私はあんまり・・・」

空母艦魂の中でエンタープライズ色に染まっていない三人はあまり今回の作戦は乗り気ではなかった。だが、そんな三人が見詰める先で並ぶ艦載機を見詰めてくくっとのどで笑うエンタープライズ。

いつになく彼女は嬉しそうだ。
「ついに来たわよ！　ジャップが大切に守っていた『ヤマト』を潰す時が！　徹底的に叩き潰して海の藻屑にしてやるわよッ！　必ず『ヤマト』を沈めなさい！　そして海に投げ出されたジャップは機銃で殺しなさい！　ジャップは皆殺しよッ！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！　Ｋｉｌｌ　Ｊａｐｓ！」
恐ろしい事を言うエンタープライズに、ヨークタウンはもう何度目かわからないため息をした。彼女の気苦労の大半は、エンタープライズであった。

第５８任務部隊は全空母から第１次攻撃隊、第２次攻撃隊と次々に発進し、その数は実に総勢約４００機にも上った。
鉛色の空を埋め尽くすネイビーブルーの攻撃隊は、一斉に己が獲物である日本艦隊に向かって飛び立っていった。
見事な編隊を組んで雲の向こうへ消えていく攻撃隊を見詰めながら、エンタープライズは「Ｋｉｌｌ　Ｙａｍａｔｏ！　Ｋｉｌｌ　Ｙａｍａｔｏ！」と叫び続け、ヨークタウンは疲れたようにため息していた。

その頃、対空戦闘用意の命令が発せられた第二艦隊は緊張に包まれていた。
誰もが声を出す事を恐れ、不気味な沈黙が続いていた。嵐の前の静けさとも言うべきその沈黙の中、大和も翔輝の隣で沈黙していた。しかしそれはいつ来るかわからない死への恐怖で言葉が出ないからであった。その証拠に、ギュッと翔輝の手を握る大和の小さく細い手は小刻みに震えている。そんな彼女の手を握り返してやるしか、翔輝にはできなかった。
いつ来るかわからない敵機に、翔輝自身も恐怖していた。だが、それは決して表には出さない。自分がしっかりしなくちゃという思いが、翔輝を毅然とさせていた。

不気味な沈黙がいつまでも続く。そう思った時だった。
『味方戦闘機の編隊後方より引き返してきますッ！』
伝声管を伝わって響いた見張り兵の声に、再び艦橋に驚きが満ちた。森下と有賀は慌てて窓の外を双眼鏡で見詰める。大和も翔輝の手を握ったまま窓に張り付いた。もちろん翔輝と共に。すると、数はずいぶん減ってしまったが、五機の零戦を引き連れた紫電改が追い掛けてきた。
「あ、あれは先程の紫電改です！」
「ど、どうして・・・ッ！　二度と帰れなくなるのに――」
翔輝はそこまで言って愕然とした。
彼らは、自分達と運命を共にする気なのだと。
甲板から爆発のように歓声が起きた。機数は減ったが、自分達と一緒に行こうとする勇士達に感激していた。
伊藤は艦隊上空に到達すると旋回して再び護衛に付いた戦闘機隊を見詰める。
「帰るように言いましょう！　このままでは彼らまで巻き込んでしまいます！」
森下が慌てて伊藤に進言するが、伊藤は静かに首を横に振る。
「帰れと言っても、帰るまい。六人の名前を聞いておこう。対空無線を開け」
伊藤の言葉に森下はうなずくと対空無線用意の命令を下した。しばらくすると、電信室に次々に自ら艦隊と運命を共にする事を決めた飛行兵達の官姓名が入ってくる。その中には清水もいた。そして・・・
「第三四三航空隊所属！　大空剣大尉！」
剣もまた、自分の名を叫んだ。そして・・・
「以上六名、我が艦隊と共に行く覚悟だそうです」
森下の報告に、伊藤は「そうか」とだけ小さくつぶやき、再び上空を旋回する戦闘機隊を見詰める。

すると森下は「後・・・」と何かを繋げると、なぜか大和の方へ向いた。
「大空大尉より、大和へ伝言だ」
「わ、私にですか！？」
森下の言葉に大和はもちろん翔輝、そして伊藤達も驚いた。
「大空大尉は、紫電改に乗っている搭乗員ですよね？」
「そうだ。その彼がお前に伝えたい事があるそうだ。代読する」
大和は真剣な表情で森下を見詰める。森下はそれに小さくうなずくとそこに書かれた文字を読み始めた。
「『戦艦『大和』の艦魂へ。僕は大空剣大尉。真珠湾攻撃からミッドウェー海戦までは『飛龍』に乗艦。『飛龍』の艦魂とも親しい仲で、大切な存在だった。『飛龍』沈没後、『瑞鳳』に配属。『瑞鳳』の艦魂と共に、飛龍達の仇を討ち続けた。瑞鶴や翔鶴とも親しかった。しかし、今はもう瑞鳳も瑞鶴も、翔鶴もいない。だから今度は、君を守る。瑞鳳の友であり、瑞鶴の親友だった君を、必ず守る』以上だ」
大和は懐かしい名前の数々に驚いていた。そんな人が今自分の為に二度と帰れぬ戦いに同行しているのだ。
瑞鶴や瑞鳳と親しかったという大空大尉。面識はないが、そういえば瑞鶴が瑞鳳と親しい飛行兵がいると話していた事があった。きっと彼の事だろう。
自分の為に戦ってくれるという大空大尉には、心の底から感謝した。
「参謀長、返信を願えますか？」
「何だ？」
大和は上空を飛ぶ紫電改を一瞥し、満面の笑みでこう言った。
「ありがとうございます、と」
第二艦隊は六機の戦闘機を引き連れて沖縄に向かって全速力で突撃した。

九隻に減っても、護衛の戦闘機が六機に減っても、その勇姿はさらに勇ましい。
特攻という生きては帰れぬ戦いでも、彼女達は輝いていた。
敵機が迫っている事など、わからなくとも感じていた。
この先へ行けば、死が待っている事も。
それでも、日本を守る為、大艦巨砲主義の終焉を迎える為、日本連合艦隊の有終の美を飾る為、『大和』は波を蹴散らしながら、全速力で沖縄へ南下した。
その艦橋で、大和はギュッと翔輝の手を握っていた。彼の方を向くと、翔輝は優しく笑みを浮かべてくれた。
この笑顔があれば戦える。そう心から思った。
大和は彼の存在を隣に感じながら、最期の戦いに向かって突撃した。

第十四章　第七節　宇垣の想い　剣の決意　大空を舞う空の戦士達（後書き）

翔鶴「開口一番に読者の皆には謝らなければならない事がある。知っての通り、我が《艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～》は実に一週間も更新をしなかった。これには様々な理由があるのだが、まず一番に関係各方面、そして読者の皆様方に甚大な迷惑を掛けてしまいすまないと思っている。これからはこのような事がないように精進していくので、これからも応援を頼む」

瑞鶴「い、いきなり重いなぁ・・・」

瑞鳳「まったく、作者は何をしてるのよ」

作者「えっとですね、単純に私生活が忙しかったのと本編とモンハンを書かないといけないのと、他作品のキャラをどうあとがきに盛り込むかで苦闘したからです・・・すみません」

瑞鳳「あのねぇ、同盟に調印した時にわかってた事でしょ？」

葛城「一週間不更新は、万死に値する」

大鳳（かのん）「・・・迷惑はダメです」

隼鷹「もうッ！　草薙先生も感想で心配してくれたんだよ！？　いい加減な事しないで！」

作者「す、すみません」

瑞鶴「と、とにかくがんばりましょう。では今回の予定は確か護衛戦艦『神龍』の方から――」

作者「あ、それはまた今度にした」

全員『・・・』

作者「あ、あれ？」

翔鶴「一週間も引きずっておいて、それでオチにする気か？」

作者「ちょっと待って！　これには深い訳があるの！　だからとりあえず刀はしまって！」

瑞鶴「どんな訳なんですか？」

作者「本当は今日にもこっちに神龍とかを呼んでみたかったんだけ

ど、どうも護衛戦艦『神龍』の方でこっちの大和を呼び込む用意をしているらしいんだ。それで時系列的に今ここで僕達が神龍を呼んじゃうと向こうのあとがきに甚大な被害が出ると思って、とりあえずほとぼりが冷めるまで神龍達は呼ばない事にしたんだ」
翔鶴「なるほど、確かに向こうが歓迎してくれているのにこちらで先にやってしまっては大変だな」
瑞鳳「そ、それなら仕方ないか」
葛城「作者殿にも考えがあったんだ」
隼鷹「意外だよねぇ」
大鳳（かのん）「・・・さすがです」
作者「当たり前でしょ。これでもこのサイトの艦魂作品の大御所なんだから。その僕が迷惑を掛けちゃまずいでしょ」
翔鶴「真摯な心がけだ。それで今日は内容を急遽変更したという訳か」
作者「そういう事。今回は空母の艦魂を集めてみたんだ。本当は赤城や加賀、蒼龍や飛龍、はたまた龍驤とか祥鳳とか龍鳳とか天城や雲龍も呼びたかったんだけど、店員オーバーで」
瑞鶴「そうですか、残念です」
瑞鳳「・・・ねぇ、ただ単にどんなキャラだったか忘れた、なんて事はないわよね？」
作者「失礼な！　僕を誰だと思ってるんだ！　えっと・・・ちょっと忘れてるかも」
瑞鳳「やっぱりぃッ！」
葛城「仕方がない。赤城殿や加賀殿などはずいぶん前に第一線から退いたのだから」
瑞鳳「でも雲龍や天城はおかしいでしょ！？」
葛城「仕方がない」
瑞鳳「どっちもあなたのお姉さんでしょッ！？」
葛城「好きでなった訳じゃない」
瑞鶴「そ、それはちょっと言い過ぎだよ」

作者「まぁ、とにかく今回はこの六空母でがんばろうよ」
大鳳（かのん）「・・・もう一人、います」
作者「え？　他に誰がいるの？」

トコトコ（ドアに向かう）

ガチャ（ドアを開く）

大鳳（かのん）「・・・こっちこっち」
？？「わかった」

作者「ねぇ、誰を連れて来たの？」
大鳳（かのん）「・・・お客さん」

長門「どうもこんにちは。戦艦『長門』の艦魂。よろしくね」

作者「えっと・・・」
大鳳（かのん）「・・・伊東先生の長門さんです」
作者「えぇッ！？　それって短編の方の！？　そんな伏兵ありなのッ！？」
大鳳（かのん）「・・・応急処置です」
翔鶴「考えたな・・・」
瑞鶴「さすが赤城さんに続く空母艦魂の秀才だね」
瑞鳳「でもいいのかな？　勝手に連れて来ちゃったりして」
隼鷹「問題ないよ。同盟結んでるんだし」
葛城「規定違反ではない」
瑞鳳「いや、そもそも規定なんてないし」
長門「今日はよろしくね。榛名さん達は忙しそうだから」
作者「そうですね。向こうもがんばってるんですし、こっちもがんばらないと」

瑞鶴「あ、そうだ。ねぇ長門さん、阿賀野さんの事は今でも好きなんですか？」
長門「・・・はい」
隼鷹「だよねぇ、キスもしたし」
長門「そ、それは言わないで。恥ずかしいから・・・」
隼鷹「『口の中・・・あっためて・・・』」
長門「い、言わないでよ！（顔真っ赤）」
隼鷹「『あなたは、私の生きる希望。そして――世界で一番愛しています――』」
長門「だから言わないでぇッ！（顔さらに真っ赤）」
翔鶴「なぁ、あれほどきれいな終わり方をした作品を今更こんな所で掘り返していいのか？」
瑞鶴「そんな部分だけピックアップしたら変な誤解を与えて、それこそ同盟破棄ですよ！？」
作者「知らないよ！　急遽だったんだから仕方ないでしょッ！　他にいじれそうなネタないんだもんッ！」
隼鷹「バカぁッ！　こんな勝手な事したら向こうのあとがきみたいに艦魂戦争が勃発しちゃうよ！？」
作者「そ、それはちょっと・・・」
瑞鶴「ど、どうするんですかッ！？　責任取れるんですか！？」
作者「うぅ・・・」
瑞鳳「このバカ！　どうすんのよこれ！　本当に戦争になったらどうするのよッ！」
作者「・・・受けて立とうじゃないかッ！」
全員『はぁッ！？』
作者「向こうは大戦末期！　こっちは開戦時からだぞ！　世界最強の南雲機動部隊も十二隻からなる戦艦部隊も投入可能！　機動部隊決戦も艦隊決戦もこっちが勝つ！」
瑞鳳「最低よあんたッ！　何考えてるのよ！」
作者「うるさい！　こっちは坊の岬沖海戦をどう書けばいいかスラ

ンプに陥ってるんだ！　戦闘シーンは苦手なんだよぉッ！　正直もうやめたい！」

瑞鶴「な、何言ってるんですか！　そんな身も蓋もない事を！」

大鳳（かのん）「・・・最低です作者さん」

作者「うるさい！　こっちは大和を人気投票で1位にさせたいのに、草薙先生が1位にお前を選んだんだぞ！？　予想外じゃッ！」

大鳳（かのん）「・・・草薙先生、ありがとうございます」

瑞鶴「大鳳！　こんな時にお礼はいいから！」

隼鷹「でも無駄だと思うなぁ」

作者「え？　何が？」

隼鷹「だって、もし伊東先生と戦争になったら、草薙先生も零戦先生も火星先生もみんな伊東先生についちゃうよ？」

作者「え？　そ、そうなの？」

翔鶴「そしたら勝ち目などないだろう。向こうはアメリカの空母１０００隻以上を葬れる未来戦艦や未来空母を保有する草薙軍。開戦初期から怒涛の快進撃をする零戦軍。いまだ未知数だが海上自衛隊の現代艦が主力の火星軍。そして大艦巨砲主義再興を旗にした伊東軍。この連合艦隊を相手に勝てると思うか？」

作者「・・・」

隼鷹「あ、作者が死んだ」

瑞鳳「ふん、いい気味よ。どうせあんたの味方なんていないんだから」

長門「あの、一体何があったの？」

翔鶴「気にするな。あぁ、それよりまだ時間はあるか？」

長門「別に予定はないから」

翔鶴「そうか、ではちょっとお茶にでもしよう。瑞鶴」

瑞鶴「任せてお姉ちゃん！」

瑞鳳「あ、私も手伝う」

隼鷹「私も！」

葛城「私も手伝う」

翔鶴「ふむ。では皆は用意を。私は長門と話がある」
長門「わかった」

作者「・・・四面楚歌だぁ」
大鳳（かのん）「・・・大丈夫？」
作者「なんとか・・・あのさ、大鳳」
大鳳（かのん）「・・・何ですか？」
作者「・・・本気で戦闘シーンが書けないんだよね。これマジで」
大鳳（かのん）「・・・がんばるしかないです。これが最後の戦闘なんですから」
作者「そうなんだけど、でもどうしよう」

一時間後・・・

長門「じゃあ私はこれで」
翔鶴「あぁ、阿賀野とやらにもよろしく言っておいてくれ」
長門「えぇ。本当にありがとう。今日はとっても楽しかった。最近非番ばっかりで退屈してたからいい気分転換になったよ」
瑞鶴「あ、じゃあ私達の作者を通じて伊東先生に頼んでみるね。もっと長門さんを出してくださいって」
長門「ありがとう。それとあの答えも早く聞きたいな」
翔鶴「いや、あれは忘れた方がいい。お互いの為にも」
隼鷹「あ、これおみあげにあげる」
長門「え？　何これ？」
隼鷹「えへへ、ペアのペンダント。阿賀野さんと長門の分。お幸せに」
長門「隼鷹、ありがとう」
葛城「恋は直球勝負。諦めません、勝つまでは」
長門「なんかそんな看板戦中にあったなぁ」
大鳳（かのん）「・・・（無言でグッジョブ）」

長門「ありがとう」
作者「あぁ、すみません。なんかここに来たらちょっと雰囲気が変わっちゃいましたね。すみません、僕の実力不足で」
長門「いいの。おかげで久しぶりに表舞台に立てたし」
作者「あぁ、お広い」
長門「じゃあねみんな。今度は海翔さんも連れて来るから」
翔鶴「楽しみにしてるぞ」
隼鷹「バイバーイ！」
瑞鶴「さようなら」

作者「あぁ、みんな帰ったみたい。えっと、なんかすみません。一週間ぶりの更新がこれで。本当に直前で伊東先生のあとがきと誤差が生じてしまったので慌てて書いたんです。これ。なんか伊東先生の長門、少し違ったような気がしますが、僕的には伊東先生の長門も好きなので、自分で書けて嬉しかったです。えっと今回は全然本編の話に触れていませんが、今回は史実にはない剣の違法行為での第二艦隊の護衛でした。まぁ、大局には大きな変化はありませんが、空中戦も書く予定です。あははは、軽いスランプが・・・」
大鳳（かのん）「・・・大丈夫。あなたならきっと」
作者「うぉッ！？　大鳳まだいたんだ」
大鳳（かのん）「・・・次回はいよいよ坊ノ岬沖海戦が始まります」
作者「セリフ取らないでよ。えっと、大鳳の言うとおり次回からついに戦闘です。あぁ、スランプが・・・」
大鳳（かのん）「・・・ガンバ」
作者「ははは、ありがとう。がんばってみるよ。えっと、伊東先生。今回は色々とすみません。勝手に長門（しかも原キャラからズレてる）を使って、さらには失礼な事も言ってしまい。どうかしてました僕。あの、これからもよろしくお願いします。戦争なんて無理です。国力がないですから。これからも良き同盟という事で。ではまた次回」

大鳳（かのん）「・・・意見や感想、待ってます」

第十四章　第八節　敵機来襲　十勇士の最後の戦い（前書き）

沖縄に向けて突進する第二艦隊と護衛戦闘機隊。
大和、翔輝、剣、雪風、矢矧、霞、初霜、磯風、浜風、冬月、涼月。
それぞれの想いが交差する最後の死闘。
連合艦隊最後の戦いにして悲しき特攻作戦の行く末。
東シナ海において、艦魂年代史史上最大規模の戦いが繰り広げられる。
《艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～》最後の戦いにして大和達の最後の戦い。
坊ノ岬沖海戦、いよいよ開戦ですッ！

第十四章　第八節　敵機来襲　十勇士の最後の戦い

沖縄に向けて曇天の空の下の海を突き進む第二艦隊。先程敵機の触接を受けた為、すでに敵空母から攻撃隊が発進したと予想するのは簡単であった。

自分達に向かって、米軍の精鋭空母部隊が全力攻撃をしようとしている。七〇〇〇人将兵達は皆、覚悟を決めていた。

そして、午前十一時半、ついにそれは来た。

『方位左四〇度方向、距離一〇〇キロに敵大編隊を電探にて捕捉！その数およそ一〇〇乃至一五〇機！』

伝声管を伝わって響いた電探員の悲鳴に艦橋に戦慄が走った。ついに、敵機の大編隊を捉えたのだ。有賀は伊藤を一瞥し、自分を見詰める部下達に命令した。

「対空戦闘用意！　他艦及び上空護衛中の戦闘機隊に発光信号！『敵機大編隊我ガ艦隊ニ接近ス。機数一〇〇乃至一五〇。各艦対空戦闘用意。各戦闘機隊奮闘ヲ期待ス』ッ！」

有賀の命令に能村や航海長、他の部下達は見事な敬礼をして伝声管や艦内放送を使って命令を発する。

有賀は瞳を閉じて沈黙している伊藤の前に立った。その気配に、伊藤も静かに瞳を開く。そこには、決意した表情の有賀がいた。

「防空指揮所に、上がります」

「そうか。《大和》を頼む」

「はい」

有賀は見事な敬礼をすると、皆に見守られながら防空指揮所に上がった。

彼が言った《大和》とは、戦艦『大和』であり、大和でもあった。どちらも守ってほしい。そんな彼の言葉にうなずいた有賀は、防空ヘルメットや防弾チョッキを着込みながら防空指揮所に上がると曇

天の空を見上げて小さくため息した。
「せめて、蒼い空の下で最期を迎えたかった・・・」
有賀の消えた艦橋では副長の能村、航海長、そして第二艦隊参謀長の森下が指示を出していた。特に森下は前艦長という事もあり、有賀と協力して《大和》を守ると決めていた。
そんな中、いよいよ迫った敵機に震える大和。その小さな手はしっかりと翔輝の手を掴んでいた。
「たった十隻の艦隊に、一〇〇機以上の敵機を逃れる術なんてありません・・・ッ！」
「それもきっと第一次攻撃隊だけだ。第二次、第三次と加われば、五〇〇機ぐらいの敵機は想定しないと」
「ご、五〇〇機・・・ッ！　そんな・・・ッ！」
大和はガクガクと震えて怯える。いくら強がっていても、いざ自分に死の恐怖が舞い降りれば恐怖を感じるのは当然だ。
翔輝は小さな体を震わせている大和を、そっと抱き締め返した。
「大丈夫。きっと大丈夫だから・・・ッ！」
そう言う翔輝の顔にも恐怖はあった。彼も死ぬのは怖い。それは皆と何一つ変わらない事だ。誰だって、死にたくない。
大和は震える体を翔輝に任せ、そっと彼を見詰める。その澄んだ漆黒の瞳に溜まる涙が、彼女の恐怖を表していた。
「少佐・・・私、すごく怖いです・・・」
震える口から搾り出されたのは、小さく、儚い声。だが、その言葉の奥には、彼女の絶望的なまでのすさまじい恐怖がある。それは翔輝にだってわかる。だからこそ、そっと彼女を抱き締める。
「僕もだよ。いざ敵機の大群が自分達に襲う為に向かって来ているとなると、すごく怖いさ。でも、今の僕には大和がいる。それだけで心が温かくなる」
翔輝の偽りや飾り気のない本心からの言葉に、大和の表情がわずかに和らいだ。フッと口元に笑みを浮かべると、そっと彼に抱き付く。

「そうですか。うふふふ、奇遇ですね――今、私もそう思いました」
大和はいつものように柔らかな笑みをすると、じっと彼を見詰める。その心からの優しい笑顔に、翔輝も小さく笑みを浮かべた。
「そっか。なら、大丈夫さ。きっと・・・」
「はい、大丈夫ですよね。だって――少佐が傍にいてくれるんですから」
大和は優しげな笑みを浮かべると、そっと彼に抱き付く。そんな彼女を翔輝もそっと抱き締める。
互いに抱き合う翔輝と大和。互いの温もりを感じ合う二人は目をつむっても互いの存在を感じ合える。
《彼》が、《彼女》がいれば戦える。そんな淡くも強い想いが二人の体を突き動かす。例えこの戦いで死ぬかもしれなくても、二人の闘志の前ではそんな事は焼き尽くされる。
大切な人と共に戦えるなら、何も恐れるものはない。恐怖を感じても、手を繋いでくれる人がいれば、それを超えるだけの力が湧き上がる。
翔輝と大和の瞳に燃える決意の炎は鉄をも溶かす業火となっていた。
「大和、例え敵機が襲い掛かってでも、沖縄へ行くぞ。そして、一緒にサトウキビでも食べような」
「ふふふ、そうですね。甘いものは大好きです」
そう笑顔で言う翔輝に、大和も嬉しそうに笑みを浮かべる。
だが、彼女はすでに感づいていた。
――自分は、決して沖縄へ行く事も、呉に帰る事もできないのだと。
それでも、隣に彼が立っている。
それだけで、大和は十分だった。
彼がいれば、自分は何も恐れる事はない。だって、大好きな人が支えてくれているのだから。
甲板に兵達が次々に出て来て己が配置の機銃や高角砲などに散っ

て行く。彼らの為にも、自分は必死に戦うしかない。
大和は窓の外の曇天の空を見詰めると、そっと祈った。
（武蔵、陸奥さん、霧島さん、皆さん・・・どうか、私達をお守りください）
大和の願いは、天国にいる仲間達に届いたのか。それは、誰にもわからない。
ただ、今は信じる。それだけだった・・・

三〇分後、大和は第三会議室にいた。そこには矢矧、霞、初霜、雪風、磯風、浜風、冬月、涼月の九人が揃っていた。その表情は一様に暗い。
先程、単艦で日本へ向かっていた『朝霜』より敵機と交戦中という無電を受けた。しかし、それ以降一切の連絡が途絶えてしまった。
伊藤は、『朝霜』は沈没したと判断した。
それを聞いた皆は静かに涙した。特に雪風、磯風、浜風の表情は暗い。彼女達にとっては、大切な妹だったのだ。
しかし、泣いてばかりもいられない。
「朝霜の為にも、皆さんがんばりましょう。もう敵機はすぐそこです」
大和の言葉に、皆はうなずいた。
これから死闘が始まる。
雪風達も、いつまでも泣いている訳にはいかない。あと一時間、いや、三〇分もしないうちに敵機が自分達に殺到する。自分や、隣にいる彼女が死ぬかもしれない。
皆、決意を固めていた。
「大和長官、いよいよだな」
霞の言葉に、大和はうなずく。
「そうですね。これが最後の戦いになるという事を、皆さん覚悟してください」
「そうね、どうやらもう一度桜を見る事はできそうもないわね」

初霜のどこか諦めたような言葉に、浜風が涙を浮かべながらうなずいた。
「そうだね。朝霜だって必死に戦ったんだ。私達も必死に戦おう！」
「そうね。浜風の言うとおりよ」
「どっちにしろ、戦わなきゃいけないんだったら、最後まで必死に戦いましょう」
雪風、磯風の言葉に、矢矧もうなずく。
「どうやら、沖縄へは行けそうもありませんね。でしたら、せめて日本海軍ここに在りという決意をアメリカに見せてやりましょう。日本を本気で怒らせたら、貴様達もただでは済まないと。そうすれば、きっと米軍も本土決戦を諦めるでしょう。私達の戦いに、一億人の日本国民の運命が懸かってるんです」
「そうだな。散る桜、残る桜も、散る桜。ここは死に花を咲かせようではないか」
矢矧と霞の言葉は、皆の決意をより硬くする。
自分達にできる事。それは日本を助ける事だ。愛する祖国を守る為に命を捧げる。軍人としてこれほど名誉な事はない。例え平和を望む普通の女の子であっても、艦魂である限り、自分達は戦わなければならない。
――それが、日本女児というものだ。
「負けるつもりはサラサラないわよ。私の主砲で敵機なんてバンバン落としてやるわ」
「私達の長十センチ砲に狙われたら最後、逃げる事なんてできません！」
冬月と涼月の言葉は何とも頼もしい。防空駆逐艦としての実力が、この艦隊を守るという事に大きく直結する事だろう。
「そろそろ時間ね」
初霜の言葉に皆はうなずくと、自分達の司令長官――大和を見詰める。
皆の視線を浴びる大和は静かにそんな矢矧達を見回す。そして、

「各員の健闘を祈る」
大和はそう言うと見事な敬礼をした。それに矢矧達も見事な敬礼をして返す。
九人のうら若き乙女達が、最後の別れを終えた瞬間であった。

「長谷川少佐、ご武運を」
「少佐、大和長官を頼む」
「長谷川君、がんばりましょう」
「長谷川少佐、共にがんばりましょう」
「長谷川様、どうかご無事で」
「みんなで沖縄に行こうね」
「まぁ、がんばりなさい」
「長谷川さん、また会える事を祈ってます」
矢矧、霞、初霜、雪風、磯風、浜風、冬月、涼月は『大和』の艦橋にいる翔輝に一度あいさつをすると、静かに光となって消えた。
残されたのは翔輝と大和だけだ。
「これが、最後になる子も、いるかもしれませんね」
「そうだな・・・」
翔輝はそれ以上何も言わなかった。無言で空を見上げる翔輝の背中に、大和はそっと抱き付く。ただそれだけなのに、どうしてこうも勇気が沸くのだろう。
まもなく敵機がこちらから視認できる距離に到達する。その時こそ、戦いの幕開けと同時に、『大和』の主砲が最後の咆哮をする時だ。
大和は一度翔輝から離れると、彼の右側に立って手を繋ぐ。
彼の視界に、いつでも自分がいられるように・・・
第二艦隊は対空戦闘の準備を完了した。同時に、上空を護衛する戦闘機隊も敵機が来るであろう方向を睨み続ける。残りの燃料は、このままなら十分戦えるだけある。鹿屋へ戻る分も、今では戦闘用になる。

剣は静かに飛龍の御守りを握ると、曇天の空を見詰め続けた。

「敵第一波左七五度方向より接近！　その数一〇〇機以上！」

有賀の隣にいた見張り兵の声に有賀は曇天の向こうを見詰める。黒い点が無数に鉛色の空に現れた。それらはどれも近づくにつれて飛行機の形に変形し、ゴオオオォォォ・・・というエンジン音を響かせて迫って来る。

有賀は迫る敵機を確認した後、伝声管に向かって命令を叫んだ。

「目標、左八〇度！　全主砲砲塔旋回始めッ！」

有賀の指示で世界最大最強の『大和』の巨砲――四六ｃｍ砲三基が一斉に動き出す。ゴゴゴゴゴ・・・という重い音を響かせながら旋回する砲塔。その一門一門がそれぞれ独立した意思で動く。各砲門がバラバラの角度で敵機を睨む。敵機の上方、下方、中央、全てに攻撃できるように、九門の砲身は敵機を睨む。

各主砲の準備完了の声を聞くと同時に、有賀は向かって来る敵機を睨み、叫んだ。

「主砲三式弾砲撃初めッ！　撃てえええええぇぇぇぇぇッ！」

刹那、『大和』の左舷で大爆発が起き、『大和』の巨砲が火を噴いた。艦がビリビリと震える。そのすさまじい爆発音と閃光、衝撃の後、敵機周辺で九つの大輪花が咲き誇った。

炸裂した三式弾の焼夷粒子で敵機十数機が墜落した。

有賀はそれを確認するとすぐに次弾装填命令を出す。

その間も迫る敵機に、『大和』は再び巨砲で砲撃し、さらに数機を撃墜させて次弾を装填させる。

そしてついに、敵機は艦隊の防空網に突入した。

護衛艦隊が一斉に主砲砲撃を始めると、『大和』はさらに副砲である二基六門の十五・五ｃｍ砲を旋回させて敵機を睨む。

「全砲門一斉砲撃始めッ！　撃てえええええぇぇぇぇぇッ！」

再三爆音が響き、敵機上空で大小合わせて一五個の大輪火を咲き誇らせ、敵機十数機を撃墜した。だが、ついに敵機は主砲副砲の射

程範囲の限界を超えた。同時に護衛艦隊はその身から無数の対空砲火を開始する。

有賀は主砲長に砲撃中止命令を出し、砲撃中に退避していた機銃、高角砲兵達に甲板に出るよう命令し、兵達は急いで甲板を走り回って自分の配置に付く。上空を旋回していた護衛戦闘機隊は燃料残りわずかの増槽を投下して敵機に向かって突貫する。

そして、『大和』上空に現れた敵急降下爆撃機が一斉に急降下して来た。

翔輝と大和は互いの手を握り合い、決して離そうとはしなかった。

「面舵いっぱぁぁぁいッ！」

有賀の命令に、『大和』の巨艦が回避の為に右に動く。『大和』は右にこれを避け、艦の左側には命中しなかった爆弾が空しく水柱を立て上らせていた。

自身の艦橋の高さにも匹敵する巨大な水柱を横目に、翔輝と大和は互いを見詰める。

「少佐ッ！　戦いましょう！　無事に沖縄に行く為にッ！」

「そうだな。戦おう！　生き残る為に、全力で戦おうッ！」

翔輝は大和の手を握り、大和を見詰めた。大和もそれを受けて握り返して彼をじっと見詰める。その互いに映る顔は、絶望なんてものはない。ただ、愛する人がそこにいる。それだけで、二人の表情は明るい。

「死ぬ為に戦うんじゃない。生きる為に戦うんだ。もう一度、日本に帰って桜を見よう」

「そうですね。もう一度、日本に・・・」

笑顔で言う翔輝に対し、大和はその言葉に表情が暗くなった。

大和は感づいていた――もう自分は、生きて帰る事はできない、と、

死の覚悟をしている大和を、翔輝は抱き締める。

「少佐・・・」

「生きて帰ろうよ！　日本へ、またあの桜を見ようよ！」

「でも・・・」
「諦めるなッ！　お前がそんな事でどうする！？」
「少佐・・・」
「――生きるんだ」
翔輝は真剣な瞳で大和を見詰めた。
「生きて・・・日本に・・・ッ！」
涙目になって大和に言い続ける彼を見て、大和は静かにうなずき、優しげな笑顔を向けた。
「そうですね。生き帰りましょう。日本に」
「あぁ、そうだな」
翔輝の胸の中で大和は嬉しそうに笑顔になり、翔輝も大和の笑顔を見て優しげに微笑む。
大和はわかっていた。自分はここで死ぬのだと。でも、これくらいのうそは言ってもいいと思った。だって、大好きな彼に、悲しい顔はしててほしくないから。
敵機が次々に攻撃を開始する。
そんな敵機を睨む二人の手は、しっかりと握られていた。
今ここに、連合艦隊最後の戦い――坊ノ岬沖海戦が始まった。

第十四章　第八節　敵機来襲　十勇士の最後の戦い（後書き）

翔鶴「今回は更新が早いな」
作者「いやぁ、迷惑を掛けたのでこの三連休はがんばって出そうかと思って」
瑞鶴「ストックは大丈夫なんですか？」
作者「えっと、昨日必死に進めて坊ノ岬沖海戦はほぼ終了。今は大和と翔輝の最後のシーンを書いてるところ」
瑞鶴「そ、そうですか・・・」
榛名「でもよ、原作の頃よりかなり力を入れて書いてるみてぇだけど？」
作者「そうだね。原作は確か坊ノ岬沖海戦の戦闘シーンは６０００文字くらいだったけど、今回は５万文字くらいになりそう」
榛名「おいおい、前回は手を抜き過ぎだろうが」
作者「あははは、元々この作品は学校の文化祭に提出する作品だったから、迫り来る締め切りに慌てて簡略化しちゃったんだよね」
武蔵「・・・手抜き」
作者「まぁ、そう言われるとそうなんだけどね」
瑞鶴「でも今回はすごいですよ。６０００文字から５文字って、どれだけ力を入れたんですか？」
榛名「見ると前回は大和と長谷川の視点だけだったけど、今回は十勇士全員が入ってるんだな」
翔鶴「外伝の《連合艦隊最後の希望　十勇士出撃》を取り込んだからな」
作者「しかも、最後という事もあって艦魂達の戦闘シーンもすごいぞ。もう艦魂達が様々な武器で舞うし、『大和』の甲板の惨劇も書いてるし、艦魂達は血だらけでの傷だらけ。今までの戦闘シーンとは比べ物にならない大規模なものになってる」
榛名「だからスランプになるんだよ。無理すんなバカ」

武蔵「・・・見切り発車」
作者「ま、まぁ苦労してた戦闘シーンは終わったし。あとは大和と翔輝の最期のシーンを書いて、終戦を書いて、その後みたいな話を書けば、やっと終わるよ」
瑞鶴「長かったですね。原作の読了時間は確か１３００分だったのに、改訂版は現在だけでも読了時間が２５００分を越えてますからね」
翔鶴「もはやこれは修正版ではなく決定版とか改訂版の方がいいのではないか？」
作者「まぁ、そうだね」
榛名「今回の本編はついに坊ノ岬沖海戦が開戦したな。って事は壮絶な死闘が始まるわけか」
作者「そうなるね。大和だけでなく――いや、むしろ十勇士の方が大活躍してる。大和はずっと翔輝の隣にいるだけだから」
瑞鶴「大和だって必死に戦ってるはずです！」
作者「わかってるわかってる」
翔鶴「まぁ、本編の話はここまでにして、今回はゲストはなしか？」
瑞鶴「そ、そうだよね。神龍ちゃんを呼べなかったし今日は私達で――」
作者「あ、今回はちゃんとゲストは呼んでるよ」
翔鶴「ほう、一体誰だ？」
作者「まあまあ、そう焦らない。では登場してもらいましょう！どうぞッ！」

ガチャ（ドアが開く）

？？「失礼する」

全員『・・・えっと』
作者「今回は新太平洋戦争から瑞鶴さんをお呼びしました！」

瑞鶴「よろしく」
瑞鶴「わ、私がもう一人ッ！？」
瑞鶴「貴様がこっちの『瑞鶴』の艦魂か」
瑞鶴「は、はいッ！　空母『瑞鶴』の艦魂です！」
瑞鶴「よろしく。なんかちょっと頼りないなぁ」
翔鶴「まぁ、少々抜けているところはあるのは確かだな」
瑞鶴「も、もう姉さんッ！」
瑞鶴「姉さん？　あぁ、『翔鶴』の艦魂か」
翔鶴「そうだ。まぁ何だ。貴様も『瑞鶴』の艦魂。私の事は姉と呼んでも構わんぞ」
瑞鶴「だ、ダメだよぉッ！　姉さんを姉さんって呼んでいいのは私だけなんだからッ！」
瑞鶴「安心しろ。呼ぶ気はない」
瑞鶴「よ、良かった・・・」
榛名「っていうか慌て過ぎだろテメェ」
武蔵「・・・シスコン」
瑞鶴「う、うるさいなぁッ！」
作者「まあまあ落ち着いて。えっと初めまして黒鉄大和です。あ、この子が榛名でこっちが武蔵。よろしく」
瑞鶴「よろしく」
榛名「しっかしそっちの物語はいいよなぁ。アメリカと真っ向から戦えるんだから。それに三笠さん達先輩と一緒に戦えるしな」
武蔵「・・・私はまだ未完」
瑞鶴「そういえばそうやったな」
武蔵「・・・瑞鶴はたまに関西弁が入る」
瑞鶴「それはこちらの作者の不手際だ。作者自身が大阪に住んでいるからな」
作者「いいですよね大阪。僕は埼玉だから埼玉県民としての誇りなんてまるでないですよ」
榛名「海とは無縁な場所に住んでて海軍の話かよ」

武蔵「・・・しかも作者の祖父は元陸軍軍人。終戦時は中国」
翔鶴「それなのに作者は陸軍悪玉海軍善玉論者だからな」
作者「いやぁ、さすがにインパール作戦とか南京大虐殺とか従軍慰安婦とかは掩護できないからね。戦争を強く望んだのも陸軍だし。どうも海軍は好きでも陸軍はねぇ。あ、でも硫黄島の戦いで奮闘した栗林忠道大将は好きだよ。彼は英雄だから」
榛名「ま、まぁ俺も陸軍は嫌いだけど、栗林は嫌いじゃねぇな」
翔鶴「私も栗林は最高の陸軍軍人だと思う」
武蔵「・・・バロン西」
瑞鶴「誰やそれ？」
武蔵「・・・ロサンゼルスオリンピック馬術競技金メダリストにして陸軍軍人だった西竹一（にしたけいち）大佐。硫黄島の戦いでは戦車第二六連隊を指揮し奮闘。同島で戦死」
榛名「そういえば世の中が英雄扱いしてたな」
作者「元々は騎兵科だったんだけど、時代の流れで騎兵がなくなって戦車に移動したんだよね」
瑞鶴「そんな者がいるのか、勉強になった」
翔鶴「あまりためになる知識ではないがな」
作者「まあいいじゃないか。さて、ここで瑞鶴さんに質問があります！」
瑞鶴「何だ？」
作者「えっと、瑞鶴さんは将人さんの事が好きなのでしょうか？」
瑞鶴「なぁッ！？（顔真っ赤）」
武蔵「・・・決定」
瑞鶴「何をバカなッ！　私は将人の事など――」
武蔵「・・・ツンデレ？」
瑞鶴「私はツンデレなどではない！」
翔鶴「もはやバレバレだな」
瑞鶴「だから違うと言っているッ！」
榛名「でも翡翠とか昴なんてキャラもいるし、飛龍とか他の艦魂も

怪しいのが大勢いるぜ？　将人を取られてもいいのか？」
瑞鶴「それはダメだ！　将人は私のパイロットだ！」
武蔵「・・・独占欲」
翔鶴「貴様が言えた事ではないがな」
作者「まぁ、がんばってもらいましょう。本物の戦争も愛の戦争も」
瑞鶴「だから違うって言っている！」
作者「とりあえずがんばってください」
瑞鶴「素直に喜べないんだが・・・」
瑞鶴「大丈夫！　私も貝塚さんが好きだから！」
翔鶴「貝塚なぁ・・・」
瑞鶴「な、何か文句があるの！？」
翔鶴「いや、もう少しまともな男にしてほしかったなぁと思ってな」
瑞鶴「貝塚さんはとてもいい方です！」
榛名「わかったわかった。とりあえず脱線するからやめろ」

着メロが響く。

翔鶴「な、何だこの音はッ！？」
作者「あぁ、僕のケータイだ」
瑞鶴「今の曲は何だ？」
作者「あぁ、羅針盤って曲だよ。ジパングっていう架空戦記アニメの主題歌の」
武蔵「・・・みらい大活躍」
榛名「草薙の『紀伊』などの未来戦艦には劣るけどな」
翔鶴「それで、一体どうしたのだ？」
作者「えっと、敵信傍受班から連絡だね。なになに・・・翡翠さんと昴さんが将人さんを拉致して逃亡中。飛龍以下の艦魂数名が追撃中・・・だそうだけど」
瑞鶴「・・・ッ！　将人・・・ッ！」
瑞鶴「あ、あの瑞鶴さん？」

ドガァンッ！（ドア粉砕）

瑞鶴「将人おおおぉぉぉッ！」

ダダダダダ・・・

瑞鶴「行っちゃい・・・ましたね・・・」

翔鶴「お前と違ってかなり行動派だな」

榛名「向こうは向こうで大変だな。こっちも長谷川を囲んだ関係はすごいけどな」

武蔵「・・・翔輝の方が絶対いい」

作者「そういう事は言わないの。えっと、瑞鶴さんも帰ってしまいましたし、今回はこれで終わりとします。次回はいよいよ戦闘開始です。まずは敵空母から発進した第一次攻撃隊と十勇士の戦いです。すさまじい大規模な対空戦闘になっています。艦魂年代史史上最大の戦いとなっています。先に言っておきますが、演出効果がすご過ぎて敵機の撃墜率がすさまじいです。まぁ、これはちょっとした架空戦記が入ってますので、その辺を理解して読んでください。では次回をお楽しみに」

翔鶴「順調に行けば明日には投稿可能だそうだ。意見感想待っているからな」

第十四章　第九節　永久不滅の連合艦隊　最後の戦姫達の壮絶な死闘（前書き）

ついに開戦した大和達最後の死闘――坊ノ岬沖海戦。
特攻隊たる事を胸に秘めた戦姫達は、日本を守る為に武器を持って舞い踊る。
そして、大和と翔輝の絆は、しっかりと結ばれている。
第一次空襲に晒される第二艦隊、そして十勇士の奮闘。本物語最大規模の戦いを、どうか最後までお読みください。

第十四章　第九節　永久不滅の連合艦隊　最後の戦姫達の壮絶な死闘

戦いは『大和』の四六ｃｍ砲の連続攻撃で幕を開けた。敵機は艦隊に到達するまでに全体の三割ほどを失ったが、構わず突っ込んで来る。物量戦で攻撃してくる米軍らしい戦い方だ。

艦隊の先頭を走る『矢矧』の防空指揮所で矢矧は腰の刀をスッと引き抜くと、上段に構える。左足を半歩下げて構えを取ると、ゴオオオォォォ・・・と轟音と響かせて迫って来る敵機を睨み付ける。その瞳の鋭さは、常の彼女の優しげなものとは違い、一人の軍人のものに変わっていた。

「沖縄には行かせないって事ね。えぇそうね。私達は沖縄へは行けない。だったらせめて、あなた達は大勢道連れにしてやるわ！　かかってきなさいッ！」

敵機はついに艦隊上空にまでやって来ると一斉に急降下して来る。そのほとんどが『大和』に集中する。そして次に狙われるのは、巡洋艦である『矢矧』だ。

敵機がすさまじい轟音を立てて急降下して来る。矢矧は冷静にその先頭の一機を斬り落とす。後続の敵爆撃機も機銃の攻撃にまた一機と撃墜される。しかし、敵機はその数で押して爆弾を投下。すぐさま『矢矧』は取舵をいっぱいまで回して回避する。『矢矧』の右側に三本の水柱が上がり、舞い上がった水が矢矧に降り掛かる。

矢矧は続いて横から突っ込んで来る雷撃機を視認すると、体を軸足でキュッと回転させて刀を構える。

「撃てぇッ！」

矢矧は迫る敵機に向かって軍刀を思いっ切り振り下ろした。刹那、『矢矧』の十五・二ｃｍ砲三基六門が火を噴いた。軽巡用の三式弾が敵機を撃墜する。

さらに機銃や高角砲が必死に奮闘をして敵機を寄せ付けない。しかしそれでも敵機は構わず突っ込んで来る。

次々に爆弾が降り注ぐが、日本海軍の新鋭軽巡洋艦である『矢矧』は軽快な動きでそれを全て回避する。軽巡洋艦に求められるのは高速性。その高速性が、『矢矧』を守っていた。

ドォンッ！　ドドォンッ！

主砲が仰角いっぱいまで砲身を上げて砲撃する。降り注ごうとした敵機の爆撃機三機が炸裂した大輪花の花びらを浴びて炎上しながら落下した。

右へ左へ、『矢矧』は必死に逃げ回る。

艦隊というのは艦隊決戦でこそそのチームワークが発揮されるもの。対空戦闘では各艦が自艦を守る為に艦長の指揮で行動する。その為、対空戦闘ではチームワークというものは発揮されない。

艦隊はすでにバラバラになっていた。

旗艦である『大和』を囲むように陣形を組んでいた艦隊は今は見る影もない。ここからでは種類はわからない駆逐艦は『大和』とは反対方向を向いている。皆、必死に逃げ回っていた。

次々に敵機は急降下して艦隊を襲う。

すさまじい数の水柱が逃げ回る各艦のまわり立ち上った。

舞い上げられた海水はまるでスコールのようにすさまじい雨のように各艦の甲板を洗う。

ズドンズドンッ！　ズドォンッ！　と爆音を響かせて『矢矧』は主砲を撃ちまくる。他にも高角砲や機銃が敵機を襲う。

一機、また一機と迫る敵機を撃ち落とすが、多勢に無勢。撃墜する数の何倍もの敵機が襲い掛かって来る。

水柱が艦のまわりに何本も立ち上るが、『矢矧』は右へ左へ器用に回避してこれを避け続ける。

死闘を繰り広げる『矢矧』の防空指揮所で刀を振るって奮闘する矢矧。迫る敵機に刀を振り下ろすと、その敵機は機銃の攻撃を受けて撃墜され、海面に激突して跡形もなく吹き飛んだ。

「ここは通させないッ！　大和司令の所には行かせないッ！」

刀を振るって一騎当千する矢矧は次々に敵機を撃破する。だが、

あまりにもすさまじい敵機の数。いくら撃ち落しても切りがいない。
刀を再び構え直す矢矧は、次の攻撃を放とうと刀を強く握る。そこへ敵機が一斉に急降下して来た。矢矧は冷静に刀を構えると一閃する。同時に機銃が一斉に迫る敵機に機銃を浴びせる。無数の銃弾を受けて数機が火を噴いて落下するが、三機が突っ込んで来る。これには矢矧も悲鳴を上げた。だが、そこへ敵機の後方から機銃が浴びせられて一機が撃墜。残りの二機も慌てて機首を急上昇させた。
驚く矢矧の上空を飛んで行ったのは護衛の零戦であった。
「あ、ありがとうございます！」
矢矧は嬉しくなって飛んでいく零戦に見事な敬礼をした。だが、その零戦は彼女の目の前で後ろから迫った敵戦闘機の機銃を受けて爆発四散した。
矢矧の中で、怒りの業火が燃え上がる。
「よ、よくもぉッ！」
零戦を撃ち落として悠々と飛ぶ敵戦闘機に矢矧は目に見えぬ速さで刀を振るう。その瞬間、その敵機は三式弾を喰らって撃墜された。
仇は討った。
矢矧は次なる敵機に刀を振るう。それは戦闘機だった。先頭の一機は撃ち落としたが、残る後続の四機が一斉に機銃を掃射して来た。甲板に火花が舞い散り、機銃兵や高角兵、弾の補充兵など十数人が一斉に命を落とし、他にも大勢の兵達が真っ赤に染まってもがき苦しむ。その光景に矢矧の瞳は鋭さを増す。
「うわあああぁぁぁぁッ！」
横一線に放った刀は、機銃の弾となって敵機を残らず撃墜する。
第一、第二主砲が旋回し、『大和』の上空で編隊を組んで一斉に急降下しようとする敵機を捉える。
「やらせるかぁッ！」
矢矧の怒号と同時に放たれた一撃は、敵機の中央部で次々に炸裂。密集していたおかげで一機に十機以上を撃墜した。慌てて散開する敵機を見詰め、矢矧は口元を吊り上げて笑みを浮かべる。

「十勇士の実力はこんなものじゃないないわッ！　私達を殺したいなら、命を捨てる覚悟でかかって来なさいッ！」

荒れ狂う海を翔ける『矢矧』はさらに速度を上げて、最大速力である三五ノットで突貫した。

ジグザグに動き回る『大和』の後方から必死に対空戦闘をする『浜風』。その第一主砲塔に立って奮戦するのは浜風。その両手に握られているのは刀よりも小さな小刀。それを両腕を振り回して踊るように敵機を次々に撃墜する。

「負けられないのよッ！　私はもうこれ以上、誰も傷つけさせないッ！」

浜風は低空飛行で突っ込んで来る雷撃機に左刀を振り抜く。同時に『浜風』の第一主砲が火を噴く。バァンッと敵機の中央で弾が炸裂し、そこへさらに機銃の弾が襲い掛かる。敵機の半分がそれで撃ち落とされた。しかし残る半分が一斉に魚雷を投下。海の中を死の槍が突っ込んで来る。

「甘いよッ！」

浜風は華麗にステップを決める。同時に『浜風』が取舵をいっぱいまで回し、さらに右舷スクリューを最高回転数まで上げた。『浜風』は艦が右に倒れるくらい傾斜しながらすさまじい小回りで旋回し、当たるはずであった魚雷は空しく『浜風』の横を通り過ぎた。

続いて敵急降下爆撃機が一斉にダイブして来る。だがそこへすかさず零戦が二機で突っ込んで来た。爆撃機は攻撃準備中は機銃手は爆弾の投下手にもなるので反撃はできない。二機の零戦はそこを突いて次々に敵機を撃墜する。

「ありがとうッ！　じゃあ私もッ！」

浜風は右刀を振り上げた。その一撃に機銃弾が敵機一機に炸裂し、撃墜される。敵機は後方の零戦に慌てて急上昇すると、零戦も急上昇して敵機群の上空へ向かう。空戦では上方を取った方が有利なのだ。

浜風は自らを守ってくれた二人の英雄に感謝し、すぐさま襲い掛かる敵機と対峙する。

両刀を胸の前で一度交差して構えると、サッと両腕を広げながら左足を半歩下げる。いつでも跳びかかる準備を完了し、浜風は敵機を睨む。

敵機は列を作って次々に急降下して来る。一本の線のように並んで殺到する敵機。その数はあまりにも多い。だが、

「負けられないッ！　私は負けられないのッ！」

浜風は両腕を全開まで降って回転するように刀を振るう。同時に機銃が一斉に敵機を襲うが、敵機は構わず突っ込んで来る。浜風はこの時初めて恐怖した。

急降下して来る敵機に『浜風』は全力で回避するが、敵機はそこへ次々に爆弾を投下する。

駆逐艦という小さな艦体の『浜風』を包み込むように無数の水柱が立ち上る。

ドォンッ！　ドドォンッ！　ズドォンッ！

無数の水のカーテンに包まれて、浜風は悲鳴を上げる。その時、敵機が投下した爆弾の一発が『浜風』の後部に命中。大爆発を起こした。

「があああああぁぁぁぁぁぁッ！」

腰が砕け、皮膚が裂け、大量の血が噴き出す。浜風は力を失い、その場に倒れた。

「うぅ・・・ッ！　ま、まだ・・・死にたく・・・ないよ・・・姉さん・・・ッ！　だ、誰か・・・た、助け――ごはぁッ！」

浜風は咳と共に大量の吐血を吐いた。真っ赤な血が鉄の床を不気味な赤に染め上げ、浜風はその場でもがき苦しむ。

「嫌だ・・・嫌だよ・・・もっと・・・みんなで笑いたい・・・みんなと・・・一緒にいたい・・・どうして・・・ッ！」

小学生や中学生ぐらいにしか見えない少女が血にまみれ、吐血を吐き、苦しそうにもがき苦しむ姿なんて、残酷以外何ものでもない。

すさまじい激痛と絶望が、彼女の小さな体に圧し掛かる。
死にたくないと願っても、自分では運命は変えられない。それが――艦魂なのだ。
遠くで必死に戦う『雪風』と『磯風』。たくさんいた姉達も今は彼女達ともう一人だけ。そのすさまじい勇姿を見て、浜風はどこか安堵した。
「あはは・・・姉さん達・・・がんばってるなぁ・・・私も・・・がんばらないと・・・ッ！」
必死に痛みに耐え、歯を食い縛りながら浜風は立ち上がろうとする。
負けない。
負けたくない。
ずっとずっと姉さん達と一緒にいた。
そんな強い想いが、浜風の体を必死に動かす。
「私はまだ・・・死にたくない・・・ッ！」
手すりに掴まりながら、浜風は立ち上がった。その瞳の光は、強く、激しく煌いている。
まだ彼女は諦めていない。
生きたいと願っている。
生き残る為に、浜風は両手に小刀を構える。
――だが、運命というものは、あまりにも残酷だった。
ブウウウウゥゥゥゥンッ！
轟音を立てて敵機が上空を通り抜けて行った。ふとそれに目をやると、それは雷撃機であった。しかも収納型の開いた穴には、銀色の槍はない。
浜風は顔を真っ青にして振り返る。そこには、自分に向かって翔けて来る魚雷が見えた。
「――あははは・・・死にたくないのに・・・ここまでか・・・ごめんね・・・お姉ちゃん・・・」
その瞬間、『浜風』に魚雷が命中した。

『『浜風』轟沈ッ！』

その報告に大和は言葉を失った。

慌てて確認すると、自分の後ろを走っていた『浜風』が黒煙と炎と共に艦体を真っ二つに折って沈んで行くのが見えた。

「は、浜風ぇッ！」

大和は必死に彼女の名を叫ぶが、返事などなく、『浜風』は静かに、そしてゆっくりと波間に消えていった。

「大和ッ！　しっかりしろッ！」

翔輝の声に、大和は顔を上げた。そこには、頼れる彼の姿があった。

「少佐・・・ッ！　浜風が・・・浜風が・・・ッ！」

「わかってる！　だけど、お前がここで動揺してどうするッ！　僕達の目的は何だッ！　浜風は必死になって戦ったんだ！　僕達がここで終わったら、それこそ浜風に掛ける言葉がないだろッ！」

そう怒鳴る翔輝の瞳も、薄っすらと濡れているのに気づく。

彼だって辛いのだ。浜風はまだ出会ってわずかであったが、大切な仲間であった。出撃前夜に大騒ぎして、笑顔を振りまいていた彼女。皆がどこか落ち込んでいても、彼女の笑顔が皆を救ってくれた。

彼女の笑顔が、今こうして自分達を立たせてくれている。

その彼女が死んだ。でも自分達はまだ生きている。だったら、彼女の為にも、残された自分達は必死に戦わなければならない。それが、彼女に対するせめてもの弔(とむら)いになるのだから。

「そう・・・ですね・・・」

大和は小さくうなずく。

元々この作戦は生きて帰る事を前提にしていない特攻作戦。これが、結末だったのだ。

覚悟していたのに、いざ目の前にその現実を突き付けられると、どうしようもなくなる自分が悔しくて仕方がない。

仲間が死ぬなんて、今まで多く見て来たし、経験してきた。そし

て今回の作戦がそれほどまでに危険という事もわかっていた。なのに、今は恐怖で潰れそうになる。

それは、浜風の死が自分に重なるからだ。

今まで自分は、安全圏にいたのだ。

ずっと平和なトラックや内地にいて、いざ実戦に出れば戦艦と空母では空母が優先されて自分は助かり、レイテ沖海戦では武蔵が狙われたからこそ、自分は他よりも狙われなかった。

だが今回は違う。

敵機は確実に自分を狙っている。

周りを守るのは軽巡一隻と駆逐艦七隻。超大型の戦艦である自分は、格好の的でしかない。

事実、敵機のほとんどは自分に集中している。

敵機は、自分を殺そうとしている。

死ぬ覚悟はできている。そう思っていたのに、実際に浜風の死を目撃してそれが揺らぐという事は、まだ自分はどこか甘えているのだろう。

彼の存在が、自分を強くすると同時に、甘えさせていると気づいた。

彼がいるから、自分は強くなれる。それは同時に、彼がいなくては自分は何もできないという事だ。彼と一緒だから、自分は死地へ行ける。そんな強さなど、死という絶対的な存在の前では、簡単に崩れ去ってしまうのだ。

足が、震える。

大和は必死になってその震えを押さえる。

怖い。

怖い怖い。

怖い怖い怖い。

恐怖で自分がどうにかなりそうだった。死というものの本当の恐怖に、大和は気が狂いそうになる。

敵機が怖い。爆音が怖い。敵機の音が怖い。誰かの悲鳴が怖い。

仲間が傷つくのが怖い。
怖くて怖くて、涙が止まらない。
もう、ダメだ・・・
そう思った時だった。
「おい大和！　しっかりしろ！」
深い暗闇に落ちそうになった自分に、光が差し込んだ気がした。
振り返れば、そこには大好きな彼がいる。
いつも自分の傍にいてくれて、支えてくれてきた彼がいる。
「少佐・・・」
「大丈夫か！　気をしっかり持て！　まだ戦闘中だぞ！」
翔輝の声が、ゆっくりと、だがしっかりと大和の胸の中に染み込んでいく。
不安で押しつぶされそうになる自分の体を、彼が優しく包み込んでくれる。
「怖いのはわかる！　でも、今は耐えてくれ！　僕が傍にいてあげるから！　お前の傍を離れたりなんかしないから！　お前を一人にしないから！」
その言葉に、自分は救われたのだと思う。
一人にしない。傍にいる。たったそれだけの事なのに、自分は何でこんなに嬉しくなってしまうのだろう。
「僕なんか頼りないかもしれない。だけど、お前を守りたいって気持ちは、誰にも負けないつもりだ。僕の手で良ければ掴め。僕の胸で良ければ飛び込め。僕の笑顔で救われるのなら、いくらだって笑ってやる。だから――」
それ以上の言葉などいらない。
もう、彼の気持ちは精一杯伝わったのだから。
大和は、そっと彼の唇に自分の唇を合わせた。
もう何も言わなくていい。そんな想いを込めた、柔らかな、純粋なキスだった。
「ありがとうございます」

大和はそっと唇を離すと、小さな声でそう言った。その声は、外で響き渡る爆音や兵達の怒号の中でも、はっきりと聞こえた。
「やっぱり少佐は、私には必要ですね」
「そ、そっかな？」
「はい。だって、少佐がいてくれるだけで、勇気が沸いてきますから」
大和は頬を赤らめながら満面の笑みでそう言った。それは、飾り気のない、心のそこからの笑顔であった。
大和はギュッと翔輝の手を両手で包むように取る。
「少佐が傍にいれば、私は大丈夫です。恐怖に押し潰されそうになっても、少佐がいてくれれば跳ね返せます。私は、戦えます」
「大和・・・」
「ですから、傍に、いてくださいね？」
ちょっと不安が混じったその問いに、翔輝が返す言葉は一つしかない。
「もちろんさ。これからも、どこまでも、ずっと一緒さ」
「・・・はい」
大和は笑顔でうなずいた。
彼の言葉は嬉しい。だけど、それではいけないのだと。
――この時、彼女はある決意していた。例え彼に嫌われるとしても、これだけは、何としても・・・
翔輝の差し出した手を、大和はしっかりと握った。もう二度と離さない。それくらいの想いで握られた二人の手は、とても固い何かで結ばれていた。
『雲の切れ間！　敵機急降下ッ！』
見張り兵の絶叫が艦橋に響く。森下が何かを叫び、能村がキッと敵機を睨む。兵達が、悲鳴を上げる中、二人は恐れなかった。
大切な者が隣にいてくれる。それだけで二人から恐怖は消えた。
グオオオォォォォォンッ！　という急降下音が響き、敵機が垂直に急降下。そして下部のハッチが開いて中から爆弾が投下され

る。鉛色の雲の切れ間から突然現れた敵機に回避は間に合わなかった。

黒い、全てを壊す爆弾が降って来る。それでも、二人の握り合った手は、しっかりと結ばれていた。

ドガアアアァァァァンッ！

「うぐあぁッ！」

「大和ッ！」

大和の腰が裂け、真っ赤な血が噴き出す。小さな少女は激痛に悲鳴を上げて翔輝に寄り掛かった。苦悶に顔をゆがめる大和。だが、被弾によって発生した火災が内部でさらなる爆発を起こし、『大和』の後部から火炎が噴き出す。

大和は苦しそうに顔をゆがめた後「ごはぁッ！」と大量の血の塊を吐いた。

「大和ッ！　しっかりしろ！」

「しょ・・・少佐・・・ッ！」

翔輝は一挙に力を失った大和を支えるように、ギュッと抱き締める。腕の中の少女は、先程よりもひどく小さく、細く感じた。

『後部甲板に爆弾二発命中！』

『後部主砲指揮所被弾！』

『後部電信室被弾！　総員戦死！』

『第二副砲被弾！　内部に貫通して弾薬庫に引火！　火災拡大中！』

まさかの事態が起きた。大和型戦艦最大の弱点である副砲が破壊され、その下の弾薬庫にまで炎が回り、誘爆してしまったのだ。

巨大な『大和』の後部から、それを超えるような黒煙が立ち上る。艦橋の中に悲鳴のような声が響き、兵達が慌しく動き回る中、翔輝はぐったりとする大和を抱え上げた。

「大和ッ！　大丈夫か！？」

「・・・はい・・・平気です・・・」

そう答える大和だが、その表情は苦しそうにゆがむ。避けた腰からはボタボタと真っ赤な血が噴き出す。大和は時折咳をしては血を

吐く。内部で発生した火災で、彼女の内側も壊れつつあるのだ。
翔輝はハンカチを取り出すと、そっと彼女の唇の端から垂れる血を拭う。これだけしか、今の自分にはできない。包帯もなければ、包帯の代わりになるようなものもない。固い軍服は包帯には適していないのだ。
「クソォ・・・ッ！　何もできないなんて・・・ッ！」
翔輝は悔しそうに唇を噛む。
結局自分には、何もできないのだ。
彼女がいくら苦しんでいても、自分には何もできない。その痛みを代わってやる事も、和らげる事もできない。何て自分は無力なんだ。
今までもそうだった。
彼女がケガをしても自分は何もできなかった。
何もできない自分が、嫌で仕方がない。
「くそぉッ！」
翔輝は悔しくて悔しくて何度も何度も床に拳を叩きつける。そのたびに拳が痛み、皮が切れ、血がにじみ出るが、こんなの彼女の痛みに比べたら痛くもなんともない。
悔しそうに何度も何度も自分の拳を痛め付ける翔輝。だが、その手を大和はそっと握った。
「大和・・・」
「だ、ダメですよ・・・自分を傷つけては・・・いけません・・・」
「ごめん・・・ッ！　やぱり僕何もできない、頼りにならない男だ・・・ッ！」
「そんな事・・・ありませんよ・・・少佐は・・・ただいてくれるだけで・・・いいんです・・・少佐が傍にいてくれれば・・・私はそれだけで・・・十分なんです」
「そんなの嫌だよ！　僕はもっとお前の為に――」
「これ以上に・・・私が嬉しい事なんて・・・ありませんよ」
そう言って笑みを浮かべると、血がにじむ彼の拳をそっと抱き締

めた。もうこの手はこれ以上傷つけさせない。そんな彼女の想いを感じてしまうほど、彼女の笑みは優しげなものだった。

これが、真っ赤な血を流しながら激しい痛みに耐える少女が出せる笑顔なのだろうか。

大和は苦しそうに唇をかんで瞳をギュッと閉じる翔輝の頬に、そっと手を添える。彼女の手の温かさに、翔輝は包まれた。

「・・・少佐・・・できれば・・・もっと強く・・・抱き締めてほしいです・・・」

「わかった」

彼女の願いなら何でも聞いてやる。そう思った。

翔輝は力を失った彼女の体を抱きかかえると、しっかりと抱き締めた。大和もそっと翔輝の首に手を回して、小さく微笑みながら彼の胸に顔を埋める。

「・・・これで・・・私は幸せです・・・」

彼女の小さな声に、翔輝は返す言葉がなかった。

ズドオオオオォォォォォン・・・ッ！

鈍い爆音と衝撃の直後、左舷前部に巨大な水柱が上がった。敵機が放った魚雷が命中したのだ。爆発と同時に、大和の左肩が裂けて血が噴き出し、大和の悲鳴が響く。

「大和ッ！」

「うぅッ・・・い、痛いです・・・ッ！　痛いです・・・ッ！　あああぁぁぁ・・・ッ！」

「くそッ！　くそぉッ！　やっぱり僕は何もできないじゃないかッ！」

再び拳を床に叩きつけようとする。だがその手を、大和が必死になって捕まえた。

「・・・やめて・・・ッ！　これ以上・・・少佐が自分を傷つける姿なんて・・・見たくないです・・・ッ！　ひぐぅッ！」

すさまじい激痛に耐えながら、必死に翔輝の手を守ろうとする大和。自分の事で精一杯なはずなのに、必死になって翔輝の事ばかり

思う。彼女の強さに、翔輝はもはや何も言えなかった。
自分にできる事は、ただ、彼女の傍にして、彼女を安心させる事だと、気づいた。
辛い現実に、目の前が真っ暗になった気がした。だがそれでも、大和という光を見つけることはできていた。その光がある限り、例え薄暗くても、暗闇ではないのだ。
翔輝はギュッと大和の小さな体を抱き締めた。真っ赤な血にまみれた彼女は、それをそっと受け入れる。そして、そっと彼の頬に優しくキスをした。
「少佐・・・ずっと・・・こうしててくださいね・・・」
「あぁ。わかった」
翔輝の返事に、大和は本当に嬉しそうな笑みを浮かべた後、自らを襲う激痛に必死に耐え続けた。そんな彼女を見詰め、翔輝にできる事は、ただひたすらに、彼女の手強く握り締めてやる事だけだった。

ズドオオオオォォォォォンッ！
すさまじい機銃掃射を甲板に叩き付けながら急降下して来る敵戦闘機に向かって刀を振り上げた刹那に響いた爆音に矢矧は驚愕しながら振り向いた。
「し、司令ッ！？」
矢矧が見たのは敵急降下爆撃機の攻撃を受けて後部副砲辺りから巨大な黒煙を上げる『大和』の姿。
自らが守ると決めた彼女が、傷を負った。その現実に、矢矧は愕然とする。
今まで休む間もなく振られていた刀が、力を失って下に下がった。
――だが、この一瞬の隙が、彼女の命取りとなった。
横から迫っていた敵雷撃機三機が一斉に魚雷を投下した。慌てて矢矧が振り返った時にはすでに遅かった。
海中を翔ける三本の魚雷。うち二本は見当違いな方向に走って行

ったが、残った一本が『矢矧』に向かって突っ込んで来る。
「い、嫌ぁッ！　来ないで！　来ないでえええぇぇぇッ！」
矢矧は悲鳴を上げる。だが、
ズドオオオオォォォォォンッ！
「ぎゃあああぁぁぁッ！」
体を引き裂かれるようなすさまじい激痛に吐血しながら矢矧は倒れた。激痛を感じる場所を見ると、腹部はえぐられ、真っ赤な鮮血を溢れ出させていた。鉄色の床が、自らの血で真っ赤に染まっていく。
「か・・・かはぁッ！」
のどの奥から熱いものが込み上げて来てたまらず吐き出した。それは真っ赤な血の塊。体中を襲う想像を絶する激痛に矢矧は悶絶する。
この時、『矢矧』は中央部に魚雷一本を受けた。
だが、このたった一本が彼女の致命傷となってしまった。
艦中央部に命中した魚雷は装甲を容易く破壊して機関部で爆発、機関室などにいた機関部員が全滅して、一瞬にして『矢矧』は航行不能に陥った。
「司令・・・ッ！　みんな・・・ッ！」
矢矧は必死に立ち上がろうとするが、腹部の激痛に耐えられずにわずかに浮いた体を再び血の海に倒した。べちゃりと頬に真っ赤な自らの血が付着し、それを最後に彼女の意識は途絶えた。

目の前で大爆発を起こした『矢矧』を見て、涼月は悲鳴を上げた。
「矢矧さんッ！」
涼月はたった一撃で力を失った『矢矧』を一瞥し、キッと急降下して来る敵機を睨む。
「よくも・・・よくも仲間をぉッ！」
刀のように鋭い眼光で睨み付け、涼月は槍を構えた。長く銀色に不気味に光る刃が、涼月の怒りの顔を映し出す。

槍を頭の上で回転させると、両手で構えて迫る敵機に必殺の突きを炸裂させる。その瞬間、『涼月』の長十センチ砲が火を吹き、敵機の撃墜する。それを一瞥し、涼月は構わず再度頭の上で槍を回転させる。その小柄な体からは想像もできないような槍さばき。次々に襲って来る敵機に涼月は寸分の狂いもなく突きの連打を叩き込む。そのたびに唸る長十センチ砲。日本海軍が生み出した最高の対空砲は敵機を次々に屠(ほふ)る。

さらに『冬月』に向かおうとする敵機には強烈な槍投げが炸裂。長十センチ砲の最大射程距離で撃墜した。

「妹には指一本触れさせないわよ!」

涼月はすぐに次の槍を発現させて構えると、迫る敵機に強烈な一撃を叩き込む。

必死に奮闘をする『涼月』だったが、いくら優れた対空砲を持っていたとしても、その処理能力を上回る数の敵機の攻撃にいつまでも対応できるはずもなかった。

ついに『涼月』の強力な弾幕を突っ切って敵急降下爆撃機が襲い掛かって来た。その光景に涼月は恐怖する。

「あ・・・」

涼月の手から、槍が零れ落ちた・・・

次の瞬間、敵機から放たれた爆弾が艦橋付近に炸裂。大爆発を起こした。艦首が吹き飛び、『涼月』は大浸水を起こして前方に傾斜した。その瞬間、『涼月』は航行不能に陥った。

燃える艦橋に横たわる涼月の肩や首からは裂傷が走り、おびただしい量の血がドクドクと噴き出ていた。一瞬にしてのすさまじい激痛に、涼月は気絶していた。

涼月の額に巻いた白いリボンには血の水玉模様が加わり、パサリ・・・と床に落ちた。

敵艦隊の上空に到達したある爆撃機隊は巨大な獲物に一撃を決めようと一斉に急降下した。

敵急降下爆撃機は、巨大な敵戦艦に穴を開けようと突っ込んで来る。だが、先頭を飛ぶ隊長機が横から割り込んで来た敵機に撃ち落とされた。

アメリカ兵は敵機を睨んだ。

隊長機を撃墜した日本機――紫電改（ジョージ）。紫電改（ジョージ）はすさまじい小回りで旋回すると再び襲って来る。後ろで必死に機銃を撃つ親友に何かを叫んだ瞬間、自分の乗ったＳＢ２Ｃヘルダイバーが爆発。アメリカ兵は空に四散した。

敵機を撃墜した剣はさらにもう一機を撃墜するが、後方から敵戦闘機が突っ込んで来る。敵機はあと二機なのに、剣は舌打ちするとフラップを全開まで開いた。その瞬間、ガクンと前へ投げ出されるような感触の後、紫電改は急減速。敵戦闘機はいきなり目の前から消えた敵機に驚く。だが、その時にはすでに、敵機の後方に紫電改が位置していた。

「もらったッ！」

剣の紫電改は四挺の二〇ｍｍ機銃を敵戦闘機に叩き込む。敵機は爆発して四散し、剣は尾翼を動かして機体を真横に移動すると、逃げ惑うもう一機に機銃を叩き込んだ。

その時、先程逃した敵機が爆弾を放った。しかし有賀の指示で右に逃げた『大和』はそれを回避した。剣は安堵するも、別の方向で奮戦していた零戦が一機撃墜されたのを見て、唇を噛むと一斉に襲って来る敵戦闘機を睨む。

「遅いんだよッ！」

剣はフラップを全開にして再び敵機の後方に移動すると、構わず機銃を叩き込む。後ろから敵機が機銃掃射するが、フラップを開いたまま急旋回。小回りするこちらの方が有利。せっかく後ろを取った敵戦闘機は、次の瞬間には黒煙を上げながら海に落下した。

また一機、零戦が落ちた。

「クソッ！　数で押すなんてアメ公が考えそうな事だなッ！」

怒り狂いながらも冷静でいられるのは、今までの経験と、飛龍と

瑞鳳の存在だ。
負けられない。
負けたくない。
剣は急上昇すると見せかけて空中で機体を捻らせると、追って来た敵機に真正面から機銃を叩き込む。突然の事に驚き引き金も引けなかった米兵は、頭を撃ち抜かれて絶命した。
剣は急上昇してた後に反転急降下して敵機に突っ込む。機銃を撃ちまくり、『大和』を狙おうとするてっきを撃ち落とす。
すでにこの戦いだけで彼は二〇機以上の敵機を撃墜している。かつて一度の戦いでこれほどの撃墜数を誇ったパイロットがいただろうか。しかもその記録はどんどん上がっていく。
しかし、敵機を次々に撃ち落とす剣だったが、失ったものも大きい。
すでに上空の日本機は自分一機だけとなっていた。他の零戦、清水達は必死の奮戦の後に撃墜された。他にも『大和』と『矢矧』が被弾。『浜風』は沈没した。守ると決めたものが次々に壊れ、失われていく。
まだ戦わなければいけない。なのに、燃料が残りわずかしかない。機銃弾ももうほとんど残っていない。戦いたくても、燃料も弾薬もなくなれば戦えなくなる。
剣はギリリと歯軋りをすると、自分を撃ち落とそうと襲って来る敵機を一瞥し、機体は反転させて急降下する。そして追い掛けて来る敵機三機を確認するとフラップを全開まで開いて急上昇。そして再び急降下。この見事な操縦で敵機は一瞬にして剣の後ろから前に位置が変わった。容赦なく、剣は機銃を叩き込む。一機、また一機が撃墜された。そして最後の一機に向かって引き金を引く。だが、
カチカチッ！　カチカチカチッ！
「・・・ッ！」
その軽い音に、剣は言葉を失った。もう、弾は残っていなかった。慌てて急上昇して敵機のすさまじい機銃の嵐の中を飛び回りながら、

剣は燃料計を見る。その針は、もう空に限りなく近い。いつエンジンが止まっても、おかしくない。

「くそ・・・ッ！」

剣は悔しそうに飛龍の御守りを握った。その時、敵機の一機が魚雷を回避している『大和』に急降下した。あのコースは、回避中の『大和』では回避できない！

剣はその光景に迷わず機体を反転させると一気に急降下した。

残りの燃料を全てエンジンに流し込み、紫電改の誉（ほまれ）エンジンが最大出力でプロペラを高速回転させる。

敵機の機銃掃射の嵐の中、紫電改は流星のように一直線に落下する。敵機の機銃が主翼を貫いた。尾翼にも、機体にも次々に弾が当たって風穴が開く。それでも、剣は決して操縦桿を引く事はなかった。

ボンッという音と共にガクンと機体が揺れる。残ったわずかな燃料などに引火して、紫電改は炎に包まれる。それでも、剣は決して操縦桿を引かない。

回避中の『大和』に迫る敵機に、その倍はあろうかという速度で紫電改は突っ込む。敵機の兵が迫る日本機に気づいた時には、もう遅かった。

剣は静かに瞳を閉じた。

「飛龍、瑞鳳・・・今逝くぞ」

紫電改は、ＳＢ２Ｃヘルダイバーに激突。爆発と同時に両機は四散した。

目の前まで迫っていた敵機に紫電改が激突した。粉々になったどちらのかわからない破片が落ちて行く。その光景に、大和は目を見開く。

あの紫電改に乗っていたのは、大空剣大尉。まだよく顔も見た事もないし声も聞いた事もない。もちろん、話した事もない。ただ知

っているのは、彼が飛龍と瑞鳳の大切な存在だったという事。そして、自分を守る為に――敵機に激突したのだとう事実だけ。

目の縁から、涙が零れ落ちた。

「大和・・・」

自分を抱きかかえてくれている翔輝の小さな言葉に、大和は涙を堪える事ができなかった。

「少佐・・・ッ！　大空大尉が・・・大空大尉がぁ・・・ッ！　うぅ・・・ッ！」

泣き崩れる大和を、翔輝は無言で抱き締め続ける。

大和は自分達を守る為に散った英雄の名を、忘れないと心に誓った。

第二艦隊はまだ、敵機の攻撃に晒されていた

陸奥「・・・で、出づらいわね。この空気」
霧島「そ、そうですね。本編すご過ぎですよ・・・」
長門「ちょっとこれは・・・」
金剛「これが戦闘なのだな」
作者「今回は特攻作戦という事もあって壮絶な死闘を表現したくて力を入れて書いたんだけど」
長門「入れ過ぎよこれ。矢矧や浜風の死闘なんか見てられないわよ・・・」
陸奥「は、浜風と大空大尉も死んじゃいましたし、大和や涼月も怪我してますよ」
霧島「こ、こんなにひどい戦いなの？」
作者「これでも史実に比べたらマシだよ。見てみろ、大和達の奮闘で次々に敵機が撃墜されてるだろ？　これが史実だと撃墜された米軍機はたったの十機だぞ？」
金剛「そんな一方的な戦いなのか？」
作者「まぁ、戦艦と航空機だからね。それも対空兵器の技術が劣っている日本だから仕方がないと言ったら仕方がないのさ」
霧島「で、でもあんまりですよ・・・」
作者「だろ？　だからこの物語での坊ノ岬沖海戦の米軍側の損害はかなりひどいものになってるよ？　そうでもしないと彼女達が報われないからね」
陸奥「でも大空大尉、敵機に突っ込んでまで大和ちゃんを守った・・・」
作者「そうだね。刹那も大鳳を守ろうとして戦死したし、剣も大和を守ろうとして戦死。瑞鳳がここにいなくて助かったよ」
金剛「霞や初霜は無事なのか？」
作者「今のところはね。でも第二次攻撃隊の空襲では二人にも敵機

が襲い掛かって来る」
霧島「あ、あの、これはまだ始まったばかりなんですよね？」
作者「うん。まだマシな方だよ？　第二次空襲では雪風達も敵機に襲われる。それで１話編成。さらに大和と翔輝視点の死闘が２万文字で１話。この時には甲板の兵達の地獄絵図が描かれてるし、その後は大和と翔輝の最後のシーンで１話。今は『大和』沈没後の第二艦隊と米艦隊を書いてるところ」
金剛「本当に史上最大規模の戦闘シーンなんだな」
作者「腕や足が飛ぶし、切腹のシーンとかもあるしね。だから今まで先送りにしてたけど残酷描写の警告を貼ったんだ。かなり残酷なシーンとかあるから」
長門「一体どれだけ力を入れて書いたのよ」
作者「そりゃあこの物語最後の戦闘だし、大和の最期だし、これが終わったら終戦の物語を書いたら本当に終わりだし」
陸奥「そっか、もう終わりなんですね・・・」
霧島「長かったようで、短かったですね」
作者「いや、十分長いと思う。現時点で読了時間２６００分に迫りつつあるし。原作の二倍の文量だし」
金剛「だが、いよいよ終戦か。これで日本も平和になるのか」
作者「まぁ一応は」
長門「私達が必死に掴もうとした平和が、やっと来るのね」
作者「まぁ広島と長崎に原爆が落とされるけど」
長門「なしにして♪」
作者「無理ですッ！」
金剛「無理ではない。何の為の本土防空の航空隊が配置されてると思ってるんだ」
作者「いやいや、搭乗員の質は悪いし高度１万メートルまで昇れる航空機はほとんどないし、そもそも菊水作戦でほとんどの航空機が特攻機に回されてるし」
長門「そこを何とか。ほら、草薙先生に援軍を頼んで迎撃してもら

って――」
作者「できませんッ！　っていうか紀伊さんとかが加わったら逆転勝利しちゃいますよッ！」
長門「それでもいいと思うけど」
作者「一応史実に合わせてるんですから。そんな訳にはいきませんよ。とにかくもうすぐ《艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～》は終了です。これは決定事項です」
陸奥「終わっちゃったら、どうするんですか？」
作者「一応既存の外伝の修正をする。その後にエピローグを修正予定。ほら、伊勢や大鳳、葛城なんかが大幅にキャラ設定を変えたからね。直さないと」
金剛「それが終わったら？」
作者「・・・」
長門「黒鉄大和、艦魂から引退・・・なんて事、ないわよね？」
作者「・・・」
長門「え？　ちょ、ちょっと・・・」
作者「いやぁ、今じゃ草薙先生や伊東先生、零戦先生に火星先生、さらには二等海士長先生まで艦魂を書いてくれてるし、もう僕の出番ないかなぁって」
霧島「ちょ、ちょっと待ってくださいッ！」
作者「うーん、モンハンの方が人気あるから、ファンタジー作家に転身って事も――」
金剛「いや、ないだろ」
作者「・・・」
金剛「貴様、忘れていないか？」
作者「へ？　何を？」
金剛「貴様、我が先輩達の物語を途中で投げ出したではないか」
作者「あぁ、三笠を主人公艦にした日露戦争の艦魂物語の事？」
長門「そうね。まだ三笠さんや松島さんの物語は終わってないしね」
陸奥「ほ、本編の方でも出雲さんとか出しちゃったし。なんかその

物語の延長線みたいな雰囲気残してるし、書かないとマズイんじゃないですか？」
作者「いやぁ、でも僕日露戦争は得意分野じゃないから。ほとんど陸上戦だし」
金剛「まぁとにかくいつかは必ず書け。いいな」
作者「・・・努力します」
長門「まぁ他にも外伝で書けそうな艦魂の物語とかって結構あるしね。長谷川君と大和達のドタバタコメディーを書いてもいいし」
陸奥「まだまだ終わりは先のようですね」
霧島「よ、良かったぁ・・・」
作者「いや、僕的には違った作品も書いてみたいし・・・」
金剛「貴様は未来永劫我ら艦魂を書いてればいいのだ。貴様は艦魂に一生を捧げろ」
作者「無茶言うなッ！」
金剛「ほう、貴様の分際で我ら戦艦に逆らうだと？　おもしろい」
作者「え？　ちょっと――」
金剛「全艦単縦陣形成ッ！　目標非国民ッ！　全艦主砲旋回開始ッ！」
作者「ちょっと待ってッ！　無理ッ！　そんな一斉砲撃なんて避けられないってッ！」
金剛「安心しろ。苦痛は一瞬だ。すぐに旅立てる」
作者「旅立ちたくないよぉッ！」
金剛「全艦主砲一斉撃ち方始めッ！　撃てぇッ！」
長門「ごめんね」
陸奥「ゆ、許してください」
霧島「ごめんなさいッ！」
作者「謝りながらもちゃんと狙って――」

ドガアアアアァァァァンッ！

金剛「ふむ。最近はどうも草薙殿のような終わり方が多いな。まぁそれでもいいが――コホン。見苦しいものをお見せしてすまない。次回は第一次空襲と第二次空襲の間のわずかな休憩の時間だそうだ。その次がいよいよ十勇士の最期という訳だな。あぁ、それと残酷描写の警告が新たに追加された事に関して詫びを言う。元々そういう意見があったのだが作者が先延ばしにしていたんだ。それが今回の戦闘で残酷なシーンが多くなったという事を受けて追加したそうだ。関係各方面に迷惑を掛けた事を謝罪する。これからも先は短いがどうかこの物語をよろしく頼む。まぁ、私は戦死した身だから言う事はないがな。ではまた次回、貴様らと会える事を願っている。意見感想など送ってくれな。では」

長門「ねぇ金剛」

金剛「うん？　何だ？」

長門「いや、さっき滝川君が駆逐艦の艦魂数人を口説いてたのを思い出して――」

金剛「滝川あああああぁぁぁぁぁッ！」

ドガァンッ！　ダダダダダダダダ・・・・・ッ！

長門「あらあら、金剛も大変ね。恋する乙女は気苦労が耐えないわね――え？　私には一生無縁な話だって？　うふふ――殺すわよ♪」

第十四章　第十節　第一次総攻撃終了　残されたのは・・・（前書き）

第一次空襲で『浜風』沈没。『矢矧』と『涼月』が戦闘不能となった。第一波の空襲は終わったとはいえ、艦隊は被害の甚大さから休憩の暇はなく、その間も敵の第二次攻撃隊が迫って来る。
大和達はもはや日本へ帰る事はできぬと決意し、最後の戦いに向けて全力で戦い抜く事を覚悟する。
そして、十勇士最後の戦いが再び始まる・・・
今回は短めです。その代わり同じくらいの文量のあとがきが入ってます。もうあとがきなのか本編なのかわかりませんが（笑）
今回はあの方をゲストにお呼びしました！
本編・あとがき共々お楽しみください！

第十四章　第十節　第一次総攻撃終了　残されたのは・・・

ゴオオオオォォォォォ・・・

立ち上る巨大な黒煙を見詰めながら、翔輝は悔しそうに唇を噛んだ。必死の消火作業が続いているが、弾薬などに引火した火災は一向に消える気配がなかった。

一〇〇機を超える敵の第一次攻撃隊第一波の攻撃は終了した。

わずか三〇分の戦闘で第二艦隊はかなりの被害を出した。

『浜風』沈没。『矢矧』『涼月』大破。『大和』も後部に爆弾を受けて火災が発生していた。他の艦艇も直撃弾こそないが至近弾を受けているもの、機銃掃射で対空機銃などの兵が大勢死んだものなど様々であった。

無傷で生き残った雪風は損害を受けている矢矧と涼月の元に向かった後、大和の所へ来た。大和も直撃弾を受けて怪我を負っていたが、翔輝の支えがあれば立つ事はできた。

「雪風。矢矧と涼月の被害は？」

すでに初霜の手当てを受けた大和は翔輝の肩を借りながら立ち上がると、暗い表情を浮かべる雪風に問う。雪風はその問いに一瞬苦しげに顔をゆがめたが、しっかりと大和の瞳を見て口を開く。

「『矢矧』は機関部に壊滅的な被害を受けて大破航行不能。矢矧も、もう立ち上がる事はできないほどに衰弱しています。続いて『涼月』は艦首が破壊されて大破。微速後進のみしかできませんし、司令部のほとんどが壊滅状態です。涼月も現在冬月の看護を受けていますが、これ以上の戦闘は無理です」

雪風の報告に、大和は「そう・・・」と小さくつぶやくと悔しそうに唇を噛んだ。そんな彼女を支える翔輝は、やるせない気持ちになった。

「伊藤長官は『涼月』を戦線から離脱させる事を決定したそうだ。だが、無事に日本に帰れるかはわからない」

翔輝の言葉に、雪風も「そうですね」と小さな声でつぶやく。
艦首が吹き飛び破口から大量の海水が浸水していて、さらに後進しかできず、しかも微速でしか動けない『涼月』が日本に無事に帰れるかどうかなど、極めて可能性は低い。機関が故障していた『朝霜』よりも危険な状態なのに、この敵地となった海を突っ切るなど、不可能に近い。それでもゼロではないのだ。
「信じましょう。涼月が帰れる事を」
大和はそう言って静かに微笑んだ。
雪風も「そうですね」と小さく笑みを浮かべると、大和を支える翔輝を見詰める。
「少佐はお怪我はありませんか？」
「うん。雪風は？」
「どうやらこんな時にも幸運は続いてるようで無傷ですよ。特攻作戦には向かない能力ですね」
どこか自嘲気味に笑う雪風。その笑みの奥には大切な妹である浜風を失った苦しみがあるのだろう。どうして自分じゃなくて彼女が死んだのか。そんな苦しみが彼女にある。
翔輝はそっと手を伸ばすと雪風の頭を撫でた。大好きな彼に頭を撫でられ、雪風は頬を赤らめながら小さく笑みを浮かべる。
「少佐・・・」
「そう自分を責めるな。お前のせいじゃない」
「で、ですが、今回の作戦は死ぬ事を前提にした特攻作戦で――」
「確かにそうかもしれない。でもな、僕は死ぬ気なんてサラサラない。みんな生きて日本に帰る。そう信じてる」
「本気ですか？　沖縄は敵の大拠点ですよ？」
「被害の大きさから作戦が中止になる可能性もあるし、何も沖縄へ行ったら必ず死ぬと決まった訳じゃない。燃料も十分にある事は、お前だってわかってるだろ？」
自分達には、まだ日本へ帰る力が残されている。
翔輝の言葉に、雪風は何か小さな希望の光を見た気がした。

特攻作戦だからといって、必ず死ぬとは限らない。以前、特攻作戦で生き残った兵がいると聞いた事がある。機体の不調や爆発で吹き飛ばされて助かったなど、必死の覚悟で行っても生き残る可能性はあるのだ。

そして自分には、すさまじい幸運力がある。もしかしたらきっと・・・

「で、ですが・・・」

それは、自分だけが生き残るという事。翔輝だったら何とか無理にでも連れ出す事もできるかもしれない。だが、大和は無理だ。敵の攻撃のほとんどが彼女に集中している。いくら不沈艦と謳われる『大和』であっても被害を受けても構わないという事にはならない。その驚異的な復原能力にも限りがあって、限界を超えれば彼女は助からない。

幸運力があって狙われる可能性が低い自分と、幸運力は人並みで最も狙われる彼女とでは、生き残れる可能性は雲泥の差だ。

「雪風」

その声に視線を上げると、そこには優しげな大和の笑みがあった。

「司令・・・」

大和は翔輝の手から離れるとフラフラとなりながら歩く。雪風が慌てて倒れそうになる彼女を抱きかかえる。

「司令！　無茶をされてはいけま――」

「――少佐を、頼んだよ」

「・・・ッ！？」

耳元で小さく放たれた彼女の言葉に、雪風は絶句した。ゆっくりと体を起こす大和は、どこかすっきりしたような笑みを浮かべていた。きっと今の声は翔輝には聞こえていない。

「おい大和。無茶するなよ」

「すみません」

翔輝に再び肩を支えられ、大和は笑みを浮かべる。そんな彼女を見詰め、雪風は愕然としていた。

先程の彼女の言葉、それは――

「司令」

雪風の真剣な声に大和は振り返った。そこには、覚悟を決めた親友とも言うべき少女の勇ましい姿があった。

雪風は、大和の決意に、見事な敬礼をして応えた。大和もまた、自分の願いを聞き入れてくれた彼女に優しく敬礼した。

二人の少女の敬礼を見詰めるが、翔輝にはその意味がわからない。だが、きっと何か大切な決意をしたのだろう。その時はそれだけしかわからなかった。

「長官、ご無事ですか？」

その声に三人が視線を向けると、そこには磯風と冬月、霞が立っていた。

「今、『涼月』が戦列を離れました」

その言葉に三人が窓の外を見ると、ゆっくりとだが、確実にバックで日本を目指して帰って行く『涼月』の姿が見えた。

「涼月からの伝言よ・・・『ごめんなさい』ってね」

冬月の言葉に、大和は小さく首を横に振る。

「いえ、涼月が謝る事なんて何もありません。あの子は、よくがんばりました」

静かに去って行く仲間に向かって、大和は小さく敬礼をした。そんな彼女を見詰め、冬月は泣き出してしまう。

「冬月・・・」

そっと彼女を支え、ハンカチを差し出したのは雪風。冬月はただ一言「ありがとう」とだけ答えて彼女のハンカチを受け取ると、涙を拭う。

「現在矢矧には初霜が付いているが、出血が激しく今も咳をするたびに血を吐く状態が続いているそうだ。航行不能でなければ、真っ先に戦列を外れるのだが・・・」

「仕方ないさ。でも、このままだと『矢矧』はいい的だ。遅かれ早かれ、矢矧はもう・・・」

翔輝の悔しそうな言葉に、霞も「そうだな・・・」と小さく答えて軍帽を被り直した。
「長谷川様」
翔輝がその声に横を向くと、じっと自分を見詰める磯風がいた。
「磯風。怪我はないか？」
「大丈夫です。長谷川様の方は？」
「僕は平気だよ。艦橋にいるからそう簡単には死なないし」
「そうですか・・・」
ほっとしたように小さく笑みを浮かべる磯風。そんな彼女を、翔輝はそっと頭を撫でてやる。たったそれだけの事なのに、磯風には言葉にはできないような安心感、そして勇気が溢れてくる。
顔を上げると、そこには大好きな彼の優しげな笑顔が自分に向けられていた。この特攻作戦で彼女が得たものは、翔輝との繋がりであった。何にも変えがたい繋がりが、彼女を支えている。
「がんばれ。死ぬんじゃないぞ」
「はい・・・」
磯風は嬉しそうに微笑むと見事な敬礼をして消えた。霞も「ご武運を」とだけ言葉を残して消え、冬月と雪風は互いを支え合いながら一礼して消えた。
残されたのは翔輝と大和。そのどちらの表情も暗い。しかも大和は時折痛みに顔をゆがませる。必死の消火作業も無意味なほど、『大和』の後部では火災が発生しているのだ。
「少佐・・・」
その声に振り返ると、大和が床に座りながらこちらをじっと見詰めていた。もう、一人で立つのも辛いらしい。
「どうした？」
「・・・戦争って、辛いですね」
その言葉には、とても重いものがあった。
彼女は戦中生まれ。戦っている日本しか知らない。だがそれでも仲間と共に笑い合った時間はとても平和で幸せだった。だが、戦争

がそれを破壊する。
この三年で、大和は多くの仲間を失った。大切な妹である武蔵や、まだ会った事もなく死んだ信濃もまたその犠牲者だ。
多くを失い、自分達が得たものとは一体何か。
戦争という辛い現実。終わったのではない。まだ続いている戦争。事実、敵の第二派を先程電探が捉えていた。また、あの辛い現実が目の前に現れる。
先程見た甲板の現状もまた、ひどいものであった。
爆弾が命中した訳ではない中部の高角砲や機銃が密集する部分には多くの兵達が倒れていた。足や腕をもがれて悲鳴を上げている兵や、すでに絶命した兵。甲板は、真っ赤に染まっていた。
またあの戦いを、自分達はしなくてはいけない。
でも、戦わなければならない。
死んでいった者達の為にも、生き残っている者達の為にも、自分達は戦わなければならないのだ。
「なぁ大和。お前はまだ、戦えるか？」
翔輝の言葉にうつむいていた顔を上げた。そこには悲痛にゆがむ彼の顔があった。
翔輝だって、こんな事は訊きたくない。こんな小さな、普通の女の子に、しかも怪我をして、仲間を大勢失っている彼女に、こんな事を訊くのは残酷以外何ものでもない。
だが、翔輝はただ、彼女の口からその決意を聞きたかった。
彼女の決意を、彼女自身から知れば、まだ自分だって戦える。そう思った。
翔輝の問いに、大和はいつの間にか目の縁に溜まっていた涙を拭き取ると、顔を引き締め、真剣な瞳で彼を見詰め、言った。
「はい。まだ私は、戦えます」
「そうか」
大和の言葉に、翔輝は静かに微笑んだ。
そっと彼女に近寄ると、彼女もじっと自分を見詰めている。その

横にそっと腰掛けると、大和は嬉しそうに微笑んで体を預けてくる。
「少佐がいれば、私はどんな敵にだって戦えますよ」
「そんなに僕って頼れるか？　あんまり自覚はないけど」
「もちろんです。私は、少佐がいてくれるから、ここまで戦えるんです。だから、次の敵が来ても、私の傍にいてくださいね？」
「もちろんさ。僕はお前から離れない。約束する」
「嬉しいです・・・」
大和はそう笑みを浮かべながら言うと、そっと翔輝に抱き付く。
だが、その力はあまりにも弱い。翔輝は彼女が自分にしっかりと抱き付けるように彼女の体を支えてやった。
自分の頼りない腕の中で、大和は本当に嬉しそうな笑みを浮かべる。その天使のような笑みも、朱色に染まった頬も、瞳の輝きも、何もかもが愛おしい。こんな彼女を、自分が支えられるのかと不安になるが、大和は自分を信頼している。だったら、その想いに答えなければいけない。
第二艦隊は『涼月』と『矢矧』を隊列から外すと、まだそれほどの被害のない『大和』を囲むように『霞』『初霜』『雪風』『磯風』『冬月』の五隻が円陣を組む。対空陣形だ。
各艦は負傷者の手当てや代行者の配置、さらには遺体の放棄などに終われていた。『大和』の甲板でも負傷者を収容し、遺体を次々に海に投棄する。残酷だが、移動しづらい甲板の上では戦闘はできない。皆、苦しそうに同胞の亡骸を海に投棄する。続いて辺り一面にぶちまけられた血を水を使って手荒く流した後、砂袋に入っている砂を掛ける。応急処置だが、滑り止めである。血で滑ってしまっては戦闘などできない。他にも必死に消火作業や破損した機銃や高角砲の応急処置が行われる。一門が使用不能になっても残り二門があれば戦える。機銃座に座った兵達は次なる戦いに必死になっていた。
防空指揮所でも敵機の凶弾に倒れた兵を運び出し、新たな見張り員を立てる。そんな中でも有賀はただひたすら敵機が現れるであろ

う空を睨み続けている。
艦橋の中でも各隊からのすさまじい量の報告の処理に終われている。森下も能村も、航海長も必死になって兵達に指示を送っている。伊藤はただ、曇天の空を見上げていた。その瞳の奥にある彼の想いは、誰にもわからない。
大和はそんな必死に自分を守ろうとしてくれている兵達を見詰めながら、彼の腕の中で彼の温もりを感じ続ける。
彼がいれば、自分は大丈夫。
どうしてだろう。勝てるはずもない戦で、しかも死ぬ事がわかっているというのに、どうしてこんなにも勇気と希望に胸が躍るのだろう。
戦いの先にも後にも死しかないというのに、なぜ自分はここまで戦えるのだろう。
簡単な事じゃないか。
彼が傍にいてくれるからだ。
彼の手が、彼の温もりが、彼の声が、彼の笑みが、彼の存在が、自分を支えてくれている。その支えはとても強く、どんな敵を前にしても自分を前へ進ませてくれる。
例え、何百、何千の敵機が襲って来ても、自分は戦える。
彼がいる限り、自分は大丈夫。
敵が自分達を殺しに掛かって来るなら、来ればいい。その代わり、その時は容赦しない。
自分は無敵だ。
世界最大最強の戦艦だから?
日本海軍の象徴だから?
大艦巨砲主義の申し子だから?
不沈艦と謳われる、超弩級戦艦の艦魂だから?
――いや、違う。
愛する人がいる、乙女だからだ。
守りたい。一緒にいたい。愛されたい。

そんな想いを純粋に向けられる相手だからこそ、大和は翔輝を選んだ。そして、翔輝がいてくれるから、自分は負ける気がしないし怖くもない。

これから先の戦いが、絶望しかなくとも、大和は絶望なんてしない。

だって、翔輝がいるから。

大好きな彼が、自分を信じて隣に立っていてくれるから。

（私は負けない。絶対に負けない）

大和はスッと立ち上がった。さっきまで一人で立つ事も難しかった彼女がいきなり自分の両足でしっかりと立ち上がった事に翔輝は驚く。

「や、大和？」

「少佐。私と共に、行ってくれますね？」

そう言って差し出された手。それはなんて細くて白く、華奢な手だろうか。でもそれは、自分が何よりも守りたい手であった。

翔輝は笑った。

「愚問だぞ大和。僕はお前から離れない。お前と一緒にどこまでも行ってやるさ。こうなったら意地でも沖縄に殴り込んでやろうじゃないか。アメ公の頭に、お前の四六センチ砲を叩き込んでやれ」

「はいッ！」

二人の手が、結ばれた。

『左三〇度方向より敵機来襲ッ！　一〇〇機以上の大編隊ッ！』

その報告に、艦橋に再び緊張が走る。森下はすぐに双眼鏡で敵機を確認する。伊藤も、今まで閉じていた瞳をゆっくりと開いた。

「各艦に発光信号。対空戦闘用意」

「対空戦闘用意ッ！」

『主砲砲撃用意ッ！』

有賀の声が伝声管を伝わって艦橋にも響く。

伝声管で参謀達が指示を送ると、艦橋の外で戦闘ラッパが鳴り響いた。それに呼応して兵達が主砲発射の衝撃から身を守る為に次々

に一度艦内に戻る。
『戦闘機ッ！　爆撃機ッ！　攻撃機ッ！　敵の大群ですッ！』
『もう護衛の戦闘機はありません！』
『後部弾薬庫の火災消火できません！』
様々な悲鳴が伝声管を伝わって響いた。
巨大な『大和』の主砲は再び動き出す。それを一瞥し、大和は森下を見詰める。
「参謀長、お願いがあります」
「うん？　何だ？」
大和は森下に近づくと何事かを耳打ちした。それを聞いた森下はニッと白い歯を見せて笑うと、わかったとばかりにうなずいた。大和にも笑みが起きる。
森下は伝声管の前に立つ。
「総員聞けッ！」
三基の主砲全てが敵機の方向に旋回を終えると、一門、また一門と巨大な砲身が敵機を捉えようと仰角を上げる。。
「『大和』の艦魂からの伝言だッ！」
全部で九門の砲身全てが、ゴゴゴゴゴ・・・と不気味な音を響かせて迫る死神達に神の鉄槌を加えようと、一門一門バラバラに、より敵機を撃墜できるように角度を取った。
森下が満面の笑みで伝声管に吼えた。
「『皆さんの奮闘に期待します！　私の命、預けましたよッ！』だぁッ！　いいかお前ら！　絶対に『大和』を守り抜けッ！　健闘を祈るッ！」
刹那、艦を揺らすような爆音に似た男達の掛け声が上がった。
その瞬間、『大和』の士気は最高潮にまで上がった。
「主砲三式弾砲撃始めッ！　撃てえええええぇぇぇぇぇッ！」
その絶好のタイミングに放たれた有賀の命令に、主砲の砲手達は引き金を引いた。
すさまじい爆音と共に九門の主砲全てから火炎と黒煙が噴き出し、

巨大な砲弾が撃ち出された。それら九つの砲弾は敵機の群集に次々に入り込み、炸裂した。

大爆発と共に巨大な大輪花が咲き誇り、敵機が次々に墜落していく。

それでも敵機は構わずに突っ込んで来る。

有賀は近過ぎる敵機にもう主砲は使えないと判断。各機銃、高角砲隊に甲板へ出て攻撃開始の命令を下した。

兵達は次々に己の場所に向かって走り、準備を整える。そして、迫る敵機に向かって一斉に火を噴いた。

戦艦『大和』の――いや、大和と翔輝の最後の戦いが始まった。

第十四章　第十節　第一次総攻撃終了　残されたのは・・・（後書き）

隼鷹「相変わらず本編重いねぇ」
大鳳（かのん）「・・・（コクリ）」
伊勢「まぁ、本編も大変やろうけど、こっちも大変やで？」
作者「あははは」
大鳳（かのん）「・・・ごはんいっぱいです」
榛名「これは一体何なんだ？」
作者「いやぁ、この前大和が護衛戦艦『神龍』にお邪魔した時にお土産でもらった北海道の食材の数々なんだけど・・・」
陸奥「これってお土産の量を超えてますよね？」
作者「あははは・・・どうしよっか？」
伊勢「今度の宴会の時に食材にすればええんちゃう？」
榛名「お、いいなそれ」
陸奥「じゃあ今度の宴会は《北海道の料理食べ尽くしちゃうぞパーティー》だね」
霧島「楽しみです」
榛名「こりゃ奪い合いの死闘になるな」
伊勢「そんで、当の本人はどこにおるん？」
作者「え？　あ、いや・・・（まさか翔輝とデート中なんて言えないよね）」
陸奥「どうしたんですか？」
作者「いや、ちょっと用事があるそうで」
大鳳（かのん）「・・・メインヒロインは大変ですね」
伊勢「何言ってんねん。あんた結構人気あるらしいで？」
大鳳（かのん）「・・・そうですか？」
陸奥「そうよ。私達なんてランキング外なのに」
霧島「しかも実際の時期的にはわずか三ヶ月の短命キャラなのに」
作者「あははは、大人気だね大鳳」

大鳳（かのん）「・・・皆さんのおかげです」
作者「こういう謙虚なところもまた人気なんだよね」
隼鷹「私だって人気あるもんッ！」
伊勢「そうやなぁ、意外とあんたも上位入賞者。しかも前回の人気投票じゃ3位やったもんな」
隼鷹「お兄ちゃんラブパワー全開なのだ！」
霧島「いいですね・・・私なんか忘れられたキャラですよ」
榛名「大丈夫だって。霧島は絶対後で挽回できるから。安心しろ」
霧島「ありがとう、姉さん」
作者「まぁとりあえず伊東先生には感謝しないとね」
大鳳（かのん）「・・・ありがとうございます」
作者「ま、気を取り直してがんばろう！」
伊勢「せやな。ほんで、今回は誰を呼んでるんや？」
作者「フフフ、よくぞ聞いてくれました！　今回は待ちに待ったあの方が降臨なされます！」
陸奥「誰なんですか？」
作者「まぁ待てって。もう少ししたら来るはずだから」

？？「きゃあッ！」

ドタァッ！

全員『！？』
伊勢「い、今の音何や？　それにあの声」
陸奥「ドアの向こうから聞こえたけど・・・」
作者「・・・えっとぉ」

？？「いたたた・・・何で何もない所で転ぶのかな？　こんなんじゃ先が不安だよぉ」

隼鷹「大丈夫かな？　ちょっと見て来る！」
作者「あ、うん」

ガチャ（ドアが隼鷹によって開かれる）

？？「きゃあッ！　だ、誰ですか・・・ッ！？」
隼鷹「大丈夫？　怪我してない？」
？？「は、はい・・・」
隼鷹「よくわかんないけど、とりあえず入って。こっちこっち」
？？「は、はい！」

隼鷹と？？が部屋に入って来る。

隼鷹「連れて来たけど、この子誰？」
神龍「あ、すみません！　わ、私は神龍と言います！　護衛戦艦『神龍』の艦魂です！　きょ、今日はよろしくお願いしますッ！」
作者「えっと・・・神龍さん。とりあえずそんなに頭下げなくても大丈夫ですから。それとさっき転んだようですが、大丈夫ですか？」
神龍「えッ！？　何でわかったんですかッ！？」
作者「いや、転倒音と独り言が聞こえたから・・・」
神龍「・・・うぅ（顔真っ赤）」
榛名「なぁ、俺達はどうすれがいいんだ？」
作者「えっと、とりあえず紹介しておくね。彼女は神龍さん。伊東先生作の《護衛戦艦『神龍』～護りたいものがそこにある～》に登場する艦魂。まぁ、メインヒロインだね」
神龍「ど、どうも」
隼鷹「神龍って言うんだ。よろしくねぇ。私は空母『隼鷹』の艦魂だよ」
神龍「あ、先程はどうも隼鷹さん。それと長門さんから伝言です。《ペンダントありがとうね》だそうです」

隼鷹「あはは、気にしないでって言っておいて。あ、私の事は隼鷹でいいよぉ♪」
神龍「あ、はい」
隼鷹「敬語も抜き！　同じ艦魂なんだから」
神龍「はい・・・あ、うん」
作者「はいはい。盛り上がってるところ悪いけどごめんね。あ、僕は黒鉄大和と言います。いつも伊東先生にはお世話になってます」
神龍「あ、どうもこんにちは。こちらこそいつも作者がお世話になってます」
作者「いえいえ、先日は北海道の幸をありがとうございましたとお伝えください」
神龍「はい」
作者「じゃあとりあえずみんなも自己紹介して」
伊勢「うちは伊勢。航空戦艦『伊勢』の艦魂やで」
神龍「あ、はい伊勢さん。えっと、私の方の伊勢さんとはちょっと違いますね」
伊勢「うちは独特やからなぁ。まぁ、気にせんで仲良くやろうなぁ」
神龍「は、はいッ！」
陸奥「あ、私は戦艦『陸奥』の艦魂。よろしくね神龍ちゃん」
神龍「陸奥さんですか、私は向こうの陸奥さんには会った事がないので嬉しいです」
陸奥「そうね。大戦末期だもんね。私は中期に事故沈没しちゃったから」
神龍「そうですよね」
陸奥「まぁ、草薙先生の余波のおかげでこうしてまた表舞台に立てたからいいけどね。これからよろしく」
神龍「はい。よろしくお願いします」
霧島「えっと、あの・・・」
神龍「はい？」
霧島「あの、えっと、その・・・」

神龍「はぁ」
霧島「うんっと、えっと、あの、その、あう・・・」
作者「・・・戦艦『霧島』の艦魂です。この子ものすごい内気な性格な上に人見知りが激しくて、すみません」
神龍「いえ、大丈夫ですよ。これから仲良くしましょうね」
霧島「あ、はい・・・ッ！」
大鳳（かのん）「・・・」
神龍「えっと・・・」
作者「すみません。この子あんまりしゃべらないんです。この子は大鳳。空母『大鳳』の艦魂です」
大鳳（かのん）「・・・（ペコリ）」
神龍「あ、これはどうもご丁寧に（ペコリ）」
榛名「しっかし、本当に大和に似た奴だな。口調も性格もほとんど同じじゃねぇか」
作者「まぁ、向こうは大和をモデルに書いたそうだから。似てるのも納得だよ」
榛名「ま、俺はこっちの方が気を遣わなくていいけどな」
作者「お前が気を遣うなんて事はあるのか？」
榛名「あん？　やんのかゴラ」
作者「すみませんすみません。僕が悪かったです。でもとりあえずは礼儀は守ってね。相手はお客さんなんだから」
榛名「わーってるよ」
神龍「あ、あのそちらの方は・・・？」
作者「ほら、お前のせいで怖がってるじゃないか」
榛名「うっせぇッ！」
神龍「・・・」
作者「黙っちゃったよッ！　ほら何とかしてッ！」
榛名「うっせぇッ！　黙ってろボケッ！　それとテメェもビクビクすんじゃねぇッ！　帝国海軍軍人だろうがッ！」
神龍「は、はいぃッ！」

伊勢「ちょっと。あんまり神龍をいじめちゃダメよ。色んな所から集中砲火を受けるわよ？」
榛名「権力なんかに俺は屈しねぇぞッ！」
伊勢「はいはい。わかったからさっさと自己紹介自己紹介」
榛名「チッ、わーったよ。俺は金剛型戦艦三番艦、戦艦『榛名』の艦魂だ。よく覚えとけ」
神龍「え？　は、榛名姉さん？」
榛名「あん？」
神龍「ひぃ・・・ッ！」
作者「うわぁッ！　ごめんなさいッ！　うちの榛名がとんだご迷惑をぉッ！」
榛名「んだとゴラァッ！　俺が迷惑だとッ！？」
神龍「はうあう・・・」
陸奥「ちょっと榛名さん！」
霧島「榛名姉さんッ！　ストップストップ！」
伊勢「あんたはちょっとこっちに来ててぇな！」
榛名「はぁッ！？　何でだよ――ちょっと待て！　おいッ！」
作者「あーあ、連行されちゃった――すみませんね驚かせてしまって」
神龍「び、びっくりしました。私の方の榛名姉さんとは全然違いますね」
作者「あははは、基本的に頼れる部分や武道派な所は似てるけど、向こうの榛名さんは志を胸に抱いた立派な戦士に対してこっちの榛名はそっちと違ってガサツで粗暴で大雑把で乱暴者で男勝りでわがままでいい加減で無鉄砲で支離滅裂――」
榛名「テメェに言われたくねぇッ！」

ドゴンッ！（作者に強烈な跳び蹴りが命中）

作者「・・・ッ！　・・・ッ！（声が出ないほど痛い）」

神龍「だ、大丈夫ですかぁッ！？」
榛名「ったく！　調子に乗りやがって！」
神龍「はうあう・・・」
榛名「・・・ったくよ。別に取って食おうなんて考えてねぇから怯えんな」
伊勢「ごめんなぁ。うちの榛名あんたんとこの榛名と違って乱暴で。せやけどええ子やから安心してぇな」
榛名「おい伊勢。俺の方が年上だぞ」
陸奥「まあまあ、作者さんが身を挺して活路を見出してくれたんですから」
作者「きれいに纏めてるけどものすごく痛いからねこれ」
霧島「相変わらず回復早いですね」
作者「草薙先生には負けるけどね。もしあとコンマ一秒でもＡＴフィールドの展開が遅かったらやばかったよ」
大鳳（かのん）「・・・ＡＴフィールド？」
隼鷹「この世の中である意味一番有名な防御シールドだよ」
伊勢「せやけどエ○ァを観てない人には辛いネタやなぁ」
陸奥「あぁ、あのおめでとうエンドのアニメですね」
伊勢「言ったらアカンよ陸奥。世の中にはあの終わり方に怒りを覚えてる人もおるんやから」
神龍「えっと・・・」
作者「おい。常識人の神龍さんが付いて行けなくて立ち往生してるぞ」
榛名「こっちの世界の筆頭がよく言うぜ。埼玉で誇れるのはって考えてら○☆すたの聖地ぐらいしか思い付かなかったくせに」
作者「か○みのツンデレ具合がいいですね」
霧島「ほ、本物ですね」
作者「ちなみに僕は地元だから聖地の巡礼は一通りやった事がある」
榛名「うわぁ・・・どうせテメェも釘○理恵至上主義者なんだろ？」
作者「まあね。何しろ前に一度この作品のメインキャラを僕なりに

声優を当てて遊んだ事もあるし」
伊勢「ほんま？　うちは誰なんや？」
作者「気にしない気にしない。どうせアニメ化なんて絶対無理なんだから。っていうかこの作品が日の光を浴びる事もないだろうし」
隼鷹「一回作家募集で投稿してみたら？　どうせ大学受験終わったんだし」
作者「いやぁ、プロとアマチュアは別世界だからね。この程度の文章力じゃ無理ってわかってるから」
陸奥「作者さんって勝てない戦はしない主義なんですよね」
霧島「勝てる戦いしかしないというのもありますけど・・・」
榛名「ただの弱腰じゃねぇか」
作者「失敬な。戦略的戦術的に考えて勝てる見込みがない戦いは次期作戦に備えて耐えているだけだ」
榛名「言い方をかっこ良くしても根本は変わってねぇじゃねぇかッ！」
作者「まぁ落ち着いて。今回は神龍さんも来てるんだから少しは大人しくしてよ」
伊勢「そうやで。見てみぃ神龍を。あんたが怖過ぎて泣いてるやないか」
神龍「え？　わ、私は別に・・・」
榛名「うぐっ・・・わーったよッ！　ったくッ！」
作者「すみません神龍さん。うちの榛名がとんだご迷惑を」
神龍「い、いえ。ちょっと私の方にはいないタイプの方で驚きましたが、結構いい人みたいですね」
隼鷹「どこをどう見たらそう思えるのかな？」
大鳳（かのん）「・・・わかりません」
神龍「えっと、やっぱりどこか榛名姉さんに似てるから、かな？」
作者「いやいや、それはそっちの榛名さんに失礼ですよ」
榛名「テメェいい加減にしやがれッ！」
伊勢「いい加減にするのはあんたや榛名。少しは大人になってぇな」

陸奥「そうですよ。せっかく神龍ちゃんが来てくれてるのに」
霧島「もう、あんまりみんなに迷惑掛けないでよ」
榛名「むぐぅ・・・何だよテメェら。みんなして俺を悪者扱いかよ！」
作者「いや、確実に悪者でしょ」
榛名「わーったよッ！　俺は降りるッ！　後は好きにしろボケッ！」
神龍「あ、待ってくださいッ！」
榛名「何だよ」
神龍「い、行かないでください！　せっかくこうして会えたんですから、もっとお話しましょうよ！」
榛名「別に俺は話す事なんかねぇぞ」
神龍「私はいっぱいあります！　私の方とは違う榛名姉さんの事、もっともっと知りたいんですッ！」
榛名「・・・わーったよ」
神龍「本当ですかッ!?　やったぁッ！」

ピョンッ！（嬉し過ぎて榛名に抱き付く神龍）

榛名「な、何だよ！　離れろッ！」
神龍「はぁ・・・こっちの榛名姉さんもいい人ですねぇ」
榛名「人の話を聞け神龍ッ！」
神龍「え？　今私の事神龍って・・・」
榛名「んだよ。呼んじゃ悪いってのか？」
神龍「う、嬉しいよぉッ！」
榛名「のわぁッ!?」

伊勢「あらら、榛名ったら神龍に押し倒されてもうたな」
陸奥「結局、神龍ちゃんの大好きな向こう榛名さんにどこか似てるんですね、私達の榛名さんは」
作者「まぁ、元々は同じ戦艦だからね。魂も同じって事さ――霧島

？」

霧島「わ、私の榛名姉さんを取らないでぇッ！」

タタタタタ・・・ピョン！（榛名に駆け寄って霧島ダイブ）

榛名「ぬおッ！　霧島テメェッ！」

霧島「神龍さんばっかりずるい！　私もぉッ！」

神龍「負けませんよぉッ！」

霧島「望むところです！」

榛名「何の勝負だあああぁぁぁッ！」

大鳳（かのん）「・・・お姉さんの奪い合いですね」

隼鷹「私知～らない」

陸奥「でもどうしましょうか？　この後始末」

伊勢「ええんやないの？　どうせ作者はんが何か考えてくれるやろうし」

作者「僕なのッ！？」

伊勢「そりゃあんた作者やし」

作者「ま、まあそうだね。えっと、とりあえず今回はここまでにしよう。文字数が残り少ないし」

伊勢「先延ばしなんか？」

作者「前後編って言ってよね。今回は前編。次は後編として神龍さんとのトークタイムにする。これでいい？」

伊勢「ええんやないの？」

陸奥「私は構いません」

大鳳（かのん）「・・・（コクリ）」

隼鷹「決定だね」

作者「じゃあそういう事で今回はここまでです。えっと、次回は坊ノ岬沖海戦第二戦。十勇士達の最後の戦いです。壮絶な戦闘シーンはまだまだ続きます。あ、最後と言ってもその後にまだ大和の最後

の戦いがありますから、本当の最後はまだ先ですね。さらに同時上映（？）は神龍さん歓迎後編です。残り少ない本作、どうか最後まで読んでください。ではまた次回お会いしましょう！」

大鳳（かのん）「・・・意見や感想・・・お手紙ください・・・ファンレター、大歓迎です（ぽっ）」

第十四章　第十一節　最終決戦　十勇士は永久に輝きて（前書き）

十勇士の最後の戦い。それは壮絶で悲惨、そして力強い戦いであった。
残された艦魂達は己が責務を真っ当する為に、無数の敵機と死闘を繰り広げる。
坊ノ岬沖海戦第二戦、いよいよスタートです！
あとがきは神龍のお話の後編です。
本編とあとがき、どちらのお楽しみいただけたら嬉しいです。
では、どうぞ！

第十四章　第十一節　最終決戦　十勇士は永久に輝きて

『大和』の主砲を受けて数を一割ほど減らされても構わず突撃して来る敵機を睨み、自らの第一主砲の上に立つ霞は腰に挿した刀を引き抜いた。それは自分の身の丈ぐらいはありそうな長刀であった。光輝く刀身に描かれた波紋は、煌びやかで美しい。

霞は後頭部に手を回すと、自分の長い髪を纏めている紐を引き抜いた。シュル・・・という柔らかな音の後、ポニーテールで纏められていた長い黒髪が風に靡く。

眼帯に覆われた左目を一度手で押さえた後、残る右目をスッと閉じて、今は亡き姉達の顔を思い浮かべる。

「姉者達、見ていてください。霞は、己が責務を真っ当したいと思います」

スッと開かれた瞳は、もはや何の未練もない。ただひたすら、目の前の敵を斬り刻む事だけを考えた瞳は凛と輝き、刀のように鋭い。

長刀を上段に構え、敵機と対峙する。

敵機は『霞』の上空に到達すると、一部が一斉に急降下して来た。それらを睨み、霞は刀を右下段に構え直すと、姿勢を低くしてキュッと爪先に力を込める。

グオオオオォォォォォンッ！

敵機の急降下音とエンジン音が高速で迫る。霞は恐れず、姿勢を低くしたまま敵機を睨み続ける。そして、

「参るッ！」

爪先に集めていた力を全て解放。ダンッという音と共に霞は跳躍。敵機に向かってその長い刀を構えたまま突っ込む。その時、先頭を飛んでいたパイロットは艦魂が見える男だった。自分に向かって片刃剣を構えたまま突撃して来た少女に、悲鳴を上げる。

次の瞬間、彼の人生は一発の銃弾によって終わった。

スタッときれいに着地した霞。その上空にいた三機の爆撃機は炎

と黒煙を纏いながら海に落下した。ドォンという音と共に海に激突した敵機を一瞥し、霞はため息した。

「味気ないな。この私を殺そうというのなら、師団規模で連れて来い。鬼畜米英め」

味方を撃墜されて敵機は仇とばかりに次々に急降下して来る。他にも低空で雷撃機が迫る。一斉に自分を全力で叩く相手だと判断した米兵を霞は賞賛する。だが、

「まだまだ甘いなアメ公。私の刀をなめるなよ？　貴様ら程度、私の敵ではないわ」

再び姿勢を低くして刀を構えると、襲い来る敵機に向かってダンッと甲板を蹴って跳躍。目にも留まらぬ速さ刀を振るって着地すると、体を捻って今度は水平に突っ込んで来る敵機に突貫。横一線に刀をなぎ払った。

霞が再び着地した後、上空から迫った敵機が数機、水平突撃をして来た敵機全てが撃墜された。そのどれもが正確無比に撃たれた主砲や機銃、高角砲、そして霞の威力であった。

だが、残った敵機は構わず爆弾を投下。『霞』のまわりで次々に爆弾が炸裂して水柱が上がる。そこへさらに少し距離の離れた場所から放った魚雷が襲い掛かる。だが、『霞』は一切舵を切らずに、むしろ全速力で突っ走る。まるで、霞の戦い方そのものであった。

次々に敵機が急降下して爆弾を放ち、魚雷が襲い掛かる。それでも、霞は突貫する。

敵機の攻撃の中を翔け抜ける『霞』のまわりに無数の水柱が立ち上り、魚雷が『霞』の後ろを次々に空振りして翔け抜けて行く。魚雷の速さも、機関を最大出力にして翔ける『霞』には対応できない。

ドォンッ！　ドォンドォンッ！　ドドォンッ！

次々に炸裂する爆弾によって水柱が立ち上り、舞い上げられた海水が雨のように降り注ぐ。第一主砲の上に立つ霞はずぶ濡れになりながらも、ただ前だけを見詰め続ける。

ブウウウウゥゥゥゥンッ！

「うざい」
通り抜けた敵機に一閃を振るう。その瞬間、敵機は爆発四散した。
敵機は霞の手の届かない所から機体を反転させて急降下して来る。霞はそれを睨み、刀を構えると敵機と対峙する。敵戦闘機が機銃掃射をしてくるが、これは無視だ。自分の周りに火花が舞い散るが、気にしない。敵機の銃弾が霞を貫くが、血も噴き出さずに何も起きず、彼女を通り抜けて足元で火花を散らす。
艦魂は、艦が傷つかなければ、どんな攻撃にも傷つく事はない。
敵機は機銃掃射をして去るが、霞の目は急降下して来る敵機を睨んだままだ。迫る敵機は十機以上。いくら霞の実力があっても、それらを全て撃墜するなど不可能だ。
フッと、霞の口に笑みが浮かんだ。
「鬼畜米英め。大和魂をというものを見せてやろう。ありがたく思え」
刹那、彼女の持つ長刀の刃がまばゆく輝き出した。
光り輝く黄金の刀を構える霞。その瞳は敵機を捉えて離さない。
そして・・・
「紫電一閃ッ！　桜斬りッ！」
ズダンッ！
霞は空へ舞った。

ドガアアァァァンッ！
その爆音に初霜は驚いて振り返った。
少し離れた場所で一騎当千の勢いで敵機を撃墜し続けていた親友は、巨大な爆発を起こして炎が立ち上った。
「霞ッ！」
初霜は親友の名を叫んだ。そんな親友の周りの海面に八機の敵機が炎と黒煙を噴いて激突した。まさか、あれだけの敵機を一度に撃墜したというのか。だとしたら、何て化け物なみの力を持っているのか――いや、自分は知っている。彼女の強さを。

霞は戦い抜いたのだ。
爆弾を二発、さらに至近弾一発を受けた『霞』は先程までの勢いを失って速度を急激に落としていく。そんな親友の姿を一瞥し、初霜はキッと自分に迫る敵雷撃機を睨む。
「霞の仇よッ！」
初霜は弓を構えると腰の矢筒から矢を取り出し、弦に構える。限界まで弦を引き絞り、矢先を敵機のど真ん中に捉えた。
限界まで引き絞った弦を解放。その瞬間、ヒュッと小さくきれいな音を響かせながら矢が放たれた。そしてそれは機銃の弾となりて、敵機の機体を縦一直線に貫いた。中にあった魚雷まで貫いたのか、敵機は大爆発を起こして四散した。
初霜は構わず矢筒から矢を五本取り出すと弦に構え、急降下して来る敵機五機に一斉に狙いを定める。そして、一気に解放する。
光り輝きながら放たれた五本の矢は次々に敵機を貫いた。だが、撃ち落とせたのは四機。残る一機は爆弾を投下して来た。それは『初霜』のギリギリ横で炸裂。巨大な水柱を上げた。
ピュッ・・・
初霜の頬に切り傷が生まれた。どうやら至近弾だったらしい。だが、初霜は表情を一切変えずに新たな敵機を睨む。
「これくらい、怪我なんてものに入らないわよ！」
初霜は弓を構え、矢筒から矢を抜き放って弦に掛ける。そして、引き絞った力を一気に解放。撃ち出された一矢は、敵機二機を一撃で貫いた。

横を護衛していた『霞』が吹き飛んだのを、大和はしっかりと見ていた。
「霞さんッ！」
「くそぉッ！」
翔輝も悔しそうに燃える『霞』を見詰める。小型の軍艦である駆逐艦は、爆弾一発でも致命傷となってしまう。機関部を破壊された

のか、『霞』は燃えながら先程まで海を飛ぶように翔け回っていた勢いを失っていく。
「少佐！　霞さんがッ！」
「わかってるッ！　わかってるけど、どうしようもないだろッ！」
大和もわかっている。自分には何もできないと。でも、それでも、何もできないなんて嫌だった。
悔しそうに、大和は唇をキュッと噛む。そんな大和の手は、しっかりと翔輝と結ばれている。決して離さない。そう決めたのだ。
『敵機直上ッ！　急降下ッ！』
見張り兵の絶叫に、大和は顔を真っ青にする。すぐに有賀が「取舵いっぱぁぁいッ！」とのどが壊れるぐらいの大声で命令し、『大和』は左へ急カーブする。
ドオオォォォンッ！
『大和』のすぐ横で爆弾が炸裂して巨大な水柱が上がった。どうやら外れたらしい。だが、ホッとする間もなく敵機は次々に急降下して来る。さらに低空で進入して来る雷撃機。機銃隊が必死に機銃弾をばら撒いて弾幕を張る。一機を撃墜するも、残り四機が一斉に魚雷を放った。
「面舵いっぱぁぁいッ！」
有賀は迫る魚雷群と敵急降下爆撃機の動きを見てすぐさま命令した。
『大和』は今度は右に急速カーブする。ハリネズミのように増築され続けた機銃や高角砲が休む間もなく機銃弾をばら撒く。その弾はいくつかの敵機を撃墜するが、敵急降下爆撃機は構わずに突進。爆弾を投下した。
「少佐ッ！」
「大丈夫だッ！」
怯える大和の手を、翔輝はギュッと握った。
――大丈夫！　大丈夫だ！
敵機の放った爆弾は『大和』の艦首の右側に炸裂して巨大な水柱

を上げた。さらに、四本の魚雷も真っ直ぐに進んでいたら命中していたが、『大和』が右に曲がった為に艦首をかすめて何もない海の彼方へ消えた。

「しょ、少佐ぁ・・・ッ！」

涙目になって喜ぶ大和に、翔輝はニッと笑う。

「だから言ったろ？　大丈夫だって」

「はいッ！」

大和は彼の言葉を信じた。彼の言葉こそが、自分を支えてくれる一番の力だ。

再び大和は繋がれた手をギュッと握る。翔輝も、それを握り返した。

二人の繋がりは、決して解ける事はなかった。

『大和』の前方で必死に戦うのは『冬月』。必死に敵機の空襲から逃げ回りながら必殺の長十センチ砲で迫り来る敵機を粉砕する。

さすが防空駆逐艦と言うだけあり、他の駆逐艦に対して機銃の数も多く、その自慢の四基の主砲はそれぞれ独立した動きで敵機を砲撃して粉砕する。

そんな『冬月』の第二主砲の上に冬月は立っていた。迫り来る敵機を睨みながら彼女が構えるのは柄の長さが自分の身の丈ほど。さらに刃の長さはその半分はあろうかという薙刀（なぎなた）であった。秋月姉妹（冬月姉妹・満月姉妹）は皆軍刀ではなく槍、矛、戟、薙刀などの武器を使う。それは長十ｃｍ砲という対空に特化した主砲に合わせた装備らしいが、詳しい事は秋月流という槍系統の武器を使った戦い方を発案した創立者の秋月にしかわからない。彼女が自分の妹達にこの技を伝授したのだから。

冬月はそんな亡き義姉の技を受け継ぐ秋月姉妹の一角である冬月姉妹の長女。グッと掴むその長い柄は、彼女の小柄な体格をカバーするように攻撃範囲を広げる。

冬月は一度自分の上で薙刀を回転させると、クルッと刃を自分の

後ろ下に構えて姿勢を低くする。そして、迫る敵機が横一列に並んだ瞬間、冬月は跳んだ。

「はあああぁぁぁッ！」

両腕の力を全開まで引き上げて横一線に薙ぎ払う。そのあまりの速さに、刃の残像が残って彼女の前方に三日月型の閃光が迸る。同時に、一番、二番、四番主砲が一斉に火を噴き、横一列に並んで雷撃体勢に入っていた敵雷撃機を全滅させた。涼月の槍が一撃必中の突貫攻撃なら、冬月は一斉に薙ぎ払って撃破する拡散攻撃だ。

スタッと着地すると、冬月は再び同じ構えを取る。後ろから敵機が迫っているのを感じた。その瞬間、振り返りざまに薙刀を振るう。敵機に斜めの一撃を叩き込み、機銃がその敵機を貫いて撃墜する。

冬月は自らの正面で薙刀を回転させると、薙刀を正面に構える。そして、機銃掃射をしながら突っ込んで来る敵戦闘機に向かって、

「てぇいッ！」

ズドォンッ！

鋭い突きを炸裂させた。

その一撃に貫かれた敵機は、三番砲の砲撃を受けて四散した。

薙刀は普通の剣のように突きや払いなど全てに対応でき、そして射程距離も長い。冬月は最も使いやすい武器だと思っていた。

「甘いわよ。そんなんじゃ私のいい的ね」

冬月は口元に笑みを浮かべると急降下して来る敵機を薙ぎ払う。その攻撃だけで敵機の半分が吹き飛ぶ。だが、残る半分が次々に爆弾を投下して来た。冬月は舌打ちする。

鉛色の空の下、海を翔ける『冬月』のまわりに無数の水柱が立ち上った。だが、冬月は表情一つ変えずにそれを見詰め、爆弾を外してきっと舌打ちしているであろう米兵の乗る敵機を斬り払う。その一撃で敵機は爆砕した。

機銃を掃射して来る敵戦闘機を鬱陶(うっとう)しげに睨み、薙刀を振るって撃墜する。だが別の敵機が薙刀の大振りな動きの後の隙に突っ込んで来た。その敵機に冬月は驚愕する。

「ちょ、ちょっと待ちな――」
敵機は突如翼に付いていた何かを射出して来た。それがロケット弾だと理解した時には、ロケット弾が自らの艦体（からだ）に直撃した後だった。
「ひぐぅ・・・ッ！」
冬月は激痛に膝を折って薙刀を杖代わりにして体を支える。その苦しげな表情の顔に、血が流れ落ちた。
この時『冬月』はロケット弾を二発受けた。だがしかし、そのどちらも不発に終わり、『冬月』は大した被害は受けなかった。
「やったわねぇ・・・ッ！」
冬月は痛みに耐えて立ち上がると、薙刀を構える。
敵機が再び隊列を組んで急降下して来た。
冬月は逃げも隠れもせずにそれを睨むと、襲い掛かって来る敵機に向かって跳躍。構えた薙刀を力の限り振るった。

親友にロケット弾が命中したのを見て雪風は悲鳴を上げた。だが、それは不発だったのか大きな爆発もなく、『冬月』は何事もなかったかのように機銃と主砲が火を噴いて敵機を襲う。その光景を見詰め、雪風は安堵の息を漏らした。だが、彼女も狙われる一隻（ひとり）には変わりなかった。
敵機が轟音を立てて急降下して来る。雪風はそれを見詰め、手に持っていた刀を構えた。彼女だって帝国海軍の軍人。やる時はやる子なのだ。
「ま、負けないッ！　私達は負けないッ！」
自らの第一主砲の上に立つ雪風は刀を上段から斬り落とす。その一撃は迫っていた敵雷撃機一機を斬り飛ばしたが、残り四機は隊列を崩さずに突進。下部から魚雷を投下した。
海を翔ける槍を見詰め、雪風の瞳が輝く。
「負けないッ！　私達は十勇士ッ！　必ず沖縄に行ってみせるッ！」
迫る四本の魚雷を『雪風』は高速のまま舵を思いっ切り切って回

避した。そこへ敵爆撃機が急降下して来る。雪風はそのうちの二機を叩き斬る。だが、敵機は構わず爆弾を投下して来た。『雪風』はそれを取舵をいっぱいまで切って回避する。右側に炸裂して自艦の全長に匹敵するくらいの高さまで立ち上った水柱は無視し、雪風は新たな敵機を睨む。

舞い上がった水が雨のように降り注ぐ中、雪風は迫り来る敵機を睨む。爆弾が投下されるが、『雪風』よりもやや右に炸裂して無意味な水柱を上げる。

敵戦闘機が横から突っ込んで来て機銃を乱射して来る。雪風の周りに機銃が炸裂して火花を散らすが、雪風は構わず横から突っ込んで来る魚雷を睨む。

避ける事はせず、ただ速力を全開まで引き上げた。機関兵達が悲鳴を上げているかもしれない。だけど、止まる訳にはいかない。

――ただ、突っ走る。それだけだ。

海を翔ける『雪風』。

魚雷は空しく彼女の後ろを通り過ぎる。

敵機が一斉に急降下して来る。だけど、雪風は瞳を閉じない。視線を外さない。ただ真っ直ぐに、迫る敵機をしっかりと瞳で見詰める。

爆音と共にまわりに無数の水柱が立ち上る。

海を翔ける魚雷が、艦体をのギリギリを次々に通過していく。

雪風は感謝した。自分の奇跡の幸運力に。

自分はまだ戦える。

まだ、生きている。

胸がほんのりと温かくなった。それは次第に熱いくらいの熱を放つ。

「私はまだ、やれるんだッ！」

雪風は迫る敵機群に向かって、その手に持った鋭い刀を力の限り振るった。

雲を通って降り注ぐわずかな火の光が、刀の銀色をキラキラと輝

かせた。
水しぶきが光り輝き、風が逆巻く。
無数の水滴を含んだ風は、光を浴びてキラキラと美しく輝く。
それはまるで、彼女の名前のような、柔らかく美しい――雪風のようであった。

一方、敵機の空爆の集中域から外れた海に、漂うというような状態で浮かぶ『矢矧』がいた。すでに機関は沈黙し、今はもう自分の力では動けなくなっていた。
そんな『矢矧』の防空指揮所ではもはや立ち上がる力も失った矢矧が倒れていた。
すでに艦長の原為一（はらためいち）大佐は総員退去を命令した。次々に海に逃げる兵達。それを見て、あぁ、終わったんだぁと改めて思う。
自分の戦いは、今終わった。
乗組員に捨てられた船。なんて滑稽な姿だろうか。だがそれでいい。明日へ命を繋げる事もまた立派な役目だ。
「ごめんね姉さん・・・ダメな妹で・・・」
全てが終わった――自分達の敗北で。
結果なんて関係ない。そもそもわかっていた事じゃないか。なのに、悔しくて仕方がない。瞳から溢れる涙は、悲しみの涙、悔し涙、安堵の涙。様々な想いが混じった涙だ。その想いの数だけ、矢矧は涙を零す。
「本当に・・・ダメな・・・指揮官・・・ね・・・」
「そんな事はない」
その声に驚いて顔を上げると、そこには磯風が立っていた。その両手には二丁の拳銃が握られている。そして、その白い頬には切り傷があり、赤い血が流れ出していた。
「磯風・・・」
「救助作業に来た。兵達の事は、任せて」
「ありがとうございます・・・」

矢矧の今にも消えてしまいそうな声に、磯風は首を横に振った。
「矢矧は仲間だ。仲間には、礼はいらない」
「ありがとう・・・ございます・・・私は本当に・・・いい仲間を・・・持ちました・・・幸せです・・・本当に・・・」
「同じ。私も、いい仲間だと思う。十勇士は」
磯風の言葉に、矢矧は嬉しそうに微笑んだ。その笑みに、いつもはあまり表情を変えない磯風は静かに微笑んだ。
「みんながんばった。朝霜も、浜風も――そして矢矧、あなたも。後は、私達に任せて」
「磯風・・・ありがとう・・・」
「だから、礼はいらないと言っている」
「そうですね」
そう言って矢矧は再び笑みを浮かべる。その笑顔は満身創痍の女の子がしているとは思えないほど優しく、楽しげな笑みだった。だからこそ、磯風は辛い。彼女は上官ではあるが自分よりも年下だ。彼女を守れなかった。そんな想いが、磯風の中で不安げに渦巻く。いつもの無表情だが、どこか暗い。瞳が、いつになく悲しげに見えた。矢矧は彼女の想いに気づき、そっと彼女の頬に手を伸ばした。血の付いていない、白くまだ温かい柔らかな手が磯風の頬を撫でる。
「矢矧・・・」
「磯風・・・元気を出して・・・あなたが気に病む事はない・・・気にしないで・・・」
心を見透かされた。そう思ったが、怒りとか恥ずかしいという気持ちは起きなかった。むしろ言葉や顔で表現できない自分の気持ちを悟った彼女には感謝したくらいだ。
「まだ・・・大和司令も・・・初霜さんも・・・雪風や冬月も戦ってる・・・後は、任せたからね・・・」
「わかった」
今の自分にはこれしか言えない。でも、これはうそではない。彼

女の想いを引き継ぎ、がんばることを決意した。これは、心からの想いだった。

「必ず・・・」

その必ずという言葉に込められた意味は、きっとこの二人にしかわからないだろう。

矢矧は磯風の言葉に安堵したように笑みを浮かべると、そっと磯風に言った。

「・・・生存者をお願い・・・私の戦いは・・・終わった・・・」

それは――矢矧の敗北宣言であった。

航行不能になった自分は、もう行く事も帰る事もできない。もはやこのまま沈むしか運命はないのだ。磯風はそれを嫌というくらい、姉妹達で知っていた。

「矢矧・・・」

「さぁ、もう行って・・・なんかもう・・・疲れちゃって・・・眠いんだ・・・だから・・・ちょっとだけ・・・眠り・・・たい・・・な・・・」

小さな声で搾り出すように言った後、矢矧はゆっくりと瞳を閉じた。

眠ってしまったのか、それとも気絶してしまったかはわからない。だが、その顔はとても安堵したような、優しげなものであった。

磯風は立ち上がると、自らの上官に向かって見事な敬礼をし、光に包まれて消えた。

残された矢矧は数分後、再び目を開けたが、その時にはもう磯風の姿はどこにもなかった。

航行不能となった『矢矧』に横付けした『磯風』から兵が移り、必死の復旧作業を行ったが、すでに『矢矧』の機関部は水没して壊滅状態であった。

復旧不能と判断し、『磯風』艦長の前田実穂（まえだ さねほ）中佐は『矢矧』の乗組員を『磯風』に移艦させる事を決定。次々に回収し、さらに海に

落ちた兵達の救出も行った。
そんな『磯風』の第一主砲塔の上に立つ磯風はそんな状況をじっと見詰めていた。ふと目線を変えると、遠くで『大和』以下の残存艦隊が必死の戦闘を続けている。落伍した『矢矧』とそれを救助しに来た『磯風』など、敵機の目には映らないのだろう。
敵の目的は――『大和』一本に絞られていた。
日本が世界最大最強と自負する戦艦を、何が何でも沈めたいという想いが伝わって来るような必死の戦いであった。磯風はそんな『大和』に乗る敬愛する彼の事を思い出していた。
「長谷川様、どうかご無事で」
そう祈ると、再び視線を救助作業に戻す。
まだ始めたばかりなので移艦した兵は少ない。艦に乗る兵達は自らの艦と別れるのがおしいのかなかなか移動して来ない。海に投げ出された者達だけが、助かった事に心から感謝していた。
まだ『矢矧』の艦内には多くの兵達が残っている。それらを大勢救い、日本を守る事。それが矢矧と誓った約束だった。もしかしたら一方的なものだったかもしれない。でも、磯風はその約束を守る事にしていた。
曇天の空の下、磯風は『大和』に襲い掛かる敵機を睨み、悔しそうに唇を噛む。
自分には、あの敵機をどうにかする事はできない。いや、正確には敵機を数機撃ち落とす事はできるだろう。だが、『大和』を襲う敵機は数十機。それだけの敵機を駆逐するなど、どんな水上艦でも不可能だ。ましてや自分は駆逐艦。無謀にも程があった。
今の自分にできる事、それは傷ついた『矢矧』の救助だ。他にあるとすれば、
「長谷川様・・・大和長官・・・どうかご無事で・・・」
胸の前で腕を組み、必死に祈る事だけだった。
必死に祈り続ける磯風の周りの甲板には次々に『矢矧』の兵達が救助されていく。このペースなら余裕で救助作業は終わるだろう。

――だが、運命とは残酷なものであった。
『敵機接近ッ！』
スピーカーから流れた悲鳴のような声に、磯風はハッと瞳を開いて天を見上げた。すると、自分達に向かって突撃してくる敵機群が見えた。
「そ、そんな・・・ッ！」
『急速発進急げッ！』
前田艦長の悲鳴のような声に兵士達は慌てて配置に向かう。現在『磯風』は『矢矧』に横付けしている。両艦が離れないように縄で結んだり、兵達が渡れるように木板まで架けている。今や『磯風』と『矢矧』は離れられない状況にいた。
兵士達は慌てて対空機銃に配置したり両艦が離れるように縄を切ったりしている。だが、敵機はそれよりも早く二隻の上空に展開すると、爆撃機隊は一斉に急降下。雷撃機隊は低空水平飛行で突撃して来る。
「磯風ぇッ！　逃げてぇッ！」
その絶叫のような声に振り向くと、防空指揮所の壁に寄りかかりながら必死に叫ぶ真っ赤な矢矧が見えた。
そうだ。自分には守らなければいけないものがある。
磯風は決意したような表情をすると腰に挿した刀を構える。刃紋が不気味に輝き、磯風は襲い来る敵機を睨む。
「負けない・・・あなた達に私は負けないッ！」
グオオオオォォォォォォンッ！
「十勇士は、負けないッ！」
磯風は全ての力を込めて刀を振るった。
敵機が爆弾、そして魚雷を一斉に投下して来る。
――次の瞬間、全てが爆発に包まれた。

『磯風』と『矢矧』は、すさまじい水のカーテンの中に消えた。
それを見ていた雪風の悲鳴が、空しく、そして悲しく曇天の空に響

いた・・・・

第十四章　第十一節　最終決戦　十勇士は永久に輝きて（後書き）

霧島「はぁ、相変わらず本編はすさまじい事になってるし隼鷹と大鳳は他の先生の所に行っちゃって、不人気キャラは暇ですね」
陸奥「言わないでください。所詮私達は大和達の人気を支える支柱なんですから」
霧島「陸奥さんはいいですよ。前回の人気投票で7位だったんですから。私なんてランキング外ですよ」
伊勢「うちも同じようなもんやで。前回は１５位やもの」
陸奥「伊勢は前回とはキャラ設定が大きく変わってるからまだ挽回できるチャンスはあるよ。でも私は何にも変わってないし」
霧島「私もです・・・出番も少ないですし」
伊勢「いんや、今回は大鳳や葛城、瑞鳳や飛龍って原作と段違いに活躍してる艦魂がぎょーさんおるから波乱になるで」
榛名「ったく、うちの作者がもっとしっかりしねぇからこんな訳のわかんねぇ状況になるんだよ」
霧島「姉さんは前回６位じゃない。私なんか・・・」
榛名「今回は無理だ。大鳳の人気が強過ぎる。たった三ヶ月キャラのくせによ。俺なんか開戦から終戦まで生きてるってのによ」
伊勢「ほんま、作者はんにはもっとがんばってもらわんとあかんな」
陸奥「そうですよ」
霧島「それしかないですよね」
榛名「ったくバカ作者」

神龍「あ、あの、なんか皆さんがブラックに・・・」
作者「あははは、そりゃ大和に武蔵、大鳳、さらには隼鷹まで他の先生の作品に呼ばれたのに、あいつらは全く呼ばれませんからね。そりゃ落ち込みもしますよ」
神龍「ひどいです。私の作者さんに頼んで毎日登場してもらいまし

ょう！」
作者「いや、そんな事したら伊東先生死んじゃいますよ」
神龍「そういえば大鳳さんと隼鷹はどちらに行かれたんですか？
黒鉄先生も途中出られましたが」
作者「えっと、まず大鳳が別行動していた武蔵と合流して零戦先生のあとがきに所に行って、その帰りにそこの感想に僕と一緒に行ったんです。隼鷹は草薙先生の所に行った後僕達と合流したんですけど、その後どっか行っちゃったんです」
神龍「大変ですね」
作者「そうですよ。零戦先生は歩く武器庫みたいな武蔵に宇宙戦艦アンドロメダを貸しちゃうし、草薙先生の所の凛（きい）は隼鷹に宇宙戦艦しゅんらんを貸しちゃうし。危うく死ぬ所でしたよ」
神龍「それはまた・・・」
作者「でもそれら全部大鳳が助けてくれたんです。大和達が僕に積み下ろし作業を押し付けて帰っても、大鳳だけは最後まで手伝ってくれて。本当にいい子ですよあの子は」
神龍「大鳳さんは裏表ない優しい方ですからね」
作者「まぁ、キャラの基本設定は武蔵から引用しましたけど、誰よりも優しいキャラにしたくてがんばりましたから。僕のキャラクターの中で一番の誇りです」
神龍「そうですか――ところで大和さんはどうされてるんですか？」
作者「あぁ、草薙先生の感想の後に翔輝とデートに行きました」
神龍「デートですか、うらやましいです」
作者「きっと神龍さんも三笠君とデートできる日が来ますよ」
神龍「えへへ、楽しみです」
作者「とりあえず大和とのお茶会は彼女のデートが終わった後でいいですか？」
神龍「はい。楽しみです」
榛名「おい作者ッ！　テメェ何一人で神龍としゃべってんだよッ！」
伊勢「そうやで！　神龍はうちらの客人でもあるんやからなッ！」

作者「いや、お前らが内輪で撃沈してたから僕が繋げといたんだけど――」

榛名「うるせぇッ！　元々はテメェのせいだろうがッ！」

ドゴォンッ！（榛名の強烈な跳び蹴りが炸裂。作者吹き飛ぶ）

神龍「あぁッ！　黒鉄先生ッ！」

榛名「放っとけ。どうせすぐ復活するんだからよ」

神龍「で、でも・・・」

伊勢「そうやで。それよりもお茶とお菓子でも囲みながら団欒（だんらん）しようや。ちょうどあんたの作者や草薙はんからのお菓子もぎょーさんあるからなぁ」

霧島「あ、私が持ってきますね！」

陸奥「私もご一緒します」

伊勢「任せたでぇ。ほんじゃ神龍。こっちの部屋に来てぇな」

神龍「はい」

榛名「それじゃ神龍は客人だからそこに座ってくれ」

神龍「はい――えっと、ここは何の部屋なんでしょうか？」

伊勢「うん？　あぁ、これはうちの作者が代表を務めてる《連合艦隊極大権限保有最上級艦魂会》、通称《極上艦魂会》の会議室や」

神龍「それはどのような組織なのでしょうか？」

榛名「あぁ、このサイト内で艦魂作品を書いている作者のほとんどが属する艦魂小説をもっと盛り上げようとする同盟会だよ」

伊勢「メンバーはこの名簿を見てぇな」

連合艦隊極大権限保有最上級艦魂会要員

司令長官　黒鉄大和元帥

司令官　戦艦武蔵大将

参謀長　伊東椋中将

先任参謀　草薙少将

参謀　零戦大佐
参謀　火星明楽少尉
参謀　二等海士長少尉

神龍「私の作者さんが参謀長ですか、しかも中将」
伊勢「まぁ、伊東はんは古参やからな。それに人望もあるし適任や。まぁ、実際に企画を考えたり実行したりするのは先任参謀の草薙はんやけどね」
榛名「うちの作者は飾りだな」
神龍「そんな事ありませんよ――えっと、この司令官に名前が書かれている戦艦武蔵大将というのは・・・」
伊勢「あぁ、それは各艦魂の代表としてうちらの武蔵が選ばれたんや。まぁあの子の指揮官としての実力は折り紙付きやからな」
神龍「私達の意見は武蔵さんに統合されるんですね」
榛名「まぁ、あいつの事だから自分と長谷川関係の事に関してはものすごく押すだろうがな」
陸奥「あ、こっちにいたんですか。捜しましたよぉ」
霧島「お、重いよぉ・・・ッ！」
神龍「あ、手伝います！」
伊勢「ええってうちらでやっておくから。あんたは客人なんやからゆっくりしてぇな」
神龍「あ、はい」
陸奥「えっと、これは白い恋人。伊東先生からもらったものですね」
榛名「あぁ、賞味期限を改ざんしてたって去年問題になった菓子か」
神龍「あ、あの、その事については触れないでくださいってうちの作者が言ってましたので」
伊勢「わかってるって。世の中には触れちゃあかんものがあるんや」
榛名「ふーん、おぉ、本当に一個一個に製造日とか賞味期限とか書いてある」
伊勢「あんた、うちらの言ってる事わかってんのか？」

陸奥「まあまあ、おいしいお菓子に変わりはないんですから、石屋製菓にはがんばってもらいたいですね」
霧島「まだまだいっぱいお菓子はあるよぉ！」
陸奥「こちらにはティーパックですけど紅茶もありますよ」
伊勢「ほんじゃ、お茶会開始やな」
神龍「はい！」

神龍「――それで三笠さんが握ってくれたおにぎりはもう本当に最高なんですよ」
伊勢「ほんま、あんたの話聞いてるとほんまにおいしそうやな」
神龍「実際においしいんですよ！」
陸奥「それだったら長谷川少佐だって負けてませんよ。あの方が淹れてくれた紅茶もおいしいんです」
神龍「へぇ、それはぜひ飲んでみたいです」
伊勢「せやけど、あんたはもう向こうの本編から落ちたからなぁ。復活するかもって空気はあるけど実際はどうなんや？」
神龍「えっと、企業秘密です」
伊勢「あぁん、気になるやないかぁ」
陸奥「お楽しみは本編の方で、という事ね」
霧島「気になりますね」
榛名「まぁ、これから先も向こうは目が離せないって事だな」
伊勢「せやなぁ。でも三笠はんはモテモテやなぁ」
神龍「そ、そうなんですよぉ・・・」
陸奥「そこは私達と同じなんですね。長谷川さんもモテモテですから」
伊勢「長谷川さんの厄介なところは恐ろしく乙女心に鈍感って所やなぁ。それに比べたら三笠はんはちゃんとあんたの気持ちをわかってくれてるだけマシやなぁ」

神龍「ま、まぁそうかもしれませんが・・・葛城が心配で」
榛名「あぁ、そっちの葛城か」
陸奥「うちの作者が戦後に出て来たら大喜びしてた方ですね。こっちの葛城のモデルにしたという」
伊勢「そういえばうちらの葛城も長谷川はんと怪しいなぁ」
榛名「ったくよ、あいつは一体どれだけ艦魂に好かれるんだよ」
作者「まぁ、ハーレム小説の主人公だからね。そりゃモテるよ」
榛名「ぬおぉッ！？　いきなり出て来んなボケッ！」
作者「こっちはお前の跳び蹴りを受けて悶絶してたんだぞ。いい加減その暴力どうにかしろよな。マジで痛いから」
榛名「うるせぇっての」
作者「これだから翔輝に好かれないんだよ」
榛名「んだとゴラァッ！」
神龍「は、榛名姉さん落ち着いて！」
霧島「暴力はダメだよぉッ！」
榛名「放せ神龍霧島！　マジであいつを蹴らせろッ！」
神龍「だ、ダメだってばぁッ！」
伊勢「いつの間にか神龍すっかり榛名に振り回されてるわね」
陸奥「そうですね。それだけ仲が良くなったという事でしょうね」
作者「まぁ、仲良くなってくれて僕も嬉しいよ」
伊勢「せやなぁ。ほら榛名もいつまでも子供みたいな事やってないで古参としての威厳を見せようや」
榛名「うるせぇッ！」
霧島「もう抑えてよぉッ！」
神龍「霧島さん、いつも大変ですね」
作者「金剛と榛名の暴走を止めるのは長門と比叡、そして霧島の役目だからね。この子はいつも苦労してるんだよ」
榛名「んだどゴラァッ！　それじゃまるで俺が悪いみたいじゃねぇかッ！」
作者「いや、確実にお前が悪いだろ」

伊勢「せやなぁ」
陸奥「そうですね」
霧島「そうだよ」
神龍「今回は黒鉄先生に賛成です」
榛名「むぐぅ・・・」
作者「さて、榛名も黙った事だし。改めてみんなで楽しくお茶会を――」

ズドオオオォォォォォォンッ！

全員『なぁッ！？』

？？「もう嫌ッ！　こんな恋やめてやるぅッ！」

作者「や、大和？」
神龍「あ、あれが大和さん？」

大和「どうせ人気ランキングじゃメインヒロインなのに1位を取れないダメキャラですよッ！　どうせ他のキャラみたいに何か秀でた能力なんてありませんよッ！　だからってこんなのもう嫌だぁッ！」

神龍「い、イメージと違うような・・・」
伊勢「どうしたんやろ大和。あんなに荒れて」
榛名「さあ」
陸奥「一体どうしたのかしら」
霧島「わかりません」
作者「ちょっと待っててッ！」

作者「おい大和ッ！　どうしたんだよお前ッ！」
大和「もう全部あなたのせいですよッ！」

作者「意味わかんないよッ！　お前翔輝とデートじゃなかったのかよッ！」
大和「デートでしたよッ！　遊園地で楽しく一緒に乗り物に乗ったり一緒にソフトクリームを食べたり、至福のひと時でしたよッ！　でも、でもぉッ！」
作者「でも？」
大和「武蔵が突然現れて翔輝さんを拉致してしまったんですぅッ！」
作者「何だってッ！？　今回の計画は極秘事項だろッ！？　何であいつが知ってんだよッ！？」
大和「知りませんよッ！　あの子の情報収集能力は桁違いですぅッ！」
作者「か、霞家と互角に諜報戦ができるぐらいだからな」
大和「しかも大鳳までいたんですッ！」
作者「た、大鳳がッ！？　う、うそだッ！　あの純粋無垢な子がそんな事をするなんてうそだぁッ！」
大和「あ、でも大鳳は純粋に翔輝さんに会いに来ただけみたいでしたが」
作者「よ、良かった・・・」
大和「良くないですよッ！　結局私の邪魔をしたんですからッ！　あぁッもう嫌ッ！」
作者「で、今翔輝は？」
大和「わかんないですぅ。でもきっと今頃は武蔵と大鳳に振り回されてるでしょうね。あの人はそういう人ですから」
作者「そ、そっか。そりゃ残念だよ・・・」
大和「もう何で普通に恋愛できないのよッ！　こんな世界もう嫌ぁッ！」
神龍「あ、あの大丈夫ですか？」
大和「え？　あなたは？」
作者「あぁ、こちらは護衛戦艦『神龍』からいらっしゃった神龍さんだ」

大和「あなたが神龍さんですか。初めまして。艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～のメインヒロイン、大和型戦艦一番艦、戦艦『大和』の艦魂です。よろしく」
神龍「あ、護衛戦艦『神龍』の艦魂です。よろしくお願いします」
作者「いやぁ、やっと両作品のメインヒロインが顔を合わせてくれたよ。しかも大和は神龍さんをお茶会に誘ったんだよね？」
大和「はい。お互いもっと友好を深める為にも」
神龍「楽しみにしてますよ」
大和「私も楽しみです」
作者「うむ。やっぱりメインヒロイン同士。他の艦魂とは違うオーラを感じるよ」
神龍「そ、そうですか？」
大和「メインヒロインでも人気投票では4位になったりする事があるから気をつけた方がいいですよ？」
神龍「そ、そうですよね」
作者「いや、神龍さんなら大丈夫でしょ」
大和「・・・ものすごく引っかかりますが、無視しましょう」
神龍「えへ、憧れの黒鉄先生の大和さんに会えて嬉しいです」
大和「私もです」
神龍「あ、お互い敬語はやめませんか？　友達になりたいです。あ、でもそちらが嫌というのであれば・・・」
大和「構いません。むしろ私もそちらの方がいいです」
神龍「えへ、よろしくね大和」
大和「こっちこそよろしくね神龍」
作者「うむ。これが艦魂同士の最も理想的な関係だよね。うむうむ。あ、でもそろそろ神龍さんは帰らないと。あまり長い間いこちらに居続けるのもまずいからね」
大和「そ、そっか、残念だな」
神龍「また来るよ。大和もまたこっちに来てね」
大和「うん。わかった」

神龍「あ、皆さんも今回はありがとうございました」
伊勢「気にせんといて。元気でなぁ」
榛名「また来いよ。いつでも歓迎してやらぁ」
霧島「さようならです」
作者「ではお気をつけて」
大和「バイバイ神龍」
神龍「さようなら」

作者「さて、皆さんも解散されて残ったのは僕一人。伊東先生、こんな感じになりましたがいかがでしたでしょうか？　神龍をちゃんと書けてましたか？　ちょっぴり不安な黒鉄です。
えっと、今回の本編は霞や初霜、冬月の戦闘シーンでした。戦記小説とは思えない戦い方ですが、これが黒鉄流なんです。本来僕はこういう戦闘の書き方は苦手なのですが、最後という事もあってがんばって書きました。臨場感は出ていたでしょうか？
次回はついに大和の最後の戦いです。今までのように大和が戦うシーンはありませんが、翔輝との残された時間に紡がれる言葉のやり取りは、書いていて僕も辛くなったものです。規模としては2万文字を想定しています。かなりの文量となる予定です。さらには甲板の上の残酷なシーンもありますので、壮絶度は今までとは比べ物にならないものになっています。そんな次の話が終わったら大和が亡くなる話。そして最後に残された者達とアメリカ艦魂の話が混ざった話を1話。これで第十四章は終わりです。その次はいよいよ最終章となります。まだまだ先が短いようで長い。それが黒鉄の作品です。
あと次回の更新はちょっと未定です。実は中間テストが近いので、更新をする暇がないのです。すみません。一応学生なのでその辺はご了承ください。

あとこのサイト内で多くの先生方の艦魂作品を読んで自分でも書いてみたいと思われた方、その際は僕の方に一報を入れていただくと嬉しいです。そしたら他の先生方にも通達して皆さんで大歓迎させてもらいます。

あ、もちろん普通の読者の皆様も僕は見捨てませんよ？　これからも応援よろしくお願いします。ご意見やご感想はどんどん送ってください。

ではまた次回お会いしましょう！

第十四章　第十二節　大和の最後の戦い　彼がいればどこまでも・・・

巨大な水柱に『磯風』と『矢矧』が消えるのを見て、大和は言葉を失った。

『『矢矧』及び『磯風』被弾ッ！　安否不明ッ！』

伝声管から伝わって来る悲鳴のような声が、現実のものとは思えなかった。まるでどこか遠くで、自分とは関係のない事に思えた――いや、思いたかった。

ただ、ハッキリしている事は、自分の手をそっと握る彼の存在だけであった。その手が、ギュッと握られてハッとし、彼の横顔を見る。

翔輝は唇を噛み、悔しそうな、悲しそうな、あるいは両方の表情を浮かべながら、巨大な水柱を見詰めていた。そこでようやく、これが現実であるという事に気づかされる。

「そんな・・・矢矧・・・ッ！　磯風・・・ッ！」

大和は今にも泣きそうな目で立ち上る水柱を見詰め続ける。

一時間、二時間のように長く感じられた時間は、結局は数十秒の事であった。舞い上がった海水が再び海に戻って視界が開けると、そこには巨大な黒煙を上げる二隻の艦がいた。

「矢矧・・・ッ！　磯風・・・ッ！」

黒煙に包まれる二隻。その両艦から発光信号が発せられた。大和は二人の悲痛な声にも思えるような発光信号を解読し、愕然とした。

『『矢矧』より発光信号ッ！『我、爆弾及ビ魚雷多数被弾。沈没避ケラレズ』ッ！』

『『磯風』より発光信号ッ！『我、至近弾ヲ受ケ機関部破壊。航行不能』ッ！』

伝声管から伝わって来た報告は、炎上する二隻が戦闘不能となった事であった。

森下は矢矧と磯風の顔を思い出して悔しそうに唇を噛んだ。その

横に立つ能村は被弾して炎上する二隻と、今さっきまで護衛をしてくれていたが、今は炎上する『霞』を見詰める。

これで動けるのは『大和』『初霜』『雪風』『冬月』の四隻だけとなってしまった。さらに無傷なのは『初霜』と『冬月』だけ。『大和』と『冬月』は戦闘に支障はなくとも被弾を受けている。もはや呉、徳山を出撃した頃の勇姿は今の十勇士には残されていなかった。

「大和・・・」

彼の声と、頬を袖で拭われる感触に顔を上げると、自分を不安そうに見詰める彼がいた。そして、彼の行動に初めて自分が泣いている事に気づいた。

「少佐・・・」

「辛いのはわかる。でも、今は自分の事に集中しろ。お前の油断が、三〇〇〇人以上の乗組員を危険に晒す事になり、何より、お前の命に関わる」

翔輝の言葉はあまりにも残酷だ。目の前の仲間を見捨てて、自分の事に集中しろ。常時なら彼の事を非難しただろう。だが、今は違う。

彼の顔を見る。その表情は辛く、泣きそうなのを必死に堪えている。そんな感じだ。

自分も辛いのを堪え、彼は自分に《生きろ》と言っていた。

もしここで自分が気を抜けば、被弾率は格段に上がる。そしてそれは、自分に乗る三〇〇〇人以上の兵士達を殺す事にもなる。それだけは、決してあってはならない。

例え残酷な言葉であっても、その奥にある彼の気持ちは、いつも自分を想ってくれている。

彼の優しさに、こうして何度も救われる。

やっぱり、自分には彼が必要だ。改めてそう思った。

真っ赤になって倒れているであろう矢矧と磯風を想うと辛くなる。だが、その不安も、握られた手から伝わる彼の温もりや優しさが、

救ってくれる。
「ごめんな、僕は何もできなくて」
大和は、悲しい言葉をつぶやき、メガネの奥の瞳で不安げに自分を見詰める翔輝に優しげな笑みを向ける。それはいつもと変わらない、彼女らしい笑みだ。
ずっと自分の手を握ってくれている彼の温かい手。これだけで、自分は嬉しくなる。その手を、今度や大和がそっと体全体で包み込む。
「や、大和？」
「少佐は無力なんかじゃないです。私は、少佐が必要です。知ってますか？　少佐がただそこにいてくれるだけ、ただ手を握ってくれるだけで、私はどんな苦しみにも耐えられる力が生まれてきます。少佐は、私にとっては大切で、かけがえのない存在です。だから、決して無力じゃありません。私は、少佐のおかげでここに立っていられるんですから」
「大和・・・」
翔輝は死という恐怖と戦いながらも自分を気遣う大和に感謝し、そっと彼女を抱き締めた。彼女だって辛いはずなのに、こんな自分の為に優しく笑ってくれる。そして何より、自分は無力ではない。ちゃんと彼女の役に立っている。そんな気持ちが、翔輝を優しく包み込んだ。
「きっと、大丈夫です・・・きっと・・・」
大和の、そんな小さな言葉が嬉しかった。
その時、敵機が一斉に急降下して来た。艦橋に見張り兵の絶叫が響き渡る。
「少佐」
「大和」
二人はしっかりと手を握り合う。
決して怖くない訳はない。だけど、ただ隣に彼が、彼女がいるだけで、自分は強くなれる。前を見ていられる。

今までだってそうだった。
多くの戦いの中、隣に彼が、彼女がいたから、自分は戦えた。今回も同じ事。
窓から見える海の向こうで、もうもうと立ち上る黒煙。その下には無残にも粉々にされた二隻（ふたり）の仲間がいる。
もう、十勇士に沖縄へ行く力など残されてはいない。
『敵機急降下ッ！』
だったら、『大和』としての責務ではなく、大和としての責務を果たす。
近づいて来る敵機の急降下音。それも一機は二機ではない。少なくても十機はいるだろう。そんな事を冷静に考えられる自分に驚くが、それは隣に立つ彼のおかげだと気づく。
キュッと唇を閉じ、響き渡る轟音に天を見上げる彼。
初めて会った雪の日、彼はまるでその雪景色のように凍っていた自分の心に春をもたらせてくれた。
彼は知らないだろうが、自分はこうして彼に救われたのだ。
彼のおかげで、この戦争をここまで来れた。
今度は、自分が彼に恩を返す番――いや、大和として、彼を愛する者として、彼の為にしなくてはならない。
ドォンッ！　ドドォンッ！　ドオオォォォンッ！
周りにすさまじい水柱が立ち上る。まるで『大和』を包むように爆発する爆弾の嵐。その衝撃に二六三メートルもある巨艦がビシビシと震える。だが、大丈夫だ。
大和は飛び去っていく敵機を睨む。その瞬間、敵機は機銃で撃ち落とされた。
「私には、少佐がいます。だから、大丈夫です」
まるでそれは自分に言い聞かせるような言葉であった。
無数の敵機の爆弾や魚雷を、『大和』は必死で避け続ける。
防弾ガラスなんて気の利いたものはない艦橋にも、敵機の機銃が窓を砕いて飛んで来る。

ビシィッ！

「少佐ッ！」

翔輝のすぐ隣に敵機の機銃が炸裂した。翔輝は一瞬顔を強張らせたが、今にも泣きそうな顔をする大和を見てメガネのブリッジを上げて静かに微笑む。

「大丈夫。僕にはお前がいる。だから、大丈夫だ」

それは自分が言った事と同じ想いを秘めた言葉だった。

彼も同じ。そう思うと、なぜだか嬉しくて仕方がない。

自分は彼と同じ。大好きな彼と自分が同じ。そう思うだけで、ここが戦場である事も忘れて優しくはにかんでしまう。

「そうですね。同じです・・・きっと」

敵機が一斉に低空飛行で突っ込んで来ると、魚雷を連続して放って来た。有賀はそれを必死に命令して回避する。魚雷は『大和』のギリギリ横を通過して行った。

続いて急降下爆撃が襲う。すさまじい対空砲火に次々に撃墜されながらも爆弾を投下。『大和』のまわりを水のカーテンが包み込む。すさまじい衝撃に『大和』の巨体が震える。その振動に、大和は恐怖するが、ギュッと握る彼の手が、彼の存在が、自分を救ってくれる。

一体何発の爆弾や魚雷を避けただろうか。もう何時間も戦っているような気がするが、実際はまだ一時間も経っていない。

立ち上る無数の水柱と魚雷の軌跡を見詰め、大和は唇を噛んだ。

一体自分は、この生殺しのような時間をあとどれくらい耐えねばならないのか。

敵機が急降下して来る。そのたびにギュッと握られる彼の手にはビッシリと汗がある。彼だって怖いのだ。それを、必死に耐えて自分を支えてくれている。

今まで、自分は彼の事を軍神のように尊敬し、愛してきた。だが、彼だって普通の人なのだ。妹の死を苦しみ、仲間の死を苦しみ、襲い掛かる敵に恐怖する。普通の人間。

じゃあ自分は、何なのだろう。
決まっている。普通の――大和という女の子だ。
軍人だから、艦魂だから、旗艦だからと溜め込んだものは、今ではもうどうでもいい。
大艦巨砲主義の終焉、連合艦隊の有終の美、日本海軍の象徴という誇り。これまでの戦いで、そんなものはもうどうでも良くなっていた。
自分はただ、彼と一緒にいたいだけだ。
例え戦闘の中であったとしても一秒でも彼と一緒にいたい。そう思う自分は、皆が尊敬する第二艦隊旗艦大和ではない。ただ、翔輝という男の人を愛する、大和という女の子なのだ。
「少佐」
大和のどこか柔らかな声に翔輝が首を向けた途端、その唇に彼女の唇が重なった。
一瞬の事だったのに、それが永遠の時間にも思えたのはなぜだろう。
キスの味は、鉄の味がした・・・
見ていると痛々しい傷の数々。これが普通の女の子なら、決して負う事はない傷。
艦魂だから。でも、その艦魂である彼女を愛した。
人間とか艦魂とかもうどうでもいい。
ただ、彼女を愛している。それだけが、翔輝の大和への想いだ。
一瞬、長門が見ていたら「それってロリコンよ？」と言われるかもしれないと思い、クスリと笑った。
「どうしたんですか？」
「いや、とうとう僕もロリコンを認めなきゃいけないかなぁって思って」
「む、私はそんなに幼くありません」
頬を膨らませて怒る大和。いつもの彼女がそこにいる。
「わかってるさ。僕はそういう趣味じゃない。ただ、大和って女の

子を愛しているだけさ。例えお前がこのまま年を取って大人になり、婆さんになっても、僕は愛するさ」

「うぅ、そうですね。大人の女性になれるのは嬉しいですけど、お婆さんか・・・」

「ははは、お前ならきっとかわいい婆さんになるさ」

「・・・そうですね」

気休めだ。

自分は艦魂。もしこのまま生き残っても、艦魂が成長する速度は人間のそれとは比べ物にならないほど遅い。自分がお婆さんになっている頃には、何もかもが変わっているだろう――いや、それすらない。だって自分は、ここで死ぬのだから。

翔輝も、もう薄々と気が付いていた。

大和はもう生き残れない。この東シナ海で果てる、と。

そして、自分の歴史もここで終えようと決意していた。

最期の時も、彼女を抱き、彼女の手を握り、ずっと笑っていようと決意していた。

だが、大和は・・・

『左五〇度方向雷撃機！』

見張り兵の絶叫に艦橋に再び戦慄が走る。

雷撃機が低空飛行で滑空。数機の編隊で一斉に魚雷を投下したが、なんとかこれは回避。だが、続いて近距離まで接近して来た雷撃機編隊が一斉に魚雷を海中に投げ込んだ。

『左四〇度方向！　魚雷六本接近ッ！』

見張り兵の悲鳴に、大和は顔を真っ青にする。嫌な汗が噴き出し、鳥肌が立つ。血の気が引き、恐怖で体が震える。そんな彼女の手がギュッと握られ、大和は隣を見る。そこには、自分をじっと見詰める彼がいた。

そうだ。自分には・・・彼がいる。

「少佐。手を、離さないでくださいね」

大和は努めて笑顔で言った。その笑顔はきっと引きつっていただ

ろうが、彼は気にせず優しげな瞳で自分を見詰めてくれた。
「離すもんか。絶対に・・・ッ！」
――より強く、二人の手は握られた。
迫る魚雷に有賀は「取舵いっぱあああぁぁぁいッ！」と絶叫を上げた。機関部は満載排水量七万トンを超える巨体を全速力で走らせる機関が悲鳴を上げる。主舵、副舵が一斉に左に倒れて水の抵抗の向きを限界まで曲げる。
巨艦『大和』が左に滑るようにして回避行動に移る。だが、敵機が魚雷を放った距離が近すぎた。『大和』の巨体が回り切らない。
「総員衝撃に備えろッ！」
前艦長であった森下の怒号に皆一斉に近くのものを掴んだ。
「少佐ッ！」
「大和ッ！」
二人は一斉に互いに抱き付くと、その互いを守るようにして強く抱き合った。
ズドンズドォンズドオオオオォォォォォンッ！
「ぐわあああああぁぁぁぁぁッ！」
艦橋のすぐ横で巨大な水柱が三本上がり、爆音と同時に大和が断末魔のような悲鳴を上げ、大量の血を噴き出して倒れた。抱きとめていた翔輝の彼女の血で真っ赤に染まる。
倒れた大和は激しく咳き込む。そのたびに吐血を吐き、傷口から血が噴水のように噴き出る。森下は見た。艦橋が、彼女の血で真っ赤に染まっている事に。
「大和ッ！　しっかりしろッ！」
翔輝は激痛にもがき苦しむ大和の体を抱き上げると、その血が止めるようにギュッと彼女の体を抱き締めた。自分が血で汚れる事など、関係なかった。
「ゲホォッ！」
ベチャリと、翔輝の胸に彼女の吐血がぶち撒かれた。そのすさまじい量に、翔輝は絶句する。

大和は、激しく痛みに苦しみ、翔輝の声など聞こえないかのように悲鳴を上げ続けるのみ。そんな彼女に、何もできない自分。唇をギュッと噛んだ瞬間、口の中に鉄の味が広がる。

「大和ッ！　クソォッ！」

翔輝は悔しくて床をバンッと叩いた。その直後、体が傾くような感覚に翔輝はハッとなって顔を上げた。

視界が、斜めになっていく。

先程受けた三本の魚雷は『大和』の左舷中央部に命中。破口から大量の海水が中に流れ込み、バランスを崩した『大和』は堪らず左へ傾いた。

「か、傾くッ！？　そんな・・・ッ！　この『大和』でも傾くのかよッ！」

不沈戦艦なんて誰が言った。

艦というのは傾いたら終わりじゃないか。それなのに『大和』は傾いている。

世の中に、不沈なんて事はありえない。改めて翔輝は思った。

その時、ギュッと手を握られた。慌てて見ると、彼女が必死を痛みに堪えながら、不安になる翔輝にそっと微笑んでいた。

「・・・大丈夫です・・・私は・・・世界最強の戦艦です・・・この程度の傾きくらい・・・何でもありません・・・ッ！」

「大和・・・」

「右舷第十二区画、第十三区画に三〇〇〇トン注水せよッ！」

その声に振り向くと、航海長が伝声管に向かって怒鳴っていた。

その言葉に翔輝はハッとして思い出す。

何ゆえ大和型戦艦が不沈艦と言われるか。それは当時最先端の防御機構が取り付けられていたからだ。

四一〇ｍｍにもなる装甲で覆われた艦体。この防御力は例え大和型と同じ四六ｃｍ砲が直撃しても耐えられる設計になっていた。

そして、大和型の切り札が当時最先端の防御機構、注排水装置である。海水が浸水して艦が傾いても、逆側の防御区画に同等の海水

を入れて傾きを直す。これが装備された軍艦は、当時はまだ大和型以外はほとんどない。さらに艦内に浸水しても防水扉を閉じれば実に一一四七区画に分ける事ができ、浸水を最小限に抑えられる。

まさに、大和型戦艦は、史上最強の防御力を持っていたのだ。

そしてその装置が働く時が来た。

左に傾く『大和』。だが右舷の防御区画に海水が注水されて傾斜が徐々に戻る。そして、水平に戻った。

翔輝は驚いた。

一度傾いた艦体が水平に戻るなど、常識破りである。

「ほら・・・言いましたでしょ・・・？　私は・・・世界最強の戦艦です・・・」

その声に彼女を見ると、どこか嬉しそうな顔をしていた。

自分の中にまだある世界最強の戦艦としての誇りを、彼に見てもらった。それが、とてもウ嬉しかったのだ。

「世界最強の・・・戦艦である私は・・・同時に・・・世界最強に・・・少佐が大好きな・・・どうしもうない女の子です・・・」

必死に痛みに耐えて言葉を繋げる大和。その痛々しい姿にさえ、翔輝は彼女を愛した。こんなに強く、優しい彼女だから、自分は好きになったのだ。

「わかった・・・わかったから・・・ッ！」

翔輝は彼女を抱き締める。彼の腕の中、大和は力ない体に必死に力を込めて、彼に抱き付いた。こうしていると、幾分か痛みが和らぐのは、愛の力なのか。そんな事を考える自分に、大和は少し照れた。

彼の温もりが温かい。

血と共に失われていく自分の体温も、彼の温かさが冷える体を温めてくれる。

ずっとこのまま、彼の抱き合っていたい。心からそう思った。

だが、大和の想いは砕ける事になる。

やっとの思いで傾斜が直った『大和』。しかし敵機の空襲は続い

ていた。米兵達は再び水平に戻った『大和』に驚愕するが、『大和』が化け物戦艦と聞いていたのですぐに冷静さを取り戻すと、再び『大和』を襲う。

雷撃機隊は『大和』の左舷から低空飛行で迫ると魚雷を投下した。

『左舷より魚雷二本接近ッ！』

伝声管を伝わって響く絶叫に翔輝はギュッと彼女を抱き締めた。

次の瞬間、『大和』の巨艦が激しく震え、爆音が轟いた。

「があああああぁぁぁぁぁッ！」

大和が体を激しく痙攣させ、大量の血がその小さな体から噴き出す。翔輝はなす術もなくただ彼女の体を抱き締めながら彼女の名前を叫び続ける。

「大和ッ！　大和ッ！」

二本の魚雷を左舷に受けた『大和』は再び左へ傾いた。航海長が再び注水命令を出す。

腕の中でぐったりと倒れる大和。

痛みに体をもがく力もなく、ただその痛みに耐えるしかない。

「ひぎぃ・・・ッ！　あぐぅ・・・ッ！　あぁ・・・ッ！」

大和の小さな悲鳴を聞くたび、翔輝は唇を噛みながら彼女の体を抱き締めてやる事しかできなかった。

右舷タンクに大量の海水が注水されて『大和』は再び水平に戻った。

甲板で戦う兵達は何度も何度も傾きながらも必ず水平に戻る『大和』に、やっぱり『大和』は不沈艦と信じて疑わなかった。

再び水平に戻った『大和』だったが、副舵が取舵のまま壊れ、『大和』は直進か取舵しかできなくなってしまった。さらに度重なる注水で艦が重くなり『大和』は十八ノットにまで速力が低下。他にも送受信室や伝声管の一部が浸水により使用不能となり、巨大な『大和』で情報を流すには生き残っている伝声管か原始的な伝令のみとなっていた。

人力の限界。伝令など、この激しい戦いの中では無意味だと誰も

がわかっていた。だが、
「機関室応答なしッ！」
「伝令走れ！」
「私が参ります！」
少年兵が敬礼して艦橋を出て行った。
わかっていても、やらなければいけないのだ。
度重なる被害で『大和』は壊れていく。同時に大和の容態も悪化し続けた。
息を荒くして吐血を繰り返す大和を、翔輝は抱き締め続けた。
二人の周りには彼女から出た大量の血がぶち撒けられていた。
中学生くらいにしか見えない女の子が、前進血まみれになって苦しむ姿など、残酷以外なにものでもない。
翔輝の腕の中で、大和はもはや笑う力もなく苦悶に顔をゆがめ、辛そうに痛みに耐えていた。
「大和ッ！　大和ッ！」
「少佐・・・泣かないでください・・・これくらいじゃ・・・まだまだ死にませんよ」
そう言うが、もう笑うほどの余裕はない。痛みに、顔をゆがめる大和に翔輝は怒鳴る。
「バカヤローッ！　死ぬとか言うなッ！」
「えへへ・・・少佐に・・・怒られちゃった」
一瞬小さく笑みを浮かべたが、それはすぐに苦悶にゆがむ。
翔輝はそんな大和を抱き締め続ける事しかできなかった。
機銃や高角砲が必死の奮戦をしているが、敵機は無数に現れて攻撃してくる。翔輝は石があったら敵に投げつけたいくらいだった。
どうしてこんなの女の子を殺そうとするのか。
この時、翔輝は感じた事のないくらいアメリカ人を憎んだ。
殺したい。
皆殺しにしたい。
この軍刀で、片っ端からアメリカ人を殺したい。そう思った。

だが――

「そんな怖い顔・・・しないでください・・・」

大和が必死に搾り出した声に、翔輝はハッとする。顔を向けると、大和が悲しそうな顔で自分を見詰めていた。

「少佐には・・・笑っててほしいんです・・・だって・・・その方が少佐らしいから・・・」

「大和・・・」

「憎しみからは・・・何も生まれないんです・・・」

大和は必死になって翔輝に抱き付く。その血まみれの手は、しっかりと翔輝の腕を握った。

「少佐には・・・笑っててほしい・・・です・・・それが・・・私の大好きな・・・長谷川少佐なんですから・・・」

大和の言葉に、翔輝は彼女を正視できず視線を逸らす。

「僕は、そんな大した人間じゃない。ただの、普通の人間だよ・・・憎しみも抱くし、人を殺したくもなる、普通の人間だ」

「わかってます・・・でも・・・それでも、少佐には・・・笑っててほしいんです・・・私が一番好きなのは・・・少佐の笑顔・・・なんですから・・・」

「大和・・・」

翔輝は腕の中でぐったりとする大和を見詰める。埃一つなかった黒い軍服はボロボロに切れて、真っ赤な血で汚れている。彼女の美しい髪も、白く柔らかな肌にも真っ赤な血がベチャリと付いている。顔色も真っ青で、とても見ていられない姿だ。だが、視線を逸らしちゃいけない。そう思った。

大和は、必死に戦っている。戦闘はもちろんだが、色々な事と。その戦いが何なのかは翔輝にもわからない。でも、それでも大和は戦っている。必死になって・・・

「大和」

その声に大和はゆっくりと視線を上げる。すると、そこには自分に勇気を与えてくれる、自分が大好きな彼の笑顔があった。辛いの

を堪えて笑うその笑みはどこかぎこちないが、そこから伝わって来る自分を想う気持ちに、大和は嬉しくなる。

「ありがとうございます・・・」

大和は小さくそうつぶやくと、そっと彼に腕を回して抱き付いた。

彼の温もりが、すぐ傍にある。

なぜだろう。痛みも苦しさも、彼の温もりが掻き消してくれる。

彼が傍にいれば、自分は無敵だ。本気でそう思えた。

敵機が急降下して来る急降下音に翔輝はハッと天を見上げた。その時、大和がギュッと抱き付いてきた。そんな彼女を、翔輝もギュッと抱き締める。

――大丈夫。

そんな想いを込めながら・・・

ズドォンッ！　ドォンッ！　ドゴォンッ！

次々に炸裂する爆弾は全て『大和』には当たらず周りで炸裂する。

そのたびに艦橋を越える高さの巨大な水柱が上がり、舞い上がった水が雨のように『大和』の甲板に叩き付ける。

無数の水柱が上がり、魚雷が炸裂する。

敵戦闘機が機銃を甲板に向かって乱射して来る。そのたびに甲板にいる兵達は敵機の凶弾に倒れて絶命していく。

甲板は敵機の機銃によって倒れた兵士達の墓場となっていた。無数に転がる真っ赤に染まった死体。

敵戦闘機は本来の役目である敵機撃墜ができない分、甲板に向かって弾倉に入った弾を全て吐き出していた。

無数の敵機が様々な方向から機銃掃射をして来る。露天な甲板でそれを避ける術もなく、次々に血が噴き出し、兵達は絶命して行く。

機銃兵達は目の前の機銃座が敵機の機銃を受けて総員戦死したのを見て戦慄した。残ったのは人間の一部だったものばかり。あれは誰の腕で、あれは誰の足なのかわからない。

内臓らしきものが飛び散っている。

兵は絶叫しながら機銃を敵機に叩き込んだ。
その声を聞きながら、杉田二等兵は機銃に弾を装填する。
「右良しッ！」
「左良しッ！」
「中良しッ！」
三連装全ての銃身に弾が込められ、射手を務める杉田の親友の内村一等兵は引き金を引いた。鋭い発砲音と共に弾丸が飛び出し、迫っていた一機の敵機を撃ち落とした。一瞬、やったと誰もが思った。だが、別の敵機が仲間の仇と機銃を叩き込んでくる。そこで、彼らの命は儚く終わった。
「ギャアアアアァァァァッ！」
「うわあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
「があああああぁぁぁぁぁぁッ！」
すさまじい悲鳴を上げ、真っ赤に染まった別の機銃座の兵達を一瞥し、中島二等兵曹は吐き気を感じた。腕や足をもがれて悶絶する者や頭を撃ち抜かれてすでに絶命した者を見詰め、中島は怒り狂う。
「右七〇度！　高角七〇度ッ！」
班長の声に、中島は横回しのハンドルを回して機銃を右に動かす。同時に、隣の席に座る小島一等兵が仰角を上げる。そして、小島は足のペダルを一気に踏み込む。引き金が押された機銃はすさまじい勢いで三つの銃口から機銃を吐き出す。だが、そのどれもが敵機には当たらない。
「クソォッ！」
ブウウウウゥゥゥゥゥンッ！
「伏せろッ！」
誰かの声に慌てて姿勢を下げた瞬間、すさまじい金属音がすぐ近くに響き、火花が散った。誰かの悲鳴に、誰かが撃たれた事を知る。
再び顔を上げた時、後ろで親友の名を叫ぶ市村二等兵がいた。その手の中で絶命したのは彼と同じ故郷の西島二等兵だ。
「市村ッ！　弾を込めろッ！」

「はぁいッ！」
親友の遺体を置き、泣きながら市村は木箱の中から新しい弾が満載されたカートリッジを取り出すと、真ん中の銃身に込める。その両隣を、杉浦一等兵と向島二等兵が込める。
「中良しッ！」
「右良しッ！」
「左良しッ！」
「撃てえええぇぇぇッ！」
機銃が再び唸り出し、機銃弾を空にばら撒く。しかし敵機はそれをあざ笑うかのように悠々と避け、別の方向から機銃を放つ。隣の機銃座にいた半数以上の兵がその一撃で絶命した。
ボトンッと何かが目の前に落ち、向島はそれを見て声にならない悲鳴を上げた。それは人間の腕であった。きっと隣の機銃座の兵のだ。
いつ自分もそうなるかわからない。向島は迫る敵機を睨みながら新しいカートリッジを取り出すと、己が銃身に込める。
「左良しッ！」
必死に奮戦する機銃隊の上に位置する高角砲隊。一段目の高角には機銃避けの盾があるが、二段目の高角砲にはそれがない。
「右良しッ！」
「左良しッ！」
大きく重い砲弾が銃身に吸い込まれ、両側に立つ兵が叫ぶと同時に高角砲が爆音を響かせて砲弾を発射する。
「急げッ！　急がんかッ！」
班長の声に倉本二等兵は次々にリレーで運ばれる重い砲弾を両手で抱え上げると、それを右砲身担当の石島一等兵に渡す。
石島は砲弾を受け取ると一度先程撃った砲弾の空薬莢を吐き出す。ゴトンという大きな音を立てて落ちた空薬莢は熱を持って白い湯気を上げている。石島はそれを一切見ようとはせず、腕に抱える砲弾を砲身の中に突っ込む。

「右良しッ！」
「左良しッ！」
左側を担当する井上一等兵と視線が合った。班長がすぐさま「撃てぇッ！」と叫び、引き金が引かれた高角砲から砲弾が飛び出す。
「早くしろッ！」
次の砲弾が来ない事にイラ立つ井上。その時上空に現れた敵機が機銃を掃射して来た。石島は慌てて高角砲の陰に隠れる。そして見た。井上が頭が撃ち抜かれた瞬間を。
悲鳴が飛び、露天高角砲にいた数人の兵達が真っ赤な血に染まった。井上は即死。他に二人が足や腕を吹き飛ばされて人間の声とは思えない悲鳴を上げる。
頭が狂いそうだった。
そこへ艦内で砲弾リレーをしている倉本が新しい砲弾を持って来た。だがそこは、つい十数秒前に見た光景と違っていた。
「井上一等兵！」
「倉本！　何をしている！　砲弾をよこせッ！」
「し、しかし井上一等兵が！」
「貴様はここにいる皆を殺したいのかッ！？」
石島の怒号に、倉本は泣きながら砲弾を手渡す。石島はもはや見るに耐えない井上の遺体を一瞥し、憎き鬼畜米英に怒鳴る。
「クソ野郎ッ！　死ねアメ公ッ！」
石島と井上の代わりに左砲身の担当になった水島二等兵は同時に砲弾を込め、高角砲は怒りに唸りと共に砲弾を撃ち出した。
戦っているのは何も機銃や高角砲の兵ばかりではない。
「衛生兵ッ！　衛生兵ッ！」
その声に北村二等兵曹は振り返った。その腕には赤十字のマーク。彼は負傷者の手当てをする衛生科の下士官だ。
「どうしたッ！」
「国崎一曹が・・・国崎一曹が・・・ッ！」
少年兵の声に彼の下で真っ赤に染まった男を見る。片足を失い、

苦しそうに顔を歪めている。出血がひどい。
「北村二曹！」
そこへ来たのは部下の三枝（さえぐさ）一等兵だ。国崎の容態を見て彼も表情が変わる。
「これは医務室に連れて行きましょう！」
「わかってる。手を貸せ！」
「はいッ！」
北村は国崎の腕を、三枝は足を持った。そんな二人に少年兵は涙ながらにすがる。
「お、お願いします！　国崎一曹を助けてください！」
「わかった！　任せておけ！」
北村の言葉に、少年兵はうなずくと再び自分の機銃座に向かった。彼はその後、敵機の凶弾に倒れたと知っている者は、何人いるだろうか。
北村と三枝は国崎を抱えながら走った。だが、その間にも目の前の機銃座が敵機の機銃を受けて真っ赤に染まる。腕や足を失って苦しむ人や、元々人の一部であったグロテスクな何かが落ちている甲板を見詰め、三枝は恐怖した。
毎日毎日兵達が朝早くに雑巾で磨き上げたあの美しい甲板は、今では人の血で真っ赤に染まり、肉片が辺りに飛び散っている。焦げ臭さや人の焼ける臭い、さらには血の臭いが二人の鼻を襲い、すさまじい吐き気がしてくる。
「三枝ッ！　早くしろッ！」
「はいッ！」
北村が怒鳴ったその時だった。敵機が轟音と共にこちらに向かって来た。北村はそれに気づいて何かを叫ぼうとした。だが、その瞬間敵機が機銃を掃射。三人の体に無数の穴が開き、北村は自分の腕が吹き飛ぶ瞬間を見て絶命した。三枝は体を襲う激痛の後、何も感じなくなった。倒れた彼の頭には、風穴が一つ開いていた。
衛生兵達は負傷者を次々に医務室へ連れて行く。その為、医務室

の廊下には大勢の負傷兵が置かれていた。血の臭いが鼻をどうにかしそうだ。人間の苦しむ声が耳を壊しそうだ。目の前の真っ赤な光景に、目が狂ってしまいそうだ。

鈴宮軍医はベッドに寝かせた兵の腕に傷にピンセット突っ込むと、無理やりその奥にある銃弾を引き抜いた。

「ギャアアァァァッ！」

「バカ者ッ！　これくらいの痛みで声を上げるな！」

鈴宮はそう叫ぶが、その傷みがどれだけ苦しいかは想像を絶する。こんなに兵達が運ばれて来なかったら、麻酔がもっとあれば、彼らにこんな乱暴な処置とは違うのができるのに。別のベッドでは軍医達の奮戦も空しく兵が一人死んだらしい。鈴宮は唇を噛んだ。

「ガーゼを持って来いッ！　早くしろッ！」

鈴宮の怒号が兵達の悲鳴や外の爆音が支配する医務室に響いた。

木村二等兵は赤十字マークを腕にして今にも意識を失ってしまいそうな兵に水を掛ける。

「寝るな！　寝たら死ぬぞッ！」

兵達は出血多量で次々に死んでいく。それらを見詰め、木村は気が狂いそうになった。

爆音が響き、艦が揺れた。どこかで爆弾が爆発したのだろうか。

甲板は一発の爆弾を受けて地獄絵図となっていた。三個機銃隊が今の爆弾の直撃を受けて吹き飛んだ。近くで見ていた大村一等兵は悲鳴を上げる。だが、すぐに自分の役目である銃弾が満載された木箱を背負って走る。だが、そんな彼に敵機の機銃が突き刺さる。大村は倒れ、木箱は燃える炎に突っ込まれた。その瞬間、機銃弾が爆発して近くにいた兵数人を吹き飛ばした。

小暮二等兵は燃え盛る火に向かって放水する。この火を消す事だけに集中し、ひたすら水をぶち当てるが、敵機の機銃で後ろにいた仲間数人が絶命した。次は自分の番。気が狂いそうになった。

有賀が必死に回避命令を出す防空指揮所には次々に敵機が機銃を叩き込む。川島二等兵曹は隣で必死に敵機の動きを叫んでいた菊池

一等兵が吹き飛ぶ瞬間を見た。彼は真っ赤に染まり、そのまま絶命した。反対側では別の兵が防空指揮所から落ちた。この高さから落ちたら、命はないだろう。

川島は恐怖と戦いながらも、必死に敵機の動きを叫ぶ。

「敵機直上！　急降下！」

甲板は血の海を化していた。

田中一等兵は自分達の仲間が壊滅したのを見て絶句していた。そんな彼の目の前で、新田一等兵曹が腰の刀を抜いて自らの腹を引き裂いて自害した。

田中はもう何がなんだかわからない。敵機が次々に機銃をばら撒くたびに、人が死んでいく。こんなのはもう戦いじゃない。ただの殺戮だ。

「おい貴様！　何をしている！」

住田二等兵曹はボーっと空を見上げている田中に駆け寄ろうとする。だが、敵機の機銃が一足早く、田中の体を貫いた。たったそれだけで、田中は死んだ。

住田はその場にしゃがみ込むと、悔しそうに甲板を叩いた。

青島水兵長は必死に高角砲の指揮を続けていた。すでに班長や副班長が敵機の凶弾に倒れ、今では自分がこの部隊の最上階級になっていた。

「右六〇度！　高角五〇度！　撃てぇッ！」

高角砲は轟音と共に砲弾を撃ち出す。その時、隣の高角砲が爆発を起こして吹き飛んだ。何が起きたかなど、青島にはわからないし関係ない。

「急げ！　早く砲弾を運べッ！」

その時、敵機の機銃が襲って来た。その一発が、青島に急かされて急いで砲弾を持って来た上村一等兵の持つ砲弾に炸裂。彼らの高角砲は爆発して吹き飛んだ。

「負傷者！　負傷者はいないか！」

東雲一等兵は赤十字のマークを付けながら甲板を歩く。だが、そ

こに生きた者は誰もいない。皆、絶命していた。
死体しかない中を、東雲は必死になって負傷者を探す。だが、そんな彼が轟音に気づいて上を見上げると、敵機が機銃を掃射。彼は無数の弾丸に貫かれて死んだ。
甲板は真っ赤に染まり、死体や人間の一部などが散乱していた。
生き残った高角砲や機銃が必死の抵抗をするが、すでに『大和』の防空能力はボロボロであった。
そして再び、敵機の機銃で兵達が絶命した。

「あぐぅ・・・くうぅ・・・ッ！」
『左舷中部に爆弾命中ッ！』
翔輝は今さっき受けた爆弾で立ち上る炎と黒煙を片方のレンズにヒビの入ったメガネで見詰める。先程の被弾で転んで割ってしまったが、そんな事どうでもいい。それよりも今の一撃で、甲板にいた兵の多くが死んだだろう。皮肉にも、命中したのは高角砲や機銃が密集している部分だった。
左舷から撃ち出される機銃の数が減ったのを見て、翔輝は唇を噛んだ。
これで『大和』はさらに敵機の攻撃を受けるだろう。そして、大和も・・・
「少佐・・・ッ！　兵達は・・・ッ？」
自分よりも兵達を心配する。実に大和らしい。そして、こういう所を自分は好きになったのだと改めて思った。
翔輝は、包み隠さずに全てを言った。
「・・・甲板は血の海だ。死体だらけで、腕や足、内臓まで飛び散ってる有様だ」
「・・・そう、ですか・・・」
その瞬間、大和は悔しそうに唇を噛み、涙を流した。
戦艦の艦魂である大和にとって、兵達は例え姿が見えない存在である自分にとっても、掛け替えのない仲間であり戦友だ。その彼ら

が死んでいく。優しい大和にとってこれほどまでに辛い事はない。
その時、敵急降下爆撃機から爆弾が投下され、『大和』の甲板中部と後部に炸裂した。
すさまじい爆音と巨艦を震わせる震動と同時に、大和が悲鳴を上げて吐血した。真っ赤な血が鉄色の壁にベチャリと付き、真っ赤に染める。鮮やかで、不気味な赤に。
「大和・・・ッ！」
「少佐・・・」
大量出血のせいか、もはや大和は痛みはほとんど感じなくなっていた。それほどまでに、大和の体はボロボロであった。
翔輝の腕の中、大和はもはや長くはない自分の命を感じていた。
もうすぐ自分は死ぬ。わかっていた。
もう体もほとんど動かない。彼に支えてもらわなければ、簡単に倒れてしまうだろう。それを必死に支えてくれる彼には、いくら感謝しても足りないくらいだ。
思えば、自分はずっと彼に支えてもらっていた。
開戦時からずっと、彼は自分の傍にいて支え続けてくれた。
もしも彼がいなかったら、自分はどうなっていただろうか？
考えたくないし、どうでもいい。
だって、彼がいない世界なんて、今じゃもうありえない。想像するだけ無駄な事。だって、彼は――翔輝はもう自分にとって、なくてはならない存在だから。
彼がいたから、自分がいる。もしも彼がいないなんて可能性があったら、その可能性に存在する自分は自分じゃない。
自分は、大和は長谷川翔輝という存在があってこそ、存在するのだ。
彼に支えてもらっている自分が、本当の自分なのだから。
辛い事や悲しい事もあった。でも、楽しい事、嬉しい事もたくさん彼のおかげで手に入れた。日本は戦争をしていたし、仲間達は死んでいった。それでも、いい艦生だったと思えるのは、彼が傍にい

てくれたからだ。
彼がいてくれたから、本当に、ただそれだけだった。それだけで、自分は幸せだった。
「・・・少佐・・・私・・・幸せでした・・・」
大和の言葉に、翔輝は顔を真っ青にする。
「ば、バカな事言うなッ！　諦めるなよッ！」
翔輝が必死に叫ぶが、もう大和はわかっていた。
ここで自分は死ぬ。それも、もうすぐ・・・
「・・・少佐と会えて・・・嬉しかったです・・・」
「もういいッ！　何も言うなッ！」
「・・・少佐・・・私・・・少佐の事・・・」
『『矢矧』沈没するッ！』
その悲鳴のような声にハッと翔輝は視線を上げる。そして、そっと彼女を抱き上げた。こんなに軽かったのか、そう驚いてしまうほど、彼女の体は軽かった。
翔輝は窓際に立つ。そんな彼に抱きかかえられながら、大和はそっと燃える『矢矧』を見た。出撃時の勇姿はもうなく、『矢矧』は燃えながら大傾斜していた。
「矢矧・・・」

燃える『矢矧』の防空指揮所の上で、矢矧はぐったりと倒れていた。
自らの血で真っ赤に染まる矢矧。その姿は痛々しい。特に、彼女の右腕は二の腕から先がなくなっていた。軽巡洋艦の防御能力を超える量の爆弾と魚雷を受けた『矢矧』はもはや原型を留めていないほど破壊されていて、矢矧の腕もその時に吹き飛んだ。
真っ赤な血が失われた腕と繋がっていた傷口から噴き出す。他にも腹や足、胸や頭などに痛々しい傷が刻まれ、血が噴き出す。
もはや、痛みなど感じなくなっていた。それほどまでに、矢矧の体の機能が低下していた。もう、生きる力さえも、残ってはいなか

った。
矢矧は首だけをわずかに動かして、自らが守ると決めた燃える『大和』を見詰める。もはや『大和』にも、生き残る力は残されてはいなかった。
連合艦隊の象徴として、皆に勇気を与えてくれた巨大戦艦は、もはやただ死を待つだけの鉄の塊に変貌しようとしていた。
守ると決めたのに、守れなかった。
「・・・やはり、私はダメだな・・・姉さんみたいには、できないよ・・・」
思い出すのは、今は亡き姉。優秀な指揮官で、駆逐艦など多くの部下に慕われていた。まわり古参の軽巡洋艦の艦魂からは、軽巡洋艦の希望とまで言われていた。そんな彼女も、トラック空襲で戦死した。
優秀な姉の遺志を継いだつもりでがんばってきたのに、最期は結局何もできなかった。
信頼できる上官。ちょっと子供っぽくて、感情的になりやすいが、その分誰よりも優しい人。そんな彼女を守ると決め、今日まで必死に戦ってきた。
なのに、結果はこれだ。
自分はもう死を待つ身。そして守ると決めた大和も、もう沖縄へ向かう力など残されてはいなかった。
結局、自分は何も守れなかった。
「・・・ごめんなさい・・・大和司令・・・」
矢矧は再び空を見上げる。
曇天の空。
どうせ死ぬなら、晴れた青空の下で死にたかったなぁと最後に小さなわがままを考えてみる。自分の思った事に、矢矧はクスリと笑った。
「・・・十勇士のみんな・・・希望を・・・ありがとう・・・」
矢矧は、そっと瞳を閉じた。

暗闇の中に見えたのは、今は亡き阿賀野と能代。二人の他にも大勢の仲間達が手を振って待っている。

矢矧は一度自分が来た道を振り返ったが、すぐに小さく微笑むと、大好きな姉に走り、その懐かしい胸に飛び込んだ。

その時の矢矧の笑みは、最高の笑顔だった。

炎上していた『矢矧』突如大爆発を起こした。火薬庫か弾薬庫に引火したのだろう。そのすさまじい爆発に、すでに虫の息であった『矢矧』は耐えられず真っ二つに折れた。そしてそのまま、艦首と艦尾を抱くようにして、『矢矧』は炎を煙を身に纏いながら、海底に没した。

連合艦隊最後の作戦に参加した水雷戦隊の旗艦として、その最期は壮絶なものであった。

翔輝と大和が見詰める先で、『矢矧』は沈没した。

大和は何も言わず、無言で敬礼した。その白い頬を流れる涙に、翔輝は掛ける言葉もなく、ただそっと、彼女を抱き締めた。

燃える『大和』のまわりでは生き残った駆逐艦が必死の抵抗をしているが、もはや隊列なんてものはなく、大和達は艦隊ではなく艦艇の集まりと化していた。

敵機は『矢矧』が沈没しても攻撃の手を緩めない。彼らの目的は『大和』を沈める事。ただそれだけであった。

敵機が急降下して来て爆弾を投下する。『大和』はそれを左に避ける。巨大な水柱を上げながら、『大和』のまわりで無数の爆弾が炸裂する。

「・・・少佐・・・無理はしないで・・・・ください・・・私・・・重いでしょ？」

「バカ。お前がそんな事気にするなよ。それに重くなんかないさ」

翔輝の言葉に、大和は嬉しそうに微笑んだ。その笑顔は力ないが、それでも翔輝に勇気をくれる、そんな笑顔だった。

その時、右舷に巨大な水柱が上がり、艦が小刻みに震えた。同時に、大和は「ひぐぅッ！」と小さな悲鳴を上げた。彼女の右足から血が噴き出るのを見て、翔輝は顔を真っ青にする。

「大和ッ！」

翔輝は急いで彼女を床に寝かす。

先程まで魚雷は全て左舷に命中していた。これは米軍側の計算なのかは知らないが、不幸中の幸いにも今度は右舷であった。だが、それでも命中は命中。怪我は怪我だ。大和は苦しそうに顔をゆがめる。翔輝はただ、そんな彼女の手を握り締めるしかない。

これだけが、自分にできる事なのだから。

そして、こんな事でも、彼女の力になれるのなら、必死にやるだけ。

目の前で真っ赤な血の海に倒れるのは、つい数時間前までは普通の女の子であった。普通に笑い、普通に怒り、普通に悲しむ、普通の女の子だった。

だが、今目の前にいるのは、長く美しい黒髪が乱れ、きれいに着こなしていた軍服もボロボロ破れてしまい、その身が露になっているが、それは自らの血で真っ赤に染まり、痛々しい。

珠のように真っ白で美しかっただった肌は裂けて噴き出す血で赤く染まり、手を添えれば柔らかくさらさらと流れていた長い黒髪もぐちゃぐちゃに乱れている。柔らかい桜色の唇からは血が流れ、いつも自分の傍で笑ってくれていた彼女の面影は、ほとんど残っていなかった。

艦魂だからだろうか。人間だったらとっくに死んでいるはず。生きているのが不思議なくらいの大怪我であった。

「大和・・・ッ！」

「・・・そんな悲しそうな顔・・・しないでくださいよ・・・」

「ごめん・・・ッ！」

「・・・笑っててほしいのにな・・・」

「・・・無茶言うなよ・・・」

「・・・そうですね・・・ごめんなさい・・・」
「謝るなって・・・」
「・・・少佐」
大和はそっと手を伸ばす。その手はゆっくりと翔輝の頬に触れると、優しく撫でる。まだ、その手には彼女の温もりがある。弱々しいが、確かにそこにあった。
「・・・えへへ・・・少佐・・・ここにいるんですね・・・」
「あぁ、僕はここにいるよ」
「・・・少佐・・・抱き締めて・・・ください・・・」
翔輝はそっと彼女の背中に手を回すと、糸の切れた人形のようにぐったりとする彼女の体を抱きかかえた。彼の腕の中、大和は傷だらけで血まみれながらも、目を柔らかく細め、口元にも小さな笑みが灯る。
「・・・少佐・・・大好きです・・・」
「あぁ、わかってる」
「・・・少佐と・・・ずっと一緒に・・・いたいです」
「あぁ、僕も同じだ。お前とずっと一緒にいたい」
「・・・でも、もうダメ・・・ですね」
「ダメじゃない。必ず、日本に帰るんだろ」
「・・・少佐」
大和はそっと彼に抱き付いた。と、その時再び『大和』に激震が起きる。左舷中部、そして後部に巨大な水柱が上がった。またも魚雷が二本、左舷に命中したのだ。再び左舷に魚雷を受けた『大和』は左に六度傾斜し、速力は十二ノットにまで低下した。すでに注排水装置では対処し切れず、有賀は苦肉の策として機械室とボイラー室、計四室に注水したが、『大和』の傾斜は戻らなかった。その際、中にいた兵達が溺死した事も、『大和』沈没の悲劇の一つであった。
大和は激しい咳と共に大量の血を吐いた。真っ赤な血は、彼女の命そのものであった。血と共に彼女の命は大量に失われていた。
翔輝は無言で、彼女を抱き締める。その肩が小刻みに震えている

事に気づいて、大和は悲しそうに瞳を翳らせる。
「・・・少佐・・・泣かないでください・・・少佐の涙なんて・・・見たくないですよ・・・」
「ごめん・・・ッ！　本当に・・・ッ！　ごめん・・・ッ！」
「・・・謝らないで・・・ください・・・少佐は・・・何も・・・悪くないんですから・・・」
「・・・でもッ――」
それ以上、言葉は出なかった。
大和は、彼の口を塞ぐようにして、自らの唇を彼の唇に押し付けた。
いきなりキスされた翔輝は驚くが、すぐにそれは離れた。彼女を見ると、頬を赤らめながら小さく微笑んでいた。
「・・・言葉なんて・・・いりませんよ・・・私は・・・少佐の想いがあれば・・・それでいいんです」
「大和・・・」
「えへへ・・・少佐とのキスは・・・幸せな味です・・・」
本当に嬉しそうに言うので、翔輝は照れてしまう。照れ隠しのように苦笑いし、頬を掻くと「僕は血の味だったけどね」と冗談交じりに言った。すると、大和は本当にすまなそうな顔をして「すみません・・・」とつぶやいてしゅんとしてしまう。これには翔輝は大慌て。
「いやッ！　別に嫌だって訳じゃないんだッ！　今のは冗談でその――」
「わかってますよ・・・冗談です・・・」
そこで初めて、自分が彼女にからかわれていた事に気づき、翔輝は顔を真っ赤にさせるとプイッと視線を逸らす。
「ったく、からかうなよ」
「・・・えへへ――でも、やっといつもの少佐に戻りましたね」
「え？」
振り向くと、彼女は優しげな笑みを向けていた。血に汚れていて

も、それでも彼女の清らかな笑みは変わらず、美しい。
「・・・やっぱり・・・少佐は笑顔が一番です・・・それは・・・陸奥さんや霧島さん・・・榛名さんや長門さん・・・葛城や隼鷹・・・隼鷹や・・・武蔵も・・・そう思っているはずです・・・もちろん、私も」
「大和・・・」
「・・・少佐の笑顔が見れて、私は幸せです」
その言葉に、翔輝は何か違和感を感じた。そしてそれはすぐに、不安に繋がり、彼女の言葉がそれを確信に変える。
「――もう、ここまでみたいです・・・」
「大和・・・ッ！　何を言って・・・ッ！」
「・・・もう・・・力が残って・・・ないんです・・・」
この時、『大和』は先程の右舷側の機械室とボイラー室の注水で速力が落ち、がんばっても六ノットまでしか速力を出せなかった。低速になった『大和』に、敵雷撃機はとどめとばかりに一斉に横へ並んで低空水平飛行で左舷から迫って来る。もはや『大和』には、それを避ける力は残されてはいなかった。さらに、見張り兵の壊滅から、『大和』はその敵機の接近に気づかない。気づいた時には、敵機が一斉に魚雷を投下した後だった。
一斉に放たれた魚雷のうち、一本がまるで引き寄せられるように『大和』に迫る。そして・・・

ズドオオオオォォォォォンッ！

「がああああぁぁぁぁぁッ！」
左舷中部に魚雷が命中。大和は今まで以上の悲鳴を上げて大量の血を体から噴き出し、血を吐き、ぐったりと彼の腕の中に倒れた。
「大和ッ！　おいッ！　しっかりしろッ！　おい――って、うわぁッ！？」
翔輝は突如として急激に傾く感覚に驚いた。

――『大和』が、倒れる・・・ッ！？

とどめの一撃となったその魚雷は、ボロボロであった左舷中央部に命中。大量の海水が艦内に浸水し、『大和』は急激に傾斜した。

六度であった傾斜は、あっという間に十度・・・二〇度・・・三〇度と大傾斜した。

激しい傾きに、『大和』の左舷はついに海に洗われた。滑り台のようになった甲板の上を、兵達が必死の抵抗も空しく流れていく。人も、死体も、機銃も、弾薬も、全てが冷たい海に投げ出される。敵機は容赦なくその甲板に向かって機銃を掃射する。落ちるだけの兵達はそれを避ける事もできずに受け、次々に命を落とす。

自らの重さに耐えられず、主砲が勝手に左舷に砲身を向ける。

さらに傾斜は増し、ついに右舷の喫水線以下の赤い艦底部分が海面に姿を現した。

世界最大最強と謳われた戦艦『大和』は、左に五〇度以上も傾斜し、炎を身に纏うその姿は、もはやその勇姿を感じさせないものとなっていた。

傾いた艦橋の中、伊藤はじっと空を飛び回る敵機を見詰めていた。そんな彼に、そっと森下が近づく。

「長官。もうこの辺でよろしいんではないですか？」

森下の言葉に、伊藤は静かにうなずいた。

「艦長に総員退去を発令するように言ってくれ。それと電信室に連絡。残存駆逐艦に乗員の救助を要請せよ」

『了解ッ！』

伝声管が使えないので、伝令が走った。

残された者達は無言であった。中には泣き出す者もいたが、誰もそれを怒ったりする者などはいなかった。

伊藤はただ、傾く『大和』を見詰めた。そんな彼の後ろで、森下が唇を噛んだ。

「結局俺は・・・何にもできなかった・・・ッ！」

森下の口から出た悲しく辛そうな声に、伊藤は一度彼に振り向い

た。そこにいたのは、頼れる森下参謀長ではなく、守ると決めたものを守れなかった、戦に破れた男がいた。その表情は今にも泣きそうな、悲しくて、苦しげなもの。

トン・・・

森下は肩に置かれた伊藤の手に驚いて、顔を上げた。そこには、森下が信頼する第二艦隊司令長官伊藤中将の姿はなく、優しげな表情をした、伊藤整一という一人の男が立っていた。

「・・・私達の役目は、終わった」

その言葉に、森下は耐えられず涙を流した。そんな彼を一瞥し、伊藤は自分を見詰める皆を見回す。その中には、翔輝の姿もあった。

伊藤は一度瞳を閉じた後、ゆっくりと開いた。

「みんな、残念だった。そして、ご苦労だった」

伊藤の言葉に全員が見事な敬礼をした。

この瞬間、水上特別攻撃隊こと第二艦隊の作戦は正式に中止された。

自分達の役目は、終わったのだ。

皆、沖縄へ行くという目的を達成できず、悔しそうに唇を噛み、床を叩き、涙する。

そんな彼を見回し、伊藤はそっと歩き出す。その先には翔輝――いや、大和がいた。

伊藤は涙目の翔輝を一瞥し、彼が必死に抱き締める見えない彼女を見詰める。

「・・・すまない大和。愚将伊藤を、許してくれ。そして――ゆっくり休め」

その言葉に、翔輝はキュッと唇を噛み、彼の腕の中の大和は小さくうなずいた。

伊藤は静かに立ち上がると、再び歩き出す。参謀達の制止を振り切りって一人長官室に入って行った。そして、その扉は二度と開く事はなかった・・・

有賀はすぐに総員退去を命じた。

ここに、実に二時間にも渡った戦艦『大和』の長く苦しい戦いは、
ついに終わりを迎えた。

第十四章　第十二節　大和の最後の戦い　彼がいればどこまでも・・・（後書き

中間テストも終わり、一週間ぶりの投稿です。
今日は１０月２５日。昨日は武蔵の命日。今日は瑞鶴、瑞鳳、扶桑、山城の命日です。
レイテ沖海戦から６４年。あの激闘はもうそんな過去のものになってしまったんですね。
さて、今回はいつものノリのあとがきはなしです。あのノリはもう本編が重過ぎて対処し切れませんから。
今回は甲板の戦闘も書いてみましたがどうでしたでしょうか？　今までにない手法なのでちょっぴり心配です。
二時間の激戦の末、戦艦『大和』はついに倒れました。
妹艦『武蔵』に比べて被害が少ないのに倒れたのは、米軍側の左舷への集中攻撃によるものでした。片側だけを狙われた『大和』は、ついにその巨艦を維持し続ける事ができなくなってしまったのです。
連合艦隊の象徴として、大艦巨砲主義の頂点として、大日本帝国の最後の希望として、『大和』は特攻任務を引き受けて沖縄へ旅立ち、その途中で敵機の攻撃を受け、ついに力尽きました。
僚艦『矢矧』も壮絶な戦没をし、旗艦である『大和』も、いよいよ最期の時を迎えようとしてます。
そして、そんな『大和』の艦魂である――大和もまた、その短き命を終えようとしていました。
開戦直後に竣工し、その直後に彼女は翔輝と出会いました。以来、太平洋戦争中の三年半の間、彼女の隣にはいつも翔輝がいました。
翔輝は優しい。その優しさに引かれて多くの艦魂が彼を好く中、彼女もまた翔輝の事が好きでした。好きだからこそに嫉妬したり、ケンカしたり、泣いたり、笑ったり。色々な思い出を作りながら、彼女は生き続けました。
何もできず、仲間達を失ったミッドウェー海戦。

空母を守る。仲間を守ると決意して挑んだ決戦に破れ、多くの仲間を失ったマリアナ沖海戦。
日本を守る為、死ぬ覚悟で突撃をし、妹や多くの仲間を失い、そして敗北したレイテ沖海戦。
そして、愛する祖国を守る為、命を捨てての最後の戦い――坊ノ岬沖海戦。
多くの戦いを経験し、妹や、多くの仲間を失いながらも、彼女の隣にはいつも彼がいました。
彼がいたから、彼女は戦い続ける事ができたのです。
わずかな仲間と共に、特攻隊として出撃した大和。敵機の空襲を受けて次々に仲間達が死んでいく中、彼女も必死に戦いました。
襲い来る敵機に恐怖しても彼がギュッと握ってくれた手。それだけを信じ、戦いました。
魚雷や爆弾を受け、傷つき、血にまみれ、激痛に耐えながらも、彼が隣にいる。彼が一緒に戦ってくれている。そんな確かな事実が、彼女を支え続けました。
しかし、ついに大和は倒れました。
血にまみれ、愛する彼の腕の中でその激動の艦生を終えようとしている大和。
そんな彼女を必死に抱き止め、ずっと支え続けた翔輝。
彼らの戦いは、ついに終わりを迎えたのです。
明日、次話を投稿したいと思います。
次回はついに大和死す。
沈み行く超弩級戦艦『大和』の上で、翔輝と大和の最後の物語が展開されます。
どうか、大和の最期を、皆さんで看取ってあげてください・・・

第十四章　第十三節　さよなら大和　繋がれた愛の絆は永遠に（前書き）

長く続いてきた《艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～》。そのメインヒロインである大和がついに壮絶な戦いの末に、命を落とします。
残された時間はあとわずか。
大和と共に死を選んだ翔輝は、傷つきボロボロになった彼女を抱き締め続ける。
しかし、大和の想いは・・・
翔輝と大和の最後の物語、どうか恋姫大和の最期を皆さんで見守ってあげてください。

第十四章　第十三節　さよなら大和　繋がれた愛の絆は永遠に

総員退去。

それは艦の終わりを意味する、艦長が命ずる最後の命令。

沈み行く艦を捨てて、明日の戦いに備えて生き残れ。そんな命令であった。

初めて『大和』に乗り込んだ兵は、この『大和』にはそんな命令は不要であると信じて疑わなかった。

なぜなら、『大和』は不沈艦。決して沈まぬ戦艦だと信じていたからだ。

だが、その『大和』にもついに総員退去の命令が下り、世界最大最強と謳われた戦艦『大和』は、もはやその勇姿は残されてはいなかった。

甲板は破壊され尽くし、高角砲や機銃は壊滅状態。傾斜した坂を、兵達が必死の抵抗も空しく流れていく。

生き残った雪風、磯風、冬月、初霜、霞の五人は、炎上しながら大傾斜する『大和』を見詰め、必死に悲鳴のような声で彼女の名を叫んだ。

だが、ついに『大和』のマストから軍艦旗が降ろされたのを見て、少女達は絶句した。

――大和はもう、死を迎えようとしていた。

大きく傾いた艦橋の中、森下はタバコを一本吸いながら艦と共に死のうとしている兵達を殴り飛ばしていた。

「参謀長ッ！　私は『大和』と共に――ぐあッ！」

「そんな減らず口を利ける力があるなら泳げッ！　そして明日の日本の為に生きろッ！」

森下は艦と運命と共にするという前時代的な考えは嫌いだった。

確かに艦と運命と共にするのは美徳かもしれない。だがそれは同時

に優秀な人材を犬死させるという事にもなる。何より、死ぬなんて事は絶対に許されるはずがなかった。

「総員退去だッ！『大和』と共に死ぬなんて考える奴は俺が殴り飛ばすッ！　急げッ！」

森下の命令に兵達は慌てて艦橋を飛び出す。その時、森下は一人伝声管に縄で体を括り付けている有賀を見た。

「有賀・・・」

「森下・・・若い奴らは任せたぞ」

そう言う有賀は体中から血を流していた。危険な露天防空指揮所にいた彼は、敵機の機銃を受けて今にも死んでしまいそうな状態だった。

森下はそんな死に掛けた同期の姿に静かに敬礼すると、今度は艦橋の隅にうずくまる翔輝と、そんな彼の腕の中で血まみれでぐったりとしている大和を見た。

森下は、彼にだけは鉄拳制裁で艦を降りろとは言わなかった。なぜなら、大和の瞳がじっと自分を見詰め、その瞳に彼女の決心を知ってからだ。

森下は小さくうなずくと、見事な敬礼をして艦橋を飛び出した。爆音に混じって聞こえる彼の「生きろッ！」という怒号が、大和には心地良かった。

艦橋には有賀や森下の鉄拳制裁を喰らっても『大和』と共に運命を共にすると覚悟した兵達がまだ大勢残っていた。

皆、『大和』と運命を共にするつもりなのだ。

大和はぐったりとする体を翔輝に預けながらそんな光景を悲しそうに見詰める。その時、頬に温かい何かを感じた。

それは涙だった。

自分を抱きかかえてくれている彼は、恥じる事なく嗚咽交じりに泣いていた。

大和を守れなかった。そんな悔しさと苦しみ、悲しみが翔輝を暗く包み込んでいた。

結局、自分は無力だった。
苦しむ彼女を支える事はできても、助ける事はできなかった。自分の腕の中で血にまみれてぐったりとする彼女を、救う事ができなかった・・・
翔香の時もそうだった。
自分は何もできず、彼女の死を見届ける事しかできなかった。
何もできない自分が嫌で、必死に生きて来たのに、結局その努力は全て徒労に終わった。
守ると決めた彼女を、守れなかった。
彼女を殺すアメリカは憎いが、それ以上に自分の無力さが憎い。
何もできない自分の存在が、嫌で仕方がなかった。
何もできなくて、ただ泣く事しかできない自分が、嫌だった。
約束したのに。
日本に生きて帰ると約束したのに、結局それは守られなかった。
そんな泣き崩れる翔輝を、大和は悲しげに見詰めた後、そっとその頬を優しく撫でた。手の甲を、彼の涙が伝う。その温かさにも、彼の存在を感じた。
「少佐・・・泣かないでください・・・」
「だって・・・約束したのに・・・守れかった・・・ッ！」
「仕方が・・・ない事です・・・生きて帰る事はできない・・・特攻作戦なんです・・・から・・・」
大和の言葉に、翔輝は愕然として泣くしかできなかった。
自分には彼女を苦しめる事しかできなかったのだ。彼女の苦しみを、自分は救う事ができないのだ。
自分の無力さが悔しくて、翔輝は泣き続けた。そんな泣き続ける翔輝に、大和は静かに声掛ける。
本当はこんな事言いたくない。でも、言わなきゃいけない。自分の弱い部分を押さえ込み、彼に向き直る。
「少佐・・・もう・・・私の命は・・・長くないです・・・」
「大和・・・ッ！」

翔輝はぐったりとしている大和を抱き締める。その震える肩を、大和もそっと抱き返す。

しばし翔輝は嗚咽を続ける。情けないと自分でわかっていても、涙は止まらない。悲しみは消えない。

そんな彼を、包むように大和はそっと抱き締め続ける。

翔輝にもわかっていた――大和の命はもうないと。

残り少ない時間、せめて彼女の為に笑っていたい。例え無理な笑顔でも、泣いているよりはずっとマシだった。

「・・・あぁ、よくやった」

翔輝は涙を拭うと、腕の中の彼女に向かって小さな笑みを浮かべた。その笑顔はいつもの彼の笑顔に比べれば弱々しいが、それでも、大和にとっては掛け替えのない、大好きな彼の笑顔に変わりはなかった。

「えへへ・・・私・・・ちゃんと・・・責務を果たしましたよ・・・」

「あぁ、よくやった」

「・・・それに・・・少佐と・・・一緒に戦いました・・・」

「そうだな」

「・・・私は、少佐が好きです」

「僕もだ。僕も、大和が好きだ」

翔輝の偽りのない真っ直ぐな言葉に、大和は嬉しくなって漆黒の瞳から煌く涙をほろりと流した。

大和は小さな笑みを浮かべ、翔輝を見詰める。

そこにいるのは、自分が大好きな彼。ずっと一緒にいたい。ずっと隣にいてほしい。ずっと、自分を見ていてほしい。そう思える大切な人だ。

彼がいたからこそ、自分はここまで来れた。

いつからだろう。彼の事を特別な人と思うようになったのは――いや、違う。会ったあの瞬間から、自分は彼の事が好きだった。

雪降る呉の港に浮かぶ最新鋭戦艦である自分に、声を掛けてくれ

たのが彼。冷たい雪も空気も、彼が優しく自分を包み守ってくれた。
あの時に感じた温もりは、今でも忘れない。
あの瞬間、自分達の物語は始まり、こうしてここまで来れたのだ。
仲間が死んでいく中でも、武蔵が死ぬ時でも、自分が死ぬかもしれないという時も、そして今も、彼がずっと自分を支えてくれた。
戦争という悲しみの世界の中、彼がいたからこそ、自分は真っ直ぐと生きて来れた。
自分の艦生は、幸せだったと思う。
たくさんたくさん悲しい事、苦しい事はあったけど、武蔵や多くの仲間達、そして彼がいてくれた。みんなが多くの幸せをくれた。
そして何より、みんなの存在、翔輝の存在こそが、最高の幸せであった。
戦争なんか関係ない。だって自分は、平和な世界を知らないから。
戦中生まれの自分は、戦争のない世界を知らない。だからこそ、これが自分にとって普通の世界なのだ。その中で生きた自分は、きっと平和な時を生きた人から見れば悲しいかもしれない。でも、自分は幸せだった。
心の片隅に、一度でいいから艦隊決戦がしたかったなぁという、世界最大最強の戦艦としての誇りがあった。それを見つけて、大和はおかしくなった。いくら普通の女の子に装っても、結局自分は戦艦の、兵器の魂なのだ。
それでも、兵器の魂である自分は彼を愛した。そして、彼も・・・
「少佐――いえ、翔輝さん」
今までもずっと言って来た。でも、これが最後だから。もう言えなくなってしまうから、言うなら今しかない。改めて、彼に、今言おう・・・
「私、翔輝さんに会えて幸せでした」
「僕もだ。大和と一緒にいれて、良かった」
翔輝の言葉に、大和は嬉しくなる。そして、自分の想いを、改めて彼に伝える。

「翔輝さん・・・」
大和は頬を赤らめ、愛する彼に自分の想いを伝える。
「あなたを――愛しています」
「あぁ、僕も愛してるよ」
翔輝も優しげな笑顔で答え、二人は優しく笑い合ったまま互いの顔を近づけ、そっと唇を重ねた。
彼にキスをしながら、ふとこのまま舌を入れたらどうなるんだろうと考える自分がいて、慌ててその考えを外に押し出す。
自分がしたいのは、純粋なキスなのだ。
大人のキスとかちょっとエッチなキスではない、ただ愛しているという想いを伝え合うだけの、穢れのない、純愛のキス。
二人はお互いの存在を確認し合うようにキスを続ける。
こんなに長い時間、キスをした事は今までなかった。まるで、これから一生分を味わうように、二人のキスは長い。
そしてようやくキスを終えて互いに顔が離れると、二人とも顔を真っ赤にしていた。結局どちらも純粋なのだ。
お互いに赤い顔であったが、恥ずかしさが徐々に薄れると、嬉しさが込み上げて来て、二人は嬉しそうに笑みを浮かべる。
そんな彼の見詰めながら、大和は今まで生きてきた三年半の思い出を振り返る。
開戦直後の雪降る呉で、自分は彼と出会った。
彼の優しさに心を引かれ、彼の傍にいるようになった。
多くの艦魂が彼のまわりに集まり、時にはやきもちを焼いて彼や他の艦魂とケンカした事もあった。
平和な時の中、みんなや翔輝とたくさん幸せな思い出を作った。
戦局の悪化から仲間達がどんどん死に、何もできない自分だけが安全な場所にいて生き残った。
そして今日、自分はその激動の艦生を終えようとしている。
振り返っただけでも、大和は少し悲しくなった。
「私達の出会いは・・・戦争で始まり・・・別れも戦争でなるなん

て・・・皮肉なものですね・・・」
「あぁ、もっと違う時代に出会いたかったよ。そうすれば――」
翔輝の言葉に、大和は小さく首を横に振った。
「いえ、私はそう思いません・・・だって、だからこそ翔輝さんと出会えたんですから・・・平和な時代だったら・・・もしかしたら・・・翔輝さんとは・・・会えなかったかも・・・しれません・・・」
大和の言葉には翔輝もうなずくしかない。戦争になったからこそ自分は『大和』に配属され、彼女と出会えた。これは紛れもない事実なのだから。
「それもそうだね。何か複雑な気分だよ」
「私もです・・・でも・・・いい事も悪い事も・・・たくさんありましたけど・・・いい艦生だった・・・そう思えます・・・だって・・・とっても幸せだったから・・・」
大和は本当に嬉しそうに微笑む。その笑顔には多くの幸せがあり、そのひとつひとつが彼女の激動の艦生の幸せなのだろう。
そんな自分の生きた事を幸せに思う大和の一方、翔輝は苦笑いする。
「僕は、どうだろ？　よくわかんないや」
「翔輝さんの人生は・・・波乱万丈でしたから・・・一概には・・・言えませんね・・・」
「でも、大和との出会いは幸せな事だと思う」
「それは私も同じです」
大和の言葉に、翔輝は優しく微笑んだ。
自分の事を優しく抱き締めてくれる彼。この温もりを感じていられるのも、あとわずか。自分の本体はもう転覆するのではないかと思えるくらいに傾いている。不沈艦とまで言われた自分も、どうやらもう持ちそうにない。
大和は、ずっと心の中にしまっておいた最後のお願いを、彼にする事にした。
「翔輝さんにお願いがあります」

「お願い？」
翔輝は不思議そうに彼女を見詰める。そんな彼の視線を真っ向から受け、大和は懇願するように彼にお願いする。
「――フルートを吹いてもらえませんか？」
「え？」
そう、それは大和がずっと言いたくて、でも言えなかったお願い。
彼はフルートがうまいらしい。聴いた事はないが、あの変態ではあっても音楽にはエキスパートである滝川が絶賛したほどの腕前だ。ぜひとも聴いてみたかった。でも、それは今まで言えなかった。なぜなら、彼は翔香の思い出と共にそれを封印したから。
フルートは、彼女の為に練習して上達したものだったから。
だから、彼は一度も吹いてくれる事はなかった。
でも、せめて一度だけ、最後に一度だけ、聴いてみたかった。
「・・・ダメ・・・でしょうか・・・？」
大和は不安そうに彼を見詰める。
断られるかもしれない。そんな不安が大和の表情を暗くする。だが、翔輝はそんな彼女を見詰め優しく微笑むと彼女の頭をそっと撫でた。
「いいよ。吹いてあげる」
その言葉に、大和の表情がぱぁっと明るくなる。
「ほ、本当ですか？」
「あぁ、もちろんさ」
「嬉しいです・・・」
本当に嬉しそうに微笑む大和を見詰め、翔輝は笑った。
どうせこれが最後なのだ。封印していても意味がない。
大和は笑みを浮かべながら残った力でフルートを発現させた。銀色の、シンプルなものだ。そもそも大和はフルートにはあまり詳しくないので、これくらいが限界なのだ。
大和は発現したフルートを彼に渡す。
「あの、変じゃないですか？」

初めて発現したので少し不安だった。でも、彼は優しく微笑みながら首を横に振る。

「大丈夫。ちゃんとできてるよ」

その言葉に、大和は安堵して笑みを浮かべる。

迷う事なく、翔輝はフルートを口に付ける。たった一人の観客に向かって、生涯最後と決めた演奏を始めた。

その優しげな音色に、大和は嬉しそうに微笑み、涙した。

こんな優しい音を最後に聞けるなんて、自分は最高の幸せ者だと思えた。

翔輝の吹くフルートは艦魂が作り出した物なので常人には聞こえないはず。だが、この時だけはなぜか聞こえた。

後に『大和』沈没の逸話の一つになる、大和の音色と呼ばれる話の原因だ。

戦いに傷つき、もはや沖縄に行く事も日本に戻る事もできなくなり、ただ燃えながら浮かぶ『大和』から響く優しげな音色。その音色に、多くの将兵達が涙した。米兵達も、燃える敵戦艦から響く音色に攻撃の手を止めていた。

そして、生き残った艦魂達もまた、その音色に涙を堪えられなかった。

――それはまるで、『大和』の最後の声に聞こえた。

翔輝の演奏はそんなに長く続かなかったが、それでも大和は十分だった。

「ありがとうございます・・・」

大和は心からの感謝の言葉を言う。そんな彼女に、翔輝は小さく微笑む。

「いいんだよ。これくらいしか僕にはできないからね」

「そんな事ありませんよ・・・」

大和が笑った瞬間、ついに巨体を維持できなくなった『大和』はさらに左へ傾く。横転するのも時間の問題。もはや『大和』は沈もうとしていた。

沈もうとする『大和』の艦橋で、翔輝は死を迎えようとしている愛する彼女を抱き締め続ける。その温もりが尽きるまで、こうしているつもりであった。

その時、彼女の体が柔らかく光り始めた。それはいつも彼女達艦魂が能力を使う時に出す光ではない。まるで、静かに失われていく、そんな光だった。

「大和・・・」

「・・・もう、時間ですね」

その言葉通り、光の粒子を天に昇らせながら大和の体が、半透明になっていく。彼女の背中を抱きかかえる自分の手が、彼女を通して見え始めた。

――大和は、消えようとしていた。

いよいよ最期。

翔輝はもう覚悟を決めていた。そして、その時を待つ。

「大和、一緒に逝こうな・・・」

「翔輝さん・・・」

翔輝は覚悟した。愛する彼女と共に、最後の瞬間まで傍にいようと。

瑠璃や瑪瑙、珊瑚には悪いが、これが自分の出した結論であった。

これでいい。

翔輝はただ、大和からの返事を待った。

――だが、大和の決意は翔輝とは正反対なものであった。

「――ダメです、翔輝さん。今すぐ、退艦してください・・・」

「え・・・？」

翔輝は絶句した。

待っていた彼女からの返事は、自分の決意を真っ向から否定するものであった。

驚きのあまり言葉を失って大和を見詰める翔輝。その視線の先にいる彼女は、真剣な瞳で自分を見詰めていた。

「・・・翔輝さん・・・生きてください・・・あなたには・・・待

ってくれる人が・・・たくさんいます・・・だから・・・日本に・・・帰ってください・・・」

「な、何言ってんだよ・・・ッ！」

「・・・少佐には・・・生きてほしいんです・・・だから・・・早く・・・退艦して・・・ください・・・ここで・・・お別れです・・・」

大和は自分を抱き締める翔輝の胸をトンと押す。その力は片手一つで簡単に弾かれてしまうような弱々しいものだったが、翔輝にとっては、心を思いっ切り突き放されたような、絶望感へと変わった。

「・・・さぁ・・・早く行ってください・・・」

「バカな事言うなよッ！　僕一人だけ逃げられる訳ないだろッ！　僕も一緒にお前と死ぬッ！　最後まで一緒にいるぞッ！」

翔輝の必死な言葉に、大和は嬉しくなるが、その想いを全て否定し、そっと彼を見詰める。

「・・・そんな事・・・言わないでください・・・翔輝さんには・・・生きてほしいんです・・・それが・・・私の願いなんですから・・・」

そう言って小さく微笑む大和は、淡い光に包まれながら徐々に消えていく。半透明になってやがて消えてしまう彼女に、翔輝は必死に叫ぶ。

「できないよッ！　僕はお前と一緒に最後までいたいッ！　何でわかってくれないんだ！」

「・・・わかってますよ・・・胸が苦しくなるくらい・・・わかってます・・・でも・・・だからダメなんです・・・私も・・・翔輝さんに生きてほしい・・・この気持ちは・・・私の本当の気持ち・・・なんですから・・・」

「大和・・・」

翔輝は泣きそうになる。

こんなにも彼女と一緒にいたいのに、彼女はそれを望まない。自分だけ生き残れ。そう言っている。だが、そんな事できるはずもな

いし、したくもない。
「今更退艦しても遅いさ。艦橋から甲板に出るまでに沈むだろ？運良く海に飛び込めても沈没時の渦や爆発に巻き込まれたらそれで終わりだ・・・もう遅いさ」
違う。
こんなのはただの言い訳だ。
わかっている。自分の本当の想いは、ただ純粋に彼女と一緒にいたい。そう願っているだけ。でも、こうでも言わないと、彼女は聞いてくれない。そう思った。
だが、大和はそれでも首を横に降る。
「・・・大丈夫です・・・翔輝さんは・・・死んでいった武蔵達が・・・守ってくれますから・・・」
翔輝はハッとして自分の腰に挿した武蔵の形見の軍刀を見詰める。
――・・・私は・・・私の愛した人に・・・生きててほしい・・・それだけが・・・私の願いなの・・・――
武蔵の死ぬ間際の必死の言葉を思い出す。
彼女も、自分が生きてほしいと願っていた。必死になって、生きてほしいと。
どんなにケンカばかりしていても、結局二人は姉妹なのだろ改めて思った。
武蔵の軍刀の柄をギュッと握り、翔輝は消え行く大和を見詰める。
「僕は大和と一緒にいたい。それは、ダメなのか？」
「・・・ダメです・・・私は翔輝さんに生きてほしい・・・そして・・・翔輝さんには・・・待ってくれている人がいます・・・だから・・・生きてください・・・私の分まで・・・生きて・・・ください・・・」
「そうか・・・」
翔輝は覚悟を決めた。
本当はこんな事したくないのだが、仕方がなかった。
翔輝は武蔵の軍刀を引き抜くと、その鋭い刃先を自らの腹に振り

下ろす――だが、その刃先は寸前で止まってしまった。
振り下ろそうとする手を、大和が必死になって掴んでいた。
「・・・何を考えているんですか・・・ッ！」
血を吐きながら、大和は怒りの声を上げる。こんなにも怒った彼女を見たのは初めてだったが、翔輝はひるまずに彼女の手を振り払おうとする。
「放してよッ！　こうすれば僕も一緒に死ねるッ！」
「・・・バカな事は止めてください・・・ッ！」
「何でだよッ！　何で一緒に死なせてくれないんだよッ！」
「・・・命というものを・・・無駄にしてはいけません・・・ッ！
翔輝さんには・・・まだやるべき事があるんです・・・ッ！」
「そんなの知らないよッ！　僕はお前と一緒に――」
怒鳴り散らす翔輝の唇に、大和は自らの唇を押し当てた。
一体何度されたかわからないこの究極の口止め。翔輝はまたも勢いを止められてしまった。
唇をそっと離すと、大和は瞳からポロポロと涙を流す翔輝を見詰める。
「・・・翔輝さん・・・愛してます・・・世界で一番・・・誰よりも・・・」
「大和・・・」
翔輝の腕の中、大和は消えていく。光の粒子が淡く光りながら天に昇っていく。すでに彼女はもう半透明を通り越してほとんど消えかけていた。彼女の背に回した自分の手が、はっきりと見える。彼女の足は、すでに膝から下が消えていた。
もう、終わりであった・・・
翔輝はそんな彼女を必死に抱き締める。
離すもんか。そんな想いを込めながら抱き締める彼に、大和は小さく微笑む。そして、彼の唇にもう一度、最後のキスをする。
もうほとんど感触がなくなっている。翔輝は必死に彼女を抱き締めて、体全体で彼女を感じようとする。だが、それでも、彼女の存

在は消えていく。
――そして、
「・・・これが・・・私に残された・・・最後の《力》です・・・」
大和の言葉の直後、翔輝の体がまばやく光り始めた。それに気づき、大和の意図を察した翔輝は必死になって抗う。
「お前・・・ッ！　僕をどこかに転送するつもりか！？　やめろッ！　やめてくれッ！」
翔輝は必死になって彼女に手を伸ばすが、ついにそれは彼女の体を通り抜けた。
・・・もう、触れる事も、できないのだ・・・
光と共に浮遊感が身を包み、翔輝の体は宙に浮く。必死に抵抗しても、その浮遊は止まらない。そして、自らを包む光も・・・
翔輝は見た。
大和が、泣きながら、それでも最高の笑顔を自分に向けている事に・・・
「・・・翔輝さん・・・さようならは・・・なしですよ・・・だって・・・またいつか・・・会えると・・・信じてますから・・・」
「大和ッ！　大和ッ！」
翔輝は必死に手を伸ばし、彼女の名を叫ぶ。
大和は光に包まれて消えていく翔輝を見詰め、優しく笑い続ける。
「・・・翔輝さん・・・またいつか・・・お会いしましょう・・・」
「大和ッ！　やめてくれッ！　僕は、お前と一緒に・・・ッ！」
大和は涙を流しながらも彼女の人生で最高の笑みを、翔輝に向けた。それは兵器の魂である艦魂の笑みではなく――大和という、長谷川翔輝を愛する女の子としての、天使のような笑みであった。
「――その時は・・・人間になって・・・翔輝さんと本当の恋人に・・・なりたいです・・・」
「大和ッ！　大和おおおおおぉぉぉぉぉ――」
――翔輝の絶叫が艦橋に響いた刹那、翔輝は『大和』から消えた。
彼を包んでいた光の粒子が消え、そこに誰もいなくなった時、大

和はぐったりと倒れた。
もう、大和は消えようとしている・・・
大和の瞳から涙が零れる。
この三年半、自分は幸せだった。
雪降る呉の出会いから、全てが始まり、そして今終わろうとしている――いや、違う。これはまた、新たな物語の始まりなのだ。
終わりなんてない。
ただ、続くだけ。
これから、自分達の、また新しい物語が始まる。
今までの思い出を走馬灯のように思い出しながら、大和は笑った。
死ぬ前に思い出が走馬灯のように流れるのは、どうやら本当らしい。そんな事を考える自分がおかしくて、クスリと笑った。
そして、最後に浮かんだのは彼の優しげな笑顔。
ずっと自分を支えてくれた、あの笑顔だ。
そんな彼の笑顔に向かって、大和は幸せいっぱいの満面の笑みで、言葉を繋げる――
「大好きです・・・翔輝さん・・・」
その言葉を最後に、開かれていた彼女は瞳が、ゆっくりと・・・
閉じられた。

大傾斜していた『大和』を見詰め、雪風は言葉を失っていた。
彼女の視線の先で、『大和』が倒れていく。
天高く聳える黒鉄の城が、陥落していく。
それはまるでスローモーションのよう。
世界最大最強の戦艦が倒れていく。
艦橋が、ゆっくりと、傾いていく。
三基の主砲全てが重さに耐えられず左に倒れていく。
垂直になった甲板の上を、人や物が落ちていく。
連合艦隊の滅亡の姿が、そこにあった。
「司令・・・ッ！　長谷川さん・・・ッ！」

雪風は唇を噛んだ。
結局、自分は何もできなかった。
幸運艦――違う。自分は死神だ。
自分だけを生き残らせる為に、仲間を殺してきた。そしてその力は、ついに自分が尊敬する上官である大和を殺す事になった。
自分だけ生き残るなんて・・・ッ！
雪風は泣き続ける。
目の前で、今にも死のうとしているのは、自分が守ると決めた、大切な艦（ひと）。彼女がいたから、自分はここまで来れた。そして、あの中には、自分が愛し、そして大切に想っている彼もいる。
涙が止まらない。
守ると決めたのに、結局自分は何も守れなかった。
そして、決意を固めた十の戦姫達――十勇士は、ここに壊滅した・・・
雪風は、泣きながら自らの上官の最期の姿に向かって、敬礼する。
連合艦隊の象徴にして、最も尊敬できる上官――大和と、彼女に乗る、大切な彼に向かって――
「うわッ！？」
突如響いた声に驚いて振り返ると、雪風は驚きのあまり目を大きく見開いた。
――そこには、翔輝が尻餅を着いていた。
翔輝は辺りを確認すると、そこは『大和』ではなかった。
「ここはどこだッ！？」
「少佐ッ！？　どうしてこんな所にいるんですか！？」
雪風は驚愕の声を上げる。翔輝が振り向くと、そこには真っ青な顔いっぱいに驚愕の表情を浮かべている雪風がいた。
「ゆ、雪風ッ！？　何で君がここにッ！？」
「何言ってるんですかッ！　ここは『雪風』の甲板ですよ！」
「えッ！？」
雪風の言葉に驚き、翔輝は慌てて立ち上がると辺りを見回す。す

ると、遠く離れた海面に巨大な壁が見えた。それは壁でなく――転覆した『大和』であった。

「大和・・・ッ！」

翔輝は顔を真っ青にすると、何がなんだかわからなく混乱している雪風の肩を掴む。

「雪風ッ！　お願いだッ！　早く僕を『大和』に戻してくれッ！」

「そ、そんな事できませんよッ！」

「早くしてッ！　僕は大和と一緒に――」

その瞬間、『大和』はすさまじい大爆発を起こした。

二人の視界は全て真っ白な光に包まれて、耳が痛いほどの強烈な大爆音と内臓をグチャグチャにするようなすさまじい衝撃波に襲われる。

大爆発した『大和』は巨大な火柱と黒煙を上げながら艦体を真っ二つに折って海中に引きずり込まれていく。

白い波が、黒鉄の巨艦を吸い込んで行く。

そして、翔輝と雪風が次に目を開けた時には――もう『大和』の姿はなく、巨大な黒いキノコ雲が天空高くまで立ち上っていた。

その非現実的な光景に、翔輝は体中から力が抜けてその場に崩れ落ちた。

見詰める先には、《彼女》の姿はどこにもなかった。あるのは、彼女が死んだという事実を見せ付けるような、巨大な黒煙だけだった。

信じられなくても、信じなくてはいけなかった。

「『大和』が・・・沈んだ・・・？」

翔輝の口からわずかに漏れたその言葉は、翔輝から全ての希望を消し飛ばした。

もう、彼女はいない。

愕然とし、ただ目の前の光景を受け入れるしかない。

翔輝の心が、再び壊れようとしていた。

――ギュッ・・・

壊れ掛けた心を支えたのは、その柔らかな感触と、温かな温もりであった。

振り向くと、背中に雪風が抱き付いていた。その肩は震え、嗚咽が聞こえる。

泣き崩れる雪風に、翔輝は言葉を失う。

「良かった・・・ッ！　少佐だけでもご無事で・・・本当に良かったです・・・ッ！」

搾り出された彼女の声は、心からの声であった。

――・・・翔輝さん・・・生きてください・・・あなたには・・・待っててくれる人が・・・たくさんいます・・・だから・・・日本に・・・帰ってください・・・――

待っててくれる人。それは彼女もそうだった。

そう、自分にはまだ待っててくれる人がいる。

瑠璃、瑪瑙、珊瑚、長門、榛名、伊勢、日向、隼鷹、龍鳳、葛城、天城、多くの人達が自分の帰りを待っている。そして、雪風も・・・

まだ自分は、死んではいけない・・・

大和は、その為に自分を生かしたのだろうか。

今はまだ、よくわからない。

でも――

「雪風・・・」

泣きじゃくる雪風を、翔輝はそっと抱き締めた。

雪風は泣きながら翔輝に強く抱き付く。翔輝もそっと、彼女を抱き締め続ける。

自分は、彼女に生かされた。

この命は、もう自分だけのものではなくなっていた。

彼女の分まで生きる。それが自分に託された彼女からの頼みなのかもしれない。

だが今は――

翔輝は巨大な黒煙を見詰め、静かに涙した。

この悲しみだけは、まだ続く。

彼女が死んだ。その現実だけが残り、翔輝は一度キュッと唇を噛む。そして、辛そうな顔のまま、翔輝は立ち上る黒煙の下、海中深くに没した彼女に向かって、そっと言葉を繋ぐ。

「・・・さよなら・・・大和」

涙を流しながら静かに敬礼する翔輝を、雪風はただ泣きながら、ずっと見詰めていた。

――戦艦『大和』、日本海軍の象徴であった世界最大最強の戦艦。日本の戦艦造船技術の粋を結集させた『大和』は名実共に世界最強であった。太平洋戦争開戦直後に竣工した『大和』は連合艦隊旗艦に就任。米戦艦部隊との艦隊決戦を夢見てただひたすらにその時を待ち続けた。しかし大艦巨砲主義の頂点に君臨する『大和』だったが、時代はすでに航空機の時代に変わっており、『大和』は戦うべき場所を失った。多くの仲間達が滅び、妹艦『武蔵』が沈んでも、『大和』は生き残り続けた。そして、そんな『大和』に与えられた最後の任務。それは沖縄を救う為に水上特別攻撃隊として沖縄へ特攻しろという、祖国に見捨てられた任務であった。わずか九隻の艦艇を引き連れた『大和』は沖縄へ向かう途中に敵空母からの攻撃を受け、約二時間にも及ぶ激戦の末、十四時二三分に横転爆沈した。戦乱の時代に生まれ、儚く散った巨大戦艦と共に生きた一人の少女の存在を知っている者はわずかしかいない。その少女は平和を知らず、戦争をする祖国しか知らない。不安に押し潰されそうになった時、雪降る呉の海の上で、彼女は運命的な出会いをした。不安を拭い去って、自分を支えてくれた一人の少年士官。その彼と生きた時間は彼女にとって掛け替えのない大切な時間であった。彼のまわりには多くの自分と同じ艦魂達が集まり、少女は時にやきもちを焼き、時にケンカし、時に涙しながらも、ずっと彼の傍にい続けた。そして最期の時でも、彼はずっと自分の傍にいてくれた。しかし、少女は決意した。彼だけは生きてほしい、と。少女は嫌がる彼を親友に託し、一人で天国へ旅立っていった。光り輝く天国には、先に散っ

て逝った妹や仲間達が待っていた。少女は満面の笑みを浮かべると、彼女達に向かって走り出す。振り返りはしない。だって、彼なら大丈夫。そう信じていたから。少女――大和は、ようやく手に入れた平和に向かって、やっと会えた仲間達の胸の中に、笑顔で飛び込んだ――

第十四章　第十三節　さよなら大和　繋がれた愛の絆は永遠に（後書き）

世界最大最強の戦艦にして、日本海軍の象徴として生まれた戦艦『大和』。
太平洋戦争の間、ずっと日本海軍の心の支えとしてその頂点に君臨し続けたその不沈戦艦は、敗北しか道が残されていない日本を救う為に、特攻任務を引き受けて最後の出撃をし、その途中に敵機のすさまじい空爆を受け、一九四五年四月七日午後二時二三分、ついに力尽き沈没しました。
北緯三〇度四三分、東経一二八度四分。
戦艦『大和』は今も海底深くで眠っています。
そして、翔輝と大和の二人の物語は、ついに終わりを迎えました。
大和と共に死ぬ事を決意する翔輝。しかし大和は彼に生きてほしいと願いました。
血まみれでもはや立つ力さえも残されていない大和が最後の使った力。それは翔輝を生き残らせる為に使われ、翔輝は生き延びる事となりました。
そして、彼を安全な『雪風』に転送した後、まるでそれを見届けたかのように、大和は力尽きました。
わずか三年半という短い命を終え、大和は死にました。
この物語のメインヒロインとして、ずっと翔輝の横で笑い続けた少女は、ついに戦争という悲劇の時代の波に呑まれ、消えてしまいました。
大和は翔輝を愛し、翔輝も大和を愛した。
思想相愛な二人を引き裂いた戦争、しかしそれが皮肉にも二人を出会わせたのでした。
戦争という悲劇の時代を生き残って来た二人は、互いの存在こそが心の支えになっていました。
しかし、その片割れである大和が死に、翔輝は一体これからどうな

っていくのか。
残された雪風や磯風、霞、初霜、冬月達の運命は？
そして、『大和』を沈めたエンタープライズ達は？
次回は第十四章最後の物語、坊ノ岬沖海戦、ついに完結です。
生き残った雪風達。しかしその中からも脱落者が現れます。翔輝達は一体・・・
そして、意気揚々と『大和』を沈めたエンタープライズ達に驚愕の真実が。
次話、乞うご期待！

第十四章　第十四節　勝者と敗者　それぞれの道（前書き）

戦艦『大和』沈没。
旗艦であり作戦の要であった『大和』が沈んだ水上特別攻撃隊は作戦を中止した。
翔輝と大和。二人の物語はここで終わりを迎えた。だが、まだ翔輝と繋がりを持つ物語はいくつもある。
大和の死に苦しむ翔輝。だが、そんな彼を必死に支えようとする少女がいた――雪風。
雪風は必死に翔輝を励ます。自らも大切な妹を失い、尊敬する上官を失っても、彼を支え続ける。そんな親友を見詰める冬月。
翔輝は、雪風の気持ちに応える事はできるのか。
そして、必死に戦い抜いた二人の戦姫もまた、その命が尽きようとしていた。
一方、『大和』を沈めて意気揚々とするアメリカ艦魂達。だが、そんな彼女達を絶望に追い込む事実があった。
第十四章最終話、坊ノ岬沖海戦がついに終結します。
今回は史実とは大きく違った展開が待っています。それは一体？
十勇士の最後の物語をどうぞ。

第十四章　第十四節　勝者と敗者　それぞれの道

旗艦である『大和』が沈んでも、第二艦隊の戦いは続いていた。
敵機は海に投げ出された無抵抗な兵士達に向かって容赦なく機銃を掃射して来た。運良く脱出できた兵達は、次々に敵の凶弾に貫かれて絶命していく。
雪風、初霜、冬月の三人はそんな人の血など流れていないような敵に激昂し、使用可能全武装を弾が尽きるまで撃ち続けた。たった三隻の駆逐艦。米軍からすればそんなものであった。
――だが、相手は化け物であった。
海面に浮かぶ兵士達を機銃掃射してあざ笑う米軍機に、次々に神の雷の如き神罰の鉄槌を撃ち込む。それはすさまじい激戦であった。たった三隻に、なぜ十数機も撃墜されたのか、今でも米兵達はわからない。
ただ、数人のパイロットは見た。
駆逐艦の主砲の上で、怒り狂いながら刀や矛、弓を振り回す戦姫の姿を。
――ネメシス。
誰かがそう言った。
味方を多数やられ、残存敵駆逐艦を攻撃しようとした時であった。母艦群から撤退命令が下された。舌打ちして、米兵達は去って行く。去って行く敵機に、雪風達は容赦なく怒りの鉄槌の撃ち込み続ける。
鉛色の空に消えていく敵機を、雪風は許す事はできなかった。

鉛色の空の下の海を翔ける空母『エンタープライズ』の甲板にはエンタープライズ以下多くの空母艦魂が揃っていた。
「ついに『ヤマト』を沈めたッ！　クソジャップども思い知ったかッ！　貴様達の象徴は我がアメリカ空母部隊が沈めたッ！　アメリ

カに牙を向いた罰だッ！」
エンタープライズのテンションは最高潮であった。悲願であった日本の象徴である『ヤマト』を沈め、これ以上に嬉しい事はなかった。
大笑いするエンタープライズを見詰めるヨークタウンは、どこか悲しそうな顔をしていた。
「どうしたの？」
隣に立つレキシントンが不思議そうに訊いて来る。
「・・・海に投げ出された兵に機銃掃射したって、最低じゃない」
ヨークタウンは吐き捨てるように言った。その言葉に、レキシントンは沈黙し、隣にいるホーネットも悲しげな表情をしていた。
海に投げ出された日本兵に向かって機銃掃射がされているという情報はレイモンドの耳に入り、彼は激昂。ミッチャー中将にすぐさま撤退命令を下し、さらには厳罰命令まで下していた。
無抵抗な敵兵を攻撃するなど、正義ではない。
エンタープライズとエセックス達嫌日派はレイモンドに激昂したが、ヨークタウン、ホーネット、レキシントンという穏健派の艦魂はレイモンドと同意見であった。
エンタープライズ大好きっ子のホーネットもこの時だけはエンタープライズを嫌った。
無抵抗の敵兵を攻撃する。それは正義に反するし何より人道に反する。
自分達アメリカは、そんな事も忘れて成り下がったのだろうか。祖国なんて、信じられなくなっていた。
エンタープライズはそんなヨークタウン達にも気づかずに笑い続ける。
その時、雲の間から攻撃隊が帰って来た。
「英雄達のお帰りよ！　みんな歓迎してあげなさいッ！」
エンタープライズの言葉の後、艦魂達は手を振って戻って来た攻撃隊を迎える。だが、ヨークタウン達は手を振る事はなかった。

次々に着艦して来る攻撃隊を見て、エンタープライズは満足そうにうなずいていた。
――だが、それはすぐに絶望に変わった。

「何ですってッ！　もう一度言いなさいッ！」
エンタープライズは怒鳴りながら報告に来た駆逐艦の艦魂である少女の胸倉を掴み上げた。少女はあまりのエンタープライズの激昂に顔を真っ青にして恐怖する。だが、こういう時に助けてくれるはずのヨークタウン達も、彼女の報告に愕然としていた。
「もう一度言えッ！」
エンタープライズの怒号に恐怖しながら、少女は再び報告書を読み上げる。
「こ、攻撃隊の損害数は未帰還機８５機！　被弾甚大での破棄機４２機！　損害は計１２７機！　全体の３分の１を喪失！　戦死者１４２名！　戦傷者８６名！　被害甚大ッ！」
その報告に、エンタープライズは言葉を失った。
たかが１０隻の艦隊に、全艦載機の３分の１を喪失した。これは彼我の戦力差が圧倒的な場合での太平洋戦争史上最大の損害であった。
「た、たった１０隻の艦隊にそんなに撃ち落とされたの・・・？」
ヨークタウンは信じられなかった。これが空母を含めた敵機動部隊であったとしても、現在の日本機動部隊の戦力から考えてこれだけの損失機が出るなんて考えられない。しかもそれが戦艦を主軸にしたわずか１０隻の艦隊だとすれば、さらに信用はできない。
だが、それは現実であった。
ホーネットは死んでいったパイロット達に涙し、レキシントンは少女を解放するとその報告書を読む。何度読んでも、損害は甚大だった。
「敵は何か新兵器を使ったの？」
「いえ、パイロットの話では今までと同じ対空戦闘だったそうです」

少女の返答に、レキシントンは沈黙した。
「――ただ」
「何？」
「パイロット達は皆怯えているように見えました」
「怯え？」
「はい。たかが１０隻の艦隊なのに、まるで数千隻の大艦隊のような迫力を持ち、死に物狂いの対空砲火は味方機を次々に薙ぎ払い、今までで最も激しい反撃だったそうです。中には一瞬で３個小隊が撃墜された部隊もいるそうです」
少女の言葉に、ヨークタウンは身震いした。
たかが１０隻の艦隊でありながら、数千隻の大艦隊に匹敵する迫力。一体彼らは何者だったのか。一体どうして、そんなにも味方機がやられたのか。
「あと、気になる報告が」
「気になる報告？」
少女の言葉に、レキシントンは書類から視線を上げて彼女を見詰める。
「はい。艦魂が見える一部のパイロットからの話なのですが、敵の駆逐艦全ての前部主砲の上に敵の艦魂を見たという話がありました」
「敵の艦魂？」
レキシントンは報告書を見る。そこには敵艦隊の編成、戦艦１、重巡洋艦１（『矢矧』の誤認）、駆逐艦７隻と書いてあった。
「敵の艦魂は主砲の上で剣や槍、中には弓まで振り回して我がアメリカ機を次々に撃墜していたそうです。その姿は美しく、そして恐怖であった、と。中には彼女達をネメシスと呼んで恐れる者もいます」
「ネメシス・・・」
レキシントンは己が頭の中にある無数の知識の中からその単語を思い出す。
――ネメシス。それはギリシア神話に出て来る人間が神に働く無

礼に対する、神の憤りと罰の擬人化である女神の名前。つまり、神の怒り。

「ふざけるなッ！　何がネメシスだッ！　ふざけやがってッ！」

エンタープライズは怒り狂い壁を殴り付けた。そのすさまじい迫力に、ヨークタウンは恐怖する。

今の彼女は、本気で激昂していた。

「艦魂が見えるパイロットが数人戦死したようね。軽空母の艦魂と親しかった人もいたし、艦魂と恋人同士だった人も・・・」

レキシントンの言葉に、ヨークタウンはフェイトを思い出した。彼がもしパイロットで、しかもこの戦いに参加していたら、彼は生きていただろうか。

「お姉ちゃん・・・」

ホーネットは泣きながらヨークタウンの手を掴む。ヨークタウンもそっと彼女の手を握った。

「クソォッ！」

バンッ！　とエンタープライズは壁を蹴る。今にも怒り狂いそうなエンタープライズは鉛色の空を睨み、悔しそうに歯軋りする。

「ふざけやがってッ！　私達が望むのは完全なる勝利ッ！　ジャップなどアメリカの前じゃゴミくずだってわからせてやる圧倒的な勝利！　それが私達の求めるものなのに、こんな大損害じゃ勝ったなんて言えないわよッ！　どうして、どうして・・・ッ！」

エンタープライズは何度も何度も壁を蹴ったり殴ったりを繰り返した。その怒り狂う姿を見つめ、ヨークタウンはレキシントンに声を掛ける。

「彼女達は・・・トッコウだったのかしら？」

「わからない。でも、勝ち目のない戦いにこんな脆弱（ぜいじゃく）な艦隊で突っ込んで来たのを見ると、可能性はある」

「――死を覚悟したからこそ、彼女達は強かったのかな？」

「それはわからない。わかっているのは――私達は勝った。でもそれは、苦い勝利。ただ、それだけ」

「そうね・・・」

ヨークタウンはそれだけ言うと、怒り狂うエンタープライズを一瞥し、そっと鉛色の空の向こうを見詰める。

この先に、『ヤマト』は眠っている。

きっとあれは、日本海軍最後の出撃だったのかもしれない。だからこそ、象徴である『ヤマト』を突入させて来た。

最後の最後まで大艦巨砲主義を信じ続けた哀れな敵国。そんな国に振り回され、最後には見捨てられた戦艦『ヤマト』。彼女の想いは、どんなものだったのだろう。

「お姉ちゃん・・・？」

ホーネットの目の前で、ヨークタウンは見事な敬礼をしていた。その敬礼は、最後まで戦い抜いた『ヤマト』以下の日本艦隊に対する、同じ海軍軍人としての最上級敬礼であった。

「・・・どうか、安らかに眠ってね――ヤマト」

敵機が去った後、『雪風』『初霜』『冬月』の三隻は海に投げ出された兵の救出作業に追われた。

春のまだ冷たい海に投げ出された兵士達は、体温を奪われて次々に絶命して海に沈んでいく。一刻の猶予もなかった。

必死の救出作業で助けられた兵士達も、沈没した艦から漏れた重油にまみれていた。中には重油と海水を多量に飲んでしまい、死んだ兵士達もいた。

駆逐艦の乗組員達は救出した兵士達の重油を拭い取り、真水を飲ませたりと大忙しであった。それぞれの艦魂達も、必死に救出作業に参加。『雪風』に転移された翔輝も、必死に救出作業に身を削った。

助けられる命もあれば、助けられない命もまたある。

旗艦である『大和』沈没の二時間後、連合艦隊司令部から正式に

作戦の中止が命令された。
残存艦は生存者救出後に佐世保に帰投する事が決定された。
救出作業はとっくに山は越えていたが、それでもまだ続いている。
海に浮かぶ兵士達は、まだまだいるのだ。
そんな中、初霜は一人親友の所にいた。
傾斜して艦の右側を海に洗われて、ただ浮かぶしかできない『霞』。
もう日本に帰る力は、残されてはいなかった。
満身創痍の『霞』の艦橋に二人の少女がいた。
床に腰掛ける初霜の膝の上には、全身血まみれの親友――霞が倒れていた。
初霜は、何も言わずに親友の髪を優しく撫でる。霞はそれに小さく笑みを浮かべるが、咳と共に吐血し、苦しそうに顔をゆがめる。
「大丈夫？」
そう訊いて、初霜は心の中で泣きたくなった。
大丈夫な訳がない。こんなに血にまみれ、傷だらけなのに、大丈夫な訳はない。でも、それ以外に掛けてあげられる言葉が、なかった。
「・・・あぁ・・・生き恥は・・・まだ晒せそうだ・・・」
霞はそう言うといつものように不敵な笑みを浮かべる。その笑みに初霜は少しだけ安堵した。いつもの親友であった。
「もう、またそんな事言って」
初霜は小さく微笑む。だが、その笑みの奥にある悲しみは、深い。
霞も、そんな親友の本当の気持ちはわかっていた。
「・・・初霜・・・最期の最期まで迷惑を掛けて・・・すまんな」
「何言ってるのよ。気にしない気にしない」
いつもの明るい笑み。それだけで、霞は嬉しかった。例えそれが彼女が自分に心配を掛けまいと涙を堪えながら必死に搾り出した笑みであっても。
「・・・初霜」
「ねぇ、霞」

「うん？」
「――私達、負けてないよね？」
初霜はうつむきながらそう言った。その瞳からポロポロと流れる涙は、悔しさからなのか、悲しさからなのか、霞にもわからなかった。
「私達は勝てなかった・・・でも、負けてもないよね？」
初霜の言葉は愚問であった。
どう考えても、こちらの大敗北でしかない。勝利など、一欠けらもない。
だが、それでも初霜は負けたと思いたくないのだ。死んでいった彼女達を、無駄な死と片付けたくないから。
初霜の必死の懇願するような瞳に、霞は小さく笑った。
「・・・何を言ってるんだ・・・これは・・・我々の勝利だぞ」
その言葉に、初霜は目を大きく見開く。その視線の先にいる片目だけの親友は、微かな笑みを浮かべていた。
「本当？」
「・・・あぁ・・・私達は・・・未来の日本に・・・希望を繋ぐ事ができた・・・今回の作戦は・・・沖縄を救うのではなく・・・未来の日本を救う事・・・だから・・・私達の勝ちだ・・・戦術的に敗北しても・・・戦略的には・・・私達の勝利だ・・・」
霞の言葉に、初霜は泣きながら何度もうなずいた。霞を握る彼女の手は震えている。そんな彼女の手を、霞はそっと包み込んだ。
その時、霞は大きな咳と共に真っ赤な血の塊を吐いた。それを見て、初霜が顔を真っ青にする。
「霞ッ！　しっかりしてッ！」
「ゲホォッ！　ゴホォッ！　くぅ・・・ッ！　ど・・・どうやらもう・・・限界のようだな・・・初霜・・・後は任せたぞ・・・」
その言葉に、初霜は涙した。
――霞はもう、助からない。と、
死にゆく彼女に掛けてあげられる言葉、それはたった一つだ。

「わかった――ゆっくり、休んでね」
初霜は、満面の笑みでそう言った。
「・・・あぁ」
霞は小さくなずくと、体を捻ってうつ伏せになる。そして、腕と足に必死に力を込めて、立ち上がろうとする。だが、初霜は一切手を貸さない。彼女は一人で立てる。そう信じていたから。
霞は激痛に耐えながら立ち上がった。初霜も、そっと立ち上がると彼女と対峙する。
今にも倒れてしまいそうな親友に手を差し伸べる。霞も、そっと手を伸ばす。
二人の親友の手は、固く結ばれた。
その時、少し離れた場所に浮かぶ『冬月』の汽笛が高らかに鳴った。
「・・・もう、時間だな」
航行不能となった『霞』は、『冬月』の魚雷で処分される事が決定されていた。そしてもう――その時が来たのだ。
霞は一度『冬月』を一瞥し、再び目の前の親友と対峙する。
「じゃあね、霞。また来世で会いましょう」
「・・・あぁ、初霜も元気でな」
「えぇ」
笑顔で言うと、初霜はくるりと踵を返してドアの向こうに消えた。
それを見詰め、霞は小さくため息した。
「姉者・・・申し訳ありません・・・霞・・・大和長官を守れませんでした・・・」
今は亡き尊敬できる姉達の顔を思い浮かべ、霞は涙した。
姉達はすばらしい艦魂だった。強く気高く、そして美しい。自分もそんな姉達のようになりたいと何度も思った。そして、努力して来た。
だが結局、自分の力不足で、守ると決めた者は守れなかった。
やっぱり自分は、姉とは違うのだと痛感した。

燃える艦体（からだ）を見詰め、霞は覚悟を決めた。

「・・・姉者・・・今からそちらに・・・参りまする・・・」

そう優しげな笑顔で言った後、霞はカッと踵を揃えて見事な敬礼をしてみせた。その向こうには、愛すべき祖国、そして――敬愛する天皇陛下がおられる。

しっかりと愛する祖国のある空を見詰め、霞は最後の力を振り絞った。

「天皇陛下万歳ッ！」

怒鳴るような大声と同時に両手を天高く上げた後、霞は腰に挿した軍刀を引き抜く。そして――

「・・・かはぁ・・・ッ！」

――霞は自らの腹に軍刀の刃を斬り入れると、間髪入れずにそれを横へ斬り裂いた。

吐血を吐き、腹から大量の血を流しながら、霞は力を失って倒れた。ベチャリという不気味な血の音が響いた後、倒れた霞は二度と動く事はなかった。

――そんな親友の最期を壁に隠れながら見守っていた初霜の頬を、一筋の涙が流れた。

霞の自害直後、『冬月』から魚雷が発射された。そして、歴戦の駆逐艦である『霞』は皆に見守られながら巨大な水柱と火柱を上げながら、東シナ海に没した。

『霞』沈没の六時間後、航行不能で海を漂流していた『磯風』についに――砲撃処分命令が下された。しかも、その処分を下すのは、姉艦である『雪風』であった。

燃える『磯風』の艦橋には雪風と磯風、そして翔輝の姿があった。

大切な妹を自ら殺さなければいけないという現実に泣き崩れる雪風を、血まみれでぐったりとしている磯風がそっと抱き締める。そ

の光景を、翔輝は無言で見詰めていた。
「嫌だよぉ・・・ッ！　何で・・・何でみんな私を残して死んじゃうのよ・・・ッ！　私の幸運のせい・・・？　だったらこんな力なんていらないよぉ・・・ッ！」
泣き叫ぶ雪風。その白い頬を流れる涙を、磯風はそっと指先で拭う。いつも明るくて、どこか頼りなくて、でも、誰よりも大好きな姉の、こんな悲しい顔なんて見たくない・・・
「姉さん・・・泣かないで・・・私は・・・十分生きた・・・幸せだから・・・」
「そんな事ないよッ！　だって、私よりも生きてないッ！　まだまだ生きられるのに・・・ッ！　何で・・・何でよ・・・ッ！」
「・・・散る桜・・・残る桜も・・・散る桜・・・みんないつかは死ぬ・・・その時間が・・・私は早かっただけ・・・ただ・・・それだけ・・・」
「そんな事ないッ！　磯風には生きる権利があるッ！　なのに・・・何でよ・・・ッ！」
泣き崩れる雪風。自分だけが生き残って、何で妹達が死ななければならないのか。そしてどうして、自分だけがいつも生き残るのか。嫌で嫌で仕方なかった。
磯風はそんな姉の涙を、そっと拭う。
「・・・私達は・・・兵器の魂・・・艦魂・・・生きるか死ぬかは・・・私達には・・・決められない・・・これも・・・運命だから・・・」
磯風の力ない言葉に、雪風は首をブンブンと横に激しく振って否定する。
「好きで艦魂になんか生まれた訳じゃないもんッ！」
そのうそ偽りのない、心からの悲鳴に一番ショックを受けたのは――翔輝だった。
そう。艦魂に生まれたくて、艦魂に生まれた訳ではない。
大和だって、普通の女の子として生まれる可能性があったはず。

それが、運命という理不尽な力によって、無理やり艦魂という存在に生まれさせられた。
彼女だって・・・本当はもっと生きたいと願っていた。
艦魂なんて・・・何でそんな存在があって・・・どうして彼女は艦魂として生まれたのか・・・そして――何で自分を残して・・・死んでしまったのか。
「長谷川少佐・・・？」
雪風の不安そうな声にハッとして視線を上げると、二人が心配そうな瞳で自分を見ていた。そして気づく――自分が泣いている事を・・・
「あ・・・」
全然気づかなかった。
「ご、ごめんなさい・・・ッ！　わ、私・・・ッ！」
雪風が気まずそうに視線を逸らす。自分が言った事が彼を傷つけたと理解したからだ。だが、翔輝は小さく首を横に振る。
「気にしないで・・・もう、大丈夫だから」
「長谷川少佐・・・」
大丈夫なんて、そんな訳ない・・・
大和は彼にとって、大切な――恋人だったのだから。
大丈夫なんて、そんな訳ないのだ・・・
「長谷川様・・・」
翔輝がその声に伏せていた視線を上げると、磯風がじっとこちらを見詰めていた。今にも死ぬかもしれないほど弱っているのに、その瞳は驚くほど力強い。
「・・・長谷川様に・・・伝えたい事があります・・・」
「何だ？」
翔輝は涙を拭うとそっと二人に近づく。そして、視線を合わせるようにして彼女達の横で腰を下げる。雪風はそっと磯風の背に手を回してそっと抱き上げる。二人の視線が、正面から重なる。
磯風はじっと、真剣な瞳で翔輝を見詰めた。

「磯風・・・？」
「・・・長谷川様・・・私――長谷川様が好きです」
突然の告白に、翔輝と磯風は驚く。だが、そんな二人の反応など予想済みなのか気にせずに磯風は言葉を続ける。
「・・・初めてあなたを知ったのは・・・雪風姉さんが大和司令の従兵になった時・・・その時からずっと・・・お慕いしていました・・・でもそれは・・・ファンとかそういう気持ちで・・・大和司令や・・・姉さんとは違いました・・・でも・・・此度（こたび）姉さんと共に長谷川様と一緒にいて・・・私は変わりました・・・ただ純粋に・・・長谷川様が好きになったんです・・・」
「磯風・・・」
「・・・わかってます・・・長谷川様は・・・大和司令が好きだって事・・・ちゃんと・・・わかってます・・・」
磯風の言葉に、翔輝と雪風は沈黙した。お互い違う理由だが、彼女の言葉に少なからずショックを受けている。翔輝は磯風の気持ちに応えられない事。雪風は自分の想いが彼には届かない事。違ってはいても、悲しい事には変わりない。
「・・・でも・・・この気持ちは・・・伝えたかったんです・・・」
雪風は自分の腕の中で死に掛けている妹を見詰める。
自分じゃ敵わないくらい強いなぁ。そう思った。だって、自分はこんなに真正面から想いは告げられない。こんなに真っ直ぐ、彼を見られない。
――だって、彼は大和が好きなのだから・・・
「・・・長谷川様の気持ち・・・今一度教えてほしいです・・・」
「僕の・・・？」
「・・・はい・・・それで・・・私は十分ですから・・・」
磯風はそう言って、じっと翔輝を見詰める。その瞳には純粋な光だけがあり、ただ、彼の答えを聞きたい。それだけの想いを込めて・・・
翔輝はそんな磯風の瞳を正面から受けながら、自分の想いを正直

に伝える。
「・・・磯風の気持ちは嬉しい。でも、僕には大和がいるから。大和が――好きだから。お前の気持ちには応えられない」
翔輝の正直な気持ち。それを聞いた磯風は――
「・・・そうですか」
そう小さくつぶやいた。その声にはやはり予想はしていたとはいえ、悲しいものがあった。でも、これが自分の気持ちなのだ。
「・・・ごめん」
翔輝が小さく謝ると、磯風は小さく首を横に振り、顔を上げた。そこには、どこかすっきりしたような笑みを浮かべる、磯風がいた。
「・・・謝らないで・・・ください・・・長谷川様の気持ちを聞けて・・・嬉しかったです・・・」
磯風はそう言うと、自分を抱えて支える雪風を見る。視線が合った瞬間、雪風は泣きそうな顔をしていたが、そんな彼女に、磯風はそっと微笑む。
「・・がんばってね・・・姉さん」
そのがんばっては、きっと自分に翔輝を諦めるなと言いたかったのだろう。だけど、雪風は首を縦に振る事はなかった。
――翔輝は大和を愛している。その事実は、決して変わらないのだから。
磯風はそれ以上何も言わず、ただ姉を見詰めていた。
しばしの沈黙の後、遠くからラッパによる演奏が響いた瞬間、雪風の表情が凍り付く。
「嫌ぁッ！」
雪風は泣き叫びながら磯風を抱き締めた。
もう彼女とお別れ。それも、自分の手で殺さなければいけない。
そんなの、嫌だ。
泣き崩れる姉の頬、磯風はそっと撫でる。
「・・・姉さん・・・もう行って・・・」
「でもッ！　でもぉッ！」

「・・・もう・・・眠い・・・だから・・・」
「・・・ッ！」
「雪風」
その声に振り返ると、翔輝が立っていた。その表情は暗く、雪風と視線が合うと、彼は小さく首を横に振る。
「・・・行こう。これ以上、磯風に負担は掛けられないよ」
翔輝の言葉に、雪風は腕の中の妹を見る。このわずかな時間でも、彼女は衰弱していた。もう、磯風は限界に達しようとしていた。
「雪風・・・」
「・・・そうですね」
雪風は一度ギュッと彼女を抱き締め、その温もりをしっかりと覚える。もう感じられない、その温もりを・・・
「・・・姉さん」
「・・・磯風、また・・・会えるよね？」
「・・・きっと・・・会える・・・また・・・どこかで」
「じゃあ、さよならじゃ、ないよね？」
「・・・また会おう・・・それがいいと思う・・・」
その言葉に、雪風は涙を拭き、優しく微笑んだ。
「じゃあ、またね」
「・・・えぇ・・・また・・・いつか・・・」
雪風はそっと磯風を床に横たわらせると、立ち上がった。その彼女の横に立つ翔輝は磯風に小さく笑みを向ける。
「じゃあな磯風。また会えるって、信じてるから」
「・・・はい・・・また会いましょう・・・長谷川様・・・」
二人の別れのあいさつの後、雪風はそっと翔輝の手を握り、光り輝いた。そしてそのまま、翔輝と共に光に包まれ、次の瞬間には消えていた。
残された磯風は小さく口元に笑みを浮かべる。その頬を、一筋の涙が流れた。
「・・・あぁ・・・失恋か・・・初恋が実らないって・・・本当だ

ったんだ・・・」

そう小さくつぶやくと、磯風は力が抜けて、ゆっくりと瞳を閉じた。その瞳が再び開く事は、二度となかった。

翔輝の手を握りながら、雪風は一度ギュッと瞳を閉じた後、再び見開いて妹の最期の姿を見詰める。そして――

ズドォンッ！

第一主砲が火を噴き、次の瞬間『磯風』は爆発した。

雪風はただひたすら、妹の名を叫び続けた。

そして、火炎を身に纏いながら、『磯風』は暗い海深く、静かに没した。

雪風はその光景に涙を流し、隣に立つ彼の胸に飛び込むと、声を上げて泣いた。そんな彼女をそっと抱きとめる翔輝もまた、涙を流していた。

『磯風』の処分後、残存駆逐艦『雪風』『初霜』『冬月』の三隻は生存者を乗せながら佐世保に向かって撤退を開始した。そのどの艦もすっかり疲れ切っていた。

特攻隊たる事を胸に秘めて沖縄に突撃したのに、結果は一方的な大敗北に終わり、こうして今自分達は逃げ帰っている。

もはや、アメリカに一矢を報いる事も、自分達日本にはできないと改めて痛感したのだった。

こうして、連合艦隊最後の作戦によって出撃した水上特別攻撃隊と米空母部隊との壮絶な死闘――坊ノ岬沖海戦は終わった。

結果は日本側の敗北。それも戦艦『大和』、軽巡洋艦『矢矧』、駆逐艦『霞』『朝霜』『浜風』『磯風』の計六隻を失い、『冬月』も中波。無事だったのは『雪風』と『初霜』のみ。戦死者は三七〇〇名にも上るという大敗北であった。

だが、米軍側にとっても、これは完勝とは程遠いものとなった。

史上最大の大反撃を受け、結果的に一二七機もの艦載機を損失。

戦死者は一四二名にも上る事となった。これは作戦参加空母艦載機の三分の一に相当し、この報告を受けたスプルーアンス大将、ニミッツ元帥は驚きを隠せなかった。何しろ戦後しばらくまでこの損害は軍上層部によって秘匿されたほどであった。

わずか十隻、しかも空母を持たない前時代的な日本艦隊にこれほどの被害を受けたなど、とても公表できるものではなかったのだ。

だが、結果はどうであれこの戦いにより日本海軍は最後の希望である『大和』以下多くの艦艇を失い、これ以降深刻な燃料不足、そして米軍による機雷封鎖を受け、二度と出撃する事はなかった・・・

すっかり空に懸かっていた鉛色の雲が消え、月明かり照らす海を、戦いに敗れ、祖国に向かって敗走する三隻の駆逐艦――『雪風』『初霜』『冬月』。

守るべきものを失い、戦いに疲れた少女達は皆大なり小なりボロボロであった。

皆自分の艦で傷を癒す中、雪風も自艦に待機していた。だが、妹二人を失い、信頼していた上官を失っても、彼女にはまだ希望が残されていた。それは――

「少佐、コーヒーをどうぞ」

「ありがとう・・・」

雪風は烹炊室でこっそり淹れた本物のコーヒーを、主砲の上に座りながら星空を眺めている翔輝に手渡した。その表情が暗い事に雪風は悲しくなるが、それでも、彼だけでも生きていてくれて本当に嬉しかった。

コーヒーを手渡した後、雪風はそっと彼の横に腰掛けた。その手にはちゃんと自分の分も握られている。この時彼女はちゃんと翔輝が苦いものは苦手だと知っていたので、彼のコーヒーには砂糖を適量入れ、自分はさらにミルクを入れていた。

香ばしい匂いを感じながら、雪風は熱々のミルクコーヒーを飲む。冷たく冷え切った体が芯から温まる。自然と、頬も緩んだ。

ふと、隣に座ったまま無言の彼を見ると、彼はコーヒーは手にしているものの口には付けず、ヒビの入ったメガネの奥の瞳はぼーっと星空を見上げていた。
その瞳は悲しげで、彼が妹の事を思い出している時の瞳に似ていた。
――きっと、彼は大和の事を思っているのだろう。そう思うと、胸がギュッと締め付けられるのを感じた。
磯風の最期の時、彼ははっきりと大和が好きと言った。もう、自分が入り込む余地など残されてはいない。それは磯風だってわかってたはずなのに。なのにどうして自分に《がんばって》など言ったのだろう。がんばったって、無駄なのに・・・
――でも、
「長谷川少佐。寒くはないですか？」
「・・・え？　あ、うん。大丈夫」
「せっかくコーヒー淹れたのに、冷めちゃいますよ」
「あぁ、ごめん」
翔輝は苦笑いしてコーヒーをすする。
「・・・うん。おいしい」
その何気ない言葉に、大喜びする自分がいた。
「良かったぁ。少佐って苦いもの苦手でしたから砂糖を入れたんですが、どれだけ入れればいいかわからなくて不安だったんですよ」
「良く知ってるね」
「・・・そりゃあ、ずっと見てましたから」
「・・・そっか」
翔輝はそう小さく言うと、そっとコーヒーをする。その横顔を見て、どうしようもなく温かくなる胸の内。
「ありがとうね」
優しい言葉を言いながら、誰よりも素敵な笑みを浮かべる彼。
改めて気づかされる。
――自分は、どうしようもなく彼が好きだという事に。

この想いは、諦めようとしても諦められるものではない。大好きで大好きで仕方がない。

長谷川翔輝という人を、どうしようもなく好きなのだ、と。

キュッと唇を噛んだ。

無理だとわかってるのに、この気持ちだけは残酷にも前に進もうとする。進む事なんてできないのに。不可能なのに、どうして・・・

そっと横に座る彼を盗み見ると、彼はどこか遠い目で星空を見上げていた。その瞳はまるで見えない何かを見ているような、はっきりしないもの。だが、雪風にはわかっている。その視線の先にあるものが・・・

（やっぱり・・・少佐は司令の事を・・・）

改めて現実を突きつけられると、どうしようもなく自分の小ささに愕然としてしまう。どんなにがんばっても、結局自分と彼は結ばれる事はない。

だって、彼は――

「何やってんのよあんた達は」

その声に雪風はハッとして顔を上げた。隣に座る翔輝も同様にその声の主を見詰める。それは頭に包帯を巻きながら仁王立ちしている冬月。その背中には激戦を戦い抜いた矛が背負われている。

「ふ、冬月ッ！　何で『雪風（ここ）』にいるのッ！？」

驚く雪風の言葉に、冬月は口をへの字に曲げてツンとあごを上げて瞳を閉じる。

「別に私がどこにいようと私の勝手でしょ」

「そ、それはそうだけど・・・」

「あんたがいちいち気にする事じゃないわよ」

「で、でもあなた傷を・・・」

「これくらい怪我なんかに入らないわよ」

そう言うと冬月は二人の前に堂々と立つ。位置的に月明かりをバックにしている為、その表情は薄暗く、何やら威圧感を感じさせるものだった。

「ふ、冬月？」
雪風の声を無視し、冬月はキッと彼女の隣に座る翔輝を見る。翔輝は冬月の登場にさほど反応を見せず、ただ星空を見上げ続けている。
出撃時に見た彼のまばゆい光はうそのように消え、今ではまるで抜け殻のように何をするでもなく星空を見上げ続ける。
そんな翔輝を睨み、冬月は再び雪風を見る。だが、彼女は視線を逸らした。まるで何かに怯えるように、翔輝に背を向けている。それで全て理解した。
「・・・ってい」
「え？」
「最低よッ！」
そう怒鳴ると、冬月は翔輝の胸倉を掴み上げた。体格差はあっても艦魂の方が力は強い。雪風は悲鳴を上げ、冬月は翔輝を睨み付ける。だが、
「危ないだろ冬月。放してくれよ・・・」
翔輝はさほど驚きもせず、彼女から視線を逸らす。誰とでも正面から向き合っていた翔輝とはまるで別人のように、今の翔輝は真っ向からぶつかる事ができない。そんな翔輝に冬月は歯軋りしながら睨み。さらに胸倉を強く掴み上げる。
「あんた、いい加減にしなさいよ。雪風の気持ちも知らないで、よくもこんな残酷な事ができるわね。最低よあんたッ！」
すさまじい怒りのオーラを撒き散らしながら、冬月は翔輝から一切目を放さずに怒鳴る。その怒号からも彼女のすさまじい怒りが見て取れる。
「ふ、冬月やめてッ！」
「あんたは黙ってなさいッ！」
止めに入ろうとした雪風を冬月は視線を向けずに怒号だけで押さえ込む。まるで見えない手に押さえつけられたように、雪風の体が動かなくなった。

雪風が行動不能となった事も確認せず、冬月はキッと翔輝を睨み付ける。

「あんたのせいで、雪風がどれだけ傷ついてるかわかってるのッ！？　大和司令を失い、大切な妹である浜風に磯風を失い、ボロボロになったこの子を支えてるのはあんたなのよッ！　なのに、何で頼ろうとする雪風を傷つけるのよッ！」

許せなかった。

雪風は翔輝が好き。だが、翔輝は大和が好き。そんな事はわかってる。真っ赤に燃える頭の中にある冷静な部分が、これは単なる感情のぶつかりだと知らせている。だが、そんなの関係ない。雪風の親友として、彼女の悲しい顔を見たくない。ただそれだけだから。

「答えなさいよッ！」

冬月は怒りに任せて翔輝を突き飛ばした。翔輝は避けられるはずもなく受身も取れずに倒れた。だがすぐに上半身だけ起こす。何か言い返してくるのか。冬月は身構える。だが、

「・・・ごめん」

翔輝から帰って来たのは、冬月の心を凍り付かせるものだった。

これだけ自分が真っ赤な炎で怒っているのに、彼には一切その熱が届かない。

「最低ッ！」

冬月は拳を振り上げる。

「やめてッ！」

その悲鳴と共に雪風が翔輝の前に立ち塞がった。冬月は驚いて拳を下げる。目の前にはキッと自分を睨み付ける親友の雪風。

「な、何よあんた。何で邪魔するのよ」

「冬月！　これ以上少佐を傷つけないでよッ！　少佐は大和司令を失ってボロボロなんだからッ！」

「それはあんただって同じでしょッ！　何でそいつの事を許せるのよ！」

「少佐は何も悪くないッ！　私を突き放したりひどい事を言ったり

暴力を振るった訳じゃないッ！　少佐は何も悪くないッ！」
そうだ。別に彼は雪風に直接ひどい事をした訳ではない。彼に悪い点はないはず。だけど、それでも雪風を傷つけた。その事実は変わらない。
「だけど・・・ッ！」
「これ以上少佐を傷つけないでッ！」
雪風の悲鳴のような声に冬月は勢いを失う。キッと自分を睨む彼女の瞳には抑え切れない感情が涙となって流れ出している。
冬月は言葉を失う。
雪風はそっと振り返って彼を見た。すると、翔輝は自分をじっと見詰めていた。そして、そっと彼はポケットからハンカチを取り出すと、スッと自分に渡した。
雪風は小さな笑みを浮かべた。
大切な人を失ってどんなに心がボロボロになっても、彼はこうして泣いている人にハンカチを渡せる人なのだ。この優しさが、自分彼を好きになった一番の原因だった。
「ありがとうございます・・・」
雪風はハンカチを受け取るとそっと涙を拭き取る。その間に翔輝は立ち上がると、雪風の前に出て冬月の前に立つ。冬月はまだ自分を睨んでいたが、構わなかった。
「・・・ごめん。大和の事でちょっといっぱいいっぱいで、まわりが見えてなかったんだ」
翔輝の偽りのない真っ直ぐな言葉。その言葉に冬月はムッと半歩下がる。
「そんなんで私が納得できると思ってるの？　雪風を傷つけた事には変わりないんだから」
「そっか・・・ごめん雪風」
「え？　わ、私は別にッ！」
「でも、今日だけは勘弁してくれないか？　ちょっと心の整理をしたいから――大和は死んだ。もう帰って来ないっていう現実の整理

を」

「「あ・・・」」

その言葉に雪風は改めて彼の心の傷を知り、冬月はそこでようやく彼も大切な人を失ったという現実に気づかされた。

自分は感情に任せて、彼にひどい仕打ちをしてしまった・・・

「・・・ごめんなさい」

「冬月が謝る事ないさ。みんなどうしても感情的になる。それが、死という現実だからね。みんなみんな、辛いのさ」

翔輝はそう言うと、再び星空を見上げる。

この星空のどこかに、大和はいるのだろうか？　そんな事を考えて、翔輝はフッと小さな笑みを浮かべる。

そう、彼女は死んだ。それは変わらない事だ。だけど、死んだからといって何もかも全てが消えた訳じゃない。

死んだ人は星になる。だったら、大和もきっとこの星空の中にいて自分を見ていてくれてるかもしれない。そう思うと、わずかだが、希望の光が生まれたような気がした。

冬月に気づかされた。

自分にはまだ雪風や、伊勢や榛名、隼鷹や葛城、龍鳳、瑠璃、珊瑚、瑪瑙がいる。彼女達の為にも、そして死んでいった仲間達や、彼女の為にも、この命尽きるまで自分は生きないといけない。せっかく助けられた命。そう簡単にこの炎は消させやしない。

「どうやら、少しは吹っ切れたみたいね」

その声に三人が振り返ると、小さな笑みを浮かべた初霜がいた。

宴会で見せたような明るいものではないが、仲間を想う気持ち一色の、とても優しげな笑みだ。

「うじうじしてても仕方ないのよ。私達が抵抗したりしても時間ってのは流れるんだから。現実は残酷でも、受け入れるしかないのよ」

「そうだね。この戦争の間ずっと、大和が隣にいた。仲間もいた。それが、僕がこの戦争の中で掴んだ大切なもの。これがある限り、僕の戦いは続くって事だね」

「そうね。やっぱりあなたは大和やみんなが惹かれるだけの素質はあるみたいね。誰よりも優しい心。でも、決して折れない心。あなたは強い人ね」

「そんな事ないよ。僕は弱い。心だって折れるさ。だけど――」

翔輝は初霜に向けていた視線をそっと、隣に立つ雪風に注ぐ。驚く彼女に向かって、翔輝はにっこりと微笑んだ。その笑顔は何も混じり気がない、純粋なもの笑顔だった。

「大和や武蔵、雪風やみんながいたから、折れても直り、強く生きて来れたんだ。僕一人の力じゃない。みんなのおかげさ。そのみんなの為にも、僕は前に進み続ける。それだけだよ」

翔輝の言葉に、初霜はにっこりと笑った。

「それだけでいいのよ。前に進み続ける事は、きっと、それでいいのよ」

初霜の言葉にうなずくと、翔輝は再び夜空を見上げたが、すぐに視線を下げる。そんな彼の行為に雪風が不思議そうに彼に近寄ろうとする。だが、それは初霜に制された。

「は、初霜さん？」

「――今は、何もしない方がいいわ」

その言葉に再び彼を見た時、雪風は胸が締め付けられるような想いがした。

うつむいた彼の肩は小刻みに震え、メガネの下の頬を一筋の涙が流れている。

翔輝が泣いている・・・

その姿に、雪風も耐えられなくなって泣き出してしまう。

どんなに強がっても、どんなに強く生きようとしても、大和達が死んだという現実は変わらない。一生背負い続ける、悲しみなのだ。

泣き崩れる雪風を、そっと冬月が抱き締める。初霜もまた、静かに頬を濡らす。

「大和・・・」

翔輝は小さく彼女の名を言った。

ありがとう。そしてさようなら。
戦争という非現実的な現実の中、彼女の存在はそれらを超えた光であった。
彼女の指し示す光が、自分をここまで導いてくれた。
もう会えない。そんなのはわかっている。だけど、きっと彼女は自分を見守っててくれているだろう。
これから辛い現実と向き合い続ける自分の背中を、そっと支えてくれるだろう。
――でも今は、君の死を苦しんでも、いいよね？
翔輝は完璧な人間じゃない。むしろその逆だ。大和の死を受け入れるのは、やっぱり今でもどこか抵抗がある。それでも、少しずつでもいいから認め、そして前に歩き続ける糧とする。その為にも、今だけは、泣きたかった。
星空を見上げると、その煌びやかな光に翔輝は涙を流し続ける。
戦艦『大和』で出会った大和という少女の事は、決して忘れない。
そして――
「愛してる・・・」
翔輝は肩を震わせながら、もう見えぬ彼女が沈んだ海に向かって、静かに敬礼した。
月明かりが照らし上げる中、翔輝はいつまでも敬礼をやめる事はなかった・・・

初霜と冬月は一度自艦に戻った。
それから数時間後、疲れ切っていた翔輝は静かに眠っていた。
すーすーと寝息を立てている翔輝を見て、横に座る雪風はそっと微笑む。
「疲れてるわよね、ぐっすり眠ってる」
「そうね。結局この人も、大切な人を失ったんだからね」
雪風の隣に座る冬月は翔輝を見詰める雪風の横顔を見た。
白い頬に涙の跡が見える。目も赤くなっていて、自分が来るまで

泣いていたのだろうとわかった。
自分に心配かけたくなくて、涙を拭いたのだろう。
親友なんだから、もう少し頼ってくれてもいいのに。
そんな風に思っていると、雪風はそっとハンカチを取り出して寝ながらも涙を流す翔輝の涙を拭き取った。寝ているのでメガネはそっと雪風のポケットの中に大事にしまってある。
「夢の中でも泣くなんて・・・せめて、夢の中では笑っていてほしいのに」
「雪風・・・」
どこか悲しげに雪風は笑った。
「私ね、少佐が大和司令が好きだって事、ずっと前からわかってたんだ。でも、それでも私は少佐が好きだった。今でも大好き。でも、少佐の心の中は大和司令しかいない。私の入り込む余地なんて、残ってないの・・・」
その言葉に、冬月は絶句した。
――雪風は、翔輝の事を諦めると言っていた。
冬月は真っ青な顔で首を振る。
大和は彼女にとっても大切な人である。そんな彼女を失った苦しみの上、翔輝への恋を諦めてしまえば、彼女は間違いなく廃人になる。そんな確信が冬月の頭をよぎった。
「雪風・・・あなた・・・」
「えへへ・・・失恋・・・かな？」
無理して笑みを浮かべる雪風。
冬月は直感した。
――彼女の恋の終わりは、彼女の終わりを意味していると。
「雪風。諦めちゃダメよ」
気づいたら、口から言葉が出ていた。
「無理だよ。もう、私じゃ少佐の心には触れる事はできないもん」
雪風はそう言って力なく首を振った。そんな雪風を説得しようと冬月は必死になる。

「あなた、今でもこの人の事が好きなんでしょ？」
「うん・・・大好きだよ」
「だったら、諦めちゃダメだよッ！　もっともっとがんばれば、きっと彼もあなたに振り向いてくれ――」
「ダメなの・・・私じゃ・・・少佐の支えにはなれない・・・」
今にも泣きそうな雪風の顔を見て、冬月は唇を噛んだ。
仲間を守れなくて死なせてしまい、そして今は生き残った親友の心も助ける事ができない。本当に自分は無力だ。
「大和・・・」
雪風を説得しようと腰を浮かせた瞬間、そんな声が響いた。
見ると、翔輝が涙を流しながら寝言を言っていた。だが、その言葉に雪風はビクッ！と震え、我慢できずに涙を流す。
・・・冬月の中で、何かがブチンッ！と断裂した。
「大和・・・やま――」
「黙ってなさいッ！」
「ごふぅッ！？」
「冬月ッ！？」
突如冬月は翔輝の腹に渾身のかかと落としを炸裂させた。その強烈な一撃を受け、翔輝は沈黙した。
そんな翔輝に「嫌あああぁぁぁッ！　少佐あああぁぁぁッ！」と悲鳴を上げる雪風を見て、冬月は「あちゃー」と顔を押さえた。
つい勢いでうざい奴に一撃必殺を決めてしまったのだ。さっきといい今といい、どうも自分はこの人間がどこか気に入らないらしい。
それでも、雪風が好きだというなら全力で応援するが。
雪風は必死に翔輝を呼ぶが、今翔輝は生と死の狭間を旅していたので当然反応できるはずもなかった。
「ひ、ひどいよ冬月ッ！　少佐に一体何の恨みがあるのよッ！？」
「い、いや、つい勢いで」
「つい勢いで少佐を殺そうとしたのッ！？」
もう涙をたっぷりと瞳の縁に溜めた雪風のアップの顔に冬月は慌

てて弁明する。
「あ、安心して。急所は外したから」
「当たり前よッ！　あなたの攻撃を急所なんかに入れられたら、少佐は即死するわよッ！」
雪風は気絶した翔輝を抱えて泣く。
「少佐ぁッ！　死なないでくださいッ！　少佐にまで死なれたら私はどうすればいいんですかッ！？」
「そんな大げさな・・・」
必死に彼を呼び続ける雪風を見て、冬月は不謹慎だと思いながらも小さく微笑んだ。
何だかんだ言っても、彼の事を、彼女は愛しているのだ。
彼の気持ちは自分には向いていない。それは彼女自身が一番良くわかっている。だけど、それでも、彼を愛している。
純粋な性格をしている彼女だからこそ、一途に彼を思い、一途に彼を愛している。一途だからこそ、彼を必死に愛している。
そんな純粋な恋心はとても微笑ましく、見詰めるこちらが自然と微笑んでしまう。
「雪風。やっぱり、今でも彼の事、好きなのね」
冬月の言葉に、雪風は一瞬ためらうような仕草をするが、素直にうなずく。
「――うん・・・大好きだよ・・・とっても」
そう言って小さく微笑むが、雪風は力なく首を振る。
「未練がましい・・・よね」
「そんな事ないわよ。だって――好きなんでしょ？」
「でも、少佐には大和司令が・・・」
「そんなの関係ないわよ。好きなら好きのまま、その気持ちをぶつけるべきよ。まだ、負けた訳じゃないわ」
「冬月・・・」
「最低な事を言うかもしれないけど、大和司令は死んでしまった。でも長谷川少佐とあなたは生きているじゃない。チャンスはまだあ

るわ」
「でも・・・私は・・・」
うつむく雪風の肩を、冬月はそっと叩いた。驚いて雪風が振り返ると、そこには優しげな笑みを浮かべた冬月がいた。
「冬月・・・」
「あなたは、あなたのままでいいじゃない」
「え？」
「あなたは大和司令じゃない。《雪風》じゃない。あの人とあなたは違うの。それは仕方ない。でも、それでいいじゃない。あなたはあなたで、彼を支えてあげなさい」
冬月の言葉に顔を伏せる雪風に、冬月は呆れたような笑みを浮かべる。
「あなたと彼がくっ付いてくれないと、いつもあなたのグチを聞いていた私まで損するじゃない」
そんな素直じゃない冬月の言葉に、雪風は泣きながら彼女に抱き付いた。
震える肩を必死に冬月に合わせ、抱き付く。
震える肩を抱き締める冬月に、雪風は彼女が願っていた言葉をつぶやく。
「私、もう一度だけ・・・もう一度だけがんばるよ」
「雪風・・・」
「これから先、少佐は辛い日々を過ごすけど、私がんばって彼を支え続ける。レイテ沖海戦で武蔵司令が死んだ後、大和司令が必死に彼の支えになったように、私も、少佐を支える。そして、いつかきっと・・・」
涙を流す瞳には、いつしか力強い意思が燃えていた。それを見て、冬月は小さく微笑む。
「がんばりなさい。私も、応援してるから」
その言葉に、雪風は嬉しそうに笑みを浮かべた。
「ありがとうッ！　やっぱり冬月は私の親友よッ！」

「・・・まったく、こういう時ばっかり親友扱いするんだから」
「え？　何か言った？」
「何でもない。それよりも、今は無事に日本に帰る事を考えましょう。あなたが死んだら、あなたが愛する人まで死んでしまうからね」
「そうだよね。もうここは、日本の海じゃなくて、敵地なんだよね」
「そうだよ。敵機はもちろん、敵潜水艦にも警戒しましょ」
「うんッ！　絶対日本に帰ろうねッ！」
「もちろん。こんな所で死んだら、それこそ大和司令に会わせる顔がないわ」
「じゃあ、がんばりましょうッ！」
「もちろん」
いつの間にか、東の空が薄っすらと明るくなっていた。もうすぐ夜明けだ。
二人の少女はまだ寒い海風をお互いの体温で温め合いながら、まだ残っている星空を見上げ、小さく笑みを浮かべ合った。

夜が明けた八日、『雪風』『初霜』『冬月』は無事に佐世保に帰港。先に離脱するも低速後進しかできなかった『涼月』も、ギリギリの状態ではあったが、佐世保に戻って来た。
連合艦隊最後の戦いは、こうして幕を閉じたのであった・・・

第十四章　第十四節　勝者と敗者　それぞれの道（後書き）

坊ノ岬沖海戦ついに終結です。
先に言っておきますが、史実ではアメリカ軍の被害は損失機十機、戦死十二名です。今回の話ではアメリカ軍にも甚大な被害が出ました。
演出効果のやり過ぎという部分もありますが、この結果ではあまりにも（僕が）やり切れないので、今回はこんな形になりました。
ついに坊ノ岬沖海戦は終わり、雪風達は帰還しました。
日本女児として、帝国軍人として、天皇陛下に命を捧げて自決した霞。
翔輝を好くも、その想いを告げた後に死んだ磯風。
今話で艦魂二人死亡。これで十勇士は四人になってしまいました。
作戦を中止して敗走する翔輝達。
大和の死に苦しむ翔輝を、雪風は必死に支えるが、彼の大和を想う気持ちに、雪風は傷ついていた。
親友の苦しみに必死になって彼女の気持ちを支える冬月。それは少しやり過ぎな部分もあったが、それこそが彼女の想いの強さであった。
雪と冬。二人の絆は確かなもの。冬月の言葉が雪風を救い、彼女は再び翔輝を想う事を決心する。
坊ノ岬沖海戦。それは多くを失った者達の新たな物語の始まりでもあった。
しかし、これ以降日本の勝利はさらに絶望的となったのは確かであった。

という事で、これで第十四章はこれで終了です。
次回はついに最終章。一気に終戦まで時代が飛びます。なんかすみません。

次話は終戦の日。ラジオから聞こえてくる玉音放送に艦魂達が想うものとは。

ついに最終章。残りわずかですが、最後までどうかよろしくお願いします。

最終章　第一節　悲しみの終戦　夏空の下の新たな始まり（前書き）

戦艦『大和』沈没から四ヶ月後の一九四五年八月十五日、日本は敗戦した。
多くの犠牲を出して戦い抜いた太平洋戦争は、ついに終わりを迎えたのだ。
ラジオから流れる玉音放送に、多くの国民が涙した。そしてそれは艦魂達も同じ。
生き残った艦魂達の、日本の勝利を信じて戦い続けた戦姫達の戦いは、ようやく終わったのだ。
《艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～》もついに最終章。
生き残った艦魂達、そして翔輝の運命は。
最後の章、どうか最後までお付き合いください。

そして、あとがきはなんと豪華な物語。
もうほとんど１話分の分量ですが、僕は気にしません。
《草薙先生の独立機動艦隊『紀伊』―連合艦隊大勝利！》の第８６話のあとがきのその後の物語。
本編と外伝、どうかどちらもお楽しみください。

最終章　第一節　悲しみの終戦　夏空の下の新たな始まり

戦艦『大和』沈没。それは日本が行える最後の抵抗であった。その抵抗が失敗に終わった日本は、その後敗北への道を歩み続けた。

五月には三国同盟最後の同盟国ドイツが無条件降伏を受け入れて敗戦。連合国軍はヨーロッパ戦線の戦力を対日戦に注げるようになり、唯一の強力な同盟国を失った日本は、ついに世界から完全に孤立した。

六月に入ると米軍は本格的に日本本土への空爆を開始。日本は火の海となった。

七月にはついに日本海軍最後の砦である呉が米機動部隊の猛爆撃を受けた。米軍は燃料不足で動けない日本艦艇を集中的に攻撃。その結果、戦艦『榛名』『伊勢』『日向』が被弾して三隻とも大破着低。空母『天城』転覆、『葛城』小破。他にも巡洋艦や駆逐艦などが壊滅的な被害を受け、連合艦隊は完全に崩壊した。

八月六日、広島県に人類史上最悪の兵器と後に言われる原子爆弾が投下。死者行方不明者十二万人以上。広島市を中心に死の地と化した。

八月八日、ソ連が日ソ中立条約を破棄して連合国側に立って日本に参戦。満州に総攻撃を敢行。満州を守る関東軍の必死の奮戦も空しく、ソ連軍の強力な機甲部隊の驀進（ばくしん）を止める事はできなかった。

八月九日、長崎県にも原爆が投下。死者行方不明者七万人以上。

――そして、一九四五年八月十五日・・・

『・・・朕深ク・・・世界ノ大勢ト・・・帝国ノ現状トニ鑑ミ・・・非常ノ措置ヲ以テ・・・時局ヲ収拾セムト欲シ・・・茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク・・・』

※現代訳（私は、深く世界の大勢と日本国の現状とを振返り、非

常の措置をもって時局を収拾しようと思い、ここに忠実かつ善良なあなたがた国民に申し伝える）

ラジオから聞こえてきたのは、日本人が神を崇める天皇陛下直々のお言葉であった。

そのラジオは玉音放送と呼ばれ、日本中を悲しみに包んだ。

『朕ハ・・・帝国政府ヲシテ・・・米英支蘇四国ニ対シ・・・其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ・・・』

（私は、日本国政府から米、英、中、ソの四国に対して、それらの共同宣言を受諾することを通告するよう下命した）

共同宣言とはポツダム宣言の事。

日本に対する無条件降伏を受け入れよというものであった。

そして、日本はそれを受け入れた。

日本は、負けたのだ。

長い苦しい戦いの末に、日本は連合軍に敗戦した。

勝つ事を信じ、命懸けで戦って来た日本人は、皆この放送に涙した。一部の軍部はこれを受け入れずに戦闘を続行するが、結局は敗北した。

明治以来、アジアの守護神として欧米列強の脅威を防ぎ続けた日本は、ついにその欧米列強に屈した。

ここに、大日本帝国は滅亡した。

呉の海に浮かぶ改装空母『隼鷹』。七月の空襲の際に他の空母が

壊滅的な被害を受けたのに対して『隼鷹』の被害はなかった。その飛行甲板に、呉に残る日本海軍の艦魂達が集まっていた。

甲板の上に崩れて泣き叫ぶ彼女達の前にも一台のラジオが置かれていた。そこからは、今も敬愛する天皇陛下直々の声で、日本が負けたという事実が流れていた。

「クソォッ！　何でッ！　何でなのよぉッ！」

「姉さあああぁぁぁんッ！」

「日本が負けるなんて・・・ッ！　うそよ・・・ッ！」

「信じない・・・ッ！　私は信じないわよ・・・ッ！」

「碇を上げてッ！　お願いだからッ！　姉さん達の仇を討たせてよぉッ！」

「うそよッ！　神国日本が鬼畜米英に負けるなんてうそよッ！」

「返してッ！　妹や姉さん達を、仲間達を返してよぉッ！」

泣き叫ぶ艦魂達。甲板に拳を叩きつける者、泣き崩れてひたすら泣き続ける者、姉の胸の中で泣き叫ぶ者、日本が負けたなんて信じられなくて、捏造を疑うも、結局その現実に絶望する者。様々な想いが交錯する。

『宜シク挙国一家子孫相伝ヘ確ク・・・神州ノ不滅ヲ信シ・・・任重クシテ道遠キヲ念ヒ・・・総力ヲ将来ノ建設ニ傾ケ・・・道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ・・・誓テ国体ノ精華ヲ発揚シ・・・世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ・・・爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ体セヨ・・・』

（ぜひとも国を挙げて一家の子孫にまで語り伝え、誇るべき自国の不滅を確信し、責任は重くかつ復興への道のりは遠いことを覚悟し、総力を将来の建設に傾け、正しい道を常に忘れずその心を堅持し、誓って国のあるべき姿の真髄を発揚し、世界の流れに遅れを取らぬよう決意しなければならない。あなたがた国民は、これら私の意をよく理解して行動せよ）

天皇陛下の声は終わり、ラジオは沈黙した。
信じられず、しかし信じるしかない。
日本は負けた。
その辛い現実だけが、目の前にある。
多くの仲間や姉妹を失いながらも、必死に戦い続けて来た戦姫達である彼女達。しかしその先にあったのは、残酷で辛い、日本の敗北という結果だった。
泣き崩れる彼女達の瞳には、死んでいった姉妹や仲間達の顔が浮かぶ。
彼女達の為にも、必死に戦って来たのに、日本は負け、彼女達が守ろうとして愛する祖国も守れず、彼女達の仇も討てなかった。
結局、自分達は何もできなかった。
圧倒的な敵に、一矢報いる事すら叶わなかったのだ。
もう泣き叫ぶ力もなく、艦魂達は膝を着いて泣き崩れる。
皆、勝つ事を信じて必死に戦って来た。だからこそ、日本の敗北は、彼女達の心をズタズタに引き裂いた。
嗚咽や怒号が響く甲板の一角で、誰よりも日本の勝利を信じ続けていた榛名が泣き崩れていた。
「・・・ひぐぅ・・・えぐぅ・・・何でだよ・・・ッ　何で・・・日本が・・・負けるんだよ・・・ッ！　姉貴・・・姉さん・・・霧島・・・クソォ・・・ッ！」
泣き崩れる榛名の頭や腕、足や服の下には痛々しい包帯が巻かれている。七月に受けた空襲で『榛名』は大破着底。その艦魂である榛名もボロボロであった。だが、今の彼女はそれ以上に心がボロボロになっていた。
信じていた日本の勝利。
だが、天皇陛下の言葉は信じなければいけない。
戦前の観艦式で、『比叡』が御召艦になって天皇陛下が乗艦した時に発せられた声と、幾分か老いたが、変わらないものであった。
――これは、本物の昭和天皇陛下のお言葉だった。

本当に、日本は負けたのだ。
姉や仲間達が必死に守って来た大日本帝国は、ついに欧米列強に屈した。
「うそだぁッ！　うそだあああぁぁぁッ！」
榛名は泣き崩れながら拳を甲板に叩き付ける。
肩を震わせて、残った艦魂達の現役最古参として必死に皆の士気を支え続けた榛名だからこそ、日本の敗北は信じられなかったし、信じたくなかった。だが、信じなければいけない。
日本が、負けたと言う現実に。
声を上げがながら泣き崩れる榛名の背中を、そっと叩く者がいた。
それは榛名と同じく大怪我を負って頭や腕などに痛々しい包帯を巻いた着物姿の伊勢だ。
「榛名・・・日本は・・・負けたんやね・・・」
「・・・ッ！　・・・ッ！」
「信じられへんのはわかるでぇ・・・うちも信じられへんよ・・・大和も死んで・・・結局うちらは・・・何もできへんかったなぁ・・・」
「伊勢・・・ッ！　俺は・・・俺は・・・ッ！」
「泣かんといてぇな・・・ッ！　うちやって・・・泣きたいんやで・・・？」
ボロボロと涙を流しながら、伊勢は嗚咽を漏らす。
榛名は、そんな伊勢を見詰め、そっと抱き締めた。
どんなに大人ぶっていても、彼女は自分よりも年下。そんな彼女が必死になって自分を励まそうとしたのだ。何て情けない自分だろうか。
彼女も辛く、こうして泣き崩れる。自分にできる事は、そんな彼女をそっと抱き締める事だけだった。
泣き崩れる伊勢を、榛名は自らも泣きながら抱き締める。そこへ、同じく包帯を頭や腕に巻いてツインテールを下ろした日向がやって来ると、嗚咽を漏らしながら伊勢に抱き付いた。榛名は無言で、日

向もそっと抱き締める。
悲しみに暮れる艦魂達。
泣き崩れる艦魂達の一角で、葛城と龍鳳、そして隼鷹の三人が集まっていた。無傷の隼鷹と違って葛城と龍鳳の頭には痛々しい包帯が巻かれている。
皆が涙を流す中、三人は少し違っていた。その表情には悲しみがあるが、どこか安堵したようなものが窺えた。
「・・・終わったんだね・・・戦争は」
隼鷹の言葉に、龍鳳が「そうですね・・・」と小さく答えた。
「・・・負けちゃったんだね・・・日本は」
「そうですね。負けました・・・でも、これで良かったんですよ。これで戦争は終わる・・・やっと、空爆に怯えないで済む日が、やって来たんです・・・」
戦争は終わった。結果はどうであれ、もうこれで日本が焦土になる事はない。
やっと日本は、平和を手に入れる事ができたのだ。悲しみはあるが、安堵や嬉しさが込み上げてくる。だが、それは決して口に出してはいけない。
日本の勝利を信じて必死に戦って来て、日本の敗戦を信じられない者も大勢いるのだから。
隼鷹と龍鳳は泣き崩れる伊勢や榛名達を見詰め、悲しげに表情を翳らせる。風が吹き、隼鷹の髪を縛る紐に付いた鈴がシャラン・・・と美しい音色を上げた。
そんな隼鷹と龍鳳の隣にいる葛城は、じっと晴天の空を見上げていた。だが、その瞳に映るのは空の蒼さではなく自分が忠誠を誓った彼の事。
今も彼は元気にしている。坊ノ岬沖海戦で『大和』が沈没し、大和を失った彼は最初こそは落ち込んでいたが、伊勢や榛名、葛城や隼鷹、龍鳳、瑠璃や珊瑚、瑪瑙のおかげで少しずつ元気を取り戻し、七月頃には以前の彼にほとんど戻っていた。

元々皮肉にも両親や翔香の死を乗り越えてきた彼は、死に対して他の人より免疫があった。それがこんな所で役立ったのだ。

そして、きっと彼も今こうして天皇陛下直々の敗戦の言葉を聞いて泣いているだろう。その涙を拭き取ってあげたい。そう思うが、今の自分では彼を支える事はできない。

彼を支えられるのはただ一人――大和だけだ。

主として忠誠を誓ったが、結局、彼の事を心まで守る事ができるのは彼女しかいないのだ。

それでも、彼を守りたいという気持ちは負けないつもりだ。

だから、早く会いたい。

敗戦した日本。その軍艦は解体されるのが決まりだ。

残り少ない命、どうしても彼と一緒にいたかった。それはきっと、他の皆も同じ。

「隼鷹殿」

「なぁに？」

「・・・空が蒼い」

「・・・そうだね。とっても清々しいよ」

終戦の日、その日は空には雲ひとつない快晴の空であった。日本という国にとってこの大空は不謹慎かもしれない。それでも、もうこの空に自分達を殺そうとする敵機が飛ばない事は、今ある確かな事であった。

葛城は雲ひとつない空を見上げて小さく笑みを浮かべる――その時、風の流れが変わった。葛城がハッとして振り返ると、甲板の上に一人の青年が立っていた。

「みんなここにいたんだ」

そこにいたのは、『大和』沈没後に瑠璃に頼み込んで移動し、その後は隼鷹や多くの呉にいる艦魂達をずっと支え続けた――空母『隼鷹』航海長、長谷川翔輝航海中佐が立っていた。

「主殿・・・」

翔輝の登場に、泣き崩れていた艦魂達は皆顔を上げた。彼を見詰

める視線は皆すがるようなものであった。
日本が負けた。それを否定してほしい。天皇を信じない訳じゃない。でも、彼が否定してくれれば、日本はまだ負けていない。そう思えるから。
「長谷川・・・」
「長谷川はん・・・」
「長谷川君・・・」
「お兄ちゃん・・・」
「主殿・・・」
「長谷川さん・・・」
榛名、伊勢、日向、隼鷹、葛城、龍鳳。その他にも多くの艦魂達が翔輝を見詰める。そんな視線の中、翔輝はそっと天を仰いだ。
その視線の先には、どこまでも広く澄んだ蒼天の空が続いていた。
そして、再び視線を彼女達に戻すと、そっと軍帽を脱いだ。
「――負けたんだな。僕達は」
その小さな言葉が風に載って響いた直後、艦魂達は再び声を上げて泣き始めた。
最後の希望を打ち砕かれ、艦魂達は絶望する。
日本が負けたという現実は、もはや疑う余地など残されてはいなかった・・・
「お兄ちゃぁんッ！」
隼鷹は泣きながら翔輝の胸に飛び込むと、その小さな体をいっぱいに広げて彼に抱き付く。翔輝はそんな隼鷹の小さな体をそっと抱き締め、その白い頬を流れる涙を拭い取る。
「隼鷹。戦争は終わったんだ。もう、誰も傷つく事はないんだ・・・」
「・・・うぅッ・・・戦争が終わって・・・嬉しいけど・・・せめて・・・翔鶴お姉ちゃんや飛鷹の仇だけは・・・討ちたかったよぉ・・・ッ！」
隼鷹は姉のように慕っていた翔鶴、実の妹の飛鷹の仇をずっと討

つ為に戦って来た。戦争が終わったのは嬉しい。だけど、せめて仇は討ちたかったのだ。

だが、それは翔輝も同じ・・・

「・・・そっか、僕も大和の仇を討ちたかったよ。せっかく、榛名に剣術を教えてもらって、本土決戦に備えてたのになぁ」

翔輝は『大和』沈没後は空襲で榛名が重傷するまで彼女に剣術を教えてもらっていた。日本陸海軍が最後の戦いとして兵力一億を投入する、まさに日本人全てが兵となって戦う本土決戦。それを信じて、修行していたのだ。

敵が上陸してくれば、彼はその先頭に立って敵軍に斬り込む覚悟をしていた。大和や死んでいった多くの仲間達の為に、一人でも多く米兵を殺そうとしていた。だけど、それももうできない――日本は、負けたのだから。

「・・・良かったぁ。お兄ちゃんが人を殺してる姿なんて、見たくなかった」

「僕は軍人だ。敵兵を殺すのが仕事なんだ。まぁ、その軍隊ももう存在しないけどね」

そう言って、翔輝は襟の階級章を引き千切って海に捨てた。もう自分は中佐ではない。軍隊が解体された今、自分は軍人ですらないのだから。

「お兄ちゃん・・・」

「あーあ、仕事なくなっちゃったなぁ。どうしよう？」

そう言って翔輝は困ったように笑みを浮かべる。その笑顔に、一体皆はどれだけ救われた事か。彼の笑顔が、わずかに自分達に希望をくれた。

「そうですよねぇ。でも中佐ならきっといい仕事が見つかりますよ」

そう言ったのは長髪にクルクルと白いリボンを巻いた少女――冬月型駆逐艦二番艦、駆逐艦『春月（はるつき）』の艦魂だ。

「確かに、あんたは結構器用だからね。きっとすぐ仕事が見つかるわよ」

左寄りのサイドテールに強気な瞳をした少女、冬月型駆逐艦三番艦、駆逐艦『宵月（よいづき）』の艦魂の言葉に翔輝は苦笑いする。
「そんな事ないよ」
「安心しなさい！　あんたの仕事が見つからなかったら、私の下僕にしてあげるわよ！　ありがたく思いなさい！」
そう言ってあまりない胸を張って仁王立ちする宵月。そんな彼女に翔輝は苦笑いするが、ムッとした隼鷹が彼女を睨む。
「お兄ちゃんはずっと私に乗ってるんだもん！　宵月にはあげないから！」
子供っぽく怒る隼鷹に、とても柔らかな笑顔（作り笑い）をする年下の宵月。
「隼鷹さん。残念ですがそれは不可能です。これは決定事項！　さあ長谷川！　私に忠誠を誓いなさい！」
そう言ってさらに胸を反らす宵月。その唇が嬉しそうに曲がり、頬が赤くなっている事は誰にも秘密だ。
「へぇ、宵月って長谷川さんの事が好きなのぉ？」
そうからかうように言ってクスクスと笑うポニーテールの女性は特三（暁）型駆逐艦二番艦、駆逐艦『響（ひびき）』の艦魂。生き残りの駆逐艦の中では古参組に入る艦魂だ。
そんな響の言葉に宵月は顔を真っ赤にして慌てる。
「ち、違いますよッ！　私は別にこんなダメ人間の事なんてこれっぽっちも」
「お兄ちゃんはダメ人間なんかじゃないもんッ！」
「そ、そうですよ！」
隼鷹と龍鳳が反撃するが、宵月は「そうですかぁ？」と明らかにバカにしたような声で返す。そんな彼女に怒りを燃やす隼鷹を翔輝が慌てて押さえる。と、
「いい加減にしなさい」
「ヒいッ！」
調子に乗る宵月の首元に刀がキラリと光る。目に留まらぬ速度で

迫り刀を向けたのは鋭い瞳で宵月を睨む葛城だ。
「ちょっと葛城！　やめろってッ！」
翔輝が慌てて葛城の腕を掴んでやめさせる。翔輝の命令には葛城はすぐに従って刀を納める。それを確認すると、翔輝は顔を真っ青にする宵月を見る。
「ごめん宵月。怖かった？」
「べ、別に怖くなんかないわよッ！　誤解しないでよ！」
今度は顔を真っ赤にして宵月はふんッと翔輝に背を向けて腕を組む。そんな宵月に翔輝は困ったように頬を掻き、響はクスクスと笑っている。すると、
「宵月ばかりずるい！」
「私達だってもちろん中佐は大歓迎です！」
「も、もしよければ私の艦長になってください！」
「ずるいわよッ！　じゃあ私の艦長に！」
「私の艦長！」
「いいえ！　私の艦長になってください！」
「私をお嫁さんにしてください！」
「ちょっと！　どさくさに紛れて何言ってるのよッ！」
わらわらと翔輝は駆逐艦や潜水艦、その他小型艇の子達に囲まれる。一部はまだ終戦という現実に泣き崩れている者もいる。それは古参組。昔からずっと日本を守ると決意していた者達ばかりだ。一方で翔輝を取り囲んだのは開戦直前生まれや戦中生まれの艦魂ばかり。平和な日本を知らない子達だ。
日本を守りたいという気持ちはあった。だけどそれよりも姉妹や仲間を守りたいと思って戦って来た彼女達は、終戦という現実にショックは受けているが、それ以上にやっと平和を掴んだという現実の方が大きいのだ。
翔輝を囲む多くの水兵の子達の中に宵月は慌てて飛び込む。
「ちょっと離れなさい！　私のは長谷川を返して！」
「へぇ、やっぱり宵月は長谷川さんの事を好きなのね」

「ひ、響さんッ！？　ち、違います！　今のは言葉のあやで！」
「ちょっとどいて！　キャー長谷川さん！」
「痛いわね！　どきなさいよ厚化粧！」
ギャーギャー言い合う艦魂達。翔輝の登場ですっかりいつもの調子の戻っていた。そんな彼女達を見詰め、泣き崩れていた艦魂達にも少しずつ笑みが戻る。と、
「どけテメェらッ！」
そう怒鳴り声を上げたのは松葉杖を付いた榛名。その怒号に水兵の艦魂達はビクッと動きを止める。そんな榛名に翔輝は慌てて艦魂達を掻き分けて駆け寄る。
「おい榛名。お前怪我してるんだから無理するなよ」
「けッ、テメェに心配されるほど落ちてなんかいねぇよ」
「相変わらずお前は素直じゃないなぁ」
「うるせぇ！　テメェには関係――ぬおッ！？」
翔輝は突如フラフラの榛名を担ぐ。それは見事なお姫様抱っこだ。あまりの事に言葉を失う榛名に、翔輝はにっこりと微笑む。
「怪我した女の子が無茶するなよ」
その至近距離の笑顔に、榛名は顔を真っ赤にして今の自分の状況を理解した。
「は、放しやがれッ！　殺すぞッ！」
「はいはい。怪我が治ったらどうぞご自由に」
「は、放せってボケぇッ！」
榛名はジタバタ大暴れ。翔輝が「動くな！　っていうか蹴るな！」と怒るが、榛名は必死になって抵抗する。さすがの翔輝も耐え切れず、仕方なく彼女を床に下ろすと、見事な蹴りが翔輝の腹に炸裂。
「痛ッ！　お前何すんだよ！」
「うるせぇッ！　後でテメェ殺すからなッ！」
そう怒鳴り、榛名はプイッと背を向ける。そんな榛名に翔輝はため息するが、榛名の頬は赤く、その口元はどこか嬉しそうに緩んでいた。

「あぁん！　うちも抱っこしてぇな！」
伊勢はそう言うと翔輝に背中から抱き付く。
「お、おい伊勢！」
「うちもお姫様抱っこしてぇな」
「お前も榛名も何で大怪我してんのにそんなに動けるんだよッ！」
「愛のパワー全開やぁッ！」
「意味わかんない！」
「俺は違うからなッ！　んな力ねぇわッ！」
翔輝を中心に、艦魂達はいつもの雰囲気に包まれる。誰もが笑い、誰もが楽しみ、誰もが幸せな、そんな時間。
一九四五年八月十五日、日本は敗北した。
多くの犠牲を出しながら、必死に戦った戦争に、日本は負けたのだ。
でも、これで良かったのだ。
これでもう、誰も戦わなくていい。誰も傷つかなくていい。
愛する祖国が、これ以上傷つく事はないのだ。
日本は負けた。その現実は変わらない。
でも、全てが終わった訳じゃない。
日本はまだ生きている。国民も大勢生きている。そして、艦魂もたくさん生きている。
これが終わりじゃない。
――始まりなのだ。また新しい、日本という歴史が始まったのだ。
翔輝は、きっと日本は蘇る。そう信じていた。
だって、大和が必死になって、命を懸けて守った国だ。その国が、このまま滅びるなんて、絶対に有り得ない。
多くの艦魂達に囲まれながら、翔輝は蒼い蒼い、どこまでも蒼い空を見上げ、そっと笑みを浮かべた。
「――大和、戦争は・・・終わったよ」
その時、一陣の風が吹いて翔輝の頬を撫でた。その風が何を意味し、そしてそれが彼女だったのか、それはわからない。だけど、

――希望はまだ終わっていない。

彼女の為にも、彼女が愛したこの国を復興させる。それが、生き残った自分に課せられた使命なのだから。

翔輝はギュッと、腰に挿した武蔵の形見の軍刀の柄を握り締めた。

新たな決意を胸に刻み、翔輝は小さく微笑んだ。

時に一九四五年八月十五日、日本が敗北し、また新たな歴史が始まった日であった。

最終章　第一節　悲しみの終戦　夏空の下の新たな始まり（後書き）

あとがき外伝　霧島のラブラブ作戦！？

艦魂世界。それは本編などの世界から離れた艦魂だけの、艦魂が普通に暮らせる世界の事である。そして、この世界には多くの艦魂達が暮らしている（一部人間もいる）。

その日、霧島は一人で自室の机に座ってため息していた。

彼女の見詰める先にあるのは一つのクッキー缶だ。独立機動艦隊『紀伊』という別の艦魂世界の友達である紀伊（真名は凛）からもらったほれ薬入りのクッキーだ（独立機動艦隊『紀伊』―連合艦隊の大勝利！の第８６話あとがき参照）。

凛は「これで長谷川の心を射止めるのよ」と言っていた。つまりはこれで翔輝の心を一時的でも自分にフォーリンラブにしろというのだ。これが武蔵なら迷わず翔輝の口にクッキーをぶち込むだろうが、霧島は悩んでいた。

確かに翔輝とラブラブしたい気持ちはある。でも、それは彼の本当の気持ちであって、こんな手段は使いたくなかった。でも、最近出番がない上に人気もない自分が彼に少しでも愛されるなら、多少の実力行使も仕方ないかもしれない。

霧島は悩んでいた。

自分に正直になるか、清廉潔白でいるか。

霧島は本気で悩んでいた。

「うーん、うーん・・・」

腕を組んで必死に頭を振って考える霧島。

一体どれくらいの時間が過ぎただろうかわからなくなった時、部

屋のドアがノックされた。
「はぁい？」
「霧島？　私よぉ」
「姉さん？　入っていいよ」
ドアを開けて入って来たのは霧島の姉、比叡だ。霧島が最も信頼する姉である。
「どうしたのよ霧島。朝からずっと部屋に篭って」
「う、ううん。別に」
「そう？　体調が悪いなら無理しないで病院に行きなさいよ？」
「だ、大丈夫だよ」
「そう？　ならいいけど」
比叡はどこか納得してない感じだったが、霧島の言葉に仕方なくうなずいた。
「じゃあ私は買い物に行くけど、一緒に行く？」
「え？　あ、私はいいや」
「そう？　じゃあね――あ」
その時比叡は霧島の机に置かれたクッキー缶に気づいた。不運にも、ちょうどその時比叡は小腹が減っていた。
「霧島。このクッキー一枚貰うわよ」
「え？　あ、だ、ダメェッ！」
霧島は顔を真っ青にして慌てて比叡を止めようとする。だが、その時にはすでに比叡は「ふが？」とクッキーを一枚頬張っていた。
霧島の顔からサーッと血の気が引く。
一方の比叡はそんな霧島の反応に不思議そうに首を傾げる。別段特別においしいという訳ではない普通のクッキーにどうしてここまで慌てるのだろうか？
――と、
「・・・あれ？」
その時、世界がグルグルと回り始めた。景色が歪み、グニャグニャとなる。フラフラと体がいう事を聞かない。

「き、霧島ぁ・・・？　こ、これは・・・？」
「ご、ごめんなさぁいッ！」
霧島は残ったクッキー缶を引っ掴むとダッと部屋から逃げ出した。目の縁にはたっぷりの涙。胸には罪悪感。純粋な霧島の涙がキラキラと光る。
「うむ？　どうしたのだ霧島？」
突っ走る霧島の前に現れたのは金髪が美しい美女。霧島の姉にして帝国海軍の鬼神、金剛だ。霧島はそんな金剛に「ごめんなさいぃッ！」と泣き叫びながら駆け抜けた。そしてそのまま外へ飛び出す。
一方、取り残された金剛は不思議そうに首を傾げると歩き出す。と、霧島の部屋から比叡が出て来た。
「比叡？　貴様買い物に行くのではなかったのか？」
返事はなかった。
なぜだろう、実の妹（出身は違うが）に対して本能が警告を発している。これはヤバイ。
「比叡？　どうしたのだ？」
比叡はフラフラと金剛に近寄る。と、その時、比叡の瞳がキュピーンと光った！
「姉さぁんッ！」
「ぬおッ！？」
ピョンといきなり比叡は金剛にダイブ。いきなりの事に金剛は対応できずにそのまま押し倒された。
「な、何だいきなりッ！？」
驚く金剛を、とろーんとした瞳で見詰める比叡。ここに来て金剛は比叡の異変に気づいた。
「ひ、比叡！？　どうしたのだ！？」
「姉さん・・・」
「な、何だ？」
「姉さんって、かわいいよねぇ」
「は・・・？」

呆然とする金剛に、比叡のわきわきと指が動き回る手が襲う！
着ている軍服を剥ぎ取り、サラシに巻かれた意外と豊満な胸に魔の手が伸びる。
「ひ、比叡ッ！？　貴様何を・・・ッ！？」
「姉さんって肌きれいだよねぇ～。えへへ、お胸がポヨポヨ」
「や、やめろ・・・ッ！　そ、そこは・・・ッ！」
「これから姉さんは私のものだからねぇ。滝川君にはあげないよぉ」
「や、やめろ・・・ッ！　た、助けて・・・ッ！　た、滝川――」

霧島は家から響く金剛の悲鳴を聞き、泣きながら走った。
「ごめんなさぁいッ！」
霧島は泣きながら決めた。
凛には悪いが、これは危険物だ。まず過ぎる。これは本当にヤバイ。姉の犠牲によって至った結論に、霧島はクッキーの処分を決めた。
「こ、公園のゴミ箱に捨てれば――きゃぁッ！」
ズシャーッ！
霧島は見事なヘッドスライディングを炸裂させた。こんな時に限って炸裂した見事なドジだ。そして、霧島の手から離れたクッキー缶は空へ飛び、少し離れた場所に落下。衝撃でフタが外れ、中から一枚一枚内装されたクッキー（数十枚）が散乱した。
「あうぅ・・・」
霧島は鼻を擦りながら起き上がると、目の前に広がっているクッキー地獄に顔を真っ青にする。
「はわわわッ！」
霧島は慌てて全て拾おうとする。と、その時直上に敵機が現れた。
「カーッ！　カァッ！」
「キャアアァァッ！」
急降下爆撃のように襲って来たのは無数のカラスの大群。霧島はその黒い恐怖に泣きながら体を縮こまらせて動かなくなってしまう。

そして、そんな霧島の目の前でカラス達がクッキーを一枚一枚（数十枚）をくちばしに咥えて飛び去って行った。
恐怖が遠くへ行った事に、霧島は安堵の息を漏らして今まで伏せていた顔を上げた――そして、先ほどまで広がっていたクッキー地獄が全滅している事に気づいて、霧島は別の地獄に悲鳴を上げた。

その頃、上空を飛ぶカラス達はせっかく獲物をゲットできたのに袋が邪魔をしていて食べれないという実態に怒り、次々に捨てた。
無数のクッキーが空から投下される。それはまさに空襲のような状況だ。そして――

霧島は必死になってクッキーを探していた。もうほとんど泣きながらだ。
そして、霧島は絶望の光景を見る事になった。
「はわわわわわッ！」
顔を真っ赤にする霧島が見た光景とは・・・

榛名「えへへ、瑞鶴。テメェ、よく見るとめちゃくちゃかわいいじゃねぇか」
瑞鶴「ど、どうしたんですか榛名さんッ!?　あッ！　だ、ダメですぅッ！　そ、そこは・・・ッ！　あぅ・・・ダメ・・・胸は弱いんですぅ・・・」

隼鷹「飛鷹ぉッ！　かわいいよぉッ！　結婚しよぉッ！」
飛鷹「ま、待ちなさい姉さんッ！　私達は女同士で姉妹であって・・・ッ！　こ、コラァッ！　スカートの中に手は入れちゃダメェ・・・ッ！」

天城「べ、別にあんたが好きって訳じゃないんだからッ！　これは仕方なくよ仕方なくッ！　あんたの為なんだからありがたく思いな

さいよねッ！」
長門「天城は素直じゃないわねぇ。私に抱っこされたいなら言えばいいのに。よしよし」
天城「う、うるさいわよぉ～・・・（満面の笑み）

加賀「赤城。私の愛を受け取ってぇッ！」
赤城「ば、バカはやめてぇッ！　わ、私には伊達さんが・・・ッ！　服を脱がさないでぇッ！」

日向「山城お姉ちゃん！　私と結婚してぇッ！」
山城「・・・ッ！　日向、落ち着け・・・ッ！」

蒼龍「飛龍、これを着てほしい・・・」
飛龍「いやあああぁぁぁッ！　何で姉さんバニー服なんか持ってるのよぉッ!?　誰か助けてぇッ！」

雲龍「翔鶴様ぁッ！　愛してますッ！　心の底から愛してますぅッ！」
翔鶴「貴様離れろッ！　な、何をしているッ!?　なぜ服を脱がすッ!?　や、やめろッ！　そのサラシは取るなぁッ！」
雲龍「こ、この向こうに翔鶴様のペッタンコが・・・ハァハァ・・・ッ！」
翔鶴「き、貴様私を愚弄するのかッ!?」
雲龍「大丈夫ですッ！　翔鶴様が貧乳を気にしてサラシの下にパットを入れてごまかしている事は承知済みです！」
翔鶴「ごはぁッ!?」

扶桑「伊勢ちゃあああぁぁぁんッ！」
伊勢「扶桑姉はんッ!?　あ、あかんてッ！　嫌やッ！　き、着物は脱がさんとおてぇッ！　ダメぇッ！　着物の中に手は入れちゃ・・

・ッ！　あひぃ・・・あぁ・・・ひゃう・・・ら、らめぇ・・・」

大和（伊）「ハァハァ・・・かわいい、すごくかわいいぞぉ・・・ッ！」

陸奥「嫌あああぁぁぁッ！　何で大和（伊）さんがここにいるんですかぁッ!?　それとこの頭のネコミミには一体何の意味がぁッ!?」

大和（伊）「気にするでない。それよりも、あぁ、かわいいぞぉ・・・ッ！」

陸奥「だ、ダメですッ！　わ、私には長谷川さんという心に決めた人が・・・ッ！　あぅ・・・だ、ダメぇ・・・ッ！　あああああぁぁぁぁぁぁッ！」

一部おかしな部分があったが、とにかくものすごい状況に陥っていた。その光景に霧島は愕然とする。この全ての責任は自分である。目の前で広がる百合ワールド。自分はこんな世界に入るつもりはサラサラないのに。な、何でこんな事に・・・ッ！

霧島は突っ伏して泣き出してしまう。

自分のドジが、壊滅的な被害をもたらしてしまった。

「うえええぇぇぇんッ！　もう死のうッ！」

霧島が自暴自棄になり掛けたその時、すさまじい爆音が響き渡った。驚いて顔を上げると、目の前にできた砂煙の中から大鳳が出て来た。

「た、大鳳さん?」

大鳳はフラフラと数歩歩くと、突如ぐったりとその場に倒れた。

いきなりの事に霧島は驚くが慌てて駆け寄る。

「た、大鳳さんッ！　しっかりしてくださいッ！」

「・・・死のう」

「た、大鳳さんッ!?　どうしたんですかッ!?」

あの純粋無垢な大鳳がいきなり「・・・死のう」なんて口走るな

んて一体何があったのか、霧島は必死になって彼女を看護する。すると、ゆっくりと大鳳は話し始めた。

「一体どうしたんですか？」

「・・・翔輝さんが・・・壊れた・・・」

「え・・・？」

「・・・クッキーを食べたら・・・そこへ通りすがった瑠璃さんに・・・」

状況は最悪であった。

霧島はほとんそ泣きながら絶望に打ちひしがれている大鳳を引きずりながら彼女が最後に翔輝を見た場所に向かった。すると・・・

「あぁ、翔輝様・・・やっと私の想いに気づいてくれたのですわね・・・嬉しいですわ・・・」

「瑠璃。愛してる」

翔輝と瑠璃が、抱き合っていた。そりゃあもうお互いの背中に手を当てていつでもキス可能な構えだ。

霧島は卒倒した。

大鳳は泣き出してしまった。

ちなみに翔輝が食べたのは大鳳が柚子（独立機動艦隊『紀伊』の金剛（柚子）の事）からもらったクッキーだ。まぁ、どちらも凛が用意したので同じものだったのだ。

倒れる二人の前で、翔輝は瑠璃にキスを迫る。瑠璃はもちろん抵抗などする訳もなく、そっと口付けを交わ――

「・・・死ねぇッ！」

ドゴォンッ！

すさまじい爆音が響き渡り、翔輝爆死。瑠璃はギリギリで回避した。

瑠璃はクルクルと着物を着ているとは思えないほど軽快な空中宙返りをしながらスタッと着地した。そして、黒煙を睨みつける。

「またあなたですの？　いい加減にしてほしいですわ」

「・・・それはこっちのセリフだ」

黒煙の中から姿を現したのはバズーカを構えた武蔵であった。いつもは無表情の彼女は、今はすさまじい怒りの表情を浮かべている。なぜだろう、彼女の背後に白虎が見える。

「・・・翔輝をたぶらかせた罪、万死に値する」

「あら？　見ていたなかったのですの？　今のは翔輝様からでしたのに」

「・・・黙れッ！　貴様の策だとは百も承知！　死ねッ！」

ドガアアァァァンッ！

武蔵のバズーカが発射され、瑠璃が爆発する――否、瑠璃はそれを横に跳んで避けた。

「いいですわ。あなたとはいずれ決着を着けるつもりでしたもの。お相手になりましょう！」

瑠璃は天の舞った。その背後になぜか青龍が見えたのは気のせいだろうか？

すさまじい大激戦を繰り広げる武蔵と瑠璃。一方、気絶していた翔輝は起き上がった。

「あ、あれ？　ここは・・・」

爆発のショックのおかげか、翔輝は元に戻っていた。

「って、何で武蔵と瑠璃がケンカしてるのッ!?　ちょっと二人ともいい加減に――もがぁッ！」

突如翔輝の口に例のほれ薬入りクッキーが炸裂した。もちろん吐き出すなんてできず、翔輝はそれを食べてしまう。

「い、一体何すんだよ姉さんッ！」

「すまない」

そこにいたのは絶世の美女、瑪瑙であった。だが、いつもは無表情の瑪瑙はなぜかすごくワクワクしていた。その理由は・・・

「そ、それより早く二人を止めないと・・・って、あれ？」

グワングワンと世界が回ってきた。次の瞬間、彼の意識に最初に映ったのは――瑪瑙。

翔輝の目がとろんとなる。

「ね、姉さん・・・愛してるよ・・・・・」
「私もだ翔輝。愛しているぞ」
そう言って、二人は抱き合った。翔輝は瑪瑙の頬に、瑪瑙は翔輝の頬にそれぞれキスをする。ここでようやく気絶から復活した霧島が再び気絶。大鳳が前世の罪を懺悔し始めた。
恍惚(こうこつ)の表情を浮かべて自らに甘えるかわいい翔輝に、瑪瑙は死ぬほど感激していた。思い出すのは彼がまだ小さかった頃の事。こうして自分に甘え、「お姉ちゃん」と慕ってくれていた。その光景が月日が経って今ここに現れた。こんな嬉しい事はない。
「翔輝、お前は本当にかわいいな・・・」
「姉さん・・・」
瑪瑙は笑みを浮かべると翔輝にキスを迫る。もちろん翔輝はそれに抵抗する事はなく、二人の唇がそっと重な――
「待つですううううぅぅぅぅッ！」
その怒号に瑪瑙は不機嫌そうに口をへの字に曲げて振り向く。するとそこには肩を激しく上下させて荒い呼吸をする大和がいた。その後ろには雪風、葛城、龍鳳の三人もいる。だが、なぜかその四人とも荒い息をし、服が激しく乱れている。理由はここに来るまでに皆クッキーを食べた他の艦魂に襲われ、必死に逃げてきたからだ。
瑪瑙はそんな大和達の登場に明らかにテンションが下がった。
「まったく、空気を読まない者達ばかりだな」
「姉さん？」
「翔輝。待っててくれ。すぐに片付ける」
「うん。がんばって姉さん」
翔輝の激励に、瑪瑙の戦闘能力が飛躍的に急上昇する。
一方の大和達は瑪瑙を応援する翔輝を見て愕然とするが、すぐに体勢を立て直す。瑪瑙に操られた翔輝を救う為にも、負けられない。
「翔輝さんを返してくださいッ！」
「長谷川さん！　気を確かにッ！」
「主殿ッ！　誘惑に負けてはダメだッ！」

「は、長谷川さんッ！」
大和達が必死に翔輝に声を掛けるが、翔輝は一途にキラキラとした瞳で瑪瑙を見詰めている。その温かな視線に大和達は泣きそうになるが、必死に涙を堪えて瑪瑙と対峙する。
一方の瑪瑙は翔輝の応援を受けてニヤリと口元を吊り上げて笑みを浮かべる。
「大和達には悪いが、翔輝は誰にも渡さん。ここで消えてもらう」
瑪瑙は腰に下げた二本の日本刀を引き抜くと両手に構えた。大和達もそれぞれの武器を構えると瑪瑙と対峙した。
霞家の最終兵器（前線に立つ事が多いが）と謳われる史上最強の剣士である瑪瑙。それと対峙するのはかつて世界最強と謳われた連合艦隊の艦魂である大和達。共闘戦線として瑠璃は瑪瑙に、武蔵は大和側に立った。そして気絶から立ち直った霧島もまた大和側に加わった。
睨み合う両軍。
一人の男を懸けて、恋姫達の最後の決戦が始まろうとしていた。

「・・・翔輝さん」
睨み合う両軍の横で、大鳳は翔輝に近づくと、持っていたクッキーを食べさせ、彼の視界に自分を映した。その光景に抜刀攻撃を開始しようとしていた大和達は驚愕する。
「大鳳ッ！　あなた何してるのよッ！」
「翔輝を返しなさいッ！」
「主殿ッ！」
大和達の非難の声を浴びながらも、大鳳は翔輝を抱きかかえると純白の翼を生やして空に飛び立った。大和達が慌てて追いかける。まさか大鳳がここまでするとは思っていなかったのだ。
だが、大鳳は何も翔輝を独占したいとか思ったのではなく彼女なりの考えがあった。
このままでは戦いが起きて怪我人が出てしまう。だったら一度自

分に彼の視界を向けさせて、どこかに監禁。ほれ薬の効き目が切れるまで隔離しようと考えていた。

大鳳の考えは見事なものであった。だが、ほれ薬の効果はすさまじく・・・

「かのん」

「・・・え？」

「愛してるよかのん」

「・・・ッ！」

突然の翔輝の爆弾発言に大鳳は顔を真っ赤にして動揺する。しかも翔輝はそう言って大鳳に抱き付いた。大鳳はそんな彼の行動に目をグルグルと回した。

翔輝に抱きつかれて動揺しまくる大鳳は真っ直ぐに飛べずに墜落。大鳳は気絶した。ちなみに墜落のショックではない事は先に言っておく。そして気絶した大鳳に翔輝がまるで子猫のように甘える。やっとの想いで追いついた大和達はその光景に顔を真っ赤にして救出しようとするが、再び二軍に分かれて激突。気絶する大鳳に懐く翔輝の横で、すさまじい激戦が繰り広げられた。

ちなみに大鳳は何度か気絶から復活するが、そのたびに翔輝に抱き締められたりされて再び気絶した。

それから半日後、やっと騒動は終結した。その後霧島が泣きながら被害者全員に謝罪。わんわん泣きながら謝る霧島に、むしろ励ます声の方が多かった。

ちなみに金剛は妹にけしからん悪知恵を植えつけた紀伊に対して全面戦争を主張したが、大和達保守派と霧島自身の必死の説得でそれは空中分解した。

そしてその夜――

「うぅ、みんなごめんな」

そう言って皆に謝罪したのは翔輝。彼自身が悪い訳ではない（むしろ周りが悪いのだが）のだが、そういうところが彼の律儀なところだ。

「いいえ！　別に翔輝さんは何も悪くないですよッ！」

「主殿は惑わされていただけだ」

「翔輝様は何も悪くないですわ！」

大和達が必死に翔輝は悪くないと叫ぶが、それは同時に自分達が悪いのだと認めている事に気づかないところが彼女達らしい。

翔輝はとりあえず迷惑を掛けた子に謝った。その後彼はある人物を探したが、見つからなかった。その人物とは・・・

「なぁ、かのんはどこにいるの？」

最も迷惑を掛けた大鳳に翔輝は謝ろうとしたのだが、彼女の姿がないのだ。

「あぁ、大鳳なら帰りましたよ？」

「帰った？」

「はい。すごく疲れたと言って」

その疲れた原因が確実に自分にあると知っている翔輝はその言葉にがっくりと肩を落とした。

「翔輝さん？」

「うぅ、かのんに嫌われたらどうしよう・・・」

「たぶんそれはないですよ」

大和ははっきりと断言した。翔輝はまだ不安そうにしているが、翔輝へ懐いている大鳳が彼を嫌う事なんてないし、何より帰り際の大鳳が頬を赤くしていた。あれはきっと満更でもなかったのだろう。うらやましい。

頭を抱える翔輝に小さく微笑み、大和は「大丈夫ですよ」と励ましの言葉を言う。彼のこういう部分も、自分は好きなのだ。

翔輝はそういえばと何かを思い出して部屋の隅でぐったりしている陸奥を見た。情報によるとなぜか護衛戦艦『神龍』の大和（伊）に襲われたらしい。いつの間にこの世界に入っていたかは知らない

が、とにかく彼女も犠牲者に変わりはない。
「大丈夫か陸奥？」
翔輝が声を掛けると、陸奥は聞こえないのかうつむきながらブツブツと何か言っている。耳を澄ますと「もうお嫁に行けない・・・」と連呼していた。何があったか知らないが、どうやらかなりダメージ（精神的に）を受けたらしい。
「伊東はんの大和（伊）はんはすごいちゅー噂やしなぁ」
「すごいって、何がさ？」
「あんたもネコミミを付ければ味わえるんちゃう？」
「・・・よくわからないけど、遠慮しておく」
「まぁ、そん時はうちらが守るから安心せぇな」
伊勢の言葉に翔輝は苦笑いすると、激しく落ち込んでいる陸奥の肩をポンと叩いた。その衝撃にハッと陸奥が顔を上げると、そこには優しく微笑む翔輝が。
「大丈夫だよ。陸奥ならきっといいお嫁さんになるから」
「は、長谷川さん・・・ッ！」
「いや、泣きながら喜ぶような事かな？」
相変わらず乙女心なんて全然わかっていない翔輝にはわかる訳はないが、陸奥はこの言葉に死ぬほど感動した。
そんな二人のやり取りに大和や伊勢、霧島ら葛城の目が冷たいものに変わる。その気配に翔輝は気づいて苦笑いした。
「えっと・・・」
「まあまあみんな落ち着いて。とりあえずひと段落したんだし、今日はみんなでパーッと宴会よ！　ね？　天城」
「う、うるさぁいッ！」
ニコニコと笑みを浮かべる長門の言葉に天城が顔を真っ赤にして怒鳴る。一体二人に何があったのか、それは翔輝にはわからない。わかる事は・・・
「相変わらず、長門さんは宴会好きですね」
「みんな笑顔で大騒ぎ！　宴会至上主義万歳よッ！」

「まぁ、気持ちはわかりますけどね」
「でしょぉッ!?　じゃあ宴会用意急げッ！」
長門の号令に大和達はすぐさま宴会の用意に取り掛かる。さすがは軍人といったところか。その精錬させた動きはすばらしい――でも、あんまりこういう事で発揮してもらいたくない。
その後長門の指揮の下、大宴会が開かれた。
宴会大好き。それが艦魂達であった。

酒に酔っ払った長門や大和に絡まれて顔を真っ赤にして逃げようとするもすぐに捕まって襲われる翔輝を見て、霧島は小さく笑みを浮かべた。
やっぱり、自分は翔輝の事が好きだった。
だからこそ、卑怯な手は使わず、真正面から彼に気持ちを伝えよう。そして、彼の気持ちが、本当に自分に向いてくれる事を信じて、戦い続ける。
一人の恋姫が、新たな決意をした瞬間であった。
そんな妹の姿を見て、比叡は小さく笑みを浮かべた。
「・・・がんばりなさい。霧島」

ちなみに、薬の効果とはいえ実の妹に襲われる（しかもその後気絶。気が付いた時には一糸纏わぬ姿で廊下に倒れていた）という経験をした金剛は、同性愛禁止法という法令を発令したが、それは却下された。
女所帯である軍隊（艦魂側）では、百合というのが少なからず存在したからだ。
金剛率いる正常恋愛主義者と百合恋愛主義者が後日大激突したのだが、そのお話は別の機会にお話しましょう。

という事でした。草薙先生、こんな感じでどうでしょう？
いやぁ、ずっと本編がシリアスだったからこういうコメディー風なのが懐かしいです。書いていて楽しかったですねぇ。
うーむ、本編の最後もコメディーになってしまったのも、少なからずこの影響が出たのだろうか？　自分の心理状態が不明です。
さて、本編はついに終戦を迎えました。
なんか前回の章からいきなり終戦まで飛んで、しかもその間の事をあんな箇条書きみたいにしてちょっと不安な部分もありますが、大和がいないんじゃ物語を組み立てるなんてできませんからね。
終戦の日、玉音放送を聴いて泣き叫ぶ艦魂達。書いていて悲しかったです。彼女達は日本の為に必死で戦った分、その日本が負けた事が悔しくて、悲しくて仕方がなかったでしょう。
そんな彼女達を支えたのが、いつの間にか中佐に昇進して『隼鷹』の航海長になった翔輝。大和の死の後も、彼はずっと艦魂達を支えてたんですね。
日本は負けました。
多くの犠牲の末に、負けたのです。
太平洋戦争は、終わりました。

さて、次回はまた少し飛んで降伏文書調印式のお話です。
東京湾を埋め尽くすアメリカ艦隊。
戦艦『ミズーリ』の上で、日本の全権団が降伏文書に署名する。この瞬間に太平洋戦争、そして第二次世界大戦は完全に終了したのです。
その光景を見詰めるアメリカの艦魂達。
さらに、久しぶりにあのキャラクターが登場します。
そして、アメリカ艦魂と彼女が日米最後の大激突！？
まだまだ予断を許さない物語、それが艦魂年代史です。
次回もまたお楽しみに！

最終章　第二節　長門とアメリカ艦魂　激突の末に託した想い（前書き）

終戦から半月後、東京湾に米艦隊が訪日。戦艦『ミズーリ』の上で日本の敗北の正式な手続き――降伏文書調印が行われた。
三年八ヵ月続いた太平洋戦争、そして第二次世界大戦が終了した瞬間であった。
その光景を見守るアメリカ艦魂、そして長門も。
降伏文書調印式で、決して交わる事のなかった二つの物語が重なる。
アメリカ艦魂と長門の、日米最終決戦とは！？
勝者と敗者。それぞれの想いがついに大激突！

さらにあとがきでは前回と同じ1話編成の短編が盛り込まれています。
しかも再びあの子が登場！？
本編とあとがき。双方共にどうかお楽しみください。

最終章　第二節　長門とアメリカ艦魂　激突の末に託した想い

一九四五年九月二日、東京湾に星条旗を翻した米艦艇が大集結した。戦艦はもちろん空母、巡洋艦、駆逐艦。旧日本海軍では保有できなかった数の艦艇が、東京湾を埋め尽くした。

そんな米艦隊のうち、戦艦『ミズーリ』に向かって数隻の小型艇が接舷した。ラッタルを上って現れたのは重光葵（しげみつまもる）外務大臣率いる日本降伏署名全権団であった。

全権団は『ミズーリ』の乗艦すると大勢の米兵に見送られながら降伏文書調印の場に向かう。そこにはダグラス・マッカーサー大将以下連合国軍側の重役が待ち構えていた。

多くの視線を浴びながら、重光は天皇・日本政府代表として降伏文書に署名。その他大本営代表として参謀総長である梅津美次郎（うめづよしじろう）陸軍大将も署名した。

その後、マッカーサー他連合国加盟国代表者が次々に署名した。

――この瞬間、正式に第二次世界大戦及び太平洋戦争（大東亜戦争）は終結した。

降伏文書調印式を見守るのは人間だけではない。艦魂達もそれを見詰めていた。

空母代表としてエンタープライズ、エセックス、ヨークタウン、ホーネット、レキシントン。戦艦代表としてアイオワ、ニュージャーシー、ウィスコンシン、ミズーリ、ニューメキシコ。その他十数名の米艦魂達がその光景を見詰めている。

日本軍によるパールハーバー奇襲攻撃から3年8ヶ月。長く苦しい戦いはようやく終わりを迎えたのだ。

こんなアジアの小さな島国である日本に、アメリカ史上最大の苦戦をしたなんて、今でも信じられない。

だけど、それももう終わった。

自分達アメリカ合衆国は、世界を混乱させ、破壊と暴虐を尽くした悪国大日本帝国を敗北させ、今こうして降伏させた。

マストに翻る星条旗が揺れる、本当の勝利の瞬間だった。

だが、エンタープライズは舌打ちするとまだ日本の全権団が退艦を終えていないにも関わらず踵を返す。慌ててエセックスが追い、アイオワやヨークタウンが不思議そうに見詰める先、彼女は同じく東京湾に浮かぶ1隻の戦艦を睨み付けた。

それは、パールハーバー攻撃命令を発した日本戦艦『ナガト』であった。

エンタープライズはキッとその日本に唯一残されたその戦艦を睨み付けると、光に包まれて消えた。アイオワ達は彼女の行動を察し、慌てて空間転移した。その向かう先は――戦艦『ナガト』。

戦艦『ミズーリ』から日本の降伏調印全権団が退艦するのを、第二主砲の上で長門はじっと見詰めていた。軍帽や軍服に隠れた部分には痛々しい包帯が巻かれている。

彼女も敵機の空襲で爆弾三発を受けて中破した。

東京湾に浮かぶ『長門』は空襲によって艦橋は破壊され、さらには本土決戦に備えて電探や副砲、対空兵装、カタパルトまでが全て陸揚げされ、後檣楼、煙突も撤去。艦体には迷彩偽装まで施され、もはや国民に最も親しまれた日本海軍の象徴ともいうべき戦艦の勇姿は、微塵も残されていなかった。

そして、何よりも国民の心が痛んだのは、艦首マストに掲げられた星条旗である。

日本の誇りである戦艦『長門』が、米軍に接収されたという現実がそこにあった。

自分のマストに翻る星条旗を一瞥し、長門は小さくため息して天を見上げた。

上空を飛び回るのは首都圏防空を任されている陸軍の近衛航空隊

こと飛行第二四四戦隊や海軍の航空隊ではなく、米空母から発進した艦載機群であった。

上空を旋回する米機の見事な編隊を見詰め、長門は苦笑いした。

「・・・勝てる訳、ないわよね」

今の日本の航空隊は編隊を組むどころかまともに飛ぶ事すら難しい。しかも数も揃っていない。それなのに米軍は見事な編隊を組む航空隊をこれだけ多く持っている。飛行機の数はもちろん、空母の数、その他各艦艇の数も日本海軍のそれを圧倒している。

勝てる訳、ないのだ。

戦前、自分が命を懸けて起こして失敗に終わった反乱の先が、目の前に広がっている。

大日本帝国は滅亡した。

これから日本には分割割譲されるという運命が待っているだろう。アメリカやイギリス、ソ連はその他各国にバラバラにされる日本。考えただけでも頭が痛くなる。でも、もう自分にはどうする事もできない。

自分はもう、戦う事はできないのだから。

もし自分に艦を動かす力が――いや、主砲一基でも動かす力があったら、今周りにいる敵艦隊を砲撃できるのに。せめて、最後だけは死に花を咲かせたかった。

大和は特攻任務を引き受けて沖縄の海に沈んだ。

なのに自分は、何もできない。周りには憎き米軍がうようよいるのに、自分には砲一門ですら動かす事もできない。

何て無力なのだろう。

愛する祖国にはもう、滅亡の未来しかない。

アジアから生まれた唯一の列強国として、欧米列強と真っ向からぶつかれるアジアの誇りであった日本は、今ではもう見る影もない。

そして、自分も遅かれ早かれ死という未来が待っている。

敗戦国の軍隊や軍艦がどうなるかなんて、これまでの歴史が嫌というくら証明している。

自分は解体されるか処分されるか、あるいは標的艦となるか。どれにしても、死ぬ事は決まっている。

長門はもう考えるのも嫌になった。

そして、日本の全権団が小型艇に移るのを見守ると、踵を返す。

「出て来なさいクソジャップの艦魂ッ！　どこにいやがるッ！？」

そのすさまじい殺気を含んだ声に、長門はクルリと振り返った。

甲板を見ると米海軍の軍服を着た金髪の少女――エンタープライズが辺りを見回して怒鳴っていた。

「誰かしら？」

米海軍の艦魂だという事は見てわかる。それが一体こんな敗軍の艦魂である自分に何の用だろうか。長門は不思議そうに口を開く。

「私に何か用かしら？」

その柔らかな声に顔を上げたエンタープライズはキッと自分を睨むと光に包まれて消えた。次の瞬間、エンタープライズは長門の背後に現れた。

エンタープライズは殺気に満ちた瞳で長門を睨み付けている。長門はそんなエンタープライズと静かに対峙した。

長門は自分を睨み付ける少女に向かってにっこりと微笑む。

「こんな敗軍の老兵に一体何の用かしら？　アメリカのお嬢さん」

長門の問いに対して少女から返って来たのは言葉ではなく強烈な拳であった。長門は回避できずにそれを頬に受け、吹き飛ばされた。敵の砲弾に耐えられるように設計された強固な装甲に覆われた主砲塔の上を二転三転する。

「いきなり何するのよ・・・ッ！」

長門が黒い瞳に怒りの炎を燃やしながらゆっくりと起き上がると、口の端から垂れる血を拭って少女と対峙する。少女はそんな長門に激昂すると、もう一発拳を叩き込み、長門を押し倒し、抵抗する長門に向かって少女は何発も拳を叩き込む。怪我を負っている長門は満足な抵抗もできずに少女の拳を受けて悲鳴を上げる。

「エンターッ！　やめなさいッ！」

そこへ乱入して来たのは同じく米艦魂。桃色の長い髪をした少女は自分を殴り付けて来る少女を捕まえると無理やりに引き剥がす。
「放せアイオワッ！　こいつ私に殺させてよッ！」
「やめなさいエンタープッ！」
少女はいつの間にか集まった米艦魂達に取り押さえられた。そんな光景を長門が見詰めていると、先程少女を捕まえた桃髪の少女がそっと自分に向かって手を伸ばして来た。だが、長門はそれを断って一人で立ち上がる。
「いきなり殴ってくるなんて、さすが暴虐の限りを尽くすアメリカ人ね」
「私達アメリカは平和を重んじる国よ。あの子が例外なだけで一緒にしないでほしいわ」
「よく言うわね。国を挙げて戦争万歳の凶暴民族がよく言うわ」
彼女らしくない言葉を言い続ける長門。まるで演劇でもしているかのように、その口から吐かれる言葉には感情が込もっていない。
アイオワはそんな長門の言葉に一瞬眉をピクリと動かすが、いつものように冷静に言葉を返す。
「まあ、敵をどう思うかなんてどの国も同じようなものよ。私達も日本人は狂った民族だって教えられてるから」
「あらぁ奇遇ね。でも私達は《教わった》なんてレベルじゃないわよ？　日本人皆が心からそう思ってるんだもの。アメリカ人は降参して投降した敵兵を容赦なく殺し、女は陵辱し、子供はいたぶりながら殺す。奴らは人間じゃない。狂った鬼そのもの。不思議ねぇ。見てると同じ人間にしか思えないわ。ねぇ、それは一体誰の皮を剥いで着たのかしら？」
長門は挑発的にアイオワを見下す。アイオワの後ろにいるニュージャージーやエセックスが怒り殴り飛ばそうとするのを、ヨークタウンやウィスコンシンが止める。
アイオワはただじっと長門を見詰め続ける。
「さぁて、私はどんな目に遭わされるのかしらねぇ？　拷問？　あ

ぁ、そっかそっか。私女の子だもんねぇ。そっちの艦魂が見える兵隊さんの慰安婦にでもするのぉ？　へぇ、やっぱりアメリカ人って最悪ね。黄色人種でも女なら誰でもいいんだぁ。お盛んな事ね。でも残念ね。私は誇り高い日本戦艦なの。敵兵にそんな恥辱を受けるくらいなら死んだ方がマシなのよ。だからその時は舌を噛んで死んでやるから」

長門は散々吐き捨てた後、クルリと身を翻す。

「どこへ行くの？」

「さぁ？　私の勝手でしょ？」

「動かないでほしい。あなたは捕虜だ。私達合衆国軍の命令に従ってもらう」

アイオワは腰のホルスターから拳銃を引き抜いて長門に向ける。艦魂はそんな物では死なないのは百も承知。だけど、痛みは受ける。長門は口元に小さな笑みを浮かべた。

「もう、こんな老兵をいじめてそんなに楽しいの？」

長門はため息をすると再び彼女達に向き直る。自分を見詰めるアメリカの艦魂達は殺意すら込めている者もいる。しかし長門はそんなものに恐れる事はなく、自分を睨む米艦魂達を見下すような目で見詰める。

何をとっても、彼女らしくない行動だ。

殺気をみなぎらせる背後のエセックスやニュージャージーを止め、アイオワは長門に向き直る。アイオワは長門に何か違和感を感じていた。それを確かめるようにアイオワは平和的に話し合うつもりでいた。

「申し遅れました。私はアメリカ合衆国海軍所属、戦艦『アイオワ』の艦魂です」

「ふーん、一人前に礼儀はわかってるのね。私は大日本帝国海軍所属、特殊警備艦『長門』の艦魂よ」

「特殊警備艦？」

「そう、私達大日本帝国ではもう戦艦なんてものは存在しないの。

私は特殊警備艦。まぁ、あなた達アメリカが本土に上陸して来た時に浮き砲台として戦う艦って事よ。あーあ、せっかく本土決戦の用意をしてたのになぁ。そうすれは一億総玉砕の覚悟で歓迎できたのに」

長門の言った本土決戦という言葉にアイオワは息を呑んだ。

硫黄島戦や沖縄戦で、日本軍は命懸けの攻撃をいくつも敢行。そのすさまじい猛反撃に自分達アメリカ軍は予想をはるかに上回る犠牲を出して占領する事になった。もし同じように日本本土に上陸作戦をしていれば、それこそ彼女の言うとおり、一億の日本人を相手にする事になる。艦砲射撃や空爆をしてもこっちの動員できる数の何十倍の敵軍と戦わなければならない。そんなの、勝てるはずがない。一体どれだけの友軍が失われるのか想像を絶する。

だからこそ、人道に反した最悪の兵器だとしても原爆を使ってこの戦争を終結させたのだ。

そして、それは正解であった。

彼女の口ぶりから見ても、日本は本気で兵力一億という覚悟で迎え撃つつもりでいたのだ。

もし判断を誤っていれば、一体どうなっていたのか。

ヨークタウンやレキシントンも、長門の言葉に息を呑む。だが、

「あぁ残念ねッ！　そうなればクソジャップを皆殺しにできたのによ！」

「何で降参なんかしたんだよッ！　しなければ皆殺しにできたのに！」

エンタープライズとエセックスの言葉に、長門はキッと二人を睨む。その黒い瞳の奥には怒りの炎が燃え上がる。

「黙りなさいエンターッ！　エセックスッ！」

アイオワの怒号にエンタープライズは気まずそうに鼻を鳴らしてそっぽを向く。そんなエンタープライズを睨み、長門に向き直る。

長門は拍手喝采していた。

「さすが女子供でも殺すアメリカ人ね。もうここまで来ると賞賛に

値するわ」
　長門は皮肉を込めながらエンタープライズを見下す。その視線にエンタープライズは激昂するが、ヨークタウンやホーネットが必死に押さえる。
　アイオワはため息した。
　どうやら話し合いは無理のようだ。
　違和感なんて結局何でもなかった。彼女は狂っている。アメリカは悪の国だと教え込まれ、話し合いにすらならない。彼女は自分達を同じ艦魂とも思っていない。
　話し合いをする気もない相手に、どう話し合いをしても無駄なのだ。
　アイオワは諦めたように踵を返す。と、そこへ遅れてニューメキシコがやって来た。スプルーアンスと話し合っていたので遅れたのだ。
「ニューメキシコさん」
「どうしたのアイオワ？　浮かない顔をして」
「いいえ、ミスナガトの事なんですが――」
　そこまで言うと、ニューメキシコは瞳を大きく見開いて彼女の後ろにいる長門を見る。そしてエンタープライズ達を一瞥して何となく状況を理解した。
「ちょっとどいて」
　ニューメキシコはアイオワの肩をトンと押すと、長門の前に出た。すると、長門もニューメキシコを見て少なからず驚く。
　ニューメキシコはそんな長門を見て小さく微笑む。その笑顔は敵軍の兵に向ける冷淡なものではなく、旧友に向ける温かな笑顔だった。
「久しぶりね、ミスナガト」
「ニューメキシコ・・・何であたたがここに・・・」
　アイオワ達は不思議そうにお互いを見合う。彼女達が知る由もない。ニューメキシコも長門もまだ日米の関係が良好だった頃、合同

演習で数度顔を合わせ、一緒にお茶を飲んだ中だという事を。
「何でって言われても、ここに集結しろって命令に従って来ただけよ」
「ここには確か、前線部隊が来るはずだったけど？」
「そりゃあ私も前線部隊としてあなた達日本と戦ったんだもの。当然でしょ？」
ニューメキシコの言葉に、長門は呆然とする。しばしの沈黙の後、長門はフッと表情を柔らかくした。それは先程までの刺々しいものではなく、本当に年齢相応の女の子を思わせる、普通の笑顔だった。
「いいわねぇ、アメリカは。戦艦を前線に送ってくれるなんて。私達日本海軍は過保護され過ぎて出撃の機会なんてほとんどなかったのに」
それは純粋なやきもちだった。
自分は戦艦。敵戦艦と砲撃戦と繰り広げてお互い傷つきながらも勝利を収める。それが自分達戦艦の生き方であり戦い方。なのに、結局自分達はそれができなかった。前線にも出れなかった自分達とは違い、アメリカの戦艦は前線で活躍している。日米の差を、嫌というほど見せ付けられたような気がした。
「うらやましいわ。あなた達アメリカが」
その言葉に、アイオワは彼女の違和感に気づいた。
彼女が吐いたアメリカへの悪口は、全てウソだという事に。
彼女は確かにアメリカを憎んでいる。だけど、負けた今となってはそれももうどうでもいい。そんな感じがした。
「ニューメキシコさん、ミスナガトとはどのようなお付き合いなのですか？」
「そうね、一緒に紅茶（ティー）を飲んだ仲よね？」
その言葉に、アイオワだけでなくエンタープライズ、ヨークタウン、レキシントンも驚いた。そして長門は小さな笑みを浮かべてうなずく。
「懐かしいわね。私と陸奥、あなたとミシシッピ、アイダホと一緒

の飲んだわね」
　長門の言った二人はニューメキシコ級戦艦二番艦『ミシシッピ』、三番艦『アイダホ』の艦魂だ。合同訓練の際に『ニューメキシコ』の甲板で五人はアメリカ式のお茶会をしたのだ。今は昔、日本とアメリカがまだ友好国だった頃の話だ。
「あの時のムツの笑顔は、かわいかったわね」
「そうね。でもコーヒーを零した時にアイダホの慌てっぷりもなかなかだったわよ？」
「確かに。あれはちょっとね」
　昔を思い出して笑い合う敵同士の艦魂の姿を見て、アイオワだけでなくエンタープライズやヨークタウンは言葉を失う。
　あれだけ敵として教え込まれ、お互いに憎み合った敵同士なのに、何であんなにも楽しげに笑う事ができるのか。理解できなかった。
　呆然とするアイオワ達を置いて、ニューメキシコと長門は楽しげに会話をする。だが、それもすぐに終わりを迎える。
　ニューメキシコはアメリカの艦魂。つまりは敵でありこの戦争の勝者。対して長門は日本の艦魂。敵であり、この戦争の敗者。以前のような関係には、もう戻れない。
　長門は久しぶりに会い、そして以前と変わらない優しいニューメキシコを見て、一抹の希望を得たような気がした。
　アメリカは、日本人が思っているほど残虐非道な国ではない。きっと、日本を守ってくれる。もう二度と、日本は間違った方向に行く事はないだろう。
　スッと、長門の手がニューメキシコに差し出された。ニューメキシコもその手を見詰めて小さく微笑むと、そっとその手を掴む。
　一足早く、日米の友好の絆が結ばれた瞬間であった。
「・・・日本を、私の大好きな祖国を、お願いね」
「・・・えぇ、必ず、私達アメリカが世界に誇れる立派な国に再建してみせます」
　長門はニューメキシコのその言葉に、そっと涙を流した。

彼女を信じよう。そしてアメリカを信じよう。そう思った。
昨日の敵は今日の友、日本とアメリカは、きっといい友好国になる。そんな気がした。
「敗軍の戦艦であるあなたの未来は、決して明るいものではない」
長門は自分よりもずっと若い士官服を着た少女――レキシントンを見る。
「そうね、私は解体されるか標的艦ってところね。こんな老兵を雇ってくれるほど、アメリカも余裕はないでしょうし」
「日本の復興は私達アメリカが約束する。その代わり、日本には赤の侵攻を食い止める防波堤になってもらう」
「・・・ソ連と、戦うの？」
赤、それはつまり社会主義の事。日本やアメリカ、ヨーロッパの国々が執る資本主義と相反する危険な思想の事。その元凶にして筆頭、それはソ連――ソビエト社会主義共和国連邦。日ソ中立条約を破り、この降伏文書調印式まで降伏した日本を攻め続けた、ドイツよりも恐ろしい国だ。
「えぇ、きっとそうなるわね。これからは私達アメリカ合衆国とソビエトの大国同士の戦いになる。日本は、私達アメリカの対ソの前線基地になってもらう」
ニューメキシコの言葉に、長門はぷっくりとした唇に指を当てて考える。
「それは、日本は危険じゃないの？」
「わからない。すでに中国では私達アメリカとソ連の戦いが起きている。その結果によって変化する」
現在中国には蒋介石率いる中国国民党軍と毛沢東率いる中国共産党軍が激突している。これらの背後にはそれぞれアメリカとソ連がおり、中国の覇権を巡っての代理戦争となっているのだ。
後にこれは毛沢東率いる中国共産党が勝利し、蒋介石率いる中国国民党軍は台湾に逃げる。その後毛沢東は中華人民共和国（現在の中国）を建国し、蒋介石は台湾で中華民国を再建国した。この戦い

を国共内戦という。
　現在でもその対立は続いており、国際上台湾は中華人民共和国の領土だが、台湾では中華民国として違う政府が統治し、軍隊も中華人民解放軍と中華民国国軍と違う組織形態の軍隊を保有している。
　そんな後の世界の情勢を大きく左右する戦いが、中国で起きているのだ。
「・・・ソ連は満州にいる日本兵を捕虜にしてるみたいだけど、それはどうなるの？」
　ソ連は日本を始めとした枢軸国軍の兵をシベリアに送り、強制労働を強いた。日本だけでも一〇〇万人以上が送られ、そのうち数十万人がその極寒の地で命を落とした。いわゆるシベリア抑留である。
「わからない。返還を強く求めるつもりでいるけど、ソ連はおそらく無視する」
　レキシントンの言葉に、ニューメキシコと長門の表情が曇る。
　ソ連。全体主義を掲げるドイツと同等、またはそれ以上に恐ろしい社会主義を掲げる狂国。アメリカとソ連の戦いは、まだ始まったばかり。日本は、その波に呑まれ、一体どんな動きをするのか。
　日本の未来は過酷なものになる。だけど、長門は信じていた。
　きっと、日本はアメリカと共に発展を遂げ、いつの日か世界の一員として華々しく復活を遂げる事を。
　そう信じているから、心に多少の余力が生まれる。ふと、長門はじっと自分を見詰めるレキシントンを見た。その無表情さ、そして先程の情報の分析能力。どこか、似ている気がした。
　スゥ・・・
「・・・？」
　レキシントンの頬を、長門がそっと撫でた。その瞬間エンタープライズとエセックスが激昂するが、再びヨークタウンやホーネット、ミズーリなどに押し倒される。
　姿形は違えど、その雰囲気は懐かしい。
「武蔵に、似てるわね・・・」

「ムサシ？」
「えぇ、一九四四年十月の終わり起きたフィリピン沖の戦いで沈んだ戦艦よ」
もちろん知っている。あの戦いで沈めた日本の超弩級戦艦の一隻だ。
「似てるの？」
「えぇ、とっても。懐かしいわ・・・」
長門は遠い目をして空を見上げた。その悲しげな表情を見て、ニューメキシコは改めてアメリカと日本は戦争の勝者と敗者なのだと理解した。
しばし長門は空を見上げていたが、クルリと踵を返した。
「ナガト？」
「・・・日本をお願い」
そう言い残すと、長門は光に包まれて消えた。エンタープライズが慌てて追おうとするのを、アイオワが制して止める。
「アイオワッ！　邪魔するなッ！　私はあのクソジャップに――」
「――戦争は、終わったのよ。いつまでも憎しみ合っても仕方がないわ。彼女だって、たくさんの仲間を失ってるんだから」
アイオワの言葉に、ヨークタウンはハッとした。
そう、自分達アメリカが多くの仲間を失ったように、彼女も、日本も多くの仲間を失った。彼女が言った《ムサシ》、会った事はないが、彼女はレキシントンと似ていると言った。
ヨークタウンは呆然としているレキシントンを見る。彼女の知り合いに、もしもレキシントンのような子がいて、それを自分達アメリカが殺した。
戦争だから敵を殺すのは仕方がない。そう自分に言い聞かせてきた想いが砕け、ヨークタウンは罪悪感に押し潰されそうになった。
結局自分達は、人殺しなのだ。
祖国の為、世界の為。名目上はいくら隠しても、結局はただの殺し合い。そして自分は、彼女の仲間を殺したのだ。

エンタープライズは納得がいかずアイオワに迫る。だが、そんな彼女にニューメキシコが頭を下げた。

「ニューメキシコ・・・」

「お願い。どうか、私の古い友人を、これ以上傷つけないで」

ニューメキシコの言葉と態度に、エンタープライズはギュッと拳を握ると不機嫌そうに鼻を鳴らして踵を返すと、光に包まれて消えた。エセックスが慌てて追いかける。

落ち込むヨークタウンの腕にしがみ付くホーネットは、悲しげに瞳を揺らす姉を不安げに見詰めた。

「お姉ちゃん・・・」

何か言おうとしたホーネットの肩を、レキシントンがそっと叩いた。振り返ると、レキシントンは小さく首を横に振った。何も言わない方がいい。そういう想いが込められていた。

ホーネットはしばし考えた後、小さくなずいた。

アイオワはそんなヨークタウン達を一瞥し、今自分が乗る戦艦『ナガト』を見上げた。

鋼色は消され、空襲対策の迷彩を塗られ、植木までもが植えられている。浮き砲台として不必要な副砲や対空火器を全て外されたその姿は、まるで大日本帝国の滅亡そのものを表しているようだった。

戦艦としての誇りも、日本人としての誇りも全て失った彼女の悲しげな背中を思い出し、アイオワは何を思ったのか。

不安げに見詰めるニュージャージー、ウィスコンシン、ミズーリ。そんな妹達にアイオワは向き直ると、悲しげな笑みを浮かべて、こう言った。

「・・・日本は、私達が守るわよ。もう二度と、彼女のような犠牲者を出さない為にも」

数日後、戦艦『長門』の切り取られた後檣楼の上に、常人には見えない艦魂の力で生み出された日章旗が海風に揺られていた。

それは、アメリカの艦魂達が長門に送った、彼女の功績を称える

ものであった。
長門はそれをそっと見上げ、嬉しさのあまり涙を流した。
日本は戦争に負けた。
でも、日本という国の新たな歴史が始まったのだ。
日本がいい国に生まれ変わるように、長門はただひたすら、願い続けた。
死んでいった大和や陸奥、多くの仲間達の為にも、彼女達が必死に残そうとした日本が、誰もが笑顔でいられる国になるよう、長門は必死に祈り続けた。
海風が吹き、美しい日章旗が今日もまた風に靡(なび)いていた・・・

最終章　第二節　長門とアメリカ艦魂　激突の末に託した想い（後書き）

あとがき外伝　大和と神龍のほのぼのお茶会

艦魂世界。それは本編などの世界から離れた艦魂だけの、艦魂が普通に暮らせる世界の事である。そして、この世界には多くの艦魂達が暮らしている（一部人間もいる）。

その日、噴水公園の中でも一番大きな噴水の前で一人の少女が待ち人を待って佇んでいた。少女は何度も腕時計で時間を確認する。

少女はこの日の為に用意したきれいな薄桃色の生地に桜の花びらが描かれた着物を着ていた。着付けや髪のセットに二時間を要した事は秘密だ。

「遅いなぁ・・・」

少女はもう一度腕時計を確認する。実はすでに待ち合わせの時間を十分オーバーしていた。なのに、待っている人はいまだに現れない。

少女はもう一度確認の為に手提げバックから手鏡を取り出すと髪の毛を整える。漆黒の艶やかな髪に挿した桜の花を模った簪（かんざし）の位置を今一度整える。と、

「ごめんなさ～いッ！」

その声に少女が視線を上げると、一人の少女がこちらに向かって走って来た。

清楚な純白のワンピース。風に揺れる控えめなフリルと胸元の蒼いリボンがかわいらしい。さらに頭に被った白いリボンが巻かれた麦藁帽子がそのかわいさを増幅させる。

麦藁帽子の少女は着物の少女の前に立つと胸の前に両手を合わせ

て《ごめんなさい》のポーズを取る。
「ごめんね。出掛けるのに苦労して・・・」
「どうしたの？」
「武蔵が翔輝さんとデートなのかって疑って尋問されてたのよ」
「・・・相変わらず無茶苦茶な妹さんね」
「そうなのよ。まったく、何であんな子が妹なんだろ」
麦藁帽子の少女は心底疲れたようにため息をする。本当にその破天荒な妹のせいで苦労しているのだろう。ご苦労様だ。
「まぁ、今日はそういうのはナシ。早く行きましょう――大和」
「あ、待ってよ神龍！」
着物をきれいに着こなした神龍を、麦藁帽子が飛ばされないように押さえながら大和は追いかけた。
神龍と大和は以前お茶会の約束をしていた。その為、今日神龍は大和の行き付けの喫茶店で一緒にお茶をする為に、わざわざやって来たのだ。
もちろん、大和も大喜びだ。
そして、神龍初めて（あとがき抜き）の黒鉄艦魂世界での一日が始まった。
二人が背を向けた噴水は、今日もきれいな水のアーチを描いていた・・・

二人が向かった先は大和行き付けの喫茶店。と言っても、この世界の艦魂のほとんどがこの店に来る。他にも喫茶店はあるのだが、ここはある理由から大人気。おかげで周辺の喫茶店が全て潰れたという伝説の喫茶店だ。
赤レンガ作りのその店はどこか旧海軍兵学校（現海上自衛隊幹部候補生学校）の校舎を思い出させる。名前は《海の女神》。この名前もまた彼女達に人気の理由のひとつだ。
店の前にはすでに多くの少女や女性（全部艦魂）が長い列を作っていた。今でも大人気のその喫茶店は、連日これくらいは並ぶ。

「す、すごい・・・」
「やっぱり人気あるなぁ」
「ね、ねぇ、大和の行き付けのお店ってここ？」
「そうだよ」
「・・・何時間待ちなのかなぁ？」
神龍はその列の長さにただただ圧倒される　不安そうに長い列を見詰める神龍に、大和はにっこりと微笑む。
「大丈夫よ。この喫茶店は士官の艦魂なら並ばずに入れるの」
「そ、そうなの？」
その言葉に神龍はほっと安堵の息を漏らした。いくらなんでも何時間も待つのはごめんだった。そんな彼女の手を引き、大和は列を無視して堂々と入る。素直に並んでいた艦魂達（水兵や下士官）はうらやましそうに見詰めている。その視線にちょっぴり罪悪感を感じる神龍であった。
カランカラン・・・という心地良い音と共にドアを開くと、中は西洋風の佇まいをしていた。すると、そこへ店員が走って来る。十代後半くらいの少年であった。すると、大和はその少年を見て頬を赤らめながら嬉しそうに微笑んだ。
「えへへ、二名様ですよぉ」
「はいはい。この時間帯に来るのはわかってるって」
少年が少し呆れ気味、でも本当はとても嬉しそうな笑みを浮かべる。それを見て大和も嬉しそうに微笑んだ。どうやら二人は知り合いらしい。すっかり取り残された神龍はそんな二人の顔を見比べる。と、
「えっと、そっちの子は？　見慣れない子だけど」
少年が神龍を見て少し戸惑ったような顔をしている。そりゃそうだろう。神龍は別の世界の艦魂なのだから。
神龍も「えっと・・・」と困っていると、大和が代わりに紹介してくれた。
「この子は《護衛戦艦『神龍』～護りたいものがそこにある～》メ

インヒロインの護衛戦艦『神龍』の艦魂です」
「あぁ、君が・・・」
「ど、どうも」
神龍はペコリと頭を垂れた。すると、少年も笑みを浮かべて「どうも」と優しく返した。すると、大和が神龍の袖をクイクイっと引っ張った。
「神龍にも紹介するね。この人は私達艦魂年代史の主人公にして私の彼氏、長谷川翔輝さんだよ」
大和の紹介に神龍はクリッとした瞳をさらに大きくして驚く。そんな彼女に「どうも、長谷川翔輝です。よろしく」と翔輝は笑顔であいさつした。
「あ、あなたが大和の彼氏さん・・・」
「ま、まぁそうだね。外で公言すると武蔵とかが反乱を起こすから言えないけどね」
翔輝はそう言って苦笑いする。その笑顔の奥に見える光を見て、あぁ、実話だなぁと感づく神龍だった。
じっと翔輝を見詰める神龍に、大和は嬉しそうに微笑む。
「えへへ、かっこいい人でしょ」
「え？　あ、はい」
とっさに答えた神龍だが、翔輝自体は別にイケメンという訳ではない。世間一般でいう中の上か上の下くらいだ。彼があれだけモテたのは、やっぱりその性格が大きい（ちなみに神龍視点では翔輝は世間一般と同じくらいの基準だが、自分の彼氏である三笠は上の上クラスである）。
「翔輝さんは元海軍中佐で、今はこの喫茶店《海の女神》の店長をしてるんだよ」
「店長さんなんですか？」
再び驚く神龍に、翔輝は照れたような笑みを浮かべる。
「まぁ、日本が敗戦して軍隊が解体されちゃってね。僕ら元軍人は公職追放を受けて無職になっちゃったからね。こうでもしないと」

「ご苦労様です」
神龍は自然とそう口にしていた。彼の境遇などは大和から聞いた事があったので心底そう思った。
「ありがとう。でも君達ほどじゃないよ」
「そんな事ありませんよ」
神龍と翔輝の会話が自然と弾む。彼の人柄がどこか三笠に似ているような気がして、神龍は自然と安心していた。しかし、そんな楽しげな二人をじーっと見詰める少女が一名。
「もう！　早く席を案内してください！」
「わ、わかったよ」
突然怒り出した大和に翔輝は困惑しながら二人を席に案内する。その道すがら、大和はじっと神龍を睨んだ。その視線が結構マジだったので、神龍は恐る恐る問う。
「あ、あの大和？」
「・・・翔輝さんはあげないから」
（なんだ、そういう事か・・・）
神龍は納得した。彼女は自分と長谷川さん会話を見てやきもちを焼いていたのだ。なんてかわいらしい友達だろうか。
「大丈夫よ。私は菊也さん一筋だから」
「そ、そうだよねぇ（あぁ、良かったぁ・・・）」
「大和？　心の声がだだ漏れだよ？」
そんなこんなで二人は案内された二階の席に腰掛けた。翔輝は水を置くと「注文が決まったら呼んでね」と言って忙しそうに下の階に降りて行った。下では他の艦魂達がお茶をしている。翔輝が雇ったウェイトレスもがんばって給仕をしている。
ちなみに、そのウェイトレスの中に大鳳がいたり、この店の人気が翔輝自身にある事を大和はちゃんと知っている。そりゃあもう今も駆逐艦の子に花束を貰ったりしている翔輝を見て、ちょっぴりやきもちも焼いてしまうが、彼を信じているので我慢する。
「うぅ・・・」

それでもやっぱりやきもちは止まらない。それが恋する乙女なのだから。神龍も気持ちはわかるが、今はとりあえず何を注文するかを決める。

「えっと・・・」

神龍がメニューに目を通していると、厨房に消えた翔輝から目を外して大和が神龍の方に向き直った。

「どれもおいしいから自由に頼んでね」

「わかった。あ、大和はいつも何頼んでるの？」

「私？　私はいつもこのレモンティーとショートケーキを頼んでるけど」

「じゃあ私もそれにする」

「そう？　じゃあ私も」

注文が決まると大和はテーブルに置いてあるベルを鳴らす。これで店員＝翔輝を呼ぶのだ。今か今かと嬉しそうに待つ大和を見て、神龍は小さく微笑んだ――が、大和の期待に反して来たのは・・・

「・・・ご注文の方、決まりました？」

「・・・なんで大鳳が来るのよ」

やって来たのは白と黒の二色で構成されたウェイトレス服を着た大鳳だった。ぼーっとした顔が笑顔ゼロ円という喫茶店の方針に間違ってる気がする上に、年齢的に何か違和感を感じる。

「あ、大鳳さんお久しぶりです」

「・・・（ペコリ）」

大鳳は礼儀正しく頭を垂れた。敬礼よりもお辞儀の方が彼女には似合う。神龍は久しぶりの再会に嬉しそうに微笑むが、期待を裏切られた大和はムッとする。

「レモンティーとショートケーキ。それぞれ二個ずつ」

「・・・（コクリ）」

大鳳は注文表に書き書きする。ちなみにその若さで筆跡検定で段位を取っていたりする。

「・・・ごゆっくり」

最後にもう一度ペコリと頭を垂れて、大鳳は去った。ちなみに帰る時に何もない平坦な床で転倒した。

そんなこんなでようやく落ち着いた二人は早速楽しげに会話すると言ってもお互い年頃の女の子。話す内容はもちろん・・・

「どう思う大和？」

神龍はなぜかすごく悲しそうな顔で大和に意見を求める。一方の大和は苦笑いしながら彼女の問いに素直に答えた。

「うーん、それは単純にただのお買い物だと思うよ？」

「ううん！　あれはきっとデートよデート！　よりにもよって葛城さんとなんて・・・ッ！」

神龍はウーッと唸りながら地団駄を踏む。彼女の話とは先日三笠と葛城が一緒に出掛けたという話だ。彼に直接聞いたらただの買い物だったらしい。途中天城や矢矧とも一緒に行動した（確認済み）そうなので、大和はデートではないと判断したが、相談者である神龍は納得できないらしい。

「葛城さん・・・なんでなのよぉ・・・」

しょんぼりする神龍を見て、大和はなぜか自分を見ているような気がした。彼の事が好きで、彼の事を心配して、彼の事で悩んで。まさに自分が今までして来たのと同じような事であった――まぁ、翔輝の場合は三笠とは比べ物にならないほど艦魂に囲まれていたので大和の心労はすさまじかったが。

「まぁでも、三笠さんは神龍一直線の人だから、大丈夫よきっと」

「え？　あ、うん。そうだね・・・」

急に神龍は顔を赤らめながらもじもじし始めた。どうやら照れたらしい。彼の自分に対する事をほめられて喜ぶ。まさに自分も同じ体験をした。

神龍もすっかり肩の荷が下りたのか、嬉しそうに微笑むと今度は大和に問う。

「それで、大和の方は最近長谷川さんとは？」

神龍の問いに対し、大和は力なく首を横に振るしかない。

「神龍の方なんて序の口よ。私の方なんてデートは妨害されるわ翔輝さんを取られるわ私は監禁されるわ、もう滅茶苦茶よ」
「・・・その背後には全部」
「武蔵が絡んでるわよ。あの愚妹が」
大和は思い出すだけでも腹立たしいのか、水をカッと飲んで気を落ち着かせる。
そう、大和はせっかく翔輝と両想いになれても、それを納得できない長谷川大和反対（二等海士長先生ネタ）主義者達――特に武蔵を筆頭とした連中に妨害工作を受け続けている。
神龍は改めて自分にそういう妹がいなくて助かったと胸を撫で下ろした。
「で、でもいつか武蔵ちゃんもわかってくれ――」
「この前改めて宣戦布告された。翔輝さんを奪う為なら凛に核ミサイルを借りるってまで豪語して」
「・・・そ、そうなんだ。じゃあ私から草薙先生に渡さないように頼んでおくね」
「無駄よ。本気のあの子を止められる者なんてこの世に存在しないわ」
「・・・ずいぶん辛い目にあってきたんだね」
「信濃はいい子なんだけどなぁ。一体どこで道を踏み間違えたのか・・・」
大和が本気で落ち込み始めて神龍が慌て始めた時、
「おいゴラ。持って来たぞ」
その無礼極まりない声に振り向くと、そこには――
「え？　榛名姉さん？」
「なぁッ！？　何で神龍がいるんだよッ！？」
「っていうか榛名さんッ！？　どうしたんですかその格好はッ！？」
二人が驚くのも無理はない。二人が見詰める先にいる榛名は、なぜかウェイトレス服を着ていた。それもいつも凛々しいポニーテールは下ろされて清楚感をかもし出し、フリフリのフリルがついたウ

エイトレス服は、いつも凶暴女と呼ばれる榛名とはまるで別人の、かわいい榛名ちゃんが完成していた。
榛名は二人の反応に顔を真っ赤にするとその清楚感溢れる姿とはまるで逆の言葉遣いで怒鳴り散らす。
「み、見るんじゃねぇッ！」
「うわぁ、かわいいよ榛名姉さん！」
「かわいいとか言うなッ！　っていうか抱きつくなボケッ！」
甘えようとする神龍を引き剥がし、榛名はフンッと鼻を鳴らして腕を組むと不機嫌そうに言葉を吐き出す。
「バイトだよバイト。一人暮らしだと何かと不便でよ」
「え？　榛名姉さん一人暮らしなの？」
「そうだけど」
「何で？　金剛さんとかと暮らせばいいのに」
「・・・」
「え？　何で泣きそうな顔するのッ！？」
なぜか激しく落ち込む榛名に驚く神龍に、大和はそっと耳打ちする。
「金剛さんが滝川さんっていう人と結婚したから、気まずくて出て行っちゃったのよ」
「えぇッ！？　あの金剛さんがぁッ！？」
神龍が驚くのも無理はない。あの《鬼の金剛》と呼ばれて畏怖され続けてきたあの金剛が同棲生活。誰もが耳を疑ってしまう。だが、事実だった。
「あの金剛さんが専業主婦してるのよ？　まぁ、料理はおいしいし掃除はうまいし適材適所ではあるんだけど、ね？」
すっかり慣れたと思っていた大和も思い出すとやはり違和感を感じるらしい。ちなみに結構うまくやっているらしい。よく金剛の怒鳴り声や滝川の悲鳴が聞こえるが、それは今に始まった事じゃない。しかも一部の目撃情報では二人が手を繋いで買い物をしていたらしい。まさに新婚さんだ。

情報によると今現在の金剛の宝物は滝川との結婚指輪らしい。
新婚ほやほや。まさに滝川健太と滝川金剛（二等海士長先生ネタ）はラブラブなのだ。本人達に言うと滅茶苦茶怒られるし、成り行きだとか腐れ縁だとか言うが。
「はぁ、それで榛名姉さんは生活費の為にバイトを」
「そうなんだよ。でも俺不器用だからどこ行っても門前払いかすぐクビになってよ」
そりゃあいくら何でもマナーが悪い客だとしてもいきなり半殺しにするような奴を雇う奴なんていない。いたらその人はアホだ――って、いたよアホが。
「長谷川に相談したら「じゃあ僕の喫茶店で働いてよ」って言われたから来たんだ。てっきり厨房とかと思ってたのに――何で俺が給仕なんだよッ！」
そう怒鳴って榛名は地団駄を踏む。スカートが捲れてもお構いなし（だって下スパッツだし）。元々女の子っぽさなんて微塵もないような榛名にかわい子ちゃんを務めろという方が無茶な話だ。
もしも翔輝が榛名を心配して彼女を雇ったと彼女自身が知らなければ、今頃この店は破壊されていただろう。
「でも榛名姉さんかわいいよ！」
「かわいいって言うなッ！　つーか抱きつくなって言ってんだろうがッ！」
抱き付こうとする神龍を必死に引きはがす榛名。一方そんな二人のやり取りをなぜか冷静に見ていた大和は一言、
「・・・ねぇ榛名さん。何しに来たんですか？」
「あ・・・」
そこでどうやら彼女は自分の役目を思い出したらしい。神龍を引き離すと後ろにあった台車から何かを取り出す。それは――
「ほら、テメェらの注文だ」
そう言って榛名は二人分のレモンティーとショートケーキを二人のテーブルに並べる。その手つきだけは結構しっかりしているのが

不思議だ。
「ほら、ゆっくりしろよな。じゃあな」
そう言い残して榛名は去った。帰る途中、彼女の熱狂的なファンの艦魂が十数名一斉にフラッシュを炸裂させたが、もちろん榛名にボコボコにされた。ちなみになぜか気絶させられたそのファンの子達は歓喜の表情を浮かべていた。
「うわぁ、きれい・・・」
神龍はショートケーキを見て素直な感想を述べた。その言葉に大和はまるで自分がほめられたかのように嬉しく微笑む。
「これ、翔輝さんの手作りなんだよ」
「そうなの？　すごぉい」
そう言うが、心の中では《菊也さんの方がすごいもん！》と叫んでいた。
相変わらず生きる為に様々なスキルを持つ翔輝。本当に軍艦を降りても生きていける奴だったのだ彼は。
二人はまずレモンティーを飲む。もちろんそのうまさは折り紙つき。彼の紅茶の淹れ方は天下一品だ。
そして、神龍はわくわくしながらショートケーキにフォークを入れる。すんなり入った柔らかさに一度驚き、口にして再び驚く。
「お、おいしい！」
「でしょぉ？　私も大好きなんだ」
そう言って大和も嬉しそうに頬張る。何度食べても飽きずにおいしい。彼の作ってくれたケーキはもはや誰にも負けないと自信を持って言える大和。
（・・・菊也さん、ファイトです！）
一方、ちょっぴり彼氏の自慢を挫かれた神龍だったが、すぐに気を取り直す。まだまだ心では三笠こそ一番という気持ちが強く輝いているのだ。
おいしい物があると話は弾むもの。二人の会話はそれまで以上に楽しげなものに変わる。話題は尽きない。お互いの周りの事を話す

だけで十分楽しい。それこそ遊びに来た長門が榛名を見てからかい、榛名が顔を真っ赤にして泣きながら店を飛び出してしまう光景が楽しげな会話に変わってしまう。途中で翔輝がやって来ておごりだと言ってチョコレートケーキをくれたり、幸せな時間はあっという間に過ぎてしまった。

「じゃあな。神龍も元気で。大和も帰りは気をつけるんだぞ」

そんな翔輝の言葉を背中に二人は店を出た。神龍の手には翔輝がお土産だと持たせたケーキの詰め合わせが握られている。

外はすっかり夕焼け一色。もう長かった一日が終わろうとしているのだ。

大和と神龍は明かりが灯り始めた街路をゆっくりと歩く。夕焼けに染まった空が美しく、神龍はクリッとした瞳でその景色を見詰める。

「きれいだねぇ・・・」

「そうね・・・」

まるで空全体が燃えているかのような美しい茜色の空を見上げ、二人は小さく微笑んだ。

神龍は空を流れていく赤く染まった雲から視線を戻すと、前に立つ大和を見る。その視線に大和も視線を彼女に向ける。

二人の少女の茜色に染まった黒の瞳が互いを映し出す。

「今日はありがとう。とっても楽しかったよ」

「それは私もだよ。また来てね。いつでも大歓迎だよ」

「うん。じゃあ、またね」

「えぇ、じゃあね」

二人の少女は互いに微笑み合うと、固い握手をした。夕日に染まるその手は、二人の絆を象徴するかのようだった。

神龍はくるりと背を向けると、夕日に照らされる暁色の道を駆けて行く。そんな彼女に向かって大和は見送るように手を振る。その背中が小さくなっても、大和は手を振り続けた。やがて、神龍の姿

は夕日の中に溶けていった・・・

「いらっしゃい――大和？　どうしたの？」

夕食時になって再び活気が溢れる喫茶店に入って来た大和に翔輝は不思議そうに声を掛ける。大和はそんな彼を見て小さく微笑む。

やっぱり、彼の隣はいい。

「お夕食、ここで食べようと思って戻って来ちゃいました」

「そっか。じゃあさっきの席まだ空いてるからそこに座って。僕が腕によりをかけておいしい料理作って持っていくから」

「はい。期待してますよ」

大和は嬉しそうに微笑むと気合を入れて厨房に消えていく彼の背中を一瞥し、先程の席に戻った。

今は空席となった彼女の席を見詰め、大和は神龍と三笠が結ばれる事を願って、小さく微笑んだ。

しばしの一人の時間の後、翔輝がわざわざ自分で料理を持って来た。そしてそのまま二人で夕食を食べる事となった。厨房を任された比叡は楽しげに夕食を食べる二人を見詰め、霧島に心の中でごめんと小さく謝った後、的確な指示を飛ばし続けた。

久しぶりの二人の時間、翔輝と大和はその時間を何よりも変えがたい時間のように楽しみ、満喫した。

帰り際、彼女の為に翔輝はいつもより早く仕事を終わらせた。もちろん彼女と一緒に帰る為だ。

星空が煌く空の下、翔輝と大和は互いの手を握り合うと、笑みを浮かべながら歩き出す。

神秘的な光を放つ月だけが、そんな二人をそっと見送るのであった。

どうでしたでしょうか？

以前伊東先生と約束していたのを思い出して慌てて今日一日で書き上げたのですが。うーむ、久しぶりにほのぼのとしていて書いてる分には楽しかったです。ですが、神龍が原作に合っているのか不安です。伊東先生？　これで合ってますかぁ？
あと本編と一部内容が異なっている部分があるかもしれませんが、まぁそれは気にしないでください。

さて、本編は降伏文書調印式。長門とアメリカ艦魂の激突。
エンタープライズの怒号や長門の皮肉、アイオワの説得、ニューメキシコの笑み。
決して交わる事のなかった物語同士の交差は、新たな物語の誕生でもありました。
敵として互いを憎しみ合っていた少女達の戦いは、今ここにようやく終わったのです。
ここに、太平洋戦争は終結しました。
これから、日米は友好国として、新たな道を歩み始めるのでした。

さて、ここで皆さんに重要なご報告がございます。
現在全速力で執筆中の《艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～》ですが、いよいよ終結が近づいてまいりました。
現在三連休初日ですが残り二日、連続二話を投稿します――そして、物語はついに終わりを迎えます。
長く続いてきたこの物語も、いよいよ残り二話で終了です。
最後までどうかお付き合いください。
次回はついに生き残った榛名、伊勢、日向、そして長門の最期を一気に描きます。
大和撫子達の最後の物語、どうかお楽しみに。

最終章　第三節　連合艦隊の終焉　天に召されし大和撫子達（前書き）

今回は連合艦隊の終焉のお話です。
生き残った榛名、伊勢、日向、そして長門の最後の物語となっています。
今まで1キャラに結構な分量を使ってきたのにここに来て一気に詰め合わせですみません。ですが正直最期のシーンというはあまり書くたくないので、自然と執筆する手も力が入らないのです。
ですがまぁ、とりあえず完成できて良かったです。
では海の戦姫達の最後の物語をどうかお楽しみください。

最終章　第三節　連合艦隊の終焉　天に召されし大和撫子達

終戦一年後の一九四六年。それは多くの旧日本海軍の艦魂達が天に召された年であった。

日本中を悲しみに包んだ玉音放送が流れたあの夏の日、あれからもう一年。山の木々などには蝉（せみ）が鳴き、照らし上げる夏の日差しは暑い。

海で遊ぶ子供達の姿もある。中にはジープに乗った駐在米軍の兵士にチョコやガムなどを貰って笑顔を浮かべる子供もいた。

日本は徐々に変わりつつある。国号こそ大日本帝国だが、この時にはすでに天皇制を主体とした大日本帝国憲法に代わる新たな平和憲法である日本国憲法が作成されていた。もうすぐ大日本帝国は完全に消滅し、新たな日本国が生まれるのだ。

激動の時代を進む日本。そんな日本の中で取り残された者達がいた。それが旧日本海軍の艦魂達だ。彼女達には未来はなく、皆解体や標的艦などの未来しかない。

新たな日本の新生の先駆けとして、古い日本の象徴でもある旧日本海軍の軍艦は、消滅するしかなかった。

一九四六年五月、呉の海に廃墟として浮かび、生き恥を晒し続けていた戦艦『榛名』『伊勢』『日向』にもついに解体命令が出され、浮揚、解体作業が始まった。

解体が始まってすでに二ヶ月が経とうとしていた。空には燦々と太陽の光があり、積乱雲がもくもくと浮かび、蝉の声が季節を夏だと表していた。

そんな夏空の下、広島湾に浮かぶ戦艦『榛名』はかつての勇姿はすでになく、艦橋も主砲も煙突も、大部分が解体を終了していた。

もうすぐ、戦艦『榛名』は完全に消滅する。そして、彼女も――

唯一まだ原型を保っている第二主砲の上に、榛名は静かに座っていた。

頭や腕には一年以上も前に受け、その後一切修理されていない傷がいまだに残っている。今でもまだ傷は完全に塞ぎ切っていない。

痛々しい姿だが、何よりも心痛いのは――榛名の体が透けている事。

解体されていく艦体に、その艦の艦魂である榛名も徐々に消えているのだ。もう彼女はその手で夏の太陽のまぶしさを遮る事はできない。

いつもは纏められたポニーテールは解かれ、風が吹くたびにサラサラと静かに揺れている。そして、姉である金剛が死んで以来日本海軍主力艦最古参として常に自分に厳しく他人に厳しく生きて来た彼女の瞳は、かつてのような凛々しさは残っているが、どこか柔らかなものに変わっていた。

戦う事を失い、自暴自棄になった彼女を救ったのは、戦中からずっと自分では気がつかないうちに心の支えになっていた翔輝であった。

戦後も『隼鷹』の航海長として乗艦していた彼は傷ついた艦魂達一人一人を巡り、励まし続けた。そして、榛名もそんな翔輝に支えられて、今までずっと生き恥を晒し続けていた。

戦う事を奪われた榛名を優しく包んだ翔輝。その優しさが、榛名を変えた。　いつも歩く刃物のように鋭かった闘気はなく、今はまるで普通の女の子のように柔らかなものに変わっていた。

髪を下ろし、瞳を柔らかくした榛名は元からのきれいな顔立ちが加わってとても清楚な女性に見える。

風に揺れる長い髪を押さえながら、榛名はそっと空を見上げた。

「・・・姉貴・・・姉さん・・・霧島・・・俺・・・もうすぐそっちに逝くからな」

自分の艦体（からだ）の事は、自分がよくわかっている。

もうすぐ、自分は完全に消える。

だけど、怖さはない。だって、死んで逝った姉や妹、仲間達の下にやっと行けるのだから。怖い訳がない。悲しくなどない。むしろ、このまま引き恥を晒し続ける方が嫌だった。

変わっていく日本を一年見詰め続け、榛名はようやくアメリカの本当の力を見た気がした。

日本内部でいくらクーデーターを起こして日本を変えようとしても失敗に終わっていたのに、アメリカはそれを意図も簡単にやっている。そして日本は、平和国家に生まれ変わろうとしていた。

そんなアメリカの力を見て、榛名は戦中の自分がバカらしく思えた。

アメリカに勝つ。そんな妄言が通用するような相手ではないのだ。アメリカは。

元々、この戦争は勝つ事なんて不可能だったのだ。どんな奇策や良策を使っても圧倒的な力の差があるアメリカに、こんな小さな島国でしかない日本が勝てるはずがなかったのだ。

この一年で、自分は大きく変わった。そう自覚していた。

アメリカという国の本当の力、変わっていく祖国、死んでいった仲間達、解体運命しか残されていない残存日本艦艇、そして――翔輝。

大和が死んでも、彼は必死に生きた。心折れる自分達艦魂を、ずっと彼は支えてくれた。そして自分も、そんな彼に支えられた。

彼が隣にいてくれるだけで力が沸き、胸が飛び跳ね、顔は真っ赤になり、でも、幸せな気分になれる。

本当は認めたくない。でも認めるしかない。

――自分は、長谷川翔輝という人間が、好きなのだと。

ずっと彼と一緒にいたい。そう願いようになったのは戦後の事。

もう全てが手遅れだったのだ。全てが遅すぎた。

それに、彼には大和という心に決めた子がいる。自分じゃもう、二人の間に入り込む事も、二人の関係を壊したいとも思わない。

だから、ずっと隠してきた。

そして、この気持ちはこのまま誰にも伝えず、あの世まで持って行くつもりでいた。
これで、いいのだ。
自分に誰かを愛する資格なんてない。祖国を守ると決意しながら守れず、こうして生き恥を晒すしかできなかった自分にそんな権利などないのだ。
決意は固めた。なのに――どうして涙が出て来るのだろう。
ポロポロと溢れる涙を、榛名は必死に袖で拭い取ろうとするが、溢れ続ける涙は止まる事はなく頬や袖を濡らしていく。
後悔しているのはわかっている。全てを後悔している。だけど、もう遅いのだ。
「・・・死にたく・・・ねぇな・・・」
それは心からの想いだった。
死にたくない。
天国にいるである姉や仲間達には会いたい。死ぬ事に怖さはない。でも、まだ生きたい。死にたくないのだ。
もっともっと生きて、今でもまだ完全には立ち直っていない翔輝を支えたい。そう思うのに、もう自分には死しか未来はない。
生きたいと願うけれど、自分には死しか残されてはいない。
こんな悲しい事はない。だけど、それが現実なのだ。
風が吹き、榛名の髪がサラサラと揺れる。
ついに悲しみを堪えられなくなり、榛名は膝を抱え目頭を膝に押し付けてさめざめと涙を流した。
思い出すのは彼の笑顔。いつもいつも自分にもちゃんと向けられていたのに、自分はそれを無視し続けた。
結局、自業自得なのだ。
そして、彼は大和という恋人を失いながらも今を必死に生きている。そんな彼を支えられない事が、今一番悲しい。
「うぅ・・・ひぐぅ・・・長谷川・・・最後に・・・お前の顔・・・見たかったぜ・・・ごめん・・・ごめんな・・・ごめんな・・・ッ！」

泣き崩れる榛名を、一陣の風が包み込んだ。
夏の太陽の光が一層輝きを増し、全てが白い光に包まれた。
神々しいほどの光が消えた時にはもう――榛名の姿はどこにもなかった。

――戦艦『榛名』、現役最古参の金剛型戦艦の一隻にして老艦ながらもその卓越した高速力から機動部隊の護衛として太平洋を駆け回り、日本海軍の最前線にいつも身を置きながら戦い続け、自らも多くの敵弾を喰らって傷つきながらも日本の為に必死に戦い抜き、そして大破着底状態という満身創痍の姿だったが終戦まで生き残った。日本海軍の戦艦の中で最も活躍し、日本海軍一の武勲艦と称された。日本の為に尽くして戦い抜いた『榛名』は解体された後も戦後の復興資材として最後まで日本にその命を捧げた。そんな『榛名』の艦魂はその激動の歴史に相応しい勇猛果敢な、ちょっと乱暴者の少女であった。日本を愛し、その日本を守る事に生きがいを感じていた彼女は欧米列強を嫌い、日本こそが世界最強の国だと信じて疑わなかった。開戦後も日本が勝利する事だけを信じ、どんなに苦しい戦いも生き抜き、必死に戦い続けた。そして同時に、女としての戦いも繰り広げていた。一人の少年に恋するも、絶対に彼女はそれを認めなかった。それでも彼の事が気になり、いつも彼に付いて回り、嫉妬などから暴力を振るった事は星の数ほど。それほどに、彼が好きだった。でも、彼女は信じなかった。恋などではない。必死に自分に言い聞かせながら、彼女は戦い続けた。だが、最期の瞬間、彼女は自分の気持ちに素直になった。もう遅いのはわかっていた。それでも、彼女は自分の気持ちを認め、武人としてではなく、一人の女として、その生涯を静かに終えた――

解体される戦艦『榛名』から少し離れた場所で同じく解体作業を受けているのは航空戦艦『伊勢』と『日向』。両艦は『榛名』と同じく一年前の空襲で大破着底した。特に被害がひどかったのは艦橋

と飛行甲板。艦橋は原型を留めていないほど破壊され、飛行甲板には巨大な穴が開いた。

終戦後も痛々しい姿を浮かべ続けていた『伊勢』と『日向』も『榛名』と同時期に解体が開始され、同じく艦橋や煙突、主砲塔などは撤去されていた。

世界唯一の航空戦艦である『伊勢』と『日向』は仲良く並んで解体されていた。

そんな『伊勢』の飛行甲板の上に、伊勢と日向の姿はあった。どちらも痛々しく包帯を巻き――どちらも消えかけていた。

女座りをして壁に背を預けている伊勢。その伊勢の膝の上に頭を載せてぐったりと横になっているツインテールを解いた日向。どちらもすでに立ち上がる力もなく、そして消えようとしていた。

伊勢はそっと、日向の髪を撫でる。その優しげな温もりに、日向小さく笑みを浮かべた。

「・・・お姉ちゃん・・・もうすぐ・・・みんなに会えるの・・・？」

「・・・そうやで・・・もうすぐ・・・みんなに会えるんや・・・」

「そっか・・・えへへ・・・嬉しいな・・・やっと・・・みんなに会えるんだ・・・」

本当に嬉しそうな笑みを浮かべる日向を見て、伊勢は優しく微笑む。だが、その瞳の奥には、決して今まさに力尽きようとしている妹には見せてはいけないものがある。

海風が吹き、二人の長く艶やかな黒髪を柔らかく揺らす。

「・・・楽しみだなぁ・・・今度陸奥や・・・霧島と会ったら・・・一緒に・・・お話をいっぱいして・・・いっぱい・・・笑うん・・・だ・・・」

そこまで言って、日向はゆっくりと瞳を閉じた。その瞬間、彼女の体を淡い光が包み込み、破裂。日向は消えた。残された彼女の光の粒子が、ゆっくりと天に昇っていく。それをしばし見詰めた後、伊勢はそっと顔を手で覆い隠すと、さめざめと泣いた。

ついに、日向が死んだ。
自分よりも先に、妹の方が死んでしまった。
でも、きっとこれで良かったのだ。こんな所にあの子一人だけ残す方が、ずっと残酷だから。きっと、もうすぐ自分も消える。
心残りがないと言えばうそになる。
本当はもっと生きたいし、翔輝と一緒にいたい。
でも、もうそれはできないのだ。
自分はもうすぐ消えてなくなる。
先に逝った仲間達の下へ、自分もようやく逝く時が来たのだ。
伊勢はそっと祖国の景色を見詰めた。そこには絶望に打ちひしがれていた戦中の日本はなく、復興の為に希望に満ち溢れた祖国の姿があった。
平和な祖国の姿が、そこにあった。
自分達が必死に守ろうとして戦い、多くの仲間を失いながら、そして負けはしても守り切った大切な祖国が。
このどこかに、彼はいるのだ。
この呉は彼の故郷にして、自分のもう一つの故郷だ。戦前、戦中、そして戦後と、この呉の海で過ごした時間は多い。
日々解体されていく自分を彼に見られるのは恥ずかしいが、それは同時に、彼に見守られながら死ねるという事を表していた。
開戦直後に、自分は彼と出会った。
大和に懐かれ、陸奥に好かれ、すっかり艦魂達の中心的存在になった彼を、彼の笑顔を、自分は好きになった。
きっかけなんてある訳じゃない。
ずっと一緒に過ごしているうちに、気がついたら好きになっていたのだ。
恋敵（ライバル）はたくさんいた。それでも、彼と一緒にいたくて、彼に愛されたくてがんばってきた。
結局、彼は自分の想いには応えてくれなかったけど、それでも、彼と過ごした時間は掛け替えのないものに変わりはなかった。

この苦しい戦争を乗り切ったのは、彼のおかげなのだ。
今の自分の心には、彼との思い出でいっぱいだ。
だからこそ、まだ死にたくないと願う。
もっと生きて、彼と一緒に思い出をもっと作りたい。そう願っている。
でも、それはできない――もうすぐ、自分も死ぬのだから。
「長谷川はん・・・」
口に出すだけで、どうしてこんなにも安堵できるのだろうか。
彼の名前はまるで魔法の言葉だ。口にするだけで、勇気が出て、胸の中が温かくなる。
彼と別れるのは辛い。
でも、彼が生きている。それだけでいい。そんな風に思う自分もいた。
彼が生きていてくれれば、自分は幸せだ。
彼との刻んできたたくさんの思い出があれば、死なんて怖くない。
だって、こんなにも胸の中が温かくていっぱいなのだから。
「長谷川はん・・・あんたに会えて・・・うち・・・ほんまに幸せだったで・・・」
その時、彼女を包み込んでいた淡い光がより一層強く輝いた――
もう、時間だ。
瞳を閉じると、自分に向けられる彼の優しげな笑顔が浮かぶ。
その笑顔に自分は一体どれだけ助けられた事か。
そして、最期の時も、支えてもらえた。
消えていく自分の体を一瞥し、伊勢はにっこりと微笑んでどこまでも澄んだ青空を見上げた。まぶしいくらいの太陽の光に、涙が流れる。
「・・・長谷川は・・・うちの分まで・・・いっぱい生きるんやで・・・うち・・・あんたの事・・・ほんまに大好きや・・・」
その言葉を最後に、伊勢の大きな瞳がゆっくりと閉じられた。
淡い光が彼女を包み込んだ後、弾ける。光が消えた時にはもう、

伊勢の姿はどこにもなく、天に向かって光の粒子が昇って行った。

――戦艦『伊勢』『日向』、連合艦隊の戦艦で最も激動の艦生を過ごした戦艦であった。扶桑型戦艦三番艦、四番艦として建造されるも同型の欠陥改善から新たな伊勢型戦艦として竣工。平和な時代では多くの国民に愛された幸せ者の戦艦であったが、戦争が始まるとその低速性や防御力の低さ、燃費の悪さなどから機動部隊の護衛として太平洋を翔け回る金剛型や主力艦として鎮座し続ける長門型や大和型よりも期待されてはおらず、扶桑型と共に他の戦艦に比べて浮いた存在だった。そんな二隻に転機が訪れたのはミッドウェー海戦後の空母不足から空母増産計画の影響を受けて航空戦艦として生まれ変わった事だった。後部主砲二基などを撤去して後部大改造。艦載機、飛行甲板、航空機格納庫、射出機などが新たに装備され、半分戦艦半分空母という奇妙な形と性能を持った航空戦艦として生まれ変わった。米海軍との決戦に備えて、『伊勢』と『日向』は航空戦艦としての力を発揮する事を夢見てその時を待ち続けた。しかし結局その機会は得られず、実戦で両艦の射出機から飛び立った飛行機はなかった。だがレイテ沖海戦後に避難したシンガポールから日本への帰還及び輸送任務の北号作戦は見事に完遂させ、本来は航空機を収納する格納庫に満載した物資は、日本を少なからず救った。しかしその後は燃料不足から湾内に停泊し続け、敵機の空爆を受けて大破着底。自慢の飛行甲板にも無数の穴が開いてしまった。そしてそのまま終戦を迎え、痛々しい姿を晒し続けたが、ついに解体され、その姿を消した。そんな両艦の艦魂は伊勢がおっとりとした大和撫子という言葉が似合う不思議な関西弁を使う少女。日向が子供っぽさ全開にしてみんなの妹的存在の少女であった。伊勢は戦中に一人の少年を好きになり、多くの恋敵（ライバル）と戦いながら、必死に彼の隣にいようと努力をし続け、日向はそんな姉を応援し続けた。彼といた時間は掛け替えのないものとなり、伊勢は彼の笑顔が見たくて、彼に喜んでもらいたくて、彼に好かれたくて様々な努力をし続けた。

そんな姉を見詰め、日向はずっと支え続け、連合艦隊戦艦の中で最も仲良し姉妹であった。時にはケンカしたりする事もあったが、お互いの為と想っての激突ばかり。だからこそ、お互いに譲れず、必死に張り合った。そのたびに周りに迷惑を掛けた事はしばしばだったが、それほどまでにお互いを想っていたのだ。いつも一緒にいた二人は最期の時も一緒に居続け、姉妹一緒に天に昇って逝った――

一九四六年六月の終わり、マーシャル諸島に約七〇隻の艦艇が浮かんでいた。これが統制された軍隊なら一大艦隊艦であるが、ここに集められた艦艇達には未来への希望はなかった。

クロスロード作戦と呼ばれる作戦には連合国の余剰艦艇や敗戦国から接収された艦艇が参加していた。その中の中央部に浮かぶ一隻の大型戦艦、それは戦艦『長門』であった。その艦首マストには、彼女が愛した祖国の印である日章旗ではなく、かつての敵国にして今自分が所属する国の象徴である――星条旗が掲げられていた。

クロスロード作戦とは、広島と長崎を吹き飛ばした原爆の威力を知る為に、集められた標的艦に原爆をぶつけるという核実験であった。

そんなクロスロード作戦に参加し、標的艦となった『長門』の第二主砲の上に、長門は立っていた。心地のいい海風に長い黒髪を靡かせ、嬉しそうに蒼い海を見詰める。

「南の海なんて久しぶりねぇ」

日本海軍の最重要根拠地であったトラックから見えた南国の海を思い出す。日本がアメリカに追い詰められると、本土近海戦となり、こんなに蒼く美しい海を見るのは久しぶりだった。

「榛名や伊勢、日向にも見せてあげたかったなぁ・・・」

少し寂しそうに微笑む長門は、榛名や伊勢、日向がもう死んでいる事は知らない。それを知る前に星条旗を掲げながら、多くの元乗組員や国民達に見送られながら祖国と永遠の別れをしたからだ。

長門は周りに集まる艦艇を見回す。そこにいるのはほとんどがア

メリカの旧式艦ばかり。他には少なからずドイツやイタリアの艦も見える。

心許せる仲間がいないのは寂しいものだ。長門もどこか寂しそうな笑みを浮かべる。と、

「長門姉さん！」

その声に振り向くと、そこにはちょこんとかわいいツインテールをした少女が笑顔で立っていた。来ている帝国海軍の下士官服と黒髪黒髪が彼女が自分と同じ日本海軍の艦魂だと示している。

長門は少女を見てニッコリと微笑んだ。

「あらあら酒匂。一体どうしたの？」

少女の名は酒匂。阿賀野型軽巡洋艦四番艦、軽巡洋艦『酒匂』の艦魂だ。坊ノ岬沖海戦で壮絶な戦死を遂げた矢矧の妹である。

レイテ沖海戦の後に竣工した『酒匂』は日本海軍最後の軽巡洋艦であったが、すでにその頃には戦局は修復不能なまでに悪化し、石油不足で軍艦は行動不能に陥っていた。無論『酒匂』もそれは同じだ。

新鋭艦『酒匂』は満足に動く事もできずに舞鶴で無傷のまま終戦を迎えた。戦後は特別輸送艦（復員船）に指定され、多くの日本兵を日本に帰した。

そして、復員任務を終えた『酒匂』はアメリカ軍に接収され、『長門』と共にこのクロスロード作戦に参加する事になった。あまりにも短い命だ。

酒匂は見た目はまだまだ子供、十二、三歳くらいにしか見えない女の子だ。笑顔がとてもかわいらしい、普通の女の子。敗軍の艦魂として生まれなければ、もっと長く生きられただろうに。そう思うと、長門の表情も曇る。

「姉さん？　どうしたの？」

うにゃっと首を傾げる酒匂。その仕草もまたかわいらしい。

彼女は優しい女の子だ。長門が暗い表情を浮かべた事にすばやく反応して心配そうに声を掛ける。長門はそんな小さな仲間に笑顔を

向ける。
「何でもないわよ。気にしないで」
「で、でもぉ・・・」
まだ納得できない酒匂を、長門はそっと抱き締めた。いきなりの事に驚く酒匂だったが、その豊満な胸に顔を埋められると、頬を赤くして嬉しそうに微笑む。
「姉さん・・・」
生まれた時にはすでに阿賀野と能代という二人の姉はすでに戦死し、唯一の姉であった矢矧とも一度も会う事はできず、その彼女も戦死した。
姉を知らずに育って来た酒匂にとって、長門は血は繋がっていないが、本当の姉のように慕っていた。長門もまた、酒匂をかわいがっていた。
さすがの長門もまさか自分達が同じ死地となるとまでは予想していなかったが。
長門は酒匂を抱き締めながら彼女の髪を優しく撫でる。その黒く艶やかな髪はいくら撫でても心地がいい。撫でられるたびに酒匂は嬉しそうに笑みを強くする。
永遠に続けばいい。そんな事を願ってしまうほどに、幸せな時間であった。
この時が、あとどれだけ続くのだろうか。
そんな事を長門が思った時であった――背後に気配を感じた。
「誰かしら？」
長門がゆっくりと振り向くと、そこには見知らぬ少女が立っていた。まず第一に彼女は白人であった。まるで海のように蒼く美しい髪に瞳をした少女は、アメリカ海軍の士官服を着ていた。という事は戦艦か正式空母の艦魂だ。
少女の存在に気づいた酒匂は怖がって長門の後ろに隠れる。
警戒する酒匂と小さく微笑む長門に見詰められる少女は、カッと踵を揃えて見事なアメリカ海軍式の敬礼をしてみせた。

「初めまして。レキシントン級航空母艦2番艦、空母『サラトガ』の艦魂よ。仲間からはサラて呼ばれてるわ」

そう言って微笑んだのは、エンタープライズの唯一無二の親友、サラトガであった。

空母『サラトガ』は硫黄島作戦で特攻機の攻撃を受けて大破した後は修理の為にアメリカ本土に戻った後に修理を終え、その後真珠湾で新設された航空隊の訓練を行っていたが終戦により中止。復員船として太平洋の島々とアメリカを往復した。

エセックス級空母の多量就役により旧式化した『サラトガ』は、クロスロード作戦の標的艦の一隻となり、このマーシャル諸島に派遣されたのだ。

「サラトガ、あなたが・・・」

長門は目の前にいるサラトガをじっと見詰める。長門にとって、サラトガは敵の最重要艦である。『エンタープライズ』などと共に戦争中期、機動部隊と互角の勝負をし続けた歴戦の敵空母だ。酒匂も自然とそのクリッとした瞳に鋭さを持たせる。

そんな二人の反応はサラトガは予想していたのか驚きもせずに二人の背を向けると周りの南国の海を見回した。風が吹き、彼女の蒼の髪が柔らかく揺れる。

「いい海ね。こんなきれいな海で死ねるなら、私は本望よ」

「・・・そっか、あなたも」

「えぇ。標的艦って訳よ」

長門は背を向けて深呼吸をする敵の艦魂を見詰める。

ある意味、彼女は自分達よりも辛い立場なのかもしれない。自分達は戦争に負けて敵軍に接収されて標的艦になった。でも彼女は、必死に祖国を勝利に導く為に戦ったのに、旧式になったからといってこうして標的艦になった。

――愛する祖国に見捨てられた彼女の気持ちは、一体どんなものなのだろうか？

長門は、自分よりもずっと若いはずであるサラトガを見詰め続け

る。と、
「ねぇ、あなたの事、ナガトって呼んでいいかしら？」
そう言ってサラトガは笑顔で振り向いた。
長門は驚いた。元敵の艦魂に、こんなにも優しげな笑顔ができるだろうか。それも、ニューメキシコのように戦前に親交があった訳ではないのに。
「えぇ、構わないわよ」
驚きながらも長門は笑顔で返した。日本海軍で多くの事件や波乱に巻き込まれた長門はこれくらいでは崩れないのだ。
長門の返事に対し、サラトガは嬉しそうに微笑む。
「ありがとうナガト。あ、私の事はサラって呼んでね」
「わかったわ――サラ」
長門は確信した。
彼女とは、良き友になれると。
長門はそっと手を差し伸べた。それは握手の合図だ。サラトガもそれに気づいて微笑むと、そっと真っ白な手を差し伸べてきた。
お互いの手が、固く結ばれた。
そんな二人を見て酒匂はおろおろする。まさか長門が敵の艦魂と握手をするとは思ってもみなかったのだ。
「あ、この子は酒匂。軽巡洋艦の艦魂よ」
「そう、よろしくねサカワ」
「え？　あ、うん、よろしく・・・」
おどおどと差し伸べられた酒匂の手を、サラトガはそっと握った。
酒匂は驚いた――彼女の手が、とても柔らかく、温かい事に。
戦中、アメリカ人は残虐非道で同じ人間（艦魂）ではない、鬼のような存在と教えられた酒匂にとって、サラトガはそのイメージを壊すにはこれ以上ない存在であった。
「とってもキュートな子ね。サカワは」
「そうよ。この子はとってもかわいいの」
二人の異国の少女は、お互いに楽しそうに微笑んだ。その光景を

見詰め、酒匂は理解した。
自分達が戦っていた敵も、同じだという事に。
自分達が必死になって、国の為、仲間の為に戦って来たのと同じように、彼女も必死に戦っていたのだ。
戦争は、そんな事も隠してしまう、恐ろしいものなのだ。
何か大切な事を掴んだ酒匂を一瞥し、長門は微笑んだ。そんな彼女を見詰め、サラトガは彼女に言っておきたい事があった。
「ねぇナガト。あなたに言っておきたい事があるんだけど」
「何かしら？」
「降伏文書調印式の時、私の親友があなたを殴り飛ばしたそうね。ごめんなさい」
頭を下げるサラトガに長門は驚いた。そして彼女が言った状況を思い出す。確かに、あの時自分を殴り飛ばしたアメリカ艦魂の少女がいた。金髪碧眼の裂女、その名は――
「エンタープライズの事？」
「・・・名前、覚えていてくれたのね」
「そりゃあ、私達日本を追い込んだ、私達から見れば史上最大の敵だもの。名前くらい嫌ってほど知ってるわ」
「そうね」
長門の言葉にサラトガはおかしそうにクスクスと笑った。
確かに、日本を追い込んだのは彼女だ。日本本土を初空襲し、ミッドウェー海戦で日本機動部隊を壊滅させ、第二次ソロモン海戦、南太平洋海戦と、日本がまだ優勢か互角だった頃に必死に勝利を重ね、エセックス級空母達に勝利への道を作った。彼女こそ、アメリカが世界に誇れる最高の英雄だろう。
「・・・そうね、あの子はすごい子よ」
「敵ながら天晴れよ。私達帝国海軍を滅ぼした伝説の空母。一体どんな子かと思ってたけど」
「ずいぶん子供っぽかったでしょ？」」
「えぇ、まだまだ子供だったわ」

「やっぱり」
長門とサラトガは互いに笑みを浮かべた。どちらもとても楽しそうな笑み。それこそが、日本とアメリカの本来の姿だったのかもしれない。
サラトガは長門と楽しい会話を続ける。と、そんな自分達をじっと見詰める酒匂と目が合った。すると、サラトガは「ちょっと待ってて」と言って一度消えると、すぐに戻って来た。そんな彼女の手にはきれいにラッピングされた何かが握られていた。サラトガはそれをそっと酒匂に渡した。
「プレゼントよ」
「え？　あ、ありがとう。えっと・・・」
「中身は私が焼いたクッキーよ。おいしいわよ？」
「クッキー？　あ、ありがとうサラッ！」
酒匂は満面の笑みを浮かべると、ラッピングを解いて嬉しそうにクッキーを頬張った。その瞬間、酒匂の笑みはさらに華やぐ。
「お、おいしいぃッ！」
「そりゃそうよ。本場であるメイド・イン・アメリカの味は格別よ」
サラトガの笑みに酒匂は口にクッキーのカスを付けながら笑みを浮かべると、嬉しそうにクッキーを頬張る。
そんな酒匂を見詰め、長門は小さく微笑んだ。
「ありがとう」
「お礼なんいていらないわよ」
サラトガはそう言うと嬉しそうな笑みを浮かべる。その笑顔はとてもかわいらしく、これが今まで自分達が戦って来た敵だという事を忘れさせる――だが実際に、彼女達アメリカと、自分達日本は戦争をしたのだ。
多くの犠牲を出して、日本が敗北したあの戦い。
もう二度と、祖国が傷つく姿なんて見たくなかった。
「ねぇ、サラトガ」
おいしそうにクッキーを食べる酒匂を見ていたサラトガは長門の

小さな声に振り返ると、そのブルーの瞳で長門をじっと見詰める。
「戦争がない世界って、どんな世界なのかしら？」
長門の問いは愚問でしかない。
人間は生き物だ。機会ではない。闘争本能というものがある。それは人間が生まれた時、いや、生命が誕生した時から生存競争を生き残る術として備わった能力だ。生物である限り、戦いは起きる。
――戦争のない世界なんて、存在しないのだ。
だが、あえて彼女のように理想を夢見るなら、それはすばらしい世界だ。どれほどすばらしいかは計り知れない。だけど、一つだけわかる事がある。それは・・・
「きっと、私達軍艦のいない世界ね」
「そうね・・・」
長門の言葉は、とても小さなものだった。
軍艦の魂である自分達は、戦争の為に生まれた。だからこそ、戦争のない世界ではその存在価値を失う。
戦争があるから自分達は生きている。なんて残酷な運命だろうか。
長門はどこまでも澄んだ蒼い空をいつまでもじっと見詰め続けた。
サラトガはそんな長門の背中をじっと見詰める。その背中は、戦いに疲れ切った一人の軍人の姿であった。
サラトガもそっと視線を外すと、蒼い空を見上げた。憎たらしいほど、いい天気だ。

七月一日、ついにその日が来た。
南国の海に並べられた多くの艦艇は、その多くが沈没するであろうと考えられていた。それほどまでに、原爆というものはすさまじい殺戮兵器だった。
サラトガと酒匂に天国に行っても友達でいようと約束し、長門は二人と別れた。向かう先は防空指揮所。彼女が戦前から好んでいた場所だ。
南国の空は今日も美しい。頬を撫でる海風が心地良く、海も穏や

かだ――これが生涯最後の景色だというなら、文句なしの絶景だ。
数日前に『長門』に乗艦していた一八〇名のアメリカ海軍兵は全て退艦を終えていた。いよいよ、最期の時が近いのだ。
しばし、長門はじっと蒼い空や蒼い海を見詰めながら、自分の思い出を振り返った。戦前生まれの自分にはたくさんの思い出があった。
国民に祝福されながらの竣工、連合艦隊旗艦、観艦式での人気はいつも自分か陸奥、日々の激しい訓練、兵達の笑い声。艦魂達との楽しい日々、日本の為に自ら引き起こした二度の内乱。何もかも懐かしい。
戦争が始まると同時に、それまで以上に賑やかになったのは、大和と翔輝の登場だろう。まさか自分の妹である陸奥が彼に恋をするなんて。以前に彼氏を事故で失っている陸奥を、長門は応援した。
なぜだろう、苦しい戦時の方が、楽しく思えた。
翔輝を中心とした艦魂達の笑顔。あの笑顔が、今でもはっきりと自分の瞳に焼き付いている。なんていい笑顔なのだろうか。
彼がいてくれたおかげで、自分達はあの苦しい戦いを戦い抜けたのだ。
本当に、感謝してもし切れない。
その時、空に一機の爆撃機が見えた。日本を火の海にし、自らも主砲で撃墜した事があるＢ－２９爆撃機だ。あの機体に、自分を吹き飛ばす殺戮兵器――原子爆弾が積まれている。
覚悟は決めた。
死ぬのが怖くない訳はない。だけど、それ以上に仲間達の所に行けるという方がずっと嬉しかった。
「いい天気ね。こんな美しい空の下で死ねるなら、私も本望よ」
長門は嬉しそうに蒼穹の空を見上げ続けた。空はどこまでも澄んでいて、雲ひとつない快晴の空がどこまでも続いていた。
風が吹き、彼女の黒く美しい長い髪を柔らかく揺らす。その姿はとても美しく、彼女が軍人であると同時に日本海軍の栄光と滅亡を

見詰め続けた少女という事を思い出させる。
そう、日本海軍を率い続けた戦姫は、まだまだ女の子だったのだ。
長門は蒼い空を見上げながら、その柔和な顔つきに相応しい優しげ笑みを浮かべる。その笑顔はとても美しく、大和撫子という言葉がこれ以上似合う者は存在しないと思えるほどであった。
「いい艦生だったわね。戦争がなければもっと良かったけど、多くの仲間と会えたし、嬉しい事が多かったわ。みんな純粋に日本を守る為に戦った。そんな彼女達を、私は誇りに思う。だから、早くみんなに会いたい。死ぬのちょっぴり怖いけど、それ以上に嬉しいわね。だって死ねば、みんなに会えるんだもの」
長門は優しげな笑みを浮かべた。その笑顔には一片の曇りもない、本当に太陽のように美しく心温まる笑顔だった。
長い時の中を生きた戦姫長門は、後悔なんてしていなかった。
いい艦生だった。心からそう思えた。
みんなで笑い合ったの宴会は、今でも忘れられない。あの笑顔を守りたくて、自分は必死に戦ったのだ。
日本は負けてしまった。それでも、長門は十分だった。きっとあの笑顔は守れた。だってきっと、天国にいるみんなは笑っているだろうから。みんな、そういう子なのだ。
今まで会って来た多くの仲間達の顔を思い浮かべる。そして、最後に長門は自分達日本艦魂をずっと支え続けた一人の少年を思い出す。
「長谷川君。今頃彼はどうしてるかしら？　元気にやってるかしら？」
長門は生きている数少ない仲間である翔輝の事を思い出し、小さく笑った。
彼には幸せになってほしい。心からそう願った。彼のおかげで、自分達は戦えたのだ。だからこそ、彼にはその分――それ以上に幸せになってもらいたかった。
「長谷川君。あなたは幸せになってね。あなたには、その権利があ

るわ。だから、幸せにね。それが・・・大和の望みでもあるんだから」

長門はその言葉の後、小さく笑みを浮かべた。

――その笑顔は、かわいい弟の幸せを願う姉の笑顔、そんな感じの優しげな笑顔だった。

そして長門はそっと蒼い空を見上げながら、一人で先に旅立たせてしまったかわいい妹――陸奥の笑顔を思い出す。

「陸奥。三年遅れたけど、お姉ちゃんもすぐに逝くからね」

長門はそう言って空を再び見上げた。

蒼い空はまるで、女の最期を見守るように光り輝いていた。刹那、その光を上回る邪悪な白い光が空一面を多い尽くした。

長門の意識は――途絶えた。

上空を飛ぶB‐29から一発の爆弾が投下された。それは広島、長崎を地獄に変えた邪悪ものそのものだった。

高度二〇〇mで爆発したそれは今まで彼女が経験した事がない猛烈な爆発と衝撃波、爆風を生み出し、彼女に襲い掛かった。

まるで世界の終わりかのような地獄の轟音と衝撃は海を揺らし続ける。

灼熱の業火と全てを溶かす超高熱が、彼女を包み込んだ。

爆心地から一五〇〇mの地点にいた戦艦『長門』はその衝撃波で大きく傾いた。しかし、衝撃波が収まってみると、彼女はたいした傷を負っている訳ではなかった。艦上建造物もほとんど無傷であり、爆心地側の装甲が多少溶けている程度であった。

日本が世界に誇った戦艦『長門』は、その威風堂々とした姿を浮かべ続けていた。だがこの時、彼女が大火傷を負って気絶した事を知っている者は誰もいない。

第一次クロスロード作戦で戦艦『長門』は生き残った。だが、一緒に参加した『酒匂』は耐え切れずに沈没した。

ほとんど無傷で生き残った『長門』はそのまま海に浮かび続け、三週間後、第二次クロスロード作戦に参加する事となった。

第二次実験では水中爆発に対する影響を見る為のものであった。爆発の瞬間、戦艦の主砲弾とは比べ物にならないほどの高く太い水柱が立ち上り、実験参加艦を襲った。無論、彼女も。

爆心地から二〇〇m程の近距離にいた彼女もやはり強烈な衝撃波と高波を食らい、大きく左舷に揺らいだ。だがその衝撃波が過ぎ去ると、彼女がまだ生きている事がはっきりと見て取れた。

構造物の被害は遠目から見てもそれほどたいしたものではなく、わずかに傾いたくらいで艦が傷ついていると思えなかった。

しかし、その時は着々と彼女に歩み寄っていた。

彼女が力尽きたのはそれから四日後の夜半だった。

誰にも見守られる事もなく、戦艦『長門』は海底に没した。

おそらく破損箇所からの浸水だと考えられるが、当時『長門』沈没の姿を見た者は誰もおらず、今もなおその正確な沈没原因はわかっていない。

――戦艦『長門』、日本海軍で唯一の四一cm砲を搭載した長門型戦艦一番艦。最も国民に愛された『長門』は他国をも驚かせる驚異の性能を持ち、竣工当時はまさに世界最強の戦艦であった。大和型が完成すると頂点の座を明け渡す事になったが、当時大和型は国民には極秘にされていたので、『長門』と『陸奥』は戦前も戦中も日本海軍の象徴として国民に愛され続けた。そして何より大和型に続く性能を持つ長門型は主力艦として日本海軍が待ち望み続けた艦隊決戦の要の一隻として、その日が来るのを待ち続けた。しかし結局その時はなく、新たな主力となった空母や航空機に翻弄され、苦し紛れの決戦に身を投じるも敗北。日本海軍は崩壊した。その後は他の生き残った戦艦とは離別して横須賀に停泊を続けるも、敵機の

空爆を受けて傷つき、それでも愛する祖国を守る為に己が主砲で押し寄せる数百の敵機を攻撃し続けた。しかし日本は敗戦し、『長門』は米軍に接収されて星条旗を揚げる事となった。その後、『長門』は広島と長崎の土地と人を焼き尽くした大量殺戮兵器である原子爆弾の標的艦となり、沈没した。そんな『長門』の艦魂は日本を愛し、そして仲間を愛した心優しき少女であった。年齢よりもずっと大人っぽく振舞う彼女を尊敬し、崇拝する者は数多く。戦前、戦中とずっと日本艦魂達を支え続けた。日本を想う気持ちは金剛や榛名にも匹敵するも、戦争回避派な上に自らが大艦巨砲主義の頂点（当時）の艦魂でありながら艦隊決戦思想を前時代的と考え、航空機主義を唱えた戦艦の艦魂であった。その為古参組との対立も多く、長門が連合艦隊旗艦として政権を握った時も決して一枚岩ではなかった。自分の意見を押し通す為なら実力行使も仕方がないという考えを持ち、日独伊三国軍事同盟締結反対や対米英戦反対などで手勢の艦魂と共に二度の内乱を起こした事もある。しかし、彼女の志に反して戦争が始まり、長門は日本が生き残るの為に必死に戦い続けた。そんな中、妹の陸奥がある少年に恋をし、長門もそれを応援した。その少年は日本艦魂の中心的人物となり、戦で疲れ果てた彼女達を支え続けた。長門もまたその少年を弟のようにかわいがり、彼と共に戦乱の時代を生きた。結局日本は敗戦し、彼もまた大切な子を失った。自分は何もできなかったと己を責めた事は幾度とあった。しかしそれでも、彼の優しい言葉が、何度も彼女を救った。そして戦後はアメリカの艦魂として星条旗の下にいたが、原爆の標的艦となり、死を覚悟した。そして二度の被爆の末に、彼女は誰にも見取られる事なく静かにその激動の生涯を終えた――

最終章　第三節　連合艦隊の終焉　天に召されし大和撫子達（後書き）

ついに榛名、伊勢、日向、長門が消えてしまい、物語も事実上の壊滅状態となりました。
残る翔輝とわずかな艦魂達。そして瑠璃達と、手持ちのキャラがもう底を尽き始めています。
ですが、それももう気になりません。なぜなら寂しい事に次回でついに長く続いて来た《艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～》もいよいよ最終回。手持ちキャラで十分対処可能なのです。
現在全力執筆中ですので、予定通り明日投稿できます。
こうして終わらせようとするとこの作品製作に掛けた実質二年間の記憶が蘇ってきます。
初めてこの作品を考えた時に参考にした先輩先生の艦魂作品やノートに書いたキャラ設定や物語のイベント設定など、今でも手元に残っています。
高校生活のほとんどをつぎ込んで来たこの作品も、いよいよ次回で終わりなんですね。改めて思うと寂しいものです。
ですが、残りあと1話だからこそ、最後までがんばりたいと思います。
では明日投稿する最終話も、どうか最後までよろしくお願いします。

最終章　最終節　桜舞う蒼穹の空への想い（前書き）

ついに《艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～》も今話で最終回です。
今まで本当にありがとうございました。
最終話は翔輝と瑠璃達、そして隼鷹などが登場するものとなっています。
最後らしくきれいに纏めたつもりなので、どうか最後までよろしくお願いします。
さらにあとがきは豪華出演者多数の予感!?
では、黒鉄大和が送る《艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～》最終話をどうぞ！

最終章　最終節　桜舞う蒼穹の空への想い

一九四七年の春、風が吹き、桜色の花びらが蒼穹の空を舞った。
蒼い空の下、呉の海に一隻の大型艦が白波を立てながらゆっくりと入港して来た。湾では多くの人々がその艦の到着に歓声の声を上げた。
多くの人々に出迎えられたその艦は旧日本海軍の中型空母であった。と言っても対空兵装は全て排除され、自慢の格納庫や飛行甲板には空母としての攻撃力である航空機は一機も搭載されておらず、もはや軍艦とも言えぬものであった。
そんな空母の甲板の上には多くの陸軍兵が出迎えの歓声を聞きながら歓喜の声を上げていた。大喜びしたり手を振ったり、中には涙を流す者もいた。
彼らは戦時中に太平洋の各島々に取り残されていた守備隊の兵達であった。戦後の日本がまず行ったのはそれらの兵を日本に帰還させる復員作業であった。その為、旧日本海軍の稼動可能の艦がその任に当たり、復員船となって復員作業を遂行していた。
そんな復員船の一隻であるその中型空母は武装こそ外されているも以前と変わらぬ勇姿を見せていた。
艦の側面に描かれた日の丸が、この艦が日本の艦だという事を現していた。そして同時に、その日の丸の横にはその艦の名前がローマ字で書かれていた。
――《ＪＵＮＹＯ》。
空母『隼鷹』。かつてそう呼ばれていたその艦は今では空母ではなく復員船『隼鷹』として戦後の日本で生き続けていた。
そんな『隼鷹』の艦橋には一人の若き航海長である――長谷川翔輝元海軍中佐が艦の指揮をしていた。
「よしッ！　機関停止ッ！　碇下ろせぇッ！」
翔輝の指揮に若い兵達が走り出す――いや、軍隊が解体された今

では兵と呼ぶのはおかしいのかもしれないが、元海軍兵の皆は旧海軍の伝統のままに動いている。
停止した『隼鷹』は碇を水しぶきを上げながら下ろし、その場に身を置く。その瞬間甲板にいた陸軍兵達の声はさらに大きなものになった。
「内火艇やその他小型艇を全て出せッ！　湾警備局に小型艇の手配をしてくれ！」
『了解ッ！』
兵達は見事な敬礼をして艦橋の外に走ったり伝声管で命令を飛ばす。そんな光景を見詰める男がいた。復員船『隼鷹』艦長、前原富義（まえはらとみよし）大佐だ。
「まったく、これでは私はいらないんじゃないか？」
「そんな事ありませんよ。僕はただ航海長としての役目を真っ当しているだけですよ」
「その若さで航海長とは、私はまだ信じられんよ。君はきっといい艦長になっただろうな」
「いえ、そんな事は・・・」
「ははは、やっぱりまだまだ若いな。だが、その若さがいい。じゃあ艦橋は任せたぞ。俺は甲板で陸軍兵の退艦を指揮してくる」
「了解」
前原は艦橋を出て行った。必要最低限の兵しか乗っていないので、艦橋にいた兵達も退艦作業に回された為、艦橋に残ったのは翔輝だけとなった。
翔輝は一人、甲板の作業を見詰めていた。そんな彼の背後に少女が一名――
「お兄ちゃんッ！」
「うわぁッ！？」
少女は突如翔輝に抱き付いた。いきなり背後から抱きつかれた青年はバランスを崩しかけるが、何とか壁に手を当てて体勢を立て直すと、背中に抱き付く少女に苦笑いする。

「ったく、いきなり抱き付くなよ――隼鷹」
「えへへ、お兄ちゃん大好ゅきぃ」
隼鷹はそう言ってさらに翔輝に強く抱き付く。翔輝もまたそんな彼女の頭をそっと撫でる。シャラン・・・と柔らかな音色を放つ髪留めの鈴がまたかわいらしい。
隼鷹は翔輝の腕を取るとその腕を包み込むように抱き付くと満面の笑顔を向ける。
「日本に、帰って来たんだね」
「うん。今回の任務はソロモン諸島だったから遠かったね」
「一ヶ月だもんね」
「まぁ、久しぶりに南国の海を見れたから良かったけど」
「えへへ、きれいだったよねぇ」
隼鷹は翔輝に甘えるように身を寄せる。そんな隼鷹を翔輝もそっと抱き締める。
彼女とは戦中からの付き合い。もう残りわずかになった戦友だ。何より、自分にとっては猛一人の妹も同然。大切な存在だった。
二人はピストン輸送で次々に上陸して行く陸軍兵達を見詰め、自分達の仕事の成果を改めて喜んだ。
戦中は敵を攻撃する為に存在した空母だった隼鷹も、こうしてみんなを笑顔にする仕事には誇りを持っていた。こうやって幸せを運ぶ。それが今の自分の役目だと、胸を張って言える。
次々に上陸して行く兵達を見詰め、ふと隼鷹は彼の横顔を見た。細メガネを掛けて幾分か知的に見えるが、その根っこはずいぶんお人好しで優しくて、ちょっぴり不器用な、自分の大好きなお兄ちゃんの姿であった。
「ねぇお兄ちゃん。お兄ちゃんも上陸するの？」
艦魂である自分は陸に上がる事はできない。移動できるのは自艦か近場にいる他艦、その周囲の狭い範囲の海に限られる。陸に上がられたら、もう自分とは会えなくなってしまう。それが隼鷹を不安にさせる。

隼鷹の問いに翔輝は「うん」とうなずいた。
「久しぶりにな。瑠璃達の事もあるからさ」
「そ、そうだよね・・・うん・・・」
しょんぼりする隼鷹に、翔輝はそっと笑みを送るとその髪を優しく撫でる。
「大丈夫だよ。ちゃんと帰って来るから。安心して」
翔輝の言葉に、隼鷹は涙目で彼を見詰める。その表情はとても不安そうだ。
「ほんとぉ？　本当に帰って来る？」
「うん。約束するよ」
翔輝のその偽りのない言葉に、隼鷹もようやく笑みを浮かべると
「うんッ！　約束だよぉッ！」とキラキラした瞳で彼を見詰めた後
「えいッ！」と彼に抱き付いた。
「お、おい危ないって」
「えへへ、お兄ちゃん大好きぃ」
嬉しそうに甘える隼鷹を、翔輝は振り払う事はなかった。ただ、そっと大切なものを守るように、彼女のその小さな体を、そっと抱き締めた。と、その時、
「主殿ッ！」
その懐かしい声に振り返ると、武士のように凛々しく髪をポニーテールで纏め、腰に軍刀を挿した少女が立っていた。その懐かしい姿に、翔輝は驚く。
「葛城！？　久しぶり！」
「主殿！　お怪我はありませぬか！？」
「大丈夫だって。今は戦中じゃないんだから」
少女――葛城は翔輝に駆け寄ってその無事な姿を自分の目で確認すると、安堵の表情を浮かべる。その笑顔の中にとても優しいものがあるのを、翔輝はちゃんと知っている。
「主殿が無事で良かった・・・」
「心配してくれてたんだ。ありがとう」

「主殿の身を案じるは当然の事だ」
「そっか、お前も無事で良かったよ」
「私は隼鷹殿と同じく復員船として一週間前にフィリピンから帰って来たのだ。姉上も、無事とは言えんが元気にしている」
「そっか・・・」
翔輝はその言葉に表情を暗くすると、呉の海の一角に横たわる廃墟――横転した空母『天城』を見た。『天城』は『榛名』などと同じく呉空襲で被弾。大破横転した。今はただ、解体を待つだけとなっている。
翔輝はふと、何もない海を見詰めた。ただの平穏な海がそこにある。だが、彼にとってそこは思い入れのある場所だった。
一年前の夏頃まで、そこには三隻の戦艦が鎮座していた。大破着底状態でも、連合艦隊の終焉の姿がそこにあった。
去年の夏、戦艦『榛名』『伊勢』『日向』の三隻は解体された。不運にも、彼女達が消えた時翔輝は『隼鷹』に乗って復員作業でマレー半島の方にいたので、その最後を看取る事はできなかった。帰って来た時にはもう――三隻(さんにん)はすでに消えていた・・・
あの時の後悔は、今でも忘れられないし、薄れもしない。
横須賀にいた『長門』にも、戦後に一度だけ会いに行ったきりで、彼女は旅立ってしまった。詳しい事はわからなかったが、標的艦として沈んだらしい。
開戦直後の彼女との出会いは、今でも忘れられない。もちろん、榛名や伊勢、日向との出会い――その他多くの艦魂達との出会いも、今では大切な思い出だ。
もちろん、今こうして隣にいる二人の少女との出会いもまた同じだ。
「主殿は上陸されるのか？」
「うん。久しぶりに瑠璃に会わないとけないしね」
「・・・瑠璃殿か。主殿も大変だな」
その意味深な言葉に、翔輝は「まったくだよ」と苦笑いした。隼

鷹もまた「瑠璃、ドジしてなきゃいいけど」と意味深な言葉を残す。

三人の会話が一体何を意味しているのか、それは後にわかる事。

翔輝は久しぶりに再会できた葛城の頭一つ分低いその頭をそっと撫でた。たったそれだけで、葛城の瞳が嬉しそうに細まる。その横で隼鷹がうらやましそうに頬を膨らませていたので、翔輝は小さく笑みを浮かべるとそっと彼女の頭を撫でた。

二人とも、本当に嬉しそうな笑みを浮かべる。

かつて多くの仲間に囲まれてあの戦争を乗り切った翔輝だったが、今ではもうたった二人だけになってしまった。

もちろん他にも生き残っている艦はある。『雪風』は佐世保を母港に中国や朝鮮などからの復員に、『冬月』は瀬戸内海の機雷除去に従事している。『涼月』は坊ノ岬沖海戦の傷がまだ癒えずに予備艦として係留されている。しかし『龍鳳』は去年解体され、『初霜』は坊ノ岬沖海戦の後に空襲を受け、奮闘するも対空戦闘中に触雷、沈没した。『妙高』と『高雄』は去年南方で英軍によって海没処分され、『青葉』は現在解体中。その他多くの戦姫達が解体や処分、標的艦として命を落としていた。

旧日本海軍の艦艇には、未来などないのだ。

だけど、未来はなくても、結果は変わらなくても、過程は変えられる。翔輝はそう思っていたし、信じていた。

龍鳳は最期泣きながら翔輝に感謝の言葉を述べて消えた。あの時、自分にも何かできる。そう思ったのだ。

戦後翔輝は第二復員省（旧海軍省）に入り、終戦時『隼鷹』の航海長だったのでそのまま『隼鷹』の航海長として復員任務に就いた。

絶望に打ちひしがれていた隼鷹のあの時の顔は今でも忘れられない。何もかもを諦めたような顔をしていた彼女が、自分を見た瞬間、満面の笑みに変わったあの瞬間も、忘れる事なんてできやしない。

もしも自分が彼女の航海長でなかったら、彼女はあんな暗い表情のまま、誰にも見守られる事もなく解体されていたのかもしれない。

過程を変えられると決心したのは、この瞬間であった。

そして、今もこうして隼鷹や葛城の隣にいる。大和の傍にいられなくなった分、彼女達には自分を少しでも頼ってほしかった。少しでも負担を少なくしたかった。そして、今こうして二人は笑顔でいる。それを見ると、やっぱりこれで良かったのだと、心から思えた。

甲板では今も陸軍兵が次々に上陸して行く。

三人だけの艦橋で、翔輝はいつまでも隼鷹と葛城、大切な二人の戦友を、仲間を、家族を抱き締め続けた。

もう二度と、大和のように手放さないように、ずっと、いつまでも・・・

「お兄ちゃぁんッ！　元気でねぇッ！」

「主殿ぉッ！　体調管理は万全にするのだぞぉッ！」

甲板で手を振りながら見送ってくれる隼鷹と葛城に笑顔で手を振りながら、翔輝は内火艇に乗って『隼鷹』を後にした。

内火艇は翔輝の他にも十数人の乗組員を乗せながら波止場に接舷する。すぐに船と岸がロープでしっかりと結ばれ、翔輝は船を下りた。

揺れる船の上ではなく、しっかりとした地面に足を付けると大きく深呼吸した。桜の香りが心地良い。これが祖国の匂いなのだ。

「さてと、帰りますか」

翔輝は手荷物を詰め込んだアタッシュケースを持つと静かに歩き出した。周りには父や息子や夫、兄や弟、友人や恋人の帰りに大喜びする民衆が大勢いる。再会を喜び合い、互いを抱き締め合う姿は傍目から見ても微笑ましい。

翔輝はそんな賑やかな港から出ると、呉の街を歩く。

終戦一ヶ月前、『榛名』や『伊勢』が致命傷を受けたあの空襲で呉の街も甚大な被害を受けた。主に軍港や軍施設、艦艇などが狙われたのだが、街も空爆を受けて炎上。死傷者もずいぶんと出た。

あれから約二年。呉の街はずいぶんと復興していた。店が多くあり、買い物をする人々が多い。まだまだ物資が足りずに闇市などが

横行しているが、それもまた人々の賑わいなのだ。他にも街中には今や恒例とも言えるアメリカ兵にお菓子をねだる子供達の姿も見える。アメリカ兵を殺そうと覚悟していた翔輝はちょっぴり複雑な気持ちだが、子供達もアメリカ兵も笑顔を浮かべているのを見て、平和になったと改めて思う――まぁ、アメリカ兵の暴力事件や強姦事件などが多数発生しているのも事実なのだが。彼らはきっと違うだろう。

そんな復興した故郷を見詰めながら、翔輝はひたすら歩く。向かう先はこの向こうだ。

徒歩一時間ちょっと、街から外れた小高いを丘を、翔輝は一人登っていた。ここは私有地なので家もなく木々が深い。すっかり街外れだ。

そんなあぜ道をひたすら歩いていく。道の横には桜の木々も立っていた。この時期にしか見られない桜の美しい花々が、桜色の景色を作り出す。

風が吹くたびに舞い散る桜吹雪の中、翔輝は胸を躍らせながらひたすら歩いて行く。

それから半時後、ようやく目的地に着いた。そこは周りの木々が遠い開けた小さな野原。この丘の頂上であり、呉の街を一望できる場所だ。そんな野原の中央に、ポツンと一軒の家が建っていた。一般家庭よりも大きい家だが、霞家の豪邸に比べたら豆粒。そんな家こそが、翔輝の自宅――長谷川家だ。

霞家の資金援助でこの丘一帯を長谷川家は保有している。そして長谷川家がそこの頂上に建っているのだ。

木造建築のその家は、翔輝にはずいぶんと懐かしいイメージを思い出させる。両親との思い出は少ないが、翔香と過ごした日々が今でも鮮やかに思い出せる。

「ただいま・・・」

小さくそうつぶやくと、翔輝は自宅に帰る。

小さな木造の門を潜り、小さな中庭を抜け、引き戸の玄関の前に

立つ。やっと、帰って来れたのだ。
翔輝は小さく深呼吸すると、引き戸をガラガラと勢い良く引いた。懐かしい我が家が、そこにあった。
「ただいまぁ！」
翔輝は嬉しそうに、一ヶ月の我が家に向かって声を上げた――が、
「あ、あわわわわわッ！」という悲鳴（？）が響き、続いて何かが割れる音がガチャンッと美しく響いた。その悲鳴（？）と破損音に翔輝は頭を抱える。さらに、
「ちょっと瑠璃ッ！　何お皿割ってるのよッ！」
「か、勝手にこのお皿が割れたのですわ！」
「そんな訳ないでしょッ！？」
「私は今日は一枚ですわ！　珊瑚様はさっき二枚割られましたわ！」
「か、数えなくたっていいじゃないッ！」
「いい加減にしなさい。ほら、早く箒（ほうき）と塵取（ちりと）りを持って来なさい」
「瑪瑙姉様ッ！？　何か黒い煙がお鍋から噴出してますわよッ！？」
「姉さんッ！　焦げてる焦げてるッ！」
「うむ？　うおッ！？　暗黒の世界が――ゲホゲホッ！」
「ゲホゴホッ！　バカぁッ！」
「水を持ってゴホゴホッ！」
台所から聞こえてくる会話と漏れ出す黒煙にさすがの翔輝も慌てて騒ぎの元凶に向かって走る。茶の間の廊下の引き戸を開くと、猛烈な黒煙と焦げ臭さが翔輝を襲う。
「ゲホゴホッ！　いいから窓を開けろッ！」
その声に騒ぎの元凶達は慌てて窓を開く。黒煙が外に抜け、あたりに視界が戻ると翔輝は釜火元に水をぶっ掛け、ようやく鎮火した。
そして、完全に黒煙が晴れるとそこには・・・
「お、お前らなぁ・・・」
「しょ、翔輝様ッ！？」
「しょ、翔輝ッ！？　何であんた・・・ッ！」
「翔輝！？　いや、これは違うのだ！」

翔輝はもはや呆れ過ぎて脱力全開。そんな彼の見詰める先には今までのような着物ではなく一般庶民のような格好をした霞家三大輝石――瑠璃、瑪瑙、珊瑚の三人がいた。ご丁寧にエプロン姿なのだが、先程のボヤ騒ぎのせいか白いエプロンが少々黒い。

翔輝は黒煙を上げる鍋と床に散ったお皿の残骸を見詰め、呆れたようにため息する。

「お前ら、いつになったらそのドジ直るんだよ」

「べ、別に私はドジじゃないですわ！」

「私はドジなんかじゃないわよッ！　アホ翔輝ッ！」

「ち、違うぞ翔輝ッ！　私はドジでは・・・ッ！」

あわあわと掃除し始める三人を見て、翔輝は呆れながらもその相変わらずな光景を見て少なからず安堵した。

慣れない一般生活に悪戦苦闘しながらも、必死になってがんばる姿はやっぱり見ていて微笑ましい。

なぜ三人が長谷川家にいてこんな一般的な生活をしているかというと・・・

「はぁ、神鳴がいればこれくらいすぐに終わりますのに・・・」

瑠璃が寂しげにつぶやくのを聞いて、翔輝は悲しげに笑った。

神鳴は榛名達が傷ついたあの空襲で亡くなった。それも、瑠璃の命令で市民を霞家が保有する防空壕へ非難させていた最中だ。瑠璃はその事を後悔しているようだが、きっと神鳴は後悔などしていないだろう。数十年霞家に仕えてきた、主を信頼し切った最高の執事なのだから。

だが、そんな彼が奉仕し続けて来た霞家は、もう存在しない。

霞家は本家分家合わせてＧＨＱ（連合国総司令部）の財閥解体の余波を受けて財政が破綻。事実上の倒産をした。さらに霞家が米軍の本土空襲の際に本家や各地の分家が私軍で高射砲や機銃で米機を撃ち落とした為、霞家の重役十数名はＢ級やＣ級戦犯扱いとなって逮捕された。瑪瑙と珊瑚の両親は捕まる寸前に自害してしまった。

そして、霞家は消滅した。借金こそ残らなかったが私有地の全て

を没収。資金なども凍結され、瑠璃、瑪瑙、珊瑚は路頭に迷う事になった。そんな三人を救ったのが、翔輝だった。翔輝は三人を家に招き、住まわせる事にした。一応復員任務という仕事があるので給料も安定はしている。もし第二復員省に入る事ができなかったら、自分も他の兵達と同じく公職を追放されていたかもしれない。そしたら、瑠璃達を救う事もできなかった。

これも、大和のおかげなのだろうか？

・・・きっと、そうなのだろう。彼女はきっと今でも、自分の事を見守っててくれている。そんな気がした。

慌てて掃除をする瑠璃達を見て、これが自分の守れたものの形だと思うと嬉しくなる――ちなみに守れなかった黒焦げの鍋の中身を確認し、魔界が広がっているのを見てまたため息する。

「ったく、お嬢様生活はまだ直らないのか？」

翔輝は一般人として暮らしていたので料理や家事なんて簡単である。しかしこのお嬢様三人は今までそういう事をした事がないので、こんなひどい有様になってしまっているのだ。

ちなみにこんな状態の三人の食事はどうしていたかというと、街の人達がわざわざ作りに来てくれているのだ。今でこそ消滅した霞家だが、霞家は今まで呉をずっと支え続け、世界恐慌の時も呉の街だけで小さなブロック経済を形成して乗り切らせたり、先の大戦では敵機の空爆の為に無償で防空壕を設立したりボロボロの日本軍の代わりに私軍で迎撃を行ったりと、呉の街の人々にとって、霞家は命の恩家。その娘達である瑠璃達は今でも感謝され続け、翔輝が町内会にお願いしたら二つ返事で快く了解してくれた。

だからこそ、翔輝は復員任務に安心して就けたのだ。

翔輝は鍋の中の魔界を見てふと問う。

「ちなみにこの暗黒世界への扉は何なの？」

「い、一応カレーですわ・・・」

「・・・カレーって、どうやったらこんなにできるのか知りたいんだけど」

お嬢様とかそういうレベルではなく、どうやらこの三人は根本的に料理がヘタらしい。これを正すのはかなりの奮闘が必要だろう。翔輝は前途多難でため息する。

「頼むから、人並みに料理が作れるくらいにはなってよね」

「べ、別に好きでこんな事してる訳じゃないわよッ！」

珊瑚が怒鳴ると瑪瑙も「翔輝が帰って来ると聞いて皆で力を合わせて夕食のカレーを作ったのよ？」と少し不機嫌そうに言い、「翔輝様に食べてほしかったんですわ」と瑠璃もどこか寂しげに言う。

珊瑚はともかくとして瑪瑙と瑠璃のセリフには翔輝も「うぅ・・・」と言葉を詰まらせる。特に瑠璃のうるうるとした瞳、これはかなりの大ダメージを翔輝に与える。

「わ、悪かったよ。瑠璃達が必死だってのはちゃんとわかってるよ」

翔輝の言葉に瑠璃と瑪瑙の顔がぱぁっと華やぎ、珊瑚はふんッと不機嫌そうにそっぽを向くがその頬は赤い。

そんないつもの三人を見詰め、翔輝は小さく笑みを浮かべる。こういう何気ない日々が幸せだという事を、彼は痛いほどわかっているのだ。

「何ヘラヘラ笑ってるのよッ！」

「ぬおッ！？　いきなり跳び蹴りするなよッ！　危ないだろッ！」

「避けないでよバカ翔輝ッ！」

突如放たれた強烈な珊瑚の跳び蹴りを紙一重で避けた翔輝と失敗した珊瑚はギャーギャーと言い合う。そんな二人に「珊瑚様！　暴力はいけませんわ！」と止めに入りちゃっかり正気の腕に抱き付く瑠璃。

「ちょっと瑠璃ッ！　離れなさいよ！」

「嫌ですわ。これは珊瑚様から翔輝様を守る為の行為ですのよ？」

「いや、明らかに僕の命のゲージが減ってる」

「大丈夫だ。翔輝は私が守る。この命に代えても」

「だぁかぁらッ！　姉さん抱き付かないでよぉッ！　もう子供じゃないんだから！」

「ちょっとッ！　私を無視して何騒いでるのよッ！」
「好きで騒いでるんじゃないよッ！」
翔輝、瑠璃、瑪瑙、珊瑚の四人のその光景は、いつもと何も変わらない、平和なものであった。小さい頃から変わらない、仲の良い関係。
変わった事は四人ともすっかり成長し、翔香が輪から消え、三人がお嬢様じゃなくなったなど多々あるが、でもやっぱり根本は変わらない。
みんな楽しげに笑い、ギャーギャーと騒ぐ。ずっと昔から過ごして来た四人の関係だ。戦争という苦難を乗り越えて、その絆はさらに強く結ばれる事になった。
翔輝とりあえず抱き付く瑠璃と瑪瑙を引き剥がすと魔界を一瞥し、三人に小さく微笑む。
「じゃあ、今日は僕が料理作るよ」
その言葉に三人から歓声が上がった。
「ほ、本当ですのッ！？　翔輝様の手料理！　楽しみですわぁッ！」
大喜びする瑠璃。
「翔輝の手料理・・・ッ！　愛の形・・・ッ！　禁断の恋の味・・・ッ！」一人かなり間違った方向に全力疾走する瑪瑙。
「あっそ。べ、別に私はあんたの料理なんか興味ないけど、そうね。どうしても作りたくて食べてほしいなら食べてあげるわ」相変わらず素直じゃない珊瑚。
そんな三人の反応に翔輝は苦笑いすると三人に背を向ける。
「どこに行くんですの？」
「買い物だよ。食材がなきゃ料理は作れないだろ？」
「そうですわね。では私も行きますわ」
「うむ。私も行くぞ。翔輝と手を繋いで」
「し、仕方ないわね。私も行ってあげるわよ。感謝しなさい」
「はいはい。じゃあみんなで行こうか」
翔輝、瑠璃、瑪瑙、珊瑚の四人は仕度を整える。特に女性陣は念

入りに服や髪を整える。まるでデートにでも行く気合の入れようだ（本人達はそれに近い心境）。

用意を終えると、四人は家を出た。

蒼い空の下、翔輝は瑠璃と瑪瑙と手を繋ぎながら仲良く呉の街に向かった。

彼に手を握られる瑠璃と瑪瑙の笑顔はとても嬉しげで、そんな三人をうらやましそうに見詰める珊瑚は、恥ずかしそうにちょこんと翔輝の服の裾を摘んでいた・・・

暁色の夕空の下、長い影を連れながら三人は丘を歩いていた。

買い物を終えた四人は帰る途中。瑪瑙の手には様々な食材の入った籠（かご）が握られている。これが今日の夕食の材料となるのだ。

瑠璃は笑顔で鼻歌を歌いながら上機嫌だ。珊瑚もどこか嬉しそうに先行して歩く。その足取りがスキップになっているのは無自覚だろう。瑪瑙はちゃっかり翔輝の手を握っている。

丘の中腹まで上がった頃、あの桜並木に到達した。青空の下の桜もいいが、暁色の夕焼けに染まる桜もまたいいものだ。

桜吹雪が舞い、四人を包み込む。

珊瑚は強い風に揺れる髪を押さえながらふと呉の海を見た。暁色に染まる海には『隼鷹』や『葛城』などの復員船や解体を待つ身の小型艇などしかない。

「ずいぶん、寂しくなっちゃったわね」

つぶやくように言った珊瑚の声に、翔輝は彼女の視線を追って小さくうなずいた。

「そうだね。寂しくなったよ、本当に」

かつて呉の海には連合艦隊の主力が集結していた。戦艦も空母も、この呉の海に集まり、そして出撃して行った。

世界三大海軍国として栄え、量より質と猛訓練して備えた力は世界最強と謳われ、一時は太平洋全土を席巻した日本海軍も、今はもういない。

アメリカの圧倒的な力の前に必死に戦い、散っていった。生き残った者達も、敗軍の艦艇としてそのほとんどが解体された。『榛名』『伊勢』『日向』『長門』もその中に入る。

去年まで、翔輝は彼女達と一緒だった。傷つきボロボロな姿であっても、彼女達は笑っていた。その笑顔に助けられ、そして自分も彼女達を助け、そうして生きてきた。

――だが、その彼女達も今はもういない。

去年の夏、『榛名』『伊勢』『日向』は解体され、『長門』は標的艦として散った。

その他多くの艦艇は戦中に死んでしまった――彼女もまた、その一人だ。

「あれからもう二年か。日本はずいぶんと変わったな」

瑪瑙はどこか寂しげにそう言った。

彼女の言うとおり、日本は大きく変わった。良くも悪くも、大きく変わったのだ。大日本帝国は消滅し、新たな日本国が誕生しようとしていた。

去年の終わり頃には新たな日本国憲法が公布され、来月にも施行される。姿形だけでなく、日本は根本から変わろうとしていた。それこそ待ったく別の国に変わろうとしている。

そして、自分達もまた大きく変わっていた。

彼女達の居場所であった霞家はなくなり、翔輝もまた海軍――彼女という居場所を失った。

「翔輝様、まだ大和様の事で落ち込んでいますの？」

瑠璃はそっと振り向いて翔輝の服の裾をちょこんと摘んだ。その寂しげで不安そうな声と彼女の涙の混じった瞳に、翔輝は小さく首を横に振る。

「落ち込んでなんかいないさ。まだ思い出すたびに胸が痛いし泣きたくもなるけど、落ち込んではいないよ」

「翔輝様の中では決着はつけたのですわね」

「うん」

翔輝は遠い目で夕暮れの空を見上げる。その瞳に悲しみなどは一抹も存在しなかった。ただ、その視線の先にあるもの。それは彼女の笑顔だ。

「いつか記憶が薄れて、あいつの声も、あいつの仕草も忘れていくのかもしれない。それでも、大和って奴が好きだったって事だけは、ずっと覚えてる」

「そうか・・・」

瑪瑙はどこか寂しげに微笑んだ。その瞳には、すっかり自分の手から旅立ってしまった弟を見る姉の悲しみがある。瑠璃も珊瑚も、その言葉に瞳を落とした。

三人は翔輝が好きだ。でも、翔輝は大和が好き。

決して交わる事のないお互いの恋。それがどれだけ残酷でひどいかなんて、言われなくてもわかってる。でも、見捨てるなんてできないのだ。

四人は家族同然で生きてきた。家族を見捨てるなんて、できるはずがない。

翔輝は落ち込む瑠璃と珊瑚の頭をそっと撫でた。視線を上げる二人に、翔輝は優しげな笑みを向ける。

「ほら、さっさと帰って飯にするぞ」

その何気ない言葉。それで一体どれだけ救われただろうか。

二人の顔にぱぁっと笑顔あ戻るのを見て、翔輝も嬉しくなる。

「そうですわね。今日は翔輝様のお料理ですわね」

「ふ、ふん。まずかったら許さないから――っていうか頭撫で撫でするなぁッ！」

そんないつもの三人を一瞥し、瑪瑙は呉の海を見詰める。その海で、大好きな弟は大きく変わった。大人になり、恋をし、戦争を戦い抜いた。すっかり自分の手から離れてしまった。もう自分はいらないのかもしれない。そうとさえ思った。だが、

「ほら姉さん。早く帰ろうよ」

そう笑顔で言って暖かな手で握ってくれる大好きな弟。その笑顔

に、自分はまだ彼の心に居場所があるのだと知り、胸が熱くなった。
「翔輝・・・」
「ほら帰ろう。家はもうすぐだよ」
「うむ。翔輝の愛の料理、早く食してみたい」
翔輝は瑪瑙の手を引いて歩き出す。先に歩いていた二人がそれに気づいて慌てて戻って来るのを見て、翔輝は苦笑いした。
「瑪瑙姉様ばっかりずるいですわ！　私もこの左腕を！」
「あ、あんた達何してるのよ！」
そんないつもの四人。
戦前から変わらない関係がそこにある。
例え翔香がいなくなっても、翔輝が別の女性に恋をしても、その関係が変わる事はない。ずっとこうしてきたからこそ、もう変わる事はないのだ。
翔輝の右腕に瑪瑙が嬉しそうに抱きつき、左腕に瑠璃が懐くように抱きつき、珊瑚は服の裾をちょこんと摘んで後ろから続く。
昔からの変わらない光景だ。
翔輝は暁色に染まる空を見上げ、ふと彼女を想った。
大和はきっと今もどこかで生きている。そんな感じがしてならない。例え非現実的な事だとしても、翔輝はそれを信じたかった。
すごく近くに感じる。でも手を伸ばしても決して掴めない。
彼女に触れる事は、もうできない。それでも、届かなくても、胸に残るものはある。
同じ時間にいて、同じものを見上げた――それを覚えているのなら、遠く離れていても、共にあると信じられる。
彼女が隣にいる。そう想うだけで力が沸き、こうして生きていられる。
彼女に助けてもらったこの命を、無駄にする事なく必死に生きる。
そう決意していた。
大和の分も生きる。それが自分に残された彼女への恩返しになる。
そう思っていた。

そして、思い出すのは彼女を始めとして散っていった仲間達の事。みんな、日本の為を想って戦い、そして死んでいった戦姫達。彼女達の勇姿を、決して忘れてはならない。

大和、武蔵、長門、陸奥、伊勢、日向、扶桑、山城、金剛、比叡、霧島、榛名、赤城、加賀、蒼龍、飛龍、翔鶴、瑞鶴、雲龍、葛城、瑞鳳、龍鳳、飛鷹、最上、矢矧、磯風、浜風、朝霜、初霜、霞。

他にも多くの艦魂達が必死に戦い抜き、散っていった戦姫達。

生き残ったのは隼鷹、葛城、天城、雪風、冬月、涼月など、ごくわずか。

かつて世界最強の日本海軍を支えた戦姫達の物語は、その歴史に終止符を打とうとしている。

歴史の中に消えていく彼女達の物語。だけど、それは決して忘れてはいけない大切な物語。後世に伝えなければならない、戦乱の時代を生きた戦姫達の物語。

決して忘れない。翔輝はそう胸に誓った。

自分がこうして生きているのは、彼女達のおかげ。多くの艦魂達に支えられ、あの怒涛の戦乱を生き抜いた翔輝は、彼女達の物語を伝え続けようと決意していた。

かつて日本は戦争をし、そして必死に戦った戦姫達がいた事を。

もう二度と、日本は戦争をしてはならない。それは当然の事だ。

だが、戦争からは何も生まれないというのは間違っている。

戦争があったからこそ、彼女達は生まれた。そして、翔輝は出会う事ができた。

連合国は日本の戦争を間違った戦争と言っているが、それは違う。

かつて日本は欧米列強の植民地化からアジアを守る為に戦争をした。日本はアジアの解放を訴え、そして多くの国々を独立させた。

アメリカは中国の市場を狙って日本を脅し、イギリスはそんなアメリカに助けを貰わなければドイツに勝てなかった。

日本は、自国を、そしてアジアを守る為に戦った。確かに中国や朝鮮で陸軍が行った虐殺行為は許される事ではない。

でも、自分達海軍は、何よりも翔輝自身は平和の為に戦ったのだと胸を張って言える。
日本はアメリカという悪と戦った。それは決して変わらない事実だ。
翔輝はあの戦争はアメリカが悪いと思っている。戦争は両軍が被害者であり加害者である。確かにそうかもしれないが、あれはアメリカの中国への進出によって日本の平和が脅かされたからだ。
満州事変や支那事変など関係ない。アメリカが日本を戦わせなければならない状態にしたのは自国の利益の為だ。
いくら考えても、そういう考えに到達するという事は、結局アメリカが悪いという結果に繋がる。
――だけど、アメリカを憎んでいるかと言われれば、それは違う。
確かに戦中はアメリカ兵を殺そうとし、憎んでいた。でも戦後、復員任務に就いていた翔輝は日本に来たアメリカ人と親しくなったのも事実だ。
これからきっと、日本とアメリカはいい友好国になれる。そう信じていた。
両国が幸せになれるなら、翔輝はその力になるつもりでいた。
アメリカと手を結ぶ。それは日本の平和に繋がる。そしてそれは彼女達が望んでいたのとは少し違うかもしれないが、日本の平和を守る事になる。
平和を求めて戦った彼女達の為にも、生き残った自分達はこの平和を守らなければならないという責務がある。
生き残った者達は、死んでいった者達の為にも、この日本を守り続ける義務がある。そして翔輝自身、そう決意していた。
翔輝亜夕暮れの空を見上げ続ける。
「翔輝様？　どうされたのですか？」
――でも今は、
「ううん。何でもないよ。ほら、早く行こう」
「そうですわね」

「うむ。楽しみだ」
「まぁがんばりなさい」
笑い合う瑠璃達を見詰め、翔輝は思った。
――でも今は、彼女達を守る事に努めよう、と。
夕暮れの空の下、翔輝、瑠璃、瑪瑙、珊瑚は仲良く家に帰った。
やがて空が暗くなった頃、その茶の間から笑い声が溢れる。
それが、日本が平和になったと身近に思える大切な事。
笑える事が、何よりも尊いと思えるそんな日々を、日本は過ごして来た。
季節はもう春。
日本という国の春は、ようやく訪れたのだった・・・

月が美しい皆が寝静まった夜空の下、翔輝は一人家の中庭にいた。
その中庭の中央には淡い月の光に照らされる小さな桜の木がある。
月に照らされる夜桜はなんとも風流な景色だが、翔輝はそれとは違う想いを抱いていた。
翔輝はまだまだ小さな木である桜を見詰め、そっと微笑んだ。
「大和。みんな、ただいま」
翔輝はそっと笹の葉で包んだ小さなお握り数個をその脇に置いた。
この小さな桜の木は戦後、翔輝が彼女達の死を受け入れて強く生きようと決意した時に彼が植えたものだ。
この桜の木は、彼女達――艦魂達のお墓だ。
きっと誰にも作られる事はない。だからこそ、翔輝が作ったのだ。
でも、寂しい墓石ではなく桜の木のしたのは、こうして彼女達の輝きを忘れない為だ。その為に彼自身が山から持って来たのだ。
大和達の墓。そう思うとやっぱり少し寂しい部分はある。だけど、これでいいのだ。彼女達の冥福を祈って、こうする事が・・・
この桜の木には多くの艦魂達の墓。つまりは慰霊碑の意味を持っている。だが、同時にこの墓で最も翔輝の想いが強い存在。それは大和だ。

風が吹き、桜の花が月光に照らされながら揺れる。枝の一本が翔輝の頬に触れた。それはまるで、大和がそっと頬を撫でてくれた。そんな風に思えた。

彼女はきっとここにいる。そう信じていた。

だから――

「・・・大和、ありがとう――そして、愛してる。誰よりもずっと、お前の事を・・・」

翔輝がいなくなった月に照らされる桜の木の下、そこには花束とお線香が置かれていた。

一九四七年四月七日、彼女の死から二年の月日が流れていた・・・

二週間後、翔輝は再び復員任務に向かう為に海を進む『隼鷹』の甲板にいた。

どこまでも平和な海を見詰め、翔輝はその平穏さに小さく微笑んだ。

「お兄ちゃんッ！」

甲板の向こうから満面の笑顔で手を振りながら駆け寄って来る隼鷹に微笑みながら、蒼く澄んだ空を見上げた。

雲ひとつない空を見上げ、今回の航海も無事に終わるように彼女に祈る。

「・・・大和、ずっと見守っててくれよ」

翔輝は抱き付いてきた隼鷹をそっと抱き締め、いつまでも笑みを絶やす事はなかった・・・

最終章　最終節　桜舞う蒼穹の空への想い（後書き）

大和「今までどうもありがとうございました。長く続いてきた《艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～》も、今回で最終回。ここまでやって来れたのも全て読者の皆さんのおかげです。本当にありがとうございました」

長門「いやぁ、長かったねぇ作者君」

作者「はい。何せこれ本当に実質二年以上の制作期間がありますからね。しかも終わってみれば最初に出した原作の二倍以上の文量になってますし」

伊勢「ほんまよぉがんばったなぁ。偉いで」

日向「でもすごいよね。開戦から終戦、そしてその戦後まで全部書いちゃったんだから」

作者「おかげで無駄に戦争の知識が頭に入ったけどね」

比叡「だけど本当にすごいわねぇ。書くの大変だったでしょ？」

作者「確かに大変でした。もう高校生活のほとんどがパソコンの前でしたからね。でも楽しかったですよ？　コメディー部分もシリアス部分も」

霧島「物語に行き詰った時はどうしてたんですか？」

作者「うーん、そういう時は息抜きをするか曲を聴いてたね」

陸奥「おすすめの曲は何なんですか？」

作者「そうだねぇ。最近は《恋姫†無双》のＯＰだった《ｆｌｏｗｅｒ　ｏｆ　ｂｒａｖｅｒｙ》だね。ちなみにこれ僕の中ではこの物語の主題歌だし（実話）」

扶桑「確かにいい曲よねぇ」

大和「恋姫†無双で好きだったキャラは何なんですか？」

作者「朱里（諸葛亮）か翠（馬超）だな」

陸奥「どっちもこの作品にはいないようなキャラですね」

作者「だからこそだよ。自分では描けなかったキャラだからこそい

いんじゃないか」
伊勢「なるほどなぁ」
榛名「・・・どうでもいいけど、話脱線してないか？」
伊勢「何の話やったっけ？」
日向「確かこの物語の主題歌だったような・・・」
作者「ちなみにｆｌｏｗｅｒ　ｏｆ　ｂｒａｖｅｒｙがＯＰならＥＤは《夏空カナタ》っていうエロゲーのＥＤの《リフレイン》だね」
大和「先に誤解を解いておきますが、私達の作者は今月の終わりで１８歳。この時はまだ１７歳ですからそういうゲームは持ってませんししてませんよぉ」
比叡「え？　じゃあ何で知ってるの？」
山城「作者はよくユーチューブを聴きながら作品を書いていた。あそこはそういうゲームの主題歌などがたくさんあるからね。色々聴き回って見つけたのさ」
扶桑「という事で今出て来た二曲はいい曲なのでぜひ聴いてねぇッ！」
金剛「だからッ！　話が脱線していると言っているであろうがッ！」
作者「た、確かに。じゃあ話を戻しますね。えっと、何はともあれ今回で《艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～》は終了です。今まで本当にありがとうございました」
瑞鶴「懐かしいよねぇ、私達がまだ世界最強の機動部隊だった頃が」
赤城「ほんと、私なんてほとんど出番なかったわね」
加賀「大丈夫。私はちゃんとあなたを見てるから」
赤城「う、うるさい！」
蒼龍「刹那、どうしているのかしら？」
飛龍「っていうか、何か私の剣が瑞鳳と怪しいんだけど」
瑞鳳「べ、別に怪しくなんかないですよ！」
飛龍「じゃあ私が貰ってもいいの？」
瑞鳳「そ、それはダメですッ！」
翔鶴「よくもまぁこれだけややこしい関係を考えたな作者」

作者「よく死人が出なかったなぁってある意味感心してるよ」
榛名「でもよぉ、本当にもう終わりなのか？」
作者「一応は」
霧島「以前エピローグがあったそうですけど」
作者「・・・あれは痛い作品だから今はお蔵入りしてる」
陸奥「な、何でですかッ！？」
武蔵「・・・出せ」
葛城「主殿の勇姿が・・・」
作者「設定が無茶苦茶だし稚拙だから」
伊勢「直せばええやないか」
作者「根本は変わらないだろ？　それにこのまま終わった方がかっこいいじゃないか」
山城「そうか？」
扶桑「うーん、この作品を読んでる人って戦記が好きって人ももちろんいるけど、ほとんどはキャラが楽しくて読んでるみたいだし」
金剛「確かに。戦記が読みたいなら他の普通の戦記を読めばいいのだ。これをわざわざ読むという事は、そういう路線の者なのだろう」
比叡「そうそう。だから設定なんて気にしないで出しちゃいなさいよ」
赤城「そうですよ。エピローグを期待する人もいるんですから」
加賀「そしたら赤城は伊達さんとの新婚生活を披露決定！」
赤城「い、嫌に決まってるでしょッ！？」
比叡「じゃあ姉さんと滝川さんを」
金剛「ダメに決まっているだろうがッ！」
榛名「・・・あぁ、鬼の金剛が崩壊していく」
金剛「榛名。殺されたいのか？」
霧島「はわわわッ！」
隼鷹「霧島も大変だね」
大鳳（かのん）「・・・架空戦記と日露戦争はどうなんですか？」
作者「あぁ、架空戦記は僕苦手だから無理。日露戦争は知識及び資

料不足で挫折。どうなるんだろ？」
武蔵「・・・本当に作者？」
作者「失礼な。これでもこの後どうするか今も考えてるんだよ。とりあえず他の外伝を修正するけどその後は不明」
武蔵「・・・モンハンに逃げるの？」
作者「さぁ？　向こうの読者からは早く艦魂を片付けてモンハンを書いてくれってメールを受けてるけど」
陸奥「だ、ダメですよッ！　黒鉄大和は艦魂小説の大御所ですよッ！？」
作者「いやぁ、草薙先生や伊東先生を始めとしてたくさん艦魂小説を書く人がいるし。もう僕いらなくね？」
大和「アホですかッ！？　あなたそれでも極上艦魂会のトップなんですか！？」
作者「いや、あれ飾りみたいなものだし」
隼鷹「最低よッ！」
武蔵「・・・安心して。私が全て指揮する」
作者「じゃあ任せても――」
飛龍「ダメに決まってるでしょッ！？」
蒼龍「武蔵に任せたら、長谷川中佐を天皇とする立憲君主艦魂世界が形成されるかもしれないわよ？　もちろん他の先生方を巻き込んで」
作者「いくら武蔵でもそこまでは――」
武蔵「・・・チッ」
作者「・・・これからもがんばります」
葛城「私はそれでも構わないが」
金剛「しかし、本当にこれからどうするのだ？」
作者「一応外伝で繋いで行こうかと思ってる。さすがにもうこんなに長い作品は書きたくない。しんどくて」
大鳳（かのん）「・・・（コクリ）」
日向「確かに辛いよねぇ」

作者「まぁとにかく、一応はまだまだ艦魂は現役でいくよ」
大和「良かったです・・・」
榛名「まったく、心配かけさせやがって」
隼鷹「良かったぁ」
作者「とりあえず既存の外伝を修正して、後は新しい外伝を書くよ。それこそ本編未登場キャラの外伝や君達の外伝でもいいし。あ、バレンタイン作戦やクリスマス作戦なんかもいいかな？」
金剛「本編と誤差が生じないか？」
作者「いいよ別に。みんなそんなに気にしないでしょ」
榛名「適当だなぁおい」
葛城「その場で決めるのは良くない」
作者「とにかくこれからは外伝でがんばる！　それが黒鉄大和です！　それではここで――」
金剛「そういえば、三笠殿から手紙を預かったのだが」
作者「え？　三笠って、伊東先生の？」
金剛「違う。貴様が途中で投げ出した日露戦争の英雄、戦艦三笠殿だ」
作者「え・・・（顔面真っ青）」

カサカサ・・・（震える手で手紙をオープン）

作者「・・・」
大和「なんて書いてあったんですか？」
榛名「なになに？《執筆再開ヲ要求。拒否ナレバ宣戦布告ト見ナシ、連合艦隊全艦艇ヲ率イテ武力ヲ行使ス》だってさ」
作者「や、やっぱり怒ってるよね・・・」
金剛「当然だ。早く書け」
作者「でもキャラ被るし、八万文字しか書けてないし。資料ないし」
榛名「でもがんばれ。三笠さんは武蔵を超えるキャラだぞ」
作者「そういえば、武蔵の強化発展型のキャラにしたんだよね三笠

って」
大和「そんな事するからです。自業自得ですよ」
作者「・・・うーん、投稿するかしないかはともかく、もう一度がんばってみよう。もし成功したらその時に投稿するよ」
霧島「敵は作らない方がいいですよ」
作者「そうだね――まぁ、気を取り直して、艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～終了会スタートです！」
全員『わあああああぁぁぁぁぁぁッ！』
パチパチパチ！

作者「・・・あのさ、これって確か艦魂年代史の宴会だよね？」
大鳳（かのん）「・・・（コクリ）」
作者「何で他の作品のキャラがいるの？」

凛「日本が負けたら私達の未来が危ないじゃない！」
柚子「こっちの物語は違うから大丈夫だ」
撫子「でも私達の史実って、こんな感じだったのですねぇ」
星菜「お姉様は私が守りますから大丈夫です・・・」
弥生「私達のミサイルは百発百中よ」
明「私達がいればこの世界も救えたのにね。ドイツが弱いから問題なし」
エリーゼ「その時は私達も出陣します」
鈴「私達連合艦隊はどんな敵にも負けない」
鞘「私も」
炎樹「未来戦艦の力はこの時代では無敵ね」
クレア「私はどっちにつけばいいんだろ？」
零「さ、さぁ？　こっちについてくれた方が嬉しいけど・・・」
小雪「打倒ドイツ！」

朱里「この世界では打倒アメリカだけどね」
楓「こっちの私と組めば無敵ね」
陽子「私は零戦先生の私とこっちの私で組みたいなぁ。あ、あと霜月先生の私とも」
京子「極上艦魂会の全艦魂で宴会でも開いてみたいのぉ。きっと楽しいじゃろうな」

作者「あそこにいるのって・・・」
大鳳（かのん）「・・・独立機動艦隊『紀伊』のキャラですね」
作者「えっと・・・」

神龍「だ、ダメですよッ！　大和（伊）さんッ！」
大和（伊）「ハァハァ・・・ッ！」
隼鷹「ニャアアアァァァッ！」
長門（伊）「大和（伊）やめなさ～いッ！」
伊勢（伊）「隼鷹を放しなさい！」
日向（伊）「もういい加減にしてよぉッ！」
天城（伊）「楽しそうだねぇ」
葛城（伊）「どーん」
天城（伊）「きゃあッ！？」
大和（伊）「どうした天城（伊）？　そうか君も私とハァハァしたいのだな？」
天城（伊）「ち、違う――いやあああぁぁぁぁッ！」
雪風（伊）「実の姉になんて事するんですかぁッ！？」
榛名（伊）「あぁ、もう好きにしてくれ」

大鳳（かのん）「・・・護衛戦艦『神龍』～護りたいものがそこにある～」
作者「・・・」

瑞鶴（零）「向こうは騒がしいな」

昴「仲良いいなぁ」
翡翠「相変わらず向こうの大和（伊）はすごいわねぇ」
長門（零）「私達は平和で良かったな」
金剛（零）「こっちにもかわいいものを見たら危険な者がいるけどな」
山城（零）「・・・そうね」
榛名（零）「この（零）って何とかなんないのか？」
青葉「見分けよ見分け」
肥前「私達はこっちの作品には出てないからナシね」
榛名（零）「卑怯だぞ・・・」

大鳳（かのん）「・・・新太平洋戦争」
作者「・・・もう突っ込まないからな」

（こんごう）「バカじゃないの？」
（いかづち）「そないな事言うなやぁ」
（しまかぜ）「大先輩ばっかりね」
（むらさめ）「手合わせしたいぜ」
（さわぎり）「やめといた方がいいと思うけど」
（しらね）「負けが目に見えてるじゃない」
（むらさめ）「やってみないとわかんないだろ！」
（こんごう）「無理ね」
（むらさめ）「無理じゃない！」
（いかづち）「やめといた方がええでぇ」
（しまかぜ）「そうね」
（むらさめ）「何だよみんなそろってぇッ！」

大鳳（かのん）「・・・艦魂物語，魂の軌跡～こんごう～」
作者「・・・現代の子達かぁ」

『伊勢』「艦魂ってこんなにたくさんいるのねぇ」
『日向』「おじさんも来れば良かったのにぃ」
『伊勢』「少尉は色々お忙しいから仕方ないわよ」
『長門』「これが他の艦魂達なのねぇ」
『赤城』「この作品の私は出番が少ないけど、私はどうなんだろ？」
『扶桑』「さぁ？　私は妹達が活躍できればいいから」
『翔鶴』「子供っぽいな」
『瑞鶴』「そういう事言わないの」
『飛龍』「でもバカっぽくない？」
『蒼龍』「そういう事言わないの」
『ウォースパイト』「純粋なイギリス人は私達だけみたいね」
『ウェールズ』「この作者も確か私がいるわよね？」
『レパルス』「あぁ、外伝にね」

大鳳（かのん）「・・・異文　太平洋戦争秘録　改『伊勢』激戦記」
翔輝「『―』があると分けやすいね」

早紀「待ちなさい由美～」
由美「嫌あああぁぁぁッ！」
亜由美「あれは放っておきましょ」
貴恵「そうね。ある意味あれは幸せの形の一つかもしれないし」
綾夏「Ｒ１５にならないのかしらあれ」
亜紀・美紀・美香・渚『やめてくださぁいッ！』

大鳳（かのん）「・・・第七独立機動艦隊～神出鬼没！！　米海軍の悲劇～」
作者「まだキャラが少なくてあんまり出せないねぇ」

長門（小）「ここに出れば人気が復活するのだろうか？」
比叡（小）「切実だねぇ。右肩下がりのアクセス数・・・」
金剛（小）「そういう話はナシにしよう。暗くなる」

日向（小）「私、なんか紹介テキトーだったけど、伝わってるわよね？」

伊勢（小）「たぶん・・・」

山城（小）「ハレ晴レユカ・・・」

扶桑（小）「ストップッ！　ここまで来てそういうのはナシッ！　陸奥も止めて！」

陸奥（小）「某（それがし）に言われても・・・」

大鳳（かのん）「・・・艦隊決戦物語ですね」

作者「（小）って何か失礼だなぁ。他に言い方を考えよう」

瑞鶴（霜）「・・・」

翔鶴（霜）「瑞鶴（霜）、少しはしゃべってよ」

宝鶴「翔鶴（霜）姉さん、瑞鶴（霜）姉さんに言葉を求めるのは無謀だと思うけど。ねぇ錦鶴？」

錦鶴「え？　あ、うん・・・」

翔鶴（霜）「・・・この（霜）って邪魔ね」

宝鶴「私と錦鶴はないもんね」

錦鶴「う、うん・・・」

大鳳（かのん）「・・・彼方の幻想」

作者「僕的には宝鶴と錦鶴って名前気に入ってるんだよね」

大鳳（かのん）「・・・架空戦記の醍醐味ですね」

作者「なんか他の先生方を含めたかなりのオールスターになってるなぁ」

大和「そうですね。あ、なんか他の先生方同士の艦魂達が交流を始めましたよ？」

作者「仲良しはいい事だよ」
大和「これがあなたが広げた艦魂世界なんですね」
作者「・・・そうだね。嬉しいな」
大和「これからもきっとどんどん増えていくんでしょうね」
作者「そうだね。僕もがんばらないと！」
大和「また新しい艦魂小説を書くんですか？」
作者「いや、とりあえず今は一度この前線から退くよ」
大和「引退ではないですよね？」
作者「まぁね。ただしばらくは他のジャンルにも挑戦したいし、単純に疲れたってのもあるしね。とりあえず艦魂に関してはしばらく外伝の修正だね。あ、《艦魂年代史外伝　～――～》って具合に～マークが入ってたらそれは修正を終えた作品なので、見つけたらぜひ読んでください」
大和「お願いしますね。作者さんも今までお疲れ様でした。でもこれからもがんばってくださいね」
作者「ありがとう――じゃあそろそろ僕は帰るね。後は任せたよ大和」
大和「はい！　お疲れ様です黒鉄大和先生！」

大和「という事で、作者さんも帰りました。
あ、作者さんからの伝言です。『今回登場させたのは極上艦魂会のメンバーのキャラクターで、急遽書いたので何か不手際があったら教えてください』だそうです。
えへへ、作者さんも大変ですね。
えっと、今まで応援ありがとうございました。これにて《艦魂年代史　～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～》は終了です。皆様からの感想、とっても嬉しかったですよ。
こうして皆さんと会えるのも最後、もしくはしばらく会えないと思

うと寂しいです。
ですけど、私達元祖艦魂組はいつまでも永久不滅で皆さんと共にあると信じています。
えへへ、なんか照れちゃいますね。
それから今回登場したキャラの作品もぜひ読んでください。皆さんとってもおもしろい作品ばかりですから。
では、もう時間が来てしまいました。
長い間、今まで本当にありがとうございました。
皆さんの事は絶対に忘れません。だから、皆さんも私達の事、忘れないでくださいね？
私は皆さんと出会えた事、本当に嬉しく思います。
メインヒロインなのに人気がなくても、もう気にしません。だって、私は幸せですから。
えへへ、これから翔輝さんと幸せな日々を送りたいと思います。妨害とかもあるでしょうけど、私負けません！
皆さんもどうか私を応援してくださいね？
では皆さん、お元気で。
さようならです！」

―完―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5439c/

艦魂年代史 ～ドキッ☆恋する乙女は大艦巨砲主義～

2010年10月8日11時09分発行